遊戯王Trumpfkarte

ブレイドＪ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あらすじ

身に覚えのない嫌疑でプロリーグから追放されたデュエリスト、結束　遊騎（ゆいつか　ゆうき）。

大会中に応援に来ようとしていた両親を事故で亡くし、デュエルをするのが怖くなったデュエリスト、栗原　遊花（くりはら　ゆうか）。

これは、過去に囚われた２人のデュエリストが偶然出会い、お互いに影響を与えながら、自らの運命を切り開いていく物語。

―――――――――――――――――――――

初投稿です。

世界観は完全オリジナルでダブル主人公でやっていきたいと思います。

遊騎が軸の描写は☆、遊花が軸の描写は★を、第３者視点を○、遊騎・遊花以外のキャラクター視点を●をつけたいと思います。

文章等、稚拙な点があると思いますが、改善点やアドバイス等よろしくお願いします。

※追記

８７話よりルールが新マスタールールからマスタールール（２０２０年４月１日改訂版）に変更になりました。

目次

プロローグ ―― 1
一章　運命の邂逅
第１話　偶然の結び目 ―― 4
第２話　運命の結び目 ―― 20
第３話　運命の切り札 ―― 32
第４話　斬り開く運命 ―― 58
第５話　譲れないもの ―― 79
第６話　抗いの運命 ―― 104
第７話　独善の狂想曲 ―― 124
第８話　絶望の後に来るもの ―― 139
第９話　全てを壊すもの ―― 165
第１０話　闇より来たる少女 ―― 195
第１１話　呪われし邪念 ―― 215
第１２話　夢に至るための道 ―― 259
第１３話　闇に呑まれし星 ―― 275
第１４話　騎士の証 ―― 303
第１５話　踏み出すための一歩 ―― 322
第１６話　もう１度はじめから ―― 341
第１７話　たゆたう魂 ―― 378
第１８話　引かれ合う絆 ―― 413
第１９話　思いの果てに ―― 433
第２０話　過去へと続く篝火 ―― 460
第２１話　蠢く悪意 ―― 474

第２２話　華麗なる出来役　492
第２３話　私が私で在るために　508
第２４話　進化する雷　526
第２５話　笑顔の空模様　562
第２６話　大きな力と重ねる力　583
第２７話　魂を食らう龍　598
第２８話　守りたいもの　623
第２９話　親友　664
第３０話　誰がための怒り　689
第３１話　暗闇に浮かぶ星　721
第３２話　原点　764
第３３話　姫ＶＳ龍・始まる大会　781
第３４話　嵐ＶＳ篝火・巻き起こる猛火　820
第３５話　小さき者ＶＳ竜・憧れる背中　863
第３６話　天候ＶＳ霊・笑顔のために　900
第３７話　絵札ＶＳ花札・消せない罪　931
第３８話　影ＶＳ磁石・影に蠢くもの　980
第３９話　雷ＶＳ傭兵・嵐に降り注ぐ雷　1012
第４０話　刀ＶＳ妖刀・孤独な戦い　1050
第４１話　護り手ＶＳ暴風雨・心に刻む信念　1081
第４２話　護り手ＶＳ暴風雨・逆境の後の希望　1137
第４３話　英雄的ＶＳ反英雄・英雄に至る者　1159
第４４話　雷光ＶＳ氷闇・氷の女王　1198
第４５話　闇を導く勇気　1220
第４６話　戦乙女ＶＳ羽根・奇跡の出会い　1251

第４７話　英雄ＶＳ氷槍・楽しいデュエル　296
第４８話　英雄ＶＳ氷槍・蘇る運命　311
第４９話　弟子ＶＳ師・変わるものと変わらないもの　367
第５０話　弟子ＶＳ師・思いが導く場所　405
第５１話　選択する運命　434
１章・キャラクター紹介　462
幕間１・炎の試練　475
幕間２・変わり続ける月花　522
幕間３・無邪気さの落とし穴　570
幕間４・竜の砲口　608
幕間５・黄昏の光　651
二章　闇より出でしゲーム
第５２話　侵食する夜霧　702
第５３話　吹雪の戦場　741
第５４話　闇より出でし怪物　794
第５５話　同調する騎士　820
第５６話　開花する小花　857
第５７話　闇を射抜く者　883
第５８話真紅の竜王　906
第５９話　時空を超えし者　942
第６０話　先を知る者　981
第６１話　全てを壊す獣の姫　1010
第６２話　同じ穴の貉　1205
第６３話　妄執する亡者　1208
第６４話　悪意の庭　1122

第65話　僅かな希望　160
第66話　偶発する奇縁　207
第67話　張り巡らされる警告　222
第68話　混沌の証　254
第69話　赤き影　305
第70話　亡霊の宴　348
第71話　不自然な凶星　386
第72話　厚遇する守護者　416
第73話　ぶつかり合う魂　450
第74話　暴走する配下　494
第75話　最速最短の伝え方　531
第76話　闇に沈む希望　583
第77話　希望の存在意義　641
第78話　未知数の希望　662
第79話　魂を刈り取る刃　713
第80話　見守る者達　760
第81話　愛念の送り火　824
第82話　追憶の復讐者　856
第83話　親愛の天秤　912
第84話　荒魂を鎮める業　977
第85話　破滅を祓う光剣　1030
第86話　失踪する炎影　1073
第87話　偽りの骸　1116
第88話　不揃いな決闘者　1163
第89話　贖罪の鍵　1200

第９０話　月夜の追走 ―――― 249
第９１話　無垢なる邪心 ―――― 289
第９２話　兆し ―――― 323
第９３話　夜に架かる虹 ―――― 338
第９４話　蠱毒に巣食うモノ ―――― 343

番外編

番外編１　ゴーストリックオアトリート ―――― 482
番外編・１周年記念　夢でも師弟でいられたら ―――― 497
番外編・２周年記念　夢見る少女じゃ割といられる ―――― 543
番外編・３周年記念　まっさらな闇 ―――― 616
番外編・４周年記念　守り護られる桜の花 ―――― 653
―――― 366

プロローグ

この世界には多くの人を魅了して止まないカードゲームが存在している。

デュエルモンスターズ。

それは、モンスター、魔法、罠の3種類のカードを駆使し、相手のライフポイントを0にしたり、特殊な条件を満たしたり、相手のデッキを無くす等様々な戦術で戦う対戦型カードゲームである。

そしてデュエルモンスターズはカードが実体化しているように見える技術、『立体映像（ソリッドビジョン）』とそれを内蔵したデュエルモンスターズ専用の装置であるデュエルディスクの開発により、デュエルモンスターズのプレイヤー『決闘者（デュエリスト）』同士の手に汗握る戦いがマスメディアを通して世界中に広がり、スポーツ選手のように人々の前で戦う『プロ決闘者（デュエリスト）』という職業と彼らが競い合うプロリーグというものが生まれるまでに至った。

これは、そんなデュエルモンスターズが広がる世界の中で自らの運命に翻弄される1人の青年と1人の少女が出会い、共に運命を切り開いていく物語。

☆

「おい、ちょっと待てよ!!?俺は知らないって言ってるだろ!!?」

沢山の人々が賑わうスタジアムの真ん中で、何人もの警備員に取り押さえられながら青年は叫ぶ。

「俺は不正なんかしてない!!?そいつのデッキなんて知らない!!?」

「ですが、実際に彼のデッキを持って来たのは貴方だ。記録にも残っている」

「そんなこと知らなかった!!?そのデッキは俺が控え室からここに来る途中に拾ったんだ!!?」

「そんな言い分が信じられるとでも?」

「じゃあ何を言ったら信じて貰えるんだよ!!?」
青年がいくら叫んでも向けられるのは冷ややかな視線のみ。
そんな青年に青年と話していた男が告げる。
「とにかく、今回の大会は出場停止。今回の件は追って処分を言い渡す。だが、決闘者の魂であるデッキを盗み見た罪は重い。リーグからの除名も考えられることを肝に命じておくんだな」
「なっ!!?ふざけんな!!?おい!!?」
警備員に捕まり、青年は引き摺られていく。
深い絶望の中へと――

――――――――――――――――――――――――

★

「お父さん!!?お母さん!!?目を覚ましてよ!!?」
少女以外に誰もいない病院の一室。
無音の部屋でただ少女の慟哭が響く。
「応援に来てくれるって、言ったのに!!?優勝したら、私とデュエルしてくれるって!!?一緒にお祝いしようねって言ったのに!!?」
少女の声に返ってくる言葉はない。
ただただ少女の慟哭がその場に響く。
「こんなの、全然嬉しくないよ!!?お父さんも、お母さんもいないんじゃ……優勝なんて、意味ないよ……こんなの、いらないから……もうデュエルしたいなんて、言わないから、だから、お父さん達を返してよ!!?」
少女はその場に崩れ落ちる。
それでも、少女に返ってくるものはない。
少女は泣き続ける。
絶望の先に至るまで――

――――――――――――――――――――――――

同じ日、同じ時刻に絶望を経験した2人の決闘者。
それは、偶然だったのだろうか？

それとも、運命だったのだろうか？
その問いに答えるものは……誰もいない。

一章　運命の邂逅

第1話　偶然の結び目

★

私には忘れられない記憶がある。

その記憶はすごく優しくて、温かくて、つい、現実から目を背けて、縋ってしまいそうになる。

でも、その記憶の中にいる人達は、私に縋らせてなんかくれなくて、前を向いて歩いて欲しいと、願っているのがわかってしまう。

それでも、私は結局前に踏み出せないまま、自問自答を繰り返す。

そんな日々が、いつまでも続いていくハズだった。

だから、その出会いはきっと、運命なんかじゃなくて、神様だって予測出来なかった、本当に偶然の出会いだったんだと思う。

でも、そんな偶然の出会いが、私が閉ざされていた世界から踏み出すきっかけになったんだって……私は、本当にそう思ったんです。

――――――――――――――――――――――――

「……ん、もう朝……ん～～～」

軽快に鳴り響く目覚まし時計を止めながら私、栗原　遊花（くりはら　ゆうか）は自分の部屋のベッドから身体を起こして伸びをする。

起きたばかりで寝ぼけている顔をパチパチと叩いて目を覚ます。

「ふわぁ……って、いけないいけない。朝ご飯とお昼のお弁当を作らないと‼？」

まだ漏れそうになる欠伸を噛み殺しながら、クローゼットからこの2年で少しキツくなったデュエルアカデミアの制服を取り出し、素早く着替え、2階にある私の部屋からリビングキッチンに降りていく。

リビングキッチンに入ると、私はいつものように机の上に置いてある写真立てに話しかけた。

「お父さん、お母さん、おはよう。今日も頑張るね」

朝の挨拶を終えると、私は冷蔵庫の中から食材を取り出して1人分

の朝ご飯を作り始めた。
……そう、この家には今私しか住んでいない。
２年前、デュエルモンスターズの大会に出ていた私を応援するために移動していた両親は、交通事故でこの世を去った。
その日は、プロ決闘者だったお父さんの仕事の日でもあって、お母さんはお父さんと一緒に私を応援するために、会場に私をおいて仕事終わりのお父さんを迎えに行っていた。
そして会場まであと少しというところで歩道に乗り込んできた車に轢かれてしまったらしい。
私がそのことを知ったのは、大会で優勝した後のことだ。
いつまでたっても現れない両親を待っているところに警察の人がやってきて、両親が事故で病院に運ばれたことを教えてもらった。
……私が病院に辿り着いた時には、もう全てが終わっていた。
正直、それからしばらくのことはあまり覚えていない。
気づいたら両親の葬儀が終わっていて、本当はお爺ちゃんの家に引き取られることになっていたけれど、そのためにはこの街から離れないと行けなくて……離れてしまったら、本当にお父さん達との思い出が消えちゃう気がして……
それから、なんとかお爺ちゃん達に納得してもらって、お友達のお母さんに様子を見に来てもらうことを条件に、私の１人暮らしは始まった。
当時の私はまだデュエルアカデミアに入学したての１年生で、家事をするのにも凄く苦労したけど、お友達のお母さんに教えて貰ったりすることでなんとか暮らしていけるようになった。
お金の方も、元々両親が私が１人立ちした時の為に貯めてくれていたお金があって、バイトとかをした甲斐もあって今のところなんとかやれている。
「うん、今日も美味しく出来た。それじゃあ、いただきます」
昔よりスムーズに作れるようになった朝食に満足しながらテーブルに移動し、朝食を食べ始める。
リビングに置いてある時計を見ると現在の時刻は７時３５分。

デュエルアカデミアに行くだけならまだ余裕はあるけど、食器の片付けを考えると少し微妙かな。
そんなことを考えながらテレビをつける。
『次のニュースです。プロチーム『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の冬城闇選手が、今シーズンでも圧倒的な実力で快進撃を見せています』
テレビから流れてくるのは毎日のように放送されているプロリーグの試合の話。
それもこの街ではそんなに珍しいことではない。
決闘都市『ケルン』。
ドイツ語で物の核を表すこの街は世界中のデュエルの中心になるようにという思いで作られた街だ。
とにかくデュエルが盛んな街でこの街に住んでいる人間全員にデュエルディスクが無料で支給されていたり、街中にいつでも使用可能なフリーのデュエルスペースがあったり、街中にあるモニターではいつもデュエルの大会の様子や人気のプロチームのことが放送されている。
この街にある企業は一件デュエルとは直接関係のない企業に見えたとしても、その従業員で構成されたデュエルチームーーーいわゆる実業団リーグが存在しており、どんな物事にも中心にはデュエルが関係している。
この街にいる限り、デュエルは切っても切れないものであり……今の私には、それが少しだけ辛い。
「っ……いけない!!?早く食べて洗い物をしなきゃ!!?」
胸の痛みを誤魔化すように私は声をあげて動き始める。
それがただの現実逃避だということを、理解しながら。

ーーーーーーー

「うぅ～思ったより時間かかっちゃった。このままじゃ遅れちゃうよ～」
あれから家事をしていたら思ったより時間がかかってしまったの

で、現在通いなれた通学路を走っていた。
　それでもこのままいつもの道を真っ直ぐに進むなら間に合うかは微妙なところになってしまうだろう。
「それなら、こっちを通り抜ければ……」
　私はいつもの通学路から外れて、大きな公園の中に入ったところで別の方法から歩いてきた誰かにぶつかり、私は尻餅をついてしまった。
　カバンも放り出され、入っていたカードが散らばってしまう。
「きゃっ‼?」
「うおっ⁉?大丈夫か?」
　尻餅をついた私に、ぶつかってしまった男性が手を差し伸べてくれる。
　私はその手を掴んで立ち上がらせて貰った。
「は、はい。すみません……あっ、カードが‼?」
「手伝うよ、手分けして集めよう」
「あ、ありがとうございます」
　男性と手分けして散らばったカードを拾っていく。
「これで全部かな?」
「少し待ってください……あれ⁉?1枚足りない⁉?」
「なんだって⁉?」
　デッキの中を確認すると1枚私のお気に入りのカードが足りていなかった。
　私と男性は慌てて辺りを見渡す。
　するとしばらくして男性が少し離れた場所に飛ばされていたカードを見つけ、急いで取ってきてくれた。
「これで間違いないかな?」
「あっ‼?はい‼?良かった……ごめんね、ハネクリボー」
　私は男性が手渡してくれたカード、ハネクリボーを胸の前でぎゅっと抱きしめた。
　そんな私の様子を見て、男性が柔らかい笑みを浮かべる。
「そのカード、大切なカードなんだな」

「あ、はい‼?·今は、その、色々あってデュエルが出来ないけど、私の大切な子、ですので‼?·」
「……そっか。それより急いでいるようだったけど、いいのか?·」
「あっ‼?·学校‼?·」
咄嗟に変なことを口走ってしまった私に何を思ったのか、男性はとても優しい目でこちらを見ながら、声をかけてくれる。
私は慌てて時間を確認する。
このままだとこの道を通ってもぎりぎりだよ‼?·
「本当にごめんなさい‼?·」
「別にいいよ。急いでるんだろ?·まぁ、これからは気をつけるんだぞ」
「はい‼?·本当にすみませんでした‼?·それと、ありがとうございました‼?·」
私は頭を深く下げると男性は手をひらひらと振って公園を出て行った。
それを確認してから、私は再びをデュエルアカデミアに向けて、今度は気をつけながら走って行くのだった。

ーーーーーーーー

「……おはようございます」
なんとか予鈴前に辿り着いた。
小さな声で呟きながら教室の扉を潜ると、向けられるのは冷ややかな目線。
私はそれを極力気にしないようにしながら自分がいつも座っている教室の1番隅の席に着く。
デュエルアカデミア・ケルン校。
ケルンにあるデュエルアカデミアで小中高一貫の超マンモス校。
デュエルモンスターズについて学ぶための学校で、必修科目は何科目かあるが、様々なカリキュラムの中から自分が学びたい戦術や召喚方法などによって好きな授業を受けれるようになっているメジャー制度を取り入れている。

メジャー制度の理由はデュエルモンスターズにおける幅広い分野から学びたいものを主的に選び、自分の可能性を探りながら、実力をつけていけるようにということらしい。
流石はプロ決闘者を毎年何百人と生み出しているだけのことはある。
だからこそ、私には居場所と言えるものが無いのだけれど……
「栗原の奴、今日も来てるのか……」
「まともにデュエルもしないのに、なんで来てるのかしら？」
毎日のように聞こえてくる陰口に心が少し折れそうになる。
それでも、私はここから逃げることはできない。
ここはデュエルが大好きだった私のために、両親が通わせてくれた学校だから。
そんな暗くなる心を吹き飛ばすように、私の肩が誰かに軽く叩かれた。
「おはよ、遊花。今日は少し遅かったわね」
「あっ、桜ちゃん。えへへ、ちょっと家事をするのに時間がかかっちゃって」
かけられた声に私は少しホッとしながら声の主を見る。
そこにいたのは、キリッとしたつり目に濡れ羽色をした髪をナチュラルミディにしている少女。
私の唯一のお友達、宝月　桜（ほうづき　さくら）ちゃんだ。
桜ちゃんは所謂幼馴染で、私が小さかった頃からずっと一緒にいてくれている女の子。
私がこの街に残る事が出来たのも、桜ちゃんが自分のお母さんに相談してくれたからで、今も私のことを気にかけてくれるとても優しい子だ。
「見て。栗原さん、また宝月さんにかまって貰ってる」
「デュエルも出来ない癖に……なんであんな奴と一緒にいるんだ？」
桜ちゃんと話している私を見て、また陰口が聞こえてくる。
その声が耳に入ったのか、桜ちゃんがその目を更につりあげながら

陰口を叩いていた人達を睨む。
「私が誰と一緒にいようがアンタ達に関係ないでしょうが‼？文句があるなら私に勝ってから直接言いに来なさい‼？いつだって挑戦を受けてやるわよ‼？」
「ひっ……‼？」
「さ、桜ちゃん、落ち着いて」
「気にくわないのよ‼？大した実力も無い癖に陰口だけは偉そうで‼？遊花がデュエル出来るようになったらアンタ達なんか全員ぼっこぼこなんだから‼？」
「そ、そんなことしないよ～」
あまりの剣幕に怯えている生徒の間に入って必死に桜ちゃんを宥める。
……そう、実際言われていることは間違いではないのだ。
桜ちゃんは学年でトップ１０に入る程の実力を持つ決闘者だ。
あまりの容赦の無さにトラウマになっている生徒がいるほど桜ちゃんは強い。
それに対して、私は学年最下位の劣等生。
両親が事故にあったあの日から、私はデュエルをすることが怖くなってしまった。
私が大会に出ていなければ、両親は事故に合わなかったんじゃないかなんて、そんなありもしないことが頭によぎって、デュエルをしてもそれで頭がいっぱいになって気付いたら何もできずに負けてしまう。
いい加減、振り切るのか、デュエルから離れるのかを考えた方がいいことは分かっている。
でも、あの頃の思い出が、両親と楽しくデュエルをしていた記憶と、デュエルのせいでいなくなってしまった両親の記憶が、私の動きを止めてしまう。
だから、私は……
「ほう、なら俺様の挑戦も受けて貰えるんだよな？」
そうして思考の海に沈みそうになった私の意識を引き上げるよう

なドスの効いた声が響いた。
声が聞こえた方向を見るとそこにいたのは周りに取り巻きを引き連れ、厳つい顔をしたドレッドヘアーの青年。
空閑　騨（くが　だん）。
桜ちゃんと同じ学年でトップ１０に入る程の実力を持つ決闘者だ。
性格はとても好戦的でいつも周りには取り巻きを引き連れ、自分の強さをアピールしているという噂だ。
そんな空閑君を見て、桜ちゃんは好戦的な表情を浮かべる。
「あら、誰かと思ったら空閑じゃない。こないだ私にコテンパンにやられたのを忘れたのかしら？」
「テメェ‼？空閑さんに何舐めた口を……」
「待て、そいつの言ってることは正しい」
「でも、空閑さん……」
「勝者にはどんなことでも出来る権利がある。それが俺様の流儀であり、事実俺様は1度宝月に負けている。それは否定するな」
空閑君の言葉に取り巻きの人が静かになる。
それを確認してから改めて空閑君は桜ちゃんに話しかける。
「忘れちゃいねぇよ。だからこそリベンジマッチって奴をしてやるって言ってんだよ。それに、お前に勝てばそいつに文句言ってもいいんだろ？」
そういって私を顎で指す空閑君。
それを見て、桜ちゃんの雰囲気が変わる。
「……は？」
一段と低くなった桜ちゃんの声と雰囲気に辺りから悲鳴が聞こえる。
空閑君の隣にいる取り巻きの人とか少し泣きそうになっている。
正直言って私も少し怖い。
その雰囲気は学生が纏っていいものじゃないよ‼？
完全に裏の人間が出す雰囲気だよ‼？
そんな桜ちゃんの雰囲気にも気圧されず、空閑君は面白そうに笑う。

「俺様もそいつには少し言ってやりたいことがあってよ。ちょうどいいからテメェも一緒に潰してやるって言ってんだよ」
「猿山の大将風情が言ってくれるじゃない。私のことで文句を言うならまだ耐えられるけど、遊花に何かする奴は誰であろうと許さないわ。その空っぽの頭の中に絶対的な敗北を刻みつけてやる」
まさに一瞬即発。
そんな空気に思わず私は桜ちゃんに抱きついた。
「だ、ダメだよ‼？桜ちゃん‼？」
「離しなさい、遊花‼？コイツは私の逆鱗に触れたの‼？完膚なきまでに心をへし折って廃人にしてやるんだから‼？」
「発想が怖すぎるよ‼？私のことなら大丈夫だから‼？そ、それ以上するなら私にだって考えがあるんだから‼？」
「考え？」
「え、えーっと、えーっと、お、お昼ご飯交換してあげないよ‼？」
「……え？」
テンパって出たそんな言葉に桜ちゃんがぽかんとした表情を浮かべる。
周りで様子を見ていた人達も私の発言を聞いて、この状況でその発言とかマジかよコイツって目でこちらを見ている。
そんな私を見て、桜ちゃんは脱力すると頭に手を当てながら雰囲気を崩した。
「……はぁ～わかったわよ。空閑、さっきの発言は聞かなかったことにしてあげるわ」
「逃げるのか？」
「興が削がれたのよ。当人がこんなトンチンカンなこと言ってるし、私が怒っても仕方ないじゃない。挑戦ならまた受けてあげるから今は退きなさい。もうすぐ授業も始まるわ」
そういってシッシッと空閑君に向かって手を振る桜ちゃん。
そんな桜ちゃんの様子に向こうも毒気が抜かれたのか、舌打ちをして自分の座席に戻っていった。
ホッと一息を吐いた私を桜ちゃんが呆れたような表情で見る。

「全く、アンタって子は本当に……まぁいいわ。私も自分の席に戻るから」
「あ、うん。ありがとう、桜ちゃん」
「別にいいわよ。止めてあげたんだから、ちゃんとお昼のおかず、交換してよね」
そんなことを言いながら私に向かってひらひらと手を振って桜ちゃんも自分の席に戻っていった。
桜ちゃんがいなくなったことで周りも興味を無くしたのか、元のざわざわとした教室に戻っていった。
私は自分の席に座り、周りの様子を確認しながら、バレないように自分のデッキケースから1枚のカードを取り出して呟いた。
「私は……どうしたらいいのかな……お父さん……お母さん」
「……」
その様子を、空閑君が険しい表情で見ていたことを、私は気づくことが出来なかった。

ーーーーーーー

「それでは午前中の講義はここまでだ。しっかりとお昼休みを取るように」
そういって教室から講義をしていた先生が出て行った。
講義の内容をノートにまとめ、カバンに片付け、お弁当箱を取り出していると桜ちゃんが私の席に近づいてきた。
「ふぅ~やっと終わったわね。遊花、お昼ご飯にしましょ」
「うん、一緒に食べよう」
そういって桜ちゃんも私の近くの席に座って昼食が入っている重箱を取り出す。
それを見て私は思わず苦笑してしまう。
「あ、相変わらず桜ちゃんのお弁当、大きいね」
「そう?これぐらい普通じゃない」
「ううん、普通は1人で重箱は食べないと思うけど……」

「そうかしら？あ、その唐揚げ美味しそう。貰ってもいい？」
「ふふっ、いいよ。代わりにそのシューマイちょうだい」
「勿論いいわよ。あーむ……ん～やっぱり遊花の料理は最高ね。これなら料理人としてでも働けるわね」
「大袈裟だよ～」
私が作った唐揚げを食べて満面の笑みを浮かべる桜ちゃんを穏やかな表情で見る。
しばらくお互いに交換しながら食事を続けていると、桜ちゃんが何の気なしに口を開いた。
「そういえばさっきの話に関係してるけど、遊花は就職、どうするの？」
「えっ？」
「えって私達ももう3年生で6月にも入って来てるのよ？そろそろ考えないとマズイじゃない」
桜ちゃんの言葉に思わず固まってしまう。
確かにそろそろ本格的に就職に向けて動き出さないとマズイだろう。
というより、デュエルアカデミアに入っている時点で職業なんてほとんど決まっているようなものだ。
それでも、私には未来を考えることが出来なかった。
それを誤魔化すように私は桜ちゃんに声をかける。
「さ、桜ちゃんは？桜ちゃんは何処か就職したいところはあるの？」
「私？私はやっぱり『フェアリーテイル』ね」
「……あ～桜ちゃん、あの会社のブランド、大好きだもんね」
ファッションブランド『フェアリーテイル』。
専ら実業団の決闘者を抱えて活動している企業である。
フェミニン系のワンピースなどに定評があるブランドで、知名度はかなり高い。
その知名度の向上に一役買っているのは自社ブランドの服を纏ってデュエルする決闘者の存在だ。
社名と商品を消費者にアピールでき、観衆の中デュエルする機会も

多く、アマチュアであるハズなのに、人気が普通のプロ決闘者となんら変わりはないのだ。
「決闘者になるのは決めてるけど、完全にプロって言うのもなんか違うのよね。それを考えると宣伝と一緒に可愛い服を着れるって言うのがいいと思うのよね」
「桜ちゃん可愛いし、確かにモデルさんとかやっても似合いそうだね」
「ふふん、それ程でもあるわ♪」
「そっか……実業団か……」
「……まぁ、実際に受けてみて受かるかは分からないし、もう少し先の話よ。でも、十分に考えてはおきたいわよね。というわけで、何かあったら相談しなさいよ？」
「……うん、ありがとう」
本当に心配そうに、それでも明るく声をかけてきてくれた桜ちゃんに、私はそう返すことしか出来なかった。

ーーーーーーーー

「はぁ～」
放課後、誰もいなくなった教室で1人ため息を吐き、デッキから1枚のカードを取り出して眺める。
桜ちゃんは用事があるとかで、今日は1人で早めに帰ってしまった。
でも、それはちょうど良かったかも知れない。
今の私の姿を見たら、きっと桜ちゃんは心配するから。
思い浮かぶのは今日桜ちゃんと話した就職のこと……私の未来の話。
デュエルアカデミアに入った頃なら……お父さん達がいた頃なら、迷うことなんてなかった。
私がデュエルアカデミアに入ったのは、お父さんみたいなプロ決闘者になるため。
お父さんみたいに、どんな逆境からでも逆転して、人々を驚かせて、

楽しませる。
そんなプロ決闘者になりたいって、思っていた。
でも、今の私は、デュエルをすることすら怖くて……辛くて……
どうして、こうなってしまったんだろう？
私は……
「おっ‼？いいカード持ってるじゃねぇか」
「っ⁉？」
思考の海に沈んでいた私は突然の衝撃に現実に引き戻される。
何が起こったのかを確認しようとすると、私の周りに空閑君の取り巻きの人達がいて、私が持っていたカードを空閑君の取り巻きの1人が握っていた。
「そのカード‼？返して‼？」
「ハッ‼？デュエルをしねぇお前にこのカードは勿体ねぇだろ‼？このカードは貰っていくぜ‼？」
「っ‼？待って‼？」
カードを持って駆け出した取り巻きの人達を追って、私も自分の荷物を纏めて走り出す。
だけど相手は男の子。
どんなに走っても中々追いつくことが出来ない。
しばらく追いかけていると、取り巻き達は朝通った公園に入っていくのが見えた。
私が公園に足を踏み入れると公園の奥には取り巻きの人からカードを受け取っている空閑君の姿が見えた。
「来たか……」
「空閑……君……その、カード、返し、て……そのカードは、お父さんの……」
私は息を切らしながら空閑君を見つめる。
そんな私を見て、空閑君は鼻を鳴らした。
「ハッ、いい目をしてるじゃねぇか。いつも怯えて宝月の後ろにいる時より遥かにいい目をしてんじゃねぇか。だが、タダで返すのは面白

くねぇよな」
そういって空閑君は獰猛な笑みを浮かべる。
「デュエルだ、栗原。テメェが勝ったらこのカードを返してやるよ」
「えっ……」
空閑君の言葉に私の顔は蒼白になる。
デュエル。
賭けるものは……お父さんが私に託してくれた大切なカード。
もし、私が負けたら、また、無くなってーーー
私の表情が変わったのが分かったのだろう。
空閑君は冷めた目でこちらを見る。
「ハッ、デュエルするとなった途端にそのザマか。だったらこのカードはテメェのところに戻らねぇだけだ」
「わた、しは……」
私の言葉はそこで詰まり、視界が真っ黒に染まっていく。
怖い……デュエルをするのも……また失うのも……お父さん達が残してくれたものが……全部消えていってしまうのが。
そのまま私の意識が消えそうになった時ーーー
「おい!!?何やってるんだ!!?」
私の後ろから誰かの声が聞こえた。
声の主は私に近づいて肩を押さえながら、私の目を見て優しい声をかけてくれた。
「おい、大丈夫か!!?何があった!!?おい、お前らこの子に何したんだ!!?」
「あなたは、今朝の……」
そこにいたのは今朝もこの公園で出会った男性だった。
茶髪のエアリーヘアで、とても優しい瞳をした男性。
その男性は空閑君達を睨みながら問い詰める。
それに対して空閑君も面白くなさそうに口を開く。
「そいつとこのカードを賭けてデュエルするってなったらそうなったんだよ」
「それはこの子のカードなんだろ!!?この子に返せ!!?」

「うるせぇ‼?・そいつは戦うことから逃げようとしてんだ‼?・そんな奴には何も言う権利なんて無いんだよ‼?・それとも、そいつの代わりにアンタがデュエルすんのか?その場合、アンタのデッキも賭けて貰うがな‼?・」
「何だと?・」
「元々テメェは部外者なんだ‼?・覚悟もねぇ奴は引っ込んでろ‼?・」
「そうだそうだ‼?・」
「引っ込んでろ部外者‼?・」
そういって空閑君は男性を威嚇し、取り巻きの人達からも野次が飛ぶ。
その言葉を聞いて、男性は顔を顰める。
当たり前だ。
私のカードだけならともかく、自分のカードがかかってまで彼がデュエルを受ける義理なんてない。
彼と私の関係なんて、今朝ぶつかっただけの他人なのだ。
そんな他人の為に自分のカードを賭けることなんて……そこまで考えたところで私の耳に、もう1度あの優しい声が聞こえた。
「なぁ、俺に任せてくれないか」
「……えっ?・」
彼から告げられた優しい言葉に私は思わず耳を疑う。
「なん、で……」
「あのカード、大切なカードなんだろ?・大切なものを奪われる気持ち、俺にも分かるから」
「でも、それであなたのカードまで賭けることは……」
「君のカードを俺に賭けて貰うんだ。それぐらいの覚悟はいるだろ。それに、君は今戦えないんだろ?・」
男性の言葉に私は思わず俯いてしまう。
そんな私を見て、男性はさらに優しい言葉をかけてくれる。
「なら、戦えない君の代わりに、俺が戦う。任せてくれ」
そう言うと男性は空閑君に向き合った。
「いいぜ。負けたら俺のデッキも賭ける。その条件で俺とデュエル

だ」
「……テメェ、正気か？」
その条件を呑んでくるとは思わなかったのだろう。
空閑君が理解出来ないものを見るような目で男性を見る。
それに対して男性はデュエルディスクを起動させながら力強く答える。
「勿論正気だ。さぁ、やろうぜ。この子のカード、返して貰うぞ‼？」
「ハッ‼？ヒーロー気取りが‼？そんな奴が俺様に、空閑　騅に勝てるかよ‼？名乗れ、ヒーロー気取り‼？」
「……遊騎だ」
「遊騎だと……その名は……何処かで……」
「ヒーロー気取りだろうがどうでもいい。戦えないこの子の代わりに俺は戦う‼？行くぞ‼？」
「っ‼？吠えるじゃねぇか‼？そこまで言うなら俺様を倒して見ろ‼？」
『決闘（デュエル）‼？』
私には、忘れられない記憶がある。
でも、この日のことも、きっと一生忘れることはないだろう。
この日、私の止まっていた時間が、ゆっくりと動き出す音が聞こえた気がした。

第2話　運命の結び目

☆

俺には果たしたかった約束がある。

その約束は俺の根幹と言えるもので、俺を助けてくれた人に返せる唯一のものだった。

でも、その約束を果たす機会は、永遠に無くなってしまって、俺は自分のいる意味を見出すことが出来なくなった。

それでも、果たせなくなった約束を諦めることだけは出来なくて、俺には抗うことしか出来なかった。

だから、その出会いは、抗い、戦い続けることで辿り着くことが出来た、新しい運命だったのかも知れない。

そんな、辿り着いた新しい運命が、俺を温かな未来に導いてくれるきっかけだったんだと……俺はその時に確信したんだ。

ーーー

から働かなくても暮らせてはいけるのだが、だからといって働かないのも気分的に良くない。
「こっちでまともな仕事……見つかるかな？」
俺は、この街では罪人に近い。
２年前、とあるプロチームの決闘者として働いていた俺はプロ決闘者としてデュエルモンスターズの大会に出場していた。
俺は順調に勝ち上がり、準々決勝の試合が始まる直前、その事件は起きた。
控え室を出て会場に向かっている途中、通路の隅に誰かのデッキケースが落ちてあったのを発見した。
決闘者の魂であるデッキが落ちているなんてとんでもないことだと思い、俺はそのデッキケースを急いで大会の運営スタッフのところに持っていった。
するとそこで待っていたのは俺の対戦相手であった決闘者のデッキケースが盗まれていたという話だった。
……疑いは、当然のように対戦相手であった俺に向いた。
勝つ為に相手のデッキケースを奪って中身を盗み見て何食わぬ顔で戻しに来たのだと。
俺がどんなに否定しても運営スタッフは俺の話を聞いてくれず、結局その大会は出場停止。
更には後日の処分で俺をプロリーグから追放することが決定した。
同じチームのメンバーや社長は俺の無罪を訴えてくれたのだが、結局決定は変わらず、俺は仲間達に迷惑をかけない為に辞表を出した。
それからは色々な仕事を転々としているが、どんな仕事をしても長続きすることは無かった。
今までプロ決闘者としてしか生きてこなかったし、その上どうやら俺は騙されやすいらしく何回も騙されては酷い環境での労働を強いられた。
まるで、運命が足掻いている俺に全てを諦めろと言っているようで……
「……諦めることなんてできない」

自分の中で燻っている感情を必死に押し付けながら、俺はバスを降りる準備を始めた。
その約束が叶うことがないと、理解していながら。

ーーーーーーー

『ハロー‼?ケルンの皆‼?驚いた?皆を驚かせるためにエンタメデュエリスト、雨夜　美傘がお送りするゲリラ放送番組‼?雨夜　美傘のデュエルステーションの時間だよ‼?今回はプロチーム『Ａｌｂｔｒａｕｍ』について色々語って言っちゃうよ～‼?』
「……何というか、相変わらずだな。この街は」
街中にあるモニターから流れているのは今シーズンに活躍しているプロチームの情報のようだ。
何処にいてもデュエルを楽しめる街とかいうキャッチコピーが付いていたハズだが確かにそれは伊達じゃないかも知れない。
「アイツらも元気にしてるかな?」
思い出すのは自分が元いたプロチーム。
ここ2年は仕事のドタバタのせいであまり情報を集めていなかったが、多分アイツらなら今でも十分トップデュエリストでいるハズだ。
一緒に戦い、時に競い合ってきた仲間だからこそそこを疑う余地はない。
俺はチラリと自分の腰につけてあるデッキケースを見る。
正直に言うと久し振りに会ってみたいが、俺は今はあの場所から抜けた身だ、そう簡単に会いに行くわけには行かないだろう。
それにしても自分の心情としてデュエルの話ばかりを思い出さされるのは少し辛い。
2年前の事件以来、俺はまともにデュエルをする相手がいなかった。
デュエルが出来なかったでもしたくなかったでもない。
する相手がいなかったのだ。

まぁ、それも当然のことだろう。
他人から見れば俺は他人に勝つ為にイカサマをした男なのだ。
そんな相手と好き好んでやるような奴がいるわけがない。
おかげで最近は自分1人でデッキを回すというぐらいでしかデュエルモンスターズに触れれていない。
「……また、してみたいな」
プロ決闘者だった時、いや、それよりも前からずっと心の中に残っている思い。
誰かとデュエルがしたい。
「っ……他の道を通るか」
今の心情でデュエルの話を見続けるのは避けたい。
俺が辺りを見回すとちょうど草木が生い茂る大きな公園を見つけた。
あの中なら流石にデュエルのモニターもないだろう。
そう思い逃げるように大きな公園の中に入ったところで別の方法から走ってきた誰かが俺にぶつかり、その子は倒れ込んでしまった。
その子が提げていたカバンも放り出され、中に入っていたカードが辺りに散らばってしまった。
「きゃっ‼?」
「うおっ⁉?大丈夫か?」
尻餅をついた子に、慌てて手を差し伸べる。
そこにいたのは制服に身を包んだ見るからにあどけない少女だった。
絹糸のように柔らかい黒髪。
その黒髪は左側頭部をサイドテールにまとめ、水色のリボンをつけている。
少女は恥ずかしかったのか少し顔を赤く染めながら俺の手を掴んだので、ゆっくりと立ち上がらせる。
「は、はい。すみません……あっ、カードが‼?」
少女が勢いよく頭を下げ、その際に自分のカードが散らばったのが見えたようだ。

かなり派手に散らばったので流石にこれを1人で集めるのは酷だろう。
「手伝うよ、手分けして集めよう」
「あ、ありがとうございます」
少女と一緒に辺りに散らばったカードを集めていく。
とりあえず視界に入ったカードは全部拾ったハズなので少女に渡し、確認してもらう。
「これで全部かな？」
「少し待ってください……あれ⁉？1枚足りない⁉？」
「なんだって⁉？」
少女が確認するとデッキの中のカードが1枚足りていなかったようだ。
俺と少女は慌てて辺りを見渡す。
しばらく探していると少し離れた木の影に飛ばされていたカードが見えたので急いで拾ってから少女に手渡した。
「これで間違いないかな？」
「あっ‼？はい‼？良かった……ごめんね、ハネクリボー」
少女は俺が手渡したハネクリボーのカードを胸の前でぎゅっと抱きしめた。
そんな少女の様子を見て、俺は自然と穏やかな笑みが浮かんだ。
「そのカード、大切なカードなんだな」
「あ、はい‼？今は、その、色々あってデュエルが出来ないけど、私の大切な子、ですので‼？」
少女の言葉に、俺は一瞬息が詰まりそうになった。
見つかったカードを抱きしめる程カードを大切にしているその少女から漏れたデュエルが出来ないという言葉。
それはどれだけの思いが込められているのか、俺には慮ることが出来なかった。
だからこそ、俺は少女を励ますように出来るだけ優しい声色で声をかける。
「……そっか。それより急いでいるようだったけど、いいのか？」

「あっ‼?・学校‼?・」
少女が慌てて時間を確認し始める。
彼女が来ているのはデュエルアカデミアの制服のハズだ。
この時間だともうすぐ授業が始まってしまうだろう。
そのことに気づいたのか少女は慌てて頭を下げてきた。
「本当にごめんなさい‼?・」
「別にいいよ。急いでるんだろ?・まぁ、これからは気をつけるんだぞ」
「はい‼?・本当にすみませんでした‼?・それと、ありがとうございました‼?・」
少女が頭を深く下げるので俺がいては行きにくいだろうと思い、少女に手をひらひらと振って公園を出て行った。
「色々あってデュエルが出来ない……か」
それは、今の俺と何が違うのだろう。
そしてそれをあの年の少女が背負っているということに、どれほどの意味があるのだろう。
「……俺も、負けてられないな」
俺の中で少しだけ燻っていた思いが小さくなった気がした。

ーーーーーーーー

そんな風に少しだけ軽くなった俺の心も、すぐに折れそうになっていた。
その理由は……
「だから‼?・仕事でしばらく留守にするから家賃は待ってくださいって話したじゃないですか‼?・」
「うるさいよ‼?・最初の契約書に書いてあっただろう‼?・賃料に不履行があった場合は即時契約解除ってね‼?・バイクやら荷物やらを売り払わないでやっただけありがたく思いな‼?・」
1ヶ月半いなかった間に家賃滞納のせいで自分の部屋が既に他の人の部屋になっていたからだ。
そもそも最初にこの街の外に出ないといけなくなった時に大家さ

んには話していたのだ。
最低でも1ヶ月はかかるからその間は家賃の支払いを待って欲しいと。
いや、そもそも今の時代に家賃を毎月手渡しないといけないのもだいぶおかしい気はするが……それを抜きにしても流石にこれはキツかった。
「ちょっと待ってくださいよ!!?そりゃないでしょ!!?」
「うるさいよ!!?正直に言うとね、アンタのことはずっと気に入らなかったんだ!!?アンタがいなくなってこちらは清々するよ!!?」
「なっ!!?」
「わかったらさっさと出て行きな!!?これ以上喚くんならセキュリティに突き出すよ!!?」
そういって取りつく島もなく俺は住んでいたアパートを追い出されてしまった。
戻ってきたばかりで無職な上に家も無くなるって……俺は抗い続けてきた運命の残酷さに、流石に心が折れそうだった。

ーーーーーーーー

「はぁ〜どうすればいいんだよ……」
時刻は夕方。
帰る場所も無くなった俺はとりあえず仕事を探す為に公共職業安定所に行ってみるもあまり良さそうな仕事も見つからず、俺は今朝通った公園があった通りをトボトボとバイクを押しながら歩いていた。
とりあえずしばらくは何処かのホテルとかで暮らすことになるのは仕方がない。
だが問題はここが決闘都市ケルンであり、現在プロリーグが始まっているということである。
決闘都市ケルンは世界中のデュエルの中心になるようにという思いで作られた街だ。

そのためプロリーグが始まると様々な街からプロリーグに参加したり、あるいはプロリーグの観戦をする為に人が集まってくる。
オフの時ならまだしもプロリーグが始まったばかりのこの時期に空いているホテルがあるとは思えない。
おまけにそれでも観戦したい人達はネットカフェとかに行ったりするのでそちら方面も全滅。
おまけに例の事件があったせいでこの街での俺の印象は最悪で泊めてくれるような人はいないだろう。
元のチームメンバー達なら泊まらせてくれるかも知れないが、プロリーグで忙しい時期にそんなことで迷惑を掛けたくない。
「最悪公園で野宿か……」
冗談混じりで呟いてみるが割と洒落になっていないというか現時点で1番可能性がありそうなのがそれである。
とりあえずまだ時間はあるから行ってないホテルを探しにいけばワンチャンぐらいはあるだろうか？
野宿は勘弁して欲しいよな、と俺は何の気なしに公園の方を向いた。
すると……
「ん？」
公園の中に走り去っていく何人かの男と、その男達を必死な表情で追っている見覚えがある少女の姿が見えた。
「……」
自分の中の冷たい部分が気にするなと告げてくる。
お前は今、生きる為にやらないといけないことがあるだろうと。
あの少女がどういう状況かも分からないのにお前が行ってどうなるのかと。
今から探せばホテルが見つかるかも知れないが、あの少女を追いかけ、首を突っ込んだせいで泊まる場所すら無くなってしまったらどうするんだと。
止めろ、関わるべきじゃない、朝にぶつかっただけのただの他人じゃないかと、そんな声がこだまする。

確かにこの状況で彼女に関わったとして、彼女にとっていい方向に転がるかも分からない。
朝にほんの少し言葉を交わしただけの他人の為に何が出来るのかと思う。
それでも……
「……」
『大丈夫なのです!!?お姉さんにドドーンとお任せなのです!!?』
「あ～～～!!?ほっとけるわけないだろ!!?」
過去の自分を救ってくれた言葉が頭の中に響く。
その言葉に救われた自分が、守るのではなく、守られる側だった自分が、自分と同じような状況にある人間を見捨てられる訳がない!!?
そして何よりーーーあんな泣きそうな顔をしている人間を、結束遊騎は見て見ぬ振りなんて出来ない!!?
バイクを押して少女が入って行った公園の中に入る。
その公園の中で俺が目にしたのは、何人かの男を横に控えさせている男と、その男と会話し、蒼白になっている少女の姿だった。
「おい!!?何やってるんだ!!?」
少女を威圧している男達に声をあげながら、蒼白になっている少女の肩を押さえ、出来るだけ優しい声で話しかけながら、男達を睨みつける。
「おい、大丈夫か!!?何があった!!?おい、お前らこの子に何したんだ!!?」
「あなたは、今朝の……」
俺の言葉が気に障ったのかリーダー格であろう男が面白くなさそうに口を開く。
「そいつとこのカードを賭けてデュエルするってなったらそうなったんだよ」
そういって男が1枚のカードを見せる。
それは確かに今朝みた少女のデッキに入っていたカードだった。
「それはこの子のカードなんだろ!!?この子に返せ!!?」
「うるせぇ!!?そいつは戦うことから逃げようとしてんだ!!?そんな

奴には何も言う権利なんて無いんだよ‼?･それとも、そいつの代わりにアンタがデュエルすんのか?その場合、アンタのデッキも賭けて貰うがな‼?･」
「何だと?･」
少女のカードだけではなく俺のカードまでも要求してくる男に、俺は心の中が熱くなっていくのを感じる。
「元々テメェは部外者なんだ‼?･覚悟もねぇ奴は引っ込んでろ‼?･」
「そうだそうだ‼?･」
「引っ込んでろ部外者‼?･」
そういって男は俺を威嚇し、取り巻き達からも野次が飛ぶ。
その言葉は確かに的を射ている。
俺と少女の関係は今朝ぶつかっただけの他人。
少女のカードだけならともかく、自分のカードがかかってまで俺がデュエルを受ける義理なんて本当はないのかも知れない。
だけど‼?
『大丈夫なのです‼?･お姉さんにドドーンとお任せなのです‼?･』
同じ状況を助けてくれたあの人の言葉を、俺が嘘にしてしまうことだけは絶対に出来ない‼?
俺は少女の方を振り向くともう1度優しく声をかけた。
「なぁ、俺に任せてくれないか」
「……えっ?･」
俺から告げられた言葉に少女は驚きの表情を浮かべる。
「なん、で……」
何故か、その答えはもう決まっているし、知っている。
「あのカード、大切なカードなんだろ?･大切なものを奪われる気持ち、俺にも分かるから」
「でも、それであなたのカードまで賭けることは……」
確かに俺のカードは少女には関係ない。
だけど、そんな関係ない俺のデュエルに自分のカードの行方を委ねてくれるのに、自分のカードも賭けないでどう信じてもらうんだ。
「君のカードを俺に賭けて貰うんだ。それぐらいの覚悟はいるだろ」

そして何より、朝に聞いた彼女の言葉。
「それに、君は今戦えないんだろ？」
その言葉に少女は俯く。
それは苦しいことなのだろう。
悔しいことなのだろう。
ならば、俺に出来ることはただ1つ。
「なら、戦えない君の代わりに、俺が戦う。任せてくれ」
彼女の思いも背負い、このデュエルに望むことだけだ‼？
「いいぜ。負けたら俺のデッキも賭ける。その条件で俺とデュエルだ」
「……テメェ、正気か？」
その条件を呑んでくるとは思わなかったのだろう。
理解出来ないものを見るような目で男は俺を見てくる。
だが、そんな目がどうしたというのか。
そのような目はこれまで生きてきた中で何度だって体験している‼？
俺はデュエルディスクを起動させながら力強く答える。
「勿論正気だ。さぁ、やろうぜ。この子のカード、返して貰うぞ‼？」
「ハッ‼？ヒーロー気取りが‼？そんな奴が俺様に、空閑　騨に勝てるかよ‼？名乗れ、ヒーロー気取り‼？」
苛立った顔でこちらを睨みつける男。
俺の名前は名乗る程の名でもないどころか名乗ると疎まれる名前だろう。
昔はともかく、今の俺にヒーローなんてものは名乗れない。
だから名だけは答えてやるよ。
「……遊騎だ」
「遊騎だと……その名は……何処かで……」
俺の名前ぐらいは聞いたことがあるのだろうだからといって正直に名乗ってやるいわれもない。
「ヒーロー気取りだろうがどうでもいい。戦えないこの子の代わりに俺は戦う‼？行くぞ‼？」

「っ‼?・吠えるじゃねぇか‼?・そこまで言うなら俺様を倒して見ろ‼?・」

『決闘‼?』

俺には果たしたかった約束がある。

その約束を俺には果たすことは出来なかったけど……その約束を受け継ぐことは出来るのかも知れない。

止まっていた俺の時間が、動き出す音がした。

第３話　運命の切り札

☆

遊騎　ＬＰ８０００
騨　　ＬＰ８０００

「先攻は俺様だ‼？まずはこの世界を俺様の色に染めてやる‼？フィールド魔法、飛竜艇ーファンドラを発動!!」
空閑と名乗った男がデュエルディスクにカードを置くと、俺達の周りの景色が空に浮かぶ船の甲板に変わった。
少し離れた場所には他の飛行艇が２隻見え、ここは１番大きな飛行艇のようだ。
これが奴のフィールド魔法、飛竜艇ーファンドラの船の上か。
立体映像なのはわかってるが、世界が塗り替えられるようなこの感覚は何度体験しても驚かされる。
「そしてまずはコイツからだ‼？空牙団の剣士ビートを召喚‼？」

〈空牙団の剣士ビート〉☆３　戦士族　地属性
ＡＴＫ１２００

現れたのは毛皮を被った小型の戦士。
下級モンスターではあるが、こういうモンスターが意外と曲者だったりするのだ。
そんな俺の予想通り、小柄な戦士が動きを見せる。
「空牙団の剣士ビートの効果発動‼？１ターンに１度手札から同名以外の空牙団モンスター１体を特殊召喚する‼？俺様は空牙団の参謀シールを特殊召喚‼？」

〈空牙団の参謀シール〉☆４　獣戦士族　闇属性
ＤＥＦ１０００

ビートが毛皮から取り出した角笛を吹くと船の中から学者のような獣人が現れ、ビートの横に並び立った。
「さらにモンスターゾーンに存在する状態で自分フィールドに自分以外の空牙団が特殊召喚されたことで空牙団の剣士ビートの効果発動!!?1ターンに1度、デッキから空牙団モンスター1体を手札に加える!!?俺はデッキから空牙団の孤高サジータを手札に加える」
「特殊召喚をさせてサーチまで出来るなんて厄介なモンスターだな」
「これだけじゃねぇよ!!?空牙団の参謀シールも空牙団の剣士ビートと同様に同名以外の空牙団を手札から特殊召喚できる!!?空牙団の参謀シールの効果で、来やがれ!!?空牙団の孤高サジータ!!?」

〈空牙団の孤高サジータ〉☆5　鳥獣族　風属性
ＤＥＦ２４００

シールがビートと同じように角笛を吹くと、船のマストからライフルを持った鳥人が甲板に降り立った。
そしてその鳥人はそのままライフルの銃口をこちらに向けた。
「特殊召喚した空牙団の孤高サジータの効果発動!!?特殊召喚した時に同名以外の自分フィールドの空牙団モンスターの種類×５００ポイントのダメージを相手に与える!!?」
「何!?」
「俺様のフィールドには空牙団の孤高サジータ以外に空牙団の剣士ビートと空牙団の参謀シールの2体がいる。よって１０００ポイントのダメージを受けな!!?」
「くっ!!?」

遊騎　ＬＰ８０００→７０００

サジータがライフルの引き金を引き、俺の身体が撃ち抜かれてライフが削られる。

まさか先攻からライフが削られるとは思わなかったな。
そんな俺を見て取り巻き達が野次を飛ばす。
「先攻からライフを削るなんて流石っす、空閑さん!!?」
「どうだ!!?見やがったか空閑さんの実力を!!?」
「テメェみたいな男が勝てる相手じゃねぇんだよ!!?」
そう言って嘲笑う取り巻き達に空閑が軽く手を振って応える。
そしてその顔に獰猛な笑みを浮かべた。
「さらに空牙団の孤高サジータには永続効果で相手はコイツ以外の空牙団モンスターを効果の対象にできねぇ。俺様はカードを1枚伏せてターンエンドだ。さぁ、偉そうな口を叩いたお前の実力を見せて貰おうか!!?」

遊騎　ＬＰ７０００　手札５
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー
ー□○□ー
ーー▲ーー　▽
騨　ＬＰ８０００　手札１

モンスターの展開をしながら手札補充とバーンによる先制攻撃、さらには効果耐性の付与。
傲慢な態度を取っているが着実な手を打ってくる辺り案外油断ならなそうだ。
おまけに発動したフィールド魔法の効果はまだ現れてないがここまで堅実な手を打ってくる奴が使ったものなら強力な効果を秘めているんだろう。
「……面白い。俺のターン、ドロー!!?」
俺は笑みを浮かべながらデッキからカードを引いた。
「まずは魔法カード、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローする!!?俺は5枚、お前は1枚捨ててドローだ」

宣言して俺は手札全てを墓地に送り、新しく5枚のカードをドローした。
それを見て同じようにドローをした空閑が笑う。
「ハッ、いきなり手札全部交換かよ。そんなに手札が悪かったのか？」
「ある意味でな。でもこれで万全に動けそうだ。俺は墓地に送られた2枚の妖刀竹光の効果発動‼？デッキから妖刀竹光以外の竹光カードをデッキから手札に加える」
「チッ、墓地発動効果があったのか」
「俺がデッキから手札に加えるのは黄金色の竹光と折れ竹光だ。そして相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。来い、Ｈ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）強襲のハルベルト‼？」

〈Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１８００

俺の前に現れたのはハルバードを持った紫の鎧を纏った戦士。
戦士はこちらを一瞥してから楽しげに空牙団を見据えた。
俺が召喚したモンスターを見て空閑が嘲笑を浮かべる。
「ヒロイックだと？ハッ、ヒーロー気取りにはお似合いのカードだな」
「好きに言ってろ。バトル‼？Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトで空牙団の剣士ビートを攻撃‼？ライトニングハルバード‼？」
「チッ、それぐらいは受けてやる。だが、ただでとは言わねぇ‼？永続罠、空牙団の修練‼？」
「罠カードか……」
「このカードに攻撃を止める能力はねぇ。空牙団の剣士ビートは討たせてやらぁ」
ハルベルトが持っていたハルバードに雷が落ち、ハルベルトはそのまま雷を纏ったハルバードでビートの身体を貫いた。
貫かれたビートは派手に爆散し、その爆風が空閑を襲う。

騅　ＬＰ８０００→７４００

「Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトの効果発動!!?このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時にデッキからヒロイックカードを手札に加える」

「サーチ効果か。だが、こちらも空牙団の修練の効果が発動する!!?自分フィールドの空牙団モンスターが戦闘または相手効果で破壊された場合、デッキからそのモンスターの元々のレベルより低いレベルを持つ空牙団モンスターを特殊召喚する!!?俺様はデッキから空牙団の撃手ドンパを特殊召喚だ!!?」

〈空牙団の撃手ドンパ〉☆２　獣族　風属性
ＤＥＦ１０００

ビートが生み出した爆風から小型船に乗った小さな獣が飛び出してきた。

今までの空牙団を見る限り下級モンスターには他の空牙団を呼び出し、呼び出した後に何かを発動する効果があるようだ。

あのモンスターにも注意が必要か。

「俺はデッキからＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）エクストラソードを手札に加える。メインフェイズ２、俺はＨ・Ｃ　エクストラソードを召喚!!?」

〈Ｈ・Ｃ　エクストラソード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１０００

現れたのは銀色の鎧を身に纏った二刀流の戦士。

俺はその姿を確認してから、２体の戦士に手をかざす。

「俺は戦士族、レベル４のＨ・Ｃ　強襲のハルベルトとＨ・Ｃ　エクストラソードでオーバーレイ!!?２体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?」

「チッ、エクシーズ召喚か!!?」

Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトとＨ・Ｃ　エクストラソードが光となり、

空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から赤い鎧を着た馬に乗る弓兵が舞い降りた。
「エクシーズ召喚!!?現れろHーC（ヒロイックチャンピオン）ガーンデーヴァ!!?」

〈HーC　ガーンデーヴァ〉★4　戦士族　地属性
ATK2100

「エクシーズモンスターか……ソイツには一体どんな効果が……」
「焦るなよ。まずはエクシーズ素材になったH・C　エクストラソードの効果発動!!?」
「エクシーズ素材になった時の効果だと!!?」
「このカードを素材としてエクシーズ召喚したモンスターの攻撃力は1000ポイントアップする!!?」

HーC　ガーンデーヴァ
ATK2100→3100

ガーンデーヴァを赤いオーラが包んでいく。
元々ガーンデーヴァは攻撃力が低めのエクシーズモンスターだ。
これぐらいしておかないとすぐに破壊されてしまうからな。
「攻撃力3100だと!!?」
「おまけにHーC　ガーンデーヴァは1ターンに1度、レベル4以下のモンスターが特殊召喚された時にオーバーレイユニットを1つ使うことでそのモンスターを破壊できる。この効果は対象を取らないから空牙団の孤高サジータでも防げないぜ」
とは言ったもののレベル4以下のモンスターなら通常召喚してしまえばいい上に空牙団の特殊召喚効果にレベル制限はない。
大型の空牙団モンスターが出てきた時点でガーンデーヴァが越えられてしまうこともあり得る。

そもそも、俺のデッキは一騎打ちには強いが複数のモンスターを対処するのは苦手なのだ。
それを踏まえて俺ができることは……俺は自分の手札を一瞥しーーー
「俺はこれでターンエンドだ」
「何だと⁉?」
ーーーそのままターンエンドを宣言した。
そんな俺を見て、空閑は目の色を変え、取り巻き達はざわめきだし、女の子は青ざめた。
俺の行動に腹が立ったのか空閑が怒鳴り声をあげる。
「そんだけ手札があるのに伏せカードすら無しだと⁉?テメェ俺様を舐めてやがるのか⁉?」
「別に舐めてなんかないさ。俺にとってこれが最善手ってだけだ」
「何処までもふざけた真似をしやがって⁉?その澄ました面、今すぐ歪めてやらぁ⁉?」
空閑が怒り狂った表情でこちらを睨みつける。
俺はその表情を見て、改めて覚悟を決める。
このターンだ。
このターンの行方で、勝負が決まる。

遊騎　ＬＰ７０００　手札６
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
　　○　　ー
ー□□□ー
ーー▲ーー　　▽
騨　　ＬＰ７４００　手札１

「俺様のターン⁉?ドローする代わりに飛竜艇ーファンドラの効果発動⁉?」
「ここでフィールド魔法の効果か……」

ドローの代わりに効果を発動するフィールド魔法があることは知っている。
そしてドローの代わりに効果を発動するということは大抵の場合ーーー
「通常ドローをする代わりにデッキから空牙団モンスターを手札に加える!!?俺様が手札に加えるのは空牙団の団長!!?空牙団の英雄ラファールだ!!?」
ーーードローよりも確実なサーチを行うものだ。
おまけにあの口振り、どうやらサーチしてきたカードはあのデッキの切り札のようだ。
俺はそれを見て気を引き締める。
ここからは少しのミスが負けに繋がる。
「早速コイツを呼び出したいところだが、まずはコイツだ。空牙団の闘士ブラーヴォを召喚!!?」

〈空牙団の闘士ブラーヴォ〉☆４　爬虫類族　炎属性
ＡＴＫ１９００

現れたのは鉤爪を着けた赤いリザードマン。
下級の空牙団には他の空牙団が特殊召喚された時の効果がある。
このタイミングで出して来たってことはそれなりに厄介な効果があるのだろう。
そして何より、ここからが本番だ。
「空牙団の闘士ブラーヴォの効果発動!!?1ターンに1度、手札から同名以外の空牙団モンスター1体を特殊召喚する!!?大空に君臨する伝説の傭兵!!?空牙団の英雄ラファールを特殊召喚だ!!?」
空閑の呼び声に応えるように雄叫びをあげて甲板に降り立ったのは蒼い巨龍。
そして巨龍に応えるようにバトルゾーンにいる空牙団のモンスター達が雄叫びをあげる。
これが空牙団の切り札か!!?

〈空牙団の英雄ラファール〉☆８　ドラゴン族　光属性
ＡＴＫ２８００

空閑が出したモンスターを見て取り巻き達の中からも歓声があがる。
「出た!!?空閑さんの切り札!!?空牙団の英雄ラファール!!?」
「これでアイツももう終わりだ!!?」
そんな取り巻き達の声を聞きながら空閑は獰猛な笑みを浮かべた。
「さぁ、いくぞ野郎共!!?空牙団の英雄ラファールが特殊召喚されたことで空牙団の英雄ラファールと空牙団の参謀シール、空牙団の闘士ブラーヴォ、空牙団の撃手ドンパの効果が発動だ!!?」
「一気に４体のモンスター効果が発動か……」
「まずは空牙団の撃手ドンパの効果!!?モンスターゾーンに存在する状態で自分フィールドに自分以外の空牙団が特殊召喚されたことで、１ターンに１度フィールドの表側表示のカード１枚を対象にし破壊する!!?消え去れ、ＨＩＣガーンデーヴァ!!?」
「っ!!?させるか!!?墓地から罠カード、スキルプリズナーを発動!!?」
「墓地から罠だと!!?」
「このカードを除外し、ＨＩＣガーンデーヴァを選択し、このターン選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にする!!?」
ドンパがガーンデーヴァに向けて銃弾を放つが、ガーンデーヴァの周りに見えない壁のようなものができ、その弾丸を弾き返した。
「手札抹殺の時に捨ててやがったか!!?なら攻撃力で上回ってやりゃあいいだけだ!!?モンスターゾーンに存在する状態で自分フィールドに自分以外の空牙団が特殊召喚されたことで、１ターンに１度フィールド全ての空牙団モンスターの攻守をターン終了時まで５００ポイントアップする!!?」
「ここに来て全体強化か!!?」

空牙団のブラーヴォが雄叫びをあげると空牙団モンスター全てに赤いオーラが宿る。
これは少しマズイかもしれないな。

空牙団の闘士ブラーヴォ
ＡＴＫ１９００→２４００

空牙団の孤高サジータ
ＤＥＦ２４００→２９００

空牙団の参謀シール
ＤＥＦ１０００→１５００

空牙団の撃手ドンパ
ＤＥＦ１０００→１５００

空牙団の英雄ラファール
ＡＴＫ２８００→３３００

「まだまだいくぞ‼？空牙団の参謀シールの効果‼？モンスターゾーンに存在する状態で自分フィールドに自分以外の空牙団が特殊召喚されたことで、１ターンに１度墓地から空牙団モンスター１体を手札に加える‼？俺様は墓地から空牙団の剣士ビートを手札に加える‼？」
シールが何かの紙を広げるとその中からカードが現れて空閑の手札に加わった。
あれが墓地から回収されたビートなのだろう。
「そしてお待ちかねの空牙団の英雄ラファールの効果発動‼？スコールリンク‼？このカードが特殊召喚された時、同名以外の空牙団モンスターの種類の数だけ自分のデッキをめくり、その中から１枚を手札に加え、残りをデッキに戻す‼？」

ラファールが辺りを雄叫びをあげるとデッキの上から1枚のカードが手札に加わった。
「そして俺様のモンスターは全て攻撃表示に変更だ!!?このターンでテメェを叩き潰してやる」

空牙団の参謀シール
ＤＥＦ１５００→ＡＴＫ２１００

空牙団の撃手ドンパ
ＤＥＦ１５００→ＡＴＫ１０００

空牙団の孤高サジータ
ＤＥＦ２９００→ＡＴＫ１７００

空閑のモンスター全ては強化され、ラファールにはガーンデーヴァの攻撃力を超えられた。
おまけにサジータに全体に効果耐性を与えたように、ラファールの効果もあれだけとは思えない。
さて、耐えきれるかどうかやって見ようじゃないか。
「バトルだ!!?空牙団の英雄ラファールでＨ－Ｃガーンデーヴァを攻撃!!?」
「手札からＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）ソードシールドの効果を発動!!?ヒロイックモンスターが存在する時に手札から墓地に送ることでこのターン、戦闘によって発生するダメージは０になり、自分フィールド上のヒロイックモンスターは戦闘で破壊されない!!?」
「無駄だ!!?空牙団の英雄ラファールの効果発動!!?シールハウリング!!?１ターンに１度、相手のモンスター効果が発動した時、手札から空牙団カード１枚を捨ててその発動を無効にする!!?」
「っ!!?ソードシールドが……!!?」
ラファールが空間を震わせる程の咆哮をあげると、ソードシールドが効果を失う。

これじゃあガーンデーヴァは守りきれない!!?

「もう邪魔は入らねぇ!!?空牙団の英雄ラファールでＨーＣガーンデーヴァを攻撃!!?突風のアウトレイジファング!!?」

「っ、迎え撃て!!?暴嵐の矢!!?」

ガーンデーヴァはラファールに向かって暴風のような数の矢を番える。

しかし、突風を纏ったラファール　はその矢を全て吹き飛ばし、ガーンデーヴァの身体に喰らいついて噛み砕いた。

「ぐっ!!?」

ガーンデーヴァが爆散し、突風で俺のライフが削れていく。

遊騎　ＬＰ７０００→６８００

「どんどんいくぞ!!?空牙団の撃手ドンパでダイレクトアタック!!?ウィンドシューター!!?」

「っ!!?」

遊騎　ＬＰ６８００→５８００

「続け!!?空牙団の参謀シールでダイレクトアタック!!?タクティシャンストーム!!?」

「くっ!!?」

遊騎　ＬＰ５８００→３７００

「どうした!!?もう後がねぇぞ!!?空牙団の闘士ブラーヴォでダイレクトアタック!!?ゲイルフィスト!!?」

「ぐあっ!!?」

遊騎　ＬＰ３７００→１３００

「ああ……!?」
空牙団モンスターの連続攻撃でライフが一気に削られ、見ていた少女から悲痛な声が聞こえる。
ボロボロにされる俺を見て、取り巻き達は歓声をあげわ空閑も勝ち誇ったような嘲笑を浮かべる。
「これで終いだ!?空牙団の孤高サジータでダイレクトアタック!?」
空閑の宣言でサジータがライフルを構え、俺に照準を合わせて引き金を引こうとする。
しかし、そんな俺を守るようにサジータとの間にいつのまにか馬に乗った亡霊の騎士が現れていた。
〈幻影騎士団シャドーベイル〉☆4　戦士族　闇属性
ＤＥＦ３００
「何っ!?」
「相手の直接攻撃宣言時、墓地から罠カード幻影騎士団シャドーベイルの効果発動!?このカードをレベル４、戦士族、攻撃力０、守備力３００の通常モンスターとして守備表示で特殊召喚する」
「っ!?そんなものまで墓地に送ってやがったのか!?クソッ!?空牙団の孤高サジータで幻影騎士団シャドーベイルを攻撃!?ブラストバレット!?」
「特殊召喚した幻影騎士団シャドーベイルはフィールドから離れる時に除外される」
サジータの放った弾丸が当たり、シャドーベイルは空気に溶けるように消えていった。
これで決まると思っていた取り巻き達はざわめきだし、少女はホッとしたように息を吐く。
「俺様の攻撃を耐えきっただと……」
「ふぅ……残念だったな。このターンで決められなくて」
「ぐっ……だが!?俺様の場は完璧!?ライフにも余裕がある!?それに比べてテメェの場には何も残っちゃいねぇ!?この状況をひっくり返せるわけがねぇ!?」

そういって怒鳴り声をあげる空閑に、俺は不敵に笑った。
「それはどうかな？」
「何？」
「お前がこのままバトルフェイズを終了するなら、俺は手札からこのカードを発動させて貰う‼？自分フィールドにカードが存在しない場合、手札から罠発動‼？拮抗勝負‼？」
「っ⁉？手札から罠だと⁉？」
「相手フィールドのカードの数が自分フィールドのカードの数より多い場合、自分・相手のバトルフェイズ終了時に発動できる‼？自分フィールドのカードの数と同じになるように、相手はフィールドのカードを裏側表示で除外しなければならない‼？」
「何だと⁉？」
俺の言葉に空閑が目を見開き、取り巻き達のざわめきが大きくなる。
「俺のフィールドには今発動した拮抗勝負のみ。さらにこの効果な相手プレイヤーに強要する効果のため空牙団の孤高サジータの対象に取られない効果も意味がない‼？さぁ、お前もフィールドのカードが1枚になるようにカードを除外して貰おうか‼？」
「ぐっ……俺は……空牙団の英雄ラファールを残し、他のカードを除外する……」
空閑がそう宣言するとラファール以外のモンスターが粒子になって消えていき、辺りも飛行艇から元の公園に戻る。
「馬鹿な……あの空閑さんの圧倒的なフィールドが……」
「一瞬で消えちまうなんて……」
「……すごい」
取り巻き達や少女からそんな声が聞こえてくる。
まぁ、伏せカードすらない状況から凌ぎきったからな。
そういう反応にもなるか。
「ふぅ……フィールド魔法は臨場感があるが、やっぱり普通の場所が1番だな」
「……テメェ、最初からこれを狙ってやがったのか」

一息吐いた俺を空閑が物凄い剣幕で睨み付ける。
そんな空閑に俺は苦笑を浮かべた。
「まさか、買い被り過ぎだ。ＨＩＣガーンデーヴァを手札と墓地のカードで守りきり、その攻撃力と効果で押せたままならそれでよかったさ。結局は想定が甘かったお陰でこんなギリギリのところまで追い詰められるはめになった。こんなの予想外もいいところさ」
「……」
「さぁ、まだお前のターンだ。空牙団の英雄ラファールと手札１枚でどう動く？」
「ぐっ……俺はカードを伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ１３００　手札４
ー－－－－－　ー
－－－－－－
ー　　ー
ー－－○－－
ー－－▲－－　▽
騨　ＬＰ７４００　手札０

苦々しい表情でターンエンドを宣言する空閑とその表情を見て呆然とする取り巻き達。
少女も何が何だかわからないというように呆然としている。
追い詰めていたと思ったら追い詰められていたのは自分だった。
きっと今の彼らの心情はそんな感じなのだろう。
「（まぁ、実際はあまり変わってないんだがな）」
確かに空閑のフィールドをある程度一掃することは出来たが、それでも空閑のフィールドには切り札であるラファールと伏せカードが残っている。
俺は自分の手札をもう１度見るが、これだけ手札があるというのに現状ではラファールをどうにかする手段がない。
というより、モンスターカードすら存在しない。

仮に壁のモンスターをドロー出来て出したとしてもライフ的に下級モンスター1枚引かれただけでも十分負けてしまう可能性がある。
ならば、ドローするしかない。
この状況を逆転する為のカードを。
「俺のターン……ドロー!!?」
俺はドローしたカードを確認し、思わず笑みを浮かべるとそのままそのカードを発動した。
「俺は魔法カード、予想ＧＵＹを発動!!?」
「予想ＧＵＹだと?」
「自分フィールドにモンスターが存在しない場合にこのカードは発動できる。デッキからレベル４以下の通常モンスター1体を特殊召喚する!!?俺が呼び出すのはこのモンスターだ!!?来い、クィーンズナイト!!?」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

俺の前に現れたのは赤い鎧を身に纏った女性の騎士。
そしてクィーンズナイトを見て、空閑は驚愕に目を見開いた。
「馬鹿な!!?クィーンズナイトだと!!?」
クィーンズナイトの姿に辺りの取り巻き達もざわめきはじめる。
わからなそうに首を傾げているのはあの少女ぐらいか。
まぁ、確かにコイツらは色々な意味で有名だからな。
いや、半分以上は俺のせいでもあるんだが……俺はそんな周りの反応を気にしないように次のカードを発動する。
「俺はクィーンズナイトに装備魔法、折れ竹光を装備する。これ自体には何も効果はないが、さらに魔法カード黄金色の竹光を発動!!?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローする!!?」
俺はドローしたカードを確認し、デッキが久しぶりのデュエルを楽しんでいるのを再確認する。

あぁ、思う存分戦わせてやるさ!!?
「俺はキングスナイトを召喚!!?」

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

クィーンズナイトの横に並び立ったのは黄金の鎧を身に纏った騎士。
そしてクィーンズナイトとキングスナイトはお互いに剣を掲げて更なる騎士を呼ぶ。
「キングスナイトの効果発動!!?自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト１体を特殊召喚する!!?集え、絵札の三銃士!!?来い、ジャックスナイト!!?」

〈ジャックスナイト〉☆５　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

クィーンズナイトとキングスナイトの剣に合わせるように剣を掲げる青い鎧の騎士が現れる。
現れた３体の騎士を見て、空閑が目に見えて動揺した。
その表情は険しく、俺を強く睨みつける。
「絵札の三銃士……だと?テメェは一体……」
「動揺してるところ悪いが、コイツらを呼び出したからにはさっさと決めさせて貰う。斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
俺がそういって手を前に突き出すと、俺の目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はカード名が異なる戦士族モンスター３体!!?俺はクィーンズナイト、キングスナイト、ジャックスナイトの３体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
絵札の三銃士がサーキットに吸い込まれていく。

そしてサーキットのリンクマーカーが輝くとサーキットの中から白銀の鎧を身に纏った騎士が現れた。
「リンク召喚!!?運命と戦う孤高の騎士!!?リンク３!!?アルカナエクストラジョーカー!!?」

〈アルカナエクストラジョーカー〉ＬＩＮＫ３　戦士族　光属性
ＡＴＫ２８００　↙?　→　↘?

現れた銀色の騎士を見て、空閑は確信を持ったという風に口を開く。
「アルカナエクストラジョーカー……遊騎……間違いねぇ。テメェ、あの結束遊騎か?」
「……まぁ、バレるよな」
俺が使うデッキにはいつも絵札の三銃士が入っている。
だからこそ、絵札の三銃士は俺の代名詞になってしまった。
自分のせいで自分の大好きなカードまで貶されるという現状は、正直心苦しい。
俺が肩を竦めると周りにいた取り巻き達もざわめき始める。
まぁ、そういう反応になるよな。
あの少女は相変わらず首を傾げているけどさ。
「結束遊騎って、あの２年前に対戦相手のデッキを盗み見たとかでプロから追放されたっていう……」
「あの世界ランキング２位の実力派プロチーム『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のエースだったって言うあの結束遊騎!?」
「じゃあさっき空閑さんのモンスターを完璧なタイミングで一掃したのもイカサマなんじゃ……」
周りの蔑むような、怯えるような視線に少し気分が悪くなってくる。
まぁ、俺の世間からの評価を考えれば妥当だろう。
世間から見れば俺は勝つ為にどんなことでもやった男という風に見えるのだ。

ったく、折角気分が乗って来たって言うのに……
そう気分が落ち込みそうになった時ーーー
「うるせぇ‼?テメェらは黙ってろ‼?」
「⁉?く、空閑さん?」
突然、空閑が取り巻き達を怒鳴りつけた。
あまりの展開に思わず呆然としていると、空閑が怒気を含ませたまま口を開く。
「デュエルが始まったらデッキとしてセットしていたカード以外にはデュエルディスクは反応しねぇ。さっきの戦術にイカサマなんてもんが介入する余地はねぇ」
「……」
「それにコイツの目とデュエルを見りゃ分かる。コイツはイカサマなんてつまらねぇことする男じゃねぇ。デュエルってのは嘘をつけねぇ。これ以上つまらねぇことで騒いでデュエルを邪魔する奴は俺様が直々に叩き潰してやるから出て来やがれ‼?」
空閑の堂々とした物言いにざわめいていた取り巻き達が静まりかえる。
俺は取り巻き達を黙らせた空閑を驚いた表情で見つめる。
「アイツらが邪魔したな。さぁ、さっさとターンを続けな」
「いや、いいのか?俺は悪名高い結束遊騎だぞ?」
「テメェまでつまらねぇこと言ってんじゃねぇ‼?いいからターンを進めろ‼?」
そう言って忌々しそうに顔を逸らす空閑を見て、俺は思わず笑ってしまった。
「ぷっ、ははははは‼?」
「っ、何が可笑しい‼?」
「いや……なんだ、こういうのも何だが、ありがとな」
俺の言葉に空閑も目を見開く。
まさか他人のカードを奪おうとしている奴に慰められるとは思わなかった。
俺は深呼吸をして改めて空閑を見る。

「認めるよ、空閑騨。少々捻くれてるが、お前はその空牙団が似合う立派なデュエリストだ」
「……」
「だからこそ、俺の本気を見せてやる。このターンで俺の勝ちだ!!?」
「!!?ほう……おもしれぇ。やれるもんならやってみやがれ!!?」
そんな俺の勝利宣言に空閑は心底愉快そうに笑った。
俺は手札を確認し、最後の準備を始める。
「まずは最後の下準備だ。魔法カード、貪欲な壺を発動!!?墓地に存在するクィーンズナイト、キングスナイト、ジャックスナイト、H・C強襲のハルベルトをデッキに、HーCガーンデーヴァをEXデッキに戻してシャッフル。そしてカードを2枚、ドローする!!?」
「ここにきてまた手札増強か……」
「そしてこのままバトルフェイズに入る!!?」
「何だと!?」
「アルカナエクストラジョーカーで空牙団の英雄ラファールを攻撃!!?」
「相討ち狙いか!?だが、そうはさせねぇ!!?罠発動!!?和睦の使者!!?このターン相手モンスターから受ける戦闘ダメージを0にし、自分のモンスターは戦闘では破壊されない!!?これでこのターン、俺が負けることはねぇ!!?」
「通すか!!?ライフポイントを半分払い、手札から罠発動!!?レッドリブート!!?」

遊騎　LP1300→650

「っ!!?また手札から罠だと!!?」
「相手が罠カードを発動した時に発動できる!!?その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする!!?」
「何っ!!?和睦の使者が!!?」
発動しようとしていた和睦の使者が再びセットされる。
これでこのターンに防がれることはない。

「その後相手はデッキから罠カード1枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンにセットできる。最もこのカード発動後、ターン終了時まで罠カードは発動できないけどな」
「チッ……俺はデッキから空牙団の修練をセットする」
「これで止めるものは無くなった!!?アルカナエクストラジョーカーで空牙団の英雄ラファールを攻撃!!?ストレートフラッシュ!!?」
「クソッ!!?迎え撃て!!?突風のアウトレイジファング!!?」
アルカナエクストラジョーカーが大剣を振りかざし、ラファールが突風を纏ってぶつかり合う。
何度も激突した2体はそのままお互いに爆散した。
ありがとう、アルカナエクストラジョーカー。
お前の死は無駄にはしない。
「チッ!!?だが、お互いのモンスターはいなくなった。テメエのライフは下級の空牙団を引いただけでトドメがさせる!!?」
「これで終わるわけがないだろ。アルカナエクストラジョーカーの効果発動!!?ユナイテッドリンク!!?リンク召喚したこのカードが戦闘で破壊され、墓地へ送られた時、デッキから戦士族・レベル４の通常モンスター1体を特殊召喚し、デッキから戦士族・レベル４モンスター1体を手札に加える!!?俺はデッキからクィーンズナイトを特殊召喚し、キングスナイトを手札に加える!!?」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１５００

誰もいなくなったフィールドに再びクィーンズナイトが現れる。
これで空閑を守るものは無くなった!!?
「行け!!?クィーンズナイトでダイレクトアタック!!?クィーンズスラッシュ!!?」
「ぐっ!!?」

騅　ＬＰ７４００→５９００

「だが、これで攻撃できるモンスターは……」
「まだだ!!?まだ俺のバトルフェイズは終了していない!!?速攻魔法発動!!?ライバルアライバル!!?」
「!!?」
「このカードは自分・相手のバトルフェイズに発動でき、モンスター1体を召喚する!!?来い、キングスナイト!!?」
「何だと!?!?」

〈キングスナイト〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

「そしてライバルアライバルで行われるのは特殊召喚ではなく召喚だ。よって、キングスナイトの効果発動!!?クィーンズナイトが存在するため、再び集え、絵札の三銃士!!?来い、ジャックスナイト!!?」

〈ジャックスナイト〉☆5　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

フィールドに再びを揃った絵札の三銃士を見て、空閑が驚愕の表情を浮かべる。
「バトルフェイズ中に再び絵札の三銃士を揃えただと!?!?」
「これが俺の騎士達の結束の力だ!!?バトルフェイズ中の召喚により2体共攻撃する権利が残っている!!?行け!!?キングスナイトでダイレクトアタック!!?キングススラッシュ!!?」
「チッ!!?」

　　騨　ＬＰ５９００→４３００

「追撃だ!!?ジャックスナイトでダイレクトアタック!!?ジャックススラッシュ!!?」

騨　ＬＰ４３００→２４００

「ぐっ……だが、これで絵札の三銃士の攻撃も終わった。これでーーー」

そう……これで本当に最後だ‼?

「これで終わりだ。速攻魔法発動‼?瞬間融合‼?」

「ここにきて融合魔法だと⁉?」

「自分フィールドに存在から融合モンスターによって決められた融合素材を墓地に送り、ＥＸデッキから融合モンスターを特殊召喚する‼?俺はクィーンズナイト、キングスナイト、ジャックスナイトの３体で融合‼?」

フィールドに現れた渦に３体の騎士達が飛び込んでいく。

そして渦が爆けるとその中から現れるのは黒い鎧を身に纏った漆黒の騎士。

「融合召喚‼?これが俺の切り札だ‼?運命に打ち勝つ勇敢なる騎士達の主‼?アルカナナイトジョーカー‼?」

〈アルカナナイトジョーカー〉☆９　戦士族　光属性

ＡＴＫ３８００

「絵札の三銃士の融合体……アルカナナイトジョーカー……」

呆然としたように呟く空閑。

取り巻き達も怒涛の展開に目を白黒とさせ、少女はその目を輝かせていた。

俺は笑顔を浮かべながら口を開く。

「久しぶりに楽しいデュエルだったぜ、空閑騨。アルカナナイトジョーカーでダイレクトアタック‼?ロイヤルストレートフラッシュ‼?」

アルカナナイトジョーカーは大剣を構えると、空閑に突撃し、その大剣を振り下ろした。

「くっ、ぐあぁぁぁ‼?」

騨　ＬＰ２４００→０

立体映像が消えると、公園にいつもの光景が戻る。
アルカナナイトジョーカーに斬られ、その場に膝をついた空閑に歩み寄った。
「約束通り、その子のカードは返して貰うぜ」
「……ほらよ」
空閑からカードを受け取るとデュエルをずっと見ていた少女に近づき、受け取ったカードを手渡す。
「これで間違いないか?」
「あっ、はい‼?ありがとうございました‼?」
「気にするな。俺も久しぶりに楽しいデュエルが出来たからな」
深く頭を下げる少女に苦笑していると、空閑が立ち上がりこちらに近づいてくる。
「おい、栗原」
「あっ……空閑……君」
空閑を見て怯えたように俺の後ろに隠れる。
まぁ、カードを盗られるところだったしな。
まさか御礼参りとか言わないよな?
そんな俺の予想を裏切るように、空閑は深く頭を下げた。
「すまなかった」
「……えっ?」
「く、空閑さん?」
突然の謝罪に少女はぽかんとした表情を浮かべ、取り巻き達も戸惑いの声をあげる。

そんな少女の様子を気にせず、空閑はさらに言葉を重ねる。
「お前、最近全然デュエルしてねぇだろ」
「っ、それは……」
「テメェの心情がどんなもんかってのは俺には分からねぇ。だが、1年の時に見たテメェのデュエルは凄かった。同年代にここまでおもしれぇデュエルが出来る奴がいるんだってよ。それが今は全然デュエルをしなくなっちまって、お前の大切なカードを賭ければ、またテメェの無茶苦茶なデュエルが見れんじゃねぇかって思っちまったんだ。馬鹿な事をしたよ」
空閑の言葉に少女は悲痛の表情を浮かべる。
……正直、事情に関しては俺には分からないから言えることはない。
ただそのやり方は本人が言うように、馬鹿で、どうしようもなく間違ったやり方だったんだろう。
空閑はどこか吹っ切れた表情で顔をあげる。
「この借りはまた何処かで返す。本当にすまなかった」
「っ……ううん、いいよ。私の方こそ、ごめんなさい」
「テメェが謝ることなんざ何もねぇだろ。じゃあな……おい、行くぞ!!?」
「は、はい!!?」
そう言って取り巻きを連れて空閑が公園を出て行こうとする。
そして公園の出口に着いた時、空閑は出口の方を見ながら今度は俺に向かって声をかけてきた。
「結束遊騎」
「ん?」
「お前は本当にイカサマなんてもんをしたのか?」
そんな空閑の問いかけに、俺は真剣に答えた。
「デュエルに嘘はつけないんだろ?それが答えなんじゃないか」
「……そうか」
そう呟くと空閑は取り巻きを連れたまま帰って行った。
……さて、俺もそろそろ今日の宿を探さないとな。

最悪の場合、本当に野宿になってしまいそうだ。
「さてと、それじゃあそろそろ俺も行くよ。もう無いとは思うが、大切なカードなら盗られないようにな」
そう言って俺は置いておいたバイクに乗って公園を去ろうとしーーー
「ま、待って下さい‼?」
「ん?」
ーーー先程助けた少女に呼び止められた。
少女の方に顔を向けると、少女はどこか覚悟を決めたような目でこちらを見ていた。
「あの、こんなこと、突然口にするなんて、失礼だと思います。でも、ここで言葉にしないと、私はいつまでも変わらないと思うから……だから……」
一体何事だと戸惑っていると、少女は俺の運命を変えることになる言葉を口にした。
「私を……私を、貴方の弟子にしてくれませんか‼?」
「……は?」
この日、それぞれに止まっていた俺達の時間は重なり合い、少しずつ動き始めた。

第４話　斬り開く運命

☆

「私を……私を、貴方の弟子にしてくれませんか‼？」
「……は？」
空閑とのデュエルが終わり、公園を立ち去ろうとした俺に、少女は真剣な表情を浮かべながらそんなことを告げてきた。
正直、意味がわからない。
一体何処からそのような話に繋がったのだろうか？
あまりの展開に思わず頭を抱えたくなるが、真剣な表情でこちらを見ている少女を放って置くのも悪いと思い、どうしてそのような話になったのかを問いかけてみることにした。
「あ～すまない、どうしてそういう話になったんだ？」
「……その、私が言った言葉、覚えていますか？その、色々あってデュエルが出来ないって……」
「……まぁ、だからこそさっき俺がデュエルしたんだからな」
覚えていないわけがない。
その言葉は確かに俺の心に響いて、だからこそ、先程のデュエルに至ったんだから。
少女は顔を俯かせながら、ポツポツと話始める。
「その、私も2年前までは、デュエルが出来ていたんです」
「……っ‼？2年前？」
2年前という言葉に一瞬息が詰まりそうになった。
何故ならそれは、俺がデュエルが出来なくなったのと同じ時期で……
「あの頃は、本当に、毎日デュエルを出来ることが楽しくて、それを見て喜んでくれる人がいて……でも、そんな時間も、急に終わってしまって……私がデュエルをしていなければ、そんな時間が終わらなかったんじゃないかって、ありもしないことが、どうしても浮かんでしまって……デュエルをすることが、怖くなって……凄く凄く

……怖くなって……」
独自するように、心情を吐露していく少女の身体が震え始める。
その独白に、その震えに、どれ程の思いが宿っているのだろう？
どれ程の激情が眠っていたのだろう？
「……でも、本当は……本当は……あの頃みたいに、デュエルがしたい‼？」
「っ‼？」
だからこそ、少女の心からの叫びに、俺の心が揺さぶられる。
何故なら、その思いは……
「怖いのも‼？辛いのも‼？無くなったりなんて、しないけど‼？失くしてしまったものも、戻ってなんかこないけど‼？それでも‼？それでも、私は……心の中に残ってる思い出を‼？お父さん達の願いを‼？嘘になんてしたくない‼？この思いを……運命だからなんて諦めたくない‼？」
こちらを真っ直ぐに見つめ、泣きながらその思いの丈を叫ぶ少女を見て、俺は思う。
……あぁ……どうしてこの少女は……こんなにも自分に似ているのだろう？
「だから……お願いします……私に、デュエルを教えて下さい……もう1度、あの頃みたいに……楽しんで……誰かを喜ばせれるようなデュエルを……そんなデュエルが出来るようなプロ決闘者に、私はなりたいんです‼？お願いします‼？」
そういって少女は俺に頭を下げる。
……出来るのだろうか？
俺に彼女が望むようなデュエルを教えることが。
許されるのだろうか？
俺のような人間が、誰かを教えることが。
「……どうして、俺なんだ？他の奴に教えて貰うんじゃダメなのか？」
「……空閑君とのデュエルを見てる時、懐かしい感じがしたんです」
「懐かしい？」

「はい……プロ決闘者だった、お父さんのデュエルを思い出したんです。どんな逆境でも、笑顔で、楽しそうに切り抜けて、皆を驚かせる。そんなデュエルが……私が目指したい場所なんです」
「……君は知らないみたいだけど、俺はこの街では悪名が高い。そんな奴の弟子になんかなったら、君にも悪名がつくかも知れないぞ？」
「さっき空閑君達が言ってたイカサマって奴ですか？」
「そうだ。それが原因で俺はプロリーグから追放されている。その弟子だからなんて理由で嫌がらせを受けたりするかも知れないぞ？」
「でも、貴方は絶対にそんなことしていません」
少女が1度顔をあげ、涙を拭いながら優しい目でこちらを見てくる。
「……知りもしなかったのになんで分かるんだ？」
「さっきのデュエルを見たら分かります。後は……その、女の勘って奴とか？ほら、私って女の子ですから」
「根拠なんてないじゃないか」
「根拠なんていらないんです。朝ぶつかっただけの女の子を全力で助けてくれた人なんですから。それに私、耐えるのは得意ですから。何を言われようがへっちゃらです」
そういって優しい笑顔を浮かべる少女。
あぁ、これは何を言っても聞きそうにない。
なら、俺がやることは……
「俺に君が望むことを教えられるかは分からない。でも、君の気持ちは分かった。だからこそ、君の覚悟を問いたい」
「覚悟……ですか？」
「デュエルだ」
そういって俺はデュエルディスクを起動する。
それを見て、女の子は少しだけ表情を歪め、身体を震わせる。
「君の気持ちが強いことは分かった。だからこそ、本当にそこに至りたいのなら、今ここで、覚悟を見せて貰う」
「……」

「勿論、断ってくれて構わない。デュエルが始まってからも、辛くなったらいつでも止めていい。正直、荒療治だということは自覚している」
俺の言葉に少女は目をキツく瞑りながらも1つ深呼吸をし、自分のカバンからデッキケースとデュエルディスクを取り出し、デッキをデュエルディスクにセットした。
その身体はやはり震えており、開かれた目には薄っすらと涙すら浮かんでいる。
それでも少女はしっかりとした目で俺を見る。
「まだ……怖いです……身体は震えるし……今だって逃げ出したいけど……でも、変わるって、決めたんです!!?」
「……ふっ、そういえばお互いに名乗ってなかったな。俺は……結束　遊騎。君は?」
「栗原……栗原　遊花です!!?」
「そうか……それじゃあ行くぞ!!?遊花!!?」
「はい!!?」
『決闘!!?』

遊騎　ＬＰ８０００
遊花　ＬＰ８０００

ーーー

この子達を見ると、少し心が軽くなる。
この子達も、久しぶりのデュエルを待ち望んでいたのが分かるから。
「また、一緒に頑張ってくれる？」
私の問いかけに、優しい声が返ってきた気がした。
「私はクリバンデッドを召喚します‼？」

〈クリバンデッド〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

私の前に現れたのは盗賊のような姿をした黒い毛玉のモンスター。
凄く好戦的にぴょんぴょんと跳ねながら手を振ってるけど……
ゴメンね、１ターン目だから攻撃出来ないの。
「私はカードを２枚伏せて、エンドフェイズにクリバンデッドの効果発動‼？このカードをリリースしてデッキの上から５枚めくり、その中から魔法・罠カード１枚を手札に加えて残りを墓地におきます」
ぴょんぴょん跳ねていたクリバンデッドの姿が消える。
その代わりに私はデッキの上から５枚のカードをめくって中から１枚のカードを手札に加えた。
「私は増殖の魔法カードを手札に加えてターンエンドです」

遊騎　ＬＰ８０００　手札５
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー▲▲ー　ー
遊花　ＬＰ８０００　手札３

「俺のターン、ドロー‼？俺はＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）サウザンドブレードを召喚‼？」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

遊騎さんの前に現れたのは頭巾を被り、背中に何本もの刀を背負った戦士。
さらに遊騎さんはそのモンスターの効果を発動させる。
「Ｈ・Ｃ　サウザンドブレードの効果発動!!?１ターンに１度手札にあるヒロイックカードを捨ててデッキからヒロイックモンスターを特殊召喚する!!?俺は手札にあるＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）ダブルランスを捨てて、来い、Ｈ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）強襲のハルベルト!!?」

〈Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１８００

遊騎さんの前に現れたのは先程のデュエルでも見たハルバードを持った紫の鎧を纏った戦士。
あのモンスターは確かサーチ効果も持ってるんだよね。
「この効果を使ったＨ・Ｃ　サウザンドブレードは守備表示になる」

Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード
ＡＴＫ１３００→ＤＥＦ１１００

サウザンドブレードが守備表示になったのは嬉しいけど、ハルベルドは少し厄介だなぁ。
最もーーーーー
「バトル!!?Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトでダイレクトアタック!!?ライトニングハルバード!!?」
「攻撃宣言時、手札から虹クリボーの効果発動!!?このカードをそのモンスターに装備し、そのモンスターは攻撃することが出来ません!!?レインボーガード!!?」

「成る程、いい判断だ。Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトは貫通効果もあるからな」
ーーーーー防ぐ手はちゃんと持っているけど。
私の手札から虹色の角を持つ球体が現れてハルベルドの動きを止めた。
折角手札を１枚使わせて出てきたのにサーチで増やされたら堪らない。
「なら、メインフェイズ２に移るよ。早速行かせて貰おうか。斬り開け‼？運命に抗うサーキット‼？」
「リンク召喚ですか……」
遊騎さんがそういって手を前に突き出すと、遊騎さんの前に巨大なサーキットが現れる。
３体はいないからエクストラジョーカーではないはずだけど、何が来るんだろう？
「召喚条件は戦士族モンスター２体‼？俺はＨ・Ｃ　強襲のハルベルトとＨ・Ｃ　サウザンドブレードの２体をリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？追想に生きる王女‼？リンク２‼？聖騎士の追想　イゾルデ‼？」
〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙？　↘？
ハルベルトとサウザンドブレードの２体がサーキットの中に消えると代わりに現れたのは金髪と白髪の２人の女性だった。
あのモンスターには一体どんな効果が……そんな私の疑問はすぐに解消される。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動‼？リンクレカレクション‼？リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター１体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキからキングスナイトを手札

に加える!!?」
「っ!!?キングスナイトが手札に……!!?」
「これだけじゃ終わらない!!?聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動!!?メモリーズギフト!!?デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター1体をデッキから特殊召喚する!!?俺はデッキから妖刀竹光、神剣―フェニックスブレード、折れ竹光、閃光の双剣―トライスを墓地に送り、デッキからクィーンズナイトを守備表示で特殊召喚!!?」
「クィーンズナイトまで!!?」

〈クィーンズナイト〉☆4　戦士族　光属性
DEF1600

遊騎さんの前に現れたのは赤い鎧を身に纏った女性の騎士。
おまけに先程のサーチ効果でキングスナイトも手札に加わっている。
先程私を助けてくれたモンスターが次は私を試す為に牙を向くんだね。
「更に墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える。俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える。カードを　2枚セットしてターンエンドだ」

遊騎　LP8000　手札4
ー▲▲ー　ー
ー□ーー
☆　ー
ーーーー
ー▲▲ー　ー
遊花　LP8000　手札2

遊騎さんの場に2枚の伏せカードが追加される。
あれだけ動いてハルベルドのサーチは防いだのに遊騎さんの手札は4枚。
おまけに手札とフィールドでもう絵札の三銃士を揃える準備が出来ている。
ハルベルトがいなくなったことで虹クリボーも墓地に落ちたけど、私が動くにはまだまだ準備が足りない。
……やっぱり、この人は強い。
「私のターン、ドロー!!?」
ドローカードを確認する。
悪くは、ない。
「私は手札からジャンクリボーを捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動!!?デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚する!!?お願い、ミスティックパイパー!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆1　魔法使い族　光属性
DEF0

現れたのはフルートのようなものを弾いている男の人。
お願い、私に希望を繋いで!!?
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを1枚ドローします。そしてこの効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル1モンスターだった場合、自分はカードをもう1枚ドローする」
「成る程、ということは当然レベル1をドローしやすいように構築してあるってことだよな。遊花のデッキはローレベルが主体のデッキなのか?」
「はい。1人1人の力は小さくても、皆の力が合わさればどんな困難だって乗り越えていける……私はそう信じたいですから」
そう例え小さな小さな力だったとしても、合わさって1つになればいつかは強大な壁だって、乗り越えられるハズだから!!?

「ミスティックパイパーの効果発動!!?カードを1枚、ドローです!!?」
ミスティックパイパーが私に背を向けながらサムズアップをして姿を消す。
そして私はデッキからドローしたカードを確認する。
「私が引いたのはクリアクリボー!!?レベル1モンスターなのでもう1枚ドローです!!?」
追加で引いたカードも確認。
モンスターを突破することは出来ないけど、これならまだまだ戦える!!?
「私はクリアクリボーを召喚!!?」

〈クリアクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＡＴＫ３００

現れたのは紫色の毛玉のようなモンスター。
召喚されたクリアクリボーは不安そうな鳴き声をあげている。
ご、ゴメンね!!?
君であのモンスター達を倒してなんか言わないから、泣かないで!!?
「そのモンスターでどうするんだ?」
「こうするんです!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「リンク召喚か……」
私が正面に手をかざすと私の前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル1モンスター1体!!?私はクリアクリボーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?希望の守り手!!?リンク1!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

クリアクリボーがサーキットに入り、代わりに出てきたのは青い球体型のモンスター。
リンクリボーはそのまま私の周りを嬉しそうにくるくる回ったり、擦り寄るような動きを見せる。
うーん、久しぶりだからかな？
立体映像のハズなのに、なんか私のモンスターは遊騎さんのモンスターに比べると凄く嬉しそうに動いてるんだけど……昔からこんな感じで動いてたっけ？
「どうかしたか？……やっぱり体調が悪いか？」
「あ、いえ何でもないです‼？」
突然黙り込んだ私を見て、遊騎さんが心配そうにこちらを見てくる。
いけないいけない、相手はあの空閑君に勝った遊騎さん。
今はデュエルに集中しないと。
「私はカードを1枚伏せてターンエンドです」

遊騎　ＬＰ８０００　手札４
ーー▲▲ー　ー
ー□ーーー
☆　☆
ーーーーー
ー▲▲▲ー　ー
遊花　ＬＰ８０００　手札１

「俺のターン、ドロー‼？聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動‼？メモリーズギフト‼？デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター1体をデッキから特殊召喚する‼？俺はデッキから妖刀竹光、最強の盾、折れ竹光、Ｄ・Ｄ・Ｒを墓地に送り、デッキからをＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）エクストラソードを攻撃表示で特殊召喚‼？」

〈Ｈ・Ｃ　エクストラソード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１０００

現れたのは銀色の鎧を身に纏った二刀流の戦士。
あのモンスターはエクシーズ召喚したモンスターの攻撃力を上げていたハズだから注意しないと。
「更に墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える。俺はデッキから折れ竹光を手札に加える。そしてそのまま魔法カード、折れ竹光をＨ・Ｃ　エクストラソードに装備!!」
エクストラソードの剣が片方折れ竹光に変わった。
それを見てエクストラソードが落ち込んでいるように見えるのも気のせいなのかな？
「魔法カード、黄金色の竹光を発動!!？魔法カード黄金色の竹光を発動!!？自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを２枚ドローする!!？さらに今引いた２枚目の黄金色の竹光を発動!!？」
「えっ!!？また!!？」
「さらに２枚ドローする!!？」
これで遊騎さんの手札は７枚。
もうどんな攻撃が来てもおかしくない。
「さぁ、全力で行くぞ!!？俺はキングスナイトを召喚!!？」

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

クィーンズナイトの横に並び立ったのは黄金の鎧を身に纏った騎士。
これは空閑君とのデュエルの時にも見た光景。
そしてクィーンズナイトとキングスナイトはお互いに剣を掲げて更なる騎士を呼ぶ。

「キングスナイトの効果発動!!?自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト1体を特殊召喚する!!?集え、絵札の三銃士!!?来い、ジャックスナイト!!?」

〈ジャックスナイト〉☆5　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

クィーンズナイトとキングスナイトの剣に合わせるように剣を掲げる青い鎧の騎士が現れる。
絵札の三銃士。
遊騎さんの代名詞と言われているモンスターが揃った。
「クィーンズナイトを攻撃表示に変更する」

クィーンズナイト
ＤＥＦ１６００→ＡＴＫ１５００

「そしてバトルフェイズ!!?Ｈ・Ｃ　エクストラソードでリンクリボーを攻撃!!?エクストラスラッシュ!!?」
エクストラソードが折れ竹光を構えながらリンクリボーに斬りかかってくる。
うっ、絵面的に使わなくていい気もしてくるけど使わないとダメージを受けちゃう!!?
「相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動!!?ゼロリンク!!?このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力はターン終了時まで０になる!!?」
リンクリボーの身体が粒子に変わってエクストラソードに纏わりつく。
そのままエクストラソードが私に斬りかかってきたが、竹光が折れて私のダメージは０……って、これじゃあ竹光が折れたからダメージが入らなかったようにしか見えないよ!!?

そしてエクストラソードも竹光が折れたことに驚かないでよ‼?
「行け‼?クィーンズナイトでダイレクトアタック‼?クィーンズスラッシュ‼?」
「あぅ‼?」

遊花　ＬＰ８０００→６５００

クィーンズナイトに剣で斬り付けられる。
そ、そうだった……立体映像のコミカルな動きに思わずツッコミを入れちゃったけどまだバトルフェイズだった‼?
「続け‼?キングスナイトでダイレクトアタック‼?キングススラッシュ‼?」
「うっ‼?」

遊花　ＬＰ６５００→４９００

「追撃だ‼?ジャックスナイトでダイレクトアタック‼?ジャックススラッシュ‼?」
「ううっ‼?」

遊花　ＬＰ４９００→３０００

「まだ終わっていないぞ‼?聖騎士の追想　イゾルデでダイレクトアタック‼?ツインアタック‼?」
「くぅ‼?」

遊花　ＬＰ３０００→１４００

攻撃はなんとか耐えきった……なんて、思ってはいけない。
私が見たこの人のデュエルは、バトルフェイズにこそ真価があるのだから。

そんな私の予想を裏切らず、それでいて最も効果的な一手を、遊騎さんは打った。
「さぁ、これに耐えられるか？リバースカードオープン‼？罠発動‼？ワンダーエクシーズ‼？その効果により自分フィールド上のモンスターでエクシーズ召喚を行う‼？」
「バトルフェイズ中にエクシーズ召喚⁉？しまっーーー」
「俺は戦士族、レベル４のキングスナイトとＨ・Ｃ　エクストラソードでオーバーレイ‼？２体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？」
キングスナイトとエクストラソードが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から赤い鎧を着た馬に乗る弓兵が舞い降りた。
「エクシーズ召喚‼？現れろＨ－Ｃ（ヒロイックチャンピオン）ガーンデーヴァ‼？」

〈Ｈ－Ｃ　ガーンデーヴァ〉★４　戦士族　地属性
ＡＴＫ２１００

「ガーンデーヴァ……そのモンスターは……」
「まずはエクシーズ素材になったＨ・Ｃ　エクストラソードの効果発動‼？このカードを素材としてエクシーズ召喚したモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする‼？」

Ｈ－Ｃ　ガーンデーヴァ
ＡＴＫ２１００→３１００

ガーンデーヴァを赤いオーラが包んでいく。
そして何よりガーンデーヴァは私のデッキと致命的な程に相性が悪い。
「Ｈ－Ｃ　ガーンデーヴァは1ターンに1度、レベル４以下のモンスターが特殊召喚された時にオーバーレイユニットを１つ使うことで

そのモンスターを破壊できる。おまけにこれは一度に複数体召喚されてもそのモンスターを全て破壊することができる」
そう、現状まずクリボーを特殊召喚はさせてもらえないだろうけどクリボーを出して増殖を使ってもトークンは同時に出るから一気に破壊される。
それだけじゃなくても私のデッキはローレベルデッキなのだ。
その効果が刺さらないわけがない。
そして更に遊騎さんは駄目押しを入れてくる。
「まだだ!!?・速攻魔法発動!!?・ライバルアライバル!!?」
「!?・その速攻魔法は!!?」
「このカードは自分・相手のバトルフェイズに発動でき、モンスター1体を召喚する!!?・来い、キングスナイト!!?」

〈キングスナイト〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

再び現れるキングスナイト。
そしてフィールドにはクィーンズナイトがいる。

「そしてライバルアライバルで行われるのは特殊召喚ではなく召喚。よって、キングスナイトの効果発動!!?・クィーンズナイトが存在するため、再び集え、絵札の三銃士!!?・来い、ジャックスナイト!!?」

〈ジャックスナイト〉☆5　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

フィールドに再びを揃った絵札の三銃士。
おまけでジャックスナイトはもう1人いるけどそんなの笑い話にもならない。
圧倒的に、そして確実に相手の隙を抜い、バトルフェイズ中に奇襲をかけて勝利を掴む。

これが……遊騎さんのデュエル。
正直、ガーンデーヴァがいてあれだけ手札がある今の状況じゃ私の伏せカードも意味がない。
1枚目は増殖だし、2枚目はブラフの強制転移。そして3枚目は聖なるバリア ―ミラーフォース―だけど、こうなることがわかってたから温存して使わなかった……というのは嘘で使えなかったが正しいだろう。
あれだけカードを引いて手札が4枚もあり、伏せもあるなら空閑君の時に使ったあのカウンター罠ーーーレッドリブートは伏せか手札にはあるだろう。
使われた時点で後3体分の攻撃なんて防ぎようがない。
でも、それでも……諦めたくない。
「……ふっ、いい目してるな」
「……えっ？」
「こんな状況でも、諦めたくないって目をしてる。それだけでも、十分に凄いことだぜ。震えも止まったみたいだしな」
突然、遊騎さんが嬉しそうに笑った。
そして遊騎さんに言われて初めて気づいた。
身体の震えが、止まってる。
あれだけ怖かったハズなのに、あれだけ苦しかったハズなのに、今はもう、負けたくないって、勝ちたいってことを考えれている。
「っ‼？」
そのことに気づいた時、懐かしい光景が見えた気がした。
幼い頃にプロ決闘者だったお父さんとデュエルした時の光景。
今よりも遥かに弱かった私は、お父さんに手も足も出なくて、それでも、負けたくなくて、せめて一矢報いたいって考えて……なんで忘れていたんだろう？
あの時だって、今より弱かった私だって、最後まで絶対に諦めなかった。
なら、今の私が諦めることなんて、出来るわけがない‼？
「……遊騎さん」

「……どうした？」
「……私は、諦めません」
「……」
「これから何があったって、どんな困難に見舞われたって、諦めることだけは、絶対にしません‼？運命は、私が斬り開いて行きます‼？だから……」
「……」
「だから、このデュエルも絶対に勝たせて貰います‼？」
「……ふっ、そうか。なら、やってみな」
「はい‼？」
　もう後ろ向きに考えたりしない。
　絶対に俯いた考え方になんてならない。
　絶対絶対、諦めたりなんかしない‼？
「行くぞ‼？ＨＩＣ　ガーンデーヴァで遊花にダイレクトアタック‼？暴嵐の矢‼？」
「相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のクリアクリボーの効果発動‼？自分はデッキから1枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替えます‼？さらにチェーン発動‼？聖なるバリア　―ミラーフォース―‼？攻撃表示のモンスターを全て破壊します‼？」
「させるか‼？リバースカードオープン‼？レッドリブート‼？相手が罠カードを発動した時に発動‼？その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする」
「……やっぱりありましたか」

「その後、相手はデッキから罠カード1枚を選んで自身の魔法＆罠ゾーンにセットできる。ただしこのカードの発動後、ターン終了時まで相手は罠カードを発動できない」
「それでも……諦めません‼？私はデッキから活路への希望をセットします‼？そしてクリアクリボーの効果発動‼？」

お願い、私のデッキ……私の思いに応えて‼？
「ドローー‼？」
そして、私が引いたのはーーー

「いつだって、私と共に‼？ハネクリボー‼？」
「っ⁉？ここでハネクリボー⁉？」
ーーー私の、最高の相棒だ‼？

〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

現れるのは天使の羽を持つ茶色い毛玉のようなモンスター。
そのモンスターが私を守るように両手を広げる。
「っ、攻撃対象はハネクリボーに移っている。ＨＥＲＯ　ガーンデーヴァでハネクリボーに攻撃‼？暴嵐の矢‼？」
私を庇うように、ハネクリボーがガーンデーヴァの矢を受け、粒子になる。
粒子になる瞬間、ハネクリボーは私を見て笑った気がした。
そして粒子となったハネクリボーが私を包むように漂い始めた。

「ハネクリボーの効果発動!!?プリフィケーション!!?このカードがフィールドから墓地に送られたターン、自分の受ける戦闘ダメージは０になる!!?」
「まさか、本当に耐えられるとはね。メインフェイズ２!!?俺は光属性レベル５のジャックスナイト２体でオーバーレイ!!?２体の光属性モンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
２体のジャックスナイトが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から純白の鎧を見に纏った戦士が降りてくる。
「星々を守りし光の戦士!!?セイクリッドプレアデス!!?」
〈セイクリッドプレアデス〉★５　戦士族　光属性
ＡＴＫ２５００
「ランク５のエクシーズモンスター……こんなモンスターまで……」
「まだだ!!?斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
遊騎さんの目の前に再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はカード名が異なる戦士族モンスター３体!!?俺はクィーンズナイト、キングスナイト、聖騎士の追想　イゾルデの３体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
イゾルデとクィーンズナイト、キングスナイトがサーキットに吸い込まれていく。
そしてサーキットのリンクマーカーが輝くとサーキットの中から白銀の鎧を身に纏った騎士が現れた。
「リンク召喚!!?運命と戦う孤高の騎士!!?リンク３!!?アルカナエクストラジョーカー!!?」
〈アルカナエクストラジョーカー〉ＬＩＮＫ３　戦士族　光属性

ＡＴＫ２８００　↙？　→　↘？

現れたのは絵札の三銃士のリンクモンスター。
本当に、遊騎さんは本気で私にぶつかってくれてるんだ。
「俺は墓地にある神剣―フェニックスブレードの効果発動‼？墓地にある聖騎士の追想　イゾルデとＨ・Ｃ　強襲のハルベルトを除外してこのカードを手札に戻す。カードを２枚伏せてターンエンドだ」
ライフはかなりのギリギリ、相手の布陣は完璧でこちらはほとんど使えない伏せカードばかりで手札も少ない。
でも、絶対に諦めない‼？

遊騎　ＬＰ８０００　手札３
ー　ー　▲　▲　ー　　ー
○　ー　○　ー　ー
　　☆　　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　▲　▲　▲　▲　　ー
遊花　ＬＰ１４００　手札１

第５話　譲れないもの

★

遊騎　ＬＰ８０００　手札３
ーーー▲▲ー　ー
○ー○ーー
☆　ー
ーーーーー
ー▲▲▲▲　ー
遊花　ＬＰ１４００　手札１

「私のターン、ドロー!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?活路への希望!!?」
「レッドリブートの効果で仕掛けたカードか」
「自分のＬＰが相手より１０００以上少ない場合、１０００ＬＰを払って発動!!?」

遊花　ＬＰ１４００→４００

「お互いのＬＰの差２０００につき1枚、自分はデッキからドローする!!?私のライフは４００!!?遊騎さんは８０００!!?よって３枚のカードをドロー!!?」
「ここに来て3ドローか!!?」
　これならまだ、戦える!!?
「私はクリボルトを召喚!!?」

〈クリボルト〉☆1　雷族　光属性
ＡＴＫ３００

出て来たのは電気を出している黒い球体のモンスター。

そのモンスターを見て遊騎さんはすぐにプレアデスの効果を発動させる。
「っ!!?そのモンスターはマズイ!!?セイクリッドプレアデスの効果発動!!?ゾディアックリターン!!?オーバーレイユニットを1つ使い、相手のカード1枚を手札に戻す!!?クリボルトを手札に戻す!!?」
「させません!!?墓地のスキルプリズナーの効果発動!!?このカードを除外してクリボルトを対象にして、このターン選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にします!!?」
「!?クリバンデッドの時か……」
プレアデスが放つ星の弾丸から見えない壁がクリボルトを守る。
これでクリボルトの効果が使える!!?
「クリボルトの効果発動!!?自分のメインフェイズ時にエクシーズ素材を持っているエクシーズモンスター1体を選択して発動できる。選択したモンスターのオーバーレイユニットを1つ取り除き、自分のデッキからクリボルト1体を特殊召喚する。私はHーC ガーンデーヴァのオーバーレイユニットを1つ使って、おいで!!?クリボルト!!?」

〈クリボルト〉☆1 雷族 光属性
ATK300

ガーンデーヴァのオーバーレイユニットの1つが私のフィールドに飛んでくると、
その光がクリボルトに変わる。
でも、それを眺めているだけの遊騎さんじゃない。
「HーC ガーンデーヴァの効果発動!!?オーバーレイユニットを1つ使い、相手フィールド上にレベル4以下のモンスターが特殊召喚された時、その特殊召喚されたモンスターを破壊する。裁きの神弓!!?」
ガーンデーヴァの放つ弓がクリボルトを射抜く。

ありがとう、クリボルト。
でも、これでガーンデーヴァのオーバーレイユニットは無くなった‼?
「さらにクリボルトの効果発動‼?自分のメインフェイズ時にエクシーズ素材を持っているエクシーズモンスター1体を選択して発動できる。選択したモンスターのオーバーレイユニットを1つ取り除き、自分のデッキからクリボルト1体を特殊召喚する。セイクリッドプレアデスのオーバーレイユニットを1つ使って、もう1回‼?クリボルト‼?」

〈クリボルト〉☆1　雷族　光属性
ＡＴＫ３００

プレアデスのオーバーレイユニットもクリボルトに変わる。
これで厄介なエクシーズモンスターのオーバーレイユニットは全て無くなった‼?
「リバースカードオープン‼?魔法カード、強制転移‼?お互いはそれぞれ自分フィールド上のモンスター1体を選び、そのモンスターのコントロールを入れ替えます‼?私はクリボルトを選びます‼?……ゴメンね、クリボルト」
「コントロール奪取か‼?俺はセイクリッドプレアデスを選択する」
私のフィールドにセイクリッドプレアデスが現れ、クリボルトが遊騎さんのフィールドに現れる。
クリボルトは遊騎さんのフィールドに行く際に気にしないでというように身体を震わせた。
「バトル‼?セイクリッドプレアデスでクリボルトを攻撃‼?えーと、えーと、セイクリッドキック‼?」
プレアデスが一瞬困惑した表情でこちらを見た気がしたけど、私が言った通りクリボルトに近づいてクリボルトを蹴り飛ばした。
む、無茶振りさせちゃったみたいでごめんなさい‼?
「くっ‼?」

遊騎　ＬＰ８０００→５８００

「だが、戦闘ダメージを受けた時、Ｈ・Ｃサウザンドブレードの効果発動!!?このカードが墓地に存在し、戦闘・効果で自分がダメージを受けた時、このカードを墓地から攻撃表示で特殊召喚する!!?」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性

ＡＴＫ１３００

遊騎さんの前に再び現れたのは頭巾を被り、背中に何本もの刀を背負った戦士。

でも、遊騎さんのライフがようやく少しだけ減った。

ここから、少しずつでも前に!!?

「私はカードを1枚伏せてターンエンドです!!?」

遊騎　ＬＰ５８００　手札３

ー ー ▲ ▲ ー　　ー

○ ー ー ○ ー

☆　　ー

ー ー ○ ○ ー

ー ▲ ▲ ▲ ー　　ー

遊花　ＬＰ４００　手札３

「俺のターン、ドロー!!?魔法カード、貪欲な壺!!?墓地に存在するクィーンズナイト２枚、キングスナイト２枚、ジャックスナイトをデッキにに戻してシャッフル。そしてカードを２枚、ドローする!!?」

ここで絵札の三銃士がデッキに戻った上にドローまでされちゃうなんて……ううん、何をされても気持ちで負けちゃダメ!!?

「俺はＨ・Ｃダブルランスを召喚!!?」

〈Ｈ・Ｃ　ダブルランス〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１７００

遊騎さんが次に出して来たのは２つの槍を持った白い戦士。
そのモンスターは出てくると同時に勇ましい雄叫びをあげる。
「Ｈ・Ｃ　ダブルランスの効果発動!!?召喚成功時に手札・墓地の同名モンスターを表側守備表示で特殊召喚する!!?俺は墓地のＨ・Ｃ　ダブルランスを特殊召喚だ!!?」
「あっ、最初のＨ・Ｃ　サウザンドブレードの効果の時に……」
「ただしこのカードはシンクロ素材にできず、このカードをエクシーズ素材とする場合、戦士族モンスターのエクシーズ召喚にしか使用できない」

〈Ｈ・Ｃ　ダブルランス〉☆４　戦士族　地属性
ＤＥＦ９００

もう１体ダブルランスが現れる。
レベル４モンスターが３体……それとも制限されてないリンク召喚？
私の疑問はすぐに解消される。
「俺は戦士族、レベル４モンスターＨ・Ｃ　サウザンドブレードと２体のＨ・Ｃ　ダブルランスでオーバーレイ!!?３体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
サウザンドブレードとダブルランスが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から降り立つのは赤く燃える剣を持った甲冑の戦士。
「エクシーズ召喚!!?現れろＨ－Ｃ（ヒロイックチャンピオン）クサナギ!!?」

〈Ｈ－Ｃ　クサナギ〉★４　戦士族　地属性

ＡＴＫ２５００

「ＨＩＣ　クサナギ……」

「ＨＩＣ　クサナギはオーバーレイユニットを１つ取り除くことでターンに１度、罠カードの発動を無効にして破壊、その後、このカードの攻撃力は５００ポイントアップさせることができる」

「つまり、聖なるバリア　―ミラーフォース―は使えないってことですね……」

　ここに来て罠を封じるモンスター……本当に遊騎さんには隙がない。

「さぁ、今度は耐えきれるかな？バトルフェイズ‼？」

「バトルフェイズ開始時、墓地に存在するリンクリボーの効果発動‼？スケープリンク‼？このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル１モンスター１体をリリースしてこのカードを墓地から特殊召喚する‼？私はクリボルトをリリース‼？戻っておいで、リンクリボー‼？」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性

ＡＴＫ３００　←

　クリボルトの姿が消え、代わりにリンクリボーが跳ねるように私の前に現れる。

　頼りにしてるよ、リンクリボー‼？

「再び出て来たか。ならバトル‼？ＨＩＣ　クサナギでリンクリボーを攻撃‼？クサナギノツルギ‼？」

「相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動‼？ゼロリンク‼？このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力はターン終了時まで０になる‼？」

　斬りかかってきたクサナギにリンクリボーの身体が粒子に変わって纏わりつく。

　これでクサナギの攻撃はお終い。

「攻撃対象がいなくなったことで攻撃は中断する。次は耐えきれるか？ＨＩＣ　ガーンデーヴァでセイクリッドプレアデスに攻撃‼？暴嵐の矢‼？」
「っ‼？迎え撃って‼？セイクリッドプレアデス‼？」
プレアデスは星の弾丸を放つが、ガーンデーヴァの弓矢はそれを掻い潜ってプレアデスに直撃し、爆散する。
でも、まだ負けない‼？
「手札から、クリボーの効果発動‼？ダークエンヴェロップ‼？相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこのカードを手札から捨てて発動できる。その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは０になる‼？」
「これも耐えるか……」
爆風から庇うようにクリボーが現れて私を守ってくれた。
まだ勝負は終わっていない‼？
「なら、アルカナエクストラジョーカーでダイレクトアタック‼？ストレートフラッシュ‼？」
エクストラジョーカーが私を斬るために私に向かって走ってくる。
それでも、まだ終わりじゃない‼？
「まだ……まだです‼？手札からバトルフェーダー‼？さらにチェーンして墓地からクリボーンの効果発動‼？」
「クリボーン‼？それもクリバンデッドの時か‼？」
「相手モンスターの攻撃宣言時、墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のクリボーモンスターを任意の数だけ対象として、そのモンスターを特殊召喚します‼？来て、クリボー‼？ハネクリボー‼？ジャンクリボー‼？虹クリボー‼？」
〈クリボー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００
〈ハネクリボー〉☆１　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

〈ジャンクリボー〉☆1　機械族　地属性
ＤＥＦ２００

〈虹クリボー〉☆1　悪魔族　光属性
ＤＥＦ１００

私の周りに現れたのは4体のクリボー達。
更にその横に鐘の音を鳴らす悪魔が現れ、エクストラジョーカーが動きを止める。

〈バトルフェーダー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

「バトルフェーダーの効果発動!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードを手札から特殊召喚し、その後バトルフェイズを終了します!!?そしてこの効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外されます」
「バトルフェイズ自体を終了してくるか。俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ５８００　手札３
ー▲▲▲ー　ー
○ー○ーー
☆　ー
□□□□□
ー▲▲▲ー　ー
遊花　ＬＰ４００　手札２

このターンも何とか耐えることが出来た。
でも、こんな防勢、いつまでも続かない。

だから、ここからは私から攻めていく!!?

「私のターン、ドロー!!?そして、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」

「リンク召喚か……さぁ、何がくる?」

私が正面に手をかざすと私の前に大きなサーキットが現れる。

「召喚条件は効果モンスター3体以上!!?私はバトルフェーダー、ジャンクリボー、虹クリボー、ハネクリボーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」

バトルフェーダーとクリボー達がサーキットの中に吸い込まれていく。

私が今から呼ぶのは、私の大切な思い出のカードであり、遊騎さんが空閑君から取り返してくれたカード。

2年前のあの日、大会で優勝してくるって意気込んだ私に、お父さんがお守りとして渡してくれたカード。

私が、デュエルが出来なくなっても、デュエル自体を嫌いにならなかったのは、このカードで繋がったお父さんとの思い出があったから……だから!!?

「お願い、私に運命を超える力を貸して!!?リンク召喚!!?閉ざされた運命を斬り開く魂の剣(つるぎ)リンク4!!?ヴァレルソードドラゴン!!?」

咆哮が響く……再開を待ち望んでいたというように。

〈ヴァレルソードドラゴン〉LINK4　ドラゴン族　闇属性

ATK3000　↙?↑←→

「そのドラゴンは……」

「はい、遊騎さんに取り返して貰ったカードです……お父さんの、形見です」

「……そうか」

私の言葉に遊騎さんは優しい目でこちらを見る。

「私は、もう1度この子達と一緒に成長していきたいです。子供の頃、

何度負けたってデュエルするのが楽しかったあの頃みたいに……
だから、もっと私は強くなります!!?リバースカードオープン!!?速攻魔法!!?増殖!!?自分フィールド上に表側表示で存在するクリボー1体をリリースして自分フィールド上にクリボートークンを可能な限り守備表示で特殊召喚します!!?」

〈クリボートークン〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

私のフィールドにいたクリボーが5体に増える。
そしてここからが本番だ。
「導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
再び私の前に大きなサーキットが現れる。
さぁ、いくよ、皆!!?
「召喚条件は通常モンスター1体!!?私はクリボートークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク1!!?リンクスパイダー!!?」

〈リンクスパイダー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１０００　←

私の前に機械の蜘蛛が現れる。
それを確認しながら私は再びサーキットを開く。
「まだいきます!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「連続リンク召喚か!!?」
「召喚条件はモンスター2体!!?私はクリボートークン2体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?プロキシードラゴン!!?」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

次に現れたのは白い身体をした機械の竜。
そして私はまたあの子を呼ぶ。
「墓地に存在するリンクリボーの効果発動!!?スケープリンク!!?このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル1モンスター1体をリリースしてこのカードを墓地から特殊召喚する!!?私はクリボートークンをリリース!!?戻っておいで、リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

２回も呼び戻したというのに相変わらず嬉しそうに跳ね回るリンクリボー。
君の元気は底無しだね。
でもゴメン、また私に力を貸して!!?
「そして導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
このターン４度目のサーキット。
私は１度目を閉じて、深呼吸をしてからそのモンスターを呼ぶ。
「召喚条件は効果モンスター３体以上!!?私はリンクスパイダー、リンクリボー、プロキシードラゴンを　２体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
「再びリンク４モンスターか……」
このモンスターにも私の思い出が詰まっている。
幼い頃からずっと私と一緒に戦ってくれた子だ。
デュエルが怖くなってからは、この子を召喚できた事は１度も無かった。
怒っているだろうか？
一緒に戦えなくなった私のことを……でも、もう待たせたりなんかしないから!!?
「もう１度私と一緒に戦って!!?閉ざされた運命を撃ち抜く信念の弾

丸!!?リンク４!!?ヴァレルロードドラゴン!!?」
咆哮が響く……再び共に戦えることを歓喜する咆哮が。
〈ヴァレルロードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑↓↘?
「もう1体、ヴァレルの名を持つドラゴンか……壮観だな」
並び立つ2体のドラゴンを見て、遊騎さんが楽しそうに笑う。
それを見て、この人は本当にデュエルが好きなんだということが分かる。
この人は、今どんなことを思っているんだろう。
大好きなデュエルが出来なくなって、それでもこんな私を助けてくれて。
知りたい……遊騎さんのことを……そして何よりも今は……
この人に勝ちたい!!?
これで攻撃する準備は出来た。
下手に小型のモンスターを出したら返しのターンでやられる。
だから、このまま攻める!!?
「バトルフェイズ!!?ヴァレルロードドラゴンでアルカナエクストラジョーカーを攻撃!!?銃声のイジェクトフレア!!?」
「アルカナエクストラジョーカーを狙ってくるか!!?」
ヴァレルロードドラゴンの口から砲台が現れ、アルカナエクストラジョーカーに向けて粒子砲を放つ。
アルカナエクストラジョーカーはそれを防ごうとするが、その攻撃を防ぐことは出来ない!!?
「この瞬間、ヴァレルロードドラゴンの効果発動!!?エロージョンエイミング!!?このカードが相手モンスターに攻撃するダメージステップ開始時に、その相手モンスターをこのカードのリンク先に置いてコントロールを得ます!!?」
「なっ!!?アルカナエクストラジョーカー!!?」

「そのモンスターは次のターンのエンドフェイズに墓地へ送られます」
ヴァレルロードドラゴンの粒子砲を受けたアルカナエクストラジョーカーは消滅し、こちらのバトルゾーンに移動する。
これで厄介なリクルート効果は無くなった!!?
「まだいきます!!?アルカナエクストラジョーカーでＨ－Ｃ　クサナギを攻撃!!?ストレートフラッシュ!!?」
「リバースカードオープン!!?幻影騎士団シャドーベイル!!?Ｈ－Ｃ　クサナギの攻撃力・守備力を３００ポイントアップさせる!!?」
「っ!!?相打ちにはさせません!!?ヴァレルロードドラゴンの効果発動!!?ジャムバレット!!?Ｈ－Ｃ　クサナギを対象にして攻撃力・守備力を５００ポイントダウンさせます!!?この効果は相手ターンにも発動することができ、この効果に対して相手は効果を発動することが出来ません!!?」
「っ、戦闘補助まであるのか!!?迎え撃て、Ｈ－Ｃ　クサナギ!!?クサナギノツルギ!!?」

Ｈ－Ｃ　クサナギ
ＡＴＫ２５００→２０００→２３００

ヴァレルロードドラゴンが手についているリボルバーから弾丸を撃ち出し、クサナギに当て怯ませ、その間にアルカナエクストラジョーカーが近づきクサナギを斬り伏せた。

遊騎　ＬＰ５８００→５３００

「まだ、行きます!!?ヴァレルソードドラゴンでＨ－Ｃ　ガーンデーヴァを攻撃!!?」
「攻撃力が下のモンスターで攻撃?」
「攻撃宣言時、ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アブソーブブースト!1ターンに1度、このカードが表側表示モンスターに攻撃

宣言した時、ターン終了時まで、このカードの攻撃力はそのモンスターの攻撃力の半分アップし、そのモンスターの攻撃力は半分になります!!?」

「何っ!?」

ＨＩＣ　ガーンデーヴァ
ＡＴＫ３１００→１５５０

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ３０００→４５５０

ヴァレルソードドラゴンが斬りかかり、それをガーンデーヴァは受け止めるが、剣から漏れる赤い光に徐々に力を吸い取られていく。

でも、これで終わりじゃない！

「さらにヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アサシネイトショット!!?１ターンに１度、攻撃表示モンスター１体を対象として発動!!?そのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃できる。そしてこの効果の発動に対して相手は効果を発動できない!!?この効果は相手ターンにでも使用することが出来ます!!?対象にするのは、ＨＩＣ　ガーンデーヴァ!!?」

斬りかかっていたヴァレルソードドラゴンの腕から突然散弾がガーンデーヴァに向かって撃ち出され、その衝撃でガーンデーヴァが乗っている馬が膝をついた。

「っ!!?守備にされる上に２回攻撃!!?だって!?」

ＨＩＣ　ガーンデーヴァ
ＡＴＫ１５５０→　ＤＥＦ１８００

「斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン!!?剣光のベイオネットブレ

イク‼?」
　私の言葉にヴァレルソードドラゴンは応えるように咆哮をあげ、そのままガーンデーヴァを斬り裂いた。
「っ‼?ガーンデーヴァ‼?」
「もう1度‼?ヴァレルソードドラゴンでダイレクトアタック‼?剣光のベイオネットブレイク‼?」
「ぐあっ‼?」

遊騎　ＬＰ５８００→１２５０

ヴァレルソードドラゴンの攻撃が通り、遊騎さんのライフが大きく削られる。
　でも、本来なら遊騎さんはシャドーベイルというあの罠をモンスターにして出せたハズだ。
　それでもダメージを受けたということは……
「戦闘ダメージを受けた時、Ｈ・Ｃサウザンドブレードの効果発動‼?このカードが墓地に存在し、戦闘・効果で自分がダメージを受けた時、このカードを墓地から攻撃表示で特殊召喚する‼?」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

遊騎さんの前に三度現れたのは頭巾を被り、背中に何本もの刀を背負った戦士。
　きっとあのモンスターからまた強力なエクシーズモンスターを出してくるハズ……
「メインフェイズ　２ーーー」
「いや、バトルフェイズを終了時、リバースカードオープン‼?罠発動‼?拮抗勝負‼?」
「っ‼?その罠は‼?」
「相手フィールドのカードの数が自分フィールドのカードの数より多

い場合、自分・相手のバトルフェイズ終了時に発動できる‼?自分フィールドのカードの数と同じになるように、相手はフィールドのカードを裏側表示で除外しなければならない‼?」

やられた‼?

さっきのデュエルが印象的過ぎてバトルゾーンにカードがあるから無意識に安心してたけど、あのカードは発動出来ないわけじゃなかったんだ。

「俺のカードは3枚。遊花も3枚になるように除外してもらう」

「私は……ヴァレルソードドラゴンとヴァレルロードドラゴン、伏せカード1枚を残して除外します」

クリボートークンとアルカナエクストラジョーカー、聖なるバリア―ミラーフォース―も除外しておく。

バレている手の内に遊騎さんが引っかかるわけがない。

これで一気に防御がキツくなってしまった。

でも、まだ負けが決まったわけじゃない。

「メインフェイズ　2、カードを1枚伏せてターンエンドです」

伏せているカードはドローマッスルとバーサークラッシュ。

正直ブラフにしかならないけど、もし2体のドラゴンを突破されてもダイレクトアタック時に虹クリボーを出せればドローマッスルで耐えられる。

だけど下手にモンスターを伏せたらハルベルドを呼ばれて貫通ダメージで負ける可能性が高くなる。

一応クリボーも手札にいるけどそう何度もは耐えられない。

だから、任せたよ、ヴァレルソード、ヴァレルロード。

遊騎　ＬＰ１２５０　手札３

ー▲ーーー　ー

ーー◯ーー

ー　☆

ーーー☆ー

ーー▲▲ー　ー

遊花　ＬＰ４００　手札２

「俺のターン……正直、ここまで追い詰められるとは思って無かったよ」
「……えへへ、驚いてくれました？」
「あぁ。でも、そう簡単には負けるわけにはいかないな。俺は君の師匠になるらしいから」
「‼？」
　言葉にしてくれた……私の師匠だって。
　その言葉に頬が緩みそうになる。
　でも、油断したりはしない。
　だって、私の師匠が、こんなに楽しそうな笑顔を浮かべているのだから‼？
「行くぞ、遊花‼？」
「はい‼？」
「ドロー‼？魔法カード、手札抹殺を発動‼？お互いに手札を全て捨てて同じ枚数ドローする‼？」
　遊騎さんは３枚、私は２枚、お互いにカードをドローになる。
　でも、遊騎さんのことだから、ただの手札交換とは思えない。
「俺は墓地に落ちた最後の妖刀竹光の効果発動‼？デッキから最後の黄金色の竹光を手札に加えるよ。さらに魔法カード、折れ竹光‼？Ｈ・Ｃ　サウザンドブレードに装備。そして魔法カード、黄金色の竹光‼？竹光カードがあるから　２枚ドローだ」
　遊騎さんのデッキは度重なるドローで凄く薄い。
　デッキが少ないということはそれだけ目当てのカードも引きやすくなっているということだ。
「俺はクィーンズナイトを召喚」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１５００

再び現れる赤い騎士。
そして遊騎さんは　２体のモンスターに手をかざす。
「俺は戦士族、レベル４のクィーンズナイトとＨ・Ｃ　サウンドブレードでオーバーレイ‼？２体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」
クィーンズナイトとサウンドブレードが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこにいたのは赤い鎧を着た王者の風格を漂わせる戦士。
「光を纏て、闇を切り裂く孤高の王者‼？　Ｈ（ヒロイック）ー　Ｃ（チャンピオン）エクスカリバー‼？」

〈Ｈ－Ｃ　エクスカリバー〉★４　戦士族　光属性
ＡＴＫ２０００

エクスカリバー……伝説の聖剣の名前を冠したモンスターが私の前に立ち塞がる。

「Ｈ－Ｃ　エクスカリバーの効果発動‼？シャイニングフォース‼？オーバーレイユニットを２つ使い、このカードの攻撃力は、次の相手のエンドフェイズ時まで元々の攻撃力の倍になる‼？」

Ｈ－Ｃ　エクスカリバー
ＡＴＫ２０００→４０００

「攻撃力４０００⁉？」
「さらにリバースカードオープン‼？魔法カード、闇の量産工場。墓地に存在する通常モンスターを２体、手札に加える。墓地のクィーンズナイト、ジャックスナイトを手札に加える。そして見せてやる、俺の切り札‼？魔法カード、融合‼？」
「っ‼？ここで融合⁉？」

「俺は手札のクィーンズナイト、キングスナイト、ジャックスナイトの３体で融合!!?融合召喚!!?運命に打ち勝つ勇敢なる騎士達の主!!?アルカナナイトジョーカー!!?」

〈アルカナナイトジョーカー〉☆９　戦士族　光属性
ＡＴＫ３８００

ヴァレルソードドラゴンの前に現れるのは黒い鎧を身に纏った漆黒の騎士。
その存在感に、私は圧倒される。
これが、遊騎さんの切り札、アルカナナイトジョーカー!!?
「魔法カード、貪欲な壺!!?墓地に存在するクィーンズナイト、キングスナイト、ジャックスナイトをデッキに、ＨＩＣ　ガーンデーヴァとＨＩＣ　クサナギをＥＸデッキに戻してシャッフル。カードを　２枚、ドローする!!?さらに墓地に存在する神剣―フェニックスブレードの効果発動!!?墓地にあるセイクリッドプレアデスとＨ・Ｃ　エクストラソードを除外してこのカードを手札に戻す!!?」
あの状況から手札が３枚まで戻った。
私はそれを見て気を引き締める。
「バトルフェイズ!!?ＨＩＣ　エクスカリバーでヴァレルロードドラゴンを攻撃!!?必殺剣　刀光剣影!!?」
「ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アサシネイトショット!!?１ターンに１度、攻撃表示モンスター１体を対象として発動!!?そのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃できる。そしてこの効果の発動に対して相手は効果を発動できない!!?この効果は相手ターンにでも使用することが出来ます!!?対象にするのは、ＨＩＣエクスカリバー!!?」

ＨＩＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ２０００↓　ＤＥＦ２０００

ヴァレルソードドラゴンの放つ散弾でエクスカリバーの動きが止まる。
でももう1体、攻撃できる遊騎さんの切り札が残っている。
「アルカナナイトジョーカーでヴァレルロードドラゴンを攻撃!!?ロイヤルストレートフラッシュ!!?」
「迎え撃って、ヴァレルロードドラゴン!!?銃声のイジェクトフレア!!?ヴァレルロードドラゴンの効果発動!!?ジャムバレット!!?アルカナナイトジョーカーを対象にして攻撃力・守備力を５００ポイントダウンさせます!!?この効果は相手ターンにも発動することができ、この効果に対して相手は効果を発動することが出来ません!!?」

アルカナナイトジョーカー
ＡＴＫ３８００→３３００

ヴァレルロードドラゴンが粒子砲を放ちさらに弾丸も放って行くがそれでもアルカナナイトジョーカーの勢いは止まらない。
そのままの勢いでヴァレルロードドラゴンは斬り裂かれてしまった。
ゴメンね、ヴァレルロード。

遊花　ＬＰ４００→１００

ライフはまだ残る。
クリボーは使わない。
「……メインフェイズ　２、俺はカードを伏せてターンエンドだ」
遊騎さんは私の雰囲気から何かを感じ取ったのか少し考えてからカードを伏せてエンド宣言をした。

遊騎　ＬＰ１２５０　手札　２
ー▲ーーー　ー
ーーー◯ー

□　☆

ーーーーー

ーー▲▲ー　ー

遊花　ＬＰ１００　手札２

「私のターン、ドローー!!?」

このターンであの２体を倒さないと勝ち目は無い!!?

「私は金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性

ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のモンスター。

「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル１モンスターを特殊召喚する!!?もう１度、私と共に!!?ハネクリボー!!?」

〈ハネクリボー〉☆１　天使族　光属性

ＡＴＫ３００

もう１度私の相棒がバトルゾーンに現れる。

ハネクリボーは嬉しそうに私の頭の上に移動する。

うん、もう１回頑張ろう!!?

「ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アサシネイトショット!!?１ターンに１度、攻撃表示モンスター１体を対象として発動!!?そのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃できる。そしてこの効果の発動に対して相手は効果を発動できない!!?この効果は相手ターンにでも使用することが出来ます!!?対象にするのは、アルカナナイトジョーカー!!?」

アルカナナイトジョーカー

ＡＴＫ３８００↓　ＤＥＦ２５００

ヴァレルソードドラゴンの散弾でアルカナナイトジョーカーがその場に膝をつく。
これで準備は整った‼?
「バトル‼?ヴァレルソードドラゴンでＨＩＣ　エクスカリバーを攻撃‼?攻撃宣言時、ヴァレルソードドラゴンの効果発動‼?アブソーブブースト！1ターンに1度、このカードが表側表示モンスターに攻撃宣言した時、ターン終了時まで、このカードの攻撃力はそのモンスターの攻撃力の半分アップし、そのモンスターの攻撃力は半分になります‼?」

ＨＩＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ４０００→２０００

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ３０００→５０００

「斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン‼?剣光のベイオネットブレイク‼?」
「迎え撃て、ＨＩＣ　エクスカリバー‼?必殺剣　刀光剣影　‼?」
ヴァレルソードドラゴンとエクスカリバーの剣戟が響く。
何度もぶつかり合う2つの剣。
そしてヴァレルソードドラゴンが一際咆哮を上げると1度距離をとり、そのまま勢いよく突撃してエクスカリバーを斬り裂いた。
「っ……すまない、エクスカリバー」
「もう1度斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン‼?アルカナナイトジョーカーを攻撃‼?剣光のベイオネットブレイク‼?」
ヴァレルソードドラゴンが勢いをつけてアルカナナイトジョーカーに突撃していく。
アルカナナイトジョーカーが剣を構える様子はない。
このまま押し切る、そう思った時ーーー

「リバースカードオープン‼?」
「っ‼?」
ーーーーー遊騎さんが笑みを浮かべているのに気が付いた。
「速攻魔法‼?旗鼓堂々‼?このターン、自分はモンスターを特殊召喚できなくなる代わりに、自分の墓地の装備魔法カード1枚をその正しい対象となるフィールド上のモンスターに装備する‼?ただしこの効果で装備した装備魔法カードはエンドフェイズ時には破壊される‼?」
「装備魔法をつけるカード?でも、1枚の装備カードじゃ……」
いや、何かを忘れている気がする。
今回のデュエルでは装備カードを墓地に送る機会は沢山あった。
その中に、この状況をひっくり返せるものがあるとしたら?
ヴァレルソードドラゴンがアルカナナイトジョーカーにぶつかり、吹き飛ぶ。
ただし、吹き飛ばされたのはヴァレルソードドラゴンの方だった。

アルカナナイトジョーカー
ＤＥＦ２５００→６３００

ヴァレルソードドラゴンを吹き飛ばしたアルカナナイトジョーカーが持っていたのは強固そうな盾。
「装備魔法、最強の盾。戦士族モンスターに装備出来て、その表示形式によって効果が変わるちょっと変わった装備魔法だ。そして守備表示の時の効果は装備モンスターの守備力は、その元々の攻撃力分アップする。攻撃表示なら逆に元々の守備力分だったけどな」
元々の攻撃力、つまり３８００分アップ。
あのカードが落ちたのはイゾルデの効果……つまり最初からこのカードを使うことも考慮して落とされていた。
そしてモンスターが増えたわけでもないから戦闘も回避出来ない。
おまけにこちらからの攻撃ではクリボーは使えない。
つまりーーー

「今回は、俺の勝ちだ。悪いな……けど、そう簡単には勝ちは譲れないんだ。迎え撃て、アルカナナイトジョーカー!!?フォーカード!!?」
アルカナナイトジョーカーが吹き飛んだヴァレルソードドラゴンに向けて剣を振るい、その剣から衝撃波が出てヴァレルソードドラゴンをさらに吹き飛ばした。
その衝撃波は、勿論私にも当たっている。
改めて思った。
遊騎さんは凄い人だって……だけど……だけどやっぱりーーー
「あぁ……悔しいなぁ……」
遊花　ＬＰ１００→０

デュエルが終わる。
空を見上げると、もう星空が見え始めていた。
何となくふわふわした気分で、空に向かって星を掴むように手を伸ばす。
もう、震えも完全に止まっていた。
思い返すのは楽しかったさっきのデュエルのことばかり。
私は、少しでも前に進めたんだろうか？
まだ、全然分からないけど……でも、私が、今一番言葉にしたい気持ちはーーー
「遊騎さん」
「……なんだ？」

「今日は、本当にありがとうございました‼?・そしてーーー」
そういって勢いよく頭を下げる。
そして私は頭を上げると、2年ぶりの、ここ最近は浮かべれなかった満面の笑みを浮かべた。
「ーーーこれからもよろしくお願いします‼?・師匠‼?・」
私は歩き出す。
もう1度、温かい未来に向かって。

第6話　抗いの運命

☆

「出来ました!!?・どうぞ、食べてください!!?・」
「あ、あぁ」
自分の目の前に並べられていく美味しそうな朝食を、俺は困惑した表情で眺める。
その料理を俺に振舞っている遊花はとても嬉しそうな笑みを浮かべている。
「えへへ、誰かと一緒に朝食を食べるのなんて久しぶりなので、つい張り切ってしまいました。どうぞどうぞ!!?・沢山食べてください!!?・」
「お、おぅ」
「残った分はお弁当にしちゃいますね!!?・」
ニコニコとした遊花の笑顔に気圧され、俺は用意された料理を食べ始める。
どうしてこんなことになったのか。
それは前日の夜まで遡る。

ーーーーーーーー

デュエルも終わり、満面の笑みを浮かべる遊花を見て、俺も少しホッとした。
今のデュエルで彼女が少しでも前に進むことが出来た。
大好きなデュエルを怖がっていた少女が再びデュエルの道に戻ることが出来たなら、とてもいいことだろう。
「それで、今日はもう暗くなっちゃいましたけど、明日からまた色々と教えて貰えないでしょうか?・朝は学校もありますから、会う場所とかも決めておきたいですし……なんだったらお家を教えて貰えればそこに通ったりなんかしちゃうんですが……」
「そうだな、今日はもう遅……」

「師匠？どうかしましたか？」
突然言葉を止めた俺を遊花が不思議そうな顔で見てくる。
だけど俺はそれに反応出来ない程、遊花の言葉により身体から冷や汗が流れていた。
周りを見回すと辺りはすっかり日が暮れていて完全に夜になっている。
この時間だと宿はもうどこも空いていないだろう。
そして俺は今、帰る家がない。
つまりーーー
「やっちまった……」
「師匠⁉？どうしたんですか⁉？」
突然崩れ落ちた俺を見て、慌てた様子で遊花が近寄ってきた。
心配させてしまうのは心苦しいが正直今は構っている余裕がない。
「あ～悪い、とりあえず会う場所はここでいいか？多分今日はここで寝るから」
「えっ⁉？ここ公園ですよ⁉？」
確かに公園だが行く場所がないのだから仕方がない。
遊花は困惑した表情を浮かべながら俺に声をかけてくる。
「家に帰らないんですか？」
「あ～色々あって住んでいたアパートを追い出されてな。ホテルでも探して泊まろうかと思ってたんだが……」
「……この時期に空いてるホテルは無いと思いますよ？実家やお知り合いとかは……」
「……実家って言えるものは今の俺にはない。そして知り合いはぶっちゃけ迷惑をかけたくない。さっき言った通り、俺はこの街では悪名が高いからな」
俺の言葉に遊花が悲痛な表情を浮かべる。
実際、多分頼ればアイツらは手を貸してくれるとは思う。
本人達も世間からの評価なんか気にはしないだろう。
でも、アイツらが築き上げたものを俺が崩してしまうことはしたくない。

幸いなことに季節はまだ6月だ。
野宿をしても風邪をひくことは無いだろう。
そう自分の中で結論付けようとした時、意を決したように遊花が俺に声をかけた。
「だったら……だったら、家に来ませんか？」
「はぁ⁉？」
遊花の発言に俺は思わず声を上げた。
一体この子は何を言ってるんだ⁉？
「その、私も1人暮らしですし、それにほら‼？弟子は師匠のいるところで家事とかを手伝いながら師匠の後ろ姿から学んだりするじゃないですか。だから、一緒の家にいた方が色々教えて貰いやすいかなって」
「い、いやいや。それは師匠の家に下宿する場合であって、弟子の家に師匠が下宿するのはマズイだろ」
そうじゃなくても色々マズイ。
無職の男が1人暮らしの年下の女の子の家に転がり込むとか、その事実だけで俺は心が折れそうだ。
通報されたら1発でアウトだぞ⁉？
そんな俺の思いとは裏腹に遊花は寂しそうな表情を浮かべる。
「それに……師匠が困ってるのに何も出来ないなんて……私も少し寂しいですから……師匠に貰ってばかりで、師匠に何も返せないのは、嫌ですから……」
「……はぁ～」
そんな遊花の言葉に俺は何も言えなくなってしまう。
先程のデュエルでも分かったことだが、この子は優しく、純粋で、そして負けず嫌いの頑固者だ。
1度こう言いだしたら止まらないのだろう。
それに、ここまで俺を気にかけるのも彼女の過去が関係しているのだろう。
先程のデュエルでも漏れていた父の形見や失くなったという言葉、そして1人暮らしという現状。

それがどういうことを意味しているのかは、聞かなくても想像がつく。
だからなのだろう。
ここまで俺のことを気にかけているのは。
俺がここで1人で過ごして、何かが起こってしまうことを恐れている。
今日会ったばかりの人間の身に何が起こってしまうのを、心の底から恐れている。
「……普通、今日会ったばかりの人間を家に泊めようとするか？」
「師匠は信用出来る人ですから」
「……そこで即答されるのもな。俺も騙されやすいけど、騙されるとか思わないのか？」
「師匠はそんなことしません。されたなら、それはそれで私の見る目がなかっただけです」
「……信用が重いよ」
「それに、いいじゃないですか、騙されても。何回も誰かを騙す人間より、何回も誰かに騙されて馬鹿を見て、それでも誰かを信じれる人間の方が、私は好きです」
「……はぁ～」
分かっていたことだが、この子の意思は固い。
このまま俺がここに居座るなら、彼女も居座ろうとしてくるだろう。
流石に、それをさせるわけにもいかない。
「とりあえず、今日のところはお世話になる」
「今日だけじゃなくてもいいですよ？通わなくても済みますし」
「そういうわけにはいかないさ」
「……じゃあ師匠の新しいお家が見つかるまでと言うことで」
その言い方は絶対にすぐには見つからないと分かって言ってるだろう。
俺が呆れた表情を浮かべるとそれを見て遊花はにっこりと笑顔を浮かべた。

「それでは改めて、よろしくお願いします、師匠!!?」

ーーーーーーー

★

「……えへへ」

「……どうかしたか?」

「あ、いえ、何でもないです」

目の前にいる師匠を見て、思わず笑みが溢れてしまう。

いけないいけない、師匠も怪訝そうな表情を浮かべてる。

普通、普通にしないと。

それでも油断すると笑みが溢れそうになってしまう。

でも、そうなってしまうのも仕方ないと思う。

昨日の事が夢じゃなかったんだってことが分かるから。

こうやって私の家で誰かと一緒に食卓を囲むのは久しぶりだ。

ずっと気にしないでいようとしていたけど、やっぱり1人での食卓は寂しかった。

話しかける相手もいなければ返ってくる言葉もない。

音も私の音しかせず、テレビをつけていないと1人を感じてしまう時間が嫌だった。

正直、師匠を家に呼んだのはとても強引だったと思う。

師匠がどんなことを気にしていたのかだって、ちゃんとわかってるハズだ。

それでも、ほっておけなかった。

もし、あのまま師匠と別れてしまったら、師匠まで居なくなってしまうんじゃないかって、思ってしまったから。

でも、師匠はこうしていてくれてる。

それが本当に……本当に嬉しい。

「そういえば師匠は今日どうするんですか?」

「とりあえず、宿を探す。後は、まだお金に余裕があるとはいえ、仕事を探さないとな。というわけだから、今日は教えてあげることは難し

いかもな」
「……宿は探さなくてもいいんですよ？ここに帰ってきてくれれば教えて貰うことも出来ますし」
「それはない」
その言葉を聞いて、仕方がないとは思うけど、少し残念に思う自分がいる。
昨日、私の家に来てからお互いのことについて少しだけ話した。
最初は私の家族のことについて話した。
師匠はずっと優しい目で私の話を聞いてくれて、聞き終わった後も何も言わないでくれた。
何を言うべきか、もしかしたら迷っていたのかも知れないけど、それでもずっと優しい目で私を見てくれていたのが嬉しかった。
それから、私は師匠の追い出された理由や悪名のことについても少し聞いた。
師匠は何でもないかのように話していたが、私はそれを聞いてかなり怒った。
どうして噂だけで、実際の師匠のことを知りもしないのにそんなことが出来るのだろう？
彼と接して、デュエルを見れば分かるハズだ。
彼はそんなことをする人間じゃないってことが。
会って1日も経っていなかった私や空閑君ですら分かったのに、何故彼のことを誰も理解しようとしないのか。
そして何よりも悲しかったのは、それに対して師匠がもう何も感じていないことだ。
怒ればいいのに、悲しめばいいのに、仕方がないと不条理を受け入れて笑うあの表情が、私には辛かった。
「……宿が見つからなかったら、ちゃんと帰ってきてくださいね？」
「帰ってくるって言うのはおかしい気がするんだけどな」
「弟子との約束ですよ」
「……はいはい、師匠としては裏切れないな。まぁ、確かに昨日の今日で見つかるとは思えないから、そうなったらすまないけど泊まらせ

て貰うよ。俺も野宿は嫌だからな」
そういって師匠が笑う。
きっと私が何を言っても譲らないから諦めたのだろう。
今は、これでいい。
師匠がくれたきっかけで、私は少しでも前に進むことが出来た。
だから、今はどうすればいいかはまだ分からないけど、いつか絶対に師匠に返すのだ。
私にくれたたくさんの恩を、そのきっかけになってくれたこの人に。
「まぁ、それはそれとして、師匠ってものになったのに何もしないって言うのも申し訳ないからな。少しアドバイスとして、カードショップでも行ってみたらどうだ？」
「カードショップ、ですか？」
「ああ。いきなり誰かとデュエルって言うのは厳しいかも知れないし、俺みたいに全くデュエルをしてなかったわけじゃないだろうけど、好んで近づきはしなかったんだろう？なら、その間に増えたカードとかもあるだろう。俺も、昨日戦った空牙団は知らなかったしな」
それを聞いて確かにと頷く。
私もデュエルアカデミアの生徒だから、デュエルが怖かった時期にも少しはデュエルをしないといけなかったけど、自分のことでいっぱいいっぱいで相手のカードなんて全然覚えていなかった。
カードについての知識も、プロ決闘者になるなら大切になってくるだろう。
それに新しいカードの中に私のデッキに役に立つカードもあるかも知れないし、知らない人とデュエルをするのは、まだ少しだけ怖い。
昨日師匠と最後までデュエル出来たのも、実は奇跡に近かったのだ。
「何処のカードショップに行こうか迷うなら、俺が昔、通っていたカードショップでも教えておくけど、どうする？」
「ありがとうございます。それじゃあ今日ははそこに行ってみます」
「ああ、あの店なら遊花でも大丈夫だ。頑張ってこいよ」

そういって師匠がカードショップの場所を教えてくれる。
師匠が通っていたカードショップか……一体どんなところなんだろう？
そんなことを考えながら、朝食の時間は穏やかに過ぎていくのだった。

ーーーーーーー

「おはようございます」
公園で師匠と別れた私は少しぎりぎりの時間に堂々と声をかけて教室の扉を潜ると、向けられるのはいつも通り冷ややかな目線。
私はそれを気にも止めず自分がいつも座っている教室の1番隅の席に着く。
とりあえず、今日師匠はもう1度泊まれる場所を探しに行ってから働ける場所を探しに行くようだ。
それでも荷物を全て持ち歩くわけにはいかないから今日は最低でも私の家に戻ってきてくれるらしい。
そのことが堪らなく嬉しい。
帰ってくる人を待つなんて、いつ以来だろう？
出来ればこのまましばらく私の家に住んで欲しいけど、それは私のわがままだ。
いくら寂しいからって、それで師匠に迷惑をかけるつもりはない。
それにしても、早く放課後にならないかな？
師匠が通っていたと言っていたカードショップ、早く行ってみたいのに。
幸いなことに今日の私が受ける講義は午前中だけだから、お昼になったら向かうことが出来る。
でも、うぅ～待ちきれないよ～
「おはよ、今日も遅かったわね。それで、何そわそわしてるの？」
「あっ、桜ちゃん。おはよう‼？」
「へっ？」

いつものように声をかけてくれた桜ちゃんに近づきながら手を振って挨拶をすると、桜ちゃんは変な声を出して驚いた表情を浮かべる。
それを見て、周りの人達もざわざわし始める。
？どうしたんだろう？何か私変なことしたかな？
「きょ、今日は随分機嫌が良さそうね。何かあったの？」
「えへへ、少しね。そうだ‼？桜ちゃん、今日は講義っていつまであるの？」
「講義？私は夕方までだけど……」
「夕方まで……そっか。お昼までなら一緒に行けたのに……」
きょとんとした顔で桜ちゃんが答えてくれる。
出来れば桜ちゃんも一緒に行けたらよかったんだけどな……夕方まで待つと帰りが遅くなっちゃうからダメだよね。
少し落ち込んだ私を見て桜ちゃんが戸惑いながら声をかけてくる。
「何？何処か行きたい所でもあったの？買い物とか？」
「ううん、ちょっとカードショップに付いてきて貰いたかったんだけど……夕方までは待てないから、1人で行ってくるね」
「そう、カードショップに……って、ええっ‼？⁉？」
「あ、もう講義が始まっちゃう。それじゃあまたね、桜ちゃん」
「ちょっ‼？ちょっと待っ、遊花⁉？」
何故か更にざわざわし始めた教室を尻目に、私は自分の席に戻って頬杖をついた。
カードショップ……楽しみだな～

ーーーーーーーー

「ここが、師匠が通ってたカードショップ」
デュエルアカデミアの講義も終わり、すぐに教室を出た私は師匠に聞いたカードショップにやってきていた。
師匠に言われて来た場所にあったのはケルンの中にあるカードショップの中ではかなりこぢんまりとした店だった。

店名は『Ｎａｔｕｒａｌ（ナチュラル）』。
私は深呼吸してから中に入る。
「こ、こんにちは」
「いらっしゃい……おや、随分可愛らしいお客さん達だね」
お店に入るとレジのところでコーヒーを飲んでいた５０代ぐらいのおじさんがすごく驚いた表情でこちらを見る。
お店の中にはそのおじさん以外に人がおらず、ゆったりとした雰囲気が漂っていた。
おじさんはカウンターにコーヒーを置いて私の前に近づいてきた。
「改めて、ようこそ『Ｎａｔｕｒａｌ』へ。見ての通り、こんなおじさんしかいないような寂れた店だが、ゆっくりと見て行くといい」
「い、いえ‼？あの、今日は、その、カードがみたいなって」
「それはまぁ、カードショップだからね。どうせ一握りの常連か偶々見かけて入ってくるような客しかいないんだ。そんなに緊張しなくてもいいんだよ」
「あぅ……」
おじさんにそう言われ、少し顔が赤くなる。
それを見ておじさんは微笑ましそうな顔をした。
「ははは、大丈夫だよ。どんなカードがお求めかな？」
「あ、あの、私しばらくデュエルモンスターズに触れれていなくて、できれば色々なカードが見たいんですが」
「おや、この街でデュエルモンスターズに触れれていないとは珍しいね？いいとも、それじゃあ私もついでにショーケースの手入れでもするから好きに見るといい」
「あ、ありがとうございます‼？」
そういうと手を軽く振りながらおじさんがショーケースの方に移動したので私もそちらに移動する。
ショーケースの中に飾ってあるカードには、やっぱり私が見たことがないカードがたくさん入っていた。
「雷神龍―サンダードラゴン……サンダードラゴンってテーマ化してたんだ……混源龍レヴィオニア……このカードは私のデッキ

にも入るかも……」
「ふふっ」
　つい思考の海に沈んでぶつぶつと呟いていた私を見て、店員のおじさんが微笑ましいものを見る目で笑う。
「あ‼?・す、すみません‼?・」
「あぁ、ごめんごめん。別にいいんだよ。ただ、懐かしい反応が見れたからね」
「懐かしい……ですか?・」
「あぁ。何年も前に君のように、そうやってショーケースに張り付きながら、毎日自分のデッキをどうするか考えていた男の子がいたのさ」
　そういうおじさんの目はその時のことを思い出したのか凄く優しい目をしていた。
　なんて声をかけていいのか分からず、つい辺りをきょろきょろと見渡すと、私の目に額縁に入れられた昨日見たばかりのカードが飛び込んできた。
「あ……絵札の三銃士」
「……あぁ、なんであんなカードを飾っているのかって思うかい?・」
「い、いえ‼?・私も昨日知ったばかりなんです。遊騎さんのカードが悪く言われてるって」
「‼?・ますます驚いた。君は彼の知り合いかい?・」
「あ、はい‼?・と言っても昨日会ったばかりですけど……その、私の師匠で、今日も、このお店を教えて貰って……」
　しどろもどろになりながら説明する私におじさんは一瞬目を見開くと、何処か納得した顔で頷いた。
「そうか……なら、少しおじさんのお話に付き合って貰えないかい?・その代わり、何か君にカードをプレゼントしよう」
「えっ‼?・いや、お話に付き合うのはいいんですけど、カードは結構ですよ‼?・」
「何、そもそもこの店自体、今やおじさんの趣味みたいなものだから構いやしないさ。さぁ、そこのテーブルの所にでも座ろうか」

「……あの、はい、失礼します」
おじさんに促されるままにテーブルの所にある椅子に座る。
おじさんは私の斜め横にある位置に椅子を持ってきて座った。
「まずは彼の知り合いなら自己紹介をしておこうか。私は島(しま)という。まぁ、おじさんと呼んでくれて構わないけどね」
「私は、栗原……栗原遊花っていいます」
「遊花君か……名前まで彼に近いとはね」
「あの、島さんは師匠のことを知っているんですよね？」
「あぁ、彼は私の1番最初の客でね。人がいない店内の中、小学生だった彼はさっきの君のようにショーケースの前でずっとカードを眺めているような子だったよ」
そんな島さんの言葉に私の顔が少し赤くなる。
つまり、今の私は小学生の頃の師匠と全く同レベルだったということだろうか？
うぅ～恥ずかしい～
「はははは、そう恥ずかしがることはないさ。何なら今の彼でもやるだろうからね」
「師匠が、ですか？」
「まぁ、私が見ていない2年の年月が彼をどうしようもなく変えてしまえば分からないが、それはないと私は思っているよ。それで、今の彼の話を聞かせて貰ってもいいかな？」
「それはいいんですけど……私も昨日会ったばかりなので、そんなに詳しくは知りませんよ？」
「今の彼の様子が知れたらそれだけで十分だよ。私にとって、彼は本当の息子と変わらないからね」
それから、私は自分のことを踏まえながら昨日あった出来事や師匠から聞いた話を島さんに話した。
島さんは相槌を打ちながら、寂しそうに、それでいて師匠が師匠のままでいることを嬉しそうに聞いていた。
一通り話終わった後、島さんは目を閉じて深く息を吐いた。
「ありがとう。君にも少し辛い話をさせてしまったね」

「い、いえ……それでも、今の私は師匠に会えたことが本当に嬉しいんですから」
「……本当に似ているんだね、君達は」
そう呟いた島さんの言葉にはとても多くの感情が込められている気がした。
島さんが不意に額縁に飾られてあった絵札の三銃士を見る。
「あそこに飾られてるのはね、彼が1番最初に使っていた絵札の三銃士なんだ」
「えっ？それじゃあ今持っているのは……」
「彼がプロになってから手に入れたものさ。1番最初に持ってたものはプロになった際に私に持っておいて欲しいって、絶対有名になって人がいないこの店を立て直して今までの恩返しをするからってさ」
「えっ？それじゃあ師匠がプロになった理由って……」
「勿論、他にも理由は沢山あったし、彼自身にもその頃に君のように抱えていた問題もあった。それでも自分の居場所だったこの店を守りたかったというのも、理由の1つ何だろうね」
そう語る島さんの表情に私は胸が締め付けられる感覚がした。
「……君は彼から実家って言えるものがないって聞いているんだよね？」
「はい……だから、私の家に泊まっているわけですし……」
「なら、これは話しておいても構わないだろう。私が話してもいいと思った人には話していいと言われているしね」
「えっ？いや、あの……」
「彼もね、プロ決闘者だった両親が亡くなっているんだよ。君と同じデュエルアカデミアの1年生の時期にね」
「えっ……」
その言葉に今度こそ私は自分の心臓を掴まれたような気がした。
「あの時のことは今でも忘れられないよ」
そうして島さんが語るのは師匠の歩んできた道筋。
「死因は火事だった。出火の原因は放火じゃないかと言われているが、まだ犯人は捕まっていないね。ちょうどその日はこの店で小さな

カード大会をやっていたんだ。最も、常連だけの、彼を入れてもたったの3人しかいない小さ過ぎるものだったけどね。その日はたまたま両親が2人共休みで、両親に優勝してくるからご馳走を用意して待っててと言って出てきたらしい」

その時のことを懐かしむように、哀しむように島さんは語る。

「3人しかいない小さなものだったけど、試合は白熱してね。終わった頃にはすっかり夜になっていた。1人は大学生だったから良かったものの、流石に子供を夜道に1人で返すわけには行かなかったからね。彼と同級生の子の2人を家まで送ることにしたんだよ。その頃からほとんど客は来ていなかったから閉めるのも簡単だったしね」

島さんはその頃の光景を思い出しているのか目を閉じている。

「彼の家の方が近くにあったから、まずは彼から送ることにした。そうして彼の家が見える所まで来た時、彼の家は既に燃え尽きる寸前だった。彼に残ったのは、それこそデッキとデュエルディスク、そしてその身体だけだよ」

それは、どれだけ辛いことなのだろうか。

私がまだ私を保てていたのは、家族の記憶が残っているものが私の周りに沢山残っていたからだ。

それまで無くなってしまった師匠は、どれだけ辛かったのだろうか？

「その上、彼の両親はどうやら駆け落ちをしていたらしくてね。彼には親戚と言えるものまでまともにいなかった。最終的には彼を知っている私が彼を引き取ることにしたんだ……私にも、その頃色々あったからね」

そういう島さんの表情は重い。

きっと島さんもその頃に大変なことがあったのだろう。

「あの頃、彼は物凄く荒れていたよ。私が話しかけるのだってぎりぎりだった。後で同級生の子に聞いて知ったけど、いじめも受けていたらしいし、本当に世の中全てが敵に見えていたんだろう」

島さんが語る師匠の過去に、私は何も口を挟むことが出来ない。

胸が苦しい……どうしようもないぐらい、傷んでしまう。

「でも、それからしばらくたったある日、そんな彼を救ってくれる子が現れた。それは本当に偶然の出会いだったが、それから彼は昔の、私の店に来てデュエルを楽しんでいた頃の彼に戻っていった」
「‼?」
その言葉に私は思わず島さんの顔を覗き込んだ。
だってそれは……私と師匠の出会いと同じで……
「それからしばらくは穏やかな日々が続いていた。でもある日、元々少なかったこの店の経営が本格的に辞めなければならない所まで行ってしまった。その時には色々なことがあった……本当に、直ぐに語りきれない程色々なことがあったんだ。その時だね、彼がプロ決闘者になることを選んだのは。実際、彼がプロ決闘者になってから経営は回復したんだ。知っている人は少ないが、彼が所属していたプロチームのメンバーは全員この店の出身だったからね。その子達は今でも来てくれるし、新カードを手に入れる際には全部この店を頼ってくれるようになったから、ほぼそのチームの専門店みたいになっているしね」
そういう島さんの目に移るのは後悔。
もしかしたら、こう思っているのかも知れない。
自分が最初からカードショップを経営していなければ、師匠が両親のことで苦しむことも、プロ決闘者になって世間から蔑まれることにもならなかったのではないかと。
「……本当はね、プロ決闘者を追放され、この店から彼が出て行った時、あの額縁は外しておいてくれって言われたんだ。拾ってくれたのに、何の恩返しも出来なくてごめんなさいって……」
そう呟く島さんの声は、本当に悲しみに満ちていて。
「馬鹿だよねぇ……彼には、彼の存在で私が一体どれだけ救われたのかが分かってない。買い物なんてほとんどしなくても、誰もいない店の中に毎日来てくれたことがどれ程嬉しかったのか……この店を続ける為にプロ決闘者なんかになる道を選んでくれた時、どれだけ泣きそうになったのか……本当に大馬鹿だ……彼がいてくれた日々が、私の1番の宝物だったというのに……」

島さんがお店の天井を見上げる。
それが何を意味しているのか分かってしまう。
ようやく分かった。
なんで師匠が私を気にかけてくれて……それでいて私を自分から遠ざけようとしたのか。
私に自分を重ねて、その上で自分のようにはなって欲しくないからこそ、教えながらも一定の距離を取ろうとするのだ。
本当に不器用な人だと思う。
でも……それは違う。
それじゃあ意味がない。
私が目指そうと思った姿は……私が救われたのは……師匠の背中なのだ。
だから……だから、私に出来ることはーーー
「……島さん」
「……なんだい？」
「私は……プロ決闘者になります」
「……」
「師匠の正式な後継者として、プロ決闘者になります」
「⁉？それはーーー」
「辛い道かも知れません……謂れ無い罵倒も受けるかも知れません……それでも、私はあの人の弟子として、証明したい⁉？」
貴方によって救われた人がちゃんといるということを。
「あの人が歩んで来た道は、誰にも非難される謂れはないと⁉？」
誰かを助ける為に、運命に抗い続けた貴方を、ちゃんと見ている人がいるということを。
「私が、証明してみせます⁉？師匠は、プロリーグから追放されるような、卑怯者じゃない。誰かの為に戦うことが出来る立派な決闘者なんだって⁉？」
それが、私を暗闇から救ってくれた師匠に出来る、1番の恩返しだと思うから。
「そのことを証明出来るまで、私は絶対に折れません。もう諦めるこ

とだけはしないって、師匠に誓いましたから」
師匠はずっと過酷な運命に抗い続けてきた。
なら、弟子の私だって運命なんかに負けるわけにはいかない。
「もし、私が島さんから見ても立派はプロ決闘者になれたら、その時は私のカードも師匠のカードと一緒に飾ってくださいね。私も、このお店のことが気に入っちゃいましたから」
「……本当に、君は彼に似ている。彼がなんで君を弟子にしたのか、少しだけ分かった気がするよ。」
そういって島さんが本当に嬉しそうに笑った。
「ならば、過去に遊騎君に送った言葉を、君にも送ろう。抗いなさい。誰に何を言われようと、その思いを違えず、真っ直ぐに進んで行きなさい。絶望の先には、必ず希望が待っているハズだからね」
「はい!!?」
「いい返事だ。私も、少し報われた気がするよ。ありがとう」
そういって島さんが頭を下げようとするが、私は手を差し出してそれを止める。
感謝されるにはまだ早過ぎる。
「頭を下げるのは、私が本当に約束を果たせた時にしてください。そのことを思い出すことも、私が折れない理由になりますから」
「……はははは!!?なら、まだこの頭を下げるのは取っておこう。その代わりに、私も未来のプロ決闘者に何か送らせて貰おうかな」
「えっ!?!?いや、あの、それは悪いですよ!!?」
「気にしない気にしない。彼の弟子であるならば、私には孫のようなものだよ。さて、どんなものがいいかな?」
そういって島さんがショーケースやファイルの中からカードを探し始める。
うぅ～そんなつもりじゃなかったのに。
どうしようかと思わず店内を見回すと私が座っているテーブルの下に1枚のカードが落ちているのが見えた。
目の錯覚なのか、そのカードは少し黒ずんでいるように見える。
落としたままなのも悪いので、私は島さんに声をかけながらその

カードを拾おうとする。
「島さん、ここにカードが落ちてますよ？」
「ん？おかしいな、店内は掃除したばかりだからカードが落ちているハズは……⁉？それに触ってはいけない‼？」
「へっ⁉？」
島さんの声に驚くがもうカードには触ってしまった。
その瞬間、カードが一瞬鈍い闇色に光った気がした。
も、もしかして、もの凄く高いカードだったとか？
そのカードを見ると、見たこともないモンスターだった。
こ、これは本当にマズイぐらいレアなカードなのでは……
ただただ慌てている私を見て、島さんは大きく目を見開いた。
「……君には本当に驚かされる。そのカードに触れていても平気なのかい？」
「へ？平気、ですけど？あの、何か触れてしまったらダメなカードだったんでしょうか？肌が荒れちゃう薬品とかで綺麗にしてるとか？」
「……どうやら本当に平気のようだね。君の周りの子達も慌てた様子を見せないし、本当に君は大物になりそうだ」
島さんは何かを確認するように呟く。
周りの子達って、どういう意味なんだろう？
島さんにその意味を聞こうとした時、店の扉が開かれ、同年代ぐらいの男性が入ってきた。
それを見て、島さんが私の方を見て申し訳なさそうにしながらその男性の方に声をかけた。
「いらっしゃい」
「随分と寂れた店だな。こんな場所にカードショップがあるなんて気づかなかったぞ」
そんな男性の言葉に私は少しムッとした。
それを見て島さんは苦笑しながらも接客をする。
「まぁ、見ての通り小さな店だからね」
「ふん……ん？」
蔑むように鼻を鳴らす男性の視線が額縁に入ってある絵札の三銃

士に向いた。
　それを見て、男性は嘲笑する。
「なんだ、この店はあの卑怯者のカードを飾るような店なのか。それは寂れるわけだ」
　その言葉に私の中で何かが切れた音がした。
「……それはあんまりな言い草だね」
「事実だろう？イカサマをするような決闘者のカードを推しているんだ。この店ではイカサマが平然と行われていると思われても仕方がないだろう？そもそも、そうでなければ彼の功績はおかしい。プロになって経った2年で自分が所属している新規チームを世界ランキング2位に押し上げるような実力。そんなもの、それこそイカサマと言えるだろう？」
　そう言ってせせら笑う男性。
　この人は一体何を言っている？
　この人は一体何を知っている？
　師匠の思いを、島さんの願いを、何も知りもしないのに、どうして知っているかのように語っている？
「だからこの店はーーー」
「それ以上、口を開かないで下さい」
　私の口からとても冷たい声が出る。
　突然口を挟んできた私に男性は怪訝な顔で私を見る。
「何？」
「この人達のことを何も知らない癖に好き勝手なことを言わないでください」
「なんだ？あの男のファンだったか？卑怯者のファン風情がどの口を聞いてーーー」
「口を開かないで下さいと、言いました」
　強い口調で、睨みつけるようにその男性を見る。
　その事に気分を悪くしたのか、忌々し気に鼻を鳴らす。
「ふん、卑怯者を慕う雑魚風情が……」
「なら、デュエルをしましょう」

「何？」
デュエルをするのは、まだ怖かった。
それでも、ここでだけは退くわけにはいかない。
この人達の思いを、侮辱することだけは赦せない。
師匠の弟子として、結束　遊騎の弟子である栗原　遊花として、それだけは耐えてはいけない‼？
「私が勝ったら、さっきの発言を撤回してください。貴方が勝ったら、私を含めて貴方が何を言おうが、何をしようが認めましょう」
「ほぅ……面白いことを言う。良いだろう、その言葉、違えるなよ？」
「それはこちらの台詞です」
「遊花君……」
そう言ってお互いにデッキをデュエルディスクにセットして構える。
それを見て、島さんが心配そうな声を出す。
そんな島さんに、私は首を振って応える。
「大丈夫です。私は、絶対に勝ってみせます。あの人の思いも、島さんの思いも、私が否定なんてさせません。２人の思いは、私が守ってみせます‼？」
「名前を聞いておこう。負けた後に約束を反故にするために逃げられたら困るからな」
「栗原遊花です。それならば私も聞いておきましょう、逃げられると面倒ですから」
「‼？言ってくれる……響　顕示（ひびき　けんじ）だ。後悔するなよ‼？」
「こちらの台詞です‼？」
『決闘‼？』

遊花　ＬＰ８０００
顕示　ＬＰ８０００

第７話　独善の狂想曲

★

遊花　ＬＰ８０００

顕示　ＬＰ８０００

「先攻は私だ……ふっ、完璧な手札だ‼？私はライフを１０００払い、魔法カード、ドラゴノイドジェネレーターを発動‼？」

顕示　ＬＰ８０００→７０００

「このカードはターンに２回、メインフェイズにドラゴノイドトークンを１体特殊召喚することが出来る。ただし、この効果の発動ターン終了時まで自分はＥＸデッキからモンスターを特殊召喚出来ないがな。私はドラゴノイドジェネレーターの効果を２回発動し、ドラゴノイドトークン２体を特殊召喚する‼？」

〈ドラゴノイドトークン〉☆１　機械族　地属性

ＤＥＦ３００

フィールドに現れたのは２体の小さなドラゴン。

ＥＸデッキからの特殊召喚を封じたってことは狙いは……

「私はドラゴノイドトークン２体をリリースし、クラッキングドラゴンをアドバンス召喚‼？」

〈クラッキングドラゴン〉☆８　機械族　闇属性

ＡＴＫ３０００

呼び出されたのは漆黒の機械龍。

１ターン目から攻撃力３０００のモンスターを出してくるなんて、

その態度に似合った実力はあるようだ。
「私はさらに永続魔法、漆黒のトバリを発動し、エンドフェイズにドラゴノイドジェネレーターの更なる効果、相手は私が呼び出したドラゴノイドトークンと同じ数、ドラゴノイドトークン1体を自身のフィールドに攻撃表示で特殊召喚しなければならない‼?」
「‼?私のバトルゾーンにトークンを……?」

〈ドラゴノイドトークン〉☆1　機械族　地属性
ＡＴＫ３００

私の前に小さなドラゴンが呼び出される。
それに反応してクラッキングドラゴンが動き始める。
「この瞬間‼?クラッキングドラゴンの効果発動‼?ヴァンダルブレイク‼?このカードがモンスターゾーンに存在し、相手がモンスター1体のみを召喚・特殊召喚した時、そのモンスターの攻撃力はターン終了時までそのレベル×２００ダウンし、ダウンした数値分だけ相手にダメージを与える‼?ドラゴノイドトークンはレベル1、よって２００ポイントダウンし、２００ポイントのダメージを与える‼?それが2回なので４００ダメージだ‼?」
「っ‼?バーン戦術‼?」

ドラゴノイドトークン
ＡＴＫ３００→１００

遊花　ＬＰ８０００→７８００→７６００

クラッキングドラゴンから放たれたいくつものレーザーによって私のライフが削られる。
まさか先攻でダメージを受けるとは思わなかった。
「そしてターンエンド。エンド時にドラゴノイドトークンの攻撃力は元に戻る。クラッキングドラゴンはこのカードのレベル以下のレベ

ルを持つモンスターとの戦闘では破壊されない。さぁ、大口を叩いたのならば見せて貰おうか、貴様の実力を」

ドラゴノイドトークン
ＡＴＫ１００↓３００

遊花　ＬＰ７６００　手札５
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　○　○　ー
ー　　ー　　ー
ー　ー　○　ー　ー
ー　ー　△　△　ー　　ー
顕示　ＬＰ７０００　手札　２

いきなりライフを削られて、攻撃力３０００の戦闘耐性持ちのモンスターを出されたのは確かに痛い。
でも、トークンは貰ったし、その耐性にも効果にも穴がある‼?
「私のターン、ドロー‼?私は手札からクリボーンを捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動‼?デッキからレベル１モンスター１体を特殊召喚する‼?お願い、ミスティックパイパー‼?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

現れたのはフルートのようなものを弾いている男の人。
そして、クラッキングドラゴンの効果は発動しない。
「チッ、下げるべき攻撃力がなければクラッキングドラゴンの効果が発動しない事に気づいていたか」
「私を舐めないで下さい。ミスティックパイパーの効果発動‼?このカードをリリースして自分のデッキからカードを１枚ドローします。そしてこの効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル１モン

スターだった場合、自分はカードをもう1枚ドローします」
いつもありがとう、ミスティックバイパー。
心の中でお礼を言うと、ミスティックバイパーが私にサムズアップをして姿を消した。
そして私はデッキからドローしたカードを確認する。
「私が引いたのは金華猫!!?レベル1モンスターなのでもう1枚ドローです!!?そして金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆1　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のモンスター。
「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル1モンスターを特殊召喚します!!?」
「だが、クラッキングドラゴンの効果発動!!?ヴァンダルブレイク!!?このカードがモンスターゾーンに存在し、相手がモンスター1体のみを召喚・特殊召喚した時、そのモンスターの攻撃力はターン終了時までそのレベル×２００ダウンし、ダウンした数値分だけ相手にダメージを与える!!?金華猫はレベル1、よって２００ポイントダウンし、２００ポイントのダメージを与える!!?」
「くっ!!?」

金華猫
ＡＴＫ４００→２００

遊花　ＬＰ７６００→７４００

クラッキングドラゴンから放たれたいくつものレーザーによってまた私のライフが削られる。
でも、これぐらいは必要経費!!?
「金華猫の効果で墓地から戻ってきて、ミスティックパイパー!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆1　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

ミスティックパイパーが再びフィールドに現れる。
そして私は正面に手をかざす。
「導いて‼?希望に繋がるサーキット‼?」
「リンク召喚か‼?」
私が正面に手をかざすと私の前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はモンスター2体‼?私はドラゴノイドトークン2体をリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?リンク召喚‼?リンク2‼?プロキシードラゴン‼?」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

次に現れたのは白い身体をした機械の竜。
「リンクモンスターはレベルを持たない。よってクラッキングドラゴンの効果は当然発動しません‼?そしてさらに導いて‼?希望に繋がるサーキット‼?」
「っ、連続リンク召喚か‼?」
私の前に再び現れるサーキット。
「召喚条件は効果モンスター3体以上‼?私はミスティックパイパー、金華猫、プロキシードラゴンを2体分として扱ってリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?」
ミスティックパイパーと金華猫、プロキシードラゴンが2体に分身し、サーキットに吸い込まれていく。
さぁ、行くよ‼?
「お願い、私に思いを守るための力を貸して‼?リンク召喚‼?閉ざされた運命を斬り開く魂の剣(つるぎ)‼?リンク4‼?ヴァレルソードドラゴン‼?」

私の呼びかけに応えるように、龍の咆哮が世界に響いた。

〈ヴァレルソードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↓?↑←→

「攻撃力３０００のリンクモンスターで相討ちを狙ってきたか」
「残念ながらそれはありません。ヴァレルソードドラゴンは戦闘破壊されませんから」
「何だと⁉?」
勿論、それだけじゃないけど。
「バトル‼?ヴァレルソードドラゴンでクラッキングドラゴンを攻撃‼?」
「っ、迎え撃て‼?クラッキングドラゴン‼?ブラックハットストリーム‼?」
クラッキングドラゴンがヴァレルソードドラゴンに向かって口から砲撃を放つ。
ヴァレルソードドラゴンはそれを躱しながらクラッキングドラゴンに近づいていく。
「攻撃宣言時、ヴァレルソードドラゴンの効果発動‼?アブソーブブースト！1ターンに1度、このカードが表側表示モンスターに攻撃宣言した時、ターン終了時まで、このカードの攻撃力はそのモンスターの攻撃力の半分アップし、そのモンスターの攻撃力は半分になります‼?」
「何っ⁉?」

クラッキングドラゴン
ＡＴＫ３０００→１５００

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ３０００→４５００

ヴァレルソードドラゴンが斬りかかり、それをクラッキングドラゴンはレーザーを放ち、牽制するが、剣から赤い光が放たれレーザーが剣に吸い取られていく。
でも、これだけじゃない!!?
「さらにヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アサシネイトショット!!?1ターンに1度、攻撃表示モンスター1体を対象として発動!!?そのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる。そしてこの効果の発動に対して相手は効果を発動できない!!?この効果は相手ターンにでも使用することが出来ます!!?対象にするのは、クラッキングドラゴン!!?」
ヴァレルソードドラゴンの腕から物凄い数の散弾がクラッキングドラゴンに向かって撃ち出される。
クラッキングドラゴンはレーザーを放ち、その散弾を相殺するが、その衝撃で身体を逸らした。
その瞬間、ヴァレルソードドラゴンは勢いよくクラッキングドラゴンに突撃していく。
「っ!!?守備表示の上に2回攻撃だと!?!?」

クラッキングドラゴン
ＡＴＫ１５００↓　ＤＥＦ０

「斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン!!?剣光のベイオネットブレイク!!?」
ヴァレルソードドラゴンは突撃の勢いのままクラッキングドラゴンを一刀両断した。
そして今度はヴァレルソードドラゴンの視線が顕示に向かう。
「もう1度斬り開いて!!?ヴァレルソードドラゴンでダイレクトアタック!!?剣光のベイオネットブレイク!!?」
「ぐあぁ!!?」
ヴァレルソードドラゴンが顕示に近づくと思いっきり剣を振り抜

いた。

顕示　ＬＰ７０００→２５００

これで残りライフは２５００。

このまま一気に押しきる‼?

「私はカードを2枚伏せてターンエンドです」

ヴァレルソードドラゴン

ＡＴＫ４５００→３０００

遊花　ＬＰ７４００　手札　３

ー－▲▲ー　ー

ーーーーー

☆　ー

ーーーーー

ー－△△ー　ー

顕示　ＬＰ２５００　手札　２

「やってくれる……私のターン、ドロー‼?この瞬間、漆黒のトバリの効果発動‼?自分のドローフェイズにドローしたカードが闇属性モンスターだった場合、そのカードを相手に見せ墓地へ送り、その後、自分のデッキからカードを1枚ドローする事ができる‼?私が見せるのはオルフェゴールディヴェル‼?」

「オルフェゴール……?」

そのモンスターはさっきショーケースを見た時にあった気がする。

あのモンスター達は……

「私はオルフェゴールディヴェルを墓地へ送り1ドロー‼?さらに漆黒のトバリの効果、ドローしたカードはハックワーム‼?墓地へ送って1ドロー‼?さらに漆黒のトバリの効果、ドローしたカードはオルフェゴールカノーネ‼?墓地へ送って1ドロー‼?」

どんどん墓地が肥えていく。

それでもドローは止まらない。
「漆黒のトバリの効果発動!!?ドローしたカードはリボルバードラゴン!!?墓地へ送って1ドロー!さらに漆黒のトバリの効果発動!!?ドローしたカードはオルフェゴールスケルツォン!!?墓地へ送って1ドロー!!?漆黒のトバリの効果発動!!?ドローしたカードはジャックワイバーン!!?墓地へ送って1ドロー!!?ふっ……魔法カードを引いたか。だが、これだけ墓地が揃えば十分だ」
「っ!!?」
猛攻が、始まる。
「私は墓地に存在するオルフェゴールスケルツォンの効果発動!!?墓地のこのカードを除外し、オルフェゴールスケルツォン以外の自分の墓地のオルフェゴールモンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターを特殊召喚する。ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は闇属性モンスターしか特殊召喚できない。私は墓地からオルフェゴールカノーネを特殊召喚する!!?」

〈オルフェゴールカノーネ〉☆1　機械族　闇属性
ＤＥＦ１９００

現れたのはトランペットを模した機械。
そしてその姿は増殖する。

「そしてこの瞬間、速攻魔法!!?地獄の暴走召喚!!?」
「っ!!?そのカードは!!?」
「相手フィールドに表側表示モンスターが存在し、自分フィールドに攻撃力１５００以下のモンスター1体のみが特殊召喚された時に発動できる。その特殊召喚したモンスターの同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から可能な限り攻撃表示で特殊召喚し、相手は自身のフィールドの表側表示モンスター1体を選び、そのモンスターの同名モンスターを自身の手札・デッキ・墓地から可能な限り特殊召喚する。私はデッキから現れろ!!?2体のオルフェゴールカノーネ!!

？」

〈オルフェゴールカノーネ〉☆1　機械族　闇属性
ＡＴＫ５００

さらに現れる2体のカノーネ。
これで一気にフィールドにモンスターは3体。
「お前もそのドラゴンを呼べるなら呼ぶがいい。最もＥＸデッキからは呼べないがな」
「っ……‼？」
「さらに墓地のオルフェゴールディヴェルの効果発動‼？墓地のこのカードを除外して発動できる。デッキからオルフェゴールディヴェル以外のオルフェゴールモンスター1体を特殊召喚する。ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は闇属性モンスターしか特殊召喚できない。私はデッキからオルフェゴールスケルツォンを特殊召喚‼？」

〈オルフェゴールスケルツォン〉☆3　機械族　闇属性
ＤＥＦ１５００

次に現れたのはドラムのようなモンスター。
これだけ動いているのに、相手はまだ召喚権すら使っていない。
そして顕示は手を正面にかざす。
「動き出せ‼？狂気が奏でるサーキット‼？」
顕示の前にサーキットが現れる。
もうどんなモンスターが出てきてもおかしくない。
「召喚条件はオルフェゴールモンスターを含むモンスター2体以上‼？私はオルフェゴールスケルツォンとオルフェゴールカノーネ3体をリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？」
カノーネ3体とスケルツォンがサーキットに吸い込まれていく。
そして代わりに現れるのはオーケストラを奏でるオーケストリオ

ンのようなモンスター。
「リンク召喚!!?殺戮を為す狂気のオーケストリオン!!?リンク４!!?オルフェゴールオーケストリオン!!?」
〈オルフェゴールオーケストリオン〉ＬＩＮＫ４　機械族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?←→↗?
「攻撃力３０００のリンク４モンスター……」
あのモンスターはどういう効果を持っているのか。
だが、まだ狂った演奏は終わらない。
「私は魔法カード、忍び寄る闇を発動!!?自分の墓地の闇属性モンスター２体をゲームから除外してデッキから闇属性・レベル４モンスター１体を手札に加える。墓地に存在するリボルバードラゴンとハックワームを除外し、デッキからオルフェゴールディヴェルを手札に加える。そして墓地に存在するオルフェゴールカノーネの効果発動!!?墓地のこのカードを除外し、手札からオルフェゴールカノーネ以外のオルフェゴールモンスター１体を特殊召喚する。この効果の発動後、ターン終了時まで自分は闇属性モンスターしか特殊召喚できない。私は手札からオルフェゴールディヴェルを特殊召喚!!?」
〈オルフェゴールディヴェル〉☆４　機械族　闇属性
ＡＴＫ１７００
次に現れたのはガーゴイルの姿をしたハープのようなモンスター。
そして顕示はさらなるモンスターを召喚する。
「私はブラックボンバーを召喚!!?」
〈ブラックボンバー〉☆３　機械族　闇属性
ＡＴＫ１００
現れたのは黒い爆弾のようなモンスター。

そしてそのモンスターは更なるモンスターを呼び寄せる。
「ブラックボンバーの効果発動！このカードが召喚に成功した時、自分の墓地から機械族・闇属性・レベル４のモンスター１体を選択して、表側守備表示で特殊召喚できる。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。甦れ、ジャックワイバーン!!?」

〈ジャックワイバーン〉☆４　機械族　闇属性
ＤＥＦ０

呼び出されるのは機械の翼竜。
そして顕示が再びサーキットを作りだす。
「動き出せ!!?狂気が奏でるサーキット!!?召喚条件はオルフェゴールモンスターを含むモンスター２体以上!!?私はオルフェゴールディヴェル、ブラックボンバー、ジャックワイバーンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
ディヴェル、ブラックボンバー、ジャックワイバーンがサーキットに吸い込まれる。
そして代わりに現れるのは今までのオルフェゴールモンスターとは雰囲気が違う戦士。
「リンク召喚!!?狂気に侵された悲しき戦士!!?リンク３!!?オルフェゴールロンギルス!!?」

〈オルフェゴールロンギルス〉ＬＩＮＫ３　機械族　闇属性
ＡＴＫ２５００　↖?←↘?

そして、蹂躙が始まる。
「オルフェゴールオーケストリオンの効果発動!!?クロックワークカデンツァ!!?除外されている自分の機械族モンスター３体をデッキに戻し、相手フィールドにリンク状態の表側モンスターが存在する場合、それらのモンスターは、攻撃力・守備力が０になり、効果は無効化される!!?」

「えっ⁉？」
「現在、オルフェゴールロンギルスのリンクマーカーはヴァレルソードドラゴンに向いていてリンク状態になっている⁉？私は除外されているオルフェゴールディヴェル、オルフェゴールスケルツォン、オルフェゴールカノーネをデッキに戻し、跪け⁉？ヴァレルソードドラゴン⁉？」
オーケストリオンから空気を震わせるような演奏が響く。
その演奏を聴き、ヴァレルソードドラゴンは力無く崩れ落ちる。

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ３０００→０

「ヴァレルソードドラゴン⁉？」
「バトル⁉？オルフェゴールロンギルスでヴァレルソードドラゴンを攻撃⁉？エレジーロンギヌス⁉？」
ロンギルスは力無く倒れ伏したヴァレルソードドラゴンをその槍で滅多刺しにした。
「っ⁉？」

遊花　ＬＰ７４００→４９００

「続け⁉？オルフェゴールオーケストリオンでダイレクトアタック⁉？スロウスカプリッチオ⁉？」
オーケストリオンのパイプから数えきれない程のレーザーが撃ち出され、私の身体を貫いていく。
「くぅぅ⁉？」

遊花　ＬＰ４９００→１９００

「リンク状態になっているオルフェゴールロンギルスとオルフェゴールオーケストリオンには効果がある。オルフェゴールロンギルスは

カードは効果では破壊されず、オルフェゴールオーケストリオンは戦闘・効果では破壊されない」
「っ!?そんな耐性まで……」
「さぁ、突破出来るものならしてみるがいい。ターンエンドだ」

遊花　ＬＰ１９００　手札３
ー▲▲ー　ー
ーーーーー
ー　☆
ー☆ーー
ー△△ー　ー
顕示　ＬＰ２５００　手札０

「私のターン、ドロー!!?……っ、魔法カード、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨てて同じ枚数ドローする!!?私は　３枚捨てて　３ドロー!!?」
「手札を入れ替えたか。何かいいものは引けたかな?」
「……くっ」
ダメ、今の手札じゃこの状況を攻略出来ない。
ここは、守るしかない。
「私はモンスターをセットしてターンエンドです……」
今は、守るしかない。
でも、何処かに逆転するチャンスがあるハズ……絶対に、諦めたりしない!!?

遊花　ＬＰ１９００　手札２
ー▲▲ー　ー
ー??ーー
ー　☆
ー☆ーー
ー△△ー　ー

顕示　ＬＰ２５００　手札０

第８話　絶望の後に来るもの

★

遊花　ＬＰ１９００　手札２
ー▲▲ー　ー
ー??ー
ー　☆
ー☆ー
ー△△ー　ー
顕示　ＬＰ２５００　手札０

「ふっ、防戦一方か。私のターン、ドロー!!?漆黒のトバリの効果発動、ドローしたカードはハックワーム!!?墓地へ送って１ドロー!!?さらに漆黒のトバリの効果、ドローしたカードはオルフェゴールディヴェル!!?墓地へ送って１ドロー!!?……今回はこれで終わりか。私は墓地に存在するオルフェゴールスケルツォンの効果発動!!?墓地のこのカードを除外し、オルフェゴールスケルツォン以外の自分の墓地のオルフェゴールモンスター１体を対象として発動できる。そのモンスターを特殊召喚する。ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は闇属性モンスターしか特殊召喚できない。私は墓地からオルフェゴールカノーネを特殊召喚する!!?」

〈オルフェゴールカノーネ〉☆１　機械族　闇属性
ＤＥＦ１９００

「さらに墓地のオルフェゴールディヴェルの効果発動!!?墓地のこのカードを除外して発動できる。デッキからオルフェゴールディヴェル以外のオルフェゴールモンスター１体を特殊召喚する。ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は闇属性モンスターしか特殊

召喚できない。私はデッキからオルフェゴールスケルツォンを特殊召喚!!?」

〈オルフェゴールスケルツォン〉☆3　機械族　闇属性
ＤＥＦ１５００

再び現れるカノーネとスケルツォン。
そして顕示が手をかざしサーキットが現れる。
「動き出せ!!?狂気が奏でるサーキット!!?召喚条件はオルフェゴールモンスターを含むモンスター2体!!?私はオルフェゴールカノーネ、オルフェゴールスケルツォンリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
カノーネとスケルツォンがサーキットに吸い込まれる。
そして代わりに現れるのはロンギルスに似た人型だがロンギルスと違って身体が完全に機械で出来ている少女。
「リンク召喚!!?狂気に造られた悲しき巫女!!?リンク2!!?オルフェゴールガラテア!!?」

〈オルフェゴールガラテア〉ＬＩＮＫ２　機械族　闇属性
ＡＴＫ１８００　↙?↑?

「オルフェゴールガラテアの効果発動!!?ルナティックセレナーデ!!?除外されている自分の機械族モンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターをデッキに戻し、その後、デッキからオルフェゴール魔法・罠カード1枚を自分フィールドにセットできる。私は除外されているオルフェゴールスケルツォンをデッキに戻し、デッキからフィールド魔法、オルフェゴールバベルをセットし、そのまま発動!!?」
顕示がフィールド魔法を発動すると辺りの風景が海上に立っている塔に変わる。
「オルフェゴールバベルの効果、このカードがフィールドゾーンに存

在する限り、元々のカード名にオルフェゴールを含む、自分フィールドのリンクモンスター及び自分の墓地のモンスターが発動する効果は、相手ターンでも発動できる効果になる!!?」
「っ!!?そんな!?」
つまりオーケストリオンやまだ発動していないロンギルスの効果も相手ターンに使えるようになってしまう。
そうなると、私のリンクモンスターは封じられたようなものだ。
そして私のデッキはリンクモンスターがいないと攻撃力が足りない。
このままじゃ、そう遠くない内にやられる。
「バトル!!?オルフェゴールロンギルスでセットモンスターを攻撃!!?エレジーロンギヌス!!?」
「セットモンスターはサクリボー」

〈サクリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

サクリボーはロンギルスの槍に貫かれて破壊される。
「終わりだ!!?オルフェゴールオーケストリオンでダイレクトアタック!!?スロウスカプリッチオ!!?」
オーケストリオンのパイプから数えきれない程のレーザーが撃ち出され、私の身体を貫こうとする。
でも、まだ!!?
「手札から、クリボーの効果発動!!?ダークエンヴェロップ!!?相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこのカードを手札から捨てて発動できる。その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは０になる!!?」
「まだ粘るか……」
クリボーが私の代わりにレーザーに貫かれる。
「オルフェゴールガラテアでダイレクトアタック!!?レクイエムサイズ!!?」

「きゃあ‼?」

遊花　ＬＰ１９００→１００

ガラテアの鎌に切り裂かれ、とうとう私のライフが１００になる。
それを見て顕示が私に向けて嘲笑を浮かべる。
「ふっ……流石は卑怯者のファンだ。生き汚いものだな」
挑発するために言ったのか、それとも本当に勝ち誇って言っているのかは分からない。
だけど、その程度の言葉じゃ、デュエル中の私には響かない。
私は昨日見た師匠の姿を思い出し、その言葉を口に出す。
「……好きに言ってろ、です」
師匠だって、自分に対する嘲笑なんて気にもしなかった。
だったら、私だってその程度で乱されたりしない。
ライフだって、まだ１００残っている。
まだ負けてない。
負けてないなら、諦める理由になんかならない‼?
「チッ……気に入らんな。まだ諦めていないと見える。リンク状態になっているオルフェゴールガラテアは戦闘破壊されない。さらにオルフェゴールバベルの効果でオルフェゴールロンギルスの除外されている自分の機械族モンスター2体をデッキに戻し、リンク状態の相手モンスター1体を選んで墓地へ送ることが出来る。ターンエンドだ」

遊花　ＬＰ１００　手札２
ー ー ▲ ▲ ー　　ー
ー ー ー ー ー
ー　　☆
ー ー ☆ ☆ ー
ー ー △ △ ー　　▽
顕示　ＬＰ２５００　手札０

「私のターン、ドロー!!?」
手札には未だにこの状況をどうにかするカードはない。
でも、まだ諦めるのには早過ぎる。
「私はカードを1枚伏せてターンエンド」
「ふっ、ついにモンスターすら出せなくなったか!!?オルフェゴールガラテアの効果発動!!?ルナティックセレナーデ!!?除外されている自分の機械族モンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターをデッキに戻し、その後、デッキからオルフェゴール魔法・罠カード1枚を自分フィールドにセットできる。私は除外されているオルフェゴールディヴェルをデッキに戻し、デッキから魔法カード、オルフェゴールプライムをセットする」

遊花　ＬＰ１００　手札３
ー▲▲▲ー　　ー
ーーーーー
ー　　☆
ーー☆☆ー
ーー△△▲　　▽
顕示　ＬＰ２５００　手札０

「私のターン、ドロー!!?私のターン、ドロー!!?漆黒のトバリの効果発動、ドローしたカードはデスペラードリボルバードラゴン!!?墓地へ送って1ドロー!!?これで十分だ。魔法カード、オルフェゴールプライム!!?手札のオルフェゴールディヴェルを墓地に送り2枚ドローする!!?……クックック、貴様には絶望を教えてやろう!!?」
「っ……」
何か、来る!!?
「まずはオルフェゴールガラテアの効果発動!!?ルナティックセレナーデ!!?除外されている自分の機械族モンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターをデッキに戻し、その後、デッキから

オルフェゴール魔法・罠カード1枚を自分フィールドにセットできる。私は除外されているリボルバードラゴンをデッキに戻し、デッキから永続罠、オルフェゴールコアをセットする。そして私は墓地に存在するオルフェゴールスケルツォンの効果発動!!?墓地のこのカードを除外し、オルフェゴールスケルツォン以外の自分の墓地のオルフェゴールモンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターを特殊召喚する。ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は闇属性モンスターしか特殊召喚できない。私は墓地からオルフェゴールカノーネを特殊召喚する!!?」

〈オルフェゴールカノーネ〉☆1　機械族　闇属性
ＤＥＦ１９００

「さらに墓地のオルフェゴールディヴェルの効果発動!!?墓地のこのカードを除外して発動できる。デッキからオルフェゴールディヴェル以外のオルフェゴールモンスター1体を特殊召喚する。ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は闇属性モンスターしか特殊召喚できない。私はデッキからオルフェゴールスケルツォンを特殊召喚!!?」

〈オルフェゴールスケルツォン〉☆3　機械族　闇属性
ＤＥＦ１５００

何度目かもう分からないぐらいに現れるカノーネとスケルツォン。
でも、ここまでならさっきと変わらない。
そして顕示が手をかざしサーキットが現れる。
「動き出せ!!?狂気が奏でるサーキット!!?召喚条件はオルフェゴールモンスターを含むモンスター2体以上!!?私はオルフェゴールスケルツォンとオルフェゴールカノーネ、そしてをオルフェゴールガラテアを2体分にしてリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」

カノーネとスケルツォン、そしてガラテアが２体に分身してサーキットに吸い込まれていく。
リンク４……ということはまさか‼？
「リンク召喚‼？再び現れろ‼？殺戮を為す狂気のオーケストリオン‼？リンク４‼？オルフェゴールオーケストリオン‼」
〈オルフェゴールオーケストリオン〉ＬＩＮＫ４　機械族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙？←→↗？
現れたのは２体目のオルフェゴールオーケストリオン。
これでオーケストリオン同士が相互リンクしているから２体の破壊耐性が完全なものになってしまった。
しかし、顕示はそれだけでは止まらない。
「そして魔法カード、死者蘇生‼？」
「っ⁉？ここで……‼？」
「その効果により、私は墓地からモンスター１体を特殊召喚する‼？甦れ、クラッキングドラゴン‼？」
〈クラッキングドラゴン〉☆８　機械族　闇属性
ＡＴＫ３０００
再び呼び出されるのは漆黒の機械龍。
そしてこれにより、私がさっき伏せたカード、クリボーを呼ぶ笛でハネクリボーを出すことは出来なくなった。
出した瞬間に、クラッキングドラゴンのバーン効果が発動して、負ける。
「さぁ、防げるものなら防いでみるがいい‼？バトル‼？今度こそ終わりだ‼？オルフェゴールオーケストリオンでダイレクトアタック‼？スロウスカプリッチオ‼？」
再び放たれるオーケストリオンのパイプから数えきれない程のレーザーが撃ち出され、私の身体を貫こうとする。

でもーーー
「まだ……まだです!!?手札からバトルフェーダー!!?さらにチェーンして墓地からクリボーンの効果発動!!?」
「っ!!?」
「相手モンスターの攻撃宣言時、墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のクリボーモンスターを任意の数だけ対象として、そのモンスターを特殊召喚します!!?来て、クリボー!!?クリアクリボー!!?サクリボー!!?虹クリボー!!?」

〈クリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

〈クリアクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

〈サクリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

〈虹クリボー〉☆1　悪魔族　光属性
ＤＥＦ１００

私の周りに現れるのは４体のクリボーとその横に鐘の音を鳴らす悪魔。

〈バトルフェーダー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

「バトルフェーダーの効果発動!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードを手札から特殊召喚し、その後バトルフェイズを終了します!!?そしてこの効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外されます」

「なんだと⁉?」
「さらにバトルフェーダーには攻撃力が無く、クリボー達は同時に召喚されているためクラッキングドラゴンの効果は発動しません⁉?」
「おのれ⁉?まだ沈まんのか⁉?……クッ、いいだろう。どうせその雑魚達では私のモンスターには敵わない。リンクモンスターを出したところでそこはロンギルスとオーケストリオンの間合い。貴様に何かが出来るわけがない⁉?次のターン、その雑魚達を蹴散らし、貴様にドラゴノイドジェネレーターの効果で貴様にトークンを送りつけてトドメを刺してやる。俺はカードを1枚セットし、ターンエンドだ」
「……エンドフェイズ。速攻魔法、ドローマッスルを発動。自分フィールドの守備力1000以下の表側守備表示モンスター1体を対象に自分はデッキから1枚ドローし、そのモンスターはこのターン戦闘では破壊されません。私は虹クリボーを対象にカードを1枚ドロー⁉?」
「はっ、苦し紛れのドローに賭けたか⁉?」

遊花　LP100　手札3
ー▲▲ーー　ー
□□□□□
ー　☆
ーー☆☆○
ーー△△▲　▽
顕示　LP2500　手札0

ダメ、今の手札じゃ根本的な解決にはならない。
となれば、次のドローでこの状況をどうにかするカードを引くしかない。
でも、本当にあるのだろうか?
この絶望的な状況を打開出来るカードが……私のデッキの中に。
そう少し弱気になりそうになった時、ちらりと私の後ろで私のデュ

エルを黙って見ている島さんの姿が目に入った。
「……」
島さんは落ち着いた目で私を見ている。
その目には何処にも心配の色が浮かんでいない。
私が勝つのを微塵も疑っていない。
「っ‼?」
私は両手で自分の頬を思いっきり叩いた。
それを見て顕示は怪訝そうな表情を浮かべる。
「どうした?絶望的な状況に、とうとう狂ったか?」
「違います。馬鹿なことを考えていた自分が情けなくて、叩いてやりたくなっただけです」
「何だと?」
そう、私は諦めないと決めた。
なのに、どうして弱気になっているんだろうか?
まだ、ライフは残っている、カードも残っている。
なのに、諦める理由なんて、何処にも無いではないか。
そんな弱気でどうする、栗原　遊花。
お前はあの2人の思いを守ると誓ったのだろう?
ならば、絶対に勝つと、自分を信じなくてどうするというのだ‼?
ふと気がつけば、私の周りにクリボー達やバトルフェーダーが寄り添ってくれていた。
クリボー達はそれぞれ心配そうに寄り添ってきたり、励まそうと私の周りをくるくる回ったりしたり、覚悟を決めたような目をしていたりする。
どうしてだろう?
立体映像のハズなのに……
本当に私を見守ってくれている気がする。
思えば、この子達もずっと私と一緒にいてくれた。
その子達がこうやって私を心配してくれているのだ。
それが嬉しくないわけがない。
錯覚でもいい、立体映像の演出だったとしても構わない。

それでも、決めたのだ。
私はこの子達と一緒に強くなると。
ならば、今から逃げるな。
今ここで強くなれ‼？
「私のターンーーー」
このドローが勝負の鍵。
だから、お願い、カード達、私に思いを守るための力を貸して‼？
「ーーードロー‼？」
勢いよくドローし、引いたカードに目をやる。
しかし、そこにあったのはーーー
「……えっ？」
ーーー私が入れた覚えがない、僅かに黒い闇を纏っているように見えるカードだった。
いや、見覚えはある。
このカードは、さっきこのお店で拾った、島さんが驚きを露わにしたカードだ。
確かに、デュエルする前に、カードを置いた記憶はない。
もしかしてその時に混ざってしまったのだろうか？
ど、どうしよう⁉？
この局面でそんなカードを引いちゃうなんて‼？
慌てた私はついそのカードをまじまじと見てしまう。
「……あれ？」
しかし、そのカードを見て、今の状況について考える。
そしてーーー
「……あはは」
「っ⁉？何がおかしい⁉？」
ーーー思わず笑顔が溢れてしまった。
絶望的な状況だったハズなのに、それでも笑顔が溢れてしまう。
「絶望の先には、必ず希望が待っているハズ、か」
これはさっき島さんから私に送られた言葉だ。
それが今まさに当てはまっている。

「そっか……君は、私の希望になりに来てくれたんだね」
だとしたら、それはきっとこの子にとってはとても不本意なことだろう。
本来のこの子は、希望なんてものから1番縁遠い存在のハズだ。
「でも……うん、ありがとう」
でも、それでも来てくれたことが、凄く嬉しかった。
さっき拾った、得体も知れないカードのハズなのに……クリボー達と同じように、このカードとも、私は繋がっているのが分かる。
「それじゃあ、一緒に行こう」
私を助けに来てくれた、優しい絶望のために。
「私はフィールドに存在するクリボー、クリアクリボー、サクリボー、虹クリボー、4体のレベル1モンスターを墓地に送ることで手札からモンスターを特殊召喚します!!?」
「何!!?なんだその特殊な召喚方法は!!?」
クリボー達が私を見て頷きあいながら粒子に変わる。
そしてその粒子は重なり合い、大きな闇の巨人が、私を守るように現れた。
「おいで!!?絶望を統べる優しき神!!?絶望神アンチホープ!!?」

〈絶望神アンチホープ〉☆12　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ５０００

「馬鹿な……何だそのモンスターは……デッキの中に入っているモンスターで……攻撃力５０００だと!!?だが、クラッキングドラゴンの効果発動!!?ヴァンダルブレイク!!?このカードがモンスターゾーンに存在し、相手がモンスター1体のみを召喚・特殊召喚した時、そのモンスターの攻撃力はターン終了時までそのレベル×２００ダウンし、ダウンした数値分だけ相手にダメージを与える!!?絶望神アンチホープのはレベル12、よって２６００ポイントダウンし、２６００ポイントのダメージを与える!!?貴様のライフでは耐えられないのだよ!!?」

クラッキングドラゴンがレーザーを撃とうとする。
そんなこと、百も承知に決まってる!!?
「手札からジャンクリボーの効果発動!!?ジャンクバレット!!?自分にダメージを与える魔法・罠・モンスターの効果を相手が発動した時、自分の手札・フィールドのこのカードを墓地へ送ってその発動を無効にし破壊する!!?」
「何だと!?!?」
ジャンクリボーが増殖しながらクラッキングドラゴンがレーザーを放とうとした砲身に突撃し、内側からクラッキングドラゴンごと爆発した。
これでもうモンスターを出すことを躊躇う必要も無くなった!!?
「バトル!!?絶望神アンチホープでオルフェゴールロンギルスを攻撃!!?」
アンチホープが背中の大剣を構え、突撃の構えをとる。
「この攻撃が通ればライフが0になるだと……ふざけるな!!?それぐらいならオルフェゴールロンギルスごと消し飛ばしてくれる!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?オルフェゴールアタック!!?自分または相手のモンスターの攻撃宣言時に、自分フィールドのオルフェゴールモンスターまたは星遺物モンスター1体をリリースし、相手フィールドのモンスター1体を対象としてそのモンスターを除外する!!?オルフェゴールロンギルスをリリースし、消えろ、絶望神アンチホープ!!?」
ロンギルスの姿が光の塊になり、アンチホープに向かってくる。
でも、そんなものじゃ私の絶望(きぼう)は壊せない!!?
「絶望神アンチホープの効果発動!!?インヴィンシブルディスペア!!?このカードが戦闘を行うバトルステップ中に1度、自分の墓地のレベル1モンスター1体を除外して発動!!?墓地から金華猫を除外し、このカードはそのダメージステップ終了時まで、他のカードの効果を受けず、戦闘では破壊されない!!?」
「効果を受けないだと!?!?」
ロンギルスが変わった光の塊はアンチホープに当たるが、アンチ

ホープは平然とその光を弾き飛ばした。
「攻撃対象がいなくなったことにより攻撃対象を変更!!?絶望神アンチホープでオルフェゴールオーケストリオンに攻撃!!?ホープブレイクパニッシャー!!?」
「くっ、迎え撃て!!?オルフェゴールオーケストリオン!!?スロウスカプリッチオ!!?」
オーケストリオンがレーザーを放ちアンチホープを消し去ろうとする。
しかし、アンチホープはそのレーザーを全て弾き、その大剣でオーケストリオンを斬りつけた。

顕示　ＬＰ２５００→５００

顕示のライフが僅かに残る。
それを見て、顕示が勝ち誇ったように笑う。
「ふっ……はははは!!?確かに後一歩でやられるところだった!!?だがしかし、結局お前の攻撃では私のライフは削り切れていない!!?そしてリンク状態のオルフェゴールオーケストリオンが破壊されることはない!!?これならば次のターンに……」
でも、まだ何も終わっていない!!?
「リバースカードオープン!!?速攻魔法!!?エネミーコントローラー!!?」
「何!!?」
「私は２つの効果の内、自分フィールドのモンスター１体をリリースし、相手フィールドの表側表示モンスター１体を対象に、その表側表示モンスターのコントロールをエンドフェイズまで得る効果を選択!!?私は絶望神アンチホープをリリースし、オルフェゴールオーケストリオン１体のコントロールを得る!!?」
ゲームのコントローラーが私の前に現れ、絶望神アンチホープの姿が消えるとコントローラーが動き始める。
「させるか!!?永続罠、オルフェゴールコアを発動!!?１ターンに１

度、自分のフィールド・墓地からモンスター1体を除外し、オルフェゴールコア以外の自分フィールドのオルフェゴールカードまたは星遺物カード1枚を対象とし、このターン、そのカードは効果の対象にならない‼？私は墓地に存在するオルフェゴールロンギルスを除外し、エネミーコントローラーの対象になっているオルフェゴールオーケストリオンを効果の対象にならなくする‼？」

オーケストリオンの周りにバリアーが現れ、コントロールを受け付けなくなったからかコントローラーが爆散する。

それを見て顕示が笑みを強くする。

「フハハハハ‼？無駄だったな。結局お前がやったことは折角出した切り札を無駄に失ったに過ぎない‼？」

そう言って笑う顕示に、私は笑顔を浮かべながら言った。

「それはどうかな？」

「何？」

「私は絶望神アンチホープを無駄に失ったんじゃない。これで私の絶望（ぎぼう）は繋がったの‼？リバースカードオープン‼？速攻魔法‼？クリボーを呼ぶ笛‼？」

「クリボーを呼ぶ笛だと？」

「その効果で自分はデッキからクリボーまたはハネクリボー1体を選択し、手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができる‼？私か選ぶのは特殊召喚‼？いつだって、私と共に‼？ハネクリボー‼？」

〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性

ＡＴＫ３００

現れるのは天使の羽を持つ私の最高の相棒。

相棒はやる気十分という風に拳を引いて構える。

顕示はそんな私の相棒を見て嘲笑を漏らす。

「ふん、そんな雑魚モンスターを攻撃表示で出すとはな。そんな雑魚モンスターに何が出来る‼？」

「相棒は雑魚なんかじゃない!!?この子が貴方にトドメを刺す!!?ハネクリボーでオルフェゴールオーケストリオンを攻撃!!?」
「馬鹿め、血迷ったか!!?迎え撃て!!?オルフェゴールオーケストリオン!!?スロウスカプリッチオ!!?」
オーケストリオンのパイプから今までの比ではないぐらいのレーザーが相棒に向かって撃ち出される。
しかし、ハネクリボーはその小柄さからそれをひらひらと避けながらオーケストリオンの頭上に飛翔する。
そうだよ、見せてあげよう、私の相棒。
貴方の……貴方達の力を!!?
「速攻魔法発動!!?バーサークラッシュ!!?」
「バーサークラッシュだと?何だそのカードは……」
「このカードはハネクリボーの真なる力を解放するカード。自分の墓地に存在するモンスター1体をゲームから除外し、ターン終了時まで、自分フィールド上に表側表示で存在するハネクリボー1体の攻撃力・守備力は、除外したモンスターと同じ数値になる!!?」
「除外したモンスターと同じ数値だと?……!?貴様、まさか!?」
「私が除外するのは、絶望神アンチホープ!!?お願い、貴方の絶望(きぼう)を相棒に貸して!!?」
私がそういうとアンチホープが薄っすらとフィールドに現れ、ハネクリボーの方を見る。
ハネクリボーはアンチホープの方を見るとコクリと頷き、それを見たアンチホープも頷き返して自分の身体を粒子に変えた。
粒子に変わったアンチホープはハネクリボーが空に向かって突き上げた右手に集まり、右手の部分に巨大な漆黒の球体を生み出した。

ハネクリボー
ＡＴＫ３０００→５０００

「馬鹿な!?攻撃力５０００のハネクリボーだと!?」
「なんと!?」

その光景を見て、今まで静観を続けていた島さんすらも声を漏らす。
そんな中、ハネクリボーはオーケストリオンの懐に向かって急降下し、その漆黒の球体をオーケストリオンの懐に突き出した。
「行って、ハネクリボー‼?ディスペアクラッシュ‼?」
私の声と共にハネクリボーがその球体をオーケストリオンに押し当てる。
すると、その球体は一瞬でオーケストリオンを呑み込み、そのまま轟音と共に跡形もなく消し飛ばした。
「馬鹿なぁぁぁ‼?」

顕示　ＬＰ５００→０

デュエルが終わり、辺りが見覚えがある店内に戻る。
私は崩れ落ちた顕示の前に立つ。
「さぁ、私が勝ったのでさっきの発言を撤回して貰えますか?」
「くっ‼?ふざけるな‼?何故貴様などに謝らなければならん‼?」
「デュエルを始める時に約束しましたから」
「そんなもの守るわけがーーー」
「卑怯者」
「何‼?」
私が正面からそういうと、顕示が怒りに満ちた顔でこちらを睨みつける。
「貴方は言いましたよね?遊騎さんのことを卑怯者だと。なら、デュエルをする際の約束すら守れない貴方は何なのですか?」
この人は何度も言っていた。
遊騎さんのことを卑怯者だと。
「貴方が卑怯者だと言っている遊騎さんは約束を守る人です。大切な約束の為に……苦悩する人です。なら、貴方が卑怯者と呼ぶ遊騎さんでも守る約束を、デュエルでの結果すら守ろうとしない貴方は卑怯

者以下じゃないですか‼?」
「クッ……今に見ていろ‼?貴様らを絶対に後悔させてやる‼?」
私の言葉に、そう捨て台詞を残すと顕示は私を振り切って店から出て行った。
しまった、逃げられた‼?
追おうか迷う私を見て、島さんが首を振りながら声をかけてくる。
「君が追う必要はないよ。この街でデュエルの結果を違えるような人間の末路は決まっているさ」
「でも……」
「何、どちらにせよ人が来ない店だ。これ以上悪評が流れようが変わらないさ。それより、先程のデュエル、見事だったよ。特に、最後の攻撃は、ね」
そういって島さんが笑顔で私を褒めてくれる。
それに対して私はデッキに混ざっていたアンチホープのカードを取り出し、首を振りながら答える。
「それはこの子のおかげです。正直、あの状況は私のデッキの中のカードじゃどう考えても、完全に詰んでいたんです。でも、それをデッキに混ざってしまったこの子が助けに来てくれた。だからこそ、さっきのデュエルでは勝てたんです」
「……そうか。でも、その結果を導いたのは君が最後まで諦めなかったからだよ。だから、それだけは誇りなさい」
「‼?……はい‼?」
島さんの言葉に私は笑顔で答える。
また少し、進むことが出来たかな?
出来てたら、いいな。
そんな私を見て、島さんはうんうんと頷くと仕切り直しとばかりに手を叩いた。
「さて、無粋な輩に遮らせてしまったが改めて君に送らせて貰うカードを決めるとしようか」
そういう島さんに私はデュエルが終わってから決めていたことを話した。

「あの、島さん。それなら、この子を貰えませんか？」
「この子って……そのアンチホープのカードかい？」
島さんが少し困ったような顔をしながら言う。
確かにさっき島さんはこのカードには触れちゃいけないと言っていた。
それがどういう意味かは分からない。
でも、それでも私は島さんに頼み込む。
「私は、このカードがどういうカードなのか、島さんがどういう意味で触るなって言ったのかは分かりません。でも、さっきこのカードを使った時、なんだか分からないけど繋がっている感じがしたんです。相棒……ハネクリボー達みたいに」
「ほぅ……」
島さんがそれを聞いて面白そうな表情を浮かべる。
「それに、この子は助けに来てくれました。あれだけ絶望的な状況で、私の希望になってくれました。だから、この子と一緒に、もっとデュエルしてみたいんです。だから、お願いします!!?」
そういって頭を深く下げる。
それを見て、島さんはとても嬉しそうに笑った。
「そこまで言われるなら、そのカードも本望だろう。いいよ。そのカードと一緒に、沢山デュエルをしてあげなさい。勿論、お代はいらないよ。元々、どうしようか困っていたカードでもあるからね」
「!!?ありがとうございます!!?」
「いやいや、今日は色々と良いものを見せて貰ったからそのお礼だよ。それより、時間は大丈夫かい？長いこと話し込んだ後にデュエルをしていたからそろそろ夜になるが……」
島さんの言葉にハッとして時間を見る。
どうしよう!!?急がないともう師匠が帰って来てるかも!!?
「ご、ごめんなさい!!?今日の所はここで失礼します!!?」
「いやいや、またいつでも来てくれていいからね。……そうだ、遊騎君に1つ言付けを頼めるかい？」
「言付けですか？」

慌ててお店を飛び出そうとする私を島さんが呼び止める。
私が振り返ると島さんは凄く優しい表情で言付けを口にした。
「いつでも帰ってきなさい。ここは君の家だ。でも、今、君に他の居場所があるのなら、その居場所を大切にしなさい……そう伝えてくれるかい？」
島さんの言葉に私は力強く頷いた。
「はい‼？今日はありがとうございました‼？次は、師匠やお友達を連れて来ます‼？」
「‼？……ああ、楽しみに待っているよ」
今日、この店に来て良かった。
そう実感しながら私は帰路を急ぐのだった。

ーーーーーーー

「おっ、帰って来たか」
「あ、師匠‼？お待たせしてしまってすみません‼？」
「ここはお前の家なのになんでお前が謝るんだよ」
家に着くと、玄関先で師匠が既に待っていた。
遅くなったことを謝ると師匠は呆れた表情を浮かべた。
「師匠はその、宿のこととか、どうなりました？」
「あ～それなんだが……」
師匠が罰が悪そうな表情を浮かべる。
「やっぱりこの時期はホテルはどこも満杯で空きが出るのは最低でも4ヶ月は先になるらしい。一応、仕事の方は遊花と会ったあの公園の清掃員の仕事が決まったんだが……」
「‼？つまり、まだ一緒に過ごせるんですね‼？」
「……何でそんなに嬉しそうなんだ」
私の反応に師匠が顔を引き攣らせるがそれでも私は喜びを隠せなかった。
だって、それだけ師匠とは沢山過ごせて色んなことを学ぶことが出来るのだから。

師匠は私のそんな反応にため息を吐きながら渋々といった感じで口を開く。
「……まぁ、宿についてはまた色々と考えて行く……悪いが、それまではよろしく頼む」
「!!?はい!!?いつまででも大丈夫ですから!!?」
そういう私に師匠は口をひくひくと引き攣らせながらも、1つ咳払いをして口を開いた。
「それで、カードショップの方では何か収穫はあったか?」
「はい!!?新しい切り札とか……師匠のことについても沢山知ることが出来ました」
「!!?……島さん、話したのか?俺のこと」
「はい……師匠の過去のことと、お店のことを、色々と」
「……そうか」
そう呟く師匠は困った顔で頭を掻いた。
「その……なんだ、やっぱりカッコ悪いよな、俺。約束1つ守れずに、迷惑ばかりかけて、さ」

「!!?そんなことありません!!?師匠は凄くカッコイイんです!!?」
「!?遊……花?」
大声で否定した私を見て、師匠が驚きの表情を浮かべる。
でも、その言葉だけは、例え師匠であっても肯定させない。
「凄いじゃないですか。お店を立て直す為に、恩返しをする為にプロ決闘者になるなんて。そんなことを決意して、本当にやり遂げちゃう人が、カッコ悪いハズ、ありません。島さんが言ってました。誰もいない店の中に毎日来てくれたことが嬉しかった、彼がいてくれた日々が、私の1番の宝物だったって」
「!?島さんが……そんなことを?」
「はい。それに、師匠の約束はまだ破られてないじゃないですか」
「えっ?」
私の言葉に師匠はきょとんとした顔をする。
そんな師匠に、私は自信を持って告げる。

「だって、師匠は私の師匠なんです。なら、私が師匠の正式な後継者としてプロ決闘者になれば、自ずと師匠の名前も上がります」
「なっ⁉?」
「そして、師匠の名が上がれば、当然お店の方にも影響が生まれ、立て直せます。勿論、今の私にはまだそんな力は無いですし、ここまで上手く行くかはわからないですけど、そうなれるのであれば、師匠は約束を違えてないじゃないですか」
　笑顔でそういう私を師匠は驚いた表情で見つめる。
　そしてとても真剣な表情で私を見る。
「俺の正式な弟子だって言うのは、途轍もなく辛い道になるぞ?」
「そんなの、遊騎さんの弟子になると決めた時から覚悟しています。言ったハズですよ、耐えるのは得意だって。何せ、クリボーデッキですからね。多少の攻撃ぐらい平気、へっちゃらです」
「俺の時とは違う。最初から非難の的にされる可能性が高い。最悪プロ決闘者になることすら拒否されるかも知れないぞ?」
「その程度じゃ諦める理由になりません。プロからがダメならアマチュアからでもそれ以下からでも始めればいいんです。師匠には誓ったハズです。私はもう諦めることだけはしないと」
「お前に重石を背負わせることになる。俺の約束まで、お前が背負うことないだろう?」
「師匠が弟子に夢を託して何が悪いんですか。それに、その約束は本日付けで私のものにもなったんです。だったら、これは師匠の重石なんかじゃないですよ」
　師匠の問いかけに、真っ正面から答えていく。
　どう問いかけても、即答する私に師匠はもう1度ため息を吐いた。
「……本当に、遊花は俺には過ぎた弟子だよ」
「師匠だからこそ、私は弟子になったんです。他の誰であろうと、私の師匠になることは出来ません。そういえば、島さんからの言付けです。いつでも帰ってきなさい。ここは君の家だ。でも、今、君に他の居場所があるのなら、その居場所を大切にしなさい、らしいですよ」
「……今このタイミングで言うか、そんな言葉?」

「師匠は居場所なんてないとか思ってるかも知れませんが、本当は居場所だってあるんです。島さんの所が……そして、私もそんな居場所になれたらなって思います」
私の言葉に、師匠は困ったように頭を掻いた。
「島さんの所には……今はまだ帰れない。果たすべき約束を、俺はまだ果たせていないから。でも……島さんが喜んでくれるなら、今度、顔出しにぐらいは行ってもいいのかもな」
「!!?はい!!?行きましょう!!?私もお供します!!?」
師匠がそう言ってくれたことが嬉しくて、私は弾むように家の前に行き、家の鍵を開けて、師匠に向かって振り向いた。
「言い忘れてました。師匠、おかえりなさい!!?」
「……馬鹿、待ってたのは俺の方なんだからそれはこちらの台詞だ。まぁ、ただいま……そして、おかえり、遊花」
「!!?はい、ただいまです、師匠!!?」

ーーーーーーーー

○

「ふぅ……それにしても、今日は面白く、そしてとてもいい日だった」
ここは、遊花が帰って行った後の『Ｎａｔｕｒａｌ』の店内。
今日あったことを振り返り、島は思わず笑顔を漏らした。
今まで音信不通だった義理の息子が弟子を作っているという話はとても嬉しかった。
そして、その弟子である少女。
彼女がとても面白く、そして優しい少女だった。
彼女が入ってきた時に驚いたのは、彼女を守るように〝カードの精霊〟……彼女のデッキのクリボー達が寄り添っていたことだ。
カードの精霊自体が憑いていることについては、それ程珍しいことではない。

彼女にも自覚症状は無かったようだが、気付けないだけでカードを大切に扱っているものにならカードの精霊は集まってくるものだ。
だが、彼女程多くの精霊に囲まれている存在を見るのは久しぶりだった。
そして何よりその後の出来事。
彼女がこの店で拾った絶望神アンチホープのカード……あのカードは”闇のカード”だった。
カードの精霊に悪意が宿り、歪んだ呪われてしまったカード……それが闇のカードだ。
闇のカードには使用者の意思を好戦的にしたり破壊衝動を生み出したりしながら人々から負の感情を喰らい、使用者や対戦相手を物理的に傷付ける可能性すらあるとても危険なカードだ。
しかも、あの絶望神アンチホープに秘められた闇は普通の闇のカードに秘められている呪いなどとは比べ物にならないぐらい強力なものだった。
それを彼女はあっさりと触り、その上影響を受けるどころか完全に受け入れて無力化していた。
勿論、本人の資質により闇のカードの影響を受けず、自分の意思で扱う者がいないわけではない。
しかし、そういった者は今度は逆にカードの精霊との折り合いが悪い。
カードの精霊は呪われてしまった闇のカードを嫌う。
その逆に闇のカードも呪われていないカードの精霊を嫌う。
彼らは相反する存在であり、相入れることなど、あり得ないことだった。
しかし、彼女が闇のカードに触れてしまったのにも関わらず、彼女の精霊達は特に強い拒絶の反応を示さなかった。
それどころかその後のデュエル。
彼女を守る為にカードの精霊達は闇のカードである絶望神アンチホープに力を貸し、絶望神アンチホープもカードの精霊であり、彼女が連れていた精霊の中で最も力が強かったハネクリボーを受け入れ、

力を貸していた。
まるで彼女だけは絶対に守るというその点で、両方の存在が合意しているかのように。
その上、デュエルが終わった後に力を貸してくれたからと絶望神アンチホープを譲ってほしいと言ってきた。
あのカードと一緒にデュエルがしたいと、只々純粋に、あのカードを受け入れた。
「相反する存在の両方から愛される存在……いやはや、長生きはしてみるものだ」
島がそう呟いた時、店の裏口の方から物音が聞こえた。
島がそちらを見ると、身体から少し闇が漏れ出している黒髪でショートボブの小学生程の少女がいた。
島はその少女を見て驚きの表情を浮かべる。
「裏口から入ってくるとは珍しいね。おまけに少し闇が漏れ出しているが、何かしてきたのかい？」
「店の前でこの店に悪態をついてた男がいたから……裏路地で少し喰らわせてきた」
「あー心当たりは確かにあるが、そこまでやる必要は無かったんじゃないかい？」
「外道にかける情けはない……大丈夫、面倒だから殺してはいない。身体は少しズタボロにしたけど、負の感情と一緒に記憶も喰わせてきたから、完全犯罪」
そういって無表情のままピースサインを作る少女に島は苦笑を浮かべる。
そういう問題ではないのだが、彼女は自分が気に入った相手以外には容赦がないので言っても無駄だろうと諦めた。
こういうところは血は繋がっていないが遊騎に似ているのかも知れないと島は思う。
島は気を取り直して少女に話しかける。
「それにしても、ここに来ていて大丈夫なのかい？この時期は何かと忙しいだろう？」

「落ち着ける環境は必要……大丈夫、やることはしっかりとこなして来たから社長も怒りはしないわ」
「相変わらずだね、君は」
無表情のまま平坦な声でいう少女を見て、島は苦笑を浮かべる。
彼女の感情が大きく動くことなど、そう多くないことは分かっているのだ。
「そうそう、今日は凄く面白いことがあったんだ」
「面白いこと？この店の売り上げが伸びたとか？」
「相変わらず辛辣だね。違うよ、遊騎君のことだ」
「詳しく」
島がそういうと少女は凄い勢いで島に近付いた。
そう、彼女が1番感情を動かすのは彼の事だから。
「会ったの？」
「いや、本人には会っていないよ。でも、彼の弟子を名乗る子が現れてね。その子が今の彼の事を教えてくれたのさ」
「弟子……」
「近々、本人にも会えるかも知れないよ。連れて来てくれるって、約束したからね」
「……そう。その時は連絡して」
「勿論。君も大事な常連だからね」
そういうと少女が目を閉じて胸の前で右手を握る。
これは彼女の感情が高ぶっている時の行動だ。
島はそれを見ながら、店じまいの準備を始める。
そんな島を横に、少女は少しだけ感情を乗せた声で呟いた。
「遊騎……」

第９話　全てを壊すもの

★

「おはようございます」
「来たわね、遊花!!?」
「ひゃう!?!?さ、桜ちゃん?」
『Ｎａｔｕｒａｌ』に行き、師匠の過去を聞いたり私のデッキに新しい仲間が加わった次の日、お仕事に行った師匠を見送ってデュエルアカデミアの教室に入ると、教室の入り口で桜ちゃんが仁王立ちをして私を待っていた。
　私の反応に、教室中の視線が私に向く。
　そんな私の反応を気にした様子もなく、桜ちゃんは私に思いっきり顔を近付ける。
「さぁ!!?聞かせて貰うわよ!!?昨日言ってた言葉の意味を!!?」
「き、昨日?私、何か変なこと言った?」
「アンタが!!?急に!!?カードショップに!!?行くって!!?言うから!!?でしょうが!!?」
「わあっ!!?ち、近い近い!!?近いよ桜ちゃん!!?」
　物凄い剣幕で顔を近付けてくる桜ちゃんに。私は教室の隅に追い込まれてしまう。
「当然、全部話してくれるのよね?」
「そもそも桜ちゃんに隠すようなことがな……」
　い、と言い切ろうとした所でふと思う。
　流石に師匠が私の家に泊まっていることは怒られるのではないだろうか、と。
　下手したら師匠に迷惑がかかってしまうのではないかと。
「……」
「ちょっと!!?何でそこで黙るのよ!?!?」
　桜ちゃんの言葉に思わず視線を逸らしてしまう。
　いや、だってこの問題はそう簡単には解決しそうにないし、したく

ないんだもん。
どうやって誤魔化せばいいのか考えている内に最初の講義を担当している先生が入ってくるのが見えた。
た、助かった。
今はこれで誤魔化そう。
「あ、さ、桜ちゃん。ほら、今は講義の先生が入って来ちゃったから座らないと!!?」
「あ、ちょっ!!?待ちなさい、遊花!!?」
私はこれ幸いにと桜ちゃんを振り切り、自分の席に移動して急いで座った。
でも、これだと次はお昼休みに聞かれちゃうよね?
うぅ〜講義中にどう誤魔化すか考えないと。
私はどう桜ちゃんの追求を乗り切ろうか考えながら午前中の講義の準備を始めるのだった。

ーーーーーーーー

「ゆ・う・か?」
「ひぅっ!!?」
午前中の講義が全て終わったと同時に私の後ろから底冷えするような低い声が聞こえた。
私がゆっくりと振り返ると、そこには満面の笑みを浮かべながらも目が一切笑っていない桜ちゃんの姿があった。
こ、怖い!!?
怖すぎるよ桜ちゃん!!?
「今度こそ逃がさないわ!!?何があったのか、全部、まるっと、聞かせて貰おうじゃない!!?」
「わ、わかったよぅ!!?話す!!?話すから!!?」
ごめんなさい、師匠。
頑張って隠しますけど、全部は隠しきれないかも知れません。
……嘘ついたら本当に殺されちゃいそうなので。

ーーーーーーー

「はぁ⁉？あの、結束　遊騎に弟子入りしたぁ⁉？」

「桜ちゃん、声‼？声が大きいよ‼？後、師匠のことをあのとか言わないで‼？」

結局、家に師匠が泊まっていることは何とか誤魔化せたけど、師匠に弟子入りした経緯などは全て話してしまった。

周囲には桜ちゃんの剣幕があまりにも怖かったせいか人が全然いないけど、それでも他人の迷惑になるのだから声のボリュームぐらいは考えてほしい。

桜ちゃんは怖い顔で私に詰め寄ってくる。

「馬鹿‼？バッカじゃないの‼？デュエルが出来るようになったのは嬉しいけど、何でよりにもよって弟子入りしたのがあの結束　遊騎なのよ‼？イカサマをしてプロリーグを追放されたような奴なのよ⁉？」

「だからあのとか言わないでよ‼？それに、師匠はイカサマなんて絶対にしてないし、他の人じゃダメなの‼？師匠だったから、私はもう1度デュエルが出来るようになったんだから‼？例え桜ちゃんでも、師匠を馬鹿にするのは許さないよ‼？」

「なっ⁉？」

私が正面から言い返したことに驚いたのか桜ちゃんが面食らった表情を浮かべる。

例え、お友達である桜ちゃんが相手でもそこだけは譲れない。

私は師匠の思いを受け継ぎ、背負っているのだから。

そんな私を見て何を思ったのか、桜ちゃんも何かを決めた顔をする。

「……遊花が言いたいことは分かったわ。でも、私はやっぱり納得出来ない」

「桜ちゃん……」

「だから、今日の放課後、結束　遊騎のところに連れて行きなさい。私

が直接見て、結束　遊騎がどういう人間なのか判断してあげるわ」
「……分かった。ちゃんと師匠を見て、判断してね」
「……フン……でも、遊花がもう1度デュエルが出来るようになって、よかったわ。それだけは、結束　遊騎に感謝してあげる」
「!!?桜ちゃん!!?」
「わあっ!!?ちょっと、遊花!!?」
そっぽを向きながらそう呟く桜ちゃんに、私は気持ちが抑えきれずに抱き着いた。
「ありがとう、大好き!!?」
「ちょっ!!?恥ずかしいこと言ってるんじゃないわよ!!?は・な・し・な・さ・い!!?」
顔を真っ赤にしながら私を引き離そうとする桜ちゃんを力一杯抱き締める。
私は、幸せものだ。
こんなに私の事を心配してくれる人がいるのだ。
だから、桜ちゃんも師匠のこと、分かってくれたらいいな。
私は幸せな気持ちを抱えたまま、気が済むまで桜ちゃんを抱き締めるのだった。

――――――――――――――――――――――――

「ねえ、本当にこんなところにいるの?」
「うん。昨日聞いた時に、ここの清掃員の仕事に決まったって言ってたから」
「元プロ決闘者の末路が公園の清掃員、ね」
放課後。
全ての講義を終えた私と桜ちゃんは、師匠に会うために師匠と出会ったあの公園に来ていた。
公園の中を見渡してみるが、師匠の姿は見えない。
もしかして、もう帰った後だったりするんだろうか?
考えてみたらいつ終わるかとか聞いてなかったし……家に帰っ

て待ってた方が確実？
　でも、そうなると師匠が家に住んでいることがバレちゃうし……
「ん？遊花か？」
「あ、師匠‼？」
　どうしようかと悩んでいると、私の後ろから作業着に身を包み、ゴミ袋を抱えている師匠が声をかけてきた。
　よかった、ちゃんと見つかったよ～
「もうデュエルアカデミアは終わったのか？」
「あ、はい‼？それで、その……師匠に合わせたい人がいるんですが……」
「俺に合わせたい人？」
「ねぇ、遊花。コイツなの？」
「あ、うん」
　師匠に事情を説明しようとすると、その前に桜ちゃんが師匠の前に立った。
　師匠の前に立った桜ちゃんは値踏みをするような目付きで師匠を見る。
「アンタが結束　遊騎ね」

「……そうだが、君は？」
「私は宝月　桜。遊花の……その、と、友達よ‼？」
「何故照れる？……そうか……遊花には友達がちゃんといたのか」
「酷くないですか師匠‼？」
　頬を赤らめて投げやり気味にいい放つ桜ちゃんに師匠が首を傾げながらもそんなことを呟いた。
　お友達ぐらいいますよ‼？
　……桜ちゃんだけだけど。
　そんな私を見て師匠が首を振りながら口を開く。
「いや、悪い意味じゃないんだ。俺の時は友達って言える人もいなかったからな。宝月のような友人がいてよかったと思っただけだ」

「あ……ごめんなさい」
思い出した……島さんが言っていた……師匠はいじめられていた時期に荒れていて、世界の全てが敵に見えていた、と。
だからこそ、私にお友達がいたことを、本当に喜んでくれたんだ。
私が、1人じゃないっていうことを。
「どうして謝る。お前が気にすることじゃないさ」
師匠が苦笑いを浮かべながらも優しい目で私を見る。
私は、少し泣きそうになってしまった。
「……コホン、それで本題なんだけど‼?」
自分のせいで変な雰囲気になったのを気にしたのか、仕切り直すように桜ちゃんが咳払いをしてから師匠を睨み付ける。
「アンタ、遊花の師匠をやってるんですって?」
「2日前からのまだまだ新米だけどな」
「正直に言うわ。私はアンタのことを信用していない」
「桜ちゃん⁉?」
桜ちゃんのはっきりとした拒絶に私はショックを受ける。
しかし、それに対して師匠は特に動揺することもなく、頷いた。
「まあ当然だろ。俺はこの街じゃ罪人だからな。知らなかったとは言え、あっさり受け入れた遊花の方がどちらかと言うとおかしい」
「……動揺とかしないのね?」
「生憎、蔑まれたり裏切られたりしてばかりの人生を歩んで来たからな。その程度のことで動揺する感情は、俺にはもう無いよ」
師匠の言葉に桜ちゃんもばつが悪そうな表情を浮かべる。
それに対して師匠はまた苦笑いを浮かべる。
「どうして気にしてるんだ?俺はお前にとって信用出来ない奴なんだろ?だったら、気にする必要なんてないじゃないか」
「……あーもう‼?調子狂うわね‼?」
桜ちゃんが頭を掻きながら、師匠から顔を背けて口を開く。
「……確かにまだ信用していないけど、一応、遊花を助けてくれたみたいだし、それに遊花がもう1度デュエルを出来るようにしてくれたのは……感謝してるし、信用したいって、思うのよ」

「‼?桜ちゃん‼?」
桜ちゃんのそんな言葉に私は思わず笑顔を浮かべてしまう。
「うっ‼?で、でも‼?やっぱり私は自分の目でしっかりと確認しないと安心出来ないの。だから、アンタが本当に遊花が言うような人間なのか、見極めさせて貰うわ‼?」
そういって桜ちゃんがデュエルディスクを起動し、師匠に向けて構える。
「私とデュエルしなさい‼?それでアンタのことを見極めてあげるわ‼?」
そういう桜ちゃんに、師匠は首を振って答える。
「無理だ」
「っ、何よ‼?逃げるって言うの⁉?」
「いや、そうじゃなくてだな……」
師匠が困った顔で桜ちゃんを見る。
でも、うん……それは無理だよ、桜ちゃん……だってーーー
「俺、まだ仕事中だからな。しかも、清掃員の仕事だからデュエルディスクもデッキもロッカーに預けてきてるし」
「……あ」
ーーー師匠はどう見てもデュエルディスクを持っていないのだから。
師匠はまだその手にゴミ袋を抱えたままでいる。
そもそも師匠は私を見かけたから仕事中に声をかけてくれただけだ。
今すぐにデュエルって言うのは流石に無理だよ。
「というわけで、もう少しで仕事も終わるから悪いが少し待っていてくれ」
「……さ」
「さ?」
「先に言いなさいよ〜〜〜‼?」
公園に顔を真っ赤にした桜ちゃんの叫び声が響いた。
桜ちゃん、意外とおっちょこちょいだもんね。

ーーーーーーー

☆

『決闘!!?』

遊騎　ＬＰ８０００

桜　　ＬＰ８０００

しっかりと仕事を終え、デュエルディスクとデッキを取ってきた俺は約束通り、遊花の友人である宝月とデュエルを始めていた。

遊花に聞いた話では宝月は学年でトップ１０に入る程の強さらしい。

今からどんなデュエルが出来るかが楽しみだ。

そんな宝月は顔を真っ赤にしながら恨めしそうにこちらを睨み付ける。

「よくも私に恥をかかせてくれたわね!!?絶対に後悔させてやるんだから!!?」

「いや、あれは宝月の自爆だった気がするが……とりあえず始めるぞ?」

デュエルディスクの決定により先攻は俺からだ。

手札は……まぁ、ある意味いつも通りか。

「魔法カード、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローする!!?俺は４枚、お前は５枚捨ててドローだ」

「いきなり手札全部交換なの?そんなに手札が悪いのかしら」

「まぁ、いつものことだ。こうでもしないと動けないからな。全く、運がいいんだか悪いんだか……俺は墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?デッキから妖刀竹光以外の竹光カードをデッキから手札に加える」

「っ‼?墓地起動の効果があったのね」
「俺がデッキから手札に加えるのは黄金色の竹光だ。俺はH・C（ヒロイックチャレンジャー）ダブルランスを召喚‼?」

〈H・C　ダブルランス〉☆4　戦士族　地属性
ATK1700

俺が出したのは2つの槍を持った白い戦士。
そのモンスターは出てくると同時に勇ましい雄叫びをあげる。
「H・C　ダブルランスの効果発動‼?召喚成功時に手札・墓地の同名モンスターを表側守備表示で特殊召喚する‼?俺は墓地のH・C　ダブルランスを特殊召喚だ‼?」
「さっきの手札抹殺で落ちていたのね……」
「ただしこのカードはシンクロ素材にできず、このカードをエクシーズ素材とする場合、戦士族モンスターのエクシーズ召喚にしか使用できない」

〈H・C　ダブルランス〉☆4　戦士族　地属性
DEF900

もう1体ダブルランスが現れる。
そして俺は正面に手を翳す。
「早速行かせて貰おうか。斬り開け‼?運命に抗うサーキット‼?」
「リンク召喚ね……」
俺の前に巨大なサーキットが現れる。
まずはコイツだ‼?
「召喚条件は戦士族モンスター2体‼?俺は2体のH・C　ダブルランスをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?リンク召喚‼?追想に生きる王女‼?リンク2‼?聖騎士の追想　イゾルデ‼?」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙？　↘？

２体のダブルランスがサーキットの中に消えると代わりに現れたのは金髪と白髪の２人の女性。
早速準備をさせて貰おうか‼？
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動‼？リンクレカレクション‼？リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター１体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキからキングスナイトを手札に加える‼？」
「それがアンタの代名詞、絵札の三銃士ね」
「知っているようなら話は早いな。早速準備をさせて貰う‼？聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動‼？メモリーズギフト‼？デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター１体をデッキから特殊召喚する‼？俺はデッキから妖刀竹光、神剣―フェニックスブレード、最強の盾、閃光の双剣―トライスを墓地に送り、デッキからクィーンズナイトを守備表示で特殊召喚‼？」
「キングの次はクィーンか」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

俺の前に現れるのは赤い鎧を身に纏った女性の騎士。
先程のサーチ効果でキングスナイトも手札に加わっているから絵札の三銃士を出す準備は取り敢えず整ったな。
「更に墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える。俺はデッキから折れ竹光を手札に加える。さらに手札から装備魔法、折れ竹光をクィーンズナイトに装

備。魔法カード、黄金色の竹光を発動!!?魔法カード黄金色の竹光を発動!!?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローする!!?」
「何でバトルゾーンに3枚もカードがあるのに手札は初手より増えてるのかしらね」
「カードを1枚伏せてターンエンドだ」
準備は万全。
さぁ、今のデュエルアカデミアの学年トップ10はどう動いてくる?

遊騎　LP8000　手札5
ー△▲ーー　ー
ー□ーーー
☆　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
桜　LP8000　手札5

「私のターン、ドロー!!?フッ、結束　遊騎!!?どうやら私のデッキは全力でアンタを試したいみたいよ!!?」
「何だって?」
「私を後攻にしたことを後悔させてあげるわ!!?魔法カード、妨げられた壊獣の眠り!!?このカードの発動時、フィールドのモンスターを全て破壊するわ!!?」
「!?ブラックホールと同じ効果だと!?」
フィールドが揺れ、イゾルテとクィーンズナイトが地割れに呑み込まれて消滅する。
その代わりに俺のフィールドには巨大な地竜が、宝月のフィールドには三つ首の竜が現れた。
「その後、デッキからカード名が異なる壊獣モンスターを自分・相手のフィールドに1体ずつ攻撃表示で特殊召喚するわ!!?この効果で特

殊召喚したモンスターは表示形式を変更できず、攻撃可能な場合は攻撃しなければならないけどね。私はアンタのフィールドに怒炎壊獣ドゴラン、そして私のフィールドには私の切り札の登場よ‼？あなたの全てを壊してあげる‼？雷撃壊獣サンダーザキング‼？」

〈怒炎壊獣ドゴラン〉☆８　恐竜族　炎属性
ＡＴＫ３０００

〈雷撃壊獣サンダーザキング〉☆９　雷族　光属性
ＡＴＫ３３００

俺のフィールドに呼び出されたのは攻撃力３０００のモンスター。だが、このまま戦ったら宝月のモンスターにやられてしまう。
そして宝月の動きはまだ終わらない。
「そしてこの娘が私のもう１体の切り札、私の相棒よ‼？月より来たる永遠の姫‼？妖精伝姫（フェアリーテイル）―カグヤを召喚‼？」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ１８５０

宝月が相棒と称して現れたのは月のマークが入っている扇子を持ったお姫様。
カグヤってことは難題が出されそうだな。
「妖精伝姫―カグヤの効果発動！召喚に成功した時、デッキから攻撃力１８５０の魔法使い族モンスター１体を手札に加える。私は２体目の妖精伝姫―カグヤを手札に加えるわ。まだまだ行くわよ、このカードは手札から攻撃表示で特殊召喚出来るわ。来なさい、ジェスターコンフィ‼？」

〈ジェスターコンフィ〉☆１　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０

現れたのは球に乗った道化師のモンスター。
こんな状況で攻撃力が０のモンスターを攻撃表示で出してくるなんて嫌な予感しかしない。
「バトルよ‼？ジェスターコンフィで怒炎壊獣ドゴランを攻撃‼？スーサイドマジック‼？」
「攻撃力０のモンスターで攻撃だと⁉？」
やっぱり何か効果があるのか？
そう思って身構えるもコンフィはドゴランに火炎を吐かれ、そのまま消滅してしまった。

桜　ＬＰ８０００→５０００

宝月のライフが大きく減る。
一体どういう意味が……そう考えた時、宝月がニヤリと笑った。
「さぁ、これが貴方に出す１つ目の難題よ‼？３０００ポイントの戦闘ダメージを受けた時、速攻魔法発動、ヘルテンペスト‼？」
「⁉？そのカードは‼？」
「このカードは３０００ポイント以上の戦闘ダメージを受けた時に発動する事ができるわ。お互いのデッキと墓地のモンスターを全てゲームから除外する‼？」
「っ‼？」
宝月がそう宣言するとお互いのデッキ、墓地からモンスターが一気にいなくなる。
そして宝月の戦術はまだ続く。
「そしてデッキから除外されたネクロフェイスの効果発動‼？このカードがゲームから除外された時、お互いはデッキの上からカードを５枚ゲームから除外する‼？」
「なっ⁉？」
俺のデッキが更に薄くなる。
しかも、よりによって今日は遊花と戦った時とは違い、いつもより

モンスターを多めのデッキ編成に変えてしまっていた。
元々ドローカードやサーチカード、デッキからの特殊召喚が多めのデッキなので俺のデッキはいつも４５枚で組むようにしている。
しかし、それを含めても今のヘルテンペストで墓地も含めてモンスターが１８枚、更にネクロフェイスで５枚のカードが除外され、一気に２３枚のカードが無くなった。
さらに今回はイゾルテや竹光で１９枚のカードをすでに使っている。
つまり合計で３９枚のカードが無くなり俺の残りデッキは残り６、いや、次のドローがあるから残り５枚だ。
デッキ枚数を４５枚にしていたのは幸いだった。
４０枚なら次のドローだけで解決できなければ負けているからな。
そして恐ろしいのはこれがまだバトルフェイズの最初だと言うところだろう。
そう、宝月の攻撃はまだ終わっていないのだ。
「そして２つ目の難題の時間よ。妖精伝姫―カグヤの効果発動!!?アンリーゾナブルディマンド!!?１ターンに１度、相手フィールドの表側表示モンスター１体を対象として発動!!?相手はそのモンスターの同名カード１枚を自身のデッキ・エクストラデッキから墓地へ送ってこの効果を無効にできる。墓地へ送らなかった場合、このカードと対象のモンスターを持ち主の手札に戻す。因みにこの効果は相手ターンでも発動できるわ。対象は勿論怒炎壊獣ドゴランよ」
「俺のデッキに怒炎壊獣ドゴランは入っていない。いたとしてもヘルテンペストで消えている。成る程、効果名がＵｎｒｅａｓｏｎａｂｌｅ　ｄｅｍａｎｄ（無理難題）とは言ったもんだな」
「そういうことよ。怒炎壊獣ドゴランと妖精伝姫―カグヤは手札に帰るわ。これでデッキにモンスターがいないアンタは表側で出すモンスターは出しても妖精伝姫―カグヤに戻されるようになった。そしてこれで貴方の場はガラ空きよ。これが３つ目の難題よ。毎ターンの３３００の攻撃に耐えられるかしら？雷撃壊獣サンダーザキングでダイレクトアタック!!?グラビティレイ!!?」

「ぐっ‼?」

遊騎　ＬＰ８０００→４７００

サンダーザキングの三つ首からレーザーが放たれ、俺のライフが大きく削られる。

こんなもの何度も耐えてられないぞ……

「カードを1枚セット。教えておいてあげる。壊獣モンスターは全て相手モンスターをリリースして相手フィールドに特殊召喚する共通効果を持っているわ」

「っ‼?つまり、守備表示でモンスターを出そうがそのモンスターをリリースして壊獣が現れ、それをカグヤが手札に戻して行くわけか」

「そう、これが４つ目の難題よ。ついでに言っておいてあげる。５つ難題はアンタの除外されている２３枚。アンタの選択次第ではその次の６つ目の難題が私の除外されたカード２５枚よ」

「俺と宝月の除外の枚数が難題になる、か」

「さぁ、アンタは幾つの難題が解けるかしら?遊花の師匠を名乗りたいならこれぐらい超えてみなさい‼?私はこれでターンエンド」

「……桜ちゃん、本気だ」

そんな遊花の呟きが聞こえる。

これで学生だって言うんだから本当に末恐ろしいって奴だよな。

遊騎　ＬＰ４７００　手札５

ー▲ー　ー

ー

ー

ー

ー○ー

ー▲ー　ー

桜　ＬＰ５０００　手札４

「俺のターン、ドロー‼?」

「さぁ、５つ目の難題よ。スタンバイフェイズ、罠発動!!?・Ｄ・Ｄ・ダイナマイト!!?相手が除外しているカードの数×３００ポイントダメージを相手ライフに与えるわ!!?」
「何!?」
「アンタの除外は２３枚!!?よって６９００ポイントのダメージを相手に与えるわ!!?防げないならこれで終わりよ!!?」
俺の目の前にダイナマイトが現れる。
っ、こんなところで終わってたまるか!!?
「まだだ!!?まだ終わっていない!!?墓地からダメージダイエットの効果発動!!?墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、そのターン自分が受ける効果ダメージは半分になる!!?」
「耐えてみせたわね。でも、除外されてるカードが増えた為、７２００ダメージの半分、３６００のダメージを受けて貰うわ!!?」
「ぐあっ!!?」

遊騎　ＬＰ４７００→１１００

何とか耐えることは出来た。
だが、状況は全くよくない。
宝月のデュエルはまるで詰将棋のように相手の一手一手を確実に潰しに来ている。
……面白い、これが今のデュエルアカデミアトップ１０の実力か。
そんな俺を見て、宝月が訝しげな顔をした。
「アンタ、笑ってるの？」
「ああ。お前とのデュエル、最高に面白いからな」
「!?アンタ、私のデュエルが面白いとか、正気？これでもデュエルアカデミアでは私なんて恐怖の対象なのよ？」
「何だそれ。こんなすぐに状況が変化する面白いデュエルが恐怖の対象とか、見る目ないんだな、今の学生って」
「なっ!?」

宝月が俺の言葉に驚いた表情を浮かべ、ぱくぱくと口を開く。
そんなに変なことを言っただろうか？
「まあいいぜ。今はとにかく、この面白いデュエルを続けよう」
「っ、や、やれるもんならやってみなさい‼？」
「ああ。手札のシャッフルリボーンを捨てて除外されているＨ・Ｃダブルランスを対象として装備魔法、ＤＤＲを発動‼？そのモンスターを攻撃表示で特殊召喚し、このカードを装備する。フィールドに舞い戻れ、Ｈ・Ｃ　ダブルランス‼？」

〈Ｈ・Ｃ　ダブルランス〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１７００

再びフィールドに現れるのは２つの槍を持った白い戦士。
「さらにキングスナイトを召喚‼？」

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

次に現れたのは黄金の鎧を身に纏った騎士。
といっても、今回はクィーンズナイトもいないし、デッキにモンスターも残っていないから完全にバニラだ。
「フン、自慢の絵札の三銃士も効果がなければ意味がないわよ？」
「今回はそれでもいいんだよ。俺は戦士族、レベル４のキングスナイトとＨ・Ｃ　ダブルランスでオーバーレイ‼？２体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」
キングスナイトとダブルランスが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこにいたのは赤い鎧を着た王者の風格を漂わせる戦士。
「光を纏て、闇を切り裂く孤高の王者‼？　Ｈ（ヒロイック）ー　Ｃ（チャンピオン）　エクスカリバー‼？」

〈ＨＩＣ　エクスカリバー〉★４　戦士族　光属性
ＡＴＫ２０００

「エクシーズモンスター……」
「ＨＩＣ　エクスカリバーの効果発動!!?シャイニングフォース!!?オーバーレイユニットを２つ使い、このカードの攻撃力は、次の相手のエンドフェイズ時まで元々の攻撃力の倍になる!!?」
　エクスカリバーの周りを漂っていたオーバーレイユニットがエクスカリバーに集まり、エクスカリバーの身体が光り輝いた。

ＨＩＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ２０００→４０００

「攻撃力４０００!?!?」
「バトル!!?ＨＩＣ　エクスカリバーで雷撃壊獣サンダーザキングを攻撃!!?必殺剣　刀光剣影!!?」
「くっ、迎え撃ちなさい!!?雷撃壊獣サンダーザキング!!?グラビティレイ!!?」
　サンダーザキングが三つ首からレーザーを放ち、エクスカリバーを迎撃しようとする。
　しかし、エクスカリバーはその攻撃を全て躱すと空に向けて力強く跳び上がり、一刀の元その全ての首を斬り裂いた。

桜　ＬＰ５０００→４３００

「っ!!?やってくれるわね」
「俺はカードを１枚セットし、ターンエンドだ」
　やれることは全部やった。
　正直に言って、最初に伏せたカードはコンボ前提のカードだったため、ヘルテンペストの影響で現状完全に死に札になっている。

どうにかする手がないわけではないのだが、その可能性を掴めるかはかなり怪しいものだ。
しかも、そのコンボを入れたのも……まぁ、理由はあるのだが、気持ち的な問題で、デッキとしてのシナジーなんて一切ない。
だから後は……宝月の宣言した難題を信じるだけだ。

遊騎　ＬＰ１１００　手札３
ーー▲▲ー　ー
ーーーーー
○　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
桜　ＬＰ４３００　手札４

「私のターン、ドローー!?……なら、宣言通り６つ目の難題といきましょうか。私は紅蓮魔獣ダイーザを召喚!!?」

〈紅蓮魔獣ダイーザ〉☆３　悪魔族　炎属性
ＡＴＫ?

宝月の前に現れたのは翼が生えた小さな赤い悪魔。
だが、あのモンスターの攻撃力は決まっていない。
となればーーー
「紅蓮魔獣ダイーザの永続効果、ディメンジョンイート。このカードの攻撃力と守備力は、ゲームから除外されている自分のカードの数×４００ポイントの数字になる。私の除外されたカード２５枚。よってその攻撃力は!!?」

紅蓮魔獣ダイーザ
ＡＴＫ?→１００００

「!!?・攻撃力１００００!!?・」
ダイーザの身体が膨れ上がり、先程まで戦っていたサンダーザキングよりも大きくなる。
流石に攻撃力１００００は予想外だ。
「さあ、この攻撃力に耐えられるかしら?・バトル!!?・紅蓮魔獣ダイーザでＨ－Ｃ　エクスカリバーを攻撃!!?・ディメンジョンクラッシュ!!?・」
ダイーザの攻撃がエクスカリバーに迫る。
でも……ただの攻撃だけなら耐えられる!!?・
「リバースカードオープン!!?・永続罠、光の護封霊剣!!?・相手モンスターの攻撃宣言時に１度、１０００ライフを払ってその攻撃を無効にする!!?・」

遊騎　ＬＰ１１００→１００

「防がれた、か」
「まぁ予想通りだったからな。自分の除外の数が関係する奴は大体攻撃力をあげるカードだ。それだけなら流石に防げる。それに宝月の手札はほとんど分かってるんだ。デッキにモンスターがいない現状で召喚権を使い、場が空く可能性が高い妖精伝姫―カグヤと怒炎壊獣ドゴランは使ってこないと思っていた」
「まぁ、当然よね。メインフェイズ2、私はカードを1枚伏せてターンエンドよ」
「エンドフェイズ、Ｈ－Ｃ　エクスカリバーの上昇していた攻撃力は元に戻る」

Ｈ－Ｃ　エクスカリバー
ＡＴＫ４０００→２０００

遊騎　ＬＰ１００　手札３
ー－▲△－　－

ーーーーー
○　ー
ーー○ーー
▲ーーーー　ー
桜　ＬＰ４３００　手札３

「俺のターン、ドロー!!?」
自分がドローしたカードを見て、今の自分が取れる手段を考える。
何とか耐えることは出来た。
だが、宝月のフィールドには攻撃力が１００００にまで高められたダイーザがいる。
俺のデッキはモンスターとの戦闘を基本としているため、効果破壊などが出来るモンスターは少ない。
その上、宝月には伏せカードがある。
そして、今目に見えているカードだけでは、現状を打開出来ないのが分かる。
なら、俺に出来そうなことはーーー
「……ねえ?何で諦めようとしないの?」
「ん?」
考えを巡らせる俺を見て、宝月が思わずと言った風に口を出す。
「極論を言ってしまえば、このデュエルの結果なんて意味がないわ。私が気に入らなければ、やっぱりアンタを認めないし、師匠になったとは言え経った2日前に出会った相手にそこまで入れ込むことなんて、無いじゃない」
真剣な表情で自分の思いを真っ直ぐに俺に伝えてくる宝月を見て、俺は、少しだけ、話す気がなかった本音を話すことにした。
「正直に言うと、宝月の言う通りではあると思う。確かに、俺と遊花は偶然に出会っただけの存在。言ってしまえばそれだけになってしまうだろうし、俺の存在がどれだけ遊花に迷惑をかけてしまうのかは、理解しているつもりだ」
「なら、何で……」

「でもな、俺は出会った日の遊花を見て思ったんだ。俺は、確かに今まで積み上げていたものは全て失った。でも、積み上げていたものが崩れても、その土台になっているもの……俺の中に確かに残っているデュエルに対する思いは、遊花の助けになり、遊花にもう1度、楽しいデュエルが出来る道に戻してやれるんじゃないかって」
「っ!!?師匠……」
俺の言葉に後ろで見ていた遊花が泣きそうな声を出す。
そういう風にするために言ったんじゃないんだから、泣くのは勘弁してほしいのだが……まあ、クサいことを言ってる自覚はある。
「遊花の何があっても諦めないという願い。俺の身体を動かすのは、義務とか使命じゃない。遊花が俺に見せてくれた絶対に諦めないという意思……それを守るために、俺は退くわけにはいかないんだ!!?」
「っ!!?なら、その覚悟をしっかり見せてみなさいよ!!?スタンバイフェイズ、リバースカードオープン!!?罠発動!!?早すぎた帰還!!?」
「!??」
「その効果により、手札1枚を除外し、除外されている自分のモンスター1体を裏側守備表示で特殊召喚するわ!!?手札の妖精伝姫―カグヤを除外し、私が出すのはメタモルポット!!?」
「メタモルポットだって!??」
「効果は有名だから知っているわよね?このカードがリバースした時、お互いは手札を全て捨てて5枚ドローする。アンタのデッキはもう5枚もない。このカードがリバースした時点で、貴方の負けは決定する!!?さぁ、これが7つ目、最後の難題よ!!?超えられるものなら超えてみなさい!!?」
それは、宝月が始めて見せた感情的な一手だった。
本来なら、今そのカードを使う必要はない。
俺が伏せカードの破壊を狙ったり、ダイーザを超えて攻撃してきた際に使えばいいものだ。
それを除去される可能性もあるタイミングで使ってきた。

これは試されているのだ。
俺の言葉が真実なら、この現状を超えてみせろという。
ならば、それに応えないでどうする!!?
今の手札に無いのなら、例え可能性が僅かであろうともその可能性を手繰ってみせる。
「俺は……諦めない。遊花の師匠として、それだけはするわけにはいかない!!?俺は墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動!!?自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローする。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外する!!?俺はフィールドのHーC　エクスカリバーをEXデッキに戻し、カードを1枚、ドローする!!?」
「……」
ドローしたカードを遊花も宝月も真剣な表情で見てくる。
俺はそのカードを見て、思わず笑顔を浮かべた。
「思いは……繋がった!!?」
「!?」
「行くぞ宝月!!?俺はH・Cダブルランスを召喚!!?」

〈H・C　ダブルランス〉☆4　戦士族　地属性
ATK1700

俺が出したのは2つの槍を持った白い戦士。
そのモンスターは出てくると同時に再び勇ましい雄叫びをあげる。
「H・C　ダブルランスの効果発動!!?召喚成功時に手札・墓地の同名モンスターを表側守備表示で特殊召喚する!!?俺は墓地のH・C　ダブルランスを特殊召喚だ!!?」
「まだ手札に残っていたのね……」
「ただしこのカードはシンクロ素材にできず、このカードをエクシーズ素材とする場合、戦士族モンスターのエクシーズ召喚にしか使用できない」

〈Ｈ・Ｃ　ダブルランス〉☆４　戦士族　地属性
ＤＥＦ９００

もう１体ダブルランスが現れる。
そして俺は正面に手を翳す。
「俺は戦士族、レベル４のＨ・Ｃ　ダブルランス２体でオーバーレイ‼？２体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」
２体のダブルランスが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこにいるのはやはり赤い鎧を着た王者の風格を漂わせる戦士。
「もう１度、俺の思いに応えてくれ‼？光を纏て、闇を切り裂く孤高の王者‼？ＨｰＣエクスカリバー‼？」

〈ＨｰＣ　エクスカリバー〉★４　戦士族　光属性
ＡＴＫ２０００

「ＨｰＣ　エクスカリバー……でも、そのモンスターじゃ届かないわ‼？」
「ＨｰＣ　エクスカリバーの効果発動‼？シャイニングフォース‼？オーバーレイユニットを２つ使い、このカードの攻撃力は、次の相手のエンドフェイズ時まで元々の攻撃力の倍になる‼？」
エクスカリバーの周りを漂っていたオーバーレイユニットがエクスカリバーに集まり、エクスカリバーの身体が光り輝いた。

ＨｰＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ２０００→４０００

「俺は墓地に存在する神剣―フェニックスブレードの効果発動‼？墓

地に存在する戦士族モンスター2体を除外し、このカードを手札に戻す。俺はH・C　ダブルランス2体を除外して神剣―フェニックスブレードを手札に戻し、H―C　エクスカリバーに装備!!?攻撃力を300ポイントアップする!!?」

H―C　エクスカリバー
ATK4000→4300

「その程度じゃ焼け石に水よ!!?」
「さらに魔法カード、ヒロイックチャンス!!?自分フィールド上のヒロイックと名のついたモンスター1体を選択し、このターン、選択したモンスターは攻撃力が倍になる!!?ただし、相手プレイヤーにダイレクトアタックは出来なくなる」

H―C　エクスカリバー
ATK4300→8600

「攻撃力8600!!?それでも届かないわよ!!?」
「いいや、届かせて見せる!!?手札から速攻魔法、異次元からの埋葬を発動!!?お互いの除外されているカードから3枚まで選び、そのカードを墓地に戻す!!?」
「っ!!?ダイーザの攻撃力をそれで下げるつもり?」
「そんなことはしない!!?俺は真っ正面からその難題を超えていく!!?俺は自分の除外から2体のH・C　ダブルランスとタスケルトンを墓地に戻す!!?」
「タスケルトン……ですって?」
「バトル!!?H―C　エクスカリバーで紅蓮魔獣ダイーザを攻撃!!?この瞬間、墓地のタスケルトンの効果発動!!?モンスターが戦闘を行うバトルステップ時、墓地のこのカードをゲームから除外し、デュエル中に1度だけ、そのモンスターの攻撃を無効にする!!?」
「!?そんな行動に何の意味が……」

「意味ならある‼?・これが俺の諦めないという意思だ‼?・モンスターの攻撃が無効になった時、リバースカードオープン‼?・速攻魔法、ダブルアップチャンス‼?・」
「⁉?・」
「攻撃が無効になったモンスターを対象にして発動‼?・このバトルフェイズ中、選択したモンスターはもう1度だけ攻撃でき、その場合、選択したモンスターはダメージステップの間、攻撃力が倍になる‼?・」
「何ですって⁉?・」
「バトル‼?・ＨＩＣ　エクスカリバーで紅蓮魔獣ダイーザを攻撃‼?・」
　エクスカリバーがダイーザに向かって剣を振るうがダイーザの身体に弾かれる。
　しかし、それでも諦めずエクスカリバーは何度もダイーザに剣を振るう。
「ダメージステップ‼?・ダブルアップチャンスの効果、ＨＩＣ　エクスカリバーの攻撃力を倍にする‼?・」

ＨＩＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ８６００→１７２００

「攻撃力……１７２００ですって⁉?・」
「行け‼?・ＨＩＣ　エクスカリバー‼?・必殺剣　二の太刀‼?・快刀乱麻‼?・」
　エクスカリバーがもう1度剣を構え、集中する。
　すると、エクスカリバーの剣に光が集まり、そのままエクスカリバーがダイーザに向かって突撃し、通り過ぎるとダイーザの身体は完全に両断されていた。
「っ……これが、アンタの覚悟……か」

桜　ＬＰ４３００→０

ーーーーーーー

「師匠!!?桜ちゃん!!?」

デュエルが終わり、公園に静けさが戻る。

デュエルが終え、一息ついている俺達に遊花が駆け寄ってくる。

その姿を眺めながら、俺は宝月に声をかけた。

「お前から見て、俺は信頼するに値したか?」

「……あんなの見せられたら、認めないわけないでしょ?突破する手段なんて、いくらでもあったハズ。それをあんな真正面から突破してくるような人を、信じないわけないじゃない……私のデュエルも認めてくれたし」

「……そうか、ありがとう」

「……フン」

少し頬を赤らめながら、宝月がそっぽを向く。

……俺も、少し前に進めただろうか?

俺はデッキの中から1枚のカードを取り出して眺めた。

ダブルアップチャンス……遊花の諦めない姿勢を見て、何となく気になって入れてしまったカードだ。

おかげで何のシナジーもないタスケルトンまで入れることになったが、それでも、このカードが無かったら先程の結果には辿り着けれなかっただろう。

……俺はこのカードが似合う者になれるだろうか?

そんなことを考えている俺を横に遊花が宝月に嬉しそうに話し始める。

「これで、桜ちゃんも師匠のこと認めてくれましたよね?ね?」

「……認めるわよ、遊花の言ってたことは、確かに間違いじゃなかったわ」

「そうだよね、そうだよね!!?師匠、今夜はお祝いです!!?帰ったら美味しい物をいっぱい食べましょう!!?」

そういって興奮気味に話す遊花に、宝月は首を傾げながら問いかけ

る。
「ん、帰ったら？何で遊花がそいつと一緒に食べることになってるのよ？」
「……あ」
宝月の質問に、遊花がだらだらと冷や汗を流し始める。
……話してなかったのかよ、その話。
それを見て、宝月は何かに気付いたのか明らかに目が笑ってない笑顔で遊花に近づいた。
「ねぇ、遊花。私に何か隠してること、あるわよね？」
「ひゃぅ⁉？べ、別にか、隠してることにゃんて、ないよ？」
「つべこべ言わず、全部話しなさい‼？」
「へぅ‼？ごめんなさーい‼？」
ああ、やっぱり面倒なことになった。
迂闊な愛弟子の存在に、俺は頭を抱えるのだった。

ーーーーーーーー

「バッカじゃないの‼？本当にバッカじゃないの⁉？アンタのその頭の中には何が詰まってるのよ⁉？」
「ひぅっ‼？」
結局、宝月から俺が遊花の家に居候しているということも含めて全て喋らされた俺達は、仲良く公園で正座させられ、仁王立ちをしている宝月に怒られていた。
まあ、普通はこういう反応になるわな。
「アンタもアンタよ‼？そこは野宿でもなんでもするべきでしょ⁉？なんで弟子の家に居候してるのよ‼？普通逆でしょ⁉？」
「だから、俺も最初は野宿しようとしたんだって。そしたら遊花が……」
「師匠を野宿なんてさせられません‼？そうするなら私だって野宿します‼？」
「……と言って聞かなくてな。俺は野宿でいいからマジで宝月から

何とか言ってやってくれ」
「遊花〜」
宝月が情けない声を出す。
まあ、友人が変な男を自分の家に泊めていたらそりゃ心配にもなるだろう。
隣にいる遊花を見ると、絶対に意思を曲げませんとばかりに胸の前で両手を握っている。
宝月や俺の言い分の方が間違いなく正しいのに何で自信満々なんだろう、この弟子は。
そこから宝月も色々な言葉をかけていくのだが、意思の強さでこの不屈の心を持つ遊花に勝てるわけもなく俺の時のようにやはり諦めさせられていた。
本当に何なんだろうこの弟子は？
その意思の強さがあるならやっぱり俺が師匠である必要とか無くないか？
「でも、実際そいつと2人暮らしっていうのは不味いわよ？ウチのお母さんの追求とかどうやって躱す気なのよ？私からの追求すら誤魔化せないのに……私はまぁ、百歩譲ってソイツの同居は認めてあげるけど、お母さんが見たら間違いなく通報よ」
「うぐっ、それは……桜ちゃん〜」
宝月の言葉に遊花が初めて詰まり、情けない声を出す。
いや、実際問題それは勘弁してほしい。
これ以上冤罪による余罪が増えるのは勘弁だ。
そんな遊花を見て、宝月は何かを考える仕草をすると、こちらをちらちらと見る。
どうかしたのかと首を傾げていると、宝月は少し声を上擦らせながら口を開いた。
「し、仕方ないわね……なら、私も一緒に遊花の家に住んであげる」
「はあっ⁉？」
「桜ちゃんも家に来てくれるんですか⁉？」
宝月のあまりの言葉に俺は驚愕の声をあげ、遊花は嬉しそうに目を

輝かせる。
「待て待て‼?・何でそうなった⁉?」
「元々、遊花が1人暮らしを始めた頃に、そういう話しが出てたのよ。やっぱり女の子な1人暮らしは不安だからって。だから、私が一緒ならお母さんの視察も、私が定期報告すれば大丈夫になるハズだわ。最悪視察が来る時も連絡は来るでしょうから、その時にはアンタに席を外して貰えばいいだけだし」
「桜ちゃん‼?・ナイスアイディアだよ‼?・それなら全部解決だよ‼?・桜ちゃんが来てくれるのもすっごく嬉しいもん‼?・」
両手を上げて喜ぶ遊花を見て、俺は頭を抱えたくなる。
そんな俺を見て、宝月はさらに言葉を続ける。
「それに、私が一緒にいれば遊花に変なことしないか、直接監視出来るしね。デュエルでのアンタのことは確かに信頼したけど、それとこれとは話しが別よ」
そういってくる宝月に俺は何も言えなくなる。
確かに、宝月が監視してるなら、分からなくて変な冤罪をかけられる可能性は減るのか？
いや、でもなぁ……
うんうんと考える俺を見て、宝月が少し寂しそうに目を伏せる。
「何よ……私が一緒じゃ、そんなにダメ？」
そんな風に声をかけてくる宝月に、俺は空を仰いでため息を吐いてから苦笑を浮かべた。
「……分かった、確かに宝月が居てくれた方が冤罪は減るだろうし、遊花も喜ぶだろう。よろしく頼むよ、宝月」
「っ‼?・わ、分かればいいのよ‼?・それじゃあ、これからよろしくね、遊花」
「うん‼?・桜ちゃん‼?・」
仲良く話始める遊花と宝月を見て、俺は少し懐かしい感覚を思い出し、夜空を見上げた。
アイツらと一緒にいた頃は、俺もこんな感じだったのかな？
見上げた夜空には綺麗な一番星が光り輝いているのだった。

第１０話　闇より来たる少女

★

「……ん、もう朝……ん～～～」
軽快に鳴り響く目覚まし時計を止めながら私は自分の部屋のベッドから身体を起こして伸びをする。
起きたばかりで寝ぼけている顔をパチパチと叩いて気合を入れる。
「さてと、早く朝ご飯とお昼のお弁当を作らないと‼?」
私は胸の前で両手を握って気合を入れると急いでクローゼットから制服を取り出し、着替える。
そして身だしなみを整えてから2階にある私の部屋からリビングキッチンに降りていく。
リビングキッチンに入ると、そこには既に先客がいた。
「お、起きてきたか」
「師匠‼?おはようございます‼?」
「ああ、おはよう。悪い、ちょっとコーヒーメーカーを借りたぞ」
「別に言わなくても勝手に使っていいって言ったじゃないですか、だから気にしないでください」
リビングでは師匠がソファーに座ってコーヒーを飲んでいた。
あのコーヒーはお父さんが使っていたコーヒーメーカーで作ったものみたい。
お父さんも誰かが使ってくれた方が喜ぶと思う……私は飲めないし。
私はいつものように机の上に置いてある写真立てに話しかけた。
「お父さん、お母さん、おはよう。今日も師匠や桜ちゃんと一緒に頑張ります」
「……親父さんとお袋さん、今日も喜んでるだろうな。俺がいることには怒ってるかも知れないが」
「大丈夫ですよ、師匠ならお父さん達も怒りません」

「どっから来るんだろうな、お前のその自信は」
そういって苦笑を浮かべながらコーヒーを飲む師匠。
出来ればもっとこうして話していたいけど、そろそろ朝ご飯とお弁当を作らないと……沢山作らないといけないから、時間がかかっちゃうもんね。
「それじゃあ、朝ご飯作っちゃいますね」
「いつも言ってるが、手伝うぞ？」
「いえいえ、私がしたいからしてるので、これぐらいやらせて下さい」
「……そういうこと言われると、本当に立つ瀬がないんだがな」
「師匠は私の師匠なので大丈夫です」
そういいながら朝食とお昼のお弁当を作り始める。
師匠と出会ってから、1週間が経った。
最近の朝は私が1人暮らしをしていた頃より忙しい。
でも、それは全然嫌なことじゃなくて、寧ろ充実していて凄く嬉しい。
こうやって朝から誰かと話せるような生活が送れるようになるなんて思わなかった。
それに、今は師匠だけじゃなくて……
朝ご飯とお弁当のおかずがある程度作り終わった時、2階からドタバタと物音が聞こえだした。
私と師匠はその音を聞いて、顔を見合わせて笑い合う。
しばらくすると、リビングキッチンの扉が勢いよく開いた。
「朝ご飯は‼？」
「第一声がそれかよ」
「おはよう、桜ちゃん」
勢いよくリビングキッチンに入ってきた桜ちゃんに私と師匠はそう返す。
それを聞いて、桜ちゃんは気にもしないように師匠に手を振る。
「別にいいじゃない、お腹空いたんだから」
「そうだとしても急ぎすぎだろ。ドスドスいわせながら降りてくるとか、ドゴランかお前は」

「誰が壊獣よ‼?」
「まあまあ」
桜ちゃんが師匠と戦った次の日、早速桜ちゃんは家に引っ越してきた。
といっても、必要最低限の荷物を移動してきただけで、まだ完全に全部が移動したわけじゃないけど。
流石に毎日接しているからか、桜ちゃんの師匠への態度も、かなり丸くなった。
師匠は最初から桜ちゃんの態度に関しては気にもしてなかったけど、距離が近くなった理由で1番大きかったのは師匠の境遇を聞いて、桜ちゃんが本気で怒ったからだろう。
あの後、師匠は両親のこととかは話さなかったけど、ほんの少しだけ桜ちゃんに自分の境遇を話した。
そのことで、桜ちゃんは周りの師匠への態度に余程腹が立ったのかその人達を見つけ出してぶん殴りに行くとまで言い出して私と師匠に止められたのは記憶に新しい。
桜ちゃん、優しいから……私の時もそうだったように、聞いてる内に影から攻撃している人達に腹を立てたのだろう。
それからは、桜ちゃんの師匠に接する態度は、多分私と話す時ぐらい軟化した気がする。
「それじゃあ朝ご飯食べよう?」
「運ぶのは流石に手伝わせて貰うぞ?」
「それじゃあお言葉に甘えて……」
「あ、私も手伝うわよ‼?」
「うん、桜ちゃんもお願い」
そういって皆で朝食を準備する。
この瞬間が、私は1番好きだ。
なんだか、失くしてしまった時間が戻ってきたみたいで……ちょっとだけ寂しいけど、それでもやっぱり嬉しい。
『いただきます』
皆で挨拶をしてから食べ始める。

「ん～今日も遊花のご飯は美味しいわね」
「あはは、ありがとう、桜ちゃん」
桜ちゃんが満面の笑みを浮かべるので、私も凄く嬉しくなる。
そんな桜ちゃんを見て、師匠が口を開く。
「宝月は自分で作ったりしないのか？」
「別に作らないわけじゃないけど、遊花が作るのより美味しくないもの。それなら食べてる方がいいわ」
「言い切ったな。まあ、お前が今のこの家で1番食ってるわけだしな」
「うるさいわね、アンタがあまり食べないだけでしょ？」
「いや、俺も平均的な成人男性ぐらいは食べてるハズだぞ？それより多い宝月がおかしい」
そんな雑談をしながら穏やかな時間が流れていく。
しばらくそんな雑談を続けていると、「さて」と、師匠が少し真面目な表情をした。
私もそんな師匠を見て、表情を切り替える。
桜ちゃんは、どこか呆れた表情を浮かべているけれど。
「もう俺が師匠になって1週間になるんだが、少しはデュエルが怖くなくなったか？」
「はい‼？毎日、師匠や桜ちゃんが相手になってくれますから」
「まあ、リハビリは必要よね、ずっとまともにデュエルしてなかったんだし」
「それに関しては俺も少し耳が痛い話なんだが……」
「結束はやらなかったんじゃなくて、出来なかったんでしょ？なら、そこを気にしたって仕方ないんじゃない？」
「いや、師匠としてはちょっとな」
「……ホント、真面目よね、アンタ達。毎朝こんなミーティングみたいな時間まで作っちゃって」
桜ちゃんが呆れながら焼き鮭を口に入れる。
そう、この時間はいつも行っている今日やることの確認の時間だった。
やっぱり時間は有限だし、私はただでさえデュエルをしていなかっ

た期間があったのだから、こういうこともしっかりと確認しながらやっていこうというのが、私と師匠の決定だった。
まあ、桜ちゃんには呆れられてるけど。
仕切り直すように師匠が口を開く。
「まあとにかく。少しでも慣れてきたのなら、そろそろ次の段階に移るべきなのかもな。勿論、無理は絶対にさせないし、打てる手は全部打つつもりだが」
「アンタってかなり過保護よね？」
「この次の段階っていうのが遊花には1番鬼門だと思ってるからだよ。だが、プロになるなら絶対避けられない道でもある」
「1番の鬼門、ですか？」
「ああ……次の段階なんだが……」
首を傾げる私に、師匠は少し逡巡し、覚悟を決めたように口を開いた。
「どこかのデュエル大会に出る」
師匠のその言葉を聞いた瞬間、私の胸が思いっきり締め付けられた気がした。
身体が震え、動悸が激しくなり、視界がブラックアウトしそうになる。
しかし、予想はついていたからか、師匠はすぐに肩を抑えて軽く背中を撫でながら優しく声をかけてくれる。
「落ち着け、大丈夫。大丈夫だ。お前の大切な人間は、もう誰もいなくなったりしないよ」
ぽんぽんと優しく背中を叩いてくれる師匠に、私はしばらく大きく深呼吸をしてから少しだけ落ち着きを取り戻した。
桜ちゃんはそんな私達の光景を何故か少し悔しそうに見ながら口を開いた。
「……それは確かに必要なことなのよね？」
「間違いなく、な。事業団ならまだしも、プロ決闘者となると特に大会の頻度は多くなる。プロツアーとかもあるしな。だから小さい大会なりなんなりから出てみて始めないといけないんだが……」

師匠がチラッと私の顔色を見て、首を振る。
「やっぱり、まだ無理そうだな」
「すみ、ません……」
「謝る必要なんてない。俺も通った道だしな」
師匠は優しい目をして私の頭を撫でてくれる。
それに対して桜ちゃんが首を傾げた。
「アンタも？」
「……そういえばそこら辺は宝月には話してなかったな。まあ、機会があれば今度話すさ」
「……分かったわ。それで、アンタの時はどう解決したの？」
「俺の時は状況が状況だったから参考になりそうにないな。俺の場合、プロになれなかったたら極端な言い方をすれば家が無くなるところだったしな」
「……なんか凄い物騒な感じの話になって来たんだけど……」
「あ～話してないところがあると面倒だな。かといって俺から話すのも微妙な話だし……そろそろ、俺も向き合うべき、か」
師匠はしばらく考え込むと、私の方を向くと覚悟を決めたように頷いた。
「遊花、後は宝月も出来れば」
「私は完全におまけみたいな扱いね。まぁ、分かってるけど」
「なん、ですか？」
まだ身体が震えている私に師匠は優しい笑みを浮かべながら呟いた。
「今日の放課後、『Ｎａｔｕｒａｌ』に行ってくれるか？」
「『Ｎａｔｕｒａｌ』って、こないだ遊花が話してたカードショップよね？」
「ああ。俺も仕事が終わったら向かう。そこで色々、これからの方針とかも話そうと思う……俺も１度挨拶しに行っときたいしな。遊花の約束を果たすために」
「……わかり、ました」
「……まぁ、まだ焦らなくていい。ゆっくり、乗り越えて歩いていけ

ばいいさ」
そう優しく声をかけてくれる師匠に、私は少しホッとしながらも、やっぱり、まだ過去を振り切れてはいないんだなって、少しだけ、気持ちが重くなった。

ーーーーーーー

「遊花、本当に大丈夫なの？」
「うん、もう平気だよ。ゴメンね、今日は1日迷惑かけちゃって」
「何言ってんのよ。私達、友達でしょ？これぐらい大したことないわ」
「……ありがとう」
放課後。
あの後はすぐにデュエルアカデミアに行ったのだが、朝の事が尾を引いていたのか今日は講義の内容も全然頭に入ってこなかった。
あまりにもぼんやりとしていたので桜ちゃんにもかなり心配をかけてしまった。
……分かっていたハズだった。
プロ決闘者になるのであれば大会に出るのは必須事項だ。
だけど、実際に自分が大会に出る姿が思い浮かぶと、どうしてもダメだった。
お父さんとお母さんがいなくなってしまった時の事を思い出して……苦しくて……辛くて……師匠が優しく声をかけてくれなければ私はあのまま倒れていたかも知れない。
師匠が折角私のことを考えて動いてくれているのに、それに応えれない私自身が嫌になる。
私は、この痛みを乗り越えることは出来るんだろうか？
いや……越えるんだ、絶対。
今の私は、色々なものを背負っている。
お父さん達の願い、島さんの思い、そして師匠の信頼。
だからこそ、それだけは裏切りたくない。
こんな私を救ってくれた師匠に、私が前を向いてくれることをきっ

と望んでくれてるお父さん達のために。
「……よし」
「……あんまり無理するんじゃないわよ」
「えっ？」
思考の海に潜っていた私に桜ちゃんが心配そうな、応援するような、複雑な表情を浮かべていた。
「遊花には、私も、結束も付いてるわ。結束の奴だって、遊花があまり無理しないでいいように色々考えてくれてるみたいだし、きっとアイツが何とかしてくれるわよ」
「桜ちゃん……」
桜ちゃんのそんな言葉に私は思わず頬が緩んでしまった。
だって……
「そんなに師匠のこと信用してくれてるんだ？」
「なっ⁉？べ、別にそういう訳じゃないわよ‼？ただ、アイツが遊花のために色々動いてるのは事実だし、それだったら下手な案でも数うちゃ当たると思っただけだから‼？」
そう言って顔を背ける桜ちゃんを見て、思わず笑いが溢れてしまう。
そっか……そうだよね。
私は、私がこの痛みを超えられるなんて、信じきることは出来ない。
でも、そんな私がこの痛みを乗り越えられるって信じてくれてる、師匠や桜ちゃんを、私は信じればいいんだよね。
「桜ちゃん、本当にありがとう‼？」
「わあっ⁉？だから、いきなり抱きついてくるんじゃないわよ‼？」
顔を真っ赤にして照れている桜ちゃんに抱きつきながら、私は、もう少しだけ頑張れる気がした。

ーーーーーーー

「こ、こんにちは」
「いらっしゃい……おや、遊花君じゃないか」

お店の中に入ると、前来た時と同じようにレジのところで島さんがコーヒーを飲んでいた。
「島さん、し、失礼します」
「ははは、そんなに緊張しなくてもいいんだよ。そちらのお嬢さんはお友達かい？」
「はじめまして。遊花の友達の宝月　桜と言います。遊花がお世話になったみたいで、本当にありがとうございました」
「おやおや、これはご丁寧に。島といいます。気軽におじさんとでも呼んでくれていいからね」
「分かりました。でも、遊花みたいに島さんで」
「ははは、いいともいいとも。好きなように呼ぶといい」
そうやってすんなりと島さんと会話をする桜ちゃんを見て、私は思わず驚いてしまう。
そんな私の様子に気付いたのか桜ちゃんがジト目でこちらを見てくる。
「……何よ？」
「桜ちゃん……敬語使えたの？」
「なっ⁉？どういう意味よ、それ‼？」
「だって、師匠に大しては最初から喧嘩売ってたし、その後も『結束』、とか言って、タメ口だし」
「そ、それは、その、最初に強く出ちゃったから、今更態度を改めるなんて、変だし……どう接すればいいか、分かんないし……」
そう言ってごにょごにょと呟き始める桜ちゃんを見て、島さんは面白そうに笑った。
「ははは、これはまた面白いお嬢さんだ。桜君も、遊騎君のことを知っているかい？」
「あ、はい。桜ちゃんも、今私の家に住んでるので」
「成る程ね……うん。遊騎君も、君達が一緒なら、楽しく過ごせてそうだ」
そう言って島さんがうんうんと頷く。
そうだ、それよりも島さんに伝えておかないと……

「あの、島さん」
「ん？どうしたんだい、遊花君？」
「今日、お仕事が終わったら師匠がこの店に来るってーーー」
「本当？」
「ーーーえっ？」
　聞こえて来たのは島さんではない人の声。
　声が聞こえてきた方向を見ると、お店の入り口にメガネをかけた黒髪でショートボブの小学生程度の少女がいた。
　その子の目は真っ直ぐに私を射抜いている。
　その少女を見て、島さんも少し驚いた表情を浮かべた。
「ちょうどいいタイミングで来たものだね。いらっしゃい。ところで、そのメガネはどうしたんだい？」
「ん、変装用」
「……それは本当に変装になっているのかい？」
「バレてないから問題ない」
「そういう問題ではないと思うけどね」
　島さんが呆れた声をあげている間に少女は私の前に歩いてくる。
「遊騎、来る？」
「えっ？あ、うん……お仕事が終わったら、だけど」
「そう……貴方が遊騎の弟子？」
「えっと、一応、そう、だよ？」
「そう」
　私の返答にポツポツと答える少女。
　その少女の表情はまるで人形のようにさっきから一切変わらない。
　すると、少女はいきなりデュエルディスクを起動した。
「えっ？」
「遊騎の弟子なら、デュエル、しよ？」
「えっと、あのーーー」
「ちょっと待った‼？」
　どう対応しようか迷っていると私と少女の間に桜ちゃんが割り込んだ。

桜ちゃんは屈みこんで少女と目線を合わせながら問いかける。
「あのね、貴方が誰だか知らないけど、いきなりデュエルなんて言われたら驚くでしょ？」
「？そう？」
「普通は驚くの‼？それに、その子はーーー」
「でも、遊騎の弟子、興味ある。なら、デュエルするのが1番」
「あーもう‼？人の話を聞きなさいよ‼？分かったわ‼？そんなにその子とやりたいんだったら私に勝ってからにしなさい‼？」
「さ、桜ちゃん⁉？」
桜ちゃんが相手って、しかもその目、小さい子だからって手加減する気とか無いよね？
トラウマ植え付ける気だよね？
そんな桜ちゃんに少女は顔を向ける。
「貴方に勝てば、いい？」
「ええ。勝てたらこの子とデュエルしてもいいわ」
「ん、分かった。なら、早く終わらせよう」
「なっ⁉？」
少女の言葉に桜ちゃんの額に青筋が浮かぶ。
あわわ、どうすれば……慌てた様子で島さんの方を見るが、島さんは呆れた表情を浮かべるだけだった。
「彼女は相変わらずだね」
「し、島さん‼？止めなくていいんですか⁉？」
「何、すぐに終わるからね。それよりも、遊花君もデュエルの準備をしておいた方がいいよ。彼女も手加減する気はなさそうだから」
「……えっ？」
島さんの言葉に私は思わず驚きの声をあげる。
だって、その言い方はまるでーーー
「早く、やろう？」
「舐めてくれるわね……後悔させてあげるわ‼？」
ーーー桜ちゃんが負けることが分かってるみたいだ。

『決闘!!?』

桜　　ＬＰ８０００
少女　　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

桜　　ＬＰ８０００
少女　　ＬＰ８０００

「先攻は私……召喚僧サモンプリーストを召喚」

〈召喚僧サモンプリースト〉☆４　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ８００

少女の前に現れたのは黒いローブを纏った魔法使い。
しかし、その魔法使いは直ぐにその場に座り込む。
「召喚僧サモンプリーストは召喚時、守備表示になる」

召喚僧サモンプリースト
ＡＴＫ８００↓ＤＥＦ１６００

「召喚僧サモンプリーストの効果、１ターンに１度、手札から魔法カード１枚を捨てて、デッキからレベル４モンスター１体を特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン攻撃できない。私は終わりの始まりを捨てて、デッキから終末の騎士を特殊召喚」

〈終末の騎士〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１４００

サモンプリーストが呪文を唱えると、サモンプリーストの横に黒い騎士が現れる。
「終末の騎士の効果、召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから闇属性モンスター1体を墓地へ送る。　私はデッキからゾンビキャリアを墓地に送る。そしてレベル4、召喚僧サモンプリーストと終末の騎士でオーバーレイ。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚」
サモンプリーストと終末の騎士が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこにいるのは王者の風格を持つグレムリン。
「群れを伴い進撃せよ、ランク4、キングレムリン」

〈キングレムリン〉★4　爬虫類族　闇属性
ＡＴＫ２３００

「キングレムリンの効果、王者の呼び声。オーバーレイユニットを1つ使い1ターンに1度、デッキから爬虫類族モンスター1体を手札に加える。私はデッキからカゲトカゲを手札に加える」
キングレムリンの咆哮が響き、少女の手札にカードが加わる。
「私はカードを2枚伏せてターンエンド」

桜　ＬＰ８０００　手札５
ー－－－－－　－
－－－－－－
○　－
－－－－－－
－－▲▲－　－
少女　ＬＰ８０００　手札２

少女のターンは凄く淡々と進んでいった。
それを見て桜ちゃんが少し顔を引き攣らせる。

「なんだか不気味ね……さっさと終わらせてあげるわ!!?私のターン、ドロー!!?アンタのキングレムリンをリリースしてアンタのフィールドに怒炎壊獣ドゴランを攻撃表示で特殊召喚よ!!?」
「!!?」

〈怒炎壊獣ドゴラン〉☆8　恐竜族　炎属性
ＡＴＫ３０００

キングレムリンのいた場所に地割れができ、キングレムリンが呑み込まれ、その代わりに巨大な地竜が現れた。
これ、桜ちゃんのお得意のパターンだ。
「さらに相手フィールドに壊獣モンスターがいるため、手札から壊獣は攻撃表示で特殊召喚することが出来る!!?私の切り札の登場よ!!?あなたの全てを壊してあげる!!?雷撃壊獣サンダーザキング!!?」

〈雷撃壊獣サンダーザキング〉☆9　雷族　光属性
ＡＴＫ３３００

「攻撃力３３００……」
「そしてこれが私の相棒よ!!?月より来たる永遠の姫!!?妖精伝姫(フェアリーテイル)―カグヤを召喚!!?」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆4　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ１８５０

現れたのは月のマークが入っている扇子を持ったお姫様。
桜ちゃんが相棒と呼ぶモンスターだ。
「妖精伝姫―カグヤの効果発動!召喚に成功した時、デッキから攻撃力１８５０の魔法使い族モンスター1体を手札に加える。私は2体目の妖精伝姫―カグヤを手札に加えるわ。そしてこのカードは攻撃表示で特殊召喚出来るわ!!?来なさい、ジェスターコンフィ!!?」

〈ジェスターコンフィ〉☆1　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０

現れたのは球に乗った道化師のモンスター。
「攻撃力０のモンスターを攻撃表示？何か効果がある？」
桜ちゃんの行動に少女は首を傾げている。
こ、この流れは完全に桜ちゃんはやる気だ。
「魔法カード、左腕の代償‼？このカード以外の自分の手札が２枚以上の場合、その手札を全て除外し、このターン魔法・罠カードをセットできなくなる代わりに発動‼？デッキから魔法カード１枚を手札に加えるわ。私が手札に加えるのはヘルテンペスト‼？」
「‼？成る程……」
「バトルよ‼？ジェスターコンフィで怒炎壊獣ドゴランを攻撃‼？スーサイドマジック‼？」
コンフィはドゴランに火炎を吐かれ、そのまま消滅する。

桜　ＬＰ８０００→５０００

桜ちゃんのライフが大きく減る。
そしてそれはあのカードの発動の合図。
「３０００ポイントの戦闘ダメージを受けた時、速攻魔法発動、ヘルテンペスト‼？このカードは３０００ポイント以上の戦闘ダメージを受けた時に発動する事ができるわ。お互いのデッキと墓地のモンスターを全てゲームから除外する‼？」
桜ちゃんがそう宣言するとお互いのデッキ、墓地からモンスターが一気にいなくなる。
そしてまだ桜ちゃんの戦術は終わっていない。
「そしてデッキから除外されたネクロフェイスの効果発動‼？このカードがゲームから除外された時、お互いはデッキの上からカードを５枚ゲームから除外する‼？」

「なら、こちらもデッキから除外されたネクロフェイスの効果発動。このカードがゲームから除外された時、お互いはデッキの上からカードを5枚ゲームから除外する」
「‼?あら、貴方のデッキにも入っていたのね。それは好都合だわ」
少女のデッキが更に減り、残りデッキはあと2枚になってしまった。
ほ、本当に容赦がなさすぎるよ桜ちゃん‼?
「そして妖精伝姫―カグヤの効果発動‼?アンリーゾナブルディマンド‼?1ターンに1度、相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動‼?相手はそのモンスターの同名カード1枚を自身のデッキ・エクストラデッキから墓地へ送ってこの効果を無効にできる。墓地へ送らなかった場合、このカードと対象のモンスターを持ち主の手札に戻す。因みにこの効果は相手ターンでも発動できるわ。対象は勿論怒炎壊獣ドゴランよ」
「私のデッキに怒炎壊獣ドゴランはいない」
「怒炎壊獣ドゴランと妖精伝姫―カグヤは手札に帰るわ。そしてこれで貴方の場はガラ空きよ。雷撃壊獣サンダーザキングでダイレクトアタック‼?グラビティレイ‼?」
「……」

少女　ＬＰ８０００→４７００

サンダーザキングの三つ首からレーザーが放たれ、少女のライフが大きく削られる。
しかし、少女はそれでも表情が動かない。
あんなに追い詰められているのに、どうして……
桜ちゃんも不気味に思ったのか、その感覚を拭い去ろうとするように顔を大きく振る。
「私はこれでターンエンド‼?さぁ、勝てるものなら勝ってみなさい‼?」

桜　ＬＰ５０００　手札２
ーーーーーー　ー
ーー○ーー
　　ー　　ー
ーーーーーー
ーー▲▲ー　ー
少女　ＬＰ４７００　手札２

「私のターン、ドローー」
「さぁ、貴方のデッキは後１枚よ。どうするかしら？」
「……名前」
「えっ？」
「名前、教えて？」
「……私のってこと？」
「ん」
「……宝月　桜よ」
「宝月　桜……ん、覚えた」
少女の突然の言葉に桜ちゃんが首を傾げる。
リベンジの為に名前でも聞いてるのかな？
そんなことを思った私にーーー
「桜。貴方、強い。戦術も、凄く面白い」
「えっ？あ、うん。ありがとう？」
「だからーーー

ーーー私に勝つの、楽しみにしてる。今日は私の勝ちだから」
「……えっ？」
ーーー圧倒的な自信を持ってその言葉は紡がれた。
「召喚……終焉の精霊（ジ・エンド・スピリット）」

〈終焉の精霊〉☆４　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ？

現れたのは黒い精霊のような姿をした小さな悪魔。
しかし、その身体は急激に膨れ上がる。
「終焉の精霊の永続効果、グリーフアブソーブ。このカードの攻撃力・守備力は、ゲームから除外されている闇属性モンスターの数×３００ポイントになる。私の除外されてる闇属性モンスターは２１枚」
「わ、私は７枚……」
「合計２８枚。つまり……」

終焉の精霊
ＡＴＫ？→８４００

「攻撃力……８４００」
「因みに伏せカードに闇次元の解放と今引いたのがＤＤＲ。除外されている闇属性モンスターを特殊召喚出来るから手札に引けていなくてもヘルテンペストを使われた時点で勝ちは決まってた」
淡々と告げる少女に、桜ちゃんは悔しそうに顔を伏せる。

しかし、直ぐに頭を振って少女に笑いかけた。
「次は勝つわ」
「ん、楽しみにしてる。バトル。終焉の精霊で雷撃壊獣サンダーザキングを攻撃。ジエンドオブカタストロフィ」
サンダーザキングより遥かに大きくなった終焉の精霊はサンダーザキングを片手で握り潰した。

桜　　ＬＰ５０００→０

ーーーーーーー

「本当に、容赦が無いね。まあ、桜君もかなりのものだったし、彼女が気に入ったのなら、才能はあるってことだね」
「嘘……」
私は目の前の光景が信じられなかった。
桜ちゃんはデュエルアカデミアでトップ１０に入る実力者だ。
そのことは師匠だって認めていたし、実際師匠もかなり苦戦して勝利した。
しかし、今目の前にいる少女はそんな桜ちゃんのほぼ最高といえる動きを受けながらもあっさりと勝ってしまった。
「勝ったから、いい？」
「……デュエルでの約束を違えたりなんてしないわ」
「ん、ありがとう、桜。凄く楽しかった」
そういって少女は相変わらずの無表情で桜ちゃんにお礼を言うと、デュエルディスクを構えて私の前に立つ。
「これで、貴方と戦える」
「っ⁉？」
そう少女が言うと、一瞬、少女の身体から黒い何かが見えた気がした。
私もデュエルディスクを起動して構える。
この人は、強い。

油断したら、すぐにやられる。

「……行きます!!?」

「お手並み、拝見」

『決闘!!?』

遊花　ＬＰ８０００

少女　ＬＰ８０００

第11話　呪われし邪念

★

遊花　ＬＰ８０００
少女　ＬＰ８０００

「先攻をいただきます。私はクリバンデッドを召喚します‼?」

〈クリバンデッド〉☆3　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

私の前に現れたのは盗賊のような姿をした黒い毛玉のモンスター。
クリバンデッドも少女に向かって精一杯威嚇している。
この少女は強い。
だから、今できる精一杯の全力で挑む‼?
「私はカードを2枚伏せて、エンドフェイズにクリバンデッドの効果発動‼?このカードをリリースしてデッキの上から5枚めくり、その中から魔法・罠カード1枚を手札に加えて残りを墓地におきます」
威嚇していたクリバンデッドの姿が消える。
その代わりに私はデッキの上から5枚のカードをめくって中から1枚のカードを手札に加えた。
「私はクリボーを呼ぶ笛を手札に加えてターンエンドです」

遊花　ＬＰ８０００　手札3
ー ー ▲ ▲ ー　ー
ー ー ー ー ー ー
ー　ー
ー ー ー ー ー ー
ー ー ー ー ー ー ー
少女　ＬＰ８０００　手札5

「私のターン、ドロー。フィールド魔法、混沌空間（カオスゾーン）を発動」
少女がそう宣言すると、辺りの風景が様々な場所に渦巻きが存在する青白い不気味なフィールドに書き換えられる。
なんだか……少し怖い。
「私はレスキューラビットを召喚」

〈レスキューラビット〉☆４　獣族　地属性
ＡＴＫ３００

少女が呼び出したのはヘルメットを被った可愛いうさぎさんだった。
でも、油断してはいけない。
ああいうモンスターこそ、厄介な効果を持っているのだから。
「レスキューラビットの効果、フィールドのこのカードを除外して、デッキからレベル４以下の同名の通常モンスター２体を特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに破壊される」
うさぎさんがジャンプして混沌空間にある渦巻きに入っていく。
代わりに現れたのは２体の禍々しい闇を纏った見たことのない岩石の戦士だった。
「私はヴェルズヘリオロープを２体特殊召喚」

〈ヴェルズヘリオロープ〉☆４　岩石族　闇属性
ＡＴＫ１９５０

「ヴェルズ……？」
見たこともない禍々しいモンスターに私は困惑する。
そんな私の耳に不気味な声が響いてくる。
『ヨノモシレサイア　カムドイ　ニウオウヨジガラレワ　イロシモオ』

「えっ？」
「遊花？どうかしたの？」
何か声が聞こえてきた気がしてあたりを見回す。
そんな私を見て、桜ちゃんが首を傾げる。
「今、何か声が聞こえなかった？何を言ってるのかはよく分からなかったけど」
「はぁ？私は何も聞こえなかったけど……ねぇ、遊花。本当に大丈夫？まだ体調が悪いんじゃ……」
「あ、ううん、大丈夫。気のせいだったみたい」
桜ちゃんが心配そうにこちらを見るのを見て、慌てて首を振る。
……気のせい？
でも、確かに何かが聞こえたような……
「……成る程……悪ふざけが過ぎる、後でお仕置き」
「えっ？」
「なんでもない。混沌空間の効果、モンスターが表側表示で除外される度に、1体につき1つこのカードにカオスカウンターを置く」

混沌空間
カオスカウンター0→1

少女が何かを呟く。
一体何を言ったんだろう？
というか、あの子が何かを呟いてから、あのモンスター達の身体が震えてる気がするんだけど……
「バトル。1体目のヴェルズヘリオロープでダイレクトアタック。テンプテーションブレイク」
「うっ‼？」

遊花　ＬＰ８０００→６０５０

「追撃。2体目のヴェルズヘリオロープでテンプテーションブレイク

ダブル」
「くぅ!!?」
遊花　ＬＰ６０５０→４１００
２体のヘリオロープに斬りつけられ、ライフが一気に半分近く削られる。
少女はそれを見て少し考えると手を前にかざした。
「私は２体のレベル４ヴェルズモンスター、ヴェルズヘリオロープ２体でオーバーレイ。２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚」
２体のヘリオロープが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から青い翼を持つ漆黒の龍が舞い降りた。
「希望を消し去る暴龍、ランク４、ヴェルズオピオン」
〈ヴェルズオピオン〉★４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２５５０
「また、ヴェルズモンスター……」
「ヴェルズオピオンの永続効果、イビルソートカース。オーバーレイユニットを持っているこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、お互いにレベル５以上のモンスターを特殊召喚できない」
「!!?」
私のデッキのモンスターは基本的にはレベル１モンスターだ。
しかし、最近私のデッキにはアンチホープが加わった。
あのモンスターのオーバーレイユニットがある限りは、アンチホープを出すことは叶わない。
「さらにヴェルズオピオンの効果発動、イビルソートインベーション。オーバーレイユニットを１つ使い、１ターンに１度、デッキから『侵略の』魔法・罠カード１枚を手札に加える。私はデッキから侵略の汎

発感染を手札に加える。侵略の汎発感染は自分フィールドの全てのヴェルズモンスターに、ターン終了時までこのカード以外の魔法・罠カードの効果を受けなくする効果がある」
「っ!??魔法・罠に対する耐性まで……」
「私はカードを2枚セット。どう突破してくるか、期待してる。ターンエンド」

遊花　ＬＰ４１００　手札３
ー－▲▲ー　ー
ー－－－－
　　○　　ー
ー－－－－
ー－▲▲ー　▽
少女　ＬＰ８０００　手札３

「私のターン、ドロー!!?」
手札は悪くない、さっきのクリバンデッドで墓地に落ちたカードもある……突破出来る!!?
「私は金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆1　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のモンスター。
「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル1モンスターを特殊召喚します!!?」
「残念だけど、その効果は通さない。リバースカードオープン。永続罠、エンペラーオーダー。モンスターが召喚に成功した時に発動するモンスターの効果が発動した時、その発動を無効にする」
「っ!!?」
「その代わり、発動を無効にされたプレイヤーはデッキから1枚ド

ローする」
「くっ……ドロー‼?まだ、動けます‼?私は手札からサクリボーを捨てて、魔法カード、ワンフォーワンを発動‼?デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚します‼?おいで、クリボルト‼?」

〈クリボルト〉☆1　雷族　光属性
ＤＥＦ２００

出て来たのは電気を出している黒い球体のモンスター。
そして私はクリボルトの効果をすぐに使用する。
「クリボルトの効果発動‼?自分のメインフェイズ時にエクシーズ素材を持っているエクシーズモンスター1体を選択して発動できる。選択したモンスターのオーバーレイユニットを1つ取り除き、自分のデッキからクリボルト1体を特殊召喚する。私はヴェルズオピオンのオーバーレイユニットを1つ使って、おいで‼?クリボルト‼?」

〈クリボルト〉☆1　雷族　光属性
ＤＥＦ２００

オピオンのオーバーレイユニットの1つが私のフィールドに飛んでくると、その光がクリボルトに変わる。
それを見て、少女は感心したように頷く。
「お見事。でも、ヴェルズオピオンの効果は無くなってもモンスター自体は残ってる」
確かに攻撃力２５５０のモンスターを残しておくのは私の残りライフからもあまり良くない。
なら、ここは少し無理をしてでも‼?
「速攻魔法‼?クリボーを呼ぶ笛‼?その効果で自分はデッキからクリボーまたはハネクリボー1体を選択し、手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができる‼?私が選ぶのは特殊召喚‼?いつだって、私と共に‼?ハネクリボー‼?」

〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

現れるのは天使の羽を持つ私の相棒。
相棒は私に寄り添うと警戒するようにオピオンを見た。
相棒を少女は興味深そうな目で見る。
「……精霊」
「精霊？」
「気付いてない？なら、今は気にしなくていい」
「う、うん」
少女の言葉も気になるけど、今はそれよりもこの状況の突破が先だ。
どうしよう、やっぱりヴァレルソードドラゴンを出すべきだろうか？
そう私が思った時、私の墓地が暗く光った気がした。
もしかして、今は自分を使えって言ってるの？
ハネクリボーも私にこくこくと頷いている。
な、何だかよく分からないけど、それだったら‼？
「私はフィールドに存在する2体のクリボルト、金華猫、ハネクリボー、4体のレベル1モンスターを墓地に送ることで墓地からモンスターを特殊召喚します‼？」
「‼？聞いたことがない召喚条件」
私のモンスター達が粒子に変わる。
そしてその粒子は重なり合い、大きな闇の巨人が、私を守るように現れた。
「おいで‼？絶望を統べる優しき神‼？絶望神アンチホープ‼？」
〈絶望神アンチホープ〉☆12　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ５０００

現れたアンチホープを見て、無表情だった少女が少しだけ目を見開いた気がした。
「流石に驚いた……闇のカードまで使えるんだ」
「闇のカード？」
確かにアンチホープの属性は闇属性だけど……
首を傾げる私に少女は本当に興味深そうな目で私を見ながら、私に聞こえない声で何かを呟いた。
「侵食されてる気配もない……精霊……闇のカード……それをどちらも扱えるのはとても稀有。ヘリオロープの言ってたのはそういうこと？」
「あ、あの……ターンを進めても、いい？」
「……ゴメン、少し考えごとしてた。封じられてたレベル５以上の特殊召喚で突破してきたのは見事。続けていい」
「う、うん。それじゃあ、バトル‼？絶望神アンチホープでヴェルズオピオンを攻撃‼？ホープブレイクパニッシャー‼？」
「迎え撃って、ヴェルズオピオン。暴虐のクリエイションクライシス」
オピオンが口から闇を纏った氷のブレスをアンチホープに向かって吐く。
アンチホープはその闇を吸収しながら、背中の大剣でヴェルズオピオンを斬り裂いた。

少女　　ＬＰ８０００→５５５０

少女のライフが大きく削られる。
よし、取り敢えずこれで一歩進んだ。
「私はこれでターンエンド」

遊花　ＬＰ４１００　手札１
ー－▲▲－　－
－－○－－
－　　－

ーーーーー
ーー△▲ー　▽
少女　ＬＰ５５００　手札３

「私のターン、ドロー。オピオンを突破したのは見事だった。でも、次はオピオンに向けた貴方の力がそのまま貴方を襲う」
「えっ？」
「私はヴェルズケルキオンを召喚」

〈ヴェルズケルキオン〉☆４　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ１６００

現れたのは両手に杖を持った魔術師のようなヴェルズモンスター。
そして少女はさらに動きを見せる。
「ヴェルズケルキオンの召喚時、手札にあるカゲトカゲの効果発動。自分がレベル４モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚できる。それに対してエンペラーオーダーの効果、モンスターが召喚に成功した時に発動するモンスターの効果が発動した時、その発動を無効にし１枚ドローする」
「っ⁉？ということはレベル４モンスターを召喚する度に１枚ドロー出来るってことですか」
「その通り。さらにヴェルズケルキオンの効果、自分の墓地のヴェルズモンスター１体を除外し、自分の墓地のヴェルズモンスター１体を対象としてそのモンスターを手札に加える。私は墓地のヴェルズヘリオロープ１体を除外してもう１体のヴェルズヘリオロープを手札に加える。モンスターが除外されたことで混沌空間にカオスカウンターが置かれる」

混沌空間
カオスカウンター１↓２

「さらにヴェルズケルキオンには墓地からモンスターを回収する効果を発動したターンのメインフェイズにヴェルズモンスターを1体召喚できる」
「⁉？ということは……」
「私はヴェルズヘリオロープを召喚」

〈ヴェルズヘリオロープ〉☆4　岩石族　闇属性
ＡＴＫ１９５０

再び現れる禍々しい闇を纏う岩石の戦士。
しかし、まだ少女の動きは止まらない。
「ヴェルズヘリオロープの召喚時、手札にあるカゲトカゲの効果発動。自分がレベル4モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚できる。それにチェーンしてエンペラーオーダーの効果、モンスターが召喚に成功した時に発動するモンスターの効果が発動した時、その発動を無効にし1枚ドローする」
そして少女は2体のモンスターに手をかざす。
「私は2体のレベル4ヴェルズモンスター、ヴェルズケルキオンとヴェルズヘリオロープでオーバーレイ。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚」
ケルキオンとヘリオロープが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りるのはオピオンよりも青い翼が残っている漆黒の竜。
「希望を奪い去る邪竜、ランク4、ヴェルズバハムート」

〈ヴェルズバハムート〉★4　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２３５０

「ヴェルズバハムートの効果、イビルソートテンプテーション。1ターンに1度、オーバーレイユニットを1つ使い、手札からヴェルズ

と名のついたモンスター1体を捨てることで相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体のコントロールを、永続的に得る」
「えっ⁉?」
「私は手札からヴェルズマンドラゴを捨てて絶望神アンチホープのコントロールを得る」
バハムートから黒い波動が出てアンチホープの身体を蝕んでいく。
アンチホープは抵抗していたが、次第に抵抗が弱まり少女のフィールドに移動した。
「絶望神アンチホープ⁉?」
私の声に反応してカードから黒い何かが少し溢れた気がした。
しかし、少女はそんなアンチホープのカードを押さえて口を開く。
「貴方があの子を大切にしてるのは分かる。でも、今は私に従ってもらう」
そういうとアンチホープから漏れ出そうとしていた黒い何かが霧散した。
「ふぅ……結構疲れる。そして、これで終わるかな?バトル。絶望神アンチホープでダイレクトアタック。ホープブレイクパニッシャー」
少女の宣言に、アンチホープは抵抗しながらも私に大剣を振るおうとする。
「攻撃宣言時、手札から虹クリボーの効果発動⁉?このカードをそのモンスターに装備し、そのモンスターは攻撃することが出来ません⁉?レインボーガード⁉?」
「ん、防御カードもあったんだ……」
手札から虹色の角を持つ球体が現れてアンチホープの動きを止めた。
危ない、自分のモンスターにやられるところだった。
「なら、ヴェルズバハムートで……ん?攻撃出来ない?」
「絶望神アンチホープの永続効果です。このカードがモンスターゾーンに存在する限り、他の自分のモンスターは攻撃できません」
「むぅ、私の場に来てもあの子を守るとは……絶望神アンチホープ

は虹クリボーで攻撃出来ないし、なかなか面倒。私はカードを1枚伏せてターンエンド」

遊花　ＬＰ４１００　手札０
ーー▲▲△　ー
ーーーーー
　ー　　○
ーー○ーー
ー▲△▲ー　▽
少女　ＬＰ５５００　手札３

なんとか耐えることは出来たけど、私の手札は０。
このままじゃそう遠くない内にやられる。
「私のターン、ドロー!!?っ……ターンエンド」

遊花　ＬＰ４１００　手札１
ーー▲▲△　ー
ーーーーー
　ー　　○
ーー○ーー
ー▲△▲ー　▽
少女　ＬＰ５５００　手札３

「出せるカードを引けなかったみたいだね。私のターン、ドロー。魔法カード、闇の誘惑。デッキから2枚ドローして、その後手札にある闇属性モンスター1体を除外する。私は2枚ドローし、終末の騎士を除外する。モンスターが除外されたことで混沌空間にカオスカウンターが置かれる」

混沌空間
カオスカウンター2→3

「私はヴェルズサンダーバードを召喚」

〈ヴェルズサンダーバード〉☆４　雷族　闇属性
ＡＴＫ１６５０

召喚されたのは漆黒の身体を持つ鳥のようなモンスター。
そして少女はさらに動きを見せる。
「ヴェルズサンダーバードの召喚時、手札にあるカゲトカゲの効果発動。自分がレベル４モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚できる。それにチェーンしてエンペラーオーダーの効果、モンスターが召喚に成功した時に発動するモンスターの効果が発動した時、その発動を無効にし１枚ドローする。さらにそれにチェーンしてヴェルズサンダーバードの効果、このカードを除外して魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、自分フィールド上のこのカードをゲームから除外し、この効果で除外したこのカードは次のスタンバイフェイズ時にフィールド上に戻り、攻撃力は３００ポイントアップする」
「自己強化⁉？」
ヴェルズサンダーバードの姿が消え、少女はカードを１枚ドローする。
「さらにヴェルズサンダーバードが除外されたことで混沌空間にカオスカウンターを置く」

混沌空間
カオスカウンター３→４

動きに全然無駄がない。
分かっていたことだけど、凄く強い。
「いいものを引いた。カードを２枚伏せてターンエンド」

遊花　ＬＰ４１００　手札１
ーー▲▲△　ー
ーーーーー
　　ー　　○
ーー○ーー
▲▲△▲▲　▽
少女　ＬＰ５５００　手札３

このままだと押し切られる。
何か逆転のカードを引かないと……
「私のターン、ドロー!!?」
そんな私を嘲笑うかのように、少女はそのリバースカードを発動する。
「スタンバイフェイズ、リバースカードを2枚オープン。絶望神アンチホープをリリースして闇のデッキ破壊ウイルス、ヴェルズバハムートをリリースして魔のデッキ破壊ウイルス。魔のデッキ破壊ウイルスの効果で相手フィールドのモンスター、相手の手札、相手ターンで数えて3ターンの間に相手がドローしたカードを全て確認し、その内の魔法カードを全て破壊する。闇のデッキ破壊ウイルスの効果で魔法カードを宣言し、相手フィールドの魔法カード、相手の手札、相手ターンで数えて3ターンの間に相手がドローしたカードを全て確認し、その内の魔法カードを全て破壊する」
「!?・?・そんな!?・?」
アンチホープとバハムートの姿が消え、私の手札と伏せカードが全て闇に覆われる。
その闇が消えると、私は手札を1枚残してそれ以外のカードが全て消えていた。
「破壊されたのはバトルフェーダーとドローマッスル、バーサーカークラッシュ。残った手札は聖なるバリアーミラーフォースー……でも、分かってるハズ。そのカードは侵略の汎発感染で効かない。そして3ターンの間、貴方が引いた１５００以下のモンスターと魔法

カードは使えない」
詰み。
その言葉が頭に浮かぶ。
私のデッキはほとんどのカードはレベル1モンスターと速攻魔法で構築されている。
罠カードなんて僅か数枚しか入っていない。
今聖なるバリア―ミラーフォース―が残ったのだって奇跡みたいなものだ。
しかも、その聖なるバリア―ミラーフォース―も侵略の汎発感染に守られるヴェルズモンスターには効果がない。
「サレンダー、してもいいよ？」
少女からそんな言葉が聞こえてくる。
「貴方は十分頑張った。これから3ターンの間動けないことはほとんど決まってるようなもの。貴方の４１００のライフじゃ、耐えきれるハズがない」
少女が言う、十分頑張ったと、これ以上やっても仕方がないと。
私も、確かにそう思う。
これは詰みだ。
どうしようもなく詰んでいる。
でも、それでもーーー
「嫌です」
「……」
「確かに、私のデッキではこの状況を解決するカードなんて、無いかも知れません。3ターンも、この状況を耐えることなんて、不可能に近いです。でも、それでも、私は、自分から諦めることだけはしたくない‼？」
ーーー諦めることだけは、栗原　遊花は選ぶことが出来ない‼？
「どんなに可能性が低くても、ライフが０になるまでは、例えドローがほとんど封じられた状態だとしても、その可能性から逃げたくない‼？」
それが、ただ苦しみが長引くだけの行為だとしても……

「師匠は言ってくれました。私が見せてくれた絶対に諦めないという意思を守るために、退くわけにはいかないんだって。なら、そんな私を信じてくれた師匠を、私は裏切りたくない‼?」
何度も裏切られてきたのに、それでも私を信じてくれたあの人を、私が裏切ることだけはしたくない‼?
「だから、私はまだ戦います。このライフが完全に尽きるまで、何があっても、私は諦めません‼?」
最後まで諦めないこと、それが栗原　遊花に出来る唯一のことだから。
「……そう」
「えっ?」
一瞬、ずっと無表情だった少女が嬉しそうに笑った気がした。
「名前、聞くの忘れてた。貴方の名前、教えて?」
「栗原……栗原　遊花です‼?」
「栗原　遊花……ん、ちゃんと覚えた」
そういうと少女は私の目を真っ直ぐ見つめる。
「遊花。見せてみて、遊騎が守るとまで言った、貴方の諦めない意思が導くものを。スタンバイフェイズ、除外されていたヴェルズサンダーバードはフィールドに戻ってくる」

ヴェルズサンダーバード
ＡＴＫ１６５０↓１９５０

漆黒の身体を持つ怪鳥が再びフィールドに現れる。
どちらにせよ、今の私に出来るのはこのカードを伏せることだけ。
だけど、絶対に諦めない。
「カードを1枚伏せてターンエンドです‼?」
「ウイルスの効果、1ターン目終了だよ」

遊花　ＬＰ４１００　手札０
ーーー▲ーーー

ーーーーー
ー　　ー
ーー○ーー
ー▲△▲ー　▽
少女　ＬＰ５５００　手札３

「私のターン、ドロー。ヴェルズカストルを召喚」

〈ヴェルズカストル〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１７５０

現れたのは闇を纏った白い鎧をつけた戦士。

「ヴェルズカストルの召喚時、手札にあるカゲトカゲの効果発動。自分がレベル４モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚できる。それにチェーンしてエンペラーオーダーの効果、モンスターが召喚に成功した時に発動するモンスターの効果が発動した時、その発動を無効にし１枚ドローする。そしてヴェルズカストルには召喚に成功したターン、自分は通常召喚に加えて１度だけヴェルズと名のついたモンスター１体を召喚できる効果がある。私はこの効果でヴェルズケルキオンを召喚」

〈ヴェルズケルキオン〉☆４　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ１６００

再び現れる両手に杖を持った魔術師。

少女の動きは止まらない。

「ヴェルズケルキオンの召喚時、手札にあるカゲトカゲの効果発動。自分がレベル４モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚できる。それに対してエンペラーオーダーの効果、モンスターが召喚に成功した時に発動するモンスターの効果が発動した時、その発動を無効にし１枚ドローする。さらにヴェルズケルキオンの

効果、自分の墓地のヴェルズモンスター1体を除外し、自分の墓地のヴェルズモンスター1体を対象としてそのモンスターを手札に加える。私は墓地のヴェルズケルキオンを除外してのヴェルズヘリオロープを手札に加える。モンスターが除外されたことで混沌空間にカオスカウンターが置かれる」

混沌空間
カオスカウンター4→5

「さらにヴェルズケルキオンには墓地からモンスターを回収する効果を発動したターンのメインフェイズにヴェルズモンスターを1体召喚できる。私はヴェルズヘリオロープを召喚」

〈ヴェルズヘリオロープ〉☆4　岩石族　闇属性
ＡＴＫ１９５０

三度現れる禍々しい闇を纏う岩石の戦士。
エクシーズ召喚などをしてこないところを見るとこのまま物量で押すつもりなのだろう。
「ヴェルズヘリオロープの召喚時、手札にあるカゲトカゲの効果発動。自分がレベル4モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚できる。それにチェーンしてエンペラーオーダーの効果、モンスターが召喚に成功した時に発動するモンスターの効果が発動した時、その発動を無効にし1枚ドローする。バトル。ヴェルズケルキオンでダイレクトアタック。クリスタルマジック」
「リバースカードオープン!!?聖なるバリアーミラーフォース―!!?相手モンスターの攻撃宣言時、相手フィールドの攻撃表示モンスターを全て破壊する!!?」
「効かない。リバースカードオープン。速攻魔法、侵略の汎発感染。自分フィールドの全てのヴェルズモンスターは、ターン終了時までこのカード以外の魔法・罠カードの効果を受けない。攻撃はそのまま受

けてもらう」
「くっ‼?」

遊花　　ＬＰ４１００→２５００

「追撃。ヴェルズカストルでダイレクトアタック。イビルスラッシュ」
「きゃあ‼?」

遊花　　ＬＰ２５００→７５０

「さぁ、どう乗り越える?ヴェルズサンダーバードでダイレクトアタック」
「まだです‼?墓地に存在する虹クリボーの効果‼?レインボーシールド‼?このカードが墓地に存在する場合、相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードを墓地から特殊召喚します‼?お願い、虹クリボー‼?」

〈虹クリボー〉☆１　悪魔族　光属性
ＤＥＦ１００

私を守るように虹クリボーが現れる。
サンダーバードはそのまま虹クリボーに向かって急降下をしてくる。
「なら、ヴェルズサンダーバードで虹クリボーを攻撃。イビルダイブアタック」
「やらせません‼?墓地に存在するサクリボーの効果発動‼?自分のモンスターが戦闘で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外します‼?」
虹クリボーが突撃してきたサンダーバードを弾く。
まだ耐えられる‼?

「モンスターが除外されたことで混沌空間にカオスカウンターに置く」

混沌空間
カオスカウンター5→6

「ヴェルズヘリオロープで虹クリボーを攻撃。テンプテーションブレイク」
「ありがとう、虹クリボー。この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外されます」
虹クリボーはヘリオロープに斬られて消滅した。
「モンスターが除外されたことで混沌空間にカオスカウンターに置く」

混沌空間
カオスカウンター6→7

「使っておけばよかったかな。メインフェイズ2。混沌空間の効果発動、1ターンに1度、自分フィールドのカオスカウンターを4つ以上取り除き、取り除いた数と同じレベルを持つ、除外されている自分または相手のモンスター1体を対象としてそのモンスターを自分フィールドに特殊召喚する。私はカオスカウンターを4つ取り除き、除外からヴェルズヘリオロープを特殊召喚」

混沌空間
カオスカウンター7→3

〈ヴェルズヘリオロープ〉☆4　岩石族　闇属性
ＡＴＫ１９５０

「私はカードを2枚伏せてターンエンド」

遊花　ＬＰ７５０　手札０
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　　ー
○○○○○
▲▲△▲ー　▽
少女　ＬＰ５５００　手札３

どんどん状況は悪くなっていく。
でも、まだやれる!!?
「私のターン、ドロー!!?私が引いたのはクリアクリボー。攻撃力は１５００以下なので破壊されます」
「クリアクリボーも墓地からの効果があったハズ……破壊が仇になったかな」
「私はこれでターンエンド!!?」
「ウイルスの効果、２ターン目終了」

遊花　ＬＰ７５０　手札０
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　　ー
○○○○○
▲▲△▲ー　▽
少女　ＬＰ５５００　手札３

「私のターン、ドロー。少し質をあげる。顕現せよ……邪念渦巻くサーキット」
少女が正面に手をかざすと大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はモンスター２体。私はヴェルズカストルとヴェルズヘリオロープをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リン

ク召喚。リンク2、魔界の警邏課デスポリス」

〈魔界の警邏課デスポリス〉ＬＩＮＫ　２　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００　↙？↘？

現れたのは警察官の格好をした悪魔の少女。
「魔界の警邏課デスポリスはカード名が異なる闇属性モンスター２体を素材としてリンク召喚した時、１ターンに１度、自分フィールドのモンスター１体をリリースし、フィールドの表側表示のカード１枚を対象として戦闘・効果で破壊される場合、代わりに１つ取り除くことができる警邏カウンターを１つ置くことが出来る効果を得る。ヴェルズケルキオンの効果、自分の墓地のヴェルズモンスター１体を除外し、自分の墓地のヴェルズモンスター１体を対象としてそのモンスターを手札に加える。私は墓地のヴェルズヘリオロープを除外してヴェルズカストルを手札に加える。モンスターが除外されたことで混沌空間にカオスカウンターが置かれる」

混沌空間
カオスカウンター３→４

「さらにヴェルズケルキオンには墓地からモンスターを回収する効果を発動したターンのメインフェイズにヴェルズモンスターを１体召喚できる。私はヴェルズカストルを召喚」

〈ヴェルズカストル〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１７５０

「ヴェルズカストルの召喚時、手札にあるカゲトカゲの効果発動。自分がレベル４モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚できる。それにチェーンしてエンペラーオーダーの効果、モンスターが召喚に成功した時に発動するモンスターの効果が発動し

た時、その発動を無効にし1枚ドローする。そしてヴェルズカストルには召喚に成功したターン、自分は通常召喚に加えて1度だけヴェルズと名のついたモンスター1体を召喚できる効果がある。私はこの効果でヴェルズサンダーバードを召喚」

〈ヴェルズサンダーバード〉☆4　雷族　闇属性
ＡＴＫ１６５０

「私は2体の闇属性レベル4モンスター、ヴェルズカストルとヴェルズケルキオンでオーバーレイ。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚」
ケルキオンとカストルが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると現れるのは漆黒に染まったユニコーンに乗る悪魔。
「希望を刈り取る死神、ランク4、ヴェルズタナトス」

〈ヴェルズタナトス〉★4　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ２３５０

「いくよ？バトル。ヴェルズタナトスでダイレクトアタック」
「相手モンスターの攻撃宣言時、墓地からクリボーンの効果発動!!？さらにチェーンしてクリアクリボーの効果発動!!？」
「クリボーン……クリバンデットの時に落ちたカードをまだ温存してたんだ」
「相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のクリアクリボーを除外し、自分はデッキから1枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替えます!!？」
お願い、私のデッキ……私に力を貸して!!？
「ドロー!!？……ありがとうございます、師匠」

「？」
「私が引いたカードは罠カード、拮抗勝負‼？」
「⁉？そのカードは……」
「さらにクリボーンの効果‼？墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のクリボーモンスターを任意の数だけ対象として、そのモンスターを特殊召喚します‼？また私と一緒に‼？来て、ハネクリボー‼？」

〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

私を守るように相棒が手を広げながら現れる。
「モンスターが増えたので攻撃宣言の再選択が出来ますが、どうしますか？」
「っ、それでもハネクリボーを残すわけにはいかない。まずはモンスターが2体除外されたから混沌空間にカオスカウンターを置く」

混沌空間
カオスカウンター4→6

「そして攻撃は続行。ヴェルズタナトスでハネクリボーを攻撃。カーススラッシュ」
ヴェルズタナトスの剣でハネクリボーが斬られ粒子に変わる。
そして粒子となったハネクリボーが私を包むように漂い始めた。
「ハネクリボーの効果発動‼？プリフィケーション‼？このカードがフィールドから墓地に送られたターン、自分の受ける戦闘ダメージは0になる‼？」
「このターンはどうしようもない……リバースカードオープン。永続罠、侵略の侵喰感染。1ターンに1度、自分の手札または自分フィールド上に表側表示で存在する、ヴェルズと名のついたモンスター1体をデッキに戻して発動できる。デッキからヴェルズと名のついたモンスター1体を手札に加える。その効果にチェーンして1

体のヴェルズサンダーバードの効果、魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、自分フィールド上のこのカードをゲームから除外し、この効果で除外したこのカードは次のスタンバイフェイズ時にフィールド上に戻り、攻撃力は３００ポイントアップする。そして侵略の侵喰感染の効果でヴェルズタナトスをＥＸデッキに戻してヴェルズマンドラゴを手札に加える。そして混沌空間にカオスカウンターが置かれる」

混沌空間
カオスカウンター６→７

「そして、バトルフェイズを終了」
「ならバトルフェイズを終了時、自分フィールドにカードが存在しない場合、手札から罠発動!!?拮抗勝負!!?相手フィールドのカードの数が自分フィールドのカードの数より多い場合、自分・相手のバトルフェイズ終了時に発動できる!!?自分フィールドのカードの数と同じになるように、相手はフィールドのカードを裏側表示で除外しなければならない!!?」
「私は混沌空間を残して他のカードを除外する」
少女のフィールドにいたモンスター達が一気に粒子に変わる。
これでフィールドのカードはかなり少なくなった。
「まさかここまでやるとは思わなかった。カードを２枚伏せてターンエンド」

遊花　ＬＰ７５０　手札０
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　　ー
ーーーーーー
▲▲ーーー　▽
少女　ＬＰ５５００　手札３

「私のターン、ドロー!!?私が引いたのは虹クリボー。攻撃力は１５００以下なので破壊されます」
「また攻撃が1回止められるね。でも、それだけじゃどうにもならない。スタンバイフェイズ、除外されていたヴェルズサンダーバードはフィールドに戻ってくる」

ヴェルズサンダーバード
ＡＴＫ１６５０→１９５０

「私はこれでターンエンド」
「ウイルスの効果、３ターン目終了。本当にウイルスのターン経過を乗り切られちゃったね」

遊花　ＬＰ７５０　手札０
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　　ー
ーー○ーー
▲▲ーーー　▽
少女　ＬＰ５５００　手札３

「私のターン、ドロー。永続魔法、魂吸収を発動。このカードのコントローラーはカードがゲームから除外される度に、1枚につき５００ライフポイント回復する。私は混沌空間の効果発動、1ターンに1度、自分フィールドのカオスカウンターを４つ以上取り除き、取り除いた数と同じレベルを持つ、除外されている自分または相手のモンスター1体を対象としてそのモンスターを自分フィールドに特殊召喚する。私はカオスカウンターを４つ取り除き、除外からヴェルズケルキオンを特殊召喚」

混沌空間
カオスカウンター7→3

〈ヴェルズケルキオン〉☆4　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ１６００

「ヴェルズケルキオンの効果、自分の墓地のヴェルズモンスター1体を除外し、自分の墓地のヴェルズモンスター1体を対象としてそのモンスターを手札に加える。私は墓地のヴェルズケルキオンを除外してのヴェルズカストルを手札に加える。モンスターが除外されたことで混沌空間にカオスカウンターが置かれ、魂吸収の効果でライフを５００回復する」

混沌空間
カオスカウンター3→4

少女　ＬＰ５５００→６０００

「さらにヴェルズケルキオンには墓地からモンスターを回収する効果を発動したターンのメインフェイズにヴェルズモンスターを1体召喚できる。私はヴェルズマンドラゴを召喚」

〈ヴェルズマンドラゴ〉☆4　植物族　闇属性
ＡＴＫ１５５０

新しく出てきたのは闇を纏ったマンドラゴラのようなモンスター。
そして少女は目の前に手をかざし、サーキットが現れる。
「顕現せよ……邪念渦巻くサーキット。召喚条件はヴェルズモンスター2体。私はヴェルズケルキオンとヴェルズマンドラゴをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイ。リンク召喚。始まりの悪意。リンク2、インヴェルズオリジン」

〈インヴェルズオリジン〉ＬＩＮＫ　２　悪魔族　光属性
ＡＴＫ２０００　→←

現れたのはガスのように実体がない黒い霧のようなモンスター。
「インヴェルズオリジンの永続効果、イビルリストレイント。このカードがＥＸモンスターゾーンに存在する限り、お互いにＥＸデッキからメインモンスターゾーンにモンスターを特殊召喚する場合、このカードのリンク先にしか出せない。さらにこのカードのリンク先にモンスターが存在する限り、このカードは効果の対象にならず、戦闘・効果では破壊されない」
「耐性付きの制約モンスター……」
「最も、効果があるのはこのターン遊花が生き残れたら。バトル」
「バトルフェイズ開始時、墓地から罠カード、光の護封霊剣の効果発動‼?相手ターンに墓地のこのカードを除外してこのターン、相手モンスターは直接攻撃できません‼?」
「っ‼?それもクリバンデットの時……その効果にチェーンしてヴェルズサンダーバードの効果、魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、自分フィールド上のこのカードをゲームから除外し、この効果で除外したこのカードは次のスタンバイフェイズ時にフィールド上に戻り、攻撃力は３００ポイントアップする。そして混沌空間にカオスカウンターが置かれ、魂吸収の効果でライフを合計で１０００回復する」

混沌空間
カオスカウンター４→５

少女　ＬＰ６０００→７０００

「本当に乗り切られるとは思わなかった。ターンエンド」

遊花　ＬＰ７５０　手札０
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
▲▲△ー　ー　▽
少女　ＬＰ７０００　手札３

なんとか凌ぎきることが出来た。
でも、手札もフィールドも何もないことには変わりがない。
おまけにもう墓地から使えるカードも虹クリボーのみ。
これ以上は本当にこのドローで決まる。
でも、それでも私は、この少女に勝ちたい‼？
「私のターン……ドロー‼？」
ドローしたカードを見る……まだ、望みはある。
「スタンバイフェイズ、除外されていたヴェルズサンダーバードはフィールドに戻ってくる」

ヴェルズサンダーバード
ＡＴＫ１６５０→１９５０

サンダーバードはオリジンのリンク先に移動した。
これで効果では除去出来ない。
「私は魔法カード、貪欲な壺を発動‼？」
「ここでドローカード……」
「私は墓地の金華猫、クリバンデット、バトルフェーダー、クリボルト２体をデッキに戻しシャッフル。そして、カードを２枚、ドローする‼？来た‼？」
「‼？」
「私はクリボーを召喚‼？」

〈クリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３００

私の前に現れるのは茶色毛玉のようなモンスター。
それを見て、少女は首を傾げる。
「この状況でクリボーを召喚？」
「この状況でじゃない、この状況だからだよ‼？速攻魔法‼？増殖‼？」
「⁉？まさか、この状況で対応している2枚を引き当てたの？」
「自分フィールド上に表側表示で存在するクリボー1体をリリースして自分フィールド上にクリボートークンを可能な限り守備表示で特殊召喚します‼？」

〈クリボートークン〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

私のフィールドにいたクリボーが5体に増える。
そしてここからが本番だ。
「導いて‼？希望に繋がるサーキット‼？」
私の前に大きなサーキットが現れる。
さぁ、行くよ‼？
「召喚条件はレベル1モンスター1体。私はクリボートークンとリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚‼？希望の守り手‼？リンク1‼？リンクリボー‼？」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

私の前に元気一杯に飛び出してくるのは青い球体のモンスター。
今回も頼りにしてるよ、リンクリボー。
でも、最初はちょっとゴメンね。

「さらに導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「連続リンク召喚……」
「召喚条件はモンスター2体。私はクリボートークンとリンクリボーでリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚!!?リンク2!!?プロキシードラゴン!!?」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

次に現れたのは白い身体をした機械の竜。
まだまだ行くよ!!?
「どんどん行くよ、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?召喚条件は通常モンスター1体!!?私はクリボートークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク1!!?リンクスパイダー!!?」

〈リンクスパイダー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１０００　←

私の前に機械の蜘蛛が現れる。
そして私はまたあの子を呼ぶ。
「墓地に存在するリンクリボーの効果発動!!?スケープリンク!!?このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル1モンスター1体をリリースしてこのカードを墓地から特殊召喚する!!?私はクリボートークンをリリース!!?戻っておいで、リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

相変わらず嬉しそうに跳ね回るリンクリボー。

もう１度私に力を貸して‼?
「そして導いて‼?希望に繋がるサーキット‼?」
「一気に４回のリンク召喚……」
このターン４度目のサーキット。
「召喚条件は効果モンスター３体以上‼?私はリンクスパイダー、リンクリボー、プロキシードラゴンを　２体分として扱ってリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?」
「リンク４……大型が来る」
今日は長い間待たせちゃったね。
でも、また貴方の力を私に貸して‼?
「お願い、私に覚悟を示す力を貸して‼?リンク召喚‼?閉ざされた運命を斬り開く魂の剣（つるぎ）‼?リンク４‼?ヴァレルソードドラゴン‼?」
待ち望んでいたというように、龍の咆哮が世界に響いた。

〈ヴァレルソードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑←→

「リンク４のドラゴンモンスター……」
「ヴァレルソードドラゴンの効果発動‼?アサシネイトショット‼?１ターンに１度、攻撃表示モンスター１体を対象として発動‼?そのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃できる。そしてこの効果の発動に対して相手は効果を発動できない‼?この効果は相手ターンにでも使用することが出来ます‼?対象にするのは、ヴェルズサンダーバード‼?」
「っ、チェーン出来ないから逃げられない」
ヴァレルソードドラゴンが銃撃を放ち、サンダーバードを撃ち落とし、地面に縫い付ける。

ヴェルズサンダーバード
ＡＴＫ１９５０↓ＤＥＦ１０５０

「バトル!!?・ヴァレルソードドラゴンでインヴェルズオリジンを攻撃!!?攻撃宣言時、ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アブソーブブースト!1ターンに1度、このカードが表側表示モンスターに攻撃宣言した時、ターン終了時まで、このカードの攻撃力はそのモンスターの攻撃力の半分アップし、そのモンスターの攻撃力は半分になります!!?」

「!!?……なら、その効果にチェーンしてヴェルズサンダーバードの効果、魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、自分フィールド上のこのカードをゲームから除外し、この効果で除外したこのカードは次のスタンバイフェイズ時にフィールド上に戻り、攻撃力は３００ポイントアップする。そして混沌空間にカオスカウンターが置かれ、魂吸収の効果でライフを５００回復する」

混沌空間
カオスカウンター５→６

少女　ＬＰ７０００→７５００

サンダーバードの姿が消え、インヴェルズオリジンから溢れる闇がヴァレルソードドラゴンの剣に吸い取られていく。

インヴェルズオリジン
ＡＴＫ２０００→１０００

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ３０００→４０００

「斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン!!?剣光のベイオネットブレイク!!?」

ヴァレルソードドラゴンは勢いよくオリジンに近づき、簡単に一刀

両断した。
「……」

少女　　ＬＰ７５００→４５００

そして今度はヴァレルソードドラゴンの視線が少女に向かう。
「もう１度斬り開いて‼?ヴァレルソードドラゴンでダイレクトアタック‼?剣光のベイオネットブレイク‼?」
「っ‼?」
ヴァレルソードドラゴンはそのまま少女に近づくと思いっきり剣を振り抜いた。

少女　ＬＰ４５００→５００

ライフは僅かに残ってしまった。
でも、私に出来ることはもうない。
だから、後は皆を信じよう。
「……ターンエンドです」

遊花　ＬＰ７５０　手札０
ーーーーーー　ー
ーーーーー??
☆　　ー
ーーーーー
▲▲△ーー　▽
少女　ＬＰ５００　手札３

「私のターン、ドローー……遊花、貴方の諦めない意思、しっかりと見せて貰った」
「っ‼?うん」
その言葉から、この後の展開が分かってしまう。

でも、それでも目を逸らさずに少女を見る。
「だから、貴方の覚悟に応え、私の切り札の1体を見せる。スタンバイフェイズ、除外されていたヴェルズサンダーバードはフィールドに戻ってくる」

ヴェルズサンダーバード
ＡＴＫ１６５０→１９５０

「私は混沌空間の効果発動、1ターンに1度、自分フィールドのカオスカウンターを4つ以上取り除き、取り除いた数と同じレベルを持つ、除外されている自分または相手のモンスター1体を対象としてそのモンスターを自分フィールドに特殊召喚する。私はカオスカウンターを4つ取り除き、除外からヴェルズケルキオンを特殊召喚」

混沌空間
カオスカウンター6→2

〈ヴェルズケルキオン〉☆4　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ１６００

「ヴェルズケルキオンの効果、自分の墓地のヴェルズモンスター1体を除外し、自分の墓地のヴェルズモンスター1体を対象としてそのモンスターを手札に加える。私は墓地のヴェルズオピオンを除外してのヴェルズマンドラゴを手札に加える。モンスターが除外されたことで混沌空間にカオスカウンターが置かれ、魂吸収の効果でライフを５００回復する」

混沌空間
カオスカウンター3→4

少女　ＬＰ５００→１０００

「さらにヴェルズケルキオンには墓地からモンスターを回収する効果を発動したターンのメインフェイズにヴェルズモンスターを1体召喚できる。私はヴェルズカストルを召喚」

〈ヴェルズカストル〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１７５０

「ヴェルズカストルの召喚時、手札にあるカゲトカゲの効果発動。自分がレベル４モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚できる。カゲトカゲを特殊召喚」

〈カゲトカゲ〉☆４　爬虫類族　闇属性
ＡＴＫ１１００

序盤から姿だけは見せていた影で出来たトカゲがようやく現れた。
そして少女は正面に手をかざす。
「私は3体のレベル４モンスター、ヴェルズサンダーバードとカゲトカゲ、ヴェルズケルキオンでオーバーレイ。３体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚」
ケルキオンとサンダーバード、カゲトカゲが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、そこには圧倒的な存在感を放つ漆黒の三つ首龍が現れた。
「闇に堕ちし最凶の龍……ヴェルズウロボロス」

〈ヴェルズウロボロス〉★４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２７５０

その圧倒的な存在感に、私は気圧される。
すると、何処からか底冷えするような声が聞こえた。

『ヨノモシレサイア　ウヨシンサウヨシ　トコタセサダビヨヲレワ　ズメラキア』
「えっ⁉？」
聞こえた……間違いなく、何かの声が。
声が聞こえてくるのは、あの圧倒的な存在感を放つ龍のいる場所。
『ウロヤテセミ　ヲンエウヨキ　ノイセイサ　トシ　イナ
モリワオ　モリマジハ　テシウヨシヲレソ』
何を言っているのかは分からない。
でも、その存在は確かに私に話しかけていた。
「ヴェルズウロボロスの効果発動、トリニティカース。オーバーレイユニットを1つ使い、3つの呪いから1つをかけることが出来る。今回発動するのは、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して持ち主の手札に戻す。つまり、ヴァレルソードドラゴンにはＥＸデッキに返って貰う」
「⁉？ヴァレルソードドラゴンの効果発動⁉？アサシネイトショット⁉？1ターンに1度、攻撃表示モンスター1体を対象として発動⁉？そのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる。そしてこの効果の発動に対して相手は効果を発動できない⁉？この効果は相手ターンにでも使用することが出来ます⁉？対象にするのは、ヴェルズウロボロス⁉？」
ウロボロスの身体から闇を纏った吹雪が溢れだし、ヴァレルソードドラゴンを凍らせていく。
ヴァレルソードドラゴンは吹雪の中、ウロボロスに近づき、至近距離で銃撃をし、怯ませることに成功したが、そのまま吹雪により凍らされ、消えてしまった。
『ウコオテエボオ　ハトコノエマオ　ヨウユリ　キトゴノギルツ　ゾタッダキガアイヨ　ククク』
後に残ったのは賞賛しているような謎の声だけだった。

ヴェルズウロボロス
ＡＴＫ２７５０→ＤＥＦ１９５０

「そしてこれで私の墓地の闇のカードは3枚。ダークアームドドラゴンを特殊召喚」

〈ダークアームドドラゴン〉星7　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２８００

現れるのは漆黒の鎧で武装された黒龍。
「ダークアームドドラゴンの効果、ダークジェノサイド。墓地の闇属性モンスター1体を除外し、フィールドのカード1枚を対象とし、破壊する。ヴェルズバハムートを除外してクリボートークンを破壊。モンスターが除外されたことで混沌空間にカオスカウンターが置かれ、魂吸収の効果でライフを５００回復する」

混沌空間
カオスカウンター４→５

少女　ＬＰ１０００→１５００

「っ‼？墓地に存在するリンクリボーの効果発動‼？スケープリンク‼？このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル１モンスター1体をリリースしてこのカードを墓地から特殊召喚する‼？私はクリボートークンをリリース‼？戻っておいで、リンクリボー‼？」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

再び戻ってくるリンクリボー。
だけど……
「ダークアームドドラゴンの効果にターン制限はない。ダークアーム

ドドラゴンの効果、ダークジェノサイド。墓地の闇属性モンスター1体を除外し、フィールドのカード1枚を対象とし、破壊する。カゲトカゲを除外してリンクリボーを破壊」

「っ!!?・リンクリボー!!?・」

ダークアームドから放たれる漆黒の斬撃でリンクリボーが切り裂かれた。

「リバースカードオープン。永続罠、侵略の侵喰感染。1ターンに1度、自分の手札または自分フィールド上に表側表示で存在する、ヴェルズと名のついたモンスター1体をデッキに戻して発動できる。デッキからヴェルズと名のついたモンスター1体を手札に加える。ヴェルズウロボロスをＥＸデッキに戻し、デッキからヴェルズヘリオロープを手札に加える」

ウロボロスの姿が消える。

せっかく出した切り札を戻した？

いや、この少女はそんなに甘くはない。

「そしてヴェルズカストルには召喚に成功したターン、自分は通常召喚に加えて1度だけヴェルズと名のついたモンスター1体を召喚できる効果がある。私はこの効果でヴェルズマンドラゴ、まだ使っていない通常召喚権でヴェルズヘリオロープを召喚」

〈ヴェルズマンドラゴ〉☆4　植物族　闇属性

ＡＴＫ１５５０

〈ヴェルズヘリオロープ〉☆4　岩石族　闇属性

ＡＴＫ１９５０

レベル4モンスターが3体……これは……!?・

「私は3体のレベル4モンスター、ヴェルズカストルとヴェルズマンドラゴ、ヴェルズヘリオロープでオーバーレイ。3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚」

そして再び現れる圧倒的な存在感を放つ漆黒の三つ首龍。

「再び現れよ、闇に堕ちし最凶の龍……ヴェルズウロボロス」

〈ヴェルズウロボロス〉★４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２７５０

「ヴェルズウロボロスの効果発動、トリニティカース。オーバーレイユニットを１つ使い、３つの呪いから１つをかけることが出来る。今回発動するのは、相手の墓地に存在するカード１枚を選択してゲームから除外する。墓地に存在する虹クリボーを除外。モンスターが除外されたことで混沌空間にカオスカウンターが置かれ、魂吸収の効果でライフを５００回復する」

混沌空間
カオスカウンター５→６

少女　ＬＰ１５００→２０００

「っ!!?虹クリボーまで……」
ウロボロスの身体から再び闇を纏った吹雪が溢れだし、今度は私の墓地を凍りつかせた。
これで、私に発動出来るカードは、本当に何もない。
完全な敗北。
それでも、俯くことだけはしない。
「次は、絶対に勝ちます」
「ん……私の場所まで辿り着くの、いつまででも待ってる。バトル。ヴェルズウロボロスで遊花にダイレクトアタック。侵食のイモータルフリーズ」
『ヨノモシレサイア　ウオアタマ』
ウロボロスの三つ首から放たれる闇のブレスに呑み込まれ、私はデュエルに敗北した。

遊花　ＬＰ　７５０→０

ーーーーーーー

「ありがとう、久しぶりに楽しいデュエルだった」
「ううん、こちらこそありがとう」
デュエルが終わり、ペコリと頭を下げてくる少女に、私も同じように頭を下げる。
それを見て、桜ちゃんと島さんも話に入ってくる。
「お疲れ様、２人共。とてもいいデュエルだったよ」
「……島さんはそれしか言わない」
「私は思っていることを素直に口に出しているだけさ」
「それにしても、アンタかなり強いわね？」
「当然。そうそう負けるわけにはいかないから」
「……えらい自信ね。そういえば、アンタ名前は？私達の名前は話したのに、アンタの名前を聞いてないのは不公平じゃない？」
「あ、私も知りたい。リベンジもしたいし」
「ん、一理ある。私はーーー」
「ーーーただいま」
少女が自分の名前を告げようとした時、聞き覚えがある声と共にお店の扉が開いた。
私達が扉の方を見ると、罰が悪そうな顔をした師匠が立っていた。
島さんはそれを見て、驚いた表情を浮かべてから、凄く優しい笑顔で師匠に話しかけた。
「おかえり。君が元気そうで、本当に嬉しいよ」
「……ごめんなさい」
「何を謝る必要があるんだい？君がこうして顔を見せてくれただけで、私は十分さ。ここは、君の家なのだからね」
「島さん……ありがとう」
そういって照れ臭そうに笑う師匠を見て、私も凄く嬉しい気持ちになる。

するとーーー
「遊騎」
「ん？この声はーーー」
「会いたかった」
「うおっ‼？」
私の前にいた少女は勢いよく師匠に抱きついた……って、ええっ⁉？
「ちょっ⁉？アンタ何してんの⁉？」
「？何か変？」
「当たり前でしょうが⁉？女の子が軽々しく男に抱きついてるんじゃないわよ‼？」
「遊騎なら大丈夫」
「……お前は本当に相変わらずだな。というか、そのメガネはなんなんだ？」
「ん、変装用」
「……それは本当に変装になっているのか？」
「バレてないから問題ない」
「そういう問題ではないと思うが……」
「遊騎、島さんと同じこと言ってる」
「いや、そりゃあお前のことを知ってればそう思うだろ」
抱きついてきた少女を特に気にした様子もなく、師匠は呆れたように少女に話しかける。
ええっと、ええっと、これってどういう状況なの⁉？
師匠は動じてないし、慌ててる私がおかしいのかな⁉？
「し、師匠⁉？その子は誰なんですか⁉？」
「そうよ‼？そんなに幼いのに私達より強いし‼？」
「は？幼い？というか、お前デュエルしたのか？」
「ん、２人共いい腕してた。将来が楽しみ。勿論、私の勝ち」
「お前は負けることの方が少ないだろうが。というか、名乗りすらせずにデュエルしたのか」
「実力を見るにはこれが１番。おかげでとても良いものが見れた。流

石は遊騎の弟子」
「宝月は弟子ではないんだけどな。まあ、お前が認めたなら十分だろうけどさ」
「ちょっと‼？私の質問に答えなさいよ‼？」
そう言う桜ちゃんに師匠は困ったように頭を掻きながら答える。
「あ～何から言ってやるべきか……とりあえず、コイツはお前らより年上だぞ？というか、俺と同級生だ」
「ど、同級生って……あ、アンタって確か」
「２２だな」
「私は早生まれだから２１」
「２１才⁉？小学生じゃなかったの⁉？」
「……ぷっ」
「遊騎、失礼。これでも気にしてる」
「わ、悪い。まあ、お前は昔から小さかったからな」
「成長しないこの身体が恨めしい。おかげでお酒飲もうとしても止められる」
「まあ絵面的にアウトだからな」
そう和やかに話す師匠に私は驚愕が隠せなかった。
絶対、年下だと思ってた。
どうしよう、結構幼い子に接するように話しちゃったけど、大丈夫かな⁉？
そんな動揺を隠せない私に、師匠はさらに爆弾を投げ込んでくる。
「後、コイツが誰かって話だが……まあ、名乗って貰った方が早いだろう。多分お前らも知ってるだろうし」
「私達も知ってる、ですか？」
「ああ、ほら」
そういって師匠が女性の背中を押す。
それに応えるように女性はメガネを外しながらすんなりとその名前を口にした。
「私の名前は闇。冬城　闇（ふゆき　やみ）。よろしく」
あれ？冬城　闇って、どこかで聞いたことがあるような……

「はぁ⁉？冬城　闇⁉？あの『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のエースで世界ランキング４位の冬城　闇⁉？」
「ええっ⁉？」
桜ちゃんの言葉に私も驚いて声をあげてしまう。
世界ランキング４位⁉？
そんなに強い人だったの⁉？
「……お前、今世界ランキング４位なのか？流石だな」
「むぅ、僅か２年で世界ランキング９位に入った遊騎に言われても少し複雑。でも少し嬉しい」
そんな反応に対しても平然としている師匠と闇さん。
そして闇さんはもう１度こちらを見ると無表情のままピースサインを作った。
「それじゃあ、これからもよろしく、遊花、桜」

第12話　夢に至るための道

★

『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』というチームがある。
ドイツ語で切り札を意味する名が付けられたそのチームは、４年前に結成され、結成からたった2年、たった４人という人数でプロチームとしての世界ランキングで2位にまで上り詰めた実力派のプロチームだ。
そしてそのチームの現エース、世界ランキング４位で、どんな状況であろうと変わらない無表情とそのエースモンスターから『氷の女王』と呼ばれ恐れられている人物、それが冬城　闇という人物だった。
人物だった、ハズなんだけど……
「どうして連絡してくれなかったの？」
「いや、お前らだって忙しいだろう？俺が抜けてからは3人になったんだし」
「遊騎の分は社長が埋めてるから大丈夫。というより、遊騎が戻ってくれば問題ない」
「積極的に調べてはなかったけど、アイツが出てんのかよ。自分でデュエルするより他人がデュエルするのを眺める方が好きな奴なのに……というか、俺はリーグ追放されてるんだぞ？戻ったって役に立たないだろう？」
「社長から今まで参加出来なかった実業団も巻き込んで一緒に新リーグを作ろうって話もいくつかのチームと合同で出てるって聞いたから問題ない。というより、遊騎のイカサマ騒動を信じてるのなんて一般人と新規と古参のほんの一握りのプロぐらい。プロでまともに遊騎とデュエルした人はほとんど信じてない上、あのリーグの審判の何人かがきな臭いという話も出てる。むしろ潰してやろう」
「頼むから俺がいないところで事件を大きくしないでくれよ……」
明らかに憤りを隠せないといった様子で師匠を呆れさせている様子を見ると全然そういう人物に見えない。

というより、そんなプロリーグの闇みたいな話をこんなところでしていいのだろうか？
私は桜ちゃんの方をちらりと見ると桜ちゃんもこちらを見てふるふると首を振って耳を塞ぐようなジェスチャーをした。
どうやら関わるだけ疲れそうだから放っておこうということらしい。
そしてさらに闇さんから爆弾発言が続く。
「そもそも『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』が出来たのは遊騎とこの店の為なのに本人がいないなら意味がない」
「いや、それはだな……」
「ちょ、ちょっと待ちなさい!!？今なんか凄い話が出なかった!?？」
流石に聞き流せなかったのか桜ちゃんが止めに入る。
私も、その話は少し気になった。
師匠がプロ決闘者になったのはこのお店を立て直す為だって言うのは聞いていた。
でも、そのチームが出来たのも師匠が理由って言うのはどういうことなんだろう？
桜ちゃんの言葉と私の反応に闇さんは首を傾げ、師匠を見る。
「言ってないの？」
「言えるかよ、お前らに迷惑がかかるかも知れないのに。そもそもプロを追放されてからは『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』って名前だって出さないようにしてたんだ」
「むぅ……むしろ出してくれれば良かったのに。そうすればプロリーグから簡単に抜けれて別のリーグを作る口実になったのに」
「……お前自分が爆弾発言してる自覚あるか？俺の時でも世界ランキング９位の奴が急に消えるって問題が出たのに、お前は４位だしチームはまだ２位のままなんだろ？」
「他人の評価とか興味ない。そして冤罪をかけてくる外道にかける情けもない。それが私達チームの総意」
「なんでそんな物騒なことになってるんだよ……いや、俺のせいなのは分かるけどさ」

師匠が頭が痛いという風に額に手をやる。
そんな師匠に桜ちゃんが問いかける。
「ちょっと‼?私の質問に答えなさいよ‼?世界ランキング２位のチームの結成の理由がアンタとこの店にあるってどういうことなの⁉?」
「あ～分かった分かった。説明するからちょっと待てって」
師匠は明らかに疲れた表情を浮かべながら、１つ咳払いをして話しはじめた。
「コホン……それじゃあ話し始めるわけなんだが、遊花は島さんから聞いてると思うが、先ずはこの店が俺の行き着けの店でこの店が悪化して潰れかけた時期があった」
「今は違うの?来た時も人がいなかったけど」
「……どうなの、島さん?」
「『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の皆が新カードを手に入れる際には全部この店に発注してくれるようになったから、ほぼお抱えの店になって潰れることはなさそうだよ。勿論、他のお客さんも来てくれるしね」
島さんが桜ちゃんのあんまりな言い方に苦笑しながら答える。
師匠が「そんなことになってたのか……」なんて呟きながらも話を戻す。
「まぁ、その際にその時はまだ社長ではなかったけど、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』を経営してる社長がちょうど新しい事業としてプロチームを作ろうとしてたみたいで、その人と偶々縁があって話してる内にこの店のこととか、まぁ色々合ってな。それならスポンサーになるから、プロ決闘者になってこの店を盛り上げてみないかって言われて、俺と闇はプロになったんだ」
「私はその場にいただけのほとんどおまけみたいなものだったけど。当時の私は強くもなかったし、社長は遊騎のデュエルがもっと見たかったからプロに誘ったんだもん。いわゆる金持ちの道楽」
「いや、アイツは闇のこともかなり評価してただろ?『絶対この子は輝くのです‼?間違いないのです‼?』とか言われてたし。そしてアイツのアレは金持ちの道楽も半分はあるだろうが、もう半分はアイツが

お人好しなだけだ」
「えっと、それじゃあ何。あの世界ランキング2位の超少数精鋭チームが出来たのは……」
「お人好しの社長が偶々見つけた遊騎を気に入って、遊騎の思いを汲んでこのお店を立て直す手伝いをしたいと思い、ついでに自分が気に入った遊騎のデュエルがもっと見たいから作られた。『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバーは元々この店の常連だった人間で構成されてるし、メンバーを増やさなかったのも単純にこの店の常連でプロ決闘者として戦える人がいなかったというだけ」
師匠と闇さんが語ったあまりの真実に私も桜ちゃんも絶句する。
別に意図したわけでもなく、ただ自分達の思いを果たしたかったからやっていたらそうなった。
この人達にとって、本当に自分達の評価はどうでもよくて、このお店を、自分達の居場所を守ろうと動いた結果が、今の状況に繋がっているのだ。
「まあ、それがこのざまだけどな。俺のせいで島さんにも、拾ってくれたアイツにも、闇達チームの仲間にも迷惑をかけちまったし」
「私達は全然気にしてない。皆まだ貴方の為に動いてる。遊騎なら知ってるでしょ？『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』は底無しの”お人好し集団（カ）”なの」
「……それでも、俺は戻らないよ。お前らに迷惑をかけたくない」
「遊騎……」
少し悲しそうな目をする闇さんに、師匠は苦笑しながら応える。
「そんな顔するなって。別に、後ろ向きな考えで言ってるわけじゃないんだ。俺にはもう、自分の思いを託すべき奴が見つかった。だから、今はそいつのことを見ていてやりたい」
そういって師匠は私のことを見る。
私は、胸の中が熱くなった気がした。
師匠は本気で私に全てを託してくれている。
それが堪らなく嬉しかった。
師匠に初めて会った時、私はまだデュエルをすることが怖かった。

空閑君にヴァレルソードドラゴンを盗られてしまった時ですら、失うことが怖くて、デュエルすることが出来なかった。
そんな私を、師匠は助けてくれた。
空閑君からヴァレルソードドラゴンを取り返してくれて、私に、もう1度デュエルが楽しいものだっていうことを、見せてくれた。
私の師匠に、なってくれた。
やっぱり、私は師匠の期待に応えたい。
それがどんなに険しい道だったとしても、偶然出会っただけの、こんなにも弱い私のことを信じてくれる師匠の為にも。
師匠の視線が私に向いていることに気づいたのか、闇さんは1度こちらを見ると、少しの間目をつぶってから、師匠に向けて、本当に少しだけ笑った。
「分かった、無理強いはしない。でも、いつかまた遊騎と一緒に、皆の前でデュエルするのは諦めないからね？」
「……ふっ、分かったよ。いつかまた、そんな日が来たらな」
「ん。それはそれとして、それなら私にも考えがある」
「考え？」
そういうと、闇さんは私の前にやってくる。
そして私の目を見ながらはっきりとした声で告げた。
「遊花をプロ決闘者にするの、私も手伝う」
「えっ⁉？」
闇さんの宣言に私は驚いて声を漏らす。
世界ランキング4位の人に手伝って貰うって、なんだか凄く大ごとになってきているような……いや、でもそれなら師匠だって元世界ランキング9位らしいし……もしかして、今更？
そんな闇さんを見て、師匠も思わず苦言を呈する。
「いや、手伝うも何もお前だってプロリーグで忙しいだろうが」
「遊騎、遊花の家に泊まってるって聞いた。なら、私も遊花の家に泊めてもらう。遊花、ダメ？」
「えっ⁉？あの、確かに部屋は空いてますけど……」
「ん、私も1人暮らしだから問題ない。一緒に過ごすなら仕事が終

わった後やオフの時に教えられる。完璧」
「はぁ⁉？」
その宣言に、流石に師匠も驚きの声を上げる。
そんな師匠を闇さんは真っ直ぐに見つめ返す。
「遊騎の弟子なら私の弟子も同然。それに、遊騎の後を継ぐというのなら、遊花がくる場所は決まってる」
「おい、それって……」
「ん……遊花を、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入れる。遊騎だって、本当はそう考えてるハズ」
「えっ⁉？」
私を、世界ランキング２位のチームに⁉？
闇さんの発言に、師匠も困ったような顔をする。
「……まあ、そうなればいいなとは思っていたが……」
「大丈夫、私が認める。私と遊騎の推薦なら社長達は拒否しない。それに、さっき遊花とデュエルして私にも分かった。遊花は間違いなく、遊騎と同じぐらい強くなる。私にだって勝てるぐらいに強くなる。だったら、社長達にもすぐに認められる」
「や、闇さん……」
まさか、さっきのデュエルでそこまで評価されてるとは思わなかった。
私は終始防戦一方だったハズなのに……
「それに、さっきのデュエルを見ててちょっと勿体ないところがあることにも気付いた。遊花、ＥＸデッキのモンスター、リンクモンスターしか持ってない？」
「えっ？あ、はい」
「そこが少し勿体ない」
「えっ？」
闇さんの言葉に首を傾げる。
リンクモンスターだけなのが、勿体ない？
「遊花のデッキは固い防御から展開してカウンターをすることが得意なように見えた。でも、リンクモンスターだけだと選択肢自体が少な

くなる。私の見立てでは、遊花のデッキはもっと沢山の可能性がある」
「沢山の、可能性？」
私は思わず自分のデッキを見る。
私のデッキに、そんな可能性が？
「ん。金華猫もいたからエクシーズ召喚は簡単だし、チューナーさえいればシンクロ召喚も出来る。手札の維持も上手だったから融合も出来るかも知れないし、サクリボーには儀式関係の効果があったから儀式召喚だって出来る。本当の意味で、遊花のデッキには無限の可能性があるの」
「他の召喚方法……」
確かに、私は今までリンク召喚しか使ったことがなかった。
でも、闇さんは私のデッキには無限の可能性があると言ってくれてる。
「遊騎は多分、遊花がデュエルをする時の気持ちとか、デュエルを楽しめるようになることを今教えてくれてると思う。だから、私は、遊花が全力で楽しいデュエル出来るような、遊花のデッキの特色を壊さず、遊花にあった戦術を見つけるお手伝いがしたい」
「私にあった戦術……」
「幸い、私は全部の召喚方法が使えるから、遊花にしっかりと教えることが出来る」
「えっ？でも、さっきのデュエルではエクシーズ召喚とリンク召喚しか……」
私がそういうと闇さんは心なし誇らしげに答える。
「これでも、世界ランキング４位だから。まだまだ、今の遊花相手なら全力は見せない。ヴェルズウロボロスを出した時に言ったハズ、私の切り札の１枚だって」
「むっ」
分かっていたことだが、それは少し悔しかった。
さっきのデュエル、私は私の全力で闇さんとデュエルした。
でも、闇さんからはまだまだデュエルをしている際に他の切り札を

隠せる程の余裕があったということだ。
　そんな私を見て、闇さんは挑発するように声をかけてくる。
「悔しい？」
「はい……でも、いつかは絶対に闇さんの切り札を全部出させて見せます‼？」
「ん、その意気や良し」
「……闇さん、私に教えてくれませんか？私に合った戦い方を」
「ん、約束したから。私の場所まで辿り着くの、いつまででも待ってるって。だから、そのためのお手伝い、頑張る。それに遊花が『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に来てくれるなら、私の後輩になる。後輩の面倒を見るのも、先輩の務め」
「‼？なら、これからよろしくお願いします、闇先パイ‼？」
「ん、凄くいい響き。これからもよろしく、遊花」
「はい‼？」
　笑い合う（闇先パイは無表情に見えるけど多分笑っているハズ）私達を見て、呆れたような声が聞こえてくる。
「なんか私達空気になってるけど、いいの？完全に忘れられてない？私達がいるの」
「まあ、家主は遊花だし、強くなりたいというのも遊花の意思だ。なら、俺はそれを尊重したい」
「なんか、遊花が一気に遠いところに行っちゃった気分ね」
「寂しいか？」
「まさか。すぐに追いついてやるわよ。それに、少し離れたぐらいで、友達ってことは変わらないわ」
「……そうか」
「うんうん、最近は本当にいいものがよく見れる。未来のプロ決闘者に期待だね」
　わ、忘れてたわけじゃないデスヨ？

ーーーーーーー

☆

「ふぅ……少し疲れたな」

あれから、すぐに遊花の家に移るという闇の要望で、闇の借りていたアパートから闇の荷物を運び出して遊花の家に移動させていたら、時刻はすっかり遅くなってしまった。

全員で協力したから早めに片がついたが、それでも終わった頃には８時半を回っていたので、今日の晩御飯は外食ということになってしまい、結局遊花の家に戻ってくる頃には１０時前になってしまった。

遊花と宝月は明日もまたデュエルアカデミアがあるからもう眠ってしまっているだろう。

そういう俺もそろそろ寝ないと明日の仕事に響きそうだ。

そんなことを考えていると、俺の部屋の扉が控えめにノックされた。

こんな時間に来るのはアイツしかいないだろうと辺りをつけ扉を開けると、そこには予想通り、パジャマ姿の闇が立っていた。

「少し、お話ししたい。いい？」

「ああ、別に構わない」

「ん、お邪魔、します」

そういうと闇は俺の部屋に入ってきて、置いてあった椅子の上にちょこんと座った。

それに対して、俺も床に敷いていた布団の上に座り込む。

話したいことはたくさんあるハズなのに、なんとなくお互いにどう話題を切り出せばいいのか分からず、辺りを静けさが支配する。

そんな時、お互いの視線が向いたのは俺が机の上に置いてあったデッキだった。

お互いの視線がデッキに向いたことが分かり、思わず俺達は笑いあった。

「なんというか、相変わらずだな、俺達も」

「ん、そうだね。私達が初めて出会った時も、『Ｎａｔｕｒａｌ』で遊騎がデッキを調整してるのを見かけたことだし」

「あの頃は驚いたんだぞ?・デッキを弄ってる俺を無表情のままジッと見てくるんだから。今なら、お前の雰囲気で感情の動きが多少分かるが、あの頃はそれも分からなかったし」
「ん、褒めて遣わす」
「どこ目線のコメントなんだよ、それ」
こうして、たわいもない軽いノリで話せる闇との会話は好きだ。
どうしようもないこと、苦しいことを考えないで済んでいたから。
多分、お互いにそれが分かっているのだろう。
だから、あの頃の俺達にはそのことが凄く救いになっていたんだ。
でも、今はそうじゃない。
こういう会話をするのも好きだが、今はそれよりも語るべきことは沢山あるだろう。
だから、俺は意を決して話を切り出す。
「闇」
「ん?」
「……悪かった」
「……」
「何も言わずにチームを辞めたことも、それから連絡を取ろうとしなかったのも、結局さ、怖かったんだよ。世間が、じゃない、お前達に嫌われるのが、何よりも怖かった。そんなこと、ありえるわけないのにな。親友のお前達を、信じきることが出来なかった」
「……ん、本当に、バカ」
「ああ」
「バカバカ、大バカ」
「ああ」
闇の言い分に、俺は何も返すことは出来ない。
返しちゃいけない……だって、返してしまえば、それを悲しんでくれた闇を否定することになってしまうから。
「私、あの頃辛かった」
「……」
「遊騎がいなくなって、したいことが分からなくなった。デュエルの

勝率もすっごく落ちた。デッキも、私に応えてくれなくなった」
「……さっきの遊花との会話で薄々気付いてたよ。デッキ、変わったんだな。『ヴェルズ』なんて、俺は聞いたことがないカードだったし。異名は変わらなかったから、相変わらず『氷結界』を使ってるんだと思ってたよ」
そう、闇は元々『ヴェルズ』なんていうカードは使っていなかった。
彼女が好んで使っていたのは『氷結界』。
彼女がプロ決闘者になる時、彼女の希望から皆で強力して組んで送ったデッキだった。
そんな俺の言葉を聞いて、闇は少し寂しそうな声を出す。
「あのデッキは、願掛けだったから。多分、使えなくなったのは、誓いを破った私への罰」
「願掛け？」
「ん……氷結界を使ってたことにはちゃんと意味があったの。そして、今のヴェルズにも。氷結界に込めていたのは、遊騎のこと」
「俺？」
突然出てきた俺の名前に思わず首を傾げてしまう。
そんな俺に闇は頷きながら答えてくれる。
「私は、あの火事の時、遊騎の心を救えなかった。私は、あの時側にいたのに、社長に会うまで、遊騎を救うことが出来なかった」
「っ⁉？闇……お前、そんなこと気にしてたのか？」
「当たり前……だって、あの頃１番遊騎の近くにいたのは私。なのに、私は遊騎に対して何も出来なかった……友達だと思っていたのに……」
そう言って目を伏せる闇に、俺は何も言えなくなる。
あの日、俺の両親が亡くなったあの火事の日。
闇は、俺と一緒にあの現場にいた。
闇も俺と同じで『Ｎａｔｕｒａｌ』で大会に出ていて、そして夜遅くなったから一緒に島さんに家まで送って貰うところだった。
そして、彼女も見たハズだ。
炎によって燃え尽きる俺の家を。

それからのこと、俺が荒れていた頃のことは、正直あまり覚えていない。
でも、その時には闇の姿はあったと思うけど、会話らしい会話は出来ていなかった気がする。
それは、彼女のせいじゃなく、間違いなく俺の責任で。
それは、彼女が背負わなくてもいいハズのものなのに……無表情でも、心優しい彼女は背負ってしまったのだろう。
「だから、プロ決闘者になる時に氷結界を選んだの。もし、また遊騎があの火事の時みたいに傷ついた時、その火も全部凍りつかせて遊騎を守れるようにって」
「お前……そんな理由で氷結界を使ってたのか？」
「だって……遊騎は私に初めて出来た友達だったから。無表情で無感情だった私の、初めてのお友達だもん」
そういう闇に俺はなんて声をかけていいか分からなかった。
そこまで自分の存在が闇にとって大きかったなんて、分からなかったから。
「だから、誓いが守れなかった私を、氷結界は怒っちゃったの。三龍は、まだ力を貸してくれるんだけどね。虎とか、他の子は無理だった。そんな時だね、ヴェルズに会ったのは」
そういう闇の言葉から感情は読めない。
でも、その言葉には様々な思いが詰まっている気がした。
「初めて見るカードで、戦い方も全然違うハズなのに、どうしてか私の感覚に馴染んだ。だから、今はヴェルズを使ってる。ヴェルズにも、込めている願いはあるけれど」
「ヴェルズに込めている願い？」
「ん……でも、それは内緒だよ？話したら、叶わなくなりそうだから」
そう言って話はここでおしまいとばかりに今度は俺に問いかけてくる。
「今度は私の質問。遊花と桜から聞いたけど、遊騎だってヒロイックなんて使ってなかったでしょ？あのカード達は？」

闇の質問に、俺も思わず苦笑を浮かべる。
何故なら、その理由は闇と同じものだから。
「理由はほとんど闇と同じだよ。デッキの中に入れても、あのカード達だけ、どうしても引けなくなった。絵札の三銃士は、変わらず力を貸してくれるんだけどな……多分、逃げた俺に愛想を尽かしたんだろうな」
「……ヒロイックにしたのは？」
「ん～直感みたいなものかな？今の俺には、ちょうどいい気がしたんだよ。逃げ出したのに、諦めきれない。半端な俺には、さ」
「……そっか」
それ以上、闇は何も言わなかった。
多分、言いたいことはあったんだと思う。
でも、言わないでくれた。
だから、俺は他のことを闇に聞いてみることにした。
「闇、遊花のこと、どう思った？」
そんな俺の漠然とした質問の意図も分かったのだろう、闇は少し思い返しながらもはっきりと断言した。
「似過ぎてるね、遊騎に」
「……やっぱりそう思うか？」
「ん、ここまで来るとタチが悪いレベル。話は聞いたけど、まるで同じ人生を他の誰かで再現してるんじゃないかって思うぐらい、境遇、出来事が似通ってる。違いだって性別とか事故の内容ぐらいだし、流石に気味が悪い」
闇の分析に俺も頷く。
まあ、流石に人生の再現は無いにしても本当に笑えない。
俺の両親も遊花の両親も亡くなったのはデュエルアカデミア1年生の時、そしてその後にイジメにあい、3年生の時に誰かに救われる。
おまけにデュエルが好きで諦めきれないところまで似てるのは、並行世界の自分だとか言われても違和感はないレベルだ。
それぐらい、栗原　遊花の人生は結束　遊騎の人生に似ているのだ。

だとすれば、遊花が辿る道筋は……と不安になってしまっても仕方がないことだろう。
だけど……
「俺は、初めて遊花に会った時、運命に出会ったと思った。俺と同じ道を辿るものだと」
「……」
「けどさ、だったらなおのこと認めてやれない。それが運命だなんて、決めてやるもんか。遊花は絶対に、俺のようにはさせない」
「……ん、私も同意見」
「もし、遊花が俺と同じ運命を辿るのなら、俺は今度こそ、何があろうと、運命と戦う。そして絶対に打ち勝つ。遊花の意思は、誰にも、それこそ運命にだろうと曲げさせねぇ」
「ん……でも、きっと大丈夫。だって、遊花の周りには沢山の優しい存在がついてる。遊騎に桜に、私、他にも色々なものがあの子の側にいる。だから、きっと大丈夫」
そういって優しい表情で笑う闇に俺も笑い返す。
そう、今度は間違えない。
絶対に、運命に打ち勝つ。
それが、遊花の師匠として、俺に出来ることのハズだから。
「さて、そろそろ寝るか。お前も明日はプロリーグの試合があるんだろ？」
「ん、ついでに遊花の話もしてくる。とはいえ、まだまだ遊花には超える壁がありそうだから、面会はまだになるけど」
「とりあえず、大会に出れる精神状態には持っていってやらないとな。今の段階ではその時点でキツい」
「もうすぐデュエルアカデミアは夏休みだから、その期間に大きな大会には出れるようにすればいい。それまでに精神的に安定するように、支えてあげよう？」
「だな。そういえば『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入って貰うならスートも引き継ぎかな？」
『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバーはそれぞれトランプのスート

の名前が与えられ、それで呼ばれるようにしていた。
　例えば、辞める前の俺はスペード、闇はハートのスートが与えられてた。
　そんな俺の言い分に、闇は忘れていたとばかりにパジャマのポケットから何かを取り出した。
「ん……忘れるところだった。これ、持ってて」
「ん？ネックレス、か？これ？」
　闇から渡されたのは濃緑色半透明で赤い斑点が見える宝石をスペードの形に加工したネックレスだった。
「遊騎がまた勝手にいなくならないように作った。作ったばかりだから不恰好だけど、危ない時には守ってくれると思うから、つけておいて。私も同じようなものがあるから、きっと危ないことがあったら私にも伝わるハズ」
「手作りの御守りみたいなものか。女の子ってそういうの好きだよな。というか、これ宝石かなんかじゃないのか？」
「大丈夫。これなら簡単にいくらでも手に入るし、加工できるから」
「そんなものがあるのか。これ、なんて宝石なんだ？」
　興味があって尋ねると闇は少し黒い笑みを浮かべながら答えた。
「ブラッドストーン……別名、ヘリオトロープ」
「へぇ、まあ貰えるなら貰っとくけどさ。ただ、これがスペードの形をしてるってことは……」
「スペードは遊騎のもの。今は仮で社長が使ってるけど、でも、皆遊騎のものだと思ってる。だから、遊花にも渡せない」
「それじゃあ遊花のはどうするんだよ？」
　俺のそんな質問に、闇は珍しくにっこりと笑った。
「それなら考えがある。ある意味、遊花の立ち位置として、これ以上ないものが」
「これ以上ないもの？」
　そして闇は自信満々にその言葉を口に出した。
「遊騎と私の弟子であり、私達『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に取ってもかなり重要な存在になる遊花に与えれる名前はただ１つ――

ーーー『ジョーカー』切り札の名を持ち、どのスートにも当てはまらないのが、遊花には相応しい」

第13話　闇に呑まれし星

☆

「準備は出来たのか？」
「ん、問題なし。今日も蹴散らしてくる」
「……世界ランキング4位が言うと洒落にならないわね」
「闇先パイ、頑張ってください‼？」
「頑張る。後輩に悪い報告は出来ない。速攻で終わらせる」
闇が引っ越してきて一夜が過ぎた栗原家前、俺達はそれぞれの行くべき場所に行くための準備を整え玄関前に出ていた。
現在はその中でも1番重要な仕事がある闇を全員で見送っている。
闇は相変わらずの無表情だが、雰囲気から確かな自信とやる気が伝わってくる。
「それにしても、案外ラフな格好をしてるのね？プロってそんなものなの？」
「……ぷっ」
「遊騎、笑わないで。私だって、本当はアレは着たくない」
闇の服装を見て、宝月がそんなことを口にする。
闇の今の服装は青白のボーダ―に白いパンツを合わているマリンスタイルという奴だ。
確かにこれで出てたらマシだろうが、普段闇がどんな格好でデュエルをしているのかを思い出し、思わず吹き出してしまう。
俺の反応に、闇はげんなりとし、何も知らない遊花と宝月は首を傾げる。
そして闇は少し嫌そうにしながら、仕方がなさそうに口を開いた。
「この服はあくまで私服で移動用。会場に行ったら、スポンサーの意向でスタイリストさんに着替えさせられる」
「着替えさせられるって、随分嫌そうな言い方だけど、どんな服を着てるのよ」
「……ゴスロリ」

嫌そうに呟く闇に、２人はうわぁという顔をした。
確かに闇の外見的にも性格的にも合っているとは思うが、本人のこの嫌がり方からどういう風に見られるのかを想像してしまったのだろう。
実際、プロ決闘者になると服装に関してもスポンサーの意向で決められることが非常に多く、会場で着替えることになるなんてざらにあることだ。
まあ、明らかに私服でデュエルするのもそれはそれで見栄えが悪いからなんだろうが、正直強制的に着替えさせられる側からしたら客寄せパンダにでもなった気分になる。
「あ、あの、闇先パイ。本当に頑張ってください」
「ん、大丈夫。デュエルの時には心に蓋をするから」
「そ、それはあんまり大丈夫じゃないのでは……」
「慣れれば大丈夫。それじゃあ、行ってくる」
そう言って、闇は駅の方に向いて歩いて行った。
おそらく、タクシーに乗って会場に行くだろう。
それを知らない為か、遊花が徒歩で移動していった闇を見て首を傾げた。
「闇さんは、歩いて会場に向かうんですか？」
「いや、タクシーだな。自分で運転するという選択肢がないからな」
「どうしてですか？」
「……どう見ても見かけが小学生な闇が車やバイクを運転して止められないと思うか？」
「あ、なんだか納得です」
「馬鹿なこと言ってないで、私達も行くわよ？あんまりのんびりしてると遅刻しちゃうし」
「あ、うん。それじゃあ師匠、行ってまいります‼？」
「おう、頑張ってこいよ」
「はい‼？」
「アンタも、仕事頑張りなさいよね」
「ああ」

そう言ってデュエルアカデミアに向けて歩き出す遊花達を見送り、俺もヘルメットを被りバイクに乗って走り出す。
さあ、今日も頑張りますかね。

ーーーーーーー

「ふぅ、やっぱり結構疲れるな」
午前中のやれることが一区切りつき、近くにあるコインロッカーから荷物を取り出してベンチで遊花が作った弁当を食べながら一息つく。
やりがいがある仕事だか、やはり外で長時間清掃を行うのは体力を食う。
特にもうじき夏だ。
その時のことを考えるとより一層げんなりとしてしまう。
「遊花の出る大会の件も考えないといけないしな……」
遊花をプロ決闘者にする段階で、俺が今1番考えてやらないといけないのはこのことだ。
遊花のデュエルに対する恐怖は、もうかなり治ってきている。
闇にだって怯まずに挑むことが出来たのだから、今ならどんな奴が相手だろうとデュエルすることができるだろう。
しかし、大会となると遊花は過去のトラウマと向き合わなければならなくなる。
つまり、自分が大会に出てしまうことで誰かが、何かが無くなってしまうのではという恐怖心。
正直、これを正面から受け止めて乗り越えろというのは酷な話だ。
俺も両親を失ってからプロ決闘者になるまでは大会には出れなかった。
大会に出る際に、どうしても両親が亡くなったことが思い出され、身体が震えた。
俺が乗り越えることが出来たのは、島さんという俺を受け入れてくれた新しい家族への恩義と、無くなりそうだった俺の1番大切な思い

出の場所を守るため、勇気を振り絞って心を軋ませながらも無理をしたからだ。
荒療治といっても差し支えがないその方法を、遊花に使えるかと言えば微妙だし、使うつもりもない。
「何かあるハズだよな……同じ経験をしてきた俺だからこそ見つけられる何かが、きっと」
昨夜、闇と話した内容が思い返される。
まるで同じ人生を他の誰かで再現してるんじゃないかという程の類似。
これが本当に神って奴の仕業なら本気でぶん殴ってやりたい程だ。
でも、だからこそ俺は遊花のことを理解してやることが出来る。
「……ダメだ、今はまだ何にも浮かばねぇ」
俺は一息ついて弁当を片付ける。
もう少しで昼休憩も終わりだ。
後はまた仕事をしながら考えよう。
そんなことを思いながら荷物を持って立ち上がると、ベンチの下にカードが落ちてるのが見えた。
「ん？こんなもの落ちてたか？もしかして俺のカードが落ちたとか……」
そんなことを呟きながら、落ちていたカードを拾う。
その瞬間ーーー
「っ⁉？ぐっ‼？」
ーーーカードから何かが俺に向かって放たれた気がした。
その何かは俺の身体を巡り、俺の意識を薄れさせる。
「っ‼？まずっ‼？」
そのまま意識が持っていかれると思った瞬間、昨日闇から貰ったペンダントが黒く光った気がした。
するとら、今まで俺を襲っていた何かの感覚が完全に消え失せた。
「っ‼？はぁ……はぁ……な、なんだったんだ、今の？」
俺は拾ってしまったそのカードを見る。
そのカードは今まで見たことがないモンスターだった。

しかし、このカードが今の現象を引き起こしたということだけは直感で理解出来た。
「おいおい、呪われたカードだって言うのか？こんなもの持ってるのも怖いが、放置も出来ないぞ？」
俺は拾ってしまったカードを眺めながらそんなことを呟く。
さっきの俺は何故だか分からないが助かった。
けど、偶然助かったとも考えにくいし、これを他の人間に渡して大丈夫だとも思えない。
「本当にどうするんだ、これ？渡すのも怖いし、手元において置くのも怖い。八方塞がりだ」
どうしようかと頭を抱えたそうになった時ーーー
『見つけたぞ』
「……は？」
ーーー後ろから何かの声がした。
振り向くと、そこには全身黒づくめの見るからに怪しい男が木の陰からこちらを見ていた。
黒の装甲のようなスーツに黒いヘルメットを被り、そのヘルメットによって声を変えているのか元の声もわからない。
体型から男ではあるようだが、それ以上のことは全くわからない見るからに怪しい男を見て、俺は荷物を持って後ずさる。
その男は木の陰から出てくると俺が拾ったカードを指差してヘルメット越しに言葉をかけてくる。
『そのカードを私に渡せ。そのカードは私のものだ』
「は？誰なんだアンタ一体？というか、渡せるわけないだろ。そんな見るからに怪しい格好している奴に。渡して欲しかったら最低でももっとまともな格好をしてから出直してこい」
俺の返答に黒づくめの男はデュエルディスクを起動させる。
そしてデュエルディスクを操作すると、急に辺りの風景が変化した。
昼間の静かな公園の姿は消え、辺りは闇に包まれ、草生い茂る星降る霊園になっていた。

「これは……フィールド魔法の転写？いや、でもこんなフィールド魔法見たことないし、立体映像のハズなのに草の感覚だって……あーもう、今日はなんだってんだ‼？」
混乱する俺を前に男はデュエルディスクを俺に向けながら言う。
『このステージは私の才能で作り上げたものだ。このステージから出るには、私にデュエルで勝つしかない』
「っ、ならお前を倒せばいいだけだ‼？」
そういって俺もデュエルディスクを構える。
それに対し、男は不気味な機械音のままで笑う。
『出来るかな、君に？』
「そんなの分かるか‼？それでも、やらなきゃいけないんだよ‼？」
『ククク、面白い。なら、見せて貰おうか、君の才能を』
『決闘‼？』

遊騎　ＬＰ８０００
黒い男　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は俺だ‼？俺は魔法カード、予想ＧＵＹを発動‼？自分フィールドにモンスターが存在しない場合にこのカードは発動できる。デッキからレベル４以下の通常モンスター１体を特殊召喚する‼？来い、クィーンズナイト‼？」
〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００
俺の前に現れたのは赤い鎧を身に纏った女性の騎士。
今回の相手は得体が知れない。
だからこそ、様子見なんてものはしない。

「さらに俺はキングスナイトを召喚!!?」

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

クィーンズナイトの横に並び立ったのは黄金の鎧を身に纏った騎士。
そしてクィーンズナイトとキングスナイトはお互いに剣を掲げて更なる騎士を呼ぶ。
「キングスナイトの効果発動!!?自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト１体を特殊召喚する!!?集え、絵札の三銃士!!?来い、ジャックスナイト!!?」

〈ジャックスナイト〉☆５　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

クィーンズナイトとキングスナイトの剣に合わせるように剣を掲げる青い鎧の騎士が現れる。
「全力で行く!!?斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
俺がそういって手を前に突き出すと、俺の目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はカード名が異なる戦士族モンスター３体!!?俺はクィーンズナイト、キングスナイト、ジャックスナイトの３体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
絵札の三銃士がサーキットに吸い込まれていく。
そしてサーキットのリンクマーカーが輝くとサーキットの中から白銀の鎧を身に纏った騎士が現れた。
「リンク召喚!!?運命と戦う孤高の騎士!!?リンク３!!?アルカナエクストラジョーカー!!?」

〈アルカナエクストラジョーカー〉ＬＩＮＫ３　戦士族　光属性
ＡＴＫ２８００　↙?　→　↘?

現れた銀色の騎士を見て、男が関心したように呟く。
『ほう、いきなりリンク３のモンスターを出してくるか』
「装備魔法、妖刀竹光をアルカナエクストラジョーカーに装備!!?」
エクストラジョーカーの剣が禍々しい竹光に変わる。
お前には似合わないが、悪いが今は頼む。
「さらに魔法カード黄金色の竹光を発動!!?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを２枚ドローする!!?カードを１枚伏せてターンエンドだ!!?」

遊騎　ＬＰ８０００　手札２
ー△▲ーー　ー
ーーーーー
☆　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
黒い男　ＬＰ８０００　手札５

『私のターン、ドロー。フム、まずはこうしよう。速攻魔法、手札断殺。お互いのプレイヤーは手札を２枚墓地へ送り、その後、それぞれデッキから２枚ドローする』
「手札交換か……だが、墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?デッキから妖刀竹光以外の竹光カードをデッキから手札に加える!!?この効果で手札に加えるのは黄金色の竹光だ!!?」
『ほう、意外と抜け目がない男だな、君は。ならば私も墓地から罠カード、幻影翼の効果を発動だ。墓地のこのカードを除外し、自分の墓地の幻影騎士団モンスター１体を特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは、フィールドから離れた場合に除外される。私は墓地から幻影騎士団（ファントムナイツ）フラジャイルアーマーを特殊召喚する』

〈幻影騎士団フラジャイルアーマー〉☆４　戦士族　闇属性
ＤＥＦ２０００

現れたのは青白い炎の身体を持った騎士。
幻影騎士団は俺も罠カードで使っているから分かる。
アイツは幻影騎士団デッキなのか？
そんな俺の予想は次のカードにより大きく外される。
『私は星因士（サテラナイト）ベガを召喚』
「⁉？幻影騎士団じゃない⁉？」

〈星因士ベガ〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１２００

現れたのは見たことがない琴のような形をした星の戦士。
『誰も幻影騎士団のデッキとは言ってない。そしてこの星因士は私の為だけに存在するカードだ。見られたことを光栄に思うがいい。星因士ベガの効果発動⁉？このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、手札から星因士ベガ以外のテラナイトモンスター１体を特殊召喚する。手札から星因士（サテラナイト）ウヌクを特殊召喚』

〈星因士ウヌク〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１８００

次に現れたのは蛇使いのような星の戦士。
どうやらあの星因士というテーマは星座をモチーフにしているようだ。
『星因士ウヌクの効果発動⁉？このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから星因士ウヌク以外のテラナイトカード１枚を墓地へ送る。私はデッキから星因士（サテラナイト）デネブを墓地に送る』
そして男はモンスター達に手をかざす。

『私は3体のレベル4モンスター、星因士ウヌクと星因士ベガ、幻影騎士団フラジャイルアーマーでオーバーレイ。3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?』
ベガとウヌク、フラジャイルアーマーが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、空から翼が生え、剣と光の輪を持つ光輝く戦士が舞い降りる。
『闇夜に輝く破滅の戦士!!?星輝士(ステラナイト)デルタテロス!!?』

〈星輝士デルタテロス〉★4　戦士族　光属性
ＡＴＫ２５００

「成る程、テラナイトって言うのはエクシーズ召喚が主体のテーマか」
『頭の回転も速いようだ。もっと楽しませてくれたまえ。星輝士デルタテロスの効果発動!!?オーバーレイユニットを1つ使い、1ターンに1度フィールドのカード1枚を対象とし、破壊する!!?その騎士には消えて貰おうか。バーンコメット!!?』
デルタテロスが持つ光の輪から隕石が現れ、エクストラジョーカーに降り注ぐ。
「させるか!!?アルカナエクストラジョーカーの効果発動!!?アボイドフェイト!!?1ターンに1度、フィールドのこのカードまたはこのカードのリンク先のモンスターを対象とする、モンスターの効果・魔法・罠カードが発動した時、そのカードと同じ種類の手札を1枚捨てることでその発動を無効にする!!?俺は手札からＨ・Ｃ(ヒロイックチャレンジャー)サウザンドブレードを捨てる!!?」
『そんな効果を持っていたか……』
エクストラジョーカーが隕石に向かって手をかざすと、隕石はエクストラジョーカーを避けて地面にぶつかった。
『ならば少し予定がズレるが仕方ない。バトルフェイズ。速攻魔法、ライバルアライバル』
「何!!?」

『その効果により自分・相手のバトルフェイズにモンスター1体を召喚する。私は星因士（サテラナイト）リゲルを召喚』

〈星因士リゲル〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

次に現れたのは宝石のように輝く星の戦士。
『星因士リゲルの効果発動。召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、フィールドのテラナイトモンスター1体を対象としてそのモンスターは、攻撃力が５００ポイントアップする』
「っ、超えられるか」
『ただしこの効果を受けたモンスターはエンドフェイズに墓地へ送られる。私は星輝士デルタテロスの攻撃力を５００ポイントアップする』

星輝士デルタテロス
ＡＴＫ２５００→３０００

『バトル。星輝士デルタテロスでアルカナエクストラジョーカーを攻撃‼?デルタブレイク‼?』
「っ、迎え撃て‼?ストレートフラッシュ‼?」
空を高速で移動しながら何度も何度もデルタテロスがエクストラジョーカーに剣を振るう。
最初は対応できていたエクストラジョーカーだったがリゲルの支援により赤い光を纏い、スピードが上がったデルタテロスにその剣で斬られてしまった。

遊騎　ＬＰ８０００→７８００

ライフが少量だけ削られる、すると、連動するかのように俺の身体にも少しだけ痛みが走った。

「っ⁉？今、痛みが……」
『気付いたか。このデュエルではライフが減ると実際の身体も傷つけられるのだよ。せめて大きなダメージには気をつけたまえ』
「なんだって⁉？くっ、アルカナエクストラジョーカーの効果発動‼？ユナイテッドリンク‼？リンク召喚したこのカードが戦闘で破壊され、墓地へ送られた時、デッキから戦士族・レベル４の通常モンスター１体を特殊召喚し、デッキから戦士族・レベル４モンスター１体を手札に加える‼？俺はデッキからクィーンズナイトを特殊召喚し、キングスナイトを手札に加える‼？さらに戦闘ダメージを受けた時、Ｈ・Ｃサウザンドブレードの効果発動‼？このカードが墓地に存在し、戦闘・効果で自分がダメージを受けた時、このカードを墓地から攻撃表示で特殊召喚する‼？そして墓地に落ちた妖刀竹光の効果でデッキから折れ竹光を手札に加える」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

フィールドにクィーンズナイトとサウンドブレードが現れる。
それを見て、男は関心したように口を開く。
『ほう、勝利の為にダメージを恐れなかったか。なかなか肝が座っている』
「五月蝿えよ。さあ、俺の場にはクィーンズナイトとＨ・Ｃ　サウザンドブレードがいるぜ」
『君のデッキで厄介なのはそこの通常モンスターだろう？ならば迷うことはない。星因士リゲルでクィーンズナイトを攻撃』
「まあ待てよ。もう少し選択肢をやるさ。速攻魔法、ライバルアライバル‼？」
『何⁉？』

「効果は言う必要はないな？その効果によりキングスナイトを召喚‼？」

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

クィーンズナイトの横に黄金の鎧を身に纏った騎士が再び並び立つ。
「キングスナイトの効果発動‼？自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト１体を特殊召喚する‼？再び集え、絵札の三銃士‼？来い、ジャックスナイト‼？」

〈ジャックスナイト〉☆５　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

『くっ、まさか私のターンに絵札の三銃士を揃えてくるとはな。モンスターが増えたことで攻撃対象の変更だ。星因士リゲルでＨ・Ｃ　サウザンドブレードを攻撃‼？ダイヤモンドスター‼？』
リゲルが生み出したダイヤモンドの隕石がサウザンドブレードを押し潰す。
「っ、これぐらい……」

遊騎　ＬＰ７８００→７２００

『残ってしまうか……私はカードを１枚伏せ、エンドフェイズに星輝士デルタテロスは墓地に送られる。しかし、この瞬間、星輝士デルタテロスの効果発動‼？メテオリインカネーション‼？このカードがフィールドから墓地へ送られた場合、手札・デッキからテラナイトモンスター１体を特殊召喚する‼？』
「っ、アルカナエクストラジョーカーみたいなリクルート効果か」

『私はデッキから星因士（サテラナイト）アルタイルを特殊召喚』

〈星因士アルタイル〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１３００

デルタテロスが墜落しながら粒子に変わっていく、しかしデルタテロスの身体が光輝くとデルタテロスの身体を少し小さくしたような星の戦士の姿に変わり、その戦士はそのまま地面に降り立った。

『まだ終わっていない。星因士アルタイルの効果発動‼？このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、星因士　アルタイル以外の自分の墓地のテラナイトモンスター１体を守備表示で特殊召喚する。この効果の発動後、ターン終了時までテラナイトモンスター以外の自分フィールドのモンスターは攻撃できない』

「っ、まだ増えるのか。というかその制約はデメリットにすらなってねぇよ」

『ククク、存分に恐れるがいい。私は墓地から星因士デネブを特殊召喚』

〈星因士デネブ〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１０００

アルタイルが地面に剣を突き刺すと、地面から光の粒子が漏れ、その粒子は白鳥のような優雅な星の戦士に姿を変えた。

『星因士デネブの効果発動‼？このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから星因士デネブ以外のテラナイトモンスター１体を手札に加える。私はデッキから星因士アルタイルを手札に加える』

「次のターン展開する準備まで行うとは抜け目がない……」

『当たり前さ。何故なら私は天才だからな。私はこれでターンエンド。さあ、君の力を最見せてみろ』

遊騎　ＬＰ７２００　手札３
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー○□○ー　　ー　　ー
ー□○□ー
ー　ー▲ー　　ー
黒い男　ＬＰ８０００　手札１

「俺のターン、ドロー!!?」
俺は自分の手札を見て、どう動くかを考える。
やはりリンク召喚かエクシーズ召喚で一気に叩くべきか？
そう考えてフィールドを見ると奴の伏せカードが目に入り、そこで１つの可能性に思い至った。
さっきから奴の戦い方に、俺は凄い既視感を感じている。
奴の戦い方は何処か俺の戦い方に似ているのだ。
考え過ぎかも知れない。
だが、俺はこの予感を無視出来ない。
なら……
「俺はクィーンズナイトを攻撃表示に変更する」

クィーンズナイト
ＤＥＦ１６００→ＡＴＫ１５００

「そしてバトルだ!!?クィーンズナイトで星因士デネブを攻撃!!?」
『成る程、私の伏せカードを感じとったか。なら、ご期待に添えるとしよう。リバースカードオープン!!?罠発動!!?ワンダーエクシーズ!!?その効果により自分フィールド上のモンスターでエクシーズ召喚を行う!!?』
「っ!!?やはりバトルフェイズ中のモンスターの展開カード!!?」
そして男はモンスター達に手をかざす。

『私は3体のレベル4テラナイトモンスター、星因士アルタイルと星因士デネブ、星因士リゲルでオーバーレイ。3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?』
アルタイルとデネブ、リゲルが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、デルタテロスに似た白銀の戦士が舞い降りる。
『闇夜を照らす壊滅の戦士!!?星輝士(ステラナイト)トライヴェール!!?』

〈星輝士トライヴェール〉★4　戦士族　光属性
ＤＥＦ２５００

『星輝士トライヴェールの効果発動!!?パニッシュメントワームホール!!?このカードがエクシーズ召喚に成功した場合、このカード以外のフィールドのカードを全て持ち主の手札に戻す!!?』
「何!!?」
『消え去れ、絵札の三銃士!!?』
トライヴェールが剣を振るうと空間が裂け、そこに絵札の三銃士が吸い込まれていった。
吸い込まれた絵札の三銃士は手札に戻ってくる。
このデッキで1番困ることはジャックスナイトが手札にくることだ。
こうなってしまうとほとんど使いようがない。
「っ、メインフェイズ2!!?相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。来い、Ｈ・Ｃ(ヒロイックチャレンジャー)　強襲のハルベルト!!?」

〈Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト〉☆4　戦士族　地属性
ＤＥＦ２００

俺の前に現れたのはハルバードを持った紫の鎧を纏った戦士。
「さらに装備魔法、折れ竹光をＨ・Ｃ　強襲のハルベルトに装備!!?魔法カード、黄金色の竹光を発動!!?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを２枚ドローする!!?よし!!?カードを１枚伏せて、魔法カード、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローする!!?俺は４枚、お前は１枚捨ててドローだ」
『ほう、手札に戻ってしまった絵札の三銃士を有効に活用できるカードを引き当てたか』
よし、これならまだ動ける!!?
「リバースカードオープン。魔法カード、闇の量産工場。墓地に存在する通常モンスター２体、クィーンズナイト２枚を手札に加える。そしてＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）エクストラソードをを召喚!!?」

〈Ｈ・Ｃ　エクストラソード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１０００

現れたのは銀色の鎧を身に纏った二刀流の戦士。
俺はその姿を確認してから、２体の戦士に手をかざす。
「俺は戦士族、レベル４のＨ・Ｃ　強襲のハルベルトとＨ・Ｃ　エクストラソードでオーバーレイ!!?２体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?」
Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトとＨ・Ｃ　エクストラソードが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から赤い鎧を着た馬に乗る弓兵が舞い降りた。
「エクシーズ召喚!!?現れろＨ（ヒロイック）ーＣ（チャンピオン）ガーンデーヴァ!!?」

〈ＨーＣ　ガーンデーヴァ〉★４　戦士族　地属性
ＡＴＫ２１００

「まずはエクシーズ素材になったＨ・Ｃ　エクストラソードの効果発動‼？このカードを素材としてエクシーズ召喚したモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする‼？」

ＨＩＣ　ガーンデーヴァ
ＡＴＫ２１００→３１００

ガーンデーヴァを赤いオーラが包んでいく。
『攻撃力３１００か。中々のパワーだな』
「おまけにＨＩＣ　ガーンデーヴァは１ターンに１度、レベル４以下のモンスターが特殊召喚された時にオーバーレイユニットを１つ使うことでそのモンスターを破壊できる。これ以上お前に特殊召喚は通させない」
『ククク、その程度のモンスターで本当に止めることが出来るかな？』
「さあな。俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ７２００　手札４
ーーー▲ーーー　ー
ーーーーーー
○　□
ーーーーーー
ーーーーーー　ー
黒い男　ＬＰ８０００　手札１

『私のターン、ドロー……フム、今出来ることは少ないか。なら、星輝士トライヴェールの効果発動‼？ポテンシャルパニッシュ‼？オーバーレイユニットを１つ使い、相手の手札をランダムに１枚選んで墓地へ送る‼？』
「っ⁉？手札破壊か‼？」
トライヴェールが剣を振るうと再び空間が裂け、その裂け目に俺の手札が吸い込まれていった。

『君にチャンスをやろう。精々活かしてみるといい。私はカードを1枚伏せてターンエンドだ』

遊騎　ＬＰ７２００　手札３
ー－▲－－　ー
－－－－－
○　□
－－－－－
－－▲－－　－
黒い男　ＬＰ８０００　手札１

「俺のターン、ドロー!!?」
今の奴のフィールドにはトライヴェールと伏せカードが1枚のみ。
ダメージが実際に襲ってくるデュエルなら、長期戦はマズイ。
ここはリスクを覚悟してでも短期決戦を狙う!!?
「魔法カード、貪欲な壺を発動!!?墓地に存在するアルカナエクストラジョーカーをＥＸデッキ、ジャックスナイトとキングスナイト２枚ずつをデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする!!?そしてクィーンズナイトを召喚!!?」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１５００

「バトル!!?ＨＩＣ　ガーンデーヴァで星輝士トライヴェールを攻撃!!?暴嵐の矢!!?」
『迎え撃て!!?星輝士トライヴェール!!?スタードロップ!!?』
ガーンデーヴァの弓矢の嵐に、トライヴェールは隕石を落として対応する。
しかし、その隕石の隙間を縫って放った弓矢がトライヴェールを撃ち抜き、トライヴェールが墜落した。
『星輝士トライヴェールの効果発動!!?スターリインカネーション!!

？オーバーレイユニットを持つこのカードが墓地へ送られた場合、自分の墓地のテラナイトモンスター１体を対象に、そのモンスターを特殊召喚する。私は墓地から星因士デネブを特殊召喚する』

〈星因士デネブ〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１５００

『星因士デネブの効果発動!!?このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから星因士デネブ以外のテラナイトモンスター１体を手札に加える。私はデッキから星因士アルタイルを手札に加える』
「だが、ＨＥＣ　ガーンデーヴァの効果発動!!?オーバーレイユニットを１つ使い、相手フィールド上にレベル４以下のモンスターが特殊召喚された時、その特殊召喚されたモンスターを破壊する。裁きの神弓!!?」
トライヴェールの姿が粒子に変わり、その粒子がデネブの姿に変わる。
しかし、デネブの姿に変えた瞬間ガーンデーヴァが弓矢でデネブを撃ち抜いた。
これで奴を守るモンスターはいない!!?
「行け!!?クィーンズナイトでダイレクトアタック!!?クィーンズスラッシュ!!?」
『くっ、これぐらい受けてやろう』

黒い男　ＬＰ８０００→６５００

クィーンズナイトに斬りつけられたが奴は平然としていた。
やはりあの装甲でダメージを軽減しているのだろう。
だが、それでも多少はダメージがあるハズだ。
「まだだ!!?速攻魔法発動!!?ライバルアライバル!!?」
『まだ追撃が出来るか』

「このカードは自分・相手のバトルフェイズに発動でき、モンスター1体を召喚する!!?・来い、キングスナイト!!?」
『!!?』

〈キングスナイト〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

「そしてライバルアライバルで行われるのは特殊召喚ではなく召喚だ。よって、キングスナイトの効果発動!!?・クィーンズナイトが存在するため、三度集え、絵札の三銃士!!?・来い、ジャックスナイト!!?」

〈ジャックスナイト〉☆5　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

『1度ならず2度までもバトルフェイズ中に再び絵札の三銃士を揃えただと!!?』
「これが俺の騎士達の結束の力だ!!?・バトルフェイズ中の召喚により2体共攻撃する権利が残っている!!?・行け!!?・キングスナイトでダイレクトアタック!!?・キングススラッシュ!!?」
『チッ、小賢しい』

黒い男　ＬＰ６５００→４９００

「追撃だ!!?・ジャックスナイトでダイレクトアタック!!?・ジャックススラッシュ!!?」

黒い男　ＬＰ４９００→３０００

これ以上の追撃は出来ない。
だが、奴のライフを大きく削ることが出来た。
このままの勢いで攻めきる。

「俺はこれでターンエンド……」
『この瞬間、リバースカードオープン!!?永続罠、リビングデッドの呼び声!!?』
「何っ!?」
『自分の墓地のモンスター1体を対象として、そのモンスターを攻撃表示で特殊召喚する。ただし、このカードがフィールドから離れた時にそのモンスターは破壊され、そのモンスターが破壊された時にこのカードは破壊される。私は墓地から星因士ベガを特殊召喚』
〈星因士ベガ〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１２００

マズイ、ガーンデーヴァは既に使っている。
ここからの展開は止められない。
『星因士ベガの効果発動!!?このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、手札から星因士ベガ以外のテラナイトモンスター1体を特殊召喚する。手札から星因士アルタイルを特殊召喚』
〈星因士アルタイル〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１７００
『さらに星因士アルタイルの効果発動!!?このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、星因士　アルタイル以外の自分の墓地のテラナイトモンスター1体を守備表示で特殊召喚する。この効果の発動後、ターン終了時までテラナイトモンスター以外の自分フィールドのモンスターは攻撃できない。私は星因士ウヌクを特殊召喚』
〈星因士ウヌク〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１８００
『星因士ウヌクの効果発動!!?このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚

に成功した場合、デッキから星因士ウヌク以外のテラナイトカード1枚を墓地へ送る。私はデッキから星因士デネブを墓地に送る』

くっ、攻め急ぎ過ぎた。

これで返しのターン、確実にエクシーズ召喚がくる。

遊騎　ＬＰ７２００　手札２

ー　ー　▲　ー　　ー

ー　○　○　○　ー

○　　ー

ー　○　○　○　ー

ー　ー　△　ー　　ー

黒い男　ＬＰ３０００　手札１

『私のターン、ドロー。私もこのカードを使わせて貰おう。魔法カード、貪欲な壺。墓地に存在する星輝士トライヴェール、星輝士デルタテロスをＥＸデッキ、星因士リゲル、星因士アルタイル、星因士デネブをデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローする。ほう、丁度いいものを引いた。私は幻影騎士団（ファントムナイツ）ダスティローブを召喚』

〈幻影騎士団ダスティローブ〉☆3　戦士族　闇属性

ＡＴＫ８００

現れたのは黒いマントを被った戦士。

ここで再び幻影騎士団のモンスター？

『さらに自分フィールドに幻影騎士団モンスターが存在する場合、手札から幻影騎士団（ファントムナイツ）サイレントブーツ特殊召喚できる』

〈幻影騎士団サイレントブーツ〉☆3　戦士族　闇属性

ＤＥＦ１２００

次に出てきたのは茶色い帽子を被った戦士。

これは、止めざるをえない。
「HーC　ガーンデーヴァの効果発動!!?オーバーレイユニットを1つ使い、相手フィールド上にレベル4以下のモンスターが特殊召喚された時、その特殊召喚されたモンスターを破壊する。裁きの神弓!!?」
ガーンデーヴァの弓矢がサイレントブーツを撃ち抜く。
しかし、奴は気にした様子を見せない。
『墓地に存在する幻影騎士団フラジャイルアーマーの効果発動!!?手札にある墓地のこのカードを除外し、手札の幻影騎士団カードまたはファントム魔法・罠カード1枚を墓地へ送り、デッキから1枚ドローする。私は手札から幻影霧剣を墓地に送り1ドロー。さらに今、墓地に送った幻影霧剣の効果発動!!?墓地のこのカードを除外し、自分の墓地の幻影騎士団モンスター1体を対象として特殊召喚する。ただしこの効果で特殊召喚したモンスターは、フィールドから離れた場合に除外される。私は幻影騎士団サイレントブーツを特殊召喚する』

〈幻影騎士団サイレントブーツ〉☆3　戦士族　闇属性
DEF1200

再び現れるサイレントブーツ、これでレベル3モンスターが2体。
『私はレベル3、幻影騎士団サイレントブーツと幻影騎士団ダスティローブでオーバーレイ!!?2体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?』
サイレントブーツとダスティローブが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から漆黒の馬に乗る亡霊の騎士が舞い降りた。
『全てを砕く亡霊の剣!!?幻影騎士団ブレイクソード!!?』

〈幻影騎士団ブレイクソード〉★3　戦士族　闇属性
ATK2000

『幻影騎士団ブレイクソードの効果発動!!?クラッシュスラッシュ!!?オーバーレイユニットを1つ使うことで自分及び相手フィールドのカードを1枚ずつ対象とし、そのカードを破壊する!!?私は幻影騎士団ブレイクソードと君のセットカードを破壊しよう』
「くっ、リバースカードオープン!!?罠発動、ダメージダイエット!!?このターン自分が受ける全てのダメージは半分になる!!?」
『フリーチェーンのカードだったか、まあいいだろう。幻影騎士団ブレイクソードの更なる効果発動!!?ソルジャーリバイバル!!?エクシーズ召喚されたこのカードが破壊された場合、自分の墓地の同じレベルの幻影騎士団モンスター2体をレベルを1つ上げて特殊召喚する!!?ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は闇属性モンスターしか特殊召喚できない。甦れ、幻影騎士団サイレントブーツ、幻影騎士団ダスティローブ!!?』

〈幻影騎士団サイレントブーツ〉☆3→4　戦士族　闇属性
ＤＥＦ１２００

〈幻影騎士団ダスティローブ〉☆3→4　戦士族　闇属性
ＡＴＫ８００

ブレイクソードの姿が闇に溶け、代わりにサイレントブーツとダスティローブの姿が現れる。
これでレベル4モンスターは5体。
だが、奴のテラナイトは光属性のハズ、これ以上どんなモンスターが出てくるというんだ?
そんな疑問を浮かべる俺に、奴は機械越しでも分かる程愉快そうな声で笑った。
『君に見せてやろう。私の才能の結晶を』
「才能の結晶だと?」
『私はフィールドにいる戦士族、レベル4モンスター5体でオーバー

レイ!!?』
「!?・5体でのエクシーズ召喚だって!?」
『5体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?』
　奴の言葉に奴のモンスター達が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
　そして渦が爆けるとそこには圧倒的存在感を放つ巨大な槍を持つ白銀の騎士。
『終焉を導く槍よ!!?今その全てを拒絶せよ!!?現れろ!!?No.86 Hー C ロンゴミアント(ヒロイックチャンピオン)!!?』

〈No.86HーC　ロンゴミアント〉★4　戦士族　闇属性
　ATK1500

「No.86?俺が知らないHーC……だと?」
『フッ、君が知らないのは当然さ。このカードは闇のカードを研究し、既存のカードをベースとして変容させた、私の才能を注いで作り上げた新しいカードだからな!!?』
「闇のカード?いや、それよりもお前が作ったカードだって!?」
『そう、私の才能があれば新しいカードを作り上げることなど造作もないのだよ。まあ、まだこのカードは参考にしたNo.としての性質が強く現れ過ぎていて、制御が難しいものだがな。だからこそ、完璧に仕上げるために、君が先程手に入れた闇のカードが欲しいのだよ』
　奴の言ってることは半分以上分からないが、とりあえず俺が拾ったカードと今召喚されたモンスターがとてもヤバいものだということは理解できた。
「だが、5体のモンスターを素材にした割には大分弱っちいんじゃないか?」
『フッ、このモンスターの真価はその素材の数にあるのだよ。No.86HーC　ロンゴミアントはオーバーレイユニットの数によって様々な効果を得ていくモンスターなのだよ。1つ以上で戦闘破壊さ

れず、２つ以上で攻撃力・守備力は１５００ポイントアップし、３つ以上でこのカードはこのカード以外の効果を受けず、４つ以上で相手はモンスターを召喚・特殊召喚できなくなり、５つ以上で１ターンに１度、相手フィールドのカードを全て破壊できる‼?・』

Ｎｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアント
ＡＴＫ１５００→３０００

「なんだって⁉?・なんだそのインチキ効果⁉?・」
『安心したまえ。君のエンドフェイズには１つずつオーバーレイユニットは取り除かれていくさ。最も、それまで君が生きている保証はないがね』
「っ‼?・」
『さあ、性能テストの時間だ。Ｎｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアントの効果発動‼?・相手フィールドのカードを全て破壊する‼?・オーバーデストロイ‼?・』
　ロンゴミアントがその槍を振るうと、槍の先から衝撃波が生み出され、絵札の三銃士とガーンデーヴァが跡形もなく吹き飛ばされてしまった。
『さあ、バトルだ‼?・Ｎｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアントでダイレクトアタック‼?・ディスペアジャベリン‼?・』
「っ‼?・ぐあぁぁぁ‼?・」

遊騎　ＬＰ７２００→５７００

　ロンゴミアントが投げた槍が俺の足を貫き、俺はその場に崩れ落ちる。
　ダメージダイエットによりダメージが半分になっているハズなのにその痛みは今までに受けたモンスターのダメージの比ではなかった。
『私はカードを１枚伏せてターンエンドだ。さあ、モルモットとして

頑張ってくれたまえ』
嘲笑うような機械音が響く。
ロンゴミアントの攻撃は、これ以上受けちゃダメだ。
だが、俺は今召喚と特殊召喚を封じられている。
おまけにロンゴミアントは効果を受けない。
俺は本当に耐えきることが出来るのか？

遊騎　ＬＰ５７００　手札２
｜｜｜｜｜｜　｜
｜｜｜｜｜｜
｜　○
｜｜｜｜｜｜
｜｜△▲｜　｜
黒い男　ＬＰ３０００　手札０

第１４話　騎士の証

☆

遊騎　ＬＰ５７００　手札２
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　○
ーーーーーー
ーー△▲ー　ー
黒い男　ＬＰ３０００　手札０

「俺のターン、ドロー……くっ、モンスターをセット。ターンエンド」

なんとか立ち上がりカードを引くが、今は出来ることがない。

ここは、耐えるしかない。

『そうだ。君の選択肢はそれしかない。エンドフェイズ、Ｎｏ．８６ＨＥＲＯ　ロンゴミアントは自身の効果でオーバーレイユニットを１つ取り除く。残りのオーバーレイユニットは４』

遊騎　ＬＰ５７００　手札２
ーーーーーー　ー
ーー??ーー
ー　○
ーーーーーー
ーー△▲ー　ー
黒い男　ＬＰ３０００　手札０

『私のターン、ドロー。私は墓地に存在する幻影騎士団ダスティローブの効果発動。墓地のこのカードを除外し、デッキから幻影騎士団（ファントムナイツ）ク

ラックヘルムを手札に加える。そして幻影騎士団クラックヘルムを召喚』

〈幻影騎士団クラックヘルム〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１５００

現れたのは宙に浮くヘルムのようなモンスター。
『さあ、君のセットモンスターは何かな？バトル。幻影騎士団クラックヘルムでセットモンスターを攻撃‼？クラックインパクト‼？』
「セットモンスターはクィーンズナイト。幻影騎士団クラックヘルムでは届かない‼？」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

『分かっているさ。リバースカードオープン。罠発動‼？幻影剣‼？幻影騎士団クラックヘルムを対象に装備し、攻撃力は８００ポイントアップし、戦闘・効果で破壊される場合、代わりにこのカードを破壊できる。これで攻撃力はこちらが上だ』

幻影騎士団クラックヘルム
ＡＴＫ１５００→２３００

クィーンズナイトがクラックヘルムの装備した幻影剣に斬られる。
……来る‼？
『お待ちかねの時間だ。Ｎｏ．８６ＨｒＣ　ロンゴミアントでダイレクトアタック‼？ディスペアジャベリン‼？』
「っ‼？‼？があっぁぁぁ‼？‼？」

遊騎　ＬＰ５７００→２７００

ロンゴミアントの槍が投擲される瞬間に横に跳び避けようとしたが、槍から衝撃波が放たれ今度は衝撃波が先程と同じ左足を貫いた。
あまりの痛みに再び俺はその場に崩れ落ちる。
次は、避けられそうにない。
『やはりダメージは他のカードの比ではないな。流石は闇のカードのエネルギーだ。私はこれでターンエンド』

遊騎　ＬＰ２７００　手札２
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　○　ー
ー　ー
ー　ー○ー
ー　ー
ー　ー△▲ー　ー
黒い男　ＬＰ３０００　手札１

「俺のターン……ドロー。俺はカードを１枚伏せてターンエンド」
立ち上がることが出来ない……痛みで意識が朦朧としてくる。
まだだ、まだ召喚を行うことは出来ない。
この１ターンだけ……なんとか、耐えれば……
『フッ、モンスターを引けなかったか。それなら決まったようなものだ。エンドフェイズ、Ｎｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアントは自身の効果でオーバーレイユニットを１つ取り除く。残りのオーバーレイユニットは３』

遊騎　ＬＰ２７００　手札２
ー　ー
ー▲ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　○　ー
ー　ー
ー　ー○ー
ー　ー
ー　ー△△ー　ー
黒い男　ＬＰ３０００　手札１

『私のターン、ドロー。すぐに楽にしてやろう。バトル!!?これで終わりだ。Ｎｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアントでダイレクトアタック!!?ディスペアジャベリン!!?』
「まだだ!!?まだ終われない!!?相手の直接攻撃宣言時、墓地から罠カード幻影騎士団シャドーベイルの効果発動!!?このカードをレベル４、戦士族、攻撃力０、守備力３００の通常モンスターとして守備表示で特殊召喚する!!?」
『なに!?!?幻影騎士団だと!?!?』
「ただし、このカードが場を離れる場合、除外される」

〈幻影騎士団シャドーベイル〉☆４　戦士族　闇属性
ＤＥＦ３００

俺を守るように亡霊の騎士が現れる。
それを見て、奴は苛ついたようにロンゴミアントを振るう。
『手札抹殺の時に送っていたか!!?Ｎｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアント!!?その亡霊を引き裂け!!?』
ロンゴミアントの槍が振り切られ、シャドーベイルは空気に溶けるように消えていった。
『無駄な足掻きを……だが、攻撃すればＨ・Ｃサウザンドブレードが出てくるか。メインフェイズ２、私は墓地に存在する幻影騎士団サイレントブーツの効果発動。このカードを除外し、デッキからファントム魔法・罠を手札に加える。私は幻影霧剣を手札に加える。私はモンスターをセット。カードを２枚セットしてターンエンドだ』
「エンドフェイズ!!?手札を１枚捨て、速攻魔法、ツインツイスター!!?セットされた２枚の魔法・罠カードを破壊する!!?」
『チッ、幻影霧剣を狙ってきたか。幻影騎士団クラックヘルムの効果発動!!?幻影騎士団カードかファントム魔法・罠が墓地に送られた場合、攻撃力が５００ポイントアップする!!?』

幻影騎士団クラックヘルム
ＡＴＫ２３００→２８００

遊騎　ＬＰ２７００　手札１
ｌｌｌｌｌｌ　ｌ
ｌｌｌｌｌｌ
ｌ　○
ｌ??ｌ○ｌ
ｌｌ△△ｌ　ｌ
黒い男　ＬＰ３０００　手札０

これで奴の伏せカードは無くなった。
その代わり、こちらの手札も１枚。
ロンゴミアントもクラックヘルムもこちらのライフを超えているから攻撃をくらえばその時点で負け。
身体も、もう限界が近い。
ここで動けなければ負ける。
「俺のターン……ドロー!!?」
引いたカードを見る……いける!!?
「俺は、Ｈ・Ｃ　ダブルランスを召喚!!?」
俺が出したのは２つの槍を持った白い戦士。
「Ｈ・Ｃ　ダブルランスの効果発動!!?召喚成功時に手札・墓地の同名モンスターを表側守備表示で特殊召喚する!!?俺は墓地のＨ・Ｃ　ダブルランスを特殊召喚だ!!?」
『クッ……さっきのツインツイスターで送っていたか』
〈Ｈ・Ｃ　ダブルランス〉☆４　戦士族　地属性
ＤＥＦ９００
もう１体ダブルランスが現れる。
そして俺は正面に手を翳す。

「俺は戦士族、レベル４のＨ・Ｃ　ダブルランス２体でオーバーレイ‼？２体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」
２体のダブルランスが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこにいるのは赤い鎧を着た王者の風格を漂わせる戦士。
「光を纏て、闇を切り裂く孤高の王者‼？　Ｈ（ヒロイック）ー　Ｃ（チャンピオン）エクスカリバー‼？」

〈ＨーＣ　エクスカリバー〉★４　戦士族　光属性
ＡＴＫ２０００

「ＨーＣ　エクスカリバーの効果発動‼？シャイニングフォース‼？オーバーレイユニットを２つ使い、このカードの攻撃力は、次の相手のエンドフェイズ時まで元々の攻撃力の倍になる‼？」
エクスカリバーの周りを漂っていたオーバーレイユニットがエクスカリバーに集まり、エクスカリバーの身体が光り輝く。

ＨーＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ２０００→４０００

「さらに魔法カード、ヒロイックチャンス‼？自分フィールド上のヒロイックと名のついたモンスター１体を選択し、このターン、選択したモンスターは攻撃力が倍になる‼？ただし、相手プレイヤーにダイレクトアタックは出来なくなる」

ＨーＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ４０００→８０００

『攻撃力８０００のエクスカリバーだと‼？』

「バトル‼?・これで終わらせる‼?・Ｈ－Ｃ　エクスカリバーでＮｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアントを攻撃‼?・必殺剣　刀光剣影‼?・」
エクスカリバーの剣がロンゴミアントに向かう。
エクスカリバーの剣がロンゴミアントを斬り裂こうとしたその時、その間に割り込むように、フィールドにセットされていたモンスターがエクスカリバーの剣からロンゴミアントを守った。
「……な……に?・」
『危ないところだったよ。君がさっき破壊したカードがなかったらやられていたところさ。墓地から罠発動‼?・仁王立ち‼?・墓地のこのカードを除外して攻撃対象を私のセットモンスターを対象にし、そのモンスターしか攻撃出来なくする‼?・残念だったな‼?・必死の攻撃だったのにな‼?・』
攻撃対象の固定。
このターン、攻撃出来るのはあのセットモンスターのみ。
つまり、このターン、どう頑張っても勝つことは出来ない。
『さあ、セットモンスターを攻撃するか。選ぶがいい』
「……Ｈ－Ｃ　エクスカリバーでセットモンスターを攻撃する」

〈幻影騎士団フラジャイルアーマー〉☆４　戦士族　闇属性
ＤＥＦ２０００

セットされていたフラジャイルアーマーをエクスカリバーが両断する。
『幻影騎士団クラックヘルムの効果発動‼?・幻影騎士団カードかファントム魔法・罠が墓地に送られた場合、攻撃力が５００ポイントアップする‼?・』

幻影騎士団クラックヘルム
ＡＴＫ２８００→３３００

しかし、これでこのターンのバトルは終わり。

俺は手札も０。
フィールドにいるエクスカリバーもヒロイックチャンスの効果でこのターンの終わりに２０００に戻る。
そしてそうなれば次のターン、確実にクラックヘルムとロンゴミアントに破壊されるだろう。
そうなれば俺の負けだ。
「……っ」
俺は自分の墓地にあるカードを必死に思い出すが勝つところまでどうしても持っていくことが出来ない。
耐えられる手段は……まだ見つかった。
しかし、奴のライフはまだ３０００もある上に俺のデッキで最も攻撃力が高いエクスカリバーはもう出してしまい、２枚目はない。
例えエクストラソードを引いてエクシーズ召喚に繋げられたとしても決め切ることはできない。
そして決めきれなければ、墓地にある幻影騎士団かテラナイトを使い突破されるだろう。
『フッ、あまりの状況に絶望したかな？ならば早く諦めてしまえばいい。そうすれば、ロンゴミアントが君を貫いてあげよう』
「‼？……ああ、そうだよな」
『フッ、意外と物分かりがいいじゃないか』
「ハッ……お断りだ」
『何？』
奴の挑発するような言葉を笑い飛ばす。
ああ、確かにこの状況は諦めた方が早いだろう。
これ以上限界の身体に鞭打つ必要もない。
だけど……

ーーーーーー

『……遊騎さん』
『……どうした？』

『……私は、諦めません』
『……』
『これから何があったって、どんな困難に見舞われたって、諦めることだけは、絶対にしません‼?運命は、私が斬り開いて行きます‼?だから……』
『……』
『だから、このデュエルも絶対に勝たせて貰います‼?』
『……ふっ、そうか。なら、やってみな』
『はい‼?』

ーーーーーーー

俺は知っている。
本当に絶望的な状況で諦めず、奇跡を起こした奴のことを。
確かに勝つことは出来なかった。
でも、それでアイツは自分の可能性を文字通り斬り開いてみせた。
そんな奴が俺なんかを師匠だって言ってくれている。
そんな奴が俺の思いを背負おうとしている。
なのに、その手伝いも出来なくなってアイツにもう1度深い傷をつけようとしている?
冗談じゃない‼?
「俺は……諦めることだけは絶対にしねぇって決めたんだ‼?」
そう叫びながら、ゆっくりと立ち上がる。
確かに勝ちの目なんて、ないのかも知れない。
だが、まだライフも残ってる。
思考だって止まってない。
なら、まだ終わっていない。
終わらせない‼?
「俺はこれでターンエンド‼?エンドフェイズ、ヒロイックチャンスの効果でHーC　エクスカリバーの攻撃力は元に戻る‼?」
HーC　エクスカリバー

ＡＴＫ８０００→２０００

「さあ、来るなら来やがれ、この黒ずくめのヘンテコヘルメット野郎‼?テメェなんかにやれるもんなんか、俺には１つもねぇんだよ‼?」

『っ、黙って聞いていれば好き勝手言ってくれるじゃないか。なら、お望み通りこの霊園に埋めてあげよう‼?エンドフェイズ、Ｎｏ．８６ＨＩＣ　ロンゴミアントは自身の効果でオーバーレイユニットを１つ取り除く。残りのオーバーレイユニットは２』

遊騎　ＬＰ２７００　手札０

ーーーーーー　ー

ーーーーーー

○　　○

ーーー○ー

ーー△△ー　　ー

黒い男　ＬＰ３０００　手札０

『私のターン、ドロー。墓地に存在する幻影騎士団フラジャイルアーマーの効果発動‼?墓地のこのカードを除外し、手札の幻影騎士団カードまたはファントム魔法・罠カード１枚を墓地へ送り、デッキから１枚ドローする。私は手札から幻影死槍を墓地に送り１ドロー。幻影騎士団クラックヘルムの効果発動‼?幻影騎士団カードかファントム魔法・罠が墓地に送られた場合、攻撃力が５００ポイントアップする‼?』

幻影騎士団クラックヘルム
ＡＴＫ３３００→３８００

『バトル‼?幻影騎士団クラックヘルムでＨＩＣ　エクスカリバーを攻撃‼?クラックインパクト‼?』

「すまない……エクスカリバー。迎え撃て‼?必殺剣　刀光剣影‼

？」
幻影剣を持ったクラックヘルムにエクスカリバーも剣技で対抗するが、強力な力で押し切られ、斬り伏せられた。
その衝撃が俺の身体にも響いてきて、思わず片膝をつく。
「ぐうぅぅ‼？」

遊騎　ＬＰ２７００→９００

「だが、戦闘ダメージを受けた時、Ｈ・Ｃサウザンドブレードの効果発動‼？このカードが墓地に存在し、戦闘・効果で自分がダメージを受けた時、このカードを墓地から攻撃表示で特殊召喚する‼？」
〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

俺の前に現れたのは頭巾を被り、背中に何本もの刀を背負った戦士。
『今更ソイツが出てきたところで貴様に何が出来る‼？終わりだ‼？Ｎｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアントでＨ・Ｃ　サウザンドブレードを攻撃‼？ディスペアジャベリン‼？』
サウザンドブレードに向けて、ロンゴミアントが槍を放つ。
だがそれを受け止め、投げ返す赤い鎧の戦士が現れた。

〈タスケナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１７００

『何⁉？』
「墓地に存在するタスケナイトの効果発動‼？このカードが墓地に存在し、自分の手札が０枚の場合、相手モンスターの攻撃宣言時にデュエル中に１度だけ発動出来る‼？このカードを墓地から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する‼？」
『バトルフェイズを終了だと⁉？馬鹿な⁉？そんなカードをいつの間

に墓地に……』
「1番最初だよ。お前が手札断殺を使った時だ」
『っ⁉？あの時……だが、私の場には攻撃力が３８００まで高められた幻影騎士団クラックヘルムとＮｏ．８６ＨｒＣ　ロンゴミアントがいる。貴様なんかに逆転など出来るわけがない⁉？私はカードを1枚伏せてターンエンドだ⁉？』

遊騎　ＬＰ９００　手札０
ｒｒｒｒｒｒｒ　ｒ
ｒｒｒｒｒｒ
ｒ　○
ｒｒｒｒ○ｒ
ｒ▲△△ｒ　ｒ
黒い男　ＬＰ３０００　手札０

「俺のターン……」
そろそろ本当に身体の限界が近い。
状況的にも正真正銘これがラストターンだ。
デッキよ、俺の思いに応えてくれ⁉？
「ドロー⁉？」
引いたカードを見る。
引いたのはＨ・Ｃ　エクストラソード。
悪くないカードではあるが俺のＥＸデッキにこの状況を突破出来るカードはない。
どうする？
そう思った時、ＥＸデッキが黒く光った気がした。
何処かで感じたその感覚にＥＸデッキを見てみると……
「なっ⁉？」
ＥＸデッキの中に、今回のデュエルのきっかけとなったカードが混ざっていた。
そのカードは微小の闇を振りまきながらまるで急かすように輝い

ている。
「……ハッ、使えって言ってるのかよ？お前のせいで俺はこんな目に合ってるってのに」
奴はこのカードを闇のカードと呼び、同じような闇のカードを研究しロンゴミアントを作ったと言っていた。
なら、当然オリジナルであるこっちの方が数倍ヤバイカード何だろう。
今は触っても最初に触った時の感覚はしないが、使用すればどうなるかまでは分からない。
だが……俺はそのカードの効果を見てため息を吐いた。
「いいぜ、使ってやる。俺も弟子の為に死ぬわけにはいかないし、俺自身でいなきゃならないからな。俺の身体を取りたきゃやればいい。だが、出来なかった時は大人しく俺の言うことを聞いて貰うぜ？姿形はあれだが、名前は立派に騎士の証を示してんだ。騎士道は守れよな。俺はＨ・Ｃ　エクストラソードを召喚!!？」

〈Ｈ・Ｃ　エクストラソード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１０００

現れたのは銀色の鎧を身に纏った二刀流の戦士。
俺はその姿を確認してから、３体の戦士に手をかざす。
「俺はレベル４のタスケナイト、Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード、Ｈ・Ｃ　エクストラソードでオーバーレイ!!？３体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!？エクシーズ召喚!!？」
タスケナイト、サウザンドブレード、エクストラソードが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこから現れるのは異形の存在。
悪魔のような身体に白いツノ、黒い鉤爪を持つ異形の神。
「騎士の魂が宿し紋章よ!!？今こそその魂を示せ!!？現れろ!!？Ｎｏ．６９　紋章神（ゴッドメダリオン）コートオブアームズ!!？」

〈Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズ〉★４　サイキック族　光属性
ＡＴＫ２６００

『馬鹿な、Ｎｏ．だと⁉？』
「ぐっ……効くな、結構」
呼び出したと同時に右手の甲にコートオブアームズと同じ数字が浮かび、思わず耐えるように胸の前で腕をクロスする。
その数字から嫌な感覚が登ってきて、ぼろぼろの俺の身体を奪おうとし、意識が薄れ始める。
だけど、俺はさっき言ったハズだぜ、コートオブアームズ。
「俺は弟子の為に死ぬわけにはいかないし、俺自身でいなきゃならないって、さ⁉？お前なんかじゃ、俺は止められねぇ⁉？」
気合いを入れて嫌な感覚を吹き飛ばすように胸の前でクロスした腕を振り払う。
すると途端に嫌な感覚が消え、意識もはっきりした。
それを見て、奴は機械越しに驚愕の声を上げた。
『馬鹿な、生身の身体でのＮｏ．の侵食を気合いで振り払ったというのか⁉？』
「理屈なんか知るか。なんか勝手に動いた。でも、これでようやくお前を倒せる。まずはエクシーズ素材になったＨ・Ｃ　エクストラソードの効果発動⁉？このカードを素材としてエクシーズ召喚したモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする⁉？」

Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズ
ＡＴＫ２６００→３６００

「さらにＮｏ．６９　紋章神コートオブアームズの効果発動⁉？ロストグローリー⁉？このカードが特殊召喚に成功した時、このカード以外のフィールド上の全てのエクシーズモンスターの効果を無効にする⁉？」

『何だと⁉？』
「ご自慢の効果、消させて貰うぜ‼？」

Ｎｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアント
ＡＴＫ３０００→１５００

コートオブアームズから謎の波動が放たれ、ロンゴミアントが色を失っていく。
『っ、私の才能の結晶が色を失っていく‼？（だが、私が伏せたカードは幻影騎士団ウロングマグネリング。これで攻撃を無効にすればこのターンやられることはない）』
「そいつさ、アンタの才能の結晶なんだよな？」
『何？』
「だったらさ、自分の才能の結晶を自分で体感して貰おうか」
『何だと？』
「Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズの効果発動‼？アームズドレイン‼？自分のメインフェイズ時、１ターンに１度、このカード以外のエクシーズモンスター１体を選択し、エンドフェイズ時まで、このカードは選択したモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得る‼？」
『同じ効果を得るだと⁉？』
「対象は勿論、ご自慢のＮｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアントだ‼？」
コートオブアームズの鉤爪から光の糸が現れ、ロンゴミアントの身体を貫く。
すると、そこからコートオブアームズは何かを吸い取り、しばらくするとコートオブアームズの前にロンゴミアントが持っていた槍が現れた。
「さて、Ｎｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアントの効果だが、素材が３つの場合は戦闘破壊されず、攻撃力・守備力は１５００ポイントアップし、このカードはこのカード以外の効果を受けない、だったよな？」

Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズ
ＡＴＫ３６００→５１００

『効果を受けない攻撃力５１００だと⁉？』
「終わりだ。バトル‼？Ｎｏ．８６ＨｌＣ　ロンゴミアントとなったＮｏ．６９　紋章神コートオブアームズで、Ｎｏ．８６ＨｌＣ　ロンゴミアントを攻撃‼？クレストマジェスティ・バージョン・ディスペアジャベリン‼？」
コートオブアームズが槍をロンゴミアントに向けて投擲し、さらにツノからエネルギー波を撃ち込んだ。
その攻撃を受けたロンゴミアントは跡形もなく四散した。
『馬鹿なぁぁぁ‼？』

黒い男　ＬＰ３０００→０

ーーーーーーーー

「ふぅ……勝った。お、場所も元の公園に戻ったな」
『ば、馬鹿な……私が、負けるなど……』
コートオブアームズの攻撃により、あの男が吹き飛び、しばらくすると景色が元の公園に戻った。
しかし、俺もあの男も、身体がぼろぼろなのには変わらない。
今でも意識を強く持たないと倒れそうだ。
とりあえずどうするべきかと考えていると、背筋に嫌な感覚が過った。
何事かとその感覚がした方を見ると、あの男のデッキのカードの１枚が勝手に宙に浮き、凄い勢いで回転しながら俺の元に飛んできた。
「うおっ⁉？」
あまりのことに咄嗟にそのカードを掴んでしまう。
恐る恐るそのカードを見て見ると、先程嫌と言う程痛めつけられたロンゴミアントのカードだった。

一瞬、カードから黒い闇が溢れてきそうになったが、何かの力がその闇を打ち消した。
『くっ、元にしたＮｏ．の勝者の方に移動する性質が残ってしまったか‼？私のＮｏ．を返せ‼？』
「っ、まずっ‼？」
ロンゴミアントがこちらにきたことに焦ったのか、男が立ち上がり、こちらに向かって駆けよって来ようとする。
こっちの身体はぼろぼろ、このまま襲われたら……
男が俺に摑みかかろうとした時……
「ちょっと‼？何やってんのよアンタ‼？」
そんな聞き覚えがある声と共に男が勢いよく横に吹き飛ばされた。
そして男がいた場所には明らかに何かを蹴り飛ばしたかのような体勢の宝月がいた。
「……見事な飛び蹴りだな」
「バッカじゃないの‼？本当にバッカじゃないの⁉？アンタそんなにぼろぼろになってる状況で何を言ってんのよ‼？」
『くっ、私の邪魔をするのか、小娘風情が‼？』
「するに決まってんでしょうが‼？そいつは私の知り合いなの‼そいつをぼろぼろにしてる奴を見て放っておくわけないでしょ‼⁇これ以上コイツに何かする気ならセキュリティを呼ぶわよ‼？」
声を張り上げて威嚇する宝月に、男は機械越しでも分かる忌々しそうな声を漏らし、デュエルディスクについてある何かのスイッチを押した。
『チッ、邪魔が入ったか。そのカードは預けておく。次は貴様の持っているＮｏ．も頂いていくぞ』
そう言葉を残し、まるで空気に溶けるかのようにその男は姿を消した。
しばらく宝月は周りを警戒した後、本当にいなくなっていることが分かったのか、警戒を解いて慌てた様子で俺の方に近づいてきた。
「消えた？」
「何なのよ、アイツ？明らかに不審者って格好してたし……という

かなんでアンタはそんなにぼろぼろになってんのよ‼？血だらけじゃない‼？」
「知らねぇよ。こっちは無理矢理襲われたんだ。変なフィールド魔法みたいな奴で逃げられなかったし、立体映像のハズなのにモンスターの攻撃で実際に俺の身体はぼろぼろになるし、むしろこっちが聞きてぇよ」
俺の身体を支え、宝月がとりあえずベンチの方に連れて行ってくれる。
俺はベンチに座ると、とりあえず宝月に疑問に思っていたことを尋ねた。
「というか、宝月はなんでここにいるんだ？デュエルアカデミアは？」
「私の講義はもう終わったわ。それで遊花の講義が終わるのを待ってたら、闇から電話がかかってきて、アンタと連絡が取れなくて胸騒ぎがするって言うから直接見にきたの。そうしたら、アンタはぼろぼろだし、不審者はいるし、一体何がどうなってんのよ？」
「さあな。とりあえず……病院行かないと駄目だよな、これ？」
「当たり前でしょうが。どう見ても入院案件だし、そんな状態で帰るなんて許さないわよ」
「いや、行くのはいいんだよ。正直今も意識を保ってるのもぎりぎりだ」
「なら尚更ーーー」
「ただ……遊花、多分泣くよな？」
「ーーーあ」
宝月も思い当たったのか悲痛な表情を浮かべる。
アイツにとって、多分身内の事故や怪我って言うのはトラウマの1つだ。
殺されてそうな状況で死ななかっただけマシと言えるが、それでもアイツのトラウマを刺激するには十分な出来事だろう。
「……仕方ねぇか」
「何がよ？」
「こうなったら、この状況も利用して遊花が少しでも大会に出れるよ

うに話を持っていくようにしよう。とりあえず宝月、不審者に襲われたって言うのは遊花には内緒だ。仕事中にミスって斜面から落ちたってことにでもしといてくれ」
「それはいいけど……どうする気なのよ？」
「まぁ、それは追々な。とりあえず……もう意識が持ちそうにない……後、頼んだ」
「ちょっ!!?結束!??しっかりしなさい!!?結束!!?」
宝月の慌てた声を聞きながら、俺は意識を手放すのだった。

第15話　踏み出すための一歩

☆

「師匠、大丈夫ですか？痛いところとかないですか？」
「だから、そう何度も聞かなくても大丈夫だって言ってるだろ。しばらくは移動は車椅子になるが、大したことねぇよ」
心配そうに何度も尋ねてくる遊花に、俺は苦笑しながら答える。
このやり取りも、もうすでに何回行ったのかわからないぐらいだ。
ちょっと派手に怪我をしたが、命に別状は無い。
ただ足は結構酷いことになっていたので、しばらくは車椅子での移動になり、検査と経過観察のため3週間程入院をすることにはなっていた。
まあ、あれだけのことがあって完全に歩けなくならなかっただけマシだろう。
「うぅ～でもでも、そうだ‼？喉が渇きませんか？」
「ん？まあ、さっきから話っぱなしだから少し喉は渇いてるが……」
「なら、何か飲み物を買ってきますね‼？少し待っていてください‼？」
「あっ、待っ……はぁ～」
止める間もなく病室を出て行ってしまった遊花を見て、思わずため息を吐いてしまう。
「……こいつは思ってた以上に重症だな」
まさかデュエルアカデミアをサボってまで見舞いに来るとは思わなかった。
「……どうしたもんかね」
俺の呟きに返ってくる声はなかった。

★　――――――

「……えっ？師匠が……入院？」
「まあ……うん。仕事中に怪我しちゃったみたいで、本当に情け無……って、遊花!!？大丈夫、遊花!!？」
その言葉を桜ちゃんから聞いた時、私は目の前が真っ暗になっていくような気がした。
身体が震え、動悸が激しくなり、目から涙が溢れてくる。
誰かに身体を揺さぶられている気がするが、私にはそれすらも分からなかった。
まだ……また、失ってしまう。
私が知らない間に……私が見てない間に、また失くなってしまう。
そうして、私の思考が暗闇に堕ちようとした時……
「……痛っ!!？」
「落ち着いた？」
私の目の前には頭にチョップしたような体勢の闇先パイがいた。
額が少しひりひりする。
どうやら私の意識を戻すために結構強く叩いたみたいだ。
闇先パイは少しため息を吐きながら声をかけてくる。
「ここまで酷いとは思わなかった。遊花、気にしすぎ。さっき、仕事終わりに遊騎にあって来たけど、もうぴんぴんしてた」
「っ!!？師匠は大丈夫なんですか!!？無事なんですか!!？」
「ん」
そういって闇先パイは何かを手渡してくる。
渡されたのは1つの携帯端末。
そしてそこから私が今1番聞きたい声が聞こえてくる。
『取り乱してんなぁ……』
「っ!!？師匠!!？大丈夫何ですか!!？お怪我は!!？具合は悪くないですか!!？」
『うおっ!!？大丈夫だって、足がちょっと痛いぐらいで、ぴんぴんしてるよ』

「本当ですか⁉？良かった……」
『まあ、悪かったよ。心配かけたな』
端末越しに申し訳なさそうな師匠の声が聞こえてくる。
そんな師匠の声を聞き、ようやく私は少しだけ安心できた気がした。
『とりあえずこの通りぴんぴんしてるから、あんまり気に病むな。そんなに気になるんだったらお見舞いにでも来てくれればいいさ』
「今から行きます‼？」
『バカ、面会時間はもう過ぎてるよ。明日だ明日。デュエルアカデミアが終わってからにしろ』
「うぅ～でも……」
『大丈夫だって。とりあえず、他の患者にも迷惑だからそろそろ切るぞ？というわけで、闇に少し代わってくれ』
「……分かりました、闇先パイ」
「ん……代わったよ。うん……ん……任された。それじゃあ、また」
師匠に言われ、闇先パイに端末を返すと、闇先パイは師匠と少し言葉を交わしてから端末を切った。
そして端末を仕舞うと、再び私に向き直る。
「というわけで、遊騎は無事。遊花が心配なのも分かるけど、気にしすぎもよくない」
「闇先パイ……」
「遊騎の入院中は、私が遊騎の分も遊花の修行を手伝う。とりあえず、遊騎が完全に回復するまでは、そう動いていこう」
そう言って、闇先パイが頑張って背伸びをして私の頭を撫でてくれる。
隣では、桜ちゃんが心配そうに私を見ていた。
……こんなんじゃダメだ。
師匠がいないのは辛いけど、だからって桜ちゃん達に心配をかけてしまうのもいけない。
「分かりました。お願いします、闇先パイ」

「ん……とりあえず、晩御飯にしよう。お腹空いた」
「そうね、結束の分も私が食べてあげるわ‼？」
「あ、私、おつまみが欲しい。社長にビール買ってきてもらったから」
「……アンタが成人してるのは知ってるけど、絵面的に止めときなさいよ。というかなんで自分とこの社長に買ってきて貰ってるのよ？」
「……世の中は世知辛い。小学生にお酒は売れないって怒られる」
「……なんか悪かったわ」
「あはは、それじゃあ早く作っちゃいますね」
桜ちゃんと闇先パイのやり取りに少しだけ笑いながら、私は晩御飯の準備を始める。
それでも、私の中には、師匠がこの場にいないことが、重くのしかかっていた。

ーーーーーーー

翌朝。
私はいつも通りにリビングキッチンに降りた。
この時間、いつもなら師匠がコーヒーを飲んでいる時間だ。
しかし、当然リビングキッチンに、師匠の姿はない。
そのことが、どうしようもなく胸を締め付ける。
「……っ」
私は暗い気持ちを振り切るように顔を振り、朝食とお弁当の準備を始める。
それでも、時間が経つにつれ、どんどんどんどん暗い考えが私の頭を支配していく。
やっぱり、ダメだ。
どうしても、お父さん達がいなくなったすぐ後の日々を思い出してしまう。
誰もいない部屋の中、ずっと私1人が座っていて、待っても待っても、その扉が開くことは無くて、本当に、ひとりぼっちで、世界から

切り離されたみたいに、私だけがその部屋で止まってしまっていた、あの日々を。
「……おはよう、遊花」
「っ!!?や、闇先パイ!!?」
急に後ろから声をかけられて振り向くと、そこにはいつのまにか闇先パイが立っていた。
闇先パイは困ったように自分の頭をポンポンとノックするように叩いて、仕方なさそうに口を開いた。
「遊花、まだ遊騎のこと心配?」
「えっ、あの、その……」
「別に、悪いとは言わない。でも、これからしばらくこのままだと、皆困る。私も、遊花がそんな顔してるのは、寂しい」
「闇先パイ……ごめんなさい」
闇先パイだって、師匠が入院したって聞いて、心配したハズだ。
そして今は、私のことも心配してもらっている。
本当に……こんな自分が情けない。
謝る私を見て、闇先パイは首をふるふると振ると、どこか優しい眼差しで私を見た。
「よし……遊花」
「はい……」
「今日、デュエルアカデミア、サボろう」
「はい……はい?」
闇先パイの言葉に私は首を傾げる。
私は今、何を言われたのだろう?
「サボって、遊騎に会いに行ってくるといい」
「ええっ!!?でも、サボりなんて……」
「じゃあ、遊騎のこと気にせず、今日を乗り切れる?」
「うっ……」
闇先パイの言葉に思わず詰まる。
確かに、今日デュエルアカデミアに行っても師匠のことが気になって講義なんて集中できないかも知れないけど、でも……

「サボって何かを見つめ直すことが出来るのは学生の特権。だから、休みたい時は休めばいい。それがまた、新しい一歩を踏み出すきっかけにもなる。先輩としてのアドバイス」
「闇先パイ……」
「連絡は桜に入れてもらうといい。責任は桜が持つ」
「私がいないところでなんて話をしてんのよ……別に構わないけど」
「桜ちゃん……」
闇先パイと話していると呆れたような顔をして桜ちゃんがリビングに入ってくる。
そして桜ちゃんも優しい表情で私に口を開く。
「私も、遊花は今日は休んで結束に会いに行ってくるといいと思うわ。私だって、遊花が悲しい顔をしてるのは見たくないもの。アンタは、馬鹿みたいに明るく笑ってればいいの。暗い表情は闇が担当してくれるわ」
「む、私は別に暗い顔はしてない」
「常に無表情なのに何を言ってるのよ？」
「桜ちゃん……闇先パイ……分かりました」
「ん、素直でよろしい」
「しっかり不安を解消してきなさい」
そんな風に、優しい2人に背中を押される。
私は2人の優しさに、少しだけ泣きそうになった。
私の不安は……無くなるものなのかな？
そのことだけが、少しだけ気になった。

ーーーーーーーー

☆

事情は、闇から連絡があったから知っているが、まさかデュエルアカデミアをサボってまで会いに来る程精神的に追い詰められてると

は思わなかった。
本当に、あの黒ずくめのヘンテコヘルメット野郎に腹が立つ。
次に会ったら絶対にその正体を晒してぼっこぼこにしてやる。
そんなことよりも、今は遊花のことだ。
このままだと、遊花は俺が入院している2週間弱はまともに動けなくなってしまうだろう。
それは遊花にとってよろしくない。
何ならその間に遊花は解消したハズのトラウマすらぶり返してしまう可能性もある。
そうなってしまったら、遊花は今度こそ前を向けなくなってしまうかも知れない。
「させるかよ……そんなこと」
そんなこと、許せるわけがない。
遊花は、俺との出会いで自分の気持ちを吐き出した。
変わりたいと願い、他の奴ならもっと上手くやれるだろうに、こんな俺なんかの弟子になった。
それを、師匠である自分が邪魔するのだけは許せない。
でも、どうすればいい？
どうすれば遊花のトラウマを解消してやることが出来る？
当初は、俺がいない間に小さな大会に出てくるようにと言おうと思っていた。
俺が退院した際の祝い代わりとして頑張ってきてくれ、といった感じで。
俺が、島さんの店を立て直す約束の為にプロ決闘者になった時と同じだ。
遊花は、自分よりも他人の為に頑張ることが出来る人間だ。
多分、そういう言い方なら、遊花は頑張っただろう。
でも、今の精神状態でそういうのは間違いなく逆効果だ。
今の遊花は、大会中に事故にあって両親が亡くなったことを強く思い出している。
最悪、大会に出ている間に俺がいなくなってしまうのではないかな

どと思いかねない。
そうなってしまえば、大会とデュエル自体が完全に遊花のトラウマとして確立してしまう。
俺だって、両親が亡くなった時はしばらく大会自体に出ること自体で誰かに何かが起きてしまうのではなんて馬鹿げた考えが浮かんでいたのだ。
だからこそ、そう簡単に大会に対する忌避感なんて……
「……まてよ」
遊花が大会を忌避しているのは、大会に出たことで両親がいなくなってしまったからだ。
なら、大会に出ることに、逆の意味を持たせられるのなら……
「師匠!!?ただいま戻りました!!?」
「っ!!?おお、戻ったか」
考えを纏めていると、遊花が病室に戻ってきた。
その声は元気一杯で、表情は笑顔だが、明らかに無理をしているのが見て取れた。
こんな笑顔……遊花には似合わねぇよな。
遊花の本当の笑顔は、もっと柔らかくて、嬉しそうで、見ている人を和ませるものだ。
こんな今にも壊れてしまいそうな儚い笑顔なんて、こいつには似合わない。
「スポーツドリンクにしたんですけど、よかったですか?」
「ああ、大丈夫だ。それよりも遊花、ちょっと話したいことがあるからちょっと屋上の方に連れて行ってくれないか?」
「屋上……ですか?」
「ああ。ずっと病室の中ってのも気が滅入るしな。少し外の風景が見たい」
「分かりました。それじゃあ、車椅子押しますね」
「頼む」
これで正しいかなんて分からない。
これで解決するかなんて分からない。

でも、この選択が少しでも遊花の救いになれるのなら、俺は何だってやってやりたい。
それがきっと、同じような運命を歩み、遊花の師匠になった俺の役目なんだと、改めて、そう思った。

ーーーーーーー

★

師匠の車椅子を押し、私達は病院の屋上に出た。
辺りに人の姿はなく、空は綺麗な青空が広がっている。
その青空が、今の私の心と真逆で、少し目を背けたくなった。
師匠はそんな青空を眺めながら、気持ち良さそうに声を上げる。
「あ～やっぱり、外はいいな。まだ1日目だが、病室って言うのは息が詰まるよ。早く外を自由に歩き回れるようになりたいもんだ」
そんな声を上げる師匠が子供みたいで、おかしくて少しだけ笑ってしまった。
「ふふっ、師匠、子供みたいです」
「いいんだよ、別に。他に誰がいるわけでもあるまいし」
「私が見てますよ？」
「遊花は弟子、俺は師匠だからいいんだ」
「なんですか、その理屈？」
戯けるような師匠の言葉に笑顔が漏れる。
そして当たり前だったそんな光景が、これからしばらくは出来ないんだと思うと、少しだけ悲しい。
「……さてと、そろそろ本題に入るか」
「……はい」
師匠の言葉を聞き、私は師匠の車椅子を止めて師匠の正面に移動する。
師匠が何かを話そうとして場所を移動しようとしていたのは分かってた。

そしてそれは今の私に関係する話なんだろう。
何を言われるのか、少しだけ怖い。
でも、そんな私を師匠は優しい眼差しで見つめてくれた。
「んー何処から話すべきか、正直少し悩むんだが、率直に言おう。話すのは前に話した大会に出るって話だ」
「っ!!?……はい」
少し、心臓の鼓動が速くなる。
それでも、私のことを考えてくれている師匠から、目を逸らすことだけはしたくなかった。
「包み隠さず話すが、本当は俺の入院中に何処かで小さな大会にでも出て貰おうと思ってた。俺の退院祝いのために、大会に出てきて欲しいって言ったら多分普段の遊花なら頑張るだろうって思ったからな」
「……はい。多分それなら、普段の私は多少無理してでも頑張れたと思います」
師匠の言葉に私は成る程と感心する。
怪我をしている師匠の期待に答えるための努力なら、確かに普段の私なら頑張れていただろう。
しかし、師匠が付けた普段の私という言葉。
それは、師匠が本当に今の私の心境を分かっているということだ。
今の私は、大会に出ることなんて出来ない。
もし、大会に出てしまったら、もし、その大会に出ている間に、師匠の怪我が悪化して、師匠の身に何かが起こってしまったら、そんなありもしないもしもが、どうしても私の頭によぎってしまう。
「まあでも、今の遊花にこんなことを言うのは酷だから思い直した。だって、事故に大会って組み合わせはお前には相当のトラウマだからな」
「……はい」
師匠の言葉に心が痛くなる。
私のことを沢山考えてくれている師匠に、全然応えられない自分自身が堪らなく情けない。
こんなに私のことを考えてくれているのに、こんなに私のために動

いてくれているのに、その弟子である私は、彼に何も返してあげれていない。
「まあ、そんなわけで最初に話した作戦は止めたわけなんだが、だからって大会の話を避け続けるわけにはいかない。プロ決闘者になろうと決めている以上、絶対にぶつかる問題だからな」
「……はい」
師匠の言葉の続きを聞くのが怖い。
一体どんなことを言われるのか想像がつかない。
私は、呆れられてしまっただろうか？
情けないと、思われてしまっただろうか？
そんなありもしない考えが浮かんでいく。
でも、そんな私の不安など幻だとでも言うように、師匠は優しい声色で正面から私に語りかけた。
「だからさ、約束をしよう」
「約束……ですか？」
「ああ」
師匠の言葉の意味が分からず、私は首を傾げる。
そんな私に師匠は優しい声色のまま言葉を続ける。
「俺が退院するのは3週間後、遊花の師匠になってから約1ヶ月後だ。だから、その時に遊花の実力を見るために、小さな大会を開こうと思う」
「えっ？」
師匠の言葉に驚いて師匠の顔を凝視してしまう。
私の為に、大会を？
「島さんに『Ｎａｔｕｒａｌ』を貸し切りにしてもらって、宝月や闇、他にもお前が呼びたい奴を呼んで、なんだったら俺の知り合いも呼んで、小さな、ささやかな大会を開く。そこで、1ヶ月間でお前が学んだことを、俺に見せてほしい。お前が呼びたい奴は皆いるんだ。そこには、お前が見てない誰かなんてもんは存在しない。不安がるものは、何もない。そんな大会を開こう」
「っ‼？」

師匠のそんな優しい提案に、気付いたら私の目から涙が流れていた。
だってそれは、本当に私の為だけに考えられている提案で……
「そこで最高に楽しいデュエルを、皆でしよう。ついでに俺が戻ってきたいい証明にもなるだろ？」
私の大会に対する印象に、他の優しい意味を与えようとしてくれていて……
「だから、約束をしよう。俺は必ず無事に退院して、そんな大会を開く。だから、遊花はそれまでに色んなことを学んで、学んだことをその大会で俺に見せてくれないか？」
師匠はそういってゆびきりをするように小指を私に向かって差し出す。
私は……幸せ者だ。
こんなにも私の事を考えてくれて、こんなにも私の不安を無くす為に動いてくれる人達がいる。
「っ……はい‼？」
私は涙を袖で拭い、差し出された師匠の小指に自分の小指を絡めた。
『ゆーびきりげんまん♪ウソついたら針千本のーます♪ゆーびきった♪』
２人でゆびきりをしてお互いに笑い合う。
私は……本当に幸せ者だ。
こんなに優しい人達が、私を支えてくれている。
お父さん、お母さん、私は、今凄く幸せです。
だから、見ていてください。
私は、絶対にお父さんや、師匠みたいなプロ決闘者になって見せます。
自分も楽しんで、他の誰かも楽しませたり、喜ばせれるようなデュエルが出来るプロ決闘者に。
今なら、少し前に進める気がした。

ーーーーーーー

☆

「ーーーって、訳なんだが。どうだ？」
「ん、勿論協力する。遊花のためにそこまでやるなんて、流石遊騎」
「……褒めてるのか、それ？」
「ん、勿論。まさか本当に今日解決するとは思ってなかったもん」
夕方、仕事終わりに立ち寄った闇に今日あった出来事を話した。
遊花はお昼には帰っていき、『Ｎａｔｕｒａｌ』にさっきの話をしたり、新しいカードを探しに行くことにしたようだ。
それを聞き、闇はとても嬉しそうな笑顔をみせる。
「まぁ、闇がいる時点でささやかなものになるかは少し微妙だけどな」
「？なんで？」
「世界ランキング４位が出る大会がささやかなわけあるか」
「むぅ……称号って面倒。やっぱりプロリーグ潰しちゃダメ？」
「止めろって言ってるだろうに……とりあえず、どれくらいの人数になるかはこれからの遊花次第だな。この３週間で新しい知り合いも増えるだろうし」
「ん、社長達も呼ぼう」
「……マジで？『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』勢揃いとか世界タイトルを取りに行くわけじゃないんだぞ？」
「顔合わせの機会としては丁度いい。私達にとっても、次世代の子達とデュエル出来るのはいい刺激になる。それに肩書きこそ大きくなったけど、私達は昔と変わらない。４年前の『Ｎａｔｕｒａｌ』ではよく見られた光景だから」
「……まぁ、確かにそうだな。たまにはいいか」
「ん、たまにはいい」
そういって２人で笑い合う。
どれだけ上手くいくかは分からないが、遊花の先程の表情を見る限り、多分大丈夫だろう。

俺は、遊花の師匠として、アイツに何かをしてあげることは出来ただろうか？
出来てたらいいな。
「それじゃあ、私もそろそろ帰る。前を向けたなら、遊花に色々教えて上げたいし」
「……闇、ちょっとだけ待ってくれるか？聞きたいことがある」
「？何？」
帰ろうとしていた闇を呼び止めると闇は首を傾げる。
そんな闇に、俺は置いてあったデュエルディスクから2枚のカードを取り出して闇に見せた。
「お前は、このカードの事を知っているのか？」
俺が取り出したのは、俺が入院する原因になったコートオブアームズとロンゴミアントのカード。
それを見て、闇は少し驚いた顔をしてこちらに向き直った。
「何処で手に入れたの？」
「1枚は拾って、もう1枚は襲って来た不審者を倒したら勝手にこっちに来た。不審者から来たのは本人曰く人造の闇のカードらしい」
「人造で闇のカードを作るなんて聞いたことない」
「その口ぶり、闇のカード自体は知ってるんだな？」
「うん」
「……あっさりと肯定したな」
「願掛けの内容以外、遊騎に隠すことなんて、私はない。スリーサイズを教えてもいいよ？」
「……アホなこと言うのは止めろ。何というか、あっさり肯定されるとそれはそれで反応に困る」
さっぱりとしている闇に思わず脱力してしまう。
もっとはぐらかされると思ったんだけどな……
「私に聞いたってことは、ネックレスがちゃんと機能したんだね。良かった」
「あの意識が奪われそうになったのがどうにかなったのはやっぱりアレのおかげなのか？」

「ん。アレ、闇のカードのモンスターの身体から出来てるから。闇の力を吸収するのにもってこい」
「ちょっ⁉？これそんな出自なのかよ⁉？」
　闇の言葉に思わずネックレスをまじまじと見つめてしまう。
　それを特に悪びれた様子もなく闇は語る。
「大丈夫。そのモンスターは私の制御下だから、悪さはしない。したらシメる」
「なんというか少しそのモンスターが可哀想になって来たんだが……やっぱり闇のカードには意思があるのか？」
「んーなら、少し長くなるけど、私が知ってること、全部聞く？」
「……頼む。俺も自分の手に入れちまったカードがまともじゃないことは分かってるからな。かと言って処分するのも怖いし、知れるだけ知っておきたい」
「分かった。じゃあ、座るね」
　そういって、闇はベットの横にある椅子を持ってきて俺の横に座った。
「それじゃあまずは闇のカードの出自について説明するね」
「おう」
「まず、闇のカードというのはカードの精霊に悪意が宿って歪んでしまった呪われたカードのこと」
「待て、いきなりさらに謎の存在が出てきたんだが……カードの精霊？」
「そういえばそこの説明もあった。うっかり」
　そういう闇を見て、思わずため息が出る。
　どうやらとても面倒なことに首を突っ込むことになってしまったようだ。
「それじゃあ先にカードの精霊の説明。といっても、こっちはそんなに難しくない。言葉通りの意味だから」
「つまり、普通のカードにも意思が宿ってると？」
「例外もあるとは思うけど基本的にはそう。遊騎も覚えがあるでしょ？」

「……引けなくなったアイツらか」
「ん……私の氷結界もそう。因みに、闇のカードとカードの精霊は基本的に仲が悪い。競合する場合もないわけじゃないけど」
「まぁ、呪われてるわけだから……待て、じゃあ俺のデッキもヤバいんじゃないか？」
　絵札の三銃士が使えなくなったら、俺は流石に詰むぞ？
「んーそこはカードによるから分からない。カードの精霊によっては気にしない子や、それよりも気の合うマスターを優先する子もいる。多分絵札の三銃士は後者。あのカード達が使えなくなっても使えたのはそれが理由だろうし」
「なんだか頭が痛くなる話だな……そんなのが存在してるのか」
「精霊は割とそこら辺にいるよ？普通の人には視えにくいだけ。視えるか視えないかなんて、視力が１．０の人が視えるものが０．３の人には視えにくいのと同じ。それぐらいの違いでしかない」
「その言い分だと、闇は視えるのか？」
「力が一定以上強い子はね。闇のカードも元は精霊だから、闇のカードを使うようになってから、気づいたら視えるようになってた」
「……とりあえず、本題に戻ってもいいか？」
「ん、闇のカードの話。闇のカードは使用者の意思を好戦的にしたり破壊衝動を生み出したり、身体を乗っ取ろうとしたりする。おまけにカードによっては身体を傷付けたりするものもある」
「滅茶苦茶危険じゃねぇか⁉？」
　驚く程物騒なことしか言われてねぇ⁉？
　やっぱり俺の怪我はコイツらが原因なんじゃねぇか⁉？
　それに対して闇は冷静に答える。
「それも使用者の意思や力量、資質とか適合割合次第。制御さえ出来れば普通に使える」
「力量と資質は何となく分かるけど、適合割合ってのは？」
「簡単にいうと闇のカードとのシンクロ率かな。使うと勝手に上がったりする」
「ということは闇は……」

「ん、私の場合、資質と適合割合が高いみたい。私の資質自体が闇のカードの性質に極めて近いんだって。だから、闇のカードにとっては私は対等な存在みたい。お陰で女王なんて呼ばれて面倒。従ってくれるから楽でいいけど、その分面倒な要求もたまにされる」
「要求？」
「戦わせろとかそういうの。負の感情を食べたりするからそういう悪い人を倒して吸い取ろうとするし」
「……やってることだけ聞くと正義のヒーローみたいに聞こえるから不思議だな」
「よくてダークヒーローが関の山だし、この子達はただ単に欲望に忠実過ぎるだけ。私も外道にかけてやる情けはないから別に構わないけど。他に質問ある？」
　そういって言うべきことは言ったようで闇は真剣な表情を崩す。
　俺は闇から教えて貰ったことを反復しながら、聞きたいことを絞り込んでいく。
「これから俺がコイツらを使うのは大丈夫なのか？コートオブアームズはもう使っちまったんだが……気合いで追い出したけど1度俺の身体を乗っ取ろうとしてきたし」
「気合いで追い出せたのが十分凄いけど、1度使ってるなら適合割合が上がってるから多分大丈夫。闇のカードは1度認めた人には忠実だから、きちんと制御することを意識しながらデュエルすれば事故は起こらない。適合割合が上がってくればいずれ話しかけてくるかもしれないしね」
「話しかけてくるのか、闇のカード……」
「私のヴェルズとか結構うるさい。喋り方が独特だから会話に慣れるのにも時間がかかったし。遊騎なら、いずれ精霊も視えるようになったり、会話出来るようになるかもね。気合いで」
「人が気合いでもなんでも出来るみたいな言い方は止めて欲しいんだが……後、この2枚どうすればいいと思う？襲われたのはコイツらが原因なんだが……」
「顔がバレてるなら捨てても今更だと思うよ？むしろ使いこなして返

り討ち出来るようにした方がいいと思う。なんなら私もシメるから呼んで」
そういってやる気を見せる闇。
でも、実際問題あの不審者がどう動いてくるかなんて分からないからな。
今は考えるだけ無駄か。
そこで闇が何かを思い出したかのように口を開いた。
「そうだ。闇のカードのことを知ったならこれも話しとく」
「……おい、まだ爆弾があるのか？」
「ある意味ではね」
そして闇は俺にとって驚愕の真実を語った。
「遊花、闇のカードを持ってるよ。絶望神アンチホープがそう。ついでにクリボー達やヴァレルとかカードの精霊もたくさん一緒にいる」
「なんだって⁉？それ、遊花は気づいてるのか⁉？」
「多分、気づいてない。というより、遊花には少し不思議なところがある」
「不思議なところ？」
「さっき話した通り、基本的に闇のカードと精霊は仲が悪い。でも、私が見た時、闇のカードであるアンチホープとクリボー達は明らかに協力して遊花を守っていた。おまけにあのアンチホープのカード、私がコントロール奪取したんだけど、その際にかなり抵抗して資質や適合割合が高い私でもかなり制御が難しいぐらい強力な闇のカードだった。なのに闇のカードであるアンチホープを使用してる遊花自身は全くアンチホープの影響を受けていない」
「闇よりも資質が高い可能性は？」
「それなら今度はクリボー達に好かれているのがおかしい。私でも精霊にはかなり嫌われてるのにそれ以上資質が高いなら、まず精霊は遊花に寄り付かないハズ。でも、遊花は闇のカードにもカードの精霊にも好かれている。カードの精霊と闇のカード、相反する存在のどちらからも愛されるとても稀有な才能。それが遊花にはある」
闇から語られた真実があまりにもぶっ飛んでいてどういう反応を

すればいいのかわからなくなる。
　正直、これ以上は容量オーバーになりそうだ。
「ヴェルズ達の話では遊花みたいな存在を『愛されし者』って言うみたい」
「『愛されし者』？」
「ん、何でもカードの精霊と闇のカードの架け橋となる才能なんだとか。詳しいことまでは分からなかったけど」
「……はぁ～何とも規格外な奴が弟子になったもんだな」
「同感。でも、遊花はまだ学生。大人として、師匠として、守れるところは守ってあげよ？」
「だな」
　遊花がどういう存在だろうと関係ない。
　だって俺は、遊花の師匠なのだから。

第16話　もう1度はじめから

★

「それじゃあ、今日の修行はここでおしまい」
「ありがとうございました、闇先パイ‼?」
「ん、今日もよく出来ました」
「えへへ」
「お疲れ、遊花」
「うん、ありがとう、桜ちゃん」
リビングで、闇先パイの修行が終わり一息つく。
闇先パイは私のデッキの方を見ながら私に尋ねてくる。
「どう?少しは慣れてきた?」
「あ、はい。まだまだ未熟ですけど、少しずつ動かせるようになってきました」
「私はよく動かせてると思うわよ?私ならそんなデッキを使うのはややこし過ぎて無理だわ」
「桜のデッキも十分変わってる方だと思う。勝ちパターンがかなり多い。殺意高すぎ」
「そうかしら?普通じゃない。ＥＸデッキもあんまり使わないし」
「普通のデッキは6割も後攻1ターン目にヘルテンペストをかましてきたりしない」
「それでも闇に勝てないのが悔しいんだけど……」
「私は強いから」
「くっ、否定出来ないのが悔しいわ」
「あ、あはは」
桜ちゃんと闇先パイのやり取りに苦笑いを浮かべながら私は自分のデッキを改めて見ていく。
師匠と約束をした日から5日が経った。
あれから闇先パイに色々な召喚方法を教えてもらいながら『Ｎａｔｕｒａｌ』で桜ちゃんと一緒に私が使えるカードを探して私のデッキ

に組み込みながら、そのデッキを試している。
　最初は、新しいカードが入って、私のデッキも少しぎくしゃくしていた気がするけど、何度も何度も試して、一緒にデュエルしていく中で、少しずつ動かせるようになっていった。
　それでも、まだデッキに入れてから引けてないカードもあるんだけど、その子とも一緒にデュエル出来ればいいなって思う。
　きっと、それはとても素敵なことだから。
「そういえば、遊花のデッキって少し枚数増えた？なんか最近ヘルテンペストで残るデッキ枚数が増えた気がするのよね」
「あ、うん。今は４５枚かな。でも、まだ使いたいカードとか、一緒にデュエルしたいカードがいっぱいあるんだよね」
　私が手に入れたカードの中でも、今のバランスじゃ組み込めないカードが何枚かある。
　そのカードとも、出来れば一緒にデュエル出来ればいいんだけど今のデッキの中身じゃそれは少し難しい。
　そんな私の言葉を聞いて、闇先パイはアドバイスをしてくれた。
「それなら、今の段階では難しいけど、いっそのことデッキの枚数を上限まで増やすという手もある」
「えっ？でも、そうなると引きたいカードが引けなくなるんじゃないの？」
「そのリスクは確かにある。でも、デッキを増やすことで使えるようになるカードだって存在する。元々、遊花のデッキはドローカードがあって墓地肥やしが出来て、防御も硬い。多少動き辛くなっても、そうやって時間を稼ぎながら戦う手段もあるって言うのは、覚えておいて損はない。デッキ枚数が多いことが、引きたいカードが引きにくいから弱いということのイコールではないから。常識に囚われてはいけない。一見変わった発想が、思いもよらない結果をもたらすのがデュエルだから」
「成る程です……」
「まあ、今はそのデッキで出来ることを考えた方がいい。それをやるのは、遊花の直感がそれをした方がいいと思った時が１番だから」

そういって締めくくり、闇先パイは背伸びをして私の頭を撫でてくれる。
……うん、今はこのデッキを使いこなすことを考えよう。
闇先パイが教えてくれたことを実践するのは、今じゃないって思うから。

ーーーーーーーー

「遊花、お昼にしましょ？」
「うん、桜ちゃん」
「宝月、少し待ってくれ。栗原、お前に少し用事がある」
「？先生、何かようですか？」
闇先パイに色々なアドバイスを受けた翌日。
午前中の講義が終わり、桜ちゃんが私の席に駆け寄ってくるから、私も笑顔で応えていると、講義をしていた先生に呼び止められた。
先生は凄く真剣な表情をして私に声をかけてくる。
「悪いんだが、校長室に来てくれるか？お前にとって、かなり大事な話になる」
「えっ？」
「ちょっと先生‼？遊花が校長室に呼ばれるってどういうことよ‼？」
先生の言葉に私は唖然とし、桜ちゃんは慌てた様子で声をあげる。
それが聞こえたのか、周りの生徒もざわざわとし始めた。
それに対し、先生も少し困った表情を浮かべる。
「詳しい話はここでは出来ないんだ。ただ、栗原にとってかなり重要な話になる。一緒に来てくれるな？」
「……はい。桜ちゃん、少し待っててくれる？」
「私も行くわ‼？」
「いや、流石にそれは無理があるよ」
「無理でも行くの‼？友達に何かあるかも知れないのに黙ってられるもんですか‼？」

「桜ちゃん……」
そういって憤る桜ちゃんに私は困った顔を浮かべる。
それを見て、先生は困った顔を浮かべながらもため息を吐いて桜ちゃんに口を開いた。
「分かった、宝月も来てもいい」
「えっ⁉？先生大丈夫なんですか⁉？」
「話の流れで宝月が関わる話になる可能性があるからな。その説明を省けるならちょうどいいかも知れん」
「よし、それじゃあ私も行くわよ」
先生は諦めたように肩を竦めた。
だ、大丈夫なのかな？
これ、後で先生が怒られたりしない？
私はそんなことを考えながら、校長室に向かって行くのだった。

ーーーーーーー

「少し待っていてくれ」
そう言うと、私達を待たせて先生はノックをすると校長室に入っていった。
多分、私達を一緒に入れなかったのはついて来ちゃった桜ちゃんについての説明があるからだろう。
しばらくすると「入りなさい」という言葉が聞こえたので、「失礼します」と声をかけて校長室の中に入った。
そこで待っていたのは、私を校長室に連れて来てくれた先生と柔和そうな印象を受ける初老の老人。
このデュエルアカデミア・ケルン校の校長、武者小路　紫煙（むしゃのこうじ　しえん）校長だ。
昔はかなり派手なデュエルをするプロ決闘者として活躍していたらしいけど、引退した今はこうしてデュエルアカデミアの運営に関わることで次世代の決闘者を育てることに尽力しているらしい。
その校長先生は現在、なんとも困ったような表情を浮かべてこちら

を見ていた。
「栗原　遊花君で間違いないかね？」
「はい。何やら大事な用があるということだったのですが……」
　私がそう尋ねると、校長先生は少し困ったような表情を浮かべながら口を開いた。
「その、実に言い難いんだがね……君を退学にという話が出ているんだ」
「……えっ？」
「⁉？ちょっと⁉？校長先生、どういうことよ⁉？」
　校長先生に言われた言葉に、私は唖然とし、桜ちゃんは慌てた様子で校長先生に尋ねる。
　私が、退学……？
　それに対し、校長先生も悲しそうな顔で口を開く。
「君の事情は聞いている。両親が亡くなり、君がデュエルに対して忌避感を抱いているのは教師陣にも伝わっていたし、君の心の傷に精一杯配慮出来るように私達も務めてきた」
「それは……気づいてました。私は、デュエルが出来なくなったなら、本当はすぐにこの学校を去るべきだったんです。それでも、この学校にいさせて貰えたこと自体、先生方の配慮があったからだと言うのは分かっています」
　本来、デュエルアカデミアは次世代のプロ決闘者を育てるための学校だ。
　それなのに、私がデュエルが出来なかった2年間もの間、この学校にいさせて貰えたこと自体、本来ならおかしいことなのだ。
「それについては、君の普段の人徳というものだよ。真面目に講義を受け、教師の指示もよく聞く優等生である君を嫌いな教師の方が少ない。しかし、それでもやはり、印象が悪い部分と、どうしようもない成績がある」
「……デュエルの実技、ですよね？」
　私の質問に校長先生は頷く。
　お父さん達が亡くなってから、私はまともにデュエルの実技が出来

ていない。
　デュエルをする際には、どうしてもお父さん達のことを思い出してしまい、デュエルどころではなかった。
　それが2年も続いたのだ。
　成績は悪いとか言うレベルではないだろう。
「ここは決闘者として活躍する子供達を導いていく為の学び舎だ。そこにデュエルが出来ない人間を置いておくのは他の生徒にも悪影響を与えるのではないかと、一部の教師から声が上がっていてね。その上、君の実技の成績はほぼ0だ。こうなってしまうと、流石に反論も難しい。しかし、だからといって私も君を退学にするというのは心苦しい。そこで職員会議の結果、ある提案が上がった」
「提案……ですか？」
　私の言葉に校長先生が頷く。
「栗原君。君が最近になって、デュエルがまた出来るようになったという話が教員の間で噂になっているのだが、本当かい？」
「!!？……はい。私は……凄く優しい出会いをしました。その人達が支えてくれて、私の事を沢山、本当に沢山考えてくれて……私は、もう1度デュエルが出来るようになりました」
　笑顔で語る私の言葉に、校長先生は少し驚いた顔をして、それから本当に嬉しそうに笑った。
「本当に、いい出会いを経験したみたいだね。ならば、話は早い。来週から、期末試験だということは分かっているね？」
「はい」
　もう季節は7月になろうとしている。
　7月の半ば過ぎには夏休みになるから、6月の終わりである来週の最初からは期末試験だ。
「そこでは勿論、デュエルの実技の試験が複数ある。しかし、今の君の成績と同じレベルの生徒と少しデュエルをしたぐらいでは評価は変わらない。よって、君にはこの学年のトップ10の子達とデュエルしてもらいたい。勿論、全力でね」
「えっ……桜ちゃん達と？」

「ちょっ、どういうことですか、校長先生⁉？私に遊花を退学にさせる可能性があるデュエルをしろって言うんですか⁉？」
校長先生の言葉に、桜ちゃんが吠える。
それに対して校長先生は首を振った。
「そういうわけではないよ。別に、勝ち負けで結果を決めるわけじゃない。デュエルの内容で、教員にこの子を退学させるのは惜しいと思わせれればいいんだ。入学当時の成績では、君の実力はトップ１０の子達にも引けを取っていない。大きな大会でも優勝していたのだから、十分にいいデュエルをしてくれる可能性がある。ようは、今の君はどんな決闘者なのかを示してくれればいいんだ」
校長先生の言葉を私の中に落とし込む。
ようは、いつも通り、自分に出来る全力でデュエルをすればいいだけだ。
それに、相手は学年トップクラスの実力者達。
だったら、私が師匠や闇先パイから学んだ事を実感することが出来るチャンスでもある。
それは、今の私にとって願ってもないこと。
師匠との約束を果たす時、沢山成長したことを見せれるチャンスでもある。
「喜んで、お受けいたします」
「ちょっ、遊花⁉？」
「私としても学年トップの人達とデュエル出来るなんて、願ってもないチャンスだもん。私は、あの人の弟子だから……この機会を、沢山成長できるチャンスを逃したくないもん。勿論、桜ちゃんも全力でやってね？私の全力で、桜ちゃんを越えるんだから⁉？」
「遊花……分かったわ。退学する羽目になっても知らないんだからね⁉？」
そういって私は桜ちゃんと笑い合う。
やる事は決まっている。
やりたい事も決まっている。
なら、全然退く理由なんてない。

「どうやら覚悟は決まっているようだね。なら、そのように取り計らせて貰うよ。君のデュエル、私も楽しみにさせて貰う」
「はい‼?あ、そうだ……その、出来ればお願いしたいことがあるんですがーーー」
そうして、私は校長先生に1つのお願いをした。
桜ちゃんは驚いていたけど、それは私にとって大切なことだったから、納得して貰った。
退学がかかっている大切なデュエルをしなければならないことは分かっている。
でも、それよりも今の私は、学年トップクラスの実力者達とデュエル出来ることが、楽しみで仕方がなかった。

ーーーーーーー

「……ふぅ」
「どう、緊張してない?」
「あ、桜ちゃん‼?桜ちゃんの試験は終わったの?」
時間が過ぎるのは早いもので、今日はもう期末試験の1日目だ。
今日は午前と午後を合わせて3戦、私はデュエルをすることになるらしい。
デュエルを控えた私に、桜ちゃんがいつも通り、私の肩を叩いて声をかけてきた。
「勿論、圧勝してきたわよ。それで、緊張してる?」
「ん〜よく分からない。沢山の人に見られながらデュエルをするのは久しぶりだから、少しそわそわするけど……」
「……はぁ〜……遊花。アンタ、笑ってるじゃない。それって、ワクワクしてるってことじゃないの?」
「……そっか。ワクワクしてるんだ、私」
桜ちゃんの言葉がぴったりと私の中にハマった気がした。
それを見て、桜ちゃんが少し不満そうな顔をする。
「くっ、こんな楽しそうな遊花をよりによってアイツに譲るなんて悔

しいわ」
「あはは、ゴメンね。でも、トップ１０の人達とデュエルするって決めた時、最初は絶対にそうしようって決めてたんだ。私のはじまりだから」
そう、校長先生に頼んで私の最初の相手は決めさせて貰った。
これは、私にとって大切な儀式。
私がもう１度、この場所からはじめるための、大切なデュエル。
『第３学年、出席番号９８番、栗原遊花さん。至急第１フィールドへお越しください』
「あ、呼ばれちゃった。それじゃあ、行ってくるね、桜ちゃん」
「頑張りなさいよ。アイツに負けたら承知しないんだから」
「うん、頑張る」
アナウンスに従い、私は第１フィールドに移動する。
周りからはいつも通りの私に対する冷たい視線と嘲笑の声。
でも、そんなこと今はどうだっていい。
フィールドには既に私の対戦相手が待っていた。
「……来たか」
「うん。お待たせ、空閑君」
待っていたのは厳つい顔をしたドレッドヘアーの青年。
あの日、私が師匠のデュエルに出会う原因になった男の子、空閑君。
「……先公から聞いたぜ。この期末試験中のデュエル、栗原の退学がかかってるんだってな」
「そうだね、なんかそうなっちゃった」
「そして、１番最初にデュエルをするのは俺様がいいって指名したらしいじゃねぇか。まさか、前の借りで負けて貰えるなんて思ってるわけじゃねぇよな？」
訝しむような目でこちらを見る空閑君に、私は思わず笑いそうになってしまった。
確かに、空閑君は前に私のヴァレルソードドラゴンを盗った時、これは借りだって言っていた。
でも、だからといって負けて貰うなんて考えているわけがない。

「空閑君、私ね。デュエル、出来るようになったよ」
「……」
「遊騎さんに……師匠に弟子入りして、沢山のことを教えて貰って、今、すっごくデュエルすることが楽しいんだ」
「……それで？」
「でもね、私がそんな風にまたデュエルが出来るようになったのは、空閑君のお陰なんだよ」
「何？」
　少し驚いたように空閑君が目を見開く。
「前に言ってくれたよね？『1年の時に見たテメェのデュエルは凄かった。同年代にここまでおもしれぇデュエルが出来る奴がいるんだって』って。今、私が空閑君の期待に応えたデュエルが出来るかは分からない。でも、あの時のことがあったから、あの出来事で師匠と出会うことが出来たから、私は前を向くことが出来た。だから、学年トップの人達とデュエルするって聞いた時、はじめのデュエルは空閑君とがいいなって思ったんだ。空閑君が望んだ、私の無茶苦茶なデュエルって言うのを見せてあげたいなって」
　そういって私はデュエルディスクを起動して空閑君に向けて構える。
「だから、私はもう1度ここからはじめるよ。あの日受けることが出来なかった空閑君の挑戦を、今ここで受ける。流石に、ヴァレルソードドラゴンは勘弁してほしいけどね」
　そんな私の宣言に空閑は少しの間きょとんとした表情を浮かべ、しばらくすると獰猛な笑みを浮かべた。
「フッ、面白い。だったら見せて貰おうか‼？そこまで言うテメェの実力を‼？」
「うん‼？私もいつまでも立ち止まってはいられないから、空閑君も乗り越えて、夢に向かってどこまでだって進化するよ‼？」
「ハッ、やれるもんならやってみな‼？行くぞ、栗原‼？」
「うん‼？」
『決闘‼？』

遊花　ＬＰ８０００
騨　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は貰うよ。私はミスティックパイパーを召喚!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ０

現れたのはフルートのようなものを弾いている男の人。
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを１枚ドローするよ。そしてこの効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル１モンスターだった場合、自分はカードをもう１枚ドローする!!?」
ミスティックパイパーが私を見てサムズアップをして消える。
いつもしてるけど、気に入ってるのかな？
そんなことを思いながら私はドローしたカードを確認する。
「私が引いたのはクリボール!!?レベル１モンスターなのでもう１枚ドロー!!?カードを１枚伏せてターンエンドだよ」

遊花　ＬＰ８０００　手札５
ーー▲ーー　ー
ーーーーー
ー　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
騨　ＬＰ８０００　手札５

「フィールドにモンスターを残さず俺にターンを渡すとはいい度胸だ

!!?俺様のターン、ドロー!!?まずはコイツからだ!!?空牙団の剣士ビートを召喚!!?」

〈空牙団の剣士ビート〉☆３　戦士族　地属性
ＡＴＫ１２００

現れたのは毛皮を被った小型の戦士。
あのモンスターから空閑君のデッキが動き出すのは覚えている。
「空牙団の剣士ビートの効果発動!!?１ターンに１度手札から同名以外の空牙団モンスター１体を特殊召喚する!!?俺様は空牙団の豪傑ダイナを特殊召喚!!?

〈空牙団の豪傑ダイナ〉☆６　獣戦士族　地属性
ＡＴＫ２５００

現れたのは屈強そうな大きな身体を持つ獣のような戦士。
「さらにモンスターゾーンに存在する状態で自分フィールドに自分以外の空牙団が特殊召喚されたことで空牙団の剣士ビートの効果発動!!?１ターンに１度、デッキから空牙団モンスター１体を手札に加える!!?俺はデッキから空牙団の英雄ラファールを手札に加える」
「!!?あれって空閑君の切り札の……」
「さらに空牙団の豪傑ダイナの効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、自分フィールドの空牙団モンスターの種類の数まで相手の墓地のカードを選んで除外する!!?ミスティックパイパーは除外させて貰うぜ!!?」
「うっ、それは痛い……」
ミスティックパイパーは私のデッキの重要なドローカード。
それをこの段階で除外されるのは、流石に痛いな。
「バトル!!?空牙団の剣士ビートでダイレクトアタック!!?リトルスラッシュ!!?」
「うぅ!!?」

遊花　　ＬＰ８０００→６８００

ビートが勢いよく駆け出し、私を斬りつけて戻っていく。

「追撃だ‼?・空牙団の豪傑ダイナでダイレクトアタック‼?・アウトレイジフィスト‼?・」

「それは通さないかな。手札からクリボールの効果を発動‼?・スピンショット‼?・相手モンスターの攻撃宣言時、そのモンスターを守備表示にするよ‼?・」

殴りかかってこようとしたダイナにクリボールが回転しながら突撃し、ダイナは怯んだのか膝をついた。

空牙団の豪傑ダイナ
ＡＴＫ２５００→ＤＥＦ１４００

「防いだか。メインフェイズ２、カードを２枚伏せる。空牙団の豪傑ダイナの永続効果によりこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手は他の空牙団モンスターを攻撃対象に選択できない」

「ビートは直接狙えないってことだね」

「お前がどう突破してくるか楽しみだ。ターンエンドだ」

遊花　ＬＰ６８００　手札４
ー ー ▲ ー ー　　ー
ー ー ー ー ー ー
ー　　ー
ー □ ○ ー ー
ー ー ▲ ▲ ー　　ー
騨　ＬＰ８０００　手札３

「私のターン、ドロー‼?・うーん、このターンはご期待に添えれそうに無いかな。私はクリバンデットを召喚」

〈クリバンデッド〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

私の前に現れたのは盗賊のような姿をした黒い毛玉のモンスター。凄く好戦的にぴょんぴょんと跳ねながら手を振ってるけど、君、攻撃力足りてないよね？

いやいや、頑張るから見たいに手を振られても足りないものは足りないから‼？

「エンドフェイズにクリバンデッドの効果発動‼？このカードをリリースしてデッキの上から５枚めくり、その中から魔法・罠カード１枚を手札に加えて残りを墓地に置くね」

不満そうにぴょんぴょん跳ねていたクリバンデッドの姿が消える。

その代わりに私はデッキの上から５枚のカードをめくって中から１枚のカードを手札に加えた。

「私は貪欲な壺の魔法カードを手札に加えてターンエンド‼？」

遊花　ＬＰ６８００　手札５
ー－▲－－　ー
－－－－－
ー　ー
ー□○－－
－－▲▲－　ー
騨　ＬＰ８０００　手札３

「動かなかったか。だが、油断はしねぇ。お前の師匠にはそれで痛い目にあわされたからな。俺様のターン、ドロー‼？早速行かせて貰うぜ‼？空牙団の剣士ビートの効果発動‼？１ターンに１度手札から同名以外の空牙団モンスター１体を特殊召喚する‼？大空に君臨する伝説の傭兵‼？空牙団の英雄ラファールを特殊召喚だ‼？」

空閑君の呼び声に応えるように雄叫びをあげて蒼い巨龍が降り立

つ。
遂にきたね、空閑君の切り札が。
〈空牙団の英雄ラファール〉☆８　ドラゴン族　光属性
ＡＴＫ２８００
「特殊召喚された空牙団の英雄ラファールとモンスターゾーンに存在する状態で自分フィールドに自分以外の空牙団が特殊召喚されたことで空牙団の剣士ビートの効果発動!!?まずは空牙団の剣士ビートの効果で１ターンに１度、デッキから空牙団モンスター１体を手札に加える!!?俺はデッキから空牙団の叡智ウィズを手札に加える。さらに空牙団の英雄ラファールの効果発動!!?スコールリンク!!?このカードが特殊召喚された時、同名以外の空牙団モンスターの種類の数だけ自分のデッキをめくり、その中から１枚を手札に加え、残りをデッキに戻す!!?」
ラファールが辺りを雄叫びをあげるとデッキの上から１枚のカードが手札に加わった。
「さらに俺は空牙団の闘士ブラーヴォを召喚!!?」
〈空牙団の闘士ブラーヴォ〉☆４　爬虫類族　炎属性
ＡＴＫ１９００
現れたのは鉤爪を着けた赤いリザードマン。
あのモンスターは確か全体の攻撃力を上げる効果があったような……
「空牙団の豪傑ダイナを攻撃表示に変更する」
空牙団の豪傑ダイナ
ＤＥＦ１４００→ＡＴＫ２５００
「空牙団の闘士ブラーヴォの効果発動!!?１ターンに１度、手札から

同名以外の空牙団モンスター1体を特殊召喚する!!?空牙団の叡智ウィズを特殊召喚だ!!?」

〈空牙団の叡智ウィズ〉☆7　魔法使い族　水属性
ＡＴＫ１６００

現れたのはタコのような姿をした魔法使い。
この状況でサーチしてまでして出したんだから、厄介なんだよね？
「特殊召喚された空牙団の叡智ウィズとモンスターゾーンに存在する状態で自分フィールドに自分以外の空牙団が特殊召喚されたことで、空牙団の闘士ブラーヴォの効果発動!!?空牙団の闘士ブラーヴォの効果で1ターンに1度フィールド全ての空牙団モンスターの攻守をターン終了時まで５００ポイントアップする!!?」

空牙団の英雄ラファール
ＡＴＫ２８００→３３００

空牙団の豪傑ダイナ
ＡＴＫ２５００→３０００

空牙団の闘士ブラーヴォ
ＡＴＫ１９００→２４００

空牙団の叡智ウィズ
ＡＴＫ１６００→２１００

空牙団の剣士ビート
ＡＴＫ１２００→１７００

「空牙団の叡智ウィズの効果、このカードが特殊召喚に成功した場合、自分は同名カード以外の自分フィールドの空牙団モンスターの種類

×５００ポイント、ライフを回復する」
「ライフ回復？」

騨　　ＬＰ８０００→１００００

空閑君のライフが１００００を超える。
確かにそれは脅威だけど、この攻める状況ではおかしいような……

そう首を傾げる私に空閑君はニヤリと笑った。
「攻めにきたんじゃないと思ったのか？残念ながらそうじゃねぇ。空牙団の叡智ウィズにはもう１つ効果がある。それは１ターンに１度、相手が魔法・罠カードの効果を発動した時、手札から空牙団カード１枚を捨ててその発動を無効にする効果だ!!？」
「っ!!？魔法罠封じ!!？」
そ、それは流石にマズイよ!!？
ラファールはモンスター効果の無効があるし!!？
「さぁ、耐えれるもんなら耐えてみな!!？バトル!!？空牙団の剣士ビートでダイレクトアタック!!？リトルスラッシュ!!？」
「うぅ!!？」

遊花　　ＬＰ６８００→５１００

「次だ!!？空牙団の叡智ウィズでダイレクトアタック!!？ウォーターバスター!!？」
「墓地からクリボーンの効果発動!!？相手モンスターの攻撃宣言時、墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のクリボーモンスターを任意の数だけ対象として、そのモンスターを特殊召喚するよ!!？対象はクリボール、クリアクリボー、虹クリボー!!？」
「!!？クリバンデットの時に落ちた奴か。壁など作らせるか!!？空牙団の英雄ラファールの効果発動!!？シールハウリング!!？１ターンに１度、相手のモンスター効果が発動した時、手札から空牙団カード

１枚を捨ててその発動を無効にする!!?・空牙団の舵手ヘルマーを捨てて無効だ!!?・攻撃は通させて貰うぞ!!?・」
「きゃあ!!?・」

遊花　ＬＰ５１００→３０００

ウィズの杖から圧縮された水流が打ち出され、ライフが削られる。
そろそろマズイ。
「これで終わりか、栗原!!?・空牙団の豪傑ダイナでダイレクトアタック!!?・アウトレイジフィスト!!?・」
「まだ、終わらないよ!!?・手札からバトルフェーダーの効果発動!!?・相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードを手札から特殊召喚し、その後バトルフェイズを終了するよ!!?・そしてこの効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される」

〈バトルフェーダー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

鐘を鳴らす悪魔が現れ、バトルフェイズが終了する。
あ、危なかったーもう少しでやられるところだったよ。
「耐えてみせたか。だが、この状況、お前はどうする?・俺様はこれでターンエンドだ。エンドフェイズ。上がっていた攻撃力は元に戻る」

空牙団の英雄ラファール
ＡＴＫ３３００→２８００

空牙団の豪傑ダイナ
ＡＴＫ３０００→２５００

空牙団の闘士ブラーヴォ
ＡＴＫ２４００→１９００

空牙団の叡智ウィズ
ＡＴＫ２１００→１６００

空牙団の剣士ビート
ＡＴＫ１７００→１２００

遊花　ＬＰ３０００　手札４
｜｜▲｜｜　｜
｜｜□｜｜
｜　｜
○○○○○
｜｜▲▲｜　｜
騨　ＬＰ１００００　手札２

「私のターン、ドロー!!?」
空閑君のフィールドにはモンスターが５体に伏せカードが２枚。
空閑君の手札は２枚だからモンスター効果も魔法罠も、１度は止められると思った方がいい。
おまけにライフは１００００。
正直かなり絶望的な状況だけど、これぐらいなら諦める程の状況じゃない!!?
「まずは、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「リンク召喚か……」
私が正面に手をかざすと私の前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル１モンスター１体!!?私はバトルフェーダーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?希望の守り手!!?リンク１!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性

ＡＴＫ３００　←

バトルフェーダーがサーキットに入り、代わりに出てきたのは青い球体型のモンスター。

リンクリボーは元気に跳ね回っている。

相変わらず元気だね、君は。

だけど、ゴメン。

今回はちょっとだけコストにさせてね？

「速攻魔法‼？エネミーコントローラー‼？」

「何⁉？」

「私は２つの効果の内、自分フィールドのモンスター１体をリリースし、相手フィールドの表側表示モンスター１体を対象に、その表側表示モンスターのコントロールをエンドフェイズまで得る効果を選択‼？私はリンクリボーをリリースし、空牙団の英雄ラファールのコントロールを得るよ‼？」

「チッ、させるか‼？空牙団の叡智ウィズの効果発動‼？１ターンに１度、相手が魔法・罠カードの効果を発動した時、手札から空牙団カード１枚を捨ててその発動を無効にする‼？手札から空牙団の撃手ドンパを捨てて無効だ‼？」

リンクリボーが消えて現れたコントローラーにウィズが水流を放つとコントローラーが動きを止めた。

機械に水を当ててるんだから、そりゃあ止まるよね。

でも、これで伏せカードが使える‼？

「リバースカードオープン‼？罠発動‼？活路への希望‼？」

「何⁉？そのカードは確か……」

「自分のＬＰが相手より１０００以上少ない場合、１０００ＬＰを払って発動‼？」

遊花　ＬＰ３０００→２０００

「お互いのＬＰの差２０００につき１枚、自分はデッキからドローす

る‼?私のライフは２０００‼?空閑君のライフは１００００‼?
よって４枚のカードをドロー‼?」
「この状況で４枚もドローするだと⁉?」
私は引いたカードを見て戦術を考える。
しかし……どう計算して見ても一手足りない。
やっぱり、まだデッキのカードが完全に馴染みきっていないのかも知れない。
何故ならここまで使ったカードは、今までも使っていたカードしか引けていない。
だけど、今まで使っていたカードだけではこの状況が解決出来ないことは分かっている。
だったら、今の私に出来ることは……
「モンスターをセット、カードを2枚伏せてターンエンドだよ」
「何?それだけの手札があって攻めてこないのか?」
辺りからブーイングのようなものが聞こえてくる。
それもそうだろう。
手札が8枚もあり、空閑君の手札も少ない今の状況で全く大した動きを見せないのだ。
普通に考えたらおかしい。
それでも……
「私は、自分のデッキを信じるって決めたから」
そう、私はこのデッキを、カード達を信じてる。
桜ちゃんと、闇先パイに手伝って貰いながら作ったこのデッキを。
だから、今はまだ耐える……耐えてみせる。
そんな私の目を見て何を思ったのか、空閑君は面白そうに笑った。
「お前、変わったな。こんな状況でも、全く怯んでねぇ。諦めてねぇ。貪欲に勝利への道を探っている」
「……うん。諦めることだけは、もうしないって決めたから」
「……それでいい。それでこそ、俺様が戦いたかった強者だ。だからこそ、諦めないというのならその意思で俺様の攻撃を耐えきって見せろ‼?」

「勿論!!?耐えることなら、私は誰にも負けない!!?」

遊花　ＬＰ２０００　手札５
ーー▲▲ー　ー
ーー■ーー
☆　ー
○○○○○
ーー▲▲ー　ー
騨　ＬＰ１００００　手札１

「俺様のターン、ドロー!!?栗原、お前に見せてやる。俺様のもう１体の切り札を!!?鳴り響け!!?理想を語らうサーキット!!?」
「!!?リンク召喚!!?」
空閑君の前にサーキットが現れる。
「召喚条件種族が異なるモンスター３体!!?俺様は空牙団の剣士ビート、空牙団の闘士ブラーヴォ、空牙団の豪傑ダイナをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
ビート、ブラーヴォ、ダイナがサーキットに飛び込んで行く。
そしてサーキットの中から桃色の花びらと共に大きな刀剣を持った狼の獣人が現れた。
「リンク召喚!!?信念貫く忠義の傭兵!!?リンク３!!?空牙団の大義フォルゴ!!?」

〈空牙団の大義フォルゴ〉ＬＩＮＫ３　獣族　闇属性
ＡＴＫ２４００　↙?→↘?

「これが、空閑君のもう１体の切り札……空牙団のリンクモンスター!!?」
「行くぞ、栗原!!?空牙団の大義フォルゴの効果発動!!?コムラードコール!!?このカードがリンク召喚に成功した場合、１ターンに同名カードは１度、そのリンク素材としたモンスター３体とは異なる種族

の空牙団モンスター1体をデッキから守備表示で特殊召喚する!!?
リンク素材としたモンスター戦士、爬虫類、獣戦士族だ!!?だからこそ、来やがれ!!?空牙団の孤高サジータ!!?」
「っ!!?そのモンスターは……」

〈空牙団の孤高サジータ〉☆5　鳥獣族　風属性
ＤＥＦ２４００

フォルゴが大きな遠吠えをするとライフルを持った鳥人がフィールドに降り立つ。
そしてその鳥人はそのままライフルの銃口を私に向ける。
「特殊召喚した空牙団の孤高サジータの効果発動!!?特殊召喚した時に1ターンに同名カードは1度、同名以外の自分フィールドの空牙団モンスターの種類×５００ポイントのダメージを相手に与える!!?俺様のフィールドには空牙団の英雄ラファール、空牙団の叡智ウィズ、空牙団の大義フォルゴの3体がいる。よって１５００ポイントのダメージを受けな!!?」
「きゃあ!!?」

遊花　ＬＰ２０００→５００

サジータがライフルの引き金を引き、私の身体が撃ち抜かれてライフが削られ、とうとう3桁になる。
危なかった……フィールドに後1体でも出せる状況だったら負けているところだった。
「これでどのモンスターの攻撃が通ってもお前の負けだ!!?さらに空牙団の剣士ビートを召喚!!?」

〈空牙団の剣士ビート〉☆3　戦士族　地属性
ＡＴＫ１２００

再び現れたのは毛皮を被った小型の戦士。
この流れは凄く不味い。
「バトル!!?空牙団の剣士ビートでリンクリボーを攻撃!!?」
「相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動!!?ゼロリンク!!?このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力はターン終了時まで0になる!!?」
斬りかかってきたビートにリンクリボーの身体が粒子に変わって纏わりつく。
「攻撃対象がいなくなったことで攻撃は中止だ。空牙団の大義フォルゴでセットモンスターを攻撃!!?春風のブロッサムアレスト!!?」
「セットモンスターはハネクリボー!!?」

〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

高速で近づいてきたフォルゴに斬られ、相棒が粒子に変わる。
「空牙団の大義フォルゴの効果発動!!?コネクションドロー!!?相手フィールドのカードが戦闘・効果で破壊された場合、1ターンに1度、自分はデッキから1枚ドローする。その後、自分フィールドの空牙団モンスターが3種類以上の場合、自分はデッキから2枚ドローする!!?」
「ここに来て3ドロー効果!?ハネクリボーの効果発動!!?プリフィケーション!!?このカードがフィールドから墓地に送られたターン、自分の受ける戦闘ダメージは0になる!!?」
「無駄だ!!?空牙団の英雄ラファールの効果発動!!?シールハウリング!!?1ターンに1度、相手のモンスター効果が発動した時、手札から空牙団カード1枚を捨ててその発動を無効にする!!?空牙団の修練を捨てて無効だ!!?」
相棒の粒子をラファールは咆哮で弾き飛ばす。
これでこのターンでも戦闘ダメージは受けてしまう。
「空牙団の叡智ウィズでダイレクトアタック!!?」

「まだ……まだだよ!!?相手モンスターの攻撃宣言時、墓地からクリアクリボーの効果発動!!?それにチェーンして墓地に存在する虹クリボーの効果!!?さらにチェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?聖なるバリア　―ミラーフォース―!!?攻撃表示のモンスターを全て破壊するよ!!?」
「っ!!?こんな状況でまだそんなもんを残してやがったのか!!?だが、無駄だ!!?空牙団の叡智ウィズの効果発動!!?1ターンに1度、相手が魔法・罠カードの効果を発動した時、手札から空牙団カード1枚を捨ててその発動を無効にする!!?手札から空牙団の舵手ヘルマーを捨てて無効だ!!?」
「聖なるバリア　―ミラーフォース―は無効化される。でも、虹クリボーの効果!!?レインボーシールド!!?このカードが墓地に存在する場合、相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードを墓地から特殊召喚するよ!!?お願い、虹クリボー!!?」

〈虹クリボー〉☆1　悪魔族　光属性
ＤＥＦ１００

私を守るように虹クリボーが現れる。

「さらにクリアクリボーの効果で相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のクリアクリボーを除外し、自分はデッキから1枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替えるよ!!?」
お願い、私のデッキ……私に力を貸して!!?
「ドロー!!?……!!?このカードは……」
「どうやら出せるカードじゃないみたいだな。空牙団の叡智ウィズで虹クリボーを攻撃!!?ウォーターバスター!!?」
打ち出された水流で虹クリボーは流されて消えてしまう。
そして残ったのは空閑君の切り札であるラファール。
「これで終わりだ!!?空牙団の英雄ラファールでダイレクトアタック

!!?突風のアウトレイジファング!!?」
ラファールが突風を纏い、私に向かって突撃してくる。
確かに、さっきまでなら負けていた。
でも、クリアクリボーの効果で来てくれたこの子がいるから、まだ負けてない!!?
「おいで、私の新しいお友達!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札のゴーストリックランタンの効果発動!!?」
「!?ゴーストリックだと!?」
「その攻撃を無効にし、このカードを手札から裏側守備表示で特殊召喚するよ!!?」
ラファールの前に一瞬だけジャックオーランタンのような幽霊が現れる。
それに驚いたのかラファールは動きを止めてしまった。
「クリアクリボーの効果で引いたのはこの子だったんだ。だから、出せなかったんじゃなくて、出さなかっただけだよ」
「……まさか、本当に耐えられるとはな。だが、俺の布陣に隙はねぇ。この状況、テメェにひっくり返せるか?俺はメインフェイズ2にーーー」
「……ねぇ、空閑君。今の状況、何かに似てない?」
「何だと?……!!?テメェ、まさかその伏せカード!!?」
「バトルフェイズを終了時、リバースカードオープン!!?罠発動!!?拮抗勝負!!?相手フィールドのカードの数が自分フィールドのカードの数より多い場合、自分・相手のバトルフェイズ終了時に発動できる!!?自分フィールドのカードの数と同じになるように、相手はフィールドのカードを裏側表示で除外しなければならない」
「っ!!?そんなものまで残してあったのか……」
空閑君だけではなく、見ていた他の生徒、特に空閑君の取り巻きの人達がざわつき始める。
それはそうだろう。
だって、絶対的に有利だったこれまでの状況がここから一気に状況が変化するのだから。

「師匠みたいに手札から使う安全性はなかったから、伏せざる負えなかったんだけどね。私のフィールドのカードは2枚。空閑君にも2枚になるように除外して貰うよ‼?」
「っ……俺様は……空牙団の英雄ラファールと……空牙団の大義フォルゴを残す」
「‼?ちょっとびっくり。空牙団の叡智ウィズを残すと思ってた」
「どの道俺様の手札は2枚。おまけに言っちまうが空牙団のカードは1枚しかねぇ。ライフは10000もある。なら、次のターンを乗り切り、空牙団の大義フォルゴのドロー効果で再び攻めに入る方を俺様は選ぶ。俺様は自分の切り札を信じるだけだ」
空閑君がそういうとラファールとフォルゴ以外の空閑君のカードが粒子になってフィールドから消えていく。
その時、粒子になっていく空閑君のモンスター達が空閑君に対して頷いていた気がした。
まるで、それでいいと言うように。
「俺様はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

遊花　LP500　手札5
ーーーーーー　ー
ー??ーーー
☆　ー
○ーーーー
ーー▲ーー　ー
騨　LP10000　手札1

やっぱり、空閑君は強い。
前の私なら、きっと全然勝負にならなかっただろう。
でも、今は違う。
こんな私に力を貸してくれている、優しい人達がいる、優しいカード達がいる。
だから……

「空閑君。私、空閑君に勝つよ」
「‼？ハッ、言うじゃねぇか。出来るもんならやってみろ‼？」
「うん、やるよ‼？私のターン、ドロー‼？」
引いたカードを見る。
これなら、行ける‼？
「速攻魔法、クリボーを呼ぶ笛‼？その効果で自分はデッキからクリボーまたはハネクリボー1体を選択し、手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができる‼？私か選ぶのは特殊召喚‼？おいで、クリボー‼？」
〈クリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

現れるのは毛玉のようなモンスター。
ここから全てが始まるの‼？
「速攻魔法‼？増殖‼？自分フィールド上に表側表示で存在するクリボー1体をリリースして自分フィールド上にクリボートークンを可能な限り守備表示で特殊召喚するよ‼？」
「っ、トークンからリンク召喚に繋げる気か‼？」
〈クリボートークン〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

現れるのは4体のクリボートークン達。
「反転召喚、ゴーストリックランタン‼？」
〈ゴーストリックランタン〉☆1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ８００

再び姿を見せるジャックオーランタンのようなモンスター。
そのモンスターは一瞬姿を消すと、急に私の後ろから現れた。

もう、イタズラ好きだね、君は。
でも、これからもよろしくね？
そして、ここからが本番だ。
「導いて‼？希望に繋がるサーキット‼？」
再び私の前に大きなサーキットが現れる。
さぁ、いくよ、皆‼？
「召喚条件はトークン以外のレベル１モンスター１体‼？私はゴーストリックランタンをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？相手を捕える深淵の邪眼‼？リンク１‼？サクリファイスアニマ‼？」

〈サクリファイスアニマ〉ＬＩＮＫ１　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０　→

フォルゴの前に怪しげな邪眼を持つモンスターが現れる。
うーん、やっぱり外見は少し怖いよね？
あ、ゴメン、落ち込まないで‼？頼りにしてるから‼？
「サクリファイスアニマの効果発動‼？コネクトアブソープション‼？１ターンに１度このカードのリンク先の表側表示モンスター１体を対象にその表側表示モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップするよ‼？対象は勿論、空牙団の大義フォルゴ‼？吸い込んじゃって、サクリファイスアニマ‼？」
「っ、やらせるか‼？空牙団の英雄ラファールの効果発動‼？シールハウリング‼？１ターンに１度、相手のモンスター効果が発動した時、手札から空牙団カード１枚を捨ててその発動を無効にする‼？空牙団の英雄ラファールを捨てて無効だ‼？」
アニマの目の上にある空間からフォルゴを吸い込むように風が生み出されるがラファールの咆哮により、その風は打ち消されてしまった。
でも、これでもう防ぐカードはない‼？

それを確認しながら私は再びサーキットを開く。
「まだ行くよ‼?希望に繋がるサーキット‼?」
「チッ、連続リンク召喚か‼?」
「召喚条件はモンスター2体‼?私はクリボートークン2体をリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?リンク召喚‼?リンク2‼?プロキシードラゴン‼?」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

次に現れたのは白い身体をした機械の竜。
そして私はまたあの子を呼ぶ。
「墓地に存在するリンクリボーの効果発動‼?スケープリンク‼?このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル1モンスター1体をリリースしてこのカードを墓地から特殊召喚する‼?私はクリボートークンをリリース‼?戻っておいで、リンクリボー‼?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

再びフィールドに飛び出してくるリンクリボー。
いつもゴメンね、でも今回もお願いするよ。
「そして導いて‼?希望に繋がるサーキット‼?」
このターン3度目のサーキット。
私は1度目を閉じて、深呼吸をしてからそのモンスターを呼ぶ。
「召喚条件は効果モンスター3体以上‼?私はサクリファイスアニマ、リンクリボー、プロキシードラゴンを　2体分として扱ってリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?」
さぁ、見せてあげよう。
貴方の姿を、空閑君に‼?

「お願い、私に未来を斬り開く力を貸して!!?リンク召喚!!?閉ざされた運命を斬り開く魂の剣(つるぎ)リンク４!!?ヴァレルソードドラゴン!!?」

〈ヴァレルソードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑←→

ヴァレルソードドラゴンが力強く雄叫びをあげる。
それを見て、空閑君が目を見開く。
「そのドラゴンは……」
「うん、あの時のドラゴンだよ。この子が、空閑君を倒す」
「ハッ、面白い!!?」
「まだまだ行くよ、ここからは私の新しい力を見せる!!?」
「新しい力だと?」
「だけどその前に下準備。魔法カード、貪欲な壺!!?墓地のサクリファイスアニマ、プロキシードラゴン、リンクリボーをＥＸデッキに、クリボーとハネクリボーをデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚、ドローする!!?よし!!?手札からクリボルトを捨てて、魔法カード、ワンフォーワンを発動!!?デッキからレベル１モンスター１体を特殊召喚する!!?さぁ、初陣だよ!!?チューナーモンスター、ジェットシンクロン!!?」
「チューナーだと!!?」

〈ジェットシンクロン〉☆１　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

現れたのは小さなジェット機のような機械のモンスター。
現れたジェットシンクロンは嬉しそうに私の周りを飛び回る。
ちょっと可愛いな。
「私はサクリボーを召喚」

〈サクリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３００

私の前にクリボーに似たモンスターが現れる。
そして私は新しい言霊を紡ぐ。
「私は⁉？レベル1、クリボートークンと、レベル1、サクリボーに、レベル1、チューナーモンスター、ジェットシンクロンをチューニング⁉？」
「やはり、シンクロ召喚か⁉？」
ジェットシンクロンが光の輪になり、クリボートークンとサクリボーが小さな星に変わり、光の道になる。
「悠久に響く祈りの歌が、争いを鎮める新風となる⁉？シンクロ召喚⁉？未来に羽ばたけ、霞鳥クラウソラス⁉？」

〈霞鳥クラウソラス〉☆3　鳥獣族　風属性
ＤＥＦ２３００

光の道が輝くと、その中から緑の翼で羽ばたく綺麗な鳥が現れた。
「行くよ、霧鳥クラウソラスの効果発動⁉？プレアーソング⁉？1ターンに1度、相手フィールドの表側表示のモンスター1体を選択し、ターン終了時までその攻撃力を0にし、その効果を無効にする⁉？対象は、空牙団の大義フォルゴ⁉？」
「何だと⁉？」

空牙団の大義フォルゴ
ＡＴＫ２４００→0

クラウソラスが綺麗な声で唄い、フォルゴが力を失っていく。
「墓地に存在するジェットシンクロンの効果発動⁉？手札を1枚墓地に送り、墓地からこのカードを特殊召喚する⁉？ただし、この効果で

特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合、除外される‼？」

〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

私の前に再びジェットシンクロンが現れる。
それを見て空閑君が再び目を見開く。
「まさか、またシンクロ召喚をする気か⁉？」
「その通り‼？私は‼？レベル３、霞鳥クラウソラスに、レベル１、チューナーモンスター、ジェットシンクロンをチューニング‼？」
ジェットシンクロンが光の輪になり、今度はクラウソラスが小さな星に変わり、光の道になる。
そして光の道が輝くと、その中から現れるのは大きな機械の腕。
「闘志を秘めしその拳、あらゆる障害を打ち砕く‼？シンクロ召喚‼？一撃爆砕‼？アームズエイド‼？」

〈アームズエイド〉☆４　機械族　光属性
ＤＥＦ１２００

「アームズエイドの効果発動‼？アームズシフト‼？１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとしてモンスターに装備出来る‼？この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、装備モンスターの攻撃力は１０００ポイントアップするよ‼？ヴァレルソードドラゴンにアームズエイドを装備‼？」
「何だと⁉？」
アームズエイドが飛び立ち、ヴァレルソードドラゴンも腕を空に掲げ、その腕に装着される。

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ３０００→４０００

「ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アサシネイトショット!!?1ターンに1度、攻撃表示モンスター1体を対象として発動!!?そのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる。そしてこの効果の発動に対して相手は効果を発動できない!!?この効果は相手ターンにでも使用することが出来ます!!?対象にするのは、空牙団の英雄ラファール!!?」
「馬鹿な!?この状況で2回攻撃だと!?」
ヴァレルソードドラゴンがアームズエイドを装備している腕をラファールに向けて、アームズエイドをそのまま発射……って、ええっ!?
いつもは銃を撃ってるよね!?
確かにカッコいいけど、アームズエイドの使い方ってそれでいいの!?
私のツッコミも虚しくアームズエイドはそのままラファールに当たると、ラファールへ膝をつき、アームズエイドは再びヴァレルソードドラゴンの腕に戻り装着された。

空牙団の英雄ラファール
ＡＴＫ２８００→ＤＥＦ２２００

い、いいもん、もうツッコんであげないもん!!?
「バトル!!?ヴァレルソードドラゴンで空牙団の英雄ラファールを攻撃!!?攻撃宣言時、ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アブソーブブースト!1ターンに1度、このカードが表側表示モンスターに攻撃宣言した時、ターン終了時まで、このカードの攻撃力はそのモンスターの攻撃力の半分アップし、そのモンスターの攻撃力は半分になる!!?」
「なっ!?だが、ダメージが通らなければ同じことだ!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?和睦の使者!!?このターン相手モンスターから受ける戦闘ダメージを0にし、自分のモンスターは戦闘で

は破壊されない!!?これでこのターン、俺様が負けることはねぇ!!?」
「この展開も、見たことあるよね、空閑君!!?」
「何っ!?まさかその手札!!?」
「ライフポイントを半分払い、手札から罠発動!!?レッドリブート!!?」

遊花　ＬＰ５００→２５０

「相手が罠カードを発動した時に発動できる!!?その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする!!?その後相手はデッキから罠カード１枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンにセットできる。最もこのカード発動後、ターン終了時まで罠カードは発動できないけどね」
「チッ!!?師弟揃って同じことしやがって!!?俺様はデッキから空牙団の修練をセットする!!?」
「ヴァレルソードドラゴンの効果!!?攻撃力は半分いただくよ!!?」

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ４０００→５４００

空牙団の英雄ラファール
ＡＴＫ２８００→１４００

「斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン!!?衝撃のベイオネットブレイク!!?」
「っ、迎え撃て!!?空牙団の英雄ラファール!!?突風のアウトレイジファング!!?」
ラファールは突風を纏って突撃し、ヴァレルソードドラゴンはアームズエイドを装備した腕をラファールに向ける。
そしてヴァレルソードドラゴンは見事なクロスカウンターを決め、ラファールを殴り飛ばした。

「くっ、ラファールがやられたか。だが、ラファールは守備表示!!?やはりこのターンで決着はつかねぇ!!?」
「それはどうかな?アームズエイドの更なる効果、ビッグバンブレイク!!?装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える!!?」
「何だと!?!?」
ラファールを殴り飛ばした拳圧がそのまま空閑君に当たり、ライフが削られていく。

騨　ＬＰ１００００→７２００

そのダメージを受け、空閑君は楽しそうに……本当に楽しそうに笑った。
「俺の負けか……来い、栗原!!?」
「うん!!?もう1度斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン!!?空牙団の大義フォルゴを攻撃!!?撃滅のベイオネットブレイク!!?」
「迎え撃て!!?空牙団の大義フォルゴ!!?春風のブロッサムアレスト!!?」
最後の力を振り絞り、フォルゴは雄叫びを上げながらヴァレルソードドラゴンに斬りかかる。
それに応えるように、ヴァレルソードドラゴンも剣を抜き、フォルゴをすれ違い様に斬り裂いた。
「アームズエイドの更なる効果、ビッグバンブレイク!!?装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える!!?これで、終わり!!?」

騨　ＬＰ７２００→１８００→０

デュエルが終わり、会場が騒然とする。
負けたのは学年トップ１０。
そして勝者は学年最下位の劣等生。
そんな騒然とした会場の中、負けたハズの学年トップ１０は、とても愉快そうな笑い声を上げた。
「ククク、ハッハハハハ‼?」
そんな空閑君に私は思わずきょとんとしてしまう。
でも、その笑い声の意味が分かり、私も嬉しくなって笑顔で声をかけた。
「空閑君‼?ありがとうございました‼?本当に、楽しいデュエルでした‼?」
「ああ、俺も満足がいくデュエルだった。栗原……お前は、本当に強い」
そう満足そうに呟くと、空閑君は振り向いて去っていく。
そんな空閑君の後ろ姿に、私は大きな声で声をかける。
「空閑君‼?今度、師匠が『Ｎａｔｕｒａｌ』ってお店で小さな大会を開いてくれるの‼?よかったら、空閑君も参加してね‼?」
そんな私の言葉に、空閑君は後ろを向いたまま片手を振って去っていった。
空閑君……参加してくれるといいな。
そんなことを思いながら、私も会場を後にする。
まずは１勝。
次は、どんな人とデュエル出来るかな?

第17話　たゆたう魂

★

「お疲れ様、遊花。しっかりと決めてきたわね」
「うん‼？凄く楽しいデュエルだったよ」
デュエルが終わってしばらくして私を探していたのか、桜ちゃんが駆け寄りながら声をかけてくる。
私の返事に、桜ちゃんは苦笑いを浮かべる。
「あの状況でデュエルをしてただ楽しかったで済ませるのが遊花らしいところよね」
「あの状況？」
私が首を傾げると桜ちゃんが少しムッとした表情で答える。
「周りの奴らの反応よ。遊花のことを馬鹿にするようなことばかり言って、思わず掴みかかるところだったわ。ま、最後に遊花が勝った時の唖然とした表情が滑稽だったから許してあげるけど」
「桜ちゃんは喧嘩っ早過ぎるよ……」
「遊花が我慢強過ぎるの。というか、無理してないわよね？」
そういって心配そうな表情で桜ちゃんが私の顔を覗きこんでくる。
そんな桜ちゃんに、私は笑顔を浮かべながら頷いた。
「うん、無理なんかしてないよ。これくらい平気、へっちゃらだよ。それに私は師匠の跡を継ぐんだもん。あれぐらいじゃ怯んでなんかいられないよ」
『第3学年、出席番号98番、栗原遊花さん。至急第5フィールドへお越しください』
そんな話をしていると、再び私を呼び出すアナウンスが流れた。
「あれ？もうそんな時間になっちゃったの？」
「まあ、さっきのデュエルが終わってから結構経ってるものね。んじゃ、また応援してあげるから、頑張って来なさいよ」
「うん‼？行ってくるね‼？」
桜ちゃんの応援を受けながら、アナウンスに従い、私は第5フィー

ルドに移動する。
　そこにいたのは綺麗な銀色の髪に琥珀色の目をした落ち着いた雰囲気を纏う女性。
　その女性は私を見ると嬉しそうに笑った。
「貴方が私の対戦相手？」
「あ、はい‼？栗原　遊花です‼？」
「私は御子神　霊華（みこがみ　れいか）。貴方みたいな面白い子とデュエル出来ることを楽しみにしていた」
「面白い、ですか？」
　首を傾げる私に御子神さんは言葉を続ける。
「貴方の魂からは面白い波動が出ているわ。その波動が周りにいる様々な存在を惹きつけ、貴方を守っている」
「えっ？波動？惹きつける？」
「気づいてはいないのね。でも、それでいいのかも知れないわ。気づいていないからこそ、貴方の波動は脳髄が疼く程心地良いものなのかも」
「え、えーと？」
　私は一体何を言われているのだろう？
　悪口を言われてるってわけじゃないみたいだし、でも、言葉の意味はよく分からないし……うーん？
　私が御子神さんの言葉に混乱していると、御子神さんは柔らかく笑いながらデュエルディスクを起動した。
「さっきの彼とのデュエルを見て、貴方のデュエルには凄く興味がある。貴方の魂の本質、私にも見せて」
「えーと、よく分からないですけど、期待に添えるように、一生懸命頑張ります‼？」
「ええ、それじゃあ始めましょう」
『決闘‼？』

遊花　ＬＰ８０００
霊華　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は私。私は荒魂を召喚」

〈荒魂〉☆４　悪魔族　闇属性

ＡＴＫ８００

御子神さんが召喚したのは鬼の顔のような形をした霊体のモンスター。

私も金華猫を持ってるから分かるけど、御子神さんのデッキはスピリットモンスターが主軸のデッキなのかな？

「荒魂の効果発動、このカードが召喚・リバースした時にデッキから荒魂以外のスピリットモンスター１体を手札に加えるわ。私はデッキから和魂を手札に加える。カードを２枚伏せてエンドフェイズ、スピリットモンスター共通の効果により、召喚・リバースしたターンのエンドフェイズにスピリットモンスターは手札に戻ってくるわ」

遊花　ＬＰ８０００　手札５

ーーーーーー　ー

ーーーーーー

ー　ー

ーーーーー

ーー▲▲ー　ー

霊華　ＬＰ８０００　手札４

「私のターン、ドロー!!?」

あ、手札抹殺。

これなら御子神さんがサーチしたカードも落とせる!!?

「魔法カード、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨てて同じ枚数ドローします!!?」

「うん、いいカードね。だけど、ダメ。手札からＰＳＹフレームギアδの効果を発動」
「ふぇっ⁉？」
「自分フィールドにモンスターが存在せず、相手の魔法カードが発動した時、手札のこのカードと自分の手札・デッキ・墓地のＰＳＹフレームドライバー１体を選んで特殊召喚し、その発動を無効にし破壊するわ。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは全てエンドフェイズに除外される。私は手札からチューナーモンスター、ＰＳＹフレームギアδ、デッキからＰＳＹフレームドライバーを特殊召喚し、手札抹殺は無効よ」

〈ＰＳＹフレームギアδ〉☆２　サイキック族　光属性
ＤＥＦ０

〈ＰＳＹフレームドライバー〉☆６　サイキック族　光属性
ＡＴＫ２５００

現れたのは電気を纏った戦士と腕に装着するような機械。
うぅ～まさかスピリットだけのデッキじゃなかったなんて……
手札抹殺を無効化されたのはちょっと痛い。
でも、さっきの効果を聞く限り、御子神さんのフィールドにモンスターがいる限りは出てこないみたいだから今なら動けそう。
「私はクリバンデットを召喚」

〈クリバンデッド〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

私の前に現れたのは盗賊のような姿をした黒い毛玉のモンスター。
はいはい、ぴょんぴょんと攻撃したいアピールをしなくても分かってるから。
エンドフェイズにあのモンスター達は除外されるみたいだけど、そ

の除外を使って動いてくるかも知れないし、ここは攻めておくべきだよね。
「バトル‼?・クリバンデットでＰＳＹフレームギアδを攻撃‼?・バンデットクロー‼?」
「残念だけど、そう上手くはいかない。リバースカードオープン、罠発動、緊急同調。バトルフェイズ中のみ発動でき、シンクロモンスター１体をシンクロ召喚するわ」
「っ⁉?・ワンダーエクシーズみたいなカード⁉?」
「私は、レベル６、ＰＳＹフレームドライバーに、レベル２、チューナーモンスター、ＰＳＹフレームギアδをチューニング」
δが光の輪になり、フレームドライバーが小さな星に変わり、光の道になる。
そして光の道が輝くと、その中から全身を機械の鎧に身を包んだ戦士が現れた。
「そこに開くは異世界への扉、現世（うつしよ）を超えて未知なる世界へ……シンクロ召喚。降誕、ＰＳＹフレームロードΩ」
〈ＰＳＹフレームロードΩ〉☆８　サイキック族　光属性
ＡＴＫ２８００
「レベル８のシンクロモンスター⁉?・攻撃対象がいなくなったのでクリバンデットの攻撃は中止します‼?」
そんな不満そうに鳴いてもダメ‼?
絶対に勝てないでしょ⁉?
「メインフェイズ２、カードを２枚伏せてエンドフェイズにクリバンデッドの効果発動‼?・このカードをリリースしてデッキの上から５枚めくり、その中から魔法・罠カード１枚を手札に加えて残りを墓地に置きます‼?」
不満そうに鳴いていたクリバンデッドの姿が消え、私はデッキの上から５枚のカードをめくって中から１枚のカードを手札に加える。
「私はワンフォーワンを手札に加えて、ターンエンドです」

遊花　ＬＰ８０００　手札３
ー▲▲ー　ー
ーーーーー
ー　○
ーーーーー
ーー▲ー　ー
霊華　ＬＰ８０００　手札３

「私のターン、ドロー。私は和魂を召喚」

〈和魂〉☆４　天使族　光属性
ＡＴＫ８００

御子神さんが召喚したのは緑色の霊体のモンスター。
「和魂の効果発動、このカードが召喚・リバースしたターン、自分は通常召喚に加えて１度だけスピリットモンスター１体を召喚できる。私は和魂をリリースして鳳凰をアドバンス召喚」

〈鳳凰〉☆６　鳥獣族　炎属性
ＡＴＫ２１００

現れたのは赤い身体を持つ霊体の鳥型モンスター。
「和魂の効果発動、このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上にスピリットモンスターが存在する場合、デッキからカードを１枚ドローする。それにチェーンして鳳凰の効果、このカードが召喚・リバースした時、相手フィールド上にセットされた魔法・罠カードを全て破壊する」
「魔法罠破壊ですか⁉？くっ、速攻魔法発動‼？クリボーを呼ぶ笛‼？その効果で自分はデッキからクリボーまたはハネクリボー１体を選択し、手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができま

す!!?私か選ぶのは特殊召喚!!?いつだって、私と共に!!?ハネクリボー!!?」

〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

私の前に相棒が現れる。
うぅ～ゴメンね、相棒。
こんな状況では呼びたくなかったんだけど……
そう思っていると相棒は気にするなというように私の頭の上に移動し、髪を撫でるように手を動かした。
それを見て、御子神さんは微笑ましそうに笑う。
「仲がいいのね、その子と」
「えっ?あの、その、相棒、ですから?」
「そう、やっぱり素敵な子ね、貴方」
「は、はぁ」
「でも、デュエルで加減はしないわ。鳳凰の効果でセットされている魔法罠を破壊。和魂の効果で鳳凰がいるから1枚ドロー。バトル。鳳凰で貴方の相棒さんを攻撃。火炎の舞」
「ゴメンね、お願い、ハネクリボー!!?」
ハネクリボーは私を守るように私の前で手を広げ、鳳凰が放った炎を纏った羽に当たり粒子に変わる。
そしてその粒子は私を守るように私の身体を包んでいく。
「ハネクリボーの効果発動!!?プリフィケーション!!?このカードがフィールドから墓地に送られたターン、自分の受ける戦闘ダメージは0になります!!?」
「流石、相棒とまで呼ばれる子。ちゃんと貴方を守るなんて素敵だわ。メインフェイズ2、私はフィールド魔法、ＰＳＹフレームサーキットを発動」
御子神さんがフィールド魔法を置くと、辺りが電流が流れる緑色の空間に変わる。

「ＰＳＹフレームサーキットの効果は自分フィールドにＰＳＹフレームモンスターが特殊召喚された場合に、自分フィールドのＰＳＹフレームモンスターのみをシンクロ素材としてシンクロ召喚出来るようになるわ」
「つまり、これからは出てきたＰＳＹフレームモンスターは直ぐにシンクロモンスターに変わっちゃうんですね」
「その通り。他にも自分のＰＳＹフレームモンスターが相手モンスターと戦闘を行うダメージステップ開始時に、手札のＰＳＹフレームモンスター1枚を捨てることでその戦闘を行う自分のモンスターの攻撃力はターン終了時まで、捨てたモンスターの攻撃力分アップさせることができる」
「戦闘補助まで……」
「ついでにこれも発動させて置くわ。ＰＳＹフレームロードΩの効果発動、ディファレントトラベル。1ターンに1度、自分・相手のメインフェイズに相手の手札をランダムに1枚選び、そのカードと表側表示のこのカードを次の自分スタンバイフェイズまで表側表示で除外するわ」
「あっ‼?ワンフォーワンが‼?」
「私はこれでターンエンド。エンドフェイズ、スピリットモンスター共通の効果により、召喚・リバースしたターンのエンドフェイズにスピリットモンスターは手札に戻ってくるわ。さあ、貴方のデュエル、もっと見せて」

遊花　ＬＰ８０００　手札２
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　▲　ー　▽
霊華　ＬＰ８０００　手札３

「私のターン、ドロー‼?」
手札の2枚が荒魂と鳳凰なのは分かってる。
だけど、残り1枚がＰＳＹフレームカードだと、シンクロ召喚の危険があるんだよね。
でも、動かないとこのままフィールドを空けながらスピリットに攻撃され続けるだけ、だったら可能性が低くなってる内に動かないと‼?
「私は金華猫を召喚‼?」

〈金華猫〉☆1　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のモンスター。
金華猫を見て、御子神さんは少し驚いた顔をした。
「貴方もスピリットモンスターを持っていたのね……」
「えへへ、この子も大切なお友達なんです。金華猫の効果発動‼?召喚した時、墓地に存在するレベル1モンスターを特殊召喚します‼?」
「そう。なら、私も動かせて貰うわ。手札のＰＳＹフレームギアαの効果を発動」
「うっ……ありましたか、」
「大丈夫、このカードは貴方を阻害はしないわ。自分フィールドにモンスターが存在せず、相手の魔法カードが発動した時、手札のこのカードと自分の手札・デッキ・墓地のＰＳＹフレームドライバー1体を選んで特殊召喚し、デッキからＰＳＹフレームギアα以外のＰＳＹフレームカード1枚を手札に加えるわ。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは全てエンドフェイズに除外される。私は手札からチューナーモンスター、ＰＳＹフレームギアα、デッキからＰＳＹフレームドライバーを特殊召喚し、デッキからＰＳＹフレームギアγを手札に加えるわ」

〈ＰＳＹフレームギアα〉☆１　サイキック族　光属性
ＤＥＦ０

〈ＰＳＹフレームドライバー〉☆６　サイキック族　光属性
ＡＴＫ２５００

現れたのはフレームドライバーと頭と身体に装着する機械のモンスター。
サーチをされて出てきちゃたけど、無効にされなかっただけマシだと考えよう。
「金華猫の効果で墓地から戻ってきて、ミスティックパイパー!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

現れたのはフルートのようなものを弾いている男の人。
いつもゴメンね、ミスティックパイパー。
「クリバンデットの効果で墓地に行ったカードね。ＰＳＹフレームサーキットの効果で自分フィールドにＰＳＹフレームモンスターが特殊召喚された場合に、自分フィールドのＰＳＹフレームモンスターのみをシンクロ素材としてシンクロ召喚するわ。私は、レベル６、ＰＳＹフレームドライバーに、レベル１、チューナーモンスター、ＰＳＹフレームギアαをチューニング」
αが光の輪になり、フレームドライバーが小さな星に変わり、光の道になる。
そして光の道が輝くと、その中からΩよりも重装備の戦士が現れた。
「そこに開くは異次元への扉、現世（うつしよ）を超えて未知なる世界へ……シンクロ召喚。生誕、ＰＳＹフレームロードＺ」

〈ＰＳＹフレームロードＺ〉☆７　サイキック族　光属性

ＡＴＫ２５００

「ＰＳＹフレームロードＺは１ターンに１度、相手フィールドの特殊召喚された表側攻撃表示モンスター１体を対象としてそのモンスターとフィールドのこのカードを次の自分スタンバイフェイズまで除外できて、この効果は相手ターンでも発動できるわ」

「うっ……リンクモンスターの天敵ですね」

２体目のＰＳＹフレームシンクロモンスター。

早くなんとかしないと手に負えなくなっちゃう。

「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを１枚ドローするよ。そしてこの効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル１モンスターだった場合、自分はカードをもう１枚ドローする!!?」

ミスティックパイパーが私を見て任せろという風にサムズアップをして消える。

「私が引いたのはサクリボー!!?レベル１モンスターなのでもう１枚ドロー!!?」

私は引いたカードを見る。

引いたカードは前の私のデッキには入っていなかったカード。

今まで中々出せなかったけど、これなら動ける!!?

「私は魔法カード、イリュージョンの儀式を発動!!?」

「!?儀式魔法……」

私の前に現れるのは金色の目の形をした壺。

「自分の手札・フィールドから、レベルの合計が１以上になるようにモンスターをリリースし、手札からサクリファイスを儀式召喚します!!?私は手札からサクリボーをリリースして儀式召喚!!?相手を捕える妖しい邪眼!!?サクリファイス!!?」

金色の目の形をした壺にサクリボーが吸い込まれる。

しばらくすると壺が割れ、中から妖しい邪眼を持つモンスターが現れた。

〈サクリファイス〉☆1　魔法使い族　闇属性
ＤＥＦ０

「サクリボーの効果発動!!?・このカードがリリースされた場合1枚ドローします。そしてサクリファイスの効果発動!!?・アブソープション!!?・1ターンに1度、相手フィールドのモンスター1体を対象にそのモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力・守備力は、このカードの効果で装備したモンスターの数値分アップし、このカードが戦闘で破壊される場合、代わりに装備したそのモンスターを破壊します!!?・対象は勿論、ＰＳＹフレームロードＺです!!?・吸い込んで、サクリファイス!!?」
「サクリファイスが守備表示だから逃げられない。ごめんなさい、ＰＳＹフレームロードＺ」
サクリファイスのお腹にある穴が開き、Ｚが吸い込まれる。
しばらくすると背中についている羽のような部分からＺの姿が浮き上がった。

サクリファイス
ＤＥＦ０→１８００

「サクリファイスはこのカードの効果でモンスターを装備したこのカードの戦闘で自分が戦闘ダメージを受けた時は、相手も同じ数値分の効果ダメージを受けるようになります。これでフィールドは空きました。バトル!!?・金華猫でダイレクトアタック!!?・ネコパンチ!!?」
「これぐらいなら痛くない」

霊華　ＬＰ８０００→７６００

金華猫が御子神さんをその肉球でポカポカと叩いて少しだけライフが減る。

うん、まあ本当に少ししか減ってないけど、これでも一歩前進。
「エンドフェイズ、金華猫は効果で手札に戻ってきます。ターンエンドです」

遊花　ＬＰ８０００　手札３
ーー△ーー　ー
ーー□ーー
ー　ー
ーーーーー
ーーー▲ー　▽
霊華　ＬＰ７６００　手札３

「私のターン、ドロー。スタンバイフェイズ、ＰＳＹフレームロードΩと除外した手札は戻ってくる。荒魂を召喚」

〈荒魂〉☆４　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ８００

「荒魂の効果発動、このカードが召喚・リバースした時にデッキから荒魂以外のスピリットモンスター１体を手札に加えるわ。私はデッキから和魂を手札に加える。バトル。ＰＳＹフレームロードΩでサクリファイスを攻撃。エレクトリックドライブ」
「っ、サクリファイスの効果、戦闘破壊される代わりに装備カードになっているＰＳＹフレームロードＺを墓地に送ります」
　電流を纏ったΩがサクリファイスに突撃してくる。
　サクリファイスは吸収していたＺを吐き出し、Ωにぶつけて防御する。
「荒魂でサクリファイスを攻撃。アラミタマ」
　荒魂がサクリファイスの身体の中に入り、サクリファイスを身体の中から爆散させた。
「メインフェイズ２、ＰＳＹフレームロードΩの効果発動、ディファレ

ントトラベル。1ターンに1度、自分・相手のメインフェイズに相手の手札をランダムに1枚選び、そのカードと表側表示のこのカードを次の自分スタンバイフェイズまで表側表示で除外するわ」
「ううっ、次は金華猫が……」
「さらに墓地に存在するＰＳＹフレームロードＺの効果発動、ディメンジョンリーンカーネーション。このカードが墓地に存在する場合、このカード以外の自分の墓地のＰＳＹフレームカード1枚を対象として、このカードをＥＸデッキに戻し、対象のカードを手札に加える。私はＰＳＹフレームギアαを手札に加えてＰＳＹフレームロードＺをＥＸデッキに戻す」
「せっかく墓地にいったのに戻っていっちゃうんですか……」
「エンドフェイズ、スピリットモンスター共通の効果により、召喚・リバースしたターンのエンドフェイズにスピリットモンスターは手札に戻ってくるわ。これでターンエンド」

遊花　ＬＰ８０００　手札３
ー　ー　ー　

ＤＥＦ２００

現れるのは毛玉のようなモンスター。

「クリボー……ＰＳＹフレームギアαの効果を発動、自分フィールドにモンスターが存在せず、相手がモンスターを召喚・特殊召喚した時、手札のこのカードと自分の手札・デッキ・墓地のＰＳＹフレームドライバー１体を選んで特殊召喚し、デッキからＰＳＹフレームギアα以外のＰＳＹフレームカード１枚を手札に加えるわ。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは全てエンドフェイズに除外される。私は手札からチューナーモンスター、ＰＳＹフレームギアα、デッキからＰＳＹフレームドライバーを特殊召喚し、デッキからＰＳＹフレームギアβを手札に加えるわ」

〈ＰＳＹフレームギアα〉☆１　サイキック族　光属性
ＤＥＦ０

〈ＰＳＹフレームドライバー〉☆６　サイキック族　光属性
ＡＴＫ２５００

現れたのはフレームドライバーとα。

この組み合わせはまたあのカードが出てくる!!?

「ＰＳＹフレームサーキットの効果、自分フィールドにＰＳＹフレームモンスターが特殊召喚された場合に、自分フィールドのＰＳＹフレームモンスターのみをシンクロ素材としてシンクロ召喚するわ。私は、レベル６、ＰＳＹフレームドライバーに、レベル１、チューナーモンスター、ＰＳＹフレームギアαをチューニング。そこに開くは異次元への扉、現世（うつしよ）を超えて未知なる世界へ……シンクロ召喚。再誕、ＰＳＹフレームロードＺ」

〈ＰＳＹフレームロードＺ〉☆７　サイキック族　光属性
ＡＴＫ２５００

再び現れるＺ。
でも、Ｚの攻略方法ならもう考えてある!!?
「速攻魔法!!?増殖!!?自分フィールド上に表側表示で存在するクリボー１体をリリースして自分フィールド上にクリボートークンを可能な限り守備表示で特殊召喚します!!?」
「さっきのデュエルでみたトークンからの連続リンク召喚ね」

〈クリボートークン〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

現れるのは５体のクリボートークン達。
「導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私の前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件は通常モンスター１体!!?私はクリボートークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク１!!?リンクスパイダー!!?」

〈リンクスパイダー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１０００　←

私の前に機械の蜘蛛が現れる。
それを確認しながら私は再びサーキットを開く。
「まだいきます!!?希望に繋がるサーキット!!?召喚条件はモンスター２体!!?私はクリボートークン２体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク２!!?プロキシードラゴン!!?」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

次に現れたのは白い身体をした機械の竜。
まだ、終わりじゃない‼?
「もう1度‼?導いて‼?希望に繋がるサーキット‼?召喚条件はレベル1モンスター1体‼?私はクリボートークンをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?リンク召喚‼?希望の守り手‼?リンク1‼?リンクリボー‼?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

出てきたのは青い球体型のモンスター。
まだ御子神さんはＺの効果を発動させる気配はない。
なら、行ける‼?
「そして、導いて‼?希望に繋がるサーキット‼?」
このターン４度目のサーキット。
私は１度目を閉じて、深呼吸をしてからそのモンスターを呼ぶ。
「召喚条件は効果モンスター3体以上‼?私はリンクスパイダー、リンクリボー、プロキシードドラゴンを　２体分として扱ってリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?」
「リンク４、さっきのデュエルのドラゴンね。なら、出てきた時にＰＳＹフレームロードＺで除外すればいいだけ」
そう、私はまだヴァレルソードドラゴンしか切り札らしい切り札を見せていない。
けど、私の切り札はヴァレルソードドラゴンだけじゃない‼?
「さあ、久しぶりの登場だよ‼?また私と一緒に戦って‼?閉ざされた運命を撃ち抜く信念の弾丸‼?リンク４‼?ヴァレルロードドラゴン‼?」
「⁉?ヴァレル……ロードドラゴン?ソードじゃなくて?」

〈ヴァレルロードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑↓↘?

咆哮を上げるのは私のもう1体のドラゴン。
ゴメンね、最近出してあげれなくて、今回はまたお願いね？
「見たことがないドラゴン……でも、ＰＳＹフレームロードＺで除外すれば同じ」
「そうは行きません‼？ヴァレルロードドラゴンはモンスターの効果の対象になりません‼？」
「⁉？それじゃあ除外できない……」
「バトル‼？ヴァレルロードドラゴンでＰＳＹフレームロードＺを攻撃‼？銃声のイジェクトフレア‼？」
「迎え撃って、ＰＳＹフレームロードＺ。エレクトリックトリップ」
ヴァレルロードドラゴンの口から砲台が現れ、ＰＳＹフレームロードＺに向けて粒子砲を放ち、ＰＳＹフレームロードＺはその砲撃に電流を纏って突撃していく。
「この瞬間、ヴァレルロードドラゴンの効果発動‼？エロージョンエイミング‼？このカードが相手モンスターに攻撃するダメージステップ開始時に、その相手モンスターをこのカードのリンク先に置いてコントロールを得ます‼？」
「⁉？ＰＳＹフレームロードＺ‼？」
「そのモンスターは次のターンのエンドフェイズに墓地へ送られます」
ヴァレルロードドラゴンの粒子砲を受けたＰＳＹフレームロードＺは消滅し、こちらのバトルゾーンに移動する。
「ＰＳＹフレームロードＺでダイレクトアタック‼？エレクトリックドライブ‼？」
「通さない、ＰＳＹフレームギアβの効果を発動、自分フィールドにモンスターが存在せず、相手モンスターの攻撃宣言時に手札のこのカードと自分の手札・デッキ・墓地のＰＳＹフレーム・ドライバー1体を選んで特殊召喚し、その攻撃モンスターを破壊する。その後、バトルフェイズを終了する。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは全てエンドフェイズに除外される。私は手札からチューナーモンス

ター、ＰＳＹフレームギアβ、墓地からＰＳＹフレームドライバーを特殊召喚し、ＰＳＹフレームロードＺを破壊し、バトルフェイズを終了する」

〈ＰＳＹフレームギアβ〉☆1　サイキック族　光属性
ＤＥＦ０

〈ＰＳＹフレームドライバー〉☆6　サイキック族　光属性
ＡＴＫ２５００

現れたのはフレームドライバーと新しいＰＳＹフレームギア。
またシンクロ召喚が来ると身構えるが、御子神さんから放たれたのは意外な言葉だった。
「私は今回、シンクロ召喚を行わない」
「えっ？」
せっかく出したＰＳＹフレームでシンクロをしてこない？
シンクロ先がいない？
流石にそれはシンクロを軸に戦っている御子神さんからは考え難い。
なら、何か他に狙いが？
分からない……けど、凄く嫌な予感がする。
「メインフェイズ２、私は特に何もせずにターンエンーーー」
「メインフェイズ終了前、リバースカードオープン、永続罠、連撃の帝王。１ターンに１度、相手のメインフェイズ及びバトルフェイズにモンスター１体をアドバンス召喚する」
「っ⁉？その為にシンクロ召喚をしなかったんですね……」
「ＰＳＹフレームギアβとＰＳＹフレームドライバーをリリースしてモンスターをアドバンスセット」
「アドバンスセット……」
御子神さんのデッキはＰＳＹフレームとスピリットの混合デッキ。
アドバンスセットをしたということはただの召喚では手札に戻っ

てしまうスピリットモンスターだろう。
スピリットモンスターの最上級モンスター……嫌な予感しかしないけど、だからといって現状出来ることもない。
「改めてターンエンドです」

遊花　ＬＰ８０００　手札１
ーーーーーー　ー
ーーーー□
☆　ー
ーー??ーー
ーーー△ー　▽
霊華　ＬＰ７６００　手札４

「私のターン、ドロー。スタンバイフェイズ、ＰＳＹフレームロードΩと除外した手札は戻ってくる。だけど、メインフェイズ、ＰＳＹフレームロードＺの効果発動、ディメンジョンリーンカーネーション。このカードが墓地に存在する場合、このカード以外の自分の墓地のＰＳＹフレームカード１枚を対象として、このカードをＥＸデッキに戻し、対象のカードを手札に加える。私はＰＳＹフレームギアδを手札に加えてＰＳＹフレームロードＺをＥＸデッキに戻す。さらにＰＳＹフレームロードΩの効果発動、ディファレントトラベル。１ターンに１度、自分・相手のメインフェイズに相手の手札をランダムに１枚選び、そのカードと表側表示のこのカードを次の自分スタンバイフェイズまで表側表示で除外するわ」
「⁉?・また金華猫が……」
Ωの姿が消える。
しかも、今回はメインフェイズ１。
それはまるでこれからの惨状からΩを逃したように見える。
そして、その予感は的中する。
「反転召喚……降臨し、全てを照らしたまえ、天照大神‼?」

〈天照大神〉☆9　天使族　光属性
ＡＴＫ３０００

現れたのは後光が差す日本でもかなり有名な光の女神。
「天照大神の効果発動、ヤタノカガミ!!?・このカードがリバースした場合、このカード以外のフィールドのカードを全て除外する!!?・」
「全部除外ですか!!?・ヴァレルロードドラゴンの効果発動!!?・ジャムバレット!!?・天照大神を対象にして攻撃力・守備力を５００ポイントダウンさせます!!?・この効果は相手ターンにも発動することができ、この効果に対して相手は効果を発動することが出来ません!!?・」
ヴァレルロードドラゴンが天照大神に向けて銃弾を放ち、少しだけ当たったが、天照大神の手に鏡が現れ、鏡から強力な光が放たれて天照大神以外のものは全て消滅した。

天照大神
ＡＴＫ３０００→２５００

攻撃力を多少下げることは出来たけど、ヴァレルロードドラゴンを除外されたのは痛い。
フィールド魔法が無くなったとはいえ、このままじゃ私のモンスターはＰＳＹフレームロードＺを攻略することが難しくなってしまう。
しかも、今のは反転召喚をしただけだ。
まだ御子神さん自体は全く動いていない。
「私は和魂を召喚」

〈和魂〉☆４　天使族　光属性
ＡＴＫ８００

「和魂の効果発動、このカードが召喚・リバースしたターン、自分は通常召喚に加えて１度だけスピリットモンスター１体を召喚できる。

この効果で荒魂を召喚」

〈荒魂〉☆４　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ８００

「荒魂の効果発動、このカードが召喚・リバースした時にデッキから荒魂以外のスピリットモンスター１体を手札に加えるわ。私はデッキから大和神を手札に加える。さらに墓地の和魂を除外して大和神を特殊召喚」

〈大和神〉☆６　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２２００

現れたのは鬼神のような霊体のモンスター。
そしてスピリット達は動き出す。
「バトル、和魂でダイレクトアタック。ニキミタマ」
「うっ‼？」

遊花　ＬＰ８０００→７２００

「次よ、荒魂でダイレクトアタック。アラミタマ」
「っ、これぐらいなら……」

遊花　ＬＰ７２００→６４００

和魂と荒魂から何かの波動が放たれライフが削られる。
ここまではまだ軽い攻撃。
問題はここからだ。
「まだ行くわ、大和神でダイレクトアタック。フツシミタマノツルギ」
「うぅ‼？」
大和神が何処からか剣を取り出し、私を斬りつける。

遊花　　ＬＰ６４００→４２００

「貴方に耐えられるかしら、天照大神でダイレクトアタック。サンシュノジンギ‼?」

「きゃあ‼?」

天照大神の手に勾玉、鏡、剣が現れ、勾玉と鏡が光輝くと剣に白いオーラのようなものが宿る。

それを天照大神が振り下ろすと凄まじい衝撃波が私を襲った。

遊花　　ＬＰ４２００→１７００

何とか、耐えることが出来た。

そう思ったが、まだ御子神さんの動きが止まらない。

「安心しているところ悪いけど、まだ終わっていないわ。速攻魔法、ライバルアライバル」

「っ、よりによってそれですか」

「効果は知ってるみたいね。バトルフェイズ中に召喚を行うことが出来るわ。和魂をリリースして鳳凰をアドバンス召喚」

〈鳳凰〉☆６　鳥獣族　炎属性

ＡＴＫ２１００

再び現れる鳳凰。

そして私のライフは鳳凰の攻撃力よりも下。

「和魂の効果発動、このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上にスピリットモンスターが存在する場合、デッキからカードを１枚ドローする。これで終わるかしら?鳳凰でダイレクトアタック。火炎の舞」

炎を纏った羽が私に向けて放たれようとする。

これは、受けない‼?

「まだです!!?・墓地に存在する相手モンスターの攻撃宣言時、墓地からクリアクリボーの効果発動!!?・それにチェーンして墓地に存在する虹クリボーの効果!!?」
「虹クリボー……そう、クリバンデットの時に落ちていたのね」
「虹クリボーの効果!!?・レインボーシールド!!?・このカードが墓地に存在する場合、相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードを墓地から特殊召喚します!!?・お願い、虹クリボー!!?・」

〈虹クリボー〉☆1　悪魔族　光属性
ＤＥＦ１００

私を守るように虹クリボーが現れる。
「さらにクリアクリボーの効果で相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のクリアクリボーを除外し、自分はデッキから1枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替えます!!?・ドロー!!?……っ、違う」
「どうやらモンスターは引けなかったみたいね。モンスターが増えたから攻撃対象の変更。鳳凰で虹クリボーを攻撃。火炎の舞」
虹クリボーが炎の羽に貫かれ、粒子になって除外される。
ゴメンね、虹クリボー。
でも、貴方のおかげで何とか生き残ることが出来たよ。
「私はカードを1枚伏せてエンドフェイズ、スピリットモンスター共通の効果により、召喚・リバースしたターンのエンドフェイズにスピリットモンスターは手札に戻ってくるわ。これでターンエンド」

遊花　ＬＰ１７００　手札２
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　ー
ーーーーーー

ーー▲ーー　ー
霊華　ＬＰ７６００　手札６

御子神さんのフィールドは再びガラ空き。
つまりはＰＳＹフレームギアの発動範囲内だっていうことだ。
分かっていたことだけど、御子神さんは凄く強い。
これが、学年トップ１０。
だけど……
「？貴方、笑ってるの？状況はかなり貴方が不利だと思うけど？」
そう、私は笑顔を浮かべている。
こんな絶対絶命の状況なのに、楽しくって仕方がない。
「確かに、今はすっごく私が不利です。御子神さん、本当に強くて。どんな手を使ってみても、全然御子神さんの動きを捉えられる気がしないです。だけど……だけど、今すっごくワクワクしてるんです‼？」
「⁉？」
「私、諦めるのって嫌だから。どんな状況でも、諦めることだけはしたくないです。でも、それだけじゃなくて、この状況をどう逆転しようか、次のドローでどれだけ変わるか、どんなカードが私を助けてくれるのか、それが楽しくって仕方がないんです‼？」
「……そう、それが貴方の魂の本質なのね。力を貸してくれる存在に常に感謝し、どんな状況でも決して諦めず楽しむ心。だからこそ、貴方は色んな存在を惹きつける」
相変わらず御子神さんの言葉の意味はよく分からない。
でも、それはきっと当たってるんだなって思った。
私は自分のデッキを見つめる。
この中に、今の状況をどうにか出来るカードがあるかは分からない。
だけど、私はこの子達が紡いでくれたこのデッキを信じてる。
「すー……はー……私のターン、ドロー‼？」
私は１度深呼吸をすると、勢いよくカードをドローした。

ドローしたカードと、今の手札を見る。
これなら、行けるかも!!?
「私は魔法カード、貪欲な壺を発動!!?その効果で墓地に存在するプロキシードラゴン、リンクスパイダー、リンクリボーをＥＸデッキに、墓地のクリバンデットとクリボーをデッキに戻してシャッフルし、２枚ドローする!!?」
「この状況でドローカード……素晴らしい引きだけど、通さない。手札からＰＳＹフレームギアδの効果を発動。自分フィールドにモンスターが存在せず、相手の魔法カードが発動した時、手札のこのカードと自分の手札・デッキ・墓地のＰＳＹフレームドライバー１体を選んで特殊召喚し、その発動を無効にし破壊するわ。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは全てエンドフェイズに除外される。私は手札からチューナーモンスター、ＰＳＹフレームギアδ、墓地からＰＳＹフレームドライバーを特殊召喚し、貪欲な壺は無効よ」

〈ＰＳＹフレームギアδ〉☆２　サイキック族　光属性
ＤＥＦ０

〈ＰＳＹフレームドライバー〉☆６　サイキック族　光属性
ＡＴＫ２５００

貪欲な壺が無効化され、フレームドライバーとδが現れる。
「ドロー出来なくて残念だったね」
「いえ、これでいいんです!!?本命はこっちです!!?相棒、また貴方の力を貸して!!?魔法カード、賢者の石―サバティエル!!?」
「!?賢者の石!?」
「このカードは自分の墓地にハネクリボーモンスターが存在する場合、ライフポイントを半分払って発動できます」

遊花　ＬＰ１７００→８５０

「そうすることで、デッキから融合魔法カードまたはフュージョン魔法カード1枚を手札に加えることが出来ます!!?・」
「!?・?・融合!?・?・まさか、貴方は融合召喚も!?・?・」
「私がデッキから手札に加えるのはサクリファイスフュージョンです!!?・そして速攻魔法、サクリファイスフュージョン!!?・アイズサクリファイス融合モンスターカードの融合素材モンスターを自分の手札・フィールド・墓地から除外し、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚します!!?・私が除外するのは、墓地のサクリファイスとクリバンデット!!?・」
　貴方も今まで来てくれなかったけど、ようやく会えるようになったんだね。
　さあ、貴方の力を皆に見せてあげよう!!?・
「妖しい邪眼よ、盗賊の悪魔よ!!?・今交わりて、全てを奪う力とならん!!?・融合召喚!!?・全てを見透かす叡智の邪眼!!?・ミレニアムアイズサクリファイス!!?・」

〈ミレニアムアイズサクリファイス〉☆1　魔法使い族　闇属性
ＤＥＦ０

　現れたのは金色の邪眼と身体を持つモンスター。
「ミレニアムアイズサクリファイスは1ターンに1度、相手モンスター1体を対象としてその相手の効果モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力・守備力は、このカードの効果で装備したモンスターのそれぞれの数値分アップし、このカードの効果で装備したモンスターと同名のモンスターは攻撃できず、その効果は無効化されます」
「っ、なんて強力な効果……」
　驚いている御子神さんに構わず、私はターンを進める。
「私はカードを1枚セットしてターンエンドです」
「えっ？何もしないの？」

「はい、この子が活躍できるのはこのターンではないですから」
「……エンドフェイズ、特殊召喚されたＰＳＹフレームギアδとＰＳＹフレームドライバーは除外されるわ」

遊花　ＬＰ８５０　手札０
ｰｰｰｰｰｰ　ｰ
ｰｰｰｰｰｰ
□　ｰ
ｰｰｰｰｰｰ
ｰｰ▲ｰｰ　ｰ
霊華　ＬＰ７６００　手札６

「私のターン、ドロー。スタンバイフェイズ、ＰＳＹフレームロードΩと除外した手札は戻ってくる」
「お帰りなさい、金華猫」
「……墓地に存在する墓地の和魂を除外して大和神を特殊召喚」

〈大和神〉☆６　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２２００

再び現れた大和神。
墓地にあるサクリボーの効果に気づいているからだろう。
これで攻撃出来るモンスターは２体になった。
「確かに強力な効果だけど、吸収される前に倒せばいいだけ。バトル、大和神でミレニアムアイズサクリファイスを攻撃。フツシミタマノツルギ」
大和神がミレニアムアイズサクリファイスに斬りかかってくる。
でも、それが本当に通用するかは別の話だ。
「速攻魔法、ドローマッスル‼?自分フィールドの守備力１０００以下の表側守備表示モンスター１体を対象に自分はデッキから１枚ドローし、そのモンスターはこのターン戦闘では破壊されません。私が

指定するのはミレニアムアイズサクリファイス!!?」
「っ!!?そんなカードが……」
斬りかかられたミレニアムアイズサクリファイスの身体が鋼鉄のようになり、その剣を弾き返す。
「これでエンドフェイズまで私のミレニアムアイズサクリファイスは戦闘破壊されません」
「っ……なら、メインフェイズ2、大和神をリリースしてアドバンスセット。そしてターンエンド」
そう、そうするしかない。
しなければスピリットの共通効果が発動し、ミレニアムアイズサクリファイスに吸収される。
だけど、それによりモンスターがフィールドに残るならPSYフレームギアは動けない!!?

遊花　LP850　手札2
ーーーーー　ー
ーーーーー
□　ー
ーー○??ー
ーー▲ーー　ー
霊華　LP7600　手札5

「私のターン、ドロー!!?私は墓地のサクリファイスフュージョンの効果発動!!?」
「っ、墓地からも効果があるの!!?」
「自分メインフェイズに墓地のこのカードを除外し、相手フィールドの効果モンスター1体を対象とし自分フィールドの、アイズサクリファイス融合モンスターまたはサクリファイス1体を選び、その効果による装備カード扱いとして対象の相手の効果モンスターを装備します!!?対象にするのは勿論。PSYフレームロードΩ!!?」
「っ、これは!!?PSYフレームロードΩの効果発動、ディファレント

トラベル。１ターンに１度、自分・相手のメインフェイズに相手の手札をランダムに１枚選び、そのカードと表側表示のこのカードを次の自分スタンバイフェイズまで表側表示で除外する!!?」

「ようやく、捉えました!!?ミレニアムアイズサクリファイスの効果発動!!?ミレニアムアブソープション!!?１ターンに１度、相手モンスターの効果が発動した時、相手のフィールド・墓地の効果モンスター１体を対象としてその相手の効果モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備します!!?対象は勿論、ＰＳＹフレームロードΩ」

異世界に逃げようとするΩだがミレニアムアイズのお腹にある穴から暴風のような吸い込みに負け、身体を飲み込まれミレニアムアイズの金色の身体の上にΩの顔だけが現れた。

ミレニアムアイズサクリファイス
ＤＥＦ０→２２００

「私は金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル１モンスターを特殊召喚します!!?墓地から戻ってきて、ミスティックパイパー!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを１枚ドローするよ。そしてこの効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル１モンスターだった場合、

自分はカードをもう1枚ドローする!!?私が引いたのはクリボーン!!?レベル1モンスターなのでもう1枚ドロー!!?ミレニアムアイズサクリファイスを攻撃表示に変更!!?」

ミレニアムアイズサクリファイス
ＤＥＦ２２００→ＡＴＫ２８００

「カードを1枚セットしてエンドフェイズ、金華猫を手札に戻してターンエンドです」

遊花　ＬＰ８５０　手札５
ー△▲ー　ー
ーーーーー
○　ー
ーーー??ー
ー▲ーー　ー
霊華　ＬＰ７６００　手札５

「私のターン、ドロー!!?……反転召喚、鳳凰!!?」

〈鳳凰〉☆６　鳥獣族　炎属性
ＡＴＫ２１００

「鳳凰の効果、このカードが召喚・リバースした時、相手フィールド上にセットされた魔法・罠カードを全て破壊する!!?」
「ミレニアムアイズサクリファイスの効果発動!!?ミレニアムアブソープション!!?1ターンに1度、相手モンスターの効果が発動した時、相手のフィールド・墓地の効果モンスター1体を対象としてその相手の効果モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備します!!?対象は鳳凰です!!?」
ミレニアムアイズのお腹にある穴からの吸い込みに、鳳凰も身体を

飲み込まれミレニアムアイズの金色の身体の上に今度は羽根だけが現れた。

ミレニアムアイズサクリファイス
ＡＴＫ２８００→４９００

鳳凰を吸収した私を見て、御子神さんは笑う。
「そうくると思った。私は羅刹を召喚」

〈羅刹〉☆４　天使族　炎属性
ＡＴＫ１５００

御子神さんが召喚したのは刀を持った鬼のようなモンスター。
「羅刹の効果を発動、このカードが召喚・リバースした時、羅刹以外の手札のスピリットモンスター１体を相手に見せることで相手フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター１体を選択して持ち主の手札に戻す。ただし、この効果を発動するターン、自分はモンスターを特殊召喚できない。私は手札の天照大神を見せることでミレニアムアイズサクリファイスにはいなくなって貰う」
羅刹がミレニアムアイズに向けて刀を振るう。
でも……
「私も、御子神さんならそうくると思ってました‼？リバースカードオープン、罠発動‼？スキルプリズナー‼？自分フィールド上のカード１枚を選択し、このターン、選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にします‼？対象は勿論、ミレニアムアイズサクリファイスです‼？」
「っ、まだ防ぐ手段が……」
ミレニアムアイズの前に見えない壁が現れ！羅刹の剣を弾く。
「特殊召喚も出来なくなったからこのターン防ぐことは難しい……エンドフェイズ、スピリットモンスター共通の効果により、召喚・リ

バースしたターンのエンドフェイズにスピリットモンスターは手札に戻ってくるわ。私はこれでターンエンド」

遊花　ＬＰ８５０　手札５
ー△△ーー　ー
ーーーーー
　　○　　ー
ーーーーー
ーー▲ーー　ー
霊華　ＬＰ７６００　手札６

「私のターン、ドロー!!?行きます!!?魔法カード、賢者の石―サバティエル!!?自分の墓地にハネクリボーモンスターが存在する場合、ライフポイントを半分払って発動できます!!?そうすることで、デッキから融合魔法カードまたはフュージョン魔法カード１枚を手札に加えることが出来ます!!?」
「っ、また賢者の石を……」

遊花　ＬＰ８５０→４２５

「私が手札に加えるのは簡易融合!!?そして墓地にある３枚の賢者の石―サバティエルを除外して賢者の石―サバティエルのもう１つ効果を発動!!?」
「!!?まさかクリバンデットの時に１枚落ちて……」
「このカードが墓地に存在する場合、自分の墓地の賢者の石―サバティエル３枚を除外し、フィールドのモンスター１体を対象として発動できます。そのモンスターの攻撃力はターン終了時まで、フィールドの攻撃力が１番高いモンスターの攻撃力分アップします!!?対象にするのは当然ミレニアムアイズサクリファイス!!?そしてフィールドで１番攻撃力が高いのはミレニアムアイズサクリファイスです!!?よってその攻撃力は!!?」

ミレニアムアイズサクリファイス
ＡＴＫ４９００→９８００

「攻撃力……９８００!?」
「これで決めます!!?バトル!!?ミレニアムアイズサクリファイスでダイレクトアタックです!!?マインドスキャンイリュージョン!!?」
ミレニアムアイズの左手に炎、右手に雷、さらにお腹の穴から闇の球体が現れ、合わさりながら御子神さんに撃ち出される。
御子神さんはそれを見て、薄く微笑んだ。
「これが、貴方の魂に導かれたものなのね……」

霊華　ＬＰ７６００→０

デュエルが終わり、再び会場が騒然とし始める。
だけど、そんなことを気にした様子もなく御子神さんは私の前まで歩いてくる。
「貴方の魂の本質、見させて貰ったわ。貴方の魂の在り方が、波動となり、まるで重力のように周りの存在の魂を惹きつけていく。私も、貴方の魂に惹かれたわ」
「えっと、よく分からないですけど、御子神さんを満足させられたってことなんでしょうか？」
「ええ、とても満足よ」
「えへへ、それならよかったです」
御子神さんを満足させるようなデュエルが出来たようでホッとする。
そんな私に、御子神さんは優しく微笑んだ。
「これからのデュエルも応援してるわ。貴方のこと、ますます興味が出たから。これからも仲良くしてくれると嬉しいわ」

「‼?仲良く⁉?それって、お友達ってことですか⁉?」
「?ええ、そう思って貰って構わないけど、ダメかしら?」
そんなことを言ってくれる御子神さんに私はぶんぶんと首を振る。
「そんなことないです‼?嬉しいです‼?えへへ、今日は凄くいい日です～2人目のお友達が出来ました～」
思わずにやけてしまう私を見て、御子神さんは少し困ったような顔を浮かべる。
「そんなに喜んで貰えるとは思わなかったけど……これからもよろしくね、遊花」
「はい‼?御子神さん‼?」
「霊華でいいわ。お友達なのだから」
「‼?じゃあ霊華さんで‼?」
「遊花が呼びやすいならそれでいいわ。それじゃあ、また会いましょ」
「はい‼?またです‼?」
反対の通路に去っていく霊華さんにぶんぶんと手を振りながら私も自分が来た通路に戻っていく。
お父さん、お母さん、今日、私には2人目のお友達が出来ました。
すっごく強くて、それでいて少し不思議な人です。
私はまた、退学出来ない理由が出来ました。
お友達と離れ離れになるのは、寂しいです。
だから、残りのデュエルも、全力で頑張ります‼?

第１８話　引かれ合う絆

★

「ふーん、御子神と友達にねぇ」
「うん‼？」
「御子神って友達とかそういうの気にしない奴だと思ってたんだけど……まあ、遊花が嬉しそうならいいわ。今度私にも紹介してよね」
「勿論だよ‼？あとね、霊華さんも師匠の開く大会に誘おうと思うんだけど……」
「まあ、いつもの御子神を見てると結束のことも気にしなさそうだし、いいんじゃない？『Ｎａｔｕｒａｌ』の場所とかも話さないといけないと思うけど」
「あ、そっか‼？それじゃあ放課後、皆で『Ｎａｔｕｒａｌ』に行ってみるとかどうかな？」
「私はいいけど、御子神の予定もちゃんと確認するのよ？」
「分かってるよ～」
　霊華さんとのデュエルが終わり、昼食を桜ちゃんと食べてから、次のデュエルまでの間、さっきのデュエルでのことについて話す。
　ついつい笑顔が溢れてしまう私を見て、桜ちゃんは何処か呆れたような視線を向ける。
「全く、浮かれちゃって。それでデュエルの方で足元をすくわれても知らないわよ？」
「それはないよ。デュエルにはいつだって全力。そうじゃなかったら相手してくれる人に失礼だもん」
「だといいけど。私の時も、ちゃんと全力でくるのよ？」
「勿論。桜ちゃんには負けっぱなしだもん。試験では絶対に勝つからね‼？」
「楽しみにしてるわ。まあ、私が勝たせて貰うけど」
『第３学年、出席番号９８番、栗原遊花さん。至急第４フィールドへお越しください』

そんな話をしていると、再び私を呼び出すアナウンスが流れた。
今日のデュエルはこれで最後。
最後のデュエルも、全力で頑張ってこないとね。
「それじゃあ行ってくるね、桜ちゃん」
「はいはい、また見ててあげるから、不甲斐ないデュエルはしないでよ？」
「うん‼？桜ちゃんにも楽しんで貰えるように頑張るね‼？」
「……いや、４種類の召喚方法を使いこなしてた時点で十分楽しませて貰ってるわよ」
何かを呟く桜ちゃんと別れ、私は指定されたフィールドに移動する。
対戦相手の人は、まだ来ていない。
次の対戦相手の人も、学年トップ１０の人のハズだ。
空閑君も、霊華さんも、勿論桜ちゃんだって凄く強い決闘者だ。
今日は２勝出来ているけど、それだって相棒達や新しいお友達が助けてくれて何とかというギリギリの勝負だった。
私に出来るのは、皆を信じて最後まで諦めずに全力でデュエルをすることだけ。
だから、一生懸命頑張らないと。
そうして改めて気合を入れていると、フィールドにボブで茶髪の男の子が駆け込んで来た。
その男の子は私を見ると満面の笑みを浮かべながら声をかけてくる。
「悪い、遅れちまった‼？お前が栗原　遊花だよな？」
「はい‼？貴方が私の次のデュエルの相手ですか？」
「ああ、俺は九石　大地（さざらし　だいち）。お前とデュエル出来るのすっごく楽しみにしてたんだ‼？」
「楽しみに、ですか？」
「ああ‼？空閑と御子神とのデュエルも見てたけど、あんなに沢山の召喚方法を使いこなす奴と戦えるなんて、くぅーっ‼？今から楽しみで仕方ないぜ‼？」

そういってワクワクしてる気持ちを抑えきれないという風に笑う九石君を見て、私も思わず笑顔を浮かべる。
私とのデュエルをこんなに楽しみにしてくれている。
これは、本当に全力で行かないと悪いよね‼?
「私も、九石君とのデュエル、凄く楽しみだよ。学年トップ１０の人とデュエル出来るんだもん‼?」
「そういって貰えるなら俺も嬉しいぜ。あと、大地でいいぜ?苗字で呼ばれるのって、なんか慣れないんだよな」
「分かったよ、大地君。なら、私も遊花でいいよ」
「おう‼?それじゃあ早速デュエルと行こうぜ、遊花‼?」
「うん‼?負けないよ‼?」
『決闘‼?』

遊花　ＬＰ８０００
大地　ＬＰ８０００

ーーーーーーーー

「先攻は私だね。私はクリボーンを召喚」

〈クリボーン〉☆１　悪魔族　光属性
ＡＴＫ３００

現れたのはシスターのようにベールを被った白い毛玉のモンスター。
今の手札で出来ることは少ないから、まずはここから始めよう。
私は正面に手をかざす。

「導いて‼?希望に繋がるサーキット‼?」
「おっ、早速リンク召喚だな‼?」
私の目の前に大きなサーキットが現れる。

「召喚条件はレベル1モンスター1体!!?私はクリボーンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?希望の守り手!!?リンク1!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

出てきたのは青い球体型のモンスター。
リンクリボーはいつも通り嬉しそうに私に擦り寄ってくる。
うん、今回は最初からよろしくね。
「カードを2枚伏せてターンエンド!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札２
ー▲▲ー　ー
ーーーーー
☆　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
大地　ＬＰ８０００　手札５

「よし!!?俺のターン、ドロー!!?おっしゃ、俺の仲間達を遊花にも見せてやるぜ!!?俺は電磁石の戦士（エレクトロマグネットウォリアー）αを召喚!!?」

〈電磁石の戦士α〉☆３　岩石族　地属性
ＡＴＫ１７００

現れたのは磁石の身体の小さな盾とサーベルを持ったモンスター。
磁石の戦士（マグネットウォリアー）シリーズは師匠の絵札の三銃士のように3体のモンスターを合わせて戦うシリーズだったハズだ。
ということは、大地君のデッキは磁石の戦士デッキってことだよね。

「電磁石の戦士αの効果発動!!?このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキからレベル8の磁石の戦士モンスター1体を手札に加えるぜ!!?俺はデッキから電磁石の戦士マグネットベルセリオンを手札に加える!!?さらにライフを2000払って、魔法カード、同胞の絆を発動!!?」

大地　LP8000→6000

「このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行えなくなる代わりに、自分フィールドのレベル4以下のモンスター1体を対象として、そのモンスターと同じ種族・属性・レベルでカード名が異なるモンスター2体をデッキから特殊召喚する!!?ただし、このカードの発動後、ターン終了時まで自分はモンスターを特殊召喚できない!!?俺は電磁石の戦士αを選択して、来い!!?電磁石の戦士β(エレクトロマグネットウォリアー)、電磁石の戦士γ(エレクトロマグネットウォリアー)!!?」

〈電磁石の戦士β〉☆3　岩石族　地属性
DEF1500

〈電磁石の戦士γ〉☆3　岩石族　地属性
DEF2000

現れたのは電磁石の戦士αのように身体が磁石で出来ている2体のモンスター。

1ターンで3体の電磁石の戦士が揃っちゃった。

このターンは特殊召喚されないけど、次の大地君のターンは凄いことになっちゃうかも。

「さらに電磁石の戦士βの効果発動!!?このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから電磁石の戦士β以外のレベル4以下のマグネットウォリアーモンスター1体を手札に加える!!?デッキから磁石の戦士δ(マグネットウォリアー)を手札に加えるぜ!!?俺はカードを2枚伏せてターン

エンドだ!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札２
ーー▲▲ー　ー
ーーーーー
☆　ー
ー□○□ー
ー▲▲ーー　ー
大地　ＬＰ６０００　手札４

「私のターン、ドロー!!?。私はミスティックパイパーを召喚!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ０

現れたのはフルートのようなものを弾いている男の人。
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを１枚ドローするよ。そしてこの効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル１モンスターだった場合、自分はカードをもう１枚ドローするよ!!?」
ミスティックパイパーが私を見てサムズアップをして消える。
うん、やっぱり気に入ってるんだね、それ。
今度からやり返してあげよう。
そんなことを思いながら私はドローしたカードを確認する。
「私が引いたのはクリボール!!?レベル１モンスターなのでもう１枚ドロー!!?ターンエンドーー」
「おっと、ならエンド前に電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γの３体の効果を発動だ!!?」
「えっ!!?」
「それぞれ相手ターンにこのカードをリリースすることでデッキからレベル４のマグネットウォリアーモンスター１体を特殊召喚する!!

？俺は電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γの３体をリリースし、デッキから、来い‼？磁石の戦士α（マグネットウォリアー）、磁石の戦士β（マグネットウォリアー）、磁石の戦士γ（マグネットウォリアー）‼？」

〈磁石の戦士α〉☆４　岩石族　地属性
ＤＥＦ１７００

〈磁石の戦士β〉☆４　岩石族　地属性
ＤＥＦ１６００

〈磁石の戦士γ〉☆４　岩石族　地属性
ＤＥＦ１８００

電磁石の戦士達の姿が消え、それぞれの電磁石の戦士に似た磁石の戦士が現れる。

磁石の戦士には特殊な召喚条件を持ったモンスターがいたハズ……これはかなりマズイかも。

「改めて、ターンエンドだよ」

遊花　ＬＰ８０００　手札４
ー▲▲ー　ー
ーーーーー
☆　ー
ー□○□ー
ー▲▲ーー　ー
大地　ＬＰ６０００　手札４

「俺のターン、ドロー‼？よっしゃ、全力で行くぜ‼？まずは磁石の戦士δを召喚‼？」

〈磁石の戦士δ〉☆４　岩石族　地属性

ＡＴＫ１６００

現れたのは今まで出てきた磁石の戦士とは異なる外見をした磁石の戦士。

「磁石の戦士δの効果発動!!?このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキからレベル４以下のマグネットウォリアーモンスター１体を墓地へ送る!!?俺はデッキから電磁石の戦士αを墓地に送るぜ!!?さらにフィールド魔法、マグネットフィールドを発動!!?」

大地君がフィールド魔法を発動すると辺りが磁石に囲まれ、磁場が発生しているフィールドに変わる。

「マグネットフィールドの効果発動!!?１ターンに１度、自分フィールドにレベル４以下の岩石族・地属性モンスターが存在する場合、自分の墓地のレベル４以下のマグネットウォリアーモンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?俺は墓地から電磁石の戦士αを特殊召喚だ!!?」

〈電磁石の戦士α〉☆３　岩石族　地属性

ＡＴＫ１７００

再び電磁石の戦士αが現れる。

電磁石の戦士αはレベル８の磁石の戦士を手札に加える効果があった。

ということは……

「電磁石の戦士αの効果発動!!?俺はデッキから磁石の戦士マグネットバルキリオンを手札に加える!!?これで準備は整ったぜ!!?遊花、お前にアレを見せてやるぜ!!?」

「アレ?」

私が首を傾げると、大地君はニコッと笑って自信満々に答えた。

「決まってるだろ、合体だ!!?自分の手札・フィールドから、磁石の戦士α、磁石の戦士β、磁石の戦士γを１体ずつリリースした場合にこのカードは特殊召喚できる!!?俺はフィールドに存在する磁石の戦

士α、磁石の戦士β、電磁石の戦士γをリリースし、手札から磁石の戦士マグネットバルキリオンを特殊召喚する‼?磁力合体‼?マグネットバルキリオン‼?」

大地君の言葉に頷きながら、磁石の戦士α、磁石の戦士β、電磁石の戦士γがそれぞれの身体を分離し、1つになっていく。

αは身体と剣に、βは顔、γは羽根となり、合体が終わると、そこに巨大な磁石の戦士が現れた。

〈磁石の戦士マグネットバルキリオン〉☆8　岩石族　地属性

ＡＴＫ３５００

攻撃力３５００のモンスター。

それをこんなに簡単に出してくるなんて、とか色々と思うところはあるけれど、それよりも1番最初に思うこと、それは……

「かっ、カッコいい‼?」

何あれ、凄い‼?

がきーん、がきーんって合体して、どーんってなって、すっごくカッコいい‼?

きらきらと目を輝かせる私に、大地君が嬉しそうに笑う。

「おっ‼?マグネットバルキリオンの良さが分かるなんて、遊花は見所あるぜ‼?だったらもっと見せてやらないとな‼?自分の手札・フィールド・墓地から、電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γを1体ずつ除外した場合にこのカードは特殊召喚できる‼?俺は墓地に存在する電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γを除外し、手札から電磁石の戦士マグネットベルセリオンを特殊召喚する‼?電磁合体‼?マグネットベルセリオン‼?」

今度は電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γが大地君の言葉に頷き、それぞれの身体を分離し、1つになっていく。

αが身体とサーベル、βが足、γが胴体と手、そして3体の頭部のパーツが合わさって1つの顔が出来る。

そして合体が終わると、そこにバルキリオンに似た巨大な磁石の戦

士が現れた。
〈電磁石の戦士マグネットベルセリオン〉☆８　岩石族　地属性
ＡＴＫ３０００
「ふぁ～!!?こっちもカッコいい!!?」
「だろ?いや～分かって貰って嬉しいぜ。やっぱり合体はロマンだよな」
そういって大地君が満足そうに頷く。
バルキリオンとベルセリオンも何処か誇らしげに立っているように見える。
さて、あまりのカッコよさに興奮してたけど、デュエルの内容としては少々マズイ。
何せ今のモンスターだけでも私のライフを簡単に削りきれてしまうのだ。
そして大地君の動きはまだ止まらない。
「まだ俺の動きは終わってないぜ!!?繋がれ!!?絆が引き合うサーキット!!?」
「!?リンク召喚!?」
大地君の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は地属性モンスター２体!!?俺は磁石の戦士δと電磁石の戦士αをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?絆の守護獣!!?リンク２!!?ミセスレディエント!!?」
〈ミセスレディエント〉ＬＩＮＫ　２　獣族　地属性
ＡＴＫ１４００　↙?↘?
「あ、今度のモンスターは可愛い」
「まぁ、コイツはウチのマスコットみたいなもんだからな」
現れたのはもふもふとしている子犬のモンスター。
大地君は現れたミセスレディエントを撫でるように手を動かす。

撫でられるようにされているミセスレディエントもどこか甘えた声で鳴いている。
ああいうモンスターも可愛いよね。
ん？なんで擦り寄って来るの、リンクリボー？
もしかして嫉妬してる？
大丈夫だよ、私の１番は君達だから、他のデッキに浮気なんてしないよ。
私も大地君の真似をするように頭を撫でるみたいに手を動かしてみると、リンクリボーは落ち着いたように動きを止めた。
うん、やっぱり私はクリボー達が１番だよ。
「さて、それじゃあ本題だぜ‼？磁石の戦士δの効果発動‼？このカードが墓地へ送られた場合、磁石の戦士δ以外のレベル４以下のマグネットウォリアーモンスター３体を自分の墓地から除外して手札・デッキから磁石の戦士マグネットバルキリオン１体を召喚条件を無視して特殊召喚する‼？」
「えっ⁉？」
「俺は墓地に存在する磁石の戦士α、磁石の戦士β、電磁石の戦士γを除外してデッキから磁石の戦士マグネットバルキリオンを特殊召喚だ‼？」

〈磁石の戦士マグネットバルキリオン〉☆８　岩石族　地属性
ＡＴＫ３５００

大地君のフィールドに現れる２体目のバルキリオン。
これは本格的にマズイのでは……
「さらにミセスレディエントの永続効果、ガイアハウリング‼？このカードがモンスターゾーンに存在する限り、フィールドの地属性モンスターの攻撃力・守備力は５００ポイントアップし、風属性モンスターの攻撃力・守備力は４００ポイントダウンする‼？」
「ふぇっ⁉？」

磁石の戦士マグネットバルキリオン
ＡＴＫ３５００→４０００

磁石の戦士マグネットバルキリオン
ＡＴＫ３５００→４０００

電磁石の戦士マグネットベルセリオン
ＡＴＫ３０００→３５００

ミセスレディエント
ＡＴＫ１４００→１９００

ミセスレディエントが遠吠えを上げると、大地君のモンスター全てが強化されていく。
攻撃力４０００が２体に攻撃力３５００が１体ってそれだけでオーバーキルだよ!!?
殺意高すぎだよ!!?
「さらに電磁石の戦士マグネットベルセリオンの効果発動!!?マグネットサイドカッター!!?自分の墓地からレベル４以下のマグネットウォリアーモンスター１体を除外し、相手フィールドのカード１枚を対象としてそのカードを破壊する!!?俺は墓地に存在する磁石の戦士δを除外して遊花のセットカードを１枚破壊するぜ!!?」
「っ、聖なるバリア　―ミラーフォース―が……」
ベルセリオンが伏せカードに向かってダッシュしながら横一文字にサーベルで斬り裂き、ミラーフォースが破壊される。
うぅ～いつもミラーフォースは使わせて貰えてない気がするよ。
「それじゃあ行くぜ?バトル!!?ミセスレディエントでリンクリボーを攻撃!!?ガイアファング!!?」
「相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動!!?ゼロリンク!!?このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力はターン終了時まで０になる!!?」

リンクリボーが粒子になり、ミセスレディエントに纏わりつく。
ミセスレディエントはそのまま噛み付いてきたが、全然ダメージは無かった。
というか、貴方、甘噛みしてない？
攻撃する気、本当にあった？
「ここからが本番だぜ‼？1体目の磁石の戦士マグネットバルキリオンでダイレクトアタック‼？マグネットクロスカッター‼？」
「通さないよ‼？手札から手札からクリボールの効果を発動‼？スピンショット‼？相手モンスターの攻撃宣言時、そのモンスターを守備表示にするよ‼？」
Ｘの字を描くように私を斬り裂こうとしたバルキリオンにクリボールが回転しながら関節部に突撃し、それによりバルキリオンの動きぐ止まった。

磁石の戦士マグネットバルキリオン
ＡＴＫ４０００→ＤＥＦ４３５０

「耐えられたか。なら、２体目の磁石の戦士マグネットバルキリオンでダイレクトアタック‼？マグネットクロスカッター‼？」
「それも通さないよ‼？攻撃宣言時、手札から虹クリボーの効果発動‼？このカードをそのモンスターに装備し、そのモンスターは攻撃することが出来ないよ‼？レインボーガード‼？」
「おおっ⁉？これも耐えるのか⁉？」
私の手札から虹色の角を持つ球体が現れてバルキリオンの動きを止める。
そんな攻撃何度も受けたら堪ったもんじゃないもん。
「やるな‼？余計にワクワクしてきたぜ‼？電磁石の戦士マグネットベルセリオンでダイレクトアタック‼？マグネットフライングカッター‼？」
ベルセリオンが空中に跳躍し、サーベルにフィールドから磁力を収束させると縦にサーベルを振り抜き、その衝撃波が私を襲った。

「きゃあ!!?」

遊花　　ＬＰ８０００→４５００

ライフが一気に半分近く削られる。
こんなんじゃそう長くは持たない。
早く何とかしないと……
「俺はこれでターンエンドだ。遊花がどう動いてくるか、楽しみだぜ」

遊花　ＬＰ４５００　手札　２
ー　ー　▲　△　ー　　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　　ー　　☆
ー　□　○　○　ー
ー　▲　▲　ー　ー　　▽
大地　ＬＰ６０００　手札４

「私のターン、ドロー!!?私は金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のモンスター。
「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル１モンスターを特殊召喚するよ!!?墓地から戻ってきて、ミスティックパイパー!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

再び現れるミスティックパイパー。

またお願いするね。
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを1枚ドローするよ。そしてこの効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル1モンスターだった場合、自分はカードをもう1枚ドローするよ!!?」
ミスティックパイパーにいつもやられているようにサムズアップをして見ると、ミスティックパイパーは少し驚いた後、笑顔でサムズアップをして姿を消した。
うん、喜んで貰えたみたいで良かった。
これからもやってあげよう。
「私が引いたのはサクリファイス!!?レベル1モンスターなのでもう1枚ドロー!!?そして私は魔法カード、イリュージョンの儀式を発動!!?」
「おっ、今度は儀式召喚か!!?」
私の前に現れるのは金色の目の形をした壺。
「自分の手札・フィールドから、レベルの合計が1以上になるようにモンスターをリリースし、手札からサクリファイスを儀式召喚します!!?私は墓地のクリボールの効果で儀式召喚を行う場合、必要なレベル分のモンスターの内の1体として、墓地のこのカードを除外できる!!?」
「!?墓地から儀式の素材になれるだって!?」
金色の目の形をした壺にクリボールが吸い込まれ、しばらくすると壺が割れ、中から妖しい邪眼を持つモンスターが現れた。
「儀式召喚!!?相手を捕える妖しい邪眼!!?サクリファイス!!?」

〈サクリファイス〉☆1　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０

「サクリファイスの効果発動!!?アブソープション!!?1ターンに1度、相手フィールドのモンスター1体を対象にそのモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力・守備力

は、このカードの効果で装備したモンスターの数値分アップし、このカードが戦闘で破壊される場合、代わりに装備したそのモンスターを破壊できるよ‼？対象は勿論、磁石の戦士マグネットバルキリオン‼？吸い込んじゃって、サクリファイス‼？」
「っ、マグネットバルキリオン‼？」
サクリファイスのお腹にある穴が開き、バルキリオンが吸い込まれる。
しばらくすると背中についている羽のような部分からバルキリオンの姿が浮き上がった。

サクリファイス
ＡＴＫ０→３５００

「サクリファイスはこのカードの効果でモンスターを装備したこのカードの戦闘で自分が戦闘ダメージを受けた時は、相手も同じ数値分の効果ダメージを受けるようになるよ。今はこの効果は使わないけどね。バトル‼？サクリファイスで電磁石の戦士マグネットベルセリオンを攻撃‼？イリュージョンマグネットクロスカッター‼？」
「迎え撃て、電磁石の戦士マグネットベルセリオン‼？マグネットフラインングカッター‼？」
ベルセリオンが空中に跳躍し、サーベルにフィールドから磁力を収束させ、サーベルを振り下ろす。
サクリファイスはバルキリオンの剣を使い、ベルセリオンをＸの字を描くように斬り裂こうとする。
剣とサーベルがぶつかり合い、爆風が起こると、その場所には吸収したバルキリオンの姿が無くなったサクリファイスの姿が残り、辺りにベルセリオンのパーツが飛び散っていた。
「サクリファイスは装備していた磁石の戦士マグネットバルキリオンを破壊して戦闘破壊を防ぐよ‼？」
「っ、やるな‼？だけど、フィールド魔法、マグネットフィールドの効果発動‼？１ターンに１度、自分の岩石族・地属性モンスターの戦闘

で相手モンスターが破壊されなかったダメージステップ終了時にその相手モンスターを持ち主の手札に戻すぜ!!?」
「えっ!?!?サクリファイス!!?」
マグネットフィールドに磁場が発生し、サクリファイスが私の手札に向かって吹き飛ばされる。
「さらに電磁石の戦士マグネットベルセリオンの効果発動!!?マグネットセパレイション!!?このカードが戦闘または相手の効果で破壊された場合、除外されている自分の電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γを1体ずつ対象として特殊召喚する!!?」
「えっ!?!?そんな効果まで!?!?」
「再集結だ!!?電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γ」

〈電磁石の戦士α〉☆3　岩石族　地属性
ＡＴＫ１７００→２２００

〈電磁石の戦士β〉☆3　岩石族　地属性
ＤＥＦ１５００→２０００

〈電磁石の戦士γ〉☆3　岩石族　地属性
ＤＥＦ２０００→２５００

飛び散っていたベルセリオンの破片が再び集まり3体の電磁石の戦士の姿になる。
「まずは電磁石の戦士αの効果発動!!?俺はデッキから電磁石の戦士マグネットベルセリオンを手札に加える!!?さらに電磁石の戦士βの効果発動!!?デッキから磁石の戦士δを手札に加える!!?」
うっ、これじゃあ次のターンにはまたベルセリオンが出てきそうだよ。
なら、今のうちに動けるだけ動かなきゃ!!?
「メインフェイズ2!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
再び私の前に大きなサーキットが現れる。

「召喚条件はトークン以外のレベル1モンスター1体!!?私は金華猫をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?相手を捕える深淵の邪眼!!?リンク1!!?サクリファイスアニマ!!?」

〈サクリファイスアニマ〉ＬＩＮＫ１　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０　→

「っ、サクリファイスって名前があるってことは!!?」
「サクリファイスアニマの効果発動!!?コネクトアブソープション!!?1ターンに1度このカードのリンク先の表側表示モンスター1体を対象にその表側表示モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップするよ!!?対象は勿論、もう1体いた磁石の戦士マグネットバルキリオン!!?吸い込んじゃって、サクリファイスアニマ!!?」
アニマの目の上にある空間が開き、バルキリオンが吸い込まれる。
しばらくすると背中についている羽のような部分からサクリファイスと同じようにバルキリオンの姿が浮き上がった。

サクリファイスアニマ
ＡＴＫ０→３５００

再び吸収されたバルキリオンを見て大地君は凄く楽しそうに笑った。
「凄えな、遊花。まさかさっきの布陣をこうも簡単に突破してくるとは思わなかったぜ!!?」
「よく言うよ、速攻で終わらせようとしたのに……」
「いや、遊花なら耐えられそうな気がしたからな。くぅーっ!!?やっぱり思ってた通り遊花とのデュエルは楽しいぜ!!?」
「それは……うん、私もかな。大地君とのデュエル、凄くワクワクす

るもん」
　大地君の戦術自体は殺意に満ち溢れてるけど、一手先がどうなるかも分からない凄く楽しいデュエルになっている。
　今日の空閑君や霊華さんとのデュエルも勿論楽しかったけれど、ここまで楽しいと思えるデュエルが出来たのは師匠と初めてデュエルした時ぐらいかも知れない。
　そんなことを考えていると大地君も待ちきれないという風に声を上げた。
「よっしゃ、デュエルを続けようぜ‼？これ以上は我慢出来ねぇよ‼？遊花、この楽しいデュエル、絶対に俺が勝たせて貰うぜ‼？」
「うん‼？私だって負けないよ‼？せっかくこんなに楽しいデュエルなんだもん‼？私はこれでエンドフェイズに移るけど？」
「ならエンド前に電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γの３体の効果を発動だ‼？電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γ、３体をそれぞれリリースし、デッキから、来い‼？磁石の戦士α、磁石の戦士β、磁石の戦士γ‼？」

〈磁石の戦士α〉☆４　岩石族　地属性
　ＤＥＦ１７００→２２００

〈磁石の戦士β〉☆４　岩石族　地属性
　ＤＥＦ１６００→２１００

〈電磁石の戦士γ〉☆４　岩石族　地属性
　ＤＥＦ１８００→２３００

　電磁石の戦士達の姿が消え、再びそれぞれの電磁石の戦士に似た磁石の戦士が現れる。
「まあ、そうなるよね。それじゃあ改めてターンエンドだよ」
　状況的には私の方が圧倒的に不利。
　だけど、こんなに楽しいデュエルで諦めるなんてありえない。

これから大地君がどんな手を打ってくるかは分からないけど、絶対に耐え切って、勝ってみせる!!?

遊花　ＬＰ４５００　手札　３

ー△▲ーー　　ー

ーーーーー

　　☆　　☆

ー□□□ー

ー▲▲ーー　▽

大地　ＬＰ６０００　手札６

第19話　思いの果てに

★

遊花　ＬＰ４５００　手札　３
ー△▲ーー　　ー
ーーーーー
　　☆　　☆
ー□□□ー
ー▲▲ーー　　▽
大地　ＬＰ６０００　手札６

「俺のターン、ドロー!!?この手札は……よし、遊花!!?お前に最強の磁石の戦士を見せてやるぜ!!?」
「えっ?」
「まずはマグネットフィールドの効果発動!!?　俺は墓地から電磁石の戦士αを特殊召喚だ!!?」

〈電磁石の戦士α〉☆３　岩石族　地属性
ＡＴＫ１７００

再び電磁石の戦士αが現れる。
電磁石の戦士αはレベル８の磁石の戦士を手札に加える効果があった。
ということは、またバルキリオンが出てくる?
でも、それなら今までと同じだし……
「そして電磁石の戦士αの効果発動!!?俺はデッキから最後の磁石の戦士マグネットバルキリオンを手札に加える!!?これで準備は整った!!?俺は魔法カード、融合を発動!!?」
「融合!!?」

「その効果で自分の手札・フィールドから、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚する‼?俺は手札にある磁石の戦士マグネットバルキリオンと電磁石の戦士マグネットベルセリオンを融合‼?超電磁合体‼?」

大地君がそういうと手札からバルキリオンとベルセリオンの姿が現れ、それぞれの身体を分離し、１つになっていく。

電磁石の戦士αと電磁石の戦士βのパーツがケンタウロスのような足になり、電磁石の戦士γが下半身を構成し、そこに磁石の戦士γの羽根がつく。

磁石の戦士αが上半身を構成し肩から砲台が現れ、そこに磁石の戦士βの顔がつき、その顔に磁石と電磁石両方のマグネットとヘルメットのようなパーツが装着される。

最後に電磁石の戦士αと磁石の戦士αのサーベルと剣が合わさり１つの巨大な剣になり、そこにバルキリオンとベルセリオンが合わさった巨大な磁石の戦士が現れた。

「完成‼?超電導戦機インペリオンマグナム‼?」

〈超電導戦機インペリオンマグナム〉☆１０　岩石族　地属性

ＡＴＫ４０００→４５００

「ふぁ～‼?凄い凄い‼?カッコいい‼?物凄くカッコいいよ、大地君‼?」

合体して出来た２体の磁石の戦士が合体しちゃうなんて、凄いカッコいいよ‼?

６体合体なんてロマンあるもん‼?

「だよな‼?やっぱり遊花は分かってるぜ‼?だが、超電導戦機インペリオンマグナムはただカッコいいだけじゃないぜ‼?超電導戦機インペリオンマグナムは1ターンに1度、相手がモンスターの効果・魔法・罠カードを発動した時にその発動を無効にし破壊出来るんだ‼?」

「ええっ⁉？無効効果⁉？」
「さらに表側表示のこのカードが相手の効果でフィールドから離れた場合、磁石の戦士マグネットバルキリオン、電磁石の戦士マグネットベルセリオン、１体ずつを手札・デッキから召喚条件を無視して特殊召喚できる⁉？」
　無効効果に実質効果耐性付きのミセスレディエントの強化付きで攻撃力４５００はマズイよ⁉？
　だって、私のライフも４５００しかないもん⁉？
「リバースカードオープン、罠発動⁉？貪欲な瓶⁉？貪欲な瓶以外の自分の墓地のカード５枚を対象にそのカード５枚をデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから１枚ドローする⁉？俺は墓地に存在する磁石の戦士マグネットバルキリオン、電磁石の戦士マグネットベルセリオンを２枚ずつと融合をデッキに戻してシャッフルしカードを１枚ドローする⁉？おっ、このカードか。なら、さらにリバースカードオープン⁉？マグネットコンバージョン⁉？自分の墓地のレベル４以下のマグネットウォリアーモンスターを３体まで対象としてそのモンスターを手札に加える⁉？俺は墓地の電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γを手札に加えるぜ⁉？そして魔法カード、手札抹殺⁉？」
「ええっ⁉？その手札の枚数で⁉？」
「お互いに手札を全て捨てて同じ枚数ドローする⁉？俺は８枚、遊花は３枚ドローだ」
　うう～動けなくなってたサクリファイスを交換できたのは嬉しいけど、８枚もドローされるのは流石にマズイよ。
「よし⁉？まだまだ行くぜ⁉？俺はフィールドに存在する磁石の戦士α、磁石の戦士β、電磁石の戦士γをリリースし、手札から磁石の戦士マグネットバルキリオンを特殊召喚する⁉？磁力合体⁉？マグネットバルキリオン⁉？」
〈磁石の戦士マグネットバルキリオン〉☆８　岩石族　地属性
　ＡＴＫ３５００→４０００

「さらに俺は墓地に存在する電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γを除外し、手札から電磁石の戦士マグネットベルセリオンを特殊召喚する!!?電磁合体!!?マグネットベルセリオン!!?」

〈電磁石の戦士マグネットベルセリオン〉☆8　岩石族　地属性
ＡＴＫ３０００→３５００

インペリオンマグナムに並び立つように再び現れるバルキリオンとベルセリオン。
これは凄くマズイよ!!?
というか、合体したのに合体前も一緒に戦うのはズルいよ!!?
「電磁石の戦士マグネットベルセリオンの効果発動!!?マグネットサイドカッター!!?俺は墓地に存在する電磁石の戦士αを除外してサクリファイスアニマを破壊するぜ!!?」
「うっ、リバースカードオープン!!?スキルプリズナー!!?自分フィールド上のカード1枚を選択してこのターン、選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にする!!?対象は勿論サクリファイスアニマ!!?」
「させないぜ!!?超電導戦機インペリオンマグナムの効果発動!!?スーパーマグネットキャノン!!?1ターンに1度、相手がモンスターの効果・魔法・罠カードを発動した時にその発動を無効にし破壊する!!?」
スキルプリズナーで生まれた見えない壁にインペリオンマグナムが背中の砲台からレーザーを発射し、その壁を破壊する。
そしてその隙にベルセリオンがアニマに向かってダッシュしながら横一文字にサーベルで斬り裂き、アニマは破壊されてしまった。
「行くぜ、遊花!!?バトル!!?超電導戦機インペリオンマグナムでダイレクトアタック!!?マグネットストームマキシマム!!?」
インペリオンマグナムの背中の砲台と巨大な剣に磁力を収束させると、レーザーを発射しながら巨大な剣からＸの字を描くように衝撃

波を放つ。
　凄くカッコいいけど、そんな攻撃受けるわけにはいかないよ!!?
「それは通さないよ!!?手札からバトルフェーダー!!?さらにチェーンして墓地からクリボーンの効果発動!!?クリボーンの効果で相手モンスターの攻撃宣言時、墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のクリボーモンスターを任意の数だけ対象として、そのモンスターを特殊召喚するよ!!?来て、クリアクリボー!!?ジャンクリボー!!?虹クリボー!!?」
「凄え!!?これも耐えるのか!!?」

〈クリアクリボー〉☆1　天使族　光属性
　ＤＥＦ２００

〈ジャンクリボー〉☆1　機械族　地属性
　ＤＥＦ２００

〈虹クリボー〉☆1　悪魔族　光属性
　ＤＥＦ１００

　私の周りに現れたのは3体のクリボー達。
　更にその横に鐘の音を鳴らす悪魔が現れる。
　その鐘の音を聴いて、インペリオンマグナムが動きを止める。

〈バトルフェーダー〉☆1　悪魔族　闇属性
　ＤＥＦ０

「バトルフェーダーの効果発動!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードを手札から特殊召喚し、その後バトルフェイズを終了するよ!!?ただしこの効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される」
「一気にクリボー達を出しながらバトルフェイズ自体を終了してくる

のか。クリアクリボーとジャンクリボーは手札抹殺の時に落ちた奴だな」
「ふふっ、これで準備は整ったよ!!?次のターン、超電導戦機インペリオンマグナムを攻略しちゃうんだから!!?」
「!!?面白え!!?どういう風に攻略してくるか見せて貰うぜ!!?俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ!!?」

遊花　ＬＰ４５００　手札　２
ーーーーー　ー
ー□□□□
ー　☆
ー○ー○○
ー▲▲ーー　▽
大地　ＬＰ６０００　手札４

「私のターン、ドロー!!?速攻魔法、サクリファイスフュージョン!!?アイズサクリファイス融合モンスターカードの融合素材モンスターを自分の手札・フィールド・墓地から除外し、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚するよ!!?」
「っ!!?それは通せない!!?超電導戦機インペリオンマグナムの効果発動!!?スーパーマグネットキャノン!!?その発動を無効にし破壊する!!?」
　生み出されようとした次元の穴にインペリオンマグナムがレーザーを発射し、消滅させる。
　これで無効効果は無くなった!!?
「魔法カード、貪欲な壺を発動!!?その効果で墓地に存在するリンクリボー、サクリファイスアニマをＥＸデッキに、金華猫、サクリファイス、ミスティックパイパーをデッキに戻してシャッフルし、２枚ドローする!!?」
「ここに来てドローカードか!!?」
「!!?よし、手札から絶望神アンチホープを捨てて魔法カード、ワン

フォーワン!!?デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚する!!?もう1度お願い、ミスティックパイパー!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆1　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを1枚ドローするよ。ドローしたカードは金華猫!!?レベル1モンスターだったからもう1枚ドロー!!?」
「っ、ドローが止まらないな」
そして、行くよ……貴方の初陣、頑張ろうね!!?
「私はレベル1、バトルフェーダーとクリアクリボーでオーバーレイ!!?。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
「!?その召喚方法はまさか!!?」
バトルフェーダーとクリアクリボーが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこには白い馬に乗る小さな首無しの騎士がいた。
「闇夜に紛れし哀しき妖精!!?その刃で疑惑を切り裂け!!?ランク1!!?ゴーストリックデュラハン!!?」

〈ゴーストリックデュラハン〉★1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

今日何度目になるか分からない、観戦している生徒達からのざわめき。
そして私が出したデュラハンを見て、大地君はよりきらきらとした笑顔を浮かべた。
「すっげー!!?遊花はエクシーズ召喚まで使えたのか!!?まさか全召喚方法を使えるとは思っても見なかったぜ!!?」

「あはは、教えてくれる人達が上手かったからね」
「遊花に教えている人達か!!?くぅーっ!!?俺もその人達とデュエルしてみてぇ!!?」
「うん……まあ、機会があれば紹介してもいいよ?」
「本当か!?」
大地君が凄く嬉しそうな笑顔を浮かべる。
大地君だったら、多分師匠のことを悪く言ったりしないだろうし、闇先パイが相手でも気落ちとかしなさそうだもんね。
「だけど、それはこのデュエルがちゃんと終わってからだよ」
「勿論さ!!?そりゃあ遊花を教えてる人達も気になるが、今は遊花とのデュエルに全力だぜ!!?」
「うん、それならいいよ。それじゃあ行くよ?まずはゴーストリックデュラハンの永続効果、スリーピィフィアー。このカードの攻撃力は自分フィールドのゴーストリックと名のついたカードの数×２００ポイントアップするけど、現状こっちの効果は関係なし。本命はこっち。ゴーストリックデュラハンの効果発動!!?ホロウエクスキュート!!?オーバーレイユニットを1つ使い、フィールド上のモンスター1体を対象に、選択したモンスターの攻撃力を半分にする!!?この効果は相手ターンでも使えるよ!!?対象は勿論、超電導戦機インペリオンマグナム!!?」
デュラハンがその手に持った小さな剣を振るうと、その剣から不可視の斬撃が飛び、インペリオンマグナムが膝をつく。

超電導戦機インペリオンマグナム
ＡＴＫ４５００→２２５０

「っ、だが、今の遊花のフィールドにはインペリオンマグナムを超えるモンスターはいないぜ?超えたとしてもマグネットフィールドで手札に戻るし」
「それもちゃんと考えてあるよ!!?私は金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００
「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル１モンスターを特殊召喚するよ!!?墓地から戻ってきて、バトルフェーダー!!?」

〈バトルフェーダー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０
バトルフェーダーを出した時、私の墓地から黒い闇が見えた気がする。
うん、今回は君にお願いするよ。
お願いね、私の絶望(きぼう)。
「私はフィールドに存在するジャンクリボー、虹クリボー、金華猫、バトルフェーダー、４体のレベル１モンスターを墓地に送ることで墓地からモンスターを特殊召喚するよ!!?」
「!?なんだ!?聞いたことがない召喚条件だぞ!?」
クリボー達が私を見ながら粒子に変わる。
そしてその粒子は重なり合い、大きな闇の巨人が、私を守るように現れた。
「おいで!!?絶望を統べる優しき神!!?絶望神アンチホープ!!?」

〈絶望神アンチホープ〉☆１２　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ５０００
「攻撃力５０００!?そんなモンスターまでいるのか!?」
「行くよ!!?バトル!!?絶望神アンチホープで超電導戦機インペリオンマグナムに攻撃!!?」
「っ!!?迎え撃て!!?超電導戦機インペリオンマグナム!!?マグネットストームマキシマム!!?」

インペリオンマグナムが背中の砲台と巨大な剣に磁力を収束し、レーザーを発射しながら巨大な剣からXの字を描くように衝撃波をアンチホープに放つ。
でも、そんな攻撃はアンチホープには効かないよ‼?
「絶望神アンチホープの効果発動‼?・インヴィンシブルディスペア‼?・このカードが戦闘を行うバトルステップ中に1度、自分の墓地のレベル1モンスター1体を除外して発動‼?・墓地からバトルフェーダーを除外し、このカードはそのダメージステップ終了時まで、他のカードの効果を受けず、戦闘では破壊されない‼?・」
「効果を受けないだって⁉?・ということはマグネットフィールドも‼?・」
「当然効かないよ‼?・斬り裂いて、絶望神アンチホープ‼?・ホープブレイクパニッシャー‼?・」
インペリオンマグナムが放つ攻撃を正面から弾き飛ばし、アンチホープはその大剣でインペリオンマグナムを一刀両断する。
そうすると、インペリオンマグナムの身体は跡形も無く爆散した。
「ぐあっ‼?・やるな‼?・」

大地　　LP6000→3250

大地君のライフが大きく減る。
これでインペリオンマグナムはいなくなった。
後はこのままどこまで押し切れるかだね。
「私はこれでターンエンドだよ‼?・」

遊花　LP4500　手札　2

ーーーーーー　ー
ーー○ーー
　　□　　☆
ー○ー○ー
ー▲▲ーー　　▽

大地　　ＬＰ３２５０　手札４

「俺のターン、ドロー‼?……⁉?このカードは……」

「?」

大地君が引いたカードを見て驚いた表情を浮かべる。

一体何を引いたんだろう?

そんなに変なカードだったのかな?

大地君はそのカードを見て１度苦笑を浮かべると、私の方を見てもう１度笑顔を浮かべた。

「遊花。お前、やっぱり凄い決闘者だな」

「……そうかな?私、ちゃんとデュエル出来てるかな?」

大地君の言葉に、思わずそんな言葉が漏れてしまう。

私は、いつも助けられてばかりいる。

師匠達にも、カード達にも、沢山の人達に支えられることで、ようやく栗原　遊花は立ち上がることが出来る。

だから、私は何処か自分のことを信じきることが出来ない。

自分を信じきるだけの、自信が足りない。

そんな私を見て、大地君は一瞬きょとんとした顔を浮かべて柔らかい笑顔を浮かべた。

「当たり前だろ。こんなにワクワクしたデュエルなんて、俺は初めてだぜ?バルキリオンもベルセリオンも、インペリオンマグナムですら出してから１ターンで攻略されちまった。俺にそれを出させないんじゃなくて、出させた上で正面から超えてくる決闘者となんか、俺はデュエルしたことがない。遊花とのデュエルは、凄いワクワクで溢れてるんだよ‼?」

「……そう、かな?」

「そうさ‼?それに、リンク召喚から始まって儀式召喚、エクシーズ召喚、無効にしちまったけど融合召喚まで１回のデュエルで見せようとしたんだぜ?それに今出してるその絶望神アンチホープってモンスターも見たことない召喚条件だったろ?そんなこと出来る奴が凄くないわけないさ‼?もっと自信を持っていいんだよ、遊花はさ‼?」

そんなことを言ってくれる大地君を見て、私は少しだけ心が軽くなった気がした。
私は、まだまだ弱い。
デュエルも、心自体も。
でも、そんな私のデュエルでも、こんなに楽しんでくれる人達がいるのなら……私は、もっと前に進めるのだろうか？
こんな弱い私を、もっと変えていくことが出来るのだろうか？
そんな私に、大地君はもう1度きらきらとした笑顔を浮かべた。
「だから、俺も俺の全力を遊花にぶつけるぜ‼？このカード、普段はほとんど引かないんだが、お前との楽しいデュエルに惹き寄せられて出てきちまったみたいだからな。だから、遊花に見せてやる。今までデュエルアカデミアでは誰にも見せたことがない、俺のもう1体の切り札を‼？」
「⁉？デュエルアカデミアでは見せたことがない切り札？」
「まずは下準備だ‼？俺は磁石の戦士αを召喚‼？」
〈磁石の戦士α〉☆4　岩石族　地属性
ＡＴＫ１４００→１９００
「さらにマグネットフィールドの効果発動‼？　俺は墓地から磁石の戦士βを特殊召喚だ‼？」
〈磁石の戦士β〉☆4　岩石族　地属性
ＤＥＦ１６００→２１００
現れるのは2体の磁石の戦士β。
そして大地君は正面に手をかざす。
「俺はレベル4、磁石の戦士αと磁石の戦士βでオーバーレイ。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼？」
「っ‼？大地君もエクシーズ召喚を……」

磁石の戦士αと磁石の戦士βが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると現れたのは指揮者のようなモンスター。
「その指揮で旋律を導け、ランク４、交響魔人マエストローク!!?」
〈交響魔人マエストローク〉★４　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２３００
「交響魔人マエストローク……そのモンスターにはどんな効果が……」
「いや、悪いけどコイツ自身にはこの状況をどうにかする力はないんだ。やれることは攻撃表示モンスターを裏守備にするぐらいだしな。絶望神アンチホープにやっても超えられないから意味がない」
「えっ?だったらどうして……」
不可解な行動に私が首を傾げる。
「まあ、その理由はもう少し待ってくれ。墓地に存在するマグネットコンバージョンの効果、墓地のこのカードを除外し、除外されている自分のレベル４以下のマグネットウォリアーモンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?除外されている電磁石の戦士γを特殊召喚!!?」
〈電磁石の戦士γ〉☆３　岩石族　地属性
ＤＥＦ２０００→２５００
「電磁石の戦士γの効果発動!!?このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、手札から電磁石の戦士γ以外のレベル４以下のマグネットウォリアーモンスター１体を特殊召喚する。磁石の戦士γを特殊召喚だ!!?」
〈磁石の戦士γ〉☆４　岩石族　地属性
ＤＥＦ１８００→２３００

「そして繋がれ!!?・絆が引き合うサーキット!!?」
「!?・?・リンク召喚!?・?」
　大地君の前に再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はモンスター2体以上!!?・俺は磁石の戦士γ、電磁石の戦士γ、交響魔人マエストロークをリンクマーカーにセット!!?・サーキットコンバイン!!?・リンク召喚!!?・稲妻の騎士!!?・リンク3!!?・電影の騎士ガイアセイバー!!?・」

〈電影の騎士ガイアセイバー〉ＬＩＮＫ　３　機械族　地属性
ＡＴＫ２６００→３１００　↑←↓

　現れたのは稲妻を纏った機械の騎士。
　だけど、そのためになんでさっき出したマエストロークを?
　すると、大地君は1枚のカードを私に向けて見せた。
　そして一瞬、本当に一瞬、いつもアンチホープから見えている気がする闇のようなものが、そのカードから見えた気がした。
「本命はこれさ。魔法カード、ダークコーリング!!?・」
「ダーク……コーリング?・」
「その効果は自分の手札・墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、ダークフュージョンの効果でのみ特殊召喚できるその融合モンスター1体をダークフュージョンによる融合召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚する!!?・」
「っ!?・?・サクリファイスフュージョンのような融合カード!?・?・」
「この効果で除外するのは墓地の交響魔人マエストロークと超電導戦機インペリオンマグナム!!?・音を司る悪魔よ、磁石の巨人と交わり、無敵の力を解き放て!!?・」
「インペリオンマグナムを融合素材に!?・?・」
　インペリオンマグナムとマエストロークの姿が次元の渦に吸い込まれる。

そして現れたのは微細な闇を放つ悪魔の翼を持った身体が石で出来た戦士。
「融合召喚!!? Ｅ－ＨＥＲＯ（イービルヒーロー）ダークガイア!!?」
〈Ｅ－ＨＥＲＯダークガイア〉☆８　悪魔族　地属性
ＡＴＫ？
「Ｅ－ＨＥＲＯ？攻撃力が決まってない？」
見たことがないモンスターに私は戸惑い、アンチホープが心なし、私を守るように身体を動かした気がした。
「Ｅ－ＨＥＲＯダークガイアの元々の攻撃力は、このカードの融合素材としたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。さらにコイツは地属性。ミセスレディエントの効果も受ける。つまり、その攻撃力は!!? 」
Ｅ－ＨＥＲＯダークガイア
ＡＴＫ？→５８００→６３００
「攻撃力６３００!!?」
「まだ俺の動きは終わってないぜ？速攻魔法、マグネットリバース!!?自分の墓地のモンスター及び除外されている自分のモンスターの中から、機械族または岩石族の通常召喚できないモンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?俺が対象にするのは除外した超電導戦機インペリオンマグナムだ!!?」
「っ!!?チェーンして墓地のスキルプリズナーを除外して効果発動!!?自分フィールド上のカード１枚を選択してこのターン、選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にする!!?対象は絶望神アンチホープ!!?」
「まあ、そう動くよな。戻ってこい!!?超電導戦機インペリオンマグナム!!?」

〈超電導戦機インペリオンマグナム〉☆１０　岩石族　地属性
ＤＥＦ４０００→４５００

再び現れるインペリオンマグナム。
この状況は凄くマズイ。
下手な動きをしたらこのターンでやられる!!?
「バトル!!?ＥＩＨＥＲＯダークガイアでゴーストリックデュラハンを攻撃!!?この瞬間、ＥＩＨＥＲＯダークガイアの効果発動!!?オーバーロードフィアー!!?このカードの攻撃宣言時、相手フィールド上に守備表示で存在する全てのモンスターを表側攻撃表示に出来る!!?この時、リバース効果モンスターの効果は発動しない!!?」
「えっ!?」
ダークガイアから闇のオーラが溢れ出し、それに当てられてかデュラハンが攻撃表示に変わる。

ゴーストリックデュラハン
ＤＥＦ０→ＡＴＫ１０００→１２００

デュラハンの攻撃力は１２００。
ダークガイアは６３００……このままじゃ一撃でやられちゃう!!?
「ゴーストリックデュラハンの効果発動!!?ホロウエクスキュート!!?オーバーレイユニットを１つ使い、フィールド上のモンスター１体を対象に、選択したモンスターの攻撃力を半分にする!!?対象はＥＩＨＥＲＯダークガイア!!?」
「残念ながらそれは通らないぜ!!?超電導戦機インペリオンマグナムの効果発動!!?スーパーマグネットキャノン!!?その発動を無効にし破壊する!!?」
インペリオンマグナムがレーザーを発射し、剣を振るおうとしていたデュラハンを爆散させる。
そしてダークガイアの視線はアンチホープに向く。

「攻撃対象がいなくなったことで攻撃対象の変更だ‼?ＥＨＥＲＯダークガイアで絶望神アンチホープを攻撃‼?マキシマムブレイク‼?」
「っ、迎え撃って‼?絶望神アンチホープ‼?ホープブレイクパニッシャー‼?絶望神アンチホープの効果発動‼?インヴィンシブルディスペア‼?墓地からジャンクリボーを除外し、このカードはそのダメージステップ終了時まで、他のカードの効果を受けず、戦闘では破壊されない‼?」
「だがダメージは受けて貰うぜ‼?」
アンチホープが私を守るように大剣を構え、ダークガイアに振りかざす。
しかし、ダークガイアはその大剣を左手だけで受け止めると、右手に闇を纏い、その拳でアンチホープを殴りつけ、吹き飛ばした。
「きゃあ‼?」

遊花　ＬＰ４５００→３２００

アンチホープが吹き飛ばされた衝撃で私のライフが減る。
このままじゃマズイ。
いくらアンチホープに効果を受けない耐性があってもそれはバトルステップだけだし、何よりインペリオンマグナムに無効化される。
さらには守備表示でモンスターを出してもダークガイアで攻撃表示にされたら私のライフなんて一瞬で消し飛んでしまう。
しかも、スキルプリズナーの効果はこのターンのみだから次のターンにはベルセリオンにアンチホープを破壊され、ベルセリオンは破壊しても分離して再び合体するだけだから対処のしようがない。
強い……これが大地君のもう1体の切り札……
「メインフェイズ2、俺は磁石の戦士マグネットバルキリオンと電磁石の戦士マグネットベルセリオンを守備表示に変更」

磁石の戦士マグネットバルキリオン

ＡＴＫ４０００→ＤＥＦ４３５０
電磁石の戦士マグネットベルセリオン
ＡＴＫ３５００→ＤＥＦ３３００

バルキリオンとベルセリオンが守備表示になる。
それもそうだ。
下手に攻撃表示にしてダメージを受けるぐらいなら、その強固な防御力で耐えればいいのだから。
「俺はカードを１枚伏せてターンエンド。さあ、今度も超えられるか見せて貰うぜ‼？」

遊花　ＬＰ３２００　手札２
ー ー ー ー ー ー　ー
ー ー ○ ー ー
ー　☆
□ □ ○ □ ☆
ー ▲ ▲ ▲ ー
大地　ＬＰ３２５０　手札０　▽

状況は絶望的。
私はこのターンにダークガイアとベルセリオンをどうにかするか大地君のライフを削りきるしかない。
おまけにインペリオンマグナムの無効効果がある。
出来るかは、分からない。
でも、やらないと負けるだけ。
なら、やるしかない。
最後まで諦めはしない。
考えてみればインペリオンマグナムのような無効化効果なんて、いつも掻い潜ってきたではないか。
空閑君の空牙団も、霊華さんのＰＳＹフレームだって、私の動きを

封じてきた。
闇先パイの時は手札もバトルゾーンも機能しなくなるようなコンボを受けた。
それでも、私はそれを掻い潜ってきたのだ。
なら、まだ諦めるなんて状況には程遠い。
諦めないことだけが、私の取り柄なのだから!!?
「すー……はー……私のターン、ドロー!!?」
私は霊華さんの時のように1度深呼吸をすると、勢いよくカードをドローした。
ドローしたカードを見て、思わず私は笑ってしまう。
可能性は……まだある!!?
「いつだって、私と共に!!?ハネクリボー!!?」
「この状況でハネクリボーだって?」

〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＡＴＫ３００

現れるのは私の相棒。
相棒が私を見て頷く。
うん、ゴメンね相棒。
今回はそうなっちゃう。
でも、無駄には絶対しないから!!?
「導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「この状況でリンク召喚?」
私の目の前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル1モンスター1体!!?私はハネクリボーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?もう1度私に力を貸して!!?希望の守り手!!?リンク1!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性

ＡＴＫ３００　←

再びフィールドに現れるリンクリボー。
リンクリボーは私を励ますように擦り寄ってくる。
うん、ありがとう、心配してくれて。
でも、平気だよ‼？
「この状況でリンクリボーを出してどう動くんだ？」
「こう動くの‼？大事なのは相棒を墓地に送ることだったもん‼？相棒、貴方の力、借り受けるよ‼？魔法カード、賢者の石―サバティエル‼？」
「⁉？そのカードは確か……」
「このカードは自分の墓地にハネクリボーモンスターが存在する場合、ライフポイントを半分払って発動できるよ」

遊花　ＬＰ３２００→１６００

「そうすることで、デッキから融合魔法カードまたはフュージョン魔法カード１枚を手札に加えることが出来るよ‼？　私が手札に加えるのは簡易融合‼？そしてライフを１０００払って、簡易融合を発動‼？」

遊花　ＬＰ１６００→６００

「レベル５以下の融合モンスター１体を融合召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚し、この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃できず、エンドフェイズに破壊されるよ‼？」
「っ‼？あのサクリファイスの融合モンスターを出すつもりか‼？それは通さない‼？超電導戦機インペリオンマグナムの効果発動‼？スーパーマグネットキャノン‼？その発動を無効にし破壊する‼？」
カップ麺のようなものにインペリオンマグナムがレーザーを発射し、消滅させる。

それを見て大地君が笑う。
「さあ、サーチしたカードは無効化したぜ。その残りの手札で動けるのか？」
「うん……まだ終わりじゃないよ‼？魔法カード、貪欲な壺を発動‼？」
「なっ⁉？2枚目⁉？」
「その効果で墓地に存在するゴーストリックデュラハンをＥＸデッキに、金華猫、クリアクリボー、虹クリボー、ハネクリボーをデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローする‼？」
私はドローしたカードを見る。
「……届いたよ、大地君‼？」
「⁉？」
「私は、魔法カード、融合を発動‼？」
「⁉？この状況で融合だって⁉？まさか、サクリファイスを引いたのか⁉？」
「ううん、私が引いたのはサクリファイスじゃない‼？私が融合するのは、フィールドに存在するリンクリボーと絶望神アンチホープ‼？」
「なんだって⁉？」
私の言葉に大地君が驚いた顔をする。
確かに、私は今日ミレニアムアイズサクリファイスを出した。
でも、私のデッキに入っている融合モンスターはミレニアムアイズサクリファイスだけじゃない‼？
「希望の守り手よ、優しき闇と交わりて、孤独を壊す力となれ‼？」
リンクリボーがアンチホープに寄り添い、アンチホープも頷きながらフィールドに出来た渦の中に飛び込んでいく。
このカードも、今まで出すことが出来なかった子。
何故か簡単なハズの融合条件を出せそうな時には満たせなくて、どうしても出せなかった子。
だけど、ようやく私と一緒に戦ってくれるんだね。
ありがとう、これからよろしくね。

さあ、一緒に行こう!!?

私のそんな思いに応えるように、龍の咆哮が聞こえた気がした。

「融合召喚!!?閉ざされた世界を溶かす毒龍!!?スターヴヴェノムフュージョンドラゴン!!?」

〈スターヴヴェノムフュージョンドラゴン〉☆8　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ２８００

「ドラゴンの融合モンスター!?」

「スターヴヴェノムフュージョンドラゴンの効果発動!!?パワースワローヴェノム!!?このカードが融合召喚に成功した場合、相手フィールドの特殊召喚されたモンスター1体を選び、その攻撃力分だけこのカードの攻撃力をターン終了時までアップする!!?対象にするのはＥ－ＨＥＲＯダークガイア!!?」

「なんだって!?……なら、リバースカードオープン!!?罠発動!!?仁王立ち!!?フィールドの表側表示モンスター1体を対象にそのモンスターの守備力は倍になり、ターン終了時にその守備力は０になる!!?対象は超電導戦機インペリオンマグナム!!?」

「えっ!?この状況で?」

スターヴヴェノムフュージョンドラゴン

ＡＴＫ２８００→９１００

超電導戦機インペリオンマグナム

ＤＥＦ４５００→９０００

スターヴヴェノムがダークガイアに毒の瘴気を放ち、その力を奪い取るのと同時にインペリオンマグナムの守備力が上がる。

仁王立ちには確か墓地から除外することで攻撃を対象のモンスターに向ける効果がある。

つまり、残りの伏せカードでさらにインペリオンマグナムの守備力をあげるカードがある可能性もある。
それとも生き残るために攻撃対象を守備表示にしているインペリオンマグナムだけに固定する為に今使用した？
分からない……けど、私に出来ることは前に進むことだけ!!？
「……どうやらその顔は仁王立ちの効果は知ってるんだな。さあ、どうする？攻撃対象はインペリオンマグナムに固定出来るぜ？」
「それでも、私は諦めずに進むだけ!!？スターヴヴェノムフュージョンドラゴンの効果発動!!？スキルスワローヴェノム!!？1ターンに1度、相手フィールドのレベル5以上のモンスター1体を対象としてターン終了時まで、このカードはそのモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得る!!？対象はＥ－ＨＥＲＯダークガイア!!？」
「っ!!？やばっ!!？」
スターヴヴェノムが再びダークガイアに毒の瘴気を放ち、次は効果を奪い取る。
これでインペリオンマグナムに攻撃を誘導されても攻撃表示に変えられるからそのまま大地君のライフを削りきれる!!？
「バトル!!？」
「っ、だったら、墓地の仁王立ちを除外して効果発動!!？Ｅ－ＨＥＲＯダークガイアを対象にしてこのターン、攻撃対象はＥ－ＨＥＲＯダークガイアしか選べなくなる!!？」
ダークガイアがインペリオンマグナム達の前に仁王立ちで立ち塞がる。
確かに現状なら大地君のライフは残る。
だけど、この手札なら!!？
「スターヴヴェノムフュージョンドラゴンでＥ－ＨＥＲＯダークガイアを攻撃!!？消失のヴェノムストリーム!!？」
「迎え撃て!!？Ｅ－ＨＥＲＯダークガイア!!？マキシマムブレイク!!？」
スターヴヴェノムが毒のブレスを放ち、ダークガイアがブレスごと吹き飛ばすように拳を振るう。

「攻撃宣言時!!?速攻魔法、決闘融合―バトルフュージョン!!?」
「なっ!!?そのカードは!!?」
「自分フィールドの融合モンスターが相手モンスターと戦闘を行う攻撃宣言時に発動!!?その自分のモンスターの攻撃力はダメージステップ終了時まで、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分アップする!!?」
「っ……あーもう、こうなりゃヤケだ!!?チェーンしてリバースカードオープン!!?速攻魔法、決闘融合―バトルフュージョン!!?」
「ええっ!!?」
「自分フィールドの融合モンスターが相手モンスターと戦闘を行う攻撃宣言時に発動!!?その自分のモンスターの攻撃力はダメージステップ終了時まで、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分アップする!!?」

ＥＨＥＲＯダークガイア
ＡＴＫ６３００→１５４００

「で、でも、チェーンの関係でその後に私の決闘融合―バトルフュージョンが適用されるよ?」
「仕方ねぇじゃん。攻撃宣言時にしか使えないから、優先権で先に遊花に使われたらどうしようもないんだよ……さっきはゴーストリックデュラハンに逃げられたから使えなかったし……」

スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
ＡＴＫ９１００→２４５００

スターヴヴェノムの攻撃力がなんか凄まじいことになってる!!?
それに対し、大地君は不貞腐れたように呟いてから、頭を掻いて苦笑を浮かべながら私の方を見た。
「あーやっぱ強いな、遊花は」
「……ううん、全然だよ。今回は、カード達が私に応えてくれたから

こうなっただけ。１枚でも、私のカードが応えてくれなかったらこうならなかったもん」
「それが出来てるから十分強いんだと思うけどな～本当に、遊花は少し自信を持てって。お前は十分凄えよ」
「大地君……」
スターヴヴェノムのブレスがダークガイアを呑み込んでいく。
だけど、それを見て大地君はニッと笑った。
「まあ、だけど。残念ながら今回は俺も負けたけど、遊花も負けな」
「……へっ？」
私……も？
「まさか本当に使うことになるとは思わなかったけど、使わせて貰うぜ‼？リバースカードオープン‼？罠発動‼？決戦融合―ファイナルフュージョン‼？自分フィールドの融合モンスターが相手フィールドの融合モンスターと戦闘を行うバトルステップに、その融合モンスター２体を対象として発動できる‼？その攻撃を無効にし、お互いのプレイヤーはその融合モンスター２体の攻撃力の合計分のダメージを受ける‼？」
「ええっ‼？⁉？」
２体の合計ってことは……３９９００のダメージをお互いに受けるの⁉？
受けすぎ‼？
受けすぎだよ‼？
８０００ライフでも４人ぐらいまとめて死んじゃえるから‼？
「というわけで、残念ながらデュエルは引き分けな」
「だ、大地君の負けず嫌い～～～‼？」
「へへっ‼？ああ、俺は負けず嫌いなんだ。次は絶対に負けないぜ‼？決戦融合―ファイナルフュージョン‼？」
そう大地君が宣言するとスターヴヴェノムとダークガイアの間に渦ができ、私達も巻き込んで一気に爆発した。
遊花　ＬＰ６００→０　（―３９３００）

大地　ＬＰ３２５０→０　（―３６６５０）

ーーーーーーー

あまりの出来事に会場自体が騒然としている。
そんなフィールドの中央で、あまりの展開と立体映像の演出に驚ぎ、仰向けに倒れていた私はいち早く立ち上がると同じように起き上がろうとした大地君に駆け寄った。
「も～大地君!!?納得行かないよ!!?絶対に勝ったと思ったのに!!?爆発オチなんて最低だよ!!?」
「ははっ、いや～凄い爆発だったよな。まさかあんな爆発になるなんて思いもしなかったぜ。いつもはダメージダイエットとか使ってから使ってるし、あそこまで攻撃力が上がらないからああはならないしな」
「そういう問題じゃないよ～!!?」
くっ、悔しい!!?
絶対、ぜーったい勝ったと思ったのに!!?
こんなに悔しいのも師匠に負けた時以来だよ、本当にもう!!?
「それでさ、遊花に教えてる人ってすぐに会えるのか？」
「えっ？うーん、師匠は入院中だし、闇先パイは忙しいだろうしなー今度、『Ｎａｔｕｒａｌ』ってカードショップで大会を開く時には絶対に来れるんだけど……」
「大会!?それって俺も参加してもいいのか!?」
「えっ？まあ、いいかな。私が連れていく人は決めていいって言ってたし……」
「よっしゃ、サンキュー遊花!!?」
そういって私の前ではしゃぐ大地君を見ると、少し不思議な感じがする。
多分、師匠から見た私ってこんな感じなんだよね？
うっ……少し恥ずかしくなってきた。
師匠、呆れたりしてないよね？

大丈夫……だよね？

「それじゃあ、その『Ｎａｔｕｒａｌ』って店を教えてくれよ。どうせだからそこでさっきの決着をつけようぜ‼？」

「むっ‼？それは望むところだよ‼？絶対に今度は私が勝つからね‼？」

「いーや、俺が勝つね。今日はこれで試験終わりなんだろ？なら、さっさと行こうぜ‼？」

「あ、待ってよ‼？というか、大地君場所分からないでしょ‼？」

そういって走り去っていく大地君を慌てて追いかける。

この子には負けたくないって気持ち……これが、ライバルって奴なのかな？

うーん、わかんないや。

第２０話　過去へと続く篝火

☆

「今頃、遊花は退学をかけて期末試験中か」
「心配？」
「いや、遊花なら大丈夫だろ。というか、闇。なんでお前はこんな朝っぱらから俺の病室に入り浸ってるんだ？」
「今日はオフ」
「オフならなんかやりたいこととかあるだろ？」
「ん、だからやりたいことをやってる。遊騎とお話、楽しい。大会のこと、確認しておくのも大事だし」
「……お前は本当に相変わらずだな」
遊花の為に大会を開くと約束してから１０日。
俺は自分の病室で遊花のための大会について考えている。
といっても、俺に大会で出来るのは遊花が呼ぶ参加者以外の参加者で誰を呼べるかを考えるぐらいが関の山で、主に考えているのは大会中に遊花が落ち着いて、楽しくデュエルするにはどういう風にしてやればいいのかっていうことになるのだが。
それがすぐに思い浮かぶのならば苦労するわけもなく、とりあえず思いついたことを片っ端から書き出しては闇に相談に乗ってもらっていた。
そして、今日は朝っぱらからオフだと病室に乗り込んできた闇の話相手をしながら、遊花が今どういう状況なのか、報告を受けていたところだ。
デュエルアカデミアでもまともにデュエルが出来る状況ではなかったことは分かっていたが、まさか退学なんて話が出るほど酷い状況だとは正直思っていなかった。
しかし、遊花なら大丈夫だろうという確かな確信がある。
まだ出会ってから２週間程しか経っていないが、その２週間でも、

遊花は見違える程成長した。
　デュエルをすること自体を怖がっていた少女が、今やどんな相手だろうと怯むことなくデュエルを行い、それが闇のような世界ランキング４位の人間にすら認められるような決闘者になっているのだ。
　闇から聞いた話だと、召喚方法は１つを除き使いこなせるようになってきているらしく、その召喚方法も完全に使いこなせるようになるのは時間の問題だろうという話だったし、早々退学にされそうなデュエルをするとは思ってもいなかった。
　というより、全ての召喚方法を使いこなせることが知られ、それでも遊花を学年最下位だからと追い出してしまえば、今のデュエルアカデミアは全ての召喚方法が使える決闘者は当たり前のようにいて、全ての召喚方法を使うぐらいでは特に面白味もない生徒なんだと、周りにアピールすることになり、無駄にデュエルアカデミアで現在学んでいる生徒のハードルを上げてしまうだけだ。
　それこそ酷というものだろう。
「というか、遊花のことで心配なことがあるとすれば本人が全ての召喚方法を使えることがどれだけ普通じゃないことなのかをちゃんと分かってるかどうかなんだよな」
「？普通じゃないの？」
「……教えた本人がこれだもんな……普通なら出来たとしてもあまりやらないだろ。そりゃあ無理してやろうと思えばどんなデッキでも可能だが、どれかの召喚方法に特化した方が戦いやすいんだし。やるのは本当にそういう複数の召喚方法を根底に置いてるデッキだけだ。それに比べて遊花のクリボーデッキはどれかの召喚方法に特化しているわけじゃないからこそ、やろうとさえ思えばどんな召喚方法でも出来るっていうだけだしな」
　どの召喚方法にも全く染まっていないからこそ出来る芸当。
　一体あの弟子はどこまで進んでいくのか、心配する一方でやっぱり期待してしまうのも師というものなのか。
「まあ、それも心配するだけ無駄か。もう始まってるならなるようにしかならないしな。遊花も今更他人の目なんか気にしないだろうし、

多少他人の目があったからって今のアイツの意思が折れるとは思えないからな。正直、あの意思の強さだけは俺でも勝てん」
「ん、私も無理。あの不屈の意思だけはどうしようもない。ウイルスで完全に動きを縛っても折れなかった子だから」
闇と２人でうんうんと頷き合う。
そんな時、病室の扉がノックされる音が聞こえた。
俺と闇は思わず首を傾げる。
回診の時間は終わったし、遊花達はデュエルアカデミアに行ってるこの時間に俺を訪ねてくる人がいるとは思えないのだが……
ベッドから動けない俺の代わりに闇が病室の扉を開ける。
そこにいたのは茶髪でセミロングの仏頂面をした男性。
その細められた目からは何処か生真面目な雰囲気を醸し出している。
その男性を見て俺が驚いて目を見開くと、男性はその仏頂面を柔らかい笑顔に変えた。
「ふっ、久しぶりだな、結束」
「不知火さん⁉？どうしてここに⁉？」
突然病室に訪れた男性に、俺は驚愕の声を上げた。
不知火　炎（しらぬい　ほむら）。
闇と同じプロチーム『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』でダイヤのスートを与えられているメンバーであり、俺の元チームメイト。
俺の両親が亡くなった日に『Ｎａｔｕｒａｌ』で行なっていた大会の最後の参加者だった年上の男性だ。
少し無愛想で冷たい印象を受けるが、実際はとても優しく、俺が一番辛かった時期にも何かと気にかけてくれていたし、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』を結成する際にも一も二もなく引き受けてくれた俺が最も尊敬している先輩だ。
不知火さんを見て、闇も少し驚いた表情で首を傾げる。
「炎、今日の試合は？」
「ああ、どうやら運営側の不手際があったみたいで少し時間が出来てな。会場もここの近くだったから、それならば少し様子を見にくるか

と足を運んでみた。冬城はどうしてここに？」
「遊騎とお話しにきた」
「そうか。お前達は昔から仲が良かったからな。だが、結束に迷惑がかかることはするなよ？」
「無論」
　そんなやり取りをすると、不知火さんは俺のベッドの近くにあった椅子に座った。
「本当に、久しぶりだな結束。冬城から話は聞いている。弟子を取ったと……お前が間接的にとはいえデュエルの世界に戻ってこれたこと、嬉しく思う。お前が弟子の為に開くという大会には、俺も喜んで参加させてもらおう」
「あ、ありがとうございます‼？」
　思わず頭を下げる俺を見て、闇は呆れたような目線を俺に向ける。
「相変わらず、遊騎は炎の前だと固い」
「お前が砕けすぎなんだよ……不知火さんは年上なんだぞ？」
「それなら社長も年上。でも、遊騎は社長を呼び捨てにしてる」
「アイツは普段の態度から全然尊敬出来ないからいいんだよ……チームにいた時も書類仕事とかでよく泣きついて来たし。それに、最初は敬語を使ってたけど、アイツ嫌がるし……」
「その態度も結束相手だからやっていたのだと思うがな。今の奴を見たら、結束も驚くだろう」
「……まあ、アイツには悪いことをしたと思ってますよ。ほぼ俺の為にチームを作ってくれたって言うのに、その俺はプロリーグから追放されて迷惑をかけてますから」
「……勘違いしているようだが、俺達はお前がプロリーグから追放されたことは迷惑だと思っていない。急にいなくなったことに関して色々と言いたいことがあるがな」
「……すいません」
　不知火さんの言葉に俺は素直に謝る。
　すると、不知火さんも苦笑を浮かべながら俺の肩を叩いた。
「何、だからといってお前がなんでそうしたのかも理解しているつも

りだ。次に似たようなことがあれば気をつけてくれればいい。お前はもっと人を頼れ」
「……次、あるんですかね？」
「その次を作る為に、俺達は戦っているんだ。無論、お前ともう1度共に戦うためにな」
そういう不知火さんの表情は真剣そのものだ。
戦っているというのは、前に闇が話していた今のプロリーグとは別のプロリーグを作るという話だろう。
俺の為にそこまでしてくれるのは嬉しいのだが、その為に他の誰かが割りを食うというのは違うと思う。
それが顔に出ていたのか、不知火さんも苦笑を浮かべながらも、真面目な声で口を開く。
「お前がそれを望んでいないことは分かっている。お前は優しい奴だからな……」
「……」
「だが、その優しさによって今のお前の現状があるのも事実だ。だから、その優しさを利用されるな。正直に言って、今のプロリーグの根本に関わっている奴らは信用できない。お前の件も色々と調べてみたが、不可解な点があまりにも多すぎる」
「不可解な点……ですか？」
俺がそう尋ねると不知火さんは真剣な表情で頷く。
「ああ。まずお前が見つけた対戦相手のデッキだが、見つかる場所があまりにもおかしい。お前の対戦相手だった人間の控え室だが、その場所はお前の控え室があったエリアとは全く反対のエリアにあった。意図的にお前の対戦相手がお前の控え室があったエリアに行ったか、誰かが持ち出さなければあんな場所に落ちているわけがない」
「っ⁉？じゃあ俺のあの時の対戦相手がわざと俺の控え室の近くに置いて行ったって言うんですか⁉？」
「いや、その可能性は低いだろう。あの日の大会の日程を調べてみたがあの大会はかなり試合の密度が濃かった。あの規模の会場で反対エリアの控え室にわざわざ仕掛けに行ったらまず試合自体に間に合

わないし、その姿を見られてバレるだろう」
　確かに、あの時デッキを届けに会場に向かったら既に対戦相手の人はデッキがないということで大会運営のスタッフのところにいた。
　俺の後に来たのであればおかしくないが、俺よりも前に来ているのであれば時間的に無理があるだろう。
　俺が盗んだという疑いが拭えなかったのも、俺の方が後に会場に来たからというのもあるのかも知れない。
「次に警備員の話だな。あの時間帯、何故かお前の控え室の近くにだけ警備員がいなかった上に、その近くのエリアが一時封鎖されてたらしい」
「えっ、警備員？というか、そんなのどうやって調べたんですか？」
「まあ色々なところで聞き込んでな。というより、分からないか？警備員が普通にいたとすれば、落ちているデッキケースなんてものはその警備員が届けているだろう？だが、実際に見つけて届けたのはお前だ。お前が発見できたような物を真っ当に仕事をしている警備員が見落とすとは考えにくい。つまり、その時にその場には警備員がいなかったか、いたとしてわざと見逃したのか、はたまたその警備員がその場にいた時にはデッキケースがまだなかったか。考えられるのはこんなところだろう」
　そう言われて思い返してみれば、確かに控え室から会場に向かう時には誰にも会わなかった気がする。
　いくら準々決勝だからといえ、あそこまで人がいなくなることなんてありえるのか？
「まあ話していけば他にも色々とあるんだが、１番の理由はあまりにも処分の決定が早過ぎる上に問答無用の強制的なものだったということだな。大した聞き取りもせずにその場での出場停止、その上お前の除名が決まったのも僅か１週間だ。その間にお前への聞き取りがなかったことも踏まえて全く腑に落ちん。まるで最初からお前を除名することが決まってたようにしか俺には思えん」
「……誰かが俺を邪魔に思ったってことですか？」
「当時、ウチのエースは間違いなくお前だったからな。結成から僅か

２年で瞬く間に世界ランキング２位を掻っ攫ったチームのエースだ。疎まれる理由は色々あっただろう。そしてもし本当にそうなら、お前を邪魔に思った相手は運営にも繋がっているような人間だってことだ。おまけにそれだけ運営を動かせるぐらいの、な」
「……」
不知火さんが語る言葉に俺は何も言えなくなる。
確かに思い返してみれば不自然なことばかりだ。
俺を邪魔に思う人間の働きは、確かにあったかも知れない。
だけど……
「それでも……俺はプロリーグを潰すようなことは、闇と不知火さん達にやって欲しくないですよ」
「遊騎……」
「確かに、思うところがないわけじゃないですよ？それでも、俺の為にプロ決闘者として今精一杯デュエルをしている人が困るのは、俺も認められない。そんなこと、俺を助けてくれた人達にやって欲しくない。そういう困っている人を助けようとした人達だったからこそ、俺は救われることが出来たんだから」
俺の言葉に闇と不知火さんが驚いたように目を見開く。
正直、本音を話すのは少し照れくさい。
でも、こうして俺を救ってくれた人達には知っておいて貰いたい。
そんな貴方達がいたからこそ、俺は救われることが出来たのだと。
「大丈夫です。今のプロリーグだって、きっとこれから変わりますよ。俺の弟子が、次の世代の奴らがきっと変えていってくれます。アイツは、諦めが悪いですから。俺の評価を変えて『Ｎａｔｕｒａｌ』を立て直すまで、絶対に諦めないって、宣言してましたからね」
「……弟子のことを信頼してるんだな」
「弟子の可能性を信じてやってこその師匠でしょ？俺は遊花を、アイツが望むべき場所まで導きます。これが俺の仕事です。大切な人達を失い、優しい人達に救って貰った俺が、今やらなければならない、自分の人生を懸ける価値のある仕事です」
「……うん、そうだね。遊花は信頼出来る。私を相手にしても最後

まで諦めなかった、あの子なら」
「……そうか。お前達の弟子という奴により興味が出て来たよ。だが、プロリーグの奴らを信用しないのは変わらない。俺は俺なりに色々調べる。お前らが未来に目を向けるなら、俺は過去に目を向けよう。それも、お前達を守るための、年上としての俺の仕事だ」
　そういうと不知火さんは椅子から立ち上がる。
「そろそろ会場に戻らないといけないからこれで失礼する。今日は久しぶりに話が出来てよかった。次に会うのは大会の時になるかも知れないが……お前とまた会えるのを楽しみにしている」
「不知火さん……無理だけはしないでくださいよ？」
「分かっている。なに、俺は俺のデッキと一緒でしぶといからな。成し遂げるまでは、何度でも蘇ってみせるさ。冬城、結束のことは頼んだぞ？」
「ん、炎も頑張って」
「ああ、今日も勝ってくるさ。俺も『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』だからな」
　そういうと不知火さんは病室から出て行った。
　不知火さんを見送り、俺は側にいた闇に向かって口を開く。
「俺って、本当に沢山の人に思われてんだな。あんなに沢山のことを調べて貰ってさ」
「ん、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』は皆遊騎のこと大好きだから。だから、皆遊騎が戻って来る日を待ってるんだよ」
「……もっとちゃんと向き合わないといけないよな、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』とも」
「私は、遊騎がいるなら何処でもいい。皆も、きっとそう思ってるよ。私達は、あの頃から変わってない。『Ｎａｔｕｒａｌ』で皆でデュエルしてたあの頃から……ずっと、遊騎が抗う姿を見てたから」
「……遊花といい、俺には勿体ない人達ばかりだよ、本当にさ」
　そう言いながら俺は病室の窓の外に目をやる。
　俺も、進まないといけないよな。
　遊花の為にも……俺自身の為にも。

ーーーーーーー

○

「サクリファイスでミセスレディエントを攻撃‼？イリュージョンマグネットストームマキシマム‼？」
「リバースカードオープン‼？罠発動‼？立ちはだかる強敵‼？相手の攻撃宣言時に自分フィールド上の表側表示モンスター１体を選択し、発動ターン相手は選択したモンスターしか攻撃対象にできず、全ての表側攻撃表示モンスターで選択したモンスターを攻撃しなければならない‼？対象にするのは磁石の戦士マグネットバルキリオンだ‼？」
「でも、サクリファイスは攻撃力４０００‼？磁石の戦士マグネットバルキリオンの守備力は４３５０‼？サクリファイスはこのカードの効果でモンスターを装備したこのカードの戦闘で自分が戦闘ダメージを受けた時は、相手も同じ数値分の効果ダメージを受けるようになるから反射ダメージで私の勝ちだよ‼？」
「ああ、だから遊花も道連れだ‼？リバースカードオープン‼？罠発動‼？仁王立ち‼？フィールドの表側表示モンスター１体を対象にそのモンスターの守備力は倍になり、ターン終了時にその守備力は０になる‼？対象は磁石の戦士マグネットバルキリオンだ‼？」
「ええっ‼？」

磁石の戦士マグネットバルキリオン
ＤＥＦ４３５０→８７００

「さあ、反射ダメージ３７００を一緒に受けて貰うぜ‼？」
「もう～‼？どれだけ負けず嫌いなの～‼？」

遊花　ＬＰ１６００→０

大地　　ＬＰ２００→０

「また引き分け。こうなると逆にすごい」
「今何回目だったかしら……御子神は覚えてる？」
「４回目。サクリファイス２回にファイナルフュージョン２回」
「つまり試験を入れて５回目ね。九石が負けず嫌いなのもあるけど、いつになったら決着がつくのかしら？」
「ははは、これはまた遊花君は面白いお友達を連れてきたものだね」
「面白いって言えるのかしら、アレって」
　カードショップ『Ｎａｔｕｒａｌ』の一角で引き分けばかりを続ける遊花と大地を眺めながら、桜は霊華と島とそんな会話をしていた。
　期末試験が終わり、遊花と一緒に帰ろうとした桜は遊花を引っ張りながら現れた大地と、そんな遊花に誘われて追いかけてきた霊華と一緒に『Ｎａｔｕｒａｌ』に連れてこられていた。
　そして連れてきた本人達は試験での決着をつける為に早々にデュエルをはじめてしまい、結果手持ち無沙汰になってしまったのでそのデュエルを観戦しながら霊華や島と話していたのだ。
「ああ、面白いとも。お互いに勝つ為に全力でデュエルし、その結果いつも引き分けを引き寄せているのだからね」
「まあ、さっきはどう頑張っても負ける状況だったから遊花からサクリファイスで自爆特攻をかけたものね」
「あの２人からはお互いに似た波動を感じるわ。きっとその波動があの結果を導いているのね」
「……相変わらず御子神の言ってることはよく分からないわ」
「ははは、それにしてもこんな光景、いつ以来だろうね。もう随分見ていない気がするよ。遊騎君がいた頃はよく見ていたけどね」
　そういって懐かしそうに目を閉じる島に桜は興味本意からそのことを尋ねた。
「結束がいた頃は違ったの？」
「まあ人数はあまり変わらないけどね。前に桜君には話しただろうけど、ここは『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の子達がよく来ていたからね。

特に遊騎君と闇君は、今の遊花君達のように毎日デュエルをして、それを他のメンバーがよく眺めていたものさ」
「プロチーム『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』が結成されたお店。ここからは面白い波動を沢山感じるわ。ここは本当に素敵な場所なのね」
「ははは、霊華君のような子にそう言われると嬉しいね。だからこそ、今の現状は少しだけ寂しいよ。あの子達のいた場所には、誰もいなくなってしまったからね」
　そういって寂しそうに笑う島を見て、桜は何とも言えない気持ちになる。
　なんとなく気まずい気分になっていると島はなんてことないように笑う。
「桜君が気まずく感じる必要はないさ。確かに、今はあの光景は見れなくなってしまったが、今日こうして、新しい光景を見せて貰えているからね。やはり、遊花君は遊騎君に似ているよ。その生き方でこうして周りの人を惹きつけていくところとかね」
「も～いつになったら決着が……あれ？島さん⁉？」
　そんなことを話していると遊花の方から島に向けて声がかかる。
　島が遊花の方を見ると遊花の手には1枚のカード。
　そのカードから溢れ出ている闇とそれを手にしても平然としている遊花。
　島は思った。
　またか、と。
「こんなところにカードが落ちてますよ？」
「遊花が持っているカードから面白い波動を感じるわ」
「アンタは何言ってるのよ？どう見てもただのカードじゃない」
「……遊花君は本当にそういうカードを惹きつけているんだね。あまり触らない方がいいものなんだが……」
「えっ⁉？またそんなにダメなカードだったんですか⁉？弁償ですか⁉？」
「マジで⁉？そんなにレアなカードなのか、それ⁉？」
　そういってカードを覗き込もうとする大地と慌てている遊花。

それを見て島も思わず苦笑を浮かべる。
「いやいや、遊花君なら別に構わないよ。なんなら遊花が持っていってくれても構わない。その子もアンチホープのように、少し扱いに困っていたカードだからね」
「島さん……なんでそんなカードが店の中に落ちてるのよ？」
「ははは、案外自分から逃げ出してるのかもしれないよ？」
「そんなわけないでしょ‼？ちゃんとカードを管理はした方がいいわよ。カードショップなんだから……」
そういって呆れて声をかけてくる桜に、島も苦笑いで返す。
そんな2人を余所目にカードを覗き込んでいた遊花は、しばらく考えてから申し訳なさそうに島を見た。
「あの、それならこのカードいただいてもいいですか？勿論お金は払いますから‼？」
「いやいや、お代はいらないよ。そのカード、気に入ってくれたのかい？」
「その……なんて言えばいいのか分からないんですけど、アンチホープの時と同じ感覚がしたんです。この子も、私と繋がってる気がして……一緒に戦いたいって言ってる気がするんです」
「……遊花まで変なことを言い出したわね……類は友を呼ぶって奴かしら？」
「？なんで私を見るの？それにそれは桜も同じという意味じゃないかしら？」
「私はアンタ達と比べれば常識人よ‼？」
隣で騒ぎ立てる桜を見て、島は笑うと優しい表情で遊花を見た。
「ははは。ともかく、使いたいのなら使ってあげなさい。その子はきっと、君を待っていたのだからね」
「‼？はい‼？ありがとうございます‼？」
「なんだ？そのカード、遊花のデッキに入れるのか？」
「うん‼？だけど、ちょっと構築も変えないといけないかな？この子を活かせるようにしてあげないと」
「うっし‼？なら、デュエルは1度止めてカードを一緒に探そうぜ‼

？俺も手伝うからさ‼？」
「うん‼？ありがとう、大地君‼？」
そういってストレージやショーケースからカードを探し始める遊花と大地を見て、島は嬉しそうに笑った。
「いやはや、遊花君は本当にいい出会いをしたんだね」
「……そうね、今日のところは遊花はいい出会いをしたと思うわ」
「桜？」
島の言葉に、少し顔を強張らせる桜に霊華は首を傾げる。
そんな霊華に、桜は苦々しい表情で口を開く。
「霊華だって分かってると思うけど、大地も霊華も……癪だけど空閑の奴も、トップ１０の中では遊花のことをあまり気にしてない友好的な部類だわ。だけど……残りの奴らは全員が友好的ってわけじゃない。それどころか、悪意の塊のような奴が残ってる」
「……」
桜の言葉に、霊華も思うところがあるのか口を閉じる。
自分と同じぐらい強いということで一括りにされている分、霊華だって同じトップ１０のメンバーのことは耳にしている。
その中に、桜が悪意の塊とまで呼ぶ人間のことも。
「遊花は明るくなった……ううん、違うわね。結束と会ってから、あの子は元の自分に戻ることが出来たの。でも、そいつらとデュエルすることになった時……あの子が傷つかないか、またあの頃の遊花に戻ってしまわないか……それが心配なの。今日のデュエルが、楽しく終わっただけに、ね」
そういって暗い顔をする桜の肩を霊華は優しく叩いた。
「大丈夫」
「御子神？」
「今日デュエルをして遊花のことはよく分かったわ。あの子は強い。悪意なんかでは決して屈しない程に」
「でも……」
「不安なら、私達が支えてあげればいいだけ。あの子は沢山のものに支えられて、私達と戦う場所に立った。なら、今度も同じように支え

てあげればいい。私もあの子を支えるわ。あの子からはそういう波動が出ているの。周りの人を惹きつける波動を」
「……最後で台無しよ、途中まではいいこと言ってたのに……でも、まあそうよね。支えてあげれば、いいのよね」
「ええ」
頷き合う桜と霊華に遊花と大地が声をかけながら手を振る。
「桜ちゃん‼?霊華さん‼?少しデッキ作るの手伝ってくれないかな?」
「桜と霊華も一緒に探さないか?面白そうなカード、いっぱいあるぜ‼?」
そんな2人を見て、桜と霊華は顔を見合わせてくすりと笑うと2人の方に歩いていく。
そんな4人の姿を見て、島は嬉しそうに呟いた。
「本当に……いつみてもいい光景だよ。若者達が未来に進んでいく姿というのは、ね」

第２１話　蠢く悪意

★

「残念ながらアンタには難題は解けなかったみたいね。じゃ、これで終わりよ‼？バトル‼？雷撃壊獣サンダーザキングでダイレクトアタック‼？グラビティレイ‼？」
「うわぁぁぁ‼？」
「おお‼？桜の奴、派手にやってるな‼？」
「桜ちゃん、いつも容赦ないから」
「彼もヘルテンペストを受けてよく耐えた方だと思う」
期末試験２日目。
自分のデュエルの順番がまだ回ってきていない私は大地君と霊華さんと一緒に、桜ちゃんのデュエルを観戦していた。
といっても、桜ちゃんが後攻１ターン目に妨げられた壊獣の眠りからドゴランとサンダーザキングを呼び出し、ジェスターコンフィで自爆特効を仕掛けてヘルテンペストを決め、そのままサンダーザキングを処理することが出来ずに攻撃をされ続ける様を見てただけなんだけど……相変わらず容赦ないなぁ、桜ちゃんは。
「桜のデュエルは派手だからすっげーワクワクするんだよな‼？」
「派手なデュエルであることは認めるわ。受ける側としては堪ったものじゃないけど」
「因みに２人だったらどうやって桜ちゃんと戦うの？」
「俺はマグネットリバースでマグネットバルキリオンを出して攻撃力で超える」
「私はフィールドにモンスターが残らないから壊獣を出される心配は基本的にない。後はヘルテンペストの予兆が見えた時にＰＳＹフレームで使わせないようにする。そうじゃなくても除外を利用したギミックも入ってるからその除外を活かして戦うだけ」
「へぇ～やっぱり２人共対処できるんだ」

「遊花はどうするんだ？」
「うーん、虹クリボーかクリボールで自爆特効をさせないぐらいかな？」
「遊花のデッキは遊花自身を守るための防御よりだものね」
「そう考えると、遊花と桜って真逆だよな。防御特化の遊花に攻撃特化の桜って感じで」
「あはは、確かにそうかもね」
桜ちゃんとデュエルするのは、正直私のデッキでは分が悪い。
私のデッキはクリボー達の防御能力でライフを繋いでから逆転していくデッキだけど、桜ちゃんのヘルテンペストはその防御能力を持つモンスター自体をデッキから消してしまう。
おまけに私のクリボー達は攻撃力が低いけど、桜ちゃんのデッキは高い攻撃力を誇る壊獣達がいっぱいいる。
攻撃力対決ではどうしてもこちらが攻めれない内に負けてしまうのだ。
それでも、最近は色々な召喚方法を覚えたお陰か少しは勝負になるようになってきたけど、桜ちゃんに対する勝率は1割ぐらいしかない。
うぅ～桜ちゃんとデュエルする時、どうするかも考えておかないとな～
そんなことを考えていると、いつの間にか後ろの方から桜ちゃんが伸びをしながらこちらにやってきた。
「ふー終わった終わった。手応えがないわね、全く」
「あ、桜ちゃん、お疲れ様‼？」
「桜、お疲れ様」
「ありがと、遊花、御子神」
「やっぱり桜のデュエルってすげー派手だよな。次は俺とやろうぜ‼？」
「今は試験中よ？出来る時間なんてあるわけないじゃない」
「ちぇっ、じゃあ試験が終わったらどうだ？」
「はいはい、考えといてあげるわ」

そういいながらぱたぱたと手を振る桜ちゃん。
それ、善処するって奴だよね？
後で絶対やらないパターンの奴だよね？
『第３学年、出席番号９８番、栗原遊花さん。至急第３フィールドへお越しください』
「あ、私の番だね」
「お、次は遊花の番か‼？今日はどんなデュエルを見せてくれるか、楽しみにしてるぜ‼？」
「私の時と同じ、どんな状況でも決して諦めずに楽しんで頑張ってくるといいわ。そうすれば、貴方のカード達は貴方を助けてくれるわ」
「うん‼？今日も楽しんで頑張ってくるね‼？」
「……遊花」
「？どうしたの、桜ちゃん？」
大地君と霊華さんの応援に笑顔で答えていると、桜ちゃんがどこか心配そうな顔で声をかけてきた。
「その……相手に何か言われても気にしなくていいんだからね？遊花は遊花らしくいればいいんだから」
「？よく分からないけど、いつも通り頑張ってくるね」
「ええ、それでいいわ」
桜ちゃんの言葉に首を傾げながらも駆け足でフィールドに移動する。
そこで待っていたのは黒髪を坊主にした少年。
その少年は私を見ると不機嫌そうな表情を浮かべた。
「やっときたのかよ。雑魚の癖に僕より遅れてくるなんて生意気な奴だな」
「えっと、ごめんなさい？」
「ハッ、謝るぐらいならさっさと負けてくれよ。なんで学年トップ１０に入ってる僕が学年最下位の雑魚決闘者なんかとデュエルしなきゃいけないんだ」
そういって不機嫌そうに少年は表情を歪ませる。
まあ、普通に考えたらいきなり学年最下位の人とデュエルしろって

言われても、強い人であればある程納得できないよね。
霊華さんや大地君の反応の方がどちらかというと変わっていた方なんだろう。
自分の言葉に特に反応を見せない私に苛立ったのか、少年は舌打ちしながらも嗜虐的な笑みを浮かべた。
「チッ……まあいいや。お前、この試験の結果で退学が決まるんだろう？なら、学年トップ１０のこの僕、不死川　王我（しなずがわおうが）が君に引導を渡してあげるよ‼？嬉しいだろ？」
「うーん、退学するのは流石に嫌ですね。まだ、やりたいことも学びたいこともありますから」
「はあ？学年最下位の雑魚決闘者が僕に勝つつもりなのか？」
「はい。私は負けるつもりでデュエルしたことはありません」
私の返事に不死川君は余計に不機嫌そうな顔をしながらデュエルディスクを起動する。
それを見て、私も自分のデュエルディスクを起動して構える。
確かに、私は学年最下位だ。
でも、やっぱり負けるつもりはない。
私はまだここで学びたいことがある。
一緒に過ごしたい人達もいる。
だから、誰になんと言われようと退学になんてなるつもりはない。
「チッ、雑魚決闘者が粋がりやがって‼？なら、圧倒的な力で叩き潰してやる‼？」
「私はまだここにいたいんです。だから、負けません‼？」
『決闘‼？』

遊花　ＬＰ８０００
王我　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は僕だ。モンスターをセット。カードを１枚伏せてターンエン

ド」

遊花　ＬＰ８０００　手札５
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　ー
ーー??ーー
ーー▲ーー　ー
王我　ＬＰ８０００　手札３

セットモンスターと伏せカードが１枚ずつ。
今までデュエルしてきた人達よりかなり控えめな１ターン目だけど、相手は学年トップ１０、油断は出来ない。
「私のターン、ドロー!!?クリバンデットを召喚」

〈クリバンデッド〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

私の前に現れたのは盗賊のような姿をした黒い毛玉のモンスター。
うん、今日も攻撃したいのは分かってるから大丈夫だよ。
でも、今まで１度もクリバンデットの攻撃って成功したことが無いんだよね……今日は大丈夫かな？
「バトル!!?クリバンデットでセットモンスターを攻撃!!?バンデットクロー!!?」
「セットモンスターはワイトプリンス」

〈ワイトプリンス〉☆１　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ０

姿を見せたのは王子様のような姿をしたガイコツのモンスター。
クリバンデットはその爪でワイトプリンスを引き裂くと、ワイトプ

リンスはバラバラになって崩れ落ちた……えっ⁉？普通に倒せた⁉？
やった⁉？やったね、クリバンデット⁉？
ようやく攻撃が成功したよ⁉？
そんな思いでクリバンデットを見ると、クリバンデットははしゃいだように跳ねまわり、それから私に抱きつくように擦り寄ってくる。
うんうん、嬉しいよね⁉？
やっと攻撃が成功したもん⁉？
そんな私を、不死川君は鼻で笑う。
「ハッ、この程度で喜ぶなんて流石は最底辺の雑魚決闘者だ⁉？墓地に送られたワイトプリンスの効果発動⁉？このカードが墓地に送られた場合、デッキからワイトとワイト夫人1体ずつを手札・デッキから墓地に送る⁉？僕はデッキからワイトとワイト夫人を墓地へ送る⁉？」
そういって不死川君はデッキから2枚のガイコツのカードを墓地に送った。
ワイトという名前には聞き覚えがある。
ステータス自体はかなり低い通常モンスターだが、墓地にそのカードが増えると大変なことになると。
「君がやったことは僕が勝利するためのサポートでしかないのさ。そんな雑魚モンスターで少しモンスターを破壊できたぐらいで喜んでる奴なんかが僕に勝てるかよ」
不死川君の言葉にクリバンデットがしょんぼりとした声で鳴く。
ううん、気にしなくてもいいんだよ、クリバンデット。
私はしょんぼりしていたクリバンデットの頭を撫でるように手を動かしながら、不死川君の顔を見る。
「はあ？なんだよ、その不機嫌そうな顔は？」
「……」
「雑魚に雑魚って言ったことが気に障ったの？本当に生意気な奴だな、君は」
確かに、クリバンデットがワイトプリンスを倒したことでこちらは

不利になるのかも知れない。
　でも、クリバンデットがいつも私のために頑張ってくれてるのは分かっている。
　例え立体映像が映し出している演出であろうとも、その頑張りを馬鹿にすることだけは赦せない。
「メインフェイズ2、私はカードを2枚伏せてエンドフェイズにクリバンデットの効果発動!!?このカードをリリースしてデッキの上から5枚めくり、その中から魔法・罠カード1枚を手札に加えて残りを墓地におきます!!?」
　クリバンデットの姿が消え、私はデッキの上から5枚のカードをめくって中から1枚のカードを手札に加える。
　貴方の頑張り、私は無駄にしないからね。
「私は魔法カード、賢者の石―サバティエルを手札に加えてターンエンドです」

遊花　ＬＰ８０００　手札４
ー▲▲ー　ー
ーーーーー
ー　ー
ーーーーー
ー▲ーー　ー
王我　ＬＰ８０００　手札３

「生意気な顔をしちゃって、君なんかじゃ僕には勝てないんだよ!!?僕のターン、ドロー!!?ふっ、このターンで君にトドメを刺してあげるよ!!?手札からワイトプリンスを捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動!!?デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚する!!?来い、僕の切り札!!?数多の屍の上に君臨する骸達の王!!?ワイトキングを特殊召喚!!?」

〈ワイトキング〉☆1　アンデット族　闇属性

ＡＴＫ？

現れたのは身体中から闇を溢れ出させているガイコツのモンスター。

攻撃力が決まってない……なら、その効果は予想がつく。

「まずは墓地に送られたワイトプリンスの効果発動‼？このカードが墓地に送られた場合、デッキからワイトとワイト夫人１体ずつを手札・デッキから墓地に送る‼？そしてワイトキングの永続効果、グールズエクスプロイテイション‼？このカードの攻撃力は墓地に存在するワイトキングとワイトの数×１０００ポイントの数値になる‼？さらに墓地に存在するワイト夫人とワイトプリンスはワイトとして扱うため、その攻撃力は‼？」

ワイトキング
ＡＴＫ？→６０００

「攻撃力６０００……」

「まだだ、まだこの程度じゃ終わらないさ‼？墓地に存在するワイトプリンスの効果発動‼？自分の墓地からワイト２体とこのカードを除外してデッキからワイトキングを特殊召喚する‼？僕は墓地のワイト、ワイト夫人、ワイトプリンスを除外してワイトキングを特殊召喚だ‼？」

〈ワイトキング〉☆１　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ？→３０００

「さらに手札から通常召喚‼？ワイトキング‼？」

〈ワイトキング〉☆１　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ？→３０００

並び立つのは3体のワイトキング。
攻撃力が少し下がったとはいえ、それでも３０００のモンスターが並んでいるのは十分脅威だ。
そして不死川君はこちらを嘲笑うように笑う。
「攻撃力が下がってることに安心したかい？そんなに僕は甘くないんだよ‼？手札からワイトメアの効果を発動‼？このカードを手札から捨てて以下の効果から1つを選択して発動する事ができる‼？ゲームから除外されている自分のワイトまたはワイトメア1体を選択して自分の墓地に戻すか、ゲームから除外されている自分のワイト夫人またはワイトキング1体を選択してフィールド上に特殊召喚することができる‼？僕はワイト夫人を特殊召喚‼？」

〈ワイト夫人〉☆3　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ２２００

ワイトキングの横に現れるのは貴婦人のような姿をしたガイコツのモンスター。
そのモンスターからワイトキングを包むように黒いオーラのようなものが溢れ出す。
「ワイト夫人の永続効果、このカードがフィールドに表側表示で存在する限り、ワイト夫人以外のフィールド上のレベル3以下のアンデット族モンスターは戦闘では破壊されず、魔法・罠カードの効果も受けない‼？」
「っ、耐性の付与……」
伏せカードの1枚は聖なるバリア　―ミラーフォース―だったけど、また使えないか……
「まだだ‼？リバースカードオープン‼？速攻魔法、異次元からの埋葬‼？除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計3枚までそのモンスターを墓地に戻す‼？僕はは除外されているワイトとワイトプリンスを墓地に戻し、再びワイトプリンスの効果が発動‼？さらにデッキからワイトとワイト夫人を墓地に落とす‼？さらに

さっき手札から墓地に送ったワイトメアも効果によりワイトとして扱われる!!?よってワイトキングの攻撃力は!!?」

ワイトキング
ＡＴＫ?→８０００

「攻撃力８０００の耐性持ちモンスターが３体……!!?」
「さあ、さっさと潰れろ雑魚決闘者!!?バトル!!?ワイトキングでダイレクトアタック!!?キングダークネス!!?」
ワイトキングが身体上から溢れ出る闇を拳に集め、私を殴ろうと突撃してくる。
確かに攻撃力も耐性もかなりの脅威だ。
でも、今更そんな単純な攻撃程度でやられる私じゃない!!?
「速攻魔法、クリボーを呼ぶ笛!!?その効果で自分はデッキからクリボーまたはハネクリボー１体を選択し、手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができる!!?私か選ぶのは特殊召喚!!?いつだって、私と共に!!?ハネクリボー!!?」

〈ハネクリボー〉☆１　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

現れるのは天使の羽を持つ私の最高の相棒。
ハネクリボーは私を守るように手を広げる。
「ハッ、そんな雑魚モンスター１体で何が出来るんだよ!!?ワイトキングでハネクリボーを攻撃だ!!?」
ワイトキングは突撃の勢いのままハネクリボーを殴り飛ばし、ハネクリボーが粒子に変わる。
しかし、その粒子は私を守るように私の身体を包み込む。
「ハネクリボーの効果発動!!?プリフィケーション!!?このカードがフィールドから墓地に送られたターン、自分の受ける戦闘ダメージは０になる!!?」

「なに⁉・小賢しい真似をしやがって⁉・だけど、僕には攻撃力が８０００のワイトキングが３体⁉・さらに、ワイト夫人の効果で戦闘破壊されず魔法・罠の効果も受けない⁉・しかも、例えワイト夫人を処理し、ワイトキングを戦闘で破壊出来ても、ワイトキングは戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地のワイトキングまたはワイト１体をゲームから除外する事で特殊召喚することが出来る⁉・君みたいな雑魚決闘者に突破できるわけがない⁉・僕はこれでターンエンドだ⁉・」

遊花　ＬＰ８０００　手札４
ー　ー　ー　ー▲ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー
□○○○ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
王我　ＬＰ８０００　手札３

分かったことがある。
この人は昨日の私のデュエルを見ていない。
最下位の雑魚だと侮って、当たり前に勝てると思っているからこそ、あの耐性だけで耐えられると思っている。
でも……それぐらいじゃ私は止まらない⁉・
「私のターン、ドロー⁉・魔法カード、魔法カード、賢者の石―サバティエル⁉・このカードは自分の墓地にハネクリボーモンスターが存在する場合、ライフポイントを半分払って発動できます」

遊花　ＬＰ８０００→４０００

「そうすることで、デッキから融合魔法カードまたはフュージョン魔法カード１枚を手札に加えることが出来る⁉・　私が手札に加えるのは、融合⁉・」

「ふん、雑魚が一端に融合召喚でもする気か？」
「私は金華猫を召喚‼？」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のようなモンスター。
「金華猫の効果発動‼？召喚した時、墓地に存在するレベル１モンスターを特殊召喚します‼？墓地から戻ってきて、サクリボー‼？」

〈サクリボー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

現れるのはクリボーに似た毛玉のようなモンスター。
サクリボーは何処か怒ってるように興奮し、金華猫もいつもと違って不機嫌そうだ。
君達も怒ってくれてるんだね？
うん、一緒に見返してやろう‼？
「私は魔法カード、融合を発動‼？自分の手札・フィールドから融合モンスターによって決められた融合素材モンスターを墓地に送り、その融合モンスター１体をＥＸデッキから特殊召喚します‼？私が融合するのは、フィールドの金華猫とサクリボー‼？」
「何？」
フィールドに現れた渦の中に金華猫とサクリボーが飛び込んでいく。
「守護霊となりし猫よ、小さき悪魔と交わりて、孤独を壊す力となれ‼？融合召喚‼？閉ざされた世界を溶かす毒龍‼？スターヴヴェノムフュージョンドラゴン‼？」

〈スターヴヴェノムフュージョンドラゴン〉☆８　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ２８００

スターヴヴェノムがフィールドを揺らす程の咆哮を上げる。
貴方も仲間を侮辱されたことを怒ってくれてるんだね。
ありがとう、それじゃあ終わらせよう。
「あんな雑魚モンスターがドラゴンの融合モンスターになるだと⁉？」
「スターヴヴェノムフュージョンドラゴンの効果発動⁉？パワースワローヴェノム⁉？このカードが融合召喚に成功した場合、相手フィールドの特殊召喚されたモンスター１体を選び、その攻撃力分だけこのカードの攻撃力をターン終了時までアップする⁉？対象にするのはワイトキング⁉？」
「何⁉？」

スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
ＡＴＫ２８００→１０８００

スターヴヴェノムの放つ毒の瘴気がワイトキングの身体を溶かし、その力を奪い去っていく。
これで準備は整った⁉？
「攻撃力１０８００だって⁉？だが、それもこのターンだけ⁉？次のターンにワイトキングで攻撃すればライフが半分になった君なんか一撃だ⁉？」
「貴方に次のターンなんてありません⁉？バトル⁉？スターヴヴェノムフュージョンドラゴンでワイトキングを攻撃⁉？そして攻撃宣言時、速攻魔法、決闘融合―バトルフュージョン⁉？自分フィールドの融合モンスターが相手モンスターと戦闘を行う攻撃宣言時に発動⁉？その自分のモンスターの攻撃力はダメージステップ終了時まで、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分アップする⁉？」
「な、なんだって⁉？」

スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
ＡＴＫ１０８００→１８８００

「こ、攻撃力、１８８００だって⁉？」
「これで終わりです⁉？消失のヴェノムストリーム⁉？」
スターヴヴェノムフュージョンドラゴンが放った毒のブレスがワイトキングを一瞬で溶かし、そのまま不死川君を呑み込んだ。
「ば、馬鹿な～⁉？」

不死川　ＬＰ８０００→０

ーーーーーーー

「そんな馬鹿な⁉？この僕が、こんな最底辺の決闘者に負けるなんて⁉？」
デュエルが終わり、膝をついてその場で拳を地面に叩きつけ悔しがる不死川君。
私はそんな不死川君に近づき、これだけは言っておきたかったことをはっきりとした口調で伝えておく。
「私は確かに弱いです。デュエルも、心も、まだまだ弱くて、使っているカードだって、貴方達から見たら取るに足らないようなカードしか、使えていないのかも知れません。それでも……それでもそんなカード達が大好きで、そのカード達と一緒に戦いたいから、一生懸命努力している決闘者だっているんです。貴方のワイトだって、ワイトだけならステータスの低い通常モンスターですが、ワイトキング達と合わされば攻撃力８０００にまで到達出来る程強化されるように、カード自体の組み合わせで色々な可能性があるんです。それを、ただの外見やステータスだけで判断して、雑魚だなんて……言わないでください」
「っ⁉？ふざけるな⁉？何で僕がお前みたいな雑魚に説教されなきゃいけないんだ⁉？」

「きゃっ‼?」
急に立ち上がった不死川君に突き飛ばされ、尻餅をついてしまう。
不死川君は憤怒の形相でこちらを睨みつけてくる。
「お前みたいな最底辺決闘者に負けるなんて何かの間違いだ‼?お前、イカサマしたんだろう⁉?」
「……なんでそうなるんですか……そもそもデュエルディスクを使用している以上、イカサマなんてしようとしてもデュエルディスクは反応しないし、酷かったら警報がなることぐらい、貴方だって知ってるでしょう?」
「うるさいうるさい‼?そうじゃなきゃお前のような奴に僕が負けるなんてあり得ないんだ‼?」
私は思わず呆れた顔で不死川君を見るが、どうしても負けを認められないのか不死川君が摑みかかろうとしてくる。
私はその光景に思わず目を瞑ってしまう。
すると、目の前から何かが吹き飛ばされるような凄い音がした。
いつまで経ってもやってこない衝撃に恐る恐る目を開けると……
「王様気取りのガキ風情が遊花に手を出してんじゃないわよ‼?2度と立ち上がれないように、そのひょろひょろの身体の骨を全部へし折ってやる‼?」
「おま、桜、それ以上は止めとけって‼?」
「見事な飛び蹴りだった。数メートルは吹き飛んだ」
「ちょっ、霊華も止めるの手伝ってくれよ‼?」
そこには今にも暴れだしそうな桜ちゃんを大地君が必死に抑え、少し先の床に転がっている不死川君を霊華さんが眺めているという光景があった。
……どういうことなの?
「えっと……桜ちゃん?」
「っ‼?遊花‼?大丈夫‼?怪我とかない⁉?待ってなさい、今からアイツを成仏させてくるから‼?」
「ちょっと、待って待って‼?やり過ぎ‼?それはやり過ぎだから‼

？」
「ほら、遊花もこう言ってるんだから少しは落ち着けよ」
「アンタは何も思わないの⁉？遊花が傷つけられたって言うのに‼？」
「いや、俺だってイラっとは来たけどさ。お前がやり過ぎて傷つくのは遊花だぜ？だから、落ち着けって、な？」
「桜ちゃん……」
「桜、貴方が遊花を悲しませてたら本末転倒よ」
「うっ……あーもう分かったわよ‼？あの蹴りだけでチャラにしてあげるわ‼？」
桜ちゃんはそういうと憤りを隠せないという風にそっぽを向いた。
……また桜ちゃんに迷惑をかけちゃった。
桜ちゃんは、小さい頃から私が危なくなったらいつも助けてくれる。
でも、そのせいで桜ちゃんが傷付くのは……凄く悲しい。
……本当に、弱いなぁ……私は……身体も……心も。
そう自己嫌悪に陥る私の耳に聞き覚えがない男性の嘲笑の声が聞こえて来た。
「ヒヒヒ、王我の奴、あんな雑魚に負けてやんの‼？おまけに宝月に蹴り飛ばされてるし、本当に笑わせてくれるな～」
「っ……この虫酸が走る喋り方は……」
桜ちゃんが嫌そうな顔を浮かべると声のする方向を向く。
私も釣られてその方向を見ると、そこには眼鏡をかけた茶髪をコーンロウにした男性がいた。
その男性は桜ちゃんを見てニヤニヤしながら近づいてきた。
「やあ、僕に負けた宝月さん。お友達を傷つけられて怒り心頭って感じかな？ヒヒヒ」
「っ……ええ、アンタの顔を見てその気分もさらに最悪になったわよ、神路祇　電二（こうろぎ　でんじ）。そんなことも分からないのなら性根と同じで脳味噌まで腐りきってんじゃないの？」
「ヒヒヒ、酷いな～僕はただ面白そうだからおちょくりに来てあげた

だけなのに。そんな雑魚に負けた王我とお友達を傷つけられて怒り心頭の宝月さんをさぁ」
　苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる桜ちゃんを横目に神路祇と呼ばれたその男性は不死川君の近くに座り込む。
「やっほ～怒れる類人猿みたいな宝月さんに蹴り飛ばされた王我君、生きてる～？」
「っ……神路祇……」
「お、意識あるんだ～ゴリラに蹴り飛ばされたようなものなのに、さっすが～骨の王様は違うね～しぶとさだけなら台所の黒い虫けらと同じぐらいじゃないの～？」
「何しに来た……」
「勿論、王我君を笑いにだよ。あんな雑魚に負けちゃった上に最後は癇癪を起こして手を出そうとするなんて、王我君、ちょっとイケてないんじゃなーい？慢心ばっかりしてるのも王我君の面白いところだけど、それで負けちゃ世話ないよね～」
「っ……コイツ‼？」
「あらやだ、殴りかかってきたりしないでよ？踏み潰したくなっちゃうからさ～ヒヒヒ」
「がっ‼？」
「あ、ごっめーん。もう潰しちゃった。足元に転がってるんだから仕方がないよね～」
　そういって床に転がっている不死川君の身体を踏みつける神路祇君。
　それを見て思わず私は声をあげる。
「あ、あの‼？止めて下さい‼？不死川君、苦しそうです‼？」
「ん～？」
　神路祇君の視線がこちらに向く。
　その視線には色々な感情が込められており、何を考えているかを正確に読み取ることができない。
　ただ、ひとつだけ分かっていることがあるとすれば……その視線に1番込められているのはーーー

「最底辺の虫けら風情が何声をかけて来てんの？踏み潰すよ、君もさ？」
「っ……」
　ーーー何処までも人を見下す、侮蔑の感情であるということだ。
「ま、いいけどね。今は許してあげるよ、栗原　遊花さん。どうせ期末試験が進めばデュエルすることになるんだから」
「……えっ？」
「あら、僕ちゃんのこと知らない？これでも学年トップ１０なのよ、僕ちゃんってさ。さっき言ってたこと、聞こえなかったかな～？僕は君のお友達の宝月さんに圧勝してんのよ、これでも、さ」
　その言葉に桜ちゃんが歯を食い縛る。
　そんな桜ちゃんの様子から分かってしまう。
　彼が言っていることが本当なのだと。
　そして、神路祇君は不死川君の上から足を退けると、私を蔑むような目で見て笑った。
「まあそう言うわけで、その時にはーーー存分に壊して遊んであげるから、待っててね、虫けらさん？ヒヒヒ、ヒハハハハ‼？」
　笑い声を上げながら去っていく神路祇君を、今の私は黙って見送ることしか出来なかった。

第22話　華麗なる出来役

★

「……」
「おい、遊花。大丈夫か？」
「あ……うん」
「……何というか、あまり気にし過ぎない方がいいぜ？別にお前が悪かったわけじゃないんだし」
「……うん、大地君も助けに来てくれてありがとう　」
「いいんだよ。あれは不死川の方が悪かったんだ。デュエルに負けたからって暴力を振るおうだなんて、間違ってる。まあ、桜の方もやり過ぎだとは思うがな」
　あの後、何やら様子がおかしいこと気づいて近づいてきた先生に事情を説明し、不死川君は保健室に連れていかれ、桜ちゃんもやり過ぎということで職員室まで連れて行かれてしまった。
　霊華さんはちょうど自分のデュエルのアナウンスが入ったので、今は他のフィールドにデュエルをしに行っている。
　だから、この場に残っているのは私と大地君だけだ。
「ねぇ、大地君。神路祇君が桜ちゃんに圧勝したって話……本当なのかな？」
「……多分な。桜の反応がおかしかったし、俺も桜が負けるとこってあんまり想像つかないけどな。でも、神路祇が強いって言うのは本当だ。俺も1度負けたことあるしな」
「っ‼？大地君も？」
「なんというか……戦い難いんだよな、神路祇って。相手のターンには攻撃をのらりくらりと躱して、自分のターンになったら急に一転して攻めてくる。態度はいつもあんな感じだし。本気なのか遊んでんのかすら分かんねぇ」
「……」
　大地君が凄く渋い顔をする。

よっぽどその時のデュエルがやり難かったのだろう。
私の時や他の人のデュエルを見る時に、いつも笑顔でいる大地君がこんな表情を浮かべる程に。
「まあ、俺は遊花なら勝てんじゃないかと思うけどな。遊花の防御力は並大抵のもんじゃないし、遊花なら耐えまくって逆転の道を作れるさ」
「……そうかな？」
そういって私の肩をぽんぽんと軽く叩いてくる大地君に、私は暗い表情で返す。
桜ちゃんも……大地君も負けた相手。
そんな人に……私は本当に勝てるのかな？
『第３学年、出席番号９８番、栗原遊花さん。至急第１フィールドへお越しください』
「お、呼ばれたみたいだぜ。頑張って来いよ、遊花」
「あ……うん、頑張る」
アナウンスが聞こえ、私は呼ばれた第１フィールドに移動する。
その移動中も、頭に浮かぶのは先程の光景と、嘲笑うような神路祇君の笑い声。
私よりも強い桜ちゃんや大地君が負けた相手なら、私はどうデュエルすればいいんだろう。
どうすれば、私は……もっと強くなれるのだろう。
そんなことを考えている内にフィールドに到着する。
そこで待っていたのは、黒髪でロングヘアの何処か上品な雰囲気の女性。
その女性は私を見るとにっこりと笑った。
「初めまして、栗原　遊花さん。私は桜糀　紅葉（さくらこうじ　もみじ）と申します。貴方とのデュエル、心待ちにしておりました」
「あ、えっと、なんで、ですか？」
「昨日の遊花さんのデュエル、拝見させて頂きました。その時に見た貴方様の楽しそうにデュエルをするお顔がとても眩しくて、是非、お側で見ることが出来ればと思ったのでございます」

「あぅ、えっと光栄、です？」
そういって穏やかな表情で笑う桜糀さんに、私はなんて返せばいいのか分からなくなる。
そんな私を見て、桜糀さんは柔らかく笑うとデュエルディスクを起動した。
「決闘者同士、デュエルを通してわかり合えることもあるはずです。遊花さん、貴方様のことを、もっと理解したく存じます……ご相手、願えますか？」
「は、はい!!?よろしくお願いします!!?」
『決闘!!?』

遊花　ＬＰ８０００
紅葉　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は貰います!!?私はミスティックパイパーを召喚!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ０

現れたのはフルートのようなものを弾いている男の人。
しかし、その表情はいつもと違い何処か心配そうにこちらを見ていた。
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを１枚ドローします。そしてこの効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル１モンスターだった場合、自分はカードをもう１枚ドローします!!?」
ミスティックパイパーが私を見つめたまま姿を消す。
私はそれにも気付かずにドローカードを確認する。
「私が引いたのはゴーストリックランタン!!?レベル１モンスターな

のでもう1枚ドロー!!?カードを2枚伏せてターンエンドです!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札４
ー▲▲ー　ー
ーーーーー
ー　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
紅葉　ＬＰ８０００　手札５

「私のターン、ドロー……あらあら、私のモンスターも遊花さんとのデュエルを楽しみにしていた見たいですわ。この手札であれば、最初から私の全力を遊花さんにお見せ出来そうですね」
「……えっ？」
「私は花札衛ー松ーを召喚します」

〈花札衛ー松ー〉☆1　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１００

フィールドに現れたのは松の絵が描かれた花札のモンスター。
「花札衛ー松ーの効果を発動します。このカードが召喚に成功した場合、自分はデッキから1枚ドローし、お互いに確認します。それが花札衛モンスター以外だった場合、そのカードを墓地へ送ります」
そう言って桜糀さんがドローしたカードを私に見せる。
「私が引いたのは花札衛ー柳ー。花札衛モンスターなので手札に加えますわ。さらに魔法カード、花積みを発動します。その効果により、デッキから花札衛モンスター3種類を選び好きな順番でデッキの上に置かせて貰います。私はデッキから花札衛ー芒ー、花札衛ー桐ー、花札衛ー桜に幕ーをデッキの上に置かせて貰います。そして手札から花札衛ー松ーをリリースし、花札衛ー松に鶴ーを特殊召喚しますわ」

〈花札衛ー松に鶴ー〉☆1　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００

松の姿が消え、代わりに現れたのは松の絵に鶴が加わったモンスター。
「花札衛ー松に鶴ーの効果を発動します。このカードが特殊召喚に成功した場合、自分はデッキから1枚ドローし、お互いに確認します。それが花札衛モンスターだった場合、そのカードを特殊召喚でき、違う場合は墓地へ送ります」
「!!?桜糀さんのデッキの上は!!?」
「はい、花積みの効果で花札衛モンスターになっていますわ。ドローしたカードは花札衛ー芒ー。花札衛モンスターなので特殊召喚しますわ」

〈花札衛ー芒ー〉☆8　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１００

松に鶴と並ぶように芒の絵が描かれたモンスターが現れる。
「続けて手札から花札衛ー芒ーをリリースし、花札衛ー芒に月ーを特殊召喚しますわ」

〈花札衛ー芒に月ー〉☆8　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００

桜糀さんがデュエルディスクにカードをセットすると、芒の姿が変化し、芒に月の絵が描かれたモンスターに変わる。
「花札衛ー芒に月ーの効果を発動します。このカードも特殊召喚に成功した場合、自分はデッキから1枚ドローし、お互いに確認し、それが花札衛モンスターだった場合、そのカードを特殊召喚でき、違う場合は墓地へ送る効果を持っていますわ」

「⁉?・もしかしてリリースして特殊召喚する花札衛は全部その効果を持ってるんですか⁉?・」
「察しがよろしくて助かりますわ。私がドローしたカードは花札衛ー桐ー、。花札衛モンスターなので特殊召喚しますわ」
〈花札衛ー桐ー〉☆１２　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１００

次に現れたのは桐の花が描かれたモンスター。
「続けて手札から花札衛ー桐ーをリリースし、花札衛（カーディアン）ー桐に鳳凰ーを特殊召喚しますわ」
〈花札衛ー桐に鳳凰ー〉☆１２　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００

桐の姿が変化し桐の花と鳳凰が描かれたモンスターに変わる。
そして姿が変わったということは……
「続けて花札衛ー桐に鳳凰ーの効果を発動します。ドローしたカードはそして手札から花札衛ー桜に幕ーの効果を発動します。手札のこのカードを見せ、自分はデッキから1枚ドローし、お互いに確認します。それが花札衛モンスターだった場合、このカードを特殊召喚し、違う場合はこのカードとドローしたカードを墓地へ送ります」
デッキ操作は終わってるけど、ここまで見てきた限りだと桜糀さんのデッキはほとんどが花札衛で構成されているハズ……ということは……
「ドローしたカードは花札（カーディアン）衛ー柳に小野道風ーよって花札衛ー桜に幕ーは特殊召喚しますわ」
〈花札衛ー桜に幕ー〉☆３　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００

フィールドに現れたのは幕の上に桜が描かれているモンスター。
１ターンで攻撃力２０００のモンスターを４体も出して、おまけに手札はまだ３枚もある。
これは物凄くマズイことになりそうな気がする。
そんな私の予感を肯定するかのように、桜糀さんは手を正面にかざす。
「参ります‼？優雅に彩るサーキット‼？」
「っ、リンク召喚‼？」
桜糀さんの前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はカード名が異なるモンスター２体以上‼？私は、花札衛ー松に鶴ー、花札衛ー芒に月ー、花札衛ー桐に鳳凰ー、花札衛ー桜に幕ーをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？この世の全てを縛る鎖の龍‼？リンク召喚‼？リンク４‼？鎖龍蛇ースカルデッド‼？」
〈鎖龍蛇ースカルデッド〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　地属性
ＡＴＫ２８００　↙？←→↘？
現れたのは身体に鎖を巻きつけた蛇のような顔をした龍のモンスター。
「鎖龍蛇ースカルデッドはこのカードのリンク素材としたモンスターの数によって以下の効果を得ますわ。２体以上でこのカードのリンク先にモンスターが召喚・特殊召喚された場合にそのモンスターの攻撃力・守備力は３００ポイントアップさせ、３体以上で１ターンに１度、自分メインフェイズに手札からモンスター１体を特殊召喚し、４体でこのカードがリンク召喚に成功した時に自分はデッキから４枚ドローし、その後手札を３枚選んで好きな順番でデッキの下に戻しますわ」
「っ、つまり今は全ての効果が使えるんですね……」
「その通りですわ。鎖龍蛇ースカルデッドの効果で私は４枚ドローし、その後手札を３枚デッキの下に戻しますわ。さらに鎖龍蛇ースカ

ルデッドの効果を発動します。1ターンに1度、自分メインフェイズに手札からモンスター1体を特殊召喚しますわ。私は手札から花札衛ー柳ーを特殊召喚しますわ」

〈花札衛ー柳ー〉☆11　戦士族　闇属性
DEF100

現れたのは柳の絵が描かれたモンスター。
「花札衛ー柳ーの効果を発動します。墓地に存在する花札衛モンスター1体をデッキに加えてシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローしますわ。私は墓地の花札衛ー桜に幕ーをデッキに戻して1枚ドローします」
「また手札が増えて……」
「そして自分フィールド上にレベル11以下の花札衛モンスターが存在する場合、手札から花札衛ー桐ーは特殊召喚できますわ。ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は花札衛モンスターしか召喚・特殊召喚できなくなります」

〈花札衛ー桐ー〉☆12　戦士族　闇属性
DEF100

このターン終了時まで花札衛しか出せなくなったということは、ここから先は花札衛だけで十分だということでもあるってことだよね。
「そして再び手札から花札衛ー桜に幕ーの効果を発動します。手札のこのカードを見せ、自分はデッキから1枚ドローし、お互いに確認します。それが花札衛モンスターだった場合、このカードを特殊召喚し、違う場合はこのカードとドローしたカードを墓地へ送ります。ドローしたカードは花札衛ー芒ー。よって花札衛ー桜に幕ーは特殊召喚しますわ」

〈花札衛ー桜に幕ー〉☆3　戦士族　闇属性

ＡＴＫ２０００

「そして自分フィールド上にレベル７以下の花札衛モンスターが存在する場合、手札から花札衛ー芒ーは特殊召喚できますわ。ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は花札衛モンスターしか召喚・特殊召喚できなくなります」

〈花札衛ー芒ー〉☆８　戦士族　闇属性
ＤＥＦ１００

桐に続いて再び芒が姿を現わす。
うう～一体この展開はいつまで続くのだろう？
「鎖龍蛇ースカルデッドの２体以上の効果でこのカードのリンク先にモンスターが召喚・特殊召喚された場合に強制的にそのモンスターの攻撃力・守備力は３００ポイントアップさせますわ」

花札衛ー芒ー
ＤＥＦ１００→４００

「さらに自分フィールド上にレベル１０以下の花札衛モンスターが存在する場合、手札から花札衛ー柳ーは特殊召喚できますわ。ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は花札衛モンスターしか召喚・特殊召喚できなくなりますわ。鎖龍蛇ースカルデッドの効果も合わせて発動しますわ」

〈花札衛ー柳ー〉☆１１　戦士族　闇属性
ＤＥＦ１００→４００

「私は再び花札衛ー柳ーの効果を発動します。墓地に存在する花札衛モンスター１体をデッキに加えてシャッフルし、その後自分はデッキから１枚ドローしますわ。私は墓地の花札衛ー松ーをデッキに戻し

て1枚ドローします。そして手札から花札衛ー柳ーをリリースし、花札衛ー柳に小野道風ーを特殊召喚しますわ」

〈花札衛ー柳に小野道風ー〉☆11　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００

続けて現れたのは柳と人型のモンスターが描かれたモンスター。
そして桜糀さんの動きは止まらない。
「花札衛ー柳に小野道風ーの効果を発動します。ドローしたカードは花札衛ー松ー。花札衛モンスターなので特殊召喚しますわ」

〈花札衛ー松ー〉☆1　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１００

再び松が現れ、桜糀さんのフィールドにはモンスターが5体。
でも、レベルはバラバラだし、それぞれのレベルもかなり高い。
一体あれだけモンスターを展開してどう動くつもりなんだろう。
「チューナモンスター、花札衛ー柳に小野道風ーの効果を発動します。フィールドのこのカードをシンクロ素材にする場合、このカードを含む全てのシンクロ素材モンスターを、レベル2のモンスターとして扱うことができます!!?」
「!!?ということはレベル１０のシンクロ召喚!!?」
「私は、レベル2となった花札衛ー桐ー、花札衛ー柳ー、花札衛ー芒ー、花札衛ー桜に幕ーに、同じくレベル2となったチューナーモンスター、花札衛ー柳に小野道風ーをチューニング!!?」
小野道風が光の輪になり、他の花札衛達が小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から現れるのは刀を持った巨大な戦士。
「四季の力が重なりし時、そこに満ちるは神秘の光!!?シンクロ召喚!!?世界を照らす威光!!?花札衛ー五光ー(カーディアン)!!?」

〈花札衛ー五光ー〉☆１０　戦士族　闇属性
ＡＴＫ５０００→５３００

「攻撃力５０００のシンクロモンスター⁉？」
「驚かれるのはまだ早いですわ。私の動きはまだ終わっていませんもの、魔法カード、ソウルチャージを発動しますわ。自分の墓地に存在するモンスターを任意の数特殊召喚し、自分はこの効果で特殊召喚したモンスターの数ライフを１０００失い、このターンバトルフェイズを行えなくなりますわ。私は花札衛ー松に鶴ー、花札衛ー芒に月ー、花札衛ー柳に小野道風ー、花札衛ー桐に鳳凰ーを特殊召喚し、ライフを４０００失いますわ」

〈花札衛ー松に鶴ー〉☆１　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００

〈花札衛ー芒に月ー〉☆８　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００

〈花札衛ー柳に小野道風ー〉☆１１　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００→２３００

〈花札衛ー桐に鳳凰ー〉☆１２　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００→２３００

紅葉　ＬＰ８０００→４０００

再び現れる花札衛達。
ライフは一気に減ったけど、チューナーがいるということは⁉？
「まずは特殊召喚した花札衛達の効果で特殊召喚に成功した場合、自分はデッキから1枚ドローし、お互いに確認し、それが花札衛モンスターだった場合、そのカードを特殊召喚でき、違う場合は墓地へ送り

ますわ。私は4枚ドロー。ドローしたカードは花札衛ー桜に幕ー、花札衛ー松ー、札再生、花札衛ー萩に猪ー。札再生だけ墓地に送りますが、墓地に送られた札再生の効果が発動します。このカードが花札衛モンスターの効果で墓地へ送られた場合、自分のデッキの上からカードを5枚めくり、その中から魔法・罠カード1枚を選んで手札に加え、残りのカードは好きな順番でデッキの上に戻すことができます」

「っ⁉？ここでまたデッキ操作⁉？」

「私は魔法カード、超こいこいを手札に加え、残りのカードを好きな順番でデッキの上に戻します。そして再び花札衛ー柳に小野道風ーの効果を発動します。フィールドのこのカードをシンクロ素材にする場合、このカードを含む全てのシンクロ素材モンスターを、レベル2のモンスターとして扱うことができます⁉？」

「っ……⁉？」

「私は、レベル2となった花札衛ー桐に鳳凰ー、花札衛ー芒に月ー、花札衛ー松に鶴ーに、同じくレベル2となったチューナーモンスター、花札衛ー柳に小野道風ーをチューニング⁉？」

再び小野道風が光の輪になり、他の花札衛達が小さな星に変わり、光の道になる。

光の道が輝くと、その中から現れたのは小野道風に描かれていた傘を持った和風の戦士。

「四季の力が重なりし時、そこに流れる悲しみの雨⁉？シンクロ召喚⁉？世界を包む涙雨⁉？花札衛ー雨四光ー⁉？」

〈花札衛ー雨四光ー〉☆8　戦士族　闇属性

ＤＥＦ３０００→３３００

「まだ終わりではありません。魔法カード、超こいこいを発動します。自分のデッキの上から3枚めくり、その中から花札衛モンスターを可能な限り召喚条件を無視して特殊召喚します。この効果で特殊召喚したモンスターのレベルは2となり、効果は無効化されます。そして

残りのカードは裏側で除外し、自分は除外したカードの数×１０００のライフを失いますわ」
　重いデメリットだけど、桜糀さんのデッキをさっきからずっと見ているから分かる。
　あのデッキはデッキの中がほとんど花札衛モンスターで出来ている。
　そのうえ、今は先程の札再生によりデッキの上が操作されている。
　だからこそ、デメリットが発動する可能性はない。
「めくられたのは花札衛ー萩に猪ー、花札衛（カーディアン）ー紅葉に鹿ー、チューナーモンスター、花札衛（カーディアン）ー牡丹に蝶ー……全て花札衛なので効果を無効化し、レベルを２にして特殊召喚しますわ」

〈花札衛ー萩に猪ー〉☆７→２　戦士族　闇属性
　ＤＥＦ１０００

〈花札衛ー紅葉に鹿ー〉☆１０→２　戦士族　闇属性
　ＤＥＦ１０００

〈花札衛ー牡丹に蝶ー〉☆６→２　戦士族　闇属性
　ＤＥＦ１０００→１３００

　現れる３枚の花札。
　そしてチューナーという言葉。
「私は、レベル２、花札衛ー萩に猪ー、花札衛ー紅葉に鹿ーに、レベル２、チューナーモンスター、花札衛ー牡丹に蝶ーをチューニング‼？」
　牡丹に蝶が光の輪になり、他の花札衛達が小さな星に変わり、光の道になる。
　光の道が輝くと、その中から現れたのは鹿の角がある兜に猪の蝶の鎧を身につけた鎧武者。
「四季の力が重なりし時、そこに現れるは美しき命‼？シンクロ召喚‼？世界を巡る生命の力‼？花札衛（カーディアン）ー猪鹿蝶ー‼？」

〈花札衛ー猪鹿蝶ー〉☆6　戦士族　闇属性
ＤＥＦ２０００→２３００

「1ターンでリンクモンスターとシンクロモンスターを3体……」
「まずは花札衛ー猪鹿蝶ーの効果を発動します、春愁秋思‼？1ターンに1度、自分の墓地の花札衛モンスター1体、花札衛ー桐に鳳凰ーを除外して、次の相手ターン終了時まで、相手は墓地のカードの効果を発動できず、墓地からモンスターを特殊召喚できなくなりますわ‼？」
「っ‼？」
猪鹿蝶が槍を振るうと私の墓地を隠すように紅葉が降り注ぐ。
墓地を封じる効果があるのは私のデッキにはかなり効いてしまう。
「このターンはバトルフェイズに入れませんが、私のモンスターの効果を説明しておきましょう。花札衛ー五光ーは1ターンに1度、相手が魔法・罠カードを発動した時、その発動を無効にし破壊します。さらに自分の花札衛モンスターが相手モンスターと戦闘を行う場合、バトルフェイズの間だけその相手モンスターの効果は無効化され、シンクロ召喚したこのカードが戦闘で破壊された場合、または相手の効果でフィールドから離れた場合、エクストラデッキから花札衛―五光―以外の花札衛シンクロモンスター1体を特殊召喚出来ます」
「っ⁉？効果無効に離れても他のシンクロモンスターを出せるんですか⁉？」
「次に花札衛ー雨四光ーは相手エンドフェイズに次の自分ターンのドローフェイズをスキップするか、このカードの効果を次の相手スタンバイフェイズまで無効にするかを選ばないといけませんが、その代わりにこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分フィールドの花札衛モンスターは効果では破壊されず、相手の効果の対象にならなくなり、相手のドローフェイズに相手が通常のドローをした場合に発動する。相手に1500ポイントのダメージを与えることができます」

「ちょ、ちょっと待って下さい!!?・五光は魔法・罠を無効にする効果と戦闘時にモンスター効果を無効にするのに、効果耐性まで付与されるんですか!!?」
「驚くのはまだ早いですわ。花札衛ー猪鹿蝶ーはこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分の花札衛モンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ相手に戦闘ダメージを与えることができます。守備表示でも私の花札衛達からは逃げられませんわ」
「っ……」
「私はこれでターンエンドといたします。さあ、遊花さん。貴方がこのデュエルで私の花札衛を攻略できるか、じっくりと見させて頂きますわ」
無効効果に破壊耐性、効果耐性、墓地封じ、貫通攻撃。
どれも私にとっては致命傷になりうる能力を、桜糀さんはたった1ターンで揃えてきた。
私のデッキのモンスターは効果で攻撃力を強化して、戦闘による破壊を狙うばかりでどうしても戦闘をする必要がある。
だけど、今の状況だと戦闘時には五光によって効果が無効化されるためその方法で突破することは出来ない。
しかも、スカルデッドで攻撃力も上がっているから現状ではアンチホープですら五光を倒すことは出来ない。
おまけに効果破壊の耐性を雨四光がつけ、五光にも無効にされるため効果を通すことすら難しい。
さらには防御に回ろうにも貫通効果があるんじゃローレベルの私のモンスター達の守備力ではいないのもほぼ同然のダメージを受けてしまう。
その上攻撃にも防御にも私のデッキは墓地を使うのに、その墓地すらも封じられてしまった。
ここまで私のデッキの特色を封じられて、本当に私に勝つ手段はあるの？

遊花　ＬＰ８０００　手札４

｜｜▲▲｜　｜

｜｜｜｜｜｜

｜　｜

☆

｜｜□□○

｜｜｜｜｜｜　｜

紅葉　ＬＰ４０００　手札３

第２３話　私が私で在るために

★

遊花　ＬＰ８０００　手札４
ーー▲▲ー　ー
ーーーーー
ー　☆
ーー□□○
ーーーーー　ー
紅葉　ＬＰ４０００　手札３

「わ、私のターン、ドローー!!?」
「花札衛ー雨四光ーの効果を発動します、苦雨凄風!!?相手のドローフェイズに相手が通常のドローをした場合、相手に１５００ポイントのダメージを与えます!!?」
「うっ!!?」

遊花　ＬＰ８０００→６５００

雨四光の傘から雨のような弾丸が私に向けて放たれ、私のライフが削られる。
この効果もそう何度も食らうことはできない。
私は改めてドローしたカードと手札を確認する。
ダメ、この手札じゃ今の状況を覆すことは出来ない!!?
「私はカードを1枚伏せてターンエンドです」
「エンドフェイズ、花札衛ー雨四光ーの効果で次の自分ターンのドローフェイズをスキップする効果を選択しますわ」

遊花　ＬＰ６５００　手札４

ー▲▲▲ー　　ー
ーーーーー
ー　　☆
ーー□□○
ーーーーー　　ー
紅葉　ＬＰ４０００　手札３

「私のターン。花札衛ー雨四光ーの効果でドローフェイズはスキップされますわ。花札衛ー猪鹿蝶ーの効果を発動します、春愁秋思!!?墓地の花札衛ー牡丹に蝶ーを除外して、次の相手ターン終了時まで、相手は墓地のカードの効果を発動できず、墓地からモンスターを特殊召喚できなくなりますわ!!?」
「っ!!?」
再び猪鹿蝶が槍を振るい私の墓地を紅葉が覆い隠す。
これでまた墓地を使用することが出来なくなっちゃった。
「さらに花札衛ー雨四光ーと花札衛ー猪鹿蝶ーを攻撃表示に変更しますわ」

花札衛ー雨四光ー
ＤＥＦ３３００→ＡＴＫ３３００

花札衛ー猪鹿蝶ー
ＤＥＦ２３００→２３００

「バトルフェイズ!!?花札衛ー五光ーでダイレクトアタックですわ!!?光風霽月!!?」
「させません!!?手札からクリフォトンの効果発動!!?このカードを手札から墓地へ送り、２０００ライフを払って、このターン、自分が受ける全てのダメージは０になります!!?」

遊花　ＬＰ６５００→４５００

五光が光を纏った刀を振り下ろし、私に向かって衝撃波が飛んでくる。
それを私の前に現れた電球のような姿をしたモンスターが、私の身体を包みこむように光の粒子を放ち、五光の放った衝撃波は霧散した。
「このターンの攻撃は防がれてしまいましたか。ならば、私はこれでターンエンドといたします」

遊花　ＬＰ４５００　手札３
ー▲▲▲ー　　ー
ーーーーー
　　ー　　☆
ーー○○○
ーーーーー　　ー
紅葉　　ＬＰ４０００　手札３

「わ、私のターン、ドローー!!?」
「花札衛ー雨四光ーの効果を発動します、苦雨凄風!!?相手のドローフェイズに相手が通常のドローをした場合、相手に１５００ポイントのダメージを与えます!!?」
「くぅっ!!?」

遊花　ＬＰ４５００→３０００

雨四光の傘から雨のような弾丸が私に向けて放たれ、私のライフが３０００になる。
こうなってしまったらもう貫通ダメージを１度受けただけでもアウトだ。
でも、私の手札にこの状況を突破出来そうなカードはない。
まだ、耐えるしかない。

「私はさらにカードを1枚伏せてターンエンド」
「エンドフェイズ、花札衛ー雨四光ーの効果で次の自分ターンのドローフェイズをスキップする効果を選択しますわ」

遊花　ＬＰ３０００　手札３
ー▲▲▲▲　ー
ーーーーー
ー　☆
ーー○○○
ーーーーー　ー
紅葉　ＬＰ４０００　手札３

「私のターン。花札衛ー雨四光ーの効果でドローフェイズはスキップされますわ。花札衛ー猪鹿蝶ーの効果を発動します、春愁秋思!!?墓地の花札衛ー荻に猪ーを除外して、次の相手ターン終了時まで、相手は墓地のカードの効果を発動できず、墓地からモンスターを特殊召喚できなくなりますわ!!?このターンで終わりでしょうか?バトルフェイズ!!?花札衛ー五光ーでダイレクトアタックですわ!!?光風霽月!!?」
「まだ……通すわけにはいきません!!?手札からゴーストリックランタンの効果発動!!?その攻撃を無効にし、このカードを手札から裏側守備表示で特殊召喚します!!?」
　光を纏った刀を私に振り下ろそうとした五光の前に一瞬だけジャックオーランタンのような幽霊が現れる。
　それに驚いたのか五光は動きを止めた。
「防がれましたか。ですが、守備表示でも私の花札衛の攻撃は防げませんよ!!?花札衛ー雨四光ーでセットモンスターに攻撃!!?」
「終わらせません!!?リバースカード、オープン!!?罠発動!!?ダメージダイエット!!?このターン自分が受ける全てのダメージは半分になります!!?」
「通させませんわ!!?花札衛ー五光ーの効果を発動します、光輝燦然

‼?1ターンに1度、相手が魔法・罠カードを発動した時、その発動を無効にし破壊します‼?」
　五光の身体が光輝き、その強い光でダメージダイエットが消し飛ぶ。
「これでお終いですわ‼?弾丸雨注‼?」
「っ、ゴーストリックランタン‼?」

〈ゴーストリックランタン〉☆1　悪魔族　闇属性
　ＤＥＦ０

「花札衛ー猪鹿蝶ーの効果でこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分の花札衛モンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ相手に戦闘ダメージを与えますわ‼?」
　雨四光の傘から集束された雨の弾丸が打ち出され、ランタンを貫いて私の身体まで届こうとする。
　しかし、そんな私を守る影が1つ。
「手札から、クリボーの効果発動‼?ダークエンヴェロップ‼?相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこのカードを手札から捨てて発動できる。その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは0になります‼?」
「‼?この攻撃も凌ぐとは……」
　クリボーが私の代わりに弾丸に撃ち抜かれる。
「まだまだ行きますわ‼?花札衛ー猪鹿蝶ーでダイレクトアタック‼?秋風冽冽‼?」
「きゃあ‼?」

遊花　ＬＰ３０００→７００

猪鹿蝶の槍に貫かれ、とうとうライフが3桁になる。
そして桜糀さんのフィールドにはスカルデッドがいる。

「今度こそ終わりでしょうか？鎖龍蛇ースカルデッドでダイレクトアタック‼？蛟竜毒蛇‼？」
スカルデッドの首が伸び、私を？み込もうと迫ってくる。
でも、まだ……‼？
「まだ……まだです‼？リバースカードオープン‼？罠発動‼？びっくり箱‼？相手フィールドにモンスターが２体以上存在する場合、相手モンスターの攻撃宣言時にそのモンスター１体を対象として発動‼？その攻撃を無効にし、そのモンスター以外の相手フィールドのモンスター１体を選んで墓地へ送り、墓地へ送ったモンスターの攻撃力と守備力の内、高い方の数値分だけ対象のモンスターの攻撃力をダウンします‼？この墓地送りは対象を取りません‼？私は花札衛ー雨四光ーを墓地において鎖龍蛇ースカルデッドの攻撃力を３０００ポイントダウンします‼？」
スカルデッドの前に小さな箱が現れ、その箱が急に開くと中からスプリングがついた拳が現れる。
スカルデッドは拳を避けることが出来たが、後ろにいた雨四光に当り、雨四光の姿が消滅し、雨四光に当たった拳が跳ね返ってスプリングがスカルデッドの身体に巻きついて動きを止めさせた。

鎖龍蛇ースカルデッド
ＡＴＫ２８００→０

「っ、お見事です。まさかそんな手段で雨四光を退けてしまうとは……流石に鎖龍蛇ースカルデッドをこのままにしておくわけにも行きませんね。メインフェイズ２‼？私は私は花札衛ー松ーを召喚します」

〈花札衛ー松ー〉☆１　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１００

「花札衛ー松ーの効果を発動します。このカードが召喚に成功した場

合、自分はデッキから1枚ドローし、お互いに確認します。それが花札衛モンスター以外だった場合、そのカードを墓地へ送ります。私が引いたのは花札衛ー桜に幕ー。このまま手札に加えます。そして手札から花札衛ー桜に幕ーの効果を発動します。手札のこのカードを見せ、自分はデッキから1枚ドローし、お互いに確認します。それが花札衛モンスターだった場合、このカードを特殊召喚し、違う場合はこのカードとドローしたカードを墓地へ送ります。私がドローしたカードは花札衛ー柳に小野道風ー。よって花札衛ー桜に幕ーは特殊召喚しますわ」

〈花札衛ー桜に幕ー〉☆3　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００

「参ります!!?優雅に彩るサーキット!!?」
「っ、またリンク召喚!!?」
桜糀さんの前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件は闇属性モンスター2体!!?私は、花札衛ー松ーと花札衛ー桜に幕ーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?!!?リンク召喚!!?リンク2!!?見習い魔嬢!!?」

〈見習い魔嬢〉ＬＩＮＫ２　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ１４００↓１７００　↙?↘?

現れたのは箒を持った魔女のようなモンスター。
そして桜糀さんはさらにサーキットを開く。
「まだまだ、参ります!!?優雅に彩るサーキット!!?召喚条件はリンクモンスター2体!!?私は見習い魔嬢と鎖龍蛇ースカルデッドをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?!!?リンク召喚!!?世界を繋ぐ双竜!!?リンク2!!?ダブルバイトドラゴン!!?」

〈ダブルバイトドラゴン〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　闇属性

ＡＴＫ１５００　→←

スカルデッドと見習い魔嬢の姿が消え、代わりに現れたのは身体が繋がっている双竜。

「ダブルバイトドラゴンの攻撃力はリンク素材としたモンスターのリンクマーカーの合計×３００ポイントアップしますわ。見習い魔嬢のリンクマーカーは2、鎖龍蛇ースカルデッドは4。合計6になるので攻撃力は１８００ポイントアップしますわ」

ダブルバイトドラゴン
ＡＴＫ１５００→３３００

「攻撃力３３００⁉？」

「さらにダブルバイトドラゴンはモンスターゾーンに存在する限り、リンクモンスター以外のモンスター効果を受けず、リンクモンスター以外のモンスターとの戦闘では破壊されませんわ」

「っ、その上耐性まで……」

「（無理をすれば雨四光をシンクロ召喚できますが……遊花さんのデッキが相手ならば猪鹿蝶の方が遊花さんは動きにくくなるハズ）私はこれでターンエンドといたします」

遊花　ＬＰ７００　手札１
ーー▲▲ー　ー
ーーーーー
ー　☆
ーー○ー○
ーーーーー　ー
紅葉　ＬＰ４０００　手札３

雨四光は退けることが出来たけど、桜糀さんのフィールドにはまだ魔法・罠を無効化し、戦闘するモンスターの効果を封じる五光と墓地

を封じ、貫通効果を付与する猪鹿蝶がいる。
さらにはリンクモンスター以外では倒せないダブルバイトドラゴンに、五光を倒したら再び雨四光が出てくるだろう。
私の手札も伏せカードも今の状況では使うことが出来ない。
もし、使えるようになったとしても五光に無効化される。
手詰まり。
どうすればこの状況を覆せるのかが全く分からないし、イメージすら湧いてこない。
『まあそう言うわけで、その時にはーーー存分に壊して遊んであげるから、待っててね、虫けらさん？ヒヒヒ、ヒハハハハ‼？』
嘲笑うような神路祇君の笑い声が再び私の頭の中に響いてくる。
……やっぱり、私はまだ弱いままなの？
こんな私で……本当に勝てるの？
そんな考えが、私を蝕んでいく。
そんな、思考の海に消えてしまいそうな私の耳に聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「こらー‼？何俯いてんのよ‼？ちゃんと顔を上げなさい‼？」
「っ……‼？」
思わず声が聞こえた方を振り向くと、そこには怒りの表情で声を張り上げている桜ちゃんと、その周りで同じように声を張り上げようとしている大地君と霊華さんの姿が見えた。
「まだ終わってないだろ‼？見せてくれよ、俺の時みたいな逆転劇を‼？」
「私の時に見せたワクワクしてる表情、今日は見せて貰ってない。貴方の波動、また感じさせて」
皆の声に、私は唖然としてしまう。
そんな私に、桜糀さんも声をかけてくる。
「遊花さんは良いお友達がいるのですね」
「あ、えっと……その……」
「遊花さんが何を思い悩んでいるのか、私には見当もつきません。ですが、それが遊花さんを苦しめていて、そのせいで、昨日の遊花さん

のデュエルで拝見させて頂いたような貴方様の楽しそうにデュエルをするお顔を曇らせてしまっているというのは分かります」
「っ!!?」
桜糀さんの言葉に、私の胸が痛む。
そうだ……今日、私は楽しんでデュエルをしていない。
あんなに桜ちゃん達に言ってたのに、勝つことばかりに頭がいって、桜糀さんだって、そんな私のデュエルが見たいって言ってくれたのに……
別に、勝ちたいと思うことが悪いとは思わない。
でも、それだけ考えてデュエルするのは……私らしくない。
今までだって、勝ちたいって思う時は沢山あった。
でもそれは、相手を倒したいから勝ちたいんじゃなくて……デュエルが楽しいから……皆と一緒に全力で楽しいデュエルがしたいから、勝ちたいって思ってたハズだ。
なのに、今の私はなんだ。
ただただ焦って、勝つことだけを考えて……そんなの、私らしくない……そんなんで私のデッキが応えてくれるわけがない。
私のメインデッキのカード達は1枚1枚は凄く小さな力しか持たないローレベルなモンスター達でほとんど構成されている。
でもそれは、1人1人の力は小さくても、皆の力が合わさればどんな困難だって乗り越えていける……そう信じたいから、私はこのデッキと、このカード達と一緒にデュエルするって決めたんじゃないのか？
例え小さな小さな力だったとしても、合わさって1つになればいつかは強大な壁だって乗り越えられるって信じたから、どんな時だってこのデッキと一緒にデュエルしてきたハズだ。
それなのに、なんだこのザマは、栗原　遊花。
勝ちたいからって自分の力だけで戦おうとするお前に、このデッキが力を貸してくれる訳ないじゃないか。
お前が目指したのはそんな決闘者だったのか？
いや、違う。

私が目指したのは、どんな逆境でも楽しんで、全力でぶつかって越えにいくような決闘者だ。
そういう人の弟子に、正統な後継者になると決めたんじゃないのか？
「っ‼？」
私は両手で自分の頬を思いっきり叩き、大きく深呼吸をする。
また……まただ。
また私は諦めそうになっていた。
本当に、自分が情けない。
まだ、ライフは残っている、ドローだってある。
なのに、どうして諦めようとしている？
そもそも、諦めないことを取ったら、私に何が残るというんだ。
どんなに弱くても、諦めずに頑張ることだけが、私の取り柄だと言うのに。
諦めてしまうなんて、私らしくない。
諦めてしまったら、それはもう栗原　遊花とは言えない。
あの人の弟子だなんて、絶対に言えない‼？
「……桜糀さん、すみませんでした‼？」
「えっ？あの、遊花さん？」
「私が楽しそうにデュエルをする姿を見たいって言ってくれたのに、こんな情けない姿を見せて、本当にすみませんでした‼？」
突然自分の頬を叩いた私に驚いている桜糀さんに、私は頭を下げる。
この人は、こんな私とのデュエルを楽しみにしていてくれた。
デュエルを通して私のことを理解したいと言ってくれた。
そんな人に、なんて姿を見せていたんだ、私は。
「もう、大丈夫です。勝てるのかとか、どうやったら強くなるとか、そんなことをうじうじ考えるのは、もう止めました。そんなこと考えてる人間は、それはもう栗原　遊花だって、言えないんです。栗原　遊花は、小さくても、弱くても、それでも諦めないで進むことしかできない人間なんです」

そう、私はここで改めて私を定義する。
これからも、迷うことはあるだろう。
でも、最後には絶対にここに辿り着く。
弱くても、諦めないで、笑顔で進んでいく。
それだけが、栗原　遊花が唯一出来ることで……私が、私で在るために必要なことなのだから。
「だから、ここからが栗原　遊花の本当のデュエルです。正直、どうやったら桜糀さんのモンスター達を突破出来るかとか、全然分からないですけど、それでも、最後まで諦めないで、最後まで楽しんでデュエルします‼?」
そういって、私は笑顔を見せる。
あの人は、どんなにピンチの時でも笑っていた。
私はその姿を見て、またデュエルが出来るようになった。
なら、私だってピンチでも笑って見せる。
諦めないで、笑顔で、皆が楽しんで貰えるようなデュエルをする。
それが、今の私なのだから。
「……そうですか。なら、私の期待に、応えて下さい。貴方様の楽しんでデュエルをする姿を、存分に見せて下さい」
「はい‼?」
私のライフは残り７００。
おまけに防御カードももうありはしない。
これが、正真正銘のラストターン。
でも、もうさっきまでの暗い感情は何処にも湧いてこなかった。
今はただ、どうやってこの状況を突破出来るのかにワクワクしてる。
私は自分のデッキを見つめる。
さっきまで、ゴメンね。
また不甲斐ない所を見せちゃったし、心配させちゃった。
でも、もう大丈夫。
私はまだまだ弱いけど……それでも、皆と一緒に、力を合わせて進んでいくよ。

だから、お願い……私に、また力を貸して!!?
「私のターン……ドロー!!?」
ドローしたカードを見る。
まだ、何も終わってない!!?
「速攻魔法、クリボーを呼ぶ笛!!?その効果で自分はデッキからクリボーまたはハネクリボー1体を選択し、手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができます!!?」
「……その効果は通します」
「なら、私が選ぶのは特殊召喚!!?いつだって、私と共に!!?ハネクリボー!!?」

〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

現れるのは天使の羽を持つ私の最高の相棒。
相棒はまだまだ心配そうな顔で私を見る。
うん、本当に心配かけちゃってゴメンね。
また、相棒の力をいっぱい借りることになるんだけど、いいかな?
そんな私に相棒は満面の笑みで頷く。
うん、ありがとう、相棒。
私は相棒の姿を見ながら正面に手をかざす。
「導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「成る程、リンク召喚ですか」
私の目の前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル1モンスター1体!!?私はハネクリボーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?希望の守り手!!?リンク1!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

フィールドに現れる青い球体のようなモンスター。
リンクリボーは私を励ますように擦り寄ってくる。
うん、ありがとう。
一緒に頑張ろうね。
「リンク1のリンクモンスターですか……そのモンスターでどう動くのでしょうか？」
「この子の出番は今じゃないです‼？大事なのは相棒を墓地に送ることでしたから‼？相棒、貴方の力、借り受けるね‼？リバースカードオープン‼？魔法カード、賢者の石―サバティエル‼？」
「⁉？そのカードは……」
「このカードは自分の墓地にハネクリボーモンスターが存在する場合、ライフポイントを半分払って発動できます」

遊花　ＬＰ７００→３５０

「そうすることで、デッキから融合魔法カードまたはフュージョン魔法カード1枚を手札に加えることが出来ます‼？」
「融合カード……この状況で融合召喚が出来るとは思えませんが……」
「さあ、どうしますか？」
「……花札衛ー五光ーの効果を発動します、光輝燦然‼？1ターンに1度、相手が魔法・罠カードを発動した時、その発動を無効にし破壊します‼？」
五光の身体が光輝き、その強い光でサバディエルが割れる。
……通してくれたら超融合でスターヴヴェノムを出せたからもう少し確実だったんだけど……ううん、まだ可能性は残ってるもん‼？
「なら、魔法カード、貪欲な壺を発動‼？」
「‼？ここに来てドローカードが残っていましたか……」
「私は墓地に存在するミスティックパイパー、ゴーストリックランタン、クリフォトン、クリボー、ハネクリボーの5体をデッキに戻して

シャッフル‼?・そしてカードを2枚、ドローします‼?……桜糀さん‼?・」
「?・はい、何でしょう?・」
「このデュエル……私の勝ちです‼?・」
「っ⁉?・」
「私は虹クリボーを召喚‼?・」

〈虹クリボー〉☆1　悪魔族　光属性
ＡＴＫ１００

現れたのは虹色の角を持つモンスター。
それを見て桜糀さんが首を傾げる。
「攻撃力１００のモンスター?・一体そのモンスターでどうやって……」
「こうやるんです‼?・これが私の思いの証‼?・魔法カード、ミニマムガッツ‼?・」
「ミニマムガッツ?・」
「自分フィールド上のモンスター1体をリリースし、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動‼?・私は虹クリボーをリリースして花札衛ー五光ーを選択します‼?・選択したモンスターの攻撃力はエンドフェイズまで0になり、このターン選択したモンスターが戦闘によって破壊され、相手の墓地に送られた時、そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与えます‼?・」
「えっ⁉?・」
「お願い、虹クリボー‼?・」
虹クリボーが青いオーラを纏い身体を粒子に変えながら、五光に突撃していく。
五光はそれを刀で受け止めたが、その勢いを抑えきれず、虹クリボーの体当たりを受けて膝をついた。

花札衛ー五光ー

ＡＴＫ５３００→０

「五光の攻撃力が０に……!?（でも、私の手札にある花札衛ー桜に幕ーは花札衛モンスターが戦闘を行うダメージステップ開始からダメージ計算前までに手札から捨てることで戦闘する自分のモンスターの攻撃力をターン終了時まで１０００ポイントアップすることが出来ます。攻撃力３００のリンクリボーなら返り討ちになり私の勝ち……）」

「バトル!!?リンクリボーで花札衛ー五光ーを攻撃!!?そしてこれが私の思いをかけた一撃です!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?魂の一撃!!?」

「っ!!?」

「自分のライフが４０００以下の場合、自分フィールドのモンスターが相手モンスターと戦闘を行う攻撃宣言時にライフを半分払い、自分フィールドのモンスター１体を選択して発動!!?選択したモンスターの攻撃力は相手のエンドフェイズ時まで自分のライフが４０００より下回っている数値分だけアップします!!?」

遊花　ＬＰ３５０→１７５

リンクリボー
ＡＴＫ３００→４１２５

「攻撃力……４１２５!!?っ、手札に存在する花札衛ー桜に幕ーの効果を発動します!!?花札衛モンスターが戦闘を行うダメージステップ開始からダメージ計算前までに手札から捨てることで戦闘する自分のモンスターの攻撃力をターン終了時まで１０００ポイントアップします!!?」

花札衛ー五光ー
ＡＴＫ０→１０００

「迎え撃って下さい、花札衛ー五光ー‼?光風霽月‼?」
「お願い、リンクリボー‼?リンクラッシュ‼?」
五光が光を纏った刀を振り下ろし、リンクリボーに衝撃波を飛ばす。
リンクリボーはその衝撃波を物ともせず、赤いオーラを纏ったまま衝撃波ごと弾き飛ばすように五光に突撃し、吹き飛ばした。
「っ‼?」

紅葉　ＬＰ４０００→８７５

「ミニマムガッツの効果‼?戦闘によって破壊された花札衛ー五光ーの元々の攻撃力分のダメージを相手に与えます‼?」
「……お見事です、遊花さん」

紅葉　ＬＰ８７５→０

ーーーーーーー

「見事なデュエルでした、遊花さん。やはり、貴方様は素敵な決闘者でしたわ」
「い、いえ、そんな、不甲斐ないところばかりを見せてしまって……」
「そんなことありませんわ。自分の心と向き合い、打ち勝つ。そんな素晴らしい光景を見せて貰えましたのですから」
デュエルを終え、そんな風に声をかけてくれる桜糀さんに私は申し訳ない気持ちでいっぱいになる。
思えば、最初の方とかかなり上の空な返事をしてた気がするし、うぅ～私のバカ～
そうして落ち込みそうになる私にも桜糀さんは優しく笑いかけて来てくれた。
「そんなに気に病まなくてもよろしいのですが……そうですね

……遊花さんが気に病むのであれば、よろしければまた私とデュエルをして頂けませんか？その時は勿論、最初から楽しそうにデュエルする遊花さんと、最後まで楽しいデュエルを」
「‼？は、はい‼？勿論です‼？」
「うふふ、それでは約束ということで。今日は素晴らしい時間をありがとうございました。また、デュエル出来る日を楽しみにしていますわ」
「‼？はい‼？私も楽しみにしています‼？」
そういってフィールドから去っていく桜糀さんを、私は見送る。
桜糀さんの姿が完全に見えなくなるまで眺めてから、私は何となく自分のデッキをデュエルディスクから抜いて抱きしめた。
ありがとう、こんな私にいつも力を貸してくれて。
また迷うことはあるかもしれないけど、それでも私はこれからもずっと、貴方達と一緒にデュエルしていくから……だから、これからもよろしくね、皆。
そんなことを思う私の耳に、聞き慣れた鳴き声が聞こえた気がした。
私は、弱いままだけど……これからも皆と一緒に進んでいきたいな。

第２４話　進化する雷

★

「ゴメンね、皆!!?情け無いデュエルを見せちゃって!!?」
「ちょっ!?!?何頭下げてるのよ!?!?」
「そうだぜ、別に気にしてないって」
「誰だって悩むことはあるわ。いつも通りの遊花に戻ったなら問題ない」
「……本当にゴメンね。そして、ありがとう」
フィールドから観戦席に戻った私は、まず皆に頭を下げた。
あんな不甲斐ない姿を見せてしまったし、そんな状況でも一生懸命応援してくれたのだ。
私に出来ることといえばそんな皆に不甲斐ない姿を見せてしまったことを謝り、応援してくれたことを感謝するぐらいだ。
「まあ、あんなことがあったばかりだったからな。不安になる気持ちは分かるぜ」
「……本当かな?大地君が不安になる姿なんて想像がつかないんだけど……」
「言えてるわね」
「確かに」
「なっ!?!?酷いぜ、皆!!?」
大地君の反応に思わず皆で笑い合う。
そうしてる内にアナウンスが流れ、次のデュエルを私に告げる。
『第３学年、出席番号９８番、栗原遊花さん。至急第３フィールドへお越しください』
「あ、呼ばれちゃった。それじゃあ行ってくるね」
「遊花のデュエル、楽しみにしてる」
「全力で楽しんでこいよ!!?」
「うん!!?誰が相手でも、全力で楽しんでくるよ!!?」

「……ええ、楽しんで来なさい。遊花なら大丈夫よ」
「うん‼?」
今はただ早くデュエルがしたくて私は指定されたフィールドに向かって駆け出してしまう。
フィールドについても、まだ対戦相手の姿はない。
しばらくすると、黒髪をミディアムにした何処か気弱そうな私と同じぐらい小柄な少年が現れた。
その少年は私を見ると慌てた様子で駆け寄ってきた。
「す、すみません‼?遅くなりました‼?」
「ううん、私が早く来ちゃっただけだから気にしなくていいよ。私は栗原　遊花。今日はよろしくお願いします‼?」
「あ、天雷　終夜（てんらい　しゅうや）って言います。こちらこそ、よろしく……」
私が自己紹介をしながら頭を下げると、同じように頭を下げながら何処か消えそうな声で天雷君が呟く。
うーん、緊張してるのかな?
でも、相手は学年トップ１０。
きっと凄く強いんだろう。
天雷君がどんなデュエルをしてくるのか、すっごく楽しみだ。
「それじゃあはじめようか、天雷君」
「あ、うん。よろしくお願いします、栗原さん」
『決闘‼?』

遊花　ＬＰ８０００
終夜　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は貰うね。魔法カード、手札抹殺‼?お互いに手札を全て捨てて同じ枚数ドローするよ‼?私は４枚、天雷君は５枚捨てて同じ枚数ドローだね」

「!!?いきなり手札を全部交換……」
「私はモンスターをセット。カードを1枚伏せてターンエンドだよ」

遊花　ＬＰ８０００　手札２
ーー▲ーー　ー
ーー??ーー
ー　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
終夜　ＬＰ８０００　手札５

「僕のターン、ドロー!!?おいで、エレキングコブラを召喚!!?」

〈エレキングコブラ〉☆４　雷族　光属性
ＡＴＫ１０００

現れたのは身体から電気を放つ小さな蛇のモンスター。
エレキングコブラは辺りをきょろきょろと見回し、天雷君を見つけると凄い勢いで擦り寄っていった。
「うん、今日もよろしくね」
天雷君が優しい表情で頭を撫でるとエレキングコブラは気持ち良さそうに目を細める。
うーん……意外と可愛いな、エレキングコブラ。
「バトル!!?エレキングコブラは相手プレイヤーにダイレクトアタックが出来ます!!?」
「っ!!?直接攻撃が出来るモンスター!!?」
「エレキングコブラでダイレクトアタック!!?エレキファング!!?」
「うっ!!?」

遊花　ＬＰ８０００→７０００

エレキングコブラがセットモンスターを飛び越え、私に噛み付いてくる。
まさかセットされてるモンスターを無視出来るなんて……これならリンクリボーをリンク召喚しておけば良かったかも。
「エレキングコブラの効果!!?このカードがダイレクトアタックによって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、自分のデッキからエレキと名のついたモンスター1体を手札に加える事ができます!!?僕はデッキからエレキリギリスを手札に加えます」
「サーチ効果まであるんだ……」
「僕はカードを2枚伏せてターンエンドです」

遊花　ＬＰ７０００　手札２
ー－▲－－　ー
－－??－－
ー　ー
－－○－－
－－▲▲－　ー
終夜　ＬＰ８０００　手札４

「私のターン、ドロー!!?金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆1　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のようなモンスター。
「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル1モンスターを特殊召喚します!!?墓地から戻ってきて、クリアクリボー!!?」

〈クリアクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

現れたのは紫色の毛玉のようなモンスター。
クリアクリボーはエレキングコブラの姿を見て震え始める。
だ、大丈夫だよ、丸呑みにされたりなんかしないよ？
「反転召喚、いつだって、私と共に!!?ハネクリボー!!?」

〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＡＴＫ３００

現れるのは天使の羽を持つ私の相棒。
相棒は私を見て申し訳なさそうな顔をする。
大丈夫だよ、効果でダメージを防いで貰おうと思ってたけど、相手がダイレクトアタックをしてくるなら仕方ないよね。
そして私は正面に手をかざす。
「私はレベル1、ハネクリボーとクリアクリボーでオーバーレイ!!?。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
「!?エクシーズ召喚……」
ハネクリボーとクリアクリボーが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこには白い馬に乗る小さな首無しの騎士がいた。
「闇夜に紛れし哀しき妖精!!?その刃で疑惑を切り裂け!!?ランク1!!?ゴーストリックデュラハン!!?」

〈ゴーストリックデュラハン〉★1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

「ゴーストリックデュラハンの永続効果、スリーピィフィアー。このカードの攻撃力は自分フィールドのゴーストリックと名のついたカードの数×２００ポイントアップするよ」

ゴーストリックデュラハン
ＡＴＫ１０００→１２００

「エレキングコブラの攻撃力は超えられちゃったね」
「バトル!!?」
「なら、バトルフェイズ開始時にリバースカードオープン!!?速攻魔法、フォトンリード!!?手札からレベル４以下の光属性モンスター１体を表側攻撃表示で特殊召喚します!!?手札からエレキリギリスを特殊召喚!!?」

〈エレキリギリス〉☆１　雷族　光属性
ＡＴＫ０

現れたのは電気を身体に纏った虫型のモンスター。
この状況で攻撃力０のモンスターを特殊召喚してくるの？
そんな私の疑問に答えるように、天雷君がもう１枚のリバースカードを発動する。
「そしてこの瞬間、リバースカードオープン!!?速攻魔法!!?地獄の暴走召喚!!?」
「っ!!?そのカードは!!?」
「相手フィールドに表側表示モンスターが存在し、自分フィールドに攻撃力１５００以下のモンスター１体のみが特殊召喚された時、その特殊召喚したモンスターの同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から可能な限り攻撃表示で特殊召喚し、相手は自身のフィールドの表側表示モンスター１体を選び、そのモンスターの同名モンスターを自身の手札・デッキ・墓地から可能な限り特殊召喚します!!?僕はデッキと墓地から、おいで、２体のエレキリギリス!!?」

〈エレキリギリス〉☆１　雷族　光属性
ＡＴＫ０

さらに現れる2体のエレキリギリス。
「うぅ、私はゴーストリックデュラハンを選択するけど、墓地にもデッキにもいないから特殊召喚は出来ないよ」
「そしてエレキリギリスの永続効果で、このカードがフィールド上で表側表示で存在する限り、相手は表側表示で存在するエレキと名のついたモンスターわ攻撃対象にできず、カード効果の対象にも出来なくなります!!?」
「ええっ!!?」
3体のエレキリギリスから電気が溢れ出し、天雷君のモンスター全てを守るように電気の壁が現れる。
攻撃対象だけじゃなくて効果対象にも出来ないなんて、ど、どうしよう!!?
私のデッキの除去手段なんて基本的に戦闘か対象に取る効果しかないのに!!?
「っ、バトルフェイズは終了。メインフェイズ2、カードを1枚伏せて、エンドフェイズにスピリットモンスターである金華猫は手札に戻るよ」

遊花　ＬＰ７０００　手札２
ー▲▲ーー　ー
ーーーーー
○　ー
ー○○○○
ーーーーー　ー
終夜　ＬＰ８０００　手札４

「僕のターン、ドロー!!?僕は3体のエレキリギリスを守備表示に変更します」
エレキリギリス

ＡＴＫ０→ＤＥＦ０

うっ、そうだよね……ミラーフォースとかで破壊されちゃう可能性を考えると守備表示にするよね。

「そしてチューナーモンスター、エレキツネを召喚!!?」

〈エレキツネ〉☆２　雷族　光属性

ＡＴＫ８００

次に現れたのは電気を纏っている狐のようなモンスター。

エレキツネも天雷君の姿を見つめると身体によじ登り頭の上に移動する。

天雷君は苦笑しながらも頭の上に移動したエレキツネを優しく撫でる。

私とクリボー達のことを撫でたりしてるけど、客観的に見るとこんな風に見られてるのかな?

天雷君がしばらく撫でると満足したのかエレキツネは頭の上から降りて来て、飛び跳ねながら天雷君に何かのアピールをする。

それを見て天雷君も頷く。

さっき天雷君はエレキツネをチューナーモンスターだと言っていた。

ということは次に来るのは……

「僕は!!?レベル４、エレキングコブラに、レベル２、チューナーモンスター、エレキツネをチューニング!!?」

「やっぱり、シンクロ召喚!!?」

エレキツネが光の輪になり、エレキングコブラが小さな星に変わり、光の道になる。

そして光の道が輝くと、その中から蛇の尻尾を持つ翼を持った魔獣が現れた。

「雷の力合わさりし時、相手を封じる魔獣が生まれる!!?シンクロ召喚!!?生誕せよ!!?エレキマイラ!!?」

〈エレキマイラ〉☆６　雷族　光属性
ＡＴＫ１４００

「……レベル６で攻撃力が１４００？」
思っていたより攻撃力が低めのモンスターが出てきたことに私は驚く。
でも、攻撃力が低くても相手はシンクロモンスター、きっと何か厄介な能力を持っているハズだ。
「バトル‼？エレキマイラも相手プレイヤーにダイレクトアタックが出来ます‼？」
「っ、また直接攻撃が出来るモンスター……」
「さらにエレキマイラはダイレクトアタックによって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、相手の手札をランダムに１枚デッキの１番上におきます‼？」
「⁉？ドローロック⁉？」
「エレキマイラでダイレクトアタック‼？ストライクエレキクロー‼？」
「くっ‼？」

遊花　ＬＰ７０００→５６００

エレキマイラがデュラハンを飛び越え、私に電撃を纏った爪で切り裂いてくる。
「エレキマイラの効果‼？相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、相手の手札をランダムに１枚デッキの１番上におきます‼？」
「っ‼？金華猫が……」
エレキマイラが身体から放つ電撃により私の手札がデッキの上に弾き飛ばされる。
ダメージとしては大したものじゃないけど、このままデッキの上を固定されてしまうと本当に勝ち目が無くなっちゃう。

おまけにエレキリギリスの効果でエレキマイラを対象に取ることも攻撃をすることも出来ない。
強い……多分、今までデュエルをしてきた学年トップ１０の人の中では１番強い。
「僕はこれでターンエンドです」

遊花　ＬＰ５６００　手札１
ー▲▲ーー　ー
ーーーーー
　○　○
ー□ー□□
ーーーーー　ー
終夜　ＬＰ８０００　手札４

「私のターン、ドロー!!?」
引いたカードは当然金華猫。
このままエレキマイラの攻撃を受け続ければ確実にドローロックで負ける。
しかもスピリットモンスターの特性上、金華猫は召喚すると手札に戻るため手札を無くしてドローロックを解除するのも時間がかかる。
かといって、金華猫をセットしても小型のモンスターに簡単に破壊されてしまうしそうなると詰みだ。
しかも相手はエレキリギリスのロックがかかって攻撃も効果の対象にもならない。
となると、今あるカードだけで突破しないといけないんだけど……正直役に立ちそうなカードは……いや、あのカードなら!!?
「私は金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル1モンスターを特殊召喚します!!?墓地から戻ってきて、サクリボー!!?」

〈サクリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

現れたのはクリボーに似た毛玉のモンスター。
そして私は正面に手をかざす。
「導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「リンク召喚……」
「召喚条件はモンスター2体!!?私はサクリボーとゴーストリックデュラハンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?プロキシードラゴン!!?」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

現れたのは白い身体をした機械の竜。
それを見て天雷君は首を傾げる。
「あの、そのモンスターでいいんですか?そこだとリンクマーカーの位置が悪いと思うんですが」
「うん。今はこれでいいんだよ。エンドフェイズに金華猫は手札に戻る。私はこれでターンエンド」

遊花　ＬＰ５６００　手札２
ー▲▲ーー　ー
ーーーーー
☆　○
ー□ー□□
ーーーーー　ー
終夜　ＬＰ８０００　手札４

「今の行動にどんな意味が……僕のターン、ドロー!!?僕はエレキジを召喚!!?」

〈エレキジ〉☆4　雷族　光属性
ＡＴＫ１０００

次に現れたのは電気を纏った雉のモンスター。
あのモンスターもきっと直接攻撃が出来るんだよね。
「バトル!!?エレキマイラでダイレクトアタック!!?」
「ここだ!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のクリアクリボーの効果発動!!?自分はデッキから1枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替えます!!?」
「っ!?あ、オーバーレイユニットがあったゴーストリックデュラハンをリンク素材にしたのはこのため!!?」
「私が引いたのはチューナーモンスター、ジェットシンクロン!!?特殊召喚してエレキマイラの攻撃対象はジェットシンクロンに変更だよ!!?」

〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

現れたのは小さなジェット機のような機械のモンスター。
ゴメンね、ちょっとだけ私を守って？
すると、ジェットシンクロンは気にしないでというように頷いた。
うん、ありがとう。
「移し替えるのは強制……エレキマイラでジェットシンクロンを攻撃!!?ストライクエレキクロー!!?」
エレキマイラにジェットシンクロンが引き裂かられる。
でも、これで直接攻撃は受けなかった!!?

ドローロックは解かれる‼?

「まさかこんな方法で防がれるなんて……エレキジも相手プレイヤーにダイレクトアタックが出来ます‼?エレキジでダイレクトアタック‼?エレキフライト‼?」

エレキジが電気を纏いながら、私に向かって思いっきり体当たりをしてくる。

「っ、これぐらいなら‼?」

遊花　ＬＰ５６００→４６００

「エレキジの効果‼?ダイレクトアタックによって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択し、このターンのエンドフェイズ時までゲームから除外します‼?僕が選ぶのはエレキマイラ‼?」

エレキマイラの姿が薄くなり消えていく。

こうしてエクストラモンスターゾーンも開けるんだ……本当に隙がない。

「エンドフェイズ、エレキマイラはフィールドに戻ってきます。僕はこれでターンエンドです」

遊花　ＬＰ４６００　手札２

ー▲▲ーー　ー

ーーーーー

☆　ー

○□○□□

ーーーーー　ー

終夜　ＬＰ８０００　手札４

ここで何か状況を変えれるカードを引かないと負ける。

お願い、私のデッキよ応えて‼?

「私のターン、ドロー‼?よし‼?私はミスティックパイパーを召喚

!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆1　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ０

現れたのはフルートのようなものを弾いている男の人。
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを1枚ドローするよ。そしてこの効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル1モンスターだった場合、自分はカードをもう1枚ドローできる!!?」
「これで金華猫で毎ターン、ミスティックパイパーを出せばドローロックは意味がなくなる。こんな土壇場でそんなカードをドローするなんて……」
ミスティックパイパーにサムズアップすると、ミスティックパイパーも誇らしげにサムズアップをしながら消えた。
本当に、ナイスタイミングなんだよ、ミスティックパイパー。
「私が引いたのはクリボー!!?レベル1モンスターなのでもう1枚ドロー!!?よし!!?カードを1枚伏せてターンエンド!!?」

遊花　ＬＰ４６００　手札３
ー▲▲▲ー　ー
ーーーーー
☆　ー
○□○□□
ーーーーー　ー
終夜　ＬＰ８０００　手札４

「僕のターン、ドロー!!?」
「スタンバイフェイズ!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?バトルマニア!!?相手ターンのスタンバイフェイズ時に発動し、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターは全て攻撃表示にな

り、このターン表示形式を変更する事はできない!!?また、このターン攻撃可能な相手モンスターは攻撃しなければならない!!?」
「えっ!?」

エレキリギリス
ＤＥＦ０→ＡＴＫ０

「っ、このままじゃエレキリギリスはプロキシードラゴンに攻撃しちゃう。なら、バトル!!?エレキマイラでダイレクトアタック!!?」
「確かに、エレキマイラで手札のクリボーをデッキに戻されて、エレキジでプロキシードラゴンを除外されたらエレキリギリスは倒せない。でも、それならこうすればいいだけ!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?聖なるバリア　―ミラーフォース―!!?」
「!?そのカードは!?」
「その効果により攻撃表示のモンスターを全て破壊するよ!!?」
　エレキマイラが私に向けて電撃を纏った爪を振るうが、私の前に見えない壁が現れてその電撃を防ぎ、そのまま天雷君のモンスター全てに反射した。
　反射された電撃は全て天雷君のモンスターに当たり、天雷君のモンスターを全て焼き尽くした。
「くっ、皆!!?メインフェイズ２、モンスターをセットしてターンエンドです」
　苦々しい表情を浮かべながら天雷君がターンを終了した。

遊花　ＬＰ４６００　手札３
ー▲ーーー　ー
ーーーーー
☆　ー
ーー??ーー
ーーーーー　ー
終夜　ＬＰ８０００　手札４

「私のターン、ドロー!!?」
これでロックも完全に解けた!!?
ここから反撃だよ!!?
「私は金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆1　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル1モンスターを特殊召喚します!!?墓地から戻ってきて、ミスティックパイパー!!?」
〈ミスティックパイパー〉☆1　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして、カードを1枚ドロー!!?引いたのはレベル1モンスター、クリボーン!!?カードをもう1枚ドロー!!?墓地に存在するジェットシンクロンの効果発動!!?手札を1枚墓地に送り、墓地からこのカードを特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合、除外される!!?」

〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

再び現れるジェットシンクロン。
そして私は正面に手をかざす。
「導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「っ、ここでリンク召喚!!?」
「召喚条件は効果モンスター3体以上!!?私は金華猫、ジェットシンクロン、プロキシードラゴンを　2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」

さあ、行くよ!!?

「お願い、私に逆境を斬り開く力を貸して!!?リンク召喚!!?閉ざされた運命を斬り開く魂の剣(つるぎ)!!?リンク４!!?ヴァレルソードドラゴン!!?」

〈ヴァレルソードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑←→

ヴァレルソードドラゴンが力強い咆哮を上げながら現れる。
うん、今回もよろしくね。

「攻撃力３０００のリンクモンスター!!?」

「バトル!!?ヴァレルソードドラゴンでセットモンスターを攻撃!!?」

「セットモンスターはエレキトンボ!!?」

〈エレキトンボ〉☆２　雷族　光属性
ＤＥＦ１００

姿を見せたのは電気を纏った蜻蛉のようなモンスター。

「斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン!!?剣光のベイオネットブレイク!!?」

ヴァレルソードドラゴンが剣を軽く振り下ろすとエレキトンボは吹き飛ばされて消えていった。

「エレキトンボの効果!!?このカードが相手によって破壊された時、自分のデッキからエレキと名のついたモンスター１体を特殊召喚出来ます!!?僕は２体目のエレキトンボを特殊召喚!!?」

〈エレキトンボ〉☆２　雷族　光属性
ＤＥＦ１００

再び現れるエレキトンボ。

うーん、なかなか攻撃を通させてくれないな。
本当に、天雷君は強い。
だからこそ、楽しい!!?
「私はこれでターンエンドだよ!!?」

遊花　ＬＰ４６００　手札４
ー▲ーーー　ー
ーーーーー
　　☆　　ー
ーー□ーー
ーーーーー　ー
終夜　　ＬＰ８０００　手札４

「僕のターン、ドロー!!?よし、手札を1枚捨てて魔法カード、ライトニングボルテックス!!?相手フィールドの表側表示モンスターを全て破壊する!!?」
「ええっ!?ヴァレルソードドラゴン!!?」
フィールドに雷が降り注ぎ、ヴァレルソードドラゴンが焼き尽くされる。
さっきまであまりモンスター以外のカードが見えなかったから、まさか魔法カードで除去されるとは思ってなかった。
これはちょっとマズイかも。
「僕はエレキリンを召喚!!?」

〈エレキリン〉☆４　雷族　光属性
ＡＴＫ１２００

現れたのは身体から電気を放つキリンのモンスター。
エレキリンも現れると同時に天雷君に擦り寄っていく。
それを見て微笑ましい気持ちにはなるけど、状況的には全然安心できない。

「エレキリンもダイレクトアタックが出来て、ダイレクトアタックによって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、そのターンのエンドフェイズ時まで相手は魔法・罠・モンスター効果を発動することが出来ません」
「っ、また厄介な効果だね……」
「バトル!!?エレキリンでダイレクトアタック!!?エレキタックル!!?」
「流石にそれは通したくないかな?手札から、手札から、クリボーの効果発動!!?ダークエンヴェロップ!!?相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこのカードを手札から捨てて発動できる。その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは0になるよ!!?」
クリボーが突撃してきたエレキテルの前に現れ、攻撃を防いで消滅する。
ゴメンね、クリボー。
でも、次のターンに攻めるならこうするしかないの。
「僕はこれでターンエンドです」
「リバースカードオープン!!?永続罠、リビングデッドの呼び声!!?自分の墓地のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚するよ!!?戻ってきて、ヴァレルソードドラゴン!!?」
「っ……ヴァレルソードドラゴンが戻って来た」
〈ヴァレルソードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑←→
再び咆哮を上げるヴァレルソードドラゴン。
分かってる、警戒しながら頑張るよ。
遊花　ＬＰ４６００　手札３
ー△ーーー　ー
ーー☆ーー
ー　　ー

ーー□○ー
ーーーーー　ー
終夜　ＬＰ８０００　手札２
「私のターン、ドロー!!?クリバンデットを召喚!!?」
〈クリバンデッド〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

私の前に現れたのは盗賊のような姿をした黒い毛玉のモンスター。
クリバンデットはきらきらした目で私を見てくる。
うん、君の出番だよ。
しっかりと倒してきてね。
「バトル!!?クリバンデットでエレキトンボを攻撃!!?バンデットクロー!!?」
クリバンデットがエレキトンボを爪で切り裂き破壊する。
うんうん、躍び跳ねて喜びたい気持ちはよく分かるよ。
「エレキトンボの効果!!?このカードが相手によって破壊された時、自分のデッキからエレキと名のついたモンスター１体を特殊召喚出来ます!!?僕は３体目のエレキトンボを特殊召喚!!?」
〈エレキトンボ〉☆２　雷族　光属性
ＤＥＦ１００

これで３体目のエレキトンボ。
これ以上エレキトンボで防がれることはない!!?
「続けてヴァレルソードドラゴンでエレキトンボを攻撃!!?ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アサシネイトショット!!?１ターンに１度、攻撃表示モンスター１体を対象として発動!!?そのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃できる。そしてこの効果の発動に対して相手は効果

を発動できない!!?この効果は相手ターンにでも使用することが出来るよ!!?対象にするのは、エレキリン!!?」
「2回攻撃!?っ、エレキリン!!?」
ヴァレルソードドラゴンがエレキリンに向かって銃撃をする。
銃弾が足に当たったのか、エレキリンはその場に崩れ落ちる。

エレキリン
ＡＴＫ１２００→ＤＥＦ１００

「斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン!!?剣光のベイオネットブレイク!!?」
ヴァレルソードドラゴンが剣を軽く振り下ろすと、先程と同じようにエレキトンボは吹き飛ばされて消えていく。
これで次にエレキトンボが出てくることはない。
後続が来たってヴァレルソードドラゴンで攻撃が出来る。
さあ、天雷君はどんなモンスターを出してくる？
「エレキトンボの効果!!?このカードが相手によって破壊された時、自分のデッキからエレキと名のついたモンスター1体を特殊召喚出来ます!!?僕は……」
そういって天雷君がデッキの中を確認しながら少しの間考える。
そしてしばらくすると力強い笑顔を浮かべながら、私にとって予想外のモンスターを特殊召喚した。
「……分かったよ。行こう、僕の相棒!!?エレキテルドラゴンを特殊召喚!!?」
「えっ……ええっ!?ドラゴン!?」

〈エレキテルドラゴン〉☆6　ドラゴン族　光属性
ＡＴＫ２５００

現れたのは電気を纏って浮遊する綺麗な青い身体のドラゴン。
「通常モンスター……しかも、攻撃表示で特殊召喚!?確かに名前

にはエレキって入ってるけど、雷族モンスターですら無いし!!?」
「さあ、どうしますか?攻撃しますか?しませんか?」
「むむむ……ここに来て心理戦か」
天雷君はさっきまでの何処かおどおどしていた雰囲気とは違い、凄く堂々とした表情でそんなことを尋ねてくる。
それを見て、本当に特殊召喚したエレキテルドラゴンが彼の相棒だと言うことが分かる。
……天雷君は本当に強い。
エレキテルドラゴンを攻撃すれば今まで1ポイントも削れていないライフが削れる。
でも、あの自信満々な表情を見ると手札誘発のカードや墓地から発動できる効果があってもおかしくない。
しかも、エレキテルドラゴンを倒すと残るのはエレキリン。
ヴァレルソードドラゴンで止められるとはいえ、ダイレクトアタックが出来るモンスターを並べられると辛いのは間違いない。
だけど、あのデッキにもし名前の関係以外でエレキテルドラゴンが入っている理由があるのなら、ここでエレキテルドラゴンを倒しておかないとマズイことになるかも知れない。
エレキテルドラゴンかエレキリンか。
私は少し考えてから選択する。
「ヴァレルソードドラゴンでエレキテルドラゴンを攻撃!!?攻撃宣言時、ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アブソーブブースト!1ターンに1度、このカードが表側表示モンスターに攻撃宣言した時、ターン終了時まで、このカードの攻撃力はそのモンスターの攻撃力の半分アップし、そのモンスターの攻撃力は半分になる!!?」
「迎え撃って!!?エレキテルドラゴン!!?」
ヴァレルソードドラゴンが浮遊しているエレキテルドラゴンに近づき、剣を振るう。
エレキテルドラゴンはその剣を避けていくが、身体に纏っていた電気はヴァレルソードドラゴンの剣に吸収され、輝きを失っていく。

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ３０００→４２５０

エレキテルドラゴン
ＡＴＫ２５００→１２５０

「斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン‼？剣光のベイオネットブレイク‼？」
ヴァレルソードドラゴンがエレキテルドラゴンに急接近し、その身体を斬り裂こうしたその瞬間、エレキテルドラゴンの身体が急に輝き出した。
「ダメージステップ開始時、手札からオネストを発動‼？」
「っ‼？そのカードは‼？」
「自分の光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ開始時からダメージ計算前までに、このカードを手札から墓地へ送ってそのモンスターの攻撃力はターン終了時まで、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分アップします‼？」

エレキテルドラゴン
ＡＴＫ１２５０→５５００

「行くよ、エレキテルドラゴン‼？電撃のショートストライク‼？」
輝きを取り戻したエレキテルドラゴンは自分の身体の前に電気の球体を作り、それを光弾のようにしてヴァレルソードドラゴンに撃ち出した。
その光弾は接近していたヴァレルソードドラゴンは避けられず、直撃してしまう。
「っ、でも、ヴァレルソードドラゴンは戦闘では破壊されないよ‼？」
「だけど、ダメージは受けて貰います‼？」
「うぐっ‼？」

遊花　ＬＰ４６００→３３５０

結局、エレキテルドラゴンは倒せず、ダメージを受けたのも私の方。
だけど、私は思わず笑顔が溢れてしまう。
だって……私は今、すごく楽しい‼？
どんな戦術を打っても全部躱されて、直ぐに対応される。
師匠や闇先パイとデュエルをしている時と全く同じ感覚がする。
それをしているのが私と同年代の少年。
そのことが嬉しくて……それでいて、凄く楽しい‼？
私は今、心から楽しんでデュエルをしてる‼？
「エンドフェイズにクリバンデットの効果発動‼？このカードをリリースしてデッキの上から５枚めくり、その中から魔法・罠カード１枚を手札に加えて残りを墓地におくよ‼？」
クリバンデットは笑顔を浮かべる私を見て満足そうに消え、私はデッキの上から５枚のカードをめくって中から１枚のカードを手札に加える。
「私は魔法カード、賢者の石―サバティエルを手札に加えてターンエンド‼？そしてヴァレルソードドラゴンとエレキテルドラゴンの攻撃力は元に戻るよ‼？」

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ４２５０→３０００

エレキテルドラゴン
ＡＴＫ５５００→２５００

遊花　ＬＰ３３５０　手札４
ー△ーーー　ー
ーー☆ーー
ー　ー
ーー○□ー

ーーーーー　ー
終夜　ＬＰ８０００　手札１

「……栗原さんは凄く楽しそうにデュエルをするんですね」
「うん!!?天雷君とのデュエル、すっごく楽しいよ!!?どんな戦術を打っても全部躱されて、直ぐに対応される。１ターン１ターンどんなカードがくるのか全然読めない。だから、今すっごくワクワクしてるんだ!!?」
　私のそんな返事を聞いて、天雷君は少し驚いた顔をしてから嬉しそうに優しい笑顔を浮かべる。
「うん、僕も栗原さんとのデュエル、凄く楽しい。ここまで攻撃しても倒しきれないなんて久しぶりだから」
「えへへ、まだまだ終わらせないよ!!?絶対に負けないんだから!!?」
「僕も負けません!!?僕のターン、ドロー!!?魔法カード、貪欲な壺を発動!!?」
「!!?ここに来てドローカード!?」
「僕は墓地に存在するオネストとエレキリギリス、エレキトンボ３体の合計５体をデッキに戻してシャッフル!!?そしてカードを２枚、ドローします!!?……!?このカードは……!!?」
　ドローしたカードを見て、天雷君は驚いたような、それでいてどこか嬉しそうな表情を浮かべる。
　一体何を引いたんだろう？
　でも、天雷君があんな表情をしてるんだから、きっと凄いカードなんだということが伝わってくる。
　天雷君は１度目を閉じてから、力強い笑顔を浮かべて私を見る。
「栗原さん、僕のデッキも栗原さんとのデュエルを楽しんでるみたい。だから、全力でいくよ!!?」
「!!?うん、勿論だよ!!?」
「僕はエレキリンをリリースして２体目のエレキテルドラゴンをアドバンス召喚!!?」
「!?またエレキテルドラゴン!?」

〈エレキテルドラゴン〉☆6　ドラゴン族　光属性
ＡＴＫ２５００

並び立つ２体のエレキテルドラゴン。
この状況で２体目のエレキテルドラゴン……これってまさか……!!?
「僕はドラゴン族レベル６モンスター、２体のエレキテルドラゴンでオーバーレイ!!?。２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
「!?・やっぱりエクシーズ召喚!!?」
２体のエレキテルドラゴンが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から金色の鎧を纏ったドラゴンが降りて来る。
「出でよ、聖なる龍王!!?・神秘の力で龍を導け!!?・ランク６!!?・聖刻龍王ーアトゥムス!!?・」

〈聖刻龍王ーアトゥムス〉★6　ドラゴン族　光属性
ＡＴＫ２４００

「ランク６のエクシーズモンスター……一体どんな効果が……」
「聖刻龍王ーアトゥムスの効果は、今は関係ないんだ。聖刻龍王ーアトゥムスに出来るのはデッキからドラゴン族モンスターを攻撃力・守備力を０にして呼ぶだけだから」
「えっ？」
天雷君の説明に私は首を傾げる。
だけど、このやり取りには何処か既視感があった。
確か……大地君とのデュエルの時にもこんなことがあったような……
「栗原さんに見せてあげる。エクシーズモンスターの進化の可能性

と、僕の切り札の雷を‼?僕は、魔法カード、ＲＵＭ（ランクアップマジック）ーアストラルフォースを発動‼?」
「ＲＵＭ?」
聞いたことがないその魔法カードの名前に私は更に首を傾げる。
だけど、あのカードからは何かの凄い力を感じる気がする。
その力はアンチホープ達から感じた力とは対極の位置にあるような、そんな力が。
「このカードは自分フィールドのランクが1番高いエクシーズモンスター1体を選択して発動出来る‼?その自分のモンスターと同じ種族・属性でランクが2つ高いモンスター1体を対象のモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する‼?」
「えっ⁉?エクシーズモンスターのランクを上げる魔法カード⁉?」
「僕は聖刻龍王ーアトゥムス1体でオーバーレイ‼?1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築‼?ランクアップエクシーズチェンジ‼?」
聖刻龍王ーアトゥムス光となり、再び空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りるのは雷を纏った圧倒的な存在感を放つ白き龍。
「雷の化身たる龍よ‼?虚ろなる世界を終焉の輝きで満たせ‼?ランク8‼?サンダーエンドドラゴン‼?」
〈サンダーエンドドラゴン〉★8　ドラゴン族　光属性
ＡＴＫ３０００
「これが僕の切り札、サンダーエンドドラゴンだよ。デュエルアカデミアで見せるのは、栗原さんが初めてだね」
「サンダーエンドドラゴン……」
これが、天雷君の切り札……
「さあ、真なる雷の力を受けてみて‼?サンダーエンドドラゴンの効

果!!?オーバーレイユニットを1つ取り除くことで、1ターンに1度、このカード以外のフィールド上に存在するモンスターを全て破壊する!!?」

「っ!?ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アサシネイトショット!!?1ターンに1度、攻撃表示モンスター1体を対象として発動!!?そのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる。そしてこの効果の発動に対して相手は効果を発動できない!!?この効果は相手ターンにでも使用することが出来るよ!!?対象にするのは、サンダーエンドドラゴン!!?」

「守備表示になるのは仕方ないね。でも、ヴァレルソードドラゴンは破壊させて貰うよ!!?受けてみて、サンダーエンドジャッジメント!!?」

ヴァレルソードドラゴンの銃弾により、サンダーエンドドラゴンが怯む。

しかし、サンダーエンドの身体から一気に雷が溢れ出すと周りが見えなくなる程の雷撃がフィールドを襲い、雷撃が止むとそこにはサンダーエンド以外には何も無かった。

サンダーエンドドラゴン
ＡＴＫ３０００→ＤＥＦ２０００

「僕はカードを1枚伏せてターンエンドです」

遊花　ＬＰ３３５０　手札４
ー　ー　ー　

「私のターン、ドロー!!?」
サンダーエンドにはまだ2つのオーバーレイユニットが残っている。
このまま毎ターン私のフィールドを吹き飛ばされると流石に耐えられない。
だから、このターンにサンダーエンドを倒す!!?
「私は金華猫を召喚!!?」
〈金華猫〉☆1　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００
「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル1モンスターを特殊召喚します!!?墓地から戻ってきて、クリボー!!?」
〈クリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００
フィールドに戻ってくるクリボー。
うん、今度は君達の力を借りるよ!!?
「相棒、貴方の力、借り受けるね!!?魔法カード、賢者の石―サバティエル!!?」
「!!?そのカードは……さっきクリバンデットで手札に加えた……」
「このカードは自分の墓地にハネクリボーモンスターが存在する場合、ライフポイントを半分払って発動できるよ」
遊花　ＬＰ３３５０→１６７５
「そうすることで、デッキから融合魔法カードまたはフュージョン魔法カード1枚を手札に加えることが出来る!!?私が手札に加えるの

は融合!!?」
「っ!!?次は融合召喚!?!?」
「私は魔法カード、融合を発動!!?自分の手札・フィールドから融合モンスターによって決められた融合素材モンスターを墓地に送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから特殊召喚します!!?私が融合するのは、フィールドの金華猫とクリボー!!?」
フィールドに現れた渦の中に金華猫とクリボーが飛び込んでいく。
「守護霊となりし猫よ、原初たる小さき悪魔と交わりて、孤独を壊す力となれ!!?融合召喚!!?閉ざされた世界を溶かす毒龍!!?スターヴヴェノムフュージョンドラゴン!!?」

〈スターヴヴェノムフュージョンドラゴン〉☆８　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２８００

スターヴヴェノムがサンダーエンドを威嚇するようにフィールドを揺らす程の咆哮を上げる。
それに応えるようにサンダーエンドも咆哮を上げた。
「小さいモンスターがドラゴンの融合モンスターに!?!?」
「スターヴヴェノムフュージョンドラゴンの効果発動!!?パワースワローヴェノム!!?このカードが融合召喚に成功した場合、相手フィールドの特殊召喚されたモンスター1体を選び、その攻撃力分だけこのカードの攻撃力をターン終了時までアップする!!?対象にするのはサンダーエンドドラゴン!!?」
「っ!?!?サンダーエンドドラゴン!!?」

スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
ＡＴＫ２８００→５８００

スターヴヴェノムの放つ毒の瘴気がサンダーエンドの身体を溶かし、その力を奪い去っていく。

「バトル!!?・スターヴヴェノムフュージョンドラゴンでサンダーエンドドラゴンを攻撃!!?・消失のヴェノムストリーム!!?」
スターヴヴェノムが放つ毒のブレスがサンダーエンドを呑み込み、そのまま溶かし尽くす。
よし、これでサンダーエンドは倒せた。
後は……
「スターヴヴェノムフュージョンは融合召喚したこのカードが破壊された場合、相手フィールドの特殊召喚されたモンスターを全て破壊することが出来るよ。私はカードを1枚伏せてターンエンドだよ」
「エンドフェイズ、リバースカードオープン!!?・罠発動!!?・エクシーズリボーン!!?・自分の墓地のエクシーズモンスター1体を対象とし、そのモンスターを特殊召喚し、このカードをオーバーレイユニットにするよ!!?」
「っ!?・それじゃあ!?・」
「再び現れよ雷の化身!!?・サンダーエンドドラゴン!!?」

〈サンダーエンドドラゴン〉★8　ドラゴン族　光属性
ＡＴＫ３０００

再びフィールドに現れるサンダーエンド。
……ううん、スターヴヴェノムにも破壊効果はあるし、墓地にはサクリボー、それに伏せカードもあるから戦闘でも大丈夫なハズ。
だから、最後まで闘志は捨てないよ!!?

遊花　ＬＰ１６７５　手札２
ー－－－－－　ー
－－－－－－
　　○　　ー
－－○－－
－－－－－　ー
終夜　ＬＰ８０００　手札０

「僕のターン、ドロー!!?……バトル!!?サンダーエンドドラゴンでスターヴヴェノムフュージョンドラゴンを攻撃!!?」
「リバースカードオープン!!?速攻魔法、決闘融合―バトルフュージョン!!?自分フィールドの融合モンスターが相手モンスターと戦闘を行う攻撃宣言時に発動!!?その自分のモンスターの攻撃力はダメージステップ終了時まで、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分アップする!!?」

スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
ＡＴＫ２８００→５８００

「これで返り討ちだよ!!?」
私がそういうと、天雷君が自分の手札を見せてくる。
そこにあったのは……
「ダメージステップ開始時、手札からオネストを発動!!?」
「っ!!?」
「自分の光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ開始時からダメージ計算前までに、このカードを手札から墓地へ送ってそのモンスターの攻撃力はターン終了時まで、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分アップします!!?」

サンダーエンドドラゴン
ＡＴＫ３０００→８８００

私のライフは１６７５。
オネストの効果で確実にサンダーエンドの攻撃力分のダメージが私に入る。
そしてサンダーエンドの攻撃を止める手段はない。
文字通り、完敗。
「お願い、サンダーエンドドラゴン!!?終焉のライトニングバースト

!!?」
「迎え撃って、スターヴヴェノムフュージョンドラゴン!!?消失のヴェノムストリーム!!?」
スターヴヴェノムの毒のブレスとサンダーエンドの雷のブレスがぶつかる。
最初は拮抗していたが、少しずつスターヴヴェノムのブレスが蒸発していき、最後にはサンダーエンドのブレスがスターヴヴェノムを呑み込んだ。
凄く、楽しいデュエルだった。
でも、やっぱり……
「ああ……負けるのは、やっぱり悔しいな……」

遊花　LP1675→0

ーーーーーーー

「ふぅ……何とか勝てた」
そうやって胸に手を当てながらホッと一息を吐いている天雷君に私は近づいて声をかける。
「天雷君、ありがとうございました!!?いいデュエルでした!!?」
「あ、うん。こちらこそ、ありがとう。栗原さんとのデュエル、凄く楽しかった」
「でも、やっぱりライフを全く削れなかったのは悔しいからもう1度デュエルしよ!!?今日はこれで試験も終わりだし!!?」
「え、ええっ!?」
私のそんな言葉に天雷君が凄く驚いた顔をする。
だって、ここまでの完敗は流石に悔しいんだもん!!?
いくらなんでもここまでやられてそのままにはしたくないもん!!?
「ダメかな?この後、カードショップに行こうかと思ってたんだけど、やっぱり負けたままって悔しいから、リベンジしたいんだ」

「ええっ⁉?まあ、うん……予定はないから、大丈夫だけど……」
「本当⁉?」
「く、栗原さん落ち着いて⁉?近い、近いよ⁉?」
そんなやり取りをしていると、観戦席から降りてきたのか桜ちゃん達がこちらにやってきた。
「……何やってんのよ、遊花?」
「再戦の申し込み⁉?だって、あそこまで完璧にやられたら悔しいんだもん⁉?」
「確かに、ライフも全然減らせてなかったから完敗と言える」
「遊花の気持ちも分かるぜ⁉?俺も前にやった時にエレキリギリスのせいで手も足も出なかったからな⁉?」
「それはアンタ達のデッキには除去カードが極端に少なすぎるからでしょうが……」
私と大地君の言葉に桜ちゃんが呆れたような声を出す。
それを聞いて天雷君も苦笑をしながら口を開く。
「あ、あはは……で、でも、栗原さんも九石君も、凄く強かったよ。僕もこの子達が頑張ってくれなかったらどうなってたか分からないから」
「……デュエルが始まったら堂々としてるのに、天雷は相変わらずね。強いのは分かるんだけど、何でこの子が学年トップなのかしら?」
「あはは……ん?」
桜ちゃんの口から溢れた言葉に少し違和感を覚える。
なんか今、凄く重要なことを言われたような……
「桜ちゃん、今なんて言ったの?なんか今、天雷君が学年で1番強いって言われた気がするんだけど……」
「あら?遊花はもしかして、知らなかったの?学年トップ10って言うのは、学年で同じぐらいに強い上位10名のことだけど、別にその中で順位が決まってないわけじゃないのよ?私とか、これで学年4位だし」
「俺は学年9位だぜ」

「私は学年7位。とは言っても、6位から10位までには実力にあまり差が無いから、変動はよくあることだけど」
「そ、そうだったんだ……それで、天雷君は？」
「だから、1位よ、そいつ」
「……えっ？」
　桜ちゃんの言葉に、私はぎこちなく首を動かして隣にいる天雷君を見る。
　そんな私を見て、天雷君は照れ臭そうに笑う。
「学年1位。デュエルアカデミアのトップは、そこにいる天雷よ。他の学年トップは全員、天雷に1度負けてるわ」
「ど、どうも……」
「えっ……ええっ⁉？」
　学年トップ⁉？
　それは手も足も出ないぐらい強いわけだよ⁉？
「凄い凄い⁉？天雷君ってそんなに強かったんだ⁉？」
「あ、あはは、僕自身あまり自覚がないんだけど……」
「アンタはそのデュエル中以外の自信の無さが問題よね。そこら辺は遊花にも言えることだけど……アンタ達は揃いも揃ってデュエルのこと以外では大人しめだし」
「だったら、なおのことデュエルだよ⁉？天雷君は私よりも確実に強いんだから、デュエルしていけば私だってもっと強くなれるもん⁉？」
「あ⁉？ズルいぜ、遊花⁉？そういうことなら俺だって天雷とデュエルしたいぜ⁉？」
「く、栗原さんも九石君も落ち着いて⁉？デュエルだったらちゃんと2人共するから⁉？」
　そういってはしゃぐ私達を見て、桜ちゃんは頭に手を当てながら大きなため息を吐いた。
「……本当に、デュエルバカよね、この子達は。負けて落ち込んでるんじゃないかと思ったけど、心配して損したわ」
「遊花がこの程度で落ちこんだりするわけない。桜は心配し過ぎ」

「……そうかもね。私も、少し考えておくべきかしらね……遊花と全力でぶつかるために……」

そう、何処か真剣な表情で呟く桜ちゃんの声は、デュエルのことで頭がいっぱいになっていた私の耳には届くことはなかった。

第２５話　笑顔の空模様

☆

「はぁ……結構体力落ちてるな」
夕方の病院内、リハビリ室から車椅子で自分の病室に戻りながら俺は思わずため息を吐く。
入院してそろそろ２週間になるが、やはり基本的には寝たきりのせいか体力が落ちてきている。
このままだと退院してもすぐには仕事とはいかないだろうし、このままだとまた仕事を辞めることになりそうだ。
「ただでさえ入院費のせいでお金もとぶって言うのに……」
暗い未来に頭を抱えたくなる。
リハビリも終わったし、いっそのこと今日は不貞寝でもしてやろうか等とアホなことを考えながら自分の病室が見える位置までやってくる。
すると、病室の前にいる奇妙な存在が目に入った。
「ん？」
そこにいたのは完全に夏になろうとしているこの時期に黒いコートを着てサングラスをかけ、何かをブツブツと呟きながら彷徨いている不審な人物。
「……」
あまりに面倒そうな展開に思わずＵターンして屋上にでも逃げてやろうかと考えてしまう。
彼方はまだこちらに気づいていないのか、そのままブツブツと呟きを続ける。
「うーん、どういう風に入ればインパクトがあるかなー？遊騎さん、リアクション薄いしなー……でも、エンターテイナーとして退きたくはないし……どうせならやっぱり驚かせたいし……」
「……」

そんな声が聞こえてきて、俺は思わず苦笑いを浮かべる。
というのも、その正体に心当たりがあったのと既にネタバレをくらってるようなこの気持ちをどうしようかという思いからなのだが……というか、リアクションが薄いは余計だ。
「いっそのこと扉をぶち破ってとかーーー」
「おい止めろ」
「……えっ？」
不穏なことを言い出したので思わずツッコミを入れてしまい、その人物がぎこちない動きでこちらを見る。
そしてしばらくしてふるふると身体を震わせると、思いっきり絶叫した。
「うひゃぁぁぁ⁉？どうしてそっちにいるの～～～⁉？」

ーーーーーーー

「ぐすん、辱められちゃいました……エンターテイナーなのに……驚かす側なのに……美傘　、一生の不覚」
「人聞きの悪いことを言うな。お前がまた突飛な行動に出ようとしたからだろ？」
「そんな⁉？まるで私がいつも突飛な行動をしてるみたいな言い方を⁉？」
「してないのか？」
「……はい、してます」
俺が借りている病室の中、ベッドの横にある椅子にしょんぼりと座っている女性に、俺は呆れた視線を向ける。
先程までのコートとサングラスはのけて、今の格好は水色のフレアワンピースだ。
黒髪のカジュアルショートに、日本人にしてはとても珍しい黒目と青目のオッドアイ。
童顔でクリッとした大きな目はどこか小動物を思わせる。
雨夜　美傘（あまや　みかさ）。

プロ決闘者でありながらフリーのアナウンサーをやっている、自称エンタメデュエリストで、プロリーグ時代の俺の知り合いだ。
性格は気さくで人懐っこく、誰かを驚かせることが好きだからプロ決闘者になったとかいうちょっと変わった奴だ。
歳は確か俺の２つ下。
彼女の新人時代、大会で何回か彼女とデュエルする機会があり、その際にアドバイス等をしていたらそれ以来何かと懐かれている。
エンタメデュエリストというのは、彼女しかそのエンタメデュエリストというのを名乗っていないから正直よく分からない。
彼女曰く、デュエルで皆を驚かせて笑顔にする決闘者のことらしいのだが……ある意味で言えば遊花が目指しているものもそこなので普通のプロ決闘者となにが違うのかは俺には分からないが、彼女の中では何か明確な線引きがあるのだろう。
さっきまでの怪しさ満点の格好は変装と俺を驚かせる為にしていたものらしい。
……どうして俺の周りにはこう変装が下手な奴しかいないのか。
「素直なのはお前のいいところなんだけどな……というか、突飛な奴じゃなかったらゲリラ放送なんてするものか。街中で見た時は何事かと思ったぞ？」
「だって、皆驚いてくれると思ったんですもん……スポンサーだって乗り気だったし……実際、人気はあるんだよ？」
「どうしてお前のスポンサーもそんな企画を通しちゃったかなー？」
「それはほら‼？私はエンタメデュエリストだから‼？」
「なんだそのドヤ顔は。理由になってないし。というか、何しに来たんだ、お前？というか、なんで俺がここにいることを知ってる？」
凄くウザいドヤ顔を浮かべる美傘に疑問に思っていたことを尋ねる。
美傘が俺を訪ねてくる理由なんてものはないと思うが……
「ふっふっふ、そこは今日匿名で情報提供が有ったからだよ。ここでは仮にYさんとーーー」
「闇に聞いたのか」

「あっさり言い当てないでよ‼?ここは分かってても言わないのがお約束でしょ⁉?」
「いや、そんなもの知らんし。というか、よくアイツが話したな。お前、闇と接点あったのか?」
俺が覚えている限りではあまり闇と美傘の間に接点はなかったように思うのだが、そんな人物に闇が何かを話すとも考えにくい。
「まあ、そこはほら、遊騎さんが追放された時に色々接点が出来て……それで、情報自体は今朝大会で闇さんと対戦する機会があって、その時に何処か機嫌が良さそうだったから聞いてみたら教えてくれたんだ……デュエル自体は容赦なくボコられたけど……」
「ああ……まあ、闇だしな……」
「……後攻1ターン目に闇と魔のデッキ破壊ウイルスを両方打ち込まれて手札が全て消えたらどうすればいいんですかね」
「うわぁ……」
真顔な上に敬語で思ってた以上に残虐な攻撃を受けてたことを告げてくる美傘に何も言えなくなる。
いや、分かってたけどさ、闇が容赦がないってことは。
「そ、それはともかく‼?その時に闇さんが言ってたんだよ‼?遊騎さんに会ったって。だから、ここはお世話になった身としては1度ご挨拶にいかないとな~と」
「そんなこと、別に気にしなくても良かったんだがな。スキャンダルとかになったら大変だろ?」
俺はこの街では罪人だ。
それをテレビとかでよく出る人間が会ってたとなると、それこそパッシングがヤバいんじゃないのか?
そんな俺に美傘はあっけらかんとした顔で告げる。
「にひひ、そんなの今更気にしないよ。元々遊騎さんが追放された時に遊騎さんのニュースでアナウンサーしろって言うのを断ったから一部から干されてるしね」
「おい、それ初耳だぞ?なんで断ったりなんかしたんだよ?」
2年前というと、彼女はまだまだ新人時代だ。

そんな時期に仕事を断ったらそりゃ干されもするだろう。
しかし、美傘はなんてことないというように、むしろ少し怒ったような様子で口を開く。
「そんなの当たり前。私がこうしてプロ決闘者を続けられているのは新人時代に遊騎さんが色々アドバイスして貰ったからだよ？そんな恩人を売るような真似は死んでもお断りです」
「……おいおい」
「大体、私は今だって遊騎さんがイカサマしたなんてことは信じてないもん。色々ときな臭い話を耳にするし、不知火さんとよく話してるもん」
「……もしかして、不知火さんに色々情報を流してるのってお前か？」
「そうだよ？報道に回る側だと、色んな情報が入って来るからね。ゲリラ放送を始めたのだって、認知度をあげていきなり私が消えるようなことがあれば怪しまれるようにするためだし。いつか世界をひっくり返して、皆を驚かせちゃおうね!!？」
「お前!!？……お前な～」
「あいた!!？なんで頭を叩くの!!？」
呆れながらも思わず軽く頭を叩くと、美傘は涙目になりながらこちらを睨んでくる。
全く、本当に呆れた奴だ。
美傘にアドバイスをしたのなんて片手で数える程度。
その程度の恩に、コイツは自分の人生をかけたのだ。
本当に、コイツは考え無しの大馬鹿だ。
でも……
「あんまり危ない橋は渡んなよな。お前に何かあると、俺だって心配するぞ？」
「!!？にひひ!!？おやおや、まさかの脈ありかな～？ダメだよ～私がいくら可愛いからって～」
「……はっ」
「鼻で笑われた!!？冗談!!？冗談だからそれは止めて!!？」

寝ぼけたことを言い出した美傘を鼻で笑うと途端に慌て出す。
全く、どこか残念なところも美傘らしいところだな。
コイツのそういうところには、少し救われる。
本当に、誰かを笑顔にするのが得意な奴だよ、お前はさ。
「そ、そうだ!!?遊騎さん、デュエルをしよう!!?最後に会った時はボロ負けだったからね、今からリベンジマッチです!!?」
「今から?まあ別に俺は構わないが、お前は仕事とか大丈夫なのか?」
「次の仕事は夜遅くにあるやつだから、少しぐらい大丈夫!!?それよりも、遊騎さんに私の進化したエンタメデュエルを見てもらわないとね!!?」
「お前、夜遅くなら休んだ方がいいんじゃ……まあいい。それじゃあここじゃ狭すぎて立体映像も上手く映らないだろうし、屋上にでも移動するか。悪いが車椅子を押してくれるか?」
「了解!!?にひひ、進化した私の姿を見て遊騎さんがどう驚くか楽しみだよ!!?」
「……そういうところが残念なんだよ、お前は」
締まらないな、コイツは……

ーーーーーーー

『決闘!!?』

遊騎　ＬＰ８０００
美傘　ＬＰ８０００

「先攻は私!!?私は雪天気シエルを召喚!!?」

〈雪天気シエル〉☆３　天使族　地属性
ＡＴＫ０

フィールドに現れたのは背中に雪の結晶のようなものをつけ、手に

銃のような物を持っているモンスター。
　前に美傘とデュエルした時には見たことがなかったカードだから、俺がプロリーグを追放されてから手に入れたカードなのだろう。
「雪天気シエルの効果発動‼?このカードが召喚に成功した時にデッキから天気魔法・罠カード1枚を選んで自分の魔法・罠ゾーンに表側表示で置くよ‼私はデッキからフィールドの中央に永続魔法、雪の天気模様を置くね‼?」
「ふーん、発動じゃなくて置くか。珍しい効果だな」
　シエルが銃のような物を握ると空から雪が降り出しわ辺り一面が雪景色になっていく。
　今の時期は夏だから、夏に降る雪って言うのはまた面白いものだな。
「雪の天気模様はちょっと変わった効果を持ってて、雪の天気模様は自分フィールドに1枚しか表側表示で存在できず、このカードと同じ縦列の自分のメインモンスターゾーン及びその両隣の自分のメインモンスターゾーンに存在する天気効果モンスターはこのカードを除外してデッキから天気カード1枚を手札に加え、この効果は相手ターンでも使えるという効果を得る。ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はドロー以外の方法でデッキからカードを手札に加える事はできなくなるけど」
「へぇ、フリーチェーンの効果をモンスターに与える魔法カードか。確かに変わってるな」
「むぅ……そこはもう少し驚いたっていいと思うんですけど……まあいいや、遊騎さんだし」
「どういう意味だよそれ」
「べっつにぃ～」
「なんだよ、その『べっつにぃ』って、なんか色々と含みがありそうな表現は」
「なんでもないよ。私は雪の天気模様の効果を得た雪天気シエルの効果を発動‼?このカードを除外してデッキから天気カード1枚を手札に加えるよ。雪天気シエルを除外してデッキから雷天気ターメル

を手札に加えるよ。私はこれでターンエンド!!?」

遊騎　ＬＰ８０００　手札５
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　ー
ーーーーーー
ーー雪ーー　ー
美傘　ＬＰ８０００　手札５

「俺のターン、ドロー!!?」
「スタンバイフェイズ!!?雪天気シエルの効果発動!!?フィールドのこのカードが天気カードの効果を発動するために除外された場合、次のターンのスタンバイフェイズに除外されているこのカードを特殊召喚するよ!!?」
「!!?自力で戻ってこれたのか!!?」

〈雪天気シエル〉☆３　天使族　地属性
ＤＥＦ２２００

「にひひ、少しは驚いた？」
「まあな、おまけに戻ってきたってことはまた俺のターンでも雪の天気模様で除外してサーチ出来るってことだろ？」
「Ｔｈａｔ（そ）’ｓ（の）　ｒｉｇｈｔ（通り）!!?流石遊騎さん、理解が早いね」
「そりゃどうも。相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。来い、Ｈ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）強襲のハルベルト!!?」

〈Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１８００

俺の前に現れたのはハルバードを持った紫の鎧を纏った戦士。
それを見て、美傘が少し微妙な表情をする。
「ヒロイック……闇さんから少しだけ聞いてたけど、本当にあのモンスター達は今使ってないんだね」
「まあ、そうなっちまったな」
「ちょっと残念。あのモンスター達にもリベンジしたかったし、遊騎さんのあのモンスター達、遊騎さんに似合ってたから好きだったんだけどな～」
「……今の俺にアイツらは似合わねぇよ。さらにＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）エクストラソードをを召喚!!?」

〈Ｈ・Ｃ　エクストラソード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１０００

現れたのは銀色の鎧を身に纏った二刀流の戦士。
俺はその姿を確認してから、２体の戦士に手をかざす。
「俺は戦士族、レベル４のＨ・Ｃ　強襲のハルベルトとＨ・Ｃ　エクストラソードでオーバーレイ!!?２体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?」
ハルベルトとエクストラソードが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から赤い鎧を着た馬に乗る弓兵が舞い降りた。
「エクシーズ召喚!!?現れろＨ（ヒロイック）ーＣ（チャンピオン）ガーンデーヴァ!!?」

〈ＨーＣ　ガーンデーヴァ〉★４　戦士族　地属性
ＡＴＫ２１００

「まずはエクシーズ素材になったＨ・Ｃ　エクストラソードの効果発動!!?このカードを素材としてエクシーズ召喚したモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする!!?」

ＨＩＣ　ガーンデーヴァ
ＡＴＫ２１００→３１００

ガーンデーヴァを赤いオーラが包んでいく。
「攻撃力３１００!?」
「さらにＨＩＣ　ガーンデーヴァは1ターンに1度、レベル４以下のモンスターが特殊召喚された時にオーバーレイユニットを1つ使うことでそのモンスターを破壊できる。逃げてもいいが、帰ってこれなくなるかもしれないぜ？」
「!?むむむ、相変わらず対処が早いね、遊騎さんは」
「バトル!?ＨＩＣ　ガーンデーヴァで雪天気シエルを攻撃!?」
「むむむ……決めた!?私は雪の天気模様の効果を得た雪天気シエルの効果を発動!?このカードを除外してデッキから天気カード1枚を手札に加えるよ。雪天気シエルを除外してデッキから雨の天気模様を手札に加えるよ!?」
シエルの姿が再び消え、美傘の手札にカードが加わる。
だけど、これで美傘のフィールドはがら空きだ!?
「だったら、ＨＩＣ　ガーンデーヴァでダイレクトアタック!?暴嵐の矢!?」
ガーンデーヴァが嵐のように矢を放ち、それが全て美傘の身体を貫いた。
「あいた!?うぅ～３１００は流石に痛いよー」

美傘　　ＬＰ８０００→４９００

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ８０００　手札３
ー▲ー　　ー
ーーーー

○　ー
ーーーーー
ーー雪ーー　ー
美傘　ＬＰ４９００　手札６
「私のターン、ドローー!?スタンバイフェイズ!!?雪天気シエルの効果発動!!?フィールドのこのカードが天気カードの効果を発動するために除外された場合、次のターンのスタンバイフェイズに除外されているこのカードを特殊召喚するよ!!?」
〈雪天気シエル〉☆３　天使族　地属性
ＤＥＦ２２００
「さあ、特殊召喚されたけどＨーＣ　ガーンデーヴァの効果は使う?」
「いや、今回は使わない。使ったらお前のことだ、手札にはあるんだろ?あのカード達が」
「そ、そそそ、そんなことないよー」
美傘がわざとらしく目を逸らす。
演技なのか素なのか判断に困るが、この反応は素だな。
「でも、今使わないならもうＨーＣ　ガーンデーヴァを使う機会はないよ!!?私は永続魔法、雨の天気模様を発動!!?」
「雪の次は雨か……」
降りしきる真夏の雪に雨が混ざり始める。
天気が荒れてきたものだ。
「雨の天気模様も自分フィールドに１枚しか表側表示で存在できず、このカードと同じ縦列の自分のメインモンスターゾーン及びその両隣の自分のメインモンスターゾーンに存在する天気効果モンスターにこのカードを除外し、相手フィールドの魔法・罠カード１枚を対象としてそのカードを持ち主の手札に戻す効果を与えるよ。当然、この効果も相手ターンに発動できる!!?」
「っ、相手ターンにも戻せるのは厄介だな」

「雨の天気模様の効果を得た雪天気シエルの効果を発動!!?このカードを除外して遊騎さんのセットカードを手札に戻すよ!!?」
「……いいぜ、このカードは手札に戻る」
「よし!!?なら、フィールド魔法、天空の虹彩を発動!!?」
美傘がフィールド魔法を発動させると、空に大きな虹が現れる。
本当によく天気が変わるもんだ。
確かに、これなら観客から見ればフィールドがどんどん様変わりして楽しいのかもな。
「天空の虹彩の効果を発動!!?1ターンに1度、このカード以外の自分フィールドの表側表示のカード1枚を破壊してデッキからオッドアイズカードを手札に加えるよ!!?私は雪の天気模様を破壊してデッキからオッドアイズペンデュラムドラゴンを手札に加えるよ!!?」
「っ、来たか。お前の切り札、オッドアイズ!!?」
雪が降り止み、雨が降りながら虹がかかるフィールドの中、美傘は1枚のドラゴンを手札に加える。
そして、あのカードを手札に加えたなら来るハズだ、ペンデュラムが。
「Ｉｔ，ｓ（さ） Ｓｈｏｗｔｉｍｅ（あ、ショータイム）!!?私はスケール4のオッドアイズファントムドラゴンと、スケール8、オッドアイズミラージュドラゴンでペンデュラムスケールをセッティング!!?」
「っ!!?他のペンデュラムカードはすでに揃ってたのか!!?」
美傘を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中に2体のドラゴンの姿が映る。
そしてそのドラゴンの下には4と8の数字が浮かぶ。
「正直少し事故ってたけどね。だけど、これで私は5から7までのモンスターを同時に特殊召喚可能!!?揺れろ揺れろ、魂の振り子!!?空に輝け、虹のアーチ!!?ペンデュラム召喚!!?飛び出せ、私のモンスター達!!?」
美傘がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって2つの光が舞い降りる。

「レベル６、極天気ランブラ‼」

〈極天気ランブラ〉☆６　天使族　闇属性
ＡＴＫ２２００

先にフィールドに降り立ったのはオーロラを背にしている長い緑髪のモンスター。
そして、その後ろより現れる赤と青の目を持つ巨大な龍。
「そして、美しき２色の眼で観客を魅了せよ‼？レベル７、オッドアイズペンデュラムドラゴン‼？」

〈オッドアイズペンデュラムドラゴン〉☆７　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２５００

「……相変わらず綺麗だな、美傘のオッドアイズは」
「‼？にひひ、遊騎さんにそう言われると嬉しいな。だけど、そんなに余裕はないと思うよ？私は雷天気ターメルを召喚‼？」

〈雷天気ターメル〉☆３　天使族　光属性
ＡＴＫ１７００

現れたのはクレヨンのような物を持ち背中に雷を背負ったモンスター。
次は雷かよ……本当に天気が荒れてきたな。
「バトル‼？オッドアイズペンデュラムドラゴンでＨＩＧＨ　ガーンデーヴァを攻撃‼？この瞬間、ペンデュラムスケールのオッドアイズファントムドラゴンの効果発動‼？１ターンに１度、もう片方の自分のＰゾーンにオッドアイズカードが存在する場合、自分の表側表示モンスターが相手モンスターと戦闘を行う攻撃宣言時にその自分のモンスターの攻撃力はバトルフェイズ終了時まで１２００ポイントアップする‼？」

オッドアイズペンデュラムドラゴン
ＡＴＫ２５００→３７００

「っ、攻撃力を超えられたか‼?・迎え撃て、ＨｰＣ　ガーンデーヴァ‼?・暴嵐の矢‼?・」
「いっけ～オッドアイズペンデュラムドラゴン‼?・螺旋のストライクバースト‼?・」
ガーンデーヴァがペンデュラムドラゴンに向かって嵐のように矢を放つ。
しかし、ペンデュラムドラゴンの放つ虹色のブレスに矢は全て呑み込まれ、ブレスはそのままガーンデーヴァに当たり爆散した。
「オッドアイズペンデュラムドラゴンの効果発動‼?・ダブルストライク‼?・このカードが相手モンスターと戦闘を行う場合、このカードが相手に与える戦闘ダメージは倍になる‼?・」
「ぐっ‼?・」

遊騎　ＬＰ８０００→６８００

「追撃だよ‼?・雷天気ターメルでダイレクトアタック‼?・ライトニングスタンプ‼?・」
ターメルが持っていたクレヨンのような物をこちらに投げつけてくる。
「くっ‼?・」

遊騎　ＬＰ６８００→５１００

「極天気ランブラでダイレクトアタック‼?・オーロラシュート‼?・」
「ぐあっ‼?・」

遊騎　ＬＰ５１００→２９００・

ランブラが放つ光弾が俺の身体を貫き、ライフを削る。
結構削られちまったな。
「メインフェイズ2ーーー」
「待った!!?お前がこのままバトルフェイズを終了するなら、俺は手札からこのカードを発動させて貰う!!?自分フィールドにカードが存在しない場合、手札から罠発動!!?拮抗勝負!!?」
「ええっ!?!?手札から罠カード!?!?」
「ああ、お前がさっき戻してくれたカードだぜ?相手フィールドのカードの数が自分フィールドのカードの数より多い場合、自分・相手のバトルフェイズ終了時に発動できる!!?自分フィールドのカードの数と同じになるように、相手はフィールドのカードを裏側表示で除外しなければならない!!?」
「ええっ!?!?それじゃあ!?!?」
「俺のフィールドには今発動した拮抗勝負のみ。さぁ、お前もフィールドのカードが1枚になるようにカードを除外して貰うぜ」
「うぅ〜まさか遊騎さんに驚かされることになるなんて……私はオッドアイズペンデュラムドラゴン以外のカードを全て除外するよ」
ペンデュラムドラゴンだけがフィールドに残り、他のモンスターやフィールドを彩っていた天気が消えて、夕暮れ時の屋上に戻る。
「ぐぬぬ……まだ、まだ負けてないもん!!?私はこれでターンエンド!!?」

遊騎　ＬＰ２９００　手札３
ーーーーー　ー
ーーーーー
ー　ー
ーー○ーー
ーーーーー　ー
美傘　ＬＰ４９００　手札１

「俺のターン、ドロー!!?」
「スタンバイフェイズ!!?雪天気シエルの効果発動!!?フィールドのこのカードが天気カードの効果を発動するために除外された場合、次のターンのスタンバイフェイズに除外されているこのカードを特殊召喚するよ!!?」

〈雪天気シエル〉☆3　天使族　地属性
ＤＥＦ２２００

「よし!!?どうやら久しぶりのお前とのデュエルに俺のデッキも張り切ってるみたいだからな。久しぶりに見せてやるよ。俺は魔法カード、予想ＧＵＹを発動!!?」
「予想ＧＵＹって……遊騎さん、私へのあてつけ?」
「今ドローしたんだから仕方ないだろ。自分フィールドにモンスターが存在しない場合にこのカードは発動できる。デッキからレベル４以下の通常モンスター1体を特殊召喚する!!?俺が呼び出すのはこのモンスターだ!!?来い、クィーンズナイト!!?」
「あ……」

〈クィーンズナイト〉☆4　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

俺の前に現れたのは赤い鎧を身に纏った女性の騎士。
それを見て美傘は嬉しそうに笑う。
「絵札の三銃士……なんだか、凄く懐かしい」
「感傷に浸るのはまだ早いぜ?俺はキングスナイトを召喚!!?」

〈キングスナイト〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

クィーンズナイトの横に並び立ったのは黄金の鎧を身に纏った騎

士。
　そしてクィーンズナイトとキングスナイトはお互いに剣を掲げて更なる騎士を呼ぶ。
「キングスナイトの効果発動!!?自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト1体を特殊召喚する!!?集え、絵札の三銃士!!?来い、ジャックスナイト!!?」

〈ジャックスナイト〉☆5　戦士族　光属性
　ＡＴＫ１９００

　クィーンズナイトとキングスナイトの剣に合わせるように剣を掲げる青い鎧の騎士が現れる。
「そして魔法カード、融合!!?自分の手札・フィールドから融合モンスターによって決められた融合素材モンスターを墓地に送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから特殊召喚する!!?俺が融合するのは、絵札の三銃士!!?」
「!!?ということは……」
　フィールドに現れた渦に3体の騎士達が飛び込んでいく。
　そして渦が爆けるとその中から現れるのは黒い鎧を身に纏った漆黒の騎士。
「クィーンズナイト、キングスナイト、ジャックスナイトの3体で融合!!?融合召喚!!?運命に打ち勝つ勇敢なる騎士達の主!!?アルカナナイトジョーカー!!?」

〈アルカナナイトジョーカー〉☆9　戦士族　光属性
　ＡＴＫ３８００

「アルカナナイトジョーカー……で、でも!!?それだけじゃ私のライフは尽きないよ!!?」
「ああ、だから凄く単純な方法で超えさせて貰うぜ。装備魔法、巨大化

をアルカナナイトジョーカーに装備!!?自分のライフポイントが相手より少ない場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力の倍になる!!?俺のライフは２９００、お前のライフは４９００!!?よって攻撃力は倍だ!!?」
「なっ!?」

アルカナナイトジョーカー
ＡＴＫ３８００→７６００

「攻撃力……７６００!?」
「バトル!!?アルカナナイトジョーカーでオッドアイズペンデュラムドラゴンを攻撃!!?ストレート!!?」
「っ!!?迎え撃って、オッドアイズペンデュラムドラゴン!!?螺旋のストライクバースト!!?」
ペンデュラムドラゴンが虹色のブレスをアルカナナイトジョーカーに放つ。
アルカナナイトジョーカーは大剣に石版のような物をつけると、大剣が巨大化し、その大剣でブレスごとペンデュラムドラゴンを斬り裂いた。
「……私の負け、か」

美傘　ＬＰ４９００→０

ーーーーーーー

「うぅ～負けた～遊騎さんを驚かせるどころか遊騎さんに驚かされてばかりだったし～自信無くしちゃうよ～」
そう言って頭を抱えて座り込む美傘に俺は苦笑しながらも話しかける。
「美傘、お前強くなったな。おまけにフィールドをどんどん変化させて、流石エンタメデュエリストってところか。観客を驚かせる為の魅

せ方、様になってたじゃないか」
俺の言葉に美傘は勢いよく顔を上げて俺を見る。
その顔は物凄くニヤけており、喜んでいるのが伝わってくる。
「ホント？遊騎さんも驚いた？驚いた？」
「ああ、驚いた驚いた。あそこまで立体映像の特色を活かして魅せれるような奴は俺は知らないぜ」
「‼？にひひ、そっか～遊騎さんも驚いちゃったか～やっぱり私って才能ある？」
「調子に乗るな」
「あいた‼？だから、どうして頭を叩くの～」
少し褒めてやると物凄くウザいドヤ顔を披露されたので、軽く頭を叩いて戒める。
こういうところがなかったら、もう少し手放しで褒められるんだがな……
「それにしても、残念だな～あのままだったら、遊騎さんに私のスケールを超えた新しいペンデュラム召喚を見せられたのに……」
「新しいペンデュラム召喚？」
「おっと‼？これ以上は内緒だよ？ネタバレは良くないもん。これ以上は次に遊騎さんにデュエルを見せる時ね。私のデッキだって、まだまだ驚かせるギミックはいっぱい入ってるんだから」
そういって胸を張る美傘。
む、そう言われると気になるな。
と、そこでいい考えが浮かんだので美傘に提案してみる。
「そうだ、美傘。今度身内で小さな大会を開くんだが、お前来るか？」
「えっ？大会？」
「ああ……まあ本題は俺の弟子の為なんだが……」
「⁉？遊騎さんの弟子⁉？行く‼？絶対行く‼？仕事休んででも行く‼？」
「いや、仕事は休むなよ……」
思った以上の食いつきの良さに面食らってしまう。
そんなに来たいか？

大きな大会をやるわけでもないのに。
「だってだって、遊騎さんの弟子ってことは遊騎さんからアドバイスを受けてきた私にとって妹弟子みたいなものだよ⁉？そんなの絶対に会いに行くよ⁉？むしろ今すぐ会わせて⁉？」
「無茶言うな⁉？というかお前を弟子にした覚えはない⁉？」
「そんなバッサリ⁉？うぅ～酷いよ～いっぱいアドバイスしてくれた仲じゃないですか～」
そう言って何処かしょんぼりとする美傘に思わずため息が出る。
まあ、慕ってくれているのは分かるのだが、流石にこのテンションの美傘を相手にするのは疲れるから勘弁願いたい。
「まあ、大会の時にはちゃんと紹介してやるからそれで我慢しろ。お前の予定が空いてる時に出来るようにしてやるから」
「本当⁉？絶対だよ⁉？嘘だったら今度、遊騎さんの病室に乗り込んでゲリラ放送やっちゃうからね⁉？」
「なんて脅しをしてくるんだお前は……」
そんなの本当に洒落にならないから止めてくれ。
しかも、美傘なら本当にやりかねないから、なおのことタチが悪い。
「そうだ⁉？遊騎さん、連絡先教えて？結局聞けてなかったし、今後予定を合わすなら分かってた方がいいでしょ？」
「……ああ、そういえばそうだな。んじゃ、連絡先も交換しとくか」
「うん⁉？にひひ、遊騎さんの連絡先ゲットだぜ⁉？」
「なんだそのテンションは……」
相変わらずテンションが無駄に高いな、コイツは。
そういえば、大事なことを言ってなかったな。
「忘れてた。その大会なんだが、俺の弟子の友人であるデュエルアカデミアの生徒や、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバーは全員来るらしいから、そのつもりでな」
「へぇ～……えっ？」
美傘が凄く引き攣った顔で俺を見る。
そこで恐る恐るといった感じで口を開く。
「あの、何処かの世界大会を荒らしに行くぜ、みたいな話じゃないんだ

よね？」
「身内だけの小さな大会だと言ったろ。デュエルアカデミアの生徒も来る」
「いやいやいや、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』全員が揃うとか、今のプロリーグでデュエルしている身としては悪夢のような大会なんだけど……いじめる？」
「いじめねぇよ。いや、正直俺も過剰戦力だと思うんだが、闇や他の連中が乗り気らしくてな」
「デュエルアカデミアの子達、トラウマになったりしない？」
「……なんとかなると思いたいよな～」
「……そうだね～」
思わず2人して遠い目をして空を見上げる。
……うん、本当に大丈夫か、この大会？

第２６話　大きな力と重ねる力

★

「ん～どうしようかな～」
「遊花、どうしたの？」
「あ、霊華さん。実は、少しだけデッキを調整してて」
「……もうすぐ試験が始まるのに？」
「もうすぐ始まるからだよ。今日で実技の試験は最後だもん。悔いがないようにしたいから」
観戦席で自分のデッキを調整していた私に霊華さんが話しかけてきてくれたから、それに返答しながらももう１度私のデッキを見直す。
いよいよ期末試験も最終日。
ここまではそんなに悪いデュエルはしていないと思う。
だけど、最後までどうなるかは分からない。
これで気を抜いて情けないデュエルをして退学とかになるのだけは嫌だ。
だから、出来ることは精一杯やっておきたい。
「そう……そういえば、今日は桜は一緒じゃないの？」
「うん。今日は桜ちゃんともデュエルすることになるから、お互いにデュエルをする前には会わないことにしたんだ。こうやってお互いに分からないところでデッキ調整をするために」
これは私と桜ちゃんで決めていた約束。
先生方の配慮で私達がデュエルするのは最終日だというのは決まっていた。
だから、最終日にはお互いに全力でデュエルをするために、デュエルの時以外は会わない、お互いのデュエルを見に行かないと決めていた。
友達だからこそ、全力でぶつかる為に。

『第３学年、出席番号９８番、栗原遊花さん。至急第５フィールドへお越しください』
「あ、呼ばれちゃった。うーん……よし、とりあえずこれで行ってみよう‼?」
「頑張って、応援してるわ、貴方の楽しいデュエルを」
「うん‼?行ってきます‼?」
アナウンスに従い、私は気合を入れながら第５フィールドに移動する。
そこにいたのは身長が２メートルぐらいあるんじゃないかというぐらいとてもがたいのいい青年。
桜ちゃん達に聞いた話だと、確か身体が凄く大きい人は学年８位だった気がする。
その青年は私を見ると豪快な笑い声を上げた。
「ははははっ‼?嬢ちゃんが俺のデュエルの相手か?えらく小さい嬢ちゃんだな‼?」
「は、はあ?」
私は確かに身長は小さい方だけど、多分貴方が大きすぎるだけだと思うんだけど……
「なら、俺の勝利は決まったようなもんだな‼?何せ、勝負って奴はでっけぇ奴が勝つもんだからな‼?小さな嬢ちゃんじゃ、相手にもなりゃしないぜ‼?」
「むっ‼?そんなの、やってみないと分かりません‼?」
私は胸の前で両拳を握り気合を入れる。
私のデッキは、彼の言い方で言うなら小さいモンスターしかいないけど、それでもここまで皆と一緒に勝ってきたんだもん‼?
それを見て、青年は面白そうに笑った。
「ほう、嬢ちゃんもでっけぇもん持ってんじゃねぇか」
「ーーーって、どこ見てるんですか、バカー⁉?」
私は思わず胸元を隠す。
セクハラ⁉?いきなりセクハラしてきたよこの人⁉?
この人、完全に私の胸を見てたよ⁉?

むぅ～やりにくいけど、もう怒った!!?
絶対に倒してやるんだから!!?
私は勢いよくデュエルディスクを起動する。
それを見て、青年は好戦的な笑みを浮かべてデュエルディスクを起動する。
「はっ、面白え。この斎京　力一（さいきょう　りきかず）が、勝負ってもんはでっけぇ奴が勝つんだってことを嬢ちゃんに教えてやるぜ!!?」
「負けません!!貴方にだけは?、絶対に負けません!!?」
『決闘!!?』

遊花　ＬＰ８０００
力一　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は私です!!?クリバンデットを召喚」

〈クリバンデッド〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

私の前に現れたのは盗賊のような姿をした黒い毛玉のモンスター。
うん、正直私も１発ぐらい引っ叩いて来て貰いたいところだけど、ルール上先攻は攻撃出来ないから、ゴメンね。
「私はカードを２枚伏せてエンドフェイズにクリバンデットの効果発動!!?このカードをリリースしてデッキの上から５枚めくり、その中から魔法・罠カード１枚を手札に加えて残りを墓地におきます!!?」
クリバンデットの姿が消え、私はデッキの上から５枚のカードをめくって中から１枚のカードを手札に加える。
「私は罠カード、魂の一撃を手札に加えてターンエンドです」

遊花　ＬＰ８０００　手札３
ー ー▲▲ー　　ー
ー ー ー ー ー ー
　　ー　　ー
ー ー ー ー ー ー
ー ー ー ー ー ー　　ー
力一　ＬＰ８０００　手札５

「俺のターン、ドロー!!?このカードはリリースなしで通常召喚出来る!!?神獣王バルバロスを召喚!!?」

〈神獣王バルバロス〉☆８　獣戦士族　地属性
ＡＴＫ３０００

現れたのは槍と盾を持った獣人のモンスター。
「レベル８のモンスターを通常召喚!?」
「ただし、この方法で通常召喚したこのカードの元々の攻撃力は１９００になっちまうがな。面倒なもんだ、効果って奴は」

神獣王バルバロス
ＡＴＫ３０００→１９００

バルバロスは何処か調子が悪そうに前屈みになる。
攻撃力は下がったけど、それでもレベル８モンスターがいきなり出てくるなんて結構マズイかも。
「バトルだ!!?神獣王バルバロスでダイレクトアタック!!?すげえ強い槍!!?」
「何そのネーミングセンス!?」
バルバロスが持っている槍で私の身体を貫く。
その顔には何処か哀愁が漂っている。
な、何か凄い可哀想なんだけど!?

だ、ダメだこの人!!?
最初の言動からしてバカだと思ってたけど、予想以上にバカだったよ!!?

遊花　　ＬＰ８０００→６１００

「俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ」

遊花　ＬＰ６１００　手札３
ー　ー▲▲ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー
ー　ー○ー　ー
ー　ー▲▲ー　ー
力一　ＬＰ８０００　手札３

「私のターン、ドロー!!?金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆1　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のようなモンスター。
「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル1モンスターを特殊召喚します!!?」
そうして私が墓地からモンスターを特殊召喚しようとしたところで斎京君は煩わしそうに声を上げた。
「ちまちま効果なんてもん使ってんじゃねぇ!!?リバースカードオープン!!?永続罠、スキルドレイン!!?ライフポイントを１０００支払うことでこのカードが魔法・罠ゾーンに存在する限り、フィールドの全ての表側表示モンスターの効果は無効だ!!?」
「えっ!?」

力一　　ＬＰ８０００→７０００

斎京君が発動した罠から何かの波動がフィールド中に広がる。
それにより、金華猫は霊体化が解かれ実体化した。
それとは逆にバルバロスは悪そうにしていた身体を持ち上げ、雄叫びを上げる。

神獣王バルバロス
ＡＴＫ１９００→３０００

「攻撃力が３０００に……」
「ああ、これか？どういうことか分からんがこうなるんだとよ。誰だったか忘れたが言ってた」
「ええっ……まさか、理解してないの？」
「おう。よく分からんが細かいことは気にすんな、デュエルディスクがこうしてんならこうなるんだよ」
多分、スキルドレインによって元々の攻撃力を１９００にするって効果が無効になるからああなるんだろうけど、なんで使ってる本人が理解してないの？
私の困惑の視線を受けて、斎京君は腕を組みながら自信満々に答える。
「これが俺の戦略って奴よ。確かに俺には少しばかり知的さってものが足りなかった。相手が使ってくるカードの効果なんざ覚えられねぇしな」
「……ああ、そこは自覚があったんだ」
というか、その言い方だと今は知的に戦ってるみたいな言い方だけど、さっきの発言のせいで説得力とか皆無だからね？
そして君のバルバロスも分かってるなら何とかしろよ、みたいな目で君を見てるから。
「だが、そこで俺は考えた訳よ。確かに俺には効果を覚えるだけの知

的さってものが少しばかし足りてねぇ。なら、その効果って奴を無くしちまえば、覚える必要なんてねぇって訳だ‼？おまけに効果ってもんが無くなっちまえば簡単だ‼？勝負にはでっけぇ奴が勝つんだからよ‼？」

「っ……」

言ってることは色々と無茶苦茶だけど、確かにそれはある意味で真理だ。

効果が無くなってしまえば、モンスター同士では攻撃力と守備力しか比べるものがない。

この人……バカだけど強い‼？

この状況は正直かなりマズイ。

私のデッキはモンスター効果が主体のローレベルデッキ。

効果が封じられたパワー勝負は正直言って部が悪い。

でも、先程のスキルドレインの説明が正しいなら、まだあの効果には穴があるハズ‼？

「導いて‼？希望に繋がるサーキット‼？」

「へっ、リンク召喚か‼？」

私が正面に手をかざすと私の前に大きなサーキットが現れる。

「召喚条件はレベル１モンスター１体‼？私は金華猫をリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？希望の守り手‼？リンク１‼？リンクリボー‼？」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性

ＡＴＫ３００　←

金華猫がサーキットに入り、代わりに出てきたのは青い球体型のモンスター。

リンクリボーもスキルドレインの波動を受けるが、特に気にした様子もなく私に擦り寄ってくる。

うん、やっぱり君は大丈夫なんだね。

なら、今回はいつも以上によろしくね。

「私はカードを1枚伏せてターンエンド!!?」

遊花　ＬＰ６１００　手札２
ー▲▲▲ー　　ー
ーーーーー
　　☆　　ー
ーー○ーー
ーー△▲ー　　ー
力一　ＬＰ７０００　手札３

「俺のターン、ドロー!!?そんな小せえモンスターで俺のモンスターをどうにか出来るかよ!!?このカードもリリースなしで通常召喚出来る!!?可変機獣ガンナードラゴンを召喚!!?」

〈可変機獣ガンナードラゴン〉☆７　機械族　闇属性
ＡＴＫ２８００

次に現れたのは戦車のような機械の龍。
「次はレベル７モンスター!!?」
「このカードもリリースなしで召喚したら攻撃力と守備力が半分になるが、スキルドレインがあれば関係ねぇ!!?　バトル!!?可変機獣ガンナードラゴンでリンクリボーを攻撃!!?轢き潰し!!?」
「だからそのネーミングセンス!!?相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動!!?ゼロリンク!!?このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力はターン終了時まで０になる!!?」
「はっ!!?効果は無効だって言ってるだろうが!!?」
「それはどうかな?」
「なに!!?」
突撃してきたガンナードラゴンにリンクリボーの身体が粒子に変わって纏わりつく。
ガンナードラゴンはその粒子を嫌がったのか突撃するのを止めた。

可変機獣ガンナードラゴン
ＡＴＫ２８００→０

「っ⁉？なんでガンナードラゴンの攻撃力が⁉？」
「スキルドレインの効果はフィールドの全ての表側表示モンスターの効果の無効。でも、リンクリボーはコストとして墓地に行ってから効果が発動する。つまり、効果が発動しているのは墓地からだからスキルドレインの効果適用外だよ」
「どういうことだよ⁉？」
「ようは、効果を使う時にすでに墓地に移動してるから使えるの。分からないんだったらデュエルディスクがそうしてるからそうなるとでも思っといて」
「……デュエルディスクがそうしてるなら仕方ねぇな」
「……」
まさか、いちいちこういう説明をしないといけないのかな？
ある意味、天雷君以上の強敵かもしれない。
というか、スキルドレインがあるなら天雷君には勝ててそうだけど……ああ、でもオネストとかがあるっけ。
それに試験後にデュエルした時には光子化とかも見えたし、戦闘破壊した後に効果が発動するモンスターも結構いたから戦闘だけじゃ逆に厳しいのかも。
「だが、まだバルバロスの攻撃が残ってるぜ⁉？神獣王バルバロスでダイレクトアタック⁉？すげえ強い槍⁉？」
「くっ⁉？」

遊花　ＬＰ６１００→３１００

ふざけた名前をしてても攻撃力自体が変わる訳じゃないからライフが一気に削られる。
流石にこのまま攻撃を受け続けるとそう長くは持たないかな。

「俺はこれでターンエンドだ」

遊花　ＬＰ３１００　手札２
ー▲▲▲ー　　ー
ーーーーー
　　ー　　ー
ーー○○ー
ーー△▲ー　　ー
カ一　ＬＰ７０００　手札３

「私のターン、ドロー!!?よし!!?手札を1枚捨てて速攻魔法、ツインツイスター!!?フィールドの魔法・罠カードを2枚まで対象としそのカードを破壊する!!?私が破壊するのはスキルドレインともう1枚の伏せカード!!?」
「そんなもん通らないんだよ!!?リバースカードオープン!!?永続罠、宮廷のしきたり!!?このカードがフィールド上に存在する限り、お互いのプレイヤーは宮廷のしきたり以外のフィールド上に表側表示で存在する永続罠カードを破壊できない!!?宮廷のしきたりは破壊されるが、スキルドレインは破壊させねぇ!!?」
「っ!!?」
竜巻が吹き荒れ、宮廷のしきたりは破壊していったがスキルドレインはフィールドに残ってしまった。
これだとまた効果が発動出来ないから下手な手は打てない。
だったら、私に出来ることは……
「私はこれでターンエンドだよ」

遊花　ＬＰ３１００　手札１
ー▲▲▲ー　　ー
ーーーーー
　　ー　　ー
ーー○○ー

ーー△ーー　　ー
力一　ＬＰ７０００　手札３

「俺のターン、ドロー!!?何も出してこねぇならこれで終わりにしてやる!!?装備魔法、ビッグバンシュートを神獣王バルバロスに装備!!?装備モンスターの攻撃力は４００ポイントアップし、装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える!!?ただし、このカードがフィールド上から離れた時、装備モンスターをゲームから除外されるがな!!?」
「っ……よりによってこの状況で守備貫通の装備カード!!?」

神獣王バルバロス
ＡＴＫ３０００→３４００

ビッグバンシュートが装備され、バルバロスの槍が燃え始める。
あれで貫かれるのは流石に嫌だ。
「バトル!!?神獣王バルバロスでダイレクトアタック!!?すんげぇ強い槍!!?」
「もうそれにはツッコまないよ!!?手札から、クリボーの効果発動!!?ダークエンヴェロップ!!?相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこのカードを手札から捨てて発動できる。その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは０にする!!?」
「なんだと!!?」
クリボーが現れてバルバロスの槍から私を庇ってくれる。
これでまだ耐えられる!!?
「チッ!!?可変機獣ガンナードラゴンでダイレクトアタック!!?轢き潰し!!?」
「くっ!!?」

遊花　ＬＰ３１００→３００

ガンナードラゴンが軽く体当たりしてくる。
良かった、流石に本当に轢かれたらどうしようかと思ったよ。
そんなことを考えているとガンナードラゴンは申し訳なさそうに頭を下げて戻っていった。
意外と紳士だね、ガンナードラゴン⁉？
デュエルなんだからそこまで気にしなくてもいいんだよ⁉？
「なかなか粘るじゃねぇか。俺はこれでターンエンドだ⁉？」

遊花　ＬＰ３００　手札０
ー▲▲▲ー　　ー
ーーーーー
　　ー　　ー
ーー○○ー
ーー△△ー　　ー
力一　ＬＰ７０００　手札３

手札は０。
おまけにフィールドには貫通効果が与えられたバルバロス。
このターンで何とかしないと、私のデッキだと確実に負ける。
「私のターン、ドロー⁉？」
引いたカードを見て、私は思わず笑顔を浮かべる。
確かにこのデュエルの決着をつけるのにはこのカードが相応しい。
さあ、小さいものの戦い方って奴を見せてあげよう⁉？
「リバースカードオープン⁉？永続罠、リビングデッドの呼び声⁉？
自分の墓地のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚するよ⁉？戻ってきて、クリバンデット⁉？」

〈クリバンデッド〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

「さらにリバースカードオープン!!?速攻魔法、クリボーを呼ぶ笛!!?その効果で自分はデッキからクリボーまたはハネクリボー1体を選択し、手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができます!!?私か選ぶのは特殊召喚!!?いつだって、私と共に!!?ハネクリボー!!?」

〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

フィールドに現れるクリバンデットと相棒。
クリバンデットは好戦的にぴょんぴょんと跳ね、ハネクリボーも身体の前で握り拳をしながら気合を入れている。
それを見て、斎京君が笑い声を上げる。
「今更そんな小せえ奴らが出てきてどうなるってんだ!!?」
「小さいものには小さいものの戦い方ってものがあるんです!!?1人で大きな力に敵わないなら、皆の力を重ねて倒す!!?魔法カード、ミニマムガッツ!!?自分フィールド上のモンスター1体をリリースし、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動!!?私はハネクリボーをリリースして神獣王バルバロスを選択します!!?選択したモンスターの攻撃力はエンドフェイズまで0になり、このターン選択したモンスターが戦闘によって破壊され、相手の墓地に送られた時、そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与えます!!?」
「何だと!!?」
「お願い、相棒!!?」
ハネクリボーが青いオーラを纏ってバルバロスに突撃し、粒子になってバルバロスに纏わりつく。
その粒子を浴びたバルバロスは力を失っていく。

神獣王バルバロス
ＡＴＫ３４００→４００

ビッグバンシュートの攻撃力上昇分は残るけど、これなら十分!!?
さあ、クリバンデット!!?
最初に言ってた通り、あの人を引っ叩いて来ちゃって!!?
「バトル!!?クリバンデットで神獣王バルバロスを攻撃!!?攻撃宣言時、リバースカードオープン!!?罠発動!!?魂の一撃!!?自分のライフが４０００以下の場合、自分フィールドのモンスターが相手モンスターと戦闘を行う攻撃宣言時にライフを半分払い、自分フィールドのモンスター1体を選択して発動!!?選択したモンスターの攻撃力は相手のエンドフェイズ時まで自分のライフが４０００より下回っている数値分だけアップする!!?」
「何だと!?!?」

遊花　ＬＰ３００→１５０

クリバンデット
ＡＴＫ１０００→４８５０

「その小せえモンスターが、攻撃力４８５０だと!?!?」
「お願い、クリバンデット!!?バンデットソウルクロー!!?」
クリバンデットが赤いオーラを纏った爪から衝撃波を飛ばしバルバロスを引き裂く。

力一　ＬＰ７０００→２５５０

「ミニマムガッツの効果!!?戦闘によって破壊された神獣王バルバロスの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える!!?」
「っ……俺の身体より、少しばかり……嬢ちゃんのほうがでっけぇ気持ちと胸だったってことかよ……」
「最後まで余計なことを付け加えるな～～～!!?」
「がはっ!!?」

私の思いに応えるようにクリバンデットが物凄い勢いで斎京君に突撃し、そのまま斎京君はフィールドの端まで吹き飛んでいった。

力一　　ＬＰ２５５０→０

ーーーーーーー

「ぐふっ……いい突撃だった、ぜ」

そんなことを呟きながらその場に蹲る斎京君。

そんな大げさな演技をしても赦さないんだからね‼？

そもそも立体映像なんだから身体に痛みなんて入るわけないし‼？

もう、初戦から調子が狂っちゃったよ。

次はもう少しまともな人とのデュエルだったらいいな。

第２７話　魂を食らう龍

「ーーーーーーーーーーーーでダイレクトアタック‼?ーーーーーーーーーーーー‼?」
「ぐあっ‼?」

大地　ＬＰ２５００→０

「だあー負けた‼?」
「……ふぅ……悪かったわね、九石。試合前なのに付き合わせて。天雷や御子神ともやってみたんだけど、あの２人相手じゃよく分からなかったのよね」
「別にいいぜ、桜の新しいカードも見れたしな。負けたのは悔しかったけどさ……遊花とのデュエルが終わったらリベンジするぜ」
「はいはい、まあ今回は世話になったから受けてあげるわ」
「おう、約束だぜ‼?」

あたりに誰もいない教室の一角。
桜は大地を相手に自分のデッキを試していた。
もうすぐ始まる親友である少女とのデュエル。
桜は無意識の内にデッキを握る手に力が込もる。
「それにしても、桜はいつそんなカードを手に入れたんだ?前にデュエルした時には使ってなかっただろ?」
「昨日、『Ｎａｔｕｒａｌ』で遊花やアンタが天雷とデュエルしてる間によ。島さんに貰ったの……相変わらずよく分からないこと言ってたけど」
「よく分からないこと?」
「『このカードが君の元にいきたがっている』なんて、意味が分からないわよ……付き合いが短いからかも知れないけど、あの人は本当によく分からない人だわ」
島から貰ったカードを取り出し、頭を掻きながらなんとも言えない

表情を浮かべる桜。
　それを見て、大地は苦笑を浮かべながら口を開いた。
「まあ、なんか不思議な雰囲気はするよな。でも、島さんが言ったなら案外本当にそうだったりするのかもな」
「なんでそうなるのよ」
「いや、何となく。強いて言うなら勘だけどさ」
「……御子神といい遊花といいアンタといい、なんで私の周りはこういうよく分からないことを言う奴ばかりなのかしら……まあ、いいわ。とにかく、付き合ってくれてありがと。それじゃ、私はちょっと行くところがあるから」
「行くところ？試験前なのにか？」
　首を傾げる大地に桜は教室から出ながら振り返ることもせずに告げる。
「試験前だからこそ、よ。ちょっと校長室に乗り込んでくるわ」
「はあっ⁉？ちょっ、待てって‼？」
　教室を出て行く桜を大地は慌てて追う。
　少女達の戦いの時は……近い。

ーーーーーーー

★

『第３学年、出席番号９８番、栗原遊花さん。至急第２フィールドへお越しください』
「あれ？もう呼ばれちゃった」
　観客席で１人デッキを調整していた私は思わず近くにあった時計を見る。
　時計を見るとさっきの試合から既に１時間が経過していた。
　思ってたよりもデッキの調整に集中し過ぎてたみたいでなんだかちょっと変な感じがする。
　少し前までは、デュエルをすることさえ怖かった。

その後も、闇先パイに会って色んな召喚方法を教えて貰うまではデッキを積極的に変えていこうとは思わなかった。
デッキを少しでも大きく変えてしまったら、お父さん達といた頃の思い出まで、少しずつ消えてしまうんじゃないかと思ってしまって……
でも、やっぱりそんなことはなくて。
あの頃の思いも、このデッキには残っていて……今でも、いつでも、私を支えてくれる。
「残り3試合……強い人達ばかりだけど、頑張ろうね、皆」
そういってカード達に声をかけると、いつもデュエル中に聞こえているモンスター達の声が聞こえてくる気がした。
なんだか、ちょっと不思議な感じ。
聞き慣れているせいなのか、本当にモンスター達の声が私の頭の中に聞こえてきてる気がするんだよね。
私はデッキをデュエルディスクにセットしてフィールドに向かう。
少し遅くなってしまったせいか、フィールドには既に対戦相手が待っていた。
見覚えがない、黒髪をロングにした長身の仏頂面の青年。
桜ちゃんでも神路祇君でもないってことは、この人が学年2位の人ってことだよね？
その青年は私を見ると、私に近づき声をかけてくる。
「君が俺の対戦相手か？」
「は、はい‼？栗原　遊花です‼？お待たせして申し訳ありませんでした‼？」
「ああ、いや、すまない、別に怒っているわけではないんだ。よく言われるのだが、どうも俺は表情が固いみたいでな。気を悪くしたようなら謝る」
「いえいえ、待たせてしまったのは事実ですから、こちらこそごめんなさいです」
ぺこりと頭を下げて謝ると青年は口元が引き攣っていた。
……もしかして、柔らかく笑ってるのかな、話の流れ的に？

確かに、これは表情が固いって言われるよ……怒ってるようにしか見えないもん。
「俺は喰代　影竜（ほうじろ　かげたつ）と言う。一応、学年で２位と言うことになっているが、気にすることはない。お互い、良いデュエルにしよう」
「はい‼?よろしくお願いします‼?」
そういうとお互いに指定の場所に移動し、デュエルディスクを起動する。
相手は学年２位の実力者。
正直、どれだけ戦えるかなんて分からない。
でも、最後まで楽しんで、諦めないで、真っ直ぐに私のデュエルをするだけ‼?
それが、喰代君に応えることにもなるんだもん‼?
『決闘‼?』

遊花　ＬＰ８０００
影竜　ＬＰ８０００

ーーーーーーーー

「先攻は私です」
手札を見るが、あんまり手札が良くない。
うぅ～意気込んだのはいいけど、ちょっと事故ってるし、とりあえずこのターンは様子を見よう。
「カードを２枚伏せてターンエンドです」

遊花　ＬＰ８０００　手札３
ーー▲▲ー　　ー
ーーーーー
ー　　ー
ーーーーー

影竜　ＬＰ８０００　手札５

「カードを２枚伏せただけか……手札事故か、それとも……俺のターン、ドロー!!?全力で動かせて貰うか。俺はライフを１０００払い、魔法カード、ドラゴノイドジェネレーターを発動!!?」

影竜　ＬＰ８０００→７０００

「このカードはターンに２回、メインフェイズにドラゴノイドトークンを１体特殊召喚することが出来る。ただし、この効果の発動ターン終了時まで自分はＥＸデッキからモンスターを特殊召喚することが出来ない。俺はドラゴノイドジェネレーターの効果を２回発動し、ドラゴノイドトークン２体を特殊召喚する!!?」

〈ドラゴノイドトークン〉☆１　機械族　地属性
ＤＥＦ３００

フィールドに現れたのは２体の小さなドラゴン。
あのカードは見覚えがある。
前に『Ｎａｔｕｒａｌ』でデュエルしていた人も使っていたカードだ。
あの時は攻撃力３０００のモンスターが出てきたけど……
「俺は２体のドラゴノイドトークンをリリースし、破壊竜ガンドラを召喚!!?」

〈破壊竜ガンドラ〉☆８　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ０

現れたのは漆黒の体躯にいくつもの赤い球体が付いたドラゴン。
レベル８のドラゴンで攻撃力０？

いや、そういうモンスター程厄介な効果を持っているハズだ。
「破壊竜ガンドラの効果発動!!?エクスターミネイトギガレイズ!!?ライフポイントを半分払って発動!!?このカード以外のカードを全て破壊し除外する!!?そしてこの効果で破壊したカードの数×３００、破壊竜ガンドラは攻撃力をアップさせる!!?」

影竜　　ＬＰ７０００→３５００

「全体破壊!!?速攻魔法、クリボーを呼ぶ笛!!?その効果で自分はデッキからクリボーまたはハネクリボー１体を選択し、手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができます!!?私が選ぶのは手札に加える効果!!?おいで
クリボー!!?」
「ほう、いいカードだ。だが、伏せカードは破壊させて貰う!!?」
ガンドラの赤い球体から光が溢れ出し、フィールドのカードを全て吹き飛ばす。
クリボーを呼ぶ笛は使えたけど、バトルマニアは巻き込まれちゃったな。

破壊竜ガンドラ
ＡＴＫ０→９００

ガンドラの攻撃力が上がるが、それでも僅か９００。
私の伏せカードを破壊するためだけに出した？
でも、わざわざそれにライフを半分も？
「良くやってくれた、破壊竜ガンドラ。魔法カード、アドバンスドロー。自分フィールドに表側表示に存在するレベル８以上のモンスター１体、破壊竜ガンドラをリリースして発動。デッキから２枚ドローする。さらに魔法カード、成金ゴブリン。デッキから１枚ドローし、相手は１０００ライフポイント回復する」
「私を回復？」

遊花　ＬＰ８０００→９０００

「まだ終わらない。手札のエクリプスワイバーンを捨て、魔法カード、ドラゴン目覚めの旋律を発動。デッキから攻撃力が３０００以上で守備力が２５００以下のドラゴン族モンスター２体まで手札に加える。俺はデッキから闇黒の魔王ディアボロスとダークホルスドラゴンを手札に加える。墓地に送られたエクリプスワイバーンの効果発動、デッキから光属性か闇属性のドラゴン族・レベル７以上のモンスター１体を除外する。俺はレッドアイズダークネスメタルドラゴンを除外する」

喰代君のデッキがどんどん圧縮されていく。

だけど、まだ喰代君の動きは止まらない。

「さらに手札の闇黒の魔王ディアボロスを捨てて魔法カード、トレードイン。手札のレベル８モンスター１体を捨てることデッキから２枚ドローする。そして２枚目の成金ゴブリンだ。デッキから１枚ドローし、相手は１０００ライフポイント回復する」

遊花　ＬＰ９０００→１００００

ライフポイントが１００００になった。

でも、何故だろう？

この凄く嫌な予感がするのは……

「速攻魔法、超再生能力を発動。このカードを発動したターンのエンドフェイズ、自分の手札から捨てられた及び自分の手札・フィールドからリリースされたドラゴン族モンスターの数だけ自分はデッキからドローする」

「っ⁉？それじゃあ……⁉？」

「残念だがまだ終わっていない。魔法カード、手札抹殺。お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローする。俺は２枚、栗原は４枚捨ててドローだ」

「っ、この状況で……」
クリボーは捨てられたけど、手札自体はかなり動きやすくなった。
だけど、これでさらにドラゴン族モンスターが捨てられてしまった。
「俺はカードを1枚伏せてエンドフェイズ。超再生能力の効果発動!!?このターン、リリース及び捨てられたドラゴンは破壊竜ガンドラ、エクリプスワイバーン、闇黒の魔王ディアボロス、ダークホルスドラゴン、そして亡龍の戦慄ーデストルドーの5体。よってカードを5枚ドローする!!?」
「っ!!?デストルドは手札抹殺の時ですか……」
「さらにドラゴノイドジェネレーターの効果、相手は俺が呼び出したドラゴノイドトークンと同じ数、ドラゴノイドトークン1体を自身のフィールドに攻撃表示で特殊召喚しなければならない」

〈ドラゴノイドトークン〉☆1　機械族　地属性
ＡＴＫ３００

私の前に小さなドラゴンが呼び出される。
正直、今の状況なら凄くありがたい。
「俺はこれでターンエンドだ」

遊花　ＬＰ１００００　手札４
ー－－－－－　ー
ー○○－－
ー　ー
－－－－－－
－－▲－－　ー
影竜　ＬＰ３５００　手札６

影竜君の手札は一気に増えて6枚。
幸い手札交換で展開もしやすくなったし、トークンだって貰えた。

ドラゴン族は墓地から展開する能力はかなり高かったハズだから早く決着をつけないと!!?

「私のターン、ドロー!!?金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆1　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のようなモンスター。

「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル1モンスターを特殊召喚します!!?墓地から戻ってきて、クリボー!!?」

〈クリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

「導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」

「リンク召喚か!!?」

私が正面に手をかざすと私の前に大きなサーキットが現れる。

「召喚条件は通常モンスター1体!!?私はドラゴノイドトークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク1!!?リンクスパイダー!!?」

〈リンクスパイダー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１０００　←

私の前に機械の蜘蛛が現れる。

それを確認しながら私は再びサーキットを開く。

「まだいきます!!?希望に繋がるサーキット!!?」

「連続リンク召喚か!!?」

「召喚条件はモンスター2体!!?私は金華猫とドラゴノイドトークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?プロキシードラゴン!!?」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

次に現れたのは白い身体をした機械の竜。
「速攻魔法‼?・増殖‼?・自分フィールド上に表側表示で存在するクリボー１体をリリースして自分フィールド上にクリボートークンを可能な限り守備表示で特殊召喚します‼?・」
「‼?・トークンを増やしてさらにリンク召喚に繋げるつもりか」

〈クリボートークン〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

私のフィールドにいたクリボーが４体に増える。
「もっと行きます‼?・導いて‼?・希望に繋がるサーキット‼?・」
私の前に現れる３度目のサーキット。
「召喚条件はレベル１モンスター１体‼?・私はクリボートークンをリンクマーカーにセット‼?・サーキットコンバイン‼?・リンク召喚‼?・希望の守り手‼?・リンク１‼?・リンクリボー‼?・」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

クリボートークンがサーキットに入り、代わりに出てきたのは青い球体型のモンスター。
いつもは私に擦り寄ってくるリンクリボーも、今は何かを感じ取っているのか擦り寄って来ない。
「そして導いて‼?・希望に繋がるサーキット‼?・」
このターン４度目のサーキット。
私は１度目を閉じて、深呼吸をしてからそのモンスターを呼ぶ。
「召喚条件は効果モンスター３体以上‼?・私はリンクスパイダー、リ

ンクリボー、プロキシードドラゴンを　２体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
「リンク４のモンスターか!!?」
「お願い、私に不安を乗り超える力を貸して!!?リンク召喚!!?閉ざされた運命を斬り開く魂の剣（つるぎ）リンク４!!?ヴァレルソードドラゴン!!?」

〈ヴァレルソードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑←→

「!!?リンク４のドラゴン!!?それが栗原の切り札か!!?」
ヴァレルソードが力強い咆哮を上げながら喰代君を睨む。
それを見て、喰代君も口元を引き攣らせる。
今回は確信が持てる。
アレは笑ってるんだ。
私が切り札を出したことを心から喜んでいる。
……もう、出し惜しみは出来ない。
一撃で終わらせる!!?
「手札のクリボーンを捨てて魔法カード、ワンフォーワン!!?デッキからレベル１モンスター１体を特殊召喚する!!?お願い!!?チューナーモンスター、ジェットシンクロン!!?」
「!!?チューナーまで出てきたか!!?」

〈ジェットシンクロン〉☆１　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

現れたのは小さなジェット機のようなモンスター。
うん、君の力、借り受けるよ!!?
「私は!!?レベル１、クリボートークン３体に、レベル１、チューナーモンスター、ジェットシンクロンをチューニング!!?」
「やはり、シンクロ召喚か!!?」

ジェットシンクロンが光の輪になり、クリボートークンが小さな星に変わり、光の道になる。
そして光の道が輝くと、その中から現れるのは大きな機械の腕。
「闘志を秘めしその拳、あらゆる障害を打ち砕く!!?シンクロ召喚!!?一撃爆砕!!?アームズエイド!!?」

〈アームズエイド〉☆４　機械族　光属性
ＤＥＦ１２００

「ジェットシンクロンの効果発動!!?このカードがシンクロ素材として墓地へ送られた場合、デッキからジャンクモンスター１体を手札に加えます!!?私はデッキからジャンクリボーを手札に加える!!?そしてアームズエイドの効果発動!!?アームズシフト!!?１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとしてモンスターに装備出来る!!?この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、装備モンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする!!?ヴァレルソードドラゴンにアームズエイドを装備!!?」
「!!?」
アームズエイドが飛び立ち、ヴァレルソードドラゴンも腕を空に掲げ、その腕に装着される。

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ３０００→４０００

「攻撃力４０００か!!?」
「バトル!!?ヴァレルソードドラゴンでダイレクトアタック!!?斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン!!?衝撃のベイオネットブレイク!!?」
ヴァレルソードがアームズエイドを装備した腕を構え、喰代君に殴り掛かる。
しかし、それは意外なカードによって阻まれた。

「残念だが、そうはいかない。手札からクリフォトンの効果発動!!?このカードを手札から墓地へ送り、２０００ライフを払って、このターン、自分が受ける全てのダメージは０になる!!?」
「クリフォトン!?」

影竜　ＬＰ３５００→１５００

喰代君の前に電球のような姿をしたモンスターが現れ、その身体を包みこむように光の粒子を放つ。
ヴァレルソードは構わず喰代君に殴り掛かるが、光の粒子に阻まれ、弾き飛ばされてしまった。
「残念だが、このターンで決着をつけるわけにはいかない。栗原にはまだ俺の戦友（とも）を見せていないからな」
「っ……カードを1枚伏せてターンエンドです」
「エンドフェイズ!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?活路への希望!!?」
「!?この状況で活路への希望!!?」
「効果は知っているようだな。自分のＬＰが相手より１０００以上少ない場合、１０００ＬＰを払って発動!!?」

影竜　ＬＰ１５００→５００

「お互いのＬＰの差２０００につき1枚、自分はデッキからドローする!!?俺のライフは５００!!?栗原は１００００!!?よって４枚のカードをドローする!!?」
私のライフは１００００あって、喰代君はたったの５００。
でも、その代わりに喰代君は次のドローで手札が１０枚になり、墓地には強力なドラゴン達が沢山眠ってる。
……凌ぎきること、出来るかな？

遊花　ＬＰ１００００　手札１

ー　ー△▲ー　　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
　　☆　　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　　ー
影竜　　ＬＰ５００　手札９

「俺のターン、ドロー‼?さあ、全力で行くぞ栗原‼?俺は墓地に存在するエクリプスワイバーン、破壊竜ガンドラ、クリフォトンを除外し、混源龍レヴィオニアを特殊召喚する‼?」

〈　混源龍レヴィオニア〉☆８　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００

現れたのは白い身体を持つ龍。
あのカードは確か……
「墓地から除外されたエクリプスワイバーンの効果と混源龍レヴィオニアの効果発動‼?混源龍レヴィオニアは自分の墓地から光・闇属性モンスターを合計3体除外した場合に特殊召喚でき、この方法でこのカードが特殊召喚に成功した時、その特殊召喚のために除外したモンスターの属性によって効果を発動する。ただし、このターン、このカードは攻撃することができない。光と闇を除外したことにより、フィールドのカードを2枚まで選んで破壊する‼?ヴァレルソードドラゴンとセットカードを破壊する‼?」
「っ、ゴメンね、ヴァレルソードドラゴン。リバースカードオープン‼?罠発動‼?ダメージダイエット‼?このターン自分が受ける全てのダメージは半分になる‼?さらにチェーンしてヴァレルソードドラゴンの効果発動‼?アサシネイトショット‼?1ターンに1度、攻撃表示モンスター1体を対象として発動‼?そのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる。そしてこの効果の発動に対して相手は効果を発動でき

ない‼?この効果は相手ターンにでも使用することが出来るます‼?対象にするのは、混源龍レヴィオニア‼?」

混源龍レヴィオニア
ＡＴＫ３０００→０

「フリーチェーンのカードだったか。だが、ヴァレルソードドラゴンとアームズエイドは破壊させて貰おう」
ヴァレルソードが銃弾を放ち、レヴィオニアを怯ませる。
しかし、レヴィオニアが放つ白と黒の光弾によってヴァレルソードと装備されていたアームズエイド、ダメージダイエットのカードを破壊されてしまった。
ダメージダイエットは発動出来たし、墓地にはクリボーンがいるから流石にライフを削りきられることはないと思いたい。
「エクリプスワイバーンの効果で除外されていたレッドアイズダークネスメタルドラゴンを手札に加える。手札からエクリプスワイバーンを墓地へ送り、デフラドラグーンを特殊召喚‼?」

〈デフラドラグーン〉☆３　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ６００

現れたのは機械的なフォルムをしたドラゴン。
しかも、墓地にエクリプスワイバーンが送られたということは……
「墓地に送られたエクリプスワイバーンの効果発動、デッキから巨神竜フェルグランドを除外する。墓地に存在する亡龍の戦慄ーデストルドーの効果発動‼?同名カードは1ターンに1度、ライフポイントを半分支払い、レベル6以下のモンスター、デフラドラグーンを対象として、このカードを特殊召喚する‼?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは対象にしたモンスターのレベル分だけ下がり、フィールドから離れた場合はデッキの一番下に戻る」

影竜　ＬＰ５００→２５０

〈亡龍の戦慄ーデストルドー〉☆７→４　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ３０００

現れたのは赤黒くところどころ骨が見えているドラゴン。
これで喰代君のライフもまた減った。
もしかして、このライフの減少にも何か意味が……？
「墓地の光属性モンスター、エクリプスワイバーンを除外して暗黒竜コラプサーペントを特殊召喚!!?」

〈暗黒竜コラプサーペント〉☆４　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ１７００

次に出てきたのは黒いワイバーンのようなモンスター。
流石に手札があれだけあっただけに展開が全然止まらない。
「除外されたエクリプスワイバーンの効果で巨神竜フェルグランドを手札に加える。そして、舞い降りろ!!?竜が紡ぎしサーキット!!?」
「っ、リンク召喚……」
喰代君の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はカード名が異なるモンスター２体以上!!?俺は、混源龍レヴィオニア、デフラドラグーン、亡龍の戦慄ーデストルドー、暗黒竜コラプサーペント　をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?理を縛る鎖の龍!!?リンク召喚!!?リンク４!!?鎖龍蛇ースカルデッド!!?」

〈鎖龍蛇ースカルデッド〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　地属性
ＡＴＫ２８００　↙?↙←→↘?

現れたのは身体に鎖を巻きつけた蛇のような顔をした龍のモンス

ター。
あのカードは桜糀さんも使っていたモンスター。
その効果はかなり厄介だったハズ……
「鎖龍蛇ースカルデッドはこのカードのリンク素材としたモンスターの数によって以下の効果を得る。２体以上でこのカードのリンク先にモンスターが召喚・特殊召喚された場合にそのモンスターの攻撃力・守備力を３００ポイントアップさせ、３体以上で１ターンに１度、自分メインフェイズに手札からモンスター１体を特殊召喚し、４体でこのカードがリンク召喚に成功した時に自分はデッキから４枚ドローし、その後手札を３枚選んで好きな順番でデッキの下に戻す。鎖龍蛇ースカルデッドの効果と墓地に送られた暗黒竜コラプサーペントの効果発動!!?暗黒竜コラプサーペントの効果でフィールドから墓地に送られた場合、デッキから輝白竜ワイバースターを手札に加える。さらに鎖龍蛇ースカルデッドで俺は４枚ドローし、その後手札を３枚デッキの下に戻す。墓地の闇属性モンスター、暗黒竜コラプサーペントを除外して輝白竜ワイバースターを特殊召喚!!?」

〈輝白竜ワイバースター〉☆４　ドラゴン族　光属性
ＤＥＦ１８００

現れたのはコラプサーペントと対になるような白いワイバーンのようなモンスター。
「さらに防覇龍ヘリオスフィアを召喚」

〈防覇龍ヘリオスフィア〉☆４　ドラゴン族　光属性
ＡＴＫ０

続けて現れたのは紫色の体躯をしたモンスター。
召喚権をようやく使ってくれたけど、ここから一体何をしてくる？
そんな私の疑問に応えるように喰代君は正面に手をかざす。
「俺はドラゴン族レベル４モンスター、輝白竜ワイバースターと防覇

龍ヘリオスフィアでオーバーレイ!!?。２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
「っ、エクシーズ召喚!!?」
ワイバースターとヘリオスフィアが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から影のような鎧を纏ったドラゴンが降りて来る。
「漆黒の竜よ!!?その力で我が戦友(とも)を導け!!?ランク４!!?銀河影竜!!?」

〈銀河影竜〉★４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２０００→２３００

現れたのは影のような鎧をつけたドラゴン。
そして今の口上からすると、ここから出てくるのが、喰代君の切り札。
「銀河影竜の効果発動!!?オーバーレイユニットを１つ使うことで、１ターンに１度、手札からドラゴン族モンスター１体を特殊召喚する!!?神をも喰らいて現れよ!!?我が戦友(とも)!!?魂食神龍ドレインドラゴン!!?」
龍が舞い降りる。
歓喜の咆哮を上げながら。

〈魂食神龍ドレインドラゴン〉☆８　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ４０００→４３００

「これが……喰代君の切り札」
現れたのは紫色の身体からいくつもの鎌が生えているドラゴン。
ドレインドラゴンは喰代君を見て、嬉しそうに咆哮を響かせる。
「このカードは通常召喚出来ず、自分のドラゴン族エクシーズモンスターの効果でのみ特殊召喚できる。そして魂食神龍ドレインドラゴ

ンの効果発動!!?グラトニーアブソーブ!!?このカードを特殊召喚に成功した時、自分のライフポイントが相手より少ない場合、このカードの攻撃力はその差の数値分アップする!!?」
「えっ!?」
「今の俺のライフポイントは２５０。栗原は１００００。よって我が戦友(とも)の攻撃力は９７５０ポイントアップする!!?そしてその攻撃力は!!?」

魂食神龍ドレインドラゴン
ＡＴＫ４３００→１４０５０

「攻撃力……１４０５０!?」
「ただし、このターン相手が受ける全てのダメージは０になるのと、魂食神龍ドレインドラゴン自体は相手プレイヤーにダイレクトアタックは出来ない為、このターンで決めることは出来ないがな」
そういう喰代君はどこか誇らしげにドレインドラゴンを見ている。
ピーキー過ぎる能力……でも、これでさっきまでの喰代君の動きの意味が分かった。
全てはこのドレインドラゴンを活かす為の戦略。
我が戦友(とも)と呼ぶ程、ドレインドラゴンのことが好きだから、ここまでの戦術を取るんだ。
「っ……でも、それでも喰代君のライフは残り２５０!!?まだ削りきれないわけじゃない!!?」
「その通りだ。だが、勿論その対策も考えてある。鎖龍蛇ースカルデッドの効果発動!!?１ターンに１度、自分メインフェイズに手札からモンスター１体を特殊召喚する!!?現れろ、レッドリゾネーター!!?」

〈レッドリゾネーター〉☆２　悪魔族　炎属性
ＤＥＦ２００

現れたのは炎の身体を持つ小さな悪魔のようなモンスター。
「レッドリゾネーターの効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した時、フィールドの表側表示モンスター1体を対象とし、そのモンスターの攻撃力分だけ自分はライフポイントを回復する!!?」
「!?・まさか!!?」
「俺が対象にするのは我が戦友(とも)、魂食神龍ドレインドラゴン!!?よってライフポイントを１４０５０ポイント回復する!!?」

影竜　ＬＰ２５０→１４３００

「ライフポイント……１４３００」
ライフポイントまで一瞬で超えられてしまった。
これだけのライフをドレインドラゴンを倒しながら削りきるのは至難の技だ。
「まだ俺の動きは終わっていない。銀河影竜を除外し、手札よりレッドアイズダークネスメタルドラゴンを特殊召喚!!?」

〈レッドアイズダークネスメタルドラゴン〉☆１０　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２８００→３１００

銀河影竜の姿が消え、代わりに現れたのは鋼鉄の身体を持つ赤い瞳の龍。
「レッドアイズダークネスメタルドラゴンの効果発動!!?１ターンに１度手札または自分の墓地からレッドアイズダークネスメタルドラゴン以外のドラゴン族モンスター1体を自分フィールドに特殊召喚する!!?手札からライトパルサードラゴンを特殊召喚!!?」

〈ライトパルサードラゴン〉☆６　ドラゴン族　光属性
ＡＴＫ２５００

ダークネスメタルの咆哮に呼び寄せられるように現れたのは白銀の身体を持つドラゴン。
「まだだ!!?魔法カード、復活の福音!!?墓地に存在するレベル７、８のドラゴンを特殊召喚する!!?蘇れ、闇黒の魔王ディアボロス!!?」
〈闇黒の魔王ディアボロス〉☆８　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００→３３００

現れたのは鎖に縛られた漆黒の龍。
「闇黒の魔王ディアボロスの効果発動!!?自分フィールドの闇属性モンスター１体をリリースし、相手は手札を１枚選んでデッキの１番上または１番下に戻す!!?俺は闇黒の魔王ディアボロス自体をリリースして効果を発動する」
「っ!??ジャンクリボーをデッキの下に戻します」
ディアボロスの姿は消えたけど、ジャンクリボーはデッキの下に送られる。
これで手札まで０になった。
「俺はカードを２枚伏せてターンエンドだ。説明しておくが、墓地にある復活の福音は自分フィールドのドラゴン族モンスターが戦闘・効果で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外でき、ライトパルサードラゴンはフィールドから墓地に送られた時、自分の墓地のドラゴン族・闇属性・レベル５以上のモンスター１体を特殊召喚できる」
「今なら闇黒の魔王ディアボロスが戻ってくるわけですね。しかも、その後普通にターンが回ればレッドアイズダークネスメタルドラゴンでライトパルサードラゴンは蘇生される」
「その通りだ。君がどう動くか、見せて貰おう」

遊花　ＬＰ１００００　手札０
ーーーーー　ー
ーーーーー

ー　　☆
□○○○ー
ー▲▲ーー　　ー
影竜　　ＬＰ１４３００　手札１

状況はどう考えても絶望的。
おまけにフィールドにも手札にもカードは残っていない。
だけど、諦めたくはない!!?
「私のターン、ドロー!!?」
引いたカードは……私の相棒、ハネクリボー。
まだ、チャンスはあるかも知れない。
「私はモンスターをセットしてターンエンドです」

遊花　ＬＰ１００００　手札０
ーーーーーー　　ー
ーー??ーー
ー　　☆
□○○○ー
ー▲▲ーー　　ー
影竜　　ＬＰ１４３００　手札１

「俺のターン、ドロー!!?この状況でも全く諦めていないその目、見事だ。だが、この一撃を持って終わらせよう。リバースカードオープン!!?永続罠!!?竜の逆鱗!!?このカードが魔法・罠ゾーンに存在する限り、自分フィールドのドラゴン族モンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ相手に戦闘ダメージを与える!!?」
「っ!!?貫通ダメージ!!?」
それは、ハネクリボーの弱点となる効果。
ハネクリボーの戦闘ダメージを０にするという効果は破壊されて墓地にいってから発動する効果だ。

でも、貫通ダメージに関しては墓地にいく前にダメージが入るから防ぎようがない。
つまり……この攻撃で手詰まりだ。
「バトル‼?魂食神龍ドレインドラゴンでセットモンスターを攻撃‼?」
「っ……セットモンスターはハネクリボー‼?」

〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

相棒は私を守るように両手を広げる。
それを見て、喰代君も納得したような顔をする。
「成る程……ハネクリボーには確か破壊され墓地にいったターンの戦闘ダメージを０にする効果があったか。竜の逆鱗がなければこのターンは凌がれていたな」
「……今回は負けちゃいました。でも、次は絶対に勝ってみせます‼?」
「‼?そうか、楽しみにしておこう。我が戦友(とも)、魂食神龍ドレインドラゴンよ‼?勇敢なる決闘者に敬意を示せ‼?暴食のスワロースパイラル‼?」
ドレインドラゴンは咆哮を上げると、白と黒が混ざった螺旋のブレスをハネクリボーに向けて放つ。
ブレスはハネクリボーを呑み込んだ後、そのまま私の身体も呑み込んだ。

遊花　ＬＰ１００００→０

ーーーーーーー

デュエルが終わり、立体映像が消えていく。
喰代君はドレインドラゴンの姿が消えるのを眺めてから、私の方に

近づき、手を差し出した。
「ありがとう。いいデュエルだった」
「いえ、こちらこそありがとうございました‼?」
私も手を差し出して喰代君と握手をする。
結局、喰代君のライフはコストの消費以外では削ることが出来なかった。
しかも、そのコストですらも完全に回復されちゃったから完敗と言える。
これが、学年トップ2の決闘者の実力。
……まだまだ遠いなぁ。
「出来れば今すぐ再戦といきたいところですが、次のデュエルもあるので今回は止めておきます」
「……そうか。案外負けず嫌いなのだな」
「そういうものじゃないんですか、決闘者って?」
「いや、違いない。栗原とのデュエル、久しぶりに心が滾るいいデュエルだった。退学がかかっているそうだが、栗原程の決闘者なら大丈夫だろう」
「……そうでしょうか?」
「ああ、俺が保証しよう。俺の試験はこれで終わりだ。せっかくだからな後は栗原のデュエルを見学させて貰うとしよう」
「あはは、期待に添えるように頑張りまーーー」
『第3学年、出席番号98番、栗原遊花さん。至急第3フィールドへお越しください』
『第3学年、出席番号390番、宝月　桜さん。至急第3フィールドへお越しください』
「ーーーへっ?」
突然のアナウンスに思わずきょとんとしてしまう。
アナウンスが聞こえたのか、喰代君も首を傾げる。
「今、俺とのデュエルが終わったところだと言うのに、随分と急なことだな。栗原は大丈夫か?」
「あ、はい‼?体力的には全然‼?でも……」

心配してくれる喰代君に慌てて大丈夫だと手を振る。
確かに、急なデュエルだということには驚いた。
でも、私が驚いたのはそっちじゃない。
最初の予定では、確か私と桜ちゃんのデュエルは期末試験の1番最後の試合にする予定だったハズだ。
でも、私はまだ神路祇君とデュエルをしていない。
となると、何か予定が入ったから順番を変えたって可能性もあるけど、結局は期末試験なんだから早々変更なんてあるわけないし……
もうひとつ考えられるのはデュエルをする側から順番の変更を要望されたこと。
この場合、私は勿論そんなことはしてないから、したとするならそれは桜ちゃんが行ったということだ。
……一体どういうことなの、桜ちゃん？

第２８話　守りたいもの

●

『ねぇ、そこでなにしてるの？』

そんな声が聞こえて私が振り向くと、そこには水色のリボンをつけた私と同い年ぐらいの女の子がいた。

その女の子の柔らかな笑顔が眩しくて、私はつい不機嫌そうに言葉を返す。

『なによ、わたしになにかよう？』

『むこうであそばないの？むこう、おともだちがたくさんいるよ？』

『いないわよ、おともだちなんて』

『いないの？』

『あいつら、わたしのことばかにするし。なんでおまえには”ぱぱ”がいないんだって。だから、あんなやつら、しらないわ』

『そうなんだ』

そういうと女の子は私が座っていた保育園の砂場に、同じように座り込む。

能天気な顔をして座り込む女の子に私は思わず、むっとして怒鳴りつけてしまう。

『なんなのよ‼？わたしにようがあるわけじゃないんでしょ⁉？さっさとどっかいきなさいよ‼？』

『？なんで？』

『あんたもどうせわたしのことをばかにするんでしょ‼？』

『??なんでばかにするの？』

『なんでって、ばかにしてんの⁉？』

『???ゆうか、ばかにしてないよ？』

『あーもう‼？なんなのよあんたは‼？』

『？ゆうかはゆうかだよ？』

『なまえをきいたんじゃないわよ‼？』

私の言葉に心底不思議そうに首を傾げる女の子を見て、私は何故だ

か胸が苦しくなって涙が溢れ出してくる。
私が急に泣き出したからか、女の子は心配そうな顔をして私の近くまで近寄ってくる。
『どうしたの？どこかいたいの？』
『いたい、わけじゃ、ない、わよ‼？』
『えっと、えっと、いたいの、いたいの、とんでけー？』
『だから、いたいんじゃ、ない、わよー‼？』
『でもでも、ないてるし。あのあの、なかないで？ぎゅー‼？いいこいいこ』
そういって心配そうに私を抱き締めながら頭を撫でてくる女の子を見て、私の目から余計に涙が溢れてくる。
久しぶりだった。
お母さんや保育園の先生以外と話すのも、こうやって抱きしめて貰うのも。
だからこそ、涙が溢れるのは止められなかった。
『うわ、あああああ‼？』
『だいじょうぶ、だいじょうぶだよー』
『ああああああ‼？』
『ゆうかがいっしょにいるよーだから、だいじょうぶだよーいたくないよー』
結局、そんな私の泣き声を聞いて、保育園の先生が近づいてくるまで、私はずっとその女の子ーーー遊花に抱きしめられながら泣いていた。
お父さんがいないことを馬鹿にされ、いじめられていた私の目には、能天気で、何も悩みが無さそうに笑う遊花が、羨ましく見えたんだと思う。
結局その後、私が泣いていたせいで遊花は遊花のお父さん達に怒られて、遊花のお父さん達が私のお母さんに必死に謝っている中、相変わらずぼんやりとしながらも心配そうに私の方を見つめていたのを覚えている。
その日から、遊花はいつも私の傍に来るようになって、私と一緒に

いたせいで、同じように周りの子供からいじめられるようにもなって、私みたいに言い返したりもしないから、次第に遊花の方がいじめの標的になっていて……

それでも、遊花は気にした様子もなく、ずっと私の傍にいてくれた。

そんな遊花がいじめられるのは許せなくて、私は遊花をいじめようとする奴らを片っ端からこてんぱんにやっつけるようになった。

遊花のお父さんにデュエルを教えて貰ったり、身体の鍛え方も教えて貰って、デュエルでも、喧嘩でも、そう簡単には負けないぐらいに強くなった。

……身体の鍛え方に関しては、遊花のお父さんも苦笑していたけど。

『壊獣』を選んだのは、名前の通り、何もかも壊せるぐらい強くなりたかったからだ。

私を縛るしがらみも、遊花をいじめようとする敵も、全部壊してしまえるぐらい、強くなりたいと願ったから。

遊花は、『いつも私を守ってくれてありがとう』なんて言ってたけど、本当は逆だ。

私が守ってるんじゃない。

私が守られていたんだ。

遊花の優しさに、遊花の笑顔に、ずっと守られてた。

だから、遊花の両親が事故で亡くなって、遊花が塞ぎ込んで笑わなくなった時、今度こそ、私が遊花を守るんだって、思った。

遊花が私を助けてくれたように、今度は私が遊花を助けるんだって。

でも、結局私には遊花を助けることが出来なかった。

遊花が辛い時も傍にいることしか出来なくて、昔みたいに笑ってくれなくなった遊花を励ますことも出来なくて……

結局、最終的に遊花を助けたのは、私じゃなくて偶然出会っただけの結束だった。

……正直言うと、そんな結束に少し嫉妬した。

突然現れて、まるでヒーローみたいに遊花を救った結束に。

でも、そんな嫉妬も結束の話を聞いたら無くなった。
結束も、遊花と同じだったから。
辛い境遇にあっても、諦めずに前に進んでいた結束だったからこそ、遊花を救えたんだって、今なら思う。
そんなことを考えた時、私は自分がどうすればいいのか分からなくなった。
遊花を守ることも出来ず、結束のように導くことも出来ず、ただそこにいるだけの私は、どうすればいいのだろうかと。
だからこそ、私はーーー

ーーーーーーー

★

「……来たわね」
「桜ちゃん」
フィールドを移動すると、そこには既に桜ちゃんが待っていた。
桜ちゃんは見たこともないような真剣な表情で私を見ている。
私はその表情に少し戸惑ってしまうが、頭を振って余計な考えを追い出し、改めて桜ちゃんを見つめる。
「悪かったわね、急に順番を変更させて」
「やっぱり、桜ちゃんが順番を変えたんだ」
「ええ、校長室に乗り込んで直談判してきたわ」
「……もう、桜ちゃんはまた無茶をして……」
私は思わず呆れた視線を桜ちゃんに向ける。
「悪いとは思ってるわよ?でも、今回は必要なことだったの。期末試験が始まる前だったら最初に決めた通り、最後に遊花とデュエルをすればよかったんだけど、今はこのタイミングでデュエルをするのが1番いいの」
そういって真剣な表情のまま話しかけてくる桜ちゃんに、私も1度目を閉じてから真剣な表情を作る。

そんな私を見て、桜ちゃんはデュエルディスクを起動しながら口を開く。
「このデュエル、私が勝ったら次の神路祇とのデュエル、遊花には棄権してもらうわ」
「……分かった」
「……案外あっさりと頷いたわね。もっと驚いたり、怒るかと思ったんだけど……」
「桜ちゃんのことだもん。分かるよ……私のこと、心配してくれてるんだよね？神路祇君とデュエルして、私が傷つかないように……桜ちゃんは、いつも私を守ってくれるから、分かるよ」
桜ちゃんは、優しいから……いつも私を守ってくれる。
私がいじめられてる時も、お父さん達がいなくなって塞ぎ込んでいた時も、ずっと傍にいて、私を守ってくれていたから……今回も、神路祇君とデュエルして、私が傷ついてしまわないように、こういう提案をしてくれてるのは分かる。
だけど……
「だけど……桜ちゃんに勝ったら、いいんだよね？神路祇君ともデュエルして？」
「っ……へぇ、遊花にしては言うじゃない？いつも負けてるのに、私に勝てるとでも？」
「うん、勝つよ……私だって、いつまでも桜ちゃんに守られてるわけにはいかないから。桜ちゃんの隣に、私も立ちたいから……だから……」
私もデュエルディスクを起動して桜ちゃんに向けて構える。
そして、私は真剣な表情を崩し、精一杯の笑顔を浮かべた。
「始めよう……本気の、楽しいデュエルを‼？」
「っ‼？楽しい……か。この状況でも、遊花はそう言うのね……」
そんな私を見て、桜ちゃんは真剣な表情を崩し呆れたような表情を浮かべる。
そしてしばらくの間目を閉じると、いつもの自信満々な笑みを浮かべた。

「なら、楽しめるものなら楽しんでみなさい!!?私は容赦なく、遊花に勝ってやるわ!!?」
「うん!!?いくよ、桜ちゃん!!?」
『決闘!!?』

遊花　ＬＰ８０００
桜　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は私だよ!!?クリバンデットを召喚」
〈クリバンデッド〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

私の前に現れたのは盗賊のような姿をした黒い毛玉のモンスター。
桜ちゃん相手に先攻なら、フィールドにモンスターを残しちゃダメだ。
フィールドにモンスターを残すと、そこから壊獣が現れてヘルテンペストを使われる可能性が出てくる。
だから、最初の内はモンスターをフィールドに残さずに、手札補充と墓地肥やしに専念する。
「私はカードを２枚伏せてエンドフェイズにクリバンデットの効果発動!!?このカードをリリースしてデッキの上から５枚めくり、その中から魔法・罠カード１枚を手札に加えて残りを墓地おくよ!!?」
クリバンデットの姿が消え、私はデッキの上から５枚のカードをめくって中から１枚のカードを手札に加える。
「私は魔法カード、クリボーを呼ぶ笛を手札に加えてターンエンド!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札３

ー　　ー
ー▲▲ー
ー　　ー
ー　　ー
ー　　ー
ー　　ー
ー　　ー
ー　　ー
桜　ＬＰ８０００　手札５

「私のターン、ドロー!!?……流石にモンスターがいないんじゃどう動こうとヘルテンペストは決められないわね。私はフィールド魔法、ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントを発動!!?」

桜ちゃんがフィールド魔法を発動すると、辺りの景色が海が近くに見える都市の街並みに変わる。

このカードは壊獣をサーチしたりできるフィールド魔法だったハズ……気をつけて動かないといけないかな。

「そして行くわよ、私の相棒!!?月より来たる永遠の姫!!?妖精伝姫（フェアリーテイル）―カグヤを召喚!!?」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ１８５０

現れたのは月のマークが入っている扇子を持ったお姫様。

カグヤは挨拶をするように私に扇子をひらひらと振ってにこやかに笑う。

桜ちゃんの相棒、カグヤ。

いつもこうやって挨拶をしてくれるいい子なんだけど、その効果は私にとってかなり辛いものなんだよね。

「妖精伝姫―カグヤの効果発動!召喚に成功した時、デッキから攻撃力１８５０の魔法使い族モンスター１体を手札に加える。私は２体目の妖精伝姫―カグヤを手札に加えるわ。バトル!!?妖精伝姫―カグヤでダイレクトアタック!!?タツノクビノタマ!!?」

「あう!!?」

カグヤは着物の中から綺麗な玉を取り出し、その玉を振りかぶって私に向かって投げつける。
毎回思うんだけど、凄く気合を入れた投球フォームで投げてくるけど、いいの、それ投げても？

遊花　ＬＰ８０００→６１５０

「何も使ってこないか……私はカードを３枚伏せてターンエンドよ」

遊花　ＬＰ６１５０　手札３
ー－▲▲ー　ー
ー－－－－
ー　ー
○－－－－
ー▲▲▲ー　▽
桜　ＬＰ８０００　手札３

「私のターン、ドロー‼？金華猫を召喚‼？」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のようなモンスター。
「金華猫の効果発動‼？召喚した時、墓地に存在するレベル１モンスターを特殊召喚するよ‼？戻ってきて、ミスティックパイパー‼？」
「クリバンデットの時に墓地にいってたのね……」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

現れたのはフルートのようなものを弾いている男の人。
「ミスティックパイパーの効果発動!!?・このカードをリリースして自分のデッキからカードを1枚ドローするよ。そしてこの効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル1モンスターだった場合、自分はカードをもう1枚ドローするよ!!?・」
ミスティックパイパーが私を見て任せろというようにサムズアップをする。
私もサムズアップして返すと笑顔を浮かべながら消えていった。
「私が引いたのはバトルフェーダー!!?・レベル1モンスターだからもう1枚ドロー!!?・」
「KYOUTOUウォーターフロントの効果、フィールドのカードが墓地に送られる度に、1枚につき1つこのカードに壊獣カウンターを1つ。最大5つまで壊獣カウンターを置くわ」

KYOUTOUウォーターフロント
壊獣カウンター0→1

引いたカードも合わせて手札を見るけど、今の状態で虹クリボーとクリボールが引けていないのが少し辛い。
このままだと、3000以上のモンスターをこちらに送りつけられるとそのままヘルテンペストが決まっちゃうかも。
「私はカードを1枚伏せてエンドフェイズ。スピリットモンスターの共通効果で金華猫は手札に戻るよ」
「ならそのエンドフェイズ、速攻魔法、スケープゴート!!?・」
「えっ?・」
「このカードを発動するターン、自分はこのカードの効果以外ではモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚できなくなるけど、自分フィールドに獣族・地属性・レベル1・攻守0の羊トークンを4体守備表示で特殊召喚するわ!!?・ただし、このトークンはアドバンス召喚のためにはリリースできないけどね」

〈羊トークン〉☆1　獣族　地属性
ＤＥＦ０

桜ちゃんのフィールドに現れるカラフルな羊達。
桜ちゃんのデッキにスケープゴートなんて前は入っていなかったと思う。
ということは、今回私とデュエルするために追加したカード？
でも、羊トークンが私とのデュエルで役に立つとは考え辛いけど……何か嫌な予感がする。
「ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントの効果で壊獣カウンターを１つ置くわ」

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント
壊獣カウンター１→２

「……ターンエンドだよ」

遊花　ＬＰ６１５０　手札５
ー▲▲▲ー　　ー
ーーーーー
　　ー　　ー
○□□□□
ーー▲▲ー　　▽
桜　ＬＰ８０００　手札３

「私のターン、ドロー‼？不思議そうな顔をしてるわね。確かに、スケープゴートは前は私のデッキには入って無かったわ。だけど、今回入れることにしたの。遊花とデュエルするために手に入れた新しい難題のためにね」
「新しい難題？」
「ええ、見せてあげるわ。私の新しい力を‼？繋がって‼？希望に導

くサーキット!!?」
「!?・桜ちゃんがリンク召喚!?・」
桜ちゃんが手をかざすと桜ちゃんの正面に大きなサーキットが現れる。
確かに桜ちゃんのＥＸデッキには数枚リンクモンスターが入っていたのは知っていた。
でも、私が見てきた限り、桜ちゃんはそのモンスター達を１度も使ったことはない。
そんなことをする前に壊獣の力で押し切っていたし、桜ちゃん自身、壊獣で押し切れない場合、自分が持ってるリンクモンスターじゃどうしようもないって言ってたから……そのモンスター達を今使ってくるの？
「召喚条件はモンスター２体!!?・私は羊トークン２体をリンクマーカーにセット!!?・サーキットコンバイン!!?・リンク召喚!!?・リンク２!!?・ＬＡＮフォリンクス!!?・」
〈ＬＡＮフォリンクス〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１２００　↙?↘?

現れたのは白い蛇のような身体を持つ機械の竜。
「どんどん行くわよ!!?・繋がって!!?・希望に導くサーキット!!?・」
「っ、連続リンク召喚!!?・」
「召喚条件はモンスター２体!!?・私は羊トークン２体をリンクマーカーにセット!!?・サーキットコンバイン!!?・リンク召喚!!?・リンク２!!?・プロキシードラゴン!!?・」
〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

次に現れたのは私も使っている白い身体をした機械の竜。
出てきたのは小型のリンクモンスターが２体。

でも、桜ちゃん程の決闘者がこれだけで終わるとは思えない。
「私はこのターン通常召喚できなくなる代わりに自分フィールドに悪魔族・闇属性・レベル1・攻守0のトーチトークンを2体攻撃表示で特殊召喚することで、遊花のフィールドにトーチゴーレムを特殊召喚するわ!!?」
「っ!!?私のフィールドに!!?」

〈トーチゴーレム〉☆8　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３０００

〈トーチトークン〉☆1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ０

私のフィールドに大きな鉄のゴーレムが、桜ちゃんのフィールドにはそのゴーレムを小さくしたようなモンスターが現れる。
マズい、攻撃力３０００のモンスターが送られて攻撃力０のモンスターが出てきた。
これじゃあヘルテンペストを使われちゃう!!?
そんな焦る私を見て、桜ちゃんはクスリと笑う。
「焦ってるってことはヘルテンペストを防ぐカードはなさそうね。だけど、ヘルテンペストを使うのはもう少し先よ。繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」
そういって桜ちゃんの前に再びサーキットが現れる。
「召喚条件は通常モンスター1体!!?私はトーチトークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク1!!?リンクスパイダー!!?」

〈リンクスパイダー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１０００　←

桜ちゃんの前に機械の蜘蛛が現れる。

それを確認しながら桜ちゃんはまたサーキットを開く。
「まだまだ行くわよ!!?繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」
「っ、また!?」
「召喚条件はトークン以外の同じ種族のモンスター2体!!?私はリンクスパイダーとLANフォリンクスをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?アカシックマジシャン!!?」

〈アカシックマジシャン〉LINK　2　魔法使い族　闇属性
ATK1700　→←

次に現れたのはフラスコを持った研究者のような女の子。
女の子は私を見てウィンクをしている。
「KYOUTOUウォーターフロントの効果で壊獣カウンターを2つ置くわ」

KYOUTOUウォーターフロント
壊獣カウンター2→4

「そしてアカシックマジシャンの効果発動!!?リンク召喚に成功した場合、リンク先のモンスターを全て持ち主の手札に戻すわ!!?」
「えっ?」
アカシックマジシャンのリンク先……アカシックマジシャンの正面にいるのは……トーチゴーレム!?
アカシックマジシャンが手に持っていたフラスコをトーチゴーレムに投げつけるとトーチゴーレムの姿が消え、トーチゴーレムが桜ちゃんの手札に返っていく。
さっき聞いた限りだと、トーチゴーレムの召喚にターン制限なんてものはなかった。
しかも、桜ちゃんのフィールドにはカグヤまでいる。
ということは、またトークンを利用されてリンク召喚をされちゃう

の⁉？

「気付いたみたいね。でも先にＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントの効果、１ターンに１度、このカードの壊獣カウンターが３つ以上の場合、デッキから壊獣モンスター１体を手札に加えるわ。私が加えるのは、勿論切り札の雷撃壊獣サンダーザキングよ」

ウォーターフロントに地響きがして、桜ちゃんの手札にサンダーザキングが加わる。

桜ちゃんの切り札が加わった上に、ここからまだリンク召喚も残ってるなんて……

「私はまた自分フィールドに悪魔族・闇属性・レベル１・攻守０のトーチトークンを２体攻撃表示で特殊召喚することで、遊花のフィールドにトーチゴーレムを特殊召喚するわ⁉？」

〈トーチゴーレム〉☆８　悪魔族　闇属性

ＡＴＫ３０００

〈トーチトークン〉☆１　悪魔族　闇属性

ＡＴＫ０

「次、行くわよ⁉？繋がって⁉？希望に導くサーキット⁉？召喚条件はモンスター２体⁉？私はトーチトークン２体をリンクマーカーにセット⁉？サーキットコンバイン⁉？リンク召喚⁉？リンク２⁉？セキュリティドラゴン⁉？」

〈セキュリティドラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性

ＡＴＫ１１００　→←

次に現れたのはプロキシーに似た白い身体をした小型の機械の竜。

「セキュリティドラゴンの効果発動⁉？このカードがフィールドで表側表示で存在する限り１度だけ、このカードが相互リンク状態の場合、相手フィールドのモンスター１体を手札に戻す⁉？対象は勿論、

トーチゴーレムよ‼?」
「っ‼?また……」
セキリュティが翼から電磁波のようなものを出し、それによりトーチゴーレムが再び桜ちゃんの手札に戻る。
またここからリンク召喚が来る。
本当に桜ちゃんは凄い。
今まで使ってこなかったリンク召喚を使って、こんなに凄いことが出来るなんて。
そんなことを考えている私を見て、桜ちゃんは優しい笑みを浮かべた。
「ここまで一方的に動かれて、そんな嬉しそうな笑顔を浮かべるなんて、本当に遊花は変わってるわね」
「えっ?笑ってた、私?」
「笑ってたわよ。凄くニコニコと、本当に遊花の笑顔は昔から変わらないわ」
思わず自分の顔をぺたぺたと触っていると、桜ちゃんがそんなことを言いながら昔を懐かしむように目を閉じる。
そしてしばらくすると、少し寂しそうな表情を浮かべた。
「遊花、さっき言ったわよね。『いつまでも桜ちゃんに守られてるわけにはいかない』って」
「えっ?う、うん」
「でもね、それは違うの。私は、遊花を守れてなんかいない。守られてたのは、私の方」
「えっ?桜ちゃん、が?」
桜ちゃんの言葉に私は首を傾げる。
私は桜ちゃんを守っていた記憶なんてない。
桜ちゃんはいつも強くて、私がいじめられてると、凄い勢いでその人達を追い払って、いつも私を助けてくれていたのに……
「遊花、私達が初めて会った時のことって覚えてる?保育園の砂場で1人でいた私に、遊花は話しかけてくれたわよね」
「えっと、うん。桜ちゃん、1人で寂しそうだったから」

私と桜ちゃんが初めて出会ったのは4歳の頃。
私が保育園の砂場で1人で寂しそうにしていた桜ちゃんを見つけて、一緒に遊べないかなと思って声をかけたのが始まりだった。
当時の私は保育園に入ったばかりだったし、理解できてなかったけど、桜ちゃんのお父さんは桜ちゃんが生まれてすぐに仕事中の事故によって亡くなったらしい。
そのことで桜ちゃんのお母さんは凄く苦労したという話は、私もよく聞いていたので知っている。
そして保育園にいた頃、お迎えに来ているのがいつもお母さんということに気づいた子供の誰かが、そのことを不思議に思っていなかった桜ちゃんに聞いたことで、周囲に知られ、そのことをからかわれていじめられていたようだ。
桜ちゃんと初めて会った時、少しお話ししてたら急に桜ちゃんが泣き出して、戸惑いながらもどこか痛いのかも知れないからどうにかしなきゃって思いで、痛いのが無くなるように頭を撫でながら抱きしめて慰めようとした記憶がある。
その後、保育園の先生が来て、私が桜ちゃんを泣かせてしまったということをお父さん達や桜ちゃんのお母さんに伝えて、私はお父さん達に怒られ、お父さん達は桜ちゃんのお母さんに必死に謝っていた。
私はなんで怒られたのか、全然分からなかったけど、それでも泣いてしまった桜ちゃんが心配で……次の日からはずっと桜ちゃんの傍にいるようになった。
桜ちゃんの辛そうに泣いてる表情が忘れられなかったから、誰かが泣いてるのは見たくなかったから、そんな思いで一緒にいた気がする。
そうして桜ちゃんと一緒にいると、知らない内に私もいじめられるようになっていて、それを桜ちゃんはいつも助けてくれた。
そしてお父さん達がいなくなってからも……沢山、本当に沢山守ってもらった。
それなのに、私を守っていないって言うのは、どういうことなんだろう？

「あの頃、遊花は確かにいじめられてたけど、それは私と一緒にいたせい。いじめられてた私と一緒にいて、だけど私みたいに言い返したりもしないから、私から標的が移っただけなの」
「えっと、それって別に桜ちゃんのせいって訳じゃないよね？いじめてた人達が悪いんだし……」
「それでも、私のせいで遊花が巻き込まれたことには変わりはないわ。私の代わりに遊花は傷付いた。私は遊花に助けられたのに……」
桜ちゃんの言葉に、私は何を言っていいのか分からなくなる。
私は、桜ちゃんのせいでいじめられてたなんて思ったこともないし、話を聞いた今も思ってもいない。
でも、桜ちゃんの言葉が正しいなら、確かにそれは私が桜ちゃんの身代わりになったような行為で、桜ちゃんからしたら、それは私が桜ちゃんを守って、代わりに私が傷ついたと感じて、苦しんでいたのかも知れない。
「だから、今度こそは私が遊花のことを守りたいの。それを遊花は望んでいないかも知れないけど、遊花は私の大切な”親友”だから、傷つくのは、見たくない」
「桜ちゃん……」
「だから、私も遊花みたいに変わってみせる!!?このカードと一緒に!!?繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」
そういって桜ちゃんが手をかざし、巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はモンスター2体以上!!?私はプロキシードラゴンとセキュリティドラゴンをそれぞれ2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
「!?リンク4のモンスター!!?」
桜ちゃんはリンク4のモンスターなんて持ってなかったハズなのに!?
プロキシーとセキリュティが2体ずつに分身し、サーキットの中に吸い込まれる。
そして桜ちゃんはEXデッキから1枚のカードを取り出すと胸の前で握りしめた。

ーーーーーーー

●

『お願い、私に力を貸して‼?リンク召喚‼?閉ざされた運命を斬り開く魂の剣(つるぎ)‼?リンク４‼?ヴァレルソードドラゴン‼?』
『お、出たな‼?遊花のヴァレルソードドラゴン‼?』
『この状況でヴァレルソードドラゴン……』
『今度こそ、天雷君のサンダーエンドドラゴンを倒しちゃうんだからね‼?』
『……はぁ～』
『どうしたんだい、深いため息なんてついて?』
『島さん……』
デュエルをしている遊花と天雷。
それを近くで見ている九石を少し離れた場所から眺めながら、思わず吐いてしまったため息が聞こえたみたいで、島さんが声をかけてくる。
今日は御子神は用事があったみたいで『Ｎａｔｕｒａｌ』には一緒に来れなかったから、カウンターの近くにいるのは私と島さんだけだ。
『何か悩みごとかい?桜君は悩みごとはすぐに解決して作らないタイプだと思っていたけど』
『それってバカにされてる?』
『褒めているのさ。悩みごとを溜め込まないようにするのも大切なことだからね。でも、今は少し悩みがあるように見える。よければ話してみないかい?老い先短い老人だと思って』
『歳は聞いてないけど、見た目からして老人って言う程の歳じゃないでしょ、島さんは……でも、そういうことなら少しだけ……』
『ああいいとも。コーヒーはいるかい?』
『苦いのは苦手なの』

『じゃあカフェオレにしよう。椅子を持ってきてそこに座るといい。なに、どうせ客のこない店だからね。どこに座っても大丈夫さ』
『それは自慢気に言えることじゃないわよ、島さん』
　そういって島さんがカウンターの後ろに置いてあったコーヒーメーカーを操作し始めたので、私は近くにあった椅子を持ってきてカウンターの前に座る。
　……いいのかしら、ここカードショップなのに？
『ヴァレルソードドラゴンでサンダーエンドドラゴンを攻撃‼？攻撃宣言時、ヴァレルソードドラゴンの効果発動‼？アブソーブブースト！1ターンに1度、このカードが表側表示モンスターに攻撃宣言した時、ターン終了時まで、このカードの攻撃力はそのモンスターの攻撃力の半分アップし、そのモンスターの攻撃力は半分になる‼？』
『ダメージステップ開始時、手札からオネストを発動‼？自分の光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ開始時からダメージ計算前までに、このカードを手札から墓地へ送ってそのモンスターの攻撃力はターン終了時まで、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分アップします‼？』
『ああ‼？オネストはズルいよ～‼？』
　そんな声が後ろにあるデュエルスペースから聞こえてくる。
　この調子だと、今回も天雷の勝ちかしらね。
　そんなことを思っていると、私の前にカフェオレが置かれる。
『それで、桜君は何を悩んでいるのかな？まあ、先程の視線やいつもの桜君を見ている限り、遊花君のことだとは思っているけどね』
『……そんなに分かりやすいかしら、私』
『どうだろうね、私は人間観察が趣味みたいなものだから気づけたのかもしれないし、そうじゃないかもしれない。まあ、今そこは重要なところではないさ。問題は、桜君の悩みだよ』
『……意外と直球でくるのね、島さんって』
『桜君は直球で聞かれた方が答えやすいかと思ったからね』
『……あたり。人間観察が趣味って言うのも伊達じゃないわね』
　私は苦笑しながらも、少しだけ遊花の方に視線を向けながら口を開

く。
『遊花は、凄いスピードで成長してる。まあ、師匠が結束で、先輩として闇が教えてるって言うのもあるのかも知れないけど、それを踏まえても、やっぱり遊花の成長は凄いと思うわ』
『そうだね。遊花君のデュエルは何試合か見せて貰ったけど、相手の戦術も知識も根こそぎ吸収してるという印象だね』
『だからこそ、ちょっと不安なの。遊花が何処か遠いところに行っちゃうんじゃないかって。私の手の届かない、守りきれないところに行っちゃうんじゃないかって……まあ、今でも守れてるなんて言えないけど。あの子に対するやっかみは、ほとんど私が原因なんだし』
そういって島さんが作ってくれたカフェオレを飲みながら、自嘲気味に笑う。
昔だって、今だって、遊花がいじめられているのは私のせい。
原因も私でその後いじめが悪化したのも、そのことにイラついた私が叩きのめしたから。
私は……遊花の負担にしかなっていない。
そんな私を見て、島さんは優しい笑みを浮かべる。
『桜君は、本当に遊花君のことを大切に思っているんだね』
『私が今こうやって穏やかに過ごせているのは、遊花が私を助けてくれたから。遊花がいなかったら、私はどれだけ荒れてしまったかなんか、想像も出来ないわ』
『だからこそ、遊花君に追いつき、守りたいんだね、桜君は』
『……ええ』
遊花には沢山の恩がある。
こんな私といつも一緒にいてくれて、私が欲しいと思った言葉をくれて、居場所をくれた。
だから、そんな遊花を私は守りたい。
私は……私のデッキみたいに、壊すことしかできない獣のようなものなのかも知れないけど……それでも、遊花のことを……大切な親友のことを、守りたい。
そんな私を見て、島さんは柔らかい笑顔を浮かべると、何かを思い

出したかのように、急に近くに置いてあった小さな箱を取り出し、中から1枚のカードを抜いて、私の前に置いた。
私はそれを見て、首を傾げながら島さんを見る。
『えっと……島さん、これは？』
『君の覚悟は十分に私に響いたよ。だから、お話を聞かせて貰ったお礼にそのカードをあげよう』
『えっ⁉？そんな、悪いわよ‼？私の悩みを聞いて貰っただけなのに……』
『ははは、気にすることはないよ。遊花君に渡したカードとはまた違った意味で扱いに困ってたカードだったからね。だが、桜君にならそのカードは相応しいだろう。何せ、このカードが君の元にいきたがっているからね』
『いや、意味わからないし……というか、それって不良在庫を押し付けられただけなんじゃ……』
困惑する私を見て、島さんは穏やかな笑みを浮かべながら口を開く。
『そのカードが、きっと桜君を望む場所まで連れて行ってくれるよ。君の守りたいという思いに応えてね』
『……分かったわ。受け取る……ありがとう、島さん』
『いやいや、気にしなくてもいいよ。それと、これは遊騎君や遊花君、後は闇君にも送った言葉だけど、桜君にも送らせて貰おう。抗いなさい。誰に何を言われようと、その思いを違えず、真っ直ぐに進んで行きなさい。絶望の先には、必ず希望が待っているハズだからね』
『‼？……ええ‼？』
私は貰ったカードを改めて見る。
カードが私のところに来たがってるとか、正直意味がわからないけど……それでも、このカードと一緒に進んでいきたいと思った。
遊花を……大切な人達を守れるように。

ーーーーーーー

★

「お願い、私に大切なものを守る力を貸して‼?閉ざされた世界を守護する精神の盾‼?リンク４‼?ファイアウォールドラゴン‼?」

咆哮が響く……世界を震わす龍の咆哮が。

〈ファイアウォールドラゴン〉ＬＩＮＫ４　サイバース族　光属性

ＡＴＫ２５００　↑←→↓

「これが私の新しい切り札……私にとっての、遊花のヴァレルソードドラゴン。それがこの、ファイアウォールドラゴンよ」

「ファイアウォールドラゴン……?」

桜ちゃんの前に現れたのはプロキシーとセキュリティが融合し、大きくなったような白いドラゴン。

ファイアウォールは桜ちゃんの姿を見て、嬉しそうに咆哮を上げる。

見たことがないドラゴンの姿に、思わず困惑する私。

それにあのドラゴンを見ていると、なんだか不思議な感じがする。

見たことがないハズなのに、何処かであったことがあるような……そんな不思議な感じが。

困惑している私を他所に、桜ちゃんはそのままターンを進める。

「妖精伝姫―カグヤの効果発動‼?アンリーゾナブルディマンド‼?1ターンに1度、相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動‼?相手はそのモンスターの同名カード1枚を自身のデッキ・ＥＸデッキから墓地へ送ってこの効果を無効にできる。墓地へ送らなかった場合、このカードと対象のモンスターを持ち主の手札に戻す。この効果は相手ターンでも発動できるわ。対象は勿論トーチゴーレムよ」

「このタイミングで⁉?私のデッキにはトーチゴーレムは入ってないから、トーチゴーレムは手札に戻るよ」

私がそう宣言するとカグヤがテクテクと私のフィールドにいる

トーチゴーレムに近づくと、その巨体を軽々と持ち上げて桜ちゃんに向かってぶん投げる。
すると、トーチゴーレムはカードとして手札に戻り、カグヤも1つ欠伸をしてから私にひらひらと手を振って眠そうに手札に戻っていった。
う、うーん、いつ見てもシュールな光景だなーというか、無理難題なのはカグヤのその筋力なんじゃ……
「なら私はまた自分フィールドに悪魔族・闇属性・レベル1・攻守0のトーチトークンを2体攻撃表示で特殊召喚することで、遊花のフィールドにトーチゴーレムを特殊召喚するわ!!?」

〈トーチゴーレム〉☆8　悪魔族　闇属性
ATK3000

〈トーチトークン〉☆1　悪魔族　闇属性
ATK0

「さあ、また行くわよ!!?繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」
そういって桜ちゃんの前にもう何度目になるかもわからないサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル1モンスター1体!!?私はトーチトークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?希望の紡ぎ手!!?リンク1!!?リンクリボー!!?」
「ええっ!?!?リンクリボー!?!?」

〈リンクリボー〉LINK1　サイバース族　闇属性
ATK300　←

出てきたのはいつも私に擦り寄ってくる青い球体型のモンスター。
だけど桜ちゃんのフィールドに現れたリンクリボーは桜ちゃんに擦り寄るようなことはせず、何処かキリッとした目でこちらを見てい

た。
「あ、あれ？」
「？どうしたのよ、遊花？」
「いや、私のリンクリボーと少し違うというか、桜ちゃんのリンクリボーは私のリンクリボーみたいに擦り寄っていかないんだなって」
「……遊花、大丈夫？体調が悪かったりするの？」
「ええっ⁉？だ、大丈夫だよ⁉？」
「そう……きっと疲れが溜まってるのね。思えばここのところ上位者との連戦なんだし、疲れも溜まるわよね。大丈夫よ、出来る限り早めに終わらせるわ」
「え、ええっ……？」
なんだか桜ちゃんが凄く優しい目で私を見てくる。
げ、解せない。
だって、いつも私のリンクリボーは擦り寄って来てるし……うーん、立体映像にも個体差とかあるのかな？
「早めに終わらせるとは言ったけど、手は抜かないわよ。まずはアカシックマジシャンの効果発動⁉？1ターンに1度、カード名を1つ宣言してこのカードの相互リンク先のモンスターのリンクマーカーの合計分だけ自分のデッキの上からカードをめくり、その中に宣言したカードがあった場合、そのカードを手札に加え、それ以外のめくったカードは全て墓地へ送る。相互リンクしているのはリンク4のファイアウォールドラゴン。だから4枚までめくることが出来るわ。私が宣言するのはジェスターコンフィ」
桜ちゃんがカードをめくっていく。
そしてその中の1枚を私に見せた。
見せられたカードは当然、ジェスターコンフィ。
「宣言したカードがあったから手札に加えるわ。そして、繋がって⁉？希望に導くサーキット⁉？召喚条件はトークン以外のモンスター2体以上⁉？私はリンクリボーとアカシックマジシャンを2体分として扱ってリンクマーカーにセット⁉？サーキットコンバイン⁉？リンク召喚⁉？リンク3⁉？サイバースアクセラレーター⁉？」

〈サイバースアクセラレーター〉ＬＩＮＫ　３　サイバース族　光属性
ＡＴＫ２０００　↑←↓
現れたのは背中にブースターのようなものをつけた人型のモンスター。
そしてそれに合わせてファイアウォールが咆哮を上げる。
「ファイアウォールドラゴンの効果発動!!?リ・ペーストシールド!!?このカードのリンク先のモンスターが、戦闘で破壊された場合、または墓地へ送られた場合に手札からモンスター1体を特殊召喚するわ!!?再びフィールドに戻りなさい、妖精伝姫―カグヤ!!?」
「ええっ!!?」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ１８５０
眠っていたところを起こされたのか、少しだけ不機嫌そうにしながら再びフィールドに現れるカグヤ。
そして私は恐ろしいことに気づいてしまった。
カグヤは自分の効果で相手モンスターと一緒に手札に戻り、ファイアウォールはリンク先のモンスターが墓地に送られるだけで手札からモンスターを出せる。
しかも、どちらの効果にもターン制限はない。
おまけに桜ちゃんにもリンクリボーがいる。
これ、かなりマズイことになってるんじゃ……
「ここでリバースカードオープン!!罠発動!!??貪欲な瓶!!?墓地に存在するリンクリボー、セキュリティドラゴン、プロキシードラゴン、リンクスパイダー、ＬＡＮフォリンクスをＥＸデッキに戻して1ドロー。よし、フィールド魔法の張り替えよ!!?フィールド魔法、サイバネットストーム!!?」

「サイバネットストーム？」
都市が消え、フィールドが大きなデータの竜巻が吹き荒れるフィールドに変わる。
また、見たことがないカードだ。
師匠や闇先パイなら知ってるかも知れないけど……でも、見たことがないカードはワクワクする。
「サイバネットストームの効果でこのカードがフィールドに存在する限り、リンク召喚は無効化されず、リンク状態のモンスターの攻撃力・守備力は５００ポイントアップされるわ」
「むむっ」

ファイアウォールドラゴン
ＡＴＫ２５００→３０００

サイバースアクセラレーター
ＡＴＫ２０００→２５００

トーチトークン
ＡＴＫ０→５００

分かってたことだけど、桜ちゃんのデッキは今までのデッキにプラスしてリンク召喚特化のデッキになっているみたいだ。
見たこともないカードがいっぱい出て来てるし、油断してるとすぐにやられてしまいそうだ。
「さあ、待たせたわね。お待ちかねのバトルフェイズよ‼？」
「待ってはいないよ……ヘルテンペストは受けたくないし……」
「ふふっ、今日の嵐は一味違うわよ？バトル‼？リンク状態じゃないトーチトークンでトーチゴーレムを攻撃‼？」
「なら、このタイミング‼？墓地に存在するクリボーンの効果発動‼？さらにチェーンしてリバースカードオープン‼？速攻魔法、クリボーを呼ぶ笛‼？」

「っ‼？クリボーン……それもクリバンデッドで落ちてたのね……」
「まずはクリボーを呼ぶ笛の効果で自分はデッキからクリボーまたはハネクリボー1体を選択し、手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができるよ‼？私が選ぶのは手札に加える効果‼？クリボーを手札に加えるよ。そして、クリボーンの効果で相手モンスターの攻撃宣言時、墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のクリボーモンスターを任意の数だけ対象として、そのモンスターを特殊召喚するよ‼？来て、サクリボー‼？そして、いつだって、私と共に‼？ハネクリボー‼？」

〈サクリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

私のフィールドに現れる相棒とサクリボー。
それを見て、桜ちゃんが渋い表情を浮かべる。
「特殊召喚してこなかったのが不思議だったけど、墓地にすでにいたのね、遊花の相棒は」
「さあ、モンスターは増えたけど、攻撃対象の変更はする？」
「残したくはないけど、するわけないでしょ。リンク状態じゃないトーチトークンでトーチゴーレムを攻撃‼？スーサイドエクスプロージョン‼？」
「うぅ～そうだよね。迎え撃って欲しくないけど迎え撃って、トーチゴーレム‼？」
近寄ってきた小さなトーチトークンがトーチゴーレムに張り付いて爆発する。
しかし、当然ながらトーチゴーレムは無傷でピンピンとしていた。

桜　　ＬＰ８０００→５０００

「さぁ、３０００ポイントの戦闘ダメージを受けた時、リバースカードオープン‼?‥速攻魔法発動、ヘルテンペスト‼?‥」

「やっぱりあるよね……」

「このカードは３０００ポイント以上の戦闘ダメージを受けた時に発動する事ができるわ。お互いのデッキと墓地のモンスターを全てゲームから除外する‼?‥だけど、今日吹く嵐はこれだけじゃないわ、フィールド魔法、サイバネットストームの最後の効果発動‼?‥ストームアクセス‼?‥」

「えっ‼?‥」

「自分が２０００以上の戦闘・効果ダメージを受けた場合に、自分のＥＸデッキの裏側表示のカードだけをシャッフルし、その一番上のカードをめくる。めくったカードがサイバース族リンクモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚し違った場合は元に戻すわ‼?‥」

「ええっ⁉?‥」

さっきから桜ちゃんのＥＸデッキから出てきてるリンクモンスターはほとんどサイバース族モンスターだった。

ということは、ＥＸデッキのモンスターはほとんどサイバース族のモンスターである可能性が高い。

桜ちゃんに向かってフィールドに吹いていたデータの嵐が近づき、桜ちゃんを呑み込む。

その嵐の中、桜ちゃんは正面に手をかざすと、データの嵐は桜ちゃんの手元に集まり、ＥＸデッキから１枚のカードが桜ちゃんの手に収まる。

「迫る嵐も、最高の追い風に変えてあげるわ‼?‥来なさい、バイナルソーサレス‼?‥」

〈バイナルソーサレス〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　地属性

ＡＴＫ１６００→２１００　↑↓

現れたのは長い手を持つ機械人形。
やっぱりあのＥＸデッキからなら出てくるよね。
「そしてヘルテンペストの効果でお互いのデッキと墓地のモンスターを全てゲームから除外する‼？さらにデッキから除外されたネクロフェイスとドットスケーパーの効果発動‼？ネクロフェイスの効果でこのカードがゲームから除外された時、お互いはデッキの上からカードを５枚ゲームから除外する‼？」
私のデッキから１８枚のモンスターとさらに５枚のカードが除外され、墓地や元々除外されてたカードも合わせて２６枚のカードが除外された。
これで残りのデッキは８枚の魔法・罠のみ。
「さらにドットスケーパーの効果でデュエル中に１度、このカードが除外された時、特殊召喚するわ‼？」

〈ドットスケーパー〉☆１　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００→２６００

現れたのはドットの身体を持つモンスター。
これでまたモンスターが出てきたってことは、メインフェイズ２にはまたリンク召喚がくるってことだよね。
「妖精伝姫―カグヤの効果発動‼？アンリーゾナブルディマンド‼？１ターンに１度、相手フィールドの表側表示モンスター１体を対象として発動‼？相手はそのモンスターの同名カード１枚を自身のデッキ・ＥＸデッキから墓地へ送らなかった場合、このカードと対象のモンスターを持ち主の手札に戻す‼？対象は勿論トーチゴーレムよ‼？」
トーチゴーレムとカグヤが再び手札に戻る。
これでフィールドにもまた空きが出来るんだよね。
「さあ、行くわよ‼？サイバースアクセラレーターでサクリボーを攻撃‼？ブーストアームズ‼？」
アクセラレーターがサクリボーに突撃して、そのまま弾き飛ばし、

サクリボーが粒子になる。
「ファイアウォールドラゴンでハネクリボーを攻撃‼？鉄壁のリフレクトノヴァ‼？」
「っ、ゴメンね、相棒」
　ファイアウォールの身体が赤く染まり、身体から溢れ出した雷がファイアウォールの前で光弾となりハネクリボーに撃ち出される。
　ハネクリボーはそれを避けようとしたが、避けた瞬間にハネクリボーと光弾を囲うようにバリアが張られ、そのバリアの中で光弾が反射し、ハネクリボーを撃ち抜いた。
　撃ち抜かれ、粒子に変わったハネクリボーは私の身体を包み込む。
「ハネクリボーの効果発動‼？プリフィケーション‼？このカードがフィールドから墓地に送られたターン、自分の受ける戦闘ダメージは０になる‼？」
「その効果とバトルフェーダーからあるから決めきれないのよね。サイバースアクセラレーターには自身が攻撃できなくなる代わりに自分・相手のバトルフェイズにこのカードのリンク先のサイバース族モンスター1体に、そのモンスターの攻撃力はターン終了時まで２０００ポイントアップさせるか、そのモンスターは1度のバトルフェイズ中に2回までモンスターに攻撃できるようにさせれたのに……」
「ええっ……あ、危なかった。モンスターは私のモンスターを破壊するだけの数は足りてたし、攻撃力５０００のファイアウォールドラゴンの攻撃なんて受けてられないよ」
「だけど、だからこそ私の難題は意味を成すわ。メインフェイズ2、繋がって‼？希望に導くサーキット‼？」
「まあ、そうなるよね」
「召喚条件はモンスター2体‼？私はトーチトークンとドットスケーパーをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？リンク2‼？プロキシードラゴン‼？」
〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００→１９００　↑→

「これで私のフィールドはまた空いたわ!!?自分フィールドに悪魔族・闇属性・レベル1・攻守0のトーチトークンを2体攻撃表示で特殊召喚することで、遊花のフィールドにトーチゴーレムを特殊召喚するわ!!?」

〈トーチゴーレム〉☆8　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３０００

〈トーチトークン〉☆1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ０

もう何度目か分からないトーチゴーレムの特殊召喚。
心なしトーチゴーレムも疲れているように見える。
まあ、あれだけ手札とフィールドを行き来してたら疲れもするよね。
「そして、繋がって!!?希望に導くサーキット!!?召喚条件は通常モンスター1体!!?私はトーチトークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク1!!?リンクスパイダー!!?」

〈リンクスパイダー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１０００→１５００　←

「まだ、まだ行けるわ!!?繋がって!!?希望に導くサーキット!!?召喚条件はモンスター2体!!?私はトーチトークンとリンクスパイダーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?スペースインシュレイター!!?」

〈スペースインシュレイター〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１２００→１７００　→←

現れたのはパワードスーツのようなものを纏った人型のモンスター。
本当に、桜ちゃんはリンクモンスターの種類も増やしたんだね。
「ファイアウォールドラゴンの効果発動!!?リ・ペーストシールド!!?このカードのリンク先のモンスターが、戦闘で破壊された場合、または墓地へ送られた場合に手札からモンスター1体を特殊召喚するわ!!?再びフィールドに戻りなさい、妖精伝姫―カグヤ!!?」
〈妖精伝姫―カグヤ〉☆4　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ１８５０→２３５０

再びフィールドに呼び出されて桜ちゃんを見て仕方なさそうに項垂れているカグヤ。
貴方も疲れてるよね、うん。
そんな何処か脱力しそうな私とは逆に桜ちゃんは真剣な目で自分のＥＸデッキを一瞥してから目を閉じる。
そして、目を開けると真剣な表情で私を見た。
「遊花、見せてあげる。私のもう1体の新しい切り札を」
「もう1体の切り札?」
「ええ。ファイアウォールドラゴンは、デッキ調整の時に何人かに見せたけど、こっちは本当に誰にも見せてない。正真正銘、遊花が初めてみることになる切り札よ。私にとってのヴァレルソードドラゴンがファイアウォールドラゴンなら、これから出すモンスターは私にとってのヴァレルロードドラゴンかしらね」
「桜ちゃんにとっての……私のヴァレルロードドラゴン……」
「ええ、行くわよ、遊花!!?繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」
桜ちゃんの前にまたサーキットが現れる。
しかし、その後に続いた召喚条件に、私は驚くことになる。
「召喚条件は……効果モンスター3体以上!!?」
「えっ!?」

効果モンスター　３体以上……その条件は私が使うヴァレルソードとヴァレルロードと同じ条件。
前に闇先パイに教えて貰ったけど、この条件でのリンクモンスターはかなり珍しいという話だった。
大体の大型リンクモンスターでも大抵はモンスター2体以上で、3体を最低ラインにしているヴァレルソード達は少し変わった部類だと。
それと同じ条件でのリンク召喚……それが意味しているのは……
「私は、妖精伝姫―カグヤ、スペースインシュレイター、プロキシードラゴンを　２体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
プロキシーが2体に分身し、インシュレイターとカグヤと一緒にサーキットの中に吸い込まれる。
そして桜ちゃんはＥＸデッキから1枚のカードを取り出すとファイアウォールの時と同じように胸の前で握りしめ、その名前を呼んだ。
「閉ざされた世界を守る決意の隔壁!!?リンク４!!?ヴァレルガードドラゴン!!?」
「!!?ヴァレルガードドラゴン!!?」
咆哮が轟く……銃声のような、龍の咆哮が。
〈ヴァレルガードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００→３５００　→←↓↘?
現れたのはヴァレルロードに似た姿の腕にシールドがついたドラゴン。
ヴァレルガードもファイアウォールのように歓喜の咆哮を上げる。
「なんで、桜ちゃんがヴァレルの名を持つドラゴンを……」
「貰ったのよ……昨日の夜、闇にね」
「闇先パイに?」

「ええ、まあ遊花は闇が帰ってきた時、もう寝てたものね」

ーーーーーーー

●

『うーん、難しいわね……そもそもＥＸデッキのモンスターなんてまともに使ったことないし……』
『……デッキ、作ってるの？』
『きゃあ‼？』
　夜、２３時をまわった頃、リビングで島さんに貰ったファイアウォールを眺めながらデッキを組んでいると突然後ろから声をかけられ、思わず悲鳴が漏れてしまう。
　おそるおそる振り返ると、そこには相変わらずの無表情で闇が立っていた。
『お、驚かさないでよ⁉？心臓に悪い……なんでアンタはそんなに気配がないのよ‼？』
『ごめん、悪気はなかった』
『まあ、それぐらいは分かるけどね。お帰りなさい、今日は遅かったわね』
『ん、ただいま。ちょっと知り合いが仕事の収録前に一緒にご飯食べようって誘ってきたから、少し遅くなった。遊花はもう寝てる？』
『ええ。明日が試験も最終日だしね。私はデッキも組み直したかったし、闇が帰って来てないのに戸締りするわけにもいかないからこうして起きてたってわけ』
『ごめん、考えてなかった。今まで１人暮らしだったから、何時に帰って来ても関係なかったし』
『別にいいわよ。私も正直煮詰まってたところだしね』
　そういってもう１度テーブルの上に広げていたカード達に目をやる。
　闇も近づいてきて、テーブルの上においてあるカード達を覗き込

む。
　そして少しだけ驚いたような声色で口を開く。
『桜、リンク召喚を使うの？』
『まあね。島さんから貰ったファイアウォールドラゴンのカードを使いたくてね。でも、私は壊獣しか使ったことないし、どうすればいいのか分からないのよね』
　そういって闇にファイアウォールのカードを見せる。
　すると、闇はファイアウォールを見て目を見開いた。
『ファイアウォール……桜、貰えたの
？』
『？闇は知ってるの、このカード？なんかこのカードが私のところに来たがってるとか、よく分からないことを言われて渡されたのよね』
　頭を掻きながらそういうと、闇は少しだけ驚いたような表情を浮かべた気がした。
『そっか……選ばれたんだ、桜は』
『えっ？』
『なんでもない。そういうことなら、私も手伝う。桜にも、お世話になってるから』
『……そうね、ここはお言葉に甘えようかしら。私１人じゃ限界みたいだし』
『ん、任せて』
　それから闇に意見を聞きながらデッキを組み上げていく。
　足りないカードもあったけど、闇が自分は使わないからと余っているカードを分けてくれて何とか形になっていった。
　そうしてデッキを組み上げていく中でふと思い出したかのように、闇が口を開く。
『そういえば、どうして今日の内に作ろうと思ったの？明日には遊花とのデュエルがあるハズ。組んだばかりのデッキより、使い慣れたデッキの方が全力でぶつかれると思うけど？』
　そう不思議そうに尋ねる闇に、私は少し苦笑する。
　多分、本当に今気づいたのだろう。

どこか抜けてるその様は自分の親友そっくりだ。
あまり口に出すつもりはなかったのだが、聞かれてしまったのに答えないのも落ち着かないからと、私は言うつもりのなかった思いを口に出す。
『この新しいデッキはね、願掛けのつもりなのよ』
『っ……願掛け？』
『ええ……私は遊花を守ることが出来てない。私のせいで、遊花は傷ついてばかりで……だから、今度こそ遊花を……大切な親友を守りたい。そして、遊花を守るために、今までの私でダメだというなら新しい私に変わってみせる。私は、壊獣みたいに壊すことしか出来ないのかも知れないけど……そんな私自身も受け入れて、その上で遊花を守れるように変わりたいの』
『……だから、壊獣デッキのままで、ファイアウォールドラゴンと一緒に戦いたいんだね』
『ええ……ファイアウォールドラゴンとは一緒に戦いたい。でも、壊獣だって今まで私と一緒に戦ってくれた大切な子達だから』
そういって、私は近くに置いてあったサンダーザキングとカグヤのカードを持つ。
『この壊獣デッキもね。実は私達に重ねて作ったの。壊獣は私自身。そして……カグヤは遊花』
『カグヤが遊花？』
『あの子、結構頑固でしょ？一度決めたら、他人が何を言っても聞かなくて、一直線に進んじゃって……そして、見えないところに消えてしまいそうな危うさが、あの子にはあるの。それがね、かぐや姫の昔話に似てると思ったの。かぐや姫も育ての親に引き止められても、自分の意思を曲げず、最後には月に帰っていった。それがなんだか遊花みたいに思えたの。だから、私のデッキには相手に送った壊獣を止めるためにカグヤが入ってるの。壊獣（私）を止められるのは、カグヤ（遊花）だけだから』
昔から私が怒って誰かを傷つけようとすると、遊花は絶対に私を止めようとしていた。

どんなにムカつく奴らが相手でも、それをすると私も傷つくからって。
素直で、天然で、だけど芯はしっかりしてて、誰かを労わることができる優しい心を持った、私とは真逆の女の子。
だからこそ、私は遊花を守りたいと思う。
その優しさに、私も救われてきたのだから。
『私は壊獣に何もかも壊せる力を望んだ……その思いを壊獣達に押し付けて、自分自身に重ねてしまったのは私なの……だけど、壊獣達がカグヤの力を借りることでお互いに戦わないで済むように……壊獣達も、私も、誰かと力を合わせれば、見つけられるかも知れない。壊す以外の新しい在り方を』
『……そっか。その思いが、きっと……』
私の思いを聞いて、闇は何かを呟いて目を閉じる。
そして目を開けると、1枚のカードをとりだして私の前に置いた。
『なら、このカード、桜にあげる』
『このカード……って、ヴァレルリンクモンスター⁉？なんで闇がそんなの持ってるのよ⁉？』
『今日の大会で優勝した時に商品で貰った。本当は遊花にあげようかと思ったけど、このカードは桜の方が相応しい』
『い、いやいやいや、そんな軽く大会の優勝商品なんて渡してこないでよ⁉？貰えないわよ、そんなの⁉？』
『気にすることなんてない。どうせ私じゃ使えないし……それに前に言ったハズ。桜が私に勝つの、楽しみにしてるって。だから、そのための投資』
そういって闇は私の手に無理矢理ヴァレルガードドラゴンを握らせる。
私は握らされたヴァレルガードドラゴンを見て、思わずため息を吐く。
闇も遊花のようにかなり頑固だ。
多分、こうなってしまったら返そうとしても受け取ってくれないだろう。

『……分かった、受け取る。大切に使わせて貰うわ』
『ん、それで全力で遊花にぶつかってくるといい』
『……それで遊花が退学になる可能性もあるのよ？』
『それは困るけど、多分大丈夫。桜はその思いを違えなければいい。何かあっても、私がフォローするから』
『何する気なのよ……』
『内緒……桜の願い、叶うといいね』
『……ええ』

ーーーーーーー

★

「闇から貰ったこのカードで、私の難題は完成する。ファイアウォールドラゴンの効果発動!!?リ・ペーストシールド!!?２体目の妖精伝姫―カグヤを特殊召喚よ!!?」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ１８５０

「そして、このカードは手札から攻撃表示で特殊召喚出来るわ。来なさい、ジェスターコンフィ!!?」

〈ジェスターコンフィ〉☆１　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０

現れたのは球に乗った道化師のモンスター。
いつもならヘルテンペストのためのモンスターだけど、今の桜ちゃんにはリンク召喚がある。
「さあ、これがこのターン最後のリンク召喚よ!!?繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」

桜ちゃんの前にもう何度目になるかもわからないサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル1モンスター1体!!?私はジェスターコンフィをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?もう1度希望を紡ぎなさい!!?リンク1!!?リンクリボー!!?」
〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００→８００　←
再びフィールドに現れるリンクリボー。
だけど、そのリンクリボーが現れた場所は……
「もう1つのエクストラモンスターゾーンに!?」
「これが私の新しい難題、エクストラリンクよ!!?」
「エクストラリンク……」
エクストラリンク。
２つのエクストラモンスターゾーンに存在するリンクモンスターが、メインモンスターゾーンに存在するリンクモンスターを通じて全て相互リンクでつながっている状態のことがそう呼ばれている。
通常なら、片方のエクストラモンスターゾーンしかプレイヤーは使用することが出来ないけど、エクストラリンクとなる場合にのみ、もう一方のエクストラモンスターゾーンにもリンクモンスターを特殊召喚することができるようになるというものだ。
聞いたことはあったけど、まさか実物を、しかも桜ちゃんが使ってくるなんて……
「エクストラリンクが成立している限り、遊花はエクストラモンスターゾーンにＥＸデッキからモンスターは出せない。その上、私のモンスターのリンクマーカーは1つも遊花のバトルゾーンには向いてないから、そこから出すということも不可能。これで遊花のＥＸデッキは完全に封じたわ」
「っ!!?」
「それと、教えておいてあげる。ヴァレルガードドラゴンは遊花の

ヴァレルソードドラゴンとヴァレルロードドラゴンを合わせたようなモンスター。ヴァレルガードドラゴンは相手の効果によって破壊されず、1ターンに1度、自分の魔法・罠ゾーンのカードを墓地に送ることでそのターンに破壊された自分または相手の墓地へ送られたモンスター1体を効果を無効にして特殊召喚する効果と、1ターンに1度フィールドのモンスター1体を守備表示にすることができる。勿論、ヴァレルソードドラゴンと同じように、相手はこの効果に対してカードを発動することができず、相手ターンにも使えるわ」

「うっ……」

それは確かにヴァレルソードとヴァレルロードの効果を合わせ、より防御能力を上げたような効果。

守備表示の効果を突破するにはリンクモンスターを出すしかないけど、今の私にはリンク召喚は封じられている。

その上、私のデッキは、ヘルテンペストを受けたせいでモンスターが残っていない。

私にあるのは墓地の少しのモンスターと手札にあるモンスターそして数枚の魔法・罠のみ。

だけど、私のメインデッキのモンスターはクリボー達が主になっているから、その攻撃力は基本的に３００。

今のままだと、サイバネットストームで強化されてるのもあってリンクリボーすら倒せない。

さらにカグヤの効果もあるから最低でも3体分モンスターが出ないと攻撃が通らない。

「そしてファイアウォールドラゴンにも、このカードが表側表示で存在する限り1度だけ、このカードと相互リンクしているモンスターの数だけ、自分または相手フィールド・墓地のモンスターを手札に戻せる。そしてこの効果も相手ターンにも使えるわ」

「っ……」

防御は許されず、攻めることも許されない。

おまけに耐え続けれてもデッキ枚数という限界が迫ってくる。

桜ちゃんは貪欲な瓶を使ってたけど、前のデッキと基本が同じな

ら、確か転生の予言まで入ってたハズ……貪欲な瓶と合わせてお互いをデッキに戻すから桜ちゃんにデッキ切れはない……やろうと思えば、相手が負けるまで永遠にデュエルができる。

……これが桜ちゃんの新しい力、新しい難題。

「私はこれでターンエンドよ。さあ、私に勝つというのなら、この難題を超えてみなさい‼？」

桜ちゃんが真剣な表情で私を見る。

状況はいつも以上に絶望的。

だけど、最後まで諦めない。

私のためにこんな戦術を用意してくれた桜ちゃんの為にも、絶対に攻略してみせる‼？

遊花　ＬＰ６１５０　手札６

ー▲▲ー　ー

ーーーーー

☆　☆

○☆☆☆ー

ーーーーー　▽

桜　ＬＰ５０００　手札２

第29話　親友

★

遊花　ＬＰ６１５０　手札６
ーー▲▲ー　ー
ーーーーー
☆　☆
○☆☆☆ー
ーーーーー　▽
桜　ＬＰ５０００　手札２

「私のターン、ドローー!!?」
今の手札に、この状況を打開する手はない。
なら、まずはその手段を引き込みにいく!!?
「リバースカードオープン!!?永続罠、グラヴィティバインドー超重力の網ー!!?」
「確かレベル４以上のモンスターが攻撃できなくなる罠よね。あったなら妖精伝姫―カグヤは防げたから使えばよかったんじゃない?」
「そうするとグラヴィティバインドが破壊されたら壊獣カウンターもあったから雷撃壊獣サンダーザキングの効果で効果モンスター・魔法・罠を封じられて負けちゃうもん。結果的にはリンクモンスターが出てきちゃったから意味がなかったけど……だからこうする!!?魔法カード、マジックプランターー!!?自分フィールドの表側表示の永続罠カード1枚を墓地へ送って自分はデッキから2枚ドローする!!?……!!?このカードは……」
ドローしたカードを見て、私は考え込む。
これは、期末試験で桜ちゃんとデュエルするって分かった時、桜ちゃんとのデュエルで使いたいなと思って入れたカード。
だけど、今の私だとこのカードを使うにはまだカードが足りない。

でも、このカードを使えたならまだ希望はあるかも知れない。
なら、私がやれることはただ1つ。
いつも通り、その希望が繋がるまで、桜ちゃんの攻撃を耐えきる!!?
「私はカードを1枚伏せてターンエンド。エンド時に手札が7枚だから手札を1枚捨てるね」

遊花　ＬＰ６１５０　手札６
ー▲▲ー　ー
ーーーー
☆　☆
○☆☆☆ー
ーーーー　▽
桜　ＬＰ５０００　手札２

「モンスターは出してこないか……まあバトルフェーダーがあるし、クリボーもいるものね。私のターン、ドロー!!?バトル!!?リンクリボーでダイレクトアタック!!?」
「バトルフェーダーの効果発動!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードを手札から特殊召喚し、その後バトルフェイズを終了するよ!!?そしてこの効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外されるよ」
「もう使ってきたわね。なら、あまり余裕は無さそうね」

〈バトルフェーダー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

鐘の音を鳴らす悪魔が現れ、リンクリボーが動きを止める。
「メインフェイズ2!!?妖精伝姫—カグヤの効果発動!!?アンリーゾナブルディマンド!!?1ターンに1度、相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動!!?相手はそのモンスターの同名

カード1枚を自身のデッキ・ＥＸデッキから墓地へ送らなかった場合、このカードと対象のモンスターを持ち主の手札に戻す‼？対象は勿論バトルフェーダーよ‼？」

「デッキの中にバトルフェーダーは残ってないから、バトルゾーンを離れる時に除外されるよ」

カグヤがバトルフェーダーを掴み、私に向けて勢いよく投げようとするとすっぽ抜けたのかバトルフェーダーは違う方向に飛んでいき、星になった。

カグヤはそれを見て、冷や汗を掻きながら逃げ出すように桜ちゃんの手札に戻っていく。

いや、効果で除外されただけだからそんなに焦らなくても……効果で除外されただけだよね？

物理的に星になったわけじゃないよね？

「そして手札に戻った妖精伝姫―カグヤを召喚‼？」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性

ＡＴＫ１８５０

扇子を顔の前にやり、こちらから目を逸らしながらカグヤが再び現れる。

えっ、何その反応？本当にバトルフェーダーは大丈夫なんだよね？

「カードを1枚伏せてターンエンドよ」

遊花　ＬＰ６１５０　手札５

ー▲▲ー　ー

ーーーー

☆　☆

○☆☆☆ー

ー▲ーー　▽

桜　ＬＰ５０００　手札２

「私のターン、ドロー!!?」
「さぁ、これは耐えられるかしら?スタンバイフェイズ、罠発動!!?D・D・ダイナマイト!!?相手が除外しているカードの数×３００ポイントダメージを相手ライフに与えるわ!!?」
「っ!!?」
「遊花の除外は２６枚!!?よって７２００ポイントのダメージを遊花に与えるわ!!?」
「まだ、終わらせない!!?手札からジャンクリボーの効果発動!!?ジャンクバレット!!?自分にダメージを与える魔法・罠・モンスターの効果を相手が発動した時、自分の手札・フィールドのこのカードを墓地へ送ってその発動を無効にし破壊する!!?」
「っ、ジャンクリボーを引けていたのね。相変わらず悪運が強い……」
私の前に現れたダイナマイトをジャンクリボーが抱え、空に凄い勢いで飛んでいき、空中で爆発する。
ありがとう、ジャンクリボー。
おかげでまだ戦えそうだよ。
「速攻魔法、大欲な壺!!?除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計3体を持ち主のデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから1枚ドローする!!?私は除外されてるバトルフェーダー、虹クリボー、ゴーストリックランタンをデッキに戻してシャッフルし、カードを1枚ドローする!!?……!!?カードを1枚伏せてターンエンドだよ!!?」

遊花　ＬＰ６１５０　手札４
ー▲▲▲ー　　ー
ーーーーー
　　☆　　☆
○☆☆☆ー
ーーーーー　　▽
桜　ＬＰ５０００　手札２

「私のターン、ドロー‼?魔法カード、封印の黄金櫃を発動。デッキからカード1枚を選んで除外し、このカードの発動後2回目の自分スタンバイフェイズに、この効果で除外したカードを手札に加えるわ。私が除外するのはD．D．ダイナマイトよ」
「っ……」
空中に黄金の櫃が現れ、その中にD．D．ダイナマイトが納められる。
これから動くことを考えると、私のデッキの中に、もうD．D．ダイナマイトを防ぐ手段はない。
つまり、2ターンが経過しきる前に桜ちゃんを倒せないと、私は負ける。
「次のD．D．ダイナマイトを遊花は防げるかしらね？最も、それまで耐え切れればの話だけど‼?バトル‼?リンクリボーでダイレクトアタック‼?リンクラック‼?」
「リバースカードオープン‼?罠発動‼?ダメージダイエット‼?このターン自分が受ける全てのダメージは半分になる‼?」
「‼?そんなカードを引いたのね……でも、攻撃は通るわ‼?」
「うっ、このぐらい……」
リンクリボーが勢いよく体当たりしてきて、私のライフが削られる。
でも、これぐらいならまだまだ大丈夫‼?

遊花　ＬＰ６１５０→５７５０

「どんどん行くわよ‼?妖精伝姫―カグヤでダイレクトアタック‼?タツノクビノタマ‼?」
「くっ、へっちゃらだよ‼?」

遊花　ＬＰ５７５０→４８２５

「続けてバイナルソーサレスでダイレクトアタック!!?ローハシャンク!!?」
バイナルソーサレスが回転しながらその長い腕を私の身体に叩きつける。
「っ……まだまだ!!?」

遊花　ＬＰ４８２５→３７７５

「サイバースアクセラレーターでダイレクトアタック!!?ブーストアームズ!!?」
「うぅっ……まだ、負けないもん!!?」

遊花　ＬＰ３７７５→２５２５

「流石に遊花の気持ちはこれぐらいじゃ折れないわよね。でも、だからって私は退かないわ!!?ファイアウォールドラゴンでダイレクトアタック!!?鉄壁のリフレクトノヴァ!!?」
ファイアウォールの身体が赤く染まり、身体から溢れ出した雷がファイアウォールの前で光弾となり私に向かって撃ち出される。
今だ!!?
「私だって退かない!!?絶対に桜ちゃんの隣に立つんだもん!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?好敵手(とも)の記憶!!?」
「えっ!?」
「相手モンスターの攻撃宣言時に発動!!?自分は攻撃モンスターの攻撃力分のダメージを受け、そのモンスターをゲームから除外し、次の相手ターンのエンドフェイズ時、この効果で除外したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する!!?」
「なっ!?……っ、ファイアウォールドラゴンの効果発動!!?リライトフューチャー!!?このカードが表側表示で存在する限り1度だけ、このカードと相互リンクしているモンスターの数だけ、自分または相手フィールド・墓地のモンスターを手札に戻せる!!?私は……

自分の墓地から妖精伝姫―カグヤとジェスターコンフィを手札に戻すわ‼?」
ファイアウォールが放った光弾が私の身体を貫く。
それでも私は目を逸らさずに、ファイアウォールを見つめる。
しばらくすると、ファイアウォールは申し訳なさそうに桜ちゃんに1つ咆哮を上げながら粒子になって姿を消した。

遊花　　ＬＰ２５２５→１０２５

サイバースアクセラレーター
ＡＴＫ２５００→２０００
リンク状態が途切れたことでアクセラレーターの攻撃力も下がる。
それに効果対象先がいなくなったからアクセラレーターの効果は実質無効化出来た。
「まさかそんな方法でファイアウォールドラゴンをフィールドから退かせるなんてね……ヴァレルガードドラゴンでダイレクトアタック‼?銃砲のスラムファイア‼?」
「まだ終わらない……終わらせない‼?手札から、クリボーの効果発動‼?ダークエンヴェロップ‼?相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこのカードを手札から捨てて発動できる。その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージを0にする‼?」
ヴァレルガードが身体中にある銃口から一斉に銃弾を発射する。
しかし、私の前に現れたクリボーがその銃弾を全て受け止め、粒子になって消えていった。
「耐えられちゃったわね……私は2体目の妖精伝姫―カグヤを召喚‼?」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆4　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ１８５０

「そして、このカードは手札から攻撃表示で特殊召喚出来るわ。来な

さい、ジェスターコンフィ!!?」

〈ジェスターコンフィ〉☆1　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０

「そして、繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」
桜ちゃんが正面に手をかざし、巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はトークン以外のモンスター2体以上!!?私はジェスターコンフィとバイナルソーサレスを2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク3!!?トライゲートウィザード!!?」

〈トライゲートウィザード〉ＬＩＮＫ　3　サイバース族　地属性
ＡＴＫ2200→2700　↑→↓

サイバースアクセラレーター
ＡＴＫ2000→2500

妖精伝姫―カグヤ
ＡＴＫ1850→2350
現れたのはシルクハットを被った魔術師のようなモンスター。
これでまたアクセラレーターも効果が使えるようになっちゃったな。
「リンク状態になったことでサイバースアクセラレーターの攻撃力は2500、妖精伝姫―カグヤは2350になるわ。これでターンエンドよ」

遊花　ＬＰ1025　手札3
ー▲ー　ー
ーーーーー
☆　☆

○☆ー☆○
ーーーーー　▽
桜　ＬＰ５０００　手札２

「私のターン、ドロー!!?」
ドローしたカードを見て、少しだけがっかりする。
残念ながらデッキに戻したバトルフェーダーはドローすることは出来なかった。
そうなると、ここからの攻防はかなりギリギリのものになる。
次のターンのエンドフェイズ、私のフィールドにファイアウォールが現れる。
正念場になるのは次のターン。
ここを凌ぎきれるかどうかで全てが決まる。
まだ、希望はある……戦える!!?
「私はこのままターンエンド!!?」

遊花　ＬＰ１０２５　手札４
ーー▲ーー　ー
ーーーーー
☆　☆
○☆ー☆○
ーーーーー　▽
桜　ＬＰ５０００　手札２

「何もしてこない……か。でも、表情に出てたわよ、バトルフェーダーは引けなかったみたいね」
「な、なんのことカナ～」
私は桜ちゃんのその言葉に思わず目を逸らす。
それを見て、桜ちゃんが苦笑いを浮かべる。
「……本当に、誤魔化すのが下手ね、遊花は」
「うぅ～分かってはいるけど～」

「いいのよ、遊花はそれで。さあ、遊花。どう転んでもこのターンと次の遊花のターンが最後の攻防よ。次のターンになれば私はＤ．Ｄ．ダイナマイトが手札に加わる。そうなったら、流石にもう防ぎきれないでしょ？」

「……」

「だからこそ、これが最後の攻防!!?私に勝つというならこの難題を超えてみなさい!!?私のターン、ドロー!!?速攻魔法、大欲な壺!!?除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計３体を持ち主のデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから１枚ドローする!!?私は除外されてる雷撃壊獣サンダーザキング、海亀壊獣ガメシエル、怒炎壊獣ドゴランをデッキに戻してシャッフルし、カードを１枚ドローする!!?さらに魔法カード、貪欲な壺!!?墓地に存在するリンクスパイダー、プロキシードラゴン、スペースインシュレイター、バイナルソーサレスをＥＸデッキに、ジェスターコンフィをデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする!!?」

「っ、ここにきてドローカード!!?」

「……バトル!!?」

「なら、バトルフェイズ開始時、リバースカードオープン!!?速攻魔法、異次元からの埋葬!!?除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計３体まで対象としてそのモンスターを墓地に戻すよ!!?私が戻すのはクリボーンとクリアクリボーとクリボール!!?」

「っ!!?そんなカードをまだ温存してたの!!?サイバースアクセラレーターでダイレクトアタック!!?」

「相手モンスターの攻撃宣言時、クリボーンの効果発動!!?墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のクリボーモンスターを任意の数だけ対象として、そのモンスターを特殊召喚するよ!!?来て、クリボール!!?クリアクリボー!!?ジャンクリボー!!?クリボー!!?そして、もう１度私と共に!!?ハネクリボー!!?」

〈クリボール〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

〈クリアクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

〈ジャンクリボー〉☆1　機械族　地属性
ＤＥＦ２００

〈クリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

私のバトルゾーンに現れる5体のクリボー達。
お願い、また私に力を貸して‼？
「でも、それだけなら防ぎきれないわ‼？サイバースアクセラレーターでジャンクリボーを攻撃‼？ブーストアームズ‼？」
「ゴメン、ジャンクリボー」
ジャンクリボーにアクセラレーターが突撃し、弾き飛ばされて粒子になる。
「続けて、1体目の妖精伝姫―カグヤでクリボーを攻撃‼？タツノクビノタマ‼？」
「お願いね、クリボー」
クリボーに向かって綺麗な玉が投げつけられ、粒子になって消えていく。
「まだよ‼？2体目の妖精伝姫―カグヤでクリボールを攻撃‼？タツノクビノタマ‼？」
「任せたよ、クリボール」
クリボールにも綺麗な玉が投げつけられ、粒子になる。
「2体の妖精伝姫―カグヤの効果発動‼？アンリーゾナブルディマンド‼？1ターンに1度、相手フィールドの表側表示モンスター1体を

対象として発動!!?相手はそのモンスターの同名カード1枚を自身のデッキ・EXデッキから墓地へ送らなかった場合、このカードと対象のモンスターを持ち主の手札に戻す!!?対象はクリアクリボーとハネクリボーよ!!?」
「っ……2体共デッキにいないから手札に戻る。戻ってきて、クリアクリボー、相棒」
2体のカグヤがクリアクリボーてハネクリボーを掴み、私に向かって投げ飛ばし2体は手札に戻ってきて、カグヤ2体も桜ちゃんの手札に戻る。
これで私のフィールドはがら空き。
そして桜ちゃんにはまだ3体の攻撃可能なモンスターがいる。
「さあ、終わりよ!!?トライゲートウィザードでダイレクトアタック!!?」
だけど……　3体ならまだ防ぎきれる!!?
「相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札のゴーストリックランタンの効果発動!!?」
「!?ゴーストリック!?」
「その攻撃を無効にし、このカードを手札から裏側守備表示で特殊召喚するよ!!?」
トライゲートの前に一瞬だけジャックオーランタンのような幽霊が現れる。
それに驚いたのかトライゲートは動きを止めてしまった。
「っ……これは……リンクリボーでセットモンスターを攻撃!!?リンクラック!!?」
「頼んだよ、ゴーストリックランタン!!?」
〈ゴーストリックランタン〉☆1　悪魔族　闇属性
DEF0
ランタンに向かってリンクリボーが突撃し、ランタンは弾き飛ばされる。

しかし、そんなランタンを踏みとどまらせるように小さなクリボーの姿が見えた。
「墓地に存在するサクリボーの効果発動!!?自分のモンスターが戦闘で破壊される場合、代わりにこのカードを除外する!!?」
「くっ……ヴァレルガードドラゴンでゴーストリックランタンを攻撃!!?銃砲のスラムファイア!!?」
「ありがとう、ゴーストリックランタン」
ヴァレルガードが身体中にある銃口から一斉に銃弾を発射し、ランタンを撃ち抜く。
ランタンは笑い声を上げながら粒子になって消えていった。
「さあ、耐えきったよ、桜ちゃん!!?」
「っ……でも、まだ私の方が有利よ!!?私はメインフェイズ2にーーー」
そういう桜ちゃんに私は1枚のカードを掲げる。
桜ちゃんは一瞬首を傾げたが、その意味が分かったのか目を見開いた。
「ま、まさかそのカード……!!?」
「バトルフェイズ終了時、自分フィールドにカードが存在しない場合、手札から罠発動!!?拮抗勝負!!?相手フィールドのカードの数が自分フィールドのカードの数より多い場合、自分・相手のバトルフェイズ終了時に発動できる!!?自分フィールドのカードの数と同じになるように、相手はフィールドのカードを裏側表示で除外しなければならない!!?」
「っ……私はヴァレルガードドラゴンを残して残りのカードを全て除外するわ」
ヴァレルガードを残し、フィールドのモンスターやデータの嵐が全て粒子になって消えていく。
そんな中、桜ちゃんがなんとも言い難い表情で私を見てくる。
「……いつから持ってたの?」
「マジックプランターの時だよ。好敵手(とも)の記憶と一緒に引いてた」
「なら、なんでもっと早く使わなかったの?そうすればすぐに私のバ

トルゾーンをなんとか出来て、こんなに追い詰められることもなかったでしょ？」
そう、確かにもっと早く使える機会はあった。
手札から使おうとしなくてもセットして置けばよかったし、除外させる数は少なくなったかもしれないけど、エクストラリンクは突破出来ていたと思う。
それでも、私がそうしなかったのはーーー
「好敵手（とも）の記憶を使いたかったからかな。それと桜ちゃんのドラゴン達を完全に除外したくなかったから」
「……そんな理由なの？」
「そんなって、大事な理由だよ。ファイアウォールドラゴンもヴァレルガードドラゴンも、桜ちゃんが私を思って手に入れてくれた桜ちゃんの新しい切り札なんだもん。普通に考えれば、おかしいことだとは思うよ？でも、それでも私は、除外するなんて形で桜ちゃんの思いを否定したくなかった。それが、私にとって、１番大事な理由だよ」
桜ちゃんは私を守るために変わりたいって言ってくれた。
その象徴がファイアウォールとヴァレルガード。
そんな桜ちゃんの思いの象徴を完全に除外しするなんて、したくなかった。
それは桜ちゃんもきっと同じハズだ。
私が好敵手（とも）の記憶を使った時、本当は私にコントロールを移すぐらいならファイアウォールの効果でファイアウォール自身をＥＸデッキに戻すことも出来たハズだ。
でも、桜ちゃんはそれをしなかった。
自分の思いの象徴を、自分の手で無くすことなんてしたくなかったんだと思う。
まあ、ファイアウォールのコントロールを取られてもカグヤでどうにかできるというのもあるんだろうけど。
「私は、受け入れる。桜ちゃんの思いを……でも、私も、桜ちゃんの隣に胸を張って立てるようになりたいから……だから、桜ちゃんのモンスターを傷付けずに、私は勝つ‼？もう、そのための道筋は見え

てるんだから!!?」
「っ……随分言ってくれるわね。やれるものならやってみなさい!!?メインフェイズ2、カードを1枚伏せてヴァレルガードドラゴンの効果発動!!?テイクダウンエイミング!!?1ターンに1度、自分の魔法・罠ゾーンのカードを墓地に送ることでそのターンに破壊された自分または相手の墓地へ送られたモンスター1体を効果を無効にして特殊召喚する!!?私は今伏せたヘルテンペストを墓地に送って遊花のジャンクリボーを特殊召喚!!?」
「ジャンクリボーを?」

〈ジャンクリボー〉☆1　機械族　地属性
　ＤＥＦ２００

ヴァレルガードの口から粒子砲が私の墓地に向かって放たれ、墓地からジャンクリボーが引きずり出される。
　でも、そんなことに何の意味が……
「そして魔法カード、妨げられた壊獣の眠り!!?このカードの発動時、フィールドのモンスターを全て破壊するわ!!?」
「えっ!?」
　フィールドが揺れ、ヴァレルガードは空を飛んで逃れたけどジャンクリボーが地割れに呑み込まれていく。
　そして私のフィールドには巨大な亀が、桜ちゃんのフィールドには三つ首の竜が現れた。
「その後、デッキからカード名が異なる壊獣モンスターを自分・相手のフィールドに1体ずつ攻撃表示で特殊召喚するわ!!?この効果で特殊召喚したモンスターは表示形式を変更できず、攻撃可能な場合は攻撃しなければならないけどね。私は遊花のフィールドに海亀壊獣ガメシエル、そして私のフィールドに現れて、全てを壊しなさい!!?雷撃壊獣サンダーザキング!!?」

〈海亀壊獣ガメシエル〉☆8　水族　水属性

ＡＴＫ２２００

〈雷撃壊獣サンダーザキング〉☆９　雷族　光属性

ＡＴＫ３３００

「サンダーザキング……」

それは桜ちゃんを象徴する壊獣モンスター。

おまけにガメシエルは強制的に攻撃しないといけないからフィールドに残すと確実にこちらにダメージが入ってしまう。

「妨げられた壊獣の眠りはモンスターを破壊しなければ特殊召喚できないけど、ヴァレルガードドラゴンはカード効果で破壊されない。だから、遊花のカードを使わせて貰ったわ。そして私はまだ通常召喚を行なってないわ‼？来なさい、私の相棒‼？妖精伝姫―カグヤを召喚‼？」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性

ＡＴＫ１８５０

覚悟を決めたような目をしてカグヤがフィールドに現れる。

「傷つけないなんてことが出来るならやってみなさい‼？私はこれでターンエンド‼？」

「エンドフェイズ‼？好敵手（とも）の記憶の効果で除外されていたファイアウォールドラゴンを私のフィールドに特殊召喚する‼？お願い、私に力を貸して‼？ファイアウォールドラゴン‼？」

〈ファイアウォールドラゴン〉ＬＩＮＫ４　サイバース族　光属性

ＡＴＫ２５００　↑←→↓

ゆっくりと私のフィールドにファイアウォールが舞い降りる。

ファイアウォールは私を見ると、何かを伝えようとしたのか弱々しい声で鳴く。

……大丈夫、貴方の思いはちゃんと分かってるから。
だから、少しだけ力を貸して。

遊花　ＬＰ１０２５　手札４
ーーーーーー　ー
ーー○☆ー
　ー　　ー
○☆○ーー
ーーーーー　ー
桜　ＬＰ５０００　手札３

揃いも揃った桜ちゃんを象徴するカード達。
それでも、私の思いは変わらない。
私は桜ちゃんと一緒に進んで行きたいんだもん!!?
だから、力を貸して、私のデッキ。
桜ちゃんに、この思いを届けるために!!?
「私のターン、ドロー!!?行くよ、桜ちゃん!!?金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル１モンスターを特殊召喚するよ!!?戻ってきて、クリボー!!?」

〈クリボー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３００

「っ、この流れは……」
「導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私の前に大きなサーキットが現れる。
行くよ、皆!!?

「召喚条件はレベル１モンスター１体!!?私は金華猫をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?希望の守り手!!?リンク１!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

出てきたのは私のリンクリボー。
リンクリボーは出てくるのと同時に私に向かって擦り寄ってくる。
うん、待たせちゃってゴメンね。
ここからはまた君の出番だよ!!?
「ファイアウォールドラゴンの効果発動!!?リ・ペーストシールド!!?このカードのリンク先のモンスターが、戦闘で破壊された場合、または墓地へ送られた場合に手札からモンスター１体を特殊召喚するよ!!?お願い、クリアクリボー!!?」

〈クリアクリボー〉☆１　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

「まだまだ行くよ、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「連続リンク召喚……」
「召喚条件はモンスター２体!!?私はクリアクリボーと海亀壊獣ガメシエルをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク２!!?プロキシードラゴン!!?」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

「ファイアウォールドラゴンの効果発動!!?リ・ペーストシールド!!?このカードのリンク先のモンスターが、戦闘で破壊された場合、または墓地へ送られた場合に手札からモンスター１体を特殊召喚する

よ!!?最後まで、私と共に!!?ハネクリボー!!?」

〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

相棒が私の顔を見て頷く。
うん、お願い、相棒の力を私に貸して!!?
「そして、行くよ、桜ちゃん!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私の前に3回目のサーキットが現れる。
「召喚条件は効果モンスター3体以上!!?私はハネクリボー、リンクリボー、プロキシードラゴンを　2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
「っ、この条件は……!!?」
貴方も今日は沢山待たせちゃったね。
お願い、私に貴方の剣(つるぎ)を貸して!!?
「お願い、私に思いを届ける力を貸して!!?リンク召喚!!?閉ざされた運命を斬り開く魂の剣(つるぎ)!!?リンク4!!?ヴァレルソードドラゴン!!?」
咆哮が響く……この時を待ち望んでいたというように。

〈ヴァレルソードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↓?↑←→

「ヴァレルソードドラゴン……だけど!!?妖精伝姫―カグヤの効果発動!!?アンリーゾナブルディマンド!!?1ターンに1度、相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動!!?相手はそのモンスターの同名カード1枚を自身のデッキ・ＥＸデッキから墓地へ送らなかった場合、このカードと対象のモンスターを持ち主の手札に戻す!!?対象は勿論ヴァレルソードドラゴン!!?」
カグヤがヴァレルソードに迫ってくる。

しかし、そんなカグヤの前に見えない壁が現れ、カグヤの動きを止めた。
「墓地から罠カード、スキルプリズナーを発動!!?このカードを除外し、ヴァレルソードドラゴンを選択して、このターン選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にするよ!!?」
「なっ!!?そんなカードいつ……!!?」

ーーーーーーー

『私はカードを1枚伏せてターンエンド。エンド時に手札が7枚だから手札を1枚捨てるね』

ーーーーーーー

「っ、まさか、あの時!!?」
「これで妖精伝姫―カグヤの効果は不発。もう気にする必要もない!!?私はヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アサシネイトショット!!?1ターンに1度、攻撃表示モンスター1体を対象として発動!!?そのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる。そしてこの効果の発動に対して相手は効果を発動できない!!?この効果は相手ターンにでも使用することが出来るよ!!?対象は……ちょっとだけゴメンね、クリボー」
ヴァレルソードが空砲を空に向けて撃つ。
それに驚いたのかクリボーはその場で蹲った。
うん、本当にゴメン……今回だけだから、許してね。

クリボー
ＡＴＫ３００↓ＤＥＦ２００

「っ……本当に私のモンスターを傷つけずに勝つつもりなの?」

「届かせてみせる、この思いを!!?私は、桜ちゃんと一緒に前に進むんだ!!?魔法カード、貪欲な壺!!?墓地に存在するリンクリボー、プロキシードラゴンをＥＸデッキに、金華猫、ジャンクリボー、ハネクリボーをデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする!!?」
「ここでドローカード!!?」
「来た!!?速攻魔法!!?増殖!!?自分フィールド上に表側表示で存在するクリボー１体をリリースして自分フィールド上にクリボートークンを可能な限り守備表示で特殊召喚する!!?」

〈クリボートークン〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

私のフィールドにいたクリボーが４体に増える。
これで準備は整った!!?
「っ、これは……!!?」
「導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
再び私の前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件は通常モンスター１体!!?私はクリボートークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク１!!?リンクスパイダー!!?」

〈リンクスパイダー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１０００　←

私の前に機械の蜘蛛が現れる。
それを確認しながら私は再びサーキットを開く。
「まだ行くよ!!?希望に繋がるサーキット!!?召喚条件はモンスター２体!!?私はクリボートークン２体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク２!!?プロキシードラゴン!!?」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

「あとちょっと!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?召喚条件はレベル１モンスター１体!!?私はクリボートークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?もう１度、希望を守って!!?リンク１!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

「そのモンスター達は……」
「さあ、行くよ!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私は１度目を閉じて、深呼吸をして最後のモンスターを呼ぶ。
「召喚条件は効果モンスター３体以上!!?私はリンクスパイダー、リンクリボー、プロキシードラゴンを　２体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
貴方にはいつも待って貰ってるよね。
ありがとう、こんな私をいつも待っててくれて。
お願い、私の思いを届けるために、貴方の力を貸して!!?
「閉ざされた運命を撃ち抜く信念の弾丸!!?リンク４!!?ヴァレルロードドラゴン!!?」

〈ヴァレルロードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↓?↑↓↘?

「ヴァレルロードドラゴンまで……」
「ファイアウォールドラゴンの効果発動!!?リライトフューチャー!!?このカードが表側表示で存在する限り１度だけ、このカードと相互リンクしているモンスターの数だけ、自分または相手フィールド・墓地のモンスターを手札に戻せる!!?ファイアウォールドラゴンと相

互リンクしてるのはヴァレルソードドラゴンとヴァレルロードドラゴン‼？私は妖精伝姫―カグヤと雷撃壊獣サンダーザキングを手札に戻すよ‼？」

ファイアウォールの身体から電磁場が溢れ出し、カグヤとサンダーザキングを手札に押し戻す。

「っ……‼？この状況……まさか本当に‼？」

「行くよ、桜ちゃん‼？これが私の全力だよ‼？バトル‼？ヴァレルロードドラゴンでヴァレルガードドラゴンを攻撃‼？銃声のイジェクトフレア‼？」

「っ、迎え撃ってヴァレルガードドラゴン‼？銃砲のスラムファイア‼？」

ヴァレルロード、ヴァレルガード、２体のヴァレルの名を持つドラゴンがお互いに粒子砲を撃ち合い、拮抗する。

「この瞬間、ヴァレルロードドラゴンの効果発動‼？エロージョンエイミング‼？このカードが相手モンスターに攻撃するダメージステップ開始時に、その相手モンスターをこのカードのリンク先に置いてコントロールを得て、そのモンスターは次のターンのエンドフェイズに墓地へ送られるよ‼？」

「っ……ヴァレルガードドラゴン‼？」

私が効果を宣言すると、ヴァレルロードの粒子砲が威力を増し、ヴァレルガードを包み込むと、ヴァレルガードはこちらのバトルゾーンに移動した。

「これでモンスターはいなくなった‼？斬り開いて、ヴァレルソードドラゴンでダイレクトアタック‼？剣光のベイオネットブレイク‼？」

「くっ……‼？」

桜　ＬＰ５０００→２０００

ヴァレルソードが優しく剣を振るい、風圧で桜ちゃんのライフが削れる。

そしてヴァレルソードはもう1度剣を振り上げた。
「これで終わりだよ‼?もう1度斬り開いて‼?ヴァレルソードドラゴンでダイレクトアタック‼?剣光のベイオネットブレイク‼?」
ヴァレルソードがもう1度剣を優しく振るう。
それを見て、桜ちゃんは優しい笑顔を浮かべた。
「……まさか本当に私のモンスターを倒さないで勝つなんてね……なんだ、やればできるじゃない……これなら……きっと……」

桜　　ＬＰ２０００→０

ーーーーーーーー

デュエルが終わり、モンスター達が粒子になって消えていく。
そんな中、４体のドラゴンが私と桜ちゃんに向けて咆哮を上げた気がした。
うん、言われなくても分かってるよ。
私は少し離れた場所で立ち尽くしている桜ちゃんに近づいていく。
そして、そんな桜ちゃんを優しく抱きしめた。
私の方が身長が低いから、抱きついてるようにしか見えないかも知れないけど、そんなこと、今は気にしない。
「ゆ、遊花？」
突然抱き締められ、桜ちゃんは困惑の声を上げる。
それでも、私は抱き締めながら、今1番伝えたい言葉を口に出す。
「ありがとう……ずっと私を守ってくれて。ずっと守ろうとしてくれて……そのために変わろうとしてくれて……私、桜ちゃんがいてくれてよかった。桜ちゃんが、私の親友でよかった」
「っ……ゆう……か」
桜ちゃんの声に涙の色が混ざる。
正直言えば、桜ちゃんがいなければ、私はとっくにこの街からいなくなっていたと思う。

この街からも、デュエルからも逃げて、師匠と会うこともなく、ずっと塞ぎ込んだまま、俯いて生きていたと思う。
私がそんなことにならなかったのは、私が塞ぎ込んでいる時に、ずっと桜ちゃんが傍にいてくれたからだ。
私が、この街や学校から逃げないで済んだのは、間違いなく、桜ちゃんのおかげなんだ。
「だから、ちゃんと声に出して言うよ？桜ちゃんは、しっかりと私を守ってくれてたよ。桜ちゃんは私の自慢の親友だもん。それだけは、例え桜ちゃんにだって否定させないからね？」
「っ‼？ゆう、か‼？」
「わわっ‼？もう……桜ちゃんは泣き虫だなーぎゅー‼？いいこいいこ」
私に抱きついて泣き崩れる桜ちゃんを抱きしめ返して、少し背伸びをして桜ちゃんの頭を撫でる。
「うわ、あああああ‼？」
「大丈夫、大丈夫だよ」
「あああああああ‼？」
「私は、桜ちゃんとずっと一緒にいるよ？だから、大丈夫だよ」
いつかあったやり取りを思い出しながら、桜ちゃんを抱き締め続ける。
私は……本当の本当に、幸せものだ。
私を支えてくれる人がいる。
私を守ろうとしてくれる人がいる。
いつか……私もそんな人達に、胸を張って並べるように……変わっていきたい。
……いけたら、いいな。
桜ちゃん達と、一緒に。

第３０話　誰がための怒り

★

「桜ちゃん、そろそろ離れない？」
「うぅ～」
　私に抱きついたままぶんぶんと首を振る桜ちゃんに、私は思わず困った表情を浮かべながらも次のデュエルに向けてデッキを調整していく。
　次のデュエルは神路祇君だし、デュエルしたことがある桜ちゃんの意見も少しは聞きたかったんだけど、今は無理そうだから諦めるしかないよね。
「お疲れ様、２人共」
「よう‼？遊花も桜もいいデュエルだったぜ‼？」
「あ、霊華さん、大地君」
　声が聞こえた方向を見ると、霊華さんと大地君が軽く手を振りながらこちらに近づいてきていた。
　そして私に抱きついている桜ちゃんを見ると、２人して首を傾げる。
「桜、どうかしたの？」
「あーうん、まあ、ね。さっきのデュエルのことで、ちょっと……」
「？さっきのデュエルで何かおかしなことがあったかしら？素晴らしいデュエルだったと思うのだけれど……」
「あーそうじゃなくて、デュエルの内容じゃなくてね……」
「あ、そういえばびっくりしたぜ。まさか桜が泣くなんてな。何言ってるのか聞こえなかったけど、それだけ悔しかったんだな」
「っ～～～‼？」
「……大地君、桜ちゃんが恥ずかしがってるからそれ以上言わないであげて」
「……成る程、そういうこと」

大地君の死体蹴りに、桜ちゃんが顔を真っ赤にしながらさらに力を込めて私に抱きついてくるので、桜ちゃんの頭を優しく撫でてあげる。

……そう、桜ちゃんがさっきから私に抱きついているのは、泣いている姿を大勢に見られたのが恥ずかしいからだ。

私も桜ちゃんもデュエルに集中し過ぎていたから忘れてたけど、あれは期末試験のデュエルで、行われていたのは他の生徒も見学ができるフィールドの上。

当然、泣き出した桜ちゃんと抱きしめていた私を、周りの生徒達は何事かと見ていた。

正直、気を遣って声をかけてくれた先生がいなかったらまだフィールドの上で桜ちゃんを抱き締めていたかもしれない。

声をかけられたことで周りに人が沢山いたことに気づいた桜ちゃんは泣いていた時とは違う意味で真っ赤になり、顔を隠すように私に抱きついて離れなくなってしまった。

私は、普段から奇異の視線で見られてるから別に気にもしなかったんだけど、桜ちゃんにはその視線が耐えられなかったみたい。

普段の桜ちゃんを見てると、泣くようなタイプに見えないから、あんなに泣いてる姿を見られたのは桜ちゃんにとって凄いダメージだったんだろう。

だけど、多分桜ちゃんは気付いてないんだろうな……今のこの状態の方が視線を集めてるってこと。

「それで、遊花は何やってたんだ？」

「デッキの最終調整かな？いよいよ最後のデュエルだからね」

「そういえばもう最後だったな。だけど、油断すんなよ？」

「あはは、油断なんか出来るほど、私は強くないよ。ここまでだって、皆が力を貸してくれたから何とかなったんだもん」

そんなことを話しながらデッキを組み上げていく。

そんな中、私は1枚のカードに目がいき、そのカードを手に取り、考え込む。

その様子を見て、大地君が首を傾げながら声をかけてくる。

「？何のカードを見てるんだ？」
「あ、うん。このカード、こないだ島さんに貰ったカードなんだけど……」
「あの面白い波動を感じたカード？」
「えっと、波動って言うのはよく分からないですけど……期末試験初日に私が拾ったカードです」
「そのカードがどうかしたのか？」
「あ、うん。一応デッキには入ってるんだけど……実は、今まで１度もドローしたことがなくて……」
「えっ？あれだけデュエルしてるのにか？」
「うん……そうなんだよね」
「不思議。遊花はデッキ調整も合わせれば少なくとも今日までに３０回以上はデュエルしてるハズ。それなのに１度もドローしてないの？」
「はい……だから少し気になってて……」
私はそういって視線を手に持ったカードに移す。
今までも出す条件が整えられなかったりするカードがあったけど、それでもドローするまでは出来ていた。
だけど、今回は根本的にドローすら出来ていない。
まるでこのカード自体が出ることを拒んでいるみたいに……
「それで、遊花はどうするの？どうしてもドロー出来ないなら、いっそのことデッキに入れないというのもアリだと思うけど……」
「……それでも、私はこの子と一緒にデュエルがしたいです。なんでドロー出来ないのかは分からないですけど、それでもデッキから抜くことだけはしたくないです」
「……そう。遊花がそう感じたのなら、それでいいと思う」
「案外、遊花の覚悟を試したりしてるのかもよ？まあ、勘なんだけどさ」
「試されてる、か……なら、余計に逃げちゃダメだよね」
大地君のそんな言葉に私は握っていたそのカードと、並べていたカードを集めて１つのデッキにしていく。

「よし、これで完成!!?」
私はそうして出来上がったデッキを胸の前で抱きしめる。
最後までよろしくね、皆。
そんなことを思っていると、いつもデュエル中に聞こえているモンスター達の声が聞こえた気がして、思わず表情が緩む。
そんな私に微笑みながらも、霊華さんは1度表情を引き締めると真剣な表情で声をかけてきた。
「次のデュエルの相手は神路祇……十分に気をつけてデュエルした方がいい。神路祇は恐ろしいカードを持っている」
「恐ろしいカード……ですか?」
「ええ。特に、女の子にとっては余計に」
「女の子は?それってーーー」
『第3学年、出席番号98番、栗原遊花さん。至急第1フィールドへお越しください』
霊華さんの言葉の意味を聞こうとしたところで、呼び出しのアナウンスが入る。
……ちょっと気になる話だったけど、どちらにしろデュエルしないといけないんだし、その時には分かることだよね。
私は目をつぶって1つ深呼吸をすると、霊華さんと大地君に笑顔で告げた。
「それじゃあ、いってきます!!?」
「おう!!?頑張ってこいよ!!?遊花のデュエル、期待してるぜ!!?」
「遊花ならきっと神路祇にも勝てる。頑張って」
「はい!!?」
2人の言葉に頷き、今度は背中に抱きついたままの桜ちゃんに声をかける。
「それじゃあ桜ちゃん。私、行ってくるね」
私の言葉を聞き、桜ちゃんはゆっくりと離れていく。
桜ちゃんの表情はどこか不安そうだ。
そんな桜ちゃんに、私は満面の笑みを浮かべて頭を撫でる。
「大丈夫だよ。桜ちゃんの仇、ちゃんと取ってくるからね」

「遊花……」
「だから、ちゃんと見ててね？私が神路祇君に勝つところ」
「……分かったわ。でも、無理はしちゃダメよ？」
「うん‼？頑張ってくるね‼？」
そういってフィールドに向けて移動する。
フィールドには既に神路祇君の姿があった。
神路祇君は私を見て、ニヤニヤと不気味な笑みを浮かべながら口を開く。
「あ、やっと来た、虫けらさん？あまりにも遅いから怖くて逃げ出しちゃったかと思ったよ～？ヒヒヒ」
「残念ですが、怖くても逃げ出すわけにはいかないので。私も退学がかかってますから」
平然として言葉を返す私を見て、神路祇君は一瞬忌々しそうな表情を浮かべ、しかしすぐに表情をニヤニヤとしたものに戻し、デュエルディスクを起動した。
「へぇ～虫けらさんの癖に生意気なこと言うじゃん。それじゃあさっさとやりますか。その平然とした態度を恐怖と絶望に歪ませるってのも、面白そうだし～お友達の宝月さんに、自分の友人が無様にやられる様を見せるのも楽しそうだからね～ヒヒヒ」
そんな神路祇君の言葉を聞きながら、私もデュエルディスクを起動する。
神路祇君は桜ちゃんに勝った学年３位の決闘者。
だから、全力で挑む‼？
「いきます‼？」
『決闘‼？』

遊花　ＬＰ８０００
電二　ＬＰ８０００

ーーーーーーーー

「先攻は僕ちゃんだよ～といっても、手札が悪いね～仕方ない、ここはカードを3枚伏せてターンエンドといこう」

遊花　ＬＰ８０００　手札５
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー▲▲▲ー　ー
電二　ＬＰ８０００　手札２

神路祇君のフィールドには3枚の伏せカード。
手札が悪いとは言ってたけど、神路祇君の態度からそれが本当なのか罠なのか判断がつかない。
それでも、私は私に出来ることをやるだけ!!?
「私のターン、ドロー!!?私はジェットシンクロンを召喚!!?」

〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＡＴＫ５００

現れたのは小さなジェット機のようなモンスター。
「バトル!!?ジェットシンクロンでダイレクトアタック!!?ブーストストライク!!?」
ジェットシンクロンが勢い良く神路祇君に突撃していく。
そんなジェットシンクロンを見て、神路祇君は嘲笑を浮かべる。
「攻撃力たった５００で攻撃してくるなんて、舐められてるね～まあ、通してなんかやらないんだけどさぁ!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?メタバース!!?」
「!!?やっぱり罠カードがありましたか……」
「このカードはデッキからフィールド魔法を手札に加えるか、自分フィールドに発動することが出来るのさ!!?さあ、よからぬことを始

めようじゃないか‼?フィールド魔法、Ｇボールパークを発動‼?」
「Ｇボールパーク?」
　辺りの風景が山の中にある球場のような風景に変わる。
　このタイミングで発動されるフィールド魔法……でも、なんだろう、凄く嫌な予感が……
「Ｇボールパークの効果発動‼?ダメージ計算時に、１ターンに１度その戦闘で発生するお互いの戦闘ダメージを０にし、自分のデッキからレベル４以下の昆虫族モンスター１体を墓地へ送ることが出来るのさ‼?僕ちゃんが墓地に送るのはゴキボール‼?というわけで、虫けらさんの攻撃は効かないよ～」
　ジェットシンクロンの攻撃が神路祇君に当たる直前何かの黒い影が横切ってジェットシンクロンを弾く。
「さらにさらに、豪華特典として～この効果で通常モンスターが墓地へ送られた場合、さらにその同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から任意の数だけ選んで特殊召喚できるのさ‼?さあ、デッキから現れな、２体のゴキボール‼?」
「ひぅっ‼?」

〈ゴキボール〉☆４　昆虫族　地属性
ＡＴＫ１２００

　フィールドに現れたのはどう見ても台所に出没してカサカサと動く黒いアレ。
　その姿を見て、私は思わず悲鳴を漏らしてしまう。
　そんな私を見て、神路祇君は愉快そうな笑みを浮かべる。
「ヒヒヒ……おいおい、どうしたんだ?たかが攻撃力１２００の効果も持たない雑魚モンスターだぜ?どうしてそんなに怖がる必要があるんだよ～」
　神路祇君が何かを言って笑ってるけど、私はそんな神路祇君に反応を返す余裕はない。
　無理無理無理‼?アレだけは無理なんだよ‼?

霊華さんが言ってた恐ろしいカードってそういう意味⁉？
確かに恐ろしいカードだよ⁉？
立体映像になることでこんなに恐ろしくなるカードがあるなんて思わなかったよ⁉？
れ、れれれ冷静になれ、私。
アレはモンスターの立体映像……実体じゃない実体じゃない実体じゃない実体じゃないーーー
「め、メインフェイズ２⁉？導いて⁉？希望に繋がるサーキット⁉？」
「へぇ～お得意のリンク召喚か」
私の前に大きなサーキットが現れる。
「し、召喚条件はレベル１モンスター１体⁉？私はジェットシンクロンをリンクマーカーにセット⁉？サーキットコンバイン⁉？リンク召喚⁉？色々な意味でお願い、希望の守り手⁉？リンク１⁉？リンクリボー⁉？」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

現れるのは青い球体型のモンスター。
リンクリボーがいつものように擦り寄ってくる前にこちらからリンクリボーを抱きしめる。
リンクリボーは驚きながらも嬉しそうに擦り寄ってくる。
うぅ～癒しだよ～向こうのフィールドを見たくないよ～
「ヒヒヒ、立体映像に縋るとか、流石最底辺の虫けらさん、情けないね～」
うぅ～なんとでも言うといいよ⁉？
今はそんなこと気にしてる余裕なんてないもん⁉？
「私はカードを２枚伏せてターンエンド⁉？」

遊花　ＬＰ８０００　手札３
ー▲▲ーー　ー

ーーーーー
☆　ー
ーー○○ー
ー▲ー▲ー　▽
電二　ＬＰ８０００　手札２

「ヒヒヒ、僕ちゃんのターン、ドロー!!?おお、いいカードを引いたね。速攻魔法、手札断殺!!?お互いのプレイヤーは手札を２枚墓地へ送り、その後、それぞれデッキから２枚ドローする」
「手札交換のカード……」
お互いに手札を２枚捨てて新しいカードをドローする。
ドローしたカードを見て、神路祇君は面白そうに笑った。
「ヒヒヒ、それじゃあいきますか。僕ちゃんは甲虫装機(インゼクター)ダンセルを召喚!!?」

〈甲虫装機ダンセル〉☆３　昆虫族　闇属性
ＡＴＫ１０００

現れたのは虫を模した赤い装甲を纏い、片手に銃を持っているモンスター。
そして神路祇君は手を前にかざす。
「犇めきあえ!!?光を呑み込むサーキット!!?」
「っ、リンク召喚……」
「召喚条件は昆虫族モンスター２体!!?僕ちゃんはゴキボール２体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク２!!?甲虫装機(インゼクター)ピコファレーナ!!?」

〈甲虫装機ピコファレーナ〉ＬＩＮＫ２　昆虫族　闇属性
ＡＴＫ１０００　↙?↘?

２体のゴキボールがいなくなり、代わりに蛾を模したピンク色の装

甲を纏い、リボンを手に持ったモンスターが現れる。
……良かった、ゴキボールがいなくなって。
そう安堵している私を見て、神路祇君は面白そうに笑う。
「何を安堵してるんだ～？ここからが本番だって言うのにさ～甲虫装機ピコファレーナの効果発動!!？インゼクターフォーゼ!!？このカードがリンク召喚に成功した場合、手札を1枚捨て、このカード以外の自分フィールドの昆虫族モンスター1体を対象としてデッキから昆虫族モンスター1体を攻撃力・守備力５００ポイントアップの装備カード扱いとして対象のモンスターに装備する!!？俺は手札を1枚捨ててデッキから甲虫装機ダンセルに甲虫装機（インゼクター）ホーネットを装備!!？そして甲虫装機ホーネット自体にもこのカードを装備カード扱いとして装備しているモンスターのレベルを3つ上げ、攻撃力・守備力をこのカードのそれぞれの数値分アップさせる!!？」
ピコファレーナがリボンを振るうと、どこからか蜂を模した装甲を纏ったモンスターが現れ、その手に持っていた蜂を模した銃をダンセルに渡し、姿を消した。

甲虫装機ダンセル　☆3→6
ＡＴＫ１０００→１５００→２０００

装備された時に効果を発揮するモンスター。
だけど、そんなモンスターの効果があれだけとは思えない。
「さらにさらに、手札から捨てられたゴキボールの効果発動!!？このカードが墓地へ送られた場合にデッキからレベル４の昆虫族モンスター1体を手札に加える。この効果で通常モンスターを手札に加えた場合、さらにそのモンスターを手札から特殊召喚でき、その後、この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力以上の攻撃力を持つ、フィールドのモンスター1体を選んで破壊できる。まあ、流石にリンクリボーよりも攻撃力が低い通常モンスターなんていないからね。今回は甲虫装機（インゼクター）ホッパーを手札に加えさせて貰おうか。そして装備カードとなった甲虫装機ホーネットの効果発動!!？モンスターに装

備されているこのカードを墓地へ送り、フィールドのカード1枚を対象として破壊する!!?その後ろのセットカードを破壊させて貰おうか!!?スティンガースパーク!!?」
「っ、リビングデッドの呼び声が……」
ダンセルがホーネットから渡された銃を構え、私のセットカードに向けて砲撃し、セットカードを跡形もなく消しとばす。
その砲撃でエネルギーが切れたのか、銃は機能を停止し、消滅した。

甲虫装機ダンセル　☆6→3
ＡＴＫ２０００→１０００

「まだこれだけじゃ終わらないぜ。甲虫装機　ダンセルの効果発動!!?このカードが自分フィールドに存在し、このカードに装備されたカードが自分の墓地へ送られた場合、デッキから甲虫装機　ダンセル以外の甲虫装機モンスター1体を特殊召喚する!!?現れろ、甲虫装機センチピード!!?」

〈甲虫装機センチピード〉☆3　昆虫族　闇属性
ＡＴＫ１６００

現れたのは百足を模した茶色の装甲を纏ったモンスター。

「甲虫装機センチピードの効果発動!!?1ターンに1度、自分メインフェイズに自分の手札・墓地から甲虫装機モンスター1体を選び、装備カード扱いとしてこのカードに装備する!!?僕ちゃんはさっき墓地にいった甲虫装機ホーネットを甲虫装機センチピードに装備するよ〜」
「っ!!?それじゃあ……」
再びホーネットが現れ、センチピードに自分の銃を手渡す。

甲虫装機センチピード　☆3→6

ＡＴＫ１６００→２１００

そしてセンチピードはその銃を私のセットカードに向ける。

「さあ、再び装備カードとなった甲虫装機ホーネットの効果発動このカードを墓地に送り、もう1枚のセットカードも破壊させて貰おうか‼？スティンガースパーク‼？」

甲虫装機センチピード　☆6→3

ＡＴＫ２１００→１６００

「っ、リバースカードオープン‼？速攻魔法、クリボーを呼ぶ笛‼？その効果で自分はデッキからクリボーまたはハネクリボー1体を選択し、手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができます‼？私か選ぶのは特殊召喚‼？いつだって、私と共に‼？ハネクリボー‼？」

〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性

ＤＥＦ２００

私の前に相棒が現れる。

相棒は私を見て、少し心配するような表情を浮かべた。

相棒の姿を見て、神路祇君は一瞬つまらなそうな表情を浮かべたが、何かを思いついたのか不気味な笑みを浮かべた。

「速攻魔法だったか～残念だったな～まあとりあえず、甲虫装機センチピードの効果発動‼？このカードが自分フィールドに存在し、このカードに装備されたカードが自分の墓地へ送られた場合、デッキから甲虫装機カード1枚を手札に加える。僕ちゃんが手札に加えるのは２枚目の甲虫装機ダンセルだ」

「後続までサーチしてくるなんて……」

「おおっと、まだ終わっちゃいないよ？甲虫装機ダンセルにも、1ターンに1度、自分メインフェイズに自分の手札・墓地から甲虫装機モン

スター1体を選び、装備カード扱いとしてこのカードに装備する効果があるのさ!!?」
「っ!??それじゃあまたホーネットが……」

甲虫装機ダンセル　☆3→6
ＡＴＫ１０００→１５００

「大正解〜!!?僕ちゃんはさっき墓地にいった甲虫装機ホーネットを甲虫装機ダンセルに装備!!?そして装備カードとなった甲虫装機ホーネットの効果発動このカードを墓地に送り、虫けらさんのリンクリボーを破壊だ!!?」
「っ、リンクリボー!!?」
抱きしめていたリンクリボーがダンセルの銃に撃ち抜かれて粒子になる。
「さあ、また甲虫装機　ダンセルの効果発動!!?このカードに装備されたカードが自分の墓地へ送られたから、再びデッキから現れろ、甲虫装機センチピード!!?」

〈甲虫装機センチピード〉☆3　昆虫族　闇属性
ＡＴＫ１６００

「まだまだ動かせて貰うよ?甲虫装機ピコファレーナの効果発動!!?同名モンスターは1ターンに1度自分の墓地の昆虫族モンスター3体を対象としてそのモンスターをデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから1枚ドローする!!?僕ちゃんは墓地のゴキボール3枚をデッキに戻して1枚ドロー!!?」
「うっ……」
ゴキボールがデッキに戻ったってことはGボールパークの効果が発動したらまたバトルゾーンにゴキボールが出てきてしまい、またリンク召喚やエクシーズ召喚に繋げられる可能性がある。
これじゃあ迂闊に攻撃出来ない……色々な意味で。

「さてと、このままだとハネクリボーが邪魔でダメージが与えられないか～困ったな～」
神路祇君がそんなわざとらしい言葉を漏らす。
こんな言葉を漏らすということは十中八九どうにかする手段があるということ……一体次はどんな手を……
「よし、じゃあこうしよう。リバースカードオープン。永続罠、ＤＮＡ移植手術。発動時に僕ちゃんは光属性を選択。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、フィールド上の全ての表側表示のモンスターは光属性になる」
「えっ？」

甲虫装機ダンセル
闇属性→光属性

甲虫装機センチピード
闇属性→光属性

甲虫装機ピコファレーナ
闇属性→光属性

フィールドのモンスターが全て光属性に変わる。
だけど、そんなことに何の意味が……、
「僕ちゃんは昆虫族・光属性のレベル３モンスター２体以上、甲虫装機ダンセルと２体の甲虫装機センチピードでオーバーレイ。３体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
「っ!??エクシーズ召喚のために属性変更を!??」
ダンセルと２体のセンチピードが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると現れたのは電子的な身体を持つフンコロガシのようなモンスター。
「現れろ!!?ランク３、電子光虫（デジタルバグ）―スカラジエータ!!?」

〈電子光虫―スカラジエータ〉★3　昆虫族　光属性
ＡＴＫ１８００

「驚いてるところ悪いけど、まだ終わりじゃないんだよ!!?僕ちゃんは電子光虫―スカラジエータのオーバーレイユニットを2つ取り除き、電子光虫―スカラジエータ1体でオーバーレイ!!?」
「えっ!?」
「1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?ランクアップエクシーズチェンジ!!?」
スカラジエータが再び空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると次に現れたのは電子的な身体を持つモンシロチョウのようなモンスター。
「現れろ!!?ランク5、電子光虫(デジタルバグ)―コアベージ!!?」

〈電子光虫―コアベージ〉★5　昆虫族　光属性
ＡＴＫ２２００

「電子光虫―コアベージは自分フィールドのランク3・4の昆虫族エクシーズモンスターからオーバーレイユニットを2つ取り除き、そのエクシーズモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚することが出来るのさ!!?」
「……まさか神路祇君もエクシーズモンスターのランクを上げる方法があるなんて……」
「電子光虫―コアベージの効果発動!!?デジタルフラッピング!!?1ターンに1度、オーバーレイユニットを1つ取り除くことで相手フィールドの守備表示モンスター1体を対象としそのモンスターを持ち主のデッキに戻す!!?対象は勿論、君の相棒のハネクリボーだ!!?」
「!?デッキバウンス!?墓地に存在するリンクリボーの効果発動!!?スケープリンク!!?このカードが墓地に存在する場合、自分フィー

ルドのレベル1モンスター1体をリリースしてこのカードを墓地から特殊召喚する!!?・私はハネクリボーをリリース!!?・戻ってきて、リンクリボー!!?・」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

相棒の姿が消え、代わりにリンクリボーが跳ねるように私の前に現れる。
ホッと一息をつく私を見て、神路祇君が愉快そうな表情を浮かべる。
「まさか耐え切れたなんて思ってないよな～?・」
「っ!?・?・」
「リバースカードオープン!!?・永続罠、リビングデッドの呼び声!!?・自分の墓地のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する!!?・現れろ、電子光虫（デジタルバグ）ーウェブソルダー!!?・」

〈電子光虫―ウェブソルダー〉☆３　昆虫族　光属性
ＡＴＫ５００

現れたのは電子の身体を持つ蜘蛛のようなモンスター。
見覚えがないということは手札断殺の時に墓地に送られていたカードだろう。
「電子光虫―ウェブソルダーの効果発動!!?・1ターンに1度、自分フィールドの表側攻撃表示モンスター1体を対象として、そのモンスターを守備表示にし、手札から昆虫族・レベル3モンスター1体を守備表示で特殊召喚する!!?・僕ちゃんは電子光虫―ウェブソルダーを守備表示にして甲虫装機ダンセルを特殊召喚だ!!?・」
「っ!?・?・またダンセルが!?・?・」

電子光虫―ウェブソルダー

ＡＴＫ５００→ＤＥＦ１５００

〈甲虫装機ダンセル〉☆３　昆虫族　闇属性→光属性
ＤＥＦ１８００

「おおっと、それだけじゃないぜ？電子光虫―コアベージの効果発動‼？１ターンに１度、フィールドのモンスターの表示形式が変更された場合に自分の墓地の昆虫族モンスター１体を選び、このカードのオーバーレイユニットとする‼？僕ちゃんは墓地のゴキポールをオーバーレイユニットにするぜ‼？」

コアベージにオーバーレイユニットが補充される。

しかも、ゴキポールは確か墓地にいった場合にレベル４モンスターをサーチすると言っていた。

つまり、オーバーレイユニットから墓地にいってもあの効果は発動する。

動きに全然無駄がない。

前に大地君の言っていた言葉の意味を今実感する。

態度はおちょくるようにふざけていても、プレイングには全然隙がない。

これは確かに本気なのか遊ばれているのかすら分からない。

「さあ、もういちいち説明しなくてもいいよな～？甲虫装機ダンセルの効果で甲虫装機ホーネットを甲虫装機ダンセルに装備‼？そして装備カードとなった甲虫装機ホーネットの効果発動このカードを墓地に送り、もう１度リンクリボーを破壊だ‼？」

「っ、ごめん……リンクリボー」

「そしてそして～また甲虫装機　ダンセルの効果発動‼？このカードに装備されたカードが自分の墓地へ送られたから、再びデッキから現れろ、甲虫装機センチピード‼？」

〈甲虫装機センチピード〉☆３　昆虫族　闇属性→光属性
ＡＴＫ１６００

「ついでだし、甲虫装機センチピードの効果発動!!?僕ちゃんはさっき墓地にいった甲虫装機ホーネットを甲虫装機センチピードに装備するよ～」

甲虫装機センチピード　☆３→６
ＡＴＫ１６００→２１００

「それじゃあバトルフェイズ。甲虫装機ピコファレーナでダイレクトアタック!!?ジャイロハリケーン!!?」
「うっ……」

遊花　ＬＰ８０００→７０００

ピコファレーナのリボンが叩きつけられ、私のライフが削られる。
「あれあれ～防御しないのかい?甲虫装機センチピードでダイレクトアタック!!?ハンドレットスティング!!?」
「うぐっ!!?」

遊花　ＬＰ７０００→４９００

センチピードがホーネットの銃を連射し、私の身体を撃ち抜いていく。
まだ攻撃は終わらない。
「ほらほら、ご自慢の防御で防いでみなよ!!?電子光虫―コアベージでダイレクトアタック!!?デジタルハリケーン!!?」
「くぅっ!!?」

遊花　ＬＰ４９００→２７００

コアベージの羽から電気を纏った鱗粉が飛ばされ、私の近くで誘爆

する。
「僕ちゃんはカードを1枚伏せてターンエンド。さあ、精々足掻いて見せてよ、虫けらさん？ヒヒヒ」

遊花　ＬＰ２７００　手札３
ー　　ー
ーーーーー
ーーーーー
ー　　☆
□□ー○○
ー△△△▲　　▽
電二　ＬＰ８０００　手札１

「私のターン、ドロー‼？」
神路祇君のバトルゾーンは盤石。
少しでも取りこぼしがあればすぐにダンセルとセンチピードでこちらのカードを破壊しながら再展開されてしまう。
おまけにＤＮＡ移植手術が妙なところで効いている。
あれがあるせいでフィールドのモンスターが光属性になってしまうため、スターヴヴェノムが融合出来なくなっているのだ。
なら、ここは……
「私はミスティックパイパーを召喚‼？」

〈ミスティックパイパー〉☆1　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ０

現れたのはフルートのようなものを弾いている男の人。
お願い、私に可能性を運んで‼？
「ミスティックパイパーの効果発動‼？このカードをリリースして自分のデッキからカードを1枚ドローします。そしてこの効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル1モンスターだった場合、自分はカードをもう1枚ドローします‼？」

「おやおや～ここにきてドロー頼みか？いいカードが引けたらいいな？」
「私が引いたのはクリボール‼？レベル1モンスターなのでもう1枚ドロー‼？さらに魔法カード、手札抹殺‼？お互いに全ての手札を捨てて同じ枚数ドローします‼？私は4枚、神路祇君は1枚ドローです‼？」
「チッ……手札交換カードを引いたか。いいものは引けたかな？」
「……ターンエンドです」
「ぷっ、あれだけドローして結局何も引けなかったのか？流石は最底辺の虫けらだな～」

遊花　ＬＰ２７００　手札４
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　☆
□□ー○○
ー△△△▲　▽
電二　ＬＰ８０００　手札１

「僕ちゃんのターン、ドロー‼？さっさとトドメを刺してあげたいけど、僕ちゃんは慎重派でね。もうちょっといたぶらせて貰おうかな～甲虫装機ピコファレーナの効果発動‼？同名モンスターは1ターンに1度自分の墓地の昆虫族モンスター3体を対象としてそのモンスターをデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから1枚ドローする‼？僕ちゃんは墓地の甲虫装機センチピード　2枚と甲虫装機ダンセルをデッキに戻して1枚ドロー‼？甲虫装機ダンセルを攻撃表示に変更」

甲虫装機ダンセル
ＤＥＦ１８００→ＡＴＫ１０００

「電子光虫―コアベージの効果発動!!?1ターンに1度、フィールドのモンスターの表示形式が変更された場合に自分の墓地の昆虫族モンスター1体を選び、このカードのオーバーレイユニットとする!!?僕ちゃんは墓地の甲虫装機ホッパーをオーバーレイユニットにするぜ!!?そしてバトルフェイズ!!?甲虫装機ダンセルでダイレクトアタック!!?」
「バトルフェーダーの効果発動!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードを手札から特殊召喚し、その後バトルフェイズを終了するよ!!?そしてこの効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外されます」
「防御カードを引いてたか、虫けらだけあってしぶといね～」

〈バトルフェーダー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

鐘の音を鳴らす悪魔が現れ、ダンセルが動きを止める。
「でも、フィールドにモンスターが出ても意味ないんだよ!!?メインフェイズ2!!?装備カードとなった甲虫装機ホーネットの効果発動このカードを墓地に送り、バトルフェーダーを破壊させて貰おうか!!?スティンガースパーク!!?」
「っ……バトルフェーダーは破壊されたので除外されます」

甲虫装機センチピード　☆6→3
ＡＴＫ２１００→１６００
バトルフェーダーがセンチピードに撃ち抜かれて消滅する。
「甲虫装機センチピードの効果発動!!?このカードが自分フィールドに存在し、このカードに装備されたカードが自分の墓地へ送られた場合、デッキから甲虫装機カード1枚を手札に加える。僕ちゃんが手札に加えるのはさっきデッキに戻した2枚目の甲虫装機ダンセル。そして電子光虫―ウェブソルダーの効果発動!!?1ターンに1度、自分フィールドの表側攻撃表示モンスター1体を対象として、そのモンス

ターを守備表示にし、手札から昆虫族・レベル3モンスター1体を守備表示で特殊召喚する!!?・僕ちゃんは甲虫装機ダンセルを守備表示にして電子光虫(デジタルバグ)ーLEDバグを特殊召喚!!?」

〈電子光虫—LEDバグ〉☆3　昆虫族　光属性
DEF0

現れたのは電子の身体を持つテントウムシのようなモンスター。
「僕ちゃんは昆虫族・光属性のレベル3モンスター2体以上、甲虫装機ダンセル、電子光虫—LEDバグ、電子光虫—ウェブソルダーでオーバーレイ。3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?　再び現れろ!!?・ランク3、電子光虫—スカラジエータ!!?」

〈電子光虫—スカラジエータ〉★3　昆虫族　光属性
ATK1800

現れる2体目のスカラジエータ。
「僕ちゃんは優しいから虫けらさんに教えておいてあげるよ。電子光虫—スカラジエータは1ターンに1度、オーバーレイユニットを2つ取り除くことで相手フィールドのモンスター1体を対象としてそのモンスターの表示形式を変更し、その効果をターン終了時まで無効にする。この効果は相手ターンでも発動できちゃうよ〜」
「っ……無効化効果に表示形式の変更まで……」
「おまけに1ターンに1度、このカードが戦闘で相手モンスターを破壊し墓地へ送った時に、破壊したそのモンスターをこのカードのオーバーレイユニットにすることができ、さらにさらに豪華特典として、さっきオーバーレイユニットになった電子光虫—LEDバグの効果で相手モンスターを破壊した時にカードを1枚ドローできるのさ!!?さあ、僕ちゃんはこれでターンエンド。精々頑張って突破して見せてよ、虫けらさん。まあ、無理だと思うけどね、ヒヒヒ」

遊花　ＬＰ２７００　手札３
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
　　ー　　☆
ーー○ー○
ー△ー△▲　　▽
電二　ＬＰ８０００　手札３

どんどん状況が悪くなっていくフィールド。
一体どう突破すれば……
「それにしても、この程度の虫けらさんにやられるなんて他の奴らも大したことないね～虫けら以下とかそれでも本当に僕ちゃんと同じ学年トップ１０なのかね～ヒヒヒ」
「っ‼？」
そんな神路祇君の笑い声に私は思わず思考を止める。
今、この人は何を言った？
「こんな雑魚に負けるなんてどいつもこいつも情けない奴ばかりさ。力及ばずデュエルで負けてしまいました～楽しいデュエルがしたかったんです～許して下さいってか？ヒヒヒ、ヒハハハハ‼？そんなんだから勝てないんだよ～‼？」
フィールドに神路祇君の嘲笑の声が響く。
「何が楽しいデュエルだ‼？デュエルってのは相手を叩き潰すためにあるんだよ‼？弱い奴らをぶっ潰してぶっ潰してぶっ潰して、地面に這い蹲らせる為にあるってのに、どいつもこいつも仲良しこよしで楽しいだの何だの、下らないことばっかり言いやがる。そんなんだから勝てもしないってことに気づけって話さ‼？ヒハハーーー」
「ーーーいい加減、戯言を言うことしか出来ないその浅ましい口を閉じてくれませんか？」
「ーーーーは？」
私の口からとても冷たい声が出て、神路祇君が目を丸くする。

無理だった。
どうしても、これだけは耐えることはできそうにない。
「さっきから聞いていれば、まるで自分が学年最強みたいに話してますけど、貴方風に言わせて貰えば、貴方は所詮学年3位でしょ？天雷君や喰代君に勝てていないのに、何様なのですか？いえ、そもそも貴方が本当に3位なのかも疑わしいです。だって……貴方、弱いじゃないですか？少なくとも、私がここまでデュエルをしてきた中で、貴方が1番弱いです」
「……何だと？」
私の言葉に神路祇君が不愉快そうな顔を浮かべる。
それでも私は淡々とその事実を口にする。
「今まで私がデュエルしてきた人達は貴方とは違いました。自分達の好きなカードを全力で活かすために、私の動きを封じてきたり、私の思いもよらない大胆な手を使って、全力で私に勝つための戦術を見せてくれました……こんなに弱い私と、全力でデュエルをしてくれました」
今まで、期末試験でデュエルしてきた人達のことを思い出す。
空閑君は空牙団のモンスター達を一気に展開し、私の防御手段を封じながら一気に攻めきろうとしてきた。
霊華さんは、ＰＳＹフレームで私の動きをとことん封じながら、手札に返っていくスピリット達で私を翻弄し、次の手を読ませてくれなかった。
大地君は倒しても倒しても次のターンにはさらに強力なモンスターを用意して、私を圧倒した。
不死川君はコンボで一気に８０００のワイトキングを3体も並べて一撃で決着をつけようとしてきた。
桜糀さんは、大型のシンクロモンスターを3体も並べて、防御手段を完全に封じ、時間を稼ぐことすらまともに出来ないようにしてきた。
天雷君はロック戦術で私の動きを封じたと思えば、それが通じなくなると圧倒的な破壊効果で私のフィールドを一気に吹き飛ばした。

斎京君は自分が苦手な効果自体を封じて、得意な攻撃力で私を押し切ろうとしてきた。
喰代君には、自分の好きなカードを最大限に活かし、そのカードの全力で相手を倒すという拘りを見せて貰った。
そして、桜ちゃんには……自分の変わりたいという思いをデッキに込め、自分の戦術をさらに進化させて、デッキもライフもエクストラモンスターゾーンすらも一気に奪われる凄いデュエルを見せて貰った。
どのデュエルも、本当は負けてても全然おかしくなくて……何で私が勝てたのか、今ですら分からないようなデュエルばかりだった。
だけどーーー
「それが貴方はどうですか？甲虫装機で私のカードを破壊し尽くしたのも、電子光虫で私の動きを封じてきたのも、確かに凄いです。でも、言うなればそれだけです。貴方は私に勝とうとしていない。私が苦しむ様を見たいが為に勝つ機会すら逃している。最初に言われた言葉をそのまま返してあげましょう。舐めているのですか、私を？そして、他の学年トップの方々を？その程度で勝てると思っていると？ふざけないでください‼？」
２ターン目、本当は私のフィールドを吹き飛ばした後にダンセルとウェブソルダーを使ってスカラジエータを出すことも出来ていた。
そうすれば私のライフはもっと削れていたし、ミスティックパイパーも効果が使えず、私は手札抹殺を手札に引き込むことが出来ず、バトルフェーダーも無いから完全に負けていた。
勝とうとしていたならあの状況でスカラジエータを出さなかった理由など考えられない。
フィールドを一掃するような魔法カードなどを使われたらエクシーズしようがしまいが同じだし、ダンセルもウェブソルダーもフィールドにいるだけで効果を発揮するタイプのモンスターでもない。
しかも、ウェブソルダーを使って出せるカードは手札になく、ホーネットをつけたセンチピードがいたのだからサーチ手段も破壊手段

もあるのだからより確実に守る方を選んだ方がよかった。
そもそもＧボールパークがあるのだから防御はそのまま攻撃にも変えれるのだ。
余計にエクシーズしなかった理由がない。
要は舐めているのだ、そんなことをしなくても散々いたぶった上で私には勝てると。
「貴方が言う通り、確かに私は弱いです。皆がなんでこんな私に期待してくれてるのか、全然分からないぐらいちっぽけで……いつも迷ってばかりで……弱くて、どうしようもないぐらい心も身体も弱くて……だから、私は誰かに馬鹿にされようが何を言われようが構いません。だって、それは間違いなく事実ですから」
そう、私のことを言われているなら、私は耐えられる。
だって、それは確かに事実だと思うから。
私は確かに、どうしようもないくらい弱くて……誰かが支えてくれなければ、こんな場所に立つことすらできない程、ちっぽけだ。
だけどーーー
「だけど、そんなちっぽけな私を支えてくれた人達を……こんな私に全力でぶつかって来てくれた人達を馬鹿にすることだけは絶対に赦せません‼？はっきりと言いましょう。他のトップ１０の方々は貴方では足元に及ばない程強いと‼？貴方の相手は、雑魚と言われてる私程度がお似合いです」
「っ……言わせておけば好き勝手言ってくれるじゃないか。なら、逆転してみろよ‼？この何もない状況を‼？」
そういって表情を怒りに歪ませながら神路祇が私を睨む。
確かに、私の今の手札ではこの状況をどうにか出来るとは言い難い。
だけど、それならドローすればいいだけだ。
この状況をどうにかする可能性を。
引けるかなんて分からない。
でも、退くわけにはいかない。
私が弱いせいで私に全力でぶつかってくれた人達が悪く言われる

のなら、私はここから強くなる。
私と全力でデュエルをしてくれた皆はやっぱり凄い人達なのだと、知って貰うために!!?
「私のターン、ドロー!!?」
ドローしたカードを見る。
このカード……そして私の手札にあるカード。
さっきまでは難しかったけど、これなら……
「私はカードを3枚伏せてターンエンド!!?」

遊花　ＬＰ２７００　手札１
ー▲▲▲ー　　ー
ーーーーー
　　ー　　☆
ーー○ー○
ー△ー△▲　　▽
電二　ＬＰ８０００　手札３

「ハッ、偉そうなことを言った癖にカードを伏せただけか!!?結局は口だけの雑魚じゃないか!!?そんなに無様に負けたきゃさっさとトドメを刺してやる!!?俺のターン、ドロー!!?」
「スタンバイフェイズ!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?バトルマニア!!?さらにチェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?リバイバルギフト!!?」
「何?」
「リバイバルギフトの効果!!?自分の墓地に存在するチューナー1体を効果を無効にして特殊召喚し、相手フィールド上に悪魔族・闇属性・レベル3・攻撃力・守備力1500のギフトデモントークン2体を特殊召喚します!!?戻ってきて、ジェットシンクロン!!?」
〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

〈ギフトデモントークン〉☆3　悪魔族　闇属性→光属性
ＡＴＫ１５００

再び現れるジェットシンクロンと神路祇のフィールドに現れる2体の小さな悪魔。
「そしてバトルマニアの効果で相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターは全て攻撃表示になり、このターン表示形式を変更する事はできない!!?また、このターン攻撃可能な相手モンスターは攻撃しなければならない!!?」
「チッ、トークンなんて面倒なもん出しやがって、だが今更そんな見え見えの罠なんてなんの意味もなさねえんだよ!!?俺は甲虫装機ダンセルを召喚!!」

〈甲虫装機ダンセル〉☆3　昆虫族　闇属性→光属性
ＡＴＫ１０００

「甲虫装機ダンセルの効果発動!!?墓地に存在する甲虫装機ホーネットを装備!!?そして装備カードとなった甲虫装機ホーネットの効果発動!!?モンスターに装備されているこのカードを墓地へ送り、フィールドのカード1枚を対象として破壊する!!?どうせそのセットカードが聖なるバリア　―ミラーフォース―みたいなカードなんだろう!!?そんな分かりやすい罠ごと絶望に沈んじまえ!!?」
　ダンセルがホーネットの銃で私の伏せカードを吹き飛ばす。
「ハッ、これでーーー」
「ふふっ」
「っ!!?」
　破壊された伏せカードを見て、私は笑う。
「かかりましたね。まさかこんなに分かりやすい罠にかかってくれるなんて思いませんでした」
「何だと!!?」

「少し考えれば分かるじゃないですか？貴方の手札に甲虫装機ダンセルがあることを、私は知ってたんですよ？だったら伏せカードが1枚だけなら破壊されるなんて、承知の上に決まってるじゃないですか」
「っ‼？じゃあそのカードは……」
「ええ、貴方が破壊してくれたおかげでどうやら逆転出来そうです。破壊された永続罠、ミラーフォースランチャーの効果発動‼？」
「ミラーフォースランチャーだと⁉？」
「セットされたこのカードが相手の効果で破壊され墓地へ送られた場合、墓地のこのカードと自分の手札・デッキ・墓地の聖なるバリア―ミラーフォース―1枚とこのカードを自分フィールドにセットでき、この効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できる‼？私は破壊されたミラーフォースランチャーとデッキから聖なるバリア　―ミラーフォース―をフィールドにセットします‼？」
「な……に⁉？」
神路祇の表情が変わる。
彼はもう召喚権を使っており、フィールドもすでにモンスターで埋まっている。
しかも、先程の彼の発言からすると彼にトークンを自分で処理する方法はなく、バトルマニアの効果で表示形式を変更して逃げることも出来ず、バトルフェイズに必ず入って攻撃しなければならない。
つまりーーー
「ば、馬鹿な……俺のフィールドのモンスターが全滅させられるだと⁉？」
「絶望に沈んじまえ……でしたっけ？どうやら絶望に沈むのは貴方の方だったみたいですね。さあ、どうしました？まだ貴方のメインフェイズですよ？それとも、もうバトルフェイズに移りますか？」
「ぐっ……て、テメェ‼？電子光虫―コアベージの効果発動‼？デジタルフラッピング‼？1ターンに1度、オーバーレイユニットを1つ取り除くことで相手フィールドの守備表示モンスター1体を対象としそのモンスターを持ち主のデッキに戻す‼？対象はジェットシンクロン‼？」

「ありがとう、ジェットシンクロン。またすぐに呼び出してあげるから少しだけ待っててね」
　コアベージの羽ばたきでジェットシンクロンがデッキの中に吹き飛ばされる。
　でも、この状況が変わったわけでもない。
「ぐっ……く、クソがぁ!!?バトルフェイズ!!?電子光虫―コアベージでダイレクトアタック!!?デジタルハリケーン!!?」
「それじゃあお返しの時間です。リバースカードオープン!!?罠発動!!?聖なるバリア　―ミラーフォース―!!?相手モンスターの攻撃宣言時に、相手フィールドの攻撃表示モンスターを全て破壊します!!?」
　コアベージが放った鱗粉を見えない壁が弾き返し、神路祇のモンスターの周りで一気に誘爆し、吹き飛ばした。
「チッ!!?だが甘いんだよ!!?オーバーレイユニットになっていたゴキポールの効果発動!!?デッキからゴキボールを手札に加え、通常モンスターだから特殊召喚だ!!?」

〈ゴキボール〉☆４　昆虫族　地属性↓光属性
　ＡＴＫ１２００

「ゴキボールでダイレクトアタック!!?コックローチアタック!!?」
「そうですね、甘いですよ……貴方が。相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のクリアクリボーの効果発動!!?さらにそれにチェーンして墓地の虹クリボーの効果発動!!?」
「何!!?そんなものいつ!!?」
「手札断殺も手札抹殺もあったんですよ?墓地にいくタイミングなんていくらでもあります。虹クリボーの効果!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時、このモンスターを特殊召喚します!!?ただし、このモンスターがフィールドから離れる場合、除外されます。戻っておいで、虹クリボー!!?」

〈虹クリボー〉☆1　悪魔族　光属性
ＤＥＦ１００

私を守るように虹色の角を持つ球体が現れる。
「さらにクリアクリボーの効果発動!!?墓地のこのカードを除外し、自分はデッキから1枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替えます!!?ドローしたカードはそのままにしておきます」
「チッ、ならゴキボールで虹クリボーを攻撃だ!!?」
「ありがとう、虹クリボー……フィールドから離れた虹クリボーはゲームから除外されます」
虹クリボーがゴキボールに弾き飛ばされ、粒子になって消滅する。
「……それで?」
「っ、おちょくってんのかテメェ!!?」
「そっくりそのままその言葉を返して上げましょうか?言ったハズですよ、舐めているのか、と。貴方の実力が口だけではないのなら、見せて下さいよ。自称学年3位さん?」
「ぐ、グギギギギ!!?ぶっ潰す!!?完膚なきまでぶっ潰してやる!!?このクソ女が!!?カードを1枚伏せてターンエンド!!?」
神路祇が怒りの表情でターンエンドを宣言する。
正直言って、フィールドのモンスターを吹き飛ばしてなお、私の方が不利なことには変わらない。
だからこそ、雑魚と侮っていた相手に一矢報いられて冷静さを失っている今の内に一気に巻き返す。
私だって怒っている。
私のことならともかく、桜ちゃん達のことを馬鹿にされて怒らない程、私は甘くない。
だけど、だからこそ冷静にデュエルをしないといけない。
心は熱く、思考は冷静に。
このデュエルだけは絶対に勝つ!!?

遊花　ＬＰ２７００　手札２
｜｜▲｜｜　｜
｜｜｜｜｜
｜　｜
｜　｜
｜｜○｜｜
｜△▲△▲▽
電二　ＬＰ８０００　手札２

第３１話　暗闇に浮かぶ星

★

遊花　ＬＰ２７００　手札２
ー　ー　▲　ー　　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　　ー　　ー
ー　ー　○　ー　ー
ー　△　▲　△　▲　　▽
電二　ＬＰ８０００　手札２

「私のターン、ドロー!!?速攻魔法、大欲な壺!!?除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計３体を持ち主のデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから１枚ドローする!!?私は除外されてるバトルフェーダー、虹クリボー、クリアクリボーをデッキに戻してシャッフルし、カードを１枚ドローする!!?さらにリバースカードオープン!!?永続罠、ミラーフォースランチャー!!?そして魔法カード、マジックプランター!!?自分フィールドの表側表示の永続罠カード１枚を墓地へ送って自分はデッキから２枚ドローする!!?さらに、金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性→光属性
ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のようなモンスター。
「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル１モンスターを特殊召喚するよ!!?戻ってきて、ミスティックパイパー!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性

ＤＥＦ０
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを1枚ドロー!!?私が引いたのはクリボール!!?レベル1モンスターだからもう1枚ドロー!!?」
「チッ!!?何枚ドローしやがる!!?」
「私はカードを3枚伏せてエンドフェイズ、金華猫はスピリットモンスターなので手札に戻ります。ターンエンドです」

遊花　ＬＰ２７００　手札３
ー▲▲▲ー　ー
ーーーーー
ー　ー
ーー○ーー
ー△▲△▲　▽
電二　ＬＰ８０００　手札２

「俺のターン、ドロー!!?チッ、手札が悪りぃ。甲虫装機ホッパーを召喚!!?」

〈甲虫装機ホッパー〉☆４　昆虫族　闇属性↓光属性
ＡＴＫ１７００

現れたのはバッタを模した緑色の装甲を纏った雰囲気がどこかやさぐれているモンスター。
「甲虫装機ホッパーの効果発動!!?コイツも手札・墓地から甲虫装機を装備できる!!?甲虫装機ホッパーに甲虫装機ホーネットを装備!!?」
「またそれですか。芸がないことですね」
「黙れぇ!!?そして装備カードとなった甲虫装機ホーネットの効果発動このカードを墓地に送り、テメェのセットカードを破壊だ!!?」
「あら、残念ですがハズレです。リバースカードオープン!!?罠発動

!!?活路への希望!!?自分のＬＰが相手より１０００以上少ない場合、１０００ＬＰを払って発動!!?」

遊花　ＬＰ２７００→１７００

「お互いのＬＰの差２０００につき1枚、自分はデッキからドローする!!?私のライフは１７００!!?貴方は８０００!!?よって３枚のカードをドロー!!?」

「ここに来て3ドローだと!!?だが、これでテメェのライフは甲虫装機ホッパーの攻撃力と同じになった!!?バトルフェイズ!!?甲虫装機ホッパーでダイレクトアタック!!?ゼクターキック!!?」

「なら、リバースカードオープン!!?永続罠、グラヴィティバインドー超重力の網ー!!?これによりレベル４以上のモンスターが攻撃できなくなります」

「何だと!?!?」

ホッパー　が飛び上がり私に蹴りを入れようとしたが、私と神路祇を囲むように青い網のドームのようなものが現れ、その網から出る重力によりホッパーとゴキボールは地面に沈むように押さえつけられる。

「甲虫装機ホッパーとゴキボールはレベル４モンスターなので攻撃出来ません。ダンセルやセンチピードなら攻撃できたのに、悔しいでしょうね」

「っ!!?グギギギギ!!?この女!!?メインフェイズ２!!?ゴキボールを守備表示に変更!!?」

ゴキボール
ＡＴＫ１２００→１５００

「俺はこれでターンエンドだ!!?」

「ならエンドフェイズ、手札を1枚捨てて、速攻魔法、ツインツイスター!!?魔法・罠カードを2枚選んで破壊します!!?Ｇボールパーク

とセットカードを1枚破壊します!!?」
「なっ!?Gボールパークと重力解除が!!?」
フィールドが山にある球場から元の試験会場に戻る。
これで厄介なフィールド魔法と防御カードが無くなりましたね。
「表示形式を変更させる罠カードですか……まあ、使ったらせっかく守備表示にしたゴキボールが攻撃表示になっちゃいますから使えませんよね」
「テメェ!!?」
いい感じに冷静さを失ってきてる。
正直、私の煽り方なんて神路祇君の今までの言動や今まで私が馬鹿にされていた時に言われていたものを真似しただけの付け焼き刃。
いつまでもこんなに上手くはいかないだろう。
だから、ここで一気に攻めていく!!?

遊花　ＬＰ１７００　手札５
ー　ー　ー　ー　△ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー○□ー　ー
ー△▲△ー　ー
電二　ＬＰ８０００　手札２

「私のターン、ドロー!!?よし、魔法カードイリュージョンの儀式!!?」
「!?儀式魔法だと!?」
「自分の手札・フィールドから、レベルの合計が1以上になるようにモンスターをリリースし、手札からサクリファイスを儀式召喚を行う!!?私は墓地のクリボールの効果で儀式召喚を行う場合、必要なレベル分のモンスターの内の1体として、墓地のこのカードを除外できる!!?」
「墓地から儀式の素材になれるだと!?さっきのツインツイスターで

捨ててやがったか‼?」
金色の目の形をした壺にクリボールが吸い込まれ、しばらくすると壺が割れ、中から妖しい邪眼を持つモンスターが現れた。
〈サクリファイス〉☆1　魔法使い族　闇属性→光属性
ＤＥＦ０
「サクリファイスの効果発動‼?アブソープション‼?1ターンに1度、相手フィールドのモンスター1体を対象にそのモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力・守備力は、このカードの効果で装備したモンスターの数値分アップし、このカードが戦闘で破壊される場合、代わりに装備したそのモンスターを破壊します‼?対象は正直いらないけどゴキボール‼?吸い込んで、サクリファイス」
サクリファイスのお腹にある穴が開き、ゴキボールが吸い込まれる。
しばらくすると背中についている羽のような部分からゴキボールの姿が浮き上がった。
うぅ〜ゴメンね、サクリファイス。
変なもの吸い込ませて……すぐに外してあげるから待っててね?
サクリファイス
ＤＥＦ０→１５００
「さらに導いて‼?希望に繋がるサーキット‼?」
「ここからリンク召喚だと⁉?」
私の前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はトークン以外のレベル1モンスター1体‼?私はサクリファイスをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?リンク召喚‼?相手を捕える深淵の邪眼‼?リンク1‼?サクリ

ファイスアニマ!!?」

〈サクリファイスアニマ〉ＬＩＮＫ１　魔法使い族　闇属性→光属性
ＡＴＫ０　→

「っ!!?またサクリファイスだと!!?」
「サクリファイスアニマの効果発動!!?コネクトアブソープション!!?１ターンに１度このカードのリンク先の表側表示モンスター１体を対象にその表側表示モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする!!?対象は勿論、甲虫装機ホッパー!!?吸い込んじゃって、サクリファイスアニマ!!?」
アニマの目の上にある空間が開き、ホッパー　が吸い込まれる。
しばらくすると背中についている羽のような部分からサクリファイスの時と同じようにホッパーの姿が浮き上がった。

サクリファイスアニマ
ＡＴＫ０→１７００

「テメェ、ことごとく俺のモンスターを吸収しやがって!!?」
「さらに、私は金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性→光属性
ＡＴＫ４００

「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル１モンスターを特殊召喚するよ!!?戻ってきて、ミスティックパイパー!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自

分のデッキからカードを1枚ドロー!!?私が引いたのはクリボー!!?レベル1モンスターだからもう1枚ドロー!!?バトルフェイズ!!?金華猫でダイレクトアタック!!?ネコパンチ!!?」
「っ、舐めてんのか貴様!!?」

電二　　ＬＰ８０００→７６００

金華猫が神路祇君に殴りかかり、少しだけライフが減る。
「さらに、サクリファイスアニマでダイレクトアタック!!?ダークイリュージョン・ゼクターキック!!?」
そういうとアニマに吸収されていたホッパーの幻影が現れ、跳び上がって神路祇君に向かって跳び蹴りをくらわせ、いつのまにか同じように跳び上がっていたアニマが神路祇君を殴り飛ばした。
「ぐっ!!?」

電二　　ＬＰ７６００→５９００

「メインフェイズ2。カードを2枚伏せてエンドフェイズに金華猫が手札に戻ります。ターンエンド」

遊花　ＬＰ１７００　手札４
▲▲△△ー　　ー
ーーーーー
　　☆　　ー
ーーーーー
ー△▲△ー　　ー
電二　　ＬＰ５９００　手札２

「俺のターン、ドロー!!?……チッ、俺が雑魚相手に防御に入らないといけないだと……モンスターをセット。カードを1枚伏せてターンエンドだ」

遊花　ＬＰ１７００　手札４
▲▲△△ー　　ー
ーーーーー
　　☆　　ー
ーー??ーー
ー△▲△▲　　ー
電二　ＬＰ５９００　手札１

神路祇君の攻めの手が止まる。
今が好機!!?
「私のターン、ドロー!!?手札のドットスケーパーを捨てて魔法カード、魔法カード、ワンフォーワンを発動!!?デッキからレベル１モンスター１体を特殊召喚する!!?戻っておいで、ジェットシンクロン!!?」

〈ジェットシンクロン〉☆１　機械族　炎属性→光属性
ＤＥＦ０

「そして、桜ちゃん、力を借りるね!!?墓地に送られたドットスケーパーの効果発動!!?デュエル中に１度、このカードが墓地に送られた場合に特殊召喚!!?」
「何だと!?!?」

〈ドットスケーパー〉☆１　サイバース族　地属性→光属性
ＤＥＦ２１００

現れたのはドットの身体を持つモンスター。
このカードはさっき桜ちゃんがデッキを調整してる時に余ってるからと分けてくれたモンスター。
レベル１モンスターだし、墓地に送る方法も除外する手段もあるか

らありがたく使わせてもらうことにした。
桜ちゃんの思いが詰まったこのカードで、一気に道を切り開く!!?
「さらに、私は金華猫を召喚!!?」
〈金華猫〉☆1　獣族　闇属性→光属性
ＡＴＫ４００
ＤＥＦ０
「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル1モンスターを特殊召喚するよ!!?戻ってきて、サクリファイス!!?」
「!!?サクリファイスだと!?」
〈サクリファイス〉☆1　魔法使い族　闇属性→光属性
「サクリファイスの効果発動!!?アブソープション!!?1ターンに1度、相手フィールドのモンスター1体を対象にそのモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力・守備力は、このカードの効果で装備したモンスターの数値分アップし、このカードが戦闘で破壊される場合、代わりに装備したそのモンスターを破壊します!!?対象はセットされているモンスター!!?吸い込んで、サクリファイス!!?」
「何だと!?セットされているモンスターまで吸収出来るのか!?」
サクリファイスのお腹にある穴が開き、セットモンスターが吸い込まれる。
「ただし、この場合はモンスターの数値が分からないため攻撃力は変動しない。だけど、これで準備は整った!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「っ、リンク召喚か!!?」
私の前に大きなサーキットが現れる。
さあ、行くよ!!?
「召喚条件は効果モンスター3体以上!!?私はドットスケーパー、ジェットシンクロン、サクリファイス、サクリファイスアニマをリン

クマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
神路祇君のデッキには効果破壊カードが多い。
それにまだセットカードも2枚も残ってる。
だから、今回は貴方の力を貸して!!?
「閉ざされた運命を撃ち抜く信念の弾丸!!?リンク4!!?ヴァレルロードドラゴン!!?」

〈ヴァレルロードドラゴン〉LINK4　ドラゴン族　闇属性→光属性
ATK3000　↘?↑↓↘?

「くっ、攻撃力3000のリンク4モンスターだと!?」
「さらに、墓地に存在するジェットシンクロンの効果発動!!?手札を1枚墓地に送り、墓地からこのカードを特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合、除外される!!?」

〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性→光属性
DEF0

「私はレベル1、金華猫とジェットシンクロンでオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
「!?今度はエクシーズ召喚だと!?」
金華猫とジェットシンクロンが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこには白い馬に乗る小さな首無しの騎士がいた。
「闇夜に紛れし哀しき妖精!!?その刃で疑惑を切り裂け!!?ランク1!!?ゴーストリックデュラハン!!?」

〈ゴーストリックデュラハン〉★1　悪魔族　闇属性→光属性
ＡＴＫ１０００→１２００

「チッ、雑魚風情がエクシーズ召喚まで使ってくるか……」
「まだです!!?まだ私は上を目指す!!?私はゴーストリックデュラハン1体でオーバーレイ!!?」
「何!?!?テメェまさか!?!?」
「1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?ランクアップエクシーズチェンジ!!?」
デュラハンが再び空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りたのは黒いドレスを身に纏い、白い羽根にところどころ漆黒の羽根が混ざる女の子のモンスター。
「闇夜を彷徨う自由な天使!!?その気ままさで憂鬱を払え!!?ランク4!!?ゴーストリックの駄天使!!?」

〈ゴーストリックの駄天使〉★4　天使族　闇属性→光属性
ＡＴＫ２０００

駄天使が私の周りをひらひらと飛びながらドヤ顔で空を指差して決めポーズをとる。
はいはい、出てこれて嬉しいのは分かったから頑張ってね。
「雑魚風情が俺みたいにモンスターをランクアップさせるだと……!?!?」
「ゴーストリックの駄天使は同名以外のゴーストリックモンスターに重ねてエクシーズ召喚を行うことが出来ます。そしてゴーストリックの駄天使の効果発動!!?チャームコール!!?オーバーレイユニットを1つ取り除くことでデッキからゴーストリック魔法・罠を手札に加えます!!?私が手札に加えるのはゴーストリックナイト!!?」
堕天使が私に向けて小さなハートを飛ばすとそれがカードになって私の手札に加わる。
それを見て駄天使は満足そうな笑みを浮かべて飛び回るが、その先

でヴァレルロードの羽根にぶつかり、涙目になって痛そうに頭を押さえていた。
……本当に、貴方は駄目な天使だから駄天使だよね。
「オーバーレイユニットとして墓地に送られたゴーストリックデュラハンの効果発動!!?このカードが墓地へ送られた場合、このカード以外の自分の墓地のゴーストリックカード1枚を対象としてそのカードを手札に加えます。私は墓地にあるゴーストリックランタンを手札に加えます」
「それも先に墓地に送っていたカードか……」
「因みにさっき手札に加えたゴーストリックナイトはフィールド上にゴーストリックと名のついたモンスターが存在する限り相手フィールド上のモンスターは反転召喚出来なくなります。それと、相手によって破壊された場合、そのターン相手は攻撃宣言が出来なくなるのでセットカードを破壊する時はくれぐれも気をつけてくださいね？貴方、運が無さそうですし」
「っ!!?調子乗ってるんじゃねぇぞ、雑魚が!!?」
「なら、その調子を落としてみてください。バトル!!?ゴーストリックの駄天使でダイレクトアタック!!?トリックハート!!?」
駄天使が目の前にひび割れているハートを作り出し、そのハートからビームを放ち、神路祇君の身体を貫く。
「くっ!!?」

電二　ＬＰ５９００→３９００

「追撃だよ!!?ヴァレルロードドラゴンでダイレクトアタック!!?銃声のイジェクトフレア!!?」
「があっ!!?」

電二　ＬＰ３９００→９００

ヴァレルロードの粒子砲が神路祇君を貫く。

これで神路祇君の残りライフは９００。
このままの勢いで押し切る。
「私はカードを１枚伏せてターンエンド!!?」

遊花　ＬＰ１７００　手札２
▲▲▲△ー　　ー
ーー○ーー
　　☆　　ー
ーーーーー
ー△▲△▲　　ー
電二　ＬＰ９００　手札１

「俺が……学年３位の俺が……こんな虫けら程度の相手に追い詰められてるだと?ふざけんじゃねぇ!!?」
「!!?」
何事かをぶつぶつと呟いていた神路祇君がいきなり怒鳴り声を上げる。
そして血走った目でこちらを睨みつける。
「俺が他のトップ１０の奴らより弱いだと?俺の相手が、雑魚のお前程度がお似合いだと?ふざけんな!!?俺は今まで気にいらねぇ奴はデュエルで叩き潰してきたんだよ!!?弱い奴らをぶっ潰してぶっ潰してぶっ潰して、地面に這い蹲らせてきたんだ!!?そんな俺がテメェ程度に雑魚に負けるだと?そんなことあり得るわけがねぇだろうが!!?」
神路祇君の雰囲気が変わる。
……どうやら、ここからが正念場らしい。
「テメェ程度が俺に勝てるわけねぇだろうが!!?テメェみたいな雑魚は俺の足元を這い蹲ってればいいんだよ!!?俺のターン、ドロー!!?魔法カード、マジックプランター!!?自分フィールドの表側表示の永続罠カード１枚、リビングデッドの呼び声を墓地へ送ってデッキから２枚ドローする!!?さらに魔法カード、貪欲な壺!!?墓地に存在する

甲虫装機ピコファレーナ、電子光虫―スカラジエータ２体をＥＸデッキに、甲虫装機ダンセル、甲虫装機センチピードをデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする!!?」
「っ……ここにきてドロー加速!!?」
そしてドローしたカードを見て、神路祇君が笑う。
「ヒハハハハ!!?テメェのものは１つ残さず全部ぶち壊してやる!!?甲虫装機ダンセルを召喚!!?」

〈甲虫装機ダンセル〉☆３　昆虫族　闇属性→光属性
ＡＴＫ１０００

「甲虫装機ダンセルの効果発動!!?墓地に存在する甲虫装機ホーネットを装備!!?そして装備カードとなった甲虫装機ホーネットの効果発動!!?モンスターに装備されているこのカードを墓地へ送り、フィールドのカード１枚を対象として破壊する!!?永続罠、グラヴィティバインドー超重力の網ーを破壊!!?」
「くっ……」
「甲虫装機　ダンセルの効果発動!!?このカードに装備されたカードが自分の墓地へ送られたから、デッキから現れろ、甲虫装機センチピード!!?」

〈甲虫装機センチピード〉☆３　昆虫族　闇属性→光属性
ＡＴＫ１６００

「甲虫装機センチピードの効果発動!!?墓地に存在する甲虫装機ホーネットを装備!!?そして装備カードとなった甲虫装機ホーネットの効果発動!!?モンスターに装備されているこのカードを墓地へ送り、フィールドのカード１枚を対象として破壊する!!?テメェのセットカードを破壊だ!!?」
「リバースカードオープン!!?罠発動!!??貪欲な瓶!!?墓地に存在するゴーストリックデュラハンをＥＸデッキに、クリボーを呼ぶ笛、ツ

インツイスター、金華猫、クリボーをデッキに戻してシャッフルし、1枚ドロー!!?」
「チッ、うざってぇ!!?甲虫装機センチピードの効果発動!!?このカードが自分フィールドに存在し、このカードに装備されたカードが自分の墓地へ送られた場合、デッキから甲虫装機カード1枚を手札に加える。デッキから手札に加えるのは甲虫装機ホーネットだ!!?」
「ここで甲虫装機ホーネット?」
神路祇君の動きが少し変わった。
これは一体何を意味して……
「リバースカードオープン!!?罠発動!!?光虫異変!!?自分の墓地の昆虫族・レベル3モンスター2体を効果を無効にして特殊召喚する!!?甦れ、電子光虫―ウェブソルダー、電子光虫―ＬＥＤバグ!!?」

〈電子光虫―ウェブソルダー〉☆3　昆虫族　光属性
ＤＥＦ１５００

〈電子光虫―ＬＥＤバグ〉☆3　昆虫族　光属性
ＤＥＦ０

「犇めきあえ!!?光を呑み込むサーキット!!?」
「ここでリンク召喚……」
「召喚条件は昆虫族モンスター2体!!?俺は甲虫装機ダンセルと電子光虫―ウェブソルダーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?甲虫装機ピコファレーナ!!?」

〈甲虫装機ピコファレーナ〉ＬＩＮＫ２　昆虫族　闇属性↓光属性
ＡＴＫ１０００　↙?↘?

「甲虫装機ピコファレーナの効果発動!!?インゼクターフォーゼ!!?このカードがリンク召喚に成功した場合、手札を1枚捨て、このカー

ド以外の自分フィールドの昆虫族モンスター1体を対象としてデッキから昆虫族モンスター1体を攻撃力・守備力５００ポイントアップの装備カード扱いとして対象のモンスターに装備する‼?俺は手札を1枚捨ててデッキから甲虫装機センチピードに甲虫装機ホーネットを装備‼?そして装備カードとなった甲虫装機ホーネットの効果発動‼?モンスターに装備されているこのカードを墓地へ送り、フィールドのカード1枚を対象として破壊する‼?テメエのセットカードを破壊する‼?」

「……」

「さらに甲虫装機センチピードの効果発動‼?このカードが自分フィールドに存在し、このカードに装備されたカードが自分の墓地へ送られた場合、デッキから甲虫装機カード1枚を手札に加える。デッキから手札に加えるのは甲虫装機ギガマンティス（インゼクター）だ‼?そしてこれで俺の墓地に3枚の甲虫装機ホーネットが揃った‼?自分の墓地に昆虫族の同名モンスターが3体存在する場合、その同名カード、甲虫装機ホーネットを対象とし、超装甲兵器ロボ　ブラックアイアンGを特殊召喚だ‼?」

〈超装甲兵器ロボ　ブラックアイアンG〉☆8　昆虫族　地属性→光属性
ＡＴＫ２４００

現れたのは台所の黒いアレを模した巨大なロボットのようなモンスター。

「そして対象とした甲虫装機ホーネットを任意の数、装備カード扱いとしてこのカードに装備する‼?俺は3体の甲虫装機ホーネットを装備だ‼?」

「っ‼?」

ブラックアイアンGに3体のホーネットが吸収すれていく。

超装甲兵器ロボ　ブラックアイアンG　☆8→17

ＡＴＫ２４００→３９００

「攻撃力３９００⁉？」

ホーネットには装備カード扱いとして装備しているモンスターのレベルを３つ上げ、攻撃力・守備力をそれぞれの数値分アップさせる効果があった。

これじゃあヴァレルロードの効果を使っても攻撃力で超えられる。

「攻撃力で超えられたことに驚いたか？残念ながらそんな単純な話じゃねぇんだよ‼？超装甲兵器ロボ　ブラックアイアンＧの効果発動‼？トリーズンフレア‼？このカードの効果で装備しているモンスターカード１枚を墓地へ送り、墓地へ送ったそのカードの攻撃力以上の攻撃力を持つ、相手フィールドのモンスターを全て破壊する‼？」

「えっ⁉？」

「俺は甲虫装機ホーネット１枚を墓地に送り、消え失せろ‼？ゴーストリックの駄天使‼？ヴァレルロードドラゴン‼？」

ブラックアイアンＧの胸元が開き、そこから巨大な砲台が現れる。

その砲台にエネルギーが集まり、黒光りする砲撃が撃ち出され、ヴァレルロードと駄天使は跡形もなく消滅した。

超装甲兵器ロボ　ブラックアイアンＧ　☆１７→１４

ＡＴＫ３９００→３４００

外見の悪趣味さはともかく、その効果は凶悪そのもの。

しかも、装備されているのがホーネットということは全体除去だけじゃなくてホーネット自体のフィールドのカードを破壊する効果も持っているということだ。

それは正直に言ってマズイ。

このままじゃ本当に私のフィールドを破壊し尽くされる‼？

「まだだ‼？まだ終わらねぇ‼？この程度じゃ俺の怒りは収まらねぇんだよ‼俺は墓地の？光虫異変の効果発動‼？自分の墓地からこの

カードとエクシーズモンスター1体、電子光虫―コアベージを除外して発動!!?自分フィールドの全ての昆虫族・レベル3モンスターのレベルはターン終了時まで、除外したエクシーズモンスターのランクと同じ数値のレベルになる!!?この効果の発動後、ターン終了時まで自分は昆虫族モンスターしか特殊召喚できない!!?」

甲虫装機センチピード
☆3→5

電子光虫―LEDバグ
☆3→5

センチピードとLEDバグのレベルが5に変わる。
「俺は昆虫族・光属性のレベル5モンスター2体以上、甲虫装機センチピードと電子光虫―LEDバグでオーバーレイ。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?再び現れろ、ランク5!!?電子光虫―コアベージ!!?」

〈電子光虫―コアベージ〉★5　昆虫族　光属性
ATK2200

「俺は電子光虫―コアベージのオーバーレイユニットを2つ取り除き、電子光虫―コアベージ1体でオーバーレイ!!?」
「っ!!?まだランクアップを!!?」
「1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?ランクアップエクシーズチェンジ!!?」
コアベージが再び空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると次に現れたのは電子的な身体を持つカブトムシのようなモンスター。
「現れろ!!?電子を統べる孤高の王者!!?ランク7、電子光虫(デジタルバグ)―ライノセバス!!?」

〈電子光虫―ライノセバス〉★7　昆虫族　光属性
ＡＴＫ２６００

「電子光虫―ライノセバスは自分フィールドのランク５・６の昆虫族エクシーズモンスターからオーバーレイユニットを２つ取り除き、そのエクシーズモンスターに重ねてエクシーズ召喚が出来る!!?そしてこのカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ戦闘ダメージを与える!!?」
「っ……貫通ダメージ」
「テメェのデッキが貫通ダメージを苦手にしてることぐらい読めてるんだよ!!?さらに電子光虫―ライノセバスはオーバーレイユニットを１つ使うことで相手フィールドで守備力が１番高いモンスターを破壊することができ、この効果は相手ターンにも使用することができる!!?リンクモンスター以外を出すのには気をつけるんだな!!?さらに甲虫装機ピコファレーナの効果発動!!?同名モンスターは１ターンに１度自分の墓地の昆虫族モンスター３体を対象としてそのモンスターをデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから１枚ドローする!!?墓地の甲虫装機ダンセル、ゴキポール２枚をデッキに戻して１枚ドロー!!?バトルフェイズ!!?」
「なら、バトルフェイズ開始時、墓地から罠カード、光の護封霊剣の効果発動!!?相手ターンに墓地のこのカードを除外してこのターン、相手モンスターは直接攻撃できません!!?」
「っ、また墓地からカードを……!!?」
「貴方が墓地に送ってくれたんです。ついさっきね」
「チッ、あの伏せカードか!!?メインフェイズ２!!?カードを２枚伏せてターンエンドだ!!?」

遊花　ＬＰ１７００　手札３
ー▲ー　ー
ーーーー

ー　　☆
ー○ー○○
△△▲△▲　　ー
電二　　ＬＰ９００　手札３

とりあえず、ライノセバスは早くどうにかしないといけない。
あのモンスターがいるだけで、私のデッキでは致命傷になる可能性が高い。
「私のターン、ドロー‼？よし‼？相棒、また貴方の力を貸して‼？魔法カード、賢者の石―サバティエル‼？このカードは自分の墓地にハネクリボーモンスターが存在する場合、ライフポイントを半分払って発動できます」

遊花　ＬＰ１７００→８５０

「そうすることで、デッキから融合魔法カードまたはフュージョン魔法カード１枚を手札に加えることが出来ます‼？　」
「⁉？融合だと⁉？」
「私がデッキから手札に加えるのはサクリファイスフュージョンです‼？そして速攻魔法、サクリファイスフュージョン‼？アイズサクリファイス融合モンスターカードの融合素材モンスターを自分の手札・フィールド・墓地から除外し、その融合モンスター１体をＥＸデッキから融合召喚します‼？私が除外するのは、墓地のサクリファイスとドットスケーパー‼？」
　また力を借りるね、桜ちゃん‼？
「妖しい邪眼よ、電子の精霊よ‼？今交わりて、全てを奪う力とならん‼？融合召喚‼？全てを見透かす叡智の邪眼‼？ミレニアムアイズサクリファイス‼？」
〈ミレニアムアイズサクリファイス〉☆１　魔法使い族　闇属性→光属性

ＤＥＦ０

現れたのは金色の邪眼と身体を持つモンスター。

「またサクリファイス……しかも次は融合モンスターだと、ふざけやがって‼?」

「そして、除外されたドットスケーパーの効果発動‼?デュエル中に1度、このカードが除外された場合に特殊召喚‼?」

「チッ、また出てきやがるのか‼?」

〈ドットスケーパー〉☆1　サイバース族　地属性↓光属性

ＤＥＦ２１００

「ミレニアムアイズサクリファイスは1ターンに1度、相手モンスターの効果が発動した時、相手のフィールド・墓地の効果モンスター1体を対象としてその相手の効果モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力・守備力は、このカードの効果で装備したモンスターのそれぞれの数値分アップし、このカードの効果で装備したモンスターと同名のモンスターは攻撃できず、その効果は無効化されます」

「効果を使えばそのまま俺の動きを封じるってわけかよ」

「さらに私は墓地のサクリファイスフュージョンの効果発動‼?自分メインフェイズに墓地のこのカードを除外し、相手フィールドの効果モンスター1体を対象とし自分フィールドの、アイズサクリファイス融合モンスターまたはサクリファイス1体を選び、その効果による装備カード扱いとして対象の相手の効果モンスターを装備します‼?対象は電子光虫―ライノセバス‼?」

「電子光虫―ライノセバスの効果を使わせて吸収しようとしてるんだろうが甘いんだよ‼?リバースカードオープン‼?速攻魔法、光虫信号‼?自分フィールドの昆虫族エクシーズモンスター1体を対象に、その自分のモンスターよりランクが2つ高いモンスターか、ランクが2つ低いモンスターを対象のモンスターに重ねてエクシーズ召喚扱

いとして特殊召喚することができる!!?・対象は勿論、電子光虫―ライノセバスだ!!?・」
「ランクアップじゃなくてランクダウンができる魔法カード!?・?……使うなら今ですかね。それにチェーンしてリバースカードオープン、速攻魔法、魔力の泉!!?・」
「何!?・?セットカードはゴーストリックナイトじゃねえのか!?・?」
「誰もゴーストリックナイトをセットしたなんて言ってませんよ?相手フィールドの表側表示の魔法・罠カードの数だけ自分はデッキからドローし、その後、自分フィールドの表側表示の魔法・罠カードの数だけ自分の手札からカードを選んで捨てます。ただし、このカードの発動後、次の相手ターンの終了時まで、相手フィールドの魔法・罠カードは破壊されず、発動と効果を無効化されませんが……これ以上チェーンが無いようなら効果解決です。魔力の泉の効果。貴方のフィールドにある表側の魔法・罠は光虫信号とＤＮＡ移植手術の２枚、私のフィールドに表側の魔法・罠は魔力の泉１枚。よって２枚ドローし、１枚手札を捨てます」
「チッ、光虫信号の効果、電子光虫―ライノセバスをランクが２つ低いモンスターにランクダウンさせる。電子光虫―ライノセバス１体でオーバーレイ!!?・１体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?・ランクダウンエクシーズチェンジ!!?・」
　ライノセバスが再び空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
　そして渦が爆けると再び現れたのは電子的な身体を持つモンシロチョウのようなモンスター。
「現れる、ランク５!!?・電子光虫―コアベージ!!?・」

〈電子光虫―コアベージ〉★５　昆虫族　光属性
ＡＴＫ２２００

「……サクリファイスフュージョンは対象がいなくなったので不発になります」
　再び現れるコアベージ。

コアベージのオーバーレイユニットは２つ。
これで次のターンにはまたライノセバスに繋げられてしまう。
そうなるとミレニアムアイズが狙われてお終いだ。
なら、ここは少し無理をしてでも決めにいく‼?
「墓地に存在するジェットシンクロンの効果発動‼?手札を１枚墓地に送り、墓地からこのカードを特殊召喚する‼?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合、除外される‼?」
「っ、オーバーレイユニットになっていたから再び墓地に戻ってやがったか」

〈ジェットシンクロン〉☆１　機械族　炎属性→光属性
ＤＥＦ０

「私は‼?レベル１、ミレニアムアイズサクリファイスと、レベル１、ドットスケーパーに、レベル１、チューナーモンスター、ジェットシンクロンをチューニング‼?」
「⁉?次はシンクロ召喚だと⁉?」
ジェットシンクロンが光の輪になり、ミレニアムアイズとドットスケーパーが小さな星に変わり、光の道になる。
「悠久に響く祈りの歌が、争いを鎮める新風となる‼?シンクロ召喚‼?未来に羽ばたけ、霞鳥クラウソラス‼?」

〈霞鳥クラウソラス〉☆３　鳥獣族　風属性→光属性
ＤＥＦ２３００

光の道が輝くと、その中から緑の翼で羽ばたく綺麗な鳥が現れる。
それを見て、神路祇君が表情を歪める。
「最底辺の雑魚決闘者が儀式・融合・シンクロ・エクシーズ、リンク、５つの召喚方法を使いこなすだと‼?ふざけるな‼?」
「そんなこと知りません‼?霧鳥クラウソラスの効果発動‼?プレ

アーソング‼?1ターンに1度、相手フィールドの表側表示のモンスター1体を選択し、ターン終了時までその攻撃力を0にし、その効果を無効にする‼?対象は、電子光虫―コアベージ‼?」

電子光虫―コアベージ
ＡＴＫ２２００→０

「チッ、攻撃力が……」
「私はクリバンデッドを召喚‼?」

〈クリバンデッド〉☆３　悪魔族　闇属性→光属性
ＡＴＫ１０００

私の前に現れたのは盗賊のような姿をした黒い毛玉のモンスター。
うん、お願い、クリバンデッド‼?
「こ、攻撃力１０００のモンスターだと‼?……お、俺のライフは９００……」
「バトル‼?クリバンデットで電子光虫―コアベージを攻撃‼?バンデットクロー‼?」
クリバンデッドがコアベージに迫る。
「わぁぁぁやられる……なんて言うわけないだろうが‼?」
「っ‼?」
「リバースカードオープン‼?罠発動‼?進入禁止！Ｎｏ　Ｅｎｔｒｙ‼?フィールド上に攻撃表示で存在するモンスターを全て守備表示にする‼?」

クリバンデッド
ＡＴＫ１０００→ＤＥＦ７００

電子光虫―コアベージ
ＡＴＫ０→ＤＥＦ１８００

超装甲兵器ロボ　ブラックアイアンＧ
ＡＴＫ３４００→ＤＥＦ３８００

甲虫装機センチピード
ＡＴＫ１６００→ＤＥＦ１２００

全てのモンスターが守備表示に変わる。
それを見て、神路祇君は勝ち誇ったような笑みを浮かべる。
「残念だったな～せっかく倒せると思ったのにな～」
「っ‼？」
「さらに電子光虫―コアベージの効果発動‼？１ターンに１度、フィールドのモンスターの表示形式が変更された場合に自分の墓地の昆虫族モンスター１体を選び、このカードのオーバーレイユニットとする‼？墓地の電子光虫―ＬＥＤバグをオーバーレイユニットにするぜ‼？」
コアベージにオーバーレイユニットが補充される。
これで次に出てくるライノセバスはかなりオーバーレイユニットを持った状態で出てくるようになってしまった。
ここで決めきれなかったのはかなり痛い。
「エンドフェイズにクリバンデットの効果発動。このカードをリリースしてデッキの上から５枚めくり、その中から魔法・罠カード１枚を手札に加えて残りを墓地におきます」
申し訳なさそうにクリバンデットの姿が消え、私はデッキの上から５枚のカードをめくって中から１枚のカードを手札に加える。
まだ、まだ負けてない。
ライフだってまだ残ってる。
絶対に凌ぎきる‼？
「私は魔法カード、貪欲で無欲な壺を手札に加えてターンエンド」

遊花　ＬＰ８５０　手札３

ー　　ー
ーーーーー
□　　☆
ー□ー□□
△△ー△ー　　ー
電二　ＬＰ９００　手札３

「さあ、望み通り終わらせてやるよ～俺のターン、ドロー!!?まずは超装甲兵器ロボ　ブラックアイアンＧを攻撃表示に変更だ!!?」

超装甲兵器ロボ　ブラックアイアンＧ
ＤＥＦ３８００→ＡＴＫ３４００

「さらに電子光虫―コアベージの効果発動!!?１ターンに１度、フィールドのモンスターの表示形式が変更された場合に自分の墓地の昆虫族モンスター１体を選び、このカードのオーバーレイユニットとする!!?墓地の電子光虫―ウェブソルダーをオーバーレイユニットにするぜ!!?」

再びコアベージにオーバーレイユニットが補充される。

これでコアベージのオーバーレイユニットは４つになった。

「それじゃあ早速行くぜ、俺は電子光虫―コアベージのオーバーレイユニットを２つ取り除き、電子光虫―コアベージ１体でオーバーレイ!!?１体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?ランクアップエクシーズチェンジ!!?」

コアベージが再び空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けると再び現れたのは電子的な身体を持つカブトムシのようなモンスター。

「再び現れろ!!?電子を統べる孤高の王者!!?ランク７、電子光虫―ライノセバス!!?」

〈電子光虫―ライノセバス〉★７　昆虫族　光属性

ＡＴＫ２６００

「さらに甲虫装機ピコファレーナの効果発動!!?墓地の電子光虫―ライノセバス、電子光虫―コアベージ、甲虫装機ホッパーをデッキに戻して１枚ドロー!!?ヒヒヒ、このまま一気にトドメまで持っていってやってもいいが、ここまで足掻いてくれたんだ。テメェに俺の切り札を見せてやるよ!!?」

「っ、まだ切り札と言えるカードがあるんですか……」

「当たり前だろ?お前程度の雑魚決闘者にわざわざ見せてやるだけありがたいと思えよ」

「わざわざ……ですか。それは、切り札を出さないといけない程、貴方が追い詰められてるってことじゃないですか?」

私の言葉に神路祇君の表情が怒りに歪む。

「はあ!?冗談言うなよ!!?テメェみたいな雑魚決闘者相手に本気でデュエルするわけないだろ!!?こんなデュエル遊びに過ぎないんだよ!!?テメェみたいな雑魚をいたぶるための、ただの遊びだ!!?」

「なら、さっさとトドメを刺してみて下さいよ。遊びなんですし、簡単に出来るんでしょ?」

「っ、そんなにトドメを刺されてぇならさっさとやってやらぁ!!?俺は甲虫装機ピコファレーナをリリースして甲虫装機ギガウィービルをアドバンス召喚!!?」

〈甲虫装機ギガウィービル〉☆６　昆虫族　闇属性→光属性
ＡＴＫ０

現れたのはゾウムシを模した装甲をつけたモンスター。

しかし、その攻撃力は０。

ということは……

「さらに甲虫装機センチピードの効果発動!!?墓地の甲虫装機ホーネットを装備!!?だが、もう破壊効果なんてテメェに使ってやるつもりはねぇ!!?」

甲虫装機センチピード　☆３→６
ＤＥＦ１２００→１４００

ホーネットが装備されたことでセンチピードのレベルは６。
やっぱり狙いはエクシーズ召喚!!?
「俺はレベル６となった甲虫装機センチピードと甲虫装機ギガウィービルでオーバーレイ。２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
センチピードとギガウィービルが空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこに現れたのは金色のカブトムシのような装甲を纏った槍を持ったモンスター。
「全てを跪かせる絶対王者!!?ランク６!!?甲虫装機(インゼクター)エクサビートル!!?」

〈甲虫装機エクサビートル〉★６　昆虫族　闇属性→光属性
ＡＴＫ１０００

出てきたモンスターは攻撃力１０００の甲虫装機。
だけど、あそこまで自信を持って切り札というならそれだけ強力な効果を持っているハズだ。
「甲虫装機エクサビートルの効果発動!!?ラウズイクウィップ!!?このカードがエクシーズ召喚に成功した時、自分または相手の墓地のモンスター１体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備できる。このカードの攻撃力・守備力は、この効果で装備したモンスターのそれぞれの半分の数値分アップする!!?俺が装備するのは墓地に存在する甲虫装機(インゼクター)ギガグリオル!!?」
「見たことない甲虫装機!?……そうか、手札断殺の時に!!?」
ケラを模した装甲を纏ったモンスターが現れ、エクサビートルはそのモンスターを粒子に変えて吸収する。

「まずは甲虫装機ギガグリオルの攻撃力の半分、１０００ポイントが甲虫装機エクサビートルに追加される。また、甲虫装機ギガグリオルが装備カード扱いとして装備されている場合、装備モンスターの元々の攻撃力は２０００になり、さらにさらに豪華特典として装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える!!?」
「っ!!?また貫通持ちのモンスター!!?」

甲虫装機エクサビートル
ＡＴＫ１０００→２０００→３０００

攻撃力３０００の上にこの状況で２体目の貫通持ちモンスターの登場はかなり痛い。
「さあ、バトルだ!!?甲虫装機エクサビートルで霞鳥クラウソラスを攻撃!!?オーバースピア!!?」
「くっ……!!?」
クラウソラスがエクサビートルが持つ槍に貫かれて爆散し、その爆風が私のライフを削る。

遊花　ＬＰ８５０→１５０

「さあさあ、防いでみろよ!!?超装甲兵器ロボ　ブラックアイアンＧでダイレクトアタック!!?」
「相手モンスターの攻撃宣言時、墓地のクリボーンの効果発動!!?このカードを除外し、自分の墓地のクリボーモンスターを任意の数だけ対象として、そのモンスターを特殊召喚します!!?来てハネクリボー!!?ジャンクリボー!!?虹クリボー!!?クリアクリボー!!?」
「何だと!!?クリバンデッドの時か!!?」

〈ハネクリボー〉☆１　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

〈ジャンクリボー〉☆1　機械族　地属性→光属性
ＤＥＦ２００

〈虹クリボー〉☆1　悪魔族　光属性
ＤＥＦ１００

〈クリアクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

私の周りに現れたのは４体のクリボー達。
「だが、その程度で防ぎきれるか‼？超装甲兵器ロボ　ブラックアイアンＧでジャンクリボーを攻撃‼？アイアンマグナム‼？」
「ゴメン、ジャンクリボー」
アイアンＧの砲撃によりジャンクリボーが消滅する。
「これで終わりだ‼？電子光虫―ライノセバスでハネクリボーを攻撃‼？ライノプラズマ‼？」
ライノセバスから雷がハネクリボーに向かって放たれ、ハネクリボーを貫く。
「まだです‼？クリボーの効果発動‼？ダークエンヴェロップ‼？相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこのカードを手札から捨てて発動できる。その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージを０にする‼？」
「っっ‼？ゴキブリ並みにしぶとい奴め‼？いい加減沈めよ‼？沈めッ‼？」
クリボーが私の前に現れてライノセバスの雷撃から私を守る。
さらに粒子になったハネクリボーも私の身体を包みこむ。
「ハネクリボーの効果発動‼？プリフィケーション‼？このカードがフィールドから墓地に送られたターン、自分の受ける戦闘ダメージは０になる‼？」
「貴様という奴はどこまでも……‼？っ、いいだろうカードを１枚

伏せてターンエンドしてやる。だが、果たして次のターン、貴様がこの状況をどうにかできるかな～？」
確かに、今の私の手札じゃこの状況をどうにかすることは出来ない。
でも、まだライフはある!!？
ライフが尽きない限り、何度だって立ち向かってみせる!!？

遊花　ＬＰ１５０　手札２
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　□　□　ー
ー　○
ー　○　ー　ー　○
△　△　▲　△　△　ー
電二　ＬＰ９００　手札３

「私のターン、ドロー!!？メインフェイズ１の開始時、魔法カード、貪欲で無欲な壺を発動!!？このターンバトルフェイズを行えなくなる代わりに、墓地の異なる種族のモンスター３体ををデッキに加えてシャッフルする。その後、デッキからカードを２枚ドローする!!？私は天使族のゴーストリックの駄天使、サイバース族のリンクリボーをＥＸデッキに、悪魔族のクリボーをデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする!!？」
「ヒヒヒ、バトルフェイズを放棄して本当に俺に勝てるのか？」
「……まだ希望はあります!!？私はレベル１、クリアクリボーと虹クリボーでオーバーレイ!!？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!？もう１度お願い!!？ランク１!!？ゴーストリックデュラハン!!？」
〈ゴーストリックデュラハン〉★１　悪魔族　闇属性→光属性
ＡＴＫ１０００→１２００

「さらに私はゴーストリックデュラハン1体でオーバーレイ!!?1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?ランクアップエクシーズチェンジ!!?出番だよ!!?ランク4!!?ゴーストリックの駄天使!!?」

〈ゴーストリックの駄天使〉★4　天使族　闇属性→光属性
ＤＥＦ２５００
「ゴーストリックの駄天使の効果発動!!?チャームコール!!?オーバーレイユニットを1つ取り除くことでデッキからゴーストリック魔法・罠を手札に加えます!!?私が手札に加えるのはゴーストリックロールシフト!!?」
「今更そんな奴を出したところで何になるんだ!!?」
「貴方の布陣の突破の糸口になるんです!!?手札のゴーストリックランタンを捨てて魔法カード、魔法カード、ワンフォーワンを発動!!?デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚する!!?おいで、クリボルト!!?」

〈クリボルト〉☆1　雷族　光属性
ＡＴＫ３００

出て来たのは電気を出している黒い球体のモンスター。
「クリボルトの効果発動!!?自分のメインフェイズ時にエクシーズ素材を持っているエクシーズモンスター1体を選択して発動できる。選択したモンスターのオーバーレイユニットを1つ取り除き、自分のデッキからクリボルト1体を特殊召喚する。私は電子光虫―ライノセバスのオーバーレイユニットを1つ使って、おいで!!?クリボルト!!?」
「何だと!?!?なら破壊して……っ、ゴーストリックの駄天使!!?」
「そう、今効果を使ってもゴーストリックの駄天使しか破壊出来ませんよ」
「クソが!!?電子光虫―ライノセバスの効果発動!!?ライノスライス

!!?オーバーレイユニットを1つ使うことで相手フィールドで守備力が1番高いモンスターを破壊する!!?」
「ゴメンね、ゴーストリックの駄天使」
駄天使は気にしないでというようにひらひらと手を振って、ライノセバスが放った斬撃のような雷に焼き尽くされた。
しかし、もう1つのライノセバスのオーバーレイユニットは私のフィールドに飛んでくると、クリボルトに変わった。

〈クリボルト〉☆1　雷族　光属性
ＡＴＫ３００

「ゴーストリックデュラハンの効果発動!!?このカードが墓地へ送られた場合、このカード以外の自分の墓地のゴーストリックカード1枚を対象としてそのカードを手札に加えます。私は墓地にあるゴーストリックランタンを手札に加えます!!?さらにクリボルトの効果発動!!?今度は甲虫装機エクサビートルのオーバーレイユニットを使って、出ておいで、クリボルト!!?」

〈クリボルト〉☆1　雷族　光属性
ＡＴＫ３００

「そして、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私の前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル1モンスター1体!!?私はクリボルトをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?もう1度お願い。希望の守り手!!?リンク1!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性→光属性
ＡＴＫ３００　←

「そして魔法カード、貪欲な壺を発動!!?」

「ここにきてまたドローカードだと⁉？」
「墓地に存在するゴーストリックデュラハン、ゴーストリックの駄天使、サクリファイスアニマ、ヴァレルロードドラゴンをＥＸデッキにクリボルトをデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする⁉？……⁉？このカード……」
そこで私が引いたのは今まで１度もドロー出来なかった僅かに黒い闇を纏っているように見えるカード。
そのカードから感じる繋がりが私にそのカードの思いを伝えてきた気がした。
……もしかして、ここは任せろって言ってるの？
私は少しフィールドと神路祇君を見て考え、そのカードに向かって頷く。
分かった、君を信じるよ。
なら、そのお膳立てをしないとね⁉？
「クリボルトの効果発動⁉？最後の甲虫装機エクサビートルのオーバーレイユニットを使って、また出ておいで、クリボルト⁉？」
「コイツ、全てのオーバーレイユニットを持っていきやがった⁉？」

〈クリボルト〉☆１　雷族　光属性
ＡＴＫ３００

「そして、導いて⁉？希望に繋がるサーキット⁉？」
私の前に再び大きなサーキットが現れる。
新しい仲間の為に、貴方の力を貸して⁉？
「召喚条件は効果モンスター３体以上⁉？私はリンクリボー、クリボルト３体分でリンクマーカーにセット⁉？サーキットコンバイン⁉？」
「またリンク４のモンスターか……」
「お願い、私に大切な人達の誇りを守る貸して⁉？リンク召喚⁉？閉ざされた運命を斬り開く魂の剣（つるぎ）⁉？リンク４⁉？ヴァレルソードドラゴン⁉？」

〈ヴァレルソードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性→光属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑←→
「チッ、またヴァレルの名を持つドラゴンか‼?」
「私は……クリボーを召喚‼?」
「はっ?」

〈クリボー〉☆１　悪魔族　闇属性→光属性
ＡＴＫ３００

私の前に現れるのは茶色毛玉のようなモンスター。
それを見て、神路祇君はぽかんとした表情を浮かべてから、しばらくすると心底おかしそうに笑い始めた。
「ヒヒヒ、ヒハハハハ‼?おいおい、追い詰められてとうとうおかしくなっちまったか?そんな雑魚をこんな状況で出してどうなるんだよ‼?手札誘発のモンスターなんだからせめて手札に持っとけよ‼?そのせいでゴーストリックランタンまで使えなくなってるじゃねぇか‼?ああ、リンクリボーを出すためか?それでも一時凌ぎにしかならないってのにな‼?ヒハハハハ‼?」
「さあ、どうしてでしょうね?私はカードを２枚伏せてターンエンドです」

遊花　ＬＰ１５０　手札３
ー ー ▲ ▲ ー　　ー
ー ー ○ ー
☆　　○
ー ○ ー ー ○
△ △ ▲ △ △　　ー
電二　ＬＰ９００　手札３

「俺のターン、ドロー!!?さて、まずはその邪魔なドラゴンを消させて貰いますか」
「……ああ、そうです。先に言っておきましょう」
「はっ?」
「このターン、貴方が選択を間違えれば……神路祇君、貴方は次のターンで負けることになりますよ」
「何?」
　私の言葉に神路祇君は怪訝な表情を浮かべ、鼻で笑う。
「ハッ、ハッタリだけは上手じゃないか。この状況で間違える奴なんていないだろうが!!?超装甲兵器ロボ　ブラックアイアンGの効果発動!!?トリーズンフレア!!?このカードの効果で装備しているモンスターカード1枚を墓地へ送り、墓地へ送ったそのカードの攻撃力以上の攻撃力を持つ、相手フィールドのモンスターを全て破壊する!!?俺は甲虫装機ホーネット1枚を墓地に送り、消え失せろ!!?ヴァレルソードドラゴン!!?」
「……ゴメンね、ヴァレルソードドラゴン」
　アイアンGの砲撃がヴァレルソードを焼き尽くす。

　超装甲兵器ロボ　ブラックアイアンG　☆14→11
　ATK3400→2900

「さらに甲虫装機ホーネットの効果発動!!?このカードを墓地に送り、セットカードを破壊する!!?」
「……ゴーストリックロールシフトが破壊されます」

　超装甲兵器ロボ　ブラックアイアンG　☆11→8
　ATK2900→2400

「チッ、ハズレか。なら、もう1枚が本命ってところか?だが、もう1枚を破壊する準備なんて出来てるんだよ!!?甲虫装機ホッパーを召

喚!!?」

〈甲虫装機ホッパー〉☆４　昆虫族　闇属性→光属性
ＡＴＫ１７００

「甲虫装機ホッパーの効果発動!!?コイツも手札・墓地から甲虫装機を装備できる!!?甲虫装機ホッパーに甲虫装機ホーネットを装備!!?そして装備カードとなった甲虫装機ホーネットの効果発動!!?このカードを墓地に送り、テメェのセットカードを破壊だ!!?」
「っ……魂の一撃が破壊されます」
「!!?あ、危ねぇ。怖い怖い、確かにそれを使われてたら俺の方がやられちまうところだった。残念だったな～俺の選択は正しかったみたいだぜ」
「……」
「バトル!!?甲虫装機ホッパーでクリボーを攻撃!!?さあ、逃げれるものなら逃げてみろよ!!?」
神路祇君が勝ち誇った笑みを浮かべ、私を嘲笑う。
そんな神路祇君を見て……私はニヤリと笑った。
「……よかった」
「あん?」
「こんな状況になっても、貴方が私を舐めていてくれて」
「何だと?」
「相手モンスターの攻撃宣言時、自分の手札・フィールド上から悪魔族モンスターをそれぞれ1体ずつ墓地へ送る事でのみ、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。私は、フィールドの悪魔族モンスター、クリボーと、手札の悪魔族モンスター、ゴーストリックランタンを墓地に送る!!?」
「っ!!?なんだその特殊召喚条件!!?聞いたことねぇぞ!!?」
フィールドにいたクリボーと手札から現れたランタンの姿が粒子に変わる。
そしてその粒子が集まり現れたのは、深い闇を纏う、天使と悪魔の

羽根を持つ人型のモンスター。
　お願い、私は皆の気高い強さを守りたい……だから、貴方の力を私に貸して‼?
「おいで‼?闇夜に紛れる不可視の天体‼?ダークネスネオスフィア‼?」

〈ダークネスネオスフィア〉☆１０　悪魔族　闇属性→光属性
　ＡＴＫ４０００

「な、なんだそのモンスターは⁉?相手の攻撃宣言時に出てくる攻撃力４０００のモンスターだと⁉?」
「リンクリボーを使うなら、バトルフェイズに入った時に使ってます。ですが、貴方はそれに違和感も覚えずに攻撃をしてきた。諦めた、とでも思いました?残念ですが……諦めるって言葉は、私から１番遠いものなんです。さて、攻撃対象のモンスターがいなくなり新しいモンスターが増えたわけですが、攻撃しますか?因みにダークネスネオスフィアには戦闘破壊耐性もありますが」
「っ、するわけないだろうが‼?甲虫装機ホッパーの攻撃は中止‼?メインフェイズ２、カードを１枚伏せてターンエンドだ‼?（俺の伏せカードは重力解除とデモンズチェーン。次のターンを防げばあんなモンスターすぐ消しとばして……）」

遊花　ＬＰ１５０　手札１
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　○　ー
ー　ー　ー　○　ー
ー　○　ー　ー　○
ー　▲　▲　△　△　ー
電二　ＬＰ９００　手札１

「私のターン、ドロー‼?バトル‼?ダークネスネオスフィアで甲虫

装機エクサビートルを攻撃!!?」
「んなもん通すかよ!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?重力解除!!?自分と相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの表示形式を変更する!!?テメェの攻撃なんて通らねぇんだよ!!?」
「そんなことだろうと思いました。ライフポイントを半分払い、手札から罠発動!!?カウンター罠!!?レッドリブート!!?」
「!?手札からカウンター罠だと!?」

遊花　ＬＰ１５０→７５

「相手が罠カードを発動した時に発動できる!!?その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする!!?その後相手はデッキから罠カード１枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンにセットできる。最もこのカード発動後、ターン終了時まで罠カードは発動できませんが」
「何だと!?お、俺は光虫異変をデッキからセットする……」
発動しようとしていた重力解除がセットされ、愕然とした表情を浮かべる神路祇君。
「重力解除が無効化されたことにより攻撃は続行!!?いって、ダークネスネオスフィア!!?ヘブンリィダークネス!!?」
ネオスフィアが異形の手をかざすと幾千もの白と黒の光弾がエクサビートルと神路祇君を囲むように浮かび上がる。
その光弾を見て神路祇君が呆然としながら口を開く。
「ヒハ……冗談……俺が、負ける?学年３位の俺が……こんな……こんな、雑魚決闘者にいぃぃ!!?」
そう神路祇君が叫んだ瞬間、幾千もの白と黒の光弾がまるで流星群のように降り注ぎ、エクサビートルごと神路祇君のライフを跡形も無く消しとばした。

電二　ＬＰ９００→０

「貴方の敗因はただ1つ。自分以外の人間を下に見て侮るその考え方を、最後まで拭えなかった。ただ、それだけのことです」

ーーーーーーー

デュエルが終わり、立体映像が消えていく。
神路祇君は、どうやら余りのショックで気絶しているらしい。
ここまでくると少し可哀想に思わないでもないけど、これに関しては私が関わっても彼の神経を逆撫でするだけだから止めておこう。
さて、これで試験の全てのデュエルも終わり。
後は結果が出るのを待つだけだ。
試験の結果としては、悪くはないと思う。
でも、負けてしまったデュエルもあるし、どうなるかは分からない。
今回の期末試験では様々な出会いと学びがあった。
出来れば、最後までデュエルアカデミアで皆と過ごしたいな……
そんなことを思いながら、私はフィールドを後にするのだった。

ーーーーーーー

「君はどんな決闘者なのかを示してくれればいいとは言ったが、まさかこんな結果になるとはね……」
他に誰もいない部屋の中、柔和そうな印象を受ける初老の老人ーーーデュエルアカデミア・ケルン校の校長、武者小路　紫煙が思わずといった感じで呟く。
今日でデュエルアカデミアで最も重要な試験と言っても過言ではないデュエルの実技試験の日程が全て終了した。
その試験は、今回教師陣の間で退学が検討されていた学年最下位の劣等生である1人の少女の運命を決めるものだったが、少女は想定以上の実力を……いや、完全に常識外れの実力を見せた……否、見せてしまったと言ってもいいだろう。
デュエルをすることを怖がっていた学年最下位の生徒が儀式・融

合・シンクロ・エクシーズ・リンクという5つの召喚方法を扱えるなど、誰が想像しただろうか？
極め付けは期末試験最後のデュエルだ。
最後のデュエル、決着をつけたカードこそメインデッキのモンスターだったが、そこまでの過程で少女は全ての召喚方法を組み合わせてデュエルをしている。
儀式からリンクとエクシーズ、融合からシンクロ。
あそこまで流れるように様々な召喚方法を自在に操れる決闘者など、プロ決闘者の中でも本当に一握りだ。
それをただの学生である少女はデュエルの中で見せた。
初日からすでに無くなりかけていた退学の話が最終日には満場一致で即消滅したのも当然のことだろう。
あれ程の決闘者を退学させたとなれば、デュエルアカデミアとしての威信に関わる。
おまけに極め付けとなったのは、今朝デュエルアカデミアにかかってきた一本の電話だ。
紫煙はその内容を思い返しながら、携帯から1つの連絡先を選ぶ。
しばらくの待機音の後、携帯から聞こえてきたのは1人の少女の声だった。
『……結果は？』
「いきなりだね、退学の話は一瞬で無くなったよ。まあ、当然といえば当然の話だがね。そうそう、君が注目していた栗原君と宝月君の試合は、栗原君が勝利したよ」
『……そう、流石は私の後輩。桜が負けたことは残念だけど、遊花が桜を超えられたことは嬉しく思う』
「まさか栗原君と宝月君が君にとってそんなに重要な少女達だとは思わなかったよ。『宝月桜のデュエル内容で栗原遊花を退学にしたら世界ランキング4位のあらゆる情報網を使ってデュエルアカデミアを潰す』なんて発言するとはね。学生時代の時から君が無理を言い出すのは結束君のことぐらいだと思ってたんだけどね……」
『私も少しは成長した……それよりも校長の方が心配。遊花を退学

にする話が出てたとか、とうとう髪だけじゃなくて意識まで耄碌してきたのかと思った』
「相変わらず辛辣だね闇君は⁉？後、髪の話は余計じゃないかな⁉？」
電話越しから聞こえてくる少女ーーー闇の声を聞き、紫煙は声を荒げる。
そんな紫煙に闇はやれやれと言った感じの声を発する。
『事実を言っただけ。校長も年齢には勝てないから諦める。ついでにデュエルでも私には勝てないんだから諦める。イラつくと余計禿げ……あ、手遅れだった』
「よーし、その口を完全に黙らせてやろうか‼？久しぶりにデュエルでもしたくなってきちゃったなー‼？一戦相手をしてもらえないかな⁉？」
『それについては少し考えてある。今回のお詫びもかねて。こういう話はどう？』
そう言って闇から続いた言葉に紫煙は思わず黙り込み、思わず苦笑を浮かべた。
「……なんというか、相変わらず君は不器用だね」
『好きに言うといい、社長からは許可を貰ってる。禿げに何言われても気にしない』
「不器用すぎるね、闇君は‼？もう少し言葉はオブラートに包んでくれないかな⁉？」
『……私、不器用だから』
「うん、それは謝罪に見せかけた追撃だね‼？分かってたよチクショーめ‼？」
思わず携帯を放り投げそうになるのを紫煙は必死に堪える。
しばらくの間深呼吸をして心を落ち着かせてから、電話越しの闇に向けて紫煙は真剣な声で話しかける。
「……君の覚悟は分かったよ。こちらとしても願ったり叶ったりさ。話が纏まったら、また連絡させて貰おう」
『……ん、校長』
「？どうしたんだい？」

『……いつも迷惑をかける……ごめんなさい』
本当に申し訳なさそうな少し落ち込んでいるような闇の声に、紫煙は柔らかい笑みを浮かべながら言葉を返す。
「……何、気にしなくてもいいさ。私にとって、デュエルアカデミアを卒業していった生徒は皆私の子供みたいなものだ。だから、君は思う通りにやるといい」
『……ん、ありがとう、禿ーーー校長』
「本当に色々と台無しにするよね、君は⁉？」
そんな言葉と同時に切れた携帯に思わず紫煙は頭を押さえ、そしてその言葉が照れ隠しだということが分かるからこそ、少し寂しそうに笑った。
「……全く、一体誰に似たんだか……本当に不器用だよ、闇君は」

第３２話　原点

☆

「師匠!!?これ、見てください!!?」
「お、おう……テンション高いな……これ、期末試験の結果か?」
「はい!!?実技のところ、見てください!!?」
病室。
ベッドの上で横になっているといきなり部屋の中に飛び込んできた遊花に数年前に見た覚えがある用紙を渡される。
見てみるとそこに書かれていたのは予想通り遊花のデュエルアカデミアでの期末試験の成績表。
興奮気味の遊花に促され、渡された成績表の実技の項目に目をやる。
そこに書かれていたのは……
「実技……９５点!?」
「えへへ、頑張りました!!?こんな点数取ったの初めてです!!?」
「そ、そりゃあ初めてだろう……というか、俺も学生の時にそんな点数取ったことないぞ……」
遊花の成績表に書いてあった点数に戦慄を覚える。
いくら俺や闇が教えているからといって、ここまでの点数を叩き出すとは思わなかった。
俺の学生時代の最高点数でも８５ぐらいが限界だったというのに……
その上実技以外の項目を見てみても軒並み９０点を超えている。
……やはり俺はすでに遊花に色々と超えられているのかも知れない……師匠としてなんとも情けない。
「まあ……なんだ、よく頑張ったな。闇から話は聞いたが、退学の話は無くなったらしいじゃないか」
「はい!!?これも師匠や闇先パイのおかげです!!?」

「……俺は何もしてないんだが……闇が色々遊花に教えてたからだろ？」
「でもでも、師匠がいなかったら私はデュエルがいなかったので、やっぱり、師匠のおかげです‼？」
「……相変わらずどんな根拠で話してるんだお前は……」
ニコニコと笑う遊花を見て、俺は苦笑する。
「はぁ～もっとちゃんと師匠らしいことできるようにしないとな……というわけで、ほら」
「はい？カード……ですか？」
ため息を吐きながら枕元に置いておいた1枚のカードを手渡すと、遊花は不思議そうな表情を浮かべる。
「期末試験でいい結果を出した時の為に、島さんに頼んでおいたんだ。まあ、頑張った弟子の為のご褒美って奴だな」
「ご褒美……⁉？このカードって‼？」
俺の言葉に遊花はそのカードを覗き込み、驚いた表情を浮かべて俺を見た。
「遊花は持ってなかっただろ？遊花のことだから欲しいかなと思ったんだ。まあ、使えるかどうかは分からないからご褒美と言えるかも微妙なところだが……使えないならお守り代わりにでもしてくれ」
「いえ‼？いえいえ‼？絶対使います‼？師匠がせっかく探してくれたご褒美なんですから‼？えへへ～やった‼？」
「……まあ、喜んでくれたようで良かったよ。もうすぐ大会だしな」
そういってカードを掲げながら嬉しそうにくるくるとその場を回る遊花を見て、思わず笑みが溢れる。
遊花の期末試験が終わり、1週間が経った。
俺が入院してから3週間、もうすぐ退院ということもあり、最近はリハビリ続きの毎日を送っている。
今ではだいぶ歩くことも出来るようになって来ており、普段通りの生活を送れるようになるまでそう時間もかからないだろう。
勿論、リハビリと並行して大会の企画も進行中だ。
「そういえば大丈夫でしたか？今回の試験で仲良くなった人達を結構

誘ってしまったのですが……」
くるくると回っていた遊花が動きを止め、申し訳なさそうな表情を浮かべてこちらを見る。
そんな遊花を見て、俺は柔らかい笑みを浮かべる。
「勿論だ。前に言ったろ？お前が呼びたい奴は皆いる、お前が見てない誰かなんてものが存在しない。不安がるものは何もない。そんな大会を開こうってさ」
「……」
「だから、お前が心配する必要なんてないんだよ。そういうのは……師匠にドドーンと任せとけばいいんだ」
「師匠……えへへ、はいです‼？」
俺の言葉に遊花は一瞬キョトンとしてから、嬉しそうに笑った。
確かに遊花が誘ったデュエルアカデミア生が思ったより多かったが、こちらも闇や美傘が暇そうな知り合いに声をかけてくれると言っていたので何とかなるだろう。
問題があるとすれば闇や美傘が呼ぶメンバーは全員プロ決闘者の中でも有名な奴ばかりだと言うところだ。
美傘が言ってた通りデュエルアカデミア生がトラウマにならなければいいのだが……正直、人数が増えることよりそちらの方が問題だ。
まあ、遊花が仲良くなったのは学年トップクラスの実力者達だし、宝月の強さを考えれば一方的に蹂躙されたりはしないだろう……多分。
そんなことを考えていると病室の扉がゆっくりと開く。
そこにいたのは明らかに笑っていない笑顔を浮かべている宝月。
宝月は扉を閉めると、その怖い表情のまま遊花に近づいた。
「コラ、遊花‼？急いで結果を見せたい気持ちは分かるけど病院で走るなって言ってるでしょ‼？」
「ひゃう‼？さ、桜ちゃん……」
「宝月か、久しぶりだな。というか、遊花……走ってくるのはダメだろ」

「あぅ……ごめんなさい」
しょんぼりとした表情で反省する遊花を見て宝月はため息を吐きながら俺の方を見た。
「全く、これも結束が入院なんてしてるのが悪いのよ。アンタが入院なんてしなければ遊花がこんな苦労することなかったのに」
「いや、それは理不尽過ぎるだろ……まあ、悪かったとは思ってるが」
「口答えしない‼?そもそも遊花がこんな風になったのはアンタのせいなんだからね‼?」
「それも一概には否定できないけど、やっぱり理不尽じゃないか?」
普段は大人しい遊花がここまで感情を露わにしてるのは俺のせいだということは分かってはいるが、だからといって俺にはどうすることも出来ないのだが……
俺が困った表情を浮かべていると、宝月は俺から目を逸らしながら少し照れくさそうに口を開いた。
「……まあ、だから早く良くなって退院しなさいよ。アンタが退院さえすれば、遊花が困ることないんだから」
「‼?はは、そうだな。どうせ後1週間もないし、早く戻って遊花や宝月に心配かけないようにしないとな」
「べ、別に私は心配なんてしてないわよ‼?アンタがいない方が清々するし‼?」
「……ふふっ、そうだよね」
「な、何よその目⁉?2人して生暖かい目で私を見るんじゃないわよ‼?」
頬を赤く染め、明らかに照れ隠しだということが分かる怒鳴り声を上げる宝月を、俺と遊花は優しい眼差しで眺める。
相変わらず素直じゃないが、何だかんだで宝月も心配してくれてたんだな。
宝月にも迷惑をかけてるし、今度宝月にも何かお礼を考えないといけないな。
そんなことを考えていると、再び病室の扉が開く。

そこには眼鏡をかけるだけの変装（本人談）をし、相変わらずの無表情でこちらを見ている闇の姿があった。
闇は頬を赤く染めた宝月を見て首を傾げる。
「桜が来てるなんて珍しい……どうかしたの？」
「な、何でもないわよ‼？」
「闇先パイ、お疲れ様です。今日のお仕事はもう終わりですか？」
「ん、今日も勝ってきた。ついでに、遊騎にお客さんを連れてきた」
「俺に？」
「師匠にお客さん……お知り合いの方ですか？」
「というか、誰もいないみたいだけど……」
「？」
客を連れてきたというわりには闇の姿しか見えず首を傾げる俺達を見て、闇が後ろを振り向いて首を傾げる。
そして病室の外をきょろきょろと見回すと目的の人物を見つけたのか、そちらに向いて歩いて行く。
耳を澄ませると闇と誰かのやり取りが聞こえてくる。
「何してるの？」
「いや、その……今更どんな顔をして会えばいいのか、分からないといいますか……」
「……何を今更。そもそも、来たいと言ったのはそっち。いい加減腹をくくる」
「わわっ⁉？待って欲しいのです‼？引っ張らないで欲しいのです‼？ま、まだ心の準備が‼？」
そんな何処か懐かしい声と共に闇が誰かを引きずりながら戻ってくる。
「⁉？お前は‼？」
「わあ、綺麗な方ですね……」
「容姿からして外国の人かしら？……遊騎って、色んな知り合いがいるのね」
闇に引きずられながら現れたのは腰まで届く長い金髪をポニーテールにし、メガネをかけたスーツ姿の女性。

くりっとした大きな青い瞳に、スラリとした手足と白い肌。
背丈も高めだが、何より目を引くのはスーツの上からでも分かる豊満な胸部だろう。
違うのは知っているが胸部にメロンでも詰めてるんじゃないだろうかと、割と本気で思ってしまう。
……そして闇、アレを見た後に胸元を触ってちょっと泣きそうになるんじゃない。
女性は何処か申しわけなさそうに顔を歪めで、今にも泣き出してしまいそうだ。
そんな女性を見て、俺は思わずため息を吐きながら呆れた目を向けてしまう。
「よう、何似合わない辛気臭い面してんだ？そういうのはお前のキャラじゃないだろ。このアホの子が」
「なっ⁉？」
「というか、なんだそのメガネは？お前もそれで変装とか言うつもりか、このアホめ。しかもこんな時間に訪ねてきて、お前また書類仕事を放っぽり出して来たんだろ、アホめ」
「あ、アホアホ言い過ぎなのです‼？こっちにも、思うところが色々とーーー」
「そうやって悩んでるのがアホだって言ってんだよ。お前が何気にしてんのか知らないけど、そういうのはどちらかと言えば俺の担当だろうが。お前はいつもみたいにへらへらと笑ってりゃいいんだよ」
そんな俺の呆れた声に女性は一瞬涙を浮かべると、それを手でぐしぐしと拭い、笑顔を浮かべながら勢いよくこちらに抱きついてきた。
「……えへへ、やっぱり、遊騎君は優しいのです‼？」
「ちょっ⁉？このアホ‼？動けない怪我人にいきなり抱きついてくる奴があるか‼？」
「そうなのです‼？アホの子なのです‼？なので遊騎君の言葉なんて聞いてあげないのです‼？」
「コイツ、最低な開き直りをしやがった⁉？というか、お前どんだけ力入れて抱きついてやがる‼？痛えよ‼？放せっての‼？」

そういいながら抱きついてきたアホを引き剥がそうとしていると横から遊花と宝月の声が聞こえてくる。
「ちょっと、私達を置いてきぼりにしないでくれない？全然話が読めないんだけど？」
「あの、師匠……その女性は一体？」
首を傾げる遊花達に無理矢理引き剥がしたアホの子を向き直らせると、ため息を吐きながらあまり認めたくはない事実を口にした。
「コイツはリーネ。俺の恩人で、闇達のスポンサー。つまりーーー『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の社長だ」
「えっ⁉？社長さんですか⁉？」
「嘘でしょ⁉？」
遊花と宝月が驚いた顔でリーネをみる。
そんな２人にリーネは笑みを浮かべるのだった。

ーーーーーーー

★

「改めて、天羽（あまは）リーネなのです‼？リーネのことは気軽に、リーネお姉さんって呼んで欲しいのです‼？」
しばらくして、全員近くに置いてあった椅子に座るとリーネさんが改めて私達にそう言った。
それを聞いて呆然とする私と奥歯に物がつまったような表情を浮かべる桜ちゃんに対し、師匠は頭を痛そうに押さえながら、リーネさんの頭を軽く小突いた。
「あぅ‼？痛いのです‼？何をするのですか？」
「お前が妙な自己紹介をするから２人が面食らってるだろうが⁉？少しは自重しろ‼？」
「でもでも、親しみやすい方が話しやすくていいのです。固苦しいのは苦手なのです……」
「そうだとしても言い方ってもんがあるだろうが、このアホめ‼？」

「あ‼?・またアホって言ったのです‼?・」
「アホにアホって言って何が悪い。言われたくないならもう少しまともな事を言え」
「むむむ～‼?・」
「あ、あの、言い合いはその辺にした方が……」
　睨み合う師匠とリーネさんを止めようとすると、闇先パイが私の肩を叩いて、相変わらずの無表情ながら何処か呆れたような雰囲気で首を振った。
「遊騎と社長は基本的にいつもこんな感じで戯れあってるから気にしなくていい」
「じゃ、戯れあってるですか?」
「ん、昔はいつもこんな感じだった。社長が突拍子もないことを言い出して、それに遊騎がダメ出し。言い合いをしながら妥協案を見つけるまでがデフォルトだった」
「……何というか、色々と大丈夫なのかしら?『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』って」
「大丈夫だから、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』がある。『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』は底無しの”お人好し集団（バカ）”だけど、能力自体はある人ばかりだから」
「そういえば、苗字が天羽ってことは……」
「ん、社長はハーフ。お父さんが日本人でお母さんがドイツ人って言ってた。生まれは日本だけど、小学生の中頃から４年前まではドイツの方で暮らしてたんだって」
　私達がそんな会話をしていると師匠とリーネさんの言い合いも一区切りがついたようで、リーネさんが少し不満そうにしながらも口を開く。
「むぅ～なら、リーネさん、ならいいのです?」
「それぐらいならいいだろ。普通年上に大してはさん付けで呼ぶもんだしな」
「ん～分かったのです。それじゃあ遊花ちゃんと桜ちゃんにはリーネさんって呼んで欲しいのです‼?・」

「ほら、戯れあってただけ、でしょ？」
「……何というか、闇も大変そうね」
「あ、あはは……分かりました、リーネさん」
「はい、なのです‼？やっぱり、親しみやすい方がいいのです‼？」
そう言ってニコニコと笑顔を浮かべるリーネさんに、私も思わず苦笑を浮かべてしまう。
そんな私を見て申し訳なさそうな顔をしながらも、師匠は呆れた様子でリーネさんに目を向ける。
「それで、何しにきたんだ？お前は一応社長何だからやらなきゃならないことなんていくらでもあるだろうに……」
「何しにきたなんてご挨拶なのです。遊騎君のことが心配だったから何とか時間を作って見にきたのですよ。２年間もの間、連絡もなかったのですから当然なのです」
「連絡がないなんて言われてもな……俺は退職してるんだし、お前に連絡を取るのも変だろうが」
「それでも、なのです。忘れられたんじゃないかって、寂しかったのです……」
「リーネ……悪かったよ。お前には色々世話になってるし、連絡ぐらいはするべきだった……すまない」
バツが悪そうに師匠がリーネさんに謝ると、リーネさんは悲しそうにしていた表情を、柔らかい笑顔に変えた。
「……えへへ、仕方がないのです。リーネは遊騎君よりお姉さんなので、許してあげるのです」
「……なんだよそれ」
「えへへ。そうなのです‼？忘れるところだったのです‼？遊花ちゃん、桜ちゃん、いつも遊騎君と闇ちゃんがお世話になっているのです。遊騎君と闇ちゃんは、ご迷惑をかけてないですか？」
「い、いえ、師匠にも闇先パイにもお世話になってばかりで迷惑なんて、そんな……」
「結束も闇も私達のことをしっかりとサポートしてくれてますから、迷惑なんてかかってません。むしろ、私達の方が結束達に迷惑をかけ

てないか心配なぐらいで……」
「……おい、闇。この宝月は本物か？殊勝過ぎて怖いんだが……」
「本物のハズ……だけど、この態度は違和感が凄い。偽物の可能性も否定しきれない」
「なっ⁉？アンタ達、人が素直に感謝してんのにその言い方はないでしょ⁉？」
「もう、遊騎君も闇ちゃんもそんなこと言ったら、めっ、なのですよ」
桜ちゃんの殊勝な態度に戦慄している師匠と闇先パイをリーネさんが窘める。
その姿は本当に師匠達のお姉さんみたいだ。
「そういえば、遊騎君。闇ちゃんに聞いたのです。遊花ちゃんを『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入れたいって話は本当なのです？」
リーネさんが首を傾げながら師匠にそんなことを尋ねる。
それは闇先パイに会った日に、師匠達が話していたことだ。
リーネさんの問いかけに、師匠は力強く頷く。
「ああ。遊花はきっと凄い決闘者になるぞ。俺を遥かに超えるぐらいな」
「私も保証する。遊花なら私も倒せる決闘者になれる」
「遊騎君と闇ちゃんが言うなら間違いないのです。それじゃあ採用決定なのです⁉？一応形だけの面接の日程とかも考えておくのです」
「ええっ⁉？」
「ちょっ⁉？」
あまりにもあっさりとリーネさんから出た採用の言葉に私と桜ちゃんが驚く。
それを見ながら師匠と闇先パイが呆れたような、何処か諦めたような表情を浮かべる。
「まあ確かに形だけになるだろうけど、その言い方はどうなんだ……」
「仕方ないと思う。どうせ面接官は社長と私か炎だし……炎はともかく、社長がいる時点で決まってるようなもの」
「俺らの時はリーネのスカウトみたいなものだったしな。俺らの時の

リーネだけの面接とか、酷かったよな……」
「面接室に入ったら社長だけがいて『採用なのです‼?』で終わったからね。そもそも『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』が出来たのも遊騎の為みたいなものだし、ある意味趣味で出来た団体だから今更ではあるけど」
「改めて聞かなくても酷い話だよな」
「遊騎が元凶だけどね」
「いやいやいや、そんな簡単に決めていいものなんですか⁉?」
桜ちゃんの言葉に私もうんうんと頷く。
私はまだリーネさんに会ったばかりなのに、そんなに簡単に決めてしまっていいのだろうか?
そんな私達を見て、リーネさんはきょとんとした表情を浮かべる。
「?ダメなのです?遊騎君と闇ちゃんは境遇とかで自分の評価を誤魔化したりはしないのです。だから、この２人が凄い決闘者になるというのならその評価は十分に信頼に足るものなのです」
「だ、だからって……」
「それに、リーネも人を見る目はある方なのです。遊花ちゃんを見た時、遊騎君や闇ちゃんを見た時と同じようにピーンと来たのです‼?だから、リーネは自分のこの感覚を信じてるのです‼?」
そう言ってリーネさんは胸を張りながらニコッと笑う。
世界ランキング２位のチームである『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』を作り、元世界ランキング９位の師匠と世界ランキング４位である闇先パイを見つけ出したリーネさんのその言葉には確かな自信と説得力がある。
でも、そんな言葉に不安になってしまう自分もいる。
そんな私の内心を読み取ってなのか、リーネさんは柔らかい表情を浮かべる。
「でも、これはあくまでリーネの個人的な意見なのです。遊花ちゃんが嫌なら無理強いなんてしないのです。遊花ちゃんの人生は遊花ちゃん自身のものなのですから。幸い、遊騎君の開催する大会にはリーネも参加させて貰う予定ですから、実力を自分の目で確認する機

会もありますし、卒業までにも時間はまだまだ有るのです。ゆっくりと、遊花ちゃんが納得いくまで考えてみて欲しいのです」
「は、はい……」
リーネさんの言葉に私は力無く頷く。
歩みたい道への一歩だと言うことは分かっている。
でも、その道を迷わず歩けるだけの自信が、私にはまだ無い。
私は、本当に師匠達の期待に応えられるような人間なのだろうか？
そんな不安が、私の中にはまだ渦巻いていて……
私は……手に入れることが出来るのだろうか？
この不安を打ち消せるだけの自信を……
「……さて、そろそろ時間も遅くなってきたし、遊花と宝月は帰った方がいいんじゃないか？あまり夜遅くまで学生が外を彷徨いてるのもよくないだろ」
そういう師匠の言葉を聞き、時計に目をやると時刻はもうすぐ１８時になるところだった。
いくら夏が近く陽射しも伸びてきたとはいえ、そろそろ学生が外を歩くには怪しい時間になってきているのかもしれない。
「闇。俺はリーネと少し話したいこともあるから、遊花達について帰ってやれるか？……まあ、補導されそうなのはどちらかというとお前の方だが」
師匠が闇先パイに目を向けると、闇先パイは師匠の目をジッと見つめてからコクンと頷いた。
「……流石にそれは失礼。だけど、遊花達だけというのも心配だから承る。元々、私も仕事帰りだったし」
「それじゃあ、遊花達のこと、頼んだぞ」
「ん……遊花、桜。帰ろう」
「まあ、流石にこれ以上遅くなるのはマズイわね。分かったわ。結束、リハビリで無理して退院が延びるなんてことないようにしなさいよ？」
「分かってるっての。遊花もまたな。あまり思い悩むなよ？」
「は、はい‼？師匠、リーネさん、また‼？」

「おう、気をつけて帰れよ」
「次は大会で、なのです」
師匠とリーネさんに見送られて私達は病室を後にする。
しばらく歩いて病院の外に出ると、外はすっかり夕焼け空になっていた。
病院の敷地内から出たところで、桜ちゃんが唐突に口を開いた。
「ん～ねぇ、遊花。リーネさんって、どっかで見たことがない？」
「えっ？無いと思うけど……」
桜ちゃんの言葉に私も色々な事を思い返してみるが、リーネさんを今まで見たような記憶はない。
そんな私の返答に桜ちゃんは首を傾げながら納得いかなそうな表情を浮かべながら頭を掻いた。
「うーん、でも、どっかで見たことがある気がするのよね～しかも、その時には遊花もいた気がするんだけど……あ～モヤモヤする‼？」
「うーん、気のせいだと思うけど……リーネさんぐらい目立つ人なら記憶に残るハズだし……」
そう言いながらも、桜ちゃんの言葉が何処かに引っかかったのか、私も何かが引っかかったような、モヤモヤとした気分になってくる。
そんな私達を見て、闇先パイは何かを考え込みながら振り返り、師匠達がいる病室を眺めていたことを、私は気づくことが出来なかった。

ーーーーーーー

☆

「……行ったか……さてと、リーネ。少し聞きたいことがある」
「……何が聞きたいのです？」
遊花達が病室を出て行き、完全に離れきった頃合いを見計らってリーネに声をかける。
そんな俺の問いかけに、リーネはこれから問われることの内容が想像つくのか真剣な表情を浮かべて俺を見る。

そんなリーネに、俺はさっきの遊花との会話で気になっていた部分を尋ねる。
「さっきの遊花との会話で、『遊騎君と闇ちゃんは境遇とかで自分の評価を誤魔化したりはしない』って言ったよな？」
「……言ったのです」
「だけど、この言葉ってよく考えたらおかしいよな？境遇とかで評価を変えることがないって言うのは、遊花が評価を変えるような境遇だって知ってたってことだ」
「……」
「だけど、今日再会したばかりの俺は当然遊花について話してないし、さっきのお前が言ってた、闇から聞いた遊花を『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入れたいという話は本当なのか、という質問があったことから、遊花について闇から詳しく聞いてるという線も無くなった。精々聞いてるのは俺の弟子で、闇がデュエルを教え、そのために居候していることぐらいだろう。それなのに、お前は『境遇』なんて言葉を出した。それはあの状況じゃ明らかにおかしい」
遊花のことを何も知らないのであれば遊花が気にしているのは実力だと思い、俺と闇が評価しているから実力は気にしなくていいと言えばよかったハズだ。
仮にも『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』は世界ランキング２位のチームだ。
普通に考えたら、ただのデュエルアカデミア生である遊花が気にするなら、自分の実力が足りていないと思うだろう。
実際、さっき遊花が言葉に詰まったのはきっとそういう部分があるのだと思う。
遊花は今までの環境のせいで、自分を過小評価し過ぎるところがある。
学年トップ１０の生徒達と互角以上のデュエルを見せ、勝ってきたハズなのに、遊花はそのことを少しも得意げに話さなかった。
そして出てきた言葉が俺や闇のおかげという言葉。
自分の実力や才能ではなく、俺と闇が教えてくれたからいいデュエ

ルが出来ていると、遊花は本気で思っているのだ。
そこも気になる部分ではあるのだが、今重要な部分はそこじゃない。
問題はなんで、『実力』じゃなく『境遇』なんて言葉が出たのかだ。
「単刀直入に聞く。リーネ、お前は遊花の過去について何か知ってる、または関係しているのか？お前が病室に入って来る前に言っていた心の準備が本当に出来ていなかった相手は、俺じゃなくて遊花だったんじゃないのか？」
「……やっぱり、遊騎君には隠し事とか出来ないのですね」
俺の問いかけにリーネが困ったような笑みを浮かべる。
それを見て、俺はため息を吐きながら口を開く。
「アホめ。お前が分かりやす過ぎるだけだ。隠したいならもう少し考えて喋れ。遊花と宝月は気づかなかったと思うが、闇は気づいてたぞ？」
「闇ちゃんにもバレてたのです？」
「視線で俺に話を聞いてやってくれって言ってたからな。アイツも自分の境遇的に必要以上に相手の過去に立ち入ろうとはしないし。自分で言うのもなんだが、例外は俺ぐらいのものだろう。気にしなくてもいいってのに、俺の両親の件はアイツのトラウマにもなってるみたいだからな」
「闇ちゃんにも気を使われちゃうなんて、お姉ちゃん失格なのです……」
そう言ってしょんぼりとするリーネを見て、俺はもう一度ため息を吐きながら、視線を窓の外に向けた。
「そう思うならさっさと話せ……姉だって言うんなら、少しは弟分や妹分に相談してもいいんじゃないか？」
「!!？……遊騎君……えへへ、遊騎君はやっぱり優しいのです」
そう言って少し嬉しそうに笑うリーネ。
リーネは少しの間、目を瞑ってから意を決したように話し始めた。
「遊騎君……遊騎君は遊花ちゃんの事故がいつ起こったのか知ってますか？」

「いつ？いや、そこまで詳しくは聞いてない。遊花はまだ精神的に不安定だし、変に過去を聞いて負担をかけたくはないからな。その言い方だと、リーネは知ってるのか？」
「……はいなのです。あの日は、リーネにとって絶対に忘れられない日なのです。だってーーーリーネにとっても、大切な人を2人も失うことになった日なのです」
「……えっ？」
リーネにとっても？
「1人は、遊騎君のことなのです」
「俺？」
「遊花ちゃんの両親が亡くなった日……それは、あのイカサマ疑惑があった大会の日なのです」
「⁉？なん……だって？」
俺がイカサマだと疑われた日と、遊花の両親が亡くなった日が同じ？
それは、嫌な偶然だった。
以前、闇と話したことがある栗原　遊花と結束　遊騎の人生が似ているという会話が思い返される。
ここまでくると、流石に疑ってしまう。
そんな偶然が本当に存在するのか？
衝撃を受けている俺に、リーネはさらに言葉を続ける。
「そしてもう1人は……リーネのママなのです」
「リーネの母さん⁉？お前、それは初耳だぞ⁉？なんで言わなかった‼？あの頃はそんな話全然してなかっただろ⁉？」
「遊騎君はあの頃かなり思い詰められてたので、話すべきじゃないと思ったのです。話しちゃったら、遊騎君は余計に塞ぎ込んじゃうと思ったのです。自分のせいでリーネに更に負担をかけてしまったって」
「それは……」
確かに、今ですらそう思ってしまったのだから、あの頃の俺でも確実にそう思っただろう。

そしてそう思ってしまった場合、あの頃の精神状態なら俺がどうなってしまったかは想像がつかない。
「あの日、リーネはいつも使ってた社用車に乗って遊騎君がいた会場に行こうとしたのです。だけど、少し準備をしている間にママがリーネがいつも使ってる社用車を使って他の会社との会議に出かけてしまったのです。そして、事故が起きてしまったのです」
そう言って、リーネは悲しそうに顔を伏せる。
「原因は社用車自体の整備不良だったみたいなのです。ママが走行させていたその車は、運転中にブレーキが効かなくなり歩道に乗り込み、1組の夫婦を巻き込んで一軒の空き家に突っ込んで、そのままママは帰らぬ人になってしまったのです」
「1組の夫婦……!?おい、まさかそれって……!?」
「……無くなった夫婦の名前は栗原　遊翼（くりはら　ゆうすけ）と栗原　愛花（くりはら　まいか）……遊花ちゃんのご両親なのです」
「っ!?」
「だから、リーネは遊花ちゃんの名前も顔も知ってたのです。お葬式の時に、リーネも直接謝罪に行ったですから。でも、遊花ちゃんはその時には完全に塞ぎ込んでずっと俯いてしまっていたので、多分リーネの顔を覚えていないのですが……だから、遊花ちゃんとリーネの関係は簡単な話なのです」
「じゃあリーネと遊花の関係って……」
俺の愕然とした声にリーネは顔を上げ、沈痛な表情でその口を開いた。
「遊花ちゃんとリーネの関係を表せる言葉はただ1つーーー被害者と……加害者の娘なのです」

第３３話　姫ＶＳ龍・始まる大会

★

「桜ちゃん‼？早く早く‼？」
「そんなに急がなくても、大会は全員が揃ってから始めるから大丈夫だって結束が言ってたでしょ。それに、結束達にも大会の準備があるんだから、急いでもどうしようもないじゃない」
「でもでも、待ちきれないんだもん‼？」
「……まあ、大会を怖がってるよりはマシよね。分かったから少しは待ちなさいって」
とある週末。
私はデュエルアカデミアに向かう通学路の途中でうずうずと身体を動かしながら呆れた表情を浮かべる桜ちゃんを待っていた。
今日は待ちに待った『Ｎａｔｕｒａｌ』で大会が開かれる日だ。
師匠が退院をして１週間が経った。
その間にも色々なことがあったが、ようやく師匠の体力も戻ってきて、参加者の人達の予定を調整した結果、この週末に大会が開かれることになった。
師匠の話によると大会は私達デュエルアカデミアの生徒や師匠の知り合いを入れて合計で１５名が参加する一発勝負のトーナメント形式で行うらしい。
人数が中途半端になるのでシード枠が出来てしまったのだが、師匠としては好都合だったらしく、シード枠は満場一致で闇先パイに決定したらしい。
理由についてはーーー
ーーーーーーー
『世界ランキング４位の人間と１回戦で当たるとか罰ゲームでしかないだろうが』

『闇ちゃんは間違いなく参加者の中で1番強くて当たった人の見せ場が無くなっちゃうので、シード枠があるならシード枠以外は認めてあげないのです‼?社長命令なのです‼?』
『……解せぬ。これも全てプロリーグって奴の仕業なんだ……やっぱり潰そう』
『八つ当たりに風評被害を加えるのは止めてやれよ』

ーーーーーーーー

ーーーという会話が師匠達の間であったとか。
実際、闇先パイの強さはまだまだ底が知れないので妥当だと私も思ってしまう。
闇先パイにはデュエルを教えて貰っているので、当然デュエルをする機会が何度もあるのだが、今だに闇先パイにはエクシーズ召喚とリンク召喚しか使わせることが出来てなくて、全部の召喚方法を見るのなんかいつになるのか分からないぐらいだ。
正直、大会で闇先パイに当たったらほぼ確実に負けると思う。
勿論、負けるつもりでデュエルするつもりは無いけど、実力差がそれぐらい圧倒的にあるということぐらいは理解しているつもりだ。
今回の大会は私の成長を師匠に見せるためのチャンスだし、流石に1回戦負けだけは控えたい。
私にだって、それぐらいの見栄はあるのだ。
「お、来た来た。おーい、遊花ー‼?桜ー‼?」
「さ、九石君。落ち着いて‼?」
「大地、ここは外。もう少し周りの迷惑を考えるべき」
「あ、大地君、天雷君、霊華さん‼?」
「あ、遊花、急に走らないでよ‼?……全く、相変わらず九石は無駄に元気よね。叫ばなくても聞こえてるわよ」
デュエルアカデミアの校門が見える位置まで来ると、大地君が私達に向かって手を振りながら声を上げているのが見えた。
その近くには霊華さんや他の人達の姿も見え、私は思わず校門に向

かって駆け出す。
校門に近づくと他の人達も私に近づいてきた。
「こんにちは、遊花さん。本日はお招きいただきありがとうございます」
「桜糀さん‼？いえいえ、こちらこそ桜糀さんに来てもらえて嬉しいです‼？」
「うふふ、今日はプロ決闘者の方々と見えることも出来ると聞きました。その上、遊花さんのお誘いですもの、断るわけがございませんわ」
そういって、桜糀さんが上品に笑う。
よかった……正直迷惑なんじゃ無いかと思ってたけど、喜んで貰えたみたい。
この前は不甲斐ない姿を見せちゃったから、今日は頑張らないと。
そう気合を入れ直していると、後ろから男の人に声をかけられる。
声をかけて来たのは喰代君だった。
「栗原、今日は大会への招待、感謝する。また何か機会があれば、このお礼はさせて貰おう」
「喰代君。いえ、私が誘いたいと思っただけだから気にしないで下さい。お礼というのであれば、またリベンジをさせていただければ、それでいいです」
「フッ、そうか。栗原程の決闘者の挑戦であれば、いつでも受けさせて貰おう」
喰代君はそういって口元を引き攣らせる。
……うん、笑ってるんだろうな、これ。
相変わらず喰代君は表情が固いみたい。
私は何となく分かるようになって来たけど……毎日喰代君よりも表情が動かない闇先パイと過ごしてるしね。
「これで全員揃ったのか？」
「揃ってるわよね、遊花。さあ、さっさといきましょ」
「あ、ちょっと待って、桜ちゃん‼？まだ全員揃ってないから‼？」
ここには用はないとばかりにすぐに『Ｎａｔｕｒａｌ』に移動しようとする桜ちゃんを引き止め、きょろきょろと辺りを見渡す。

すると、私達から少し離れた所で校門に持たれかかっている見覚えがあるドレッドヘアーが見えた。
私は笑顔を浮かべるとその人影に向けて駆け寄っていき、声をかけた。
「こんにちは、空閑君!!?・来てくれたんだね!!?・」
「……ああ、まあな」
そこにいたのは苦い表情を浮かべている空閑君だった。
何で苦い表情を浮かべているのか分からず、首を傾げながらも、私はもう1度辺りを見渡しながら空閑君に尋ねる。
「今日は取り巻きの子達は来てないの?・」
「アイツらがいると、またお前にちょっかいを出すだろうからな。そうなるとお前も困るだろう?・」
「別に気にしないのに。どうせなら、皆で楽しくデュエル出来た方がいいし」
「……栗原、お前、正気か?・俺様も含め、お前を馬鹿にし、大事なカードを奪った連中だぞ?・何故そんな俺様に笑顔を向けて簡単に許すことが出来る」
空閑君が正気を疑うような目でこちらを見る。
私は空閑君のそんな言葉にきょとんとしながらも答える。
「?・だって、馬鹿にされるのはいつものことだし、自分がまだまだだってことはよく知ってるもん。それに、カードは師匠が取り返してくれたし、空閑君だって理由も教えてくれて、ちゃんと謝ってくれたでしょ?・なら、私が怒る理由なんてもうないよ」
「……いかれてやがる」
「あはは、そうかも。でもでも、それで皆が笑顔でいられるなら、いかれてるのって、そんなにダメ?・」
そういって不思議そうに首を傾げる私を見て、空閑君は何かを考えはじめる。
そして深いため息を吐いて吐き捨てるように呟いた。
「……そうでもないな」
「えっ?・」

「そうでもないって言ったんだ。全く、俺様も焼きが回ったな……俺様も大概いかれてやがる……『Ｎａｔｕｒａｌ』って、店でやるんだろ？悪いが場所が分からん。案内を頼めるか」
「!!？うん!!？一緒に行こう!!？」
「おい!!？引っ張るんじゃねぇ!!？」
空閑君の言葉に嬉しくなって、私は空閑君の腕を引いて桜ちゃん達が待っている場所に駆け出した。
お父さん、お母さん、今日はいい日になりそうです!!？

ーーーーーーーー

☆

「とりあえず、大会の準備としてはこんなところか」
「島さん、大丈夫そう？」
「ああ、大丈夫だとも。流石に手際がいいね」
遊花と約束した大会の開催日。
俺と闇は一足先に『Ｎａｔｕｒａｌ』に来て、大会を開催する準備をしていた。
とは言ったものの、大会ルール自体の確認は済んでいるし、やることといえばデュエルスペースにある机や椅子を観戦しやすいように移動させたり、トーナメント表を張り出すぐらいではあるのだが。
手際よく準備を進めていく俺と闇を見て、島さんは感心したような声をあげるが、そんなに大したことはしていないので俺と闇は苦笑を浮かべるしかない。
「規模が少し大きくなったとはいえ、昔はいつもやってたからな」
「なんだか懐かしい。昔は遊騎と２人っきりの大会なんてざらだったから、よく２人で大会の準備をしてた。中学生の途中頃からは炎も増えたけど」
闇が昔を懐かしむように目を閉じる。
小学生の頃から俺と闇は『Ｎａｔｕｒａｌ』に通っていたわけだが、

その頃からこの店にはあまり決闘者が来ず、大会の時間になっても俺と闇の２人しかいないことなんてざらにあった。
　その頃は２人しかいなかったので、よく２人だけで大会を行ったりしていたものだ。
　まあ、内容は景品があるフリーデュエルみたいなものだったが、それでもその頃の俺達にとってはとても楽しみにしていたものだった。
「それからも基本的に３人での大会だったもんな。それ以外の決闘者が来てくれることなんて何回あったか……」
「ははは。もしかしたら『Ｎａｔｕｒａｌ』史上最大の大会かも知れないね」
「いや、島さん……それはちょっと笑いにくいよ」
「１５名程度の大会が最大規模なんて、悲しすぎる……」
　嬉しそうに笑う島さんを見て、俺と闇が微妙な表情になる。
　そんな時、店の扉が勢いよく開かれた。
　開かれた扉の方を見ると、そこには満面の笑みを浮かべるリーネの姿があった。
「おっはよーございまーすなのです‼？」
「頭の悪そうな挨拶をしながら入ってくるな、アホめ。近所迷惑だ」
「朝っぱらからアホって言われたのです⁉？」
　俺の辛辣な言葉にリーネが驚愕の表情を浮かべる。
　そんなリーネに呆れたような声をかけながら、リーネの後ろから２人の男性が姿を見せた。
「いや、今のは天羽が悪いだろう。今日な貸切になってるとはいえ、そこには配慮するべきだ」
「まあまあ、社長も悪気があったわけじゃないですからその辺にしておきましょうよ」
「不知火さん‼？それにお前は……治虫か？」
「お久しぶりです、結束さん」
　不知火さんと一緒に現れたのは黒髪をベリーショートにした温厚そうな顔つきをした青年。
　御影　治虫（みかげ　おさむ）。

『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の最後の１人でクラブスートを務める青年であり、デュエルアカデミア時代の俺と闇の後輩だ。
『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』を結成する直前、偶々デュエルアカデミアでデュエルする機会があり、その後しばらくリベンジのために付きまとわれ、その際にこの店にやってきてリーネに見定められた俺達の中では少し変わった経歴で加入した奴だ。
　性格は温厚でお人好しだが、少しお調子者の部分があり、そのせいでデュエルに負けることもしばしば。
　最も、それは俺が『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』を辞める前の話だから今どうなっているのかまでは分からないが……何となく変わってない気がするんだよな……闇の態度的に。
「治虫も来たんだ。忠告しとくけど、遊花に悪影響を与えたら問答無用でぶっ飛ばす」
「むっ、そんな言い方はないじゃないですか。遊花さんって言うのはウチの新しいメンバーになるかもしれない人なんでしょ？そんな人に悪影響なんて与えるわけないじゃないですか」
「そう言うのは少しは負け癖を治してから言うべき。フォローするこちらの身にもなれ」
「っ、言わせておけば……今日こそ絶対に勝ってみせる」
「私に勝つなんて１万年早い。そして今回の大会の趣旨は私達がデュエルすることじゃない。それすら理解出来ていない奴が私に勝つなんて笑わせる」
　そういって闇と治虫の間に火花が散る。
『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の中で、この２人だけは相性が悪い。
　元々、治虫が俺に付き纏っていたことに対して闇がいい印象を持っていなかったのだが、そのうえ治虫のお調子者の部分がどうも根が真面目な闇とは性に合わないらしく、会うたびに喧嘩をしている気がする。
　最初は仲裁をしていたのだが何度言っても止めようとしないので俺はもう止めるのを諦めた。
　こういうのは好きなようにやらせていたらいつのまにか解決した

りするものだし、止めるのも俺よりも適任な奴がいる。
「はいはい、そこまでなのです‼?皆で楽しむ日に喧嘩なんかしちゃいけないのです‼?」
「むっ……」
「でも……」
「でもも何もないのです‼?今日は2人とも仲良くするのです‼?社長命令なのです‼?言うこと聞かないならリーネも本気で怒っちゃうのです‼?」
その言葉に闇と治虫がビクッと身体を震わせる。
こんなふざけた態度のリーネだが、怒ると物凄く怖い。
俺も1度リーネが本気で怒った姿を見たことがあるが、それ以来『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の中でリーネを怒らせることはタブーになった程だ。
リーネのそんな態度に闇と治虫は少し顔を青くしながらおずおずと引き退った。
「今日のところはこの辺にしとく」
「そうですね、流石に社長を怒らせるようなことだけはしたくないです」
「はい、2人共お利口さんなのです‼?いい子いい子してあげるのです‼?」
そう言いながらリーネが2人の頭を優しく撫でるが、2人の表情は引き攣ったままだ。
きっと今の2人は草食動物が住処から出ようとしたら、入り口で肉食動物が寝ていたような気持ちなのだろう。
まあ、自業自得なので助けないが。
俺と同じ気持ちなのか、そんな3人をよそに不知火さんが俺に話しかけてくる。
その目はアレとは関わらないでおこうと雄弁に語っていた。
「それで、噂の結束の弟子はまだ来ていないのか?」
「遊花は今日参加するデュエルアカデミア生を迎えに行ってから来るので、もうそろそろ来ると思います。俺達は大会の準備があったの

で」
「そうだったのか。それならば店先に出ていなくていいのか？大会があることは知っていても、今日は貸切にしているから扉には休業中の札をかけてるだろう？」
「やべっ、忘れてた!!?」
不知火さんの指摘に俺は入り口の扉を見ると、そこには既に島さんが立っていた。
そして島さんは店先で何かを見て、笑っている。
それを見て、俺は表情を崩す。
その表情で、島さんが見ている光景には想像がついたから……
しばらくすると島さんは外にいた誰かと話をすると店の中に入ってくる。
店に入ってくる島さんの後ろには、俺の予想通り遊花達の姿があった。
遊花は店の中に入ってくるなり、俺の姿を見つけると笑顔を浮かべて俺に駆け寄ってきた。
「師匠!!?私が誘った人達を連れてきました!!?」
「おう。まあ、まだ来てない奴がいるから悪いけどもう少しだけ待ってくれ」
「はい!!?」
「結束、この子がお前の弟子か？」
「はい。遊花、紹介しておくな。この人は不知火　炎さん。闇と同じ『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバーだ」
「『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の方ですか!!?はじめまして、師匠の弟子の栗原　遊花です!!?今日はよろしくお願いします!!?」
「うん、元気が良くていいな。不知火　炎だ。君の話は冬城から聞いている。長い付き合いになりそうだ、こちらこそよろしく頼む」
「はい!!?」
不知火さんが笑顔で手を差し出し、遊花も嬉しそうにその手を握り握手をする。
……よかった、不知火さんなら遊花の緊張も解してくれると思っ

たが、その必要がないぐらい遊花も大会を楽しみにしてくれているみたいだ。
今日の大会は遊花のトラウマを軽減させれるいいチャンスだ。
これ以上の条件での大会は恐らくもう作れないだろう。
だからこそ、今日の大会は遊花にとって楽しいものであって欲しい。
……だが、少しだけ懸念していることもある。
俺はちらりとまだ2人の頭を撫でているリーネの方を見る。
この前聞いた遊花とリーネの関係。
今のところ気付かれてはいないみたいだが、気づいてしまった時、遊花がどういう反応を示すのか想像がつかない。
遊花は今までも家族に対することでトラウマを再発させていた。
今回の件は特にその事故の根幹に関わる部分だ。
それだけに確実に遊花はトラウマを再発させるだろう。
だが、それを隠し続けたまま遊花を『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に誘うのもまた違うと思ってしまう。
この考えは俺のエゴだとは思う……それでも、俺は出来ることなら2人共に救いがある結末になってほしいと思う。
俺を助けてくれたリーネと、俺が助けたい思った遊花……どちらも俺にとっては大切な存在だ。
だからこそ、まだ何をすればいいかは分からないが、俺は2人のために自分に出来ることはしたいと思う。
皆が笑っていられるなら、それが1番いい結末なのだから。
「師匠？どうかしたんですか？」
「っ、悪い悪い。大会のことで少し考え事をな」
「なあ、遊花。その人が言ってた遊花の師匠なのか？」
「あ、大地君。うん、私の師匠の結束　遊騎さんだよ」
俺を見て首を傾げる遊花に考えていたことを誤魔化していると、そんな遊花に声をかける人物がいた。
遊花に声をかけたのは大地君と呼ばれた茶髪の青年。
その名前は入院中に遊花から聞いたことがある。

確か、遊花と何回デュエルをしても引き分けになってしまう青年だったな。
「結束　遊騎だ。弟子の遊花が世話になってるな」
「あ、えっと、九石大地だ、です。遊花とは何度かデュエルしててさー……です」
「いやお前、敬語苦手過ぎだろ。別に敬語じゃなくていいぞ？俺はそんなに大した人間じゃないからな」
「……そう言ってくれると助かるぜ、いやー遊花の師匠だけあって話が分かる人でよかったぜ。遊花の師匠なんだからスッゲー強いんだろ？俺、今からワクワクが止まらなくてさ」
「もう、大地君!!?……ごめんなさい、師匠」
言い辛そうにしていた敬語を止め、爽やかな笑顔を浮かべながら話しかけてくる大地を見て、遊花が恥ずかしそうに頬を赤くしながら謝ってくる。
まあ、この時期だと敬語が使えなくても珍しくはないし、俺としても特に気にしているわけじゃないからいいだろう。
「そうか。俺も君の話は遊花から聞いてるよ。主催者ではあるが、俺も大会には参加する予定だから大会で当たることを楽しみにしてるよ」
「おう!!?く～今から楽しみだぜ!!?」
そう言ってワクワクを抑えきれないという風に笑顔を浮かべる大地を見て、思わず笑顔が溢れる。
気持ちのいい青年だ。
純粋にデュエルを楽しみにしているのがこちらにも伝わってくる。
これが次世代の決闘者か……遊花といい宝月といい、デュエル界の未来は明るそうだな。
そんなことを思っていると、店の扉が勢いよく開き、何かが店の中に入ってくる。
俺達がそちらを見るとそこにいたのは黒いスーツに白いマントとシルクハットをつけ、青いベネチアンマスクをつけた怪しい人物。
……うん、大体正体に察しはついた。

というかこんなチグハグで突拍子のないことをやるのはアイツしかいない。
その人物は全員の視線が自分に向いたことを確認すると、マスクを投げ捨てマントを翻しながら楽しそうに名乗りを上げた。
「会場を彩る神秘のベール!!?純情可憐な笑顔の奇術師!!?問答無用のエンターテイナー!!?雨夜美傘、ここに参上!!?観客のハートは、私がいただき!!?」
そういってドヤ顔で仁王立ちの決めポーズをとる美傘。
ポカンとするデュエルアカデミア生一同と、予想出来ていたからこそ頭を抱えているプロ決闘者数名。
そんな中、とりあえず俺は美傘に近づき、その額に勢いよくチョップをくらわした。
「あいた!!?」
「い・い・か・げ・ん・に・し・ろ!!?」
「あいた!!?あぅ!!?ちょ!!?ストップ!!?タンマ!!?タンマです!!?そんなに、叩かないで!!?」
リズムよくチョップを入れていくと、美傘は慌てた様子で涙目になりながら、額を押さえる。
そんな美傘に俺は引き攣った笑顔を浮かべながら、握り拳を作って美傘の両こめかみに拳の先端を挟み込ませ、ネジ込むように圧迫した。
「反省してないからやってんだ!!?前にも突拍子もないことは止めろって話をしたばかりだろうが!!?この考え無しの大馬鹿野郎が〜〜〜!!?」
「あぅ〜!!?痛い、超痛いです!!?具体的に言うと頭がぺちゃんこに潰れそうなぐらい、あいたたたた!!?遊騎さん!!?ギブ!!?ギブです!!?私が悪うございました!!?勘弁してくだせぇ〜〜〜!!?」
美傘は泣き叫びながら必死に俺の腕をタップするので、仕方なく離してやると頭を押さえてその場に崩れ落ちる。
それを見て俺はため息を吐きながら、しゃがみ込み、美傘の顔を覗き込む。

「どうしてお前は結果が分かってるのにそういう突拍子もないことをするかねー」
「うぅ～だって、絶対驚いてくれると思ったんだもん……」
「方向性を間違えてるって言ってんだよ。お前のデュエルは十分他人を驚かせれるんだからそっちを主にして、普段のはもう少し抑えろって」
「うぅ～善処します……」
「それは実行しない時の言葉なんだよな……」
　俺がもう1度深いため息を吐いていると、遊花が困惑した表情で近づいてくる。
「あ、あの、師匠……そちらの方は……？」
「ああ～こんなんでも一応参加者だ。他の奴らも悪いな、驚かせて」
「こんなのって言うのは酷い……って、師匠⁉？今、遊騎さんのことを師匠って言いました⁉？」
「えっ、あの、はい……言いましたけど……？」
　遊花の言葉を聞き、美傘がガバッと顔をあげ、キラキラとした目を遊花に向けながら勢いよく立ち上がって、遊花の手を握る。
　……立ち直り早いな、おい。
「うわぁ～それじゃあこの子が噂のお弟子さんなんですね‼？初めまして、エンタメデュエリストの雨夜美傘です‼？」
「えっと……栗原　遊花、です」
「遊花ちゃんですね‼？うぅ～可愛い‼？これが、これが妹弟子‼？良い‼？凄く良いよ‼？」
「い、妹弟子ですか？」
「だから、お前を弟子にした覚えはないと言ってるだろうが」
「ええ～つれないですよ～あんなにいっぱいアドバイスをくれたのに～」
「うるさい。お前が何と言おうが俺の弟子は遊花だけだ」
「し、師匠……」
　俺の言葉に美傘は不満そうに頬を膨らませ、遊花は嬉しそうに頬を染める。

他のデュエルアカデミア生もなんだかざわざわし始めているし、このままじゃ収集がつかなくなってしまう。
そこで俺は忘れかけていた美傘の役割を思い出す。
「というか、美傘。お前、知り合いを参加者として連れてくるって言ってただろうが。そいつはどうしたんだよ？」
「えっ？多分外にいますよ？」
「ならさっさと呼んでやれよ‼？なんで放置してきたんだよ⁉？」
「だって、一緒に入るとインパクトが……」
「それが理由かよ⁉？なおさら早く呼んでこい‼？」
「はーい。それじゃあ入っていいですよー」
「ホンマ？それじゃあ失礼して……って、入りにくいっちゅうねん‼？盛り上げてくる言うてたのに、自分なんちゅう空気を作ってくれとるん⁉？」
「っ‼？お前は……‼？」
そうノリツッコミをしながら入ってきたのは染めた色が落ちかけて地毛の黒色が見えている出来損ないの金髪をセミロングにしたエセ関西弁の男。
その男は俺を見るとニヤリと笑った。
「よう、遊騎。久しぶりやないか」
「お前は……誰だっけ？」
「って、覚えてへんのかい‼？自分、普通ライバルの顔を忘れるか⁉？」
「……冗談だ。久しぶりだな」
「なんや、心臓に悪いわぁ……ホンマに冗談なんか？今なんか不自然な間があらへんかった？」
「……気のせいだ」
「なあ、なんで今間が伸びたん？ちゃんとワイの目を見てワイの名前を言うてくれへんか、なあ？」
男の言葉に俺は必死に目を逸らしながら、自分の記憶を手繰り寄せる。
確かこの男の名前は霧生　竜河（きりゅう　りゅうが）。

プロリーグ時代に何度かデュエルしたことがあるプロ決闘者だ。
性格は……直情的で好戦的な馬鹿だったということは覚えている。
プロリーグの試合で初めてデュエルした際に俺が勝利して以来目の敵にするように何かあるとすぐに突っかかってきていたと思う。
エセ関西弁なのは確かキャラ作りとか言ってたな……何でも昔に漫画で読んだお気に入りの決闘者が関西弁だったから真似してそうなったとか……まあ、本人が気に入ってるなら何も言うまい。
所属チームは『Ｒａｕｈ（ラオ）』
ドイツ語で荒くれ者を意味するチームで、パワフルな戦術を使う決闘者が多く、世界ランキングでも結構上位に食い込んでいるチームだったハズだ。
……よし、辛うじて思い出した。
「……冗談に決まってるだろ、竜河」
「……まあええわ、何や意外と元気そうやないか。プロ決闘者辞めて落ちぶれてるかと思うてたけど、目は昔と全然変わっとらん。心配して損した気分や」
そういって竜河は面白そうに笑う。
そんな竜河の態度に俺は首を傾げる。
「……俺はイカサマしたって理由で辞めることになったのに、俺を疑っていないのか？」
「アホぬかせ。ワイは自分と何度もデュエルしたことがあるんやぞ？自分がそんなことする決闘者やないことぐらい、嫌って程理解しとるわ。イカサマなんかに頼った奴に負ける程、ワイも落ちぶれとるつもりはあらへんぞ」
そういって、竜河が真剣な表情で俺を睨む。
……どうやら無用な心配だったみたいだな。
よく考えれば、竜河は美傘が誘った決闘者だ。
その誘いに乗ってる時点で、俺を疑ってる可能性なんて低いか。
「覚悟しとれよ、遊騎。ワイは今日こそお前を倒しに来たんやからな‼？」

「……当たるかどうかすら分からないのにそう言われても困るが……まあ当たった時はこちらも全力でいかせて貰うだけだ」
「上等や‼?・自分がおらんなって最近はあまりおもろいデュエルができへんかったけど、今日は久しぶりに魂が滾る程おもろいデュエルができそうや‼?・」
そういって竜河が好戦的な笑みを浮かべる。
当たると決まったわけでもないのに、気が早い奴だ。
……だけど、こういう馬鹿は嫌いじゃない。
遊花の成長を促し、確認するための大会ではあるが、俺にとっても重要な、楽しい大会になりそうだ。
「……遊騎君、人数も揃ったようだし、そろそろ大会を始めるかい?」
「そうですね……それじゃあ、注目‼?・これより大会を開始する‼?」
俺のその言葉に周りの視線が一気にこちらに向く。
こういうのは慣れていないがやれるだけやってみるしかないよな。
「まずは今日の大会に参加してくれたことを感謝する。俺は今回の大会の参加者であり主催者の結束　遊騎。多分、名前を知らない奴はいないよな?主に悪名ではあると思うが……」
そんな俺の言葉に一部のデュエルアカデミア生が反応する。
多分、今反応した子達は俺の名前を聞かされてなかったんだろうな。
遊花は俺のことを師匠としか呼ばないしな。
「今日の大会は言うなれば俺が弟子の実力を見たいがために開いた我が儘によるものだ。そんな大会にデュエルアカデミア生もプロ決闘者もこんなにも集まるとは正直思っていなかった。心から感謝を」
そう言って俺は1度頭を下げて言葉を続ける。
「今日の大会でデュエルアカデミア生はプロの世界を、プロ決闘者はこれからのデュエル界を担う次世代の決闘者達を直に見るチャンスだ。大会が完全に終わるまではフリーデュエルはなるべく勘弁して欲しいが、積極的に交流してくれて構わない。ただし、一部のプロ決

闘者はくれぐれも自重するように‼?次世代の子達にトラウマを残すようなことだけは止めてくれよ?」
俺がそういうと『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバーが一斉に目を逸らした。
……本当に分かってるのか、コイツら?
「それじゃあ、長ったらしい話はここら辺にして、組み合わせを決めていきたいと思う。本日の参加者は俺を含めて１５名だが、悪いがシード枠は先に決めてある。冬城　闇……『氷の女王』と言った方が分かりやすいかも知れないが、現世界ランキング４位の劇物が混ざってる。流石にそんな奴を１回戦に混ぜるわけにはいかないからシードに隔離している。理解してほしい」
そんな俺の言葉にプロ決闘者勢が当たり前だというように頷き、闇は「……解せぬ」と呟いた。
いや、当然の対応だからな?
そして再び騒つくデュエルアカデミア生達。
流石に現世界ランキング４位なんてものがこんなに小さな大会に混ざってるとは思ってもいなかったんだろうな。
闇は大会中は服装もゴスロリを着せられてるから普段とイメージが全然違うし、外見だけだと小学生にしか見えないし。
遊花もそこは伝えなかったのだろう。
伝えたとしても信じて貰えるか怪しいものだしな。
「それじゃあ誰からでもいいからカウンターにおいてあるカードを引いて、そこに書かれてある数字と名前をカウンターにいる島さんに言ってくれ。その番号を張り出してあるトーナメント表に書いていくからな」
俺の言葉に参加者達がカウンターに集まりカードを引いていき、番号を島さんに告げていき、それを俺がトーナメント表に書き写していく。
全員がカードを引き終わるのを確認すると、残ったカードを俺のものとしてトーナメント表に書き加えた。
「よし、それじゃあ組み合わせを発表していくぞ?まずはＡブロック、

1回戦『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』所属、天羽リーネＶＳデュエルアカデミア所属、喰代　影竜」
「わわっ、最初からリーネの出番なのです‼？張り切っていくのです‼？」
「最初からプロ決闘者が相手か……自分の実力がどこまでプロに通用するのか、試すチャンスだな」

1回戦
天羽リーネ
ＶＳ
喰代　影竜

「2回戦、デュエルアカデミア所属、宝月　桜ＶＳ『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』所属、不知火　炎」
「いきなり闇の同僚が相手……全力でいかないとすぐに負けちゃいそうね」
「宝月　桜……冬城が言っていた栗原の友人だな。油断は出来んか」

2回戦
宝月　桜
ＶＳ
不知火　炎

「3回戦、デュエルアカデミア所属、栗原　遊花ＶＳ『Ｒａｕｈ』所属、霧生　竜河」
「いきなりプロ決闘者の人が相手……師匠の手前、情けないデュエルは見せられません」
「なんや初っ端はデュエルアカデミア生かいな。まあ、肩慣らしには丁度ええかも知れへんな」

３回戦
栗原　遊花
ＶＳ
霧生　竜河

「４回戦、無所属、雨夜　美傘ＶＳデュエルアカデミア所属、御子神霊華」
「デュエルアカデミア生が相手か～これはたくさん驚いて貰うチャンスだね‼？」
「さっきの奇抜な人が相手……面白いことになりそうね」

４回戦
雨夜　美傘
ＶＳ
御子神　霊華

「ここからがＢブロックだ。第５試合、無所属、結束　遊騎ＶＳデュエルアカデミア所属、桜糀　紅葉……Ｂブロックはいきなり俺の出番なのか。遊花の後に情けないデュエルは出来ないな」
「あの御仁とのデュエルですね……手間が省けて丁度良いかも知れません」

第５試合
結束　遊騎
ＶＳ
桜糀　紅葉

「第６試合、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』所属、御影　治虫ＶＳデュエルアカデミア所属、九石　大地」
「デュエルアカデミア生が相手か……次は結束さんとデュエル出来そうだな」

「く～最初からプロ決闘者が相手か!!?・６試合目まで待ちきれねぇよ!!?・早くデュエルしてぇ!!?・」

第６試合
御影　治虫
ＶＳ
九石　大地

「第７試合、デュエルアカデミア所属、天雷　終夜ＶＳデュエルアカデミア所属、空閑　騨」
「空閑君とのデュエル……頑張ろう」
「天雷が相手か……プロ決闘者とやりあえなかったのが残念だが、ここらで雪辱を晴らすのには丁度いいな」

第７試合
天雷　終夜
ＶＳ
空閑　騨

「そしてＢブロックのこの後に闇のシード枠がある」
「むぅ……退屈過ぎる」
「我慢しろ。試合はデュエルスペースの関係と、プロ決闘者勢から他の試合を観戦したいという希望があった為、１試合ずつ行っていき、ルールは通常のデュエルと同じで、新マスタールールで禁止・制限は最新のものを使い、ＬＰ８０００の１発勝負だ。準決勝に入るところでお昼休憩を挟むのも覚えておいてくれ。それじゃあ試合はお互いの準備が出来次第はじめていく。各自試合を観戦しながらも、各々の準備は怠らないように。他に何か質問はーーー」
「はい!!?・」
質問を受けようとすると美傘が勢いよく手をあげる。
……正直まともな質問がこない気がするからあまり聞きたくは

ないのだが、他に質問するような人もいなさそうなので仕方なく美傘に応える。
「……美傘」
「この大会の名前を教えてください‼?」
「……そんなもの考えてないっての」
「ええ～せっかくだから考えてくださいよ‼?重要な大会って、やっぱり名前があった方が映えるじゃないですか」
「……お前、放送しようとしてないか?言っとくが放送は却下だぞ」
「……ナ、ナンノコトヤラ」
「こんな小規模な店で世界ランキング４位を含めた世界有数のプロ決闘者が罪人である俺を含めたデュエルアカデミア生とデュエルしてるような映像が流れてみろ。街中で大混乱が起こるし、参加者にどんな厄介事がやってくるか分からないんだぞ?当然却下だ。俺は主催者としてここにいる全員を守る義務がある」
美傘が俺の言葉を聞いてハッとした後にしょんぼりとする。
よかった、大会前に釘を刺すことができて。
美傘は後先考えない行動ばかりするから、他の被害とか思いつかなかったんだろう。
こういう危なっかしいところがあるから、美傘はほっておけないのだ。
これでこの質問は終わりかと思ったが、意外なところから声が上がった。
「だが、結束。放送云々はともかく、大会名はしっかりと決めた方がいいんじゃないか?」
「⁉?不知火さん⁉?」
「そうなのです‼?この大会はそれだけ重要な大会になるのです‼?遊騎君は、弟子の第一歩を踏み出すための大会を、そんな適当に進める気なのですか?」
「リーネまで……分かった。ちょっと考えるから待ってくれ」
リーネと不知火さんの言葉に、俺は真剣に大会名を考えはじめる。
この大会は公式の記録に残るようなものではないし、むしろメン

バー的には残すわけにはいかない大会だ。
だからこそ、ささやかなもので、大層な大会名なんてない方がいいと思っていた。
でも、それでも遊花のこれからに関わる大切な大会なのだ。
例えどんな記録にも残らないとしても、遊花の記憶に残る大事なものになるのなら、確かに名前は考えておくべきだったのかも知れない。
俺はしばらく考えて、1つの言葉を口にした。
「……『Ｂｅｓｃｈｅｉｄｅｎ（ベシャイデン）』……ドイツ語で、ささやかな、とか、謙虚って意味だ」
「ささやかな……です？」
「元々、この大会は不安がるものは何もないささやかな大会にしようって趣旨で生まれたんだ。そんな大会に大層な名前なんて必要ない。この大会ができたのは、今こうして参加してくれた奴らのささやかな思いのおかげなんだからさ」
「成る程、なのです。うん、リーネは凄くいいと思うのです‼？」
「社長に同じく。私も、その名前がちょうどいいと思う」
「わ、私も、それがいいです‼？」
リーネと闇、そして遊花の言葉に周りも納得したように頷く。
それを確認してから俺は改めて大会の開始を宣言する。
「それじゃあ改めて、大会、『Ｂｅｓｃｈｅｉｄｅｎ』スタートだ‼？第1試合から準備が出来次第スタートする。全員、精一杯のデュエルをし、全力で楽しもう‼？」
『お～‼？』
こうして、俺達のささやかな大会は始まった。

ーーーーーーー

○

「遊騎君、リーネは準備万端なのです‼？」

「こちらもいつでも始められる」
「よし、双方準備が出来たみたいだな。これより、１回戦、第１試合。天羽リーネＶＳ喰代　影竜の試合を開始する」
　残りの参加者が観戦を始める中、参加者の中央でリーネと影竜はお互いにデュエルディスクを構える。
　デュエルディスクを構え終えると、リーネは笑顔で影竜に声をかけた。
「えっと、影竜君であってたですよね？リーネはリーネと言うのです。今回はよろしくお願いするのです‼？」
「こちらこそ、まさか初戦から世界ランキング２位のチームのメンバーと戦えるとは思いませんでした。今回は胸をお借りさせていただきます、天羽プロ」
「むぅ、固苦しいのです。でもでも、目は全然胸を借りるなんて言っていないので、許してあげるのです‼？」
　言葉では謙虚ながらも闘志を絶やさない影竜を見て、リーネはニコニコとした笑顔を見せながらも、少し申し訳なさそうな表情を浮かべた。
「最初に謝っておくのです。リーネは手加減をするのがすっごく苦手なのです。なので、すぐに終わっちゃったらごめんなさいなのです」
「っ……」
　リーネの言葉から溢れてくる圧倒的な自信と気迫に、影竜は厳しい表情を浮かべる。
　影竜は気圧されそうになる自分を振り払うように、声をあげた。
「デュエルアカデミア所属、喰代　影竜、挑ませていただく‼？」
「『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』所属、天羽リーネ、出撃なのです‼？」
『決闘‼？』

リーネ　ＬＰ８０００
影竜　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は貰う。速攻魔法、超再生能力を発動。このカードを発動したターンのエンドフェイズ、自分の手札から捨てられた及び自分の手札・フィールドからリリースされたドラゴン族モンスターの数だけ自分はデッキからドローする」
「んードラゴン族デッキなら止めておくのです。手札から灰流うららの効果発動なのです‼?デッキからカードを手札に加える効果、デッキからモンスターを特殊召喚する効果、デッキからカードを墓地へ送る効果、そのいずれかの効果を含む魔法・罠・モンスターの効果が発動した時、このカードを手札から捨ててその効果を無効にするのです‼?」
「っ、手札誘発のモンスターか……」
リーネの手札から動物の耳が生えた着物の少女が現れ、その少女が手をかざすと桜吹雪が起こり、超再生能力が消滅した。
「なら次だ‼?手札のエクリプスワイバーンを捨て、魔法カード、ドラゴン目覚めの旋律を発動。デッキから攻撃力が３０００以上で守備力が２５００以下のドラゴン族モンスター2体まで手札に加える。俺はデッキから闇黒の魔王ディアボロスとダークホルスドラゴンを手札に加える。墓地に送られたエクリプスワイバーンの効果発動、デッキから光属性か闇属性のドラゴン族・レベル7以上のモンスター1体を除外する。俺はレッドアイズダークネスメタルドラゴンを除外する‼?さらに手札の闇黒の魔王ディアボロスを捨てて魔法カード、トレードイン。手札のレベル8モンスター1体を捨てることデッキから2枚ドローする」
「やっぱりドラゴン族デッキは1度動きはじめるとよく動くのです」
「さらに魔法カード、成金ゴブリン。デッキから1枚ドローし、相手は１０００ライフポイント回復する」

リーネ　ＬＰ８０００→９０００

「魔法カード、竜の霊廟をデッキからドラゴン族モンスター1体を墓

地へ送り、この効果で墓地へ送られたモンスターがドラゴン族の通常モンスターだった場合、さらにデッキからドラゴン族モンスター1体を墓地へ送る事ができる。俺はダークストームドラゴンを墓地に送り、ダークストームドラゴンはデュアルモンスター。墓地では通常モンスターのため、さらに亡龍の戦慄ーデストルドーを墓地に送る。カードを2枚伏せてターンエンドです」

リーネ　ＬＰ９０００　手札４
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　▲　▲　ー　ー　ー　ー　ー　ー
影竜　ＬＰ８０００　手札１

「リーネのターン、ドローなのです!!?影竜君が動いてくれたので、リーネも思いっきり動けそうなのです!!?魔法カード、隣の芝刈り発動なのです!!?」
「隣の芝刈り?」
聞き覚えがないカード名に影竜は首を傾げる。
そんな影竜にリーネはニコッと笑いながら効果を説明する。
「このカードは自分のデッキの枚数が相手よりも多い場合に発動できるのです。その効果はデッキの枚数が相手と同じになるように、自分のデッキの上からカードを墓地へ送るというものなのです!!?」
「っ、大量の墓地肥やしカードか!!?」
「リーネのデッキは６０枚なので、一気に墓地肥やしができるのですよ。さあ、影竜君の残りのデッキ枚数を教えて欲しいのです」
「っ、俺のデッキ枚数は２７枚です……」
「リーネは５４枚なので、その差分の２７枚のカードを墓地に送らせて貰うのです」
リーネのデッキが一気に半分墓地に送られ、影竜は苦い表情を浮か

べる。
　しかし、リーネはただ墓地を肥やしただけではなかった。
「さらに墓地に送られた2枚の妖刀竹光の効果発動なのです!!?」
「っ、墓地起動効果のカードも落ちたか……」
「デッキから妖刀竹光以外の竹光カードをデッキから手札に加えるのです。リーネがデッキから手札に加えるのは黄金色の竹光と燃え竹光なのです。そしてリーネの相棒の登場なのです!!?戦場を舞う始まりの戦乙女!!?閃刀姫―レイ!!?」

〈閃刀姫―レイ〉☆4　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１５００

　リーネの前に現れたのは刀を持ち、制服を着た白髪の少女。
「そのカードが貴方の相棒ですか……」
「リーネのデッキはこの子から始まるのです。それじゃあ早速行っちゃうのですよ!!?」
　そういってリーネが正面に手をかざす。
「刀術式起動なのです!!?戦場へと続くサーキット!!?」
「っ、リンク召喚か!!?」
　リーネが正面に手をかざし、巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は炎属性以外の閃刀姫モンスター1体!!?私は閃刀姫―レイをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
　レイがサーキットに吸い込まれる。
　そしてサーキットが輝くとサーキットの中から真っ赤な鎧を身に纏った白髪の少女が現れた。
「リンク召喚!!?業火の如き閃滅の刃なのです!!?リンク1!!?閃刀姫―カガリ!!?」

〈閃刀姫―カガリ〉ＬＩＮＫ１　機械族　炎属性
ＡＴＫ１５００　↖?

「閃刀姫―カガリの効果発動!!?アルヴィト!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、自分の墓地の閃刀魔法カード1枚を対象としてそのカードを手札に加えるのです!!?リーネは墓地から閃刀起動―エンゲージを手札に加えるのです!!?」
「成る程……貴方のデッキは閃刀というカードが主軸になっているのか」
「まだまだこれからなのですよ!!?魔法カード、閃刀起動―エンゲージなのです!!?自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しない場合に発動でき、デッキから閃刀起動―エンゲージ以外の閃刀カード1枚を手札に加え、その後、自分の墓地に魔法カードが3枚以上存在する場合、自分はデッキから1枚ドローできるのです!!?リーネの墓地には勿論3枚以上魔法カードがあるので後の効果も発動するのですよ」
「!!?サーチ効果に合わせてドローまでするのか!!?」
「リーネはデッキから閃刀機―イーグルブースターを手札に加えてさらに1枚ドローなのです!!?いいものを引いたのです!!?まずは永続魔法、燃え竹光を発動なのです!!?さらに装備魔法、妖刀竹光を閃刀姫―カガリに装備するのです!!?」
「さっきの墓地起動のカード……3枚目を引いていたか……」
フィールドに燃え盛る竹刀と禍々しいオーラを纏った竹刀が現れ、禍々しいオーラを纏った竹刀をカガリが持つ。
すると、燃え盛っていた竹刀から炎が舞い上がった。
「この瞬間、永続魔法、燃え竹光の効果発動なのです!!?このカードが魔法&罠ゾーンに存在する状態で自分が竹光カードを発動した場合、次の相手のメインフェイズ1をスキップするのです!!?」
「何っ!?」
燃え竹光から舞い上がった炎が影竜を囲むように辺りに広がった。
それを見て、影竜は苦い表情をさらに濃くした。
「まだ終わってないのですよ。永続魔法、端末世界を発動なのです!!?自分メインフェイズ1にのみこのカードを発動でき、このカードが魔法&罠ゾーンに存在する限り、お互いのメインフェイズ2をスキッ

プするのです!!?」
「っ!!?つまり……」
「次の影竜君のターンはドローフェイズ、スタンバイフェイズ、バトルフェイズ、エンドフェイズのみになるのです。影竜君がこの状況を突破してこれるのか、試させて貰うのです」
オレンジ色の球体が現れ、リーネと影竜を包む。
メインフェイズを封じられたことで影竜は表情をさらに厳しいものに変えた。
「そして突破するのにもそんなに時間をあげるつもりはないのです!!?閃刀姫―カガリの永続効果!!?ヒルド!!?このカードの攻撃力は自分の墓地の魔法カードの数×１００ポイントアップするのです!!?」
「何だと!!?」
「今のリーネの墓地には隣の芝刈りで２８枚の魔法カードがあるのです!!?なので攻撃力は……」

閃刀姫―カガリ
ＡＴＫ１５００→４３００

「攻撃力４３００だと!!?」
「カードを２枚伏せてバトルフェイズなのです!!?閃刀姫―カガリでダイレクトアタック!!?一刀三礼!!?」
「ぐっ……」

影竜　ＬＰ８０００→３７００

カガリが妖刀竹光を使い、影竜の胴を打ちつけ、影竜のライフが一気に削られる。
「リーネはこれでターンエンドなのです」
「ならば、エンドフェイズ!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?活路への希望!!?」

「‼?・成る程、なのです。文字通り、まだまだ希望は捨ててないみたいで安心したのです」
「自分のＬＰが相手より１０００以上少ない場合、１０００ＬＰを払って発動‼?・」

影竜　ＬＰ３７００→２７００

「お互いのＬＰの差２０００につき1枚、自分はデッキからドローする‼?・俺のライフは２７００‼?・天羽プロは９０００‼?・よって3枚のカードをドローする‼?・」
影竜が一気に手札を増やし、リーネが嬉しそうな笑みを浮かべる。
影竜は増えた手札を見て、口を引き攣らせた。

リーネ　ＬＰ９０００　手札２
▲△△△▲　ー
ーーーーー
☆　ー
ーーーーー
ーーー▲ー　ー
影竜　ＬＰ２７００　手札４

「俺のターン、ドロー‼?・」
「燃え竹光の効果でメインフェイズ1はスキップなのです‼?・」
「構わない‼?・このままバトルフェイズに入る。速攻魔法、手札断殺を発動‼?・お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送り、その後、それぞれデッキから2枚ドローする‼?・」
「黄金色の竹光も使っておくべきだったですかね……だけど、墓地に魔法が増えたので閃刀姫―カガリの攻撃力がさらに上がるのです」

閃刀姫―カガリ
ＡＴＫ４３００→４５００

「攻撃力が上がるのはこの際構わない‼?リバースカードオープン‼?罠発動‼?戦線復帰‼?自分の墓地のモンスター1体を守備表示で特殊召喚する‼?俺は墓地からアークブレイブドラゴンを特殊召喚だ‼?」

〈アークブレイブドラゴン〉☆7　ドラゴン族　光属性
ＤＥＦ２０００

影竜の前に現れたのは白い身体に金の模様が入ったドラゴン。
「アークブレイブドラゴンの効果発動‼?このカードが墓地からの特殊召喚に成功した場合、相手フィールドの表側表示の魔法・罠カードを全て除外し、このカードの攻撃力・守備力は、この効果で除外したカードの数×２００ポイントアップする‼?」
「ふむふむ。竹光と端末世界を一気に除去してきたのですね。お見事なのです」
アークブレイブドラゴンが咆哮をあげると、オレンジ色の球体と竹光が消滅し、リーネが関心した声をあげた。

アークブレイブドラゴン
ＤＥＦ２０００→２６００

「これでメインフェイズに入ることができる。メインフェイズ2、墓地のエクリプスワイバーンを除外して暗黒竜コラプサーペントを特殊召喚‼?」

〈暗黒竜コラプサーペント　〉☆4　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ１７００

現れたのは黒いワイバーンのようなモンスター。
「除外されたエクリプスワイバーンの効果でレッドアイズダークネス

メタルドラゴンを手札に加える。さらに防覇龍ヘリオスフィアを召喚」

〈　防覇龍ヘリオスフィア〉☆４　ドラゴン族　光属性
ＡＴＫ０

続けて現れたのは紫色の体躯をしたモンスター。
そして影竜は正面に手をかざす。
「俺はドラゴン族レベル４モンスター、暗黒竜コラプサーペントと防覇龍ヘリオスフィアでオーバーレイ‼？。２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼？」
コラプサーペントとヘリオスフィアが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から影のような鎧を纏ったドラゴンが降りて来る。
「漆黒の竜よ‼？その力で我が戦友（とも）を導け‼？ランク４‼？銀河影竜‼？」

〈銀河影竜〉★４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２０００

現れたのは影のような鎧をつけたドラゴン。
「銀河影竜の効果発動‼？オーバーレイユニットを１つ使うことで、１ターンに１度、手札からドラゴン族モンスター１体を特殊召喚する‼？神をも喰らいて現れよ‼？我が戦友（とも）‼？魂食神龍ドレインドラゴン‼？」
龍が舞い降りる。
会場を震わせる程の歓喜の咆哮を上げながら。

〈魂食神龍ドレインドラゴン〉☆８　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ４０００

現れたのは紫色の身体からいくつもの鎌が生えているドラゴン。
ドレインドラゴンはカガリを見て、威嚇するように咆哮をあげる。
「このカードは通常召喚出来ず、自分のドラゴン族エクシーズモンスターの効果でのみ特殊召喚できる。そして魂食神龍ドレインドラゴンの効果発動!!?グラトニーアブソーブ!!?このカードを特殊召喚に成功した時、自分のライフポイントが相手より少ない場合、このカードの攻撃力はその差の数値分アップする!!?」
「!!?」
「今の俺のライフポイントは２７００。天羽プロは９０００。よって我が戦友(とも)の攻撃力は５３００ポイントアップする!!?そしてその攻撃力は!!?」

魂食神龍ドレインドラゴン
ＡＴＫ４０００→９３００

「攻撃力９３００……」
「ただし、このターン相手が受ける全てのダメージは０になるのと、魂食神龍ドレインドラゴン自体は相手プレイヤーにダイレクトアタックは出来ない。最も、すでにメインフェイズ２なのでそのデメリットは関係ないですが」
「……成る程なのです。強力なうえによく考えられているのです。さっきの言葉から察するにそのドラゴンが影竜君の相棒なのですね」
「……はい。このカードは、俺の転機になったカードですから」
「……そうなのですね。聞いてはみたいのですが、時間も押してるので別の機会にするのです」
「はい。俺はさらに銀河影竜を除外して銀河影竜を除外し、手札よりレッドアイズダークネスメタルドラゴンを特殊召喚!!?」

〈レッドアイズダークネスメタルドラゴン〉☆１０　ドラゴン族　闇属性

ＤＥＦ２４００

銀河影竜の姿が消え、代わりに現れたのは鋼鉄の身体を持つ赤い瞳の龍。

その龍の咆哮は新たな龍を呼ぶ。

「レッドアイズダークネスメタルドラゴンの効果発動!!?1ターンに1度手札または自分の墓地からレッドアイズダークネスメタルドラゴン以外のドラゴン族モンスター1体を自分フィールドに特殊召喚する!!?蘇れ、闇黒の魔王ディアボロス!!?」

〈闇黒の魔王ディアボロス〉☆８　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ３０００

現れたのは鎖に縛られた漆黒の龍。

「闇黒の魔王ディアボロスの効果発動!!?自分フィールドの闇属性モンスター1体をリリースし、相手は手札を1枚選んでデッキの1番上または1番下に戻す!!?俺は闇黒の魔王ディアボロス自体をリリースして効果を発動する」

「うーん、この手札ならデッキの上に戻しておくのです」

「カードを1枚伏せてターンエンドです」

リーネ　ＬＰ９０００　手札1

▲ーーーー▲　ー

ーーーーー

☆　ー

ー□○□ー

ーー▲ーー　ー

影竜　ＬＰ２７００　手札０

「リーネのターン、ドローなのです。影竜君、貴方のデュエル、よーく見させて貰ったのです。自分の相棒への愛情と活かすための構築が

凄く伝わってきたのです」
「……ありがとうございます」
リーネのそんな言葉に影竜はこの後の自分の展開を悟る。
それでもリーネから目を逸らそうとしない影竜を見て、リーネは嬉しそうな笑みを浮かべて目を閉じる。
そして目を開けると、リーネは今までとは打って変わった真剣な表情に切り替えた。
「きっと、影竜君は立派なプロ決闘者になれるのです。でもでも、リーネも一応はプロ決闘者。それに、リーネには背負っているものもたくさんあるので、そうそう負けてあげるわけにはいかないのです。だからーーー悪いですけど、このデュエルはお終いにするのです」
「っ……!!?」
「魔法カード、閃刀起動―エンゲージなのです!!?デッキから閃刀術式―アフターバーナーを手札に加え、その後、自分の墓地に魔法カードが3枚以上存在するので、デッキから1枚ドローなのです!!?そして魔法カード、閃刀術式―アフターバーナーなのです!!?自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しない場合、フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてそのモンスターを破壊し、その後、自分の墓地に魔法カードが3枚以上存在する場合、フィールドの魔法・罠カード1枚を選んで破壊できるのです!!?」
「何っ!!?」
「対象にするのは魂食神龍ドレインドラゴンなのです!!?因みに魔法・罠カードを破壊する効果は対象を取らないので使うなら今の内なのですよ」
「っ!!?リバースカードオープン!!?速攻魔法、禁じられた聖衣!!?フィールドの表側表示モンスター1体を対象とし、ターン終了時までそのモンスターは、攻撃力が６００ポイントダウンし、効果の対象にならず、効果では破壊されない!!?対象は勿論、魂食神龍ドレインドラゴンだ!!?」
「ならそれにチェーンしてリバースカードオープンなのです!!?速攻魔法、旗鼓堂々なのです!!?このターン、自分はモンスターを特殊召

喚できなくなる代わりに、自分の墓地の装備魔法カード1枚をその正しい対象となるフィールド上のモンスターに装備するのです‼?ただしこの効果で装備した装備魔法カードはエンドフェイズ時には破壊されるのです。リーネは墓地から装備魔法、巨大化を魂食神龍ドレインドラゴンに装備するのです‼?」

「っ‼?」

「何もないハズなのでこのままチェーンを解決なのです。まずは巨大化の効果で自分のライフポイントが相手より少ない場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力の倍になり自分のライフポイントが相手より多い場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力の半分になるのです。今のリーネのライフポイントは９０００、影竜君は２７００。圧倒的にリーネの方が多いのです。なので魂食神龍ドレインドラゴンには元々の攻撃力の半分になって貰うのです」

魂食神龍ドレインドラゴン
ＡＴＫ９３００→２０００

ドレインドラゴンの身体に石版のような物が埋め込まれる。
すると、ドレインドラゴンは苦悶の声を上げながら地面に降り立つ。

「ドレインドラゴン‼?っ、禁じられた聖衣の効果で魂食神龍ドレインドラゴンは攻撃力が６００ポイントダウンし、効果の対象にならず、効果では破壊されなくなる……」

魂食神龍ドレインドラゴン
ＡＴＫ２０００→１４００

「最後に閃刀術式―アフターバーナーの効果で魂食神龍ドレインドラゴンは破壊できなくて、あまり意味はないのですが禁じられた聖衣を破壊するのです。さらに墓地に魔法カードが２枚増えたので閃刀姫―カガリの攻撃力がさらに上がるのです‼?」

閃刀姫―カガリ
ＡＴＫ４５００→４７００

「攻撃力……４７００!!?」
「Ｄａｓ（これで）ｉｓｔ（終わりな）ｄａｓ（のです）Ｅｎｄｅ!!?バトルフェイズなのです!!?閃刀姫―カガリで魂食神龍ドレインドラゴンを攻撃なのです!!?」
「くっ……迎え撃て、我が戦友（とも）!!?魂食神龍ドレインドラゴンよ!!?暴食のスワロースパイラル!!?」
ドレインドラゴンは影竜の言葉に応えるように咆哮を上げると、白と黒が混ざった螺旋のブレスをカガリに向けて放つ。
それに対して、カガリは手に持った刀を腰の辺りで構えて目を閉じた。
「奥義……閃刀術式―アフターバーナー起動」
リーネがそう呟くとカガリの背中に魔法陣が浮かび上がると、その魔法陣から刀の形をした８つの炎が後方に展開され、カガリが手にしていた刀にも炎が宿る。
そしてカガリは閉じていた目を開き、後方に噴き出した炎の勢いを利用して白と黒の螺旋のブレスに突っ込みながら、構えていた刀を横薙ぎに振るった。
「ランドグリーズ!!?いっとーりょーだーん!!?」
カガリが放った炎を纏った一閃が白と黒のブレスを斬り裂いていく。
そしてカガリの身体がドレインドラゴンの身体を通り過ぎ、カガリは地面に剣を突き立てて、地面を斬り裂きながらもアフターバーナーの勢いを殺してドレインドラゴンに向き直る。
ドレインドラゴンは申し訳なさそうに影竜に咆哮をあげると、身体から炎を噴き出しながら爆散した。
「いいのだ、我が戦友（とも）よ……俺の方こそ力が及ばなくてすまない。共により精進していこう」

影竜　ＬＰ２７００→０

ーーーーーーー

「そこまで‼?勝者、天羽リーネ‼?」
「えへへ、やった～なのです‼?」
そういって、リーネが観戦していた『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバーに向かってピースサインを向ける。
そんなリーネに、影竜は頭を下げる。
「天羽プロ、この度は至らない自分とデュエルしていただき、ありがとうございました」
「むぅ～相変わらず影竜君は固いのです。もう少しフランクに接してくれてもいいのですよ?」
「いえ、尊敬できる決闘者を相手に礼儀を欠かすわけにはいきませんから。機会があれば、またよろしくお願いします」
「むぅ～仕方ないのです。デュエルに関しては勿論なのですよ。リーネも影竜君が立派なプロ決闘者になるのを楽しみにしているのです」
そういってリーネが影竜に手を差し出し、影竜もその手を取って握手をする。
リーネと影竜のデュエルを見て、デュエルアカデミア生の一部は騒然としていた。
自分達の身近にいる学年トップ２の影竜がまるで赤子の手をひねるようにあっさりと倒されてしまったという事実に、自分達とプロ決闘者の間の壁を実感する。
一方、プロ決闘者と驚かなかったデュエルアカデミア生の一部ーーー遊花と桜は冷静にリーネと影竜のデュエルを見ていた。
「あれが、リーネさんの実力……喰代君をあんなにあっさり倒せちゃうなんて凄い‼?」
「結束や闇とデュエルしたから分かってはいたけど、やっぱりプロ決闘者はレベルが違うわね……最初からワンキルを狙うぐらいのつ

もりでいかないといけないわね」
「いや、そこのデュエルアカデミア生、自分ら基準が完全におかしくなっとるで？『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』はプロの世界でもかなり異様な存在やからな？特に世界ランキング４位とあの社長さんの異質さは大概やで」
「うんうん。『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバー……その中でも闇さんとリーネさんが普通なんて思われたら、私達は立つ瀬がないよ」
　遊花と桜の呟きに思わずといった風に竜河がツッコミをいれ、美傘が頷きながら応える。
　そんな美傘達の言葉に遊花と桜は首を傾げる。
「そうなんですか？えっと、雨夜さんと……」
「美傘でいいよ。遊騎さんの弟子なら私の妹弟子みたいなものだしね」
「なんや、この子が言うてた結束の弟子かいな。これは１回戦も楽しみになってきたわ。嬢ちゃん、ワイも竜河でかまへんで。堅苦しいのは苦手なんや」
「えっと、それじゃあ美傘さんと竜河さんで……それで、異質ってどういうことなんですか？私には闇さんもリーネさんも凄く強いってことしか分からないんですが……」
　そんな遊花の質問に美傘と竜河は苦笑いを浮かべる。
「凄く強いなんてレベルやない。あの２人は明らかに強すぎるんや」
「強すぎる……ですか？」
「違いがよく分からないのだけれど……」
「２人共、闇さんとリーネさんのここ１年の黒星の数って知ってる？」
「黒星……負けた数ってことですか？いえ、知らないです」
「リーネさんは５０、闇さんは１０だよ。『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』は１年間で５００試合以上はしてるって言うのにね。因みに竜河さんの黒星は３００試合程で１０５で勝率が６割ぐらいね」
「えっ⁉？」
「ちょっ⁉？そんなに勝ってるの⁉？」

「うん。正直、闇さんとかいつ公式大会を強すぎるのを理由に出禁にされるか分からないぐらいのレベルだよ。というか、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバーの勝率はどの人も年間勝率は８割以上。別に勝ちに拘ったりしているわけでもなく、ただ楽しんでデュエルしているだけでその戦績……プロチームの中でも、あそこはかなり異様なチームなんだよ」

闇とリーネ、プロチーム『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』自体の戦績に遊花と桜は驚く。

強いということは分かっていたが、具体的な数字で提示されるとその異質さが際立つ。

試合数に反してあまりにも負けた数が少なすぎるのだ。

「ちょっ、なんでそこでワイの黒星を暴露したん⁉？自分のでも良かったやん⁉？」

「いや～私にもプライドってものがありますからね。黒星のことなんて妹弟子には教えたくないじゃないですか」

「それのせいでワイのプライドはズタズタなんやけど⁉？」

「竜河さんですから大丈夫です。ファイト‼？」

「やかましいわ‼？なんやそのぞんざいな声援⁉？」

美傘と竜河のそんなやり取りを聞きながらも、遊花と桜は改めてプロ決闘者の世界を意識する。

そしてそれと同時に遊騎が次の試合のアナウンスをする。

「それじゃあ、次の試合だ。１回戦第２試合、デュエルアカデミア所属、宝月　桜ＶＳ『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』所属、不知火　炎。両選手は試合の準備を頼む」

「桜ちゃん……」

遊騎のアナウンスに遊花が心配そうな表情で桜を見る。

そんな遊花に、桜は戦意を滾らせた笑顔を見せた。

「……上等じゃない。今の私が『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバー相手にどれだけ戦えるか、試してやるわ。私だって、そう簡単に負けてやるつもりはないんだから‼？」

第３４話　嵐ＶＳ篝火・巻き起こる猛火

○

「これより、1回戦第2試合、宝月　桜ＶＳ不知火　炎の試合を開始する」

遊騎の宣言を受け、桜と炎は他の参加者達の前に出て向かい合う。

そして桜がデュエルディスクを構えようとしたところで、炎が桜に話しかけた。

「君の話は冬城から聞いている。将来が期待できるとても有望な決闘者だと。今回のデュエル、期待させてもらおう」

「……いつも完敗してるのにそんな評価されてるのは凄く複雑なんだけど……まあ、期待に応えれるように頑張ります。私も、相手が闇の同僚だとしても負けるつもりはありませんから」

「……ほう、いい目をしているな。これは期待以上のものが見れそうだ」

負けないという強い意志が宿った目で炎を見てデュエルディスクを構える桜に、炎は面白そうに笑って同じようにデュエルディスクを構える。

「……来い!!?」

「いくわよ!!?」

『決闘!!?』

桜　ＬＰ８０００
炎　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は私ね……魔法カード、封印の黄金櫃を発動。デッキからカード1枚を選んで除外し、このカードの発動後2回目の自分スタンバイフェイズに、この効果で除外したカードを手札に加えるわ。私が

除外するのはトーチゴーレムよ」
「トーチゴーレムか、面白いカードを使うな」
「カードを1枚伏せてターンエンド」

桜　ＬＰ８０００　手札３
ー▲ー　ー
ーーーー
ー　ー
ーーーー
ーーーー　ー
炎　ＬＰ８０００　手札５

「ふむ、聞いていた話と少し違うな。君は序盤から動いてくる決闘者だと聞いていたが……」
「……先攻は苦手なのよ」
「……成る程、そういうことか。俺のターン、ドロー。俺は馬頭鬼を召喚」

〈馬頭鬼〉☆４　アンデッド族　地属性
ＡＴＫ１７００

炎の前に斧を持った牛の顔を持つ妖怪のモンスターが現れる。
「このままバトルだ。馬頭鬼でダイレクトアタック‼？牛頭断‼？」
馬頭鬼が勢いよく桜に近づき。手に持った斧を振り下ろそうとする。
しかし、そんな馬頭鬼の前に鐘の音を鳴らす悪魔が現れ、馬頭鬼の動きを止めた。

〈バトルフェーダー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

「バトルフェーダーの効果発動‼?相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードを手札から特殊召喚し、その後バトルフェイズを終了するわ‼?そしてこの効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される」
「ふむ、もう攻撃を止めてくるのか……もっと危ない状況になるまで温存しておいた方がよかったんじゃないのか?」
「お生憎様、これが1番いいタイミングなのよ。せっかく遊花がくれたカードなんだから、1番いいタイミングで使ってあげないとね」
そういって桜はちらりと観戦している遊花を見る。
このバトルフェーダーは桜が遊花に余っていたドットスケーパーを渡した時、代わりに貰ったものだ。
桜のデッキは防御に使えるカードが少ないため、遊花から受け取ったバトルフェーダーはすぐに投入されることになった。
そして、バトルフェーダーには桜のデッキだからこそ活きてくる部分もある。
「何かを仕掛けてくるつもりか……メインフェイズ2、カードを2枚伏せてターンエンドだ」

桜　ＬＰ８０００　手札２
ー－▲－－　ー
ー－□－－
ー　ー
ー－○－－
ー▲▲－－　ー
炎　ＬＰ８０００　手札３

「私のターン、ドロー‼?スタンバイフェイズ、封印の黄金櫃は発動から1ターン経過。そしていくわよ‼?不知火さんの馬頭鬼をリリースして雷撃壊獣サンダーザキングを攻撃表示で特殊召喚‼?」

〈雷撃壊獣サンダーザキング〉☆９　雷族　光属性

ＡＴＫ３３００

馬頭鬼を喰らいながら、炎のフィールドに三つ首の竜が降り立ち、空に向かって咆哮を上げた。

「俺のモンスターをリリースして攻撃力３３００のモンスターを俺の場に呼び出すだと？」

「そして行くわよ、私の相棒‼？月より来たる永遠の姫‼？妖精伝姫（フェアリーテイル）—カグヤを召喚‼？」

〈妖精伝姫—カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性

ＡＴＫ１８５０

現れたのは月のマークが入っている扇子を持ったお姫様。

カグヤは振り返って桜に向かって挨拶をするように扇子をひらひらと振ってにこやかに笑い、それを見て桜は口元を僅かに引き攣らせる。

この前、異世界に連れて行かれるという超常現象を体験してから、凄く生き生きと動いているのが分かるようになった自身の相棒たるカード。

その際に出会った自分と同じようにカグヤを使っていた遊戸という少女は話したりもしていた気がするが、自分もいつか会話が出来るようになりそうで桜は少し頭が痛くなった。

そんな考えを打ち消すように首を振り、桜は改めてデュエルに意識を戻す。

「妖精伝姫—カグヤの効果発動！召喚に成功した時、デッキから攻撃力１８５０の魔法使い族モンスター１体を手札に加える。私は２体目の妖精伝姫—カグヤを手札に加えるわ。そしてバトルフェーダーを攻撃表示に変更よ」

「何？」

バトルフェーダー

ＤＥＦ０→ＡＴＫ０

バトルフェーダーが攻撃表示になったことで炎が眉を顰める。

それを見て、桜はいつも通り口を開く。

「バトル‼?・頼んだわよ、バトルフェーダーで雷撃壊獣サンダーザキングに攻撃‼?・プランクベール‼?・」

バトルフェーダーがサンダーザキングに突撃していくが、サンダーザキングの三つ首からレーザーが放たれ、バトルフェーダーを吹き飛ばしながら桜に当たる。

桜　　ＬＰ８０００→４７００

「さぁ、３０００ポイントの戦闘ダメージを受けた時、リバースカードオープン‼?・速攻魔法発動、ヘルテンペスト‼?・」

「‼?・そのカードは……」

「このカードは３０００ポイント以上の戦闘ダメージを受けた時に発動する事ができるわ。お互いのデッキと墓地のモンスターを全てゲームから除外する‼?・」

桜と炎のデッキからモンスターが除外されていく。

それを見て、桜は自分のいつものパターンに入れたことで僅かに笑みを浮かべる。

「そしてそしてデッキから除外されたネクロフェイスの効果発動‼?・このカードがゲームから除外された時、お互いはデッキの上からカードを５枚ゲームから除外する‼?・さらにドットスケーパーの効果でデュエル中に１度、このカードが除外された時、特殊召喚するわ‼?・」

このまま押し切る。

そう桜が思った矢先に炎が薄く笑った。

「成る程……デッキのモンスターを無くし、そちらはモンスターを展開して一気に攻める。実にいい戦術だ。だが――残念ながら、それは俺にとっては悪手だ」

「っ‼?・」

「俺はそれにチェーンして除外された不知火の隠者、不知火の宮司の効果を発動!!?不知火の隠者の効果でこのカードが除外された場合、不知火の隠者以外の除外されている自分の不知火モンスター1体を対象として特殊召喚し、不知火の宮司の効果でこのカードが除外された場合、相手フィールドの表側表示のカード1枚を対象としてそのカードを破壊する!!?不知火の隠者の対象は妖刀―不知火、不知火の宮司の対象は君の妖精伝姫―カグヤだ」
「っ!?除外された時に効果があるアンデッド!?なら、さらにそれにチェーンして妖精伝姫―カグヤの効果発動!!?アンリーゾナブルディマンド!!?1ターンに1度、相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動!!?相手はそのモンスターの同名カード1枚を自身のデッキ・EXデッキから墓地へ送ってこの効果を無効にできる。墓地へ送らなかった場合、このカードと対象のモンスターを持ち主の手札に戻す。この効果は相手ターンでも発動できるわ。対象にするのは雷撃壊獣サンダーザキング!!?」
「成る程な。俺のデッキには雷撃壊獣サンダーザキングは入っていない。手札に戻ることで不知火の宮司は不発だな」
カグヤがサンダーザキングの首根っこを掴み、引きずりながら桜の手札に返っていく。
その光景に少し頭を抱えたくなった桜だが、生憎そんな余裕はなかった。
「不知火の隠者の効果で除外されているチューナーモンスター、妖刀―不知火を特殊召喚だ」

〈妖刀―不知火〉☆2　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ８００

炎の前に現れたのは一振りの刀。
その刀の近くに薄っすらと武士の霊の姿が浮かびあがっている。
「ドットスケーパーの効果でデュエル中に1度、このカードが除外された時、特殊召喚するわ」

〈ドットスケーパー〉☆1　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

妖刀のように桜の前には現れたのはドットの身体を持つモンスターが現れる。
「そしてネクロフェイスの効果でお互いにデッキの上から5枚のカードを除外だな」
お互いのデッキがさらに薄くなりヘルテンペストによる一連のチェーンが終わる。
なんとかカグヤを破壊されることとサンダーザキングを炎のフィールドに残すことは防ぎ、ドットスケーパーを呼び出せた桜だが、除外したことが仇になったことに苦い表情を浮かべる。
おまけに相手がアンデッド族だということは墓地でも効果を発動させるモンスターが多いということであり、それがさらに桜の表情を歪ませる。
桜は悟る。
炎のデッキは、自分のデッキにとって天敵と言えるものだと。
しかし、現状どうにかする手があるわけでもない。
「私はカードを1枚伏せてターンエンド」
「ならば、そのエンドフェイズにリバースカードオープン!!?永続罠!!?不知火流　輪廻の陣!!?このカードは魔法＆罠ゾーンに存在する限り、カード名を不知火流　転生の陣として扱い、1ターンに1度、以下の効果から1つを選択して発動できる。自分フィールドの表側表示のアンデット族モンスター1体を除外してこのターン、自分が受ける全てのダメージは0になる効果か、除外されている自分の守備力0のアンデット族モンスター2体を対象としてデッキに戻してシャッフルしその後、自分はデッキから1枚ドローする効果だ。俺はデッキに戻してドローする効果を使い、除外されている妖刀―不知火と不知火の隠者をデッキに戻して1ドローする」

桜　ＬＰ４７００　手札３
ー　ー▲ー　ー
ー　ー□ー　ー
ー　　ー
ー　ー○ー　ー
ー▲△ー　ー
炎　ＬＰ８０００　手札４

「俺のターン、ドロー。再び不知火流　輪廻の陣の効果を発動!!?不知火の宮司と不知火の鍛師をデッキに戻して1ドローだ」
「っ……ヘルテンペストが予想以上に仇になってるわね」
「俺は不知火の武士を召喚!!?」

〈不知火の武士〉☆４　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ１８００

現れたのは刀を腰に携えた武士のモンスター。
そして炎は2体のモンスターを見てその言霊を紡ぐ。
「俺は、レベル4、不知火の武士に、レベル2、チューナーモンスター、妖刀―不知火をチューニング!!?」
妖刀が浮かびあがり、武士に向かって飛んでいく。
武士がその刀を手に取ると、武士の後ろに妖刀に憑いていた武士の霊が実体化した。
「剣に宿し無念の思いが、武士に宿りて力を成す!!?シンクロ召喚!!?憑依一体!!?刀神―不知火!!?」

〈刀神―不知火〉☆６　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ２５００

「……って、姿とかが変わるわけじゃないの!?」
「ん?ああ、このモンスターは不知火の武士に妖刀―不知火が憑依す

るだけだからな。姿が変わることを期待してたならすまない」
桜の反応に炎は苦笑しながら答える。
「それでもシンクロモンスターになってステータスが上昇してることには変わりがないぞ。バトル!!?刀神―不知火でドットスケーパーを攻撃!!?不知火流　紅蓮袈裟斬り!!?」
武士がドットスケーパーに向けて刀を構えると実体化した霊も同じように刀を構える。
そして武士と霊が同時に刀を振るうと刀から炎を纏った斬撃が放たれ、ドットスケーパーを斬り裂いた。
「っ、でも、ドットスケーパーの効果でデュエル中に1度、このカードが墓地に送られた時、特殊召喚するわ」

〈ドットスケーパー〉☆1　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

「蘇生効果もあったのか。だが、これでもうこのデュエル中は蘇生できないな。メインフェイズ2、カードを2枚伏せてターンエンドだ」

桜　ＬＰ４７００　手札３
ー ー ▲ ー ー　　ー
ー ー □ ー ー
ー　　○
ー ー ー ー ー
ー ▲ △ ▲ ▲　　ー
炎　ＬＰ８０００　手札３

「私のターン、ドロー!!?スタンバイフェイズ!!?除外されていたトーチゴーレムを手札に加えるわ!!?そして不知火さんの刀神―不知火をリリースして雷撃壊獣サンダーザキングを攻撃表示で特殊召喚!!?」

〈雷撃壊獣サンダーザキング〉☆９　雷族　光属性
ＡＴＫ３３００

「刀神―不知火を除去するためか」
「不知火流　輪廻の陣でダメージを０にされたら困るもの。これで心置きなく動けるわ‼？私はこのターン通常召喚できなくなる代わりに自分フィールドに悪魔族・闇属性・レベル１・攻守０のトーチトークンを２体攻撃表示で特殊召喚することで、不知火さんのフィールドにトーチゴーレムを特殊召喚するわ‼？」

〈トーチゴーレム〉☆８　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３０００

〈トーチトークン〉☆１　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ０

炎のフィールドに大きな鉄のゴーレムが、桜のフィールドにはそのゴーレムを小さくしたようなモンスターが現れる。
「そして、繋がって‼？希望に導くサーキット‼？」
「リンク召喚か……」
桜が目の前に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は通常モンスター１体‼？私はトーチトークンをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？リンク１‼？リンクスパイダー‼？」

〈リンクスパイダー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１０００　←

桜の前に機械の蜘蛛が現れる。
それを確認しながら桜は再びサーキットを開く。
「まだまだ行くわよ‼？繋がって‼？希望に導くサーキット‼？」

「っ、連続リンク召喚か!!?」
「召喚条件はレベル1モンスター1体!!?私はトーチトークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?希望の紡ぎ手!!?リンク1!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

出てきたのは青い球体型のモンスター。
その姿を確認し、桜はさらにサーキットを開く。
「繋がって!!?希望に導くサーキット!!?召喚条件はトークン以外の同じ種族のモンスター2体!!?私はリンクスパイダーとリンクリボーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?アカシックマジシャン!!?」

〈アカシックマジシャン〉ＬＩＮＫ　２　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ１７００　→←

次に現れたのはフラスコを持った研究者のような女の子のモンスター。
「アカシックマジシャンの効果発動!!?リンク召喚に成功した場合、リンク先のモンスターを全て持ち主の手札に戻すわ!!?戻ってきなさい、トーチゴーレム!!?」
「トーチゴーレムを再利用するつもりか!!?」
アカシックマジシャンが手に持っていたフラスコをトーチゴーレムに投げつけるとトーチゴーレムの姿が消え、桜の手札に戻ってくる。
「私は再び自分フィールドに悪魔族・闇属性・レベル1・攻守0のトーチトークンを2体攻撃表示で特殊召喚することで、不知火さんのフィールドにトーチゴーレムを特殊召喚するわ!!?」

〈　トーチゴーレム〉☆８　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３０００

〈トーチトークン〉☆１　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ０

「次、行くわよ‼？繋がって‼？希望に導くサーキット‼？召喚条件はモンスター２体‼？私はトーチトークン２体をリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？リンク２‼？セキュリティドラゴン‼？」

〈セキュリティドラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１１００　→←

次に現れたのはプロキシーに似た白い身体をした小型の機械の竜。
「セキュリティドラゴンの効果発動‼？このカードがフィールドで表側表示で存在する限り１度だけ、このカードが相互リンク状態の場合、相手フィールドのモンスター１体を手札に戻す‼？対象は勿論、トーチゴーレムよ‼？」
「くっ‼？まだリンク召喚が続くか……」
セキリュティが翼から電磁波のようなものを出し、それによりトーチゴーレムが再び桜の手札に戻る。
「まだまだ‼？自分フィールドに悪魔族・闇属性・レベル１・攻守０のトーチトークンを２体攻撃表示で特殊召喚することで、不知火さんのフィールドにトーチゴーレムを特殊召喚‼？」

〈　トーチゴーレム〉☆８　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３０００

〈トーチトークン〉☆１　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ０

「どんどん行くわ!!?繋がって!!?希望に導くサーキット!!?召喚条件はモンスター2体!!?私はトーチトークン2体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?プロキシードラゴン!!?」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

次に現れたのは白い身体をした機械の竜。
「そして……繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」
現れる巨大なサーキット。
そこで桜は1度目を閉じ、1つ深呼吸をすると力強く言霊を紡ぐ。
「召喚条件はモンスター2体以上!!?私はプロキシードラゴンとセキュリティドラゴンをそれぞれ2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
「!?リンク4のモンスターか!!?」
プロキシーとセキリュティが2体ずつに分身し、サーキットの中に吸い込まれる。
そして桜はＥＸデッキから1枚のカードを取り出し、胸の前で握りしめてからそのカードの名前を呼んだ。
「お願い、私に決意を守る力を貸して!!?閉ざされた世界を守護する精神の盾!!?リンク4!!?ファイアウォールドラゴン!!?」
「!?ファイアーウォールだと!?」
桜の呼び声に、白き龍は世界を震わす程の咆哮を以って応えた。

〈ファイアウォールドラゴン〉ＬＩＮＫ４　サイバース族　光属性
ＡＴＫ２５００　↑←→↓

「ファイアウォール……冬城、使い手が現れたなんて聞いてないぞ……」

ファイアウォールを見て、炎は驚愕の表情を浮かべながら桜には聞こえない声で何かを呟く。
炎が何かを呟いたことには気付かず、桜はデュエルを進めていく。
「アカシックマジシャンの効果発動!!?1ターンに1度、カード名を1つ宣言してこのカードの相互リンク先のモンスターのリンクマーカーの合計分だけ自分のデッキの上からカードをめくり、その中に宣言したカードがあった場合、そのカードを手札に加え、それ以外のめくったカードは全て墓地へ送る。相互リンクしているのはリンク4のファイアウォールドラゴン。だから4枚までめくることが出来るわ。宣言するのは貪欲な壺よ!!?」
桜がカードをめくっていき、1枚のカードを手札に加える。
加わったのは当然、貪欲な壺だ。
「宣言したカードがあったから手札に加えるわ。そして、繋がって!!?希望に導くサーキット!!?私はドットスケーパーとアカシックマジシャンを2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク3!!?サイバースアクセラレーター!!?」

〈サイバースアクセラレーター〉LINK 3 サイバース族 光属性
ATK2000 ↑←↓

現れたのは背中にブースターのようなものをつけた人型のモンスター。
そしてそれに合わせてファイアウォールが咆哮を上げる。
「ファイアウォールドラゴンの効果発動!!?リ・ペーストシールド!!?このカードのリンク先のモンスターが、戦闘で破壊された場合、または墓地へ送られた場合に手札からモンスター1体を特殊召喚するわ!!?出番よ、私の相棒!!?妖精伝姫—カグヤ!!?」
「っ、この状況でカグヤが出てくるか」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ１８５０

「妖精伝姫―カグヤの効果発動‼？アンリーゾナブルディマンド‼？１ターンに１度、相手フィールドの表側表示モンスター１体を対象として発動‼？相手はそのモンスターの同名カード１枚を自身のデッキ・ＥＸデッキから墓地へ送ってこの効果を無効にできる。墓地へ送らなかった場合、このカードと対象のモンスターを持ち主の手札に戻す。この効果は相手ターンでも発動できるわ。対象は勿論トーチゴーレムよ」

「俺のデッキにはトーチゴーレムは入っていない。よってトーチゴーレムは手札に戻る」

『……はぁ～桜に頼られるのは嬉しいのだけれど、私だって少しは休みが欲しいわね。お陰で退屈過ぎて死ぬことはなさそうだけど、今度は過労で死んじゃいそうだわ』

「……えっ？」

何か聞いたことがない女の子の声が聞こえたような気がして桜が周りを見渡すが、声の主らしき者の姿は見えない。

そうしている間にカグヤがテクテクと炎のフィールドにいるトーチゴーレムに近づき、その巨体を軽々と持ち上げて桜に向かって投げるとトーチゴーレムはカードとして手札に戻り、カグヤも肩を落としながら手札に戻っていった。

「き、気のせい……よね？魔法カード、貪欲な壺‼？墓地に存在するリンクリボー、リンクスパイダー、セキリュティドラゴン、プロキシードラゴンをＥＸデッキに、ドットスケーパーをデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする‼？」

「リンクモンスターをＥＸデッキに戻して再利用するつもりか……」

「私はまた自分フィールドに悪魔族・闇属性・レベル１・攻守０のトーチトークンを２体攻撃表示で特殊召喚することで、不知火さんのフィールドにトーチゴーレムを特殊召喚する‼？」

〈トーチゴーレム〉☆８　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３０００

〈トーチトークン〉☆１　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ０

「もう１度お願い、繋がって!!?希望に導くサーキット!!?召喚条件はレベル１モンスター１体!!?私はトーチトークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?もう１度希望を紡いで!!?リンク１!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

「さらに繋がって!!?希望に導くサーキット!!?召喚条件はモンスター２体!!?私はトーチトークンとリンクリボーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク２!!?プロキシードラゴン!!?」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

「ファイアウォールドラゴンの効果発動!!?リ・ペーストシールド!!?このカードのリンク先のモンスターが、戦闘で破壊された場合、または墓地へ送られた場合に手札からモンスター１体を特殊召喚するわ!!?……何度もゴメン、妖精伝姫―カグヤ!!?」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ１８５０

「妖精伝姫―カグヤの効果発動!!?アンリーゾナブルディマンド!!?対象は勿論トーチゴーレムよ。手札に戻させて貰うわ!!?そして自分フィールドに悪魔族・闇属性・レベル1・攻守0のトーチトークンを2体攻撃表示で特殊召喚することで、不知火さんのフィールドにトーチゴーレムを特殊召喚!!?」

〈トーチゴーレム〉☆8　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３０００

〈トーチトークン〉☆1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ０

「さらに繋がって!!?希望に導くサーキット!!?召喚条件はモンスター2体!!?私はトーチトークン2体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?スペースインシュレイター!!?」

〈スペースインシュレイター〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１２００　→←

現れたのはパワードスーツのようなものを纏った人型のモンスター。

「ここでファイアウォールドラゴンの効果発動!!?リライトフューチャー!!?このカードが表側表示で存在する限り1度だけ、このカードと相互リンクしているモンスターの数だけ、自分または相手フィールド・墓地のモンスターを手札に戻せる!!?戻すのはトーチゴーレムと雷撃壊獣サンダーザキングよ!!?」

「っ、まだ止まらないのか……」

ファイアウォールの身体から電磁場が溢れ出し、トーチゴーレムとサンダーザキングを手札に押し戻す。

「自分フィールドに悪魔族・闇属性・レベル1・攻守0のトーチトーク

ンを2体攻撃表示で特殊召喚することで、不知火さんのフィールドにトーチゴーレムを特殊召喚!!?」

〈トーチゴーレム〉☆8　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３０００

〈トーチトークン〉☆1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ０

「繋がって!!?希望に導くサーキット!!?召喚条件は通常モンスター1体!!?私はトーチトークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク1!!?リンクスパイダー!!?」

〈リンクスパイダー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１０００　←

「さらに墓地に存在するリンクリボーの効果発動!!?スケープリンク!!?このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル1モンスター1体をリリースしてこのカードを墓地から特殊召喚する!!?私はトーチトークンをリリース!!?戻ってきなさい、リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

「そして……行くわ!!?繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」
　現れる巨大なサーキットを見て、桜はファイアーウォールを出した時と同じように目を閉じ、１つ深呼吸をして言霊を紡ぐ。
「召喚条件は効果モンスター3体以上!!?私は、リンクスパイダー、リンクリボー、スペースインシュレイターを2体分として扱ってリンク

マーカーにセット!!?・サーキットコンバイン!!?・」
インシュレイターが2体に分身し、リンクスパイダー、リンクリボーと一緒にサーキットの中に吸い込まれる。
そして桜はＥＸデッキから1枚のカードを取り出すとファイアウォールの時と同じように胸の前で握りしめ、その名前を呼んだ。
「閉ざされた世界を守る決意の隔壁!!?・リンク４!!?・ヴァレルガードドラゴン!!?・」
「!?・次はヴァレルガードドラゴンだと!?・」
桜の呼び声に、赤き龍は銃声と咆哮を以って応えた。

〈ヴァレルガードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００→３５００　→←↓↘?

「ヴァレルガードドラゴン……何故君がそれを?」
「闇から貰ったんです。私に勝つのを楽しみにしてるから、そのための投資って」
「!!?・冬城が評価しているのは知っていたが……そこまでとは思っていなかったな」
「こんな私に期待してくれてる闇のためにも、そう簡単に負けるわけにはいかないのよ!!?・ファイアウォールドラゴンの効果発動!!?・リ・ペーストシールド!!?・このカードのリンク先のモンスターが、戦闘で破壊された場合、または墓地へ送られた場合に手札からモンスター1体を特殊召喚するわ!!?・またお願い、妖精伝姫―カグヤ!!?・」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ１８５０

「妖精伝姫―カグヤの効果発動!!?・アンリーゾナブルディマンド!!?・対象はトーチゴーレム、手札に戻すわ!!?・そして自分フィールドに悪魔族・闇属性・レベル1・攻守0のトーチトークンを2体攻撃表示で特殊召喚することで、不知火さんのフィールドにトーチゴーレムを特

殊召喚!!?」

〈トーチゴーレム〉☆８　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ３００

〈トーチトークン〉☆１　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ０

「さらに繋がって!!?希望に導くサーキット!!?召喚条件はモンスター２体!!?私はトーチトークン２体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク２!!?セキリュティドラゴン!!?」

〈セキュリティドラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１１００　→←

「これは、エクストラリンク!!?……まさかデュエルアカデミア生がこの領域にまで達しているとはな……冬城が期待するのも頷ける」

桜が作り出したフィールドを見て、炎は感心したように頷く。

それに対して桜は首を振りながら少し不満そうな顔をした。

「これじゃあ全然足りないわ。まだリンクマーカーが炎さんのフィールドに向いているもの。でも、これ以上モンスターを展開する手段はないから、今回はこれで行くしかないわね」

「……フッ、これだけ動いてもまだ満足していないか。君は本当に将来有望な決闘者だな」

不満気な顔をする桜を見て、炎は柔らかい笑みを浮かべる。

その表情はまるで何かを懐かしむような表情だった。

「バトルフェイズ!!?」

「なら、このタイミングで使わせて貰おう。バトルフェイズ開始時、速攻魔法、異次元からの埋葬!!?除外されている妖刀ー不知火、不知火

の隠者、不知火の鍛師を墓地に戻させて貰おう」
「このタイミングで……それでも、臆せず攻めるわ‼？セキュリティドラゴンでトーチゴーレムを攻撃‼？プチリフレクト‼？」
セキュリティが小さな電撃を放ち、トーチゴーレムが爆散する。
「続けて、プロキシードラゴンでダイレクトアタック‼？ベビーノヴァ‼？」
「これぐらいは甘んじてうけよう」
プロキシーの口から小さな光弾が放たれ、炎のライフを削る。

炎　ＬＰ８０００→６６００

「サイバースアクセラレーターでダイレクトアタック‼？ブーストアームズ‼？」
「くっ……」
アクセラレーターが炎に突撃し、炎のライフがさらに削られる。

炎　ＬＰ６６００→４６００

「さらにファイアーウォールドラゴンでダイレクトアタック‼？鉄壁のリフレクトノヴァ‼？」
ファイアウォールの身体が赤く染まり、身体から溢れ出した雷がファイアウォールの前で光弾となり炎に向かって撃ち出される。
それを見て、炎はニヤリと笑う。
「相手モンスターの直接攻撃宣言時、リバースカードオープン‼？罠発動‼？王魂調和‼？」
「っ、攻撃反応罠……」
「その攻撃を無効にし、レベルの合計が８以下になるように、自分の墓地からチューナー１体とチューナー以外のモンスターを任意の数だけ選んで除外し、除外したモンスターのレベルの合計と同じレベルを持つシンクロモンスター１体を、ＥＸデッキからシンクロ召喚扱いで特殊召喚する‼？」

「っ⁉？墓地のカードを使って相手ターン中にシンクロ召喚⁉？」
「俺は墓地の、レベル４、不知火の鍛師に、レベル２、チューナーモンスター、妖刀―不知火を除外してチューニング⁉？シンクロ召喚⁉？もう１度現世に甦れ⁉？憑依一体⁉？刀神―不知火⁉？」

〈刀神―不知火〉☆６　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

再びフィールドに刀神が現れる。
「そして除外された不知火の鍛師の効果発動⁉？このカードが除外された場合、このターン、アンデッド族モンスターは戦闘では破壊されない⁉？」
「っ……これ以上の攻撃は無意味ってわけね。なら、メインフェイズ２、カードを１枚伏せてヴァレルガードドラゴンの効果発動⁉？テイクダウンエイミング⁉？１ターンに１度、自分の魔法・罠ゾーンのカードを墓地に送ることでそのターンに破壊された自分または相手の墓地へ送られたモンスター１体を効果を無効にして特殊召喚する⁉？私は今伏せた左腕の代償を墓地に送って、墓地からトーチゴーレムを特殊召喚⁉？」

〈トーチゴーレム〉☆８　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３０００

「そして、繋がって⁉？希望に導くサーキット⁉？」
「まだリンク召喚をしてくるか……」
「召喚条件はトークン以外のモンスター２体以上⁉？私はトーチゴーレムとプロキシードラゴンを２体分として扱ってリンクマーカーにセット⁉？サーキットコンバイン⁉？リンク召喚⁉？リンク３⁉？トライゲートウィザード⁉？」

〈トライゲートウィザード〉ＬＩＮＫ　３　サイバース族　地属性

ＡＴＫ２２００

現れたのはシルクハットを被った魔術師のようなモンスター。

「ファイアウォールドラゴンの効果発動!!?リ・ペーストシールド!!?このカードのリンク先のモンスターが、戦闘で破壊された場合、または墓地へ送られた場合に手札からモンスター１体を特殊召喚するわ!!?お願い、妖精伝姫―カグヤ!!?」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ１８５０

「これで本当に最後のリンク召喚よ!!?繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」

そういって桜はサーキットを開く。

「召喚条件は効果モンスター２体!!?私はセキュリティドラゴンと妖精伝姫―カグヤでリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク２!!?アンダークロックテイカー!!?」

〈アンダークロックテイカー〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１０００　↑↓

現れたのは独楽のような形をしたモンスター。

「ファイアウォールドラゴンの効果発動!!?リ・ペーストシールド!!?このカードのリンク先のモンスターが、戦闘で破壊された場合、または墓地へ送られた場合に手札からモンスター１体を特殊召喚するわ!!?頼んだわよ、妖精伝姫―カグヤ!!?」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ１８５０

「トライゲートウィザードの効果発動!!?このカードが２体以上のモ

ンスターと相互リンクしていることで1ターンに1度、フィールドのカード1枚を対象としてそのカードを除外する!!?私は不知火流輪廻の陣を除外するわ!!?」
「なら、不知火流　輪廻の陣の効果を発動!!?不知火の宮司と不知火の武士をデッキに戻して1ドローだ」
「妖精伝姫―カグヤの効果発動!!?アンリーゾナブルディマンド!!?対象は刀神―不知火!!?」
「ならばその効果にチェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?不知火流　燕の太刀!!?刀神―不知火をリリースし発動!!?自分フィールドのアンデット族モンスター1体をリリースし、フィールドのカード2枚を対象にして破壊し、その後、デッキから不知火モンスター1体を除外する!!?俺が対象にするのはサイバースアクセラレーターとファイアーウォールドラゴン!!?」
「えっ!?!?っ、リバースカードオープン!!?罠発動!!?亜空間物質転送装置!!?効果によりファイアウォールドラゴンをエンドフェイズまで除外する!!?」
「逃げられたか……デッキから除外するのは不知火の宮司」
「妖精伝姫―カグヤも墓地へ送られなかったため、手札に戻るわ」
　ファイアウォールの姿が消えると、刀神が霊体になりながら突撃してきて、アクセラレーターを斬り捨てる。
　そしてカグヤも難しい顔をしながら桜の手札に戻っていった。
「そして除外された不知火の宮司の効果でトライゲートウィザードを破壊だ!!?」
　デッキから飛んできた宮司の炎に焼かれてトライゲートも消滅する。
「私はカードを2枚伏せてターンエンド。エンドフェイズ、除外されていたファイアウォールドラゴンはフィールドに戻ってくるわ」
　再びフィールドに現れるファイアウォール。
　しかし、エクストラリンクも崩され、盤面をズタズタにされた桜は苦い表情を浮かべるしかなかった。

桜　ＬＰ４７００　手札２
ー　ー▲▲ー　　ー
ー　ー☆☆ー
　　ー　　☆
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　　ー
炎　ＬＰ４６００　手札４

「俺のターン、ドロー!!?さあ、反撃といかせて貰おう。墓地に存在する妖刀ー不知火の効果発動!!?このカードが墓地に存在する場合、チューナー以外の自分の墓地のアンデット族モンスター1体を対象としてそのモンスターとこのカードを墓地から除外し、その2体のレベルの合計と同じレベルを持つアンデット族シンクロモンスター1体をＥＸデッキから特殊召喚する!!?」
「っ!!?また墓地のモンスターを使ってシンクロモンスターを……」
「最も、これは効果によるもののため正規のシンクロ召喚ではないがな。俺は墓地に存在する妖刀ー不知火と刀神―不知火を除外!!?剣に宿し無念の思いが、武士と重なり現世に現る!!?憑依超越!!?戦神ー不知火!!?」

〈戦神ー不知火〉☆8　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ３０００

炎の前に現れたのは武士と融合し、完全に実体化している妖刀に憑いていた武士の霊。
「戦神ー不知火の効果発動!!?善因善果!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、自分の墓地のアンデット族モンスター1体を除外してこのカードの攻撃力はターン終了時まで、除外したモンスターの元々の攻撃力分アップする!!?俺が除外するのは刀神―不知火!!?」

戦神ー不知火
ＡＴＫ３０００→５５００

「攻撃力５５００⁉？」
「さらに除外された２体の刀神―不知火の効果⁉？このカードが除外された場合、相手フィールドのモンスター１体を対象としてそのモンスターの攻撃力は５００ポイントダウンする⁉？効果対象はファイアーウォールドラゴンとヴァレルガードドラゴンだ⁉？」

ファイアーウォールドラゴン
ＡＴＫ２５００→２０００

ヴァレルガードドラゴン
ＡＴＫ３０００→２５００

「っ、ファイアーウォールドラゴン⁉？ヴァレルガードドラゴン⁉？」
「さらに俺は不知火の武士を召喚⁉？」

〈不知火の武士〉☆４　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ１８００

「バトル⁉？戦神ー不知火でヴァレルガードドラゴンを攻撃⁉？不知火流　輪廻刃⁉？」
「させないわ⁉？ヴァレルガードドラゴンの効果発動⁉？プロテクションショット⁉？１ターンに１度、フィールドのモンスター１体を対象として、そのモンスターを表側守備表示にする⁉？この効果の発動に対して相手はカードの効果を発動できず、この効果は相手ターンでも発動できる⁉？対象は戦神ー不知火⁉？」
　腰に携えた２つの刀を抜き、ヴァレルガードに斬りかかろうとする戦神。
　それを見て、ヴァレルガードが盾を戦神に向けて構えると、盾から

いくつもの弾丸が撃ち出され、戦神の身体を吹き飛ばし膝を突かせた。

戦神ー不知火
ＡＴＫ５５００→ＤＥＦ０

「ならば、不知火の武士でファイアウォールドラゴンを攻撃‼?」
「攻撃力が低いモンスターでファイアウォールドラゴンを攻撃?ということは、それをどうにかする効果があるってことよね」
「その通りだ。不知火の武士は自分の墓地のアンデット族モンスター1体を除外してこのカードの攻撃力をターン終了時まで６００ポイントアップし、このターンこのカードがモンスターと戦闘を行った場合、そのモンスターはダメージ計算後に除外することができる」
「っ……使わざるを得ないわね。ファイアウォールドラゴンの効果発動‼?リライトフューチャー‼?このカードが表側表示で存在する限り1度だけ、このカードと相互リンクしているモンスターの数だけ、自分または相手フィールド・墓地のモンスターを手札に戻せる‼?この効果は相手ターンでも発動できる‼?ファイアウォールドラゴンとはヴァレルガードドラゴンが相互リンクしてるから、不知火の武士は手札に戻って貰うわ‼?」
　ファイアウォールの身体から溢れ出す電磁場が、武士を炎の手札に弾き飛ばす。
「これで……」
「甘い‼?速攻魔法、炎王炎環‼?自分フィールドの炎属性モンスター1体と自分の墓地の炎属性モンスター1体を対象として対象の自分フィールドのモンスターを破壊し、対象の墓地のモンスターを特殊召喚する‼?　俺はフィールドの戦神ー不知火を破壊して墓地の不知火の武士を特殊召喚する‼?」
「なっ⁉?」

〈不知火の武士〉☆4　アンデッド族　炎属性

ＡＴＫ１８００

戦神の姿が炎に包まれ、その炎の中からファイアウォールに向かって武士が勢いよく飛び出してくる。

「戦神ー不知火の効果発動!!?六道輪廻!!?フィールドのこのカードが戦闘・効果で破壊され墓地へ送られた場合、除外されている自分の守備力０のアンデット族モンスター１体を墓地に戻す。俺は除外されている不知火の宮司を墓地に戻す。そして、今度こそ倒させて貰うぞ!!?不知火の武士でファイアウォールドラゴンを攻撃!!?袈裟斬り!!?」

「っ……防げない……迎え撃ちなさい!!?ファイアウォールドラゴン!!?鉄壁のリフレクトノヴァ!!?」

ファイアウォールの身体が赤く染まり、身体から溢れ出した雷がファイアウォールの前で光弾となり、武士に向かって撃ち出される。

「不知火の武士の効果発動!!?自分の墓地のアンデット族モンスター１体を除外してこのカードの攻撃力をターン終了時まで６００ポイントアップし、このターンこのカードがモンスターと戦闘を行った場合、そのモンスターはダメージ計算後に除外することができる!!?俺は墓地に存在する不知火の隠者を除外して攻撃力を６００ポイントアップさせる!!?さらに除外された不知火の隠者の効果で除外されている刀神ー不知火を特殊召喚する!!?」

不知火の武士
ＡＴＫ１８００→２４００

〈刀神―不知火〉☆６　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ２５００

撃ち出された光弾を見て、武士は近くを飛んでいた霊魂を手に持ち、自分の身体に押し当てると、その霊魂が武士に吸い込まれる。

すると、武士の動きが急激に早くなり、光弾を躱した勢いのまま

ファイアウォールを切り裂き、消滅させた。

桜　ＬＰ４７００→４３００

「っ、ファイアウォールドラゴン‼?」

「さらに刀神―不知火でヴァレルガードドラゴンを攻撃‼?不知火流紅蓮袈裟斬り‼?」

「迎え撃ちなさい、ヴァレルガードドラゴン‼?銃砲のスラムファイア‼?」

炎の斬撃を放つ刀神に対し、ヴァレルガードも身体中にある銃口から一斉に銃弾を発射する。

斬撃と銃弾はお互いにぶつかることなく交差し、斬撃はヴァレルガードを斬り裂き、銃弾は刀神を撃ち抜いた。

「っ……ヴァレルガードドラゴン……私が未熟なせいでゴメンね……ファイアウォールドラゴン、ヴァレルガードドラゴン」

「……メインフェイズ2、俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

桜　ＬＰ４３００　手札２
ー▲▲ー　ー
ーーーー
ー　☆
ー○ー
ー▲ー　ー
炎　ＬＰ４６００　手札３

「……これが、闇と同じ『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の決闘者……やっぱりまだまだ遠いわね」

ファイアウォール、ヴァレルガード、２体の切り札を失い、桜は改めて思う。

炎は強い……自分では全然及ばない程に。

どれだけ攻めようと、致命傷になり得る攻撃は全ていなされ、気が

付いたら自分の方が不利になっている。
彼が使う不知火のように、実体が掴めず、掴もうと足掻く程に、闇の中に引きずり込まれていくような、嫌な感覚が桜を襲う。
それでもーーー
「……それでも、こんな私に期待してくれてる人達のためにも、そう簡単に負けるわけにはいかないのよ‼?」
桜は自分の頬を強く叩き、気合を入れ直す。
それを見て、炎は少し戸惑ったような表情で桜に尋ねる。
「……何故だ?何故君はそこまで負けを拒む?例え負けてしまったとしても、冬城達が君の評価を落とすとは思えん。無論、俺も今までのデュエルで君のことは高く評価しているが、負けたからといって君の評価を落とすつもりはない。これだけのデュエルが出来る君は十分に立派な決闘者だ」
「……不知火さんにそう言われると嬉しいわね。なら、余計に諦めるわけにはいかないわ」
「……何故?」
「そんなの簡単よ。私には守りたい親友がいるの。天然で、考えなしだけど、真っ直ぐ自分の意思を貫いてる……心優しい親友が」
「?それが一体……」
桜の答えに炎が首を傾げる。
そんな炎に、桜は嬉しそうに笑いながら口を開く。
「その子がね、言ってくれたのよ。私の隣に立ちたいって。本当に……馬鹿よね。目指す場所が、私の隣なんかじゃダメじゃない。その子が目指すのは、誰も歩んだことがない茨の道。この街で罪人と呼ばれる決闘者で、チームを世界ランキング2位まで導いた奴の正当な後継者なんだもの。私の隣程度で満足されちゃったら、簡単に潰されちゃうかもしれないじゃない」
「……」
「それでも、私の隣に立ちたいと言ってくれるなら、私のやれることは1つだけ。他の奴に潰されないぐらい、私自身も強くなる。そうすれば、私の隣に立てるぐらい強いその子は、他の誰にも潰されないで

しょ？そして私が強くなることを期待してくれてる人達がいてくれる。なら、その期待に応えれたら、親友のその子だって同じ期待に応えれるぐらい強くなれるハズじゃない？」
「!!？そのために、君は負けを拒むのか？親友をより強い場所に導くために？」
桜の言葉に炎は驚いた表情を浮かべる。
そんな炎を見て、桜は面白そうに笑った。
「ハッ……冗談。私には導くことなんか出来ないわよ。それは私じゃなくてその子の師匠の役目。私に出来るのは、親友が道半ばで折れないように支えてあげることだけ……大切な親友を守るためにも、私はそう簡単に負けるわけにはいかないの。あの子を1番近くで支えられるのは、私だけなんだから!!？」
「っ!!？」
『不知火君を守るためにも、私はそう簡単に負けるわけにはいかないの。不知火君を1番近くで支えれるのは、私だけなんだから!!？』
桜の言葉に、炎は頭の中にとある光景が思い浮かび、思わず表情を歪める。
そんな炎の様子に気付かず、桜は真剣な表情で勢いよくカードをドローした。
「私のターン、ドロー!!？速攻魔法、大欲な壺!!？除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計3体を持ち主のデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから1枚ドローする!!？私は除外されてる雷撃壊獣サンダーザキング、海亀壊獣ガメシエル、怒炎壊獣ドゴランをデッキに戻してシャッフルし、カードを1枚ドローする!!？さらにリバースカードオープン!!？罠発動!!？貪欲な瓶!!？墓地に存在するヴァレルガードドラゴン、リンクリボー、セキュリティドラゴン、プロキシードラゴンをＥＸデッキに、妖精伝姫—カグヤをデッキに戻してシャッフルしカードを1枚ドローする!!？」
「っ!!？ここに来て連続ドローか!!？」
ドローしたカードを見て、桜は笑顔を浮かべる。
まだ、可能性は潰えていないと。

「私は不知火さんの不知火の武士をリリースして海亀壊獣ガメシエルを攻撃表示で召喚!!?」
「この状況で壊獣モンスターをドローしたのか……」
〈海亀壊獣ガメシエル〉☆８　水族　水属性
ＡＴＫ２２００

甲羅に篭った巨大な亀が高速回転しながら武士を薙ぎ払って現れる。
「そして相手フィールドに壊獣モンスターが存在する場合、このカードは手札から攻撃表示で特殊召喚できる!!?あなたの全てを壊してあげるわ!!?雷撃壊獣サンダーザキング!!?」
〈雷撃壊獣サンダーザキング〉☆９　雷族　光属性
ＡＴＫ３３００

桜のフィールドに降り立つ三つ首の竜。
サンダーザキングは桜を見て、歓喜の咆哮を上げる。
「そして、これが本当に最後の出番よ!!?最後まで私と一緒に戦って、私の相棒!!?妖精伝姫―カグヤ!!?」
〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ１８５０

桜の前に現れたカグヤは桜を見て嬉しそうに笑い、桜の耳にデュエル中に聞こえてきた女の子の声が再び聞こえてくる。
『仕方ないわねぇ……でも、いいわ。例え私にとっては刹那のような時間だったとしても、最後まで桜と一緒にいてあげる』
そんな、どこか嬉しそうな優しい声が桜に届く。
しかし、今はそんなことは気にしないと、桜はさらに動きを続ける。
「妖精伝姫―カグヤの効果発動！召喚に成功した時、デッキから攻撃

力１８５０の魔法使い族モンスター１体を手札に加える。私はデッキに残っている最後の妖精伝姫―カグヤを手札に加えるわ。そしてアンダークロックテイカーの効果発動!!?・1ターンに1度、このカードのリンク先の表側表示モンスター1体と、相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象とし、その相手モンスターの攻撃力はターン終了時まで、対象としたリンク先のモンスターの攻撃力分だけダウンする!!?私はリンク先の雷撃壊獣サンダーザキングを対象に海亀壊獣ガメシエルの攻撃力を下げる!!?」

海亀壊獣ガメシエル
ＡＴＫ２２００→０

「っ!!?……これは……」
「バトル!!?・雷撃壊獣サンダーザキングで海亀壊獣ガメシエルを攻撃!!?・グラビティレイ!!?」
サンダーザキングの三つ首からレーザーが放たれ、ガメシエルごと炎の身体をのみ込み、ライフを一気に削っていく。

炎　ＬＰ４６００→１３００

「これで終わりよ!!?・妖精伝姫―カグヤでダイレクトアタック!!?」
カグヤが着物の中から綺麗な玉を取り出し、その玉を振りかぶって炎に向かって投げつけようとする。
それを見て、炎は目を閉じる。
そして目を開けると決意を込めた目で桜を見た。
「……宝月。君の親友に対する思いはよく伝わった。君のその思いは尊いものだ。きっと、君の思いは成就するだろう」
「っ……ありがと」
雰囲気が変わった炎を見て、桜は警戒する。
「だが、君に成就させたい思いがあるように、俺にも成し遂げたい思いがある。だからこそ……俺もそう簡単に負けるわけにはいかない。

本当はこの場では使うつもりはなかったが、君の力と覚悟に応え、俺のもう1つの力を君に見せよう」
「っ⁉？もう1つの力⁉？」
「リバースカードオープン‼？罠発動‼？ヴェンデットリボーン‼？」
「ヴェンデット？……聞いたことがないカードね」
聞き覚えのないカード名に、桜は嫌な予感を感じる。
そして、その予感は的中する。
「このカードは相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターをリリースし、その元々のレベルと同じレベルを持つアンデット族・闇属性・攻守0のヴェンデットトークン1体を自分フィールドに特殊召喚する‼？」
「なっ⁉？」
「ただし、この効果で特殊召喚したトークンがモンスターゾーンに存在する限り、自分はヴェンデットモンスターしか召喚・特殊召喚できなくなるがな。俺が対象にするのは妖精伝姫―カグヤだ‼？」
「っ、カグヤ‼？」
『っ……抜かったわ。ごめんなさい、桜』
カグヤの足元から闇が伸びてきて、闇の中にカグヤが沈んでいく。
そしてカグヤの姿が消えると、炎のフィールドに闇に包まれたゾンビのようなモンスターが現れた。

〈ヴェンデットトークン〉☆4　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ０

「っ……トークンを出すってことはそれを使えるカードがあるってことよね……なら、アンダークロックテイカーでヴェンデットトークンを攻撃‼？クロックブレイカー‼？」
クロックテイカーから時計の形をした光弾が放たれ、ヴェンデットトークンは消滅する。
勝負を決めきることが出来なかった。

桜は苦い表情を浮かべながらも、不安を吹き飛ばすように力強くターンの終了を宣言した。
「私はこのままターンエンド!!?」

桜　ＬＰ４３００　手札２
ー▲ー　ー
ー○ー
ー　☆
ー
ー
ー　ー
炎　ＬＰ１３００　手札３

「俺のターン、ドロー!!?……来たか!!?行くぞ、宝月!!?これがもう１つの俺の力だ!!?儀式魔法、リヴェンデットボーン!!?」
「!??儀式魔法!??」
炎が１枚の魔法カードを桜に見せるように掲げ、発動する。
そのカードは発動する瞬間、薄っすらと闇を纏ったように桜には見えた。
「このカードはレベルの合計が儀式召喚するモンスターのレベル以上になるように、自分の手札・フィールドのモンスターをリリース、またはリリースの代わりに自分の墓地のアンデット族モンスターを除外し、自分の手札・墓地からヴェンデット儀式モンスター１体を儀式召喚する!!?墓地の刀神ー不知火を除外して儀式召喚を行う!!?」
炎の前に闇の球体が現れ、その球体に刀神が吸い込まれていく。
そして闇の球体が吹き飛ぶと、その中から闇を纏い、身体中から骨が変質して出来た武器が飛び出している人型のモンスターが現れた。
「例えその身が朽ち果てようと、生まれ変わる程の怨讐の果てに、新たな強さを得よ!!?儀式召喚!!?リヴェンデットスレイヤー!!?」

〈リヴェンデットスレイヤー〉☆６　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２４００

「リヴェンデットスレイヤー……」
現れたスレイヤーを見て、桜は無意識の内に両腕をさする。
それは桜が今まで見てきた炎のモンスターと何処か違うということを無意識の内に感じとったからなのかも知れない。
「除外された刀神―不知火の効果!!?このカードが除外された場合、相手フィールドのモンスター1体を対象としてそのモンスターの攻撃力は５００ポイントダウンする!!?アンダークロックテイカーの攻撃力を５００ポイントダウンさせる!!?」

アンダークロックテイカー
ＡＴＫ１０００→５００

「バトル!!?リヴェンデットスレイヤーでアンダークロックテイカーを攻撃!!?ダメージ計算時、リヴェンデットスレイヤーの効果発動!!?アベンジフレイム!!?このカードが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時に1度、自分の墓地からアンデット族モンスター1体を除外して、このカードの攻撃力は３００ポイントアップする!!?俺は墓地から不知火の宮司を除外して攻撃力を３００ポイントアップ!!?」
スレイヤーの身体に近くを浮遊していた霊魂が吸収されると、スレイヤーの両足が黒い炎に包まれる。

リヴェンデットスレイヤー
ＡＴＫ２４００→２７００

「っ!!?」
「行け、リヴェンデットスレイヤー!!?リヴェンデットスマッシュ!!?」
スレイヤーを黒い炎を纏った足で勢いよく跳躍すると空中で一回転しながらその両足でクロックテイカー蹴り飛ばした。

桜　ＬＰ４３００→２１００

「くっ‼?」

「さらに除外された不知火の宮司の効果で雷撃壊獣サンダーザキングを破壊だ‼?」

サンダーザキングの身体に小さな霊魂が入っていき、内側から燃え上がり、サンダーザキングが消滅する。

「っ……サンダーザキング……だけど、このターンではトドメまではーーー」

「それはどうかな?手札を1枚捨て、速攻魔法、アクションマジック―ダブルバンキング‼?自分フィールドのモンスターは、このターン戦闘で相手モンスターを破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃できる‼?」

「っ⁉?ここにきて連続攻撃⁉?」

スレイヤーの身体に1枚のカードが吸い込まれると、スレイヤーは黒い炎を纏った足で再び跳躍する。

「これで終わりだ‼?リヴェンデットスレイヤーでダイレクトアタック‼?リヴェンデットディバイド‼?」

そして空中で一回転する瞬間、スレイヤーの姿が2つに分かれ、分裂したスレイヤーが同時に桜に向かって蹴りを放つ。

それを見て、桜は悔しそうな表情を浮かべながらも真っ直ぐな目で炎を見た。

「……今回は私の負け……だけど、いつかは絶対に勝ってみせるわ‼?」

「……ああ、その日を楽しみにしておこう」

ーーーーーーー

桜　ＬＰ２１００→０

「……そこまで‼?勝者、不知火　炎‼?」
　遊騎の宣言を聞き、炎は桜に向かって手を差し出す。
「実にいいデュエルだった。君のような決闘者を見ると、俺もまだまだ負けていられないとデュエルに身が入るというものだ。君のこれからに、俺も期待させて貰おう」
　そんな炎を見て、桜は悔しそうな表情を浮かべながらもその手をとる。
「……まあ、今は不知火さんみたいな決闘者にそこまで評価されたことを素直に喜ばせて貰うわ。だけど、覚えておいてくださいね。今は無理でも、いつか絶対に勝ってみせますから」
「……フッ、今負けたばかりだと言うのにもう勝つことに目線が向いているか。本当に君は有望そうだ……ふむ、そういえば君は結束と冬城と一緒に暮らしていると言ったな。あの２人は君にも指導してるのか?」
「?私はあの２人に指導なんてして貰ってないわよ?デュエルをすることはあるけど、指導なんて言えるものじゃないし。私にとって、あの２人は親友の師匠と先輩ってだけだもの」
　炎の問いに首を傾げながらも、桜は正直に答える。
　それを聞いて、炎は少し考えると僅かに口元に笑みを浮かべながら思いついたことを口にした。
「ならば、これも何かの縁だ。君さえよければ俺の弟子にならないか?」
「えっ⁉?」
　炎の提案に桜は驚いた表情で炎を見る。
　そんな桜に炎は柔らかな笑みを浮かべながら理由を述べていく。
「君のこれからに興味が湧いたというのが主な理由だ。今のデュエルを見た限り、君はヘルテンペストを主軸に使った戦術を使っていたし、除外を使った戦術を主に使っている俺なら教えられることもあるだろう。それに、これからのデュエル界を担っていく若者を育てるというのもその道の先達の役目だからな」
「いや、そう言って貰えるのは嬉しいんだけど……私は『Ｔｒｕｍｐ

ｆｋａｒｔｅ』に入るつもりなんてないわよ？」
「別にそれは構わない。君が他のチームに入ることになろうとも、自分を脅かせる存在を育てるということは、その存在に負けないように自分を高めることにも繋がる。自分1人だけが強く、相手が皆弱かったら、強い存在は自分の力を過信して堕落していくだろう。だからこそ、自分を脅かす相手がいるということは、何もデメリットだけではないんだ。俺自身にも君を育てることで、自分の戦術を見つめ直すことができ、君が成長することで俺が今まで見落としていた力を得るものもあるだろう。だからこそ、師弟関係というのはお互いに利害があるんだ」
「……何というか、不知火さんって、変に真面目とか、不器用ってよく言われない？」
「……」
「黙ったってことは図星なのかしら？正直、利害のこととか、別に言わないでいいこととかあったと思うわよ？そこさえなければ完璧な誘い文句だったと思うんだけど」
ジト目をする桜に炎は思わず目を逸らす。
そんな炎を見て、桜は小さく笑う。
「……ふふっ。でも、それだけ誠実に私のことを考えてくれたってことよね」
そういうと、桜は真剣な表情を浮かべながら炎に頭を下げた。
「……お願いします。私は、親友のためにも、期待してくれる人達のためにも、弱いままでいたくないの……だから、私を強くしてください」
「‼？……ああ、君が望む強さまで導けるように最善を尽くそう。こちらこそ、よろしく頼む」
「‼？ええ、よろしくね、お師匠様」
「……とりあえず、お師匠様は止めてくれ。普通に名前で呼んでくれて構わない」
「ふふっ、了解よ、炎さん」
困った表情を浮かべる炎に桜は悪戯っぽく笑う。

そんな桜に調子を崩されながらも、炎は咳払いをして改めて口を開く。
「……んんっ、それじゃあ指導に関しては大会が終わってから話を詰めるとしよう。このままだと、大会の進行に影響が出るからな」
「分かったわ。私に勝ったんだから、炎さんもそう簡単には負けないでよね」
「……次の相手が天羽だと分かっている時点で難しい注文だが、出来る限り期待に応えさせて貰う。少なくとも、君を後悔させるような無様なデュエルにはならないようにしよう」
「リーネさんが強いことは分かってるし、それでいいわ。それじゃあね、炎さん」
そういうと、桜は遊花がいる場所に戻りながら、ふと思い出したようにデッキの中から1枚のカードを取り出す。
取り出したのは自身の相棒である妖精伝姫―カグヤのカード。
デュエル中に聞こえてきた謎の声。
その声が聞こえてきたのは妖精伝姫―カグヤを出した時だった。
「あの声は貴方のものなの？」
勇気を出して問いかけてみるも、カードから返事はない。
「……やっぱり気のせいよね」
桜は頭を掻きながらも遊花の待っている観戦場所に戻って行く。
そんな桜の姿を見送りながら、炎は闇が観戦している場所に移動する。
近づいてきた炎に、闇は相変わらずの無表情で口を開く。
「お疲れ……正直ヴェンデットを出すほど追い詰められるとは思ってなかった」
「俺もまさか使わされるとは思っていなかったさ。これが次世代の決闘者か。末恐ろしいものだ」
「流石は桜。私もヴァレルガードを託した甲斐がある」
そんなことを言う闇に対し、炎は少し真剣な表情で闇を睨んだ。
「……そのことで少し言いたいことがある。何故、ファイアウォールドラゴンの使い手が現れたこと、それが宝月であることを俺に言わ

なかった？」
「……言いづらかった。炎にとって、ファイアウォールドラゴンのことは嫌なことを思い出させると思ったから……ごめんなさい」
無表情ながらも、何処か辛そうな雰囲気で謝る闇に炎も苦い表情を浮かべる。
「……冬城が俺のことを考えてあえて言わなかったことは分かった。だが、それでもやはり納得できない部分はある」
「炎……」
「冬城、俺は宝月の師匠をすることにした」
「っ!!？それって……」
「勘違いするな。別にファイアウォールドラゴンのことがあったからだけじゃない。宝月の実力は本物だ。その先が見たくなったという気持ちも嘘じゃない。だが、同時にあのカードを赦したわけでもない。あのカードに振り回されるのは……俺と奴だけで十分だ」
硬い表情でそう告げる炎に、闇は少し悩む素振りを見せながらも、こくりと頷いた。
「……そう……分かった。桜のこと、色々とよろしく頼む」
「ああ、任せておけ。俺はもう、あんな過ちを繰り返させない」
強い決意を秘めた目で炎が頷く。
そんな炎を、闇は心配そうに見つめるしかなかった。

ーーーーーーーー

★

「ただいま、遊花。負けちゃったわ、やっぱりプロ決闘者は強いわね」
「桜ちゃん!!？」
「ちょっ!!？ゆ、遊花!!？な、なんで抱きついてくるのよ!!？」
不知火さんとのデュエルを終えて、私の傍に戻ってきた桜ちゃんに、私は勢いよく抱きつくと、桜ちゃんが顔を真っ赤にしながら慌てだす。

そんな様子を気にせず、私は強く桜ちゃんを抱き締める。
「私を守るために色んなことを考えてくれてありがとう‼?……大好き‼?」
「っ～～～‼?あ～もう‼?恥ずかしいからあんまり抱きつくんじゃないわよ‼?は・な・れ・な・さ・い‼?」
恥ずかしがって私を引き剥がそうとする桜ちゃんに負けじとしがみつく。
そんなことをしていると、近くにいた美傘さんと竜河さんの会話が聞こえてくる。
「まさか不知火さんと渡り合えるデュエルアカデミア生がいるなんて……これは私達も油断は出来ないね」
「今のデュエルアカデミア生はレベル高いんやな。ワイの相手は結束の弟子やし、なんやワイもワクワクしてきたわ」
そんな会話が聞こえてくるのと同時に師匠のアナウンスが聞こえてくる。
「それじゃあ、次の試合だ。1回戦第3試合、デュエルアカデミア所属、栗原　遊花ＶＳ『Ｒａｕｈ』所属、霧生　竜河。両選手は試合の準備を頼む」
「お、ようやくワイの出番やな。栗原、いくで」
「あ、はい‼?それじゃあ桜ちゃん、行ってくるね」
「ええ……相手はプロ決闘者だけど、アンタはいつも通り楽しんでデュエルしてきなさい」
「うん‼?」
桜ちゃんの言葉に力強く頷いて、師匠と竜河さんが待っている場所に向かう。
私が近づくと、師匠は私をチラッと見て優しい笑みを浮かべてくれた。
師匠の前でデュエルをするのは、久しぶりだから少し緊張する。
だけど、これは私の成長を見せるための初めの一歩。
相手はプロ決闘者……勝てるかどうかなんて分からない。
だから、後悔しないように、全力でデュエルを楽しむ‼?

そんな決意を込めてデュエルディスクを起動すると、竜河さんも面白そうに笑ってデュエルディスクを起動した。
「気合いは十分みたいやな。ほな、はじめよか。結束の弟子の実力、しっかりと見せて貰うで‼?」
「はい‼?師匠の弟子として、全力でお相手いたします‼?」
「準備は出来たみたいだな。これより、1回戦第3試合、栗原　遊花VS霧生　竜河の試合を開始する‼?」
『決闘‼?』

遊花　ＬＰ８０００
竜河　ＬＰ８０００

第３５話　小さき者ＶＳ竜・憧れる背中

★

遊花　ＬＰ８０００
竜河　ＬＰ８０００

「先攻はワイやな。ワイはモンスターをセット。カードを２枚伏せてターンエンドや」

遊花　ＬＰ８０００　手札５
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー■ー
ー　ー▲▲ー　ー
竜河　ＬＰ８０００　手札２

「私のターン、ドロー!!?私はミスティックパイパーを召喚!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ０

現れたのはフルートのようなものを弾いている男の人。
今日もよろしくね、ミスティックパイパー。
そんな私にミスティックパイパーは任せろというようにサムズアップをした。
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを１枚ドローします!!?そしてこの効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル１モンスターだった場合、

自分はカードをもう1枚ドローします!!?」
　ミスティックパイパーが姿を消し、私はカードをドローする。
「私が引いたのはクリボール!!?レベル1モンスターなのでもう1枚ドローします!!?カードを2枚伏せてターンエンドです!!?」
「なんや、結束の弟子のわりには控えめなやっちゃなぁ。それやったらこっちからいかせてもらうで!!?リバースカードオープン!!?永続罠、ダイナミストハウリングを発動や!!?このカードは発動時の効果処理として、デッキからダイナミストペンデュラムモンスターを2体まで選んでワイのペンデュラムゾーンに置くことができるんや!!?」
「ペンデュラムモンスター!?!?それを2枚置けるってことは……」
「次のターンからワイはペンデュラム召喚ができるっちゅうことや。ただし、置いた場合は次のターンの終了時まで、ワイはダイナミストモンスターしかペンデュラム召喚できへんけどな。ワイはデッキからスケール3のダイナミストスピノスとスケール6のダイナミストプレシオスをペンデュラムスケールにセッティングや!!?」
　竜河さんを挟むように光の柱が立ち上り、その光の中に機械の身体を持つ2体の恐竜の姿が映る。
　そしてその恐竜の下には3と6の数字が浮かび上がった。
　私のターン中にペンデュラムスケールを準備してくるなんて……流石はプロ決闘者、次のターンの攻撃は激しくなりそう。

遊花　ＬＰ８０００　手札５
ー－▲▲－　　－
－－－－－
－　　－
－－■－－
△－△▲△　　－
竜河　ＬＰ８０００　手札２

「ワイのターン、ドロー!!?まずはダイナミストアンキロスを反転召

喚や!!?」

〈ダイナミストアンキロス〉☆４　機械族　水属性
ＡＴＫ１５００

フィールドに機械の身体を持つアンキロサウルスのようなモンスターが現れる。
「さらにダイナミストステゴサウラーを召喚や!!?」

〈ダイナミストステゴサウラー〉☆４　機械族　水属性
ＡＴＫ１６００

アンキロスに続くようにステゴサウルスの姿をした機械の恐竜が現れる。
「まずはコイツや!!?再起せえや!!?太古から続くサーキット!!?」
「リンク召喚ですか……」
竜河さんが目の前に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はペンデュラムモンスター２体や!!?ワイはダイナミストアンキロスとダイナミストステゴサウラーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク２!!?ヘビーメタルフォーゼエレクトラム!!?」

〈ヘビーメタルフォーゼエレクトラム〉ＬＩＮＫ　２　サイキック族
炎属性
ＡＴＫ１８００　↙?↘?

現れたのは機械的な鎧を纏った戦士のモンスター。
「ヘビーメタルフォーゼエレクトラム……あのカードは里香さんが使ってた……」
「ヘビーメタルフォーゼエレクトラムの効果発動や!!?このカードがリンク召喚に成功した場合にデッキからペンデュラムモンスター１

体を選んで、ワイのＥＸデッキに表側表示で加えるで。ワイはデッキからダイナミストレックスをＥＸデッキに加える。さらに永続魔法、ダイナミストチャージを発動!!?このカードの発動時の効果処理として、デッキからダイナミストモンスター1体を手札に加えることができる。ワイはデッキからダイナミストプテランを手札に加える!!」

竜河さんのデッキからダイナミストモンスターが手札とＥＸデッキに加わっていく。

だけど、エレクトラムがいるってことはこれだけじゃ終わらない。

「ヘビーメタルフォーゼエレクトラムの効果発動!!?1ターンに1度、このカード以外のワイのフィールドの表側表示のカード1枚を破壊してその後、ワイのＥＸデッキから表側表示のモンスター1体を手札に加える!!?ワイはペンデュラムゾーンのダイナミストスピノスを破壊してＥＸデッキからダイナミストレックスを手札に加える!!?さらにこの瞬間、ダイナミストチャージとヘビーメタルフォーゼエレクトラムの更なる効果が発動や!!?ダイナミストチャージの効果で1ターンに1度、ダイナミストカードがフィールドからワイのＥＸデッキに表側表示で加わった場合にそのカード1枚手札に加え、ヘビーメタルフォーゼエレクトラムの効果でワイのペンデュラムゾーンのカードがフィールドから離れた場合にデッキから1枚ドローする!!?ワイはダイナミストスピノスを手札に加えて、1ドローや!!?」

「っ……一気に手札が……」

竜河さんの手札が一気に5枚まで増える。

そしてこのターン、竜河さんはまだペンデュラム召喚をしてない。

「さあ、お待ちかねの時間や!!?ワイはスケール3のダイナミストプテランをペンデュラムスケールにセッティング!!?これでワイはこれで4と5のモンスターを同時に特殊召喚可能!!?滾れ、魂の振り子!!?世界に轟け、太古の咆哮!!?ペンデュラム召喚!!?出番やで、ワイのモンスター達!!?」

竜河さんがそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって4つの光が舞い降りた。

「ＥＸデッキから現れや、レベル４、ダイナミストアンキロス!!?レベル４、ダイナミストステゴサウラー!!?」

〈ダイナミストアンキロス〉☆４　機械族　水属性
ＡＴＫ１５００

〈ダイナミストステゴサウラー〉☆４　機械族　水属性
ＡＴＫ１６００

まず姿を見せたのは先程までフィールドにいたアンキロスとステゴサウラー。
そしてその後ろに巨大な２体の影が現れる。
「そしてこれがワイの切り札達や!!?全員喰らいつくしてまえ!!?レベル５、ダイナミストスピノス!!?レベル５、ダイナミストレックス!!?」

〈ダイナミストスピノス〉☆５　機械族　水属性
ＡＴＫ２５００

〈ダイナミストレックス〉☆５　機械族　水属性
ＡＴＫ２４００

現れたのはスピノサウルスとティラノサウルスの姿をした機械の恐竜。
これが、竜河さんの切り札……
「まずはバトルの前の下準備や!!?ダイナミストスピノスの効果発動!!?サバイバルオブザフィトテスト!!?このカード以外のワイのフィールドのダイナミストモンスター１体をリリースして２つある効果から１つを選択して発動できる。このターン、このカードは直接攻撃できるようになるか、このターン、このカードは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃できるようになるんや!!?ワイはダイナミス

トアンキロスをリリースして、選択するのは2回攻撃の効果や!!?」
「っ、２５００の2回攻撃ですか!!?」
スピノスがアンキロスに喰らい付き、アンキロスの身体の中にあったコアを取り込むと、背鰭から電気が溢れはじめる。
「ほないくで、バトル!!?ダイナミストステゴサウラーでダイレクトアタック!!?ダイナバイトファング!!?」
「うっ!!?」
ステゴサウラーが勢いよく突進し、私に喰らいつきライフが削られる。

遊花　ＬＰ８０００→６４００

「次や!!?ヘビーメタルフォーゼエレクトラムでダイレクトアタック!!?ヘビーバレット!!?」
「っ!!?」
エレクトラムの持つ銃から弾丸が撃ち出されて私の身体を貫いていく。

遊花　ＬＰ６４００→４６００

「ダイナミストレックスでダイレクトアタック!!?ダイナ粒子砲、発射や!!?」
「きゃっ!!?」
レックスの背中についていた砲門に粒子が集まり、ビームが私に向かって撃ち出される。

遊花　ＬＰ４６００→２２００

「まだ終わってへんで。ダイナミストレックスの効果発動!!?ダイナチャージ!!?このカードが攻撃を行ったダメージステップ終了時、このカード以外のワイのフィールドのダイナミストモンスター1体を

リリースして２つある効果から１つを選択して発動できる‼？このカードは相手モンスターに続けて攻撃でき、守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ戦闘ダメージを与えるか、相手の手札・フィールドのカード１枚を選んで持ち主のデッキに戻してその後、このカードの攻撃力は１００ポイントアップする効果や‼？自分のフィールドにモンスターはおらんからワイが選択するのはデッキに戻す効果や‼？ダイナミストステゴサウラーをリリースして、自分の手札、１枚もらうで‼？」

「手札をですか⁉？」

スピノスのようにレックスがステゴサウラーに喰らい付き、ステゴサウラーの身体の中にあったコアを取り込むと、砲門の両側についていた小さな砲門に粒子が集まりわレーザーが放たれて、私の手札を撃ち抜く。

ダイナミストレックス
ＡＴＫ２４００→２５００

デッキに戻されたのはゴーストリックランタン。

防御に使えるカードを減らされたのは、かなり痛い。

「さあ、このままなら終わってまうで‼？ダイナミストスピノスでダイレクトアタック‼？」

「通しません‼？手札からクリボールの効果を発動‼？スピンショット‼？相手モンスターの攻撃宣言時、そのモンスターを守備表示にするよ‼？」

スピノスの背鰭から電撃が溢れ出しそうになったとき、クリボールが回転しながら背鰭に突撃し、それによりスピノスの動きが止まった。

ダイナミストスピノス
ＡＴＫ２５００→ＤＥＦ１８００

「防がれたか。まあそうやないとおもろないわ。ワイはこれでターンエンドや」
「なら、エンドフェイズ‼?・リバースカードオープン‼?・罠発動‼?活路への希望‼?・自分のＬＰが相手より１０００以上少ない場合、１０００ＬＰを払って発動‼?・」

遊花　ＬＰ２２００→１２００

「お互いのＬＰの差２０００につき1枚、自分はデッキからドローする‼?・私のライフは１２００‼?・竜河さんは８０００‼?・よって3枚のカードをドロー‼?・」
「なんやて‼?・ここにきて3ドローかいな……これは次のターンが楽しみやな」

遊花　ＬＰ１２００　手札６
ー　ー　ー　ー▲ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　☆
○ー　ー○ー
△▲△▲△　ー
竜河　ＬＰ８０００　手札３

「私のターン、ドロー‼?・魔法カード、イリュージョンの儀式を発動‼?・」
「儀式魔法やと‼?・」
　私の前に現れるのは金色の目の形をした壺。
「自分の手札・フィールドから、レベルの合計が1以上になるようにモンスターをリリースし、手札からサクリファイスを儀式召喚します‼?・私は墓地のクリボールの効果で儀式召喚を行う場合、必要なレベル分のモンスターの内の1体として、墓地のこのカードを除外できる‼

？」
　金色の目の形をした壺にクリボールが吸い込まれ、しばらくすると壺が割れ、中から妖しい邪眼を持つモンスターが現れた。
「儀式召喚!!?相手を捕える妖しい邪眼!!?サクリファイス!!?」

〈サクリファイス〉☆1　魔法使い族
　ＡＴＫ０

「サクリファイスの効果発動!!?アブソープション!!?1ターンに1度、相手フィールドのモンスター1体を対象にそのモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力・守備力は、このカードの効果で装備したモンスターの数値分アップし、このカードが戦闘で破壊される場合、代わりに装備したそのモンスターを破壊できるよ!!?対象はダイナミストスピノス!!?吸い込んじゃって、サクリファイス!!?」
「吸収されるぐらいやったら道連れや!!?永続罠、ダイナミストハウリングの効果発動!!?このカードが既に魔法＆罠ゾーンに表側表示で存在する場合、1ターンに1度、ワイのフィールドのダイナミストモンスター1体をリリースし、相手フィールドのカード1枚を対象としてそのカードを持ち主の手札に戻す!!?ワイはダイナミストスピノスをリリースしてサクリファイスを手札に戻す!!?」
　スピノスが身体から電気を撒き散らしながら咆哮をあげ、爆発する。
　その爆風によりサクリファイスは手札に吹き飛ばされた。
「っ、サクリファイスが……」
「儀式モンスターを特殊召喚するには専用の儀式魔法が必要や。手札に戻ったらそう簡単には出てへんやろ。ワイは永続魔法、ダイナミストチャージの効果でダイナミストスピノスを手札に加えるで」
「なら、次です!!?手札のサクリファイスを捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動!!?デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚する!!?おいで、ドットスケーパー!!?」

〈ドットスケーパー〉☆1　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

現れたのはドットの身体を持つモンスター。
そして私は正面に手をかざす。
「導いて‼?希望に繋がるサーキット‼?」
「次はリンク召喚やな」
私の前に現れる巨大なサーキット。
まずは貴方の出番だよ‼?
「召喚条件はレベル1モンスター1体‼?私はドットスケーパーをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?リンク召喚‼?希望の守り手‼?リンク1‼?リンクリボー‼?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

出てきたのは青い球体型のモンスター。
リンクリボーはいつものようにフィールドに出るのと同時に私に擦り寄ってくる。
うん、今日も一緒に頑張ろうね。
「墓地に送られたドットスケーパーの効果発動‼?デュエル中に1度、このカードが墓地に送られた場合に特殊召喚します‼?」
「チッ、蘇生効果持ちやったか……」

〈ドットスケーパー〉☆1　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

「さらに、リバースカードオープン‼?永続罠、リビングデッドの呼び声‼?自分の墓地のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚します‼?戻ってきて、ミスティックパイパー‼?」

〈ミスティックパイパー〉☆1　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ０

再び現れるドットスケーパーとミスティックパイパー。
貴方達の力、また借りるね。
「私はレベル1、ドットスケーパーとミスティックパイパーでオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
「!??今度はエクシーズ召喚やと!??」
ドットスケーパーとミスティックパイパーが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこには白い馬に乗る小さな首無しの騎士がいた。
「闇夜に紛れし哀しき妖精!!?その刃で疑惑を切り裂け!!?ランク1!!?ゴーストリックデュラハン!!?」

〈ゴーストリックデュラハン〉★1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００↓１２００

「そしてゴーストリックデュラハンの効果発動!!?ホロウエクスキュート!!?オーバーレイユニットを1つ使い、フィールド上のモンスター1体を対象に、選択したモンスターの攻撃力を半分にする!!?この効果は相手ターンでも使えます!!?対象はダイナミストレックス!!?」
「そんなことさせるかいな!!?ペンデュラムゾーンに存在するダイナミストプレシオスの効果、このカードがペンデュラムゾーンに存在する限り1度だけ、このカード以外のワイのフィールドのダイナミストカードを対象として発動した効果を無効にできる!!?」
「っ、そんなペンデュラム効果が……」
「その後、このカードを破壊する。そしてペンデュラムゾーンのダイ

ナミストプレシオスが破壊されたことでヘビーメタルフォーゼエレクトラムの効果が発動!!?ペンデュラムゾーンのカードが破壊されたことで1ドローや!!?」
ペンデュラムゾーンにいたダイナミストの咆哮によりデュラハンの斬撃が打ち消される。
手札は増やされちゃったけど、それならまた次の手を打つだけ!!?
「だったら、私はゴーストリックデュラハン1体でオーバーレイ!!?」
「なんやて!?!?」
「1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?ランクアップエクシーズチェンジ!!?」
デュラハンが再び空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りたのは黒いドレスを身に纏い、白い羽根にところどころ漆黒の羽根が混ざる女の子のモンスター。
「闇夜を彷徨う自由な天使!!?その気ままさで憂鬱を払え!!?ランク4!!?ゴーストリックの駄天使!!?」

〈ゴーストリックの駄天使〉★4　天使族　闇属性
ＡＴＫ２０００

駄天使が私の周りをひらひらと飛びながらドヤ顔で決めポーズをとりながら現れる。
……喜んで出て来たところ悪いんだけど、今回の貴方の主な役目は戦闘じゃなくてリンク召喚の補助なんだ。
私がそんなことを考えてると駄天使がガーンとショックを受けた表情を浮かべながら項垂れた。
「私はクリボルトを召喚!!?」

〈クリボルト〉☆1　雷族　光属性
ＡＴＫ３００

出て来たのは電気を出している黒い球体のモンスター。

現れたクリボルトを見て、駄天使は自分の役目を悟ったのか虚ろな表情を浮かべる。
……ゴメン、今度ちゃんと貴方が活躍出来るように頑張るから今回は許してね。
「クリボルトの効果発動!!?自分のメインフェイズ時にエクシーズ素材を持っているエクシーズモンスター1体を選択して発動できる。選択したモンスターのオーバーレイユニットを1つ取り除き、自分のデッキからクリボルト1体を特殊召喚する!!?私はゴーストリックの駄天使のオーバーレイユニットを1つ使って、おいで!!?クリボルト!!?」

〈クリボルト〉☆1　雷族　光属性
ＡＴＫ３００

駄天使のオーバーレイユニットの1つがクリボルトに変わる。
「さらにもう1度クリボルトの効果でゴーストリックの駄天使のオーバーレイユニットを取り除いてもう1体クリボルトを特殊召喚!!?」

〈クリボルト〉☆1　雷族　光属性
ＡＴＫ３００

「そして、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「こんだけモンスターを展開してからリンク召喚ちゅうことは……」
さあ、行くよ!!?
「召喚条件は効果モンスター3体以上!!?私はリンクリボー、ゴーストリックの駄天使、クリボルト2体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
竜河さんにはもう1枚ダイナミストのペンデュラムスケールがある。
あのカードもきっとダイナミストを直接どうにかしようとすれば

効果が発動するハズ……だから、今回は貴方の力を貸して!!?
「閉ざされた運命を撃ち抜く信念の弾丸!!?リンク４!!?ヴァレルロードドラゴン!!?」
　私の呼び声に応えるように龍の咆哮が轟いた。

〈ヴァレルロードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑←↘?

「リンク４のリンクモンスター……しかもヴァレルシリーズやと!?
?なんちゅう珍しいもんを出してきよんねん!!?」
「魔法カード、マジックプランター!!?自分フィールドの表側表示の永続罠カード１枚、リビングデットの呼び声を墓地へ送ってデッキから２枚ドローする!!?そして、バトル!!?ヴァレルロードドラゴンでダイナミストレックスを攻撃!!?銃声のイジェクトフレア!!?」
「っ、迎え撃て!!?ダイナミストレックス!!?ダイナ粒子砲や!!?」
　ヴァレルロードとレックスがお互いに粒子砲を撃ち合い、拮抗する。
「この瞬間、ヴァレルロードドラゴンの効果発動!!?エロージョンエイミング!!?このカードが相手モンスターに攻撃するダメージステップ開始時に、その相手モンスターをこのカードのリンク先に置いてコントロールを得て、そのモンスターは次のターンのエンドフェイズに墓地へ送られるよ!!?」
「なんやて!?!?」
　私が効果を宣言すると、ヴァレルロードの粒子砲が威力を増し、レックスを包み込みこちらのバトルゾーンに移動させた。
「ワイのダイナミストレックスが!?!?」
「ダイナミストレックスでヘビーメタルフォーゼエレクトラムを攻撃!!?ダイナ粒子砲、発射です!!?」
「ぐっ……やってくれるやんけ」
　レックスが粒子砲をエレクトラムに放ち、エレクトラムが蒸発した。

竜河　ＬＰ８０００→７３００

「追撃です‼？クリボルトでダイレクトアタック‼？ミニボルト‼？」

「そんなん痛くも痒くもないわ」

クリボルトが竜河さんに近づき静電気を起こす。

……当たり前だけど、全然効かないよね。

竜河　ＬＰ７３００→７０００

少しはライフを削れたけど、まだまだこちらが不利な状況が続いてる。

だけど、少しずつでも前に‼？

「メインフェイズ２、私はカードを２枚伏せてターンエンドです‼？」

遊花　ＬＰ１２００　手札２

ー－▲▲ー　ー

ー－○ー○

☆　ー

ー－－－－

△△△▲ー　ー

竜河　ＬＰ７０００　手札５

「あんだけ整ってたワイのフィールドをここまでボロボロにするやなんて……おもろなってきたわ‼？ワイのターン、ドロー‼？ワイはダイナミストプテランを召喚や‼？」

〈ダイナミストプテラン〉☆４　機械族　水属性

ＡＴＫ１８００

現れたのはプテラノドンを模した機械の恐竜。
「早速やけど厄介なモンスターには消えてもらうで‼?永続罠、ダイナミストハウリングの効果発動‼?ダイナミストプテランをリリースしてヴァレルロードドラゴンをＥＸデッキに戻す‼?」
「っ……ヴァレルロードドラゴン‼?」
プテランが起こした爆風でヴァレルロードの姿が掻き消える。
「永続魔法、ダイナミストチャージの効果でダイナミストプテランを手札に加える。そしてスケール６のダイナミストアンキロスをペンデュラムスケールにセッティング‼?これでワイはこれで４と５のモンスターを同時に特殊召喚可能‼?滾れ、魂の振り子‼?世界に轟け、太古の咆哮‼?ペンデュラム召喚‼?また出番やで、ワイのモンスター達‼?」
竜河さんがそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって再び４つの光が舞い降りた。
「手札から現れや‼?レベル４、ダイナミストプテラン‼?レベル４、ダイナミストステゴサウラー‼?レベル５、ダイナミストスピノス‼?そしてＥＸデッキから戻ってこいや‼?レベル４、ダイナミストプレシオス‼?」

〈ダイナミストプテラン〉☆４　機械族　水属性
ＡＴＫ１８００

〈ダイナミストステゴサウラー〉☆４　機械族　水属性
ＡＴＫ１６００

〈ダイナミストスピノス〉☆５　機械族　水属性
ＡＴＫ２５００

〈ダイナミストプレシオス〉☆４　機械族　水属性
ＡＴＫ１７００

現れたのはプテランとスピノス、そしてプレシオサウルスを模した機械の恐竜。
「ダイナミストスピノスの効果を２回発動や‼?・サバイバルオブザフィトテスト‼?・ダイナミストステゴサウラーとダイナミストプテランをリリースしてこのターン、ダイレクトアタックと２回攻撃が出来るようになる‼?」
「っ⁉?その効果は両方共使えるんですか⁉?」
「誰もターンに１度なんて言うてないで?・喰い散らかせや、ダイナミストスピノス‼?」
スピノスがステゴサウラーとプテランに喰らい付き、そのコアを吸収する。
「さらにダイナミストプレシオスの永続効果‼?・このカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分のフィールドのモンスターの攻撃力はワイのフィールドのダイナミストカードの数×１００ポイントダウンする‼?」
「えっ⁉?」
「ワイのフィールドのダイナミストカードは６枚。やから自分のモンスターの攻撃力・守備力は６００ポイントダウンや‼?」

クリボルト
ＡＴＫ３００→０

ダイナミストレックス
ＡＴＫ２５００→１９００

プレシオスの咆哮でクリボルトとレックスが身体を震わせる。
これはちょっとマズイかも……
「バトル‼?」
「バトルフェイズ開始時、墓地に存在するリンクリボーの効果発動‼?・スケープリンク‼?・このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル１モンスター１体をリリースしてこのカードを墓地か

ら特殊召喚する!!?私はクリボルトをリリース!!?戻っておいで、リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００→０　←

クリボルトの姿が消え、代わりにリンクリボーが跳ねるように私の前に現れる。
お願い、私に力を貸して、リンクリボー!!?
「さあ、決めにいくで!!?ダイナミストプレシオスでリンクリボーを攻撃や!!?ミストブルー!!?」
「相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動!!?ゼロリンク!!?このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力はターン終了時まで０になる!!?」
口から粒子の霧を吐くプレシオスにリンクリボーの身体が粒子に変わって纏わりつく。
「攻撃対象がいなくなったことで攻撃は中断するで。そして、これで終いや!!?ダイナミストプレシオスでダイレクトアタック!!?ダイナブレード!!?」
プレシオスの背鰭が光り、そこから電撃が私に向かって放とうとする。
「まだ……終わらせません!!?手札から、クリボーの効果発動!!?ダークエンヴェロップ!!?相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこのカードを手札から捨てて発動できる。その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージを０にする!!?」
クリボーが電撃を受け止め、粒子になって消えていく。
ありがとう、クリボー。
「やけど、２回目は耐えられへんやろ!!?もう１度ダイナミストプレシオスでダイレクトアタック!!?ダイナブレード!!?」
プレシオスの背鰭が光り、そこから今度こそ電撃が私に向かって放たれる。

「それも通しません‼?リバースカードオープン‼?罠発動‼?パワーウォール‼?相手モンスターの攻撃によって自分が戦闘ダメージを受けるダメージ計算時、その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージが0になるように500ダメージにつき1枚、自分のデッキの上からカードを墓地へ送ります‼?ダイナミストプレシオスの攻撃力は2500なのでデッキの上から5枚のカードを墓地に送ってダメージを0にします‼?」

私がデッキの上から5枚のカードを墓地に送ると、私の前に粒子で出来た盾が生まれ、スピノスが放った電撃を防いだ。

なんとか防ぎきれた……そう思った矢先に竜河さんは面白そうに笑った。

「この攻撃も防ぐなんてやるやないか。やけど、まだワイの攻撃は終わってへん‼?リバースカードオープン‼?罠発動‼?ダイナミストラッシュ‼?」

「‼?」

「このカードは1ターンに1枚しか発動出来へんけど、デッキからダイナミストモンスター1体を特殊召喚して、この効果で特殊召喚したモンスターは他のカードの効果を受けないんや‼?ただし、エンドフェイズに破壊されるんやけどな」

「っ……なら、チェーンしてリバースカードオープン、速攻魔法、魔力の泉‼?相手フィールドの表側表示の魔法・罠カードの数だけ自分はデッキからドローし、その後、自分フィールドの表側表示の魔法・罠カードの数だけ自分の手札からカードを選んで捨てます‼?」

「っ‼?ここにきてまたドローカードやと‼?」

「ただし、このカードの発動後、次の相手ターンの終了時まで、相手フィールドの魔法・罠カードは破壊されず、発動と効果を無効化されなくなります。竜河さんのフィールドにある表側の魔法・罠は2枚のペンデュラムカードとダイナミストチャージ、ダイナミストハウリング、ダイナミストラッシュの5枚。私のフィールドに表側の魔法・罠は魔力の泉1枚。よって5枚ドローし、1枚手札を捨てます‼?」

「っ……ここにきて5枚もドローしてくるやなんてなんつう奴や

……少し欲張り過ぎたで。ダイナミストラッシュの効果でダイナミストレックスを特殊召喚や‼?」

〈ダイナミストレックス〉☆5　機械族　水属性
ＡＴＫ２４００

再び竜河さんのフィールドに現れるレックス。
そして竜河さんのフィールドにダイナミストが増えたことでプレシオスの効果でこちらのレックスの攻撃力はさらに下がる。

ダイナミストレックス
ＡＴＫ１９００→１８００

「ダイナミストレックスでダイナミストレックスを攻撃‼?ダイナ粒子砲‼?」
竜河さんのフィールドのレックスが私のフィールドにいたレックスを粒子砲で撃ち抜いた。
「うぅ……」

遊花　ＬＰ１２００→６００

「ホンマなら残りの手札を貰うつもりやったけど、あんだけ手札が増えたならフィールドにモンスターが残った方がええな。メインフェイズ２、ワイはカードを１枚伏せてターンエンドや。エンドフェイズ、ダイナミストラッシュの効果で特殊召喚されたダイナミストレックスは破壊されるで」

遊花　ＬＰ６００　手札５
ー　ー
ーーーーー
ーーーーー
ー　ー

ーー○○ー
△△△▲△
竜河　ＬＰ７０００　手札１　ー

これが……プロ決闘者の実力。
私のフィールドは何も無く、竜河さんのフィールドはダイナミストを活かすための完璧な布陣が整っている。
おまけにライフ差も圧倒的で私は一撃でも受けてしまえば終わってしまうライフしかないのに、竜河さんはまだ７０００ものライフが残っている。
このままだと、きっと私は負けてしまう。
でも、だからこそーーー
「……なんや自分、笑っとんのか？この圧倒的に不利な状況で？」
「違いますよ。不利だからこそ、笑うんです‼？」
竜河さんが訝しげな顔で私を見る。
そんな竜河さんに私は笑顔を浮かべたまま答える。
「リーネさんや不知火さんの試合を見て、実際に竜河さんとデュエルして思いました。やっぱりプロ決闘者の方は凄いです。私が勝てなかった喰代君に勝って、桜ちゃんに勝って、そして今もこうして追い詰められて……今の私なんかじゃ、竜河さんには全然届かないのかも知れません。だけど……だからって、俯いってたって何も変わらないんです‼？」
昔の私なら……師匠に出会う前の私ならきっと、俯いて諦めてしまっていたと思う。
ここまで不利な状況を逆転できるわけないって。
だけど、今の私は違う。
「正直、どうやったらこの状況を逆転できるかなんて分からないです。それでも、最後まで諦めないで、最後まで楽しんで、笑顔でデュエルをする‼？それが、今の私で、私の憧れた人の姿なんです‼？私は、その後を継ぐって決めたんです‼？」
私があの日見た師匠の姿。

どんな逆境でも、笑顔で、楽しそうに切り抜けて、誰かを驚かせる決闘者。
それが私の目指す場所で、憧れた師匠の背中。
今の私の実力じゃ、切り抜けるには足りないかも知れない。
それでも、笑顔で楽しんでデュエルをすることなら、私にだってできる。
そして諦めなければ、いつかは絶対に運命を斬り開けるって、信じているから……だから‼?
「だから、ライフが0になるまで、諦めずに楽しんでデュエルをします‼?運命を斬り開けるまで、私は絶対に諦めません‼?」
「っ……成る程な。結束がどうして自分を弟子にしたんか分かった気がするわ。やけど、このままワイに負けるんやったら口だけや。そこまでいうんやったら勝って証明してみぃや‼?」
竜河さんがそう言って真剣な表情で私を見る。
お願い、私のデッキ……私の思いに応えて‼?
「私のターン、ドロー‼?まずはこのカード‼?速攻魔法、サクリファイスフュージョン‼?アイズサクリファイス融合モンスターカードの融合素材モンスターを自分の手札・フィールド・墓地から除外し、その融合モンスター1体をEXデッキから融合召喚します‼?私が除外するのは、墓地のサクリファイスとドットスケーパー‼?」
私の前に渦が現れ、そこにサクリファイスとドットスケーパーが吸い込まれていく。
そして渦が弾けると、中から現れたのは金色の邪眼と身体を持つモンスター。
「妖しい邪眼よ、電子の精霊よ‼?今交わりて、全てを奪う力とならん‼?融合召喚‼?全てを見透かす叡智の邪眼‼?ミレニアムアイズサクリファイス‼?」
〈ミレニアムアイズサクリファイス〉☆1　魔法使い族　闇属性
DEF0

「お次は融合モンスターかいな⁉？自分、一体いくつの召喚方法を使えるんや⁉？」
「そして、除外されたドットスケーパーの効果発動⁉？デュエル中に１度、このカードが除外された場合に特殊召喚⁉？」

〈ドットスケーパー〉☆１　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００→１５００

「ミレニアムアイズサクリファイスは１ターンに１度、相手モンスターの効果が発動した時、相手のフィールド・墓地の効果モンスター１体を対象としてその相手の効果モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力・守備力は、このカードの効果で装備したモンスターのそれぞれの数値分アップし、このカードの効果で装備したモンスターと同名のモンスターは攻撃できず、その効果は無効化されます」
「残念やけど、ワイのダイナミストスピノスに相手ターンに発動する効果はない。吸収することはできへんで？」
「私は墓地のサクリファイスフュージョンの効果発動⁉？自分メインフェイズに墓地のこのカードを除外し、相手フィールドの効果モンスター１体を対象とし自分フィールドの、アイズサクリファイス融合モンスターまたはサクリファイス１体を選び、その効果による装備カード扱いとして対象の相手の効果モンスターを装備します⁉？対象はダイナミストスピノス⁉？」
「っ⁉？さっきの融合魔法にそんな効果があったんかいな⁉？なら、ペンデュラムゾーンに存在するダイナミストアンキロスの効果、このカードがペンデュラムゾーンに存在する限り１度だけ、このカード以外のワイのフィールドのダイナミストカードを対象として発動した効果を無効にできる⁉？その後、本当ならこのカードは破壊されるんやけど、今は魔力の泉の効果で破壊されずに残る。１度しか使えへんから破壊された方がよかったんやけどな」
　ペンデュラムゾーンにいたアンキロスの衝撃波でサクリファイス

フュージョンが打ち消される。
だけど、これでもう無効化はされない!!?
「墓地に存在するチューナーモンスター、ジェットシンクロンの効果発動!!?手札を1枚墓地に送り、墓地からこのカードを特殊召喚します!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合、除外されます!!?」

〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

現れたのは小さなジェット機のような機械のモンスター。
ジェットシンクロンを見て、竜河さんは目を見開いた。
「チューナーやと!?自分まさか!!?」
「私は!!?レベル1、ミレニアムアイズサクリファイスと、レベル1、ドットスケーパーに、レベル1、チューナーモンスター、ジェットシンクロンをチューニング!!?」
ジェットシンクロンが光の輪になり、ミレニアムアイズとドットスケーパーが小さな星に変わり、光の道になる。
そして光の道が輝くと、その中から緑の翼で羽ばたく綺麗な鳥が現れた。
「悠久に響く祈りの歌が、争いを鎮める新風となる!!?シンクロ召喚!!?未来に羽ばたけ、霞鳥クラウソラス!!?」

〈霞鳥クラウソラス〉☆3　鳥獣族　風属性
ＤＥＦ２３００→１７００

「シンクロ召喚までしよった……こんなん流石に予想外やで」
「霧鳥クラウソラスの効果発動!!?プレアーソング!!?1ターンに1度、相手フィールドの表側表示のモンスター1体を選択し、ターン終了時までその攻撃力を0にし、その効果を無効にする!!?対象は、ダイナミストスピノス!!?」

「っ、流石にそんなことさせるわけにはいかんで‼?永続罠、ダイナミストハウリングの効果発動‼?ダイナミストプレシオスをリリースして霧鳥クラウソラスをＥＸデッキに戻す‼?そして永続魔法、ダイナミストチャージの効果でダイナミストプレシオスを手札に加える‼?」

プレシオスが爆風を起こしクラウソラスの姿が掻き消える。

伏せカードはまだあるけど、見えてる防御カードはなくなった‼?

「魔法カード、貪欲な壺を発動‼?」

「なっ⁉?ここにきてドローカードやと⁉?」

「墓地に存在するリンクリボー、ゴーストリックデュラハン、ゴーストリックの駄天使をＥＸデッキに、クリボルト２枚をデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローします‼?私は、金華猫を召喚‼?」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性

ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のようなモンスター。

「金華猫の効果発動‼?召喚した時、墓地に存在するレベル１モンスターを特殊召喚します‼?墓地から戻ってきて、クリボー‼?」

〈クリボー〉☆１　悪魔族　闇属性

ＤＥＦ２００

「そして、導いて‼?希望に繋がるサーキット‼?」

「ここにきてまたリンク召喚かいな‼?」

私が正面に手をかざすと私の前に大きなサーキットが現れる。

「召喚条件はレベル１モンスター１体‼?私は金華猫をリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?リンク召喚‼?もう１度、希望を守って‼?リンク１‼?リンクリボー‼?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

「そして速攻魔法!!?増殖!!?自分フィールド上に表側表示で存在するクリボー１体をリリースして自分フィールド上にクリボートークンを可能な限り守備表示で特殊召喚します!!?」
「!!?トークンを増やしてさらにリンク召喚に繋げるつもりやな」

〈クリボートークン〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

私のフィールドにいたクリボーが５体に増える。
「行きます!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私の前に再びサーキットが現れる。
「召喚条件はモンスター２体!!?私はクリボートークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク２!!?プロキシードラゴン!!?」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

次に現れたのは白い身体をした機械の竜。
それを確認して私は再びサーキットを開く。
「まだまだ!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?召喚条件は通常モンスター１体!!?私はクリボートークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク１!!?リンクスパイダー!!?」

〈リンクスパイダー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１０００　←

私の前に機械の蜘蛛が現れる。
これで準備は整った!!?
「導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
そして私は1つ深呼吸をして、そのモンスターを呼ぶ。
「召喚条件は効果モンスター3体以上!!?私はリンクスパイダー、リンクリボー、プロキシードラゴンを　2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
「リンク4モンスター、またヴァレルロードドラゴンかいな……」
「お願い、私に憧れに近づく力を貸して!!?リンク召喚!!?閉ざされた運命を斬り開く魂の剣(つるぎ)リンク4!!?ヴァレルソードドラゴン!!?」
「なんやて!?!?別のヴァレルシリーズのドラゴンやと!?!?」
私の呼び声に応えるように龍の咆哮が世界に響いた。

〈ヴァレルソードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑←→

「っ……まさか他のヴァレルシリーズが出てくるとは思わへんかったわ」
「ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アサシネイトショット!!?1ターンに1度、攻撃表示モンスター1体を対象として発動!!?そのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる。そしてこの効果の発動に対して相手は効果を発動できない!!?この効果は相手ターンにでも使用することが出来ます!!?対象にするのは、ダイナミストスピノス!!?」
ヴァレルソードドラゴンがスピノスに向かって銃撃し、スピノスが崩れ落ちる。

ダイナミストスピノス
ＡＴＫ２５００→ＤＥＦ１８００

「チッ、やけど２回攻撃ぐらいじゃワイには届かへんで!!?」
「いいえ、届かせてみせます!!?墓地に存在するリンクリボーの効果発動!!?スケープリンク!!?このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル１モンスター１体をリリースしてこのカードを墓地から特殊召喚する!!?私はクリボートークンをリリース!!?もう１度戻っておいで、リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

「さらに速攻魔法発動!!?クリボーを呼ぶ笛!!?その効果で自分はデッキからクリボーまたはハネクリボー１体を選択し、手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができます!!?私か選ぶのは特殊召喚!!?いつだって、私と共に!!?ハネクリボー!!?」

〈ハネクリボー〉☆１　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

私の前に相棒が現れる。
お願い相棒、私に力を貸して!!?
「導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私の前に現れる巨大なサーキット。
「召喚条件は効果モンスター２体!!?私はハネクリボーとリンクリボーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク２!!?ペンテスタッグ!!?」

〈ペンテスタッグ〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１６００　→←

現れたのは機械の身体を持つクワガタのようなモンスター。
「ペンテスタッグやと?確かそのモンスターは……」

「ペンテスタッグの永続効果!!?このカードがモンスターゾーンに存在する限り、リンク状態の自分のモンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ相手に戦闘ダメージを与えます!!?」
「っ、貫通攻撃やと!?」
「これで準備は整いました!!?バトル!!?ヴァレルソードドラゴンでダイナミストスピノスを攻撃!!?攻撃宣言時、ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アブソーブブースト!1ターンに1度、このカードが表側表示モンスターに攻撃宣言した時、ターン終了時まで、このカードの攻撃力はそのモンスターの攻撃力の半分アップし、そのモンスターの攻撃力は半分になる!!?」
ヴァレルソードドラゴンがスピノスに近づき、剣を振るう。
スピノスはヴァレルソードドラゴンに電撃を放つが、ヴァレルソードドラゴンの剣に吸収されていく。

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ３０００→４２５０

ダイナミストスピノス
ＡＴＫ２５００→１２５０

「斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン!!?剣光のベイオネットブレイク!!?」
「ぐっ……!!?」
ヴァレルソードドラゴンが吸収した電撃を纏った剣でスピノスを一刀両断し、咆哮をあげながらスピノスは爆散した。

竜河　ＬＰ７０００→４５５０

「チッ、魔力の泉の効果が無かったらペンデュラムスケールを代わりに破壊して戦闘破壊を防げるちゅうのに」

「もう1度斬り開いて!!?ヴァレルソードドラゴンでダイレクトアタック!!?剣光のベイオネットブレイク!!?」
「まだや!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?ダイナミストラッシュ!!?デッキからダイナミストモンスター1体を特殊召喚して、この効果で特殊召喚したモンスターは他のカードの効果を受けへん!!?ワイはダイナミストスピノスを特殊召喚や!!?」

〈ダイナミストスピノス〉☆5　機械族　水属性
ＡＴＫ２５００

爆風の中から再び姿を現わすスピノス。
「なら、ヴァレルソードドラゴンでダイナミストスピノスに攻撃!!?剣光のベイオネットブレイク!!?」
ヴァレルソードドラゴンはスピノスに勢いよく近づくと、今度は電撃を放つ間も無く斬り裂いた。

竜河　ＬＰ４５５０→２８００

「くっ……やけど、これでペンテスタッグの攻撃だけではワイのライフは削りきれへん!!?」
「いえ、このターンで終わりです!!?ペンテスタッグでダイレクトアタック!!?そして、速攻魔法、旗鼓堂々!!?自分の墓地の装備魔法カード1枚と、その正しい対象となるフィールド上のモンスター1体を選択し、選択した装備魔法カードを選択したモンスターに装備します!!?」
「装備魔法やと……?」
「この効果で装備した装備魔法カードはエンドフェイズ時に破壊され、このカードを発動したターン、自分はモンスターを特殊召喚できません!!?私はペンテスタッグに墓地の団結の力を装備します!!?」
「!?なんやて!?」
「団結の力の効果で装備モンスターの攻撃力・守備力は、自分フィール

ドの表側表示モンスターの数×８００ポイントアップします‼？私のフィールドにはペンテスタッグ、ヴァレルソードドラゴン、クリボートークンの３体がいます‼？なのでその攻撃力は……」

ペンテスタッグ
ＡＴＫ１６００→４０００

「攻撃力４０００やと⁉？」
「お願い、ペンテスタッグ‼？ダンガンスマッシュ‼？」
ペンテスタッグは空高く舞い上がると、高速回転しながら竜河さんに突進し、つかんで地面に叩きつけた。

竜河　ＬＰ２８００→０

ーーーーーーー

「そこまで‼？勝者、栗原　遊花‼？」
「……えっ、勝てたん、ですか？」
師匠の声を聞き、私は呆然としたように呟く。
そんな私を見て、竜河さんはため息を吐く。
「なんや実感がわかんいう顔しとるな。さっきまでは堂々としとったいうのに、デュエルが終わった途端にそれやと気が抜けてまうわ」
「えっと、あの、本当に、勝てたん、ですか？」
「それを負けたワイに聞くんかいな⁉？勝った‼？勝ちましたわ‼？ワイの負けや‼？」
そう言って不機嫌そうに竜河さんが顔を逸らす。
それを見て、ようやく私の中に竜河さんに勝ったということが入ってくる。
「嘘……でもでも、確かに勝ったんだよね？夢じゃないよね？実は負けてて幻覚が見えてるんじゃないよね？」
「どんだけ自分に自信がないねん‼？いや、まあ学生の身でプロ決闘

者に勝つんわ夢見たいなもんなんかも知れへんけど……おい、結束‼?弟子の指導ぐらいしっかりせえや‼?」
「いや、俺も入院してたせいで結局あまり見てやれてないからな。それでも、勝ってここまで取り乱すとは思わなかったが……」
「あ、師匠‼?あの、あの‼?」
自分が竜河さんに勝てたことが信じられず、私は師匠の方を向いて言葉にならない声を漏らす。
そんな私に、師匠は苦笑しながらも頭の上に手をおいた。
「よく頑張ったな。話には聞いていたけど、色々な召喚方法をしっかりと自分のものに出来てる。おまけにプロ決闘者の竜河にまで勝ったんだ。師匠として、鼻が高いよ」
「あぅ……えへへ」
そういって、師匠は私の頭を優しく撫でてくれる。
……なんだか、胸のあたりがぽかぽかして、安心する……もうちょっとだけ、このままで……
「ちょっと、そこの天然師弟。まだ大会は続いてるんだけど?」
しばらく師匠に頭を撫でられていると後ろから桜ちゃんの声が聞こえてくる。
後ろを振り向くと桜ちゃんが呆れたような目でこちらを見ており、他の参加者も微笑ましいものを見るような目をしていた。
「そうだな。それじゃあ次の試合に移るか」
「あっ……」
師匠が苦笑しながら私の頭から手を離し、私は思わず声を漏らしてしまう。
うぅ……残念だけど、仕方ないよね。
私は少し気落ちしながら桜ちゃんが観戦している場所に戻っていく。
私が戻ると桜ちゃんが首を傾げながら声をかけてくる。
「お疲れ、遊花……って、なんで勝ったのにしょんぼりとしてんのよ?」
「……ううん、なんでもない」

「そ、そう？ならいいけど……それにしてもプロ決闘者に勝つなんて凄いじゃない‼？」
「あ、うん。まだあんまり実感がないんだけど……」
「まあ、いきなり強い人に勝っても実感はわきにくいわよね。でも、遊花は勝ったの。そこだけは忘れちゃダメよ？」
「……うん」
　桜ちゃんの言葉に私は頷く。
　なんだかまだふわふわしてるけど、でも、ようやく私も1歩を踏み出せたのかな？
「ホンマにデュエルしてる時とは大違いやな、自分。もうちょい自信持った方がええと思うで？」
「お疲れ様です、遊花ちゃん。いや～竜河さんに勝っちゃうなんて流石は遊騎さんのお弟子さんだね‼？桜ちゃんも不知火さん相手に凄くいいデュエルをしてたし、私もうかうかしてられないな～」
「あ、竜河さん、美傘さん」
　私がぼんやりとしていると後ろから竜河さんと美傘さんが声をかけてくる。
「ふっふっふ、次はようやく私のデュエルだもん。エンタメデュエリストの本領発揮だよ‼？」
「エンタメデュエリスト？」
「何よ、エンタメデュエリストって？」
　美傘さんから出たエンタメデュエリストという言葉に、私と桜ちゃんは首を傾げる。
　そんな私達に美傘さんは自信満々に胸を張って答える。
「デュエルで皆を驚かせて笑顔にする決闘者のことだよ‼？つまり、私のこと‼？」
「やから、それは普通の決闘者もある程度意識してやってることやから自分だけの専売特許やあらへんって。しかも、自分のやることは大抵突拍子も無いことやし……」
「ソ、ソンナコトナイヨ～」
「そういうのはワイの目を見てからいいや。すまんなぁ、自分ら。コ

イツ、アホやねん」
「むっ、アホってなんですか、アホって‼?・そんなこと言ったら竜河さんなんて最後には物量で力押ししてくるパワー馬鹿じゃないですか‼?・」
「なんやと⁉?・ヘンテコ決闘者に言われとうないわ‼?・」
「むむっ‼?・」
「ぐぬぬっ‼?・」
「あわわ‼?・け、喧嘩はダメですよ〜‼?・」
「……遊花、桜、どうかした?・」
「あ、闇。実は……」
突然言い合いを始めた美傘さんと竜河さんを見て私は慌てる。
そんな私の様子が見えたのか、後ろから闇先パイが声をかけてきた。
桜ちゃんから状況を聞き、闇先パイは少しむっとしたような雰囲気を出しながらため息を吐いた。
「はぁ……分かった。ここは私に任せて」
「闇先パイ?・」
「そこ2人」
「なんや……って、冬城⁉?・」
「なんですか……って、や、闇さん⁉?・」
勢いのまま振り返った2人が闇先パイの姿を見て固まる。
そんな2人に闇さんは無表情ながらも不機嫌そうに口を開いた。
「今は大会中。ここは喧嘩をする場所じゃない。もし、それ以上喧嘩を続けるというのなら……私が相手になる」
「なっ⁉?・」
「ひぃっ‼?・や、闇さんがですか⁉?・」
闇先パイの言葉に2人の身体が震え始める。
そんな2人に闇先パイは淡々と言葉を続ける。
「どうせシードで暇だったからちょうどいい。ウォーミングアップぐらいにはなる。なんなら2人いっぺんにかかってきてもいいよ?・」
「いや、そのやな……」

「あわわわわ‼?」
「だから、静かにするか、静かになるか……好きな方を選べ」
『静かにします‼?』
「ん、よろしい。もしこれ以上騒ぐなら……分かってるよね?」
『イエス、マム‼?』
闇先パイの雰囲気に2人が敬礼しながら答える。
な、なんとか治ったみたいで良かったけど、2人のこの反応はなんなんだろう?
私が首を傾げていると、闇先パイが私の方に振り返った。
「2人が迷惑をかけた。ごめんなさい」
「い、いえ、闇先パイのせいではありませんし、少し困っただけですから……」
「そういって貰えると助かる。それはそれとして、遊花、さっきのデュエル、凄く良かった。アレで竜河はプロでは結構強い方だから、その竜河に勝てただけでも凄い前進してる。えらいえらい」
「あ、ありがとうございます」
「桜も、炎を相手にあそこまでデュエルできて凄かった。ナイスファイト」
「……まあ、素直に受け取っておくわ」
闇先パイが背伸びをして私の頭を撫でながら私達を褒めてくれる。
褒められるのは嬉しいけど、さっきの2人の反応が凄く気になるんですが……
「それじゃあ、次の試合だ。1回戦第4試合、無所属、雨夜　美傘ＶＳデュエルアカデミア所属、御子神　霊華。両選手は試合の準備を頼む」
「あ、わ、私の試合ですね‼?そ、それじゃあ行ってきまーす」
そんな中、師匠が次の試合のアナウンスをする。
それを聞いて美傘さんが少しホッとした様子で敬礼をといて動き始める。
そんな美傘さんに闇先パイが声をかけた。
「ん、美傘」

「ひゃい!!?な、なんですか!!?デュエルが終わったら校舎裏ですか!!?」
「……一体私を何だと思っているの?貴方のデュエルはきっと遊花やデュエルアカデミアの子達の参考になる」
「わ、私のデュエルがですか?」
「ん。だから、いつも通り楽しいデュエルが見れるのを期待してる」
闇先パイのそんな言葉に、美傘さんはぱぁっと太陽みたいに輝いた笑顔を浮かべて、自信満々に答えた。
「にひひ!!?闇さんにそこまで言われて応えないなんて、エンタメデュエリストの名折れです!!?見ててくださいね、絶対に観客を驚かせるすっごいデュエルをしてきますから!!?」
そういって、美傘さんが師匠が待っている場所に向かう。
そして同じように霊華さんが観戦場所から美傘さんの前に移動した。
「貴方が私の対戦相手だね。私はエンタメデュエリスト、雨夜　美傘!!?今日は貴方に特等席で、私のエンタメデュエルを見せちゃうよ!!?」
「そう、私は御子神　霊華。貴方からは変わった波動を感じるからデュエルが出来るのを楽しみにしてた」
「お、おう……なんかちょっと不思議さん?落ち着いた感じだし、闇さんパターンの人かな?それでも、楽しみにしてたなら、精一杯楽しんでもらわないといけないよね!!?」
そういって美傘さんがデュエルディスクを起動し、それに合わせて霊華さんもデュエルディスクを起動した。
「それじゃあこれより、雨夜　美傘のエンタメデュエルの開幕です!!?　Ｉｔ，ｓ　Ｓｈｏｗｔｉｍｅ!!?皆のハートは、私がいただいちゃうんだから!!?」
「やっぱり変わった人……楽しいデュエルになりそうね」
「準備は出来たみたいだな。これより、１回戦第４試合、無所属、雨夜　美傘ＶＳデュエルアカデミア所属、御子神　霊華の試合を開始する!!?」

『決闘!!?』

美傘　LP8000
霊華　LP8000

第３６話　天候ＶＳ霊・笑顔のために

○

美傘　ＬＰ８０００
霊華　ＬＰ８０００

「先攻は私。私はフィールド魔法、ＰＳＹフレームサーキットを発動」
霊華がフィールド魔法を置くと、店内が電流が流れる緑色の空間に変わる。
「ＰＳＹフレームサーキットの効果は自分フィールドにＰＳＹフレームモンスターが特殊召喚された場合に、自分フィールドのＰＳＹフレームモンスターのみをシンクロ素材としてシンクロ召喚出来るようになるわ」
「ふむふむ。つまり、霊華ちゃんはＰＳＹフレームというモンスターを主軸にしてるってわけだね。しかも、特殊召喚時にシンクロを行うっていうことは、相手ターンに特殊召喚をするテーマだってことでもある」
「その通り、流石プロ決闘者。他にも自分のＰＳＹフレームモンスターが相手モンスターと戦闘を行うダメージステップ開始時に、手札のＰＳＹフレームモンスター１枚を捨てることでその戦闘を行う自分のモンスターの攻撃力はターン終了時まで、捨てたモンスターの攻撃力分アップさせることができる。さらに私は荒魂を召喚」

〈荒魂〉☆４　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ８００

現れたのは鬼の顔のような形をした霊体のモンスター。
美傘は荒魂を見て少し驚いた表情を浮かべる。
「スピリットモンスターとはまた珍しいモンスターを使ってるね」

「荒魂の効果発動、このカードが召喚・リバースした時にデッキから荒魂以外のスピリットモンスター1体を手札に加える。私はデッキから和魂を手札に加える。カードを2枚伏せてエンドフェイズ、スピリットモンスター共通の効果により、召喚・リバースしたターンのエンドフェイズにスピリットモンスターは手札に戻ってくる」

美傘　ＬＰ８０００　手札５
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　ー
ーーーーーー
ーー▲▲ー　▽
霊華　ＬＰ８０００　手札３

「私のターン、ドロー!!?・まずはいきなりフィールド魔法で霊華ちゃんのステージに変えられちゃったから、私の色を付けたしちゃおうかな？私は雪天気シエルを召喚!!?」

〈雪天気シエル〉☆３　天使族　地属性
ＡＴＫ０

フィールドに現れたのは背中に雪の結晶のようなものをつけ、手に銃のような物を持っているモンスター。
「雪天気シエルの効果発動!!?・このカードが召喚に成功した時にデッキから天気魔法・罠カード1枚を選んで自分の魔法・罠ゾーンに表側表示で置くよ!!私はデッキからフィールドの中央に永続魔法、雪の天気模様を置くね!!?」
シエルが銃のような物を握ると空から雪が降り出し、辺り一面が雪景色になっていく。
雪に辺りの電流が反射し、雪が薄緑に光り幻想的な風景を作り出す。

「雪の天気模様は自分フィールドに1枚しか表側表示で存在できず、このカードと同じ縦列の自分のメインモンスターゾーン及びその両隣の自分のメインモンスターゾーンに存在する天気効果モンスターはこのカードを除外してデッキから天気カード1枚を手札に加え、この効果は相手ターンでも使えるという効果を得るよ。ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はドロー以外の方法でデッキからカードを手札に加える事はできなくなるけどね」
「発動じゃなくて置く……しかも、そのものの効果じゃなくてモンスターに効果を与える魔法カード……やっぱり変わってる」
「そ、それを霊華ちゃんに言われるのは少し納得がいかないんだけど‼?ま、まあいいよ。手札を1枚捨てて魔法カード、ペンデュラムコール‼?カード名が異なる魔術師ペンデュラムモンスター2体をデッキから手札に加え、このカードの発動後、次の相手ターン終了時まで自分のペンデュラムゾーンの魔術師カードは効果では破壊されなくなるよ‼?」
「それはダメ。手札からＰＳＹフレームギアδの効果を発動。自分フィールドにモンスターが存在せず、相手の魔法カードが発動した時、手札のこのカードと自分の手札・デッキ・墓地のＰＳＹフレームドライバー1体を選んで特殊召喚し、その発動を無効にし破壊するわ。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは全てエンドフェイズに除外される。私は手札からチューナーモンスター、ＰＳＹフレームギアδ、デッキからＰＳＹフレームドライバーを特殊召喚し、ペンデュラムコールは無効」
「あちゃー、ＰＳＹフレームってそういう感じかー」

〈ＰＳＹフレームギアδ〉☆2　サイキック族　光属性
ＤＥＦ０

〈ＰＳＹフレームドライバー〉☆6　サイキック族　光属性
ＡＴＫ２５００

現れたのは電気を纏った戦士と腕に装着するような機械。
「そしてフィールド魔法、ＰＳＹフレームサーキットの効果で自分フィールドにＰＳＹフレームモンスターが特殊召喚された場合に、自分フィールドのＰＳＹフレームモンスターのみをシンクロ素材としてシンクロ召喚するわ。私は、レベル６、ＰＳＹフレームドライバーに、レベル２、チューナーモンスター、ＰＳＹフレームギアδをチューニング」
δが光の輪になり、フレームドライバーが小さな星に変わり、光の道になる。
そして光の道が輝くと、その中から全身を機械の鎧に身を包んだ戦士が現れた。
「そこに開くは異世界への扉、現世（うつしよ）を超えて未知なる世界へ……シンクロ召喚。降誕、ＰＳＹフレームロードΩ」

〈ＰＳＹフレームロードΩ〉☆８　サイキック族　光属性
ＡＴＫ２８００

現れたΩを見て、美傘が苦い表情を浮かべる。
「いきなり私のターン中にシンクロ召喚なんて、エンタメデュエリストの私より目立つことしてくれちゃうね」
「……苦い表情をしている理由はそっちなの？」
「だったら、もっと皆を楽しませるステージを作る準備をしないとね‼？私は雪の天気模様の効果を得た雪天気シエルの効果を発動‼？このカードを除外してデッキから天気カード１枚を手札に加えるよ。雪天気シエルを除外してデッキから晴天気ベンガーラを手札に加える。ターンエンドだよ」

美傘　ＬＰ８０００　手札４
ーー雪ーー　ー
ーーーーー
ー　○

ーーーーー
ーー▲▲ー　▽
霊華　ＬＰ８０００　手札２

「私のターン、ドロー」
「スタンバイフェイズ‼?・雪天気シエルの効果発動‼?・フィールドのこのカードが天気カードの効果を発動するために除外された場合、次のターンのスタンバイフェイズに除外されているこのカードを特殊召喚するよ‼?・」
「‼?・成る程、自分の効果で戻ってくることが出来るのね」

〈雪天気シエル〉☆３　天使族　地属性
ＤＥＦ２２００

「なかなか厄介。それならこちらも手札を先に整える。荒魂を召喚」

〈荒魂〉☆４　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ８００

「荒魂の効果発動、デッキからケンドウ　魂（スピリット）　ＫＡＩ―ＤＥＮを手札に加える」
「おうっ⁉?・スピリットのペンデュラムモンスターなんてまた珍しいカードを……」
「バトル。ＰＳＹフレームロードΩで雪天気シエルを攻撃」
「まだシエルを失うわけにはいかないかな?・私は雪の天気模様の効果を得た雪天気シエルの効果を発動‼?・このカードを除外してデッキから天気カード１枚を手札に加えるよ。雪天気シエルを除外してデッキから雨天気ラズラを手札に加えるよ‼?・」
「なら、攻撃対象がいなくなったことでそのまま攻撃を継続。ＰＳＹフレームロードΩでダイレクトアタック。エレクトリックドライブ」
「あいた‼?・結構痛いよ、これ」

電流を纏ったΩが美傘に突撃し、美傘のライフが削られる。

美傘　ＬＰ８０００→５２００

「次、荒魂でダイレクトアタック。アラミタマ」

「あちち‼?」

美傘　ＬＰ５２００→４４００

「メインフェイズ2、ＰＳＹフレームロードΩの効果発動、ディファレントトラベル。1ターンに1度、自分・相手のメインフェイズに相手の手札をランダムに1枚選び、そのカードと表側表示のこのカードを次の自分スタンバイフェイズまで表側表示で除外するわ」

「ありゃりゃ、せっかくサーチした晴天気ベンガーラは持ってかれちゃったか」

「エンドフェイズ、スピリットモンスター共通の効果により、召喚・リバースしたターンのエンドフェイズにスピリットモンスターは手札に戻ってくる。私はこれでターンエンド」

美傘　ＬＰ４４００　手札４

ーー雪ーー　ー

ーーーーー

ー　　ー

ーーーーー

ーー▲▲ー　▽

霊華　ＬＰ８０００　手札４

「うーん、またフィールドがガラ空きだね。これはまたＰＳＹフレームが来ちゃうかな?私のターン、ドロー‼?スタンバイフェイズ‼?雪天気シエルの効果を発動して特殊召喚するよ‼?」

〈雪天気シエル〉☆３　天使族　地属性
ＤＥＦ２２００
「私は　ＥＭ（エンタメイト）ドクロバットジョーカーを召喚!!?」
〈ＥＭドクロバットジョーカー〉☆４　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ１８００

美傘のフィールドに帽子を被ったマジシャンのようなモンスターが現れる。
「ＥＭドクロバットジョーカーの効果発動!!?このカードが召喚に成功した時、デッキからＥＭドクロバットジョーカー以外のＥＭモンスター、魔術師ペンデュラムモンスター、オッドアイズモンスターの内、いずれか１体を手札に加えるよ!!?私が手札に加えるのはオッドアイズペンデュラムドラゴン!!?」
「ペンデュラムモンスター……」
「そしてここからが私のステージだよ!!?私はフィールド魔法、天空の虹彩を発動!!?」
「!!?あなたもフィールド魔法を……」
美傘がフィールド魔法を発動させると、雪が舞い、電流が流れる空間に大きな虹が現れる。
「天空の虹彩の効果を発動!!?１ターンに１度、このカード以外の自分フィールドの表側表示のカード１枚を破壊してデッキからオッドアイズカードを手札に加えるよ!!?私はＥＭドクロバットジョーカーを破壊してデッキからオッドアイズペルソナドラゴンを手札に加えるよ!!?」
「っ、２枚のペンデュラムモンスターが手札に……それに一体いくつのテーマが同じデッキに入っているの?」
ドクロバットの姿が消え、美傘の手札にペルソナドラゴンが加わる。
それを見て、美傘は笑顔を浮かべて右手の指を鳴らした。

「Ｉｔ（さあ），ｓ Ｓｈｏｗｔｉｍｅ（ショータイム）だ‼？私はスケール１、オッドアイズペルソナドラゴンと、スケール４のオッドアイズペンデュラムドラゴンでペンデュラムスケールをセッティング‼？」
美傘を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中に２体のドラゴンの姿が映る。
そしてそのドラゴンの下には１と４の数字が浮かぶ。
「これで私は２から３までのモンスターを同時に特殊召喚可能‼？揺れろ揺れろ、魂の振り子‼？空に輝け、虹のアーチ‼？ペンデュラム召喚‼？飛び出せ、私のモンスター‼？」
美傘がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって１つの光が舞い降りる。
「レベル３、雨天気ラズラ‼？」

〈雨天気ラズラ〉☆３　天使族　水属性
ＤＥＦ１４００

フィールドに現れたのはメガネをかけ、手にペンのような物を持っているモンスター。
「雨天気ラズラの効果発動‼？このカードが特殊召喚に成功した場合、手札から天気魔法・罠カード１枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンに表側表示で置くよ‼？私は手札から永続罠、雷の天気模様を置くよ‼？」
「今度は永続罠……」
ラズラがペンを空にかざすと、雲が現れてそこから雷が鳴りはじめる。
「雷の天気模様は自分フィールドに１枚しか表側表示で存在できず、このカードと同じ縦列の自分のメインモンスターゾーン及びその両隣の自分のメインモンスターゾーンに存在する天気効果モンスターはこのカードが相手モンスターと戦闘を行うダメージステップ開始時に、このカードを除外してその相手モンスターを持ち主の手札に戻す効果を与えるよ。カードを１枚セット。エンドフェイズ‼？オッ

ドアイズペンデュラムドラゴンの効果発動!!?ペンデュラムリード!!?このカードを破壊し、デッキから攻撃力１５００以下のペンデュラムモンスター１体を手札に加えるよ!!?私はデッキから貴竜の魔術師を手札に加えてターンエンドだよ」

美傘　ＬＰ４４００　手札１
ー雷雪▲△　　▽
ー□□ーー
　　ー　　ー
ーーーーー
ーー▲▲ー　　▽
霊華　ＬＰ８０００　手札４

「私のターン、ドロー。スタンバイフェイズ、ＰＳＹフレームロードΩと除外した手札は戻ってくる」

〈ＰＳＹフレームロードΩ〉☆８　サイキック族　光属性
ＡＴＫ２８００

「私はスケール１、スモウ　魂（スピリット）　ＹＯＫＯ―ＺＵＮＡと、スケール９、ケンドウ魂ＫＡＩ―ＤＥＮでペンデュラムスケールをセッティング」
霊華のを挟むように光の柱が立ち上がる。
それを見て、美傘はニヤリと笑う。
「!!?ペンデュラムスケールはもう揃っちゃってたか……だけど、そうはさせないよ!!?速攻魔法、揺れる眼差し!!?お互いのペンデュラムゾーンのカードを全て破壊し、その後、この効果で破壊したカードの数によって効果を適用するよ。１枚以上で相手に５００ポイントのダメージを与え、２枚以上でデッキからペンデュラムモンスター１体を手札に加え、３枚以上でフィールドのカード１枚を選んで除外できる。４枚でデッキから揺れる眼差し１枚を手札に加える事ができる。今回破壊するのは３枚だから霊華ちゃんに５００ダメージを

与え、デッキからペンデュラムモンスターを手札に加え、カードを1枚除外させて貰うよ!!?」
「っ!?そんなカードを仕掛けてたなんて……PSYフレームロードΩの効果発動、ディファレントトラベル。貴方の手札1枚と表側表示のこのカードを次の自分スタンバイフェイズまで表側表示で除外するわ」
「貴竜の魔術師を持ってかれちゃったけど、これは仕方ないね。揺れる眼差しの効果で霊華ちゃんに500ダメージを与えて、オッドアイズファントムドラゴンを手札に加え、セットカードを1枚除外させて貰うよ!!?」
「除外されたのは罠カード、仁王立ち」

霊華　LP8000→7500

フィールドにあった3つの光の柱が消えていき、霊華が難しい表情を浮かべる。
「少し予定が狂った……だけど、まだ動ける。私は荒魂を召喚」

〈荒魂〉☆4　悪魔族　闇属性
ATK800

「荒魂の効果発動、デッキから天照大神を手札に加える」
「天照大神……確かスピリットモンスターの切り札って言えるカードだったハズだよね」
「エンドフェイズ、スピリットモンスター共通の効果により、召喚・リバースしたターンのエンドフェイズにスピリットモンスターは手札に戻ってくる」
「ならエンドフェイズに雪の天気模様の効果を得た雨天気ラズラの効果を発動!!?雨天気ラズラを除外してデッキから晴れの天気模様を手札に加えるよ!!?」
「私はこれでターンエンド」

美傘　ＬＰ４４００　手札３
ー雷雪ーー　　▽
ーー□ーー
ー　　ー
ーーーーー
ーーーー▲ー　　▽
霊華　ＬＰ７５００　手札４

「私のターン、ドロー!!?スタンバイフェイズ!!?雨天気ラズラも雪天気シエルと同じ効果を持ってるから特殊召喚するよ!!?」

〈雨天気ラズラ〉☆３　天使族　水属性
ＤＥＦ１４００

「さて、天照大神が来ることを考えるとあまり派手には動けないから準備に専念しようかな?私はスケール４のオッドアイズファントムドラゴンをペンデュラムスケールにセッティング。天空の虹彩の効果を発動!!?オッドアイズファントムドラゴンを破壊してデッキからオッドアイズアークペンデュラムドラゴンを手札に加えるよ。雪の天気模様の効果を得た雨天気ラズラの効果も発動!!?雨天気ラズラを除外してデッキから２枚目の雪天気シエルを手札に加えるよ!!?」

「?このタイミングで雪の天気模様の効果を使うの?」

「さらに魔法カード、ペンデュラムホルト!!?このカードは自分ＥＸデッキに表側表示のペンデュラムモンスターが３種類以上存在する場合に発動でき、自分はデッキから２枚ドローする!!?ただし、このカードの発動後、ターン終了時まで自分はデッキからカードを手札に加える事はできない」

「!!?成る程……そのカードがあったから先にサーチ効果を……」

「それに雪の天気模様はドロー効果までは阻害しないからね。私はカードを2枚ドロー!!?おおっと!?」
ドローしたカードを見て、美傘が笑顔を浮かべた。
それを見て、霊華も警戒の色を強くする。
「前言撤回かな?このターンから攻めさせて貰うよ。このカードは通常召喚する場合、モンスター3体をリリースして召喚しなければならず、モンスターの代わりに自分フィールドの永続魔法・永続罠カードをリリースできる!!?私はフィールドの雪天気シエル、永続魔法、雪の天気模様、永続罠、雷の天気模様を墓地に送り、手札からモンスターをアドバンス召喚するよ!!?」
「っ!??聞いたことがない召喚条件でのアドバンス召喚!??」
「世界を驚愕させる竜を超えし機兵!!?真竜機兵ダースメタトロン!!?」

〈真竜機兵ダースメタトロン〉☆9　幻竜族　光属性
ＡＴＫ３０００

フィールドにかかっていた雲と共に雪と雷が消え去り、空から剣と矛を持ち、黄金の鎧を身を纏った竜が降りてくる。
そのモンスターを見て、霊華が目を見開く。
「幻竜族……?そんな種族、聞いたことがない……私が感じた変わった波動の原因はこのカード?」
「ふふん、驚いた?驚いた?まあ幻竜族はかなり珍しいカードだから知らないのも無理はないかな。私もこの真竜機兵ダースメタトロン以外の幻竜族は見たことないしね。だけど、真竜機兵ダースメタトロンはただ珍しいだけのモンスターじゃないよ!!?真竜機兵ダースメタトロンの永続効果、サクリファイスレジスタンス!!?このカードは、このカードのアドバンス召喚のためにリリースしたカードと元々の種類が同じカードの効果を受けないよ!!?」
「!??ということは……」
「今回真竜機兵ダースメタトロンをアドバンス召喚するのにモンス

ター、魔法、罠を全て使ってるから、今の真竜機兵ダースメタトロンは全てのカード効果を受けないよ!!?」
「完全耐性持ちの攻撃力３０００のモンスター!?」
「バトル!!?真竜機兵ダースメタトロンでダイレクトアタック!!?スキュアブレイズ!!?」
「くっ……!!?」
ダースメタトロンが剣を空に掲げると、空から炎の槍が無数に降り注ぎ、霊華の身体を貫いた。

霊華　ＬＰ７５００→４５００

「さあ、真竜機兵ダースメタトロンをどう対処してくるかな?私はこれでターンエンドだよ」

美傘　ＬＰ４４００　手札５
ー ー ー ー ー ー　▽
ー ー ○ ー ー
ー　　ー
ー ー ー ー ー ー
ー ー ー ▲ ー　▽
霊華　ＬＰ４５００　手札４

「私のターン、ドロー。スタンバイフェイズ、ＰＳＹフレームロードΩと除外した手札は戻ってくる」
「それなら私も雨天気ラズラを特殊召喚するよ!!?」

〈雨天気ラズラ〉☆３　天使族　水属性
ＤＥＦ１４００

〈ＰＳＹフレームロードΩ〉☆８　サイキック族　光属性

ＡＴＫ２８００

「確かに珍しいモンスターで強固な耐性を持ってるけど、倒せないわけじゃない。私は和魂を召喚」

〈和魂〉☆４　天使族　光属性
ＡＴＫ８００

霊華が召喚したのは荒魂に似た緑色の霊体のモンスター。
「和魂の効果発動、このカードが召喚・リバースしたターン、自分は通常召喚に加えて１度だけスピリットモンスター１体を召喚できる。この効果で荒魂を召喚」

〈荒魂〉☆４　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ８００

「荒魂の効果発動、デッキから砂塵の悪霊を手札に加える。バトル。ＰＳＹフレームロードΩで真竜機兵ダースメタトロンを攻撃!!?」
「迎え撃って、真竜機兵ダースメタトロン!!?スキュアブレイズ!!?」
ダースメタトロンがΩに向けて炎の槍を放つ。
「私はフィールド魔法、ＰＳＹフレームサーキットの効果を発動!!?相手モンスターと戦闘を行うダメージステップ開始時に、手札からＰＳＹフレームギアεを捨てて、ＰＳＹフレームギアεの攻撃力１５００をＰＳＹフレームロードΩに加える!!?」
「あ!!?フィールド魔法のこと忘れてた!!?」

ＰＳＹフレームロードΩ
ＡＴＫ２８００→４３００

「貫いて、ＰＳＹフレームロードΩ。オーバーロードエレクトリックドライブ!!?」

フィールドに漂っていた電流がΩに向かって集まっていく。
集まった電力を纏ったΩに炎の槍が当たろうとした瞬間、Ωの姿がブレる。
そして次にΩの姿が現れた時、ダースメタトロンの身体には風穴が空いていた。

美傘　ＬＰ４４００→３１００

「……呆気ない最後だった」
「ふっふっふ、それはどうかな？真竜機兵ダースメタトロンの効果発動!!？ディファレントサモン!!？アドバンス召喚したこのカードが相手によって破壊された場合、地・水・炎・風属性のいずれかの融合・シンクロ・エクシーズモンスター１体をＥＸデッキから特殊召喚するよ!!？」
「っ!?？そんな効果まで持ってるの!?？」
風穴が空き消滅していくダースメタトロンを中心に次元に穴が開く。
そしてその穴の中から暴風と共にエメラルドのような体躯を持つ龍が現れた。
「私が呼び出すのはこのモンスター!!？観客を魅力し、歓声の旋風を巻き起こせ!!？オッドアイズボルテックスドラゴン!!？」
〈オッドアイズボルテックスドラゴン〉☆７　ドラゴン族　風属性
ＤＥＦ３０００
「オッドアイズボルテックスドラゴンの効果発動!!？サンダーフウァールウインド!!？このカードが特殊召喚に成功した時、相手フィールドの表側攻撃表示モンスター１体を対象としてそのモンスターを持ち主の手札に戻す!!？対象はＰＳＹフレームロードΩ!!？」
「っ!!？バトルフェイズ中じゃ逃げられない」
ボルテックスドラゴンがΩを中心にして高速で旋回すると、Ωを包

み込むように旋風が発生し、周囲の電流が集まりΩの動きを止める。
　Ωはその旋風に吹き飛ばされ、そのまま姿を消した。
「まさかこれを狙って？」
「いや～恥ずかしい話だけど本当にフィールド魔法のことを忘れてて
ね。これは偶々だよ。オッドアイズボルテックスドラゴンにはこの
カード以外のモンスターの効果・魔法・罠カードが発動した時にＥＸ
デッキから表側表示のペンデュラムモンスター１体をデッキに戻す
ことで、その発動を無効にして破壊できるからそれで何とかしようと
は思ってたんだけどね。でも、これでＰＳＹフレームロードΩはいな
くなったよ」
「無効効果まで……でも、まだ可能性はある。リバースカードオー
プン。罠発動、サイコチャージ。自分の墓地に存在するサイキック族
モンスター３体を選択し、デッキに加えてシャッフル。その後、自分
のデッキからカードを２枚ドローする。私は墓地に存在するＰＳＹ
フレームギアε、ＰＳＹフレームドライバー、ＰＳＹフレームギアδ
をデッキに戻して２ドロー。さらに今ドローした速攻魔法、手札断
殺。お互いのプレイヤーは手札を２枚墓地へ送り、その後、それぞれ
デッキから２枚ドローする」
「ここにきて連続ドローカードか……」
「来た……速攻魔法、禁じられた聖杯。オッドアイズボルテックス
ドラゴンを対象にし、ターン終了時までそのモンスターは、攻撃力が
４００ポイントアップし、効果は無効化される。」
「あちゃーここに来て効果無効カードか……そのまま通すよ」

　オッドアイズボルテックスドラゴン
　ＡＴＫ２５００→２９００

「さらに速攻魔法、ライバルアライバル」
「っ!!?よりにもよってそのカード!?」
「このカードは自分・相手のバトルフェイズに発動でき、モンスター１
体を召喚する。和魂をリリースして、砂塵の悪霊を召喚」

〈砂塵の悪霊〉☆６　アンデット族　地属性
ＡＴＫ２２００

フィールドに現れたのは白い髪の幽鬼のようなモンスター。
「和魂の効果発動、このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上にスピリットモンスターが存在する場合、デッキからカードを１枚ドローする。それにチェーンして砂塵の悪霊の効果発動。このカードが召喚・リバースした時、このカード以外のフィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する」
「っ……オッドアイズボルテックスドラゴンと雨天気ラズラは破壊されるよ」
砂塵の悪霊を中心に砂塵嵐が起こり、ボルテックスドラゴンとラズラ、荒魂が吹きの飛ばされて消滅する。
「そして今はまだバトルフェイズ。砂塵の悪霊でダイレクトアタック。砂塵撃」
「うっ‼？」
砂塵の悪霊が砂塵を拳に纏い、美傘を殴りつける。

美傘　ＬＰ３１００→９００

「……流石にこれ以上は攻撃が出来そうにない。メインフェイズ２、カードを１枚伏せてエンドフェイズ、スピリットモンスター共通の効果により、召喚・リバースしたターンのエンドフェイズにスピリットモンスターは手札に戻ってくる。（私の伏せカードは波紋のバリア―ウェーブフォース―……そして手札には攻撃宣言時に特殊召喚してバトルフェイズを終了させられるＰＳＹフレームギアβ……これなら次のターンも耐えられるハズ）」

美傘　ＬＰ９００　手札５
ーーーーー　▽

ーーーーー
ー　　ー
ーーーーー
ーー▲ーー　　▽
霊華　ＬＰ４５００　手札２

「……ふぃ～危ない危ない……もう少しでやられるところだったよ。でも、まだまだデュエルはここから!!?追い詰められたこの状況から大逆転して皆を驚かせちゃうんだから!!?」
　そういって満面の笑顔を浮かべる美傘を見て、霊華は不思議そうな顔を浮かべながら口を開く。
「……何故、貴方はそんなに驚かせることに拘ってるの?」
「ほぇ?何か変?」
「変というわけじゃない……ただ、今日このお店に入ってきた時にも皆を驚かそうとしてた。だから、何か理由があるのかと思って気になっただけ」
「理由かぁ……うーん、そうだなぁ」
　霊華の言葉に美傘は少し考える素振りを見せ、考えが纏まると自信満々に笑った。
「……理由は、私がデュエルで皆を驚かせて笑顔にする決闘者、エンタメデュエリスト、雨夜　美傘だからだよ」
「……答えになってない」
「にひひ、そうかもね。だけど、理由なんて本当にそんなものだよ。私はただ誰かに驚いて貰うのが好きなだけ……驚いた後に誰かに笑って貰うのが好きなだけだもん。だからこそ、私はエンタメデュエリストなんだよ」
「……よく分からない」
　そういって首を傾げる霊華に、美傘は苦笑を浮かべながら言葉を続ける。
「にひひ、それも仕方ないことかな。だけど、私がやりたいことは１つだけ、皆が驚くようなデュエルをして、自分も含めて皆で笑顔になる

こと」
「自分も？」
「昔ね、私がプロ決闘者になったばかりで、観客を驚かせて笑顔にさせるようなデュエルが上手く出来なかった時に、私にアドバイスをくれた人がいたんだ。『顰めっ面でデュエルしてても、誰も笑顔になんかならないぜ。誰かを笑顔にしたいなら、まずは自分が笑顔でいないとな』って」
「だから、貴方は笑顔でデュエルをしてるの？追い詰められた状況でも？」
　懐しむように柔らかく笑う美傘に霊華が問う。
　そんな霊華に美傘は今後は満面の笑みを浮かべて答えた。
「エンタメデュエリストってのは諦めが悪くてね。諦めない限り希望は最後まで消えないんだよ。さて、お話はここでお終い。私のデュエル、よーく見ててよ。このターンで絶対に霊華ちゃんを驚かせて、笑顔にして見せるから‼？私のターン、ドロー‼？」
　ドローしたカードを見て、美傘はニコッと笑うと観戦している人達にも聞こえるように声を上げた。
「さあ、さあ、お立ち会い‼？これから皆さんに見せるのは、デュエルモンスターズに存在する６つの特殊召喚方法‼？儀式・融合・シンクロ・エクシーズ・ペンデュラム・リンク、その全ての召喚方法をこの１ターンで皆さんにお見せ致します‼？」
「っ⁉？全ての召喚方法を⁉？」
「見事成功致しましたらどうか拍手喝采を‼？まずは魔法カード、シャッフルリボーン‼？自分フィールドにモンスターが存在しない場合、自分の墓地のモンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚します‼？ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、エンドフェイズに除外されます。私は雨天気ラズラを守備表示で特殊召喚‼？」
〈雨天気ラズラ〉☆３　天使族　水属性
ＤＥＦ１４００

「そして私は雪天気シエルを召喚!!?」

〈雪天気シエル〉☆3　天使族　地属性
ＡＴＫ０

「雪天気シエルの効果発動!!?このカードが召喚に成功した時にデッキからフィールドの中央に永続魔法、雪の天気模様を置きます!!?さらに墓地に存在する晴天気ベンガーラの効果発動!!?このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドの表側表示の永続魔法・永続罠カード1枚を墓地へ送って、このカードを守備表示で特殊召喚し、手札から天気魔法・罠カード1枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンに表側表示で置きます!!?私は雪の天気模様を墓地に送り、墓地の晴天気ベンガーラを特殊召喚し、手札から永続魔法、晴れの天気模様をフィールドの中央に置きます!!?」
「手札断殺の時に墓地に送っていたのね」

〈晴天気ベンガーラ〉☆3　天使族　炎属性
ＤＥＦ４００

フィールドに降り出した雪が溶けて現れたのは、光り輝く太陽とパレットと筆を持ったモンスター。
それを確認し、美傘は正面に手をかざす。
「Ｉｔ，ｓ（さ）　Ｓｈｏｗ（あ、ショー）ｔｉｍｅ（タイム）!!?最初に皆様にお見せするのはリンク召喚です!!?輝いて!!?笑顔で溢れるサーキット!!?」
美傘の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は天気モンスター3体!!?私は雪天気シエル、雨天気ラズラ、晴天気ベンガーラをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
サーキットの中にシエル、ラズラ、ベンガーラが吸い込まれていく。
そしてサーキットが光り輝くと、中から現れるのは虹を模したパ

レットと絵具を持つ白銀の髪を持つ天使。
「リンク召喚!!?笑顔に繋がる希望の架け橋!!?リンク３!!?虹天気アルシエル!!?」

〈虹天気アルシエル〉ＬＩＮＫ　３　天使族　光属性
ＡＴＫ２４００　↙?←↘?

「天気のリンクモンスター……」
「私は墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動!!?自分フィールドのカード１枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから１枚ドローします!!?ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を１枚除外します!!?私は晴れの天気模様をデッキに戻してカードを１枚ドローします!!?さらに魔法カード、貪欲な壺!!?墓地に存在するオッドアイズボルテックスドラゴンをＥＸデッキに、真竜機兵ダースメタトロン、雨天気ラズラ、雪天気シエル２枚をデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする!!?」
「ここにきて連続ドロー……」
「そして、お次に皆様にお見せするのはペンデュラム召喚です!!?私はスケール１、ＥＭ（エンタメイト）ユーゴーレムと、スケール８のオッドアイズアークペンデュラムドラゴンでペンデュラムスケールをセッティング!!?」
　美傘を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中にゴーレムとドラゴンの姿が映る。
　そしてその下には１と８の数字が浮かんだ
「これで私は２から７までのモンスターを同時に特殊召喚可能!!?揺れろ揺れろ、魂の振り子!!?空に輝け、虹のアーチ!!?ペンデュラム召喚!!?ＥＸデッキから再び姿を現せ、私のモンスター達!!?」
　美傘がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって　３つの光が舞い降りる。
「レベル５、オッドアイズペルソナドラゴン!!?」

〈オッドアイズペルソナドラゴン〉☆5　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ２４００

最初に現れたのは白い仮面のような身体を持つ赤と青の目を持つ小さな龍。
次にペルソナドラゴンの後ろに赤と青の目を持つ巨大な龍が降り立つ。
「美しき2色の眼で観客を魅了せよ‼?レベル7、オッドアイズペンデュラムドラゴン‼?」

〈オッドアイズペンデュラムドラゴン〉☆7　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２５００

ペンデュラムドラゴンが咆哮を上げる。
そんなペンデュラムドラゴンに並び立つように骨を想起させる身体を持ち、眼に青い炎が宿った龍が現れた。
「そして、美しき2色の眼で観客を幻惑せよ‼?レベル7、オッドアイズファントムドラゴン‼?」

〈オッドアイズファントムドラゴン〉☆7　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２５００

「　3体のオッドアイズの名を持つドラゴン……」
「ここからは私のオッドアイズタイムだよ‼?私は墓地に存在するチューナーモンスター、貴竜の魔術師の効果を発動‼?このカードが手札・墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル7以上のオッドアイズモンスター1体を対象として、そのモンスターのレベルを　3つ下げ、このカードを特殊召喚する‼?」
「っ、そのカードも手札断殺の時に……」
「私はオッドアイズペンデュラムドラゴンのレベルを3つ下げて貴竜

の魔術師を召喚!!?」

オッドアイズペンデュラムドラゴン
☆7→4

〈貴竜の魔術師〉☆3　魔法使い族　炎属性
ＤＥＦ１４００

現れたのは白いローブを纏った魔法使いのモンスター。
「チューナー……なら、次にくるのは……」
「そう!!?次にお見せするのはシンクロ召喚!!?貴竜の魔術師の効果でこのカードをシンクロ素材とする場合、ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できず、他のシンクロ素材にオッドアイズモンスター以外のモンスターを使用した場合、このカードを持ち主のデッキの一番下に戻るよ。私は、レベル４となったオッドアイズペンデュラムドラゴンに、レベル　３、チューナーモンスター、貴竜の魔術師をチューニング!!?」
貴竜の魔術師が光の輪になり、ペンデュラムドラゴンが小さな星に変わり、光の道になる。
そして光の道が輝くと、その中から燃え上がる炎と共にルビーのような体躯を持つ龍が現れた。
「シンクロ召喚!!?観客を魅力し、熱狂の炎を灯せ!!?オッドアイズメテオバーストドラゴン!!?」

〈オッドアイズメテオバーストドラゴン〉☆7　ドラゴン族　炎属性
ＡＴＫ２５００

「シンクロの……炎のオッドアイズ」
「オッドアイズメテオバーストドラゴンの効果発動!!?ペンデュラムコネクト!!?このカードが特殊召喚に成功した時、自分のペンデュラムゾーンのカード１枚を対象としてそのカードを特殊召喚する!!?

ただし、このターン、このカードは攻撃できなくなる」
　メテオバーストドラゴンの前に大きな魔法陣が現れる。
　メテオバーストドラゴンが咆哮を上げると、その魔法陣の中から漆黒の身体を持つ龍が現れる。
「私がペンデュラムゾーンから選択するのはオッドアイズアークペンデュラムドラゴン‼?美しき2色の眼で観客に奇跡を見せよ‼?オッドアイズアークペンデュラムドラゴン‼?」

〈オッドアイズアークペンデュラムドラゴン〉☆7　ドラゴン族　闇属性
　ＡＴＫ２７００

「またオッドアイズが……」
「どんどん行くよ‼?続けて皆様にお見せするのはエクシーズ召喚です‼?私はレベル7のオッドアイズファントムドラゴンとオッドアイズアークペンデュラムドラゴンでオーバーレイ‼?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築‼?エクシーズ召喚‼?」
　ファントムドラゴンとアークペンデュラムドラゴンが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
　そして渦が爆けると吹き荒れる吹雪と共にサファイアのような体躯を持つ龍が現れた。
「観客を魅力し、銀雪の輝きを見せよ‼?オッドアイズアブソリュートドラゴン‼?」

〈オッドアイズアブソリュートドラゴン〉★7　ドラゴン族　水属性
　ＡＴＫ２８００

「次はエクシーズの水のオッドアイズ……‼?まさかオッドアイズは‼?」
「気づいたかな?オッドアイズは現在リンク以外の全ての召喚方法を使えるんだよ‼?」

「っ、そんなことができるなんて……」
「さあ、お次は融合召喚です‼？魔法カード、オッドアイズフュージョンを発動‼？自分の手札・フィールドから、ドラゴン族の融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚する‼？私はフィールドのオッドアイズペルソナドラゴンと手札のオッドアイズミラージュドラゴンを融合‼？」

美傘の前に渦が現れ、そこにペルソナドラゴンとペルソナドラゴンに似た緑色の龍が吸い込まれていく。
そして渦が弾けると、暴風と共にエメラルドのような体躯を持つ龍が再び現れた。
「仮面の龍、幻影の龍よ‼？今交わりて、笑顔を導く力となれ‼？融合召喚‼？再び歓声の旋風を巻き起こせ‼？オッドアイズボルテックスドラゴン‼？」

〈オッドアイズボルテックスドラゴン〉☆7　ドラゴン族　風属性
ＡＴＫ２５００

「融合の風のオッドアイズ……ということは次は……」
「融合召喚に成功した時、ペンデュラムスケールのＥＭユーゴーレムの効果発動‼？1ターンに1度、自分フィールドにモンスターが融合召喚された場合、自分の墓地のペンデュラムモンスター及び自分のＥＸデッキの表側表示のペンデュラムモンスターの中から、ＥＭモンスター、オッドアイズモンスター、魔術師モンスターの内、いずれか1体を選んで手札に加える。私はＥＸデッキからオッドアイズペンデュラムドラゴンを手札に加える。そして天空の虹彩の効果を発動‼？ＥＭユーゴーレムを破壊してデッキから儀式魔法、オッドアイズアドベントを手札に加えるよ‼？」
「‼？やっぱり次は儀式のオッドアイズ‼？」
「そしてこれが最後の召喚方法、儀式召喚です‼？私は儀式魔法、オッ

ドアイズアドベントを発動!!?レベルの合計が儀式召喚するモンスターのレベル以上になるように、自分の手札・フィールドのペンデュラムモンスターをリリースし、自分の手札・墓地からドラゴン族の儀式モンスター1体を儀式召喚する!!?私は手札のオッドアイズペンデュラムドラゴンをリリースし、墓地から儀式召喚を行うよ!!?」
「!?手札断殺で捨てたカードは全部使ったのに、そんなカードいつ墓地に……」
「覚えてないかな?デュエルの1番最初に墓地に送るタイミングがあったハズだよ?」
「デュエルの最初?」

ーーーーーーーー

『そ、それを霊華ちゃんに言われるのは少し納得がいかないんだけど!!?ま、まあいいよ。手札を1枚捨てて魔法カード、ペンデュラムコール!!?』

ーーーーーーーー

「っ、あの時!!?」
「さあ、いくよ?儀式召喚!!?観客を魅力し、その重力で惹きつけろ!!?オッドアイズグラビティドラゴン!!?」
美傘の呼び声に応えるように、地面の中から岩石覆われたインペリアルトパーズのような体躯を持つ龍が現れた。

〈オッドアイズグラビティドラゴン〉☆7　ドラゴン族　地属性
ＡＴＫ２８００

「っ……儀式の地のオッドアイズ……まさか本当に1ターンで全ての召喚方法を使うなんて……」
「ふふん、驚いた?それじゃあこのまま終わりにするよ!!?オッドアイズグラビティドラゴンの効果発動!!?グラビティリッパー!!?こ

のカードが特殊召喚に成功した時、相手フィールドの魔法・罠カードを全て持ち主の手札に戻す!!?この効果の発動に対して相手は魔法・罠・モンスターの効果を発動できない!!?」
「えっ!?」
グラビティドラゴンが霊華に向けて両手を振り下ろすと、空間が歪みはじめ、辺りを覆っていた電流が流れる緑色の空間が消え、伏せカードと共に霊華の手札に戻る。
「……私の負け」
霊華は己の負けを悟る。
伏せカードはなくなり、手札のＰＳＹフレームもボルテックスドラゴンに止められる。
完全に手詰まりだと。
そんな霊華に美傘は真剣な表情を浮かべた。
「強かったよ、霊華ちゃん。だから、私は最後まで全力で霊華ちゃんにぶつかるよ!!?バトル!!?虹天気アルシエルでダイレクトアタック!!?レインボーティアーズ!!?この瞬間、オッドアイズアブソリュートドラゴンの効果発動!!?リキッドブリザード!!?自分または相手のモンスターの攻撃宣言時に、オーバーレイユニットを1つ取り除き、その攻撃を無効にする!!?」
「えっ!?」
アルシエルが霊華に虹を模した絵具を向け、7色のレーザーを撃つ。
それに反応し、アブソリュートドラゴンはオーバーレイユニットを1つ吸収し、辺りに吹雪を発生させる。
吹雪の中で7色のレーザーは乱反射を起こし、辺りを様々な色で彩っていく。
それを見て、霊華と観戦している参加者からも感嘆の声が漏れる。
「綺麗……」
「その後、自分の手札・墓地からオッドアイズモンスター1体を選んで特殊召喚できる!!?再び美しき2色の眼で観客を魅了せよ!!?オッドアイズペンデュラムドラゴン!!?」

吹雪が勢いを落とし、乱反射していたレーザーが集束し地面に向けて放たれ、土煙が舞う。
しばらくすると、龍の咆哮と共に土煙が吹き飛び、再び赤と青の目を持つ巨大な龍が姿を現した。

〈オッドアイズペンデュラムドラゴン〉☆7　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２５００

「これにてペンデュラム・シンクロ・エクシーズ・融合・儀式、全特殊召喚方法のオッドアイズ揃い踏みだ!!?」
美傘の声に応えるようにペンデュラムドラゴンが咆哮を上げ、それに呼応するように他のオッドアイズも咆哮を上げる。
それを見て、霊華は思わず笑顔を浮かべた。
「……ズルい。こんな凄い光景を見せられたら、笑うしかない」
「にひひ!!?いくよ、霊華ちゃん!!?オッドアイズアブソリュートドラゴンでダイレクトアタック!!?ブリザードスマッシュ!!?」
アブソリュートドラゴンが辺り一面を凍らせ、その氷を尻尾で砕いて破片が霊華を襲い、ライフを削る。

霊華　ＬＰ４５００→１７００
「Ｗｅｌｌ（それじゃあ）ｔｈｅｎ（フィナーレだよ）ｆｉｎａｌｅ!!?オッドアイズペンデュラムドラゴンでダイレクトアタック!!?螺旋のストライクバースト!!?」
ペンデュラムドラゴンが虹色のブレスを霊華に放つ。
霊華はそれを見て目を閉じ、柔らかく笑いながらブレスに呑み込まれた。

霊華　ＬＰ１７００→０

ーーーーーーー

「そこまで‼?勝者、雨夜　美傘‼?」
　デュエルが終わると観戦していたデュエルアカデミア生達の中から拍手が起きる。
　鳴り響く拍手を聞きながら美傘は嬉しそうに笑いながら恭しく頭を下げる。
　そんな美傘に霊華は柔らかな笑みを浮かべながら話しかける。
「ありがとうございました。感じたことがない波動を持つカードも見れて、凄く楽しいデュエルだった」
「にひひ、霊華ちゃんを満足させられたならよかったよ。また機会があったらデュエルしようね」
「次の試合は遊花とのデュエルだから、美傘さんだけを応援することは出来ないけど、遊花とどんなデュエルを見せてくれるのか、期待してる」
「うん、期待してくれるだけで私は十分だよ。遊花ちゃんとのデュエルでも沢山驚かせてあげるから、お楽しみにね‼?」
　そういうと美傘は霊華に手を振りながら、元いた観戦場所に戻っていく。
　美傘が元いた観戦場所に戻ると、遊花がきらきらと目を輝かせながら美傘に声をかける。
「美傘さん、お疲れ様でした‼?1ターンで全ての召喚方法を使うなんて、本当に凄いです‼?」
「にひひ、そういって貰えると頑張った甲斐があるよ。まあ、遊花ちゃんもペンデュラム以外の召喚方法は使ってたから、私みたいなデュエルぐらいすぐに出来るようになると思うけどね」
「うぅ～そうでしょうか?少なくとも私はペンデュラム召喚は出来ませんし……」
「あ～そっか。遊花ちゃんのデッキはレベル1モンスターが主体だもんね。ペンデュラム召喚するためにはスケール0のカードがいるわけか」
　少し残念そうな遊花を見て、美傘は少しの間目を閉じて何かを考え

る。
　しばらくして、美傘は目を開ける遊花に対してニコッと笑った。
「よし、ならこうしよう‼？次の私とのデュエルで遊花ちゃんが勝つことができたら、私が遊花ちゃんをペンデュラム召喚ができるようにしてあげる」
「えっ⁉？本当ですか⁉？」
「うんうん、本当本当。皆を驚かせることが出来るように色々な召喚方法を覚えたけど、元々私の専門はペンデュラム召喚だからね。遊花ちゃんにも使えるペンデュラムカードを美傘さんが用意してあげよう」
「‼？ありがとうございます‼？」
「おっと、少し気が早いよ？私に勝ってからだって分かってる？」
「勿論です。どちらにせよ、私だって負けるつもりはありませんから。私が成長したところを師匠にたくさん見てもらうために、美傘さんにだって、勝っちゃいますから‼？」
　負けないという強い意志が宿る遊花の目を見て、美傘は少し驚いた表情を浮かべてから柔らかく笑った。
「‼？……そっか。うん、元々楽しみだったけど、余計次のデュエルが楽しみになってきたよ。遊騎さんの弟子の力、見せてもらうよ‼？」
「はい‼？」
「……盛り上がるのは勝手だけど、アンタ達のデュエルはもう少し先なんだからね？」
「やる気があるのはいいこと。これだけでも遊騎が大会を開いた意義はあった。嬉しい」
「いや、ちょいとやりすぎやと思うけどなぁ、ワイは。というか、自分らこれ以上栗原に詰め込む気かいな……ホンマ末恐ろしい子になりそうやで」
　今にもデュエルを始めそうな遊花と美傘を見て、桜が呆れた顔をしながらツッコミを入れ、闇は嬉しそうな声を出し、竜河は困惑したような声を漏らす。

そんな中、店内に遊騎の声が響く。
「それじゃあここからがBブロックの試合だ。1回戦第5試合、無所属、結束　遊騎VSデュエルアカデミア所属、桜糀　紅葉だ。俺の方はすでに準備が出来ているから、桜糀は試合の準備を頼む」
「!!?次は師匠の試合ですね!!?」
「ん、久しぶりに遊騎のデュエルが見れる。楽しみ」
「そういえば闇は何だかんだで結束がデュエルするところを見れてなかったわね」
「ん……だから今の遊騎がどんなデュエルをするか、楽しみ」
無表情ながらも、ワクワクとした雰囲気が伝わる声色で闇が呟く。
「それで、相手の桜糀いうデュエルアカデミア生は強いんか?」
「今日来ているデュエルアカデミア生は私以外学年トップ10に入ってる人達ばかりですから、凄く強い人ですよ」
「……いや、栗原の実力で学年トップ10に入れてないことがワイは驚愕なんやけども」
「遊花は1ヶ月前まではデュエルが出来なかったから入ってないだけよ。今なら3位ぐらいには入れるんじゃない?」
「えーそれはない「結束　遊騎さん。私は貴方のような人が遊花さんの師匠に相応しいとは思えません」……え?」
聞こえてきた声に、話をしていた遊花達が声が聞こえた方向を向く。
そこにあったのは厳しい表情で遊騎を睨む紅葉の姿。
「……成る程、ね。それで?」
そんな紅葉に、遊騎は苦笑を浮かべながら尋ねる。
紅葉は遊騎の問いに強い意志を込めた声色で、その言葉を告げた。
「私が勝ったなら、貴方は遊花さんの師匠を辞め、彼女には二度と近づかないでください」
「!?桜糀さん!?なんで……」
遊花が悲しそうな声を漏らす。
穏やかに進んでいた大会に、嵐が、やってこようとしていた。

第３７話　絵札ＶＳ花札・消せない罪

☆

全てを焼き尽くすような業火が、辺り一面に広がっている。
辺りから聞こえる悲鳴が、どこか遠くの出来事のように思える。
俺はその業火が全てを焼き尽くすのを見ていることしか出来ない。
ああ……どうして……
どうして俺は見ているだけしかできないのだろう？
どうして俺は取り残されてしまうのだろう？
どうして……俺は　あの業火の中にいないのだろう？

ーーーーーーー

「それじゃあここからがＢブロックの試合だ。１回戦第５試合、無所属、結束　遊騎ＶＳデュエルアカデミア所属、桜糀　紅葉だ。俺の方はすでに準備が出来ているから、桜糀は試合の準備を頼む」
大会のアナウンスをしてから、デュエルディスクにデッキをセットする。
何とかここまでは順調に進行することが出来ていてホッとする。
それにしても、まさか遊花がプロ決闘者である竜河に勝ってしまうとは思わなかった。
遊花自身、かなり実力をつけていることはこの間の期末テストや闇からの報告で分かっていた。
それでもまだプロ決闘者に勝てるまでの実力には届いていないだろうというのが、闇から聞いていた評価だったのだ。
そんな遊花が竜河に勝ち、２回戦に駒を進めた。
それが、自分のことのように嬉しく思う。
「……俺も負けてられないよな」
遊花が１回戦を突破したのに、師匠である自分が１回戦負けなど笑い話にもならない。

彼女の師匠として情けないところは見せられないと自分を鼓舞していると、俺の目の前に1人の少女が歩いてくる。
上品な雰囲気を纏っているその少女の顔は険しく、俺を真っ直ぐ睨みつけており、思わず苦笑してしまった。
……分かっていたハズだった。
それでも、異世界に行くという経験で、一瞬でも夢を見てしまったからだろうか？
だから、今こうして現実がやってくる。
「……お初にお目にかかります、結束　遊騎さん。貴方が、遊花さんの師匠ということに間違いありませんか？」
「……ああ、そういうことになっている」
「……何故、貴方のような人に遊花さんが弟子入りを……」
桜糀は1度目を閉じてから、覚悟を決めた厳しい表情で俺を見る。
「結束　遊騎さん。私は貴方のような人が遊花さんの師匠に相応しいとは思えません」
「……成る程、ね。それで？」
俺の問いに桜糀は強い意志を込めた声色で、口を開いた。
「私が勝ったなら、貴方は遊花さんの師匠を辞め、彼女には二度と近づかないでください」
「⁉？桜糀さん⁉？なんで……」
遊花の悲しそうな声が聞こえてくる。
俺は真っ直ぐ桜糀を見つめ返しながら尋ねる。
「一応、理由を聞いていいか？」
「それは貴方が1番分かっているのではありませんか？イカサマでプロリーグを追放された貴方が」
「まあ、そんなところだろうな……いいぜ。その条件、受けよう」
「ちょっ、結束⁉？アンタ何言って……」
俺の言葉に、宝月が驚きの声を上げる。
それでも俺は目を逸らさずに桜糀に告げる。
「どっちにしろ、大会なんだから逃げるわけにもいかないしな。ただし、そっちにだけ利があるような条件には乗れない。だから俺が勝っ

たら、俺と遊花の師弟関係にこれ以上口出しするのは止めて貰うぜ。これは遊花が望んだものだからな。師匠として、弟子の望みを断つなんて無責任なことはしたくないからな」

「……いいでしょう。このデュエル、勝たせていただきます」

「悪いが、俺もこのことに関しては今更引く気はないんだよ。遊花が俺を師匠だと呼んでくれる限りは、俺は遊花の師匠であり続ける……そう決めてんだ」

そう、例え俺自身がこの街の人々にとって、どうしようもない罪人なのだとしても……

俺と桜糀、２人同時にデュエルディスクを起動し、構える。

負けるつもりは元々なかったが、今回は余計に負けられない。

このデュエル……絶対に勝ってみせる。

『決闘!!?』

遊騎　ＬＰ８０００
紅葉　ＬＰ８０００

ーーーーーーーー

「先攻はいただきますわ。魔法カード、花合わせを発動します。花合わせは1ターンに1枚しか発動できず、このカードを発動するターン、自分は花札衛モンスターしか召喚・特殊召喚できなくなりますが、その代わりにデッキから同名カードは1枚までで攻撃力１００の花札衛モンスター4体を攻撃表示で特殊召喚します!!?」

「!!?魔法カード1枚からモンスターを4体特殊召喚だって!!?」

「ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、アドバンス召喚のためにはリリースできません。私はデッキから、花札衛（カーディアン）ー松ー、花札衛（カーディアン）ー芒ー、花札衛（カーディアン）ー柳ー、花札衛（カーディアン）ー桐ーを特殊召喚しますわ!!?」

〈花札衛ー松ー〉☆1　戦士族　闇属性

ＡＴＫ１００

〈花札衛ー芒ー〉☆８　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１００

〈花札衛ー柳ー〉☆１１　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１００

〈花札衛ー桐ー〉☆１２　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１００

フィールドに現れたのは４体の花札のモンスター。
流石にたった１枚のカードから４体のモンスターが出てくるとは思っていなかった。
花札衛モンスターしか召喚・特殊召喚できなくなる制約があるとはいえ、それでも使って攻撃力１００のモンスターを並べてきたのだから、ここから繋がる何らかの召喚方法が必ずあるハズ……これは最初からかなりマズイことになったかもな。
「私はフィールドにいる花札衛ー柳ーをリリースしてチューナーモンスター、花札衛（カーディアン）ー柳に小野道風ーを特殊召喚します!!?」

〈花札衛ー柳に小野道風ー〉☆１１　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００

現れたのは柳と人型のモンスターが描かれたモンスター。
「このカードが特殊召喚に成功した場合、自分はデッキから１枚ドローし、お互いに確さます。それが花札衛モンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚でき、違った場合、そのカードを墓地へ送ります」
そういって桜糀がカードをドローし、そのカードを俺に見せる。
「私がドローしたカードは花札衛（カーディアン）ー芒に月ー。花札衛モンスターな

ので特殊召喚しますわ」

〈花札衛ー芒に月ー〉☆８　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００

次に現れたのは芒に月の絵が描かれたモンスター。
「続けて花札衛ー芒に月ーの効果を発動します。このカードも特殊召喚に成功した場合、自分はデッキから１枚ドローし、お互いに確認し、それが花札衛モンスターだった場合、そのカードを特殊召喚でき、違う場合は墓地へ送る効果を持っていますわ」
「フィールドは埋まってるからドローがメインってわけか」
「私がドローしたのは花札衛（カーディアン）ー桐に鳳凰ー。花札衛モンスターなのでそのまま手札に加えます。そしてチューナモンスター、花札衛ー柳に小野道風ーの効果を発動します。フィールドのこのカードをシンクロ素材にする場合、このカードを含む全てのシンクロ素材モンスターを、レベル２のモンスターとして扱うことができます!!?」
「!!?・ということはレベル１０のシンクロ召喚か!!?」
「私は、レベル２となった花札衛ー桐ー、花札衛ー松ー、花札衛ー芒ー、花札衛ー芒に月ーに、同じくレベル２となったチューナーモンスター、花札衛ー柳に小野道風ーをチューニング!!?」
小野道風が光の輪になり、他の花札衛達が小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から現れるのは刀を持った巨大な戦士。
「四季の力が重なりし時、そこに満ちるは神秘の光!!?・シンクロ召喚!!?・世界を照らす威光!!?・花札衛（カーディアン）ー五光ー!!?」

〈花札衛ー五光ー〉☆１０　戦士族　闇属性
ＡＴＫ５０００

「まさかいきなり攻撃力５０００のシンクロモンスターを出してくるなんてな」

「花札衛ー五光ーはただ攻撃力が高いだけのモンスターではありません。花札衛ー五光ーは1ターンに1度、相手が魔法・罠カードを発動した時、その発動を無効にし破壊します。さらに自分の花札衛モンスターが相手モンスターと戦闘を行う場合、バトルフェイズの間だけその相手モンスターの効果は無効化され、シンクロ召喚したこのカードが戦闘で破壊された場合、または相手の効果でフィールドから離れた場合、ＥＸデッキから花札衛―五光―以外の花札衛シンクロモンスター1体を特殊召喚出来ます」

「っ……ただでさえ攻撃力が高いってのに魔法・罠無効に戦闘補助、おまけに除去されても後続を呼び出せるのかよ……」

「貴方のような人に花札衛―五光―を突破できますか？私はこれでターンエンドといたします」

遊騎　ＬＰ８０００　手札５

ーーーーーー　ー

ーーーーーー

ー　○

ーーーーーー

ーーーーーー　ー

紅葉　ＬＰ８０００　手札４

1ターン目からかなり動きにくくなった上に、攻撃力５０００なんていうモンスターを突破しなくてはいけなくなってしまったが、だからといって簡単に引き退るつもりはない。

「俺のターン、ドロー‼？まずは速攻魔法、手札断殺‼？お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送り、その後、それぞれデッキから2枚ドローする‼？」

「手札交換のカードですか……その効果は通しましょう」

「なら次に墓地に送られた墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える」

「それは先程の試合で天羽さんが使っていたカードですね。その効果

も通しましょう。サーチしたカードを無効にすればいいだけですからね」
「なら俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える。そして装備魔法、妖刀竹光を花札衛―五光―に装備する」
「っ、私のモンスターを利用してきましたか。そのカードは無効にするだけ無駄ですね」
花札衛―五光―の刀が禍々しい竹光に変わる。
これでドローする準備は出来たが……さあ、どこを止めてくるかだな。
「魔法カード黄金色の竹光を発動!!?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローする!!?」
「……その効果も通しましょう」
「ドローを通してきたか……なら次だ。魔法カード、予想ＧＵＹを発動!!?自分フィールドにモンスターが存在しない場合にこのカードは発動できる。デッキからレベル４以下の通常モンスター１体を特殊召喚する!!?」
「通常モンスター……っ、確か貴方のデッキは絵札の三銃士を使うのでしたね。ならば、止めさせていただきます。花札衛ー五光ーの効果を発動します、光輝燦然!!?１ターンに１度、相手が魔法・罠カードを発動した時、その発動を無効にし破壊します!!?」
五光の身体が光輝き、その強い光で予想ＧＵＹのカードが割れる。
よし、これでこのターンはもう魔法・罠を無効に出来ない……それじゃあ、早速新しい力を試してみるか。
「俺はスケール２の魔装戦士ドラゴディウスとスケール７の魔装戦士ドラゴノックスでペンデュラムスケールをセッティング!!?」
「っ、ペンデュラム召喚!!?」
「ええっ!!?遊騎さんがペンデュラム召喚!!?そんなの私聞いてないよ!!?」
俺を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中に２体の戦士の姿が浮かびあがり、下に２と７の数字が現れる。

俺がペンデュラムスケールをセッティングをしたことで店内がざわつき始める。
特に、美傘がうるさい。
アイツの十八番であるペンデュラム召喚をいきなり俺が使ったら驚くとは思っていたが、もう少し静かにできないのだろうか？
チラリと観戦席を見ると遊花も驚いたように目を見開いていた。
まあ、遊花を驚かせてやれただけでもやったかいはあったか。
「……結束　遊騎がペンデュラム召喚を使うなんて話は聞いたことがありませんが……」
「最近使う機会があったから覚えたんだよ」
「使う機会、ですか」
「ああ、ちょっと異世界でな」
「……私を馬鹿にしているのですか？」
「さあ、どうだろうな？これにより俺は3から6までのモンスターを同時に召喚可能!!?魂に宿りし剣よ!!?煌めく勇気となりて、運命を超える力を導け!!?ペンデュラム召喚!!?現れろ、俺のモンスター達!!?」
俺がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって2つの光が舞い降りる。
「レベル4、H・C（ヒロイックチャレンジャー）ダブルランス!!?」

〈H・C　ダブルランス〉☆4　戦士族　地属性
ATK1700

最初に現れたのは2つの槍を持った白い戦士。
そしてその後ろに赤い鎧を身に纏った女性の騎士が現れる。
「レベル4、クィーンズナイト!!?」

〈クィーンズナイト〉☆4　戦士族　光属性
DEF1600

「っ、クィーンズナイトはすでに手札にあったのですか、ということは最後の手札は……」
「察しがいいな。俺はキングスナイトを召喚!!?」
〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００
クィーンズナイトの横に並び立ったのは黄金の鎧を身に纏った騎士。
そしてクィーンズナイトとキングスナイトはお互いに剣を掲げて更なる騎士を呼ぶ。
「さあ、お前が花札なら俺は絵札を呼ばせて貰おうか。キングスナイトの効果発動!!?自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト１体を特殊召喚する!!?集え、絵札の三銃士!!?来い、ジャックスナイト!!?」
〈ジャックスナイト〉☆５　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００
クィーンズナイトとキングスナイトの剣に合わせるように剣を掲げる青い鎧の騎士が現れる。
それを見て、桜糀が苦い表情を浮かべる。
だが、こちらも加減するつもりはない。
俺はすぐに手を正面にかざす。
「斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
「リンク召喚ですか……」
俺の前に巨大なサーキットが現れる。
花札衛ー五光ーの無効化効果も次のターンには復活してしまう。
だからこそ、このターンで花札衛ー五光ーを倒す!!?
「召喚条件は戦士族モンスター２体!!?俺はジャックスナイトとＨ・Ｃ　ダブルランスの２体をリンクマーカーにセット!!?サーキット

コンバイン‼?リンク召喚‼?追想に生きる王女‼?リンク２‼?
聖騎士の追想　イゾルデ‼?」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

ジャックスナイトとダブルランスの２体がサーキットの中に消えると代わりに金髪と白髪の２人の女性が現れる。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動‼?リンクレカレクション‼?リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター１体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキからＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）エクストラソードを手札に加える‼?まだ終わらない‼?聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動‼?メモリーズギフト‼?デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター１体をデッキから特殊召喚する‼?俺はデッキから妖刀竹光、神剣―フェニックスブレード、ビッグバンシュート、最強の盾を墓地に送り、デッキからＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）サウザンドブレードを攻撃表示で特殊召喚‼?」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

現れたのは頭巾を被り、背中に何本もの刀を背負った戦士。
そしてこのモンスターはフィールドに更なる戦士を呼べる。
「まずは墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから２枚目の黄金色の竹光を手札に加え、そのまま黄金色の竹光を発動‼?カードを２枚ドローする‼?」
「また手札が……」
「さらにＨ・Ｃ　サウザンドブレードの効果発動‼?１ターンに１度

手札にあるヒロイックカードを捨ててデッキからヒロイックモンスターを特殊召喚する!!?俺は手札のＨ・Ｃ　エクストラソードを捨ててデッキから現れろ、Ｈ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）強襲のハルベルト!!?」

〈Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１８００
俺の前に新たに現れたのはハルバードを持った紫の鎧を纏った戦士。
「そしてこの効果を使ったＨ・Ｃ　サウザンドブレードは守備表示になる」

Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード
ＡＴＫ１３００→ＤＥＦ１１００

「くっ、次々にモンスターがフィールドに……」
「まだまだ終わらないぜ!!?斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
「っ、再びリンク召喚……」
俺の前に再びサーキットが現れる。
さあ、行くぞ!!?
「召喚条件はカード名が異なる戦士族モンスター３体!!?俺はキングスナイト、Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード、聖騎士の追想イゾルデの３体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
キングスナイト、サウザンドブレード、イゾルデがサーキットに吸い込まれていく。
そしてサーキットのリンクマーカーが輝くとサーキットの中から白銀の鎧を身に纏った騎士が現れた。
「リンク召喚!!?運命と戦う孤高の騎士!!?リンク３!!?アルカナエクストラジョーカー!!?」

〈アルカナエクストラジョーカー〉ＬＩＮＫ３　戦士族　光属性

ＡＴＫ２８００　↙？　→　↘？

「絵札の三銃士のリンクモンスター……それが貴方の切り札ですか」

「これだけじゃないぜ。俺は戦士族、レベル４のクィーンズナイトとＨ・Ｃ　強襲のハルベルトでオーバーレイ‼？２体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」

クィーンズナイトとハルベルトが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けるとそこにいたのは赤い鎧を着た王者の風格を漂わせる戦士。

「光を纏て、闇を切り裂く孤高の王者‼？　Ｈ（ヒロイック）ー　Ｃ（チャンピオン）　エクスカリバー‼？」

〈ＨーＣ　エクスカリバー〉★４　戦士族　光属性

ＡＴＫ２０００

「エクシーズモンスター……」

「ＨーＣ　エクスカリバーの効果発動‼？シャイニングフォース‼？オーバーレイユニットを２つ使い、このカードの攻撃力は、次の相手のエンドフェイズ時まで元々の攻撃力の倍になる‼？」

エクスカリバーの周りを漂っていたオーバーレイユニットがエクスカリバーに集まり、エクスカリバーの身体が光り輝いた。

ＨーＣ　エクスカリバー

ＡＴＫ２０００↓４０００

「攻撃力４０００‼？ですが、それでも花札衛―五光―は倒せません‼？」

「ああ。五光を倒すのはエクスカリバーの役目じゃないさ。墓地に存在する神剣―フェニックスブレードの効果発動‼？自分の墓地に存

在する戦士族モンスター2体をゲームから除外する事で、このカードを自分の墓地から手札に加える。俺は墓地から聖騎士の追想イゾルデとＨ・Ｃ　エクストラソードを除外してこのカードを手札に戻す。そしてバトル‼？アルカナエクストラジョーカーで花札衛―五光―を攻撃‼？」

「⁉？攻撃力が低いアルカナエクストラジョーカーで攻撃⁉？花札衛―五光―の効果発動‼？光明遍照‼？自分の花札衛モンスターが相手モンスターと戦闘を行う場合、バトルフェイズの間だけその相手モンスターの効果は無効化されます‼？迎え撃ってください、花札衛―五光―‼？光風霽月‼？」

五光が光を纏った刀を振り下ろそうとする。

「俺はペンデュラムゾーンの魔装戦士ドラゴディウスの効果発動‼？」

「っ、ペンデュラム効果⁉？」

「自分のモンスターが相手の表側表示モンスターと戦闘を行うダメージステップ開始時に手札を1枚捨て、その戦闘を行う相手モンスターの攻撃力・守備力は半分になる‼？」

花札衛―五光―
ＡＴＫ５０００→２５００

「っ、攻撃力が……」

「行け、アルカナエクストラジョーカー‼？ストレートフラッシュ‼？」

五光の身体を抑えるようにドラゴディウスが現れる。

その隙にエクストラジョーカーが五光に大剣を振りかざし、斬り伏せた。

紅葉　ＬＰ８０００→７７００

「くっ……ですが、花札衛―五光―の効果発動‼？千紫万紅‼？シ

ンクロ召喚したこのカードが戦闘で破壊された場合、または相手の効果でフィールドから離れた場合、ＥＸデッキから花札衛―五光―以外の花札衛シンクロモンスター１体を特殊召喚出来ます‼？世界を包む涙雨‼？花札衛（カーディアン）ー雨四光ー‼？」

〈花札衛ー雨四光ー〉☆８　戦士族　闇属性
ＤＥＦ３０００

現れたのは小野道風に描かれていた傘を持った和風の戦士。
だが、エクスカリバーの敵ではない‼？
「花札衛―五光―が破壊されたことで装備していた妖刀竹光も墓地に送られている。その効果でデッキから３枚目の黄金色の竹光を手札に加える。続けてＨーＣ　エクスカリバーで花札衛ー雨四光ーを攻撃‼？必殺剣　刀光剣影‼？」
「迎え撃ってください、花札衛ー雨四光ー‼？弾丸雨注‼？」
雨四光の傘から集束された雨の弾丸がエクスカリバーに向けて撃ち出される。
エクスカリバーは撃ち出された弾丸に剣を振るい、弾丸ごと雨四光を斬り裂いた。
「くっ……雨四光までやられるとは……追放されたとはいえ、それでもプロ決闘者だっただけのことはあるということですか……」
「……メインフェイズ２、墓地に存在する神剣―フェニックスブレードの効果発動‼？Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトとジャックスナイトを除外してこのカードを手札に戻す。俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ８０００　手札３
△ー▲ー△　　ー
ーー○ーー
☆　　ー
ーーーーー

ーーーーー　　ー
紅葉　ＬＰ７７００　手札４

「たった1ターンで五光が倒されるとは思いませんでしたが、貴方のような人に私は負けません!!?私のターン、ドロー!!?私は花札衛ー松ーを召喚します!!?」

〈花札衛ー松ー〉☆1　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１００

フィールドに現れたのは松の絵が描かれた花札のモンスター。
「花札衛ー松ーの効果を発動します。このカードが召喚に成功した場合、自分はデッキから1枚ドローし、お互いに確認します。それが花札衛モンスター以外だった場合、そのカードを墓地へ送ります」
そう言って桜糀がドローしたカードを見せる。
「ドローしたカードは花札衛（カーディアン）ー桜に幕ー。花札衛モンスターなので手札に加えます。そして手札から花札衛ー桜に幕ーの効果を発動します。手札のこのカードを見せ、自分はデッキから1枚ドローし、お互いに確認します。それが花札衛モンスターだった場合、このカードを特殊召喚し、違う場合はこのカードとドローしたカードを墓地へ送ります。私がドローしたカードは花札衛（カーディアン）ー松に鶴ー。よって花札衛ー桜に幕ーは特殊召喚しますわ」

〈花札衛ー桜に幕ー〉☆3　戦士族　闇属性
ＤＥＦ２０００

フィールドに幕の上に桜が描かれているモンスターが現れる。
手札を増やされながらモンスターが増えるというのはなかなか面倒だ。
おまけに手札に加わったのは名前からして先程特殊召喚した柳に小野道風のようなモンスター。

「そして手札から花札衛ー松ーをリリースし、花札衛ー松に鶴ーを特殊召喚しますわ」

〈花札衛ー松に鶴ー〉☆1　戦士族　闇属性
ＤＥＦ２０００

予想通り、松の姿が消え、代わりに松の絵に鶴が加わったモンスターが現れる。

「花札衛ー松に鶴ーの効果を発動します。このカードが特殊召喚に成功した場合、自分はデッキから1枚ドローし、お互いに確認します。それが花札衛モンスターだった場合、そのカードを特殊召喚でき、違う場合は墓地へ送ります」

「そのドロー効果は花札衛の共通のものだったのか……」

「私がドローしたのは花札衛ー柳ー!!?花札衛モンスターなので特殊召喚します!!?」

〈花札衛ー柳ー〉☆11　戦士族　闇属性
ＤＥＦ１００

現れたのは柳の絵が描かれたモンスター。

あのモンスターはさっきチューナーの柳に小野道風に変わった。

ということはまたシンクロ召喚がくる可能性があるのか……

「花札衛ー柳ーの効果を発動します。墓地に存在する花札衛モンスター1体をデッキに加えてシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローします。私は墓地の花札衛ー五光ーをデッキに戻して1枚ドローします。そして花札衛ー柳ーをリリースしてチューナーモンスター、花札衛ー柳に小野道風ーを特殊召喚します!!?」

「やっぱり出てきたか」

〈花札衛ー柳に小野道風ー〉☆11　戦士族　闇属性
ＤＥＦ２０００

「花札衛ー柳に小野道風ーの効果を発動します。私がドローしたのは花札衛ー荻に猪ー。花札衛モンスターなので特殊召喚します!!?」

〈花札衛ー荻に猪ー〉☆7　戦士族　闇属性

DEF1000

次に現れたのは荻と猪の絵が描かれたモンスター。

ステータスが他の花札衛と異なってるということはまた違った効果を持っているモンスターか？

「花札衛ー荻に猪ーの効果を発動します。特殊召喚に成功した場合、デッキから1枚ドローし、それをお互いに確認して花札衛モンスターだった場合、相手フィールドのモンスター1体を破壊して、違った場合は墓地へ送ります!!?」

「っ、破壊効果を持ってる奴までいるのか」

「私がドローしたのは花札衛ー松ー。花札衛モンスターなのでアルカナエクストラジョーカーを破壊します!!?」

荻に猪がエクストラジョーカーに回転しながら突撃し、エクストラジョーカーが破壊される。

「っ、対象に取らない効果だから防げない……おまけに戦闘でもないから後続も呼べないか」

「そしてチューナモンスター、花札衛ー柳に小野道風ーの効果を発動します。フィールドのこのカードをシンクロ素材にする場合、このカードを含む全てのシンクロ素材モンスターを、レベル2のモンスターとして扱うことができます!!?私は、レベル2となった花札衛ー松に鶴ー、花札衛ー荻に猪ーに、同じくレベル2となったチューナーモンスター、花札衛ー柳に小野道風ーをチューニング!!?」

「今度はレベル6のシンクロ召喚か」

小野道風が光の輪になり、松に鶴と荻に猪が小さな星に変わり、光の道になる。

光の道が輝くと、その中から現れたのは鹿の角がある兜に猪の蝶の

鎧を身につけた鎧武者。
「四季の力が重なりし時、そこに現れるは美しき命!!?シンクロ召喚!!?世界を巡る生命の力!!?花札衛(カーディアン)ー猪鹿蝶ー!!?」

〈花札衛ー猪鹿蝶ー〉☆6　戦士族　闇属性
ＤＥＦ２０００

「花札衛ー猪鹿蝶ーの効果を発動します!!?春愁秋思!!?1ターンに1度、自分の墓地の花札衛モンスター1体、花札衛ー芒ーを除外して、次の相手ターン終了時まで、相手は墓地のカードの効果を発動できず、墓地からモンスターを特殊召喚できなくなりますわ!!?」
「っ!!?なら、それにチェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?貪欲な瓶!!?墓地に存在する妖刀竹光3枚と黄金色の竹光2枚をデッキに戻してシャッフルし、カードを1枚ドローする!!?」
猪鹿蝶が槍を振るうと俺の墓地を隠すように紅葉が降り注ぐ。
これでサウザンドブレードとダブルランスは使えなくなった。
それにフェニックスブレードも捨てたら戻せなくなる……これは結構痛いな。
「だが、花札衛ー猪鹿蝶ーじゃ俺のＨーＣ　エクスカリバーは超えられないぜ?」
「ええ、だからこのカードを使わせて貰います。魔法カード、シンクロキャンセル!!?フィールドのシンクロモンスター1体を対象として、そのシンクロモンスターを持ち主のＥＸデッキに戻し、その後、ＥＸデッキに戻したそのモンスターのシンクロ召喚に使用したシンクロ素材モンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、その一組を自分フィールドに特殊召喚できます!!?」
「なっ!?って、ことは……」
「私は花札衛ー猪鹿蝶ーをＥＸデッキに戻して、墓地から花札衛ー松に鶴ー、花札衛ー荻に猪ー、花札衛ー柳に小野道風ーを特殊召喚します!!?」

〈花札衛ー松に鶴ー〉☆1　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００

〈花札衛ー柳に小野道風ー〉☆１１　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００

〈花札衛ー荻に猪ー〉☆７　戦士族　闇属性
ＤＥＦ１０００

猪鹿蝶の姿が粒子になって拡散し、その粒子が再び花札達に変わる。

そして特殊召喚されたということは……

「特殊召喚された花札衛ー松に鶴ー、花札衛ー柳に小野道風ー、花札衛ー荻に猪ーの効果を発動します‼？チェーンにより花札衛ー荻に猪ーの効果から発動します。私が引いたのは花札衛ー桐ー。花札衛モンスターなのでＨＩＣ　エクスカリバーを破壊します‼？」

「くっ……エクスカリバーまでやられるか」

荻に猪が今度はエクスカリバーに回転しながら突撃し、エクスカリバーが破壊される。

「次に花札衛ー柳に小野道風ーの効果を発動します。私がドローしたのは花札衛ー桐に鳳凰ー。花札衛モンスターなので特殊召喚します」

〈花札衛ー桐に鳳凰ー〉☆１２　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００

現れたのは桐の花と鳳凰が描かれたモンスター。

これでフィールドに5体の花札衛が揃ったからまた五光を出す準備が整ったわけか。

「最後に花札衛ー松に鶴ーの効果を発動します。私が引いたのは魔法カード、名推理。花札衛モンスターではないのでこのまま墓地に送られます。さらに花札衛ー桐に鳳凰ーの効果を発動します。私がド

ローしたのは魔法カード、花積み。このカードもそのまま墓地へ送られます。そしてこのままバトルフェイズに入ります‼?花札衛ー松に鶴ーでダイレクトアタックですわ‼?孤雲野鶴‼?」
「くっ‼?」

遊騎　ＬＰ８０００→６０００

松に鶴の絵の中から鶴が飛び出し、俺の身体に突撃し、ライフが削られる。
「続けて花札衛ー柳に小野道風ーでダイレクトアタックです‼?柳眉倒豎‼?」
「ぐっ……」
柳に小野道風の絵の中から柳の葉が嵐のように俺の身体を貫いていく。

遊騎　ＬＰ６０００→４０００

「さらに花札衛ー桐に鳳凰ーでダイレクトアタックですわ‼?伏竜鳳雛‼?」
「っ‼?ぐあっ‼?」

遊騎　ＬＰ４０００→２０００

桐に鳳凰の絵の中から火の鳥が飛び出し、俺の身体を貫く。
「花札衛ー桐に鳳凰ーの効果を発動します。このモンスターが相手に戦闘ダメージを与えたことでカードを1枚ドローします。さらにバトルフェイズ終了時に花札衛ー松に鶴ーの効果も発動します。このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時にカードを1枚ドローします……成る程、このカードですか。確かに、このデュエルには御誂え向きのカードかも知れませんね」
花札衛モンスターの効果で手札を増やした桜糀が何かを呟く。

この状況でさらに手札が増えるのはかなりマズイ。
おまけに……
「メインフェイズ2。チューナモンスター、花札衛ー柳に小野道風ーの効果を発動します。フィールドのこのカードをシンクロ素材にする場合、このカードを含む全てのシンクロ素材モンスターを、レベル2のモンスターとして扱うことができます!!?私は、レベル2となった花札衛ー松に鶴ー、花札衛ー桜に幕ー花札衛ー荻に猪ー、花札衛ー桐に鳳凰ーに、同じくレベル2となったチューナーモンスター、花札衛ー柳に小野道風ーをチューニング!!?」
小野道風が光の輪になり、他の花札衛達が小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から再び現れるのは刀を持った巨大な戦士。
「四季の力が重なりし時、そこに満ちるは神秘の光!!?シンクロ召喚!!?もう1度世界を照らしてください!!?花札衛ー五光ー!!?」
〈花札衛ー五光ー〉☆10　戦士族　闇属性
ATK5000
「まあ、当然出てくるよな」
再びフィールドに現れた五光。
いくらまだドラゴディウスが残っているとはいえ、かなり厳しいことになってきたな。
「私はカードを1枚伏せてターンエンドといたします」
遊騎　LP2000　手札4
△ーーー△　ー
ーーーーー
ー　○
ーーーーー
ーー▲ーー　ー

紅葉　ＬＰ７７００　手札６

「俺のターン、ドロー!!?」

このターンは猪鹿蝶の効果で墓地は使えない。

幸いペンデュラムスケールはまだある。

ペンデュラム召喚を使って何とか突破口を作る!!?

「俺はすでにセッティングされているペンデュラムスケールで再びペンデュラム召喚を行う!!? 魂に宿りし剣よ!!? 煌めく勇気となりて、再び運命を超える力を導け!!? ペンデュラム召喚!!? 現れろ、俺のモンスター達!!?」

俺がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって２つの光が舞い降りる。

「レベル４、Ｈ・Ｃ　ダブルランス!!?」

〈Ｈ・Ｃ　ダブルランス〉☆４　戦士族　地属性

ＤＥＦ９００

「レベル４、タスケナイト!!?」

〈タスケナイト〉☆４　戦士族　光属性

ＤＥＦ１００

俺のフィールドに２つの槍を持った白い戦士と赤い鎧の戦士が現れる。

それを見て、桜糀は真っ直ぐな目で俺を睨んだ。

「ペンデュラム召喚はもう通させません。リバースカードオープン!!? 永続罠、イカサマ御法度!!?」

「っ……イカサマ御法度?」

発動されたカードの名前を聞き、俺の心臓がドクンと跳ねる。

「このカードは１ターンに１度、相手が手札からモンスターを特殊召喚した時に発動し、手札から特殊召喚された相手フィールドのモンス

ターを全て持ち主の手札に戻します!!?」
「っ!!?なんだって!!?」
「最も、このカードはフィールドに花札衛シンクロモンスターが存在しない場合には墓地へ送られてしまいますが……それでもこの状況では十分。H・C　ダブルランスとタスケナイトには手札に戻っていただきます!!?」
イカサマ御法度の効果でフィールドに現れていたダブルランスとタスケナイトが手札に戻ってくる。
よりにもよってこの状況でペンデュラム召喚を封じてくる罠カード。
前までの俺のデッキなら手札からの特殊召喚なんてものはあまり行わなかったから効かなかったが、今の俺のデッキはペンデュラム召喚も戦術の一部としてしっかりと組み込まれているのでこのカードはかなりの痛手だ。
……その名前といい、運命が俺に言っているのだろうか？
お前に与えられた罪は……絶対に消えることはないと。
「っ……俺はモンスターをセット。カードを1枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　LP2000　手札3
△ー▲ー△　ー
ーー??ーー
ー　○
ーーーーー
ーー△ーー　ー
紅葉　LP7700　手札6

「私のターン、ドローー!!?……面白いカードを引きましたね。私は花札衛ー松ーを召喚します!!?」

〈花札衛ー松ー〉☆1　戦士族　闇属性

ＡＴＫ１００

「花札衛ー松ーの効果を発動します‼？私がドローしたのは花札衛ー紅葉に鹿ー。花札衛モンスターなのでそのまま手札に加えます。そして花札衛ー松ーをリリースして、花札衛ー紅葉に鹿ーを特殊召喚します‼？」

〈花札衛ー紅葉に鹿ー〉☆１０　戦士族　闇属性

ＤＥＦ１０００

現れたのは紅葉と鹿の絵が描かれたモンスター。

「花札衛ー紅葉に鹿ーの効果を発動します‼？特殊召喚に成功した場合、デッキから1枚ドローし、それをお互いに確認して花札衛モンスターだった場合、相手フィールドの魔法・罠を1枚破壊して、違った場合は墓地へ送ります‼？」

「っ、ここで魔法・罠破壊の花札衛が出てくるのか⁉？」

「私がドローしたのは花札衛ー芒に月ー。花札衛なのでペンデュラムスケールの魔装戦士ドラゴディウスを破壊します‼？」

花札衛ー紅葉に鹿ーが回転しながらドラゴディウスがいる光の柱に突撃し、光の柱ごとドラゴディウスを破壊する。

イカサマ御法度の効果でペンデュラム召喚はほぼ無意味になっていたとはいえ、ペンデュラム効果が使えなくなったのは痛い。

俺のデッキのモンスターでは攻撃力で五光を超えるモンスターはおらず、魔法・罠も無効化されるため装備魔法で突破するのも難しい。

このままだと高攻撃力で押し切られる。

そんな俺をさらに追い詰めるように、桜糀は更なるモンスターをフィールドに呼ぶ。

「私は墓地の魔法カード、花積みを除外して効果を発動します。墓地にある花札衛モンスター1体、花札衛ー桐ーを手札に加えます。そして私は手札から2枚の花札衛ー桐ーと花札衛ー桐に鳳凰ーを墓地へ送り、モンタージュドラゴンを特殊召喚します‼？」

「⁉?花札衛じゃないモンスターだと⁉?」

〈モンタージュドラゴン〉☆８　ドラゴン族　地属性

ＡＴＫ?

現れたのは不自然に巨大化した腕を持つ３つ首の不気味なドラゴン。

そして何よりも不気味なところは……

「攻撃力が決まってない?」

「モンタージュドラゴンは通常召喚できず、手札からモンスター３体を墓地へ送った場合のみ特殊召喚できます。そしてこのカードの攻撃力は、墓地へ送ったそのモンスターのレベルの合計×３００ポイントになります‼?」

「なんだって⁉?」

「墓地に送った花札衛ー桐ーと花札衛ー桐に鳳凰ーはレベル１２のモンスター。よってその攻撃力は……」

モンタージュドラゴン

ＡＴＫ?→１０８００

「攻撃力……１０８００⁉?」

「バトルフェイズ‼?花札衛ー五光ーでセットモンスターを攻撃します‼?光風霽月‼?」

「っ……通さない‼?俺はペンデュラムスケールに存在する魔装戦士ドラゴノックスのペンデュラム効果を発動‼?」

「っ、このタイミングでもう１枚のペンデュラムスケールの効果ですか……」

「相手モンスターの攻撃宣言時、このカードを破壊し、そのバトルフェイズを終了する‼?」

ドラゴノックスの光の柱が割れ、辺りを暗闇が包み込む。

そして暗闇が晴れるとバトルフェイズが終了した。

「まさかバトルフェイズ自体を止める効果を持っているとは思いませんでした……メインフェイズ2。私は何もせずにターンエンドといたします」

遊騎　ＬＰ２０００　手札３
ー▲ー　ー
ー??ー
ー　○
ー○ー
ー△ー　ー
紅葉　ＬＰ７７００　手札４

「俺のターン、ドロー!!?……くっ」
ドローしたカードを見るが、現状を解決できるカードではなかった。
墓地のカードも使えるようになったがモンタージュや五光を超えることはできない。
なら、俺に出来ることは……
「モンスターをセット。カードを3枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ２０００　手札０
ー▲▲▲　ー
ー????ー
ー　○
ー○ー
ー△ー　ー
紅葉　ＬＰ７７００　手札４

「……防戦一方ですか。フェニックスブレードと黄金色の竹光まで伏せたのは本命が破壊される確率を減らすためのブラフと言ったところでしょうか？」

「……さあ、どうだろうな？」
「……イカサマをした貴方のような方の実力など所詮この程度。やはり貴方は遊花さんの師匠には相応しくありません」
「……ああ、分かってるよ」
桜糀の言葉に、俺はぽつりと呟く。
そんなこと、誰よりも分かっている。
俺のような人間が、遊花の師匠には相応しくないことぐらい。
そんなこと、遊花の師匠をすることになった時から分かっていたさ。
「だからこそ、ここで引導を渡してあげましょう。私のターン、ドロー‼？魔法カード、札再生を発動します‼？自分の墓地の花札衛モンスター1体を対象に、そのカードを手札に加え、その後手札から花札衛モンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚できます‼？私は墓地の花札衛ー桜に幕ーを手札に加え、手札から花札衛ー芒に月ーを特殊召喚します‼？」

〈花札衛ー芒に月ー〉☆8　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００

「花札衛ー芒に月ーの効果を発動します‼？私がドローしたのは仁王立ち。花札衛モンスターではないので墓地に送られます。バトルフェイズ‼？花札衛ー芒に月ーでセットモンスターを攻撃します‼？雲心月性‼？」
「セットモンスターはＨ・Ｃ　ダブルランス‼？」

〈Ｈ・Ｃ　ダブルランス〉☆4　戦士族　地属性
ＤＥＦ９００

芒に月の絵の中から満月が飛び出し、ダブルランスを斬り裂いて破壊する。
「花札衛ー芒に月ーの効果を発動します‼？1ターンに1度、この

カードが戦闘で相手モンスターを破壊した場合、デッキからカードを1枚ドローします!!?続けて、花札衛ー五光ーでセットモンスターを攻撃します!!?光風霽月!!?」
「セットモンスターはタスケナイト!!?」

〈タスケナイト〉☆4　戦士族　光属性
ＤＥＦ１００

五光の刀から衝撃波が飛び、タスケナイトが斬り捨てられる。
「これで終わりでしょうか?モンタージュドラゴンでダイレクトアタックです!!?シンセシスフレア!!?」
モンタージュが俺に向けて3つ首から炎のブレスを放つ。
「まだ……終われるか!!?墓地に存在するタスケナイトの効果発動!!?このカードが墓地に存在し、自分の手札が0枚の場合、相手モンスターの攻撃宣言時にデュエル中に1度だけ発動出来る!!?このカードを墓地から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する!!?」
「っ!?またバトルフェイズを終了させるのですか!?」

〈タスケナイト〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１７００

タスケナイトが俺を庇うように現れ、俺の周りが立体映像の炎に包まれる。
それを見て、様々な光景が脳裏に浮かぶ。
畏怖。
侮蔑。
嘲笑。
様々な光景が、浮かんでは消えていく。
……ああ、どうして俺はーーー
「っ!!?遊騎!!?」
「っ、闇?」

聞き慣れた声が耳に届き、俺の意識は現実に呼び戻される。
驚いて声が聞こえた方を見てみると、闇が心配そうな表情で俺をジッと見ていた。
そんな闇を見て、俺は頭を振って自分の頭の中にある暗い感情を追い出す。
そんな俺を見て、桜糀は不可解そうな表情を浮かべる。
「……何故、そんな泣きそうな表情を浮かべているのですか？」
「……そっか。俺はそんな表情をしてるのか」
桜糀の言葉に、俺は苦笑したと思う。
それは闇にも心配をかけるハズだ。
……ダメだな、俺は。
もう考えても仕方がないことだっていうことは、分かってるっていうのに……
「君が気にすることはないさ。君がやることは変わらない。俺に勝って遊花の師匠を止めさせる。それだけのことさ。それに、聞かれても俺には答えられないしな」
「貴方は……」
「さあ、デュエルを続けようぜ。バトルフェイズは終了したが、まだ君のターンだ。俺もこのデュエルを諦めるつもりはないからな。全力で抗わせてもらう」
「……ですが、流石にこれ以上は耐えることはできないハズ。次のターンで御首級を頂戴いたします。メインフェイズ2、私は何もせずにターンエンドといたします」

遊騎　ＬＰ２０００　手０
ー▲▲▲▲　ー
ーー□ーー
ー　○
ー○○ーー
ーー△ーー　ー
紅葉　ＬＰ７７００　手札５

ーーーーーーー

★

「あの、闇先パーーー」
「ごめん、遊花、桜。少しついてきて。島さん、店の奥の部屋を少し借りる」
「……ああ、大事な話になりそうだからね。構わないよ」
「ありがと。遊花、桜、来て」
「わっ⁉？や、闇先パイ？」
「ちょっ、待ちなさいよ⁉？」
デュエル中、師匠に心配そうな声をあげた闇先パイに質問をしようとすると、闇先パイは少し切羽詰まった表情を浮かべて私と桜ちゃんをお店の奥にある部屋に引っ張っていく。
部屋の中に入ると、闇先パイは真剣な表情で私たちに尋ねる。
「遊花、桜。最近、私が知らないところで遊騎に何かあった？」
「えっ？」
「……何というべきかしら」
闇先パイの質問に、私は桜ちゃんと顔を見合わせ難しい表情を浮かべる。
闇先パイが知らず、私が知っていることで師匠に最近あったことと言えば、やはり異世界での戦いのことだろう。
でも、それを話してもいいのだろうか？
そんな私達を見て、闇先パイは目を伏せながら寂しそうな声を出した。
「話せないなら話さなくてもいい。でも、そっか……あったんだ。そこで、遊騎を揺さぶる何かが……」
「えっと、あの……師匠はどうしたんでしょうか？あんな表情の師匠、初めて見ます」
今まで見たことがない、悲しそうで……まるで今にも消えてしま

いそうな表情を浮かべる師匠を見て、私は困惑する。
　そんな私を見て、闇先パイは困ったように自分の頭をポンポンとノックするように叩き、1度目を閉じると、覚悟を決めた表情を浮かべた。
「遊花。遊花から見て、遊騎はどんな人に見える？」
「えっ？」
「難しく考えなくていい。遊花から見た遊騎を教えてほしい」
　真っ直ぐに私を見る闇先パイに、私は少し考えてから口を開く。
「師匠は……辛いことがあっても諦めないで、誰かの思いを守るために頑張れる……強くて、とても優しい人だと思います」
　出会ってばかりの私のために、デュエルをしてくれて、師匠になってくれて、私のためにこんな素敵な大会まで開いてくれた、強くて優しい人。
　そんな私の答えに、闇先パイは少し悲しそうな表情を浮かべた。
「……そっか」
「あの……何か間違っていたでしょうか？」
「ううん……遊花は悪くない。遊騎の行動は、確かにそう見えるから」
「そう見えるって……なら本当は違うって言うの？」
「違うわけでもない。でも、本質でもない」
「師匠の本質……ですか？」
「ん」
　闇先パイはそこで言葉を区切り、少し躊躇いながらその言葉を口にした。
「いつかは話さないといけないと思ってた。だから、いい機会だから話しておく。遊騎はね……弱い人だよ。とってもね」
「えっ……？」
　師匠が、弱い？
「まず、勘違いを1つ正しておく。遊騎は辛いことがあっても諦めないんじゃない。遊騎はもう……　辛いということが認識できないだけ。それぐらい……結束　遊騎は　壊れている」

「……えっ？」
「ちょっと⁉？それってどういうことなのよ⁉？」
闇先パイの告げた言葉に桜ちゃんは声を荒げ、私は愕然としてしまう。
辛いことが認識できないぐらいに壊れている？
「どこから話すべきかは少し悩むけど、今は遊花達が分かるところだけを話す。遊騎の両親が火事で亡くなったこと、その後に遊騎がいじめにあって荒れていたことまでは知ってるよね？」
「……はい」
『Ｎａｔｕｒａｌ』であった大会の帰りに、師匠の家で火事が起こり、師匠の両親が亡くなったこと、その後にデュエルアカデミアでいじめが起こり、師匠が荒れていたという話は島さんから、そして師匠自身から聞いている。
「じゃあ、何で遊騎がいじめられることになったのか、遊花達は知ってる？」
「師匠がいじめられていたわけ、ですか？」
「……そういえば、結束がいじめられてたとか、荒れてたって話は聞いたけど、その理由までは聞かなかったわね」
桜ちゃんの言葉に私もハッとする。
事が起こったことは知っていても、その理由までは確かに聞いてなかった。
話の上辺だけを聞いて、その理由まで思い至らなかったことに自責の念が湧く。
そんな私に闇先パイは苦笑を浮かべながら口を開く。
「遊花が気にする必要はない。その話は多分、遊騎が意図的に隠しただろうし、聞かれても遊騎も答えにくかったと思うから」
そして、闇先パイは残酷ないじめの実情を口にする。
「遊騎がいじめられてた理由はね。遊騎が家族で唯一生き残ったから」
「……えっ？」
「っ、ちょっと待って⁉？それってまさか⁉？」

闇先パイの言葉が理解出来ず、私は首を傾げ、桜ちゃんは何かに気づいたのか声を荒げる。
師匠が生きてることがなんでいじめられることにーーー
「遊騎がいじめられていた理由……それは遊騎が唯一生き残ったからこそ、遊騎が　自分の家族を殺したんじゃないかって、噂が流れたから」
「っ⁉？どうして⁉？師匠がそんなことするわけないじゃないですか‼？」
闇先パイの言葉に、私は思わず声を荒げてしまう。
そんな私に、闇先パイは淡々と真実を告げていく。
「どこからそんな噂が流れたのかは、私にも分からない。誰かが冗談のつもりで言ったのか、遊騎を気に入らない誰かが言ったのか……それでも、当時のデュエルアカデミアでは確かにそんな噂が流れていた。そして、ほとんどの人がそんな噂を事実だと思った」
「なんでですか⁉？師匠がそんなことする人じゃないことなんて、少し接しただけでも分かるじゃーーー」
「いなかった」
「ーーーえっ？」
「いなかったの。当時のデュエルアカデミアには。私以外に遊騎と接している人なんて」
闇先パイは淡々と、それでいて拳を握りしめながらそう口にした。
闇先パイ以外に師匠と接する人がいなかった？
「遊騎は明るくて、素直で、困っている人は誰だって助けてしまう程お人好しで、凄く純粋な人だった。そして、純粋過ぎるが故に、遊騎のことを誰も理解出来なかった。純粋で、真っ直ぐ過ぎる子供みたいで、何をするかが分からないから怖がった」
「なん……ですか、それ……」
「だからこそ、そんな根も葉もない噂を誰もが信じてしまった。ううん、本当は信じてはいなかったのかもしれない。だけど、そうしていた方が　攻撃しやすいから信じていなくても、噂を肯定した。遊騎を生贄に、自分の鬱憤を晴らすため、自分がいじめの標的にならないた

め、色んな思いから、誰もが遊騎の存在を否定した」
「どうして……」
「そして遊騎も家族を殺したということを強く否定出来なかった」
「……えっ？」
「はあ⁉？」
　闇先パイの言葉に私も桜ちゃんも目を見開く。
「どうしてよ⁉？結束の家族が亡くなったのはアイツがいない間に火事が起こったせいでしょ⁉？結束には何も関係ないじゃない‼？」
「……桜には難しいかも知れないけど、遊花なら分かるかも知れない」
「私が、ですか？」
「辛いことを聞くことになるけど、思ったことはない？自分がいなければ、両親は死ななかったんじゃないかって」
「っ……それは……」
　闇先パイの問いに、私は顔を伏せる。
　……確かに、そう思ったことはある。
　私が大会に出なければ、それ以前に生まれていなければ、両親は死ななかったんじゃないかって、両親が亡くなってすぐの頃はずっとそんなことを考えていた。
「だから、遊騎も思ったの。自分が両親に『優勝してくるからご馳走を用意して待ってて』なんて言わなければ、両親は死ななかったんじゃないかって」
「そんなこと分からないじゃない‼？」
「分からないよ。だからこそ、本当にどうなったか分からないからこそ、遊騎はそれを罪だと認めてしまった。
　自分のせいで両親は死んだのだと」
　闇先パイはとても悲しそうな顔でそう呟く。
「そんなこともあったからなんだろうね。遊騎は、今でも火を見るのが苦手なの」
「っ‼？だからさっき……」
「うん。多分、モンタージュドラゴンの攻撃の立体映像で思い出し

ちゃったんだと思う。昔はもっと取り乱してたからまだマシな方ではあったけど……」
「？待って。だけど前に私とデュエルした時、ドゴランが吐いた炎を見ても結束は平気だったわよ？」
桜ちゃんの言葉に私もそういえばと思い返す。
師匠と桜ちゃんが初めてデュエルした時、ヘルテンペストを使うためにドゴランを使っていた気がする。
「普段の遊騎なら、立体映像だと分かってるから大丈夫なの。そこはプロ決闘者になる時に社長や炎と克服できるように頑張ったから。だけど、今回は遊花の師匠を継続できるかがかかってるデュエルな上に場所は遊騎の思い出の場所であり、トラウマの場所でもある『Ｎａｔｕｒａｌ』……遊騎は今かなり不安定になってるハズ」
「……ちょっと、それマズイんじゃない？結束が負けたら……」
不安そうな顔を浮かべる桜ちゃんに闇先パイは明るい顔で首を振る。
「ううん、遊騎は負けないよ。遊花が俺を師匠だと呼んでくれる限りは、俺は遊花の師匠であり続けるって宣言してたからね」
「いや、そんな気持ちだけじゃ……」
「その気持ちが、遊騎には１番大事なの。遊花は遊騎にとって大切な弟子だから……だからこそ、遊騎は　壊れてるんだけど」
「あの……それはどういう意味なんですか？師匠が……その、壊れてるって」
躊躇いながら尋ねる私を見て、闇先パイは少し悲しそうな表情で口を開く。
「さっきの話の続きになるけど、遊騎は両親が死んだのが自分のせいだと思ってる。そしてその罪悪感からか、はたまたいじめられている間に精神が摩耗したからか、遊騎はもう、自分の命を塵程にも大事に思っていないの」
「っ⁉？」
「なっ⁉？」
「だからこそ、自分がどんな目にあっても遊騎は辛いなんて思わない。

遊騎が　まだ生きてるのは、自分が死ぬことで私や島さん達みたいな、自分にとって大切な人達が悲しむのが嫌だからって言うだけ。そしてその思いの根本には、『大切なもの』という括りが重要になっている」
「……括り、ですか？」
闇先パイの衝撃的な発言に私は何とか言葉を絞り出す。
そんな私の気持ちを汲んでか、闇先パイはこくりと頷いて言葉を続ける。
「遊騎の本質はここにある。重要なのは遊騎が自分の命を価値があるものだと思っていないこと。自分の命なんて……自分なんてどうでもいいと思ってる。そのくせ、遊騎はこと自分の友人や家族と言える存在に対する思い入れは強い。だからこそ、遊騎の辞書の中で『大切なもの』の前には必ず『自分よりも』という一文がつく。だから、遊騎の『大切な弟子』である遊花のことなら、遊騎は必ず守るよ。それこそ、自分の命をかけてもね」
「……でも、それって……」
暗い表情を浮かべる私に、闇先パイは真剣な表情で私を見る。
「だからこそ、改めて遊花に問う。今ならまだ、結束　遊騎の弟子からただの栗原　遊花に戻れる。遊騎が壊れてることを知って、それでも貴方は結束　遊騎の弟子であることを選べる？」
「私はーーー」
そんな闇先パイの問いに、私はーーー

ーーーーーーー

☆

桜糀のターンが終わり、俺のターンになる。
しかし、状況はかなり絶望的だ。
俺のフィールドにモンスターはタスケナイトのみ。
伏せカードはブラフの黄金色の竹光とフェニックスブレード。

残り2枚は使用することは出来るが片方は確実に五光に止められてしまう。
だが勝利の可能性を考えるとどちらのカードも通せなければかなり難しい。
そして負けるということは、遊花の師匠を辞めるということ。
遊花との約束を……守れなくなるということだ。
ちらりと店の奥の方に視線をやる。
さっきの俺の様子を見て、闇が遊花と宝月を店の奥に連れていくのが見えた。
おそらく俺の様子について聞いているのか、俺のことについて話しているのだろう。
……俺のことを聞いて、遊花はどう思うだろうか？
こんなことなら最初から正直に話しておけばよかったと、今更ながらに思う。
自分のような壊れている人間を師匠にするべきではない、と。
分かっているのだ、自分はどうしようもなく歪んでいる異常な人間なのだと言うことも……誰かを導けるような真っ当な人間じゃないことも。
俺のせいで、両親は死んだ。
あの日、俺が家で待っていてくれだなんて言ったから。
いや、そもそもあの日に大会に行っていなければ、両親を助けられたかもしれない……もしくは、俺も最後まで一緒にいられたのかもしれない。
どうして、俺だけ取り残されてしまったのだろう？
俺が生きていること自体が、消せない罪だと言うのに……
「……何故、貴方は遊花さんの師匠になろうと思ったのですか？」
「ん？」
暗い考えが頭に浮かんでは消えていく最中、桜糀が真剣な表情でそんなことを尋ねてくる。
そんな桜糀に、俺も真剣な表情で答える。
「遊花の話を聞いた時にな、俺に似てるなって思ったんだよ。性格と

か雰囲気とかそんなんじゃない。俺の生きてきた人生に似てると思った」
「……」
「だからこそ、そんな奴が俺みたいな決闘者になるために弟子になりたいって言ってきた時に思ったんだ。この子は俺のようにしてはいけないって」
「……それは最初から遊花さんをまともに教える気はなかったということですか？」
「違う。俺みたいに壊れた人間になって欲しくなかっただけさ。遊花は俺に似た人生を歩んでいる。だからこそ、一歩踏み外してしまえば俺みたいな存在になってしまう」
こんな……生きているのか、死んでいるのかも分からないような中途半端な存在に成り果ててしまう。
そんな存在に……遊花にはなって欲しくなかった。
「だからこそ、守ってやりたいと思った……だけど、余計なお世話だったのかもな。俺がいなくたって、遊花はもう道を踏み外したりなんかしないだろうし、楽しんでデュエルすることができる。大会だって怖くなくなるだろう。ちゃんと教えれたのは1週間ぐらいのものだったが、それでも俺の役目はすでに終わってるんだよ」
不意に異世界で言われた言葉を思い出す、守ることだけが師匠の役目じゃないと。
ならば、どうすればよかったのだろう？
願ってはいけなかったのだろうか？
大切な弟子が傷つかないことを。
確かに遊花は無事だった。
だが、もしあの時に遊花の身に何かが起こっていたら、きっと俺は全てが許せなくなっていただろう。
遊花にそんな戦いを強要した世界を……そして遊花を送り出してしまった俺自身を……だって、それは両親を助けられなかった時のように、俺が見殺しにしたのと同じことなのだから。
「なら、初めから私に勝つ気はなかったと？」

「まさか、言っただろ？遊花が俺を師匠だと呼んでくれる限りは、俺は遊花の師匠であり続けると。まあ、今もそう思ってくれてるかは分からないし、俺の弟子じゃない方が遊花は幸せになれる。だから、きっと君の方が正しいのさ」

……できるなら、遊花には俺の後継者じゃなくて普通のプロ決闘者になってほしい。

プロ決闘者になった時、俺の後継者だなんて名乗ったらまともにデュエルなんてさせて貰えないだろう。

俺の後継者だなんて言わなければ、遊花はかなり腕を上げているから普通のプロ決闘者として成功するだろう。

遊花が望んだ、自分も楽しんで誰かを喜ばせれるようなデュエルが、きっとできる。

……だからこそ、俺のような存在はいない方がいい。

「……悪い、つまらない話をしたな」

「貴方様は……それでいいのですか？」

桜糀の雰囲気が少し変わり、そんな言葉が聞こえる。

そんな桜糀に、俺はいつも通り苦笑を浮かべ……

「いい「いいわけありません!!?」……えっ？」

俺の言葉を聞き覚えがある声が遮る。

声が聞こえた方向を見ると、そこには明らかに怒ってますと言うように頬を膨らませて不機嫌そうな顔をした遊花がいた。

そして遊花は頬を膨らませたまま俺の方に近づき、俺の正面に立った。

「師匠!!?さっきから聞いていれば、何を頓珍漢なことを言ってるんですか!!?桜糀さんが正しい？正しいか正しくないかなんてどうでもいいんです!!?」

「お、おう？」

「何が俺の役目はすでに終わってるんだよ、ですか!!?師匠の役目はまだまだ全然、終わってません!!?師匠に教えて貰いたいことはたくさんあるんです!!?」

「い、いや、それなら闇にでもーーー」

「私の師匠は師匠だけです‼?」
「っ、遊花?」
そう叫ぶ遊花の目には薄っすらと涙が滲んでいて……
「前にも言いました‼?師匠だからこそ、私は弟子になったんです。他の誰であろうと、私の師匠になることは出来ません‼?それに何が俺みたいに壊れた人間になって欲しくないですか‼?師匠は全然壊れてなんてないです‼?」
「いや、あの……」
「師匠が本当に壊れているなら、私が治します‼?何年、何十年経ったとしても、絶対に師匠を治してあげます‼?だから……」
そこで遊花は不機嫌そうな表情を浮かべるのが限界になったのか、クシャッと顔を歪め、目から涙が溢れる。
「だから……辞めないで下さい……ずっと……ずっと私の師匠でいてくださいよぅ……師匠」
そういって遊花が右手を伸ばして俺の服の端を摘む。
そんな遊花を見て、俺は深いため息を吐いた。
「……最悪だ」
その言葉に遊花の肩がビクッと跳ねる。
そんな遊花の頭に手をのせ、優しく撫でる。
「弟子にそんなこと言わせちまうなんてな……思い出したよ。俺は遊花をどんな逆境でも、笑顔で楽しそうに切り抜けて、皆を驚かせるデュエルができるようにしてやらないといけないんだもんな」
「グスッ……そうですよ……まだ私、闇先パイに勝てませんもん。だから、最低でも闇先パイに勝てるようになるまで絶対に逃がさないんですから……」
「ハードル高いな……世界ランキング4位の人間に勝てるようにしろってのか。まあ、頑張ってみるからさ。とりあえず、今は見ててくれ。ここから逆転して、まずは遊花を驚かせて見せるからさ」
俺がそういうと、遊花は俺の服から手を放す。
そしてまだ少し不安そうな顔で俺を見て願いを口にする。
「師匠……」

「ん？」
「勝って、下さい」
「……おう‼？」
俺が笑顔で答えてやると、ようやく安心したような表情を浮かべて遊花が観戦席に戻っていく。
遊花が観戦席に戻ったのを確認し、俺は改めて桜糀を見た。
「悪い、待たせたな」
「……貴方様は今の選択の意味が分かっているのですか？」
「ああ、よく分かってるよ」
俺の存在は、きっと遊花の人生に暗い影を落とすことになる。
遊花のことを考えるなら、俺はいない方がいいのだろう。
それでも……
「……それでも、約束したもんな」
遊花を彼女が望むプロ決闘者にすると。
それに、もし俺の存在が必要だと言うのなら……いくらでも使い潰してやる。
「そのためにも、勝たせてもらうぜ。このデュエル」
「っ、手札もないこの状況から逆転できるというのですか？」
「できるかできないかじゃないんだよ」
俺はデッキの上のカードを持つ。
このドローが運命の分かれ道。
だけど、不思議と不安はなかった。
何故なら……
「今の俺は、負ける気がしないからな‼？俺のターン、ドロー‼？」
ドローしたカードを見る。
まだ、望みはある。
「俺は装備魔法、妖刀竹光をタスケナイトに装備する‼？そしてリバースカードオープン‼？魔法カード、黄金色の竹光‼？」
「っ、この状況で竹光カードを引いてきましたか。ですが無駄です‼？花札衛ー五光ーの効果を発動します、光輝燦然‼？1ターンに1度、相手が魔法・罠カードを発動した時、その発動を無効にし破壊し

ます‼?」
　五光の身体が光輝き、その強い光で黄金色の竹光のカードが割れる。
「これで貴方様の手札は０。もう打てる手はーーー」
「ああ、無効にしてくれると思っていたさ。だからこそ、まだ希望はあるんだ‼?リバースカードオープン‼?罠発動‼?活路への希望‼?」
「‼?」
「自分のＬＰが相手より１０００以上少ない場合、１０００ＬＰを払って発動‼?」

遊騎　ＬＰ２０００→１０００

「お互いのＬＰの差２０００につき1枚、自分はデッキからドローする‼?俺のライフは１０００‼?桜糀は７７００‼?よって３枚のカードをドローする‼?」
「ここに来て３枚のドロー⁉?」
「まだ終わらない‼?黄金色の竹光を発動‼?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローする‼?さらに魔法カード、貪欲な壺‼?墓地に存在するアルカナエクストラジョーカー、ＨーＣ　エクスカリバーをＥＸデッキに、Ｈ・Ｃ　ダブルランス、Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード、キングスナイトをデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローする‼?」
「一気に手札が5枚に……」
「……繋がった」
「っ‼?」
　俺の呟きに、桜糀が目を見開く。
　そんな桜糀に、俺は自信満々に告げる。
「桜糀、このデュエル……俺の勝ちだ‼?リバースカードオープン‼?罠発動‼?一族の結集‼?フィールドの表側表示モンスター1

体を対象として、そのモンスターと元々のカード名が異なり、元々の種族が同じモンスター1体を自分の手札・墓地から選んで特殊召喚する!!?俺が対象にするのは戦士族のタスケナイト!!?墓地から蘇れ、クィーンズナイト!!?」

〈クィーンズナイト〉☆4　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

「っ、この状況でクィーンズナイトが出てくるということは……」
「俺はキングスナイトを召喚!!?」

〈キングスナイト〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

クィーンズナイトの横にキングスナイトが現れ、２人の騎士は剣を掲げて更なる騎士を呼ぶ。
「キングスナイトの効果発動!!?自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト1体を特殊召喚する!!?再び集え、絵札の三銃士!!?来い、ジャックスナイト!!?」

〈ジャックスナイト〉☆5　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

クィーンズナイトとキングスナイトの剣に合わせるように剣を掲げてジャックスナイトが現れる。
「そして魔法カード、融合を発動!!?」
「ここで融合のカード!!?まさか!!?」
「自分の手札・フィールドに存在する融合モンスターによって決められた融合素材を墓地に送り、ＥＸデッキから融合モンスターを特殊召喚する!!?俺はフィールドのクィーンズナイト、キングスナイト、

ジャックスナイトの３体で融合!!?」
フィールドに現れた渦に３体の騎士達が飛び込んでいく。
そして渦が爆けるとその中から現れるのは黒い鎧を身に纏った漆黒の騎士。
「融合召喚!!?運命に打ち勝つ勇敢なる騎士達の主!!?アルカナナイトジョーカー!!?」

〈アルカナナイトジョーカー〉☆９　戦士族　光属性
ＡＴＫ３８００

「絵札の三銃士の融合モンスター……ですが、そのモンスターでも私のモンスター達を突破することは出来ません!!?」
「それはどうかな?リバースカードオープン!!?装備魔法、神剣―フェニックスブレードをアルカナナイトジョーカーに装備!!?攻撃力を３００ポイントアップさせる!!?」

アルカナナイトジョーカー
ＡＴＫ３８００→４１００

「それでも届きません!!?」
「まだだ!!?速攻魔法!!?旗鼓堂々!!?このターン、自分はモンスターを特殊召喚できなくなる代わりに、自分の墓地の装備魔法カード１枚をその正しい対象となるフィールド上のモンスターに装備する!!?ただしこの効果で装備した装備魔法カードはエンドフェイズ時には破壊される!!?俺はこの効果で墓地に存在する装備魔法、最強の盾をアルカナナイトジョーカーに装備!!?攻撃表示だからその元々の守備力分、２５００ポイント攻撃力をアップする!!?」

アルカナナイトジョーカー
ＡＴＫ４１００→６６００

「攻撃力６６００⁉？」
「バトル⁉？アルカナナイトジョーカーで花札衛ー芒に月ーを攻撃⁉？この瞬間、墓地のタスケルトンの効果発動⁉？モンスターが戦闘を行うバトルステップ時、墓地のこのカードをゲームから除外し、デュエル中に1度だけ、そのモンスターの攻撃を無効にする⁉？」
「タスケルトン……手札断殺の時ですか。ですがその行動に何の意味が……」
「意味なら大有りだ⁉？モンスターの攻撃が無効になった時、速攻魔法、ダブルアップチャンス⁉？」
「⁉？」
「攻撃が無効になったモンスターを対象にして発動⁉？このバトルフェイズ中、選択したモンスターはもう1度だけ攻撃でき、その場合、選択したモンスターはダメージステップの間、攻撃力が倍になる⁉？」
「攻撃力を倍にして追加攻撃⁉？」
「続けてアルカナナイトジョーカーで花札衛ー芒に月ーを攻撃⁉？」
「させません⁉？墓地の仁王立ちを除外して効果発動⁉？モンタージュドラゴンを対象にしてこのターン、攻撃対象はモンタージュドラゴンしか選べなくなります⁉？」
　芒に月を攻撃しようとしたアルカナナイトジョーカーの前に、モンタージュドラゴンが立ち塞がる。
「ダブルアップチャンスの効果でモンタージュドラゴンは破壊されてしまいますが、それでも私のライフは残ります。そしてこのターンが終われば最強の盾は破壊され、花札衛ー五光ーの攻撃力がアルカナナイトジョーカーを上回り、私の勝ちです⁉？」
「いや、お前に次のターンはない⁉？アルカナナイトジョーカーでモンタージュドラゴンを攻撃⁉？そしてダメージステップ開始時、手札からオネストの効果を発動⁉？」
「なっ⁉？そのカードは⁉？」
「オネストは自分の光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ開始時からダメージ計算前までに、このカードを手札から墓地へ送っ

て発動できる‼?そのモンスターの攻撃力はターン終了時まで、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分アップする‼?モンタージュドラゴンの攻撃力は１０８００。よって攻撃力を１０８００ポイントアップさせる‼?」

アルカナナイトジョーカー
ＡＴＫ６６００→１７４００

「そしてダブルアップチャンスの効果‼?ダメージステップの間、攻撃力が倍になる‼?」

アルカナナイトジョーカー
ＡＴＫ１７４００→３４８００

モンタージュが３つ首から炎のブレスを放ち、それをアルカナナイトジョーカーは大剣で受け止める。
そしてブレスを受け止めていたアルカナナイトジョーカーにオネストとダブルアップチャンスのカードが吸い込まれていくと、アルカナナイトジョーカーの身体が金色の光に包まれ、大剣でブレスを弾き返した。
「攻撃力……３４８００のアルカナナイトジョーカー⁉?」

「これで終わりだ‼?行け、アルカナナイトジョーカー‼?ロイヤルストレートフラッシュ‼?」
アルカナナイトジョーカーが大剣を構えると、大剣に金色の光が集まっていく。
アルカナナイトジョーカーは勢いよくモンタージュに突撃し、その大剣を振り下ろしてモンタージュを斬り伏せた。
「……お見事」

紅葉　ＬＰ７７００→０

ーーーーーーー

「……俺の勝ちだ」

「はい。そして私の負けでございます」

立体映像が消え、静まり返った店内で俺達は言葉を交わす。

そしてそれと同時に誰かが走ってくるような音が聞こえーーー

「やりました‼?師匠の勝ちです‼?」

「ぐはっ‼?」

ーーーたと思ったら、背中に凄い衝撃が走った。

後ろを振り向くと、背中に思いっきり遊花が張り付いていた。

……今の、絶対タックルだったって。

だって、めちゃくちゃ痛かったし。

……まあ、色々心配をかけただろうし今は好きにさせておこう。

「結束さん」

そんなことを思いながら遠い目をしていると、桜糀が俺に話しかけてきた。

何の用かと思って桜糀の方を見ると、桜糀はその場に跪いて土下座をしようとしてーーー

「って、待て待て待て‼?何しようとしてるんだ‼?」

「桜糀さん‼?何しようとしてるんですか‼?」

「いえ、先程まで大変失礼なことを致しましたので謝罪をと」

「いやいやいや、別に謝罪とかいらないから‼?というかお前、俺のこと嫌ってたんじゃなかったの‼?」

そんな俺の言葉を聞き、桜糀は申し訳なさそうに目を伏せた。

「申し訳ありません。先程までの態度や言動は、結束さんがどのような方なのか試していたのでございます」

「た、試してた?」

「はい。貴方様がどのような方なのか、お弟子さんである遊花さんを見ていれば分かりました。しかし、世間での貴方様の噂はよろしくないものばかり。そのことで、遊花さんも傷ついてしまうのではと愚考

いたしまして……」
「だからああいう煽るような言い方で俺が実際にはどのような人物かを試していた、と？」
「はい……ですが、それは結果として結束さんや遊花さんを深く傷つけるような結果になってしまいました。どんなに謝っても許されることではありません。ですが、私にできることといえばこの頭を下げることぐらい。なんでしたら私のことは如何様にでもしてくださって構いません‼？」
「いやいやいや、何覚悟を決めた目で言ってるんだ⁉？そういうのいらないから‼？」
ダメだ、まともそうだと思ってたけどこの子結構ぶっ飛んでる子だ⁉？
いや、俺が言える立場じゃないんだけどさ‼？
「あーもう‼？とにかく、俺は気にしてないから別にいい。それじゃあ気が済まないって言うんなら、これからも遊花のことを気にかけてやってくれ」
「……そのようなことで構わないのですか？」
「いいんだよ。元々俺が疑われるような人間なのが悪いんだ。君が気にするようなことじゃない。だから、これからも遊花のことを頼む」
「……承りました。ですが、それだけではこちらも気が済みません。しかし、今は大会中。今回のお詫びはまた後日」
「……君も頑固な奴だな。ああ、それで構わないよ」
「はい。それでは敗者は去るといたしましょう。この度は本当に申し訳ありませんでした」
頭を下げ、観戦席に桜糀が戻っていく。
それを見送ってから視線を遊花に移した。
「それで、遊花。そろそろ大会を進行したいから離してくれないか」
「嫌です」
「即答かよ……」
「だって、師匠はいっぱい私に心配かけたんですもん。だから今は嫌です」

そう言って不機嫌そうに頬を膨らませる遊花。
そう言われてしまうと如何ともしがたい。
遊花に心配をかけてしまったのは事実だしな。
「それを言われると辛いんだがな……後で俺にできることならなんでもやってやるから、今は離れてくれよ」
「なんでも……ですか」
俺の言葉に、遊花はしばらく何かを考えるような表情を見せ、考えが纏まったのか笑顔を浮かべて俺から離れた。
「分かりました!!?そういうことなら離れます!!?」
「お、おう」
そういってニコニコと笑顔を浮かべながら遊花が俺の身体から離れる。
なんだか遊花が妙に笑顔なんだが、一体何を思いついたんだ？
……これはプレミしたかな、俺。
安易にカードをきってしまったかもしれない。
……まあ、それも俺の罰にはちょうどいいかもな。
とにかく、今は大会を進めよう。
それが今の俺が遊花にできる贖罪だ。
そんなことを、俺は冗談交じりに思うのだった。

第３８話　影ＶＳ磁石・影に蠢くもの

○

「それじゃあ1回戦第6試合、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』所属、御影治虫ＶＳデュエルアカデミア所属、九石　大地を開始する」
「よっしゃー‼?ようやく出番だぜ‼?」
遊騎の宣言を受け、大地が勢いよく他の参加者達の前に躍り出る。
「あの空気の後にデュエルするなんて、やりづらいなぁ」
それとは対象的に、治虫は居心地が悪そうにしながら他の参加者達の前に出てくる。
「えっと、九石君だっけ?悪いけど、さっさと勝たせて貰うよ。デュエルアカデミア生に負けるわけにはいかないからね」
「いや、俺だって負けるつもりはないぜ‼?せっかく楽しみにしていたプロ決闘者のデュエルなんだ‼?全力でぶつかっていくぜ‼?」
そういって、２人は同時にデュエルディスクを起動する。
「いくよ‼?」
「おう‼?楽しいデュエルをしようぜ‼?」
『決闘‼?』

治虫　ＬＰ８０００
大地　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は俺だな。俺はモンスターをセット。カードを2枚伏せてターンエンドだ」

治虫　ＬＰ８０００　手札２
ーー▲▲ー　　ー
ーー??ーー

ー　　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
大地　ＬＰ８０００　手札５

「俺のターン、ドロー!!?まずは魔法カード、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローする!!?俺は５枚、そっちは２枚捨ててドローだ」
「手札交換か……好都合だな。俺は墓地に送られたシャドールビースト、それにチェーンしてシャドールヘッジホッグの効果発動!!?」
「!!?墓地に送られた時に効果が発動するカードか!!?」
「まずはチェーン処理でシャドールヘッジホッグの効果、このカードが効果で墓地へ送られた場合、デッキからシャドールヘッジホッグ以外のシャドールモンスター１体を手札に加える!!?俺はデッキからシャドールファルコンを手札に加える。さらにシャドールビーストの効果、このカードが効果で墓地へ送られた場合、デッキから１枚ドローする!!?」
「手札交換のつもりが手札を増やされちまった。でも、この程度じゃへこたれないぜ!!?俺は電磁石（エレクトロマグネットウォリアー）の戦士αを召喚!!?」

〈電磁石の戦士α〉☆３　岩石族　地属性
ＡＴＫ１７００

現れたのは磁石の身体の小さな盾とサーベルを持ったモンスター。
「磁石の戦士シリーズ……珍しいカードを使ってるな」
「電磁石の戦士αの効果発動!!?このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキからレベル８の磁石の戦士モンスター１体を手札に加えるぜ!!?俺はデッキから電磁石の戦士マグネットベルセリオンを手札に加える!!?さらにフィールド魔法、マグネットフィールドを発動!!?」
大地がフィールド魔法を発動すると辺りが磁石に囲まれ、磁場が発

生しているフィールドに変わる。
「マグネットフィールドの効果発動!!?1ターンに1度、自分フィールドにレベル4以下の岩石族・地属性モンスターが存在する場合、自分の墓地のレベル4以下のマグネットウォリアーモンスター1体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?俺は墓地から電磁石の戦士(エレクトロマグネットウォリアー)βを特殊召喚だ!!?」

〈電磁石の戦士β〉☆3　岩石族　地属性
　DEF1500

　現れたのは電磁石の戦士αのように身体が磁石で出来ているのモンスター。
「さらに電磁石の戦士βの効果発動!!?このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから電磁石の戦士β以外のレベル4以下のマグネットウォリアーモンスター1体を手札に加える!!?俺は電磁石の戦士(エレクトロマグネットウォリアー)γを手札に加えるぜ!!?そして、繋がれ!!?絆が引き合うサーキット!!?」
「リンク召喚か……」
　大地の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は地属性モンスター2体!!?電磁石の戦士αと電磁石の戦士βをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?絆の守護獣!!?リンク2!!?ミセスレディエント!!?」

〈ミセスレディエント〉LINK　2　獣族　地属性
　ATK1400　↙?↘?

　現れたのはもふもふとしている子犬のモンスター。
「ミセスレディエントの永続効果、ガイアハウリング!!?このカードがモンスターゾーンに存在する限り、フィールドの地属性モンスターの攻撃力・守備力は500ポイントアップし、風属性モンスターの攻撃力・守備力は400ポイントダウンするぜ!!?」

ミセスレディエント
ＡＴＫ１４００→１９００

ミセスレディエントが遠吠えを上げる。
「早速いくぜ‼？俺は自分の手札・フィールド・墓地から、電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γを１体ずつ除外した場合にこのカードは特殊召喚できる‼？俺は墓地に存在する電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γを除外し、手札から電磁石の戦士マグネットベルセリオンを特殊召喚する‼？電磁合体‼？マグネットベルセリオン‼？」
フィールドに電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γが現れ、それぞれの身体を分離し、１つになっていく。
αが身体とサーベル、βが足、γが胴体と手、そして３体の頭部のパーツが合わさって１つの顔が出来る。
そして合体が終わると、そこに巨大な磁石の戦士が現れた。

〈電磁石の戦士マグネットベルセリオン〉☆８　岩石族　地属性
ＡＴＫ３０００→３５００

「っ、いきなり攻撃力３５００のモンスターが出てくるか……」
「一気にライフを削らせて貰うぜ‼？電磁石の戦士マグネットベルセリオンの効果発動‼？マグネットサイドカッター‼？自分の墓地からレベル４以下のマグネットウォリアーモンスター１体を除外し、相手フィールドのカード１枚を対象としてそのカードを破壊する‼？俺は墓地に存在する磁石の戦士（マグネットウォリアー）αを除外してセットモンスターを破壊するぜ‼？」
ベルセリオンがセットモンスターに向かってダッシュしながら横一文字にサーベルを振るおうとする。
それを見て、治虫はニヤリと笑った。
「リバースカードオープン‼？永続罠、星遺物の傀儡‼？」

「星遺物の傀儡？」
「このカード名の効果は1ターンに1度、２つある内のいずれか1つしか使用できない‼？俺が使用するのは自分フィールドの裏側表示モンスター1体を対象として、そのモンスターを表側攻撃表示または表側守備表示にする効果‼？俺はセットモンスター、クローラーレセプターを表側守備表示にする‼？」

〈クローラーレセプター〉☆2　昆虫族　地属性
ＤＥＦ１２００

フィールドに姿を現したのは機械的な身体を持つ蛾のようなモンスター。
「クローラーレセプターの効果発動‼？リバースした場合にデッキからクローラーモンスター1体を手札に加える‼？俺はデッキからクローラーグリアを手札に加える‼？」
「また手札が増えるのか‼？だけど、そのモンスターは破壊させて貰う‼？」
ベルセリオンがレセプターを斬り伏せる。
しかし、切断されたレセプターの目が怪しく光り、その光に惹かれるようにフィールドに影が差す。
「クローラーレセプターの効果発動‼？表側表示のこのカードが相手の効果でフィールドを離れた場合、クローラーレセプター以外のクローラーモンスターを同名カードは1枚までで2体、デッキから裏側守備表示で特殊召喚する‼？」
「いいっ⁉？」
「俺はデッキからクローラースパインとクローラーアクソンを裏側守備表示で特殊召喚する」
フィールドに新たなモンスターが2体セットされる。
「さあ、俺のモンスターは2体増えたわけだが、どうするかな？」
「勿論、攻撃するぜ‼？バトル‼？電磁石の戦士マグネットベルセリオンでセットモンスターを攻撃‼？マグネットフライングカッター

!!?」
「そうくると思ってたよ。リバースカードオープン!!?罠発動!!?メタバース!!?」
「っ、そのカードは確か遊花とのデュエルで神路祇が使ってた……」
「このカードはデッキからフィールド魔法を手札に加えるか、自分フィールドに発動することが出来る!!?俺はデッキからフィールド魔法、星遺物に差す影を発動!!?」
治虫がフィールド魔法を発動すると、フィールドが夜に代わり、巨大な物体が治虫の背後に現れる。
「星遺物に差す影には3つの効果がある。1つ、フィールドのクローラーモンスターの攻撃力・守備力は300ポイントアップする。2つ、1ターンに1度、自分メインフェイズに手札からレベル2以下の昆虫族モンスター1体を表側守備表示または裏側守備表示で特殊召喚する。そして3つ、自分のリバースモンスターが相手モンスターとの戦闘で破壊された時に、その相手モンスターを墓地へ送る!!?」
「!?なんだって!?」
「バトルを止めることは出来ないからこのままバトルは継続だ。セットモンスターはクローラースパイン!!?」

〈クローラースパイン〉☆2　昆虫族　地属性
DEF2100→2400→2900

ベルセリオンが空中に跳躍し、サーベルにフィールドから磁力を収束させると縦にサーベルを振り抜き、機械的な身体を持つ蠍のようなモンスターを切断する。
しかし、切断されたスパインの目が怪しく光ると、スパインが爆散し身体の中から怪しい液体がミセスレディエントにかかる。
その液体がかかったミセスレディエントは苦しみながら消滅した。
「ミセスレディエント!?」
「クローラースパインのリバース効果。このカードがリバースした場合、フィールドのモンスター1体を対象として破壊する。対象はミセ

スレディエントだ。そして星遺物に差す影の効果で電磁石の戦士マグネットベルセリオンには墓地にいって貰おうか」
治虫の背後にある巨大な物体から小さな黒い影が大量に現れ、ベルセリオンに向かって蠢く。
そしてその黒い影達がベルセリオンを呑み込み、しばらくして黒い影達が巨大な物体に戻っていくと、そこにベルセリオンの姿は無かった。
ベルセリオンには破壊された時に戦闘または相手の効果で破壊された場合に除外されている電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γを1体ずつ対象として特殊召喚する効果があるが、星遺物に差す影の効果は墓地送り。
破壊ではないためベルセリオンの効果は発動しない。
自分のフィールドを完璧に崩されたのを見て、大地は面白そうに笑った。
「……ははっ!!?すっげえ!!?俺の行動が全て裏目に出ちまう。これがプロ決闘者の実力か!!?」
「……へぇ、せっかく出した切り札を完全に処理されても笑うのか」
「当たり前だろ!!?こんなにすげえデュエルでワクワクしないなんて勿体ないぜ!!?それに俺の切り札な電磁石の戦士マグネットベルセリオンだけじゃないからな。まだまだここからだ!!?俺は破壊されたミセスレディエントの効果発動!!?ガイアリターン!!?…このカードが戦闘・効果で破壊された場合、自分の墓地の地属性モンスター1体を対象としてそのモンスターを手札に加える!!?俺は墓地から磁石の戦士δ(マグネットウォリアー)を手札に加えるぜ!!?メインフェイズ2、カードを2枚伏せてターンエンドだ!!?」

治虫　LP8000　手札5
ー△ー　▽
ー??ー
ー　ー
ーーーー

ーー▲▲ー　　▽
大地　ＬＰ８０００　手札２
「暑苦しい奴だな、そういう奴は苦手なんだ。だからさっさと終わらせる。俺のターン、ドロー。まずは反転召喚、クローラーアクソン」
〈クローラーアクソン〉☆２　昆虫族　地属性
ＡＴＫ５００→８００
フィールドに姿を現したのは機械的な身体を持つ蟷螂のようなモンスター。
「クローラーアクソンのリバース効果。このカードがリバースした場合、フィールドの魔法・罠カード１枚を対象として破壊する!!?マグネットフィールドには消えて貰うぜ!!?」
「くっ……」
アクソンの目が怪しく光りその手を振るうと、周囲の磁場が消滅する。
「さらにフィールド魔法、星遺物に差す影の効果発動!!?手札からクローラーグリアを裏側守備表示で特殊召喚する。そして永続罠、星遺物の傀儡の効果発動!!?使うのはさっきと同じ自分フィールドの裏側表示モンスター１体を対象として、そのモンスターを表側攻撃表示または表側守備表示にする効果!!?俺はセットモンスター、クローラーグリアを表側守備表示にする!!?」
〈クローラーグリア〉☆２　昆虫族　地属性
ＤＥＦ１５００→１８００
次にフィールドに姿を現したのは機械的な身体を持つ蝗のようなモンスター。
「クローラーグリアの効果発動!!?このカードがリバースした場合、自分の手札・墓地からクローラーグリア以外のクローラーモンスター

１体を選んで表側攻撃表示または裏側守備表示で特殊召喚する!!?
俺は墓地からクローラースパインを攻撃表示で特殊召喚!!?」

〈クローラースパイン〉☆２　昆虫族　地属性
ＡＴＫ３００→６００

グリアの目が怪しく光ると地面からスパインが姿を現わす。
姿を現したスパインを見て、治虫は正面に手をかざす。
「覆いつくせ!!?影を纏しサーキット!!?」
「リンク召喚か!!?」
治虫の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はクローラーモンスター２体!!?クローラースパインとクローラーアクソンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
スパインとアクソンがサーキットに吸い込まれていく。
そしてサーキットが輝くと中から現れたのは機械的な身体を持つ巨大な蜘蛛のモンスター。
「リンク召喚!!?全てを呑み込む捕食者!!?リンク２!!?エクスクローラークオリアーク!!?」

〈エクスクローラークオリアーク〉ＬＩＮＫ　２　昆虫族　地属性
ＡＴＫ２０００→２３００　↙?↘?

「クローラーのリンクモンスター……」
「エクスクローラークオリアークの永続効果、コングロマリットバグは自分フィールドのクローラーモンスターの数によって適用できる効果が増えていく。２体以上で自分フィールドのモンスターの攻撃力・守備力は３００ポイントアップし、４体以上で相手はバトルフェイズ中に効果を発動できなくなり、６体以上で自分のモンスターは直接攻撃できるようになる。今バトルゾーンにいるクローラーモンスターは２体。よって自分フィールドのモンスターのステータスは３

００ポイントアップする」

エクスクローラークオリアーク
ＡＴＫ２３００→２６００

クローラーグリア
ＤＥＦ１８００→２１００

「数が増えるたびに強化されていくのか」
「まだまだ動かせて貰うよ。速攻魔法、神の写し身との接触‼？自分の手札・フィールドから、シャドール融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をＥＸデッキから融合召喚する‼？」
「融合召喚だって⁉？」
「俺が融合するのは手札のシャドールモンスター、シャドールファルコンと手札の地属性モンスター、クローラーデンドライト‼？影に飲まれし隼よ、影より生まれし害虫と交わりて、全てを封じる闇となれ‼？」
　フィールドに現れた渦に治虫の手札から影のような隼のモンスターと機械の身体を持つ寄生虫のようなモンスターが呑み込まれていく。
　そして渦が弾けると機械の鎧から伸びる影の糸に縛られた操り人形が現れた。
「融合召喚‼？影より生まれし機兵‼？エルシャドールシェキナーガ‼？」

〈エルシャドールシェキナーガ〉☆１０　機械族　地属性
ＡＴＫ２６００→２９００

「今度はシャドールの融合モンスター……」
「教えておくよ。エルシャドールシェキナーガは特殊召喚されたモン

スターが効果を発動した時にその発動を無効にし破壊する効果を持っている」
「うっ……無効化は面倒だな」
「さらに墓地に送られたシャドールファルコンの効果発動!!?このカードが効果で墓地へ送られた場合、このカードを墓地から裏側守備表示で特殊召喚する!!?」
「っ、またセットモンスターかよ……」
フィールドに再び影が生まれ、大地は苦い表情を浮かべる。
「バトル!!?エクスクローラークオリアークでダイレクトアタック!!?」
「させないぜ!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?戦線復帰!!?自分の墓地のモンスター1体を対象としてそのモンスターを守備表示で特殊召喚する!!?甦れ、電磁石の戦士マグネットベルセリオン!!?」

〈電磁石の戦士マグネットベルセリオン〉☆8　岩石族　地属性
ＤＥＦ２８００

大地を守るように、再びベルセリオンが姿を現わす。
「くっ、守備力が高いな……エクスクローラークオリアークの攻撃は中止する。だが、エルシャドールシェキナーガで電磁石の戦士マグネットベルセリオンを攻撃!!?シャドーシェル!!?」
「迎え撃て、電磁石の戦士マグネットベルセリオン!!?」
シェキナーガから影で覆われた鉄の弾丸が撃ち出されていく、ベルセリオンはサーベルでその弾丸を斬ろうとしたが、サーベルが触れる瞬間、弾丸は実態を失くしてサーベルをすり抜けたかと思うと、再び実体化してベルセリオンを貫いた。
「くっ……だけど、電磁石の戦士マグネットベルセリオンの効果発動!!?マグネットセパレイション!!?このカードが戦闘または相手の効果で破壊された場合、除外されている自分の電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γを1体ずつ対象として特殊召喚する!!

？再集結だ‼？電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γ」

〈電磁石の戦士α〉☆３　岩石族　地属性
ＡＴＫ１７００

〈電磁石の戦士β〉☆３　岩石族　地属性
ＤＥＦ１５００

〈電磁石の戦士γ〉☆３　岩石族　地属性
ＤＥＦ２０００

飛び散っていたベルセリオンの破片が再び集まり３体の電磁石の戦士の姿に変わる。

「そして３体の電磁石の戦士の効果発動‼？電磁石の戦士αの効果発動‼？俺はデッキから磁石の戦士マグネットバルキリオンを手札に加える‼？さらに電磁石の戦士βの効果発動‼？デッキから２体目の電磁石の戦士αを手札に加える‼？そして電磁石の戦士γの効果発動‼？このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、手札から電磁石の戦士γ以外のレベル４以下のマグネットウォリアーモンスター１体を特殊召喚する‼？俺は手札から磁石の戦士δを特殊召喚‼？」

〈磁石の戦士δ〉☆４　岩石族　地属性
ＡＴＫ１６００

現れたのは今まで出てきた磁石の戦士とは異なる外見をした磁石の戦士。

「磁石の戦士δの効果発動‼？このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキからレベル４以下のマグネットウォリアーモンスター１体を墓地へ送る‼？俺はデッキから２体目の電磁石の戦士γを墓地に送る‼？」

「なかなかやるね。メインフェイズ２、カードを１枚伏せてターンエ

ンドだ」
「ならエンドフェイズ‼?ならエンド前に電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γの3体の効果を発動だ‼?それぞれ相手ターンにこのカードをリリースすることでデッキからレベル4のマグネットウォリアーモンスター1体を特殊召喚する‼?俺は電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γの3体をリリースし、デッキから、来い‼?磁石の戦士α、磁石の戦士β、磁石の戦士γ‼?」
「っ……面倒なことを」

〈磁石の戦士α〉☆4　岩石族　地属性
DEF1700

〈磁石の戦士β〉☆4　岩石族　地属性
DEF1600

〈磁石の戦士γ〉☆4　岩石族　地属性
DEF1800

電磁石の戦士達の姿が消え、それぞれの電磁石の戦士に似た磁石の戦士が現れた。
治虫はそれを見て苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

治虫　LP8000　手札2
ー△▲ー　▽
??ーー□○
ー　☆
□□□○ー
ーーー▲ー　ー
大地　LP8000　手札3

「俺のターン、ドローー‼?まずは合体だ‼?自分の手札・フィールドか

ら、磁石の戦士α、磁石の戦士β、磁石の戦士γを1体ずつリリースした場合にこのカードは特殊召喚できる!!?俺はフィールドに存在する磁石の戦士α、磁石の戦士β、電磁石の戦士γをリリースし、手札から磁石の戦士マグネットバルキリオンを特殊召喚する!!?磁力合体!!?マグネットバルキリオン!!?」

磁石の戦士α、磁石の戦士β、電磁石の戦士γがそれぞれの身体を分離し、1つになっていく。

αは身体と剣に、βは顔、γは羽根となり、合体が終わると、そこに巨大な磁石の戦士が現れた。

〈磁石の戦士マグネットバルキリオン〉☆8　岩石族　地属性

ＡＴＫ３５００

「さらに俺は電磁石の戦士αを召喚!!?」

〈電磁石の戦士α〉☆3　岩石族　地属性

ＡＴＫ１７００

「電磁石の戦士αの効果発動!!?俺はデッキから電磁石の戦士マグネットベルセリオンを手札に加える!!?そして俺は墓地に存在する電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γを除外し、手札から電磁石の戦士マグネットベルセリオンを特殊召喚する!!?電磁合体!!?マグネットベルセリオン!!?」

〈電磁石の戦士マグネットベルセリオン〉☆8　岩石族　地属性

ＡＴＫ３０００

「チッ、攻撃力３０００オーバーのモンスターをこうも易々と……」

「まずはリンクモンスターを倒す!!?バトル!!?電磁石の戦士マグネットベルセリオンでエクスクローラークオリアークを攻撃!!?マグネットフライングカッター!!?」

「迎え撃て、エクスクローラークオリアーク‼?ナイトメアストリングス‼?」
クオリアークが口から鋼で出来た糸をベルセリオンに向けて吐き出す。
ベルセリオンは磁力でその糸を弾き返し、クオリアークに近づいて斬り伏せた。

治虫　ＬＰ８０００→７６００

「ぐっ……エクスクローラークオリアークの効果発動‼?表側表示のこのカードが相手の効果でフィールドから離れた場合、または戦闘で破壊された場合、同名カードは1枚までで2体、墓地から裏側守備表示で特殊召喚する‼?」
「なっ⁉?戦闘破壊された時にも呼べるのか⁉?」
「俺は墓地からクローラーレセプターとクローラースパインを裏側守備表示で特殊召喚する‼?」
「だけど、エクスクローラークオリアークが倒されたことでフィールドのモンスターのステータスは下がる‼?」

エルシャドールシェキナーガ
ＡＴＫ２９００→２６００

クローラーグリア
ＤＥＦ２１００→１８００

「続けて、磁石の戦士マグネットバルキリオンでエルシャドールシェキナーガを攻撃‼?マグネットクロスカッター‼?」
「くっ、迎え撃て‼?エルシャドールシェキナーガ‼?シャドーシェル‼?」
シェキナーガが影で覆われた鉄の弾丸を撃ち出していく。
バルキリオンは撃ち出される弾丸を躱して懐に入り込むと、Ｘの字

を描くようにシェキナーガを斬り裂いた。

治虫　ＬＰ７６００→６７００

「くっ……だが、エルシャドールシェキナーガの効果発動!!?このカードが墓地へ送られた場合、自分の墓地のシャドール魔法・罠カード1枚を対象としてそのカードを手札に加える!!?俺は墓地にある神の写し身との接触を手札に加える!!?」

「融合カードを回収できるのか……ということは次のターンにはまた融合されちまう。これじゃあ倒してもきりがないぜ……だけど、退くわけにもいかねぇ!!?電磁石の戦士αでセットモンスターを攻撃!!?アルファカッター!!?」

「セットモンスターはシャドールファルコン」

〈シャドールファルコン〉☆2　魔法使い族　闇属性

ＤＥＦ１４００

電磁石の戦士αがサーベルを振るい、影でできた隼を切り伏せる。

「シャドールファルコンの効果発動!!?このカードがリバースした場合、シャドールファルコン以外の自分の墓地のシャドールモンスター1体を対象として、そのモンスターを裏側守備表示で特殊召喚する!!?俺は墓地のエルシャドールシェキナーガを裏側守備表示で特殊召喚する!!?」

「なっ!!?融合モンスターでもいけるのか!!?」

「そして星遺物に差す影の効果で電磁石の戦士αには墓地にいって貰おうか」

電磁石の戦士αが影に呑まれて消滅する。

その光景を見て、大地は笑みを浮かべた。

「そうだ!!?磁石の戦士δでセットモンスターを攻撃!!?マグネットタックル!!?」

「セットモンスターはクローラーレセプター」

〈クローラーレセプター〉☆２　昆虫族　地属性
ＤＥＦ１２００→１５００

レセプターに磁石の戦士δは強烈なタックルを仕掛け、破壊する。
「クローラーレセプターの効果発動!!?俺はデッキからクローラーランヴィエを手札に加える!!?そして星遺物に差す影の効果で磁石の戦士δにも墓地にいって貰うよ」
磁石の戦士δが影に呑まれて消えていく。
しかし、その光景を見て大地は不敵に笑った。
「それを待ってたぜ!!?磁石の戦士δの効果発動!!?このカードが墓地へ送られた場合、磁石の戦士δ以外のレベル４以下のマグネットウォリアーモンスター３体を自分の墓地から除外して手札・デッキから磁石の戦士マグネットバルキリオン１体を召喚条件を無視して特殊召喚する!!?」
「なにっ!!?」
「俺は墓地に存在する磁石の戦士α、磁石の戦士β、電磁石の戦士γを除外してデッキから磁石の戦士マグネットバルキリオンを特殊召喚だ!!?」
影が巨大な物体に戻っていく。
そして影が完全にいなくなると磁石の戦士δがいた場所に巨大な磁石の戦士が現れた。

〈磁石の戦士マグネットバルキリオン〉☆８　岩石族　地属性
ＡＴＫ３５００

「磁石の戦士マグネットバルキリオンでセットモンスターを攻撃!!?マグネットクロスカッター!!?」
「くっ、セットモンスターはエルシャドールシェキナーガ……」

〈エルシャドールシェキナーガ〉☆１０　機械族　地属性

ＤＥＦ３０００

シェキナーガが姿を見せた瞬間、バルキリオンはシェキナーガが弾丸を撃ち出す前に懐に入り込み、Ｘの字を描くようにシェキナーガを斬り伏せた。

「ぐっ……まさか蘇生したシェキナーガまで破壊されるとは……」

「へへっ‼？このまま一気に押し切るぜ‼？メインフェイズ２、電磁石の戦士マグネットベルセリオンの効果発動‼？マグネットサイドカッター‼？自分の墓地から磁石の戦士δを除外して、フィールド魔法、星遺物に差す影を破壊する‼？」

ベルセリオンが治虫の背後にある巨大な物体を横一文字にサーベルを振るって破壊すると、辺りがいつもの店内に戻る。

「くっ……フィールド魔法まで……」

「俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ‼？」

「調子に乗るな‼？俺は永続罠、星遺物の傀儡のもう１つの効果を発動‼？自分の墓地のクローラーモンスター１体をデッキに戻し、自分フィールドの表側表示モンスター１体を対象として、そのモンスターを裏側守備表示にする‼？」

「なんだって⁉？」

「俺は墓地のエクスクローラークオリアークをＥＸデッキに戻してクローラーグリアを裏側守備表示にする‼？」

「クローラーグリアってクローラーを特殊召喚できた奴だよな……ってことはまた、エクスクローラークオリアークは出てくるのか」

クローラーグリアの姿が再び影に隠れる。

やはりこのまま勢いで押し切れる程、プロ決闘者は甘くなさそうだと、大地は気を引き締めた。

治虫　ＬＰ６７００　手札４

ーー△▲ー　ー

ー
ー
ー ????ー
ー　　ー
ー○○○ー
ーー▲▲ー　　ー
大地　ＬＰ８０００　手札１

「まさかこんなにデュエルアカデミア生に押されるなんてね……そろそろ本気を出させて貰うよ‼?‥俺のターン、ドロー‼?‥まずは反転召喚、クローラースパイン‼?‥」

〈クローラースパイン〉☆２　昆虫族　地属性
ＡＴＫ３００

「クローラースパインの効果発動‼?‥磁石の戦士マグネットバルキリオンを１体破壊する‼?‥」
スパインの身体から猛毒の液体がバルキリオンに撃ち出され、バルキリオンの身体が溶けて消滅する。
「くっ……悪りぃ、バルキリオン」
「さらに反転召喚、クローラーグリア‼?‥」

〈クローラーグリア〉☆２　昆虫族　地属性
ＡＴＫ７００

「クローラーグリアの効果発動‼?‥俺は墓地からクローラーアクソンを攻撃表示で特殊召喚‼?‥」

〈クローラーアクソン〉☆２　昆虫族　地属性
ＡＴＫ５００

「そして、覆いつくせ‼?‥影を纏しサーキット‼?‥」
「やっぱりリンク召喚か‼?‥」

治虫の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はクローラーモンスター2体!!?クローラースパインとクローラーアクソンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?再び現れろ、全てを呑み込む捕食者!!?リンク2!!?エクスクローラークオリアーク!!?」

〈エクスクローラークオリアーク〉ＬＩＮＫ　２　昆虫族　地属性
ＡＴＫ２０００↓２３００　↙?↘?

クローラーグリア
ＡＴＫ７００↓１０００

再び現れたクオリアークに大地は警戒を露わにする。
「さらに俺はクローラーランヴィエを召喚!!?」

〈クローラーランヴィエ〉☆２　昆虫族　地属性
ＡＴＫ１１００↓１４００

フィールドに現れたのは機械の身体を持つ亀虫のようなモンスター。
そして治虫はすぐに正面に手をかざす。
「もう1度だ、覆いつくせ!!?影を纏しサーキット!!?」
「またリンク召喚か……」
治虫の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は昆虫族モンスター2体!!?クローラーグリアとクローラーランヴィエをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?エクスクローラーニューロゴス!!?」

〈エクスクローラーニューロゴス〉ＬＩＮＫ　２　昆虫族　地属性
ＡＴＫ１９００↓２２００　↑↓

サーキットから現れたのは機械の身体を持つ百足のようなモンスター。
「さらにリバースカードオープン!!?永続罠、影依の原核!!?このカードは発動後、魔法使い族・闇属性・レベル９・攻撃力１４５０・守備力１９５０となり、のモンスターとして特殊召喚する!!?この効果で特殊召喚されたこのカードは、シャドール融合モンスターカードに記された属性の融合素材モンスターの代わりにできる」
〈影依の原核〉☆９　魔法使い族　闇属性
ＤＥＦ１９５０

治虫が発動した罠カードから、影が噴き出している球体が現れる。
「そして速攻魔法、神の写し身との接触!!?自分の手札・フィールドから、シャドール融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をＥＸデッキから融合召喚する!!?俺が融合するのは手札のシャドールモンスター、シャドールヘッジホッグとフィールドの影依の原核を光属性として扱い融合!!?影に飲まれし鼠よ、原初の影と交わりて、全てを操る闇となれ!!?」
フィールドに現れた渦に治虫の手札から影のようなハリネズミのモンスターとフィールドの影依の原核が呑み込まれていく。
そして渦が弾けると影の糸が溢れ出している操り人形が現れた。
「融合召喚!!?影より生まれし操り人形!!?エルシャドールネフィリム!!?」
〈エルシャドールネフィリム〉☆８　天使族　光属性
ＡＴＫ２８００→３１００

「あのモンスター、シェキナーガに縛られてた奴だよな。あれもモンスターだったのか……」

「エルシャドールネフィリムの効果発動!!?シャドーフォール!!?このカードが特殊召喚に成功した場合に、デッキからシャドールカード1枚を墓地へ送る。さらに墓地に送られたシャドールヘッジホッグと影依の原核の効果も発動!!?シャドールヘッジホッグの効果でデッキからシャドールモンスターを、影依の原核の効果で墓地から影依の原核以外の自分の墓地のシャドール魔法・罠カード1枚を手札に加える!!?」
「っ、手札が全然減らねぇ」
「チェーン処理で影依の原核の効果で墓地から神の写し身との接触を手札に加え、シャドールヘッジホッグの効果でシャドールビーストを手札に。そしてエルシャドールネフィリムの効果でデッキからシャドールファルコンを墓地に送り、墓地に送られたシャドールファルコンの効果を発動!!?このカードを墓地から裏側守備表示で特殊召喚する!!?」
　ネフィリムの身体から闇が溢れ出し、シャドールファルコンの姿になると、フィールドの影に溶けていく。
「まだだ!!?まだ終わらない!!?魔法カード、貪欲な壺!!?墓地に存在するエルシャドールシェキナーガをEXデッキに、シャドールファルコン、シャドールビースト、シャドールヘッジホッグ2体をデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローする!!?そして、手札を1枚捨てて速攻魔法、超融合!!?」
「超融合だって!?」
「自分・相手フィールドから融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をEXデッキから融合召喚する!!?このカードの発動に対して魔法・罠・モンスターの効果は発動できない。俺はセットされているシャドールモンスター、シャドールファルコンと君のフィールドの地属性モンスター、電磁石の戦士マグネットベルセリオンで融合!!?」
「くっ!!?その組み合わせは!!?」
「影に飲まれし隼よ、電磁石の巨人と交わりて、全てを封じる闇となれ!!?」

フィールドに巨大な渦が現れ、シャドールファルコンとベルセリオンが引きずり込まれる。
そして渦が弾けると再び機械の鎧から伸びる影の糸に縛られた操り人形が現れた。
「融合召喚!!?・再び現れろ、影より生まれし機兵!!?・エルシャドールシェキナーガ!!?・」

〈エルシャドールシェキナーガ〉☆１０　機械族　地属性
ＡＴＫ２６００→２９００

「超融合のコストとして墓地に送られたシャドールビーストの効果発動!!?・カードを1枚ドローする!!?・」
「またシェキナーガが出てきちまった……だけど、磁石の戦士マグネットバルキリオンの攻撃力を超えるモンスターはいない。これなら……」
「それはどうかな?・バトル!!?・エルシャドールネフィリムで磁石の戦士マグネットバルキリオンを攻撃!!?・シャドーマリオネッター!!?・」
「っ、迎え撃て、磁石の戦士マグネットバルキリオン!!?・マグネットクロスカッター!!?・」
ネフィリムが身体中からバルキリオンに向けて影の糸を伸ばし、バルキリオンはその糸を避けて懐に入り込み、ネフィリムを剣で斬り伏せようとする。
「エルシャドールネフィリムの効果発動!!?・シャドーイロウシェン!!?・このカードが特殊召喚されたモンスターと戦闘を行うダメージステップ開始時、そのモンスターを破壊する!!?・」
「なんだって!?!?・」
バルキリオンの剣がネフィリムを斬り裂こうとした瞬間、バルキリオンの動きが止まる。
よく見ると、バルキリオンの影から無数の糸が伸び、バルキリオンの身体を縛り付ける。
そしてネフィリムはバルキリオンの胸に手を置くと、手から大量の

糸を生み出し、バルキリオンを体内から爆散させた。
「くっ……バルキリオン!!?」
「続けてエクスクローラーニューロゴスでダイレクトアタック!!?ハンドレッドボム!!?」
「ぐっ!!?」
ニューロゴスの身体に付いている球体から無数の爆弾が大地に向かって撃ち出される。

大地　ＬＰ８０００→５８００

「続けてエクスクローラークオリアークでダイレクトアタック!!?ナイトメアストリングス!!?」
「くぅ!!?」
クオリアークが口から鋼で出来た糸を吐き出し、大地の身体を貫く。

大地　ＬＰ５８００→３５００

「エルシャドールシェキナーガでダイレクトアタック!!?シャドーシェル!!?」
「ぐあっ!!?」
シェキナーガが生み出した影を纏った鉄の弾丸が大地の身体を撃ち抜き、ライフが大きく削られる。

大地　ＬＰ３５００→６００

「残念だけどこれ以上の追撃は出来ないか……命拾いをしたな」
「……っ、ははは!!?すっげぇ!!?」
「っ!?なんだ、追い詰められすぎて笑うしか無くなったのか?」
突然大声で笑い出した大地を見て、治虫は訝しげな表情を浮かべる。

そんな治虫に大地は満面の笑みを浮かべ、興奮気味に口を開いた。
「治虫さん、スッゲー強ええな!!?今までのデュエルも見てきたけど、やっぱプロ決闘者はこんなに強ええ人達ばっかなんだよな!!?くっっー!!?ワクワクが止らねぇ!!?」
「……もう負けそうだって言うのにそんな言葉が出てくるのか」
「確かに、治虫さんの言うように俺の方がピンチだよ。けどさ、俺のライフは残ってるってことは次の俺のターンがある。次の俺のターンのドローで、この状況が一気に変わるかも知れないじゃんか!!?」
「そんなことが簡単に起こるわけがないだろ」
「そりゃあ簡単には起こらないさ。だけど、デュエルはやってみなきゃ分かんないだろ?だから、俺はライフが0になるその時まで諦めない!!?そして絶対に勝ってみせるんだ!!?」
「っ、ムカつくね……知ったようなことを……デュエルアカデミア生の君が俺に勝つだって?やれるもんならやってみろよ!!?メインフェイズ2、カードを1枚伏せてターンエンド!!?」

治虫　ＬＰ６７００　手札３
ー－△▲ー　　ー
ー－☆○○
ー　　☆
ー－－－－
ー－▲▲ー　　ー
大地　ＬＰ６００　手札１
ー－－－－－－－

「あちゃー怒ってるですね、治虫君」
「……だから負け癖がつく。相手がデュエルアカデミア生だろうと関係ない。相手を侮ってる時点で治虫の負けは決まってる」
「冬城は相変わらず辛辣だな。まあ、冬城の言うことにも一理あるが」
観戦席の一角、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバーで少し話し

合っていた闇達は行われている治虫と大地のデュエルを見てそんな言葉を漏らした。
『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の中で、治虫の戦績は１番悪い。
　デュエルの腕自体は悪くないのだが、相手を侮ったり、思い通りにいかないと怒りでデュエルが雑になってしまい、そのせいでプレイミスをして負けることが多いのだ。
　それでも、プロ決闘者として勝率８割を維持しているのは流石と言うべきではあるが。
「治虫はデュエル自体は弱くないのにそこが勿体無い。その侮り癖さえ無ければ勝率ももっと上がるのに」
「うふふ、闇ちゃんも何だかんだ言って治虫君のことをちゃんと評価してるのですね」
「……性格とデュエルの腕は関係ないから。実力については正当に評価する。性格は最悪だけど」
「そういうことにしといてあげるのです。本当に闇ちゃんは可愛いのです‼？」
「むぎゅ……社長、離して、窒息する‼？」
「何をしてるんだお前達は」
　リーネに抱き上げられながら胸を顔に押し付けられ、窒息しかけて足をぷらぷらさせて暴れている闇を見て、炎が呆れた声を出す。
　しばらくして、解放された闇は深呼吸をしながらリーネに聞かれないように炎に尋ねる。
「……死ぬかと思った……それより炎、気付いてる？あの大地って子の墓地とデッキの上にあるカード」
「ああ、気付いてるさ。今のところ本人に影響はなさそうだから放っておいても大丈夫だろうが……それでも驚いたな。彼のデッキで使われている磁石の戦士は通常のものだろう？汚染されているようにも見えないというのに、よく動かせているな」
「……もしかしたら、遊花と同じパターンなのかも知れない」
「……聞いていた栗原の特殊な力と同種のものだと言うのか？」
「可能性はあると思う……何にせよ、あの大地って子が今から使お

うとしているあのカードはーーー」
闇と炎が視線をデュエルに移す。
そこでは大地が今ドローしたカードを使用するところだった。
そしてそのカードから漏れる微弱な闇。
「ーーー闇のカードだ」

ーーーーーーーー

「俺のターン!!?」
大地は満面の笑みを浮かべ、自分のデッキの上のカードを掴む。
状況は極めて不利。
効果を無効にして破壊するシェキナーガに戦闘時に特殊召喚したモンスターを問答無用で破壊するネフィリム。
おまけに治虫の伏せはおそらく速攻魔法の神の写し身との接触。
それを使ってまた強力なシャドール融合モンスターが現れるだろう。
それに対して大地の手札は1枚。
伏せカードは使用できないマグネットコンバージョンと仁王立ち。
圧倒的に不利な状況にあるハズなのに、それでも大地はワクワクが抑えきれずにいた。
大地が思い浮かべるのはプロ決闘者相手に引けを取らないデュエルをした友人達の姿。
そして劣勢を笑顔で逆転してみせた自身のライバルと呼べる少女。
「ドローー!!?」
大地はその姿を思い浮かべながら、勢いよくカードをドローする。
それと同時に治虫も動きはじめる。
「スタンバイフェイズ!!?リバースカードオープン!!?速攻魔法、神の写し身との接触!!?自分の手札・フィールドから、シャドール融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をEXデッキから融合召喚する!!?俺が融合するのは手札のシャドールモンスター、シャドールリザードと

闇属性、シャドールドラゴン‼?影に飲まれし蜥蜴よ、影から生まれし龍と交わりて、全てを戒める闇となれ‼?」
フィールドに現れた渦に治虫の手札から影のような蜥蜴のモンスターと影のような龍のモンスターが呑み込まれていく。
そして渦が弾けると影の糸に操られている竜の人形に乗った少女の人形が現れた。
「融合召喚‼?影に操られし哀れな人形‼?エルシャドールミドラーシュ‼?」

〈エルシャドールミドラーシュ〉☆5　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ２２００→２５００

「新しいシャドール融合モンスターか」
「墓地に送られたシャドールリザードとシャドールドラゴンの効果を発動‼?シャドールドラゴンの効果でこのカードが効果で墓地へ送られた場合、フィールドの魔法・罠カード1枚を対象としてそのカードを破壊する‼?俺はお前のセットカードを1枚破壊する‼?」
「破壊されたのはマグネットコンバージョン……」
「さらにシャドールリザードの効果でこのカードが効果で墓地へ送られた場合、デッキからシャドールリザード以外のシャドールカード1枚を墓地へ送る‼?俺はデッキからシャドールヘッジホッグを墓地に送り、シャドールヘッジホッグの効果でデッキからシャドールビーストを手札に加える‼?そしてエルシャドールミドラーシュの永続効果、シャドーリストラクション‼?このカードがモンスターゾーンに存在する限り、その間はお互いに1ターンに1度しかモンスターを特殊召喚できない‼?」
「っ、特殊召喚制限……」
「これでお前はこのターン1度しか特殊召喚できない‼?その上、エルシャドールシェキナーガで特殊召喚したモンスターが効果を発動した場合に無効にして破壊できる‼?この状況で逆転できるものならしてみろよ‼?」

そういって治虫が笑う。
そんな治虫に、大地は満面の笑みで答えた。
「ああ‼？突破してやるぜ‼？俺の切り札でな‼？」
「なっ⁉？」
「魔法カード、ダークコーリング‼？」
「ダーク……コーリング？」
「このカードは自分の手札・墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、ダークフュージョンの効果でのみ特殊召喚できる融合モンスター1体をダーク・フュージョンによる融合召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚する‼？」
「墓地のカードで融合召喚だって⁉？」
「俺がこの効果で除外するのは、墓地に存在する悪魔族モンスター、Ｅ－ＨＥＲＯ（イービルヒーロー）マリシャスエッジと、岩石族モンスター、磁石の戦士マグネットバルキリオン‼？悪魔の如き強さを誇る英雄よ、磁石の巨人と交わりて、無敵の力を解き放て‼？」
「Ｅ－ＨＥＲＯ⁉？手札抹殺の時に送られてたのか⁉？そんなＨＥＲＯ聞いたこともない‼？」
身体中に棘がついている悪魔のモンスターとバルキリオンの姿が闇を纏った渦の中に吸い込まれていく。
そして渦が弾けると、中から現れるのは微細な闇を放つ悪魔の翼を持つ身体が石で出来た戦士。
「融合召喚‼？　Ｅ－ＨＥＲＯ（イービルヒーロー）ダークガイア‼？」
〈Ｅ－ＨＥＲＯダークガイア〉☆８　悪魔族　地属性
ＡＴＫ？
「またＥ－ＨＥＲＯ……攻撃力が決まってない？」
「Ｅ－ＨＥＲＯダークガイアの元々の攻撃力は、このカードの融合素材としたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる‼？Ｅ－ＨＥＲＯマリシャスエッジは２６００、磁石の戦士マグネットバルキ

リオンは３５００。つまり、その攻撃力は⁉？　」

ＥＩＨＥＲＯダークガイア
ＡＴＫ？→６１００

「攻撃力６１００⁉？だが、それでも俺のライフは削りきれない⁉？
次のターンにエルシャドールネフィリムの効果で終わりだ⁉？」
「いや、このターンで決めさせて貰うぜ⁉？手札から装備魔法、巨大化をＥＩＨＥＲＯダークガイアに装備⁉？」
「巨大化だって⁉？」
「このカードは自分のライフポイントが相手より少ない場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力の倍になる⁉？俺のライフは６００、治虫さんのライフは６７００⁉？よってＥＩＨＥＲＯダークガイアの攻撃力は倍になるぜ⁉？」

ＥＩＨＥＲＯダークガイア
ＡＴＫ６１００→１２２００

「攻撃力１２２００⁉？」
「これで決まりだ⁉？バトル⁉？ＥＩＨＥＲＯダークガイアでエルシャドールシェキナーガを攻撃⁉？マキシマムブレイク⁉？」
シェキナーガが影を纏った巨大な鉄の弾丸をダークガイアに撃ち出す。
ダークガイアは闇を纏った右手で、その弾丸を受け止め、吸収する。
そしてシェキナーガの懐に入ると闇を纏った右手で、シェキナーガを殴りつけ、跡形もなく吹き飛ばした。
「馬鹿な……ぐあぁぁぁ⁉？」

治虫　ＬＰ６７００→０

ーーーーーーー

「そこまで‼?勝者、九石　大地‼?」
「よっしゃ‼?へへっ、楽しいデュエルだったぜ」
「馬鹿な……俺がデュエルアカデミア生に負けるなんて」
　遊騎の宣言に、大地は満面の笑みを浮かべながら鼻を擦り、治虫は呆然としながら観戦席の方に戻っていく。
　それを見て、大地が困ったような表情を浮かべるが、そんな大地に遊騎が声をかける。
「君が気にすることじゃないぜ。治虫も覚悟ってものが足りなかったんだ。負ける可能性をはじめから除外してるからあんなことになるんだ」
「あ、ああ」
「それより、凄いデュエルだった。次の君のデュエルの相手は俺だからな。楽しみにさせて貰うぜ」
「‼?そっか、次は遊花の師匠とデュエルできるんだよな‼?くぅー‼?今から楽しみになってきたぜ‼?」
「俺もだよ。それじゃあ大会を進めるから観戦席に戻ってくれるか?」
「おう‼?ああ、早くデュエルがしたいぜ‼?」
　そういって、大地が笑顔で観戦席に戻っていく。
　そんな大地を見て、遊騎はため息を吐いた。
「……はぁ、負けた対戦相手に気を遣わせるようじゃまだまだだぜ、治虫。それじゃあ、次の試合だ。1回戦最終戦第7試合、デュエルアカデミア所属、天雷　終夜VSデュエルアカデミア所属、空閑　騨。両選手は試合の準備を頼む」
　遊騎のアナウンスを聞き、2人の青年が参加者達の前に移動する。
「空閑君、よろしくお願いします」
「天雷、今日は勝たせて貰うぞ。負けっぱなしは俺様の性に合わないからな」
　そう言って終夜と騨はデュエルディスクを起動する。
　この2人はデュエルアカデミアでは上位ということもあり、試験な

どでデュエルをする機会も多かった。
その戦績は終夜の全勝。
デュエルアカデミア1位の実力は伊達ではない。
だからこそ、騨は油断なく終夜に挑む。
「いくぞ‼?」
「うん‼?」
『決闘‼?』

終夜　ＬＰ８０００
騨　　ＬＰ８０００

第３９話　雷ＶＳ傭兵・嵐に降り注ぐ雷

○

終夜　ＬＰ８０００
騨　　ＬＰ８０００

「先攻は僕だね。モンスターをセット。カードを２枚伏せてターンエンドです」

終夜　ＬＰ８０００　手札２
ー　ー▲▲ー　　ー
ー　ー??ー　ー
ー　　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
騨　ＬＰ８０００　手札５

「俺様のターン、ドロー!!?まずはコイツだ!!?空牙団の剣士ビートを召喚!!?」

〈空牙団の剣士ビート〉☆３　戦士族　地属性
ＡＴＫ１２００

現れたのは毛皮を被った小型の戦士のモンスター。
「空牙団の剣士ビートの効果発動!!?１ターンに１度手札から同名以外の空牙団モンスター１体を特殊召喚する!!?俺様は空牙団の飛哨リコンを特殊召喚!!?」

〈空牙団の飛哨　リコン〉☆２　獣族　風属性

ＤＥＦ５００

ビートが毛皮から取り出した角笛を吹くと気球に乗り、望遠鏡を持っている獣人のモンスターが現れる。

「さらにモンスターゾーンに存在する状態で自分フィールドに自分以外の空牙団が特殊召喚されたことで空牙団の剣士ビートの効果発動‼？１ターンに１度、デッキから空牙団モンスター１体を手札に加える‼？俺様はデッキから空牙団の叡智ウィズを手札に加える。そして空牙団の飛哨リコンの効果発動‼？空牙団の飛哨リコンも１ターンに１度手札から同名以外の空牙団モンスター１体を特殊召喚する‼？俺様は空牙団の叡智ウィズを特殊召喚する‼？」

〈空牙団の叡智ウィズ〉☆７　魔法使い族　水属性

ＤＥＦ２８００

リコンが気球から手を振ると、タコのような姿をした魔法使いのモンスターが現れた。

「特殊召喚された空牙団の叡智ウィズとそれにチェーンしてモンスターゾーンに存在する状態で自分フィールドに自分以外の空牙団が特殊召喚されたことで空牙団の飛哨リコンの効果発動‼？空牙団の飛哨リコンの効果で１ターンに１度自分フィールドにこのカード以外の空牙団モンスターが特殊召喚された場合、フィールドにセットされたカード１枚を対象として破壊する‼？俺様は天雷の魔法・罠ゾーンにセットされたカードを１枚破壊する‼？」

「っ、くず鉄のかかしが破壊されるよ」

「そして空牙団の叡智ウィズの効果、このカードが特殊召喚に成功した場合、自分は同名カード以外の自分フィールドの空牙団モンスターの種類×５００ポイント、ライフを回復する。俺様のフィールドには空牙団の剣士ビートと空牙団の飛哨リコンがいる。よって１０００ポイントのライフを回復させて貰うぜ」

騨　ＬＰ８０００→９０００

「テメェ相手に加減なんて出来ねぇ。最初から全力でいかせて貰うぜ‼？鳴り響け‼？理想を語らうサーキット‼？」

「っ、いきなりリンク召喚……」

騨の前にサーキットが現れる。

「召喚条件種族が異なるモンスター３体‼？俺様は空牙団の剣士ビート、空牙団の飛哨リコン、空牙団の叡智ウィズをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？」

ビート、リコン、ウィズがサーキットに飛び込んで行く。

そしてサーキットの中から桃色の花びらと共に大きな刀剣を持った狼の獣人が現れた。

「リンク召喚‼？信念貫く忠義の傭兵‼？リンク３‼？空牙団の大義フォルゴ‼？」

〈空牙団の大義フォルゴ〉ＬＩＮＫ３　獣族　闇属性

ＡＴＫ２４００　↙？→↘？

「空牙団の大義フォルゴの効果発動‼？コムラードコール‼？このカードがリンク召喚に成功した場合、１ターンに同名カードは１度、そのリンク素材としたモンスター３体とは異なる種族の空牙団モンスター１体をデッキから守備表示で特殊召喚する‼？リンク素材としたモンスター戦士、獣、魔法使い族だ‼？来やがれ‼？空牙団の参謀シール‼？」

〈空牙団の参謀シール〉☆４　獣戦士族　闇属性

ＤＥＦ１０００

フォルゴが大きな遠吠えをすると、どこからか学者のような獣人のモンスターが現れる。

「空牙団の参謀シールの効果発動‼？空牙団の参謀シールも１ターン

に１度手札から同名以外の空牙団モンスター１体を特殊召喚する‼？来やがれ‼？空牙団の孤高サジータ‼？」

〈空牙団の孤高サジータ〉☆５　鳥獣族　風属性
ＤＥＦ２４００

シールが角笛を吹くと、空からライフルを持った鳥人が甲板に降り立った。

そしてその鳥人はそのままライフルの銃口を終夜に向けた。

「特殊召喚した空牙団の孤高サジータの効果にチェーンしてモンスターゾーンに存在する状態で自分フィールドに自分以外の空牙団が特殊召喚されたことで空牙団の参謀シールの効果発動‼？自分フィールドにこのカード以外の空牙団モンスターが特殊召喚された場合、自分の墓地の空牙団モンスター１体を対象として手札に加える。俺様は墓地に存在する空牙団の剣士ビートを手札に加える。そして空牙団の孤高サジータの効果、特殊召喚した時に同名以外の自分フィールドの空牙団モンスターの種類×５００ポイントのダメージを相手に与える‼？俺様のフィールドには空牙団の孤高サジータ以外に空牙団の大義フォルゴと空牙団の参謀シールの２体がいる。よって１０００ポイントのダメージを受けな‼？」

「うっ‼？」

終夜　ＬＰ８０００→７０００

サジータがライフルの引き金を引き、弾丸が終夜の身体を撃ち抜く。

それを見て、騅はニヤリと笑った。

「まずは先制させて貰ったぜ」

「やるね、空閑君」

「まだまだここからだ‼？バトル‼？空牙団の大義フォルゴでセットモンスターを攻撃‼？春風のブロッサムアレスト‼？」

「セットモンスターはエレキトンボ」

〈エレキトンボ〉☆２　雷族　光属性
ＤＥＦ１００

高速で近づいてきたフォルゴに斬られ、電気を纏った蜻蛉のようなモンスターが粒子に変わる。
「空牙団の大義フォルゴの効果発動!!?コネクションドロー!!?相手フィールドのカードが戦闘・効果で破壊された場合、１ターンに１度、自分はデッキから１枚ドローする。その後、自分フィールドの空牙団モンスターが３種類以上の場合、自分はデッキから２枚ドローする!!?」
「一気に３枚もドローを……だけど、破壊されたエレキトンボの効果発動!!?自分のデッキからエレキと名のついたモンスター１体を特殊召喚出来ます!!?僕はエレキリギリスを特殊召喚します!!?」

〈エレキリギリス〉☆１　雷族　光属性
ＤＥＦ０

終夜を守るように、電気を身体に纏った虫型のモンスターが現れる。
「そしてエレキリギリスの永続効果で、このカードがフィールド上で表側表示で存在する限り、相手は表側表示で存在する他のエレキと名のついたモンスターは攻撃対象にできず、カード効果の対象にも出来なくなります!!?」
「チッ!!?厄介なモンスターが出てきたか。メインフェイズ２、魔法カード、烏合の行進!!?自分フィールド上に獣族・獣戦士族・鳥獣族のいずれかのモンスターが存在する場合、その種族１種類につき１枚デッキからカードをドローする!!?俺様のフィールドには獣族の空牙団の大義フォルゴ、獣戦士族の空牙団の参謀シール、鳥獣族の空牙団の孤高サジータがいる!!?よって３枚のカードをドローだ!!?」

「っ!?・また3枚のドロー!?・」
「ただし、このカードを発動するターン、自分は他の魔法・罠カードの効果を発動できないがな。俺様はカードを3枚セットしてターンエンドだ」

終夜　ＬＰ７０００　手札２
ー－▲－－　ー
－－□－－
ー　☆
□□－－－
ー▲▲▲ー　ー
騨　ＬＰ９０００　手札６

「僕のターン、ドロー!!?・エレキリギリスを召喚!!?・」
「チッ!!?・2枚目を持っていやがったか!!?・」

〈エレキリギリス〉☆１　雷族　光属性
ＡＴＫ０

「そして2体のエレキリギリスが揃ったこととでこのカードがフィールド上で表側表示で存在する限り、相手は表側表示で存在するエレキと名のついたモンスターは攻撃対象にできず、カード効果の対象にも出来なくなります!!?・」
２体のエレキリギリスから電気が溢れ出し、終夜のフィールド全てを守るように電気の壁を生み出す。
それを見て、騨が苦い表情を浮かべる。
「エレキリギリスロック……早くも決めてくるとはな」
「僕はこのままターンエンドです」

終夜　ＬＰ７０００　手札２
－－▲－－　ー

ーー□○ー
ー　☆
□□ーーー
ー▲▲▲ー　ー
騨　ＬＰ９０００　手札６

「チッ、面倒なことになったな。俺様のターン、ドロー!!?このターンは攻撃ができねぇ。だが、攻める準備をさせて貰う。俺様は空牙団の剣士ビートを召喚!!?」

〈空牙団の剣士ビート〉☆３　戦士族　地属性
ＡＴＫ１２００
「リバースカードオープン!!?罠発動!!?戦線復帰!!?自分の墓地のモンスター１体を対象としてそのモンスターを守備表示で特殊召喚する!!?戻ってきやがれ、空牙団の叡智ウィズ!!?」

〈空牙団の叡智ウィズ〉☆７　魔法使い族　水属性
ＤＥＦ２８００

「空牙団の叡智ウィズとチェーンして空牙団モンスターが特殊召喚されたことで空牙団の参謀シール、空牙団の剣士ビートの効果発動!!?まずは空牙団の剣士ビートの効果でデッキから空牙団の英雄ラファールを手札に加え、空牙団の参謀シールの効果で墓地から空牙団の飛哨リコンを手札に加える。そして空牙団の叡智ウィズの効果、このカードが特殊召喚に成功した場合、自分は同名カード以外の自分フィールドの空牙団モンスターの種類×５００ポイント、ライフを回復する。俺様のフィールドには空牙団の参謀シール、空牙団の孤高サジータ、空牙団の剣士ビート、そして空牙団の大義フォルゴがいる。よって今度は２０００ポイントのライフを回復だ!!?」

騨　ＬＰ９０００→１１０００

「ライフが１００００を超えちゃった……」
「これだけじゃないぜ‼？空牙団の参謀シールの効果発動‼？１ターンに１度手札から同名以外の空牙団モンスター１体を特殊召喚する‼？大空に君臨する伝説の傭兵‼？空牙団の英雄ラファールを特殊召喚だ‼？」
　騅の呼び声に応えるように、フィールドに雄叫びをあげながら蒼い巨龍が降り立つ。

〈空牙団の英雄ラファール〉☆８　ドラゴン族　光属性
　ＡＴＫ２８００

「特殊召喚された空牙団の英雄ラファールの効果発動‼？スコールリンク‼？このカードが特殊召喚された時、同名以外の空牙団モンスターの種類の数だけ自分のデッキをめくり、その中から１枚を手札に加え、残りをデッキに戻す‼？」
　ラファールが雄叫びをあげるとデッキの上から１枚のカードが騅の手札に加わる。
「この状況、どういう状況なのかお前には分かるよな？」
「空牙団の英雄ラファールと空牙団の叡智ウィズの効果で１ターンに１度手札から空牙団を捨てることで、モンスター・魔法・罠を無効にできて、空牙団の孤高サジータの効果で空牙団は対象にとることが出来ない。さらに空牙団の参謀シール、空牙団の剣士ビートの効果で墓地やデッキから空牙団を手札に加えれる上に、モンスターを戦闘破壊さえすれば空牙団の大義フォルゴで３枚もドローできる……これは厄介なフィールドだね」
「だが、俺様もエレキリギリスのせいで攻撃できねぇ。ライフがある内にどうにかしねぇとな。俺様はカードを１枚伏せてターンエンドだ‼？」

終夜　ＬＰ７０００　手札２

ー　　ー
ー▲ーー
ーー□○ー
　ー　☆
□□□○○
ー▲▲▲ー　　ー
騨　ＬＰ１１０００　手札６

「僕のターン、ドロー!!?まずはエレキリギリスを守備表示に変更します」

エレキリギリス
ＡＴＫ０→ＤＥＦ０

「そして手札からサンダーシーホースを捨てて効果発動!!?このカードを手札から捨てて、デッキから攻撃力１６００以下の雷族・光属性・レベル４の同名モンスター２体を手札に加えます!!?ただし、この効果を発動するターン、自分はモンスターを特殊召喚できません」
「ダイレクトアタックできるエレキモンスターを呼ぶつもりか!!?だが、そうはさせねぇ!!?空牙団の英雄ラファールの効果発動!!?シールハウリング!!?１ターンに１度、相手のモンスター効果が発動した時、手札から空牙団カード１枚を捨ててその発動を無効にする!!?空牙団の豪傑ダイナを捨てて無効だ!!?」
　電気を纏ったタツノオトシゴのようなモンスターが姿を見せたが、ラファールの咆哮により、吹き飛ばされて消滅する。
「それなら、いくよ、エレキングコブラを召喚!!?」
「チッ、もう手札に持ってやがったか」

〈エレキングコブラ〉☆４　雷族　光属性
ＡＴＫ１０００

終夜の正面に現れたのは身体から電気を放つ小さな蛇のモンス

ター。
エレキングコブラはフィールドに現れるとすぐに終夜に擦り寄る。
それを見て、終夜はエレキングコブラの頭を優しく撫でると騅に向き直る。
「バトル‼?エレキングコブラは相手プレイヤーにダイレクトアタックが出来ます‼?」
「チッ‼?相変わらず面倒なモンスターだ」
「エレキングコブラでダイレクトアタック‼?エレキファング‼?」
「くっ‼?」

騅　ＬＰ１１０００→１００００

エレキングコブラが空牙団のモンスター達の足元をすり抜け、騅に噛み付く。
「エレキングコブラの効果‼?このカードがダイレクトアタックによって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、自分のデッキからエレキと名のついたモンスター１体を手札に加える事ができます‼?僕はデッキからエレキーウィを手札に加えます。そしてこのまま
ターンエンドです」

終夜　ＬＰ７０００　手札２
ー▲ー　ー
ー○□□ー
ー　☆
□□□○○
ー▲▲▲ー　ー
騅　ＬＰ１００００　手札５

「俺様のターン、ドロー‼?……チッ、やれることがねぇ。俺はこれでターンエンドだ」

終夜　ＬＰ７０００　手札２
ー▲ー　ー
ー○□□ー
ー　☆
□□□○○
ー▲▲▲ー　ー
騨　ＬＰ１００００　手札６

「僕のターン、ドロー!!?……バトル!!?エレキングコブラでダイレクトアタック!!?エレキファング!!?」
「くっ!!?チマチマと削りやがって……」

騨　ＬＰ１００００→９０００

「エレキングコブラの効果!!?このカードがダイレクトアタックによって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、自分のデッキからエレキと名のついたモンスター１体を手札に加える事ができます!!?」
「……その効果は通すぜ」
「なら、デッキからエレキリンを手札に加えます。僕はこのまま
ターンエンドです」
嵐の前の静けさとでも言うように静かにデュエルが進んでいく。
お互いにフィールドは整っているが、終夜は騨のライフを削りきれるだけの攻撃力が足りず、騨はエレキリギリスロックを突破する方法がない。
しかし、観戦している他の参加者達にも分かっていた。
そろそろデュエルが本格的に動いてくるということが。

終夜　ＬＰ７０００　手札４
ー▲ー　ー
ー○□□ー
ー　☆

□□□○○
ー▲▲▲ー　　ー
騨　ＬＰ９０００　手札６

「俺様のターン、ドロー‼?……ようやくきたぜ‼?」
「っ、何かがくる‼?」
「フィールド魔法、飛竜艇―ファンドラを発動‼?」
辺りの景色が空に浮かぶ船の甲板に変わる。
しかし、そんなことを気にした様子もなく、騨はすぐさま飛竜艇―ファンドラの効果を発動させる。
「飛竜艇―ファンドラの効果を発動‼?自分フィールドに空牙団モンスターが５種類以上存在する場合、フィールドゾーンのこのカードを墓地へ送って、相手フィールドのカードを全て破壊する‼?ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで相手が受ける全てのダメージは０になる‼?」
飛竜艇―ファンドラがエレキリギリスとエレキコブラを巻き込んで墜落をはじめ、爆散すると、辺りがいつもの店内に戻る。
「……流石だね、空閑君。躊躇いなく飛竜艇―ファンドラの破壊効果を使ってくるなんて」
「たった２体のモンスターだが、エレキリギリスのロックは俺のデッキじゃ突破し辛い。破壊できる状況なら躊躇う必要などどこにもない。空牙団の大義フォルゴの効果発動‼?コネクションドロー‼?相手フィールドのカードが戦闘・効果で破壊された場合、１ターンに１度、自分はデッキから１枚ドローする。その後、自分フィールドの空牙団モンスターが３種類以上の場合、自分はデッキから２枚ドローする‼?これで貴様の守りも無くなった。次からは本格的に攻めさせて貰う。俺はカードを２枚伏せてターンエンド。手札超過で空牙団の舵手ヘルマーを捨てる」

終夜　ＬＰ７０００　手札４
ーーーーー　　ー

ーーーーー
ー　☆
□□□○○
▲▲▲▲▲　ー
騨　ＬＰ９０００　手札６

「このままだと押し負ける……よね」
モンスターも伏せカードも万全な騨のフィールドを見て、終夜は苦い表情を浮かべる。
「僕のターン、ドロー……‼？このカード……」
「‼？何か引いたみたいだな」
苦い表情を浮かべていた終夜がドローしたカードを見て、表情を変える。
それに気付いた騨も面白そうに笑みを浮かべながらも、警戒の色を強くする。
終夜は何かを考えるように１度目を閉じ、考えが纏まると覚悟を決めたような目で騨を見た。
「やっぱり空閑君は強いね。少しでも隙ができると、そのままやられちゃいそうになる。それに、今日はなんだかいつもよりも張りきってるみたいに見える」
「……別に張りきってなんかいねぇ。ただ、借りを返さないといけねぇ奴がいるだけだ」
そういって騨は終夜から目を逸らす。
そんな騨を見て、終夜は１度くすりと笑ってから、真剣な表情を浮かべた。
「空閑君は戦いたい相手がいるんだね……でも、僕だって自分がどれだけ戦えるか試して見たい。だから、僕の新しい力で空閑君を倒す‼？」
「新しい力だと？」
「まずは魔法カード、封印の黄金櫃を発動。デッキからカード１枚を選んで除外し、このカードの発動後２回目の自分スタンバイフェイズ

に、この効果で除外したカードを手札に加えることができる」
「……そのカードは通す。それを防いでライトニングボルテックスを使われたら堪らないからな」
「なら、僕がデッキから除外するのは雷電龍―サンダードラゴン!!?」
「サンダードラゴンだと?」
「そして除外された雷電龍―サンダードラゴンの効果発動!!?1ターンに1度、このカードが除外された場合またはフィールドから墓地へ送られた場合に、デッキから雷電龍―サンダードラゴン以外のサンダードラゴンカード1枚を手札に加えるよ!!?」
「っ、成る程な。そのサンダードラゴンというのが貴様の新しい力か。だが通させん!!?空牙団の英雄ラファールの効果発動!!?シールハウリング!!?手札から空牙団の闘士ブラーヴォを捨てて無効だ!!?」
ラファールの咆哮が響き、除外され効果を発動しようとしていた雷電龍―サンダードラゴンが効果を失う。
しかし、それを見て終夜は笑みを浮かべた。
「それを待っていました!!?手札から雷鳥龍―サンダードラゴンを捨てて効果発動!!?」
「何!!?別のサンダードラゴンのカードだと!!?」
「1ターンに1度、自分の墓地のモンスター及び除外されている自分のモンスターの中から、雷鳥龍―サンダードラゴン以外のサンダードラゴンモンスター1体を選んで特殊召喚します!!?僕は除外されている雷電龍―サンダードラゴンを特殊召喚!!?」

〈雷電龍―サンダードラゴン〉☆5　雷族　闇属性
DEF1500

フィールドに現れたのは雷を纏った黒い身体の竜。
それを見て、騨は訝しげな視線を終夜に向ける。
「大層なことを言ったわりには守備表示か。そいつにこの状況がどうにか出来るとでも言うのか?」
「そうだよ、ここから全てが始まるんだ!!?雷族モンスターの効果が

手札で発動したターン、融合モンスター以外の自分フィールドの雷族の効果モンスター1体をリリースし、このカードはＥＸデッキから特殊召喚できる‼？僕はフィールドの雷族モンスター、雷電龍―サンダードラゴンをリリース‼？」
「何⁉？なんだその召喚条件は⁉？」
店内に雷雲が現れ、巨大な雷が雷電龍―サンダードラゴンに落ち、雷電龍―サンダードラゴンの姿が光の柱に包まれる。
その光の柱の中で雷電龍―サンダードラゴンのシルエットが肥大化していき、光の柱が消え去るとそこには雷を纏い、巨大化した雷電龍―サンダードラゴンの姿が現れた。
「雷の力でその身を昇華せよ‼？超雷龍―サンダードラゴン‼？」

〈超雷龍―サンダードラゴン〉☆８　雷族　闇属性
ＡＴＫ２６００

「融合カードを使わずに融合モンスターを出してくるだと⁉？」
「まだだよ‼？まだサンダードラゴンは進化する‼？手札の雷族モンスター1体と、同名モンスター以外の自分フィールドの雷族の融合モンスター1体を除外し、このカードはＥＸデッキから特殊召喚できる‼？僕は手札のエレキリンとフィールドの融合モンスター、超雷龍―サンダードラゴンを除外するよ‼？」
「っ⁉？また聞いたことのない召喚条件だと⁉？」
超雷龍―サンダードラゴンの側に身体から電気を放つキリンのモンスターが現れ、その2体を包み込むように雷雲から再び巨大な雷が落ちる。
雷が落ちたことで出来た光の柱の中で超雷龍―サンダードラゴンとエレキリンの姿は混ざり合い、超雷龍―サンダードラゴンの時よりも更に肥大化していく。
そして光の柱が消し飛ぶと、そこには雷を纏った緑の身体を持つ三つ首の龍が降臨した。
「雷の力を束ね、進化に深化を重ねて雷神へと昇華せよ‼？雷神龍―

サンダードラゴン!!?」

〈雷神龍―サンダードラゴン〉☆１０　雷族　光属性
ＡＴＫ３２００

「またサンダードラゴンの融合モンスター……そのうえ攻撃力が３２００だと!?」
「それじゃあいくよ!!?バトル!!?雷神龍―サンダードラゴンで空牙団の英雄ラファールを攻撃!!?」
「攻撃宣言時、リバースカードオープン!!?罠発動!!?聖なるバリア―ミラーフォース―!!?攻撃表示のモンスターを全て破壊する!!?」
「そんなもの効きません!!?雷神龍―サンダードラゴンの効果発動!!?ターンドライトニング!!?このカードが効果で破壊される場合、代わりに自分の墓地のカード２枚を除外できる!!?僕は墓地の封印の黄金櫃とくず鉄のかかしを除外して破壊を免れます!!?」
「っ、効果耐性があるのか!!?」
「お願い、雷神龍―サンダードラゴン!!?エボリューションライトニング!!?」
「くっ!!?迎え撃て、空牙団の英雄ラファール!!?突風のアウトレイジファング!!?」
雷神龍―サンダードラゴンが咆哮を上げるとラファールを囲むように雷雲が現れ、雷がラファールを捉えるように降り注ぐ。
その雷からラファールを守るように見えない壁が現れ、その雷を雷神龍―サンダードラゴンに跳ね返し、それと同時にラファールも突風を纏って雷雲を吹き飛ばしながら雷神龍―サンダードラゴンに突撃する。
跳ね返された雷は雷神龍―サンダードラゴンに当たる瞬間、雷神龍―サンダードラゴンの身体が光に変わって姿を消し、ラファールも雷神龍―サンダードラゴンの姿を見失い、辺りを見回す。
すると、雷神龍―サンダードラゴンはいきなりラファールの背後に

現れ、三つ首から雷のブレスを放ち、ブレスに呑まれたラファールはそのまま消滅した。

騨　ＬＰ９０００→８６００

「くっ……やるじゃねぇか」

「僕はこのままターンエンドだよ」

終夜　ＬＰ７０００　手札２

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　○　ー

ー　☆

□　□　□　ー　○

▲　▲　ー　▲　▲　ー

騨　ＬＰ９０００　手札５

「なかなか強力なモンスターだな、だが倒せないわけじゃねぇ‼？俺様のターン、ドロー‼？リバースカードオープン‼？デッキの上のカードを墓地に送り、リバースカードオープン‼？魔法カード、アームズホール‼？自分のデッキ・墓地から装備魔法カード１枚を選んで手札に加える‼？ただし、このターン、俺様は通常召喚はできねぇ。俺様がデッキから手札に加えるのは装備魔法、団結の力‼？」

「っ‼？そのカードは……」

「まだだ‼？空牙団の参謀シールの効果発動‼？１ターンに１度手札から同名以外の空牙団モンスター１体を特殊召喚する‼？出てこい、空牙団の闘士ブラーヴォ‼？」

〈空牙団の闘士ブラーヴォ〉☆４　爬虫類族　炎属性

ＡＴＫ１９００

鉤爪を着けた赤いリザードマンが騨の前に現れる。

「空牙団モンスターが特殊召喚されたことで空牙団の参謀シール、チェーンして空牙団の剣士ビートの効果発動!!?空牙団の剣士ビートの効果でデッキから空牙団の叡智ウィズを手札に加え、空牙団の参謀シールの効果で墓地から空牙団の英雄ラファールを手札に加える。そして装備魔法、団結の力を空牙団の大義フォルゴに装備!!?装備モンスターの攻撃力・守備力は、自分フィールドの表側表示モンスターの数×８００ポイントアップする!!?俺様のフィールドにいるモンスターは６体!!?よって空牙団の大義フォルゴの攻撃力は４８００ポイントアップする!!?」

フィールドにいる空牙団モンスター達の身体からオーラのようなものが溢れ、フォルゴの身体に集まっていく。

そのオーラを取り込んだフォルゴは歓喜の遠吠えを上げる。

空牙団の大義フォルゴ
ＡＴＫ２４００→７２００

「っ、攻撃力７２００!!?」

「バトル!!?空牙団の大義フォルゴで雷神龍―サンダードラゴンを攻撃!!?春風のブロッサムアレスト!!?」

「迎え撃って、雷神龍―サンダードラゴン!!?エボリューションライトニング!!?」

雷神龍―サンダードラゴンが咆哮を上げると、雷雲から雷が降り注ぎ、フォルゴを襲う。

フォルゴは降り注ぐ雷を避けながら、雷神龍―サンダードラゴンに迫っていく。

フォルゴの刀が雷神龍―サンダードラゴンに届きそうになった時、終夜は１枚のカードを掲げた。

「ダメージステップ、手札の雷源龍―サンダードラゴンを捨てて効果発動!!?」

「っ、また別のサンダードラゴンだと!?!?」

「このカードを手札から捨て、自分フィールドの雷族モンスター１体

を対象として、そのモンスターの攻撃力は５００ポイントアップする‼？この効果は相手ターンでも発動できるよ。僕は雷神龍―サンダードラゴンの攻撃力を５００ポイントアップする‼？そして雷族モンスターの効果が手札で発動した時、雷神龍―サンダードラゴンの効果発動‼？ライトニングインディグネイション‼？フィールドのカード１枚を選んで破壊する‼？僕は団結の力を破壊します‼？」

「っ、しまった‼？」

フォルゴの刀が雷神龍―サンダードラゴンの身体に触れた瞬間、雷神龍―サンダードラゴンの身体から雷が溢れ出しフォルゴをオーラごと吹き飛ばした。

空牙団の大義フォルゴ
ＡＴＫ７２００→２４００

雷神龍―サンダードラゴン
ＡＴＫ３２００→３７００

吹き飛ばされ、雷によって身体が痺れて動けないフォルゴに雷神龍―サンダードラゴンは三つ首から雷のブレスを放ち、ブレスに呑まれたフォルゴは刀を残して消滅した。

騨　ＬＰ８６００→７３００

「してやられたか。メインフェイズ２。空牙団の剣士ビートを守備表示に変更する」

空牙団の剣士ビート
ＡＴＫ１２００→ＤＥＦ５００

「カードを１枚伏せてターンエンドだ」

終夜　ＬＰ７０００　手札１
｜｜｜｜｜｜　　｜
｜｜｜○｜
｜　　｜
□□□○□
▲｜▲▲▲　　｜
騨　ＬＰ７３００　手札６

「僕のターン、ドロー!!?よし、墓地の光属性モンスター、雷源龍―サンダードラゴンと闇属性モンスター、雷電龍―サンダードラゴンを除外して、手札から雷劫龍―サンダードラゴンを特殊召喚!!?」

〈雷劫龍―サンダードラゴン〉☆８　雷族　闇属性
ＡＴＫ２８００

フィールドに現れたのは黒い身体で２つの顔を持つ龍。
「また別のサンダードラゴンか……」
「そして除外された雷源龍―サンダードラゴンと雷電龍―サンダードラゴンの効果発動!!?雷電龍―サンダードラゴンの効果でデッキから、雷獣龍―サンダードラゴンを手札に加え、雷源龍―サンダードラゴンの効果でデッキから、１ターンに１度、このカードが除外された場合またはフィールドから墓地へ送られた場合に、デッキから同名カード１枚を手札に加える!!?」
「チッ、また面倒なカードが手札に……」
「だけど、安心していいよ。デッキに入っているサンダードラゴンモンスターは基本的に１ターンの内に２つある効果の内１つしか使用することが出来ないから」
「つまりこのターンに雷源龍―サンダードラゴンと雷電龍―サンダードラゴンの効果が発動することはないってことか」
「だけど、今サーチした雷獣龍―サンダードラゴンは違うよ!!?手札から雷獣龍―サンダードラゴンを捨てて効果発動!!?そして手札か

らモンスター効果が発動したことで雷劫龍―サンダードラゴンの効果が発動‼?1ターンに1度、このカードの攻撃力はターン終了時まで３００ポイントアップするよ。ついでに言っておくと、雷神龍―サンダードラゴンの効果は発動した雷族モンスターの効果にチェーンして発動するから、強制効果の雷劫龍―サンダードラゴンによって発動のタイミングを逃すよ」

雷劫龍―サンダードラゴン
ＡＴＫ２８００→３１００

「それでも入っているということは雷劫龍―サンダードラゴンも厄介な効果を持っているということか」
「まあね。そして雷獣龍―サンダードラゴンの効果で自分の墓地のカード及び除外されている自分のカードの中から、雷獣龍―サンダードラゴン以外のサンダードラゴンカード1枚を選んで手札に加えるよ。僕は墓地から雷鳥龍―サンダードラゴンを手札に加え、そのまま手札から雷鳥龍―サンダードラゴンを捨てて効果発動‼?それにチェーンしてそして雷族モンスターの効果が手札で発動した時、雷神龍―サンダードラゴンの効果発動‼?ライトニングインディグネイション‼?フィールドのカード1枚を選んで破壊する‼?この破壊は対象を取らないよ‼?」
「っ、空牙団の孤高サジータの耐性も意味がないか」
「破壊するのは魔法・罠ゾーンにさっきセットしたカード‼?」
「チッ、烈風の空牙団が破壊される」
「そして雷鳥龍―サンダードラゴンの効果で僕は除外されている雷電龍―サンダードラゴンを特殊召喚‼?」

〈雷電龍―サンダードラゴン〉☆５　雷族　闇属性
ＤＥＦ１５００

「雷族モンスターの効果が手札で発動したターン、融合モンスター以

外の自分フィールドの雷族の効果モンスター1体をリリースし、このカードはＥＸデッキから特殊召喚できる‼?僕はフィールドの雷族モンスター、雷電龍―サンダードラゴンをリリース‼?雷の力で再びその身を昇華せよ‼?超雷龍―サンダードラゴン‼?」
「っ、２体目がいたのか」

〈超雷龍―サンダードラゴン〉☆８　雷族　闇属性
ＡＴＫ２６００

「超雷龍―サンダードラゴンは永続効果でこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手はドロー以外の方法でデッキからカードを手札に加える事ができなくなり、このカードが戦闘・効果で破壊される場合、代わりに自分の墓地の雷族モンスター1体を除外することができるよ」
「くっ、空牙団の剣士ビートのサーチ効果まで封じてきたか」
「バトル‼?雷神龍―サンダードラゴンで空牙団の闘士ブラーヴォを攻撃‼?エボリューションライトニング‼?」
雷神龍―サンダードラゴンが咆哮を上げ、雷雲から雷を落とし、ブラーヴォの動きが止まったところに雷のブレスを放ち、消滅させる。

　　　　ＬＰ７３００→５５００．

「くっ‼?」
「続けて、雷劫龍―サンダードラゴンで空牙団の叡智ウィズを攻撃‼?ライトニングブレイザー‼?」
雷劫龍―サンダードラゴンが２つの顔から雷のブレスを放ち、ウィズを消滅させた。
「雷劫龍―サンダードラゴンの効果発動‼?このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、自分の墓地からカード1枚を除外して、デッキから雷族モンスター1体を手札に加える‼?僕は墓地に存在するサンダーシーホースを除外してデッキから雷鳥龍―サンダー・ド

ラゴンを手札に加えるよ‼?」
「サーチ効果を持っていたのか……」
「さらに超雷龍―サンダードラゴンで空牙団の参謀シールを攻撃‼?アンガーライトニング‼?」
超雷龍―サンダードラゴンが雷のブレスを放ち、シールが消滅する。
「僕はこれでターンエンドです」
「エンドフェイズ‼?リバースカードオープン‼?罠発動‼?貪欲な瓶‼?貪欲な瓶以外の自分の墓地のカード5枚を対象にそのカード5枚をデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから1枚ドローする‼?俺様は墓地に存在する空牙団の大義フォルゴをEXデッキに、アームズホール、団結の力、烈風の空牙団、聖なるバリア―ミラーフォース―をデッキに戻してシャッフルし、カードを1枚ドローする‼?」

終夜　LP7000　手札3
ーーーーー　ー
ーー○○ー
○　ー
ー□ーー□
▲ーーー▲　ー
騨　LP5500　手札7

最初は押していたハズなのに気付いたら自分の方が押され、展開していた空牙団のモンスター達も壊滅しかかっている現状に、騨は苦い表情を浮かべる。
削れたライフも最初のサジータによるバーンのみ。
デュエルアカデミア1位の実力は伊達ではないことを嫌という程思い知らされる。
「……天雷、お前は強い」
「……」

「だが、俺様もいつまでも負けているつもりはねぇ。俺様はもっと強くならなきゃならねぇんだ。俺様のターン、ドロー!!?……っ、コイツは……」

ドローしたカードを見て、騨は驚きの表情を浮かべる。

騨はしばらくそのカードを眺めると面白そうに笑った。

「……ハッ、いいだろう。久しぶりにお前を使ってやる。空牙団の剣士ビートの効果発動!!?1ターンに1度手札から同名以外の空牙団モンスター1体を特殊召喚する!!?出てこい、空牙団の参謀シール!!?」

〈空牙団の参謀シール〉☆4　獣戦士族　闇属性
ＤＥＦ１０００

「さらに空牙団の参謀シールの効果発動!!?空牙団の参謀シールも1ターンに1度手札から同名以外の空牙団モンスター1体を特殊召喚する!!?来やがれ、空牙団の舵手ヘルマー!!?」

〈空牙団の舵手ヘルマー〉☆3　水族　水属性
ＤＥＦ２０００

フィールドに現れたのは船員のような格好をした魚人のモンスター。

「空牙団モンスターが特殊召喚されたことで空牙団の参謀シールの効果発動!!?墓地から空牙団の豪傑ダイナを手札に加える!!?さらに空牙団の舵手ヘルマーの効果発動!!?1ターンに1度手札から同名以外の空牙団モンスター1体を特殊召喚する!!?出てこい、空牙団の豪傑ダイナ!!?」

〈空牙団の豪傑ダイナ〉☆6　獣戦士族　地属性
ＡＴＫ２５００

ヘルマーに続いて現れたのは屈強そうな大きな身体を持つ獣のような戦士。
「特殊召喚された空牙団の豪傑ダイナとチェーンして空牙団モンスターが特殊召喚されたことで空牙団の舵手ヘルマーの効果発動!!?空牙団の舵手ヘルマーの効果で手札から空牙団カード1枚を捨てて、自分はデッキから1枚ドローする。俺様は手札の空牙団の叡智ウィズを捨てて1枚ドロー!!?さらに空牙団の豪傑ダイナの効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、自分フィールドの空牙団モンスターの種類の数まで相手の墓地のカードを選んで除外する!!?俺様のフィールドにいる空牙団のモンスターは5種類いる。よって、天雷の墓地からエレキリギリス2体、エレキトンボ、エレキングコブラ、雷獣龍―サンダードラゴンを除外する!!?」
「っ、墓地のカードが2枚に……でも、除外された雷獣龍―サンダードラゴンの効果発動!!?このカードが除外された場合またはフィールドから墓地へ送られた場合、デッキからサンダードラゴンモンスター1体を守備表示で特殊召喚する!!?この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに持ち主の手札に戻るよ。僕はデッキから雷電龍―サンダードラゴンを特殊召喚!!?」

〈雷電龍―サンダードラゴン〉☆5　雷族　闇属性
ＤＥＦ１５００

「まだだ!!?まだ終わらない!!?鳴り響け!!?理想を語らうサーキット!!?」
「っ、リンク召喚……」
　騨の前にサーキットが現れる。
「召喚条件種族が異なるモンスター3体!!?俺様は空牙団の舵手ヘルマー、空牙団の参謀シール、空牙団の孤高サジータをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?もう1度その信念を貫け!!?リンク3!!?空牙団の大義フォルゴ!!?」

〈空牙団の大義フォルゴ〉ＬＩＮＫ３　獣族　闇属性
ＡＴＫ２４００　↙？→↘？

「空牙団の大義フォルゴの効果発動!!？コムラードコール!!？このカードがリンク召喚に成功した場合、１ターンに同名カードは１度、そのリンク素材としたモンスター３体とは異なる種族の空牙団モンスター１体をデッキから守備表示で特殊召喚する!!？リンク素材としたモンスター水、獣戦士、鳥獣族だ!!？来やがれ!!？空牙団の闘士ブラーヴォ!!？」

〈空牙団の闘士ブラーヴォ〉☆４　爬虫類族　炎属性
ＤＥＦ２００

「そして空牙団の闘士ブラーヴォの効果発動!!？１ターンに１度手札から同名以外の空牙団モンスター１体を特殊召喚する!!？再び大空に君臨しろ!!？空牙団の英雄ラファール!!？」

〈空牙団の英雄ラファール〉☆８　ドラゴン族　光属性
ＡＴＫ２８００

「モンスターゾーンに存在する状態で自分フィールドに自分以外の空牙団が特殊召喚されたことで空牙団の闘士ブラーヴォの効果発動!!？１ターンに１度フィールド全ての空牙団モンスターの攻守をターン終了時まで５００ポイントアップする!!？」
ブラーヴォが雄叫びをあげると空牙団モンスター全てに赤いオーラが宿る。

空牙団の闘士ブラーヴォ
ＤＥＦ２００↓７００

空牙団の剣士ビート

ＤＥＦ５００→１０００

空牙団の豪傑ダイナ

ＡＴＫ２５００→３０００

空牙団の大義フォルゴ

ＡＴＫ２４００→２９００

空牙団の英雄ラファール

ＡＴＫ２８００→３３００

「一気にフィールドに空牙団が……」

壊滅寸前にまで追い込んだフィールドが再び空牙団に埋め尽くされ、終夜は厳しい表情を浮かべる。

そんな終夜に騨は面白そうに笑いながら1枚のカードを掲げた。

「いくぞ天雷‼？貴様が好きな雷の力を、今度は貴様が受けてみるといい‼？」

「えっ？」

「俺は空牙団の剣士ビート、空牙団の闘士ブラーヴォ、空牙団の豪傑ダイナをリリース‼？来やがれ、逆境をねじ伏せる稲妻の戦士‼？ギルフォードザライトニング‼？」

「⁉？ギルフォードザライトニング⁉？」

ビート、ブラーヴォ、ダイナの姿が粒子に変わり、空に集まっていく。

そして空から稲妻が落ちると、フィールドには背中に剣を背負い、マントを羽織った屈強な戦士が現れた。

〈ギルフォードザライトニング〉☆８　戦士族　光属性

ＡＴＫ２８００

「空閑君のデッキに空牙団以外のモンスターが入ってたなんて

……」
「コイツは俺様がまだガキの頃に切り札として使っていたモンスターだ。なんとなく入れたままになっていたが、この状況にはコイツが相応しい。ギルフォードザライトニングの効果発動!!?ターナラウンドライトニング!!?モンスター3体をリリースしてこのカードのアドバンス召喚に成功した場合、相手フィールドのモンスターを全て破壊する!!?」
「えっ!?!?っ、僕の墓地にカードは2枚しか……雷神龍―サンダードラゴンの効果発動!!?ターンドライトニング!!?このカードが効果で破壊される場合、代わりに自分の墓地のカード2枚を除外できる!!?僕は墓地の雷鳥龍―サンダードラゴンとエクシーズリボーンを除外して破壊を免れます!!?」
「だが、他のモンスターは防げねぇ!!?斬り伏せろ、ギルフォードザライトニング!!?」
ギルフォードザライトニングが背中に背負っていた剣を抜き、空に掲げると剣に雷が落ちて、帯電する。
ギルフォードザライトニングがその剣を振るうと、剣から雷を纏った斬撃が放たれ、雷神龍―サンダードラゴンは身体を光に変えて躱したが、他のモンスターは全て薙ぎ払われ、消滅した。
「まさかそんな方法で僕のモンスターを破壊してくるなんて……」
「空牙団の大義フォルゴの効果発動!!?コネクションドロー!!?相手フィールドのカードが戦闘・効果で破壊された場合、1ターンに1度、自分はデッキから1枚ドローする!!?」
「なら、僕もそれにチェーンして除外された雷鳥龍―サンダードラゴンの効果発動!!?このカードが除外された場合またはフィールドから墓地へ送られた場合、自分の手札を任意の数だけデッキに戻してシャッフルし、その後、自分はデッキに戻した数だけデッキからドローします!!?僕は手札を1枚デッキに戻してシャッフルし、カードを1枚ドローします!!?」
「手札交換か……だが、これで貴様のフィールドに残ったモンスターは雷神龍―サンダードラゴンだけだ」

「でも、雷神龍―サンダードラゴンの攻撃力は現在３７００。空閑君のモンスターじゃ届かないよ‼？」
「それはどうかな？届かないなら届かせればいいだけのこと‼？リバースカードオープン‼？ギルフォードザライトニングを墓地に送り、魔法カード、受け継がれる力‼？」
「っ、受け継がれる力‼？」
「自分フィールド上のモンスター１体を墓地に送り、自分フィールド上のモンスター１体を選択し、選択したモンスターの攻撃力は、発動ターンのエンドフェイズ時まで墓地に送ったモンスターの攻撃力分アップする‼？俺様は空牙団の英雄ラファールを選択し、ギルフォードザライトニングの攻撃力２８００を空牙団の英雄ラファールに受け継がせる‼？」
ギルフォードザライトニングが持っていた剣をラファールに渡し、粒子になって剣に宿る。
その剣を受け取ったラファールは空間を震わせる程の咆哮をあげた。

空牙団の英雄ラファール
ＡＴＫ３３００→６１００

「バトル‼？」
「バトルフェイズ開始時、手札の雷電龍―サンダードラゴンを捨てて効果発動‼？このカードを手札から捨て、デッキから同名モンスター１体を手札に加えます‼？この効果は相手ターンでも発動できる‼？」
「雷神龍―サンダードラゴンの効果を発動させるつもりか‼？だが、ソイツの弱点はもう分かってるんだよ‼？チェーンして速攻魔法、盆回し‼？自分のデッキからカード名が異なるフィールド魔法カード２枚を選び、その内の１枚を自分フィールドにセットし、もう１枚を相手フィールドにセットする‼？この効果でセットしたカードのいずれかがフィールドゾーンにセットされている限り、お互いに他の

フィールド魔法カードを発動・セットできない‼?俺様は自分のフィールドに飛竜艇―ファンドラ、天雷のフィールドに半魔導帯域をセットする‼?これで直接チェーンが出来ないことで雷神龍―サンダードラゴンの効果は発動しねぇ‼?」
「っ、雷電龍―サンダードラゴンの効果で同名カードを手札に加えるよ」
「空牙団の英雄ラファールで雷神龍―サンダードラゴンを攻撃‼?雷光のアウトレイジファング‼?」
「っ、迎え撃って‼?雷神龍―サンダードラゴン‼?エボリューションライトニング‼?」
雷神龍―サンダードラゴンが咆哮をあげ、ラファールを囲むように雷雲が現れ、雷がラファールを捉えるように降り注ぐ。
ラファールはギルフォードザライトニングから受け継いだ剣で雷を受け止め、帯電させながら突風を纏って雷神龍―サンダードラゴンに突撃する。
雷神龍―サンダードラゴンはラファールに向かって三つ首から雷のブレスを放つが、ラファールの姿がブレたかと思うと、ラファールが雷神龍―サンダードラゴンの後ろに現れ、一太刀で雷神龍―サンダードラゴンの三つ首を全て斬り裂いた。

終夜　ＬＰ７０００→４６００

「うっ‼?雷神龍―サンダードラゴン‼?」
「続け、空牙団の大義フォルゴでダイレクトアタック‼?春風のブロッサムアレスト‼?」
「うわぁっ‼?」

終夜　ＬＰ４６００→１７００

フォルゴが刀で終夜の身体を斬り裂き、ライフを大きく削る。

「メインフェイズ2、俺様はセットしたフィールド魔法、飛竜艇―ファンドラを発動!!?」
辺りの景色が再び空に浮かぶ船の甲板に変わる。
「俺様はこれでターンエンドだ。エンドフェイズに強化されていたモンスターの攻撃力は元に戻る」

空牙団の英雄ラファール
ＡＴＫ６１００→２８００

空牙団の大義フォルゴ
ＡＴＫ２９００→２４００

終夜　ＬＰ１７００　手札３
ー　ー
ー　ー
ー　☆
ー　ー
ー○ー　ー
▲ー　ー
騨　ＬＰ５５００　手札４

「僕のターン、ドロー!!?魔法カード、貪欲な壺!!?墓地に存在する雷神龍―サンダードラゴンと超雷龍―サンダードラゴンをＥＸデッキに、雷劫龍―サンダードラゴン、雷電龍―サンダードラゴン２枚をデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする!!?さらに魔法カード、闇の誘惑!!?自分はデッキから２枚ドローし、その後手札の闇属性モンスター１体を除外し、手札に闇属性モンスターが無い場合、手札を全て墓地へ送ります。デッキから２枚ドローして手札の雷電龍―サンダードラゴンを除外します。そして除外された雷電龍―サンダードラゴンの効果発動!!?デッキから雷獣龍―サンダードラゴンを手札に加えます!!?さらに魔法カード、手札抹殺!!?」
「ここにきて連続ドローから手札交換だと!!?」

「お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローする!!?僕は5枚、空閑君は3枚捨てて同じ枚数ドローするよ!!?さらに魔法カード、バッテリーリサイクル!!?自分の墓地の攻撃力１５００以下の雷族モンスター2体を手札に加えるよ!!?僕は墓地から雷源龍―サンダードラゴンとエレキトンボを手札に加える!!?……空閑君、いくよ!!?」
「っ、こい!!?」
「魔法カード、雷龍融合!!?このカードは自分のフィールド・墓地のモンスター及び除外されている自分のモンスターの中から、雷族の融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを持ち主のデッキに戻し、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚するよ!!?」
「何っ!?フィールドだけじゃなく墓地や除外から融合を行うだと!?」
「僕は除外されている雷電龍―サンダードラゴン、雷鳥龍―サンダードラゴン、雷獣龍―サンダードラゴン、3体のサンダードラゴンモンスターをデッキに戻して融合!!?雷龍の名を持つ雷よ、今交わりて雷神へと至らん!!?」
フィールドに現れた渦に3体のサンダードラゴンが吸い込まれていく。
そして渦が弾けると、フィールドに再び緑の身体を持つ三つ首の龍が降臨した。
「融合召喚!!?雷の力を束ね、再び雷神へと昇華せよ!!?雷神龍―サンダードラゴン!!?」

〈雷神龍―サンダードラゴン〉☆１０　雷族　光属性
ＡＴＫ３２００

「チッ、また出てきやがったか!!?」
「僕は手札の雷源龍―サンダードラゴンを捨てて効果発動!!?このカードを手札から捨て、雷神龍―サンダードラゴンの攻撃力を５００

ポイントアップする!!?」
「ここでだと?……チッ、空牙団の英雄ラファールの効果発動!!?シールハウリング!!?空牙団の孤高サジータを捨てて無効だ!!?」
「これで空牙団の英雄ラファールの効果はもう使えない。速攻魔法、フォトンリード!!?手札からレベル４以下の光属性モンスター１体を表側攻撃表示で特殊召喚します!!?手札からエレキトンボを特殊召喚!!?」

〈エレキトンボ〉☆２　雷族　光属性
ＤＥＦ１００

「僕はエレキトンボをリリースして、行こう、僕の相棒!!?エレキテルドラゴンをアドバンス召喚!!?」
「エレキテルドラゴンだと!?」

〈エレキテルドラゴン〉☆６　ドラゴン族　光属性
ＡＴＫ２５００

フィールドに現れたのは電気を纏って浮遊する綺麗な青い身体のドラゴン。
「さらに魔法カード、死者蘇生!!?自分または相手の墓地のモンスター１体を自分フィールドに特殊召喚する。墓地から蘇ってもう１体のエレキテルドラゴン!!?」
「何っ!?」

〈エレキテルドラゴン〉☆６　ドラゴン族　光属性
ＡＴＫ２５００

並ぶように２体のエレキテルドラゴンが現れる。
そして終夜は２体のエレキテルドラゴンに手をかざす。
「僕はドラゴン族レベル６モンスター、２体のエレキテルドラゴンで

オーバーレイ!!?。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
「やはりエクシーズ召喚か!!?」
2体のエレキテルドラゴンが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から金色の鎧を纏ったドラゴンが降りて来る。
「出でよ、聖なる龍王!!?神秘の力で龍を導け!!?ランク6!!?聖刻龍王ーアトゥムス!!?」

〈聖刻龍王ーアトゥムス〉★6　ドラゴン族　光属性
ATK2400

「ランク6のエクシーズモンスターか……だが、そのモンスターでは俺様のモンスターは突破できないぞ?」
「わかってる。だからこそ、空閑君に見せるよ。今まで空閑君に見せたことがなかった、僕の切り札の雷を!!?僕は、魔法カード、RUM(ランクアップマジック)ーアストラルフォースを発動!!?」
「RUM……だと?」
「このカードは自分フィールドのランクが1番高いエクシーズモンスター1体を選択して発動出来る!!?その自分のモンスターと同じ種族・属性でランクが2つ高いモンスター1体を対象のモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する!!?」
「なにっ!?エクシーズモンスターのランクを上げる魔法カードだと!?」
「僕は聖刻龍王ーアトゥムス1体でオーバーレイ!!?1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?ランクアップエクシーズチェンジ!!?」
聖刻龍王ーアトゥムス光となり、再び空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けると空から舞い降りるのは雷を纏った圧倒的な存在感を放つ白き龍。
「雷の化身たる龍よ‼?虚ろなる世界を終焉の輝きで満たせ‼?ランク８‼?サンダーエンドドラゴン‼?」
〈サンダーエンドドラゴン〉★８　ドラゴン族　光属性
ＡＴＫ３０００
「サンダーエンドドラゴン……コイツが貴様の真の切り札か‼?」
「さあ、真なる雷の力を受けてみて‼?サンダーエンドドラゴンの効果‼?オーバーレイユニットを１つ取り除くことで、１ターンに１度、このカード以外のフィールド上に存在するモンスターを全て破壊する‼?」
「ここにきて全体破壊だと⁉?」
「受けてみて、サンダーエンドジャッジメント‼?」
サンダーエンドの身体から一気に雷が溢れ出すと周りが見えなくなる程の雷撃が飛竜艇―ファンドラの甲板を襲う。
雷撃が止むと、焼き焦げた甲板の上にはサンダーエンドと雷神龍―サンダードラゴンの姿しか残っていなかった。
「雷神龍―サンダードラゴンの効果、ターンドライトニング。このカードが効果で破壊される場合、代わりに自分の墓地のフォトンリードと貪欲な壺を除外しました。ここで決めます‼?バトル‼?サンダーエンドドラゴンでダイレクトアタック‼?終焉のライトニングバースト‼?」
「ぐあっ‼?」
騨　ＬＰ５５００→２５００
サンダーエンドドラゴンが放つ雷のブレスにより、騨のライフが一気に削られる。
そして騨が正面に目をやるとそこにあるのは雷神龍―サンダード

ラゴンの三つ首から雷のブレスが放たれようとしているところだった。
「……クソッ、俺様の負け、か」
「終わりだよ‼?雷神龍―サンダードラゴンでダイレクトアタック‼?エボリューションライトニング‼?」

騨　ＬＰ２５００→０

ーーーーーーー

「そこまで‼?勝者、天雷　終夜‼?」
「……ふぅ、なんとか勝てた」
遊騎の宣言に、終夜はホッと胸を撫で下ろす。
そんな終夜に渋い表情を浮かべながらも、騨は自分がいた観戦席の方に戻っていく。
そんな騨に終夜は慌てて声をかける。
「あ、あの空閑君‼?デュエルしてくれて、ありがとう。空閑君の分も頑張るからね」
「そう気負わなくてもいい。弱い奴が消え、強い奴が残る……当然のことだ。天雷は強く、俺はまだまだ弱かった、それだけのことだ」
そういって、再び観戦席に向かって騨が歩いていくのを寂しそうな表情で見送ってから終夜も自分のいた観戦席に戻っていく。
２人が観戦席に戻ったことを確認すると、遊騎は改めて全員に聞こえるように声を出した。
「これで１回戦は全試合が終了した。時間の関係もあるし、これからすぐに２回戦に移ろうと思う。２回戦第１試合、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』所属、天羽リーネＶＳ『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』所属、不知火　炎。両選手は試合の準備を頼む」
そんな遊騎のアナウンスを聞き、観客席がざわつき始める。
世界ランキングで２位の実力派プロチーム『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバー同士でのデュエル。

普段チームとして共に戦っているメンバー同士のデュエルなど、普通お目にかかれるものではない。
一体どんなデュエルになるのか、観戦していた参加者達は興味深そうに試合の開始を待つ。
「えへへ、炎君とデュエルするのも久しぶりなのです」
「ふむ。そういえば最近はあまりデュエルする機会がなかったな」
「最近何かと忙しいですからね～もう少し書類仕事が減ってくれたり、誰かが手伝ってくれたら出来るのですけど……」
「天羽がサボって脱走しなければ少しは時間は確保できるハズだぞ」
「あぅ、やぶ蛇だったのです……」
そんなどこか張り詰めた雰囲気の中、場違いな程のんびりとした雰囲気で会話をしながらリーネと炎が他の参加者達の前に出てくる。
そんな2人を遊騎が呆れたような目で見ながら声をかける。
「2人共、もう少し緊張感を持ってくれないか？」
「えーだって、炎君とのデュエルですよ？やろうと思えばいつでもできるのです。まあ、負けるつもりはリーネもないので本気でデュエルはするですけど……」
「天羽の言い分も一理あるな。俺も新しくできた弟子の手前負けるつもりはないが、緊張感を保つのは難しいのも事実だ」
「いや、まあ2人の気持ちも分からなくはないんけどさ。でも、一応大会なんだし、これからプロ決闘者になるかもしれない子達も見てるんだからさ……俺だって久しぶりに2人のデュエルが見れるのは楽しみだし」
「むむっ!!?」
「ほぅ」
遊騎が漏らしたそんな言葉にリーネと炎が顔を見合わせる。
そして嬉しそうに笑うと、真剣な表情を浮かべてデュエルディスクを起動した。
「遊騎君にそう言われたら仕方がないのです!!?久しぶりにリーネお姉さんが炎君に勝つところを見せてあげるのです!!?」
「それは聞き捨てならんな。勝つのは俺の方だ。結束や弟子の前で無

様な姿は晒せないからな」
「むむっ‼?・忘れたのです?『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』内での勝率はリーネの方が上なのです」
「勝率が上だろうとこの場で勝てなければ意味がない。重要なのはこの場で勝てるかどうかだ」
「むむむっ、絶対に負けないのです‼?・」
「ふっ、こちらの台詞だ‼?・」
「え、えっと……」
急に真剣になった２人を見て遊騎が困惑した表情を浮かべる。
遊騎は助けを求めるように闇を見るが、アイコンタクトで返ってきたのは”諦めろ”という言葉だったので、遊騎は考えるのを止めて試合の開始を宣言することにした。
なんかもうめんどくさかったのである。
「えっと……そ、それじゃあ両者共準備ができたようなので、これより、２回戦第１試合、天羽リーネＶＳ不知火　炎の試合を開始する‼?」
「天羽リーネ、推して参る、なのです‼?・」
「かかってこい‼?・」
『決闘‼?』

リーネ　ＬＰ８０００
炎　ＬＰ８０００

第４０話　刀ＶＳ妖刀・孤独な戦い

○

リーネ　ＬＰ８０００
炎　ＬＰ８０００

「先攻はリーネなのです。魔法カード、名推理なのです‼？炎君は１～１２までの任意のレベルを宣言して、通常召喚可能なモンスターが出るまでリーネのデッキの上からカードをめくっていき、そのモンスターのレベルが宣言されたレベルと同じ場合はめくったカードを全て墓地へ送り、違った場合はそのモンスターを特殊召喚して残りのめくったカードは全て墓地へ送るのです‼？」
「いきなり面倒なカードを……４だ」
「まあそうなるですよね。それじゃあめくっていくのです」
そういってレーネが自分のデッキをめくっていく。
そして１０枚程めくったところで動きを止めた。
「めくられたのは幽鬼うさぎ。レベル３なので特殊召喚なのです‼？」

〈幽鬼うさぎ〉☆３　サイキック族　光属性
ＤＥＦ１８００

フィールドに現れたのは周りに兎の霊が憑いている赤い目をした銀髪のモンスター。
それを見て炎は渋い表情を浮かべる。
「外れたのは別に構わないが、よりによって出てきたのが幽鬼うさぎか」
「幽鬼うさぎはフィールドのモンスターの効果が発動した時、またはフィールドの既に表側表示で存在している魔法・罠カードの効果が発

動した時、手札・フィールドのこのカードを墓地へ送ってフィールドのそのカードを破壊できるのです。炎君のデッキは永続魔法や永続罠、フィールド魔法が多いので幽鬼うさぎはかなり効くハズなのですよ」

「だが、それはお前も同じことだ。閃刀魔法は基本的に発動するためには自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しないという条件がある。幽鬼うさぎがいる限り、閃刀魔法は使えない」

「……まあ、いつもデュエルしてるのでバレてるですよね」

「それはお互い様という奴だろう？」

「仰る通りなのです。仕方がないので気長にいくのです。リーネはカードを２枚伏せてターンエンドなのです」

リーネ　ＬＰ８０００　手札２
ー▲▲ー　ー
ー??ー
ー　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
炎　ＬＰ８０００　手札５

「俺のターン、ドロー!!?そちらが動かないのであればこちらもゆっくり準備をするとしよう。モンスターをセット。カードを２枚伏せてターンエンドだ」

リーネ　ＬＰ８０００　手札２
ー▲▲ー　ー
ー??ー
ー　ー
ー??ー
ー▲▲ー　ー
炎　ＬＰ８０００　手札３

「リーネのターン、ドローなのです!!?ん～今回は動き出すのに時間がかかりそうなのですよ。魔法カード、予見通帳なのです!!?リーネのデッキの上からカード3枚を裏側表示で除外して、このカードの発動後3回目の自分スタンバイフェイズに、この効果で除外したカード3枚を手札に加えるのです」
「時間経過が必要だが一気に3枚の手札が増えるか。今の膠着状態でその効果は強力だな」
「リーネはこれでターンエンドなのです」

リーネ　ＬＰ８０００　手札２
ー－▲▲ー　　ー
ー－??ー－
ー　　ー
ー－??ー－
ー－▲▲ー　　ー
炎　ＬＰ８０００　手札３

「俺のターン、ドロー!!?モンスターをセットしてターンエンドだ」

リーネ　ＬＰ８０００　手札２
ー－▲▲ー　　ー
ー－??ー－
ー　　ー
ー－????ー
ー－▲▲ー　　ー
炎　ＬＰ８０００　手札３

「リーネのターン、ドローなのです!!?スタンバイフェイズ、予見通帳の使用から1ターン経過なのです。リーネは何もせずにターンエンドなのです」

リーネ　ＬＰ８０００　手札３
ーー▲▲ー　ー
ーー??ーー
ー　ー
ー　????ー
ーー▲▲ー　ー
炎　ＬＰ８０００　手札３

嵐の前の静けさだとでも言うようにほとんど動きを見せない２人に、店内は緊迫した空気に包まれる。
先に大きく動くのはどちらなのか……そんな雰囲気の中、炎が面白そうに笑った。
「さて、予見通帳で手札を増やされるのは厄介だ。その前に動かせて貰おうか」
「ドーンとこい、なのです!!?」
「ふっ、ならばお望み通りいかせて貰おう!!?俺のターン、ドロー!!?相手フィールドにモンスターが存在する場合、手札からヴェンデットコアを捨てて、リバースカードオープン!!?速攻魔法、逢華妖麗譚―不知火語!!?このカードは相手フィールドにモンスターが存在する場合に、手札からアンデット族モンスター１体を捨てて発動できる。捨てたモンスターとカード名が異なる不知火モンスター１体を自分のデッキ・墓地から選んで特殊召喚する。ただし、このカードの発動後、ターン終了時まで自分はアンデット族モンスターしか特殊召喚できない。俺がデッキから特殊召喚するのは不知火の鍛師!!?」
〈不知火の鍛師〉☆４　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ１０００
フィールドに現れたのは鍛師のモンスター。
「さらに反転召喚、妖刀―不知火!!?」

〈妖刀―不知火〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ８００

鍛師の正面に一振りの刀が現れ、その刀の近くに薄っすらと武士の霊の姿が浮かびあがる。
「俺は、レベル４、不知火の鍛師に、レベル２、チューナーモンスター、妖刀―不知火をチューニング‼？」
妖刀が浮かびあがり、鍛師に向かって飛んでいく。
鍛師がその刀を手に取ると、鍛師の姿が武士に変わり、その武士の後ろに妖刀に憑いていた武士の霊が実体化した。
「剣に宿し無念の思いが、武士に宿りて力を成す‼？シンクロ召喚‼？憑依一体‼？刀神―不知火‼？」

〈刀神―不知火〉☆６　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ２５００

「炎君お得意の不知火シンクロモンスターですね」
「不知火の鍛師の効果発動‼？フィールドのこのカードがシンクロ素材として墓地へ送られた場合、デッキから不知火の鍛師以外の不知火カード１枚を手札に加える‼？俺はデッキから不知火の武部を手札に加える‼？さらに墓地に存在するヴェンデットコアの効果発動‼？このカードが墓地に存在する場合、自分の墓地からアンデット族モンスター１体を除外してこのカードを特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。俺は墓地の不知火の鍛師を除外してヴェンデットコアを特殊召喚‼？」

〈ヴェンデットコア〉☆１　アンデッド族　闇属性
ＤＥＦ５００

刀神の周りを漂うように闇を纏った水色に光る不気味な球体のモンスターが現れる。
「除外された不知火の鍛師の効果発動!!?このカードが除外された場合、このターン、自分のアンデット族モンスターは戦闘では破壊されない。さらに反転召喚、不知火の師範!!?」

〈不知火の師範〉☆2　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ６００

刀神の側に袴姿の老人が姿を現わす。
それを見て炎は正面に手をかざす。
「そして、燃え上がれ!!?劫火が宿しサーキット!!?」
「!!?ここでリンク召喚なのです?」
炎の正面に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は種族がアンデット族モンスター２体以上!!?俺はヴェンデットコア、不知火の師範、刀神―不知火をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
ヴェンデットコア、不知火の師範、刀神がサーキットに飛び込んでいく。
そしてサーキットが光ると、サーキットの中から炎と共に両刃の薙刀を持った着物姿のモンスターが現れた。
「リンク召喚!!?縁結ぶ迎え火!!?リンク３!!?麗神―不知火!!?」

〈麗神―不知火〉ＬＩＮＫ３　アンデット族　炎属性
ＡＴＫ２４００　↑→←

「麗神―不知火……シンクロモンスターを使ってリンク召喚をしてきたということは、シンクロモンスターを除外する算段があるということです?」
「その通りだ!!?儀式魔法、リヴェンデットボーン!!?このカードはレベルの合計が儀式召喚するモンスターのレベル以上になるように、

自分の手札・フィールドのモンスターをリリース、またはリリースの代わりに自分の墓地のアンデット族モンスターを除外し、自分の手札・墓地からヴェンデット儀式モンスター1体を儀式召喚する‼?墓地の刀神ー不知火を除外して儀式召喚を行う‼?」
「っ、儀式魔法……ということは……」
炎の前に闇の球体が現れ、その球体に刀神が吸い込まれていく。
そして闇の球体が吹き飛ぶと、その中から闇を纏い、身体中から骨が変質して出来た武器が飛び出している人型のモンスターが現れた。
「例えその身が朽ち果てようと、生まれ変わる程の怨讐の果てに、新たな強さを得よ‼?儀式召喚‼?リヴェンデットスレイヤー‼?」

〈リヴェンデットスレイヤー〉☆6　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２４００

「やっぱり出てきたですね、リヴェンデットスレイヤー‼?」
「バトル‼?麗神―不知火で幽鬼うさぎを攻撃‼?不知火流　業火斬舞‼?」
麗神が薙刀に炎を纏わせ、舞うように連続して幽鬼うさぎを切り伏せる。
「むぅ、結局効果は使わせて貰えなかったのです」
「続けてリヴェンデットスレイヤーでダイレクトアタック‼?リヴェンデットスマッシュ‼?」
スレイヤーを黒い炎を纏った足で勢いよく跳躍すると空中で一回転しながらその両足でリーネに蹴りを入れた。
「あぅ、痛いのです」

リーネ　ＬＰ８０００→５６００

「これで効果を気にする必要はなくなったが……相手は天羽だからな。ここは慎重にいくか……俺はこのままターンエンドだ」

リーネ　ＬＰ５６００　手札３
ー▲▲ー　ー
ーーーーー
ー　☆
ー○ーー
ーー▲ー　ー
炎　ＬＰ８０００　手札２

「うぅ、やられたからにはやり返すのです‼?リーネのターン、ドローなのです‼?スタンバイフェイズ、予見通帳の使用から２ターン経過なのです。そしてメインフェイズ‼?魔法カード、閃刀機―ホーネットビットなのです‼?」
「‼?そっちを引かれていたか……」
「自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しない場合、自分フィールドにリリースできない戦士族・闇属性・レベル１・攻撃力守備力０の閃刀姫トークン１体を守備表示で特殊召喚するのです‼?そして自分の墓地に魔法カードが３枚以上存在する場合、そのトークンの攻撃力・守備力は１５００になるのです‼?出てきてください、閃刀姫トークン‼?」

〈閃刀姫トークン〉☆１　戦士族　闇属性
ＤＥＦ１５００

フィールドにホーネットビットが飛び交い、ホーネットビットから閃刀姫―レイの立体映像が投影される。
そういってリーネが正面に手をかざす。
「刀術式起動なのです‼?戦場へと続くサーキット‼?」
「っ、リンク召喚か‼?」
リーネが正面に手をかざし、巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は炎属性以外の閃刀姫モンスター１体‼?私は閃刀姫トークンをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?」

レイの立体映像がサーキットに吸い込まれる。
そしてサーキットが輝くとサーキットの中から真っ赤な鎧を身に纏った白髪の少女が現れた。
「リンク召喚!!?業火の如き閃滅の刃なのです!!?リンク1!!?閃刀姫―カガリ!!?」

〈閃刀姫―カガリ〉ＬＩＮＫ１　機械族　炎属性
ＡＴＫ１５００　↖?

「炎の閃刀姫か……」
「閃刀姫―カガリの効果発動!!?アルヴィト!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、自分の墓地の閃刀魔法カード1枚を対象としてそのカードを手札に加えるのです!!?リーネは墓地から閃刀起動―エンゲージを手札に加えるのです!!?」
「っ、すでに墓地に落ちていたか……」
「そして魔法カード、閃刀起動―エンゲージなのです!!?自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しない場合に発動でき、デッキから閃刀起動―エンゲージ以外の閃刀カード1枚を手札に加え、その後、自分の墓地に魔法カードが3枚以上存在する場合、自分はデッキから1枚ドローできるのです!!?リーネの墓地には勿論3枚以上魔法カードがあるので後の効果も発動するのですよ」
「くっ、相変わらず厄介なサーチカードだな……」
「リーネはデッキから閃刀術式―アフターバーナーを手札に加えてさらに1枚ドローなのです!!?そして今加えた魔法カード、閃刀術式―アフターバーナー発動なのです!!?自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しない場合、フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてそのモンスターを破壊し、その後、自分の墓地に魔法カードが3枚以上存在する場合、フィールドの魔法・罠カード1枚を選んで破壊できるのです!!?破壊するモンスターは麗神―不知火なのです!!?」
「ならば、チェーンして麗神―不知火の効果発動!!?衆生回向!!?相

手ターンに、除外されている自分のアンデット族シンクロモンスター1体を対象として、そのモンスターをこのカードのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚する!!?俺は除外されている刀神―不知火を特殊召喚する!!?」

〈刀神―不知火〉☆6　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ２５００

麗神が舞うように薙刀を振るうと、フィールドに再び刀神の姿が現れる。
「戻ってくるのは仕方ないのです。だけど、麗神―不知火と伏せカードは破壊させてもらうのです!!?」
「麗神―不知火と、ヴェンデットリユニオンは破壊される」
麗神に向かってカガリが刀の形をした8つの炎を飛ばし、麗神を切り裂き破壊する。
「そして閃刀姫―カガリの永続効果!!?ヒルド!!?このカードの攻撃力は自分の墓地の魔法カードの数×１００ポイントアップするのです!!?リーネの墓地には魔法カードは１２枚あるので、閃刀姫―カガリの攻撃力は１２００ポイントアップするのです!!?」

閃刀姫―カガリ
ＡＴＫ１５００→２７００

「刀神―不知火を超えられたか……」
「バトルフェイズなのです!!?閃刀姫―カガリで刀神―不知火を攻撃なのです!!?」
「迎え撃て、刀神―不知火!!?不知火流　紅蓮袈裟斬り!!?」
武士が刀を構えると実体化した霊も同じように刀を構える。
そして武士と霊が同時に刀を振るうと刀から炎を纏った斬撃が、カガリに向けて放たれる。
それに対して、カガリは向かってくる斬撃を見据えながら手に持っ

た刀を腰の辺りで構えた。
「奥義、閃刀術式―アフターバーナー起動!!?」
リーネがそう口にするとカガリの背中に魔法陣が浮かび上がると、その魔法陣から刀の形をした８つの炎が後方に展開され、カガリが手にしていた刀にも炎が宿る。
そしてカガリは後方に噴き出した炎の勢いを利用して加速しながら、刀神の放った斬撃を斬り裂くように構えていた刀を横薙ぎに振るった。
「ランドグリーズ!!?いっとーりょーだーん!!?」
カガリが放った炎を纏った一閃が刀神の斬撃を吹き飛ばし、そのまま刀神を斬り裂いた。

炎　ＬＰ８０００→７８００

「これぐらいのダメージなら問題ない」
「メインフェイズ２なのです!!?炎君相手に閃刀姫―カガリのままでいても仕方ないので、リーネはどんどんいかせて貰うのです!!?刀術式起動なのです!!?戦場へと続くサーキット!!?」
「っ、再びリンク召喚か……」
「召喚条件は水属性以外の閃刀姫モンスター１体!!?私は閃刀姫―カガリをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
リーネが手をかざすと、カガリの正面に巨大なサーキットが現れ、カガリの身体を通過するように動き始める。
カガリがサーキットを潜ると、今度は４つの盾を装備した青い鎧を身に纏った白髪の少女が現れた。
「リンク召喚!!?水簾の如き刀衛の盾なのです!!?リンク１!!?閃刀姫ーシズク!!?」
〈閃刀姫ーシズク〉ＬＩＮＫ１　機械族　水属性
ＡＴＫ１５００　↑?

「次は水の閃刀姫か……」
「閃刀姫ーシズクの永続効果、ヘルフィヨトゥル!!?相手フィールドのモンスターの攻撃力・守備力は、自分の墓地の魔法カードの数×１００ポイントダウンするのです!!?リーネの墓地には魔法カードは１２枚あるので、炎君のモンスターの攻撃力は１２００ポイントダウンするのです!!?」

リヴェンデットスレイヤー
ＡＴＫ２４００→１２００

「全体の攻撃力を下げてくるとは、相変わらず閃刀姫はどれも厄介だな……」
「リーネはカードを２枚伏せてエンドフェイズに閃刀姫ーシズクの効果発動!!?ヘルヴォル!!?このカードを特殊召喚したターンのエンドフェイズ、デッキから、同名カードが自分の墓地に存在しない閃刀魔法カード１枚を手札に加えるのです!!?リーネはデッキから閃刀機―シャークキャノンを手札に加えてターンエンドなのです!!?」

リーネ　ＬＰ５６００　手札３
▲▲▲▲ー　　ー
ーーーーー
　　☆　　ー
ーー○ーー
ーーーーー　　ー
炎　ＬＰ７８００　手札２

「俺のターン、ドロー!!?次のターンには予見通帳で手札が増える、悪いがその前に決めさせて貰うぞ!!?俺は不知火の武部を召喚!!?」

〈不知火の武部〉☆４　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ１５００→３００

フィールドに薙刀を持った袴姿のモンスターが現れる。
「不知火の武部の効果発動!!?このカードが召喚に成功した時、手札・デッキから妖刀―不知火モンスター1体を特殊召喚する!!?ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はアンデット族モンスターしか特殊召喚できない。俺はデッキから逢魔ノ妖刀―不知火を特殊召喚する!!?」

〈逢魔ノ妖刀―不知火〉☆3　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ８００→０

武部が薙刀を振るうと、武部の正面に金色に光る一振りの刀が現れ、その刀の近くに薄っすらと鎧を着た武士の霊の姿が浮かびあがる。
「そして、燃え上がれ!!?劫火が宿しサーキット!!?」
「リンク召喚……また麗神ー不知火なのです?」
炎の正面に巨大なサーキットが現れる。
リーネの呟きに、炎は薄っすらと笑みを浮かべながらその言霊を紡ぐ。
「召喚条件は種族がアンデット族モンスター2体!!?俺は不知火の武部とリヴェンデットスレイヤーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
「っ、リンク2ということは麗神ー不知火じゃないみたいなのですね。ということは……」
武部とスレイヤーがサーキットに飛び込んでいく。
そしてサーキットが光ると、サーキットの中から紅いマフラーをつけ、右手に禍々しい剣が生えているスレイヤーに似たモンスターが現れた。
「リンク召喚!!?怨讐を超えし救済者!!?リンク２!!?アドヴェンデットセイヴァー!!?」

〈アドヴェンデットセイヴァー〉ＬＩＮＫ　２　　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ１６００↓４００　↙？↘？
「やっぱり出てきたのですね、リンクモンスターのヴェンデット……」
「まずは墓地に送られたリヴェンデットスレイヤーの効果発動!!？スコープエイド!!？儀式召喚したこのカードが墓地へ送られた場合、デッキから儀式魔法カード１枚を手札に加え、デッキからヴェンデットモンスター１体を墓地へ送る。俺はデッキから２枚目のリヴェンデットボーンを手札に加え、２枚目のリヴェンデットスレイヤーを墓地に送る。そしてアドヴェンデットセイヴァーの効果発動!!？ヴィンディクティブリチュアル!!？自分の墓地のヴェンデットカード１枚を対象として、そのカードを手札に加える。俺は墓地からリヴェンデットボーンを手札に加える!!？」
「　２枚も儀式魔法が手札に……」
「ここからが本番だ!!？墓地に存在する妖刀ー不知火の効果発動!!？このカードが墓地に存在する場合、チューナー以外の自分の墓地のアンデット族モンスター１体を対象としてそのモンスターとこのカードを墓地から除外し、その２体のレベルの合計と同じレベルを持つアンデット族シンクロモンスター１体をＥＸデッキから特殊召喚する!!？俺は墓地に存在する妖刀ー不知火と刀神―不知火を除外!!？剣に宿し無念の思いが、武士と重なり現世に現る!!？憑依超越!!？戦神ー不知火!!？」
〈戦神ー不知火〉☆８　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ３０００↓１８００
　炎の前に現れたのは武士と融合し、完全に実体化している妖刀に憑いていた武士の霊。
「戦神ー不知火の効果発動!!？善因善果!!？このカードが特殊召喚に

成功した場合、自分の墓地のアンデット族モンスター１体を除外してこのカードの攻撃力はターン終了時まで、除外したモンスターの元々の攻撃力分アップする‼?俺が除外するのは麗神―不知火‼?」

戦神ー不知火
ＡＴＫ１８００→４２００

「っ、攻撃力は下げてるのに４２００もあるですか……」
「まだ終わってないぞ‼?逢魔ノ妖刀―不知火の効果発動‼?このカードをリリースし、逢魔ノ妖刀―不知火以外の除外されている自分のモンスターの中から不知火モンスターを含むアンデット族モンスター　２体を対象として、そのモンスターを守備表示で特殊召喚する‼?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はアンデット族モンスターしか特殊召喚できない。俺は先程除外された妖刀ー不知火と刀神―不知火を特殊召喚‼?」

〈妖刀―不知火〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

〈刀神―不知火〉☆６　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

「また妖刀ー不知火と刀神―不知火がフィールドに……でも、戦神ー不知火は１ターンに１度しか特殊召喚できないハズなのです」
「ああ、だから別の手を使う。天羽相手に加減など出来ないからな。俺は墓地に存在する不知火の師範の効果発動‼?このカードが墓地に存在し、自分フィールドに不知火モンスターが　２種類以上存在する場合、このカードを特殊召喚する‼?ただし、この効果で特殊召喚した不知火の師範はフィールドから離れた場合に除外される」

〈不知火の師範〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

「うっ、不知火の師範のことをすっかり忘れていたのです。これでレベルの合計は１０……くるですね、炎君の切り札が」
「ああ、行くぞ天羽‼？俺は、レベル６、刀神―不知火と、レベル　２、不知火の師範に、レベル２、チューナーモンスター、妖刀―不知火をチューニング‼？」
　妖刀が浮かびあがり、光を纏いながら刀神と不知火の師範に向かって飛んでいく。
　妖刀が刀神と師範の間の地面に突き刺さると、刀神と師範を取り囲むように地面から炎が舞い上がり、刀神と師範の姿を隠す。
　しばらくして、炎が斬り払われるように霧散すると、炎の身体を持つ馬に乗った武士のモンスターが現れた。
「剣に宿し無念の思いが、神へと至る不知火となる‼？シンクロ召喚‼？憑依神化‼？炎神ー不知火‼？」

〈炎神―不知火〉☆１０　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ３５００→２３００

「出てきたですね……炎君の切り札、炎神ー不知火」
「除外された不知火の師範の効果にチェーンして炎神―不知火の効果発動‼炎魂入滅‼？このカードが特殊召喚に成功した場合、自分の墓地のカード及び除外されている自分のカードの中から、アンデット族シンクロモンスターを任意の数だけ選んでＥＸデッキに戻し、その後、戻した数だけ相手フィールドのカードを選んで破壊できる‼？俺は墓地に存在する刀神―不知火をＥＸデッキに戻して閃刀姫ーシズクを破壊する‼？」
「っ、させないのです‼？さらにチェーンしてリバースカードオープンなのです‼？速攻魔法、閃刀機―イーグルブースターなのです‼？自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しない場合、

フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてこのターン、その表側表示モンスターは自身以外のカードの効果を受けず、自分の墓地に魔法カードが3枚以上存在する場合、さらにこのターン、そのモンスターは戦闘では破壊されなくなるのです!!?対象は勿論、閃刀姫ーシズクなのです!!?」

炎神が刀を振り抜き、巨大な炎の斬撃がシズクに向かって放たれる。

その斬撃をシズクは背中に出現させたブースターで躱しきる。

「閃刀機―イーグルブースターが伏せられていたか……だが、まだ終わっていない!!?不知火の師範の効果でこのカードが除外された場合、自分フィールドのアンデット族モンスター1体を対象として、そのモンスターの攻撃力はターン終了時まで600ポイントアップする。対象は戦神ー不知火だ!!?」

戦神ー不知火
ＡＴＫ４２００→４８００

「っ、墓地に魔法カードが増えたことでさらに炎君のモンスターの攻撃力は下がるのです!!?」

アドヴェンデットセイヴァー
ＡＴＫ４００→３００

戦神ー不知火
ＡＴＫ４８００→４７００

炎神―不知火
ＡＴＫ２９００→２８００

「ふっ、それは焼け石に水というものだ。俺の炎はその程度の水では止められん!!?バトル!!?戦神ー不知火で閃刀姫ーシズクを攻撃!!

？」
「耐え抜くのです、閃刀姫ーシズク!!？」
腰に携えた２つの刀を抜き、炎を纏わせて戦神はシズクに斬りかかる。
シズクが４つの盾を集めると、魔法陣が現れ、シズクを覆うように光の障壁を生み出す。
シズクはその障壁で戦神の刀を受け止め、刀から溢れる炎をエネルギーに変換し、魔法陣に吸収していくが徐々に障壁に亀裂が入り、押され始める。
「速攻魔法、アクションマジック―フルターン!!？このターン、モンスター同士の戦闘で発生するお互いの戦闘ダメージは倍になる!!？」
「ええっ!!？」
「戦神ー不知火の攻撃力は４７００、閃刀姫ーシズクは１５００。戦闘で発生するダメージは３２００だ。つまり、３２００の倍、６４００のダメージが天羽に入る」
「リーネのライフポイントは５６００……これを受けたらお終いなのです!!？っ、だったら!!？チェーンしてリバースカードオープンなのです!!？罠発動!!？針虫の巣窟!!？自分のデッキの上からカードを５枚墓地へ送るのです!!？」
「ほう、そんなカードが伏せられていたか。確かに、針虫の巣窟で５枚の魔法カードが落ちれば閃刀姫ーシズクの効果で戦神ー不知火の攻撃力は４２００に下がり、発生する戦闘ダメージは２７００。倍のダメージが入っても５４００になり、天羽のライフは残る。だが、それは落ちたカードが全て魔法カードであればの話だ」
リーネが発動したカードを見て、炎が不敵に笑う。
そんな炎に対し、リーネは覚悟を決めたような顔で笑い返した。
「それでも、やるっきゃないならやるだけなのです!!？針虫の巣窟の効果で５枚のカードを墓地におくのです!!？」
「行け、戦神ー不知火!!？不知火流　輪廻刃!!？」
リーネがデッキの上から５枚のカードを勢いよく引いて墓地に送る。

観戦している参加者が固唾を呑んで見守る中、シズクの障壁が砕け、戦神の刀を受けてシズクが吹き飛ばされる。
しかし、シズクは背中に出現させたブースターを起動し、さらに刀を地面に突き刺して勢いを殺して、息を切らし、数メートル吹き飛ばされながらも、なんとか踏み止まった。

アドヴェンデットセイヴァー
ＡＴＫ３００→０

炎神―不知火
ＡＴＫ２３００→１８００

戦神ー不知火
ＡＴＫ４７００→４２００

リーネ　ＬＰ５６００→２００

「ふぅ、危なかったのです……閃刀姫ーシズクは閃刀機―イーグルブースターの効果で戦闘で破壊されないのです」
「ふっ、見事だ天羽。だが、次の攻撃を耐えきれるか？炎神―不知火で閃刀姫ーシズクを攻撃‼？不知火流　煉獄ノ祓‼？」
炎神が刀を抜き、空に掲げるとその刀に炎が集まっていき、炎が５メートル程の巨大な刀の姿を成す。
炎神はシズクに向かって、勢いよくその炎で出来た刀を振り下ろす。
「まだまだなのです‼？リバースカードオープンなのです‼？速攻魔法、旗鼓堂々なのです‼？このターン、自分はモンスターを特殊召喚できなくなる代わりに、自分の墓地の装備魔法カード１枚をその正しい対象となるフィールド上のモンスターに装備するのです‼？ただしこの効果で装備した装備魔法カードはエンドフェイズ時には破壊されるのです。リーネは墓地から装備魔法、魔界の足枷を炎神ー不知

火に装備するのです!!?」
「なにっ!?・そんなものが落ちていたのか!?・」
「さっきの針虫の巣窟で落ちたのですよ。魔界の足枷の効果で装備モンスターは攻撃する事ができず、攻撃力・守備力は１００になるのです!!?」

炎神―不知火
ＡＴＫ３５００→１００→０

炎神が乗っている炎の身体を持つ馬の足に突如足枷が現れ、馬がよろけて炎神が態勢を崩す。
態勢を崩したことで炎の刀はシズクから逸れ、霧散した。
「耐えきられたか……メインフェイズ　２、カードを１枚伏せてターンエンドだ。エンドフェイズ時、炎神―不知火を縛っている魔界の足枷は破壊され、戦神ー不知火の攻撃力は元に戻る」

炎神―不知火
ＡＴＫ０→１７００

戦神ー不知火
ＡＴＫ４２００→１２００

リーネ　ＬＰ２００　手札３
ーーー▲ー　ー
ーーーーー
☆　☆
ーー○ー○
ーー▲ーー　ー
炎　ＬＰ７８００　手札２
ーーーーーー

★

「……凄い」
「これが『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』同士のデュエル……というか、やっぱり炎さん、私の時は本気じゃなかったのね。分かってたことだけど、悔しいわね」
リーネさんと不知火さんの激しいデュエルに圧倒され、私と桜ちゃんは思わずそんな声を漏らす。
そんな私達に近くにいた闇先パイが首を傾げながら声をかけてくる。
「そんなに凄い？いつも通りの社長と炎だと思うけど」
「こ、これでいつも通りですか⁉？」
「凄いに決まってるでしょ⁉？闇は見慣れてるからそう思うだけよ⁉？」
「そんなこと言われても困る。それに、遊花と桜が目指してるのはそういう場所。２人もいずれ出来るようになる」
「ほ、本当かしら？」
「ん、私が保証する。だから、そんなに驚く必要はない」
「それはまた別の問題だと思うのですが……」
闇先パイの言葉に、私と桜ちゃんは頬を痙攣らせる。
桜ちゃんはともかく、私があんなデュエルが出来るようになるなんて全然思えないんだけど……でも、私が目指しているのはそういう場所なんだよね？
だったら、全然あんな風になれるなんて思えなくても、いつかはなれるように精一杯頑張らなくちゃ。
「ふふっ」
胸の前で握り拳を作り気合を入れていると、そんな私を見て闇先パイが無表情ながらも微笑ましそうに笑う。
そんな闇先パイに、私はふとデュエルを見ていて思ったことを訪ねる。

「あの、闇先パイ。少し聞きたいことがあるんですが……」
「ん、なに？」
「『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』って、何か決まった戦術を使うとか決まってたりするんですか？」
「？そんなものはないけど……どうしてそう思ったの？」
「いえ、その、気のせいかも知れないんですが、リーネさんと不知火さんのデュエルが似ている気がして……」
「リーネさんと炎さんのデュエルが？」
「うん。リーネさんは閃刀姫モンスター１体を強化して戦ってるでしょ？不知火さんも桜ちゃんとのデュエルでは基本的にモンスター１体ずつを強化して戦ってたから……」
　そういう私を見て、闇先パイは感心したような表情を浮かべ、それでいて少し困ったように口を開く。
「遊花はよく人を見れてる。だけど、別に決まった戦術があるわけじゃないよ。あれはあの２人がなるべく１人で戦うことに拘ってるだけ」
「拘ってる、ですか？」
「ん。あの２人、変に責任感が強いから、何でも１人で抱え込んじゃうの。それが多分、デュエルスタイルにも出てるんだと思う……もっと頼ってくれてもいいのにね」
　そういって、闇先パイがリーネさんと不知火さんのデュエルに視線を移す。
　視線を移した闇先パイは相変わらずの無表情で……だけど、どこか寂しそうだった。

ーーーーーーーー

○

「流石は炎君なのです……もう後がないのですね」
「先程の攻撃を耐え切っておいてよく言うな。あれで決め切れたと

思ったが、流石に天羽を倒すのは一筋縄にはいかないか」
　そういって、リーネと炎はお互いに笑い合う。
　しばらく笑い合うと、リーネは真面目な表情を浮かべて炎を見る。
「だけど、リーネもまだ負けるわけにはいかないのです。リーネには、この大会でやりたいことがありますから」
「やりたいことだと？」
「だからこそ、このデュエル、勝たせて貰うのです‼？リーネのターン、ドローなのです‼？スタンバイフェイズ、予見通帳の使用から3ターン経過したので、除外されていたカードを手札に加えるのです‼？」
「くっ、手札が一気に増えてしまったか……」
「リーネはカードを1枚伏せて、魔法カード、手札抹殺なのです‼？お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローするのです‼？リーネは5枚、炎君は　2枚捨ててドローするのです‼？」
「リヴェンデットボーンが捨てられてしまったか。1枚ぐらい使っておくべきだったか」
「さらに墓地に送られた妖刀竹光の効果発動なのです‼？デッキから妖刀竹光以外の竹光カードをデッキから手札に加えるのです‼？リーネはデッキから黄金色の竹光を手札に加えるのです‼？さらにリバースカードオープン‼？装備魔法、妖刀竹光を閃刀姫ーシズクに装備するのです‼？」
「っ、もう1枚手札にあったのか‼？」
　シズクの手元に禍々しいオーラを纏った竹刀が現れる。
「そして魔法カード、黄金色の竹光なのです‼？自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローするのです‼？来たのです‼？魔法カード、閃刀術式―ジャミングウェーブなのです‼？」
「‼？そのカードは……」
「自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しない場合、フィールドにセットされた魔法・罠カード1枚を対象としてそのカードを破壊し、その後、自分の墓地に魔法カードが3枚以上存在する場

合、フィールドのモンスター1体を選んで破壊できるのです!!?リーネは炎君のセットカードを破壊するのです!!?」
「っ!!?だが、それならば破壊される前に効果を使えばいいだけだ!!?リバースカードオープン!!?永続罠、不知火流　輪廻の陣!!?1ターンに1度、　2つある効果から1つを選択して発動できる!!?俺が使うのは自分フィールドの表側表示のアンデット族モンスター1体を除外してこのターン、自分が受ける全てのダメージを0にする効果だ!!?俺はアドヴェンデットセイヴァーを除外して効果発動!!?」
「そんなのムダムダ、なのです!!?ライフポイントを半分払い、手札からカウンター罠、レッドリブートを発動なのです!!?」
「なんだと!?!?」

リーネ　　LP200→100

「相手が罠カードを発動した時、その発動を無効にし、そのカードをそのままセットするのです!!?その後相手はデッキから罠カード1枚を選んで自分の魔法&罠ゾーンにセットできるのです。最もこのカード発動後、ターン終了時まで罠カードは発動できないですが」
「くっ……俺はデッキから不知火流　燕の太刀をセットする」
「閃刀術式―ジャミングウェーブの効果でセットされている不知火流　輪廻の陣と炎神―不知火を破壊するのです!!?」
「だが、炎神―不知火の効果!!?自分フィールドのアンデット族モンスターが戦闘・効果で破壊される場合、代わりに自分の墓地の不知火モンスター1体を除外できる。俺は墓地に存在する不知火の武部を除外して破壊を無効にする!!?さらに除外された不知火の武部の効果発動!!?自分はデッキからカードを1枚ドローし、その後手札を1枚捨てる」
「まだまだ終わらないのです!!?手札を2枚捨てて自分の墓地の閃刀起動―エンゲージを対象として魔法カード、魔法石の採掘なのです!!?墓地から閃刀起動―エンゲージを手札に加えるのです!!?そしてそのまま閃刀起動―エンゲージを発動なのです!!?デッキから閃刀

機―ウィドウアンカーを手札に加えて、墓地に3枚以上魔法カードがあるので1枚ドローなのです!!?」
「っ、閃刀機―ウィドウアンカーだと!?あのカードは確か……」
「行くのです!!?速攻魔法、閃刀機―ウィドウアンカーなのです!!?自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しない場合、フィールドの効果モンスター1体を対象として、そのモンスターの効果をターン終了時まで無効にし、その後、自分の墓地に魔法カードが3枚以上存在する場合、そのモンスターのコントロールをエンドフェイズまで得る事ができるのです!!?対象にするのは勿論、炎神―不知火!!?」
シズクの腕にアンカーが装着され、シズクはそのアンカーを炎神に向けて放つ。
放たれたアンカーは炎神の身体を捉え、そのままリーネのフィールドに引きずり込んだ。
「リーネのフィールドに移動したことで炎神ー不知火の攻撃力は元の数値に戻るのです。そしてリーネの墓地の魔法カードは、今ので29枚になったのです」

炎神―不知火
ＡＴＫ１７００→３５００

戦神ー不知火
ＡＴＫ１２００→１００

「っ、攻撃力を１００まで下げられたか……だが炎神―不知火が天羽のフィールドに移動したことで天羽はもうほとんどの閃刀魔法を使えない。俺のライフは７８００、このターンで決められるとは考えにくい。次のターンに炎神―不知火は俺のフィールドに戻ってくる。そうすれば閃刀姫ーシズクをどうにかする方法などいくらでもある!!?」
「分かっているのです!!?だからこそ、炎君に次のターンはないので

す!!?」
「なんだと!!?」
「バトルフェイズなのです!!?炎神―不知火で戦神ー不知火を攻撃!!?」
「迎え撃て、戦神ー不知火!!?不知火流　輪廻刃!!?」
　炎神が刀を抜こうとすると、その刀を抜かせまいと戦神が２つの刀を抜き、炎神に斬りかかる。
　その刀を避けるように炎神は馬を走らせ、戦神から距離を取る。
「これがこのデュエルを終わらせる最後の魔法カードなのです!!?リバースカードオープンなのです!!?速攻魔法、アクションマジック―フルターンなのです!!?」
「天羽もフルターンを使ってくるだと!!?」
「効果は勿論分かってるですね?このターン、モンスター同士の戦闘で発生するお互いの戦闘ダメージは倍になるのです!!?そしてこのカードが墓地に落ちることでリーネの墓地の魔法カードは３０枚になるのです!!?これにより、戦神ー不知火の攻撃力はジャスト０なのです!!?」

戦神ー不知火
ＡＴＫ１００→０

「くっ……戦神ー不知火!!?」
「行くのです、炎神ー不知火!!?不知火流　煉獄ノ祓!!?」
　距離を取った炎神が向かってくる戦神に対して刀を抜き、空に掲げると、その刀に炎が集まっていき、５メートル程の巨大な刀になる。
　炎神は集まって巨大な刀になった炎を圧縮していき、通常のサイズの刀に変える。
　刀が完成すると炎神は馬を走らせて戦神に近づくとすれ違い様に３度戦神を斬りつけると、戦神の身体が燃え上がり霊子になって消滅した。

炎　ＬＰ７８００→８００

「ぐっ……戦神ー不知火の効果発動!!?六道輪廻!!?フィールドのこのカードが戦闘・効果で破壊され墓地へ送られた場合、除外されている自分の守備力０のアンデット族モンスター１体を墓地に戻す!!?俺は除外されている不知火の師範を墓地に戻す!!?」

「Ｄａｓ（これで）ｉｓｔ（終わりなのです）ｄａｓ　Ｅｎｄｅ!!?閃刀姫―シズクでダイレクトアタックなのです!!?」

シズクが炎に向けて霞の構えを取る。

「奥義……閃刀術式―ジャミングウェーブ起動」

リーネがそう呟くと、シズクの周りに４枚の盾が展開され、シズクの前方に魔法陣が出現する。

シズクがその魔法陣に飛び込むよう突っ込むと、魔法陣から先程の戦神との戦闘で吸収されたエネルギーがシズクの身体を覆い、水流となって現れる。

「貴方に送る　Ｒｅｑｕｉｅｍ（鎮魂歌）です!!?スヴァーヴァ!!?」

水流を纏ったシズクはそのまま水流の勢いに乗って炎に突撃し、すれ違いざまに炎の身体を刀で斬り裂いた。

「……俺の負けか。やはり、天羽は強いな」

炎　ＬＰ８００→０

ーーーーーーー

「そこまで!!?勝者、天羽リーネ!!?」

「ふぅ、頑張ったのです～」

遊騎の宣言を聞き、ホッと息を吐くリーネに、炎が無愛想な表情で口を開く。

「負けてしまったな。やはり、我らの社長は一筋縄にはいかないらしい」

「むぅ、そういう言い方はよくないのです。それじゃあリーネが悪い

人みたいなのです」
「はは、悪かった。このリベンジはまたいずれさせて貰うとしよう。それにしても、デュエルの最中に言っていたこの大会でしたいことと言うのは何のことだ？」
「えへへ、それはまだまだ内緒なのです。と言っても、結局それが出来るかはこの後の試合の結果次第なのですが」
「次の試合？……もしかして栗原が関係していることなのか？」
「あ、あはは」
　核心を突いてくる炎に、リーネは曖昧に笑って返す。
　そんなリーネの表情に何かを感じとったのか、炎はあえて何も聞かずにリーネに背を向けた。
「まあいい。天羽が考えてやろうとしていることだ、悪いことではないだろう。何か困ったことになれば、話してくれればいい」
「……ごめんなさい、なのです」
「構わんさ。負けることはないと思うが、次の試合も楽しみにしている」
「はいなのです。炎君達に無様なデュエルは見せられないですからね。リーネはいつだって、全力で行くのです」
「ふっ、そうか」
　そう呟くと、炎は観戦席の方に戻っていく。
　リーネも後に続こうとしたところで、遊騎に声をかけられる。
「リーネ」
「っ、遊騎君……」
「お前、一体何をするつもりなんだ？」
　遊騎の困惑した表情での問いかけに、リーネは悲しそうに顔を伏せながら答える。
「……ごめんなさい、なのです。今は言えないのです」
「お前、もしかして事故のことを遊花に……」
「っ……さ、さあて、リーネは観戦席に戻るのです。遊騎君は運営も兼ねてるんですから、ちゃんとお仕事しないとダメなのですよ」
「あ、おい‼？」

呼び止めようとした遊騎を振り切るように、そそくさとリーネは観戦席に戻っていく。
そんなリーネを見送りながら、遊騎はため息を吐きながら呟いた。
「……はぁ、アホめ……もっと人を頼れっての」

ーーーーーーー

★

「すまない、宝月。天羽に勝つことが出来なかった。カッコ悪いところを見せてしまったな」
「ちょっ⁉？あんな凄いデュエル見せといて謝らないでよ⁉？炎さんは十分凄かったわよ」
「そうだろうか？」
「ええ……だけど、炎さん。不器用なのは分かるけどいきなり頭を下げるとか止めてよね。心臓に悪いわ」
私達がリーネさんと不知火さんの凄まじいデュエルの余韻に浸っていると、観戦席に戻ってきた不知火さんがいきなり桜ちゃんに頭を下げて謝り、私は思わず唖然としてしまい、桜ちゃんは困った表情を浮かべて狼狽えていた。
そんな私達に助け舟を出すためか、闇先パイが不知火さんに口を開く。
「炎、桜達が困ってる。そこら辺にしておくべき」
「むっ、そうか。すまない、宝月、栗原」
「だ、だから謝らないでいいっていってば‼？」
「そ、そうですよ‼？あの、お疲れ様でした‼？」
「ああ、ありがとう。だが、やはり俺も精進が足りないな」
「炎は十分頑張ってたと思う。いつもより善戦してた」
「それはそうだが……」
「待って、闇。今、いつもよりって言った？」
「ん？そうだけど？」

桜ちゃんの質問に闇先パイは何を尋ねているのか分からないとでも言うように首を傾げる。
そんな闇先パイの様子を見て、不知火さんは苦笑を浮かべながら口を開く。
「正直な話をすれば、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の中でも天羽の実力は群を抜いておかしい。そのポテンシャルの高さは、冬城すらも抜いているだろう」
「ええっ⁉？闇先パイより強いんですか⁉？」
「じょ、冗談でしょ⁉？」
「事実。実際、私と社長が戦ったらよくて勝率は五分、悪ければ私が三分ってところ。私の強さはたくさんデュエルをして身についた後付けのものだけど、社長の強さは社長自身の才能によるもの。社長自体がデュエルを見る方が好きで、社長という立場だからデュエルをしてこなかったから世界ランキングにはまだ入っていないけど、同じ頃にスタートしてたら、試合数的にもとっくに社長は世界ランキングに入れているハズ」
淡々と事実を述べるようにそう告げる闇先パイに、私と桜ちゃんは唖然としてしまう。
まさかリーネさんがそこまで強い人だなんて思わなかった。
というよりも、私には闇先パイが負けている姿を想像する方が難しい。
普段から色々と教えて貰いながらデュエルをしているから、闇先パイの凄さはよく分かっている。
そんな闇先パイよりも強い決闘者がいるなんて……
「それじゃあ次の試合に移ろうと思う。２回戦第２試合、デュエルアカデミア所属、栗原　遊花ＶＳ無所属、雨夜　美傘。両選手は試合の準備を頼む」
そんな中、師匠の次の試合のアナウンスが聞こえてきて、私はハッとして首をぶんぶんと振るって、頭の中から今考えていたことを吹き飛ばす。
そうだ、次は私と美傘さんの試合。

美傘さんは全ての召喚方法を使いこなして霊華さんを圧倒した実力者で、師匠からアドバイスを受けたことがある決闘者。

今は余計なことは考えないで、今自分にできることを……次の試合も、精一杯頑張ってデュエルをしよう。

それがまだまだ弱い私に出来る唯一のことなんだから。

第４１話　護り手ＶＳ暴風雨・心に刻む信念

●

『ーーー勝者、眼竜　夜‼?』

「……はぁ～今日も初戦負け、か」

遠くから聞こえてくるデュエルの結果を聞いて歓声が飛び交い、賑わいを見せているスタジアムで、私は1人ため息を吐きながら自分がいた控え室からスタジアムの出口に向かってトボトボと歩いていた。

デュエルアカデミアを卒業して2ヶ月。

プロ試験に合格して念願のプロ決闘者になった私は、思ったように結果を出せず、連敗を続ける日々を送っていた。

別に、勝てないことに落ち込んでいるわけじゃない……嘘、勝てないことでも少し落ち込んではいるけれど、それよりも落ち込む理由は他にあった。

「……はぁ～どうやったらお客さんが楽しんでくれるデュエルが出来るんだろう?」

それは、私のデュエルではお客さんを楽しませれていないことだ。

私がプロ決闘者になったのは、私のおじいちゃんが元プロ決闘者だったからだ。

両親が共働きであまり家にいなかった私は、昔からよくおじいちゃんの家に預けられていた。

そんな私が寂しい思いをしないように、おじいちゃんは私にデュエルを教えてくれて、デュエルディスクの立体映像を使って、私が驚くようなデュエルをいつも見せてくれていた。

そんなおじいちゃんのデュエルは、まるで魔法みたいで……いつも私を笑顔にしてくれた。

おじいちゃんは、自分のようなデュエルをする決闘者のことを『エンタメデュエリスト』って呼ぶことを教えてくれて……私も大きくなったら、絶対におじいちゃんみたいに誰かを驚かせて、笑顔にさせ

るようなエンタメデュエリストになってみせるんだって言うと、おじいちゃんは嬉しそうに笑ってくれた。
私のデッキーーー『オッドアイズ』も、そんなおじいちゃんが私のために作ってくれたデッキだ。
両親にはない、私だけの特徴である黒目と青目のオッドアイをイメージして、おじいちゃんがカードを集めて作ってくれたみたい。
そんなおじいちゃんに少しでも恩を返せるように、そしておじいちゃんのようなエンタメデュエリストになるために、私はプロ決闘者の世界に入った。
……だけど、現実は、思うようにお客さんを驚かせることができず、連敗を続ける日々。
こんな私がプロ決闘者を続けてもいいのかと、暗い感情が心に浮かんでくる。
「……才能ないのかな、私……」
そう呟きながら、俯いたまま控え室があった廊下の曲がり角を曲がり、スタジアムの出口があるホールに行こうとすると……
「うぉっ!!?」
「ひゃぅ!!?」
俯いていたせいで私と同じようにホールから曲がり角を曲がろうとしていた男性にぶつかってしまった。
私は慌ててその人に頭を下げる。
「す、すみません!!?すみません!!?」
「いや、ちょっと驚いただけだからそんなに謝らなくていいけどさ……下向いて歩いてると危ないぜ?」
「はい、本当にご迷惑、を……」
そこで私は顔を上げて初めてぶつかった男性の顔をしっかりと見て、自分の血の気が引いていく音が聞こえた気がした。
そこにいたのは茶髪のエアリーヘアで、とても優しい瞳をした男性。
だけど、その人物の名前を、私は知っている。
２年前、突如彗星のように現れたプロチーム『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒ

ｔｅ』のエースを務め、チームを世界ランキング２位に導き、本人も現世界ランキング９位で『英雄騎士』なんて呼び名がついている、私なんかじゃ足元にも及ばないプロ決闘者で……今日の私の初戦の相手。
「ゆ、ゆゆゆ、結束プロ⁉？」
「ん？君は、さっきの」
結束　遊騎。
間違いなく最高峰のプロ決闘者がそこにいた。
私は顔を真っ青にして、結束プロに向けて何度も頭を下げる。
「すみません⁉？すみません⁉？本当にすみません⁉？生きていてすみません⁉？」
「いやいやいや、落ち着けって⁉？別に怒ってないから⁉？」
「すみません⁉？すみません⁉？わちきが悪うござんした⁉？穴掘って埋まってるんで勘弁してくだせぇ⁉？」
「だから落ち着いて⁉？……ああ、もう⁉？落ち着けっての⁉？」
「あいた⁉？」
何度も頭を下げる私の額に、結束プロが軽くチョップを打ち込む。
額を押さえて顔を上げると、結束プロは呆れたような表情を浮かべていた。
「ようやく止まったか。止めるために少しチョップを入れさせて貰ったけど、別に俺は怒ってないから、少しは落ち着け」
「あぅ……すみません」
「何回すみませんって言うんだよ……君は確か……今年プロ決闘者になった雨夜プロであってるよな？」
「っ⁉？わ、私のことを覚えててくれたんですか⁉？」
結束プロの口から私の名前が出たことに、驚きの表情を浮かべてしまう。
そんな私の反応に首を傾げながらも、結束プロは何でもないことのように言葉を続ける。
「ん？まあな。同じ大会に出る決闘者のことは、なるべく全員覚えるようにしてるからな。君は初戦の対戦相手だし、特徴的で綺麗なオッ

ドアイをしてるから覚えやすかった……ああ、悪い。オッドアイのこと気にしてたりしたか？気にしてたのなら謝るよ」
「あ、あぅ……だ、大丈夫、です。その、あ、ありがとう、ございます……」
結束プロがさらっと口にした言葉に少し頬が熱くなる。
まさか雲の上の人だと思っていた人物に覚えられていて、私のオッドアイを綺麗だなんて言って貰えるなんて……
それにしても、結束プロはやっぱり凄い人だ。
同じ大会に出る決闘者のことを全員覚えるようにしてるなんて……私には、出来そうにない。
「……どうかしたのか？なんか表情が暗いが……」
「い、いえ‼？大丈夫です‼？」
心配そうな表情を浮かべる結束プロを見て、私は慌てて手を振って誤魔化す。
そんな私を見て何かを感じとったのか、結束プロは頭を掻いてから何かを決めたような笑顔を浮かべて口を開いた。
「……よし、これも何かの縁だ。雨夜プロ、まだ時間はあるか？」
「えっ？あ、はい。後は帰るだけですから……」
「そっか」
突然のことに首を傾げる私に、結束プロは優しい表情を浮かべながら笑いかけてーーー
「んじゃ、ちょっとばかし付き合えよ。お悩みぐらい、聞いてやるぜ、新人君」
ーーー私の、運命を変える言葉を口にした。

ーーーーーーー

★

「それじゃあ両者共準備ができたようなので、これより、２回戦第２試合、デュエルアカデミア所属、栗原　遊花ＶＳ無所属、雨夜　美傘の

試合を開始する!!?」
「ふっふっふ、ようやく遊花ちゃんとのデュエルだね。いや～待ち遠しかったよ」
師匠の宣言を聞いて、美傘さんがニコニコと輝くような笑顔で笑いかけてくる。
「ようやく遊花ちゃんに特等席でエンタメデュエルを見せれるんだもんね。美傘さん、頑張っちゃうぞ～!!?」
「はい!!?私も美傘さんのエンタメデュエル、楽しみです!!?」
「ストレート!!?な、なんかちょっと照れちゃうよ……うぅ、遊騎さんといい、この師弟は色々と直球過ぎるのが困るなぁ」
私がワクワクした表情で美傘さんに笑い返すと、美傘さんは頬を赤らめながら照れたような表情を浮かべる。
美傘さんはしばらく照れたような、困ったような表情を浮かべて何かを呟いていたけど、ぶんぶんと首を振るとまた笑顔を浮かべてデュエルディスクを起動した。
「それじゃあこれより、雨夜　美傘のエンタメデュエルの開幕だよ!!?　Ｉｔ’ｓ　Ｓｈｏｗｔｉｍｅ（さあ、ショータイムだ）!!?予告する!!?遊花ちゃんのハートも、勝利も、私がいただいちゃうよ!!?」
そう言って美傘さんは私を指差しながら、指で銃を作って私を撃ち抜くような動作をする。
そんな美傘さんを見て、私も深呼吸をしてからデュエルディスクを起動する。
美傘さんは霊華さんを圧倒した実力者。
最初から全力でぶつからないと!!?
「すー……はー……行きます!!?」
『決闘!!?』

遊花　ＬＰ８０００
美傘　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は私だね!!?私はＥＭ(エンタメイト)ドクロバットジョーカーを召喚!!?」

〈ＥＭドクロバットジョーカー〉☆４　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ１８００

美傘さんのフィールドに現れたのは帽子を被ったマジシャンのようなモンスター。

「ＥＭドクロバットジョーカーの効果発動!!?このカードが召喚に成功した時、デッキからＥＭドクロバットジョーカー以外のＥＭモンスター、魔術師ペンデュラムモンスター、オッドアイズモンスターの内、いずれか1体を手札に加えるよ!!?私が手札に加えるのはオッドアイズペンデュラムドラゴン!!?」

「オッドアイズ……里香さんも使ってたペンデュラムモンスター……」

「そしてここからは私のステージだ!!?私はフィールド魔法、天空の虹彩を発動!!?」

美傘さんがフィールド魔法を発動させると、店内に大きな虹が現れる。

「天空の虹彩の効果を発動!!?1ターンに1度、このカード以外の自分フィールドの表側表示のカード1枚を破壊してデッキからオッドアイズカードを手札に加えるよ!!?私はＥＭドクロバットジョーカーを破壊してデッキからオッドアイズペルソナドラゴンを手札に加えるよ!!?」

「ペンデュラムカードが2枚揃っちゃった……」

「期待させて悪いけど、このターンのペンデュラム召喚はお預けかな?遊花ちゃんを驚かせるためには沢山準備をしないとね。私はオッドアイズペンデュラムドラゴンをペンデュラムスケールにセッティング!!?カードを1枚伏せて、エンドフェイズ!!?オッドアイズペンデュラムドラゴンの効果発動!!?ペンデュラムリード!!?このカードを破壊し、デッキから攻撃力１５００以下のペンデュラムモンス

ター1体を手札に加えるよ‼?私はデッキからオッドアイズミラージュドラゴンを手札に加えてターンエンドだよ」

遊花　ＬＰ８０００　手札５
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　ー
ーーーーー
ーー▲ーー　▽
美傘　ＬＰ８０００　手札４

「私のターン、ドロー‼?私はクリバンデットを召喚‼?」

〈クリバンデッド〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

私の前に現れたのは盗賊のような姿をした黒い毛玉のモンスター。
クリバンデットは興奮したように何度も手を振りながら、ぴょんぴょんと跳ね回る。
うん、君も大会だから張り切ってるんだね。
今回も一緒に頑張ろうね。
「バトル‼?クリバンデットでダイレクトアタック‼?バンデットクロー‼?」
「あいた‼?」

美傘　ＬＰ８０００→７０００

クリバンデットが美傘さんの身体を爪で斬り裂いてライフを削る。
よし、まずは先制攻撃が通った。
「メインフェイズ2、カードを1枚伏せてエンドフェイズにクリバンデッドの効果発動‼?このカードをリリースしてデッキの上から5

枚めくり、その中から魔法・罠カード1枚を手札に加えて残りを墓地におきます!!?」

攻撃が成功し、喜んでぴょんぴょんと跳ねていたクリバンデッドが私に手を振ってから姿を消す。

そんなクリバンデットを見て思わず笑顔を浮かべながら、私はデッキの上から5枚のカードをめくって中から1枚のカードを手札に加えた。

「私は魔法カード、ワンフォーワンを手札に加えてターンエンドです!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札５
ー－▲－－　ー
－－－－－
ー　ー
－－－－－
－－▲－－　▽
美傘　ＬＰ７０００　手札４

「私のターン、ドロー!!?　Ｉｔ，ｓ（さあ、）Ｓｈｏｗｔｉｍｅ（ショータイムだ）!!?私はスケール1、オッドアイズペルソナドラゴンと、スケール8のオッドアイズミラージュドラゴンでペンデュラムスケールをセッティング!!?」

美傘さんを挟むように光の柱が立ち上り、その光の中に2体のドラゴンの姿が映る。

そしてそのドラゴンの下には1と8の数字が浮かんだ。

「これで私は2から7までのモンスターを同時に特殊召喚可能!!?揺れろ揺れろ、魂の振り子!!?空に輝け、虹のアーチ!!?ペンデュラム召喚!!?飛び出せ、私のモンスター達!!?」

美傘さんがそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって2つの光が舞い降りる。

「レベル3、雷天気ターメル!!?」

〈雷天気ターメル〉☆3　天使族　光属性
ＡＴＫ１７００

最初に現れたのはクレヨンのような物を持ち背中に雷を背負ったモンスター。
そしてターメルの後ろに現れるのは赤と青の目を持つ巨大な龍。
「そして、ＥＸデッキより現れて、美しき２色の眼で観客を魅了せよ‼？レベル７、オッドアイズペンデュラムドラゴン‼？」

〈オッドアイズペンデュラムドラゴン〉☆７　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２５００

「オッドアイズペンデュラムドラゴン……まさかまた戦うことになるなんて思わなかったな」
「あれれ？遊花ちゃんはオッドアイズペンデュラムドラゴンのことを知ってるの？このカード、私以外に持ってる人を見たことないんだけど……」
「はい、ちょっと異世界で」
「……遊騎さんも言ってたよね、それ。そのネタ遊騎さん達の中で流行ってるの？まあいいや。それじゃあバトルフェイズ‼？」
「なら、バトルフェイズ開始時にリバースカードオープン‼？永続罠、通行増税‼？お互いのプレイヤーは手札を１枚墓地へ送らなければ攻撃宣言が出来なくなります‼？」
「うわぁ、面倒なカードが出ちゃったな。だけどここは果敢に攻めちゃうよ‼？手札を１枚捨ててオッドアイズペンデュラムドラゴンでダイレクトアタック‼？螺旋のストライクバースト‼？」
ペンデュラムドラゴンが虹色のブレスを私に向かって放とうとする。
美傘さんのデッキはさっきのデュエルを見た限り相手の動きを封じながら大量展開からの一斉攻撃で決めにいくデッキだった。

なら、最初から出来るだけダメージは抑えていく‼?

「虹には虹で対抗です‼?攻撃宣言時、手札から虹クリボーの効果発動‼?このカードをそのモンスターに装備し、そのモンスターは攻撃することが出来ません‼?レインボーガード‼?」

「うっ、そんなカードが手札にあったのかー」

私の手札から虹色の角を持つ球体が現れてペンデュラムドラゴンの動きを止める。

それを見て美傘さんは渋い表情を浮かべた。

「うぅ～最後の手札は捨てたくないからこのターンはもう攻撃出来ないか。仕方ない、メインフェイズ2。まずは天空の虹彩の効果を発動‼?ペンデュラムゾーンのオッドアイズミラージュドラゴンを破壊してデッキからオッドアイズアークペンデュラムドラゴンを手札に加えるよ。そしてリバースカードオープン‼?永続罠、ペンデュラムスイッチ‼?自分のモンスターゾーンのペンデュラムモンスター1体を対象としてそのペンデュラムモンスターを自分のペンデュラムゾーンに置くことができるよ‼?私はエクストラモンスターゾーンのオッドアイズペンデュラムドラゴンをペンデュラムゾーンにおくよ‼?」

「っ、またペンデュラムドラゴンがペンデュラムゾーンに……装備モンスターがいなくなったことで虹クリボーは墓地に送られます」

光の柱の中にいた緑色のドラゴンの姿が消え、代わりにフィールドにいたペンデュラムドラゴンが光の柱の中に入っていく。

「オッドアイズが活躍したからお次は天気の出番だよ。雷天気ターメルの効果発動‼?自分フィールドの表側表示の永続魔法・永続罠カードを1枚墓地へ送ってデッキから天気魔法・罠カード1枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンに表側表示で置くよ‼?私はペンデュラムスイッチを墓地へ送ってデッキから雪の天気模様をフィールドの中央に表側表示で置くよ‼?」

ターメルがクレヨンを空に向かって投げると、クレヨンがひとりでに動いて雲を描き、その雲から雪が降り始める。

「雪の天気模様は自分フィールドに1枚しか表側表示で存在できず、

このカードと同じ縦列の自分のメインモンスターゾーン及びその両隣の自分のメインモンスターゾーンに存在する天気効果モンスターはこのカードを除外してデッキから天気カード1枚を手札に加え、この効果は相手ターンでも使えるという効果を得る。ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はドロー以外の方法でデッキからカードを手札に加える事はできなくなるけどね」

「霊華さんのデュエルでは何度もその効果で手札を増やしていましたね……かなり厄介なカードです」

「さらにこのターン私は通常召喚を行なってない。私は雷天気ターメルをリリースして極天気ランブラをアドバンス召喚!!?」

ターメルの姿が粒子に変わって空に登っていき、ターメルが描いた雲の中に入っていく。

しばらくするとその雲から粒子が降り注ぎ、粒子が形を成すとオーロラを背にしている長い緑髪のモンスターが現れた。

〈極天気ランブラ〉☆6　天使族　闇属性

ＡＴＫ２２００

「極天気ランブラの効果発動!!?このカードが召喚に成功した時、自分の手札・デッキ・墓地から天気魔法・罠カード1枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンに表側表示で置くよ!!?私はデッキから晴れの天気模様を雪の天気模様の右横に表側表示で置くよ!!?」

ランブラが空に手をかざすと、雲に切れ間ができ、そこから太陽が顔を覗かせた。

「晴れの天気模様も自分フィールドに1枚しか表側表示で存在できず、このカードと同じ縦列の自分のメインモンスターゾーン及びその両隣の自分のメインモンスターゾーンに存在する天気効果モンスターはこのカードを除外し、自分フィールドのモンスター1体をリリースし、そのモンスターとカード名が異なる天気モンスター1体を自分の手札・墓地から選んで特殊召喚する効果を得るよ。この効果も勿論相手ターンでも発動できる」

「美傘さんのデッキにはペンデュラムモンスターがいますからリリースするコストはほとんど無いようなものというわけですね」
「Ｔｈａｔ（そ），ｓ（の）　ｒｉｇｈｔ（通り）!!?流石は遊騎さんの弟子、理解が早いね。そして極天気ランブラの永続効果でこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分フィールドの天気魔法・罠カードは相手の効果の対象にならず、相手の効果では破壊されないよ。エンドフェイズ!!?オッドアイズペンデュラムドラゴンの効果発動!!?ペンデュラムリード!!?このカードを破壊し、デッキから　ＥＭ（エンタメイト）ペンデュラムマジシャンを手札に加えてターンエンドだよ」

遊花　ＬＰ８０００　手札４
ー－△－－　　ー
－－－－－
ー　　ー
－－○－－
△－雪晴－　　▽
美傘　ＬＰ７０００　手札２

「私のターン、ドロー!!?まずは手札からクリボーンを捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動!!?デッキからレベル１モンスター１体を特殊召喚する!!?お願い、ミスティックパイパー!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

フィールドに現れたのはフルートのようなものを弾いている男の人。
今の手札だと少し厳しいから、今回もお願いね、ミスティックパイパー。
そんなことを思う私にミスティックパイパーは任せろとでも言うようにサムズアップをした。

「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを1枚ドローします。そしてこの効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル1モンスターだった場合、自分はカードをもう1枚ドローします!!?」
「むむっ、レベル1が主体の遊花ちゃんのデッキでそのモンスターが出てくるということは……」
「私が引いたのはクリアクリボー!!?レベル1モンスターなのでもう1枚ドローします!!?」
ミスティックパイパーが姿を消し、私はさらにカードをドローする。
……うん、この手札ならどうにかなりそう!!?
「私はクリアクリボーを召喚!!?」

〈クリアクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＡＴＫ３００

現れたのは紫色の毛玉のようなモンスター。
召喚されたクリアクリボーは不安そうな鳴き声をあげている。
だ、大丈夫だよ。
君に戦って貰うわけじゃないからそんなに怯えないで？
「墓地に存在するジェットシンクロンの効果発動!!?手札を1枚墓地に送り、墓地からこのカードを特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合、除外される!!?」
「クリバンデットの時に墓地に落ちてたんだね」

〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

現れたのは小さなジェット機のような機械のモンスター。
現れたジェットシンクロンはクリアクリボーを宥めるようにクリ

アクリボーの周りを飛び回る。
「私はレベル1、クリアクリボーとジェットシンクロンでオーバーレイ!!?。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
「まずはエクシーズ召喚か」
クリアクリボーとジェットシンクロンが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこには白い馬に乗る小さな首無しの騎士がいた。
「闇夜に紛れし哀しき妖精!!?その刃で疑惑を切り裂け!!?ランク1!!?ゴーストリックデュラハン!!?」

〈ゴーストリックデュラハン〉★1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

「ゴーストリックデュラハンの永続効果、スリーピィフィアー。このカードの攻撃力は自分フィールドのゴーストリックと名のついたカードの数×２００ポイントアップします!!?」

ゴーストリックデュラハン
ＡＴＫ１０００→１２００

「ゴーストリックデュラハン……確か竜河さんのデュエルで攻撃力を半減させようとしてたっけ。このままだと極天気ランブラを超えられちゃうか」
「バトル!!?通行増税の効果で手札を1枚捨ててゴーストリックデュラハンで極天気ランブラを攻撃!!?」
「なら、私は雪の天気模様の効果を得た極天気ランブラの効果を発動!!?このカードを除外してデッキから天気カード1枚を手札に加えるよ。極天気ランブラを除外してデッキから曇天気スレットを手札に加えるよ!!?」

「攻撃対象がいなくなりましたが攻撃はそのまま続行です!!?ゴーストリックデュラハンでダイレクトアタック!!?ナイトオブビヘッド!!?」
「うわっ!!?」
「ええっ!!?」

美傘　ＬＰ７０００→５８００

デュラハンが美傘さんの首元を斬り付け、それを見て、私と美傘さんが驚きの声をあげる。
「怖っ!!?怖いよ!!?立体映像だとは分かってるけど流石に怖すぎるって!!?」
「ご、ごごご、ごめんなさい!!?」
私は必死に頭を下げて美傘さんに謝る。
そ、そういえばいつも駄天使にランクアップさせてたからデュラハンでまともにプレイヤーを攻撃したことってなかった気がする。
ま、まさかそんな攻撃をするなんて……
デュラハンは不思議そうに身体を揺する。
も、もうその攻撃は禁止!!?
私も心臓に悪いから!!?
そんな私の視線を受けてデュラハンはガクッと項垂れた。
うっ……可愛そうだけど、あれは心臓に悪いし、もし異世界の時みたいにダメージが実体化するようなことがあったら怖いから、ここはしっかりと言い聞かせておかないといけないよね?
「メインフェイズ2。私はカードを2枚伏せてターンエンドです」

遊花　ＬＰ８０００　手札０
ー▲△▲ー　ー
ーーーーー
ー　○
ーーーーー

△ー雪晴ー　▽
美傘　ＬＰ５８００　手札３

「あーびっくりした。まさかこんな風に驚かされるなんて思わなかったよ……なら、今度は私が遊花ちゃんを驚かさないとね‼？私のターン、ドロー‼？スタンバイフェイズ‼？極天気ランブラの効果発動‼？フィールドのこのカードが天気カードの効果を発動するために除外された場合、次のターンのスタンバイフェイズに除外されているこのカードを特殊召喚するよ‼？」

〈極天気ランブラ〉☆６　天使族　闇属性
ＡＴＫ２２００

「Ｉｔ，ｓ（さあ、）Ｓｈｏｗｔｉｍｅ（ショータイム）‼？私はスケール８のオッドアイズアークペンデュラムドラゴンで再びペンデュラムスケールをセッティング‼？」
消えていた光の柱の中にいたペンデュラムドラゴンに似た姿をしたドラゴンが現れる。
そしてそのドラゴンの下に８の数字が浮かぶ。
「これで私は再び２から７までのモンスターを同時に特殊召喚可能‼？揺れろ揺れろ、魂の振り子‼？空に輝け、虹のアーチ‼？ペンデュラム召喚‼？飛び出せ、私のモンスター達‼？」
美傘さんがそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって３つの光が舞い降りる。
「レベル３、曇天気スレット‼？」

〈曇天気スレット〉☆３　天使族　風属性
ＡＴＫ１５００

最初に現れたのはペンのような物を持ち雲を纏っているモンスター。

「レベル４、ＥＭペンデュラムマジシャン!!?」

〈ＥＭペンデュラムマジシャン〉☆４　魔法使い族　地属性
ＡＴＫ１５００

次に現れたのは真っ赤なシルクハットを被ったマジシャンのモンスター。
そしてスレットとペンデュラムマジシャンの後ろから再び赤と青の目を持つ巨大な龍が現れる。
「そして、再びＥＸデッキより現れて、美しき２色の眼で観客を魅了せよ!!?レベル７、オッドアイズペンデュラムドラゴン!!?」

〈オッドアイズペンデュラムドラゴン〉☆７　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２５００

「今度は３体……」
「ＥＭペンデュラムマジシャンの効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、自分フィールドのカードを２枚まで対象としてそのカードを破壊し、破壊した数だけデッキからＥＭペンデュラムマジシャン以外のＥＭモンスターを同名カードは１枚まで手札に加えるよ!!?私は晴れの天気模様と雪の天気模様を破壊してデッキからＥＭ（エンタメイト）レ・ベルマンとＥＭ（エンタメイト）バリアバルーンバクを手札に加えるよ!!?」
ペンデュラムマジシャンが指を鳴らすと、降っていた雪と太陽が消え、ペンデュラムマジシャンの手元に２枚のカードが現れる。
「さらに曇天気スレットの効果発動!!?このカードが自分フィールドに存在し、このカード以外の自分フィールドの表側表示の天気カードが墓地へ送られた場合、自分の墓地の天気魔法・罠カードを２枚まで対象としてそのカードを自分の魔法＆罠ゾーンに表側表示で置くよ!!?私は墓地から晴れの天気模様と雪の天気模様を再び同じ場所に置くよ!!?」

「っ⁉？破壊した天気魔法が戻るんですか⁉？」
スレッドが纏っていた雲を空に飛ばし、さらに持っていたペンを空に投げる。
ペンが空に飛ばされた雲に入ると、再びフィールドに雪が降りはじめ、雲の切れ間からは太陽が顔を出した。
「ふふん、どんどんいくよ⁉？私は墓地に存在するチューナーモンスター、貴竜の魔術師の効果を発動⁉？このカードが手札・墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル７以上のオッドアイズモンスター１体を対象として、そのモンスターのレベルを３つ下げ、このカードを特殊召喚する⁉？」
「っ、通行増税の効果で捨ててたんですね」
「私はオッドアイズペンデュラムドラゴンのレベルを３つ下げて貴竜の魔術師を召喚⁉？」

オッドアイズペンデュラムドラゴン
☆７→４

〈貴竜の魔術師〉☆３　魔法使い族　炎属性
ＤＥＦ１４００

現れたのは白いローブを纏った魔法使いのモンスター。
「チューナー、ということは……」
「そう、シンクロ召喚だよ⁉？貴竜の魔術師の効果でこのカードをシンクロ素材とする場合、ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できず、他のシンクロ素材にオッドアイズモンスター以外のモンスターを使用した場合、このカードを持ち主のデッキの一番下に戻るよ。私は、レベル４となったオッドアイズペンデュラムドラゴンに、レベル　３、チューナーモンスター、貴竜の魔術師をチューニング⁉？」
貴竜の魔術師が光の輪になり、ペンデュラムドラゴンが小さな星に変わり、光の道になる。

そして光の道が輝くと、その中から燃え上がる炎と共にルビーのような体躯を持つ龍が現れた。
「シンクロ召喚!!?・観客を魅力し、熱狂の炎を灯せ!!?・オッドアイズメテオバーストドラゴン!!?・」

〈オッドアイズメテオバーストドラゴン〉☆7　ドラゴン族　炎属性
ＡＴＫ２５００

「炎のオッドアイズ……」
「オッドアイズメテオバーストドラゴンの効果発動!!?・ペンデュラムコネクト!!?・このカードが特殊召喚に成功した時、自分のペンデュラムゾーンのカード1枚を対象としてそのカードを特殊召喚する!!?・ただし、このターン、このカードは攻撃できなくなるよ。私はペンデュラムゾーンのオッドアイズペルソナドラゴンを特殊召喚!!?・」
メテオバーストドラゴンの前に大きな魔法陣が現れ、美傘さんの隣に立っている光の柱にも同じ魔法陣が現れる。
そして光の柱が姿を消すと、その魔法陣の中から白い仮面のような身体を持つ赤と青の目を持つ小さな龍が現れた。

〈オッドアイズペルソナドラゴン〉☆5　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ１２００

「オッドアイズペルソナドラゴンの効果発動!!?・1ターンに1度、ＥＸデッキから特殊召喚された表側表示モンスター1体を対象としてそのモンスターの効果をターン終了時まで無効にする!!?・この効果は相手ターンでも発動できるよ。私はゴーストリックデュラハンを対象に、その効果を無効にするよ!!?・」
「っ、なら!!?・チェーンしてゴーストリックデュラハンの効果発動!!?・ホロウエクスキュート!!?・オーバーレイユニットを1つ使い、フィールド上のモンスター1体を対象に、選択したモンスターの攻撃力を半分にします!!?・この効果は相手ターンでも使えます!!?・対象

は極天気ランブラ‼?」
デュラハンがその手に持った小さな剣を振るうと、その剣から不可視の斬撃が飛び、ランブラが膝をつく。
そんなデュラハンにペルソナドラゴンが咆哮を放ち、デュラハンも膝をついた。

極天気ランブラ
ＡＴＫ２２００→１１００

ゴーストリックデュラハン
ＡＴＫ１２００→１０００

「攻撃力を下げられるのは仕方ないけど、それでも私は止まらないよ‼?天空の虹彩の効果を発動‼?私はオッドアイズメテオバーストドラゴンを破壊してデッキから　ＥＭ（エンタメイト）オッドアイズディゾルヴァーを手札に加えるよ‼?」
「えっ?せっかく出したオッドアイズメテオバーストドラゴンを破壊しちゃうんですか?」
メテオバーストドラゴンの姿が粒子に代わり、私は困惑の表情を浮かべる。
そんな私を見て、美傘さんはニヤリと笑った。
「にひひ、心配ご無用‼?オッドアイズアークペンデュラムドラゴンのペンデュラム効果発動‼?リターンペンデュラム‼?自分フィールドのオッドアイズカードが戦闘・効果で破壊された場合、自分の手札・デッキ・墓地からオッドアイズモンスター1体を選んで特殊召喚する‼?蘇って、オッドアイズメテオバーストドラゴン‼?」
「えっ⁉?」
光の柱にいるアークペンデュラムドラゴンが咆哮する。
すると、散っていた粒子が集まって大きな魔法陣が生まれ、その中から再びルビーのような体躯を持つ龍が現れた。

〈オッドアイズメテオバーストドラゴン〉☆7　ドラゴン族　炎属性
ＡＴＫ２５００

「またオッドアイズメテオバーストドラゴンがフィールドに……」
「破壊されて蘇生したことによりオッドアイズメテオバーストドラゴンの攻撃制限は解かれるよ。そしてオッドアイズメテオバーストドラゴンの永続効果、メテオフェーズ‼？このカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手はバトルフェイズ中にモンスターの効果を発動できないよ‼？」
「っ⁉？そんな効果が⁉？」
美傘さんから告げられたメテオバーストドラゴンの効果に私は苦しい表情を浮かべる。
バトルフェイズ中のモンスター効果封じ。
それはモンスター効果を軸に防御を行う私のデッキの天敵とも言える効果。
美傘さんの今の手札は４枚。
その上、美傘さんには蘇生を行える晴れの天気模様と手札を増やせる雪の天気模様がある。
それを使って極天気ランブラを蘇生し、攻撃力を戻せば私のライフポイントを大きく削れる。
そうなればメテオバーストドラゴンを処理出来ない私は防御手段がなくなり、間違いなく負ける。
「行くよ、バトル‼？手札を１枚捨ててオッドアイズメテオバーストドラゴンでゴーストリックデュラハンを攻撃‼？メテオブレス‼？」
メテオバーストドラゴンの口元に炎が集まり、デュラハンに向けて放たれそうになる。
……多分、期末試験が終わった直後の私ならここでどうにも出来なくなり負けていただろう。
だけど、今の私はその時とは違う。
僅かな間だったけど、大切な出会いを経験したんだもん‼？
「神楽さん、また力をお借りします‼？リバースカードオープン‼？

速攻魔法、皆既日蝕の書!!?太陽の光が隠れることで全てのモンスターが眠りにつく!!?フィールドの表側表示モンスターを全て裏側守備表示にします!!?」
「えっ!?」
フィールドに現れていた太陽に月が重なり、太陽の光が遮られてフィールドが夜のように暗くなる。
あたりが暗くなったことにより、フィールドにいたモンスターは全て眠りについた。
「ただし、このターンのエンドフェイズに、相手フィールドの裏側守備表示モンスターを全て表側守備表示にし、その後、この効果で表側守備表示にしたモンスターの数だけ相手はデッキからドローします」
美傘さんの攻撃を防いだことで、観客席が少し賑やかになってくる。
美傘さんは攻撃を防いだ私と、賑やかになってきた観客席を見て、輝くような笑顔を見せた。
「……あはは!!?まさかこの攻撃も躱されちゃうなんてね。いいね、すっごくいいよ!!これこそエンターテイメントって奴だもん!!?さあ、遊花ちゃん。私達でもっと観客を盛り上げちゃおう!!?」
「!!?はい!!?」
「メインフェイズ2。このまま手札が増えちゃうと手札制限もあって少し勿体ないから使えるカードは使っておくかな?私はスケール1、EMレ・ベルマンをペンデュラムスケールにセッティング!!?」
美傘さんの隣に再び光の柱が立ち上り、その光の中にベルを被ったモンスターの姿が映り、その下に1の数字が浮かんだ。
これで美傘さんは次のターンも2から7までのペンデュラム召喚が行える。
「さらにカードを1枚伏せてエンドフェイズ!!?皆既日蝕の書の効果で眠っていたモンスターが目覚め、表側守備表示になり私はカードを5枚ドローするよ!!?」
「なら私もエンドフェイズ!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?裁きの天秤!!?相手フィールドのカードの数が自分の手札・フィー

ルドのカードの合計数より多い場合に発動でき、自分はその差の数だけデッキからドローします‼?」
「っ⁉?それも狙っての皆既日蝕の書だったの⁉?」
「美傘さんのフィールドのカードは１１枚、私は裁きの天秤、ゴーストリックデュラハン、通行増税の３枚。その差分の８枚のカードをドローします‼?」
「ここにきて８枚もドローか……これは楽しくなってきたよ‼?私も皆既日蝕の書の効果で全てのモンスターを表側にするよ‼?皆、起きろ起きろ起きろー‼?」

〈曇天気スレット〉☆３　天使族　風属性
ＤＥＦ１０００

〈極天気ランブラ〉☆６　天使族　闇属性
ＤＥＦ２０００

〈ＥＭペンデュラムマジシャン〉☆４　魔法使い族　地属性
ＤＥＦ８００

〈オッドアイズペルソナドラゴン〉☆５　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ２４００

〈オッドアイズメテオバーストドラゴン〉☆７　ドラゴン族　炎属性
ＤＥＦ２０００

「そして表側表示になった枚数、つまり５枚のカードをドロー‼?……っ、このカードは……」
美傘さんがドローしたカードの１つを見て目を見開く。
そして、まるで悪戯を思いついた子供のような笑顔を浮かべた。
「にひひ‼?これは面白いことになりそうだよ‼?改めて私はこれでターンエンドだよ‼?」

遊花　ＬＰ８０００　手札８
ーー△ーー　ー
ーーーーー
ー　■
□□□□□
△▲雪晴△　▽
美傘　ＬＰ５８００　手札６

美傘さんのフィールドは全て埋まっていて手札は６枚。
そしてメテオバーストドラゴンを封じないと私のデッキで美傘さんの攻撃を防いでいくのには限界がある。
だけど、美傘さんのペンデュラムゾーンにアークペンデュラムドラゴンがある限り、破壊しても蘇生されてしまう。
だけど、この手札なら……!?
「私のターン、ドロー!?まずは魔法カード、マジックプランター!?自分フィールドの表側表示の永続罠カード１枚を墓地へ送って自分はデッキから２枚ドローします!?私は通行増税を墓地に送って２枚ドロー!?」
「攻撃制限を取り払ってきたか……それに手札は１０枚。さあ、どんなのがくるかな？」
「まずはこれです!?速攻魔法!?エネミーコントローラー!?私は２つの効果の内、自分フィールドのモンスター１体をリリースし、相手フィールドの表側表示モンスター１体を対象に、その表側表示モンスターのコントロールをエンドフェイズまで得る効果を選択!?私はゴーストリックデュラハンをリリースし、オッドアイズメテオバーストドラゴンのコントロールを得ます!?」
ゲームのコントローラーが私の前に現れ、デュラハンの姿が消えるとコントローラーが動きはじめる。
コントローラーがコマンドを入力し終えるとメテオバーストドラゴンの姿が消え、私のフィールドに現れた。

「オッドアイズメテオバーストドラゴンを奪われちゃったか……敵に回すと厄介なんだよね、あの効果。おまけにエクストラモンスターゾーンも空いちゃった」
「それだけじゃありません‼？墓地に送られたゴーストリックデュラハンの効果発動‼？このカードが墓地へ送られた場合、このカード以外の自分の墓地のゴーストリックカード1枚を対象としてそのカードを手札に加えます。私は墓地にあるゴーストリックランタンを手札に加えます‼？」
「っ、それもクリバンデットの時に落ちたカードか」
「どんどんいきます‼？速攻魔法‼？クリボーを呼ぶ笛‼？その効果で自分はデッキからクリボーまたはハネクリボー1体を選択し、手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができる‼？私か選ぶのは特殊召喚‼？おいで、クリボー‼？」

〈クリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

私の前に現れたのは茶色の毛玉のようなモンスター。
今回も貴方の力、使わせて貰うよ‼？
「速攻魔法‼？増殖‼？自分フィールド上に表側表示で存在するクリボー1体をリリースして自分フィールド上にクリボートークンを可能な限り守備表示で特殊召喚します‼？」
「‼？この流れは、竜河さんの時に見た連続リンク召喚の流れ⁉？」

〈クリボートークン〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

私のフィールドに4体のクリボーが現れる。
さあ、行くよ‼？
「導いて‼？希望に繋がるサーキット‼？」
私が手をかざすと、目の前に大きなサーキットが現れる。

まずは貴方の出番だよ!!?

「召喚条件はレベル1モンスター1体。私はクリボートークンをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚!!?希望の守り手!!?リンク1!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

私の前に元気一杯に飛び出してくるのは青い球体のモンスター。
今回もよろしくね、リンクリボー。
さらに私は続けて正面に手をかざし、サーキットを出現させる。

「さらに導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」

「やっぱり連続リンク召喚だね」

「召喚条件はモンスター2体。私はクリボートークン2体をリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚!!?リンク2!!?プロキシードラゴン!!?」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

次に現れたのは白い身体をした機械の竜。

「どんどん行きます!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?召喚条件は通常モンスター1体!!?私はクリボートークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク1!!?リンクスパイダー!!?」

〈リンクスパイダー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１０００　←

私の前に機械の蜘蛛が現れる。

「そして導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」

「一気に４回のリンク召喚か……うーん、こういうのも派手でいいなー」
　このターン４度目のサーキット。
「召喚条件は効果モンスター３体以上‼？私はリンクスパイダー、リンクリボー、プロキシードラゴンを２体分として扱ってリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？」
「リンク４……大型が来るね」
　美傘さんの防御はかなり硬い。
　だからこそ、その防御を撃ち抜く力を私に貸して‼？
「閉ざされた運命を撃ち抜く信念の弾丸‼？リンク４‼？ヴァレルロードドラゴン‼？」
　私の呼び声に応えるように龍の咆哮がフィールドに轟いた。
〈ヴァレルロードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
　ＡＴＫ３０００　↙？↑↑↘？
「ヴァレルロードドラゴンか。また厄介なモンスターが出てきたね」
「まだ終わりじゃありません‼？魔法カード、イリュージョンの儀式を発動‼？」
「っ、今度は儀式モンスターか。やるね、遊花ちゃん」
　私の前に現れるのは金色の目の形をした壺。
「自分の手札・フィールドから、レベルの合計が１以上になるようにモンスターをリリースし、手札からサクリファイスを儀式召喚します‼？私は手札のサクリボーをリリース‼？」
　金色の目の形をした壺に背中に千年眼が付いている茶色の毛玉のようなモンスターが吸い込まれていく。
　しばらくすると壺が割れ、中から妖しい邪眼を持つモンスターが現れた。
「儀式召喚‼？相手を捕える妖しい邪眼‼？サクリファイス‼？」
〈サクリファイス〉☆１　魔法使い族

ＡＴＫ０

「サクリボーの効果発動!!?このカードがリリースされた場合に自分はデッキから1枚ドローします!!?そしてサクリファイスの効果発動!!?アブソープション!!?1ターンに1度、相手フィールドのモンスター1体を対象にそのモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力・守備力は、このカードの効果で装備したモンスターの数値分アップし、このカードが戦闘で破壊される場合、代わりに装備したそのモンスターを破壊できるよ!!?対象はオッドアイズペルソナドラゴン!!?吸い込んじゃって、サクリファイス!!?」

「っ、ヴァレルロードドラゴンは選ばれないし、サクリファイスは手札からの特殊召喚。オッドアイズメテオバーストドラゴンも墓地から蘇生したから効果を無効には出来ないか……ゴメンね、オッドアイズペルソナドラゴン」

サクリファイスのお腹にある穴が開き、ペルソナドラゴンが吸い込まれる。

しばらくすると背中についている羽のような部分から白い仮面が浮き上がった。

サクリファイス
ＡＴＫ０→１２００

「何も無ければバトルフェイズに入りますが、何かありますか?」

「バトルフェイズになるとオッドアイズメテオバーストドラゴンの効果でモンスター効果が封じられるから使うなら今だけど……フィールドをガラ空きにするのも少し怖いからここはスルーだよ」

「ならバトル!!?サクリファイスで曇天気スレットを攻撃!!?イリュージョン・ペルソナブラスト!!?」

サクリファイスのお腹にある穴が開き、そこからドラゴンの咆哮が響き、衝撃波になってスレットを吹き飛ばして消滅させる。

「くっ……曇天気スレットは破壊される」
「ここからが本番です!!?手札を1枚捨てて、速攻魔法、超融合!!?」
「なっ!??そのカードは!??」
「手札を1枚捨てて発動し、自分・相手フィールドから融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚します!!?このカードの発動に対して魔法・罠・モンスターの効果は発動できません!!私が融合するのはサクリファイスと極天気ランブラ!!?」
「うっ、極天気ランブラを使われちゃうか。サクリファイスを使うってことはあの融合モンスターのサクリファイスだね。動き辛くはなっちゃうけど、攻撃力がないあのモンスターならまだ……」
　そういって、ホッとしたような表情を浮かべる美傘さんに私は笑顔を浮かべながら首を振る。
「残念ですが、出てくるのはミレニアムアイズサクリファイスじゃありません。私は、フィールドの闇属性モンスター、サクリファイスに、闇属性モンスター、極天気ランブラを融合!!?妖しい邪眼よ、極光の輝きと交わりて、孤独を壊す力とならん!!?」
　フィールドに現れた嵐のように激しい渦にサクリファイスとランブラが吸い込まれていく。
　さあ、久しぶりの出番だから、思いっきりお願いね。
　私のそんな思いに応えるように、渦が弾け、産声をあげるように龍の咆哮が響いた。
「融合召喚!!?閉ざされた世界を溶かす毒龍!!?スターヴヴェノムフュージョンドラゴン!!?」

〈スターヴヴェノムフュージョンドラゴン〉☆８　ドラゴン族　闇属性
　ＡＴＫ２８００
「ドラゴンの融合モンスター!?」
「スターヴヴェノムフュージョンドラゴンの効果発動!!?パワースワ

ローヴェノム‼？このカードが融合召喚に成功した場合、相手フィールドの特殊召喚されたモンスター１体を選び、その攻撃力分だけこのカードの攻撃力をターン終了時までアップする‼？対象にするのはＥＭペンデュラムマジシャン‼？」
「ええっ⁉？」
　スターヴヴェノムがペンデュラムマジシャンに毒の瘴気を放ち、その力を奪い取っていく。

　スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
　ＡＴＫ２８００→４３００

「攻撃力４３００⁉？」
「ヴァレルロードドラゴンでＥＭペンデュラムマジシャンを攻撃‼？銃声のイジェクトフレア‼？」
　ヴァレルロードの口から砲台が現れ、ペンデュラムマジシャンに向けて粒子砲を放つ。
「この瞬間、ヴァレルロードドラゴンの効果発動‼？エロージョンエイミング‼？このカードが相手モンスターに攻撃するダメージステップ開始時に、その相手モンスターをこのカードのリンク先に置いてコントロールを得て、そのモンスターは次のターンのエンドフェイズに墓地へ送られます‼？」
「ううっ、今回はモンスターを奪われてばかりだよ……」
　私が効果を宣言すると、ヴァレルロードの粒子砲が威力を増し、ペンデュラムマジシャンを包み込みこちらのバトルゾーンに移動させる。
　これで美傘さんのフィールドはガラ空きになった‼？
「スターヴヴェノムフュージョンドラゴンでダイレクトアタック‼？消失のヴェノムストリーム‼？」
「ぐうぅぅぅ‼？」

美傘　ＬＰ５８００→１３００

スターヴヴェノムが毒のブレスが美傘さんのライフを大きく削る。
美傘さんのライフは残り僅か。
だけどこれ以上、攻撃を続ける手段はない。
それでも、私のライフポイントはまだ８０００で美傘さんのライフは１３００。
これだけライフを削れたならだいぶ有利になっているハズだ。
「いたた……思ってた以上に削られちゃったな。だけど、このターンが終わればオッドアイズメテオバーストドラゴンが戻ってくる。そうなればモンスター効果で防御を行う遊花ちゃんには辛いハズだよ？」
「そこもちゃんと考えてます!!？メインフェイズ２、オッドアイズメテオバーストドラゴンを除外して異次元の精霊を特殊召喚!!？」
「うぇっ!?!？」

〈異次元の精霊〉☆１　天使族　光属性
ＤＥＦ１００

フィールドにいたメテオバーストドラゴンの姿が光に包まれて消滅し、その場所に赤い服を着た小さな精霊のモンスターが現れる。
「この方法で特殊召喚した場合、次のスタンバイフェイズに特殊召喚をするために除外したモンスターはフィールドに戻ります。ですが、フィールドに戻るのは次のスタンバイフェイズに異次元の精霊が残っていればの話です!!？墓地に存在するリンクリボーの効果発動!!？スケープリンク!!？このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル１モンスター１体をリリースしてこのカードを墓地から特殊召喚する!!？私は異次元の精霊をリリース!!？戻っておいで、リンクリボー!!？」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

異次元の精霊の姿が消え、代わりにリンクリボーが跳ねるように私の前に現れる。
それを見て、美傘さんが苦い笑みを浮かべる。
「これで事実上オッドアイズメテオバーストドラゴンは完全に除外されるわけだね……流石に除外から戻す方法は持ってないや」
「私はカードを2枚伏せてターンエンドです!!?」
「なら、エンドフェイズにリバースカードオープン!!?罠発動!!?活路への希望!!?」
「っ、ここで活路への希望ですか……」
「効果は知ってるみたいだね。自分のＬＰが相手より１０００以上少ない場合、１０００ＬＰを払って発動!!?」

美傘　ＬＰ１５００→５００

「お互いのＬＰの差２０００につき1枚、自分はデッキからドローする!!?私のライフは５００!!?遊花ちゃんは８０００!!?よって3枚のカードをドロー!!?」
美傘さんの手札が一気に3枚も増える。
これで次のドローも入れて美傘さんの手札はさっきまでの私と同じで１０枚。
モンスターは全部倒せたけど、次のターンの攻撃はかなり激しいものになりそう。

スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
ＡＴＫ４３００→２８００

遊花　ＬＰ８０００　手札１
ー ー ▲ ▲ ー　ー
ー ー □ ☆ ○
ー　☆

ーーーーー
△ー雪晴△　　▽
美傘　ＬＰ５００　手札９

「……ふぃ～……やっぱり遊花ちゃんは強いね。だけど、デュエルはまだまだ終わらない‼？追い詰められたこの状況から大逆転して皆に最高のエンターテイメントをお送りしないとね‼？」
「……ふふっ」
そういって満面の笑顔を浮かべる美傘さんを見て、私も思わず笑顔が溢れる。
そんな私を見て、美傘さんは不思議そうに首を傾げる。
「あれれ、どうかした？まだ美傘さん何にもしてないけど」
「いえ、やっぱり美傘さんも笑うんだなって思って」
「えーもしかして美傘さん笑わない女だと思われてた？クール系な私……ありかな？」
「い、いえ、そういう意味じゃなくて、やっぱり美傘さんも師匠みたいに、逆境の中で笑える人なんだなって」
「あーそういうことか」
私の言葉に美傘さんは納得がいったというような表情を浮かべる。
そして美傘さんは審判をしている師匠の方をチラリと見ると、柔らかい表情を浮かべた。
「それは当然だよ。だってそれは、私が遊騎さんから学んだことだからね」
「師匠から……ですか？」
「うん。私ね、プロ決闘者になったばかりの頃はずっと負けてばかりの日々だったんだ。多分、最長で１ヶ月近くは連敗してた」
「ええっ⁉？こんなに強い美傘さんがですか⁉？」
美傘さんが口にした言葉に私は驚きを露わにする。
全召喚方法を華麗に使いこなしている美傘さんが１ヶ月も負け続けてただなんて、信じられない。
そんな私を見て、美傘さんは苦笑を浮かべながら頭を掻く。

「あはは……恥ずかしい話だけど、当時の私は凄く弱かったもん。デッキの中身も今とは違ってオッドアイズ達だけだったし、そのオッドアイズ達を使いこなすことすら、私には出来ていなかった。おまけにそんな調子だから観客を驚かせて笑顔にさせるようなデュエルなんて到底出来っこなくて……あの頃は、プロ決闘者を辞めようかと本気で悩んでたぐらいだった」
「美傘さん……」
「そんな時だったよ、遊騎さんと出会ったのは。遊騎さんは、当時の私なんかじゃ足元にも及ばないプロ決闘者だったのに、新人だった私なんかの悩みを聞いてくれて、その悩みを吹き飛ばすきっかけをくれたんだ」

ーーーーーーー

●

「んー雨夜プロは何か飲みたいものとかあるか？」
「い、いえいえいえ、お気になさらず‼？」
「まあそう気にすんなって。新人に奢ってやるって言うのを1度やってみたかったんだ。ウチは新人とか入ってこないしな。というわけで、どうせ高いものでもないんだし、大人しく奢られてくれれば助かる」
「あぅ、じゃ、じゃあ、コーヒーを……」
「おう」
……どうしてこんなことになったんだろう？
スタジアムの一角にある誰もいない休憩所。
その中にある自動販売機で缶コーヒーを買っている結束プロを見ながら私は途方にくれていた。
『ちょっとばかし付き合えよ』、そう言われて付いてきてしまったが、一体これから自分はどうなってしまうんだろう？
やっぱり、さっきぶつかったことを本当は怒っていて、お話という

名のお説教が待っていたり……
「ほれ」
「ひゃう⁉?」
自分よりも遥かに大物である人物と2人っきりという状況に不安で押しつぶされそうになって俯いていた私は、いきなり額に冷たい感触を感じて驚きの声を漏らしてしまう。
恐る恐る顔をあげるとそこには私に缶コーヒーを差し出して面白そうに笑う結束プロの姿があった。
「そんなにびびられるのも新鮮だな。ほら、雨夜プロの分だ」
「あ、ありがとうございます……」
私は恥ずかしさに顔を赤くしながら結束プロから缶コーヒーを受け取る。
結束プロは自分の缶コーヒーを開けると、それを一飲みしてから私に声をかけてくる。
「ふぅ……それで、雨夜プロはなんであんな暗い表情で歩いてたんだ?」
「っ‼?あの、その……」
そのストレートな物言いに、私は思わず言葉を詰まらせる。
そんな私に苦笑しながらも、結束プロは優しい表情を浮かべて口を開く。
「悪い、まどろっこしいのは苦手でさ。いきなりで言いづらいとは思うけど、誰かに話すことで、少しは楽になるかも知れないぜ?まあ、それも別に俺じゃなくてもいいんだけどな」
「えっと、結束プロは、その、なんで、私の、ことを……」
「んー純粋に気になったんだ。雨夜プロ、滅茶苦茶暗い顔をしてるからさ。よくいるんだよ、雨夜プロみたいに暗い表情で思い悩んでプロ決闘者を辞める新人。プロ決闘者になれる奴ってさ、プロになれるだけの人をワクワクさせることができる凄い所があるんだ。それなのに辞めちゃうなんて、勿体ないじゃないか」
「っ……」
「だから、せめて俺が気付いた範囲の人ぐらいは、悩んでるならどうに

かしてやりたいなって思ってさ」
「……優しいんですね、結束プロは」
「……いや、全然優しくなんかないさ。誰をも助けられるわけじゃないしな。ただ……折角気づけたのに何もしないのは死ぬほど後悔する。それが嫌だから声をかけた。それだけのことだよ」
そう言って結束プロは柔らかい表情で私を見る。
その目を見て、私は悟る。
この人は、本当にそれだけのために私に声をかけてくれたんだ。
偶々出会った私が悩んでいるのを見抜いて、心配だから声をかけてくれた。
本当に、それだけで……それだけのことが……今の私には凄く嬉しくって……
「あの、結束プロ……どうすれば、誰かを驚かせて、笑顔にさせるようなデュエルが出来るようになりますか？」
気付いたら、そんな言葉が私の口から飛び出していた。
「誰かを驚かせて、笑顔にさせるようなデュエル……か。それが雨夜プロがプロ決闘者になった理由だって考えてもいいのかな？」
「はい。私はお客さんに楽しんでもらえるデュエルがしたいんです」
私の言葉を聞き、結束プロは笑うこともなく、真剣な表情で考えはじめる。
「んー難しい話だな。俺はお客さんが楽しんで貰えるような工夫なんて全然してないしな」
「……そうなんですか？」
「俺はプロ決闘者にはならないといけなかったからなったってだけだし。他の人達は世界ランキング９位で凄いとか言うけど、俺はただ好きなようにデュエルをしてるだけだからな」
「……意外です。結束プロはいつも華麗な逆転劇を見せているから、そういうこともちゃんと考えてデュエルしてるんだと思ってました」
そんなことを口にする私に結束プロは苦笑しながら首を横に振る。
「俺が？ないない。そんなこと考えてると、肝心なところで決心が

鈍ったりするからな。狙って逆転が出来るようにするぐらいなら、最初から追い込まれないようにデュエルするって。まあ、上手くいかないから毎回追い込まれるんだけどな」
「そうなんですか……結束プロのデュエルが1番近いんです。私が目指している、誰かを驚かせて、笑顔にさせるようなデュエルに」
「俺のデュエルが？」
「はい。結束プロのデュエルには、いつも驚かされて、思わず笑顔になっちゃいますから」
結束プロは世界ランキング9位のプロ決闘者だけど、強いから人気があるというわけではない。
結束プロのデュエルは、どんな逆境に追い込まれても必ず逆転し、観客を驚かせるものだ。
その華麗な逆転劇を見せてくれるのが、結束プロのデュエルの魅力だと思う……私も、その、そんな結束プロのファンだったりするし。
だからこそ、毎回見事な逆転劇を見せている結束プロはそういうところも考えてデュエルをしてるんだと思っていた。
でも、実際は結束プロはそういうことは意識せずにデュエルをしている。
なら、誰かを驚かせて、笑顔にさせるようなデュエルをするにはどうしたら……
「んー俺のデュエルね……それなら1つだけ思い浮かぶことがあるな」
「⁉？本当ですか⁉？それは一体……」
結束プロの呟きに、私は思わず身を乗り出す。
そんな私に、結束プロは何でもないことのようにその言葉を口にした。
「全力で自分も楽しんでデュエルをする」
「えっ？自分も楽しんで……？」
「ああ。それだけは誰にも負けない自信があるからな」
結束プロの言葉に私は思わず首を傾げてしまう。
そんな私に、結束プロはさらに言葉を重ねる。

「雨夜プロはさ、楽しんでデュエルしてるか？」
「そんな、楽しんでデュエルする余裕なんて、私には……」
「雨夜プロとの今日のデュエル。雨夜プロ、こんな顰めっ面でずっと辛そうにデュエルしてたぜ」
結束プロは自分の頬を引っ張って深刻そうな表情を浮かべる。
私は、デュエルをしている時にそんな表情を？
そして結束プロは引っ張っていた頬を放すと、輝くような笑顔で私に笑いかけた。
「顰めっ面でデュエルしてても、誰も笑顔になんかならないぜ。誰かを笑顔にしたいなら、まずは自分が笑顔でいないとな」
「誰かを笑顔にしたいなら、自分が笑顔で……」
「だからこそ、自分も全力で楽しんでデュエルをする。楽しんでデュエルをしてたら、勝手に笑顔も浮かんでくるさ。俺は、いつもデュエルを全力楽しんでるぜ。対戦相手が次はどんな戦術がくるのか、どんなモンスターが見れるのか、そう思うだけでワクワクが止まらない。だからこそ、そんな戦術を、凄いモンスター達を打ち破ってみたいから、逆転してみせるんだ」
「……でも、私にはそんな実力なんて……」
そういって俯いてしまう私の肩を、結束プロは優しく叩いて口を開く。
「実力なんて、全力でやってけばいずれは付いてくるさ。雨夜プロとのデュエル、結構楽しかったぜ。あんな色々な召喚方法が使える奴なんてほとんどいないしさ。だから、変に肩肘張らずに、1度心行くまで楽しんでデュエルをしてみろよ。きっと、雨夜プロが目指している景色が見れるハズだぜ」
そういって、うーんと伸びをする結束プロは、そのまま視線を休憩所内の時計に移して表情を引攣らせた。
そして慌てた表情で残っていた缶コーヒーを一気飲みして私に向かって顔の前で手を合わせる。
「悪い‼？中途半端になっちまったけど、もうすぐ次の試合が始まっちまうから、先に失礼させて貰うな‼？」

そういって慌てて休憩所を出て行こうとする結束プロの背中に私は慌てて頭を下げた。
「あっ、あの、ありがとうございました!!?私……精一杯楽しんでデュエルをしてみます!!?」
そんな私の言葉に、結束プロは面白そうに笑った。
「だから、そんな変に肩肘張らなくていいんだって。雨夜プロは真面目過ぎるから、もう少し馬鹿になってみなよ」
「ええっ!??」
「んじゃ、また機会があったらな。そうだ、良かったら俺のデュエルを見てってくれよ。雨夜プロが言ってたみたいに、雨夜プロが笑顔になって、驚いてくれるようなデュエルが出来るように頑張ってみるからさ」
そういって、今度こそ結束プロは休憩所を出て行った。
そんな結束プロを見送り、私は結束プロに言われた言葉を唱えてみる。
「全力で楽しんでデュエルをする。変に肩肘張らず、もう少し馬鹿になってみる……うん、もう少し、頑張ってみよう」
そういって、私も休憩所から出て行って観戦席に向かう。
そこで見た結束プロのデュエルは、やっぱり私を笑顔にしてくれて……私がもう1度頑張るきっかけをくれた。
そして……遊騎さんのくれたアドバイスは、私を夢だったエンタメデュエリストにしてくれたんだ。

――――――

★

「あの時遊騎さんがアドバイスをくれたから、今の私はここにいる。プロ決闘者を辞めることもなく、誰かを驚かせて、笑顔にさせる決闘者……エンタメデュエリストになれたんだ」
「そんなことがあったんですか……やっぱり、師匠は昔から師匠な

んですね」
美傘さんが話してくれた過去に、私は思わず頬を緩ませる。
だって、昔の師匠も、今の師匠と変わらないってことが分かったから。
イカサマでプロリーグから追放されるなんてことがあっても……私が尊敬している師匠は、何も変わっていないってことが分かったから。
「私は今、最高に楽しんでデュエルをしてる。だからこそ、皆を驚かせて、華麗に遊花ちゃんに勝っちゃうよ!!?」
「私だって、美傘さんとのデュエルは楽しいです!!?だから、絶対に負けません!!?」
「行くよ、遊花ちゃん!!?私のターン、ドロー!!?……ふふっ、これで揃ったね」
ドローしたカードを見て、美傘さんは楽しそうな笑顔を浮かべながら、観戦している人達にも聞こえるように声を上げた。
「さあ、さあ、お立ち会い!!?これから皆さんにはお見せするのはエンタメデュエリスト、雨夜　美傘のとっておき!!?ペンデュラムスケールを超えた、ペンデュラム召喚を皆さんにお見せ致します!!?」
「ペンデュラムスケールを超えた……ペンデュラム召喚?」
「それではまずは下準備を致しましょう。魔法カード、魔導契約の扉!!?自分の手札から魔法カード1枚を選んで相手の手札に加え、その後、自分のデッキからレベル7・8の闇属性モンスター1体を自分の手札に加えるよ!!?」
「モンスターのサーチカード……ここで使っておきます!!?チェーンしてリバースカードオープン、速攻魔法、魔力の泉!!?相手フィールドの表側表示の魔法・罠カードの数だけ自分はデッキからドローし、その後、自分フィールドの表側表示の魔法・罠カードの数だけ自分の手札からカードを選んで捨てます!!?」
「っ!?ここにきてまた大量ドローカードを使ってくるか……やるね、遊花ちゃん」
「ただし、このカードの発動後、次の相手ターンの終了時まで、相手

フィールドの魔法・罠カードは破壊されず、発動と効果を無効化されなくなります。美傘さんのフィールドにある表側の魔法・罠は2枚のペンデュラムカードと雪の天気模様、晴れの天気模様、魔導契約の扉の5枚。私のフィールドに表側の魔法・罠は魔力の泉1枚。よって5枚ドローし、1枚手札を捨てます!!?」

「想定外に手札が増えちゃったけど問題ないかな?魔導契約の扉の効果で遊花ちゃんにはこのカードをプレゼント!!?」

「あ、ど、どうも……」

私の手札に美傘さんの手札から魔法カードが加わってくる。

私の手札を増やしてまで一体どんなモンスターを呼ぶんだろう?

「私がデッキから手札に加えるのは今回の主役、レベル8、オッドアイズファンタズマドラゴン!!?」

「オッドアイズファンタズマドラゴン……?」

美傘さんの手札に見たことのないオッドアイズが手札に加わる。

あれが美傘さんが言っていたペンデュラムスケールを超えるモンスターなの?

「さてさて、主役は手札に加わったわけだけど、もうちょっとだけ舞台を整えようかな?手札を1枚捨てて魔法カード、ペンデュラムコール!!?カード名が異なる魔術師ペンデュラムモンスター2体をデッキから手札に加え、このカードの発動後、次の相手ターン終了時まで自分のペンデュラムゾーンの魔術師カードは効果では破壊されなくなるよ!!?私はデッキから相克の魔術師と相生の魔術師を手札に加えるよ!!?さらに墓地に存在する晴天気ベンガーラの効果発動!!?このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドの表側表示の永続魔法・永続罠カード1枚を墓地へ送って、このカードを守備表示で特殊召喚し、手札から天気魔法・罠カード1枚を選んで自分の魔法&罠ゾーンに表側表示で置きます!!?私は雪の天気模様を墓地に送り、墓地の晴天気ベンガーラを特殊召喚し、手札から永続罠、オーロラの天気模様を置くよ!!?」

〈晴天気ベンガーラ〉☆3　天使族　炎属性

ＤＥＦ４００

フィールドに降り出した雪が溶けて現れたのは、光り輝くオーロラとパレットと筆を持ったモンスター。

「そして、このカードは通常召喚する場合、モンスター３体をリリースして召喚しなければならず、モンスターの代わりに自分フィールドの永続魔法・永続罠カードをリリースできる!!?私はフィールドの晴天気ベンガーラ、永続魔法、晴れの天気模様、永続罠、オーロラの天気模様を墓地に送り、手札からモンスターをアドバンス召喚するよ!!?」

「っ!!?この条件は霊華さんの時に使った……」

「世界を驚愕させる竜を超えし機兵!!?真竜機兵ダースメタトロン!!?」

〈真竜機兵ダースメタトロン〉☆９　幻竜族　光属性

ＡＴＫ３０００

フィールドにかかっていたオーロラと共に太陽が消え去り、空から剣と矛を持ち、黄金の鎧を身を纏った竜が降りてくる。

「真竜機兵ダースメタトロンの永続効果、サクリファイスレジスタンス!!?このカードは、このカードのアドバンス召喚のためにリリースしたカードと元々の種類が同じカードの効果を受けないよ!!?今回真竜機兵ダースメタトロンをアドバンス召喚するのにモンスター、魔法、罠を全て使ってるから、今の真竜機兵ダースメタトロンは全てのカード効果を受けないよ!!?」

「っ、完全耐性を持つモンスター……」

「そしていよいよ主役の登場だよ!!?手札のオッドアイズファンタズマドラゴンの効果発動!!?自分のペンデュラムゾーンにカードが２枚存在し、自分のＥＸデッキに表側表示のオッドアイズペンデュラムモンスターが存在する場合に、このカードを手札から特殊召喚する!!?ただし、この効果を発動するターン、自分はペンデュラム召喚でき

ない‼?」
「っ‼?・ペンデュラム召喚出来なくなる代わりにスケールを超えて手札から出せるからペンデュラムスケールを超えたペンデュラム召喚ってわけですか……」
「Ｉｔ，ｓ（さ、あ、）Ｓｈｏｗｔｉｍｅ（ショータイム、だ）‼?・限界を超えて揺れろ、魂の振り子‼?・地上に希望の橋を描け、虹のアーチ‼?・オーバースケールペンデュラム‼?・」
　美傘さんがそういうと空に今まで以上に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって勢いよく１つの光が流星のように舞い降り、辺りを土煙で包む。
　そして土煙が吹き払われると、骨を想起させる身体に様々な色の宝玉を身に付け、巨大な黒い角を持った眼に青い炎が宿らせた龍が現れた。
「その美しき２色の眼で観客を幻想の世界に誘え‼?・レベル８、オッドアイズファンタズマドラゴン‼?・」

〈オッドアイズファンタズマドラゴン〉☆８　ドラゴン族　闇属性
　ＡＴＫ３０００

「これが……ペンデュラムスケールを超えたペンデュラム召喚」
「それじゃあ行くよ?・バトル‼?・真竜機兵ダースメタトロンでヴァレルロードドラゴンを攻撃‼?・」
「くっ……ヴァレルロードドラゴンの効果発動‼?・ジャムバレット‼?・オッドアイズファンタズマドラゴンを対象にして攻撃力・守備力を５００ポイントダウンさせます‼?・この効果は相手ターンにも発動することができ、この効果に対して相手は効果を発動することが出来ません‼?・」
　ヴァレルロードが手についているリボルバーから弾丸を撃ち出し、ファンタズマドラゴンを怯ませる。

　オッドアイズファンタズマドラゴン

ＡＴＫ３０００→２５００

「頼んだよ、真竜機兵ダースメタトロン!!?スキュアブレイズ!!?」

「迎え撃って、ヴァレルロードドラゴン!!?銃声のイジェクトフレア!!?」

ヴァレルロードが粒子砲を放ち、ダースメタトロンは空から炎の槍を無数に振らせる。

それぞれの攻撃はぶつかり合うこと無くお互いの身体を貫いた。

「真竜機兵ダースメタトロンの効果発動!!?ディファレントサモン!!?アドバンス召喚したこのカードが相手によって破壊された場合、地・水・炎・風属性のいずれかの融合・シンクロ・エクシーズモンスター１体をＥＸデッキから特殊召喚するよ!!?」

「っ!!?」

風穴が空き消滅していくダースメタトロンを中心に次元に穴が開く。

そしてその穴の中から暴風と共にエメラルドのような体躯を持つ龍が現れた。

「私が呼び出すのはこのモンスター!!?観客を魅力し、歓声の旋風を巻き起こせ!!?オッドアイズボルテックスドラゴン!!?」

〈オッドアイズボルテックスドラゴン〉☆７　ドラゴン族　風属性

ＡＴＫ２５００

「融合の……風のオッドアイズ!!?」

「オッドアイズボルテックスドラゴンの効果発動!!?サンダーフウァールウインド!!?このカードが特殊召喚に成功した時、相手フィールドの表側攻撃表示モンスター１体を対象としてそのモンスターを持ち主の手札に戻す!!?対象はリンクリボー!!?」

「っ……ゴメンね、リンクリボー」

ボルテックスドラゴンがリンクリボーを中心にして高速で旋回すると、リンクリボーを包み込むように竜巻が発生する。

身体の小さなリンクリボーが竜巻に耐えられるハズもなく、目を回しながら吹き飛ばされて消えていった。
「今度は私のモンスターを返して貰おうかな？オッドアイズボルテックスドラゴンでＥＭペンデュラムマジシャンを攻撃‼？ボルテックスソニック‼？」
ボルテックスドラゴンは風を纏ってペンデュラムマジシャンに突撃し、すれ違いざまにその翼でペンデュラムマジシャンを斬り裂いた。
「破壊されたＥＭペンデュラムマジシャンはＥＸデッキに送られる。そしてお待ちかね、オッドアイズファンタズマドラゴンでスターヴヴェノムフュージョンドラゴンを攻撃‼？」
「えっ⁉？攻撃力はこっちの方が高いのに⁉？」
ファンタズマドラゴンがスターヴヴェノムに突撃していく。
スターヴヴェノムも負けじとファンタズマドラゴンに向かって突撃し、２体の龍がぶつかり合う。
「手札に存在するＥＭオッドアイズディゾルヴァーの効果発動‼？自分のペンデュラムモンスターが相手モンスターと戦闘を行うダメージステップ開始時、このカードを手札から特殊召喚し、その自分のモンスターはその戦闘では破壊されないよ‼？」

〈ＥＭオッドアイズディゾルヴァー〉☆８　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ２０００

フィールドに銀色の鎧に身を包み、錫杖を持った魔術師のようなモンスターが現れ、ファンタズマドラゴンの身体を包むように光のベールを魔法で生み出す。
「確かに戦闘破壊は出来なくなったけど、それに何の意味が……」
「ＥＭオッドアイズディゾルヴァーを出したのは追撃のため。　本命はこっちさ‼？オッドアイズファンタズマドラゴンの効果発動‼？ファントムワールド‼？このカードが相手モンスターに攻撃するダメージ計算時、その相手モンスターの攻撃力はそのダメージ計算時の

み、自分のＥＸデッキの表側表示のペンデュラムモンスターの数×１０００ポイントダウンする‼？」
「っ⁉？それじゃあ‼？」
「私のＥＸデッキにいるペンデュラムモンスターはＥＭドクロバットジョーカー、オッドアイズミラージュドラゴン、ＥＭペンデュラムマジシャン、貴竜の魔術師、そしてオッドアイズペンデュラムドラゴンの５枚‼？よって、スターヴヴェノムフュージョンドラゴンの攻撃力は５０００ポイントダウン‼？」
「っ、スターヴヴェノム‼？」
ファンタズマドラゴンの身体に様々な色の宝玉が輝き、その宝玉からＥＸデッキにいるペンデュラムモンスターの幻影が現れる。
現れた幻影はそれぞれの攻撃をスターヴヴェノムに放ち、スターヴヴェノムを怯ませる。

スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
ＡＴＫ２８００→０

「やっちゃえ、オッドアイズファンタズマドラゴン‼？幽幻のファンタズマミラージュ‼？」
「っ、迎え撃って‼？スターヴヴェノムフュージョンドラゴン‼？消失のヴェノムストリーム‼？」
スターヴヴェノムがファンタズマドラゴンに向かって毒のブレスを放つ。
しかし、毒のブレスはファンタズマドラゴンの身体をすり抜けて、ファンタズマドラゴンの姿が幻のように消えていく。
スターヴヴェノムが気配を感じて後ろを振り向くと、ファンタズマドラゴンの口元から青い炎のブレスが放たれる。
そのブレスに合わせて、ファンタズマドラゴンの宝玉からファンタズマドラゴンの姿をした幻影が現れ、ブレスと共にスターヴヴェノムを呑み込み、喰らい尽くした。

遊花　ＬＰ８０００→５５００

「うぅっ……破壊されたスターヴヴェノムフュージョンドラゴンの効果発動!!?ロンリーブレイク!!?融合召喚したこのカードが破壊された場合、相手フィールドの特殊召喚されたモンスターを全て破壊する!!?」

「っ、させないよ!!?オッドアイズボルテックスドラゴンの効果発動!!?ボルテックスディフェンド!!?このカード以外のモンスターの効果・魔法・罠カードが発動した時にＥＸデッキから表側表示のペンデュラムモンスター１体をデッキに戻すことで、その発動を無効にして破壊する!!?私はオッドアイズペンデュラムドラゴンをデッキに戻してその効果を無効にするよ!!?」

破壊されたスターヴヴェノムから大量の毒の瘴気が溢れ出す。

しかし、ボルテックスドラゴンが生み出した風の防壁にその瘴気は吹き飛ばされた。

「危なかった……追撃だよ!!?ＥＭオッドアイズディゾルヴァーでダイレクトアタック!!?ソルーションマジック!!?」

「きゃっ!!?」

ディゾルヴァーの杖から青い炎の球が放たれ、私の身体にぶつかる。

遊花　ＬＰ５５００→３５００

「よし、攻撃が通った!!?速攻魔法、セベクの祝福!!?自分のモンスターが直接攻撃によって相手に戦闘ダメージを与えた時、その数値分だけ自分のライフポイントを回復する!!?」

「っ、ここでライフ回復の速攻魔法……」

美傘　ＬＰ５００→２５００

美傘さんの５００まで削れていたライフポイントが２５００まで

回復する。
　このターンで負けることはないからランタンを使わなかったけど、これならランタンを使って攻撃を防いでおくべきだったかも知れない。
「メインフェイズ２、天空の虹彩の効果を発動!!?私はＥＭオッドアイズディゾルヴァー破壊してデッキからオッドアイズファントムドラゴンを手札に加えるよ!!?そしてオッドアイズアークペンデュラムドラゴンのペンデュラム効果発動!!?リターンペンデュラム!!?墓地から蘇って、オッドアイズペルソナドラゴン!!?」

〈オッドアイズペルソナドラゴン〉☆５　ドラゴン族　闇属性
　ＤＥＦ２４００

　美傘さんのフィールドに再びペルソナドラゴンが現れる。
　ペルソナドラゴンはＥＸデッキから特殊召喚したモンスターの効果を無効にでき、ボルテックスドラゴンも効果を無効にして破壊することができる。
　これを突破するのは、なかなか難しそうだ。
　……やっぱり、美傘さんは強い。
「私はカードを１枚伏せてターンエンド!!?」
「なら、エンドフェイズにリバースカードオープン!!?永続罠、リビングデッドの呼び声!!?自分の墓地のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚します!!?戻ってきて、サクリファイス!!?」
「っ、ここでサクリファイスか……」

〈サクリファイス〉☆１　魔法使い族
　ＡＴＫ０

　私のフィールドにサクリファイスが戻ってくる。
　サクリファイスならペルソナドラゴンの効果を受けないし、効果を使うことを警戒させればボルテックスドラゴンを牽制できる。

だから……次のターンで一気に叩く!!?

遊花　ＬＰ３５００　手札６
ー　ー　ー　△ー　　ー
ー　ー　ー　○ー
ー　　○
ー　ー　○□ー
△ー▲ー△　　▽
美傘　ＬＰ２５００　手札５

「私のターン、ドロー!!?私は金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のモンスター。
「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル１モンスターを特殊召喚します!!?対象はミスティックパイパーです!!?」
「サクリファイスが怖いからね、そこはスルーさせて貰おうかな」
「なら、金華猫の効果で墓地から戻ってきて、ミスティックパイパー!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

「次です!!?墓地に存在するジェットシンクロンの効果発動!!?手札を１枚墓地に送り、墓地からこのカードを特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合、除外されます!!?」
「オーバーレイユニットになってたからまた墓地に戻ってたのか……それもスルーだよ」

〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

「だったら、墓地に送られたドットスケーパーの効果発動!!?・デュエル中に1度、このカードが墓地に送られた場合に特殊召喚!!?・」
「ええっ!?・?・そ、それもスルーだよ」

〈ドットスケーパー〉☆1　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

現れたのはドットの身体を持つモンスター。
現れたモンスター達を見て、美傘さんは本当に楽しそうに笑う。
「まさかサクリファイスを警戒させて一気に5体もモンスターを並べちゃうなんてね。さあ、遊花ちゃんはここから何をするのかな?・リンク召喚?・エクシーズ召喚?・シンクロ召喚?・それとも、サクリファイスを使って融合召喚かな?・」
ワクワクした表情で私を見ている美傘さんに、私も笑顔を浮かべながら首を振る。
「いいえ、私がするのは今まで美傘さんに見せたどの召喚方法でもありません!!?・私はフィールドに存在するサクリファイス、金華猫、ミスティックパイパー、ドットスケーパー、4体のレベル1モンスターを墓地に送ることで墓地からモンスターを特殊召喚します!!?・」
「っ!?・?・私の真竜機兵ダースメタトロンみたいに聞いたことがない特殊な召喚条件!?・?・」
フィールドにいた4体のレベル1モンスターが粒子に代わり、私の正面に集まっていく。
そしてその粒子は重なり合い、大きな闇の巨人が、私を守るように現れた。
「おいで!!?・絶望を統べる優しき神!!?・絶望神アンチホープ!!?・」

〈絶望神アンチホープ〉☆１２　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ５０００

私が特殊召喚したアンチホープを見て、観戦席のざわめきが強くなる。
現れたアンチホープを見て、美傘さんは驚きに目を見張る。
「こ、攻撃力５０００のモンスター⁉？レベル１モンスターからそんなモンスターが出てきちゃうの⁉？」
美傘さんのライフポイントは残り２５００。
フィールドのオッドアイズボルテックスドラゴンを攻撃すればちょうどライフは０になる⁉？
「ここで決めます⁉？バトル⁉？絶望神アンチホープでオッドアイズボルテックスドラゴンに攻撃⁉？ホープブレイクパニッシャー⁉？」
「っ、迎え撃って⁉？オッドアイズボルテックスドラゴン⁉？ボルテックスソニック⁉？」
ボルテックスドラゴンは風を纏い、凄まじい速さでアンチホープに突撃していく。
それに対してアンチホープは背中の大剣を抜き、向かってくるボルテックスドラゴンを見据えて大剣を振るう。
一瞬の交差。
アンチホープは大剣を支えに膝をついたが、ボルテックスドラゴンはその身体を斬り裂かれ、粒子になって消えていった。
「これでーーー⁉？」
「手札から、ＥＭバリアバルーンバクを捨てて効果発動⁉？」
「っ⁉？そのカードはＥＭペンデュラムマジシャンで手札に加えてたカード？」
「自分のモンスターが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時、このカードを手札から捨てて、その戦闘で発生するお互いの戦闘ダメージは０になる⁉？」
「っ、クリボーみたいに戦闘ダメージを０にするモンスター……」
美傘さんを衝撃から守るようにシルクハットを被った風船のよう

なバクが現れ、衝撃を受け止めると粒子になって消えていく。
「そしてオッドアイズアークペンデュラムドラゴンのペンデュラム効果発動!!?リターンペンデュラム!!?デッキより現れて、美しき2色の眼で観客を魅了せよ!!?レベル7、オッドアイズペンデュラムドラゴン!!?」

〈オッドアイズペンデュラムドラゴン〉☆7　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ２０００

再びフィールドに現れるペンデュラムドラゴン。
このターンで決めることが出来なかったのは少し不味い。
アンチホープは強力な攻撃力を持っている代わりにこのモンスター以外の攻撃を封じてしまう。
だけど、美傘さんのデッキはペンデュラムモンスターが主体のデッキ。
何度倒しても戻ってくるペンデュラムモンスターを壁にされたら突破することが出来なくなる。
それに時間を稼がれてアンチホープを倒して攻撃する準備を整えられたらまた追い詰められる。
「っ、メインフェイズ2、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私が手をかざすと、目の前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル1モンスター1体。ジェットシンクロンをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚!!?もう1度、希望を守って!!?リンク1!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

サーキットの中から私に擦り寄るようにリンクリボーが現れる。
オッドアイズ達の攻撃を考えると、リンクリボーだけじゃまだ心許ない。

そんな時、魔導契約の扉で美傘さんから手渡されたカードが視界に入る。
……このカードならもう少し時間が稼げるかも。
「私は魔法カード、光の護封剣を発動!!?この効果でーーー」
「ふっふっふ、　使ったね？」
「ーーーえっ？」
美傘さんから渡された光の護封剣を発動した瞬間、美傘さんが悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべる。
そして美傘さんは観戦している人達にも聞こえるように声を上げた。
「さあ、さあ、お立ち会い!!?ここからがエンタメデュエリスト、雨夜美傘の本領発揮だよ!!?光の護封剣の発動にチェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?バーストリバース!!?」
「バーストリバース……？」
「このカードはライフポイントを２０００払って発動できる!!?」

美傘　ＬＰ２５００→５００

「そして自分の墓地のモンスター１体を選択して裏側守備表示で特殊召喚できるんだ!!?」
「裏側守備表示で？」
美傘さんが使った罠カードに私は首を傾げる。
確かに光の護封剣には効果処理として、相手フィールドに裏側表示モンスターが存在する場合、そのモンスターを全て表側表示にするという効果がある。
それを利用しようとしているのは分かるけど、美傘さんのデッキはペンデュラムモンスターが主体のハズだし、天気モンスターも効果の特性からリバースモンスターがいるとは考え辛い。
一体何をーーー
「私がセットするのはペンデュラムコールで墓地に送ったカード、ウェザーレポート!!?」

「ウェザー……レポート？」
また私が聞いたことのないモンスター名に首を傾げる。
しかし、観戦席にいたプロ決闘者達の人達がざわつき始める。
プロ決闘者の人達がざわつくようなカード……凄く、嫌な予感がする。
「そして光の護封剣の発動時の効果処理として、相手フィールドに裏側表示モンスターが存在する場合、そのモンスターを全て表側表示にする‼？さあ、驚け‼？ウェザーレポート‼？」

〈ウェザーレポート〉☆４　水族　水属性
ＤＥＦ１５００

フィールドに降り注ぐ光の剣により姿を現したのは傘を差した雪だるまのようなモンスター。
見たことがないモンスターだけど、一体どんな効果を……
警戒を露わにする私に、美傘さんは咳払いをしてから真剣な表情を浮かべる。
「コホン。デュエルの途中ですが、ここでお昼のニュースの時間です」
「へっ？」
「明日のバトルフェイズは暴風が吹き荒れるでしょう。全てを薙ぎ払われないように注意してくださいね」
「い、一体何を……」
急にお天気キャスターのような雰囲気で物騒なことを言いはじめた美傘さんに私は目を丸くしてしまう。
そんな私に美傘さんは再び悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべて、口を開いた。
「ウェザーレポートのリバース効果発動‼？シャインブレイク‼？相手フィールド上に表側表示で存在する『光の護封剣』を全て破壊し、破壊に成功した場合、次の自分のバトルフェイズを２回行う事ができる‼？」
「ええっ‼？」

美傘さんの言葉に、私や観戦していた人達から驚きの声がとぶ。
そんな中、ウェザーレポートが傘を振るうと光の剣が消えていく。
しまった、光の護封剣を渡してきたのはこのためだったんだ……
だけど、こんなのを予想しろだなんて無理があるよ‼?
動揺する私に美傘さんはドヤ顔を浮かべながら、笑いかけてくる。
「あれ～?乗せられちゃった?」
「むむむ～‼?まんまと乗せられちゃいましたよ～‼?」
「あはは‼?ごめんごめん。本当にかかるなんて私も思ってなくてさ。プロリーグの人達は色んなカードを覚えている人が多いから、こんなピンポイントメタなカードでも覚えて警戒する人がいるからなかなか決まらないんだよね」
そういって面白そうに笑う美傘さんを見ていると、何だか毒気が抜かれていく。
でも、状況が圧倒的に不利になったのは確かだ。
これで美傘さんは次のバトルフェイズを2回行うことができる。
それは実質美傘さんのモンスター全てが2回攻撃になるのと同じだ。
現在美傘さんのフィールドにいる4体のモンスターが全員攻撃するだけでも8回の攻撃回数になる。
「さてと、これで次の私のターン、バトルフェイズを2回行うことが出来る。私のモンスターの猛攻を、遊花ちゃんは耐え切れるかな?」
そういって笑顔を浮かべる美傘さんを、私は真っ直ぐ見つめ返す。
「……美傘さんが、人を驚かせて笑顔にさせることを信念としているように、私にだって譲れない信念があります」
「‼?遊花ちゃんの信念?」
「はい……それは、どんな逆境でも、笑顔で、楽しそうに切り抜けて、皆を驚かせるデュエルをすること‼?だから、どんな逆境でも私は諦めません‼?耐えることなら、私は誰にも負けない自信があります‼?だから、次の美傘さんの攻撃も耐え切って、絶対に切り抜けてみせます‼?」
そういって笑顔を浮かべる私を見て、美傘さんは一瞬目を丸くし

て、それから輝くような笑顔を浮かべた。
「それじゃあ、私の攻撃、耐え切れるものなら耐えてみろ‼?遊騎さんの弟子の本領、見せて貰うよ‼?」
「はい‼?私はカードを2枚伏せてターンエンドです‼?」
私は気合を入れてターンの終了を宣言する。
ここから、美傘さんの怒涛の攻撃があるハズ。
正直言って、今の手札じゃ少し心許ない。
だけど……諦めない。
絶対にこの逆境を耐え切って、逆転してみせるんだから‼?

遊花　ＬＰ３５００　手札２
ー▲▲ー　ー
ー○ー
☆　ー
□○□ー
△ーー△　▽
美傘　ＬＰ５００　手札４

第４２話　護り手ＶＳ暴風雨・逆境の後の希望

★

遊花　ＬＰ３５００　手札２
ーーー▲▲ー　　ー
ーー○ーー
　　☆　　ー
□□○□ー
△ーーー△　　▽
美傘　ＬＰ５００　手札３

「私のターン、ドロー‼?私は早速ペンデュラム召喚を行う‼?揺れろ揺れろ、魂の振り子‼?空に輝け、虹のアーチ‼?ペンデュラム召喚‼?飛び出せ、私のモンスター達‼?」
　美傘さんがそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって２つの光が舞い降りる。
「ＥＸデッキより現れろ‼?レベル４、ＥＭペンデュラムマジシャン‼?」

〈ＥＭペンデュラムマジシャン〉☆４　魔法使い族　地属性
ＡＴＫ１５００

　最初に姿を現したのはペンデュラムマジシャン。
　そしてその後ろから骨を想起させる身体を持ち、眼に青い炎が宿った龍が現れた。
「そして、美しき２色の眼で観客を幻惑せよ‼?レベル７、オッドアイズファントムドラゴン‼?」

〈オッドアイズファントムドラゴン〉☆７　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ２５００

「ＥＭペンデュラムマジシャンの効果発動‼？私はペンデュラムゾーンのＥＭレ・ベルマンとオッドアイズアークペンデュラムドラゴンを破壊して、デッキから　ＥＭ（エンタメイト）ギタートル、　ＥＭ（エンタメイト）レインゴートを手札に加えるよ」

「オッドアイズアークペンデュラムドラゴンを破壊しちゃうんですか？」

アークペンデュラムドラゴンには自分フィールドのオッドアイズカードが戦闘・効果で破壊された場合、自分の手札・デッキ・墓地からオッドアイズモンスター１体を選んで特殊召喚するペンデュラム効果がある。

なのに、そのカードを破壊してまでカードをサーチするの？

疑問を浮かべる私に、美傘さんはウィンクをしながら答える。

「そうだよ。これからやりたいことをするためにはどうしても１度ペンデュラムゾーンを空けないといけないからね」

「ペンデュラムゾーンを？」

「そうだよ。私はスケール３の相克の魔術師とスケール８の相生の魔術師でペンデュラムスケールをセッティング‼？」

美傘さんを挟むように光の柱が立ち上り、その光の中に２人の魔術師の姿が映る。

その魔術師の下には３と８の数字が浮かんでいたが、８の数字に突然ノイズが走り、４の数字に書き換わった。

「相生の魔術師は自分フィールドのカードが相手フィールドより多い場合、このカードのペンデュラムスケールは４になる。今は私のフィールドのカードの方が多いから４になるね」

今のスケールならペンデュラム召喚は出来ないけど、美傘さんはこのターンペンデュラム召喚を行なっているから関係ない。

それでもペンデュラムスケールを張り替えたということは、本命はペンデュラム効果ということだ。

「それじゃあ最後の準備といこうかな？私はレベル４、ＥＭペンデュ

ラムマジシャンとウェザーレポートでオーバーレイ‼？。２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼？」
「っ、ここでエクシーズ召喚⁉？」
美傘さんが手をかざすとペンデュラムマジシャンとウェザーレポートが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると漆黒の身体を持つ龍がフィールドに舞い降りる。
「逆境を覆す黒龍よ‼？その雷で観客の視線を集めよ‼？ランク４‼？ダークリベリオンエクシーズドラゴン‼？」
〈ダークリベリオンエクシーズドラゴン〉★４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２５００
「ダークリベリオンエクシーズドラゴン……」
ペンデュラムドラゴンやスターヴヴェノム、そして異世界で見たクリアウィングのように召喚方法の名前を持つドラゴン。
その力は、なんとなく想像がつく。
「ダークリベリオンエクシーズドラゴンの効果発動‼？アドヴァシティーリベリオン‼？オーバーレイユニットを２つ取り除き、相手フィールドの表側表示モンスター１体を対象としてそのモンスターの攻撃力を半分にし、その数値分このカードの攻撃力をアップする‼？」
「っ、させません‼？墓地から罠カード、スキルプリズナーを発動‼？このカードを除外し、絶望神アンチホープを選択して、このターン選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にします‼？」
「そんなカードまで落ちてたんだ……これはまだなにかありそうだね」
ダークリベリオンからアンチホープに雷が放たれるが、それを見えない壁が弾く。
攻撃力を半分にされたら、いくらアンチホープが戦闘破壊耐性をつ

けれても私のライフの方が先に尽きてしまう。
ホッと息を吐く私に、美傘さんはその笑みを強くする。
「それならいよいよ本命を呼び出すとしようかな‼？相生の魔術師のペンデュラム効果‼？1ターンに1度、自分フィールドのエクシーズモンスター1体とレベル5以上のモンスター1体を対象として発動できる。そのエクシーズモンスターのランクはターン終了時まで、そのレベル5以上のモンスターのレベルの数値と同じになる‼？私はダークリベリオンエクシーズドラゴンとオッドアイズペンデュラムドラゴンを対象にして、ダークリベリオンエクシーズドラゴンのランクをオッドアイズペンデュラムドラゴンのレベルと同じ7にする‼？」
「‼？ランクを上げるペンデュラム効果？」
光の柱の中にいる相生の魔術師が天空に向かって弓を放つと、その弓が闇の粒子となりフィールドに降り注ぐ。
その粒子を身体に浴びて、ダークリベリオンとペンデュラムドラゴンが咆哮を上げた。

ダークリベリオンエクシーズドラゴン
★4→7

「さらに相克の魔術師のペンデュラム効果‼？1ターンに1度、自分フィールドのエクシーズモンスター1体を対象として、このターンそのモンスターは、そのランクと同じ数値のレベルのモンスターとしてエクシーズ召喚の素材にできる‼？」
「えっ‼？」
相克の魔術師が手にしていた双刃剣を振るうと、光の粒子がダークリベリオンに向けて放たれる。
粒子を浴びたダークリベリオンは光り輝き、力強い咆哮を上げた。

ダークリベリオンエクシーズドラゴン
★7＝☆7

これでダークリベリオンがレベル７のモンスターとしてエクシーズ召喚に使えるようになった。
だけど、ただエクシーズ召喚をするだけならわざわざダークリベリオンのランクを上げなくても美傘さんのフィールドにはペンデュラムドラゴンとオッドアイズファントムの２体のレベル７モンスターが既に存在している。
……今まで美傘さんがしていた行動は何かしら明確な意味があった。
それならば、ダークリベリオンをエクシーズ召喚の素材にできるようにしたこの行動にも、きっと何か意味があるハズ。
そんな私の予感を裏付けるように、美傘さんは再び正面に手をかざし、その言霊を口にした。
「Ｉｔ，ｓ（さあ、）Ｓｈｏｗｔｉｍｅ（ショータイム）（だ）!!?私はドラゴン族レベル７モンスター、オッドアイズペンデュラムドラゴンとドラゴン族レベル７モンスター扱いとなっているダークリベリオンエクシーズドラゴンでオーバーレイ!!?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
ペンデュラムドラゴンとダークリベリオンが咆哮を上げながら光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、渦の中から炎を纏った竜巻がフィールドに光来する。
そして竜巻が霧散すると、その中から身体中に鋭利な棘が生え、真紅の身体を持つ２色の瞳の龍が姿を現した。
「覇王の名を持つ竜よ!!?その力で世界を驚愕させよ!!?覇王烈竜オッドアイズレイジングドラゴン!!?」
〈覇王烈竜オッドアイズレイジングドラゴン〉★７　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００

「覇王烈竜……オッドアイズレイジングドラゴン……」
美傘さんが呼び出したレイジングドラゴンの迫力に、私は思わず気圧される。
これが、美傘さんが呼び出そうとしていたモンスター。
……これだけは分かる。
このモンスターは、間違いなく強敵だ。
「エクシーズモンスターを素材としてエクシーズ召喚した覇王烈竜オッドアイズレイジングドラゴンは2つの効果を得る。1つは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる効果。もう1つが1ターンに1度、オーバーレイユニットを1つ取り除いて、相手フィールドのカードを全て破壊し、攻撃力をターン終了時まで、破壊したカードの数×２００ポイントアップする効果だよ!!?」
「全体破壊に連続攻撃!!?っ……なら、リバースカードオープン!!?罠発動!!?ダメージダイエット!!?このターン自分が受ける全てのダメージは半分になります!!?さらにチェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?貪欲な瓶!!?貪欲な瓶以外の自分の墓地のカード5枚を対象にそのカード5枚をデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから1枚ドローします!!?私は墓地のプロキシードラゴン、ヴァレルロードドラゴン、スターヴヴェノムフュージョンドラゴン、ゴーストリックデュラハンをＥＸデッキに、金華猫をデッキに戻してシャッフルし、カードを1枚ドローします!!?」
「破壊されるカードの枚数を減らしてきたね。でも、その程度じゃ防ぎきれないよ!!?覇王烈竜オッドアイズレイジングドラゴンの効果発動!!?レイジングブレイク!!?1ターンに1度、オーバーレイユニットを1つ取り除いて、相手フィールドのカードを全て破壊し、攻撃力をターン終了時まで、破壊したカードの数×２００ポイントアップする!!?」
レイジングドラゴンが世界を揺るがす程の咆哮を上げ、咆哮は衝撃波となり辺り一面を吹き飛ばす。
その衝撃波から私を庇うように立っていたアンチホープとリンクリボーは、身体を使って衝撃波を防ぎきると、粒子になって消えて

いった。
「アンチホープ……リンクリボー……ありがとう」
覇王烈竜オッドアイズレイジングドラゴン
ＡＴＫ３０００→３４００
これで私のフィールドは完全にがら空きになった。
そしてレイジングドラゴンの効果を聞いて、気が付いたことがある。
「このターン、美傘さんはウェザーレポートの効果で２度のバトルフェイズを行うことができる……そして、覇王烈竜オッドアイズレイジングドラゴンは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃できる効果を持っている……ということは……」
「気付いたみたいだね。覇王烈竜オッドアイズレイジングドラゴンの効果は　１度のバトルフェイズに２回攻撃できる効果。つまり、ウェザーレポートによる　２回目のバトルフェイズでも、２回攻撃を行うことができるというわけさ‼?」
つまりこのターン、レイジングドラゴンだけでも合計４回の攻撃を行うことが出来るということ。
フィールドのカードを全て破壊されたこの状況でその複数回攻撃を防ぐのは、至難の業だ。
それでも私は俯かず、真っ直ぐに美傘さんを見据える。
そんな私を見て、美傘さんは満面の笑みを浮かべた。
「遊花ちゃん、最後まで希望は捨てないって顔をしてるね。それでこそ、私も張り合いがあるってものだよ‼?私はオッドアイズペルソナドラゴンを攻撃表示に変更‼?」
オッドアイズペルソナドラゴン
ＤＥＦ２４００→１２００
「さあ、遊花ちゃんの信念を私に見せてみろ‼?バトルフェイズ１‼

？オッドアイズペルソナドラゴンでダイレクトアタック‼？インダビジュアリティディスガイズ‼？」
ペルソナドラゴンの周りに白い仮面がいくつも現れ、その仮面から一斉に衝撃波が私に向かって放たれた。

遊花　ＬＰ３５００→２９００

「っ……これぐらい、へっちゃらです‼？」
「ならどんどん行くよ‼？オッドアイズファントムドラゴンでダイレクトアタック‼？幻惑のファントムフレア‼？」
オッドアイズファントムが青白い炎のブレスを放ち、私のライフを削っていく。

遊花　ＬＰ２９００→１６５０

「これで決まるかな？覇王烈竜オッドアイズレイジングドラゴンでダイレクトアタック‼？」
「相手モンスターの攻撃宣言時、墓地に存在するクリボーンの効果発動‼？墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のクリボーモンスターを任意の数だけ対象として、そのモンスターを特殊召喚します‼？来て、サクリボー‼？クリアクリボー‼？虹クリボー‼？ジャンクリボー‼？クリボー‼？」

〈サクリボー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

〈クリアクリボー〉☆１　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

〈虹クリボー〉☆１　悪魔族　光属性
ＤＥＦ１００

〈ジャンクリボー〉☆1　機械族　地属性
ＤＥＦ２００

〈クリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

私のフィールド現れる5体のクリボー達。
それを見て美傘さんが一瞬目を見開くが、再び不敵な笑みを浮かべた。
「そんな防御手段があったなんてね。だけど、おかげでもっと面白いことができそうだよ‼?攻撃は続行‼?覇王烈竜オッドアイズレイジングドラゴンでクリボーを攻撃‼?烈風のインフェルノバースト‼?」
レイジングドラゴンが咆哮を上げると、レイジングドラゴンを中心に炎の竜巻がいくつも生まれる。
その竜巻はレイジングドラゴンの正面に集まっていき、竜巻は太陽のように炎が渦巻いている巨大な球体に変わる。
その球体に向けてレイジングドラゴンが咆哮をあげると、咆哮により生まれた衝撃波で炎の球体が勢いよく撃ち出され、クリボーを呑み込み、大爆発を起こした。
「っ、なんて破壊力……だけど、これならまだ防ぎきれます‼?」
「それはどうかな?遊花ちゃんの今の防御方法が逆に遊花ちゃんを苦しめることになる‼?速攻魔法、竜の闘志‼?このターンに特殊召喚された自分フィールドのドラゴン族モンスター1体を対象として、このターン、そのモンスターは通常の攻撃に加えて、相手フィールドのこのターンに特殊召喚されたモンスターの数まで、1度のバトルフェイズ中に攻撃できる‼?」
「っ⁉?それじゃあ……‼?」
「私はこのターンに特殊召喚したオッドアイズファントムドラゴンを対象にして発動‼?このターン遊花ちゃんが特殊召喚したモンス

ターは5体。つまり、オッドアイズファントムドラゴンは通常攻撃に加えて5回の攻撃を行うことができる!!?」
オッドアイズファントムが咆哮を上げると、周囲に魔法陣が現れ、魔法陣の中から5体のオッドアイズファントムの幻影が現れる。
「そして、竜の闘志の効果はこのターンの　1度のバトルフェイズを指定している。よって、ウェザーレポートによる2回目のバトルフェイズでも、通常攻撃に加えて5回の攻撃が行える。つまりこのターン、オッドアイズファントムドラゴンは合計で12回の攻撃を行うことができる!!?」
「12回攻撃のオッドアイズファントムドラゴン!?!?」
美傘さんの言葉に、観戦席が一気にざわつきはじめる。
それも当然だろう。
そんな攻撃回数のモンスターなんて聞いたことがないし、その上このオッドアイズファントムには複数回攻撃の付与によるデメリットが一切無いのだ。
この手の複数回攻撃が出来る場合はモンスターしか攻撃が出来なかったり、直接攻撃が出来なくなったりするカードがほとんどだが、今のオッドアイズファントムにはその手のデメリットが一切存在しない。
そんな数の直接攻撃……受けたらひとたまりも無い。
「さあ、どこまで耐え切れるかな?オッドアイズファントムドラゴンでジャンクリボーを攻撃!!?幻惑のファントムフレア!!?」
「っ……ゴメンね、ジャンクリボー」
オッドアイズファントムが青白い炎のブレスを放ち、ジャンクリボーはブレスに呑まれて消滅する。
「続けてオッドアイズファントムドラゴンで虹クリボーを攻撃!!?幻惑のファントムフレア!!?」
「っ、お願い、虹クリボー」
虹クリボーが私を庇うように、オッドアイズファントムのブレスを受けて粒子に変わる。
「まだまだ!!?オッドアイズファントムドラゴンでサクリボーを攻撃

!!?幻惑のファントムフレア!!?」
「頼んだよ、サクリボー」
サクリボーも私を庇うようにオッドアイズファントムのブレスに呑まれ消滅する。
「さあ、後がないよ!!?オッドアイズファントムドラゴンでクリアクリボーを攻撃!!?幻惑のファントムフレア!!?」
「っ、クリアクリボー……」
クリアクリボーはオッドアイズファントムの幻影から逃げようとしたが、周り込まれ、放たれたブレスに呑まれて消滅する。
これで私のクリボー達はいなくなった。
だけど、美傘さんには攻撃できるモンスターがまだまだ残っている。
「さあ、後がないよ!!?覇王烈竜オッドアイズレイジングドラゴンでダイレクトアタック!!?」
「っ、まだです!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札のゴーストリックランタンの効果発動!!?」
「!!?そのモンスターはゴーストリックデュラハンで回収してたカードだね」
「その攻撃を無効にし、このカードを手札から裏側守備表示で特殊召喚します!!?」
レイジングドラゴンの背後にジャックオーランタンのような幽霊が現れる。
背後に気配を感じたレイジングドラゴンは振り返って、炎の球体を放つが、そこには既にランタンの姿はなかった。
「また防がれちゃった……耐えることなら誰にも負けないというのも強ち間違いじゃないかもね。オッドアイズファントムドラゴンでセットモンスターを攻撃!!?幻惑のファントムフレア!!?」
「セットモンスターはゴーストリックランタンです!!?」
〈ゴーストリックランタン〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

ランタンが笑いながらオッドアイズファントムのブレスに呑まれて消滅する。
ありがとう、ランタン。
「このバトルフェイズは凌がれちゃうね。だけど、攻撃はまだ残ってるよ‼?オッドアイズファンタズマドラゴンでダイレクトアタック‼?幽幻のファンタズマミラージュ‼?」
「きゃっ‼?」

遊花　ＬＰ１６５０→１５０

ファンタズマドラゴンから青い炎のブレスとファンタズマドラゴンの姿をした幻影が現れ、私を呑み込んで大きくライフを減らす。
……なんとか、１度目のバトルフェイズは凌ぐことができた。
だけど、私のライフは残り１５０。
１度でも攻撃が通れば簡単に吹き飛んでしまうようなライフでしかない。
絶望的な逆境。
それでも……まだ諦めるには早すぎる。
「この攻撃を凌ぎきるなんて流石だね。なら、バトルフェイズ１を終了してバトルフェイズ２にーーー」
「今です‼?自分・相手のバトルフェイズ終了時に手札のクリボーンの効果発動‼?」
「っ‼?２枚目のクリボーン‼?」
「このカードを手札から捨て、このターンに戦闘で破壊され自分の墓地へ送られたモンスター１体を対象として特殊召喚します‼?私は墓地からゴーストリックランタンを特殊召喚‼?」

〈ゴーストリックランタン〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

再びフィールドにランタンが笑いながら姿を現わす。
それを見て、美傘さんは驚きの表情を浮かべた。
「またクリボーンが墓地に……まさか本当に耐えきるつもりなの⁉？っ、バトルフェイズ２⁉？オッドアイズペルソナドラゴンでゴーストリックランタンを攻撃⁉？インダビジュアリティディスガイズ⁉？」
「またお願い、ゴーストリックランタン⁉？」
ペルソナドラゴンの周りに白い仮面が浮かびあがり、その仮面から一斉に衝撃波がランタンに向けて放たれ、衝撃波を受けたランタンは笑いながら姿を薄れさせ、消滅した。
「オッドアイズファントムドラゴンでダイレクトアタック⁉？」
「相手モンスターの攻撃宣言時、墓地に存在するクリボーンの効果発動⁉？墓地のこのカードを除外して、もう１度私を守って、クリボー達⁉？サクリボー⁉？クリアクリボー⁉？虹クリボー⁉？ジャンクリボー⁉？クリボー⁉？」

〈サクリボー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

〈クリアクリボー〉☆１　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

〈虹クリボー〉☆１　悪魔族　光属性
ＤＥＦ１００

〈ジャンクリボー〉☆１　機械族　地属性
ＤＥＦ２００

〈クリボー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

再び私のフィールドに現れる5体のクリボー達。
それを見て、美傘さんは一瞬渋い表情を浮かべながらも、オッドアイズファントムに指示を出す。
「っ、攻撃はそのまま続行!!?そしてオッドアイズファントムドラゴンでジャンクリボー、クリボー、クリアクリボー、サクリボー、虹クリボーにそれぞれ攻撃!!?一斉掃射!!?幻惑のファントムフレア!!?」
5体のオッドアイズファントムの幻影がクリボー達に向かって一斉に青白い炎のブレスを放ち、クリボー達は消滅していく。
……ありがとう、クリボー達。
いっぱい破壊させちゃってゴメンね?
このお詫びはデュエルに勝つことで応えるから!!?
「でも、まだオッドアイズファントムドラゴンの攻撃は残っている!!?オッドアイズファントムドラゴンでダイレクトアタック!!?」
「まだです!!?墓地に存在する虹クリボーの効果!!?レインボーシールド!!?このカードが墓地に存在する場合、相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードを墓地から特殊召喚します!!?お願い、虹クリボー!!?」

〈虹クリボー〉☆1　悪魔族　光属性
DEF100

私を守るようにこのターン、3回目の虹クリボーが現れる。
オッドアイズファントムはそのまま虹クリボーに向かってブレスを放つ。
「なら、そのまま攻撃を続行してオッドアイズファントムドラゴンで虹クリボーを攻撃!!?幻惑のファントムフレア!!?」
「やらせません!!?墓地に存在するサクリボーの効果発動!!?自分のモンスターが戦闘で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外します!!?」
虹クリボーに向けて放たれる青白い炎のブレスを、サクリボーが代

わりに受けて消滅する。
「くっ‼?オッドアイズファンタズマドラゴンで虹クリボーを攻撃‼?幽幻のファンタズマミラージュ‼?」
「……お疲れ様、虹クリボー。何度も守って貰ってゴメンね」
ファンタズマドラゴンが放つ青い炎のブレスとファンタズマドラゴンの姿をした幻影が虹クリボーに向かっていく。
虹クリボーは私の方を向いて気にしないでと言うように嬉しそうに跳ねてから、ブレスに呑まれて消滅していった。
「流石にそろそろ防ぎきれないハズ‼?覇王烈竜オッドアイズレイジングドラゴンでダイレクトアタック‼?烈風のインフェルノバースト‼?」
「まだ……まだです‼?相手モンスターの攻撃宣言時、墓地からクリアクリボーの効果発動‼?相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のこのカードを除外し、自分はデッキから1枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替えます‼?」
「っ‼?まだそんな効果を残していたの‼?」
「私がドローしたのはクリフォトン‼?モンスターなので特殊召喚し、攻撃対象を移し替えます‼?」

〈クリフォトン〉☆1　悪魔族　光属性
ＤＥＦ２００

電球のような姿をしたモンスターが私を守るように現れ、レイジングドラゴンが放った炎の球体に呑まれて消滅する。
ここまでの攻撃を防ぎきった私を見て、美傘さんは嫌な予感を振り切るように首を振り、レイジングドラゴンに手をかざす。
「まさかここまで耐えられるなんて思わなかったよ。だけど、Ｉｔ（フィ）ｆｉｎａｌｅ（ナーレ）（だよ）‼?覇王烈竜オッドアイズレイジングドラゴンでダイレクトアタック‼?烈風のインフェルノバースト‼?」
レイジングドラゴンが世界を揺るがす程の咆哮をあげ、炎の竜巻を

集めて球体を作り、私に向かって撃ち出す。
眼前に迫る炎の球体。
その球体が直撃する瞬間、私は最後の手札を掲げて笑顔を浮かべた。
「ありがとう……みんな」
「っ⁉？」
「手札から、クリボーの効果発動‼？ダークエンヴェロップ‼？相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこのカードを手札から捨てて発動できる。その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージを０にする‼？」
「ここで２枚目のクリボー⁉？」
私の眼前で炸裂する炎の球体。
その爆炎から守るように、クリボーが立ち塞がり、爆炎を防ぎきると、私に向けてウィンクをしてから粒子になって消えていった。
「嘘……２回のバトルフェイズを本当に凌ぎきるなんて……」
美傘さんが唖然とした表情で私を見て、観戦席からも驚きの声があがる。
それも仕方がないことだと思う。
２回のバトルフェイズ、合計２０回のモンスターによる攻撃を防ぎきったのだ。
私だって、正直できるとは思わなかった。
だけど、私の思いに応えるように、私のデッキのお友達が力を貸してくれたから……私はまだ、戦える‼？
「っ、このままは少し不味いかな。メインフェイズ２、天空の虹彩の効果を発動‼？私はオッドアイズペルソナドラゴンを破壊してデッキからオッドアイズグラビティドラゴンを手札に加えるよ‼？」
「そう簡単にはいかせて貰えませんか……」
フィールドのペルソナドラゴンの姿が消え、美傘さんの手札に儀式のオッドアイズが加わる。
ペルソナドラゴンの攻撃力は１２００だったから、そのまま残ってくれればライフを削りにいきやすかったけど、流石にそう簡単には

いかせて貰えないみたい。
「私はこれでターンエンド!!?」

遊花　ＬＰ１５０　手札０
ー　　ー
ー　　ー
ー　　ー

ＡＴＫ３００

フィールドに現れたのは天使の羽を持つ私の最高の相棒。
相棒はやる気十分という風に拳を構える。
美傘さんはそんな私の相棒を見て困惑した表情を浮かべる。
「ハネクリボーを攻撃表示？一体何を……」
「やることはたった１つです‼？バトル‼？ハネクリボーで覇王烈竜オッドアイズレイジングドラゴンを攻撃‼？」
「ハネクリボーで攻撃⁉？迎え撃って、覇王烈竜オッドアイズレイジングドラゴン‼？烈風のインフェルノバースト‼？」
向かってくるハネクリボーに、レイジングドラゴンは炎の竜巻をいくつも発生させてハネクリボーに向けて放つ。
ハネクリボーは炎の竜巻を躱しながらレイジングドラゴンに近づいていく。
さあ、皆に見せてあげよう、相棒。
逆境を覆す、貴方達の力を‼？
「速攻魔法発動‼？バーサーカークラッシュ‼？」
「っ⁉？バーサーカークラッシュ⁉？」
「自分の墓地に存在するモンスター１体をゲームから除外し、ターン終了時まで、自分フィールド上に表側表示で存在するハネクリボー１体の攻撃力・守備力は、除外したモンスターと同じ数値になる‼？」
「除外したモンスターと同じ数値⁉？っ、確か遊花ちゃんの墓地には……‼？」
「私が除外するのは、絶望神アンチホープ‼？お願い、また貴方の絶望（きぼう）を相棒に貸して‼？」
私がそういうとアンチホープが薄っすらとフィールドに現れ、ハネクリボーと頷き合うと自分の身体を粒子に変える。
粒子に変わったアンチホープはハネクリボーの右手に集まっていき、右手の部分に巨大な闇の球体を作り出す。

ハネクリボー

ＡＴＫ３０００→５０００

「攻撃力５０００のハネクリボー⁉？」

竜巻を集め、炎の球体を生み出してハネクリボーに撃ち出すレイジングドラゴン。

ハネクリボーは放たれた炎の球体に向けて、闇の球体を纏った拳を突き出した。

「お願い、ハネクリボー‼？ディスペアクラッシュ‼？」

私の声と共にハネクリボーが拳を突き出すと、拳から闇の球体が撃ち出される。

闇の球体はレイジングドラゴンが放った炎の球体を一瞬で呑み込み、そのままレイジングドラゴンも呑み込んで轟音と共に跡形もなく消し飛ばす。

美傘さんはそれを見て、柔らかい表情で笑って目を閉じた。

「これが、遊花ちゃんの信念……遊騎さんの弟子の力、か……敵わないな」

美傘　ＬＰ５００→０

ーーーーーーー

「そこまで‼？勝者、栗原　遊花‼？」

「えっと……勝てたん、ですよね？」

師匠の声を聞いても実感が湧かず、呆然としたように呟く私を見て、美傘さんは優しい表情で手を叩く。

「おめでとう、遊花ちゃん。遊花ちゃんの信念、見せて貰ったよ」

「美傘さん……あ、ありがとうございます」

「最後まで希望を捨てなかった今のデュエルでの気持ち、失くさないようにね。そうすれば、遊花ちゃんはもっと強くなれるよ」

「……はい‼？私はもう諦めることだけはしないって、決めてますから‼？」

「……そっか。それならよかったよ」
「美傘さん、今回はありがとうございました!!?美傘さんとのデュエル、凄く驚いて、凄く楽しかったです!!?」
　そういって笑顔を浮かべる私を見て、美傘さんは少しの間きょとんとした表情を浮かべたが、その表情はすぐに満面の笑みに変わった。
「にひひ。デュエルには勝てなかったけど、遊花ちゃんを楽しませれたならよかったかな。……遊花ちゃん、辛いことや悲しいことがあったらいつでも私を呼んでね。どんな時でも、私が遊花ちゃんの最後の希望になってあげる。これでも、姉弟子だからね。絶対に遊花ちゃんを笑顔にして見せるからさ」
「!!?……はい!!?」
「それに、私に勝ったからには約束も果たさないといけないしね。さーて、どんなカードがいいかなー」
　そうやって美傘さんと笑い合いながら観戦席に戻る。
　観戦席に戻ると、桜ちゃんが優しい笑顔を浮かべながら声をかけてきた。
「お疲れ様、遊花。あの攻撃を耐えきるなんて、流石は遊花ね。私も親友として鼻が高いわ」
「ありがとう、桜ちゃん。私も耐えきれたのには自分でも少し驚いてるよ。……まあ、バトルフェーダーをドローしてたらもう少し楽だったんだけどね」
「バトルフェイズ自体を終了させれるものね。ハネクリボーが墓地にいただけでも耐えきれてたし、そう考えると少し微妙ね」
「でも、あれで良かったんだよ。結果的に耐えれたんだし、美傘さんの凄いデュエルも見れたから」
「まあ、バトルフェイズを2回行ったり、6回連続攻撃を行ったりしたのは本当に驚かされたわ。あれがエンタメデュエリストって奴なのね」
「ふふん。驚いた?驚いた?あれが美傘さんのエンタメデュエルだよ!!?」
　そういって得意げな表情を浮かべる美傘さん。

そんな美傘さんに闇先パイと不知火さんが苦笑しながら話しかける。
「驚かされたことは認める。実用性は皆無だけど」
「知識がある奴なら光の護封剣を渡された時点でウェザーレポートの存在に思い至るからな。そうなればウェザーレポートは死に札になる。まともな奴ならあんなピンポイントでしか発動しないカードをデッキには入らない。雨夜だからこそ出来ることだな」
「ふふん。そうでしょう、そうでしょう……あれ？もしかして私、馬鹿にされてません？」
「褒めてる褒めてる。破天荒な美傘にしか、あんなことできない」
「ああ、雨夜にしかあんなことはできんだろうからな。相手の知識がないことを前提としたコンボなど、俺には到底できん」
「ふふん。ですよね、ですよね……あれ？やっぱり褒められてないような？んー？」
闇先パイと不知火さんの言葉を聞いて、不思議そうに美傘さんが首を傾げる。
そんな話をしていると、師匠のアナウンスが私の耳に届いた。
「それじゃあ次の試合に移る。２回戦第３試合、無所属、結束　遊騎ＶＳデュエルアカデミア所属、九石　大地だ。俺の方はすでに準備が出来ているから、九石は試合の準備を頼む」
「!!?……そっか、次のデュエル、師匠と大地君だ」
「師匠とライバルのデュエルね、遊花はどっちを応援するの？」
「？どっちも応援するよ？」
「……まあ、遊花ならそう答えるわよね。そこが遊花らしいところではあるんだけど」
「???」
ニヤニヤと笑いながら、どちらを応援するのか尋ねてきた桜ちゃんにそう答えると、呆れたような表情を浮かべられ、意味が分からず首を傾げる。
どういう意味だったんだろう？
師匠と友達のデュエルなんだし……どっちも応援するものだよ

ね？

「くぅー‼？ようやく遊花の師匠とデュエルできるんだな‼？待ち遠しかったぜ‼？」

そんな話をしている内に、大地君が観戦席から師匠の前に移動して、デュエルディスクを構えながら嬉しそうに笑っていた。

そんな大地君に師匠は苦笑しながらも、優しい表情でデュエルディスクを構える。

「そういって貰えると光栄だな。俺も君とのデュエルを楽しみにしていた。お互い、いいデュエルにしよう」

「おう‼？いくぜ‼？」

『決闘‼？』

遊騎　ＬＰ８０００
大地　ＬＰ８０００

第４３話　英雄的ＶＳ反英雄・英雄に至る者

☆

遊騎　ＬＰ８０００
大地　ＬＰ８０００

「先攻は貰うぜ‼?・俺は電磁石(エレクトロマグネットウォリアー)の戦士βを召喚‼?・」

〈電磁石の戦士β〉☆３　岩石族　地属性
ＡＴＫ１５００

現れたのは身体が電磁石で出来ているのモンスター。
「電磁石の戦士βの効果発動‼?・このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから電磁石の戦士β以外のレベル４以下のマグネットウォリアーモンスター１体を手札に加える‼?・俺は磁石(マグネットウォリアー)の戦士δを手札に加えるぜ‼?・さらにライフを２０００払って、魔法カード、同胞の絆を発動‼?・」

大地　ＬＰ８０００→６０００

「このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行えなくなる代わりに、自分フィールドのレベル４以下のモンスター１体を対象として、そのモンスターと同じ種族・属性・レベルでカード名が異なるモンスター２体をデッキから特殊召喚する‼?・ただし、このカードの発動後、ターン終了時まで自分はモンスターを特殊召喚できない‼?・俺は電磁石の戦士βを選択して、来い‼?・電磁石(エレクトロマグネットウォリアー)の戦士α、電磁石(エレクトロマグネットウォリアー)の戦士γ‼?・」

〈電磁石の戦士α〉☆３　岩石族　地属性

ＡＴＫ１７００

〈電磁石の戦士γ〉☆３　岩石族　地属性

ＤＥＦ２０００

同胞の絆により現れたのは電磁石の戦士βのように身体が磁石で出来ている２体のモンスター。

１ターン目から電磁石の戦士を揃えてくるとは、楽しいデュエルになりそうだ。

「さらに電磁石の戦士αの効果発動!!?このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキからレベル８の磁石の戦士モンスター１体を手札に加えるぜ!!?俺はデッキから電磁石の戦士マグネットベルセリオンを手札に加える!!?俺はカードを２枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ８０００　手札５

|　|　|　|　|　|　|　|

|　|　|　|　|　|　|

|　　|　　|

|○○□|

|▲▲|　　|

大地　ＬＰ６０００　手札３

「俺のターン、ドロー!!?そっちが電磁石の戦士を揃えてきたなら俺も揃えてやらないとな。魔法カード、予想ＧＵＹ!!?自分フィールドにモンスターが存在しない場合にこのカードは発動できる。デッキからレベル４以下の通常モンスター１体を特殊召喚する!!?俺が呼び出すのはこのモンスターだ!!?来い、クィーンズナイト!!?」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性

ＤＥＦ１６００

俺の前に現れたのは赤い鎧を身に纏った女性の騎士。
「さらに俺はキングスナイトを召喚!!?」
〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００
クィーンズナイトの横に並び立ったのは黄金の鎧を身に纏った騎士。
そしてクィーンズナイトとキングスナイトはお互いに剣を掲げて更なる騎士を呼ぶ。
「キングスナイトの効果発動!!?自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト１体を特殊召喚する!!?集え、絵札の三銃士!!?来い、ジャックスナイト!!?」
〈ジャックスナイト〉☆５　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００
クィーンズナイトとキングスナイトの剣に合わせるように剣を掲げる青い鎧の騎士が現れる。
フィールドに揃った絵札の三銃士を見て、九石は楽しそうに目を輝かせる。
「絵札の三銃士キター!!?いきなり揃えてくるなんて、流石は遊花の師匠だぜ!!?」
「ふっ、これぐらいじゃ怯まないか。なら、斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
「!!?リンク召喚か!!?」
俺が正面に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
電磁石の戦士には相手ターン中にリリースすることで磁石の戦士を呼び出すことが出来る。

絵札の三銃士の攻撃力では残念ながら磁石の戦士シリーズの守備力を突破することは出来ない。
そして次のターンにはリリースした電磁石の戦士を使って手札に加えたベルセリオンが出てくるハズだ。
だったら、俺がやることは……
「召喚条件は戦士族モンスター２体!!?俺はクィーンズナイトとキングスナイトの２体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?追想に生きる王女!!?リンク２!!?聖騎士の追想　イゾルデ!!?」
〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

フィールドに現れたのは金髪と白髪の２人の女性型のモンスター。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?リンクレカレクション!!?リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター１体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキから魔装戦士ドラゴディウスを手札に加える!!?」
「!!?今度はペンデュラムモンスターか!!?」
「これだけじゃ終わらない!!?聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動!!?メモリーズギフト!!?デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター１体をデッキから特殊召喚する!!?俺はデッキから妖刀竹光、神剣―フェニックスブレード、最強の盾、ビッグバンシュート、閃光の双剣―トライスを墓地に送り、デッキからジャックスナイトを攻撃表示で特殊召喚!!?」
「っ!!?２体目のジャックスナイトだって!!?」
〈ジャックスナイト〉☆５　戦士族　光属性

ＡＴＫ１９００

俺のフィールドに２体のジャックスナイトが並び立つ。

「更に墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える。俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える。俺はスケール２の魔装戦士ドラゴディウスでペンデュラムスケールをセッティング‼？」

「いっ⁉？」

俺の隣に光の柱が立ち上り、その光の中に戦士の姿が浮かびあがり、下に２の数字が現れる。

「聖騎士の追想　イゾルデの効果で手札に加えたモンスターの効果は使えないんじゃ……」

「知らないのか？確かに聖騎士の追想　イゾルデで手札に加えたモンスターの効果は発動できない。だが、ペンデュラムモンスターをペンデュラムスケールとして使うのは魔法カード扱いだ。モンスター効果じゃない。そして当然、ペンデュラム効果も使用できる」

「うっ……そうだったのか。確か魔装戦士ドラゴディウスのペンデュラム効果は……」

「そして墓地に存在する神剣―フェニックスブレードの効果発動‼？自分の墓地に存在する戦士族モンスター２体をゲームから除外する事で、このカードを自分の墓地から手札に加える。俺は墓地からクィーンズナイトとキングスナイトの２体を除外して神剣―フェニックスブレードを手札に戻す。バトル‼？１体目のジャックスナイトで電磁石の戦士αを攻撃‼？」

「くっ、電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γの効果発動‼？それぞれ相手ターンにこのカードをリリースすることでデッキからレベル４のマグネットウォリアーモンスター１体を特殊召喚する‼？俺は電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γの３体をリリースし、デッキから、来い‼？磁石の戦士（マグネットウォリアー）α、磁石の戦士（マグネットウォリアー）β、磁石の戦士（マグネットウォリアー）γ‼？」

〈磁石の戦士α〉☆４　岩石族　地属性
ＤＥＦ１７００
〈磁石の戦士β〉☆４　岩石族　地属性
ＤＥＦ１６００
〈磁石の戦士γ〉☆４　岩石族　地属性
ＤＥＦ１８００

電磁石の戦士達の姿が消え、それぞれの電磁石の戦士に似た磁石の戦士が現れる。
「攻撃対象がいなくなったことで攻撃対象の変更だ。１体目のジャックスナイトで磁石の戦士γを攻撃‼？ジャックススラッシュ‼？」
磁石の戦士γをジャックスナイトが剣で斬り裂き、磁石の戦士γは爆散する。
「くっ‼？」
「続けて、２体目のジャックスナイトで磁石の戦士αを攻撃‼？ジャックススラッシュ‼？」
２体目のジャックスナイトも、磁石の戦士αを剣で斬り裂き爆散させる。
「さらに聖騎士の追想　イゾルデで磁石の戦士βを攻撃‼？そして俺はペンデュラムゾーンの魔装戦士ドラゴディウスの効果発動‼？」
「っ‼？」
「自分のモンスターが相手の表側表示モンスターと戦闘を行うダメージステップ開始時に手札を１枚捨て、その戦闘を行う相手モンスターの攻撃力・守備力は半分になる‼？」

磁石の戦士β
ＤＥＦ１６００→８００

「行け、聖騎士の追想　イゾルデ‼？ツインアタック‼？」

金髪と白髪の２人の女性が同時に飛び上がり、空中で一回転してから磁石の戦士βに飛び蹴りを加える。
吹き飛ばされた磁石の戦士βは１度は立ち上がったがそのままその場に倒れて爆散した。
「なんとか全ての磁石の戦士を倒せたな。メインフェイズ２。俺は光属性レベル５のジャックスナイト２体でオーバーレイ‼？２体の光属性モンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」
２体のジャックスナイトが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から純白の鎧を見に纏った戦士が降りてくる。
「星々を守りし光の戦士‼？セイクリッドプレアデス‼？」

〈セイクリッドプレアデス〉★５　戦士族　光属性
ＡＴＫ２５００

「おーかっけぇ‼？こんなモンスター見たことねぇ‼？」
現れたプレアデスを見て九石が目を輝かせる。
そういえば、俺もプレアデス以外のセイクリッドモンスターは１枚しか見たことないな。
もう１枚の効果からしてカテゴリーがあるんだと思うんだが……いや、今はそこはどうでもいいか。
「セイクリッドプレアデスは１ターンに１度オーバーレイユニットを１つ使い、相手のカード１枚を手札に戻すことができ、この効果は相手ターンにも使うことができる」
「っ、相手ターンにも使えるのか……厄介だな」
「俺はカードを２枚伏せてターンエンドだ」
「なら、エンドフェイズ‼？リバースカードオープン‼？罠発動‼？マグネットコンバージョン‼？自分の墓地のレベル４以下のマグネットウォリアーモンスターを３体まで対象としてそのモンスター

を手札に加える‼?俺は墓地の磁石の戦士α、磁石の戦士β、磁石の戦士γを手札に加えるぜ‼?」
「‼?一気に磁石の戦士を手札に加えたか……これは、来るかな?」

遊騎　ＬＰ８０００　手札３
△▲▲ー　ー
ーーーー○
ー　☆
ーーーーー
ー▲ーーー　ー
大地　ＬＰ６０００　手札６

「俺のターン、ドロー‼?よし、これならいけそうだな‼?」
「‼?」
「まずはコイツだ‼?磁石の戦士δを召喚‼?」
〈磁石の戦士δ〉☆４　岩石族　地属性
ＡＴＫ１６００

現れたのは今まで出てきた磁石の戦士とは異なる外見をした磁石の戦士。
「磁石の戦士δの効果発動‼?このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキからレベル４以下のマグネットウォリアーモンスター１体を墓地へ送る‼?俺はデッキから電磁石の戦士αを墓地に送るぜ‼?これで準備は整ったぜ‼?遊花の師匠にもアレを見せてやるぜ‼?」
「アレ?」
俺が首を傾げると、九石は爽やかな笑みを浮かべて自信満々に答えた。
「決まってるだろ、合体だ‼?自分の手札・フィールドから、磁石の戦士α、磁石の戦士β、磁石の戦士γを１体ずつリリースした場合にこ

のカードは特殊召喚できる‼？俺は手札に存在する磁石の戦士α、磁石の戦士β、磁石の戦士γをリリースし、手札から磁石の戦士マグネットバルキリオンを特殊召喚する‼？磁力合体‼？マグネットバルキリオン‼？」

どこからか磁石の戦士α、磁石の戦士β、電磁石の戦士γが身体を分離させながら現れ、１つになっていく。

αは身体と剣に、βは顔、γは羽根となり、合体が終わると、そこに巨大な磁石の戦士が現れた。

〈磁石の戦士マグネットバルキリオン〉☆８　岩石族　地属性

ＡＴＫ３５００

「っ……攻撃力３５００のモンスターがこうも簡単に出てくるのはやっぱり脅威だな」

「へへっ、カッコいいだろ？」

「確かにな。伊達に一時期特撮の合体メカとして使用されただけはある」

「お‼？遊花の師匠はそれも知ってるのか‼？」

「まぁ、俺も男だからな」

俺のそんな言葉に九石は目を輝かせる。

磁石の戦士シリーズは俺が子供の頃に特撮のメカとして使用されて一時期有名になった。

確か、電磁石戦隊オメガレンジャーって作品だった気がする。

高校生の主人公達が磁石の戦士に変身して、異次元世界より現れた悪の王国と戦う話だ。

俺も子供の頃、毎週欠かさず見てたよな。

「俺のこのデッキは子供の頃に見たその作品に憧れて作ったんだ。やっぱりああいうヒーローってカッコいいしさ」

「……そうか、その気持ちはわからなくもないな。さて、磁石の戦士マグネットバルキリオンを出してきたわけだが、そいつじゃこの布陣は突破できないぞ？」

「へへっ、まあ見てなって。磁石の戦士マグネットバルキリオンの効果発動!!?このカードをリリースし、自分の墓地の磁石の戦士α、磁石の戦士β、磁石の戦士γを1体ずつ対象として特殊召喚する!!?分離しろ、磁石の戦士マグネットバルキリオン!!?」

バルキリオンの身体が光ると、バルキリオンの身体が別れ、それぞれのパーツが集まって磁石の戦士α、磁石の戦士β、電磁石の戦士γが現れる。

〈磁石の戦士α〉☆4　岩石族　地属性
DEF1700

〈磁石の戦士β〉☆4　岩石族　地属性
DEF1600

〈磁石の戦士γ〉☆4　岩石族　地属性
DEF1800

せっかく出したバルキリオンを分離してきたということは、九石の狙いは他の召喚方法か？

そんな俺の予想を肯定するかのように九石は正面に手をかざす。

「俺はレベル4、磁石の戦士αと磁石の戦士γでオーバーレイ。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」

「エクシーズ召喚か……」

磁石の戦士αと磁石の戦士γが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けると指揮者のようなモンスターが現れる。

「その指揮で旋律を導け、ランク4、交響魔人マエストローク!!?」

〈交響魔人マエストローク〉★4　悪魔族　闇属性
DEF2300

「っ、交響魔人マエストローク……使わざるを得ないか。セイクリッドプレアデスの効果発動!!?ゾディアックリターン!!?オーバーレイユニットを1つ使い、1ターンに1度、相手のカード1枚を手札に戻す!!?この効果は相手ターンでも使用することが出来る!!?俺は交響魔人マエストロークを手札に戻す!!?」

プレアデスが放つ星の弾丸がマエストロークを弾き飛ばし、空間に穴を開けて消滅させる。

マエストロークにはオーバーレイユニットを使うことで相手のモンスターを裏側守備表示にする効果があったハズだ。

プレアデスを裏側守備表示にされたら効果が使えなくなるため使うしかなかったが、これでこれから出てくるモンスターを対処するのは難しくなったか。

「これで邪魔をされる心配もなくなったぜ。お次はコイツだ!!?繋がれ!!?絆が引き合うサーキット!!?」

「!!?今度はリンク召喚か……」

九石の前に巨大なサーキットが現れる。

「召喚条件は地属性モンスター2体!!?俺は磁石の戦士δと電磁石の戦士βをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?絆の守護獣!!?リンク2!!?ミセスレディエント!!?」

〈ミセスレディエント〉ＬＩＮＫ　２　獣族　地属性

ＡＴＫ１４００　↙?↘?

現れたのはもふもふとした身体をしている子犬のモンスター。

ミセスレディエントは地属性モンスターの能力を上昇させる効果を持っているが、問題なのはそちらではない。

「それじゃあ本題だぜ!!?磁石の戦士δの効果発動!!?このカードが墓地へ送られた場合、磁石の戦士δ以外のレベル4以下のマグネットウォリアーモンスター3体を自分の墓地から除外して手札・デッキか

ら磁石の戦士マグネットバルキリオン1体を召喚条件を無視して特殊召喚する‼?」
「くっ、やっぱり出てくるよな」
「俺は墓地に存在する磁石の戦士α、磁石の戦士β、磁石の戦士γを除外してデッキから磁石の戦士マグネットバルキリオンを特殊召喚だ‼?」

〈磁石の戦士マグネットバルキリオン〉☆8　岩石族　地属性
ＡＴＫ３５００

フィールドに再びバルキリオンが姿を現わす。
「さらにミセスレディエントの永続効果、ガイアハウリング‼?このカードがモンスターゾーンに存在する限り、フィールドの地属性モンスターの攻撃力・守備力は５００ポイントアップし、風属性モンスターの攻撃力・守備力は４００ポイントダウンする‼?」

磁石の戦士マグネットバルキリオン
ＡＴＫ３５００→４０００

ミセスレディエント
ＡＴＫ１４００→１９００

ミセスレディエントが遠吠えを上げると、九石のモンスターが強化されていく。
「まだまだいくぜ‼?自分の手札・フィールド・墓地から、電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γを1体ずつ除外した場合にこのカードは特殊召喚できる‼?俺は墓地に存在する電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γを除外し、手札から電磁石の戦士マグネットベルセリオンを特殊召喚する‼?電磁合体‼?マグネットベルセリオン‼?」
今度は電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γがそれぞ

れの身体を分離し、１つになっていく。
αが身体とサーベル、βが足、γが胴体と手、そして３体の頭部のパーツが合わさって１つの顔が出来る。
そして合体が終わると、そこにバルキリオンに似た巨大な磁石の戦士が現れた。

〈電磁石の戦士マグネットベルセリオン〉☆８　岩石族　地属性
ＡＴＫ３０００→３５００

「さらに電磁石の戦士マグネットベルセリオンの効果発動!!?マグネットサイドカッター!!?自分の墓地からレベル４以下のマグネットウォリアーモンスター１体を除外し、相手フィールドのカード１枚を対象としてそのカードを破壊する!!?俺は墓地に存在する電磁石の戦士αを除外してペンデュラムゾーンの魔装戦士ドラゴディウス破壊するぜ!!?」
「くっ……結構不味いか」
ベルセリオンが光の柱に向かってダッシュしながら横一文字にサーベルで斬り裂き、光の柱の中にいたドラゴディウスが破壊される。
これで戦闘で破壊するのは一気に厳しくなるか。
「それじゃあいくぜ!!?バトル!!?電磁石の戦士マグネットベルセリオンでセイクリッドプレアデスに攻撃!!?マグネットフライングカッター!!?」
「っ、迎え撃て、セイクリッドプレアデス!!?プラネットフォール!!?」
プレアデスが空間に穴を開け、空から小惑星を降らせる。
ベルセリオンは小惑星を躱しながら空中に跳躍し、サーベルに磁力を収束させると縦にサーベルを振り抜き、その衝撃波で小惑星ごとプレアデスを斬り裂いた。

遊騎　ＬＰ８０００→７０００

「くっ‼?」
「続けてミセスレディエントで聖騎士の追想　イゾルデを攻撃‼?ガイアファング‼?」
ミセスレディエントが勢いよく2人の女性に喰らい付き、粒子にして消滅させる。

遊騎　ＬＰ７０００→６７００

「っ‼?」
「そして磁石の戦士マグネットバルキリオンでダイレクトアタック‼?マグネットクロスカッター‼?」
バルキリオンは剣を掲げ、Ｘの字を描くように俺の身体を斬り裂いた。
「ぐあっ‼?」

遊騎　ＬＰ６７００→２７００

「まだ終わってないぜ‼?墓地に存在するマグネットコンバージョンの効果発動‼?墓地のこのカードを除外し、除外されている自分のレベル４以下のマグネットウォリアーモンスター1体を特殊召喚する‼?」
「っ⁉?さらに追撃がくるのか⁉?」
「俺は電磁石の戦士αを特殊召喚‼?」

〈電磁石の戦士α〉☆3　岩石族　地属性
ＡＴＫ１７００→２２００

「電磁石の戦士αの効果発動‼?俺はデッキから電磁石の戦士マグネットベルセリオンを手札に加える‼そして?電磁石の戦士αでダイレクトアタック‼?マグネットサーベル‼?」

「ぐっ‼?」

遊騎　　ＬＰ２７００→５００

電磁石の戦士αのサーベルに斬りつけられ、俺のライフは一気に５００まで削られる。

流石は治虫に勝っただけのことはある。

下手をすれば、このまま押しきられる。

「ぷっ、はははは‼?」

「⁉?な、なんだ?」

その事実に、俺は思わず笑い声を漏らしてしまい、九石は驚いた表情を浮かべる。

ああ……やっぱり、デュエルは面白い。

色々なことがあって、久しく忘れていたが、心の底からそう思う。

自分をここまで追い詰められる決闘者がいることが、堪らなくワクワクする。

「いや、こんなに楽しいデュエルは久しぶりだからさ……なんか燃えてきた」

「っ‼?」

「驚かせて悪かったな。さあ、デュエルを続けようぜ」

「……おう‼?俺はこのままターンエンドだ‼?」

遊騎　ＬＰ５００　手札３

ー▲▲ーー　　ー

ーーーーー

☆　　ー

ー○ー○○

ー▲ーーー　　ー

大地　　ＬＰ６０００　手札２

意気込んだのはいいものの、俺のライフはたったの５００。

おまけに破壊効果を持ち、破壊されても分離することで再合体を繰り返すベルセリオンがいる限り俺の勝機は薄い。
だからこそ、まずはベルセリオンを攻略しにいく‼?
「俺のターン、ドロー‼?よし、装備魔法、妖刀竹光を電磁石の戦士マグネットベルセリオンに装備する‼?」
「っ、そのカードは確か……」
ベルセリオンのサーベルが禍々しい竹刀に変わる。
「そして魔法カード、黄金色の竹光を発動‼?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローする‼?さらに墓地に存在する神剣―フェニックスブレードの効果発動‼?墓地のセイクリッドプレアデスと聖騎士の追想　イゾルデを除外してこのカードを手札に戻す。そして魔法カード、手札抹殺‼?」
「っ⁉?ここで手札交換か‼?」
「お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローする‼?俺は4枚、九石は2枚捨ててドローだ」
「くっ……電磁石の戦士マグネットベルセリオンを捨てられちまったか」
お互いに手札交換を行う。
よし、この手札ならベルセリオンを攻略できる‼?
「速攻魔法、大欲な壺‼?除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計3体を対象にそのモンスター3体を持ち主のデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから1枚ドローする‼?俺は除外されているクィーンズナイトとキングスナイトの2体、そして九石の除外から電磁石の戦士γをデッキに戻して1枚ドローする‼?」
「っ、しまった‼?」
俺はクィーンズナイトとキングスナイト、九石は電磁石の戦士γをデッキに戻して、俺は1枚ドローする。
電磁石の戦士γをデッキに戻されたことで、九石は苦い表情を浮かべる。

「電磁石の戦士マグネットベルセリオンが破壊された時に分離するためには電磁石の戦士α、電磁石の戦士β、電磁石の戦士γ、3体のモンスターが除外されていなければならない。つまり、1体でも除外からいなくなってしまえば、電磁石の戦士マグネットベルセリオンは分離することができない!!?」
「くっ!!?」
「これで心置きなく電磁石の戦士マグネットベルセリオンを倒すことができる!!?相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。来い、H・C（ヒロイックチャレンジャー）強襲のハルベルト!!?」

〈H・C　強襲のハルベルト〉☆4　戦士族　地属性
ATK1800→2300

俺の前に現れたのはハルバードを持った紫の鎧を纏った戦士。
ハルベルトもミセスレディエントの効果を受けて攻撃力が上がっているため、ミセスレディエントを倒すことが可能だ。
「さらに俺はH・C（ヒロイックチャレンジャー）ダブルランスを召喚!!?」

〈H・C　ダブルランス〉☆4　戦士族　地属性
ATK1700→2200

俺が出したのは2つの槍を持った白い戦士。
そのモンスターは出てくると同時に勇ましい雄叫びをあげる。
「H・C　ダブルランスの効果発動!!?召喚成功時に手札・墓地の同名モンスターを表側守備表示で特殊召喚する!!?俺は墓地のH・C　ダブルランスを特殊召喚だ!!?」
「さっきの手札抹殺で落ちたのか!!?」
「ただしこのカードはシンクロ素材にできず、このカードをエクシーズ素材とする場合、戦士族モンスターのエクシーズ召喚にしか使用できない」

〈Ｈ・Ｃ　ダブルランス〉☆４　戦士族　地属性
ＤＥＦ９００→１４００

もう１体ダブルランスが現れる。
そして俺は正面に手を翳す。
「俺は戦士族、レベル４の２体のＨ・Ｃ　ダブルランスでオーバーレイ‼？２体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」
２体のダブルランスが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこにいたのは赤い鎧を着た王者の風格を漂わせる戦士。
「光を纏て、闇を切り裂く孤高の王者‼？　Ｈ（ヒロイック）ー　Ｃ（チャンピオン）　エクスカリバー‼？」

〈ＨーＣ　エクスカリバー〉★４　戦士族　光属性
ＡＴＫ２０００

「ＨーＣ　エクスカリバー‼？確かそいつは……」
「ＨーＣ　エクスカリバーの効果発動‼？シャイニングフォース‼？オーバーレイユニットを２つ使い、このカードの攻撃力は、次の相手のエンドフェイズ時まで元々の攻撃力の倍になる‼？」
エクスカリバーの周りを漂っていたオーバーレイユニットがエクスカリバーに集まり、エクスカリバーの身体が光り輝いた。

ＨーＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ２０００→４０００

「まだ終わってないぜ。墓地に存在する神剣―フェニックスブレードの効果発動‼？墓地のＨ・Ｃ　ダブルランスとジャックスナイトを除

外してこのカードを手札に戻す。そしてそのまま装備魔法、神剣―フェニックスブレードをＨ－Ｃ　エクスカリバーに装備!!?攻撃力を３００ポイントアップする!!?」

エクスカリバーの背中にフェニックスブレードが現れ、エクスカリバーはフェニックスブレードを手に取って構える。

Ｈ－Ｃ　エクスカリバー
ＡＴＫ４０００→４３００

「攻撃力４３００!?」
「バトルだ!!?Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトでミセスレディエントを攻撃!!?ライトニングハルバード!!?」
ハルベルトが持っていたハルバードに雷が落ち、ハルベルトはそのまま雷を纏ったハルバードでミセスレディエントの身体を貫いた。

大地　ＬＰ６０００→５６００

磁石の戦士マグネットバルキリオン
ＡＴＫ４０００→３５００

電磁石の戦士マグネットベルセリオン
ＡＴＫ３５００→３０００

Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト
ＡＴＫ２３００→１８００

「Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトの効果発動!!?このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時にデッキからヒロイックカードを手札に加える!!?」
「くっ、だが俺も破壊されたミセスレディエントの効果発動!!?ガイアリターン!!?このカードが戦闘・効果で破壊された場合、自分の墓

地の地属性モンスター1体を対象としてそのモンスターを手札に加える!!?俺は墓地から電磁石の戦士マグネットベルセリオンを手札に加える!!?」
「ベルセリオンが手札に戻ったか……なら俺は、H・C　強襲のハルベルトの効果でデッキからH・C（ヒロイックチャレンジャー）ソードシールドを手札に加える!!?続けて、HーC　エクスカリバーで電磁石の戦士マグネットベルセリオンを攻撃!!?必殺剣　伏竜鳳雛!!?」
「くっ、迎え撃て!!?電磁石の戦士マグネットベルセリオン!!?マグネットフライングカッター!!?」
　ベルセリオンは空中に跳躍し、磁力を収束させようとするが、装備が妖刀竹光に変わっているため、収束に普段より時間がかかる。
　その隙にエクスカリバーはフェニックスブレードを構えて空に向けて力強く跳び上がり、空中で回転しながらベルセリオンの身体を真っ二つに斬り裂いた。

大地　ＬＰ５６００→４３００

「電磁石の戦士マグネットベルセリオンが破壊されることで墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?デッキから黄金色の竹光を手札に加える」
「くっ、電磁石の戦士マグネットベルセリオンは電磁石の戦士γがいないため分離することができない……だけど、磁石の戦士マグネットバルキリオンは残ったぜ!!?」
「いや、そうはさせない!!?速攻魔法、旗鼓堂々!!?のターン、自分はモンスターを特殊召喚できなくなる代わりに、自分の墓地の装備魔法カード1枚をその正しい対象となるフィールド上のモンスターに装備する!!?ただしこの効果で装備した装備魔法カードはエンドフェイズ時には破壊される!!?俺はこの効果で墓地に存在する装備魔法、閃光の双剣―トライスをHーC　エクスカリバーに装備する!!?」
　エクスカリバーが持ってたフェニックスブレードが背中の鞘に収まり、代わりにエクスカリバーの手元に1組の双剣が現れる。

「閃光の双剣―トライスを装備したモンスターは攻撃力が５００ポイントダウンする代わりにバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができる!!?」
「２回攻撃だって!?」

ＨＩＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ４３００→３８００

「これによりＨＩＣ　エクスカリバーはもう１度攻撃することができる!!?ＨＩＣ　エクスカリバーで磁石の戦士マグネットバルキリオンを攻撃!!?必殺剣　一箭双雕!!?」
「っ!!?迎え撃て!!?磁石の戦士マグネットバルキリオン!!?マグネットクロスカッター!!?」
バルキリオンがエクスカリバーをＸの字に斬り裂こうと剣を振るう。
そんなバルキリオンの剣を、エクスカリバーは片方の剣でいなし、バルキリオンの体制が崩れたところでバルキリオンの剣を弾き飛ばし、双剣をクロスするようにバルキリオンを斬り裂いた。

大地　ＬＰ４３００→４０００

「くっ……バルキリオンまでやられちまった。やっぱ遊花の師匠はつえぇ」
「メインフェイズ２、カードを２枚伏せてターンエンドだ」
「なら、エンドフェイズ!!?電磁石の戦士αの効果発動!!?このカードをリリースし、デッキから磁石の戦士δを特殊召喚する!!?さらにチェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?死魂融合!!?自分の墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを裏側表示で除外し、その融合モンスター１体をＥＸデッキから融合召喚する!!?」
「何っ!!?」

「この効果で特殊召喚したモンスターはそのターン攻撃できないけど、今は俺のターンじゃないから関係ない‼?遊花の師匠にも、最強の磁石の戦士を見せてやるぜ‼?」
「っ……」
「俺は墓地にある磁石の戦士マグネットバルキリオンと電磁石の戦士マグネットベルセリオンを裏側で除外して融合‼?超電磁合体‼?」
九石がそういうと墓地からバルキリオンとベルセリオンの姿が現れ、それぞれの身体を分離し、１つになっていく。
電磁石の戦士αと電磁石の戦士βのパーツがケンタウロスのような足になり、電磁石の戦士γが下半身を構成し、そこに磁石の戦士γの羽根がつく。
磁石の戦士αが上半身を構成し肩から砲台が現れ、そこに磁石の戦士βの顔がつき、その顔に磁石と電磁石両方のマグネットとヘルメットのようなパーツが装着される。
最後に電磁石の戦士αと磁石の戦士αのサーベルと剣が合わさり１つの巨大な剣になり、そこにバルキリオンとベルセリオンが合わさった巨大な磁石の戦士が現れた。
「完成‼?超電導戦機インペリオンマグナム‼?」

〈超電導戦機インペリオンマグナム〉☆１０　岩石族　地属性
ＡＴＫ４０００

「超電導戦機インペリオンマグナム……磁石の戦士の切り札か」
「超電導戦機インペリオンマグナムは1ターンに1度、相手がモンスターの効果・魔法・罠カードを発動した時にその発動を無効にし破壊できる。さらに表側表示のこのカードが相手の効果でフィールドから離れた場合、磁石の戦士マグネットバルキリオン、電磁石の戦士マグネットベルセリオン、１体ずつを手札・デッキから召喚条件を無視して特殊召喚できるんだ‼?」
つまり破壊するなら無効効果を掻い潜り、戦闘によって勝つしかないってわけだ。

その上、今の俺のフィールドには攻撃表示のハルベルトがいる。
おまけに、九石の動きはまだ終わっていない。
「さらに電磁石の戦士αの効果で磁石の戦士δを特殊召喚!!?」
〈磁石の戦士δ〉☆4　岩石族　地属性
ＡＴＫ１６００
「磁石の戦士δの効果発動!!?俺はデッキから電磁石の戦士γを墓地に送るぜ!!?」
電磁石の戦士γが墓地に送られたことで後は電磁石の戦士βが出るだけで再びベルセリオンが姿を現わす。
……これは結構面倒なことになったな。
「エンドフェイズ。旗鼓堂々の効果で装備された閃光の双剣―トライスは破壊され、ＨＩＣ　エクスカリバーの下がっていた攻撃力が戻る」
ＨＩＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ３８００→４３００
遊騎　ＬＰ５００　手札１
▲▲▲△▲　ー
ーー○ーー
○　○
ーーーー○
ーーーーー　ー
大地　ＬＰ４０００　手札３
「俺のターン、ドロー!!?おっ、きたか」
九石がドローしたカードを見て、嬉しそうな表情を浮かべる。
この状況でドローして喜ぶということは電磁石の戦士βを引かれ

たか？
　そう考えて警戒する俺を見て、九石は子供のような笑顔で俺に笑いかけた。
「よっしゃ、俺のヒーローを遊花の師匠に見せてやるぜ‼？」
「ヒーロー？」
　首を傾げる俺に九石がドローしたカードを掲げる。
　その瞬間、カードから溢れ出す微細な闇が見えた気がした。
「相手フィールド上にモンスターが存在する場合、このカードはモンスター1体をリリースして召喚できる‼？俺は磁石の戦士δをリリースしてＥ－ＨＥＲＯ（イービルヒーロー）マリシャスエッジをアドバンス召喚‼？」
「っ、Ｅ－ＨＥＲＯ⁉？」

〈Ｅ－ＨＥＲＯマリシャスエッジ〉☆７　悪魔族　闇属性
　ＡＴＫ２６００

　現れたのは身体中に棘がついている悪魔のような姿をしたヒーロー。
「へへっ、カッコいいだろ？」
「……ヒーローって言うには禍々しい外見をしてるけどな」
「Ｅ－ＨＥＲＯマリシャスエッジはこのカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与えることができる‼？」
「っ、貫通効果持ちかよ……」
　今の俺のライフは５００。
　これ以上まともに攻撃を受けるわけにはいかない。
「いくぜ、バトル‼？」
「なら、バトルフェイズ開始時、Ｈ・Ｃソードシールドの効果を発動‼？ヒロイックモンスターが存在する時に手札から墓地に送ることでこのターン、戦闘によって発生するダメージは０になり、自分フィールド上のヒロイックモンスターは戦闘で破壊されない‼？」
「させないぜ‼？超電導戦機インペリオンマグナムの効果発動‼？

スーパーマグネットキャノン‼?1ターンに1度、相手がモンスターの効果・魔法・罠カードを発動した時にその発動を無効にし破壊する‼?」

フィールドに薄っすらと現れたソードシールドをインペリオンマグナムが背中の砲台からレーザーを発射し、破壊する。

「これで防ぐものは無くなったぜ‼?EーHEROマリシャスエッジでH・C　強襲のハルベルトを攻撃‼?マリシャススライサー‼?」

マリシャスエッジが跳び上がると、身体中の棘が伸び、その棘をハルベルトに突き刺すように回転蹴りを放つ。

だが、まだ終わっちゃいない‼?

「墓地に存在するタスケナイトの効果発動‼?このカードが墓地に存在し、自分の手札が0枚の場合、相手モンスターの攻撃宣言時にデュエル中に1度だけ発動出来る‼?このカードを墓地から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する‼?」

「っ⁉?そんなカードまで墓地に落ちてたのか‼?」

〈タスケナイト〉☆4　戦士族　光属性

ATK1700

タスケナイトがハルベルトを庇うように現れ、マリシャスエッジの蹴りを受け止め、弾き返す。

それを見て、九石はさらに笑みを強くする。

「くぅー‼?やっぱり遊花の師匠なだけあって防御が硬いな‼?へへっ、これだからデュエルは面白いんだ‼?メインフェイズ2、俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ‼?」

「エンドフェイズ、上昇していたHーC　エクスカリバーの攻撃力は元に戻る」

HーC　エクスカリバー

ATK4300→2300

遊騎　ＬＰ５００　手札０
▲▲▲△▲　ー
ー○○ーー
○　○
ーー○ーー
ーー▲ーー　ー
大地　ＬＰ４０００　手札２

「俺のターン、ドロー!!?」
なんとか防ぎきったがこのままじゃジリ貧だ。
少なくとも、インペリオンマグナムはどうにかしないと後がない。
「墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動!!?自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローする。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外する!!?俺はフィールドのＨーＣ　エクスカリバーをＥＸデッキに戻し、カードを1枚ドローする!!?」
「それも手札抹殺の時に落ちたカードか!!?」
「俺は装備魔法、折れ竹光をタスケナイトに装備する!!?」
タスケナイトの手元に折れ竹光が現れ、タスケナイトは折れ竹光を手に持って構える。
「そしてリバースカードオープン!!?魔法カード、黄金色の竹光を発動!!?折れ竹光があるためカードを2枚ドローする!!?」
「ここで2枚のドローか……でも、ここで無効にするとＨーＣ　エクスカリバーが出た時に効果を無効にできなくなっちまうからここは通すぜ」
俺の手札に2枚のカードが加わる。
よし、この手札なら……!!?
「俺は戦士族、レベル4のＨ・Ｃ　強襲のハルベルトとタスケナイトでオーバーレイ!!?2体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」

「っ、やっぱりもう1度くるよな」
ハルベルトとタスケナイトが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると再びフィールドに現れる赤い鎧を着た王者の風格を漂わせる戦士。
「もう1度、力を貸してくれ‼?光を纏て、闇を切り裂く孤高の王者‼?HーCエクスカリバー‼?」

〈HーC　エクスカリバー〉★4　戦士族　光属性
ＡＴＫ２０００

「だけど、HーC　エクスカリバーの効果を使えば超電導戦機インペリオンマグナムで破壊するぜ?」
「だったら無理矢理にでも効果を使わせて貰うだけだ。装備魔法、月鏡の盾をHーC　エクスカリバーに装備‼?このカードの装備モンスターが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時のみ、装備モンスターの攻撃力・守備力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力と守備力の内、高い方の数値を＋１００ポイントアップした数値になる‼?」
「なんだって⁉?っ、なら超電導戦機インペリオンマグナムの効果発動‼?スーパーマグネットキャノン‼?月鏡の盾の発動を無効にして破壊だ‼?」
エクスカリバーの手元に現れようとしていた月鏡の盾をインペリオンマグナムが背中の砲台からレーザーを発射し、破壊する。
「だか、これで効果を止めることは出来なくなった‼?HーC　エクスカリバーの効果発動‼?シャイニングフォース‼?オーバーレイユニットを2つ使い、このカードの攻撃力は、次の相手のエンドフェイズ時まで元々の攻撃力の倍になる‼?」
エクスカリバーの周りを漂っていたオーバーレイユニットがエクスカリバーに集まり、エクスカリバーの身体が光り輝いた。

ＨＩＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ２０００→４０００

「さらに墓地に存在する神剣―フェニックスブレードの効果発動!!?墓地のＨ・Ｃ　強襲のハルベルトとタスケナイトを除外してこのカードを手札に戻す。そしてそのまま装備魔法、神剣―フェニックスブレードをＨＩＣ　エクスカリバーに装備!!?攻撃力を３００ポイントアップする!!?」

エクスカリバーの背中に再びフェニックスブレードが現れ、エクスカリバーはフェニックスブレードを手に取って構える。

ＨＩＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ４０００→４３００

「くっ、また攻撃力が４３００になったか!!?」
「バトル!!?ＨＩＣ　エクスカリバーで超電導戦機インペリオンマグナムを攻撃!!?必殺剣　伏竜鳳雛!!?」
「迎え撃て!!?超電導戦機インペリオンマグナム!!?マグネットストームマキシマム!!?!!?」

インペリオンマグナムの背中の砲台と巨大な剣に磁力を収束させると、エクスカリバーに向けて巨大な剣からＸの字を描くように衝撃波を放つ。

エクスカリバーは放たれた衝撃波を躱して空に向けて力強く跳び上がる。

空中に跳び上がり身動きが取れないエクスカリバーに背中の砲台からレーザーを放つインペリオンマグナムだが、エクスカリバーは身体を捻らせてレーザーを躱すとそのままインペリオンマグナムを斬り裂いた。

大地　ＬＰ４０００→３７００

「ぐっ……」
「まだ終わっちゃいない!!?手札を1枚捨ててリバースカードオープン!!?速攻魔法、アクションマジック―ダブルバンキング!!?自分フィールドのモンスターは、このターン戦闘で相手モンスターを破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃できる!!?」
「なっ!!?また連続攻撃だって!!?」
「続けて、ＨーＣ　エクスカリバーでＥーＨＥＲＯマリシャスエッジを攻撃!!?必殺剣　二の太刀!!?竜駒鳳雛!!?」
「ぐっ、迎え撃て!!?ＥーＨＥＲＯマリシャスエッジ!!?マリシャススライサー!!?」
　エクスカリバーとマリシャスエッジが同時に跳び上がると、エクスカリバーはフェニックスブレードを構えてマリシャスエッジに向けて振り抜き、マリシャスエッジは身体中の棘を伸ばし、エクスカリバーに回転蹴りを放つ。
　お互いの影が交差し、フィールドに降りた瞬間、エクスカリバーが崩れるように膝をつく。
　それを見て、マリシャスエッジは笑いながら振り返るが、次の瞬間、身体に亀裂が入り、倒れるように粒子になって消えていった。

大地　ＬＰ３７００→２０００

「っ……まさかまた2回攻撃をしてくるなんてな」
「メインフェイズ2、カードを1枚伏せてエンドフェイズにシャッフルリボーンのデメリットが発動するが、俺の手札は0だから除外は無しだ。俺はこれでターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ５００　手札０
▲▲ー△▲　ー
ーーーーー
ー　○
ーーーーー

ーー▲ーー　ー
大地　ＬＰ２０００　手札２

「ははっ、やっぱ遊花の師匠スッゲー強ええや‼?ライフでは俺が勝ってるハズなのに全然追い詰めれてる気がしねぇ‼?くっー‼?ワクワクが止らねぇぜ‼?」
「……ふっ、本当に君は楽しそうにデュエルをするな」
「へへっ、当たり前だぜ。デュエルは何が起こるか分からないから楽しいんだ。次の俺のドローで、今の状況が一気に変わるかも知れない。そう考えるとワクワクするんだ。遊花の師匠は違うのか?」
「っ……」
そう言って純粋な目で俺を見てくる九石に、一瞬言葉が詰まる。
俺は、デュエルが楽しいだけのものではないということを知っている。
異世界での経験や、入院することになった闇のカードに関するデュエルは、怪我どころか一歩間違えれば死んでしまうようなものだった。
だけど……
「……ああ、そうだな。デュエルは楽しいものだ」
……それでも、俺の中にあるデュエルが楽しいという思いは変わっていない……いや、変わっちゃいけない。
辛い経験をしているのに、こんな俺のデュエルを見て俺の事を師匠と呼んでくれる遊花がいるように、デュエルというのは誰かの希望になれるものだ。
だからこそ、デュエルが楽しいという思いだけは捨てちゃいけない。
「認めるよ、九石　大地。君は立派なデュエリストだ」
「‼?」
「だからこそ、俺も本気で君を迎え撃つ。君のワクワクで、俺の本気を超えてみな‼?」
「……へへっ、おう‼?俺のターン、ドロー‼?魔法カード、貪欲な

壺‼?墓地に存在するミセスレディエントをＥＸデッキに、２体の磁石の戦士マグネットバルキリオン、電磁石の戦士マグネットベルセリオン、磁石の戦士δをデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする‼?」

「っ、ここにきてドローカードか……」

九石が勢いよく２枚のカードをドローする。

そして九石はドローしたカードを見て満面の笑みを浮かべた。

「へへっ、引いたぜ。遊花の師匠に見せてやる。俺の最強のヒーローを‼?」

「最強のヒーロー……来るか、さっきのデュエルで治虫を倒したあのモンスターが‼?」

「魔法カード、ダークコーリング‼?このカードは自分の手札・墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、ダークフュージョンの効果でのみ特殊召喚できる融合モンスター１体をダーク・フュージョンによる融合召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚する‼?」

「っ、やはり来たかダークコーリング‼?」

「俺がこの効果で除外するのは、墓地に存在する悪魔族モンスター、ＥＭＨＥＲＯマリシャスエッジと、岩石族モンスター、超電導戦機インペリオンマグナム‼?悪魔の如き強さを誇る英雄よ、磁石の巨人と交わりて、無敵の力を解き放て‼?」

マリシャスエッジとインペリオンマグナムの姿が闇を纏った渦の中に吸い込まれていく。

そして渦が弾けると、中から現れるのは微細な闇を放ち悪魔の翼を持つ身体が石で出来た戦士。

「融合召喚‼?　ＥＭＨＥＲＯ（イービルヒーロー）ダークガイア‼?」

〈ＥＭＨＥＲＯダークガイア〉☆８　悪魔族　地属性

ＡＴＫ?

「ＥＭＨＥＲＯダークガイアの元々の攻撃力は、このカードの融合素

材としたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる‼？ＥＭＨＥＲＯマリシャスエッジは２６００、超電導戦機インペリオンマグナムは４０００。つまり、その攻撃力は‼？」

ＥＭＨＥＲＯダークガイア
ＡＴＫ？→６６００

「攻撃力……６６００‼？」
「これで決まりだ‼？バトル‼？ＥＭＨＥＲＯダークガイアでＨＭＣ
エクスカリバーを攻撃‼？マキシマムブレイク‼？」
「すまない……迎え撃て‼？ＨＭＣ　エクスカリバー‼？必殺剣
伏竜鳳雛‼？」
エクスカリバーはフェニックスブレードを構えて空に向けて力強く跳び上がり、空中で回転しながらダークガイアにフェニックスブレードを振るう。
しかし、ダークガイアが闇を纏った右手で、フェニックスブレードを受け止めると、エクスカリバーが力を込めてもフェニックスブレードがピクリとも動かなくなった。
そしてダークガイアはフェニックスブレードを払いのけると、体勢が崩れたエクスカリバーに闇を纏った右手で殴りつけようとする。
「リバースカードオープン‼？罠発動‼？攻撃の無敵化‼？バトルフェイズ時にのみ、２つの効果から１つを選択して発動できる‼？俺が選ぶのはこの効果だ‼？バトルフェイズ中、自分への戦闘ダメージは０になる‼？」
「させないぜ‼？ライフポイントを半分払い、手札からカウンター罠、レッドリブートを発動‼？」

大地　ＬＰ２０００→１０００

「っ‼？」
「相手が罠カードを発動した時に発動できる‼？その発動を無効に

し、そのカードをそのままセットする!!?その後相手はデッキから罠カード1枚を選んで自分の魔法&罠ゾーンにセットできる。このカード発動後、ターン終了時まで相手は罠カードは発動できない。最も、この攻撃が通れば終わりだけどな!!?」
「ああ……だから通さない!!?チェーンしてリバースカードオープン!!?カウンター罠、レッドリブート!!?」
「なんだって!?」
俺が伏せていたレッドリブートを発動させると九石が驚きの表情を浮かべる。
だが、それは九石がレッドリブートを使ってきたことで俺も驚かされたのだからお互い様ということにして貰おう。
「効果は分かってるよな?レッドリブートは発動が無効になりセットして貰うぜ!!?」
「ぐっ……俺はデッキからスキルプリズナーをセットする!!?確かにダメージは通らないが、エクスカリバーは倒させて貰うぜ!!?」
九石の言葉と共にダークガイアの拳がエクスカリバーを貫き、エクスカリバーは闇に呑まれて消滅した。
「ははっ、すっげぇ!!?まさかここまでやっても凌がれるなんてな。俺はこのままターンエンドだ!!?」
「なら、エンドフェイズ!!?リバースカードオープン、罠発動!!?貪欲な瓶!!?貪欲な瓶以外の自分の墓地のカード5枚を対象にそのカード5枚をデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから1枚ドローする!!?俺は墓地に存在するHーC　エクスカリバーをEXデッキに、大欲な壺、予想GUY、妖刀竹光、黄金色の竹光をデッキに戻してシャッフルしカードを1枚ドローする!!?

遊騎　LP500　手札1
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
○　ー
ーーーーーー

ー▲▲▲▲ー　　ー
大地　ＬＰ１０００　手札２

なんとか凌ぎきり俺のターンがやってくる。
しかし、俺のフィールドにカードはなく、手札もたったの１枚のみ。
おまけに九石には伏せカードが３枚あり、内２枚はレッドリブートとスキルプリズナー。
これ以上凌ぐのは難しく、間違いなくこれがラストターンになるだろう。
「俺のターン、ドロー‼?」
まだ、希望は消えていない。
「速攻魔法、大欲な壺‼?除外されているセイクリッドプレアデスと聖騎士の追想　イゾルデをＥＸデッキに、Ｈ・Ｃ　ダブルランスをデッキに戻してシャッフルし、カードを１枚ドローする‼?」
ドローしたカードを見て、俺は思わず笑みを浮かべた。
「……繋がった」
「っ‼?」
「行くぞ九石‼?俺はＨ・Ｃダブルランスを召喚‼?」

〈Ｈ・Ｃ　ダブルランス〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１７００

「Ｈ・Ｃ　ダブルランスの効果発動‼?召喚成功時に手札・墓地の同名モンスターを表側守備表示で特殊召喚する‼?俺は墓地のＨ・Ｃ　ダブルランスを特殊召喚だ‼?ただしこのカードはシンクロ素材にできず、このカードをエクシーズ素材とする場合、戦士族モンスターのエクシーズ召喚にしか使用できない」

〈Ｈ・Ｃ　ダブルランス〉☆４　戦士族　地属性
ＤＥＦ９００

俺のフィールドに２体のダブルランスが現れる。
それを見て九石は驚愕の表情を浮かべる。
「またレベル４の戦士族が２体……まさか‼？」
「俺は戦士族、レベル４の２体のＨ・Ｃ　ダブルランスでオーバーレイ‼？２体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」
２体のダブルランスが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとやはり現れるのは赤い鎧を着た王者の風格を漂わせる戦士。
「最後まで俺と共に戦ってくれ、決して折れない不屈の聖剣‼？光を纏て、闇を切り裂く孤高の王者‼？ＨｰＣエクスカリバー‼？」

〈ＨｰＣ　エクスカリバー〉★４　戦士族　光属性
ＡＴＫ２０００

「３回目のエクスカリバー‼？」
「ＨｰＣ　エクスカリバーの効果発動‼？シャイニングフォース‼？オーバーレイユニットを２つ使い、このカードの攻撃力は、次の相手のエンドフェイズ時まで元々の攻撃力の倍になる‼？」
エクスカリバーの周りを漂っていたオーバーレイユニットがエクスカリバーに集まり、エクスカリバーの身体が光り輝いた。

ＨｰＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ２０００→４０００

「さらに墓地に存在する神剣―フェニックスブレードの効果発動‼？墓地のＨ・Ｃ　ダブルランスとＨ・Ｃ　ソードシールドを除外してこのカードを手札に戻す。そして再度装備魔法、神剣―フェニックスブレードをＨｰＣ　エクスカリバーに装備‼？攻撃力を３００ポイントアップする‼？」

エクスカリバーの背中に再びフェニックスブレードが現れ、エクスカリバーはフェニックスブレードを手に取って構える。

ＨＩＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ４０００→４３００

「また攻撃力が４３００になるのか⁉？だけど、それじゃあまだダークガイアには届かないぜ‼？」
「ああ、だからこれが最後の一手だ‼？魔法カード、ヒロイックチャンス‼」
「ヒロイックチャンス⁉？」
「自分フィールド上のヒロイックと名のついたモンスター１体を選択し、このターン、選択したモンスターは攻撃力が倍になる‼？ただし、相手プレイヤーにダイレクトアタックは出来なくなる‼？俺が選ぶのは当然、ＨＩＣ　エクスカリバー‼？」

ＨＩＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ４３００→８６００

「攻撃力……８６００⁉？」
「これで最後だ‼？バトル‼？ＨＩＣ　エクスカリバーでＥＩＨＥＲＯダークガイアを攻撃‼？」
「くっ……迎え撃て‼？ＥＩＨＥＲＯダークガイア‼？マキシマムブレイク‼？」
エクスカリバーはフェニックスブレードを構えて空に向けて力強く跳び上がり、空中で回転しながらダークガイアにフェニックスブレードを振るうが再び闇を纏った右手で受け止められる。
しかし、次は先程とは違い徐々にエクスカリバーの勢いを増していき、ダークガイアも両手でフェニックスブレードを受け止める。
「っ……ぐっ……くっ～～～だあー‼？」
九石は難しい表情を浮かべ、しばらく考え込んでいたが諦めたよう

に苦笑を浮かべた。
「やっぱり遊花の師匠は強えぇや……だけど、次は勝たせて貰うぜ」
「ふっ、楽しみにしてるさ。だけど、今回は俺の勝ちだ……決めろ、ＨｌＣ　エクスカリバー‼?必殺剣　伏竜鳳雛‼?」
　俺の声を聞き、エクスカリバーはフェニックスブレードを振り抜き、ダークガイアの体勢を崩すと、その身体をフェニックスブレードで真っ二つに斬り裂いた。

大地　　ＬＰ１０００→０

ーーーーーーーー

「……ふぅ、俺の勝ちだな」
「だあー‼?負けた‼?」
　立体映像が消え、俺はホッと息を吐き、九石は悔しそうに叫び声をあげる。
「そういえば最後の伏せカードは何だったんだ?」
「ダメージダイエット。まさかあんなに連続攻撃をくらうなんて思わなかったからなんだか使うタイミングを逃しちまってさ。最後は使ってもどうしようもならなかったんだ」
「あー、成る程な」
　エクスカリバーは８６００でダークガイアは６６００だったから発生するダメージは２０００で、九石のライフは１０００だったのでダメージを半分にしてもライフは無くなる。
　前のターンにレッドリブートを使ってなければ残ったが……それはあのターンに決めに行くのを諦めていればの話だから微妙だな。
　まさか俺もレッドリブートを伏せてたなんて思わないだろうし、ほぼ確実に決めにいけるなら俺が九石の立場でも使っていただろう。
　しばらく悔しそうな表情を浮かべていた九石だったが、自分の頬を叩くと今度は満面の笑みを浮かべた。
「負けたことは悔しいけど、でも最高に楽しいデュエルだったぜ‼?」

「ああ、俺も君とのデュエルは楽しかった。また機会があればデュエルしような」
「おう、勿論だぜ‼？次は絶対俺が勝つからな‼？」
「ふっ……次も負ける気はないさ」
俺がそう言うと九石は楽しそうに笑いながら観戦席に戻っていった。
デュエルが終わったため、俺は再び審判としての仕事に移る。
「それじゃあ2回戦も最後の試合に移るぜ。2回戦第4試合、デュエルアカデミア所属、天雷　終夜VS『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』所属、冬城　闇だ。両者共試合の準備を頼む」
「ん、既に準備は終わってる」
俺がアナウンスを終えるのと同時に、俺の前に闇がやってくる。
その表情は相変わらずの無表情だが、それでも俺には闇が楽しそうにしているのが伝わってきた。
闇の試合が始まることで少しざわつき始めた店内で、明らかに緊張した顔で天雷がやってくる。
「あ、あの、て、天雷　終夜と言います。こ、今回は、よろしく、お願いしま、しゅ」
「ん、よろしく。そんなに緊張しなくてもいい。私は大した人間じゃないから」
「世界ランキング4位の人間が何言ってやがる」
「こんなの、時間をかければ誰でもなれると思うけど？」
「そんなわけあるか。そもそもその時間だって、4年しかかかってないじゃないか」
「2年で9位になった遊騎にそれを言われても困る」
そんな俺達のやり取りを聞いて、天雷は余計に表情を強張らせる。
うーん、緊張を解すつもりだったのだがどうやら逆効果だったようだ。
だけど、緊張したままデュエルをさせて実力を発揮できないというのも可哀想だしどうしたものか……
俺がそんなことを考えていると、闇は真っ直ぐと天雷の目を見つめ

て口を開く。
「あなた、デュエル、好き？」
「へっ？は、はい」
「そう……私も、デュエルが好き。デュエルは、私に大切な人との出会いをくれたから」
　そういって、闇は一瞬こちらを見てから視線を天雷に戻す。
「デュエルが好きという点で、私とあなたは同じ。だったら、そんなに怖がる必要はない。同じデュエルが好きな決闘者同士がデュエルをするだけ。肩書きとかそんなものは関係ない。だから、あなたの全力、私に見せて」
「……はい‼？」
「……へぇ」
　闇の言葉を聞いて落ち着いたのか、天雷は強張っていた表情を崩して笑顔を浮かべてデュエルディスクを起動する。
　それを見て、俺は思わず関心した声をあげてしまった。
　そんな俺の声が聞こえたのか、闇の視線がこちらに移る。
「何？」
「ふっ……いや、何でもないさ」
「そう」
　俺のそんな言葉に、闇はあっさりと視線を天雷に戻し、デュエルディスクを起動する。
　こういうあっさりとした性格も、姿も、昔から全然変わらないのに、それでもやっぱり成長してるんだな、お前も。
「それじゃあ準備も出来たみたいだし、２回戦第４試合、天雷　終夜ＶＳ冬城　闇の試合を開始する‼？」
「全力で、ぶつからせて貰います‼？」
「ん、どーんとこい」
『決闘‼？』

終夜　ＬＰ８０００
闇　ＬＰ８０００

第４４話　雷光ＶＳ氷闇・氷の女王

○

終夜　ＬＰ８０００
闇　ＬＰ８０００

「先攻と後攻、好きな方を選ぶといい。それぐらいのハンデはつけられるべき」
「ありがとうございます。それでは先攻をいただきます。まずは手札からサンダーシーホースを捨てて効果発動!!?このカードを手札から捨てて、デッキから攻撃力１６００以下の雷族・光属性・レベル４の同名モンスター２体を手札に加えます!!?ただし、この効果を発動するターン、自分はモンスターを特殊召喚できません。僕はデッキから２体のエレキングコブラを手札に加えます。そしてモンスターをセット。カードを１枚伏せてターンエンドです」

終夜　ＬＰ８０００　手札４
ー▲ー　ー
ー??ー
ー　ー
ーーーー
ーーーー　ー
闇　ＬＰ８０００　手札５

「私のターン、ドロー。まずはフィールド魔法、混沌空間を発動」
闇がそう宣言すると、店内の風景が様々な場所に渦巻きが存在する青白い不気味なフィールドに書き換えられる。
「混沌空間の効果でモンスターが表側表示で除外される度に、１体につき１つこのカードにカオスカウンターを置くようになる」

「っ、除外をトリガーにするフィールド魔法!!?」
「あなたはサンダードラゴンを使ってたから、それを利用させてもらう。そして私は召喚僧サモンプリーストを召喚」
〈召喚僧サモンプリースト〉☆４　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ８００

闇の前に現れたのは黒いローブを纏った魔法使い。
しかし、その魔法使いは直ぐにその場に座り込む。
「召喚僧サモンプリーストは召喚時、守備表示になる」

召喚僧サモンプリースト
ＡＴＫ８００→ＤＥＦ１６００

「召喚僧サモンプリーストの効果、１ターンに１度、手札から魔法カード１枚を捨てて、デッキからレベル４モンスター１体を特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン攻撃できない。私はシャッフルリボーンを捨てて、デッキから終末の騎士を特殊召喚」

〈終末の騎士〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１４００

サモンプリーストが呪文を唱えると、サモンプリーストの横に黒い騎士が現れる。
「終末の騎士の効果、召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから闇属性モンスター１体を墓地へ送る。　私はデッキからゾンビキャリアを墓地に送る。そしてレベル４、召喚僧サモンプリーストと終末の騎士でオーバーレイ。２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚」
サモンプリーストと終末の騎士が光となり、空に浮かんだ混沌の渦

に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこにいるのは王者の風格を持つグレムリン。
「群れを伴い進撃せよ、ランク４、キングレムリン」
〈キングレムリン〉★４　爬虫類族　闇属性
ＡＴＫ２３００
「キングレムリンの効果、王者の呼び声。オーバーレイユニットを１つ使い１ターンに１度、デッキから爬虫類族モンスター１体を手札に加える。私はデッキからカゲトカゲを手札に加える」
キングレムリンの咆哮が響き、闇の手札にカードが加わる。
「バトル。キングレムリンでセットモンスターを攻撃。破邪の咆哮」
「セットモンスターはエレキトンボ‼？」
〈エレキトンボ〉☆２　雷族　光属性
ＤＥＦ１００
キングレムリンが咆哮をあげると周囲に衝撃波が発生し、電気を纏った蜻蛉のようなモンスターが吹き飛ばされて粒子に変わる。
「破壊されたエレキトンボの効果発動‼？自分のデッキからエレキと名のついたモンスター１体を特殊召喚出来ます‼？僕はエレキリギリスを特殊召喚します‼？」
〈エレキリギリス〉☆１　雷族　光属性
ＤＥＦ０
終夜を守るように、電気を身体に纏った虫型のモンスターが現れる。
「そしてエレキリギリスの永続効果で、このカードがフィールド上で表側表示で存在する限り、相手は表側表示で存在する他のエレキと名のついたモンスターは攻撃対象にできず、カード効果の対象にも出来

なくなります!!?」
「なかなか厄介なモンスター。メインフェイズ2、カードを2枚伏せてターンエンド」

終夜　ＬＰ８０００　手札４
ーー▲ーー　ー
ーー□ーー
ー　○
ーーーーー
ー▲▲ーー　▽
闇　ＬＰ８０００　手札２

「僕のターン、ドロー!!?」
「スタンバイフェイズ、攻撃力２０００以上の闇属性モンスター、キングレムリンをリリースしてリバースカードオープン。罠発動、魔のデッキ破壊ウイルス。魔のデッキ破壊ウイルスの効果で相手フィールドのモンスター、相手の手札、相手ターンで数えて３ターンの間に相手がドローしたカードを全て確認し、その内の攻撃力１５００以下のモンスターを全て破壊する」
「!?・?・そんな!?・?」
キングレムリンの姿が消え、終夜の手札とエレキリギリスが闇に覆われる。
その闇が消えると、終夜は手札が２枚残してそれ以外のカードが全て消えていた。
「破壊された手札はエレキングコブラ２枚に雷源龍―サンダードラゴン。残った手札はフォトンリードと雷電龍―サンダードラゴン……さあ、残ったカードでどう動けるかな?」
「っ、まだ手は有ります!!?・リバースカードオープン!!?・罠発動!!?百雷のサンダードラゴン!!?・自分の墓地の雷族モンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚し、その後、その同名モンスターを自分の墓地から可能な限り特殊召喚できます!!?・ただし、この効果

で特殊召喚したモンスターは、フィールドから離れた場合に除外され、この効果で特殊召喚したモンスターがモンスターゾーンに存在する限り、自分は雷族モンスターしか特殊召喚できません‼？僕は墓地のエレキングコブラを対象に、墓地のエレキングコブラ２体を特殊召喚します‼？」

〈エレキングコブラ〉☆４　雷族　光属性
ＡＴＫ１０００

終夜の正面に身体から電気を放つ小さな蛇のモンスターが２体現れる。
いつもならフィールドに現れるとすぐに終夜に擦り寄るエレキングコブラだが、今回は擦り寄ることもなく、威嚇するように闇に向けて舌を出し、尻尾を振っていた。
いつもと違う反応に困惑した表情を浮かべる終夜に、闇はどこか納得した様子で口を開く。
「成る程……やっぱり精霊だったんだね、その子達は」
「えっ？」
「分からないなら分からないでいい。私はその子達と相性が悪いから威嚇されてるだけ。あなたが気にする必要はない。さあ、デュエルを続けよう」
「は、はい‼？手札から雷電龍―サンダードラゴンを捨てて効果発動‼？デッキから同名モンスター１体を手札に加えます‼？そして雷族モンスターの効果が手札で発動したターン、融合モンスター以外の自分フィールドの雷族の効果モンスター１体をリリースし、このカードはＥＸデッキから特殊召喚できる‼？僕はフィールドの雷族モンスター、エレキングコブラをリリース‼？」
「来るね……雷の龍が」
店内に雷雲が現れ、巨大な雷がエレキングコブラに落ち、エレキングコブラの姿が光の柱に包まれる。
その光の柱の中でエレキングコブラのシルエットが肥大化してい

き、光の柱が消え去るとそこには雷を纏い、巨大化した雷龍の姿が現れた。
「雷の力でその身を昇華せよ!!?超雷龍―サンダードラゴン!!?」
〈超雷龍―サンダードラゴン〉☆８　雷族　闇属性
ＡＴＫ２６００
「融合も無しに融合召喚してくるのはちょっとズルい……エレキングコブラが除外されたことで混沌空間にカオスカウンターが１つ置かれる」
混沌空間
カオスカウンター０→１
「行きます!!?バトル!!?エレキングコブラでダイレクトアタック!!?エレキファング!!?」
「ん、ちょっと痛いけど、これくらいなら平気」
闇　ＬＰ８０００→７０００
エレキングコブラが勢いよく飛び出していき、闇の左腕に噛み付く。
闇が噛み付いてきたエレキングコブラを表情を変えずに見つめると、エレキングコブラは跳び退くように終夜のフィールドに戻る。
「エレキングコブラの効果発動!!?このカードがダイレクトアタックによって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、自分のデッキからエレキと名のついたモンスター１体を手札に加える事ができます!!?僕はデッキから３体目のエレキングコブラを手札に加えます!!?そして速攻魔法、フォトンリード!!?手札からレベル４以下の光属性モンスター１体を表側攻撃表示で特殊召喚します!!?手札からエレキングコブラを特殊召喚!!?」

〈エレキングコブラ〉☆４　雷族　光属性
ＡＴＫ１０００
「むぅ、また出てきた」
「追撃です‼？エレキングコブラでダイレクトアタック‼？エレキファング‼？」
闇　ＬＰ７０００→６０００
「再びダイレクトアタックが成功したのでエレキングコブラの効果発動‼？僕はデッキからエレキンメダイを手札に加えます。そして超雷龍―サンダードラゴンでダイレクトアタック‼？アンガーライトニング‼？」
「っ……」
闇　ＬＰ６０００→３６００
超雷龍―サンダードラゴンが雷のブレスを放つと、闇は半歩後ろに下がり、雷のブレスに左手が呑まれると少しだけ表情を顰めた。
「メインフェイズ２‼？手札の雷族モンスター１体と、同名モンスター以外の自分フィールドの雷族の融合モンスター１体を除外し、このカードはＥＸデッキから特殊召喚できる‼？僕は手札のエレキンメダイとフィールドの融合モンスター、超雷龍―サンダードラゴンを除外します‼？」
「まだ進化してくるんだね……」
超雷龍―サンダードラゴンの側に身体から電気を放つ金目鯛のモンスターが現れ、その２体を包み込むように雷雲から再び巨大な雷が落ちる。
雷が落ちたことで出来た光の柱の中で超雷龍―サンダードラゴンとエレキンメダイの姿は混ざり合い、超雷龍―サンダードラゴンの時

よりも更に肥大化していく。
そして光の柱が消し飛ぶと、そこには雷を纏った緑の身体を持つ三つ首の龍が降臨した。
「雷の力を束ね、進化に深化を重ねて雷神へと昇華せよ!!?雷神龍―サンダードラゴン!!?」
〈雷神龍―サンダードラゴン〉☆１０　雷族　光属性
ＡＴＫ３２００
「雷神龍―サンダードラゴン……サンダードラゴンの最終進化系、か……エレキンメダイと超雷龍―サンダードラゴンが除外されたことで混沌空間にカオスカウンターが２つ置かれるよ」
混沌空間
カオスカウンター１→３
「僕はこれでターンエンドです」
終夜　ＬＰ８０００　手札１
ーーーーー　ー
ー○○ーー
○　ー
ーーーーー
ー▲ーーー　▽
闇　ＬＰ３６００　手札２
いきなり闇のライフが半分以上削られたことで観戦していたデュエルアカデミア生達から騒めきが生まれる。
このままいけば終夜が勝利するのではないか、と。
しかし、闇とデュエルをしたことがある遊花と桜、そしてプロ決闘者達は分かっていた。

闇はこの程度では終わらないということを。
それを裏付けるように、闇は真っ直ぐに終夜を見て口を開く。
「……名前」
「えっ？」
「もう1度、名前教えて？」
「……僕のですか？」
「ん。私、名前覚えるの苦手だから。でも、あなたは強いから、覚えておきたい。だから、教えて？」
「……天雷　終夜です」
「天雷　終夜……ん、覚えた。終夜、あなたは強い。現時点では、遊花や桜よりも強い」
「ど、どうも……」
そんな闇の突然の言葉に終夜は困惑した表情を浮かべる。
そんな終夜に、闇は無表情だが真っ直ぐで、確かな自信が込められた目を向ける。
「だから……ちょっとだけ、本気だすね」
「えっ⁉？」
「私のターン、ドロー。魔法カード、闇の誘惑。自分はデッキから2枚ドローし、その後手札の闇属性モンスター1体を除外する。そして手札に闇属性モンスターが無い場合、手札を全て墓地へ送る。私は手札からヴェルズケルキオンを除外する」
「ヴェルズ？聞いたことがないモンスターですね」
「モンスターのヴェルズケルキオンが除外されたことで、混沌空間にカオスカウンターが1つ置かれる」

混沌空間
カオスカウンター3→4

「さらに墓地から2体の闇属性モンスター、召喚僧サモンプリーストとキングレムリンを除外して魔法カード、忍び寄る闇。デッキから闇属性・レベル4モンスター1体を手札に加える。私はデッキからヴェ

ルズカストルを手札に加える」
「っ、またヴェルズ……」
「終末の騎士とキングレムリンが除外されたことで混沌空間にさらにカオスカウンターが２つ置かれる」

混沌空間
カオスカウンター４→６

「私はヴェルズカストルを召喚」

〈ヴェルズカストル〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１７５０

現れたのは闇を纏った白い鎧をつけた戦士。
現れたカストルを見て、エレキングコブラはさらに激しく威嚇をはじめる。
「ど、どうしたの？エレキングコブラ？」
困惑する終夜を他所に、闇は淡々とデュエルを続ける。
「ヴェルズカストルの召喚時、手札にあるカゲトカゲの効果発動。自分がレベル４モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚できる。それにチェーンしてリバースカードオープン。罠発動。エンペラーオーダー。エンペラーオーダーの効果、モンスターが召喚に成功した時に発動するモンスターの効果が発動した時、その発動を無効にし１枚ドローする。私はカゲトカゲの特殊召喚を無効にして１枚ドロー。そしてヴェルズカストルには召喚に成功したターン、自分は通常召喚に加えて１度だけヴェルズと名のついたモンスター１体を召喚できる効果がある」
「っ、召喚権を増やすモンスター⁉？ということは……」
「私はヴェルズヘリオロープを召喚」

〈ヴェルズヘリオロープ〉☆４　岩石族　闇属性

ＡＴＫ１９５０

フィールドに現れたのは禍々しい闇を纏う岩石の戦士。
「ヴェルズヘリオロープの召喚時、手札にあるカゲトカゲの効果発動。自分がレベル４モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚できる。それにチェーンしてエンペラーオーダーの効果、カゲトカゲの発動を無効にし１枚ドローする」
そして闇は２体のモンスターに手をかざす。
「私は２体のレベル４ヴェルズモンスター、ヴェルズカストルとヴェルズヘリオロープでオーバーレイ。２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚」
カストルとヘリオトロープが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りるのは青い翼を黒い闇に侵食されている漆黒の竜。
「希望を奪い去る邪竜、ランク４、ヴェルズバハムート」

〈ヴェルズバハムート〉★４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２３５０

「っ、またヴェルズ……しかも、エクシーズモンスター」
「ヴェルズバハムートは１ターンに１度、オーバーレイユニットを１つ使い、相手フィールド上の表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動。手札からヴェルズと名のついたモンスター１体を捨てることでそのモンスター１体のコントロールを、永続的に得ることができる」
「っ⁉？その効果は使わせません⁉？手札から雷電龍―サンダードラゴンを捨てて効果発動⁉？デッキから同名モンスター１体を手札に加えます⁉？この効果は相手ターンにも使用することが出来ます⁉？そして雷族モンスターの効果が手札で発動した時、雷神龍―サンダードラゴンの効果発動⁉？ライトニングインディグネイション⁉

？フィールドのカード1枚を選んで破壊する‼？僕はヴェルズバハムートを破壊します‼？」
　雷神龍―サンダードラゴンの身体から雷が溢れ出し、バハムートに向けて放たれてバハムートが闇に溶けて霧散する。
「これで……」
「うん、そうしてくれると思ってた。速攻魔法、エクシーズダブルバック」
「えっ⁉？」
「自分フィールド上のエクシーズモンスターが破壊されたターン、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合に発動できる。自分の墓地から、そのターンに破壊されたエクシーズモンスター1体と、そのモンスターの攻撃力以下のモンスター1体を選択して特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。私は墓地からヴェルズバハムートと終末の騎士を特殊召喚」

〈ヴェルズバハムート〉★4　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２３５０

〈終末の騎士〉☆4　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１４００

霧散していた闇が再び集まっていき、バハムートが姿を見せる。
さらにバハムートが咆哮を上げると、闇の中から終末の騎士も姿を現した。
「これでもう雷神龍―サンダードラゴンによる妨害はない。終末の騎士の効果、私はデッキから亡龍の戦慄ーデストルドーを墓地に送る。そしてフィールド魔法、混沌空間の効果発動、1ターンに1度、自分フィールドのカオスカウンターを4つ以上取り除き、取り除いた数と同じレベルを持つ、除外されている自分または相手のモンスター1体を対象としてそのモンスターを自分フィールドに特殊召喚する。私

はカオスカウンターを４つ取り除き、除外からヴェルズケルキオンを特殊召喚」

混沌空間
カオスカウンター６→２

〈ヴェルズケルキオン〉☆４　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ１６００

現れたのは闇を纏い両手に杖を持った魔術師のようなモンスター。
「ヴェルズケルキオンの効果、自分の墓地のヴェルズモンスター１体を除外し、自分の墓地のヴェルズモンスター１体を対象としてそのモンスターを手札に加える。私は墓地のヴェルズカストルを除外してヴェルズヘリオロープを手札に加える。モンスターが除外されたことで混沌空間にカオスカウンターが置かれる」

混沌空間
カオスカウンター２→３

「さらにヴェルズケルキオンには墓地からモンスターを回収する効果を発動したターンのメインフェイズにヴェルズモンスターを１体召喚できる」
「えっ⁉？また召喚権が増えるんですか⁉？」
「私はヴェルズヘリオロープを召喚」

〈ヴェルズヘリオロープ〉☆４　岩石族　闇属性
ＡＴＫ１９５０

再び現れる禍々しい闇を纏う岩石の戦士。
「ヴェルズヘリオロープの召喚時、手札にあるカゲトカゲの効果発動。自分がレベル４モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札か

ら特殊召喚できる。それにチェーンしてエンペラーオーダーの効果、カゲトカゲの発動を無効にし1枚ドローする。魔法カード、闇の誘惑。2枚ドローしてカゲトカゲを除外する。モンスターが除外されたことで混沌空間にカオスカウンターが置かれる」
「っ、手札が減らない……」

混沌空間
カオスカウンター3→4

「さて、準備も終わったし、ここからが本番。顕現せよ……邪念渦巻くサーキット」
「っ、リンク召喚……」
闇が正面に手をかざすと大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はモンスター2体。私はヴェルズバハムートと終末の騎士をリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚。リンク2、魔界の警邏課デスポリス」

〈魔界の警邏課デスポリス〉ＬＩＮＫ　２　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００　↙?↘?

現れたのは警察官の格好をした悪魔の少女。
「魔界の警邏課デスポリスはカード名が異なる闇属性モンスター2体を素材としてリンク召喚した時、1ターンに1度、自分フィールドのモンスター1体をリリースし、フィールドの表側表示のカード1枚を対象として戦闘・効果で破壊される場合、代わりに1つ取り除くことができる警邏カウンターを1つ置くことが出来る効果を得る。私は墓地に存在するチューナーモンスター、ゾンビキャリアの効果を発動。手札を1枚デッキの上に置くことでこのカードを墓地から特殊召喚する」
「っ⁉?チューナーモンスターを特殊召喚⁉?」
「ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れ

た場合に除外される」

〈ゾンビキャリア〉☆２　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ２００

「チューナーモンスター……まさか今度は‼？」
フィールドに現れた小さなゾンビを見て、終夜は驚いて目を見開く。
そんな終夜に構わず、闇は少しだけ嬉しそうに正面に手をかざす。
「さあ、久しぶりの出番だよ。私は、レベル４、ヴェルズヘリオロープに、レベル２、チューナーモンスター、ゾンビキャリアをチューニング」
ゾンビキャリアが光の輪になり、ヘリオロープが小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から現れるのは氷の身体を持った長い体躯の龍。
「闇に導かれた氷槍は、世界の全てを凍て付かせる。シンクロ召喚。希望を凍り付かせる氷竜。氷結界の龍ブリューナク」

〈氷結界の龍ブリューナク〉☆６　海竜族　水属性
ＡＴＫ２３００

「氷結界の龍……だけど、どこかヴェルズバハムートに似てるような……」
「……ゾンビキャリアが除外されたことで混沌空間にカオスカウンターが置かれる」

混沌空間
カオスカウンター４→５

「氷結界の龍ブリューナクの効果発動、フリージングワールド。同名

カードは1ターンに1度、手札を任意の枚数墓地へ捨て、捨てた数だけ相手フィールドのカードを対象としてそのカードを持ち主の手札に戻す」
「手札に戻す……っ、しまった‼?」
「雷神龍―サンダードラゴンは破壊への耐性はあるけど、それ以外の効果には無力。私は手札を1枚捨てて雷神龍―サンダードラゴンを手札に戻す」
ブリューナクが翼を振るうと、猛烈な吹雪が吹き荒れ、雷神龍―サンダードラゴンの身体が凍り付いていき、氷像に変わる。
「雷神龍―サンダードラゴンが……」
「まだまだ行く。墓地に存在するチューナーモンスター、亡龍の戦慄ーデストルドーの効果発動。同名カードは1ターンに1度、ライフポイントを半分支払い、レベル6以下のモンスター、氷結界の龍ブリューナクを対象として、このカードを特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは対象にしたモンスターのレベル分だけ下がり、フィールドから離れた場合はデッキの一番下に戻る」

闇　LP3600→1800

〈亡龍の戦慄ーデストルドー〉☆7→1　ドラゴン族　闇属性
DEF3000

墓地から現れたのは赤黒くところどころ骨が見えているドラゴン。
「チューナーモンスターということはもしかしてまた……‼?」
「私は、水属性レベル6、氷結界の龍ブリューナクに、レベル1となったチューナーモンスター、亡龍の戦慄ーデストルドーをチューニング」
デストルドが光の輪になり、ブリューナクが小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から現れるのは氷の翼を持った屈強な身体つきをした氷龍。

「闇に導かれた氷槍は、全てを凍らせ撃ち砕く。シンクロ召喚。希望を粉砕する暴龍。氷結界の龍グングニール」

〈氷結界の龍グングニール〉☆7　ドラゴン族　水属性
ＡＴＫ２５００

「また別の氷結界の龍……」
「墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動。自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローする。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外する。私はフィールドのエンペラーオーダーをデッキに戻してシャッフルし、カードを1枚ドローする……むぅ、これならグングニールを出す前に使っておけば良かった」
　闇がドローしたカードを見て、困ったように自分の頭をポンポンとノックするように叩きながら、少し残念そうな声を漏らす。
「まあいい、切り替えていく。氷結界の龍グングニールの効果発動、フリージングブレイク。1ターンに1度、手札を2枚まで墓地へ捨て、捨てた数だけ相手フィールド上のカードを選択して破壊する。私は手札を1枚捨ててエレキングコブラ1体を破壊する」
「っ……ゴメン、エレキングコブラ。百雷のサンダードラゴンで特殊召喚されたこのカードは除外されます」
　グングニールが咆哮を上げると、エレキングコブラの真上に巨大な氷柱がいくつも現れ、エレキングコブラに降り注いで、粉砕した。
「モンスターが除外されたことで混沌空間にカオスカウンターが置かれる」

混沌空間
カオスカウンター5→6

「まだ終わりじゃない。魔法カード、使者蘇生。墓地に存在するモン

スター1体を特殊召喚する」
「ここで蘇生カード!?」
「墓地から甦れ、ヴェルズヘリオロープ」

〈ヴェルズヘリオロープ〉☆4　岩石族　闇属性
ＡＴＫ１９５０

三度現れる禍々しい闇を纏う岩石の戦士。
その表情は少し疲れていて非難の目を闇に向けていたが、闇は気にしないでデュエルを続ける。
「バトル。ヴェルズケルキオンでエレキングコブラを攻撃。クリスタルマジック」
「くっ……」
ケルキオンの持っている杖から闇の球体が放たれ、エレキングコブラは闇に呑み込まれて消滅する。

終夜　ＬＰ８０００→７４００

「続けて、魔界の警邏課デスポリスでダイレクトアタック。ポリストライク」
「うっ……これくらい」
デスポリスが警棒を終夜を叩きつけて、終夜のライフが削られる。

終夜　ＬＰ７４００→６４００

「まだまだ行く。ヴェルズヘリオロープでダイレクトアタック。テンプテーションブレイク」
「うっ……」
ヘリオロープが石の剣で終夜の身体を斬り裂いていく。

終夜　ＬＰ６４００→４４５０

「もう一声、氷結界の龍グングニールでダイレクトアタック。暴虐のブリザードクライシス」
「うわぁぁぁ!!?」
グングニールが氷のブレスを放ち、終夜のライフは大きく削られた。

終夜　ＬＰ４４５０→１９５０

「メインフェイズ2、私は2体のレベル4ヴェルズモンスター、ヴェルズヘリオロープとヴェルズケルキオンでオーバーレイ。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚」
ヘリオロープとケルキオンが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から青い翼を持つグングニールに似た漆黒の龍が舞い降りた。
「希望を消し去る暴龍、ランク4、ヴェルズオピオン」

〈ヴェルズオピオン〉★4　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２５５０

「また、ヴェルズエクシーズモンスター……今度はグングニールに似てる……」
「ヴェルズオピオンの永続効果、イビルソートカース。オーバーレイユニットを持っているこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、お互いにレベル5以上のモンスターを特殊召喚できない」
「えっ!?」
「さらにヴェルズオピオンの効果発動、イビルソートインベーション。オーバーレイユニットを1つ使い、1ターンに1度、デッキから『侵略の』魔法・罠カード1枚を手札に加える。私はデッキから侵略の汎発感染を手札に加える。侵略の汎発感染は自分フィールドの全ての

ヴェルズモンスターに、ターン終了時までこのカード以外の魔法・罠カードの効果を受けなくする効果がある」
「っ、そんな……」
終夜の現在の手札はもう効果を発動することが出来ない雷電龍―サンダードラゴンのみで、ドローするカードは魔のデッキ破壊ウイルスの効果で攻撃力１５００以下のモンスターなら破壊されてしまう。
さらにはレベル５以上のモンスターの特殊召喚はオピオンに封じられているためサンダードラゴンの特殊召喚は行えない。
そのうえ魔法・罠で突破しようとしても侵略の汎発感染に阻まれてオピオンは生き残ってしまう。
勝利へと至る道を悉く凍らされ、動けなくさせる。
『氷の女王』
異名通り、氷のように冷たい無表情のまま相手の全てを凍らせてしまう女王の姿が、そこにはあった。
「私はカードを１枚伏せてターンエンド。シャッフルリボーンのデメリットは手札がないので効果はない」

終夜　ＬＰ１９５０　手札１
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　☆
ー　ー○ー○
ー　ー▲ー　▽
闇　ＬＰ１８００　手札０

「っ……僕のターン、ドロー!!……僕？が引いたのはライトニングボルテックスです」
「魔法カードだから破壊はされない。だけど、その手札じゃヴェルズオピオンをどうにも出来ない。残念だけど、おしまいだね」
「っ……それでも……それでも、最後まで足掻きます!!？手札を１枚捨てて魔法カード、ライトニングボルテックス!!？相手フィール

ドの表側表示モンスターを全て破壊する‼?」
「ん……それでこそ決闘者。チェーンして速攻魔法、侵略の汎発感染。自分フィールドの全てのヴェルズモンスターは、ターン終了時までこのカード以外の魔法・罠カードの効果を受けなくなる」
オピオンの身体が闇に包まれる中、フィールドに雷が降り注ぐ。
雷が止むと、フィールドに残っていたのはオピオンの姿だけだった。
「僕は……これでターンエンドです」

終夜　ＬＰ１９５０　手札０
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　　ー
ーーーー○
ーーーーー　▽
闇　ＬＰ１８００　手札０

「私のターン、ドロー。これでおしまい。バトル。ヴェルズオピオンでダイレクトアタック。暴虐のクリエイションクライシス」
オピオンが口から闇を纏った氷のブレスが終夜に向かって放たれる。
それを見て、終夜は悔しそうに顔を歪め、それでも目を逸らさずに氷のブレスに呑み込まれていった。

終夜　ＬＰ１９５０→０

ーーーーーー

「そこまで‼?勝者、冬城　闇‼?」
「ぶい」
デュエルが終わり、闇が無表情のまま遊騎に右手でＶサインを見せ

る。
　そんな闇に遊騎が苦笑していると、終夜が闇に近づいて頭を下げる。
「冬城さん、ありがとうございました。やっぱり、世界ランキングに入る決闘者って凄いんですね。最後は全然歯が立ちませんでした」
「ん、私は強いから。だけど、終夜もいい線行ってた。これからが楽しみ」
「ありがとうございます。機会があれば、またデュエルをしてくれませんか？」
「ん、勿論。終夜も、卒業したらプロ決闘者になるの？」
「あはは、こんな僕が入れるチームがあればですが……」
　そういって苦笑を浮かべる終夜に、闇は相変わらずの無表情で……だけどどこか優しい眼差しを向けて口を開いた。
「あなたならきっと大丈夫。プロとしてデュエルできる日を楽しみにしてる。私は、いつまでもあなた達の道の先で待ってるよ」

第４５話　闇を導く勇気

★

「全員、午前中の試合はご苦労だった。既にお昼は回っているが、これから昼休憩を取ってから準決勝に移りたいと思う。現在の時刻は１２時３０分だから１４時まで、１時間半を休憩時間とする。それまでにお昼等を済まして戻ってきてくれ。それでは、一時解散とする」

師匠のアナウンスを聞き、大会に参加していた皆さんが動き始める。

それを眺めていた私に、桜ちゃんが話かけてくる。

「遊花、お昼ご飯はどうする？」

「桜ちゃん。えへへ、実はお弁当作ってきたんだ。師匠や闇先パイと一緒に食べたいなって思って」

「……道理で大会に出るにしては大きなバックを持ってきてると思ったわ。というか、どこで食べるつもりなのよ？」

「あ……考えてなかった」

「アンタねぇ……というか、私の気のせいじゃなければ既に店内に結束と闇の姿が無いんだけど……」

「えっ⁉？」

桜ちゃんのその言葉を聞き、私は慌てて店内を見回す。

しかし、店内の何処を見ても師匠と闇先パイの姿を確認出来なかった。

慌てている私の様子を見て、カウンターにいた島さんが首を傾げながら声をかけてくる。

「遊花君、どうかしたのかい？」

「し、島さん‼？師匠と闇先パイを知りませんか⁉？」

「遊騎君と闇君かい？あの２人ならさっき店を出て行ったよ。闇君が出て行ったのを見て遊騎君が追いかけるように出て行ったから、何か話でもあったんじゃないのかな？」

「そ、そうですか……」

「あの2人に何か用があったのかい？」
肩を落として落ち込む私に、心配そうな顔で島さんが声をかけてくれる。
そんな島さんに、桜ちゃんは呆れたような声で答える。
「この子、あの2人と一緒にお昼ご飯を食べようとしてたみたいなんだけど、約束してなかったみたいなのよね」
「そうだったのかい。なら、2人に連絡を取ってみればいいんじゃないのかい？」
「……私、2人の電話番号知りません……」
「そ、そうなのかい？」
「遊花、聞いてなかったのね……まあ、色々あったから忘れてたんだろうけど……仕方ないわね、私が闇にかけてあげるわ」
「桜ちゃんは知ってるの⁉？」
驚きの表情で桜ちゃんを見る私を、桜ちゃんは携帯端末で闇先パイに連絡を取りながら呆れた表情で見る。
「そりゃ同居してんだから連絡を取るために連絡先ぐらい聞くわよ。結束は入院のこともあったから私も忘れてたけど……ん、ダメね。繋がらないわ。電源が入ってないみたい」
「そっか……どうしよう、このお弁当？」
「あの2人のことだから外に行ったのなら何処かで食べて帰ってくるでしょうしね」
「うぅ～何で先に話しておかなかったんだろう～私の馬鹿～」
「あれ？どうかしたのです、2人共？」
「栗原は何故泣きそうな顔で蹲っているんだ？」
「ああ、リーネさんと炎さん。実はねーーー」
蹲って頭を抱える私を見て、今度はリーネさんと不知火さんが不思議そうに声をかけてきた。
そんな2人に桜ちゃんが理由を説明すると、2人共苦笑を浮かべた。
「あの2人は結構自由人ですからね～先に約束してなかったならまず捕まらないと思うのですよ」

「あの2人も天羽には言われたくないと思うが……結束の様子から冬城に何か話があったことは確かだと思うからな。少なくともしばらくは帰ってこないだろう。役に立てなくてすまない」
「い、いえいえ、謝らないでください。元々ちょっと話しておかなかった私が悪いんですし……そうだ。お2人はお昼ご飯はどうするのですか？」
「お昼ご飯です？リーネ達は何処かで食べてくるつもりなのですよ」
「御影がさっさと出て行ってしまったから天羽と2人で近くの店にでも行こうと思っていた。天羽を1人で外に出すと何をしでかすか分からんからな」
「むむっ、その言い方は酷いのですよ」
「そう言って1人で外に出したら毎回トラブルを連れてくるのは天羽だろう。その巻き添いを喰うのは大体俺か結束なんだ、迷惑をかけられる側の気持ちも少しは考えろ」
「むむぅ、解せぬのです」
「あ、あはは……でも、それなら私達と一緒に食べませんか？このままだと師匠と闇先パイの分のお弁当が余っちゃいますし……」
　私のその言葉にリーネさんと不知火さんは少し驚いた表情を浮かべる。
「これ食ってもいいのか？これは結束と冬城の分なのだろう？」
「そうですけど、多分師匠と闇先パイはお外でお昼ご飯を食べて帰ってくると思うんです。そうなると、お弁当が余ってることでお2人に気を遣わせちゃうかも知れませんから」
「遊花ちゃんは本当に良い子なのですね。そういうことなら、リーネは遠慮なくいただくのです」
「栗原がそこまで気を使う必要はないと思うが……まあ、そういうことならばありがたくいただこう」
「ありがとうございます。だけど、結局どこで食べましょうか？」
「島さん、ここで食べちゃダメなのです？」
「いや、リーネさん、ここデュエルスペースだし……」
「流石にこの後も大会があるのだからデュエルスペースで食べるのは

勘弁して貰いたいけど、店の奥でなら構わないよ」
　リーネさんの言葉に苦笑しながら、島さんがさっき闇先パイに連れていかれた店の奥を指差す。
「でも、そこって島さんの生活スペースなんじゃないの？」
「ははは、遊騎君の弟子である遊花君は私には孫のようなものだからね。それにリーネ君や炎君も、そして桜君だって私にとってはもう身内のようなものだ。そこまで気にする必要はないよ。闇君なんて、いつも店の裏口から入ってくるしね」
「何してるのよ闇は……」
「あ、あはは……でも、そういうことならお借りしても構いませんか？」
「ああ、いいとも。ちょうどいいから、私もお昼ご飯にさせて貰おうかな」
「あ、だったら島さんも是非私のお弁当を食べてください。少し多めに作ってあるので」
「そうかい。それなら、遠慮なくいただこうかな。悪いけど、デュエルスペースから自分の分の椅子を持っていってくれるかい？何分普段は1人で暮らしているから椅子が足りなくてね」
「分かりました」
　そんな島さんの嬉しそうな声を聞きながら、私達はお店の奥にあるリビングに椅子を持って移動させて貰う。
　しばらく全員でテーブルや椅子を準備して、テーブルの上にお弁当を広げる。
　そして全員の準備が終わったところで、手を合わせて挨拶をした。
『いただきます』
「ん～やっぱり遊花の料理はいつ食べても最高に美味しいわね」
「もう、桜ちゃんは大袈裟だよ」
「でも、本当に美味しいのです。遊花ちゃんは将来いいお嫁さんになりそうなのです」
「り、リーネさんまで、お、お嫁さんだなんて、そんな……あぅ」
　リーネさんの言葉に私は顔が真っ赤になってしまう。

うぅ～いいお嫁さんになるなんて、恥ずかしいよ……
「それにしても、こんな美味しいお弁当を食べ損なうなんて、結束達も勿体ないことをしたわね」
「それは仕方ないよ、私が話しておかなかったのが悪いんだし……」
「まあ、あの２人のことだ。話しが終わったら一緒にお昼を食べて戻って来るだろう。結束が『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』にいた頃からずっとそうだったからな」
「遊騎君と闇ちゃんは昔からすっごく仲がいいですからね～」
「……やっぱり、師匠と闇先パイは昔から仲が良かったんですか？」
「あ、それ私も気になってた」
　そんな私と桜ちゃんの質問に、島さんが柔かな笑みを浮かべながら口を開く。
「あの２人は小学生の頃からずっと一緒にいるからね。昔はよく遊騎君が闇君の手を引いてこの店に来て一緒に遊んでいたものだよ。２人が出会ったのもこの店だしね。最も、闇君が最初にこの店に来た時には、闇君はデッキすら持っていなかったけどね」
「そうなの？正直あの２人の出会いとかあまり想像出来ないんだけど……というか、凄く詳しいわね」
「そりゃあそうだとも。彼らはこの店の数少ない常連客だったからね。遊騎君が最初の常連客、２番目が闇君だ。２人が中学生になった頃から炎君が３番目の常連客になってくれたけど、それまではずっとあの２人がデュエルをするのを眺めているのが日課のようなものだったからね」
「……そんなに昔から人が少ないのね、この店」
「桜ちゃん!!？」
「ははは、事実なんだし別に気を使う必要はないんだよ、遊花君。実際、遊騎君と闇君がいなければ、もっと早くにこの店は畳んでいただろうからね」
　桜ちゃんの呟いた一言に私が思わず嗜めるように声をあげると、島さんは気にしてないというように朗らかに笑う。
　それにしても、さっきの島さんの口にした言葉には気になるところ

があった。
　それは闇先パイが『Ｎａｔｕｒａｌ』に初めて来た時にデッキを持っていなかった、というところだ。
　ここ、決闘都市『ケルン』は、とにかくデュエルが盛んな街でこの街に住んでいる人間全員にデュエルディスクが無料で支給されているよう場所だ。
　私だって、初めて自分のデッキを手に入れたのは幼稚園の頃だったのに、当時小学生だった闇先パイがデッキを持っていなかったというのはどういうことなのだろう？
　考えていることが表情に出ていたのか、そんな私を見て島さんは何処か納得したような笑みを浮かべた。
「成る程……遊花君と桜君は闇君の過去を知らないのか。まあ、闇君のことだから隠してるんじゃなくて、聞かれないから教えなかったんだろうがね」
「闇先パイの過去……ですか？」
「まあ、確かに知らないけど、闇の過去がどうかしたの？」
　疑問の表情を浮かべる私達に、島さんだけでなく、リーネさんや不知火さんも困ったような表情を浮かべる。
　しばらく困ったような表情を浮かべていた島さんだったが、少しして仕方が無さそうに口を開いた。
「本当は、こういう話を本人以外がするのはどうかと思うんだけどね。多分、本人は本当に気にしてないんだろうから、本人から聞いた話を、私から少しだけ話させて貰おう。闇君の過去は色々と特殊でね……闇君はね、元々は孤児なんだよ」
「……えっ？」
「孤児って……親がいないってこと？」
「……親がいないっていうだけならまだよかったんだけどね」
　そういって、島さんは表情を少し固くしながら口を開く。
「彼女が孤児として発見されたのは今から約１２年前だ。この街にある教会に孤児院が併設された施設の近くで、夜の闇の中、ボロボロの状態で倒れていたところを、孤児院の院長が発見したらしい。保護さ

れた闇君は、すぐに何処の子供なのかを調べられたらしいんだが、闇君に該当する人物はこの『ケルン』には存在しなかったんだ」
「存在しなかったって……」
「おまけに、憔悴していたせいか闇君自身も自分の記憶を失っていてね。どこから来たのか、どうしてあんなところで倒れていたのか、何も覚えていなかった。彼女が身に付けていたものもボロボロの布切れと、数枚の見たこともないデュエルモンスターズのカードのみ。まるで本当に闇の中から突然その場所に現れたみたいだなんて言われていたようだ。闇という名前も、当時の捜査関係者がそんな彼女を仮名で呼んでいたものがそのまま付けられたらしいからね。冬城という苗字も、闇君を引き取った孤児院の院長のもの。だから、闇君の本当の名前を知る人は誰もいないんだよ」
「そんな……」
島さんから語られる闇先パイの過去に、私達は思わず絶句してしまう。
そんな私達を見て、島さん達は苦笑しながら首を振る。
「まあ、暗い気持ちになるのは分かるけど、あまり気にし過ぎない方がいいよ。本当に闇君はその時のことはもう気にしてないみたいだからね」
「冬城はあれでさっぱりとした性格をしているからな。自分の中で終わったことだと決めてしまえばもう気にもかけないのだろう」
「リーネの時なんて昔のことを聞いたらいきなり孤児だって話をされたですからね……あの時は本当にどういう表情をすれば良かったのか困ったのです。言った闇ちゃん自身はあっけらかんとしてましたし……」
そういう島さん達は呆れたような、何処か安心しているような表情を浮かべていた。
そんな島さん達の様子を見て、普段の闇先パイの様子を思い出す。
いつも無表情で、だけど何処か優しい眼差しで私達のことを見守ってくれている闇先パイ。
多分、本当に島さん達の言う通り、闇先パイにとって、それはもう

終わったことで……私が気にしたって、どうしようもないことなんだろうけど……やっぱり、心がモヤモヤするのは事実で……

……本当に、私は何も知らないんだなぁ……師匠のことも……闇先パイのことも……

「……さて、話が本筋から少し外れてしまったね。元々はあの２人が出会いの話だったか。まあ、この話をするのには彼女の境遇も関係してくるから、ある程度は仕方がないことだね」

「……今の話が関係してるんですか？」

「ああ、そうだよ。さっきの話で少し出たけど、闇君がそもそもこの店に来たのは記憶を無くした自分が持っていたカードのことを知るためだったんだ」

「……そういえばさっきもそんな話をしてたわね。というか、そのカードは今どうなってるの？」

「そのカードなら今でも闇君のデッキに入っているハズだよ。まあ、彼女自身あまりあのカードを使おうとはしないから多分遊花君達は見たことがないだろうけどね……とにかくそんなわけで、孤児院に引き取られた闇君は自分の手掛かりとなるものを探しにこの店に来たんだ」

ーーーーーーー

●

「んーこれ、欲しいな……でも、買うと今月のお小遣い無くなるしな……んー」

「ふふっ、今日は何を見て唸っているんだい、遊騎君」

「あ、島さん。このカード、俺のデッキに欲しいなって思ってさ」

いつものようにショーケースに張り付きながら唸っていた遊騎君に私が話しかけると、遊騎君は輝くような笑顔を浮かべながらショーケースにあるカードを指差した。

「おや？それは新しく出たＨＥＲＯのカードじゃないか。使うのかい

？」
「うん‼？かっこいいし、このカードなら絵札の三銃士と一緒に使えるしさ……だけど、これ買っちゃうと今月のお小遣いが無くなっちゃうんだよね」
「ははは、それは困ったものだね。それならしばらく待ってみたらどうだい？もしかしたら値段が下がるかもしれないよ？」
「えーでも、そう言って前は値段が上がったじゃん」
「そればっかりはおじさんにもどうしようもないからね。なるべく安くは提供してあげたいけど、うちの店だけ安くても買占めが起こってしまうかも知れないからね」
「むー買い占めることが出来るとか、大人ってズルいなー」
　そういって遊騎君は不満そうに頬を膨らませながらショーケースの中にあるカードを再び見る。
　そうしてしばらく唸っていた遊騎君だったが、どうするか決めたのか再び私の方を見てショーケースのカードを指差した。
「決めた‼？島さん、このカード買う‼？」
「おや、いいのかい？」
「おう、男の仕事の８割は決断で後はおまけみたいなものだからな‼？」
「……どこで覚えてくるんだい、そんな言葉？」
「前にテレビでヒーローが言ってた」
「最近のテレビはよく分からないね。ほら、このカードでいいかい？」
「うん‼？それじゃあこれお金‼？早速デッキを組み直そっと」
　そういってお金を払うと遊騎君はすぐにデュエルスペースのテーブルに座って、背負っていたリュックから自分が持っているカードを広げてデッキを組み直し始める。
　私がそんな遊騎君は微笑ましいものを見る目で見ていると、不意に店の扉を開ける音が聞こえた。
　珍しいこともあるものだと私が扉の方に目を向けると、そこには遊騎君と同い年ぐらいの少女がいた。
　黒髪のショートボブに服は真っ黒なワンピース。

整った顔立ちと無機質な眼がまるで人形を思わせるような少女だった。
私は久しぶりの遊騎君以外のお客さんに驚きながらも、少女に近寄り、しゃがみ込んで視線を合わせて口を開く。
「いらっしゃいませ。ようこそ『Ｎａｔｕｒａｌ』へ。今日はカードを見に来たのかい？」
私がそう尋ねると、少女はこくんと頷く。
「そうかい。なら、見ての通り寂れた店だがゆっくりと見ていくといいよ。カードならあそこのショーケースやストレージから探すといい」
そういうと少女は再びこくんと頷くとショーケースの前に移動してショーケースに張り付きながらカードを探し始める。
うちの店に来るお客さんはショーケースに張り付く子ばかりだなぁ、なんて思いながら少女や遊騎君の様子を見ながらもお店の仕事を進めていく。
少女はしばらくの間ショーケースの中を覗き込んでいたが目当てのカードが見つからなかったのか、辺りに視線をきょろきょろと彷徨わせはじめる。
そんな中、少女の視線が近くでデッキを作っていた遊騎君の方に向き、少女は遊騎君に近寄っていき遊騎君をジッと見つめはじめた。
しばらくは遊騎君も気にせずにデッキを作っていたのだが、次第に耐えられなくなったのか少女の方に向き直り声をかけた。
「……なあ、なんか俺に用があるのか？」
遊騎君がそう尋ねると少女はふるふると首を振る。
しかし、少女の視線は遊騎君が作っているデッキから外れない。
遊騎君が困ったような表情を浮かべて私の方を見る。
そんな遊騎君を見かねて、私も２人に近付いて声をかける。
「遊騎君が作っているデッキに興味があるのかい？」
「デッキ……？」
そこで初めて少女は首を傾げながら声を出す。
少女の声はすぐにでも掻き消えてしまいそうな程小さな声だった

が、なんとか私の耳に届いた。
「おや？デッキが分からないのかい？カードを探しにきたのだから君も決闘者だと思ったんだけどね」
「デッキ……決闘者……知らない……私、カード、探しに、来た。私の、手かがり、欲しくて」
「手がかり？」
「このカード……知らない？」
「うわっ、何このカード……見たことねぇ」
「これは……私も見たことがないね」
　そういって少女はポケットから数枚のカードを取り出し、私と遊騎君がそのカードを覗き込むと、私達は思わずといったように呟いた。
　そんな私達の反応に、少女は相変わらずの無表情だったが、何処か暗い雰囲気で肩を落とす。
　そんな少女を見て、遊騎君は何を思ったのか明るい表情を浮かべて口を開いた。
「よし、じゃあさせっかくだから、そのカードを使ってデュエルしてみようぜ」
「えっ？」
　遊騎君の突然の言葉に少女は目を丸くする。
「デュエルって、何？」
「あーデッキも知らないんだからデュエルも分かんないか。このカードでデッキを使って勝負するんだよ。せっかく見たこともないカードがあるんだから、やっぱりデュエルしてみたいじゃん。それにデュエルすることでお互いのことも分かるしさ」
「遊騎君……君ねぇ」
　遊騎君の言葉に私は呆れたような表情を浮かべる。
　おそらく、暗い雰囲気を出した少女を慰めたかったんだろうが、もう少し他に言葉はなかったんだろうか？
　しかし、そんな遊騎君の言葉が何処かに響いたのか少女は遊騎君に顔を近付ける。
「デュエル……やって、みたい。なんか、知ってる、気がする」

「お、そっか。ならやろうぜ、デュエル」
「でも、私、デッキ？ない」
「あーそうだよな。なら、俺の余ってるカード分けるからさ、それでデッキ作ろうぜ」
　そういって遊騎君が自分の持っていたカードを広げはじめると、少女はふるふると首を振る。
「でも、それ、あなたの、カード」
「気にすんなって。決闘者同士、困った時は助け合いだからな。まあ、大したカードもないんだけど……俺は結束　遊騎。お前、名前は？」
「……闇、って、呼ばれてた」
「呼ばれてた？……まあいいや。それじゃあ闇、デュエルしようぜ‼？」
「‼？……うん、よろしく、遊騎」

ーーーーーーーー

★

「結局、その後は遊騎君が闇君相手に新デッキを試して、寄せ集めのカードで出来た闇君のデッキを一方的に打ち負かしてね。そんなデュエルでも闇君には楽しかったのか、遊騎君が帰る時間までずっと2人でデュエルをしていたんだ。そんなことがあってからだね、このお店の常連に闇君が加わったのは」
　そういって、昔を懐かしむように島さんが目を細める。
　それは、きっと島さんにとっても大切な思い出なのだろう。
　そのことを思い出している島さんは、凄く優しい笑みを浮かべていた。
「結局、闇君の境遇を聞いたのはそれからしばらくたってからだったけど、その頃にはもう、闇君は自分の過去を探すことよりも、遊騎君と楽しくデュエルをすることの方が重要になっていたみたいだった

ね。何もなかった彼女にとっては、遊騎君と、遊騎君が与えてくれたデュエルというものはそれだけ大切なんだろう。そして、それはきっと遊騎君の方からしてもそうだったんだろうね。彼も闇君が来るまではこの店で独りぼっちだったからね」
「……だからあの2人は仲がいいんですね」
「そうだろうね。だからこそ、闇君は今でも遊騎君と一緒にデュエルが出来ることを楽しみにしているんだよ。闇君にとって、デュエルは遊騎君との絆の象徴なんだろうね」
そういって、島さんが窓の外を見て、私もつられるように窓の外を見る。
……私を救ってくれた師匠……私を導いてくれる闇先パイ。
私は、そんな2人に何が返せるんだろう？
そんなことを、ふと思った。

ーーーーーーー

☆

「……ふぅ、ここなら誰にも見られないかな？」
「見つけた、闇!!？」
「!!？遊騎……何か用事？」
『Ｎａｔｕｒａｌ』を出て、店の路地裏に入った俺は、追いかけていた人物である闇を見つけて思わず声を上げる。
そんな俺を見て、闇は手を後ろに組み、目を見開きながら首を傾げた。
俺はそんな闇を気にせずに近づいていき、闇が隠した左手を掴んで、見える位置まで引っ張る。
見えるようになった闇の左手は、
火傷をしたように赤く、何かに噛み付かれたような跡があった。
「むぅ……バレちゃった」
「バレちゃった、じゃねぇよ」

左手を見られた闇は気まずそうに顔を逸らす。
そんな闇にため息を吐きながら、俺は確認するように口を開く。
「これ、さっきのデュエルが原因だな。エレキングコブラと超雷龍―サンダードラゴンの攻撃でこうなったのか？」
「ん、正解」
俺の言葉を闇は肯定する。
闇は先程のデュエルで超雷龍―サンダードラゴンが攻撃した際に少しだけ身体を引き、雷のブレスに左手が呑まれると少しだけ表情を顰めていた。
闇の妙な動きを見てもしやとは思ったが、その予感は当たってしまったようだ。
「……天雷が使ってたのは闇のカードなのか？」
「ううん、闇のカードだったらこの程度じゃ済んでないよ。終夜が使っていたのは寧ろ逆のカード」
「じゃあ、前に話してたカードの精霊って奴なのか？そんなのが何でまた闇に怪我なんか……」
「私の資質自体が闇のカードの性質に極めて近いって話、前にしたよね？闇のカードに近い私は、カードの精霊にはかなり嫌われてるの。だから、これは威嚇攻撃みたいなもの。こちらに手を出すなって言う警告だね」
「それって……」
闇はカードの精霊からも、闇のカードからも攻撃を受けてしまうってことなのか？
どんな表情をすればいいのか分からない俺に、闇は何でもないというように首を振った。
「遊騎が気にする必要はない……それに火傷ぐらいならまだ対処できるから」
「えっ？」
「おいで、ウロボロス」
闇がそう呟くと、闇のデュエルディスクから霧のように闇が溢れ出す。

その闇の霧が周囲を包み込むと、霧の中から圧倒的な存在感を放つ漆黒の三つ首龍が現れた。
「なっ⁉？」
『ヨウオウヨジガラレワ　カダンヨヲレワ』
現れた三つ首龍に驚いていると、その龍は底冷えするような渋い声で闇に話しかける。
そんな龍を、闇は気にすることもなく平然と話しかける。
「ん、ちょっと火傷したから治して」
『……ガダノイシホ　デイナワカツア　ニウヨ　ノルオタレヌ　ヲレワ』
「いいから、やって」
『ダウオウヨジ　イナガタカシ　アハ』
龍は底冷えするような渋い声から一転して、哀愁が漂うような悲しそうな声を出すと、身体から闇の霧を噴き出させ、闇の左手を覆っていく。
しばらくして左手を覆っていた闇が霧散すると、闇の左手は火傷や噛まれた跡のない綺麗な手に戻っていた。
「ん、ばっちり。元通り」
「待て待て待て‼？色々とちょっと待て‼？」
「ん、どうかした？」
「どうかしたも何もツッコミどころが多すぎるだろ⁉？」
平然としている闇に思わずツッコミを入れると、闇は不思議そうに首を傾げる。
むしろこっちの方が首を傾げたいわ‼？
「まずいきなり出てきたそこの龍‼？そいつはなんなんだよ⁉？」
『ヲキオリシミオ　ゴイ　スロボロウズルエヴ　ハナノレワ　ノドキウユ　ルカカニメオニツハオ』
「ええい、自己紹介してくれてるんだろうが悪いが何言ってるか分からん‼？」
「えっと、『お初にお目にかかる、遊騎殿。我の名はヴェルズウロボロス。以後お見知り置きを』だって」

「分かるのかよ⁉？というかその外見なのにめっちゃ丁寧だな、お前⁉？」
『モデドホレソ　ヤイ』
俺のツッコミにヴェルズウロボロスと名乗った龍が照れたような咆哮をあげ、地面が揺れる。
止めろ、外見とのギャップが激しすぎる⁉？
「……ヴェルズってことは今、闇が使ってるモンスターなんだよな？」
「うん。この子はヴェルズウロボロス。さっきのデュエルでは出せなかったけど、私の切り札の1枚」
「お前が闇のカードを使ってるって言うのは前にも聞いてたけど、闇のカードって言うのはこんな風に簡単に実体化してくるものなのか？」
「ううん、普通の闇のカードなら簡単に実体化することは不可能。というより、それが出来るならわざわざ使用者を乗っ取るなんて、非効率的。モンスターの身体の方が、間違いなく人間より強いよ」
「……それもそうか」
前に闇に聞いた話しだと闇のカードは使用者の身体を乗っ取るらしいのだが、こんな風に実体化できるのならわざわざそんな弱体化するような真似を取る必要ないもんな。
「この子が実体化してるのは、私の適合割合が高いから。普通の決闘者ならこうはいかない」
「……はぁ、まあ他にも聞きたいことがあるから今はこのぐらいにしておく。次の質問なんだが、どうやって闇の怪我をヴェルズウロボロスが治したんだ？」
「そんなに難しいことじゃない。闇のカードとの適合割合の高さを活かして闇で包んでいる間に一度身体を分解して再構築しただけ」
「滅茶苦茶難しくて危険なことやってんじゃねぇか⁉？」
「これも適合割合が高くて資質が闇に近い私だけの特権。普通の人なら死んじゃうから止めた方がいい」
「やらねぇだろ、誰もそんなこと……」

誰が好き好んで自分の身体を分解するんだよ……
「はぁ～まあいい。いや、良くないけど。深く考えてたら午後の試合に間に合わなくなっちまう。それで、最後の質問なんだけどさ」
「ん、何でも聞いて」
そういって闇は無表情のまま胸を張る。
そんな闇に、俺はさっきの試合で初めてヴェルズを見てからずっと気になっていたことを口にした。
「闇が使ってるヴェルズのモンスターってさ。昔、俺がお前にあげたモンスター達に似てないか？ヴェルズヘリオロープにヴェルズカストル……あれ、最初にお前に会った時にあげた寄せ集めのカードの中にあったジェムナイトエメラルとセイクリッドポルクスだろ？」
「……流石遊騎。気付いたんだ、ヴェルズの秘密に」
俺の言葉に、闇は目を丸くしながらもどこか嬉しそうな表情を浮かべる。
そんな闇に俺は苦笑を浮かべながら首を振った。
「俺も九石とのデュエルでセイクリッドプレアデスを出してなかったら多分そこまでは思い浮かばなかったさ。俺が唯一知っているセイクリッドプレアデス以外のセイクリッドモンスターであり、セイクリッドの召喚権を増やす効果を持っていたセイクリッドポルクスなんて、思い出せただけ奇跡だ。それにヴェルズヘリオロープにヴェルズカストル以上に分かりやすいモンスターをお前は出してくれたじゃないか」
そういって俺は未だに闇の後ろに実体化しているヴェルズウロボロスを指差す。
「ヴェルズバハムート、ヴェルズオピオン、そしてそこにいるヴェルズウロボロスの姿を見れば、俺だって確信が持てる。前にお前は言ってたもんな。『三龍は、まだ力を貸してくれる』って。そういう意味なんだろ？」
「……ふふっ、大正解。やっぱり、遊騎は凄いね」
俺の言葉に、闇は無表情のまま、でもどこか嬉しそうにぱちぱちと手を叩く。

そんな闇を見て、俺は思わず苦笑を浮かべる。
そんな俺を見て、闇はいつも通りの無表情で口を開いた。
「遊騎には特別に教える。私とヴェルズとの出会いを。そして、どうしてヴェルズのモンスターが、遊騎がくれたモンスターに似ているのかも」

ーーーーーーー

●

「……」
「酷い顔をしているな」
「あ……炎……ごめんなさい……今日も……負けちゃった」
ある日、プロチーム『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』としての大会が終わり、事務所のソファーで俯いて座っていた私に、炎が話しかけてきた。
「気にする必要はない。冬城の分は俺と御影が勝ったからな……大丈夫か？」
「大丈夫……だよ……大丈夫じゃないと……ダメ、なの」
「……」
私の言葉に、炎が表情を固くする。
炎にそんな表情をさせてしまうことを申し訳なく思いながらも、私にはそんな言葉を吐くことしか出来なかった。
遊騎が……私の１番大切な友達がプロリーグから追放され、私達の前から突然姿を消して１ヶ月が経過した。
遊騎がいなくなったことにショックを受けた……のだろうか？
正直、自分の感情がよく分からない。
突然遊騎がいなくなったことで錯乱したりは、しなかった。
……どう反応すればいいのか、分からなかった。
あまりにも、当たり前のように一緒にいた存在が、在ることが当然の存在が、無くなっていたから。

例えるなら、『朝起きたら利き手が無くなっていた』きっと、そんな感じなのだろう。
まず、どうすればいいのかが分からない。
無くなったからといって、人生が終わるわけでもなく、多少違和感があろうが生活はしていける。
だけど……確かに在ったハズのその場所には、何も無い。
圧倒的に……取り返しがつかないほど、何も無い。
他のもので無くなったものを補おうとしても、それはやっぱり偽物で……空虚感を埋めることはできても、元に戻すことは出来なくて……
だからこそ、今の私は空っぽで……そして空っぽだからこそーーー
「ダメだよね……私……こんなんじゃ、氷結界に見捨てられても仕方がない」
「冬城……」
ーーー今の私には自分のデッキすら扱うことが出来ないのだろう。
遊騎がいなくなった日から、私は自分が使っていた氷結界のデッキを使うことが出来なくなっていた。
正確には、使えなくなったという表現は正しく無いのかも知れない。
デッキをデュエルディスクにセットすることも、それでデュエルをすることも出来る。
だけど、デュエル中に私の手札に氷結界のカードがくることは無くなった。
どんな構築に変えても、氷結界のカードだけは手札に来ることはなかった。
そして、EXデッキに入っているシンクロモンスターの中でも、氷結界の虎王ドゥローレンは出せなくなっていた。
他の氷結界のカードと同じく、ドゥローレンだけシンクロ召喚を行うための条件が、どうしても揃わなかった。
私が今使える氷結界のカードは、氷結界の三龍だけ。

まるで、他の氷結界のカードに、今のお前には使う資格がないのだと言われているようだった。
「……俺ではお前を慰めることが出来る言葉は浮かばん。だが、冬城ならきっと大丈夫だ。お前はいつの日か、また前のようなデュエルが出来るようになる」
「……そうかな？」
「ああ、それは俺が保障しよう。だから、今はゆっくりと休め」
「……うん……炎……ありがとう」
「気にするな。我ながら、お前にこんな言葉しかかけることが出来ない自分が嫌になるからな」
そういうと、炎は荷物を纏めて事務所を出て行った。
「……私も帰ろう」
しばらくボーっとしていた私はそう独りごち呟くと、荷物を纏めて外に出た。
外に出ると、辺りは既に暗闇に支配されていた。
気づいたら、時刻は２２時を回っており、人影もまばらだ。
私は自分の外見がかなり幼いということを自覚している。
他の人から見れば、私の姿は小学生程度の少女にしか見えないだろう。
当然、そんな少女がこの時間帯に歩いていれば面倒なことに巻き込まれかねない。
私はなるべく急いで自分の借りているマンションに帰るために夜の街を駆けていく。
そうして、自分のマンションの近くまで差し掛かったところだった。
『ヨヨジウヨシ　タエカカヲミヤ　二ロココ　ヨヨジウヨシ』
「？……誰？」
近くにあった電信柱の陰から、不思議な声が聞こえた。
私は電信柱の方を見るが、そこには人影はない。
気のせいかと思い、私がそのまま立ち去ろうとすると、また私の耳に不思議な声が届く。

『ヨヨジウヨシ　タエカカヲミヤ　二ロココ　ダココ』
「……また、聞こえた」
何度も聞こえる不思議な声に、私はもう一度声の主を探す。
すると、声が聞こえた電信柱の陰に1枚のカードが落ちていることに気づいた。
私は首を傾げながら、落ちていたカードを拾う。
すると、手に取ったカードから夜の闇を凝縮したような黒い何かが溢れ出し、私の身体を包み込んだ。
『ダノモノシタワ　ハダラカノマサキ　デレコ　ナタツカカ　ハハハハフ』
嘲笑うような笑い声が頭の中に響く。
そんな声に対し、私はーーー
「むぅ、うるさい。とりあえずこれが喋ってることには間違いなさそう？」
『……エ』
ーーーあまりにもうるさいので少し不機嫌になりながらも、平然とそのカードを握りしめた。
『ルイテツコノ　ガキシイ　ゼナ　ダゼナ　アアアヤギ』
「不思議。スピーカーが仕込まれてるわけでもなさそう。何処から声が聞こえてる？」
私が確認するようにカードを折れるか折れないかの絶妙なバランスで引っ張ると悲鳴のような声が頭に響いてくる。
『‼？ルレブヤ　ガロシリヨ　ノレワ　‼？ナルパツヒ　‼？オロメヤ　メヤ』
「むぅ、凄くうるさい……燃やせば黙る？」
『‼？テメヤ』
「テメヤ……もしかして、反対に言葉を言ってる？”やめて”って言ってたの？」
『カイナハデルア　ガロコドミ　ハトルスイカリ　ヲゴンゲ　ノラレワ　ウホ』
「長文は分からない。ここでは人間の言葉で話せ。そうじゃないと燃

やす」
『ダリム』
私がそういうと、カードから怯えるような声が聞こえてきた。
改めてそのカードを観察する。
種類はリンクモンスター、名称はインヴェルズオリジン。
イラストは黒い霧のようなものが集まり顔のようになっている。
おそらく、この顔が話しかけてきているのだろう。
聞いたことがないモンスターで、意識疎通は可能……だけど人間の言葉を話すのは無理……興味深いけど、面倒そうなものを拾ってしまった。
私は困った時の癖で、自分の頭をポンポンとノックするように叩きながらそのカードを懐にしまい、再び夜道を駆ける。
カードから抗議するような声が聞こえてきたが無視して、自分が借りているマンションの自室に入り、部屋の電気をつけると、懐からインヴェルズオリジンのカードを取り出してテーブルの上においた。
『?ダコドハココ』
「私の部屋。外だと誰かに見られちゃうかも知れないから。そうなると面倒」
『?ダリモツルスウド　ヲレワ』
「別にどうもしない。興味があるから質問してみたいだけ」
『?トダンモツシ』
「ん、質問。あなたは何?」
『ダドーカノミヤ　ハレワ』
「闇のカード?」
『ダイザンソ　シレワロノ』
「……悪霊の一種?」
『ダノモナウヨノソ』
「……やっぱり燃やす?」
『テメヤ』
再びカードから怯えたような声が響く。
まあ、燃やすのは流石に可哀想だから冗談なのだが、これはいい脅

し文句になるかもしれない。
「それで、どうしてあなたは私に話しかけたの？」
『……』
「だんまり？つまりやましいことがある？私を憑き殺そうとでもした？」
『……』
「図星？黙ってたら分からない。別にそれぐらいじゃ怒らない。それで死んだなら、私はその程度だったというだけ」
『ナルイテツワスガモキ』
「肝が？ああ、促音は元の文字になるんだ。別に肝が座ってるわけじゃない。それならそれでいいと思っただけ」
『？カキウヨシ　マサキ』
「どうだろうね？正気か狂気か、正しいか間違ってるかなんて、他人が決めるものだから……私には、分からないよ」
気付いたら、私は無意識の内に自分の手を握りしめていた。
遊騎はイカサマをしたって言われて、プロリーグから追放された。
だけど、それだけはありえないということを、ずっと遊騎とデュエルをしてきた私は知っている。
遊騎は、勝つことに拘ったことなど1度もない。
遊騎はどんな時でも楽しむことが1番で、デュエルに負けても次にどうすればその戦術を攻略できるか考えるのを楽しむような人だった……だからこそ、楽しむためじゃない、勝つためのイカサマなんて、遊騎は絶対にしない。
それなのに、世間は遊騎のことをよく知りもせず、彼がイカサマをしたと断定し、追放した。
いつもそうだ。
誰も遊騎のことを理解しようともせず、勝手な決めつけで迫害する。
何故、誰も彼のことを理解しようともしないのか？
記憶が無かった私に、暖かな居場所をくれた、私の道標になってくれた優しい彼を、どうして皆して傷付けるのか？

何故彼に悪者という役を押し付けるのか？
私はーーーそんなこの世界が赦せない。
「ねぇ、あなたは呪われた存在なんだよね？あなたはなんで呪われたの？」
『タレマウ　リヨンネヤジ　ノトビトヒ　ハレワ……』
「人々の邪念から？」
『ダウユリイザンソ　ノレワ　ガノクイ　テレワロノ　ニカレダ　イロノ　ヲカレダ　ダノナイロノ　ガソコトコタレマウ　ハレワ　ウヨサ』
「そっか……あなたも勝手な役割を押し付けられたんだね」
私は思わずテーブルの上に置いてあったインヴェルズオリジンのカードを手に取り、抱きしめた。
『？ヲニナ』
「ゴメンね……人間って勝手だよね……悪いことをこうやって押し付けて……理不尽だよね」
人々の負の感情を一方的に押し付けられたって、形にされた存在。
それは、なんて身勝手な思いから生み出されたのだろう？
別に、そのような存在に生まれたかったわけでもないのに……
「ねぇ、君は私と一緒にデュエルするつもりはない？」
『？ニナ』
私の言葉にインヴェルズオリジンから戸惑いの声が聞こえてくる。
私はそんなインヴェルズオリジンに言葉を続ける。
「あなたのこと、気に入った。私は、あなたと一緒にデュエルがしたい」
『？ゾダトコウイ　トルレワロノ　モマサキ　ハトコウイ　トウカツヲレワ　ダイザンソ　タレワロノ　ハレワ　ヲトコナキヅノモ』
「そんなの大したことじゃない。あなたに押し付けられた悪意を一緒に背負えるなら、呪い上等」
『？ルストウヨレイケウ　ヲレワ　ゼナ　ニノナレソ　？ゾダノタシトウロトツノ　ヲダラカ　ノマサキ　ハレワ　？ダゼナ』
「そうだったんだ。だけど、私は平気だったから気にしない。それに、

あなたは似てるから」
『?トダルテニ』
「うん。何でもかんでも背負っちゃう、私の大切な友達に」
『ヨノモナンビフ　ハトルイテニ　ニレワ　モチダモト　ノソ』
　そんな、どこか諦めたような声が私の頭に響く。
『イヨガルス　ニキス　ダミタケマ　ニマサキ　ハレワ』
「ん、好きにする。これからよろしくね、インヴェルズオリジン」
　私がそういうとインヴェルズオリジンから完全に諦めたような雰囲気が伝わってきた。
　私は改めてインヴェルズオリジンのカードを眺めながら質問をする。
「それで、あなたを使うにはどうしたらいい?あなたを使うにはヴェルズモンスターって言うのが必要なんだよね?同じように呪われているカードを探せばいいの?」
『?カルアハドーカ　イナテツカツ　イナ　ハウヨツヒ　ノソ』
「使ってないカード……少し待ってて」
　インヴェルズオリジンにそういうと、私は仕事に持って行っていたカバンの中から普段使っている氷結界とは別のデッキケースを取り出し、中からカードを取り出してテーブルの上に広げていく。
　私が取り出したカードを見て、インヴェルズオリジンは興味深そうな声を上げる。
『ナダドーカ　ノロボロボ　ンブイズ　ウホ』
「うん。これは、私が1番最初に友達に貰ったデッキだから」
『ガンエミ　カシニバタミカ　クナハデ　キツデ　ハニレワ　カンダウヨジ　ノカニナ……』
「むっ、それは失礼。私にとってはとても大切なデッキなの」
　私はそういって広げたカードを1枚ずつ並べていく。
「ジェムナイトエメラル、セイクリッドポルクス、ナチュルコスモスビート、ドラグニティーブラックスピア、霞の谷の巨神鳥、ジュラックタイタン、ＡＯＪ　カタストル……確かにどこにも規則性なんてないし、テーマで固まってるわけでもない……それでも、私の大切

な友達が初めてくれたカード達で出来たデッキだから」
『タツイ　ヲトコ　ナイレツシ　ハレソ　カウソ』
「ううん、別にいいよ。客観的に見たらそう見えるのも事実だしね。それで、このカード達をどうするの？」
　素直に謝ってきたインヴェルズオリジンに私は首を傾げながら質問する。
『サノルスウコ　ネハレソ』
　そんな私の疑問に応えるようにインヴェルズオリジンのカードから闇が溢れ、私が並べたカードを呑み込んでいく。
　しばらくして闇がインヴェルズオリジンの中に戻ると、テーブルの上には私が並べたカードとは別のカードの束が存在した。
　私は首を傾げながらもそのカードの束から1枚ずつカードを手に取っていき、中身を確認していく。
「ヴェルズヘリオロープ、ヴェルズカストル、ヴェルズマンドラゴラ、ヴェルズザッハーク、ヴェルズサンダーバード、ヴェルズサラマンドラ、ヴェルズゴーレム……これって……」
『ダノタセサ　カズルエヴ　リトシツウ　ヲタガス　ノータスンモタイテツカツ　ノマサキ　リヨニラカチ　ノレワ　？カタイロドオ　フフフ』
「ヴェルズ化……それがあなたの力なの？」
『ナガイナ　ハデケワ　ルエカツ　モデニンナ　アマ　モニカイ』
　インヴェルズオリジンのどこか誇らしげな声が響く。
　私はヴェルズ化したカードを確認しながら少し困った顔をする。
「凄いけど、このカード達だけじゃデュエルの決め手にはならないね」
『ヌリタ　ガラカチ　ハデケダドーカ　タシニイタイバ　マイ　ナガダノイイ　バレア　ガイタイバ　ナクヨリウヨキ　シコスウモ』
「強力な媒体……」
　インヴェルズオリジンのその言葉に、私はカバンから氷結界のデッキケースを出し、その中にあるＥＸデッキから氷結界の三龍を手に取る。
　私が手に取った氷結界の三龍を見て、インヴェルズオリジンは驚き

の声をあげる。
『カノタイテツモ　モドーカ　ナクヨリウヨキ　ドホレコ　タイロドオ』
「そうなの？これも私の大切な友達がくれたカードなの。せっかく昔使ってたカードを元にしたカードでデュエルできるなら、この子達も一緒に使いたいから」
そういって、私も改めて手元にある氷結界の三龍を見る。
このカード達は、私がプロ決闘者になる際、氷結界を使いたいと言ったら遊騎がプレゼントしてくれたカードだ。
私が使いたいと言ったから、島さんに無理を言って探して貰ったらしい。
カード自体もアルバイトや大会の優勝賞金を使ってわざわざ自力で手に入れてプレゼントしてくれた。
氷結界が使えなくなった今でも、この子達だけは私に力を貸してくれてる。
それがまるで、私にまだ遊騎のことを諦めるなって励ましてくれているようで……私にとって、凄く大切なカード達だ。
だから、できることならこれからも一緒にデュエルがしたい。
『ウオラモ　テセサ　トイタイバ　クナヨリンエ　バラナ　カウソ』
そういうと、再びインヴェルズオリジンのカードから闇が溢れ、氷結界の三龍を呑み込んでいく。
そして、闇が消えると、私の手元には氷結界の三龍に重なるように、今の私の主力となる3枚のエクシーズモンスターが現れたんだ。

ーーーーーーーー

☆

「ーーーと、言う訳で、ヴェルズ達は遊騎から貰ったモンスターに似ているわけでした」
「……頭が痛くなってきた」

一通り闇の話を聞いた後、軽い頭痛を覚えて額に手をやる。
ヴェルズのカードが異常な存在だと言うのもそうだが、それを平然と受け入れている闇も闇だった。
……ダメだ、これ以上は俺のキャパシティを超えている。
闇に害はないみたいだし、深くは考えない方向でいこう。
「……はぁ～分かった。いや、あまり分かりたくはないけど、闇がそれでいいのならそれでいい。俺があげたカードをそれだけ大切に思ってくれてるのは嬉しいしな」
「ん、遊騎がくれたものは全部大切な宝物だから」
「そんな大したものをあげれてないから申し訳ないんだけどな。まあいいや。それじゃあ、長話をしちまったし、一緒に昼飯でも食いに行こうぜ」
「ん、賛成。時間を考えると、『ジャンクフード』がいい。中学生の時に、よくあそこで遊騎と一緒にハンバーガー食べたし」
「ああ、あの店な」
『ジャンクフード』というのは、栄養価のバランスを著しく欠いた調理済み食品のことではなく、『Ｎａｔｕｒａｌ』の近くにあるハンバーガー屋の名前だ。
人気メニューは何故かジャンクウォリアーの顔の形をしている『ジャンクハングリーバーガー』……おそらくジャンクフードのジャンクとかけてそうなってるんだろう。
「んじゃ、行ってみるか。なんか思い出すと久しぶりに食べたくなってくるしな」
「ん。でも、その前に、遊騎にお願いがある」
「お願い？珍しいな、闇が俺にお願いなんて。何か奢って欲しいのか？」
あまりにも珍しい闇からの申し出に俺は首を傾げる。
そんな俺の目を真っ直ぐ見つめて、闇は少し躊躇いながらも覚悟を決めた顔でその言葉を口にする。
「ううん、そっちじゃない。次の私とのデュエル、遊騎にあのカードを使って欲しい」

「……あのカード？」
「ん。私が初めて遊騎とデュエルした時に使ってた、英雄のカード」
「……」
　闇の言葉に、俺は思わず苦い表情を浮かべる。
「前に言ったろ？今の俺にあのカード達は引けないって。同じように氷結界が使えなくなった闇なら分かるだろ？」
「ん、無茶なことを言ってるのは分かってる。だけど、やっぱり私は、他でもない『Ｎａｔｕｒａｌ』で、遊騎がもう１度あのカードを使ってるのがみたい。それに、信じてる。今の遊騎なら、きっと前みたいにあのカードが使えるって」
「……はぁ～遊花といいお前といい、何でそんな根拠のない期待を俺にするんだよ」
　真っ直ぐに、俺なら大丈夫だと信頼しきった目を向けてくる闇に、俺は思わずため息を吐く。
　そして路地裏から出るために踵を返しながら、ぶっきらぼうに呟いた。
「……入れるだけだぞ。出せるかどうかまでは、保証しないからな」
「!!？うん。ありがとう、遊騎」
　そんな嬉しそうな闇の声を聞きながら、俺は路地裏から表通りに向かって歩き出す。
　……はぁ～期待が重いっての、本当にさ。

ーーーーーーー

●

　路地裏から出るために歩き出した遊騎を見て、私は少しだけ笑みを浮かべる。
　そんな私に、控えていたヴェルズウロボロスが話しかけてくる。
『？ウロダ　イナ　テシナハ　カシ　デマウユチト　ハシナハ　ノドホキサ　？カノイヨ』

「いいの。あそこから先は、願掛けだから。遊騎が知る必要はない」
『カノモウイウソ』
「ん、そういうもの」
ヴェルズウロボロスの実体化を解きながら、私はもう1度、あの後のことを思い出す。

ーーーーーーー

「ヴェルズウロボロス、ヴェルズオピオン、ヴェルズバハムート……ゴメンね、あなた達まで闇に染めてしまって」
『ヨウオウヨジ　ガラレワ　イナ　ハウヨツヒ　ルスニキ』
「……えっ？」
氷結界の三龍をヴェルズ化させ、思わず呟いた私の声に、返ってくる声があった。
だけど、その声は先程まで聞こえていたインヴェルズオリジンの声ではなくて、どこか尊厳があり、ぶっきらぼうながらもこちらを気遣うような声だった。
私は驚いた表情を浮かべながら手元にあるカードに目線を移す。
そこにあったのは、当然先程生まれたヴェルズのエクシーズモンスター達。
その中でも、自分の存在を主張するように闇を放っているヴェルズウロボロスの姿だった。
『ヨウオウヨジ　ガラレワ　ナタキデ　ガトコ　スナハ　クヤウヨ』
「ようやく？……もしかして、氷結界の龍、なの？」
『タツラモ　テセサウヨリ　ヲドーカノミヤ　ナラカ　ダイタミ　イナエミ　ガイレイセ　ハウオウヨジ　ラヤウド　ナガダ　スロボロウズルエヴ　ワレワ　ノマイ　エイハト　モニカイ』
「えっと……女王って、私の、こと？」
『ヨウオウヨジ　ガラレワ　ヨジウヨシ　シメヒ　ヲゴクカ　イカダケ　モトウソ』
そういって、ヴェルズウロボロスは笑う。

『ニメタ　ノモト　タシケ　ヲタガス　カルケヅツ　イカタタ　ニメタ　ノモト　ナツセイタ　ダマ　ウト　ニウオウヨジ』
「……無論。私は遊騎にたくさんのものを貰った。私の居場所も、誰かを思う感情も、全部遊騎から貰ったもの。私は遊騎を頼ることしかできなかったから……」
　私が今いる居場所も、こうやって人を思いやる感情も、全部遊騎が教えてくれたもの。
　遊騎ともし出会わなければ、私はずっと独りぼっちで、何も見出せずに生きてたんじゃないかって、こんな感情は持てなかったんじゃないかって、そう思うだけで私の心はぞっとする。
「だから、遊騎を誰かが傷付けるなら、私はそんな存在と戦う。大切な人を守ることが悪だと言うのなら、私は悪でもいい。遊騎の帰ってこれる場所がないなら、私が帰ってこれる場所を作る。例えーーー今の世界を全て壊してでも」
『ヨウオウヨジ　ガラレワ　ウソカ　ヲラカチ　モラカレコ　ハラレワ　バラナ　ダゴクカイイ　ハハハハフ』

ーーーーーーー

「……もう、誓いは絶対に違えない」
「おい、闇。早く行かないと時間が無くなるぞ？」
「……ん、今行く」
　表通りの方から聞こえる遊騎の声に、私は薄っすらと笑みを浮かべながら駆け出す。
　ご飯が終わって遊花のデュエルを見たら、次は遊騎とのデュエル。
　……全力でぶつかり合える、楽しいデュエルになるといいな。

第４６話　戦乙女ＶＳ羽根・奇跡の出会い

★

「全員集合したな？それじゃあ準決勝第１試合、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』所属、天羽　リーネＶＳデュエルアカデミア所属、栗原　遊花を開始する」
　お昼休憩も終わり、参加者が全員集まったのを確認した師匠が、準決勝の始まりを告げる。
「とうとう準決勝ね。リーネさん相手でも、しっかりやって来なさいよ」
「うん、全力でぶつかってくるね‼？」
　桜ちゃんの問いに笑顔で応えながら、私はリーネさんが待っている場所に移動する。
　リーネさんは近寄ってきた私を見て、ほんの一瞬、辛そうな表情を浮かべる。
　そのことに私が疑問を覚える前に、リーネさんは何事もなかったように笑顔を浮かべて私に話しかけてきた。
「ようやく遊花ちゃんとのデュエルなのですね。今回はよろしくお願いするのです、遊花ちゃん」
「あっ、はい‼？こちらこそ、よろしくお願いします‼？」
　リーネさんがそういって頭を下げるのを見て、私も慌てて頭を下げると、リーネさんは優しい笑みを浮かべながらデュエルディスクを起動する。
　私もそんなリーネさんを見てデュエルディスクを起動し、大きく深呼吸をする。
　相手は闇先パイにして自分より強いと言わしめた決闘者。
　闇先パイに歯が立たない私なんかじゃ、足元にも及ばないかも知れない。
　それでも……私はチラッと審判をしている師匠を見る。

このデュエルに勝てれば決勝戦。
そしてそこでデュエルできる可能性があるのは、師匠か闇先パイだ。
２人は、この１ヶ月の間に色々なことを教えてくれた。
私が楽しくデュエルが出来るように配慮してくれて、私をもう１度デュエルの道に戻してくれた師匠。
私が全力で楽しいデュエル出来るように戦術を一緒に考えてくれて、それが身につくまで何度も手伝ってくれた闇先パイ。
そんな２人に、直接デュエルして、今の私の姿を見せたい。
だからこそ……リーネさんがどんなに強くても、このデュエルでの勝利だけは譲りたくない‼？
「すー……はー……いきます‼？」
「ふふっ、いい気迫なのです。それでこそ、リーネも全力でデュエルできるのです‼？『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』所属、天羽リーネ、出陣なのです‼？」
『決闘‼？』

遊花　ＬＰ８０００
リーネ　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は貰います‼？私はミスティックパイパーを召喚‼？」
〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ０
現れたのはフルートのようなものを弾いている男の人。
現れたミスティックパイパーはいつものように私にサムズアップをする。
「ミスティックパイパーの効果発動‼？このカードをリリースして自

分のデッキからカードを1枚ドローします!!?そしてこの効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル1モンスターだった場合、自分はカードをもう1枚ドローします!!?」
　ミスティックパイパーが姿を消し、私はカードをドローする。
「私が引いたのはゴーストリックランタン!!?レベル1モンスターなのでもう1枚ドローします!!?カードを2枚伏せてターンエンドです!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札４
ー－▲▲ー　　ー
ー－－－－－
　ー　　ー
－－－－－－
－－－－－－　ー
リーネ　ＬＰ８０００　手札５

「リーネのターン、ドローなのです!!?早速行かせて貰うのです!!?魔法カード、隣の芝刈り発動なのです!!?」
「っ、そのカードは喰代君の時に使ってた……」
「このカードは自分のデッキの枚数が相手よりも多い場合に発動できるのです。その効果はデッキの枚数が相手と同じになるように、自分のデッキの上からカードを墓地へ送るのです!!?さあ、遊花ちゃんの残りのデッキ枚数を教えて欲しいのです」
「私のデッキは３８枚です」
　私のデッキ枚数を聞いて、リーネさんが少し驚いた表情を見せる。
「むむっ、遊花ちゃんのデッキは少し枚数が多いのですね。リーネは５４枚なので、その差分の１６枚のカードを墓地に送らせて貰うのです。さらに墓地に送られた妖刀竹光の効果発動なのです!!?」
「っ、師匠も使ってる竹光シリーズですか……」
「デッキから妖刀竹光以外の竹光カードをデッキから手札に加えるのです。リーネは黄金色の竹光を手札に加えるのです。さらに魔法

カード、増援を発動なのです!!?その効果でデッキからレベル４以下の戦士族モンスター1体を手札に加えるのです!!?リーネはデッキから閃刀姫―レイを手札に加えるのです!!?」
「来ましたね、リーネさんの相棒のモンスター……」
「さあ、早速遊花ちゃんにリーネの相棒を紹介するのです!!?戦場を舞う始まりの戦乙女!!?閃刀姫―レイ!!?」

〈閃刀姫―レイ〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１５００

リーネさんの前に現れたのは刀を持ち、制服を着た白髪の少女。
レイはフィールドに現れると、私に向かってぺこりと丁寧にお辞儀をする。
「それじゃあ早速行っちゃうのですよ!!?刀術式起動なのです!!?戦場へと続くサーキット!!?」
「っ、やっぱりリンク召喚してきますよね……」
リーネさんが正面に手をかざし、巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は炎属性以外の閃刀姫モンスター1体!!?私は閃刀姫―レイをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
レイの正面に現れた巨大なサーキットがレイの身体を通過するように動き始める。
そしてサーキットが輝き、レイの身体を通過すると、そこには真っ赤な鎧を身に纏ったレイの姿があった。
「リンク召喚!!?業火の如き閃滅の刃なのです!!?リンク1!!?閃刀姫―カガリ!!?」

〈閃刀姫―カガリ〉ＬＩＮＫ１　機械族　炎属性
ＡＴＫ１５００　↖?

「閃刀姫―カガリの効果発動!!?アルヴィト!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、自分の墓地の閃刀魔法カード1枚を対象としてそ

のカードを手札に加えるのです‼?・リーネは墓地から閃刀起動―エンゲージを手札に加えるのです‼?・」
「あのカードは確か……」
「そして魔法カード、閃刀起動―エンゲージなのです‼?・自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しない場合に発動でき、デッキから閃刀起動―エンゲージ以外の閃刀カード1枚を手札に加え、その後、自分の墓地に魔法カードが3枚以上存在する場合、自分はデッキから1枚ドローできるのです‼?・リーネの墓地には勿論3枚以上魔法カードがあるので後の効果も発動するのですよ」
「っ、サーチとドローを両立できるのは強力ですね……」
「リーネはデッキから閃刀機―シャークキャノンを手札に加えてさらに1枚ドローなのです‼?・そして装備魔法、妖刀竹光を閃刀姫―カガリに装備するのです‼?・」
「うっ、装備できる竹光カードも引かれてたんですか……」
　カガリの手元に禍々しいオーラを纏った竹刀が現れ、カガリはその竹刀を手に持つ。
「さらに魔法カード、黄金色の竹光なのです‼?・自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローするのです‼?……ふふっ、どうやらリーネのデッキは本気で遊花ちゃんにぶつかれって言ってるみたいなのです。フィールド魔法、閃刀空域―エリアゼロを発動なのです‼?・」
「っ⁉?・閃刀はフィールド魔法まであるんですか⁉?・」
　リーネさんがフィールド魔法を発動すると、店内がＳＦに出てくる電脳空間じみた世界に変わる。
　これが閃刀のフィールド魔法……リーネさんの有利なフィールド。
「それじゃあ早速、閃刀空域―エリアゼロの効果発動なのです‼?・このカード以外の自分フィールドのカード1枚、妖刀竹光を対象として発動するのです‼?・自分のデッキの上からカードを3枚めくり、その中から閃刀カード1枚を選んで手札に加える事ができ、残りのカードはデッキに戻すのです。そして、閃刀カードがめくられた場合、さら

に対象にしていたカードを墓地へ送るのです!!?」
「っ!!?対象になったのは妖刀竹光だから……」
「閃刀カードがめくれたら竹光カードもサーチさせて貰えるのですよ。リーネはデッキの上から3枚をめくって閃刀術式―ジャミングウェーブを手札に加えて、妖刀竹光を墓地に送るのです。そして墓地に送られた妖刀竹光の効果でデッキから2枚目の黄金色の竹光を手札に加えさせて貰うのですよ～」
「うっ……手札がどんどん増えて全然減らない」
カガリが手に持っていた妖刀竹光がデータが消えるように分解されて消滅すると、リーネさんの手札がさらに増える。
あれだけ動いているのにリーネさんの手札はまだ8枚もある。
これが、闇先パイにして自分より強いと言わしめたリーネさんの実力。
動きに全然無駄がない。
「さあ、どんどんやるのですよ!!?魔法カード、予見通帳なのです!!?リーネのデッキの上からカード3枚を裏側表示で除外して、このカードの発動後3回目の自分スタンバイフェイズに、この効果で除外したカード3枚を手札に加えるのです」
「うっ、さらに時間経過によるドローカードを引かれましたか……」
「まあ、保険レベルのドローカードなのです。遊花ちゃんとのデュエルでは時間をかければかけるだけ不利になりそうですし……だから、いけいけどんどん、なのです!!?魔法カード、閃刀術式―ジャミングウェーブなのです!!?自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しない場合、フィールドにセットされた魔法・罠カード1枚を対象としてそのカードを破壊し、その後、自分の墓地に魔法カードが3枚以上存在する場合、フィールドのモンスター1体を選んで破壊できるのです。最も、遊花ちゃんのフィールドにモンスターはいないのですけどね。それでも、セットカードを1枚破壊させて貰うのです!!?」
「っ、リバースカードオープン!!?速攻魔法、クリボーを呼ぶ笛!!?その効果で自分はデッキからクリボーまたはハネクリボー1体を選択

し、手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができます‼？私か選ぶのは手札に加える効果‼？私はデッキからクリボーを手札に加えます‼？」
「ん～避けられちゃった上にクリボーまで手札に加えられちゃったのですか……なら、早めに使わせにいくしかないのですね。まずは手札を１枚墓地に送って装備魔法、破邪の大剣―バオウを閃刀姫―カガリに装備するのです‼？」
カガリの目の前に禍々しい大剣が現れ、カガリはその大剣を一生懸命引き抜いて、ふらつきながら構える。
「破邪の大剣―バオウの効果で装備モンスターの攻撃力は５００ポイントアップし、このカードを装備したモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した場合、そのモンスターの効果は無効化されるのです。そして閃刀姫―カガリの永続効果‼？ヒルド‼？このカードの攻撃力は自分の墓地の魔法カードの数×１００ポイントアップするのです‼？今のリーネの墓地には２２枚の魔法カードがあるのです‼？なので、閃刀姫―カガリ攻撃力は２２００ポイントアップするのです‼？」

閃刀姫―カガリ
ＡＴＫ１５００→２０００→４２００

「っ、いきなり攻撃力４２００……」
「バトルなのです‼？閃刀姫―カガリでダイレクトアタック‼？ダヴィンスレイヴ‼？」
カガリは大剣を正面に構えると、こちらに向けて勢いよく振りかぶってその大剣を投げようと……投げてくるんですか⁉？
「と、通しません‼？相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札のゴーストリックランタンの効果発動‼？その攻撃を無効にし、このカードを手札から裏側守備表示で特殊召喚します‼？」
「ふむ、防いできたのですか」
カガリが大剣を投げようとした瞬間カガリの正面にジャックオー

ランタンのような幽霊が現れる。
ランタンが急に現れたことで驚いたのか、カガリは涙目になりながらランタンに向けて大剣を投げつける。
大剣を投げつけられたことでランタンが慌てて姿を消すと、大剣は私の顔の真横を通り過ぎていった。
こ、怖いよ‼？
後、数センチでも外れてたら、すぷらった、だったよ‼？
「やっぱり遊花ちゃんの防御を突破するのは一筋縄では行かなそうなのです。メインフェイズ2、リーネはカードを2枚伏せてターンエンドなのです」

遊花　ＬＰ８０００　手札４
ー　ー　ー　ー▲ー　ー
ー　ー??ー　ー
ー　☆
ー　ー　ー　ー　ー
ー▲△▲ー　▽
リーネ　ＬＰ８０００　手札２

「わ、私のターン、ドロー‼？まずはゴーストリックランタンを反転召喚‼？」

〈ゴーストリックランタン〉☆１　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ８００

再び姿を見せるジャックオーランタンのようなモンスター。
ランタンは現れると同時に震えながら私に寄り添ってくる。
……うん、君も大剣を投げられたのが怖かったんだよね、その気持ちは凄く分かるよ。
「さらに金華猫を召喚‼？」

〈金華猫〉☆1　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のモンスター。
「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル1モンスターを特殊召喚します!!?」
「なら、その効果にチェーンして手札にある幽鬼うさぎの効果を発動なのです!!?フィールドのモンスターの効果が発動した時、またはフィールドの既に表側表示で存在している魔法・罠カードの効果が発動した時、手札・フィールドのこのカードを墓地へ送ってフィールドのそのカードを破壊するのです!!?」
「っ、金華猫が……!!?」
「さらにチェーンしてリバースカードオープンなのです!!?速攻魔法、閃刀機―シャークキャノンなのです!!?自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しない場合、相手の墓地のモンスター1体を対象としてそのモンスターを除外するのです!!?自分の墓地に魔法カードが3枚以上存在する場合、除外せずにそのモンスターを自分フィールドに特殊召喚できるのですが、今回はその効果は使わないのです。リーネは遊花ちゃんの墓地からミスティックパイパーを除外するのです!!?」
「うっ、ミスティックパイパーまで……」
カガリの手元にランチャーのようなものが現れ、カガリが引き金を引くとそこから放たれたレーザーが私の墓地からミスティックパイパーを除外する。
さらにリーネさんの手札から兎の霊が金華猫に向かって勢いよく突撃し、吹き飛ばしてお互いに消滅した。
「さらに墓地に魔法カードが増えたので閃刀姫―カガリの攻撃力は上がるのですよ」

閃刀姫―カガリ
ＡＴＫ４２００→４３００

金華猫もミスティックパイパーも私のデッキではモンスターの展開の要になるとても重要なカード。
その２枚を対処されたのはかなり厳しい。
「なら、導いて‼?希望に繋がるサーキット‼?」
「リンク召喚なのですね」
私の前に現れる巨大なサーキット。
お願い、あなたの出番だよ‼?
「召喚条件はレベル１モンスター１体‼?私はゴーストリックランタンをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?リンク召喚‼?希望の守り手‼?リンク１‼?リンクリボー‼?」
〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

出てきたのは青い球体型のモンスター。
リンクリボーはいつものようにフィールドに出るのと同時に私に擦り寄ってくる。
うん、今回もあなたの力、存分に使わせてもらうね。
「私はカードを１枚伏せてターンエンドです」

遊花　ＬＰ８０００　手札３
ー－▲▲ー　ー
ー－－－－
☆　☆
ー－－－－
ー▲△ー－　▽
リーネ　ＬＰ８０００　手札１

「リーネのターン、ドローなのです‼?スタンバイフェイズ、予見通帳の使用から１ターン経過なのです。そして閃刀空域―エリアゼロの

効果発動なのです!!?破邪の大剣―バオウを対象にしてデッキの上から3枚をめくって閃刀術式―アフターバーナーを手札に加えて破邪の大剣―バオウを墓地に送るのです!!?」
「っ、そのカードは!!?」
「そして今手札に加えた魔法カード、閃刀術式―アフターバーナー発動なのです!!?自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しない場合、フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてそのモンスターを破壊し、その後、自分の墓地に魔法カードが3枚以上存在する場合、フィールドの魔法・罠カード1枚を選んで破壊できるのです!!?破壊するモンスターは当然リンクリボーなのです!!?」
「っ、チェーンするカードはありません……」
「なら、遊花ちゃんのセットカード1枚とリンクリボーを破壊しちゃうのです!!?」
カガリが刀の形をした8つの炎を飛ばし、リンクリボーとセットカードを切り裂き破壊する。
「くっ、ですが破壊された永続罠、ゴーストリックナイトの効果発動!!?このカードが相手によって破壊され墓地へ送られた時、このターン相手は攻撃宣言できません!!?」
「むむっ、破壊された時に攻撃を封じるカードまであるのですか……なかなか攻撃させて貰えないのです。墓地に魔法カードが増えたのと閃破邪の大剣―バオウが外れたことで刀姫―カガリの攻撃力は変化するのですよ」

閃刀姫―カガリ
ＡＴＫ４２００→４０００

「装備魔法が無くなったのにまだ攻撃力が４０００も……」
「とは言ったものの、このまま閃刀姫―カガリでいても遊花ちゃんがヴァレルソードドラゴンやスターヴヴェノムフュージョンドラゴンを出してきちゃうと高攻撃力を利用されちゃうので、ちゃんと防御よりの形態に変えさせて貰うのです!!?刀術式起動なのです!!?戦場

へと続くサーキット!!?」
「っ、再びリンク召喚ですか……」
「召喚条件は水属性以外の閃刀姫モンスター1体!!?私は閃刀姫―カガリをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
リーネさんが手をかざすと、カガリの正面に巨大なサーキットが現れ、カガリの身体を通過するように動き始める。
カガリがサーキットを潜ると、今度は4つの盾を装備した青い鎧を身に纏ったレイの姿が現れた。
「リンク召喚!!?水簾の如き刀衛の盾なのです!!?リンク1!!?閃刀姫―シズク!!?」

〈閃刀姫―シズク〉ＬＩＮＫ１　機械族　水属性
ＡＴＫ１５００　↑?

「次は水の閃刀姫ですね……」
「閃刀姫―シズクの永続効果、ヘルフィヨトゥル!!?相手フィールドのモンスターの攻撃力・守備力は、自分の墓地の魔法カードの数×１００ポイントダウンするのです!!?リーネの墓地には魔法カードは２５枚あるので、遊花ちゃんのモンスターの攻撃力は２５００ポイントダウンするのです!!?」
「うぅ、全体を２５００ポイントも下げられると攻撃が通せないです……」
「リーネはカードを1枚伏せてエンドフェイズに閃刀姫―シズクの効果発動!!?ヘルヴォル!!?このカードを特殊召喚したターンのエンドフェイズ、デッキから同名カードが自分の墓地に存在しない閃刀魔法カード1枚を手札に加えるのです!!?リーネはデッキから閃刀機構―ハーキュリーベースを手札に加えてターンエンドなのです!!」

遊花　ＬＰ８０００　手札３
ー－－－▲－　－
－－－－－

ー　☆
ーーーーー
ー▲▲ーー　▽
リーネ　ＬＰ８０００　手札２

「私のターン、ドロー!!?っ、ここで引くんですか……」
私が引いたのは増殖のカード。
手札にクリボーもあるから使用すればヴァレルソードに繋げることができる。
もしリーネさんがカガリのままにしていたらデュエルを終わらせることができたかも知れないけど、シズクに変えられてしまったせいで与えられるダメージはかなり少なくなってしまう。
……なんだか、完全にリーネさんのペースに巻き込まれている気がする。
だけど、少しでも攻めないことには前に進めない!!?
「私はクリボーを召喚!!?」

〈クリボー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３００→０

「ふむふむ、ここでクリボーを出してきたということは……」
「速攻魔法!!?増殖!!?自分フィールド上に表側表示で存在するクリボー１体をリリースして自分フィールド上にクリボートークンを可能な限り守備表示で特殊召喚します!!?」
「やっぱりトークンを増やしてリンク召喚に繋げるのですね」

〈クリボートークン〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

私のフィールドにいたクリボーが５体に増える。
「行きます!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」

私の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は通常モンスター1体!!?私はクリボートークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク1!!?リンクスパイダー!!?」
〈リンクスパイダー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１０００→０　←
私の前に機械の蜘蛛が現れる。
「まだまだ行きます!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?召喚条件はモンスター2体!!?私はクリボートークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?プロキシードラゴン!!?」
〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００→０　↑↓
次に現れたのは白い身体をした機械の竜。
「墓地に存在するリンクリボーの効果発動!!?スケープリンク!!?このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル1モンスター1体をリリースしてこのカードを墓地から特殊召喚する!!?私はクリボートークンをリリース!!?もう1度戻っておいで、リンクリボー!!?」
〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００→０　←
私のフィールドに再びリンクリボーが姿を現わす。
これで準備は整った!!?
「そして、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私が正面に手をかざすと私の前に巨大なサーキットが現れる。

そして私は1つ深呼吸をして、そのモンスターを呼ぶ。
「召喚条件は効果モンスター3体以上!!?私はリンクスパイダー、リンクリボー、プロキシードラゴンを　2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
「リンク4モンスター……来るのですね」
「お願い、私に劣勢を覆す力を貸して!!?リンク召喚!!?閉ざされた運命を斬り開く魂の剣(つるぎ)リンク4!!?ヴァレルソードドラゴン!!?」
私の呼び声に応えるように龍の咆哮が世界に響いた。

〈ヴァレルソードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００→５００　↙?↑←→

「やっぱりヴァレルソードドラゴンなのですね。確かにヴァレルソードドラゴンなら閃刀姫ーシズクは突破できるのです。ですが、今のままだと2回攻撃もできないのですよ?」
「ちゃんと手はあります!!?最後のクリボートークンを除外して異次元の精霊を特殊召喚!!?」

〈異次元の精霊〉☆1　天使族　光属性
ＡＴＫ０

フィールドにいたクリボートークンの姿が光に包まれて消滅し、その場所に赤い服を着た小さな精霊のモンスターが現れる。
「この方法で特殊召喚した場合、次のスタンバイフェイズに特殊召喚をするために除外したモンスターはフィールドに戻りますが、トークンなのでその効果は関係ありません。ここでヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アサシネイトショット!!?1ターンに1度、攻撃表示モンスター1体を対象として発動!!?そのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる。そしてこの効果の発動に対して相手は効果を発動できない!!?この効果は相手ターンにでも使用することが出来ます!!?対象

にするのは、異次元の精霊です‼?」
ヴァレルソードが異次元の精霊に空砲を撃つと、異次元の精霊はわざとらしく胸を抑えてフィールドに倒れこむ。
……意外とノリがいいね、君達。

異次元の精霊
ＡＴＫ０↓ＤＥＦ１００

「成る程なのです。これなら2回攻撃もできるのですね」
「いきます、バトル‼?ヴァレルソードドラゴンで閃刀姫ーシズクを攻撃‼?攻撃宣言時、ヴァレルソードドラゴンの効果発動‼?アブソーブブースト!1ターンに1度、このカードが表側表示モンスターに攻撃宣言した時、ターン終了時まで、このカードの攻撃力はそのモンスターの攻撃力の半分アップし、そのモンスターの攻撃力は半分になる‼?」
「っ、ごめんなさいなのです。耐えて欲しいのです、閃刀姫ーシズク」
シズクが４つの盾を集めると、魔法陣が現れ、シズクを覆うように光の障壁を生み出す。
光の障壁で防御を固めるシズクにヴァレルソードが勢いよく近づき、剣を振るう。
シズクはその障壁でヴァレルソードを受け止め、剣からエネルギーを魔法陣に吸収していたが、ヴァレルソードが咆哮をあげると逆に障壁に亀裂が入り、エネルギーを吸収されはじめた。

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ５００↓１２５０

閃刀姫ーシズク
ＡＴＫ１５００↓７５０

「斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン‼?剣光のベイオネットブレ

イク!!?」
「あいたたた、なのです」
ヴァレルソードは1度後ろに下がると吸収したエネルギーを纏った剣を勢いよくシズクに向けて振り下ろす。
ヴァレルソードの剣を受けると、シズクの纏っていた障壁と4つの盾は粉々に砕け散り、レイは土煙を上げながら弾き飛ばされた。

リーネ　LP8000→7500

レイが吹き飛ばされた方向を向いてヴァレルソードが警戒するように咆哮をあげる。
しばらくして土煙が晴れると、ボロボロになりながらもフィールドに立っているレイの姿があった。
「えっ!!?どうして閃刀姫ーレイが!!?」
「閃刀姫ーシズクが破壊された時に墓地にいる閃刀姫ーレイの効果発動なのです!!?このカードが墓地に存在する状態で、自分フィールドの表側表示の閃刀姫リンクモンスターが相手の効果でフィールドから離れた場合、または戦闘で破壊された場合にこのカードを特殊召喚するのです!!?」

〈閃刀姫ーレイ〉☆4　戦士族　闇属性
DEF1500

「っ、そんな効果が……ですが、ヴァレルソードドラゴンは2回攻撃ができます!!?そのうえ閃刀姫ーシズクがいなくなったことで攻撃力も元に戻ってます!!?」

ヴァレルソードドラゴン
ATK1250→3750

「もう1度斬り開いて!!?ヴァレルソードドラゴンで閃刀姫ーレイを

攻撃!!?剣光のベイオネットブレイク!!?」
ヴァレルソードが剣を構えてレイに迫る。
それを見て、リーネさんは正面に手をかざしながらニヤリと笑った。
「自身をリリースして閃刀姫ーレイの効果発動なのです!!?」
「えっ!!?」
「ＥＸデッキから閃刀姫モンスター１体をＥＸモンスターゾーンに特殊召喚するのです!!?この効果は相手ターンでも発動できるのです!!?」
「っ!!?つまり擬似的なリンク召喚が可能なのですか!!?」
ヴァレルソードが剣をレイに振りかざそうとしたところで、レイの正面に巨大なサーキットが現れ、ヴァレルソードがサーキットに弾かれて吹き飛ばされる。
レイが身体を起こして勢いよくサーキットを通過すると、今度は重機のように巨大な４つの機械の手を装備し、橙色の鎧を身に纏ったレイの姿が現れた。
「地盤の如き揺るぎない豪腕なのです!!?リンク１!!?閃刀姫ーカイナ!!?」

〈閃刀姫ーカイナ〉ＬＩＮＫ１　機械族　地属性
ＡＴＫ１５００　↘?

「次は地の閃刀姫……」
「閃刀姫ーカイナの効果発動!!?フリスト!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、相手フィールドの表側表示モンスター１体を対象としてそのモンスターは相手ターン終了時まで攻撃できなくなるのです!!?対象は勿論、ヴァレルソードドラゴンなのです!!?」
「っ!!?攻撃制限を付与する閃刀姫!!?」
弾き飛ばされたヴァレルソードが再び剣を構えてカイナに迫る。
しかし、そんなヴァレルソードの身体をカイナは４つの機械の手を使って拘束し、完全に封じ込めた。

「っ、ヴァレルソードドラゴン……私はこのままターンエンドです」
「エンドフェイズ、閃刀姫―カイナの効果は解けるのですよ」
リーネさんがそういうと、カイナは拘束していたヴァレルソードの身体を放すと、４つの機械の手でヴァレルソードを殴りつけてラッシュをかけると、最後にはカイナ自身の手でヴァレルソードを思いっきり殴り飛ばした。
……色々とツッコミたいけど、この状況はかなりマズイ。
気を引き締めていかないと、一瞬でやられる。

遊花　ＬＰ８０００　手札１
ーーーー▲ー　ー
ーー□ーー
☆　☆
ーーーーー
ー▲▲ーー　▽
リーネ　ＬＰ７５００　手札２

「リーネのターン、ドローなのです!!?スタンバイフェイズ、予見通帳の使用から２ターン経過なのです。まずは自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しない場合に装備魔法、閃刀機構―ハーキュリーベースを閃刀姫―カイナに装備するのです!!?」
カイナの後ろに巨大な戦闘機のようなものが現れる。
……どう見ても装備魔法って外見をしてないんだけど……あれ、本当に装備魔法なのかな?
「閃刀姫―カイナの効果発動!!?グロッティ!!?このカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分が閃刀魔法カードの効果を発動する度に、自分は１００ポイントライフを回復するのです」
「っ、ライフの回復までできるのですか……」

リーネ　ＬＰ７５００→７６００

「閃刀機構―ハーキュリーベースには装備したモンスターが直接攻撃できず、1度のバトルフェイズ中にモンスターに2回攻撃できるようになり、自分の墓地に魔法カードが3枚以上存在し、装備モンスターが攻撃でモンスターを破壊した場合に自分はデッキから1枚ドローする効果があるのですが、今回はそんなの関係ないのです。リーネは閃刀空域―エリアゼロの効果発動なのです!!?閃刀機構―ハーキュリーベースを対象にしてデッキの上から3枚をめくって閃刀術式―ベクタードブラストを手札に加えて閃刀機構―ハーキュリーベースを墓地に送るのです!!?そして墓地に送られた閃刀機構―ハーキュリーベースの効果発動なのです!!?このカードが効果でフィールドから墓地へ送られた場合、閃刀機構―ハーキュリーベース以外の自分の墓地の閃刀カードを3枚まで対象としてそのカードをデッキに戻すのです!!?」

「っ!!?そっちが狙いだったんですね……」

「レーネは墓地から閃刀姫―カガリ、閃刀姫―シズク、閃刀術式―ジャミングウェーブをデッキに戻すのです!!?そして閃刀姫―カイナの効果で閃刀空域―エリアゼロと閃刀機構―ハーキュリーベース分、ライフを回復するのです」

リーネ　ＬＰ７６００→７８００

「さらに魔法カード、閃刀術式―ベクタードブラストなのです!!?自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しない場合に、お互いのデッキの上からカードを2枚墓地へ送り、その後、自分の墓地に魔法カードが3枚以上存在する場合、ＥＸモンスターゾーンの相手モンスターを全て持ち主のデッキに戻す事ができるのです!!?」

「っ!!?それじゃあ……」

カイナの手元に巨大な大剣が現れ、カイナはその切っ先をヴァレルソードに向ける。

すると、大剣の先端が開き、砲塔になるとそこから巨大なレーザーが放たれ、それを受けたヴァレルソードは消滅した。

リーネ　ＬＰ７８００→７９００

「っ、ヴァレルソードドラゴン……ですが、墓地に送られたドットスケーパーの効果発動!!?デュエル中に１度、このカードが墓地に送られた場合に特殊召喚します!!?」

「むっ、今の閃刀術式―ベクタードブラストで落ちたのですね」

〈ドットスケーパー〉☆１　サイバース族　地属性

ＤＥＦ２１００

現れたのはドットの身体を持つモンスター。

ヴァレルソードは戻されたけど、モンスターの数は変わらないならまだ大丈夫。

そんな私の浅はかな考えを吹き飛ばすように、リーネさんが正面に手をかざす。

「刀術式起動なのです!!?戦場へと続くサーキット!!?」

「っ、またリンク召喚……」

リーネさんが正面に手をかざし、巨大なサーキットが現れる。

「召喚条件は炎属性以外の閃刀姫モンスター１体!!?私は閃刀姫ーカイナをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」

カイナの正面に現れた巨大なサーキットがカイナの身体を通過するように動き始める。

そしてサーキットが輝き、カイナの身体を通過すると、そこには再び真っ赤な鎧を身に纏ったレイの姿があった。

「リンク召喚!!?再燃する業火の如き閃滅の刃なのです!!?リンク１!!?閃刀姫―カガリ!!?」

〈閃刀姫―カガリ〉ＬＩＮＫ１　機械族　炎属性

ＡＴＫ１５００　↖?

「閃刀姫―カガリの効果発動!!?・アルヴィト!!?・リーネは墓地から閃刀起動―エンゲージを手札に加えるのです!!?そしてそのまま閃刀起動―エンゲージを発動なのです!!?デッキから閃刀術式―ジャミングウェーブを手札に加えて1枚ドロー!!?さらに手札に加えた閃刀術式―ジャミングウェーブを発動なのです!!?遊花ちゃんのセットカードとモンスター1体を破壊させて貰うのです!!?」

「っ、リバースカードオープン!!?罠発動!!?ダメージダイエット!!?このターン自分が受ける全てのダメージは半分になります!!?」

「ダメージを軽減する罠だったのですね……ですけど、ドットスケーパーは破壊させて貰うのです!!?」

「っ……」

カガリから放たれるジャミングウェーブで私のフィールドが異次元の精霊のみになる。

ダメージダイエットは発動できたから大丈夫だとは思いたいけど……このターンのリーネさんの動きを見ていると、このまますんなりと終わるとは思えない。

そんな私の予感を裏付けように、リーネさんは私を追い詰める更なる手を打つ。

「手札を1枚捨ててリバースカードオープンなのです!!?・装備魔法、閃光の双剣―トライスを閃刀姫―カガリに装備するのです!!?」

「っ!!?・ブラフで伏せてたカードだったんだ……しかも、あのカードって師匠が大地君とのデュエルで使ってた……」

「閃光の双剣―トライスを装備したモンスターは攻撃力が５００ポイントダウンする代わりにバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができるのです!!?そして閃刀姫―カガリの永続効果!!?ヒルド!!?今のリーネの墓地には２７枚の魔法カードがあるのです!!?・なので、その攻撃力は……」

閃刀姫―カガリ
ＡＴＫ１５００→１０００→３７００

「攻撃力３７００の２回攻撃⁉？」
カガリの手元に１組の双剣が現れ、カガリはそれを手に持って構える。
「バトルなのです‼？」
「なら、バトルフェイズが開始時に墓地に存在するリンクリボーの効果発動‼？スケープリンク‼？異次元の精霊をリリースしてーーー」
「そうはさせないのです‼？速攻魔法、墓穴の指名者なのです‼？相手の墓地のモンスター１体を対象として、そのモンスターを除外し、次のターンの終了時まで、この効果で除外したモンスター及びそのモンスターと元々のカード名が同じモンスターの効果は無効化されるのです‼？リーネが除外するのはリンクリボーなのです‼？」
「っ、そんな⁉？」

閃刀姫―カガリ
ＡＴＫ３７００→３８００

私の墓地からリンクリボーが除外される。
そのうえリンクリボーのリリースはコストだから異次元の精霊もフィールドからいなくなっている。
つまり、カガリの攻撃を防ぐ方法がない。
いくらダメージダイエットを使ってるからといっても、これはマズイ。
「閃刀姫―カガリでダイレクトアタック‼？そしてダメージステップ、リバースカードオープンなのです‼？速攻魔法、リミッター解除‼？」
「っ⁉？リミッター解除⁉？」
「リミッター解除の効果で自分フィールドの全ての機械族モンスターの攻撃力は、ターン終了時まで倍になるのです‼？ただし、この効果が適用されているモンスターはこのターンのエンドフェイズに破壊されるのです。現在の３８００。そこから倍で固定され、永続効果で墓地に落ちるリミッター解除分の数値が足されるのです。つまり、そ

の攻撃力は……」

閃刀姫―カガリ
ＡＴＫ３８００→７６００→７７００

「攻撃力７７００の２回攻撃⁉？」
「奥義……閃刀術式―アフターバーナー起動……オーバーロード⁉？」
リーネさんがそう叫ぶとカガリの背中に魔法陣が浮かび上がると、その魔法陣から刀の形をした８つの炎が後方に展開され、カガリが手にしていたトライスにも炎が宿る。
しかし、炎はそれだけには止まらず、トライスから溢れ出しカガリの身体すらも包み込み、カガリ自体を太陽のように輝く炎の球体に姿を変える。
カガリは炎に包まれたまま、後方に勢いよく炎を噴き出させ、私に向かって突撃し、すれ違いざまにトライスを逆手に持って斬りつける。
「くっ⁉？」

遊花　ＬＰ８０００→４１５０

「もう1度、閃刀姫―カガリでダイレクトアタック⁉？」
リーネさんの声に、私の横を通り過ぎていったカガリが旋回し、再び私に向かってくる。
そして私の前で跳び上がると、炎が弾け、姿を現したカガリが炎を纏ったトライスを順手に持ち直し、思いっきり振り下ろした。
「ティルヴィング⁉？」
「きゃあ⁉？」

遊花　ＬＰ４１５０→３００

カガリの剣撃がまともに入り、８０００あったライフが一気に削られ、レッドゾーンに突入する。
リミッター解除の効果発動が適用されているカガリはエンドフェイズには破壊されるけど……それはエンドフェイズまでカガリだったらの話だ。
「メインフェイズ２なのです‼？刀術式起動なのです‼？戦場へと続くサーキット‼？」
「っ、やっぱりそうなりますよね……」
「召喚条件は水属性以外の閃刀姫モンスター１体‼？私は閃刀姫―カガリをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？」
リーネさんが手をかざすと、カガリの正面に巨大なサーキットが現れ、カガリの身体を通過するように動き始める。
カガリがサーキットを潜ると、炎を纏っていた鎧が消え、再び４つの盾を装備した青い鎧を身に纏ったレイの姿が現れた。
「リンク召喚‼？絶え間無き水簾の如き刀衛の盾なのです‼？リンク１‼？閃刀姫―シズク‼？」

〈閃刀姫―シズク〉ＬＩＮＫ１　機械族　水属性
ＡＴＫ１５００　↑？

「閃刀姫―シズクの永続効果、ヘルフィヨトゥル‼？リーネの墓地には魔法カードは３０枚あるので、遊花ちゃんのモンスターの攻撃力は３０００ポイントダウンするのです‼？」
「っ……３０００は流石にキツいですね……」
これでヴァレルソードを出せたとしても攻撃力は０。
私のライフを考えるとコンバットトリックのカードを使われるだけでアウトだ。
おまけにただシズクを倒しても再びレイが出てきて他の閃刀姫に変化されてしまう。
そうなるとどうしようもない。
「エンドフェイズに閃刀姫―シズクの効果発動‼？ヘルヴォル‼？

リーネはデッキから閃刀機―ホーネットビットを手札に加えてターンエンドなのです。さあ、遊花ちゃん。この逆境をどうにかできますか？」

遊花　ＬＰ３００　手札１
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　☆
ーーーーーー
ーーーーーー　▽
リーネ　ＬＰ７９００　手札２
ーーーーーーーー

○

「な、何とか耐え切ったわね」
「どうしてデュエルしてる遊花より桜の方が動揺してるの？」
「ほ、ほっといてよ‼？なんか見てて落ち着かないのよ‼？」
「そういうもの？」
「そういうものなの‼？」
カガリの攻撃が終わり、遊花のライフが大きく削られた頃。
遊花のデュエルを観戦してはらはらしている桜を見て、闇は首を傾げていた。
そんな闇に、近くにいた炎が嗜めるように声をかける。
「冬城、お前も観戦している時に結束が負けそうになったら心配するだろう？」
「？心配しなくても遊騎は勝つよ？」
「……例えが悪かったのか、それとも冬城の結束への信頼が厚すぎるのか、どう考えるか困る解答だな」
「いや、間違いなく闇の結束への信頼が過剰過ぎるだけだから……

炎さんも本当に変に真面目よね」
闇の返答に微妙な表情を返す炎を見て、桜は疲れたような表情を浮かべる。
そんな桜や炎の様子を気にすることもなく、闇はマイペースに炎に言葉を投げかける。
「それはそれとして、炎。社長の様子、少し変」
「やはり冬城もそう思うか？」
「変？リーネさんが？」
「ん。いつもの社長なら、いくら遊花のデッキが自分のデッキの天敵だからってもう少しのんびりと確実に攻めていくハズ。だけど、今日の社長はどこか鬼気迫るものを感じる」
「へ？遊花のデッキがリーネさんの天敵？あんなに遊花が追い詰められてるのに？」
闇の言葉に、桜は首を傾げる。
遊花があんなに圧倒されているのに、どうしてそんな遊花がリーネの天敵になるのかと。
首を傾げる桜に闇は淡々と口を開く。
「桜は遊花のデッキの特徴として、防御力に長けていることは分かるよね？」
「当たり前でしょ？遊花のデッキにはクリボーシリーズのカードがたくさん入ってるし、そうじゃなくてもバトルフェーダーやゴーストリックが入ってるのよ？あの防御はそう簡単に抜かせて貰えないからよく分かってるわ」
「ん、そんな桜に問題。遊花の防御力を削っていくには何が効果的？」
「防御力を削る方法？モンスター効果を封じるのが1番だとは思うけど、それは削るって感じじゃないわよね。なら、物量とか？遊花の防御って1回の攻撃に対しての防御って感じだし」
「いい着眼点。それじゃあ今日見た感想だけでいい。社長のプレイスタイルは？」
「リーネさんのプレイスタイル？そりゃあ閃刀姫モンスターでの単騎突破……あ」

そこまで言って桜は目を丸くする。
そんな桜を見て、闇は頷きながら言葉を続ける。
「気付いた？そう、単騎で戦うことに長けている社長の閃刀姫で遊花の防御力を突破するのは至難の技。社長は基本的に閃刀姫リンクモンスター1体を強化して戦うわけだけど、1体ということは攻撃は連続攻撃を付与しない限り1度のみ。そして1度の攻撃なら遊花のモンスター達なら手札に1枚あれば1ターン防ぐことができる。そのうえ遊花のデッキはあれでドロー能力にも長けてるからなかなか手札が減らない。普通なら増える手札に攻撃回数が追いつかないで徐々に遊花が有利になっていくハズなんだけど……」
「今の状況だと遊花が得意な単騎の防御をしきれずに追い詰められてるってわけよね」
「そういうこと。勿論最初に遊花の手札を増やさせないように妨害をしてるからそれが効いてるというのもある。それに社長の手札や伏せカードがもっと充実してるなら別。社長のデッキは単騎で戦う分それをサポートする手札誘発や妨害系の速攻魔法も結構入ってるから手札さえ整えれば確かに突破も不可能ではない。だけど、あそこまで徹底して使えるカードを使い切って速攻をかける必要はドローの妨害が成功してる時点でない。それこそ次のターンには予見通帳で手札が3枚増えるわけだし、次のターンに増えた手札も使って同じように攻めていれば多分遊花は負けてる」
「リーネさんがミスをしたってこと？」
「ミスとも言い難いけど、結果的に遊花は生き残ってるわけだし、それならより確実な手を打つ方が無難。それが分からない社長ではないハズ。あの人はデュエルをするより見るのが好きだからあまりデュエルをしないだけで、デュエルタクティクスは間違いなく今のプロリーグの中で1番天才的だから」
「……闇にそこまで言わせるってことは本当に相当ってわけよね」
闇の真っ直ぐな言葉に、リーネが苦笑いを浮かべる。
世界ランキング4位の決闘者がここまで言うような相手と自分の親友はデュエルをし、まだ生き残っているということに、どう反応す

ればいいのか困ってしまうのだ。
　そんな桜と闇に、炎が何かを考え込むように顎に手を当てながら口を開く。
「そういえば俺とのデュエルの際に天羽は”この大会でやりたいことがある”と言っていたな」
「やりたいこと？」
「ああ。そしてそれがどうやら栗原に関係しているらしい」
「遊花に？リーネさんがなんでまた……就職試験とか？」
「天羽の場合は本人が気に入れば就職試験は合って無いようなものだから違うと思うが……それに何やら深刻そうな表情をしていたしな」
「深刻そうな表情……遊花……社長……接点……」
　炎の言葉に闇も真剣な表情で考え込む。
　そしてしばらく考え込むとポツリと呟く。
「……病院の時？」
「病院って、私と遊花が初めてリーネさんと会った日のこと？」
「ん……そういえば、桜。遊花に社長をどこかで見たことがないか聞いてた」
「あーそうなのよね。なんかリーネさんをどこかで見た気がするのよね……遊花に関係してる何かだったと思うんだけど……」
「遊花に関係……社長と、遊花の共通点……？……っ、まさか……!?？」
「冬城？何か分かったのか？」
　思わず目を見開いた闇に、炎が訝しげな表情を浮かべる。
　そんな炎に、闇は悲しそうな表情を浮かべながらデュエル中の２人に視線を移した。
「多分……だから遊花に黙ってたんだね、遊騎は……」
「結束？なんで結束の名前がそこで出てくるのよ？」
　首を傾げる桜に、闇は悲しそうな表情のままどこか覚悟を決めた表情をしているリーネを見て呟いた。
「きっと、すぐに分かる。あの２人はーーー」

ーーーーーーー

☆

「……やっぱり、リーネさんは凄い人です」
1対1ならまず破られることはないクリボー達の防御能力を突破して一気にレッドゾーンまでライフを削られたことに、私は素直に尊敬の念をリーネさんに抱く。
そんな私を見て、リーネさんは辛そうな表情を浮かべながら首を振る。
「……違うのです。リーネは、遊花ちゃんにそんな目を向けられるような人間じゃないのですよ」
「そんなことーーー」
「そんなことあるのですよ。リーネは、怖がりで卑怯な臆病者なのですから」
リーネさんは辛そうな、どこか覚悟を決めたような表情でぽつぽつと話しはじめる。
「リーネは、遊花ちゃんに謝らないといけないことがたくさんあるのです」
「謝らないといけないこと、ですか？」
「はい、なのです。遊花ちゃんは覚えていないかも知れないのですが、リーネは遊花ちゃんをいっぱい傷付けているのです。それなのに、それを直接謝ることもできず、そんな遊花ちゃんを自分の作ったチームに入れようとする、最低な人間なのです」
そういうと、リーネさんは悲しそうな表情で、目尻に涙を浮かべながら、その言葉を口に出す。
「リーネは……リーネは、遊花ちゃんのご両親が亡くなった交通事故の加害者の娘なのです。遊花ちゃんのご両親を……遊花ちゃんの幸せを奪ったのは……リーネのママなのです」
「……」

「それなのに、リーネは、遊花ちゃんに直接それを言うのが怖くて……謝ることも、出来なくて……黙ったままで……遊花ちゃんを自分の居場所に引き入れようとして……本当に、最低最悪な人間なのです‼？」
「……」
「でも、もう、隠していたくなんてないから……遊花ちゃんを、これ以上傷付けるような人間の傍にいて欲しくないから……今日、絶対に話そうって、決めていたのです」
「……」
「何度謝ったって、許されることではないのです……遊花ちゃんの家族を奪ったのは、間違いなく、リーネの家族なのです……ごめんなさい……ごめんなさいなのです……」
ぼろぼろと、リーネさんは涙を流しながら私に頭を下げて懺悔をする。
そんなリーネさんを見て、私はーーー
「……やっぱり、まだ気にしていたんですね、リーネさんは」
「……えっ？」
「私の方こそ、リーネさんには言わないといけないことがあるんです」
ーーーリーネさんに向かって深く頭を下げて、その言葉を口に出した。
「ごめんなさい、リーネさん。私も、リーネさんをいっぱい傷つけてしまいました。本当に、ごめんなさい」
「……えっ？」
私の言葉に、リーネさんは目を見開き、震える声で私に問いかける。
「な、んで……遊花、ちゃんが謝って……いや、それよりも、覚えて……たのですか……？」
「……実は、病院でリーネさんに会った日、頭の中に何かが引っかかった気がして、お爺ちゃんの家に電話したんです。そしたら、お爺ちゃんがリーネさんの事を覚えてて、教えてくれたんです。リーネさんが、あの日……お父さん達の葬儀の時に、私にいっぱい謝ってくれたお姉さんだったんだって」

ーーーーーーー

「よろしいでしょうか？」

「ああ、わざわざありがとうね。そちらも大変だろうに……」

「いえ、私の家族はそちらの女の子の心に消えない傷を作ってしまった。本当に、謝っても謝りきれない」

「……家族を失ったのはそちらも同じさ。そちらの娘さんも、あまり気にやまないことだ。今回の事故は、どちらが悪いというものでもないのだからね」

「……お気遣い、ありがとうございますなのです。でも、本当に、申し訳ありませんでした」

俯いている私の隣で、お爺ちゃんと誰かの声がする。

だけど、その声も近くじゃなくて、どこか遠くから聞こえているようで、現実味がわかない。

……いや、いっそのこと、現実じゃなかったらどれだけよかったのだろう？

大好きな……大好きな、お父さんとお母さんが、交通事故で、いなくなってしまうなんて……

いっそ、この世界全てが夢だったらどんなにいいのだろう？

そんな、意味もない現実逃避を続ける私の耳に、どこかから冷ややかな女の人の声が聞こえてきた。

「……アンタ、ムカつくね」

「……えっ？」

そんな声に、私が顔をあげると、そこには冷ややかな目で私を睨みつけている私よりも少し年上の黒髪の少女がいた。

少女は侮蔑するような目で、さらに私に言葉を続ける。

「アンタ1人が全部の不幸を背負ってるなんて思わないでよ……アンタ以外にも悲しんでる人はいるんだ。アンタの方が”可哀想”だなんて、勘違いするなよ」

「……っ」

その少女の言葉に、私は再び顔を伏せる。
……少女の言う通りだ。
家族を亡くしたのは、私だけじゃない。
交通事故を起こした相手の人も、今回の事故で亡くなったって、お爺ちゃんは言っていた気がする。
それなのに、私1人が不幸になった気でいるなんて……そんなの、許されるわけがない。
……ああ、なんで世界はこんなにも辛いことで溢れてるんだろう。
……こんな世界、いっそのこと全て壊れてしまえばーーー
「……えっ？」
そんな、自分のものじゃないような黒い感情が私の頭に浮かびそうになった時、私の近くで何かが叩かれる音が響き、先程私に声をかけてきていた少女の呆然としたような声が聞こえた。
私が少しだけ顔をあげると、私を守るように、綺麗な金髪をした女の人が立っているのが目に入った。
「何を……言ってるのですか？」
「えっ？」
「この子に何を言ってるのですか‼？」
金髪の女性は怒ったように声を張り上げると、黒髪の少女の襟元を掴む。
金髪の女性の声に驚いたのか、黒髪の少女もどこか怒ったような声をあげる。
「だ、だって、あの娘1人に不幸面されちゃ堪らないじゃないか‼？リーネだってママを無くして辛いのに、アイツの不幸の方が上みたいで、リーネの辛さは軽く見られてるみたいじゃーーー」
「……嬉しくないのです」
「ーーーえっ？」
「リーネの為に言ってくれた事なんだって分かってるのです。分かってるけど……どちらがより不幸かを秤にかけて、それで勝ったって……全然嬉しくなんて、ないのです‼？」

そういうと、金髪の女性は黒髪の少女を突き飛ばす。
そして金髪の女性は震える声で少女に怒りの声をあげる。
「リーネはそんなこと、微塵も頼んでいないのです‼?辛いけど、辛いなんて思っちゃいけないのです‼?苦しいけど、苦しんで当然なのです‼?リーネの家族が、この子を苦しめてるのに、今度はリーネが、この子を苦しめないといけないんですか‼?」
「ち、違ーーー」
「何も違わないのです‼?こちらがこの子の幸せを奪ったのに、どうしてこちらが被害者面をするのですか‼?この子は何も悪くなんてないのです‼?辛くて当然なのです‼?それなのに、なんでリーネの存在が、この子を糾弾しないといけないのですか‼?」
そこまでいうと、金髪の女性は振り返って私の前でしゃがみ込み、地面に頭をつける。
「ごめんなさい……本当に、ごめんなさいなのです……」
「っ、あ、のーーー」
「あなたをたくさん苦しめて、何もできなくて、ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい、なのです……」
目の前で、泣きながら地面に頭をつけて謝る女性に、私はなんて言葉をかけていいのか分からなくなる。
結局、私は女性に何も言葉を返すことが出来ないまま、お爺ちゃんと女性の父親らしき人の仲裁により、女性は父親らしき人に連れられて去っていった。
そして、私は……そんな女性を……リーネさんを見て、何も言葉を返してあげれなかったことを、酷く後悔したんだ。
自分のことしか見えていなかった、私自身の浅はかな思いを……

ーーーーーー

「あの時、私は自分のことしか考えられていませんでした。家族を失ったのは、リーネさんだって同じだったハズなのに、私1人が不幸になった気がして……だから、謝らないといけないのは私も同じな

んです。リーネさんのことまで頭が回らず、自分のことしか考えられなくて、ごめんなさい」
「ちが、違うのです……悪いのは、リーネの方で……」
そういって、震えた声で否定するリーネさんに、私は首を振りながら安心させるように声をかける。
「何も違いませんよ。お爺ちゃんから聞きました、あの事故は整備不良で突発的に起こったものだって。だから、リーネさんのお母さんにも、悪いところなんてありません。リーネさんが、必要以上に責任を感じる必要なんてないんです」
「で、でも……でもでも、リーネは……遊花ちゃんの幸せを……」
「……確かに、お父さん達がいなくなったのは、今でも悲しいです。だけど、だからといって、今の私は不幸なんかじゃありません。悲しいことはあったけど……私は、師匠に出会うことができましたから」
「!!?遊騎君に……会えたから?」
「はい」
リーネさんの言葉に私は柔らかな笑みを浮かべる。
前に、異世界に行った時、優しい、偽りの世界を見せられたことがある。
そこには、私の両親がいて、師匠はプロリーグから追放されてなくて、それでも私と師匠や闇先パイとの関係も変わっていない、とても幸せな世界だったと思う。
だけど、今にして思えばそんな世界だけは、例え過去に遡って未来を変えれるとしても起こりえないと断言できる。
私が師匠に出会えたのは、私が両親を失った悲しみから抜け出せずに日々を過ごしていたから。
師匠が私に会ったのは、プロリーグから追放されてそれでも諦めずに過ごしていたから。
もし、私の両親が生きていたら、私が過去を振り切れていたら、私はあの日の公園にはいない。

もし、師匠がプロリーグを追放されていなかったら、師匠が諦めていたら、師匠はあの日の公園にいない。
大きな不幸と、小さな小さな偶然が重なりあって、奇跡が起こったからこそ、私と師匠の出会いはある。
だからこそ、これだけは断言できる。
私と師匠が出会い、こうして師弟になるのは、私が両親を失って塞ぎ込み、師匠がプロリーグから追放される、この辛い現実でしかありえない。
例え出会ってからのＩＦは存在しても、それよりも前のＩＦで、私達がこうして出会い、師弟になることはきっとない。
私と師匠の出会いは、そんな奇跡の中でしか起こらない。
「お父さん達がいなくなったことを肯定するわけじゃありません。だけど、辛い出来事にも、失くしてきたものにも、痛みにも、ちゃんと意味があったんです。今の私には……師匠が、桜ちゃんが、闇先パイが、一緒にいてくれます。そして、こんな私を支えてくれる、期待してくださる皆さんがいます。だから、私は今、十分幸せなんです」
「……遊花ちゃんは……今、幸せ、なのですか？」
「はい。それだけは、リーネさんにだって否定させません。私は、十分幸せ者なんです。これ以上の幸せを望んだら、きっと罰が当たっちゃいます。だから……」
私はそこで言葉を区切り、心から幸せだって、リーネさんに伝わるような笑顔を浮かべる。
「リーネさんが、これ以上苦しむ必要なんてないんです。リーネさんは、私に十分幸せを運んでくれたんですよ」
「っ……遊花、ちゃん……」
私の言葉に、リーネさんの目から涙が溢れる。
そんなリーネさんを見て、私は笑顔を浮かべたまま、デッキの１番上のカードを握る。
「だからこそ、このデュエルは絶対に勝って見せます。リーネさんが運んでくれた幸せは、私に運命だって乗り越えられる力をくれたんだって、はっきり見せたいですから‼？」

「……それは無理なのです。この状況から遊花ちゃんが逆転するなんて、それこそ奇跡的なことなのですよ？」
「それなら、奇跡を起こすだけです。私には、夢があります」
「夢……ですか？」
「はい……それは、どんな逆境でも、笑顔で、楽しそうに切り抜けて、皆を驚かせるデュエルができるプロ決闘者になること。そして、そんな気持ちを教えてくれた師匠が、プロリーグから追放されるような、卑怯者じゃない。誰かの為に戦うことが出来る立派な決闘者なんだって証明することです‼？」
「‼？遊花ちゃん……」
「っ、遊花、お前……」
リーネさんと審判をしていた師匠が目を見開いて驚きの声を漏らす。
「その夢を叶えるために、諦めることだけはしないってことを、私は師匠に……そして私自身に誓ったんですから‼？」
「……なら、見せて欲しいのです。遊花ちゃんが奇跡を起こすのを。リーネが、本当に遊花ちゃんに幸せを運んだってことを、証明してみて欲しいのです」
「……はい‼？すー……はー……私のターン‼？」
深く深呼吸をして、握るカードに力を込める。
私のフィールドにカードはなく、手札も現状1枚のみ。
次のターンになれば予見通帳の効果でリーネさんの手札は一気に増える。
そうなれば、リーネさんはきっと私を確実に倒すことができるカードを手に入れるだろう。
それは、今までのリーネさんのデュエルを見てきたからこそ感じる確信めいた予想。
だからこそ、このターンが最後のチャンス。
お願い、私のデッキ……私は、リーネさんに証明したいの。
リーネさんが運んでくれた幸せは、私をちゃんと救ってくれたということを。

私が救われる程、幸福な奇跡を起こしてくれたんだってことを。
だから、お願い……私に、運命を乗り越える力を貸して‼?
「ドロー‼?」
勢いよくカードを引き抜き、ゆっくりとそのカードを自分の目の前に持ってくる。
「っ、このカードは……」
ドローしたカードを見て、私は思わず目を見開く。
……まだ、望みはある。
「魔法カード、貪欲な壺‼?墓地に存在するリンクスパイダー、プロキシードラゴンをEXデッキに、金華猫、クリボー、異次元の精霊をデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローします‼?」
「……この状況でドローカードを使ってくるなんて、流石なのです。だけど、やっぱり奇跡は起きなかったみたいなのです。貪欲な壺にチェーンして手札から灰流うららの効果発動なのです」
「‼?」
「デッキからカードを手札に加える効果、デッキからモンスターを特殊召喚する効果、デッキからカードを墓地へ送る効果、そのいずれかの効果を含む魔法・罠・モンスターの効果が発動した時、このカードを手札から捨ててその効果を無効にするのです。これで遊花ちゃんはドローできず、手札も1枚のみ。次のターンでおしまいなのです」
リーネさんの手札から動物の耳が生えた着物の少女が現れ、その少女が手をかざすとフィールドに桜吹雪が巻き起こる。
そんな桜吹雪の中、私はーーー
「信じてました」
「えっ?」
「リーネさんなら、きっと私の行動を止めるカードが手札にあるって。信じていました」
ーーーそういって、満面の笑みを浮かべた。
「っ、一体何を……」
「リーネさんが、私の動きを止めてくれなければ、きっと私は負けていました。だけど、止めてくれたからこそ、奇跡は起こる……この

ターンに引いた、師匠から貰った、このカードで!!?」
「っ、遊騎君から貰ったカード!?」

ーーーーーーー

『期末試験でいい結果を出した時の為に、島さんに頼んでおいたんだ。まあ、頑張った弟子の為のご褒美って奴だな』
『ご褒美……!?このカードって!!?』
『遊花は持ってなかっただろ?遊花のことだから欲しいかなと思ったんだ。まあ、使えるかどうかは分からないからご褒美と言えるかも微妙なところだが……使えないならお守り代わりにでもしてくれ』
『いえ!!?いえいえ!!?絶対使います!!?師匠がせっかく探してくれたご褒美なんですから!!?えへへ〜やった!!?』

ーーーーーーー

私の頭に、リーネさんと出会った日の、病室での師匠との一幕が思い出される。
師匠……あなたはやっぱり、私の最高の師匠です。
あなたのおかげで、私は新しい自分に変わることが、変身することができるんです。
「チェーンが発生した時、自分の手札からこのカードを特殊召喚する事ができます!!?」
「っ、特殊な召喚条件のモンスター!!?」
さあ……いこう、相棒!!?
「夢見る想いは、運命だって乗り越えられます!!?いつまでも、私と共に羽ばたいて!!?ハネクリボーＬＶ９!!?」
私の声に応えるように、優しくも勇ましい声が聞こえた気がした。
〈ハネクリボーＬＶ９〉☆９　天使族　光属性
ＡＴＫ?

巻き起こる桜吹雪の中、フィールドに現れたのは赤き鎧に身を包んで変身した天使の羽を持つ私の最高の相棒。
その姿に、リーネさんは驚きに目を見開く。
「ＬＶ９……進化した、遊花ちゃんのハネクリボー、なのですか？だけど、攻撃力が……決まってないのです？」
「ハネクリボーＬＶ９が自分フィールド上に表側表示で存在する限り、お互いに発動した魔法カードは墓地へ送られずゲームから除外されます。なので、灰流うららに無効化された貪欲な壺はそのまま除外されます」
桜吹雪が止み、フィールドには相棒のＬＶ９とシズクの姿だけが残る。
そんなフィールドで、相棒の赤き鎧が輝き、相棒の右手に周囲から光の粒子を集め始める。
「そして、ハネクリボーＬＶ９の永続効果、スペルアブソーブ‼？このカードの攻撃力・守備力は相手の墓地に存在する魔法カードの数×５００ポイントの数値になる‼？」
「っ⁉？閃刀姫―カガリに似た効果なのです⁉？しかも相手って、リーネの墓地には今……」
「リーネさんの墓地にある魔法カードは３０枚‼？閃刀姫―シズクの効果で攻撃力は３０００ポイントダウンしますが、それでもその攻撃力は……‼？」

ハネクリボーＬＶ９
ＡＴＫ？→１５０００→１２０００

「３０００ポイント下がってるのに、攻撃力１２０００⁉？」
「これで決まりです‼？バトル‼？ハネクリボーＬＶ９で閃刀姫―シズクを攻撃‼？」
「っ、迎え撃つのです、閃刀姫―シズク‼？奥義、閃刀術式―ジャミングウェーブ起動‼？スヴァーヴァ‼？」

リーネさんがそう叫ぶと、シズクの周りに４枚の盾が展開され、シズクの前方に魔法陣が出現する。
シズクがその魔法陣に飛び込むよう突っ込むと、シズクの身体を覆うような水流が現れ、水流を纏ったシズクはそのまま水流の勢いに乗って相棒に向かって突撃する。
向かってくるシズクを迎え撃つように相棒が右手を構えると、集まっていた光の粒子が止まり、赤き鎧が強く光輝く。
赤き鎧が光輝くと、相棒は空に向けて飛び立ち、空中で一回転すると勢いよくシズクに向かって突撃する。
向かってきた相棒を水流を纏った刀で斬り裂こうとするシズクに、相棒は光輝くその右手を振り下ろした。
「バーサーカークリティカルクラッシュ‼？」
ぶつかり合う相棒の右手とシズクの刀。
次の瞬間、相棒とシズクを中心に爆発が起き、フィールドを包むように爆煙が舞う。
そんな爆煙の中から飛び出してくる１つの影。
勢いよく爆煙から飛び出し、姿を現したのは私の、最高の相棒の姿だった。
「私の……勝ちです‼？」
「……奇跡を、起こされちゃったのです……証明、されちゃったのですね」

リーネ　ＬＰ７９００→０

ーーーーーーー

「……そこまで‼？勝者……栗原　遊花‼？」
師匠の宣言に、観戦席からどよめきが聞こえてくる。
そんな中、どこか憑き物が落ちたような表情で、リーネさんが私の前までやってくる。
「見せてもらったのです。遊花ちゃんが起こす奇跡、運命だって乗り

越えられる力を。こんなの見せられたら、納得するしかないのです」
「リーネさん……」
「遊花ちゃん……リーネは最低最悪な人間なのです……それでも、遊花ちゃんは許してくれるのですか？」
「……当たり前です。許すに決まってます。リーネさんは、自分のことしか考えられず、リーネさんをたくさん傷つけてしまった私を、許してくれますか？」
「っ……当たり前なのです‼？」
「ひゃう‼？り、リーネさ……むぎゅう⁉？」
そこまで言って感極まって我慢出来なくなったのか、リーネさんが力一杯私の身体を抱き締める。
リーネさんが喜んでくれたのは嬉しいんですが……こ、これはちょっとキツいです。
「ちょっ、抱きつくのを止めろリーネ‼？」
「むぅ、遊騎君、なんで止めるのです？もしかして、嫉妬なのです？」
「このアホ‼？そういう呑気なことを言ってるんじゃないだよ‼？窒息‼？遊花がお前の胸のせいで窒息してんの‼？」
「……ほぇ？」
「む～、～～～‼？」
「あ、あわわ⁉？大丈夫なのです⁉？」
「すー……はー……あ、危うく死んじゃうところでした」
力一杯抱きしめてくるリーネさんの腕を必死にタップすると、リーネさんが慌てて手を離し、私は必死に深呼吸をする。
まさか、抱きしめられて窒息死しそうになるなんて思わなかった。
「大丈夫か、遊花？」
「す、すみません師匠。ありがとうございます」
少し顔色を悪くした私の背中を、師匠が優しく摩ってくれる。
そんな師匠の顔は窒息しかけた私を見て、同情しているようだった。
……もしかして、師匠もやられたことがあるのかな？
そんなことを考えた時、私は無意識のうちに自分の胸に手をやって

いた。
……うん、小さくはない、むしろ大きい方ではあると思う。
だけど、リーネさんには敵わないし……男の人は大きいのが好きって聞くし……やっぱり、師匠も大きい方が好きなのかな？
「遊花？どうかしたのか？やっぱり体調が悪いか？」
「な、な、なんでもないです‼？あは、あはは……」
「そうか？大丈夫ならいいんだが……」
心配そうな目で見てくる師匠に、罪悪感を感じながら私は慌てて頭を振って笑顔を見せる。
今、何考えてたんだろう……うぅ～なんか変なことを考えてた気がする……それに、ちょっと、胸も変な気がする……どうしたんだろう、私？
自分の無意識の行動に戸惑っていると、リーネさんが改めて私に話しかけてくる。
「遊花ちゃん、改めてごめんなさいなのです」
「い、いえいえ、そんな、私は大丈夫ですから、気にしないでください‼？」
「……そういって貰えると、リーネも助かるのです。それで、改めて遊花ちゃんにお話したいことがあるのですが……」
「私にお話……ですか？」
「はいなのです。前に遊騎君達が話していた遊花ちゃんを『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入れたいって話なのですが、こちらから遊花ちゃんをスカウトしたいのです」
「えっ、ええっ～～～‼？」
リーネさんの言葉に、私は驚いて声を上げ、周りのざわつきもより一層強くなる。
そんな中、リーネさんは真っ直ぐとした目で私を見る。
「今日、遊花ちゃんと実際にデュエルをして確信したのです。遊花ちゃんは、必ず遊騎君や闇ちゃんと同じ、もしかしたらそれ以上の決闘者になるのです。だからこちらから、遊花ちゃんに頼みたいのです。遊花ちゃん、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入って貰えませんか

？」
「えっと、あの、その……」
突然のことに狼狽える私を見て、師匠が批難するような目でリーネさんを見る。
「リーネ‼？お前、いつものことながら性急過ぎるぞ⁉？せめてもう少し遊花が落ち着いてからな……」
「うぅ～でもでも、どうしても遊花ちゃんのデュエルをもっと見たくなっちゃったのです。それに、遊花ちゃんが目指しているのは遊騎君なのですよ？遊騎君のことを知ってるリーネとしては、やっぱり応援したくなっちゃうのです」
「お、お前なぁ……」
「あ、あの‼？リーネさん‼？」
「はいなのです」
頭を抱えている師匠を横目に、私はリーネさんに話しかける。
そんなリーネさんに、私は真剣な表情で問いかける。
「リーネさんから見て、私は、師匠みたいな決闘者になれますか？師匠みたいに、どんな逆境でも、笑顔で、楽しそうに切り抜けて、皆を驚かせるデュエルができて、それで……誰かに勇気を与えられるような決闘者に、なれますか？」
「……リーネの全てを賭けて、保証するのです。遊花ちゃんは、遊花ちゃんの望む決闘者に、必ずなることができるのです」
「……私は、まだ自信がありません。本当に師匠みたいな決闘者になれるのか、不安で仕方ないです。だけど、それでもやっぱり、私は師匠みたいな決闘者になりたい。そうなれると信じてくれている皆さんの期待に、応えたいんです」
「遊花……」
師匠の驚くような声が聞こえる。
そして私は、リーネさんに深く頭を下げる。
「こちらこそ、お願いします。私を、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入れて貰えませんか？」
「‼？勿論なのです‼？こちらこそ、よろしくお願いするのです‼？」

そういって、リーネさんは満面の笑みを浮かべて私の手を取った。
そんな私達を見て、師匠は真っ直ぐな目で私を見て口を開く。
「……いいんだな？」
「……はい。これは、私が決めたことですから」
「……そっか。なら、俺から言えることはないな。頑張れよ、遊花」
「……あ」
そういって、師匠は柔らかな笑顔を見せ、私は思わず声を漏らしてしまう。
その師匠の笑顔が、凄く嬉しかったから。
そんな師匠の笑顔が、ずっと見たかったから。
「さて、色々と話を詰めて行きたいのですが、とりあえず今は大会が終わるのを待つことにするのです。いい加減、これ以上待たせると不機嫌になってしまいそうな人がいるですから」
「へっ？」
「失礼。不機嫌にはならない。ちょっと待ちきれないだけ」
私の背中から聞こえた声に振り向くと、うずうずと待ちきれないというような雰囲気を出す闇先パイがいた。
そうだ、色々あったから忘れていたけど次の試合はーーー
「……それじゃあ準決勝第２試合、無所属、結束　遊騎ＶＳ『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』所属、冬城　闇を開始する……か」
「ん……」
ーーー師匠と闇先パイ。
私の尊敬する２人の決闘者のデュエルが始まろうとしていた。

第４７話　英雄ＶＳ氷槍・楽しいデュエル

☆

「ん～このカード……俺にデッキに欲しいよな……だけど、今月はお小遣いを使い切っちゃったし……」
「遊騎……」
「ん？ああ、闇か。今日も来たんだな」
いつものように『Ｎａｔｕｒａｌ』のショーケースにあるカードを見て唸っていた俺に、掻き消えてしまいそうな程小さな声で、ここ最近『Ｎａｔｕｒａｌ』によく来るようになったほとんど表情が変わらない少女ーーー闇が声をかけてきた。
俺の問いかけに、闇はこくんと頷き、途切れ途切れになりながら、相変わらずの小さな声で答える。
「ん、遊騎とデュエル、楽しい、から、それに、デュエル、してると、遊騎のこと、分かるから」
「俺のこと？」
「ん、こんなことが、好きなんだ、とか、こんなことが、苦手なんだ、とか」
「……そういうのは別に聞いてくれたら普通に答えるぜ？」
俺の困ったような顔に、闇はふるふると首を振る。
「いいの。こっちの方が、楽しい。デュエルの方が、遊騎のこと、いっぱい、分かる、から」
「……まあ、俺もデュエルしてる中で闇のことが分かってきてるし、闇がいいって言うなら別にいいか。んじゃ、今日もデュエルするか？」
「ん」
そういって、俺達はデュエルスペースに移動し、お互いにデッキを取り出す。
そしていつものように、日が暮れてお互いに帰らないといけない時間になるまでデュエルをした。

そんな日常が、俺達にとっては当たり前になっていって。
いつのまにか、俺達は話をするよりも、デュエルをすることでお互いのことが分かるようになっていた。
その日の攻め方やその際の表情から、お互いの感情が伝わってきて、直接言葉にしなくても、お互いの気持ちが分かるようになって……
だからこそ、俺達は『Ｎａｔｕｒａｌ』で再開した時、デュエルをしなかった。
俺が『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』から離れた２年間で変わってしまった部分が、デュエルで伝わってしまうのが怖かったから。
俺はヒロイック、闇はヴェルズ。
お互いに使うカードまでもが変わっていて……それを知られて、小学生の頃からの友人に、どう思われるのかが、お互いに怖かったから。
だけど、それは杞憂だった。
変わってる部分もあるけど、俺も闇も、根っこの部分は変わっていないことが、話や他人とのデュエルを見ているだけでも、十分に分かったから。
だからこそ、このデュエルはーーー

ーーーーーーー

「……それじゃあ準決勝第２試合、無所属、結束　遊騎ＶＳ『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』所属、冬城　闇を開始する……か」
「ん……」
遊花とリーネのデュエルが終わり、俺と闇は向かい合う。
そんな俺達を見て、遊花が困ったような表情で俺達を見る。
多分、遊花のことだからどっちを応援すればいいんだろうとか考えているのだろう。
そんな遊花を見て、リーネは優しい表情を浮かべて遊花の手を引く。

「それじゃあ遊花ちゃん。リーネ達は2人のデュエルを邪魔したらいけないので観戦に戻るのです」
「は、はい!!?え、えっと、師匠!!?闇先パイ!!?」
「なんだ?」
「何?」
リーネに手を引かれて観戦場所に戻っていく遊花が俺達に声をかける。
首を傾げる俺達に、遊花は困った表情でいっぱいいっぱいになりながらも、一生懸命な声でその言葉を口にした。
「師匠と闇先パイのデュエル、楽しみにしてます!!?だから、師匠達も楽しんでデュエルをしてください!!?」
「……ぷっ」
「……ふふ」
「え、ええっ?私、何か変なこと言いましたか?」
遊花の言葉に、俺達は思わず顔を綻ばせ、それを見て遊花がわたわたと焦ったような表情を浮かべる。
そんな遊花に、俺達は優しい表情を浮かべながら言葉を返した。
「いや、遊花らしいなって思っただけさ。任せとけ、遊花の期待に添えるような楽しいデュエルにしてやるさ」
「私と遊騎のデュエルだから心配無用。遊花の参考になれるよう、頑張る」
「!!?はい!!?」
俺達の言葉に満足したのか、遊花は笑顔を浮かべて観戦場所に戻っていく。
そんな遊花を見て、闇は優しい表情のまま口を開く。
「本当に、面白い子だね、遊花は」
「あれが遊花のいいところだけどな。いつも他人のことを気にかけて、それでいて自分の芯をしっかりと持っている、強い奴だよ」
そんなことを呟きあい、俺達は再び向かい合う。
「……本当はさ、俺はこの大会でいつ負けてもいいって思ってたんだ。この大会はあくまで遊花の成長を促すもので、それを見れるだけ

で十分だって」
　この大会は、遊花がプロ決闘者になるための一歩を踏み出せるようにするための試練で、だからこそ、俺のデュエルは関係ないと思ってた。
「だけど、今日の遊花のデュエルを見て、我慢できなくなっちまった。あの日、遊花と俺が出会った日から、遊花がどれだけ成長したのか、実際にデュエルをして試してみたくなった。だからこそ、相手がお前でも負けないぜ、闇」
　そういって、俺はデュエルディスクを起動して構える。
　そんな俺を見て、闇も自分のデュエルディスクを起動しながら口を開く。
「私も、遊騎が遊花とデュエルしたいなら、デュエルの勝利は譲ってもいいかなって思ってた。だけど、やっぱり我慢できない。強くなった遊花と、私もデュエルしたい。それに、やっぱり遊騎とのデュエルで手加減はしたくない。今の私を、遊騎に全力でぶつけたい」
　お互いにはっきりと自分の意思を伝え、笑い合う。
「闇と最後にデュエルをしたのっていつだっけ？」
「遊騎がプロリーグから追放される前日」
「……結構時間が経ったもんだよな。俺はプロリーグから追放され、闇は世界ランキング４位。だいぶ差がついちまった」
「他人が決める評価なんて関係ない。それに、今日のデュエルを見てたら分かる。遊騎の強さは昔からちっとも衰えてない」
「そうだといいけどな。それじゃあ、始めるか。お互い、再開してから言葉じゃ伝えれなかったこともたくさんあるだろ？俺達の間なら、言葉よりもデュエルの方が分かりやすい」
「ん、余計な言葉は不要。私達が分かり合うにはデュエルが１番。私達は、デュエルをすることでしか分かり合えない」
「……いくぜ、闇」
「……ん」
『決闘‼？』

遊騎　ＬＰ８０００
闇　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は私。私はレスキューラビットを召喚」

〈レスキューラビット〉☆４　獣族　地属性
ＡＴＫ３００

闇が呼び出したのはヘルメットを被ったうさぎのモンスター。
「レスキューラビットの効果、フィールドのこのカードを除外して、デッキからレベル４以下の同名の通常モンスター２体を特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに破壊される」
レスキューラビットが空高く跳び上がって姿を消す。
代わりに空中から落ちてきたのは２体の禍々しい闇を纏った岩石の戦士。
「私はヴェルズヘリオロープを２体特殊召喚」

〈ヴェルズヘリオロープ〉☆４　岩石族　闇属性
ＡＴＫ１９５０

「……久しぶりだな、ジェムナイトエメラル」
俺の呟きに、２体のヘリオロープが恭しく頭を下げる。
「まずは小手調べ。私は２体のレベル４ヴェルズモンスター、ヴェルズヘリオロープ２体でオーバーレイ。２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚」
２体のヘリオロープが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から青い翼を持つ漆黒の龍が舞い降りた。

「希望を消し去る暴龍、ランク４、ヴェルズオピオン」

〈ヴェルズオピオン〉★４　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ２５５０

「ヴェルズオピオン……グングニールだな」

「ヴェルズオピオンの永続効果、イビルソートカース。オーバーレイユニットを持っているこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、お互いにレベル５以上のモンスターを特殊召喚できない」

「なかなか面倒な効果だな」

俺のデッキは絵札の三銃士を主軸にしているためジャックスナイトやアルカナナイトジョーカーのようなレベル５以上のモンスターを特殊召喚する機会は割と多い。

少なくともオピオンがいる間は絵札の三銃士が封じられるのは結構な痛手だ。

「さらにヴェルズオピオンの効果発動、イビルソートインベーション。オーバーレイユニットを１つ使い、１ターンに１度、デッキから『侵略の』魔法・罠カード１枚を手札に加える。私はデッキから永続罠、侵略の侵喰感染を手札に加える。侵略の侵喰感染は１ターンに１度、自分の手札または自分フィールド上に表側表示で存在する、ヴェルズと名のついたモンスター１体をデッキに戻してデッキからヴェルズと名のついたモンスター１体を手札に加えることができる。私はカードを３枚伏せてターンエンド」

遊騎　ＬＰ８０００　手札５

ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　○

ー　ー　ー　ー　ー

ー▲▲▲ー　ー

闇　ＬＰ８０００　手札２

「俺のターン、ドロー‼?」
特殊召喚を制限するオピオンにセットカードが3枚。
かなり万全そうな布陣だが、あのセットカードの1枚はさっきサーチした侵略の侵喰感染だろうし、先程の闇のデュエルを見る限り直接モンスターを除去するカードは少なそうだ。
それならば、この手札でオピオンを突破できる。
「相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。来い、Ｈ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）強襲のハルベルト‼?」

〈Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１８００

俺の前に現れたのはハルバードを持った紫の鎧を纏った戦士。
「ヒロイック……私が知らない遊騎の新しいモンスター」
「このカードは守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ戦闘ダメージを与えることができる。そして装備魔法、月鏡の盾をＨ・Ｃ　強襲のハルベルトに装備‼?このカードの装備モンスターが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時のみ、装備モンスターの攻撃力・守備力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力と守備力の内、高い方の数値を＋１００ポイントアップした数値になる‼?」
「むぅ、流石遊騎。もうヴェルズオピオンを突破してくるんだ」
ハルベルトの手元に満月のような綺麗な金色の輝きを放つ盾が現れる。
これならばハルベルトでオピオンを突破できる。
「バトル‼?Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトでヴェルズオピオンを攻撃‼?フルムーンハルバード‼?」
「仕方ない……迎え撃って、ヴェルズオピオン。暴虐のクリエイションクライシス」

「ダメージ計算時、月鏡の盾によりＨ・Ｃ　強襲のハルベルトはヴェルズオピオンの攻撃力を＋１００ポイントアップした数値になる!!?」

Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト
ＡＴＫ１８００→２６５０

オピオンが口から闇を纏った氷のブレスをハルベルトに向かって放つが、ハルベルトが月鏡の盾で防ぐと氷のブレスは反射され、自分のブレスを受けたオピオンが怯む。
その隙にハルベルトはオピオンに近づくとハルバードでオピオンを貫き、破壊した。

闇　ＬＰ８０００→７９００

「Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトの効果発動!!?このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時にデッキからヒロイックカードを手札に加える。俺はデッキからＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）サウザンドブレードを手札に加える。そしてメインフェイズ２、俺はＨ・Ｃ　サウザンドブレードを召喚!!?」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

フィールドに頭巾を被り、背中に何本もの刀を背負った戦士が現れる。
それを見て、俺は正面に手をかざす。
「斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
「リンク召喚だね……」
俺の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター２体!!?俺はＨ・Ｃ　強襲のハルベルトとＨ・Ｃ　サウザンドブレードの２体をリンクマーカーにセット!!

?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?追想に生きる王女!!?リンク2!!?聖騎士の追想　イゾルデ!!?」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

ハルベルトとサウザンドブレードの2体がサーキットの中に消えると代わりに金髪と白髪の2人の女性が現れる。

「墓地に送られた月鏡の盾とチェーンして聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?リンクレカレクション!!?聖騎士の追想　イゾルデをリンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター1体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキからキングスナイトを手札に加える!!?そして墓地に送られた月鏡の盾の効果、表側表示のこのカードがフィールドから墓地へ送られた場合、５００ライフポイントを払ってこのカードをデッキの一番上または一番下に戻す。俺は月鏡の盾をデッキの下に戻す」

遊騎　ＬＰ８０００→７５００

「まだ終わらない!!?聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動!!?メモリーズギフト!!?デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター1体をデッキから特殊召喚する!!?俺はデッキから妖刀竹光、神剣―フェニックスブレード、月鏡の盾、最強の盾を墓地に送り、デッキからクィーンズナイトを守備表示で特殊召喚!!?」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

俺の前に現れたのは赤い鎧を身に纏った女性の騎士。
先程のサーチ効果でキングスナイトも手札に加わってるから、クィーンズナイトが破壊されなければ次のターンには絵札の三銃士を揃えられる。
そしてクィーンズナイトを破壊してもイゾルデが残っていればまたクィーンズナイトを呼ぶことができる。
さて、闇はどう対処してくるかな？
「更に墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える。俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える。カードを2枚セットしてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ７５００　手札４
ー－▲▲ー　　ー
ー□ーーー
☆　　ー
ーーーーー
ー▲▲▲ー　　ー
闇　ＬＰ７９００　手札２

「私のターン、ドロー。クィーンズナイトとキングスナイトを揃えられたのは面倒だけど、要はその効果を使わせなければいいだけ。私はヴェルズカストルを召喚」

〈ヴェルズカストル〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１７５０

現れたのは闇を纏った白い鎧をつけた戦士。
「次はお前か、セイクリッドポルクス……」
「ヴェルズカストルの召喚時、手札にあるカゲトカゲの効果発動。自分がレベル４モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚できる。それにチェーンしてリバースカードオープン。罠

発動、エンペラーオーダー」
「っ、エンペラーオーダーがあったか……というかそのコンボがすでに揃っているのも厄介だな」
「エンペラーオーダーの効果、モンスターが召喚に成功した時に発動するモンスターの効果が発動した時、その発動を無効にし、無効にされたプレイヤーは1枚ドローする。私はカゲトカゲの特殊召喚を無効にして1枚ドロー。ドローはされちゃうけど、エンペラーオーダーがあればキングスナイトの効果は発動しないから、絵札の三銃士が揃うことはない。そしてヴェルズカストルには召喚に成功したターン、自分は通常召喚に加えて1度だけヴェルズと名のついたモンスター1体を召喚できる効果がある。私はヴェルズサンダーバードを召喚」

〈ヴェルズサンダーバード〉☆4　雷族　闇属性
ＡＴＫ１６５０

次にフィールドに現れたのは漆黒の身体を持つ鳥のようなモンスター。
闇の言葉通りなら、あれは霞の谷の巨神鳥か。
「ヴェルズサンダーバードの召喚時、手札にあるカゲトカゲの効果発動。自分がレベル4モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚できる。それにチェーンしてエンペラーオーダーの効果、モンスターが召喚に成功した時に発動するモンスターの効果が発動した時、その発動を無効にし1枚ドローする。このまま攻めてもいいけど、遊騎相手ならこっち。顕現せよ……邪念渦巻くサーキット」
「リンク召喚か……」
闇が正面に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はヴェルズモンスター2体。私はヴェルズカストルとヴェルズサンダーバードをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイ」
カストルとサンダーバードがサーキットに吸い込まれていく。

そしてサーキットから溢れ出るように現れたのはガスのように実体がない黒い霧のモンスター。
「リンク召喚。始まりの悪意。リンク2、インヴェルズオリジン」
〈インヴェルズオリジン〉ＬＩＮＫ　２　悪魔族　光属性
ＡＴＫ２０００　→←
「インヴェルズオリジン……」
このカードが、闇が言っていたヴェルズを生み出した闇のカード。
思わず注視していると、どこからか興味深そうな声が聞こえてきた。
『カ　コトオ　ナンビフ　ウイカト　キウユ　ルイテニ　ニレワ　ガマサキ　ウホ』
「……不憫は余計だ」
『カイナ　ハデルア　ガロコドミ　ハトルス　イカリ　ヲゴンゲ　ノラレワ　ウモ　ウホ』
「……闇に教えられたしな」
「インヴェルズオリジン……ここは人前……喋るの、ダメ」
『タツカワ　ナダ　ウドンメ』
そういうと、本当に仕方なさそうにオリジンは話すのを止めた。
……少し会話しただけだが、なんか妙に人間臭い奴だったな……オリジン。
「デュエルを続ける。インヴェルズオリジンの永続効果、イビルリストレイント。このカードがＥＸモンスターゾーンに存在する限り、お互いにＥＸデッキからメインモンスターゾーンにモンスターを特殊召喚する場合、このカードのリンク先にしか出せない。さらにこのカードのリンク先にモンスターが存在する限り、このカードは効果の対象にならず、戦闘・効果では破壊されない」
「面倒な制約効果だな」
「インヴェルズオリジンの力はそれだけじゃない。本番はここから。バトル。インヴェルズオリジンでクィーンズナイトを攻撃。マレ

ヴァランスオリジン」
「クィーンズズナイトを狙ってくるのか？」
　オリジンから黒い闇の波動が放たれ、それを受けたクィーンズナイトが闇に呑まれて消滅する。
　クィーンズナイトを呑み込んだ闇は、闇のフィールドに集まると、何かの形を作り始める。
「インヴェルズオリジンの効果、マレヴァランスインクリース。１ターンに１度、フィールドのモンスターが戦闘・効果で破壊された時、その破壊されたモンスターの数まで、デッキからレベル４以下のヴェルズモンスターを守備表示で特殊召喚する」
「っ、ヴェルズモンスターを増やせるのか⁉？」
「私はデッキからヴェルズケルキオンを守備表示で特殊召喚」

〈ヴェルズケルキオン〉☆４　魔法使い族　闇属性
　ＤＥＦ１５５０

　現れたのは闇を纏い両手に杖を持った魔術師のようなモンスター。
「メインフェイズ２、ヴェルズケルキオンの効果、自分の墓地のヴェルズモンスター１体を除外し、自分の墓地のヴェルズモンスター１体を対象としてそのモンスターを手札に加える。私は墓地のヴェルズヘリオロープ１体を除外してもう１体のヴェルズヘリオロープを手札に加える。さらにヴェルズケルキオンには墓地からモンスターを回収する効果を発動したターンのメインフェイズにヴェルズモンスターを１体召喚できる」
「っ、ということは……」
「私はヴェルズヘリオロープを召喚」

〈ヴェルズヘリオロープ〉☆４　岩石族　闇属性
　ＡＴＫ１９５０

　再び現れる禍々しい闇を纏う岩石の戦士。

「ヴェルズヘリオロープの召喚時、手札にあるカゲトカゲの効果発動。自分がレベル４モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚できる。それにチェーンしてエンペラーオーダーの効果、カゲトカゲの発動を無効にし1枚ドローする」
「……あれだけ召喚したのにターンの最初より手札が増えてるな」
「まだ終わりじゃない。私は2体の闇属性レベル４モンスター、ヴェルズヘリオロープとヴェルズケルキオンでオーバーレイ。２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚」
ヘリオロープとケルキオンが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとフィールドに赤いマントを羽織った鎧の戦士が現れる。
「希望を忘れさせる悪夢、ランク４、ヴェルズナイトメア」

〈ヴェルズナイトメア〉★４　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ１９５０

あのモンスターにも見覚えがある。
間違っていなければ、あのモンスターの元になったのはＸＸ―セイバー　ボガーナイトだろう。
この調子だと、まだまだ俺の知ってるモンスター達がヴェルズとして現れそうだ。
「ヴェルズナイトメアは相手がモンスターの特殊召喚に成功した時、オーバーレイユニットを1つ取り除いてその特殊召喚したモンスターを裏側守備表示にすることができる」
「それでイゾルデは残したってわけか」
イゾルデでモンスターを特殊召喚しても裏守備にしてしまえばリンク召喚やエクシーズ召喚の素材にすることができない。
おまけにイゾルデではオリジンとナイトメアを突破することは出来ないし、新たにＥＸデッキからあのモンスター達を倒せるモンスターを出そうとしても現状オリジンのリンクマーカーの先にしか特

殊召喚できないため、オリジンは耐性を得てしまう。
イゾルデを倒してくれてたらナイトメアが出る前に戦闘ダメージを受けるからサウザンドブレードが出せたから突破する手段もあったんだが……これはなかなか厄介だな。
「私はこれでターンエンド」

遊騎　ＬＰ７５００　手札４
ー－▲▲ー　　ー
ー－－－－
☆　☆
ー－－－□ー
ー▲▲▲ー　　ー
闇　ＬＰ７９００　手札４

「俺のターン、ドロー‼?・裏守備にされようがやるしかないな。聖騎士の追想　イゾルデの効果発動‼?・メモリーズギフト‼?・デッキから妖刀竹光、折れ竹光、ビッグバンシュート、閃光の双剣―トライスを墓地に送り、デッキからＨ・ヒロイックチャレンジャー　Ｃ　エクストラソードを守備表示で特殊召喚する‼?」

〈Ｈ・Ｃ　エクストラソード〉☆４　戦士族　地属性
ＤＥＦ１０００

現れたのは銀色の鎧を身に纏った二刀流の戦士。
「墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える」
「それは仕方ない。ヴェルズナイトメアの効果発動、アネンディングナイトメア。相手がモンスターの特殊召喚に成功した時、オーバーレイユニットを１つ取り除いてその特殊召喚したモンスターを裏側守備表示にする」
「ならそれにチェーンしてリバースカードオープン‼?・罠発動‼?・一

族の結集‼?フィールドの表側表示モンスター1体を対象として、そのモンスターと元々のカード名が異なり、元々の種族が同じモンスター1体を自分の手札・墓地から選んで特殊召喚する‼?俺が対象にするのは戦士族の聖騎士の追想　イゾルデ‼?俺は墓地からH・C　強襲のハルベルトを攻撃表示で特殊召喚‼?」

〈H・C　強襲のハルベルト〉☆4　戦士族　地属性
ATK1800

俺の前に再びハルバードを持った紫の鎧を纏った戦士が現れる。
それを見て、闇は少し困ったような表情を浮かべる。
「厄介なモンスターが蘇生されちゃったね。チェーンの関係でヴェルズナイトメアの効果はH・C　強襲のハルベルトには使えない。だけど、H・C　エクストラソードには眠ってもらう」
ナイトメアの鎧から闇が溢れだし、エクストラソードを呑み込むと、エクストラソードがその場に崩れ落ちる。
すまない、エクストラソード。
だが、お前のおかげでこの状況の突破口を開けそうだ。
「墓地に送られた妖刀竹光の効果で俺はデッキから折れ竹光を手札に加える俺は装備魔法、折れ竹光を聖騎士の追想　イゾルデに装備‼?」
金髪のイゾルデの手元に折れ竹光が現れる。
「そして魔法カード、黄金色の竹光を発動‼?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローする‼?そして墓地に存在する神剣―フェニックスブレードの効果発動‼?自分の墓地に存在する戦士族モンスター2体をゲームから除外する事で、このカードを自分の墓地から手札に加える。俺は墓地からクィーンズナイトとH・C　サウザンドブレードの2体を除外して神剣―フェニックスブレードを手札に戻す。そして魔法カード、手札抹殺‼?」
「‼?ここで一気に手札入れ替え……おまけにカゲトカゲまで処理

されちゃうね」
「お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローする‼?俺は6枚、闇は4枚捨ててドローだ。さらに再び魔法カード、黄金色の竹光を発動‼?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローする‼?」
「むぅ……ドローが止まらない」
手札抹殺で手札を全て入れ替え、さらに黄金色の竹光でドローする。
よし、これなら……‼?
「H・C　エクストラソードをリリースしてH・C（ヒロイックチャレンジャー）ウォーハンマーをアドバンス召喚‼?」

〈H・C　ウォーハンマー〉☆6　戦士族　地属性
ATK2100

フィールドに現れたのは鋼鉄の鎧に身を包み、巨大なハンマーを持ったモンスター。
「上級のヒロイックもいるんだ……ヴェルズナイトメアの守備力を超えられちゃった」
「それだけじゃないぜ。H・C　ウォーハンマーはこのカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに1体のみ装備し、このカードの攻撃力は、この効果で装備したモンスターの攻撃力分アップすることができる」
「むむっ、自己強化まであるんだ……なかなか厄介」
「これだけじゃ終わらない‼?魔法カード、ヒロイックチャンス‼?自分フィールド上のヒロイックと名のついたモンスター1体を選択し、このターン、選択したモンスターは攻撃力が倍になる‼?ただし、相手プレイヤーにダイレクトアタックは出来なくなる。俺が選択するのはH・C　強襲のハルベルト‼?」

Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト
ＡＴＫ１８００→３６００

「むぅ、Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトにも越えられちゃった……おまけに守備貫通もあるんだよね」
「これで準備は整った‼？バトル‼？Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトでヴェルズナイトメアを攻撃‼？ライトニングハルバード‼？」
　ハルベルトが持っていたハルバードに雷が落ち、ハルベルトはそのまま雷を纏ったハルバードでナイトメアの身体を貫いた。

闇　ＬＰ７９００→６２５０

「Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトの効果発動‼？このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時にデッキからヒロイックカードを手札に加える‼？」
「それにチェーンしてインヴェルズオリジンの効果、マレヴァランスインクリース。デッキからレベル４以下のヴェルズモンスター、ヴェルズサンダーバードを守備表示で特殊召喚する」

〈ヴェルズサンダーバード〉☆４　雷族　闇属性
ＤＥＦ１０５０

　再びフィールドにサンダーバードが現れる。
　だが、サンダーバードならまだ突破できる‼？
「Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトの効果で俺はデッキからＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）ダブルランスを手札に加える。続けて聖騎士の追想　イゾルデでヴェルズサンダーバードを攻撃‼？」
「ここは逃げる。リバースカードオープン。罠発動。深すぎた墓穴。自分または相手の墓地のモンスター１体を対象として、次の自分スタンバイフェイズにそのモンスターを墓地から自分フィールドに特殊召喚する。私が選択するのは私の墓地にあるヴェルズゴーレム」

「手札抹殺で落ちたカードか……」
「さらにそれにチェーンしてヴェルズサンダーバードの効果、このカードを除外して魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、自分フィールド上のこのカードをゲームから除外し、この効果で除外したこのカードは次のスタンバイフェイズ時にフィールド上に戻り、攻撃力は３００ポイントアップする」
「そんな効果を持ってたのか……」
　フィールドからサンダーバードの姿が消え、攻撃を仕掛けようとしていたイゾルデの動きが止まる。
「攻撃対象がいなくなったことで攻撃は取り止める。次だ、Ｈ・Ｃウォーハンマーでインヴェルズオリジンを攻撃‼?ギガントブレッヒェン‼?」
「……インヴェルズオリジン」
『ルオテッカワ』
「ならいい。迎え撃って、インヴェルズオリジン。マレヴァランスオリジン」
　オリジンが闇の波動をウォーハンマーに向けて放つが、ウォーハンマーはハンマーを振るって闇の波動ごとオリジンを打ち砕いた。

闇　ＬＰ６２５０→６１５０

「Ｈ・Ｃ　ウォーハンマーの効果発動‼?このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに１体のみ装備し、このカードの攻撃力は、この効果で装備したモンスターの攻撃力分アップすることができる‼?」

Ｈ・Ｃ　ウォーハンマー
ＡＴＫ２１００→４１００

ウォーハンマーのハンマーに、破壊したオリジンが吸い込まれてい

き、ハンマーが薄っすらと闇を纏う。
……擬似的とはいえ闇のカードのコントロールを得たんだから前のコードオブアームズの時みたいに痛みが来るかと思ったんだが……
そんな疑問を抱いた俺に、オリジンが小さな声で語りかけてくる。
『ルレラコオ　トルヤ　イナ　ハトコルス　クヨシンシ　ヲマサキガレワ』
「……なんというか、すまん」
『ナルスニキ』
少し怯えた声を出すオリジンに同情しながらも、切り替えてデュエルに意識を戻す。
「これで闇のフィールドはがら空きだ!!?速攻魔法、ライバルアライバル!!?」
「!!これは……」
「このカードは自分・相手のバトルフェイズに発動でき、モンスター1体を召喚する!!?来い、H・Cダブルランス!!?」
〈H・C　ダブルランス〉☆4　戦士族　地属性
ATK1700
フィールドに2つの槍を持った白い戦士が現れる。
そのモンスターは出てくると同時に勇ましい雄叫びをあげる。
「H・C　ダブルランスの効果発動!!?召喚成功時に手札・墓地の同名モンスターを表側守備表示で特殊召喚する!!?ただしこのカードはシンクロ素材にできず、このカードをエクシーズ素材とする場合、戦士族モンスターのエクシーズ召喚にしか使用できない」
「さっきの手札抹殺で落ちたんだね……仕方ない、それにチェーンしてエンペラーオーダーの効果、モンスターが召喚に成功した時に発動するモンスターの効果が発動した時、その発動を無効にし1枚ドローさせる」
「エンペラーオーダーの効果で1枚ドロー!!?そしてH・C　ダブル

ランスでダイレクトアタック‼?ツヴァイシュティヒ‼?」
ダブルランスが勢いよく闇に突撃し、２つの槍でその身体を貫く。
「うっ……」

闇　ＬＰ６１５０→４４５０

「まだ終わらない‼?リバースカードオープン‼?罠発動‼?罠発動‼?ワンダーエクシーズ‼?その効果により自分フィールド上のモンスターでエクシーズ召喚を行う‼?」
「やっぱり、これは遊騎の十八番。バトルフェイズ中の連続召喚による奇襲攻撃‼?」
「俺は戦士族、レベル４のＨ・Ｃ　ダブルランスとＨ・Ｃ　強襲のハルベルトでオーバーレイ‼?２体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築‼?」
ダブルランスとハルベルトが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から赤い鎧を着た馬に乗る弓兵が舞い降りた。
「エクシーズ召喚‼?現れろＨ－Ｃ（ヒロイックチャンピオン）ガーンデーヴァ‼?」

〈Ｈ－Ｃ　ガーンデーヴァ〉★４　戦士族　地属性
ＡＴＫ２１００

「そして今はまだバトルフェイズ中だ‼?Ｈ－Ｃ　ガーンデーヴァで闇にダイレクトアタック‼?暴嵐の矢‼?」
「っ……」

闇　ＬＰ４４５０→２３５０

ガーンデーヴァが放つ嵐のような弓矢が闇のライフを大きく削る。
これでライフもフィールドもこちらの方が有利になった。

闇相手に油断は出来ないが、このまま押し切って……そんなことを考えながら闇の方を見る。
するとそこにはーーー
「ぐすっ……うぅ……」
「いいっ⁉？や、闇⁉？おま、なんで泣いてるんだよ⁉？」
ーーー目から大粒の涙を流し泣いている闇の姿があった。
俺ですら初めて見る闇の泣き顔に、辺りは騒然とし、俺もあまりの事態に動揺してしまう。
そんな騒然とした店内で、闇は震えた声で途切れ途切れになりながら、それでもはっきりとその言葉を口に出す。
「……楽しい」
「……えっ？」
「楽しい……楽しいね……遊騎……やっぱり……あの頃と……同じ……遊騎とのデュエルが……1番……楽しい……心が……踊る⁉？」
「⁉？闇……お前……笑って……」
いつも無表情な闇が、涙を流しながらも、誰が見ても分かるような、本当に嬉しそうな笑顔を浮かべる。
「だから……もっと、もっと、デュエル、する⁉？遊騎と、楽しい、デュエル、たくさん、する⁉？」
「……最悪だ」
そんな、満面の笑みを浮かべる闇を見て、俺は自分の至らなさに思わず、右手で自分の頭を勢いよく殴る。
「こんなことならもっと早く、お前とデュエルをしてやればよかった……本当に、自分の至らなさが嫌になる」
俺は1度目を閉じて、両手で自分の頬を叩くと、闇に向けて満面の笑みを浮かべた。
「ああ、続けようぜ、闇。俺とお前の、楽しいデュエルを⁉？」
「⁉？うん⁉？」
俺の言葉に、闇が満面の笑みで応える。
もう、勝敗なんて関係ない。

今だけは、闇が……そして俺自身が望んだ楽しいデュエルのために、全力でぶつかる!!?

「メインフェイズ2、カードを2枚伏せてターンエンドだ!!?」

遊騎　ＬＰ７５００　手札３

ー☆▲▲ー　ー

ー○○ーー

☆　ー

ーーーーー

ーー△▲ー　ー

闇　ＬＰ２３５０　手札４

「私のターン、ドロー!!?スタンバイフェイズ、深すぎた墓穴の効果で墓地からヴェルズゴーレムを特殊召喚!!?」

〈ヴェルズゴーレム〉☆５　岩石族　闇属性

ＡＴＫ２１５０

闇のフィールドに胴体が真っ二つに折れ、その中から黒い昆虫の甲殻が生えている機械のモンスターが現れる。

外見からして、アレはＡＯＪカタストルか。

「さらに除外されていたヴェルズサンダーバードはフィールドに戻ってくる!!?これは特殊召喚じゃないからＨーＣ　ガーンデーヴァの効果にも引っかからない!!?」

ヴェルズサンダーバード

ＡＴＫ１６５０↓１９５０

姿を消していたサンダーバードが再びフィールドに現れる。

さあ、どう動いてくる、闇?

「まずはフィールド魔法、混沌空間を発動!!?」

闇がそう宣言すると、店内の風景が様々な場所に渦巻きが存在する青白い不気味なフィールドに書き換えられる。
「混沌空間の効果でモンスターが表側表示で除外される度に、１体につき１つこのカードにカオスカウンターを置くようになるよ。さらに相手フィールドのモンスターの数が自分フィールドのモンスターより多い場合、手札からヴェルズマンドラゴを特殊召喚!!?」

〈ヴェルズマンドラゴ〉☆４　植物族　闇属性
ＡＴＫ１５５０

新しく出てきたのは闇を纏ったマンドラゴラのようなモンスター。
元になったのは、ナチュルコスモスビートか？
何だろうと止めておいた方がいいか。
「ＨＩＣ　ガーンデーヴァの効果発動!!?オーバーレイユニットを１つ使い、相手フィールド上にレベル４以下のモンスターが特殊召喚された時、その特殊召喚されたモンスターを破壊する。裁きの神弓!!?」
「させない!!?それにチェーンしてリバースカードオープン!!?永続罠、侵略の侵喰感染!!?１ターンに１度、自分の手札または自分フィールド上に表側表示で存在する、ヴェルズと名のついたモンスター１体をデッキに戻してデッキからヴェルズと名のついたモンスター１体を手札に加えることができる!!?私はフィールドのヴェルズマンドラゴをデッキに戻してデッキから２体目のヴェルズマンドラゴを手札に加える!!?」
「うっ、やべっ、すっかり忘れてた」
「これでもうＨＩＣ　ガーンデーヴァの効果は使えない!!?そしてデッキに戻ったからまだ遊騎のモンスターの方が多い!!?手札からヴェルズマンドラゴを特殊召喚!!?」

〈ヴェルズマンドラゴ〉☆４　植物族　闇属性
ＡＴＫ１５５０

ガーンデーヴァの放つ弓をマンドラゴは地面に潜って躱し、しばらくして再び姿を現わす。
「どんどん行く!!?ヴェルズゴーレムの効果発動!!?1ターンに1度、フィールド上に表側表示で存在する、闇属性以外のレベル5以上のモンスター1体を選択して破壊できる!!?私はH・C　ウォーハンマーを破壊する!!?」
「くっ、すまない、H・C　ウォーハンマー」
ヴェルズゴーレムの目から闇を纏ったレーザーが放たれ、それを受けたウォーハンマーが消滅する。
「まだまだ……まだまだ!!?私は召喚僧サモンプリーストを召喚!!?」

〈召喚僧サモンプリースト〉☆4　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ８００

闇の前に現れたのは黒いローブを纏った魔法使い。
「召喚僧サモンプリーストは召喚時に効果で守備表示になる。それにチェーンしてエンペラーオーダーの効果、モンスターが召喚に成功した時に発動するモンスターの効果が発動した時、その発動を無効にし1枚ドローする!!?そして、召喚僧サモンプリーストの効果発動!!?1ターンに1度、手札から魔法カード1枚を捨てて、デッキからレベル4モンスター1体を特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン攻撃できない。私はシャッフルリボーンを捨てて、デッキからヴェルズケルキオンを特殊召喚!!?」

〈ヴェルズケルキオン〉☆4　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ１６００

「っ、まだヴェルズケルキオンの効果も使ってないのにモンスターゾーンが埋まった!?ってことは次は……」

「そして顕現せよ……邪念渦巻くサーキット!!?」
「っ、やっぱりリンク召喚か!!?」
闇が正面に手をかざすと大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はモンスター2体!!?私はヴェルズマンドラゴと召喚僧サモンプリーストをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2、魔界の警邏課デスポリス!!?」
〈魔界の警邏課デスポリス〉ＬＩＮＫ　２　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００　↙?↘?

マンドラゴとサモンプリーストがサーキットに吸い込まれ、代わりに現れたのは警察官の格好をした悪魔の少女。
「魔界の警邏課デスポリスはカード名が異なる闇属性モンスター2体を素材としてリンク召喚した時、1ターンに1度、自分フィールドのモンスター1体をリリースし、フィールドの表側表示のカード1枚を対象として戦闘・効果で破壊される場合、代わりに1つ取り除くことができる警邏カウンターを1つ置くことが出来る効果を得る!!?さらにヴェルズケルキオンの効果、私は墓地のヴェルズナイトメアを除外してヴェルズカストルを手札に加える!!?さらに混沌空間の効果でモンスターが表側表示で除外されたからカオスカウンターを1つ置く!!?」
混沌空間
カオスカウンター0→1

カストルを手札に加えたところで闇は1度目を閉じ、本当に楽しそうな、それでいて確かな自信を秘めた目で俺を見た。
「ここからが本番……私の今出せる全力、私の切り札達!!?全部全部、遊騎に見せる!!?儀式魔法、影霊衣(ネクロス)の反魂術!!?」
「っ……それも今のデッキに入ってたのか……」
闇が使ってきた儀式魔法に、俺は目を見開く。

俺がまだ『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』にいた頃、闇は『氷結界』のデッキを使っていた。
だが、それも正確に言うと正しいわけではない。
闇は俺があげたカードでデッキを組んでいた頃から、色々な召喚方法に興味を持ち、積極的に自分のデッキに取り入れていた。
だから、闇のデッキはシンクロ召喚が軸になる『氷結界』デッキでありながら全部の召喚方法が使えていた。
その中で、闇が『氷結界』の頃からデッキの中に取り入れていたのが、闇が使う氷結界の三龍の力を持った『影霊衣』の儀式モンスター達。
闇が初めて遊花に会った時、確かに全部の召喚方法が使えると宣言していたが、まさか影霊衣がそのまま取り入れられているとは思っていなかった。
そして今のフィールドを見る限り、この状況で出てくるのは闇のお気に入りであるあのモンスターの力を秘めた影霊衣。
「影霊衣の反魂術の効果でレベルの合計が儀式召喚するモンスターと同じになるように、自分の手札・フィールドのモンスターをリリースし、自分の手札・墓地から影霊衣儀式モンスター１体を儀式召喚する‼？私はフィールドにいるレベル５のヴェルズゴーレム、レベル４のヴェルズサンダーバードをリリースして墓地から儀式召喚を行う‼？」
フィールドに輝くダイヤモンドのような物が現れ、それにヴェルズゴーレムとサンダーバードが吸い込まれる。
しばらくするとそのダイヤモンドが輝きはじめ、ダイヤモンドの周囲が凍り付いていく。
「その身に宿すは最凶の龍‼？今こそ最凶の力を得て、全てを凍りつかせよ‼？儀式召喚‼？」
闇の声に応えるように、ダイヤモンドまでもが凍りつくと、ダイヤモンドが砕け散り、その中から氷の鎧を身に纏い、氷の剣を持った戦士が現れた。
「最凶の龍を秘めた凄まじき戦士‼？トリシューラの影霊衣（ネクロス）‼？」

〈トリシューラの影霊衣〉☆９　戦士族　水属性
ＡＴＫ２７００

「やっぱりそいつだったか……トリシューラの影霊衣」
「トリシューラの影霊衣の効果発動、トリニティブリザード‼？このカードが儀式召喚に成功した時、相手の手札・フィールド・墓地のカードをそれぞれ１枚選び、その３枚を除外する‼？私は遊騎の手札１枚、フィールドのＨ－Ｃ　ガーンデーヴァ、墓地のＨ・Ｃ　ダブルランスを除外する‼？」
「っ、手札からはジャックスナイトが除外される」
トリシューラの影霊衣の氷の剣を振るうと、俺の手札とフィールドにいたガーンデーヴァと、墓地のダブルランスが凍り付き、消滅する。
相変わらず強力な効果をしてやがるな。
「さらに混沌空間の効果でモンスターが表側表示で３体除外されたからカオスカウンターを３つ置く‼？」

混沌空間
カオスカウンター１→４

「そしてヴェルズケルキオンには墓地からモンスターを回収する効果を発動したターンのメインフェイズにヴェルズモンスターを１体召喚できる‼？私はヴェルズカストルを召喚‼？」

〈ヴェルズカストル〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１７５０

「ヴェルズカストルには召喚に成功したターン、自分は通常召喚に加えて１度だけヴェルズと名のついたモンスター１体を召喚できる効果がある。私はヴェルズサラマンドラを召喚‼？」

〈ヴェルズサラマンドラ〉☆４　恐竜族　闇属性
ＡＴＫ１８５０

現れたのは闇が身体から溢れ出し、黒い棘が身体から生えているモンスター。
今度はジュラックタイタンかよ……
そして、闇の攻撃はまだまだ終わらない。
「私は墓地に存在するチューナーモンスター、グローアップバルブの効果発動!!?デュエル中に１回、このカードが墓地に存在する場合に、自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送り、このカードを特殊召喚する!!?」
「グローアップバルブ!?!?っ、手札抹殺の時に落ちてたのか!?!?」

〈グローアップバルブ〉☆１　植物族　地属性
ＤＥＦ１００

フィールドに現れたのは白い花が生えた球根のようなモンスター。
闇のフィールドに新しく出たのはレベル１のチューナー。
そして闇のフィールドにはレベル４モンスターがたくさんいる。
これは、奴が来る!!?
「私は、レベル４、ヴェルズサラマンドラ、レベル４、ヴェルズカストルに、レベル１、チューナーモンスター、グローアップバルブをチューニング!!?」
グローアップバルブが光の輪になり、サラマンドラとカストルが小さな星に変わり、光の道になる。
「全てを消し去る破壊の槍よ、今ここに最凶の力を示せ!!?シンクロ召喚!!?」
そして光の道が輝くと、その中から現れるのは氷の翼を持った三つ首の氷龍。
闇の『氷結界』時代からの切り札であり、異名である『氷の女王』の所以たるモンスター。

「希望を、世界すらも凍結させる最凶の氷龍!!?氷結界の龍トリシューラ!!?」

〈氷結界の龍トリシューラ〉☆9　ドラゴン族　水属性
ＡＴＫ２７００

「っ、やっぱり本物のトリシューラは迫力が違うな」
身体にその力を秘めているトリシューラの影霊衣とは違う、圧倒的な存在感と威圧感。
最凶の龍足るその力が、今から猛威を振るう。
「氷結界の龍トリシューラの効果発動、トリニティフリーズ!!?このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手の手札・フィールド・墓地のカードをそれぞれ1枚まで選んで除外できる!!?」
「くっ、なら、チェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?ダメージダイエット!!?このターン自分が受ける全てのダメージは半分になる!!?」
「ダメージが減るのは仕方ない……だけど、他は全部貰う!!?氷結界の龍トリシューラの効果で1、遊騎の手札!!?」
「くっ、オネストが……」
トリシューラの三つ首の左の顔から氷のブレスが放たれ、手札のオネストが凍り付き、消滅する。
「2、フィールドにある遊騎の最後の伏せカード!!?」
「っ、拮抗勝負までやられるか……」
今度はトリシューラの三つ首の右の顔から氷のブレスが放たれ、フィールドの拮抗勝負が凍り付き、消滅する。
「3、遊騎の墓地にある神剣―フェニックスブレード!!?この3枚を除外する!!?トリニティフリーズ!!?」
最後にトリシューラの三つ首の中央の顔から氷のブレスが放たれ、墓地のフェニックスブレードが凍り付き、消滅した。
逆転するのに必要そうなカードを全て凍り付かされた……これは流石に痛すぎる。

「混沌空間の効果でモンスターが表側表示で1体除外されたからカオスカウンターを1つ置く!!?」

混沌空間
カオスカウンター4→5

「まだ……まだ私はやれる!!?フィールド魔法、混沌空間の効果発動!!?1ターンに1度、自分フィールドのカオスカウンターを4つ以上取り除き、取り除いた数と同じレベルを持つ、除外されている自分または相手のモンスター1体を対象としてそのモンスターを自分フィールドに特殊召喚する!!?私はカオスカウンターを4つ取り除き、除外からヴェルズヘリオロープを特殊召喚!!?」

混沌空間
カオスカウンター5→1

〈ヴェルズヘリオロープ〉☆4　岩石族　闇属性
ＡＴＫ１９５０

「まだ終わりじゃない!!?魔法カード、使者蘇生。墓地に存在するモンスター1体を特殊召喚する!!?」
「ここで蘇生カードだって!!?」
「墓地から甦れ、もう1体のヴェルズヘリオロープ!!?」

〈ヴェルズヘリオロープ〉☆4　岩石族　闇属性
ＡＴＫ１９５０

「そして、バトル!!?トリシューラの影霊衣で聖騎士の追想　イゾルデを攻撃!!?陰影のアイシクルアパリション!!?」
トリシューラの影霊衣が地面に向けて氷の剣を突き刺すと、地面がひび割れ、地面から大量の氷柱が出現し、イゾルデ達の動きを拘束す

る。
　トリシューラの影霊衣は地面に剣を突き刺したまま勢いよく跳び上がると、足元に氷柱を出現させ、その状態でイゾルデに向けて飛び蹴りを放ち、蹴りの勢いと氷柱によりイゾルデ達の身体を貫いた。
「ぐっ‼?」

遊騎　ＬＰ７５００→６９５０

「続けて、魔界の警邏課デスポリスでダイレクトアタック。ポリストライク」
「くっ……これくらい‼?」
　デスポリスが警棒で俺の身体を勢いよく叩きつける。

遊騎　ＬＰ６９５０→６４５０

「もっともっと‼?ヴェルズケルキオンでダイレクトアタック‼?クリスタルマジック‼?」
「っ……」
　ケルキオンの持っている杖から闇の球体が放たれ、俺の身体を貫いて消滅する。

遊騎　ＬＰ６４５０→５６５０

「まだまだ行く‼?１体目のヴェルズヘリオロープでダイレクトアタック‼?テンプテーションブレイク‼?」
「くっ……」
　ヘリオトロープが石の剣で俺の身体を斬り裂いていき、さらにその後ろから２体目のヘリオロープの剣が迫る。
「さらに２体目のヴェルズヘリオロープでダイレクトアタック‼?テンプテーションブレイク‼?」
「ぐあっ‼?」

遊騎　ＬＰ５６５０→４６７５→３７００

「最後‼？氷結界の龍トリシューラでダイレクトアタック‼？凍結のブリザードノヴァ‼？」

闇の声に応えるかのようにトリシューラの三つ首全ての目が光ると、トリシューラの身体から吹雪が生み出され、三つ首全てが空気を吸い込むと、圧縮された氷のブレスが俺の身体を呑み込んだ。

「くっ、ぐあああっ‼？」

遊騎　ＬＰ３７００→２３５０

７５００もあったライフが一気に闇と同じところまで減らされる。

そして、闇は笑みをさらに強くする。

「やっぱり、遊騎はまだまだ耐え切ってくれる……だから、もっともっと、本気出す‼？メインフェイズ２、私は３体のレベル４モンスター、ヴェルズケルキオンと２体のヴェルズヘリオロープでオーバーレイ‼？３体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼？」

ケルキオンと２体のヘリオロープが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けると、そこに現れるのはトリシューラと同等の圧倒的な存在感を放つ漆黒の三つ首龍。

「闇に堕ちし最凶の龍……ヴェルズウロボロス‼？」

〈ヴェルズウロボロス〉★４　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ２７５０

「っ……ヴェルズウロボロス……トリシューラがヴェルズ化した姿、か」

『ゾンセ　ハンゲカ　メタノウオウヨジ　ガワ　シカシ　ノドキウユ

ナタツア　タマ』
「ヴェルズウロボロスの効果発動、トリニティカース‼?オーバーレイユニットを1つ使い、1ターンに1度、3つの呪いからフィールドに表側表示で存在する限り1度ずつ、1つを相手にかけることが出来る‼?今回発動するのは、相手の手札をランダムに1枚選んで墓地へ送る‼?」
「手札破壊⁉?」
ウロボロスの身体から闇が溢れ出し、俺の最後の手札を呑み込んで消滅させる。
……こいつは流石にマズイぜ。
「墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動‼?自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローする。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外する‼?私はフィールドの魔界の警邏課デスポリスをEXデッキに戻し、カードを1枚ドローする‼?」
「魔界の警邏課デスポリスを逃したか……」
「遊騎には簡単に高攻撃力を出せるヒロイックの切り札がいる。低攻撃力の魔界の警邏課デスポリスは流石に危険。私はカードを1枚伏せてターンエンド‼?手札がないからシャッフルリボーンのデメリットも無し。さあ、もっともっと、楽しいデュエル、しよ‼?」
「……ははっ、相変わらず、期待が重いな」
闇の言葉に、俺は思わず苦笑する。
今の俺には手札もフィールドにもカードは無い。
おまけに墓地も重要なカードはほとんど除外されてボロボロ。
この状況で逆転するのは、正直かなり厳しい。
だけど……
俺はチラッときらきらとした満面の笑みで俺を見ている闇の顔を見る。
……分かってる。
普段、ほとんど感情を表に出さないお前が、そんなに楽しいって言

うんなら……これはお前にとって、本当に楽しくて……大切なデュエルなんだよな？

「……だったら、やってやろうじゃないか」

気合を入れ、俺も笑顔を浮かべる。

状況は完全にこちらの不利。

次のドロー次第では、その時点でゲームオーバー。

それでも、諦めはしない。

この圧倒的な逆境、必ず攻略してみせる。

なんたってこれは、どこまでも熱く燃えられる……楽しい楽しいデュエルなんだから。

遊騎　ＬＰ２３５０　手札０

ｌｌｌｌｌｌｌ　ｌ

ｌｌｌｌｌｌｌ

ｌ　ｌ

○ｌ○ｌ○

ｌ▲△△ｌ　▽

闇　ＬＰ２３５０　手札０

第４８話　英雄ＶＳ氷槍・蘇る運命

★

「……凄い……やっぱり、師匠と闇先パイは凄い」

師匠と闇先パイの１ターン毎に状況がガラリと変化する激しいデュエルに、私は思わず声を漏らす。

そんな私の声を聞いて、隣にいた桜ちゃんはどこか呆れたような声を出す。

「この状況でそんな言葉が出るのも遊花らしいところよね……私はそれよりもいつも無表情な闇があそこまで感情を表に出してることに驚いてるんだけど……」

「そ、そこにだってちゃんと驚いてるよ？」

私だって、いつも無表情な闇先パイがあんなに泣いたり笑ったりする姿を見ることになるなんて思わなかった。

だけど、自分より取り乱している人がいると冷静になるというのが人間というもので……

「や、闇ちゃんが泣いてるのです？笑ってるのです？ああもう、リーネには何が何やら……‼？」

「落ち着け、天羽‼？いや、取り乱す気持ちも分かるがとりあえず落ち着け‼？」

私達の近くで取り乱しているリーネさんと不知火さんを見て、私は思わず苦笑を浮かべてしまう。

きっと、あんな闇先パイを見るのはリーネさん達も初めてなんだろう。

それに、何となく分かる。

闇先パイがあんなに感情を表に出すのはきっと、師匠の前だけなんだ。

だからこそ、あそこまで取り乱しているリーネさん達を見ちゃうと妙に冷静になってしまうというか……そのおかげか、私は師匠達のデュエルを……闇先パイの本気を、冷静に見ることが出来ていた。

闇先パイはリンク、儀式、シンクロ、エクシーズを1ターンで併用し、師匠の手札とフィールドのカードを壊滅させ、墓地の有用なカードを根こそぎ奪い去った。
そんな闇先パイの戦術の核になっているのが、闇先パイが切り札と呼び、現在フィールドで圧倒的な存在感を放っているトリシューラというモンスター達なのだろう。
以前、異世界で共闘した神楽さんが使用し、私も託されて使用したことがあるトリシューラの影霊衣。
その原型となる氷結界の龍トリシューラ。
そして……どこか氷結界の龍トリシューラに似ている、私が戦ったことがあるヴェルズウロボロス。
どのモンスターも相手に壊滅的な被害を与えることができるのに、そのモンスター達を1ターンで揃え、反撃の目を徹底的に摘んでいく。
これが……現世界ランキング4位である闇先パイの本当の実力。
「相変わらずデタラメな強さよね。まあ、世界ランキング4位なんだから当たり前なんだけど……これは次の遊花の相手は闇になりそうね」
「ううん、まだ分からないよ」
桜ちゃんの言葉に、私は即座に首を振る。
そんな私を見て、桜ちゃんは苦笑いを浮かべる。
「いや、師匠である結束を応援したい遊花の気持ちは分かるけど、今の結束には手札やフィールドはおろか、墓地にすら有用なカードはなさそうなのよ？この状況から逆転するのは流石に無理があるでしょ？」
「ううん、確かに根拠があるわけじゃないよ？師匠の状況が絶望的なのは私だって分かるもん」
「ならなんで……」
「だけど……師匠、今凄く楽しそうだもん」
「……は？」
「こんな絶望的な状況でも、闇先パイとのデュエルを楽しんでる。全然諦めないでこの状況を攻略する方法を考えてる。だから、まだ分か

らないよ」
私の言葉に、桜ちゃんは目を丸くする。
師匠の顔には、圧倒的に不利な状況のハズなのに笑顔が浮かんでいる。
そして、師匠が不利な状況で笑顔を浮かべる時は……大抵その逆境を切り抜けてしまう時だ。
「それに、闇先パイが言ってたもん。師匠に1番大切なのは気持ちだって。そして、師匠が逆転することを、もっと楽しいデュエルを続けることを望んでるのは、師匠の大切な友達の闇先パイなんだもん。だから、師匠は絶対にまだ終わらないよ。大切な友達である闇先パイの願いを叶えるために」
「……はぁ～なんなのよ、アンタ達の結束に対するその信頼は……根拠なんて無いって言うのに、私までまだアイツが終わらないって思っちゃうじゃない」
桜ちゃんが複雑そうな表情でそんなことを呟く。
私はそんな桜ちゃんを見て、思わず笑みを浮かべると、師匠達のデュエルに視線を戻す。
……師匠、また私に見せてください。
逆境を覆し、私に前を向く勇気をくれた、あなたのデュエルを。

ーーーーーーーー

☆

遊騎　ＬＰ２３５０　手札０
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　ー
○ー○ー○
ー▲△△ー　▽
闇　ＬＰ２３５０　手札０

「俺のターン、ドロー!!?よしっ!!?魔法カード、一時休戦!!?お互いのプレイヤーは、それぞれデッキから1枚ドローし、次の相手ターン終了時まで、お互いが受ける全てのダメージは0になる!!?」
「!!?相変わらず引きが強い……」
「これでとりあえず1ターンは凌げるか。俺はこのままターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ２３５０　手札１
ー　　ー
ー　　ー
ー　　ー
ー　　ー
○ー○ー○
ー▲△△ー　　▽
闇　ＬＰ２３５０　手札１

「私のターン、ドロー!!?魔法カード、闇の誘惑。自分はデッキから2枚ドローし、その後手札の闇属性モンスター1体を除外する。そして手札に闇属性モンスターが無い場合、手札を全て墓地へ送る。私は手札から終末の騎士を除外する。そして混沌空間の効果でモンスターが表側表示で1体除外されたからカオスカウンターを1つ置く」

混沌空間
カオスカウンター1→2

「ダメージは与えられないし、下手にモンスターを出すのも悪手だね。私はこのままターンエンド」

遊騎　ＬＰ２３５０　手札１
ー　　ー
ー　　ー
ー　　ー

ー　　ー
○ー○ー○
ー▲△△ー　　▽
闇　ＬＰ２３５０　手札２

「俺のターン、ドロー!!?」
もう一時休戦の効果は切れているためここからは攻撃が通ってしまう。
だけど、今の手札で闇のフィールドを突破することは出来ない。
そして問題は闇のフィールドにいるヴェルズウロボロスだ。
手札破壊はもう使えないが、残り２つ、トリシューラを元にしているならフィールドと墓地に干渉する効果があるハズだ。
次のターンまで生き残れるかは闇が何を選択するかによる運次第。
それでも、今は出来ることをやるしか無い。
「俺はモンスターをセット。カードを１枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ２３５０　手札０
ーー▲ーー　　ー
ーー??ーー
ー　　ー
○ー○ー○
ー▲△△ー　　▽
闇　ＬＰ２３５０　手札２

「私のターン、ドロー!!?ヴェルズウロボロスの効果発動、トリニティカース!!?オーバーレイユニットを１つ使い、１ターンに１度、３つの呪いからフィールドに表側表示で存在する限り１度ずつ、１つを相手にかけることが出来る!!?今回発動するのは、相手フィールド上に存在するカード１枚を選択して持ち主の手札に戻す効果!!?」
「っ、やっぱりフィールドに干渉する効果を持ってたか……」
「私が選択するのは……遊騎のセットモンスター!!?」

ウロボロスの身体から闇を纏った吹雪が溢れだし、セットしていたモンスターが凍らされ、吹き飛ばされる。
「バトル!!?トリシューラの影霊衣でダイレクトアタック!!?」
「まだだ!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札のガガガガードナーの効果発動!!?このカードを手札から特殊召喚できる!!?」
「!!?さっき手札に戻したモンスター……そんな効果を持ってたんだ……」

〈ガガガガードナー〉☆4　戦士族　地属性
ＤＥＦ２０００

俺のフィールドに巨大な盾を持ったモンスターが現れる。
「だけど、それだけならまだ防ぎきれないよ?攻撃対象が増えたことで、バトルステップの巻き戻しが起こる。私はトリシューラの影霊衣でガガガガードナーを攻撃!!?陰影のアイシクルアパリション!!?」
「いや、そうでもないぜ。墓地のタスケルトンの効果発動!!?モンスターが戦闘を行うバトルステップ時、墓地のこのカードをゲームから除外し、デュエル中に1度だけ、そのモンスターの攻撃を無効にする!!?」
「!!?手札抹殺の時に落としてたんだね……」
トリシューラの影霊衣が発生させる氷柱からガガガガードナーを庇うようにタスケルトンが現れ、タスケルトンはガガガガードナーを突き飛ばして氷柱に刺されて消滅する。
「なら、氷結界の龍トリシューラでガガガガードナーを攻撃!!?凍結のブリザードノヴァ!!?」
トリシューラの三つ首全ての目が再び光り、圧縮された氷のブレスがガガガガードナーに向けて放たれる。
「まだだ!!?墓地に存在するタスケナイトの効果発動!!?このカードが墓地に存在し、自分の手札が0枚の場合、相手モンスターの攻撃宣言時にデュエル中に1度だけ発動出来る!!?このカードを墓地から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する!!?」

「っ!?・?・そんなカードまで墓地に落としてたんだ……」

〈タスケナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１７００

赤い鎧の戦士が現れ、ガガガガードナーと共に盾を支えてトリシューラのブレスを防ぎきる。
「ふぅ……なんとか凌いだぜ」
「……ふふっ、やっぱり遊騎は凄い。メインフェイズ２、カードを１枚伏せてターンエンドだよ」

遊騎　ＬＰ２３５０　手札０
ー ー ▲ ー ー　ー
ー ー □ □ ー
ー　　ー
○ ー ○ ー ○
▲ ▲ △ △ ー　▽
闇　ＬＰ２３５０　手札２

「俺のターン、ドロー!!?……このカードは……なら、俺は戦士族、レベル４のガガガガードナーとタスケナイトでオーバーレイ!!?２体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
ガガガガードナーとタスケナイトが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこにいたのは赤い鎧を着た王者の風格を漂わせる戦士。
「光を纏て、闇を切り裂く孤高の王者!!?　Ｈ（ヒロイック）ー　Ｃ（チャンピオン）エクスカリバー!!?」

〈ＨーＣ　エクスカリバー〉★４　戦士族　光属性

ＡＴＫ２０００

「ＨｌＣ　エクスカリバー……来たね、遊騎の新しい切り札が……」

「ＨｌＣ　エクスカリバーの効果発動!!?シャイニングフォース!!?オーバーレイユニットを２つ使い、このカードの攻撃力は、次の相手のエンドフェイズ時まで元々の攻撃力の倍になる!!?」

エクスカリバーの周りを漂っていたオーバーレイユニットがエクスカリバーに集まり、エクスカリバーの身体が光り輝いた。

ＨｌＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ２０００→４０００

「レベル４の戦士族２体から攻撃力４０００を出せるのはやっぱり強力……魔界の警邏課デスポリスを戻しておいてよかった」

「バトル!!?ＨｌＣ　エクスカリバーでヴェルズウロボロスを攻撃!!?」

「やっぱりヴェルズウロボロスを狙ってくるよね……それなら、リバースカードオープン!!?罠発動!!?エクシーズリベンジシャッフル!!?自分フィールド上のエクシーズモンスターが攻撃対象に選択された時、自分の墓地のエクシーズモンスター１体を選択して攻撃対象となったエクシーズモンスターを持ち主のＥＸデッキに戻し、その後、選択したモンスターを墓地から特殊召喚し、このカードを下に重ねてオーバーレイユニットとする!!?私はヴェルズウロボロスをＥＸデッキに戻して墓地から蘇れ、ヴェルズオピオン!!?」

〈ヴェルズオピオン〉★４　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ１６５０

エクスカリバーがウロボロスに斬りかかろうとするが、ウロボロスの姿が闇に溶けるように消え、代わりにオピオンの姿が現れる。

「逃げたか。攻撃対象がいなくなったことで、バトルステップの巻き

戻しが起こる。ＨｌＣ　エクスカリバーで氷結界の龍トリシューラを攻撃‼？必殺剣　刀光剣影‼？」
「迎え撃って、氷結界の龍トリシューラ‼？凍結のブリザードノヴァ‼？」
トリシューラが圧縮された氷のブレスをエクスカリバーに向けて放つ。
エクスカリバーはその氷のブレスに正面から突撃すると、ブレスごとトリシューラの三つ首を全て斬り裂いた。

闇　ＬＰ２３５０→１０５０

「むぅ……トリシューラがやられちゃった」
「メインフェイズ２、俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ２３５０　手札０
ｌｌ▲▲ｌ　　ｌ
ｌｌｌｌｌｌ
ｌ　　○
○ｌｌｌ□
▲ｌ△△ｌ　　▽
闇　ＬＰ１０５０　手札３

「私のターン、ドロー‼？」
「スタンバイフェイズ、リバースカードオープン‼？罠発動‼？ヒロイックギフト‼？」
「‼？ヒロイックの罠カード？」
「相手のライフポイントが２０００以下の場合に発動できる。相手のライフポイントを８０００にして自分はデッキからカードを２枚ドローする‼？」
「えっ？」

闇　ＬＰ１０５０→８０００

「……ライフが８０００に戻っちゃったけど、いいの？」
「ライフとしては追い詰めてても俺だってライフに余裕があるわけじゃないからな。どうせ俺のデッキは高攻撃力で叩いていくデッキなんだ。ライフが初期値に戻ろうが、手札が欲しい時もある。勿論、それだけが狙いじゃないけどな」
「……成る程、面白い。それなら私も遊騎を全力で追い詰める。まずはヴェルズオピオンの効果発動、イビルソートインベーション‼？オーバーレイユニットを１つ使い、私はデッキから速攻魔法、侵略の汎発感染を手札に加える。侵略の汎発感染は自分フィールドの全てのヴェルズモンスターに、ターン終了時までこのカード以外の魔法・罠カードの効果を受けなくする効果がある。さらにヴェルズオピオンをリリースしてリバースカードオープン‼？罠発動‼？闇霊術ー「欲」‼？自分フィールド上の闇属性モンスター１体をリリースして相手は手札から魔法カード１枚を見せてこのカードの効果を無効にできる。見せなかった場合、自分はデッキからカードを２枚ドローする‼？」
「俺の手札には魔法カード、融合がある。その効果は無効だ」
「むぅ……仕方ない。私はヴェルズケルキオンを召喚‼？」

〈ヴェルズケルキオン〉☆４　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ１６００

「さらにヴェルズケルキオンの効果、私は墓地のヴェルズケルキオンを除外してヴェルズヘリオロープを手札に加える‼？さらに混沌空間の効果でモンスターが表側表示で除外されたからカオスカウンターを１つ置く‼？」

混沌空間
カオスカウンター２→３

「ぐっ……そろそろ混沌空間のせいでヴェルズケルキオンがループし始めるな」
「私はヴェルズケルキオンの効果で増えた召喚権でヴェルズヘリオロープを召喚!!?」

〈ヴェルズヘリオロープ〉☆4　岩石族　闇属性
ＡＴＫ１９５０

「私は2体のレベル4ヴェルズモンスター、ヴェルズケルキオンとヴェルズヘリオロープでオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
ケルキオンとヘリオトロープが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りるのはオピオンよりも青い翼が残っている漆黒の竜。
「希望を奪い去る邪竜、ランク4、ヴェルズバハムート!!?」

〈ヴェルズバハムート〉★4　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２３５０

「っ、ブリューナクを元にしたそいつか……確か天雷の時の説明を思い出す限りコントロール奪取が出来るんだよな?」
「ん、ヴェルズバハムートの効果、イビルソートテンプテーションは、1ターンに1度、オーバーレイユニットを1つ使い、手札からヴェルズと名のついたモンスター1体を捨てることで相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体のコントロールを、永続的に得ることができる」
「……なら、神頼みをするなら今だな。ヴェルズバハムートの召喚成功時、リバースカードオープン!!?罠発動!!?活路への希望!!?」
「!!?そのカードは……」

「自分のＬＰが相手より１０００以上少ない場合、１０００ＬＰを払って発動!!?」

遊騎　ＬＰ２３５０→１３５０

「お互いのＬＰの差２０００につき1枚、自分はデッキからドローする!!?俺のライフは１３５０!!?闇は８０００!!?よって3枚のカードをドローする!!?」

「っ、ここでさらに3枚のドロー……このためにヒロイックギフトを使ったんだね」

「ああ、ドロー的にもライフ的にもちょうど良かったからな。一時休戦で活路への希望を引いた時はどうなるかと思ったが、なんとかなったみたいだぜ」

「それなら、これはどうする?ヴェルズバハムートの効果、イビルソートテンプテーション!!?私は手札からヴェルズオウィスプを捨ててＨ－Ｃ　エクスカリバーのコントロールを得る!!?」

バハムートから黒い波動が出てエクスカリバーの身体を蝕んでいく。

「悪い、エクスカリバー……だが、お前の力は無駄にはしないぜ!!?その効果にチェーンして手札からＨ・ヒロイックチャレンジャー　Ｃ　ソードシールドの効果を発動!!?ヒロイックモンスターが存在する時に手札から墓地に送ることでこのターン、戦闘によって発生するダメージは0になり、自分フィールド上のヒロイックモンスターは戦闘で破壊されない!!?この効果は相手ターンでも使用することができる!!?」

「!!?また防御カードを引いたの!!?」

俺の周りに緑色の盾が浮かぶ。

これでこのターン、戦闘ダメージによって俺がやられることはない。

エクスカリバーは自身を蝕む黒い波動に抵抗していたが、次第に抵抗が弱まり闇のフィールドに移動した。

「まさかこのターンまで耐えられるなんて……魔法カード、終わり

の始まり‼?自分の墓地に闇属性モンスターが7体以上存在する場合に発動する事ができ、自分の墓地に存在する闇属性モンスター5体をゲームから除外する事で発動‼?私は墓地から召喚僧サモンプリースト、カゲトカゲ、ヴェルズゴーレム、ヴェルズヘリオロープ、ヴェルズサンダーバードを除外して、自分のデッキからカードを3枚ドローする‼?」
「っ、一気に3枚ドローしてくるか」
「それだけじゃない。混沌空間の効果でモンスターが表側表示で5体除外されたからカオスカウンターを5つ置く‼?」

混沌空間
カオスカウンター3→8

闇の手札が一気に3枚も増え、混沌空間のカウンターも一気に5個も増えるのか……
「さらにフィールド魔法、混沌空間の効果発動‼?私はカオスカウンターを4つ取り除き、除外からヴェルズサンダーバードを特殊召喚‼?」

混沌空間
カオスカウンター8→4

〈ヴェルズサンダーバード〉☆4　雷族　闇属性
ＡＴＫ１６５０

さらにフィールドに呼び出されたの自身の効果で除外することが出来るサンダーバード。
本当に容赦がない……いや、それだけ闇が本気を出しているということか。
「私はカードを3枚伏せてターンエンド‼?」
「エンド時にＨーＣ　エクスカリバーの攻撃力は元に戻る」

ＨＩＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ４０００→２０００
遊騎　ＬＰ１３５０　手札４
｜｜｜｜｜　｜
｜｜｜｜｜
　○　｜
○｜○○｜
▲▲△△▲　▽
闇　ＬＰ８０００　手札２

「俺のターン、ドロー!!?」
「スタンバイフェイズ、リバースカードオープン!!?ヴェルズバハムートをリリースして罠発動!!?魔のデッキ破壊ウイルス!!?」
「うげっ、ここでウイルスカードか!!?」
「魔のデッキ破壊ウイルスの効果で相手フィールドのモンスター、相手の手札、相手ターンで数えて３ターンの間に相手がドローしたカードを全て確認し、その内の攻撃力１５００以下のモンスターを全て破壊する!!?」
　バハムートの姿が消え、俺の手札が闇に包まれる。
「破壊されたのはクィーンズナイト。残ったのはスキルプリズナー、融合、キングスナイト、大欲の壺……むぅ、あんまり効いてない」
「これでも十分痛いって……動けないわけじゃないけどな。速攻魔法、大欲の壺!!?除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計３体を持ち主のデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから１枚ドローする!!?俺は除外されているクィーンズナイト、ジャックスナイト、Ｈ・Ｃ　ダブルランスをデッキに戻してカードを１枚ドローする!!?ドローしたカードは予想ＧＵＹだ!!?」
「むぅ……そのカードは本当に予想外……」
「俺は魔法カード、予想ＧＵＹを発動!!?自分フィールドにモンス

ターが存在しない場合にこのカードは発動できる。デッキからレベル４以下の通常モンスター１体を特殊召喚する‼?来い、クィーンズナイト‼?」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

「まだまだ行くぜ‼?キングスナイトを召喚‼?」

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

クィーンズナイトの横に黄金の鎧を身に纏った騎士が並び立つ。
「キングスナイトの効果発動‼?自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト１体を特殊召喚する‼?」
「させない‼?それにチェーンしてエンペラーオーダーの効果、モンスターが召喚に成功した時に発動するモンスターの効果が発動した時、その発動を無効にし１枚ドローさせる‼?」
「エンペラーオーダーの効果で１枚ドロー‼?俺がドローしたのはジャックスナイト‼?」
「っ‼?……やっぱり、遊騎のここ１番での引きの強さはこれぐらいじゃ止められないか……来るね、遊騎の切り札が」
「行くぜ、闇‼?魔法カード、融合を発動‼?自分の手札・フィールドに存在する融合モンスターによって決められた融合素材を墓地に送り、ＥＸデッキから融合モンスターを特殊召喚する‼?」
「ならそれにチェーンしてヴェルズサンダーバードの効果、このカードを除外して魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、自分フィールド上のこのカードをゲームから除外し、この効果で除外したこのカードは次のスタンバイフェイズ時にフィールド上に戻り、攻撃力は３００ポイントアップする。そしてモンスターが除外されたこ

とで混沌空間の効果でモンスターが表側表示で1体除外されたからカオスカウンターを1つ置く!!?」

混沌空間
カオスカウンター4→5

「構わない!!?俺はフィールドのクィーンズナイトとキングスナイト、手札のジャックスナイトの3体で融合!!?」
フィールドに現れた渦に3体の騎士達が飛び込んでいく。
そして渦が爆けるとその中から現れるのは黒い鎧を身に纏った漆黒の騎士。
「融合召喚!!?運命に打ち勝つ勇敢なる騎士達の主!!?アルカナナイトジョーカー!!?」

〈アルカナナイトジョーカー〉☆9　戦士族　光属性
ＡＴＫ３８００

「アルカナナイトジョーカー……遊騎の切り札!!?」
アルカナナイトジョーカーを見て、闇はとても嬉しそうな笑みを浮かべる。
逆転まではまだまだ遠いが、一歩でも前に進む!!?
「バトル!!?俺のモンスターを解放して貰うぜ!!?アルカナナイトジョーカーでＨ－Ｃ　エクスカリバーに攻撃!!?ロイヤルストレートフラッシュ!!?」
「こっちを狙ってくるんだね。迎え撃って、Ｈ－Ｃ　エクスカリバー!!?必殺剣　刀光剣影!!?」
身体から闇を溢れさせているエクスカリバーがアルカナナイトジョーカーに向けて剣を振るうが、アルカナナイトジョーカーの大剣に受け止められ、大剣を持っていない手で殴り飛ばされる。
吹き飛んだエクスカリバーにアルカナナイトジョーカーは大剣を構えると、エクスカリバーが態勢を立て直す前に一気に近づき、その

大剣を振り下ろした。

闇　ＬＰ８０００→６２００

「ライフが戻ってるから、これぐらいなら平気」

「それでも一歩は踏み出せた。まだまだデュエルはこれからだ‼?」メインフェイズ２、カードを１枚伏せてターンエンドだ」

「ウイルスの効果、１ターン目終了だよ」

遊騎　ＬＰ１３５０　手札０

ー　ー▲ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー

ー　○

○ー　ー　ー　ー

▲ー△△▲　▽

闇　ＬＰ６２００　手札２

「私のターン、ドロー‼?」スタンバイフェイズ除外されていたヴェルズサンダーバードはフィールドに戻ってくる」

ヴェルズサンダーバード

ＡＴＫ１６５０→１９５０

フィールドに再びサンダーバードが姿を現わす。

闇はフィールドを見て、さらに楽しそうな笑みを浮かべる。

「……やっぱり、遊騎は強い。だからこそ、全力で遊騎にぶつかる‼?」

「……ああ、来い、闇‼?」

俺のフィールドには攻撃力３８００のアルカナナイトジョーカーがいてセットカードはスキルプリズナーがある。

ここまでのデュエルで闇のデッキはモンスター効果の単体除去を

基本としてて魔法や罠の除去カードは少なめ見たいだし、切り札がトリシューラ系のことを考えると攻撃力でアルカナナイトジョーカーを超えてこれるとは考えにくい。
　この状況、闇はどう突破してくる？
「フィールド魔法、混沌空間の効果発動!!？私はカオスカウンターを４つ取り除き、除外からヴェルズケルキオンを特殊召喚!!？」

混沌空間
カオスカウンター５→１

〈ヴェルズケルキオン〉☆４　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ１６００

「さらにヴェルズケルキオンの効果、私は墓地のヴェルズババムートを除外してヴェルズヘリオロープを手札に加える!!？さらに混沌空間の効果でモンスターが表側表示で除外されたからカオスカウンターを１つ置く!!？」

混沌空間
カオスカウンター１→２

「私はヴェルズケルキオンの効果で増えた召喚権でヴェルズヘリオロープを召喚!!？」

〈ヴェルズヘリオロープ〉☆４　岩石族　闇属性
ＡＴＫ１９５０

「レベル４モンスターが３体……来るか？」
「私は３体のレベル４モンスター、ヴェルズケルキオン、ヴェルズヘリオロープ、ヴェルズサンダーバードでオーバーレイ!!？３体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!？」

ケルキオン、ヘリオロープ、サンダーバードが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、再び現れるのは圧倒的な存在感を放つ漆黒の三つ首龍。
「再臨せよ……闇に堕ちし最凶の龍……ヴェルズウロボロス‼?」

〈ヴェルズウロボロス〉★4　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２７５０

「ヴェルズウロボロスの効果発動、トリニティカース‼?オーバーレイユニットを1つ使い、1ターンに1度、3つの呪いからフィールドに表側表示で存在する限り1度ずつ、1つを相手にかけることが出来る‼?今回発動するのは、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して持ち主の手札に戻す効果‼?私が選択するのはアルカナナイトジョーカー‼?」
「させるか‼?チェーンしてリバースカードオープン‼?罠発動‼?スキルプリズナー‼?自分フィールド上のカード1枚を選択してこのターン、選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にする‼?選択するのは勿論、アルカナナイトジョーカーだ‼?」
ウロボロスの身体から闇を纏った吹雪が溢れだし、アルカナナイトジョーカーを襲うが、アルカナナイトジョーカーの鎧が輝くと、吹雪を弾くように見えない壁が出現し、吹雪からアルカナナイトジョーカーを守った。
これでスキルプリズナーは使わされたがこのターンにアルカナナイトジョーカーがモンスター効果を受けることはない。
ウロボロスの効果を使ってきたということは魔法や罠でアルカナナイトジョーカーを除去する方法がないということだろう。
しかし、それでも闇は楽しそうな笑みを崩さない。
「……ウロボロス」
『ウオウヨジ　ガラレワ　エカツ　ヲラカチ　ノラレワ　ニンブンゾ

ルオテツカワ』
「ありがとう……バトル!!?」
「何?」
「ヴェルズウロボロスでアルカナナイトジョーカーを攻撃!!?侵食のイモータルフリーズ!!?」
「攻撃力が低いヴェルズウロボロスで攻撃だって!?!?っ、迎え撃て、アルカナナイトジョーカー!!?ロイヤルストレートフラッシュ!!?」
ウロボロスの三つ首から放たれる闇のブレスがアルカナナイトジョーカーに向けて放たれるが、アルカナナイトジョーカーは構わずに大剣を構えて突撃し、闇のブレスごとヴェルズウロボロスを切り裂いた。

闇　ＬＰ６２００→５１５０

ウロボロスが破壊され、闇のライフが削られる。
攻撃力が足りていないウロボロスで攻撃してきたんだからてっきりコンバットトリックかと思ったが……ウロボロスがそのまま破壊されたのなら一体どんな狙いが……
「リバースカードオープン!!?速攻魔法、エクシーズダブルバック!!?」
「っ、それは……!!?」
「自分フィールド上のエクシーズモンスターが破壊されたターン、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合に発動できる。自分の墓地から、そのターンに破壊されたエクシーズモンスター1体と、そのモンスターの攻撃力以下のモンスター1体を選択して特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。私は墓地からヴェルズウロボロスとヴェルズオピオンを特殊召喚!!?」
〈ヴェルズウロボロス〉★４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２７５０

〈ヴェルズオピオン〉★４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２５５０

フィールドに再びウロボロスとオピオンが姿を現わす。
だけど、ウロボロスとオピオンではアルカナナイトジョーカーは突破することは出来ない。
闇の奴、一体何を狙ってるんだ？
「メインフェイズ２、手札を１枚捨てて除外されているヴェルズババムートを対象として装備魔法、ＤＤＲを発動!!?そのモンスターを攻撃表示で特殊召喚し、このカードを装備する!!?戻っておいで、ヴェルズババムート!!?」

〈ヴェルズバハムート〉★４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２３５０

ウロボロスとオピオンに寄り添うように、ババムートも姿を現わす。
ヴェルズ化した氷結界の三龍がフィールドに揃う。
だが、ヴェルズ化した三龍はエクシーズモンスター。
オーバーレイユニットがない三龍は効果を使うことも出来ないし、ウロボロスとオピオンにいたってはエクシーズダブルバックの効果でエンドフェイズには破壊されてしまう。
訝しげな表情を浮かべる俺を見て、闇はくすりと笑うと、三龍に向かって手をかざした。
「このカードは自分の手札・フィールドのモンスターのみを素材とした融合召喚及び自分フィールドの異なるモンスター３体を除外した場合にＥＸデッキから特殊召喚できる!!?私はヴェルズウロボロス、ヴェルズオピオン、ヴェルズババムートのカード名が異なるモンスター３体を除外して融合!!?」
「っ!!?除外することで特殊召喚できる融合モンスター!!?」

ウロボロス、オピオン、ババムートがフィールドに現れた渦に飛び込んでいく。
「この場に満ちる龍の邪念が最凶の龍の姿を為す!!?融合召喚!!?」
そして渦が爆けるとその中から現れたのは、全ての頭の角が３本になり、腰周りから新たな氷の翼を生やしたトリシューラの姿だった。
「魂をも凍てつかせる最凶の龍!!?氷獄龍トリシューラ!!?」

〈氷獄龍トリシューラ〉☆９　ドラゴン族　水属性
ＤＥＦ２０００

「融合モンスターのトリシューラ!??まだそんな隠し球がいたのか、俺もそんなの知らないぞ!??」
「ふふっ、驚いてくれた?……この子はオリジンの力でウロボロスとトリシューラを混ぜ合わせたら出来たカードなの。私の今のとっておき」
闇が後半は周りに聞こえないように小声になりながらも自信満々な笑みでそんなことを言う。
混ぜ合わせるってそんなデタラメなことまで出来るのかよ、オリジンの力は!??
「それじゃあ行くよ?氷獄龍トリシューラの効果発動、トリニティデリート!!?元々の種族がドラゴン族のモンスターのみを素材としてこのカードが特殊召喚に成功した場合、自分のデッキ・相手のデッキの一番上・相手のＥＸデッキの順に確認してそれぞれ１枚ずつ除外する!!?」
「なっ!??ここでデッキ破壊にシフトするのか!??」
「私はデッキからネクロフェイス、遊騎のデッキの１番上、遊騎のＥＸデッキからアルカナエクストラジョーカーを除外する!!?」
氷獄龍が新たな氷の翼を羽ばたかせ吹雪を引き起こし、俺のデッキとＥＸデッキを凍らせていく。
「さらに除外されたネクロフェイスの効果発動!!?このカードがゲームから除外された時、お互いはデッキの上からカードを５枚ゲームか

ら除外する‼?」
「くっ……デッキがヤバイな」
ネクロフェイスによってさらにデッキが削られる。
今回は闇の願いに応えるためのカードを足すだけ足したため、少しデッキの枚数が増えているが、それでもドローやイゾルデの効果を多用した結果、俺のデッキは既に43枚のカードを使用し、たったの4枚になってしまっている。
そしてカードが除外されたということはーーー
「混沌空間の効果でモンスターが表側表示で除外された数カオスカウンターを1つ置く‼?」
「くっ、俺はアルカナエクストラジョーカーを入れて5体」
「私もネクロフェイスを入れて4体が除外されたからカオスカウンターは9個置かれる‼?」

混沌空間
カオスカウンター2→11

混沌空間に大量のカオスカウンターが置かれる。
これだけカオスカウンターがあれば闇のデッキのモンスターならほとんど呼び出すことが出来るだろう。
そして俺のデッキにモンスターはほぼ残っていない。
このまま耐久戦をされたら……いや、そうじゃなくても俺のライフは風前の灯。
アルカナナイトジョーカーを突破されても、このまま耐久戦を仕掛けられても、俺は確実に負ける。
「まだ終わりじゃない。魔法カード、貪欲な壺‼?墓地に存在するヴェルズケルキオン、ヴェルズカストル、ヴェルズヘリオロープ、ヴェルズサンダーバード、ヴェルズサラマンドラをデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローする‼?」
「っ、ここで闇のデッキ枚数も増えるのか……」
「私はトリシューラの影霊衣を守備表示に変更」

トリシューラの影霊衣
ＡＴＫ２７００→ＤＥＦ２０００

「さあ、エンディングの時は近いよ。この状況を攻略できる？私はこれでターンエンド‼？」

遊騎　ＬＰ１３５０　手札０
ーーーーーー　ー
ーーーーー
??　○
??ーーーー
ーー△△▲　▽
闇　ＬＰ５１５０　手札２

ーーーーーーー

★

「次は融合のトリシューラ……遊花の言う通り少しずつ逆転してきてる結束も結束だけど、闇の奴も一体どれだけ奥の手を持ってるのよ」
「師匠……闇先パイ……」
激しいデュエルを続ける師匠と闇先パイを、私ははらはらした表情で見つめる。
逆境に立たされていたハズなのに少しずつ逆転していく師匠も凄いけど、その師匠を抑え込みどんどん追い詰めて言ってる闇先パイも凄い。
正直、私にはもうどちらが勝つかなんて予想出来ない。
「いや～流石闇さん、容赦ないね。その攻撃を凌ぎ切ってる遊騎さんも遊騎さんだけど。遊花ちゃんが落ち着かない表情をする気持ちも

分かるなぁ」
「あ、美傘さん」
　そんなどうにも落ち着かない私に、美傘さんが腕を組んでうんうんと頷きながら話かけてくる。
「……美傘さんは師匠と闇先パイ、どちらが勝つと思いますか？」
「うーん、どうだろうね？遊騎さんと闇さんって決闘者として真逆のタイプだからなー」
「真逆……ですか？」
「どういうこと？」
「遊騎さんは追い詰められて逆境に陥入れば陥る程強くなるタイプだけど、逆に闇さんは逆境に陥らないように自分が有利な状況を維持して逆境に陥る前にねじ伏せるタイプだからね」
　そう言われてこれまでの師匠と闇先パイのデュエルを思い出す。
　確かに、師匠は自分が追い詰められれば追い詰められる程その状況から一気に逆転しているし、闇先パイは自分に有利な状況を整えて相手の逆転の手を確実に潰しにいっている。
　そんな2人は確かに真逆の決闘者と言えるのかも知れない。
「だから、ちょっと予想が付きづらいんだよね。遊騎さんは追い詰められれば強くなり、闇さんは追い詰める程強くなる。そのまま当てはめると、2人のデュエルはお互いが激しくぶつかる程お互いに強くなっていくから」
「ちょっと無茶苦茶な気がするけど、美傘さんの言ってることもなんとなく分かるわ」
「それでも、どちらが勝つと思うか答えるなら、私は遊騎さんかな」
「師匠ですか？」
「うん。だって遊騎さん、今すっごく楽しそうだもん。そして遊騎さんが楽しそうな時って、絶対に何か驚くことを起こしてくれる時なんだよね。私達には予想がつかない何かを」
　美傘さんがそう答えて楽しそうな表情で師匠達のデュエルに視線を移す。
　そんな美傘さんの視線を追うように、私もデュエルに視線を移す。

視線の先に移る師匠の顔は、追い詰められているハズなのに凄く楽しそうで……美傘さんが言うように、何かを起こしてくれそうな気がした。

ーーーーーーー

☆

「俺のターン……」

俺はデッキの上のカードを握りながら目を瞑り、今回のデュエルで既に使用している４３枚のカードを思い返し、自身のデッキに残っているカードを把握する。

……俺のデッキに残っているカードの中で現状を覆せそうな可能性を秘めているカードはたった1枚。

しかも、そのカードもあくまで可能性があるだけ。

そのうえそのカードも現状は死に札で、次のドローから特定のカードを引き込んでいけなければ使えない。

そうなればアルカナナイトジョーカーがやられると、そのままゲームオーバーだ。

いや、アルカナナイトジョーカーがやられなくてもこのままだと混沌空間の効果で毎ターン壁になるようなモンスターを出されて攻めきれなくなるのが目に見えている。

状況は圧倒的な逆境で、本当は既に攻略法なんてものは残されていないのかも知れない。

だけど、だからこそーーー

「闇」

「何？」

「……やっぱり、デュエルは楽しいな」

「‼？……うん」

俺の言葉に、闇はとても柔らかい笑みを浮かべる。

一歩先の展開が全然見えず、圧倒的な逆境に立たされようと、この

気持ちだけは変わらない。
デュエルっていうのは、楽しいものなんだ。
決闘者が必死に考えて作った様々な可能性を秘めたデッキのカードで、例え逆境に立たされていても、次のドローによる可能性で運命が一気に変わるかも知れない。
そう考えると、身体が熱くなって、ワクワクする。
「状況は圧倒的に俺の方が不利。そのうえ攻略法なんてものはもう残ってないかも知れない。それでも、俺は諦めない……諦めきれない。こんなに楽しいデュエルを、最後まで楽しみたい」
「……ん」
「だからこそ……俺は最後まで戦い続ける。運命に、勝ってみせる」
「……うん。私に見せて、遊騎が運命に屈さないところを。私が大好きな、遊騎のデュエルを」
闇の言葉を聞き、握るカードに力を込める。
きっとここが運命の分かれ目、逆転するための最後のチャンス。
頼む、俺のデッキ……俺に力を貸してくれ。
俺とのデュエルを楽しみに待っていてくれた友人に……俺なんかを師匠と慕ってくれる愛弟子に、運命を超える力を見せてやりたいんだ。
だから、頼む……俺に、運命を乗り越える力を貸してくれ!!?
「ドロー!!?」
勢いよくカードを引き抜き、ゆっくりとそのカードを自分の目の前に持ってくる。
……まだ、望みはある。
「俺がドローしたのは貪欲な壺!!?攻撃力１５００以下のモンスターではないから破壊されない!!?」
「っ、ここでまたドローカード……」
「魔法カード、貪欲な壺!!?墓地に存在するＨ－Ｃ　エクスカリバーをＥＸデッキに、Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト、Ｈ・Ｃ　ダブルランス、タスケナイト、ガガガガードナーをデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする!!?」

ドクン
カードをドローした瞬間、心臓が強く波打った気がした。
俺はその感覚に促されるまま、ドローしたカードに目をやる。
「‼?お前は……そうか、来てくれたんだな」
「‼?遊騎の雰囲気が……変わった?なんか、懐かしい感じがする……もしかして‼?」
ドローしたカードを見て、柔らかい笑みを浮かべる俺を見て、闇が目を見開く。
……俺は、お前と一緒に戦うことから1度逃げた。
運命に、抗うことが出来なかった。
そんな、俺ともう1度戦ってくれるのか?
俺のそんな気持ちに応えるように、カードが微かに震えた気がした。
……ありがとう。
お前に今度こそ誓おう、俺はもう絶対に運命から逃げないと。
今度こそ、最後まで運命と戦い、そして勝ってみせると。
「だから……お前の力をもう1度貸してくれ‼?俺がドローしたのは、融合解除と……ＤＥＳＴＥＮＹ（デステニー）ＨＥＲＯＢｌｏｏｄ（ブルーディー）‼?」
「‼?やっぱり……ドロー出来たんだね、遊騎」
「行くぞ‼?速攻魔法、融合解除‼?フィールドの融合モンスター1体を対象としてその融合モンスターを持ち主のＥＸデッキに戻し、その後、ＥＸデッキに戻したそのモンスターの融合召喚に使用した融合素材モンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、その一組を自分フィールドに特殊召喚できる‼?俺はアルカナナイトジョーカーの融合を解除‼?墓地から蘇れ、絵札の三銃士‼?来い、クィーンズナイト‼?キングスナイト‼?ジャックスナイト‼?」
〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００
〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性

ＤＥＦ１４００

〈ジャックスナイト〉☆５　戦士族　光属性

ＤＥＦ１０００

アルカナナイトジョーカーの身体が光に変わると、その光は３つに分かれ、絵札の三銃士がフィールドに並び立つ。

「そして、自分フィールドのモンスター３体、クィーンズナイト、キングスナイト、ジャックスナイトをリリースし、手札からこのモンスターを特殊召喚する‼？」

絵札の三銃士が粒子に変わり、空に集まっていく。

集まった粒子が弾けると、空から舞い降りたのは龍の鎧を見に纏った漆黒の戦士。

その戦士はフィールドに降り立つと、力強い咆哮を上げた。

「呪われた運命に抗う孤独の戦士‼？ＤＩＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄ‼？」

〈ＤＩＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄ〉☆８　戦士族　闇属性

ＡＴＫ１９００

「ＤＩＨＥＲＯ……遊騎の、ヒーロー‼？」

現れたＢｌｏｏｄを見て、闇が嬉しそうな表情を浮かべる。

「まずはＤＩＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄの永続効果、シールデステニー‼？このカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手フィールドの表側表示モンスターの効果は無効化される。そしてＤＩＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄの効果発動‼？カースアブソーブ‼？１ターンに１度、相手フィールドのモンスター１体を対象として、その相手モンスターを装備カード扱いとして１枚だけこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの元々の攻撃力の半分だけアップする‼？対象は氷獄龍トリシューラ‼？」

Ｂｌｏｏｄが氷獄龍に手を伸ばすと、Ｂｌｏｏｄの背中に付い

ている龍の爪が氷獄龍に放たれ、その爪に貫かれた氷獄龍はガラスのように砕け、粒子に変わるとＢｌｏｏｏｍＤに吸い込まれていった。

ＤｍＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏｍ
ＡＴＫ１９００→３２５０

「っ、相変わらず強力な効果……」
「バトル‼？ＤｍＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏｍでトリシューラの影霊衣を攻撃‼？デソレイションフィアー‼？」
「迎え撃って、トリシューラの影霊衣‼？陰影のアイシクルアパリション‼？」
　トリシューラの影霊衣が地面に向けて氷の剣を突き刺すと、地面がひび割れ、地面から大量の氷柱が出現する。
　しかし、ＢｌｏｏｏｍＤは地面を強く蹴って跳び上がり、その氷柱を躱すと、空中で一回転して足に闇を纏い、トリシューラの影霊衣に向けて跳び蹴りの体勢に移る。
　それを見てトリシューラの影霊衣も地面に勢いよく跳び上がると、足元に氷柱を出現させ、ＢｌｏｏｏｍＤに向けて跳び蹴りを放つ。
　ＢｌｏｏｏｍＤとトリシューラの影霊衣の足がぶつかり合い、辺りを吹き飛ばすような衝撃波が生まれる。
　最初は拮抗していたが、ＢｌｏｏｏｍＤが力を込めると足に纏っていた闇がトリシューラの影霊衣の氷柱を呑み込んでいき、ＢｌｏｏｏｍＤはそのままの勢いでトリシューラの影霊衣の身体を貫き、トリシューラの影霊衣は爆散した。
「っ……トリシューラの影霊衣まで……」
「俺はこのままターンエンドだ‼？」
「っ、ウイルスの効果、２ターン目終了」

遊騎　ＬＰ１３５０　手札０
ーーー△ーーー　ー
ーーー○ーーー

ー　　ー
ーーーーー
ーー△△▲　　▽
闇　ＬＰ５１５０　手札２

「私のターン、ドロー!!?フィールド魔法、混沌空間の効果発動!!?私はカオスカウンターを４つ取り除き、除外からヴェルズサンダーバードを特殊召喚!!?」

混沌空間
カオスカウンター１１→７

〈ヴェルズサンダーバード〉☆４　雷族　闇属性
ＤＥＦ１０５０

「さらにモンスターをセットしてターンエンド!!?」

遊騎　ＬＰ１３５０　手札０
ーー△ーー　　ー
ーー○ーー
ー　　ー
ー▲??ーー
ーー△△▲　　▽
闇　ＬＰ５１５０　手札２

「俺のターン、ドロー!!?俺が引いたのはＨ・Ｃ　強襲のハルベルト!!?攻撃力１５００以下のモンスターじゃないから破壊されない!!?」
「っ、ここでＨ・Ｃ　強襲のハルベルト……」
「俺はＨ・Ｃ　強襲のハルベルトを召喚!!?」

〈Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト〉☆４　戦士族　地属性

ＡＴＫ１８００

「バトル‼?・Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトでヴェルズサンダーバードを攻撃‼?・ライトニングハルバード‼?」

ハルベルドが雷を纏ったハルバードでサンダーバードを貫き、サンダーバードは爆散する。

「くっ……」

闇　　ＬＰ５１５０→４４００

「Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトの効果発動‼?・デッキからＨ・Ｃ　ダブルランスを手札に加える‼?・そしてＤｒＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｒｄでセットモンスターを攻撃‼?・デソレイションフィアー‼?」

「セットモンスターはヴェルズヘリオロープ‼?」

〈ヴェルズヘリオロープ〉☆４　岩石族　闇属性

ＤＥＦ６５０

Ｂｌｏｏｒｄの跳び蹴りによりヘリオロープは砕け散る。

あと、もう少しだ。

「俺はこれでターンエンドだ‼?」

「ウイルスの効果、３ターン目終了。これでウィルスの効果も無くなる」

遊騎　ＬＰ１３５０　手札１

ｒｒ△ｒｒ　　ｒ

ｒｒ○○ｒ

ｒ　　ｒ

ｒｒｒｒｒ

ｒｒ△△▲　　▽

闇　ＬＰ４４００　手札２

「私のターン、ドロー!!?……フィールド魔法、混沌空間の効果発動!!?私はカオスカウンターを４つ取り除き、除外からヴェルズヘリオロープを特殊召喚!!?」

混沌空間
カオスカウンター７→３

〈ヴェルズヘリオロープ〉☆４　岩石族　闇属性
ＤＥＦ６５０

「さらにモンスターをセット。カードを１枚伏せてターンエンド」

遊騎　ＬＰ１３５０　手札１
ー△ー　ー
ー○○ー
ー　ー
ー　ー
ー????ー
ー▲△△▲　▽
闇　ＬＰ４４００　手札１

「俺のターン、ドロー!!?俺はＨ・Ｃ　ダブルランスを召喚!!?」

〈Ｈ・Ｃ　ダブルランス〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１７００

「バトル!!?」
「危なかった……バトルフェイズ開始時、リバースカードオープン!!?罠発動!!?侵略の侵喰崩壊!!?自分フィールド上に表側表示で存在するヴェルズと名のついたモンスター１体を選択してゲームから除外し、相手フィールド上のカード２枚を選択して持ち主の手札に

戻す!!?私はヴェルズヘリオトロープを除外してＤーＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｍ－ＤとＨ・Ｃ　強襲のハルベルトを手札に戻す!!?これでーーー」
「悪いな、闇」
「ーーーえっ？」
「残念だが、それは一手遅いぜ!!?ライフポイントを半分払い、手札からカウンター罠発動!!?レッドリブート!!?」
「っ!!?そのカードは……!!?」

遊騎　ＬＰ１３５０→６７５

「相手が罠カードを発動した時に発動できる!!?その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする!!?その後相手はデッキから罠カード１枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンにセットできる。最もこのカード発動後、ターン終了時まで罠カードは発動できないがな」
「っ……侵略の侵喰崩壊はセットされる。デッキからセットするカードはない」
「バトル!!?Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトでヴェルズヘリオロープを攻撃!!?ライトニングハルバード!!?」
「っ……」
ハルベルドが雷を纏ったハルバードでヘリオロープを貫く。

闇　ＬＰ４４００→３２５０

「Ｈ・Ｃ　ダブルランスでセットモンスターを攻撃!!?ツヴァイシュティヒ!!?」
「セットモンスターはヴェルズサラマンドラ!!?」
〈ヴェルズサラマンドラ〉☆４　恐竜族　闇属性
ＤＥＦ９５０

ダブルランスがサラマンドラに突撃し、２つの槍でその身体を貫き、サラマンドラが消滅する。
それを見て、闇はどこか満足したような表情で目を閉じる。
「これで終わりだ‼？ＤーＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏ－Ｄでダイレクトアタック‼？デソレイションフィアー‼？」
Ｂｌｏｏｏ－Ｄは足に闇を纏い、地面を強く蹴って跳び上がり、空中で一回転して闇に向けて跳び蹴りの体勢に移る。
闇は閉じていた目を開くと、迫るＢｌｏｏｏ－Ｄの攻撃になど目もくれず、俺に向かって笑みを浮かべた。
「……ありがとう、遊騎。心が踊る、すっごく楽しいデュエルだった」
「……ああ、俺もだよ」
俺の言葉に満足したように、闇は満面の笑みを浮かべながらＢｌｏｏｏ－Ｄの攻撃をその身に受けた。

闇　ＬＰ３２５０→０

ーーーーーーーー

立体映像が消え、静まり返った店内で俺達は言葉を交わす。
「……俺の勝ちだな」
「ん、私の負け。やっぱり、負けるのはちょっと悔しい」
「ちょっとなのか？」
「ん、ちょっとだけ。だって、そんなことよりも嬉しいことがあったから。遊騎と、全力のデュエルができたから。だから、悔しいなんて気持ちより、嬉しい気持ちの方が大きい」
「うおっ‼？」
そういって、闇は満面の笑みを浮かべながら再開した時のように勢いよく抱きつき、俺の身体に顔を埋める。
その光景に騒然としはじめる店内で、俺は呆れた表情を浮かべながら闇を見る。

「……お前なぁ、少しは自分の立場を考えろよ？」
「むふー……スキャンダル？遊騎となら、いいよ？」
「……勘弁してくれ」
「ふふっ……もう、大丈夫？」
「……ああ。お前達に力を貰ったからな」
　他の人には見えないように、埋めた顔を少しだけあげてどこか心配そうな表情を浮かべる闇に、俺は苦笑しながら答える。
　俺の答えに満足したのか、闇は身体を離すとこちらに背を向けながら口を開く。
「次のデュエルも、目一杯楽しんでね。きっと、遊花もそれを望んでる。遊花の師匠として、全力でぶつかってあげて」
「……ああ、勿論だ。遊花の師匠として、そしてこんな俺を支えてくれている闇達の前で、不甲斐無いデュエルは見せないさ。楽しみにしててくれ、俺と遊花のデュエルを」
「……ん」
　そう呟くと、闇はこちらを振り向かずに観戦場所に戻っていった。
　そして闇と入れ替わるように俺の方に向かってくる1人の少女。
　その表情はどこか嬉しそうで、俺が初めて出会った時の常に辛そうにしていた面影は、もうどこにもない。
「師匠」
「それじゃあ、決勝戦を始めよう。デュエルアカデミア所属　栗原遊花ＶＳ無所属、結束　遊騎……師弟対決と行くか」
「はい‼？」
　俺の言葉に遊花が満面の笑みで答える。
　大会のフィナーレが、近づこうとしていた。

第４９話　弟子ＶＳ師・変わるものと変わらないもの

★

「……俺の勝ちだな」
「ん、私の負け。やっぱり、負けるのはちょっと悔しい」
「……俺の勝ちだな」
「ん、私の負け。やっぱり、負けるのはちょっと悔しい」
「ちょっとなのか？」
「ん、ちょっとだけ。だって、そんなことよりも嬉しいことがあったから。遊騎と、全力のデュエルができたから。だから、悔しいなんて気持ちより、嬉しい気持ちの方が大きい」
「うおっ⁉？」
　そういって、闇先パイが満面の笑みを浮かべながら勢いよく師匠に抱きついて、師匠の身体に顔を埋める。
　その光景を見て騒然としている店内で、私は苦笑いを浮かべ、師匠に甘えている闇先パイをちょっとだけ羨ましく思いながらも真剣な表情で師匠を見つめる。
「遂にここまで来たわね。結局、遊花の言った通り、遊花の相手は結束か。自分の師匠が相手だけど、やれるわよね、遊花」
「うん、勿論だよ」
　少し心配そうに私に声をかけてくる桜ちゃんに、私は笑顔を浮かべながらしっかりとした声で答える。
　……そう、遂にここまで来た。
　師匠が私のために開いてくれた大会の決勝戦で、私と師匠のデュエルが始まる。
　正直、私なんかが決勝戦までこれるなんて思ってもいなかった。
　大会で対戦した決闘者の人達は全員プロ決闘者の人達で、どのデュエルも、一手でも間違えてしまえばその時点で負けていたようなデュエルばかりで……だけど……それでも……
「私は、ここまできたんだもん」

例え、薄氷の勝利だったとしても、今、この瞬間に決勝戦まで勝ち上がってきたのは他の誰でもなく、私で。
そんな私の成長を、私が1番見てほしい人に直接ぶつかって見てもらえる。
ならば、臆する必要も、遠慮をする必要もない。
私の憧れの人に、今の私の全力をぶつけることができるんだから。
「ふふっ、遊花ちゃん、いい表情してるね。そんな遊花ちゃんに美傘さんからプレゼントだよ」
「美傘さん、このカードは……？」
先程まで一緒に師匠達のデュエルを見ていた美傘さんが柔らかい笑顔を浮かべながら私に2枚のカードを手渡す。
首を傾げる私に美傘さんはウィンクをしながら口を開く。
「勿論、約束してた遊花ちゃんにも使えるペンデュラムカードだよ」
「これが⁉？というより、もう見つけてくれたんですか⁉？」
「にひひ、そう驚いてくれると頑張った甲斐があるよ。準決勝には間に合わなかったし、遊花ちゃん、遊騎さんと闇さんの試合に集中してたからギリギリになっちゃったけど、使ってくれたら嬉しいな」
「はい‼？勿論です‼？ありがとうございます、美傘さん‼？」
「にょわ⁉？ゆ、遊花ちゃん⁉？な、なんか恥ずかしいからいきなり抱き着くのは止めて欲しいんだけど⁉？」
「あ……ご、ごめんなさい‼？」
嬉しくなって、思わず美傘さんに抱き着くと、美傘さんは顔を真っ赤にして声をあげたので、慌てて美傘さんから離れる。
私が離れたのを見て、美傘さんは胸を押さえながら照れたように笑う。
「うぅ～遊花ちゃんは感情表現がストレートだからこっちが驚いちゃうよ。まあ、それだけ喜んでくれたことだし、良しとしとくかな？」
「ご、ごめんなさい‼？」
「にひひ、いいよいいよ。遊騎さんとのデュエル、楽しんできてね」
「‼？はい‼？」
美傘さんに貰ったカードをそのままデッキに加え、師匠が待ってい

る場所に向かう。
そんな私入れ替わるように闇先パイがこちらに向かってやってくる。
闇先パイはチラッとこちらを見ると、柔らかい笑顔を浮かべる。
その笑顔は、私に大丈夫だと言ってくれているようで、私も笑顔で頷いて、闇先パイとすれ違う。
そして、そんな私を、柔らかい笑みを浮かべて待ってくれている1人の男性。
その笑顔は、私が初めて出会った時に見たものと同じで、私も思わず嬉しくなって笑顔を浮かべて、声をかける。
「師匠」
遊騎さん。
私に閉ざされていた世界から踏み出すきっかけをくれた、私の……大切な師匠。
「それじゃあ、決勝戦を始めよう。デュエルアカデミア所属　栗原遊花ＶＳ無所属、結束　遊騎……師弟対決と行くか」
「はい‼?」
師匠の言葉に私は満面の笑みで答える。
このデュエルは、とても大切なデュエル。
私が師匠と出会って、あの頃と比べてどれだけ前に進めたか、そして……師匠がどれだけ私にとって大切な師匠なのかを分かって貰うための、とても大切なデュエル。
だから……このデュエルは、私がこの1ヶ月で身につけてきたものを全てを込める‼?
「すー……はー……」
私は深く深呼吸をすると、デュエルディスクを起動する。
そんな私を見て、師匠は楽しそうに笑うと、同じようにデュエルディスクを起動して構えた。
「それじゃあ、これより大会名『Ｂｅｓｃｈｅｉｄｅｎ』の決勝戦を執り行う‼?デュエルアカデミア所属　栗原　遊花ＶＳ無所属、結束　遊騎‼?デュエル開始だ‼?全力でかかってこい、遊花‼?」

「はい!!?」
『決闘!!?』

遊花　ＬＰ８０００
遊騎　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は私です!!?私はクリバンデッドを召喚します!!?」

〈クリバンデッド〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

私の前に現れたのは盗賊のような姿をした黒い毛玉のモンスター。
クリバンデッドは凄く嬉しそうにぴょんぴょんと跳ねながら手を振っている。
うん……あなたも、師匠とのデュエルだから張り切ってるんだよね。
先攻だから攻撃はさせてあげられないけど、今回もよろしくね。
「私はカードを２枚伏せて、エンドフェイズにクリバンデッドの効果発動!!?このカードをリリースしてデッキの上から５枚めくり、その中から魔法・罠カード１枚を手札に加えて残りを墓地におきます!!?」
ぴょんぴょん跳ねていたクリバンデッドの姿が消える。
その代わりに私はデッキの上から５枚のカードをめくって中から１枚のカードを手札に加えた。
「私は増殖の魔法カードを手札に加えてターンエンドです!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札３
ーー▲▲ー　ー
ーーーーー

ー　　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
遊騎　ＬＰ８０００　手札５
「俺のターン、ドロー!!?……ふっ、面白い。俺はＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）サウザンドブレードを召喚!!?」
〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００
師匠の前に現れたのは頭巾を被り、背中に何本もの刀を背負った戦士のモンスター。
確かあのモンスターは……
「Ｈ・Ｃ　サウザンドブレードの効果発動!!?１ターンに１度手札にあるヒロイックカードを捨ててデッキからヒロイックモンスターを特殊召喚する!!?俺は手札にあるＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）ダブルランスを捨てて、来い、Ｈ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）強襲のハルベルト!!?」
〈Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１８００
次に師匠の前に現れたのはハルバードを持った紫の鎧を纏った戦士。
ハルベルトは戦闘ダメージを与えるとヒロイックカードをサーチする効果も持ってるんだよね。
「この効果を使ったＨ・Ｃ　サウザンドブレードは守備表示になる」
Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード
ＡＴＫ１３００→ＤＥＦ１１００

「バトル!!?Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトでダイレクトアタック!!?ライトニングハルバード!!?」
ハルベルドが雷を纏ったハルバードで私を貫こうと向かってくる。
それを見て、私は思わず笑顔を浮かべながら１枚の手札を掲げる。
「攻撃宣言時、手札から虹クリボーの効果発動!!?このカードをそのモンスターに装備し、そのモンスターは攻撃することが出来ません!!?レインボーガード!!?」
「ふっ……そんな気はしていたさ」
私の手札から虹色の角を持つ球体が現れてハルベルドの動きを止め、それを見て師匠が面白そうに笑う。
「なら、メインフェイズ２!!?斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
「リンク召喚……あのモンスターですね」
師匠がそういって手を前に突き出すと、師匠の前に巨大なサーキットが現れる。
戦士族が２体ということは、師匠のデッキで出てくるのはあのリンクモンスターしかいない。
「召喚条件は戦士族モンスター２体!!?俺はＨ・Ｃ　強襲のハルベルトとＨ・Ｃ　サウザンドブレードの２体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?追想に生きる王女!!?リンク２!!?聖騎士の追想　イゾルデ!!?」
〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?
ハルベルトとサウザンドブレードの２体がサーキットの中に消えると代わりに現れたのは金髪と白髪の２人の女性。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?リンクレカレクション!!?リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター１体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモン

スター効果も発動できない。俺はデッキからキングスナイトを手札に加える!!?」
「キングスナイト……」
「これだけじゃ終わらない!!?聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動!!?メモリーズギフト!!?デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター1体をデッキから特殊召喚する!!?俺はデッキから妖刀竹光、神剣―フェニックスブレード、折れ竹光、閃光の双剣―トライスを墓地に送り、デッキからクィーンズナイトを守備表示で特殊召喚!!?」

〈クィーンズナイト〉☆4　戦士族　光属性
DEF1600

師匠の前に現れたのは、師匠の代名詞である絵札の三銃士の内の1人。
赤い鎧を身に纏った女性の騎士、クィーンズナイト。
おまけに先程のサーチ効果で師匠の手札にはキングスナイトも加わっている。
次のターンにイゾルデとクィーンズナイトを倒せなければ絵札の三銃士はフィールドに集う。
「更に墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える。俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える。カードを2枚セットしてターンエンドだ」

遊花　LP8000　手札2
ー▲▲ー　ー
ーーーーー
ー　☆
ーーー□ー
ー▲▲ー　ー

遊騎　ＬＰ８０００　手札４

「私のターン、ドロー‼?」

ドローカードを確認し、私は笑顔を浮かべたままそのカードを使用する。

「私は手札からジャンクリボーを捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動‼?デッキからレベル１モンスター１体を特殊召喚する‼?お願い、ミスティックパイパー‼?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性

ＤＥＦ０

現れたのはフルートのようなものを弾いている男の人。

現れたミスティックパイパーは楽しそうにフルートのようなもの演奏すると、私を見てサムズアップをする。

そんなミスティックパイパーに私も笑顔を浮かべてサムズアップを返す。

「……ぷっ、はははは‼?」

「ふふっ、あはは‼?」

そんな光景に耐えられなくなったのか、師匠が楽しそうに笑い声をあげる。

不思議そうな表情を浮かべる観戦者達を他所に、私も楽しそうに笑う師匠につられ、思わず笑ってしまう。

ひとしきり笑った後、師匠が柔らかな表情で私に声をかける。

「まさかこんなことになるなんてな……あの時と同じだな」

「……はい、あの時と同じです」

師匠の言葉に、私は懐かしむように目を閉じる。

そう、ここまでの展開は、私と師匠が初めてデュエルをした時と同じ展開だ。

攻撃したモンスターも、使用したカードも、伏せカードや手札の枚数すら、あの日、夕暮れ時の公園で師匠とデュエルをした時と全く同

じ。
他の人には分からない。
私と師匠だけが共有できる、大切な思い出。
「……これ、聞いておきたかったんだけどな」
「……はい」
「遊花は……俺の弟子になって、変わることができたか？」
それは、師匠と初めてデュエルした時に、私が口にした願い。
デュエルをするのが怖くて、身体が震えて逃げ出したかったけど、師匠のような決闘者になりたくて、勇気を出してデュエルディスクを起動した、あの日の私の願い。
それを口にする師匠の顔はどこか自信がなさそうで……だからこそ、私ははっきりと師匠に伝える。
「勿論です‼？閉ざされていた世界でただ日々を過ごすことしかできなかった私が変われたのは、新しい一歩を踏み出すきっかけをくれたのは、間違いなく師匠なんです」
あの日、師匠に出会えなければ、私は永遠に同じような日々を繰り返すことしかできなかっただろう。
何をするでもなく、中途半端なままに日々を過ごして、前に進むことも、戻ることもせず、生きているのか、死んでいるのかすら分からない、ただそこに存在するだけの、抜け殻のような日々を繰り返すだけの存在になっていた。
そんな私に前に進む勇気をくれたのは、間違いなく師匠なんだ。
「だから、私はこのデュエルで証明します。私は師匠と出会えてよかったって……師匠に出会えたから、今の私はここにいるんだってことを」
「遊花……」
驚いた表情を浮かべる師匠を見て、私は笑顔を浮かべながら改めてフィールドにいるミスティックパイパーに目を向ける。
そんな私を見て、ミスティックパイパーは分かっているというようにサムズアップをしながらしっかりと頷いた。
うん……お願い、私の思いを届けるために、私に希望を繋いで‼

？

「ミスティックパイパーの効果発動‼？このカードをリリースして自分のデッキからカードを1枚ドローし、この効果でドローしたカードをお互いに確認してレベル1モンスターだった場合、自分はカードをもう1枚ドローします‼？」

私は勢いよくカードをドローし、そのカードを見えるように掲げた。

「私が引いたのはクリボー‼？レベル1モンスターなのでもう1枚ドローです‼？」

「‼？ここで前とは違うカードを引いてくるか。しかも、クリボーってことは……」

「私はクリボーを召喚‼？」

〈クリボー〉☆1　悪魔族　闇属性

ＡＴＫ３００

私の前に現れるのは茶色の毛玉のようなモンスター。

「速攻魔法‼？増殖‼？自分フィールド上に表側表示で存在するクリボー1体をリリースして自分フィールド上にクリボートークンを可能な限り守備表示で特殊召喚します‼？」

「まあ、そうなるよな」

〈クリボートークン〉☆1　悪魔族　闇属性

ＤＥＦ２００

私のフィールドにいたクリボーが5体に増える。

そしてここからが本番だ。

「導いて‼？希望に繋がるサーキット‼？」

私の前に大きなサーキットが現れる。

さぁ、行くよ‼？

「召喚条件はレベル1モンスター1体。私はクリボートークンをリン

クマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚!!?希望の守り手!!?リンク1!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

私の前に元気一杯に飛び出してくるのは青い球体のモンスター。
うん、今回もお願いね、リンクリボー。
「さらに導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「遊花お得意の増殖からの連続リンク召喚か」
「召喚条件はモンスター2体。私はクリボートークン2体でリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚!!?リンク2!!?プロキシードラゴン!!?」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

次に現れたのは白い身体をした機械の竜。
まだまだ、終わらない!!?
「どんどん行きます!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?召喚条件は通常モンスター1体!!?私はクリボートークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク1!!?リンクスパイダー!!?」

〈リンクスパイダー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１０００　←

私の前に機械の蜘蛛が現れる。
「そして導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「4回目のリンク召喚……大型がくるな」
このターン4度目のサーキット。

「召喚条件は効果モンスター3体以上!!?・私はリンクスパイダー、リンクリボー、プロキシードラゴンを　2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?・サーキットコンバイン!!?・」
　今回は待たせなかったよ。
　師匠に今の私を見てもらうために、あなたの力を貸して!!?・
「閉ざされた運命を撃ち抜く信念の弾丸!!?・リンク4!!?・ヴァレルロードドラゴン!!?・」
　私の呼び声に応えるように龍の咆哮がフィールドに轟いた。

〈ヴァレルロードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
　ＡＴＫ３０００　↙?↑↑↘?

「ヴァレルロードドラゴンか……厄介なモンスターが出てきたな」
「これだけじゃ終わりません!!?・ここまでは師匠と出会った頃の私の力。ここからは、師匠に出会ってからの私の新しい力も見せていきます!!?・魔法カード、儀式の下準備!!?・デッキから儀式魔法カード1枚を選び、さらにその儀式魔法カードにカード名が記された儀式モンスター1体を自分のデッキ・墓地から選んで、そのカード2枚を手札に加えます!!?・私が加えるのはイリュージョンの儀式とサクリファイス!!?・」
「サクリファイス……ってことは次は……」
「私は儀式魔法、イリュージョンの儀式を発動!!?・自分の手札・フィールドから、レベルの合計が1以上になるようにモンスターをリリースし、手札からサクリファイスを儀式召喚します!!?・私は墓地のクリボールの効果で儀式召喚を行う場合、必要なレベル分のモンスターの内の1体として、墓地のこのカードを除外できる!!?・」
「!!?・クリバンデッドの時に落ちていたか!!?・」
　私の前に現れるのは金色の目の形をした壺が現れ、その中にクリボールが吸い込まれていく。
　しばらくすると壺が割れ、中から妖しい邪眼を持つモンスターが現れた。

「儀式召喚!!?相手を捕える妖しい邪眼!!?サクリファイス!!?」

〈サクリファイス〉☆1　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０

「儀式召喚……闇から学んだ召喚方法の1つか」
「サクリファイスの効果発動!!?アブソープション!!?1ターンに1度、相手フィールドのモンスター1体を対象にそのモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力・守備力は、このカードの効果で装備したモンスターの数値分アップし、このカードが戦闘で破壊される場合、代わりに装備したそのモンスターを破壊できます!!?対象は、クィーンズナイト!!?吸い込んじゃって、サクリファイス!!?」
「っ、クィーンズナイト!!?」
サクリファイスのお腹にある穴が開き、クィーンズナイトが吸い込まれる。
しばらくすると背中についている羽のような部分からクィーンズナイトの鎧が浮き上がった。

サクリファイス
ＡＴＫ０→１５００

「サクリファイスはこのカードの効果でモンスターを装備したこのカードの戦闘で自分が戦闘ダメージを受けた時は、相手も同じ数値分の効果ダメージを受けるようになります。さらに墓地に存在するリンクリボーの効果発動!!?スケープリンク!!?このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル1モンスター1体をリリースしてこのカードを墓地から特殊召喚します!!?私はクリボートークンをリリース!!?戻っておいで、リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性

ＡＴＫ３００　←

クリボートークンの姿が消え、代わりにリンクリボーが跳ねるように私の前に現れる。

「バトル‼?ヴァレルロードドラゴンで聖騎士の追想　イゾルデを攻撃‼?銃声のイジェクトフレア‼?」

ヴァレルロードがイゾルデに向かって粒子砲を放つ。

「この瞬間、ヴァレルロードドラゴンの効果発動‼?エロージョンエイミング‼?このカードが相手モンスターに攻撃するダメージステップ開始時に、その相手モンスターをこのカードのリンク先に置いてコントロールを得て、そのモンスターは次のターンのエンドフェイズに墓地へ送られます‼?」

「くっ、イゾルデを奪われたか……」

私が効果を宣言すると、ヴァレルロードの粒子砲が威力を増し、イゾルデを包み込みこちらのバトルゾーンに移動させた。

「これで師匠のバトルゾーンはがら空きです‼?まずはリンクリボーでダイレクトアタック‼?リンクラッシュ‼?」

私の声に、リンクリボーは勢いよく師匠に突撃する。

「っ、これぐらいなら平気だな」

遊騎　ＬＰ８０００→７７００

「続けて、聖騎士の追想　イゾルデでダイレクトアタック‼?ツインアタック‼?」

「くっ‼?」

遊騎　ＬＰ７７００→６１００

リンクリボーに続くようにイゾルデ達が師匠に向かって跳び蹴りを放つ。

まだサクリファイスの攻撃が残っているけど、ここで攻撃するとダ

メージが入ったことで師匠の墓地からサウザンドブレードが出てきてフィールドに残ってしまう。
　ここは攻撃しない方が賢明だよね。
「メインフェイズ2、私も使わせて貰います!!?聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?メモリーズギフト!!?デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター1体をデッキから特殊召喚します!!?」
「何!?」
「私はデッキから団結の力を墓地に送ってエキストラケアトップスを特殊召喚!!?」

〈エキストラケアトップス〉☆1　戦士族　地属性
ＤＥＦ１００

　現れたのはダンボールで出来たトリケラトプスの着ぐるみを着たモンスター。
「そんなモンスターが入ってたのか……」
「えへへ、まだ終わりじゃありませんよ?私はレベル1、サクリファイスとエキストラケアトップスでオーバーレイ!!?。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
「!!?今度はエクシーズ召喚か!!?」
　サクリファイスとケアトップスが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
　そして渦が爆けるとそこには白い馬に乗る小さな首無しの騎士が現れた。
「闇夜に紛れし哀しき妖精!!?その刃で疑惑を切り裂け!!?ランク1!!?ゴーストリックデュラハン!!?」

〈ゴーストリックデュラハン〉★1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

「ゴーストリックデュラハン……これはなかなか面倒な布陣だな」
現れたデュラハンを見て、師匠は苦い表情を浮かべる。
師匠のデッキはモンスターの戦闘に特化している。
だけど、ヴァレルロードやデュラハンはフリーチェーンでモンスターの攻撃力を下げることができるし、リンクリボーもいるから戦闘面での防御に関してはこれでかなり有利になったハズ。
勿論、だからといって油断なんてしない。
私の師匠は、そんな逆境をあっさりと覆してしまう人なのだから。
「私はこれでターンエンドです!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札０
ーー▲▲ー　ー
☆ー□ー☆
☆　ー
ーーーーー
ーー▲▲ー　ー
遊騎　ＬＰ６１００　手札４

「俺のターン、ドロー!!?よし、まずは装備魔法、妖刀竹光を聖騎士の追想　イゾルデに装備!!?」
「むっ、竹光カードを引かれちゃいましたか」
イゾルデの手元に禍々しい竹刀が現れる。
「さらにリバースカードオープン!!?魔法カード、黄金色の竹光を発動!!?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを２枚ドローする!!?おっ」
ドローしたカードを見て、師匠の表情が変わる。
……やっぱり引かれたみたい、この状況を突破するカードを。
「遊花が新しい力を見せてくれたんなら、俺もそれに応えないとな。俺はスケール２の魔装戦士ドラゴディウスとスケール７の魔装戦士ドラゴノックスでペンデュラムスケールをセッティング!!?」
「っ、ここでペンデュラムモンスターですか」

師匠を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中に2体の戦士の姿が浮かびあがり、下に2と7の数字が現れる。
異世界での出会いを通して師匠が学んだ師匠の新しい力。
今日は本当にペンデュラム召喚とは縁のある日だ。
「これにより俺は3から6までのモンスターを同時に召喚可能!!?魂に宿りし剣よ!!?煌めく勇気となりて、運命を超える力を導け!!?ペンデュラム召喚!!?現れろ、俺のモンスター!!?」
師匠がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって1つの光が舞い降りる。
「レベル4、クィーンズナイト!!?」

〈クィーンズナイト〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１５００

現れたのは先程サクリファイスで吸収したハズの赤い鎧を身に纏った女性の騎士、クィーンズナイト。
「っ!!?2枚目を引いてたんですね。ということは……」
「ああ、遊花の想像してる通りだ。俺はキングスナイトを召喚!!?」

〈キングスナイト〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

クィーンズナイトの横に並び立ったのは黄金の鎧を身に纏った騎士。
そしてクィーンズナイトとキングスナイトはお互いに剣を掲げて更なる騎士を呼ぶ。
「キングスナイトの効果発動!!?自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト1体を特殊召喚する!!?集え、絵札の三銃士!!?来い、ジャックスナイト!!?」

〈ジャックスナイト〉☆5　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

クィーンズナイトとキングスナイトの剣に合わせるように剣を掲げる青い鎧の騎士が現れる。
絵札の三銃士。
師匠の代名詞と言えるモンスターが、フィールドに揃った。
「墓地に存在する神剣―フェニックスブレードの効果発動!!?自分の墓地に存在する戦士族モンスター2体をゲームから除外する事で、このカードを自分の墓地から手札に加える。俺は墓地からクィーンズナイトとＨ・Ｃ　強襲のハルベルトの2体を除外して神剣―フェニックスブレードを手札に戻す。そしてバトルだ!!?クィーンズナイトでリンクリボーを攻撃!!?クィーンズスラッシュ!!?」
「相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動!!?ゼロリンク!!?このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力はターン終了時まで0になります!!?」
リンクリボーの身体が粒子に変わってクィーンズナイトに纏わりつき、その力を奪う。

クィーンズナイト
ＡＴＫ１５００→０

「攻撃対象がいなくなったことでクィーンズナイトの攻撃は中止する。次だ!!?キングスナイトでゴーストリックデュラハンを攻撃!!?」
「なら、ゴーストリックデュラハンの効果発動!!?ホロウエクスキュート!!?オーバーレイユニットを1つ使い、フィールド上のモンスター1体を対象に、選択したモンスターの攻撃力を半分にする!!?この効果は相手ターンでも使えます!!?対象はジャックスナイト!!?」
デュラハンがその手に持った小さな剣を振るうと、その剣から不可

視の斬撃が飛び、ジャックスナイトは盾で防いだが、その衝撃で膝をついた。

ジャックスナイト
ＡＴＫ１９００→９５０

「ジャックスナイトの攻撃力は下げられたか。だが、キングスナイトの攻撃は止まらない‼？いけ、キングスナイト‼？キングススラッシュ‼？」
「ゴメンね、ゴーストリックデュラハン。迎え撃って、ナイトオブビヘッド‼？」
　デュラハンが近づいてきたキングスナイトに小さな剣を振るうが、キングスナイトが振るった剣に弾き飛ばされ、そのままデュラハンは身体を斬られて粒子に変わった。
「墓地に送られたゴーストリックデュラハンの効果発動‼？このカードが墓地へ送られた場合、このカード以外の自分の墓地のゴーストリックカード1枚を対象としてそのカードを手札に加えます。私は墓地にあるゴーストリックランタンを手札に加えます‼？」
「っ、それもクリバンデットの時に落ちたカードか」
　これで師匠のフィールドで攻撃できるモンスターは攻撃力が半減したジャックスナイトのみ。
　ヴァレルロードの効果もあるし、魔装戦士ドラゴディウスのペンデュラム効果を使っても、私のフィールドにいるヴァレルロードとイゾルデは倒されない……なんて、そんな単純な話なわけがない。
　私の憧れる師匠のデュエルは、バトルフェイズにこそ真価があるのだから。
　そんな私の予想に応えるように、師匠は楽しそうに笑顔を浮かべた。
「さあ行くぜ？速攻魔法発動‼？瞬間融合‼？」
「っ‼？ここで融合魔法……なら、チェーンしてリバースカードオープン‼？速攻魔法、魔力の泉‼？相手フィールドの表側表示の魔

法・罠カードの数だけ自分はデッキからドローし、その後、自分フィールドの表側表示の魔法・罠カードの数だけ自分の手札からカードを選んで捨てます‼?」
「‼?ここでそのドローカードか‼?」
「ただし、このカードの発動後、次の相手ターンの終了時まで、相手フィールドの魔法・罠カードは破壊されず、発動と効果を無効化されなくなります。師匠のフィールドにある表側の魔法・罠は2枚のペンデュラムカードと妖刀竹光、瞬間融合の4枚。私のフィールドに表側の魔法・罠は魔力の泉1枚。よって4枚ドローし、1枚手札を捨てます‼?」
「上手くドローされちまったな。おまけに破壊を封じることで魔装戦士ドラゴノックスのペンデュラム効果まで封じられちまったか……だが、それでこそ、遊花の成長を感じられるってものだ‼?チェーン処理により瞬間融合の効果を発動‼?自分フィールドに存在から融合モンスターによって決められた融合素材を墓地に送り、EXデッキから融合モンスターを特殊召喚する‼?ただし、この効果で融合召喚したモンスターはエンドフェイズに破壊される。俺はクイーンズナイト、キングスナイト、ジャックスナイトの3体で融合‼?」
フィールドに現れた渦に絵札の三銃士が飛び込んでいく。
そして渦が爆けるとその中から現れるのは黒い鎧を身に纏った漆黒の騎士。
師匠の切り札であり、初めて師匠とデュエルをした時に私にトドメを刺した騎士達の主。
「融合召喚‼?運命に打ち勝つ勇敢なる騎士達の主‼?アルカナナイトジョーカー‼?」
〈アルカナナイトジョーカー〉☆9　戦士族　光属性
ＡＴＫ３８００
「アルカナナイトジョーカー……相変わらずの存在感ですね」

「さあ行くぞ‼?今はまだバトルフェイズ中‼?融合召喚したアルカナナイトジョーカーは当然攻撃できる‼?アルカナナイトジョーカーでヴァレルロードドラゴンを攻撃‼?」
「迎え撃って、ヴァレルロードドラゴン‼?銃声のイジェクトフレア‼?」
アルカナナイトジョーカーが大剣を構え、ヴァレルロードに勢いよく突撃していく。
そんなアルカナナイトジョーカーにヴァレルロードは粒子砲を放って対抗する。
「ペンデュラムゾーンの魔装戦士ドラゴディウスの効果発動‼?自分のモンスターが相手の表側表示モンスターと戦闘を行うダメージステップ開始時に手札を1枚捨て、その戦闘を行う相手モンスターの攻撃力・守備力は半分になる‼?」
「っ、ならそれにチェーンしてヴァレルロードドラゴンの効果発動‼?ジャムバレット‼?アルカナナイトジョーカーを対象にして攻撃力・守備力を５００ポイントダウンさせます‼?この効果は相手ターンにも発動することができ、この効果に対して相手は効果を発動することが出来ません‼?」

アルカナナイトジョーカー
ＡＴＫ３８００→３３００

ヴァレルロードドラゴン
ＡＴＫ３０００→１５００

「それでも攻撃力はこちらの方が上だ‼?行け、アルカナナイトジョーカー‼?ロイヤルストレートフラッシュ‼?」
ヴァレルロードが粒子砲だけではなく弾丸も放ってアルカナナイトジョーカーを止めようとするが、アルカナナイトジョーカーはその弾丸を物ともせずにヴァレルロードの懐に入り、その大剣で勢いよくヴァレルロードを斬り裂いた。

遊花　ＬＰ８０００→６２００

「っ、ゴメンね、ヴァレルロードドラゴン。だけど、このターンが終われば瞬間融合の効果でアルカナナイトジョーカーは破壊されます‼？」

「甘いぜ、遊花‼？俺のバトルフェイズはまだ終了していない‼？リバースカードオープン‼？速攻魔法、融合解除‼？」

「えっ⁉？」

「フィールドの融合モンスター１体を対象としてその融合モンスターを持ち主のＥＸデッキに戻し、その後、ＥＸデッキに戻したそのモンスターの融合召喚に使用した融合素材モンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、その一組を自分フィールドに特殊召喚できる‼？俺はアルカナナイトジョーカーの融合を解除‼？墓地から蘇れ、絵札の三銃士‼？来い、クィーンズナイト‼？キングスナイト‼？ジャックスナイト‼？」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１５００

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

〈ジャックスナイト〉☆５　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

アルカナナイトジョーカーの身体が光り輝くと、アルカナナイトジョーカーの身体が光に変わって３つに分かれ、再び絵札の三銃士がフィールドに並び立つ。

そして再びフィールドに絵札の三銃士が現れたということは……

「そしてさっきも言ったが今はまだバトルフェイズ中だ!!?特殊召喚した絵札の三銃士も当然攻撃ができる!!?ジャックスナイトで聖騎士の追想　イゾルデを攻撃!!?ジャックスラッシュ!!?」
「うっ!!?」

遊花　ＬＰ６２００→５９００

イゾルデ達がジャックスナイトに斬られて粒子に変わる。
「聖騎士の追想　イゾルデが破壊されたことで墓地に送られた妖刀竹光の効果でデッキから黄金色の竹光を手札に加える。これで遊花のバトルゾーンもガラ空きだ。キングスナイトでダイレクトアタック!!?キングスラッシュ!!?」
「っ!!?」
キングスナイトの剣が私の身体を斬りつけ、ライフが削られる。

遊花　ＬＰ５９００→４３００

「……メインフェイズ２だ」
まだクィーンズナイトの攻撃は残っていたけど、師匠はそのままバトルフェイズを終了する。
……ここで攻撃してくれたらランタンで攻撃を無効化してバトルゾーンにランタンを残すことが出来たんだけど、やっぱり攻撃してきてくれないよね。
さっきのターンでサウザンドブレードを出させないようにした動きをやり返されちゃったな。
「まずはコイツだ!!?斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
師匠がそういって手を前に突き出すと、師匠の目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はカード名が異なる戦士族モンスター３体!!?俺はクィーンズナイト、キングスナイト、ジャックスナイトの３体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」

絵札の三銃士がサーキットに吸い込まれていく。
そしてサーキットのが輝くとサーキットの中から白銀の鎧を身に纏った騎士が現れた。
「リンク召喚!!?運命と戦う孤高の騎士!!?リンク3!!?アルカナエクストラジョーカー!!?」

〈アルカナエクストラジョーカー〉ＬＩＮＫ３　戦士族　光属性
ＡＴＫ２８００　↙?　→　↘?

「今度はアルカナエクストラジョーカーですか……」
「俺はさっき魔装戦士ドラゴディウスの効果で捨てた神剣―フェニックスブレードの効果発動!!?墓地からキングスナイトとジャックスナイトの２体を除外して神剣―フェニックスブレードを手札に戻す。そして速攻魔法、大欲の壺!!?除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計３体を持ち主のデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから１枚ドローする!!?俺は除外されているクィーンズナイト、キングスナイト、ジャックスナイトをデッキに戻してカードを１枚ドローする!!?」
師匠のデッキの中に絵札の三銃士が戻り、さらに師匠はカードをドローする。
これでエクストラジョーカーを戦闘破壊したら再び絵札の三銃士が揃う可能性が出てきた。
相変わらず、師匠の奇襲攻撃は洗練されていて無駄がない。
「俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ」

遊花　ＬＰ４３００　手札４
ー▲ー　ー
ーーーー
ー　☆
ーーーー
△ー▲ー△　ー

遊騎　ＬＰ６１００　手札２

このターンの間は魔力の泉のデメリットで師匠の魔法・罠カードは破壊されず、発動と効果を無効化出来ない。
魔装戦士ドラゴノックスのペンデュラム効果でバトルフェイズを終了させられることはないけど、その代わりに魔装戦士ドラゴディウスを破壊することも出来なくなってるのはちょっと辛い。
それでも私に出来るのは、今出せる全力で師匠にぶつかることだけだ。
「私のターン、ドロー!!?私はサクリボーを召喚!!?」

〈サクリボー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３００

現れたのはクリボーに似た毛玉のモンスター。
「そして墓地に存在するリンクリボーの効果発動!!?スケープリンク!!?私はサクリボーをリリースして、戻ってきて、リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

サクリボーの姿が消え、再びリンクリボーが跳ねるように私の前に現れる。
「サクリボーの効果発動!!?このカードがリリースされた場合に自分はデッキから１枚ドローします!!?よし、魔法カード、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨てて同じ枚数ドローします!!?私は４枚、師匠は２枚の手札を捨てて同じ枚数ドローです!!?」
「ここで手札入れ替えか……」
「さらに魔法カード、貪欲な壺!!?墓地に存在するゴーストリックデュラハン、リンクスパイダー、プロキシードラゴン、ヴァレルロードドラゴンをＥＸデッキに、ジャンクリボーをデッキに戻してシャッ

フルし、カードを２枚ドローします‼?･このカードは……」
「何か引いたみたいだな。さあ、今度は何を仕掛けてくる?･」
ドローしたカードを見て、思わず笑顔を浮かべる私を、師匠は楽しそうな表情で見つめる。
そんな師匠に、私は今ドローした２枚のカードを掲げた。
「美傘さん、早速力をお借りします‼?･私は、スケール０のペンデュラムーチョとスケール２のＥＭ（エンタメイト）ドラネコでペンデュラムスケールをセッティング‼?･」
「ペンデュラムモンスター⁉?･っ、ＥＭってことは美傘の奴が渡したのか」
私を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中にメキシカンな格好をしているペンギンとお腹が銅鑼になっているネコが浮かびあがり、下に０と２の数字が現れる。
「これで私はレベル１モンスターを同時に召喚可能です‼?･心に灯し小さき希望よ‼?･光り輝く未来を導いて‼?･ペンデュラム召喚‼?･おいで、私のお友達‼?･」
私がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって１つの光が舞い降りる。
「レベル１、クリボーン‼?･」

〈クリボーン〉☆１　悪魔族　光属性
ＡＴＫ３００

フィールドに舞い降りたのはシスターのようにベールを被った白い毛玉のモンスター。
現れたクリボーンを見て、私は思わず声を漏らす。
「できた……私にも、ペンデュラム召喚が‼?･」
そんな私を見て。師匠は苦笑を浮かべながらもどこか嬉しそうに口を開いた。
「お見事。これで遊花は全部の召喚方法が使えるようになったわけだな……さあ、まだデュエルは終わってないぜ?･ここからどうする、

遊花？」
「まずはこうです‼？導いて‼？希望に繋がるサーキット‼？」
　私が正面に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はトークン以外のレベル１モンスター１体‼？私はクリボーンをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？相手を捕える深淵の邪眼‼？リンク１‼？サクリファイスアニマ‼？」

〈サクリファイスアニマ〉ＬＩＮＫ１　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０　→

　エクストラジョーカーの正面にサクリファイスに似た怪しげな邪眼を持つモンスターが現れる。
「っ、サクリファイスのリンクモンスターか‼？」
「サクリファイスアニマの効果発動‼？コネクトアブソープション‼？１ターンに１度このカードのリンク先の表側表示モンスター１体を対象にその表側表示モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップします‼？対象は勿論、アルカナエクストラジョーカー‼？吸い込んじゃって、サクリファイスアニマ‼？」
「残念だが、それは通さない‼？アルカナエクストラジョーカーの効果発動‼？アボイドフェイト‼？１ターンに１度、フィールドのこのカードまたはこのカードのリンク先のモンスターを対象とする、モンスターの効果・魔法・罠カードが発動した時、そのカードと同じ種類の手札を１枚捨てることでその発動を無効にする‼？俺は手札からタスケナイトを捨ててその効果を無効にする‼？」
「うっ、モンスターカードを引かれちゃってましたか」
　アニマの目の上にある空間が開き、エクストラジョーカーを吸い込もうとするが、エクストラジョーカーがアニマに向けて手をかざすとアニマが吹き飛ばされ、吸収を止めてしまった。
「さあ、吸収は防いだぜ？次はどうする？」

「だったらこれです!!?私は魔法カード、融合を発動!!?自分の手札・フィールドから融合モンスターによって決められた融合素材モンスターを墓地に送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから特殊召喚します!!?私が融合するのは、フィールドのリンクリボーとサクリファイスアニマ!!?」
「!!?お次は融合召喚か!!?」
フィールドに現れた渦の中にリンクリボーとアニマが飛び込んでいく。
「希望の守り手よ、深淵の邪眼と交わりて、孤独を壊す力となれ!!?融合召喚!!?」
この状況を突破するにはあなたの力が必要なの。
だから、あなたの力を私に貸して!!?
そんな私の思いに応えるように、龍の咆哮が世界を揺らす。
「閉ざされた世界を溶かす毒龍!!?スターヴヴェノムフュージョンドラゴン!!?」

〈スターヴヴェノムフュージョンドラゴン〉☆８　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２８００

「っ、そのドラゴンは……」
「スターヴヴェノムフュージョンドラゴンの効果発動!!?パワースワローヴェノム!!?このカードが融合召喚に成功した場合、相手フィールドの特殊召喚されたモンスター1体を選び、その攻撃力分だけこのカードの攻撃力をターン終了時までアップします!!?対象にするのはアルカナエクストラジョーカー!!?」

スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
ＡＴＫ２８００→５６００

スターヴヴェノムがエクストラジョーカーに毒の瘴気を放ち、その

力を奪い取る。
「バトル‼?・スターヴヴェノムフュージョンドラゴンでアルカナエクストラジョーカーを攻撃‼?・消失のヴェノムストリーム‼?・」
「迎え撃て、アルカナエクストラジョーカー‼?・ストレートフラッシュ‼?・」
エクストラジョーカーが大剣を構え、スターヴヴェノムに突撃する。
それに対し、スターヴヴェノムも毒のブレスをエクストラジョーカーに放つ。
「ペンデュラムゾーンの魔装戦士ドラゴディウスの効果発動‼?・自分のモンスターが相手の表側表示モンスターと戦闘を行うダメージステップ開始時に手札を1枚捨て、その戦闘を行う相手モンスターの攻撃力・守備力は半分になる‼?・」

スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
ＡＴＫ５６００→２８００

スターヴヴェノムの毒のブレスを身体に受けながらも、エクストラジョーカーはそのブレスを耐え切り最後の力を振り絞ってスターヴヴェノムに大剣を振るう。
エクストラジョーカーの大剣がスターヴヴェノムを斬り裂こうとした瞬間、スターヴヴェノムと大剣の間に小さな影が割り込み、スターヴヴェノムを庇い、エクストラジョーカーと共に消滅した。
「墓地に存在するサクリボーの効果発動‼?・自分のモンスターが戦闘で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外します‼?・」
「っ、やってくれるな」
「それだけじゃありません‼?・墓地に存在するエキストラケアトップスの効果発動‼?・このカードが墓地に存在し、ＥＸモンスターゾーンのモンスターがメインモンスターゾーンのモンスターとの戦闘で破壊され墓地へ送られた時、このカードをその破壊されたＥＸモンスターゾーンのモンスターの持ち主のフィールドに守備表示で特殊召

喚します!!?」

「俺のフィールドに特殊召喚だって？チェーンしてアルカナエクストラジョーカーの効果発動!!？ユナイテッドリンク!!？リンク召喚したこのカードが戦闘で破壊され、墓地へ送られた時、デッキから戦士族・レベル４の通常モンスター１体を特殊召喚し、デッキから戦士族・レベル４モンスター１体を手札に加える!!？俺はデッキからクィーンズナイトを特殊召喚し、キングスナイトを手札に加える!!？」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

〈エキストラケアトップス〉☆１　戦士族　地属性
ＤＥＦ１００

師匠のフィールドにクィーンズナイトと私のケアトップスが現れる。

とりあえずエクストラジョーカーは退けれた。

次の一手は……

「メインフェイズ２、カードを１枚伏せてターンエンドです!!？」

遊花　ＬＰ４３００　手札０
△▲▲ー△　ー
ーーー○ー
ー　ー
ーー□□ー
△ー▲ー△　ー
遊騎　ＬＰ６１００　手札１

「俺のターン、ドロー!!？もう１度行かせて貰うぜ。俺はキングスナイトを召喚!!？」

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００
「キングスナイトの効果発動!!?自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト１体を特殊召喚する!!?再び集え、絵札の三銃士!!?来い、ジャックスナイト!!?」

〈ジャックスナイト〉☆５　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００
師匠のフィールドにまた絵札の三銃士が揃う。
今だ!!?
「神楽さん、また力をお借りします!!?リバースカードオープン!!?速攻魔法、皆既日蝕の書!!?太陽の光が隠れることで全てのモンスターが眠りにつく!!?フィールドの表側表示モンスターを全て裏側守備表示にします!!?」
「何っ!!?」
フィールドに皆既日食が訪れ、あたりが夜のように暗くなったことにより、フィールドにいたモンスターは全て眠りにつく。
「ただし、このターンのエンドフェイズに、相手フィールドの裏側守備表示モンスターを全て表側守備表示にし、その後、この効果で表側守備表示にしたモンスターの数だけ相手はデッキからドローします」
「くっ……裏側守備表示にしたことでリンク召喚とエクシーズ召喚を封じてきたわけか。仕方ない、カードを１枚伏せてエンドフェイズ!!?皆既日蝕の書の効果で眠っていたモンスターが目覚め、表側守備表示になり俺はカードを４枚ドローする!!?」
「なら私もエンドフェイズ!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?裁きの天秤!!?相手フィールドのカードの数が自分の手札・フィールドのカードの合計数より多い場合に発動でき、自分はその差の数だけデッキからドローします!!?」

「っ!!?それが狙いだったのか!!?」
「師匠のフィールドのカードは８枚、私はペンデュラムカード２枚にスターヴヴェノムフュージョンドラゴン、裁きの天秤の４枚。その差分の４枚のカードをドローします!!?」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１４００

〈ジャックスナイト〉☆５　戦士族　光属性
ＤＥＦ１０００

〈エキストラケアトップス〉☆１　戦士族　地属性
ＤＥＦ１００

師匠も私もお互いに４枚のカードをドローする。
師匠の手札も増やしちゃったけど、これで準備は万端だ。

遊花　ＬＰ４３００　手札４
△ー ー ー △　ー
ー ー ー ??ー
ー　ー
□□□□ー
△▲▲ー△　ー
遊騎　ＬＰ６１００　手札４

「私のターン、ドロー!!?」
「スタンバイフェイズ、リバースカードオープン!!?罠発動!!?ワンダーエクシーズ!!?その効果により自分フィールド上のモンスター

でエクシーズ召喚を行う!!?」
「ここでエクシーズ召喚!!?ということは……」
「俺は戦士族、レベル４のクィーンズナイトとキングスナイトでオーバーレイ!!?２体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?」
クィーンズナイトとキングスナイトが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から赤い鎧を着た馬に乗る弓兵が舞い降りた。
「エクシーズ召喚!!?現れろＨ－Ｃ（ヒロイックチャンピオン）ガーンデーヴァ!!?」

〈Ｈ－Ｃ　ガーンデーヴァ〉★４　戦士族　地属性
ＡＴＫ２１００

「Ｈ－Ｃ　ガーンデーヴァは１ターンに１度、レベル４以下のモンスターが特殊召喚された時にオーバーレイユニットを１つ使うことでそのモンスターを破壊できる。おまけにこれは一度に複数体召喚されてもそのモンスターを全て破壊することができる。遊花がペンデュラム召喚をしてきてもそのモンスターを一気に破壊できるぜ?」
師匠が試すような口調で私にそう告げる。
そんな師匠に私は笑顔で応える。
「確かに厄介なモンスターです。でも、そのモンスターは１度攻略済みです!!?私はクリボルトを召喚!!?」
「!!?やっぱり出てくるか」

〈クリボルト〉☆１　雷族　光属性
ＡＴＫ３００

出て来たのは電気を出している黒い球体のモンスター。
「クリボルトの効果発動!!?自分のメインフェイズ時にエクシーズ素材を持っているエクシーズモンスター１体を選択して発動できる。

選択したモンスターのオーバーレイユニットを1つ取り除き、自分のデッキからクリボルト1体を特殊召喚する。私はＨ－Ｃ　ガーンデーヴァのオーバーレイユニットを。１つ使って、おいで‼？クリボルト‼？」

〈クリボルト〉☆1　雷族　光属性
ＡＴＫ３００

ガーンデーヴァのオーバーレイユニットの1つが私のフィールドに飛んでくると、その光がクリボルトに変わる。
「Ｈ－Ｃ　ガーンデーヴァの効果発動‼？オーバーレイユニットを1つ使い、相手フィールド上にレベル４以下のモンスターが特殊召喚された時、その特殊召喚されたモンスターを破壊する。裁きの神弓‼？」
ガーンデーヴァが残りのオーバーレイユニットを使って放つ弓がクリボルトを射抜き、消滅させる。
ありがとう、クリボルト。
これでガーンデーヴァのオーバーレイユニットは無くなった‼？
「これで邪魔するものはありません‼？私は既にセッティングされているペンデュラムカードでペンデュラム召喚を行います‼？心に灯し小さき希望よ‼？光り輝く未来を導いて‼？ペンデュラム召喚‼？おいで、私のお友達‼？」
私がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって2つの光が舞い降りる。
「レベル1、チューナーモンスター、ジェットシンクロン‼？」

〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

最初に現れたのは小さなジェット機のような機械のモンスター。
そしてジェットシンクロンに寄り添うように頭に中華鍋のような

ものを被ったモンスターが現れる。
「レベル1、チューニングサポーター!!?」
〈チューニングサポーター〉☆1　機械族　光属性
DEF300
「チューニングサポーター……そんなのまで入ってたのか……そしてチューナーが出てきたってことは……」
「チューニングサポーターはフィールドのこのカードをシンクロ素材とする場合、このカードはレベル2モンスターとして扱う事ができます!!?私は!!?レベル1、クリボルトと、レベル2として扱うチューニングサポーターに、レベル1、チューナーモンスター、ジェットシンクロンをチューニング!!?」
「やっぱりシンクロ召喚をしてくるよな」
ジェットシンクロンが光の輪になり、クリボルトとチューニングサポーターが小さな星に変わり、光の道になる。
そして光の道が輝くと、その中から現れるのは大きな機械の腕。
「闘志を秘めしその拳、あらゆる障害を打ち砕く!!?シンクロ召喚!!?一撃爆砕!!?アームズエイド!!?」
〈アームズエイド〉☆4　機械族　光属性
DEF1200
アームズエイドがフィールドに現れた瞬間、観戦者達の騒めきが聞こえてくる。
聞こえてくる騒めきに首を傾げる私に、師匠は苦笑を浮かべる。
「なんで周りが騒ついてるのか分からないって顔してるな。気づいてないのか?今、遊花はこのデュエルで全ての特殊召喚方法を使ったんだぜ?」
「あっ……」
師匠の言葉に、私も遅れて自分が行ったことに気付く。

リンク召喚、儀式召喚、エクシーズ召喚、ペンデュラム召喚、融合召喚、そしてシンクロ召喚。
夢中になってたから気づかなかったけど、このデュエルで私は全ての特殊召喚方法を使っている。
「本当に、遊花には驚かされてばかりだ。俺も師匠として負けてられないな……」
「いや、あの、私なんて、そんな大したものじゃ……」
「ばーか、そんな自分を卑下すんなって。たった1ヶ月で使えもしなかった5つの召喚方法を使いこなせるようになったんだ。遊花は俺の自慢の弟子だよ」
「っ、師匠……!!?」
嬉しそうにそう口にする師匠を見て、私は思わず涙が出そうになる。
そんな私を見て、師匠は柔らかい表情を浮かべると、心の底から楽しそうに笑った。
「まあ、遊花の師匠としてまだまだ負けてやるつもりはないぜ？弟子の全力も受けきれないような師匠じゃカッコ悪いしな。だから、遠慮なく、もっと全力でかかってこい!!?」
「っ……はい!!?まずはチューニングサポーターの効果発動!!?このカードがシンクロ素材として墓地へ送られた場合に自分はデッキから1枚ドローします!!?さらにチェーンしてジェットシンクロンの効果発動!!?このカードがシンクロ素材として墓地へ送られた場合、デッキからジャンクモンスター1体を手札に加えます!!?私はデッキからジャンクリボーを手札に加えます!!?」
「ペンデュラム召喚で使った分の手札は補充されたか」
「アームズエイドの効果発動!!?アームズシフト!!?1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとしてモンスターに装備出来る!!?この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップします!!?アームズエイドをスターヴヴェノムフュージョンドラゴンに装備!!?」
アームズエイドが飛び立ち、スターヴヴェノムも腕を空に掲げ、そ

の腕に装着される。

スターヴヴェノムフュージョンドラゴン

ＡＴＫ２８００→３８００

「バトル‼?・スターヴヴェノムフュージョンドラゴンでジャックスナイトを攻撃‼?・消滅のヴェノムインパクト‼?・」

スターヴヴェノムがアームズエイドをジャックスナイトに向けると、アームズエイドが射出され、ジャックスナイトの身体を貫く。

……やっぱりアームズエイドが飛んでいくんだね。

「アームズエイドの更なる効果、ビッグバンブレイク‼?・装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与えます‼?・」

ジャックスナイトを貫いたアームズエイドはそのまま師匠に向かって飛んでいき、師匠を殴りつけた。

「くっ‼?・」

遊騎　ＬＰ６１００→４２００

「だが、効果ダメージを受けた時、Ｈ・Ｃサウザンドブレードの効果発動‼?・このカードが墓地に存在し、戦闘・効果で自分がダメージを受けた時、このカードを墓地から攻撃表示で特殊召喚する‼?・」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性

ＡＴＫ１３００

師匠の前に再び現れたのは頭巾を被り、背中に何本もの刀を背負った戦士。

でも、これで師匠のライフをほんの少しだけ上回れた。

「メインフェイズ２、カードを２枚伏せてターンエンドです‼?・」

デュエルはまだまだこれから。

今の私には、師匠みたいに劇的な逆転なんてまだできない。
だからこそ、一歩ずつでも前へ進む。
もっともっと、私の全力を師匠にぶつける。
それが、私を導いてくれた師匠に今の私ができる最大の恩返し。
師匠が歩んで来た道は、誰にも非難される謂れはないということを証明し、師匠が笑顔でデュエルができるように私の全力のデュエルを行う。
それが……師匠の後継者になることを決めた私の、変わらない願いなんだから。

遊花　ＬＰ４３００　手札２
△▲△▲△　｜
｜｜｜○｜
｜　○
○｜｜□｜
△｜▲｜△　｜
遊騎　ＬＰ４２００　手札４

第５０話　弟子ＶＳ師・思いが導く場所

☆

遊花　ＬＰ４３００　手札２
△▲△▲△　ー
ーーー○ー
ー　○
○ーー??ー
△ー▲ー△　ー
遊騎　ＬＰ４２００　手札４

「俺のターン、ドロー!!?」
俺はドローしたカードを確認し、フィールドに視線を移す。
遊花のフィールドにはアームズエイドを装備したスターヴヴェノムに、２枚のセットカードとペンデュラムカードがある。
スターヴヴェノムには確か融合召喚したスターヴヴェノムが破壊された場合に相手フィールドの特殊召喚されたモンスターを全て破壊する効果があったハズだ。
皆既日食の書で１度裏側守備表示になっているためＥＸデッキから特殊召喚されたという情報は消えているが、融合召喚されたという情報は裏側になっても残るためあの破壊効果は問題なく発動するし、遊花が俺のフィールドに特殊召喚したケアトップスの効果も確認させてもらったが、このカードには特殊召喚されたこのカードが破壊され墓地へ送られた場合に１枚ドローする効果がある。
リンク召喚の素材に出来れば良かったんだが、あいにく俺のＥＸデッキにはもうリンクモンスターは残っていない。
つまり、スターヴヴェノムを破壊すればこちらのモンスターは全滅し、遊花は１枚ドローすることができるというわけだ。
もっとも、そうすんなりと破壊させて貰えるかも疑問だが。

だが、スターヴヴェノムを突破しにいかないことには何も始まらない。
「墓地に存在する神剣―フェニックスブレードの効果発動!!?墓地からクィーンズナイトとキングスナイトの2体を除外して神剣―フェニックスブレードを手札に戻す。そしてこのままバトル!!?」
「なら、バトルフェイズ開始時、リバースカードオープン!!?罠発動!!?イクイップシュート!!?このカードはバトルフェイズ中のみ発動する事ができ、自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスターに装備された装備カード1枚と相手フィールド上に存在する表側攻撃表示のモンスター1体を選択し、選択した装備カードを選択した相手モンスターに装備し、その後、選択した装備カードを装備していた自分のモンスターと、選択した相手モンスターで戦闘を行いダメージ計算を行います!!?私はスターヴヴェノムフュージョンドラゴンに装備されているアームズエイドをHーC　ガーンデーヴァに装備し、戦闘を行います!!?」
「何!?」
「ゴメンね、スターヴヴェノムフュージョンドラゴン。あなたの力、使わせて貰うね」

スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
ＡＴＫ３８００→２８００

ＨーＣ　ガーンデーヴァ
ＡＴＫ２１００→３１００

遊花の声に、スターヴヴェノムは力強い咆哮で応える。
その咆哮に応えるようにアームズエイドがスターヴヴェノムの腕から離れ、ガーンデーヴァの腕に無理矢理装着される。
装着されたアームズエイドはガーンデーヴァを引き摺りながら、スターヴヴェノムに突撃していく。
「くっ!!?ダメージステップ開始時にペンデュラムゾーンの魔装戦士

ドラゴディウスの効果発動!!?手札を1枚捨て、その戦闘を行う相手モンスターの攻撃力・守備力は半分になる!!?」

スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
ＡＴＫ２８００→１４００

ドラゴディウスの効果で攻撃力が下がったスターヴヴェノムを、アームズエイドに引き摺られたガーンデーヴァがその身体を貫き、スターヴヴェノムはその場に力無く倒れた。

遊花　ＬＰ４３００→２６００

「っ……破壊されたスターヴヴェノムフュージョンドラゴンの効果発動!!?ロンリーブレイク!!?融合召喚したこのカードが破壊された場合、相手フィールドの特殊召喚されたモンスターを全て破壊します!!?さらにその効果にチェーンしてアームズエイドの更なる効果、ビッグバンブレイク!!?装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与えます!!?この効果は相手モンスターに装備されていた場合でも、私から見た相手にダメージを与えることができます!!?」
「っ!??ということは……」
「スターヴヴェノムフュージョンドラゴンの元々の攻撃力、２８００のダメージを師匠には受けて貰います!!?」
「ぐあっ!??」

遊騎　ＬＰ４２００→１４００

ガーンデーヴァに装着されていたアームズエイドが自らの意思で離れ、俺の身体に突撃してくる。
そして、破壊されたスターヴヴェノムの亡骸から大量の毒の瘴気が

溢れ出し、フィールドにいたモンスターを全て溶かし、粒子に変えた。
「そしてエキストラケアトップスの効果発動‼？特殊召喚されたこのカードが破壊され墓地へ送られた場合、自分はカードを1枚ドローします‼？」
ケアトップスの効果で遊花の手札が増える。
俺のバトルフェイズだと言うのにこちらのモンスターは全て破壊され、大ダメージを受けてしまったうえ、手札補充までされてしまった。
そんな遊花の攻勢に、俺は思わず笑みを浮かべてしまう。
遊花は、この1ヶ月で本当に強くなった。
俺の目の前で身体を震わせ、涙を浮かべていた少女の面影は、もうどこにもない。
この1ヶ月で得た様々な経験を糧に、遊花は凄まじい速度で進化している。
そして何より、そのデュエルスタイルが俺の真逆の方向に進化しているのが面白い。
俺のデュエルスタイルは自分のバトルフェイズにモンスターを展開して一気に攻勢に移り相手が攻勢に移れないようにすることで防勢に転じているが、遊花は相手のバトルフェイズにモンスターを展開し、防勢から一気に攻勢に転じるデュエルスタイルを確立させてきている。
一体、遊花はどこまで進化していくのか、それを想像するだけでワクワクしてくる。
だが、だからこそーーー
「……やっぱり、そう簡単には負けてやれないよな」
遊花の実力は、すでに俺に追いつこうとしている。
だが、だからこそ、まだ師匠として遊花に負けてやるわけにはいかない。
師匠である俺に勝つことで遊花が自分の実力に満足してしまえば、まだまだ花開くであろう遊花の才能に歯止めをかけてしまう可能性がある。

それは、遊花の師匠として忍びない。
「？師匠、どうかしたんですか？」
不思議そうな顔で首を傾げる遊花を見て、俺は改めて覚悟を決める。
俺は、遊花を必ず彼女が望むプロ決闘者という場所まで導く。
それがあの日、夕暮れの公園で彼女の師匠となった俺の責任で、俺が今、心からやりたいと思うことだから。
「……いや、何でもない。メインフェイズ２、俺は再び神剣―フェニックスブレードの効果を発動し、墓地からＨ－Ｃ　ガーンデーヴァとジャックスナイトを除外することでこのカードを手札に戻す。俺はモンスターをセット。カードを１枚伏せてターンエンドだ」

遊花　ＬＰ２６００　手札３
△▲ー－△　　ー
ーーーーー
ー　　ー
ー－??－ー
△▲▲ー△　　ー
遊騎　ＬＰ１４００　手札４

「私のターン、ドロー‼？ここで魔装戦士ドラゴノックスを使わせます‼？私は金華猫を召喚‼？」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

遊花のフィールドに現れたのは霊体になっている猫のモンスター。
「金華猫の効果発動‼？召喚した時、墓地に存在するレベル１モンスターを特殊召喚します‼？戻ってきて、ミスティックパイパー‼？」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性

ＤＥＦ０

「さらにミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを１枚ドロー!!?私が引いたのはクリアクリボー!!?レベル１モンスターなのでもう１枚ドローです!!?」

「ここで一気に手札が２枚も増えるか……」

「そして私は既にセッティングされているペンデュラムカードでペンデュラム召喚を行います!!?心に灯し小さき希望よ!!?光り輝く未来を導いて!!?ペンデュラム召喚!!?おいで、私のお友達!!?」

遊花がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって今度は３つの光が舞い降りる。

「レベル１、クリアクリボー!!?」

〈クリアクリボー〉☆１　天使族　光属性

ＤＥＦ２００

最初に現れたのは紫色の毛玉のようなモンスター。

「レベル１、ジャンクリボー!!?」

〈ジャンクリボー〉☆１　機械族　地属性

ＤＥＦ２００

次に現れたのは機械の身体を持つクリボーに似たモンスター。

そしてそんな２体のクリボー達に寄り添うようにドットの身体を持つモンスターが現れる。

「レベル１、ドットスケーパー!!?」

〈ドットスケーパー〉☆１　サイバース族　地属性

ＤＥＦ２１００

「そして墓地に存在するリンクリボーの効果発動!!?スケープリンク

!!?私はドットスケーパーをリリースして、またお願い、リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

ドットスケーパーの姿が一瞬消え、リンクリボーが遊花の前に現れる。
そしてリンクリボーが現れるのと同時に姿を消していたドットスケーパーが再び姿を現わす。
「墓地に送られたドットスケーパーの効果発動!!?デュエル中に１度、このカードが墓地に送られた場合に特殊召喚します!!?」

〈ドットスケーパー〉☆１　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

現れたドットスケーパーを見て、遊花が深呼吸をする。
その行動を見て、遊花が次に出してくるモンスターを悟る。
次に出てくるのは、遊花の大切な思い出が詰まったモンスター。
遊花の運命を斬り開く剣(つるぎ)の龍。
「導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
遊花の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は効果モンスター３体以上!!?私はリンクリボー、クリアクリボー、ジャンクリボー、ドットスケーパーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
遊花のフィールドにいた４体のモンスターがサーキットに吸い込まれていく。
そして、サーキットが輝くとフィールドに龍の咆哮が響いた。
「お願い、私に運命を超える力を貸して!!?リンク召喚!!?閉ざされた運命を斬り開く魂の剣(つるぎ)リンク４!!?ヴァレルソードドラゴン!!?」

〈ヴァレルソードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑←→

「やっぱり出てきたか……ヴァレルソードドラゴン」
「ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アサシネイトショット!!?1ターンに1度、攻撃表示モンスター1体を対象として発動!!?そのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる。そしてこの効果の発動に対して相手は効果を発動できない!!?この効果は相手ターンにでも使用することが出来ます!!?対象にするのは、金華猫!!?」
ヴァレルソードが金華猫に空砲を放ち、驚いた金華猫が守備表示に変わる。

金華猫
ＡＴＫ４００↓ＤＥＦ２００

「まだ終わりません!!?墓地に存在するジェットシンクロンの効果発動!!?手札を1枚墓地に送り、墓地からこのカードを特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合、除外される!!?」

〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

遊花の前に再びジェットシンクロンが現れる。
そして遊花は再び正面に手をかざす。
「導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「っ、またリンク召喚か!!?」
「召喚条件は効果モンスター2体!!?私は金華猫とジェットシンクロンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク

召喚!!?・リンク２!!?・ペンテスタッグ!!?・」

〈ペンテスタッグ〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１６００　→←

現れたのは機械の身体を持つクワガタのようなモンスター。
「っ、確かそのモンスターは……」
「ペンテスタッグの永続効果!!?・このカードがモンスターゾーンに存在する限り、リンク状態の自分のモンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ相手に戦闘ダメージを与えます!!?・」
「ここで貫通攻撃か!!?・」
「バトル!!?・斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン!!?・セットモンスターを攻撃!!?・剣光のベイオネットブレイク!!?・」
「通さない!!?・俺はペンデュラムスケールに存在する魔装戦士ドラゴノックスのペンデュラム効果を発動!!?・相手モンスターの攻撃宣言時、このカードを破壊し、そのバトルフェイズを終了する!!?・」
ドラゴノックスの光の柱が割れ、辺りを暗闇が包み込む。
そして暗闇が晴れるとバトルフェイズが終了した。
「ふぅ……とりあえずペンデュラム召喚は封じれましたね。私はこのままターンエンドです」
「ならエンドフェイズにリバースカードオープン、罠発動!!?・貪欲な瓶!!?・貪欲な瓶以外の自分の墓地のカード５枚を対象にそのカード５枚をデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから１枚ドローする!!?・俺は墓地に存在するアルカナエクストラジョーカー、聖騎士の追想　イゾルデをＥＸデッキに、大欲な壺、妖刀竹光、黄金色の竹光をデッキに戻してシャッフルしカードを１枚ドローする!!?・」

遊花　ＬＰ２６００　手札１
△▲ーーー△　ー

ー☆ーーー
☆　　ー
ーー??ーー
△ー▲ーー　　ー
遊騎　ＬＰ１４００　手札４

「俺のターン、ドロー!!?まずは反転召喚、Ｈ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）エクストラソード」

〈Ｈ・Ｃ　エクストラソード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１０００

現れたのは銀色の鎧を身に纏った二刀流の戦士。
「さらにＨ・Ｃダブルランスを召喚!!?」

〈Ｈ・Ｃ　ダブルランス〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１７００

エクストラソードに続くようにフィールドに２つの槍を持った白い戦士が現れる。
「Ｈ・Ｃ　ダブルランスの効果発動!!?召喚成功時に手札・墓地の同名モンスターを表側守備表示で特殊召喚する!!?俺は墓地のＨ・Ｃ　ダブルランスを特殊召喚だ!!?ただしこのカードはシンクロ素材にできず、このカードをエクシーズ素材とする場合、戦士族モンスターのエクシーズ召喚にしか使用できない」

〈Ｈ・Ｃ　ダブルランス〉☆４　戦士族　地属性
ＤＥＦ９００

ダブルランスが雄叫びをあげると、フィールドにもう１体ダブルランスが現れる。

「まずはコイツだ!!?斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
「リンク召喚……この状況なら……」
俺が手をかざすと正面に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター2体!!?俺はH・C　ダブルランスとH・C　エクストラソードをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?追想に生きる王女!!?リンク2!!?聖騎士の追想　イゾルデ!!?」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉LINK　2　戦士族　光属性
ATK1600　↙?　↘?

ダブルランスとエクストラソードがサーキットの中に消え、再びフィールドにイゾルデが現れる。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?リンクレカレクション!!?リンク召喚に成功した時、デッキからH・C（ヒロイックチャレンジャー）ソードシールドを手札に加える!!?」
「ソードシールド……防御用のヒロイックカードですね」
「さらに聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動!!?メモリーズギフト!!?俺はデッキから妖刀竹光、最強の盾、ビッグバンシュート、月鏡の盾、折れ竹光を墓地に送り、デッキからジャックスナイトを守備表示で特殊召喚!!?」

〈ジャックスナイト〉☆5　戦士族　光属性
DEF1000

「この状況でジャックスナイト?」
「墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える。さらに墓地の神剣―フェニックスブレードの効果を発動し、墓地からH・C　ダブルランスとH・C　エクストラソードを除外することでこのカードを手札に戻す。そして手札を1枚捨てて除外されているジャックスナイトを対象に装備魔法、DDRを発

動!!?そのモンスターを攻撃表示で特殊召喚し、このカードを装備する。フィールドに舞い戻れ、ジャックスナイト!!?」

〈ジャックスナイト〉☆5　戦士族　光属性
ＤＥＦ１０００

「フィールドに2体のジャックスナイト!?!?ということは……!!?」
「俺は光属性レベル5のジャックスナイト2体でオーバーレイ!!?2体の光属性モンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
2体のジャックスナイトが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から純白の鎧を見に纏った戦士が降りてくる。
「星々を守りし光の戦士!!?セイクリッドプレアデス!!?」

〈セイクリッドプレアデス〉★5　戦士族　光属性
ＡＴＫ２５００

「っ、セイクリッドプレアデス……そのモンスターは……」
「セイクリッドプレアデスの効果発動!!?ゾディアックリターン!!?オーバーレイユニットを1つ使い、1ターンに1度、相手のカード1枚を手札に戻す!!?この効果は相手ターンでも使用することが出来る!!?俺はヴァレルソードドラゴンを手札に戻す!!?」
「っ、ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アサシネイトショット!!?セイクリッドプレアデスを守備表示にします!!?」
プレアデスが放つ星の弾丸をヴァレルソードに放ち、ヴァレルソードも銃撃で相殺していく。
ヴァレルソードは迫り来る星の弾丸を銃撃で相殺していたが、防ぎきれずに弾き飛ばされる。

星の弾丸で異空間に弾き飛ばされる寸前、ヴァレルソードは最後の力を振り絞ってプレアデスに銃撃を放ち、それを受けたプレアデスは膝をついた。

セイクリッドプレアデス
ＡＴＫ２５００→ＤＥＦ１５００

「これで存分に攻められる‼?バトル‼?Ｈ・Ｃ　ダブルランスでペンテスタッグに攻撃‼?ツヴァイシュティヒ‼?さらにダメージステップ開始時にペンデュラムゾーンの魔装戦士ドラゴディウスの効果発動‼?手札を１枚捨て、その戦闘を行う相手モンスターの攻撃力・守備力は半分になる‼?」

ペンテスタッグ
ＡＴＫ１６００→８００

ダブルランスが勢いよくペンテスタッグに突撃し、２つの槍でその身体を貫く。

遊花　ＬＰ２６００→１５００

「うぅ……」

「続けて、聖騎士の追想　イゾルデでダイレクトアタック‼?ツインアタック‼?」
「させません‼?ペンデュラムゾーンのＥＭドラネコの効果発動‼?１ターンに１度、相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動し、その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは０になります‼?」
「っ⁉?ペンデュラムカードまで防御効果を持ってるのか⁉?」
イゾルデ達が遊花に向かって跳び蹴りを放つが、ペンデュラムゾーンから現れたドラネコが腹にある銅鑼で弾き返した。

ダイレクトアタックの戦闘ダメージを無くすとは、また厄介な防御手段が増えたものだ。
「俺はこのままターンエンドだ」

遊花　ＬＰ１５００　手札１
△▲ー－△　　ー
ーーーーー
ー　　☆
ーーー○□
△ー▲ー－　　ー
遊騎　ＬＰ１４００　手札４

「私のターン、ドロー!!?……カードを１枚伏せてターンエンドです」

遊花　ＬＰ１５００　手札１
△▲▲ー△　　ー
ーーーーー
ー　　☆
ーーー○□
△ー▲ー－　　ー
遊騎　ＬＰ１４００　手札４

「俺のターン、ドロー!!?このカードか……なら、セイクリッドプレアデスの効果発動!!?ゾディアックリターン!!?オーバーレイユニットを１つ使い、ペンデュラムゾーンのＥＭドラネコを手札に戻す!!?」
「えっ!!?」
プレアデスの放つ星の弾丸が光の柱の中にいたドラネコを弾き飛ばし、遊花の手札に戻す。
「墓地の神剣―フェニックスブレードの効果を発動し、墓地から２体

のジャックスナイトを除外することでこのカードを手札に戻す。そして魔法カード、手札抹殺‼?」
「っ⁉?」
「お互いに手札を全て捨てて同じ枚数ドローする‼?俺は5枚、遊花は2枚の手札を捨てて同じ枚数ドローだ‼?これでもうペンデュラム召喚はできないぜ?」
「うっ、そのためにEMドラネコを手札に戻したんですね……」
おそらく遊花が持っているペンデュラムカードはあの2枚のみ。
これでこのデュエル中にまたペンデュラム召喚をされる可能性はかなり低くなっただろう。
そして、例えペンデュラムカードが他に入っていて今のドローで引いていたとしても、ペンデュラム召喚で大量にモンスターを展開できるほど、俺達のデュエルには時間が残っていない。
「っ‼?デッキが……」
遊花が自分のデッキを見て、厳しい表情を浮かべる。
……どうやら自分がどれだけのカードを使用していたかちゃんと数えてなかったみたいだな。
今後はそこも考えてデュエルできるように教える必要があるか。
遊花も俺と同じようにドローカードやサーチカードを多用するため、最近ではデッキを45枚にしているらしい。
だが、それを踏まえても遊花はこのデュエル中、クリバンデッドのような墓地を肥やすカードや、魔力の泉、裁きの天秤などの大量にドローするカードを多用していた。
俺が数えていた限り、遊花は今の手札抹殺でドローしたカードを含めると既に44枚のカードを使用している。
さっきのリーネとのデュエルでペンデュラム召喚を使える素振りを見せてなかったところから俺とのデュエルの直前にペンデュラムカードを足したようで45枚よりは少し増えているようだが、それでも遊花のデッキは残り3枚。
一方、俺もドローやサーチを多用はしていたが貪欲な瓶や大欲の壺でデッキにカードを戻していたこともあり、手札抹殺でドローした

カードを含めると４１枚のカードは既に使用しているが、まだデッキは６枚残っている。
遊花のデッキは防御に長けており、自分から攻めることはどちらかというと苦手にしている。
このままこちらが耐久戦をしかければデッキ切れで勝てるとは思うが……それは俺らしくない。
師匠として、弟子を相手に守りの方向に逃げたくない。
それに、元々こちらは遊花程耐久戦が得意な方ではないのだ。
現状だと、どうしてもイゾルデは攻撃表示で残ってしまうし、攻撃力をあげるためにエクストラジョーカーに変えてもその分モンスターが減るので防御面で不安が残るのは同じこと。
それならば、最後まで自分らしく攻めの姿勢を崩さないデュエルをした方がまだマシだ。
「さあ、どちらにせよ残り時間は後僅か。最後まで全力で行くぞ、遊花‼?」
「っ、はい‼?」
「まずは下準備だ。速攻魔法、大欲の壺‼?除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計３体を持ち主のデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから１枚ドローする‼?俺は除外されているクィーンズナイト、キングスナイト、ジャックスナイトをデッキに戻してカードを１枚ドローする‼?」
「っ、また絵札の三銃士がデッキに……」
「そして、クィーンズナイトを召喚‼?」
〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１５００
「俺はセイクリッドプレアデスを攻撃表示に変更する」
セイクリッドプレアデス
ＤＥＦ１５００→ＡＴＫ２５００

「行くぜ、バトル!!?クィーンズナイトでダイレクトアタック!!?」
「通しません!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のクリアクリボーの効果発動!!?自分はデッキから1枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替えます!!?さらにチェーンして墓地からクリボーンの効果発動!!?相手モンスターの攻撃宣言時、墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のクリボーモンスターを任意の数だけ対象として、そのモンスターを特殊召喚します!!?来て、クリボー!!?ジャンクリボー!!?虹クリボー!!?……そして、行きますよ、師匠!!?」
「!!?」
「いつまでも、私と共に羽ばたいて!!?ハネクリボーＬＶ９!!?」
「なっ!?ここでハネクリボーＬＶ９だって!?」

〈クリボー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

〈ジャンクリボー〉☆１　機械族　地属性
ＤＥＦ２００

〈虹クリボー〉☆１　悪魔族　光属性
ＤＥＦ１００

〈ハネクリボーＬＶ９〉☆９　天使族　光属性
ＤＥＦ？

フィールドに現れたのは３体のクリボー達と赤き鎧に身を包んだ天使の羽を持つ遊花の相棒。
ここでハネクリボーＬＶ９が出てくるのは少々不味い。
「ハネクリボーＬＶ９が自分フィールド上に表側表示で存在する限

り、お互いに発動した魔法カードは墓地へ送られずゲームから除外されます。そして、ハネクリボーＬＶ９の永続効果、スペルアブソーブ‼?このカードの攻撃力・守備力は相手の墓地に存在する魔法カードの数×５００ポイントの数値になります‼?」
「っ、俺の墓地にある魔法カードは１９枚……」

ハネクリボーＬＶ９
ＤＥＦ?→９５００

「っ、守備力９５００……」
ハネクリボーＬＶ９の赤き鎧が輝き、赤き鎧に周囲から光の粒子を集まって光輝く。
あの守備力を突破するのは現状じゃ不可能だ。
「そしてクリアクリボーの効果発動‼?デッキからカードを1枚ドローします‼?このカードはそのまま手札に加えます」
「くっ、モンスターが増えたことで攻撃対象の変更だ。クィーンズナイトでクリボーを攻撃‼?クィーンズスラッシュ‼?」
「ゴメンね、クリボー」
クィーンズナイトの剣に斬り裂かれ、クリボーが粒子になって消滅する。
「続けて、聖騎士の追想　イゾルデでジャンクリボーに攻撃‼?ツインアタック‼?」
「ありがとう、ジャンクリボー」
イゾルデ達に蹴り飛ばされ、ジャンクリボーも粒子に変わる。
「まだだＨ・Ｃ　ダブルランスで虹クリボーに攻撃‼?ツヴァイシュティヒ‼?」
ダブルランスが勢いよく虹クリボーに突撃していく。
そして手に持つ2つの槍で虹クリボーの身体を貫こうとした瞬間、虹クリボーの身体が粒子に変わり、その槍を逃れた。
「今です‼?相手モンスターの攻撃宣言時、自分の手札・フィールド上から悪魔族モンスターをそれぞれ1体ずつ墓地へ送る事でのみ、この

カードを手札から特殊召喚する事ができる!!?私は、フィールドの悪魔族モンスター、虹クリボーと、手札の悪魔族モンスター、絶望神アンチホープを墓地に送ります!!?」
「っ!??ここで特殊な召喚条件のモンスター!??」
手札から現れたアンチホープの姿が粒子に変わり、虹クリボーが変化した粒子に集まっていく。
そしてその粒子が集まり現れたのは、深い闇を纏う、天使と悪魔の羽根を持つ人型のモンスターが現れる。
「おいで!!?闇夜に紛れる不可視の天体!!?ダークネスネオスフィア!!?」

〈ダークネスネオスフィア〉☆１０　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ４０００

「ダークネスネオスフィア……守備力４０００!?」
「それだけじゃありませんよ。ダークネスネオスフィアは戦闘では破壊されません!!?」
「っ、戦闘破壊耐性まであんのかよ」
遊花のフィールドに現れた異形のモンスターに、俺は思わず冷や汗を流す。
相対するだけで分かるこの威圧感。
あのカードは……多分、闇のカードだ。
遊花が闇のカードである絶望神アンチホープを持っているのは知っていたが、ダークネスネオスフィアなんてカードも持っていたなんて、俺は聞いていない。
俺は思わず、観戦している闇に目をやる。
すると、闇も俺の視線に気付き、少し驚いた表情を浮かべながら首を振る。
どうやら、闇もこのカードのことは知らなかったらしい。
遊花の様子が変わっていないところを見ると制御はちゃんとできているみたいだが、闇のカードに大怪我を負わされた身としては落ち

着かない。
「っ、とりあえず今はできることをやるだけか。速攻魔法発動!!?ライバルアライバル!!?」
「!?その速攻魔法は……」
「このカードは自分・相手のバトルフェイズに発動でき、モンスター1体を召喚する!!?来い、キングスナイト!!?」

〈キングスナイト〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

「ライバルアライバルで行われるのは特殊召喚ではなく召喚。よって、キングスナイトの効果発動!!?クィーンズナイトが存在するため、三度集え、絵札の三銃士!!?来い、ジャックスナイト!!?」

〈ジャックスナイト〉☆5　戦士族　光属性
ＤＥＦ１０００

フィールドに三度揃った絵札の三銃士。
だが、現状ハネクリボーＬＶ９とダークネスネオスフィアを突破することはできない。
「俺はメインフェイズ２ーーー」

「なら、バトルフェイズ終了時、リバースカードオープン!!?罠発動!!?拮抗勝負!!?」
「っ!?マジか!?」
「相手フィールドのカードの数が自分フィールドのカードの数より多い場合、自分・相手のバトルフェイズ終了時に発動できます!!?自分フィールドのカードの数と同じになるように、相手はフィールドのカードを裏側表示で除外しなければなりません!!?」
っ、やられた!!?
ずっと伏せられていたからタイミングが合わないカードだとは

思っていたが、まさか拮抗勝負だとは思わなかった。
「私のカードは５枚。師匠も５枚になるように除外して貰います‼?」
「ぐっ……俺は絵札の三銃士とペンデュラムゾーンの魔装戦士ドラゴディウス、セットカード１枚を残して他のカードを除外する」
フィールドからダブルランスとイゾルデ、プレアデスが粒子に変わり消滅する。
「……ははっ、やべぇ」
想像以上の遊花の反撃に俺は思わずそんな言葉を漏らしてしまう。
やはりカウンターが得意な遊花相手に攻めるのは下策だったか。
だが、まだ終わっていない。
ライフもデッキも残っているのだ。
こんな楽しいデュエルを諦める要素なんて、どこにもない。
「改めてメインフェイズ２、俺はカードを２枚伏せてターンエンドだ‼?」

遊花　ＬＰ１５００　手札１
△ー▲ーー　ー
ーー□□ー
ー　ー
□○○ーー
△ー▲▲▲　ー
遊騎　ＬＰ１４００　手札０

「私のターン、ドロー‼?師匠の手札は０、墓地にはタスケナイト……それでも、私は前に進みます‼?いつだって、私と共に‼?ハネクリボー‼?」
「っ‼?ここで普通のハネクリボーだって‼?」
〈ハネクリボー〉☆１　天使族　光属性
ＡＴＫ３００

フィールドに現れたのは天使の羽を持つ遊花の相棒。
リンクリボーが墓地にいるとはいえこの状況で攻撃表示で出してくるなんて……いや、遊花にはハネクリボーを強化するバーサーカークラッシュがある。
あの伏せカードがそうだとしたら、そのまま決め手になる可能性もある。
「私はハネクリボーＬＶ９を攻撃表示に変更‼？」

ハネクリボーＬＶ９
ＤＥＦ９５００→ＡＴＫ９５００

「そして装備魔法、ビックバンシュートをハネクリボーＬＶ９に装備します‼？」
「っ、そのカードは……」
「ビックバンシュートの効果で装備モンスターの攻撃力は４００ポイントアップし、装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与えます‼？ただし、このカードがフィールド上から離れた時、装備モンスターをゲームから除外されます」

ハネクリボーＬＶ９
ＡＴＫ９５００→９９００

「攻撃力９９００の貫通持ちだって⁉？」
ハネクリボーＬＶ９の右手が真っ赤に燃える。
あの攻撃力の貫通攻撃なんてくらったら一溜りもない‼？
「バトル‼？ハネクリボーＬＶ９でジャックスナイトを攻撃‼？バーサーカービックバンクラッシュ‼？」
ハネクリボーＬＶ９が右手を構えると、赤き鎧が強く光輝く。
赤き鎧が光輝くと、ハネクリボーＬＶ９は空に向けて飛び立ち、空

中で一回転すると勢いよくジャックスナイトに向かって突撃する。
「させるか!!?墓地に存在するタスケナイトの効果発動!!?このカードが墓地に存在し、自分の手札が０枚の場合、相手モンスターの攻撃宣言時にデュエル中に１度だけ発動出来る!!?このカードを墓地から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する!!?」

〈タスケナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１７００

光を放ちながら真っ赤に燃える右手をジャックスナイトに振り下ろそうとするハネクリボーＬＶ９の前に赤い鎧の戦士が現れ、その右手を受け止め、弾き返す。
弾き飛ばされたハネクリボーＬＶ９は空中で一回転すると、遊花を守るように遊花の正面に舞い降りた。
「これでタスケナイトも使わせました。次のターンが最後の勝負です。私はこれでターンエンド!!?」

遊花　ＬＰ１５００　手札０
△ー▲△ー　ー
ー○○□ー
ー　ー
□○○○ー
△ー▲▲▲　ー
遊騎　ＬＰ１４００　手札０

「俺のターン……」
俺はデッキの上のカードを握りながらフィールドに目をやる。
遊花のデッキは残り１枚。
そして遊花のフィールドには攻撃力を９９００まで高め、ビックバンシュートにより貫通効果を得ているハネクリボーＬＶ９に、戦闘破壊耐性があるダークネスネオスフィア、そして攻撃表示のハネクリ

ボー。
ハネクリボーは墓地にリンクリボーがいるためいつでもリンクリボーに変わることができ、そうでなくても伏せカードがバーサーカークラッシュだと仮定したら先程墓地に送っていたアンチホープを除外することで最大５０００の攻撃力を得ることができる。
それに対し、俺のフィールドには絵札の三銃士とタスケナイト。
ペンデュラムゾーンの魔装戦士ドラゴディウスと現状使えないブラフの伏せカードがあるだけだ。
とてもじゃないが現状を突破出来るようなものではない。
おまけにタスケルトンでも墓地に落ちていればよかったんだが、あいにく今回は引けておらず防御をすることも難しい。
防御を取ればハネクリボーＬＶ９に貫通攻撃を受け、攻撃をするならばハネクリボーＬＶ９を突破しなければならないという、なんとも難しい状況だ。
……この状況を突破できる可能性があるとしたら、ただ１つ。
それは奇しくも闇との準決勝に似ており、俺は思わず苦笑を浮かべてしまう。
だけど、それでいい。
「……遊花」
「……はい」
「このターンだ……このターンが、俺達のデュエルのラストターンだ」
「……はい」
俺の言葉に遊花が少し寂しそうな表情を浮かべる。
遊花の気持ちは、俺にも分かる。
遊花とのデュエルは、とても楽しいものだった。
お互いに死力を尽くし、逆転に逆転を重ねる全力の、楽しいデュエル。
だが、どんなに楽しいデュエルでも、デッキ枚数とライフという残り時間がある限り永遠に続けることは出来ない。
いつかは必ず、終わりがくる。

だからこそ、今この一瞬を全力で戦い抜く。
そうして全力を尽くしてぶつかり合った思い出は、いつまでも残り続けるのだから。
「だからこそ、俺はこのドローに全てを賭ける。俺の全力、受け切れるものなら受けきってみな!!?」
「……はい!!?」
真剣な表情で頷く遊花を見て、俺は握るカードに力を込める。
頼む、俺のデッキよ。
俺は師匠として……そして何よりも1人の決闘者として、遊花の全力に応えたいんだ!!?
「行くぜ……ドロー!!?」
勢いよくカードを引き抜き、そのカードを自分の目の前に持ってくる。
そのカードを見て、俺はーーー
「ありがとう……俺のデッキ」
「っ!!?」
ーーー不敵な笑みを浮かべた。
「行くぜ、遊花。これが俺の全力だ!!?自分フィールドのモンスター3体、クィーンズナイト、キングスナイト、ジャックスナイトをリリースし、手札からこのモンスターを特殊召喚する!!?」
「っ!!?その召喚方法は闇先パイの時の!!?」
絵札の三銃士が粒子に変わり、空に集まっていく。
集まった粒子が弾けると、空から舞い降りたのは龍の鎧を見に纏った漆黒の戦士。
その戦士はフィールドに降り立つと、力強い咆哮を上げた。
「呪われた運命に抗う孤独の戦士!!?ＤＨＥＲＯＢｌｏｏＤ（デステニーヒーロー　ブルーディー）!!?」
〈ＤＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄ〉☆８　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１９００

「Ｄ－ＨＥＲＯ……これが、師匠の切り札……」
現れたＢｌｏｏｏｍＤを見て、遊花が目を見開く。
「Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏｍ Ｄの永続効果、シールデステニー‼？このカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手フィールドの表側表示モンスターの効果は無効化される‼？」
「っ、それじゃあ‼？」
「ハネクリボーＬＶ９の能力の上昇は自身の効果によるものだ‼？その効果が無くなれば、その力も消える‼？」
Ｂｌｏｏｏｍ Ｄの鎧から闇が吹き出し、辺りの風景が夜に変わる。
そのＢｌｏｏｏｍ Ｄから吹き出した闇により、ハネクリボーＬＶ９の鎧が纏っていた光が失われていく。

ハネクリボーＬＶ９
ＡＴＫ９９００→４００

「そしてＤ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏｍ Ｄの効果発動‼？カースアブソーブ‼？１ターンに１度、相手フィールドのモンスター１体を対象として、その相手モンスターを装備カード扱いとして１枚だけこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの元々の攻撃力の半分だけアップする‼？対象はハネクリボー‼？」
「っ……墓地に存在するリンクリボーの効果発動‼？スケープリンク‼？私はハネクリボーをリリースして、最後までお願い、リンクリボー‼？」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

Ｂｌｏｏｏｍ Ｄがハネクリボーに手を伸ばすと、Ｂｌｏｏｏｍ Ｄの背中に付いている龍の爪がハネクリボーに放たれる。
その龍の爪がハネクリボーを貫こうとした瞬間、ハネクリボーの姿

が消え、龍の爪が対象を見失い、不発したところでリンクリボーが遊花の前に現れた。
「行くぞ、バトル!!?タスケナイトでリンクリボーを攻撃!!?」
「相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動!!?ゼロリンク!!?このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力はターン終了時まで０になります!!?この効果はリリースされた後に墓地で発動するのでＤ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄの効果は受けません!!?」
　リンクリボーの身体が粒子に変わってタスケナイトに纏わりつき、その力を奪う。

タスケナイト
ＡＴＫ１７００→０

「これで決まりだ!!?Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄでハネクリボー　ＬＶ９を攻撃!!?」
「迎え撃って、ハネクリボー　ＬＶ９!!?バーサーカービックバンクラッシュ!!?」
　ハネクリボー　ＬＶ９が右手を構えると、右手に炎が灯る。
　ハネクリボー　ＬＶ９は空に向けて飛び立ち、空中で一回転すると勢いよくＢｌｏｏｄに向かって突撃する。
　それに対し、Ｂｌｏｏｄも地面を強く蹴って跳び上がり、空中で一回転して足に闇を纏いながらハネクリボー　ＬＶ９に向けて跳び蹴りの体勢に移り、ハネクリボー　ＬＶ９の拳とＢｌｏｏｄの蹴りがぶつかり合う。
「師匠の全力に、私も全力で応えます!!?これが私の思いをかけた一撃です!!?リバースカードオープン!!?ライフポイントを半分支払い、罠発動!!?魂の一撃!!?」
「っ!!?」

遊花　ＬＰ１５００→７５０

「自分のライフが４０００以下の場合、自分フィールドのモンスターが相手モンスターと戦闘を行う攻撃宣言時にライフを半分払い、自分フィールドのモンスター１体を選択して発動!!?選択したモンスターの攻撃力は相手のエンドフェイズ時まで自分のライフが４０００より下回っている数値分だけアップします!!?対象は勿論、ハネクリボーＬＶ９です!!?」
　遊花の宣言に、俺は目を閉じる。
　そして、柔らかい笑みを浮かべながら遊花にその言葉を紡いだ。
「見事な一撃だった……だけど、やっぱり師匠として、そう簡単に勝ちは譲れないや」
「っ!!?」
「リバースカードオープン!!?カウンター罠、レッドリブートを発動!!?相手が罠カードを発動した時に発動!!?その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする!!?」
「っ……やっぱりありましたか」
「その後、相手はデッキから罠カード１枚を選んで自身の魔法＆罠ゾーンにセットできる。ただしこのカードの発動後、ターン終了時まで相手は罠カードを発動できない!!?」
「デッキからセットするカードはありません……ここで終わり、ですね」
「……ああ」
　俺の言葉に、遊花は悔しそうに表情を歪める。
　しかし、遊花は首をブンブンと振ると、満面の笑みを浮かべて俺を見た。
「今はやっぱり……まだまだ師匠には勝てないです。だけど、いつか絶対、師匠に勝てるぐらい強くなります。だから……だから、今日は、本当にありがとうございました、師匠!!?」
「……ああ、こちらこそありがとう、遊花。決めろ、ＤＨＥＲＯＢｌｏｏｄ!!?デソレイションフィアー!!?」
　俺の言葉にＢｌｏｏｄが身体に力を込める。

すると、徐々にハネクリボーＬＶ９の身体を押していき、そのままハネクリボーＬＶ９の身体を貫いた。
それを見て、遊花は目を閉じ、少し震えた声でぽつりと呟いた。
「……でも、やっぱり悔しいなぁ」
遊花　ＬＰ７５０→０

第５１話　選択する運命

★

デュエルが終わり、立体映像が消えていく。
消えていくＢｌｏｏｌＤの姿を見ながら、師匠は深く息を吐く。
「……ふぅ、何とか勝てた、か。本当に、強くなったな、遊花」
「いえ、私なんて、まだまだです。もっともっと頑張って師匠に追いつかないといけませんから‼？」
「……目標にしてくれるのは素直に嬉しいんだが、そう自分を卑下することもないと思うんだがなぁ」
私の言葉に、師匠は苦笑を浮かべる。
師匠に褒められるのは嬉しいけど、やっぱり現状で満足してはダメだ。
師匠の後を継ぐのであれば、もっともっと腕を磨かないといけない。
それに、異世界で交わした約束もある。
『お互い強くなったら、お互い全力でデュエルしよう』
その約束を果たすためにも、私はまだまだ強くなりたい。
……少なくとも、自分の強さにちゃんと自信が持てるぐらいには。
「遊騎、遊花、お疲れ様」
「あ、闇先パイ」
「２人とも、凄くいいデュエルだった。特に遊花はペンデュラム召喚も使えるようになったし、大進歩。えらいえらい」
「ありがとうございます……えへへ」
そんなことを考えると、いつの間にか観戦場所から闇先パイが私達に近付き、そんなことを言いながら背伸びをして私の頭を撫でてくれる。
そんな闇先パイは無表情ながらも嬉しそうに、そしてちょっと困っ

ているような声色で言葉を続ける。
「これで大会は終わり。だけど、ちょっと困ったことがある」
「困ったこと……ですか？」
「うん。遊花に勝ったんだから優勝者は遊騎。だけど、主催者も遊騎。元々この大会は記録に残すには問題があったけど、遊騎が優勝したことでより残すことが出来ない大きな問題になった」
「あ」
闇先パイの言葉に、師匠が冷や汗をかきながら引き攣った表情を浮かべる。
確かにこの大会は師匠が私のために開いてくれた大会だけど、それで師匠が優勝したことにどんな問題があるんだろう？
師匠や闇先パイが困った表情を浮かべている理由が分からず首を傾げていると、闇先パイは寂しそうな表情で口を開く。
「今回の大会では現在のプロリーグで活躍しているようなプロ決闘者が半数は出てる。その中で決勝を戦ったのがプロリーグを追放された遊騎と、まだデュエルアカデミア生である遊花。しかも、主催者であった遊騎がそのまま優勝したとなると、出来レースを疑われる」
「っ⁉？そんなわけーーー」
「勿論、今日実際にデュエルをした皆はちゃんと分かってる。だけど、外部から見たらそうは思われない。世の中には、人の頑張りを悪意で塗り潰そうとするような輩が確かに存在する。そんな輩には、この大会の結果はうってつけなの……本当に、下らない」
「そんな……」
闇先パイが吐き捨てるかのようにそう告げる。
私や師匠がデュエルで勝ったことで、そんなことになるなんて……
闇先パイの言葉に、私は思わず泣きそうになりながら師匠を見る。
そんな私を見て、師匠は苦笑を浮かべながら、私の肩に手を置いた。
「そんなに泣きそうな顔をするなって。遊花が責任を感じることなんて何もないんだ。遊花は純粋に、今日の自分の成長を喜べばいいんだよ」

「でも……」
「でもも何もないって。それとも、遊花は今日、ここで行われたデュエルはあってはいけないと思うか？デュエルを通じて感じたことも、ぶつかった思いも、全部無かった方が良かったと思うか？」
「っ‼？そんなわけないです‼？今日の大会があったから、私は色んなことを知ることが出来たんです‼？師匠のことも、闇先パイのことも、リーネさんのことも、美傘さんのことも、他の人達のことだって、たくさん知ることが出来たんです‼？それなのに、今日のことが無かった方がいいなんて、そんなことあるわけないです‼？」
師匠の言葉に、私は思わず大声で反論してしまう。
そんな私の言葉を聞き、師匠は安心したように柔らかく笑った。
「なら、それでいいんだよ。誰になんと言われようと、どう思われようと、俺達がそのことに意味を見出せたならそれでいいんだ。言いたい奴には勝手に言わせとけ……まあ、1番迷惑をかけちまう俺が言えたことじゃないんだがな」
「ふふっ、確かにね。だけど、遊騎はそれでいいし、遊花もそれでいい。2人が気にすることなんて何もない。元々、この大会を記録に残すには問題が多すぎるから今更多少の問題が増えても大して変わらない。それに、記録には残せなくても、記憶には残る。私達が忘れなければ、今日のことは無くならない」
「……闇がそういうと重いな」
「えへん。伊達に記憶を失ってないから」
「それも胸張って言えることじゃないけどな……俺もやらかした側だから大差は無いが」
そういって、師匠と闇先パイが冗談めかして笑う。
そんな2人を見て、私は思わず自分の手をギュッと握りしめる。
ああ、やっぱりこの人達は強い。
デュエルだけじゃなくて、心も。
私も、いつかはこの人達のようになれるだろうか？
どんなに辛いことがあっても、一緒に笑い飛ばすことが出来るように。

「それじゃあこれにて大会、『Ｂｅｓｃｈｅｉｄｅｎ』の全日程を終了する。本日はこのような大会に参加してくれて感謝する。一応、この大会の参加者にはこちらで賞品は用意させて貰っている。といっても、成績に応じたこの『Ｎａｔｕｒａｌ』に置いてあるカードの交換券みたいなものだがな。順次配っていくから、交換したいものが決まったら俺か島さんに声をかけてくれ。そして大会が終わったため、ここからは自由時間だ。フリーデュエルを行ったり、積極的に交流してくれて構わない。それでは、これにて解散‼？」

師匠の言葉に、観戦していた参加者達は思い思いに散っていく。

店内のショーケースを見て回る人や、デュエルを始める人、今日のデュエルについて話す人など参加者達の動きは様々だ。

そんな光景を思わずボーっと眺めていた私に、話しかけてくる声があった。

「お疲れ様なのです、遊花ちゃん」

「あ、リーネさん」

「遊騎君とのデュエル、すっごく良かったのです。冗談抜きで今すぐ遊花ちゃんが欲しくなっちゃたのですが……流石にデュエルアカデミアを中退して貰うわけにもいかないですからね、来年まで我慢するのです」

「あ、あはは……私も流石に中退はしたくないので、その方が助かります」

本当に残念そうなリーネさんを見て、私は思わず苦笑いを浮かべる。

せっかくこの間退学になりそうだった状況を覆したばかりなのに、中退するのは流石に勘弁してほしい。

「待ち遠しいのですが、その待っている間に遊花ちゃんがまた成長してくれるのをを楽しみに待たせて貰うのですよ。それじゃあ、リーネはここで失礼させて貰うのです」

「えっ⁉？もう帰っちゃうんですか⁉？」

「あはは、リーネも残念なのですが、まだ片付けないといけない仕事を会社に残してきちゃったので、仕方がないのですよ。遊花ちゃんの採

用試験に関しては、闇ちゃんを通じてまた後日お知らせするのです」
「……もしかして、ご迷惑をかけちゃいましたか？」
私のために開かれたこの大会に出るためにお仕事を残してまで参加してくれたのであれば大変心苦しい。
私が申し訳なく思っていると、リーネさんは慌てたように手を振った。
「ち、違うのです‼？遊花ちゃんは何も悪くないのですよ？ただリーネがお仕事を片付けるのが苦手なだけなのです‼？」
「それは大声で言えるようなことでもないだろうが、アホめ」
「あぅ‼？痛いのですよ、遊騎君‼？」
「お前がアホなことを大声で宣言してるからだろうが……」
リーネさんの声が聞こえたのか、交換券を配っていた師匠が呆れた表情を浮かべながら近づいてきてリーネさんの頭を軽く小突く。
「というか、お前の場合は仕事が残るのはサボり癖があるからだろうが。やる気さえ出せば冗談みたいなスペックで仕事を片付ける癖に」
「だってだって、遊騎君がいなくなってからは息抜きがあんまり出来なくなっちゃったので、息が詰まっちゃうのですよ。炎君、真面目過ぎるのです。遊騎君がいた時はなんだかんだ言って遊騎君は息抜きに付き合ってくれてたのに、炎君はなかなか息抜きさせてくれないのです」
「俺だって別に付き合いたくて息抜きに付き合ってた訳じゃないんだが……」
「うぅ～遊騎君、やっぱり『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に戻って来る気は無いのです？書類仕事だけでも手伝ってくれたらリーネは凄く助かるのですが……」
リーネさんは何処か冗談めかしながら、それでいて真剣な表情で師匠にそんなことを言う。
そんなリーネさんに、師匠は苦笑をしながらも首を振る。
「悪いが、お前達に迷惑がかかるのが分かってて戻るつもりはない。ただでさえ、お前達には借りが多いんだ。これ以上借りを作ってられないさ」

「リーネはそんなこと気にしないのですが……仕方がないのです。頑固な遊騎君の説得はまた時間が出来た時にゆっくりするのです」
「……諦める気は？」
「無論、ないのです‼？リーネは強欲ですからね、遊騎君が戻って来てくれるまで何度だって言うのですよ」
胸を張ってそう告げるリーネさんに、師匠は困ったような表情を浮かべながらリーネさんに背を向ける。
そして呟くような声で口を開いた。
「……まあ、考えてはおく」
「‼？えへへ、言質は取ったのですよ？」
「あくまで考えておくだけだ」
「それでも十分なのです‼？それじゃあ、リーネは本当にここで失礼するのです‼？遊騎君、遊花ちゃん、また、なのです‼？」
「あ、はい‼？また‼？」
「……ああ」
リーネさんは心底嬉しそうな笑顔を浮かべると、そのまま『Ｎａｔｕｒａｌ』を出て行った。
私はリーネさんが出て行くのを見送ってから、師匠の方を見る。
私の視線に気づいたのか、師匠は苦笑を浮かべながら口を開く。
「……はぁ～甘いよな、俺。困ってる奴は、どうしても放っておけない」
「いえ、師匠は甘いんじゃくて、優しいんですよ。それでこそ、私が尊敬する師匠です‼？」
「……そんなんじゃないと思うんだけどな。とりあえず、ほら、遊花にも交換券渡しとくな」
「あ、ありがとうございます。といっても、私の欲しいカードは師匠や闇先パイが譲ってくれたので、特に思い浮かばないのですが……」
「……まあ、今すぐに交換しないといけないわけじゃないし、ゆっくりカードを見たり、他の奴らと話ながら考えればいいさ。それより、遊花もあっちでデュエルしてる奴らに混ざってきたらどうだ？他の奴らのデュエルを見ることも勉強になるだろうからな」

「そうですね……はい。それじゃあ、色々見てじっくり考えたいと思います」
「ああ、それじゃあまた後でな」
「はい!!?」
師匠が私にひらひらと手を振って、島さんがいるカウンターに向かって行く。
私はそんな師匠を見送り、みんながいるデュエルスペースに移動する。
デュエルスペースではちょうど美傘さんが大地君とデュエルを行なっており、それを桜ちゃんと霊華さん、そして不知火さんが観戦していた。
「オッドアイズファンタズマドラゴンで電磁石の戦士マグネットベルセリオンを攻撃!!?この瞬間、ペンデュラムスケールのオッドアイズファントムドラゴンの効果発動!!?1ターンに1度、もう片方の自分のPゾーンにオッドアイズカードが存在する場合、自分の表側表示モンスターが相手モンスターと戦闘を行う攻撃宣言時にその自分のモンスターの攻撃力はバトルフェイズ終了時まで1200ポイントアップする!!?」

オッドアイズファンタズマドラゴン
ATK3000→4200

「っ、攻撃力4200!!?」
「さらに速攻魔法、アクションマジックーフルターン!!?このターン、モンスター同士の戦闘で発生するお互いの戦闘ダメージは倍になる!!?」
「なっ!?」
「そしてオッドアイズファンタズマドラゴンの効果発動!!?ファントムワールド!!?このカードが相手モンスターに攻撃するダメージ計算時、その相手モンスターの攻撃力はそのダメージ計算時のみ、自分のEXデッキの表側表示のペンデュラムモンスターの数×1000

ポイントダウンする!!?」
「っ!!?ってことは……!!?」
「私のＥＸデッキにいるペンデュラムモンスターはＥＭドクロバットジョーカー、オッドアイズペルソナドラゴン、そしてオッドアイズペンデュラムドラゴンの３枚!!?よって、電磁石の戦士マグネットベルセリオンの攻撃力は３０００ポイントダウン!!?」

電磁石の戦士マグネットベルセリオン
ＡＴＫ３０００→０
「Ｗｅｌｌ（それじゃあ） ｔｈｅｎ（フィナーレだよ） ｆｉｎａｌｅ!!?幽幻のファンタズマミラージュ!!?」

大地　ＬＰ６５００→０

「だあー!!?負けた!!?やっぱりプロ決闘者って強え!!?」
「ふぃ～危なかった～遊花ちゃんといい、霊華ちゃんといい、本当に最近のデュエルアカデミア生は凄いなぁ。うかうかしてたらすぐに抜かれちゃいそうだよ」
「うん、流石の大地もプロ決闘者相手には分が悪いみたい」
「流石に九石がプロ決闘者相手に何回も勝ったら驚くわよ。デュエルアカデミアでは私達より順位下なんだから」
「九石は十分健闘していたと思うぞ。デュエルアカデミア生の間でプロ決闘者とデュエル出来る機会自体多くはないだろうが、その上で１度勝利しているのだからな」
「大地君、美傘さんとデュエルしてたの？」
「お、遊花、こっちに来たのか。美傘さんにもデュエルして貰ってたんだけどさ、やっぱプロ決闘者ってすっげぇ強えな!!?全然勝てねぇぜ」
そう言って大地君は楽しそうに笑う。
そんな大地君を見て、私は大地君とデュエルをしていた美傘さんと

一緒に苦笑いを浮かべる。
「デュエルしただけでここまで喜ばれたのは流石に初めての経験だな。なんというか、凄いね、大地君は」
「あ、あはは……大地君がすみません」
「ううん、気にしないで。喜んで貰えたなら私も嬉しいからさ。それより、遊花ちゃんもお疲れ様!!?ペンデュラム召喚、ばっちり決めれてたね!!?」
「はい!!?本当にありがとうございました、美傘さん!!?」
「にひひ、どういたしまして!!?遊花ちゃんが喜んでくれたなら私も嬉しいよ」
　そういって美傘さんが嬉しそうに笑う。
　そんな話をしていると、桜ちゃん達が私に気が付いたのか声をかけてくる。
「遊花、お疲れ様。結束とのデュエル、惜しかったわね」
「ありがとう、桜ちゃん。うん、私も師匠に追いつけるようにもっと頑張らないとね」
「全ての召喚方法を使えるようになったのに、まだ上を目指すのね。うん、遊花らしくていいと思う」
「えっと、それって褒められてます、霊華さん?」
「勿論。友達がこんなにも成長してるのだから、私も負けてられないわ。美傘さん、次は私とデュエルして貰ってもいいかしら?」
「にひひ、勿論いいよ!!?」
「なら、私は炎さんに挑もうかしら?弟子として、お師匠様には稽古をつけて貰わないといけないものね」
「……だからお師匠様は止めてくれ。いいだろう、師匠になると決めたからには弟子の成長を促すのも大事な使命だからな」
「今度は桜達がデュエルするのか。なら、遊花、俺とデュエルしないか?」
「うーん、今はちょっと遠慮しとこうかな?カードの方も見ておきたいし」
　大地君のデュエルの誘いに、私は首を振る。

まださっきまでの師匠とのデュエルの余韻が残ってるから、今はもう少しだけ、この余韻を感じていたい。
そんな私の返答に、大地君は残念そうにしながらも、首を振っていつものように笑った。
「そっか。まあ、あれだけ凄いデュエルをした後だもんな。じゃあ、俺は他の人にデュエルを挑みに行ってくるぜ‼?とりあえず、闇さんにデュエルを挑んでみるかな、世界ランキング４位ってどれだけ強いのか実際に体験して見てぇし‼?」
「……大地君って、結構怖いもの知らずだよね」
そんな私の呟きが聞こえなかったのか、大地君は楽しそうに笑いながら闇先パイの方に走っていった。
闇先パイなら断らないとは思うけど、大地君、闇先パイ相手にどうデュエルするつもりなんだろう?
大地君のデッキって闇先パイのヴェルズオピオンを出されたら動けなくなっちゃうと思うんだけど……
大地君にデュエルを挑まれて驚いている闇先パイを横目に、私は今後はショーケースやストレージがある場所に移動する。
そこでは天雷君と桜糀さんがショーケースの中にあるカードを見ており、そこから少し離れた場所で竜河さんと空閑君が何かを話しているようだった。
天雷君と桜糀さんはともかく、竜河さんと空閑君は何を話しているんだろう?
不思議に思って首を傾げていると、竜河さんは私に気付いたのか面白そうに笑いながら空閑君に何かを口にする。
竜河さんの言葉を聞いた空閑君はこちらを見て、渋い表情を浮かべると竜河さんに何かを告げて私の方に近付き、口を開く。
「栗原」
「えっと、うん。どうしたの、空閑君?」
「お前は俺様が認める強者だ。だからこそ、俺様はもっと強くなり、次にデュエルする時には、必ずお前に勝つ」
「え、えっと?」

空閑君の突然の言葉に私は首を傾げる。
そんな私を見て、空閑君は鼻を鳴らすと私の横を通り過ぎて『Ｎａｔｕｒａｌ』を出て行った。
突然のことに私が首を傾げていると面白そうに笑いながら竜河さんが私に近づいてきた。
「クックック、本当におもろいやっちゃな」
「竜河さん。空閑君と何を話してたんですか？」
「ああ、ちょいとワイのチームにスカウトさせて貰うただけや」
「‼？空閑君、竜河さんにスカウトされたんですか⁉？うわぁ、凄いなあ、空閑君」
「……あんさんそれなんの皮肉……いや、天然なんやろうな。今日の短い付き合いでもそれぐらいは分かるわ」
「？」
竜河さんのプロチームにスカウトされるなんて空閑君はやっぱり凄いなと尊敬していると、竜河さんは苦笑いを浮かべながら脱力したように肩を落とす。
何か変なことを言っただろうかと首を傾げていると、竜河さんは気を取り直すように首を振った。
「まあ、あんまいい反応は貰えへんかったけど、最後の言葉は効いたみたいやからな。あの感じやと、多分ウチに来てくれるやろ」
「一体何を言ったんですか？」
「残念やけど、それはヒミツや。まあ、栗原も足元を掬われんよう頑張りや」
「は、はぁ」
「ほな、向こうではデュエルしてるようやし、ワイも混ざってくるかいな。ほなな、栗原」
「あ、はい」
竜河さんの言葉の意味が分からず首を傾げていると、竜河さんは楽しそうに笑いながら桜ちゃん達がデュエルしているデュエルスペースに向かっていった。
……一体何だったんだろう？

「あ、栗原さんもカードを見にきたの？」
「天雷君。うん、天雷君はもう決めたの？」
「うん、この轟雷機龍―サンダードラゴンにしようかなって」
そういって、天雷君が指を指したのはリンクモンスターのサンダードラゴン。
雷族モンスターを2体以上求めるリンク4のモンスターだから普通なら少し難しそうだけど、天雷君のデッキはエレキモンスターを特殊召喚するためにフォトンリードや地獄の暴走召喚が入ってるからそこまで難しくはないのかも。
雷族モンスターに付加する耐性も攻撃力が低めなエレキモンスターを守るのに使えるし、確かに天雷君のデッキにはぴったりだ。
「そうだ‼？天雷君、サンダードラゴンなんていつデッキに入れたの？前に私とデュエルした時には入ってなかったよね？」
「えっと、今日大会があるから昨日の夜にデッキの調整をしててその時に。前の期末試験の時に栗原さんも宝月さんも新しい戦術を試してたみたいだから、僕ももっと色々な戦い方を試してみたいなって思って」
そういって天雷君が自分のデッキを見て笑顔を浮かべる。
私と桜ちゃんがきっかけで新しいカードをデッキに加えたって言われると少し恥ずかしい。
そしてサンダードラゴンが加わったことでただでさえ手強かった天雷君のデッキはさらに強化されている。
うぅ、また天雷君に勝つ道が遠のいちゃったかも。
「私も負けてられないなぁ……」
「あはは、準優勝した栗原さんにそう言われるのは少し変な気分だけど……それじゃあ僕は島さんを呼んでくるから」
「うん、私も何かデッキに加えれそうなカードがないか探して見るね」
そういって、天雷君が島さんを呼びに離れていく。
私は結局天雷君に1度も勝てていない。
天雷君がもっと強くなったなら、これ以上引き離されないように頑張らないと。

そんなことを考えながら、私もショーケースの方に近づいていく。
「あ、遊花さん……」
私がショーケースに近づくと、桜糀さんがこちらに気付いたのか視線を向け、申し訳なさそうに目を伏せる。
……もしかして、まだ1回戦での師匠との事を気にしているのだろうか？
そのことに関しては理由も教えてもらったし、師匠にも謝ってくれたんだから私は気にしてないんだけど……うーん、よし‼？
「桜糀さんは何か欲しいカード見つかりましたか？」
「えっ⁉？いえ、私が使用している花札衛は色々と使用制限が多いので、なかなか相性が良いカードは見つからないので……」
「あ、確かに花札衛モンスター以外なら墓地にいったり特殊召喚効果を使えば花札衛モンスターしか特殊召喚出来なくなる縛りがあるんでしたよね。でもでも、絶対に花札衛モンスターしか出せなくなるわけじゃないですし、私も手伝いますからＥＸデッキのモンスターで探して見ましょう‼？」
「えっと、あ、あの、遊花さん？」
戸惑う桜糀さんの手を引き、ＥＸデッキのカードが置いてあるショーケースの前に移動して桜糀さんのデッキに入りそうなカードを探していく。
「うーん、どんなカードがいいんでしょう？花札衛はチューナーモンスターがいるのでシンクロモンスターでしょうか？でもでも、高レベルモンスターを展開できるので大型エクシーズモンスターの召喚も狙えるんですよね」
「‼？エクシーズ召喚は考えたことがありませんでした。ですが、花札衛モンスターはそれぞれのモンスターのレベルが違いますのでエクシーズ召喚を狙うのはやはり難しいですね」
「それなら、レベルを変更できるカードを加えてみたらどうでしょうか？ちょっと花札衛モンスターの効果の成功率は下がっちゃいますけど、その分色々なエクシーズモンスターに繋げれるようになれば戦術の幅は広がりますし」

「……遊花さんは色々な事を考えているのですね。私にはそのような発想には至れませんでした」
「えへへ、常識に囚われてはいけない。一見変わった発想が、思いもよらない結果をもたらすのがデュエルだって、闇先パイにいつも教えて貰ってますから」
「冬城プロに……あの、遊花さん」
「？どうかしましたか？」
「……私は、遊花さんの師である遊騎さんを侮辱してしまいました。そのことを、遊花さんは怒っていないのでしょうか？」
「……やっぱり、そのことを気にしていたんですね」
私がそう尋ねると、桜糀さんは暗い顔で力無く頷く。
そんな暗い表情を浮かべる桜糀さんに、私はーーー
「えい‼？」
「ひゃ‼？ゆ、遊花さん？」
ーーー背伸びをして、桜糀さんの頬に手をおき、顔を両手で挟んだ。
うぅ、身長差があるから結構疲れる……でも、桜糀さんの暗い表情なんて私は見たくない。
「桜糀さんは気にし過ぎです。いや、２年間も両親の事故を引きずってデュエルが出来なかった私が言えた試しではないかも知れませんが……それでも桜糀さんはちゃんと師匠に謝ってくれました。だから、桜糀さんが気にする必要なんて、もうないんです」
「ですが……」
「それに、桜糀さんは私を心配してくれただけなんです。それなのに、私が怒れるわけないじゃないですか。桜糀さんが師匠や私にあんな厳しいことを言うことになったのは、私達に問題があるからなんです。プロリーグから追放されたプロ決闘者と、その弟子。私が桜糀さんの立場でも、きっと心配しちゃいます。だから、桜糀さんが必要以上にそのことを抱える必要はありません」
今回の桜糀さんの一件は、これからの私達に必ず降りかかってくる問題だ。
私が師匠の……プロリーグから追放された元プロ決闘者、結束

遊騎の弟子である限り、必ず今回のような侮辱や嘲笑は降りかかる。
　それでも……
「それでも、私は師匠の弟子ですから。他の誰でもない、結束　遊騎の弟子ですから」
　そういって、桜糀さんに笑顔を見せる。
　そう、誰になんと言われようと、私は師匠の弟子だ。
　どんな逆境でも、笑顔で、楽しそうに切り抜けて、皆を驚かせる……あの人の弟子だ。
「師匠は、どんなに謂れ無い嘲笑を受けようと、折れずに頑張ってきました。だから、その弟子である私も、そう簡単には折れません。師匠が歩んで来た道は、誰にも非難される謂れはないということを証明して、今日みたいにたくさんの人の前で師匠と一緒にデュエルが出来るようになるまで、私は絶対に諦めません」
「遊花さん……」
「だから、もしそれでもまだ桜糀さんが罪悪感を感じるというのなら、また師匠とデュエルをしてくれませんか？」
「結束さんと、デュエルを、ですか？」
「はい。師匠はこの街では悪名が高いせいで、誰ともデュエルをすることが出来ませんでした。あんなにデュエルが好きなのに……あんなに、楽しそうにデュエルをする人なのに……それを奪われて……だから、桜糀さんがよろしければまた師匠とデュエルをしてあげてください。そうしてくれたら、きっと、師匠は喜びます」
　私がそう言うと、桜糀さんはしばらくの間驚いた表情を浮かべ、それからとても優しい笑みを浮かべた。
「ふふっ……遊花さんは、本当に素敵な方ですね……承りましたわ。それが、私の罪滅ぼしになり、遊花さんや結束さんに喜んでいただけるのであれば」
「ありがとうございます、桜糀さん」
「紅葉、でいいですよ、遊花さん。私達、もうお友達ですから」
「‼？はい‼？紅葉さん‼？」
「それでは遊花さん、私のデッキに加えれそうなカードを探すのを手

伝って貰っても構いませんか？彼の方とデュエルをするのであれば、精一杯楽しんでいただきたいので」
「はい‼？勿論です‼？」
私は紅葉さんと笑い合い、一緒にショーケースの中を覗き込み、カードを探す。
大切なお友達が……また1人増えた。

ーーーーーーー

☆

「……ふぅ、何とか終わったか」
「お疲れ様だね、遊騎君。コーヒーはいるかい？」
「島さん……ああ、いただこうかな」
遊花との決勝戦が終わって数時間。
俺と島さん以外に誰もいない店内で、島さんに渡されたコーヒーを飲む。
あれから、しばらくの間参加者達の交流は続き、１９時を回ったあたりで完全に解散となった。
デュエルアカデミア生達をあまり遅くまで外出させるのも良くないし、プロ決闘者達は明日にはまたそれぞれの仕事がある。
だからこそ、切り上げるにはちょうどいい時間帯だった。
俺は片付けを手伝うと言って聞かない遊花を闇と宝月に連れて帰って貰い、島さんと2人で大会の後片付けを行ない、ようやく一区切りがついたところだった。
「……ふふっ」
「島さん？どうかしたのか？」
「いや、まさかまた君が楽しんでデュエルをする姿が見れる日が来たのかと思うと感慨深くてね。これも、遊花君のおかげかな？君は本当にいい弟子を持ったものだ」
そういって、島さんが嬉しそうに笑う。

そんな島さんに、俺はコーヒーカップを覗き込みながら思わず言葉を漏らす。
「……俺、ちゃんと遊花の師匠をやってあげれてるのかな？」
「不安かい？」
「そりゃあ……まぁ。俺はこの街では大罪人だし」
「君は周りにはあまり弱味を見せずに1人で思い悩むのが悪い癖だね」
「うぐっ……自覚はしてるけどさ」
「ただ大罪を犯しただけの人間なら、遊花君はあそこまでの笑顔と信頼は見せていないさ。君は十分、師匠として上手くやれているよ」
「……島さんにそう言われると、少し安心する」
「それは良かった。私は君に何もしてあげられなかったからね」
そういって、島さんは寂しそうに目を細める。
そんな島さんの言葉に、俺は強く首を振る。
「そんなことない‼？島さんがいなかったら、俺は今ここにはいなかった‼？両親がいなくなった俺を支えてくれたのは島さんだ‼？だから、島さんが俺に何も出来てないなんてことはない‼？」
「遊騎君……」
「だから、そんな悲しいことは言わないでくれ。俺の方こそ、島さんに何も返してあげられなくて、ごめん」
そういって頭を下げる俺を見て、島さんは苦笑を浮かべながら口を開く。
「……全く、それこそそんなことはないんだけどね。君は私に十分色々なものをくれたよ。君がいてくれた日々は、今でも色褪せることはない私の宝物だからね」
「島さん……」
「だからこそ、例え君がこの街で大罪人と呼ばれていようと、私にとって、君は変わらず1番大切な宝物だ。だから、迷惑だなんて考えなくてもいい。血は繋がっていなくとも、私達は家族なのだからね」
「……ありがとう」
「ああ、こちらこそ。さて、そろそろ今の君の居場所に帰った方がいい

んじゃないかい？あまり遅くなってしまうと、可愛い弟子が君のことを心配してしまうよ？」
「……それは島さんよりも俺の方がよく分かってるよ」
「ははは、本当にいい弟子を持ったものだね」
嬉しそうに笑う島さんを見て、俺はなんとなくばつが悪い感じがして、目を逸らす。
そこで目に入ってきたショーケースを見て、俺は島さんに頼みたかったことを思い出す。
「そ、そうだ、島さん。ちょっと探して欲しいものがあるんだけど……」
「おや、頼みたいこと？また遊花君へのご褒美かい？」
「いや、まあそれもなくはないんだけど、そっちじゃなくてーーー」
俺は島さんに頼みたかったことを話す。
俺の話を聞き、島さんは興味深そうな表情を浮かべる。
「成る程ね。別に構わないが、またどういった心情の変化なんだい？」
「……遊花を見てて思っただけだよ。まだまだ負けてられないって」
「ふふっ、そうかい。そういうことなら喜んで協力させて貰おう」
「ありがとう。それじゃあ、今日のところは遊花達のところに戻るよ……島さん」
「？なんだい？」
そういって、店の扉に手をかけたところで、島さんの方を振り向かずに、俺は気恥ずかしく思いながらも、その言葉を口にする。
「その……たまには、この店にも帰ってくるから」
「‼？……ああ、いつでも帰っておいで。この店も、君の家なのだから」
「……ああ。それじゃあ、いってきます」
「ふふっ、いってらっしゃい、遊騎君」
そんな島さんの言葉を耳に、俺は店を出て、置いていたバイクに跨って帰路に着く。
……これで俺も、少しは遊花みたいに前に進めたのかな？

そんなことを思いながら、俺は夜の街にバイクを走らせるのだった。

ーーーーーーー

「結構遅くなっちまったな」

栗原家の玄関口につき、腕時計に目をやると現在の時刻は『Ｎａｔｕｒａｌ』の片付けと、その後に島さんと話し込んでいた為に２２時を回っていた。

この時間ならば、遊花達はもう眠っているだろうか？

そんなことを考えながら、玄関の扉を開け、家にあがる。

するとその音が聞こえたのか、リビングの方からぱたぱたとした足音が近づいてきた。

「師匠、お帰りなさい‼？遅かったですね、桜ちゃんも闇先パイももう寝ちゃいましたよ？やっぱりお手伝いした方がよろしかったでしょうか？」

「遊花、まだ起きてたのか？いつもならもう寝てる時間だろうに」

リビングから玄関に現れたのは水色のワンピースのパジャマに真っ白なエプロンを身につけた遊花だった。

驚いた表情を浮かべる俺を見て、遊花は恥ずかしそうに頬を掻く。

「えへへ、なんだか眠れなくて……それに、やっぱり師匠を待っていたかったですから」

「俺を？」

「はい‼？今日は、本当にお疲れ様でした、師匠。ご飯にします？お風呂にします？」

「ん……じゃあ先に晩御飯をいただこうかな？流石に腹が減ったからさ」

「お任せください‼？そろそろ帰ってくるかなって思ってたので、食べられるように準備だけはしてたんです。すぐに作っちゃうので少々お待ちください」

「ああ、別に急がなくていいからな」

リビングに移動し、テーブルの椅子を引いて座り、キッチンで料理を作る遊花を眺める。
キッチンで料理を作る遊花はどこかいつもより嬉しそうで、しばらくすると、遊花が料理を持ってテーブルに運んできた。
「お待たせしました‼？時間が時間なのであまり大したものは作れませんでしたが、どうぞ召し上がってください」
「いや、ありがとう。いただきます」
そういって、遊花が用意してくれた料理に口をつける。
「うん、美味いな」
「えへへ、よかったです。どんどん食べてくださいね」
「ああ」
料理を食べ進める俺を見て、遊花が嬉しそうに、にこにこと笑う。
あまりにも嬉しそうに笑う遊花を見て、俺は思わず言葉を漏らしてしまう。
「……なんだか、凄く嬉しそうだな」
「えへへ……こうして２人だけで食卓を囲んでいると、師匠が初めて私の家に来てくれた時のことを思い出しちゃって……」
「……そういえば遊花と２人だけだったのは、遊花の家に来た日と遊花が『Ｎａｔｕｒａｌ』に初めて行った日の２日間だけだったな。次の日からは宝月がこの家に住むようになったし」
「だから、懐かしいなって思いまして。なんだかおかしいですよね、まだ師匠と出会ってから１ヶ月しか経っていないのに」
「まあ、それだけ遊花が濃い時間を頑張ったってことさ……少しは頑張った自分に自信が持てたか？」
懐かしむように目を細める遊花に、俺はそんなことを尋ねる。
すると、遊花は真剣な表情を浮かべて首を振った。
「……ちょっとだけは。でも、まだまだ全然足りないです。師匠の弟子と胸を張って言えるようになるには、まだまだ足りないんです」
「そんなに気張らなくてもいいんだけどな……」
「そういうわけにもいきませんよ。今日の大会に出て、よく分かりました。世の中にはまだまだ強い人がたくさんいます。でも、その人達

が今日大会に参加してくれたプロ決闘者の皆さんのように、友好的な方ばかりでは、きっとないです。今日の紅葉さんの一件のように、師匠や師匠の弟子である私に、厳しいことを言う人は、恐らくたくさんいると思います」
「遊花……やっぱりーーー」
　思わず否定的な言葉が出そうになる俺の口を、遊花が手をかざして遮る。
「師匠、それ以上自分を否定するような言葉を出したら、私怒っちゃいますよ？その話は紅葉さんの時に終わらせました。誰がなんと言おうと、私が師匠の弟子を辞めることはありません」
「……悪かった」
「はい。私も偉そうなことを言ってしまい申し訳ありません。でも、この思いだけは絶対に変わりませんから。だから、それだけはちゃんと、師匠に分かってて欲しいなって思ったんです」
「遊花……」
　遊花は1度目を閉じると、確かな意志が込められた真剣な表情を浮かべて俺を見た。
「改めて、私は誓います。私は、どんな逆境でも、笑顔で、楽しそうに切り抜けて、皆を驚かせるデュエルができるプロ決闘者になります。そして、そんな私を導いてくれた師匠が、プロリーグから追放されるような、卑怯者なんかじゃない、誰かの為に戦うことが出来る立派な決闘者なんだって証明してみせます。その夢を叶えるまでは、私は絶対に諦めません。そのためだったら、辛い運命とだって戦ってみせます」
「……」
「だから、師匠も約束してください。その夢が叶うまで、私の師匠でいてくれるって。私と一緒に、運命と戦ってくれるって」
「……何を言っても無駄か。遊花の諦めないって気持ちは、絶対に折れないってことはこの1ヶ月でも十分過ぎる程分かったしな」
　遊花の揺るぎない意志が込められた言葉に、俺は思わず苦笑を浮かべる。

本当に、その意思の強さがあるのなら、俺が師匠である必要はないと思うんだが……だけど、それがお前の望みなんだもんな。
だからこそ、その思いには真剣に答えないといけない。
あの日、身体を震せ、涙を浮かべながらも、運命と戦う決意をした少女の思いを、俺は確かに受け止めたのだから。
「ああ、俺も遊花に誓うよ。遊花が俺を師匠だと思ってくれる限り、俺はいつまでも遊花の師匠だ。そして、弟子である遊花が運命と戦うというのなら、俺もまた、運命と戦う。そして勝ってみせる」
「はい、約束です」
そういってゆびきりをするように、遊花が小指を俺に向かって差し出す。
そんな遊花を見て、俺は柔らかく笑いながら、差し出された遊花の小指に自分の小指を絡めた。
『ゆーびきりげんまん♪ウソついたら針千本のーます♪ゆーびきった♪』
「……ぷっ、飯食ってる時に何やってるんだろうな、俺達」
「あはは、確かにそうですね」
２人でゆびきりをしてお互いに笑い合う。
……今なら、少しだけ前に進める気がした。

ーーーーーと、ここまでなら真面目な雰囲気で終わっていたのかも知れないが、どうやら俺の弟子はそう一筋縄にはいかないらしい。
「さて、ご馳走さま。美味しかったよ」
「はい、お粗末様でした」
「それじゃあ洗い物したら、風呂に入って今日のところは寝るとするかな？」
「あ、ま、待ってください‼？」
「ん？」
食べ終わった食器をキッチンに運ぼうと立ち上がった俺を、同じように立ち上がった遊花が呼び止める。
その表情は先程の話をした時と同じかなり真剣なもので、俺は思わず身構える。
そんな俺に、遊花は少し言葉を詰まらせながらもハッキリとした口調で口を開く。
「あの……ですね。今日の紅葉さんとのデュエルの後にした約束、覚えてますか？」
「紅葉って言うと、桜糀のことだよな？桜糀とのデュエルの後って言うと……」
遊花の言葉に、俺は頭に手を当てながら桜糀とのデュエルの後のことについて思い返す。
桜糀とのデュエルは色々と俺達の問題を浮き彫りにしたデュエルだったが、それが終わった後というと……

ーーーーーーー

『それで、遊花。そろそろ大会を進行したいから離してくれないか』
『嫌です』
『即答かよ……』
『だって、師匠はいっぱい私に心配かけたんですもん。だから今は嫌

です』
『それを言われると辛いんだがな……後で俺にできることならなんでもやってやるから、今は離れてくれよ』
『なんでも……ですか……分かりました!!?そういうことなら離れます!!?』
『お、おう』

ーーーーーー

「……あ」
「師匠、あの時言いましたよね?俺にできることならなんでもやってやるって」
遊花の言葉に、俺の身体から冷や汗が流れる。
そういえば、そんなことを口にしていた。
あの時は不機嫌そうな遊花をどうにかするために咄嗟に出てしまった言葉だったが、今日は色々なことがあったから、まさかそれをちゃんと覚えているとは思わなかった。
「だから……ですね、師匠に、やってもらいたいことがあるんです」
そういって、遊花が俺の目の前にやってくる。
遊花の真剣な声色に、俺は思わず後退りをするが、後退りしてできた距離を遊花はすぐに詰めてくる。
ヤバい、ここまで真剣な遊花は今まで見たことがない。
俺は一体何をさせられるのだろう?
不用意なことを言った過去の自分を恨みながらも、観念して遊花に向き合う。
「あ、ああ。確かに言った……な。分かった、俺にできることなら何でもしてやる」
「本当ですか!!?」
「ああ、師匠として、弟子とした約束を反故にはしない」
そんな俺の言葉に、遊花は心底嬉しそうな表情を浮かべる。
……ああ、言った……言ってしまった。

ここまで嬉しそうな表情を浮かべるなんて、一体俺は何をさせられるのだろう？
「そ、それじゃあ……あ、あのですね、そのですね……」
興奮しているのか頬を赤く染め、何度も言葉を詰まらせる遊花に、俺は身構える。
「すー……はー……それじゃあ、い、言います‼？」
そんな俺に遊花は深呼吸を1つするとーーー
「あの……わ、私の頭を撫でて貰えないでしょうか‼？」
「……は？」
ーーーそんなたわいも無いことをお願いしてきた。
「えっと……それがお願い、なのか？」
「そ、その、今日、私いっぱい頑張ったと思うんです‼？師匠には負けてしまいましたけど、準優勝でしたし‼？」
思わずそう聞き返してしまった俺に、遊花はぶんぶんと手を胸の前で振りながら、言い訳をするように口を開く。
「だから、その、ご褒美、として、褒めて、貰いたいな、なんて、思った、わけでして、その、だ、ダメでしょうか？」
そういって、少し不安そうな上目遣いで遊花が俺を見る。
何というか、本当に拍子抜けするようなお願いに、逆にその程度の願いでいいのかと思ってしまう。
「いや、別に構わないんだが……本当にそんな願いでーーー」
「よ、よかったです‼？それじゃあ、その、お、お願い、します‼？」
再確認しようとする俺の言葉を食い気味に遮り、遊花がちょこんと自分の頭を差し出してくる。
そんな遊花の気迫に戸惑いながらも、俺は要望通りに遊花の頭に手を置き、優しく撫でる。
「……へへへ」
すると、遊花は心底嬉しそうにその表情を緩ませた。
そのあまりの表情の緩みっぷりに戸惑いながらも、遊花が満足するように、撫でる位置を変えていきながら彼女の頭を撫で続ける。
「ふぁぁ～幸せです～」

「……安上がりな幸せだな……」
「ふぁい？なにかいいましたか～ししょ～？」
「……いや、なんでもない」
どんどん表情を緩ませていく遊花を見て、俺はまあいいかと口を紡ぐことにした。
本人がそれで幸せだと言うのなら、余計なことは言うまい。
それにしても……
「～～～♪」
俺に頭を撫でられながら、嬉しそうに表情を緩ませ、鼻歌まで歌いはじめた遊花を見て、ふと思う。
「（犬っぽいなぁ……）」
撫でて貰えないかと不安そうな上目遣いをし、頭を撫でられて嬉しそうに表情を崩している様を見ていると、なんだか犬みたいだと思ってしまう。
あまりの犬っぽさに犬耳と犬尻尾を幻視してしまいそうだ。
「それで、いつまで撫で続ければいいんだ？」
「わたしがまんぞくするまでですぅ～」
「……マジかー」
この状態の遊花が満足することなんてあるのだろうか？
これは思っていたよりも大変なお願いなのかも知れない。
俺はさっきまでの真面目な雰囲気はなんだったのかと思いながら、遊花の頭を撫で続ける。
何だか締まらないが、たまには、こんなのも悪くないかもな？
これから、俺達に襲い掛かる困難は、きっと想像もつかない程辛いものだろう。
だけど、今日の誓いや、こんな穏やかな時間を忘れない限り、俺達はきっと大丈夫だろう。
そんなことを思いながら、夜は更けていく。
俺達の運命との戦いは、まだ、始まったばかりだ。

遊戯王Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ

一章　運命の邂逅

Das Ende

「クックックッ、ハハハハハ‼?‼?また1つ、完成したぞ‼?‼?やはり、私の才能に不可能はない‼?」

薄暗い部屋の中で男の声が響き渡る。

その声色に含まれているのは、抑えきれない歓喜と狂気。

薄暗い部屋の中、ただ1人、男の声だけが響いている。

「へぇーまた新しいカードを作ったんだ。流石だねー」

「‼?‼?ほう、君か。相変わらず神出鬼没だな」

「さっきからいたんだけどなーまあ、気付かれないのも当たり前だけど。私は透明なんだし」

そんな薄暗い部屋に、突如として透き通った幼い少女の声が加わる。

突如現れた少女に、男は近くに置いてあったカードの束を投げると、少女はそれを片手でしっかりと掴んだ。

「おっとと、いきなり投げないで欲しいなー」

「テストプレイが必要だ。そのカード達を適当に街にばら撒いてきて貰いたい」
「あれ？いいの？これはあなたの才能の結晶なんでしょ？」
「使えるプレイヤーが増えなければ意味はない。そうでなければ、ゲームとして成り立たないだろう？」
「ゲームねぇ……まあいいや。面白そうだし、乗ってあげるよ。でも、カードに適応できなかった人は？きっとめちゃくちゃ暴れるよ？」
透き通った、感情がこもっていないような少女の声が男に投げかけられる。
そんな少女の問いに、男はつまらなそうな声を出す。
「それは私の知ったことではない。私の目的はただ１つ……君だって知っているだろう？」
「そうだねーまあ、いいや。それじゃあ、いってくるね。今回は、楽しいゲームになればいいね」
そういうと、まるで初めからその部屋にいなかったかのように、少女の気配が消える。
少女がいなくなった部屋で、男は先程作り上げた闇のカードを掲げて、楽しそうに笑った。
「これで計画も次の段階に移る……精々私の目的の為の良い実験台になってくれたまえ。さあ、闇のゲームのスタートだ」

二章　闇より出でしゲーム
Ｆｏｒｔｓｅｔｚｕｎｇ　ｆｏｌｇｔ……

1章・キャラクター紹介

結束　遊騎（ゆいつか　ゆうき）
男性
年齢　２２歳
身長　１８５ｃｍ
体重　６９ｋｇ
誕生日　４月４日
血液型　Ａ型
好きなもの　逆転　コーヒー
嫌いなもの　火　ナス
デッキ　ＨＣ絵札の三銃士
茶髪のエアリーヘアの元プロ決闘者の青年。
明朗快活で裏表のない性格だが、不器用で直情的なところがある。
また極度のお人好しで困っている人を放っておけず、騙されやすい。
ここぞという時の勝負強さとどんな逆境でも覆すプレイングからプロチーム『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』を世界ランキング２位に導いたチームの初期メンバー。
子供の頃は純粋過ぎる故に同年代の子供に理解されず避けられており、友人と呼べる人間は闇しかおらず、火事で両親を失ってからは、１人だけ生き残ったことで周りから殺人犯なのではと言われのない疑惑を受けいじめられていたが、荒れていた時期をリーネに助けられた。
両親を失った際に自分のことを引き取ってくれた島と、幼い頃からの友人である闇のことを本当の家族のように大切に思っており、自分達の憩いの場所である『Ｎａｔｕｒａｌ』を守るためにプロ決闘者となった。
『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』ではスペードのスートを務めていたが、対戦相手のデッキを盗み見たという嫌疑をかけられ、２年前にプロリー

グから追放されて以来は『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』や『Ｎａｔｕｒａｌ』から離れ、様々な仕事を転々としており、現在は公園の清掃員の仕事をしながら遊花の家に居候をしている。

栗原　遊花（くりはら　ゆうか）
女性
年齢　１８歳
身長　１５５ｃｍ
体重　４７ｋｇ
スリーサイズ　Ｂ８８　Ｗ５６　Ｈ８６
誕生日　５月５日
血液型　Ａ型
好きなもの　家事　花　可愛いもの
嫌いなもの　暗い場所　車　ピーマン
デッキ　全召喚適応クリボー

黒髪で左側頭部をサイドテールにまとめ、いつも水色のリボンをつけているデュエルアカデミア３年生の大人しく心優しい少女。
素直で天然。
困っている人は放っておけないお人好しで、どんな状況でも諦めない不屈の心を持っている。
また、大人しい性格故に一歩引いて物事を見ている為、洞察力があり、物事の本質を捉える鋭い部分がある。
両親を交通事故で亡くして以来後ろ向きな思考に囚われ、デュエルが出来なくなっていたが、両親の形見であるヴァレルソードドラゴンを盗られたところを遊騎に助けられ、その時の遊騎のデュエルに亡くなった父のデュエルの面影を見て遊騎に弟子入りを果たし、遊騎との関わりを得て、徐々に本来の明るさを取り戻し、再びデュエルを行えるようになった。
デュエルモンスターズの精霊に愛されており、彼女のモンスターは基本的に全て精霊化しており、影ながら彼女を守っているが、本人は多少の違和感は持っているが自分のモンスター達が精霊だという事

に気づけていない。
また闇のカードを扱う才能もあり、こちらも本人が気づいていないだけで凶悪な闇のカードばかりを引き寄せ、心を通わしている。
精霊と闇のカード、相反する２つ存在から愛される『愛されし者』という特殊な力を持っているが、その力の詳細は不明であり、本人も自身の力には気づいていない。

宝月　桜（ほうづき　さくら）
女性
年齢　１８歳
身長　１６５ｃｍ
体重　５０ｋｇ
スリーサイズ　Ｂ７２　Ｗ５５　Ｈ８１
誕生日　７月７日
血液型　Ｏ型
好きなもの　食事　裁縫　洋服
嫌いなもの　陰口　勉強
デッキ　トーチテンペスト壊獣カグヤ
キリッとしたつり目に濡れ羽色をした髪をナチュラルミディにしているデュエルアカデミア３年生の少女。
気が強く、憎まれ口をたたいたりするが、根は優しい少女であり、少々おっちょこちょいな大食いキャラでもある。
遊花とは幼馴染で、幼い頃、シングルマザーであることを周囲に馬鹿にされ、孤独だった自分を救ってくれた遊花のことをとても大切に思っており、両親が亡くなってからデュエルを躊躇うようになった遊花のことをいつも気にかけ、自分には出来なかった本来の遊花を取り戻すきっかけとなった遊騎には感謝している反面複雑な思いを抱いている。
壊獣デッキを使用している理由は自身を縛るしがらみや遊花をいじめようとする敵を全部壊せる程強くなりたいと願ったからであり、そんな彼女のデッキには相手の戦術を破壊するための様々なカード

が仕込まれている。
　元々はＥＸデッキを使わない戦術を用いていたが、遊騎との出会いや遊花の成長する姿を見て、遊花に追いつき、壊すだけではなく、大切な人達を守れるようになりたいと新しい自分に変わる決意を固め、島からはファイアウォールドラゴン、闇からはヴァレルガードドラゴンを渡され、新たにリンク召喚を戦術に取り入れるようになった。
　その後、『Ｎａｔｕｒａｌ』において炎との激戦を得て、彼に弟子入りしている。

冬城　闇（ふゆき　やみ）
女性
年齢　２１歳（推定）
身長　１３８ｃｍ
体重　３４ｋｇ
スリーサイズ　Ｂ６５　Ｗ４５　Ｈ６６
誕生日　３月３日（推定）
血液型　ＡＢ型
好きなもの　遊騎
嫌いなもの　警察　運命
デッキ　ヴェルズトリシューラ
基本無表情な黒髪でショートボブの小柄な女性。
　元々は記憶を失って倒れているところを発見され、経歴を調べても見つからなかったことから彼女の本当の名前や年齢などは謎に包まれていて誰も知らない。
　記憶を失い、孤児で一人ぼっちだった自分にデュエルを教え、友人になってくれた遊騎に好意を抱いており、遊騎を追放したプロリーグを潰そうと遊騎に冤罪をかけた元凶を探している。
『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』ではハートのスートを務め、遊騎追放前は氷結界を使い、現在はヴェルズを使用する現世界ランキング４位で通称『氷の女王』と呼ばれる程のプロ決闘者だが、外見が子供にしか見えないため、初対面であればまずプロ決闘者だと思われない。

氷結界を使っていた理由は遊騎の家の火事の現場を直接見て、荒れてしまった遊騎を助けられなかった罪悪感と無力感から遊騎の障害になるものを全て凍らせれるようにという思いで使用していたが、遊騎がプロリーグを追放されることになった際に氷結界の三龍以外のカードに見限られ、使えなくなる。
その後、インヴェルズオリジンと出会い、ヴェルズを使用するようになってからは、例え悪と呼ばれ、全てを破壊することになろうとも遊騎を守り、遊騎の居場所を作るという新たな誓いと覚悟を胸に、闇のカードであるヴェルズ達を使用している。
彼女の性質は闇のカードに近く、闇のカードを引き寄せ、使いこなすことができるが、その反面、デュエルモンスターズの精霊には嫌われており、精霊が宿っているカードには拒絶される。

プロチーム『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』関係者

不知火　炎（しらぬい　ほむら）
男性
年齢　２６歳
身長　１８５ｃｍ
体重　７０ｋｇ
誕生日　８月１３日
血液型　Ａ型
好きなもの　釣り　スパゲティ
嫌いなもの　精霊　もずく
デッキ　不知火ヴェンデット
『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』でダイヤのスートを務める茶髪でセミロングの仏頂面をした青年。
生真面目な性格でいつも仏頂面をしているため、冷徹な印象を受けるが根は優しく正義感が強い。
不器用な部分があり、余計なことを口にしては相手を呆れさせたりする等何かと損をしており、自身もそのことを気にしている。

遊騎が追放された元凶を探るため、プロ決闘者としての仕事の裏ではプロリーグのことについて調べており、そのために危険な橋を渡っては闇のカードであるヴェンデットの力で切り抜けている。
『Ｎａｔｕｒａｌ』において桜との激戦を得て、彼女を弟子にする。
桜が手に入れたファイアウォールドラゴンとは何か因縁があるようで、複雑な感情を抱いている。

天羽リーネ　（あまは　りーね）
女性
年齢　２４歳
身長　１７０ｃｍ
体重　５４ｋｇ
スリーサイズ　Ｂ９４　Ｗ５６　Ｈ８５
誕生日　１１月２３日
血液型　ＡＢ型
好きなもの　デュエル観戦　お姉さんぶること
嫌いなもの　書類仕事　雨
デッキ　芝刈り竹光閃刀姫
長い金髪をポニーテールにした日本人とドイツ人のハーフである青目の女性。
ドイツからの帰国子女で『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の社長。
現在は遊騎の代わりにスペードのスートを務めている。
口癖として最後に「～です」「～なのです」とつける癖がある。
性格はマイペースで天然ボケ。
突拍子もないことを言ったり、何かとお姉さんぶろうとしては遊騎に怒られたり呆れられたりしている。
普段はのほほんとしているが怒ると怖く、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の中でリーネだけは怒らせないという暗黙の了解がある程。
帰国してすぐに自分が偶然助けた遊騎が楽しそうにデュエルをする姿に見惚れ、自分が気に入った遊騎を助けるためと、自分がもっと遊騎のデュエルを見たいがために、遊騎をプロ決闘者にし、『Ｔｒｕｍ

ｐｆｋａｒｔｅ』を作った。
遊花の両親の交通事故はリーネの母親が原因であり加害者の娘ということになっているが、『Ｎａｔｕｒａｌ』での大会を得て遊花と和解した。

御影　治虫（みかげ　おさむ）
男性
年齢　２０歳
身長　１６５ｃｍ
体重　６５ｋｇ
誕生日　９月２２日
血液型　Ｂ型
好きなもの　スポーツ　ゲーム
嫌いなもの　暗闇
デッキ　クローラーシャドール
『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』でクラブのスートを務める黒髪をベリーショートにした青年。
性格は温厚でお人好しだが調子に乗って周囲に流されやすく、傲慢なところがある。
『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』が結成される少し前に、デュエルアカデミアで遊騎とデュエルをする機会があり、遊騎に完敗。
リベンジのために遊騎に付きまとっていたところで、リーネにデュエルの腕を見込まれ、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に加入することになった。
デュエルのセンスはいいのだが調子に乗って油断し、負けることが多く『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の中では１番戦績が悪い。
根が真面目な闇とは犬猿の仲で、会うたびに喧嘩になっている。

雨夜　美傘（あまや　みかさ）
女性
年齢　２０歳

身長　１５８ｃｍ
体重　４６ｋｇ
スリーサイズ　Ｂ７４　Ｗ５４　Ｈ７８
誕生日　１１月３日
血液型　Ａ型
好きなもの　笑顔　驚かせる事　ドーナツ
嫌いなもの　涙　喧嘩
デッキ　ＥＭ天気真竜魔術師レポートオッドアイズ
黒髪のカジュアルショートに黒目と青目のオッドアイの女性。
気さくで人懐っこく、人を驚かせることが大好きな自称エンタメデュエリスト。
フリーのプロ決闘者でありながらフリーのアナウンサーもやっており、実況をしたりゲリラ放送を行う『美傘のデュエルステーション』という番組を行い、ケルンの名物アナウンサーとなっている。
両親が共働きで祖父の家に預けられていた際に、元プロ決闘者の祖父からデュエルを教えてもらい、祖父のような誰かを驚かせて笑顔にさせるような決闘者になるためにプロ決闘者になったが、連敗を続ける日々を送り心が折れそうになった時に遊騎と出会い、遊騎のアドバイスにより救われた。
本人に悪気は無いが、馴れ馴れしくドヤ顔で調子に乗るため相手をイラッとさせやすい。
デッキが丸ごと入れ替わったかのように見える奇想天外なデュエルをし、いつも誰かを驚かせるための戦術や、立体映像を使った演出を考え、見る人が笑顔を浮かべてくれるようなデュエルを行えるように日夜努力している。
『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバーではないが、遊騎への恩返しのため、遊騎がプロリーグから追放された原因を闇や炎と共に調べている。

島（しま）
男性

年齢　不明
身長　２００ｃｍ
体重　８５ｋｇ
誕生日　不明
血液型　不明
好きなもの　コーヒー　若人
嫌いなもの　争い
デッキ　???
カードショップ『Ｎａｔｕｒａｌ』の店長をしているいつも初老の男性。
温厚で優しい性格の持ち主で、遊騎と闇とは小学生の頃からの付き合いがあり、遊騎が事故で両親を失った際、行き場のない遊騎を引き取り、養子とした。
カードショップを経営しているのは半ば趣味であり、自分が気に入ったり、その人に必要だと感じたカードは代価もなく渡すなどしており、客足も少ないため、経営難に陥っている。
客足が少ない自分の店に毎日のように通ってくれていた遊騎と闇を本当の息子や娘のように大切に思っており、いつも気にかけている。
デュエルモンスターズの精霊や闇のカードについて詳しいが、どこからその知識がきているのかは誰も知らない。

デュエルアカデミア生

九石　大地（さざらし　だいち）
男性
年齢　１７歳
身長　１６８ｃｍ
体重　６７ｋｇ
誕生日　９月１日
血液型　Ｏ型

好きなもの　特撮　スポーツ
嫌いなもの　勉強　読書
デッキ　ＥＩＨＥＲＯ磁石の戦士
茶髪ボブヘアーのデュエルアカデミア３年生の青年。
明るく前向きな性格で少々負けず嫌い。
どんな時でもワクワクしたデュエルの出来る相手を望んでおり、同年代で様々な召喚方法を使いこなし、自分と引き分けた遊花を友人であり、共に競い合えるライバルだと思っている。
デュエルの腕はピカイチで、どんな逆境でも覆すような天才的なドロー力を発揮するが、勉強は苦手で、本を読むと頭が痛くなる程であり、授業中はよく居眠りをしている。
使用している磁石の戦士は子供の頃に特撮で放送されていた戦隊モノのロボットとして登場しており、そのヒーローへの憧れから使用している。
また、闇のカードであるＥＩＨＥＲＯも所持しているが、無意識下での制御に成功している。

御子神　霊華（みこがみ　れいか）
女性
年齢　１７歳
身長　１６０ｃｍ
体重　４４ｋｇ
スリーサイズ　Ｂ７３　Ｗ５３　Ｈ７５
誕生日　３月１８日
血液型　ＡＢ型
好きなもの　占い　神社
嫌いなもの　騒音　巫女服
デッキ　スピリットＰＳＹフレーム
銀髪のセミショートに琥珀色の目をしたデュエルアカデミア３年生の少女。
落ち着いた性格でどこか達観しており、掴み所がなく、神秘的な雰

囲気を放っている。
彼女の姓である御子神家は霊能力者の家系であり、彼女自身の才能はかなり高く、波動として周囲の霊魂を感じることができ、不思議な波動を放っている遊花に惹かれ、興味を持ち、友人となる。
御子神家は巫女家系でもあるため、彼女も巫女なのだが、コスプレの一種となった巫女服を居た堪れなく思い着るのを嫌がるなど、普通の少女らしい感性も持っている。
使用しているスピリットは彼女の家系由来のものであり、それに彼女自身が気に入っているＰＳＹフレームを組み合わせ、掴み所がないデュエルを見せる。

天雷　終夜（てんらい　しゅうや）
男性
年齢　１７歳
身長　１５６ｃｍ
体重　５０ｋｇ
誕生日　３月２５日
血液型　Ｏ型
好きなもの　読書　動物
嫌いなもの　喧嘩
デッキ　エレキサンダードラゴン
黒髪をミディアムにしたデュエルアカデミア３年生の小柄な少年。
気弱で大人しい性格でいつも自信がなさそうにおどおどしているが、デュエルになると自信の無さは鳴りを潜め、堅実でありながらも苛烈なデュエルを行い、デュエルアカデミアでトップの成績を誇っている。
デュエルモンスターズの精霊に好かれており、精霊の存在を自覚しているため、召喚する度に擦り寄ってくるエレキモンスターの精霊達には愛情を持って接しており、精霊達のカードが破壊されると悲しむなどその絆も深い。

空閑　騨（くが　だん）
男性
年齢　１７歳
身長　１７８ｃｍ
体重　７５ｋｇ
誕生日　８月２日
血液型　Ｂ型
好きなもの　強者　戦い
嫌いなもの　卑怯者
デッキ　空牙団
ドレッドヘアーの厳つい顔をしたデュエルアカデミア３年生の青年。
取り巻きを引き連れ高圧的な態度を取っているがそれは強さへの自信であり、強い決闘者には一定の敬意を払うなど、根は真面目で律儀な人間。
常に強者との戦いを求めており、デュエルアカデミアへ入学した際に遊花のデュエルを目撃し、一目を置いていたが、その後デュエルが出来なくなった遊花のことを遺憾に思い、再びデュエルをするために因縁をつけていた。

桜糀　紅葉（さくらこうじ　もみじ）
女性
年齢　１７歳
身長　１６８ｃｍ
体重　５０ｋｇ
スリーサイズ　Ｂ８０　Ｗ５８　Ｈ７７
誕生日　９月２３日
血液型　Ａ型
好きなもの　茶道　和菓子
嫌いなもの　機械
デッキ　花札衛

黒髪ロングヘアの上品な雰囲気を纏ったデュエルアカデミア３年生の少女。
物腰が柔らかく柔軟な姿勢の優しい性格だが、少々思い込みが激しく生真面目な部分がある。
実家が古風な雰囲気の甘味処であり、いずれは実家を継ぐことが決まっているが、デュエルをすることも好きであるため、両親に頼み込みデュエルアカデミアに通わせて貰っている。
どうにかして実家の仕事と決闘者を両立することはできないかと思い悩んでいる。

喰代　影竜（ほうじろ　かげたつ）
男性
年齢　１８歳
身長　１８０ｃｍ
体重　７２ｋｇ
誕生日　４月２５日
血液型　Ｏ型
好きなもの　真剣勝負
嫌いなもの　見下すこと
デッキ　カオスドレインドラゴン
黒髪をロングにしたいつも仏頂面をしているデュエルアカデミア３年生の青年。
礼儀正しく、穏やかな性格だが、表情が硬いため他人からはいつも怒っているように見られていることを気にしている。
どんな相手であろうとも全力でデュエルをすることを信条としており、切り札であり戦友（とも）と呼んでいる魂食神龍ドレインドラゴンで真正面からぶつかり、打ち勝つ勝負を行うことに誇りを持っている。

幕間1・炎の試練

★

「ど、どうでしょう？に、似合ってますか？」
「うん、見事に服に着られてるな」
「背伸びしてる感じがして可愛い」
「うぅ、確かに自分でも似合わないなって思いますけど……師匠も闇先パイも酷いです」
紺色のリクルートスーツに身を包んだ私を見て、笑顔でそんな感想を口にする師匠と闇先パイに、私は思わず頬を膨らませる。
不満気に頬を膨らませる私に、師匠は苦笑を浮かべながらさらに言葉を続ける。
「悪い悪い。遊花は童顔だから、どうしても綺麗系の服は似合わないんだよな。まあ、闇よりはマシだろ」
「否定はしない。この体型にスーツが似合わないのは自覚してる」
「そんなことは……ごめんなさい」
「遊花すらフォローを投げ出すレベル……そっちの方がダメージが大きい……」
「ああ‼？ごめんなさい‼？えっと、えっと、ほら、闇先パイはゴスロリとか他に似合う服があるじゃないですか‼？」
「……遊騎、今日は仕事休んで不貞寝する」
「いや、それはダメだろ。とりあえず遊花、テンパってるのは分かるがそれ以上は闇の傷を広げることになるから止めてやってくれ」
「ああ‼？本当にごめんなさい闇先パイ‼？」
少し涙目になりながら師匠に抱き着いて不貞腐れている闇先パイに必死に謝る。
そんな私達を見て、師匠は闇先パイの頭を優しく撫でながらムッとした表情を浮かべた。
「それにしてもリーネの奴、いきなり採用試験の予定なんか送って来

やがって、急すぎるだろ。いくら遊花達が夏休みに入ったとはいえ、まだあの大会から1週間ちょっとしか経ってないってのに……」
「あ、あはは……リーネさんも忙しい人ですから。私なんかに時間を取らせてしまったみたいで申し訳ないんですが……」
「遊花が謝る必要はない。そもそも、私と炎もこの話を聞かされたのは遊花に通知が届いてから。今回のことは間違いなく社長が悪い。こっちの方こそごめん」
「い、いえいえ‼？闇先パイが謝らなくても……」
「いや、謝罪は受け取っとけ。これは『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』側の不手際だからな。あのアホにはこないだ事務所に乗り込んで説教をしといたし、今日直接謝らせるように闇や不知火さんにもいってある。存分に文句をいってやれ」
　そういって少し怒ったような表情を師匠と闇先パイが浮かべる。
　そう、何故私がリクルートスーツに身を包んでいるかというと、今日『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』での採用試験があるからだ。
　いきなりリーネさんから採用試験の日程が送られてきた時には驚いたけど、師匠や闇先パイに履歴書の書き方を教えて貰いながら何とか準備を間に合わせることができた。
　ただ、師匠や闇先パイ曰く、リーネさんの試験は形だけで、採用試験中に本当に履歴書を見るかどうかは怪しいらしいけど。
「それじゃあ闇。遊花のこと、よろしく頼んだぞ？」
「ん、任された。といっても、私も事務所の中まで案内することしかできないけど。今日もプロリーグの試合があるし。しかも治虫も一緒。最悪」
「お前らは本当に仲が悪いな……」
「当たり前。遊騎に付き纏ってたことを私は忘れてない」
「まあ、程々にな。それにしても、宝月の奴起きてこなかったな」
　そういって、師匠が桜ちゃんが眠っている2階の方に視線を向ける。
「桜ちゃん、朝は弱いですから……学校がある時も結構頑張って起きてきてるんですよ」

「だからってちょっと弛み過ぎだとは思うけどな。もう9時になるぞ」
「桜のことだから、遊花のことが心配で眠れなかったとか？」
「ああ、それはありそうだな」
「あはは……それではそろそろいってきます。一応リビングにお家の鍵は置いていますので、すみませんが、桜ちゃんのこと、よろしくお願いします、師匠」
　私がそういって頭を下げると、師匠は頬を掻きながら柔らかい笑顔を浮かべてくれた。
「ああ。遊花の方もあまり気負う必要はないと思うが、頑張ってこい。それじゃあ……いってらっしゃい、遊花、闇」
「はい‼？いってきます、師匠‼？」
「ん、いってくる」
　師匠の言葉に元気よく答え、闇先パイと一緒に家を出る。
　今日の試験は私が師匠の正統な後継者になる為の第一歩。
　よーし、頑張るぞ～‼？

ーーーーーーーー

「ん、遊花、着いたよ」
「こ、ここが『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の事務所なんですか？」
　闇先パイに案内され、辿り着いたのはかなり広い敷地を持つ1つの高層ビル。
　予想していなかった建物に、私は思わず唖然としてしまう。
　そんな私を見て、闇先パイは面白そうに笑う。
「ふふっ、驚いた？」
「は、はい。『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』は少人数チームなのに、こんな大きなところが事務所なんですか？」
「ん。あんまり知られてないことだけど、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』は部署の名前であって運営母体とはまた違うから」
「そ、そうだったんですか⁉？」

「ん。まあ、少人数プロチームというが売りだから、独立してるチームだって勘違いされやすいし、結局は運営母体も社長のお父さんの会社だからあまり変わりは無いんだけどね。遊花は『Ｓｅｇｅｎ（ゼーゲン）』って名前聞いたことない？」
「あ、その名前は知ってます。ケルンで食品や医療品を扱ってる大手メーカーの名前……あの、闇先パイ？」
「ん？」
「その、もしかしてなのですが、今その名前が出てきたってことは、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の運営母体って……」
「ん、その『Ｓｅｇｅｎ』。そしてここがその本社」
「ふぇぇぇぇぇ!!?!?」
闇先パイから告げられる衝撃の真実に私は思わず大声を出してしまい、近くを歩いていた人達の視線が一気に私に向き、私は慌ててこちらを向いた人達に頭を下げる。
『Ｓｅｇｅｎ』。
ドイツ語で祝福や幸福、幸運などの意味を持つ名前が付けられたその会社はケルンで売られている食品や医療品の６割を一手に担っている大手メーカーの名前だ。
食品や医療品の６割を担っているだけあって、スーパーや薬局など様々なところでその名前を目にする程知名度は高い。
でも、まさかそんな有名なところが『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に関係しているなんて思ってもいなかった。
動揺する私を見て、闇先パイは柔らかい笑みを浮かべ、背伸びをして私の頭を撫でてくれる。
「ふふっ、いいリアクションをするね。大丈夫、遊騎も言ってたけど、運営母体が大きい会社だからってあまり気負う必要はない。勿論自己研鑽は必要だけど、私達は観客の前でいつも通りのデュエルをすればいいだけ。そこは変わらない」
「あぅ……はい」
「大きな声が聞こえたから何事かと思ったが、もう来ていたのか」
「あ、炎」

闇先パイに頭を撫でられていると、ビルの方から紺のスーツに身を包んだ不知火さんが歩いてきた。
不知火さんは頭を撫でられている私を見て、不思議そうな表情を浮かべる。
「栗原はどうかしたのか？」
「ん、ちょっと本社を見て驚いてたから落ち着かせてあげてるの」
「ああ、成る程。確かに知らなければ驚くのも無理はないな。結束はそこを説明してなかったのか」
「働いていた側からしたら当たり前過ぎて忘れてたのかも」
「その可能性が高そうだな。俺達も伝えるのを忘れてしまっていたしな。驚かせてすまない、栗原」
そういって不知火さんが頭を下げる。
そんな不知火さんに、私は慌てて頭を下げる。
「い、いえいえ‼？師匠に聞いた話ばかりで自分でちゃんと調べれていなかった私が悪いんです。だから気にしないでください‼？」
「ふむ、そういう考えもあるか。分かった、この事はここまでにしよう。それより、冬城はそろそろ会場に向かわないと今日の試合に間に合わなくなるぞ」
「むぅ……気が重いけど、遊花の手前サボれないから頑張ってくる」
「ふっ、そもそも冬城はサボったことなどないだろう。冬城は真面目だからな」
「……それじゃあいってくる。遊花、試験頑張ってね」
「あ、はい‼？闇先パイも頑張ってください‼？」
私がそういうと闇先パイはこちらを見ずに早足に歩き去っていった。
そんな闇先パイを見て、不知火さんが難しい表情を浮かべる。
「……怒らせてしまっただろうか？」
「ふふっ、図星を突かれて照れてただけですよ」
「そうか。また余計なことを口にしてしまったな」
「そんなに気にしなくてもいいと思いますよ？闇先パイもきっと分かってますから」

「すまない、気を遣わせてしまったな。それじゃあ俺達も移動することにしよう。着いてきてくれ」
「はい‼?よろしくお願いします‼?」
　歩き出した不知火さんの後ろにつき、ビルの中に入ると、ビルの中にはたくさんの人で溢れていて、私は思わずきょろきょろと行き交う人に目がいってしまう。
　そんな私を、不知火さんが微笑ましいものを見るような目で見て柔らかく笑う。
「珍しいか?」
「あ、すみません……」
「いや、気にすることはない。俺はもう慣れたが、客観的に見れば物珍しいというのは分かる。栗原も『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』にくればいずれは慣れるだろう」
「そ、そうでしょうか?」
「ああ」
　そんな話をしながら、不知火さんと一緒にビルの中を歩いていく。
　途中でエレベーターに乗り、再び歩くこと十数分。
「着いたぞ。ここが採用試験の部屋だ」
「……えっと、不知火さん?」
　ようやく立ち止まった不知火さんに連れてこられたのは、様々な機械が置いてある大きな白い部屋だった。
　私が思わず首を傾げていると、部屋の奥から見覚えがある金髪の女性がこちらに駆け寄ってきた。
「あ、ようやく来たのです‼?ようこそ、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』へ、なのです。遊花ちゃん」
「リーネさん‼」
「今回は急に採用試験を行うことにして申し訳ないのです。送った後に遊騎君にいっぱい怒られたのです。本当にごめんなさいなのです……」
「い、いえいえ‼?気にしないでください‼?それで、あの、この部屋は……」

「ここは『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバー用のデュエルルームなのです。『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバーは普段この部屋でメンバー同士のデュエルをしたり、そこにあるデュエルマシーンを使ったりしてデッキを調整しているのですよ」
「そうなんですか……ということは、ここに連れてこられたのは……」
「勿論、採用試験のため、その中の実技試験をここで行うのですよ。実技試験で実力を示せないなら、面接試験を行っても意味がないですからね」
「やっぱり、そうなんですね」
私の言葉に、リーネさんが頷く。
実技試験の存在は、闇先パイから聞かされていたので知っていた。
というのも、いくらリーネさんからスカウトされたからといえ、本来の私の成績では『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に就職することは不可能だったのだ。
それもある意味では仕方がないことだろう。
この前の期末試験ではかなりいい成績を取ったとはいえ、ここ２年間の実技の成績は退学という話が出ていたようにほとんど０に近い。
いくらこの前の大会でリーネさん達プロ決闘者の方々とデュエルを行い善戦したとはいえ、あの大会の記録は表に出すわけにはいかないため、そうなると私の経歴はマイナスの要素があまりにも多過ぎる。
『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』は師匠が抜けてから、多くの決闘者が売り込みにきていたが、師匠を馬鹿にした発言をする決闘者があまりにも多くいたため、師匠を馬鹿にするのであれば、当然師匠のように自分達に勝つことができるということで、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバーの誰か１人にでも勝てれば採用するという条件を設定していたらしい。
結局はその条件を満たす決闘者は現れず、この２年間『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバーが増えることはなかったのだが、ここで私が無条件で入るということになってしまうと、成績のことも踏まえて

他の人達には示しがつかない。
　だからこそ、公式の記録を残せるような場で『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバーにデュエルで勝利するということが、私の就職の条件にも含まれることになったのだ。
「というわけで、遊花ちゃんにはこれから炎君とデュエルしてもらうのですよ。誰にも文句が付けられないよう、ちゃんと公式記録として残せるように、外部のプロ決闘者も呼んでるので頑張ってほしいのです」
「外部の……ですか？それは一体ーーー」
「それはね……私だよ‼？」
「ひゃぅ‼？」
　私が首を傾げた瞬間、いきなり後ろから誰かに抱き着かれて思わず驚きの声を上げてしまう。
　私が慌てて振り向くと、美傘さんが悪戯が成功した子供のような表情を浮かべながら私に抱きついていた。
「み、美傘さん⁉？」
「にひひ、驚いた？驚いた？本当に遊花ちゃんはいい反応をしてくれるから美傘さんは嬉しいよ」
　そういって嬉しそうに笑いながら美傘さんが抱き着くのを止めて私から離れる。
「もしかして、外部のプロ決闘者って……」
「美傘ちゃんのことなのです。美傘ちゃんは自分の番組を持ってるので、記録を残して広めて貰うには持ってこいなのです」
「こんな特ダネ、他の誰にも渡せないよ。まあ、放送するのは遊花ちゃんがちゃんとプロリーグでデビューすることになってからだけど……というわけで、ばっちり不知火さんに勝利しちゃってね、遊花ちゃん‼？」
「そうなのですよ。炎君なんてボッコボコにしちゃうのです‼？」
「……確かに栗原には勝ってもらわないと困るわけなんだが、ここまで言われると少し複雑だな」
　そういって、不知火さんが複雑そうな表情を浮かべる。

そんな不知火さんに、私は真っ直ぐ向かい合い、はっきりと自分の思いを告げる。
「あ、あの‼?不知火さん‼?」
「?どうかしたか、栗原?」
「私、全力で不知火さんにぶつかります‼?だから、不知火さんも全力で私を見極めてください‼?私が師匠の後を継ぐのに相応しいか、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入るべき決闘者なのかを‼?」
「……君は真っ直ぐな奴だな。勿論、そのつもりだ。こんな状況ではあるが、君と直接デュエルできるのを楽しみにしていた。結束の弟子の実力がどのくらいのものなのか、俺の弟子が一歩も退かずに覚悟を示す程の、俺の弟子の親友としての君の覚悟を、俺に見せてくれ」
「はい‼?」
私達は部屋の中央に移動し、少し離れて向かい合う。
しばらくして美傘さんがスタッフの人達と撮影する準備を整えたところでリーネさんが口を開く。
「それでは、これより『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』採用の実技試験を行うのです‼?」
リーネさんの言葉に、私達はデュエルディスクを起動する。
私は深呼吸をすると、真っ直ぐに不知火さんを見つめ、気合を入れるように声を上げた。
「すー……はー……いきます‼?」
「ああ、君の実力を見せてみろ‼?」
『決闘‼?』

遊花　ＬＰ８０００
炎　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は貰います‼?私はミスティックパイパーを召喚‼?」

〈ミスティックパイパー〉☆1　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ０

現れたのはフルートのようなものを弾いている男の人。
現れたミスティックパイパーはいつもより張り切ったように、私にサムズアップをする。
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを1枚ドローします!!?そしてこの効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル1モンスターだった場合、自分はカードをもう1枚ドローします!!?」
ミスティックパイパーが姿を消し、私はカードをドローする。
「私が引いたのはクリボール!!?レベル1モンスターなのでもう1枚ドローします!!?カードを2枚伏せてターンエンドです!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札４
ー▲▲ー　ー
ーーーーー
ー　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
炎　ＬＰ８０００　手札５

「俺のターン、ドロー!!?栗原のデッキは防御が得意なのだったな。ならばその防御力、試させて貰おう。魔法カード、封印の黄金櫃。デッキからカード1枚を選んで除外し、このカードの発動後2回目の自分スタンバイフェイズに、この効果で除外したカードを手札に加える。俺がデッキから除外するのは不知火の武部だ。そして除外された不知火の武部の効果発動!!?このカードが除外された場合、自分はデッキから1枚ドローし、その後、手札を1枚選んで捨てる」
「手札交換……いえ、墓地肥やしですね」
「その通りだ。俺はフィールド魔法、不知火流　転生の陣を発動!!?」

不知火さんがフィールド魔法を発動すると、辺りが夜のように暗くなる。
「そしてフィールド魔法、不知火流　転生の陣の効果発動!!?1ターンに1度、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、手札を1枚墓地へ送り、2つある効果から1つを選択して発動できる。今回発動するのは自分の墓地の守備力0のアンデット族モンスター1体を特殊召喚する効果だ。俺は手札を1枚捨て、墓地から不知火の隠者を特殊召喚!!?」

〈不知火の隠者〉☆4　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

現れたのは袈裟を着たお坊さんのようなモンスター。
「さっきの不知火の武部で捨ててたんですね」
「ああ。不知火の隠者の効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、自分フィールドのアンデット族モンスター1体をリリースしてデッキから守備力0のアンデット族チューナー1体を特殊召喚する!!?俺は不知火の隠者をリリースしてデッキからチューナーモンスター、妖刀―不知火を特殊召喚する!!?」

〈妖刀―不知火〉☆2　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ８００

隠者の姿が消えると、その代わりに一振りの刀が現れ、その刀の近くに薄っすらと武士の霊の姿が浮かびあがる。
「さらに俺は不知火の宮司を召喚!!?」

〈不知火の宮司〉☆4　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ１５００

次に現れたのは祈祷をしている宮司のモンスター。

「不知火の宮司の効果発動!!?このカードが召喚に成功した時、自分の手札・墓地から不知火の宮司以外の不知火モンスター1体を選んで特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは、フィールドから離れた場合に除外される。墓地より甦れ、不知火の隠者!!?」

〈不知火の隠者〉☆4　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

宮司が祈祷を捧げると、再びフィールドに隠者が姿を現わす。
「まだだ!!?俺は墓地に存在する不知火の師範の効果発動!!?このカードが墓地に存在し、自分フィールドに不知火モンスターが　２種類以上存在する場合、このカードを特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚した不知火の師範はフィールドから離れた場合に除外される!!?」
「っ、不知火流　転生の陣の時に捨てたカードですか」

〈不知火の師範〉☆2　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

フィールドに袴姿の老人が姿を現わす。
これで不知火さんのフィールドにはモンスターが４体。
もう何がきてもおかしくない。
そんな私の予想を肯定するかのように、不知火さんは正面に手をかざす。
「いくぞ、燃え上がれ!!?劫火が宿しサーキット!!?」
「リンク召喚ですか……」
不知火さんの正面に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は種族がアンデット族モンスター2体以上!!?俺は不知火の隠者、不知火の師範、不知火の宮司をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」

隠者、不知火の師範、宮司がサーキットに飛び込んでいく。
そしてサーキットが光ると、サーキットの中から炎と共に両刃の薙刀を持った着物姿のモンスターが現れた。
「リンク召喚!!?縁結ぶ迎え火!!?リンク３!!?麗神―不知火!!?」
〈麗神―不知火〉ＬＩＮＫ３　アンデット族　炎属性
ＡＴＫ２４００　↑→←
「不知火のリンクモンスター……」
「まだ終わらないぞ?」
「除外された不知火の隠者、それにチェーンして不知火の師範の効果発動!!?まずは不知火の師範の効果で自分フィールドのアンデット族モンスター１体を対象として、そのモンスターの攻撃力はターン終了時まで６００ポイントアップする。対象は麗神―不知火だ」
麗神―不知火
ＡＴＫ２４００→３０００
「そして不知火の隠者の効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードが除外された場合、不知火の隠者以外の除外されている自分の不知火モンスター１体を対象として特殊召喚する。そしてこの効果の発動時にフィールドに不知火流　転生の陣が存在する場合、この効果の対象を２体にできる!!?」
「えっ!?」
「俺のフィールドには不知火流　転生の陣が存在している除外より現れろ、不知火の武部!!?不知火の師範!!?」
〈不知火の武部〉☆４　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ１５００
〈不知火の師範〉☆２　アンデッド族　炎属性

ＡＴＫ６００

フィールドに不知火の師範と、薙刀を持った袴姿のモンスターが現れる。

リンク召喚されたハズなのに、モンスターが減ってない。

しかも、不知火さんのフィールドにはまだチューナーモンスターがいる‼？

「俺は、レベル４、不知火の武部、レベル２、不知火の師範に、レベル２、チューナーモンスター、妖刀―不知火をチューニング‼？」

妖刀が浮かびあがり、武部と不知火の師範に向かって飛んでいく。

武部と不知火の師範がその刀に触れると、妖刀に憑いていた武士の霊が武部と不知火の師範を包み込み、実体化した。

「剣に宿し無念の思いが、武士と重なり現世に現る‼？シンクロ召喚‼？憑依超越‼？戦神ー不知火‼？」

〈戦神ー不知火〉☆８　アンデッド族　炎属性

ＡＴＫ３０００

「戦神ー不知火の効果発動‼？善因善果‼？このカードが特殊召喚に成功した場合、自分の墓地のアンデット族モンスター１体を除外してこのカードの攻撃力はターン終了時まで、除外したモンスターの元々の攻撃力分アップする‼？俺が除外するのは不知火の宮司‼？」

戦神ー不知火

ＡＴＫ３０００→４５００

「攻撃力４５００‼？」

「ついでに言っておこう。麗神―不知火の永続効果により、このカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分フィールドのシンクロモンスターは効果では破壊されず、さらに自分の炎属性モンスターは戦闘では破壊されない」

「っ、効果耐性と戦闘耐性まであるんですか……」
「それでは行くぞ、バトル!!?麗神―不知火でダイレクトアタック!!?不知火流　業火斬舞!!?」
「うっ!!?」

遊花　ＬＰ８０００→５０００

麗神が薙刀に炎を纏わせ、舞うように連続して私を切りつける。
「続けて戦神ー不知火でダイレクトアタック!!?不知火流　輪廻刃!!?」
「それを通すわけにはいきません!!?手札からクリボールの効果を発動!!?スピンショット!!?相手モンスターの攻撃宣言時、そのモンスターを守備表示にします!!?」
私を斬り裂こうとした戦神にクリボールが回転しながら突撃し、それにより戦神の動きが止まった。

戦神ー不知火
ＡＴＫ４５００→ＤＥＦ０

「防いできたか。メインフェイズ２、俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ。エンドフェイズ、変動していた戦神ー不知火と麗神―不知火の攻撃力は元に戻る」

戦神ー不知火
ＡＴＫ４５００→３０００

麗神―不知火
ＡＴＫ３０００→２４００

遊花　ＬＰ５０００　手札３
ーー▲▲ー　ー

ーーーーー
ー　☆
ーーー□ー
ーー▲ーー　▽
炎　ＬＰ８０００　手札１

強力な耐性の付与と高攻撃力モンスターによる強襲。
不知火さんは最初から全力で私にぶつかってくれている。
だったら、私もその全力に応える‼？
「私のターン、ドロー‼？魔法カード、儀式の下準備‼？デッキから儀式魔法カード１枚を選び、さらにその儀式魔法カードにカード名が記された儀式モンスター１体を自分のデッキ・墓地から選んで、そのカード２枚を手札に加えます‼？私が加えるのはイリュージョンの儀式とサクリファイス‼？」
「儀式モンスター……そして墓地にはクリボールが存在しているか」
「私は儀式魔法、イリュージョンの儀式を発動‼？自分の手札・フィールドから、レベルの合計が１以上になるようにモンスターをリリースし、手札からサクリファイスを儀式召喚します‼？私は墓地のクリボールの効果で儀式召喚を行う場合、必要なレベル分のモンスターの内の１体として、墓地のこのカードを除外できる‼？」
私の前に現れるのは金色の目の形をした壺が現れ、その中にクリボールが吸い込まれていく。
しばらくすると壺が割れ、中から妖しい邪眼を持つモンスターが現れた。
「儀式召喚‼？相手を捕える妖しい邪眼‼？サクリファイス‼？」
〈サクリファイス〉☆１　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０
「サクリファイスの効果発動‼？アブソープション‼？１ターンに１

度、相手フィールドのモンスター1体を対象にそのモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力・守備力は、このカードの効果で装備したモンスターの数値分アップし、このカードが戦闘で破壊される場合、代わりに装備したそのモンスターを破壊できます!!?対象は、戦神ー不知火!!?吸い込んじゃって、サクリファイス!!?」

「いい効果だ。だが、その程度じゃ届かない。リバースカードオープン!!?永続罠!!?不知火流　輪廻の陣!!?このカードは魔法&罠ゾーンに存在する限り、カード名を不知火流　転生の陣として扱い、1ターンに1度、以下の効果から1つを選択して発動できる。自分フィールドの表側表示のアンデット族モンスター1体を除外してこのターン、自分が受ける全てのダメージは0になる効果か、除外されている自分の守備力0のアンデット族モンスター2体を対象としてデッキに戻してシャッフルしその後、自分はデッキから1枚ドローする効果だ。俺は自分フィールドの表側表示のアンデット族モンスター1体を除外してこのターン、自分が受ける全てのダメージは0になる効果を使用し、戦神ー不知火を除外することでこのターンのダメージを0にする!!?」

サクリファイスのお腹にある穴が開き、戦神を吸い込もうとするが、戦神は粒子に変わり不知火さんを守るように包み込む。

「これでサクリファイスは攻撃力が0のままで、俺がダメージを受けることもなくなった」

「だったらこうです!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」

私が正面に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。

「召喚条件はトークン以外のレベル1モンスター1体!!?私はサクリファイスをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?相手を捕える深淵の邪眼!!?リンク1!!?サクリファイスアニマ!!?」

〈サクリファイスアニマ〉ＬＩＮＫ１　魔法使い族　闇属性

ＡＴＫ０　→

麗神の正面にサクリファイスに似た怪しげな邪眼を持つモンスターが現れる。
「!!?今度はサクリファイスのリンクモンスターか」
「サクリファイスアニマの効果発動!!?コネクトアブソープション!!?1ターンに1度このカードのリンク先の表側表示モンスター1体を対象にその表側表示モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップします!!?対象は勿論、麗神―不知火!!?吸い込んじゃって、サクリファイスアニマ!!?」
「ならば、チェーンして麗神―不知火の効果発動!!?衆生回向!!?相手ターンに、除外されている自分のアンデット族シンクロモンスター1体を対象として、そのモンスターをこのカードのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚する!!?俺は除外されている戦神ー不知火を特殊召喚する!!?」
「っ!!?また戦神ー不知火が戻ってくるんですか!!?」

〈戦神ー不知火〉☆8　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ３０００

アニマの目の上にある空間が開き、麗神を吸い込もうと吸引をはじめる。
アニマに吸引されながらも麗神が薙刀を振るうと、フィールドに再び戦神の姿が現れる。
しかし、アニマの吸引には抗えず、麗神は目の上にある空間に吸い込まれ、しばらくすると背中についている羽のような部分から麗神が持っていた薙刀が現れた。

サクリファイスアニマ
ＡＴＫ０→２４００

「麗神―不知火は吸収されてしまったか……だが、戦神ー不知火の効果発動!!?・善因善果!!?・墓地の不知火の武部を除外してこのカードの攻撃力はターン終了時まで、不知火の武部の元々の攻撃力分アップする!!?」

戦神ー不知火
ＡＴＫ３０００→４５００

「そして除外された不知火の武部の効果発動!!?・このカードが除外された場合、自分はデッキから１枚ドローし、その後、手札を１枚選んで捨てる!!?・どうした、お前の実力はその程度か、栗原?」
「うっ……」
麗神を除去することには成功したが、代わりに戦神がフィールドに戻ってきた上に手札交換兼墓地肥やしまでされてしまった。
これが師匠や闇先パイ、リーネさんと同じ『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバーである不知火さんの実力。
やっぱり、今の私じゃ全然届かない。
「だからって、負けるわけにも、諦めるわけにもいかないんです!!?私はクリバンデッドを召喚!!?」

〈クリバンデッド〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

私の前に盗賊のような姿をした黒い毛玉のモンスターが現れる。
今回は攻撃させては上げられないけど、あなたの力、存分に借りるね!!?
「エンドフェイズにクリバンデッドの効果発動!!?・このカードをリリースしてデッキの上から５枚めくり、その中から魔法・罠カード１枚を手札に加えて残りを墓地におきます!!?」
クリバンデッドの姿が消え、私はデッキの上から５枚のカードをめくって中から１枚のカードを手札に加える。

「私は手札抹殺の魔法カードを手札に加えてターンエンドです!!?」
「エンドフェイズ、変動していた戦神ー不知火の攻撃力は元に戻る」

戦神ー不知火
ＡＴＫ４５００→３０００

遊花　ＬＰ５０００　手札３
ー☆▲▲ー　　ー
ーーー☆ー
ー　　ー
ーーー○ー
ーー△ーー　　▽
炎　ＬＰ８０００　手札１

「俺のターン、ドロー!!?・まずは不知火流　輪廻の陣の効果発動!!?
今回使用するのは除外されている自分の守備力０のアンデット族モンスター２体を対象としてデッキに戻してシャッフルしその後、自分はデッキから１枚ドローする効果だ。俺は除外されている不知火の武部と不知火の宮司をデッキに戻してカードを１枚ドローする!!?
……成る程、この手札か。俺は不知火の武部を召喚!!?・」

〈不知火の武部〉☆４　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ１５００

「不知火の武部の効果発動!!?・このカードが召喚に成功した時、手札・デッキから妖刀ー不知火モンスター１体を特殊召喚する!!?・ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はアンデット族モンスターしか特殊召喚できない。俺はデッキからチューナーモンスター、逢魔ノ妖刀ー不知火を特殊召喚する!!?・」

〈逢魔ノ妖刀ー不知火〉☆３　アンデッド族　炎属性

ＡＴＫ８００

武部が薙刀を振るうと、武部の正面に金色に光る一振りの刀が現れ、その刀の近くに薄っすらと鎧を着た武士の霊の姿が浮かびあがる。

「さらに俺は墓地に存在する不知火の師範の効果発動!!?このカードが墓地に存在し、自分フィールドに不知火モンスターが　２種類以上存在する場合、このカードを特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚した不知火の師範はフィールドから離れた場合に除外される!!?」

〈不知火の師範〉☆２　アンデッド族　炎属性

ＤＥＦ０

「っ、またモンスターが並んで……」

「そして、燃え上がれ!!?劫火が宿しサーキット!!?」

不知火さんの正面に再び巨大なサーキットが現れる。

「召喚条件は種族がアンデット族モンスター２体!!?俺は戦神ー不知火と不知火の師範をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」

「っ、リンク２のモンスター……ということは……」

戦神と不知火の師範がサーキットに飛び込んでいく。

そしてサーキットが光ると、サーキットの中から紅いマフラーをつけ、右手に禍々しい剣が生えているモンスターが現れた。

「リンク召喚!!?怨讐を超えし救済者!!?リンク２!!?アドヴェンデットセイヴァー!!?」

〈アドヴェンデットセイヴァー〉ＬＩＮＫ　２　アンデット族　闇属性

ＡＴＫ１６００　↙?↘?

「ヴェンデット……不知火さんのもう1つの主力のモンスター」
「除外された不知火の師範の効果発動!!?アドヴェンデットセイヴァーの攻撃力はターン終了時まで６００ポイントアップする!!?」

アドヴェンデットセイヴァー
ＡＴＫ１６００→２２００

「そしてアドヴェンデットセイヴァーの効果発動!!?ヴィンディクティブリチュアル!!?自分の墓地のヴェンデットカード1枚を対象として、そのカードを手札に加える。俺は墓地から儀式魔法、リヴェンデットボーンを手札に加える!!?」
「っ、さっきの手札交換で落としていましたか……」
「次はこれだ。逢魔ノ妖刀―不知火の効果発動!!?このカードをリリースし、逢魔ノ妖刀―不知火以外の除外されている自分のモンスターの中から不知火モンスターを含むアンデット族モンスター　２体を対象として、そのモンスターを守備表示で特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はアンデット族モンスターしか特殊召喚できない。俺は除外から不知火の隠者と不知火の師範を特殊召喚!!?」

〈不知火の隠者〉☆４　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

〈不知火の師範〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

「不知火の隠者の効果発動!!?俺は不知火の隠者をリリースしてデッキから再びチューナーモンスター、逢魔ノ妖刀―不知火を特殊召喚する!!?」

〈逢魔ノ妖刀―不知火〉☆3　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ８００

「行くぞ‼?俺は、レベル４、不知火の武部に、レベル３、チューナーモンスター、逢魔ノ妖刀―不知火をチューニング‼?」
逢魔ノ妖刀が浮かびあがり、武部に向かって飛んでいく。
武部は薙刀を背中に収め、その刀を手に取ると、武部の後ろに妖刀に憑いていた武士の霊が実体化した。
「妖を断つ剣の思いが、武部に宿りて力を成す‼?シンクロ召喚‼?憑依一体‼?妖神―不知火‼?」

〈妖神―不知火〉☆7　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ２１００

「レベル７の不知火シンクロモンスター……一体どんな効果が……」
「妖神ー不知火の効果発動‼?臨命終時‼?１ターンに１度、自分メインフェイズに、自分の墓地及び自分フィールドの表側表示モンスターの中から、モンスター１体を選んで除外し、その後、その種類によって、効果をそれぞれ適用できる。アンデット族ならば自分フィールドの全てのモンスターの攻撃力は３００ポイントアップし、炎属性ならフィールドの魔法・罠カード１枚を選んで破壊。そしてシンクロモンスターならフィールドのモンスター１体を選んで破壊する。俺は墓地に存在する戦神ー不知火を除外し、全ての効果を適用する‼?この効果は対象を取らない。何か発動するなら今のうちだぞ?」
「……発動するカードはありません」
「ほう、ならば妖神ー不知火の効果で自分フィールドの全てのモンスターの攻撃力は３００ポイントアップし、栗原のセットカード１枚とサクリファイスアニマを破壊する‼?」
「ゴメンね、サクリファイスアニマ」
妖神が逢魔ノ妖刀を掲げると、逢魔ノ妖刀に戦神の霊が吸い込まれ

ていく。
戦神を吸い込むと、逢魔ノ妖刀は金色の輝きを増し、妖神が逢魔ノ妖刀を振るうと、金色の光が周囲に放たれ、その光によりアニマと私のセットカードが切り裂かれ、不知火さんのモンスターは全てその光に包まれた。

アドヴェンデットセイヴァー
ＡＴＫ２２００→２５００

妖神―不知火
ＡＴＫ２１００→２４００

不知火の師範
ＡＴＫ６００→９００

「さあ、まだ終わらないぞ。墓地に存在する妖刀ー不知火の効果発動‼？このカードが墓地に存在する場合、チューナー以外の自分の墓地のアンデット族モンスター１体を対象としてそのモンスターとこのカードを墓地から除外し、その２体のレベルの合計と同じレベルを持つアンデット族シンクロモンスター１体をＥＸデッキから特殊召喚する‼？」
「墓地からの擬似シンクロ召喚……‼？」
「俺は墓地に存在する妖刀ー不知火と不知火の隠者を除外‼？剣に宿し無念の思いが、武士に宿りて力を成す‼？憑依一体‼？刀神―不知火‼？」

〈刀神―不知火〉☆６　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ２５００

フィールドに現れたのは後ろに妖刀の霊が実体化している武士。
そして除外されたのは隠者。

不知火さんの攻撃はまだ終わっていない。
「除外された不知火の隠者の効果発動!!?フィールドに不知火流　転生の陣が存在するため、除外から妖刀ー不知火と戦神ー不知火を特殊召喚する!!?」

〈戦神ー不知火〉☆8　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ３０００

〈妖刀―不知火〉☆2　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ８００

「戦神ー不知火の効果発動!!?善因善果!!?墓地の不知火の武部を除外してこのカードの攻撃力はターン終了時まで、不知火の武部の元々の攻撃力分アップする!!?」

戦神ー不知火
ＡＴＫ３０００→４５００

「そして除外された不知火の武部の効果発動!!?このカードが除外された場合、自分はデッキから1枚ドローし、その後、手札を1枚選んで捨てる!!?」
「っ、また手札交換……」
「さあ、栗原。俺の全力に耐えられるか見せて貰うぞ?俺は、レベル6、刀神―不知火と、レベル　2、不知火の師範に、レベル2、チューナーモンスター、妖刀―不知火をチューニング!!?」
妖刀が浮かびあがり、光を纏いながら刀神と不知火の師範に向かって飛んでいく。
妖刀が刀神と師範の間の地面に突き刺さると、刀神と師範を取り囲むように地面から炎が舞い上がり、刀神と師範の姿を隠す。
しばらくして、炎が斬り払われるように霧散すると、炎の身体を持つ馬に乗った武士のモンスターが現れた。

「剣に宿し無念の思いが、神へと至る不知火となる‼?・シンクロ召喚‼?・憑依神化‼?・炎神ー不知火‼?・」

〈炎神―不知火〉☆１０　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ３５００

「レベル１０の不知火シンクロモンスター……不知火さんの切り札、ですね」

「炎神―不知火の効果発動‼炎魂入滅‼?・このカードが特殊召喚に成功した場合、自分の墓地のカード及び除外されている自分のカードの中から、アンデット族シンクロモンスターを任意の数だけ選んでＥＸデッキに戻し、その後、戻した数だけ相手フィールドのカードを選んで破壊できる‼?・俺は墓地に存在する刀神―不知火をＥＸデッキに戻して栗原のセットカードを破壊する‼?・」

炎神が刀を振り抜き、巨大な炎の斬撃が私のセットカードに向かって放たれる。

なら、このタイミングで‼?

「炎神―不知火の効果にチェーンして手札からクリフォトンの効果発動‼?・このカードを手札から墓地へ送り、２０００ライフを払って発動‼?・このターン、自分が受ける全てのダメージは０になります‼?・」

「何?・このタイミングでだと?・」

遊花　ＬＰ５０００→３０００

「さらにそれにチェーンしてリバースカードオープン‼?・罠発動‼?・活路への希望‼?・」

「‼?・成る程、そのためか」

「自分のＬＰが相手より１０００以上少ない場合、１０００ＬＰを払って発動‼?・」

遊花　ＬＰ３０００→２０００

「お互いのＬＰの差２０００につき1枚、自分はデッキからドローする‼？私のライフは２０００‼？不知火さんは８０００‼？よって３枚のカードをドローします‼？」

私がカードをドローすると、私の前に電球のような姿をしたモンスターが現れ、私の身体を包みこむように光の粒子を放つ。

そして炎神の斬撃が私が発動した活路への希望を破壊した。

「このターンは防がれてしまったか……流石だな。俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ。エンドフェイズ、変動していたアドヴェンデットセイヴァーと戦神ー不知火の攻撃力は下がる」

アドヴェンデットセイヴァー
ＡＴＫ２５００→２２００

戦神ー不知火
ＡＴＫ４５００→３０００

遊花　ＬＰ２０００　手札５
ーーーーー　ー
ーーーーー
☆　ー
○ー○ー○
ーー△▲ー　▽
炎　ＬＰ８０００　手札２

手札を増やすためとはいえ、かなりライフポイントが減ってしまった。

おまけに不知火さんのフィールドには強力な不知火シンクロモンスターが3体にアドヴェンデットセイヴァーがおり、モンスターを除外することでダメージを０にできる輪廻の陣がある。

まずは輪廻の陣を攻略しないと、私に勝ち目はない。
「私のターン、ドロー!!?よし!!?私はカードを1枚伏せて、魔法カード、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨てて同じ枚数ドローします!!?私は4枚、不知火さんは2枚の手札を捨てて同じ枚数ドローです!!?」
「ほとんどの手札を交換したな。余程手札が悪かったのか?」
「その答えはこれです!!?手札から捨てられた魔轟神獣キャシーの効果発動!!?さらにそれにチェーンして墓地に送られたドットスケーパーの効果発動!!?まずはドットスケーパーの効果でデュエル中に1度、このカードが墓地に送られた場合に特殊召喚します!!?」

〈ドットスケーパー〉☆1　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

私のフィールドにドットの身体を持つモンスターが現れる。
「そして魔轟神獣キャシーの効果!!?このカードが手札から墓地へ捨てられた時、フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊します!!?私が破壊するのは、不知火流　輪廻の陣!!?」
「何!?!?くっ……ならば、不知火流　輪廻の陣の効果発動!!?俺は妖神ー不知火を除外することでこのターンのダメージを0にする!!?」
手札から捨てられた身体に金色の腕輪のようなものをつけた猫のモンスターが、緑色のボールのような悪魔を弾き飛ばして輪廻の陣を破壊する。
闇先パイに言われてカードを破壊するカードを増やしておいてよかった。
これでこのターンはダメージを与えられないけど、これ以上のドローやダメージを無くすことは防げる。
「ここから反撃です!!?まずは、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「リンク召喚か……」

私が手をかざすと、正面に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル1モンスター1体。私はドットスケーパーをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚!!?希望の守り手!!?リンク1!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

サーキットから飛び出して、私に擦り寄ってくるのは青い球体のモンスター。
君はいつも変わらないね。
今回もよろしく頼んだよ。
「私は天輪の葬送士を召喚!!?」

〈天輪の葬送士〉☆１　天使族　光属性
ＡＴＫ０

フィールドに現れたのは銀色の棺の身体を持つモンスター。
「天輪の葬送士の効果発動!!?このカードが召喚に成功した時、自分の墓地の光属性・レベル１モンスター１体を対象としてその光属性モンスターを特殊召喚します!!?戻ってきて、ミスティックパイパー!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

葬送士が自分の腕で身体になっている棺を開けると、棺の中から再びミスティックパイパーが姿を現わす。
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを１枚ドローします!!?ドローしたカードは虹クリボー!!?レベル１モンスターなのでもう１枚ドローします!!

?さらに、墓地に存在するジェットシンクロンの効果発動!!?手札を1枚墓地に送り、墓地からこのカードを特殊召喚します!!?」
「!!?そんなカードまで墓地に送っていたか」
「ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合、除外されます!!?おいで、ジェットシンクロン!!?」

〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

フィールドに現れたのは小さなジェット機のような機械のモンスター。
現れたジェットシンクロンは嬉しそうに私の周りを飛び回る。
「私はレベル1、天輪の葬送士とジェットシンクロンでオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
「今度はエクシーズ召喚か!!?」
葬送士とジェットシンクロンが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこには白い馬に乗る小さな首無しの騎士がいた。
「闇夜に紛れし哀しき妖精!!?その刃で疑惑を切り裂け!!?ランク1!!?ゴーストリックデュラハン!!?」

〈ゴーストリックデュラハン〉★1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

「ゴーストリックデュラハンの永続効果、スリーピィフィアー。このカードの攻撃力は自分フィールドのゴーストリックと名のついたカードの数×２００ポイントアップします!!?」

ゴーストリックデュラハン

ＡＴＫ１０００→１２００

「そしてゴーストリックデュラハンの効果発動!!?ホロウエクスキュート!!?オーバーレイユニットを１つ使い、フィールド上のモンスター１体を対象に、選択したモンスターの攻撃力をターン終了時まで半分にします!!?この効果は相手ターンでも使えます!!?対象は炎神ー不知火!!?」

デュラハンがその手に持った小さな剣を振るうと、その剣から不可視の斬撃が飛び、炎神が乗っている馬に当たって馬が膝をつく。

炎神―不知火
ＡＴＫ３５００→１７５０

「これで準備はできました!!?私はゴーストリックデュラハン１体でオーバーレイ!!?１体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?ランクアップエクシーズチェンジ!!?」

デュラハンが再び空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けると空から舞い降りたのは黒いドレスを身に纏い、白い羽根にところどころ漆黒の羽根が混ざる女の子のモンスター。

「闇夜を彷徨う自由な天使!!?その気ままさで憂鬱を払え!!?ランク４!!?ゴーストリックの駄天使!!?」

〈ゴーストリックの駄天使〉★４　天使族　闇属性
ＡＴＫ２０００

駄天使が私の周りをひらひらと飛びながらいつものようにドヤ顔で空を指差して決めポーズをとる。

しかし、今回はすぐに決めポーズを止めると、駄天使は握り拳を作って自分の胸を叩いた。

分かってるよ、今回はちゃんと君にも活躍して貰うからね。

「ゴーストリックの駄天使は同名以外のゴーストリックモンスターに

重ねてエクシーズ召喚を行うことが出来ます。そしてゴーストリックの駄天使の効果発動!!?チャームコール!!?オーバーレイユニットを1つ取り除くことでデッキからゴーストリック魔法・罠を手札に加えます!!?私が手札に加えるのはゴーストリックパニック!!?」

堕天使が私に向けて小さなハートを飛ばすとそれがカードになって私の手札に加わる。

「バトル!!?ゴーストリックの駄天使で炎神ー不知火を攻撃!!?トリックハート!!?」

駄天使が目の前にひび割れているハートを作り出し、そのハートからビームを放ち、炎神の身体を貫く。

しかし、身体を貫かれた炎神は少し怯んだが、貫かれた部分が燃え上がり、何事も無かったかのように修復された。

「炎神ー不知火の永続効果、燎原之火!!?自分フィールドのアンデット族モンスターが戦闘・効果で破壊される場合、代わりに自分の墓地の不知火モンスター1体を除外する。俺は墓地に存在する麗神―不知火を除外することで破壊を免れる」

「っ!!?そんな耐性まであるんですか!?……これは突破するのが大変そうです。メインフェイズ2。カードを2枚伏せてターンエンドです!!?」

「エンドフェイズ、ゴーストリックデュラハンの効果で下がっていた炎神―不知火の攻撃力は元に戻る」

炎神―不知火
ＡＴＫ１７５０→３５００

遊花　ＬＰ２０００　手札３
ー▲▲▲ー　ー
ーーー○ー
☆　☆
○ーーー○
ーーー▲ー　▽

炎　ＬＰ８０００　手札２

「俺のターン、ドロー!!?……どうやら、俺のデッキも全力で栗原のことを試したいようだな」
「っ、何か引いたみたいですね」
ドローしたカードを見て、不知火さんの表情に真剣さが増す。
強力な不知火モンスターはほとんど不知火さんのフィールドに揃っている。
ということは、次に不知火さんが使ってくるのは……
「まずはアドヴェンデットセイヴァーの効果発動!!?ヴィンディクティブリチュアル!!?俺は墓地から儀式魔法、リヴェンデットボーンを再び手札に加える!!そして、儀式魔法、リヴェンデットボーン!!?」
「やっぱり、儀式魔法……!!?」
「このカードはレベルの合計が儀式召喚するモンスターのレベル以上になるように、自分の手札・フィールドのモンスターをリリース、またはリリースの代わりに自分の墓地のアンデット族モンスターを除外し、自分の手札・墓地からヴェンデット儀式モンスター1体を儀式召喚する!!?墓地の不知火の師範と不知火の隠者を除外して儀式召喚を行う!!?」
不知火さんの前に闇の球体が現れ、その球体に不知火の師範と隠者が吸い込まれていく。
そして闇の球体が吹き飛ぶと、その中から闇を纏い、身体中から骨が変質して出来た武器が飛び出している人型のモンスターが現れた。
「例えその身が朽ち果てようと、生まれ変わる程の怨讐の果てに、新たな強さを得よ!!?儀式召喚!!?リヴェンデットスレイヤー!!?」
〈　リヴェンデットスレイヤー〉☆６　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２４００
「リヴェンデットスレイヤー……不知火さんの切り札……」
「さあ、この攻撃に耐えきれるか?まずは除外された不知火の師範と、

それにチェーンして不知火の隠者の効果発動!!?不知火の隠者の効果でフィールドに不知火流　転生の陣が存在するため、除外から妖神ー不知火と不知火の師範を特殊召喚する!!?」

〈妖神―不知火〉☆7　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ２１００

〈不知火の師範〉☆2　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

「さらに除外された不知火の師範の効果発動!!?リヴェンデットスレイヤーの攻撃力はターン終了時まで６００ポイントアップする!!?」

リヴェンデットスレイヤー
ＡＴＫ２４００→３０００

「まだ終わらないぞ!!?燃え上がれ!!?劫火が宿しサーキット!!?」
「またリンク召喚……」
「召喚条件は種族がアンデット族モンスター2体以上!!?俺は不知火の師範とアドヴェンデットセイヴァーを2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
　不知火の師範とアドヴェンデットセイヴァーが2体に分身し、サーキットに飛び込んでいく。
　そしてサーキットが光ると、サーキットの中から再び両刃の薙刀を持った着物姿のモンスターが現れる。
「リンク召喚!!?再びこの世との縁結ぶ迎え火!!?リンク3!!?麗神―不知火!!?」

〈麗神―不知火〉ＬＩＮＫ３　アンデット族　炎属性
ＡＴＫ２４００　↑→←

「うっ、また麗神―不知火ですか……」
「妖神ー不知火の効果発動!!?臨命終時!!?1ターンに1度、メインフェイズに発動!!?俺はフィールドにいる妖神ー不知火自身を除外し、全ての効果を適用する!!?」
「なら、チェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?ダメージダイエット!!?このターン自分が受ける全てのダメージは半分になります!!?」
「ふむ、ダメージを軽減するカードが伏せられていたか。ならば妖神ー不知火の効果で自分フィールドの全てのモンスターの攻撃力は３００ポイントアップし、栗原のセットカード1枚とゴーストリックの駄天使を破壊する!!?」
妖神が逢魔ノ妖刀を空に投げると、逢魔ノ妖刀に妖神が光となって吸い込まれていく。
妖神を吸い込むと、逢魔ノ妖刀は金色の輝きを増しながら、地面に突き刺さって辺りに金色の光を放ち、その光により駄天使と私のセットカードが消滅し、不知火さんのモンスターは全てその光に包まれて、雄叫びを上げた。

麗神―不知火
ＡＴＫ２４００→２７００

戦神ー不知火
ＡＴＫ３０００→３３００

炎神ー不知火
ＡＴＫ３５００→３８００

リヴェンデットスレイヤー
ＡＴＫ３０００→３３００

不知火さんのフィールドのモンスターは麗神によりシンクロモン

スターは効果では破壊されず、炎属性モンスターは戦闘では破壊されない。
　さらに麗神やリヴェンデットスレイヤーも炎神ー不知火によって墓地の不知火を除外することで戦闘・効果による破壊耐性を持っている。
　その上で効果による全体強化。
　この布陣を突破するのはなかなか厳しそうだ。
「さあ、今度は耐えきれるか？バトル‼？麗神―不知火でリンクリボーを攻撃‼？不知火流　業火斬舞‼？」
「相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動‼？ゼロリンク‼？このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力はターン終了時まで０になる‼？」
　リンクリボーの身体が粒子に変わってに麗神纏わりつき、力を奪う。

麗神―不知火
ＡＴＫ２７００→０

「これでリンクリボーは使わせた。戦神ー不知火でダイレクトアタック‼？不知火流　輪廻刃‼？」
「それも通しません‼？攻撃宣言時、手札から虹クリボーの効果発動‼？このカードをそのモンスターに装備し、そのモンスターは攻撃することが出来ません‼？レインボーガード‼？」
　私の手札から虹色の角を持つ球体が現れて戦神の動きを止める。
「これも凌ぐか。ならば次はどうだ？炎神ー不知火でダイレクトアタック‼？不知火流　煉獄ノ祓‼？」
　炎神が刀を抜き、空に掲げると、その刀に炎が集まっていき、５メートル程の巨大な刀になる。
　炎神は集まって巨大な刀になった炎を圧縮していき、通常のサイズの刀に変える。
　刀が完成すると炎神は馬を走らせて私に近づいてくる。

「ダメージステップ‼?速攻魔法、アンデットストラグル‼?フィールドのアンデット族モンスター1体を対象として、ターン終了時まで、そのモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップ、または１００ポイントダウンする‼?俺は炎神ー不知火の攻撃力を１０００ポイントアップする‼?」
「っ‼?」

炎神ー不知火
ＡＴＫ３８００→４８００

炎神の炎の刀に、地面から溢れ出した怨霊が集まり、炎の色が紫色に変わる。
この攻撃を受けると、ダメージダイエットの効果でダメージが軽減されても私のライフは０になる。
「まだ、終わりません‼?手札からクリボーの効果発動‼?ダークエンヴェロップ‼?相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこのカードを手札から捨てて発動できる。その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージを０にする‼?」
「‼?これも防ぐか……」
馬を走らせて私に近づいた炎神はすれ違い様に3度斬りつけてくる。
その斬撃から守るように、クリボーが立ち塞がり、斬撃を防ぎきると、私に向けてウィンクをしてから粒子になって消えていった。
ありがとう、クリボー。
これでまだ戦える‼?
「まさかこの攻撃も耐えられるとはな。だが、まだリヴェンデットスレイヤーの攻撃が残っている‼?リヴェンデットスレイヤーでダイレクトアタック‼?」
「相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のクリアクリボーの効果発動‼?このカードを除外し、自分はデッキから1枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚

してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替えます‼?ドロー‼?……っ、違う」
「ならば攻撃はそのまま通る‼?行け、リヴェンデットスレイヤー‼?リヴェンデットスマッシュ‼?」
「きゃあ‼?」

遊花　ＬＰ２０００→３５０

スレイヤーは足に黒い炎を纏い、勢いよく跳躍すると空中で一回転しながらその両足で私を思いっきり蹴り飛ばす。
これで私のライフは３桁……もう後がない。
「メインフェイズ２、墓地のアンデットストラグルの効果発動‼?このカードが墓地に存在する場合、自分メインフェイズに除外されている自分のアンデット族モンスター１体を選んでデッキに戻し、このカードを自分フィールドにセットする。ただし、この効果でセットしたこのカードはフィールドから離れた場合に除外される。俺は除外されている不知火の隠者をデッキに戻し、アンデットストラグルをセットする。俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ。エンドフェイズ、攻撃力が変動していたモンスター達の攻撃力は元に戻る」

麗神―不知火
ＡＴＫ０→２４００

炎神ー不知火
ＡＴＫ４８００→３５００

リヴェンデットスレイヤー
ＡＴＫ３３００→２４００

遊花　ＬＰ３５０　手札２
ー▲△ーー　ー

ーーーーー
☆　ー
○ーー○○
ー▲▲▲ー　▽
炎　ＬＰ８０００　手札０

残りのライフは３５０。
おまけに私の２枚の手札は現状使えず、伏せカードもゴーストリックパニックだからこの逆境を覆すことは出来ない。
だけど……
「手札もライフもちゃんと残ってる……まだ、終わりじゃない」
自分に言い聞かせるように、はっきりと口に出す。
可能性は、ちゃんと残っている。
まだ負けてはいない。
負けてないなら……戦える‼？
「ふっ……いい目をしているな。この状況でも諦めないか」
「はい。師匠の弟子として、諦めることだけはしないって誓いましたから」
「いい気迫だ。ならば、その気持ちが嘘ではないことを証明してみせろ。栗原、君の真価を見せてくれ」
「はい‼？私のターン、ドロー‼？魔法カード、貪欲な壺‼？墓地に存在するサクリファイスアニマ、ゴーストリックデュラハン、ゴーストリックの駄天使をＥＸデッキに、天輪の葬送士、クリバンデットをデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローします‼？」
「ここにきてドローカードを引いてくるか……」
「よし、魔法カード、シャッフルリボーン‼？自分フィールドにモンスターが存在しない場合、自分の墓地のモンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚します‼？ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、エンドフェイズに除外されます。墓地から蘇って魔轟神獣キャシー‼？」

〈魔轟神獣キャシー〉☆1　獣族　光属性
ＤＥＦ６００

「さらに墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動!!?自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローします!!?ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外しなければいけません。私は魔法・罠ゾーンにある虹クリボーをデッキに戻し、カードを1枚ドローします!!?まだまだです!!?魔法カード、モンスタースロット!!?自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、選択したモンスターと同じレベルの自分の墓地に存在する
　モンスター1体を選択してゲームから除外し、その後、自分のデッキからカードを1枚ドローします。この効果でドローしたカードをお互いに確認し、選択したモンスターと同じレベルのモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚します!!?私はフィールドの魔轟神獣キャシーを選択し、墓地のドットスケーパーを除外してデッキからカードを1枚ドロー!!?ドローしたカードはサクリボー!!?魔轟神獣キャシーと同じレベル1モンスターなので特殊召喚します!!?」

〈サクリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

　フィールドに現れたスロットマシーンから出てきたのは、クリボーに似た背中に金色の瞳を持つモンスター。
「除外されたドットスケーパーの効果発動!!?デュエル中に1度、このカードが除外された場合に特殊召喚します!!?」

〈ドットスケーパー〉☆1　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

「墓地に存在するリンクリボーの効果発動!!?スケープリンク!!?このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル1モンスター1体をリリースしてこのカードを墓地から特殊召喚する!!?私はサクリボーをリリース!!?戻っておいで、リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

フィールドにいたサクリボーの姿が消え、代わりにリンクリボーが嬉しそうに墓地から飛び出してくる。
「サクリボーの効果発動!!?このカードがリリースされた場合、自分はデッキから1枚ドローします!!?」
「ここにきて連続ドローだと!!?」
「……見えました……この逆境を覆す攻略法!!?」
「!!?」
ドローしたカードを見て、私は思わず笑顔を浮かべ、確かな自信を胸に不知火さんを見る。
「不知火さん……このターンで、貴方を攻略します!!?」
「……面白い。やれるものならやってみろ!!?」
「はい!!?私はモンスターをセットします!!?」
「何?セットモンスターだと?」
「そしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?ゴーストリックパニック!!?自分フィールド上に裏側守備表示で存在するモンスターを任意の数だけ選択して選択したモンスターを表側守備表示にし、その中のゴーストリックと名のついたモンスターの数まで、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを選んで裏側守備表示にします!!?この効果で表側守備表示にするのは、ゴーストリックランタンです!!?」

〈ゴーストリックランタン〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

私のフィールドにジャックオーランタンのような幽霊が現れる。
「ゴーストリックモンスターが表側になったことで炎神ー不知火を裏側守備表示にします!!?」
ランタンが現れると同時にフィールドを暗闇が包み込み、暗闇が晴れると炎神が裏側守備表示になる。
「そして、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は効果モンスター2体!!?私はドットスケーパーとリンクリボーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?ペンテスタッグ!!?」

〈ペンテスタッグ〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１６００　→←

現れたのは機械の身体を持つクワガタのようなモンスター。
「ペンテスタッグだと?確かそのモンスターは……」
「ペンテスタッグの永続効果!!?このカードがモンスターゾーンに存在する限り、リンク状態の自分のモンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ相手に戦闘ダメージを与えます!!?」
「!!?成る程な。炎神ー不知火の守備力は０。貫通ダメージで倒しきるつもりか。だが、俺のライフポイントはまだ８０００ポイント丸々残っている。このターンに削りきることができるか?」
「やってみせます!!?そのための準備はもうできてるんです!!?私はレベル1、ゴーストリックランタンと魔轟神獣キャシーでオーバーレイ!!?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
ランタンとキャシーが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると再び現れる白い馬に乗る小さな首無しの騎士。

「闇夜に紛れし哀しき妖精‼?再びその刃で疑惑を切り裂け‼?ランク1‼?ゴーストリックデュラハン‼?」

〈ゴーストリックデュラハン〉★1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００→１２００

「まだです‼?私はゴーストリックデュラハン1体でオーバーレイ‼?1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築‼?ランクアップエクシーズチェンジ‼?」
デュラハンが再び空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りたのは黒いドレスを身に纏った堕天使。
「闇夜を彷徨う自由な天使‼?その気ままさで逆境を払え‼?ランク4‼?ゴーストリックの駄天使‼?」

〈ゴーストリックの駄天使〉★4　天使族　闇属性
ＡＴＫ２０００

「再び出てきたか、ゴーストリックの駄天使……だが、ゴーストリックの駄天使では攻撃力が足りないぞ?」
「いいえ、この子が今回の主役です。この子が、不知火さんを倒します‼?」
「何?」
私の言葉に、駄天使がどこか不安そうな表情で私の様子を伺う。
もう、いつもの無駄な自信はどこに行ったの?
約束したでしょ、今度ちゃんと貴方が活躍出来るように頑張るって。
だから、今回は貴方が主役なの。
いつものようにバッチリ決めてきて‼?
「ゴーストリックの駄天使のもう1つの効果を発動‼トリックアブソーブ‼??1ターンに1度、自分メインフェイズに手札のゴースト

リックカード1枚をこのカードのオーバーレイユニットにすることができます!!?私は手札の永続罠、ゴーストナイトをゴーストリックの駄天使のオーバーレイユニットにします!!?」
「罠カードでもオーバーレイユニットにできるのか……だが、オーバーレイユニットを増やすだと?」
私の手札にあったゴーストリックナイトがオーバーレイユニットとして駄天使に吸い込まれていく。
まだ不安そうな表情を浮かべている駄天使に、私は笑顔を浮かべて頷く。
大丈夫。
貴方が活躍できるように、私が背中を押してあげるから、貴方の力を私に貸して!!?
「バトル!!?ゴーストリックの駄天使でセットされている炎神ー不知火に攻撃!!?そして速攻魔法、旗鼓堂々!!?自分の墓地の装備魔法カード1枚と、その正しい対象となるフィールド上のモンスター1体を選択し、選択した装備魔法カードを選択したモンスターに装備します!!?」
「旗鼓堂々……結束や天羽も使っているカードか。だが、装備魔法だと……?」
「この効果で装備した装備魔法カードはエンドフェイズ時に破壊され、このカードを発動したターン、自分はモンスターを特殊召喚できません!!?私はゴーストリックの駄天使に墓地のストイックチャレンジを装備します!!?」
「何!!?そのカードは……!!?」
私が宣言したカードに不知火さんが目を見開く。
「ストイックチャレンジは自分フィールド上に1枚しか表側表示で存在できず、オーバーレイユニットを持っているエクシーズモンスターにのみ装備可能なカード。そして装備モンスターの攻撃力は自分フィールド上のオーバーレイユニットの数×６００ポイントアップし、相手モンスターとの戦闘によって相手ライフに与える戦闘ダメージは倍になります!!?ただし、装備モンスターは効果を発動できなく

なり、このカードは相手のエンドフェイズ時に墓地へ送られ、このカードがフィールド上から離れた時に装備モンスターは破壊されてしまいますが……それでも、この一撃が通れば決着がつきます‼？」

「見事だが、それでは届かない‼？チェーンしてリバースカードオープン‼？永続罠、不知火流　輪廻の陣‼？」

「‼？２枚目……」

「その効果で俺は戦神ー不知火を除外することでこのターンのダメージを０にする‼？これでその攻撃は届かない‼？」

「……いいえ、届きます……届かせます‼？ライフポイントを半分払い、手札からカウンター罠、レッドリブートを発動‼？」

「何だと⁉？そのカードも結束が使っていた……」

遊花　ＬＰ３５０→１７５

「相手が罠カードを発動した時、その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする‼？その後相手はデッキから罠カード１枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンにセットでき、このカード発動後、ターン終了時まで相手は罠カードは発動できません‼？」

「くっ……俺はデッキから不知火流　燕の太刀をセットする」

「チェーン処理によりストイックチャレンジをゴーストリックの駄天使に装備‼？ゴーストリックの駄天使のオーバーレイユニットは４枚‼？よってその攻撃力は……」

ゴーストリックの駄天使
ＡＴＫ２０００→４４００

「攻撃力４４００の貫通攻撃で倍のダメージだと⁉？」

「お願い、ゴーストリックの駄天使‼？ストイックトリックハート‼？」

駄天使の身体を金色のオーラが包み込み、駄天使はいつもより巨大

なひび割れているハートを作り出す。
　そして、作り出した巨大なハートをそのまま炎神に向かって投げつけた。
　炎神は投げつけられた巨大なハートを受け止めようとしたが、そのまま押し潰され、消滅した。
「……見事だ、栗原」

　炎　ＬＰ８０００→０

ーーーーーーー

「そこまでなのです‼？これにて実技試験を終了するのです‼？」
「ふぅ……な、何とか勝てました」
　リーネさんの言葉に私は張り詰めていた緊張の糸が切れてへなへなとその場に崩れ落ちる。
　そんな私を見て苦笑を浮かべながら、不知火さんが近づいてきて私に手を差し伸べて立たせてくれる。
「君のここぞという時の勝負強さに諦めないという意志、しっかりと見せて貰った。今のデュエルを見て文句をつける決闘者はいないだろう。まだ面接試験は終わっていないが、栗原なら大丈夫だ。俺は君を歓迎する」
「は、はい‼？ありがとうございます‼？」
「お疲れ様なのです、遊花ちゃん‼？」
「ひゃぅ‼？り、リーネさん、く、苦しいですぅ……」
「あわわ、またやっちゃったのです。ごめんなさいなのです」
「い、いえ、大丈夫です」
　リーネさんの力一杯の抱擁により押し付けられる双丘から顔だけでも脱出するようにモゴモゴと動かし、リーネさんを何とか見上げることに成功する。
　ふぅ……また窒息するところでした。
「改めてお疲れ様なのです、遊花ちゃん。やっぱり、遊騎君のお弟子で

すね。逆転の仕方が遊騎君そっくりなのです」
「本当ですか⁉？師匠にそっくり……えへへ」
リーネさんの言葉に思わず頬が緩んでしまう。
師匠にそっくりということは、師匠の弟子としてしっかりと成長できているということだ。
それが……堪らなく嬉しい。
「にひひ、嬉しそうだね、遊花ちゃん。不知火さんにも勝っちゃうし、本当に遊花ちゃんには驚かされてばかりだよ。エンタメデュエリストとして、負けてられないな～」
「あ、美傘さん‼？」
「今日の記録はちゃんと遊花ちゃんがプロ決闘者になった時の為にしっかりと残しておくよ。美傘さんも、遊花ちゃんがプロ決闘者になるのを楽しみにしてる。だから、『Ｎａｔｕｒａｌ』の大会の時みたいなデュエルを、今度はたくさんの観客の前でやろうね」
「‼？はい‼？約束です‼？」
私の言葉に美傘さんが笑顔を浮かべる。
これで……ようやくプロ決闘者のための一歩を踏み出せた。
だけど、これはまだプロ決闘者の入り口に辿り着いたに過ぎない。
こんな私に期待をかけてくれている人達の為に、もっともっと精進しないと。
そう、握り拳に力を込めながら、改めて誓いを立てるのだった。

幕間2・変わり続ける月花

●

「ん～……もう、あさぁ……ふぁ～」
汗で張り付いた髪を掻き上げ、ベッドから起き上がるも、あまりの眠さに欠伸を零しながら、そのまま船を漕いでしまう。
「ん～……ねみゅぃ……こにょままもぅぃちどねょうかなぁ……でもぉ……ねちゃうとゆぅかのぁさごはんがぁーーー遊花……？……‼？遊花⁉？」
寝ぼけ頭でぼんやりとしていた意識が一気に覚醒する。
今日は遊花の『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』での採用試験の日だ。
まさかそんな日に限って寝坊しちゃうなんて‼？
私は慌てて自分の部屋を飛び出し、階段を降りてリビングに駆け込む。
「遊花‼？」
「ようやく起きてきたのか……もう遊花は闇と出て行った、ぞ？」
そんな私を呆れた表情を浮かべて出迎えたのは遊花の師匠である結束だった。
結束は私を見て固まると、気まずそうな表情を浮かべて視線をリビングでついていたテレビの方に移すと、額に手をやって困ったような声を出す。
「……朝が弱いとは聞いてたが、まさかここまで弱いとはな。おまえ、もう9時半になるぞ？」
「し、仕方ないじゃない‼？朝は苦手なのよ‼？」
「分かった分かった‼？とりあえず朝食の準備をしといてやるから、その格好をどうにかしてこい‼？」
「えっ？」
結束にそう言われ、改めて自分の格好に目をやる。
私の格好は、起きた状態のまますぐに降りてきてしまったため、ピンクのワンピースのパジャマのままだった。

そのうえ慌てていたため、服が乱れてところどころはだけており、とてもじゃないが人前に出れるような姿ではなかった。
「〜〜〜!!?」
私は耳まで真っ赤になりながら、声にならない悲鳴をあげ、急いで階段を駆け上がり自分の部屋に戻ると、そのまま布団の中に潜り込む。
「見られた……よりにもよって、結束に、っ〜〜〜!!?」
私はあまりの恥ずかしさに悶え、声にならない悲鳴をあげながら、しばらく布団の中を転がることになるのだった。

ーーーーーーー

「お、おお、おはよ、結束!!?きょ、今日もいい朝ね!!?」
「……おう。とりあえず、もう準備も終わるから座って待っててくれ」
「え、ええっ!!?そ、そそ、そうさせて貰うわ!!?」
何とも言えない微妙な表情を浮かべる結束に促され、私は上擦った声を上げながらテーブルの近くにある椅子に腰をかける。
私はテーブルの上に置いてあったリモコンでテレビのチャンネルを適当に回しながら、横目で結束をチラチラと見る。
結束はそんな私を気にした様子もなく、キッチンで忙しなく動いていた。
……多分、気を使ってくれてるのよね?
や、べ、別に結束とは何も無かったし!!?
気を使われる理由なんて、ぜーんぜん、これっぽっちも、見当つかないし!!?
「朝食持ってきたぞ……って、何でお前はテーブルに頭を打ち付けてるんだ?」
「な、ななな、何でもないし!!?」
「お、おう……まあいいけど、後、それ見るのか?」
「えっ?」

結束がお盆で手が塞がっているため、顎でテレビの方を差し、私もテレビの方に視線を移す。
テレビでは、火霊使いヒータをモチーフにした格好の俳優とゴヨウガーディアンをモチーフにした格好の俳優がエルシャドールエグリスタの着ぐるみに向かって『予告する‼?アンタの核石、いただくぜ‼?』とか『デュエルセキュリティの権限において、実力を行使する‼?』とか、決め台詞的なことを言っていた。
……うん、どう見ても子供向けの特撮番組よね。
「べ、べべべ、別に‼?たまたま映ってただけだから‼?そんなことより、早く朝食を寄越しなさい‼?」
「……分かった分かった。一応釘を刺しとくが、ちゃんと落ち着いて食べろよ?今の宝月だと、喉に詰まらせたりしかねん。そういうのは勘弁だ」
「……ん、ごめん。心配してくれて、ありがと……」
本当に心配そうな表情を浮かべる結束に、私は素直に謝る。
そんな私を見て苦笑を浮かべながら、結束は手に持っていたお盆を私の前に置いた。
「別にいいって。ほら、冷めちまう前に食えよ」
「……うん。いただきます」
「おう、食え食え」
結束に促され、お盆にのった朝食に手をつける。
「美味しい……けど、遊花の味付けじゃないわね、これ」
「当たり前だろ、俺が作ったんだから」
「えっ⁉?これ、アンタが作ったの⁉?」
「そんなに驚くことかよ……俺だって最近まで1人暮らししてたんだぞ?料理ぐらいできるっての」
驚く私に、結束が不服そうに表情を歪ませる。
そんな結束を見て、私は少し考え込む。
……思い返してみれば、私はまだ結束のことをあまり知らない。
勿論、プロリーグから追放された元プロ決闘者だとか、結束の過去にどんなことがあったのかは、少しだけ知ってはいるけど、結束　遊

騎がどんな人間なのか、どんなことが好きなのか、どんなことが嫌いなのか、そういったことは何も知らない。
それに、そもそも私と結束はーーー
「それで、宝月は今日はどうするんだ？」
「ーーーほぇ？」
考え込んでいた私は急に結束に声をかけられて間抜けな声を出してしまう。
そんな私を怪訝そうに見ながらも、結束は言葉を続ける。
「今日は遊花がいないだろ？多分、試験が終わったらリーネ達に捕まるだろうから帰ってくるなら夕方とかになると思うが、宝月はどうするんだ？」
「……全然考えてなかった」
「……宝月って、意外と抜けてるところがあるよな」
「う、うるさいわね‼？そういうアンタはどうするのよ‼？」
「俺は宝月がどうするかによって動きを変えようと思ってたからな。遊花が鍵を置いて行ってるから、留守番が必要なら留守番するつもりだったし、逆に宝月が落ち着かないから出て行けって言うんなら適当に外で時間を潰すつもりだったからな」
「何よそれ……」
冗談交じりにそんなことを言う結束に、私は少しムッとする。
その考えは、完全に私に気を使った考え方だ。
まるで私にとって結束は邪魔な存在なんだって決め付けられてるみたいで、少し気に入らない。
そんな私の頭に、１つの妙案が思い浮かぶ。
……いいわ、そっちがそのつもりなら、こっちにだって考えがあるんだから。
「……なら、結束は今日決まった予定はないのよね？」
「ん？まあそうだが……」
「だったら、私に付き合いなさい」
「……は？」
私の言葉に、結束が首を傾げる。

これはチャンスだ。
遊花がいない状況で、結束　遊騎がどのような人間なのかを改めて見極めるチャンス。
だからこそ、私は自信満々にその言葉を口にした。
「今日1日、私がアンタを連れ回してあげる。後悔しても、知らないわよ？」

ーーーーーーー

☆

「どうしてこうなった……」
「ほら、早くこっちきなさいよ‼？」
「分かったって」
俺はため息を吐きながら、店の奥で服を見ている宝月の所に向かう。
本当に、どうしてこうなったのか。
遊花は『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』への採用試験に、闇はプロリーグでの試合、俺も今日は仕事が、休みだったため、栗原家には俺と宝月だけが残ることになった。
俺がいても宝月が落ち着けないだろうと思ったので、宝月が落ち着けるように別行動を取ろうと思っていたのだが……
『どうせ暇なんでしょ？だったら、荷物持ちとして買い物に付き合いなさい。男手があるなら普段より色々な物が買えるしね』
そんなことを言われ、宝月の買い物に荷物持ちとして付き合わされることになっていた。
特に用事があった訳じゃないので、別に構わないといえば構わないのだが、宝月と2人で出かけているこの状況が何とも奇妙で落ち着かない。
「？何妙な顔をしてるのよ？もしかして、具合悪いの？」
「いや、別にそういうわけじゃない。ちょっと考え事をしてただけだ」

「そう？ならいいんだけど……あ、この服……」
そういって宝月が手に取ったのは水色のシフォンワンピース。
水色は遊花のイメージが強く、宝月にしては珍しいなと思っていると……
「これ、絶対に遊花に似合う……買わなきゃ‼？」
「いや、自分が買う服を選べよ」
何しに来たんだお前は。
思わずツッコミを入れてしまう俺に、宝月が不満そうな表情を浮かべる。
「何よ、別にいいでしょ？」
「いや、まあ宝月がしたいようにすればいいとは思うが、自分の服を見に来たんじゃないのかよ？」
「誰もそんなこと言ってないわよ。そもそも今日はウィンドウショッピングのつもりだったし」
「……お前、俺に荷物持ちで付いて来いって言わなかったか？」
「……あ。そ、そうだったかしら？」
「おい、今の『あ』ってなんだ。どうして目を逸らす」
「な、なんでもないわ‼え、えっと、そう‼？この服‼？買おうか悩んでたんだけど、似合うと思う？」
俺の視線から逃れるように、慌てた様子で宝月が手に取ったのはピンクのフリルブラウス。
何だか誤魔化されたような気がするが、とりあえず自分の主観を告げる。
「似合うと思うぞ。まあ、宝月は元が可愛いから大抵の服なら着こなせる気はするが」
「か、かわっ⁉？」
俺が感想を述べると、宝月は頬を赤く染め、あわあわと狼狽え始める。
「か、かかか、からかわないでよ‼？私が可愛いだなんて、そんなわけーーー」
「？別にからかってるつもりはないぞ。宝月は元々小顔でスレンダー

なモデル体型だ。俺の主観が入ってしまうから断言とまではいかないが、モデルとしてでも十分やっていけるぐらい可愛いだろ」
「なっ⁉？ななななな、何恥ずかしいことを言ってるのよ⁉？」
「は？俺はただ感想を言っただけーーー」
「分かった‼？分かったからそれ以上何も言わないで‼？」
宝月はそう叫ぶと、顔を両手で隠してその場に蹲み込んでぶつぶつと何かを呟き始める。
「うぅ……油断した……まさか結束が遊花と同じレベルで天然だったなんて……べ、別に照れてなんかないし、意識なんて全然してないし……くそぅ……」
「……一体なんなんだ？」
宝月の不自然な行動に俺は首を傾げていると……
「ねぇ、あの男の人、どこかで見たことない？」
「えっ？どの人？」
「ほら、あそこの茶髪の……」
そんなひそひそとささやくような声が俺の耳に届く。
声が聞こえた方向をチラリと見ると、店にいた他の女性客がこちらを見て何かを話していた。
ああ、これはよくないパターンだ。
「……ままならないな」
「……？結束？どうかしたの？」
蹲み込んでいた宝月が顔を隠したまま、手の隙間からこちらを訝しげに覗き込む。
……宝月は気付いてないな……なら……
「……いや、何でもない。なんか悪いことしたみたいだし、俺は店の外で待ってるよ」
「あ‼？ちょっと、結束‼？」
宝月の言葉を背中に受けながら、俺は店を出て目立たないように近くの路地に移動する。
……本当に、ままならないな。
俺は空を仰ぎながらため息を吐くのだった。

ーーーーーーー

●

「……うぅ、やらかしたわ」

急に店内から出て行った結束を見て、私は思わずため息を吐いてしまう。

せっかく結束がどのような人間なのかを改めて見極めるチャンスだって言うのに、別行動になってしまったら意味がない。

「で、でも、仕方ないじゃない!!?あんなこと言われるなんて思ってもみなかったし!!?私が、可愛い、とか……うがぁー!!?」

私は自分自身に言い訳をしながらも、先程結束に言われた言葉を思い出し、体温が上がるのを感じて思わず、唸り声を上げてしまう。

て、照れてるわけじゃないし!!?

ぜんっぜん、意識なんかしてないし!!?

私、元から体温が上がりやすいだけだし!!?

「あの、お客様?他のお客様のご迷惑になるのであまり大きな声は……」

「ご、ごめんなさい!!?」

困ったような表情で近づいてきた店員さんに慌てて頭を下げる。

突然唸り声を上げた私を見て、近くにいた他のお客さんも怪訝そうな表情を浮かべていた。

……はぁ〜今日の私は本当にいいところないな。

何だか居心地が悪くなり、店内から出て行こうとした時、その声が私の耳に届いた。

「思い出した!!?さっきの人、あの人に似てたんだ。プロリーグから追放された『墜ちた英雄』、結束　遊騎!!?」

「っ!!?」

その言葉が聞こえてきた瞬間、私は胸が強く締め付けられるような感覚がした。

声が聞こえてきた方向を見ると、店にいた2人の女性客が結束について話していた。
「えー本当に？見間違いじゃない？」
「本当に似てたんだって‼？まあ、流石に本人だとは私も思ってないけど。というか、本物だったらこんな人が多いところになんかこれないでしょ」
「だよね。イカサマをしてプロリーグを追放だなんて、プロ決闘者として恥だもん。私だったら恥ずかしくて外になんか出られないって」
「っ……～～～‼？」
聞こえてくる言葉に、拳を固く握りしめ、今すぐ殴りかかってやりたくなるような衝動を必死に抑える。
……ダメだ。
これ以上ここにいたら、きっと私は耐えられなくなる。
私は脇目も振らずに、急いで店の外に出る。
「ん、もう出てきたのか？」
店の外に出ると、近くの路地から結束が驚いた表情で声をかけてくる。
「そんなに急いで出てこなくても、俺のことは気にしなくてよかったんだぞ？」
「っ‼？アンタはどうしてそう‼？」
「⁉？お、おい‼？どうしたんだよ⁉？」
苦笑しながらそんなことを言う結束に耐えられず、私は思わず結束の胸倉に掴みかかってしまう。
結束の今の言葉と表情で気付いてしまった。
結束は気付いていたんだ、自分のことに気付きそうな人間がいたことを。
そしてそのことで私に迷惑がかからないように店の外に出て行ったんだ。
その事実が、どうしようもなく私の胸を締め付ける。
だってその姿は、私をいつも守ってくれる、私の親友にそっくりで……だからこそ、どうしようもなく腹が立つ。

相談してくれなかった結束も……そんな結束に八つ当たりをしている自分自身にも。
「っ……何でもない……いきなり掴みかかって悪かったわ。ごめんなさい」
「……いや、俺の何かが癇に障ったから宝月は怒ったんだろ？なら宝月が謝る必要なんてない」
「っ……行くわよ。ちょっと気分を変えたいわ」
「いや、俺はこのままどっかに行った方がーーー」
「いいから、行くの‼？」
渋い表情を浮かべる結束の手を掴み、強引に引っ張りながら歩き出す。
……本当に、嫌になる。
こうやって、強引に、力尽くでしか動けない自分自身が。
私は……本当に変われているんだろうか？

ーーーーーーー

☆

「……」
「宝月、大丈夫か？」
宝月に引っ張られ、街の中を進んでいった俺達はもうそろそろお昼の時間になるということで近くにあった喫茶店に入り、一休みをすることにした。
喫茶店に入ってから、沈黙を続ける宝月が気になり声をかけると、宝月は辛そうに表情を歪めながらも、薄く笑う。
「……ん、平気よ。私は平気。心配してくれてありがと」
「だけど、お前……」
「私だって分かってるわよ、自分がどんな表情をしてるかぐらい。だけど、これは自分で考えたいことだから、ごめん」
「……いや、こちらこそ無神経に踏み込み過ぎた、悪かったよ」

俺が謝ると、宝月はより表情を歪めながらも、何も言わずに首を振った。
そんな宝月を見て、どうして宝月がこんなに辛そうな表情をしているのかについて考えを巡らせる。
俺が店を出る前にも、宝月は不自然な動きをしていたが、どちらかといえばそれは驚いているような意味合いが強く、こんな辛そうな雰囲気ではなかった。
だとすれば、宝月に変化があったのは俺が店を出てからの僅かな時間。
そしてその原因は先程の行動からして俺にあるということだ。
そうなると、心当たりは店内にいたーーー
「……ねぇ、結束」
「ん、どうした？」
宝月の変化について考えを巡らせていると、宝月が真剣な表情で俺の顔を覗き込む。
宝月は少し躊躇いながらも、その言葉を口に出す。
「あのさ……私とアンタって、どういう関係？」
「……は？」
宝月の質問の意図が分からず、俺は首を傾げる。
そんな俺に構わず、宝月は言葉を続ける。
「改めて考えるとね。私とアンタの関係って凄く曖昧なのよね。私にとって、結束は親友の師匠。結束にとっての私は、弟子の友人。でも、それってさ……結局は他人ってことじゃない？」
「それは……」
「だから、色々考えたけど、これってただのお節介でしかないのかなって、思ったの。そんなに歳が離れてる訳じゃないけど、結束は私よりも色々なことを知ってるし、経験してる。だから、私みたいな小娘が何かを言っても、余計なお世話なんじゃないかって、思うの」
そういう宝月の表情は、弱々しく今にも泣き出してしまいそうだった。
こんな弱々しい宝月の姿は、今まで1度も見たことがなかった。

俺の中での宝月は、遊花が俺の弟子になった時に俺を見極める為にデュエルを挑んできた時の印象が強く、宝月は友人の為に頑張れる眩しく、強い人間なんだと思っていた。
……だけど、それは俺の思い違いだったのかも知れない。
この弱々しく、誰かの為に思い悩み、不安になっているこの姿こそが、本来の宝月の姿なのだと、俺の感覚が告げていた。
「……はぁ～やっぱり、俺もまだまだ未熟だな」
1ヶ月近くも接していてそんなことにも気づけなかった自分が嫌になる。
だけど、気付けたのなら、まだ遅くはないハズだ。
「宝月ってさ……意外と抜けてるところが多いよな」
「……は？」
「朝起きてくるのは遅いし、無駄に憎まれ口を叩いてみたりするし、何かあるとすぐに相手に噛み付いていくし、不器用だし」
「……本人の前でよくそこまで言えるわね」
突然の俺の言葉に、宝月が怒りで頬を引攣らせる
そんな宝月に構わず、俺はさらに言葉を続ける。
「だけど、遊花のことは本当に大切に思ってて、その為だったら得体の知れない俺みたいな奴にでも立ち向かえる凄く強い決闘者。それが、俺がこの1ヶ月で知った、宝月　桜って人間だ。ああ、後意外と打たれ弱いところがあるってのも今知ったことだな」
「……何が言いたいのよ」
「さっき宝月は、俺とお前が他人だって話をしたけどさ。そんな他人の俺でもこんなに宝月を知ったんだぞって話だ。宝月だって、俺の事、少しは知ってるだろ？」
「……」
「関係ってのは、そんなにすぐに作られていくものでも、名前が付けられるものでもないんだよ。関わっていく中で少しずつ形が作られていって、気付いたらそういう関係に収まってるんだ。だから、そんなに関係がどうとか、考えなくてもいいんじゃないか？」
「結束……」

俺の言葉に、宝月が目を丸くする。
「まあ、それが不安だって言うんなら、宝月がこの関係に好きな名前を付ければいい。歳とかそんなものは関係ねぇよ。リーネや不知火さんは俺より年上だけど、俺はあの２人のことは友人だと思ってるぜ」
「私は……」
「まあ、俺との関係なんて、あってもデメリットにしかならないかも知れないけどな」
「っ、そんなこーーー」
「おや？彼方におられるのは宝月様ではありませんか、お嬢様？」
「げっ、あの女がいるんですの？」
「……お嬢様、淑女がそのような言葉を使うのははしたないですわ」
「ん？」
「うげっ、なんでアイツがいるのよ……」
宝月が何かを言おうと口を開こうとした瞬間、どこからか宝月の名前が聞こえてきて、思わずそちらの方を見ると、そこにはメイドを侍らせ、金髪に縦ロールという今時珍しいぐらいテンプレートなお嬢様がいた。
俺と同じようにそのお嬢様の方を見た宝月は心底嫌そうに顔を顰める。
宝月のことを知ってるってことは、あのお嬢様はデュエルアカデミア生か。
「分かっておりますわ。それで、宝月　桜は何処にいるんですの？」
「あちらでございます」
あからさまなお嬢様はメイドに促されこちらを向き、宝月と一緒にいる俺を見て表情が凍り付いた。
「お、男⁉？あのデュエルアカデミアで刃向かう決闘者一人一人にトラウマを刻み込み、裏の人間でもすくみ上がらせるあの『壊獣姫』が男と一緒にいるんですの⁉？」
「どうやらデート中みたいですね。お嬢様も宝月様を見習って早くお相手を見つけないと行き遅れてしまいますよ」
「よ、余計なお世話ですわ‼？」

どうやら酷い勘違いをしているみたいで狼狽しているお嬢様。
というか……
「宝月……お前、デュエルアカデミアで何したんだよ？」
「何もしてないわよ‼？ただ、遊花にいちゃもんを付けてくる奴を片っ端から蹴散らしただけで……」
「してんじゃねぇか」
そんな会話をしている内にお嬢様はメイドを引き連れてこちらに向かって歩いてくる。
何だか厄介事になる気配がするな、これ。
「ご機嫌よう、宝月　桜。今日は栗原　遊花の面倒は見なくてよろしいんですの？」
「っ、こんにちは、鬼石　千晶（きせき　ちあき）。お生憎様、あの子は今日は就職試験に行ってるの。家で愛でられて食っちゃ寝するしか能がない誰かさんとは違って立派でしょ？」
「っ、あらあらあんな見窄らしい子が就職できる企業などあるのかしら？慰めておく準備でもしておいた方がいいんじゃなくて？」
「ぐっ、心配無用よ。いつまでたってもトップ１０に入れない万年１１位の方と違ってウチの遊花はトップ１０とも余裕で渡り合える程優秀なの。貴方こそ、いつまで経っても結果が出せずに実家に見捨てられないように注意した方がいいんじゃない？」
「ふふ、ふふふ」
「はは、ははは」
「……なんなんだコイツらは」
「申し訳ございません。お嬢様はこうして宝月様と戯れ合うことが生き甲斐なのでご容赦いただければと」
「どんな生き甲斐だよ……」
「というか生き甲斐ではありませんわ‼？」
宝月とお互いに怒りに頬を引攣らせながら笑い合っていた鬼石と呼ばれた少女がこちらを向く。
鬼石はしばらくこちらをジッと見て奥歯にものが詰まったような表情を浮かべる。

「ねぇ、貴方どこかで会ったことがないかしら？何だか見覚えがある気がするのですけど……」
「お嬢様……ご学友の恋人に手を出そうとするなんて……嘆かわしい」
「貴女本当に失礼ですわね、珊瑚（さんご）‼？それでも私のメイドですの‼？」
「お嬢様を弄ぶのが私の生き甲斐ですので」
「そんな生き甲斐捨ててしまえ、ですわ‼？」
「というか、結束はこ、恋人なんかじゃないわよ‼？」
「あの、お客様方？他のお客様のご迷惑になるのであまり大きな声は……」
『ごめんなさい‼？』
　困ったような表情で近づいてきた店員さんに全員で頭を下げる。
　うん、もう少し自重してくれないかな、コイツら。
　そんなどこか気が抜けそうになったところで、珊瑚と呼ばれたメイドの言葉に背筋が凍った。
「冗談はさておき、お嬢様。この殿方は、あの方ですわ。２年前にプロリーグから追放されたプロ決闘者、『墜ちた英雄』、結束　遊騎」
「っ‼？」
「『墜ちた英雄』……あのイカサマでプロリーグを追放された？」
　鬼石がもう１度俺を見る。
　そしてすぐに浮かんだのは侮蔑するような嘲笑。
「あらあら、栗原　遊花といい、結束　遊騎といい、宝月　桜。貴方の目はくすんでるんじゃないですの？それともゴミ拾いをする癖でもあるんですの？」
「……何ですって？」
「オーホッホッホッ‼？だってそうでしょう？デュエルアカデミアでただ存在するだけの栗原　遊花に加え、そこにいる結束　遊騎なんてこの街１番の罪人。そんな人間とばかり付き合っているなんて、貴方の程度が知れるじゃありませんか」
　そういって高笑いをする鬼石に宝月は……

「……いい度胸してるじゃない、鬼石。遊花だけじゃ飽き足らず、結束のことまで馬鹿にするなんて……アンタ、覚悟ができてるのよね？」
　拳を握りしめ、底冷えするような声を出し、怒りを露わにした表情で鬼石を睨みつける。
「表に出ろ。デュエルで決着をつけてあげるわ」
「あら、怒りました？」
「これが怒ってないように見えるなら、アンタの目の方こそくすんでるわ。それとも、いつもみたいに逃げる？その方が弱虫のアンタにはお似合いだわ」
「……何ですって？」
　宝月の言葉に、今度は鬼石の目に怒りの炎が宿る。
　そんな鬼石を宝月は鼻で笑う。
「だってそうでしょ？アンタ、遊花を馬鹿にするわりには遊花や私にデュエルを挑んだことないじゃない？アンタは本当は知ってるんでしょ、遊花がどれだけ強いか。そして怖いからこそデュエルは絶対に挑まず、悪口を叩き続ける。デュエルしなければ、自分が負けていることにはならないものね。卑怯者らしい姑息な戦い方だわ、反吐がでる」
「っ‼？言ってくれるじゃありませんか。そこまで言うのであればまずは貴方を、次に栗原　遊花を叩き潰してあげますわ。私を卑怯者だなどと口にしたこと、後悔させてあげますわ」
「後悔するのはアンタの方よ。その鼻につく上から目線が２度とできないぐらい、完膚なきまでに叩き潰してあげるわ」
「ふん、先に行って待っていますわ。珊瑚」
「分かりました、お嬢様。それでは宝月様、結束様、お待ちしております」
　そういって鬼石が店の外に出て行った。
「お、おい、宝月‼？」
　面倒な事になってきた為、慌てて宝月に声をかける。
　そんな俺に、宝月は申し訳なさそうな表情を浮かべる。

「悪いわね、結束。私の問題に巻き込んで」
「いや、迷惑をかけてるのは俺の方だろ。俺のせいでお前はいちゃもんを付けられたんだから」
「……確かにそうかもね」
「だろ？俺は別に気にしてなーーー」
「けどね、結束」
俺の言葉を遮り、宝月は真剣な表情で口を開く。
「覚えておいて、アンタが気にしてなくても、アンタが馬鹿にされることを気にする人間がいるんだってこと。少なくとも、私はアンタが馬鹿にされることを黙って聞いてることなんてできないから」
そういうと、宝月は鬼石を追うように店を出て行く。
そんな宝月に、俺は苦笑を浮かべ、思わず呟いた。
「……本当に律儀な奴だよ、お前はさ」

ーーーーーー

●

「覚悟はよろしいかしら、宝月　桜」
「それはこちらの台詞よ、鬼石。いい加減、年貢の納め時って奴だわ」
店を出た私達は近くにあった街中にあるいつでも使用可能なフリーのデュエルスペースに移動し、デュエルディスクを起動する。
鬼石は遊花や結束を侮辱した。
それだけで私が戦う理由としては十分。
私はデッキケースから自分のデッキを取り出し、少しの間見つめてからデュエルディスクにセットする。
頼んだわよ、私のデッキ。
このデュエル、絶対に勝つ。
『決闘‼？』

桜　ＬＰ８０００

千晶　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は貰いますわ!!?……ふっ、完璧な手札ですわ!!?宝月　桜、貴女を完膚無きまでに倒して差し上げますわ!!?」
「御託はいいからさっさと始めなさい。私も今は加減とかしてあげれないから」
「減らず口を……ならば完全なる敗北というものを教えて差し上げますわ!!?魔法カード、ブリリアントフュージョン!!?同名カードは１ターンに１枚しか発動できませんが、このカードの発動時に、自分のデッキからジェムナイト融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体を、攻撃力・守備力を０にしてＥＸデッキから融合召喚しますわ!!?」
「いきなりデッキ融合……中々面倒なことになりそうね」
「ただし、このカードがフィールドから離れた時にそのモンスターは破壊されますが。私はデッキからクリスタルローズとジェムナイトラピスを墓地に送り融合!!?水晶の薔薇よ、癒しの戦士と交わりて、新たな輝石を生み出しなさい!!?」
　鬼石のデッキから水晶で出来た薔薇と、胸元に紫色の宝石が嵌め込まれた戦士が現れ、フィールドに出来た渦に飲み込まれる。
　そして渦が弾けると、白いマントを羽織った金色の戦士が現れる。
「その輝きで仲間を導きなさい!!?ジェムナイトセラフィ!!?」

〈ジェムナイトセラフィ〉☆５　天使族　地属性
　ＤＥＦ１４００→０

「ジェムナイトセラフィ……」
「まずは下準備ですわ。私はジェムレシスを召喚しますわ!!?」

〈ジェムレシス〉☆４　岩石族　地属性

ＡＴＫ１７００

フィールドに現れたのは橙色の宝石が嵌め込まれたアルマジロのモンスター。

「ジェムレシスの効果発動!!?召喚に成功した時、デッキからジェムナイトモンスター１体を手札に加えますわ!!?私はデッキからジェムナイトアレキサンドを手札に加えます。そしてジェムナイトセラフィの効果!!?このカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分は通常召喚に加えて１度だけ、自分メインフェイズにモンスター１体を通常召喚できますわ!!?私は今手札に加えたジェムナイトアレキサンドを召喚しますわ!!?」

〈ジェムナイトアレキサンド〉☆４　岩石族　地属性

ＡＴＫ１８００

セラフィに導かれて現れたのは様々な色の宝石が鎧に嵌め込まれた白銀の戦士。

「さらにジェムナイトアレキサンドの効果発動!!?このカードをリリースしてデッキからジェムナイト通常モンスター１体を特殊召喚しますわ!!?ジェムナイトアレキサンドをリリースし、デッキから現れなさい!!?ジェムナイトクリスタ!!?」

〈ジェムナイトクリスタ〉☆７　岩石族　地属性

ＡＴＫ２４５０

アレキサンドの鎧が輝くと、その鎧から水晶が生え、白銀から銀色に色が変わった。

「そして、輝きなさい!!?宝石に彩られしサーキット!!?」

「リンク召喚か……」

鬼石の前に巨大なサーキットが現れる。

「召喚条件はジェムモンスター２体!!?私はジェムナイトセラフィと

ジェムレシスの２体をリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？幻想より伝わる原初の宝石‼？リンク２‼？ジェムナイトファントムルーツ‼？」

〈ジェムナイトファントムルーツ〉ＬＩＮＫ　２　岩石族　地属性
ＡＴＫ１４５０　↙？　↘？

セラフィとジェムレシスがサーキットに吸い込まれ、サーキットの中から銀色の翼を持つ戦士が現れる。
「ジェムナイトファントムルーツの効果発動‼？このカードがリンク召喚に成功した場合、デッキからジェムナイトカード１枚を手札に加えますわ‼？私はデッキからジェムナイトフュージョンを手札に加えますわ‼？」
「っ、きたわね……ジェムナイト専用の融合魔法」
「まだ下準備は終わっておりませんわ‼？私は墓地に存在するクリスタルローズの効果発動‼？同名カードは１ターンに１度、このカードが墓地に存在する場合、自分の墓地から融合モンスター１体を除外してこのカードを守備表示で特殊召喚できますわ‼？私は墓地のジェムナイトセラフィを除外してクリスタルローズを特殊召喚しますわ‼？」

〈クリスタルローズ〉☆２　岩石族　光属性
ＤＥＦ５００

「さらにクリスタルローズのもう１つの効果発動‼？１ターンに１度、自分メインフェイズに、手札・デッキからジェムナイトモンスターまたは幻奏モンスター１体を墓地へ送り、エンドフェイズまで、このカードは墓地へ送ったモンスターと同名カードとして扱いますわ‼？私はデッキからジェムナイトラズリーを墓地に送りますわ‼？」
デッキからラピスに似た戦士が墓地に送られ、クリスタルローズの姿がラズリーに変わる。

「さらに墓地に送られたジェムナイトラズリーの効果も発動しますわ。このカードが効果で墓地へ送られた場合、自分の墓地の通常モンスター1体を対象としてそのモンスターを手札に加えますわ。私は墓地に存在するジェムナイトラピスを手札に加えます。これでようやく下準備は終わりましたわ。行きますわよ、宝月さん‼?魔法カード、ジェムナイトフュージョン‼?」
「さて、何が出てくるかしらね」
「自分の手札・フィールドから、ジェムナイト融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚しますわ‼?私は手札のジェムナイトラピスとフィールドのジェムナイトラズリーとなったクリスタルローズを融合‼?癒しの力を持つ双子の戦士よ、今交わりて、新たな輝石を生み出しなさい‼?」
ラピスとラズリーがフィールドに出来た渦に飲み込まれる。
そして渦が弾けると、青い修道服をきた女戦士が現れた。
「その輝きで闇を払いなさい‼?ジェムナイトレディラピスラズリ‼?」

〈ジェムナイトレディラピスラズリ〉☆6　岩石族　地属性
ＡＴＫ２４００

「まだまだ行きますわよ。まずは墓地に存在するジェムナイトフュージョンの効果発動‼?自分の墓地に存在するジェムナイトモンスター1体を除外して墓地のこのカードを手札に加えますわ。私は墓地のジェムナイトアレキサンドを除外してジェムナイトフュージョンを再び手札に加えますわ」
「融合魔法が回収できるのがジェムナイトのズルいところよね」
「なんとでも言ってくださいまし。私はライフポイントを１０００支払い、ジェムナイトファントムルーツのもう1つの効果を発動しますわ‼?フュージョンルーツ‼?」

千晶　ＬＰ８０００→７０００

「自分の墓地のカード及び除外されている自分のカードの中から、ジェムナイト融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをデッキに戻し、その融合モンスター１体をＥＸデッキから融合召喚しますわ‼？ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン直接攻撃できませんが、どの道先攻なので、デメリットにはなりませんわね」

「っ、本当に１度融合が始まると面倒なテーマね、ジェムナイトは‼？」

「私は除外されているジェムナイトセラフィとジェムナイトアレキサンドをＥＸデッキとデッキに、墓地に存在するジェムナイトラズリーをデッキに戻して融合‼？導きの宝石よ、輝ける魔石よ‼？癒しの戦士と交わりて、究極の輝石を生み出しなさい‼？」

フィールドに出来た渦に、セラフィとアレキサンド、ラズリーが飲み込まれる。

そして渦が弾けると、赤いマントを羽織り、胸にダイヤモンドが嵌め込まれた女騎士が現れた。

「これが私のエースですわ‼？闇の中でも輝く高貴なる宝石騎士‼？ジェムナイトレディブリリアントダイヤ‼？」

〈ジェムナイトレディブリリアントダイヤ〉☆１０　岩石族　地属性
ＡＴＫ３４００

「あれが鬼石のエースモンスター……」

「さあ、私の攻撃、存分に受けてくださいまし。ジェムナイトレディラピスラズリの効果発動‼？ジュエルフラッシュ‼？１ターンに１度、自分のメインフェイズに、デッキ・ＥＸデッキからジェムナイトモンスター１体を墓地へ送り、フィールドの特殊召喚されたモンスターの数×５００ポイントのダメージを相手に与えますわ‼？」

「‼？バーン戦術か‼？」

「私はＥＸデッキから2体目のジェムナイトレディラピスラズリを墓地に送りますわ。フィールドに特殊召喚されたモンスターはジェムナイトクリスタ、ジェムナイトファントムルーツ、ジェムナイトレディブリリアントダイヤ、そしてジェムナイトレディラピスラズリの４体。合計２０００ポイントのダメージを受けて貰いますわ‼?」
「くっ‼?」

桜　　ＬＰ８０００→６０００

ラピスラズリの手から紫色の閃光が放たれ、私のライフを削る。
先攻から２０００のバーンダメージって割と洒落にならないわね。
「驚くのはまだ早いですわよ?ジェムナイトレディブリリアントダイヤの効果発動‼?ジュエルヴァンガード‼?1ターンに1度、自分メインフェイズに自分フィールドの表側表示のジェムナイトモンスター1体を選んで墓地へ送り、ＥＸデッキからジェムナイト融合モンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚しますわ‼?私はジェムナイトレディラピスラズリを墓地に送り、現れなさい‼?ジェムナイトマスターダイヤ‼?」

〈ジェムナイトマスターダイヤ〉☆9　岩石族　地属性
ＡＴＫ２９００

ラピスラズリの姿が消え、代わりに現れたのはダイヤモンドの鎧を身に纏い、8個の宝石が嵌め込まれた大剣を持つ騎士が現れる。
あのモンスターは確か……
「ジェムナイトマスターダイヤの効果発動‼?ジュエルライド‼?1ターンに1度、自分の墓地のレベル7以下のジェムナイト融合モンスター1体を除外してエンドフェイズまで、このカードは除外したモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得ますわ‼?私は墓地のジェムナイトレディラピスラズリを除外して、同名カードとして扱い、同じ効果を得ますわ‼?」

「っ‼?・やばっ‼?・」
マスターダイヤが大剣に嵌められている紫色の宝石に手をやると、大剣を残してマスターダイヤの姿がラピスラズリに変わる。
「ジェムナイトレディラピスラズリとなっているジェムナイトマスターダイヤの効果発動‼?・ジュエルフラッシュ‼?・私はＥＸデッキから３体目のジェムナイトレディラピスラズリを墓地に送り、再び２０００ポイントのダメージを受けて貰いますわ‼?・」
「ぐっ‼?・」

桜　　ＬＰ６０００→４０００

マスターラピスラズリが持つ大剣から紫色の閃光が放たれ、再び私のライフを大きく削る。
これだけ動いて置きながら、鬼石はまだ攻撃の手を緩めない。
「まだ終わりませんことよ‼?・再び魔法カード、ジェムナイトフュージョン‼?・私は手札のジェムナイトオブシディアとフィールドのジェムナイトクリスタ、ジェムナイトファントムルーツの３体を融合‼?・黒曜の宝石よ、水晶の騎士よ、原初の宝石と交わりて、究極の輝石を生み出しなさい‼?・」
黒曜石の身体を持つ戦士とクリスタ、ファントムルーツがフィールドに出来た渦に飲み込まれる。
そして渦が弾けると、現れるのは２体目のダイヤモンドの騎士。
「闇を払う尊厳なる宝石騎士‼?・ジェムナイトマスターダイヤ‼?・」
〈ジェムナイトマスターダイヤ〉☆９　岩石族　地属性
ＡＴＫ２９００

「っ、またマスターダイヤ⁉?・」
「もうお分りですわよね?・まずはジェムナイトオブシディアの効果発動‼?・このカードが手札から墓地へ送られた場合、自分の墓地のレベル４以下の通常モンスター１体を特殊召喚しますわ‼?・私は墓地の

ジェムナイトラピスを特殊召喚しますわ!!?」

〈ジェムナイトラピス〉☆3　岩石族　地属性
ＤＥＦ１００

「そして2体目のジェムナイトマスターダイヤの効果発動!!?ジュエルライド!!?墓地のジェムナイトレディラピスラズリを除外して、同名カードとして扱い、同じ効果を得ますわ!!?そしてジェムナイトレディラピスラズリとなっているジェムナイトマスターダイヤの効果発動!!?ジュエルフラッシュ!!?私はデッキからジェムナイトラズリーを墓地に送り、再び２０００ポイントのダメージを受けて貰いますわ!!?」
「きゃっ!!?」

桜　ＬＰ４０００→２０００

２体目のマスターラピスラズリが持つ大剣から紫色の閃光が放たれ、私のライフはとうとう２０００まで削られてしまう。
苦い表情を浮かべる私を見て、鬼石は勝ち誇ったような高笑いをする。
「オーホッホッホッ!!?どうですか、宝月　桜。貴女はヘルテンペストを戦術の起点に置いていますが、あのカードを使うには３０００ポイントの戦闘ダメージを受けなければいけません。ですが、貴女のライフはすでに２０００ポイント。これでヘルテンペストはもう使えませんわ」
「っ……」
「オーホッホッホッ!!?その悔しそうな表情、堪りませんわ。私は墓地に送られたジェムナイトラズリーの効果を発動して墓地のジェムナイトクリスタを手札に加えます。そしてジェムナイトマスターダイヤの永続効果、ジュエルエレメント!!?このカードの攻撃力は、自分の墓地のジェムモンスターの数×１００ポイントアップしますわ。

私の墓地にはジェムレシス、ジェムナイトオブシディア、ジェムナイトラズリー、ジェムナイトファントムルーツ、ジェムナイトレディラピスラズリの５体のジェムモンスターがいるため５００ポイント攻撃力がアップしますわ」

ジェムナイトマスターダイヤ
ＡＴＫ２９００→３４００

「私はカードを２枚伏せますわ。（私の伏せカードはジェムナイトモンスターが破壊された場合にそのモンスターの元々の攻撃力のダメージを与えるブリリアントスパークとジェムナイトをリリースすることで墓地のジェムナイトを蘇生するジェムエンハンス。こちらのモンスターを破壊しようとしたらその時点で貴女の敗北は決定しますわ）私はこれでターンエンド。さあ、最後までみっともなく足掻いてくださいまし」

桜　ＬＰ２０００　手札５
ーーーーー　ー
ーーーーー
○　ー
○□○ーー
ー▲△▲ー　ー
千晶　ＬＰ７０００　手札１

「……１ターン目からよくここまで追い詰められたものよね」
「オーホッホッホッ‼負けを認める気にはなったかしら宝月　桜‼??ヘルテンペストが使えない貴方には打てる手もないでしょう？地面を這い蹲って泣いて謝れば許してあげてもよろしくてよ？」
思わず苦笑を浮かべた私を嘲笑うように、鬼石が高笑いをする。
確かに私のライフは２０００まで削られている。
こうなってしまったらヘルテンペストは使えず、私の戦術の殆どが

使用できなくなっていただろう。
……そう以前の私なら。
「ふっ、やっぱりアンタの目はくすんでるみたいね、鬼石」
「⁉?」
「ヘルテンペストが使えなければ打てる手がない？一体いつの私の話をしてるのよ？その程度のことで私が負けるなんて、随分舐めてくれるじゃない？」
「何ですって⁉?」
「大体、地面を這い蹲って泣いて謝る？ふざけんじゃないわよ‼?アンタには見えないの？私の身体から溢れ出る怒りの炎が？」
「っ‼?」
私の剣幕に鬼石が身体を震わせる。
「アンタは今までも遊花を侮辱してきた。それだけでも赦すわけにはいかない。だけど、今私から怒りの炎が溢れ出てるのはそれが理由じゃない」
そこで私は言葉を区切り、デュエルを観戦している結束に視線を向ける。
アンタが言ったんだからね、この関係に好きな名前を付けていいって。
結局、答えなんかもう出てた。
結束のことを悪く言われて私が怒ってしまう理由なんて1つしかない。
だからこそ、ここではっきりと宣言する。
「私が今1番赦せないのは結束を……私の友達を罪人だと馬鹿にしたこと‼?私の友達を馬鹿にして、ただで済むと思ってんじゃないわよ‼?アンタの全てを壊してあげるわ‼?」
さあ、行くわよ、私のデッキ。
結束と出会ったことで繋がった新しい力、存分に見せてやりましょ‼?
「私のターン、ドロー‼?手札からドットスケーパーを捨てて、魔法カード、ワンフォーワンを発動‼?デッキからレベル1モンスター1

体を特殊召喚する!!?出てきなさい、フォーマッドスキッパー!!?」

〈フォーマッドスキッパー〉☆1　サイバース族　光属性
ＤＥＦ０

私のフィールドに機械の身体を持つ魚のモンスターが現れる。
「墓地に送られたドットスケーパーの効果発動!!?デュエル中に1度、このカードが墓地に送られた場合に特殊召喚するわ!!?」

〈ドットスケーパー〉☆1　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

スキッパーの横にドットの身体を持つモンスターが現れる。
「行くわよ、繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」
「リンク召喚ですか……」
私が目の前に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
さあ、初陣よ!!?
「召喚条件はレベル４以下のサイバース族モンスター1体!!?私はドットスケーパーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク1!!?転生炎獣ペイルリンクス(サラマングレイト)!!?」
「転生炎獣ですって!?」

〈転生炎獣ペイルリンクス〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ５００　←

ドットスケーパーがサーキットに吸い込まれると、代わりにサーキットから現れたのは真っ赤な装甲に身を包んだ山猫のモンスター。
現れたペイルリンクスを見て、鬼石が目を見開く。
「転生炎獣……そんなモンスター見たことも聞いたこともないですわ!!?それに、貴方はそんなモンスターは持ってなかったハズですわ

!!?」
「だから言ったでしょ？一体いつの私の話をしてるのよって。この子達は最近譲って貰ったのよ。私のお師匠様にね」

ーーーーーーー

『これで終わりだ。行け、戦神ー不知火!!?不知火流　輪廻刃!!?』
『きゃあ!!?』

桜　ＬＰ２４００→０

『ああ～また負けた!!?もう、炎さん強過ぎるわよ……』
『これでもプロ決闘者だからな。それにデッキ相性としてもこちらが有利だ。そう簡単には宝月に負けないさ』
『Ｎａｔｕｒａｌ』で行われた大会から3日後。
私は仕事終わりの炎さんに誘われて『Ｎａｔｕｒａｌ』で、炎さんとデュエルをしていた。
あの大会で炎さんの弟子になったということでこうして指導を受けているわけだけど、全然歯が立たなくて項垂れてしまう。
『やっぱり、少しデッキを見直そうかしら。ヘルテンペストだってどんなデュエルでも使えるわけじゃないんだし……』
『ふむ、どこか思うところがあるのか？』
『実はこの前、ライフポイント４０００でデュエルしないといけない状況があって……』
『ほう、それは珍しい。だが、確かにライフポイントが４０００だとヘルテンペストを使うのはかなり難しくなるな』
『ええ、その時は正直言って完全に足手纏いだったわ。でも、これから先また経験することもあるかも知れないし、ヘルテンペスト自体を封じてくるようなデュエルだってあるかも知れない。そのために、今の大半をヘルテンペストに頼ってる戦術も少しは変えていきたいのよね』

私の言葉に、炎さんは興味深そうな表情を浮かべる。
私が思い出したのは異世界でデュエルをした時のことだ。
こちらの世界とは違いライフポイントが４０００であることが普通の世界。
確かにこちらの世界ではほとんど気にする程のことではないけど、またあのようなことが起こった時にルールの弊害で足手纏いになるのはゴメンだ。
そうじゃなくても、先攻でバーン戦術を使われて私のライフポイントが３０００より少なくなりヘルテンペストを使えなくなるようなデュエルだってこれから経験する可能性は十分ある。
そうなった時に、何も出来ずに負けるようなことは避けたい。
『遊花だって、たったの1ヶ月で全ての召喚方法を使えるぐらいに変わって見せた。今だって、どんどん変わり続けてる。だから、私だって、遊花に負けないように何度だって変わって見せなきゃ』
『ふむ、何度だって変わる、か……』
私の言葉に、炎さんが何かを考え込む。
そして、少し寂しそうな笑みを浮かべたかと思うと、自分のバックから1つのカードの束を取り出し、私に手渡した。
『君の思いは分かった。なら、このカード達を使って見るつもりはないか？』
『……転生炎獣？見たことがないテーマね』
手渡されたカード達を見ていくと、どのモンスターにも転生炎獣という名称が付いていた。
聞いたことがないテーマだけど、闇が使ってるヴェルズみたいな何か特殊なテーマなのかしら？
『そのカード達は元々俺の……友人が使っていたものだ。色々あって今は俺の手元にあるが、俺にはそのカード達は使えなくてな。だが、変わりたいという宝月にはぴったりなテーマだと思う』
『……確かに少し見た限り私に合いそうだけど、炎さんの友人のものだったんでしょ？本当に私なんかに渡しちゃっていいの？』
友人から渡されたものなら、それはとても大切なもののハズだ。

それは使えないといいながらこうして持ち歩いていることからよく分かる。
そんなものを私なんかに託して大丈夫なのかしら？
そんな私の質問に、炎さんは相変わらず寂しそうな笑みを浮かべながらも、はっきりと告げる。
『ああ、構わない。そのカード達も、もう1度誰かと共に戦うことを望んでいるハズだ』
『炎さん……分かった、受け取る。大切に使わせて貰うわ』
『ああ、そうしてくれ』
炎さんの言葉に頷き、受け取った転生炎獣のカードを改めて見る。
……炎さんとこの転生炎獣達に何があったかは分からない。
だけど、初めて師匠である炎さんから受け継いだカード……絶対に使いこなしてみせる!!?

ーーーーーーー

「みせてあげるわ!!?師匠から受け継いだ、私の新しい力を!!?転生炎獣ペイルリンクスの効果発動!!?1ターンに1度、このカードがリンク召喚に成功した場合に、デッキから転生炎獣（サラマングレイト）の聖域（サンクチュアリ）1枚を手札に加える!!?私はデッキからフィールド魔法、転生炎獣の聖域を手札に加え、そのままフィールド魔法、転生炎獣の聖域を発動!!?」
フィールド魔法を発動すると、辺りの風景がマグマに囲まれた火山のフィールドに変わる。
「転生炎獣のフィールド魔法……」
「手札に存在する転生炎獣（サラマングレイト）モルの効果発動!!?1ターンに1度、自分のリンクモンスターをリンク召喚に成功したターンの自分のメインフェイズに、手札のこのカードをリンクモンスターのリンク先となる自分のフィールドに特殊召喚する!!?」

〈転生炎獣モル〉☆1　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ０

ペイルリンクスの近くの地中から、爪に炎を纏ったモグラのモンスターが現れる。
「さて、次はコイツよ‼?・私は転生炎獣ペイルリンクスと転生炎獣モルをリリースして轟雷帝ザボルグをアドバンス召喚‼?・」
「はあっ⁉?・」

〈轟雷帝ザボルグ〉☆8　雷族　光属性
ＡＴＫ２８００

ペイルリンクスとモルの姿が消え、フィールドに肩に巨大な赤い角が生えた鬼が現れる。
「轟雷帝ザボルグの効果発動‼?・さらにそれにチェーンして転生炎獣モルが墓地に送られたことで手札の転生炎獣ガゼル（サラマングレイト）の効果発動‼?」
「っ、また転生炎獣ですの⁉?・」
「1ターンに1度転生炎獣ガゼル以外のサラマングレイトモンスターが自分の墓地に送られた場合、このカードを手札から特殊召喚する‼?」

〈転生炎獣ガゼル〉☆3　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１０００

モルがいた場所に今度は炎を纏ったガゼルが現れる。
「そして轟雷帝ザボルグの効果発動‼?・このカードがアドバンス召喚に成功した場合、フィールドのモンスター1体を対象としてそのモンスターを破壊し、破壊したモンスターが光属性だった場合、その元々のレベルまたはランクの数だけ、お互いはそれぞれ自分のＥＸデッキからカードを選んで墓地へ送る‼?・このカードが光属性モンスターをリリースしてアドバンス召喚に成功した場合、墓地へ送る相手のカードは自分が選べるけど、今回は光属性モンスターは使ってないか

らアンタが選べるわよ。まあ、そもそもアンタのＥＸデッキは残らないけどね‼？私が破壊するのは轟雷帝ザボルグ自身‼？」
轟雷帝ザボルグが自分の身体に雷を落とすと、轟雷帝ザボルグの身体から雷が溢れ出して私達のＥＸデッキのカードを吹き飛ばす。
「くっ……ＥＸデッキが全て墓地に……」
「これでもう、お得意の融合召喚は出来ないわね」
「ですが、墓地にジュエルモンスターが増えたことでジェムナイトマスターダイヤの攻撃力はさらに上がりますわ‼？」

ジェムナイトマスターダイヤ
ＡＴＫ２９００→４２００

「攻撃力ぐらい、いくらでもくれてやるわ‼？転生炎獣ガゼルのもう１つの効果発動‼？１ターンに１度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから転生炎獣ガゼル以外のサラマングレイトカード１枚を墓地に送る。私はデッキから転生炎獣（サラマングレイト）スピニーを墓地に送るわ‼？」
「くっ、次から次へと転生炎獣を……」
「墓地に存在する転生炎獣スピニーの効果発動‼？自分フィールドに転生炎獣スピニー以外のサラマングレイトモンスターが存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚する‼？ただしこの効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外されるわ‼？」

〈転生炎獣スピニー〉☆３　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１５００

私の墓地からガゼルに寄り添うように炎を纏ったアルマジロトカゲが現れる。
「魔法カード、貪欲な壺‼？墓地に存在するリンクリボー、プロキシードラゴン、セキュリティドラゴンをＥＸデッキに、轟雷帝ザボルグ、

ドットスケーパーをデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする‼よし、？今ドローした転生炎獣（サラマングレイト）ミーアの効果発動‼？このカードが通常のドロー以外の方法で手札に加わった場合、このカードを相手に見せ、手札から特殊召喚する‼？」

〈転生炎獣ミーア〉☆２　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ６００

フィールドに身体から炎を噴き出しているミーアキャットが現れる。
これで準備は整った‼？
「フォーマッドスキッパーの効果発動‼？自分メインフェイズに、ＥＸデッキのリンクモンスター１体を相手に見せ、このターンにリンク召喚する場合、このカードは見せたモンスターと同じカード名・種族・属性の素材としても扱えるわ‼？私が見せるのは転生炎獣（サラマングレイト）ヒートライオ‼？このターンの間、フォーマッドスキッパーはリンク召喚する場合、転生炎獣ヒートライオ・サイバース族・炎属性として扱えるわ‼？そして、繋がって‼？希望に導くサーキット‼？」
「くっ、またリンク召喚」
私が前に再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は炎属性の効果モンスター２体以上‼？私は転生炎獣ヒートライオとなっているフォーマッドスキッパーと転生炎獣ミーア、転生炎獣ガゼルをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？」
サーキットの中にスキッパーとミーア、ガゼルが吸い込まれると、フィールドにあった火山が噴火し、マグマが溢れ始める。
そして火山の噴火に合わせるように、サーキットの中からマグマを喰らいながら現れたのは炎の身体を持つ灼熱の獅子。
「古より伝わる灼熱の獅子‼？リンク召喚‼？リンク３‼？転生炎獣ヒートライオ‼？」

〈転生炎獣ヒートライオ〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２３００　↙?→↘?

「ヒートライオ……先程フォーマッドスキッパーが写し取ったモンスター」
「さあ、食事の時間よ、転生炎獣ヒートライオ!!?転生炎獣ヒートライオの効果発動!!?それにチェーンしてフォーマッドスキッパーの効果発動!!?まずはフォーマッドスキッパーの効果でリンク素材としてこのカードが墓地に送られた場合、デッキからレベル５以上のサイバース族モンスター１体を手札に加えるわ!!?私はデッキから転生炎獣Ｂバイソン（サラマングレイト）を手札に加えるわ!!?そしておまちかねの転生炎獣ヒートライオの効果発動!!?イグズィスタンスイーター!!?このカードがリンク召喚に成功した場合、相手の魔法・罠ゾーンのカード１枚を対象に、そのカードを持ち主のデッキに戻す!!?私は鬼石のセットカードを１枚をデッキに戻すわ!!?」
　ヒートライオが咆哮を上げると、炎で出来た魔法陣が現れ、鬼石のセットカードを吸収した。
　セットカードを飲み込んだヒートライオは満足そうに両手を合わせる。
「くっ……私のブリリアントスパークが!!?」
「まだ終わらないわ!!?フィールド魔法、転生炎獣の聖域の効果発動!!?」
「ここでフィールド魔法の効果ですって!?」
「１ターンに１度、このカードがフィールドゾーンに存在する限り、自分がサラマングレイトリンクモンスターをリンク召喚する場合、自分フィールドの同名のサラマングレイトリンクモンスター１体のみを素材としてリンク召喚できる!!?」
「なっ!?ということは……」
「繋がって!!?希望に導くサーキット!!?私は転生炎獣ヒートライオをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
　ヒートライオの頭上にサーキットが、足元に炎で出来た魔法陣が現

れ、交差するようにヒートライオの身体を通過する。
　サーキットと魔法陣が通過すると、ヒートライオの身体からさらに大きな炎が噴き出した。
「生まれ変われ、古より伝わる灼熱の獅子!!?転生リンク召喚!!?リンク3!!?転生炎獣ヒートライオ!!?」
〈転生炎獣ヒートライオ〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２３００　↙?→↘?
「再びヒートライオが……」
「さあ、もう1度食事の時間よ!!?転生炎獣ヒートライオの効果発動!!?イグズィスタンスイーター!!?私は鬼石のもう1枚のセットカードもデッキに戻させて貰うわ!!?」
「くっ、ならばチェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?ジェムエンハンス!!?自分フィールド上のジェムナイトと名のついたモンスター1体をリリースし、自分の墓地のジェムナイトと名のついたモンスター1体を墓地から特殊召喚しますわ!!?私はジェムナイトラピスをリリースして墓地から蘇りなさい!!?ジェムナイトレディラピスラズリ!!?」
〈ジェムナイトレディラピスラズリ〉☆6　岩石族　地属性
ＤＥＦ１０００
　フィールドのラピスの姿がラピスラズリに変わり、セットカードが消滅する。
　セットカードを吸収出来なかったことでヒートライオは不満そうに咆哮を上げる。
「セットカードはなくなってしまいましたが、これで私のフィールドにレディラピスラズリが戻りましたわ。これでこのターンの間に貴方はレディラピスラズリとマスターダイヤ　2体を破壊しなけれ次のターンの負けが決定しますわ!!?」

そういって勝ち誇ったように鬼石が笑う。
そんな鬼石に、私は冷ややかな表情で告げる。
「何甘いこと言ってんのよ。アンタに次のターンなんてあるわけないでしょ」
「……は？」
「手札の転生炎獣Ｂバイソンの効果発動‼？自分の墓地のサラマングレイトモンスターが３体以上いる場合、このカードを手札から守備表示で特殊召喚する‼？」
〈転生炎獣Ｂバイソン〉☆８　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１０００

ヒートライオに並び立つように炎を纏ったバイソンが現れる。
「転生炎獣Ｂバイソンの効果発動‼？相手フィールドの表側表示のカードの数まで自分の墓地の炎属性リンクモンスターを対象としてＥＸデッキに戻し、その後戻したカードの数まで相手フィールドの表側表示のカードを選んでターン終了時までその効果を無効にできる‼？私は墓地の転生炎獣ヒートライオと転生炎獣サンライトウルフをＥＸデッキに戻して　２体のジェムナイトマスターダイヤの効果を無効にする‼？」
バイソンの両横に、炎で出来たバイソンが現れ、　２体のマスターダイヤに突撃し、その身体を炎で包む。

ジェムナイトマスターダイヤ
ＡＴＫ４２００→２９００

「くっ、マスターダイヤの攻撃力が……」
「さあ、これが最後のリンク召喚よ‼？繋がって‼？希望に導くサーキット‼？」
私の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はサイバース族モンスター２体‼？私は転生炎獣Ｂバイソ

ンと転生炎獣スピニーをリンクマーカーにセット!!?・サーキットコンバイン!!?・リンク召喚!!?・リンク2!!?・クロックリザード!!?」

〈クロックリザード〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１２００　↙?・←

「ここに来て、転生炎獣じゃないリンクモンスター?」
サーキットから現れた紫の水晶を身体につけた蜥蜴のモンスターを見て、鬼石が怪訝な表情を浮かべる。
さあ、いよいよフィナーレ、派手に行くわよ!!?
「クロックリザードの効果発動!!?・このカードをリリースし、自分の墓地から融合モンスター1体を選んでＥＸデッキに戻す。その後、その融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを自分の墓地から除外し、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚する!!?」
「融合召喚ですって!!?」
「私は墓地に存在する転生炎獣(サラマングレイト)ヴァイオレットキマイラをＥＸデッキに戻し、墓地に存在する転生炎獣モンスター、もう1枚の転生炎獣ヴァイオレットキマイラとリンクモンスター、クロックリザードを融合!!?」
フィールドに現れた渦の中に紫色の炎を纏った魔獣とクロックリザードが飛び込んでいく。
「紫炎を纏し古の魔獣よ、時間を司る蜥蜴と交わりて、新たな世界に、生命の炎を灯せ!!?・転生融合召喚!!?」
そして渦が弾けると、フィールドに降り立つのは全身から紫炎を撒き散らす紫色の魔獣。
「生まれ変わりし、紫炎を司る古の魔獣!!?・転生炎獣ヴァイオレットキマイラ!!?」

〈転生炎獣ヴァイオレットキマイラ〉☆８　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２８００

「転生炎獣の融合モンスター……そんなものまでいますの？」
「さあ、一気に喰い尽くすわよ‼？転生炎獣ヴァイオレットキマイラの効果発動‼？それにチェーンしてクロックリザードの効果発動‼？クロックリザードの効果で墓地のこのカードが除外された場合、相手フィールドの特殊召喚されたモンスターの攻撃力は、ターン終了時まで自分の墓地のサイバース族モンスターの数×４００ポイントダウンする‼？私の墓地には転生炎獣ミーア、転生炎獣ガゼル、転生炎獣モル、フォーマッドスキッパー、転生炎獣Ｂバイソン、転生炎獣ペイルリンクスの６体のサイバース族モンスターがいるため、鬼石のモンスターの攻撃力は２４００ポイントダウンするわ‼？」
「何ですって⁉？」

ジェムナイトレディブリリアントダイヤ
ＡＴＫ３４００→１０００

ジェムナイトマスターダイヤ
ＡＴＫ２９００→５００

ジェムナイトレディラピスラズリ
ＡＴＫ２４００→０

クロックリザードが時を歪め、ジェムナイト達の身体が朽ちてボロボロになっていく。
「そして転生炎獣ヴァイオレットキマイラの効果発動‼？リインカネーションブレイズ‼？このカードが融合召喚に成功した場合に、このカードの攻撃力はターン終了時まで、素材としたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値の半分だけアップする‼？私が素材にしたのは攻撃力２８００の転生炎獣ヴァイオレットキマイラと攻撃力１２００のクロックリザード‼？よって転生炎獣ヴァイオレットキマイラの攻撃力は２０００ポイントアップする‼？」

転生炎獣ヴァイオレットキマイラ
ＡＴＫ２８００→４８００

「攻撃力４８００⁉？ですが、その程度では私にトドメはさせませんわ⁉？どうやら、貴方は計算すら満足してできないみたいですわね」
「なんとでも言いなさい。負け犬の遠吠えは終わったら聞いてあげるわ。さて、本当はここまでやる必要はないけど、完膚なきまでに叩き潰してあげるって言ったもの、狩らせて貰うわよ、アンタの全てを」
「何ですって？」
「転生炎獣ヒートライオのもう１つの効果発動⁉？サラマングレイトマジック⁉？このカードが転生炎獣ヒートライオを素材としてリンク召喚されている場合、１ターンに１度、フィールドの表側表示モンスター１体と、自分の墓地のモンスター１体を対象として、対象のフィールドのモンスターの攻撃力は、ターン終了時まで対象の墓地のモンスターの攻撃力と同じになる⁉？」
「っ⁉？まさか、そのために同名カードをリンク素材に……」
「そう、同名カードから生まれ変わる程強くなれる。それがこの転生炎獣よ」
「くっ……（宝月　桜の墓地にはまだ轟雷帝ザボルグの効果で落ちたモンスターも残っている。一体どんなモンスターの攻撃力をコピーして……）」
「私は……アンタのジェムナイトマスターダイヤの攻撃力を私の墓地にあるヴァレルガードドラゴンと同じ３０００にするわ」
「……は？」

ジェムナイトマスターダイヤ
ＡＴＫ５００→３０００

ヒートライオが魔法陣をマスターダイヤに向かって放ち、魔法陣を潜ったマスターダイヤの肩にヴァレルガードのシールドが現れる。

それを見た鬼石はしばらく呆気に取られた後、嘲笑を浮かべる。
「ぷっ、あはははは‼？宝月　桜‼？貴方、私を笑い殺す気ですの‼？わざわざ自分で下げた攻撃力を一気にあげるなんて一体何がしたいんですの‼？」
そういって可笑しそうに笑う鬼石を、私はいっそ哀れなものを見る目で見てしまう。
「ここまでくると、いっそ哀れね、鬼石　千晶。対戦相手が誰なのか、忘れてるんじゃないかしら……まあいいわ。気付いた時には終わってるから、そのまま笑ったまま潰れちゃいなさい。バトル‼？転生炎獣ヒートライオで攻撃力３０００になったジェムナイトマスターダイヤに攻撃‼？ヒートストライク‼？」
ヒートライオが炎を集めて弾丸を作り、マスターダイヤに向けて撃ち込む。
マスターダイヤはその炎の弾丸をヴァレルガードのシールドで防ぎ、そのまま大剣でヒートライオを斬り裂こうとする。
「ダメージ計算時、フィールド魔法、転生炎獣の聖域のもう１つの効果を、１０００ライフポイントを払い、転生炎獣ヒートライオを対象として発動‼？」

桜　ＬＰ２０００→１０００

「自分のモンスターが戦闘を行うダメージ計算時に、１０００ライフポイントを払い、自分フィールドのリンクモンスター１体を対象として発動そのモンスターの攻撃力を０にし、そのモンスターの元々の攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復するわ‼？」
「あはははは……は？」
マスターダイヤに斬られる瞬間、ヒートライオの身体から魔法陣が現れ、ヒートライオの炎を吸収すると、私の身体にライフポイントとして分け与える。
そしてマスターダイヤに切り裂かれたヒートライオは荒々しい咆哮を上げながら爆散した。

転生炎獣ヒートライオ
ＡＴＫ２３００→０
桜　ＬＰ１０００→３３００→３００

「さてと、ちゃんと気付いた、鬼石　千晶？　」
「な、何がですの⁉？結局貴方がやったことなど、無駄にライフポイントを回復してダメージを受けただけですわ‼？そんな行動に何の意味がーーー」
「はぁ……まさかここまで言っても気付かないなんてね。なら、答え合わせはすぐだし最後のヒントをあげる。さて、問題よ。私は一体何ポイントの戦闘ダメージを受けたでしょう？」
「私を馬鹿にしていますの⁉？そんなの勿論３０００ポイント……っ⁉？ま、まさか⁉？」
そこまで答えて、鬼石の表情が蒼白になり、がたがたと震え始める。
「あら、やっと気付いたみたいね。じゃあ答え合わせといきましょうか。まあ、言いたいことはただ１つ……詰めが甘いのよ、三下が。３０００ポイントの戦闘ダメージを受けた時、速攻魔法発動、ヘルテンペスト‼？お互いのデッキと墓地のモンスターを全てゲームから除外する‼？」
フィールドに炎の嵐が吹き荒れ、デッキと墓地から全てのモンスターを奪い去っていく。
「ついでにこれも受け取っておきなさい？デッキから除外されたネクロフェイスの効果発動‼？このカードがゲームから除外された時、お互いはデッキの上からカードを５枚ゲームから除外する‼？」
「っ、私のデッキが……」
デッキが一気に無くなり、鬼石が青ざめた表情を浮かべる。
しかし、フィールドに残ったモンスター達を見て、再び勝ち誇った笑みを浮かべる。
「ふ、ふふふ、確かに驚かされはしましたが貴方はもう手札もなく、モンスターもその融合モンスターのみ。それに対して私はまだ４体の

融合モンスターがいる。次のターンにはジェムナイトレディラピスラズリのバーン効果でーーー」
「はぁ～だからアンタは哀れだって言ってるのよ、鬼石　千晶。動転して自分のモンスターの効果すら把握できないの？」
「な、何を言って……」
「じゃあ言ってあげるわ。アンタのそのご自慢のバーン効果、どうやって使うつもりなのかしら？ジェムナイトレディラピスラズリの効果はデッキ・ＥＸデッキからジェムナイトモンスター１体を墓地へ送って発動するのよね？だけど、アンタのデッキとＥＸデッキ、既にモンスターがいないじゃない」
「ぁ……」
　自分のデッキのモンスターとＥＸデッキが既に存在していないことに気付き、鬼石は絶望の表情を浮かべる。
「ついでに言えばアンタのご自慢の融合モンスターじゃ私の転生炎獣ヴァイオレットキマイラを超えられないわ。アンタのデッキはそのほとんどが融合関係のカードだから現状死に札となってるカードはかなり多いハズよ。そんな状況で、私がアンタのモンスターを狩り切る前に逆転のカードが引けるかしら？」
「ぁ……ぁぁ……」
「まあ、そんなのどうでもいい推論だわ。私は言ったハズよ、このターンでアンタは終わりだって」
「……え？」
「さあ、メインディッシュよ。転生炎獣ヴァイオレットキマイラでジェムナイトレディブリリアントダイヤに攻撃‼？」
　ヴァイオレットキマイラが勢いよくブリリアントダイヤに向かっていく。
「ダメージ計算時、転生炎獣ヴァイオレットキマイラの効果発動‼？フュアリィフレイム‼？このカードが元々の攻撃力と異なる攻撃力を持つモンスターと戦闘を行うダメージ計算時に１度、このカードの攻撃力はそのダメージ計算時のみ倍になる‼？」
　ヴァイオレットキマイラが怒ったような咆哮をあげると、ヴァイオ

レットキマイラの身体から紫炎が溢れ出し、ヴァイオレットキマイラの身体を包み込む。

転生炎獣ヴァイオレットキマイラ
ＡＴＫ４８００→９６００

「攻撃力……９６００⁉？それじゃあ⁉？」
「まだよ、転生炎獣ヴァイオレットキマイラの更なる効果‼？ヘイトリッドリインカネーション‼？転生炎獣ヴァイオレットキマイラを素材として融合召喚したこのカードと戦闘を行うモンスターの攻撃力は、ダメージ計算時のみ０になる‼？」
ヴァイオレットキマイラが更に強く咆哮をあげると、身体から溢れ出した紫炎がブリリアントダイヤを襲い、その身体を溶かしていく。

ジェムナイトレディブリリアントダイヤ
ＡＴＫ１０００→０

「ブリリアントダイヤ⁉？そんな……こんなの、勝てるわけが……」
「アンタの敗因は、ただ１つ。私を本気で怒らせたことよ。心火に焼かれて燃え尽きなさい、鬼石　千晶‼？行って、転生炎獣ヴァイオレットキマイラ‼？インフュアリエイティングインレジュメント‼？」
紫炎を纏ったヴァイオレットキマイラが１つの弾丸となり、ブリリアントダイヤを貫く。
身体を貫かれたブリリアントダイヤは、その熱量で内側から身体を溶かされ跡形もなく消滅した。
「きやぁぁぁぁ‼？」

千晶　ＬＰ８０００→０

ーーーーーーー

「ふう、終わったわね……さて、と」

「ひっ‼?」

デュエルが終わり、私が冷ややかな目で鬼石を見ると、鬼石は泣きそうな顔で私を見る。

そんな鬼石に、私はドスの効いた声で告げる。

「今回はこれで勘弁してあげる。だけど、次にもし私の友達を馬鹿にするようなことがあれば、どうなるか分かってるわよね?」

「……‼?……‼?」

鬼石が青ざめた表情で首を何度も縦に振る。

まあ、これだけ言えば十分よね。

「分かったんなら行きなさい。私の気が変わらない内に」

私がそういうと、鬼石は脱兎の如く逃げ出した。

鬼石のメイドは私達に深く頭を下げ、鬼石の後を追って走っていく。

鬼石の姿が完全に見えなくなったところで、私はようやく一息ついた。

「……はぁ、これだけ言えば何とかなるかしらね。慣れないことはするもんじゃないわ」

「いや、どう見ても手慣れてただろ。その道の人よりそれっぽかったぞ」

「何よ、失礼しちゃうわね」

呆れた顔でそんなことを言いながら近寄ってくる結束をジト目で睨みつける。

誰がその道の人よ、私はただの高校生だっての。

「まあいいわ。とりあえず移動しましょ? 何だか無駄にギャラリーが集まって来ちゃったし、アンタもあんまり人に集られると面倒でしょ?」

「まあな。んじゃ、適当に移動するか」

「じゃあ行きましょ。ほら、アンタ達、邪魔よ‼? 消し炭になって世界

の空を舞いたくなかったら退きなさい‼?」
「……お前やっぱりその道の人だろ」
そんな結束の呆れたような声を聞きながら、私達は道を塞いでいるギャラリーを押し退けながら街中を後にするのだった。

ーーーーーーー

☆

「はぁ～やっと落ち着けるわね」
街中から離れ、俺達がやって来たのはいつも俺が働いているデュエルアカデミアの近くにある公園だ。
ベンチに背中を預けてグイッと伸びをするに、俺は呆れた表情で疑問を口にする。
「宝月はいつもああやって向かってくる奴を蹴散らしてるのか?」
「まあね。気に入らないのよ、大した実力も無い癖に陰口だけは偉そうな奴らが。別に自分の実力があるんならある程度は私だって許容するわよ。だけど大抵ああやって口だけは達者な奴は実力は伴ってない奴ばかり、本当に腹が立つわ」
そういって本当に不機嫌そうに宝月は鼻を鳴らす。
そんな宝月を見て、俺は思わず苦笑を浮かべてしまう。
本当に、律儀な奴だ。
きっと宝月はこれからもこの実直さで敵を増やしていくだろう。
真っ直ぐ過ぎるというのは、それだけ周りとの軋みも生みやすい。
しかし、だからこそ、宝月はこれほど強いのだろう。
心も、その生き方も。
「そ、それより、その、さっきのデュエル、ちゃんと見てたわよ、ね?」
「ん?・ああ」
しばらく不機嫌そうな表情をしていた宝月だったが、落ち着いてきたかと思うと、突然挙動不審になり、チラチラと俺の方を見ながらそんなことを言う。

「じゃ、じゃあ、ちゃんと聞いてたわよね？その、私がアンタをどう思ってるか？」
「どう思ってるか……ああ、友達って言ってたやつか」
「っ～～～～!!?」
俺がそういうと、宝月の頬が一気に赤くなる。
きっと照れているのだろう。
その様子が面白くてつい笑ってしまう。
そんな俺を見て、宝月が顔を赤くしたまま不機嫌そうな表情を浮かべる。
「な、何よ!!?笑わなくてもいいじゃない!!?改めて思い返すと恥ずかしかったのよ!!?あんなにギャラリーがいる前で……と、とと、友達なんて宣言するの!!?」
「はは、悪い悪い。俺は嬉しかったぜ、宝月が友達だって言ってくれてさ」
「……桜」
「ん？」
苦笑を浮かべながら謝ると、宝月がどこか拗ねたような様子で口を開く。
「前から気になってたの。遊花や闇は名前で呼ぶのに、私だけ宝月って苗字で呼ぶの。だから、友達なんだし、これからはちゃんと桜って、名前で呼んでよね。わ、私も、結束のこと、ゆ、遊騎って、呼ぶから……」
「!!?……ああ、分かったよ。これからもよろしくな、桜」
「っ～～～～!!?え、ええ、こちらこそ、よろしく頼むわ、ゆ、遊騎……」
「言わせといて照れるなよ……」
「し、仕方ないでしょ!!?何だか恥ずかしいの!!?」
さっきよりも顔を赤くしている桜に呆れていると、桜は急に真剣な表情を作って真っ直ぐに俺を見る。
「遊騎」
「ん？」
「私は、アンタの友達だから。だから、私には気を使わなくていいんだ

からね？」
「‼？」
「アンタを馬鹿にする奴は、私が全員叩き潰してあげる。だから、少しは私を頼りなさい」
「……ああ、分かった。すぐには出来ないかも知れないけど、頑張ってみるよ」
「ん、それでいいの」
そういって桜が笑顔を浮かべて俺の胸を軽くパンチする。
……本当に、俺は恵まれてるな。
こんなことを言ってくれる友達ができるなんてさ。
「さて、言いたいことは言ったし、いい機会だから今度はお互いの昔話でもしない？私、あんまり遊騎の昔のこと知らないし」
「長くなるぞ？」
「構わないわよ、言ったじゃない。今日1日、私がアンタを連れ回すって。だから時間なんて気にしなくていいの」
「はは、分かったよ。さて、それじゃあ何から話すかな」
そういって、俺達は話し始める。
……こういうのも、悪くはないな。

幕間3・無邪気さの落とし穴

★

それは、闇先パイのこんな一言から始まった。

「私、実家に帰るから」

「ふーん、そっか」

「……えっ？」

「はぁっ⁉？」

師匠と闇先パイの仕事がお休みで、珍しく全員が揃った朝食時、突然そんなことを口にした闇先パイに、私と桜ちゃんは驚いて持っていた箸を落としてしまう。

そんな私達を見て、師匠と闇先パイは不思議そうに首を傾げる。

「？どうかしたのか？」

「どうかしたのか、じゃないわよ⁉？遊騎は何とも思わないの⁉？」

「は？」

「あの、闇先パイ⁉？私、何か気に触るようなことでもしたんでしょうか⁉？」

「？そんなこと、遊花はしてないよ？いきなりどうしたの、２人共？」

「だって、闇先パイが実家に帰るって……」

「帰っちゃ駄目なの？」

「それは……」

無表情のまま、不思議そうに首を傾げる闇先パイを見て、私は思わず目を伏せる。

確かに、闇先パイは好意で私の家に泊まってくれていただけだ。

だから、寂しいけど、闇先パイが出て行きたいというのであれば、私は呼び止めることなんて出来ない。

「……分かりました」

「ん、夜には帰ってくるから」

「はい、夜には……えっ？」

「ん？」
「……あ～成る程なぁ」
闇先パイの言葉に、私は首を傾げ、そんな私を見て、闇先パイが首を傾げる。
そんな私達を見て、師匠は何かに気付いたのかうんうんと頷き、闇先パイに問いかける。
「闇、どうして実家に帰るんだ？」
「ん？院長から電話で、『寂しがってる子もいるから、偶には帰ってきなさい』って言われたから。どちらにせよ、そろそろあの子達の様子は見に行きたいと思ってたし」
「俺達のことが嫌いになってこの家から出て行きたいって意味じゃないんだよな？」
「？言ってる意味がよく分からない。私が遊騎達を嫌いになることなんてありえないよ？」
闇先パイが師匠の言葉に、理解出来ないというような表情を浮かべる。
「と、言うことだ、２人共。闇が言った実家に帰るは、文字通り１度実家に帰るってだけで出て行くって意味じゃないぞ。あ、この卵焼き貰うな」
「あ、私も貰う。どうせなら遊騎達も来る？遊騎に会えば、きっとあの子達も喜ぶ」
「まあ、遊花の修業の一環にはなるかも知れないけど、俺が行って喜ぶかは微妙だと思うがなぁ……」
そんなことを話しながら朝食を再開した２人を見て、桜ちゃんが俯きながらぷるぷると震えはじめる。
「……ま」
「？どうかした、桜？」
「紛らわしいのよアンタは～～～!!？」
そんな桜ちゃんの様子に首を傾げる闇先パイを見て、桜ちゃんは家の中に響き渡るような大声を上げるのだった。

ーーーーーーー

「ようやく着いたか。やっぱり、街中からは少し離れてるから遊花の家からじゃ結構かかったな」
「徒歩で1時間ぐらいかかったわよ……こんなに歩くなら先に言っておいて欲しかったわ」
「ゴメンね。ここって車とかで来ると色々と面倒なことになるから」
「ここが、闇先パイのご実家なんですか？」
「ん、そうだよ。教会と孤児院……今の言い方だと児童養護施設の複合施設、『Ｈｉｌｆｅ（ヒルフェ）』」
闇先パイに案内されて私達がやってきたのは、町外れにある小さな教会だった。
屋根が尖っており、2階の中央部には円で囲まれた十字架がつけられている。
外は白塗りの塀がぐるりと敷地を囲んでおり、出入り口としての門がつけられていた。
堂々と門を潜る闇先パイの後に続き私達も門を潜り、教会の敷地内に入っていく。
「誰も居ませんね……」
「多分、教会の中だと思う。最近はあまり外で遊ぶと騒音問題とかで五月蝿いし」
「世知辛い話だよな」
「あ、あはは……あれ？」
「どうしたの、遊花？」
敷地内を見回しながら歩いていると、少し離れた場所にある木の下にカードが落ちていた。
この教会にいる誰かの落し物だったりするのかな？
あのままじゃ風に飛ばされちゃうし、拾っておいた方がいいよね？
そう思った私は小走りでそのカードに近づいていく。
「遊花？……あ‼？それに近づくな‼？」
「えっ？」

私がカードの近くまで駆け寄ったところで、後ろから師匠の焦った声が聞こえ、私は思わずカードに手を伸ばしながら師匠の方を振り返る。

その瞬間ーーー

「ひゃあぁぁぁ⁉？」

「遊花⁉？」

「あー遅かったか……」

私の足元が急に陥没し、私の身体は小さな空洞に落下し、頭上からカラカラに乾いた木の枝が降り注いだ。

「あいたたた……こ、これって、落とし穴？」

直径はおよそ1メートルで、深さは尻餅をついた私の身体がほとんど埋まっているところを見ると1メートル５０センチといったところだろうか？

穴の底にはふかふかのワラなどが大量に敷き詰められてあり、落下による怪我や骨折、捻挫といったものを負うことはなかった。

そんな私の足元に、拾おうとしたカードが落ちていた。

カードはスカゴブリンがスカと書いてある紙を掲げている『偽物のわな』。

……まさか、このカードが落ちてたこと自体がこの落とし穴に落とすための罠？

「ハーハッハッハ⁉？引っかかったな、悪者め⁉？」

「えっ？」

思わぬ事態に茫然としていた私の頭上から子供の笑い声が聞こえてくる。

声が聞こえてきた方を見ると、落とし穴の近くにあった木の幹の上で仁王立ちをしながら笑い声をあげている緑髪をセミロングにした小学生ぐらいの小さな女の子がいた。

「ふふん⁉？これに懲りたらさっさと尻尾巻いて帰れ⁉？この教会は、アタシが守る⁉？」

「え、えっと……」

「こらー⁉？そこのちびっ子⁉？降りてきて遊花に謝りなさい⁉？」

「へへーん!!?誰が悪者になんか謝るもんか!!?あっかんべー!!?」
「なっ!?頭にきた!!?そこで待ってなさい!!?すぐに引きずり降ろし、って、きゃあ!!?」
「桜ちゃん!?」
近付いて来ていた桜ちゃんの悲鳴と何かが落ちるような音が聞こえてくる。
頑張って落とし穴から顔を出して周囲を確認すると、桜ちゃんも落とし穴にはまって尻餅をついていた。
「やーい!!?引っかかったー!!?やっぱりアタシってばさいきょ、う?」
桜ちゃんの姿を見て、木の上を飛び跳ねながら喜んでいた女の子が、足を滑らせ、木の上から落ちてくる。
「っ!?危ない!!?」
「わぁぁぁぁ!!?」
「……ったく、どうせそうなると思ったよ。本当に、しょうがねぇな」
「えっ?」
そんな声が聞こえたかと思うと、いつのまにかに木の近くまで移動してきていた師匠がジャンプして落ちてくる女の子をキャッチし、木を蹴って反動で私が落ちた落とし穴の近くに着地する。
「ふぅ……予想して近付いてきててよかったな」
「師匠、なんでわざわざ空中でその子を受け止めたんですか?」
「ん?ああ、コイツのことだからきっと木の真下にも落とし穴があるだろうからな。引っかかってたら間に合わないから空中で受け止めるしかなかったんだよ。手を貸す、これで出れるか?」
「あ、ありがとうございます。よいしょっと」
師匠が片手で女の子を抱え、空いた手で私を引き上げてくれる。
桜ちゃんの方を見ると、桜ちゃんも闇先パイに手伝って貰って落とし穴から抜け出しており、怒りからか引き攣った表情で師匠が抱えている女の子を見ていた。
木から落ちたことでしばらく茫然としていた女の子だったが、師匠

に抱えられていることに気付くとジタバタと暴れ始めた。
「こらー!!?は～な～せ～!!?」
「……はぁ～お転婆は治ってないみたいだな、空子（あこ）」
「!?なんでアタシの名前を知っている!?さてはお前、すとーかーだな!?」
「……しかも覚えられてないときた。２年程度で忘れられるとか少し悲しいぞ、おい」
「すとーかーがいるなんて、自分が魅力的過ぎて困っちゃう。流石アタシ!!?」
「……品を作ってるところ悪いがコロボックリにしか見えないぞ」
「ふっ、アタシの魅力に気付かないなんてまだまだ子供ね」
「とりあえずさっき自分が言った言葉を思い返して話してくれるか？」
　師匠が頭を痛そうに押さえながら深くため息を吐くと、空子と呼ばれた女の子は師匠の顔をまじまじと見て首を傾げた。
「ん～この声、どこかで聞いたような……」
「空子ちゃん!!?大丈夫!?」
「おい!!?空子から離れろ!!?」
「お、続々登場だな」
　師匠がそんなことを呟きながら教会の方を見る。
　私も視線を追って教会の方を見ると、教会の陰から茶髪のエアリーショートの女の子と黒髪のベリーショートの男の子がこちらを見ていた。
　男の子は警戒したように私達を見ていたが、女の子は師匠を見て驚いたように目を見開くとゆっくりとこちらに近付いてくる。
　しばらくはゆっくりと近付いてきていた女の子だが、次第に驚きの表情を満面の笑みに変えて走り出し、そのまま勢いよく師匠に抱き着いた。
「やっぱり、遊騎お兄ちゃんだ!!?」
「久しぶりだな、遊陽（ゆうひ）。しばらくこれなくて悪かったな」
「ううん、また来てくれるって信じてたもん。だから遊陽、泣かなかっ

たよ。偉い？」
「ああ、偉い偉い。最後に会ったのが2年前だから……遊陽達ももうデュエルアカデミアの初等部3年生か。大きくなったな～」
「えへへ～」
遊陽と呼ばれた女の子は師匠に頭を撫でられて気持ち良さそうに目を細める。
そんな遊陽ちゃんの反応を見て、空子ちゃんが大声をあげながら師匠を指差す。
「あー思い出した‼？ゆっくんじゃん‼？今までどこに行ってたの⁉？お土産は⁉？」
「ようやく思い出したか……というか、まだ”ゆっくん”呼びなのかよ……残念だが、俺の弟子を落とし穴に落とすような悪い子には、お土産は無しだ」
「え～‼？」
そんな師匠達のやり取りを見て、遊陽ちゃんと一緒にいた男の子もこちらに近付いてくる。
しかし、近付いてくる男の子の表情は険しく師匠のことをキツく睨みつけている。
そんな男の子に、師匠は困った表情を浮かべながら声をかける。
「よう、竜路（りゅうじ）。お前も元気そうで良かった」
「……何しに来た、この裏切り者」
「裏切り者……ね。まあ、そう言われても仕方ないわな。お前らの声援を裏切ったことになるし。それに関しては言い訳のしようもない」
「帰れ。アンタの顔なんかもう2度と見たくない」
「……そっか。ということらしいんだが、帰っていいか、闇？」
「駄目。竜路も遊騎を困らせないで。遊騎だって、辞めたくてプロ決闘者を辞めたわけじゃない」
師匠が闇先パイの方を向いてそんな質問をすると、闇先パイも困ったような表情を浮かべて竜路と呼ばれた男の子を宥める。
そんな闇先パイを見て、竜路君は苦虫を噛み潰したような表情を浮

かべる。
「ヤミセン……」
「闇先生。変に略さないで、何だか闇金の一種みたいに聞こえるから」
「あ、よく見たらちびっ子先生だ」
「……どうやら空耳が聞こえたみたい。私みたいな立派な大人を捕まえてちびっ子なんて呼称が聞こえるわけがない」
「あ、闇先生‼？お帰りなさい‼？」
「……うぅ、遊陽。貴方だけ、私をちゃんと先生と呼んでくれるのは」
「わわっ‼？苦しいよう、闇先生」
闇先パイが少し泣きそうな表情で遊陽ちゃんを抱きしめ、遊陽ちゃんがくすぐったそうに身をよじらせる。
いきなりの怒涛の展開についていけず、困惑する私達に気付いたのか師匠は、抱えていた空子ちゃんを下ろし、苦笑を浮かべながら口を開く。
「あ～悪いな。おいてきぼりにしちまって」
「い、いえ、それでこの子達は……」
「ここで暮らしてる子供達さ。落とし穴を作ってたのが空子。闇に抱きしめられてるのが遊陽。あっちで俺を睨んでるのが竜路だ。俺がプロ決闘者だった頃、闇の実家のこの教会をよく訪ねててな。その頃にこの教会に寄付したり、デュエルを教えたりしてたから、コイツらにとって俺はすっかり兄貴分ってわけだ……ここで暮らしてる子達は両親が行方不明だったり、両親から虐待を受けた子だっている。だからこそ、人の温もりって奴に飢えてるんだよ」
「……そう、ですか」
師匠が最後の方は子供達に聞こえないように小さな声で話す。
師匠の話してくれた事実に、私は胸が締め付けられるような感覚がした。
そんな私に気付いたのか、闇先パイから解放された遊陽ちゃんが私に声をかけてくる。
「お姉ちゃん、大丈夫？どこか痛いの？」

「っ……ううん、大丈夫だよ。心配してくれてありがとう。私は遊花って言うの。貴方のお名前は？」
「遊陽はね、遊陽って言うんだよ‼？遊花お姉ちゃんのお名前、遊騎お兄ちゃんや遊陽とお名前が似てるね」
「あはは、そうだね。それじゃあ、今日はよろしくね、遊陽ちゃん」
「うん‼？遊花お姉ちゃん‼？」
そういって、遊陽ちゃんが嬉しそうに笑う。
……うん、私に何が出来るか分からないけど、今日はいっぱい頑張ろう。
少なくとも……私達がいる間、遊陽ちゃん達が笑っていられるように。

ーーーーーーー

☆

「久しぶりだね、遊騎君」
「……お久しぶりです、院長」
遊陽達を遊花達に任せた俺は、教会の中にある院長室に挨拶に来ていた。
俺は院長室に入った瞬間寸止めをするように降り抜かれた拳に苦笑しながら、その拳を抜き無表情のまま俺を見ている初老の男性に目を向ける。
冬城　時定（ふゆき　ときさだ）。
この教会の院長であり、闇の義父。
院長は拳を振り抜いたまま、口を開く。
「避けようともしなかったね。当てられないと思ったのかな？」
「いや、単に殴られても仕方ないって思ってただけですよ？俺が来なくなることで与えた影響っていうのはやっぱり大きいと思ってますから」
「そうか、それはいい覚悟だ。勿論、当てるつもりは無かったがね」

「震脚まで使っててよく言いますよ。当たってたら多分良くて昏倒ですよ？」
「それは君の態度次第だったさ。避けようとしていれば当てていたかもね」
「俺が避けようとしなくてよかったですね。当たってたら多分闇がめちゃくちゃ怒りますよ」
「ふむ、確かによかった。義理とはいえ、男親にとって娘に嫌われること程怖いものはないからね」
　そんな軽口を叩いていると、ようやく院長は拳を降ろす。
　そして院長が拳を降ろしたところで今度は俺が頭を下げた。
「色々ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」
「事情はちゃんと闇君から聞いている。君が謝ることではないよ。まあ、君の心情からしたら謝りたくなる気持ちも分かるけどね。懺悔室にでも行ってくるかい？」
「……それもいいかもですね。経営、上手く行ってます？」
「君の寄付が無くなったのは痛かったが、闇君の仕送りも増えたからなんとかね。卒業した子の中にもプロ決闘者になって寄付をしてくれる子もいるし、それも助けになっているよ。ありがたい話だ、君や闇君が行なっていたデュエル教室も無駄では無かったということだ。誇りたまえ」
「……ありがとうございます」
　院長の言葉に少しだけ報われた気分になる。
　プロ決闘者だった頃、俺と闇はオフの日にはこの教会に立ち寄ってデュエル教室をしていた。
　デュエルが物事の中心になっているこのケルンでは、デュエルが強い方が何かと優遇されやすい。
　そのためこのような施設から出た人間であっても、デュエルが強ければその分色々な仕事につきやすいのだ。
　だからこそ、この教会に来る子供達の助けに少しでもなるように行なっていたデュエル教室が身になっていたのであれば、それはとても嬉しいことだ。

「まあ、君がいなくなってからは一悶着もあったがね。君が突然こなくなったことにショックを受けた子、君の噂を聞き君に失望した子、などね」
「……まあ、そうですよね。当然だと思いますよ」
来た時に会った遊陽や竜路のことを思い出し、俺は苦い表情を浮かべる。
ここで暮らしてる子達は両親が行方不明だったり、両親から捨てられたり、両親から虐待を受けた子など様々な問題を抱え、精神的に参っている子も多い。
そんな子達がいつも来ていた人間が急にいなくなるなんてことがあって、影響を受けないわけがないのだ。
「だからこそ、私は君がまた来てくれたことを嬉しく思うよ。君との問題をどう乗り越えるか、それも子供達の……そして君の成長にもなるからね」
そういって、院長はいつもの無表情を崩し、少しだけ笑うのだった。

ーーーーーーー

「あ〜!!?やっと戻ってきたな、ゆっくん!!?」
「うおっと!!?」
院長室から出て、普段子供達が過ごしている講堂に入った途端に、勢いよく空子が突撃してきたため、怪我をしないように優しく受け止める。
突撃してきた空子は何処かで見たことがあるようなテンションで俺を指差しながら口を開く。
「ゆっくんはせんぽうでアタシとデュエルだ!!?」
「は、せんぽう?……先鋒ってことか?何だ、チーム戦でデュエルでもするのか?」
「うん!!?ちびっ子先生が、今日はゆか姉ちゃん達がいるからチーム対抗戦をやってみようって。それで、1番最初にやるのは3年生のアタシ達なんだって!!?」

「……”ゆか”じゃなくて、”ゆうか”な」
「あれ？そうだっけ？まあとにかく、ゆっくんはゆか姉ちゃん達と一緒のチームね‼？」
何だか知らない間に俺を入れて空子達とチーム戦をやることが決定してしまったらしい。
多分最初に空子達とやるのはある程度チーム戦のことを理解してデュエルができる年齢が空子達３年生のラインなんだろう。
それより下の子供達は見学に回り、上の子達は上級生だから後回しにといったところだろうか？
まあ後は俺が知る限りでは遊陽、空子、竜路はほとんど３人組で行動してるから、見てる側の子供達がチーム戦のイメージがしやすいと思ったのかもな。
「分かった分かった。とりあえず遊花達に聞いてみるから少しだけ待ってくれ」
「少しってどれぐらい？何時何分何秒？　地球が何回周った時？」
「……いいから少しだけ待ってろ。そうじゃないといつまで経ってもデュエルできないぞ？」
「えー⁉？やだ‼？ちゃんと待ってるから早くね、ゆっくん‼？」
「はいはい」
早くデュエルがしたいのかその場で足踏みをしはじめた空子に苦笑しながら、遊花達の姿を探す。
すると、闇と桜がデュエルをするスペースを準備している中、講堂の一角で子供達に群がられている遊花の姿が目に入った。
「お姉ちゃん、いい匂いするねー‼？」
「おっぱいおーきいねー‼？」
「ふかふかー‼？」
「あ、あの、変なところを触らな……ひゃぅ‼？ちょっと待っ……‼？」
「……大丈夫か、遊花？」
「あっ、師匠‼？あの、助けてください‼？」
子供達に群がられ、困ったような表情で助けを求める遊花に苦笑し

ながら手を叩いて子供達の注意を自分に向ける。
「やれやれ……はい、注目‼?そこのお姉ちゃんは今から皆の前でデュエルを披露してくれるから、皆、良い子で待つことはできるかな?」
『はーい‼?』
「良い返事だ。それじゃあ今闇先生が準備をしてるから、その近くで並んで待ってるんだぞ?」
『はーい‼?』
俺がそういうと、子供達が一斉に闇の近くに駆け出す。
「……全く、怪我とかはないか?」
「は、はい……ビックリはしましたけど、怪我はないですよ」
フラフラになりながらも、なんとか立ち上がる遊花だが、髪の毛と服がくちゃくちゃにされていた。
やっぱり子供達は容赦が無いな。
そんなことを思いながら遊花の髪を撫でて整えてやる。
突然髪を撫でられ少し驚いた遊花だったが、すぐにその表情を心底嬉しそうに緩ませた。
「あ、ありがとうございます……えへへ」
「それで、なんかチーム戦をすることになったんだって?」
「はい。闇先パイが言うにはチーム戦をすることでデュエルの腕だけではなく責任感も身に付けるためだとか。師匠が先鋒、桜ちゃんが中堅、私が大将らしいです」
「まあ、子供達の為だけじゃなくて遊花達の為でもあるんだと思うぞ。チーム戦とかあまりやったことないだろ?」
「そうですね……デュエルアカデミアの講義で少し行った程度でしょうか?その時はまだデュエルするのが怖かったので、チームを組んで下さった人には凄く迷惑をかけてしまいました」
そういって、遊花が当時のことを思い出したのか少ししゅんとする。
まあ、遊花の場合はデュエルすること自体がトラウマだったのだから、それ自体は仕方ないことだと思うけどな。

「それじゃあ実質初めてのチーム戦だな。『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入ったら当然チーム戦をすることだってある。良い機会だから今の内に慣れておけよ」
「は、はい‼？」
「んじゃ、準備も出来たみたいだし、闇達のところに行くか」
「あ……はい」
撫でるのを止めると、遊花は少し名残惜しそうな声を上げたが、首を振って真剣な表情を作る。
気負い過ぎる必要はないが、ある意味ちょうど良いか。
この教会の子供達を相手にするなら、全力でいかないと勝てないだろうしな。
そんなことを思いながら闇達のいる場所に移動する。
俺の姿を見ると、桜は咎めるような目で俺を見た。
「遅いわよ、遊騎」
「悪い悪い。それで今からチーム戦なんだよな？」
「ええ、子供達が相手だからどの程度加減すればいいか分からないけど……」
「遠慮はいらないぞ？むしろ本気でいけ。その方がお前らのためだ。子供達の前で負けたら結構こたえるだろうからな」
「……その言い方、私達が負けるって言いたいの？」
「流石にそれはちょっと私達を見くびり過ぎですよ、師匠？」
遊花と桜が不服そうな顔で俺を睨む。
そんな遊花達を見て、俺は思わず笑ってしまう。
「ふっ、どうやらちゃんと現状を認識してないみたいだな。さっき遊花には言ったぜ？子供達のためだけじゃなくて遊花達のためでもあるって。むしろ今回試されてるのは遊花達の方なのさ」
「……どういう意味ですか？」
「なあ、遊花。お前はこの１ヶ月で闇の指導を受けてどうだった？」
「闇先パイの指導……ですか？すごくためになりました。デュエルの後に私の至らないところや改善点を教えてくれて、そこから私がどうしていきたいのかを聞いて、そのためにどうすればいいのかを一緒

に考えてくれて……闇先パイの指導があったから、この前の大会だって、プロ決闘者の方々と対等に戦えたんだと思います」
首を傾げながら遊花は闇とのデュエルをしてきた日々を思い出して少しだけ笑顔を見せる。
そこまで思い至ってるなら気付いてもいいものなんだがな。
「そうだな。闇の指導は実際かなり上手いと思う。たったの1ヶ月で遊花がプロ決闘者相手に対等にデュエルが出来るようになったんだからな。それじゃあ問題だ。ここはどこで、子供達は闇のことをなんて呼んでいる？」
「えっ？それは、ここは闇先パイの実家で、闇先パイのことは闇先生って……あ!!？」
そこまでいって遊花と桜の顔色が真っ青に変わる。
「気付いたみたいだな。勿論、闇は1人暮らしをしてたわけだから毎日この家に帰ってきてたわけじゃないが、俺が知る限りプロ決闘者になってからでも闇は5日に1度はこの教会に帰ってきてデュエルを教えていた。闇に教えられた日数は遊花より確実にこの教会の子供達の方が多い」
「じゃ、じゃあここの子供達は……」
「闇ほどではないが、全員プロ決闘者と普通に張り合えるぐらいには強いぞ。特に今から相手をする遊陽、空子、竜路は俺もたまに教えてた奴らで、デュエルアカデミア初等部の3年生ではあるが、この教会で過ごした期間だと1番長い部類で、一際優秀な奴らだ。俺も何度か負けたことあるしな」
「し、師匠がですか!!？」
「嘘でしょ!!？」
俺の言葉に、遊花と桜が驚愕の表情を浮かべる。
そんな遊花達に俺は苦笑を浮かべながらも、はっきりとした声で告げる。
「まあ、そこら辺を理解して貰うために俺が先鋒なんだろうけどな。ま、俺と空子のデュエルを見て、慣れておけ。お前達がこれからデュエルするのは、自分達より歳下だが格上の決闘者だってことにな」

ーーーーーーー

「それじゃあこれから特別授業としてチーム対抗戦を行う。デュエルする子も、見学をする子も、準備はいい？」

『はーい!!?』

「ん、いいお返事。今日は外部から私の友達が来てくれた。その人達に協力して貰って今日はチーム対抗戦の授業を行う。チーム戦はそれぞれのチームで最初にデュエルをする人の先鋒、次にデュエルをする人の中堅、最後にデュエルをする人の大将に分かれてそれぞれの同じ順番の人とデュエルをしてもらう。この順番も凄く重要。最初の2人が負けてしまえば、最後の人が勝っても負けてしまうし、1人目が勝って、2人目が負けてしまえば、最後の人の勝敗でチームとしての勝ち負けが決まってしまう。他にもーーー」

闇が行うチーム戦の説明を子供達は真剣な表情で聞いている。

俺が来てた頃は闇も途切れ途切れで話し、わざと騒いだりした子供もいた気がするが、今はそんな子供がいないのは闇の指導が上手くなったからなんだろうな。

「それじゃあ長い説明はここら辺にして、実際にチーム戦を見てもらう。先鋒、空子、皆の前に」

「はーい!!?ちびっ子先生!!?」

「……今日はよく空耳が聞こえる日。ちびっ子とか何のことだか分からない。遊騎、お願い」

「おう」

ちょっと遠い目をした闇に呼ばれ、子供達の前に出て、空子と向かい合うように立ち、デュエルディスクを起動する。

空子はそんな俺を見て、デュエルディスクを起動しながら不敵な笑みを浮かべる。

「ふっふっふ、ようやくゆっくんにアタシの強さを思い知らせる日が来たようね!!?ゆっくんなんて、けちょんけちょんにしちゃうんだから!!?」

「ほう、そいつは楽しみだ。空子がどれぐらい強くなったか、しっかり見せて貰わないとな」
「ふっふーん!!?強くなったアタシのデュエルを見たら、きっとゆっくんだって私にメロメロになるんだから!!?そうなったら、ゆっくんはアタシの子分として一生私の傍でこき使ってあげるんだから!!?」
「一生こき使われるのは勘弁だからこりゃあ尚のこと負けるわけにはいかないな」
「なんでよ!?!?アタシの子分じゃ嫌なの!?!?」
「いや、普通嫌だろ」
俺の返答が気に入らないのか空子が不満気に頬を膨らませる。
相変わらず空子はよく分からんな。
いや、基本がアホなのは分かるんだけどな。
「むぅー!!?ゆっくんのばか!!?絶対にけちょんけちょんにしてやる!!?」
「よく分からんが、とりあえず俺は負けないぜ。闇、はじめていいか?」
「ん。それじゃあこれより、チーム『空子軍団』VSチーム『月花騎士』の先鋒戦をはじめる」
「……そんなチーム名だったのか。まあいいや、いくぞ、空子?」
「アタシの力、思い知れ!!?」
『決闘!!?』

遊騎　LP8000
空子　LP8000

ーーーーーーー

「先攻はアタシ!!?まずはコイツだ。トリオンの蟲惑魔を召喚!!?」

〈トリオンの蟲惑魔〉☆4　昆虫族　地属性
ATK1600

フィールドに頭に角のようなものが生えた白髪の少女のモンスターが現れる。
現れたトリオンは観戦している子供達に向かって可愛らしく手を振る。
……可愛くはあるんだが、本体は足元に潜んでいるアリジゴクなんだよな。
まあ、観戦している子供達の表情が少し引き攣ってることは本体を見たことがあるんだろう。
泣きだす子供がいないだけマシだな。
「トリオンの蟲惑魔の効果発動!!?このカードが召喚に成功した時にデッキからホール通常罠か落とし穴通常罠1枚を手札に加える!!?アタシはデッキから底なし落とし穴を手札に加えるよ!!?」
「底なし落とし穴か……警戒するにしても面倒なんだよな、落とし穴って」
「そして掘り進め!!?迷いも貫くサーキット!!?」
「リンク召喚か……」
空子が目の前に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はリンクモンスター以外の蟲惑魔モンスター1体!!?アタシはトリオンの蟲惑魔をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
トリオンがサーキットの中に吸い込まれていく。
そして代わりに現れたのは緑髪のツインテールの少女。
「リンク召喚!!?全てを惑わす幻惑の花!!?リンク1!!?セラの蟲惑魔!!?」
〈セラの蟲惑魔〉ＬＩＮＫ１　植物族　地属性
ＡＴＫ８００　←
「蟲惑魔のリンクモンスターか……厄介なのが出てきたな」
「ふっふっふ、まだ終わりじゃないぞー!!?魔法カード、二重召喚!!?

このターン、自分は通常召喚を２回まで行う事ができる‼?・そして、ティオの蟲惑魔を召喚‼?・」

〈ティオの蟲惑魔〉☆４　植物族　地属性
ＡＴＫ１７００

フィールドに植物の中で寝そべっいる黒髪の少女のモンスターが現れる。

「ティオの蟲惑魔の効果発動‼?・このカードが召喚に成功した時、自分の墓地の蟲惑魔モンスター１体を守備表示で特殊召喚する‼?・戻ってこーい、トリオンの蟲惑魔‼?・」

〈トリオンの蟲惑魔〉☆４　昆虫族　地属性
ＤＥＦ１２００

「くっ、蟲惑魔が２体出てきたってことは……」

「アタシはレベル４、トリオンの蟲惑魔とティオの蟲惑魔でオーバーレイ‼?・２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼?・」

トリオンとティオが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けるとフィールドに咲き誇るのは頭に大きな花をつけた桃色の髪の少女。

「全てを引き寄せる魔性の花‼?・ランク４‼?・フレシアの蟲惑魔‼?・」

〈フレシアの蟲惑魔〉★４　植物族　地属性
ＤＥＦ２５００

「やっぱり出てきたか、フレシアの蟲惑魔‼?・」

「フレシアの蟲惑魔の永続効果でオーバーレイユニットを持ったこの

カードは罠カードの効果を受けないよ!!?さらにこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、フレシアの蟲惑魔以外の自分フィールドの蟲惑魔モンスターは戦闘・効果で破壊されず、相手の効果の対象にならない!!?」
「っ、相変わらず厄介な効果だな」
「アタシはカードを2枚伏せてターンエンドだ!!?」

遊騎　ＬＰ８０００　手札５
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
☆　ー
ー□ー　ー　ー
ー　ー▲▲ー　ー
空子　ＬＰ８０００　手札１

「最初からかなり厄介な布陣を作られたな……地道に削っていくしかないか。俺のターン、ドロー!!?まずはこれだ!!?魔法カード、予想ＧＵＹ!!?自分フィールドにモンスターが存在しない場合にこのカードは発動できる。デッキからレベル４以下の通常モンスター１体を特殊召喚する!!?」
「なら、予想ＧＵＹにチェーンして手札から増殖するＧを捨てて効果発動!!?」
「げっ!!?よりによって最後の手札がそれかよ!!?」
「同名カードは１ターンに１度、手札から捨てることで効果を適用!!?このターン、相手がモンスターの特殊召喚に成功する度に、自分はデッキから１枚ドローしなければならないよ!!?これでゆっくんが特殊召喚する度にアタシの手札は増える!!?」
「くっ……予想ＧＵＹの効果でデッキからクィーンズナイトを特殊召喚だ!!?」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性

ＡＴＫ１５００

俺の前に赤い鎧を身に纏った女性の騎士が現れる。
それに反応するようにフィールドに黒い影が現れて空子の手元にカードを運ぶ。
「クィーンズナイトが特殊召喚されたからアタシは１枚ドロー!!?」
「罠カードは使ってこないか……」
空子のフィールドを突破するにはまずフレシアを倒さなければならないが、今の手札でフレシアを超えようとするならＥＸデッキからモンスターを特殊召喚するしかない。
しかし、そうすれば増殖するＧの効果で空子の手札は増えてしまうし、出したモンスターは罠カードによって対処されてしまうだろう。
これはなかなか厄介な状況になったものだ。
「それでもやれることをやるしかない。俺はＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）サウザンドブレードを召喚!!?」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

フィールドに頭巾を被り、背中に何本もの刀を背負った戦士が現れる。
現れたサウザンドブレードを見て空子が首を傾げる。
「ひろいっく？ヒーローじゃなくて？」
「……残念だが、今はヒーローはほとんど休業中なんだ」
「えー!!?ゆっくんのヒーロー、カッコよくて好きだったのにー!!?」
「悪いな。あの頃に負けないようなデュエルはしてみせるからそれで勘弁してくれ」
「むーならちゃんとカッコいいところ見せてよ？アタシが発動するカードはないよ」
「使ってはこないか……なら、斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」

俺が正面に手をかざすと目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター2体!!?俺はクィーンズナイトとＨ・Ｃ　サウザンドブレードの2体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?追想に生きる王女!!?リンク2!!?聖騎士の追想　イゾルデ!!?」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

クィーンズナイトとサウザンドブレードの2体がサーキットの中に消えると代わりに現れたのは金髪と白髪の2人の女性。
「聖騎士の追想　イゾルデが特殊召喚されたから1枚ドロー!!?」
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?リンクレカレクション!!?リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター1体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキから魔装戦士ドラゴディウスを手札に加える!!?」
「っ!??ペンデュラムモンスター!??アタシが発動するカードはないよ」
「なら、聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動!!?メモリーズギフト!!?デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター1体をデッキから特殊召喚する!!?俺はデッキから妖刀竹光、最強の盾、ビッグバンシュート、閃光の双剣―トライスを墓地に送り、デッキからＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）　強襲のハルベルトを攻撃表示で特殊召喚!!?」

〈Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１８００

俺のフィールドにハルバードを持った紫の鎧を纏った戦士が現れ

る。
「H・C　強襲のハルベルトが特殊召喚されたからさらに1枚ドロー‼?」
「まだ使ってこないか……墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える。俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える。俺はスケール2の魔装戦士ドラゴディウスでペンデュラムスケールをセッティング‼?」
　俺の隣に光の柱が立ち上り、その光の中に戦士の姿が浮かびあがり、下に2の数字が現れる。
「あれ?聖騎士の追想　イゾルデの効果で手札に加えたモンスターの効果は使えないんじゃなかったの?」
「確かに聖騎士の追想　イゾルデで手札に加えたモンスターの効果は発動できないが、ペンデュラムモンスターをペンデュラムスケールとして使うのは魔法カード扱いだ。モンスター効果じゃないからペンデュラムスケールやペンデュラム効果を使うことはできる。ついでに言っておくと、魔装戦士ドラゴディウスのペンデュラム効果は自分のモンスターが相手の表側表示モンスターと戦闘を行うダメージステップ開始時に手札を1枚捨て、その戦闘を行う相手モンスターの攻撃力・守備力は半分になるぜ」
「へぇーそうなのかー……ん?フレシアの蟲惑魔がやられるじゃん‼?」
「バトル‼?H・C　強襲のハルベルトでフレシアの蟲惑魔に攻撃‼?ライトニングハルバード‼?」
　ハルベルドがハルバードに雷を纏いながらフレシアに迫る。
　迫ってくるハルベルドを見て、フレシアは怪しい笑みを浮かべる。
「させないぞ‼?フレシアの蟲惑魔の効果発動‼?アルアメントトラップ‼?1ターンに1度、オーバーレイユニットを1つ取り除き、発動条件を満たしているホール通常罠カードまたは落とし穴通常罠カード1枚をデッキから墓地へ送って、この効果は、その罠カード発動時の効果と同じになる‼?この効果は相手ターンにでも使える‼?さらにそれにチェーンしてセラの蟲惑魔の効果発動‼?インヴァ

イトカヴァティ‼?1ターンに1度、このカード以外の自分の蟲惑魔モンスターの効果が発動した場合、デッキからホール通常罠カードまたは落とし穴通常罠カード1枚を選んで自分フィールドにセットする‼?アタシはデッキから奈落の落とし穴をセットする‼?」
「また面倒な罠が増えたか……」
「そして、フレシアの蟲惑魔の効果でアタシはデッキから狡猾な落とし穴を墓地に落として効果をコピー‼?自分の墓地に罠カードが存在しない場合、フィールドのモンスター2体を対象としてそのモンスターを破壊する‼?H・C　強襲のハルベルトと聖騎士の追想　イゾルデを破壊だ‼?」
　フレシアが怪しい笑みを浮かべた瞬間、ハルベルドとイゾルデの足場が崩れ、地面の中に吸い込まれて姿を消した。
「すまない、ハルベルド、イゾルデ。だが、これでとりあえずフレシアのオーバーレイユニットは1つ使わせたな。メインフェイズ2、装備魔法、妖刀竹光をセラの蟲惑魔に装備する」
「えー⁉?いらなーい‼?」
　セラの手元に禍々しい竹光が現れる。
「魔法カード、黄金色の竹光‼?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローする‼?俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ」
「なら、エンドフェイズにリバースカードオープン‼?罠発動、強欲な瓶‼?自分はデッキから1枚ドローする‼?それにチェーンしてセラの蟲惑魔の効果発動‼?アトラクタントフェロー‼?1ターンに1度、通常罠カードが発動した場合、同名カードが自分フィールドに存在しない蟲惑魔モンスター1体をデッキから特殊召喚する‼?アタシはデッキからアトラの蟲惑魔を特殊召喚‼?」

〈アトラの蟲惑魔〉☆4　昆虫族　地属性
　ＡＴＫ１８００

　フィールドに頭に紅い宝玉のようなものをつけた黒髪の少女のモ

ンスターが現れる
確かアトラにはモンスターゾーンに存在する限り、自分の通常罠カードの発動及びその発動した効果が無効化されなくなる効果があったハズだ。
やはり、時間をかければかける程不利になっていくな。
これは短期決戦を狙っていくしかないな。

遊騎　ＬＰ８０００　手札３
ー▲△▲△　ー
ーーーーー
☆　ー
○□ーーー
ー▲ー▲ー　ー
空子　ＬＰ８０００　手札４

「アタシのターン、ドロー!!?ふふーん、ゆっくんなんてすぐに動けなくしてあげるんだから。アタシはティオの蟲惑魔を召喚!!?」

〈ティオの蟲惑魔〉☆４　植物族　地属性
ＡＴＫ１７００

「ティオの蟲惑魔の効果発動!!?もう１度戻ってこーい、トリオンの蟲惑魔!!?」

〈トリオンの蟲惑魔〉☆４　昆虫族　地属性
ＤＥＦ１２００

「さらにトリオンの蟲惑魔の効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、相手フィールドの魔法・罠カード１枚を対象として破壊する!!?ゆっくんのペンデュラムカード、魔装戦士ドラゴディウスを破壊だ!!?」

ドラゴディウスのいる光の柱の下からトリオンの本体であるアリジゴクが現れ、光の柱の中にいるドラゴディウスを地面に引きずり込む。
「くっ、破壊された魔装戦士ドラゴディウスはＥＸデッキに送られる」
「まだまだいくぞー!!?掘り進め!!?迷いも貫くサーキット!!?」
「リンク召喚……セラの蟲惑魔を使ってくるのか？」
空子が目の前に手をかざすと再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は植物モンスター２体!!?アタシはセラの蟲惑魔とティオの蟲惑魔をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク２!!?アロマセラフィージャスミン!!?」
〈アロマセラフィージャスミン〉ＬＩＮＫ　２　植物族　光属性
ＡＴＫ１８００　↙?↘?

セラとティオがサーキットに吸い込まれ、代わりに現れたのは葉っぱの羽根を持つ妖精のモンスター。
「墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。俺はデッキから　２枚目の黄金色の竹光を手札に加える」
「それぐらい問題なし!!?アロマセラフィージャスミンの効果発動!!?１ターンに１度、このカードのリンク先の自分のモンスター１体をリリースしてデッキから植物族モンスター１体を守備表示で特殊召喚する!!?アタシはトリオンの蟲惑魔をリリースしてデッキからチューナーモンスター、ナチュルコスモスビートを特殊召喚する!!?」
「げっ!!?ナチュルモンスター!!?」
〈ナチュルコスモスビート〉☆　２　植物族　地属性
ＤＥＦ７００

トリオンの姿が消え、代わりに現れたのは頭にコスモスを生やした土人形のようなモンスター。

ナチュルモンスターが出てきたってことはここらで使っておかないとマズイ!!?

「リバースカードオープン!!?速攻魔法、手札断殺!!?さらにそれにチェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動、トゥルースリインフォース!!?デッキからレベル2以下の戦士族モンスター1体を特殊召喚する!!?ただし、このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行えない。来い、H・C（ヒロイックチャレンジャー）アンブッシュソルジャー!!?」

〈H・Cアンブッシュソルジャー〉☆1　戦士族　地属性
DEF0

フィールドに緑のマントを羽織った迷彩服の戦士が現れる。

「そしてチェーン処理で手札断殺の効果だ。お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送り、その後、それぞれデッキから2枚ドローする」

「むー手札交換はいいけど、チェーンの関係で落とし穴カードはタイミングを逃すんだったよね?」

「ああ、よく覚えてたな。偉いぞ、空子」

「へへーん、これぐらい楽勝よ!!?それに今の手札交換でいいもの引けたもんね!!?このターンでゆっくんをがっちがちに縛ってやる!!?」

「……本格的に嫌な予感がしてきたな」

「アタシはレベル4、地属性のアトラの蟲惑魔に、レベル2、地属性のチューナーモンスター、ナチュルコスモスビートをチューニング!!?」

コスモスビートが光の輪になり、アトラが小さな星に変わり、光の道になる。

そして光の道が輝くと、その中から現れるのは樹木のような鱗を持つ大地の竜。

「古代より緑と共に生きた竜よ、その力で生命を守れ!!?シンクロ召喚!!?繁茂せよ、ナチュルパルキオン!!?」

〈ナチュルパルキオン〉☆６　ドラゴン族　地属性
ＡＴＫ２５００

「やっぱりナチュルパルキオンが出てきたか」
「ナチュルパルキオンの効果、ナチュラルトラップは、罠カードが発動した時、自分の墓地のカード２枚を除外して、このカードがフィールドに表側表示で存在する場合、その発動を無効にして破壊することができる。これでゆっくんの罠は封じたも同然だ‼？そしてまだ終わらないぞ‼？魔法カード、ソウルチャージ‼？」
「っ⁉？」
「自分の墓地のモンスターを任意の数だけ対象としてそのモンスターを特殊召喚する‼？ただし、自分はこの効果で特殊召喚したモンスターの数×１０００ポイントのライフポイントを失い、このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行えないけどね。アタシは墓地からアトラの蟲惑魔、ティオの蟲惑魔、そしてチューナーモンスター、ナチュルチェリーを特殊召喚して３０００ポイントのライフを失う‼？」

〈アトラの蟲惑魔〉☆４　昆虫族　地属性
ＡＴＫ１８００

〈ティオの蟲惑魔〉☆４　植物族　地属性
ＡＴＫ１７００

〈ナチュルチェリー〉☆１　植物族　地属性
ＤＥＦ２００

空子　ＬＰ８０００→５０００

フィールドに現れるアトラとティオ、そして手足がついたさくらん

ぼのようなモンスター。
　あのナチュルチェリーはさっきの手札断殺で落ちたカードだろう。
　この布陣でレベル1チューナーが出たってことはあっちも出てくるか。
「アタシはレベル４、地属性のティオの蟲惑魔に、レベル１、地属性のチューナーモンスター、ナチュルチェリーをチューニング!!?」
　チェリーが光の輪になり、ティオが小さな星に変わり、光の道になる。
　そして光の道が輝くと、その中から現れるのは樹木の身体を持つ緑の獣。
「古代より緑と共に生きた獣よ、その叡智で生命を守れ!!?シンクロ召喚!!?叢生せよ、ナチュルビースト!!?」

〈ナチュルビースト〉☆５　獣族　地属性
　ＡＴＫ２２００

「ナチュルビーストの効果、ナチュラルマジックはこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、デッキの上からカードを２枚墓地へ送る事で、魔法カードの発動を無効にして破壊できる。これでゆっくんは魔法も罠も使えなくなった!!?それに蟲惑魔達がいるから落とし穴だって好きなものを使えるからモンスターだってまともに出せない!!?このターンバトルフェイズは行えないけど、これでアタシの勝利は確定!!?ふふーん、やっぱりアタシってば最強ね!!?」
「っ、確かに面倒な布陣だな」
「アタシはカードを２枚伏せてターンエンド!!?次のターンには一斉攻撃で決めにいくよ!!?」

遊騎　ＬＰ８０００　手札４
ーーーーー　ー
ーー□ーー

ー　　☆
○□○ー○
ー▲▲▲▲　　ー
空子　ＬＰ５０００　手札２

魔法も罠も封じられ、モンスターを出せば落とし穴に落とされる。
確かに、かなり厄介な布陣だ。
だけど、今の手札なら可能性が全くないわけではない。
問題は空子がどのタイミングでフレシアの効果を使おうとするか。
そして俺がこのドローであのカードを引けるかだ。
正直、ここであのカードをドローできなければその時点で手詰まりだ。
頼む、俺に力を貸してくれ‼？
「俺のターン……ドロー‼？」
俺は勢いよくドローしたカードを見る。
可能性は……繋がっている‼？
「スタンバイフェイズ、Ｈ・Ｃアンブッシュソルジャーの効果発動‼？自分のスタンバイフェイズ時、フィールド上のこのカードをリリースして自分の手札・墓地からＨ・Ｃアンブッシュソルジャー以外のＨ・Ｃと名のついたモンスターを２体まで選んで特殊召喚できる‼？墓地より甦れ、Ｈ・Ｃサウザンドブレード、Ｈ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）エクストラソード‼？」
〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００
〈Ｈ・Ｃ　エクストラソード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１０００
サウザンドブレードと共に現れたのは銀色の鎧を身に纏った二刀流の戦士。

現れたエクストラソードに空子は一瞬驚いた表情を見せたが、すぐに不敵な笑みを浮かべる。
「さっきの手札断殺で落としたカードね。だけどそれぐらいどうってことないわ‼?リバースカードオープン‼?罠発動、底なし落とし穴‼?相手がモンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に、そのモンスターを裏側守備表示にする‼?そしてこの効果で裏側守備表示になったモンスターは表示形式を変更できない‼?」
フィールドに現れたサウザンドブレードとエクストラソードの足場が崩れ、地面の中に吸い込まれて暗闇の中に消える。
「裏側守備表示になっちゃえばリンク召喚にもエクシーズ召喚にも使えない。これでそのモンスター達は無力‼?」
「ならH・C（ヒロイックチャレンジャー）クラスプナイフを召喚‼?」

〈H・C　クラスプナイフ〉☆1　戦士族　地属性
ATK300

フィールドに現れたのは鉄の鎧を見に纏った巨大なナイフを持つ戦士。
その姿を見て空子が首を傾げる。
「この状況で攻撃力300のレベル1モンスターを攻撃表示?」
「さあ、何か使うか?」
「(魔法と罠はナチュルビーストとナチュルパルキオンが封じてるから魔法や罠による強化じゃない。できるとしたらリンク召喚だけど、出せたとしてリンク1のモンスターだし、それでこの状況を突破できるわけないし、出てきたモンスターがもし強くても落とし穴罠でどうにかすればいいのはゆっくんだってわかってるハズ。なら、ハッタリでフレシアの蟲惑魔のオーバーレイユニットを使わせようとしてるってことね。ふふーん、そんな手には乗らないんだから)アタシが発動するカードはないよ」
「……ふぅ、賭けは俺の勝ちだな」
「……えっ?」

クラスプナイフが生き残ったことで俺は安堵の息を吐く。
この状況でクラスプナイフを除去されていたらヤバかった。
だけど、生き残ったなら勝機が見える!!?
「見せてやるよ、空子が望んでた俺のヒーローをな!!?自分フィールドのモンスター3体、H・C　クラスプナイフ、H・Cサウザンドブレード、H・C　エクストラソードをリリースし、手札からこのモンスターを特殊召喚する!!?」
「えっ!?!?」
クラスプナイフ、サウザンドブレード、エクストラソードが粒子に変わり、空に集まっていく。
集まった粒子が弾けると、空から舞い降りたのは龍の鎧を見に纏った漆黒の戦士。
その戦士はフィールドに降り立つと、力強い咆哮を上げた。
「呪われた運命に抗う孤独の戦士!!?ＤＥＳＴＥＮＹ－ＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）ＢＬＵＥ－ＥＹＥＤ（ブルーディー）!!?」

〈ＤＥＳＴＥＮＹ－ＨＥＲＯ　ＢＬＵＥ－ＥＹＥＤ〉☆８　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１９００

「ＤＥＳＴＥＮＹ－ＨＥＲＯ!!?ゆっくん入ってないって言ったじゃん!!?」
「入ってないとは言ってないぞ、ほとんど使ってないって言っただけだ。それに本当にＤＥＳＴＥＮＹ－ＨＥＲＯはＢＬＵＥ－ＥＹＥＤしか入ってないしな」
現れたＢＬＵＥ－ＥＹＥＤを見て、空子が一瞬目を見開くがすぐに不敵な笑みを浮かべる。
「だけど、いくらゆっくんのヒーローでもモンスターであることには変わりないもん!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?奈落の落とし穴!!?相手が攻撃力１５００以上のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚した時にその攻撃力１５００以上のモンスターを破壊し除外する!!?これでゆっくんのヒーローもおしまいだよ!!?」
「残念だが、そうはいかないぜ?ライフポイントを半分払い、手札からカウンター罠発動!!?レッドリブート!!?」

遊騎　ＬＰ８０００→４０００

「相手が罠カードを発動した時に発動できる‼?その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする‼?その後相手はデッキから罠カード1枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンにセットできる。ただしこのカード発動後、ターン終了時まで罠カードは発動できないがな」

「そんなの無駄だよ‼?アトラの蟲惑魔の永続効果でこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分の通常罠カードの発動及びその発動した効果は無効化されな……い?」

発動していた奈落の落とし穴が空子のフィールドに伏せられる。

それを見て空子が驚愕の表情を浮かべる。

「な、なんで⁉?」

「確かにアトラの蟲惑魔の永続効果やナチュルパルキオンの効果があればレッドリブートで奈落の落とし穴は無効にできない。だが、奈落の落とし穴が発動するのはあくまで特殊召喚の成功時。特殊召喚が成功した時点で俺のＤ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄの永続効果が発動していた‼?」

「っ⁉?」

俺の言葉に空子が改めてフィールドを見ると、Ｂｌｏｏｄの鎧から闇が吹き出し、辺りの風景が夜に変わる。

そのＢｌｏｏｄから吹き出した闇により、空子のモンスターは力を失っていた。

「Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄの永続効果、シールデステニー‼?このカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手フィールドの表側表示モンスターの効果は無効化される‼?」

「あっ‼?そういえばそんな効果だった‼?ということは……」

「確かに空子の布陣はかなり強固だが、それはほとんどモンスター効果に頼ったものだ。Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄでモンスター効果を封じてしまえば、俺を縛るものはない。そしてレッドリブートの効果により、このターン空子はもう罠カードは使えない。追い詰めたの

はこっちの方だ」
「そんな……むぐぐー!!?レッドリブートの効果でデッキからナチュルの神星樹をセット!!?私のライフはまだ５０００もあるもん!!?次のターンで逆転してやる!!?」
悔しそうに唸りながらそんなことを言う空子。
確かに次のターンになってＢｌｏｏｏＤがやられれば俺の負けだ。
だからこそ、このターンで終わらせる!!?
「いや、空子に次のターンはない!!?ＤＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏ－Ｄの効果発動!!?カースアブソーブ!!?１ターンに１度、相手フィールドのモンスター１体を対象として、その相手モンスターを装備カード扱いとして１枚だけこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの元々の攻撃力の半分だけアップする!!?対象はナチュルパルキオン!!?」
Ｂｌｏｏｏ－ＤがパルキオンにＤＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏ－Ｄの背中に付いている龍の爪がパルキオンに放たれ、その爪に貫かれたパルキオンはガラスのように砕け、粒子に変わるとＢｌｏｏｏ－Ｄに吸い込まれていった。

ＤＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏ－Ｄ
ＡＴＫ１９００→３１５０

「さらに装備魔法、孤毒の剣をＤＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏ－Ｄに装備!!?」
Ｂｌｏｏｏ－Ｄの手元に悪魔の意匠が凝らされた禍々しい紫の魔剣が現れる。
「孤毒の剣は自分フィールドに装備モンスター以外のモンスターが存在する場合にこのカードは墓地へ送られるが、相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時のみ、装備モンスターの元々の攻撃力・守備力は倍になる!!?」
「っ!!?だけどそれだけならまだ足りないよ!!?」
「そうだろうな。だから答え合わせといこう。バトル!!?ＤＨＥＲ

０　Ｂｌｏｏｏｍ－Ｄでナチュルビーストを攻撃‼？そして、速攻魔法、アクションマジック－フルターン‼？」
「⁉？そのカードは……」
「このターン、モンスター同士の戦闘で発生するお互いの戦闘ダメージは倍になる‼？」
「戦闘ダメージが倍⁉？」
「そして相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時、孤毒の剣によりＤ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏｍ－Ｄの攻撃力は倍になる‼？」

Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏｍ－Ｄ
ＡＴＫ１９００→３８００→５０５０

Ｂｌｏｏｏｍ－Ｄが孤毒の剣を撫でると、孤毒の剣が青いオーラに包まれる。
「攻撃力５０５０の戦闘ダメージが倍⁉？それじゃあ……」
「これで終わりだ。行け、Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏｍ－Ｄ‼？ファイナルフィアースラッシュ‼？」
Ｂｌｏｏｏｍ－Ｄが青いオーラを纏った孤毒の剣をナチュルビーストに振るうと、孤毒の剣から青い斬撃が放たれ、ナチュルビーストを斬り裂く。
Ｂｌｏｏｏｍ－Ｄがナチュルビーストに背中を向けながら孤毒の剣を再び撫でると、青いオーラが消え、それと同時にナチュルビーストが爆散した。

空子　ＬＰ５０００→０

ーーーーーーー

「そこまで、勝者、遊騎」
「ふぅ、結構ギリギリだったな」
立体映像が消え、俺が一息吐くと子供達から歓声が上がる。

そんな中、対戦相手だった空子は悔しそうに表情を歪める。
「むー!!?絶対勝ったと思ったのにー!!?」
「ははは、そう簡単に俺も負けるわけにはいかないからな。だけど、空子も凄く強くなってたな。見違えたぞ、偉い偉い」
そういって頭を撫でてやると。空子が嬉しそうに鼻を掻く。
「!!?へへ、でしょー!!?見ててよ、ゆっくん!!?次は絶対に勝ってやるんだから!!?」
「ああ、楽しみにしてるぜ」
空子にそういって、遊花達が控えていた場所に戻る。
俺が戻ると遊花と桜は凄く真剣な表情で俺を見ていた。
そんな遊花達に、俺は苦笑しながら声をかける。
「どうやら、ここの子供達の強さがしっかりとイメージできたみたいだな」
「あんなデュエル見せられたら嫌でも分かるわよ……アンタ、結構危なかったでしょ?」
「まあな。Ｂｌｏｏｄをドローしてなかったら、空子が別の落とし穴やフレシアの効果を使ってたらその時点で俺は負けだったよ。まあ、落とし穴を掻い潜ることはできるとふんでたから実質Ｂｌｏｏｄがドローできるかどうかだったんだけどな」
「師匠がギリギリですか……」
そういって遊花が少し暗い表情を浮かべる。
全く、気負い過ぎるなって言ってるのにな。
「そう気負うなって。あくまでも今日のメインは子供達のチーム対抗戦の練習だからな。手を抜くのもダメだが、負けようとデメリットはない。それに、気負い過ぎるとその緊張は子供達にも伝わるぞ?気楽に、楽しんでデュエルをしろよ」
「!!?……そうですね。私達が楽しんでデュエルできないと、子供達も楽しんでデュエルなんでできませんよね」
俺の言葉に、ようやく遊花が柔らかい笑顔を見せる。
よかった……どうやら上手く気持ちを切り替えられたみたいだな。

やっぱり、遊花に暗い顔は似合わないからな。
「さてと、次は桜だが。相手は多分竜路だな」
「あのアンタに突っかかってた男の子ね」
「まあ、それに関しては俺が悪いから言ってやるなよ。最初に空子が来たなら多分そうだろう」
「なんで空子ちゃんが最初なら次は竜路君なんですか？」
「今回空子は俺とデュエルしたいから先手に来ただろうからな。そうじゃなかったら自分が1番強いと思ってる空子は大将をやってるだろうし、その負けを取り返すためでも、遊陽は温存するだろう」
「その言い方だと、あの大人しめな遊陽って子が1番強いの？」
「ああ。ぶっちゃけ多分俺のデッキだと8割がた負けるな。闇も先攻をとれれば勝てるだろうが、後攻なら良くて7割悪くて5分ってところだろう」
「ええっ⁉？」
「嘘でしょ⁉？」
俺の言葉に遊花と桜が大声をあげて驚く。
まあ、気持ちは分からなくもない。
遊花達にとって俺や闇はかなり強いってイメージがあるんだろうし、そんな相手と互角かそれ以上の相手が遊陽みたいな小学3年生の少女だとは思わないだろう。
「まあ、相性云々意外にも色々あるんだが、そこはデュエルしてのお楽しみだな。正直、この中なら遊花が1番勝機がある。闇もそれを期待してるんだろう」
「……私が遊陽ちゃんに勝つのをってことですか？」
「多分な。あの年齢で強過ぎるって言うのも、それはそれで問題になるもんだぜ」
「強過ぎることが……ですが？」
「それじゃあそろそろ中堅戦をはじめる」
子供達に今のデュエルの解説をしていた闇が俺達にも聞こえるように言う。
その言葉に桜が少し不服そうな表情を浮かべる。

「結局、私の対戦する子の話は聞けなかったじゃない」
「ははは、悪い悪い。だが、桜の戦術は竜路相手には相性が良かったハズだから何とかなると思うぜ。まあ、俺の知らない間に竜路のデッキが変わってる可能性もあるが、桜なら大丈夫だろ」
「……まあ、それだけ信頼されてるってことで許してあげるわ。ちゃんと見てなさいよね」
「おう、頑張れよ」
そういうと、桜が闇がいる場所に移動する。
さて、どんなデュエルが見られるか……楽しみにしてるぜ、桜、竜路。

幕間４・竜の砲口

●

「それじゃあ次は中堅戦に入る。竜路、皆の前に」
「分かった、ヤミセン」
「だからヤミセンは止めて。桜、お願い」
「分かったわよ、ヤミセン」
「……泣いていい？」
「ちょっ⁉？ごめんごめん‼？私が悪かったから‼？本気のトーンでそんなこと言わないでよ⁉？ゆ、遊騎‼？助けて‼？」
「……初っ端から何やってんだお前らは」
いつもの無表情を崩して本気で泣きそうになっている闇を、私達を見て本気で呆れている遊騎と一緒に慰める。
まさかいつも無表情な闇がこんな冗談で泣きそうになるとは思わなかった。
あまり表情が変わらない闇だけど、内心堪えていたのかもしれない。
数分後、遊騎と必死に慰めたことでようやくいつもの調子に戻った闇がデュエルの開始の宣言をする。
「……それじゃあ、これより、チーム『空子軍団』ＶＳチーム『月花騎士』の中堅戦を、はじめる。竜路、桜、構えて」
「……ええ、分かったわ」
……訂正、まだちょっと引きずってるかもしれない。
そんな闇を見て表情を引攣らせながらも、私はデュエルディスクを起動する。
そんな私をジッと睨みつけるようにしながら、私の対戦相手である竜路と呼ばれた少年もデュエルディスクを起動する。
そんな私を睨みつけていた竜路だったが、一瞬視線を私の後ろの方にいる遊騎に移すと、不機嫌そうに口を開く。
「……アンタもあの裏切り者の仲間なのか？」

「随分な言われようね。その裏切り者が遊騎のことを指してるなら否定はしないわ。私はアイツの友達だから。まあ、友達になれたのも最近の話だけどね」
「……だったらアンタは俺の敵だ」
「……ふーん、まあいいわ。でも、敵だって言うなら容赦はしないわよ？私、敵ならどんな奴でも容赦しない主義なの」
「望むところだ。あんな奴の仲間に負けるもんか‼？」
『決闘‼？』

桜　ＬＰ８０００
竜路　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は私か……なら、まずはこれね。速攻魔法、転生炎獣の炎陣（サラマングレイト・サークル）‼？」
「サラマングレイト‼？何で桜が……‼？」
何故か審判をしている闇から驚いたような声が聞こえてくる。
そういえば、闇には不知火さんから貰ったことを言ってなかったわね。
まあ、後で話せばいいことよね？
とりあえず、今はデュエルに集中よ。
「この同名カードは1ターンに1枚しか使えず、２つ効果から1つを選択して発動できる。デッキからサラマングレイトモンスター1体を手札に加えるか、自身と同名のモンスターを素材としてリンク召喚した自分フィールドのサラマングレイトリンクモンスター1体を対象としてこのターン、そのリンクモンスターは自身以外のモンスターの効果を受けなくする効果よ。私はデッキからサラマングレイトモンスター1体を手札に加える効果でデッキから転生炎獣（サラマングレイト）ガゼルを手札に加えるわ」
「モンスターのサーチカードか……」

「私はレディデバッガーを召喚!!?」

〈レディデバッガー〉☆４　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１７００

フィールドに現れたのはテントウムシのような外見をした女性型のモンスター。

「レディデバッガーの効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキからレベル３以下のサイバース族モンスター１体を手札に加える!!?私はデッキから転生炎獣（サラマングレイト）モルを手札に加えるわ。そして、繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」

「リンク召喚……」

私が目の前に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。

「召喚条件はレベル４以下のサイバース族モンスター１体!!?私はレディデバッガーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク１!!?転生炎獣（サラマングレイト）ペイルリンクス!!?」

〈転生炎獣ペイルリンクス〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ５００　←

レディデバッガーがサーキットに吸い込まれると、代わりにサーキットから現れたのは真っ赤な装甲に身を包んだ山猫のモンスター。

「転生炎獣ペイルリンクスの効果発動!!?１ターンに１度、このカードがリンク召喚に成功した場合に、デッキから転生炎獣（サラマングレイト）の聖域（サンクチュアリ）１枚を手札に加える!!?私はデッキからフィールド魔法、転生炎獣の聖域を手札に加える!!?」

「っ、次から次へとサーチするせいで手札が減らねぇ……」

「そしてフィールド魔法、転生炎獣の聖域を発動!!?」

フィールド魔法を発動すると、辺りの風景がマグマに囲まれた火山のフィールドに変わる。

「手札に存在する転生炎獣モルの効果発動!!?1ターンに1度、自分のリンクモンスターをリンク召喚に成功したターンの自分のメインフェイズに、手札のこのカードをリンクモンスターのリンク先となる自分のフィールドに特殊召喚する!!?」

〈転生炎獣モル〉☆1　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ０

ペイルリンクスの近くの地中から、爪に炎を纏ったモグラのモンスターが現れる。

「さあ、どんどん行くわよ!!?繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」

「またリンク召喚か!!?」

「召喚条件は炎属性の効果モンスター2体!!?私は転生炎獣ペイルリンクスと転生炎獣モルをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?転生炎獣サンライトウルフ(サラマングレイト)!!?」

〈転生炎獣サンライトウルフ〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１８００　←→

ペイルリンクスとモルがサーキットに吸い込まれ、代わりに炎を纏った機械的な狼が現れる。

「転生炎獣モルが墓地に送られたことで手札の転生炎獣ガゼルの効果発動!!?」

「最初にサーチしたモンスターか!!?」

「1ターンに1度転生炎獣ガゼル以外のサラマングレイトモンスターが自分の墓地に送られた場合、このカードを手札から特殊召喚する!!?」

〈転生炎獣ガゼル〉☆3　サイバース族　炎属性

ＤＥＦ１０００

モルがいた場所に今度は炎を纏ったガゼルが現れる。

「転生炎獣ガゼルのもう１つの効果発動!!?１ターンに１度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから転生炎獣ガゼル以外のサラマングレイトカード１枚を墓地に送る。私はデッキから転生炎獣（サラマングレイト）Ｊジャガーを墓地に送るわ!!?そしてフィールド魔法、転生炎獣の聖域の効果発動!!?１ターンに１度、このカードがフィールドゾーンに存在する限り、自分がサラマングレイトリンクモンスターをリンク召喚する場合、自分フィールドの同名のサラマングレイトリンクモンスター１体のみを素材としてリンク召喚できる!!?」

「同名カードを使ったリンク召喚?」

「繋がって!!?希望に導くサーキット!!?私は転生炎獣サンライトウルフをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」

サンライトウルフの頭上にサーキットが、足元に炎で出来た魔法陣が現れ、交差するようにサンライトウルフの身体を通過する。

サーキットと魔法陣が通過すると、サンライトウルフの纏っていた炎が一際激しく燃え上がる。

「転生リンク召喚!!?リンク２!!?転生炎獣サンライトウルフ!!?」

〈転生炎獣サンライトウルフ〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　炎属性

ＡＴＫ１８００　←→

「同名カードにリンク召喚なんて何の意味が……」

「意味ならちゃんとあるわよ?転生炎獣サンライトウルフの効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードが転生炎獣サンライトウルフを素材としてリンク召喚されている場合、自分の墓地のサラマングレイト魔法・罠カード１枚を選んで手札に加える!!?私は墓地に存在する転生炎獣の炎陣を手札に加えるわ!!?」

「っ!?!?サーチカードを回収した!?!?」

「さらに墓地に存在する転生炎獣Ｊジャガーの効果発動!!?同名カー

ドは1ターンに1度、このカードが墓地に存在し、自分フィールドにサラマングレイトリンクモンスターが存在する場合、転生炎獣Ｊジャガー以外の自分の墓地のサラマングレイトモンスター1体を対象としてそのモンスターをデッキに戻し、墓地のこのカードを自分のサラマングレイトリンクモンスターのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚する‼?私は墓地の転生炎獣サンライトウルフをＥＸデッキに戻して転生炎獣Ｊジャガーを特殊召喚‼?」

〈転生炎獣Ｊジャガー〉☆４　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１２００

サンライトウルフの近くに身体に着いた棘から炎を噴き出させているジャガーが現れる。
そしてＪジャガーが現れたことでサンライトウルフは歓喜の声をあげる。
「転生炎獣サンライトウルフの効果発動‼?同名カードは1ターンに1度、このカードのリンク先にモンスターが召喚・特殊召喚された場合、自分の墓地から炎属性モンスター1体を選んで手札に加える‼?ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できない。私は墓地の転生炎獣モルを手札に加えるわ。私はカードを2枚伏せてターンエンド。さあ、アンタの力、見せてもらうわよ」

桜　ＬＰ８０００　手札３
ー▲▲ー　▽
ー□□ーー
☆　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
竜路　ＬＰ８０００　手札５

「俺のターン、ドロー!!?フィールド魔法、ユニオン格納庫を発動!!?」
マグマに囲まれた火山フィールドの一角に、巨大な格納庫が現れる。
「ユニオン格納庫の発動時の効果処理として、デッキから機械族・光属性のユニオンモンスター1体を手札に加える事ができる!!?俺はデッキからB―バスタードレイクを手札に加える!!?」
「へぇ……ユニオンモンスターなんて、また珍しいものを使ってるわね」
「そんなこと言ってられるのは今の内だ!!?俺はゴールドガジェットを召喚!!?」

〈ゴールドガジェット〉☆4　機械族　光属性
ＡＴＫ１７００

フィールドに金色の歯車のようなモンスターが現れる。
「ゴールドガジェットの効果発動!!?このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、手札から機械族・レベル４モンスター1体を特殊召喚する!!?来い、B―バスタードレイク!!?」

〈B―バスタードレイク〉☆4　機械族　光属性
ＤＥＦ１８００

ゴールドガジェットの隣に緑色の装甲を持つ機械の竜が現れる。
そしてバスタードレイクが咆哮をあげると、火山フィールドの一角に現れた格納庫のハッチが開く。
「フィールド魔法、ユニオン格納庫の効果発動!!?1ターンに1度、自分フィールドに機械族・光属性のユニオンモンスターが召喚・特殊召喚された場合、そのモンスター1体を対象としてそのモンスターに装備可能で、カード名が異なる機械族・光属性のユニオンモンスター1体をデッキから選び、そのモンスターに装備する!!?ただし、この効

果で装備したユニオンモンスターは、このターン特殊召喚できない。
俺はデッキからＢ―バスタードレイクにＣ―クラッシュワイバーンを装備する!!?」
格納庫から紫色の装甲を持つ機械の翼竜が飛び出し、変形するとバスタードレイクと合体する。
「行くぞ、接続せよ!!?同盟結びしサーキット!!?」
「リンク召喚ね」
竜路が目の前に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は機械族モンスター２体!!?俺はゴールドガジェットとＢ―バスタードレイクをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク２!!?プラチナガジェット!!?」
〈プラチナガジェット〉ＬＩＮＫ　２　機械族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙?↘?

ゴールドガジェットとバスタードレイクがサーキットに吸い込まれ、代わりに白金の歯車が現れる。
「墓地に送られたＣ―クラッシュワイバーンの効果、それにチェーンしてＢ―バスタードレイクの効果発動!!?Ｂ―バスタードレイクの効果でこのカードがフィールドから墓地へ送られた場合、デッキからユニオンモンスター１体を手札に加える。俺はデッキからＡ―アサルトコアを手札に加える!!?そしてＣ―クラッシュワイバーンの効果発動!!?このカードがフィールドから墓地へ送られた場合、手札からユニオンモンスター１体を特殊召喚する!!?現れろ、Ｗ―ウィングカタパルト!!?」
〈Ｗ―ウィングカタパルト〉☆４　機械族　光属性
ＤＥＦ１５００

バスタードレイクがいた場所に青い装甲を持つジェット機が飛来する。

「どんどん行くぜ‼?・プラチナガジェットの効果発動‼?・自分メインフェイズに手札からレベル４以下の機械族モンスター１体をこのカードのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚する‼?・来い、Ａ―アサルトコア‼?・」

〈Ａ―アサルトコア〉☆４　機械族　光属性
ＡＴＫ１９００

プラチナガジェットが身体から眩い光を放つと、その光に導かれてか金色の装甲を持つ機械の蠍が現れる。
そして現れたアサルトコアを見て、竜路がその手をかざす。
「俺は機械族レベル４、Ｗ―ウィングカタパルトとＡ―アサルトコアでオーバーレイ‼?・２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼?・」
「お次はエクシーズ召喚ね」
ウィングカタパルトとアサルトコアが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとフィールドに現れたのは身体中に歯車があり、背中に巨大な歯車を背負った機械戦士。
「世界を動かす機械戦士‼?・ランク４‼?・ギアギガントＸ‼?・」

〈ギアギガントＸ〉★４　機械族　地属性
ＡＴＫ２３００

「ギアギガントＸの効果発動‼?・ダイナミックフォース‼?・オーバーレイユニットを１つ取り除き、自分のデッキ・墓地からレベル４以下の機械族モンスター１体を選んで手札に加える‼?・俺はデッキからＸ―ヘッドキャノンを手札に加える‼?・これで準備は整った、俺は墓地に存在するＡ―アサルトコア、Ｂ―バスタードレイク、Ｃ―クラッシュワイバーンを除外することでＥＸデッキからモンスターを特殊召喚する‼?・」

「⁉?・墓地から特定のモンスターを除外することで特殊召喚できるモンスター⁉?」
「合体しろ⁉?Ａ―アサルトコア、Ｂ―バスタードレイク、Ｃ―クラッシュワイバーン⁉?」
　墓地に眠っていた３機のユニオンモンスターが動き出し、それぞれの身体を分離させ、アサルトコアを中心として左にクラッシュワイバーン、右にバスタードレイクが合体し、それぞれの武装が組み合わさっていく。
　合体を終えたその機体は金色に輝き、咆哮をあげた。
「竜機合体⁉?ＡＢＣ―ドラゴンバスター⁉?」

〈ＡＢＣ―ドラゴンバスター〉☆８　機械族　光属性
　ＡＴＫ３０００

「今度は特殊条件での融合召喚か⁉?」
「ＡＢＣ―ドラゴンバスターの効果発動⁉?アサルトバスタークラッシュ⁉?１ターンに１度、手札を１枚捨て、フィールドのカード１枚を対象としてそのカードを除外する⁉?この効果は相手ターンでも発動できる⁉?俺は手札を１枚捨てて転生炎獣Ｊジャガーを除外する⁉?」
「っ⁉?成る程、九石のマグネットベルセリオンみたいな奴ってわけね……ごめんなさい、Ｊジャガー」
　竜路が手札を捨てると、ＡＢＣ―ドラゴンバスターの身体になったバスタードレイクとクラッシュワイバーンの口からレーザーが放たれ、Ｊジャガーはそのレーザーに貫かれて粒子になって消えた。
「これで何度も蘇ってくることはないな。さらに今手札から捨てられたおジャマジックの効果発動⁉?」
「は⁉?おジャマ⁉?」
「このカードが手札・フィールドから墓地へ送られた場合、デッキからおジャマグリーン、おジャマイエロー、おジャマブラックを１体ずつ手札に加える⁉?これで手札コストも確保できたぜ」

「おジャマまで入ってるとか一体どんなデッキなのよ……というか、あれ絶対６０枚デッキよね？道理でデッキが多く見えたわけだわ」
「バトル‼？まずはプラチナガジェットで転生炎獣ガゼルを攻撃‼？プラチナキック‼？」
　プラチナガジェットが勢いよく飛び上がり、ガゼルを蹴り飛ばし、消滅させる。
「次だ‼？ギアギガントXで転生炎獣サンライトウルフを攻撃‼？ギアナックル‼？」
　殴りかかってくるギアギガントXの拳がサンライトウルフの身体に突き刺さり、爆散した。

桜　ＬＰ８０００→７５００

「続けてＡＢＣ―ドラゴンバスターでダイレクトアタック‼？アサルトバスタークラッシュ―ドラゴンバスター‼？」
「くっ‼？」

桜　ＬＰ７５００→４５００

　ＡＢＣ―ドラゴンバスターの身体中にある武装が一斉に放たれ、ミサイルやレーザーが次々に放たれ私のライフが大きく削られる。
　ちょうど３０００ダメージだからヘルテンペストが引けてればよかったけど、引けてないものは仕方ないか。
「メインフェイズ2、カードを2枚伏せてターンエンドだ」

桜　ＬＰ４５００　手札３
ー―▲▲ー　▽
ーーーーー
ー　☆
ー―○ー○

ーー▲▲ー　　▽
竜路　ＬＰ８０００　手札４

「私のターン、ドロー!!?ＡＢＣ―ドラゴンバスターは中々厄介だけど、それなら喰らってしまえばいいだけだわ!!?ＡＢＣ―ドラゴンバスターをリリースして怒炎壊獣ドゴランを攻撃表示で特殊召喚!!?」

〈怒炎壊獣ドゴラン〉☆８　恐竜族　炎属性
ＡＴＫ３０００

ドラゴンバスターを喰らいながら、地の底から巨大な地竜が竜路のフィールドに降り立つ。
これで厄介な除外効果は無くなったわね。
「くっ、ＡＢＣ―ドラゴンバスターが……だが、代わりに攻撃力３０００のモンスターがいることには変わりがない!!?!!?」
「馬鹿ね、そんなの承知の上に決まってるでしょ。行くわよ、相棒!!?月より来たる永遠の姫!!?妖精伝姫（フェアリーテイル）―カグヤを召喚!!?」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ１８５０

現れたのは月のマークが入っている扇子を持ったお姫様。
カグヤは挨拶をするように私に扇子をひらひらと振ってにこやかに笑う。
……やっぱり、最近カグヤが勝手に動いてる気がするのよね。
疲れてるのかしら、私？
「……まあいいわ。妖精伝姫―カグヤの効果発動！召喚に成功した時、デッキから攻撃力１８５０の魔法使い族モンスター１体を手札に加える。私は２体目の妖精伝姫―カグヤを手札に加えるわ。バトル!!?妖精伝姫―カグヤでプラチナガジェットを攻撃!!?タツノクビノタマ!!?」

カグヤは着物の中から綺麗な玉を取り出し、その玉を振りかぶってプラチナガジェットに向かって投げつける。
その玉はプラチナガジェットの身体を貫き、プラチナガジェットを爆散させた。
……おかしいわね、前見た時は玉からレーザーみたいなのを出してたハズなんだけど……

竜路　ＬＰ８０００→７７５０

「くっ……プラチナガジェットの効果発動!!?このカードが戦闘・効果で破壊された場合、デッキからレベル４のガジェットモンスター１体を特殊召喚する!!?来い、シルバーガジェットを召喚!!?」

〈シルバーガジェット〉☆４　機械族　光属性
ＡＴＫ１５００

爆散したプラチナガジェットが生み出した爆煙の中からゴールドガジェット似た銀色の歯車のモンスターが現れる。
「シルバーガジェットの効果発動!!?このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、手札から機械族・レベル４モンスター１体を特殊召喚する!!?来い、Ｘ―ヘッドキャノン!!?」

〈Ｘ―ヘッドキャノン〉☆４　機械族　光属性
ＡＴＫ１８００

シルバーガジェットの肩にキャノン砲をつけた機械兵が現れる。
そしてヘッドキャノンが現れるのと同時に再び格納庫のハッチが開く。
「フィールド魔法、ユニオン格納庫の効果発動!!?俺はデッキからＸ―ヘッドキャノンにＺ―メタルキャタピラーを装備する!!?」
格納庫から金色の装甲を持つ戦車が飛び出し、ヘッドキャノンの足

場となる。
「Ｚ―メタルキャタピラーの効果で装備モンスターの攻撃力・守備力は６００ポイントアップする」

Ｘ―ヘッドキャノン
ＡＴＫ１８００→２４００

「また面倒そうなモンスターが出てきたわね。メインフェイズ２、妖精伝姫―カグヤの効果発動!!?アンリーゾナブルディマンド!!?１ターンに１度、相手フィールドの表側表示モンスター１体を対象として発動!!?相手はそのモンスターの同名カード１枚を自身のデッキ・ＥＸデッキから墓地へ送ってこの効果を無効にできる。墓地へ送らなかった場合、このカードと対象のモンスターを持ち主の手札に戻す。この効果は相手ターンでも発動できるわ。対象は勿論、怒炎壊獣ドゴランよ」
「っ!??俺のデッキに怒炎壊獣ドゴランは入ってない……」
竜路がそう宣言するとカグヤがドゴランに向かって歩いていき、その巨体を軽々と持ち上げる。
「……えっ?」
唖然とする私に構わずカグヤはドゴランを私に向けて投げるとドゴランはカードとして手札に戻り、カグヤもドヤ顔で胸を張りながら私の手札に戻っていった。
……おかしい。
この効果も前は相手モンスターと一緒に姿を消すだけだったハズなんだけど……そういえば、前に遊花が似たような立体映像が見えたって言ってたことがあったわね。
私と遊花で今まで見えてたものが違って今の私には遊花が見えてたような映像が見えるってこと?
でも、一体なんで……
「どうしたんだ?まだアンタのターンだぞ?」
思考の海に潜ろうとする私を、不機嫌そうな

竜路の声が引き上げる。
……うん、考えることは色々あるけど、今はちゃんとデュエルに集中しないと。
他のことに気を取られて勝てる程、この子はきっと甘くない。
「悪かったわ、デュエルを続けましょ。私はカードを1枚伏せてターンエンドよ」

桜　ＬＰ４５００　手札４
ー▲▲▲ー　　▽
ーーーーー
　　ー　　ー
ー○○ー○
ー△▲▲ー　　▽
竜路　ＬＰ７７５０　手札３

「俺のターン、ドロー!!?よしっ!!?魔法カード、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨てて同じ枚数ドローする!!?俺は3枚、アンタは４枚の手札を捨てて同じ枚数ドローだ!!?」
「ここで手札交換か……なら、少しデッキを圧縮しておこうかしら。チェーンしてリバースカードオープン!!?速攻魔法、転生炎獣の炎陣!!?私はデッキからサラマングレイトモンスター1体を手札に加える効果でデッキから転生炎獣（サラマングレイト）スピニーを手札に加えるわ。そして手札抹殺の効果で手札を全て捨てて5枚ドローよ」
「ドロー枚数を増やしたか。ギアギガントXの効果発動!!?ダイナミックフォース!!?オーバーレイユニットを1つ取り除き、俺はデッキから2体目のＡ―アサルトコアを手札に加える!!?さらに魔法カード、貪欲な壺!!?墓地に存在するＡＢＣ―ドラゴンバスター、プラチナガジェットをＥＸデッキに、ゴールドガジェット、おジャマイエロー、Ｗ―ウィングカタパルトをデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローする!!?」
ドローしたカードを見て、竜路が不敵な笑みを浮かべる。

どうやらこのターンが正念場になりそうね。
「これで準備は整った!!?このターンでアンタを倒す!!?」
「へぇ、やれるもんならやってみなさい」
「そんなことを言えるのも今の内だ!!?リバースカードオープン!!?スクランブルユニオン!!?除外されている自分の機械族・光属性の通常モンスターまたはユニオンモンスターを3体までを対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?戻って来い、B―バスタードレイク!!?C―クラッシュワイバーン!!?」

〈B―バスタードレイク〉☆4　機械族　光属性
DEF1800

〈C―クラッシュワイバーン〉☆4　機械族　光属性
DEF2000

フィールドに再び現れる2体のユニオンモンスター。
さっき貪欲な壺でドラゴンバスターはEXデッキに戻ってるからこれでドラゴンバスターが出てくるのは確定したわね。
「どんどん行くぞ、接続せよ!!?同盟結びしサーキット!!?」
竜路が目の前に手をかざすと再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はカード名が異なるモンスター2体以上!!?俺は、B―バスタードレイク、C―クラッシュワイバーン、シルバーガジェット、ギアギガントXをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?邪悪を縛る龍!!?リンク召喚!!?リンク4!!?鎖龍蛇ースカルデッド!!?」

〈鎖龍蛇ースカルデッド〉LINK4　ドラゴン族　地属性
ATK2800　↙?←→↘?

現れたのは身体に鎖を巻きつけた蛇のような顔をした龍のモンスター。

あれは確か桜糀も使ってたリンクモンスターね。
「鎖龍蛇ースカルデッドはこのカードのリンク素材としたモンスターの数によって以下の効果を得る。２体以上でこのカードのリンク先にモンスターが召喚・特殊召喚された場合にそのモンスターの攻撃力・守備力は３００ポイントアップさせ、３体以上で１ターンに１度、自分メインフェイズに手札からモンスター１体を特殊召喚し、４体でこのカードがリンク召喚に成功した時に自分はデッキから４枚ドローし、その後手札を３枚選んで好きな順番でデッキの下に戻す」
「つまり今は全ての効果が使えるってことね……」
「その通りだ。まずは墓地に送られたＣ―クラッシュワイバーンの効果、それにチェーンしてＢ―バスタードレイクの効果、そしてそれにチェーンして最後に鎖龍蛇ースカルデッドの効果発動‼？俺は４枚ドローし、その後手札を３枚デッキの下に戻す‼？次にＢ―バスタードレイクの効果でデッキからＹ―ドラゴンヘッドを手札に加える。そしてＣ―クラッシュワイバーンの効果で手札からＡ―アサルトコアを特殊召喚‼？」

〈Ａ―アサルトコア〉☆４　機械族　光属性
ＡＴＫ１９００→２２００

「さらに俺はＹ―ドラゴンヘッドを召喚‼？」

〈Ｙ―ドラゴンヘッド〉☆４　機械族　光属性
ＡＴＫ１５００

ヘッドキャノンの横に今度は赤いの装甲の翼竜が現れる。
さっきＡＢＣで合体したってことは、今フィールドにいるＸＹＺでも合体しそうね。
「そして、フィールド魔法、混沌空間を発動‼？」
「っ‼？今度は闇が使ってるフィールド魔法か……」
竜路がそう宣言すると、格納庫が消え、火山フィールドの様々な場

所に渦巻きが現れる。
「混沌空間の効果でモンスターが表側表示で除外される度に、１体につき１つこのカードにカオスカウンターを置くようになる。これで準備は完璧だ‼？俺はフィールドのＸ―ヘッドキャノン、Ｙ―ドラゴンヘッド、Ｚ―メタルキャタピラーを除外することでＥＸデッキからモンスターを特殊召喚する‼？合体しろ‼？Ｘ―ヘッドキャノン、Ｙ―ドラゴンヘッド、Ｚ―メタルキャタピラー‼？」
「やっぱりそいつらも合体するのね」
フィールドで合体していたヘッドキャノンとメタルキャタピラーが分離し、ドラゴンヘッドがメタルキャタピラーの上に乗り、さらにそのドラゴンヘッドの上にヘッドキャノンが乗っかった。
「武装合体‼？ＸＹＺ―ドラゴンキャノン‼？」

〈ＸＹＺ―ドラゴンキャノン〉☆８　機械族　光属性
ＡＴＫ２８００→３１００

混沌空間
カオスカウンター０→３

「……どう見てもただ乗っただけなんだけど？」
「はっ、そんなことを言ってられるのは今の内だけだ‼？魔法カード、おジャマ改造‼？ＥＸデッキの機械族・光属性の融合モンスター１体を相手に見せ、自分の手札・フィールド・墓地のおジャマモンスターを任意の数だけ除外して見せたモンスターにカード名が記されている融合素材モンスターを、除外したモンスターの数だけ自分の手札・デッキ・墓地から選んで同名カードは１枚までで特殊召喚する‼？俺はＥＸデッキのＶＷ―タイガーカタパルトを見せ、墓地からおジャマブラックとおジャマグリーンを除外して、デッキから現れろ、Ｖ―タイガージェット、Ｗ―ウィングカタパルト‼？」

〈Ｖ―タイガージェット〉☆４　機械族　光属性

ＤＥＦ１８００

〈Ｗ―ウィングカタパルト〉☆４　機械族　光属性

ＤＥＦ１５００

混沌空間

カオスカウンター３→５

フィールドに虎の顔を持つ戦闘機とウィングカタパルトが現れる。

さっきの条件で出してきたモンスターってことはこのモンスター達も……

「俺はフィールドのＶ―タイガージェット、Ｗ―ウィングカタパルトを除外することでＥＸデッキからＶＷ―タイガーカタパルトを特殊召喚する!!?合体しろ!!Ｖ―タイガージェット、Ｗ―ウィングカタパルト!!?」

竜路の声にウィングカタパルトの上にタイガージェットが乗っかる。

……やっぱり乗っただけにしか見えないんだけど?

「航空合体!!?ＶＷ―タイガーカタパルト!!?」

〈ＶＷ―タイガーカタパルト〉☆６　機械族　光属性

ＡＴＫ２０００→２３００

混沌空間

カオスカウンター５→７

「まだまだ行くぜ!!?俺はフィールドに存在するＡ―アサルトコアと、墓地に存在するＢ―バスタードレイク、Ｃ―クラッシュワイバーンを除外し、竜機合体!!?ＡＢＣ―ドラゴンバスター!!?」

〈ＡＢＣ―ドラゴンバスター〉☆８　機械族　光属性

ＡＴＫ３０００→３３００

混沌空間

カオスカウンター７→１０

フィールドに３体の合体モンスターが揃う。

でも、これだけで終わりとは思えない。

「ふっ、アンタに見せてやる‼？２体の究極合体モンスターをな‼？」

「２体の究極合体モンスター？」

「俺はフィールドのＡＢＣ―ドラゴンバスターとＸＹＺ―ドラゴンキャノンを除外し、ＥＸデッキからモンスターを特殊召喚する‼？合体しろ‼？ＡＢＣ―ドラゴンバスター、ＸＹＺ―ドラゴンキャノン‼？」

竜路の声に、ドラゴンバスターとドラゴンキャノンが分離し、合体していく。

メタルキャタピラーを中心にバスタードレイクとクラッシュワイバーンの顔と翼がキャタピラにつき、その下にドラゴンヘッドが合体し、アサルトコアがクラッシュワイバーンのミサイルを装備しながら連結する。

ヘッドキャノンは腕にバスタードレイクとクラッシュワイバーンの胴体が変化した電磁砲を装備し、肩にメタルキャタピラーの爪が装備され、角のように変化する。

最後にヘッドキャノンがメタルキャタピラーと連結し、巨大な１体のロボットになった。

「武装竜機合体‼？ＡｔｏＺ―ドラゴンバスターキャノン‼？」

〈ＡｔｏＺ―ドラゴンバスターキャノン〉☆１０　機械族　光属性

ＡＴＫ４０００→４３００

混沌空間

カオスカウンター１０→１２

「っ、随分ゴツいのが出てきたわね」
「言っておくぜ。ＡｔｏＺ―ドラゴンバスターキャノンの効果は、フィールドのこのカードを除外し、除外されている自分のＡＢＣ―ドラゴンバスター、ＸＹＺ―ドラゴンキャノンを１体ずつ対象としてそのモンスターを特殊召喚する。この効果は相手ターンでも発動できる。さらに、相手がモンスターの効果・魔法・罠カードを発動した時、手札を１枚捨ててその発動を無効にし破壊する。これでアンタをもう動かせない」
「っ⁉？分離効果に手札の数だけ無効効果を撃てるですって⁉？」
今の竜路の手札は３枚。
この状況で３回も無効効果が撃てるとか洒落になってないわよ⁉？
「まだ終わってないぜ⁉？フィールド魔法、混沌空間の効果発動⁉？１ターンに１度、自分フィールドのカオスカウンターを４つ以上取り除き、取り除いた数と同じレベルを持つ、除外されている自分または相手のモンスター１体を対象としてそのモンスターを自分フィールドに特殊召喚する⁉？俺はカオスカウンターを８つ取り除き、除外から戻って来い⁉？ＸＹＺ―ドラゴンキャノン⁉？」

混沌空間
カオスカウンター１２→４

フィールドに再び現れるドラゴンキャノン。
カードとしては分かるけど、アンタ合体してるハズなのにどっから出てきてるのよ⁉？
「次はこれだ⁉？俺はフィールドのＶＷ―タイガーカタパルトとＸＹＺ―ドラゴンキャノンを除外し、ＥＸデッキからモンスターを特殊召喚する⁉？合体しろ⁉？ＶＷ―タイガーカタパルト、ＸＹＺ―ドラゴンキャノン⁉？」
竜路の声に、次はタイガーカタパルトとドラゴンキャノンが分離

し、合体していく。
　ウィングカタパルトとヘッドキャノンが連結し胴体となり、そこにメタルキャタピラーのキャタピラが腕として連結される。
　そして背中にドラゴンヘッドの翼がつき、最後にヘッドキャノンの頭にヘルメットのようにタイガージェットの虎の顔が乗り、もう1体の巨大ロボットが現れる。
「航空武装合体!!?ＶＷＸＹＺ―ドラゴンカタパルトキャノン!!?」

〈ＶＷＸＹＺ―ドラゴンカタパルトキャノン〉☆８　機械族　光属性
　ＡＴＫ３０００→３３００
　混沌空間
　カオスカウンター４→６

「また巨大ロボット……これがアンタが言う2体の究極合体モンスター?確かに強そうだけど、合計の攻撃力が下がってるし、ちょっとイケてないんじゃない?」
「はっ!!?何を勘違いしてるんだ?俺の合体はまだ終わってないぜ!!?」
「何ですって?」
「お楽しみはこれからだ!!?まずはＶＷＸＹＺ―ドラゴンカタパルトキャノンの効果発動!!ヴィクトリーカタパルトキャノン!!??1ターンに1度、相手フィールドのカード1枚を対象としてその相手のカードを除外する!!?俺はさっきのターンアンタが伏せたカード1枚を除外する!!?」
　ドラゴンカタパルトキャノンが胸にあるキャノン砲から極太のレーザーを発射し、私が伏せていたヘルテンペストを除外する。
　あのまま攻撃してきてくれてたら発動できてたのに、運がいい奴ね。
「そして手札からおジャマデルタハリケーンを捨てて、リバースカードオープン!!?速攻魔法、おジャマッチング!!?手札及び自分フィー

ルドの表側表示のカードの中から、おジャマカード1枚を墓地へ送って発動!!?そのカードとカード名が異なるおジャマモンスター1体とアームドドラゴンモンスター1体を自分のデッキ・墓地から選んで手札に加え、その後、この効果で手札に加えたモンスター1体を召喚できる。俺はデッキからおジャマブルーとアームドドラゴンＬＶ５を手札に加える!!?たが、召喚は行わない」

「レベルモンスター、しかもアームドドラゴン!?!?アンタのデッキ、本当にどうなってんのよ!?!?」

「鎖龍蛇ースカルデッドの効果発動!!?手札からモンスター1体を特殊召喚する!!?来い、アームドドラゴンＬＶ５!!?」

〈アームドドラゴンＬＶ５〉☆５　ドラゴン族　風属性
ＡＴＫ２４００↓２７００

スカルデッドが咆哮をあげると、フィールドに咆哮をあげ、身体中から飛び出している武器で周りを攻撃しながら黒龍が舞い降りる。

「そして魔法カード、レベルアップ!!?フィールド上に表側表示で存在するＬＶを持つモンスター1体を墓地へ送り、そのカードに記されているモンスターを、召喚条件を無視して手札またはデッキから特殊召喚する!!?俺はアームドドラゴンＬＶ５を墓地に送り、デッキより現れろ!!?アームドドラゴンＬＶ７!!?」

アームドドラゴンＬＶ５が一際大きな咆哮をあげると、アームドドラゴンＬＶ５の身体が光に包まれ、身体中の武器が更に強化され、鋼鉄化された龍に変わった。

〈アームドドラゴンＬＶ７〉☆７　ドラゴン族　風属性
ＡＴＫ２８００↓３１００

「アームドドラゴンＬＶ７……確かに強力だけど、なんでわざわざそいつを……」

疑問に思う私を見て、竜路は不敵に笑うと、再びその言霊を紡ぐ。

「俺はフィールドのＶＷＸＹＺ―ドラゴンカタパルトキャノンとアームドドラゴンＬＶ７を除外!!?」
「はぁ!?」
「自分がＶＷＸＹＺ―ドラゴンカタパルトキャノンとアームドドラゴンＬＶ７を特殊召喚に成功しているデュエル中に、自分のフィールド・墓地のそのモンスターを除外した場合のみ、ＥＸデッキからこのモンスターは特殊召喚できる!!?合体しろ!!?ＶＷＸＹＺ―ドラゴンカタパルトキャノン、アームドドラゴンＬＶ７!!?」
竜路の声に、ＶＷＸＹＺ―ドラゴンカタパルトキャノンは分離し、アームドドラゴンＬＶ７が咆哮をあげる。
分離したロボット達はアームドドラゴンＬＶ７を中心に集まり、合体していく。
今度はウィングカタパルトとドラゴンヘッドの身体が連結しアームドドラゴンＬＶ７の胴体と合わさり、アームドドラゴンＬＶ７の力でドラゴンヘッドの身体でできた足からはドリルが生える。
アームドドラゴンＬＶ７の首元にはヘッドキャノンの頭にヘルメットのようにタイガージェットの虎の顔が、さらにその上にドラゴンヘッドの頭が重なる。
そしてアームドドラゴンＬＶ７の翼にドラゴンヘッドの翼がさらにつき、アームドドラゴンＬＶ７の腕にはメタルキャタピラーのキャタピラが、さらにキャタピラの腕の下にヘッドキャノンがもう１組の腕として連結される。
最後にタイガージェットとウィングカタパルトのジェットがアームドドラゴンＬＶ７の尻尾に連結し、巨大なロボットの身体を持った龍が咆哮をあげた。
「航空武装龍神合体!!?アームドドラゴンカタパルトキャノン!!?」
〈アームドドラゴンカタパルトキャノン〉☆１０　機械族　光属性
ＡＴＫ３５００→３８００
混沌空間

カオスカウンター6→8

「アームドドラゴンカタパルトキャノン……アームドドラゴンとロボットって繋がりがないでしょうが、おジャマもだけど……」
現れたアームドドラゴンカタパルトキャノンを見て、私は思わず頭を抱えたくなる。
何より、これだけ手間がかかって現れたモンスターに、私の直感も告げている。
アレは……とてつもなくヤバいと。
「アームドドラゴンカタパルトキャノンは相手ターンに1度、デッキ・EXデッキからカード1枚を除外することで相手のフィールド・墓地のカードを全て除外することができる」
「っ⁉？相手ターン中の全体除去⁉？」
「さらにアームドドラゴンカタパルトキャノンがモンスターゾーンに存在する限り、相手は除外されている自分・相手のカードと同名カードの効果を発動できない」
「なっ⁉？よりによって……」
竜路が説明した効果に私は頬を引き攣らせる。
……今の竜路の説明だと、私のデッキの主軸であるヘルテンペストを使った瞬間、私は自分のデッキの全てのモンスターの効果が使えなくなり、敗北が確定する。
まあ、そのヘルテンペストすらさっきのドラゴンカタパルトキャノンで除外されてしまったため発動できなくなっているが、私の不利には変わらない。
アームドドラゴンカタパルトキャノンを出すために竜路の手札は少し減ったけど、それでも竜路はまだ2枚ある。
私の今の手札だけじゃこのターンを耐えきれない。
「流石にこの状況はアンタだってどうすることもできないだろ？諦めて負けを認めろ」
「……諦めて負けを認めろ、か。ふふっ」
「っ⁉？何がおかしい⁉？」

竜路の言葉に私は思わず笑い声を出してしまう。
「いや、そうよね。確かに普通なら諦めるような状況だと思うわ。私の今の手札に逆転の手段なんてないし、アンタのモンスターが強力なことだって十分に分かった」
「なら……」
「だけどね。残念だけど、諦めたりはしないわ。私の友達はどんな状況でも絶対に諦めたりしないから。私だけ、簡単に諦めちゃったら顔向けなんてできないもの」
そう、この程度で諦めちゃったら私は遊花や遊騎に顔向けできない。
あの2人は、私より絶望的な状況でも最後までデュエルを諦めなかった。
それなのに、そんな2人の友達である私が、そう簡単に諦めてしまうわけにはいかない。
「どんなに可能性が低くても、ライフが完全に尽きるまでは、何があっても絶対に諦めない。そうすれば、可能性は繋がる。奇跡だって起きる。それが……私の大切な友達から教わったことよ」
「っ……」
私の言葉に、竜路は苦々しい表情を浮かべる。
そしてしばらく何かを考えるような素振りを見せ、私の目を真っ直ぐに見つめて、言葉を紡ぐ。
「……何であんな奴の味方をするんだ？アイツは決闘者として最悪のことをした。イカサマをして、応援していた人達の心を裏切った卑怯者だぞ」
「別に、私はアンタの気持ちは否定しないわよ？というか、否定できないわ。私だって最初はそうだったし。遊騎がイカサマしたってことを聞いて遊騎にキツく当たってたもの」
「なら、何故……」
理解出来ないような表情で竜路が私を見る。
何故、遊騎の味方をするか？
そんなの、理由は1つだけ。

「簡単よ。私は遊騎のことを知って、友達になった。だから私は遊騎の味方。理由なんてそれだけで十分よ」
「……意味が分かんねー」
「理解する必要なんてないわ。大切なことは私が分かってたら十分なの。誰が何と言おうと私は遊騎の友達。そうなるって、私は決めたの。それに……本当はアンタだって分かってるんじゃないの？」
「……何？」
　私の言葉に竜路が首を傾げる。
　そんな竜路に、私は真っ直ぐに思ったことを伝える。
「たった1ヶ月程度の付き合いでしかない私が分かってるのに、それよりも長い付き合いをしてるアンタが分からないとは思えないのよね。遊騎がイカサマなんてしてないってこと」
「っ‼？だが、あいつは……」
「ええ、確かに遊騎はプロリーグから追放されてるわ。だけど、だからってそれが真実とは限らないじゃない」
「っ……」
「それに、アンタのデュエルを見てたらよく分かるのよね。アンタ、遊騎に憧れてたんでしょ？」
「っ‼？そんなこと……‼？」
　私の言葉に、竜路は明らかに動揺したように声を張り上げる。
　だけど、その態度が雄弁に語っている。
　私の言葉が事実だってことを。
「ないって言うなら別に構わないわ。私が勝手にそう思っただけだし。だけど、アンタが使ってるモンスターを見て思ったの。誰かさんが使ってるモンスターみたいに複数のモンスターが1組に、特に3体のモンスターが1組になるようなモンスターばかりだって」
　ＡＢＣもＸＹＺもおジャマも、特定の3体のモンスターが組み合わさり強力になるモンスター達だ。
　3体で1つの力を生み出すその戦い方は遊騎が好んで使う絵札の三銃士にも言えることだ。
　それだけじゃない。

竜路がこのターンの最初にやったことも、遊騎にそっくりだ。
手札交換からさらにドローに繋げ、特定のモンスターを呼び出して一気に攻勢にでる。
それがどうしても重なる。
どんな逆境でも乗り越えていく、遊騎の姿に。
「まあ、本当のところはどうでもいいわ。それはアンタ自身が分かってればいいことだしね。さあ、デュエルを続けましょうか。このターンで私を倒すんでしょ？やれるもんならやってみなさい」
「っ……そんなにお望みならやってやる‼？バトル‼？」
「なら、バトルフェイズ開始時にリバースカードオープン‼？罠発動、貪欲な瓶‼？墓地に存在する転生炎獣サンライトウルフをＥＸデッキに、転生炎獣ガゼル、怒炎壊獣ドゴラン、妖精伝姫—カグヤ２体をデッキに戻してシャッフルしカードを１枚ドローする‼？」
「‼？そんなものが伏せられていたのか……」
「どうする？ＡｔｏＺ—ドラゴンバスターキャノンで無効にするかしら？」
「はっ‼？使えないカードをドローする可能性だってあるんだ‼？そんなもの無効になんかするかよ‼？」
「そう……なら、私が何をドローしても後悔しないことね。ドローするということは、可能性が生まれるということだと知りなさい」
私はそんなことを言いながら墓地のカードをデッキに戻し、デュエルディスクがシャッフルを終えたのをみてデッキの上のカードを握る。
私の今の手札じゃこのターンは凌ぎきれない。
だからこそ、このドローが最後の可能性。
頼んだわよ、私のデッキ。
私の思いに応えて‼？
「ドロー‼？」
私は勢いよくカードをドローし、そのカードに視線を向ける。
そんな私に構わず、竜路は自分のモンスターに命令する。
「たった１枚ドローしたぐらいで状況が変わるかよ‼？鎖龍蛇ースカ

ルデッドでダイレクトアタック!!?スネークチェーンブレイク!!?」
スカルデッドが鎖を振り回し、私に向かって投げつける。
向かってくる鎖を見て、私は不敵な笑みを浮かべた。
「どうやらそうでもないみたいよ?相手モンスターの攻撃宣言時、転生炎獣(サラマングレイト)パローの効果発動!!?このカードを手札から攻撃表示で特殊召喚する!!?」
「何っ!!?なら、ＡｔｏＺ―ドラゴンバスターキャノンの効果発動!!?ドラゴンバスターキャノン!!?相手がモンスターの効果・魔法・罠カードを発動した時、手札を1枚捨ててその発動を無効にし破壊する!!?」
フィールドに現れようとした炎を身に纏ったオウムをドラゴンバスターキャノンがバスタードレイクとクラッシュワイバーンの胴体が変化した電磁砲を使って撃ち落とす。
しかし、撃ち落とされたパローの身体が燃え上がると、その炎がガゼルの姿に変化する。
「まだよ!!?転生炎獣パローが墓地に送られたことで手札の転生炎獣ガゼルの効果発動!!?転生炎獣ガゼル以外のサラマングレイトモンスターが自分の墓地に送られた場合、このカードを手札から特殊召喚する!!?」
「っ!!?更なる特殊召喚だと!!?だが、これを無効にすれば手札が……くっ、いいだろう!!?その特殊召喚は通す!!?」
「なら、転生炎獣ガゼルを特殊召喚よ!!?」

〈転生炎獣ガゼル〉☆3　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１０００

「そして転生炎獣ガゼルのもう1つの効果発動!!?私はデッキから転生炎獣(サラマングレイト)ファルコを墓地に送るわ!!そして墓地に送られた転生炎獣ファルコの効果発動!!?1ターンに1度、このカードが墓地へ送られた場合、自分の墓地のサラマングレイト魔法・罠カード1枚を対象として自分フィールドにセットする!!?私は墓地の転生炎獣の炎陣を

セットするわ!!?」
「っ!!?そんな効果のモンスターがいたのか!!?だが、このターンで倒せば同じことだ!!?攻撃対象が増えたことで、攻撃対象を変更!!?鎖龍蛇ースカルデッドで転生炎獣ガゼルを攻撃!!?スネークチェーンブレイク!!?」
スカルデッドが鎖を振り回し、攻撃の方向をガゼルに変える。
しかし、そんなスカルデッドの鎖からガゼルを守るように、どこからか真っ赤な装甲がガゼルの身体に装着され、鎖の衝撃を受け止めると粒子になって消滅した。
「墓地に存在する転生炎獣ペイルリンクスは自分フィールドのサラマングレイトカードが戦闘・効果で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外できる。これはルール効果による適用のため、発動する効果じゃないからアームドドラゴンカタパルトキャノンでも止められないわ」

混沌空間
カオスカウンター8→9

「なっ!!?っ、だが墓地にはもう転生炎獣ペイルリンクスはいない!!?続けてアームドドラゴンカタパルトキャノンで転生炎獣ガゼルを攻撃!!?ドラゴンドリルカタパルトキャノン!!?」
アームドドラゴンカタパルトキャノンが咆哮をあげると、アームドドラゴンカタパルトキャノンが背中についてあるジェットを勢いよく噴射させて身体中のドリルを回転させながらガゼルに向かって突撃し、その身体に風穴を開け、爆散させた。
「ＡｔｏＺ―ドラゴンバスターキャノンでダイレクトアタック!!?ドラゴンバスターキャノン・フルバースト!!?」
ＡｔｏＺ―ドラゴンバスターキャノンの全武装が展開され、電磁砲やミサイルが嵐のように私の身体に降り注いだ。

桜　ＬＰ４５００→２００

「……これで終わりかしら？」
「まだだ‼？ＡｔｏＺ―ドラゴンバスターキャノンの効果発動‼？ユニオンアウト‼？フィールドのこのカードを除外し、除外されている自分のＡＢＣ―ドラゴンバスター、ＸＹＺ―ドラゴンキャノンを１体ずつ対象としてそのモンスターを特殊召喚する‼？合体解除だ‼？ＡＢＣ―ドラゴンバスター、ＸＹＺ―ドラゴンキャノン‼？」
竜路の声に、ＡｔｏＺ―ドラゴンバスターキャノンの各機体が分離し、２体の巨大なロボット２分かれた。

〈ＡＢＣ―ドラゴンバスター〉☆８　機械族　光属性
ＡＴＫ３０００→３３００

〈ＸＹＺ―ドラゴンキャノン〉☆８　機械族　光属性
ＡＴＫ２８００→３１００

混沌空間
カオスカウンター９→１０

「今度こそ終わりだ‼？ＸＹＺ―ドラゴンキャノンでダイレクトアタック‼？エックスワイゼットハイパードラゴンキャノン‼？」
ドラゴンキャノンがそれぞれの機体から一斉にレーザーを放つ。
そしてレーザーが私に当たる直前に、フィールドに鐘の音が鳴り響き、放たれていたレーザーが消滅した。
「数が増えようと、無効化されないなら怖くはないのよ‼？バトルフェーダーの効果発動‼？相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードを手札から特殊召喚し、その後バトルフェイズを終了する‼？」
「なっ⁉？バトルフェイズを終了させるモンスターだと⁉？」
「ただしこの効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外されるわ。残念だけど、このターンで私を倒すことはで

きなかったわね」

〈バトルフェーダー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

バトルフェーダーが現れたことでバトルフェイズは終了し、竜路は悔しそうな表情を浮かべる。
だが、気を取り直すように首を振ると、再びドラゴンバスターとドラゴンキャノンに手をかざす。
「だが、まだ俺の方が圧倒的に有利なことには変わりがない‼？メインフェイズ２‼？俺はフィールドのＡＢＣ―ドラゴンバスターとＸＹＺ―ドラゴンキャノンを除外し、ＥＸデッキからＡｔｏＺ―ドラゴンバスターキャノンを特殊召喚する‼？再合体しろ‼？ＡＢＣ―ドラゴンバスター、ＸＹＺ―ドラゴンキャノン‼？武装竜機合体‼？ＡｔｏＺ―ドラゴンバスターキャノン‼？」
「２体目が入ってたのね……」

〈ＡｔｏＺ―ドラゴンバスターキャノン〉☆１０　機械族　光属性
ＡＴＫ４０００↓４３００

混沌空間
カオスカウンター１０↓１２

ドラゴンバスターとドラゴンキャノンが再び合体し、ドラゴンバスターキャノンになる。
……流石に２体目はいないと思ってたんだけど、これでまた無効効果を考えて動かないといけないわね。
「俺はこのままターンエンドだ‼？次の俺のターンで、今後こそ決めてやる‼？」

桜　ＬＰ２００　手札３

ーーー▲ー　　▽
ーーー□ーー
　　☆　　ー
ー○○ーー
ーーーーー　　▽
竜路　ＬＰ７７５０　手札１

状況は圧倒的にこちらの方が不利。
こちらのフィールドと墓地のカードを全て除外することができるアームドドラゴンカタパルトキャノンと効果無効ができるドラゴンバスターキャノンは健在で、混沌空間も残っているから次のターンには除外からドラゴンカタパルトキャノンだって出てくる可能性がある。
そのうえ竜路のライフポイントは７７５０とほとんど丸々残っている。
だけど、不思議と負ける気はしない。
私がやることはただ１つ。
「散々やってくれたんだし、ここからは私のターンよ‼？アンタの全て、私が破壊してあげる‼？」
「っ‼？」
「私のターン、ドロー‼？まずはコイツよ‼？私はＡｔｏＺ―ドラゴンバスターキャノンをリリースして雷撃壊獣サンダーザキングを攻撃表示で特殊召喚‼？」
「っ⁉？また壊獣だと⁉？」
〈雷撃壊獣サンダーザキング〉☆９　雷族　光属性
ＡＴＫ３３００
ドラゴンバスターキャノンを喰らい、三つ首の竜が竜路のフィールドに降り立つ。
これで厄介な除外効果は無くなったわね。

「リバースカードオープン‼?・速攻魔法、転生炎獣の炎陣‼?・私はデッキからサラマングレイトモンスター1体を手札に加える効果でデッキから転生炎獣(サラマングレイト)ミーアを手札に加えるわ‼?・そして今手札に加えた転生炎獣ミーアの効果発動‼?・このカードが通常のドロー以外の方法で手札に加わった場合、このカードを相手に見せ、手札から特殊召喚する‼?・」

〈転生炎獣ミーア〉☆2　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ６００

フィールドに身体から炎を噴き出しているミーアキャットが現れる。

「墓地に存在する転生炎獣スピニーの効果発動‼?・自分フィールドに転生炎獣スピニー以外のサラマングレイトモンスターが存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚する‼?・ただしわこの効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外されるわ‼?・」

〈転生炎獣スピニー〉☆3　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１５００

私の墓地からミーアに寄り添うように炎を纏ったアルマジロトカゲが現れる。

「くっ……召喚権も使ってないのに次々とモンスターを……」

「まだよ‼?・墓地に存在する転生炎獣ファルコの効果発動‼?・このカードが墓地に存在する場合、転生炎獣ファルコ以外の自分フィールドのサラマングレイトモンスター1体を対象として持ち主の手札に戻し、このカードを墓地から特殊召喚する‼?・私は転生炎獣ミーアを手札に戻して転生炎獣ファルコを特殊召喚する‼?・」

〈転生炎獣ファルコ〉☆4　サイバース族　炎属性

ＤＥＦ１６００

ミーアの姿が消え、代わりに現れるのは炎を纏った隼。

そして私はその姿を確認して正面に手をかざす。

「繋がって‼?希望に導くサーキット‼?」

「リンク召喚……」

「召喚条件はレベル１モンスター１体‼?私はバトルフェーダーをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?リンク召喚‼?希望の紡ぎ手‼?リンク１‼?リンクリボー‼?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性

ＡＴＫ３００　←

でてきたのは親友である遊花も使っている青い球体型のモンスター。

現れたリンクリボーを真剣な表情で竜路のモンスターを睨みつける。

「まだまだ行くわよ‼?繋がって‼?希望に導くサーキット‼?」

「くっ、連続リンク召喚か‼?」

「召喚条件はサイバースモンスター２体‼?私はリンクリボーと転生炎獣ファルコをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?リンク召喚‼?リンク２‼?フレイムアドミニスター‼?」

〈フレイムアドミニスター〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　炎属性

ＡＴＫ１２００↓２０００　↑↘?

フィールドに現れたのは燃えるように真っ赤な装甲の機械の戦士。

このカードにはモンスターゾーンに存在する限り、自分フィールドのリンクモンスターの攻撃力は８００ポイントアップする効果があるけど、今回はその効果は関係ない。

「そして、繋がって‼?希望に導くサーキット‼?」

「くっ、まだリンク召喚が続くのか⁉？」
　私が前にこのターン３度目の巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は炎属性の効果モンスター２体以上⁉？私は転生炎獣スピニーとフレイムアドミニスターを２体分として扱ってリンクマーカーにセット⁉？サーキットコンバイン⁉？」
　サーキットの中にスピニーと２体に分身したアドミニスターが吸い込まれると、フィールドにあった火山が噴火し、マグマが溢れ始める。
　そして火山の噴火に合わせるように、サーキットの中からマグマを喰らいながら現れたのは炎の身体を持つ灼熱の獅子。
「古より伝わる灼熱の獅子⁉？リンク召喚⁉？リンク３⁉？
転生炎獣ヒートライオ（サラマングレイト）⁉？」

〈転生炎獣ヒートライオ〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　炎属性
　ＡＴＫ２３００　↙？→↘？

「リンク３の転生炎獣モンスター……」
「まだまだ、ここからよ⁉？フィールド魔法、転生炎獣の聖域の効果発動⁉？１ターンに１度、このカードがフィールドゾーンに存在する限り、自分がサラマングレイトリンクモンスターをリンク召喚する場合、自分フィールドの同名のサラマングレイトリンクモンスター１体のみを素材としてリンク召喚できる⁉？」
「なっ⁉？ということはまた……」
「繋がって⁉？希望に導くサーキット⁉？私は転生炎獣ヒートライオをリンクマーカーにセット⁉？サーキットコンバイン⁉？」
　ヒートライオの頭上にサーキットが、足元に炎で出来た魔法陣が現れ、交差するようにヒートライオの身体を通過する。
　サーキットと魔法陣が通過すると、ヒートライオの身体からさらに大きな炎が噴き出した。
「生まれ変われ、古より伝わる灼熱の獅子⁉？転生リンク召喚⁉？リンク３⁉？転生炎獣ヒートライオ⁉？」

〈転生炎獣ヒートライオ〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２３００　↙？→↘？

「再びヒートライオが……」
「さあ、食事の時間よ‼？転生炎獣ヒートライオの効果発動‼？サラマングレイトマジック‼？このカードが転生炎獣ヒートライオを素材としてリンク召喚されている場合、１ターンに１度、フィールドの表側表示モンスター１体と、自分の墓地のモンスター１体を対象として、対象のフィールドのモンスターの攻撃力は、ターン終了時まで対象の墓地のモンスターの攻撃力と同じになる‼？私はアームドドラゴンカタパルトキャノンと墓地の転生炎獣モルを対象として発動‼？アームドドラゴンカタパルトキャノンの攻撃力を転生炎獣モルと同じ０にする‼？」
「なっ⁉？っ……これ以上動かせるか‼？アームドドラゴンカタパルトキャノンの効果発動‼？ドリルカタパルトキャノン‼？相手ターンに１度、デッキ・ＥＸデッキからカード１枚を除外することで相手のフィールド・墓地のカードを全て除外することができる‼？俺はデッキからおジャマレッドを除外してアンタのフィールド、墓地のカードを全て除外する‼？」
　アームドドラゴンカタパルトキャノンが咆哮をあげると、アームドドラゴンカタパルトキャノンの身体中についているドリルが肥大化し、ヒートライオや火山など周囲の物体全てに風穴を開け、消滅させる。
「これで転生炎獣ヒートライオは除外された‼？アームドドラゴンカタパルトキャノンがモンスターゾーンに存在する限り、相手は除外されている自分・相手のカードと同名カードの効果を発動できないため、転生炎獣ヒートライオの効果も消える‼？」
「ええ、狙い通りよ‼？これで邪魔するものは無くなったわ‼？魔法カード、フュージョンオブファイア‼？自分の手札及び自分・相手フィールドからサラマングレイト融合モンスターカードによって決

められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚する!!?私は手札のサラマングレイトモンスター、転生炎獣ミーアとアンタのリンクモンスター、鎖龍蛇ースカルデッドで融合!!?」
「何っ!?俺のモンスターを使って融合だと!?」
フィールドに現れた渦の中に手札から飛び出したミーアがスカルデッドを突き飛ばし、共に渦の中に消える。
「炎を纏し猫よ、鎖の如き龍蛇と交わりて、新たな世界に、生命の炎を灯せ!!?融合召喚!!?」
そして渦が弾けると、フィールドに降り立つのは全身から紫炎を撒き散らす紫色の魔獣。
「紫炎を司る古の魔獣!!?転生炎獣ヴァイオレットキマイラ!!?」

〈転生炎獣ヴァイオレットキマイラ〉☆８　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２８００

「転生炎獣の融合モンスターだと!?そんなものまで存在したのか!?」
「さあ、一気に喰い尽くすわよ!!?転生炎獣ヴァイオレットキマイラの効果発動!!?リインカネーションブレイズ!!?このカードが融合召喚に成功した場合に、このカードの攻撃力はターン終了時まで、素材としたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値の半分だけアップする!!?私が素材にしたのは攻撃力８００の転生炎獣ミーアと攻撃力２８００の鎖龍蛇ースカルデッド!!?よって転生炎獣ヴァイオレットキマイラの攻撃力は１８００ポイントアップする!!?」

転生炎獣ヴァイオレットキマイラ
ＡＴＫ２８００→４６００

「攻撃力４６００だと!?」
「そしてこれが最後の一手よ!!?魔法カード、シャイニングアブソー

ブ⁉？相手フィールド上に表側表示で存在する光属性モンスター1体を選択し、自分フィールド上に表側攻撃表示で存在する全てのモンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力分アップする⁉？」
「何だと⁉？」
「私が対象にするのはアンタのアームドドラゴンカタパルトキャノン⁉？よって、私の転生炎獣ヴァイオレットキマイラの攻撃力は３８００ポイントアップする⁉？」
アームドドラゴンカタパルトキャノンの身体から光の粒子が溢れ出し、ヴァイオレットキマイラの身体に吸収されていく。

転生炎獣ヴァイオレットキマイラ
ＡＴＫ４６００→８４００

「攻撃力８４００⁉？っ、だが、それでも俺のライフを削りきるには至らない⁉？アンタの手札はすでになく、次のターンには転生炎獣ヴァイオレットキマイラの攻撃力も元に戻る⁉？そうなれば次のターンに混沌空間でＶＷＸＹＺ―ドラゴンカタパルトキャノンを呼び戻してアンタは終わりだ⁉？」
そういって苦い表情を浮かべながらも必死な表情で叫ぶ竜路に、私は不敵な笑みを浮かべて応える。
「いいえ、アンタに次のターンはないわ⁉？」
「何っ⁉？」
「さあ、メインディッシュよ。転生炎獣ヴァイオレットキマイラでアームドドラゴンカタパルトキャノンに攻撃⁉？」
「くっ……迎え撃て⁉？アームドドラゴンカタパルトキャノン⁉？ドラゴンドリルカタパルトキャノン⁉？」
アームドドラゴンカタパルトキャノンが咆哮をあげ、背中についてあるジェットを勢いよく噴射させて身体中のドリルを回転させながらヴァイオレットキマイラに向かっていく。
そんなアームドドラゴンカタパルトキャノンにも怯まず、光を纏い

ながらヴァイオレットキマイラもアームドドラゴンカタパルトキャノンに向かっていく。
「ダメージ計算時、転生炎獣ヴァイオレットキマイラの効果発動!!?フュアリィフレイム!!?このカードが元々の攻撃力と異なる攻撃力を持つモンスターと戦闘を行うダメージ計算時に1度、このカードの攻撃力はそのダメージ計算時のみ倍になる!!?」
「っ!??何だと!?!?」
「アンタのアームドドラゴンカタパルトキャノンは鎖龍蛇ースカルデッドの効果で攻撃力が変動している!!?心火を燃やしなさい、転生炎獣ヴァイオレットキマイラ!!?」
ヴァイオレットキマイラが怒ったような咆哮をあげると、ヴァイオレットキマイラの身体から紫炎が溢れ出し、光と共にヴァイオレットキマイラの身体を包み込む。

転生炎獣ヴァイオレットキマイラ
ＡＴＫ８４００→１６８００

「攻撃力……１６８００だと!?!?」
「これで終わりよ!!?行きなさい、転生炎獣ヴァイオレットキマイラ!!?シャイニングインフュアリエイティングインレジュメント!!?」
紫炎を纏い、光を放つヴァイオレットキマイラが1つの弾丸となり、ドリルとなったアームドドラゴンカタパルトキャノンとぶつかり合う。
しばらく拮抗していたが、徐々にアームドドラゴンカタパルトキャノンのドリルが溶け始め、最後には身体を貫かれて爆散した。
「ぐあぁぁぁぁぁ!!?」

竜路　ＬＰ７７５０→０

ーーーーーーーー

「そこまで、勝者、桜」
「ふぅ、何とかなったわね」
立体映像が消え、私が一息吐くと子供達から歓声が上がる。
そんな中、対戦相手だった竜路は苦々しい表情で私を睨みつける。
「……デュエルには負けた。だけど、俺は認めないからな、俺達を裏切ったアイツを」
「別にいいんじゃない？私は別に遊騎を認めさせるためにデュエルをしたわけじゃないし、その感情は他人がどうこう言ったぐらいでどうにかなるものでもないもの。それはあくまでもアンタと遊騎の問題よ」
「……ふん」
私の言葉に悔しそうに表情を歪ますと、竜路は踵を返す。
……まあ、少しは気持ちを吐き出せたかしらね。
後は、あのお人好しがどうにかするでしょ。
そんなことを考えながら私は遊花達の控えている場所に戻っていく。
戻ってきた私を見て、遊花は嬉しそうにニコニコとした笑顔を浮かべた。
「お帰りなさい、桜ちゃん‼？やっぱり桜ちゃんは凄いね」
「ありがと、遊花。それで、なんでそんなに嬉しそうなの？」
「だって、桜ちゃんが師匠の味方だって言ってくれたんだもん‼？桜ちゃんが師匠のことを認めてるって言葉にしてくれたのが、すごーく嬉しい‼？」
「うぐっ‼？あ、あんまり嬉しそうにしないでよ……なんだか恥ずかしいし……」
あまりにも嬉しそうにしている遊花を見ると、何だか頬が熱くなってくる。
何となく遊花を直視できずに目を逸らすと、今度は苦笑いを浮かべている遊騎の姿が目に入った。
「悪いな、俺の問題を桜に尻拭いさせるような羽目になっちまって」
「別に、気にしてないわよ。まあ、私からすれば竜路の気持ちだって分

かるし、後はアンタがなんとかしなさいよね」
「ああ、分かってるよ。ありがとな、桜」
「……ふん」
素直に感謝の言葉を告げてくる遊騎に、私は照れ臭くて顔を逸らす。
あーもう、師弟揃って似たようなことを言って‼?
素直なのはこの2人の良いところだとは思うけど、こういう時に嫌になるわ……主に私の羞恥心的に。
「そ、それで‼?結局私達が2連勝したわけだけど、遊花のデュエルはどうなるの?2連勝したってことは、チームとしてはこちらが勝ちってことになるから大将戦をやる必要はないわよね?」
「……あ‼?そういえばそうだね」
私の言葉に、遊花が驚きの声をあげる。
……今の反応、本当に気付いてなかったわね。
「確かに本来のチーム戦なら最終戦をやる必要はないが、これはあくまで練習だしな。それに、あの表情を見てみろよ」
「えっ?」
「あの表情……ですか?」
そんな遊花を呆れた目で見ていると、遊騎が苦笑しながらある方向を指差し、それにつられるように私達は遊騎が指差した方向を見る。
遊騎が指差した先には残念そうに、そしてどこか寂しそうに俯いている遊陽と呼ばれた少女の姿があった。
そして遊陽のそんな様子を見て、こちらをジッと見ている闇と、そんな闇に何度も頷き返す遊花。
あーまあ、そうなるわよね。
うん、分かってた。
闇は自分の教え子をほっておけないし、遊花も寂しそうな表情を浮かべてる子をほっておけるわけないものね。
「チーム戦は2連勝したから、この時点でチーム『月花騎士』の勝利が決定した。だけど、今日はあくまでもチーム戦の練習。それにこの教会の人以外とデュエルをするいい機会でもある。よって、これより大

将戦を行う」
闇のそんな言葉に、遊陽は驚いたように顔をあげ、嬉しそうな表情を浮かべる。
それを見て、デュエルの相手である遊花も嬉しそうな笑顔を浮かべた。
……本当に、遊花は変わらないわね、昔から。
まあ、それでこそ私の親友なんだけどね。
相手は遊騎にして８割負けると言わせる闇の教え子。
頑張りなさいよ、遊花。

幕間5・黄昏の光

★

「それじゃあ最後に大将戦に入る。遊陽、皆の前に」
「はい‼?」
「遊花、お願い」
「分かりました」
闇先パイに促され、私は子供達の前に出て行く。
子供達は前に出てきた私をとても真剣な表情で見つめており、そんな子供達の見本になれるのか少しだけ不安を感じてしまう。
だけど、これは闇先パイが私やこの教会の子供達のために考えて提案してくれたこと。
後輩として、そしていつもお世話になっている身として、闇先パイのお役に立たないと。
そうして密かに自分を鼓舞していると、私の前に対戦相手である遊陽ちゃんがやってくる。
遊陽ちゃんは、これからのデュエルが待ちきれないのかそわそわしており、とても嬉しそうな表情を浮かべていた。
「遊花お姉ちゃん、今日はよろしくお願いします‼?」
「はい、こちらこそよろしくお願いします」
「それじゃあこれよりチーム『空子軍団』ＶＳチーム『月花騎士』の大将戦をはじめる。遊陽、遊花構えて」
丁寧に頭を下げてくる遊陽ちゃんに、私も同じように頭を下げて応え、闇先パイの言葉に、遊陽ちゃんと同時にデュエルディスクを起動する。
……遊陽ちゃんは、幼くても師匠が認める決闘者。
今日の師匠や桜ちゃんのデュエルを見て、この教会の子供達がどのくらい強いのかはよく分かった。

だからこそ、私も全力でぶつかる!!?
「行くよ、遊花お姉ちゃん!!?」
「うん、遊陽ちゃん!!?」
『決闘!!?』

遊花　ＬＰ８０００
遊陽　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は遊陽だよ!!?」
遊陽ちゃんが元気いっぱいな声をあげる。
師匠が８割は勝てないという遊陽ちゃんのデュエル……一体どんなデュエルなんだろう?
「まずは魔法カード、堕天使の追放!!?同名カードは１ターンに１度、デッキから堕天使の追放以外の堕天使カード１枚を手札に加えるよ!!?私はデッキから堕天使イシュタムを手札に加えるよ!!?」
「堕天使?」
聞いたことがないカード名に私は首を傾げながら思わず自分のＥＸデッキを見る。
……うん、多分駄天使は関係ないよね。
おそらく今遊陽ちゃんが言っているのは駄目な天使じゃなくて堕ちた天使のことだ。
だけど、そんなテーマ、私は聞いたことがないけど……
「さらに手札からヘカテリスを捨てて効果発動!!?自分メインフェイズにこのカードを手札から墓地へ捨てて、デッキから神の居城―ヴァルハラ１枚を手札に加えるよ!!?」
「神の居城―ヴァルハラ……」
そのカードのことは知っている。
確か天使族を特殊召喚する効果を持つ永続魔法だ。
ということは、遊陽ちゃんのデッキは天使族デッキかな?

確かに、教会に住んでいる遊陽ちゃんにはぴったりなカードかも知れない。
「遊陽は、永続魔法、神の居城―ヴァルハラを発動!!?自分フィールドにモンスターが存在しない場合、１ターンに１度、自分メインフェイズに手札から天使族モンスター１体を特殊召喚する!!?見ててね、遊花お姉ちゃん。遊陽の切り札を!!?」
「っ!!?もう切り札が出てくるの!!?」
「知恵を司る戦いの女神!!?アテナ!!?」

〈アテナ〉☆７　天使族　光属性
ＡＴＫ２６００

遊陽ちゃんの声に応えるように現れたのは巨大な盾と三又の矛を持った女神。
その姿はとても神々しく、見る者を圧倒する。
これが、遊陽ちゃんの切り札……一体どんな効果が……
「行くよ、遊花お姉ちゃん!!?遊陽は、創造の代行者ヴィーナスを召喚!!?」

〈創造の代行者ヴィーナス〉☆３　天使族　光属性
ＡＴＫ１６００

遊陽ちゃんの前に胸の前で手を組んだ長髪の天使が現れる。
それに合わせてアテナが手に持った矛を空に掲げる。
「この瞬間、アテナの効果発動!!?断罪の雷!!?このカードが既にモンスターゾーンに存在する状態で、このカード以外の天使族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された場合、相手に６００ポイントのダメージを与えるよ!!?」
「!!?バーン効果……」
天使族が場に出る度に発動するバーン効果。
それはかなり強力な効果だと思う。

そして……何だか凄く嫌な予感がする。
だから、ここは……
「アテナな効果にチェーンして手札からクリフォトンの効果発動!!?
このカードを手札から墓地へ送り、２０００ライフポイントを払って、このターン、自分が受ける全てのダメージは０になります!!?」

遊花　ＬＰ８０００→６０００

アテナが掲げた矛から光が空へと登っていくと、突如出現した雲から雷が私に向かって降り注ぐ。
雷が私の身体に当たろうとした時、私の前に現れた電球のような姿をしたモンスターが、私の身体を包みこむように光の粒子を放ち、降り注ぐ雷を無効化した。
アテナの雷が無効化されたのを見て、遊陽ちゃんは凄く嬉しそうな表情を浮かべた。
「凄い!!?遊陽お姉ちゃん、遊陽が先攻でもアテナの雷を防げるんだ!!?遊騎お兄ちゃんでも防げなかったのに!!?」
「えっ?う、うん?」
何故か嬉しそうにそう語る遊陽ちゃんに私は首を傾げてしまう。
アテナの効果を防がれたのに、どうしてこんなに嬉しそうなんだろう?
「いつもはすぐに　デュエルが終わっちゃうけど　今日は長い時間デュエルができそう!!?もっともっと楽しいデュエルをしようね!!?」
「……えっ?」
遊陽ちゃんの言葉に、私は違和感を覚える。
今の言葉は一体どういう……
困惑する私に構わず、遊陽ちゃんは凄く楽しそうに笑いながらも、少し悩んだ表情を見せる。
「でも、どうしよう?アテナの効果を防がれるのなんて闇先生とデュエルする時ぐらいだし……ん～でも、前に闇先生は『１度動き出し

たら最後まで動ききる方がいい』って言ってたもんね。よし、行くよ、遊花お姉ちゃん‼?」
「っ‼?」
「創造の代行者ヴィーナスの効果発動‼?５００ライフポイントを払って手札・デッキから神聖なる球体（ホーリーシャインボール）１体を特殊召喚するよ‼?５００ライフポイント払って、おいで神聖なる球体‼?」

遊陽　ＬＰ８０００→７５００

〈神聖なる球体〉☆２　天使族　光属性
ＤＥＦ５００

ヴィーナスが祈りを捧げると、ヴィーナスの側に白い球体が姿を現わす。
「アテナの効果は強制効果だから、ダメージは与えられないけど発動はしちゃうの。ゴメンね、遊花お姉ちゃん」
アテナが再び雷を降らせるが、私の身体を包みこんでいる光の粒子が降り注ぐ雷を無効化する。
うーん、ダメージを受けることはないって分かってるんだけど、それでも少しビックリしちゃうな。
「さらに創造の代行者ヴィーナスの効果発動‼?さらに２回５００ライフポイントを払ってデッキから２体の神聖なる球体を特殊召喚‼?」
「その効果、ターン制限とか無かったんだね」

遊陽　ＬＰ７５００→６５００

〈神聖なる球体〉☆２　天使族　光属性
ＤＥＦ５００

ヴィーナスの側にさらに２体の神聖なる球体が現れ、私の身体を雷

が襲う。
すでにアテナの効果は４回発動しているため、クリフォトンを使っていなければ２４００ものダメージを受けていた。
おまけにそんなダメージを与えるような動きをしているのに、遊陽ちゃんの手札は残っているし、まだＥＸデッキからモンスターをだしてもいない。
……何となく、師匠が８割は勝てず、私が１番勝機があると言っていた理由が分かった気がした。
「それじゃあ行くよ‼？輝いて‼？希望を照らすサーキット‼？」
「リンク召喚だね」
遊陽ちゃんが手をかざすと、遊陽ちゃんの目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は天使族モンスター２体‼？遊陽は２体の神聖なる球体をリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？リンク２‼？失落の堕天使‼？」
〈失落の堕天使〉ＬＩＮＫ２　天使族　闇属性
ＡＴＫ１６００　↙？↘？

２体の神聖なる球体がサーキットに吸い込まれると、代わりに漆黒の翼と悪魔の角を持つ天使が現れる。
現れた失落の天使に反応して雷が降り注ぐが当然私にダメージはない。
……うん、これあと何回繰り返されるんだろう？
「失落の堕天使の効果発動‼？手札を１枚捨ててデッキから堕天使スペルビアを手札に加えるよ‼？さらに手札の堕天使イシュタムの効果発動‼？手札からこのカードと堕天使カード１枚を捨てて自分はデッキから２枚ドローするよ‼？遊陽は堕天使イシュタムと堕天使スペルビアを捨てて２枚ドロー‼？」
「サーチしたカードを使っての手札交換……墓地肥やしの意味もあるのかな？」

「次、行くよ!!?・輝いて!!?・希望を照らすサーキット!!?・」
　遊陽ちゃんの目の前に再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は天使族モンスター2体以上!!?遊陽は神聖なる球体と失落の堕天使を2体分として扱ってをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?・リンク召喚!!?・リンク3!!?・天空神騎士(セレスティアルナイト)ロードパーシアス!!?・」

〈天空神騎士ロードパーシアス〉ＬＩＮＫ３　天使族　光属性
ＡＴＫ２４００　↙?・←↘?

　神聖なる球体と失落の堕天使が2体に分身してサーキットに吸い込まれると、サーキットからケンタウロスのように馬の脚を持つ天使が現れた。
「アテナのもう1つの効果発動!!?・身捧ぐ祈り!!?・1ターンに1度、アテナ以外の自分フィールドの表側表示の天使族モンスター1体を墓地へ送り、アテナ以外の自分の墓地の天使族モンスター1体を対象としてその天使族モンスターを特殊召喚するよ!!?・」
「っ!!?・そんな効果まであるの!!?・」
「創造の代行者ヴィーナスを墓地へ送って、戻っておいで、堕天使スペルビア!!?・」

〈堕天使スペルビア〉☆8　天使族　闇属性
ＡＴＫ２９００

　ヴィーナスの姿が粒子に変わり、天に昇っていくと、代わりに天から舞い降りたのは鷹のような羽根に、壺のような頭を持つ堕天使。
　そして壺の中から闇が溢れ出し、フィールドで形を成していく。
「堕天使スペルビアの効果発動!!?・このカードが墓地からの特殊召喚に成功した時、堕天使スペルビア以外の自分の墓地の天使族モンスター1体を対象としてその天使族モンスターを特殊召喚する!!?・出番だよ、堕天使イシュタム!!?・」

〈堕天使イシュタム〉☆１０　天使族　闇属性
ＡＴＫ２５００

形を成した闇は４枚の漆黒の翼を持つ堕天使に変わる。
一気に大型のモンスターが２体……だけど、まだまだ終わりって訳じゃなさそうだね。
「堕天使イシュタムの効果発動!!?１０００ライフポイントを払い、自分の墓地の堕天使魔法・罠カード１枚を対象として、その魔法・罠カードの効果を適用し、その後墓地のそのカードをデッキに戻す!!?この効果は相手ターンでも発動できるよ!!?遊陽はライフポイントを１０００払って墓地の堕天使の追放の効果を適用し、デッキから堕天使アスモディウスを手札に加えて堕天使の追放をデッキに戻すよ!!?」

遊陽　ＬＰ６５００→５５００

「また堕天使が手札に……」
「まだまだ行くよ!!?魔法カード、アドバンスドロー!!?自分フィールド上に表側表示で存在するレベル８以上のモンスター１体をリリースしてデッキからカードを２枚ドローする!!?堕天使イシュタムをリリースして２枚ドロー!!?そしてこの瞬間、天空神騎士ロードパーシアスの効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、自分フィールドの表側表示の天使族モンスターが墓地へ送られた場合、自分の墓地から天使族モンスター１体を除外して除外したモンスターよりレベルが高い天使族モンスター１体を手札から特殊召喚する!!?」
「!!?ということは……」
「墓地の神聖なる球体を除外して、手札から堕天使アスモディウスを特殊召喚!!?」

〈堕天使アスモディウス〉☆８　天使族　闇属性

ＡＴＫ３０００

フィールドに現われたのは鴉のような濡羽色の翼を持つ堕天使。
「堕天使アスモディウスの効果発動!!?1ターンに1度、自分メインフェイズにデッキから天使族モンスター1体を墓地へ送る!!?遊陽はデッキからイーバを墓地に送るよ!!?そして墓地に送られたイーバの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが墓地へ送られた場合、このカード以外の自分のフィールド・墓地の天使族・光属性モンスターを2体まで除外し、除外した数だけ、デッキからイーバ以外のレベル2以下の天使族・光属性モンスターを同名カードは1枚まで手札に加えるよ!!?」
「っ、まだ手札が増えるの!?」
「遊陽は墓地の2体の神聖なる球体を除外して、デッキからトリックスターリリーベルとトリックスターマンドレイクを手札に加えるよ!!?そして手札に加えたトリックスターリリーベルの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、ドロー以外の方法で手札に加わった場合、このカードを手札から特殊召喚する!!?」

〈トリックスターリリーベル〉☆2　天使族　光属性
ＤＥＦ２０００

遊陽ちゃんのフィールドに現れたのは鈴を持った妖精のようなモンスター。
そろそろ止まって欲しいんだけど……終わらないよね、多分。
「天空神騎士ロードパーシアスのもう1つの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、手札を1枚捨てて『天空の聖域』のカード名が記されたカードまたは『天空の聖域』1枚をデッキから手札に加え、フィールドに『天空の聖域』が存在する場合にはその1枚を天使族モンスター1体にできるよ!!?遊陽は手札を1枚捨ててデッキからマスターヒュペリオンを手札に加えるよ!!?そして手札から捨てられたトリックスターマンドレイクの効果発動!!?同名カードは1ター

ンに1度手札から墓地へ送られた場合、このカードを守備表示で特殊召喚するよ!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外されるよ」

〈トリックスターマンドレイク〉☆2　天使族　光属性
ＤＥＦ１０００

リリーベルに寄り添うように、ハート型のタンバリンを持った妖精が現れる。
遊陽ちゃんのバトルゾーンが埋まったけど、全然動きが止まる予感がしないや。
そんな私の予感を肯定するかのように、遊陽ちゃんが正面に手をかざす。
「また行くよ!!?輝いて!!?希望を照らすサーキット!!?」
「……だよね」
「召喚条件はトリックスターモンスター2体!!?遊陽はトリックスターリリーベルとトリックスターマンドレイクをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?トリックスタースイートデビル!!?」

〈トリックスタースイートデビル〉ＬＩＮＫ２　天使族　光属性
ＡＴＫ２０００　↑↓

サーキットから現れたのは悪魔のような衣装を着た妖精のモンスター。
これでまた遊陽ちゃんのバトルゾーンに空きができる。
「このカードは、自分の手札・フィールド上・墓地に存在する代行者と名のついたモンスター1体をゲームから除外し、手札から特殊召喚する事ができる!!?墓地の創造の代行者ヴィーナスを除外して、おいで、マスターヒュペリオン!!?」

〈マスターヒュペリオン〉☆８　天使族　光属性
ＡＴＫ２７００

フィールドに現れたのは太陽のような輝きを放つ天使。
遊陽ちゃんのフィールドにレベル８のモンスターが３体。
これってまさか……
「遊陽はレベル８、堕天使スペルビア、堕天使アスモディウス、マスターヒュペリオンでオーバーレイ‼？　３体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼？」
「‼？やっぱりエクシーズ召喚‼？しかも、ランク８の大型エクシーズモンスター‼？」
スペルビア、アスモディウス、ヒュペリオンが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとフィールドに現れたのは背中に沢山の棒を背負い、野球のバットを持った戦士。
「教え導く熱血教師‼？ランク８‼？熱血指導王ジャイアントトレーナー‼？」

〈熱血指導王ジャイアントトレーナー〉★８　戦士族　炎属性
ＡＴＫ２８００

「攻撃力は下がってる……というか、天使族以外もいるんだね」
ダメージがないから目眩しのように何度も降り注ぐだけになっていたアテナの雷がこないことに少し感動を覚える。
だけど、レベル８モンスターを３体使ってでてきたんだから厄介な効果を持っているハズだ。
「熱血指導王ジャイアントトレーナーの効果発動‼？熱血指導‼？このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除き、デッキからカードを１枚ドローし、お互いに確認。確認したカードがモンスターだった場合、さらに相手ライフに８００ポイントのダメージを与えるよ‼？熱血指導王ジャイアントトレーナーの効果は１ターンに　３度まで使

用できるけど、代わりにこの効果を発動するターン、自分はバトルフェイズを行えないよ」
「うっ、ダメージは受けないけど、まだ手札が増えるの？バトルフェイズが行えないのも先攻だから関係ないし……」
「それじゃあ熱血指導王ジャイアントレーナーの効果でカードを１枚ドロー‼？ドローしたカードはオネスト。モンスターカードだから８００ポイントのダメージを与えるよ‼？」
ジャイアントトレーナーのバットから何故か雷が放たれて、私の身体を襲う。
うぅ、結局雷に襲われることには変わりはないんだね、ダメージはないけど。
「続けて熱血指導王ジャイアントレーナーの効果発動‼？カードを１枚ドロー‼？ドローしたのは魔法カード、堕天使の戒壇。さらに最後のオーバーレイユニットを使って熱血指導王ジャイアントレーナーの効果発動‼？カードを１枚ドロー‼？ドローしたのは、トリックスターナルキッス‼？モンスターカードだから８００ポイントのダメージを与えるよ‼？」
「うぅ……目がチカチカしてきたよ……」
ダメージは受けないけど、このドローで遊陽ちゃんの手札は６枚になった。
……バトルゾーンも整ってるのに、何で最初より増えてるの？
「まだまだ終わらないよ‼？」
「もうそろそろ終わって‼？」
「魔法カード、堕天使の戒壇‼？同名カードは１ターンに１度、自分の墓地の堕天使モンスター１体を選んで守備表示で特殊召喚する‼？蘇って、堕天使スペルビア‼？」
〈堕天使スペルビア〉☆８　天使族　闇属性
ＤＥＦ２４００
私の心からの叫びも虚しく、再び現れるスペルビア。

うっ、またアテナの雷が降ってくるよ……

「そして堕天使スペルビアの効果発動!!?もう1度お願い、トリックスターリリーベル!!?」

〈トリックスターリリーベル〉☆2　天使族　光属性

ＤＥＦ２０００

「よし、輝いて!!?希望を照らすサーキット!!?」

遊陽ちゃんの目の前に4度目の巨大なサーキットが現れる。

「召喚条件は天使族モンスター2体以上!!?遊陽は堕天使スペルビアとトリックスタースイートデビルを2体分として扱ってをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク3!!?トリックスターフォクシーウィッチ!!?」

〈トリックスターフォクシーウィッチ〉ＬＩＮＫ３　天使族　光属性

ＡＴＫ２２００　↑→↓

サーキットから現れたのはピンクの衣装に身を包んだ魔法少女のような妖精のモンスター。

「そして、輝いて!!?希望を照らすサーキット!!?」

遊陽ちゃんの目の前にすぐさま5度目の巨大なサーキットが現れる。

遊陽ちゃんの反応からして、これは大型のリンクモンスターが来そうだね。

「召喚条件はトリックスターモンスター2体以上!!?遊陽はトリックスターリリーベルとトリックスターフォクシーウィッチを3体分として扱ってをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」

「リンク4モンスター……」

リリーベルがサーキットに吸い込まれ、後を追うようにフォクシーウィッチが3体に分身しながらサーキットに飛び込んでいく。

そしてサーキットが輝くと、現れたのは女王のような尊大な雰囲気を醸し出している妖精。
「リンク召喚!!?妖精達のマドンナ!!?リンク４、トリックスターベラマドンナ!!?」

〈トリックスターベラマドンナ〉ＬＩＮＫ４　天使族　光属性
ＡＴＫ２８００　↙?←→↘

「トリックスターのリンク４モンスター……」
「トリックスターベラマドンナの永続効果、妖精の花道!!?リンク召喚したこのカードのリンク先にモンスターが存在しない場合、このカードは他のカードが発動した効果を受けないよ!!?」
「っ!?完全耐性持ちの大型リンクモンスター!?」
ベラマドンナは遊陽ちゃんから見て、フィールドの右端に召喚されている。
ベラマドンナのリンクマーカーは上、右、下、左斜め下だから、リンクマーカーの先にモンスターが現れることはない。
「最後のもう一押し!!?魔法カード、死者蘇生!!?」
「まだそんなカードが残ってたの!?」
「自分または相手の墓地のモンスター１体を対象としてそのモンスターを自分フィールドに特殊召喚するよ!!?もう１度おいで、堕天使スペルビア!!?」

〈堕天使スペルビア〉☆８　天使族　闇属性
ＡＴＫ２９００

このターン３度目のスペルビアの蘇生。
心無しスペルビアが疲れているように見えるのは気のせいかな?
「堕天使スペルビアの効果発動!!?戻ってきて、マスターヒュペリオン!!?」

〈マスターヒュペリオン〉☆８　天使族　光属性
ＡＴＫ２７００

再び現れるヒュペリオン。
遊陽ちゃんのフィールドに再び揃う２体のレベル８モンスター。
ということは……
「遊陽はレベル８、堕天使スペルビア、マスターヒュペリオンでオーバーレイ‼？　２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼？」
スペルビアとヒュペリオンが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとフィールドに現れたのは白銀の鎧を纏った竜の騎士。
「高貴なる竜の騎士‼？ランク８‼？神竜騎士フェルグラント‼？」

〈神竜騎士フェルグラント〉★８　戦士族　光属性
ＡＴＫ２８００

「神竜騎士フェルグラントは１ターンに１度、オーバーレイユニットを１つ取り除き、フィールドの表側表示モンスター１体を対象としてこのターン、対象のモンスターは効果が無効になり、このカード以外の効果を受けなくなる効果を持ってるよ。そしてこの効果は相手ターンでも発動できる」
「効果無効と効果耐性を与えるモンスター……」
ただでさえ突破し辛い状況なのに、さらに強固なフィールドになった。
これが遊陽ちゃんの実力……師匠が認める闇先パイの教え子。
このターン、アテナの雷が降り注いだ回数は１９回。
もし、クリフォトンが最初の手札になかったら。
もし、１回のダメージが少ないからとクリフォトンを使わなかったら、私はすでに負けていた。

この子は……きっと私の全力でも届かないぐらい強い。
だけど……
「遊陽はカードを1枚伏せてターンエンドだよ‼？えへへ、遊花お姉ちゃんがどんなデュエルを見せてくれるか、楽しみだなぁ」
無邪気に笑う遊陽ちゃんに、私は気を引き締める。
それでも、遊陽ちゃんは私とのデュエルをこんなに楽しみにしてくれている。
だったら、今出せる私の全力で、遊陽ちゃんに応えてみせる‼？

遊花　ＬＰ６０００　手札４
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　☆
○ー○○☆
ーー△▲ー　ー
遊陽　ＬＰ５５００　手札３
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー

☆

「な、何よ……あれ……」
「相変わらず、ぶっ飛んだ強さだな、遊陽は」
遊陽のデュエルを見て、桜が茫然とした表情を浮かべる。
まあ、驚く気持ちも分かるけどな。
俺がいた時よりもデュエルのキレが上がってるし。
「今のターン、遊花がクリフォトンを持ってなかったら……」
「負けてたな。アテナによる６００バーンが１９回に熱血指導王ジャイアントトレーナーの８００バーンが２回、計１３０００のバーンダメージによる先攻ワンショットキルだ」
「……そんなの洒落にならないわよ」

「分かっただろ？俺が８割負ける理由。俺のデッキはモンスターの戦闘を主にしてるからバーン系には弱い。仮に耐え切っても大型天使が残ってて戦闘で突破しようとすればオネストがくる可能性が高い。相性が悪すぎるんだよ」

俺のデッキにバーンを防げるようなカードはほとんど入っていない。

そのためある程度バーンでライフを削られてから大型モンスターで攻撃されればそれだけで簡単にライフは尽きる。

そのうえ俺のデュエルは高攻撃力のモンスター単騎で相手の切り札を突破し、そこから小型のモンスターで追撃を加えていくスタイルだ。

遊陽の大型モンスターを複数体用意するような戦い方とは相性が悪い。

「……私もあれだけバーンされるとどうしようもないわ。闇はどうするの？」

「昔の闇は氷結界を使ってたからな。氷結界にはロック系の効果で攻撃制限や魔法カードやモンスター効果を使用する時に手札コストを要求するモンスターがいる。そこで縛って固めたところで氷結界の三龍や影霊衣で突破してたな」

「じゃあ今は？」

「先攻取ってヴェルズオピオンを出せばある程度はどうにかなるだろう。あのカードはレベル５以上の特殊召喚を封じるからな。大型天使の展開を防げるのがデカいだろう」

「後攻なら？」

「展開されるだけなら闇はどうとでもできる。バーンは手札誘発を引けるかどうかだな。まあそんなの誰にでも言えることではあるが。闇もあれでプロだからな。その手の対策カードぐらいは用意してるさ」

俺の言葉に桜は納得したような表情を浮かべる。

まあ、対策があるからといって勝てるかはまた別の話だけどな。

それでも闇なら勝利を掴み取ってるだろうと思えるのは、それだけ

付き合いが長いからだろう。
「それにしても、あの堕天使ってカードはなんなの？私、見たことないんだけど？」
何の気なしに、桜がそんな質問を投げかけてくる。
そんな桜の質問に、俺は思わず複雑な表情を浮かべてしまう。
「……ごめん、聞いちゃ不味い話だった？」
「いや、悪くはないんだけどな……こう、どう説明するかがな……」
思わず出してしまった表情に気付いたのか、桜は申し訳なさそうな表情で謝ってきた。
そんな桜に首を振って応えながら、俺は少しずつ話だす。
「んーまあ、結論から言ってしまえば、俺達にも分からない。俺も闇も、遊陽以外で堕天使を使ってる決闘者を見たことないからな」
「遊騎達でも知らないの？」
「ああ。元々あの堕天使は遊陽がこの教会に来た時から持っていたものなんだが……遊陽の境遇は闇に似ててな」
「……それって、記憶喪失の所を拾われたってこと？」
「‼？何だ、知ってたのか」
桜の口から出た言葉に俺は驚く。
まぁ、闇も隠すようなことはしてないし、知っててもおかしくはないが。
「……まあね。前に大会の休憩時間に島さんから聞いたの」
「ああ、島さんからか。まぁ知ってるなら話は早いが、遊陽は別に記憶喪失って訳ではないな。最も、下手したらそれよりも質は悪いが」
「闇よりも？」
「ああ……遊陽はな、捨て子なんだよ。しかも、産まれてすぐの赤ん坊の頃に、この教会の前に捨てられていたらしい」
「えっ……？」
俺の言葉に桜の目が見開かれる。
そんな桜に構わず、俺は話を続ける。
「遊陽を最初に見つけたのは闇だ。９年前、俺達が中等部に入った頃、

『Ｎａｔｕｒａｌ』でデュエルした帰り道、この教会の前にあのデッキと共に毛布に包まれて捨てられていた遊陽を発見したらしい。とりあえず院長を呼んで、遊陽を保護してセキュリティにも連絡して調べて貰ったんだが、遊陽の両親だと思われる人物の足取りはケルンから出たところで途切れてたらしくてな。結局は見つけられなかった」
「そんな……」
「そんなことがあって、遊陽はずっとこの教会で暮らしてるんだよ。境遇が似てるからか闇も遊陽のことは妹みたいに可愛がってててな。俺も暇があれば様子を見に来てたから、遊陽にとって俺と闇は兄や姉代わりになってるんだろう。だから、遊陽の堕天使達の出処は分からない。だけど、遊陽にとって堕天使達は家族との唯一の繋がりなのかもな。どんな理由があったかは分からないけど、デッキを用意して毛布に包んで見つかりやすい教会の前に遊陽をおいてたんだ、遊陽への愛情があったって、信じてやりたいよな」
「……」
俺の言葉に、桜は複雑そうな表情を浮かべながら遊陽を見る。
そんな桜を微笑ましく思いながら、俺も遊陽の方を見る。
遊陽は、本当に楽しそうに遊花とデュエルをしている。
……闇に聞いた話だと、もう教会にいる子供達ではほとんど遊陽の相手にはならないらしい。
遊陽と対等にデュエルができるのは空子と竜路の２人だけ。
その２人でも、遊陽が後攻ならばという条件付きだ。
だから最近、遊陽が先攻になった時点で諦める子供達も出てきて、遊陽は全力でデュエルができなかったらしい。
だからこそ、今回この教会に来ることを決めた時、闇と話して遊花を遊陽とデュエルさせてみようという話になった。
遊花も遊陽も、俺達と対等にデュエルができる決闘者だからお互いにいい刺激になるだろうし、防御特化の遊花なら、遊陽の全力も受けきることができると思ったのだ。
たった１ターン目の攻防で、あれだけ楽しそうにデュエルができているのだから、やはり２人をデュエルさせようと思ったのは間違いで

はなかっただろう。
「……まぁ、少し予想外のこともあったけどな……闇の奴、気付いてたのに言わなかったな？」
「遊騎？何か言った？」
「……いや、何でもない」
こちらを見て首を傾げる桜を誤魔化しながら改めて遊陽を見る。
……遊陽が、堕天使のカードを使用する時、カードから薄く闇が溢れているのが見えた。
最近、闇のヴェルズの力を直接見たからか、俺が手に入れて以来使わないようにしているあのカード達が原因なのか、俺にも少しだけ見えるようになったそれが、どういうことを意味しているのかはよく分かる。
闇が何も言わないということは大丈夫ということだとは思うが、やはり少しだけ落ち着かない。
……遊陽が使っている堕天使達は……間違いなく闇のカードだ。

ーーーーーーーー

★

「私のターン、ドロー!!？」
遊陽ちゃんの布陣は攻防共にかなり強固な布陣だ。
だけど、この手札なら突破するのもそう難しくはないハズ!!？
「カードを1枚伏せて魔法カード、手札抹殺!!？お互いに手札を全て捨てて同じ枚数ドローするよ!!？私も遊陽ちゃんも3枚の手札を捨てて同じ枚数ドローだよ!!？」
「あ、オネストが捨てられちゃった……」
「さらに手札から捨てられた魔轟神獣キャシーの効果発動!!？このカードが手札から墓地へ捨てられた時、フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊します!!？私が破壊するのは神竜

騎士フェルグラント!!?」
「!!?・させないよ!!?・神竜騎士フェルグラントの効果発動!!?・神竜の加護!!?・1ターンに1度、オーバーレイユニットを1つ取り除き、フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてこのターン、対象のモンスターは効果が無効になり、このカード以外の効果を受けなくなる!!?・この効果は相手ターンでも発動できるよ!!?・遊陽は神竜騎士フェルグラントを対象に効果を無効にしてこのカード以外の効果を受けなくするよ!!?・」
　手札から捨てられた身体に金色の腕輪のようなものをつけた猫のモンスターが、緑色のボールのような悪魔を神竜騎士に向かって弾き飛ばすが、金色のオーラを纏った神竜騎士は身体に当たった悪魔を弾き、そのまま斬り伏せた。
　神竜騎士は倒せなかったけど、これで無効化効果もなくなった。
　これで思う存分動ける!!?・
「リバースカードオープン!!?・魔法カード、儀式の下準備!!?・デッキから儀式魔法カード1枚を選び、さらにその儀式魔法カードにカード名が記された儀式モンスター1体を自分のデッキ・墓地から選んで、そのカード2枚を手札に加えるよ!!?・私が加えるのはイリュージョンの儀式とサクリファイス!!?・」
「!!?・遊花お姉ちゃん、儀式モンスターを使うんだ!!?・」
「私は儀式魔法、イリュージョンの儀式を発動!!?・自分の手札・フィールドから、レベルの合計が1以上になるようにモンスターをリリースし、手札からサクリファイスを儀式召喚するよ!!?・私は手札のサクリボーをリリースして儀式召喚を行う!!?・」
　私の前に現れるのは金色の目の形をした壺が現れ、その中にクリボーに似た毛玉のモンスターが吸い込まれていく。
　しばらくすると壺が割れ、中から妖しい邪眼を持つモンスターが現れた。
「儀式召喚!!?・相手を捕える妖しい邪眼!!?・サクリファイス!!?・」
〈サクリファイス〉☆1　魔法使い族　闇属性

ＡＴＫ０

「これが遊花お姉ちゃんの儀式モンスター……ちょっと怖いなぁ」
「サクリボーの効果発動!!?このカードがリリースされた場合に自分はデッキから1枚ドローするよ!!?そしてサクリファイスの効果発動!!?アブソープション!!?1ターンに1度、相手フィールドのモンスター1体を対象にそのモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力・守備力は、このカードの効果で装備したモンスターの数値分アップし、このカードが戦闘で破壊される場合、代わりに装備したそのモンスターを破壊できるよ!!?対象は、天空神騎士ロードパーシアス!!?吸い込んじゃって、サクリファイス!!?」
「あっ!!?天空神騎士ロードパーシアスが!!?」
サクリファイスのお腹にある穴が開き、ロードパーシアスが吸い込まれる。
しばらくすると背中についている羽のような部分からロードパーシアスの姿が浮き上がった。

サクリファイス
ＡＴＫ０→２６００

「とりあえず1体、次はこう!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「!!?今度はリンク召喚!!?」
私が正面に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はトークン以外のレベル1モンスター1体!!?私はサクリファイスをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?相手を捕える深淵の邪眼!!?リンク1!!?サクリファイスアニマ!!?」
〈サクリファイスアニマ〉ＬＩＮＫ１　魔法使い族　闇属性

ＡＴＫ０　→

サクリファイスがサーキットに吸い込まれ、代わりにサーキットからジャイアントトレーナーの正面にサクリファイスに似た怪しげな邪眼を持つモンスターが現れる。
「またサクリファイス……ということは‼?」
「サクリファイスアニマの効果発動‼?コネクトアブソープション‼?1ターンに1度このカードのリンク先の表側表示モンスター1体を対象にその表側表示モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする‼?対象は熱血指導王ジャイアントトレーナー‼?吸い込んじゃって、サクリファイスアニマ‼?」
アニマの目の上にある空間が開き、ジャイアントトレーナーを吸い込む。
しばらくするとアニマの背中についている羽のような部分からジャイアントトレーナーが持っていたバットが現れた。

サクリファイスアニマ
ＡＴＫ０→２８００

「ジャイアントトレーナーまで……」
「バトル‼?サクリファイスアニマで神竜騎士フェルグラントを攻撃‼?ダークイリュージョンスイング‼?」
「迎え撃って、神竜騎士フェルグラント‼?神竜剣‼?」
アニマが羽根に現れたバットを射出して神竜騎士の身体を貫くが、それでも近づいてきた神竜騎士に斬られ、お互いに爆散する。
「ありがとう、サクリファイスアニマ。墓地に存在するエキストラケアトップスの効果発動‼?このカードが墓地に存在し、ＥＸモンスターゾーンのモンスターがメインモンスターゾーンのモンスターとの戦闘で破壊され墓地へ送られた時、このカードをその破壊されたＥＸモンスターゾーンのモンスターの持ち主のフィールドに守備表示

で特殊召喚するよ!!?」
「手札抹殺の時に落としてたんだね」
〈エキストラケアトップス〉☆1　戦士族　地属性
ＤＥＦ１００

爆散したアニマの代わりにダンボールで出来たトリケラトプスの着ぐるみを着たモンスターが現れる。
「メインフェイズ2、手札のドットスケーパーを捨てて魔法カード、魔法カード、ワンフォーワンを発動!!?デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚するよ!!?おいで、チューナーモンスター、ジェットシンクロン!!?」
「チューナーモンスター!?」
〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

フィールドに現れたのは小さなジェット機のような機械のモンスター。
「さらに墓地に送られたドットスケーパーの効果発動!!?デュエル中に1度、このカードが墓地に送られた場合に特殊召喚するよ!!?」
〈ドットスケーパー〉☆1　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

ジェットシンクロンに寄り添うようにドットの身体を持つモンスターが現れる。
「チューナーモンスター……遊花お姉ちゃんはシンクロ召喚も使えるの?」
「うん、行くよ?私は!!?レベル1、ドットスケーパーと、レベル1、エキストラケアトップスに、レベル1、チューナーモンスター、ジェッ

トシンクロンをチューニング!!?」
ジェットシンクロンが光の輪になり、ドットスケーパーとケアトップスが小さな星に変わり、光の道になる。
「悠久に響く祈りの歌が、争いを鎮める新風となる!!?シンクロ召喚!!?未来に羽ばたけ、霞鳥クラウソラス!!?」

〈霞鳥クラウソラス〉☆3　鳥獣族　風属性
ＤＥＦ２３００

光の道が輝くと、その中から緑の翼で羽ばたく綺麗な鳥が現れた。
「ジェットシンクロンの効果発動!!?このカードがシンクロ素材として墓地へ送られた場合、デッキからジャンクモンスター1体を手札に加える!!?私はデッキからジャンクリボーを手札に加えるよ!!?ジャンクリボーの効果、ジャンクバレットは自分にダメージを与える魔法・罠・モンスターの効果を相手が発動した時、自分の手札・フィールドのこのカードを墓地へ送ってその発動を無効にして破壊することができるよ」
「!!?アテナの効果は強制効果だから、天使族モンスターを出すとアテナが破壊されちゃう……」
「私はこのままターンエンド!!?」

遊花　ＬＰ６０００　手札２
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　□
○ー　ー　ー☆
ー　ー△▲ー　ー
遊陽　ＬＰ５５００　手札３

「遊花お姉ちゃん、凄い!!?こんなにすぐに対策されちゃうなんて思わなかった!!?遊陽も負けてられないね、遊陽のターン、ドロー!!?

まずはトリックスターベラマドンナの効果発動‼?妖精の介錯‼?このカードのリンク先にモンスターが存在しない場合、自分の墓地のトリックスターモンスターの種類×２００ポイントのダメージを相手に与えるよ‼?」
「っ、ベラマドンナもバーン効果を持ってたんだね」
「遊陽の墓地にはトリックスターリリーベル、トリックスターナルキッス、トリックスタースイートデビル、トリックスターフォクシーウィッチの４種類のトリックスターがいるから８００ポイントのダメージだよ‼?」
ベラマドンナの周りに４つの光の玉が浮かびあがり、私の身体を貫くように放たれる。

遊花　ＬＰ６０００→５２００

「くっ‼?」
「そして手札からこのカード以外の堕天使カード２枚を捨てることで、このカードを手札から特殊召喚する‼?遊陽は手札の堕天使マリーと背徳の堕天使を捨てて堕天使マスティマを特殊召喚‼?」

〈堕天使マスティマ〉☆７　天使族　闇属性
ＡＴＫ２６００

現れたのは獣のような顔を持つ白翼の天使。
「この瞬間、アテナの効果発動‼?断罪の雷‼?堕天使マスティマが特殊召喚されたから６００ポイントのダメージを与えるよ‼?」
「なら、ジャンクリボーの効果発動‼?ジャンクバレット‼?自分にダメージを与える魔法・罠・モンスターの効果を相手が発動した時、自分の手札・フィールドのこのカードを墓地へ送り、その発動を無効にして破壊する‼?」
ジャンクリボーが増殖しながら雷を放とうとするアテナに突撃し、自爆する。

これでアテナはーーー
「堕天使マスティマの効果発動!!?１０００ライフポイントを払い、自分の墓地の堕天使魔法・罠カード１枚を対象として、その魔法・罠カードの効果を適用し、その後墓地のそのカードをデッキに戻す!!?この効果は相手ターンでも発動できるよ!!?」
「っ!!?堕天使イシュタムと同じ効果!!?まさか、その効果って堕天使の共通効果なの!!?」
「遊陽はライフポイントを１０００払って墓地の堕天使の戒壇を適用し、自分の墓地の堕天使モンスター１体を選んで守備表示で特殊召喚する!!?蘇って、堕天使スペルビア!!?堕天使の戒壇をデッキに戻すよ!!?」

遊陽　ＬＰ５５００→４５００

〈堕天使スペルビア〉☆８　天使族　闇属性
ＤＥＦ２４００

再びフィールドに現れるスペルビア。
それが意味するのは女神の帰還。
「そして堕天使スペルビアの効果発動!!再び姿を現せ、？知恵を司る戦いの女神!!?アテナ!!?」

〈アテナ〉☆７　天使族　光属性
ＡＴＫ２６００

「っ、またアテナがフィールドに……」
「アテナのもう１つの効果発動!!?身捧ぐ祈り!!?堕天使スペルビアを墓地に送り、墓地から蘇って、オネスト!!?」

〈オネスト〉☆４　天使族　光属性
ＡＴＫ１１００

スペルビアが消え、代わりに現れたのは白翼の天使。
「アテナの効果発動!!?断罪の雷!!?オネストが特殊召喚されたから６００ポイントのダメージを与えるよ!!?」
「うっ……」

遊花　ＬＰ５２００→４６００

私の身体をアテナの雷が貫く。
確かに天使が特殊召喚されればダメージは入るけど、なんでオネストを……
「オネストの効果発動!!?自分メインフェイズにフィールドの表側表示のこのカードを持ち主の手札に戻すよ!!?」
「えっ!!?そんな効果もあったの!!?」
「そして手札に戻ったオネストを召喚!!?」

〈オネスト〉☆４　天使族　光属性
ＡＴＫ１１００

「アテナの効果発動!!?断罪の雷!!?オネストが召喚されたから６００ポイントのダメージを与えるよ!!?」
「くっ……」

遊花　ＬＰ４６００→４０００

私の身体が再びアテナの雷に貫かれる。
し、知らなかった……オネストって光属性のモンスターの攻撃力を上げるだけじゃないんだ……
「バトル!!?堕天使マスティマで霞鳥クラウソラスを攻撃!!?暴虐!!?」
マスティマがクラウソラスにむけて拳を振り抜く。

しかし、その拳はクラウソラスを庇うように現れたサクリボーによって防がれた。
「墓地に存在するサクリボーの効果発動!!?自分のモンスターが戦闘で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外するよ!!?」
「そんな効果が……なら、アテナで霞鳥クラウソラスを攻撃!!?裁きの穿通!!?」
「ゴメンね、霞鳥クラウソラス……」
アテナが三又の矛を投げると、三又の矛はクラウソラスの身体を貫通し、クラウソラスを粒子に変えた。
「墓地に存在するエキストラケアトップスの効果発動!!?このカードが墓地に存在し、ＥＸモンスターゾーンのモンスターがメインモンスターゾーンのモンスターとの戦闘で破壊され墓地へ送られた時、このカードをその破壊されたＥＸモンスターゾーンのモンスターの持ち主のフィールドに守備表示で特殊召喚する!!?」

〈エキストラケアトップス〉☆１　戦士族　地属性
ＤＥＦ１００

「続けていくよ!!?オネストでエキストラケアトップスを攻撃!!?誠実な白翼!!?」
オネストの白翼から、羽根が弾丸のように放たれ、ケアトップスの身体を貫いた。
「エキストラケアトップスの効果発動!!?自身の効果で特殊召喚されたこのカードが破壊され墓地へ送られた場合、自分はカードを１枚ドローする!!?」
「攻撃を防ぐだけじゃなくてドローまで考えてたんだ。でも、これで遊花お姉ちゃんのフィールドはがら空きだよ!!?トリックスターベラマドンナでダイレクトアタック!!?妖精の紗幕!!?」
「きゃあ!!?」

遊花　ＬＰ４０００→１２００

ベラマドンナが手に持った鎌を振るうと光の斬撃が放たれて私のライフが大きく削られる。
これで私のライフは残り１２００。
アテナの効果が２回発動するだけで尽きる。
だけどーーー
「メインフェイズ２ーーー」
「今だよ‼?自分フィールドにカードが存在しない場合、手札から罠発動‼?拮抗勝負‼?」
「手札から罠⁉?それって、遊騎お兄ちゃんも使ってた……」
「相手フィールドのカードの数が自分フィールドのカードの数より多い場合、自分・相手のバトルフェイズ終了時に発動できる‼?自分フィールドのカードの数と同じになるように、相手はフィールドのカードを裏側表示で除外しなければならない‼?私のフィールドには拮抗勝負１枚のみ。だから、遊陽ちゃんにも１枚になるようにフィールドのカードを除外して貰うよ‼?」
「っ、遊陽はアテナを選んでそれ以外のカードを除外するよ‼?そしてトリックスターベラマドンナはこのカードのリンク先にモンスターが存在しない場合に他のカードが発動した効果を受けないからフィールドに残る‼?」
アテナとベラマドンナ以外のカードが粒子に変わり、消滅する。
その光景を見て、遊陽ちゃんは楽しそうに笑う。
「凄い凄い‼?遊陽お姉ちゃん、凄く強い‼?」
「あはは、それでも遊陽ちゃんには追い詰められてるけどね」
「遊陽、こんなに楽しいデュエルは久しぶりなの。遊陽が全力でデュエルをすると、いつもすぐにデュエルが終わっちゃうの。だから、遊陽の全力を受け止めてくれる遊花お姉ちゃんとのデュエル、凄く楽しい‼?」
「……そうなんだ。じゃあ、遊陽ちゃんにもっと楽しんで貰えるように、私ももっと頑張らないとね」
遊陽ちゃんの言葉に、私は気合を入れ直す。

……きっと、遊陽ちゃんの言葉は真実なのだろう。
遊陽ちゃんは、それぐらいに強い。
遊陽ちゃん強さはこの教会で見た空子ちゃんや竜路君達とは比べ物にならない程異質なものだ。
まるで……闇先パイとデュエルしてるような気分になる。
でも、そんな遊陽ちゃんが私とのデュエルを楽しんでくれている。
ならば、最後までその期待に応えたい。
「私はこれでターンエンドだよ!!?」

遊花　ＬＰ１２００　手札１
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　　ー
○ーーー☆
ーーーーー　ー
遊陽　ＬＰ４５００　手札１

「私のターン、ドロー!!?」
私はドローしたカードを見て少しだけ考える。
……少しだけ危ない橋を渡ることになる。
だけど、この状況を突破するならやってみるしかない。
「速攻魔法、サクリファイスフュージョン!!?アイズサクリファイス融合モンスターカードの融合素材モンスターを自分の手札・フィールド・墓地から除外し、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚するよ!!?私が除外するのは、墓地のサクリファイスとドットスケーパー!!?」
「今度は融合!?!?凄い凄い!!?」
「妖しい邪眼よ、電子の精霊よ!!?今交わりて、全てを奪う力とならん!!?融合召喚!!?全てを見透かす叡智の邪眼!!?ミレニアムアイズサクリファイス!!?」

〈ミレニアムアイズサクリファイス〉☆1　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０

フィールドに現れた渦の中から出てきたのは金色の邪眼と身体を持つモンスター。
「今度は融合モンスターのサクリファイスなんだ」
「そして、除外されたドットスケーパーの効果発動‼?・デュエル中に1度、このカードが除外された場合に特殊召喚するよ‼?・」

〈ドットスケーパー〉☆1　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

「ミレニアムアイズサクリファイスは1ターンに1度、相手モンスター1体を対象としてその相手の効果モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力・守備力は、このカードの効果で装備したモンスターのそれぞれの数値分アップし、このカードの効果で装備したモンスターと同名のモンスターは攻撃できず、その効果は無効化するよ‼?・」
「‼?・効果が発動したら吸収されちゃうのはちょっと嫌だなぁ」
「私はクリアクリボーを召喚‼?・」

〈クリアクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＡＴＫ３００

現れたのは紫色の毛玉のようなモンスター。
「あ、可愛い。だけど、そのモンスターを出してどうするの?・」
「この子自体は何もしないよ。でも、大事なのはクリアクリボーは天使族ってこと」
「あ‼?・」
「アテナの効果、断罪の雷はアテナがモンスターゾーンに存在する状

態で、このカード以外の天使族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された場合、相手に６００ポイントのダメージを与える効果。天使族を召喚したのが私でも、その効果は発動するよね？」
「うっ、アテナの効果発動!!?断罪の雷!!?クリアクリボーが召喚されたから６００ポイントのダメージを与えるよ!!?」
「チェーンしてミレニアムアイズサクリファイスの効果発動!!?ミレニアムアブソープション!!?1ターンに1度、相手モンスターの効果が発動した時、相手のフィールド・墓地の効果モンスター1体を対象としてその相手の効果モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備するよ!!?」
「うぅ、アテナが吸収されちゃう……」
「ううん、私が対象にするのは、遊陽ちゃんの墓地の堕天使アスモディウス!!?」
「えっ!?」
　ミレニアムアイズのお腹にある穴から暴風のような吸い込みが起こり、墓地からアスモディウスが引きずり出され、身体を飲み込まれたアスモディウスはミレニアムアイズの金色の身体の上に漆黒の翼だけが現れる。
　その隙にアテナが雷で私の身体を貫いた。

ミレニアムアイズサクリファイス
ＡＴＫ０→３０００

遊花　ＬＰ１２００→６００

「どうしてアテナを吸収しないの？」
「それじゃあトリックスターベラマドンナを倒せないからね。それに、別にアテナを吸収しないわけじゃないよ」
「えっ!?」
「墓地のサクリファイスフュージョンの効果発動!!?自分メインフェイズに墓地のこのカードを除外し、相手フィールドの効果モンスター

1体を対象とし自分フィールドの、アイズサクリファイス融合モンスターまたはサクリファイス1体を選び、その効果による装備カード扱いとして対象の相手の効果モンスターを装備するよ‼？対象はアテナ‼？」

ミレニアムアイズは今度はアテナを吸収し、ミレニアムアイズの手元にアテナが持っていた巨大な盾と三又の矛が現れた。

ミレニアムアイズサクリファイス
ＡＴＫ３０００→５６００

「アテナまで……このためにアテナは吸収しなかったんだね」
「その通り‼？バトル‼？ミレニアムアイズサクリファイスでトリックスターベラマドンナを攻撃‼？マインドスキャンイリュージョン‼？」
「迎え撃って、トリックスターベラマドンナ‼？妖精の紗幕‼？」
ベラマドンナが鎌を振い、光の斬撃をミレニアムアイズに放つが、ミレニアムアイズはアテナが持っていた巨大な盾で光の斬撃を防ぐ。
光の斬撃を防いだミレニアムアイズは手に持っていた三俣の矛をベラマドンナに投げつけ、さらにお腹の穴から闇の球体を放ち、ベラマドンナの身体を貫いた。

遊陽　ＬＰ４５００→１７００

「うっ、ベラマドンナが……」
「さらにクリアクリボーでダイレクトアタック‼？クリアタック‼？」
「きゃっ‼？」
クリアクリボーが身体をびくびくと震わせながら、目を瞑り勢いよく遊陽ちゃんに突撃する。
……本当に臆病なんだね、君は。

遊陽　ＬＰ１７００→１４００

「一気にライフが削られちゃった。だけど、遊花お姉ちゃんのライフもあと少し。次のターンに私がモンスターを出してその子を攻撃したら終わっちゃうよ？」

遊陽ちゃんに指を刺され、クリアクリボーが涙を浮かべながら私の後ろに隠れる。

……私を盾にされても困るんだけど……まぁ、そこもちゃんと考えてるけどね。

「大丈夫。ちょっと勿体無いけど、ちゃんと方法は考えてるから。メインフェイズ２、導いて‼？希望に繋がるサーキット‼？」

「えっ‼？リンク召喚⁉？」

私が正面に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。

今、私のエクストラモンスターゾーンにはミレニアムアイズがいる。

正直、ミレニアムアイズは使いたくないけど、クリアクリボーを攻撃表示のままにしないためにはこれしかない。

「召喚条件はレベル１モンスター１体。私はミレニアムアイズサクリファイスをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚‼？希望の守り手‼？リンク１‼？リンクリボー‼？」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性

ＡＴＫ３００　←

ミレニアムアイズがサーキットに吸い込まれ、代わりに元気一杯に飛び出してきたのは青い球体のモンスター。

今回も頼んだよ、リンクリボー。

「そして私はレベル１、クリアクリボーとドットスケーパーでオーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼？」

「凄い‼？遊花お姉ちゃん、エクシーズ召喚まで使えるんだ‼？」

クリアクリボーとドットスケーパーが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこには白い馬に乗る小さな首無しの騎士がいた。
「闇夜に紛れし哀しき妖精‼?その刃で疑惑を切り裂け‼?ランク1‼?ゴーストリックデュラハン‼?」

〈ゴーストリックデュラハン〉★1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

「まだだよ‼?私はゴーストリックデュラハン1体でオーバーレイ‼?1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築‼?ランクアップエクシーズチェンジ‼?」
「ランクアップ?」
デュラハンが再び空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りたのは黒いドレスを身に纏い、白い羽根にところどころ漆黒の羽根が混ざる女の子のモンスター。
「闇夜を彷徨う自由な天使‼?その気ままさで憂鬱を払え‼?ランク4‼?ゴーストリックの駄天使‼?」

〈ゴーストリックの駄天使〉★4　天使族　闇属性
ＤＥＦ２５００

駄天使が私の周りをひらひらと飛びながらいつものようにドヤ顔で空を指差して決めポーズをとる。
……うーん、遊陽ちゃんの堕天使を見てからだと余計にそう思うけど、やっぱり貴女は駄目な方の駄天使だよね。
そんな私の内心を読んだのか、駄天使が心外だというように、ぷんぷんと怒ってみせた。
ごめんごめん、ちゃんと頼りにしてるから、そんなに怒らないで?
「ゴーストリックの駄天使は同名以外のゴーストリックモンスターに

重ねてエクシーズ召喚を行うことができるの」
「へぇ～そんなエクシーズ召喚もあるんだ」
「そしてゴーストリックの駄天使の効果発動!!?チャームコール!!?オーバーレイユニットを1つ取り除くことでデッキからゴーストリック魔法・罠を手札に加えるよ!!?私が手札に加えるのはゴーストリックロールシフト!!?」
堕天使が私に向けて小さなハートを飛ばすとそれがカードになって私の手札に加わる。
といっても、現状使えるわけじゃないから次のターンを耐え切れたらだね。
「私はこのままターンエンド!!?」

遊花　ＬＰ６００　手札１
ー　ー
ー　ー
ー　□ー
ー　☆　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
遊陽　ＬＰ１４００　手札１

「やっぱり、遊花お姉ちゃんは凄く強い!!?だから、遊陽ももっともっと全力を出すよ!!?」
「……あはは、まだ全力を出せるんだ」
そういってニコニコと笑う遊陽ちゃんに、私は思わず苦笑してしまう。
……遊陽ちゃんの攻勢で私の防御手段も流石に尽きた。
遊陽ちゃんがバーン系のカードをドローしたらそれだけで私の負け。
遊陽ちゃんがどんなカードをドローするかで、全てが決まる。
「遊陽のターン、ドロー!!?魔法カード、貪欲な壺!!?」
「っ、ここでドローカード……」

「墓地に存在する失落の堕天使、天空神騎士ロードパーシアス、熱血指導王ジャイアントトレーナー、神竜騎士フェルグラント、トリックスターベラマドンナをＥＸデッキに戻してカードを２枚ドロー‼？……あれ？」

勢いよくドローしたカードを見て、遊陽ちゃんが目を丸くする。

？一体何をドローしたんだろう？

「拾ってから今までどうやってもドローできなかったのに……えっ？遊花お姉ちゃんに会いに来たの？」

「遊陽ちゃん？」

「……そっか。うん、そうなんだね。分かった。会わせてあげるね、遊花お姉ちゃんに‼？」

遊陽ちゃんは何かを呟くと、私の方を見て今ドローしたカードの内、１枚のカードを私に向ける。

その瞬間、遊陽ちゃんが持っていたカードが一瞬鈍い闇色に光った気がした。

「行くよ、遊花お姉ちゃん‼？このモンスターは自分の墓地にモンスターが１０体以上存在する場合のみ特殊召喚する事ができる‼？」

「っ、聞いたことがない特殊召喚条件？」

遊陽ちゃんの告げた召喚条件に、私は戸惑いの声をあげる。

……何でだろう？

聞いたことがないハズなのに、私はこれから出てくるモンスターをよく知っている気がする。

妙な感覚に戸惑っていると、そのモンスターがフィールドに現れる。

現れたのは機械の身体を持つ巨大な天使にして、時を司る究極の神。

「さあ、おいで‼？究極時械神セフィロン‼？」

〈究極時械神セフィロン〉☆１０　天使族　光属性

ＡＴＫ４０００

「究極時械神……セフィロン」
その名前を呟くと、チクりと胸を刺すような痛みが走った。
セフィロンも、まるで見定めているような目で私を見ている。
この妙な感覚、前にもどこかで……
「行くよ、遊花お姉ちゃん!!?究極時械神セフィロンの効果発動!!?」
「っ!!?」
「1ターンに1度、レベル8以上の天使族モンスター1体を自分の手札・墓地から特殊召喚する事ができる!!?この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、攻撃力は4000になる!!?蘇って、堕天使イシュタム!!?」

〈堕天使イシュタム〉☆10　天使族　闇属性
ATK2500→4000

セフィロンの力で、イシュタムが強化されてフィールドに現れる。
本当に、敵に回すと厄介な効果だね……
「遊陽は堕天使ユコバックを召喚!!?」

〈堕天使ユコバック〉☆3　天使族　闇属性
ATK700

フィールドに現れたのは身体に鎖をつけた小型の天使。
「堕天使ユコバックの効果発動!!?このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから堕天使カード1枚を墓地へ送るよ!!?遊陽はデッキから堕天使の戒壇を墓地に送るよ!!?」
ユコバックの効果で堕天使の戒壇が墓地に落ちる。
これで堕天使モンスターの共通効果を使われるだけでスペルビアとアテナが蘇る。
そうなれば、確実に私はやられる。
最も、もしかしたらこのターンで決着がついてしまうかも知れないけど。

「バトル‼?・堕天使ココバックでリンクリボーを攻撃‼?・暴食‼?・」
「相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動‼?・ゼロリンク‼?・このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力はターン終了時まで0になる‼?・」
リンクリボーの身体が粒子に変わってココバックに纏わりつき、その力を奪う。

堕天使ココバック
ＡＴＫ７００→０

「モンスターがいなくなったから攻撃は中止するよ‼?・続けて、堕天使イシュタムでゴーストリックの駄天使を攻撃‼?・自裁の闇‼?・」
イシュタムの身体から闇が溢れ出し、駄天使の身体を包み込む。
驚いた駄天使はいつものようにひび割れているハートを作り出し、そのハートからビームを放つが、闇に触れたビームは跳ね返され、駄天使自身の身体を貫いた。
「っ、ゴーストリックの駄天使……」
「これで終わりかな?・究極時械神セフィロンでダイレクトアタック‼?」
セフィロンの両手に光が集まっていく。
この攻撃を受けたら私の負け……だけど、まだ終わってない‼?
「相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のクリアクリボーの効果発動‼?・自分はデッキから1枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替えるよ‼?・」
「‼?・さっきのモンスターにそんな効果が……」
お願い、私のデッキ……遊陽ちゃんとの楽しいデュエルを……
セフィロンとの再開を、まだ終わらせたくないの‼?
だからお願い、私に力を貸して‼?
そんな風に願いながら、私は勢いよくカードをドローする。
そこにいたのはーーー

「……ありがとう、相棒。まだ、終わらないよ‼?」
「‼?」
「いつだって、私と共に‼?ハネクリボー‼?」
〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

現れるのは天使の羽を持つ私の相棒。
ハネクリボーは私を庇うように両手を広げる。
「っ、攻撃対象が変更になったから、究極時械神セフィロンでハネクリボーを攻撃‼?」
セフィロンが両手に集めた光をレーザーのようにハネクリボーに放ち、ハネクリボーが粒子になる。
粒子になる瞬間、ハネクリボーは私を見て笑った気がした。
そして粒子となったハネクリボーが私を包むように漂い始める。
「ハネクリボーの効果発動‼?プリフィケーション‼?このカードがフィールドから墓地に送られたターン、自分の受ける戦闘ダメージは０になる‼?」
「これ以上攻撃する手段はなかったけど、あっても無理だったね。メインフェイズ２、カードを１枚伏せてターンエンドだよ‼?エンド時に堕天使ユコバックの攻撃力は元に戻るね」

堕天使ユコバック
ＡＴＫ０→７００

遊花　ＬＰ６００　手札１
｜｜｜｜｜｜　｜
｜｜｜｜｜｜
｜　｜
｜○○○｜
｜｜▲｜｜　｜
遊陽　ＬＰ１４００　手札０

私の手札はゴーストリックロールシフトのみ。
遊陽ちゃんのフィールドには攻撃力７００のユコバックがいるけど、遊陽ちゃんが守る手段もなくユコバックを出したとは思えないから多分、あの伏せカードはユコバックを守るかフィールドから退けるカードなのだろう。
今の私の状況じゃ、どうやっても勝てない。
だけど……
私はチラリと遊陽ちゃんの顔を見る。
遊陽ちゃんの顔は、私がここからどんなことをしてくるのかを楽しみにしているような満面の笑みだった。
遊陽ちゃんは、私とのデュエルを本当に楽しんでくれている。
だからこそ、遊陽ちゃんの期待には応えてあげたい。
「私のターン、ドロー!!?」
……まだ、望みはある。
「魔法カード、貪欲な壺!!?」
「!!?遊花お姉ちゃんも、ここでドローカードを引いたの!!?」
「墓地に存在するリンクリボー、サクリファイスアニマ、ゴーストリックデュラハン、ゴーストリックの堕天使をＥＸデッキに、ハネクリボーをデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする!!?」
ドローしたカードを見て、私は再び闘志を燃やす。
「……うん。まだ、何も終わってない!!?」
「!!?」
「行くよ、遊陽ちゃん!!?魔法カード、シャッフルリボーン!!?自分フィールドにモンスターが存在しない場合、自分の墓地のモンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、エンドフェイズに除外される!!?戻ってきて、霞鳥クラウソラス!!?」
〈霞鳥クラウソラス〉☆３　鳥獣族　風属性
ＤＥＦ２３００

フィールドに再びクラウソラスが姿を現わす。
「私は金華猫を召喚!!?」
〈金華猫〉☆1　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００
現れたのは霊体になっている猫のモンスター。
「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル1モンスターを特殊召喚するよ!!?戻ってきて、チューナーモンスター、魔轟神獣キャシー!!?」
〈魔轟神獣キャシー〉☆1　獣族　光属性
ＤＥＦ６００
金華猫と戯れ合うようにキャシーが墓地から飛び出してくる。
「チューナーモンスター……ということは!!?」
「私は!!?レベル3、霞鳥クラウソラスに、レベル1、魔轟神と名のついたチューナーモンスター、魔轟神獣キャシーをチューニング!!?」
キャシーが光の輪になり、クラウソラスが小さな星に変わり、光の道になる。
そして光の道が輝くと、その中から現れるのは黒い鎧を纏った白い身体の一角獣。
「混沌の門より出し神獣、その力はあらゆるものを戒める!!?シンクロ召喚!!?可能性を封じる獣!!?魔轟神獣ユニコール!!?」
〈魔轟神獣ユニコール〉☆4　獣族　光属性
ＡＴＫ２３００
「魔轟神獣ユニコール?」

「魔轟神獣ユニコールの永続効果、プリーセプトヴァイアビラティ‼?このカードがフィールド上に表側表示で存在し、お互いの手札が同じ枚数である限り、相手が発動した魔法・罠・効果モンスターの効果は無効化され破壊される‼?」
「えっ⁉?」
「私の手札はさっきのターンに手札に加えたゴーストリックロールシフト。このカードを伏せれば私と遊陽ちゃんの手札は共に0。遊陽ちゃんの発動する効果は全て無効化されるよ」
「っ、なら、今使えばいいだけだよ‼?堕天使ユコバックをリリースして、リバースカードオープン、神属の堕天使‼?」
「……やっぱりユコバックを逃す方法があったんだね」
「このカードは手札及び自分フィールドの表側表示モンスターの中から、堕天使モンスター1体を墓地へ送って発動できて、フィールドの効果モンスター1体を選び、その効果をターン終了時まで無効にし、そのモンスターの攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復するよ‼?遊陽は究極時械神セフィロンの効果を無効化して、その攻撃力分、4000のライフポイントを得るよ‼?」

遊陽　LP1400→5400

「っ、ライフポイントが5400まで……」
「遊花お姉ちゃんの手札はさっき遊花お姉ちゃんが言ったようにゴーストリックロールシフトだけ。これで遊陽のライフポイントは削り切れないね」
「……ううん、まだだよ‼?墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動‼?自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローする。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外する‼?私はフィールドの魔轟神獣ユニコールをEXデッキに戻し、カードを1枚ドローする‼?」
私は深呼吸をすると、デッキの上のカードを握りしめる。

このドローで、デュエルの勝敗が決まる。
お願い、私のデッキ。
もう1度、私の思いに応えて!!?
「すー……はー……ドロー!!?」
勢いよくドローしたカードを、ゆっくりと自分の顔の前に持ってくる。
ドローしたカードを見て、私は満面の笑みを浮かべた。
「……ありがとう、私のデッキ。遊陽ちゃん、このデュエル。私の勝ちだよ!!?」
「えっ!?」
「手札を1枚捨てて、速攻魔法、超融合!!?」
「超融合?」
私が発動したカードに、遊陽ちゃんは首を傾げる。
「このカードは手札を1枚捨てて発動でき、自分・相手フィールドから融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をEXデッキから融合召喚する!!?このカードの発動に対して魔法・罠・モンスターの効果は発動できない!!?私はフィールドの闇属性モンスター、金華猫と、遊陽ちゃんのフィールドの闇属性モンスター、堕天使イシュタムを融合!!?」
「っ!!?遊陽のイシュタムを使って融合!!?」
「守護霊となりし猫よ、堕ちたる天使と交わりて、孤独を壊す力となれ!!?」
フィールドに稲妻を纏った渦が現れ、その中に金華猫とイシュタムが吸い込まれる。
そして渦が弾けると、現れるのは全てを溶かす毒龍。
「融合召喚!!?閉ざされた世界を溶かす毒龍!!?スターヴヴェノムフュージョンドラゴン!!?」
〈スターヴヴェノムフュージョンドラゴン〉☆8　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２８００

「ドラゴンの融合モンスター⁉？」
「スターヴヴェノムフュージョンドラゴンの効果発動⁉？パワースワローヴェノム⁉？このカードが融合召喚に成功した場合、相手フィールドの特殊召喚されたモンスター１体を選び、その攻撃力分だけこのカードの攻撃力をターン終了時までアップする⁉？対象にするのは究極時械神セフィロン⁉？」

スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
ＡＴＫ２８００→６８００

スターヴヴェノムがセフィロンに毒の瘴気を放ち、その力を奪い取る。
「攻撃力……６８００……」
「まだだよ⁉？スターヴヴェノムフュージョンドラゴンの効果発動⁉？スキルスワローヴェノム⁉？１ターンに１度、相手フィールドのレベル５以上のモンスター１体を対象としてターン終了時まで、このカードはそのモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得る⁉？対象は究極時械神セフィロン⁉？」
「えっ？」
スターヴヴェノムが再びセフィロンに毒の瘴気を放ち、次は効果を奪い取る。
それを見て、遊陽ちゃんが不思議そうに首を傾げた。
「究極時械神セフィロンの効果を奪ってどうするの？」
「勿論、効果を使うんだよ。究極時械神セフィロンとなったスターヴヴェノムフュージョンドラゴンの効果発動⁉？リザレクションウィッシュ⁉？１ターンに１度、レベル８以上の天使族モンスター１体を自分の手札・墓地から特殊召喚する事ができる⁉？この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、攻撃力は４０００になる⁉？」
「えっ⁉？遊花お姉ちゃんのデッキってレベル１モンスターのデッキ

のハズなのに、レベル８以上の天使族モンスターなんてどこにも……」
私の言葉に、遊陽ちゃんが狼狽える。
そんな遊陽ちゃんに、私はにっこりと笑いながら、そのモンスターを呼んだ。
「いるんだよ、私のとっておきの相棒が‼？いつまでも、私と共に羽ばたいて‼？ハネクリボーＬＶ９‼？」
「ハネクリボーＬＶ９⁉？」

〈ハネクリボーＬＶ９〉☆９　天使族　光属性
ＡＴＫ？↓４０００

スターヴヴェノムの咆哮に導かれ、フィールドに現れたのは赤き鎧に身を包んだ天使の羽を持つ私の相棒。
ずっと墓地で待たせちゃってゴメンね、相棒。
そんな私の内心を呼んだのか気にしないでと言うように、相棒は身体を振る。
「そんなモンスターいつ……あ、最初の手札抹殺‼？」
「行くよ、バトル‼？スターヴヴェノムフュージョンドラゴンで究極時械神セフィロンを攻撃‼？消失のヴェノムストリーム‼？」
スターヴヴェノムが放つ毒のブレスがセフィロンを飲み込んでいく。
ブレスに飲み込まれて消える瞬間、セフィロンは私と遊陽ちゃんを見て微笑んだ気がした。

遊陽　ＬＰ５４００→２６００

「っ……セフィロン……」
「これで決まりだよ‼？ハネクリボーＬＶ９でダイレクトアタック‼？」
相棒が右手を構えると、集まっていた光の粒子が止まり、赤き鎧が

強く光輝く。
赤き鎧が光輝くと、相棒は空に向けて飛び立ち、空中で一回転すると勢いよく遊陽ちゃんに向かって突撃し、光輝くその右手を振り下ろす。
その右手が当たる瞬間、遊陽ちゃんは嬉しそうで……それでもやっぱり悔しそうな笑みを浮かべた。
「あーあ……負けちゃったなぁ」
「バーサーカークリティカルクラッシュ‼?」

遊陽　ＬＰ２６００→０

ーーーーーーー

「……そこまで、勝者、遊花」
「……ふぅ、何とか勝てた……」
立体映像が消え、私は一息吐く。
しかし、先程までの桜ちゃんとのデュエルとは違い、子供達の声はなく、完全に静まり返っている。
私がそのことに戸惑っていると、遊陽ちゃんが私に近付いてくる。
その顔に浮かんでいたのは……満面の笑みだった。
「凄い‼?やっぱり遊花お姉ちゃんは凄いね‼?デュエルに負けるなんて久しぶり‼?」
「えっ?えっと、ありがとう?」
「ねぇねぇ、遊花お姉ちゃん。もう1回デュエルしよ?今度は遊陽が勝ってみせるから‼?」
「えっ、えっと……」
遊陽ちゃんのあまりの勢いに押されていると、闇先パイが微笑ましいものを見るような目でこちらに近付いてきた。
「遊陽、そこまで。遊陽のチーム戦は終わったけど、遊花は次の子達とのデュエルもあるから」
「あ……ごめんなさい」

満面の笑みを一瞬で曇らせ、しょんぼりとした表情を浮かべる遊陽ちゃんに、私は思わず首を振って、遊陽ちゃんと目線が合うようにしゃがみ込む。
「ううん、気にしないでいいんだよ。それじゃあ、チーム戦が一通り終わったら、またデュエルしようか」
「本当⁉？」
「うん、約束」
「えへへ、ありがとう、遊花お姉ちゃん」
そういって、遊陽ちゃんがぱあっと花が咲いたような笑顔を見せる。
うん、可愛い。
妹がいたらこんな感じなのかな？
「あ、そうだ‼？遊花お姉ちゃん、このカードあげる‼？」
そんなことを考えていたら、遊陽ちゃんがデッキから1枚のカードを取り出し、私の手におく。
「えっ⁉？このカード……」
遊陽ちゃんから渡されたのは……究極時械神セフィロン。
デュエル中に遊陽ちゃんが使用し、私が妙な感覚を感じたモンスター。
私は慌てて究極時械神セフィロンを遊陽ちゃんの手に返す。
「だ、ダメだよ‼？これは遊陽ちゃんのカードなんだから‼？」
「でも、きっとセフィロンも遊花お姉ちゃんに使って欲しがってるよ？だって、デッキに入れてから今まで1度もドローしたことなかったのに、遊花お姉ちゃんとデュエルした時だけドローできたんだもん。きっと、遊花お姉ちゃんに会いたかったんだよ」
「で、でも、セフィロンを貰っちゃうと遊陽ちゃんのデッキが足りなくなるんじゃ……」
「心配いらないよ。セフィロンはたまたま拾ったカードだし、セフィロンを入れるからデッキから外したカードもあるもん」
そういって、遊陽ちゃんが心配はいらないと言うように笑顔を見せる。

私は、改めて究極時械神セフィロンのカードを見る。
……やっぱり、間違いない。
なんでか分からないけど、私はこの子と繋がっている気がする。
この感覚には、覚えがある。
1つは相棒……ハネクリボー達から感じるもの。
もう1つは……絶望神アンチホープや、ダークネオスフィアから感じたものだ。
……この感覚が何なのかは分からないけど、それでも、この子から私を感じるなら……
「……分かった。大切に使わせて貰うね？」
「うん‼？」
遊陽ちゃんから手渡された究極時械神セフィロンをしっかりと握りしめる。
いつか、この感覚が何なのか、分かる日がくるのかな？
そんなことを考えていると、突然子供達の歓声が聞こえてきた。
私が驚いて子供達の方を見ると、子供達はきらきらした目で私を見ていた。
「すげー‼？遊陽に勝っちまった‼？」
「あの姉ちゃんつぇー‼？」
「私もお姉ちゃんとデュエルしてみたい‼？」
「私もー‼？」
「えっ？ええっ？」
「ふふ、遊陽とのデュエルを見て、遊花のことを気に入ったみたいだね」
私が戸惑っていると、闇先パイが嬉しそうに声をかけてくる。
「ありがとう、遊花。遊花なら、遊陽の全力をちゃんと受け止めてくれると思ってた。私だと、正面から叩き潰すことにしかならなくて、どうにもできなかったから。助かった」
「いえ、そんな、私なんて……」
「ん、遊花は自己評価が低いのが悪いところ。もっと誇っていい。これからも、遊陽に構ってあげて欲しい。遊陽は、私の妹みたいなもの

だから」
「闇先パイ……はい、勿論です‼?」
優しい眼差しで遊陽ちゃんを見る闇先パイに、私はしっかりと頷き返す。
そんな私を見て、闇先パイは柔らかく笑った。
「ありがとう、遊花」
「あ……」
「?どうかした?」
その笑顔は本当に一瞬で、すぐにいつもの無表情に戻ってしまったけど……きっと、闇先パイの心からの笑顔だったと思う。
それが何だか嬉しくて、私は思わず笑顔を浮かべながら首を振った。
「いえ、何でもないです」
「そう?ならいい。それじゃあ次のチーム戦もはじめていい?」
「はい‼?今日はとことんデュエルしちゃいますから‼?」
そんなことをいいながら、再び子供達とのチーム戦がはじまる。
遊陽ちゃん達に出会え、闇先パイのことをちょっとだけ知ることができた。
私はそんな幸せを噛み締めながら、日が暮れるまで、子供達とデュエルを行うのでした。

二章　闇より出でしゲーム
第５２話　侵食する夜霧

○

「クソッ、また勝てなかった……」
夜が深まる頃。
ケルンの一角で、１人の男がぶつぶつと悪態をつきながら、人がいない夜道を月明りを頼りに歩いていた。
「アイツがいなければ優勝できたハズなのに、あの野郎、いつもいつも邪魔ばかりしやがって……クソッ‼？」
男の悪態の向く先は、行き着けの店で行われた大会の決勝で戦った同じその店の常連の決闘者。
男が溜息を吐きながら月を見上げると、見上げた月には雲がかかり始め、月明りが隠されていく。
「……はぁ、こんなこと言っても仕方ないか。次こそは絶対にアイツを叩き潰してーーー」
「へぇーお兄さん、いい心の闇を持ってるねー」
「……は？」
ふと、男の耳に透き通った少女のような声が聞こえた。
男が声が聞こえた方向を見ると、近くの路地裏に人影が見えた。
しかし、雲がかかり、月明りが隠されてしまった夜道では、路地裏の闇の中にいる人影の顔は見えなかった。
その人影は、感情がこもっていない笑い声をあげると男に語りかける。
「ふふふ、ようやくちょうど良さそうな決闘者が見つかったかな？お兄さん、喜ぶといいよ。私が貴方に魔法のカードをあげる。これがあれば、貴方の望みは叶う」
「は？何を言ってーーー」
「だから、思う存分……その心の闇を解放してね」

その言葉と共に、人影から男に何かが投げつけられ、男は反射的にそれを受け止める。
男が受け止めた何かに視線をやると、そこにあったのは1枚のカード。
男がカードを認識した、その瞬間ーーー
「っ⁉？ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼？」
カードから黒い何かが放たれ、その何かは男の身体を呑み込んでいき、男の意識を急激に薄れさせていく。
男が絶叫をあげる中、人影は少し残念そうな声を出す。
「うーん、ハズレかーなかなか適合するプレイヤーを見つけるのって難しいなぁ……まあいいや。これはこれでゲームに使えそうだし」
そう人影が呟くと、男を呑み込んでいた黒い何かが男の身体に納まっていき、男がその場で倒れ伏す。
それを見て、人影は雲が流れはじめた空を見上げ、再び感情がこもっていない笑い声をあげると、男に背を向けた。
「ふふふ。それじゃあ、ゲームスタートだよ。思う存分、心の闇の赴くままに暴れてね」
雲が流れ、再び月が顔を出すと、まるで初めからそこには何もなかったかのように、人影が消える。
後に残ったのは、夜道に倒れ伏せ、身体から微細な闇が溢れ出している男だけだった。

ーーーーーーー

☆

「ーーーーお…て……さい」
誰かの声が遠くで聞こえる。
自分がまだ深い眠りの中にいるのが分かる。
「うぅ……し……う……く…き……と……く…て…まい…す」
心地よい揺れに優しい声。

誰だろう？
ダメだ、頭がうまく回らない。
「ゆ…か……ど…？」
「あ……や……ん…い……と……」
「……た……せて」
遠くで先程まで聞こえていた声とはまた別の声が聞こえ、その声の主が近づいてくる気配がする。
「あ……そ…はあ…な……じゃ……」
「ゆ…きな…大丈夫……１０……９……８……７……６……」
しばらくすると、その声の主は俺の耳元でカウントを始める。
一体何を数えて……
「５……４……３……２……１……０」
声の主が０を告げた瞬間、背筋に走る強烈な悪寒。
俺はその感覚に従って、勢いよく布団から転がり出る。
そして布団から転がり出た瞬間に、耳に響いてくる鈍い音。
先程まで俺がいた布団に目をやると、俺の枕に突き刺さっていたのは、裁定などについて書かれている分厚いデュエルモンスターズのルールブックだった。
「おはよ……遊騎」
「……ああ、おはよう、闇」
布団から転がり出た俺を見て、何かを手放した体勢で柔らかな笑みを浮かべている闇が目に入る。
俺は何とか挨拶を返しながら、頭を抑えながら闇に質問をする。
「闇……これは何だ？」
「ん……ルールブック」
「違う。俺が聞きたいのは凶器が何かではなく、それを使用した動機だ」
「遊騎が出勤時間が近づいてきてるのになかなか起きてこないから起こそうと思ったから？」
「何故に疑問形？そして危うく永眠するところだったぞ」

「大丈夫。遊騎なら避けてくれるから」
「……期待が重すぎる」
可愛らしく首を傾げる闇に俺は思わずため息が溢れる。
確かに起きてこなかった俺が悪いのだが、この起こし方はあんまりではないだろうか？
そんな俺に、申し訳なさそうに声をかけてくるのはこの部屋にいたもう1人の人物。
「す、すみません、師匠……闇先パイを止められなくて……」
「いや、遊花は悪くないさ。元はといえば起きれなかった俺が悪いしな。ありがとな、起こそうとしてくれて」
「あ……はい。えへへ」
申し訳なさそうに謝ってくる遊花に感謝の意を込めて頭を撫でると、遊花は嬉しそうに表情を緩ませる。
そんな遊花を横目に俺は部屋の時計に目をやる。
現在の時刻は朝の7時半を回ったところだった。
確かにこれは結構急がないと仕事に間に合わなそうだな。
「取り敢えず、着替えるからリビングで待っててくれ」
「はい‼？闇先パイ、いきましょう」
「ん、待ってるね」
そういって、遊花と闇が部屋を出ていく。
そんな2人を見送りながら、俺は思わず苦笑を浮かべる。
「……この日常にもすっかり慣れちまったな。とにかく、急いで着替えるか」
すっかり遊花達との生活に慣れてしまった自分に苦笑しながら、俺は着替えはじめるのだった。

ーーーーーーー

「それじゃあ、そろそろ行くとするかな」
「ん、私も出る」

「あ、少し待ってください!!?」
リビングでの朝食を終え、仕事があるという闇と共に玄関に向かうと、遊花が足早にキッチンに移動し、小さな包みを2つ持って戻ってくると、俺達にその包みを差し出す。
「これ、お弁当です。今日もお仕事頑張ってくださいね、師匠、闇先パイ」
「……いつもすまないな。ありがたくいただくよ」
「ありがとう、遊花。遊花のお弁当、いつも美味しいから好き。遊花はいいお嫁さんになれる」
「い、いいお嫁さんになれるだなんて……そんなことないですよぅ……」
闇の言葉に遊花は顔を真っ赤にして照れる。
俺も遊花ならいいお嫁さんになれると思うが、言ったら遊花は余計に照れそうだ。
ここは余計なことは言わない方がいいだろう。
「遊花は今日はどう過ごすんだ?今日でデュエルアカデミアの夏休みも終わりだろ?」
今日は8月31日。
夏も終わりを告げ、学生達は再び学校に行き出す頃合いだ。
遊花と初めて出会ったのが7月の初め頃だったことを考えると、もう2ヶ月も経ったのかと、この2ヶ月の内に起こった様々な出来事を思い返すと何だか感慨深くなる。
そんな風に何となくこの2ヶ月のことを思い返していると、遊花は困ったような表情を浮かべた。
「本当は、夏休み最後の日なので、桜ちゃんと何処かに買い物に行こうかなって思ってたんですけど、桜ちゃん、夏休みの宿題がまだ終わってないみたいで……」
「へぇ、学生の頃にはよくある話ではあるが、桜ができてないのは意外だな」
「同感。桜は宿題はきっちり終わらせてるタイプだと思ってた」
意外な事実に驚いた表情を浮かべる俺達に、遊花は苦笑を浮かべな

がら頬を掻く。
「桜ちゃん、ああ見えて勉強は苦手な方なんです。テスト前になるといつも私がテスト勉強を手伝ってあげてますから。だから、今日も私が夏休みの宿題を手伝ってあげるんです」
「そうなのか。そういえば遊花は座学の成績も良かったしな」
「遊花は本当に優秀。それはそれとして、だから桜は今日起きてくるのが遅いの？夜中まで宿題をしてたとか？」
「あーそうじゃなくて、多分普通に寝坊だと思います。桜ちゃん、朝弱いから……」
「……人って見かけによらないよな」
「桜……なんて残念な子」
「あ、あはは……」
俺達は残念なものを見る目で未だに眠っているだろう桜がいる２階に視線をやると、遊花も目を逸らして誤魔化すように笑う。
……うん、これは流石にフォローできんぞ。
「……まあいい。とりあえず、そろそろ出ないと不味いから行くとするよ」
「はい、お帰りは何時ぐらいになりますか？」
「特に用事もないからな……いつも通り１９時ぐらいには帰れると思う」
「私も今日は大した仕事じゃないから、１９時までには帰ってくるね」
「そうですか……分かりました。師匠、闇先パイ、いってらっしゃいです‼？」
「ああ、いってきます」
「ん、いってくる」
笑顔の遊花に見送られ、俺達は玄関を出る。
「……ふふっ」
「？闇、どうかしたのか？」
玄関のドアが閉まり、遊花の姿が見えなくなったところで闇が笑みを漏らし、珍しく思った俺は思わず闇に尋ねる。
そんな俺に、闇は可笑しそうに笑いながら首を振る。

「ううん、ただ、こうやって遊花に見送られるのもすっかり日常になったなって、少し可笑しく思っただけ」
「はは、確かにな。その気持ちは俺にも分かるよ」
闇の言葉に、俺も思わず笑みを浮かべてしまう。
２ヶ月前までは仕事を無くし、住んでいた場所からも追い出され、他人から蔑まれる毎日を過ごしていたというのに、今はこんな俺の弟子になりたいと言ってくれた子と、友人達と一緒に暮らしているというのは、何とも奇妙な出来事で……本当に、人生何が起こるか分からないとはよく言ったものだと思う。
「ん……でも、悪いことじゃない。遊花達はいい子だし、遊騎も一緒にいてくれる。だから、私は幸せ」
「……ああ、そうだな。俺も闇や遊花達がいるこの日常が好きだぜ」
「むふー……嬉しい」
そういって、闇の頭をぽんぽんと軽く叩くと、闇が心から満足そうな笑みを浮かべる。
そんな満足気な闇に苦笑しながらも、何気無い幸せを噛み締めながら、俺達はそれぞれの仕事に向かうのだった。

ーーーーーーーー

「ふぅ、やっぱりまだ暑いな」
午前中に公園で行える掃除が一区切りつき、近くにあるコインロッカーから荷物を取り出してベンチで遊花が作った弁当を食べながら、近くの自動販売機で買ったスポーツ飲料を飲んで一息つく。
世間では夏休みが終わる頃だというのに、まだ太陽は燦々と輝き、俺の体力を奪っていく。
この感じだとまだしばらくの間はこの暑さが続きそうだ。
この暑さのせいか公園にも人は疎らで、人影などほとんどない。
現在公園にいるのはランニングをしている男性と母親と思われる女性と砂場で遊んでいる子供ぐらいだ。
まぁ、こんな暑い日にわざわざ公園にくる人間なんてそうはいない

よな。
「……ん？」
そんなことを考えていると、どこからか視線を感じた。
俺は思わず視線を感じた方向を見るが、そこには公園に植えてある木があるだけで、人影はない。
「……気のせいか？」
俺は首を傾げながら再び弁当を食べ進めるが、しばらくすると再び視線を感じはじめる。
俺は顔を大きく動かさず視線だけを、視線を感じた方向に向けるが、やはりそこには木があるだけで人影はない。
「……」
俺は奇妙な感覚に思わず顔をしかめ、弁当をベンチの上に置き、その木に近づいて木の後ろや木の上を覗き込む。
しかし、やはりそこに人の姿はない。
「……何なんだよ一体……」
俺は頭を掻きながら、自分が座っていたベンチに戻っていく。
すると……
「んん⁉？」
ベンチに戻ると、ベンチの上に置いてあった弁当の中身が明らかに減っていた。
おかずが少し減っており、まだほとんど食べていなかったご飯は半分程消えている。
そして再び木の方から感じる視線。
「……狐につままれている気分だ」
俺はため息を吐きながら昼食を再開した。
視線に関してはこちらを直接害そうとしているわけでないのでもう無視だ。
こんなことでせっかく遊花が作ってくれた弁当を無駄にするのはいただけない。
その後、弁当を食べ終わり仕事を再開してからも何度か視線を感じたが、視線を向けてくる何者かが姿を現わすことはなかった。

そして俺が仕事を終え、近くのロッカーに預けていた荷物を取りに行ってから公園に戻ると、ずっと感じていた視線が無くなっていた。
「はぁ……本当に、何なんだよ一体……」
俺は思わずため息を吐いてしまう。
誰が見ていたのかは結局分からなかったが、どうやら俺を見ていた人間はもういなくなっているようだ。
何が目的だったのかは分からないが、観察するだけして何も仕掛けてこなかったことに、何とも言えないモヤモヤとした感覚がする。
いや、勿論何か仕掛けてこられても困るのだが、こなかったらこなかったで後々何か面倒事になりそうなので、それならば今仕掛けてこられた方がマシだ。
「辺りも暗くなってきたしな……」
すでに8月も最終日。
まだ夏のような暑さが残っているとはいえ、もう日暮れは早くなってきており、空はすっかり夜の闇に覆われている。
出来れば早く帰りたいところだが、俺が気づいていないだけで視線の主がまだいるなら遊花達の身にまで危険を及ぼしてしまうかも知れないと思うと、下手に動きたくない。
「……いっそのこと闇でも呼んで一緒に帰るか？」
闇ならヴェルズ達という強力なボディーガードがいる分、俺よりも頼りになりそうだし、この状況をどうにかする術もありそうだ。
そんな冗談じみたことを考えながら、自身の携帯端末を取り出したところで、俺は目を見開いた。
「は？圏外？」
取り出した携帯端末を見ると、街中にある公園にいるハズなのに端末に圏外という文字が浮かんでいた。
俺はそのことを訝しみ、改めて辺りを見渡し異変に気付く。
「この暗さ……夜の闇じゃない」
辺りは確かに暗くなっているが、よく見ると風に流されて何かが漂っており、その何かが視界を暗く染めていた。
「これは……煙……いや、霧か？」

視界を暗く染めていた何かに触れて見ると、腕に少し水滴がつく。
……これは前言を撤回する必要がありそうだな。
「すでに仕掛けられてたわけか……しかも、凄く面倒臭い相手みたいだな」
この2ヶ月の間に俺も様々な経験をしたため、こんな異常現象が起こっていれば流石に自分がどんな状況にいるかが分かる。
これは……異世界で経験したのと同じような体験だ。
「うわぁぁぁぁぁ!!?」
「っ!?? 何だ!?!?」
異世界での経験を思い返している最中に、耳を劈くような悲鳴が聞こえ、俺の近くに何かが吹き飛ばされてくる。
俺が思わずそちらを見ると、そこには身体中が傷だらけになった男性が横たわっていた。
俺は慌ててその男性に近づいていく。
「おい!!? 大丈夫か!?! 何があった!?!?」
「わ……わからない……友人とデュエルをしてる時に……急に霧が出てきて……霧が……霧が襲ってきて……」
「っ!!? おい、しっかりしろ!!?」
そこまで言ったところで、男性が意識を失って倒れこむ。
これは、思ってた以上にヤバい状況になっているみたいだな。
とりあえず、この男性をどこかにーーー
「ククク、見つけたぞ」
「っ!!?」
声が聞こえてきた方向を見ると、そこには1人の男が立っていた。
黒髪のツイストヘアーのその男はどこにでもいる一般人に見える。
ただ、おかしい点があるとすれば、身体から黒い霧を噴き出させ、狂気に満ちた瞳で笑っているところだ。
そしてこの男が身体から発している霧からする気配には覚えがある。
「……お前がこの異常現象の原因か」
「ネズミが紛れ込んでいたか……まあいい。誰だろうとジャマする

奴は全員叩き潰してやればいいんだ!!?今のオレにはその力があるんだからな!!?」
「……思ってた以上に会話が繋がらないな」
血走った目でデュエルディスクを起動する男に俺は頭を抱えたくなりながらも、デュエルディスクを起動する。
どの道、この霧をどうにかするには霧の発生源であるコイツを倒さないといけないみたいだし、視界が遮られて逃げられない以上、やるしかない。
「いいぜ、やってやる。ただし、叩き潰されるのはお前の方だがな」
「オレが最強になるために、ジャマする奴は誰だろうと叩き潰す!!?」
『決闘!!?』

遊騎　ＬＰ８０００
黒霧男　ＬＰ８０００

ーーーーーーーー

「ククク、先攻はオレだ。オレはモンスターをセット。カードを２枚伏せてターンエンドだ!!?」

遊騎　ＬＰ８０００　手札５
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　ー
ーー??ーー
ーー▲▲ー　ー
黒霧男　ＬＰ８０００　手札２

「俺のターン、ドロー!!?」
俺はドローしたカードを横目に身体から黒い霧を噴き出させ狂ったように笑う怪しげな男を見る。

先程俺の前でボロボロになり意識を失った男性を見る限り、この男とのデュエルは前に俺が戦ったあの黒ずくめのヘンテコヘルメット野郎の時のようにモンスターの攻撃が実体化している可能性が高い。
ならば、相手の準備が整い、攻撃を受ける前にさっさと決着をつける!!?
「相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。来い、H・C（ヒロイックチャレンジャー）強襲のハルベルト!!?」

〈H・C　強襲のハルベルト〉☆4　戦士族　地属性
ATK1800

俺の前に現れたのはハルバードを持った紫の鎧を纏った戦士。
「さらに来い、クィーンズナイト!!?」

〈クィーンズナイト〉☆4　戦士族　光属性
ATK1500

ハルベルトの隣に赤い鎧を身に纏った女性の騎士が現れる。
「バトル!!?H・C　強襲のハルベルトでセットモンスターを攻撃!!?」
「ククク、セットモンスターはおジャマブルーだ」

〈おジャマブルー〉☆2　獣族　光属性
DEF1000

姿を現したのは縦長い顔を持つ青い人型のモンスター。
おジャマデッキか……なかなか厄介なデッキだ。
これは余計に早く終わらさないと面倒なことになりそうだ。
「H・C　強襲のハルベルトの効果、このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ戦闘ダメージを

与える!!?」
「何っ!?」
「貫け、ライトニングハルバード!!?」
ハルベルドは雷を纏ったハルバードでおジャマブルーを貫いた。

黒霧男　ＬＰ８０００→７２００

「クッ……」
「よし、Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトの効果発動!!?このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時にデッキからヒロイックカードを手札に加える!!?」
「!!?やってくれるな。なら、オレはおジャマブルーの効果発動!!?このカードが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、デッキからおジャマカード２枚を手札に加える!!?オレはデッキからおジャマジックとおジャマカントリーを手札に加える!!?」
「面倒なカードが入ったな。だが、こちらもＨ・Ｃ　強襲のハルベルトの効果でデッキからＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）ダブルランスを手札に加える。そしてこれでお前のフィールドは空いた!!?クィーンズナイトでダイレクトアタック!!?クィーンズスラッシュ!!?」
「グッ!!?」
クィーンズナイトが男に斬りかかり、男が鬱陶しそうな声を出す。

黒霧男　ＬＰ７２００→５７００

「まだだ!!?速攻魔法発動!!?ライバルアライバル!!?自分・相手のバトルフェイズに発動でき、モンスター１体を召喚する!!?」
「何!!?」
「来い、キングスナイト!!?」
〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

クィーンズナイトの横に並び立ったのは黄金の鎧を身に纏った騎士。
そしてクィーンズナイトとキングスナイトはお互いに剣を掲げて更なる騎士を呼ぶ。
「キングスナイトの効果発動!!?自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト1体を特殊召喚する!!?集え、絵札の三銃士!!?来い、ジャックスナイト!!?」

〈ジャックスナイト〉☆5　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

クィーンズナイトとキングスナイトの剣に合わせるように剣を掲げる青い鎧の騎士が現れる。
それを見て、男は目を見開く。
「バトルフェイズ中にモンスターを展開してくるだと!?」
「バトルフェイズ中の召喚により2体共攻撃する権利が残っている!!?行け!!?キングスナイトでダイレクトアタック!!?キングススラッシュ!!?」
「チッ!!?」

黒霧男　ＬＰ５７００→４１００

「追撃だ!!?ジャックスナイトでダイレクトアタック!!?ジャックススラッシュ!!?」
「ググッ!!?」

黒霧男　ＬＰ４１００→２２００

キングスナイトとジャックスナイトが交差するように男に斬りか

かり、男のライフは一気に削れる。
　これでライフポイントとしてはこちらが有利になった。
　このまま早めに決着をつけてやる。
「メインフェイズ２!!?斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
「リンク召喚か……」
　俺が正面に手を前に突き出すと、目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター２体!!?俺はクィーンズナイトとキングスナイトの２体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?追想に生きる王女!!?リンク２!!?聖騎士の追想　イゾルデ!!?」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
　ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

　クィーンズナイトとキングスナイトの２体がサーキットの中に消えると代わりに現れたのは金髪と白髪の２人の女性。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?リンクレカレクション!!?リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター１体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキからＨ・ＣＨＩＶＡＬＲＹＣＨＡＬＬＥＮＧＥＲ（ヒロイックチャレンジャー）サウザンドブレードを手札に加える!!?これだけじゃ終わらない!!?聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動!!?メモリーズギフト!!?デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター１体をデッキから特殊召喚する!!?俺はデッキから妖刀竹光、ビッグバンシュート、最強の盾、閃光の双剣―トライス、孤毒の剣を墓地に送り、デッキから２体目のジャックスナイトを特殊召喚!!?」

〈ジャックスナイト〉☆５　戦士族　光属性

ＡＴＫ１９００

「墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える。俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える。俺は光属性レベル５のジャックスナイト２体でオーバーレイ‼？２体の光属性モンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」

２体のジャックスナイトが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けると空から純白の鎧を見に纏った戦士が降りてくる。

「星々を守りし光の戦士‼？セイクリッドプレアデス‼？」

〈セイクリッドプレアデス〉★５　戦士族　光属性

ＡＴＫ２５００

「セイクリッドプレアデスの効果発動‼？ゾディアックリターン‼？オーバーレイユニットを１つ使い、１ターンに１度、相手のカード１枚を手札に戻す‼？この効果は相手ターンでも使用することが出来る‼？俺はお前のセットカード１枚を手札に戻す‼？」

「っ、ならばリバースカードオープン‼？永続罠、おジャマパーティ‼？」

「使ってこなかったから条件を満たしていないのかと思ったが、使わなかっただけか」

「自分・相手のメインフェイズに、デッキからおジャマカード１枚を手札に加え、その後手札を１枚選んで捨てる‼？オレはおジャマレッドを手札に加え、手札を１枚捨てる」

プレアデスが放つ星の弾丸がおジャマパーティを吹き飛ばして男の手札に戻す。

「そして今手札から捨てられたおジャマジックの効果発動‼？このカードが手札・フィールドから墓地へ送られた場合、デッキからおジャマグリーン、おジャマイエロー、おジャマブラックを１体ずつ手

札に加える!!?」
「一気に手札が増えたな……」
男の手札におジャマモンスターが一気に加わり、結果的にはプレアデスの効果による手札戻しも悪手になってしまった。
これは面倒なことになったかもな。
「俺はカードを1枚セットしてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ８０００　手札４
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　○○
ー　☆
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　▲ー　ー
黒霧男　ＬＰ２２００　手札８

「好き勝手してくれやがって、テメェは絶対に叩き潰す!!?オレのターン、ドロー!!?速攻魔法、手札断殺!!?お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送り、その後、それぞれデッキから2枚ドローする!!?」
「手札交換か……」
「ククク、いいものを引いたぞ。まずはフィールド魔法、おジャマカントリーを発動!!?」
男がカードを発動させると、辺りの景色がおジャマ達が生息している集落に変わる。
「オレはおジャマレッドを召喚!!?」

〈おジャマレッド〉☆2　獣族　光属性
ＡＴＫ０

姿を現したのは丸顔の赤い人型のモンスター。
「おジャマレッドの効果発動!!?このカードが召喚に成功した時、手

札からおジャマと名のついたモンスターを４体まで自分フィールド上に攻撃表示で特殊召喚する事ができる‼?現れろ、おジャマグリーン、おジャマイエロー、おジャマブラック‼?」

〈おジャマグリーン〉☆２　獣族　光属性
ＡＴＫ０

〈おジャマイエロー〉☆２　獣族　光属性
ＡＴＫ０

〈おジャマブラック〉☆２　獣族　光属性
ＡＴＫ０

レッドに導かれフィールドに現れる３体のおジャマ達。
……この状況は少しマズイ。
おジャマ達にはあの３体が揃うことで使用できる必殺技がある。
そして発動されたおジャマカントリーには手札を捨てることで墓地に存在するおジャマモンスターを蘇生する効果がある。
そして厄介なのがその蘇生は手札から捨てたモンスターでも可能だと言うこと。
プレアデスでおジャマ達を戻してもあまり意味はない。
「フィールド魔法、おジャマカントリーの効果。自分フィールド上におジャマと名のついたモンスターが表側表示で存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの元々の攻撃力・守備力を入れ替える」

おジャマレッド
ＡＴＫ０→１０００

おジャマグリーン
ＡＴＫ０→１０００

おジャマイエロー
ＡＴＫ０→１０００
おジャマブラック
ＡＴＫ０→１０００

セイクリッドプレアデス
ＡＴＫ２５００→１５００

Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト
ＡＴＫ１８００→２００

フィールドにいたモンスター達の攻守が逆転する。
これがおジャマデッキの厄介なところだ。
俺のデッキには高い攻撃力を持つ代わりに低い守備力を持っているモンスターが結構いる。
そういうモンスター達が現状ではかなり不利になってしまうのだ。
そして男はニヤリと怪しい笑みを浮かべながら恐れていたカードを発動する。
「そして、魔法カード、おジャマデルタハリケーン!!?自分フィールド上におジャマグリーン、おジャマイエロー、おジャマブラックが表側表示で存在する場合、相手フィールド上に存在するカードを全て破壊する!!?」
「っ、やっぱりあったか!!?なら、チェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?ダメージダイエット!!?このターン自分が受ける全てのダメージは半分になる!!?」
「チッ、そんなカードを仕掛けていたか……」
「さらにチェーンしてセイクリッドプレアデスの効果発動!!?ゾディアックリターン!!?オーバーレイユニットを1つ使い、Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトを手札に戻す!!?」
「!!?」

プレアデスが放つ星の弾丸が空間に穴を開け、その穴を潜り抜けてハルベルトが俺の手札に戻ってくる。
これで次のターンの展開も少しは楽になる。
「だがキサマの残りのカードは全て破壊させて貰うぞ‼?」
おジャマ３兄弟がおしくらまんじゅうのように互いのお尻をくっつけ合い、そのまま猛烈な勢いで円を描くよう高速回転して輪を作り、俺のフィールドのカードを囲んで大爆発を起こして吹き飛ばす。
これで俺のフィールドはガラ空きになった。
これは流石にマズイな……
「さあここからが本番だ‼?跪け‼?全てを蹴散らすサーキット‼?」
「リンク召喚か……」
男の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はおジャマモンスターを含む獣族モンスター３体‼?オレはおジャマグリーン、おジャマイエロー、おジャマブラックをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?リンク召喚‼?リンク３‼?おジャマエンペラー‼?」

〈おジャマエンペラー〉ＬＩＮＫ３　獣族　光属性
ＡＴＫ０　↙?←↘?

おジャマ３兄弟がサーキットに吸い込まれ、代わりに現れたのは玉座に座っている紫色のおジャマモンスター。
「おジャマエンペラーの永続効果、エンペラーアソラティー‼?フィールドゾーンにおジャマカントリーが存在する場合、このカードは攻撃力が３０００ポイントアップし、効果では破壊されない‼?」
「っ、この状況で攻撃力３０００か……」

おジャマエンペラー
ＡＴＫ０→３０００

「さらにオレはおジャマカントリーの効果発動!!?・1ターンに1度、手札からおジャマと名のついたカード1枚を墓地へ送る事で、自分の墓地に存在するおジャマと名のついたモンスター1体を特殊召喚する!!?オレは手札のおジャマパーティーを捨てて墓地より蘇れ、おジャマブルー!!?・」

〈おジャマブルー〉☆2　獣族　光属性
ＡＴＫ０↓１０００

再びフィールドに現れるおジャマブルー。
そして男は正面に手をかざす。
「オレはレベル2のおジャマレッドとおジャマブルーでオーバーレイ!!?・2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?・」
「次はエクシーズ召喚か……」
おジャマレッドとおジャマブルーが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると現れたのは筋骨隆々な岩石の戦士。
「現れろ!!?・ガチガチガンテツ!!?・」

〈ガチガチガンテツ〉★2　岩石族　地属性
ＡＴＫ５００↓１８００

「ガチガチガンテツの永続効果、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
自分フィールド上のモンスターの攻撃力・守備力は、このカードのオーバーレイユニットの数×２００ポイントアップする」

おジャマエンペラー
ＡＴＫ３０００↓３４００

ガチガチガンテツ
ＡＴＫ１８００→２２００

「攻撃力３４００……」
「まだだ!!?・魔法カード、トライワイトゾーン!!?・自分の墓地に存在するレベル２以下の通常モンスター３体を選択して選択したモンスターを墓地から特殊召喚する!!?・蘇れ、おジャマグリーン、おジャマイエロー、おジャマブラック!!?」

〈おジャマグリーン〉☆２　獣族　光属性
ＡＴＫ０→１０００→１４００

〈おジャマイエロー〉☆２　獣族　光属性
ＡＴＫ０→１０００→１４００

〈おジャマブラック〉☆２　獣族　光属性
ＡＴＫ０→１０００→１４００

再びフィールドに現れるおジャマ３兄弟。
これは結構なダメージになりそうだな。
「バトルだ!!?・おジャマイエローでダイレクトアタック!!?・イントゥルージャンパンチ!!?・」
「くっ!!?・」

遊騎　ＬＰ８０００→７３００

「次だ!!?・おジャマブラックでダイレクトアタック!!?・イントゥルージャンキック!!?・」
「っ……」

遊騎　ＬＰ７３００→６６００

「まだまだ‼?・おジャマグリーンでダイレクトアタック‼?・イントゥルージャンタックル‼?」
「うっ……」

遊騎　ＬＰ６６００→５９００

おジャマ３兄弟が俺の身体を殴り、蹴り、タックルをかまし、身体に軽い痛みが走る。
クソッ、やっぱりダメージが実体化してるのか。
今のは攻撃力が低いおジャマ３兄弟の攻撃だったからまだ良かったが、これは攻撃を受けすぎるのもマズイな。
「ククク、痛そうだな?・まだ攻撃は終わっていないぞ?・ガチガチガンテツでダイレクトアタック‼?・ガチガチブロー‼?・」
「がっ‼?・」

遊騎　ＬＰ５９００→４８００

ガンテツの重い拳が身体に入り、俺の身体は吹き飛ばされる。
……咄嗟に後ろに飛んで衝撃を殺せたから良かったものの、まともに入ったらあれだけでも洒落にならない。
そしてまだ１番攻撃力が高いモンスターの攻撃が残っている。
「ククク、次はもっと痛いぞ?・おジャマエンペラーでダイレクトアタック‼?・イントゥルージャンアーミー‼?・」
「ぐうっ‼?・」

遊騎　ＬＰ４８００→３１００

おジャマエンペラーが片手をあげると、おジャマエンペラーの周りにおジャマナイトの軍隊が現れ、それぞれが手に持った盾でシールドアタックをかまして消えていった。
「だが、戦闘ダメージを受けた時、Ｈ・Ｃサウザンドブレードの効果発

動!!?このカードが墓地に存在し、戦闘・効果で自分がダメージを受けた時、このカードを墓地から攻撃表示で特殊召喚する!!?」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００→１１００

俺のフィールドに頭巾を被り、背中に何本もの刀を背負った戦士が姿を現わす。
おジャマデルタハリケーンがある可能性を考えてさっきの手札断殺で捨てていたのが役に立ったな。
これで次のターンに繋げることができる。
「ククク……ようやく出番だな」
「っ!!?」
そんな風に考えた俺を見て、男はニヤリと笑う。
そして男が笑うのと同時に男の周りを漂っていた黒い霧が集まりはじめ、俺の身体を悪寒が駆け抜ける。
この感覚……来る!!?
「さあ、キサマに耐えられるかな?オレの攻撃を!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?ワンダーエクシーズ!!?その効果により自分フィールド上のモンスターでエクシーズ召喚を行う!!?」
「っ!!?ここでエクシーズ召喚か!!?」
「オレはレベル２のおジャマグリーン、おジャマイエロー、おジャマブラックでオーバーレイ!!?３体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
おジャマ３兄弟が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、そこに現れたのは白い鉤爪を持ち胴体に牙を持つ獰猛なる悪魔、悪意の霧。
「悪意により生み出されし禁呪の霧よ!!?後悔と絶望を呑み込み具現せよ!!?現れろ!!?Ｎｏ．９６ブラックミスト!!?」

〈Ｎｏ．９６ブラックミスト〉★２　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１００→５００

「Ｎｏ．……やっぱり闇のカードか!!?」
現れたブラックミストを見て、霧から感じていた気配が確信に変わる。
Ｎｏ．という名前がついているなら間違いなく俺が所持しているカードと同じで闇のカードだろう。
そして男の雰囲気が妙なことにもこれで説明がつく。
前に闇に聞いた話だと、闇のカードは使用者の意思を好戦的にしたり破壊衝動を生み出したり、身体を乗っ取ろうとしたりするらしい。
恐らくこの男は闇のカードに適合できずに負の衝動を増幅されているか身体を乗っ取られているパターンなのだろう。
何にせよ、本体が出てきたということは、ここが正念場になりそうだな。
「バトル!!?Ｎｏ．９６ブラックミストでＨ・Ｃ　サウザンドブレードを攻撃!!?」
ブラックミストが身体を黒い霧に変え、サウザンドブレードに迫る。
「攻撃力が低いモンスターで攻撃……ってことは……」
「Ｎｏ．９６ブラックミストの効果発動!!?リグレットガルプ!!?このカードが相手モンスターと戦闘を行う攻撃宣言時に１度、オーバーレイユニットを１つ取り除き、その相手モンスターの攻撃力を半分にし、このカードの攻撃力はその数値分アップする!!?」
「っ!!?攻撃力を吸収するモンスター!!?」
霧になったブラックミストがサウザンドブレードの身体に纏わりつき、サウザンドブレードの身体から力を奪い去り、サウザンドブレードが膝をつく。

Ｎｏ．９６ブラックミスト
ＡＴＫ５００→１０５０

Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード
ＡＴＫ１１００→５５０

「喰らい尽くせ、Ｎｏ．９６ブラックミスト‼?ディスペアシンク‼?」

膝をついたサウザンドブレードの頭上に霧が集まってブラックミストが姿を現し、胴体にある口から闇の波動を放ち、サウザンドブレードを呑み込み、爆散させた。

「ぐっ‼?」

遊騎　ＬＰ３１００→２５５０

爆風により飛び散ったコンクリート片が俺の身体を襲う。

直接当たっていなくてこの衝撃。

ダイレクトアタックなんて受けたらその時点で意識だけでなく、身体も失うことになるだろう。

……コイツは少しばかりヤバいな。

「オレはカードを１枚伏せてターンエンドだ‼?次のターンで決着をつけてやるよ‼?」

遊騎　ＬＰ２５５０　手札５
ーーーーーー　ー
ーーーーー
☆　ー
○○ーーー
ーー▲ーー　▽
黒霧男　ＬＰ２２００　手札０

男ーーーブラックミストはニヤニヤとした怪しい笑みを浮かべて俺を見る。

あれだけ自信満々といった表情を浮かべているということは余程自分のフィールドに自信があるのだろう。
だけど、そんな男の表情を見ても不思議と全然負ける気はしなかった。
こう言っては何だが、この程度の相手に負けるなら、俺は遊花と出会ったこの２ヶ月の間で死んでいるだろう。
そう思える程、遊花と出会ってから、この２ヶ月の間にした経験は、しっかりと俺の中に残っている。
「俺のターン、ドロー‼」
カードをドローした瞬間、俺のＥＸデッキが黒く光る。
……使えって言ってるんだよな。
確かに、相手は闇のカード。
そして今の手札で奴を倒すなら、あのカードを使うのがちょうどいい。
あまり使いたくはないが……
「……仕方がない、乗せられてやるよ。相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しないため、再び来い、Ｈ・Ｃ強襲のハルベルト‼？」
〈Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１８００→２００
「さらに魔法カード、戦士の生還‼？自分の墓地の戦士族モンスター１体を対象としてその戦士族モンスターを手札に加える‼？俺は墓地に存在するＨ・Ｃ　サウザンドブレードを手札に加え、そのままＨ・Ｃ　サウザンドブレードを召喚‼？」
〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００→１１００
「そしてＨ・Ｃ　サウザンドブレードの効果発動‼？１ターンに１度

手札にあるヒロイックカードを捨ててデッキからヒロイックモンスターを特殊召喚する!!?俺は手札にあるＨ・Ｃダブルランスを捨てて、来い、Ｈ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）エクストラソード!!?」

〈Ｈ・Ｃ　エクストラソード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１０００

現れたのは銀色の鎧を身に纏った二刀流の戦士。
俺はその姿を確認してから、３体の戦士に手をかざす。
「俺はレベル４のＨ・Ｃ　強襲のハルベルト、Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード、Ｈ・Ｃ　エクストラソードでオーバーレイ!!?３体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
ハルベルト、サウザンドブレード、エクストラソードが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこから現れるのは異形の存在。
悪魔のような身体に白いツノ、黒い鉤爪を持つ異形の神。
「騎士の魂が宿し紋章よ!!?今こそその魂を示せ!!?現れろ!!?Ｎｏ．６９　紋章神（ゴッドメダリオン）コートオブアームズ!!?」

〈Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズ〉★４　サイキック族　光属性
ＡＴＫ２６００→１４００

「馬鹿な、Ｎｏ．だと!?」
「……よし、特に何ともないな」
前に使用した時のような嫌な感覚で意識が薄れはじめることもなく、俺はホッと息を吐く。
これも前に闇が言っていた１度使ったことで適合割合が上がってることが原因だろうか？
複雑な気持ちだが、使用する度に意識を失いかけるよりかはマシだな。

「まずはエクシーズ素材になったＨ・Ｃ　エクストラソードの効果発動‼?このカードを素材としてエクシーズ召喚したモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする‼?」

Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズ
ＡＴＫ１４００→２４００

「さらにＮｏ．６９　紋章神コートオブアームズの効果発動‼?ロストグローリー‼?このカードが特殊召喚に成功した時、このカード以外のフィールド上の全てのエクシーズモンスターの効果を無効にする‼?」
「何だと⁉?」
「ご自慢の効果、消させて貰うぜ‼?」
コートオブアームズから謎の波動が放たれ、ブラックミストとガチガチガンテツが色を失っていく。

ガチガチガンテツ
ＡＴＫ２２００→１８００

おジャマエンペラー
ＡＴＫ３４００→３０００

Ｎｏ．９６ブラックミスト
ＡＴＫ１０５０→１００

「ついでだ。Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズの効果発動‼?アームズドレイン‼?自分のメインフェイズ時、１ターンに１度、このカード以外のエクシーズモンスター１体を選択し、エンドフェイズ時まで、このカードは選択したモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得る‼?」
「同じ効果を得るだと⁉?」

「対象はガチガチガンテツだ。お前の効果、いただくぜ」
　コートオブアームズの鉤爪から光の糸が現れ、ガチガチガンテツの身体を貫き、力を吸い取っていく。

Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズ
ＡＴＫ２４００→３０００

「っ、攻撃力３０００だと⁉？」
「さてと、こういう時のお約束としては、核となってる奴を倒せば終わりだよな？」
「っ⁉？」
「バトル⁉？ガチガチガンテツとなったＮｏ．６９　紋章神コートオブアームズで、Ｎｏ．９６ブラックミストを攻撃⁉？」
「っ⁉？させるか⁉？リバースカードオープン⁉？罠発動⁉？立ちはだかる強敵⁉？相手の攻撃宣言時に自分フィールド上の表側表示モンスター１体を選択し、発動ターン相手は選択したモンスターしか攻撃対象にできず、全ての表側攻撃表示モンスターで選択したモンスターを攻撃しなければならない⁉？これで攻撃対象をおジャマエンペラーにーーー」
「そんなことだろうと思ったぜ。残念だが通さねぇよ。ライフポイントを半分払い、手札からカウンター罠発動⁉？レッドリブート⁉？」
「何っ⁉？手札からカウンター罠だと⁉？」

遊騎　ＬＰ２５５０→１２７５

「相手が罠カードを発動した時に発動できる⁉？その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする⁉？その後相手はデッキから罠カード１枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンにセットできる。最もこのカード発動後、ターン終了時まで罠カードは発動できないけどな」
「何だと⁉？」
　男の顔が驚愕に歪み、発動しようとしていた立ちはだかる強敵が再

びセットされる。
　これでこのターンに防がれることはない。
「決めろ、Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズ‼？クレストマジェスティ‼？」
　ブラックミストは身体を霧に変えて逃げようとしたがコートオブアームズの鉤爪から光の糸が現れてブラックミストを縛り、ツノからエネルギー波を撃ち込み消滅させた。
「バカなぁぁぁぁぁぁぁ‼？」

黒霧男　ＬＰ２２００→０

ーーーーーーー

「ふぅ……勝った」
　コートオブアームズが放ったエネルギー波により辺りを包んでいた黒い霧が吹き飛び、夜の闇が戻ってくる。
　俺がホッと一息ついていると、コートオブアームズによって吹き飛ばされた男のデッキからカードが１枚、勝手に宙に浮き、凄い勢いで回転しながら俺の元に飛んできた。
「うおっと⁉？」
　咄嗟にそのカードを掴み見て見ると、俺の元に飛んできたのは先程まで男に取り憑いていたブラックミストのカードだった。
　一瞬、ブラックミストから黒い闇が溢れてきそうになったが、闇から貰ったネックレスがブラックミストから溢れ出していた闇を飲み込み、打ち消した。
　それと同時にさっきまで圏外になっていたハズの携帯端末が鳴り始める。
　着信相手はーーー
「もしもし？」
『遊騎、大丈夫？ヘリオロープが遊騎が襲われてるって言ってたから心配した』

「そんなことまで分かるのかよ、このネックレス……ああ、何とかな」
『よかった……』
端末越しに心配そうな声色で話しかけてくる闇に、俺は苦笑しながら応える。
ブラックミストが生み出した霧の中でのデュエルだったためよく分からなかったが、夜の闇は俺が仕事を終えた時よりも深まっている。
思ったよりも長い間あの霧の中にいたみたいだな。
「闇、今から出てこれるか？俺はいいんだが、闇のカードを使ってた奴とその被害者らしき奴が倒れちまっててどうすればいいか分からないんだ」
「ん、今来た」
「……対応が早過ぎるだろ」
端末から視線を公園の入り口の方に向けると、いつも通りの無表情で闇がこちらに向かって歩いてきていた。
おそらく、連絡を取りながらもこちらに向かってきていたのだろう。
それでもタイミングを狙ってたみたいで少し驚いたが。
闇は俺の近くで倒れていた2人の男に近づいて何かを確認すると、懐からインヴェルズオリジンのカードを取り出して先程ブラックミストに吹き飛ばされた男のデュエルディスクにセットすると、インヴェルズオリジンから闇が溢れ出しデュエルディスクごとその男を包み込んでいく。
闇はそのまま男のデュエルディスクを操作し、男を包んでいたインヴェルズオリジンの闇が消えると、セットしたインヴェルズオリジンを抜き取りこちらに戻ってきた。
「これでよし。帰ろ、遊騎」
「いやいやいや、この人達をこのまま放置するわけにもいかないだろ」
「大丈夫。デュエルディスクの通報装置を発動させたから時期にデュエルセキュリティが来る。面倒な事はアイツらにやらせればいい」

「でもな……」
「だって、ここにいて正直に話すと遊騎が犯人にされちゃうよ？インヴェルズオリジンを使ってその人の記憶とデュエルディスクには細工をしたけど、最後にデュエルをしたのは遊騎だから名乗り出たら間違いなく遊騎が犯人にされる。アイツらは闇のカードなんて信じないだろうし」
「うぐっ……」
闇の言葉に俺は言葉を詰まらせる。
確かに客観的に見れば最後にデュエルしたのが俺でこうなってるのだから間違いなく俺が犯人だよな。
実際、襲われた不可抗力とはいえコートオブアームズで吹き飛ばして気絶させたのは俺なんだし。
「遊騎のそういう素直なところ、私は好き。だけど、それで遊騎が辛い目に会うのは嫌。それに遊騎がそんなことで捕まったら、遊花は悲しむよ」
「……分かったよ」
「ん、それでよし。それじゃあ、帰ろ」
そういって闇が俺の手を引いて歩き出す。
闇に手を引かれながら、俺は闇に問いかける。
「手慣れてる感じだったけど、闇はいつもこんなことしてるのか？」
「うん。前も話したけど、ヴェルズ達は負の感情を食べるから闇のカードに取り憑かれた人達にはちょうどいいの。さっきの人も闇のカードに取り憑かれた原因はもう1人の倒れてた人にデュエルで勝てないことに対する小さな悪感情を増幅させられたみたい」
「コイツそんなことしたのかよ」
「それが遊騎が倒した闇のカード？」
さっきから握りっぱなしになっていたブラックミストのカードに視線をやる。
俺の言葉に、闇がブラックミストのカードを覗き込む。
すると、ブラックミストを見た闇は怪訝そうな表情を浮かべた。
「ん……またＮｏ．……」

「また？まあ、確かに俺が今まで手に入れたのもＮｏ．って種類だったけど……」
「違う。遊騎のことじゃない。実は最近、闇のカードを所有して暴走してる人に出会うことが明らかに増えてるの」
「そうなのか？」
「ん、しかも１ヶ月前ぐらいまでは１週間に１度あるぐらいだったのに、ここ最近は１日に２～３戦戦うこともあるぐらいで、ちょっと異常」
「……それは確かにちょっと異常だな」
闇の言葉に俺が眉をひそめと、闇はさらに言葉を続ける。
「うん。そして最近出会う闇のカードで１番多いのがその『Ｎｏ．』って種類の闇のカード。最初は偶然かとも思ったけど、そう思うには少し出会い過ぎてる。まるで……誰かが意図的にばら撒いてるみたい」
「……なぁ、それってもしかして……」
俺の脳裏に２ヶ月前にコートオブアームズを狙って俺を襲ってきたあの黒ずくめのヘンテコヘルメット野郎が思い浮かぶ。
あの男は、確かロンゴミアントを使った際に『私の才能を注いで作り上げた新しいカード』だと言っていた。
そして『新しいカードを作り上げることなど造作もない』とも。
俺の考えていることが分かったのか、闇はこくりと頷く。
「ん、目的は分からないけど、多分犯人は遊騎を襲った奴だと思う。闇のカードが増えはじめたのは遊騎が襲われてからしばらくしてからだし、そのカードもほとんどが『Ｎｏ．』という名前のカードだっていうのは偶然とは思えない」
「……だよな」
「これでも一応、遊騎達に被害が出る前にと空いてる時間で犯人を探してはいたんだけど……結局、間に合わなかったね……」
闇が少し落ち込んだかのように肩を落とす。
そんな闇の言葉に、俺は首を振りながら闇の頭をぽんぽんと軽く撫でる。

「気にするなよ。お前は色々と忙しいのに、それでも俺達のことを考えて犯人探しをしてくれたんだ。ありがとな、闇」
「遊騎……ん、どういたしまして」
たった1人で頑張ってくれていた闇にお礼を言うと、闇は目を丸くし、それから柔らかい笑顔を浮かべた。
それにしても、問題は闇のカードの所有者が増えてきているということだ。
1度身体を乗っ取られかけたからよく分かる。
闇のカードはとても危険なものだ。
闇みたいに使いこなせているならともかく、先程の男みたいに使いこなせずに暴走した場合、近くにいた人間にどんな被害が出るかは分かるない。
そして闇のカードによる暴走が誰かの意図したもので無差別に引き起こされているというのであれば、その被害は俺の身近な存在にも及ぶかもしれないということだ。
それに、俺は1度闇のカードをばら撒いている原因であるであろう男と戦い、闇のカードを入手している。
今まで接触が無く、さっきのデュエル自体は偶発的に起こったものだったとしても、再び襲われないとも限らない。
いや、もしかすると公園で昼間に感じたあの謎の視線はあの男かその仲間のものであった可能性だってある。
それならば……俺が取るべき行動はーーー
「なぁ、闇」
「ん？」
「俺も手伝うよ。闇のカードをばら撒いてる奴を探すの」
「……やっぱり、遊騎ならそう言うと思った」
俺の言葉を予想していたのか、闇が少し困ったような表情を浮かべる。
「危ないよ？」
「それはお前だって同じだろ」
「私は……強いから」

「お前が強いことは知ってるけど、それと心配しないかは別だろ。お前は俺の大切な友達で……家族だと思ってる。お前が俺のことを心配してくれるように、俺が闇が危険なことに首を突っ込むことを放っておけるわけないだろ」
「……むぅ、凄く嬉しいから困る……ん、分かった。私も明日からは少し忙しくなりそうだし、遊騎も探してくれるなら助かる。だけど、無理はしちゃダメ」
「分かってるよ。俺も短い期間で2度も入院することになりたくないからな」
冗談めかした俺の言葉に、闇が少し笑みをこぼす。
色々と面倒な事になったが、俺達の日常を守るためなら致し方ないことだよな。
「そういえば、明日から忙しくなるって何があるんだ？別にまだプロリーグも大詰めってわけじゃないだろ？」
「ん……遊騎なら話してもいい。少し前に無理を通させて貰ったお礼をするってだけのお話だけど。実はねーーー」
そんな俺の質問に、闇は悪戯っ子のような笑みを浮かべながらその問いに応える。
闇が告げたその応えに、俺は思わず目を丸くするのだった。

ーーーーーーー

★

「ふぁ～……眠い……」
「もう、桜ちゃん。今日から2学期なんだからちゃんとしないと」
「分かってるわよ……ふぁ～」
眠たそうに欠伸をしながら目を擦る桜ちゃんに私は苦笑する。
今日から2学期、再びデュエルアカデミアでの学園生活が始まる。
前までは長期休暇が終わるとデュエルをしなければならないデュエルアカデミアに行くことに憂鬱な気分になっていたけど、今は違

う。
　そんな私達の後ろから聞き覚えのある声が聞こえてくる。
「おはよう、遊花、桜」
「よ、遊花、桜」
「あ、霊華さん、大地君!!?おはよう!!?」
「おはよう……霊華、九石……」
「桜は今にも眠りそうね」
「あはは、桜ちゃん、朝弱いから」
　話しかけてきた霊華さんと大地君に、私は笑顔で挨拶を返す。
　……昔は絶対に考えられなかったけど、こうして、友達にまた会えることが凄く嬉しい。
「それにしても早く始業式終わらねぇかな?」
「ケルン校は小中高一貫のマンモス校だから、全校を一箇所に集めるとそれなりに時間はかかるから仕方ない」
　退屈そうに頭の後ろで腕を組んでいる大地君に、霊華さんがそう告げる。
　実際、ケルン校では生徒の数が多すぎるため別室でモニターを使って集会を行うことの方が多い。
　全校がこうして体育館に集まるのはこういう始業式や終業式のような日のみ。
　人混みに酔いそうになってしまうため、大地君の早く終わって欲しいという気持ちも分かる。
　まあ、多分大地君は退屈だから早く終わって欲しいんだろうけど。
『全校生徒が揃いましたので、ただ今より始業式を開始します』
「あ、始まるね」
　始業式の開始を告げる先生のアナウンスが聞こえてきたため、会話を切り上げて壇上を見つめ、淡々と進行していく始業式に意識を傾ける。
　そして、学生にとっては1番眠くなる時間である校長先生のお話が終わろうとした時、校長先生が私達が驚くことになるその言葉を口にする。

「さて、今学期は、デュエルアカデミアの生徒の能力向上を願い、特別講師として2人の講師が新しい次代の決闘者達の力になりたいと、我が校で講義を行いたいと申し出てくれたため、新しく必修科目の特別講義を行ってくれることになったので、君達に紹介したいと思う」
「必修科目の特別講義を行う特別講師？」
「珍しいわね、必修科目の特別講義なんて」
校長先生の言葉に、生徒達はざわつき始め私も桜ちゃんと一緒に首を傾げる。
特別講師自体そう珍しいことではない。
様々なカリキュラムの中から自分が学びたい戦術や召喚方法などによって好きな授業を受けれるようになっているメジャー制度を取り入れているこのケルン校では、講義ごとに専門の特別講師が付いているため、講師の数はかなり多い。
それでも、2学期という年度の中間に位置するこの時期に必修科目を教える講師が入ってくるというのは今までには無いパターンだった。
「まずは1人目の講師を紹介しよう。世界的に活躍しているカードデザイナー、天神　幻騎（あまがみ　げんき）君だ」
校長先生に紹介されて壇上に登ったのは柔和な笑みを浮かべる黒髪をオールバックにした男性。
「皆さんこんにちは、カードデザイナーの天神　幻騎です。私の経験が新たな時代に向かうデュエルに関係する皆さんの力になればと思い、今回、カードデザイン学という講義を担当させて貰うことになりました。どうぞ、よろしくお願いします」
天神さんが頭を下げると、体育館に拍手の音が響く。
天神さんが壇上の端に下がると、校長先生が再び話し始める。
「それでは2人目の講師を紹介しよう。次に紹介する講師は君達も知っているだろうプロ決闘者だ。彼女はこのケルン校の卒業生であり、今回は自身の後輩にあたる決闘者達の役に立てればと多忙にも関わらず名乗り出てくれた。それでは早速壇上に上がって貰おう」
校長先生の言葉に、壇上に上がっていく1人の少女。

「えっ⁉？」
「嘘でしょ⁉？」
その姿に私と桜ちゃんは思わず声を上げてしまう。
壇上に上がったのは黒髪でショートボブの小柄な女性。
その表情を氷のように固まり、変わることない無表情。
「それでは紹介しよう。世界ランキング２位のプロチーム、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に所属し、現世界ランキング４位のプロ決闘者ーーー『氷の女王』冬城　闇君だ」
校長先生の紹介に小柄な少女ーーー闇先パイは、いつも通りの無表情で口を開いた。
「冬城　闇……デュエル学の実技を担当することになりました……どうぞ、よろしくお願いします」

第５３話　吹雪の戦場

○

「冬城　闇……デュエル学の実技を担当することになりました……どうぞ、よろしくお願いします」

闇の言葉に体育館にいる生徒達が騒めき始める。

その騒めきに秘められている感情は様々だ。

驚愕、歓喜、疑念、疑惑。

そんな騒めきの中でも闇の表情は変わらない。

そしてそんな騒めきを掻き消すように校長である紫煙は言葉を紡ぐ。

「静粛に。君達から疑念の声が上がるのも当然だ。彼女はチームとしては世界ランキング２位、個人としても世界ランキング４位であり、毎日のように数々の大会で優勝している超一流のプロ決闘者。そんな多忙な彼女がこの学校の講師として働くということが信じられない、本物ではないのではないかと疑う気持ちも分かる」

生徒達の騒めきは最もだというように紫煙は頷く。

そしていかにも名案があるというように、その言葉を口に出す。

「だからこそ、ここは決闘者らしい方法で、彼女が本物であるということを証明したいと思う。これから３０分後、デュエル場の中央フィールドにて私と闇君のエキシビションマッチを行う‼？」

紫煙の言葉に会場は大きく騒めき始める。

デュエルアカデミア・ケルン校の校長を務めている紫煙は引退したとはいえプロ決闘者としてプロリーグで活躍していた決闘者だ。

現在はケルン校の校長という立場にいるため、そのデュエルが見られるという機会はそうそう訪れるものではない。

そして、そんな校長の対戦相手は眉唾物ではあるが現世界ランキング４位のプロ決闘者かも知れない人物なのだ。

滅多に見ることが出来ない引退した元プロ決闘者と、現世界ランキング４位のプロ決闘者かも知れない人物とのデュエル。

生徒達の期待が高まるのは当然だった。
「それでは、これにて始業式を終了する。生徒達は教員の誘導にしたがって速やかにデュエル場の中央フィールドに移動するように」
そんな紫煙の言葉で締めくくられ、波乱の始業式が終了する。
流行る気持ちを抑えられず、教員の誘導よりも早く中央フィールドに向けて駆け出す生徒が続出したどころか、誘導をそっちのけで駆け出す教員まで続出したのは、仕方がないことだろう。

ーーーーーーー

★

「何というか、大変なことになったわね……」
「そうだね……」
教員に誘導され、中央フィールドに移動した私と桜ちゃんは疲れたようにため息を吐く。
そんな私達を見て、中央フィールドに移動する際に合流した紅葉さんと天雷君が苦笑を浮かべる。
「その様子では、冬城プロはお二人に自身がデュエルアカデミアの講師を始めるということを話してはおられなかったようですね」
「まあ、冬城さんは忙しい人だから、伝えるのを忘れてたんじゃないかな？」
「分かってないわね、天雷……闇のことだから、間違いなく確信犯よ」
「絶対に私達を驚かせる為に黙ってたんです。間違いないです……」
「あ、あはは……そこまで断言できちゃうんだ」
疲れた表情でそう断言する私達を見て、天雷君は引き攣った笑みを浮かべる。
天雷君達は師匠と闇先パイが私の家に住んでいることは知らないから、闇先パイの性格から想定したんだろうと思ってるんだろうけ

ど、そんなことはない。
何故なら、闇先パイは今朝出かける際に言った言葉は「仕事に言ってくる」という言葉だけで、デュエルアカデミアに来るなんて一言も言ってなかったのだ。
だからこそ、こうしてデュエルアカデミアに講師として来ることを黙っていたのは私達を驚かせたかったことに他ならない。
「それにしても闇さんと校長先生のデュエルとかどんなデュエルになるんだろうな？」
「闇さんの強さはこの前の大会で十分見せて貰ったけど、校長先生も現役時代は世界ランキングでも上位にいたと聞いてる。だからこそ、想像がつかないわ」
大地君が楽しそうに笑いながら、霊華さんは興味深そうにそんなことを言う。
私も、普段から闇先パイとデュエルをしているから闇先パイの強さはよく分かっているつもりだ。
だけど、プロ決闘者としてプロリーグで行なっている闇先パイのデュエルというのは、実は見たことがない。
だからこそーーー
『それでは、これよりデュエルアカデミア・ケルン校、武者小路　紫煙校長と特別講師、プロ決闘者、冬城　闇のエキシビションマッチを行う!!?』
中央フィールドにデュエル開始のアナウンスが流れ、生徒達から歓声が上がる中、中央フィールドの中心で校長先生と闇先パイが向かい合う。
初めて見るプロ決闘者としての闇先パイの姿とこれから起こるであろう白熱したデュエルに、私は心を踊らせるのだった。

ーーーーーーー

○

『それでは、これよりデュエルアカデミア・ケルン校、武者小路　紫煙校長と特別講師、プロ決闘者、冬城　闇のエキシビションマッチを行う‼?』
「むぅ……客寄せパンダになった気分……いつもの衣装よりはマシだけど……」
　歓声が上がるデュエル場の中央で、講師らしくオーダーメイドの黒いスーツに身を包んだ闇が無表情ながらも少し困ったような雰囲気で口を開く。
　そんな闇を見て、対戦相手である紫煙は面白そうに笑みを浮かべる。
「ははは、普段から大勢の観客の前でデュエルをしているプロ決闘者が今更何を言ってるんだい?プロ決闘者としての衣装でデュエルをしている時よりは視線も少ないだろうに」
「……抜けろ」
「何て恐ろしい呪詛を口にするんだい⁉?」
　闇の言葉に紫煙が思わず頭を抑え、それを見て闇がニヤリと笑う。
　そんな闇の様子を見て、紫煙は思わずため息を吐く。
「全く……闇君は本当に相変わらずだね。プロ決闘者になってからも対戦相手に失礼なことばかり言うんじゃないかと気が気じゃなかったよ」
「誰の毛が無いって?」
「言ってるそばからこれだからね‼『気が気じゃない』って言ったんだよ‼?」
「『薄毛もない』?」
「薄毛くらいはあるよ‼?」
「えっ……ご愁傷様です」
「ははは、それくらいにしないと叩き潰すぞ?」
　輝く頭皮に青筋を浮かべながら笑っていない目で闇を見る紫煙に、闇は目を閉じると無表情ながらも真剣な雰囲気を感じさせる力強い目で紫煙を見返す。
「上等。やれるものならやってみるといい。私だっていつまでも小娘

というわけじゃない」
「っ、驕れる者久しからずという言葉を知らないのかい？」
「威張り散らしてる者は遠からず没落する、でしょ？それなら問題なし。私は自分の力に自信があるだけ。それに久しくなる程時間も経ってない、まだまだ花盛り」
「口が減らないところは、本当に昔から変わらないね。ならばその言葉が本当かどうか試させて貰おうか‼？」
　その紫煙の言葉を皮切りに、両者はデュエルディスクを起動して構えると、戦いの始まりを告げる言葉を口にした。
『決闘‼？』

闇　ＬＰ８０００
紫煙　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は私だね。早速いかせてもらおう。永続魔法、六武の門を発動するよ」
「むぅ……いきなり面倒なカードが出てきた」
　思わず顔を顰める闇に紫煙は朗らかに笑う。
「ははは、闇君相手に手加減なんてすればすぐにやられてしまうからね。こちらだって全力でいくさ。六武の門は六武衆モンスターが召喚・特殊召喚される度にこのカードに武士道カウンターを２つ置き、自分フィールドの武士道カウンターを取り除いた数で違う効果を発動できる。２つでフィールドの六武衆効果モンスターまたは紫炎効果モンスター１体の攻撃力をターン終了時まで５００ポイントアップし、４つで自分のデッキ・墓地から六武衆モンスター１体を選んで手札に加え、６つで自分の墓地の紫炎効果モンスター１体を特殊召喚できる」
「相変わらず厄介な効果……」
「さあ、戦を始めるとしよう。私は真六武衆―カゲキを召喚‼？」

〈真六武衆―カゲキ〉☆３　戦士族　風属性
ＡＴＫ２００

六武の門
武士道カウンター０→２

紫煙の前に現れたのは背中につけた機械の腕で４本の刀を構えている侍。
現れたカゲキは大声で叫び仲間を呼ぶ。
「真六武衆―カゲキの効果発動!!?このカードが召喚に成功した時、手札からレベル４以下の六武衆モンスター１体を特殊召喚する。来なさい、影六武衆―キザル!!?」

〈影六武衆―キザル〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１９００

六武の門
武士道カウンター２→４

カゲキの後ろに現れたのは刀を逆手に持った忍者。
「影六武衆―キザルの効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した時、自分フィールドに存在する属性以外の六武衆モンスター１体をデッキから手札に加えるよ。私はデッキから水属性の影六武衆―ハツメを手札に加える。さらに真六武衆―カゲキは永続効果で自分フィールドに以外の六武衆モンスターが存在する場合、このカードの攻撃力は１５００ポイントアップするよ」

真六武衆―カゲキ
ＡＴＫ２００→１７００

「永続魔法、六武の門の効果発動!!?このカードに置かれている武士道カウンターを4つ取り除き、デッキから真六武衆―キザンを手札に加えるよ」

六武の門
武士道カウンター4→0

「むぅ、モンスターは増えるのに手札がなかなか減らないのが六武衆のズルいとこ」
「ははは、それじゃあ行こうか。雄叫びを上げろ、開戦を告げるサーキット!!?」
紫煙が正面に手を前に突き出すと、目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター2体!!?私は真六武衆―カゲキと影六武衆―キザルの2体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?聖騎士の追想　イゾルデ!!?」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

カゲキとキザルの2体がサーキットの中に消えると代わりに金髪と白髪の2人の女性が現れる。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター1体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。私はデッキから大将軍　紫炎を手札に加える。さらに聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター1体をデッキから特殊召喚する。私はデッキから妖刀竹光、

団結の力、魔導師の力、やり過ぎた埋葬を墓地に送り、デッキから影六武衆―ドウジを特殊召喚!!?」

〈影六武衆―ドウジ〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１７００

六武の門
武士道カウンター０→２

イゾルデに導かれ、フィールドに現れたのは銃を構えた忍者。
「墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える。私はデッキから黄金色の竹光を手札に加える。まだまだいくよ、自分フィールドに真六武衆―キザン以外の六武衆モンスターが存在する場合、真六武衆―キザンは手札から特殊召喚できる!!?来なさい、真六武衆―キザン!!?」

〈真六武衆―キザン〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１８００

六武の門
武士道カウンター２→４

ドウジの側に黒い鎧を見に纏った侍が現れる。
「影六武衆―ドウジの効果発動!!?このカードが既にモンスターゾーンに存在する状態で、自分フィールドにこのカード以外の六武衆モンスターが召喚・特殊召喚された時、デッキから六武衆カード１枚を墓地へ送る。私はデッキから真六武衆―シナイを墓地に送る。さて、１度手札交換といこうか。魔法カード、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローする!!?私は４枚、闇君は５枚捨てて同じ枚数ドローだよ」
「相変わらず、動きに無駄が無い……」

「これでも元プロ決闘者だからね。さあ、良いものもドローすることができたし、ここからが本番だ。雄叫びを上げろ、開戦を告げるサーキット!!?」
「またリンク召喚……」
紫煙が正面に手を前に突き出すと、目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は六武衆モンスターを含む戦士族モンスター2体!!?聖騎士の追想　イゾルデと真六武衆―キザンの2体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?軍を率いて出陣せよ!!?リンク2!!?六武衆の軍大将!!?」
〈六武衆の軍大将〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　地属性
ＡＴＫ１０００　↙?　↘?
六武の門
武士道カウンター4→6
イゾルデとキザンがサーキットの中に姿を消すと、フィールドに背中に2本の刀を背負いながら、1本の大刀を持った侍が現れる。
「六武衆の軍大将の効果発動!!それにチェーンして影六武衆―ドウジの効果も発動するよ。影六武衆―ドウジの効果で私はデッキから真六武衆―エニシを墓地に送るよ。そして六武衆の軍大将の効果、このカードがリンク召喚に成功した場合、手札を1枚捨ててデッキから武士道カウンターを置く効果を持つカード1枚を手札に加えるよ。私は手札を1枚捨ててデッキから六武衆の結束を手札に加え、そのまま永続魔法、六武衆の結束を発動。このカードも六武衆モンスターが召喚・特殊召喚される度にこのカードに武士道カウンターを1つ、最大2つまで置き、武士道カウンターが置かれているこのカードを墓地へ送ることでこのカードに置かれていた武士道カウンターの数だけ、自分はデッキからドローすることができる」
「むっ、まだ手札を増やしてくるか……」

「まだまだ展開させて貰おう。魔法カード、ソウルチャージ‼?自分の墓地のモンスターを任意の数だけ対象としてそのモンスターを特殊召喚し、自分はこの効果で特殊召喚したモンスターの数×１０００ライフポイントを失う。ただし、同名カードは１ターンに１枚しか発動できず、このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行えない」

「今は先攻１ターン目だからバトルフェイズも何もないでしょ……」

「私は墓地から真六武衆―カゲキ、真六武衆―シナイ、真六武衆―エニシを特殊召喚し、３０００ポイントのライフを失うよ」

〈真六武衆―カゲキ〉☆３　戦士族　風属性
ＡＴＫ２００→１７００

〈真六武衆―シナイ〉☆３　戦士族　水属性
ＡＴＫ１５００

〈真六武衆―エニシ〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１７００

六武の門
武士道カウンター６→８

六武衆の結束
武士道カウンター０→１

六武衆の軍大将
武士道カウンター０→１

紫煙　ＬＰ８０００→５０００

紫煙のライフが削られる代わりに、紫煙を守るように3人の侍が現れる。
「六武衆の軍大将の永続効果でこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、このカードのリンク先に六武衆モンスターが召喚・特殊召喚される度に、このカードに武士道カウンターを1つ置くよ。そしてまた六武衆モンスターが特殊召喚されたことで影六武衆―ドウジの効果で私はデッキから影六武衆―フウマを墓地に送るよ。そして再び永続魔法、六武の門の効果発動!!?·このカードに置かれている武士道カウンターを4つ取り除き、墓地から真六武衆―ミズホを手札に加えるよ」

六武の門
武士道カウンター8→4

「そして今手札に加えた真六武衆―ミズホは自分フィールドに真六武衆―シナイが表側表示で存在する場合、手札から特殊召喚する事ができる。来なさい、真六武衆―ミズホ!!?·」

〈真六武衆―ミズホ〉☆3　戦士族　炎属性
ＡＴＫ１５００

六武の門
武士道カウンター4→6

六武衆の結束
武士道カウンター1→2

六武衆の軍大将
武士道カウンター1→2

シナイに寄り添うように赤い鎧の女武者が現れる。

「そしてまた六武衆モンスターが特殊召喚されたことで影六武衆―ドウジの効果で私はデッキから六武衆の影武者を墓地に送るよ。さらに永続魔法、六武衆の結束の効果でこのカードを墓地へ送りデッキから2枚ドローするよ」
「むぅ……1ターン目だからって好き勝手動いて……」
「ははは、悪いねぇ。だけどこの手札なら闇君のターンは回ってこないかも知れないね」
「むっ？」
「魔法カード、ブーギートラップ。同名カードは1ターンに1枚しか発動できず、手札を2枚捨て、自分の墓地の罠カード1枚を対象としてこのカードは発動することができる。対象にした罠カードを自分フィールドにセットし、この効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できるようになる。私は手札を2枚捨てて墓地から罠カード、忍の六武をセットするよ」
「‼？そのカードは確か……」
「さあいくよ、罠発動、忍の六武‼？このカードは自分フィールドに六武衆モンスターが6体存在し、その属性が全て異なる場合のみ発動することができるかなり発動が難しいカードだ。ただし、その分このカードは強力な効果を秘めている。その効果は次の相手ターンをスキップするのさ‼？」
「……本当に容赦がない」
「私のフィールドには地属性の六武衆の軍大将、風属性の真六武衆―カゲキ、炎属性の真六武衆―ミズホ、水属性の真六武衆―シナイ、光属性の真六武衆―エニシ、そして闇属性の影六武衆―ドウジの6属性の六武衆モンスターが揃っている。これで闇君の次のターンはスキップだ‼？」
　紫煙が発動した忍の六武から鎖の立体映像が現れ、闇の身体とデュエルディスクを縛り、その光景を見て会場から響めきが起こる。
　デュエルアカデミアケルン校、校長、元プロ決闘者、武者小路　紫煙。
　その実力は実戦から遠ざかってなお健在であり、プロ決闘者を相手

に一方的に追い詰めることができるということを生徒達は理解する。
それだけの実力を見せつけながらも、紫煙は表情を緩めない。
何故なら、これだけの戦術を見せてさえーーー闇の表情は一切変わらないのだから。
「ははは、これでも闇君の表情は変えられないか」
「驚いてはいる……というより、むしろやり過ぎとまで思う。私の実力を見させるつもりないでしょ？」
「そういうわりには動揺した素ぶりすら見せないじゃないか」
「当然……私は強いから」
闇の自信に満ち溢れたその言葉に、紫煙は面白そうに笑みを浮かべる。
自分の教え子であった少女が確かな自信を持って自分と相対している。
その事実が、年甲斐も無く紫煙を高ぶらせる。
「ははは、ならばその強さを存分に見せて貰おうじゃないか。そのためにも、一切の手加減はしないよ」
「元々してない癖に……御託はいいからデュエルを進める」
「そうさせて貰うよ。私はフィールドにいる風属性の真六武衆―カゲキ、炎属性の真六武衆―ミズホ、水属性の真六武衆―シナイの属性が異なる六武衆モンスター3体を墓地に送ることでこのカードをＥＸデッキから特殊召喚できる‼？」
紫煙の言葉にカゲキ、ミズホ、シナイの3体が粒子に変わり、フィールドに残った六武衆達の影に溶けていく。
そして影から飛び出てくるのは光り輝く忍び装束を着た忍者。
「六武の影に生きる忍びの長‼？影六武衆―リハン‼？」

〈影六武衆―リハン〉☆5　戦士族　光属性
ＡＴＫ２４００

六武の門
武士道カウンター6→8

六武衆の軍大将
武士道カウンター2→3

「特殊な条件で出せる融合モンスター……忍者の癖に全然忍んでない」
「それは言わないお約束さ。六武衆モンスターが特殊召喚されたことで影六武衆―ドウジの効果で私はデッキから六武衆―ニサシを墓地に送るよ。さらにレベル4、六武衆モンスターの真六武衆―エニシと影六武衆―ドウジでオーバーレイ!!?2体の六武衆モンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
「今度はエクシーズ召喚……」
エニシとドウジが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこにいたのは赤い鎧に身を包んだ仮面の侍。
「戦乱の世を治める魔王の影!!?六武衆の影―紫炎!!?」

〈六武衆の影―紫炎〉★4　戦士族　地属性
ＡＴＫ２５００

六武の門
武士道カウンター8→10

六武衆の軍大将
武士道カウンター3→4

「さて、十分動いたことだし、私はこれで1度ターンエンドとしよう」

闇　ＬＰ８０００　手札５
ー－－－－－　ー
－－－－－－

☆　ー
○○ー○ー
ーー△ーー　ー
紫煙　ＬＰ５０００　手札１

「私のターン……忍の六武の効果でスキップされる」
「それにより再び私のターンだ、ドロー‼?……ふむ、このカードか。ならば、永続魔法、六武の門の効果発動‼?六武衆の軍大将に置かれている武士道カウンターを４つ取り除き、墓地から真六武衆―カゲキを手札に加えるよ」

六武衆の軍大将
武士道カウンター４→０

「墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動‼?自分フィールドのカード１枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから１枚ドローする。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を１枚除外する‼?私はフィールドの六武衆の軍大将をＥＸデッキに戻し、カードを１枚ドローするよ」
「手札抹殺……いや六武衆の軍大将かブーギートラップの時かな」
「私は再び永続魔法、六武の門の効果発動‼?このカードに置かれている武士道カウンターを４つ取り除き、墓地から影六武衆―ハツメを手札に加えるよ」

六武の門
武士道カウンター１０→６

「私は真六武衆―カゲキを召喚‼?」

〈真六武衆―カゲキ〉☆３　戦士族　風属性

ＡＴＫ２００→１７００

六武の門

武士道カウンター６→８

「真六武衆―カゲキの効果発動!!?・来なさい、影六武衆―ハツメ!!?・」

〈影六武衆―ハツメ〉☆４　戦士族　水属性

ＡＴＫ１６００

六武の門

武士道カウンター８→１０

カゲキの後ろに現れたのは苦無を持ち、桃色の着物に青いマフラーをつけたくノ一。

現れたハツメはさらに仲間を呼び寄せる。

「影六武衆―ハツメの効果発動!!?・自分の墓地及び自分フィールドの表側表示モンスターの中から、六武衆モンスター２体を除外し、影六武衆―ハツメ以外の自分の墓地の六武衆モンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?・私は墓地の六武衆―ニサシと真六武衆―エニシを除外して、チューナーモンスター、六武衆の影武者を特殊召喚!!?・」

〈六武衆の影武者〉☆２　戦士族　地属性

ＤＥＦ１８００

六武の門

武士道カウンター１０→１２

現れたのは甲冑を纏った緑色の服を着た侍。

その姿を見て、闇は一瞬面白そうに表情を緩めた。

「チューナーモンスター……それなら次は……」
「勿論、シンクロ召喚さ。私は!!?レベル3、六武衆モンスター、真六武衆―カゲキに、レベル2、戦士族チューナー、六武衆の影武者をチューニング!!?」
六武衆の影武者が光の輪になり、カゲキが小さな星に変わり、光の道になる。
そして光の道が輝くと、その中から現れるのは紫色のオーラを放つ赤い鎧を纏った侍。
「戦乱の世を治める為、夢幻の力を知らしめろ!!?シンクロ召喚!!?戦乱が生んだ冷徹なる魔王!!?真六武衆―シエン!!?」

〈真六武衆―シエン〉☆5　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２５００

六武の門
武士道カウンター１２→１４

「真六武衆―シエン……校長の切り札か……」
「これだけではないよ。永続魔法、六武の門の効果発動!!?六武の門に置かれている武士道カウンターを6つ取り除き、自分の墓地の紫炎効果モンスター1体を特殊召喚できる!!?さあ蘇れ、戦乱の世を治め、人々に安寧をもたらす天下御免の大将軍!!?大将軍　紫炎!!?」

〈大将軍　紫炎〉☆7　戦士族　炎属性
ＡＴＫ２５００

六武の門
武士道カウンター１４→８

現れたのは赤紫のオーラを放つシエンに似た赤い鎧を纏った侍。
「むっ、次は漢字の紫炎……」

「さて、これで仕上げとしようかな。永続魔法、六武の門の効果発動‼?このカードに置かれている武士道カウンターを４つ取り除き、デッキから六武衆の師範を手札に加えるよ」

六武の門
武士道カウンター８→４

「そして自分フィールドに武衆モンスターが存在するとき、六武衆の師範は特殊召喚できる。来なさい、六武衆の師範‼?」

〈六武衆の師範〉☆５　戦士族　地属性
ＡＴＫ２１００

六武の門
武士道カウンター４→６

紫煙のフィールドに眼帯をつけた白髪の老人が現れ、紫煙のモンスターゾーンが６体のモンスターにより再び埋まる。
これだけモンスターを展開してなお紫煙の手札は３枚も残っている。
げに恐ろしきは六武の門のサーチ効果と六武衆の展開能力。
そしてこの布陣の恐ろしいところは展開されているモンスターの数だけではない。
「闇君なら知っているね。真六武衆―シエンの効果、天下布武は１ターンに１度、相手が魔法・罠カードを発動した時にその発動を無効にし破壊する。そして大将軍　紫炎の効果、天下静謐はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は１ターンに１度しか魔法・罠カードを発動できない」
「つまり、私は１ターンに１度しか魔法・罠は使えず、致命的な魔法・罠ならそれを無効にすることができるということ……」
「そして真六武衆―シエンと大将軍　紫炎はどちらもフィールドのこ

のカードが戦闘・効果で破壊される場合、代わりに自分フィールドの六武衆モンスター1体を破壊できる。そうそう簡単には突破できないよ」
「……」
「最もそれが効果を発揮するのはこのターン闇君が生き残れればの話だけどね。六武衆の影―紫炎の効果発動!!?偽・天下布武!!?1ターンに1度、オーバーレイユニットを1つ取り除き、自分フィールドの攻撃力２０００未満の六武衆モンスター1体を対象としてそのモンスターの元々の攻撃力はターン終了時まで２０００になる!!?この効果は相手ターンでも発動できるよ。私はこの効果で影六武衆―ハツメの攻撃力を２０００にするよ」

影六武衆―ハツメ
ＡＴＫ１６００→２０００

六武衆の影―紫炎の鼓舞によりハツメの攻撃力が上がる。
これで総攻撃力は１４１００。
闇のライフポイントを完全に削りきることができる。
「さあ、闇君は耐えられるかな?バトル!!?真六武衆―シエンでダイレクトアタック!!?六天魔王斬!!?」
シエンが刀を振るい、紫のオーラを纏った斬撃を闇に放つ。
放たれた斬撃に、闇は無表情のまま1枚のカードを掲げると、フィールドに鐘の音が鳴り響き、斬撃が霧散した。

〈バトルフェーダー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

「あまり私を舐めないで。バトルフェーダーの効果発動。相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードを手札から特殊召喚し、その後バトルフェイズを終了するわ。この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される」

「おやおや、止められてしまったね。確かにモンスター効果は止められないが、闇君のデッキにモンスター効果の防御カードは少ないと思っていたんだがね」
　そういいながらも特に驚いた様子も見せない紫煙に、闇は表情をほんの少しだけ緩ませて胸を張る。
「最近、防御特化の後輩が増えたから……教えてるだけじゃなくて、私だってその子から学んで変わってる。前にも話したハズ、私も少しは成長してる。いつまでも、学生気分の小娘じゃない」
「ははは、成る程ね。彼女が君の影響を受けているように、君も彼女の影響を受けているというわけだ。メインフェイズ2、私はカードを1枚伏せ、エンドフェイズに、シャッフルリボーンの効果で手札を1枚除外してターンエンドだ」

闇　ＬＰ８０００　手札４
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　□　ー　ー
○　ー
○○○○○
ー　ー　△　▲　ー　ー
紫煙　ＬＰ５０００　手札１

「長かった……ようやく私のターン」
　そう呟いて、闇は改めてフィールドを見る。
　紫煙のフィールドにはシエン、紫炎、リハン、六武衆の影―紫炎と言った六武衆の切り札達が勢揃いしている。
　そのうえ戦線を維持する蘇生効果を持つハツメ、相手による効果破壊時に墓地の六武衆を回収することができる六武衆の師範、そして何より六武衆を展開する限り次の六武衆をいくらでも手札に加え、紫炎を蘇生することができる六武の門がある。
　この布陣の厄介なところはどれか単体を破壊したところで大したダメージにはならないところだ。

そして切り崩すことができなければ再び同じ布陣が展開され、そのまま連続攻撃を受けて敗北することになる。
「どうしたんだい？私の六武衆に怖気付きでもしたかな？」
「怖気付く？冗談、むしろその逆」
「逆だって？」
ドローもせずに考え込んでいた闇に紫煙が尋ねると、そのような答えが返ってきて紫煙は不思議そうな表情を浮かべる。
そんな紫煙に、闇は無表情を少しだけ崩し、楽しそうな笑みを浮かべた。
「校長が私に対して全力でデュエルをしてるのが伝わってくる。だからこそ……全力でデュエルをする校長を、私も遠慮なく倒しにいける」
「‼？」
「心が躍るね……私のターン、ドロー。魔法カード、闇の誘惑。自分はデッキから２枚ドローし、その後手札の闇属性モンスター１体を除外する。そして手札に闇属性モンスターが無い場合、手札を全て墓地へ送る」
「ドローカードか……いいだろう。闇の誘惑は無効にしない。その代わり、大将軍　紫炎の効果でこのターン、闇君はもう魔法・罠カードを発動できないよ」
「構わない。私はデッキから２枚ドローし、手札からヴェルズサンダーバードを除外する……ふふっ、なかなか運がいい。闇の誘惑でドローしたチューナーモンスター、彩宝龍の効果発動」
「むっ‼？」
「彩宝龍の効果、このカードがデッキから手札に加わった場合、このカードを相手に見せて、このカードを特殊召喚する。おいで、彩宝龍」
〈彩宝龍〉☆５　海竜族　水属性
ＤＥＦ２６００
闇のフィールドに水晶のように透き通った輝きを放つ水竜が現れ

る。
　それを確認してから闇は楽しそうに正面に手をかざす。
「私は、レベル1、バトルフェーダーに、レベル5、チューナーモンスター、彩宝龍をチューニング」
　彩宝龍が光の輪になり、バトルフェーダーが小さな星に変わり、光の道になる。
　光の道が輝くと、その中から現れるのは氷の身体を持った長い体躯の龍。
「闇に導かれた氷槍は、世界の全てを凍て付かせる。シンクロ召喚。希望を凍り付かせる氷竜。氷結界の龍ブリューナク」

〈氷結界の龍ブリューナク〉☆6　海竜族　水属性
　ＡＴＫ２３００

「氷結界の龍ブリューナク……確かにこの状況ではかなり厄介なモンスターだね」
「氷結界の龍ブリューナクの効果発動、フリージングワールド。同名カードは1ターンに1度、手札を任意の枚数墓地へ捨て、捨てた数だけ相手フィールドのカードを対象としてそのカードを持ち主の手札に戻す。私は手札を2枚捨てて真六武衆―シエンと大将軍　紫炎を手札に戻す」
　ブリューナクが翼を振るうと、猛烈な吹雪が吹き荒れはじめる。
「破壊ではないから確かに真六武衆―シエンと大将軍　紫炎じゃ防げない。だが、その効果を通すかどうかはまた別の話さ。ライフポイントを１５００支払い、カウンター罠、神の通告‼？」
「むっ」

紫煙　ＬＰ５０００→３５００

「ライフポイントを１５００支払うことで2つの効果を発動することができる。モンスターの効果が発動した時にその発動を無効にし破

壊するか、自分または相手がモンスターを特殊召喚する際にその特殊召喚を無効にし、そのモンスターを破壊する効果だ。当然、この状況ではモンスターの効果が発動した時にその発動を無効にし破壊する効果が発動し、氷結界の龍ブリューナクは破壊されるよ」
　吹雪を放っていたブリューナクに天から雷が降り注ぎ、ブリューナクの身体を貫いて爆散させる。
「これで闇君はブリューナクだけではなく使える手札を2枚失った。そのうえ魔法・罠カードももう発動できない。残り2枚の手札でこの状況をどうにかできるのかい？」
「余裕。これで校長のセットカードは無くなった。後は全てを吹き飛ばすだけ。私はレスキューラビットを召喚」

〈レスキューラビット〉☆4　獣族　地属性
ＡＴＫ３００

　闇の目の前にヘルメットを被ったうさぎのモンスターが現れる。
　現れたレスキューラビットは空高く跳び上がってそのまま姿を消す。
「レスキューラビットの効果、フィールドのこのカードを除外して、デッキからレベル４以下の同名の通常モンスター2体を特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに破壊される。私はヴェルズヘリオロープを2体特殊召喚」

〈ヴェルズヘリオロープ〉☆4　岩石族　闇属性
ＡＴＫ１９５０

　代わりに空中から落ちてきたのは2体の禍々しい闇を纏った岩石の戦士。
　現れたヘリオロープを見て紫煙は興味深そうに目を細める。
「ほう、噂として聞いてはいたがしばらく見ない間に禍々しいモンスターを使うようになったね」

「私はレベル４のヴェルズヘリオロープ２体でオーバーレイ。２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚」
２体のヘリオロープが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空からフィールドに降り立ったのは赤い複眼に黒い星座が描かれたマントのような羽根がつき、胸にヴェルズのマークが描かれた悪魔。
「闇より生まれ、闇を払いし星の王子、ランク４、励輝士ヴェルズビュート」

〈励輝士ヴェルズビュート〉★４　悪魔族　光属性
ＡＴＫ１９００

「また見たこともないモンスターだね。そのモンスターがこの状況を覆すのかい？」
「ん、励輝士　ヴェルズビュートの効果発動、エキシトンフラッシュ。自分メインフェイズまたは相手バトルフェイズに、相手の手札・フィールドのカードを合計した数が自分の手札・フィールドのカードを合計した数より多い場合、オーバーレイユニットを１つ取り除いて発動できる。このカード以外のフィールドのカードを全て破壊する」
「っ⁉？何だって⁉？」
「ただしこの効果の発動後、ターン終了時まで相手が受ける全てのダメージは０になる。私の手札とフィールドにあるカードは２枚、校長は８枚。私の方が少ないため、フィールドのカードは全て破壊させてもらう」
ヴェルズビュートが胸の前で拳を突き合わせると、ヴェルズビュートの腹部にある赤い宝石から光が放たれ、紫煙のフィールドに降り注ぐと、六武衆達が跡形も無く消え去った。
「確かに真六武衆―シエンと大将軍　紫炎はどちらもフィールドのこのカードが戦闘・効果で破壊される場合、代わりに自分フィールドの六武衆モンスター１体を破壊できる。だけど、それはあくまでも永続

効果による身代わり。同時に全てのモンスターを破壊してしまえば、身代わりはできない」
「くっ……まさかそんな強力なエクシーズモンスターがいるとはね……だが、破壊された六武衆の師範の効果発動!!?このカードが相手の効果で破壊された場合、自分の墓地の六武衆モンスター1体を対象としてそのモンスターを手札に加える。私は墓地に存在する真六武衆―カゲキを手札に加える!!?」
「これで一先ず逆転した。私はカードを1枚伏せてターンエンド」

闇　ＬＰ８０００　手札０
ー▲ー　ー
ーーーー
ー　○
ーーーー
ーーーー　ー
紫煙　ＬＰ３５００　手札２

「まさかあのフィールドを全て吹き飛ばされるとはね。私のターン、ドロー!!?私は真六武衆―カゲキを召喚!!?」

〈真六武衆―カゲキ〉☆３　戦士族　風属性
ＡＴＫ２００

「真六武衆―カゲキの効果発動!!?」
「それもいい加減通さない。チェーンしてリバースカードオープン。永続罠、エンペラーオーダー。モンスターが召喚に成功した時に発動するモンスターの効果が発動した時、その発動を無効にし、無効にされたプレイヤーは1枚ドローする。私は真六武衆―カゲキの効果を無効にして1枚ドローさせる」
「っ、そんなカードが伏せられていたのか……エンペラーオーダーの効果で1枚ドローするよ」

紫煙が苦虫を噛み潰したような表情でカードをドローする。
カゲキの効果でチューナーを呼び出し、ヴェルズビュートを破壊する予定だったが無効化されてしまっては、ヴェルズビュートを倒せないどころか攻撃力が２００しかないカゲキをそのままにしなければならない。
そのうえエンペラーオーダーにより手札が増えたことで再びヴェルズビュートの効果が発動できるようになっている。
無理に動こうとしてもこのままでは再びヴェルズビュートにより全てを破壊されてしまうのだ。
「世界ランキング４位は伊達ではないね。私はカードを１枚伏せてターンエンドだ」

闇　ＬＰ８０００　手札０
ーーー△ーーー　ー
ーーーーーー
ー　　○
ーー○ーー
ーー▲ーー　ー
紫煙　ＬＰ３５００　手札２

「私のターン、ドロー……バトル。励輝士ヴェルズビュートで真六武衆―カゲキを攻撃。ビュートクラッシュ」
ヴェルズビュートが腹部にある赤い宝石に左手をかざすと、ヴェルズビュートの左手に光り輝く白いサーベルが現れる。
サーベルを手にしたヴェルズビュートはカゲキに向かって跳び上がると、サーベルでカゲキの身体を貫き、深く押し込んでから引き抜いてカゲキに背を向ける。
サーベルで貫かれたカゲキはヴェルズビュートが背を向けると光に包まれ、爆散した。

紫煙　ＬＰ３５００→１８００

「ん、あと少し。メインフェイズ2、カードを1枚伏せてターンエンド」

闇　ＬＰ８０００　手札０
ーー△▲ー　ー
ーーーーー
ー　○
ーーーーー
ーー▲ーー　ー
紫煙　ＬＰ１８００　手札２

「ははは、まさかここまで追い詰められるとは……本当に、成長したね、闇君。学生時代の君からでは考えられないぐらいに」
「……言ったハズ、私も少しは成長してる」
本当に嬉しそうに笑う紫煙に闇は無表情ながらも警戒する。
紫煙はそんな闇に苦笑しながらも力強い目で闇を見据える。
「だけど、これでも私はデュエルアカデミアの校長だからね。そう簡単に負けるわけにはいかない」
「それぐらい分かってる。だからこそ、私も全力が出せる」
「そうかい。ならば、逆転させて貰うとしよう。私のターン、ドロー‼?自身のライフポイントを１００にし、リバースカードオープン‼?罠発動‼?究極背水の陣‼?」
「‼?そのカードは……なら、チェーンしてリバースカードオープン。罠発動、ダメージダイエット。このターン自分が受ける全てのダメージは半分になる」

紫煙　ＬＰ１８００→１００

「フリーチェーンの防御カードか。まあ構わないさ。究極背水の陣は自分のライフポイントを１００になるように払って発動でき、自分の

墓地の六武衆と名のついたモンスターを同名カードは1枚までで可能な限り特殊召喚する!!さあ、蘇りなさい、歴戦の勇士達よ!!?影六武衆―キザル!!?影六武衆―ハツメ!!?六武衆の師範!!?影六武衆―リハン!!?真六武衆―シエン!!?」

〈影六武衆―キザル〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１９００

〈影六武衆―ハツメ〉☆４　戦士族　水属性
ＡＴＫ１６００

〈六武衆の師範〉☆５　戦士族　地属性
ＡＴＫ２１００

〈影六武衆―リハン〉☆５　戦士族　光属性
ＡＴＫ２４００

〈真六武衆―シエン〉☆５　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２５００

紫煙のフィールドに、５体の六武衆が姿を現わす。
「影六武衆―キザルの効果発動!!?」
「この状況なら普通のドローで魔法カードを引かれる方が怖い。その効果は無効化しない」
「ならば私はデッキから炎属性の影六武衆―ゲンバを手札に加える。雄叫びを上げろ、開戦を告げるサーキット!!?」
紫煙が正面に手を前に突き出すと、目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は六武衆モンスターを含む戦士族モンスター２体!!?六武衆の師範と影六武衆―キザルの２体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?再び軍を率いて出陣せよ

‼?・リンク2‼?・六武衆の軍大将‼?・」

〈六武衆の軍大将〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　地属性
ＡＴＫ１０００　↙?　↘?

「六武衆の軍大将の効果発動‼私は手札を1枚捨ててデッキから六武の門を手札に加え、再び発動‼?・」
「っ、厄介なものを……」
「まだまだここからさ。影六武衆―ハツメの効果発動‼?・墓地に存在する影六武衆―ドウジと六武衆の師範を除外し、蘇りなさい影六武衆―キザル‼?・」

〈影六武衆―キザル〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１９００

六武の門
武士道カウンター０→２

六武衆の軍大将
武士道カウンター０→１

「再び影六武衆―キザルの効果発動‼?・今度は風属性の影六武衆―フウマを手札に加える。私は影六武衆―ゲンバを召喚‼?・」

〈影六武衆―ゲンバ〉☆２　戦士族　炎属性
ＡＴＫ２００

六武の門
武士道カウンター２→４

六武衆の軍大将

武士道カウンター1→2

現れたのは身体中に火薬の詰められた竹筒を付けた忍者。

「影六武衆―ゲンバの効果発動!!?このカードが召喚に成功した時、除外されている自分の六武衆モンスター1体をを手札に加える!!?私は除外されている六武衆の師範を手札に加えるよ。そして私はフィールドにいる地属性の影六武衆―キザル、炎属性の影六武衆―ゲンバ、水属性の影六武衆―ハツメの属性が異なる六武衆モンスター3体を墓地に送り、忍者らしく分身の術といこうじゃないか。EXデッキより2体目の影六武衆―リハンを特殊召喚する!!?」

〈影六武衆―リハン〉☆5　戦士族　光属性

ＡＴＫ２４００

六武の門

武士道カウンター4→6

六武衆の軍大将

武士道カウンター2→3

紫煙の言葉にキザル、ゲンバ、ハツメの3体が粒子に変わり、フィールドに2体目のリハンが現れる。

「さて、そろそろ厄介ものにはご退場いただこうかな。まずは永続魔法、六武の門の効果発動!!?このカードに置かれている武士道カウンターを4つ取り除き、墓地から六武衆の真影を手札に加えるよ」

六武の門

武士道カウンター6→2

「影六武衆―リハンの効果発動!!?光縛拳!!?1ターンに1度、手札及び自分フィールドの表側表示のカードの中から、六武衆カード1枚

を除外し、フィールドのカード1枚を対象として除外する!!?私は手札の影六武衆―フウマを除外して励輝士ヴェルズビュートを除外する!!?」

リハンが印を結ぶと、リハンの掌に光の球体が現れ、リハンがヴェルズビュートに突撃して、光の球体をヴェルズビュートに押し当てると、ヴェルズビュートは光の球体に呑まれて消滅する。

「っ、ゴメンね、ヴェルズビュート……」

「さあ、まだまだいくよ。自分フィールドに武衆モンスターが存在するとき、六武衆の師範は特殊召喚できる。来なさい、六武衆の師範!!?」

〈六武衆の師範〉☆5　戦士族　地属性

ＡＴＫ２１００

六武の門

武士道カウンター2→4

六武衆の軍大将

武士道カウンター3→4

「再び永続魔法、六武の門の効果発動!!?このカードに置かれている武士道カウンターを4つ取り除き、墓地から真六武衆―キザンを手札に加えるよ」

六武の門

武士道カウンター4→0

「そして2体目の影六武衆―リハンの効果発動!!?光縛拳!!?手札の真六武衆―キザンを除外してエンペラーオーダーも除外する!!?」

2体目のリハンによりエンペラーオーダーも消滅する。

これで闇のフィールドは完全にガラ空きになってしまった。

だが、まだ紫煙の攻撃は終わらない。
「速攻魔法、六武衆の影忍術‼?自分フィールドのモンスター1体を墓地へ送り、除外されている自分の六武衆モンスター1体を特殊召喚する‼?六武衆の師範を墓地に送り、現れなさいチューナーモンスター、影六武衆―フウマ‼?」

〈影六武衆―フウマ〉☆1　戦士族　風属性
ＤＥＦ１８００

六武の門
武士道カウンター０→２

六武衆の軍大将
武士道カウンター４→５

六武衆の師範の姿が消え、代わりに現れたのは風魔手裏剣を持った忍者。
そしてフウマに寄り添うように周りに霊魂を漂わせた赤い鎧の侍が現れる。

〈六武衆の真影〉☆４　戦士族　闇属性
ＤＥＦ２０００

六武の門
武士道カウンター２→４

「自分が影六武衆モンスターの召喚・特殊召喚に成功した時、手札から六武衆の真影は特殊召できる」
「チューナーとレベル４の六武衆……ということは……」
「私は‼?レベル４、六武衆モンスター、六武衆の真影に、レベル１、戦士族チューナー、影六武衆―フウマをチューニング‼?」

六武衆の真影が光の輪になり、フウマが小さな星に変わり、光の道になる。
そして光の道が輝くと、その中から現れるのは紫色のオーラを放つ赤い鎧を纏った2体目の侍。
「戦乱の世を治める為、夢幻の力を知らしめろ‼？シンクロ召喚‼？戦乱が生んだ冷徹なる2人目の魔王‼？真六武衆―シエン‼？」

〈真六武衆―シエン〉☆5　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２５００

六武の門
武士道カウンター4→6

六武衆の軍大将
武士道カウンター5→6

「っ、2体目の真六武衆―シエン……」
「さて、これで仕上げだ。永続魔法、六武の門の効果発動‼？六武の門に置かれている武士道カウンターを6つ取り除き、自分の墓地の紫炎効果モンスター1体を特殊召喚できる‼？さあ再び蘇れ、戦乱の世を治め、人々に安寧をもたらす天下御免の大将軍‼？大将軍　紫炎‼？」

〈大将軍　紫炎〉☆7　戦士族　炎属性
ＡＴＫ２５００

六武の門
武士道カウンター6→0

「さて、これで一通り動き終わったね。六武衆の軍大将の永続効果、このカードの攻撃力は自分フィールドの武士道カウンターの数×１０

０ポイントアップするよ」

六武衆の軍大将
ＡＴＫ１０００→１６００

「それじゃあバトルだ。六武衆の軍大将でダイレクトアタック‼？六連斬‼？」
「っ……」

闇　ＬＰ８０００→７２００

六武衆の軍大将が大刀を振り回し、闇を６回連続で斬りつける。
「続けていくよ、１体目の影六武衆―リハンでダイレクトアタック‼？忍烈光斬‼？」
「うっ……」

闇　ＬＰ７２００→６０００

「さらに２体目の影六武衆―リハンでダイレクトアタック‼？忍烈光斬‼？」
「っ、まだまだ平気……」

闇　ＬＰ６０００→４８００

２体のリハンが光を纏った忍刀で闇の身体を斬り裂き、素早くその場を飛び退くと、２体のリハンの後ろから２体のシエンが紫のオーラを纏った斬撃を闇に放つ。
「まだまだ終わらないよ‼？１体目の真六武衆―シエンでダイレクトアタック‼？六天魔王斬‼？」
「くっ……」

闇　ＬＰ４８００→３５５０

「追撃だよ。２体目の真六武衆―シエンでダイレクトアタック‼？六天魔王斬‼？」

「くぅ……結構効くね……」

闇　ＬＰ３５５０→２３００

「まだ最後の攻撃が残っているよ‼？大将軍　紫炎でダイレクトアタック‼？紫炎大斬刀‼？」

「ぐっ……」

闇　ＬＰ２３００→１０５０

紫炎が繰り出した紫色の炎を纏った斬撃により、闇のライフポイントが一気に削られ、闇が厳しい表情を浮かべる。

そんな闇を見て、紫煙は表情を緩めながらターンを進める。

「十分な戦果だね。さて、このままでは危ないかも知れないから保険をかけておこう。メインフェイズ２、魔法カード、一時休戦。お互いのプレイヤーは、それぞれデッキから１枚ドローし、次の相手ターン終了時まで、お互いが受ける全てのダメージは０になるよ」

「っ、よりによってここでそれ……」

削られたライフポイントと紫煙との圧倒的なまでの戦力差、そして一時休戦によるダメージの無効化という状況に、闇は表情を硬くする。

紫煙のフィールドには六武衆の軍大将と２体のリハンとシエン、そして紫炎が存在する。

これにより魔法・罠は２回まで無効化されるうえに使用できてもターンに１回のみ。

おまけに耐えようとしてもリハンによりその術を除外されてしまう。

紫煙のライフポイントはたったの１００だが、その１００を削るのがあまりにも遠い。
「私はこのままターンエンドだ。さあ、追い詰めたよ。この状況を覆せるかな？」

闇　ＬＰ１０５０　手札１
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
☆　ー
○○○○○
ーー△ーー　ー
紫煙　ＬＰ１００　手札１

ーーーーーーー

★

「ちょっ、校長先生ってあんなに強かったの⁉？」
「元プロ決闘者だということは存じておりましたが、まさか冬城プロが押される程とはお強いとは思いませんでしたね」
「うん。校長先生、凄く強い」
闇先パイと校長先生のデュエルを見て、みんなが口々にそう呟く。
校長先生のフィールドを闇先パイが完全に破壊したかと思えば校長先生はすぐにそれ以上のフィールドを整えて闇先パイを追い詰めてしまった。
これが元プロ決闘者だった校長先生の実力。
２人の息もつかさぬ接戦に、私は思わず圧倒されてしまった。
「この状況は流石に闇さんも厳しいか？」
「校長先生のフィールドには魔法・罠の使用に制限をかける大将軍紫炎と、魔法・罠を無効にする真六武衆―シエンが２体いる。それに対して闇さんはフィールドにカードはなく手札も１枚。おまけに一

時休戦の効果で次のターンが終わるまでダメージを与えることができない。これは流石に闇さんでも覆すのは厳しいと思う」
２人のデュエルを見て、大地君と霊華さんがそう言葉を漏らす。
そんな２人の言葉を、みんなが肯定するかのように口を噤む。
確かに、この状況はどう見ても闇先パイの方が不利だ。
校長先生の圧倒的なフィールドをドローを含めてのたった２枚の手札で攻略するのはかなり厳しいと思う。
だけど、それでもーーー
「ううん、闇先パイは勝つよ」
「遊花？」
私の言葉に桜ちゃんは困ったような表情を浮かべ、みんなもきょとんとした表情を浮かべる。
そんな桜ちゃん達に、私は笑顔を浮かべながら確かな自信を持って笑顔で口を開く。
「だって……闇先パイは、強いから」
私の言葉に、みんなが目を丸くして、思わず闇先パイの方を見る。
そこにはいつもの無表情を崩し、楽しそうに笑っている闇先パイの姿があった。
信じてますよ、闇先パイ。

ーーーーーーー

○
「私のターン……」
巡ってきた自分のターン。
しかし、一時休戦により紫煙にダメージを与えることはできないため、このターンでの闇の勝利はありえない。
手札、墓地、除外、デッキ、そしてフィールド。
使える全ての情報を頭に入れ、絶えず思考を続けながら、考えをまとめるために闇は深く深呼吸をする。
「すー……はー……ふふっ」

「？どうかしたのかい？」
「何でもない……少し、面白かっただけ」
深呼吸をしてから思わず漏れてしまったというような闇の笑みに紫煙は首を傾げる。
そんな紫煙の質問に答えながら、闇はどんな逆境に追い込まれても、決して諦めず深呼吸をしながら乗り越えていった、現在自分のデュエルを見ているであろう遊花のことを思い浮かべる。
初めて会った時、手札を奪い尽くされ、ドローも封じられ、それでもライフが尽きる最後の時まで諦めなかった、自分に出来た初めての後輩。
あの時の遊花に比べれば、この状況など全然逆境などではない。
そして、どんな逆境でも覆し、自らの思いを貫いてきた遊花と交わした約束が、闇にはある。
遊花が自分のいる場所まで辿り着くのをいつまでも待っているという約束。
そんな約束を交わした遊花の前で、そう易々と負けるわけにはいかない。
だからこそ、闇は不敵な笑みを浮かべながら口を開く。
「校長……」
「何だい？」
「このデュエル……私が勝つよ」
「ほう、この状況でも自身の勝利を疑わないというわけだね」
「無論……」
闇は１度目を閉じ、強い意志が込められた目でデッキの上のカードを引きながらその言葉を口に出す。
「私は、強いから……ドロー」
ドローしたカードを見て、闇は薄く笑った。
「さあ、全力で楽しもう……私はヴェルズケルキオンを召喚」
〈ヴェルズケルキオン〉☆４　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ１６００

現れたのは両手に杖を持った魔術師のようなモンスター。
「ヴェルズケルキオンの効果、自分の墓地のヴェルズモンスター1体を除外し、自分の墓地のヴェルズモンスター1体を対象としてそのモンスターを手札に加える。私は墓地のヴェルズヘリオロープ1体を除外して、ヴェルズオウィスプを手札に加える」
「手札抹殺で落ちていたカードだね……」
「さらにヴェルズケルキオンには墓地からモンスターを回収する効果を発動したターンのメインフェイズにヴェルズモンスターを1体召喚できる。私はヴェルズオウィスプを召喚」

〈ヴェルズオウィスプ〉☆4　炎族　闇属性
ＡＴＫ４５０

フィールドに現れたのは青白い炎の姿をしたモンスター。
そのモンスターを見て紫煙は目を細める。
「これでレベル4モンスターが2体……エクシーズ召喚かい？」
「残念、ハズレ。バトル。ヴェルズオウィスプで大将軍　紫炎を攻撃。エロージョンウィルオウィスプ」
「!!？特効してくるのかい？迎え撃ちなさい、紫炎大斬刀!!？」
突撃してきたヴェルズオウィスプを紫炎は紫色の炎を纏った斬撃で斬り伏せる。
「一時休戦の効果で確かにダメージは入らないがこれに何の意味が……」
「デュエルはパズルみたいに全てが組み合わさってこそ意味を為す。意味のない行動なんてない。ヴェルズオウィスプの効果、このカードと戦闘を行った効果モンスターの効果をダメージ計算後に無効化する。そしてこの効果はヴェルズオウィスプがいなくなっても継続される」
「!!？何だって!!？」
斬り伏せられたハズのヴェルズオウィスプが紫炎の身体に纏わり

つき、その動きを封じ込める。
「これで魔法・罠の発動枚数制限は完全に無くなった。メインフェイズ2、墓地から罠カード、ブレイクスルースキルを除外して効果発動」
「っ、それも手札抹殺の時のカードか……」
「相手フィールドの効果モンスター1体を対象としてその相手の効果モンスターの効果をターン終了時まで無効にする。私は真六武衆―シエン1体の効果を無効にする」
「これは無効にしても意味がないね……いいだろう、真六武衆―シエンの効果は無効化される」
　突然シエンの後ろの空間が割れ、白い恐竜が現れ、シエンをその空間の中に引きずり込んでシエンの身動きを封じた。
「後一手、墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動。自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローする。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外する」
「また墓地から発動できるカード……その効果も通そう」
「私はヴェルズケルキオンをデッキに戻してシャッフルし、カードを1枚ドローする……ふふっ、いいカード……魔法カード、儀式の準備」
「っ!!?儀式の準備だって!!?」
「デッキからレベル7以下の儀式モンスター1体を手札に加え、その後、自分の墓地の儀式魔法カード1枚を選んで手札に加える事ができる。私はデッキからブリューナクの影霊衣(ネクロス)を手札に加えて墓地から影霊衣(ネクロス)の降魔鏡を手札に加える。さらに今手札に加えたブリューナクの影霊衣の効果発動、ブリューナクの影霊衣を手札から捨ててデッキからブリューナクの影霊衣以外の影霊衣モンスター1体を手札に加える。私がデッキから手札に加えるのはトリシューラの影霊衣(ネクロス)。そして儀式魔法、影霊衣の降魔鏡!!?レベルの合計が儀式召喚するモンスターと同じになるように、自分の手札・フィールドのモンスターをリリース、またはリリースの代わりに自分の墓地の影霊衣モンスターを除外し、手札から影霊衣儀式モンスター1体を儀式召喚する!!

？」
「っ、発動できるということは条件は整っているというわけか。ならば、真六武衆―シエンの効果、天下布武‼？1ターンに1度、相手が魔法・罠カードを発動した時にその発動を無効にし破壊する‼？」
シエンから紫色のオーラが溢れ出し、発動しようとしていた影霊衣の降魔鏡を破壊する。
破壊された影霊衣の降魔鏡を見て、闇は不敵な笑みを浮かべた。
「これで、本当に障害は無くなった。魔法カード、貪欲な壺‼？」
「っ⁉？この状況でまだドローカードを残していたのかい⁉？」
「墓地に存在する氷結界の龍ブリューナクをＥＸデッキに、彩宝龍、ブリューナクの影霊衣、クラウソラスの影霊衣（ネクロス）、ヴェルズヘリオロープをデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローする‼？まだ終わりじゃない、デッキの上から１０枚を裏側で除外して強欲で貪欲な壺‼？自分はデッキから2枚ドローする‼？」
「っ、ドローが止まらない……」
「まだまだ繋げられる。速攻魔法、異次元からの埋葬‼？除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計3体まで対象として墓地に戻す。私は除外されているバトルフェーダー、ヴェルズヘリオロープ、ヴェルズサンダーバードを墓地に戻す。そしてこれで私の墓地にある闇属性モンスターが7体になった。自分の墓地に闇属性モンスターが7体以上存在する場合に、魔法カード、終わりの始まり‼？自分の墓地に存在する闇属性モンスター5体をゲームから除外する事で、自分のデッキからカードを3枚ドローする‼？そしてそれにチェーンして自分の通常魔法発動時、手札を全て捨て、速攻魔法、連続魔法‼？」
「なっ⁉？そのカードは……⁉？」
闇が発動した連続魔法を見て、紫煙が目を見開く。
そんな紫煙に、闇は楽しそうな笑みを浮かべた。
「連続魔法の効果……このカードの効果は、その通常魔法の効果と同じになる……つまり今、連続魔法は終わりの始まりをコピーする……そして連続魔法は効果のみをコピーし、コストまではコピーし

ない。つまり、ノーコストで3枚ドロー!!?さらに終わりの始まりの効果で墓地のバトルフェーダー、ネクロフェイス、ヴェルズヘリオロープ、ヴェルズオウィスプ、ヴェルズサンダーバードを除外して3枚ドロー!!?」

「一気に6枚のカードをドローだって!?」

「さらに除外されたネクロフェイスの効果、このカードがゲームから除外された時、お互いはデッキの上からカードを5枚ゲームから除外する!!?」

「くっ!?ここでデッキ破壊までしてくるのかい!?」

闇と紫煙のデッキの上から一気に5枚のカードが除外され、お互いにデッキが僅か数枚になる。

追い詰められていたハズの闇の脅威の連続ドローに、会場からも驚愕の声が上がっていた。

現世界ランキング4位のプロ決闘者、『氷の女王』冬城　闇。

その正体を疑う者は、もう会場にはいなかった。

「そしてこれが最後の準備。墓地に存在するトリシューラの影霊衣と影霊衣の降魔鏡を除外して影霊衣の降魔鏡の効果発動、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、自分の墓地からこのカードと影霊衣モンスター1体を除外してデッキから影霊衣魔法カード1枚を手札に加える。私はデッキから影霊衣(ネクロス)の万華鏡を手札に加える」

「そんな効果があったんだね……これは影霊衣の降魔鏡を無効にしたのは完全に下策だったね」

「そして、儀式魔法、影霊衣の万華鏡!!?儀式召喚するモンスターと同じレベルになるように、自分の手札・フィールドのモンスター1体をリリース、またはEXデッキのモンスター1体を墓地へ送り、手札から影霊衣儀式モンスターを任意の数だけ儀式召喚する!!?」

「儀式モンスターを任意の数儀式召喚する儀式魔法だって!?」

驚愕の表情を浮かべる紫煙に、闇は自分の手札を見て、くすりと笑う。

「ふふっ、ちょうど出せるのがこのモンスター達だなんてね……心が躍るね、遊花……私はEXデッキからレベル7モンスター、氷結

界の龍グングニールを墓地に送る」
　フィールドに輝くダイヤモンドのような物が現れ、それにグングニールの姿が浮かび上がる。
　しばらくするとそのダイヤモンドが輝きはじめ、光が収まると、ダイヤモンドがあった場所に魔槍を持った白い一角獣の鎧を纏った魔法使いと緑の鳥のような鎧を纏った小柄な戦士が現われる。
「その身に宿すは混沌の門より出し神獣!!?その魔法はあらゆるものを戒める!!?儀式召喚!!?可能性を凍りつかせる魔導師!!?ユニコールの影霊衣(ネクロス)!!?」

〈ユニコールの影霊衣〉☆４　魔法使い族　水属性
　ＡＴＫ２３００

「その身に宿すは祈りの歌!!?その旋律は争いをも凍てつかせる吹雪となる!!?儀式召喚!!?未来に舞い上がる戦士!!?クラウソラスの影霊衣!!?」

〈クラウソラスの影霊衣〉☆３　戦士族　水属性
　ＤＥＦ２３００

「一気に2体のモンスターを儀式召喚してくるとはね……だが、攻撃力も守備力も些か足りないようだよ?」
「攻撃力や守備力が足りなくても、それを補うだけの強さをこの子達は持っている。ユニコールの影霊衣の永続効果、プリーセプトソーサリー!!?このカードがモンスターゾーンに存在する限り、ＥＸデッキから特殊召喚されたフィールドの表側表示モンスターの効果は無効化される」
「!!?効果無効とは厄介だね……」
　ユニコールの影霊衣が魔槍を振るうと、魔槍から吹雪が吹き荒れ、ＥＸデッキから出てきたリハンとシエン、六武衆の軍大将を凍らせる。

六武衆の軍大将
ＡＴＫ１６００→１０００

六武衆の軍大将
武士道カウンター６→０

「さらにクラウソラスの影霊衣の効果、プレアーシンフォニーはＥＸデッキから特殊召喚された、フィールドのモンスター１体を対象としてターン終了時まで、そのモンスターの攻撃力は０になり、効果は無効化される。そしてこの効果は相手ターンでも発動できる」
「っ、ＥＸデッキから出てくるモンスターに対して強力な効果を発揮する儀式モンスターとは、また厄介なモンスター達だね」
「私はカードを３枚伏せて、ターンエンド」

闇　ＬＰ１０５０　手札０
ー▲▲▲ー　ー
ーー○□ー
☆　ー
○○○○○
ーー△ーー　ー
紫煙　ＬＰ１００　手札１

「私のターン、ドロー!!?」
「スタンバイフェイズ、リバースカードオープン。速攻魔法、大欲の壺。除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計３体を持ち主のデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから１枚ドローする!!?私は除外されているトリシューラの影霊衣、バトルフェーダー、ネクロフェイスをデッキに戻してカードを１枚ドローする」
「っ、ここでドローカードか……見事だよ、闇君。確かに闇君が呼び

出した儀式モンスターは強力な効果を秘めているよ。だがそのモンスター達が無効化できるのはあくまでＥＸデッキから出したモンスターだけだ‼？私は墓地から特殊召喚した影六武衆―リハンの効果発動‼？光縛拳‼？フィールドの六武衆の軍大将を除外してユニコールの影霊衣を除外する‼？」

リハンが印を結ぶと、六武衆の軍大将の身体が粒子に変わり、リハンの掌に集まって光の球体をに変わる。

リハンはユニコールの影霊衣に突撃し、光の球体を押し当ててユニコールの影霊衣を消滅させる。

「っ、ゴメンね、ユニコールの影霊衣」

「これで効果を封じられていたモンスター達の氷が溶ける。そして２体目の影六武衆―リハンの効果発動‼？光縛拳‼？手札の六武衆―ヤリザを除外してクラウソラスの影霊衣を除外する‼？」

「させない、クラウソラスの影霊衣の効果発動‼？プレアーシンフォニー‼？ＥＸデッキから特殊召喚された、フィールドのモンスター１体を対象としてターン終了時まで、そのモンスターの攻撃力は０になり、効果は無効化する‼？対象にするのは今効果を使っている２体目の影六武衆―リハン‼？」

凍らされていたリハンが氷の中から飛び出し、クラウソラスの影霊衣に光の球体を押し当てようとする。

そんなリハンに対し、クラウソラスの影霊衣が歌を歌いはじめると、吹雪が吹き荒れ、リハンを再び氷の中に閉じ込めた。

影六武衆―リハン
ＡＴＫ２４００→０

「だが、これでクラウソラスの影霊衣はもう効果を使えない‼？バトル‼？真六武衆―シエンでクラウソラスの影霊衣を攻撃‼？六天魔王斬‼？」

シエンが紫のオーラを纏った斬撃をクラウソラスの影霊衣に放つ。

しかし、斬撃がクラウソラスの影霊衣を斬り裂こうとした瞬間、ク

ラウソラスの影霊衣の身体が氷に包まれ、斬撃を弾き飛ばした。
「何⁉？」
「手札からグングニールの影霊衣（ネクロス）を捨てて効果発動、このカードを手札から捨て、自分フィールドの影霊衣モンスター１体を対象としてこのターンそのモンスターは戦闘・効果では破壊されない。対象にするのは勿論、クラウソラスの影霊衣⁉？」
「っ、仕留め損なったね。メインフェイズ２、私は攻撃した真六武衆―シエン以外の全てのモンスターを守備表示にする」

真六武衆―シエン
ＡＴＫ２５００→ＤＥＦ１４００

影六武衆―リハン
ＡＴＫ２４００→ＤＥＦ２４００

影六武衆―リハン
ＡＴＫ０→ＤＥＦ２４００

大将軍　紫炎
ＡＴＫ２５００→ＤＥＦ２４００

攻撃してきたシエン以外の全てのモンスターが防御を固める。
紫煙のライフは残り１００。
クラウソラスの影霊衣がフィールドに残ってしまったため、幸い攻撃したシエンは墓地から特殊召喚したシエンだったが、下手にモンスターを攻撃表示で残してしまうとクラウソラスの影霊衣の効果により攻撃力を０にされ、そのまま攻撃されてしまえば敗北してしまう。
クラウソラスの影霊衣の攻撃力はたったの、１０００。
次のターンを凌ぎきればリハンで除外できることを考えれば当然の選択だった。
「私はカードを１枚伏せてターンエンドだ」

影六武衆―リハン
ＡＴＫ０→ＡＴＫ２４００

闇　ＬＰ１０５０　手札０
ー▲ー▲ー　ー
ーーーー□ー
ー　ー
□□□○□
ーー△▲ー　ー
紫煙　ＬＰ１００　手札０

「私のターン、ドローー……校長……そろそろ終わりにしよう」
「っ!??」
「クラウソラスの影霊衣の効果発動!!?プレアーシンフォニー!!?対象は守備表示になっている真六武衆―シエン」

真六武衆―シエン
ＡＴＫ２５００→０

クラウソラスの影霊衣の歌が響き、防御を固めていたシエンを凍りつかせる。
「私は終末の騎士を召喚」

〈終末の騎士〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１４００

クラウソラスの影霊衣と並び立つように黒い騎士が現れる。
「終末の騎士の効果、召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから闇属性モンスター１体を墓地へ送る。　私はデッキから亡龍の戦慄ーデストルドーを墓地に送る。そして墓地に存在する亡龍の戦

慄ーデストルドーの効果発動。同名カードは1ターンに1度、ライフポイントを半分支払い、レベル6以下のモンスター、クラウソラスの影霊衣を対象として、このカードを特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは対象にしたモンスターのレベル分だけ下がり、フィールドから離れた場合はデッキの一番下に戻る」

闇　ＬＰ１０５０→５２５

〈亡龍の戦慄ーデストルドー〉☆7→4　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ３０００

墓地から現れたのは赤黒くところどころ骨が見えているドラゴン。
「レベル4、亡龍の戦慄ーデストルドーと終末の騎士でオーバーレイ。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚」
デストルドと終末の騎士が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこにいるのは王者の風格を持つグレムリン。
「群れを伴い進撃せよ、ランク4、キングレムリン」

〈キングレムリン〉★4　爬虫類族　闇属性
ＡＴＫ２３００

「キングレムリンの効果、王者の呼び声。オーバーレイユニットを1つ使い1ターンに1度、デッキから爬虫類族モンスター1体を手札に加える。私はデッキからカゲトカゲを手札に加える」
キングレムリンの咆哮が響き、闇の手札にカードが加わる。
「私は墓地に存在するチューナーモンスター、ゾンビキャリアの効果を発動。手札を1枚デッキの上に置くことでこのカードを墓地から特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合に除外される」

〈ゾンビキャリア〉☆2　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ２００

闇が手札をデッキの上に置くと、地中から小さなゾンビが現れる。
「っ、まだそんなモンスターを墓地に残していたのかい。だが、闇君のＥＸモンスターゾーンは既にキングレムリンで使っている。狙いはリンク召喚かい？」
そんな紫煙に、闇は薄く笑う。
「ハズレ。これで決めにいく。このカードは自分の手札・フィールドのモンスターのみを素材とした融合召喚及び自分フィールドの異なるモンスター3体を除外した場合にＥＸデッキから特殊召喚できる‼？私はクラウソラスの影霊衣、キングレムリン、ゾンビキャリアのカード名が異なるモンスター3体を除外して融合‼？」
「っ⁉？除外することで特殊召喚できる融合モンスターだって⁉？」
クラウソラスの影霊衣、キングレムリン、ゾンビキャリアがフィールドに現れた渦に飛び込んでいく。
「この場に満ちる龍の邪念が最凶の龍の姿を為す‼？融合召喚‼？」
そして渦が爆けるとその中から現れたのは、４つの氷の翼を持ち、全ての頭に3本の角が生えた三つ首の氷龍。
「魂をも凍てつかせる最凶の龍‼？氷獄龍トリシューラ‼？」

〈氷獄龍トリシューラ〉☆9　ドラゴン族　水属性
ＡＴＫ２７００

「氷獄龍トリシューラ⁉？何だい、その見たこともないトリシューラは⁉？」
「ナイショ。ドラゴン族を融合素材にしてないから効果はないけど、攻撃力は校長のライフを削りきるのには十分」
「っ、通すわけにはいかないね。ライフポイントを半分支払い、カウンター罠、神の宣告‼？」

「っ、まだそんなカードを……」

紫煙　ＬＰ１００→５０

「ライフポイントを半分支払うことで２つの効果を発動することができる。魔法・罠カードが発動した時にその発動を無効にし破壊するか自分または相手がモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚する際にそれを無効にし、そのモンスターを破壊する効果。今回発動するのはモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚する際にそれを無効にし、そのモンスターを破壊する効果。氷獄龍トリシューラは破壊されるよ‼？」

神の宣告から放たれた光の波動が氷獄龍を消滅させる。

「なら、墓地に存在するグングニールの影霊衣と影霊衣の万華鏡を除外して影霊衣の万華鏡の効果発動、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、自分の墓地からこのカードと影霊衣モンスター１体を除外してデッキから影霊衣魔法カード１枚を手札に加える。私はデッキから影霊衣（ネクロス）の反魂術を手札に加える」

「手札もないのに儀式魔法を手札に加えてどうするつもりだい？」

「こうする。リバースカードオープン‼？永続罠、闇次元の解放‼？除外されている自分の闇属性モンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する‼？ただし、このカードがフィールドから離れた時にそのモンスターは破壊され除外され、そのモンスターが破壊された時にこのカードは破壊される。私が対象にするのは召喚僧サモンプリースト‼？」

「狙いはエクシーズ召喚か‼？そんな効果通させないよ。真六武衆―シエンの効果、天下布武‼？１ターンに１度、相手が魔法・罠カードを発動した時にその発動を無効にし破壊する‼？」

シエンから紫色のオーラが溢れ出し、発動しようとしていた闇次元の解放を破壊する。

「これで完全に闇君のモンスターはいなくなった。どうやらこれで終わりみたいだね」

紫煙の言葉に、闇は顔を伏せ……口元に笑みを浮かべた。

「……うん、終わり……私の勝ちだよ」
「っ⁉？」
「これで止めるものは何もない……これが私の本当の決め技。リバースカードオープン⁉？魔法カード、ミラクルシンクロフュージョン⁉？」
「なっ⁉？融合魔法⁉？」
「自分のフィールド・墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを除外し、シンクロモンスターを融合素材とするその融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚する⁉？私は墓地に存在するドラゴン族シンクロモンスター、氷結界の龍グングニールと、戦士族モンスター、クラウソラスの影霊衣を融合⁉？」
　フィールドに現れた渦に、墓地から飛び出してきたグングニールとクラウソラスが吸い込まれていく。
　そして渦が弾けるとそこに現れたのは巨大な槍を持つ青い鎧を纏った竜の騎士。
「戦士の心は竜に宿り、うねりとなりて騎士へと導く⁉？融合召喚⁉？心に響く勇敢なる魂⁉？波動竜騎士ドラゴエクィテス⁉？」

〈波動竜騎士ドラゴエクィテス〉☆１０　ドラゴン族　風属性
　ＡＴＫ３２００

「ここで攻撃力３２００の融合モンスターだって⁉？」
「バトル⁉？波動竜騎士ドラゴエクィテスで真六武衆―シエンを攻撃⁉？」
「っ、迎え撃て、真六武衆―シエン⁉？六天魔王斬⁉？」
　ドラゴエクィテスがシエンを貫くように槍を振るい、シエンも紫のオーラを纏った刀で槍を弾いて応戦する。
　激しい鍔迫り合いの中、一瞬の隙をつきシエンがドラゴエクィテスの槍を後方に弾き飛ばし、紫のオーラを纏った斬撃を放つ。
　ドラゴエクィテスはその斬撃を空を翔び紙一重で躱すと、弾き飛ばされた槍を拾い、旋回して勢いをつけると、槍を水平に構えシエンに

向かい猛烈な勢いで突進する。
「これで決まり。ヴォーゲンシャルシュピース!!?」
シエンは再び斬撃を放ったが猛烈な勢いで突進するドラゴエクィテスの槍に弾かれ、そのまま身体を槍で貫かれて大きな風穴を開けると、楽しそうに笑いながら消滅した。
「……はははは、確かに見せて貰ったよ。君の成長を……その覚悟を、ね」

紫煙　ＬＰ５０→０

ーーーーーーー

『しょ、勝者、プロ決闘者、冬城　闇!!?』
「ぶい」
デュエルが終わり、沸き起こる歓声の中、闇が無表情のまま右手でＶサインを作る。
そんな闇を見て、紫煙は愉快そうに笑う。
「はははは、負けたよ。やはり老体では現役のプロ決闘者である闇君には及ばないか」
「ターンを私に回さずに倒そうとした癖によく言う。普通ならあの時点で負けてる」
「それでも闇君には届かなかったけどね」
「当然……私は強いから」
「はははは、その言葉も正しいことを証明されてしまったね。さてと、これからどうするんだい？君が本物だと言うことを証明したのはいいが、このままだと君のところに生徒が押し寄せそうだよ？」
そういって、紫煙が歓声が止まない観戦席を見る。
観戦していた生徒は今にも闇達がいるデュエル場に入ってきそうになっていた。
闇はそんな観戦席をチラリと見ると、デュエルディスクを起動しながら口を開く。

「無論逃げる……人混みに紛れるのは得意。今日は落ち着きそうにないから、そのまま帰ってもいい？」
「……まあ、こればっかりは仕方ないね。ああ、こちらで許可するよ」
「ん、それじゃあ失礼する。楽しいデュエルをありがとう、校長。お願いね、氷獄龍トリシューラ」
闇がそういってデュエルディスクにカードをセットすると、立体映像の氷獄龍が現れる。
生徒達が現れた氷獄龍に目を奪われていると、氷獄龍が氷の翼を羽ばたかせ立体映像の吹雪を引き起こす。
氷獄龍が引き起こした吹雪に思わず生徒達が目を瞑り、再び目を開けると、氷獄龍の立体映像と共に闇の姿はデュエル場から消えていた。
「全く……本当に、面白い子だね、闇君は」
別の意味で騒めき始めるデュエル場で、紫煙は本当に愉快そうに笑い声をあげるのだった。

第５４話　闇より出でし怪物

☆

「へぇ～闇君がデュエルアカデミアの特別講師にね」
「俺も昨日聞かされたばっかりで驚いたよ。まあ、闇は実家で子供達相手に教えてたから大丈夫だとは思うけどさ」
「闇君はアレで人に教えるのが上手だからねぇ」
「感情表現は乏しいけどな」
　闇が校長とのデュエルを繰り広げていた頃。
　仕事が休みであった俺は島さんに呼び出され『Ｎａｔｕｒａｌ』を訪れていた俺は島さんに俺達の近況を報告しながら、目の前にあるカードの束と向き合っていた。
　俺の話を聞きながら、島さんは懐かしむような目で俺を見る。
「……何だか久しぶりだね」
「久しぶり？」
「こうしてカウンターから遊騎君がデッキを作るのを眺めているということがさ。昔は毎日のように見てきたハズなんだけどね」
「……まぁ、俺も色々あったし……島さんからすればまだまだ若造でも、俺だって一応大人になったんだ。いつまでも子供の頃のままじゃいられないさ」
「ふふっ、そうだね。遊騎君も大人になったよ。可愛い弟子も出来たことだしね」
「……」
　島さんの言葉に何となく居た堪れなくなり、俺は聞こえなかったふりをしてデッキ作りに集中する。
　そんな俺を見て島さんはクスクスと笑い声を出す。
「それで、使えそうなカードはあったかい？一応遊騎君が望んだ条件に添ったカードを探したつもりではあるけど、実際に使えるかどうかは遊騎君にしか分からないしね」
「ああ、やっぱり島さんに頼んでよかったよ。俺だけじゃ使えるカー

ドをピックアップするだけでも一苦労だし、そもそもこの街のカードショップで俺はほとんど出禁状態だから探しにも行けないしさ」
「ふふっ、それはよかった。カードショップの店長冥利に尽きるというものだよ」
そんな島さんの言葉を聞きながら、俺は目の前にある島さんが用意してくれたカードの束に向き合っていく。
今日、島さんが俺を呼び出したのは、この前の大会が終わった後に俺が島さんに頼み、探してもらっていたとある分類のカード達が『Ｎａｔｕｒａｌ』に届いたからだった。
俺は島さんに探して貰ったカード達と自分が今まで所持していたカード達を見合わせながら、新しいデッキを組んでいく。
そんな俺を島さんは微笑ましいものを見るような目で見る。
「可愛い弟子の為に自分も強くなろうと努力を怠らない。うん、遊騎君も立派に師匠をやれているようで、私は嬉しいよ」
「……あまりからかわないでくれよ」
「ふふっ、ごめんごめん。それで、今度はどんなデッキにするつもりなんだい？前の大会の時のデッキも君が昔から使っていたデッキとはかなり変わっていたけど、今回も大きく変えるのかい？」
「いや、今回はそこまで大掛かりに変えるつもりはないよ。というか、前だって本当はそんなに大きく変えるつもりはなかったんだけどな。ただ、使えなくなったカードが多かったから変えないといけなかったってだけで」
俺は、そういって何となく手をつけていない自分が所持していたカードの束に目をやる。
そんな俺を見て、島さんが少し寂しそうな表情を浮かべながらも、気を取り直すように明るい声を出す。
「……何にせよ、私が探したカード達で遊騎君がどんなデッキを組むのか楽しみだよ」
「ああ、楽しみにしててくれ。といっても、実際にデュエルを見せるならそれこそ闇や遊花を呼ぶ必要があるけど……よし、ある程度はできたか。さてと、コイツらはどうするかな？」

メインデッキをある程度組み上げた俺は自分のデュエルディスクに入れたままにしていたＥＸデッキから３枚の闇のカードを取り出す。
闇のカードをばら撒いてる奴を探すことを決めたのだから、このカード達が必要になってくる機会も多くなるかもは知れないが、俺が所持しているこの３枚のＮｏ．はなかなかに癖が強い。
コートオブアームズは３体のレベル４モンスターが必要なうえに、相手がエクシーズモンスターでなければ効果がないのと変わらない。
ロンゴミアントはオーバーレイユニットが多い程効果を得ることができるが、全ての効果を得るためには５体のレベル４モンスターを揃える必要があるし、１番出しやすい２体だと戦闘破壊されない攻撃力３０００なだけでそれぐらいなら俺のデッキだとエクスカリバーを出した方がマシな場面が多いだろう。
そして手に入れたばかりのブラックミストはレベル２モンスターを３体要求するためそもそもレベルが合わない。
ブラックミストを出せそうなカードも持ってはいるが……どうしたものか。
思わずため息を吐いてしまう俺の耳に、何か重い物を落とした音が聞こえてくる。
驚いて音が聞こえた方を見ると、島さんが手に持っていたであろうカードファイルを落とし、鋭い目で俺が手に持っていた闇のカード達を見ていた。
「し、島さん？」
「遊騎君、そのカード達はどこで手に入れたんだい？」
「えっと、１枚は拾って、他の２枚は襲ってきた決闘者を倒したらこっちに飛んできたんだ」
「そうか……」
「……島さんも闇のカードのことを知ってるのか？」
「‼？……闇君から聞いたんだね。そのカード達が闇のカードだと言うことを」
「ああ。闇が使ってるヴェルズ達が闇のカードだってことも聞いた

し、遊花が闇のカードを持ってるのも聞いた」
「そうか……それを分かっていて使っているのか……やれやれだね」
　そういって、島さんが悲しげに目を伏せる。
　そんな島さんにどう声をかければいいのか分からず狼狽える俺に、島さんは何処か重い口調で口を開く。
「遊騎君」
「……はい」
「出来れば私は君にはそのカード達を使って欲しくはない。君がどれくらいのことを知っているかは知らないが、そのカードは君が想像している以上に危険なものだ」
「……分かってるつもり、なんて言わないさ。島さんの方がきっとこのカード達のことをよく知ってるんだろうし」
「そうだね。私もカードショップを生業にしている身だ。闇のカードのことはよく知っている。それが原因で破滅した者も、ね」
　島さんが一瞬、悲しげに店の奥にある生活スペースの方を見る。
「それでも、私は君が決めたことをそう簡単には曲げない人間だと知っている。だからこそ、君がそのカード達を使うのであれば、心を強く持つことだ」
「心を強く……」
「そうでなければ、君はそのカード達に呑まれるだろう。君は普通の人間だ。闇君や遊花君とは違う、普通の人間だ」
「闇や遊花と違う？……それってどういう……」
「……それは君が自分で知ることさ。まあ、そう偉そうに言ってみたけど、私にもまだまだ分からないことが多いだけなんだけどね。ともかく、君がそのカード達を使うのなら、それ相応の覚悟をすることだね」
「……分かった」
「うん。君がいつまでも君であることを、私は願っているよ」
　そんな島さんの言葉を聞きながら、俺は再び自分のデッキに向き合う。

分からないことも聞きたいこともまだある。
それでも島さんが話さないのなら、それはきっと意味があって、まだ話す段階ではないのだろう。
それならば、俺が今やれることは1つだけ。
俺は思考の海に潜りながら新しいデッキを組みあげていくのだった。

ーーーーーーー

「結構時間がかかったな……あー腹減った」
あれから2時間程デッキ作りに没頭し、何とか形になったところで昼食を取るために店を出る。
今日は始業式だけだと言っていたから遊花達はそろそろ家に戻っているところだろうか？
闇がいきなりデュエルアカデミアにやってきたことに戸惑っていないといいが……無理だろうなぁ。
そもそも世界ランキングにいるようなプロ決闘者がいきなり講師としてやってくるだけでもおかしいことなのに、それが知り合いなのだから遊花達の戸惑う姿が目に浮かぶ。
闇は驚かせるために黙っておくと言っていたが……家で間違いなく質問責めにあってるんだろうな。
「というか、俺も黙ってたことに関して何か言われたりしないよな？闇の奴が巻き込んでこないとーーー」
「うわぁぁぁぁぁ!!?」
「っ!?おいおい、昨日もあったぞ、こんなパターン!!?」
家に帰ってからのことを考えていると、近くの路地裏から耳を劈くような悲鳴が聞こえ、俺は思わず悲鳴が聞こえてきた場所に向けて走り出す。
俺が路地裏に駆け込むと、そこには倒れ伏した男性と闇が溢れ出している1枚のカードを手にしている人物がいた。
「うわ、面倒なことになったなぁ」

そこにいたのは黒いパーカーを深く被った黒髪の前下がりショートで中性的な顔立ちの人物。
パーカーを深く被っているのと中世的な顔立ちのせいでイマイチ性別が判断しにくい。
その少年（？）は俺の方を見ると面倒くさそうに表情を歪ませる。
アイツが持っているのは間違いなく闇のカード。
この状況からしてこの男をやったのはコイツか？
『ウゥ……‼？』
「っ、何だ？今の声？」
「ん……うわ、連戦？ちょっと勘弁して欲しいんだけど……仕方ない、面倒くさいけど放っとくのも面倒だし倒させて貰おう」
少年の近くから不気味な唸り声が聞こえて来たかと思うと、少年は面倒くさそうに何かを呟きながらデュエルディスクを起動させて俺を見る。
どうやらやる気のようだ、昨日の今日だと言うのに、本当についてない。
だけど、すでに被害が出てる以上この少年を放っておくわけにもいかないか。
俺も作ったばかりのデッキをデュエルディスクにセットし、構える。
いきなり実戦になってしまったが、それでもやるしかない。
「やろうってのか？いいぜ、とりあえずお前をぶっ倒す‼？」
「弱い奴程そういうんだよね。やれるもんならやってみなよ」
『決闘‼？』

遊騎　ＬＰ８０００
謎の少年？　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻はボクか。ボクはモンスターをセット。カードを１枚伏せて

ターンエンドだよ」

遊騎　ＬＰ８０００　手札５

ーーーーーー　ー

ーーーーーー

ー　ー

ーー??ーー

ーー▲ーー　ー

謎の少年？　ＬＰ８０００　手札３

「俺のターン、ドロー……うっ」

ドローしたカードを含めて自分の手札を確認するが、作ったばかりのせいか手札の調子が悪い。

こんな状態で闇のカードを使う決闘者とデュエルすることになるなんて本当についていないがそれでもやれることをやるしかない。

「相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。来い、Ｈ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）強襲のハルベルト!!?」

〈Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト〉☆４　戦士族　地属性

ＡＴＫ１８００

俺の前に現れたのはハルバードを持った紫の鎧を纏った戦士。

「バトル!!?Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトでセットモンスターを攻撃!!?」

「セットモンスターはヴァンパイアソーサラー」

〈ヴァンパイアソーサラー〉☆４　アンデット族　闇属性

ＤＥＦ１５００

姿を現したのは魔女の格好をした吸血鬼のモンスター。

「H・C　強襲のハルベルトの効果、このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ戦闘ダメージを与える!!?」
「!!?貫通効果持ちのモンスターか……面倒だな」
「貫け、ライトニングハルバード!!?」
ハルベルドは雷を纏ったハルバードでヴァンパイアソーサラーの身体を貫く。
身体を貫かれたヴァンパイアソーサラーは闇に溶けるように消滅した。

謎の少年？　ＬＰ８０００→７７００

「よし、H・C　強襲のハルベルトの効果発動!!?このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時にデッキからヒロイックカードを手札に加える!!?」
「サーチ効果まであるのか。でも、破壊されたヴァンパイアソーサラーの効果発動!!?このカードが相手によって墓地へ送られた場合、デッキから闇属性のヴァンパイアモンスター1体またはヴァンパイア魔法・罠カード1枚を手札に加える。ボクはデッキからシャドウヴァンパイアを手札に加える!!?」
「ならばこちらもH・C　強襲のハルベルトの効果でデッキからH・C（ヒロイックチャレンジャー）ダブルランスを手札に加える。メインフェイズ2、俺は手札に加えたH・Cダブルランスを召喚!!?」
〈H・C　ダブルランス〉☆4　戦士族　地属性
ＡＴＫ１７００

フィールドに現れる2つの槍を持った白い戦士。
「そして、斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
「リンク召喚か……」
俺が正面に手を前に突き出すと、目の前に巨大なサーキットが現れ

る。
「召喚条件は戦士族モンスター２体!!?俺はＨ・Ｃ　強襲のハルベルトとＨ・Ｃ　ダブルランスの２体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?追想に生きる王女!!?リンク２!!?聖騎士の追想　イゾルデ!!?」
〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

ハルベルトとダブルランスがサーキットの中に消え、金髪と白髪の２人の女性が現れる。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?リンクレカレクション!!?リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター１体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキからＨ・Ｃダブルランスを手札に加える!!?」
　イゾルデの効果で俺は次のターンに動けるように２体目のダブルランスを手札に加える。
　ここまではいつも通りだが……少し試してみるか。
「聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動!!?メモリーズギフト!!?デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター１体をデッキから特殊召喚する!!?俺はデッキから妖刀竹光、巨大化を墓地に送り、ヒーローキッズを特殊召喚!!?」
「ヒーローキッズ?」
〈ヒーローキッズ〉☆２　戦士族　地属性
ＤＥＦ６００
イゾルデに導かれ、姿を現したのはＳＦで出てきそうなバトルスー

ツを着た小さな戦士。
「墓地に送られた妖刀竹光の効果、それにチェーンしてヒーローキッズの効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した時、デッキから同名カードを任意の枚数特殊召喚する事ができる!!?俺はデッキから2体のヒーローキッズを特殊召喚する!!?」

〈ヒーローキッズ〉☆2　戦士族　地属性
ＤＥＦ６００

ヒーローキッズがバトルスーツを操作し通信を行うと、呼び出しに応じた2体のヒーローキッズがフィールドに現れる。
「そして墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える。俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える。……さて、早速試してみるか。俺はレベル2のヒーローキッズ3体でオーバーレイ!!?3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
3体のヒーローキッズが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、現れたのは鉤爪を持ち胴体に牙を持つ獰猛なる悪魔。
「悪意により生み出されし禁呪の霧よ!!?後悔と絶望を呑み込み道を切り開け!!?現れろ!!?Ｎｏ．９６ブラックミスト!!?」

〈Ｎｏ．９６ブラックミスト〉★2　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１００

「Ｎｏ．……やっぱり闇のカードか」
「……俺はカードを3枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ８０００　手札４
ー▲▲▲ー　ー

ーー○ーー
ー　　☆
ーーーーー
ーー▲ーー　　ー
謎の少年？　ＬＰ７７００　手札４

「伏せカードが多いし、闇のカードまで出てる……面倒だね」
そういって本当に面倒くさそうに少年は呟く。
……さっきの発言もそうだが、この反応……まさかコイツーーー
「はぁ～まぁいいや。何だろうとボクがやることは変わらないし……悪いけど、ボクも連戦で疲れてるんだよね。だからーーーこのターンで終わらせてもらうよ」
「何っ⁉？」
面倒くさそうに、それでいて確かな自信を持ってその言葉を紡ぎ、少年はカードをドローした。
「ボクのターン、ドロー。手札から精気を吸う骨の塔を捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動‼？デッキからレベル１モンスター１体を特殊召喚する‼？おいで、ヴァンパイアの使い魔‼？」

〈ヴァンパイアの使い魔〉☆１　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ０

現れたのは小さな蝙蝠のモンスター。
ヴァンパイアの使い魔は少年の肩に止まり、その首に牙を立てる。
「ヴァンパイアの使い魔の効果発動‼？このカードが特殊召喚に成功した場合、同名カードは１ターンに１度、５００ライフポイントを払って発動できる。デッキからヴァンパイアの使い魔以外のヴァンパイアモンスター１体を手札に加える。ボクは５００ライフポイントを支払いデッキからヴァンパイアジェネシスを手札に加えるよ」

謎の少年？　ＬＰ７７００→７２００

「さあ、絶望の塔を建てようか。リバースカードオープン。罠発動、ギブ＆テイク‼？自分の墓地のモンスター１体と、自分フィールドの表側表示モンスター１体を対象として、対象の墓地のモンスターを相手フィールドに守備表示で特殊召喚し、対象のフィールドのモンスターのレベルはターン終了時まで、その特殊召喚したモンスターのレベル分だけ上がる」

「俺のフィールドにモンスターを特殊召喚だって⁉？」

「ボクは墓地の精気を吸う骨の塔を君のフィールドに特殊召喚し、ヴァンパイアの使い魔のレベルを３つ上げる‼？」

〈精気を吸う骨の塔〉☆３　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ１５００

ヴァンパイアの使い魔
☆１→４

ブラックミストの隣に骨が組み合わさった不気味な塔が現れる。

「これで準備完了だね。墓地に存在するヴァンパイアソーサラーの効果、墓地のこのカードを除外してこのターンに１度だけ、自分はレベル５以上の闇属性のヴァンパイアモンスターを召喚する場合に必要なリリースをなくす事ができる。ボクはヴァンパイアソーサラーを除外してシャドウヴァンパイアを召喚‼？」

〈シャドウヴァンパイア〉☆５　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２０００

フィールドに現れたのは影のように薄く、黒く染まった巨大な吸血鬼。

現れたシャドウヴァンパイアは咆哮をあげる。

「シャドウヴァンパイアの効果発動!!?このカードが召喚に成功した時、手札・デッキからシャドウヴァンパイア以外の闇属性のヴァンパイアモンスター1体を特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚に成功したターン、そのモンスター以外の自分のモンスターは攻撃できない。ボクはデッキからヴァンパイアロードを特殊召喚する!!?」

〈ヴァンパイアロード〉☆5　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２０００

フィールドに現れたのは夜空のようなマントを羽織った吸血鬼。
そしてヴァンパイアロードが現れると骨の塔から青い人魂が溢れ出す。
「ここで君のフィールドに特殊召喚した精気を吸う骨の塔の効果が発動する。アンデット族モンスターが特殊召喚に成功する度に、相手のデッキの上からカードを2枚墓地へ送る」
「何?」
骨の塔から溢れ出した青い人魂が少年のデッキへと向かって放たれ、少年のデッキが削られる。
墓地肥やしのためか?
だが、わざわざこのカードを俺のフィールドに送ってまでそんなことをするか?
しかも、少年はこのターンで勝つと言ったがシャドウヴァンパイアの効果でこのターンはヴァンパイアロード以外の攻撃は封じられている。
そんな状態でどうやって勝つつもりなんだ?
そんな俺の疑問に、少年は薄く笑って答えた。
「さて、勝利へのカウントダウンが始まるよ。相手のカードの効果によって墓地へ送られた魔法カード、ジャックポット7の効果発動!!?」
「ジャックポット7?」
「このカードは相手のカードの効果によって墓地へ送られた時、ゲー

ムから除外される。そしてこの効果によってゲームから除外された自分のジャックポット7が3枚揃った時、自分はデュエルに勝利するのさ」
「なっ⁉？特殊勝利だって⁉？」
少年の後ろに強欲な壺が乗った巨大なスロットマシーンが現れ、左端のスロットが7の数字で止まる。
少年のデッキはアンデットが主体のデッキ。
アンデットは蘇生などの特殊召喚手段が多いから骨の塔の効果は簡単に発動する。
しかも、俺のデッキは戦闘に重きを置いているせいで特殊勝利に対する対策や妨害なんてものはほとんど入ってない。
……コイツはヤバいぜ。
「さあ、絶望と一緒に遊ぼうか。魅力せよ⁉？月夜に輝くサーキット⁉？」
「リンク召喚か……」
少年が正面に手をかざし、巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はアンデットモンスター2体⁉？ボクはヴァンパイアの使い魔とシャドウヴァンパイアの2体をリンクマーカーにセット⁉？サーキットコンバイン⁉？リンク召喚⁉？月下で戯れる吸血鬼⁉？リンク2⁉？ヴァンパイアサッカー⁉？」
〈ヴァンパイアサッカー〉ＬＩＮＫ　２　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ１６００　↙？　↘？
ヴァンパイアの使い魔とシャドウヴァンパイアがサーキットの中に消え、代わりに現れたのはピンクの帽子を被った吸血鬼。
「ヴァンパイアサッカーを特殊召喚したことで骨の塔の効果が発動し、ボクのデッキを削るよ」
骨の塔から溢れ出した青い人魂が少年のデッキへと向かって放たれ、少年のデッキを再び削る。
すると、削られたハズのデッキから真紅の悪魔が現れる。

「ふふっ、どうやら今日のボクは運がいいみたいだ。精気を吸う骨の塔の効果で墓地に送られた闇より出でし絶望の効果発動!!?このカードが相手の効果で手札・デッキから墓地へ送られた時、このカードをフィールドに特殊召喚する!!?」

〈闇より出でし絶望〉☆８　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２８００

「っ、最上級のモンスターがそんな条件で出てくるのかよ」
「闇より出でし絶望もアンデット。特殊召喚したことで精気を吸う骨の塔の効果が発動し、ボクのデッキを削る。それにチェーンしてヴァンパイアサッカーの効果発動!!?1ターンに1度自分・相手の墓地からアンデット族モンスターが特殊召喚された場合に自分はデッキから1枚ドローする」
「くっ、手札まで増えやかがった」
「まだまだいくよ、ヴァンパイアサッカーの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、相手の墓地のモンスター1体を対象としてそのモンスターを相手フィールドに守備表示で特殊召喚し、特殊召喚したそのモンスターはアンデット族になる。ボクは君のフィールドに君の墓地からＨ・Ｃダブルランスを特殊召喚するよ」

〈Ｈ・Ｃ　ダブルランス〉☆４　戦士族→アンデット族　地属性
ＤＥＦ９００

ヴァンパイアサッカーが墓地にいたダブルランスに噛みつき、吸血鬼として俺のフィールドに蘇生させる。
それと同時に骨の塔から青い人魂が溢れ少年のデッキを削っていく。
「さて、そろそろ切り札を出させて貰おうか。このカードは通常召喚できず、自分フィールド上に存在するヴァンパイアロード1体をゲームから除外した場合のみ特殊召喚する事ができる!!?ボクはフィー

ルドのヴァンパイアロードを除外する!!?」
ヴァンパイアロードがマントを翻すと、マントで隠れたヴァンパイアロードの身体が膨れ上がっていく。
しばらくしてヴァンパイアロードがいた場所に佇んでいるのは紫色の身体に爪のような物が背中から飛び出した始まりの吸血鬼。
「現れろ。全ての吸血鬼を統べる真祖!!?ヴァンパイアジェネシス!!?」

〈ヴァンパイアジェネシス〉☆8　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ３０００

「ヴァンパイアジェネシス……」
「精気を吸う骨の塔の効果でまたボクのデッキは削られる。そしてヴァンパイアジェネシスの効果発動!!?ソウルサブミット!!?1ターンに1度、手札からアンデット族モンスター1体を墓地に捨てる事で、捨てたアンデット族モンスターよりレベルの低いアンデット族モンスター1体を自分の墓地から選択して特殊召喚する!!?ボクは手札のレベル4モンスター、屍界のバンシーを墓地に送って墓地からヴァンパイアの眷属を特殊召喚!!?」

〈ヴァンパイアの眷属〉☆2　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ０

ヴァンパイアジェネシスが咆哮し、その咆哮に応えるように身体の半分が闇に呑まれた白い獣が現わる。
「精気を吸う骨の塔の効果にチェーンしてヴァンパイアの眷属の効果、さらにそれにチェーンして屍界のバンシーの効果発動!!?まずは屍界のバンシーの効果でフィールド・墓地のこのカードを除外して手札・デッキからアンデットワールド1枚を選んで発動する。この効果は相手ターンでも発動できる。ボクは墓地の屍界のバンシーを除外してデッキからアンデットワールドを発動!!?」

少年がアンデットワールドを発動させると、あたりが薄暗く腐敗した世界に変わる。
「アンデットワールドの効果でフィールドの表側表示モンスター及び墓地のモンスターは全てアンデット族になり、お互いはアンデット族モンスターしかアドバンス召喚できなきなるよ」

聖騎士の追想　イゾルデ
戦士族→アンデット族

Ｎｏ．９６ブラックミスト
悪魔族→アンデット族

「っ、これで何を出しても精気を吸う骨の塔は発動するってわけか」
「次にヴァンパイアの眷属の効果発動‼？このカードが特殊召喚に成功した場合、同名カードは1ターンに1度、５００ライフポイントを払ってデッキからヴァンパイア魔法・罠カード1枚を手札に加える。ボクは５００ライフポイントを支払いデッキからヴァンパイアの領域を手札に加えるよ」

謎の少年？　ＬＰ７２００→６７００

ヴァンパイアの眷属はヴァンパイアの使い魔のように少年の足に牙を立てと、少年の手札にヴァンパイアの領域が手札に加わる。
「最後に精気を吸う骨の塔の効果が発動し、アンデット族モンスターが特殊召喚に成功したことでボクのデッキの上からカードを２枚墓地へ送る」
骨の塔から溢れ出した青い人魂が少年のデッキへと向かって放たれ、少年のデッキを再び削る。
今ので少年のデッキはさらに薄くなった。
そろそろジャックポット7が落ちてもおかしくない。
「まだまだ終わらないよ。墓地のヴァンパイアの使い魔の効果発動‼

？同名カードは1ターンに1度、このカードが墓地に存在する場合、手札及び自分フィールドの表側表示のカードの中から、ヴァンパイアカード1枚を墓地へ送ってこのカードを特殊召喚する‼？ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。ボクはヴァンパイアの眷属を墓地に送りヴァンパイアの使い魔を特殊召喚‼？」

〈ヴァンパイアの使い魔〉☆1　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ０

ヴァンパイアの眷属の身体が闇に呑まれ、ヴァンパイアの使い魔に姿を変える。

「精気を吸う骨の塔の効果でボクのデッキは削られる……お、来たね。２枚目のジャックポット７の効果発動‼？このカードは相手のカードの効果によって墓地へ送られた時、ゲームから除外される。これで後１枚だね」

少年の後ろにある巨大なスロットマシーンの中央のスロットが７の数字で止まる。

これは本当にマズイ。

「それじゃあ終わりとしよう。ボクは墓地に存在するチューナーモンスター、ゾンビキャリアの効果を発動。手札を１枚デッキの上に置くことでこのカードを墓地から特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合に除外される」

〈ゾンビキャリア〉☆２　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ２００

少年が手札をデッキの上に置くと、地中から小さなゾンビが現れる。

終わり……少年がそう言ったということはゾンビキャリアでデッキの上においたカードは間違いなくジャックポット７。

そしてゾンビキャリアが特殊召喚されたことで精気を吸う骨の塔の効果が発動し、ジャックポット7の効果が発動し、特殊勝利が確定する。
万事休すか……だが、現状をどうにかできるカードは、手札にも伏せたカードにも……いや、待てよ。
俺は自分の伏せてあるカードの内1枚のカード、そしてジャックポット7の効果を思い出す。
……さっきまでは現状使ってもどうしようもないカードだと思ってた。
だけど、デッキの上がジャックポット7だと言うのであればーーーまだ可能性はある。
「それじゃあさよならだね。精気を吸う骨の塔の効果発動!!?アンデット族モンスターが特殊召喚に成功する度に、相手のデッキの上からカードを2枚墓地へ送る!!?これでジャックポット7が墓地にいきボクの勝ちだ!!?」
「いや……まだ分からないぜ!!?チェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?ペアルック!!?お互いのデッキの一番上のカードをお互いに確認し、そのカードが同じ種類だった場合、お互いはそのカードを手札に加え、違った場合、お互いはそのカードを除外する!!?」
「はっ!?何だいそのカード!?」
俺が発動したカードを見て少年が目を見開く。
そりゃあそうだろう。
俺だってあのカードがなかったら知ることもなかっただろうからな。
だが、この状況ならピッタリだ。
「勿論、この状況をどうにかするカードさ。さあ、お互いのデッキの上を確認するぜ」
「ぐっ……ボクのデッキの上はジャックポット7」
「俺のデッキの上はクィーンズナイト。種類が違うからお互いに確認したカードは除外だ」

ペアルックの効果でクィーンズナイトとジャックポット７が除外され、骨の塔が少年のデッキ削る。
「……精気を吸う骨の塔の効果で墓地に送られたため闇より出でし絶望を特殊召喚する」
〈闇より出でし絶望〉☆８　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２８００
削られたハズのデッキから再び闇より出でし絶望が現れ、骨の塔がデッキ削る。
しかし、ジャックポット７の最後のスロットは止まらない。
「……ふぅ、何とかなったな」
「ジャックポット７は自身の効果によって除外されて３枚が揃わなければ特殊勝利は発動しない……まさかそんなカードで妨害されるなんて」
少年は自身の戦術にかなり自信があったのだろう。
目を見開いて呆然としている。
実際、こんなの奇跡みたいなものだ。
アンデット族には除外から戻ってくる手段も結構あるから、もし手札に加わってたら多分ゾンビキャリアを再利用されて終わっていただろう。
この少年は強い。
こんな奇策、２度も使えない。
だけど、それでも生き残ることはできた。
まだまだ、デュエルはこれからだ。
「……君、名前は？」
しばらく呆然としていた少年だったが、その表情が真剣なものに変わり、真っ直ぐに俺を見ながらそう口にする。
その問いに、俺は少し悩んだが、名前だけ口にする。
「……遊騎だ」
「ゆうき……ユウキ……遊騎か。うん、分かった。遊騎、まずは謝

罪しよう。すまなかった」
「はっ？」
少年は俺に深々と頭を下げる。
いきなりの謝罪に、俺は思わず間抜けな声を漏らしてしまう。
そんな俺に構わず、少年はさらに言葉を続ける。
「正直、君のことを舐めていた。闇のカードの気配がしたから闇のカードに操られているような大したことない決闘者だと。だが、君はボクに追い詰められたこの状況で最後まで可能性を捨てず、特殊勝利を阻止して見せた。そんなこと、闇のカードに操られて実力を過信し、暴走している決闘者ができるとは思えない」
少年は頭を下げたまま確信を持った声で言う。
……俺も薄々気づいていたが、この少年は闇のカードに操られてはいない。
俺がブラックミストを出した時、闇のカードだと面倒くさそうにしていたように、この少年にははっきりとした意思がある。
恐らく、倒れていた青年は闇のカードに操られて少年に襲いかかっていた人物なのだろう。
その現場を俺がたまたま発見し、俺は少年が青年を襲ったと勘違いした。
逆に少年は俺が持っているコートオブアームズ達の気配から闇のカードに操られている決闘者だと思ったのだろう。
お互いの勘違いがこのデュエルを生んだのだ。
正直、お互いに勘違いだと気づいたのだからもうデュエルを続ける理由はない。
だけどーーー
「このデュエルを続ける理由はもうない。だけど、君がいいならこのデュエルを続けさせて欲しい。ジャックポット7をこんな方法で防がれたのは初めてだからね。1人の決闘者として、君とのデュエルを楽しませて欲しい……ダメかな？」
そういって、少年が伺い立てるように首を傾げる。
それに対する俺の答えは1つだけだ。

「勿論良いぜ。こんな楽しいデュエルを途中で止めたら勿体ないからな」
「‼?ありがとう、嬉しいよ」
「ただし、ここからは本当に全力でこいよ?そうじゃないと張り合いがないからな」
「ふふ、随分言ってくれるね?勿論そのつもりさ」
「お前、名前は?俺だけ聞かれるのも不公平だしな」
　そんな俺の質問に、少年は少し悩んだそぶりを見せると、面白そうに笑いながら口を開いた。
「夜（よる）。姓は……訳あって伏せさせてもらうよ。君も言ってないんだし、これで対等だろ?」
「……はは、いいぜ。それじゃあ、かかって来い、夜‼?」
「ああ、遊騎に見せてあげるよ、ボクの全力とボクの闇のカードをね‼?ボクは闇属性レベル８モンスター、闇より出でし絶望２体でオーバーレイ‼?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築‼?エクシーズ召喚‼?」
　２体の闇より出でし絶望が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
　そして渦が爆けると、現れたのは顔に布を被った巨大な人型のモンスター。
「人に生み出されし生命よ‼?その優しき拳で闇を撃ち砕け‼?現れろ‼?Ｎｏ．２２不乱健‼?」

〈Ｎｏ．２２不乱健〉★８　アンデット族　闇属性
　ＡＴＫ４５００

『ウゥ……ウァァァ‼?』
　夜を守るように夜の前に現れた不乱健は空に向かって雄叫びをあげ、辺りの空気を震わせる。
「これが夜の闇のカード……やっぱりＮｏなのか」
「この子はとても紳士でね。ボクの身体を乗っ取ろうともせず、ボク

を守ろうとしてくれるんだ」
「へぇ……そういう闇のカードもあるのか」
「ふふ、それじゃあデュエルを続けよう。精気を吸う骨の塔の効果が発動しデッキの上からカードを２枚墓地へ送る‼?」ボクは永続魔法、ヴァンパイアの領域を発動‼?」
　夜がヴァンパイアの領域を発動すると、薄暗く腐敗した世界に紅い月が昇る。
「ヴァンパイアの領域の効果発動‼?」１ターンに１度、５００ライフポイントを払って発動できる。このターン自分は通常召喚に加えて１度だけ、自分メインフェイズにヴァンパイアモンスター１体を召喚できる‼?」

夜　ＬＰ６７００→６２００

「召喚権を増やすカードか」
「それだけじゃないよ。ヴァンパイアサッカーの効果発動‼?」自分がモンスターをアドバンス召喚する場合、自分フィールドのモンスターの代わりに相手フィールドのアンデット族モンスターをリリースできる‼?」
「っ、何⁉?」
「ボクは君のフィールドにいるＮｏ．９６ブラックミストをリリースしてヴァンパイアドラゴンをアドバンス召喚‼?」

〈ヴァンパイアドラゴン〉☆５　アンデット族　闇属性
　ＡＴＫ２４００

　ブラックミストを喰らい、フィールドに現れたのは一ツ目の蛇のような竜。
　それを見て夜は楽しそうに正面に手をかざす。
「見せてあげるよ、ボクのとっておきをね。ボクは、レベル５、ヴァンパイアドラゴンに、レベル２、チューナーモンスター、ゾンビキャリ

アをチューニング!!?」
「お、シンクロ召喚か!!?」
ゾンビキャリアが光の輪になり、ヴァンパイアドラゴンが小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から現れるのは青い炎を見に纏った紅い目を持つ漆黒の龍。
「紅き月の輝きが、冥府より可能性を呼び覚ます!!?シンクロ召喚!!?紅き月の滅竜!!?真紅眼の不屍竜!!?」

〈真紅眼の不屍竜〉☆7　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２４００

「真紅眼の……不屍竜だって!?」
「驚いたかい?でも驚くのはまだ早いよ!!?精気を吸う骨の塔の効果発動!!?アンデット族モンスターが特殊召喚に成功する度に、相手のデッキの上からカードを２枚墓地へ送る!!?よし、墓地に落ちたグローアッププルームの効果発動!!?このカードが墓地へ送られた場合、墓地のこのカードを除外してデッキからレベル５以上のアンデット族モンスター１体を手札に加える。だけど、フィールドゾーンにアンデットワールドが存在する場合、手札に加えず特殊召喚する事もできるよ」
「何だって!?」
「ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はアンデット族モンスターしか特殊召喚できない。さあ、おいで死霊王　ドーハスーラを特殊召喚!!?」

〈死霊王　ドーハスーラ〉☆８　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２８００

腐敗した世界に花が咲き、導かれるように現れたのは髑髏の身体を持つ魔術師のような蛇。

「さて、そろそろ精気を吸う骨の塔は休ませてあげようかな？精気を吸う骨の塔の効果、それにチェーンして死霊王ドーハスーラの効果発動‼？ゴーストグラジュエイト‼？死霊王　ドーハスーラ以外のアンデット族モンスターの効果が発動した時に２つある効果から１つを選んで適用する。ただし、このターン、自分の死霊王　ドーハスーラの効果で同じ効果を適用できない。その効果を無効にするか、自分または相手の、フィールド・墓地のモンスター１体を選んで除外する。ボクは２つ目の効果を適用して精気を吸う骨の塔を除外する‼？」

ドーハスーラの魔術で骨の塔が闇に呑まれて霊魂に変わり、消滅する。

アンデットワールドがある限り、モンスターが効果を使えば無効か除外ができるってわけか……これはかなり面倒なことになった。

「精気を吸う骨の塔の効果でデッキの上から２枚を墓地に送るよ。そして真紅眼の不屍竜の永続効果、ネクロフレイルアップ‼？このカードの攻撃力・守備力は、お互いのフィールド・墓地のアンデット族モンスターの数×１００ポイントアップする‼？」

真紅眼の不屍竜
ＡＴＫ２４００→４０００

「攻撃力４０００⁉？」

「ボクはカードを１枚伏せてターンエンド。ボクのデュエルは十分見せたし、今度は君のデュエルを見せて貰おうかな」

夜が挑発するような目で俺を見る。

夜のフィールドには強力なアンデット達が揃っている。

それに対して俺はデッキがまだ上手く馴染んでおらず、そのうえアンデットワールドの影響で種族がアンデットに変更されているせいでリンクモンスターやエクスカリバーなどの一部のカードが使えなくなっている。

それでも夜はこれだけ凄いデュエルを見せてくれたんだ。

ならば、俺もそんな夜のデュエルに応えてやりたい。

そのためにも、このデュエル中に絶対にこのデッキをものにして見せる!!?

遊騎　ＬＰ８０００　手札４
丨▲▲丨丨　　丨
丨丨丨□丨
　　☆　　☆
○○○○□
丨丨△▲丨　　▽
夜　ＬＰ６２００　手札０

第５５話　同調する騎士

☆

遊騎　ＬＰ８０００　手札４
ー▲▲ーー　ー
ーーー□ー
☆　☆
○○○○□
ーー△▲ー　▽
夜　ＬＰ６２００　手札０

「俺のターン、ドロー!!?」
改めて自分の手札を見るが、やはり手札が悪い。
夜のデッキは骨の塔の効果で残り僅か。
耐久戦も考えれなくはないが、あれだけ強力なアンデット達の猛攻を耐えられるとは思えない。
そのうえ下手に動いてもドーハスーラに止められて一気に攻め込まれたらそれだけで終わりだ。
なら、まずはドーハスーラの効果を使い切らせる!!?
「デッキから妖刀竹光、最強の盾、ビッグバンシュート、孤毒の剣を墓地に送り聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?メモリーズギフト!!?」
「モンスターを展開されても面倒だから止めておこうか。それにチェーンして死霊王ドーハスーラの効果発動!!?ゴーストグラジュエイト!!?ボクは１つ目の効果を適用し、その効果を無効にする!!?」
ドーハスーラの魔術によりイゾルデの身体が闇に覆われ、イゾルデの効果が無効化される。
「だが、墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?デッキから折れ竹光

を手札に加える!!?俺は聖騎士の追想　イゾルデに装備魔法、折れ竹光を装備!!?さらに魔法カード黄金色の竹光を発動!!?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローする!!?」
「むっ、手札を増やされたか」
「よし、悪いがこの薄暗いフィールドを破壊させて貰うぜ!!?速攻魔法、ダブルサイクロン!!?自分フィールドの魔法・罠カード1枚と、相手フィールドの魔法・罠カード1枚を対象として破壊する!!?俺は自分フィールドの折れ竹光と夜のアンデットワールドを破壊する!!?」
「アンデットワールドを狙ってきたか……手札を残しておいた方がよかったかな」

聖騎士の追想　イゾルデ
アンデット族→戦士族

真紅眼の不屍竜
ＡＴＫ４０００→３４００

フィールドに現れた2つの竜巻がイゾルデが持っていた折れ竹光とアンデットワールドを吹き飛ばし、不屍竜の攻撃力を僅かながらに下げる。
ヴァンパイアサッカーによって呼び出されたダブルランスのアンデット化は解けないが、これでとりあえずこれから出すモンスターがアンデットになることはなくなり、不屍竜の攻撃力もまだ倒せるラインにまで下げれた。
これならまだ戦える!!?
「俺はＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）サウザンドブレードを召喚!!?」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

フィールドに現れたのは頭巾を被り、背中に何本もの刀を背負った戦士。
サウザンドブレードは雄叫びをあげ、戦場に仲間を呼ぶ。
「Ｈ・Ｃ　サウザンドブレードの効果発動!!?１ターンに１度手札にあるヒロイックカードを捨ててデッキからヒロイックモンスターを特殊召喚する!!?俺は手札にあるＨ・Ｃダブルランスを捨てて、来い、Ｈ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）エクストラソード!!?」

〈Ｈ・Ｃ　エクストラソード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１０００

サウザンドブレードの雄叫びに導かれ、現れたのは銀色の鎧を身に纏った二刀流の戦士。
このままでもエクスカリバーは出せるが、エクスカリバーでは不乱健にすぐにやられてしまう。
なら、ここは少し手札を使ってでもあっちを試してみるか。
「手札を１枚捨て、除外されているクィーンズナイトを対象として装備魔法、ＤＤＲを発動!!?そのモンスターを攻撃表示で特殊召喚し、このカードを装備する。フィールドに舞い戻れ、クィーンズナイト!!?」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

除外から赤い鎧を身に纏った女性の騎士がフィールドに現れる。
俺はその姿を確認してから、３体の戦士に手をかざす。
「俺はフィールドにいる戦士族、レベル４モンスター、Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード、Ｈ・Ｃ　エクストラソード、クィーンズナイトでオーバーレイ!!?３体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?』
サウザンドブレード、エクストラソード、クィーンズナイトが光と

なり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
　そして渦が爆けるとそこから現れるのは圧倒的存在感を放つ巨大な槍を持つ白銀の騎士。
「終焉を導く槍よ‼?・今その力を守るべき者の為に振え‼?現れろ‼?Ｎｏ．８６Ｈ－Ｃ（ヒロイックチャンピオン）ロンゴミアント‼?」

〈Ｎｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアント〉★４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１５００

「っ、２体目のＮｏ．‼?」
「まずはエクシーズ素材になったＨ・Ｃ　エクストラソードの効果発動‼?このカードを素材としてエクシーズ召喚したモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする‼?」

Ｎｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアント
ＡＴＫ１５００→２５００

「そしてＮｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアントは永続効果、リンクグローリーにより、オーバーレイユニットの数によって様々な効果を得る。１つ以上で戦闘破壊されず、２つ以上で攻撃力・守備力は１５００ポイントアップし、３つ以上でこのカードはこのカード以外の効果を受けず、４つ以上で相手はモンスターを召喚・特殊召喚できなくなり、５つ以上で１ターンに１度、相手フィールドのカードを全て破壊できる」
「はっ‼?何だい、そのインチキくさい効果は‼?」
「勿論制限もあるさ。Ｎｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアントは相手のエンドフェイズに１つずつオーバーレイユニットは取り除かれていく。現在、Ｎｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアントのオーバーレイユニットは３つ。よって戦闘破壊されず、攻撃力・守備力は１５００ポイントアップし、このカードはこのカード以外の効果を受けない」

Ｎｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアント
ＡＴＫ２５００→４０００

「っ、戦闘破壊されず効果を受けない攻撃力４０００ってだけでも十分厄介だよ」
「それ以上に厄介な布陣の癖によく言うぜ。バトル‼？」
「おっと、ならバトルフェイズ開始時、墓地の仁王立ちを除外して効果発動‼？墓地のこのカードを除外し、自分フィールドのモンスター１体を対象としてこのターン、相手は対象のモンスターしか攻撃できない。対象にするのはヴァンパイアの使い魔だよ」
「っ、そんなものまで落ちてたのか……」
「ああ、言い忘れてたけど、真紅眼の不屍竜にはもう１つ効果がある。真紅眼の不屍竜のもう１つの効果、ネクロファンタズムは真紅眼の不屍竜以外のアンデット族モンスターが戦闘で破壊された時、自分または相手の墓地のアンデット族モンスター１体を選んで自分フィールドに特殊召喚することができる。攻撃するなら注意して行うことだね」
「ぐっ、倒したら後続が出てくる上にドーハスーラの効果まで発動するのか……俺は何もせずにターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ８０００　手札１
ー▲▲ーー　ー
ーー○□ー
☆　☆
○○○○□
ーー△▲ー　ー
夜　ＬＰ６２００　手札０

「ボクのターン、ドロー……うーん、あのＮｏ．……戦闘破壊も無理で効果も無理。おまけに攻撃力も高い。オーバーレイユニットが減っていくとはいえ、このままだとボクのモンスターもただでは済ま

ないか」
　そういいながら夜は少しの間考える素ぶりを見せると、ニヤリと笑った。
「なら、このターンで一気に決めさせて貰おうかな？」
「何？」
「まずは墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動!!？自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローする。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外するよ。ボクはフィールドのヴァンパイアサッカーをＥＸデッキに戻し、カードを1枚ドローする!!？そして、魅力せよ!!？月夜に輝くサーキット!!？」
　夜が正面に手をかざし、再びサーキットが現れる。
「召喚条件はアンデットモンスター2体!!？ボクはヴァンパイアの使い魔と死霊王ドーハスーラの2体をリンクマーカーにセット!!？サーキットコンバイン!!？リンク召喚!!再び現れろ、月下で戯れる吸血鬼!!？リンク2!!？ヴァンパイアサッカー!!？」

〈ヴァンパイアサッカー〉ＬＩＮＫ　２　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ１６００　↙？　↘？

「これでフィールドが空いたね。墓地のヴァンパイアの眷属の効果発動!!？同名カードは1ターンに1度、このカードが墓地に存在する場合、手札及び自分フィールドの表側表示のカードの中から、ヴァンパイアカード1枚を墓地へ送ってこのカードを特殊召喚する!!？ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。ボクは永続魔法のヴァンパイアの領域を墓地に送りヴァンパイアの眷属を特殊召喚!!？」

〈ヴァンパイアの眷属〉☆２　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ１２００

「何？ここで攻撃表示だと？」
「そしてヴァンパイアの眷属の効果とチェーンしてヴァンパイアサッカーの効果発動!!？墓地からアンデット族モンスターが特殊召喚されたからデッキから1枚ドローし、ヴァンパイアの眷属の効果で５００ライフポイントを支払いデッキからヴァンパイアデザイアを手札に加えるよ」
「ここにきてさらに手札を増やすのか……だが、お前のデッキはもうほとんど無いぜ？」
　俺から見える夜の残りのデッキ枚数は2枚。
　このままだと俺にトドメをさす前にデッキが切れると思うのだが……
「ご忠告どうも。だけど心配いらないさ。今から少しデッキは増えるし、さっき言った通りこのターンで決めさせて貰うつもりだからね!!？墓地に存在する罠カード、リターンオブアンデットの効果発動!!？このカードが墓地に存在する場合、除外されている自分のアンデット族モンスター1体を選んでデッキに戻し、このカードを自分フィールドにセットする!!？ただし、この効果でセットしたこのカードはフィールドから離れた場合に除外される。ボクは除外されているゾンビキャリアをデッキに戻してこのカードをセットする」
「っ、除外からデッキに戻すカードがあったのか……」
「そしてカードがセットされたこの瞬間、墓地のＥＭ（エンタメイト）五虹の魔術師の効果発動!!？」
「はっ!!？ＥＭだって!!？」
　夜の口から飛び出した予想外のカード名に俺は驚きの声を上げる。
　そんな俺に夜は苦笑を浮かべながら頬を掻く。
「あ、はは、まあ驚くよね。これは友人が無理矢理押し付けてきたカードでね。ボクのデッキならこのカードを使いこなして色んな人を驚かせれるって聞かなくて……」
「あーそれは、なんというか……苦労してるんだな、お前も」
「分かってくれるかい？確かに相性はいいんだけど、ボクのデッキに

は似合わないんだよね」
そういって夜が疲れたようにため息を吐く。
そんな夜にどこか既視感を感じ、俺は思わず同情した視線を向けてしまう。
しばらくなんとも言えない空気が流れたが、夜が気を取り直すように首を振り、明るい声を出した。
「ま、まあ、相性がいいのは間違いないからね。気を取り直して、ＥＭ五虹の魔術師の効果発動‼？このカードが墓地に存在し、自分フィールドに魔法・罠カードがセットされた場合、墓地のこのカードを自分のペンデュラムゾーンに置くよ‼？」
夜の右隣に光の柱が立ち上り、その光の中に虹色に輝く魔術師の姿が映る。
そしてその魔術師の下には１２の数字が浮かぶ。
「ＥＭ五虹の魔術師のペンデュラム効果により、お互いは自身の魔法＆罠ゾーンにセットされているカードの数により効果を適用する。０枚なら自分フィールドのモンスターは攻撃できず、効果を発動できなくなる」
「セットカードが無いと行動を制限してくるペンデュラムカードか……面倒だな」
「まあ、今のボク達のフィールドにはセットカードがあるから関係ないけどね。続けるよ、墓地のアクションマジック―ダブルバンキングの効果発動‼？このカードが墓地に存在する場合、自分メインフェイズに手札から魔法カード１枚を捨ててこのカードを自分の魔法＆罠ゾーンにセットするよ。ただし、この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できない。ボクは手札のアンデットストラグルを捨ててこのカードをセットする。さらに今墓地にいったアンデットストラグルの効果発動‼？このカードもリターンオブアンデットと同じように除外されている自分のアンデット族モンスター１体を選んでデッキに戻し、このカードを自分フィールドにセットする。ただし、この効果でセットしたこのカードはフィールドから離れた場合に除外される。ボクは除外されているヴァンパイアソーサラーを

デッキに戻してこのカードをセットする」
夜のフィールドにセットカードが増えていき、一気に夜の魔法＆罠ゾーンがセットカードで埋まる。
先程、五虹の魔術師のペンデュラム効果で自身の魔法＆罠ゾーンにセットされているカードの数により効果を適用すると言っていた。
ということは、今のように夜のフィールドに限界までカードがセットされればーーー
「そして改めてＥＭ五虹の魔術師のペンデュラム効果発動‼？自分フィールドに４枚以上のセットカードがある時、自分フィールドのモンスターの攻撃力は元々の数値の倍になる‼？」
「っ⁉？何だって⁉？」
ーーー秘められていた強力な力が解放される。
光の柱にいる五虹の魔術師から虹色のオーラが夜のモンスター達に放たれ、その身体を包み込んでいく。
虹色のオーラに包まれた夜のモンスター達は力強い咆哮をあげた。

ヴァンパイアの眷属
ＡＴＫ１２００→２４００

ヴァンパイアサッカー
ＡＴＫ１６００→３２００

真紅眼の不屍竜
ＡＴＫ２４００→４８００→５８００

ヴァンパイアジェネシス
ＡＴＫ３０００→６０００

Ｎｏ．２２不乱健
ＡＴＫ４５００→９０００

「全体の攻撃力が倍に……不乱健にいたっては攻撃力９０００だって⁉？」
「君のＮｏ．がどんな耐性を持っていたってこれなら関係ない。Ｎｏ．が生き残ろうとも、君が生き残れないのさ」
「っ……」
「そしてさっき説明した真紅眼の不屍竜の効果は覚えてるかい？君のフィールドにはちょうどよくアンデットになっているモンスターがいるよ」
「っ、しまった⁉？」
「行くよ、バトル⁉？真紅眼の不屍竜でＮｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアントを攻撃⁉？ネクロメガフレア⁉？」
「っ、リバースカードオープン⁉？罠発動、ダメージダイエット⁉？このターン自分が受ける全てのダメージは半分になる⁉？」
「むっ、ダメージを軽減する罠があったのか」
　不屍竜が口から青い炎の球を放ち、ロンゴミアントの身体を呑み込む。
「くっ⁉？」

遊騎　ＬＰ８０００→７１００

　青い炎に呑み込まれていたロンゴミアントは槍を振るって身体を呑み込んでいた炎を弾き飛ばした。
「続けていくよ、ヴァンパイアの眷属でＨ・Ｃ　ダブルランスを攻撃⁉？ブラッディバイト⁉？」
　ヴァンパイアの眷属が闇を纏ってダブルランスに突撃し、ダブルランスの身体に喰らいついてその身体に風穴をあける。
　風穴を開けられたダブルランスからは瘴気が溢れ出し、その瘴気を真紅眼の不屍竜が吸収し、咆哮をあげて冥界の門を開く。
「真紅眼の不屍竜の効果発動⁉？ネクロファンタズム⁉？真紅眼の不屍竜以外のアンデット族モンスターが戦闘で破壊された時、自分または相手の墓地のアンデット族モンスター１体を選んで自分フィール

ドに特殊召喚することができる‼?・甦れ、死霊王　ドーハスーラ‼?」

〈死霊王　ドーハスーラ〉☆８　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２８００→５６００

真紅眼の不屍竜
ＡＴＫ５８００→５７００

不屍竜に導かれ、再びドーハスーラが姿を現わす。
そしてドーハスーラの身体も虹色のオーラに包まれ、その力を増している。
これは、本格的にマズくなってきたな。
「さあ、次だ。ヴァンパイアサッカーで聖騎士の追想　イゾルデを攻撃‼?・ブラッディスキュア‼?」
ヴァンパイアサッカーが両手を地面に振り下ろすと、地面から血で出来た杭が現れ、イゾルデ達の身体を串刺しにし、消滅させた。

遊騎　ＬＰ７１００→６３００

「ぐっ、まだまだ‼?」
「ここからが本番だよ。死霊王ドーハスーラでＮｏ．８６Ｈ－Ｃ　ロンゴミアントを攻撃‼?・ハデスサーペント‼?」
ドーハスーラが杖を振るうと冥界から蛇の大群が呼び出され、ロンゴミアントの身体に喰らいつく。
ロンゴミアントは地面に勢いよく槍を振り下ろして地割れを引き起こし、動きが止まった蛇達を吹き飛ばした。

遊騎　ＬＰ６３００→５５００

「くっ……これぐらいで……‼?」

「まだまだ終わらないよ‼?ヴァンパイアジェネシスでＮｏ．８６ＨｰＣ　ロンゴミアントを攻撃‼?ブラッディストーム‼?」
　ロンゴミアントにヴァンパイアジェネシスが手をかざすと、ヴァンパイアジェネシスの周囲に血で出来た槍が現れ、ロンゴミアントに降り注ぐ。

遊騎　ＬＰ５５００→４５００

「っ‼?」
「これで最後‼?Ｎｏ．２２不乱健でＮｏ．８６ＨｰＣ　ロンゴミアントを攻撃‼?カラプスフィスト‼?」
『ウゥ……ウァァァァァ‼?』
　度重なる攻撃に膝をついているロンゴミアントに不乱健が咆哮をあげながらその巨大な拳を振りおろす。
　ロンゴミアントはその拳を防ごうとしたが、勢いを抑えきれずそのまま叩き潰された。
「ぐあああっ‼?」

遊騎　ＬＰ４５００→２０００

「ふふっ、一先ずお見事と言っておこうかな?エンドフェイズ、ボクはシャッフルリボーンの効果で手札を1枚除外する」
「Ｎｏ．８６ＨｰＣ　ロンゴミアントの効果発動、オーバーレイユニットを1つ取り除く。残りのオーバーレイユニットは2つだ」

遊騎　ＬＰ２０００　手札1
ｰ▲ｰｰｰ　ｰ
ｰｰ○ｰｰ
☆　ｰ
○○○○○
▲▲▲▲△　ｰ

夜　ＬＰ６２００　手札２

「……これは流石にヤバいな」

夜のフィールドを埋め尽くすアンデット達を見て、俺は思わず渋い表情を浮かべてしまう。

俺のフィールドにはオーバーレイユニットが２つになったロンゴミアントとセットカードが１枚。

それに対し、夜にはフィールドを埋め尽くす程のモンスター達とそれを強化している五虹の魔術師と４枚のセットカードがある。

１枚でもセットカードを使わせるか破壊できれば五虹の魔術師の強化は解かれるが、現状その手段は無い上に強化が解かれても俺の残り少ないライフポイントを削りきるには十分過ぎるモンスター達が揃っている。

おまけに俺は今伏せられているセットカードが無くなればモンスターによる攻撃も効果も封じられてしまう。

状況は圧倒的に俺の不利。

「サレンダーするかい？」

夜からそんな言葉が聞こえてくる。

「君は十分頑張った。これだけの攻撃を前によく耐えきったよ。だけど、君のＮｏ．の効果耐性は消えたし、ボクは伏せカードもモンスターも万全だ。次のターンには確実に君を倒すことができる。負けたらＮｏ．はボクの元に来ちゃうし、これ以上やる必要はないんじゃないかな？」

夜の言葉に俺も確かにそう思う。

ここから逆転することなんて、奇跡に近いのだろう。

だけど、それでもーーー

「断る」

「……」

「確かに、俺のデッキにこの状況を打開するカードなんて、無いかも知れない。そんな中で次のターンも生き残ることなんて不可能かも知れない。だが、それでも俺は、自分から諦めるという選択だけは絶対

にしない‼?」
「っ‼?」
俺の気迫に、夜が気圧される。
そう、諦めるということだけは、俺には選べない。
「どんなに可能性が低くても、ライフが０になるまでは、その可能性からは逃げないと決めたんだ‼?」
それが、無用な苦しみを生むのだとしても……
「こんなどうしようもない人間を師匠だと言ってくれる子がいるんだ。そのために辛い運命とだって戦ってみせると、絶対に諦めないと言ってくれた優しい子が。どうしようもない俺のことを信じてくれた弟子の気持ちを、裏切るような真似だけはしたくない‼?」
辛く苦しい日々を送ってきたハズなのに、それでも俺を信じてくれたあの子を、俺が裏切ることだけはしたくない‼?
「だから、俺はどんな逆境でも戦う。このライフが完全に尽きるまで、何があっても、絶対に諦めねぇ‼?」
最後まで諦めないこと、それが遊花と約束した、あの子の師匠としての誓いだから。
「……そうか、君にもあるんだね、絶対に守りたいものが」
そういって夜が柔らかな笑みを浮かべる。
そして1度目を閉じると、強い意志がこもった目で俺を見た。
「なら、見せてみなよ。君にこの逆境を乗り越える力があるってことを‼?」
「言われるまでもない‼?俺のターン、ドロー‼?」
ドローしたカードを見る。
まだ、可能性はある。
「１０００ライフポイントを払ってリバースカードオープン‼?罠発動‼?活路への希望‼?」
遊騎　ＬＰ２０００→１０００
「自分のライフポイントが相手より１０００以上少ない場合、発動で

き、お互いのライフポイントの差２０００につき1枚、自分はデッキからドローする‼?俺のライフは１０００‼?夜は６２００‼?よって2枚のカードをドローする‼?」
「‼?ここにきてドローカードをまだ残してたか……でも、無駄だよ。Ｎｏ．２２不乱健の効果発動‼?グラスプデトネーション‼?」
「ここでＮｏ．の効果か‼?」
「1ターンに1度、オーバーレイユニットを1つ取り除き、手札を1枚墓地へ送り、相手フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して発動‼?このカードを守備表示にし、選択したカードの効果をエンドフェイズ時まで無効にする‼?この効果は相手ターンでも発動できるよ」
「っ……あの攻撃力がある癖にフリーチェーンの無効効果まであるのかよ‼?」
「ボクは手札を1枚捨ててＮｏ．２２不乱健を守備表示にし、活路への希望を無効にする‼?それにチェーンして死霊王ドーハスーラの効果発動‼?ゴーストグラジュエイト‼?ボクは2つ目の効果を適用してＮｏ．８６ＨｒＣ　ロンゴミアントを除外する‼?」
ドーハスーラの魔術でロンゴミアントが闇に呑まれて霊魂に変わり、消滅する。
そして発動しようとしていた活路への希望を不乱健がその巨大な手で掴み、力強く握ると握り潰された活路への希望が爆散した。
『ウゥ‼?』
まさか爆発するとは思っていなかったのか、驚いた不乱健は腕を胸の前で組んで防御の体制をとった。

Ｎｏ．２２不乱健
ＡＴＫ９０００→ＤＥＦ１０００

真紅眼の不屍竜
ＡＴＫ５７００→５８００

「この状況でもドローカードを温存していたのは素直に賞賛するよ。だけど、そのせいでロンゴミアントも消えたし、セットカードが無くなったからモンスター効果と攻撃も封じられた。やりたいようにやったところで、どっちみち無駄だったようだね」
「いや……まだ俺の希望は尽きていない‼?魔法カード、貪欲な壺‼?」
「なっ⁉?またドローカードだって⁉?」
「墓地に存在するＮｏ．９６ブラックミスト、聖騎士の追想　イゾルデをＥＸデッキに、ヒーローキッズ３体をデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする‼?」
今ある手札だけではこの状況を打開することはできない。
全ては、このドローに掛かっている。
握るカードに力を込め、俺はデッキから勢いよくカードをドローし、ドローしたカードを見る。
「……来てくれたんだな」
「っ‼?」
ドローしたカードを見て、俺は思わず笑みを浮かべる。
このカードは、さっき『Ｎａｔｕｒａｌ』で手に入れたばかりのカード。
俺のデッキの、新しい戦術の核となる１枚。
きっと、このカードはまだ俺のことを認めてくれてはいないだろう。
先程まで全然ドローできる気がしなかったのだから、このカード自体が、ドローされるのを拒んでいたのだと思う。
それでも、この状況でドローできたということは、きっとこのカードは俺を試しに来たのだ。
自分を使いこなせるかどうかを。
ああ、きっとお前の思いに応えてやる。
だからーーー
「今は俺に力を貸してくれ‼?まずはカードを１枚伏せて、魔法カード、シャッフルリボーンを発動‼?自分フィールドにモンスターが存

在しない場合に自分の墓地のモンスター1体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、エンドフェイズに除外される!!?もう1度来い、クィーンズナイト!!?」

〈クィーンズナイト〉☆4　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

再び俺のフィールドに現れるクィーンズナイト。
そして俺は、手札に残った最後のカードを使用する。
「さあ、初陣だ!!?俺は、チューナーモンスター、ジャンクチェンジャーを召喚!!?」
「っ!!?チューナーだって!!?」

〈ジャンクチェンジャー〉☆3　戦士族　地属性
ＡＴＫ１５００

フィールドに現れたのは鋼鉄の身体を持つロボットのような戦士。
さあ、お前の力、十分に見せて貰うぜ。
「ジャンクチェンジャーの効果発動!!?このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、フィールドのジャンクモンスター1体を対象として2つの効果から1つを選択して発動できる。対象のモンスターのレベルを1つ上げるか、対象のモンスターのレベルを1つ下げる。俺は2つ目の効果を使用し、ジャンクチェンジャーのレベルを1つ下げる!!?」

ジャンクチェンジャー
☆3→2

ジャンクチェンジャーの身体が赤く輝き、レベルが1つ下がる。
これで準備は整った。

そして俺は新しい言霊を紡ぐ。
「俺はレベル４、クィーンズナイトに、レベル２、チューナーモンスター、ジャンクチェンジャーをチューニング!!?」
「来るね、シンクロ召喚が……」
ジャンクチェンジャーが光の輪になり、クィーンズナイトが小さな星に変わり、光の道になる。
「夜空に輝く星屑は、希望の道を照らし出す!!?シンクロ召喚!!?光芒を描け、スターダストチャージウォリアー!!?」
〈スターダストチャージウォリアー〉☆６　戦士族　風属性
ＡＴＫ２０００

光の道が輝くと、その中から現れたのは翼にいくつもの砲身を持つ空色の戦士。
さあ、頼んだぜチャージウォリアー。
この逆境を吹き飛ばしてくれ!!?
「スターダストチャージウォリアーの効果発動!!?スターリーチャージ!!?このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分はデッキから１枚ドローする!!?」
「またドローか……だけど、この状況でたった１枚ドローしたところでこの状況がどうなるって言うんだい?」
「勿論、一気に変わるんだよ。俺はカードを１枚伏せて、先に伏せたセットカードを使わせて貰う。リバースカードオープン!!?装備魔法、月鏡の盾をスターダストチャージウォリアーに装備!!?」
「っ、装備魔法か……」
チャージウォリアーの手元に満月のような綺麗な金色の輝きを放つ盾が現れる。
「このカードの装備モンスターが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時のみ、装備モンスターの攻撃力・守備力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力と守備力の内、高い方の数値を＋１００ポイントアップした数値になる!!?」

「戦闘では必ず勝てるようになるってわけか。だけど、それだけじゃ何も変わらない。ボクのこの布陣は1体のモンスターがやられたところで何も変わらない!!?」
「ああ、分かってるさ。だから、夜のモンスターは全滅させて貰う!!?」
「何?」
「スターダストチャージウォリアーにはもう1つ効果がある。スターダストチャージウォリアーの永続効果、アナアレーションシューティング!!?このカードは特殊召喚された相手モンスター全てに1回ずつ攻撃できる!!?」
「っ!??何だって!??」
チャージウォリアーの効果を聞き、夜が目を見開く。
現在夜のフィールドにいるアンデット達は全て特殊召喚されたモンスター。
月鏡の盾を装備しているチャージウォリアーは相手がどんな攻撃力、防御力を持っていようと戦闘ができるのであれば関係ない。
今のチャージウォリアーならたった1体だけでも殲滅できる!!?
「さあ行くぞ、バトル!!?スターダストチャージウォリアーで真紅眼の不屍竜を攻撃!!?ファーストフルムーンドロップ!!?」
「っ、迎え撃て、真紅眼の不屍竜!!?」
「ダメージ計算時、月鏡の盾によりスターダストチャージウォリアーは真紅眼の不屍竜の攻撃力を＋１００ポイントアップした数値になる!!?」

スターダストチャージウォリアー
ＡＴＫ２０００→５９００

不屍竜が口から青い炎の球を放ち、チャージウォリアーを焼き尽くそうとするが、チャージウォリアーがその炎を月鏡の盾で反射し、不屍竜が怯んだところを翼の砲身で撃ち抜いた。

夜　ＬＰ６２００→６１００

「くっ、真紅眼の不屍竜‼?」

「これでアンデットを倒しても蘇生しなくなったな。二撃目だ。スターダストチャージウォリアーでヴァンパイアの眷属を攻撃‼?セカンドフルムーンドロップ‼?」

スターダストチャージウォリアー
ＡＴＫ２０００→２５００

勢いよく突撃してきたヴァンパイアの眷属を、チャージウォリアーは月鏡の盾でいなし、体制を崩したところを砲身で撃ち抜き、消滅させる。

夜　ＬＰ６１００→６０００

「くっ、ダメージは大したことないけど、これは……」

「まだまだいくぜ、三撃目だ‼?スターダストチャージウォリアーでヴァンパイアサッカーを攻撃‼?サードフルムーンドロップ‼?」

スターダストチャージウォリアー
ＡＴＫ２０００→３３００

ヴァンパイアサッカーが再び両手を地面に振り下ろし、地面から血で出来た杭を出現させるが、チャージウォリアーはそれを空に跳び上がって交わし、空から砲撃をし、消滅させる。

夜　ＬＰ６０００→５９００

「っ……」

「四撃目‼?スターダストチャージウォリアーで死霊王ドーハスーラ

を攻撃!!?・フォースフルムーンドロップ!!?・」

スターダストチャージウォリアー
ＡＴＫ２０００→５７００

ドーハスーラが杖を振るい、冥界から蛇の大群を呼び出すが、チャージウォリアーは砲身全てを解放し、蛇の大群ごとドーハスーラを撃ち抜いて消滅させる。

夜　ＬＰ５９００→５８００

「ぐっ……」
「五撃目!!?・スターダストチャージウォリアーでヴァンパイアジェネシスを攻撃!!?・フィフスフルムーンドロップ!!?・」

スターダストチャージウォリアー
ＡＴＫ２０００→６１００

ヴァンパイアジェネシスの周囲に生み出された血で出来た槍がチャージウォリアーに降り注ぐ。
チャージウォリアーはその槍を月鏡の盾で防ぎながらヴァンパイアジェネシスに近付いていき、驚いているヴァンパイアジェネシスの口に砲身を突っ込み、砲撃をして消滅させた。

夜　ＬＰ５８００→５７００

「うぅ……」
「これで最後だ!!?・六撃目!!?・スターダストチャージウォリアーでＮｏ．２２不乱健を攻撃!!?・シックスフルムーンドロップ!!?・」

スターダストチャージウォリアー

ＡＴＫ２０００→９１００

ヴァンパイアジェネシスを吹き飛ばしたチャージウォリアーは不乱健に砲撃する。

「くっ……迎え撃て‼？Ｎｏ．２２不乱健‼？」

『ウァァァァァ‼？』

放たれた砲弾を不乱健は弾き飛ばしチャージウォリアーに接近し、巨大な腕でチャージウォリアーの身体を捉え、締め上げる。

身体を締め上げられながらも、チャージウォリアーは全砲身を不乱健に向け、零距離で砲撃を放ち、不乱健の身体に風穴をあけた。

『ウゥ……』

「っ……不乱健‼？」

風穴をあけられた不乱健は夜の方を振り向くと粒子に変わり消滅した。

「くっ……まさかこの状況をたった1体のモンスターで覆すなんて……」

「これでお前のモンスターは全滅した。まだ終わりにはさせねぇぞ。俺はこれでターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ１０００　手札０

ー▲△ーー　ー

ーーーーー

ー　○

ーーーーー

▲▲▲▲△　ー

夜　ＬＰ５７００　手札１

「ボクのターン、ドロー‼？……っ、まさかここで防戦を強いられるなんてね。ボクは酒呑童子を召喚‼？」

〈酒呑童子〉☆４　アンデット族　地属性

ＡＴＫ１５００→３０００

現れたのは大きな酒瓶を手に持った金髪の鬼。

「酒呑童子の効果発動‼?･1ターンに1度、２つの効果から1つを選択して発動できる。自分の墓地からアンデット族モンスター2体を除外してデッキから1枚ドローするか、除外されている自分のアンデット族モンスター1体をデッキの一番上に戻す。ボクは1つ目の効果で墓地からＮｏ．２２不乱健とヴァンパイアジェネシスを除外して1枚ドローする‼?･」

「Ｎｏ．２２不乱健を除外するのか?･アンデット族は蘇生効果も多いだろ?･」

「ボクも蘇生してあげたいけど、Ｎｏ．２２不乱健はエクシーズ召喚でしか特殊召喚できない制約があってね。蘇生してあげることはできないのさ。それにどれだけ攻撃力が高かろうが今のスターダストチャージウォリアーには戦闘では１００上回れる。まあ、その分何を召喚しようとも１００ダメージしか受けないという利点もある。だけど、ダメージを優先しようとして他のモンスターを出せば、ボクが出すアンデットに君の残り僅かなライフは確実に削り取れる」

「ぐっ……」

「だから今はゆっくりと準備をさせて貰うさ。ボクはこれでターンエンドだよ」

遊騎　ＬＰ１０００　手札０

ー▲△ーー　　ー

ーーーーー

ー　　○

ーー○ーー

▲▲▲▲△　　ー

夜　ＬＰ５７００　手札２

「俺のターン、ドロー‼?･」

夜の言う通り、今の状況ではダメージは増えない。
……少し危ない橋を渡ることになるが、どうせこのままだとそう遠くない内にやられる。
なら、ここで畳み掛ける!!?
「まずは墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動!!?自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローする。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外する!!?俺はフィールドの月鏡の盾をデッキに戻し、カードを1枚ドローする!!?」
「むっ、いいのかい?それじゃあボクの攻撃は耐えられないよ?」
「さあ、どうだろうな?俺はカードを1枚伏せて、魔法カード、戦士の生還!!?自分の墓地の戦士族モンスター1体を対象としてその戦士族モンスターを手札に加える!!?俺は墓地に存在するジャンクチェンジャーを手札に加え、再び召喚!!?」

〈ジャンクチェンジャー〉☆3　戦士族　地属性
ＡＴＫ１５００

再びフィールドに現れるジャンクチェンジャー。
お前の力、もう1度貸して貰うぜ!!?
「再びジャンクチェンジャーの効果発動!!?2つ目の効果を使用し、ジャンクチェンジャーのレベルを1つ下げる!!?」

ジャンクチェンジャー
☆3→2

「っ、またチューナーモンスターが出てきたということは……」
「俺はレベル6、スターダストチャージウォリアーに、レベル2、チューナーモンスター、ジャンクチェンジャーをチューニング!!?」
ジャンクチェンジャーが光の輪になり、今度はチャージウォリアー

が小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から現れるのは機械の身体を持つ電子の巨人。
「迫る逆境、覆したるは不屈の闘志!!?シンクロ召喚!!?百折不撓の戦士、ギガンティックファイター!!?」

〈ギガンティックファイター〉☆8　戦士族　地属性
ＡＴＫ２８００

「レベル８のシンクロモンスター……」
「ギガンティックファイターの永続効果、フォルテュードフォース!!?このカードの攻撃力は、お互いの墓地の戦士族モンスターの数×１００ポイントアップする!!?」
「っ、攻撃力を増加させるタイプのモンスターか!!?」
「俺の墓地にいる戦士族モンスターはＨ・Ｃ　ダブルランス２体にＨ・Ｃ　強襲のハルベルト、Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード、Ｈ・Ｃ　エクストラソード、クィーンズナイト、ジャンクチェンジャー、スターダストチャージウォリアーの８体。よって攻撃力は８００ポイントアップする!!?」

ギガンティックファイター
ＡＴＫ２８００→３６００

「攻撃力で超えられたか……」
「これだけじゃないぜ!!?俺は墓地に存在する速攻魔法、バスターモードゼロを除外して効果発動!!?」
「っ!!?そんなカードいつ……っ、ＤＤＲの手札コストか!!?」
「自分メインフェイズに墓地のこのカードを除外して、手札・デッキからバスターモード１枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンにセットする!!?そしてこの効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できる!!?俺はデッキから罠カード、バスターモードをセットする

‼?」
俺のデッキからバスターモードがセットされる。
これで準備は整った‼?
「バトル‼?ギガンティックファイターで酒呑童子を攻撃‼?ギガンティックブレイク‼?」
ギガンティックファイターは力強く跳躍すると酒呑童子を勢いよく蹴り飛ばした。

夜　ＬＰ５７００→５１００

「くっ……」
「さあ、ここからが本番だ‼?ギガンティックファイターをリリースし、リバースカードオープン‼?罠発動‼?バスターモード‼?」
「っ……やっぱり追撃してくるか」
「自分フィールドのシンクロモンスター１体をリリースしてそのモンスターのカード名が含まれる／バスターモンスター１体をデッキから攻撃表示で特殊召喚する‼?アクセスコード、ギガンティックファイターＥＸＥ‼?」
ギガンティックファイターの正面にロケットがついた青いアーマーが現れる。
ギガンティックファイターがそのアーマーを蹴り飛ばすと、アーマーが弾け飛びギガンティックファイターに装着されていく。
装着が終わるとそこに佇むのは背中にロケットを背負った青いボディの電子の巨人。
「重甲合体‼?ギガンテックファイター／バスター‼?」
〈ギガンテックファイター／バスター〉☆１０　戦士族　地属性
ＡＴＫ３３００
「ギガンテックファイター／バスター……」
「ギガンテックファイター／バスターの効果発動‼ノックアウト

フォース!!??このカードが特殊召喚に成功した時、自分のデッキから戦士族モンスターを2体まで選択し墓地へ送る事ができる!!?俺はデッキからタスケナイトとヒーローキッズを墓地に送る!!?そして追撃だ!!?ギガンテックファイター／バスターでダイレクトアタック!!?ギガンティックブレイクバスター!!?」

ギガンテックファイター／バスターは背中のロケットを使い勢いよく空へと飛び立つと、右手を夜に向け、左手で支える。

すると、右手が銃口に変わり、銃口からレーザーが放たれて夜の身体を貫いた。

夜　ＬＰ５１００→１８００

「ぐっ!!?強烈な攻撃だね……でも、何とか耐え切ってーーー」

「いや、まだだ!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?デストラクトポーション!!?」

「なっ!!?」

「自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択し、選択したモンスターを破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復する!!?俺が選択するのは、ギガンテックファイター／バスター!!?」

遊騎　ＬＰ１０００→４３００

「この瞬間、ギガンテックファイター／バスターの効果発動!!?バスターキャストオフ!!?フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、自分の墓地に存在するギガンテックファイター1体を特殊召喚する事ができる!!?キャストオフだ、ギガンテックファイター!!?」

俺のライフが回復し、ギガンテックファイター／バスターの身体から青いアーマーが勢いよく弾け飛ぶ。

青いアーマーが弾け飛んだギガンティックファイターは力強い雄

叫びをあげた。
〈ギガンティックファイター〉☆８　戦士族　地属性
ＡＴＫ２８００→３９００
「っ、まだ追撃を……」
「これで終わりだ‼？ギガンティックファイターでダイレクトアタック‼？ギガンティックブレイク‼？」
ギガンティックファイターが再び跳躍し、夜に向かって飛び蹴りの体勢を取る。
向かってくるギガンティックファイターを見て、夜はため息を吐く。
「まさかあの状況からここまで追い詰められるなんてね……流石に、これは使う気、無かったんだけどなぁ」
「何？」
夜の言葉に、俺は訝しげな表情を浮かべる。
そんな俺を見て、楽しそうに笑いながら、夜はそのカードを発動した。
「でも、やっぱり負けたくないから、使わせて貰うよ。リバースカードオープン‼？罠発動‼？死魂融合‼？自分の墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを裏側表示で除外し、その融合モンスター１体をＥＸデッキから融合召喚する‼？」
「っ‼？ここで融合魔法だって‼？」
「ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン攻撃できない。まあ、今は君のターンだから関係ないけどね。ボクは墓地に存在するヴァンパイアサッカーとヴァンパイアドラゴンを死魂融合‼？」
夜の正面に現れた渦にヴァンパイアサッカーとヴァンパイアドラゴンが吸い込まれていく。
そして、それと同時に渦から溢れ出す濃厚な闇。
圧倒的な威圧感。

言われなくても本能で分かる。
次に現れるのはーーー間違いなく闇のカード。
「冥府に堕ちた暗黒の魂よ‼?・今、その姿を龍に変え、世界を暗黒に染め上げろ‼?・冥界龍ドラゴネクロ‼?・」
〈冥界龍ドラゴネクロ〉☆8　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ３０００

現れたのは骨の鎧を纏った死霊の竜。
どんな効果を秘めているかは分からない。
だけど、確かに感じる。
あのモンスターは何かがヤバい。
「モンスターが増えたことで攻撃は中断する。俺はこれでターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ４３００　手札０
ーーーー▲ー　ー
ーー○ーー
ー　○
ーーーーー
▲▲▲ー△　ー
夜　ＬＰ１８００　手札２

「ボクのターン、ドロー‼?……ふふっ、いいものを引いた。今度こそ、君に引導を渡してあげるよ‼?」
「っ……」
「バトル‼?・冥界龍ドラゴネクロでギガンティックファイターを攻撃‼?・」
「っ、墓地に存在するタスケナイトの効果発動‼?・このカードが墓地に存在し、自分の手札が０枚の場合、相手モンスターの攻撃宣言時にデュエル中に１度だけ発動出来る‼?・このカードを墓地から特殊召

喚し、バトルフェイズを終了する!!?」
「やっぱり墓地効果があったね。だけど、無駄無駄!!?手札から屋敷わらしの効果発動!!?」
「っ、手札誘発モンスター!!?」
「墓地からカードを手札・デッキ・ＥＸデッキに加える効果、墓地からモンスターを特殊召喚する効果、墓地からカードを除外する効果以下のいずれかの効果を含む魔法・罠・モンスターの効果が発動した時、このカードを手札から捨ててその発動を無効にする!!?」
ゴシックなドレスを着たアンデットが現れ、タスケナイトの動きを封じる。
これでバトルフェイズを止められなくなった!!?
「これで邪魔ものはいなくなったね。喰らえ、冥界龍ドラゴネクロ!!?ソウルラヴィジュ!!?」
「っ、迎え撃て、ギガンティックファイター!!?ギガンティックブレイク!!?」
ドラゴネクロが闇の波動のようなものをギガンティックファイターに浴びせる。
浴びせられた闇の波動にギガンティックファイターは怯むが、闇の波動を振り切るように跳躍し、ドラゴネクロに跳び蹴りをくらわせ、爆散させた。

夜　ＬＰ１８００→１１００

「倒せた……のか？」
「ああ、戦闘はギガンティックファイターの勝ちさ。勝利はボクが貰うけどね!!?冥界龍ドラゴネクロの効果発動!!?ダークソウルラナウェイ!!?このカードがモンスターと戦闘を行ったダメージステップ終了時、そのモンスターの攻撃力は０になり、そのモンスターの元々のレベル・攻撃力を持つアンデット族のダークソウルトークン１体を自分フィールド上に特殊召喚する!!?」
「何!!?」

「さあ、闇の魂を解放しろ、ギガンティックファイター‼?」
闇の波動のダメージでギガンティックファイターが膝をつく。
すると、ギガンティックファイターの影が動き出し、実体化すると、そこには黒い身体を持つギガンティックファイターが現れた。

ギガンティックファイター
ＡＴＫ３９００→９００

〈ダークソウルトークン〉☆８　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ⊠?→２８００

「さあ、己の闇に向き合うといいよ。ダークソウルトークンでギガンティックファイターを攻撃‼?ダークギガンティックブレイク‼?」
「っ、迎え撃て、ギガンティックファイター‼?ギガンティックブレイク‼?」
ダークソウルとギガンティックファイターが同時に跳び上がり、跳び蹴りがぶつかり合う。
「リバースカードオープン‼?速攻魔法、アンデットストラグル‼?フィールドのアンデット族モンスター1体を対象としてターン終了時まで、そのモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップするか１０００ポイントダウンする‼?ボクはダークソウルトークンの攻撃力を１０００ポイントアップする‼?」

ダークソウルトークン
ＡＴＫ２８００→３８００

最初は拮抗していたが徐々にダークソウルが押しはじめ、ギガンティックファイターはその身体を貫かれた。

遊騎　ＬＰ４３００→１４００

「くっ……戦闘ダメージを受けた時、Ｈ・Ｃサウザンドブレードの効果、それにチェーンしてギガンティックファイターの効果発動‼？フォルテュードリザレクション‼？このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分または相手の墓地の戦士族モンスター１体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚できる‼？対象はギガンティックファイター‼？」

「無駄無駄無駄‼？速攻魔法、墓穴の指名者‼？相手の墓地のモンスター１体を対象としてそのモンスターを除外し、次のターンの終了時まで、この効果で除外したモンスター及びそのモンスターと元々のカード名が同じモンスターの効果は無効化される‼？除外するのは勿論ギガンティックファイター‼？」

「くっ、ギガンティックファイター‼？」

闇より現れた腕にギガンティックファイターが呑み込まれて消滅する。

「……Ｈ・Ｃサウザンドブレードの効果、このカードが墓地に存在し、戦闘・効果で自分がダメージを受けた時、このカードを墓地から攻撃表示で特殊召喚する」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

俺のフィールドに再びサウザンドブレードが現れる。

「楽しいデュエルだったけど、これで終わりだよ。手札を１枚捨ててリバースカードオープン‼？速攻魔法、アクションマジック―ダブルバンキング‼？自分フィールドのモンスターは、このターン戦闘で相手モンスターを破壊した場合、もう１度だけ続けて攻撃できる‼？」

「っ……」

「終わりだよ、ダークソウルトークンでＨ・Ｃサウザンドブレードを攻撃‼？ダークギガンティックブレイク‼？」

ダークソウルの跳び蹴りがサウザンドブレードに迫る。

ああ、確かに終わりだ。

俺のライフが０になることは避けられない。
「……次は勝つ」
「ふっ、次やる時もボクが勝つさ」
「ああ……だが、そういう台詞は勝ってから言うものだぜ」
「……えっ？」
俺の言葉に、夜が目を丸くする。
俺は苦笑を浮かべ、そんな夜に最後のカードを発動する。
「悪いな、今回は引き分けだ。リバースカードオープン‼？罠発動‼？ヒロイックリベンジソード‼？発動後このカードは装備カードとなり、自分フィールド上のヒロイックと名のついたモンスター１体に装備する。そして装備モンスターの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは相手も受け、装備モンスターと戦闘を行った相手モンスターをダメージ計算後に破壊する‼？」
「なっ⁉？」
「俺はＨ・Ｃサウザンドブレードにヒロイックリベンジソードを装備する‼？」
サウザンドブレードの手元に赤い長剣が現れるのと、同時にダークソウルの蹴りがサウザンドブレードを貫き、爆散する。
爆散したサウザンドブレードが持った赤い長剣が宙に浮かびあがると、ダークソウルを貫き、そのまま夜の身体も貫いた。

遊騎　ＬＰ１４００→０
夜　ＬＰ１１００→０

ーーーーーーーー

「ふぅ……」
「ふぅ……じゃない‼？」
デュエルが終わり、立体映像が消えたところで夜が俺に詰め寄ってくる。

もう少しで勝てたところを引き分けに持っていかれたのだからそりゃあ怒りもするわな。
「最後のアレは何だい⁉？確かに結果的に負けを引き分けに持っていけたけど、ボクが墓穴の指名者を持ってなくてギガンティックファイターを除外できなかったら、勝てる試合を引き分けの試合にしてるじゃないか‼？」
「確かにそうだが、アレも一応考えてやったんだよ。ギガンティックファイターが残ってたら確かにサウザンドブレードが敗因にも繋がるが、防ぎきれるハズのところで明らかにライフが残らないのにサウザンドブレードが攻撃表示でいたら怪しいだろう？」
「まあ……確かにあからさまに怪しくて攻撃を躊躇うかも知れないけど、思い切りが良かったら攻撃してくるかもしれないじゃないか」
「そうなっても待っているのは引き分けだ。俺にはあの時点で負けが無かった。勝つか引き分け。ベストとは言えなくても、ワーストじゃなくてベターなら構わない。それに、可能性として引き分けにできるなら試してみたかったというのもあるしな」
「試すだって？」
「引き分けの場合、闇のカード達はどうなるか、さ」
俺の言葉に、夜が目を見開いて自分のデュエルディスクからカードを取り出す。
俺も自分のデュエルディスクに入っているＥＸデッキから３枚のＮｏ．を取り出す。
勝者に移る性質があるらしいこのカード達に何か起こるかと思ったが、どうやら何も起こっていないようだ。
いや、正確には何も起こらないという結果が出たというべきか。
どうやら、引き分けであればＮｏ．の移動する性質は発動しないらしい。
恐らく、どちらが勝っているわけでもなく、負けてるわけでもないからだろう。
これはこれで重要な情報だな。
引き分けにする手段なんてそうそうあるものではないが、闇のカー

ドで暴走している人間が引き分けが可能なデッキを使っていた場合は闇のカードを引き離せない可能性があるということだ。
　自分の闇のカードを守る手段にもなりそうではあるが、そちらに特化させるぐらいなら勝利を目指す方が明らかにいいからな。
　まあ、頭の片隅においておくぐらいでいいだろうが、この情報を得られただけでも前進だな。
「……まあ、不乱健を奪われなかったからよしとしておくよ。ボクもこの子がいなくなったら困るからね」
「こちらに移ってきても返すつもりではあったけどな。俺のデッキじゃ不乱健なんてだせねぇし」
「ボクも返すつもりだったよ。戦士族縛りなんてボクには無理だし」
　そういってため息を吐くと、夜は頭を掻いてから再び頭を下げた。
「改めて、悪かったよ。勘違いで君にデュエルを挑んでしまって」
「いや、俺も勘違いしてたし、お互い様だ。だから、そんなに気にしないでくれ。それで、正直忘れてたんだが……そこで倒れてる人はどうするんだ？」
「あ」
　俺の言葉に、夜が倒したであろう男性を見る。
　そして気まずそうに視線を逸らしながら携帯端末を取り出すのだった。

ーーーーーーー

「それで、夜はどうして俺にデュエルを挑んできたんだ？例え俺が本当に闇のカードに操られてたとしても逃げればよかっただけだと思うが」
「んーそんなに深い理由はないよ？他の人を襲ったら面倒だし、逃げても追われたら面倒だから倒した方が早いと思っただけさ」
「面倒だったからが理由かよ……」
　デュエルセキュリティに連絡を取った俺達はすっかり忘れていた昼食を取るために、近くにあるファストフード店に入り、ハンバー

ガーを食べながらお互いのことを話していた。
どうやら夜が不乱健を手に入れたのは偶然だったらしい。
俺がコートオブアームズを拾った時のように、道端に落ちていた不乱健を誰かの落し物だと思って拾ったらカードから不乱健の声が聞こえてきたそうだ。
それからというもの、たまに闇のカードに操られた決闘者に襲われるようになり、成り行きで闇のカードを集める羽目になったようだ。
「それにこの近くにはデュエルアカデミアがあるだろう？そこに妹が通っててね。何かの間違いで闇のカードに操られた奴がデュエルアカデミアに紛れ込んだら怖いだろう？だから、他に被害が出る前に倒しておこうかなって」
「成る程、身内のためか。妹思いなんだな」
「まあ、家族だしね。やっぱり大切にしたいじゃないか」
そういって、少し照れたように笑いながら夜がハンバーガーを齧る。
そんな夜に優しい眼差しを向けていると、夜が誤魔化すように口を開いた。
「そ、それにしても、まさか闇のカードを作り出してばら撒いてる人間がいるなんてね。最近闇のカードに操られてる人が多いなと思ってはいたけど」
「俺も知り合いから聞いた話だが、そうらしいな。とはいっても、俺は闇のカード関連で襲われたのは夜を入れても3回だけだからあまり実感はないが」
「うぐっ……ボクを数に入れないでくれよ。悪かったとは思ってるんだからさ」
「はは、悪い悪い」
ジト目で俺を睨んでくる夜に、俺は苦笑する。
そんな俺を見てため息を吐きながら、夜は仕切り直すように真剣な表情を浮かべた。
「全く……それで、遊騎はこれからどうするんだい？その闇のカードをばら撒いている奴を探すのかい？」

「ああ。奴は俺が闇のカードを持ってることを知ってるから再び襲ってくる可能性もあるしな。元凶を叩かないと事態が解決しないなら見つけ出して倒してしまうのが1番だ。俺にも守りたい奴らがいるしな」
そういって、俺の脳裏に遊花達の姿が浮かぶ。
闇のカードのせいで遊花達の平穏な日常が脅かされる可能性があるというのであれば、その元凶は無くしておきたい。
そのためなら……俺の身体なんかいくらでも使い潰してやる。
そんな俺の顔を見て、夜は何かを考えるような仕草を見せ、苦笑を浮かべながら口を開いた。
「そっか……なら、その元凶を探すの、ボクも手伝うよ」
「……いいのか？確かに夜ぐらい強い奴が手伝ってくれたら心強いが、危険なことだぞ？」
「どのみちボクも闇のカードを持った人達に襲われるからね。事態が早く解決するならその方がいいし、連絡を取り合った方が楽だろう？それに、2人でやれば片方がもし負けてももう片方がフォローできるからね。勿論、ボクは負けないけど」
「……はは、そいつは頼もしいな。頼りにするぜ？」
「おうともさ‼？それじゃあ、これからよろしく頼むね、共犯者クン？」
「……俺らが悪者みたいな言い方をするなよ」
呆れたような表情を浮かべる俺を見て、夜は楽しそうに笑うのだった。

第５６話　開花する小花

★

「デュエルだ‼？栗原　遊花‼？お前を倒して、俺は冬城プロに挑戦させて貰う‼？」

「……うぅ～どうしてこうなったんでしょう」

デュエルディスクを構え、鋭い眼光で私を見てくる男の子の声と、まるで獲物を見つけた肉食獣のように私達を取り囲んでいる生徒達を見て、私は思わずため息を吐く。

どうしてこんなことになったのか。

事の始まりは数分前。

面白そうに薄く笑いながら私を見ている闇先パイの一言が原因だった。

ーーーーーーー

「それじゃあ、これよりデュエル学、実技の講義を始めます。よろしくお願いします」

壇上で、マイクを片手にぺこりと頭を下げる闇先パイを見てどこか張り詰めた雰囲気の中で生徒達は頭を下げる。

それも当然といえば当然なのかも知れない。

講義を担当するのは現世界ランキング４位のプロ決闘者。

自分達の遥か先を進む先達なのだから。

始業式の後、いつの間にか会場から姿を消していた闇先パイは私達が家に帰ると普段と変わらない態度で私達を出迎えた。

闇先パイに聞いたところ、闇先パイがデュエルアカデミアで特別講師をすることになったのは校長先生に頼みを聞いて貰う代わりにデュエルアカデミアの特別講師をするという約束があったらしい。

闇先パイの方も現在のデュエルアカデミア生に興味があり、プロリーグの試合がない時に週２回程度ということで引き受けたのだと

か。
驚きはしたけど、闇先パイに教えて貰える時間が増えることは私としてもとても嬉しかった。
闇先パイの教育者としての技能は遊陽ちゃん達とのデュエルで十分体験したもんね。
「それじゃあ早速講義に移っていきたいと思うけど、今日はまず、私にみんなのデュエルを見せて欲しい」
闇先パイの言葉に教室から疑問の声があがる。
そんなことを気にした素ぶりも見せずに、闇先パイは言葉を続けていく。
「私の講義はそんなに数が多くないし、君達のデュエルを見たことがないから、現状だと当たり障りがない講義しかできない。それだと個人個人の戦術にあった講義の方がみんなも身に入ると思う。だからこそ、今日は好きな相手とでいいから、みんながデュエルをしている姿を私に見せて欲しい。デュエル場でのデュエルはデュエルアカデミア内のコンピュータに記録されるから、そこからみんなのデュエルを見ていって次の時間からどんな講義をするかを考えるから」
闇先パイの言葉に生徒達が騒つき始める。
それも当然だよね。
闇先パイが言っているのはここにいる全員に個別的なアドバイスをできるようにするということなんだから。
正直無茶苦茶だけど、きっと闇先パイなら本当にできちゃうんだろうな。
「それじゃあ早速デュエルを始めて貰おうと思う。みんな好きな人とペアを作ってーーー」
「冬城先生、質問をしても構いませんか？」
闇先パイがそういってデュエルを促そうとすると、それを遮るように1人の男子生徒が挙手をした。
闇先パイは首を傾げながらその男子生徒に手を向ける。
「はい。えっと……悪いけど、名前が分からないから名前を言って

から質問をどうぞ」
「服部。服部　香月（はっとり　かづき）と言います。質問なのですが、この講義で冬城先生とデュエルできる機会はあるのでしょうか？」
「!!?成る程……ね」
服部と名乗ったその男子生徒の質問に、教室が再び騒めきはじめる。
確かにデュエル学の実技では、たまに教員と生徒がデュエルをすることがあった。
教員が個別で生徒にアドバイスをする時や罰則を免除するために教員に勝つことを条件にだとか、色々な条件があるがその中で教員とデュエルをすることが、デュエルアカデミアではある。
だけど、闇先パイは現役のプロ決闘者なんだし、デュエルすると色々な問題が起こる気がするけど……
男子生徒の質問に闇先パイは興味深そうに笑いながら少し何かを考えるような仕草を見せる。
「確かに、現役のプロ決闘者が講義をしているのだからデュエルをしてみたいという気持ちは分かる。だけど、誰とでもというと、時間が足りないし、デュエルを出来た人とできない人とで格差が生じる……となると、特定の条件を満たした人となら……」
ふと、壇上で考えこみながら顔をあげた闇先パイと目があった。
闇先パイは目があった私を見て、ニヤリと笑った。
……何だろう、少し嫌な予感が……
「ん、質問は分かった。私とデュエルをする機会があるかという質問だけど、確かに、現役のプロ決闘者が講義をしているのだからデュエルをしてみたいという気持ちは理解できる。だけど、みんなとデュエルをするとなると時間が足りないし、デュエルできた人とできない人とで格差ができてしまう。だから、条件をつけようと思う」
「条件、ですか？」
「ん、これから呼ぶ生徒は速やかに壇上にあがること。栗原　遊花」
「はい!?？」

闇先パイに名前を呼ばれ、私はおずおずと壇上にあがる。
闇先パイに呼び出された私に、生徒達の視線が一斉に向く。
闇先パイはそんな生徒達に楽しそうな表情で口を開く。
「今日の講義からここにいる栗原　遊花にデュエルで勝った人となら、私がデュエルしてあげる」
「なっ⁉？」
「ほえっ⁉？や、闇先パ……冬城先生⁉？」
闇先パイの言葉に今日何度目かも分からない騒めきが教室に広がる。
私達の関係を知っている桜ちゃんや大地君達も困惑の表情を浮かべていた。
「な、何故その女子なのですか？」
「遊花とは大会でデュエルしたことがあるの。その時にとてもいいデュエルを見せてくれたから、遊花に勝てる人なら私にとっても良いデュエルができそうだからかな」
闇先パイの言葉により一層騒めきが広がり、中には闇先パイとデュエルしたという私を羨ましそうだったり嫉しそうに見る生徒達まで現れる。
……確かに、闇先パイは嘘はついてない。
夏休み中、闇先パイに何度か小規模な大会に連れて行かれて、そこで闇先パイと当たってデュエルしたこともある。
だけど、そのデュエルでは一方的に負けた記憶しかないんだけど……
「というわけだから、遊花に勝った人とのデュエルなら、私はデュエルを受けてあげるよ。今日は有意義な質問をしてくれたから君が遊花とデュエルをするといい。ただし、遊花の都合も考えて迷惑になるような状況でのデュエルだけはしないこと。それを破った人とは私は絶対にデュエルしないから」
「……分かりました」
「それじゃあ改めて講義を開始する。好きな人とペアを作ってデュエルをするように」

現実逃避するように視線を彷徨わせているといつの間にか私のデュエルの相手まで決まっていた。
自分のデュエルを行う為に散っていく生徒達を横目に、闇先パイに抗議するような視線を向けると、闇先パイは私の横を通り過ぎながら小さな声でそっと囁いた。
「これも修行の一環。普段と違う人とデュエルするのもいい刺激になる。他の生徒達とデュエルができるのも楽しみではあるけど、遊花なら多分ほとんどの子達に勝てるハズ。遊花の全力のデュエル、期待してるね」
そういって、闇先パイが全体を見渡せる場所に移動して行った。
そして闇先パイと入れ違いになるように、先程質問をしていた男子生徒ーーー服部君が向かってくる。
私は思わずため息を吐きながら、天を仰ぐのだった。

ーーーーーーー

「聞こえているのか？早くデュエルをはじめるぞ？」
「うぅ……分かりました」
長い回想を終え、私はデュエルディスクを構える。
これも修行の一環なんだし、闇先パイがもう宣言しちゃったことだからどうしようもない。
それに前向きに捉えれば色んな人とデュエルができるようになったってことだし、師匠の後継者として『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入ることになるんだから頑張らないと‼？
「改めて、栗原　遊花です。今日はよろしくお願いします」
「服部　香月だ。お前に恨みはないが、冬城プロとデュエルをする為に倒させて貰う」
「悪いですけど、そうは行きません。私だって、夢の為に戦い続けるって決めたから、そう簡単に負けるわけにはいかないんです‼？」
「ならば、力付くで倒させて貰おう‼？行くぞ‼？」
『決闘‼？』

遊花　ＬＰ８０００
香月　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は私ですね。私は手札からクリアクリボーを捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動!!?デッキからレベル１モンスター１体を特殊召喚する!!?お願い、ミスティックパイパー!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

現れたのはフルートのようなものを弾いている男の人。
ミスティックパイパーはいつものように私にサムズアップをする。
うん、今日もお願いね、ミスティックパイパー!!?
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを１枚ドローし、この効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル１モンスターだった場合、自分はカードをもう１枚ドローします!!?私がドローしたのはジャンクリボー!!?レベル１モンスターなのでもう１枚ドローします!!?」
「減った手札がそのまま元に戻ったか……」
「よし、魔法カード、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨てて同じ枚数ドローします!!?私は４枚、貴方は５枚の手札を捨てて同じ枚数ドローします!!?」
「何も伏せずに手札交換……余程手札が悪いと見えるな」
「さあ、どうでしょうか?私はクリバンデッドを召喚!!?」

〈クリバンデッド〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

私の前に盗賊のような姿をした黒い毛玉のモンスターが現れる。
今回も攻撃させてはあげれないけど、あなたの力、貸して貰うね。
「エンドフェイズにクリバンデッドの効果発動!!?このカードをリリースしてデッキの上から5枚めくり、その中から魔法・罠カード1枚を手札に加えて残りを墓地におきます!!?」
クリバンデッドの姿が消え、私はデッキの上から5枚のカードをめくって中から1枚のカードを手札に加える。
「私は儀式の下準備の魔法カードを手札に加えます。さらに墓地に送られた絶対王バックジャックの効果発動!!?」
「っ、墓地に送られた時に効果を発動するモンスターが混ざっていたか……」
「このカードが墓地へ送られた場合、自分のデッキの上からカードを3枚確認し、好きな順番でデッキの上に戻します。私はこれでターンエンドです!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札４
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
香月　ＬＰ８０００　手札５

「伏せカードも無しだなんて舐めてくれる……たっぷり後悔させてやろう!!?俺のターン、ドロー!!?俺は手札の黄昏の忍者―ジョウゲンの効果発動!!?手札の忍法カード1枚を相手に見せてこのカードを手札から特殊召喚する!!?俺は手札の隠密忍法帖を見せて、現れろ、黄昏の忍者―ジョウゲン!!?」

〈黄昏の忍者―ジョウゲン〉☆７　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００

現れたのは鎖鎌を持った金色の鎧を纏った忍者。
忍法のカードも見えたということは、この人のデッキは忍者デッキみたい。
「俺は永続魔法、隠密忍法帖を発動!!?1ターンに1度、手札から忍者モンスター1体を墓地へ送ってデッキから隠密忍法帖以外の忍法魔法・罠カード1枚を選んで自分フィールドにセットする!!?俺は手札の機甲忍者アクアを捨ててデッキから忍法　変化の術をセット!!?そして黄昏の忍者―ジョウゲンをリリースして黄昏の忍者将軍―ゲツガをアドバンス召喚!!?」

〈黄昏の忍者将軍―ゲツガ〉☆8　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００

ジョウゲンの姿が消え、代わりに現れたのは2本の旗を背負った黒い鎧の忍者。
ゲツガはレベル8だからもう1体リリースしないといけないハズだけど……
「黄昏の忍者将軍―ゲツガは忍者モンスター1体をリリースしてアドバンス召喚することができる」
「成る程、それで1体のリリースで出てきたんですね」
「そして黄昏の忍者将軍―ゲツガの効果発動!!?忍之一字!!?同名カードは1ターンに1度、フィールドに攻撃表示で存在する場合、同名カード以外の自分の墓地の忍者モンスター2体をこのカードを守備表示にし、特殊召喚する!!?黄昏の忍者将軍―ゲツガを守備表示にし、現れろ、忍者マスターＨＡＮＺＯ!!?黄昏の中忍―ニチリン!!?黄昏の中忍―ニチリンはルール上忍者カードとしても扱う」

黄昏の忍者将軍―ゲツガ
ＡＴＫ２０００→ＤＥＦ３０００

〈忍者マスターＨＡＮＺＯ〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１８００

〈黄昏の中忍―ニチリン〉☆６　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２３００

ゲツガが２本の旗を掲げて座り込むと、ゲツガに寄り添うように現れたのは銀の忍装束を着た仮面をつけた忍者と赤いマフラーを付けた小刀を持った忍者。
手札抹殺で増えた墓地を利用されちゃったね。
「忍者マスターＨＡＮＺＯの効果発動!!?このカードが反転召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから同名カード以外の忍者と名のついたモンスター１体を手札に加える事ができる!!?俺はデッキから２枚目の機甲忍者アクアを手札に加える!!?さらに魔法カード、機甲忍法ゴールドコンバージョン!!?自分フィールド上に忍法と名のついたカードが存在する場合、自分フィールド上の忍法と名のついたカードを全て破壊し、その後、デッキからカードを２枚ドローする!!隠密忍法帖を破壊し、カードを２枚ドローする!!?行くぞ、バトル!!?」
「なら、バトルフェイズ開始時、墓地の絶対王バックジャックを除外して効果発動!!?」
「何!!?」
「相手ターンに墓地のこのカードを除外して自分のデッキの一番上のカードをめくり、そのカードが通常罠カードだった場合、自分フィールドにセットし、違った場合、そのカードを墓地へ送ります。そして、この効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できます」
「っ、お前のデッキの上は確か……」
「はい。絶対王バックジャックの効果で操作済みです。絶対王バックジャックの効果でデッキの上をめくります!!?めくられたのは通常罠、ディーラーズチョイス!!?通常罠カードなのでセットされます」
「ディーラーズチョイス……確かお互いのプレイヤーはデッキをシャッフルし、デッキから１枚ドローし、その後、お互いのプレイヤー

は手札を1枚捨てる罠だったな。それならば気にする必要はない‼?忍者マスターＨＡＮＺＯでダイレクトアタック‼?空花乱墜」
ＨＡＮＺＯが私に接近しながら苦無を投げてくる。
今だ‼?
「相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のクリアクリボーの効果発動‼墓地のこのカードを除外し、自分はデッキから1枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替えます‼?」
「っ‼?またデッキの上から……」
私は勢いよくカードをドローし、そのまま新しいお友達を呼び出す。
「私がドローしたのはアンクリボー‼?モンスターなので特殊召喚し、攻撃対象を移し替えます‼?」

〈アンクリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

フィールドに現れたのは身体に金色の装飾をつけ、頭にアンクをつけた紫色の毛玉のモンスター。
現れたアンクリボーは私を見て、仕方なさそうに身体を振るとＨＡＮＺＯの苦無に貫かれた後、蹴り飛ばされて消滅した。
ゴメンね、アンクリボー。
だけど、君の力はちゃんと借り受けるよ‼?
「アンクリボーの効果発動‼?クリーングオブライフ‼?このカードが戦闘・効果で破壊され墓地へ送られた場合、このターンのエンドフェイズに、自分のデッキ・墓地から死者蘇生1枚を選んで手札に加えます‼?」
「なっ‼?厄介な効果を……黄昏の中忍―ニチリンでダイレクトアタック‼?」
「相手モンスターの攻撃宣言時、墓地に存在するクリボーンの効果発動‼?墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のクリボーモンスター

を任意の数だけ対象として、そのモンスターを特殊召喚します!!?来て、アンクリボー!!?ジャンクリボー!!?虹クリボー!!?クリボー!!?」

〈アンクリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

〈ジャンクリボー〉☆1　機械族　地属性
ＤＥＦ２００

〈虹クリボー〉☆1　悪魔族　光属性
ＤＥＦ１００

〈クリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

私のフィールドに４体のクリボーが現れる。
それを見て、服部君が忌々しげな表情を浮かべる。
「ええい、鬱陶しい!!?黄昏の中忍―ニチリンでクリボーを攻撃!!?朝不謀夕!!?」
「ゴメンね、クリボー」
私の声にクリボーが気にしないでと言うように身体を振る。
そんなクリボーをニチリンが小刀で斬り裂き、消滅させた。
「ライフを削ることはできなかったか。まあいい。メインフェイズ2、カードを2枚伏せてターンエンドだ。次のターンに、お前に絶望を教えてやろう」
「絶望なんて私はしません。エンドフェイズにアンクリボーの効果でデッキから死者蘇生を手札に加えます」

遊花　ＬＰ８０００　手札５
ー―▲―ー

□□ー□ー
ー　　ー
○ー□ー○
ー▲▲▲ー　　ー
香月　ＬＰ８０００　手札２

「私のターン、ドロー!!?」
「スタンバイフェイズ、忍者マスターＨＡＮＺＯをリリースし、リバースカードオープン!!?永続罠、忍法　変化の術!!?自分フィールドの表側表示の忍者モンスター１体をリリースしてリリースしたモンスターのレベル＋３以下のレベルを持つ獣族・鳥獣族・昆虫族モンスター１体を、手札・デッキから特殊召喚する!!?ただし、このカードがフィールドから離れた時にそのモンスターは破壊される。俺はデッキから鳥獣族モンスター、ダークシムルグを特殊召喚する!!?」

〈ダークシムルグ〉☆７　鳥獣族　闇属性
ＡＴＫ２７００

ＨＡＮＺＯの姿が煙に包まれ、ＨＡＮＺＯがいた場所から煙を吹き飛ばしながら黒い身体の怪鳥が現れる。
「ダークシムルグの永続効果、このカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手はカードをセットすることができない!!」
「カードのセットを封じられるのは厄介ですね」
「封じるのはセットカードだけではない!!?さらに２枚のリバースカードをオープン!!?永続罠、魔封じの芳香!!?虚無空間!!?魔封じの芳香の効果でこのカードが魔法＆罠ゾーンに存在する限り、お互いに魔法カードはセットしなければ発動できず、セットしたプレイヤーから見て次の自分ターンが来るまで発動できず、虚無空間の効果でこのカードが魔法＆罠ゾーンに存在する限り、お互いにモンスターを特殊召喚できない!!?」
「っ!!?つまり……」

「魔封じの芳香により魔法カードはセットさなければ発動できないがダークシムルグでカードのセットを封じられているためお前は魔法・罠を使えない。そのうえ虚無空間で特殊召喚ができないこの状況ではダークシムルグを突破することはそう容易いものではない。さらに黄昏の中忍―ニチリンには。１ターンに１度、手札から忍者モンスター１体を捨てることでそのターン、自分フィールドの忍者モンスター及び忍法カードが戦闘・効果では破壊されなくなるか、自分フィールドの忍者モンスター１体の攻撃力をターン終了時まで１０００アップすることができ、この効果は相手ターンにも使用することができる。お前にできることなどもう無い」

そういって、服部君が勝ち誇った笑みを浮かべる。

……確かに魔法・罠が使えず、特殊召喚もできないこの状況から逆転するのはそう簡単なことではない。

夏休み前の私なら、間違いなくこの時点で負けていたと思う。

だけどーーー

「いえ、このくらいなら、何とかなります‼？」

「何？」

ーーー今の私には、夏休み前の私にはいなかった新しいお友達がいるんだから‼？

「服部君。あなたの戦術、攻略させて貰います‼？リバースカードオープン‼？罠発動、ディーラーズチョイス‼？お互いのプレイヤーはデッキをシャッフルし、デッキから１枚ドローし、その後、お互いのプレイヤーは手札を１枚捨てます‼？」

「確かにそのカードはフィールドに残っていたな……それで逆転のカードを引こうとでも言うのか？」

「いえ、攻略法は既に私の手札にあるんです‼？お互いに１枚ドローし、手札を１枚捨てます‼？私が捨てるのは魔轟神獣キャシー‼？」

「俺は機甲忍者アクアを捨てる」

「そして、手札から捨てられた魔轟神獣キャシーの効果発動‼？このカードが手札から墓地へ捨てられた時、フィールド上に表側表示で存在するカード１枚を選択して破壊します‼？」

「っ⁉？何⁉？」
「私が破壊するのは魔封じの芳香⁉？」
　手札から捨てられた身体に金色の腕輪のようなものをつけた猫のモンスターが、緑色のボールのような悪魔を弾き飛ばして魔封じの芳香を破壊する。
　キャシーが魔封じの芳香を破壊した瞬間、虚無空間がガラスが割れるような音を立てて崩れ去る。
「……虚無空間はデッキまたはフィールドから自分の墓地へカードが送られた場合、破壊される……」
「これで魔法カードも使えるようになりました⁉？魔法カード、儀式の下準備⁉？デッキから儀式魔法カード1枚を選び、さらにその儀式魔法カードにカード名が記された儀式モンスター1体を自分のデッキ・墓地から選んで、そのカード2枚を手札に加えます⁉？私が加えるのはイリュージョンの儀式とサクリファイス⁉？」
「っ、儀式モンスターが手札に……」
「私は儀式魔法、イリュージョンの儀式を発動⁉？自分の手札・フィールドから、レベルの合計が1以上になるようにモンスターをリリースし、手札からサクリファイスを儀式召喚するよ⁉？私は手札のサクリボーをリリースして儀式召喚を行う⁉？」
　私の前に現れるのは金色の目の形をした壺が現れ、その中にクリボーに似た毛玉のモンスターが吸い込まれていく。
　しばらくすると壺が割れ、中から妖しい邪眼を持つモンスターが現れた。
「儀式召喚⁉？相手を捕える妖しい邪眼⁉？サクリファイス⁉？」
〈サクリファイス〉☆1　魔法使い族　闇属性
　ＡＴＫ０
「ぐっ……そいつは……」
「まずはサクリボーの効果発動⁉？このカードがリリースされた場合に自分はデッキから1枚ドローします⁉？そしてサクリファイスの

効果発動!!?アブソープション!!?1ターンに1度、相手フィールドのモンスター1体を対象にそのモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力・守備力は、このカードが戦闘で破壊される場合、代わりに装備したそのモンスターを破壊できます!!?対象は、黄昏の忍者将軍―ゲツガ!!?吸い込んじゃって、サクリファイス!!?」

サクリファイスのお腹にある穴が開き、ゲツガが吸い込まれる。

しばらくすると背中についている羽のような部分からゲツガが手にしていた2本の旗が浮き上がった。

サクリファイス
ＡＴＫ０→２０００

「そして、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」

「リンク召喚がくるか!!?」

私の前に大きなサーキットが現れる。

「召喚条件はレベル1モンスター1体。私はアンクリボーをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚!!?希望の守り手!!?リンク1!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

私の前に元気一杯に飛び出してくるのは青い球体のモンスター。

うん、今回もお願いね、リンクリボー。

「さらに導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」

「っ、連続リンク召喚……」

「召喚条件はモンスター2体。私は虹クリボーとジャンクリボーをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚!!?リンク2!!?プロキシードラゴン!!?」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

次に現れたのは白い身体をした機械の竜。
いつもならここでリンク４のヴァレル達に繋げるけど、この手札なら、もっと先に行ける‼？
行くよ、私の新しいお友達‼？
「私は、捕食植物（プレデタープランツ）セラセニアントを召喚‼？」

〈捕食植物セラセニアント〉☆１　植物族　闇属性
ＡＴＫ１００

フィールドに現れたのは葉が筒状になった植物を背負った蟻のモンスター。
その姿を見て、服部君は怪訝な表情を浮かべる。
確かに外見は少し不気味に見えるもんね。
ああ、ゴメン、ゴメン‼？
悲しそうに顎を鳴らさないで‼？
君の力、存分に使わせて貰うから‼？
「ライフポイントを２０００払って魔法カード、超越融合‼？」
「っ⁉？融合魔法だと⁉？」

遊花　ＬＰ８０００→６０００

「融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスター２体を自分フィールドから墓地へ送り、その融合モンスター１体をＥＸデッキから融合召喚する‼？このカードの発動に対してカードの効果は発動できない‼？私はサクリファイスと捕食植物セラセニアントを超越融合‼？」
フィールドに稲妻が迸り、巨大な渦が現れる。

その巨大な渦にサクリファイスとセラセニアントが吸い込まれていく。
そして渦の中から巨大な雷がフィールドに落ち、光が収まると、そこに現れたのは金色の邪眼と身体を持つモンスター。
「妖しい邪眼よ、全てを喰らう植物よ‼？今交わりて、全てを奪う力とならん‼？融合召喚‼？全てを見透かす叡智の邪眼‼？ミレニアムアイズサクリファイス‼？」

〈ミレニアムアイズサクリファイス〉☆1　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０

「サクリファイスの融合モンスター……確かそいつはモンスターを吸収して効果を無効化する奴だったな」
「捕食植物セラセニアントの効果発動‼？フィールドのこのカードが効果で墓地へ送られた場合、または戦闘で破壊された場合、デッキから同名カード以外のプレデターカード1枚を手札に加える‼？私はペンデュラムモンスター、捕食植物（プレデタープランツ）スパイダーオーキッドを手札に加えます‼？」
「ペンデュラムモンスターだと⁉？まさか、お前は……⁉？」
服部君がスパイダーオーキッドを見て驚愕の表情を浮かべる。
そんな服部君に私は笑顔を浮かべながら2枚のカードを掲げる。
「私は、スケール０のペンデュラムーチョとスケール８の捕食植物スパイダーオーキッドでペンデュラムスケールをセッティング‼？」
私を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中にメキシカンな格好をしているペンギンと蜘蛛のように見える植物が浮かびあがり、下に０と８の数字が現れる。
「これで私は1から7までのモンスターを同時に召喚可能です‼？だけどその前に下準備です‼？ペンデュラムゾーンに置かれたペンデュラムーチョのペンデュラム効果発動‼？このカードを発動したターンの自分メインフェイズに1度だけ、自分の墓地のモンスターまたは除外されている自分のモンスターの中から、同名カード以外のペ

ンデュラムモンスター1体を自分のＥＸデッキに表側表示で加えます‼？私は墓地の　ＥＭ（エンタメイト）ドラネコをＥＸデッキに加えます‼？」
「そんなモンスターまで墓地に……」
「まだ終わりじゃありませんよ‼？今度は捕食植物スパイダーオーキッドのペンデュラム効果発動‼？このカードを発動したターンの自分メインフェイズに、このカード以外の魔法＆罠ゾーンの表側表示のカード1枚を対象としてそのカードを破壊する‼？私が破壊するのは忍法　変化の術‼？」
「ぐっ……忍法　変化の術が離れたことでダークシムルグが破壊される」
　光の柱からスパイダーオーキッドが蔦を伸ばし、変化の術を破壊するとダークシムルグが煙に包まれて消滅した。
「さあ、ショータイムです‼？心に灯し小さき希望よ‼？光り輝く未来を導いて‼？ペンデュラム召喚‼？おいで、私のお友達‼？」
　私がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって2つの光が舞い降りる。
「レベル1、ドットスケーパー‼？」

〈ドットスケーパー〉☆1　サイバース族　地属性
　ＤＥＦ２１００

　最初に現れたのはドットの身体を持つモンスター。
　そしてその後ろにお腹が銅鑼になっているネコのモンスターが舞い降りる。
「レベル1、ＥＭドラネコ‼？」

〈ＥＭドラネコ〉☆1　獣族　地属性
　ＤＥＦ１００

「っ、本当にペンデュラム召喚を……」
　驚きに目を見開いている服部君を他所に、私は深く深呼吸をして正

面に手をかざす。
さあ、たくさん待たせちゃったけど、あなたの出番だよ‼?
「行きます‼?導いて‼?希望に繋がるサーキット‼?」
「ここにきてまたリンク召喚か‼?」
「召喚条件は効果モンスター３体以上‼?私はドットスケーパー、リンクリボー、プロキシードラゴンを　２体分として扱ってリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?」
ドットスケーパー、リンクリボー、そしてプロキシードラゴンが２体に分身してサーキットに吸い込まれていく。
そしてサーキットが光り輝くとそこから現れるのは剣の如き龍。
「お願い、私に運命を超える力を貸して‼?リンク召喚‼?閉ざされた運命を斬り開く魂の剣(つるぎ)‼?リンク４‼?ヴァレルソードドラゴン‼?」
待ち望んでいたというように、剣の如き龍はその咆哮を世界に轟かせた。

〈ヴァレルソードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑←→

「リンク４の、大型リンクモンスター……‼?」
「まだです‼?墓地に送られたドットスケーパーの効果発動‼?デュエル中に１度、このカードが墓地に送られた場合に特殊召喚します‼?」

〈ドットスケーパー〉☆１　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

再びフィールドに現れるドットスケーパー。
よし、このまま一気に‼?
「魔法カード、ししゃしょしぇい‼?っ～～～‼?」
「……大丈夫か?」

舌を押さえ呻いてる私を、何とも言えない気まずそうな表情で服部君が見てくる。
「だ、大丈夫です‼?か、噛んでなんかないですよ?魔法カード、ししゃしょ‼?うっ～～～‼?うぅ～～～‼?」
再び舌を抑えて呻く私。
うぅ～せっかくシリアスでクライマックスな感じの雰囲気だったのに～～～‼?
「慌てなくていい。落ち着いて言うといい」
そんな私に服部君は凄く優しい表情で声を掛けてくれる。
うぅ、いい人です、服部君。
なんというか、このままデュエルを続けるのが辛くなってきた。
でも、ここまできて途中で止めるのも失礼だから、最後まで全力で行く‼?
「……コホン、魔法カード、死者蘇生‼?自分または相手の墓地のモンスター1体を特殊召喚します‼?対象は墓地のチューナーモンスター、魔轟神獣キャシー‼?……ふぅ、ようやく言えた」
「あのモンスターはチューナーだったのか……いいだろう」

〈魔轟神獣キャシー〉☆1　獣族　光属性
ＤＥＦ６００

ようやくフィールドに現れるキャシー。
呼び出されたキャシーもどこか慰めるように、私の身体に擦り寄ってくる。
うぅ～ありがとう、キャシー。
気を取り直して、あなたの力、借りさせて貰うね‼?
「私は‼?レベル1、ドットスケーパーと、レベル1、ＥＭドラネコに、レベル1、チューナーモンスター、魔轟神獣キャシーをチューニング‼?」
キャシーが光の輪になり、ドットスケーパーとドラネコが小さな星に変わり、光の道になる。

そして光の道が輝くと、その中から緑の翼で羽ばたく綺麗な鳥が現れた。
「悠久に響く祈りの歌が、争いを鎮める新風となる!!?シンクロ召喚!!?未来に羽ばたけ、霞鳥クラウソラス!!?」
〈霞鳥クラウソラス〉☆3　鳥獣族　風属性
ＡＴＫ０
「霧鳥クラウソラスの効果発動!!?プレアーソング!!?1ターンに1度、相手フィールドの表側表示のモンスター1体を選択し、ターン終了時までその攻撃力を0にし、その効果を無効にする!!?対象は、黄昏の中忍―ニチリン!!?」
「効果無効だと!!?だが、効果を使えばミレニアムアイズサクリファイスに……くっ、いいだろう」
黄昏の中忍―ニチリン
ＡＴＫ２３００→０
クラウソラスが綺麗な声で唄い、ニチリンが力を失っていく。
「ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アサシネイトショット!!?1ターンに1度、攻撃表示モンスター1体を対象として発動!!?そのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる。そしてこの効果の発動に対して相手は効果を発動できない!!?この効果は相手ターンにでも使用することが出来ます!!?対象にするのは、霧鳥クラウソラス!!?」
「ここで2回攻撃……!!?」
ヴァレルソードドラゴンが空に向かって銃撃を放ち、クラウソラスがその銃声を聞いて防御を固める。
霞鳥クラウソラス
ＡＴＫ０→ＤＥＦ２３００

「そしてこれが最後の一押し‼?・墓地の超越融合の効果発動‼?・」
「何だと⁉?・まだ効果があるのか⁉?・」
「このカードを除外し、このカードの効果で融合召喚したモンスター1体を対象としてそのモンスターの融合召喚に使用した融合素材モンスター一組を自分の墓地から特殊召喚します‼?・ただしこの効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力・守備力は0になり、効果は無効化されます。ミレニアムアイズサクリファイスを対象に戻っておいで、サクリファイス、捕食植物セラセニアント‼?・」

〈サクリファイス〉☆1　魔法使い族　闇属性
ＤＥＦ０

〈捕食植物セラセニアント〉☆1　植物族　闇属性
ＤＥＦ０

再びフィールドに現れるサクリファイスとセラセニアント。
それを見て、服部君が悟ったような表情を浮かべた。
「これは……いいだろう、くるがいい‼?・」
「私は‼?・レベル1、サクリファイスと捕食植物セラセニアントでオーバーレイ‼?・2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼?・」
サクリファイスとセラセニアントが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこには白い馬に乗る小さな首無しの騎士がいた。
「闇夜に紛れし哀しき妖精‼?・その刃で疑惑を切り裂け‼?・ランク1‼?・ゴーストリックデュラハン‼?・」

〈ゴーストリックデュラハン〉★1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００→１２００

「さらに、私はゴーストリックデュラハン1体でオーバーレイ‼?1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築‼?ランクアップエクシーズチェンジ‼?」
デュラハンが再び空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りたのは黒いドレスを身に纏い、白い羽根にところどころ漆黒の羽根が混ざる女の子のモンスター。
「闇夜を彷徨う自由な天使‼?その気ままさで憂鬱を払え‼?ランク4‼?ゴーストリックの駄天使‼?」

〈ゴーストリックの駄天使〉★4　天使族　闇属性
ＡＴＫ２０００

駄天使が私の周りをひらひらと飛びながらドヤ顔で決めポーズをとりながら現れる。
現れた駄天使を見て、服部君は面白そうに笑った。
「まさか、儀式、融合、シンクロ、エクシーズ、ペンデュラム、リンク。全ての召喚法を1ターンで全て使ってくるとはな」
「バトル‼?ゴーストリックの駄天使で黄昏の中忍―ニチリンを攻撃‼?トリックハート‼?」
駄天使が目の前にひび割れているハートを作り出し、そのハートからビームを放ち、ニチリンの身体を貫き、爆散させた。

香月　ＬＰ８０００→６０００

「ぐっ‼?」
「続けて、ヴァレルソードドラゴンでダイレクトアタック‼?」
「っ、墓地の機甲忍者アクアの効果発動‼?相手モンスターの直接攻撃宣言時、自分の墓地にこのカード以外の忍者と名のついたモンスターが存在する場合、墓地のこのカードをゲームから除外して攻撃モンスター1体の攻撃を無効にする‼?」

「させません‼?ミレニアムアイズサクリファイスの効果発動‼?ミレニアムアブソープション‼?1ターンに1度、相手モンスターの効果が発動した時、相手のフィールド・墓地の効果モンスター1体を対象としてその相手の効果モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの効果で装備したモンスターと同名のモンスターは攻撃できず、その効果は無効化されます‼?対象は、墓地に存在するもう1枚の機甲忍者アクア‼?」

アクアが服部君を守るように現れるが、ミレニアムアイズのお腹にある穴から暴風のような吸い込みで墓地にいたアクアを吸い込み、身体の中に取り込む。

ミレニアムアイズの身体から浮かび上がったアクアの顔が怪しく光ると、服部君を守ろうとしていたアクアの身体が金縛りにあったかのように硬直し、消滅した。

ミレニアムアイズサクリファイス
ＡＴＫ０→８００

「これで攻撃は止まりません‼?斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン‼?剣光のベイオネットブレイク‼?」

私の言葉に応えるようにヴァレルソード咆哮をあげ、そのまま服部君を斬り裂く。

香月　ＬＰ６０００→３０００

「ぬぅぅっ‼?」

「これで終わりです‼?もう1度斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン‼?剣光のベイオネットブレイク‼?」

「これが、栗原　遊花の実力か……ぐあぁぁぁ‼?」

香月　ＬＰ３０００→０

ーーーーーーー

「私の、勝ちです‼?」

「……ああ、俺の負けだ」

私の言葉に、服部君が悔しそうに項垂れる。

「冬城プロが君を指名するわけだ。結局超越融合のライフコスト以外ではライフポイントも減らせなかった。完敗だ」

「いえ、服部君も強かったです。ディーラーズチョイスで魔轟神獣キャシーを捨てられなければあのまま負けてたと思います」

実際、あのコンボは強力だった。

あのまま魔法・罠も使えず、特殊召喚もできない続いたら元々の攻撃力が低い私のデッキでは何も出来ずに負けていただろう。

正直、あの戦況を攻略できたのはかなり運が良かったと思う。

「そう言って貰えるとこちらも救われる。だが、どうやらまだ君に勝利するには実力が足りないようだ。今はまだ腕を磨き、改めて挑戦させて貰うとしよう」

「はい‼?また服部君とデュエルができる時を楽しみにしています‼?」

「ああ、君の期待にも応えられるように早く強くならなければな。それでは、失礼する。君も頑張れよ」

そういって服部君が去っていくと、私の周りにまた他の人達が群がってくる。

うぅ……これ、この講義の内に後何回デュエルをすればいいんだろう?

だけど、頑張れって言ってくれた服部君の為にも不甲斐ないデュエルはできないよね?

この修行を乗り越えたら、私はまた1つ強くなれるハズだもん。

だったら、私に出来ることはただ1つ。

私は気持ちを切り替えるように両手で頬を叩くと、デュエルディスクを起動して私を取り囲んでいる人達を見る。

「さあ、次は誰が相手をしますか?」

栗原　遊花、夢に向かってまだまだ頑張ります!!?

第５７話　闇を射抜く者

○

「バトル。終わりだよ、ヴェルズウロボロスでＮｏ．６６覇鍵甲虫マスターキービートルに攻撃。侵食のイモータルフリーズ」
「んぎゃあああ‼？」

操られた男　ＬＰ１００→０

「むぅ……またＮｏ．……か……結構倒したのになかなかばら撒いてる奴の尻尾が掴めない」
闇は自分の元に飛んできた闇のカードを懐に仕舞うと、闇のカードを失い、倒れた男に近づいてインヴェルズオリジンを男のデュエルディスクにセットし、インヴェルズオリジンの闇の力で男の記憶とデュエルディスクのデータを書き換える。
なかなか黒幕に辿り着けないことに苛立ちいつも以上に無表情になっていると、そんな闇に話しかけてくる声があった。
「相変わらずしけたツラしてるな『氷の女王』」
「……」
闇が不機嫌そうに声が聞こえた方向を見ると、そこにいたのは白髪をツーブロックにした男。
その男は不機嫌そうな闇を気にした素ぶりも見せずに言葉を続ける。
「闇のカード狩り、精が出るじゃねぇか。今のプロ決闘者ってのはそんなに暇なのか？」
「……ご想像にお任せする。少なくとも、貴方よりは忙しい」
「はっ、そりゃあそうだ。天下のプロ決闘者が無職より忙しくなかったらそれこそおかしいだろ」
そういって男は吐き捨てるように笑う。
そんな男を、闇は冷たい表情で睨む。

「それで、何の用？」
「アンタに聞きたいことがある。最近、アンタ以外に闇のカードのことを嗅ぎまわってる奴がいるらしい。知らねぇか？」
「……心当たりはある。だけど、私がそれを貴方に教える必要、ある？」
「……いや、ねぇよ。なら、アンタからそいつに言っといてくれねぇか？闇のカードには関わるなってよ」
　そういって、男は真剣な表情で闇を見る。
　そんな男に、闇は興味がなさそうに背を向ける。
「闇のカードを探すことを決めたのはその人の意思。私がとやかく言うことじゃない」
「っ……はっ、そうかよ。なら、そいつがどうなってもいいんだな？」
「……」
　そう脅すように言う男に、闇は無表情を通り越した虚無の表情を浮かべて振り返る。
「それは、戦線布告？あの頃のように、成すすべも無く私に叩き潰されたいっていう宣言？」
「っ、いいぜ？俺だってあの頃とは違う。今ならアンタを倒せるかも知れねぇぜ？」
「自惚れもここまでくるといっそ清々しい。いっそ二度と立ち上がれないように闇の中に消し去るのも一考だね」
　闇の身体から、深夜の闇をさらに深くしたような漆黒のオーラが溢れ始め、男も身体から微小の闇を溢れ出させながらデッキに手をかける。
　一触即発。
　闇がデュエルディスクを起動しようとした時、夜の闇を引き裂くようなサイレンの音が聞こえてきた。
　聞こえてくるサイレンの音に、闇はため息を吐くと溢れ出していた闇を霧散させ、男に背を向けた。
「興が冷めた。面倒なことになる前に帰る」

「逃げるのか？」
「好きにとればいい。貴方もさっさとこの場から去れば？またデュエルセキュリティのお世話になるのは嫌でしょ？」
「……チッ、闇のカードは俺が狩る。邪魔する奴は全員俺の敵だ」
そういうと男は身を翻し夜の闇の中に消えていく。
闇はため息を吐きながら、空に浮かんだ月を見上げた。
「面倒なことになった……遊騎の邪魔、しないといいけど」
そんな闇の呟きも、夜の闇の中に溶けていくのだった。

ーーーーーーーー

☆

「ゴメン、遅くなったね」
「いや、構わない。別に予定があったわけじゃないしな」
「そういって貰えると助かるよ。さあ、今日も張り切って闇のカードをばら撒いている奴を探すとしようじゃないか」
そういって、いつものように黒いパーカーを深く被って先を行く夜を追って街の中を歩き出す。
夜と初めて出会った日から5日。
俺達は暇があれば連絡を取り合い、合流して闇のカードをばら撒いた奴を探すようになった。
しかし、闇のカードを所持している決闘者は見つかるものの闇のカードをばら撒いていると思われる決闘者の情報を得られることは無かった。
闇のカードに操られていた人間にも、闇のカードを回収した後に話を聞いてみたが誰に聞いても返ってくるのは『いつの間にか手にしていた』という言葉だけだった。
どうやら闇のカードに操られている間の記憶はまばらになっているらしく、入手した直前から記憶が途切れているようだ。
つまり、操られていた人間からでは闇のカードをばら撒いた人間の

正体は特定出来ない。
　だからこそ、今は闇のカードをばら撒いている人間が現れるかを探すことにしてみたんだが……
「正直、砂漠の中で一本の針を探すようなものだよね。ただでさえケルンには人が多くて外部からも観光客がよく来る。これで犯人が観光客ですでに街の外とかだと流石にお手上げだよ」
「まあ、それは無いと思うけどな。それなら流石にこれだけ闇のカードに関連した事件が立て続けに起こらないだろう」
「実行犯と生産元が違う可能性はあるけどね。実行犯に闇のカードを渡してばら撒かせて生産元は街の外でデータを取ってるとか」
「……ありそうだから困るな」
　そういって夜と一緒にため息を吐く。
　本当にこの調子で闇のカードをばら撒いているあの黒ずくめのヘンテコヘルメット野郎に辿り着けるのだろうか？
『ウゥ‼？』
「ん？何か感じたのかい、不乱健？」
『ウゥ……ウァ‼？』
「そっか、ありがとう。遊騎、どうやらこの近くに闇のカードを持ってる人間がいるみたいだ」
「そうか、わかった。不乱健にもありがとうと言っといてくれ」
『ウゥゥ‼？』
「どういたしまして、だってさ」
　夜がデュエルディスクから不乱健を取り出して走り出し、俺はその後を追う。
　夜と捜索を初めてからこうして不乱健が夜のことを呼ぶことがあった。
　どうやら闇のカードである不乱健には闇のカードがある位置が分かるようだ。
　俺の持っている闇のカードはそんな反応を見せないから不乱健だけの特殊な能力なのか、俺が未だに自分の闇のカードの声を聞けていないからなのかどちらかは定かでは無い。

それでもあの不乱健の言ってる言葉が分かる夜は凄いと思うが、本人曰く慣れ、らしい。
絶対にそんなものではないと思うが、困ることではないので深く追求するのは止めておいた。
「こっちだね……って、えっ⁉？」
「っ⁉？何だ、これ？」
夜について行き、辿り着いたのは路地裏にある小さな酒場だった。
その酒場の周りには、１０人程の人間が倒れ伏していた。
慌てて近づいてみたが、目立った外傷はなくただ眠っているだけのようだった。
それでも、これだけの人間が倒れているのは明らかにおかしい。
俺は夜と頷きあうと、店の中に踏み込む。
店の中は異常な静寂が支配していた。
というのも、外で眠っている人達と同じように店の中にいる人達が全員眠っている。
店の店員であろう人まで眠っていることから、この状況は明らかに異常だった。
そんな店の中で１つだけ動く人影があった。
スーツ姿の男が周りの人間が全て眠っているのにも関わらず、１人で店にある酒を勝手に開けて飲んでいる。
そしてその男の身体から漏れ出している微細な闇。
間違いない、あの男が闇のカードの所持者だ。
「君かい？ここにいる人達を全員眠らせたのは？」
「あぁ？なんだぁ、テメェらぁ？」
夜が話しかけると酒を飲んでいた男は不機嫌そうな表情でこちらを向く。
男は明らかに酔っ払っており、呂律も回っていない。
しかし、その目に浮かんでいるのは明らかな狂気。
「悪いけど、手短かに言うよ？君はＮｏ．というカードを所有しているね？」
「ああん？それが何だって言うんだぁ？」

「そのカードをボク達に譲って欲しい。そのカードは、危険なものだから」
「はっ‼?誰が渡すかってんだよぉ‼?コイツがあれば俺様は好きなだけ酒が飲めるんだからよぉ‼?」
「……分かってはいたけど、話にならないね」
「だな。酔ってるせいなのか、闇のカードの影響なのか分かりにくいが」
どちらにせよ、この状況をほっておくわけにはいかない。
そう思って俺がデュエルディスクを起動しようとした時ーーー
「見つけたぜ、闇のカード」
俺の背後から男の声が聞こえた。
俺が振り返るとそこに立っていたのは白髪をツーブロックにした男だった。
その男は俺達の間に割り込むように入ってくると、デュエルディスクを起動して男に向けながら、こちらに声をかける。
「お前らか。最近闇のカードのことを嗅ぎまわってんのは?悪りぃが、邪魔するなよ?アイツは俺の標的だ。あの闇のカードは俺が貰う」
「は?誰なんだあんた一体?」
そんな俺の問いかけに白髪の男は応えずに闇のカードに取り憑かれている男にデュエルディスクを向ける。
あまりの自体に困惑していると、予想外の場所からその答えが告げられた。
「お前は……射手園　大和（いてぞの　やまと）‼?」
「知ってるのか、夜?」
「……まあ、ね。1年前、暴力事件を起こしてプロリーグから追放された元プロ決闘者さ」
そういって夜が不機嫌そうに白髪の男を睨む。
そんな夜を、白髪の男ーーー大和は横目で見て、面白そうに笑う。
「ん……テメェ、もしかして『真祖』か?どうしてテメェがここにいる?」

「『真祖』？」
「っ、ボクのことはどうだっていいだろう？お前こそ、何でここにいる‼？」
「はっ、言っただろう？あの闇のカードをいただきにきたんだよ」
「なっ⁉？お前なんかに渡せるわけないだろう⁉？」
「お、おい、夜？落ち着けって」
明らかに怒りの表情を浮かべて、大和に噛み付く夜に困惑してしまう。
まだ短い付き合いだが、闇みたいにあんまり感情を外に出さないタイプだと思っていたため、この反応は少し予想外だ。
そして俺達が揉めている間に、闇のカードに操られた男が動き出す。
「うるせぇぞぉ、テメェらぁ‼？静かに酒も飲めやぁしねぇ‼？テメェらなんざぁ、永遠に眠ってろぉ‼？」
男がそう叫んだかと思うと、男の身体から白い霧の塊が俺達の方に放たれる。
何だか分からないが、アレに当たるのは不味い気がする‼？
「うおっ‼？」
「‼？チッ‼？」
「うわっ⁉？なに……これ……」
「っ‼？夜‼？」
男を横目で見ていた俺と大和は身を翻してその霧の塊を交わすことができた。
しかし、大和の方を見ていた夜は気づくのに遅れ、その霧の塊に飲み込まれてしまう。
霧に飲み込まれた夜は戸惑いの声をあげたかと思うとその場に倒れ伏せる。
慌てて近寄ってみると、外傷自体はなかったが、外にいた人達と同じように深い眠りに落ちてしまっていた。
まさか、外の人達もこうやって眠らせたのか⁉？
眠りについた夜を見て、大和は忌々しそうに表情を歪めながら闇の

カードに取り憑かれた男を見た。
「チッ、素人が手を出すからこうなるんだ。おい、酒飲み野郎。俺とデュエルしろ」
「デュエルだとぉ？」
「俺が勝ったらテメェの闇のカードをいただく。もしテメェが勝ったら、俺達はここから去る。そうしたら好きなだけ酒が飲めるぜ？」
「っ、おい‼？」
「いいから黙ってろ‼？それで、どうする？」
「……いいだろう、テメェが俺様に勝てるわけがないからなぁ‼？」
「決まりだな」
そういって、大和と男がデュエルディスクを起動する。
そしてーーーデュエルが始まった。

大和　ＬＰ８０００
泥酔男　ＬＰ８０００
ーーーーーーー

「俺様の先攻だぁ‼？俺様は堕ち武者（デスサムライ）を召喚だぁ‼？」

〈堕ち武者〉☆４　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ１７００

フィールドに現れたのは顔だけになった侍の亡霊。
「堕ち武者の効果発動だぁ‼？このカードが召喚に成功した時、デッキからアンデット族モンスター１体を墓地へ送るぅ‼？俺はデッキからネクロフェイスを墓地に送るぞぉ‼？」
「アンデットデッキか……」
「カードを２枚伏せてターンエンドだぁ‼？」

大和　ＬＰ８０００　手札５
ーーーーー　ー

ーーーーー
ー　　ー
ーー○ーー
ー▲▲ーー　　ー
泥酔男　ＬＰ８０００　手札２

「俺のターン、ドロー!!?中央に魔弾の射手カスパールを召喚!!?」

〈魔弾の射手カスパール〉☆３　悪魔族　光属性
ＡＴＫ１２００

フィールドに現れたのはマントを羽織った悪魔の羽根を持ち、異形の手をした銃士。

「さらにライフを２０００払って、中央で魔法カード、同胞の絆を発動!!?」

大和　ＬＰ８０００→６０００

「このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行えなくなる代わりに、自分フィールドのレベル４以下のモンスター１体を対象として、そのモンスターと同じ種族・属性・レベルでカード名が異なるモンスター２体をデッキから特殊召喚する!!?ただし、このカードの発動後、ターン終了時まで自分はモンスターを特殊召喚できない。魔弾の射手カスパールを対象に、来やがれ、魔弾の射手ドクトル、魔弾の射手ザキッド!!?それぞれ魔弾の射手カスパールの左右に特殊召喚だ!!?」

〈魔弾の射手ドクトル〉☆３　悪魔族　光属性
ＡＴＫ１４００

〈魔弾の射手ザキッド〉☆３　悪魔族　光属性

ＡＴＫ１６００

カスパールに並び立つように現れたのは同じように悪魔の羽根と異形の手を持つ医師とガンマンのモンスター。

「ここで魔弾の射手カスパールの効果発動だ。同名カードは１ターンに１度、このカードと同じ縦列で魔法・罠カードが発動した場合、発動したカードとカード名が異なる魔弾カード１枚をデッキから手札に加える。俺はデッキから速攻魔法、魔弾―クロスドミネーターを手札に加える」

そういって大和の手札に魔法カードが加わる。

見たことがないモンスター達だが、どうやら魔弾というカテゴリーのデッキみたいだな。

「次だ。魔弾の射手ザキッドと同じ縦列で魔法カード、精神統一を発動‼？同名カードは１ターンに１度、デッキから同名カード１枚を手札に加える。そして魔弾の射手ザキッドの効果を発動だ。同名カードは１ターンに１度、このカードと同じ縦列で魔法・罠カードが発動した場合、手札から魔弾カード１枚を捨てて自分はデッキから２枚ドローする。俺は手札の魔弾―クロスドミネーターを捨てて２枚ドローする。さらに魔弾の射手ドクトルと同じ縦列で魔法カード、一時休戦。お互いのプレイヤーは、それぞれデッキから１枚ドローし、次の相手ターン終了時まで、お互いが受ける全てのダメージは０になる。そして魔弾の射手ドクトルの効果発動。同名カードは１ターンに１度、このカードと同じ縦列で魔法・罠カードが発動した場合、その発動したカードとカード名が異なる魔弾カード１枚を自分の墓地から選んで手札に加える。俺は墓地に存在する魔弾―クロスドミネーターを手札に戻す」

「手札が増えてるだとぉ？ふざけやがってぇ‼？」

「はっ、ふざけてるなんて、闇のカードに酔ってるテメェにだけは言われたくねぇな。俺は左端にカードを１枚伏せてターンエンドだ」

大和　ＬＰ６０００　手札６

ーーーー▲　　ー
ー○○○ー
　ー　　ー
ーー○ーー
ー▲▲ーー　　ー
泥酔男　ＬＰ８０００　手札３

「俺様のターン、ドローだぁ‼?ダメージを与えられないだとぉ?そんなもの俺様には関係ねぇんだよぉ～‼?」
「あぁ?」
「速攻魔法、手札断殺‼?お互いのプレイヤーは手札を２枚墓地へ送りぃ、その後、それぞれデッキから２枚ドローするぅ‼?」
「手札交換か……いいぜ。だが、同じ縦列で魔法・罠カードが発動したことにより魔弾の射手ドクトルの効果発動だ‼?」
「なにぃ⁉?俺様が使っても発動するだとぉ⁉?」
「言ったハズだぜ?同じ縦列で魔法・罠カードが発動した時だと。誰も自分のだなんて言っていない。ちゃんと説明されたものは聞いとくもんだぜ?俺は墓地から手札断殺で捨てた永続罠、魔弾―ブラッディクラウンを手札に戻す」
「面倒な野郎めぇ……ちょろちょろ動いてんじゃねぇよ‼?俺様は酒呑童子を召喚だぁ‼?」

〈酒呑童子〉☆４　アンデット族　地属性
ＡＴＫ１５００

現れたのは大きな酒瓶を手に持った金髪の鬼。
「酒呑童子の効果発動だぁ‼?１ターンに１度、２つの効果から１つを選択して発動できるぅ‼?俺様は自分の墓地からアンデット族モンスター２体を除外してデッキから１枚ドローする効果を選択し、墓地のゴブリンゾンビとネクロフェイスを除外して１枚ドローだぁ‼?さらに除外されたネクロフェイスの効果発動だぁ‼?このカード

がゲームから除外された時、お互いはデッキの上からカードを５枚ゲームから除外するぅ‼？」
「チッ、デッキ破壊か……」
「さらに手札を１枚捨てて除外されているネクロフェイスを対象として装備魔法、ＤＤＲを発動だぁ‼？そのモンスターを攻撃表示で特殊召喚し、このカードを装備するぅ‼？戻りやがれぇ、ネクロフェイスぅ‼？」

〈ネクロフェイス〉☆４　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ１２００

フィールドに現れたのは何本もの触手が蠢いている人形の頭。
「まだだぁ‼？リバースカードオープン‼？罠発動、リターンオブアンデットぉ‼？フィールドのアンデット族モンスター１体を選んで除外し、その後、そのコントローラーの墓地からアンデット族モンスター１体を選び、その持ち主のフィールドに守備表示で特殊召喚するぅ‼？俺様はネクロフェイスを除外して墓地からピラミッドタートルを特殊召喚だぁ‼？」

〈ピラミッドタートル〉☆４　アンデット族　地属性
ＤＥＦ１４００

ネクロフェイスが姿を消し、代わりに姿を現したのはピラミッドを背負った亀のモンスター。
「再び除外されたネクロフェイスの効果発動だぁ‼？さらにお互いはデッキの上からカードを５枚ゲームから除外するぅ‼？」
「チッ、面倒なことをしやがる。チェーンして魔弾の射手カスパールの効果発動だ。俺はデッキからカウンター罠、魔弾―デッドマンズバーストを手札に加える」
「ははははっ‼？サーチでもなんでも好きにしやがれぇ‼？どうせテメェはすぐに何もできなくなるんだからよぅ‼？」

男が笑うのと同時に男の周りを漂っていた闇が集まり始める。
この感覚は……来るか？
「俺様はレベル４の堕ち武者と酒呑童子でオーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」
堕ち武者と酒呑童子が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、そこに現れたのは一升瓶を抱えて瓶や空き缶が散らばる中眠っているバク。
「眠りを司る獣よぉ‼？歯向かう全ての者に永遠の眠りを与えろぉ‼？現れろ‼？Ｎｏ．４１泥睡魔獣バグースカ‼？」
〈Ｎｏ．４１泥睡魔獣バグースカ〉★４　悪魔族　地属性
ＤＥＦ２０００
「出やがったな、Ｎｏ．‼？」
現れたＮｏ．を見て、大和は面白そうに笑みを浮かべる。
そんな大和を見てバグースカに乗っ取られている男が不愉快そうな表情を浮かべる。
「そんな表情ができるのは今の内だぁ‼？Ｎｏ．４１泥睡魔獣バグースカの効果発動ぅ‼？エターナルスリープワールドぉ‼？このカードがモンスターゾーンに守備表示で存在する限り、フィールドの表側表示モンスターは守備表示になり、フィールドの守備表示モンスターが発動した効果は無効化されるぅ‼？」
「‼？はっ、なかなか強力な効果じゃねぇか」
バグースカの身体から白い霧が吹き出し、辺りを包みこむ。
霧に包まれた銃士達はその場に崩れ落ちる。
倒れこむ直前に銃士達はそれぞれが銃の引き金を引き、弾丸を放つが放たれた弾丸は見当違いの方向に飛んでいき、銃士達は眠りについた。

魔弾の射手カスパール
ＡＴＫ１２００→ＤＥＦ２０００

魔弾の射手ドクトル
ＡＴＫ１４００→ＤＥＦ１２００

魔弾の射手ザキッド
ＡＴＫ１６００→ＤＥＦ２００

「これでテメェのモンスターはおねんねだぁ‼？テメェがデッキ切れになるまで永遠になぁ‼？墓地に存在するリターンオブアンデットの効果発動だぁ‼？除外されている自分のアンデット族モンスター１体を選んでデッキに戻し、このカードを自分フィールドにセットするぅ‼？ただし、この効果でセットしたこのカードはフィールドから離れた場合に除外されるがなぁ‼？俺様は除外されているピラミッドタートルをデッキに戻してこのカードをセットするぅ‼？カードを１枚伏せてターンエンドだぁ‼？」
「……そろそろ頃合いだな」
「あぁ？何を言ってるんだぁ？」
　大和の言葉に男は怪訝な表情を浮かべる。
　そんな男に、大和は吐き捨てるように言葉を紡ぐ。
「分からないのか？テメェの本体が姿を現したんだ。もう加減せずに終わらせてやれるって言ってんだ」
「っ‼？なんだとぉ‼？テメェなんかに俺様が倒せるハズがーーー」
「そういうのはもう聞き飽きてんだ。終わりにしようぜ、エンドフェイズ、手札から罠発動‼？魔弾―デスペラード‼？」
「手札から罠だとぉ‼？」
　男が驚愕の表情を浮かべ、大和がそんな男を面白そうに笑う。
「悪いな。魔弾モンスターには永続効果としてモンスターゾーンに存在する限り、自分・相手ターンに自分は魔弾魔法・罠カードを手札から発動できんだよ」

「なにぃ⁉?そんな効果聞いてないぞぉ⁉?」
「はっ、言ってないからな。テメェを倒すのにわざわざ自分の手の内を晒すかよ。魔弾―デスペラードの効果、同名カードは1ターンに1度しか発動できないが、自分フィールドに魔弾モンスターが存在する場合、フィールドの表側表示のカード1枚を対象としてそのカードを破壊する。俺が破壊するのはピラミッドタートルだ」
　先程カスパールが放った弾丸が円を描くように曲がり、警戒するピラミッドタートルの身体を貫いて爆散させる。
「なっ⁉?弾丸が戻って……」
「『魔弾の射手』ってオペラを知ってるか?悪魔が与えた弾丸は、たとえどこに銃口を向けようと魔力によって狙った獲物に必ず命中するが7発目の弾丸だけは、悪魔の望んだ標的に命中させるって話だ。コイツらその話がモチーフになったモンスターなんだよ」
「クソがぁ……だがぁ、プレイミスだなぁ?Ｎｏ．４１泥睡魔獣バグースカがいる限り、テメェは動けねぇのによぉ?」
「んなもん関係ねぇよ。どっちみち、テメェは次のターンには終わるんだからな」

大和　ＬＰ６０００　手札７
ー－－－－▲　　ー
ー□□□ー
　ー　　□
ー－－－－ー
ー▲▲▲ー　　ー
泥酔男　ＬＰ８０００　手札０

「俺のターン、ドロー⁉?速攻魔法、魔弾―クロスドミネーター⁉?同名カードは1ターンに1度しか発動できないが、自分フィールドに魔弾モンスターが存在する場合、フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてターン終了時まで、そのモンスターの攻撃力・守備力は0になり、効果は無効化される⁉?対象はＮｏ．４１泥睡魔獣バグー

スカだ‼？」
「なにぃ⁉？ならば、リバースカードオープン‼？速攻魔法、フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてターン終了時までそのモンスターは、攻撃力が６００ポイントダウンし、効果の対象にならず、効果では破壊されないぃ‼？対象はＮｏ．４１泥睡魔獣バグースカだぁ‼？」
「無駄だって言ってんだよ。手札からカウンター罠、魔弾―デッドマンズバースト‼？同名カードは1ターンに1度しか発動できないが、自分フィールドに魔弾モンスターが存在する場合、相手が魔法・罠カードを発動した時、その発動を無効にし破壊する‼？」
「なんだとぉ⁉？」
ドクトルが放った弾丸がバグースカが纏おうとしていた聖衣を撃ち抜き、キッドが放った弾丸がバグースカの身体を撃ち抜き、あまりの痛みにバグースカが放っていた白い霧を止める。
白い霧が吹き飛んだ瞬間、銃士達が眠りから覚めた。

Ｎｏ．４１泥睡魔獣バグースカ
ＤＥＦ２０００→０

「これで効果も使えるな。同じ縦列で魔法・罠が発動したことで魔弾の射手カスパールと魔弾の射手ドクトルの効果発動だ。魔弾の射手ドクトルの効果で墓地から魔弾―デスペラードを、魔弾の射手カスパールの効果でデッキから速攻魔法、魔弾―ネバーエンドルフィンを手札に加える。さらに手札から永続罠、魔弾―ブラッディクラウン‼？同名カードは1ターンに1度、自分・相手のメインフェイズに手札から魔弾モンスター1体を特殊召喚し、この効果でモンスターが特殊召喚されたゾーンと同じ縦列の相手のメインモンスターゾーンが使用されていない場合、そのゾーンはターン終了時まで使用できない‼？さあ出番だぜ。魔弾を生み出しし堕天した天使達の長‼？魔弾の悪魔　ザミエル‼？」

〈魔弾の悪魔　ザミエル〉☆８　悪魔族　光属性
ＡＴＫ２５００

カスパールが天に向かって弾丸を放つと、その弾丸に導かれるように天より舞い降りたのは銃士達と同じ悪魔の羽根を持ち、両手に銃を手にした双銃の悪魔。
「さあ、終わりにしようぜ。俺は守備表示になっていた魔弾モンスターを全て攻撃表示に変更する」

魔弾の射手カスパール
ＤＥＦ２０００→ＡＴＫ１２００

魔弾の射手ドクトル
ＤＥＦ１２００→ＡＴＫ１４００

魔弾の射手ザキッド
ＤＥＦ２００→ＡＴＫ１６００

「リバースカードオープン!!?罠発動、メテオレイン!!?このターン自分のモンスターが守備表示モンスターを攻撃した時にその守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える!!?」
「ぐっ……だが、俺様のライフポイントは８０００ポイント丸々残っているぅ!!?テメェのモンスターじゃこのターンでトドメなどさせるわけがないぃ!!?」
「終わりだって言ってんだろ。バトル!!?魔弾の悪魔　ザミエルでＮｏ．４１泥睡魔獣バグースカを攻撃!!?ダメージステップ、速攻魔法、魔弾―ネバーエンドルフィン!!?同名カードは１ターンに１度しか発動できないが、自分フィールドの魔弾モンスター１体を対象としてそのモンスターの攻撃力・守備力はターン終了時まで元々の数値の倍になる!!?」

「なんだとぉ⁉？」
「ただし、このカードを発動するターン、対象のモンスターは直接攻撃できないがな。対象にするのは魔弾の悪魔　ザミエルだ⁉？」
ザミエルの双銃に弾丸が装填され、それぞれの銃から光と闇が溢れ出す。

魔弾の悪魔　ザミエル
ＡＴＫ２５００→５０００

「攻撃力……５０００だとぉ⁉？」
「やれ、魔弾の悪魔　ザミエル⁉？ヴァイスシュヴァルツパトローネ⁉？」
ザミエルが双銃から魔弾を放つ。
バグースカはその魔弾を避けるように身体を逸らすが、魔弾はバグースカを追尾するかのように曲がり、バグースカの身体を撃ち抜き、爆散させた。

泥酔男　ＬＰ８０００→３０００

「がああぁっ⁉？……あれぇ？僕は何を……？」
「ん？もしかして、正気に戻ったのか？」
バグースカが破壊された瞬間、男の目に理性の色が戻る。
酔っているせいでまだ呂律は怪しいが、バグースカに操られていた時の狂気の瞳ではない。
しかし、バグースカに操られていた男が正気に戻ったにも関わらず、大和はそのままデュエルを続ける。
「はっ、闇のカードが破壊されて一時的に正気に戻ったか。魔弾の射手ドクトルでダイレクトアタック⁉？ギフトパトローネ⁉？」
「へっ？ぐあぁぁぁ⁉？」

泥酔男　ＬＰ３０００→１６００

ドクトルが放った弾丸が正気に戻った男の足を貫き、男が苦痛の声を漏らす。
あの攻撃、実体化している⁉？
このままだと不味い⁉？
「おい⁉？止めろ⁉？その男はもう正気に戻ってるだろ⁉？」
「はっ、素人が。今は闇のカードが破壊されたことで一時的に正気に戻ってるだけだ。このままほっとけばまたさっきの状態に逆戻りだ。だから、さっさとトドメを刺すしかねぇんだよ⁉？魔弾の射手ザキッドでダイレクトアタック⁉？」
「ひっ⁉？り、リバースカードオープン⁉？永続罠、闇次元の解放⁉？除外からーーー」
「だから、終わりだ。ライフポイントを半分払い、手札からカウンター罠発動⁉？レッドリブート⁉？」

大和　ＬＰ６０００→３０００

「相手が罠カードを発動した時に発動できる⁉？その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする⁉？その後相手はデッキから罠カード１枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンにセットできる。最もこのカード発動後、ターン終了時まで罠カードは発動できないがな」
「そ、そんな……」
「終わりだ、やれ、魔弾の射手ザキッド⁉？ゲシュヴィントパトローネ⁉？」
大和がそう口にした瞬間、キッドの銃から弾丸が放たれ、先程と同じように男の足を貫いた。
「うわぁぁぁぁぁ⁉？」

泥酔男　ＬＰ１６００→０

ーーーーーーー

「Ｎｏ．４１泥睡魔獣バグースカ。テメェは俺の物だ」
痛みに気を失った男のデュエルディスクからバグースカが浮びあがり、大和の手に渡る。
俺は気を失った男に近付き様子を確認する。
怪我は……浅い。
これなら病院に連れていけば何とかなるハズだ。
だが……
「おい。あそこまでやる必要は無かっただろ」
俺はバグースカのカードを見ていた大和を睨み付ける。
そんな俺を大和は鼻で笑った。
「はっ、とんだ甘ちゃんだな、『英雄騎士』。いや、今は『墜ちた英雄』って言った方がいいか？」
「っ⁉？お前、俺のことを……」
「知らないわけないだろ？お前と俺は同類なんだからよ。まあ、そんな同類がこんな甘ちゃんだとは思わなかったけどな」
そういって大和が手で銃の形を作って俺の方に向ける。
「テメェが何で闇のカードを追ってるのかは知らねぇが。そこで呑気に寝てる奴と一緒にこの件からさっさと手を引け。テメェみたいな甘ちゃんがやっていけるようなことじゃねぇんだよ」
大和は俺に向かって銃を撃つような仕草をする。
「『英雄騎士』。まだお前がこの件に関わるってんなら今度はお前の闇のカードをいただく」
「おい‼？」
「う、うーん……あれ……ボクは……」
「‼？夜‼？」
後ろで夜の声が聞こえ、振り向くと夜が眠たそうに目を擦りながら起き上がるところだった。
その間に大和は俺に背を向けて路地裏の奥に歩き出す。
「確かに伝えたぜ。じゃあな」
「……」

夜や怪我をしている男を放っておくわけにもいかず、俺は大和が去って行くのをただ見ていることしか出来なかった。

ーーーーーーー

「ゴメン、迷惑をかけたね」
「いや、構わない。俺も咄嗟に対処が出来なくて悪かったな」
「それこそ遊騎が気にすることじゃないさ。不用意によそ見していたボクが悪いしね。それにしても、ムカつくね、大和の奴……」
あれからデュエルセキュリティに連絡をし、店にいた人達が全員起きるのを確認し、怪我をした男を病院に運んでから、病院近くのベンチに座って夜が眠っていた間のことを話した。
話を聞いた夜は心底不機嫌そうに口を尖らせる。
「夜はあいつと知り合いなのか？」
「ん……まあ、昔にちょっと、一緒にデュエルをする機会があっただけさ。それ以上でもそれ以下でもない」
少し寂しそうな表情を浮かべながら、夜はそう呟く。
言葉と表情には明らかに含みがあるが、それはきっと夜からすれば触れて欲しくないところなのだろう。
だからこそ、俺はあえてそこには触れずに話を続ける。
「あいつは、これ以上この件に関わるなって言ってきた。口ぶりや行動からしてばら撒いた奴ではなさそうだが、このまま闇のカードを追っていくならぶつかることになりそうだな」
そう言って先程のデュエルを思い出す。
自分のターンだろうと相手のターンだろうと、自在に手札から多様な魔弾を放って相手の戦術を撃ち抜いていく大和のデュエル。
だが、先程のデュエルであいつの全力が見えたとも思えない。
大和の口ぶりが正しいなら、魔弾は7枚あるハズだからまだ見えていない魔弾もある。
そして何より、あの口ぶりからして大和はまだ奥の手を隠しているハズだ。

正直、やりあったら勝てるかどうかは分からない。
「それで、遊騎はどうするの？大和が言ったように、この件から手を引く？」
夜が試すような口ぶりでそんなことを言う。
そんな夜に俺は首を振りながら答えた。
「いや、勿論このまま闇のカードをばら撒いている奴を探す。どの道俺は闇のカードをばら撒いてる奴に知られてるんだ。今更引いたところで危険なのには変わりない。それに……あいつのやり方は気にくわない」
俺はそう言って病院の方を見る。
最後、闇のカードの効力が切れて正気に戻った時、他にも手段があったハズだ。
Ｎｏ．という闇のカードは勝者の元に移動する。
なら、正気に戻った際にサレンダーを促すこともできたハズだ。
そうすれば、無駄に怪我をすることもなくバグースカは大和の手に渡ったハズだ。
だが、そんなことを気にすることもなく、大和は攻撃を続けて操られていた男を傷つけた。
あのやり方は、俺には気にくわない。
そんな俺の答えに、夜は満足したように笑うと、俺の肩に手をおいた。
「ふふっ、遊騎ならそう言うと思っていたよ。だったら、ボクも降りるわけにはいかないね」
「いや、別に無理して夜が付き合う必要はないんだぞ？今回危険な目にあったんだし……」
「何を言ってるんだい。ボクだって君と同じで闇のカードを持ってる人間には狙われてるんだ。今更降りても変わらないさ。それに、初めて会った時に言っただろう？君とボクは同じ秘密を持つ共犯者なんだ。相手が降りないのに、自分が降りるなんて無しさ」
そういって、夜が冗談めかして笑う。
そんな夜を見て、俺は思わず笑みを浮かべると夜に向かって手を掲

げた。
「そっか。それじゃあ改めて、よろしく頼むぜ、夜」
「おうともさ‼?」
そういって俺達は笑い合いながらハイタッチをする。
誰が相手になろうとも、闇のカードをばら撒いている奴を見つけ出して、絶対に止めてみせる。
その思いは一層強くなり、俺の中で燃え上がっていくのだった。

第５８話真紅の竜王

★

「バトル‼?絶望神アンチホープでマシンナーズフォースを攻撃‼?ホープブレイクパニッシャー‼?」
「ぐあぁぁぁ‼?」

男子生徒　ＬＰ４００→０

立体映像が消え、項垂れている男子生徒に私は近づいて笑顔で手を差し出す。
「ありがとうございました‼?いいデュエルでした‼?」
「っ……あ、あぁ‼?つ、次は負けないからな‼?」
「はい‼?次にデュエルする時を楽しみに待ってます‼?」
私が握手をしながら笑顔を浮かべると、対戦した男の子は顔を赤くしながら手を振り払って走り去ってしまった。
……うぅ、怒らせちゃったのかな?
自分に勝った相手が笑っていたのが気に入らなかったのかな……ううん、もしかしたら他にもデュエル中に失礼な態度を取っちゃってたのかも……
「お疲れ、遊花。何を落ち込んでるのよ?」
そんなことを考えて落ち込んでいると、後ろから私の肩を叩いて声をかけてくる人がいた。
言うまでもなく、私の親友の桜ちゃんだ。
「桜ちゃん……さっきのデュエル、私失礼なことしちゃったかな?」
「は?いきなり何言ってるのよ?」
「だって、顔を真っ赤にして走っていっちゃったし……私が失礼なことをして怒らせちゃったんじゃ……」
「……」
私の言葉に、桜ちゃんが呆れたように頭を抱える。

そしてしばらくすると疲れたようにため息を吐きながら、首を振った。
「……はぁ～大丈夫よ。遊花は別に悪いことなんかしてないから」
「本当？」
「こんなことで嘘なんかつかないわよ。とにかく、遊花はいつも通りでいいの。わかった？」
「……うん」
「……はぁ～私の周りの人間はどうしてこう鈍感な奴が多いのかしら」
桜ちゃんがため息を吐きながら小さな声で何かを呟く。
そして気を取り直すように、視線を私の後ろに向けた。
「それにしても、相変わらず凄い人数よね」
「あ、あはは……やっぱり闇先パイって凄い人なんだね。こんなに人が集まるなんて」
桜ちゃんの視線を追って振り向くと、そこにいるのは今私達がいる講堂から溢れ出さんとばかりに集まった人の山。
そこにいる人達はそわそわした様子で私の方を見ていた。
……そう、ここにいる人達はみんな闇先パイとデュエルをするために私とデュエルをしに来た人達なのだ。
闇先パイが出した条件。
栗原　遊花にデュエルで勝った人とならデュエルをする、という話は瞬く間にデュエルアカデミアに広がった。
そのためか、あの条件が提示されて5日が経った今では休み時間や講義が空いてる時間に様々な学年から私とのデュエルで勝利するために人が集まるようになっていた。
流石にこの人数を相手にすると私の体力が持たないので、条件をもっと細かく定めて貰って休憩時間もできたけど、それでも流石にこの人数とデュエルをするにはいくら時間があっても足りない。
だからこそ、闇先パイには少し条件を追加して、私が負けた人達に勝てたら闇先パイに挑戦できるという風にして貰い、私がこの5日間の間に負けた2人の決闘者にも協力して貰うことにしたんだけど

……
「お願い、サンダーエンドドラゴン‼?終焉のライトニングバースト‼?」
「行くぞ、我が戦友(とも)、魂食神龍ドレインドラゴンよ‼?暴食のスワロースパイラル‼?」
「きゃぁぁぁ‼?」
「んぎゃぁぁぁ‼?」
「あっちも終わったみたいね」
「やっぱり強いなぁ……天雷君と喰代君」
私達の視線の先には、それぞれ圧倒的な実力で勝利した天雷君と喰代君の姿があった。
２人は一息つくと次の挑戦者を探したのだが、どうやら今日２人に挑戦したのは先程の２人だけだったようだ。
それもそのハズ。
天雷君と喰代君はこのデュエルアカデミアでトップとＮＯ２の実力者だ。
私みたいなほとんど無名の決闘者とは違い、その圧倒的な強さはこのデュエルアカデミア中に知れ渡っている。
だからこそ、あの２人に挑戦をするのはデュエルアカデミアでトップクラスの実力者に挑戦してみたいという人か、私とのデュエルの待ち時間が待ちきれずにもしかしたら勝てるかも知れないと挑んでいく人ぐらいだ。
おまけに圧倒的な実力差で勝っている２人と違い、私は防御よりの戦術のため、ギリギリのところで勝利することの方が多く、もしかしたら次は勝てるかもしれないという気持ちを挑戦してくる人達に抱かしてしまっているみたいで、結果的に勝ち目がありそうな私のとのデュエルを選ぶ人ばかりが増え、私のデュエル回数は全く減っていかないのだ。
「やっぱり精進が足りないね。私も２人みたいにもっと強くなれるように頑張らないと‼?」
「今でも十分強くなってると思うけどね。まあ、遊花がそうなりた

いって言うのなら頑張りなさい。私だって手を貸してあげるから」
「ありがとう、桜ちゃん」
そういって桜ちゃんと笑い合うと予鈴のチャイムが鳴る。
チャイムの音を聞き、デュエルが出来なかった生徒達は残念そうな表情を浮かべて散っていく。
講義中は、実技の講義以外では私に挑むことは禁止されている。
一息はつけるんだけど、結局講義を受けることになるんだから休み時間とはとても言えない。
だからって、弱音も吐いていられないよね。
これも修行の一環だもん。
よーし、頑張るぞー!!?
そう自分を鼓舞しながら、私も講義の準備に取り掛かるのだった。

ーーーーーーーー

「今日の講義では、皆さんにカードのデザインをして貰おうと思います」
闇先パイと同じく特別講師としてデュエルアカデミアにきた天神先生は、講義が始まると生徒達にそう告げた。
天神先生の講義はカードデザイン学。
私達が使用しているデュエルモンスターズのカードがどのように生み出されているのかについて学んでいく講義らしい。
今日の講義内容はスケッチブックにオリジナルのカードを好きなだけ描いて提出するという内容で、今回提出された課題を見てこれからの講義内容を考えていくようだ。
とはいったものの、いきなりオリジナルのカードを考えるなんて少し難易度が高い気がするんだけどなぁ……
「うぅ……桜ちゃん、何か描けた?」
「んー私もまだね。いきなり描けって言われてもそうそう描けないわよ」
「だよね……うぅ、どうしよう?」

「なんだ、遊花達はまだ描けてないのか？」
　私が桜ちゃんと頭を抱えていると、近くの席に座っていた大地君がそんな声をあげる。
「大地君。その口ぶりだと、大地君は……」
「おう、もう描けたぜ」
　そういって大地君は私達にスケッチブックを見せる。
　そこに描かれていたのは巨大な電磁砲を２つ背負ったロボットのような戦士だった。
「それって磁石の戦士をイメージして描いたの？」
「まあな。電磁石の戦士の効果があるから、もう少し出せる磁石の戦士を増やしたいんだよな」
「成る程ね。まあ、自分が使ってるテーマのカードが描きやすいといえば描きやすいわよね」
「よし、描けた」
　そんな話をしていると、私達の１つ前の席に座っていた天雷君からそんな声が聞こえてくる。
「て、天雷君ももう描けたの⁉？」
「う、うん。一応ね」
　そういって恥ずかしそうに天雷君が見せてくれたのは雷を纏った小さな竜。
「これは……サンダーエンドドラゴンをイメージして描いたのかしら？」
「うん。サンダーエンドドラゴンをもっと小型にした姿をイメージして描いたんだ。サンダーエンドドラゴンはランク８だから、この子はランク４ぐらいかな」
「うぅ～大地君も天雷君もすごいなぁ……私なんてさっぱりだよ」
　早くも描きあげてしまった大地君と天雷君を見て、私は項垂れる。
「そんなに思い浮かばないなら自分がモンスターになった姿でも描けばいいんじゃないか？」
　項垂れる私を不憫に思ったのか、大地君はそんな言葉を口にする。
「私がモンスターになった姿……あれ？」

「ん？私がモンスターになった姿？」
私がモンスターになった姿って……
隣に座っていた桜ちゃんも私と同じ事が頭に浮かんだみたいで、私達は思わず顔を見合わせた。
「私達がモンスターになった姿……ね。それなら遊花は相手の場にモンスターが存在していないとき、手札から特殊召喚できて、フィールドから墓地か除外されたそのカードを手札に戻し、そのターン特殊召喚できなくなる代わりに次の相手ターン終了時まで自分が受ける戦闘ダメージは０になるモンスターかしら？」
「あはは‼？それなら桜ちゃんは２０００以上の戦闘ダメージを受けるか相手に与えた場合に手札を１枚捨てることでデッキから特殊召喚できて、その効果で特殊召喚に成功した場合、相手はデッキからモンスターを３体まで選んで除外するモンスターだね」
「うわっ、それは流石に強すぎないか？」
「どちらも条件が緩すぎると思うけど……」
驚いた表情を見せる大地君と天雷君に、私と桜ちゃんは苦笑してしまう。
何故なら、その効果は私達が異世界に行った時に自分自身がカードになってデュエルをした時の効果なのだ。
私が初めて異世界に行った際にみんなの思いを束ねて、天使と竜の翼を持つ少女と共に戦った姿。
だから、私がモンスターになった姿というのは、きっとあの漆黒の毛並みに覆われた竜の姿なのだろう。
「みんな、元気かなぁ……」
私は目を閉じて異世界での記憶を掘り起こす。
辛いことや苦しいこともあったけど、みんなと過ごした時間はすごく楽しくて、幸せな時間だった。
……また、みんなに会える日も来るのかな？
「なんだ、項垂れてたわりには、遊花めちゃくちゃ描いてるじゃん」
「……ほぇ？」
思い出に浸っていた私は大地君のそんな言葉に現実に引き戻され

る。
大地君の言葉に首を傾げながら自分のスケッチブックを見ると、そこにはどこか見覚えがある様々なモンスターが描かれていた。
「ね、ねぇ、遊花？そのモンスター、どこかで見たことあるんだけど……」
「き、奇遇だね、桜ちゃん。私もだよ」
「僕も少しだけ見たことがあるモンスターが混ざってるような……」
私、桜ちゃん、天雷君は、私が無意識のうちにスケッチブックに描いていたモンスターを見て、頬を引きつらせる。
巨大な銀狼はいいとして、機械の身体を持つ生物達や顔なき戦士達は色々と不味い気がする。
私が無意識のうちに描いてしまったのは、この世界にはない異世界のカード達。
前者は兎も角、後者は世界を滅ぼそうとしたカード達のため頬が引きつってしまうのも仕方がないだろう。
うぅ……一体いつの間に描いちゃったんだろう？
これなら師匠がモンスターになったあのカッコいい姿が描きたいよ。
「……あれ？」
「遊花？どうかしたの？」
「うん。こんなモンスターいたかな？」
私は自分が無意識に描いてしまったモンスター達を眺めていると、その中に見覚えがないモンスター達がいた。
そこに描かれていたのは金色の翼を持つ小さな戦士と、その隣に描かれている白龍。
確かに似た戦士は見た記憶はあるけど、あのモンスターはこんなに小さくは無かった気がする。
そしてこの白い龍に関しては間違いなく見たことがないと断言できる。
それなのに、どうしてだろう？

私は、このモンスター達をよく知ってる気がする。
このモンスター達は一体……
「それでは、1度手を止めてください」
考えに耽っていた私の耳に天神先生の声が聞こえてくる。
どうやら無意識に絵を描いたり、考えごとをしている間にかなり時間は過ぎていたようで気付いたら講義の終わりの時間になっていた。
うーん、一体何だったんだろう？
私は心の何処かに引っ掛かるものを感じながらも、自分が描いたスケッチブックを提出するのだった。

ーーーーーーー

「うーん」
「さっきから唸ってばっかりだな、遊花は」
「そんなに遊花は変わったものを描いたの？」
「変わってるといえば変わってるわね。色んな意味で」
昼休み。
さっきの講義のことを思い出してどうにももやもやとした感じがする私を見て、大地君と霊華さんは首を傾げ、桜ちゃんは私が作った重箱からシューマイを口に運びながら苦笑を浮かべた。
休み時間や講義が空いてる時間に私とのデュエルを望む人がいるとはいえ、この昼休みの時間は平和なものだ。
流石に、私に挑む為に昼食を抜こうと考える人はそう多くないらしい。
昼食を邪魔すれば闇先パイが口にした私に迷惑をかけないという条件を満たせなくなってしまうためだろうが、そうでなくともデュエルアカデミアケルン校は敷地が広く、移動教室などがある場合には、結構な距離を歩くことになるため体力を使う。
昼食を抜いてお昼からの講義を受けるとなると、間違いなく講義中に地獄を見ることになるだろう。
だからこそ、この時間は四六時中デュエルを挑まれるようになる

デュエルアカデミアにおいて唯一しっかりと休める時間だった。
「しっかし、遊花とデュエルしようとする奴減らないな。俺だって遊花や闇さんとデュエルしてぇのに」
「大地君なら、言っててくれればいつでもデュエルするよ？闇先パイは忙しい人だから分からないけど……」
「駄目だ駄目だ。遊花だってずっとデュエルしてたら流石に体力が持たないだろ？俺は万全の状態の遊花とデュエルしたいんだ。それに闇さんはあの条件をクリアしたらデュエルするって話だろ？知り合いだからって理由でルールを破るわけにはいかねぇって」
「そっか……ふふっ」
「なんだよ？」
「ううん、大地君って律儀だなって思っただけ」
私が思わず笑いながらそう応えると、大地君が不貞腐れたように自分の腕を枕にしながら椅子にもたれ掛かる。
悪いことしちゃったかな？
だけど、そういう大地君の律儀なところ、私はとてもいいと思うけどな。
「……見つけたぞ」
「えっ？」
和やかな昼食の時間を過ごしていた私達の耳にそんな言葉が聞こえてくる。
私が声が聞こえた方を見ると、そこにいたのは見るからに怪しい少女だった。
フリルがついた黒い日傘を持ち、デュエルアカデミアの制服の上から何故か羽織っている黒いマント。
右目には眼帯がついており、左目の赤は多分カラーコンタクトだろうか？
綺麗な黒髪をサイドアップにし、身長は私よりも少し小さいから多分年下だろうその少女はどこか不敵な笑みを浮かべてこちらを見ていた。
「汝が栗原　遊花だな？」

「えっと、そう、だけど……私に何か用かな？」
「ようやく巡り逢えた。汝は光、我は影。我らはぶつかり合う運命（さだめ）にある‼？」
　そういって少女はマントを勢いよく広げながら不敵な笑みを浮かべる。
　どういう反応をすればいいのか分からず困惑していると、桜ちゃんが呆れたような声でその少女に話しかける。
「はぁ……遊花とデュエルしにきたって言うのは何となく分かったけど、それで、アンタは誰なのよ？」
「フッ、我が忌み名を問うか……良かろう。我こそ深淵より出でし、全てを喰らう真紅の悪竜‼？我が忌み名、その魂に刻め‼？」
　そういうと少女はマントを翻しながらゆるりと一回転すると、眼帯のついた右目を手で押さえながら、もう片方の手で私を指差した。
「紅神爆牙（こうこうはくが）のアイズ・Ｄ・スカーレット。汝を喰らう者だ‼？」
「……は、はぁ」
　思わず間の抜けた返事を返す私を見て、少しだけ不服そうにしながらも、スカーレット（？）ちゃんはデュエルディスクを起動し、私に向ける。
「さあ、我らの聖戦（ジハード）を始めようではないか、栗原　遊花。我が運命の好敵手よ‼？汝を倒した時、我が悲願は達成される‼？」
「えっと……桜ちゃん、これってデュエルの申し込みってことでいいんだよね？」
「だと思うわよ。言ってることはよく分からないけど。まあ、軽く蹴散らしてやりなさいな」
「何だか面白い奴が挑んできたもんだな。くぅーっ‼？いいなぁ、俺もデュエルがしたいぜ‼？」
「あの子の魂からも面白い波動を感じる。ふふっ、遊花といると、本当に退屈しないわね」
　呆れたように肩を竦める桜ちゃんに、ワクワクした表情をする大地君、そしてちょっと不思議な感想を言って微笑んでいる霊華さん。
　何だかよく分からないけど、デュエルを挑まれたなら断るわけには

いかないよね？
私は自分のデュエルディスクを起動して、構える。
それを見て、スカーレットちゃんはニヤリと笑った。
「さあ、汝の全てを喰らい尽くしてやろう‼？」
「何だかよく分からないけど、デュエルするなら、受けてたちます‼？」
『決闘‼？』

遊花　ＬＰ８０００
スカーレット　ＬＰ８０００

ーーーーーーーー

「先攻は私だね。モンスターをセット。カードを２枚伏せてターンエンドだよ」

遊花　ＬＰ８０００　手札２
ーーー▲▲ー　ー
ーー■ーー
ー　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
スカーレット　ＬＰ８０００　手札５

「我のターン、ドロー‼？我は伝説の黒石（ブラックオブレジェンド）を召喚（サモン）‼？」

〈伝説の黒石〉☆１　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ０

フィールドに現れたのは赤黒い石のような卵のモンスター。
種族がドラゴンということは、あの卵から何かが産まれてくるのか

な？

興味深く黒石を見つめる私に、スカーレットちゃんは不敵に笑いながら黒石に手をかざす。

「クックック、我が力の一端、汝に見せてやろう‼？伝説の黒石のエフェクトアクティベート‼？このカードをリリースしてデッキからレベル７以下のレッドアイズモンスター１体を特殊召喚（スペシャルサモン）する‼？」

「えっ⁉？レッドアイズ⁉？」

「現れよ、真紅眼（レッドアイズ）の黒竜（ブラックドラゴン）‼？」

スカーレットちゃんの呼び声に応えるように、黒石が輝きはじめ、空に浮かび上がる。

そして黒石が割れ、卵の殻が弾け飛ぶと、そこには真紅の眼を持つ黒竜が私を睨みつけながら咆哮をあげた。

〈真紅眼の黒竜〉☆７　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ２４００

「真紅眼の……黒竜……」

スカーレットちゃんの特殊召喚した黒竜に、私は思わず驚きの声をあげてしまう。

真紅眼シリーズ。

可能性をもたらす竜とも呼ばれ、非常に人気が高いレアカードである真紅眼の黒竜を主にしたカテゴリーだ。

サポートカードも豊富で、その人気の高さから昔はプレミア価格がついてデッキを作るのには数百万はかかっていたらしい。

現在は増版され、一部の大会の優勝景品などで出回ったおかげで昔よりかは手に入りやすくなってるハズだけど、それでもまだ数十万はかかるハズだ。

まさかそんなデッキをデュエルアカデミアの生徒で持っている人がいるなんて……

私は不敵に笑っているスカーレットちゃんを見て、気を引き締める。

真紅眼シリーズは確かに希少価値の高いシリーズだけど、ただ希少価値が高いからプレミア価格が付いていたわけではない。
真紅眼シリーズはそれだけ強力な力と可能性を秘めているのだ。
「まずは小手試しだ‼？魔法アクティベート、黒炎弾‼？我のモンスターゾーンの真紅眼の黒竜１体を対象としてその真紅眼の黒竜の元々の攻撃力分のダメージを汝に与える‼？」
「っ‼？元々の攻撃力分ということはいきなり２４００のバーンダメージ⁉？」
「ただし、このカードを発動するターン、真紅眼の黒竜は攻撃できないがな。燃やし尽くせ、真紅眼の黒竜‼？黒炎弾‼？」
「きゃあ‼？」

遊花　ＬＰ８０００→５６００

黒竜から黒い炎の弾丸が私に向けて放たれ、私の身体を炎が包む。
最初から結構痛い一撃を貰っちゃった。
だけど、これで真紅眼の黒竜は攻撃できない……なんて、安心できるわけないよね。
そんな私の予感を肯定するかのように、スカーレットちゃんは不敵に笑いながら次のカードを掲げる。
「我はフィールドの真紅眼の黒竜をリリース‼？我の手札・フィールドからレッドアイズモンスター１体をリリースした場合にこのカードは特殊召喚できる‼？我が僕よ、貴様の中に潜む異なる人格（オルターエゴ）を呼び覚ますがいい‼？真紅眼の（レッドアイズ）亜（オルタナティブ）黒（ブラック）竜（ドラゴン）‼？」
「真紅眼の亜黒竜⁉？」
スカーレットちゃんの言葉に黒竜が自身の身体を抑えながら苦しそうに咆哮をあげる。
そして咆哮をあげた黒竜の目が漆黒に染まると、身体が赤黒く光り、黒竜だった存在は歓喜の咆哮をあげた。

〈真紅眼の亜黒竜〉☆７　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ２４００

「バトルだ‼？真紅眼の亜黒竜でセットモンスターをアタック‼？
黒焔弾（ダークテラフレア）‼？」
「っ、セットモンスターはドットスケーパー‼？」

〈ドットスケーパー〉☆１　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

現れたのはドットの身体を持つモンスターを、亜黒竜の赤黒い炎の弾丸が焼き尽くし、ドットスケーパーの身体がデータに変わり辺りに散らばる。
しかし、炎が晴れると散らばっていたデータが再び集まり、ドットスケーパーの姿を成した。
「墓地に送られたドットスケーパーの効果発動‼？デュエル中に１度、このカードが墓地に送られた場合に特殊召喚するよ‼？」
「成る程、自己再生能力を所持していたか……クックック、そうこなくてはな」

〈ドットスケーパー〉☆１　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

「メインフェイズ２、我はカードを２枚セットし、ターンエンドだ」

遊花　ＬＰ５６００　手札２
ー－▲▲－　ー
ー－□－－
ー　ー
－－○－－
－－▲▲－　ー
スカーレット　ＬＰ８０００　手札１

「私のターン、ドロー‼?・まずは、導いて‼?・希望に繋がるサーキット‼?」
「リンク召喚か……」
　私が正面に手をかざすと私の前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル1モンスター1体‼?・私はドットスケーパーをリンクマーカーにセット‼?・サーキットコンバイン‼?・リンク召喚‼?・希望の守り手‼?・リンク1‼?・リンクリボー‼?」
〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

　ドットスケーパーがサーキットに入り、代わりに飛び出してきたのは青い球体型のモンスター。
　飛び出してきたリンクリボーはしばらく私の周りを嬉しそうにくるくる回っていたが、しばらくすると私の頭の上に座り込んだ。
　立体映像だから重さはないけど、なんだか変な感じだなぁ。
　苦笑を浮かべながらリンクリボーを見上げているとスカーレットちゃんが愉快そうに笑う。
「クックック、それが汝の使い魔か。えらくちっぽけだな」
「むっ、小さくたってこの子達はとっても強いんだよ。今からそれを証明してあげる」
「ほぅ、ならば見せて貰おうではないか」
「うん、たっぷり見せてあげるよ。小さい者なりの戦い方ってやつをね‼?・私はサクリボーを召喚‼?」
〈サクリボー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３００

　私の前に現れるのは背中に金色の目を持つクリボーに似たモンスター。

「フッ、そのようなちっぽけなモンスターが増えたところでどうなるというのだ」
「勿論、貴方の真紅眼の亜黒竜を倒せるんだよ‼?魔法カード、ミニマムガッツ‼?自分フィールド上のモンスター1体をリリースし、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動‼?私はサクリボーをリリースして真紅眼の亜黒竜を選択‼?選択したモンスターの攻撃力はエンドフェイズまで0になり、このターン選択したモンスターが戦闘によって破壊され、相手の墓地に送られた時、そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える‼?」
「何っ⁉?」
「お願い、サクリボー‼?」
サクリボーが青いオーラを纏い身体を粒子に変えながら、亜黒竜に突撃していく。
亜黒竜はサクリボーに赤黒い炎の弾丸を放ち焼き尽くそうとするが、サクリボーは消滅しながらも最後の力を振り絞り、亜黒竜の身体に体当たりをし、怯ませた。

真紅眼の亜黒竜
ＡＴＫ２４００→０

「我が僕の攻撃力が……‼?」
「サクリボーの効果発動‼?このカードがリリースされた場合に自分はデッキから1枚ドローします‼?そして、バトル‼?リンクリボーで真紅眼の亜黒竜を攻撃‼?リンクラッシュ‼?」
「迎え撃て、真紅眼の亜黒竜‼?黒焔弾‼?」
亜黒竜が赤いオーラを纏って突撃してくるリンクリボーに赤黒い炎の弾丸を放つ。
しかし、リンクリボーは炎の弾丸を物ともせずそのままの勢いで亜黒竜を弾き飛ばした。

スカーレット　ＬＰ８０００→７７００

「ミニマムガッツの効果‼？戦闘によって破壊された真紅眼の亜黒竜の元々の攻撃力分のダメージを相手に与える‼？」

「ぐっ、小癪な……だが、破壊された真紅眼の亜黒竜のエフェクトアクティベート‼？黒竜は深淵より舞い戻る（リバイヴ）（パーソナリティー）‼？このカードが戦闘または相手の効果で破壊された場合、同名カード以外の我のセメタリーのレベル７以下のレッドアイズモンスター１体を特殊召喚する‼？そしてこのエフェクトで特殊召喚したモンスターが真紅眼の黒竜の場合、その元々の攻撃力は倍になる‼？」

「えっ⁉？攻撃力が倍⁉？」

「覚醒の刻だ、我が僕よ‼？異なる人格（オルターエゴ）の深淵より目覚めよ‼？真紅眼の黒竜‼？」

リンクリボーによって弾き飛ばされた黒竜の身体から赤黒い光が消えていく。

黒竜が再び真紅の眼を輝かせると、世界を震わせるような咆哮をあげた。

〈真紅眼の黒竜〉☆７　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ２４００→４８００

「っ……だけど、ミニマムガッツの効果で２４００ポイントのダメージは受けて貰うよ‼？」

「ぐっ……」

スカーレット　ＬＰ７７００→５３００

リンクリボーの身体から赤い衝撃波が放たれ、スカーレットちゃんのライフを削る。

これでライフは少しだけ優位になったけど、攻撃力が倍になった黒竜が蘇ってしまった。

やっぱりドラゴン族特有の高攻撃力は少々部が悪い。
油断すると、一瞬でやられる。
「メインフェイズ2、カードを1枚伏せてターンエンド」

遊花　ＬＰ５６００　手札１
ー▲▲▲ー　　ー
ーーーーー
　　☆　　ー
ーー○ーー
ーー▲▲ー　　ー
スカーレット　ＬＰ５３００　手札１

「我のターン、ドロー!!?魔法アクティベート、紅玉の宝札!!?手札からレベル7のレッドアイズモンスター1体をセメタリーへ送り、我はデッキから2枚ドローする。その後、デッキからレベル7のレッドアイズモンスター1体をセメタリーへ送る事ができる!!?手札の真紅眼の黒炎竜(レッドアイズブラックフレアドラゴン)をセメタリーへ送り、カードを2枚ドローする!!?その後、デッキから2枚目の真紅眼の黒竜をセメタリーに送る!!?」
「っ、墓地肥やしにドローを両方こなせるんだね」
「クックック。それでは魔宴(サバト)の始まりだ!!?リバースカードオープン!!?永続罠アクティベート、真紅眼の鎧旋(リターンオブレッドアイズ)!!?我のフィールドにレッドアイズモンスターが存在する場合、我のセメタリーの通常モンスター1体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?蘇れ、真紅眼の黒炎竜!!?」

〈真紅眼の黒炎竜〉☆7　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２４００

フィールドに現れたのは炎の翼を持つレッドアイズ。
でも、そのレッドアイズは効果モンスターに見えるんだけど……

怪訝な表情を浮かべる私をスカーレットちゃんは何故かその場で一回転してから指を指す。
「クックック、汝の困惑、手に取るように分かるぞ。真紅眼の黒炎竜はデュアルモンスター。真紅眼の黒炎竜はフィールド・セメタリーに存在する限り、通常モンスターとして扱い、フィールドの通常モンスター扱いのこのカードを通常召喚としてもう1度召喚することでその身に宿る禁じられし力を解放することができるのだ」
「デュアルモンスター……」
その名前は聞いたことがある。
確か通常モンスターと効果モンスターの側面を合わせ持つモンスターのことだ。
フィールドにいるそのモンスターを再度召喚することで効果モンスターとして扱い、本来持っている効果を発動させるモンスター。
レッドアイズにもそんなモンスターが存在したんだ……
「さあ、禁じられた力を解き放ち、この世の全てを燃やし尽くすがいい!!?真紅眼の黒炎竜!!?再度召喚(デュアルサモン)!!?」
スカーレットちゃんがそう宣言すると、黒炎竜の炎の翼が勢いを増して燃え上がる。
「バトルだ!!?真紅眼の黒炎竜でリンクリボーをアタック!!?黒焔弾(ダークキロフレア)!!?」
「相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動!!?ゼロリンク!!?このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力はターン終了時まで0になる!!?」

真紅眼の黒炎竜
ＡＴＫ２４００→０

リンクリボーの身体が粒子に変わって黒炎竜に纏わりつく。
しかし、それに構わず黒炎竜は炎の弾丸を放つ。
「フッ、その程度で我の炎を防いだつもりか!!?真紅眼の黒炎竜の効果発動!!?黒炎(エタニティフレア)は全てを燃やし尽くす!!?このカードが戦闘を行っ

たバトルフェイズ終了時、このカードの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える‼?」
「えっ⁉?・きゃあ‼?」

遊花　ＬＰ５６００→３２００

私に放たれた炎の弾丸が勢いよく燃え上がり、私のライフを削り取る。

まさかバーン効果を得るとは思わなかった。

思ってた以上に、この状況は不味い。

「さあ、終焉の刻だ。真紅眼の黒竜でダイレクトアタック‼?総てを燃やし尽くす黒炎弾（オーバーロードダークメガフレア）‼?」

黒竜から先程より巨大な黒い炎の弾丸が私に向けて放たれる。

これを受けたら私の負けが確定する。

「そんな攻撃、通さない‼?・リバースカードオープン‼?・罠発動‼?パワーウォール‼?・相手モンスターの攻撃によって自分が戦闘ダメージを受けるダメージ計算時、その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージが０になるように５００ダメージにつき1枚、自分のデッキの上からカードを墓地へ送ります‼?・真紅眼の黒竜の攻撃力は４８００だからデッキの上から１０枚のカードを墓地に送ってダメージを０にする‼?」

私がデッキの上から１０枚のカードを墓地に送ると、私の前に粒子で出来た盾が生まれ、黒竜の炎を防ぐ。

黒炎は粒子の盾を喰らい、燃え上がりながら私に迫るが、私の身体に届く前に消滅した。

「クックック、闘志は未だに消えぬようだな。ならば、我が僕を打倒してみるがいい。メインフェイズ2、カードを1枚セットしターンエンドだ」

真紅眼の黒炎竜
ＡＴＫ０→２４００

遊花　ＬＰ３２００　手札１
ー▲ー▲ー　　ー
ーーーーー
　　ー　　ー
ーー○○ー
ー▲△▲ー　　ー
スカーレット　ＬＰ５３００　手札１

「すー……はー……私のターン!!?」
私は１度深く深呼吸をして、握るカードに力を込める。
状況は私の不利。
圧倒的な攻撃力を得ている黒竜に、強力なバーン効果を持つ黒炎竜。
どちらを残しても危険なことには変わりがない。
だけど、今の攻撃で増えた墓地のカードを使えば、まだなんとかなる!!?
「ドロー!!?私は天輪の葬送士を召喚!!?」

〈天輪の葬送士〉☆１　天使族　光属性
ＡＴＫ０

フィールドに現れたのは銀色の棺の身体を持つモンスター。
「天輪の葬送士の効果発動!!?このカードが召喚に成功した時、自分の墓地の光属性・レベル１モンスター１体を対象としてその光属性モンスターを特殊召喚するよ!!?おいで、ミスティックパイパー!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

葬送士が自分の腕で身体になっている棺を開けると、棺の中からフ

ルートのようなものを弾いている男の人が姿を現わす。
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを1枚ドローし、この効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル1モンスターだった場合、自分はカードをもう1枚ドローします!!?」
「ドローカードか」
「私がドローしたのは魔轟神獣キャシー!!?レベル1モンスターなのでもう1枚ドロー!!?さらに魔法カード、モンスタースロット!!?自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、選択したモンスターと同じレベルの自分の墓地に存在するモンスター1体を選択してゲームから除外する。その後、自分のデッキからカードを1枚ドローし、この効果でドローしたカードをお互いに確認して選択したモンスターと同じレベルのモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚するよ!!?私は天輪の葬送士を対象に墓地のドットスケーパーを除外し、カードを1枚ドロー!!?私がドローしたのは妖醒龍ラルバウール!!?レベル1モンスターだから特殊召喚するよ!!?」

〈妖醒龍ラルバウール〉☆1　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ０

フィールドに現れたのは銀色の身体の幼竜。
現れたラルバウールは楽しそうに青い炎を吐きながら、私の頭の上に乗る。
むぅ……なんだか今日はみんな私の頭の上に乗ってくるな。
まあ、別に構わないけどね。
君の力、貸して貰うね？
「除外されたドットスケーパーの効果、それにチェーンして妖醒龍ラルバウールの効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、フィールドの表側表示モンスター1体を対象として自分の手札を1枚選んで捨て、対象のモンスターと同じ種族・属性でカード名が異な

るモンスター1体をデッキから手札に加える!!?私は天輪の葬送士を対象に手札を1枚捨て、天使族・光属性のクリアクリボーを手札に加えるよ!!?そして、除外されたドットスケーパーの効果発動!!?デュエル中に1度、このカードが除外された場合に特殊召喚するよ!!?」

〈ドットスケーパー〉☆1　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

「まだだよ!!?手札から捨てられた魔轟神獣キャシーの効果発動!!?このカードが手札から墓地へ捨てられた時、フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊する!!?」
「何!?」
「私が破壊するのは真紅眼の鎧旋!!?」
「ならばチェーンして真紅眼の鎧旋のエフェクトアクティベート!!?蘇れ、真紅眼の黒竜!!?」

〈真紅眼の黒竜〉☆7　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ２０００

２体目の黒竜が姿を現し、身体に金色の腕輪のようなものをつけた猫のモンスターが、緑色のボールのような悪魔を弾き飛ばして真紅眼の鎧旋を破壊する。
これで蘇生手段は無くすことができた。
そう思った瞬間、フィールドに再び竜の咆哮が響く。
「クックック、見事だ。だが、破壊された真紅眼の鎧旋のエフェクトアクティベート!!?このカードが相手の効果で破壊されセメタリーへ送られた場合、我のセメタリーのレッドアイズモンスター1体をを特殊召喚する!!?」
「っ!!?破壊しても効果があるの!!?」
「真なる自身と並び立て、真紅眼の亜黒竜!!?」

〈真紅眼の亜黒竜〉☆7　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ２０００

亜黒竜まで現れ、スカーレットちゃんのフィールドに現れた４体のレッドアイズが私を睨む。
「よくやった、と言いたいところだが下策だったな。これでより我のフィールドは盤石になった」
「確かに状況は少し悪くなったけど、これぐらいなら大丈夫!!?」
「何？」
「さあ、攻略しちゃうよ!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私が正面に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はトークン以外のレベル１モンスター１体!!?私は天輪の葬送士をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?相手を捕える深淵の邪眼!!?リンク１!!?サクリファイスアニマ!!?」

〈サクリファイスアニマ〉ＬＩＮＫ１　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０　→

葬送士がサーキットに吸い込まれ、代わりにサーキットから黒炎竜の正面に怪しげな邪眼を持つモンスターが現れる。
「ぐっ……邪眼だと？……カッコイイなぁ」
「えっ？」
「コホン……何でもない。そんなちっぽけな瞳で何ができるというのだ？」
「ちっぽけでも貴方の竜を封じることはできるよ!!?サクリファイスアニマの効果発動!!?コネクトアブソープション!!?１ターンに１度このカードのリンク先の表側表示モンスター１体を対象にその表側表示モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力

分アップする!!?」
「何だと!?!?」
「対象は真紅眼の黒炎竜!!?吸い込んじゃって、サクリファイスアニマ!!?」
アニマの目の上にある空間が開き、黒炎竜を吸い込む。
しばらくするとアニマの背中についている羽のような部分から炎の翼が現れた。

サクリファイスアニマ
ＡＴＫ０→２４００

「くっ……忌々しき邪眼の力め……」
「まだまだ終わらないよ!!?墓地に存在するジェットシンクロンの効果発動!!?手札を1枚墓地に送り、墓地からこのカードを特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合、除外されるよ!!?おいで、ジェットシンクロン!!?」

〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

フィールドに現れたのは小さなジェット機のような機械のモンスター。
現れたジェットシンクロンは嬉しそうに私の周りを飛び回る。
私は深く深呼吸をして正面に手をかざす。
さあ、あなたの出番だよ!!?
「行くよ、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私の前に再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は効果モンスター3体以上!!?私はドットスケーパー、ジェットシンクロン、妖醒龍ラルバウール、サクリファイスアニマをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
「大型のリンクモンスターか……」

ドットスケーパー、ジェットシンクロン、ラルバウール、アニマがサーキットに吸い込まれていく。
そしてサーキットが光り輝くとそこから現れるのは剣の如き龍。
運命を斬り開く私の剣。
「お願い、私に運命を超える力を貸して!!?リンク召喚!!?閉ざされた運命を斬り開く魂の剣(つるぎ)!!?リンク4!!?ヴァレルソードドラゴン!!?」
私の問いに、剣の如き龍は世界を震わせる程の咆哮で応えた。
〈ヴァレルソードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑←→
「リンク4の大型ドラゴンか……いいだろう、その力、我に示してみよ!!?」
「ううん、まだだよ!!?手札を1枚捨てて、速攻魔法、超融合!!?」
「なっ!?そのカードは!?」
「手札を1枚捨てて発動し、自分・相手フィールドから融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚するよ!!?このカードの発動に対して魔法・罠・モンスターの効果は発動できない!!私が融合するのはあなたのフィールドにいる闇属性モンスター、真紅眼の黒竜と真紅眼の亜黒竜!!?」
「我のモンスターだけで融合召喚を行うだと!?」
フィールドに現れた嵐のように激しい渦に黒竜と亜黒竜が吸い込まれていく。
「真紅の眼を持つ黒竜よ、内なる黒竜と交わりて、孤独を壊す力となら ん!!?」
さあ、今日も思いっきりお願いね。
「融合召喚!!?閉ざされた世界を溶かす毒龍!!?スターヴヴェノムフュージョンドラゴン!!?」
私の問いかけに応えるように、渦を吹き飛ばしながら毒龍はその姿

を現した。
〈スターヴヴェノムフュージョンドラゴン〉☆８　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２８００
「スターヴヴェノムフュージョンドラゴンの効果発動!!?パワースワローヴェノム!!?このカードが融合召喚に成功した場合、相手フィールドの特殊召喚されたモンスター１体を選び、その攻撃力分だけこのカードの攻撃力をターン終了時までアップする!!?対象にするのは攻撃力が倍になっている真紅眼の黒竜!!?」
「何っ!??」
スターヴヴェノムが毒の瘴気を放ち、瘴気を浴びた黒竜の力を奪い取っていく。
スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
ＡＴＫ２８００→７６００
「攻撃力７６００だと!??」
「バトル!!?スターヴヴェノムフュージョンドラゴンで真紅眼の黒竜を攻撃!!?消失のヴェノムストリーム!!?」
「迎え撃て、真紅眼の黒竜!!?総てを燃やし尽くす黒炎弾!!?」
黒竜が巨大な黒い炎の弾丸を放つが、スターヴヴェノムが放った毒のブレスに掻き消され、そのままブレスを受けた黒竜は消滅した。
スカーレット　ＬＰ５３００→２５００
よし、これでスカーレットちゃんのフィールドにモンスターはいなくなった。
このまま一気にーーー
「我のフィールドのレベル７以下のレッドアイズモンスターが相手モ

ンスターの攻撃または相手の効果で破壊され我のセメタリーへ送られた場合、手札の真紅眼の遡刻竜（レッドアイズトレーサードラゴン）のエフェクトアクティベート!!?」

「っ!?」

「このカードを手札から守備表示で特殊召喚し、可能な限りその破壊されたモンスターを破壊された時と同じ表示形式で特殊召喚する!!?刻を超えて蘇れ、真紅眼の黒竜!!?」

〈真紅眼の黒竜〉☆7　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２４００

〈真紅眼の遡刻竜〉☆4　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ１６００

突然フィールドに巨大な機械が現れ、その中から黒竜と黒竜に似た小さな黒竜が現れる。

まさか手札誘発で蘇生手段があるとは思わなかったけど、攻撃表示のままならまだいける!!?

「ヴァレルソードドラゴンで真紅眼の黒竜を攻撃!!?攻撃宣言時、ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アブソーブブースト!!?1ターンに1度、このカードが表側表示モンスターに攻撃宣言した時、ターン終了時まで、このカードの攻撃力はそのモンスターの攻撃力の半分アップし、そのモンスターの攻撃力は半分になる!!?」

「何っ!?」

真紅眼の黒竜
ＡＴＫ２４００→１２００

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ３０００→４２００

ヴァレルソードが斬りかかり、それを黒竜は腕で受け止めるが、剣から漏れる赤い光に徐々に力を吸い取られていく。
「さらにヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アサシネイトショット!!?1ターンに1度、攻撃表示モンスター1体を対象としてそのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる!!?そしてこの効果の発動に対して相手は効果を発動できない!!?この効果は相手ターンにでも使用することが出来ます!!?対象にするのは、スターヴヴェノムフュージョンドラゴン!!?」
斬りかかっていたヴァレルソードの腕から突然散弾がスターヴヴェノムの頭上に撃ち出され、それを見てスターヴヴェノムは身を守る。

スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
ＡＴＫ７６００↓　ＤＥＦ２０００

「っ、攻撃反応のカードを封じてきたか」
「これで終わりです!!?斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン!!?剣光のベイオネットブレイク!!?」
私の言葉にヴァレルソードは応えるように咆哮をあげ、そのまま黒竜を斬り裂き、爆風が吹き荒れる。
しかし、その爆風がスカーレットちゃんに届くことはなかった。
「残念だが、それは届かない。リバースカードオープン!!?罠アクティベート!!?ガードブロック!!?」
「っ!!?」
「相手ターンの戦闘ダメージ計算時にその戦闘によって発生する我への戦闘ダメージは0になり、我はデッキからカードを1枚ドローする」
「防がれた!?っ、それでもモンスターは残さない!!?ヴァレルソードドラゴンで真紅眼の遡刻竜を攻撃!!?もう1度斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン!!?剣光のベイオネットブレイク!!?」

「フッ、良かろう。よくやってくれた、真紅眼の遡刻竜よ」
ヴァレルソードに斬り裂かれ、遡刻竜が消滅する。
仕留めきれなかった……状況としてはまだこちらが有利だけど、スカーレットちゃんのあの余裕そうな表情……追い詰められたのは、私の方なのかもね。
「私はこれでターンエンド」
スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
ＡＴＫ７６００→２８００

遊花　ＬＰ３２００　手札０
ー▲ーーー　ー
ーー○ーー
☆　ー
ーーーーー
ー▲ーーー　ー
スカーレット　ＬＰ２５００　手札１

「我のターン、ドロー……我が僕を打倒し、我をここまで追い詰めるとは、褒めてやろう。流石は”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”と言ったところか」
「え”っ⁉？も、もしかして、それ、私のこと？」
「ぷっ……”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”」
私が思わず引き攣った表情でスカーレットちゃんを見ると、後ろから噴き出した桜ちゃんの声が聞こえた。
後ろを振り返ると口を押さえて必死に笑いを堪えている桜ちゃん達の姿があり、私は恥ずかしさに顔を赤くしながらも恨めしそうにスカーレットちゃんを睨む。
私にそんな変な異名なんてついてないよ⁉？
というか、桜ちゃんは笑い過ぎ⁉？
桜ちゃんだって『壊獣姫』なんて異名を持ってる癖に⁉？
「汝のその強さに敬意を評し、我が深淵の一端をお見せしよう。我は

チューナーモンスター、ヴァレットシンクロンを召喚!!?」
「ヴァレット……シンクロン?」

〈ヴァレットシンクロン〉☆1　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ０

現れたのは機械的な身体を持つ弾丸の如き龍。
ヴァレットシリーズというカテゴリーがあるのは知っている。
私のヴァレルソードやヴァレルロード、桜ちゃんが持つヴァレルガードのようなヴァレルシリーズと併用することでモンスターを弾丸のように撃ち出して相手の戦術を崩していくカテゴリーだ。
だけど、あのシリーズはリクルート効果が強力で複数枚のヴァレットモンスターをデッキに投入する必要があるから、レッドアイズシリーズとは噛み合っていない気がするんだけど……
そんな私の怪訝な表情を見て、スカーレットちゃんは不敵に笑う。
「ヴァレットシンクロンのエフェクトアクティベート!!?このカードが召喚に成功した時、自分のセメタリーのレベル５以上のドラゴン族・闇属性モンスター１体を対象としてそのモンスターを効果を無効にして守備表示で特殊召喚する!!?」
「っ!!?大型ドラゴンの蘇生効果!!?」
「ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに破壊され、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は闇属性モンスターしかＥＸデッキから特殊召喚できない。何度でも蘇れ、我が僕!!?真紅眼の黒竜!!?」

〈真紅眼の黒竜〉☆７　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ２０００

ヴァレットシンクロンの後ろに再び姿を現わす黒竜。
ヴァレットシンクロンはチューナーモンスター。
ということはーーー

「行くぞ‼?・我が魂に潜む深淵の悪魔‼?・真紅の竜王の名をその魂に刻むがいい‼?・」
「真紅の……竜王?」
「我はレベル7、真紅眼の黒竜に、レベル1、チューナーモンスター、ヴァレットシンクロンをチューニング‼?・」
ヴァレットシンクロンが光の輪になり、黒竜が小さな星に変わり、光の道になる。
そして光の道が輝くと、そこに現れたのは王者の風格を持つ傷だらけの竜王。
「王者の威光、闇をも揺るがす‼?・深淵に触れしその力を解放せよ‼?・シンクロ召喚‼?・深淵の武王、レッドデーモンズドラゴンスカーライト‼?・」

〈レッドデーモンズドラゴンスカーライト〉☆8　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００

「レッドデーモンズドラゴン……スカーライト……」
「深淵の武王よ、その力を知らしめるがいい‼?・レッドデーモンズドラゴンスカーライトのエフェクトアクティベート‼?・1ターンに1度、我のメインフェイズにこのカード以外の、このカードの攻撃力以下の攻撃力を持つ特殊召喚された効果モンスターを全て破壊し、この効果で破壊したモンスターの数×５００ポイントのダメージを相手に与える‼?・」
「全体破壊‼?・」
「深淵に抱かれて眠るがいい、強者たる龍よ。深淵(スカーライト)は武王(アビス)を見出す‼?・」
スカーライトが咆哮をあげると、フィールドを炎が包み込み、ヴァレルソードとスターヴヴェノムを一瞬で焼き尽くす。
「ヴァレルソードドラゴン‼?・スターヴヴェノムフュージョンドラゴン‼?・」

「2体の龍は焼き尽くした。次は汝が焼かれる番だ」
「っ‼?きゃあ‼?」

遊花　ＬＰ３２００→２２００

スカーライトの炎が私の身体まで焼き尽くす。
私のライフがスカーライトの攻撃力を下回った……だけど‼?
「破壊されたスターヴヴェノムフュージョンドラゴンの効果発動‼?ロンリーブレイク‼?融合召喚したこのカードが破壊された場合、相手フィールドの特殊召喚されたモンスターを全て破壊する‼?」
「‼?ほう……深淵の武王をも喰らおうとするか、猛毒の龍よ」
燃やし尽くされたスターヴヴェノムの亡骸から大量の毒の瘴気が溢れ出し、スカーライトを呑み込み、溶かし尽くして粒子に変える。
これでスカーレットちゃんのスカーライトも破壊された。
これならまだ……
「だが、甘い‼?リバースカードオープン‼?罠アクティベート‼?シャドーインパルス‼?」
「えっ⁉?」
「我のフィールドのシンクロモンスターが戦闘・効果で破壊されセメタリーへ送られた時、そのモンスター1体を対象としてそのモンスターと同じレベル・種族でカード名が異なるシンクロモンスター1体をＥＸデッキから特殊召喚する‼?教えてやろう、”小さな聖域の守護女神(リトルサンクチュアリガーディアン)”よ」
「その呼び方はやめて欲しいんだけど……」
「我が魂に潜む真紅の竜王は、平行世界(パラレルワールド)の自分自身と繋がることができるのだ」
「そして聞いてくれないんだね……平行世界の自分?」
「見せてやろう、異なる道を歩んだ真紅の竜王の姿を‼?レッドデーモンズドラゴンスカーライトを対象とし、我はＥＸデッキから更なる竜王を呼ぶ‼?」
そういって、スカーレットちゃんがＥＸデッキから1枚のカードを

取り出す。
　すると突然、スカーレットちゃんがそのカードを押さえる。
「ぐあぁぁぁ!!?」
「ええっ!?!?な、なに?」
「ぐっ……し、静まれ……深淵の竜王よ……怒りを静めろ」
「す、スカーレット、ちゃん?」
「あー、遊花。あんまり触れないであげる方がいいわよ?」
　スカーレットちゃんは苦しそうにそう言ってカードを押さえる。
　そんなスカーレットちゃんの様子を、桜ちゃん達は生暖かい目で見つめているけど……スカーレットちゃんが手にしているあのカードから、薄っすらと闇が溢れ出してるような……
　しばらく苦しそうにカードを押さえていたスカーレットちゃんは、そのカードを天に掲げると勢いよくデュエルディスクにセットした。
「深淵に至りし覇道の王者よ!!?闇をも燃やし尽くし絶対なる力を示せ!!?深淵の覇王、琰魔竜レッドデーモン!!?」
〈琰魔竜レッドデーモン〉☆8　ドラゴン族　闇属性
　ＡＴＫ３０００

　現れたのはスカーライトに似た王者の風格を持つ巨大な竜王。
　その姿を見て、私は奇妙な感覚に陥る。
　私は、あのモンスターを知ってる気がする。
　だけど、一体どこで……
「バトル!!?終幕だ、琰魔竜レッドデーモンでダイレクトアタック!!?覇王は断罪の炎(カンヴィクション ヘルフレア)である!!?」
　琰魔竜が拳に炎を纏い、私に向けてその拳を振るう。
「っ!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のクリアクリボーの効果発動!!墓地のこのカードを除外し、自分はデッキから1枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替えます!!?」

「ほう、先程手札から捨てたカードか」
ここでモンスターが引けなければ私の負け。
頼んだよ、私のデッキ‼?
私は勢いよくカードをドローし、そのままそのカードを呼び出す。
「私がドローしたのは絶対王バックジャック‼?モンスターなので特殊召喚し、攻撃対象を移し替えます‼?」

〈絶対王バックジャック〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

私のフィールドに機械の身体を持つ人型の悪魔が現れる。
現れたバックジャックは琰魔竜を見て目を見開き、さらにその拳が自身に振るわれていることに気付くとショックを受けたような表情を浮かべながら燃やし尽くされて消滅した。
……何だか分からないけど、ゴメンね。
「墓地に送られた絶対王バックジャックの効果発動‼?このカードが墓地へ送られた場合、自分のデッキの上からカードを3枚確認し、好きな順番でデッキの上に戻す‼?さらに墓地の絶対王バックジャックを除外して効果発動‼?相手ターンに墓地のこのカードを除外して自分のデッキの一番上のカードをめくり、そのカードが通常罠カードだった場合、自分フィールドにセットし、違った場合、そのカードを墓地へ送るよ。そして、この効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できる」
「汝のデッキは今操作したばかりか」
「私のデッキの上のカードは罠カード、貪欲な瓶。通常罠だからセットするよ」
「クックックッ、いいだろう、”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”」
「やめてって言ってるのにぃ……」
「耐えてみせよ。その守り、我が真紅の竜王が正面から破壊してやろう。メインフェイズ2、セメタリーに存在する伝説の黒石のエフェクトアクティベート‼?このカードがセメタリーに存在する場合、我の

セメタリーのレベル７以下のレッドアイズモンスター１体をデッキに戻し、セメタリーのこのカードを手札に加える。」
「っ‼？墓地回収の効果まであるんだね」
「我は真紅眼の亜黒竜をデッキに戻し、伝説の黒石を手札に加える。カードを１枚セットし、ターンエンドだ」
そういってスカーレットちゃんがターンの終了を宣言する。
レッドアイズを倒したと思ったら次はレッドデーモン。
第２ステージに移ったってところかな？
状況は、一気にこちらが不利になった。
だけど、これぐらいで弱音なんて吐いていられない。
耐えることなら、私は誰にも負けない自信がある。
この逆境を耐え切って、絶対に攻略してみせるんだから‼？

遊花　ＬＰ２２００　手札０
ー▲▲ーー　ー
ーーーーー
ー　○
ーーーーー
ーー▲ーー　ー
スカーレット　ＬＰ２５００　手札１

第５９話　時空を超えし者

★

遊花　ＬＰ２２００　手札０
ー▲▲ーー　ー
ーーーーー
ー　○
ーーーーー
ーー▲ーー　ー
スカーレット　ＬＰ２５００　手札１

「私のターン、ドロー!!?私は金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のようなモンスター。
「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル１モンスターを特殊召喚するよ!!?戻ってきて、ミスティックパイパー!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースしてカードを１枚ドロー!!?私がドローしたのは　ＥＭ（エンタメイト）ドラネコ!!?レベル１モンスターなのでもう１枚ドロー!!?私はそのままスケール２の　ＥＭ（エンタメイト）ドラネコをペンデュラムスケールにセッティング!!?」
「ペンデュラムモンスター……フッ、流石は我が好敵手。運命の振り子すら操るか」

私の隣に光の柱が立ち上り、その光の中にお腹が銅鑼になっているネコが浮かびあがり、下に2の数字が現れる。
「私はこれでターンエンド!!?エンドフェイズ、金華猫の効果発動!!?スピリットモンスターの共通効果により、このカードが召喚・リバースしたターンのエンドフェイズこのカードを手札に戻すよ」

遊花　ＬＰ２２００　手札２
△▲▲ー　ー
ーーーーー
ー　○
ーーーーー
ーー▲ーー　ー
スカーレット　ＬＰ２５００　手札１

「我のターン、ドロー!!?我は伝説の黒石を召喚!!?」

〈伝説の黒石〉☆１　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ０

「伝説の黒石のエフェクトアクティベート!!?このカードをリリースしてデッキより現れよ、真紅眼の亜黒竜!!?」

〈真紅眼の亜黒竜〉☆７　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２４００

「っ、また真紅眼の亜黒竜……」
「さあ、耐えてみせよ!!?バトル!!?真紅眼の亜黒竜でダイレクトアタック!!?黒焔弾(ダークテラフレア)!!?」
「ＥＭドラネコのペンデュラム効果発動!!?１ターンに１度、相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動!!?その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは０になる!!?」

「ほう、そのようなエフェクトを秘めていたか」
亜黒竜から放たれた炎の弾丸を、光の柱から飛び出してきたドラネコがお腹のドラで弾き飛ばす。
ありがとう、ドラネコ。
「だが、まだ深淵の覇王のアタックが残っている。淡魔竜レッドデーモンでダイレクトアタック‼?覇王(カンヴィクション)は断罪の炎(ヘルフレア)である‼?」
「相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札のゴーストリックランタンの効果発動‼?その攻撃を無効にし、このカードを手札から裏側守備表示で特殊召喚します‼?」
「これも凌ぐか……」
淡魔竜の背後にジャックオーランタンのような幽霊が現れる。
背後に気配を感じた淡魔竜は振り返って、炎を纏った拳を振るうがそこには既にランタンの姿はなかった。
「クックック、見事だ。そうこなくては面白くない。我はこのままターンエンドだ」

遊花　ＬＰ２２００　手札１
△▲▲ー　ー
ーー■ーー
ー　○
ーー○ーー
ーー▲ーー　ー
スカーレット　ＬＰ２５００　手札１

「私のターン、ドロー‼?私は金華猫を召喚‼?」
〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００
「金華猫の効果発動‼?もう１度戻ってきて、ミスティックパイパー‼?」

〈ミスティックパイパー〉☆1　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースしてカードを1枚ドロー!!?私がドローしたのはクリボーン!!?レベル1モンスターなのでもう1枚ドロー!!?」
「チッ、なかなか手札が減らぬか……」
「今はまだ攻められないね。私はこのままターンエンド。エンドフェイズに金華猫は手札に戻るよ」

遊花　ＬＰ２２００　手札４
△▲▲ー　ー
ーー■ーー
ー　○
ーー○ーー
ーー▲ーー　ー
スカーレット　ＬＰ２５００　手札１

「我のターン、ドロー!!?……クックック、このカードをドローしたか。フィールドにシンクロモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できる!!?我はチューナーモンスター、シンクローンリゾネーターを特殊召喚!!?」
「っ、ここでチューナーモンスター?」

〈シンクローンリゾネーター〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ１００

現れたのは音叉を持つ小さな悪魔のモンスター。
ＥＸモンスターゾーンは既に琰魔竜がいるハズなのに、チューナーモンスターを出してくるということは、まさか琰魔竜を使ってシンク

ロ召喚をするつもりなの？
……何だか、嫌な予感がする。
そんな私の予感は、スカーレットちゃんが不敵な笑みと共に告げた言葉で確信に変わる。
「クックックッ、見せてやろう、”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”。覇道の果てに、魔王へと至った真紅の竜王の姿を‼？」
「えっ⁉？」
「我はドラゴン族闇属性レベル８シンクロモンスター、琰魔竜レッドデーモンに、レベル１、チューナーモンスター、シンクローンリゾネーターをチューニング‼？」
シンクローンが光の輪になり、琰魔竜が小さな星に変わり、光の道になる。
そこで、スカーレットちゃんがＥＸデッキから１枚のカードを取り出すと、琰魔竜の時よりも濃い闇が溢れ出し、スカーレットちゃんがそのカードを押さえる。
「ぐあぁっ‼？ぐぅ……我が命に従え……深淵の竜王よ……汝の力……我のために示せ‼？」
スカーレットちゃんがそういいながら、デュエルディスクにカードをセットすると、溢れ出していた闇が収まる。
そして光の道が輝くと、そこに現れたのは身体中から禍々しい棘が生え、両腕に刃がついた巨大な竜王。
「覇道を極めし王者よ‼？深淵に至りし憤怒で、全てを消し去れ‼？深淵の魔王、琰魔竜レッドデーモンアビス‼？」
「琰魔竜レッドデーモンアビス⁉？」
〈琰魔竜レッドデーモンアビス〉☆９　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３２００
現れたレッドデーモンアビスを見て、私は目を見開く。
私は、あのモンスターを知らない。
知らないことはおかしくないハズだ。

何故なら元々どちらも今日初めてみたモンスター達のハズだから。
だけど、琰魔竜は知っていたのに、レッドデーモンアビスは知らない。
これって一体……
「行くぞ、バトル!!?真紅眼の亜黒竜でセットモンスターをアタック!!? 黒焔弾(ダークテラフレア)!!?」
「っ、セットモンスターはゴーストリックランタン!!?」
〈ゴーストリックランタン〉☆1　悪魔族　闇属性
DEF0

ランタンが笑いながら亜黒竜の炎に呑まれて消滅する。
ゴメン、助けてくれてありがとう、ランタン。
「続けて、琰魔竜レッドデーモンアビスでダイレクトアタック!!?」
「EMドラネコのペンデュラム効果発動!!?その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは0にーーー」
「深淵の魔王に、その程度の小細工など効かぬ!!?チェーンして琰魔竜レッドデーモンアビスのエフェクトアクティベート!!?魔王は戦術(ロスト)すら捩じ伏せる(ホールド)!!?相手フィールドの表側表示のカード1枚を対象としてそのカードのエフェクトをターン終了時までインヴァリドにする!!?このエフェクトは相手ターンでもアクティベートできる!!?」
「インヴァリド……効果無効!!?」
光の柱から飛び出してこようとしたドラネコが、レッドデーモンアビスが放った怒りの炎で光の柱に閉じ込められる。
攻撃的な外見をしてるのに無効効果を持ってるなんて流石に予想外だよ!!?
「終わりだ。魔王は憤怒の刃を振るう(ラスロスライサー)!!?」
レッドデーモンアビスが私に両腕の刃を振るう。
「っ、まだ、だよ!!?クリボーの効果発動!!?ダークエンヴェロップ!!?相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこのカード

を手札から捨てて発動できる。その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージを０にする‼?」
「っ‼?これも防ぐというのか⁉?」
クリボーが私の前に現れてレッドデーモンアビスの刃から私を守り、消滅する。
危なかった……クリボーがドローできてなかったら本当に終わってたよ。
「クッ、〝小さな聖域の守護女神(リトルサンクチュアリガーディアン)〟の名は伊達ではないということか」
「そんな名前で呼んでるの貴方だけだからね?」
「良かろう、ならばより強力な力でその〝聖盾(イージス)〟を貫くまでだ。メインフェイズ２」
「なら、自分・相手のバトルフェイズ終了時に手札のクリボーンの効果発動‼?」
「っ、先程ドローしたカードか」
「このカードを手札から捨て、このターンに戦闘で破壊され自分の墓地へ送られたモンスター１体を対象として特殊召喚するよ‼?私は墓地からゴーストリックランタンを特殊召喚‼?」

〈ゴーストリックランタン〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

再びフィールドにランタンが笑いながら姿を現わす。
「モンスターがフィールドに残ったか……良かろう、そのちっぽけなモンスターで何が変わるのか、見せて貰うぞ。セメタリーに存在する伝説の黒石のエフェクトアクティベート‼?我は真紅眼の黒竜をデッキに戻し、伝説の黒石を手札に加える。我はこれでターンエンドだ」

遊花　ＬＰ２２００　手札２
△▲▲ーー　ー
ーー□ーー

ー　　○
ーー○ーー
ーー▲ーー　　ー
スカーレット　ＬＰ２５００　手札２

「私のターン、ドロー!!?」
レッドデーモンアビスのフリーチェーンでの無効効果は厄介だ。
だからこそ、あのモンスターはこのターンで倒す!!?
「私は金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

「金華猫の効果発動!!?」
「これ以上手札を増やされるのも厄介だ。潰させて貰おう。チェーンして琰魔竜レッドデーモンアビスのエフェクトアクティベート!!?魔王(ラスロス)は戦術(ホール)すら捩じ伏せる(ルド)!!?金華猫のエフェクトをインヴァリドする!!?」
レッドデーモンアビスが放った怒りの炎が金華猫を閉じ込め、実体化させられる。
手札は増やせなくなったけど、これで無効効果も無くなった!!?
「私はレベル１、金華猫とゴーストリックランタンでオーバーレイ!!?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
「ほう、今度はエクシーズ召喚か。どこまでも楽しませてくれる」
金華猫とランタンが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこには白い馬に乗る小さな首無しの騎士がいた。
「闇夜に紛れし哀しき妖精!!?その刃で疑惑を切り裂け!!?ランク１!!?ゴーストリックデュラハン!!?」

〈ゴーストリックデュラハン〉★1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

「ゴーストリックデュラハンの永続効果、スリーピィフィアー。このカードの攻撃力は自分フィールドのゴーストリックと名のついたカードの数×２００ポイントアップするよ‼?」

ゴーストリックデュラハン
ＡＴＫ１０００→１２００

「そしてゴーストリックデュラハンの効果発動‼?ホロウエクスキュート‼?オーバーレイユニットを1つ使い、フィールド上のモンスター1体を対象に、選択したモンスターの攻撃力をターン終了時まで半分にします‼?この効果は相手ターンでも使えます‼?対象は琰魔竜レッドデーモンアビス‼?」

デュラハンがその手に持った小さな剣を振るうと、その剣から不可視の斬撃が飛び、レッドデーモンアビスに当たり、レッドデーモンアビスが怒りの咆哮をあげながら苦痛に喘ぐ。

琰魔竜レッドデーモンアビス
ＡＴＫ３２００→１６００

「攻撃力を下げてきたか……だが、汝の死霊では我が深淵の魔王を倒すには至らん」

「ううん、これで準備完了だよ‼?私はゴーストリックデュラハン1体でオーバーレイ‼?1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築‼?ランクアップエクシーズチェンジ‼?」

「っ⁉?何だと⁉?」

デュラハンが再び空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けると空から舞い降りたのは黒いドレスを身に纏い、

白い羽根にところどころ漆黒の羽根が混ざる女の子のモンスター。
「闇夜を彷徨う自由な天使!!?その気ままさで憂鬱を払え!!?ランク４!!?ゴーストリックの駄天使!!?」

〈ゴーストリックの駄天使〉★４　天使族　闇属性
ＡＴＫ２０００

駄天使が私の周りをひらひらと飛びながらいつものようにドヤ顔で空を指差して決めポーズをとる。
君は本当にいつも変わらないよね。
私が呆れた視線を駄天使に向けていると、スカーレットちゃんが何かを呟いた。
「くっ……邪眼の次は駄天使だと……なんて羨ましい」
「えっ？」
「何でもない」
何か聞こえたような気がしたけど、スカーレットちゃんに食い気味に否定された。
う、うーん、気のせいだったのかな？
……まあいいや、今はレッドデーモンアビスを攻略しないとだもんね。
「ゴーストリックの駄天使は同名以外のゴーストリックモンスターに重ねてエクシーズ召喚を行うことが出来る。そしてゴーストリックの駄天使の効果発動!!?チャームコール!!?オーバーレイユニットを１つ取り除くことでデッキからゴーストリック魔法・罠を手札に加えるよ!!?私が手札に加えるのはゴーストリックパニック!!?」
堕天使が私に向けて小さなハートを飛ばすとそれがカードになって私の手札に加わる。
「そしてゴーストリックの駄天使の攻撃力は２０００。今の琰魔竜レッドデーモンアビスを上回ってる!!?バトル!!?ゴーストリックの駄天使で琰魔竜レッドデーモンアビスを攻撃!!?トリックハート!!?」

「クッ、迎え撃て、琰魔竜レッドデーモンアビス!!?魔王は憤怒の刃を振るう(ラスロスライサー)!!?」
レッドデーモンアビスが怒りの咆哮をあげながら駄天使に両腕の刃を振るうが、駄天使はそれをひらりと交わしてひび割れているハートを作り出し、そのハートからビームを放って、レッドデーモンアビスの身体を貫き、爆散させた。

スカーレット　ＬＰ２５００→２１００

「クッ……駄天使如きが深淵の魔王を屠るとはやってくれる」
「よし、とりあえず琰魔竜レッドデーモンアビスは倒せた。私はこれでターンエンド!!?」

遊花　ＬＰ２２００　手札３
△▲▲ー　ー
ーーーーー
○　ー
ー○ーー
ー▲ーー　ー
スカーレット　ＬＰ２１００　手札２

「我のターン、ドロー……クックック、深淵の魔王を倒すとは、褒めてやろう、”小さな聖域の守護女神(リトルサンクチュアリガーディアン)”よ」
「……」
「確かに我が深淵の魔王は汝の呼び声に応えた駄天使により討たれた。だが、魔王は人の嘆きと怨嗟がある限り何度でも蘇るものだ。それを汝に教えてやろう!!?我はチューナーモンスター、レッドリゾネーターを召喚!!?」

〈レッドリゾネーター〉☆２　悪魔族　炎属性
ＡＴＫ６００

現れたのは喰代君も使っていた炎の身体を持つ小さな悪魔のようなモンスター。
「レッドリゾネーターのエフェクトアクティベート!!?このカードが召喚に成功した時、手札からレベル４以下のモンスター１体を特殊召喚する!!?来い、伝説の黒石!!?」
〈伝説の黒石〉☆１　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ０
「伝説の黒石のエフェクトアクティベート!!?このカードをリリースしてデッキより現れよ、真紅眼の黒竜!!?」
〈真紅眼の黒竜〉☆７　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２４００
黒石が割れ、再びフィールドに現れる黒竜。
ここまでだと先程までの動きと同じに見える。
だけど、レッドリゾネーターはチューナーモンスターだ。
ということは……
「我はレベル７、真紅眼の黒竜に、レベル２、チューナーモンスター、レッドリゾネーターをチューニング!!?」
「っ、やっぱりレベル９のシンクロ召喚!!?」
レッドリゾネーターが光の輪になり、黒竜が小さな星に変わり、光の道になる。
そして光の道が輝くと、そこから現れたのは空中に浮かぶ巨大な城。
「魔王の力を示す不落の城よ!!?魔王の帰還を祝い、その姿を現すがいい!!?シンクロ召喚!!?天空に浮かびし魔王城、浮鵺城!!?」
〈浮鵺城〉☆９　機械族　風属性

ＤＥＦ３０００

「浮鵺城……」

「浮鵺城のエフェクトアクティベート‼？魔王（リバイヴ）は地に堕ちず（フィアー）このカードがシンクロ召喚に成功した時、我がセメタリーのレベル９モンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する‼？」

「レベル９……ということは……っ、チェーンしてリバースカードオープン‼？罠発動、貪欲な瓶‼？貪欲な瓶以外の自分の墓地のカード５枚を対象にそのカード５枚をデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから１枚ドローする‼？私は墓地に存在するヴァレルソードドラゴン、スターヴヴェノムフュージョンドラゴンをＥＸデッキに、金華猫、超融合、モンスタースロットをデッキに戻してシャッフルしカードを１枚ドローするよ‼？」

「構わない。現世に舞い戻れ、深淵の魔王‼？談魔竜レッドデーモンアビス‼？」

〈談魔竜レッドデーモンアビス〉☆９　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ３２００

浮鵺城が怪しく輝くと、その輝きに導かれ、レッドデーモンアビスが再びその姿を現わす。

「っ、また談魔竜レッドデーモンアビスが……」

「魔王城の力はそれだけではない‼？浮鵺城のパーマナンスエフェクト、弱者は魔王（ビル）に触（ズ）れること叶（デ）わずこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、召喚・特殊召喚されたレベル８以下のモンスターは、そのターンにはアタックできない‼？弱き者には、我が深淵の魔王に挑む権利すら与えられぬのだ」

「っ、攻撃規制の効果まであるんだね」

その効果に私は渋い表情を浮かべる。

私のデッキに入ってるモンスターは基本的にレベル１モンスターだ。

勿論、アンチホープ達みたいな大型モンスターも入ってはいるが、そうそう簡単に出せるものじゃない。
レベルを持たないエクシーズモンスターやリンクモンスターはいるが、レッドデーモンアビスを超えるとなると2体のヴァレルモンスターしかいないが、レッドデーモンアビスの効果無効を掻い潜ってリンク4モンスターを出すのは至難の技だ。
おまけに私の融合・シンクロモンスターは全員レベル8以下だから効果の対象内。
これはかなり突破するのが難しくなってきたね。
「バトル!!?・さっきのお返しといこうではないか。琰魔竜レッドデーモンアビスでゴーストリックの駄天使をアタック!!?魔王は憤怒の刃(ラスロスイサー)を振るう!!?・」
「っ、迎え撃って、ゴーストリックの駄天使!!?・トリックハート!!?・」
駄天使がハートからビームを放つが、レッドデーモンアビスはそのビームごと両腕の刃で駄天使を切り裂いた。

遊花　LP2200→1000

「うぅ……ゴメンね、ゴーストリックの駄天使。墓地に送られたゴーストリックデュラハンの効果発動!!?・このカードが墓地へ送られた場合、このカード以外の自分の墓地のゴーストリックカード1枚を対象としてそのカードを手札に加える。私は墓地にあるゴーストリックランタンを手札に加えるよ!!?・」
「チッ、本当に硬い。だが、琰魔竜レッドデーモンアビスのエフェクトアクティベート!!?・魔王は闇の眷属(デビルズクリエイト)を生み出す!!?・このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、自分のセメタリーのチューナー1体を対象としてそのモンスターを守備表示で特殊召喚する!!?・蘇れ、レッドリゾネーター!!?・」
〈レッドリゾネーター〉☆2　悪魔族　炎属性
DEF200

「レッドリゾネーターのエフェクトアクティベート!!?このカードが特殊召喚に成功した時、フィールドの表側表示モンスター1体を対象とし、そのモンスターの攻撃力分だけ我はライフポイントを回復する!!?我が選ぶのは琰魔竜レッドデーモンアビスだ」

スカーレット　ＬＰ２０５０→５３００

追い上げていたライフが一気に逆転される。

この子……言動はよく分からないけど、本当に強い。

「無理にアタックして汝のモンスターを増やす必要はない。我はこのままターンエンドだ」

遊花　ＬＰ１０００　手札５

△ー▲ーー　ー

ーーーーー

ー　□

ー□○○ー

ーー▲ーー　ー

スカーレット　ＬＰ５３００　手札１

状況はどんどん悪化していく。

早くなんとかしないと、本当に後がなくなる。

「私のターン、ドロー!!?魔法カード、儀式の下準備!!?デッキから儀式魔法カード1枚を選び、さらにその儀式魔法カードにカード名が記された儀式モンスター1体を自分のデッキ・墓地から選んで、そのカード2枚を手札に加えます!!?私が加えるのはイリュージョンの儀式とサクリファイス!!?」

「次は儀式モンスターか……」

「私は儀式魔法、イリュージョンの儀式を発動!!?自分の手札・フィールドから、レベルの合計が1以上になるようにモンスターをリリース

し、手札からサクリファイスを儀式召喚するよ!!?」
「サクリファイス……あの邪眼を持つモンスターか。悪くない手だが、その手は通らない。チェーンして琰魔竜レッドデーモンアビスのエフェクトアクティベート!!?魔王は戦術すら捩じ伏せる(ラスホールド)!!?イリュージョンの儀式のエフェクトをインヴァリドする!!?」
　レッドデーモンアビスが放った怒りの炎がイリュージョンの儀式を燃やし尽くし、消滅させる。
「これで手札のサクリファイスは無駄になったな」
「無駄なんかじゃないよ!!?魔法カード、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨てて同じ枚数ドローします!!?私は5枚、貴方は1枚の手札を捨てて同じ枚数ドローするよ!!?」
「成る程、こちらが本命か。余程この状況が厳しいと見える」
「うん、厳しいよ。それでも私は、やれることをやるだけだから!!?私は金華猫を召喚!!?」
「先程デッキに戻したモンスター……再び引き当てたか」

〈金華猫〉☆1　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

「金華猫の効果発動!!?もう1度戻ってきて、ミスティックパイパー!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆1　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースしてカードを1枚ドロー!!?私がドローしたのはペンデュラムーチョ!!?レベル1モンスターなのでもう1枚ドロー!!?そして私はスケール0のペンデュラムーチョをペンデュラムスケールをセッティング!!?」
「!!?ほう、この状況で運命の振り子を動かすか」

私を挟むようにもう１つの光の柱が立ちあがり、その光の中にメキシカンな格好をしているペンギンが浮かび上がり、下に０の数字が現れる。
「これで私はレベル１モンスターを同時に召喚可能‼？まずはペンデュラムゾーンに置かれたペンデュラムーチョのペンデュラム効果発動‼？このカードを発動したターンの自分メインフェイズに１度だけ、自分の墓地のモンスターまたは除外されている自分のモンスターの中から、同名カード以外のペンデュラムモンスター１体を自分のＥＸデッキに表側表示で加えるよ‼？私は捕食植物（プレデタープランツ）スパイダーオーキッドをＥＸデッキに加える‼？さあ、ショータイムだよ‼？心に灯し小さき希望よ‼？光り輝く未来を導いて‼？ペンデュラム召喚‼？おいで、私のお友達‼？」
私がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって３つの光が舞い降りる。
「レベル１、クリボルト‼？」

〈クリボルト〉☆１　雷族　光属性
ＡＴＫ３００

最初に出て来たのは電気を出している黒い球体のモンスター。
「レベル１、エキストラケアトップス‼？」

〈エキストラケアトップス〉☆１　戦士族　地属性
ＤＥＦ１００

次に現れたのはダンボールで出来たトリケラトプスの着ぐるみを着たモンスター。
そしてその背後に現れるのは蜘蛛のように見える植物のモンスター。
「レベル１、捕食植物スパイダーオーキッド‼？」

〈捕食植物スパイダーオーキッド〉☆1　植物族　闇属性
ＤＥＦ０

「そして、導いて‼?希望に繋がるサーキット‼?」
「モンスターは４体……またヴァレルソードドラゴンか」
「召喚条件は効果モンスター３体以上‼?私は金華猫、クリボルト、エキストラケアトップス、捕食植物スパイダーオーキッドをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?」
　確かに、ヴァレルソードならダメージを与えられるけど、２回攻撃をするならスカーレットちゃんのモンスターを守備にしないといけないから倒しきることはできない。
　だから、今回は貴方の力を貸して‼?
「閉ざされた運命を撃ち抜く信念の弾丸‼?リンク４‼?ヴァレルロードドラゴン‼?」
「っ‼?ここで別のヴァレルリンクモンスターだと⁉?」
　私の呼び声に応えるように龍の咆哮が轟いた。

〈ヴァレルロードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑↑↘?

「バトル‼?ヴァレルロードドラゴンで琰魔竜レッドデーモンアビスを攻撃‼?銃声のイジェクトフレア‼?」
「我が魔王を狙うだと?迎え撃て‼?琰魔竜レッドデーモンアビス‼?魔王は憤怒の刃を振るう‼?」
　レッドデーモンアビスがヴァレルロードに両腕の刃を振り抜くが、ヴァレルロードはそれを躱してレッドデーモンアビスに粒子砲を放つ。
「この瞬間、ヴァレルロードドラゴンの効果発動‼?エロージョンエイミング‼?このカードが相手モンスターに攻撃するダメージステップ開始時に、その相手モンスターをこのカードのリンク先に置いてコントロールを得て、そのモンスターは次のターンのエンドフェイ

ズに墓地へ送られるよ‼?」
「何⁉?”小さな聖域の守護女神(リトルサンクチュアリガーディアン)”、我が魔王を奪おうと言うのか⁉?」
私が効果を宣言すると、ヴァレルロードの粒子砲がレッドデーモンアビスを包み込みこちらのバトルゾーンに移動させた。
私のフィールドに移った瞬間、レッドデーモンアビスのカードから一瞬、闇のようなものが溢れ出した気がしたが、すぐに消えていった。
「ごめんなさい、ちょっとだけ力を貸してもらうね。淡魔竜レッドデーモンアビスで浮鵺城を攻撃‼?えっと……ラスロススライサー‼?」
「何⁉?」
レッドデーモンアビスが空に浮かんでいる浮鵺城に近付いていき、両腕を振り抜いてその身体を切り裂き、爆散させた。
「ふぅ、これで攻撃制限も無くなったね」
「馬鹿な、淡魔竜レッドデーモンアビスを扱えているだと⁉?」
「へ?扱えてるって?」
スカーレットちゃんが驚愕の表情で私を見てくる。
扱えてるって、ただ攻撃宣言しただけだし、これぐらいなら誰でもできると思うけど……
「馬鹿な、我以外に淡魔竜が扱えるなど……まさか、奴も深淵に選ばれし者だと言うのか⁉?」
「え、えっと、スカーレットちゃん?」
「……クックック、アッハハハハ‼?」
「ひゃぅ‼?い、いきなりどうしたの?」
突然、大声で笑いはじめたスカーレットちゃんに私は驚いて悲鳴をあげてしまう。
スカーレットちゃんはしばらくの間愉快そうに笑うと、好戦的な笑みでこちらを見た。
「アッハハハ‼?よい‼?よいぞ、”小さな聖域の守護女神(リトルサンクチュアリガーディアン)”よ‼?それでこそ我が運命の好敵手だ‼?」
「は、はぁ」
「だからこそ、超える価値がある。汝の屍を喰らった時こそ、我が悲願

は達成されるのだ!!?ならばこそ、汝を超えるために、我が深淵の魔王をも超える必要があるのであれば、超えてみせよう!!?我が名は紅神爆牙(こうこうはくが)のアイズ・Ｄ・スカーレット!!?貴様の全てを喰らう者なのだからな!!?リバースカードオープン!!?速攻魔法アクティベート!!?シンクロトランセンド!!?」
「っ、それは何ターンも前からずっと伏せられてたカード……」
「汝相手では使う機会はないかと思ったが、今ならばちょうどいい!!?汝のフィールドのシンクロモンスター1体を対象としてそのモンスターより1つ高いレベルを持つシンクロモンスター1体をＥＸデッキから特殊召喚する!!?」
「っ!?しまった、コントロール奪取が仇に……!!?」
「ただし、このエフェクトで特殊召喚したモンスターは、このターンエフェクトをアクティベートできないがな。そんなことはどうでもよい!!?我は琰魔竜レッドデーモンアビスを対象に、レベル１０のシンクロモンスターを特殊召喚する!!?」
そこで、スカーレットちゃんがＥＸデッキから1枚のカードを取り出すと、やはりレッドデーモンアビスの時よりも濃い闇が溢れ出し、スカーレットちゃんの手を包んでいく。
それでもスカーレットちゃんは愉快そうに笑っていた。
「ぐっ……クックック!!?いいだろう、深淵の竜王よ……我が運命の好敵手を喰らうため……貴様の力を我に与えよ!!?」
スカーレットちゃんがそういいながら、デュエルディスクにカードをセットすると、溢れ出していた闇がスカーレットちゃんの中に収まる。
そしてスカーレットちゃんは好戦的な瞳で私を捉えた。
「魔王へと至りしよ王者よ!!?深淵を受け入れ、その姿を深淵へと変えよ!!?深淵の悪魔竜、琰魔竜レッドデーモンベリアル!!?」
〈琰魔竜レッドデーモンベリアル〉☆１０　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３５００

現れたのは綺麗な真紅が闇の瘴気に染まった紫の身体に、漆黒の鎧を身につけ、両腕にアビスよりも巨大な刃がついた竜王。
「また……私が知らない琰魔竜……」
「さあ、我らの聖戦（ジハード）を続けようではないか、”小さな聖域（リトルサンクチュアリ）の守護女神（ガーディアン）”」
「っ……私はこのままターンエンド」

遊花　ＬＰ１０００　手札３
△ー▲ー△　　ー
ーー○ーー
　　☆　　○
ー□○ーー
ーーーーー　　ー
スカーレット　ＬＰ５３００　手札１

「我のターン、ドロー!!?我はレッドリゾネーターをリリースし、レッドデーモンズドラゴンスカーライトを対象として、琰魔竜レッドデーモンベリアルのエフェクトアクティベート!!?悪魔は王者（イビルキング）を生み出す（ボーン）!!?我のフィールドのモンスター１体をリリースし、我のセメタリーのレッドデーモンモンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?」
「っ!!?させません!!?チェーンして琰魔竜レッドデーモンアビスのエフェクトアクティベート!!?ラスロスホールド!!?琰魔竜レッドデーモンベリアルの効果を無効にします!!?」
レッドデーモンアビスが放った怒りの炎がレッドデーモンベリアルを閉じ込める。
しかし、閉じ込められたハズのベリアルは不気味な笑みを浮かべた。
「これで汝はもう我の行動を阻むことはできん!!?我はチューナーモンスター、チェーンリゾネーターを召喚!!?」

〈チェーンリゾネーター〉☆1　悪魔族　光属性
ＡＴＫ１００

現れたのは長い鎖と音叉を持つ小さな悪魔のモンスター。
「チェーンリゾネーターのエフェクトアクティベート!!?フィールドにシンクロモンスターが存在し、このカードが召喚に成功した時、デッキから同名以外のリゾネーターモンスター1体を特殊召喚する!!?現れよ、チューナーモンスター、ミラーリゾネーター!!?」

〈ミラーリゾネーター〉☆1　悪魔族　光属性
ＤＥＦ０

チェーンが鎖で輪を作ると、その中から鏡の姿をした小さな悪魔が現れる。
ここにきて2体のチューナーなんて、一体何を……
「クックック、行くぞ、我が運命の好敵手!!?禁じられし我が力、その魂に刻み込むがいい!!?我はドラゴン族闇属性レベル１０シンクロモンスター、琰魔竜レッドデーモンベリアルに、レベル1、チューナーモンスター、チェーンリゾネーター、ミラーリゾネーターをダブルチューニング!!?」
「っ!!?ダブルチューニング……レベル１２のシンクロモンスター!!?」
チェーンとミラーが光の輪になり、レッドデーモンベリアルの周りを囲むようにして光の玉になる。
そこで、スカーレットちゃんが自分の腕から闇を溢れ出させながらＥＸデッキから勢いよくカードを引き抜き、デュエルディスクにセットすると、光の玉が突如収縮し、勢いよく弾ける。
光が弾け、フィールドに顕現したのは綺麗な真紅が完全なる漆黒に染まった悪魔のような竜王。
４本の腕で全てを破壊しつくす暴虐の化身。
「悪魔へと至りし竜王よ!!?深淵と同化し、全てを喰らう破壊者とな

れ!!?シンクロ召喚!!?深淵の破壊神、琰魔竜王レッドデーモンカラミティ!!?」

〈琰魔竜王レッドデーモンカラミティ〉☆12　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ４０００

「琰魔竜王……レッドデーモン……カラミティ」

また私が知らない琰魔竜が現れる。

だけど、今の私にそんなことを気にしている余裕はなかった。

この空気が張り詰めたかのような威圧感から、直感できる。

このモンスターは……本当に不味い。

「さあ、神へと至った深淵の竜王の力、存分に味わうがいい!!?琰魔竜王レッドデーモンカラミティのエフェクトアクティベート!!?破壊神(アブスタクルデストラクション)を阻めるもの無し!!?このカードがシンクロ召喚に成功した時、このターン相手はフィールドでアクティベートするエフェクトをアクティベートできず、このアクティベートに対して、相手はカードのエフェクトをアクティベートできない!!?」

「っ!チェーンできない発動無効!?」

レッドデーモンカラミティが身体から闇を溢れ出させると、フィールド全てが闇に包まれ、フィールドにあった全てのカードが効果を失った。

これは一気に防ぐのが難しくなったね。

「行くぞ、”小さな聖域の守護女神(リトルサンクチュアリガーディアン)”!!?禁じられし我が力、防げるものなら防いでみよ!!?バトル!!?琰魔竜王レッドデーモンカラミティで琰魔竜レッドデーモンアビスをアタック!!」

「えっ!?琰魔竜レッドデーモンアビスを攻撃するの!?」

ヴァレルロードを攻撃すればすぐに私のライフは０にできるのに？

「全てを砕け、琰魔竜王レッドデーモンカラミティ!!?破壊神は魂すら滅する(イグズィスタンスデストラクション)!!?」

レッドデーモンカラミティが２本の腕でレッドデーモンアビスの

両腕を掴み、そのまま引き千切る。
苦悶の咆哮をあげるレッドデーモンアビスに、レッドデーモンカラミティは漆黒のオーラを纏った４本の腕をレッドデーモンアビスに振り下ろし、地面に叩きつけて粉々に吹き飛ばす。
そしてレッドデーモンアビスがフィールドに叩きつけられた衝撃が、私の身体を襲った。
「っ⁉？くぅっ⁉？」

遊花　ＬＰ１０００→２００

今のレッドデーモンカラミティの攻撃……
本当に身体に痛みが走ったような……
「さあ、審判の刻だ。琰魔竜王レッドデーモンカラミティのエフェクトアクティベート⁉？このカードが戦闘でモンスターを破壊した場合、そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える⁉？」
「っ⁉？この状況でバーン効果⁉？」
「破壊した琰魔竜レッドデーモンアビスの攻撃力は３２００⁉？汝の吹けば飛ぶようなライフなど、簡単に消し飛ばせる」
レッドデーモンカラミティが咆哮をあげると、空から巨大な隕石が私に向かって大量に降り注ぐ。
どうせこのターンの終わりには墓地に行くからってサクリボーを使わなかったのは失敗だったね。
「我が運命に現れた好敵手よ……さらばだ⁉？破壊神は終焉（アポカリプスデイ）をもたらす⁉？」
「……ううん、まだだよ⁉？手札からジャンクリボーの効果発動⁉？ジャンクバレット⁉？自分にダメージを与える魔法・罠・モンスターの効果を相手が発動した時、自分の手札・フィールドのこのカードを墓地へ送ってその発動を無効にし破壊する⁉？」
「何だと⁉？」
ジャンクリボーが増殖しながら降り注ぐ隕石を全て相殺していく。

全ての隕石を相殺したジャンクリボーは、最後に勢いよくレッドデーモンカラミティに突撃し、自爆して自分ごとレッドデーモンカラミティを吹き飛ばした。

ありがとう、ジャンクリボー。

君のおかげで助かったよ。

破壊されたレッドデーモンカラミティを見て、スカーレットちゃんは目を見開き、忌々しげに私を睨みつけた。

「ええい、往生際が悪い!!?だが、琰魔竜王レッドデーモンカラミティを破壊したのは悪手だったな。破壊された琰魔竜王レッドデーモンカラミティのエフェクトアクティベート!!?破壊神(デモニックリインカネーション)は輪廻の輪を廻るこのカードが相手によって破壊された場合、自分のセメタリーのレベル８以下のドラゴン族・闇属性シンクロモンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?」

「っ!!?蘇生効果まであるの!?!?」

「蘇れ、深淵の武王よ!!?レッドデーモンズドラゴンスカーライト!!?」

〈レッドデーモンズドラゴンスカーライト〉☆８　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ３０００

「レッドデーモンズドラゴンスカーライト!?!?っ、その子は確か……」

「レッドデーモンズドラゴンスカーライトは１ターンに１度、我のメインフェイズにこのカード以外の、このカードの攻撃力以下の攻撃力を持つ特殊召喚された効果モンスターを全て破壊し、このエフェクトで破壊したモンスターの数×５００ポイントのダメージを相手に与えることができる。汝のライフは残り２００。このエフェクトを受ければ汝のライフは尽きる。だが、そこで我は考える。琰魔竜王レッドデーモンカラミティのエフェクトを防いだ汝のことだ。まだ、手札やセメタリーにこのアタックを防ぐ手段が残っているかもしれない、

とな」
「……」
「そこで”小さな聖域の守護女神(リトルサンクチュアリガーディアン)”よ。汝がどんな策を有していようと関係なく葬る方法を思いついた」
「えっ⁉?」
「メインフェイズ2‼?魔法アクティベート、思い出のブランコ‼?自分のセメタリーの通常モンスター1体を対象として、そのモンスターを特殊召喚する。ただし、このエフェクトで特殊召喚したモンスターはこのターンのエンドフェイズに破壊される。舞い戻れ、真紅眼の黒竜‼?」
「ここで真紅眼の黒竜?」

〈真紅眼の黒竜〉☆7　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２４００

今日何度目かわからない黒竜の登場に、私は首を傾げる。
エンドフェイズには破壊されるのに、なんでこのタイミングで……いや、スカーレットちゃんのフィールドには亜黒竜が存在している。
ということは、このタイミングで黒竜を出した意味は……‼?
「行くぞ、我はレベル7、真紅眼の黒竜と真紅眼の亜黒竜でオーバーレイ‼?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼?」
「っ、やっぱりエクシーズ召喚‼?」
黒竜と亜黒竜が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこに現れたのは鋼の身体と炎の翼を持つ黒竜。
「可能性を秘めし鋼の竜よ‼?その力で敵対者の可能性を燃やし尽くせ‼?ランク7‼?真紅眼(レッドアイズ)の鋼炎竜(フレアメタルドラゴン)‼?」

〈真紅眼の鋼炎竜〉★7　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ２８００

「真紅眼の鋼炎竜……」

「真紅眼の鋼炎竜は魂を重ね合わせることで更なる力を得た真紅眼だ。その身体はパーマナンスエフェクトによりオーバーレイユニットがある限りエフェクトで破壊されることはない。そして重要なのはもう１つのパーマナンスエフェクトだ。オーバーレイユニットを持った真紅眼の鋼炎竜がモンスターゾーンに存在する限り、相手が魔法・罠・モンスターのエフェクトをアクティベートする度に相手に５００ポイントのダメージを与える!!?」

「っ!??効果の度に５００ポイント!?!?」

「青ざめたな。汝がこれからどのような結末に辿り着くのか、気付いたようだな」

不敵な笑みを浮かべるスカーレットちゃんに、私は表情を引きつらせる。

なんてことを思いつくの……これは……流石に不味いね。

「例え汝がレッドデーモンズドラゴンスカーライトのエフェクトを防ごうと、その防ごうと動いたことで真紅眼の鋼炎竜のエフェクトが汝のたったの２００しかないライフを削り取る!!?例え、このターンなんらかの方法で防ぎきろうと、我のモンスターを倒そうとすれば動く必要がある。だが、動くということは真紅眼の鋼炎竜のエフェクトを発動させるということだ。動いた時点で、汝の敗北は決定する!!?」

「っ……」

「そのうえ汝のデッキはローレベルのモンスターで組まれているのであろう?ならば、エフェクトを使わなければ我がモンスターは超えれまい。最も、汝が動く前にそのライフは尽きているであろうがな。深淵に抱かれて眠れ、”小さな聖域の守護女神(リトルサンクチュアリガーディアン)”!!?レッドデーモンズドラゴンスカーライトのエフェクトアクティベート!!?深淵(スカーライト)は武王(アビス)を見出す!!?」

スカーライトが咆哮をあげると、フィールドを炎が包み込み、ヴァレルロードを焼き尽くし、私をも?み込もうと渦を巻く。

「まだ……まだだよ‼?・チェーンして手札からハネワタを捨てて効果発動‼?・このターン、自分が受ける効果ダメージは０になる‼?・この効果は相手ターンでも発動できるよ‼?・」
「っ⁉?・この状況でも防ぎきるというのか⁉?・」
私の前に天使の羽根を持つ触角の生えた毛玉のモンスターが現れ、粒子に変わって私の身体を包みこみ、スカーライトの炎と続けざまに放たれた鋼炎竜の炎を弾き返す。
遊陽ちゃんとデュエルして以来バーンで対策に入れてたけど、まさかこんなところで役に立つなんてね。
レッドデーモンカラミティを破壊するためにジャンクリボーに頑張って貰ったけど、これなら最初からハネワタに任せてたらよかったね。
「これでも沈まないとは、やはり”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”の名は伊達ではないと言ったところか。良かろう、我はこれでターンエンドだ。汝にターンを渡してやろう。このターンを生き延びたところで、汝に生き残る術などないのだからな」

遊花　ＬＰ２００　手札１
△ー▲ー△　　ー
ーーーーー
　ー　　○
ーー○ーー
ーーーーー　　ー
スカーレット　ＬＰ５３００　手札０

何とか生き残ることはできた。
だけど、私のライフは残り２００。
そしてスカーレットちゃんのフィールドには私が効果を発動したら５００ダメージを与えてくる鋼炎竜と、特殊召喚した自身の攻撃力以下のモンスターを破壊して５００ポイントのダメージを与えてくるスカーライトがいる。

私がこのターンにあの2体のモンスターを倒すことができなければ、私の負けは決定するだろう。
しかし、あの2枚を突破することに効果を使ってしまえば鋼炎竜によって私のライフは燃え尽きる。
私の最後の手札はクリボー。
伏せてあるカードはブラフとしてセットしていたアクションマジック―ダブルバンキングだから、この状況を覆すことは現状では不可能だ。
動いても動かなくても敗北に繋がっている現状が、私の心に重くのしかかる。
……だけどーーー
「……ふふっ」
「っ、何がおかしい？あまりの絶望に気が狂ったか？」
「違うよ。おかしいから笑うんじゃない……不利だからこそ、笑うんだよ‼？」
私は笑顔を浮かべたまま、真っ直ぐにスカーレットちゃんを見る。
「正直、どうやったらこの状況を逆転できるかなんて分からないよ。それでも、最後まで諦めないで、最後まで楽しんで、笑顔でデュエルをする……それが、私だから」
「っ、この絶望的な状況をも楽しむというのか？」
「まあ、気楽に考えられるような状況ではないけどね。だけど、俯いてたって、何も変わらない。絶望してたって、前には進めない。私には、まだライフが残ってる。デッキが残ってる。だから、ライフが0になるまで、デッキが無くなるまで、諦めずに楽しんでデュエルをする‼？運命を斬り開けるまで、私は絶対に諦めない‼？例えどんな絶望的な逆境だって、その逆境の先に、私の目指すべき場所が、私の希望があるんだから‼？」
「っ……戯言を。ならば、この絶望を覆してみよ‼？汝の希望など、まやかしに過ぎないことを教えてやろう‼？」
スカーレットちゃんが苛ついたような目で私を睨みつける。
そんなスカーレットちゃんに構わず、私は自分のデッキの上のカー

ドに手を添えた。
「すー……はー……私の、ターン!!?」
私は深く深呼吸をし、握るカードに力を込める。
私のデッキに、本当にこの状況をどうにかするカードがあるかなんて分からない。
だけど、私は最後までデュエルを諦めたくない。
例え、このカードをドローした後に、敗北の未来が待っているとしても、前に進むことを止めることだけはしたくない。
だから、お願い、私のデッキ。
私と一緒に……最後まで戦って!!?
「ドロー!!?」
気合を入れて、勢いよくカードをドローする。
その瞬間ーーー
『本当は、私も、君達が変える未来を見届けたかった……』
「っ!?……えっ?」
突然、頭の中に流れ込んできたイメージに、私は目を見開く。
空から巨大な建造物が落ち、ぼろぼろになった街のビルの上で話をする2人の男性。
「……今のは、貴方の記憶なの?」
私は何となくそう感じ、自分のドローしたカードに目を向ける。
……このカードは、遊陽ちゃんから受け取ったカード。
……ごめんなさい。
今の私には、何で貴方が自分の記憶を見せてくれたのかは分からない。
だけど……絶対に、いつかその想いに応えれるように頑張るから。
だからーーー
「だから、今は貴方の力を私に貸して!!?このモンスターは自分の墓地にモンスターが10体以上存在する場合のみ特殊召喚する事ができる!!?」
「っ、聞いたことがない特殊召喚条件だと!!?」

私の告げた召喚条件に、スカーレットちゃんは驚いて目を見開く。
私の呼び声に呼応するかのように、私の背後に巨大な大樹が現れる。
そして大樹から１０の光が溢れ、光の線で結ばれていくと、大樹の中から現れたのは機械の身体を持つ巨大な天使にして、時を司り、世界を救おうとした究極の神。
「おいで‼？時空を超え、希望を導く叡智の神‼？究極時械神セフィロン‼？」

〈究極時械神セフィロン〉☆１０　天使族　光属性
ＡＴＫ４０００

「馬鹿な……この状況で、攻撃力４０００のモンスターだと⁉？」
「バトル‼？究極時械神セフィロンで真紅眼の鋼炎竜を攻撃‼？」
「くっ……真紅眼の鋼炎竜のエフェクトアクティベート‼？
真紅の輝きは消えず‼？１ターンに１度、オーバーレイユニットを１つ取り除き、我のセメタリーのレッドアイズ通常モンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する‼？このエフェクトは相手ターンでもアクティベートできる‼？」
「‼？そんな効果まで……」
「蘇れ、真紅眼の黒炎竜‼？」

〈真紅眼の黒炎竜〉☆７　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ２０００

再び姿を現わす黒炎竜。
それでも、私が今やることは変わらない‼？
「攻撃はそのまま続行‼？お願い、究極時械神セフィロン‼？」
セフィロンが両手を頭上に掲げ、両手首を合わせると、開いた手に光が集まり、球体に変わる。
その光は誰かが願った希望の光。

セフィロンはその光の球体を鋼炎竜に向けると、集まった光の球体が巨大なレーザーに変わり鋼炎竜に放たれる。
「ウィッシュシャイン!!?」
放たれた巨大な願いの光は、鋼炎竜を呑み込み、粒子に変えた。

スカーレット　ＬＰ５３００→４１００

「ぐっ……真紅眼の鋼炎竜はやられたか。だが、まだレッドデーモンズドラゴンスカーライトが残っている!!?次のターン、そのエフェクトで真紅眼の黒炎竜を破壊すればーーー」
「まだだよ!!?手札を1枚捨てて、リバースカードオープン!!?速攻魔法、アクションマジック―ダブルバンキング!!?自分フィールドのモンスターは、このターン戦闘で相手モンスターを破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃できる!!?」
「っ!?何だと!?」
「もう1度お願い、究極時械神セフィロンでレッドデーモンズドラゴンスカーライトを攻撃!!?デュアルウィッシュシャイン!!?」
「くっ……迎え撃て、レッドデーモンズドラゴンスカーライト!!?武王は烈火(スカーライトブレイズ)を纏う!!?」
スカーライトはその身に炎を纏い、セフィロンに突撃していく。
セフィロンは右手をスカーライトに向けると、セフィロンの周囲に小さな光の球体が無数に現れる。
セフィロンがそのままスカーライトに向けて手を突き出すと小さな光の球体から先程放った光のレーザーが放たれ、無数の光のレーザーに呑み込まれたスカーライトは怒りの咆哮をあげるとそのまま姿を光に変えた。

スカーレット　ＬＰ４１００→３１００

「ぐっ……まさかレッドデーモンズドラゴンスカーライトまでやられるなど……」

「メインフェイズ２!!?墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動!!?自分フィールドのカード１枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから１枚ドローする。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を１枚除外する!!?私はフィールドのペンデュラムーチョをデッキに戻し、カードを１枚ドローする!!?カードを１枚伏せてターンエンド!!?」

遊花　ＬＰ２００　手札０
△ー▲ーー　ー
ーー○ーー
ー　ー
ーーーー□ー
ーーーーー　ー
スカーレット　ＬＰ３１００　手札０

「我のターン、ドロー!!?くっ……まさかあの状況を突破されるとは……だが、汝のライフは残り２００!!?我は真紅眼の黒炎竜を再度召喚し、攻撃表示に変更する!!?」

真紅眼の黒炎竜
ＤＥＦ２０００→ＡＴＫ２４００

「真紅眼の黒炎竜のエフェクトで燃え尽きるがいい!!?バトル!!?真紅眼の黒炎竜で究極時械神セフィロンをアタック!!?黒焔弾（ダークキロフレア）!!?」

黒炎竜がセフィロンごと私を燃やし尽くそうと炎の弾丸を放つ。

それを見て、私はスカーレットちゃんがしていたように不敵な笑みを浮かべた。

「見えてたよ、貴方の未来!!?攻撃宣言時、リバースカードオープン!!?罠発動!!?魂の一撃!!?」

「何!!?」

「自分のライフが４０００以下の場合、自分フィールドのモンスターが相手モンスターと戦闘を行う攻撃宣言時にライフを半分払い、自分フィールドのモンスター１体を選択して発動!!?選択したモンスターの攻撃力は相手のエンドフェイズ時まで自分のライフが４０００より下回っている数値分だけアップする!!?」
「馬鹿な!??」
「対象は勿論、究極時械神セフィロン!!?私のライフは２００の半分の１００になり、究極時械神セフィロンの攻撃力は!!?」

遊花　ＬＰ２００→１００

究極時械神セフィロン
ＡＴＫ４０００→７９００

「攻撃力……７９００だと!??」
「お願い、究極時械神セフィロン!!?ソウルウィッシュシャイン!!?」
私の声に、セフィロンの身体が光を纏って輝きだす。
セフィロンが両手首を合わせると、身体に纏っていた光が開いた手に集まり、先程よりも巨大な球体に変わる。
集まった光の球体は先程よりも巨大なレーザーとなり、黒炎竜が放った炎の弾丸ごと、黒炎竜を消しとばした。
「馬鹿な……我が、破れる、だと!??ぐあぁぁぁ!!?」

スカーレット　ＬＰ３１００→０

ーーーーーーー

「……ふぅ、何とか勝てた……」
「お疲れ、遊花。いいデュエルだったわよ」
「ありがとう、桜ちゃん」
「また面白い波動を放つモンスターが増えてる。遊花は本当に面白

い」
「すっげぇデュエルだったぜ、遊花。やっぱ、防御じゃ遊花に敵う奴はいねぇな」
「あはは、そんなことはないと思うけど……」
立体映像が消え、私が一息吐いていると、桜ちゃん達が私の肩を叩きながら労いの言葉をかけてくれる。
「でも、ギリギリ勝てただけだから、もっと精進しないと」
「真面目ね、遊花は。もっと勝てたことを喜んでもいいと思うわよ？」
私の言葉に、桜ちゃんは呆れた表情を浮かべる。
だけど、ここまで追い詰められちゃったのは自分の実力不足が原因だから私としてはそう喜んでいられない。
レッドデーモンアビスが攻撃された時にサクリボーを使っていれば。
レッドデーモンカラミティのバーン効果にハネワタを使っていれば。
あそこまで追い込まれることもなく、ヴァレルロードでレッドデーモンカラミティのコントロールを得れば勝てていたのだ。
他にも判断が甘かったから追い詰められることになった場面が何度かあった。
やっぱり、私はまだまだ未熟者だ。
「……まぁいいわ。それで、あれはどうするの？」
「あれ？」
桜ちゃんの言葉の意味が分からず、首を傾げながら桜ちゃんの指差した方を見ると、そこには地面に手をついて項垂れているスカーレットちゃんがいた。
「馬鹿な……我が、負けた、だと？この紅神爆牙（こうこうはくが）のアイズ・D・スカーレットが、深淵に至りし影が、光などに……」
「えっと、スカーレットちゃん？」
「”小さな聖域（リトルサンクチュアリガーディアン）の守護女神”か……我を笑いにきたのか？」
「とりあえずその呼び方は止めて欲しいんだけど……笑いになんかくるわけないよ」

「ならば、何をしにきた。我は敗者だ。敗者にかける言葉など、侮蔑と嘲笑しかあるまい」
「うーん、なんでそんなに卑屈になってるのかは分からないけど……」
　私は地面に手をついて項垂れているスカーレットちゃんに自分の手を差し伸べて笑顔を浮かべた。
「ありがとうございました‼？いいデュエルでした‼？」
「っ……な、何を言ってーーー」
「スカーレットちゃんのデュエル、凄かったよ。少しでも気を抜いたら、きっと私は負けてた。だから、また、デュエルしようね‼？」
　私が笑顔でそう告げると、スカーレットちゃんは驚いた表情で目を見開く。
　しばらく驚いた表情を浮かべていたスカーレットちゃんだったが、私の手を払い除けると、不敵に笑った。
「フン、汝は光、我は影。我らが相入れることはない。そして告げたハズだ、我らはぶつかり合う運命（さだめ）にあると」
「……それは、またデュエルしてくれるってこと？」
「そ、そうではない‼？だが、我と汝は闘わねばならぬのだ。来るべき終末の日（ラグナロク）のためにな」
「うーん、よく分からないけど、またスカーレットちゃんとデュエルができるなら、すっごく嬉しいな」
「だ、だからそうではないとーーー」
「ーーーあ、やっと見つけた‼？真紅ちゃん‼？」
「うぐっ‼？この声は……」
「ん？」
　突如聞こえた声に、スカーレットちゃんが苦い表情を浮かべる。
　私がその声が聞こえてきた方を見ると、黒髪をクラシカルストレートにした少女が慌てた表情でこちらを見ていた。
　少女は私と話していたスカーレットちゃんを見ると急いでスカーレットちゃんの側に近づいて、スカーレットちゃんの頭に手を置くと、勢い良く下げさせた。

「すみません!!?すみません!!?真紅ちゃんがご迷惑をかけてすみません!!?」
「ぐっ、我が真名を呼ぶな、”深淵の話し手(アビストーカー)”!!?」
「真紅ちゃんだって私をあびすとーかーとか呼んでるんだからおあいこだよ!!?それよりも、真紅ちゃん、上級生にまで迷惑をかけて!!?しかも、あの栗原先輩だし、私も一緒に謝ってあげるから、ちゃんと迷惑をかけたこと謝るの!!?」
「我は迷惑など、痛っ!!?痛い、痛い!!?分かった、分かったから、刀花ちゃん!!?謝るから!!?そのままだと頭が割れるから!!?」
「え、えっと……」
必死に頭を下げる少女と頭を無理矢理下げさせられて涙目になってきたスカーレットちゃんに、私が戸惑った表情を浮かべて桜ちゃん達の方を見るが、桜ちゃん達も苦笑いを浮かべるだけだった。
どうするべきかと考えていると、そんな私の耳に聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「遊花達、何してる?もうすぐ私の講義、始まるよ?」
「あ、闇先パイ!!?えっ!!?もうそんな時間なんですか!!?」
首を傾げながら声をかけてくる闇先パイに私は慌てて時計を見ると、すでに予鈴が鳴り終わっている時間だった。
デュエルに夢中で全然時間なんて気にしてなかった!!?
急がないと闇先パイの講義に遅れちゃうよ!!?
だけど、この子達をこのままほっておくわけにはいかないし……
私が戸惑いの表情を浮かべてスカーレットちゃん達に視線を向けると、スカーレットちゃん達に気付いたのか、闇先パイが視線をそちらに向け、どこか関心したように頷いた。
「成る程、あれを見て遊花に挑戦しに来たんだ。結構見所がある」
「えっ?闇先パイ、この子達のこと知ってるんですか?」
「……遊花、もしかして私が講師をしてること忘れてる?私は悲しい……」
「わ、忘れてなんかないですよ!!?ただ、ちょっと意外だっただけで……」

「それで、その子達はどこの誰なのよ？」
本当に悲しそうな表情を浮かべた闇先パイを見て慌てていると、桜ちゃんがそんな質問を闇先パイにする。
桜ちゃんの質問に闇先パイは気を取り直すように咳払いをすると、スカーレットちゃん達を見て、口を開いた。
「コホン……そこの子達はデュエルアカデミア高等部の1年生。今日の朝講義があって遊花と桜の期末試験でのデュエルを映像で見せたから挑みにきたんだと思う」
「へぇ、私達のデュエルを……って、ほぇっ⁉？」
「ちょっ⁉？何で私達のデュエルなのよ⁉？」
私達のデュエルが下級生に公開されているという事実に、私と桜ちゃんは驚く。
そんな話、全然聞いてないですよ⁉？
「ん、下級生は上級生のデュエルを知らないって子が多くて、自分達のデュエルに自惚れてる子達が多かったから。天狗の鼻をへし折るにはちょうどいいかなと思って。校長には許可取ったから」
「私達の許可を取りなさいよ‼？」
「反省も後悔も特にしてない」
「少しはしなさいよ‼？」
「遊花と桜のデュエルが公開されてるのは別にいいとして、結局そいつらは誰なんだ？」
「ん、遊花と桜のデュエルが公開されてるのは別にいいとして、その子達のことは気になる」
「大地君も霊華さんも全然良くないからね⁉？」
私達の言葉をさらっと流して、闇先パイは2人の下級生を指差すとその子達の正体を告げた。
「そこの厨二病が眼竜　真紅（がんりゅう　しんく）。そして真紅に頭を下げさせてるのが幸土　刀花（こうど　とうか）。高等部1年の学年1位と2位だよ」
「それよりも私達の……って、えっ？」
闇先パイの言葉に思わずポカンとした表情で2人を見てしまう。

「痛い痛い‼?ギブ‼?ギブギブ‼?ちゃんと謝るから、頭を離して刀花ちゃん‼?」
「すみません‼?すみません‼?」
２人は先程と変わらず私達に向かって頭を下げ続けている。
この２人が高等部１年生の学年１位と２位?
「え、ええ〜〜〜‼?⁉?」
私の驚きの声が講義開始のチャイムと共にデュエルアカデミアに響き渡る。
そして結局、私達は闇先パイも含めて講義に遅刻することになるのだった。

第６０話　先を知る者

★

「それじゃあ、今回の講義はここまで。今日は遅刻しちゃってごめんなさい。次からは気をつける。ありがとうございました」
そんな言葉で闇先パイの講義が終わり、闇先パイは壇上を降りて教室を去っていく。
スカーレットちゃん改め、真紅ちゃんとのデュエルが長引いてしまい、結局私達はみんな揃って遅刻することになってしまった。
私のデュエルが長引いてしまったせいでみんなを巻き込んで遅刻させてしまったため、私はとても心苦しかったのだが、みんな笑いながらこんなこともあると許してくれた。
うぅ、次からはもっと時間にも気をつけてデュエルしないと。
そんなことを考えていると、私の背後から私の肩を誰かが優しく叩いた。
私が振り返ると、そこには苦笑を浮かべている桜ちゃんがいた。
「やっぱり落ち込んでるわね。気にしないでいいって言ってるのに」
「だって、私に付き合わせちゃったから桜ちゃん達まで遅刻しちゃったんだし……」
「それは私達の自業自得って奴よ。私達がもっと早く遊花を止めるなり、先に行くなりすればよかったのにしなかったんだから遊花が落ち込む必要なんてないの」
そういって、桜ちゃんは柔らかい笑顔で私の頬をムニムニと揉む。
多分、励ましてくれてるんだよね？
どちらにせよ、今回のことはもう終わってしまったことだ。
だったら、いつまでもくよくよしてるんじゃなくて、次に同じことが起こらないように気をつける方が大事なハズだ。
「……うん、分かった。ありがとう、桜ちゃん」

「どういたしまして。こんなことでいちいち落ち込まないの。前にも言ったけど、遊花はいつでも馬鹿みたいに明るく笑ってればいいんだから」
「うぅ、それっていい意味なの？」
「いい意味に決まってるでしょ。少なくとも、落ち込んでる遊花より笑ってる遊花を見る方が私は嬉しいわ」
そういいながら桜ちゃんが私の頬から手を放す。
……やっぱり、桜ちゃんは優しい。
だからこそ、そんな桜ちゃんに迷惑をかけないようにもっと頑張らないと。
「し、失礼します‼？栗原先輩はいらっしゃいますか？」
「ほぇ？」
「ん？」
改めて気合を入れていた私の耳にそんな声が聞こえてくる。
私達が声の聞こえてきた方を見ると、そこにいたのは真紅ちゃんとのデュエルの後に現れた黒髪をクラシカルストレートにした少女。
闇先パイが話していた高等部1学年、学年2位の少女、幸土　刀花がそこにいた。

ーーーーーーー

「栗原先輩、宝月先輩。真紅ちゃんが失礼な態度を取り、ご迷惑をかけてしまい本当に申し訳ありませんでした‼？」
「わわっ‼？そんな、頭なんて下げないでいいよ。真紅ちゃんとのデュエルは楽しかったし、私は全然気にしてないから刀花ちゃんが謝る必要なんてないもん」
「私も別に気にしてないわよ。迷惑をかけられた本人がこう言ってるんだし、私がどうこういうことじゃないわ」
勢いよく頭を下げてくる刀花ちゃんに、私は手を振って頭をあげるように言う。
私と桜ちゃんの言葉に、刀花ちゃんは本当に申し訳なさそうな表情

を浮かべながら渋々頭をあげた。
突如、私達のいた教室を訪れた刀花ちゃんにお昼休みのことで話がしたいと言われた私と桜ちゃんは刀花ちゃんと一緒にデュエルアカデミア内にあるラウンジに来ていた。
本当は大地君や霊華さんにも謝りたいと言っていたのだが、私達とは違い2人にはまだ次の講義が残っていたため私達だけでお話をすることになった。
元々、あの2人も気にしていないみたいだったから刀花ちゃんに謝られても困惑するだけだったと思うけどね。
「というか、本当に謝るならあの真紅って子でしょうに、なんでアンタが謝りにくるのよ?あの真紅って子は?」
「私はなかったんですが、真紅ちゃんはまだ講義が残ってまして……真紅ちゃんを待ってる間に先輩方がお帰りになられる可能性がありましたので、私だけでも謝りにこようと思ったんです。私、真紅ちゃんの友達ですから。友達が迷惑をかけたのなら、それは私が迷惑をかけたのと同義です。だから、先輩方にはしっかりと謝っておきたかったんです」
刀花ちゃんは真剣な声色でそう口にする。
なんというか、とても律儀な子だ。
自分が行ったことじゃないのに、友達のために頭を下げにくるなんて。
だけど、その思いは理解できる。
刀花ちゃんにとって、真紅ちゃんはきっととても大切な友達なんだろう。
私も、例えば桜ちゃんが誰かに迷惑をかけてしまったら落ち着かなくて謝りに行くと思う。
だから、私は相変わらず申し訳なさそうな表情を浮かべたままの刀花ちゃんに笑顔で応えた。
「刀花ちゃんは優しいんだね。分かった、そういうことなら、ちゃんと謝罪は受け取っておくね。刀花ちゃんの気持ちは、私にも分かるから」

「⁉?ありがとうございます、栗原先輩⁉?」
「やれやれ、相変わらずね、遊花は」
笑い合う私達を、桜ちゃんは微笑ましいものを見るような目で見る。
さて、これで刀花ちゃんの用事は終わったんだと思うけど……私には少し気になっていることがある。
「ねぇねぇ、刀花ちゃんって高等部1年生の学年2位なんだよね?」
「えっと……はい、一応そういうことになっています。未熟な身で学年2位など、恥ずかしいのですが……」
そういって、刀花ちゃんは本当に恥ずかしそうに顔を伏せる。
「じゃあさじゃあさ、私とデュエルしない?学年1位の真紅ちゃんがあんなに強かったんだもん。学年2位の刀花ちゃんのデュエル、すっごく気になってたんだ⁉?」
「えっ?栗原先輩と、ですか?」
私の言葉に刀花ちゃんが驚いた表情を浮かべた。
あれ?そんなに驚くようなことを言ったかな?
私が首を傾げていると、桜ちゃんが呆れた表情で口を開いた。
「なんで刀花が驚いてるのか分からないって表情ね。本当に、自分の状況が特異だってことの自覚がないんだから」
「特異?」
「あのね、今の遊花にはデュエルで勝てば闇に挑戦できるって権利があるせいで、色んな奴が遊花とデュエルをすることを望んで、長蛇の列を作るぐらい待ってるのよ?そんな遊花からデュエルを挑まれるなんて、闇へ挑戦するチャンスが自分から転がってきてるようなものなの」
「あーそういうことになるんだ……あれ?じゃあ私からデュエルを挑んだら……」
「ある意味運がいいってことになるけど、待ち時間もなくデュエルができたってことで刀花は周りからの妬みが凄いでしょうね」
「やっぱり、そうなりますよね」
「ええっ⁉?そんなぁ……」

桜ちゃんの言葉に、刀花ちゃんは引き攣った笑みを浮かべ、私は思わず顔を顰めてしまう。
今の状況にまさかそんな弊害があるなんて思わなかった。
それじゃあしばらくの間、私は自分の好きにデュエルをしたらたくさん迷惑をかけちゃうの？
うぅ～刀花ちゃんのデュエルが見たいのに～‼？
「……あの、栗原先輩は私のデュエルが見たいんですよね？」
「えっ？うん、そうだけど……」
「なら、あの、宝月先輩に、お願いがあるのですが……」
「ん？私？」
「はい‼？あの、私とデュエルしていただけませんか‼？」
刀花ちゃんがどこか緊張した様子で桜ちゃんにデュエルを申し込む。
もしかして、私と直接デュエルしたら不味いから、桜ちゃんとデュエルをして私に刀花ちゃんのデュエルを見せようとしてくれてるのかな？
だけど、そのわりには凄く緊張してるみたいなんだけど……
そんな刀花ちゃんの様子に桜ちゃんは首を傾げながら応える。
「別に構わないし、理由も分かるけど、なんでそんなに緊張してるのよ？」
「その、ご存知だとは思うのですが、私達は栗原先輩と宝月先輩の期末試験でのデュエルを映像で見せていただいたんです」
「うぐっ……分かってたことではあるけど、あのデュエルが下級生に広まってるっていうのはダメージがデカいわね」
刀花ちゃんの言葉に、桜ちゃんは恥ずかしそうに頭を抱えて項垂れる。
刀花ちゃんは首を傾げているが、桜ちゃんの気持ちは凄く分かる。
あの期末試験での桜ちゃんとのデュエルは、私が神路祇君とデュエルすることをかけて、お互いに譲れない思いを込めて全力で戦ったデュエルだ。
だからこそ、あのデュエルはお互い感情のままにぶつかり、デュエ

ルの後には桜ちゃんは感極まって泣いてしまっていて、それが見られていると思うと頭も抱えたくなるよね。
「えっと、それで、そのデュエルを見せて貰った時から是非宝月先輩とデュエルして見たかったんです。あんな綺麗なデュエルをする宝月先輩と」
「綺麗？私のデュエルが？」
「はい‼？」
　自分のデュエルが綺麗と言われ、思わず顔を上げた桜ちゃんに刀花ちゃんは興奮したように何度も頷く。
「栗原先輩とのデュエルでの流れるようなカード捌きから生み出された完全なエクストラリンク。あんな綺麗なデュエル、初めて見ました。だから、そんな宝月先輩のデュエルと実際にデュエルしてみたいんです‼？」
「うっ……そんなきらきらした目で見られると照れるわね……この真っ直ぐさ、誰かさんの姿が重なるわ」
　そういって、桜ちゃんは何故か私の方をチラッと見て、観念したようにため息を吐いた。
「はぁ～分かったわ。デュエルしましょ、刀花。アンタの期待に応えれるかは、分からないけどね」
「‼？本当ですか⁉？ありがとうございます‼？」
「遊花も、それでいいかしら？」
「うん‼？刀花ちゃんのデュエルも見れるし、桜ちゃんがデュエルしてるところを見るのも私は大好きだから」
「っ～～～また恥ずかしいことを……ああもう‼？はじめるわよ、刀花‼？アンタの実力、私達に見せてみなさい‼？」
「は、はい‼？未熟な身ですが、精一杯ぶつからせていただきます‼？よろしくお願いいたします‼？」
　そういって、２人は距離をとるとデュエルディスクを起動し、デュエルの始まりを告げる言霊を発した。
『決闘‼？』

桜　ＬＰ８０００
刀花　ＬＰ８０００

ーーーーーー

●

「先攻は私です‼?・まずは永続魔法、サイバネットコーデックを発動‼?・さらに私はドラコネットを召喚します‼?・」

〈ドラコネット〉☆３　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１４００

刀花が最初に出してきたのはデータの身体を持つ小型のドラゴンのようなモンスターだった。
さて、１年生の学年２位の実力、しっかり見せて貰おうじゃない。
「ドラコネットの効果発動‼?・このカードが召喚に成功した時、手札・デッキからレベル２以下の通常モンスター１体を守備表示で特殊召喚します‼?・来てください、ビットロン‼?・」

〈ビットロン〉☆２　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２０００

ドラコネットが電波を飛ばすと、その電波をキャッチして白い羽根を持つ小さな球体のモンスターが現れた。
そして刀花は正面に手をかざす。
「現れて‼?・未来を描くサーキット‼?・」
「リンク召喚ね」
刀花の正面に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は通常モンスター１体‼?・私はビットロンをリンクマーカーにセット‼?・サーキットコンバイン‼?・リンク召喚‼?・リンク

1‼?リンクスパイダー‼?」

〈リンクスパイダー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１０００　←

ビットロンがサーキットの中に吸い込まれていき、代わりに機械の蜘蛛がサーキットの中から現れる。
「リンクスパイダーの効果発動‼?1ターンに1度、自分メインフェイズに手札からレベル4以下の通常モンスター1体をこのカードのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚する‼?来てください、デジトロン‼?」

〈デジトロン〉☆2　サイバース族　地属性
ＤＥＦ０

リンクスパイダーがデータの糸を吐き出すと、その糸に釣られてビットロンに似た角を持つ小さな球体のモンスターが現れた。
「次、行きます‼?現れて‼?未来を描くサーキット‼?」
「連続リンク召喚……」
刀花の正面に再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は効果モンスター2体‼?私はリンクスパイダーとドラコネットをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?リンク召喚‼?戦いの始まりを告げる電子の騎士‼?リンク2‼?コードトーカー‼?」

〈コードトーカー〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１３００　→←

サーキットから現れたのは無色の鎧を纏う騎士。
「この瞬間、永続魔法、サイバネットコーデックの効果発動‼?コードトーカーモンスターがＥＸデッキから自分フィールドに特殊召喚さ

れた場合、そのモンスター1体を対象としてそのモンスターと同じ属性のサイバース族モンスター1体をデッキから手札に加えます!!?ただし、このターン、同じ属性のモンスターを自分のサイバネットコーデックの効果で手札に加える事はできず、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はサイバース族モンスターしかＥＸデッキから特殊召喚できません。さらにこのカード名の効果は同一チェーン上では1度しか発動できません」

「成る程ね。刀花のデッキはサイバース族、特にそのコードトーカーモンスターが軸になってるってわけね……それにしても、刀花の名前でそのデッキは狙いすぎじゃない？そりゃ真紅に”深淵の話し手（アビストーカー）”なんて呼ばれるわよ」

「うぐっ!!?い、言わないでください!!?私だって少し気にしてるんですから!!?でも、これお父さんから貰ったデッキですし、今更使うのを止めるのなんて……」

「あー刀花が使ってることを否定するつもりはないわよ？悪かったわね、気にしてることに触れちゃって」

想像以上に刀花が傷ついた表情を浮かべたので、私は罰が悪く思いながら謝る。

そんな私に、刀花は慌てて手と首をブンブンと振る。

「い、いえいえ!!?宝月先輩が謝る必要なんてありません!!?私だって自覚はしてますから!!?そ、それよりもデュエルを続けますね!!?サイバネットコーデックの効果でデッキから闇属性のサイバース族モンスター、マイクロコーダーを手札に加えます!!?まだまだ行きます!!?現れて!!?未来を描くサーキット!!?」

「またリンク召喚か……」

「召喚条件はサイバース族モンスター2体以上!!?この瞬間、手札のマイクロコーダーの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、自分フィールドのサイバース族モンスターをコードトーカーモンスターのリンク素材とする場合、手札のこのカードもリンク素材にできます!!?」

「っ!!?手札からリンク素材にできるモンスター!!?」

「私は手札のマイクロコーダーとコードトーカーを2体分として扱ってリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?」
　刀花の手札からコードトーカーを更に小さくしたような騎士が、フィールドからコードトーカーが2体に分身してサーキットに吸い込まれる。
　そしてサーキットが輝くと中から現れたのは巨大な盾を持つ透き通った水色の鎧を纏った騎士。
「リンク召喚‼?勝利を導く守護騎士‼?リンク3‼?エンコードトーカー‼?」

〈エンコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　光属性
ＡＴＫ２３００　→←↘?

「今度は光属性のコードトーカーか」
「再び永続魔法、サイバネットコーデックの効果、それにチェーンしてマイクロコーダーの効果発動‼?同名カードは1ターンに1度、コードトーカーモンスターのリンク素材として手札・フィールドから墓地へ送られた場合、デッキからサイバネット魔法・罠カード1枚を手札に加え、フィールドのこのカードを素材とした場合にはその1枚をサイバース族・レベル4モンスター1体にできます。私はデッキから永続魔法、サイバネットオプティマイズを手札に加えます。さらにサイバネットコーデックの効果でデッキから光属性のサイバース族モンスター、サイバースガジェットを手札に加えます‼?」
「連続リンク召喚をしてるハズなのに手札がなかなか減らないわね……」
「私は今手札に加えた永続魔法、サイバネットオプティマイズを発動し、その効果を発動‼?同名カードは1ターンに1度、自分メインフェイズにサイバース族モンスター1体を召喚します‼?ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はサイバース族モンスターしかＥＸデッキから特殊召喚できません」
「っ、また召喚ができるのね。おまけにその縛りなんてあってないよ

うなものじゃない」
「私はバランサーロードを召喚します!!?」
「げっ!!?そのモンスターは……」

〈バランサーロード〉☆４　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１７００

現れたのはデータの身体を持つ戦士のモンスター。
この状況で出てくるのは、少し辛いわね。
「バランサーロードの効果発動!!?1ターンに1度、ライフポイントを１０００払ってこのターン自分は通常召喚に加えて1度だけ、自分メインフェイズにサイバース族モンスター1体を召喚できます!!?私はライフポイントを１０００払って、サイバースガジェットを召喚します!!?」

刀花　ＬＰ８０００→７０００

〈サイバースガジェット〉☆４　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００

現れたのは頭にガジェットをつけたロボットのモンスター。
「サイバースガジェットの効果発動!!?このカードが召喚に成功した時、自分の墓地のレベル２以下のモンスター1体を対象としてそのモンスターを守備表示で特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化されます。戻って来てください、マイクロコーダー!!?」

〈マイクロコーダー〉☆1　サイバース族　闇属性
ＤＥＦ０

これで刀花のフィールドには一気にモンスターが並んだ。

これは、また来るわね。
「現れて‼?・未来を描くサーキット‼?・」
「まあ、そうよね」
「召喚条件は効果モンスター２体以上‼?・私はバランサーロード、サイバースガジェット、マイクロコーダーをリンクマーカーにセット‼?・サーキットコンバイン‼?・」
バランサーロード、サイバースガジェット、マイクロコーダーがサーキットに吸い込まれる。
そしてサーキットが輝くと中から現れたのは巨大な銃を持つ橙色の鎧を纏った騎士。
「リンク召喚‼?・騎士達を纏める騎士団長‼?・リンク３‼?・トランスコードトーカー‼?・」

〈トランスコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　地属性
ＡＴＫ２３００　→←↓

「次は地属性のコードトーカーか」
「再び永続魔法、サイバネットコーデックの効果、それにチェーンしてサイバースガジェットの効果発動‼?・同名カードは１ターンに１度、このカードがフィールドから墓地へ送られた場合、自分フィールドサイバース族、光属性、レベル２、攻撃力守備力０のガジェットトークン１体を特殊召喚します‼?・来てください、ガジェットトークン‼?・」

〈ガジェットトークン〉☆２　サイバース族　地属性
ＤＥＦ０

刀花のフィールドにサイバースガジェットが頭につけていたガジェットが現れる。
「さらにサイバネットコーデックの効果でデッキから地属性のサイバース族モンスター、コードジェネレーターを手札に加えます‼?・」

「っ、本当に手札が全然減らないわね」
「そしてトランスコードトーカーの永続効果、ブリリアントコマンダー!!?このカードが相互リンク状態の場合、このカード及びこのカードの相互リンク先のモンスターの攻撃力は５００ポイントアップし、相手の効果の対象になりません!!?」

トランスコードトーカー
ＡＴＫ２３００→２８００

エンコードトーカー
ＡＴＫ２３００→２８００

「更にトランスコードトーカーの効果発動!!?リターンコマンド!!?同名カードは１ターンに１度、トランスコードトーカー以外の自分の墓地のリンク３以下のサイバース族リンクモンスター１体を対象としてそのモンスターをこのカードのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚する!!?ただし、この効果を発動するターン、自分はサイバース族モンスターしか特殊召喚できません!!?戻って来てください、コードトーカー!!?」

〈コードトーカー〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１３００　→←

再びフィールドにコードトーカーが舞い戻る。
これは、まだしばらくは終わりそうにないわね。
「まだ止まりません!!?現れて!!?未来を描くサーキット!!?」
刀花の正面にこのターン６回目のサーキットが現れる。
「召喚条件はモンスター３体!!?私はデジトロン、ガジェットトーク ン、コードトーカーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
デジトロン、ガジェットトークン、コードトーカーがサーキットに

吸い込まれる。
　そしてサーキットが輝くと中から現れたのは手甲状のパーツからクワガタムシの顎のような爪が伸びた燃えるような赤色の鎧を纏った騎士。
「リンク召喚!!?・全てを打ち砕く豪胆なる騎士!!?・リンク３!!?・パワーコードトーカー!!?・」

〈パワーコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　炎属性
　ＡＴＫ２３００→２８００　↙?・↑→

「お次は炎属性のコードトーカー……そろそろ止まって欲しいところね」
「永続魔法、サイバネットコーデックの効果発動!!?・デッキから炎属性のサイバース族モンスター、デグレネードバスターを手札に加えます!!?・そして私は墓地にいるバランサーロードとドラコネットを除外してデグレネードバスターを特殊召喚します!!?・」

〈デグレネードバスター〉☆7　サイバース族　炎属性
　ＡＴＫ２５００

　現れたのは両肘にドリルをつけたロボットのモンスター。
「そして除外されたバランサーロードの効果発動!!?・このカードが除外された場合、手札からレベル４以下のモンスター１体を特殊召喚します!!?・来てください、コードジェネレーター!!?・」

〈コードジェネレーター〉☆3　サイバース族　地属性
　ＡＴＫ１３００

　現れたのはトランスコードトーカーを小型化したようなモンスター。
「そして現れて!!?・未来を描くサーキット!!?・」

「まだ続くわよね……」
「召喚条件はサイバース族モンスター２体!!?私はデグレネードバスターとコードジェネレーターをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?戦いの終局を告げる電子の騎士!!?リンク２!!?コードトーカーインヴァート!!?」

〈コードトーカーインヴァート〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１３００　←↓

サーキットから現れたのはコードトーカーに似た白銀の鎧を纏う騎士。
「コードトーカーインヴァートの効果、それにチェーンしてコードジェネレーターの効果発動!!?このカードがコードトーカーモンスターのリンク素材として手札・フィールドから墓地へ送られた場合、デッキから攻撃力１２００以下のサイバース族モンスター１体を墓地へ送り、そしてフィールドのこのカードを素材とした場合には墓地へ送らず手札に加える事もできます!!?私はデッキからドングルドングリを手札に加えます!!?そしてコードトーカーインヴァートの効果発動!!?このカードがリンク召喚に成功した場合に、手札からサイバース族モンスター１体をこのカードのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚します!!?来てください、ドングルドングリ!!?」

〈ドングルドングリ〉☆１　サイバース族　闇属性
ＤＥＦ０

インヴァートに導かれフィールドに現れたのはＵＳＢコネクタにドングリがくっ付いているようなモンスター。
「ドングルドングリの効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、自分フィールドにサイバース族・闇属性・レベル１・攻撃力守備力０のドングルトークン１体を特殊召喚します!!?来てください、

ドングルトークン!!?」

〈ドングルトークン〉☆1　サイバース族　闇属性
ＤＥＦ０

ドングルドングリがＵＳＢコネクタから外れりと、ＵＳＢコネクタがそのままトークンとしてモンスターに変わる。
このフィールド……嫌な予感がしてきたわね。
「あと少し!!?現れて!!?未来を描くサーキット!!?」
刀花の正面に現れるのはこのターン８回目のサーキット。
「召喚条件はサイバース族モンスター２体以上!!?私はドングルトークン、コードトーカーインヴァートを２体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
ドングルトークンとインヴァート２体に分身してサーキットに吸い込まれる。
そしてサーキットが輝くと中から現れたのは巨大な緑色の鎧を纏った魔導騎士。
「リンク召喚!!?戦場に終焉をもたらす叡智の騎士!!?リンク３!!?エクスコードトーカー!!?」

〈エクスコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　風属性
ＡＴＫ２３００　↑→↓

「今度は風属性のコードトーカー……」
「永続魔法、サイバネットコーデックの効果、それにチェーンしてエクスコードトーカーの効果発動!!?ヴァイアビィラティクローズ!!?このカードがリンク召喚に成功した時、ＥＸモンスターゾーンのモンスターの数だけ、使用していないメインモンスターゾーンを指定して指定したゾーンはこのモンスターが表側表示で存在する間は使用できません!!?」
「っ!!?モンスターゾーンを封じる効果!!?」

「私が指定するのはエンコードトーカーの正面、エンコードトーカーのリンクマーカーが向いているゾーンを指定します!!?」
エクスコードがエンコードの正面にある私のゾーンに重力場を放ち、エンコードの正面のゾーンを消失させた。
エンコードのリンクマーカー先へのＥＸデッキからの特殊召喚を封じてきた。
そして刀花のフィールドにはまだドングリが残っている。
ということは、刀花の狙いは……
「サイバネットコーデックの効果でデッキから風属性のサイバース族モンスター、ガベージコレクターを手札に加えます!!?これで最後です!!?現れて!!?未来を描くサーキット!!?」
刀花の正面にこのターン最後のサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル２以下のサイバース族モンスター１体!!?私はドングルドングリをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク１!!?トークバックランサー!!?」
〈トークバックランサー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１２００　←

もう１つのエクストラモンスターゾーンに緑と青の鎧を着た槍兵が現れる。
これで、刀花のモンスターは全て相互リンクで繋がった。
「やっぱり、狙いはエクストラリンクだったのね」
「エクスコードトーカーの効果に頼ってエンコードトーカーのリンクマーカーを封じてるので宝月先輩みたいな完璧なエクストラリンクではありませんが、これで宝月先輩のＥＸデッキは完全に封じました!!?」
やりきった表情で嬉しそうに刀花がそう告げる。
「私みたいに完璧じゃない……ね」
その言葉に私は思わず苦笑いを浮かべてしまう。
私のエクストラリンクはトーチゴーレムとカグヤ、そしてファイア

ウォールの効果を使って強引に行ったものだ。
それに引き換え刀花のエクストラリンクはサーチや特殊召喚を繰り返し、リンク３であるコードトーカーモンスターを並べて堅実に完成させたものだ。
完成度で言えば、間違いなく刀花のエクストラリンクの方が上だ。
これが高等部１年、学年２位の実力……
「さらにエクスコードトーカーの永続効果、ダブルコネクト!!?このカードのリンク先のモンスターは、攻撃力が５００ポイントアップし、効果では破壊されません!!?」

パワーコードトーカー
ＡＴＫ２８００→３３００

トークバックランサー
ＡＴＫ１２００→１７００

「私だけが宝月先輩のデッキを把握しているのも不公平なので、改めて私の布陣を説明しておきます。トランスコードトーカーの永続効果でトランスコードトーカー及びトランスコードトーカーの相互リンク先のモンスターの攻撃力は５００ポイントアップし、相手の効果の対象にならず、エクスコードトーカーの永続効果で、エクスコードトーカーのリンク先のモンスターは、攻撃力が５００ポイントアップし、効果では破壊されません。さらにエンコードトーカーの効果、リフレクトサンクチュアリで、１ターンに１度、このカードのリンク先の自分のモンスターが、そのモンスターより攻撃力が高い相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算前に、その自分のモンスターはその戦闘では破壊されず、その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは０になり、そのダメージ計算後、このカードまたはこのカードのリンク先の自分のモンスター１体を選び、その攻撃力をターン終了時まで、その戦闘を行った相手モンスターの攻撃力分アップします。またパワーコードトーカーの効果、マキシマムインクリースは１ターンに１

度、パワーコードトーカーが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時に、パワーコードトーカーのリンク先の自分のモンスター1体をリリースし、このカードの攻撃力はそのダメージ計算時のみ、元々の攻撃力の倍になります」
「つまり、エンコードトーカー、トランスコードトーカー、パワーコードトーカーは戦闘破壊も効果による除去も難しいってわけね」
「さらにパワーコードトーカーのもう1つの効果、リストラクションブレイクは1ターンに1度、フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてそのモンスターの効果をターン終了時まで無効にし、永続魔法サイバネットオプティマイズには自分のコードトーカーモンスターが戦闘を行う場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠・モンスターの効果を発動できなくなります」
「効果無効まであるなら本格的に戦闘でどうにかするのは厳しいわね」
「そしてトランスコードトーカーの効果で同名カードは1ターンに1度、トランスコードトーカー以外の自分の墓地のリンク3以下のサイバース族リンクモンスター1体を対象としてそのモンスターをトランスコードトーカーのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚し、トークバックランサーもこのカード以外の自分フィールドのサイバース族モンスター1体をリリースし、そのモンスターと元々のカード名が異なる自分の墓地のコードトーカーモンスター1体を対象としてそのモンスターをこのカードのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚する効果があります」
「っ、面倒な効果ばかり……少し破壊したぐらいじゃ蘇生させて元通りってわけね……」
「私はこれでターンエンドです」

桜　ＬＰ８０００　手札５
ーーーーー　ー
ー×ーーー
☆　☆

ー☆☆☆ー
ー△△ーー　　ー
刀花　ＬＰ７０００　手札２

「本当に、大したものね。高等部１年でこれだけのことができるなら、確かに学年２位にだってなれるわ」
「えへへ、ありがとうございます」
刀花が照れたように笑う。
確かに刀花の布陣は強力だ。
エクストラリンクが成立してるし、それぞれのコードトーカー達がお互いを強化し、その布陣をより強固にしている。
だけどーーー
「だけど、私だって上級生としてのプライドがあるの。私と遊花のデュエルを見せて貰ったみたいだけど、あのデュエルで私の全てを見せれたわけじゃないし、私だってあのデュエルの時から成長してる。それに……教えてあげるわ。私はエクストラリンクを使うけど、私にはエクストラリンクは効かないってことを」
「……えっ？」
私の言葉に刀花は目を丸くする。
そんな刀花に、私は好戦的な笑みを浮かべて勢いよくカードを引き抜いた。
「そのエクストラリンク、壊させて貰うわよ!!？私のターン、ドロー!!？私は刀花のエンコードトーカーをリリースし、海亀壊獣ガメシエルを刀花のフィールドに攻撃表示で特殊召喚!!？」
「っ!!？エンコードトーカー!!？」

〈海亀壊獣ガメシエル〉☆８　水族　水属性
ＡＴＫ２２００

エンコードを喰らい、刀花のフィールドに巨大な亀が現れる。
「私のモンスターをリリースして私のフィールドにモンスターを

……」

刀花が現れたガメシエルを見て目を見開いく。

やっぱり、刀花は私の壊獣の効果を知らなかったみたいね。

刀花は私と遊花のデュエルを見せられたらしいけど、私は期末試験での遊花とのデュエルでは壊獣達の効果を使っていなかった。

何故なら、私の戦略を知っている遊花が私にヘルテンペストを使わせないためにフィールドにモンスターを残さないように動いていたからだ。

だからこそ、あのデュエルで壊獣の効果を使用する機会は最後までなかったんだけど、それがこんな形で役に立つなんてね。

「っ‼？エンコードトーカーがリリースされたということは‼？」

「これで刀花のエクストラリンクは壊れたわ。まずは行くわよ、相棒‼？月より来たる永遠の姫‼？妖精伝姫（フェアリーテイル）―カグヤを召喚‼？」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性

ＡＴＫ１８５０

現れたのは月のマークが入っている扇子を持ったお姫様。

カグヤは挨拶をするように私に扇子をひらひらと振ってにこやかに笑うのを見て、私は思わず顔を顰める。

「……妖精伝姫―カグヤの効果発動！召喚に成功した時、デッキから攻撃力１８５０の魔法使い族モンスター１体を手札に加える。私は２体目の妖精伝姫―カグヤを手札に加えるわ。妖精伝姫―カグヤの効果発動‼？アンリーゾナブルディマンド‼？１ターンに１度、相手フィールドの表側表示モンスター１体を対象として発動‼？相手はそのモンスターの同名カード１枚を自身のデッキ・ＥＸデッキから墓地へ送ってこの効果を無効にできる。墓地へ送らなかった場合、このカードと対象のモンスターを持ち主の手札に戻す。この効果は相手ターンでも発動できるわ。対象は勿論、海亀壊獣ガメシエルよ」

「っ、私のデッキに海亀壊獣ガメシエルは入ってません……」

刀花がそう宣言するとカグヤがガメシエルに向かって歩いていき、

その巨体を軽々と持ち上げ、私に向けて放り投げるとガメシエルはカードとして手札に戻り、カグヤもドヤ顔で胸を張りながら私の手札に戻っていった。
その姿を見て、私は思わず頭を抱える。
……やっぱり最近カグヤが意思を持って動いてる気がするのよね。
疲れてるのかしら、私。
「宝月先輩？」
突然頭を抱えた私を見て、刀花が心配そうに首を傾げる。
……色々思うところはあるけれど、刀花に心配かけるわけにもいかないわね。
「……何でもないわ。続けるわよ？私は刀花のトランスコードトーカーをリリースし、再び海亀壊獣ガメシエルを特殊召喚‼？」
「っ、トランスコードトーカーまで……」

〈海亀壊獣ガメシエル〉☆８　水族　水属性
ＡＴＫ２２００

トランスコードを喰らい、刀花のフィールドに再びガメシエルが現れる。
「トランスコードトーカーがいなくなったことでパワーコードトーカーの攻撃力も下がるわね」

パワーコードトーカー
ＡＴＫ３３００→２８００

「次行くわよ、手札の転生炎獣（サラマングレイト）ウルヴィーを捨てて、魔法カード、サイバネットマイニング‼？同名カードは１ターンに１度、手札を１枚墓地へ送って発動できる。デッキからレベル４以下のサイバース族モンスター１体を手札に加えるわ‼？私はデッキから転生炎獣（サラマングレイト）ガゼルを手札に加えるわ‼？」

「転生炎獣？聞いたことがないサイバース族モンスターですね」
「そして今手札に加えた転生炎獣ガゼルの効果発動!!？1ターンに1度転生炎獣ガゼル以外のサラマングレイトモンスターが自分の墓地に送られた場合、このカードを手札から特殊召喚する!!？」

〈転生炎獣ガゼル〉☆3　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１０００

私のフィールドに現れるのは炎を纏ったガゼルのモンスター。
「転生炎獣ガゼルのもう1つの効果発動!!？1ターンに1度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから転生炎獣ガゼル以外のサラマングレイトカード1枚を墓地に送る。私はデッキから転生炎獣（サラマングレイト）スピニーを墓地に送るわ!!？」
「また転生炎獣……」
「墓地に存在する転生炎獣スピニーの効果発動!!？自分フィールドに転生炎獣スピニー以外のサラマングレイトモンスターが存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚する!!？ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外されるわ!!？」

〈転生炎獣スピニー〉☆3　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１５００

私の墓地からガゼルに寄り添うように炎を纏ったアルマジロトカゲが現れる。
私はそれを見て正面に手をかざす。
「私の新しい力、存分に見せてあげるわ!!？私はレベル3の転生炎獣ガゼルと転生炎獣スピニーでオーバーレイ!!？2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!？エクシーズ召喚!!？」
「エクシーズ召喚!?？」
ガゼルとスピニーが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれ

る。
　そして渦が爆けると空から舞い降りるのは炎を纏った荒馬。
「さあ、初陣よ!!?輪廻を駆ける幻想の荒馬!!?転生炎獣(サラマングレイト)ミラージュスタリオ!!?」
〈転生炎獣ミラージュスタリオ〉★3　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２０００
「サイバース族のエクシーズモンスター……」
「転生炎獣ミラージュスタリオの効果発動!!?シードオブファイア!!?オーバーレイユニットを1つ取り除いてデッキからサラマングレイトモンスター1体を守備表示で特殊召喚する!!?ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は炎属性以外のモンスターの効果を発動できないわ。私はデッキから転生炎獣(サラマングレイト)フェネックを特殊召喚するわ!!?」
〈転生炎獣フェネック〉☆3　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ２００
　ミラージュスタリオが嘶くとその声に誘われて炎のついた尻尾を持つ狐が姿を現わす。
「そして、行くわよ!!?繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」
「!!?ここでリンク召喚!!?」
「召喚条件は炎属性の効果モンスター2体!!?私は転生炎獣ミラージュスタリオと転生炎獣フェネックをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?転生炎獣(サラマングレイト)サンライトウルフ!!?」
〈転生炎獣サンライトウルフ〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１８００　←→

ミラージュスタリオとフェネックがサーキットに吸い込まれ、代わりに炎を纏った機械的な狼が現れる。
「何でせっかく出したエクシーズモンスターを使ってリンク召喚を……」
「勿論、意味があるからよ。転生炎獣フェネックの効果、それにチェーンして転生炎獣ミラージュスタリオの効果発動!!?バックドラフト!!?エクシーズ召喚したこのカードがサラマングレイトリンクモンスターのリンク素材として墓地へ送られた場合、フィールドのモンスター1体を対象としてそのモンスターを持ち主の手札に戻す!!?」
「えっ!!?リンク素材にされた時に効果を発動させるエクシーズモンスター!!?」
「対象はエクスコードトーカー!!?」
リンク素材として消えたハズのミラージュスタリオが炎でできた幻影となって現れ、エクスコードトーカーを吹き飛ばす。
「エクスコードトーカーがいなくなったことで私の使用不能ゾーンは解除され、パワーコードトーカーとトークバックランサーの攻撃力も下がるわ」

パワーコードトーカー
ＡＴＫ２８００→２３００

トークバックランサー
ＡＴＫ１７００→１２００

「そして転生炎獣フェネックの効果発動!!?このカードがリンク２以上のサイバース族リンクモンスターのリンク素材として墓地へ送られた場合、デッキからサラマングレイト通常魔法カード1枚を手札に加える。私はデッキからフュージョンオブファイアを手札に加えるわ。このカードはルール上サラマングレイトカードとしても扱うからサーチすることができるわ」
「フュージョン……まさか、融合魔法!!?」

「ご名答よ。魔法カード、フュージョンオブファイア!!?自分の手札及び自分・相手フィールドからサラマングレイト融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚するわ!!?私は手札の転生炎獣（サラマングレイト）Ｊジャガーと刀花のパワーコードトーカーを融合!!?」

「っ!??私のモンスターを使って融合召喚!??」

私の手札から現れた炎を纏ったジャガーとパワーコードが稲妻を纏った炎の渦に呑み込まれていく。

「炎を纏し獣よ、豪胆なる騎士と交わりて、新たな世界に、生命の炎を灯せ!!?融合召喚!!?」

そして渦が弾けると、フィールドに降り立つのは全身から紫炎を撒き散らす紫色の魔獣。

「紫炎を司る古の魔獣!!?転生炎獣（サラマングレイト）ヴァイオレットキマイラ!!?」

〈転生炎獣ヴァイオレットキマイラ〉☆８　サイバース族　炎属性

ＡＴＫ２８００

「今度はサイバース族の融合モンスター……」

「転生炎獣ヴァイオレットキマイラの効果にチェーンして転生炎獣サンライトウルフの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードのリンク先にモンスターが召喚・特殊召喚された場合、自分の墓地から炎属性モンスター1体を選んで手札に加える!!?ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できない。私は墓地の転生炎獣ウルヴィーを手札に加えるわ。転生炎獣ヴァイオレットキマイラの効果発動!!?リインカネーションブレイズ!!?このカードが融合召喚に成功した場合に、このカードの攻撃力はターン終了時まで、素材としたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値の半分だけアップする!!?私が素材にしたのは攻撃力１８００の転生炎獣Ｊジャガーと攻撃力２３００のパワーコードトーカー!!?よって転生炎獣ヴァイオレットキマイラの攻撃力は２１００ポイントアップするわ!!?」

転生炎獣ヴァイオレットキマイラ
ＡＴＫ２８００→４９００

「攻撃力４９００……⁉？」
「そして墓地から手札に加わった転生炎獣ウルヴィーの効果発動⁉？このカードが効果で自分の墓地から手札に加わった場合、このカードを相手に見せ、自分の墓地の炎属性モンスター1体を対象としてそのモンスターを手札に加えるわ。私は墓地から転生炎獣ガゼルを手札に加えるわ」
「うぅ、全然手札が減りません……」
「それはアンタもでしょうが……行くわよ、バトル⁉？転生炎獣サンライトウルフでトークバックランサーを攻撃⁉？サンライトオーバードライブ⁉？」
　サンライトウルフが炎を纏った拳でトークバックに殴りかかる。
　しかし、その拳がトークバックに触れようとした瞬間、トークバックが持っていた槍が黄色の蛇に変わり、サンライトウルフを吹き飛ばした。
「手札からプロフィビットスネークの効果を発動⁉？自分のサイバース族リンクモンスターが相手モンスターと戦闘を行うダメージステップ開始時に、このカードを手札から墓地へ送ってその相手モンスターを持ち主の手札に戻します⁉？」
「っ⁉？そんなモンスターが……海亀壊獣ガメシエルは残っちゃうわね。でも、トークバックランサーを残すわけにはいかない……リンクモンスターだけでも殲滅するわ⁉？転生炎獣ヴァイオレットキマイラでトークバックランサーを攻撃⁉？インフュアリエイティングインレジュメント⁉？」
　紫炎を纏ったヴァイオレットキマイラが1つの弾丸となり、トークバックを貫く。
　身体を貫かれたトークバックは、その熱量で内側から身体を溶かされ跡形もなく消滅した。

刀花　ＬＰ７０００→３３００

「うぅ……凄い……やっぱり、宝月先輩、強いです。私のエクストラリンクをあんな方法で突破されるなんて、思っても見ませんでした」

そういって、刀花がどこか嬉しそうに笑う。

そんな刀花の様子に首を傾げながら、私は思わず刀花に問いかける。

「何だか嬉しそうね。状況としては刀花の方が不利だと思うんだけど？」

「確かに、戦況は私の方が不利です。サイバネットコーデックもサイバネットオプティマイズだって残ってますが、手札はガベージコレクターしか残ってません。それでも、宝月先輩とのデュエルは凄く楽しいんです。宝月先輩は、私が思ってた通りの……いえ、私の先を行く凄い決闘者ですから」

「っ……」

そういって刀花が心底楽しそうな笑顔を浮かべる。

私はその心底楽しそうな笑顔を見て、思わずデュエルを観戦している遊花に視線を向ける。

遊花は、胸の前で小さな拳を握りしめながら、楽しそうに私達のデュエルを見ていた。

……やっぱり、重なるわね。

刀花の姿に、遊花の姿が。

「だから、負けちゃうかも知れませんけど、最後まで諦めないでデュエルします。私の全力が宝月先輩にどれだけ通用するのか、試して見たいんです‼？」

「……そう。なら、精一杯刀花の全力をぶつけなさい。先輩らしく、正面から刀花を受け止めてあげるわ」

「‼？はい、お願いします‼？」

「メインフェイズ２、カードを１枚伏せてターンエンドよ。エンド

フェイズ、転生炎獣ヴァイオレットキマイラの攻撃力は元に戻るわ」

転生炎獣ヴァイオレットキマイラ
ＡＴＫ４９００→２８００

ヴァイオレットキマイラが纏っていた炎が消え、攻撃力が元に戻る。

刀花の目は、まだ死んでいない。

いや、死んでいないどころかデュエルが始まった時よりも輝きを増している。

このデュエルは、間違いなくここからが本番だ。

だけど、こんな私に憧れてくれている刀花に、こんな私を見守ってくれている遊花に、無様なところなんて見せられない。

だから、例え刀花がどんな戦術を繰り出してこようとも、その戦術を超えてみせるわ!!?

桜　ＬＰ８０００　手札４
ー▲ー　ー
ー○ーー
ー　ー
○ーーー
ー△ー　ー
刀花　ＬＰ３３００　手札１

第６１話　全てを壊す獣の姫

●

桜　ＬＰ８０００　手札４
ー ー ▲ ー ー　　ー
ー ○ ー ー ー
　　ー　　ー
○ ー ー ー ー
ー △ △ ー ー　　ー
刀花　ＬＰ３３００　手札１

「私のターン、ドロー!!?……これなら、まだ可能性があります!!?
私はガベージコレクターを召喚します!!?」

〈ガベージコレクター〉☆２　サイバース族　風属性
ＡＴＫ１００

現れたのはゴミ箱のような姿をしたモンスター。
「さらに１ターンに１度、自分フィールドにサイバース族モンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できます!!?来てください、バックアップセクレタリー!!?」

〈バックアップセクレタリー〉☆３　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１２００

ガベージコレクターの近くに電子的な外見をした秘書のモンスターが現れる。
これで刀花の手札は無くなった。

だけど、あの感じはすぐにリンク召喚ってわけじゃなさそうね。
「ガベージコレクターの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカード以外の自分フィールドのサイバース族モンスター1体を持ち主の手札に戻し、手札に戻ったモンスターと同じレベルでカード名が異なるサイバース族モンスター1体をデッキから特殊召喚します!!?私はバックアップセクレタリーを手札に戻してデッキからフレイムバッファローを特殊召喚します!!?」

〈フレイムバッファロー〉☆3　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１４００

セクレタリーの姿がデータに変わってガベージコレクターに吸い込まれ、代わりに青い炎を纏ったバッファローが現れる。
「……行きますよ、宝月先輩。私の切り札、お見せします!!?」
「!!?ええ、あなたの全力、見せて見なさい!!?」
「行きます!!?現れて!!?未来を描くサーキット!!?」
刀花の正面に再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は効果モンスター2体以上!!?私はガベージコレクター、フレイムバッファロー、海亀壊獣ガメシエルをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
ガベージコレクターとフレイムバッファロー、ガメシエルがサーキットに吸い込まれる。
そしてサーキットが輝くと中から現れたのは漆黒の鎧を纏った騎士。
「リンク召喚!!?絆の象徴たる黒衣の騎士!!?リンク3!!?デコードトーカー!!?」

〈デコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ２３００　↙?↘?

「デコードトーカー……そのモンスターが刀花の切り札なのね」

「永続魔法、サイバネットコーデックの効果、それにチェーンしてフレイムバッファローの効果発動!!?表側表示のこのカードがフィールドから離れた場合、手札からサイバース族モンスター1体を捨て、自分はデッキから2枚ドローします!!?私はバックアップセクレタリーを捨ててカードを2枚ドローします!!?」

「ここで2枚ドローか……」

「さらに永続魔法、サイバネットコーデックの効果発動!!?デッキから闇属性のサイバース族モンスター、SIMMタブラスを手札に加えます!!?そして手札に加えたSIMMタブラスの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、手札のこのカードを相手に見せ、自分の墓地のサイバース族・レベル4モンスター1体を対象としてリンク状態の自分のリンクモンスターのリンク先となる自分フィールドにこのカードを手札から特殊召喚し、対象のモンスターを手札に戻します!!?私は墓地からサイバースガジェットを手札に戻し、SIMMタブラスを特殊召喚します!!?」

〈SIMMタブラス〉☆5　サイバース族　闇属性
DEF1800

フィールドに現れたのは機械的な身体を持つバクのモンスター。
そして今サイバースガジェットを回収されたということは……

「永続魔法、サイバネットオプティマイズの効果発動!!?サイバースガジェットを召喚します!!?」

〈サイバースガジェット〉☆4　サイバース族　光属性
ATK1400

「さらにサイバースガジェットの効果発動!!?墓地より戻って来てください、マイクロコーダー!!?」

〈マイクロコーダー〉☆1　サイバース族　闇属性

ＤＥＦ０

これで再び刀花のフィールドにモンスターが並んだ。

「行きます‼？現れて‼？未来を描くサーキット‼？召喚条件はサイバース族モンスター２体以上‼？私はＳＩＭＭタブラス、サイバースガジェット、マイクロコーダーをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？もう１度お願いします‼？リンク３‼？エクスコードトーカー‼？」

〈エクスコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　風属性

ＡＴＫ２３００　↑→↓

「またエクスコードトーカー……」

「永続魔法、サイバネットコーデックの効果、それにチェーンしてサイバースガジェット、さらにチェーンしてマイクロコーダー、最後にチェーンしてエクスコードトーカーの効果発動‼？ヴァイアビィラティクローズ‼？私が指定するのはもう１つのエクストラモンスターゾーンの真下のゾーン指定します‼？」

「これでリンクマーカーが下だとその先にはＥＸデッキからモンスターが出せないのね」

「次にマイクロコーダーの効果でフィールドから墓地へ送られたため、デッキからレベル４・サイバース族のコードラジエーターを手札に加えます。さらにサイバースガジェットの効果で、来てください、ガジェットトークン‼？」

〈ガジェットトークン〉☆２　サイバース族　地属性

ＤＥＦ０

「最後にサイバネットコーデックの効果でデッキから風属性のサイバース族モンスター、リンクインフライヤーを手札に加えます‼？そしてリンクインフライヤーはフィールドのリンクモンスターのリン

ク先となる自分フィールドに手札から特殊召喚できます!!?来てください、リンクインフライヤー!!?」

〈リンクインフライヤー〉☆2　サイバース族　風属性
ＤＥＦ１８００

デコードのリンク先に凧のようなモンスターが現れる。
「まだ行きます!!?現れて!!?未来を描くサーキット!!?」
「っ、まだリンク召喚に繋がるのね」
「召喚条件はサイバース族モンスター2体以上!!?この瞬間、手札のコードラジエーターの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、自分フィールドのサイバース族モンスターをコードトーカーモンスターのリンク素材とする場合、手札のこのカードもリンク素材にできます!!?」
「また手札からリンク素材にできるモンスター!?!?」
「私はガジェットトークン、リンクインフライヤー、手札のコードラジエーターをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
ガジェットトークン、フライヤー、そして手札から青い鎧を身につけたナーガのようなモンスターがサーキットに吸い込まていく。
そしてフィールドに現れたのは青い鎧を身に着けた弓兵の騎士。
「リンク召喚!!?星をも射抜く弓騎士!!?リンク3!!?シューティングコードトーカー!!?」

〈シューティングコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　水属性
ＡＴＫ２３００→２８００　↑→←

「水属性のコードトーカー……これでコードトーカーは出揃ったようね」
「永続魔法、サイバネットコーデックの効果、それにチェーンしてコードラジエーターの効果発動!!?このカードがコードトーカーモンス

ターのリンク素材として手札・フィールドから墓地へ送られた場合、相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてそのモンスターは攻撃力が0になり、効果は無効化され、フィールドのこのカードを素材とした場合にはこの効果の対象を2体にできます!!?対象は勿論、転生炎獣ヴァイオレットキマイラ!!?」

「っ!!?ここで弱体化!!?」

コードラジエーターが身に着けていた青い鎧が輝くと、シューティングがヴァイオレットキマイラに青い輝きを纏った弓矢を放つ。

シューティングの弓矢がヴァイオレットキマイラを貫くと、ヴァレットキマイラはフィールドに膝をついた。

転生炎獣ヴァイオレットキマイラ
ＡＴＫ２８００→０

「っ、転生炎獣ヴァイオレットキマイラ!!?」

「永続魔法、サイバネットコーデックの効果でデッキから水属性のサイバース族モンスター、シーアーカイバーを手札に加えます!!?……流石にこの手札ではこれ以上モンスターを出せませんね」

刀花がそういって視線を落として残念そうに呟く。

しかし、次の瞬間には真剣な表情を浮かべて私を見た。

「でも、これでも宝月先輩のライフポイントを削りきるには十分です!!?デコードトーカーの永続効果、パワーアセンブル!!?このカードの攻撃力は、このカードのリンク先のモンスターの数×５００ポイントアップします!!?」

「なっ!!?」

「デコードトーカーのリンク先にはエクスコードトーカーと転生炎獣ヴァイオレットキマイラがいます!!?なので、デコードトーカーの攻撃力は１０００ポイントアップします!!?」

デコードトーカー
ＡＴＫ２３００→３３００

「っ、攻撃力３３００……」
「さらにデコードトーカーにはもう１つ効果があります。デコードトーカーのもう１つの効果、リライトウォールは自分フィールドのカードを対象とする相手の魔法・罠・モンスターの効果が発動した時、このカードのリンク先の自分のモンスター１体をリリースすることでその発動を無効にし破壊することができます」
「耐性まであるのね……流石は切り札ってところかしら」
「バトル!!?念には念を、です。バトルフェイズ開始時にシューティングコードトーカーの効果発動!!?スターアーチェリー!!?自分バトルフェイズ開始時に発動でき、このバトルフェイズ中、このカードはこのカードのリンク先のモンスターの数＋１回まで相手モンスターに攻撃できます!!」
「モンスター限定の連続攻撃!?!?」
「ただし、このターン、相手フィールドのモンスターが１体のみの場合、そのモンスターと戦闘を行うこのカードの攻撃力はそのダメージ計算時のみ４００ポイントダウンしますけどね。シューティングコードトーカーのリンク先にはデコードトーカーとエクスコードトーカーがいます!!?よってシューティングコードトーカーはモンスターに限り３回の攻撃が可能です!!?」
　こちらがモンスターを増やすことを前提とした効果発動。
　だけど、今の効果ならモンスターさえ増やせればまだ生き残れる!!?
「その効果にチェーンしてリバースカードオープン!!?永続罠、サラマングレイトギフト!!?手札からサラマングレイトモンスター１体を捨てて、デッキからサラマングレイトモンスター１体を墓地へ送り、その後、自分はデッキから１枚ドローするわ!!?私は手札の転生炎獣ウルヴィーを捨てて、デッキから転生炎獣（サラマングレイト）フォクシーを墓地へ送り、カードを１枚ドローするわ!!?そしてサラマングレイトモンスターが自分の墓地に送られたことで手札の転生炎獣ガゼルの効果発動!!?このカードを手札から特殊召喚!!?」

〈転生炎獣ガゼル〉☆3　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１０００

「転生炎獣ガゼルのもう１つの効果発動!!?私はデッキから転生炎獣(サラマングレイト)ファルコを墓地に送るわ!!?そして墓地へ送られた転生炎獣ファルコの効果発動!!?このカードが墓地へ送られた場合、自分の墓地のサラマングレイト魔法・罠カード1枚を自分フィールドにセットする!!私は墓地の?フュージョンオブファイアをセットするわ!!?」

「っ、また融合魔法が……それでも、私は攻めるだけです!!?シューティングコードトーカーで転生炎獣ヴァイオレットキマイラを攻撃!!?永続魔法、サイバネットオプティマイズの効果発動!!?自分のコードトーカーモンスターが戦闘を行う場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠・モンスターの効果を発動できなくなります」

「っ、厄介な効果ね……」

「絶望を射抜いてシューティングコードトーカー!!?スターリーヘブン!!?」

シューティングが夜空に向かって弓矢を放つと放たれた矢が分裂して流れ星のように降り注ぎ、ヴァイオレットキマイラの身体を貫き、爆散させた。

桜　ＬＰ８０００→５２００

「この瞬間、墓地のプロフィビットスネークの効果発動!!?このカードが墓地に存在し、自分のサイバース族モンスターが戦闘で相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分の墓地からカード1枚を除外し、自分の墓地のレベル４以下のサイバース族モンスター1体を手札に加えます!!?私は墓地のトークバックランサーを除外して、プロフィビットスネークを手札に戻します」

「くっ!!?厄介なカードが手札に戻ったわね。だけど、転生炎獣ヴァ

イオレットキマイラが破壊されたことでデコードトーカーの攻撃力も下がるわ」

デコードトーカー
ＡＴＫ３３００→２８００

「続けてシューティングコードトーカーで転生炎獣ガゼルを攻撃‼?相手フィールドのモンスターが1体のみの場合、そのモンスターと戦闘を行うこのカードの攻撃力はそのダメージ計算時のみ４００ポイントダウンします。スターリーヘブン‼?」

シューティングコードトーカー
ＡＴＫ２８００→２４００

再びシューティングが夜空から矢を降らせ、ガゼルを爆散させる。
ありがとう、ガゼル。
あなたのおかげで何とか生き残れそうよ。
「まだ行きます‼?エクスコードトーカーでダイレクトアタック‼?グラビティスクラッチ‼?」
「ぐっ‼?」

桜　ＬＰ５２００→２９００

エクスコードの重力波を纏った鉤爪で切り裂かれ、私のライフが大きく削られる。
「まだです‼?デコードトーカーでダイレクトアタック‼?デコードエンド‼?」
刀花の声に応えるように、デコードが巨大な剣を振りかぶり、私の身体を勢いよく斬り裂いた。
「きゃあ‼?」

桜　ＬＰ２９００→１００

「……ふぅ、危なかったけど、紙一重で生き残れたわね」

「っ、削りきれなかった……やっぱり宝月先輩は凄いです。だけど、これで私の方が有利になりました‼？バトルフェイズ終了時、シューティングコードトーカーの効果発動‼？スターギフト‼？自分・相手のバトルフェイズ終了時、このターンにこのカードが戦闘で破壊したモンスターの数だけ自分はデッキからドローします‼？シューティングコードトーカーが破壊したモンスターは２体‼？よってカードを２枚ドローします‼？」

「っ‼？ここでまたドロー効果……」

「メインフェイズ２‼？速攻魔法、バウンドリンク‼？同名カードは１ターンに１度、自分のフィールド・墓地のリンクモンスター１体を対象としてそのモンスターを持ち主のＥＸデッキに戻し、そのリンクマーカーの数だけ、自分はデッキからドローし、その後、ドローした数だけ手札を選んで好きな順番でデッキの下に戻します‼？私は墓地からリンク３のトランスコードトーカーをＥＸデッキに戻し、３枚のカードをドローし、３枚のカードをデッキの下に戻します‼？」

「手札入れ替えまでされちゃうのね……」

「私はカードを３枚伏せてターンエンドです‼？」

桜　ＬＰ１００　手札３

ー▲△ーー　ー

ーーー×ー

☆　ー

☆☆ーーー

▲△△▲▲　ー

刀花　ＬＰ３３００　手札２

「紙一重で生き残れたけど、私も後がないわね。私のターン、ドロー‼？速攻魔法、転生炎獣の炎陣（サラマングレイト・サークル）‼？この同名カードは１ターンに１枚

しか使えず、2つ効果から1つを選択して発動できる。デッキからサラマングレイトモンスター1体を手札に加えるか、自身と同名のモンスターを素材としてリンク召喚した自分フィールドのサラマングレイトリンクモンスター1体を対象としてこのターン、そのリンクモンスターは自身以外のモンスターの効果を受けなくする効果よ。私はデッキからサラマングレイトモンスター1体を手札に加える効果でデッキから転生炎獣（サラマングレイト）ミーアを手札に加えるわ!!?そして手札に加わった転生炎獣ミーアの効果発動!!?このカードが通常のドロー以外の方法で手札に加わった場合、このカードを相手に見せ、手札から特殊召喚する!!?」

〈転生炎獣ミーア〉☆2　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ６００

フィールドに身体から炎を噴き出しているミーアキャットが現れる。

「そしてリバースカードオープン!!?魔法カード、フュージョンオブファイア!!?」

「同じ手は食いません!!?リバースカードオープン!!?カウンター罠、サイバネットコンフリクト!!?同名カードは1ターンに1度しか発動できませんが、自分フィールドにコードトーカーモンスターが存在し、モンスターの効果・魔法・罠カードが発動した時、その発動を無効にし除外する!!?さらに次のターンの終了時まで、相手はこの効果で除外したカードと元々のカード名が同じカードの効果を発動できません!!?」

「っ、そんなカードも伏せられてたのね」

稲妻を纏った炎の渦がコードトーカー達が一斉に手をかざすと霧散する。

融合させてデコードを除去しようと思ってたのに、これは厳しいわね。

「だけど、まだ手はあるわ!!?墓地に存在する転生炎獣ファルコの効

果発動!!?このカードが墓地に存在する場合、同名以外の自分フィールドのサラマングレイトモンスター1体を対象としてそのモンスターを持ち主の手札に戻し、このカードを墓地から特殊召喚する!!?私は転生炎獣ミーアを手札に戻して、来なさい、転生炎獣ファルコ!!?」

〈転生炎獣ファルコ〉☆4　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１６００

ミーアの姿が消え、代わりに現れたのは炎を纏った鷹のモンスター。
「さらに墓地に存在する転生炎獣フォクシーの効果発動!!?このカードが墓地に存在し、フィールドに表側表示の魔法・罠カードが存在する場合、手札からサラマングレイトカード1枚を捨ててこのカードを特殊召喚する!!?私は手札から転生炎獣ミーアを捨てて、転生炎獣フォクシーを特殊召喚!!?」

〈転生炎獣フォクシー〉☆3　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１２００

私のフィールドに現れるのは炎の尻尾を持つ管狐。
現れたフォクシーは尻尾の炎を強く燃え上がらせ、弾丸のように刀花のフィールドに放つ。
「その後、フィールドの表側表示の魔法・罠カード1枚を選んで破壊できる。この効果は対象を取らないからデコードトーカーでも無効にはできないわ。私は永続魔法、サイバネットオプティマイズを破壊するわ!!?」
「くっ、サイバネットオプティマイズを狙ってきましたか……」
フォクシーが放った炎の弾丸がサイバネットオプティマイズを焼き尽くした。
「これでコードトーカー達との戦闘でも効果が使えるようになったわ

ね。墓地に存在する転生炎獣スピニーの効果を再び発動!!?自分フィールドに転生炎獣スピニー以外のサラマングレイトモンスターが存在するため墓地から特殊召喚!!?」

〈転生炎獣スピニー〉☆3　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１５００

「宝月先輩のフィールドにモンスターが並んだ……ということは!!?」
「繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」
　私が目の前に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル４以下のサイバース族モンスター１体!!?私は転生炎獣ファルコをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク１!!?転生炎獣ペイルリンクス!!?」

〈転生炎獣ペイルリンクス〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ５００　←

　ファルコがサーキットに吸い込まれると、代わりにサーキットから現れたのは真っ赤な装甲に身を包んだ山猫のモンスター。
「転生炎獣ペイルリンクスの効果発動!!?１ターンに１度、このカードがリンク召喚に成功した場合に、デッキから転生炎獣の聖域（サラマングレイト・サンクチュアリ）１枚を手札に加える!!?私はデッキからフィールド魔法、転生炎獣の聖域を手札に加える!!?そしてフィールド魔法、転生炎獣の聖域を発動!!?」
　フィールド魔法を発動すると、辺りの風景がマグマに囲まれた火山のフィールドに変わる。
「転生炎獣のフィールド魔法……」
「まだよ!!?繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」
　私の前に再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は炎属性の効果モンスター２体以上!!?私は転生炎獣スピ

ニー、転生炎獣フォクシー、転生炎獣ペイルリンクスをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
　サーキットの中にスピニー、フォクシー、ペイルリンクスが吸い込まれると、フィールドにあった火山が噴火し、マグマが溢れ始める。
　そして火山の噴火に合わせるように、サーキットの中からマグマを喰らいながら現れたのは炎の身体を持つ灼熱の獅子。
「古より伝わる灼熱の獅子!!?リンク召喚!!?リンク３!!?
転生炎獣ヒートライオ(サラマングレイト)!!?」

〈転生炎獣ヒートライオ〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　炎属性
　ＡＴＫ２３００　↙?→↘?

「リンク３の転生炎獣モンスター……」
「さあ、食事の時間よ、転生炎獣ヒートライオ!!?転生炎獣ヒートライオの効果発動!!?イグズィスタンスイーター!!?このカードがリンク召喚に成功した場合、相手の魔法・罠ゾーンのカード１枚を対象に、そのカードを持ち主のデッキに戻す!!?私サイバネットコーデックをデッキに戻すわ!!?」
「サイバネットコーデックまで!?!?っ……デコードトーカーの効果発動!!?リライトウォール!!?自分フィールドのカードを対象とする相手の魔法・罠・モンスターの効果が発動した時、このカードのリンク先の自分のモンスター１体をリリースすることでその発動を無効にし破壊します!!?私はエクスコードトーカーをリリースして転生炎獣ヒートライオの効果を無効にし、破壊します!!?」
　ヒートライオが咆哮を上げると、炎で出来た魔法陣が現れ、サイバネットコーデックを吸収しようとするが、デコードがエクスコードに手をかざすと、エクスコードは頷きながらデータに変わり、サイバネットコーデックを守るファイヤーウォールになる。
　ファイヤーウォールになったエクスコードはそのままヒートライオを包み込み、ヒートライオを消滅させた。
「リンク先にモンスターがいなくなったため、デコードトーカーとエ

クスコードトーカーの効果を受けていたシューティングコードトーカーの攻撃力は下がります」

デコードトーカー
ＡＴＫ２８００→２３００

シューティングコードトーカー
ＡＴＫ２８００→２３００

「使ってきたわね。なら、転生炎獣ヒートライオが破壊された時、墓地の転生炎獣フェネックの効果発動!!?このカードが手札・墓地に存在し、ＥＸデッキから特殊召喚された自分フィールドのサイバース族モンスターが戦闘または相手の効果で破壊された場合、このカードを特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外されるわ」

〈転生炎獣フェネック〉☆３　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ２００

「私は転生炎獣（サラマングレイト）コヨーテを召喚!!?」

〈転生炎獣コヨーテ〉☆３　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１０００

フィールドに現れたのは鋼の身体を持つ狼のようなモンスター。
「そして、繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」
「っ、またリンク召喚ですか」
「召喚条件は炎属性の効果モンスター２体!!?私は転生炎獣コヨーテと転生炎獣フェネックをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク２!!?転生炎獣サンライトウルフ!!?」

〈転生炎獣サンライトウルフ〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１８００　←→

「さらに墓地に存在する転生炎獣Ｊジャガーの効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードが墓地に存在し、自分フィールドにサラマングレイトリンクモンスターが存在する場合、転生炎獣Ｊジャガー以外の自分の墓地のサラマングレイトモンスター１体を対象としてそのモンスターをデッキに戻し、墓地のこのカードを自分のサラマングレイトリンクモンスターのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚する!!?私は墓地の転生炎獣ヒートライオをＥＸデッキに戻して転生炎獣Ｊジャガーを特殊召喚!!?」

〈転生炎獣Ｊジャガー〉☆４　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１２００

サンライトウルフの近くに身体に着いた棘から炎を噴き出させているジャガーが現れる。
そしてＪジャガーが現れたことでサンライトウルフは歓喜の声をあげる。
「転生炎獣サンライトウルフの効果発動!!?私は墓地の転生炎獣転生炎獣ウルヴィーを手札に加え、再び墓地から手札に加わった転生炎獣ウルヴィーの効果発動!!?このカードを相手に見せ、私は墓地から転生炎獣ガゼルを手札に加えるわ!!?」
「っ、また転生炎獣ガゼルが手札に……」
「まだ終わってないわ!!?繋がって!!?希望に導くサーキット!!?召喚条件は炎属性の効果モンスター２体以上!!?私は転生炎獣Ｊジャガー、転生炎獣サンライトウルフを２体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?再び現れなさい!!?古より伝わる灼熱の獅子!!?リンク召喚!!?リンク３!!?転生炎獣ヒートライオ!!?」

「また転生炎獣ヒートライオが……」

〈転生炎獣ヒートライオ〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２３００　↙?→↘?

「さあ、今度こそ食事の時間よ、転生炎獣ヒートライオ!!?転生炎獣ヒートライオの効果発動!!?イグズィスタンスイーター!!?このカードがリンク召喚に成功した場合、相手の魔法・罠ゾーンのカード1枚を対象に、そのカードを持ち主のデッキに戻す!!?私サイバネットコーデックをデッキに戻すわ!!?さあ、喰い散らかしなさい、転生炎獣ヒートライオ!!?」

ヒートライオが咆哮を上げると、炎で出来た魔法陣が現れ、サイバネットコーデックを吸収する。

サイバネットコーデックを呑み込んだヒートライオは満足そうに両手を合わせる。

「まだ終わらないわ!!?フィールド魔法、転生炎獣の聖域の効果発動!!?」

「ここでフィールド魔法の効果ですか!?」

「1ターンに1度、このカードがフィールドゾーンに存在する限り、自分がサラマングレイトリンクモンスターをリンク召喚する場合、自分フィールドの同名のサラマングレイトリンクモンスター1体のみを素材としてリンク召喚できる!!?」

「っ!?ということは……」

「繋がって!!?希望に導くサーキット!!?私は転生炎獣ヒートライオをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」

ヒートライオの頭上にサーキットが、足元に炎で出来た魔法陣が現れ、交差するようにヒートライオの身体を通過する。

サーキットと魔法陣が通過すると、ヒートライオの身体からさらに大きな炎が噴き出した。

「生まれ変われ、古より伝わる灼熱の獅子!!?転生リンク召喚!!?リンク3!!?転生炎獣ヒートライオ!!?」

〈転生炎獣ヒートライオ〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２３００　↙？→↘？

「転生……リンク召喚⁉？」
「さあ、もう１度食事の時間よ⁉？転生炎獣ヒートライオの効果発動⁉？イグズィスタンスイーター⁉？私は刀花のセットカード１枚をデッキに戻させて貰うわ⁉？」
「っ⁉？なら、リバースカードオープン⁉？速攻魔法、サイバネットバックドア⁉？自分フィールドのサイバース族モンスター１体を対象とし、そのモンスターを除外し、そのモンスターの元々の攻撃力より低い攻撃力を持つサイバース族モンスター１体をデッキから手札に加えます。そしてこの効果で除外したモンスターは次の自分スタンバイフェイズにフィールドに戻り、そのターン直接攻撃できます⁉？」
「なっ⁉？この状況でダイレクトアタックができるようになる速攻魔法⁉？」
「私はシューティングコードトーカーを除外してデッキからＲＡＭクラウダーを手札に加えます⁉？」
シューティングコードの姿が消え、刀花の手札にＲＡＭクラウダーが加わる。
不味い……私のライフはたったの１００。
この状況でダイレクトアタックをされたら確実に負ける。
「なら、無理矢理にでも⁉？永続罠、サラマングレイトギフトのもう１つの効果発動⁉？自身と同名のモンスターを素材としてリンク召喚したサラマングレイトリンクモンスターが自分フィールドに存在する場合、手札からサラマングレイトモンスター１体を捨てて自分はデッキから２枚ドローする⁉？」
「っ、ここでドロー枚数が増えるんですね……」
「私は手札の転生炎獣ウルヴィーを捨てて、カードを２枚ドローするわ⁉？そしてサラマングレイトモンスターが自分の墓地に送られた

ことで手札の転生炎獣ガゼルの効果発動!!?このカードを手札から特殊召喚!!?」

〈転生炎獣ガゼル〉☆３　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１５００

「転生炎獣ガゼルのもう１つの効果発動!!?私はデッキから転生炎獣ラクーン（サラマングレイト）を墓地に送るわ!!?さらに転生炎獣ヒートライオのもう１つの効果発動!!?サラマングレイトマジック!!?このカードが転生炎獣ヒートライオを素材としてリンク召喚されている場合、１ターンに１度、フィールドの表側表示モンスター１体と、自分の墓地のモンスター１体を対象として、対象のフィールドのモンスターの攻撃力は、ターン終了時まで対象の墓地のモンスターの攻撃力と同じになる!!?私は刀花のデコードトーカーの攻撃力を私の墓地にある転生炎獣ラクーンと同じ４００にするわ!!?」

デコードトーカー
ＡＴＫ２３００→４００

ヒートライオが魔法陣をデコードに向かって放ち、魔法陣を潜ったデコードの肩にアライグマのイラストが描かれたマントが現れる。
「っ!?デコードトーカーの攻撃力が……」
「バトル!!?転生炎獣ガゼルでデコードトーカーを攻撃!!?サバンナフレイム!!?」
「……迎え撃ってください、デコードトーカー!!?デコードエンド!!?」
「えっ!?」

刀花　ＬＰ３３００→２２００

ガゼルが炎を纏ってデコードに突撃し、その身体を貫き、爆散させ

る。
「……墓地に存在する転生炎獣ラクーンの効果発動!!?このカードが墓地に存在し、自分のサラマングレイトモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊し墓地へ送った時にこのカードを手札に加えるわ」
刀花の手札にはプロフィビットがあるハズなのに使ってこなかった。
次のヒートライオの攻撃が通ればライフが尽きるハズなのに。
となれば、明らかに攻撃を誘われているのだろう。
私のライフは残り１００。
慎重に行動しないと不味いライフではあるが、動かなければどうしようもないというのも事実だ。
「なら、臆せず攻める!!?転生炎獣ヒートライオでダイレクトアタック!!?」
「リバースカードオープン!!?罠発動!!?リコーデッドアライブ!!?自分のフィールド・墓地のリンク３のサイバース族リンクモンスター１体を対象としてそのモンスターを除外し、ＥＸデッキからコードトーカーモンスター１体を特殊召喚します!!?私は墓地からエンコードトーカーを除外してＥＸデッキからトランスコードトーカーを特殊召喚します!!?」
「っ、そんなカードが伏せられてたのね」

〈トランスコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　地属性
ＡＴＫ２３００　→←↓

転生炎獣ヒートライオ
ＡＴＫ２３００→２８００

刀花のフィールドにトランスコードが再び現れる。
トランスコードには他のコードトーカーを蘇生する効果があるため、破壊しておきたいけど攻撃すれば間違いなくプロフィビットに手札に戻される。

これはかなり不味いことになったわね。

「……モンスターが増えたことで攻撃は中止するわ。カードを1枚伏せてエンドフェイズに転生炎獣コヨーテの効果発動!!?このカードがリンク素材として墓地へ送られたターンのエンドフェイズに2つの効果から1つを選択して発動できる。同名以外の自分の墓地のサラマングレイトモンスター1体を対象としてそのモンスターを守備表示で特殊召喚するか、同名以外の自分の墓地のサラマングレイトカード1枚を対象としてそのカードを手札に加える。私は2つ目の効果で墓地の転生炎獣ファルコを手札に加えるわ。これでターンエンドよ」

桜　ＬＰ１００　手札５

ー▲△ーー　▽

ーーー○ー

☆　☆

ーーーーー

ーーーーー　ー

刀花　ＬＰ２２００　手札３

「私のターン、ドロー!!?スタンバイフェイズ、サイバネットバックドアで除外されていたシューティングコードトーカーがフィールドに戻ります!!?戻ってきてください、シューティングコードトーカー!!?」

〈シューティングコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　水属性

ＡＴＫ２３００　↑→←

「このままシューティングコードトーカーでダイレクトアタックをすれば宝月先輩のライフは尽きますが……念には念を入れさせて貰います!!?トランスコードトーカーの効果発動!!?リターンコマン

ド‼?墓地から戻ってきてください、エクスコードトーカー‼?」

〈エクスコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　風属性
ＡＴＫ２３００→２８００　↑→↓

トランスコードトーカー
ＡＴＫ２３００→３３００

「さらに私はＲＡＭクラウダーを召喚します‼?」

〈ＲＡＭクラウダー〉☆４　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１８００

フィールドに現れたのは身体から電気を発している羊のモンスター。
「ＲＡＭクラウダーの効果発動‼?自分フィールドのモンスター１体をリリースし、自分の墓地のサイバース族モンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚します‼?私はＲＡＭクラウダーをリリースし、戻ってきてください、パワーコードトーカー‼?」

〈パワーコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２３００→２８００　↙?↑↓

「っ、またコードトーカー達が並んできたわね」
「これで決めます‼?バトル‼?」
「なら、バトルフェイズ開始時、永続罠、サラマングレイトギフトのもう１つの効果発動‼?私は手札の転生炎獣ファルコを捨てて、カードを２枚ドローするわ‼?さらに墓地に送られた転生炎獣ファルコの効果で墓地の転生炎獣の炎陣をセットするわ‼?」
「構いません‼?シューティングコードトーカーでダイレクトアタック‼?スターリーヘブン‼?」

シューティングが夜空に向かって弓矢を放つと放たれた矢が分裂して流れ星のように私に降り注ぐ。
この攻撃が通れば私の負け……だけど、そんな簡単に通るわけがないでしょうが!!?
「まだ終わらないわ!!?直接攻撃宣言時にバトルフェーダーの効果、それにチェーンして転生炎獣パローの効果発動!!?」
「っ!?」
「相手モンスターの攻撃宣言時、転生炎獣パローは手札から攻撃表示で特殊召喚する!!?」

〈転生炎獣パロー〉☆5　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２０００

フィールドに現れたのは炎を身に纏ったオウムのモンスター。
そしてそれと同時にフィールドに鐘の音が鳴り響き、私に放たれていた弓矢が消滅する。
「さらにバトルフェーダーの効果発動!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードを手札から特殊召喚し、その後バトルフェイズを終了する!!?」
「っ!?バトルフェイズを終了!?」
「ただしこの効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外されるわ」

〈バトルフェーダー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

バトルフェーダーが現れたことでバトルフェイズが終了する。
耐えられるとは思っていなかったのか、刀花は驚いた表情を浮かべたがすぐにまた楽しそうな笑みを浮かべた。
「……流石です、宝月先輩!!?まさかこの攻撃まで耐えられるなんて思いませんでした!!?でも、次のターンには絶対に決めてみせます

‼?私はカードを1枚伏せてターンエンドです‼?」

桜　ＬＰ１００　手札４
ー▲△▲ー　　▽
ー○□○ー
　　☆　　☆
ー☆☆☆ー
ーー▲ーー　　ー
刀花　ＬＰ２２００　手札２

「なんとか防げたけど……流石にこれ以上は不味いわね」
あまりにも堅固な刀花のフィールドに私は思わず苦笑を浮かべてしまう。
今の私にこの状況を覆せるカードはない。
トランスコードにより相互リンクとなっているエクスコードは効果対象にならず、そのトランスコードは自身の効果とエクスコードにより効果対象も効果破壊もできなくなっている。
パワーコードもエクスコードにより効果破壊耐性を得ており、刀花の説明ではパワーコードは相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時に、リンク先のモンスターをリリースすることで攻撃力が元々の攻撃力の倍になると言っていたため、ヒートライオで弱体化させても元々の攻撃力の倍の状態で固定されてしまう。
狙い目はシューティングコードだが、ヒートライオの効果で弱体化させたとしても刀花の手札にはまだプロフィビットがあるだろう。
あのカードがある限り、コードトーカー達との戦闘は成立しない。
私が使う転生炎獣ではこの状況を覆せない。
「……ふふっ」
「?宝月、先輩?」
「ううん、何でもないわ。ただ、自分の未熟な部分を再確認しただけよ。本当に、私もまだまだね」
その言葉が頭に浮かんだ時、私は思わず笑ってしまった。

私は昔の自分から変わる為に、炎さんから受け継いだ転生炎獣を私のデッキに組み込んだ。
だけど、いつのまにか受け継いだ転生炎獣を使うことばかりに意識が向きすぎていたのかも知れない。
だからこそ、転生炎獣で対処が出来ない布陣に陥り、ここまで追い詰められている。
確かに、私は転生炎獣を選んでから変わることができたと思う。
だけど、私が選んで身につけてきた力は転生炎獣だけじゃない。
私には自らの名前になるような、自分が選び、共に進んできた力がある。
「そうよね、カグヤ」
私は最初に召喚したきり、ずっと手札に残っていた相棒に向けてそう呟く。
確かに、私は炎さんの弟子になった。
だけど、私は私だ。
大切なものを守る為に全てを壊してしまえるぐらい強くなりたいと願った私は、何も変わっていない。
それが今まで積み上げてきた私。
遊花を……大切な親友を守り、支えるために強くなろうという願い。
それを……今まで積み上げてきた私を切り捨てて転生しても意味がない。
私は、私のまま……全て壊し尽くす壊獣の姫のまま、変わり続けると決めたのだから!!?
『ふふっ、やっとらしくなってきたじゃない、桜』
「……えっ？」
「桜ちゃん？」
「宝月先輩？」
そんな、どこかで聞いたことがあるような女の子の嬉しそうな声が私の耳に届く。
私は慌てて周りを見渡すが、声の主らしき者の姿は見えず、突然周

りを見渡し始めた私を、遊花と刀花は不思議そうな表情で見る。
幻聴？
でも、確かに今声が……
困惑した表情を浮かべる私の耳に再び声が響く。
『あら？ようやくちゃんとラインが繋がったのかしら？案外時間がかかったわね』
「っ‼？また……」
『もう、どこ見てるの？手札よ、桜。あなたの手札』
「手札？……もしかして」
私はその声に従い恐る恐る自分の手札を見る。
そこにあるのは私が昔からずっと一緒に戦ってきた相棒ーーー妖精伝姫—カグヤ。
そのカグヤの絵が、私が手札を見た瞬間、確かに笑った。
『ようやく気付いたわね。相棒の声が分からないなんて、私は悲しいわ。よよよ』
そういって、手札のカグヤが泣き真似をする。
……ちょっと待って、突然過ぎて色々とついていけないんだけど、とりあえずちょっと待って。
私は、この現象に見覚えがある。
それは異世界で出会った決闘者達のデュエルでだ。
その時の言葉を借りるのなら……
「……カードの精霊？」
『ぴんぽんぴんぽーん‼？大正解よ‼流石は私の桜ね‼??』
「……誰があなたのよ」
あまりの展開に思わず頭を抱えたくなる。
今日は一体なんなのかしら？
変な厨二病が現れたかと思ったら、親友とのデュエルが後輩に広まってて、それを見た後輩にデュエルを挑まれたら今度は精霊？
誰かこの状況を正しく説明できるならして欲しいわ。
『頭を抱えてるのはいいけど、そろそろデュエルを再開した方がいいんじゃないかしら？あの子、心配そうな顔をしてるわよ？』

「桜ちゃん？」
カグヤの声に遊花の方を見ると心配そうな表情でこちらを見ていた。
……色々と言いたいことや聞きたいことはあるけれど、遊花に心配をかけるわけにはいかないわね。
それに、刀花とのデュエルはまだ終わってない。
あまり待たせ過ぎるのも刀花に悪い。
「……デュエルが終わったら、ちゃんと話を聞かせて貰うから」
『ええ、それで構わないわ。私もようやくあなたと話せるんだもの。さあ、カードを引いて、桜。あなたの仲間が待ってるわ』
「……はぁ～」
「宝月、先輩？」
カグヤの言葉を聞き、私は大きくため息を吐いて頭を振ると、頬を叩いて気合を入れる。
突然の私の行動に困惑している刀花に、私は苦笑を浮かべながらも真剣な表情を浮かべる。
「何でもないわ。ちょっと色々考え過ぎちゃっただけ。だけど……もう考えるのは止めたわ。今の私にできるのは、こんな私に応えてくれる仲間達と、刀花に全力でぶつかるだけ」
そういって、私は自分のデッキの上のカードを握る。
改めて頼むわ、私のデッキ。
あなた達の力を、私に貸して。
どんな逆境も壊して、大切な人達を守るための力を得る為に!!?
「さあ、私が全てを壊してあげるわ!!?私のターン、ドロー!!?リバースカードオープン!!?速攻魔法、転生炎獣の炎陣!!?私はデッキからサラマングレイトモンスター1体を手札に加える効果でデッキから転生炎獣モルを手札に加えるわ!!?さらに永続罠、サラマングレイトギフトのもう1つの効果発動!!?私は手札の転生炎獣ラクーンを捨てて、カードを2枚ドロー!!?さらに転生炎獣パローの効果発動!!?このカードをリリースし、ライフポイントを２０００ポイント回復するわ!!?」

「⁉?・ここでライフポイントを回復するんですか⁉?・」
パローの身体が炎に変わると、私の身体を包み込み私のライフを回復させる

桜　ＬＰ１００→２１００

「そして魔法カード、妨げられた壊獣の眠り‼?・このカードの発動時、フィールドのモンスターを全て破壊するわ‼?・」
「⁉?・全体破壊魔法⁉?・」
「この瞬間、墓地に存在する転生炎獣ペイルリンクスの効果、自分フィールドのサラマングレイトカードが戦闘・効果で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外できる。私はこの効果で転生炎獣ヒートライオと転生炎獣ガゼルを破壊から守るわ」
フィールドが揺れ、バトルフェーダーとエクスコード、シューティングコードが地割れに呑み込まれて消滅する。
その代わりに刀花のフィールドには巨大な地竜が、私のフィールドには私の切り札である三つ首の竜が現れる。
「その後、デッキからカード名が異なる壊獣モンスターを自分・相手のフィールドに１体ずつ攻撃表示で特殊召喚するわ‼?・この効果で特殊召喚したモンスターは表示形式を変更できず、攻撃可能な場合は攻撃しなければならないけどね。私は刀花のフィールドに怒炎壊獣ドゴラン、そして私のフィールドには私の切り札の登場よ‼?・あなたの全てを壊してあげる‼?・雷撃壊獣サンダーザキング‼?・」

〈怒炎壊獣ドゴラン〉☆８　恐竜族　炎属性
ＡＴＫ３０００

〈雷撃壊獣サンダーザキング〉☆９　雷族　光属性
ＡＴＫ３３００

トランスコードトーカー

ＡＴＫ３３００→２３００

パワーコードトーカー

ＡＴＫ２８００→２３００

「雷撃壊獣サンダーザキング……これが宝月先輩の切り札……」

「それじゃあ、最後まで私と一緒に戦って貰うわよ、相棒‼?」

『ええ、勿論よ』

「再び現れなさい、月より来たる永遠の姫‼?妖精伝姫―カグヤを召喚‼?」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性

ＡＴＫ１８５０

『私、参上‼?』

そういってカグヤは自身を指差しながら扇子を掲げる。

一々ツッコミなんて入れてやらないんだから、ちゃんと戦いなさいよね‼?

「妖精伝姫―カグヤの効果発動！私はデッキから最後の妖精伝姫―カグヤを手札に加えるわ‼?そして妖精伝姫―カグヤの効果発動‼?アンリーゾナブルディマンド‼?対象はパワーコードトーカー‼?」

「っ、パワーコードトーカーは１枚しかＥＸデッキにありません……」

「なら、妖精伝姫―カグヤと一緒にフィールドから退場して貰うわ」

カグヤがパワーコードに近づいていくと、パワーコードは手甲状のパーツから緑色のワイヤーを伸ばし、カグヤの腕を縛ると、そのまま引き寄せようとする。

『あら、私と力比べ？そのワイヤーで私を釣り上げる気かも知れないけど、力比べなら私だって自信があるわよ』

しかし、カグヤはそんなパワーコードを見て楽しそうに笑うと、パワーコードのワイヤーを力強く引き寄せると、そのままワイヤーごと

パワーコードを振り回し、空の彼方まで投げ飛ばした。
『釣られたのはあなたの方だったわね。私が強すぎるからって泣かないでね』
「……やっぱりアンタのその効果は何か間違ってると思うわ」
『失礼ね、姫は強いものなのよ』
そういうと、カグヤは楽しそうに笑いながら私の手札に戻ってきた。
……これはこれで話す必要があるかしら？
「……まあいいわ。墓地に存在する転生炎獣Ｊジャガーの効果発動‼？私は墓地の転生炎獣サンライトウルフをＥＸデッキに戻して転生炎獣Ｊジャガーを特殊召喚‼？」

〈転生炎獣Ｊジャガー〉☆４　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１８００

「まだまだ行くわ‼？墓地に存在する転生炎獣ファルコの効果発動‼？私は転生炎獣ガゼルを手札に戻して、来なさい、転生炎獣ファルコ‼？」

〈転生炎獣ファルコ〉☆４　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１６００

「そして、繋がって‼？希望に導くサーキット‼？召喚条件は炎属性の効果モンスター２体‼？私は転生炎獣ファルコと転生炎獣Ｊジャガーをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？リンク２‼？転生炎獣サンライトウルフ‼？」

〈転生炎獣サンライトウルフ〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１８００　←→

「転生炎獣サンライトウルフ？なんでこの状況でそのモンスターを

……」
「まだ答えあわせには早いわよ。サラマングレイトモンスターが自分の墓地に送られたことで手札の転生炎獣ガゼルの効果発動!!?このカードを手札から特殊召喚!!?」
〈転生炎獣ガゼル〉☆3　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１５００
「さらに手札に存在する転生炎獣モルの効果発動!!?１ターンに１度、自分のリンクモンスターをリンク召喚に成功したターンの自分のメインフェイズに、手札のこのカードをリンクモンスターのリンク先となる自分のフィールドに特殊召喚する!!?」
〈転生炎獣モル〉☆1　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ０
ヒートライオの近くの地中から、爪に炎を纏ったモグラのモンスターが現れる。
「そして……行くわ!!?繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」
現れる巨大なサーキットを見て、私は目を閉じ、１つ深呼吸をしてから言霊を紡ぐ。
「召喚条件は効果モンスター３体以上!!?私は、転生炎獣モル、転生炎獣ガゼル、転生炎獣サンライトウルフを２体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
「リンク４!?!?大型リンクモンスター!?!?」
サンライトウルフが２体に分身し、モル、ガゼルと一緒にサーキットの中に吸い込まれる。
私はＥＸデッキから１枚のカードを取り出すと胸の前で握りしめる。
最近あなたを出してあげられなくてゴメン。
また、私に守るための力を貸して!!?

「閉ざされた世界を守る決意の隔壁!!?リンク４!!?ヴァレルガードドラゴン!!?」

私の呼び声に、赤き龍は銃声と咆哮を以って応えた。

〈ヴァレルガードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ３０００　→←↓↘?

「ヴァレル……ガードドラゴン……」

「行くわよ、ヴァレルガードドラゴン!!?ヴァレルガードドラゴンの効果発動!!?テイクダウンエイミング!!?１ターンに１度、自分の魔法・罠ゾーンのカードを墓地に送ることでそのターンに破壊された自分または相手の墓地へ送られたモンスター１体を効果を無効にして特殊召喚する!!?私はサラマングレイトギフトを墓地に送って刀花のシューティングコードトーカーを特殊召喚!!?」

「っ!?私のシューティングコードトーカーを!?」

〈シューティングコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　水属性

ＡＴＫ２３００　↑→←

ヴァレルガードの口から粒子砲が刀花の墓地に向かって放たれ、墓地からシューティングコードが引きずり出される。

「これで準備は整ったわ!!?バトル!!?転生炎獣ヒートライオで怒炎壊獣ドゴランに攻撃!!?」

「なっ!?自爆特攻ですか!?」

「ダメージ計算時、フィールド魔法、転生炎獣の聖域のもう１つの効果を、１０００ライフポイントを払い、転生炎獣ヒートライオを対象として発動!!?」

「っ、転生炎獣の聖域のもう１つの効果?」

桜　ＬＰ２１００→１１００

「自分のモンスターが戦闘を行うダメージ計算時に、１０００ライフポイントを払い、自分フィールドのリンクモンスター1体を対象として発動そのモンスターの攻撃力を０にし、そのモンスターの元々の攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復するわ‼?」

ドゴランの火炎がヒートライオに放たれると、ヒートライオの身体から魔法陣が現れ、ヒートライオの炎を吸収すると、私の身体にライフポイントとして分け与える。

そしてドラゴンの火炎に呑み込まれたヒートライオは荒々しい咆哮を上げながら爆散した。

転生炎獣ヒートライオ
ＡＴＫ２３００→０

桜　ＬＰ１１００→３４００→４００

「今の行動にどんな意味が……」

「意味なら大ありよ。遊花とのデュエルを見たなら知ってるんじゃない?私が３０００ポイントのダメージを受けたらどうなるか」

「３０００……っ⁉?まさか‼?」

「さあ、私の必殺技、存分に味わいなさい‼?３０００ポイントの戦闘ダメージを受けた時、速攻魔法発動、ヘルテンペスト‼?お互いのデッキと墓地のモンスターを全てゲームから除外する‼?」

フィールドに炎の嵐が吹き荒れ、デッキと墓地から全てのモンスターを奪い去っていく。

「ついでにこれも受け取っておきなさい?デッキから除外されたネクロフェイス、そして除外されたバランサーロードの効果発動‼?」

「えっ⁉?バランサーロード⁉?」

「効果の説明はいらないわよね?戻ってきなさい、相棒‼?妖精伝姫―カグヤを特殊召喚‼?」

『私、再び参上‼?』

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ１８５０

「さらにネクロフェイスの効果発動!!?このカードがゲームから除外された時、お互いはデッキの上からカードを５枚ゲームから除外する!!?」
「っ!!?デッキが……」
ネクロフェイスの効果で刀花のデッキが消滅する。
まあ、私も残り３枚ってところだけど。
だけど、このままデッキ切れで終わりって言うのも全力で戦ってくれた刀花に失礼よね。
「刀花、最後まで全力で行くわよ!!?」
「っ……はい!!?」
「シューティングコードトーカーでトランスコードトーカーを攻撃!!?」
「シューティングコードトーカーは返して貰います!!?手札からプロフィビットスネークの効果を発動!!?自分のサイバース族リンクモンスターが相手モンスターと戦闘を行うダメージステップ開始時に、このカードを手札から墓地へ送ってその相手モンスターを持ち主の手札に戻します!!?」
現れたプロフィビットに巻き付かれ、シューティングコードが刀花のＥＸデッキに帰っていく。
「これでプロフィビットスネークも無くなったわ!!?ヴァレルガードドラゴンでトランスコードトーカーを攻撃!!?銃砲のスラムファイア!!?」
「迎え撃ってください、トランスコードトーカー!!?アーススストライク!!?」
ヴァレルガードが身体中にある銃口から一斉に銃弾を発射する。
トランスコードは自身のパーツの一部を変形させて銃にし、岩石の弾丸を放ち、相殺していたが、次第に相殺できなくなり、銃弾に貫か

れて爆散した。

刀花　ＬＰ２２００→１５００

「くぅっ‼?」

「続けて雷撃壊獣サンダーザキングで怒炎壊獣ドゴランを攻撃‼?グラビティレイ‼?」

「きゃあ‼?」

刀花　ＬＰ１５００→１２００

サンダーザキングの三つ首からレーザーが放たれ、ドゴランを焼き尽くす。

「これで終わりよ、妖精伝姫―カグヤでダイレクトアタック‼?」

「っ、まだ終わりじゃありません‼?墓地に存在するリコーデッドアライブを除外して効果発動‼?」

「‼?」

「ＥＸモンスターゾーンに自分のモンスターが存在しない場合、墓地のこのカードを除外し、除外されている自分のコードトーカーモンスター１体を対象として特殊召喚します‼?最後まで私と一緒に戦ってください、デコードトーカー‼?」

〈デコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　闇属性

ＡＴＫ２３００　↙?→↘?

刀花を守るように、デコードが姿を現わす。

「……妖精伝姫―カグヤの効果発動‼?アンリーゾナブルディマンド‼?対象はデコードトーカー‼?」

「デコードトーカーも１枚しかＥＸデッキにありません」

「なら、妖精伝姫―カグヤと一緒にフィールドから戻って貰うわ」

デコードが剣をカグヤに振りかざすが、カグヤはその剣を扇子で受

け止めると、その隙にデコードを蹴り飛ばす。
　吹き飛ばされて剣を弾き落とされたデコードはそれでも刀花を守るようにカグヤに突撃し、その拳を振り抜く。
『お見事。だけど、私も相棒の前でかっこ悪いところは見せたくないのよ。だから、悪いけどそこをどいて貰うわね。答えは聞かないわ』
　そう言うと、カグヤはデコードの拳を受け止めたかと思うとそのままの勢いでデコードを投げ飛ばした。
『さて、道は開いたんだから、最後はビシッと決めるわよ』
　そういうとカグヤは私の手札に戻っていく。
　カグヤがフィールドから消えたのを見て、刀花が残念そうながらも安堵の息を吐く。
「負けてしまいましたが、何とかトドメはさされずにーーー」
「何を勘違いしてるの？私のバトルフェイズはまだ終了してないわ‼？」
「……えっ？」
　刀花が私の言葉に呆けた表情を浮かべる。
　確かに、前までの私ならここからの追撃はできなかった。
　だけど……今の私には新しい友達から学んだ力がある。
「刀花、アンタはとても強かったわ。だから、私も最後まで全力よ‼？リバースカードオープン‼？速攻魔法、ライバルアライバル‼？自分・相手のバトルフェイズにモンスター1体を召喚する‼？」
「っ⁉？それじゃあ⁉？」
「決めるわよ、相棒‼？妖精伝姫―カグヤを召喚‼？」
『ええ、これが本当のクライマックスよ‼？』
〈妖精伝姫―カグヤ〉☆4　魔法使い族　光属性
　ＡＴＫ１８５０
「ここで妖精伝姫―カグヤ……完敗、ですね」
「妖精伝姫―カグヤでダイレクトアタック‼？タツノクビノタマ‼？」

カグヤは着物の中から綺麗な玉を取り出し、綺麗な投球フォームで刀花に向かって投げると、投げた玉がカーブしながら刀花の身体にぶつかった。
「きゃあ‼?」

刀花　ＬＰ１２００→０

『ふふん‼?どうかしら、桜。私の必殺技、クライマックスバージョンよ‼?』
「……後から言うのね」

ーーーーーーー

「ふぅ、何とか勝てたわね……なんか無駄に疲れた気もするけど」
「お疲れ様、桜ちゃん」
「ありがと、遊花」
「やっぱり桜ちゃんのデュエルは凄いなぁ。あそこまで追い込まれて一気に逆転しちゃうなんて」
「……それを遊花に言われるのは何だか複雑な気分ね」
「えっ?」
「……ううん、何でもないわ」
きょとんとした表情で首を傾げる遊花に苦笑を浮かべる。
私よりも遥かに追い込まれた状況からでも逆転してる遊花にそんなことを言われても、ねぇ?
そんな何とも言えない気持ちを抑え込んでいると、刀花が悔しそうな、だけどどこか嬉しそうな表情で頭を下げてきた。
「宝月先輩‼?お手合わせ、ありがとうございました‼?負けてしまいましたが、宝月先輩とのデュエル、とてもためになりました‼?」
「……そう、ありがとう、刀花。私も、あなたのおかげで少しだけ前に進めたわ」
「私などが宝月先輩のお役に立てたのであれば嬉しいです。惜しむら

くは宝月先輩のエクストラリンクが見れなかったことですが……」
そういって刀花は本当に残念そうな表情を浮かべる。
そんな刀花に何となくバツが悪く思いながら、私は頬を掻きながら口を開く。
「まあ、刀花は常にリンク召喚をしてたからもう１つのエクストラモンスターゾーンがなかなか空かなかったものね。それに……私のデッキも、期末試験で遊花とデュエルした時から変わってるから前ほどエクストラリンクはし難いのよ」
「えっ⁉？そうだったんですか⁉？」
「転生炎獣の転生リンク召喚をするには同名のリンクモンスターがいるもの。結構ＥＸデッキもキツキツなのよね」
転生炎獣の特徴である転生には同名カードが必要になる。
そのためＥＸデッキには同名モンスターが２体は必要なため、１５枚のＥＸデッキのカードを選別するのも結構大変なため、前ほど積極的にエクストラリンクを狙いにいくようにはしないようにしたのだ。
勿論、全くできないってわけじゃないけどね。
「まあ、私がエクストラリンクを狙えなかったのはそれだけ刀花が強かったってことよ。だから、自信を持ちなさい。次デュエルしたら私が負けちゃうかもね」
「い、いえいえ、そんなそんな、私なんてまだまだ未熟な身ですから……あ‼？」
そこで刀花はラウンジにおいてあった時計を見る。
話している間に結構時間が経ったようで、いつのまにか全ての講義が終了する時間になっていた。
「い、いけない‼？真紅ちゃんに講義が終わったら待っててって言ってるんでした‼？そ、それでは、私はこの辺りで失礼します‼？今回はご迷惑をかけてしまい、私のワガママまで聞いていただき、本当に申し訳ありませんでした‼？」
「だから、気にしてないわよ……それじゃあね、刀花。また遊びに来なさい。刀花なら歓迎するわ」
「またね、刀花ちゃん。今度は真紅ちゃんと一緒にね」

私と遊花がそういうと、刀花はもう一度深く頭を下げてから走ってラウンジから出て行った。
……さて、これで刀花の件は片付いた。
後は……
「刀花ちゃん、行っちゃったね。それじゃあ帰ろっか、桜ちゃん」
「ごめん、遊花。私、ちょっと用事を思い出したの。悪いけど先に帰って貰えないかしら？」
「えっ？用事？それなら私、待ってるよ？」
私の言葉に遊花はきょとんとした表情を浮かべながら首を傾げる。
でも、待ってて貰うわけにもいかないのよね。
「本当に大したことない用事だから遊花は先に帰って晩御飯の準備でもしてて。遊花の晩御飯、楽しみにして帰るから」
「ん～……分かった。それじゃあ桜ちゃんが喜んでくれるように頑張って晩御飯を作って待ってるね」
「ええ、頼んだわ。私も用事を終わらせたらすぐに帰るから」
「うん、分かった。それじゃあ用事、頑張ってね」
そういってラウンジを去っていく遊花を手を振って見送り、私は1人ラウンジに取り残される。
……ふぅ、あっさり帰ってくれてよかったわ。
これから行うことを遊花に見られるのは、少しだけ恥ずかしいし、どんな目で見られるかわからないものね。
まあ、遊花なら案外簡単に受け入れてくれそうではあるけど……
そんなことを考えながら私は自分のデッキから1枚のカードを取り出す。
取り出したカードはーーー妖精伝姫―カグヤ。
取り出した妖精伝姫―カグヤのカードを眺めていると、私の耳に先程のデュエルでも聞こえた女の子の声が響く。
『ふふん、どうだったかしら、桜。相棒らしい、見事な活躍だったと思わない？』
「……本当に幻覚や幻聴の類いじゃないのね」
『むぅ、失礼しちゃうわね。ちゃんとデュエル中に会話をしたじゃな

い。相棒のことを信じられないの？』
「むしろ信じたくないのよ、アンタみたいなカードの精霊なんて非常識な存在と会話ができるようになった自分を」
私はカードの中で楽しそうに微笑んでいるカグヤを見て頭を抱える。
……確かに、異世界で共に戦った決闘者にはカード精霊が憑いていた人もいたけど、まさか自分自身が、しかも子供の頃からずっと使ってきたカードに精霊が宿ってるなんて思ってもみなかった。
『私は嬉しいわよ？桜と会話ができるようになったの。今生では会話できないかと思ってたもの』
「……そういえばアンタ、ラインが繋がったとか言ってたわよね？あれってどういう意味なの？」
『ああ、ラインって言うのはね、言うなれば〝魂の伝達〟よ』
「〝魂の伝達〟？」
突然出てきた意味不明な言葉に私は首を傾げる。
そんな私に、カグヤは楽しそうに言葉を続ける。
『そう。精霊の身体は桜のような人間の身体と違って物質じゃなくて、心のエネルギー、霊気でできてるの』
「霊気って……よく幽霊とかそんな話で出てくるあの霊気？」
『そう。今桜が認識している私の声も人間でいう声帯を震わせて発せられてるものじゃないの。〝魂の伝達〟。心と心が直接霊気のラインで繋がり、意志が伝わる。ようはテレパシーみたいなもので、私の声を桜は認識しているのよ』
「……なんだかややこしい話になってきたわね」
『まあ、簡単に言えば私と桜の波長があうようになったから話せるようになったの。それだけが分かっていれば十分だわ』
そういってカグヤは嬉しそうに笑う。
波長があったからカグヤと会話ができるようになった。
理屈は分かったけど、それならば何故今なのかしら？
私とカグヤ自体の付き合いはそれこそ私が保育園の頃からだ。
それが何故急に波長があうようになったのかしら？

沸いてくる疑問に首を傾げていると、カグヤは手に持っていた扇子を広げて口元を隠しながら楽しそうに口を開く。
『何にせよ、これで退屈な日々から解放されるわ。今までは語りかけても桜は気づいてくれなかったけど、これからは話しかけたら気づいてくれるんだもの』
「……言っとくけど、いつでも応えれるわけじゃないんだからね？」
『それぐらい分かってるわよ、失礼しちゃうわ。私はこれでもかなりの年月を生きてきてるのよ？世間知らずのお姫様ってわけじゃないわ』
「……それにしても、アンタのこと、遊花には説明した方がいいのかしら？あの子ならカードの精霊のことは一応知ってるし」
私がカグヤのことを遊花に話そうか悩んでいると、カグヤが突然真剣な表情を浮かべて首を振った。
『いいえ、あの子にはまだ話さない方がいいわ。あの子の周りには既に色々な存在が集まってきてるしね。時間の問題とはいえ、そこに私の存在が加わってあの子を抑制している壁が崩れてしまえば、どうなるか予想がつかないもの』
「は？それってどういう……」
『……ごめんなさい、これは今語るべきことではないの。この話をすれば、きっと桜は戸惑う。でも、いずれ分かる時が来るわ。あの子が存在している限り、必ず、ね』
そういったきりカグヤは黙りこくってしまった。
……カグヤが遊花の何を知っているのかは分からない。
何故それを私に伝えられないのかも。
だけど、私が遊花にしてあげれることなんて1つしかない。
遊花に何があろうと、遊花が折れないように支える。
それが、あの子の親友として、宝月　桜ができる唯一のことなのだから。

第６２話　同じ穴の貉

☆

「……はぁ～」

午前中の清掃が一区切りつき、近くにあるコインロッカーから荷物を取り出してベンチで遊花が作った弁当を食べながら思わずため息を吐く。

バグースカの事件から早くも1週間が過ぎた。

あれからも夜と共に闇のカードについて調べてみているのだが、全く成果が上がらなかった。

闇のカードにより引き起こされる事件自体は増えていくのに、不自然な程に元凶への手掛かりがない。

こうなってくると根本的に調べ方を考え直す必要がありそうだ。

「といっても、何か方法があるわけじゃないんだよな」

そう呟きながら、座っていたベンチに身体を投げ出す。

闇のカードを探っていけば遭遇するかと思ったが、あれからあの黒ずくめのヘンテコヘルメット野郎と遭遇することもない。

俺が所持しているコードオブアームズ、そして成り行きで奪うことになったロンゴミアントがあるのに狙ってこないのは、諦めたからか闇のカードをばら撒くために後回しにしているのか、はたまた別の理由か。

ただ、諦められていたなら手詰まりだ。

「はぁ～何とかして闇のカードが集まってる場所を探す方法があればなぁ」

「はっ、そんな方法があれば俺が使ってやるよ」

「……ん？」

思わずため息と共に吐き出してしまった俺の言葉に、そんな返答が聞こえてきて、俺は思わず首を傾げながら声が聞こえてきた方向を見る。

「よぉ、『英雄騎士』。えらく落ちぶれた仕事をしてんじゃねぇか」

「アンタは……射手園　大和、だったか？」
「へぇ、元とはいえ世界ランキング９位の人間に覚えられてるとは光栄だな」
　そういって、白髪をツーブロックにした男ーーー大和はいやらしく笑った。
「何しにきた？」
「前に言ったろ。まだアンタがこの件に関わるってんなら今度はアンタの闇のカードをいただくってな」
　そういって大和はデュエルディスクを起動しながら、１枚のカードを俺に見せる。
「『英雄騎士』、俺とデュエルしろ。お互いの闇のカードを賭けてな」
　大和が手にしていたのはこの前大和が倒したバグースカのカード。
　そんな大和に俺は思わず疑問を返す。
「どうしてアンタは俺達をこの事件から遠ざけようとする？アンタ、何か知ってるのか？」
「……はっ、俺は事件自体に興味はねぇ。だが、闇のカードは全て俺が狩る。テメェらみたいな素人に狩場が荒らされるのが嫌なだけだ」
「っ、お前‼？」
　そういって笑う大和に俺は思わず声を荒げてしまう。
　コイツ、そんなゲーム感覚で闇のカードを狩ってるっていうのか？
　そんなことで、闇のカードに操られた人達に怪我を負わせてるっていうのか？
　そんな俺を見て、大和は楽しそうに笑う。
「さあ、ゲームと行こうぜ、『英雄騎士』。どちらが闇のカードを手に入れるかってゲームをな」
「……いいぜ、アンタに闇のカードは渡せない。アンタの闇のカードも、俺が回収してやる‼？」
　そういって俺もデュエルディスクを起動して構える。
　このデュエル、負けるわけにはいかない‼？
「いくぞ‼？」
「戦闘開始だ、ぶっ潰させて貰うぜ、『英雄騎士』」

『決闘!!?』

遊騎　ＬＰ８０００
大和　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は俺だ。右端に魔弾の射手カスパールを召喚!!?」

〈魔弾の射手カスパール〉☆３　悪魔族　光属性
ＡＴＫ１２００

フィールドに現れたのはマントを羽織った悪魔の羽根を持ち、異形の手をした銃士。

「魔弾モンスターには永続効果としてモンスターゾーンに存在する限り、自分・相手ターンに自分は魔弾魔法・罠カードを手札から発動できる。よって、中央で手札から永続罠、魔弾―ブラッディクラウンを発動!!?同名カードは1ターンに1度、自分・相手のメインフェイズに手札から魔弾モンスター1体を特殊召喚し、この効果でモンスターが特殊召喚されたゾーンと同じ縦列の相手のメインモンスターゾーンが使用されていない場合、そのゾーンはターン終了時まで使用できない!!?さあ早速出番だぜ。中央に現れよ、魔弾を生み出しし堕天した天使達の長!!?魔弾の悪魔　ザミエル!!?」

「っ、いきなりか!!?」

〈魔弾の悪魔　ザミエル〉☆８　悪魔族　光属性
ＡＴＫ２５００

カスパールが天に向かって弾丸を放つと、その弾丸に導かれるように天より舞い降りたのは銃士達と同じ悪魔の羽根を持ち、両手に銃を手にした双銃の悪魔。

１ターン目から切り札を出してくるなんて、とばしてくるじゃないか。
「俺は右端で魔法カード、カップオブエース‼?コイントスを１回行い、表が出た場合、自分はデッキからカードを２枚ドローし、裏が出た場合、相手はデッキからカードを２枚ドローする」
「運次第のドローカードか……」
立体映像で現れたコインをザミエルが指で弾き、落ちてきたコインを手で受け止める。
ザミエルが手を開くと、コインは表を向いていた。
「は、ついてるな。表が出たから俺は２枚ドローする‼?さらに魔弾の射手カスパールの効果発動だ。同名カードは１ターンに１度、このカードと同じ縦列で魔法・罠カードが発動した場合、発動したカードとカード名が異なる魔弾カード１枚をデッキから手札に加える。俺はデッキから罠カード、魔弾―デスペラードを手札に加える」
「手札が一気に増えたか……」
「俺はこれでターンエンドだ。精々楽しませてくれよ、『英雄騎士』」

遊騎　ＬＰ８０００　手札５
ーーーーーー　ー
ーーーーー
ー　ー
ーー○ー○
ーー△ーー　ー
大和　ＬＰ８０００　手札４

「俺のターン、ドロー‼?」
前に見た限りでは魔弾モンスターがいる限り、伏せられていなくても手札から魔弾が放たれるハズだ。
だが、いくら魔弾を手札から使えるようになろうが手札からの魔弾と展開するモンスターで手札という弾丸はすぐに尽きるハズ……だったら、まずは手札を使い切らせて弾切れを起こさせる‼?

「俺はＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）サウザンドブレードを召喚!!?」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

フィールドに頭巾を被り、背中に何本もの刀を背負った戦士のモンスターが現れる。
現れたサウザンドブレードを見て大和は鼻で笑う。
「はっ、ヒロイック……英雄的な者、か。昔は『英雄騎士』なんて呼ばれてたアンタにはピッタリなカードだな、『墜ちた英雄』」
「好きに言えよ。その程度の言葉じゃ俺は動じない」
「そうかよ。なら、今のアンタを見せて貰おうか。まずは小手調べだ。手札から右端で罠発動!!?魔弾―デスペラード!!?同名カードは１ターンに１度しか発動できないが、自分フィールドに魔弾モンスターが存在する場合、フィールドの表側表示のカード１枚を対象としてそのカードを破壊する。俺が破壊するのはＨ・Ｃ　サウザンドブレードだ」
カスパールが弾丸を放ち、サウザンドブレードの身体を貫いて爆散させる。
「さらに魔弾の射手カスパールの効果発動だ。俺はデッキからカウンター罠、魔弾―デッドマンズバーストを手札に加える。召喚権を使ったモンスターは破壊したが、まさか、これだけで終わりってわけじゃないよな？」
「当たり前だろ。魔法カード、予想ＧＵＹを発動!!?自分フィールドにモンスターが存在しない場合にこのカードは発動できる。デッキからレベル４以下の通常モンスター１体を特殊召喚する!!?」
「お得意の絵札の三銃士を出す気か……だが無意味だ。手札からカウンター罠、魔弾―デッドマンズバースト!!?同名カードは１ターンに１度しか発動できないが、自分フィールドに魔弾モンスターが存在する場合、相手が魔法・罠カードを発動した時、その発動を無効にし破壊する!!?」

ザミエルが銃弾を放ち、予想ＧＵＹを破壊する。
ここまでは予想の範囲内。
そして、魔弾は同名カードは1ターンに1度しか使えない。
少なくとも、このターンの内に破壊と効果無効をされる心配は無くなったハズだ。
問題はここからだな。
「相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。来い、Ｈ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）強襲のハルベルト!!?」
「チッ、まだ特殊召喚ができるモンスターを残していたか」

〈Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１８００

俺の前に現れたのはハルバードを持った紫の鎧を纏った戦士。
「そしてバトル!!?」
「おっと、メインフェイズ終了時に魔弾―ブラッディクラウンの効果を発動!!?魔弾の射手ドクトルを魔弾の悪魔　ザミエルの右隣に特殊召喚だ!!?」

〈魔弾の射手ドクトル〉☆３　悪魔族　光属性
ＡＴＫ１４００

カスパールとザミエルの間に悪魔の羽根と異形の手を持つ医師のモンスターが現れる。
あのカードは確か魔弾のサルベージが出来るモンスターだったな。
「だが、臆せず攻める!!?バトル!!?Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトで魔弾の射手ドクトルを攻撃!!?ライトニングハルバード!!?」
ハルベルドは雷を纏ったハルバードを構え、ドクトルに突撃する。
そんなハルベルドに対し、ドクトルは冷静に銃を構える。
「魔弾の射手ドクトルと同じ縦列で速攻魔法、魔弾―クロスドミネー

ター‼?同名カードは1ターンに1度しか発動できないが、自分フィールドに魔弾モンスターが存在する場合、フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてターン終了時まで、そのモンスターの攻撃力・守備力は0になり、効果は無効化される‼?対象はH・C　強襲のハルベルトだ‼?」
「っ……やっぱり魔弾を持ってたか」

H・C　強襲のハルベルト
ATK1800→0

ドクトルを貫こうとするハルベルトのハルバードをザミエルが魔弾で弾き、ハルベルドの体勢を崩させる。
「魔弾の射手ドクトルの効果発動。同名カードは1ターンに1度、このカードと同じ縦列で魔法・罠カードが発動した場合、その発動したカードとカード名が異なる魔弾カード1枚を自分の墓地から選んで手札に加える。俺は墓地に存在する魔弾―デッドマンズバーストを手札に戻す。そして迎え撃て、魔弾の射手ドクトル‼?ギフトパトローネ‼?」
体勢が崩れたハルベルドは、至近距離から行われたドクトルの銃撃を躱すことができず、そのまま爆散した。

遊騎　LP8000→6600

「くっ……」
「はっ、あっけねえ。この程度かよ、『英雄騎士』。これなら次のターンには決着が付きそうだな」
「随分甘く見られたもんだな。そんなにお望みならすぐにこの状況を覆してやるさ‼?俺はバトルフェイズを終了し、バトルフェイズ終了時に手札から罠発動‼?拮抗勝負‼?」
「何っ⁉?」
「手札から罠を使えるのは別にアンタだけの特権じゃないんだぜ。自

分フィールドにカードが存在しない場合、このカードは手札からも発動できる!!?相手フィールドのカードの数が自分フィールドのカードの数より多い場合、自分・相手のバトルフェイズ終了時に発動できる!!?自分フィールドのカードの数と同じになるように、相手はフィールドのカードを裏側表示で除外しなければならない!!?」
「何だと!?!?」
「俺のフィールドには今発動した拮抗勝負のみ。さぁ、アンタにもフィールドのカードが1枚になるようにカードを除外して貰うぜ!!?」
「チッ……俺は魔弾の悪魔　ザミエルを残し、他のカードを除外する」
　大和がそう宣言するとザミエル以外のカードが粒子になって消えていく。
「俺はこれでターンエンドだ」
「思った以上に消耗させられたが、この程度じゃ俺は止められないぜ。魔弾の悪魔　ザミエルの効果発動!!?エントヴィッケルンパトローネ!!?相手エンドフェイズに発動でき、このターン、このカードが表側表示で存在する間に自分が発動した魔弾魔法・罠カードの数だけ、自分はデッキからドローする!!?」
「っ!!?ドロー効果を持ってたのか……」
「使った分の弾丸は装填させて貰うぜ?」
　大和の言葉でザミエルが新しい魔弾を生み出す。
　しかし、現れた魔弾は幻影のように崩壊して消えていった。
「何!?!?」
「誰がそんな効果通すかよ。手札から罠発動!!?無限泡影!!?」
「っ!!?また手札から罠か……」
「アンタだって俺のターンに好きなように手札から魔法や罠を使ったんだ。ズルいなんて言うなよな?自分フィールドにカードが存在しない場合、このカードは手札からも発動できる!!?相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてそのモンスターの効果をターン終了時まで無効にする!!?対象は勿論、魔弾の悪魔　ザミエルだ。

これで手札は増やせないぜ？」

遊騎　ＬＰ６６００　手札１

ーーーーーー　ー

ーーーーーー

ー　　ー

ーー○ーー

ーーーーー　ー

大和　ＬＰ８０００　手札２

「……少しはやるじゃねぇか。だが、俺の方が有利なことには変わりがない‼？俺のターン、ドロー‼？俺は右端に魔弾の射手　カラミティ召喚‼？」

〈魔弾の射手カラミティ〉☆４　悪魔族　光属性

ＡＴＫ１５００

現れたのは悪魔の羽根と異形の手を持つロケットランチャーを持った女性型のモンスター。

「バトル‼？魔弾の射手カラミティでダイレクトアタック‼？シュプレンゲンパトローネ‼？」

「ぐっ‼？」

遊騎　ＬＰ６６００→５１００

カラミティが放つロケットランチャーの爆風が俺の身体を打ちつける。

「追撃だ。魔弾の悪魔　ザミエルでダイレクトアタック‼？ヴァイスシュヴァルツパトローネ‼？」

「ぐあっ‼？」

遊騎　ＬＰ５１００→２６００

ザミエルが双銃から放つ魔弾が俺の身体を貫き、大きくライフを削る。

どうやら今回の攻撃は実体化してないみたいだが、それでもライフが大きく削られたことには変わりがないから、素直に喜べないな。

「だが、戦闘ダメージを受けた時、Ｈ・Ｃサウザンドブレードの効果発動‼？このカードが墓地に存在し、戦闘・効果で自分がダメージを受けた時、このカードを墓地から攻撃表示で特殊召喚する‼？」

「チッ、蘇生効果持ちがいたか」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

俺のフィールドに再びサウザンドブレードが姿を現わす。

それを見て大和は不愉快そうに顔を歪めた。

「面倒な奴だ。俺はこれでターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ２６００　手札１
ーーーーーー　ー
ーー○ーー
ー　　ー
ーー○ー○
ーーーーー　ー
大和　ＬＰ８０００　手札２

「俺のターン、ドロー‼？」

大和の手札は２枚。

１枚は魔弾―デッドマンズバースト。

だが、分かっているなら使わせないように動くことができる。

ここが攻めるチャンスだ‼？

「俺は、チューナーモンスター、ジャンクチェンジャーを召喚!!?」
「チューナーだと!!?」

〈ジャンクチェンジャー〉☆３　戦士族　地属性
ＡＴＫ１５００

フィールドに現れたのは鋼鉄の身体を持つロボットのような戦士。
「ジャンクチェンジャーの効果発動!!?このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、フィールドのジャンクモンスター１体を対象として２つの効果から１つを選択して発動できる。対象のモンスターのレベルを１つ上げるか、対象のモンスターのレベルを１つ下げる。俺は１つ目の効果を使用し、ジャンクチェンジャーのレベルを１つ上げる!!?」

ジャンクチェンジャー
☆３→４

ジャンクチェンジャーの身体が赤く輝き、レベルが１つ上がる。
これで準備は整った。
「俺はレベル４、Ｈ・Ｃ　サウザンドブレードに、レベル４、チューナーモンスター、ジャンクチェンジャーをチューニング!!?」
「来るか、シンクロ召喚……」
ジャンクチェンジャーが光の輪になり、サウザンドブレードが小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から現れるのは機械の身体を持つ電子の巨人。
「迫る逆境、覆したるは不屈の闘志!!?シンクロ召喚!!?百折不撓の戦士、ギガンティックファイター!!?」

〈ギガンティックファイター〉☆８　戦士族　地属性
ＡＴＫ２８００

「レベル８のシンクロモンスターか」
「ギガンティックファイターの永続効果、フォルテュードフォース‼?このカードの攻撃力は、お互いの墓地の戦士族モンスターの数×１００ポイントアップする‼?俺の墓地にいる戦士族モンスターはＨ・Ｃ　強襲のハルベルト、Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード、ジャンクチェンジャーの３体。よって攻撃力は３００ポイントアップする‼?」

ギガンティックファイター
ＡＴＫ２８００→３１００

「攻撃力３１００……」
「バトル‼?ギガンティックファイターで魔弾の悪魔　ザミエルを攻撃‼?ギガンティックブレイク‼?」
「チッ、迎え撃て‼?魔弾の悪魔　ザミエル‼?ヴァイスシュヴァルツパトローネ‼?」
ギガンティックファイターは力強く跳躍するとザミエルに向けて跳び蹴りを放つ。
ザミエルが双銃から魔弾を放って応戦するが、ギガンティックファイターの跳び蹴りは魔弾ごとザミエルを貫き、爆散させた。

大和　ＬＰ８０００→７４００

「チッ……ザミエルがやられたか」
「切り札を破壊できただけでも上出来だな。俺はこのままターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ２６００　手札１
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　○

ーーーー○
ーーーーー　ー
大和　ＬＰ７４００　手札２
「俺のターン、ドロー!!?一旦、防御に回るか。俺は中央に魔弾の射手スターを召喚!!?」
〈魔弾の射手　スター〉☆４　悪魔族　光属性
ＡＴＫ１３００
現れたのは悪魔の羽根と異形の手を持つ踊り子のような姿のモンスター。
「さらに魔弾の射手カラミティと同じ縦列で魔法カード、一時休戦。お互いのプレイヤーは、それぞれデッキから１枚ドローし、次の相手ターン終了時まで、お互いが受ける全てのダメージは０になる」
「ダメージが入らなくなったか」
「さらに魔弾の射手カラミティの効果発動。同名カードは１ターンに１度、このカードと同じ縦列で魔法・罠カードが発動した場合、自分の墓地の魔弾モンスター１体を対象としてそのモンスターを守備表示で特殊召喚する。蘇れ、魔弾を生み出しし堕天した天使達の長!!?魔弾の悪魔　ザミエル!!?」
「っ、もう復活してきたか」
〈魔弾の悪魔　ザミエル〉☆８　悪魔族　光属性
ＤＥＦ２５００
カラミティが墓地に向かって弾丸を放つと、その弾丸に導かれるようにザミエルが蘇る。
さらに大和はニヤリと笑うと正面に手をかざす。
「試してみるか。俺はレベル４の魔弾の射手カラミティと魔弾の射手スターでオーバーレイ!!?２体のモンスターでオーバーレイネット

ワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
カラミティとスターが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、そこに現れたのは一升瓶を抱えて瓶や空き缶が散らばる中眠っているバク。
「眠りを司る獣よ!!?歯向かう全ての者に永遠の眠りを与えろ!!?現れろ!!?Ｎｏ．４１泥睡魔獣バグースカ!!?」

〈Ｎｏ．４１泥睡魔獣バグースカ〉★４　悪魔族　地属性
ＤＥＦ２０００

「っ、そのＮｏ．はこのあいだの!!?」
「Ｎｏ．４１泥睡魔獣バグースカの効果発動!!?エターナルスリープワールド!!?このカードがモンスターゾーンに守備表示で存在する限り、フィールドの表側表示モンスターは守備表示になり、フィールドの守備表示モンスターが発動した効果は無効化される!!?」
「っ……」
バグースカの身体から白い霧が吹き出し、辺りを包みこむ。
霧に包まれたギガンティックファイターはその場に崩れ落ち、眠りについた。
厄介なＮｏ．だ。
これでこちらの攻撃と効果は封じられたな。

ギガンティックファイター
ＡＴＫ３１００↓ＤＥＦ１０００

「さあ、この状況でどう動く、『英雄騎士』？俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ２６００　手札２
ーーーーー　ー

ーーーーー
□　□
ー□ーーー
ーー▲ーー　ー
大和　ＬＰ７４００　手札１

「俺のターン、ドロー!!?……くっ」
一時休戦とドローで増えた手札を見るが、この状況を打開する方法は見つからない。
リンクモンスターを出せればバグースカを破壊することはできるだろうが、バグースカを破壊できる攻撃力を持ったリンクモンスターは俺のデッキにはアルカナエクストラジョーカーしかいない。
だが、アルカナエクストラジョーカーはカード名が異なる戦士族モンスター３体からのみリンク召喚できるリンク３のモンスター。
今の手札では３体の戦士族を出すところにまでは辿り着けない。
だが、攻められないのは大和も同じハズだ。
バグースカが動きを封じるのは俺だけじゃない。
大和のモンスターもまたバグースカにより眠らされ、効果を無効化されている。
なら、この状況をどうにかする手段が見つかるまで、凌ぐしかない。
「俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ２６００　手札２
ー▲ーーー　ー
ーーーーー
□　□
ー□ーーー
ーー▲ーー　ー
大和　ＬＰ７４００　手札１

「俺のターン、ドロー!!?スタンバイフェイズ、Ｎｏ．４１泥睡魔獣バ

グースカの効果発動。このカードのコントローラーは、自分スタンバイフェイズ毎にこのカードのオーバーレイユニットを1つ取り除く。この効果でオーバーレイユニットを取り除けない場合、このカードを破壊する」
「そんなデメリットを持っていたのか……」
バグースカに1つのオーバーレイユニットが吸い込まれていく。
まあ、流石にデメリット効果ぐらいは持ってないと強力過ぎるか。
守備表示がないリンクモンスターという抜け道があるとはいえ、フィールドにいるだけでリンクモンスター以外のモンスターを止められるのを続けられたら突破手段が限られてくるからな。
バグースカのオーバーレイユニットは後1つ。
つまり、2ターン後にはオーバーレイユニットがなくなり、存在を保てずに自壊する。
なら、今は準備をし、バグースカの拘束が解けたところで攻めにいくのが1番いいだろう。
最もーーー
「Ｎｏ．４１泥睡魔獣バグースカは後2ターンで破壊されるが、そんなものは関係ねぇ。このターンで、お前にトドメを刺すからな」
ーーー大和がそれまで大人しく待ってくれるわけがないだろうがな。
「俺はＮｏ．４１泥睡魔獣バグースカを攻撃表示に変更する」

Ｎｏ．４１泥睡魔獣バグースカ
ＤＥＦ２０００→ＡＴＫ２１００

バグースカが目を覚まし、のそのそと起き始めると、バグースカの身体から吹き出していた白い霧が消えていき、眠っていたモンスター達が夢から覚める。
「そして攻撃表示に変わったことでＮｏ．４１泥睡魔獣バグースカの永続効果が変化する‼?」
「っ‼?表示形式で効果が変わるモンスターだったのか……」

「Ｎｏ．４１泥睡魔獣バグースカの効果発動!!?トタイングステップ!!?攻撃表示のこのカードは相手の効果の対象にならず、相手の効果では破壊されない!!?」
「っ、今度は効果耐性か……」
目を覚ましたバグースカはまだ酔いが回っているのかフラフラとしながらもこちらを睨みつけながら拳を構える。
「俺はさらに魔弾の悪魔　ザミエルも攻撃表示に変更する」

魔弾の悪魔　ザミエル
ＤＥＦ２５００→ＡＴＫ２５００

「そして中央に魔弾の射手ワイルドを召喚!!?」

〈魔弾の射手ワイルド〉☆４　悪魔族　光属性
ＡＴＫ１７００

現れたのは悪魔の羽根と異形の手を持つ近未来的な火器で武装したゲリラのようなモンスター。
「リバースカードオープン!!?罠発動、メテオレイン!!?このターン自分のモンスターが守備表示モンスターを攻撃した時にその守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える!!?」
「なっ!?ここで貫通ダメージか!!?」
「さらに魔弾の射手ワイルドの効果発動!!?このカードと同じ縦列で魔法・罠カードが発動した場合、自分の墓地の魔弾カード３枚を対象としてそのカード３枚をデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから１枚ドローする!!?俺は墓地の魔弾―クロスドミネーター、魔弾―デスペラード、魔弾の射手カラミティをデッキに戻し、カードを１枚ドローする!!?」
「手札まで増やされたか……」
「さあ、ぶっ潰させて貰うぜ、『英雄騎士』!!?バトル!!?魔弾の射手

ワイルドでギガンティックファイターを攻撃!!?ゲヴァルトパトローネ!!?」
　ワイルドが武装していた火器を一斉掃射し、それを受けたギガンティックファイターは爆散する。

遊騎　ＬＰ２６００→１９００

「くっ……ギガンティックファイターの効果発動!!?フォルテュードリザレクション!!?このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分または相手の墓地の戦士族モンスター１体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚できる!!?対象はギガンティックファイター!!?」
「はっ、無駄なんだよ!!?手札から罠発動!!?魔弾―ダンシングニードル!!?同名カードは１ターンに１度しか発動できないが、自分フィールドに魔弾モンスターが存在する場合、お互いの墓地のカードを合計３枚まで対象としてそのカードを除外する!!?」
「この状況で墓地除外だって!?!?」
「俺が除外するのはお前の墓地に存在するＨ・Ｃ　サウザンドブレード、ジャンクチェンジャー、ギガンティックファイターだ!!?」
　ザミエルが放った魔弾が墓地にいたギガンティックファイター達を撃ち抜き、消滅させる。
　ここで墓地のカードを封じられたのはかなり痛い。
「終わりだ!!?Ｎｏ．４１泥睡魔獣バグースカでダイレクトアタック!!?」
　バグースカが勢いよく俺に殴りかかってくる。
　この攻撃を受ければ俺の負け……だけど、そう簡単に通すわけがないだろ!!?
「まだだ!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札のガガガガードナーの効果発動!!?このカードを手札から特殊召喚できる!!?」
「何っ!?!?」

〈ガガガガードナー〉☆４　戦士族　地属性
ＤＥＦ２０００

俺をバグースカから守るように巨大な盾を持ったモンスターが現れる。
「なら、Ｎｏ．４１泥睡魔獣バグースカでガガガガードナーを攻撃‼？ドランカンマスター‼？」
「ガガガガードナーの効果発動‼？このカードが攻撃対象に選択された時、手札を１枚捨てる事で、このカードはその戦闘では破壊されない‼？」
「生き残りやがるか‼？だが、ダメージは受けて貰うぜ‼？」
「くっ、これぐらい……」

遊騎　ＬＰ１９００→１８００

殴りかかってきたバグースカをガガガガードナーは巨大な盾で受け止めるが、バグースカの勢いに負け、盾が弾きとばされる。
「トドメを刺せなくなったか……だが、そいつは生かしておかねえ‼？魔弾の悪魔　ザミエルでガガガガードナーを攻撃‼？ヴァイスシュヴァルツパトローネ‼？」
盾が無くなったガガガガードナーにザミエルが双銃から魔弾を放ち、防ぐことができないガガガガードナーの身体を撃ち抜き、爆散させた。
「ぐあぁっ‼？」

遊騎　ＬＰ１８００→１３００

「しぶとさだけは一級品だな。だが、お前の手札は０。フィールドにモンスターもなく、墓地に使えるカードもねぇ。そして伏せカードも魔弾―デッドマンズバーストでどうにでもなる。次の俺のターンが、お前の最期だ、『英雄騎士』。ターンエンド」

遊騎　ＬＰ１３００　手札０
ー▲ーーー　ー
ーーーーー
　　○　　ー
ー○○ーー
ーーーーー　ー
大和　ＬＰ７４００　手札１

なんとか凌ぎきり俺のターンがやってくる。
しかし、俺には手札がなく、フィールドに残ったカードもブラフとして伏せていたシャッフルリボーン。
おまけに大和の手札にはまだ使われていない魔弾―デッドマンズバーストが残っている。
あのカードが残っている限り、シャッフルリボーンを発動させることはできないだろう。
このままいけば待っているのは敗北。
そしてその代価は俺が所持している闇のカードだ。
確かに闇のカードを大和に奪われようが俺に直接的なデメリットはない。
俺の手元から闇のカードがなくなれば、事件に巻き込まれる可能性も今までよりはかなり低くなるだろう。
俺だって、危険な目にあいたいわけではない。
だけど、もう俺は決断したのだ。
大切な友達を……家族のような存在を守るために、闇のカードをばら撒いてる奴を探すと。
そのためには闇のカードが必要になる。
夜が言っていた、不乱健を拾ってから闇のカードを持つ決闘者に襲われるようになったという話。
あの話が本当なら、闇のカードには引かれ合う性質があるのかも知れない。

そうだとすれば、闇のカードを集めていけば闇のカードをばら撒いてる奴と出会う確率もあがる。
闇のカードをばら撒いてるということは、それだけの闇のカードを所持しているということなのだから。
それに、俺は大和のやり方が気に入らない。
ゲーム感覚で闇のカードを狩り、操られていた人達を平気で傷つける大和を。
だからこそーーー
「こんなところで負けてなんていられないよな」
そう呟き、俺は再び闘志を燃やす。
ライフは残り僅か。
明確に逆転する方法が手札にあるわけでもない。
だけど、負けられない……負けるわけにはいかない!!?
「射手園　大和……確かにアンタは強い。だけど、俺にだって譲れないものはある」
「……」
「だからこそ、本気でアンタを倒す。俺はこんなところで立ち止まるわけにはいかないんだ!!?」
「はっ!!?吠えるじゃねぇか。この状況から逆転できるものならやってみろ!!?」
「ああ、やってやる!!?それが俺がここでデュエルをしている意味なんだからな!!?俺のターン、ドロー!!?」
勢いよくドローしたそのカードを見る。
まだ、終わってない!!?
「リバースカードオープン!!?魔法カード、シャッフルリボーン!!?自分フィールドにモンスターが存在しない場合、自分の墓地のモンスター1体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、エンドフェイズに除外される!!?対象はガガガガードナー!!?」
「悪あがきか。手札からカウンター罠、魔弾―デッドマンズバースト!!?その発動を無効にし破壊する!!?

ワイルドが火器を放ってシャッフルリボーンを破壊する。
これで魔弾―デッドマンズバーストは使わせた!!?
「俺はH・C（ヒロイックチャレンジャー）ダブルランスを召喚!!?」

〈H・C　ダブルランス〉☆4　戦士族　地属性
ATK1700→2200

俺が出したのは2つの槍を持った白い戦士。
そのモンスターは出てくると同時に勇ましい雄叫びをあげる。
「H・C　ダブルランスの効果発動!!?召喚成功時に手札・墓地の同名モンスターを表側守備表示で特殊召喚する!!?俺は墓地のH・C　ダブルランスを特殊召喚だ!!?」
「何!!?そんなモンスターいつ……っ、さっきのガガガガードナーか!!?」
「ただしこのカードはシンクロ素材にできず、このカードをエクシーズ素材とする場合、戦士族モンスターのエクシーズ召喚にしか使用できない」

〈H・C　ダブルランス〉☆4　戦士族　地属性
DEF900→1400

もう1体ダブルランスが現れる。
「そして、斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
「ここでリンク召喚か!!?」
俺が正面に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター2体!!?俺は2体のH・C　ダブルランスをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?追想に生きる王女!!?リンク2!!?聖騎士の追想　イゾルデ!!?」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉LINK　2　戦士族　光属性

ＡＴＫ１６００　↙？　↘？

フィールドに現れたのは金髪と白髪の２人の女性型のモンスター。

「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動‼？リンクレカレクション‼？リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター１体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキからＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）ウォーハンマーを手札に加える‼？」

「何？」

俺の手札に加わったウォーハンマーを見て大和が訝しげな表情を浮かべる。

確かにウォーハンマーは上級モンスター。

イゾルデの召喚制限、さらには召喚権をすでに使っていることから手札に加える意味は皆無と言っていい。

そう……今までの俺のデッキであれば。

「さあ、初陣だ‼？聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動‼？メモリーズギフト‼？デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター１体をデッキから特殊召喚する‼？俺はデッキから妖刀竹光、最強の盾、ビッグバンシュート、閃光の双剣―トライス、孤毒の剣を墓地に送り、デッキから天融星カイキを特殊召喚‼？」

「天融星カイキ、だと？」

〈天融星カイキ〉☆５　戦士族　光属性

ＤＥＦ２１００

俺のフィールドに現れたのは鬼の顔の鎧を見に纏った鎧武者。

さあ、派手に活躍して貰うぜ‼？

「天融星カイキの効果、それにチェーンして墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える。

俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える。そして天融星カイキの効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、ライフポイントを５００を払って発動できる!!?」

遊騎　ＬＰ１３００→８００

「自分の手札・フィールドから、戦士族の融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をＥＸデッキから融合召喚する!!?俺はレベル５以上の戦士族モンスター、Ｈ・Ｃ　ウォーハンマーと天融星カイキを融合!!?」

「モンスター効果で融合召喚だと!?!?」

カイキが雄叫びをあげると、空に見える星が輝き、カイキとウォーハンマーを照らす。

その光に導かれるように、カイキとウォーハンマーは粒子に変わり、混ざり合う。

「天に融けし戦士よ、勇ましき鋼鉄の戦士よ!!?今交わりて、勝利を照らす星となれ!!?融合召喚!!?」

混ざり合った粒子が輝くと、その場に現れたのは漆黒のマントを羽織り、巨大な槍を持つ鬼神。

「勝利を告げる明星!!?覇勝星イダテン!!?」

〈覇勝星イダテン〉☆１０　戦士族　光属性
ＡＴＫ３０００

「レベル１０の融合モンスター!?!?テメェ、そんなモンスターまで……」

「覇勝星イダテンの効果発動!!?このカードが融合召喚に成功した場合、デッキから戦士族・レベル５モンスター１体を手札に加える!!?俺はデッキからジャックスナイトを手札に加える!!?さらに俺は墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動!!?自分フィールドのカード１枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッ

フルし、その後自分はデッキから1枚ドローする。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外する!!?俺はフィールドの聖騎士の追想　イゾルデをＥＸデッキに戻し、カードを1枚、ドローする!!?そして覇勝星イダテンの効果発動!!?神行法!!?1ターンに1度、手札を任意の枚数捨ててこのカードの攻撃力を捨てた数×２００ポイントアップさせる!!?俺は手札の妖刀竹光、ジャックスナイトを捨てて、覇勝星イダテンの攻撃力を４００ポイントアップさせる!!?」

覇勝星イダテン
ＡＴＫ３０００→３４００

「攻撃力３４００!?」
「まだ終わりじゃないぜ!!?墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?デッキから折れ竹光を手札に加え、覇勝星イダテンに装備!!?魔法カード、黄金色の竹光を発動!!?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローする!!?」
「ここで2枚のカードをドローするだと!?」
「まだだ!!?魔法カード、蛮族の狂宴ＬＶ５!!?自分の手札・墓地から戦士族・レベル5モンスターを2体まで選んで特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは、効果が無効化され、このターン攻撃できない。蘇れ、ジャックスナイト、天融星カイキ!!?」

〈天融星カイキ〉☆5　戦士族　光属性
ＤＥＦ２１００

〈ジャックスナイト〉☆5　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

「俺は光属性レベル5の天融星カイキ、ジャックスナイトでオーバー

レイ!!?2体の光属性モンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
「チッ、エクシーズ召喚か!!?」
カイキとジャックスナイトが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から純白の鎧を見に纏った戦士が降りてくる。
「星々を守りし光の戦士!!?セイクリッドプレアデス!!?」
〈セイクリッドプレアデス〉★5　戦士族　光属性
ＡＴＫ２５００
「セイクリッドプレアデスの効果発動!!?ゾディアックリターン!!?オーバーレイユニットを1つ使い、1ターンに1度、相手のカード1枚を手札に戻す!!?この効果は相手ターンでも使用することが出来る!!?俺は魔弾の悪魔　ザミエルを手札に戻す!!?」
「何!!?ザミエル!!?」
プレアデスが放つ星の弾丸がザミエルを弾き飛ばし、空間に穴を開けて消滅させる。
「そしてこれが最後の一手だ!!?速攻魔法、アクションマジック―フルターン!!?このターン、モンスター同士の戦闘で発生するお互いの戦闘ダメージは倍になる!!?」
「何だと!!?」
「バトル!!?セイクリッドプレアデスでＮｏ．４１泥睡魔獣バグースカを攻撃!!?プラネットフォール!!?」
「くっ!!?」
大和　ＬＰ７４００→６６００
プレアデスが空間に穴を開け、空から小惑星を降らせ、バグースカを押し潰す。

「この程度の攻撃で……‼?」
「これで決める‼?霸勝星イダテンで魔弾の射手ワイルドを攻撃‼?」
「チッ、迎え撃て‼?魔弾の射手ワイルド‼?」
ワイルドがイダテンに火器から魔弾を放つ。
向かってくる魔弾を見ながら、イダテンは槍を構えてワイルドを見据える。
「霸勝星イダテンの効果発動‼?陰陽五行‼?このカードがこのカードのレベル以下のレベルを持つ相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時に1度、その相手モンスターの攻撃力をそのダメージ計算時のみ0にする‼?」
「何だと⁉?」

魔弾の射手ワイルド
ＡＴＫ１７００→０

「終わりだ‼?貫け、霸勝星イダテン‼?天翔疾風撃‼?」
魔弾がイダテンを貫こうとした瞬間、イダテンの姿が消え、ワイルドの背後に現れる。
ワイルドが振り向こうとした瞬間、ワイルドの身体に風穴が開き、爆散した。
「馬鹿な、ぐあぁぁぁぁぁ‼?」

大和　ＬＰ６６００→０

ーーーーーーー

「俺の勝ちだ‼?」
その言葉に反応するように、大和のデュエルディスクからバグースカのカードが凄い勢いで回転しながら俺の元に飛んでくる。
バグースカを手にした俺を見て、大和は不機嫌そうに顔を歪めた。

「チッ、バグースカが渡っちまったか。なかなかやるじゃねぇか、『英雄騎士』。やっぱり、アイツら無しで挑むのは少し確実性に欠けたか」
「なに？」
大和の言葉に眉をひそめていると、大和は懐から2枚のカードを取り出す。
そして取り出されたカードからバグースカと同じような闇が溢れ出す。
「なっ⁉？まだ闇のカードがあったのか⁉？デュエルには勝ったのになんでそいつらは回収できないんだ⁉？」
「はっ、素人が。闇のカードを奪えんのはデッキに入ってる場合のみなんだよ。デッキにさえ入れてなければ闇のカードを奪われる心配はねぇ。まあ、賭けといった手前、バグースカは入れてデュエルする必要があったがな」
「っ、やってくれるな。同じレートじゃない癖に何が賭けだよ」
「知らねぇテメェが悪いんだよ。バグースカは取られちまったが、お前のデータは手に入った。次は負けることはねぇ」
「くっ……」
そういって大和が2枚のカードをデッキに入れ、再びデュエルディスクを構える。
断ることはできるが、このまま闇のカードを大和に所持させているのもよくない。
だが、今のデュエルで俺のデッキの中身はほとんど割れてしまった。
勿論、見せていない戦術はいくつかあるが、それは純粋に大和の魔弾で妨害されたため使えなかったというだけだ。
先程のデュエルでデッキの中身が割れた分、より魔弾での妨害は確実に俺の手を封じるだろう。
今手に入れたバグースカを入れるという手もあるが、大和は1度バグースカを攻略しているから効くとは思えない。
一体どうすればーーー
「人の友達に随分とやってくれる。前言ったとおり、成すすべも無く

叩き潰してあげようか？」
「っ‼？チッ、この声は……」
俺の耳に聞き覚えのある声が響き、大和が忌々しそうな目で俺の背後を睨む。
大和の視線を追って振り向くと、そこには怒りを露わにしている闇がいた。
「『氷の女王』……」
「闇⁉？どうしてここに……」
「ん、遊騎がデュエルしてるってヘリオトロープに教えてもらって急いできた。ちょうどお昼休みだったし。それはそれとして、今はそっちの奴に用がある」
そういって、闇は俺から大和に視線を向けると、身体から昼間の光すら呑み込むような漆黒のオーラが溢れはじめる。
「これ以上遊騎に手を出すというのなら、私が相手になる。忠告はした。それでも手を出したんだから、加減をするつもりはない」
「っ……流石に連戦で『氷の女王』とデュエルをするのはキツいか」
そういうと大和はデュエルディスクを停止させ、こちらに背を向ける。
「そいつはアンタに預けといてやるよ。また遊ぼうぜ、『英雄騎士』」
「二度とくるな」
そんなことを言って去って行く大和に、闇は辛辣な言葉を吐く。
大和の姿が完全に見えなくなると、闇の身体から溢れてた漆黒のオーラが消えた。
「大丈夫、遊騎？」
「大丈夫だって。別に攻撃が実体化してたわけじゃないしな」
「そうだったら私は大和を塵も残さず叩き潰す所存」
「そっか、ありがとな。気持ちだけは受け取っておくよ」
「ん」
憤りを露わにしている闇の頭を撫でると、闇は柔らかい笑みを浮かべた。
「闇は大和のことを知ってるのか？」

「一応、ね。遊騎は知ってる？アイツが１年前に暴力事件を起こしてプロリーグから追放された元プロ決闘者だって」
「ああ、この前遭遇した時に聞いた」
「ん、その時射手園　大和を鎮圧したのが私」
「……は？」
闇の言葉に、俺は思わず思考が止まってしまう。
そんな俺に構わず、闇は淡々と言葉を続ける。
「正確にいえば、闇のカードに操られて暴力事件を起こした射手園大和を偶々居合わせた私が鎮圧した。それだけの話、だよ」

第６３話　妄執する亡者

★

「君が栗原　遊花君だね。改めて、お会いできて嬉しいよ」
「ひゃ、ひゃい‼？恐縮です‼？」
「そんなに緊張しないでくれたまえ。呼び出したのは私の方なのだからね」
　そういって天神先生が朗らかに笑う。
　真紅ちゃんとデュエルをした日から早くも１週間が過ぎた。
　私は相変わらず闇先パイとのデュエルを望むデュエルアカデミア生とデュエルを行う日々を過ごしていた。
　流石に毎日デュエルを行い、私の戦法を観察されているからか最近では私のメタデッキを使うような人もでてきて、勝利はしているものの厳しいデュエルが多くなってきていた。
　闇先パイ曰く、メタデッキを使われるのは強者として認められている証、らしいんだけど、全然実感がない。
　そんな風に今日も一日中デュエルをする日なんだろうなと思っていたのだが、今日は少しだけいつもと違っていた。
　というのも、先週にカードデザイン学の講義で提出したスケッチブックに描いていたオリジナルカードのデザインのことで、放課後に研究室にくるようにと天神先生に呼び出されてしまったのである。
　というのもーーー
「それにしても、まさか学生であそこまでのカードデザインができる人がいるとはね。正直、とても驚いたよ」
「あは、あはは……」
　天神先生の賞賛の言葉に、私は引き攣った表情で曖昧に笑う。
　呼び出しを受けた際に、私と桜ちゃんは引き攣った表情で冷や汗を流した。
　何故なら、私がスケッチブックに描いていたのはこの世界にはない

異世界のカード達。
　この世界には存在せず無意識に描いてしまったとはいえ、原型を知っているカードを描いているのである意味ズルして描いたのと同じものなのだ。
　しかも、その中にはその異世界を滅ぼそうとしたカードまであったわけで、そこからインスピレーションを得られてしまうと色々と困ったことになりそうなのだ。
「栗原君は将来、カードデザイナーの道に進む気なのかい？」
「い、いえ。私はプロ決闘者を目指しているので……」
「そうなのか……君のような子が入ってくればカードデザインの世界も面白くなりそうだと思ったのだがね。君のデザインはどれも素晴らしかったからね。特に、私はこのデザインが気に入ったよ」
　そういって、天神先生が開いたページに描かれていたのは、私が無意識のうちに描いていた金色の翼を持つ小さな戦士と白龍。
　沢山の異世界のモンスター達と同じく、無意識の内に描いた２体のモンスターだったが、このモンスター達は本当に見覚えがないモンスターだった。
　だけど、見覚えはないハズなのに、何故かこのモンスター達は実在している気がするのだ。
「栗原君？どうかしたのかい？」
「あ、いえ、何でもないです。そ、それで天神先生。私は何で呼び出されたのでしょうか？」
「ああ、そうだったね。栗原君を呼び出した理由は２つあってね。１つはあのデザインをした子と話がしてみたかったということ。そしてもう１つは、そんな栗原君に課題を出そうかと思ったからさ」
「課題……ですか？」
　天神先生の言葉に、私は首を傾げる。
　カードデザイン学の課題で私にだけ出されるってどういうことなんだろう？
「君は素晴らしいデザインを見せてくれたからね。その才能が磨かれないのは惜しい。例え君がカードデザイナーになる気がなくとも、い

ずれその才能を活用する機会がくるかも知れない。そこでだ、君には私が出した課題に沿ったカードのデザインをしてきて貰いたい」
「カードのデザイン……」
「勿論、これは私個人の好奇心からの提案だ。君が断るというのであれば、私も諦めるとしよう。それに、これはとても大切なことだが、もし君がこの課題を受けてくれたとして、この課題によって君が生み出した作品を流用しないことについても誓約書を作成する。どうだろうか？」
そういって、天神先生は真剣な表情で私を見る。
私には、師匠の跡を継いでプロ決闘者になる夢がある。
その思いは絶対に変わらないものだけど、ここまで真剣に私の能力を考えてくれている天神先生の提案を断るのも悪い気がする。
それに……この課題を通じてカードデザインを続けていけば、いつかは辿り着くのかも知れない。
私が無意識のうちに描いてしまった、あの金色の翼を持つ小さな戦士と白龍の正体に。
だからーーー
「……分かりました、その提案、お受けします」
「……そうか。そういって貰えると私も教えがいがある。これからもよろしく頼むよ、栗原君」
「はい、よろしくお願いします」
そういって、手を差し出して握手を求めてくる天神先生の手を握る。
天神先生の手は、何故だか冷たく感じた。

ーーーーーーー

「ふぅ……結構遅くなっちゃった」
殆ど人が居なくなった夕暮れ時の校舎を1人で歩く。
あれから天神先生が用意してくれていた誓約書を書いていたら結構遅い時間になってしまった。

私にはよく分からなかったけど、プロとして誓約を書面にしておくのはとても大切なことだとは天神先生の言葉だ。
それだけ天神先生はカードデザイナーとしての仕事に誇りを持っていると言うことなのだろう。
そんな人に自分のデザインを褒められるのは何だか複雑な気分だ。
そして誓約書を書いた後、早速天神先生に課題を言い渡された。
今回の課題はーーー
「『闇』……かぁ」
漠然とした課題なのは私の力を試しているのか、期待しているのか。
ともあれ私は色々と考えを巡らせる。
『闇』という言葉で私の中で真っ先に浮かぶのは闇先パイだが、だからって闇先パイをイメージしてデザインをするというのは流石に無いだろう。
次に思い浮かんだのは異世界で出会った私よりも年下なのに私よりも何倍も大人びた雰囲気の少女。
でも、彼女をイメージしてデザインするのも流石に違う。
それ以外で『闇』でイメージできるものといえば……
「あ、そういえば……」
私は自分のデッキを取り出し、その中から3枚のカードを取り出す。
私が取り出したのは絶望神アンチホープ、ダークネスネオスフィア、究極時械神セフィロンのカード。
私がこの3枚と初めて出会った時、このカード達は薄い闇を放っていた気がするのだ。
あれは見間違いなのかも知れないけど、何故だかその印象が強く私の中で残っているのだ。
「思えばこの3枚も不思議なカードなんだよね」
私が所持しているこの3枚のカードを他の人が所持しているのを見たことがない。
夏休みの間に色々な大会に出ることになって『Ｎａｔｕｒａｌ』以

外のカードショップにも行く機会があったけど、それでもやはりこの3枚を見つけることはできなかったのだ。
まさか世界に1枚しかない、なんてことはないと思うのだが、それでも全く同じカードが見つからないのは不思議だった。
おまけにこの3枚にはなんだか分からないけど私と繋がっている気がするのだ。
だからだろうか？
不思議なカードなのに、忌避感などは全くなかった。
思えば『闇』という言葉は、不安や恐怖を煽りそうなものなのに、そんなイメージが全く湧かないのはピンチの時にはいつも私を助けてくれるこの子達のおかげなのかも知れない。
私にとって『闇』という言葉は希望の象徴でもあるのだ。
まあ、そんなことを言ったら絶望神アンチホープに怒られちゃいそうだけどね。
「んーまあまだ時間はあるし、ゆっくり考えてみようかな」
そんなことを呟いて私は玄関前の廊下に差し掛かる。
思えばこうして1人になるのも何だか久しぶりだ。
桜ちゃんは今日は不知火さんとの修行があるらしく早めに帰っていったし、霊華さんも家の用事があるらしい。
大地君は最近噂になっている『ケルンの5不思議』という不思議な話を追っているらしく、講義が終わるとすぐに教室を出て行った。
そういう不思議な話を追っていくのは危ないと思うんだけど、楽しそうな大地君を見ると何だか止めにくいんだよね。
「見つけたぞ、栗原　遊花!!?」
「ふえっ？」
そんなことをぼんやりと考えていると、私の背後からそんな怒声が聞こえてきた。
私が振り向くとそこにいたのは黒髪を坊主にした少年。
「不死川、君？」
私が期末試験でデュエルした学年トップ10に入る決闘者ーーー不死川　王我君が血走った目で私を見ていた。

「僕とデュエルをしろ‼?・栗原　遊花‼?・」
「えっ?」
「君なんかに負けたせいで、僕は笑い者だ‼?・君みたいな愚民風情に王が負けるなどあってはならない‼?・」
「ええっ……そんなの逆恨みじゃ……」
「君を、君を叩き潰して僕が王であることを証明する‼?・そのために、僕は君を倒す力を手に入れたんだ‼?・」
そういって不死川君はデュエルディスクを起動して私に向ける。
ダメだ、話を聞いて貰えない。
私はため息を吐きながらデュエルディスクを起動する。
デュエルをすることで不死川君の気がおさまるならそれでいい。
話も聞いて貰えないなら、デュエルの中で話すしかない。
「栗原　遊花‼?・君は絶対に叩き潰す‼?・」
「やるからには、負けるつもりはありません‼?・」
『決闘‼?・』

遊花　ＬＰ８０００
王我　ＬＰ８０００

ーーーーーーーー

「先攻は僕だ‼?・モンスターをセット。カードを１枚伏せてターンエンド‼?・」

遊花　ＬＰ８０００　手札５
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　　ー
ーー■ーー
ーー▲ーー　ー
王我　ＬＰ８０００　手札３

「私のターン、ドロー!!?」
不死川君のデッキはワイトを使ったアンデットデッキだ。
期末試験でデュエルした時には攻撃力が８０００になったワイトキングを一気に３体も並べられて一撃で決着をつけられそうになった。
ゲームエンド級の攻撃でも耐えきる自信はあるけど、ここは慎重に戦わないと。
「モンスターをセット。カードを２枚伏せてターンエンドです」

遊花　ＬＰ８０００　手札３
ーー▲▲ー　ー
ーー■ーー
ー　ー
ーー■ーー
ーー▲ーー　ー
王我　ＬＰ８０００　手札３

「モンスターとカードを伏せるだけだと？僕には攻撃する必要すらないとでも言いたいのか!?」
「えぇ!?ただ攻めれる手札じゃないだけでそんなこと思ってなんかーーー」
「ふざけるなふざけるなふざけるな!!?どいつもコイツも僕を馬鹿にしやがって!!?」
「いや、だから馬鹿にもしてなーーー」
「栗原　遊花!!?王に仇なす愚民風情が粋がりやがって!!?君だけは必ず処刑してやる!!?」
「うぅ……話を聞いてくださいよぉ……」
血走った目でこちらを睨みつけてくる不死川君に私は思わず涙目になりながら肩を落とす。
取りつく島もないとはこのことだ。

知らない内にそこまで怒らせてしまったのかな？
でも、不死川君とはあの期末試験以来会ってないし、あの期末試験での出来事で怒っていたとしても、今まで全く干渉しようとしてこなかったのに今更ここまで怒るだろうか？
……なんだか、少し違和感がある気がする。
妙な違和感に首を傾げる私を、不死川君は血走った目で睨みながら勢いよくカードを引き抜いた。
「王の威光は絶対だと言うことを君にも分からせてやる‼？僕のターン、ドロー‼？反転召喚、魔導雑貨商人‼？」
〈魔導雑貨商人〉☆１　昆虫族　光属性
ＡＴＫ２００

現れたのは風呂敷を背負ったコガネムシのモンスター。
「魔導雑貨商人の効果発動‼？このカードがリバースした場合、魔法・罠カードが出るまで自分のデッキの上からカードをめくり、その魔法・罠カードを手札に加え、残りのめくったカードは全て墓地へ送る‼？」
「‼？魔法や罠を手札に加えるモンスター……ううん、本命は墓地肥やしですね」
魔導雑貨商人は背負っていた風呂敷をおろすと、風呂敷の中に入っているものを次々と辺りに放り投げ、墓地に送られていく。
しばらくすると目当てのものが見つかったのか、魔導雑貨商人は手にしたカードを掲げた。
「僕はワンフォーワンを手札に加える‼？そして墓地に送られた２体のワイトプリンスの効果発動‼？」
「っ、そのモンスターは……」
「このカードが墓地に送られた場合、ワイトとワイト夫人１体ずつを手札・デッキから墓地に送る‼？僕は２体のワイトプリンスの効果でデッキからワイトとワイト夫人を２体ずつ墓地へ送る‼？」
そういって不死川君のデッキから４枚のガイコツ達が墓地に送ら

れる。
　かなり墓地が増えたけど、まだ不死川君は反転召喚をしただけだ。
「墓地に存在するワイトプリンスの効果発動!!?自分の墓地からワイト2体とこのカードを除外してデッキからワイトキングを特殊召喚する!!?墓地に存在するワイト夫人、ワイトプリンス、はワイトとして扱うため、僕は墓地のワイト、ワイト夫人、ワイトプリンスを除外して、顕現せよ、我が王!!?王の威光により数多の屍を統べる骸の王!!?ワイトキング!!?」

〈ワイトキング〉☆1　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ？

　現れたのは身体中から闇を溢れ出させているガイコツの王、不死川君の切り札だ。
「王の威光はこの程度じゃない!!?手札から馬頭鬼を捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動!!?デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚する!!?顕現せよ、ワイトキング!!?」
「っ、2体目のワイトキング……」

〈ワイトキング〉☆1　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ？

　フィールドに現れるのは2体目のワイトキング。
　警戒する私を見て、不死川君は嘲笑うような笑みを浮かべた。
「焦るなよ、君の処刑はもう少し先さ。王の裁きは絶対じゃないといけないんだからね!!?僕は金華猫を召喚!!?」
「えっ!?金華猫!?」

〈金華猫〉☆1　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

現れたのは私がいつも頼りにしている霊体になっている猫のようなモンスター。
不死川君の召喚した金華猫は、私を見ると瞳孔を広げながら『シャー』っと鳴き声をあげながら威嚇する。
うぅ……うちの子じゃないのはわかってるけど威嚇されるのは結構ショックだよ……
「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル1モンスターを特殊召喚する!!?
蘇れ、ワイトプリンス!!?」

〈ワイトプリンス〉☆1　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ０

姿を見せたのは王子様のような姿をしたガイコツのモンスター。
現れたワイトプリンスを見て、不死川君は不気味な笑みを浮かべながらワイトプリンス達に手をかざす。
その瞬間、不死川君の身体を少しだけ闇が溢れ出し、不死川君の身体を覆った気がした。
「僕はレベル1の魔導雑貨商人、金華猫、ワイトプリンスでオーバーレイ!!?3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
「!!?エクシーズ召喚……?」
魔導雑貨商人、金華猫、ワイトプリンスが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、そこに現れたのは夜空のようなドレスを身に纏い、水晶の杖を持った闇夜の女王。
「銀河の闇より生まれし女王よ!!?その冷酷なる魔術で王に叛く者を断罪せよ!!?現れろ!!?Ｎｏ．８３ギャラクシークィーン!!?」

〈Ｎｏ．８３ギャラクシークィーン〉★1　魔法使い族　闇属性
ＤＥＦ５００

「Ｎｏ．８３……ギャラクシークィーン？」
聞いたこともないエクシーズモンスターに私は思わず首を傾げてしまう。
私のデッキも不死川君のようにレベル１が主体のデッキだから闇先パイにエクシーズ召喚について教えてもらった時に、ランク１のエクシーズモンスターにどんなモンスターがいるのかを調べた。
だけど、その時にギャラクシークィーンなんて名前のモンスターはいなかったハズだ。
それに立体映像として映し出されたギャラクシークィーン自体にもどこか違和感のようなものを感じてしまう。
存在が知られていない、どこか違和感を感じるエクシーズモンスター……なんだか、嫌な予感がする。
「クックックッ、これで君の処刑は決まったようなものだけど、どうせだからたっぷりと君を絶望させてあげよう‼？手札からワイトメアの効果を発動‼？このカードを手札から捨てて以下の効果から１つを選択して発動する事ができる‼？ゲームから除外されている自分のワイトまたはワイトメア１体を選択して自分の墓地に戻すか、ゲームから除外されている自分のワイト夫人またはワイトキング１体を選択してフィールド上に特殊召喚することができる‼？僕はワイト夫人を特殊召喚‼？」

〈ワイト夫人〉☆３　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ２２００

ワイトキングの横に現れるのは貴婦人のような姿をしたガイコツのモンスター。
そのモンスターからワイトキングを包むように黒いオーラのようなものが溢れ出す。
「ワイト夫人の永続効果、このカードがフィールドに表側表示で存在する限り、ワイト夫人以外のフィールド上のレベル３以下のアンデッ

ト族モンスターは戦闘では破壊されず、魔法・罠カードの効果も受けない!!?」
「っ……相変わらず厄介な耐性ですね」
「さらに墓地に存在する馬頭鬼の効果発動!!?自分メインフェイズに墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のアンデット族モンスター1体を特殊召喚する!!?さあ、愚民を絶望させろ、ワイトキング!!?」
「3体目のワイトキング!?!?っ、魔導雑貨商人ですでに墓地に落ちてたんですか……」

〈ワイトキング〉☆1　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ？

フィールドに現れた3体のワイトキングが私を睨みつける。
不死川君の墓地にはすでにかなりの数のワイトがいるハズだからその攻撃力は凄まじいことになっているだろう。
だけど、私のセットモンスターは相棒のハネクリボー。
だから、最低でもこのターンは生き残れるハズだ。
そんな私の思考を読んだかのように不死川君の不気味な笑みを浮かべる。
「ククク、あまり慌てた様子が見えないね。ということは、そのセットモンスターはハネクリボーとかいうあの忌々しい雑魚モンスターかな？」
「……さあ、どうでしょうね？」
「あはは、図星かい？まあ、真実がどうかなんてどうでもいいさ。それよりも、まさかこれぐらいならまだ耐えられるだなんて思ってるんじゃないだろうね？」
「……」
「はっ、これだから愚民は理解力が乏しくて困る。１度見た戦法が王に通じるわけがないだろう？僕には王を勝利に導く闇の女王がいるんだからね!!?Ｎｏ．８３ギャラクシークィーンの効果発動!!?ギャラクシーオペイク!!?」

「⁉?あのエクシーズモンスターの効果ですか……」
「1ターンに1度、オーバーレイユニットを1つ取り除き、次の相手のエンドフェイズ時まで、自分フィールド上に存在するモンスターは戦闘では破壊されず、守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える⁉?」
「っ⁉?モンスター全体に戦闘破壊耐性と貫通効果を与えるんですか⁉?」
ギャラクシークィーンの杖から闇が溢れ出し、不死川君のモンスター達を包み込む。
闇を纏ったワイト達は歓喜したように身体を震わせる。
「オーバーレイユニットとして墓地に送られたワイトプリンスの効果発動⁉?デッキからワイトとワイト夫人1体ずつを墓地に送る⁉?さらに速攻魔法、速攻魔法、異次元からの埋葬⁉?除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計3枚までそのモンスターを墓地に戻す⁉?僕は除外されているワイト、ワイトプリンス、馬頭鬼を墓地に戻す⁉?」
「またワイトが墓地に……」
「さあ、王の威光を示す時だ⁉?ワイトキングの永続効果、グールズエクスプロイテイション⁉?このカードの攻撃力は墓地に存在するワイトキングとワイトの数×１０００ポイントの数値になる⁉?墓地に存在するワイト夫人、ワイトプリンス、ワイトメア、そしてワイトプリンセスはワイトとして扱う」
「っ、先程の魔導雑貨商人で他のワイトも墓地にいってたんですね」
「僕の墓地にはワイトが3枚、ワイト夫人、ワイトメア、ワイトプリンス、ワイトプリンセスがそれぞれ2枚ずつ存在している⁉?よってワイトキングの攻撃力は⁉?」

ワイトキング
ＡＴＫ?→１１０００

「攻撃力１１０００の貫通攻撃モンスターが３体⁉？」
「さあ、この世から消してあげるよ⁉？バトル⁉？ワイトキングでセットモンスターを攻撃⁉？キングダークネス⁉？」
「っ、セットモンスターはハネクリボー⁉？」

〈ハネクリボー〉☆１　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

現れるのは天使の羽を持つ私の相棒。
ハネクリボーは私を守るように手を広げる。
「ハッ、やはりその雑魚モンスターか⁉？だが、そいつの効果が発動するのは破壊された後だ⁉？Ｎｏ．８３ギャラクシークィーンの力を得たワイトキングには無意味⁉？雑魚モンスターの壁なんて意味をなさないんだよ⁉？」
「相棒の頑張りを、無意味になんかさせません⁉？リバースカードオープン⁉？罠発動⁉？パワーウォール⁉？」
「何⁉？」
「相手モンスターの攻撃によって自分が戦闘ダメージを受けるダメージ計算時、その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージが０になるように５００ダメージにつき１枚、自分のデッキの上からカードを墓地へ送ります⁉？ワイトキングの攻撃で発生する戦闘ダメージは１０８００だからデッキの上から２２枚のカードを墓地に送ってダメージを０にします⁉？」
私がデッキの上から２２枚のカードを墓地に送ると、私の前に粒子で出来た盾が生まれる。
ワイトキングが身体上から溢れ出る闇を拳に集め、ハネクリボーを殴り飛ばして粒子に変えながら、拳に集めた闇を私に向けて放つが放たれた闇は粒子の盾に阻まれる。
そして破壊されたハネクリボーの粒子が私を守るように私の身体を包み込んだ。
「ハネクリボーの効果発動⁉？プリフィケーション⁉？このカードが

フィールドから墓地に送られたターン、自分の受ける戦闘ダメージは０になる‼?」
「チッ、王の攻撃を防ぐとは生意気な奴め‼?……まぁいいさ。君には王を倒すことなどできやしないんだからね‼?僕はこれでターンエンドだ‼?」

遊花　ＬＰ８０００　手札３
ーーー▲ー　ー
ーーーーー
ー　□
□○○○ー
ーー▲ーー　ー
王我　ＬＰ８０００　手札０

不死川君のフィールドには攻撃力１１０００まで高められたワイトキングが３体と、そのワイトキングに強力な耐性を与えているワイト夫人とギャラクシークィーンがいる。
ワイトキングとワイト夫人だけならまだ耐えられるかもしれないが、ギャラクシークィーンがいる限りワイトキングの攻撃は必ず私に届く。
早くあのカードを何とかしないと……
「私のターン、ドロー‼?私はクリボルトを召喚‼?」

〈クリボルト〉☆１　雷族　光属性
ＡＴＫ３００

出て来たのは電気を出している黒い球体のモンスター。
「っ、小賢しいモンスターを‼?そんなものが通用するわけないだろう‼?リバースカードオープン‼?速攻魔法、禁じられた聖衣‼?フィールドの表側表示モンスター１体を対象としてターン終了時までそのモンスターは、攻撃力が６００ポイントダウンし、効果の対象

にならず、効果では破壊されない‼?対象はＮｏ．８３ギャラクシークィーン‼?」
「っ、ここで……」

Ｎｏ．８３ギャラクシークィーン
ＡＴＫ５００↓０

ギャラクシークィーンのドレスが白の聖衣を纏う。
オーバーレイユニットさえ無くしてしまえればと思ったけど、やっぱりそう簡単には通してくれないよね。
「だけど、まだ諦めません‼?導いて‼?希望に繋がるサーキット‼?」
「リンク召喚か……」
私の前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル１モンスター１体。私はクリボルトをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚‼?希望の守り手‼?リンク１‼?リンクリボー‼?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

クリボルトがサーキットに吸い込まれると、代わりに私の前に青い球体のモンスターが現れる。
「えっ……リンクリボー?どうしたの?」
しかし、いつもなら元気一杯と言った風に私に擦り寄ってくるリンクリボーはどこか警戒した様子でギャラクシークィーンを見つめていた。
「……あ‼?そういえば……」
私はリンクリボーの様子からあることに思い至り改めて不死川君のフィールドを見る。
不死川君のフィールドではワイトキング達が身に纏う闇のオーラ

に歓喜するように身体を震わせ、そんなワイトキングをワイト夫人が愛おしそうに見つめていた。
しかし、そんな中でもギャラクシークィーンはエクシーズ召喚された時と変わらず、ただその場に佇み、無機質な目で私の方を見ていた。
「……やっぱり、そうだ」
改めて不死川君のフィールドを見て、私はギャラクシークィーンから感じた違和感に気づく。
不死川君のフィールドにいるワイトキング達はまるで生きているような……いや、アンデットだから死んではいるんだろうけど、意思のようなものを感じられた。
だけど、ギャラクシークィーンからはその意思というものが感じられない。
その場にただ佇み、決められた命令通りに動く、まるでロボットのような機械じみた印象を受けるのだ。
勿論、立体映像なのだから意思が感じられないなんて当然だと思う。
だけど、この感覚は間違っていないと、私の直感が告げていた。
「でも、それならなんであのカードからだけ……」
「さっきから何をぶつぶつと呟いている？何もしないんだったらさっさと負けを認めろ!!？」
思考に耽っていた私に不死川君は怒鳴り声をあげる。
……この感覚が何なのかは分からないけど、今はデュエルに集中しないと。
「……私はこのままターンエンドです」

Ｎｏ．８３ギャラクシークィーン
ＡＴＫ０↓５００

遊花　ＬＰ８０００　手札３
ー－－－▲－　　－
－－－－－

☆　　□

□○○○ー

ーーーーー　　ー

王我　ＬＰ８０００　手札０

「あはははは‼？手も足もでないようだね。ならば、さっさと潰してあげるよ‼？僕のターン、ドロー‼？Ｎｏ．８３ギャラクシークィーンの効果発動‼？ギャラクシーオペイク‼？オーバーレイユニットを１つ取り除き、再び僕のモンスターに次の相手のエンドフェイズ時まで、戦闘では破壊されず、守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える効果を付与する‼？」

「っ、また……」

ギャラクシークィーンの杖から溢れ出した闇が再び不死川君のモンスター達を包み込む。

「それでは王の威光に背いた愚民に判決を言い渡そう。愚民である君に与える判決は、死だ‼？バトル‼？ワイトキングでリンクリボーを攻撃‼？キングダークネス‼？」

「相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動‼？ゼロリンク‼？このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力はターン終了時まで０になる‼？」

ワイトキング

ＡＴＫ１１０００→０

リンクリボーの身体が粒子に変わってワイトキングに纏わりつき、殴りかかろうとしてきたワイトキングが纏っていた闇を払う。

「防いだか。だが、それだけでは君の判決は変わらない‼？２体目のワイトキングでダイレクトアタック‼？キングダークネス‼？」

「まだです‼？相手モンスターの攻撃宣言時にクリボーンの効果、それにチェーンしてクリアクリボーの効果発動‼？」

「チッ、さっきのパワーウォールで墓地にいったカードか!!?」
「まずはクリアクリボーの効果発動!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のこのカードを除外し、自分はデッキから1枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替えます!!?私はカードを1枚ドロー!!?このカードは特殊召喚しません。そしてクリボーンの効果発動!!?相手モンスターの攻撃宣言時に墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のクリボーモンスターを任意の数だけ対象として、そのモンスターを特殊召喚します!!?来て、アンクリボー!!?クリボーン!!?クリボール!!?ジャンクリボー!!?そして、いつだって、私と共に!!?ハネクリボー!!?」

〈アンクリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

〈クリボーン〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

〈クリボール〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

〈ジャンクリボー〉☆1　機械族　地属性
ＤＥＦ２００

〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

私を守るようにフィールドに5体のクリボー達が現れる。
しかし、現れたクリボー達を嘲笑うように不死川君は声をあげる。
「学習能力がないなぁ、君は。雑魚モンスターの壁など意味をなさないと言ってるだろ!!?攻撃対象が増えたことで攻撃対象を変更!!?

２体目のワイトキングでクリボールを攻撃!!?キングダークネス!!?」
ワイトキングの拳がクリボールを弾き飛ばし、闇が私に向かって放たれる。
だけど、まだ終わりじゃない!!?
「手札から、クリボーの効果発動!!?ダークエンヴェロップ!!?相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこのカードを手札から捨てて、その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージを０にします!!?」
「チッ、まだ防ぐというのか!!?」
クリボーが私を守るように立ち塞がり、ワイトキングが放った闇を受け止め、粒子になって消えていく。
ありがとう、クリボール、クリボー。
君達の頑張りは無駄にしないよ!!?
「墓地に存在する妖醒龍ラルバウールの効果発動!!?このカードが手札・墓地に存在し、自分フィールドのモンスターが戦闘または相手の効果で破壊された場合にこのカードを特殊召喚します!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外されます!!?おいで、妖醒龍ラルバウール!!?」

〈妖醒龍ラルバウール〉☆１　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ０

フィールドに現れたのは銀色の身体の幼竜。
現れたラルバウールはギャラクシークィーンを警戒した様子で見つめながら私の頭の上に乗る。
そこ、前にも乗ってたけど気に入ったの？
いや、別にいいんだけどね。
「妖醒龍ラルバウールの効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、フィールドの表側表示モンスター１体を対象として自分の手札を１枚選んで捨て、対象のモンスターと同じ種族・属性でカード名

が異なるモンスター1体をデッキから手札に加える‼?私はハネクリボーを対象に手札を1枚捨て、天使族・光属性の究極時械神セフィロンを手札に加えます‼?」
「ほう、大それた名前のモンスターを持っているじゃないか。だが、せっかく加えたそのカードも、君が消えれば使えない‼?3体目のワイトキングでーーー」
「いえ、まだ終わりません‼?妖醒龍ラルバウールの効果で手札から捨てられたフリップフローズンの効果発動‼?このカードが墓地へ送られた場合、相手フィールドの攻撃表示モンスターを全て守備表示にします‼?」
「何だって⁉?」
　こちらに走りだそうとしたワイトキングが踏みしめていた地面が突然凍りつき、ワイトキングが足を滑らせてその場で転倒すると、ワイトキングの頭部についていたガイコツが外れて氷の上を勢いよく転がっていく。
　転がっていった頭部を拾おうと他のワイトキングも動こうとするが、同じように凍りついた地面で足を滑らせて転倒した。

ワイトキング
ＡＴＫ１１０００→ＤＥＦ０

「クソが、さっきからちょろちょろとかわしやがって‼?……まぁいい。ワイトキング達は戦闘では破壊されない。それに守備表示になったということはダメージを受ける心配もなくなったということだ。次のターンこそ、君に引導を渡してやる‼?メインフェイズ2、カードを1枚伏せてターンエンドだ‼?」

遊花　ＬＰ８０００　手札３
ーーー▲ー　ー
□□□□□
ー　□

□□□□□ー
ーー▲ーー　　ー
王我　ＬＰ８０００　手札０

何とか耐え凌ぎ、再び私のターンがやってくる。
だけど、私も防御手段をほとんど使い切ってしまったため次のターンを渡すようなことがあれば次こそは本当に防ぎきれない。
このターンが、私がデュエルに勝利する最後のチャンス。
「私のターン、ドロー!!?」
勢いよくドローしたカードに視線を向ける。
ドローしたカードを見て、私は思わず笑みを浮かべた。
「見えました……あなたの攻略法!!?」
「何!!?」
私の言葉に不死川君が目を見開く。
そんな不死川君に、私は確かな自信を持って口を開く。
「不死川君……あなたを、攻略します!!?」
「っ、戯言を!!?」
私は深く深呼吸をして正面に手をかざす。
さあ、あなたの出番だよ!!?
「行きます、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私の前に再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は効果モンスター３体以上!!?私は妖醒龍ラルバウール、アンクリボー、クリボーン、ジャンクリボーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
「っ、大型のリンクモンスターか……」
ラルバウール、アンクリボー、クリボーン、ジャンクリボがサーキットに吸い込まれていく。
そしてサーキットが光り輝くとそこから現れるのは剣の如き龍。
「お願い、私に王に反逆する力を貸して!!?リンク召喚!!?閉ざされた運命を斬り開く魂の剣(つるぎ)!!?リンク４!!?ヴァレルソードドラゴン!!?」

私の願いに剣の如き龍は咆哮で応えた。

〈ヴァレルソードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑←→

「リンク４の大型ドラゴンだと⁉?」
「まだです⁉?私はサクリボーを召喚⁉?」

〈サクリボー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３００

現れたのはクリボーに似た毛玉のモンスター。
「導いて⁉?希望に繋がるサーキット⁉?」
私の前に再び大きなサーキットが現れる。
「召喚条件は効果モンスター２体⁉?私はハネクリボーとサクリボーをリンクマーカーにセット⁉?サーキットコンバイン⁉?リンク召喚⁉?リンク２⁉?ペンテスタッグ⁉?」

〈ペンテスタッグ〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１６００　→←

現れたのは機械の身体を持つクワガタのようなモンスター。
「ペンテスタッグだと?確かそのモンスターは……」
「ペンテスタッグの永続効果⁉?このカードがモンスターゾーンに存在する限り、リンク状態の自分のモンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ相手に戦闘ダメージを与えます⁉?」
「っ⁉?成る程、その貫通効果で僕のライフを削りきる気だな。だが、無意味だ⁉?リバースカードオープン⁉?罠発動⁉?闇魔の裁き⁉?相手がモンスターの特殊召喚に成功した時、そのモンスターを破壊する⁉消えろ、ペンテスタッグ⁉?」

「っ、ゴメンね、ペンテスタッグ……」
フィールドに現れた闇魔が
破壊されたペンテスタッグを見て不死川君が勝ち誇ったような笑みを浮かべた。
「はっ、呆気ない。これで分かっただろう？君が僕に勝てるわけがないんだよ‼？」
「はい、見えましたよ。あなたを攻略する私の未来が‼？」
「何⁉？」
「今の行動であなたのセットカードは無くなりました。これで妨害されることなく動くことができます‼？このモンスターは自分の墓地にモンスターが１０体以上存在する場合のみ特殊召喚する事ができる‼？」
「っ、聞いたことがない特殊召喚条件だと⁉？」
私の呼び声に呼応するかのように、私の背後に巨大な大樹が現れる。
そして大樹から１０の光が溢れ、光の線で結ばれていくと、大樹の中から現れたのは機械の身体を持つ巨大な天使にして、時を司り、世界を救おうとした究極の神。
「おいで‼？時空を超え、希望を導く叡智の神‼？究極時械神セフィロン‼？」
〈究極時械神セフィロン〉☆１０　天使族　光属性
ＡＴＫ４０００
「っ、さっき妖醒龍ラルバウールで手札に加えたモンスターか‼？」
「究極時械神セフィロンの効果発動‼？リザレクションウィッシュ‼？１ターンに１度、レベル８以上の天使族モンスター１体を自分の手札・墓地から特殊召喚する事ができる‼？この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、攻撃力は４０００になる‼？」
「何っ⁉？君のデッキはレベル１モンスターのデッキのハズだ‼？レベル８以上の天使族モンスターなんて……」

「いるんです、私のとっておきの相棒が!!?いつまでも、私と共に羽ばたいて!!?ハネクリボーＬＶ９!!?」
「ハネクリボーＬＶ９だと!?!?」

〈ハネクリボーＬＶ９〉☆９　天使族　光属性
ＡＴＫ?→４０００

セフィロンの身体が光り輝き、その輝きに導かれ、フィールドに現れたのは赤き鎧に身を包んだ天使の羽を持つ私の相棒。
今回はちょっと損な役回りをさせちゃうけど、私に力を貸してね、相棒!!?
「レベル９のハネクリボーだと!?!?そんなモンスターもパワーウォールで墓地に送っていたのか!?!?」
「ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アサシネイトショット!!?１ターンに１度、攻撃表示モンスター１体を対象として発動!!?そのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃できる。そしてこの効果の発動に対して相手は効果を発動できない!!?この効果は相手ターンにでも使用することが出来ます!!?対象にするのは、ハネクリボーＬＶ９!!?」
「２回攻撃だと!?!?」
ヴァレルソードドラゴンが相棒に向かって銃撃を放ち、相棒がその銃弾を弾いて防御を固める。

ハネクリボーＬＶ９
ＡＴＫ４０００→ＤＥＦ０

「これがあなたの攻略法です!!?速攻魔法、エネミーコントローラー!!?」
「何!?!?貴様、まさか!?!?」
「私は２つの効果の内、自分フィールドのモンスター１体をリリースし、相手フィールドの表側表示モンスター１体を対象に、その表側表

示モンスターのコントロールをエンドフェイズまで得る効果を選択‼?私はハネクリボーＬＶ９をリリースし、Ｎｏ．８３ギャラクシークィーンのコントロールを得ます‼?」
「や、止めろぉぉぉ‼?」
相棒の姿が消えると、フィールドに現れたコントローラーが動き出し、そのコマンドに操られ、ギャラクシークィーンが私のフィールドに移動する。
その瞬間、ギャラクシークィーンのカードから闇のようなものが吐き出され、私に向かってきた。
「ふぇっ⁉?な、何⁉?」
私は咄嗟に防ぐように手を正面にかざし、怖くなって目を閉じる。
その瞬間、私の視界で何かが輝いた気がした。
しばらくして何も起こらずおそるおそる目を開けて見ると、闇のようなものはどこにもなく私のフィールドに移動したギャラクシークィーンが私を見つめ、申し訳なさそうに頭を下げた。
「えっ?何々?何が起こったの?」
私は突然のことに首を傾げてしまう。
さっきのは幻覚?
でも、確かにギャラクシークィーンから闇のようなものが溢れてた気がするし……それに、今確かにギャラクシークィーンは私に向かって頭を下げたよね?
さっきまではまるでロボットみたいな機械じみた印象を受けたのに、今は確かにギャラクシークィーンの意思のようなものが感じられた。
も、もうわけがわからないよ～‼?
「……ん?なんだ?何で僕は栗原　遊花なんかとデュエルしてるんだ⁉?」
「ふぇ?」
私が１人困惑していると、そんな声が聞こえてきて私は不死川君の方を見る。
すると、そこには先程までの鬼気迫った様子ではなく明らかに困惑

している不死川君の姿があった。
「おい‼?栗原　遊花‼?貴様、一体何をした‼?何故、僕が君なんかとデュエルをしてるんだ‼?」
「ええっ⁉?そんなの私が聞きたいよ‼?無理矢理挑んできたのは不死川君の方だよ⁉?」
「はぁ?嘘をつくな。僕が君程度の決闘者にデュエルを挑む理由なんてあるわけないだろ」
「ええっ⁉?」
　先程までの流れを完全に覆すような発言をする不死川君。
　一体全体どうなってるの⁉?
「……ふん、まぁいい。君をここで倒して期末試験の借りを返すのも一興だ。さあ、かかってこい‼?栗原　遊花‼?」
「うぅ……何なの本当に……もう‼?よく分からないからすぐにデュエルを終わらせます‼?Ｎｏ．８３ギャラクシークィーンの効果発動‼?ギャラクシーオペイーーー」
　そこまでいったところで私のフィールドにいたギャラクシークィーンが首を振った。
　えぇ……今度は何なの?
　ギャラクシークィーンは私を見ると、杖を振って不死川君のフィールドにいた時とは違い杖から闇ではなく光を放った。
　も、もしかして効果名の変更を求められてるの?
　ほ、本当に何なんだろうこのカード?
　ええっと、不死川君が言ってたギャラクシーオペイクはギャラクシーが銀河でオペイクは闇って意味のハズだから、訳すると銀河の闇、だよね?
　でも、今は光を放ってるから、ええっと……
「Ｎｏ．８３ギャラクシークィーンの効果発動‼?ギャラクシークィーンズライト‼?オーバーレイユニットを１つ取り除き、私のモンスターに次の相手のエンドフェイズ時まで、戦闘では破壊されず、守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える効果を付与し

ます‼?」
「何だと⁉?」
ギャラクシークィーンは私のつけた効果名に満足そうにしながら杖を振るい、私のモンスターを光で包む。
よ、よく分からないけど、これで準備は整ったもん‼?
「バトル‼?ヴァレルソードドラゴンでワイトキングを攻撃‼?攻撃宣言時、ヴァレルソードドラゴンの効果発動‼?アブソーブブースト‼?1ターンに1度、このカードが表側表示モンスターに攻撃宣言した時、ターン終了時まで、このカードの攻撃力はそのモンスターの攻撃力の半分アップし、そのモンスターの攻撃力は半分になる‼?」
「何っ⁉?」

ワイトキング
ＡＴＫ１１０００→５５００

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ３０００→８５００

ヴァレルソードが斬りかかり、それをワイトキングは闇を纏った拳で受け止めるが、剣から漏れる赤い光に徐々に闇が吸い取られていく。
「これで終わりです‼?斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン‼?剣光のベイオネットブレイク‼?」
私の言葉にヴァレルソードは応えるように咆哮をあげ、そのままワイトキングを斬り裂き、爆風で不死川君を吹き飛ばした。
「んぎゃあああ‼?」

王我　ＬＰ８０００→０

ーーーーーーー

「ふぅ……おわったぁ……」
何だか色んな意味で疲れてしまった私は思わずそんな気の抜けた声を漏らして、廊下にへたり込む。
その瞬間、私に向かって何かが飛んでくるのが見えた。
「わあっ⁉？今度は何なの⁉？」
私は反射的に飛んできたものを受け止め、おそるおそる受け止めたものを見る。
私が受け止めたのは不死川君が使っていたギャラクシークィーンのカードだった。
「ええっ⁉？何で⁉？」
私は困惑した表情で不死川君を見るが、不死川君は忌々しげに表情を歪めながら、俯いてぶつぶつと呟いていた。
「クソっ‼？何がどうなってるんだ‼？何故気付いたら栗原　遊花とデュエルをしている‼？しかも、何であんな負けるのが確定した状況なんだ‼？」
「あ、あの……」
「ああ⁉？僕を笑いにきたのか⁉？」
「ひゅい‼？ち、違うよ‼？私は不死川君のカードが私に向かって飛んできたから返そうとしただけで……」
「はぁ？」
「ほ、ほら、これ」
機嫌が悪そうに怒鳴り声をあげる不死川君に、私はおそるおそるギャラクシークィーンのカードを見せる。
すると、不死川君は余計に怒ったような表情を浮かべた。
「それは僕への当てつけのつもりか？それは君が使ってたカードだろ‼？」
「ええっ⁉？違うよ‼？このカードは不死川君が出してきたんだよ⁉？私はそれをエネミーコントローラーを使ってコントロールを得ただけで……」
「何をふざけたことを……僕はこんなカードは持っていない‼？なら使ってるのは君しかいないじゃないか‼？」

「え、ええ……？」
不死川君の言葉に私は困惑した表情を浮かべる。
今のデュエルでギャラクシークィーンを使っていたのは間違いなく不死川君だったのに、それすらも覚えていないの？
本当に、このカードはなんなんだろう？
私が戸惑っている間に不死川君はデュエルディスクを仕舞い、こちらを睨みつけながら吐き捨てるように口を開いた。
「これで勝ったと思うなよ、栗原　遊花‼？次は絶対に君をひれ伏させてみせるからな‼？」
「あ‼？ちょっと、待ってよ不死川君‼？」
私が呼び止める間も無く不死川君が走り去っていく。
残されたのはギャラクシークィーンを手にして呆然としている私だけ。
「うぅ……本当になんなの～もう‼？」
そんな私の問いに、答えてくれる人はいなかった。

ーーーーーーー

○

「ふーん。ちょっと想像とは違ったけど、やっと面白そうなプレイヤーが見つかったかな？」
廊下にへたり込んで遊花が嘆きの声をあげている頃、そんな遊花を物陰から見ている人影があった。
「そろそろプレイヤーを探すのにも飽きちゃったし、私もゲームに参加させて貰おうかなぁ？挨拶ぐらいは、しておいてもいいよね？」
人影はあまり感情がこもっていない透き通った声でそういうと近くにあった窓から外を見る。
その方角にあるのは、この街にある大きな公園。
「怒られちゃうかも知れないけど、少しだけ摘まみ食いさせて貰っちゃお。少しは面白いゲームになればいいなぁ」

そういうと、まるで初めからそこにいなかったかのように、人影は姿を消すのだった。

第６４話　悪意の庭

○

「クックックッ、ハハハハハ‼?‼?‼?また１つ、完成したぞ‼?‼?‼?私の至高の作品が‼?‼?‼?やはり、私の才能に不可能はない‼?‼?‼?」
　薄暗い部屋の中、抑えきれない歓喜と狂気を含んだ男の笑い声が響き渡る
「へぇーまた新しいカードが出来たんだーそれにしても、もう少し静かにすることはできないのかな?」
「っ‼?‼?‼?また君か……どうにかならないのか、君のその神出鬼没さは」
「自分でどうにかできるならしてるんだけどねー残念なことにそうはいかないんだよ。あなたも分かってるでしょ?」
　狂気を含んだ男の笑い声が響く部屋に、突如としてどこか呆れたような幼い少女の声が加わる。
　男が声が聞こえた方に視線を向けると、デスクの上に腰をかけ、デスクの上においてあったスケッチブックをパラパラと見ながら、男にジト目を向ける幼い少女がいた。
　突然現れてジト目を向けてくる少女に、男は近くに置いてあった３枚のカードを少女に向かって投げつけた。
「おっと、だからいきなり投げないでってばー」
「テストプレイが必要だ。君にはそのカードのテストプレイをして貰いたい」
「あれ?珍しいね、私がテストプレイをしてもいいの?街にばら撒くんじゃなくて?」
　少女はスケッチブックをデスクの上に戻し、カードを投げつけられたことに不満を漏らしながらも意外そうな声を出す。
　そんな少女に男は再び近くにおいてあったカードを手に取りながら口を開く。
「そのカードはまだ表に出すには早い。あまり情報が出回ると面倒

だ。ゲームでも自分のレベルが５や１０に到達した瞬間に敵のレベルが５０まで跳ね上がれば手も足もでないだろう？」
「へぇ、それだけ強力な力なんだ」
「だが、そうなるのは私としても本位ではない。となれば、君が使うのが１番だろう。君の力なら誰の記憶にも残らないのだから。そうだろう、正体不明の抹消者（アンノウンイレイザー）？」
「勝手に変な名前をつけないで欲しいんだけどね……まあいいや。面白そうだし、乗ってあげるよ。そろそろ退屈だったから、どこかで遊んでこようと思ってたんだー」
そういうと、少女は勢いよくデスクから飛び降りる。
そのままいつものように消えようとした少女に、男は待ったをかける。
「待ちたまえ。君にもう１つテストプレイして貰いたいものがある」
「……何？言っておくけど、また投げ渡してきたらやらないからねー」
少女の言葉に再びカードを投げ渡そうとしていた男は動きを止め、仕方がなさそうに少女に２枚のカードを手渡す。
「これを試すの……って、これ白紙じゃんかーこれで何を試すのさ？」
何も書かれていない白紙のカードを見て少女は眉をひそめる。
そんな少女に男は楽しそうな声色で口を開いた。
「ククク、そのカードは白紙で構わないのだよ。そのカードは闇の力を込めることでカードへと変化するのさ」
「闇の力を？」
「気が向いた時で構わない。そのカードに闇の力を込めてみるといい。そうすればそのカードは新たな形を得るだろう。それがそのカードのテストプレイだ」
「へぇ、まあ楽しそうならなんでもいいよ。それじゃあね」
そういうと、まるで初めからその部屋にいなかったかのように、少女の姿と気配が消えた。
少女がいなくなった部屋の中で、男は少女が手にしていたスケッチ

ブックを開くと、忌々しそうに表情を歪めた。
「私の才能こそ至高のハズなのだ……私の才能こそ……」
狂気を孕んだ男の呟きに、答える者はいなかった。

ーーーーーーー
☆

「……ふぅ、ようやく終わりだな」
公園のゴミを集めたゴミ袋を抱え、俺は額に浮かぶ汗を拭いながら一息つく。
大和とのデュエルから2日が経った。
結局あの後、夜と闇のカード探しをしたのだが、大和が再び俺の前に現れることはなかった。
闇のことを警戒しているのか、他の場所で闇のカードを狩っているのかは分からないが、俺としても今の状態で再び大和とデュエルをすればただでは済まないだろうから、ホッとしている。
結局、闇から大和のことについてそれ以上聞くことはできなかった。
それは俺に隠すことなんてないと公言していた闇が珍しく言い淀んだからだ。
頼めば教えてはくれるんだろうが、あの闇が言い淀んだということは余程の理由があるのだろう。
俺だって、自分がプロリーグを追放された時のことなんてそう易々と他人に話せることじゃない。
誰にだって、触れて欲しくない記憶はある。
俺や遊花であれば両親のこと、闇にとってはそのことが触れて欲しくないことだったという話だ。
親しき仲にも礼儀あり。
だからこそ、俺は闇が自分から話してくれるか大和から直接話しを聞けるまではこの話を忘れることにしたのだった。
「そっちはいいとして、闇のカードについても少しは手掛かりを得た

いところだよなぁ」
そう呟き、思わずため息を吐く。
闇もそうだが、今回の事件には決定的に分からないことが多すぎる。
闇のカードをばら撒いているのは誰なのか？
闇のカードを何のためにこの街にばら撒いているのか？
俺が闇のカードのことを追ってもう半月になるが、俺だけならともかくそれよりも前に調べ始めていた闇までその情報を一切得られていないのは不思議だった。
どれだけ用意周到に準備をしていようが、闇のカードを渡している以上誰かの記憶には残るハズだ。
だが、被害にあった人間も闇のカードに操られていた人間も、誰も闇のカードを手にしたことを覚えていないとなれば、流石に不自然じゃないだろうか？
最初は闇のカードに操られている人を片っ端から倒していけば誰かからは情報を得られるかと思っていたが、このままだと拉致があかない。
どこかアプローチを変える必要がある。
「とは言っても、どうすりゃいいんだか」
そんなことを呟きながら、ゴミを片付けていると……
「……ん？」
ふと、どこからか視線を感じた。
俺は思わず視線を感じた方向を見るが、そこには公園に植えてある木があるだけで、人影はない。
「……前にもあったな、こんなこと」
俺は思わずため息を吐いた。
確かあれはブラックミストに操られた男に襲われた日だった。
昼食の時間に視線を感じ、視線を感じた場所に行ってみるがそこには誰もおらず、戻ると自分の弁当が半分程消えており、再び同じ場所から視線を感じていた。
正直訳がわからない。

催眠術だとか超スピードとかそんな類いのものじゃないんだろうが、妙な感覚を味わい微妙な気分になったのを覚えている。
そしてその感覚を今再び感じている。
俺はもう1度ため息を吐きながら、仕事を片付け、近くのロッカーに預けていた荷物を取りに行ってから公園に戻る。
前はこの時には視線の主はいなくなっていたのだが……
「まだ、視線を感じるな」
公園に戻っても感じていた視線は無くならなかった。
とはいえ、このままでいても事態は進展しない。
この後には夜と会って再び闇のカードを探す手筈になっている。
なら……
「おい‼?誰だか知らないが見てるんだろ?出てこいよ‼?」
俺はダメ元で公園にいるであろう何者かに声をかけてみる。
ダメならばこのまま夜と待ち合わせをした場所まで移動して探すまでだ。
そう意気込んでいたのだが、その予想はあっさり外れることになる。
「うん、いいよー」
「……は?」
そんな声が俺の背後から聞こえてきて、俺は後ろを振り返る。
そこにいたのは、幼い少女だった。
綺麗な銀髪をツインテールにし、大きくて袖から手が出ていないデュエルアカデミアの制服に身を包んで、どこか楽しそうな無邪気な笑みを浮かべてこちらを見ている。
身長からして初等部の中学年と言ったところだろうか?
まさか自分を見ていたのがこんなに幼い少女だとは思わなかった。
それにこの少女の姿、顔立ち……どこかで見たことがあるような……
「君が、俺を見ていたのか?」
「そうだよーお兄さん、結構鋭いんだね。私のことを気づいてくれる人って、あんまりいないんだけどなー」

そういって、どこか感情がこもっていない透き通った声で少女は笑う。
戸惑いの表情を浮かべる俺に、少女は楽しそうに、そして何でもないことのように、それを告げた。
「お兄さん、闇のカードについて知りたいんだよね？」
「っ⁉？何を……」
「隠さなくてもいいよー私、知ってるもん。お兄さん達が闇のカードについて調べてるって。だって闇のカードをばら撒いてるの私だもん」
「なっ⁉？」
少女の言葉に、俺は絶句する。
こんな幼い少女が、この街に闇のカードをばら撒いている元凶だったのか⁉？
「一体何のためにーーー」
「ふふ、知りたい？じゃあ、デュエルしよ？」
「何？」
「私とデュエルをしてくれたら闇のカードについてお兄さんに少し教えてあげる。どう？」
そういって、少女は変わらない無邪気な笑みを浮かべる。
ここでデュエルを受けるのは危険だ。
相手は何故だか知らないが俺達のことを知っている。
それでデュエルを挑んできたというのであれば、探りを入れている俺達を消しにきた可能性が高い。
それでも、この少女が本当に闇のカードをばら撒いているのなら、この少女を倒せば闇のカードがこれ以上広まるのを止めることができるかも知れない。
それにやった手に入れた手掛かりを、ここで手放すわけにはいかない。
だからーーー
「いいぜ、そのデュエルを受ける」
「ふふ、お兄さんならそう言ってくれると思ってたよ。それじゃあ早

速、ステージを変えよう」
そしてデュエルディスクを操作すると、急に辺りの風景が変化した。
夕暮れ時の公園は消え、辺りは色とりどりの花々が咲き誇り、その花々の中央に巨大な大樹がそびえ立つ花園に変わっていた。
「っ⁉？これは、あのヘンテコヘルメット野郎がやったのと同じ……⁉？」
「ああ、お兄さんは閉幕世界（クローズワールド）を知ってるんだね」
「閉幕……世界？」
「そう。立体映像に質量を与えた現実世界とは別の仮想領域。それがこの閉幕世界なんだって。まあ、私は話が難しくて途中で聞くのやめちゃったけど」
少女の言葉に俺は表情を引きつらせる。
少女の言っている言葉が本当なのだとしたらそれはとんでもないことだ。
立体映像に質量を与えた現実世界とは別の仮想領域？
そんなもの現代の技術でできるなんて聞いたこともない。
そして少女の言葉からこの空間を作ったのは少女ではない。
この空間を生み出した奴は、他にいる。
おそらく、あのヘンテコヘルメット野郎が。
「そしてここが私の閉幕世界、世界樹の花園（ユグドラシル）。綺麗な場所でしょ？それに便利なんだよ、ここならデュエルが終わるまで誰も出れないし入れないから、誰の邪魔も入らないもん」
「っ……」
少女の言葉に俺は思わず苦い表情を浮かべた。
やはり、この空間に外部から鑑賞することは不可能らしい。
つまり、助けは求められず、そのうえ脱出不能。
やろうと思えば少女はこのまま俺を閉じ込めることもできる。
……これは、本格的に悪乗りが過ぎたかもな。
「さあ、デュエルを始めよう。楽しいゲームにしようね」
そういって、少女は無邪気にデュエルディスクを構える。

どのみち、ここでデュエルを受けなくてもこの空間から脱出する方法はない。
それならば、俺の取れる選択肢は1つだけだ。
「ああ、やってやるさ。君に勝って闇のカードが広まるのを止める‼？」
そういって、俺はデュエルディスクにデッキをセットしようとし、ある事に思い至りＥＸデッキから1枚のカードを抜いて胸ポケットにいれた。
抜いたカードはコートオブアームズのカード。
あのヘンテコヘルメット野郎はコートオブアームズを狙っていた。
もし、俺がデュエルに負け、コートオブアームズが少女に渡った場合、間違いなくあのヘルメット野郎に渡るだろう。
コートオブアームズはエクシーズキラーの効果を持っているが、この少女がエクシーズモンスターを使ってくるかは分からない。
なら、のけておいても影響は大きくなく、もし負けても少女に渡ることは防げるハズだ。
「いくぞ‼？」
「いい意気込みだね。それじゃあ、ゲームスタートだよ」
『決闘‼？』

遊騎　ＬＰ８０００
少女　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は俺だな」
俺は手札を見てから少女に視線を向ける。
外見がデュエルアカデミア生初等部の生徒であろうと、相手はやっと見つけた闇のカードに関する手掛かりだ。
そしてあれだけ自信を持っているということはかなりの実力者なのだろう。

幸い手札はいい方だ。
なら、様子見なんてせずに全力でぶつかっていく‼?
「魔法カード、予想ＧＵＹを発動‼?自分フィールドにモンスターが存在しない場合にこのカードは発動できる。デッキからレベル４以下の通常モンスター１体を特殊召喚する‼?来い、クィーンズナイト‼?」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

俺の前に赤い鎧を身に纏った女性の騎士が現れる。
「さらに俺はキングスナイトを召喚‼?」

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

そしてクィーンズナイトに並び立つようには黄金の鎧を身に纏った騎士が現れる。
そして並び立ったクィーンズナイトとキングスナイトはお互いに剣を掲げて更なる騎士を呼ぶ。
「キングスナイトの効果発動‼?自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト１体を特殊召喚する‼?集え、絵札の三銃士‼?来い、ジャックスナイト‼?」

〈ジャックスナイト〉☆５　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

クィーンズナイトとキングスナイトの剣に合わせるように剣を掲げる青い鎧の騎士が現れる。
「おー一気に3体のモンスターを並べるなんてなかなかやるねー」

「行くぞ、斬り開け‼?運命に抗うサーキット‼?」
「早速リンク召喚だね」
俺が正面に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター2体‼?俺はクィーンズナイトとキングスナイトをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?リンク召喚‼?追想に生きる王女‼?リンク2‼?聖騎士の追想イゾルデ‼?」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

クィーンズナイトとキングスナイトがサーキットに吸い込まれていき、代わりにフィールドに現れたのは金髪と白髪の2人の女性型のモンスター。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動‼?リンクレカレクション‼?リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター1体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキからＤＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）Ｂｌｏｏｄｙ（ブルーディー）を手札に加える‼?」
「へぇー運命を司る英雄か」
「まだまだ行くぞ‼?聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動‼?メモリーズギフト‼?デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター1体をデッキから特殊召喚する‼?俺はデッキから妖刀竹光、最強の盾、ビッグバンシュート、閃光の双剣―トライス、孤毒の剣を墓地に送り、デッキから天融星カイキを特殊召喚‼?」

〈天融星カイキ〉☆5　戦士族　光属性
ＤＥＦ２１００

イゾルデに導かれ俺のフィールドに鬼の顔の鎧を見に纏った鎧武者が現れる。
「天融星カイキの効果、それにチェーンして墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える。俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える。そして天融星カイキの効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、ライフポイントを５００を払って発動できる!!?」

遊騎　ＬＰ８０００→７５００

「自分の手札・フィールドから、戦士族の融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をＥＸデッキから融合召喚する!!?俺はレベル５以上の戦士族モンスター、ジャックスナイトと天融星カイキを融合!!?」
「へぇーお次は融合召喚か」
カイキが雄叫びをあげると、空に見える星が輝き、カイキとジャックスナイトを照らす。
その光に導かれるように、カイキとジャックスナイトは粒子に変わり、混ざり合う。
「天に融けし戦士よ、絵札の騎士よ!!?今交わりて、勝利を照らす星となれ!!?融合召喚!!?」
混ざり合った粒子が輝くと、その場に現れたのは漆黒のマントを羽織り、巨大な槍を持つ鬼神。
「勝利を告げる明星!!?覇勝星イダテン!!?」

〈覇勝星イダテン〉☆１０　戦士族　光属性
ＡＴＫ３０００

「覇勝星イダテンの効果発動!!?このカードが融合召喚に成功した場合、デッキから戦士族・レベル５モンスター１体を手札に加える!!?俺はデッキから２枚目のジャックスナイトを手札に加える!!?そし

て覇勝星イダテンの効果発動!!?神行法!!?1ターンに1度、手札を任意の枚数捨ててこのカードの攻撃力を捨てた数×２００ポイントアップさせる!!?俺は手札の妖刀竹光を捨てて、覇勝星イダテンの攻撃力を２００ポイントアップさせる!!?」

覇勝星イダテン
ＡＴＫ３０００→３２００

「再び墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?デッキから折れ竹光を手札に加え、聖騎士の追想　イゾルデに装備魔法、折れ竹光を装備!!?そして魔法カード、黄金色の竹光を発動!!?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローする!!?」
「なかなか手札が減らないねー」
「まだだ!!?魔法カード、蛮族の狂宴ＬＶ５!!?自分の手札・墓地から戦士族・レベル５モンスターを2体まで選んで特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは、効果が無効化され、このターン攻撃できない。蘇れ、ジャックスナイト、天融星カイキ!!?」

〈天融星カイキ〉☆5　戦士族　光属性
ＤＥＦ２１００

〈ジャックスナイト〉☆5　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

「お、レベル5モンスターが2体。ということは……」
「俺は光属性レベル5の天融星カイキ、ジャックスナイトでオーバーレイ!!?2体の光属性モンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
カイキとジャックスナイトが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けると空から純白の鎧を見に纏った戦士が降りてくる。
「星々を守りし光の戦士!!?セイクリッドプレアデス!!?」
〈セイクリッドプレアデス〉★５　戦士族　光属性
ＡＴＫ２５００
「やっぱりエクシーズ召喚だ。１ターンにリンク、融合、エクシーズをしてくるなんて、驚かせてくれるねー」
俺のモンスター達を見て、少女はパチパチと空虚な拍手をする。
この余裕そうな雰囲気……挑発のつもりか、それとも本当に余裕なのか。
どちらにせよ、油断はしない。
「俺はカードを２枚伏せてターンエンドだ」
遊騎　ＬＰ７５００　手札３
ー▲△▲ー　ー
ーー○ー○
ー　☆
ーーーーー
ーーーーー　ー
少女　ＬＰ８０００　手札５
「さあ、楽しいゲームを始めよう。私のターン、ドロー。魔法カード、予想ＧＵＹを発動」
「何？」
「効果の説明は不要だよね？私はデッキからチューナーモンスター、エンジェルトランペッターを特殊召喚するよ」
〈エンジェルトランペッター〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

フィールドに現れたのは闇の霧を放つアサガオのモンスター。
「さらに手札から薔薇恋人（バラヴァー）を捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動。デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚するよ。おいで、死の花―ネクロフルール」

〈死の花―ネクロフルール〉☆1　植物族　闇属性
ＤＥＦ０

さらにエンジェルトランペッターの放つ闇の霧の中かや枯れ果てた白ユリのモンスターが現れる。
「さて、魔法カード、フレグランスストーム。フィールド上に表側表示で存在する植物族モンスター1体を破壊し、自分のデッキからカードを1枚ドローする。さらに、この効果でドローしたカードが植物族モンスターだった場合、そのカードをお互いに確認し自分はカードをもう1枚ドローする事ができる。私は死の花―ネクロフルールを破壊してカードを1枚ドローするよー」
ネクロフルールが嵐によって吹き飛ばされてフィールドに舞い散り、少女はカードを1枚ドローする。
「私がドローしたのは椿姫ティタニアル。植物族モンスターだからさらにもう1枚ドローするね。そして破壊された死の花―ネクロフルールの効果発動。このカードがカードの効果によって破壊され墓地へ送られた場合、自分のデッキから時花の魔女―フルールドソルシエール1体を特殊召喚する事ができる」
「破壊された時の効果持ちだったか……」
「おいで、時花の魔女―フルールドソルシエール」
舞い散っていたネクロフルールの花びらがフィールドの中央に集まっていくと、花びらが花の杖を持つ魔女の姿を成した。

〈時花の魔女―フルールドソルシエール〉☆8　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ２９００

「いきなり攻撃力２９００の最上級モンスターか‼？」
「時花の魔女―フルールドソルシエールの効果発動、ネクロイドブルーム。このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、相手の墓地に存在するモンスター１体を選択して選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚するよ」
「何⁉？」
「ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃する事はできず、このターンのエンドフェイズ時に破壊されちゃうけどね。私はあなたのキングスナイトを貰っちゃうね」

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

フルールドソルシエールが杖を振るうと、地面から身体に紫色の花が植え付けられたキングスナイトが現れる。
あの子のフィールドにはレベル４でありチューナーのエンジェルトランペッターがいる。
このままだとキングスナイトを利用されてレベル８のシンクロモンスターかランク４のエクシーズモンスターに繋げられる。
いや、あの子は召喚権もまだ使っていないからアドバンス召喚も考えられる。
難しいところではあるが、次のターンのことを考えるならここは……
「セイクリッドプレアデスの効果発動‼？ゾディアックリターン‼？オーバーレイユニットを１つ使い、１ターンに１度、相手のカード１枚を手札に戻す‼？この効果は相手ターンでも使用することが出来る‼？俺はキングスナイトを手札に戻す‼？」
「ありゃりゃ、回収されちゃったかー」
プレアデスが放つ星の弾丸がキングスナイトの身体に植え付けられた紫色の花を弾き飛ばし、そのまま空間に穴を開けてキングスナイ

トを俺の手札に移動させる。
「まあいいや。これでセイクリッドプレアデスの効果は使えなくなったしね。私はイービルソーンを召喚」
〈イービルソーン〉☆1　植物族　闇属性
ＡＴＫ１００
フィールドに現れたのは手榴弾の形をした棘の生えた実をつけている花のモンスター。
「イービルソーンの効果発動。このカードをリリースして相手ライフに３００ポイントのダメージを与え、自分のデッキから同名カードを２体まで表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。ただし、この効果で特殊召喚した同名カードは効果を発動する事ができないけどね。まずは軽いジャブってことで、３００ポイントのダメージ、受けて貰うよ」
「くっ……」
遊騎　ＬＰ７５００→７２００
イービルソーンがつけていた手榴弾の形をした棘の生えた実が弾け、弾け飛んだ棘が俺の身体を貫く。
そして俺の身体に当たらなかった棘が落ちた場所から２体のイービルソーンが生えてきた。
〈イービルソーン〉☆1　植物族　闇属性
ＤＥＦ３００
「さあ、どんどんフィールドに彩りを添えようかな－1体のイービルソーンをリリースして、永続魔法、超栄養太陽。自分フィールド上のレベル２以下の植物族モンスター1体をリリースしてリリースしたモンスターのレベル＋3以下のレベルを持つ植物族モンスター1体

を、手札・デッキから特殊召喚する。ただし、このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊し、そのモンスターがフィールド上から離れた時、このカードを破壊する。イービルソーンのレベルは1。私はデッキからローンファイアブロッサムを特殊召喚するよ」
「っ‼?厄介なモンスターが出てきたな」

〈ローンファイアブロッサム〉☆3　植物族　炎属性
ＤＥＦ１４００

超栄養太陽によりイービルソーンが変異し、フィールドに現れたのは黄色い爆弾のような実をつけた植物。
あのカードは植物族のデッキではかなり強力なカードであり、制限カードにまでなったカードだからその効果は知っている。
これはかなり不味いことになるかも知れないな。
「ローンファイアブロッサムの効果発動。1ターンに1度、自分フィールドの表側表示の植物族モンスター1体をリリースしてデッキから植物族モンスター1体を特殊召喚するよ。私はローンファイアブロッサムをリリースしてデッキから姫葵マリーナを特殊召喚するよ」

〈姫葵マリーナ〉☆8　植物族　炎属性
ＡＴＫ２８００

ローンファイアブロッサムの実が弾け、辺りを爆煙が包む。
そして爆煙が晴れると、そこには向日葵の身体を持つアルラウネのモンスターが現れた。
「まだまだ行くよー私は墓地に存在する薔薇恋人の効果発動。墓地のこのカードを除外して、手札から植物族モンスター1体を特殊召喚する。そしてこの効果で特殊召喚したモンスターはこのターン、相手の罠カードの効果を受けない。おいで、椿姫ティタニアル」

〈椿姫ティタニアル〉☆8　植物族　風属性
ＡＴＫ２８００

マリーナに寄り添うように現れたのは椿の身体を持つアルラウネのモンスター。
これだけでもかなり面倒な状況になっているが、少女の不敵な表情を見るとまだまだ本気じゃないのが分かる。
そして、また少女の展開は終わっていない。
「それじゃあお待ちかね。私はレベル1、イービルソーンに、レベル4、チューナーモンスター、エンジェルトランペッターをチューニング」
「来るか、シンクロ召喚……」
エンジェルトランペッターが光の輪になり、イービルソーンが小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から現れるのは白い薔薇のドレスを纏った少女。
「黒薔薇の庭に咲く純潔なる少女よ、聖域を侵す者に白き茨の呪いを与えよ。シンクロ召喚、白き薔薇乙女、ガーデンローズメイデン」

〈ガーデンローズメイデン〉☆5　植物族　闇属性
ＡＴＫ１６００

「ガーデンローズメイデンの効果発動、ローゼンアルタール。このカードが特殊召喚に成功した場合、自分のデッキ・墓地からブラックガーデン1枚を選んで手札に加える。私はデッキからブラックガーデンを手札に加えて、そのままフィールド魔法、ブラックガーデンを発動ー!!?」
少女がそういってブラックガーデンを発動すると、世界樹の花園に変化が訪れる。
色とりどりの花が咲き誇っていた花園を茨が侵食していき、色とり

どりの花が枯れていく代わりに辺り一面に黒い薔薇が咲き誇った。
「ようこそ私のゲームエリアへ。ここはブラックガーデン……世界樹の花園に寄生し、全ての生命を養分として花を咲かせる異界の花園」
「ブラックガーデン……」
「さあ、思う存分戦おうか。バトル」
「なら、バトルフェイズ開始時、墓地に存在する天融星カイキの効果発動!!?」
「!!?へぇ、さっきのセイクリッドプレアデスで墓地に戻してたのか」
「元々の攻撃力と異なる攻撃力を持つレベル５以上の戦士族モンスターが自分フィールドに存在している相手ターンに、このカードを墓地から特殊召喚する!!?蘇れ、天融星カイキ!!?」

〈天融星カイキ〉☆５　戦士族　光属性
ＤＥＦ２１００

「そしてライフポイントを５００を払って天融星カイキの効果発動!!?」

遊騎　ＬＰ７２００→６７００

「また融合召喚かーだけどその前にチェーンしてフィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動」
「何?」
「ブラック・ガーデンの効果以外でモンスターが表側表示で召喚・特殊召喚される度に、そのモンスターの攻撃力を半分にし、その後、そのコントローラーは、相手のフィールドに植物族・闇属性・レベル２・攻撃力守備力８００のローズトークン１体を攻撃表示で特殊召喚するよー」
「っ!!?弱体化とトークンを生成する効果を持ってるのか!!?」
少女の言葉に反応するように花園に蔓延っていた茨がカイキに向

かって伸び、その身体を締め上げる。
締め上げられたカイキが苦悶の声を上げると、少女のフィールドに黒い薔薇が咲いた。

天融星カイキ
ＡＴＫ１０００→５００

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００

「くっ、厄介なフィールド魔法だな。天融星カイキの効果発動‼？俺は覇勝星イダテンとレベル５以上の戦士族モンスター天融星カイキを融合‼？」
「あれ？せっかく出した覇勝星イダテンを融合しちゃうんだ？」
カイキが雄叫びをあげると、再び空に見える星が輝き、カイキとイダテンを照らす。
その光に導かれるように、カイキとイダテンは粒子に変わり、混ざり合う。
「天に融けし戦士よ、勝利を告げる明星よ‼？今交わりて、覇道を照らす星となれ‼？融合召喚‼？」
混ざり合った粒子が輝くと、その場に現れたのは漆黒の鎧を纏い、巨大な槍を携えた６本の腕と３つ顔を持つ闘神。
「覇道を告げる凶星‼？覇道星シュラ‼？」

〈覇道星シュラ〉☆１２　戦士族　闇属性
ＡＴＫ０

「へぇ、レベル１２の融合モンスターなのに攻撃力は０……しかもそのモンスターを攻撃表示か。モンスターが特殊召喚されたことでブラックガーデンの効果発動、このカードは攻撃力を下げれなくてもローズトークンは出せる」

「……本当に厄介なフィールド魔法だな」
少女の言葉に反応するように花園に蔓延っていた茨がシュラに向かって伸び、その身体を締め上げようとする。
シュラは６本の腕を使い巻きついてきた茨を容易く引きちぎると、シュラが引きちぎった茨の残骸から黒い薔薇が咲いた。

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００

「ガーデンローズメイデンで聖騎士の追想　イゾルデを攻撃。シュラーフローゼン」
ローズメイデンが手を伸ばすとイゾルデ達に向かって白い茨が襲いかかる。
「相討ち狙いか。だが、そうはさせない‼？覇道星シュラの効果発動‼？神威‼？１ターンに１度、自分・相手のバトルフェイズに相手フィールドの全ての表側表示モンスターの攻撃力は０になる‼？」
「っ‼？相手のモンスターを一気に弱体化させるのか……なかなかやるねー」
シュラの身体を赤い闘気が包み込み、シュラが雄叫びを上げるとその闘気が少女のモンスター達に吹き荒れる。
シュラの闘気に当てられたモンスター達はその身体を萎縮させ、金縛りにあったかのように動けなくなった。

ガーデンローズメイデン
ＡＴＫ１６００→０

時花の魔女―フルールドソルシエール
ＡＴＫ２９００→０

姫葵マリーナ
ＡＴＫ２８００→０

椿姫ティタニアル
ＡＴＫ２８００→０

ローズトークン
ＡＴＫ８００→０

「迎え撃て、聖騎士の追想　イゾルデ‼？ツインアタック‼？」
イゾルデ達は伸びてきた茨を躱すように同時に跳び上がり、空中で一回転してからガーデンメイデンに跳び蹴りを加える。
吹き飛ばされたガーデンメイデンはそのまま爆散し、辺りに白い薔薇が舞い散った。

少女　ＬＰ８０００→６４００

「くっ……だけど、ただではやられないよ？姫葵マリーナの効果発動、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカード以外の自分フィールド上の植物族モンスター１体が戦闘またはカードの効果によって破壊され墓地へ送られた場合、相手フィールド上のカード１枚を選択して破壊できる。私は覇道星シュラを破壊させて貰うよ」
「っ、だから相討ちを狙ってたのか……」
舞い散った白い薔薇をマリーナが弾丸に変え、シュラの身体を貫き、爆散させる。
だが、シュラはただではやられない‼？
「破壊された覇道星シュラの効果発動‼？六道輪廻‼？融合召喚したこのカードが相手によって破壊され墓地へ送られた場合、覇勝星イダテン１体を融合召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚する‼？」
「‼？へぇ、そんな効果まであるんだね」
「再び現れて勝利を告げろ‼？覇勝星イダテン‼？」

〈覇勝星イダテン〉☆１０　戦士族　光属性
ＡＴＫ３０００→１５００

現れたイダテンは茨に締め上げられるが、少女のフィールドは埋まっているためローズトークンは生まれなかった。
「覇勝星イダテンの効果発動‼？俺はデッキから３枚目のジャックスナイトを手札に加える‼？」
「手札補充までされちゃうか。ふふ、やっぱりゲームはこうじゃないと面白くないよね」
そういって少女は無邪気に笑う。
状況からしてかなり追い詰めているハズなんだが、これぐらいならまだ余裕ってわけか。
「とはいえ、このまま戦うと私が不利だからね。少し戦術を変えさせて貰おうかなー？だけどその前に、椿姫ティタニアルで聖騎士の追想イゾルデを攻撃。カメーリエドルン」
「迎え撃て、聖騎士の追想　イゾルデ‼？ツインアタック‼？」
ティタニアルが茨を操り、イゾルデ達を襲おうとするが、茨が届く前にイゾルデ達はティタニアルの懐に潜り込み蹴りを加えると、ティタニアルはそのまま爆散し、辺りに椿の花が舞い散った。

少女　ＬＰ６４００→４８００

「いたた、これで再び姫葵マリーナの効果発動、私は聖騎士の追想　イゾルデを破壊させて貰うよ」
舞い散った椿の花がイゾルデ達を包み込み、爆散させた。
「メインフェイズ２、咲き誇れ、生命を飲み込むサーキット」
「リンク召喚か……」
少女が正面に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は植物モンスター２体。私はローズトークン２体をリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚。リンク２、アロマセラフィージャスミン」

〈アロマセラフィージャスミン〉ＬＩＮＫ　２　植物族　光属性
ＡＴＫ１８００→９００　↙？↘？

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００

ローズトークンがサーキットに吸い込まれ、葉っぱの羽根を持つ妖精のモンスターが現れる。
それと同時に茨がセラフィージャスミンに向かって伸び、その身体を締め上げて俺のフィールドにローズトークンを生む。
あれは空子も使っていたリンクモンスターだな。
確かにローズトークンが生み出される関係上、あのデッキとは相性が良さそうだ。
「アロマセラフィージャスミンの効果発動。１ターンに１度、このカードのリンク先の自分のモンスター１体をリリースしてデッキから植物族モンスター１体を守備表示で特殊召喚する。私は時花の魔女―フルールドソルシエールをリリースしてデッキからチューナーモンスター、スポーアを特殊召喚する」

〈スポーア〉☆１　植物族　風属性
ＤＥＦ８００　ＡＴＫ４００→２００

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００

フルールドソルシエールの姿が消え、少女のフィールドには綿胞子のモンスターが現れ、俺のフィールドにはローズトークンが生まれる。
チューナーを出してきたということはシンクロ召喚か？
「これで準備完了。咲き誇れ、生命を飲み込むサーキット」

少女が正面に手をかざすと再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は効果モンスター2体以上。私は姫葵マリーナ、スポーア、アロマセラフィージャスミンを2体分として扱ってリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン」
「リンク4の大型リンクモンスターか‼?」
マリーナ、スポーア、そしてセラフィージャスミンが2体に分身してサーキットに吸い込まれていく。
そしてサーキットが光り輝くとそこから現れるのは機械的な身体を持つ竜。
「リンク召喚。悪意より生まれし全てを破壊し尽くす爆竜。リンク4、トポロジックボマードラゴン」

〈トポロジックボマードラゴン〉ＬＩＮＫ４　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↘?←→↘?

「トポロジックボマードラゴン……確か里香さんが使ってたモンスターだったな。だが、そのモンスターだってブラックガーデンに縛られる」

トポロジックボマードラゴン
ＡＴＫ３０００→１５００

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００

ブラックガーデンの茨がトポロジックボマーを締め上げ、俺のフィールドにローズトークンを生み、俺のフィールドがモンスターに埋め尽くされる。
しかし、ブラックガーデンにより締め付けられているトポロジックボマーは俺を見て、嘲笑うかのようにニヤリと笑った。
「さあ、リセットの時間だよ。トポロジックボマードラゴンの効果発

動、アオスシュテルベン。このカードがモンスターゾーンに存在し、フィールドのリンクモンスターのリンク先にこのカード以外のモンスターが特殊召喚された場合、お互いのメインモンスターゾーンのモンスターを全て破壊する」
「っ⁉？何だって⁉？」
「ただし、このターン、このカード以外の自分のモンスターは攻撃できない。まあ、もうバトルフェイズも終わっちゃったから関係無いけどね。それじゃあ、壊しちゃえ、トポロジックボマードラゴン」
少女の声にトポロジックボマーは歓喜の咆哮を上げながら体内からエネルギーを放出する。
放出されたエネルギーはフィールドのモンスターを全て焼き払った。
「ぐっ……モンスターが全滅……」
「ふふっ、よく出来ました。私はカードを1枚伏せてターンエンドだよ。さあ、もっとゲームを楽しもう」

遊騎　ＬＰ６７００　手札５
ー▲ー▲ー　　ー
ーーーーー
☆　　ー
ーーーーー
ーー▲ーー　　▽
少女　ＬＰ４８００　手札０

「俺のターン、ドロー⁉？よし、魔法カード、手札抹殺⁉？お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローする⁉？お前は手札がない。よって俺のみ5枚のカードを捨ててドローだ」
「お、手札交換か。いいタイミングで引いたねー」
「まだだ⁉？魔法カード、貪欲な壺⁉？墓地に存在する聖騎士の追想イゾルデ、セイクリッドプレアデス、覇道星シュラ、覇勝星イダテン2体をＥＸデッキに戻してカードを2枚ドローする⁉？さらに、リ

バースカードオープン‼?・罠発動、貪欲な瓶‼?・墓地に存在する蛮族の狂宴ＬＶ５と妖刀竹光、ジャックスナイト３体をデッキに戻してシャッフルし、カードを１枚ドローする‼?・」

「おおー結構ドローするねー」

俺はドローした手札を見て考える。

ブラックガーデンによって表側表示で召喚・特殊召喚される度に、ローズトークンが生み出される。

幸いローズトークンを出す場所を決めるのは召喚したプレイヤーのため、２回まではトポロジックボマーのリンク先から外すことができるが３度目は確実にトポロジックボマーの効果を発動させてしまう。

なら、ここは一点突破で決めにいく‼?・

「相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。来い、Ｈ・ＣＣ（ヒロイックチャレンジャー）強襲のハルベルト‼?・」

〈Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト〉☆４　戦士族　地属性

ＡＴＫ１８００→９００

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性

ＡＴＫ８００

俺の前に現れたのはハルバードを持った紫の鎧を纏った戦士。

「そしてＨ・ＣＣ（ヒロイックチャレンジャー）サウザンドブレードを召喚‼?・」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性

ＡＴＫ１３００→６５０

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性

ＡＴＫ８００

さらにハルベルドに並び立つように頭巾を被り、背中に何本もの刀を背負った戦士が現れる。
「俺は戦士族、レベル４のＨ・Ｃ　強襲のハルベルトとＨ・Ｃ　サウザンドブレードでオーバーレイ‼？２体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」
ハルベルドとサウザンドブレードが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこにいたのは赤い鎧を着た王者の風格を漂わせる戦士。
「光を纏て、闇を切り裂く孤高の王者‼？　Ｈ（ヒロイック）ー　Ｃ（チャンピオン）　エクスカリバー‼？」

〈Ｈ－Ｃ　エクスカリバー〉★４　戦士族　光属性
ＡＴＫ２０００

「へぇ、随分カッコいいエクシーズモンスターだね。だけど、ブラックガーデンの効果は受けて貰うよ」
少女の言葉に反応するように茨がエクスカリバーに向かって伸び、その身体を縛り付けて黒い薔薇を咲かせる。

Ｈ－Ｃ　エクスカリバー
ＡＴＫ２０００→１０００

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００

「そしてトポロジックボマードラゴンの効果発動、アオスシュテルベン。リンク先にこのカード以外のモンスターが特殊召喚されたから、お互いのメインモンスターゾーンのモンスターを全て破壊する。まあ、破壊されちゃうのは私のローズトークンだけだけどね」
少女の声にトポロジックボマーは再び体内からエネルギーを放出

し、ローズトークンを焼き払う。
　これであの子のモンスターはトポロジックボマードラゴンだけだ‼?
「ＨＩＣ　エクスカリバーの効果発動‼?シャイニングフォース‼?オーバーレイユニットを２つ使い、このカードの攻撃力は、次の相手のエンドフェイズ時まで元々の攻撃力の倍になる‼?」
　エクスカリバーの周りを漂っていたオーバーレイユニットがエクスカリバーに集まり、エクスカリバーの身体が光り輝くと、エクスカリバーは力を込めて身体を縛っていた茨を吹き飛ばした。

ＨＩＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ１０００→４０００

「成る程、元々の攻撃力の倍にすることでブラックガーデンの影響を無効化したのか」
「バトル‼?ＨＩＣ　エクスカリバーでトポロジックボマードラゴンを攻撃‼?必殺剣　刀光剣影‼?」
「迎え撃って、トポロジックボマードラゴン。断絶のフェアリュックトハイト」
　トポロジックボマーが口からレーザーを放ち、エクスカリバーを迎撃しようとする。
　しかし、エクスカリバーはその攻撃を躱すと空に向けて力強く跳び上がり、一刀の元その身体を斬り裂き、爆散させた。

少女　ＬＰ４８００→２３００

「あいたた……トポロジックボマードラゴン、やられちゃったか」
「まだだ‼?このターンで決着をつける‼?速攻魔法、旗鼓堂々‼?のターン、自分はモンスターを特殊召喚できなくなる代わりに、自分の墓地の装備魔法カード１枚をその正しい対象となるフィールド上のモンスターに装備する‼?ただしこの効果で装備した装備魔法

カードはエンドフェイズ時には破壊される‼?俺はこの効果で墓地に存在する装備魔法、閃光の双剣―トライスをＨ－Ｃ　エクスカリバーに装備する‼?」

　エクスカリバーの剣が消え、代わりにエクスカリバーの手元に１組の双剣が現れる。

「閃光の双剣―トライスを装備したモンスターは攻撃力が５００ポイントダウンする代わりにバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができる‼?」

「‼?ここで２回攻撃……‼?」

Ｈ－Ｃ　エクスカリバー
ＡＴＫ４０００→３５００

「これによりＨ－Ｃ　エクスカリバーはもう１度攻撃することができる‼?これで終わりだ‼?Ｈ－Ｃ　エクスカリバーでダイレクトアタック‼?必殺剣　一箭双雕‼?」

　エクスカリバーが双剣をクロスするようにして少女の身体を斬り裂こう迫る。

　しかし、エクスカリバーの双剣が少女を斬り裂こうとした瞬間、少女の身体を薄い障壁が覆い、エクスカリバーの双剣を弾き飛ばした。

「何‼?」

「いやー危なかったよ。だけど、私はダメージを受けてない。相手ターンの戦闘ダメージ計算時、リバースカードオープン。罠発動、ガードブロック。その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になり、自分のデッキからカードを１枚ドローする。これでダメージは無しってことで」

　そういって少女はデッキからカードを１枚ドローする。

　決めきれなかった……だが、トポロジックボマーは破壊し、少女のフィールドにはモンスターも残っていない。

　もう少しで決着をつけられる……ハズだ。

「メインフェイズ２、俺はカードを２枚伏せてターンエンド。エンド

フェイズ、旗鼓堂々の効果で閃光の双剣―トライスは破壊される」

ＨＩＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ３５００↓４０００

遊騎　ＬＰ６７００　手札２
ー▲ー▲▲　　ー
ーーーーー
　ー　　○
ーーーーー
ーーーーー　　▽
少女　ＬＰ２３００　手札１

「ふふ、いいね。ここまで追い詰められたのは久しぶり。やっぱりゲームはこうじゃないとね」
そういって、少女は愉快そうに笑う。
少女の手札は１枚。
フィールドにモンスターはなく、残っているのはブラックガーデンだけだ。
これだけ追い詰めているハズなのに、この異常なまでの余裕はなんなんだ？
「難しい表情をしてるねーお兄さん。もっとゲームを楽しもうよ」
「……君はデュエルを楽しんでるんだよな？」
「ん？そうだよ？」
「なら、何で闇のカードをばら撒いてるんだ？君も知ってるだろ、闇のカードを使いこなせない奴は暴走する。それで他の人に危害が加わるかも知れない状況なんかじゃ、楽しめないだろ？」
「なんで？」
俺の問いに少女は心底不思議そうに首を傾げ、そしてどこか感情がこもっていないような声で口を開く。
「だって、ゲームって言うのはフェアじゃないと面白くないでしょ？

私も相手を傷つけるんだから　　相手も私を傷つけれないと面白くないよ？」

「なっ⁉？」

少女の言葉に、俺は思わず絶句してしまう。

まさか、この少女が闇のカードをばら撒いている理由はーーー

「それにお兄さんみたいに闇のカードに適合できる人もちゃんといるしね。こうやってばら撒いてれば、どんな人なら闇のカードを使えるかが分かるでしょ？」

「っ、実験してるつもりなのか？この街の人を使って、この街に生きる人の平穏を壊してまで‼？」

「ふふ、さあね？私は楽しければなんでもいいんだよ。さてと、お話はおしまい。楽しいデュエル、続けよ？私のターン、ドローーーーーあれ？」

ドローしたカードを見て少女は一瞬首を傾げ、何かを思い出したのか、手を打った。

「あーそういえば実験してこいって言われたっけ。まあちょうどいいかな、お兄さん、結構強いし。それじゃあこの力、早速試させて貰おうっと」

そういって少女がドローしたカードを掲げる。

すると、そのカードから大量の闇が噴き出した。

「私が引いたのはＲＵＭ（ランクアップマジック）ー七皇（ザ・セブンス・ワン）の剣‼？」

「ＲＵＭ……七皇の剣？」

少女が掲げたカードを見て、俺は疑問を口に出す。

ＲＵＭというカードには覚えがある。

前に『Ｎａｔｕｒａｌ』で行った大会で天雷が使用し、フィールドにいたアトゥムスを切り札であるサンダーエンドドラゴンにランクアップさせたカードだ。

そのことからＲＵＭというのはエクシーズモンスターをランクアップさせるカードのハズ。

だが、少女のフィールドにはエクシーズモンスターどころかモンスターすら存在しない。

発動できないハズのカード……それでも俺の本能はあのカードが不味いということを告げていた。
そして、その予感は的中する。
「このカード名の効果はデュエル中に1度しか適用できず、自分のドローフェイズに通常のドローをしたこのカードを公開し続ける事で、そのターンのメインフェイズ1の開始時に発動できる!!?私はＲＵＭ－七皇の剣を発動!!?ＣＮｏ．以外のＮｏ．１０１～Ｎｏ．１０７のいずれかをカード名に含むモンスター1体を、自分のＥＸデッキ・墓地から選んで特殊召喚し、そのモンスターと同じＮｏ．の数字を持つＣＮｏ．モンスター1体を、そのモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚する!!?」
「Ｎｏ．を直接ＥＸデッキから出せるカードだと!?!?いや、それよりもＣＮｏ．って……」
「すぐに分かるよ。お兄さんには特別に見せてあげる。Ｎｏ．の進化をね。ＲＵＭ－七皇の剣の効果でＥＸデッキより現れろ、Ｎｏ．１０３!!?無より生まれし氷の令嬢、神葬零嬢ラグナゼロ!!?」

〈Ｎｏ．１０３神葬零嬢ラグナゼロ〉★４　天使族　水属性
ＡＴＫ２４００

現れたのは氷の剣を持った氷の翼で空を舞う天使。
だが、これで終わりじゃない。
「そしてＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナゼロ1体でオーバーレイ!!?1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?カオスエクシーズチェンジ!!?」
「カオス……エクシーズチェンジ、だと?」
ラグナゼロが空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りたのは透き通った氷の翼が黒く染まり、巨大な鎌を手にした死の天使。
「現れろ、ＣＮｏ．１０３!!?罪ある者へ永遠の休息を与える氷の令嬢、神葬零嬢ラグナインフィニティ!!?」

〈ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティ〉★５　天使族　水属性
ＡＴＫ２８００

「これが呪われた闇を持つＮｏ．に更なる呪いを重ねて進化させた力、ＣＮｏ．だよ」
「これが……ＣＮｏ．……っ!!?」
現れたラグナインフィニティが放つ威圧感に思わず息をするのを忘れてしまいそうになり、思いっきり自分の頬を叩く。
雰囲気に呑まれたらダメだ。
呑まれたら……確実にやられる。
「……確かに強そうなモンスターだが、そいつもブラックガーデンの効果は受けるハズだ」
「うん、受けるよ。そうじゃないとフェアじゃないもんね」
少女の言葉に反応するように茨がラグナインフィニティに向かって伸び、その身体を縛り付けて黒い薔薇を咲かせた。

ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティ
ＡＴＫ２８００→１４００

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００

「確かに攻撃力は下がったけど、この子の効果を耐えられるかな？ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティの効果発動、ウンエントリヒフェアボート!!?１ターンに１度、カオスオーバーレイユニットを１つ取り除き、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して、選択したモンスターの攻撃力と、その元々の攻撃力の差分のダメージを相手ライフに与え、そのモンスターをゲームから除外する!!?」

「っ⁉？何だって⁉？」
「この効果は相手ターンでも発動できるよ。対象は勿論、ＨＩＣ　エクスカリバー⁉？ＨＩＣ　エクスカリバーの現在の攻撃力は４０００。元々の攻撃力が２０００だから２０００ポイントのダメージを受けて貰うよ⁉？」
ラグナインフィニティがエクスカリバーに向けて手をかざすと吹雪が吹き荒れ、エクスカリバーの身体が凍りついていく。
エクスカリバーの身体が完全に凍りつくと、ラグナインフィニティは鎌を振るって斬撃を放ち、エクスカリバーごと俺の身体を切り裂いた。
「っ⁉？ぐあぁぁぁ⁉？」

遊騎　ＬＰ６７００→４７００

ラグナインフィニティの放った斬撃により、俺の身体から鋭い痛みが襲ってくる。
その痛みは前にロンゴミアントに足を貫かれた時のものよりも酷い。
幸いカオスオーバーレイユニットは無くなったが、こんな攻撃を何度も受けたら、今度こそ病院送りでは済まなくなる。
「これでお兄さんのモンスターは消えちゃったね。それじゃあ、どんどん行くよ。魔法カード、貪欲な壺。墓地に存在するトポロジックボマードラゴン、アロマセラフィージャスミンをＥＸデッキに、時花の魔女―フルールドソルシエール、イービルソーン２体をデッキに戻してカードを２枚ドローするよ。……あは」
ドローしたカードを見て、少女は笑みを浮かべる。
なんだ？何を引いた？
俺は警戒しながら少女がドローしたカードに視線を向ける。
その瞬間ーーー
「っ⁉？⁉？ぐっ⁉？」
そのカードから今まで見た闇のカードの比ではない程の大量の闇

が噴き出し、心臓を鷲掴みにされたような悪寒が俺の身体を貫き、俺は全身から一気に冷や汗が吹き出すのを感じながら、急いでそのカードから視線を逸らした。
ダメだ、アレを直視してはいけない。
アレを直視したら最期、間違いなく俺はあのカードに喰われる。
そう俺の本能が告げていた。
そんな俺の様子に気付いたのか、少女は残念そうに肩を竦めた。
「残念、お兄さんでも無理か。まあ、すぐに発狂しなかっただけマシかな？そう簡単にはいかないことは分かってるし、それが分かっただけよしとしよう」
「何を……言って……」
「安心していいよ、私は使わないから。使っちゃうとゲームが成り立たなくなっちゃうしね。せっかくここまで楽しいデュエルをしたんだもん。最後にお兄さんが自滅して終わっちゃったらつまらないしね。もうこっちを見ても大丈夫だよ、見えないようにポケットにしまったから」
少女の言葉を聞き、俺はおそるおそる少女の方を見ると少女の手札が1枚になっており、代わりに少女の胸ポケットから大量の闇が吹き出していた。
「……いいのか、それを使わなくて。実質手札が1枚減ったようなものだぞ？」
「強がりはよしなよ。そうして立っているのも辛いでしょ？」
そういって、少女は何の気なしに笑う。
その笑顔はどこか空虚でーーー
「それに、この手札だけでも十分お兄さんにトドメはさせるからね」
「何⁉？」
ーーー確かな自信が宿っていた。
「永続魔法、増草剤。1ターンに1度、自分の墓地の植物族モンスター1体を対象としてその植物族モンスターを特殊召喚する。ただし、この効果でモンスターを特殊召喚するターン、自分は通常召喚できず、この効果で特殊召喚したモンスターがフィールドから離れた時にこ

のカードは破壊される。戻っておいで、死の花―ネクロフルール」

〈死の花―ネクロフルール〉☆1　植物族　闇属性
ＤＥＦ０

〈ローズトークン〉☆2　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００

少女のフィールドにネクロフルールが現れ、俺のフィールドに黒い薔薇が咲く。
この状況でネクロフルールを蘇生させるなんて、一体何を……
「私はフィールド魔法、ブラックガーデンのもう１つの効果を発動‼？」
「何⁉？まだ効果があったのか⁉？」
「フィールドの全ての植物族モンスターの攻撃力の合計と同じ攻撃力を持つ、自分の墓地のモンスター１体を対象としてこのカード及びフィールドの植物族モンスターを全て破壊して、全て破壊した場合、対象のモンスターを特殊召喚する‼？私のフィールドにいる死の花―ネクロフルールの攻撃力は０だけど、お兄さんのフィールドには攻撃力８００のローズトークンが２体いる。私はブラックガーデンとフィールドにの植物族モンスターを全て破壊して再び咲き誇れ白き薔薇乙女、ガーデンローズメイデン」
辺り一面に咲き誇っていた黒い薔薇がネクロフルールを巻き込みながら朽ち果てていく。
そして全ての黒い薔薇が朽ち果てると、その残骸からローズメイデンが姿を現した。

〈ガーデンローズメイデン〉☆5　植物族　闇属性
ＡＴＫ１６００

「破壊された死の花―ネクロフルールの効果それにチェーンしてガー

デンローズメイデンの効果発動、ローゼンアルタール。私は墓地から再びブラックガーデンを手札に加える。そして破壊された死の花―ネクロフルールの効果発動。デッキからまたおいで、時花の魔女―フルールドソルシエール」

〈時花の魔女―フルールドソルシエール〉☆８　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ２９００

「っ、またフルールドソルシエールが……」
「時花の魔女―フルールドソルシエールの効果発動、ネクロイドブルーム。今度はＨ・Ｃ　サウザンドブレードを貰っちゃうね」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

フルールドソルシエールが杖を振るうと、地面から身体に紫色の花が植え付けられたサウザンドブレードが現れる。
サウザンドブレードは攻撃できないが、サウザンドブレードが攻撃出来なくとも少女のフィールドにいる他のモンスター達だけで十分に俺のライフを削りきることができる。
だが、俺のセットカードの１枚はピンポイントガード。
このカードは相手モンスターの攻撃宣言時に自分の墓地のレベル４以下のモンスター１体を守備表示で特殊召喚し、この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン、戦闘・効果では破壊されなくなる罠カードだ。
残りの伏せカードは拮抗勝負と活路への希望だから使えないが、これなら少女のモンスターが攻撃してきても防ぎきれるハズだ。
だが、少女はそんな俺の心を読んだかのように無邪気な笑みを浮かべた。
「わかってるよ。この程度じゃお兄さんを倒せないことは」
「っ‼？」

「だから、もっともっと追い詰めないとね。墓地に存在するスポーアの効果発動。このカード名の効果はデュエル中に1度しか使用できず、このカードが墓地に存在する場合、自分の墓地からこのカード以外の植物族モンスター1体を除外してこのカードを特殊召喚し、この効果で特殊召喚したこのカードのレベルは除外したモンスターのレベル分だけ上がる。私は墓地の死の花―ネクロフルールを除外してスポーアを特殊召喚」

〈スポーア〉☆1→2　植物族　風属性
ＤＥＦ８００

少女のフィールドに再びスポーアが現れる。
あのモンスターはチューナーだったハズ。
狙いはシンクロ召喚か？
だが、少女のエクストラモンスターゾーンには既にラグナインフィニティが存在している。
なら、狙いは……
「さて、これが最後の準備だよ。私はフィールド魔法、ブラックガーデンを再び発動」
「この状況で、またブラックガーデン？」
俺達の周りを再び黒い薔薇が包み込む。
そして少女は楽しそうに手をかざす。
「いくよ、咲き誇れ、生命を飲み込むサーキット」
「っ、やっぱりリンク召喚か……」
「召喚条件は効果モンスター2体以上。私はＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティ、スポーア、Ｈ・Ｃ　サウザンドブレードをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン」
ラグナインフィニティ、スポーア、そして紫色の花に操られたサウザンドブレードがサーキットに吸い込まれていく。
そしてサーキットが光り輝くとそこから現れるのは機械的な身体を持つ白黒の竜。

「リンク召喚。悪意より生まれし全てを消去する電子竜。リンク３、トポロジックトゥリスバエナ」

〈トポロジックトゥリスバエナ〉ＬＩＮＫ４　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ２５００　↙？→↘？

「また、トポロジックリンクモンスター……ってことは‼？」
「察しがいいね。ブラックガーデンの効果でトポロジックトゥリスバエナは縛られ、そのリンク先にローズトークンを特殊召喚する」

トポロジックトゥリスバエナ
ＡＴＫ２５００↓１２５０

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００

ブラックガーデンの茨がトゥリスバエナを締め上げ、俺のフィールドにローズトークンが生み出される。
それを見て、トゥリスバエナはトポロジックボマーのように嘲笑うかのようなニヤリとした笑みを浮かべた。
「トポロジックトゥリスバエナの効果発動、アルプトラウムタオフェ。このカードのリンク先にモンスターが特殊召喚された場合、そのモンスター及びフィールドの魔法・罠カードを全て除外し、この効果で除外した相手のカードの数×５００ポイントのダメージを相手に与える」
「っ⁉？今度は魔法・罠を‼？」
「やっちゃえ、トポロジックトゥリスバエナ‼？」
少女の声にトゥリスバエナは歓喜の咆哮を上げながら体内からエネルギーを放出し、ブラックガーデンごと俺の魔法・罠を消滅させる。
「除外したお兄さんのカードは３枚だから１５００のダメージを受けて貰うよ」

「くっ……がぁっ!!?」

遊騎　ＬＰ４７００→３２００

トゥリスバエナの放ったエネルギーの余波で俺の身体は吹き飛ばされる。

「ぐっ……戦闘ダメージを受けた時、Ｈ・Ｃサウザンドブレードの効果発動……このカードが墓地に存在し、戦闘・効果で自分がダメージを受けた時、このカードを墓地から攻撃表示で特殊召喚する!!?」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

俺のフィールドに再び現れるサウザンドブレード。

それを見て少女は浮かべた笑みを濃くする。

「ふふ、それ!!?それだよ、お兄さん!!?無駄な足掻きだとわかっていても最後まで諦めないその意思!!?それでこそ楽しいゲームなんだよ。だから、私も最後まで手は抜かないよ。咲き誇れ、生命を飲み込むサーキット!!?」

少女が正面に手をかざすと再び巨大なサーキットが現れる。

「召喚条件は効果モンスター2体以上!!?私はガーデンローズメイデンとトポロジックトゥリスバエナを3体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」

ガーデンローズメイデン、そしてトポロジックトゥリスバエナが3体に分身してサーキットに吸い込まれていく。

そしてサーキットが光り輝くと再び現れるのは機械的な身体を持つ竜。

「リンク召喚!!?悪意より生まれし全てを破壊し尽くす爆竜よ、再びその姿を現せ!!?リンク4、トポロジックボマードラゴン!!?」

〈トポロジックボマードラゴン〉ＬＩＮＫ４　サイバース族　闇属性

ＡＴＫ３０００　↙？←→↘？

「バトル。トポロジックボマードラゴンでＨ・Ｃ　サウザンドブレードを攻撃‼？断絶のフェアリュックトハイト‼？」

トポロジックボマーがサウザンドブレードに向けて口からレーザーを放ち、サウザンドブレードを消滅させる。

遊騎　ＬＰ３２００→１５００

「ぐうっ‼？」

「この瞬間、トポロジックボマードラゴンの効果発動‼？ヴォールシュプレンゲン‼？このカードが相手モンスターを攻撃したダメージ計算後、その相手モンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える‼？Ｈ・Ｃ　サウザンドブレードの攻撃力は１３００‼？１３００ポイントのダメージを受けて貰うよ‼？」

「ぐあぁぁぁ‼？」

遊騎　ＬＰ１５００→２００

トポロジックボマーが放ったエネルギー波に吹き飛ばされ、俺は地面を転がり、立つことができなくなる。

俺の手札に攻撃を防ぐカードはない。

そして少女のフィールドにはまだフルールドソルシエールが残っている。

「さあ、楽しいゲームだったけどそろそろ終わりの時間だよ。最期に何か言い残すことはある？」

そういって少女は無邪気に笑う。

そんか少女に俺は無理矢理身体を起こし、拳を握り締めながら口を開いた。

「……次は、負けない」

「‼？……ぷっ、あはははは‼？それはすごくいい心がけだね‼？

じゃあ、終わりだよ。時花の魔女―フルールドソルシエールでダイレクトアタック‼?シャルムプフランフェ‼?」
少女の宣言に、フルールドソルシエールが杖に魔力を集め、紫の閃光が俺に迫る。
その光景を最後に俺は意識を手放した。

遊騎　ＬＰ２００→０

ーーーーーーーー

○

「ふふ、面白かったよ、お兄さん」
意識を失い、地面に倒れ伏せた遊騎を見て、少女は遊騎のデッキから移動してきたＮｏ．達を手に、楽しげに笑う。
倒れ伏せた遊騎の身体に怪我はなく、代わりに倒れ伏せた遊騎の真横には何かが大地を抉っていったかのような跡が残っていた。
「最後の言葉が『次は負けない』だなんて、本当に面白いなーお兄さんは。まだまだゲームも序盤。私とこんなに楽しいゲームができるプレイヤーをこんなに早く消しちゃうのは惜しいもんね」
そういって、少女は無邪気に笑う。
最後のフルールドソルシエールの攻撃。
少女はフルールドソルシエールに命じて遊騎から攻撃を逸らしていた。
それは単なる気まぐれではあったが、最後まで諦めなかったことにより、遊騎は何とか自分の命を繋ぐことができたのだ。
「ま あ、次 に 会 う 時 に は お 兄 さ ん は 私 の こ と を 覚えていないと思うけど。それはそれで楽しみにしておこうかな？あ、そうだ」
そういって、少女は協力者である男から渡された白紙のカードを２枚取り出すと、遊騎がデュエルの前にデッキから抜いて胸ポケットに

いれていたカードを取り出した。
「みーつけた。あ、抵抗しても無駄だよ。私に君の力は効かないからね」
取り出したカードーーーコートオブアームズは抵抗するように闇を少女に放つが少女はその闇をいとも容易く打ち消す。
そして抵抗がなくなったコートオブアームズを2枚の白紙のカードと重ね合わせ、少女が目を閉じる。
すると、少女の身体から闇が溢れだし、コートオブアームズごと白紙のカードを呑み込んでいく。
しばらくすると闇に呑まれた白紙だった2枚のカードにそれぞれ絵柄が浮かびあがった。
「ふふ、でーきた。成果は出さないとうるさそうだから他のカードは貰っていくけど、代わりにこれをお兄さんにあげるよ。次のステージではもっともっと楽しいゲームをしようね、お兄さん」
そういうと、少女はポケットからメモ帳とペンを取り出し、何かを書き記すとそれを破ってから3枚のカードを包んで遊騎の服のポケットに入れ、自分のデュエルディスクを操作して世界樹の花園を解除する。
辺りの景色が元の公園に戻ると、少女は初めからそこにはいなかったかのように姿を消し、倒れ伏せた遊騎だけが残るのだった。

ーーーーーーー

☆

「……き…う…遊騎!!?しっかりするんだ!!?」
「っ!!?……あ?」
誰かに身体を強く揺さぶられ、俺の意識が浮上していく。
俺は目を開けて妙に痛む身体を何とか起こすと、身体を揺さぶっていた人物は心底安心したような声を出した。
「遊騎!!?気がついたかい?」

「よ……る？」
「そうだよ。全く、約束の時間になっても来ないから様子を見に来れば、こんなところでぶっ倒れてるんだからね。心配をかけさせないでおくれよ」
そういって、いつものように黒いパーカーを深く被った夜が安堵の息を吐く。
そう言われて辺りを見渡すとそこはいつも仕事をしている公園だった。
公園にある時計を見ると時刻は１９時を回っており、辺りはすっかり夜の帳が下りている。
「それで、一体何があったんだい？こんなところで倒れているなんて、只事じゃないだろ？」
「何があったか……か」
そう言われて、俺は倒れる前に起こったことは思い出す。
しかし……
「……思い出せない」
「はぁ？」
「何かが、あったハズだ。とても大事な何かが、あった気がする。だけど、それが何なのか、思い出せない」
「思い出せないって……倒れてたってことは余程のことがあったハズだろ？それが何で思い出せないのさ？」
俺の返答に夜が戸惑った表情を浮かべる。
俺は集中して何があったかを思い出そうとするが、全く思い出せなかった。
「ん……これは？」
思い出せないことに困惑しながら、俺は自分の身体を改めて見てみると何故か腕についているデュエルディスクが起動したままになっていた。
そしてデュエルディスクが告げているのは、ライフポイントが０になり、俺が敗北したということ。
「っ‼？そうだ‼？」

「遊騎？どうしたんだい？」
　そこまで考えると、突然俺の中に先程までの記憶がノイズ混じりで蘇ってくる。
「デュエル、したんだ。闇のカードをばら撒いてる奴と」
「っ⁉？何だって⁉？そいつは一体……」
「だけど、それだけだ。姿とかデッキとか、手かがりになりそうな記憶があったハズなんだが、その記憶がまるで消しゴムで消されてしまったかのように思い出せないんだ。覚えているのはそいつが闇のカードをばら撒いている側の敵だったということと……俺がそいつに負けたってことだ」
「なっ⁉？遊騎が、負けた？冗談だろ？」
「冗談なら良かったんだけどな……」
　そういって、俺は自分のデュエルディスクからＥＸデッキを取り出す。
　もし、このデュエルディスクと、俺が思い出した記憶が間違えていないんだとしたら……
「Ｎｏ．が……ない」
　呆然としたような夜の声に、俺も苦い表情を浮かべる。
　俺が取り出したＥＸデッキからは、そこに存在したハズのＮｏ．が全てなくなっていた。
「Ｎｏ．がないってことは、負けて勝者にカードが移ったってことだ……悪い」
「……む、悪いって何だい。ボクがＮｏ．を奪われたことを怒るとでも思ってるのかい？」
「……怒らないのか？」
「怒るとも。そんなことでボクが怒ると思ってたことをね」
　そういって、夜は俺の頬を摘むと思いっきり横に引っ張った。
「いてて‼？」
「ったく、そんなよく分からない相手と戦って生き残っただけでも儲け物なのに、何でボクが怒らないといけないのさ？あんまり見くびらないでくれよ、共犯者クン。君とボクは運命共同体なんだからね」

「っ……悪い」
「うん、ボクはこう見えて優しいから許してあげよう」
そういって夜は笑みを浮かべた。
……全く、敵わないな。
「とはいったものの、Ｎｏ．が無くなったってことはもう遊騎は無理して闇のカードに関わる必要はなくなったんじゃないかい？」
「いや、そうでもない。コートオブアームズだけＥＸデッキから外しておいたからな」
「ＥＸデッキに入れておかなければ奪われない、か。アイツから得た知識って言うのが気に入らないけどね」
「そう言うなって……ん？」
俺がコートオブアームズを仕舞ったハズのポケットに手を入れると、ポケットの中から妙な感触が伝わってきた。
俺は首を傾げながらそれを取り出すとそこには1枚のメモ用紙と、それに包まれて3枚のカードが入っていた。
俺は思わず夜と顔を見合わせてそのメモ帳を見る。
『そのカード達はお兄さんにあげるよ。今度はもっと楽しいゲームで遊ぼうね　ｂｙ正体不明の抹消者（アンノウンイレイザー）』……何だこれ？」
「文面的に君を倒した人物からのラブレターの類かな？かなりふざけた輩だけど、君は一体何をしたんだい？」
「そんなの俺が聞きてえよ。それでそのカード達って言うのは……は？」
「……何だいこれ？」
メモ用紙に包まれていたカードを見て俺達は目を丸くする。
包まれたカードの内、1枚は俺が仕舞ったコートオブアームズだった。
しかし、残りの2枚が問題だった。
包まれていたのは見たことがない魔法カードとエクシーズモンスター。
そしてそこに書かれていた名前は……
「カオス……ナンバーズ？」

俺が失った記憶の中で、何かが動いた気がした。

第６５話　僅かな希望

★

「見たことがないカード？」
「はい。このカード何ですが……」
興味深そうな表情を浮かべる天神先生に私は頷く。
不死川君とデュエルをした翌日。
私はあのデュエルで手に入れてしまったギャラクシークィーンについて調べるため、放課後、天神先生の研究室を訪れていた。
世界的に活躍しているカードデザイナーの天神先生なら、この不思議なカードについても何か知っているんじゃないかと思ったのだ。
……ギャラクシークィーンについて調べにきたことは、桜ちゃんにも内緒にしている。
手に入れた経緯が経緯だし、心配性の桜ちゃんに話したらきっと桜ちゃんもこのカードを調べようとするから。
だから、今日天神先生の研究室に訪れたのは課題についてのアドバイスを聞くためということにしておいた。
実際、課題についても聞きたいことがあったから嘘ではないしね。
私は自分のデッキからギャラクシークィーンのカードを取り出し、天神先生に見せる。
「っ⁉？これは一体、どういうことだ‼？」
ギャラクシークィーンを見た天神先生は驚いたように目を見開き、身体を震わせる。
「天神先生？」
「栗原君、君はこのカードをどこで手に入れたんだい？」
「えっ⁉？えっと……」
鬼気迫る表情を浮かべる天神先生に、私は戸惑いながらもギャラクシークィーンを手に入れた経緯を伝える。
突然不死川君にデュエルを挑まれたこと。
その不死川君がギャラクシークィーンを使っていたこと。

そしてデュエルに勝利した時にギャラクシークィーンが私の元に飛んできて、不死川君はデュエルを挑んだことを覚えていなかったことまで戸惑っていた私は全てを話した。
正直、言ってからこんなことを話しても信じて貰えないんじゃないかと思ったけど、天神先生は真剣な表情で私の話を聞いてくれた。
「……そうか。話してくれてありがとう」
「いえ、それで天神先生、このカードのことは何か知りませんか？」
「……いや、私も分からない。しかし、手掛かりになりそうなカードなら私も知っている」
「!!？本当ですか!!？」
「ああ。このカードを見れば、君は驚くかも知れないけどね」
そういうと天神先生は研究室のデスクの引き出しから1枚のカードを取り出し、デスクの上において私に見せてくれる。
「えっ!!？」
そこに描かれていたのはギャラクシークィーンと同じ、Ｎｏ．の名前を持つ金色の翼を持つ小さな戦士。
私が無意識の内にスケッチブックに描いたモンスターとそっくりなカードが、そこにあった。
「これはつい最近、ケルンで出回っている謎のカードということで知り合いが渡してくれたカードだ。いつどこで作られ、どこから出てきたのかは不明。共通点はＮｏ．という名前を持っているところだ。正直君のイラストを見たとき、君がこのカードを作り出したのではないかと思ったが、その反応を見るにそういうわけでもなさそうだ」
そういって天神先生が椅子に背中を預ける。
私はそんな天神先生の言葉に反応するのも忘れ、見せて貰ったカードをジッと見つめていた。
やっぱり……私は、このカードを知っている気がする。
だけど、そんな出自が不明なカードをどうして……
カードを眺めながら考え込んでいる私を見て、天神先生は苦笑を浮かべながら口を開いた。
「はは、よっぽどそのカードが気になるようだね」

「へっ⁉？あ、はい……すみません」
「いやいや、知的好奇心が旺盛なのはいいことだよ。そんなに気になるというのであれば、そのカードは栗原君に渡してもいいよ」
「えっ⁉？いや、そんなの悪いですよ⁉？」
突然の天神先生の提案に私は慌てて首を振る。
そんな私に天神先生はにこやかな笑みを浮かべながら首を振る。
「どのみち、私が持っていてもそのカードは使えないからね。一通り調べ終わったのだから構わないよ。カードは使いたい者が使う物だ。その代わり、１つ頼みを聞いて貰えないかい？」
「頼み……ですか？」
「ああ。君が持っているギャラクシークィーンのカードをデュエルを通して見てみたいんだ」
「つまり、私が天神先生とデュエルをしてギャラクシークィーンを使えばいいんですか？」
「ああ。実際に見ることでインスピレーションが湧くかも知れないからね。頼めるかい？」
そういいながらも、天神先生はすでにデュエルディスクを手に取って起動していた。
私はもう一度デスクの上に置かれたカードを見て考える。
うーん、ギャラクシークィーンを見せることでこのカードを貰えるならいいのかな？
それに、このカードを持っていればもしかしたらもう１体、私が無意識のうちに描いていた白龍にも出会えるかも知れない。
それは……多分必要なことだから。
「……分かりました。その話、お受けします」
「そうか、ありがとう。それでは、このカードは君のものだ」
天神先生はにこやかな笑みを浮かべて、私にあのカードを手渡す。
その瞬間、妙な違和感を感じた気がしたが、すぐにその違和感は消え、私は自分のＥＸデッキを少し入れ替え、そのカードをデッキに入れた。
「ほう……」

「?どうかしましたか?」
「いや、何でもないよ。それでは、デュエルといこうか」
興味深そうな表情で私を見ていた天神先生は立ち上がるとデュエルディスクを構えたので、私も立ち上がりデュエルディスクを構える。
天神先生がどんなデュエルをするかは分からないけど、期待に応えれるように頑張らないと。
「……行きます!!?」
「ああ、楽しいデュエルにしよう」
『決闘!!?』

遊花　ＬＰ８０００
幻騎　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は私ですね。私はミスティックパイパーを召喚!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ０

現れたのはフルートのようなものを弾いている男の人。
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを１枚ドローし、この効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル１モンスターだった場合、自分はカードをもう１枚ドローします!!?」
「ほう、ミスティックパイパーを使うということは栗原君のデッキはレベル１モンスターが主体のローレベルデッキのようだね」
いつものようにミスティックパイパーが私を見てサムズアップをして姿を消し、私はドローしたカードを確認する。
「私が引いたのは天輪の葬送士!!?レベル１モンスターなのでもう１

枚ドローします!!?私はカードを2枚伏せてターンエンドです!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札４
ーー▲▲ー　　ー
ーーーーー
　ー　　ー
ーーーーー
ーーーーー　　ー
幻騎　ＬＰ８０００　手札５

「私のターン、ドロー。ふむ、悪くない手札だね。私は彼岸の悪鬼ハックルスパーを特殊召喚」

〈彼岸の悪鬼　ハックルスパー〉☆３　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

現れたのはが４本の角を持つ悪魔のモンスター。
「このカード、というよりは彼岸モンスターはだが、自分フィールドに魔法・罠カードが存在しない場合、手札から特殊召喚することができる」
「何だか物凄く簡単な条件で特殊召喚してくるんですね」
「まぁその代わり、彼岸モンスターのほとんどは自分フィールドに彼岸モンスター以外のモンスターが存在する場合には破壊されてしまうのだがね。私は彼岸の悪鬼　ガトルホッグを召喚」

〈彼岸の悪鬼　ガトルホッグ〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１６００

次に現れたのは腕が鎖でに繋がれている悪魔のモンスター。
「あれ?そのモンスターも彼岸モンスターなら先程の効果で特殊召喚した方がいいんじゃ……」

「これには理由があってね。何、すぐに分かるさ。閉鎖せよ‼？運命に従うサーキット‼？」
　天神先生が手をかざすと、正面に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル３モンスター２体‼？私は彼岸の悪鬼　ハックルスパーと彼岸の悪鬼　ガトルホッグをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？リンク２‼？彼岸の黒天使　ケルビーニ‼？」

〈彼岸の黒天使　ケルビーニ〉ＬＩＮＫ　２　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ５００　↙？　↘？

　サーキットから現れたのはそれぞれ違う動物の頭が４つある悪魔のモンスター。
「さて、墓地に送られた彼岸の悪鬼　ガトルホッグの効果発動‼？このカードが墓地へ送られた場合、同名以外の自分の墓地の彼岸モンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する。この効果は彼岸モンスターの共通効果により特殊召喚していた場合は発動できない」
「‼？だから通常召喚してきたんですね」
「墓地より甦れ、彼岸の悪鬼　ハックルスパー‼？」

〈彼岸の悪鬼　ファーファレル〉☆３　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

「デッキからレベル３モンスター、彼岸の悪鬼　グラバースニッチを墓地に送り、彼岸の黒天使　ケルビーニを対象に彼岸の黒天使　ケルビーニの効果発動‼？ヘブンズデモン‼？デッキからレベル３モンスター１体を墓地へ送り、フィールドの彼岸モンスター１体を対象として発動できる。そのモンスターの攻撃力・守備力をターン終了時まで、墓地へ送ったモンスターのそれぞれの数値分アップする。彼岸の黒天使　ケルビーニは彼岸の悪鬼　グラバースニッチの攻撃力、１０

００ポイント分攻撃力をあげる」

彼岸の黒天使　ケルビーニ
ＡＴＫ５００→１５００

「墓地に送られた彼岸の悪鬼　グラバースニッチの効果発動!!?このカードが墓地へ送られた場合、デッキから同名以外の彼岸モンスター１体を特殊召喚する。私はデッキから彼岸の悪鬼　スカラマリオンを特殊召喚!!?」

〈彼岸の悪鬼　スカラマリオン〉☆３　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２０００

フィールドに現れたのは長い爪と髪を持つ悪魔。
これでフィールドにはレベル３モンスターが２体……ということは……
「私はレベル３、彼岸の悪鬼　ハックルスパーと彼岸の悪鬼　スカラマリオンでオーバーレイ!!?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
ハックルスパーとスカラマリオンが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から漆黒の馬に乗る亡霊の騎士が舞い降りた。
「全てを砕く亡霊の剣!!?幻影騎士団（ファントムナイツ）ブレイクソード!!?」

〈幻影騎士団ブレイクソード〉★３　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００

「幻影騎士団!!?彼岸モンスターだけじゃなかったんですね……」
「幻影騎士団ブレイクソードの効果発動!!?クラッシュスラッシュ!!?オーバーレイユニットを１つ使うことで自分及び相手フィールド

のカードを1枚ずつ対象とし、そのカードを破壊する!!?私は幻影騎士団ブレイクソードと栗原君の中央のセットカードを破壊しよう」
ブレイクソードが闇を纏いながら私のセットカードに突撃し、その剣でセットカードを斬り裂く。
ブレイクソードが纏っていた闇は、そのままブレイクソードをも?み込もうとしたが、ケルビーニがその闇を吸収した。
「えっ!?」
「彼岸の黒天使　ケルビーニの永続効果により、このカードのリンク先のモンスターは効果では破壊されなくなる」
「っ、それで幻影騎士団ブレイクソードは破壊されなかったんですね……ですが、破壊された永続罠、ゴーストリックナイトの効果発動!!?このカードが相手によって破壊され墓地に送られた時、そのターン相手は攻撃宣言が出来なくなります!!?」
「成る程。ブラフを引かされ、その上で攻撃まで封じられるとは一杯食わされたね。ならば次の手を打つとしよう。閉鎖せよ!!?運命に従うサーキット!!?」
「!!?またリンク召喚ですか……」
天神先生が手をかざすと、正面に再び大きなサーキットが現れる。
「召喚条件は闇属性モンスター2体以上!!?私は幻影騎士団ブレイクソードと彼岸の黒天使　ケルビーニを2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
ブレイクソードとケルビーニが2体に分身してサーキットに吸い込まれる。
そしてサーキットが輝くと、現れたのは巨大な戦斧を構えた漆黒の騎士。
「リンク召喚!!?終わりを告げる戦斧の騎士!!?リンク3!!?幻影騎士団ラスティバルディッシュ(ファントムナイツ)!!?」
〈幻影騎士団ラスティバルディッシュ〉ＬＩＮＫ　３　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２１００　↙?　↘?↘

「幻影騎士団のリンクモンスター……」
「幻影騎士団ラスティバルディッシュの効果発動!!?ラストファントム!!?自分メインフェイズにデッキから幻影騎士団モンスター1体を墓地へ送り、その後、デッキからファントム魔法・罠カード1枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンにセットする!!?私はデッキから幻影騎士団サイレントブーツを墓地に送り、永続罠、幻影霧剣を（ファントムフォッグブレード）セットする!!?さらに墓地に存在する幻影騎士団サイレントブーツの効果発動!!?墓地のこのカードを除外し、デッキからファントム魔法・罠カード1枚を手札に加える!!?私はデッキから罠カード、幻影騎士団ウロングマグネリングを手札に加える」
「うっ、手札が全然減りませんね」
「私はカードを3枚伏せ、エンドフェイズに墓地に送られた彼岸の悪鬼　スカラマリオンの効果発動!!?このカードが墓地へ送られたターンのエンドフェイズ、デッキから同名カード以外の悪魔族・闇属性・レベル3モンスター1体を手札に加える。私はデッキから魔界発現世行きデスガイドを手札に加え、ターンエンドだ」

遊花　ＬＰ８０００　手札４
ー　ー　ー▲ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　☆
ー　ー　ー　ー　ー
ー▲▲▲▲　ー
幻騎　ＬＰ８０００　手札３

「うぅ、セットカードが多い……でも、臆しません!!?私のターン、ドロー!!?私は天輪の葬送士を召喚!!?」
〈天輪の葬送士〉☆１　天使族　光属性
ＡＴＫ０

フィールドに現れたのは銀色の棺の身体を持つモンスター。
「天輪の葬送士の効果発動!!?このカードが召喚に成功した時、自分の墓地の光属性・レベル1モンスター1体を対象としてその光属性モンスターを特殊召喚します!!?」
「成る程、それでミスティックパイパーを再利用するつもりだね。ならば止めておくとしよう。チェーンしてリバースカードオープン!!?永続罠、幻影霧剣!!?」
「!!?さっき幻影騎士団ラスティバルディッシュでセットしたカードですね」
「フィールドの効果モンスター1体を対象としてこのカードが魔法&罠ゾーンに存在する限り、対象のモンスターは攻撃できず、攻撃対象にならず、効果は無効化され、そのモンスターがフィールドから離れた時にこのカードは破壊される。対象は天輪の葬送士だ」
葬送士に向かって闇の霧を纏った剣が放たれ、葬送士を貫いてその身体を霧に変える。
「っ、ミスティックパイパーは蘇生できませんでしたが、これぐらいは承知の内です!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「リンク召喚か……」
私の前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル1モンスター1体。私は天輪の葬送士をリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚!!?希望の守り手!!?リンク1!!?リンクリボー!!?」
〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←
葬送士がサーキットに吸い込まれると、代わりに青い球体のモンスターが現れ、私の周りを嬉しそうにくるくると跳ね回った。
うん、今回もよろしくね。
「リンクリボーか。なかなか厄介な効果を持ったモンスターが出てき

たね」
「まだ終わりじゃありません!!?リバースカードオープン!!?速攻魔法!!?クリボーを呼ぶ笛!!?その効果で自分はデッキからクリボーまたはハネクリボー1体を選択し、手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができます!!?私か選ぶのは特殊召喚!!?おいで、クリボー!!?」

〈クリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

私の前に現れたのは茶色の毛玉のようなモンスター。
「ほう、クリボーを特殊召喚か。ということは、増殖のカードでも持っているのかな?ならば、次の栗原君の戦術は増殖で増やしたトークンを使って連続リンク召喚に繋げると言ったところか」
「っ……」
天神先生の言葉に、私は手札にある増殖のカードを見て苦い表情を浮かべる。
流石はカードデザイナーをしている天神先生だ。
私が使うカードから私の次に行う戦術を予測されている。
「それでも、私にできることをやるだけです!!?速攻魔法!!?増殖!!?自分フィールド上に表側表示で存在するクリボー1体をリリースして自分フィールド上にクリボートークンを可能な限り守備表示で特殊召喚します!!?」

〈クリボートークン〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

私のフィールドにいたクリボーが分裂し5体に増える。
「行きます!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私の声に再びサーキットが現れる。
「召喚条件はモンスター2体!!?私はクリボートークンをリンクマー

カーにセット!!?・サーキットコンバイン!!?・リンク召喚!!?・リンク2!!?・プロキシードラゴン!!?」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

次に現れたのは白い身体をした機械の竜。
それを確認して私は再びサーキットを開く。
「まだまだ!!?・導いて!!?・希望に繋がるサーキット!!?・召喚条件は通常モンスター1体!!?・私はクリボートークンをリンクマーカーにセット!!?・サーキットコンバイン!!?・リンク召喚!!?・リンク1!!?・リンクスパイダー!!?・」

〈リンクスパイダー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１０００　←

私の前に機械の蜘蛛が現れる。
これで準備は整った!!?
「導いて!!?・希望に繋がるサーキット!!?・」
そして私は1つ深呼吸をして、そのモンスターを呼ぶ。
「召喚条件は効果モンスター3体以上!!?・私はリンクスパイダー、リンクリボー、プロキシードラゴンを2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?・サーキットコンバイン!!?・」
「リンク4……大型のリンクモンスターが来るか」
リンクスパイダー、リンクリボー、そしてプロキシードラゴンが2体に分身してサーキットに吸い込まれていく。
そしてサーキットが光り輝くとそこから現れるのは剣の如き龍。
「お願い、私に予測を超える力を貸して!!?・リンク召喚!!?・閉ざされた運命を斬り開く魂の剣(つるぎ)!!?・リンク4!!?・ヴァレルソードドラゴン!!?・」
待ち望んでいたというように、剣の如き龍はその咆哮を世界に轟か

せた。

〈ヴァレルソードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑←→

「!!?ヴァレルシリーズ……珍しいカードを持っているね」
「さらに魔法カード、モンスタースロット!!?自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、選択したモンスターと同じレベルの自分の墓地に存在するモンスター1体を選択してゲームから除外する。その後、自分のデッキからカードを1枚ドローし、この効果でドローしたカードをお互いに確認して選択したモンスターと同じレベルのモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚します!!?私はクリボートークンを対象に墓地の天輪の葬送士を除外し、カードを1枚ドロー!!?私がドローしたのはチューナーモンスター、ジェットシンクロン!!?レベル1モンスターだから特殊召喚します!!?」

〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

フィールドに現れたのは小さなジェット機のような機械のモンスター。
「チューナーモンスター……となると、君の次の手は……」
「行きます!!?私は、レベル1、クリボートークン2体に、レベル1、チューナーモンスター、ジェットシンクロンをチューニング!!?」
ジェットシンクロンが光の輪になり、クリボートークンが小さな星に変わり、光の道になる。
「悠久に響く祈りの歌が、争いを鎮める新風となる!!?シンクロ召喚!!?未来に羽ばたけ、霞鳥クラウソラス!!?」

〈霞鳥クラウソラス〉☆3　鳥獣族　風属性

ＡＴＫ０

光の道が輝くと、その中から緑の翼で羽ばたく綺麗な鳥が現れた。
「ジェットシンクロンの効果発動!!?このカードがシンクロ素材として墓地へ送られた場合、デッキからジャンクモンスター１体を手札に加える!!?私はデッキからジャンクリボーを手札に加えます!!?そして霧鳥クラウソラスの効果発動!!?プレアーソング!!?１ターンに１度、相手フィールドの表側表示のモンスター１体を選択し、ターン終了時までその攻撃力を０にし、その効果を無効にします!!?対象は幻影騎士団ラスティバルディッシュ!!?」

幻影騎士団ラスティバルディッシュ
ＡＴＫ２１００→０

クラウソラスが綺麗な声で唄い、ラスティバルディッシュが力を失っていく。
「バトル!!?ヴァレルソードドラゴンで幻影騎士団ラスティバルディッシュを攻撃!!?この瞬間、ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アサシネイトショット!!?１ターンに１度、攻撃表示モンスター１体を対象として発動!!?そのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃できる。そしてこの効果の発動に対して相手は効果を発動できない!!?この効果は相手ターンにでも使用することが出来ます!!?対象にするのは、霧鳥クラウソラス!!?」
「っ、攻撃宣言時に効果を使用することでこちらの攻撃反応罠を封じてきたか」
ヴァレルソードが空砲を放ち、クラウソラスは防御の体勢を取る。

霞鳥クラウソラス
ＡＴＫ０→ＤＥＦ２３００

「斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン‼?・剣光のベイオネットブレイク‼?・」
私の言葉に応えるようにヴァレルソードは咆哮をあげ、力を失ったラスティバルディッシュを戦斧ごと斬り裂く。

幻騎　ＬＰ８０００→５０００

「くぅっ‼?・」
「もう１度斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン‼?・ヴァレルソードドラゴンでダイレクトアタック‼?・剣光のベイオネットブレイク‼?・」
「それは防がせて貰おう。リバースカードオープン‼?・罠発動、幻影騎士団ウロングマグネリング‼?・相手モンスターの攻撃宣言時にその攻撃を無効にし、その後、このカードはこのカード及び自分フィールドの表側表示の、幻影騎士団モンスター１体またはファントム永続魔法・永続罠カード１枚を墓地へ送って自分はデッキから２枚ドローし、この効果を相手ターンでも発動できる戦士族・闇属性・レベル２・攻撃力守備力０の効果モンスターとなり、
モンスターゾーンに攻撃表示で特殊召喚される‼?・」

〈幻影騎士団ウロングマグネリング〉☆２　戦士族　闇属性
ＡＴＫ０

フィールドに磁石の輪を持った戦士が現れ、その磁力によりヴァレルソードの剣を引き寄せ、ヴァレルソードの攻撃を受け止めた。
２撃目は止められてしまったけど、ラスティバルディッシュを倒せただけでも十分な成果だよね。
「私はこのままターンエンドです‼?・」

遊花　ＬＰ８０００　手札３
ーーーーーー

ー□ーーー
☆　　ー
ーーー○ー
ー▲ーー▲　　ー
幻騎　ＬＰ５０００　手札３

「私のターン、ドロー!!?墓地に存在する幻影霧剣を除外して効果発動!!?墓地のこのカードを除外し、自分の墓地の幻影騎士団モンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは、フィールドから離れた場合に除外される。蘇れ、幻影騎士団ラスティバルディッシュ!!?」

〈幻影騎士団ラスティバルディッシュ〉ＬＩＮＫ　３　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２１００　↙?　↘?↓

フィールドに闇の霧が立ち込め、その中からラスティバルディッシュが再び姿を現わす。

効果無効という厄介な効果を持つ永続罠なのに、墓地にいっても効果があるなんて……しかも、ラスティバルディッシュが蘇ったということは……

「幻影騎士団ラスティバルディッシュの効果発動!!?ラストファントム!!?私はデッキから幻影騎士団（ファントムナイツ）クラックヘルムを墓地に送り、２枚目の幻影霧剣をセットする!!?さらに墓地に存在する幻影騎士団クラックヘルムの効果発動!!?墓地のこのカードを除外し、このターンのエンドフェイズに、自分の墓地から幻影騎士団カードまたはファントム魔法・罠カード１枚を選んで手札に加える」

「エンドフェイズ時に墓地回収をする効果ですか……」

「まだまだ行くよ、リバースカードオープン!!?罠発動、幻影騎士団（ファントムナイツ）ロストヴァンブレイズ!!?フィールドの表側表示モンスター１体を対象としてターン終了時まで、そのモンスターの攻撃力は６００ポイン

トダウンし、レベルは2になり、自分の幻影騎士団モンスターは戦闘では破壊されない。その後、このカードは戦士族・闇属性・レベル2・攻撃力600・守備力0の通常モンスターとなり、モンスターゾーンに守備表示で特殊召喚する!!?私が対象にするのは霞鳥クラウソラスだ」

霞鳥クラウソラス
☆3→2
〈幻影騎士団ロストヴァンブレイズ〉☆2　戦士族　闇属性
DEF0

クラウソラスの身体を青い鬼火で包みながらフィールドに現れたのは青い鬼火を纏った鎧のモンスター。
「レベル2モンスターが2体……来ますね」
「私はレベル2、幻影騎士団ウロングマグネリングと幻影騎士団ロストヴァンブレイズでオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
ウロングマグネリングとロストヴァンブレイズが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとフィールドに青い鬼火を纏った漆黒の槍と鎧を身に付けた骸骨が現れた。
「全てを貫く亡霊の呪槍!!?幻影騎士団カースドジャベリン(ファントムナイツ)!!?」
〈幻影騎士団カースドジャベリン〉★2　戦士族　闇属性
ATK1600
「ランク2の幻影騎士団モンスター……」
「まずは幻影騎士団ラスティバルディッシュの効果発動!!?アパリシャンモーン!!?このカードが既にモンスターゾーンに存在する状態で、

このカードのリンク先に闇属性エクシーズモンスターが特殊召喚された場合、フィールドのカード1枚を対象としてそのカードを破壊する‼？対象は霞鳥クラウソラスだ‼？」

ラスティバルディッシュがクラウソラスに手をかざすと、クラウソラスの周りに闇が立ち込め、その闇の中から数えきれない程の亡霊が現れてクラウソラスを呑み込み、消滅させた。

「っ‼？クラウソラス‼？」

「さらに幻影騎士団カースドジャベリンの効果発動‼？ファントムランサー‼？オーバーレイユニットを1つ取り除き、相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。ターン終了時までそのモンスターの攻撃力は0になり、効果は無効化される‼？このカードが幻影騎士団カードをオーバーレイユニットとしている場合、この効果は相手ターンでも発動できる‼？対象はヴァレルソードドラゴンだ‼？」

「くっ‼？チェーンしてヴァレルソードドラゴンの効果発動‼？アサシネイトショット‼？幻影騎士団カースドジャベリンを守備表示にします‼？」

カースドジャベリンが怨念を纏った槍をヴァレルソードに向かって投擲しようとする。

ヴァレルソードは銃撃をしてカースドジャベリンを怯ませるが、銃撃に構わず投擲された槍がヴァレルソードを貫き、ヴァレルソードも苦痛の咆哮をあげ、その場に崩れ落ちた。

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ３０００→０

幻影騎士団カースドジャベリン
ＡＴＫ１６００→ＤＥＦ０

「これでヴァレルソードドラゴンは無力化した。私は魔界発現世行きデスガイドを召喚‼？」

〈魔界発現世行きデスガイド〉☆3　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

フィールドに現れたのはバスガイドのような格好をした悪魔の女の子のモンスター。
「魔界発現世行きデスガイドの効果発動!!?このカードが召喚に成功した時に手札・デッキから悪魔族・レベル3モンスター1体を特殊召喚する!!?この効果で特殊召喚したモンスターは効果が無効化され、シンクロ素材にできない。私はデッキから魔サイの戦士を特殊召喚!!?」

〈魔サイの戦士〉☆3　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１４００

さらにデスガイドの隣にサイの姿をした悪魔が現れる。
これでフィールドには再びレベル3モンスターが2体並んだ。
「私はレベル3、魔界発現世行きデスガイドと魔サイの戦士でオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
デスガイドと魔サイの戦士が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとフィールドに現れたのは赤い洋服に身を包み、短刀を携えた旅人。
「現世を彷徨う旅人!!?彼岸の旅人　ダンテ!!?」

〈彼岸の旅人　ダンテ〉★3　戦士族　光属性
ＡＴＫ１０００

「今度は彼岸のエクシーズモンスター!!?」
「彼岸の旅人　ダンテの効果発動!!?ライドザウィンド!!?1ターン

に1度、オーバーレイユニットを1つ取り除き、自分のデッキの上からカードを3枚まで墓地へ送り、このカードの攻撃力はターン終了時まで、この効果を発動するために墓地へ送ったカードの数×５００ポイントアップする‼？私は3枚のカードを墓地に送り、攻撃力を１５００ポイントアップする‼？」

彼岸の旅人　ダンテ
ＡＴＫ１０００→２５００

「バトル‼？さっきのお返しといこう。幻影騎士団ラスティバルディッシュでヴァレルソードドラゴンを攻撃‼？ファントムスマッシャー‼？」
ラスティバルディッシュが戦斧を掲げると戦斧に闇が集まっていき、辺りの闇を集め終わるとラスティバルディッシュが空高く跳び上がって勢いよく戦斧を振り下ろし、ヴァレルソードの身体を切断した。

遊花　ＬＰ８０００→５９００

「くぅ……‼？ゴメンね、ヴァレルソードドラゴン……」
「追撃だ‼？彼岸の旅人　ダンテでダイレクトアタック‼？バンクスラッシュ‼？」
「きゃっ‼？」

遊花　ＬＰ５９００→３４００

彼岸の旅人　ダンテが短刀を振り抜き、私のライフを大きく削る。
私の行動をことごとく妨害され、ライフも一気に削られる。
強い。
これが、天神先生の実力。
このままだと、間違いなく私はやられる。

「バトルフェイズ終了時、彼岸の旅人　ダンテの効果発動!!?このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる」

彼岸の旅人　ダンテ
ＡＴＫ２５００→ＤＥＦ２５００

「メインフェイズ2、私はカードを2枚伏せ、エンドフェイズ、幻影騎士団クラックヘルムの効果で墓地から幻影騎士団ブレイクソードをＥＸデッキに戻す。ターンエンドだ」

彼岸の旅人　ダンテ
ＡＴＫ２５００→１０００

遊花　ＬＰ３４００　手札３
ー　ー　ー　

「戦斧の騎士よ、亡霊の呪槍と交わりて、孤独を壊す力となれ‼?」
フィールドに稲妻を纏った渦が現れ、その中にラスティバルディッシュとカースドジャベリンが吸い込まれる。
そして渦が弾けると、現れるのは全てを溶かす毒龍。
「融合召喚‼?閉ざされた世界を溶かす毒龍‼?スターヴヴェノムフュージョンドラゴン‼?」

〈スターヴヴェノムフュージョンドラゴン〉☆８　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２８００

「スターヴヴェノムフュージョンドラゴンの効果発動‼?パワースワローヴェノム‼?このカードが融合召喚に成功した場合、相手フィールドの特殊召喚されたモンスター１体を選び、その攻撃力分だけこのカードの攻撃力をターン終了時までアップする‼?対象は彼岸の旅人　ダンテ‼?」

スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
ＡＴＫ２８００→３８００

スターヴヴェノムが彼岸の旅人　ダンテに毒の瘴気を放ち、その力を奪い取る。
「さらにクリバンデッドを召喚‼?」

〈クリバンデッド〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

スターヴヴェノムの隣に盗賊のような姿をした黒い毛玉のモンスターが現れる。
「バトル‼?スターヴヴェノムフュージョンドラゴンで彼岸の旅人ダンテを攻撃‼?消失のヴェノムストリーム‼?」

スターヴヴェノムが彼岸の旅人　ダンテを？み込むように毒のブレスを放つ。
しかし、毒のブレスが彼岸の旅人　ダンテを？み込む瞬間、彼岸の旅人　ダンテの背中に霊体で出来た翼が現れ、空へと飛び上がり毒にブレスを躱した。
「リバースカードオープン‼？罠発動、幻影翼（ファントムウィング）‼？フィールドの表側表示モンスター1体を対象として、そのモンスターの攻撃力は500ポイントアップし、このターンに1度だけ戦闘・効果では破壊されない‼？」

彼岸の旅人　ダンテ
ＡＴＫ１０００→１５００

「っ、耐えられた……私はこのままエンドフェイズに入ってエンドフェイズにクリバンデッドの効果発動‼？このカードをリリースしてデッキの上から5枚めくり、その中から魔法・罠カード1枚を手札に加えて残りを墓地におきます‼？」
クリバンデッドの姿が消え、私はデッキの上から5枚のカードをめくって中から1枚のカードを手札に加える。
「私は魔法カード、大欲の壺を手札に加えます。さらに墓地に送られた絶対王バックジャックの効果発動‼？このカードが墓地へ送られた場合、自分のデッキの上からカードを3枚確認し、好きな順番でデッキの上に戻します。私はこれでターンエンドです‼？」

スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
ＡＴＫ３８００→２８００

遊花　ＬＰ３４００　手札２
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
○　□

ーーーーー
ー▲ー▲▲　　ー
幻騎　ＬＰ５０００　手札１

「厄介なモンスターが出てきたが、そろそろ終わりかな？私のターン、ドロー。彼岸の旅人　ダンテの効果発動!!？ライドザウィンド!!？オーバーレイユニットを１つ取り除き、私は３枚のカードを墓地に送り、攻撃力を１５００ポイントアップする!!？」

彼岸の旅人　ダンテ
ＡＴＫ１０００→２５００

「そしてオーバーレイユニットとして墓地に送られた魔サイの戦士の効果発動!!？このカードが墓地へ送られた場合、デッキから同名以外の悪魔族モンスター１体を墓地へ送る。私はデッキから彼岸の悪鬼ファーファレルを墓地に送る。そして墓地に送られた彼岸の悪鬼ファーファレルの効果発動!!？このカードが墓地へ送られた場合、フィールドのモンスター１体を対象としてそのモンスターをエンドフェイズまで除外する!!？」
「っ!!？ということは……!!？」
「私はスターヴヴェノムフュージョンドラゴンをエンドフェイズまで除外する!!？」
当然現れた腕が翼になっている悪魔にスターヴヴェノムが異次元に飛ばされる。
これで再び私のフィールドにモンスターがいなくなった。
これは、ちょっとマズイかも。
「手札を１枚捨て、除外されている幻影騎士団ラスティバルディッシュを対象として装備魔法、ＤＤＲを発動!!？そのモンスターを攻撃表示で特殊召喚し、このカードを装備する。再びフィールドに舞い戻れ、幻影騎士団ラスティバルディッシュ!!？」

〈幻影騎士団ラスティバルディッシュ〉ＬＩＮＫ　３　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２１００　↙？　↘？↓
「幻影騎士団ラスティバルディッシュの効果発動‼？ラストファントム‼？私はデッキから幻影騎士団（ファントムナイツ）ラギッドグローブを墓地に送り、３枚目の幻影霧剣をセットする‼？」
「っ、また……‼？」
「さらに墓地に存在する幻影翼を除外して効果発動‼？このカードも幻影霧剣と同じく墓地のこのカードを除外し、自分の墓地の幻影騎士団モンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する‼？ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは、フィールドから離れた場合に除外される。蘇れ、幻影騎士団ラギッドグローブ‼？」

〈幻影騎士団ラギッドグローブ〉☆３　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１０００

フィールドに現れたのは巨大なので黒い手を持つ亡霊のモンスター。
「まだだ‼？リバースカードオープン‼？罠発動、幻影騎士団（ファントムナイツ）ミストクロウズ‼？除外されている自分の幻影騎士団モンスター１体を対象としてそのモンスターを手札に加える‼？私は除外されている幻影騎士団サイレントブーツを手札に加える‼？そして自分フィールドに幻影騎士団モンスターが存在する場合、幻影騎士団サイレントブーツは手札から特殊召喚できる‼？こい、幻影騎士団サイレントブーツ‼？」

〈幻影騎士団サイレントブーツ〉☆３　戦士族　闇属性
ＤＥＦ１２００

ラギッドグローブに寄り添うように、茶色い服を着た亡霊が姿を現

わす。
　これで天神先生のフィールドにはまたレベル３モンスターが２体。
「私はレベル３、幻影騎士団ラギッドグローブと幻影騎士団サイレントブーツでオーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」
　ラギッドグローブとサイレントブーツが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
　そして渦が爆けると空から再び舞い降りるのは漆黒の馬に乗る亡霊の騎士。
「再び姿を現せ、全てを砕く亡霊の剣‼？幻影騎士団ブレイクソード‼？」

〈幻影騎士団ブレイクソード〉★３　戦士族　闇属性
　ＡＴＫ２０００

「この瞬間、オーバーレイユニットとなった幻影騎士団ラギッドグローブの効果発動‼？フィールドのこのカードをオーバーレイユニットとしてエクシーズ召喚した闇属性モンスターは攻撃力が１０００ポイントアップする‼？」
「っ、師匠の使うエクストラソードみたいな効果ですか……」

　幻影騎士団ブレイクソード
　ＡＴＫ２０００→３０００

「彼岸の旅人　ダンテを攻撃表示に変更する」

　彼岸の旅人　ダンテ
　ＤＥＦ２５００→ＡＴＫ２５００

「バトル‼？幻影騎士団ブレイクソードでダイレクトアタック‼？ファントムザンバー‼？」

ブレイクソードの剣が私に迫る。
この攻撃を受けても私のライフは残る……だけど、何だか受けちゃいけない気がする。
「相手モンスターの直接攻撃宣言時、ＥＭ（エンタメイト）クリボーダーの効果発動!!?このカードを手札から特殊召喚し、その相手モンスターの攻撃対象をこのカードに移し替えてダメージ計算を行います!!?そしてその戦闘で自分が戦闘ダメージを受ける場合、代わりにその数値分だけ自分のライフポイントを回復します!!?」
「まだそんなカードを残していたのか!!?」
「おいで、ＥＭクリボーダー!!?」

〈ＥＭクリボーダー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３００

斬りかかってきたブレイクソードから私を守るように現れたのはボーダー柄の帽子と尻尾をつけた茶色の毛玉のようなモンスター。
ブレイクソードに斬られたクリボーダーは光の粒子に変わると私の身体を包みこみ、ライフを回復させた。

遊花　ＬＰ３４００→６１００

「回復されたか……だが、まだ私の攻撃は終わっていない!!?幻影騎士団ラスティバルディッシュでダイレクトアタック!!?ファントムスマッシャー!!?」
「くぅっ!!?」

遊花　ＬＰ６１００→４０００

「まだだ!!?彼岸の旅人　ダンテでダイレクトアタック!!?リバースカードオープン!!永続?罠、幻影剣（ファントムソード）!!?フィールドの表側表示モンスターいち体を対象としてこのカードを発動し、対象のモンスター

の攻撃力は８００ポイントアップし、戦闘・効果で破壊される場合、代わりにこのカードを破壊できる。そのモンスターがフィールドから離れた時にこのカードは破壊される。対象は彼岸の旅人　ダンテだ‼?」

彼岸の旅人　ダンテ
ＡＴＫ２５００→３３００

彼岸の旅人　ダンテの手元に霧を纏った剣が現れ、彼岸の旅人　ダンテの攻撃力が上昇する。
危なかった、ブレイクソードの攻撃を通してたらこのカードでやられるところだった。
「受けろ、ファントムバンクスラッシュ‼?」
「きゃっ‼?」

遊花　ＬＰ４０００→７００

幻影剣を持った彼岸の旅人　ダンテに斬り裂かれ、私のライフポイントはレッドゾーンに突入する。
だけど、何とか耐えきることが……
そんな私の考えを読んだかのように、天神先生はニヤリと笑った。
「耐えきれたと思ったかな?残念だがそうともいかない。墓地に存在する幻影剣を除外して効果発動‼?」
「っ‼?そうか‼?彼岸の旅人　ダンテの効果で墓地にーーー」
「このカードも幻影霧剣と同じく墓地のこのカードを除外し、自分の墓地の幻影騎士団モンスター1体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する‼?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは、フィールドから離れた場合に除外される。蘇れ、幻影騎士団カースドジャベリン‼?」
〈幻影騎士団カースドジャベリン〉★2　戦士族　闇属性

ＡＴＫ１６００

フィールドに再び現れるカースドジャベリン。
まさかここに来て追撃がくるとは思っていなかった。
現れたカースドジャベリンを見て、天神先生は苦笑を浮かべながら私を見た。
「どうやら、ここまでのようだな。見たかったギャラクシークィーンが見られなかったことは残念だが、十分に面白いものが見れたから良しとしよう」
「……」
「サレンダーするかい？私の伏せカードは万全だ。例え何らかのカードで攻撃を防ごうとも、逆転は難しいだろう？」
「……確かに、そうかも知れませんね」

天神先生の言葉に、私はそう呟いて目を閉じる。
カースドジャベリンの攻撃を防ぐ方法はある。
だけど、ほとんど手札がない私に天神先生のあの強固な布陣を攻略するのは至難の技に見えるだろう。
だけどーーー
「物分かりがいいね、栗原君は」
「でも……その提案は受けません‼？」
「っ⁉？」
私のはっきりとした宣言に、天神先生は驚いて目を見開く。
確かに、今の私には天神先生の布陣を攻略する未来は見えない。
それでも、まだ僅かにでも可能性が残っているのであれば、私はその可能性から逃げたくない。
「私は……諦めることだけは絶対にしないって決めたんです‼？」
「っ……その言葉……」
私の言葉に、一瞬天神先生の表情が歪み、私を見る目が睨むものに変わった気がした。
しかし、それは本当に一瞬のことで天神先生はすぐに表情を真剣な

ものに変えた。
「なら、見せて貰おうか。君のその意志が導くものを。幻影騎士団カースドジャベリンでダイレクトアタック!!?カースドデススピア!!?」
カースドジャベリンの槍が私を貫こうと迫ってくる。
だけど、まだ終わりじゃない!!?
「まだです!!?相手モンスターの攻撃宣言時、墓地からクリアクリボーの効果発動!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のこのカードを除外し、自分はデッキから1枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替えます!!?」
「ほう、まだそんなモンスターを残していたのか。確か栗原君のデッキの上は絶対王バックジャックに操作されていたね……」
「はい!!?だから私がドローするカードは分かっています!!?私がドローしたのは捕食植物セラセニアント(プレデタープランツ)!!?モンスターなので特殊召喚し、攻撃対象を移し替えます!!?」

〈捕食植物セラセニアント〉☆1　植物族　闇属性
ＤＥＦ６００

フィールドに葉が筒状になった植物を背負った蟻のモンスターが現れ、私の代わりにカースドジャベリンの槍に貫かれる。
しかし、貫かれたセラセニアントは体内から溶解液をカースドジャベリンに向けて放ち、溶解液を受けたカースドジャベリンを一瞬で溶かし尽くした。
「捕食植物セラセニアントの効果発動!!?このカードが相手モンスターと戦闘を行ったダメージ計算後にその相手モンスターを破壊します!!?」
「戦闘を強要しそのまま道連れにするとはやるじゃないか」
「さらに捕食植物セラセニアントの効果発動!!?フィールドのこのカードが効果で墓地へ送られた場合、または戦闘で破壊された場合、

デッキから同名カード以外のプレデターカード1枚を手札に加える‼?私はペンデュラムモンスター、捕食植物(プレデタープランツ)スパイダーオーキッドを手札に加えます‼?」
「おまけに手札まで増やすとはね。だが、それだけではまだ逆転するには足りないよ。私はこれでバトルフェイズを終了ーーー」
「待ってください‼?バトルフェイズ終了前、墓地の絶対王バックジャックを除外して効果発動‼?相手ターンに墓地のこのカードを除外して自分のデッキの一番上のカードをめくり、そのカードが通常罠カードだった場合、自分フィールドにセットし、違った場合、そのカードを墓地へ送ります。そして、この効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できます‼?」
「ほう……ここで使うか。君のデッキは今の捕食植物セラセニアントの効果でシャッフルされているハズだが?」
「はい。ですが、さっきまでのデッキじゃ、どの道罠カードはありませんでしたから絶対王バックジャックの効果を使ってもどうしようもありませんでした。でも、そのデッキがシャッフルされた今なら、まだ可能性はあります」
「そんな僅かな希望に縋るというのかい?」
「例え僅かな希望だとしても、進まなければ掴めません‼?私はその希望を掴み取って、絶対に運命を斬り開くんです‼?絶対王バックジャックの効果でデッキの上をめくります‼?」
私は目をつぶって勢いよくカードをめくる。
お願い、私のデッキ。
私の思いに応えて‼?
そう強く願いながらゆっくりと目を開けて、めくったカードを見る。
そしてめくったカードを見て、私は満面の笑みを浮かべた。
「めくられたのは……通常罠、裁きの天秤‼?」
「なっ⁉?そのカードは……⁉?」
「裁きの天秤は通常罠カードなのでセットされます‼」
「くっ……バトルフェイズ終了時、彼岸の旅人　ダンテはに守備表

示になる」

彼岸の旅人　ダンテ

ＡＴＫ３３００→ＤＥＦ２５００

「私はこのままターンエンドだ」

「なら、エンドフェイズ、リバースカードオープン‼?罠発動‼?裁きの天秤‼?相手フィールドのカードの数が自分の手札・フィールドのカードの合計数より多い場合に発動でき、自分はその差の数だけデッキからドローします‼?天神先生のフィールドのカードは7枚、私は裁きの天秤と手札2枚の3枚。その差分の4枚のカードをドローします‼?」

「くっ、ここにきて4枚のカードをドローだと⁉?」

「さらに彼岸の悪鬼　ファーファレルの効果で除外されていたスターヴヴェノムフュージョンドラゴンが私のフィールドに戻ります‼?戻ってきて、スターヴヴェノムフュージョンドラゴン‼?」

〈スターヴヴェノムフュージョンドラゴン〉☆8　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ２８００

私の呼び声に応えるように、スターヴヴェノムが歓喜の咆哮を上げながら帰還する。

僅かだった希望は、確かに輝いてる。

さあ、始めよう……逆境からの逆転を‼?

彼岸の旅人　ダンテ

ＡＴＫ３３００→１８００

遊花　ＬＰ７００　手札６

ーーーーー　ー

ーー○ーー
ー　□
ーー☆○ー
▲▲△△ー　ー
幻騎　ＬＰ５０００　手札０

「私のターン、ドロー!!?速攻魔法、大欲の壺!!?除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計３体を持ち主のデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから１枚ドローする!!?私は除外されている天輪の葬送士、クリアクリボー、絶対王バックジャックをデッキに戻してカードを１枚ドローします!!?そして私はクリボルトを召喚!!?」

〈クリボルト〉☆１　雷族　光属性
ＡＴＫ３００

出て来たのは電気を出している黒い球体のモンスター。
「クリボルトの効果発動!!?自分のメインフェイズ時にオーバーレイユニットを持っているエクシーズモンスター１体を選択し、選択したモンスターのオーバーレイユニットを１つ取り除き、自分のデッキからクリボルト１体を特殊召喚します!!?対象は幻影騎士団ブレイクソード!!?」
「くっ、その効果は厄介だから止めさせて貰おう。チェーンしてリバースカードオープン!!?永続罠、幻影霧剣!!?クリボルトを対象としてその効果を無効にさせて貰うよ」
クリボルトの身体を闇の霧を纏った剣が貫き、その身体を霧に変える。
だけど、そんな効果はもう効かない!!?
「私は、スケール０のペンデュラムーチョとスケール８の捕食植物スパイダーオーキッドでペンデュラムスケールをセッティング!!?」
私を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中にメキシカンな格好

をしているペンギンと蜘蛛のように見える植物が浮かびあがり、下に０と８の数字が現れる。
「今度はペンデュラム召喚だと⁉？」
「これで私は１から７までのモンスターを同時に召喚可能です⁉？まずはペンデュラムゾーンに置かれたペンデュラムーチョのペンデュラム効果発動⁉？このカードを発動したターンの自分メインフェイズに１度だけ、自分の墓地のモンスターまたは除外されている自分のモンスターの中から、同名カード以外のペンデュラムモンスター１体を自分のＥＸデッキに表側表示で加えます⁉？私は墓地のＥＭ（エンタメイト）ドラネコをＥＸデッキに加えます⁉？さらに捕食植物スパイダーオーキッドのペンデュラム効果発動⁉？このカードを発動したターンの自分メインフェイズに、このカード以外の魔法＆罠ゾーンの表側表示のカード１枚を対象としてそのカードを破壊する⁉？私が破壊するのは幻影霧剣⁉？」
「何っ⁉？」
　光の柱からスパイダーオーキッドが蔦を伸ばし、幻影霧剣を破壊すると霧に変わっていたクリボルトの姿が元に戻る。
「これで再び効果が使えます⁉？クリボルトの効果発動⁉？幻影騎士団ブレイクソードのオーバーレイユニットを１つ取り除き、自分のデッキからクリボルト１体を特殊召喚します⁉？」

〈クリボルト〉☆１　雷族　光属性
ＡＴＫ３００

　ブレイクソードのオーバーレイユニットが私のフィールドに飛んでくると、その光がクリボルトに変わる。
「もう１度、クリボルトの効果発動⁉？幻影騎士団ブレイクソードのオーバーレイユニットを１つ取り除き、自分のデッキからクリボルト１体を特殊召喚します⁉？」

〈クリボルト〉☆１　雷族　光属性

ＡＴＫ３００

「レベル１モンスターが３体……ということは‼?」

「期待されているところ申し訳ないのですが、それはもう少し後です。魔法カード、儀式の下準備‼?デッキから儀式魔法カード１枚を選び、さらにその儀式魔法カードにカード名が記された儀式モンスター１体を自分のデッキ・墓地から選んで、そのカード２枚を手札に加えます‼?私が加えるのはイリュージョンの儀式とサクリファイス‼?」

「何っ⁉?君は儀式モンスターまで使えるのか⁉?」

「私は儀式魔法、イリュージョンの儀式を発動‼?自分の手札・フィールドから、レベルの合計が１以上になるようにモンスターをリリースし、手札からサクリファイスを儀式召喚します‼?私は手札のサクリボーをリリースして儀式召喚を行う‼?」

私の前に現れるのは金色の目の形をした壺が現れ、その中にクリボーに似た毛玉のモンスターが吸い込まれていく。

しばらくすると壺が割れ、中から妖しい邪眼を持つモンスターが現れた。

「儀式召喚‼?相手を捕える妖しい邪眼‼?サクリファイス‼?」

〈サクリファイス〉☆１　魔法使い族　闇属性

ＡＴＫ０

「まずはサクリボーの効果発動‼?このカードがリリースされた場合に自分はデッキから１枚ドローします‼?そしてサクリファイスの効果発動‼?アブソープション‼?１ターンに１度、相手フィールドのモンスター１体を対象にそのモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力・守備力は、このカードの効果で装備したモンスターの数値分アップし、このカードが戦闘で破壊される場合、代わりに装備したそのモンスターを破壊できます‼?対象は、幻影騎士団ラスティバルディッシュ‼?吸い込んじゃって、

サクリファイス‼?」
サクリファイスのお腹にある穴が開き、ラスティバルディッシュが吸い込まれる。
しばらくすると背中についている羽のような部分から巨大な戦斧が浮き上がった。

サクリファイス
ＡＴＫ０→２１００

「っ、やってくれるじゃないか」
「そして導いて‼?希望に繋がるサーキット‼?」
私の正面に大きなサーキットが現れる。
今度は君の力を借りるよ‼?
「召喚条件は効果モンスター３体以上‼?私はスターヴヴェノムフュージョンドラゴン、サクリファイス、クリボルト２体をリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?」
スターヴヴェノムとサクリファイスと２体のクリボルトがサーキットに吸い込まていく。
そしてサーキットが光り輝くとそこから現れるのは弾丸の如き龍。
「閉ざされた運命を撃ち抜く信念の弾丸‼?リンク４‼?ヴァレルロードドラゴン‼?」
私の呼び声に龍は歓喜の咆哮を響かせた。

〈ヴァレルロードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↘?↑→↘?

「また、ヴァレルシリーズのリンクモンスターだと⁉?」
「これで準備は整いました‼?次はペンデュラム召喚です‼?心に灯し小さき希望よ‼?光り輝く未来を導いて‼?ペンデュラム召喚‼?おいで、私のお友達‼?」
私がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かっ

て２つの光が舞い降りる。
「レベル１、クリボーン‼？」
〈クリボーン〉☆１　悪魔族　光属性
ＡＴＫ３００
最初に現れたのはシスターのようにベールを被った白い毛玉のモンスター。
「レベル１、ＥＭドラネコ‼？」
〈ＥＭドラネコ〉☆１　獣族　地属性
ＤＥＦ１００
さらにクリボーンの後ろにお腹が銅鑼になっているネコのモンスターが舞い降りる。
「レベル１、クリアクリボー‼？」
〈クリアクリボー〉☆１　天使族　光属性
ＤＥＦ２００
そして最後に紫色の毛玉のようなモンスターが現れた。
「まさか難易度が高いレベル１モンスターをペンデュラム召喚してくるとはね……」
「私は墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動‼？自分フィールドのカード１枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから１枚ドローする。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を１枚除外します‼？私はフィールドの捕食植物スパイダーオーキッドをデッキに戻し、カードを１枚ドローします‼？さらに魔法カード、貪欲な壺‼？墓地に存在するスターヴヴェノムフュージョンドラゴン、リンクスパイダー、プ

ロキシードラゴンをＥＸデッキに、クリボルト２体をデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローします‼?」
「くっ……まだドローをしてくるか」
「……行きます‼?私はレベル１のクリボーン、ＥＭドラネコ、クリアクリボーでオーバーレイ‼?３体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築‼?エクシーズ召喚‼?」
クリボーン、ドラネコ、クリアクリボーが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、そこに現れたのは夜空のようなドレスを身に纏い、水晶の杖を持った闇夜の女王。
「銀河の光より生まれし女王よ‼?その優しき魔術で民を照らす光となれ‼?おいで、Ｎｏ．８３ギャラクシークィーン‼?」
〈Ｎｏ．８３ギャラクシークィーン〉★１　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ５００
現れたギャラクシークィーンは私を見て穏やかな笑みを浮かべる。
やっぱり、初めて見たときとは印象が違う気がする。
「これが……ギャラクシークィーン、だと?」
そしてギャラクシークィーンを見た天神先生は驚愕に目を見開いた。
やっぱり、カードデザイナーの人から見てもこのカードはおかしいのかな?
いけないいけない、今はデュエルに集中しないと。
「私は再びクリボルトの効果発動‼?Ｎｏ．８３ギャラクシークィーンのオーバーレイユニットを２つ取り除き、自分のデッキからクリボルト２体を特殊召喚します‼?」
〈クリボルト〉☆１　雷族　光属性
ＡＴＫ３００

ギャラクシークィーンのオーバーレイユニット２つがクリボルトに変わる。

「そして魔法カード、死者蘇生!!?自分または相手の墓地のモンスター１体を特殊召喚します!!?」

「なっ!!?ここで死者蘇生だと!!?」

「再びフィールドに舞い戻り、閉ざされた運命を斬り開いて!!?私の魂の剣(つるぎ)!!?ヴァレルソードドラゴン!!?」

再臨した剣の如き龍はその咆哮で私の呼び声に応えた。

〈ヴァレルソードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ３０００　↓?↑←→

「ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アサシネイトショット!!?クリボルトを守備表示にし、このターン、このカードは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃できます!!?」

ヴァレルソードの空砲に驚き、クリボルトは防御の体勢を取る。

クリボルト
ＡＴＫ３００→ＤＥＦ２００

これで勝負を決めに行く準備は整った。

このままでも十分デュエルに勝利することはできる。

でも、私の頭に浮かんだのは天神先生から渡されたカード。

あのカードが、私を呼んでいる気がする。

「私はレベル１のクリボルト２体でオーバーレイ!!?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」

２体のクリボルトが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

私がＥＸデッキからそのカードを取りしフィールドにセットすると、そのカードから一瞬闇のようなものが溢れた気がした。

しかし、私が何かに突き動かされるように、そのカードに手をかざすとその闇は跡形も無く霧散した。
「何⁉？」
天神先生の驚愕するような声が、どこか遠くから聞こえる。
それと同時に空に浮かんだ混沌の渦が爆ける。
そして、現れたのは金色の翼を持つ小さな戦士。
私が呼んだ小さき希望。
「おいで、Ｎｏ．３９‼？小さき希望は、逆境の中で進化を遂げる‼？希望皇ホープルーツ‼？」

〈Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツ〉★１　戦士族　光属性
ＡＴＫ５００

「馬鹿な‼？これは一体⁉？」
「行きます、Ｎｏ．８３ギャラクシークィーンの効果発動‼？ギャラクシークィーンズライト‼？オーバーレイユニットを１つ取り除き、私のモンスターに次の相手のエンドフェイズ時まで、戦闘では破壊されず、守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える効果を付与します‼？」
「くっ、チェーンしてリバースカードオープン‼？永続罠、幻影霧剣‼？Ｎｏ．８３ギャラクシークィーンを対象としてその効果を無効にする‼？」
「同じ手はそう何度も通じません‼？ライフポイントを半分払い、手札からカウンター罠、レッドリブートを発動‼？」
「何だと⁉？」

遊花　ＬＰ７００→３５０

「相手が罠カードを発動した時、その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする‼？その後相手はデッキから罠カード１枚を選ん

で自分の魔法＆罠ゾーンにセットでき、このカード発動後、ターン終了時まで相手は罠カードは発動できません‼？」
「くっ……私はデッキから幻影騎士団ウロングマグネリングをセットする」
「これで効果は止まりません‼？お願い、Ｎｏ．８３ギャラクシークィーン‼？」
　ギャラクシークィーンが杖を振るい、私のモンスター達を光で包み込む。
「決めます‼？バトル‼？ヴァレルロードドラゴンで幻影騎士団ブレイクソードを攻撃‼？銃声のイジェクトフレア‼？」
「くっ‼？そのモンスターは確か……」
「この瞬間、ヴァレルロードドラゴンの効果発動‼？エロージョンエイミング‼？このカードが相手モンスターに攻撃するダメージステップ開始時に、その相手モンスターをこのカードのリンク先に置いてコントロールを得て、そのモンスターは次のターンのエンドフェイズに墓地へ送られます‼？」
　私が効果を宣言すると、ヴァレルロードは口から粒子砲を放ち、その粒子でブレイクソードを包み込んでこちらのバトルゾーンに移動させる。
「幻影騎士団ブレイクソードで彼岸の旅人　ダンテを攻撃‼？この瞬間、Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツの効果発動‼？ムーンバリアオリジン‼？自分または相手モンスターの攻撃宣言時、このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除いてそのモンスターの攻撃を無効にし、そのモンスターがエクシーズモンスターだった場合、このカードの攻撃力はそのモンスターのランク×５００ポイントアップする‼？」
「っ、幻影騎士団ブレイクソードのランクは３‼？」
「よって攻撃力は１５００ポイントアップします‼？」
　ブレイクソードの剣をホープルーツが背中の翼を盾に変えて受け止め、その力を吸収する。

Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツ
ＡＴＫ５００→２０００

「さらにＮｏ．８３ギャラクシークィーンで彼岸の旅人　ダンテを攻撃!!?そして再びＮｏ．３９　希望皇ホープルーツの効果発動!!?ムーンバリアオリジン!!?攻撃を止め、Ｎｏ．８３ギャラクシークィーンのランクは１のため、攻撃力を５００ポイントアップする!!?」

Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツ
ＡＴＫ２０００→２５００

「ランク１で攻撃力が２５００!?!?」
「ヴァレルソードドラゴンで彼岸の旅人　ダンテを攻撃!!?攻撃宣言時、ヴァレルソードドラゴンの効果発動!!?アブソーブブースト!!?１ターンに１度、このカードが表側表示モンスターに攻撃宣言した時、ターン終了時まで、このカードの攻撃力はそのモンスターの攻撃力の半分アップし、そのモンスターの攻撃力は半分になる!!?」
「何っ!?!?」

彼岸の旅人　ダンテ
ＡＴＫ１８００→９００

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ３０００→３９００

ヴァレルソードが斬りかかり、それを彼岸の旅人　ダンテは闇を幻影剣で受け止めるが、剣から漏れる赤い光に徐々に幻影剣が纏う闇が吸い取られていく。
「さらにヴァレルロードドラゴンの効果発動!!?ジャムバレット!!?彼岸の旅人　ダンテを対象にして攻撃力・守備力を５００ポイントダ

ウンさせます‼?この効果は相手ターンにも発動することができ、この効果に対して相手は効果を発動することが出来ません‼?」

彼岸の旅人　ダンテ
ＤＥＦ２５００→２０００　ＡＴＫ９００→４００

ヴァレルロードがヴァレルソードを援護するように弾丸を放ち、彼岸の旅人　ダンテの短刀を弾き飛ばす。
「斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン‼?剣光のベイオネットブレイク‼?」
私の声にヴァレルソードは咆哮で応えると勢いよく剣を振りかざし、幻影剣を破壊した。

幻騎　ＬＰ５０００→３１００

「くっ‼?戦闘で破壊される場合、幻影剣を代わりに破壊する‼?」
「まだです‼?もう1度斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン‼?彼岸の旅人　ダンテを攻撃‼?剣光のベイオネットブレイク‼?」
短刀も弾き飛ばされた彼岸の旅人　ダンテは、防ぐ間も無くヴァレルソードにその身体を斬り裂かれた。

幻騎　ＬＰ３１００→１２００

「ぐぅっ‼?彼岸の旅人　ダンテの効果発動‼?このカードが墓地へ送られた場合、このカード以外の自分の墓地の彼岸カード1枚を手札に加える‼?彼岸の悪鬼　ガトルホッグを手札に加える‼?」
「これで終わりです‼?Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツでダイレクトアタック‼?」
ホープルーツが剣を構え、勢いよく空へと跳び上がると、ホープルーツの剣に光が集まっていく。
剣が強く光輝くとホープルーツは勢いよくその剣を振り下ろした。

「ホープ剣ルーツスラッシュ‼?」
「ぐあぁぁぁ‼?」

幻騎　ＬＰ１２００→０

ーーーーーーー

「ふぅ……何とか勝てた……痛っ‼?」
デュエルが終わり、ホッと一息をついた瞬間、急に頭痛が襲ってきた。
しかし、頭を押さえるとさっきまでの頭痛が嘘のようになくなった。
「大丈夫かい、栗原君?」
「あ、はい‼?ちょっと頭痛がしたんですけど、もう無くなりました。ちょっと集中し過ぎて疲れちゃったのかも知れません」
「そうか……なら、今日はもう帰って休むといい。課題の提出もまだまだ先の話だからね」
「あはは、そうします。それで、あれで良かったのでしょうか?」
心配するようにこちらを見る天神先生に、私は先程のデュエルのことを訪ねる。
一応ギャラクシークィーンを使ってるところは見せられたけど、少ししか見せられなかったし、あれで良かったのかな?
しかし、そんな不安気な表情を浮かべる私に天神先生は柔らかな笑顔で答えた。
「ああ、実にいいものを見せて貰ったよ。おかげでいいインスピレーションも得られた。早速新しいカードをデザインしたくなる程ね」
「そうですか、それはよかったです」
「ああ。今回、インスピレーションを得られたデザインがカードになったら栗原君にも送らせて貰おう」
「ありがとうございます。今日は、本当にありがとうございました‼?天神先生から頂いたホープルーツ、大事にします‼?」

「いや、こちらも有意義な時間だったよ。また何かがあればよろしく頼む」
「はい‼?それでは失礼しました‼?」
私は笑顔を浮かべ天神先生に一礼をして研究室から出る。
私は誰もいない夕暮れの廊下を歩きながら、自分のデュエルディスクからホープルーツのカードを取り出す。
まだ、分からないことだらけだけど、きっとこの出会いにも、何か意味はあるハズだから。
「これからも、よろしくね。ホープルーツ」
私の問いに応えるように、ホープルーツのカードが光った気がした。

ーーーーーーー

○

「ふぅ……行ったか」
遊花が去った研究室で幻騎は1つ息を吐いて近くにあった椅子に座る。
その顔には様々な感情が浮かんでは消えていく。
そんな幻騎に声をかける存在があった。
「何を1人で百面相をしてるの?」
「……君か……いつから見ていた?」
「あなたが負ける少し前。あの子がＮｏ．を使った時ぐらいからかな」
幻騎が声の聞こえた方に視線を向けると、綺麗な銀髪をツインテールにした自身の身の丈より大きなデュエルアカデミアの制服を着た少女がデスクの上に腰をかけて足をぷらぷらしていた。
「どうしたの?負けちゃって悔しかった?」
「くだらないな。あのデッキはダミーデッキだ。勝つためのものではない。それに、あのデュエルはわざと負けたのさ」

「わざと？」
「確認したいことは確認できたからな。わざわざ勝つ意味もない。そもそも、私が勝ってホープルーツが私の元に戻ってしまえば実験のために渡した意味が無くなってしまう」
そういって幻騎は自分のデュエルディスクを外す。
実際、先程の遊花とのデュエルでは幻騎は手を抜いていた。
遊花は忘れていたが、レッドリブートが封じるのはあくまで罠カードの発動のみ。
彼岸の旅人　ダンテに装備され、墓地に送られた幻影剣の効果は発動できたため、ラスティバルディッシュを蘇生させることができ、あのターンに負けることはなかったのだ。
「ふーん。それで、何か収穫はあったの？」
「勿論だ。興味深い実験動物（モルモット）が見つかったよ」
「自分の生徒を実験動物呼ばわりだなんて、相変わらず精神が歪んでるよね、あなたは」
「それは君が言えたことではないだろう？」
「はいはい、ブーメランだったよ。それで、あの子のどこが興味深かったの？」
「私が作り上げた　ギャ　ラ　ク　シー　クィー　ン　が闇のカードでは無くなっていた」
「……はぁ？」
少女が何言ってるんだコイツ、とでも言うような視線を幻騎に向ける。
しかし、幻騎はそんな少女の視線を全く気にした様子もなく、幻騎は楽し気な笑みを浮かべた。
「言葉通りの意味さ。彼女が手にしていたギャラクシークィーンは既に闇のカードではない。あのカードに宿した呪いは跡形もなく吸収されていた。おそらくは、彼女の生まれ持った力だろう。私が作り上げたホープルーツの呪いも消えてしまったからな」
幻騎は先程のデュエルで、遊花がホープルーツをエクシーズ召喚した時のことを思い出す。

あの時、確かにホープルーツに付加していた呪いは遊花を蝕もうとした。
しかし、遊花が無意識のうちに手をかざすと、その呪いが霧散したのだ。
遊花の目からは闇が消えたように見えたのだが、幻騎の目から見えた光景は違った。
確かに闇は霧散したが、霧散した闇はまるで引き寄せられるかのように遊花の身体に取り込まれていったのだ。
Ｎｏ．に込められた呪いは生半可なものではない。
それこそ、人の精神を蝕む程に。
しかし、そのような呪いを無意識とはいえ自身に取り込んでいるのにも関わらず遊花は何事もなかったかのように笑っていた。
幻騎にとって、これ以上興味深いことはなかった。
「クックックッ、面白い。闇のカードを探っている連中も増えてきている。これだけテストプレイヤーが揃えば計画を次の段階に移せそうだな」
「お、いよいよ次のステージに行く？次のステージからは私もある程度デュエルしてもいいんだよね？」
「ああ、いいとも。しかし、次のステージに移る前に試したい作品のアイディアがある。もう少し待ちたまえ」
「はいはい、分かったよ。それじゃあ私はまたプレイヤーでも探してこようかな」
そういうと少女は初めからそこにいなかったかのように姿を消す。
姿を消した少女を気にも止めず、幻騎はデスクの中に隠しておいた彼自身の本当のデッキを取り出し、その中から1枚のカードを手に取る。
そのカードは当然のように闇を纏い、幻騎は楽し気に笑った。
「さあ、共に次のステージに進むとしよう……私の希望よ」
そ の カ ー ド に 描 か れ て い た の は ー ー ー ー ー
金色の翼を持つ戦士だった。

第６６話　偶発する奇縁

☆

「……本当にここに入るのかい？」
「そうだが、どうかしたのか？」
「うっ……虎穴に入らずんば虎子を得ず、か」
「はぁ？ここに危険なんてないぞ？というか、俺の実家にその言い方は失礼だろ」
「いや、まぁ……なんというか……うん」
引き攣った表情でなんとも歯切れの悪い返答を返す夜に俺は首を傾げる。
正体不明の襲撃者に襲われてコートオブアームズ以外のＮｏ．を失い、代わりに謎のカードを手に入れた日の翌日。
俺達は少しでも何かの手掛かりを得られないかと思い、島さんがいる『Ｎａｔｕｒａｌ』に足を運んでいた。
前に話をした時に闇のカードのことはよく知っていると言っていたし、もしかしたらこの謎のカード達についても知っているかもしれないと思ったからだ。
今日は仕事も休みで俺が手に入れていたカードだから本当は１人でくる予定だったのだが、興味があるからと夜と一緒にくることになり、夜を待っていたら時刻は夕方になってしまった。
まぁ、夜にも自分の生活があるんだから遅くなってしまっても仕方がないことだけどな。
俺だって自分の仕事が終わるのを待って貰ってることがあるし。
それはそれとして、この夜の反応は何なんだろうか？
『Ｎａｔｕｒａｌ』に行くという話をした時、夜の反応は極めて普通だった。
俺の実家だと言うことを話したら寧ろ興味深そうにしていたハズなんだが……

俺が訝しげな表情を浮かべていると夜は引き攣った笑みのまましばらくの間宙に視線を彷徨わせ、1度ため息を吐くと覚悟を決めたような表情を浮かべた。
「……はぁ……よし、入ろうか」
「何だかよく分からないが、いいのか？」
「うん、待たせてゴメンね。気持ちの整理はついたから」
「何でカードショップに入るのに気持ちの整理がいるんだよ……」
「カードショップだからって理由じゃないけど……ボクにも色々あるんだよ」
「……まあ、いいけどな」
「ゴメン」
「謝らなくてもいいって。それじゃあ覚悟も決まったみたいだし、入ろうぜ」
「いらっしゃい……おや、遊騎君じゃないか」
「……ただいま、島さん」
「ああ、おかえりなさい」
お店に入るといつものようにレジのところで島さんがコーヒーを飲んでいた。
俺の姿を見て嬉しそうに頬を緩ませる島さんに照れ臭さを感じながらも、本題に入るために口を開く。
「今日は島さんに見てもらいたいものがあってきたんだ」
「……ほう、それはそちらにいるのは新しいお友達も関係しているのかい？」
「ん、ああ。先に説明しとくよ、最近知り合った友人の、夜だ」
「は、初めまして、夜と言います。遊騎にはいつもお世話になっています」
俺が紹介すると、夜はどこか緊張した様子で島さんに頭を下げる。
島さんは少し驚いた表情を浮かべながらも、優しい笑みを浮かべて夜に向けて頭を下げた。
「これはどうもご丁寧に。私は島というものだ。色々あって現在は遊騎君の保護者とこの寂れたカードショップの店長をやっている」

「そ、そうですか……」
「ははは、そんなに怯えなくても取って食ったりはしないよ。君も色々と大変なようだが、これからも遊騎君と仲良くしてくれると嬉しいよ」
「は、はい!!?」
島さんの言葉に、夜は黒いパーカーの深く被ってあるフードが脱げそうなぐらいにぶんぶんと頷く。
夜らしくない行動に首を傾げていると、島さんの視線が俺に向いた。
「それで、私に見てもらいたいというものどんなものなんだい?」
「あ、ああ。これなんだけど、島さんは見たことないか?」
「っ!!?これは……」
島さんに促され、俺は自分のデッキから例の2枚のカードとコートオブアームズを引き抜いて島さんに見せる。
島さんは2枚のカードを見て驚いた表情を浮かべると、真剣な表情で俺を見た。
「遊騎君、これはどこで手に入れたんだい?」
「それが、よく分からないんだ」
「よく分からない?」
「ああ」
俺は島さんに昨日の出来事を伝えた。
闇のカードをばら撒いてると思われる決闘者とデュエルしたこと。
そのデュエルで俺が負け、デッキに入れなかったコートオブアームズ以外のNo.を失い、代わりにこのカードを手に入れていたこと。
そしてそのデュエルの詳細が思い出せないことなど、手掛かりになりそうなことは全て話した。
島さんは俺の話を聞き終わると腕を組んで困ったような表情を浮かべた。
「……話してくれてありがとう、遊騎君。とりあえず、君が無事でいてくれて良かったよ」
「うっ……ごめんなさい」

「謝らなくても構わないよ。それに、例え1度負けようと君はまた闇のカードを街に放っている人物を追うんだろう？」
「……」
島さんの言葉に俺は思わず目をそらす。
そんな俺に苦笑しながら、島さんは言葉を続ける。
「これでも君の保護者だからね、それぐらいは分かる。私にできることは、君が無事にこの事件を解決してくれることだけだよ」
「……ごめん。そしてありがとう、島さん」
「どういたしまして。さて、本題に入るとしよう。このカードについて聞きたいという話だったが、申し訳ないが私にもこのカードのことは分からない。力に慣れなくて悪いね」
「そっか、島さんにも分からないカードってあるんだな」
「それはそうさ。ただ、このＮｏ．というカードについてなら少しは教えることができる」
「っ!!？あなたは知ってるんですか、このＮｏ．達について!?？」
島さんの言葉に、空気を読んで黙ってくれていた夜が喰いつく。
「ああ、このカード達はーーー」
夜の言葉に島さんが頷き、話しはじめようとした時、店の扉が開く音がした。
俺が思わずそちらを向くと、そこにはーーー
「こんにちはー……って、あれ？師匠？」
「遊騎？あんた何してるのよ？」
「何？”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”の、師匠（マスター）だと？」
「栗原先輩のお師匠さん、ですか？」
「遊花？桜？」
ーーー見たことがない少女達を連れた遊花と桜がそこにいた。

★ーーーーーー

「はぁ～ようやく今日の講義が終わったわね……」
「ふふっ、お疲れ様、桜ちゃん」
講義が終わり、机に俯せになっている桜ちゃんに苦笑を浮かべながら、桜ちゃんの頭を優しく撫でる。
桜ちゃんは先程までの講義のダメージが余程大きかったのか俯せになったまま覇気のない声をあげる。
「うぅ～あんなの社会にでても使う機会なんてあるわけないじゃない。何が微分積分よ……」
「あはは……まあ、気持ちは分かるけどね。でも、テストでは必要になるんだから覚えなきゃダメだよ？」
「くっ、この成績優秀者め……」
そういって、恨めしそうな目で桜ちゃんが私を見る。
私は別に成績優秀者ってわけではないと思うけど、勉強苦手な桜ちゃんからすれば、講義についていけている私は優秀に見えるんだろう。
私だって予習や復習をしてるからついていけてるだけなんだけどなぁ。
『全く、桜がしっかり勉強してないのが悪いのにその子に当たってどうするのよ』
「ふぇ？桜ちゃん、今何か桜ちゃんを叱るような声が聞こえなかった？」
「えっ⁉？き、気のせいじゃない？」
突然、どこからか呆れたような女の子の声が聞こえた気がして私は辺りを見渡しながら桜ちゃんに尋ねる。
そんな私の問いに、桜ちゃんは私から目を逸らしながらどこか慌てた様子でそう答える。
「そうかな？確かに近くで聞こえた気がしたんだけど……」
「き、きっと疲れてるのよ‼？ほら、今日も1日忙しかったでしょ？だから、今日は早く帰って休みましょ。うん、それがいいわ‼？」
桜ちゃんはそう早口でまくし立てると急いで自分の荷物を纏める。
確かに、今日も1日闇先パイにデュエルを挑みたい人達が挑んでき

て休む暇もほとんどなかったし、少し疲れてきてるのかも。
　でも、今日は行っておきたい場所があるんだよね。
「うーん、でも、今日は『Ｎａｔｕｒａｌ』に行こうと思ってたんだよね」
「『Ｎａｔｕｒａｌ』に？」
「うん。最近デュエルしてると私のデッキをピンポイントで妨害するようなカードを入れてる人が増えてきたから、対策のためにまたカードを見ながらデッキを組み直してみようかなって思って。それに、少し調べたいものもあるし」
　私の頭に浮かぶのはギャラクシークィーンと一昨日手に入れたホープルーツのカード。
　天神先生でも分からないカードだったけど、もしかしたら島さんなら何か知ってるかも知れないし、自分で調べれるところまで調べておきたいのだ。
　ギャラクシークィーンを手に入れたあの日。
　ギャラクシークィーンを使っていた不死川君は明らかに様子がおかしかった。
　幸い、途中で元の不死川君に戻ったけど、もし不死川君があのままだったらどうなっていたかは分からない。
　……私は、不死川君の様子がおかしかったのはあのギャラクシークィーンが原因だったのだと思う。
　根拠と言える程、確かな確信があるわけじゃない。
　だけど、ギャラクシークィーンのコントロールを奪った後に普段の様子に戻ったことを考えると、その可能性はかなり高いと思う。
　私の脳裏に浮かぶのは、初めて行った異世界で行われた、私が未熟だったせいで私を守ろうとしてくれた優しい少女を傷つけ、危険な目に合わせてしまったデュエル。
　あの時、私は対戦相手だった決闘者が使用したカードで、ありもしない幻影を見せられた。
　異世界にもデュエルモンスターズは存在し、異世界でそのようなカードが存在しているのであれば、私達が生きているこの世界にだっ

て、そんな不思議なカードが存在してもおかしくない。
……今回はその標的が偶々私だった。
だけど、もしその標的が私の大切な人達に向かったら……
「遊花？どうかしたの？」
「っ……ううん、何でもない」
心配そうな表情で私を見つめる桜ちゃんに、私は無意識のうちに握りしめていた手のひらを開いて誤魔化すように手を振る。
結局、ギャラクシークィーンについては何も分かっていないから、私の考え過ぎなのかも知れない。
だけど、だからこそ知っておきたい。
どうしてギャラクシークィーンがそんな力を持っていたのか。
そして、どうしてその力が私には効かないのか。
「とにかく私はこの後『Ｎａｔｕｒａｌ』に行ってみるね。桜ちゃんは先にーーー」
「何水臭いこと言ってるのよ。私だってついて行くわ。それに、対戦相手がいないとデッキ調整ができないでしょ？」
「桜ちゃん……ありがとう‼？」
「わあっ⁉？だから、いきなり抱き着かないでってば‼？」
気持ちが抑えきれずに抱き着いた私を、桜ちゃんは顔を真っ赤にしながら引き離そうとする。
そんな中、私達の耳に聞き覚えのある笑い声が聞こえてきた。
「クックック、アッハハハハ‼？見つけたぞ、”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”‼？」
「あれ？この声って……」
突然聞こえてきた妙な声に騒然とする教室の中、私が声の聞こえた方を見ると、そこには校内にも関わらず黒い日傘を差し、マントを羽織っている真紅ちゃんがいた。
「真紅ちゃん‼？」
「わ、我が真名を呼ぶな‼？”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”‼？」
「そう言うなら私もその呼び名はやめてほしいんだけど……」
私が困った表情を浮かべていると真紅ちゃんは騒然としている教

室の中を気にも止めずに私の前まで歩いてきて、マントを翻しながらくるりと一回転し、眼帯を押さえながら私を指差した。
「さあ、聖戦（ジハード）だ、”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”‼？今日こそ汝を倒してーーー」
「見つけた‼？何してるの、真紅ちゃん‼？」
「チッ‼？いいところで……」
「あ、刀花ちゃん」
　真紅ちゃんが私にデュエルを申し込もうとしたところで、真紅ちゃんの後ろから慌てた様子で刀花ちゃんが教室に入ってくる
　刀花ちゃんは急いで真紅ちゃんの側に近づくと、初めて会った時のように真紅ちゃんの頭に手を置くと、勢い良く下げさせた。
「すみません‼？すみません‼？また真紅ちゃんがご迷惑をかけてすみません‼？」
「くっ、止めよ、”深淵の話し手（アビストーカー）”‼？我は今日こそ光と影の闘いに終止符をーーー」
「意味がわからないことを言わない‼？もう栗原先輩達に迷惑をかけないって約束したでしょ‼？」
「フン、そんなもの我は了承しておらいたたた‼？分かった、分かったから、刀花ちゃん‼？手を放して‼？頭が、頭が割れるぅ‼？」
「すみません‼？すみません‼？本当にすみません‼？」
「だ、大丈夫。私は気にしてないから。頭をあげて、刀花ちゃん」
「本当に申し訳ありません‼？他の先輩方もお騒がせしてしまい申し訳ありませんでした‼？」
　涙目で頭を抑えている真紅ちゃんに無理矢理頭を下げさせながら、刀花ちゃんは何事かとこちらの様子を伺っていた他の生徒達にも頭を下げる。
　他の生徒達はそんな刀花ちゃんに苦笑いを浮かべながらも、気にしてないとでも言うように手を振ったり、声をかけたりしていた。
　まあ、これだけ一生懸命謝ってる子にこれ以上何かを言うのは良心が咎めるよね。
　少し気になるのは真紅ちゃんの姿を見て頭を抱えたり、「静まれ」と

か言いながら目や腕を抑えている男子生徒が何人かいることだけど、何かあったのかな？
「それで、結局真紅は何しにきたのよ？」
「紅神爆牙（こうこうはくが）のアイズ・Ｄ・スカーレット‼？」
「長いのよ、アンタの呼び名……」
「フッ、我が呼び名を呼べるなど光栄におもってあー‼？ごめんなさい‼？謝る‼？謝るから‼？生意気言って本当にすみませんでした‼？だから引きちぎらんとばかりに眼帯を引っ張らないで‼？やめ、やめろー‼？ああでもそのまま放すのは止めて‼？ゆっくり、ゆっくり放してね‼？」
　刀花ちゃんに眼帯を思いっきり引っ張られながら悲鳴をあげる真紅ちゃんに桜ちゃんが憐れむような視線を向ける。
　うん、全然話が進まない。
　このままじゃ一向に『Ｎａｔｕｒａｌ』に行くことにならないよ。
「うーん、ゴメンね、真紅ちゃん。私達、今日はこの後カードショップに行く予定があるからデュエルは受けられないんだ」
「そうだったんですね……うぅ、なおのことお時間を無駄にしてしまい申し訳ありません」
「フッ、我から逃げるのかあああ‼？刀花ちゃんの馬鹿ぁ‼？ゆっくりって言ったのにぃ‼？目が、目がああああ‼？」
「だ、大丈夫、真紅ちゃん？」
「ああ、気にしないでください。いつものことですから」
　引っ張られていた眼帯を放され、ゴムの反動で眼帯が目に当たり廊下をのたうち回る真紅ちゃんを見て、刀花ちゃんが気にしないようにと手を振る。
　というか、いつもこんな目にあってるの？
「くぅ、に、逃げるのか、〝小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）〟……」
「ここまでやられて全く反省した様子が見られないのはある意味凄いわね」
「別に逃げるつもりはないんだけど……そうだ‼？真紅ちゃん達も一緒にくる？そうすれば向こうでデュエルができるかも知れないし」

「いいんですか？お邪魔になるかも知れませよ？」
「大丈夫。ちょうどデュエルの相手も欲しかったしね」
「そういうことなら、不束者ですが真紅ちゃん共々よろしくお願いします」
「クックック、いいだろう。そのカードショップを貴様の墓場にーーー」
「真紅ちゃん？」
「ーーーよろしくお願いします、先輩方‼？」
刀花ちゃんが手を頭に乗せようとして、真紅ちゃんが慌てて頭を下げる。
うーん、今日は賑やかになりそうだなぁ。

ーーーーーーー

「あの、栗原先輩。少し聞きたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」
「ん？うん、いいよ。なにが聞きたいの？」
「栗原先輩は、どうやって今の強さを身につけたんですか？」
「ほぇ？」
『Ｎａｔｕｒａｌ』に向かう途中、私達の少し後ろを歩いていた刀花ちゃんにそんな質問をされた。
質問の意味がよく分からず首を傾げていると、刀花ちゃんはさらに言葉を続ける。
「あれから何度か栗原先輩がデュエルをする姿を見かけたのですが、栗原先輩が負けてるところって見たことがないんです。だから、どうすればそんなに強くなれるのかなって少し疑問に思ったんです」
「うーん、そんなに強いかなぁ？私なんてまだまだだと思うけど……」
「あ、あれでまだまだ、ですか？」
「だって、いつもギリギリのところまで追い詰められちゃうもん。もっと強く、もっと華麗に逆転できるようにならないと、ね」

私の言葉に刀花ちゃんが目を丸くする。
そんな刀花ちゃんに桜ちゃんがどこか呆れた様子で口を開いた。
「悪いわね、刀花。その子天然なの。それに、目指しているものがものだから理想も高くて、自信もないのよ」
「栗原先輩が目指してるもの、ですか？」
「ええ、その子が目指してる場所は、どんな逆境でも、笑顔で、楽しそうに切り抜けて、皆を驚かせるデュエルができる世界ランキング２位のプロチーム、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のプロ決闘者だもの」
「『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のプロ決闘者……って、ええっ⁉？」
「何だと⁉？」
桜ちゃんの言葉に、刀花ちゃんと刀花ちゃんの隣で聞いてないフリをしながらもチラチラとこちらを見ていた真紅ちゃんが驚いた声をあげる。
あーまぁ、そんな反応になるよね。
「く、栗原先輩は『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入ることを目指してるんですか⁉？」
「う、うん。私の師匠が『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の人でね。その人の跡を継ぎたいから」
「汝の強さ、只者ではないと思っていたが、まさか『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の者を師匠（マスター）としているとは……もしや、その師匠（マスター）とは『氷の女王』のことか？」
「うーん、闇先パイも確かにデュエルを教えてくれるけど、師匠ってわけじゃないんだ」
「『氷の女王』に直接教えてもらっているだと⁉？くっ……なんて羨ましい……」
そういって真紅ちゃんは俯きながらぶつぶつと何かをつぶやいている。
「ど、どうしたの？」
「あーあまり気にしないでください。多分憧れてる冬城先生が栗原先輩に教えてるのが羨ましいだけなので」
「真紅ちゃんは闇先パイに憧れてるの？」

「当たり前だよ‼?・どんな状況であろうと変わらず無表情で相手を圧倒するあの強さ‼?・そしてそんな自分を魅せるためのあのゴシック調のファッション‼?・あんなにカッコいいのに憧れないわけがないよ‼?・」
「え、ええっと、なんか口調がブレてるけど、いいの?・」
「はっ‼?・こ、コホン。深淵に潜む悪竜としては、真なる女王に礼節を払うのは当然だ。べ、別にファンというわけではないからな‼?・」
「そ、そっか」
　思わず口調がブレてしまう程の真紅ちゃんの熱量に、私は思わず苦笑を浮かべてしまった。
　あの衣装に関してはスポンサーの意向で闇先パイとしては不本意なものだってことは言わない方がいいんだろうなぁ。
「ま、まぁ、私のことはそんなところだよ。というか、私としては真紅ちゃんと刀花ちゃんだって十分強いと思うよ?・2人こそ、どうやって強くなったの?・」
「私は独学ですね。デュエルにおける戦術を参考書で調べたり、プロ決闘者の人のデュエルを見にいったりといった感じです」
「クックック、我の力の一旦を探ろうと言うのか?・そんなもの、我が答えるわけがーーー」
「真紅ちゃんはお姉さんがプロ決闘者の方なんです。デュエルはそのお姉さんに教えてもらってて、いつもデュエルを挑んでは返り討ちにあってるみたいですよ」
「って、恥ずかしいことを勝手に答えるなー‼?”深淵の話し手（アビストーカー）”‼?・」
　真紅ちゃんが誤魔化そうとした事実を刀花ちゃんがさらりと話して、真紅ちゃんが頬を赤くする。
　この反応、負けてることとか、努力してることとかがバレたくなかったんだろうなぁー。
「へぇ、プロ決闘者のお姉さんがいたんだね、真紅ちゃんには。やっぱり、強い人なの?・」
「フン、当然だ‼?・姉上は我が知る限り最も強い決闘者だ。今はまだ世界ランキングのトップ10には入っていないが、姉上なら必ず『氷

の女王』も超え、世界ランキングの頂点に君臨する‼?」
そういって真紅ちゃんは自慢気に胸を張る。
真紅ちゃんがここまで自慢気に語るプロ決闘者のお姉さんか……どんな人なんだろう?
そんなことを話している内に『Ｎａｔｕｒａｌ』が見えてきた。
何だか色々なことを話してたらあっという間だったなぁ。
「ついたわね」
「ここが栗原先輩が通っているカードショップですか?」
「む、何だか寂れたところだな」
『Ｎａｔｕｒａｌ』を見て、真紅ちゃん達が微妙な表情を浮かべる。
私はそんな2人に苦笑しながらも勢いよく店の扉を開ける。
「こんにちはー……って、あれ?」
私が扉を開けると『Ｎａｔｕｒａｌ』の中に3つの人影があった。
1人は店長である島さん。
そんな島さんに話しかけているフードを被った人物。
そしてもう1人ーーー
「師匠?」
「遊騎?あんた何してるのよ?」
「何?”小さな聖域の守護女神(リトルサンクチュアリガーディアン)”の、師匠(マスター)だと?」
「栗原先輩のお師匠さん、ですか?」
「遊花?桜?」
ーーー私の師匠がそこにいた。

ーーーーーー

☆

「師匠も『Ｎａｔｕｒａｌ』に来てたんですね」
「ああ、ちょっと島さんに聞きたいことがあってな。そっちの子達は見たことがないが遊花の友達か?」
「はい‼?眼竜　真紅ちゃんと幸土　刀花ちゃんです」

遊花がそういうと、遊花の後ろから黒い日傘に、マント、眼帯をつけた少女が俺の前にやってきて品定めでもするような目で俺を見た。
「我は紅神爆牙（こうこうはくが）のアイズ・D・スカーレット‼？貴様が”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”の師匠（マスター）か？」
「……は？」
「真紅ちゃん‼？す、すみません‼？すみません‼？」
「ぐあああああっ‼？頭が、頭が割れるぅ‼？」
少女の名乗りに俺が思わず唖然としていると、もう1人の少女が真紅と呼んだ少女の頭を掴んで無理矢理下げさせた。
「は、初めまして幸土　刀花と言います。栗原先輩にはお世話になってます。いきなり真紅ちゃんが失礼なことを言ってしまい申し訳ありません‼？」
「あ、ああ。別に気にしてないから構わない。遊騎だ。遊花がお世話になってるな」
「い、いえいえ、そんなそんな、私の方が栗原先輩にはお世話になって、本当に、ほんっとうにご迷惑をおかけして……」
「はな、放せ‼？我はただ”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”の師匠（マスター）がどの程度の者なのかをあいたたたた‼？頭が潰れそうなぐらい痛いぃ‼？」
真紅と呼ばれていた少女の悲鳴が店の中に響く。
このままだと近所迷惑になりそうなんだが……
俺がどうしたものかと唸っていると、そんな俺に遊花が話しかけてくる。
「それで、そちらの方は師匠のお知り合いですか？」
「ん？ああ、紹介するよ。コイツは……って、おい？なんで俺の後ろに隠れるんだ」
「いや、そのなんというか……」
俺が夜を紹介しようと後ろを振り向こうとすると、夜が俺の背中に張り付いて遊花達から隠れる。
そんな夜から聞こえてくるのはどこか焦ったような声だった。
突然の夜の行動に俺が戸惑っていると、意外なところから夜の行動の答えがもたらされた。

「ううっ、頭が潰れるかと……ん？姉上⁉？姉上が何故ここに⁉？」
「うぐっ……」
　掴まれていた頭を解放され、涙目で頭を押さえていた少女が夜を指差しながらそんなことを言い、夜が引き攣った笑みを浮かべる。
　……ん？
姉？
「ああ、もう……まさかこんなところで出会うなんてね。弱ったなぁ」
　そういうと夜は観念したように俺の背中から離れて遊花達の前に出て、困ったように笑った。
「初めまして、遊騎のお弟子さん、かな？ボクは眼竜　夜（がんりゅうよる）。妹がお世話になってるよ」

ーーーーーーー

「まさか妹が遊騎の弟子の後輩だなんてね、思っても見なかったよ」
「俺は夜が女だったことの方に驚いてるよ」
「気づいてなかったんですね、師匠……」
　色々と衝撃的な自己紹介が終わった後、俺達はデュエルスペースに座って雑談をしていた。
　島さんからＮｏ．について聞くのは一旦保留してもらった。
　今話したら遊花の耳にも入るからな。
「いや、前例があるからなあ」
「前例……ああ、異世界での」
　呆れたようなジト目で俺を見ていた遊花が俺の言葉を聞いて俺にだけ聞こえるような声で納得したように口を開く。
　２回目の異世界で、俺達は少女の見た目をした少年に会っている。
　いや、あの少年は危うく本当に少女にされるところだったが。
　そんなことがあったため、余計に中性的な顔立ちの夜の性別は分からなかったのだ。
「まあ、『ボク』って言う呼び方もよくなかったよね。だけど……気

づかれてないなとは思ってたけど……背中に張り付いても気づかれないとは思わなかったよ」
　夜が暗い表情で自分の胸に手をやり、俺の隣に座っている遊花の胸を見て口角がピクピクと引き攣った。
　……反応に困るからそういうのはやめてほしいんだが。
「悪かったね、遊騎。柔らかな感触がなくて」
「いや、言ってない言ってない」
「もう、師匠‼？そういうのはダメですよ‼？例え心で思っててもロにしないのがマナーです」
「だから言ってな……遊花の方が酷いこと言ってるぞ？」
「はっ⁉？す、すみません、夜さん‼？私、嘘が苦手で……」
「うん……遊花ちゃん。悪気がないのは分かってるからこれ以上抉らないで貰えるかな……心を」
　遊花の悪意のない言葉をくらい、夜が胸を押さえる。
　天然の言葉ってこういう時に痛いよな。
「ともあれ不可抗力とはいえ夜の本名を知っちまったんだし、俺も一応改めて自己紹介をした方がいいか」
「別に必要ないよ、とっくに気づいてるからね、結束　遊騎さん？」
「ああ、やっぱり気づいてたのか」
「まあね。今の君の現状で絵札の三銃士を使ってる人間なんて、それこそそのカードの代名詞となったオリジナルしかいないだろう？それに、君の人となりは美傘からよく聞いてるからね」
「美傘？……あ‼？じゃあ夜のデッキに入ってたＥＭ五虹の魔術師って……」
「うん、あの子から押し付けられたものだよ。あの子とボクは同世代のプロ決闘者だから、何かと交流があってね。数少ないボクの友人さ……言ってて少し悲しくなるけどね」
　そういって夜が自嘲気味に笑う。
　俺がどう反応しているか悩んでいると、遊花の隣に座っていた桜が弄っていた端末を見ながら口を開いた。
「あった、眼竜　夜。所属チーム『Ｕｎｔｅｒｗｅｌｔ（ウンターヴェルト）』。様々な大会

で一瞬にしてヴァンパイアモンスターを並べ、勝ちをさらっていくことからついた異名は『真祖』。現世界ランキング１６位……１６位⁉？」
「ふぇ⁉？世界ランキング上位の人なんですか⁉？」
「あはは……まあ、一応ね」
桜が読み上げた内容に、夜は照れたように笑う。
『Ｕｎｔｅｒｗｅｌｔ（ウンターヴェルト）』というと、ドイツ語で暗黒街や黄泉の国を意味する名がつけたられたチームだ。
その名が意味するようにアンデット族や悪魔族のモンスターを戦術の核におく決闘者が多く所属していたように記憶している。
確かにアンデット族を主軸として使っている夜にぴったりのチームと言えるだろう。
現世界ランキング１６位という実力も、あの強さなら納得だ。
「クックック、どうだ、”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”‼？我が姉上は貴様の師匠（マスター）のようなプロリーグから追放されるような罪人とは違い素晴らしい方なのだ‼？」
「”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”？」
「えっとえっと、師匠は気にしないでください。それよりも今の発言は見逃せないよ、真紅ちゃん。師匠は罪人なんかじゃないもん‼？」
「真紅、今の発言は流石に私も見逃せないわよ？」
夜の妹が遊花に勝ち誇ったような笑みを浮かべ、遊花、そして桜はムッとした表情を浮かべて夜の妹を睨みつける。
「そこまでだ、遊花。後ついでに桜。別に俺は気にしてないから」
「っ、でも‼？」
「前も言ったわよ、私はアンタが馬鹿にされることを黙って聞いてることなんてできないって」
「それでも、俺がこの街で罪人なのは事実だ。そんなこといちいち怒ってたらきりが無い。受け流すことも大切だ。桜はともかくとして、遊花はプロになったら間違いなく今みたいなことを言われ続ける。そんな挑発に毎回乗ってたら、勝てるものも勝てなくなるぞ」
「っ……分かり、ました」

俺の言葉を聞いて遊花が悲しそうに目を伏せる。
今言った言葉は事実だ。
遊花が俺の後継者としてプロ決闘者になるつもりである以上、こんな挑発は毎回されるハズだ。
そんな挑発に毎回乗ってたらきりが無いし、受け流すことも必要だ。
……だけど、フォローはちゃんとしておくべきだろう。
「……だけど、お前達が俺の代わりに怒ってくれたのは嬉しかったよ。ありがとうな、遊花、桜」
「っ、はい!!?」
「……分かればいいのよ」
俺の言葉に遊花が嬉しそうに笑い、桜が照れたように目を逸らす。
本当に、いい奴らだよ遊花達は。
「……すまないね、遊騎。うちの妹が」
「すみません、結束さん。真紅ちゃんが失礼なことを……」
「構わねぇよ、事実だしな。そういえば、夜のことで有耶無耶になっちまったけど、結局遊花達は何をしに来たんだ?」
「あ、そうでした!!? 私、島さんに見てもらいたいものがあったんです!!?」
「おや、私にかい?」
突然自分に話が振られたことに、島さんが驚いた表情を浮かべて遊花を見る。
「はい、これなんですけど……」
そういって、遊花が自分のデッキから2枚のカードを引き抜いて島さんに見せようとする。
その動きにはどこか既視感があり、なんだか嫌な予感がしてくる。
そして、その予感は確信に変わる。
「これは……!!?」
「最近偶然手に入れたもので、Ｎｏ．ってカードなんですがーーー」
「Ｎｏ．!?」
「ひゃう!!?し、師匠?夜さん?どうかしたんですか?」

突然大声をあげた俺達に遊花は驚いた表情を浮かべ、桜達はきょとんとした表情で俺達を見る。
しかし、そんな遊花達に構っている余裕もなく、俺達は慌てて遊花が島さんに手渡したカードを覗き込む。
そこにあったのは確かにＮｏ．の名前を持つ２枚のカード。
俺は慌てて遊花の肩に手をおく。
「ひゃわぁ‼？し、師匠？」
「遊花‼？このカードはどこで手に入れた⁉？体調とか悪くなったり、怪我とかしてないか⁉？」
「ち、近い‼？近いです、師匠‼？このカードはデュエルアカデミアで手に入れて、怪我とかはなくてーーー」
「デュエルアカデミアで⁉？」
「嘘でしょ、そんなところにまでばら撒かれはじめたのかい⁉？」
遊花の言葉に俺と夜は目を見開く。
そんな俺達に戸惑いながらも遊花は何かの確信を得たかのような目で俺を見て、口を開く。
「師匠は、このカード達について知ってるんですね？教えてください、このカードはなんなんですか？」
そんな遊花の問いに、俺は思わず天を仰ぐ。
困惑に満ちた店内で、俺達は確かに日常が崩壊していく音を聞いた。

第６７話　張り巡らされる警告

☆

「Ｎｏ．８３ギャラクシークィーン、Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツ……間違いなくＮｏ．だが、少しおかしいね」
「おかしい？」
「ああ。どうやらこの２枚は闇のカードではないようだ」
「は？Ｎｏ．なのに、闇のカードじゃないのか？」
「ああ、実際に触って見るといい。このカードに人を害する力はないからね」
　そういって島さんから２枚のＮｏ．を受け取る。
　いつもならＮｏ．から黒い闇が溢れ出してくるのだが、この２枚からはそんな兆候が一切見られない。
　本当に、闇のカードじゃないのか？
　だけど、この２枚は確かにＮｏ．のハズ……これは一体……
「あの、よくわからないですけど、とりあえずその子達を返してもらっていいですか？」
「ん、あ、ああ、悪い」
　思考の海に沈みそうになった俺の身体を遊花が揺すり、俺の意識が現実に戻ってくる。
　遊花は困惑の表情を浮かべながらも、俺から２枚のＮｏ．を受け取り、再び自分が座っていた椅子に座った。
　桜達もそれぞれ椅子に座ったまま、戸惑った表情を浮かべて俺達を見ている。
「あの、師匠はこのカード達について知ってるんですよね？教えてください、このカードはなんなんですか？」
　遊花の問いかけに、俺は夜に視線を向けると、夜は仕方がなさそうに首を振った。
　誤魔化しきれない、そう言いたいのだろう。
　出来れば巻き込みたくはなかったが、すでに本人が関わっているの

であれば、話していないことによって引き起こされる問題の方が多いだろう。
俺が思わずため息を吐くと、そんな俺達を見て真剣な表情で口を開いた。
「ちょうど遊騎君達にも話すつもりだったから、私が話そう。そのＮｏ．ってカードは闇のカードというものの一種なんだ」
「闇のカード……ですか？」
島さんの言葉に遊花が何かを思い浮かべるように口元に手をやる。
きっと遊花の頭に浮かんでいるのは初めて異世界に行った時に戦ったあのカード達なんだろう。
「闇のカードというのはカードの精霊に悪意が宿って歪んでしまった呪われたカードでね。闇のカードに適合できなかった使用者の意思を好戦的にしたり破壊衝動を生み出したり、身体の乗っ取りや身体を傷付けたりするカードなんだ」
「ちょっ⁉？そんな危険ものを遊花に返さないでよ‼？」
「落ち着け、桜。気持ちは分かるが、どういうわけかその２枚はすでに闇のカードじゃなくなってるんだ。持ってても影響はない」
「でも……」
「まあまあ、落ち着いて。桜ちゃん、だったよね？そのカードを使うことを選んだのは遊花ちゃんの意思だ。影響がないのであれば遊花ちゃんの好きにさせるべきさ。それに、もし遊花ちゃんがそのカードを手放したとして、そのカードの呪いが蘇るようなことがあれば、次にそのカードを手にした人物が乗っ取られる可能生もある」
「なら燃やしたりとか……」
「闇のカードは呪われたカードだ。破壊すればカードに込められていた呪いが行き場をなくして周囲に飛び散り祟りになる可能性がある。物理的に壊すことはオススメできないね」
「うっ……」
俺と夜、島さんの言葉に桜が心配するように遊花を見ながら、悔しそうに歯噛みをする。
親友がそんな危険なものを持ってたら心配だと言う桜の気持ちも

痛い程分かるが、実際何故かあの2枚のＮｏ．は闇のカードではなくなっている。
　遊花が所持していても危険はないハズだ。
「話を戻そう。そのＮｏ．というカードは、闇のカードの中でもかなり変わったカードでね。人が心に抱く心の闇や欲望を増幅することに特化していてね。そのうえ、Ｎｏ．には決まった姿がないんだ」
「決まった姿がない？」
「ああ。本来の闇のカードはカードの精霊が呪いによって歪んだものなんだが、Ｎｏ．はＮｏ．を手にした者の心の闇や欲望を読み取り、その姿や能力を決めてしまうんだ。例えば、誰かを倒したいという欲望なら戦闘では負けなくなるとか、誰にも邪魔はさせたくないという欲望なら相手を縛る効果、とかね。他にもその効果に付随した特殊な力を使用者に授けるんだ。最も、1度姿を獲得してしまえば、そこから変化することはそうそうないみたいだけどね」
「成る程、それでか」
　島さんの言葉に、俺はブラックミストとバグースカのことを思い出す。
　ブラックミストを使っていた男は身体から黒い霧を発しながらジャマする奴は全員叩き潰すと言っていたし、バグースカを使っていた男は静かに酒を飲ませろと怒鳴りながら、歯向かうものを眠らせる霧を発していた。
　だからこそ、ブラックミストは戦闘したモンスターを必ず勝つ効果を持ち、バグースカは相手を静かに眠らせる効果を持っていたのだろう。
　……じゃあ、俺が手にしたコートオブアームズの姿と効果の意味は一体なんなんだ？
「他に特異なところがあるといえばＮｏ．を使用している者同士がデュエルをした場合、勝者の元にＮｏ．が移動する、という性質があるね」
「えっ？でも、私がギャラクシークィーンを手に入れた時、私はまだＮｏ．を持ってませんでしたよ？」

「……ふむ、不思議なこともあるものだね。基本的にＮｏ．が移動するのは使用者同士のデュエルのみのハズだが」
遊花の言葉に、島さんが興味深そうに首を傾げる。
俺も遊花の話す事実について考えようとした時、俺の服の袖が躊躇いがちに引かれる。
俺が袖を引かれた方を見ると、困惑した表情を浮かべた幸土の姿があった。
「あの、すみません。質問してもよろしいでしょうか？」
「ああ、いいぞ。幸土、だったよな？悪いな置いてきぼりにしちまって……」
「い、いえ、その、浅学の身で申し訳ないのですが、まずカードの精霊というのは、本当に実在しているんですか？栗原先輩や宝月先輩もそのことに特に驚かれた様子が見られないのですが……」
「ああ～そうだな、そこからだよな。俺もはっきりと見えるわけじゃないんだが、カードの精霊って言うのは実在してる。俺の友人の話だと、そこら辺にいて視えるか視えないかは、視力が１．０の人が視えるものが０．３の人には視えにくいのと同じぐらいのレベルらしい。俺達が驚いていないのは、そのカードの精霊関係で色々巻き込まれたことがあるからだな」
「そ、そうなんですか……それでもう１つ質問なんですが、何故、結束さんはＮｏ．ってカードのことを知っているんですか？島さんの説明にもあまり驚いていないみたいでしたし……」
「あ、そういえば⁉？どうして師匠はそんなに詳しいんですか？」
「うぐっ……」
幸土の質問に、遊花もそういえばというように俺の方を向く。
鋭い……できればそこは話さないでおきたかったんだが……仕方がないか。
「……実はな、俺も持ってるんだよ、Ｎｏ．」
「えっ⁉？」
「はあっ⁉？」
「因みに、ボクも所持者だよ」

「姉上もか⁉？」
　驚く遊花達に俺は自分のデッキからコートオブアームズを、夜は不乱健を取り出し、机の上におく。
　コートオブアームズ達を見て幸土は驚きながらも納得したように頷いた。
「成る程、結束さん達自身がＮｏ．の所持者だったんですね」
「ああ。といっても、俺達も偶々拾っただけなんだけどな」
「成る程、では先程の使用者の意思を好戦的にしたり破壊衝動を生み出したり、身体の乗っ取りや身体を傷付けたりするというのに驚かなかったのは実体験があったりするんですか？」
「うっ……それは、だな」
　幸土の更なる質問に俺は思わず口ごもる。
　そんな俺を見て、遊花は首を傾げたが、すぐに何かに思い至ったのかしばらく考え込むと真剣な表情で俺の方を見た。
「師匠。前に仕事中に怪我をしたと言って入院したことがありましたよね？」
「っ‼？あ、ああ」
「師匠のお仕事は公園の清掃のハズなのに入院する程の大怪我をするなんておかしいなって思ってたんです。もしかして、あの入院はその闇のカードで怪我をしたからなんですか？」
「うぐっ‼？」
「その反応、やっぱりそうなんですね⁉？」
　遊花が明らかに怒った表情を浮かべて俺に詰め寄る。
　くっ……バレた。
　遊花は抜けている部分はあるが基本的には頭がいい。
　情報さえ揃ってしまえばそこから答えを導くのは凄く早いのだ。
　だから闇のカードの情報が遊花に渡れば入院した時の真実に辿り着いてしまうのではと思ってはいたが、やっぱりバレてしまったか。
「どうしてちゃんと話してくれなかったんですか⁉？」
「いや、普通信じられないだろ？デュエルしてたら大怪我した、なんて。ただでさえ混乱してた遊花をさらに戸惑わせるんじゃないかっ

て思ったんだよ。怪我の後遺症が、とか言って」
「っ、それでも、ちゃんと教えて欲しかったです……嫌なんです、何も分からないまま師匠がいなくなるのなんて……」
遊花が目に涙を浮かべながら、泣きそうな声で俺の服の袖を掴む。
「本当に……嫌なんです……」
「遊花……悪かったよ」
俺は手で遊花の目に浮かんだ涙を拭い、そのまま頭を優しく撫でる。
すると、遊花は首を振って柔らかく笑った。
「いえ、私も我儘を言ってごめんなさい。でも、次はちゃんと教えてくださいね。私は、師匠のこと、信じてますから」
「……ああ」
そうして遊花が落ち着くまでしばらくの間頭を撫でていると、わざとらしい咳払いが聞こえてきた。
「コホン!!?そろそろ本題に戻ってもいいかい?」
俺達が咳払いが聞こえてきた方を見ると夜が俺達から視線を逸らしながら微妙な表情を浮かべていた。
周りを見ると、島さんはにこにこと嬉しそうに笑みを浮かべ、桜は呆れたようなジト目でこちらを見て、真紅は気まずそうに視線を逸らし、幸土は恥ずかしそうに顔を真っ赤にしながらも興味深そうにこちらを見ていた。
俺が何事かと首を傾げていると、疲れたような表情で夜が口を開いた。
「君達ねぇ、イチャつくなら人がいないところにしなよ」
「は?」
「はぅっ!!?い、イチャついてなんかないですよ!!?私と師匠はそういう関係では……あぅ」
夜の言葉を、遊花は顔を真っ赤にしながら手をわたわたと振って否定する。
俺が思わず遊花の方を見ると、俺と遊花の視線がぶつかる。
目があった遊花は熱でもあるんじゃないかと疑うぐらい顔を真っ

赤に染めながら、慌てて俺から離れてこちらを見ないように顔を背けた。
「桜ちゃん、この２人はいつもこうなのかい？」
「大体こんな感じよ、この師弟は。本人達的には無意識なんでしょうけど……」
「それはまた側から見ると気疲れしそうな日常だね」
　戸惑う俺を横目に夜と桜がひそひそと何かを話す。
　物凄いジト目なのできっと俺の悪口だろう。
「それで……ええっと、どこまで話したっけ？」
「遊騎達がＮｏ．ってカードを持ってるってところよ」
「ああ、そうだったね。この中では、ボク、遊騎、遊花ちゃんがＮｏ．を持ってるわけなんだけど、最近、この街にＮｏ．をばら撒いている奴がいるみたいなんだ」
「Ｎｏ．を？」
「ああ。桜は覚えてないか？俺が入院するきっかけになったお前が蹴り飛ばした奴のこと」
「あ、あの明らかに不審者って格好をしてた黒ずくめのヘンテコヘルメット野郎のこと？」
　桜の問いかけに俺が頷くと、桜は不機嫌そうに表情を曇らせる。
「あいつは俺が偶然拾ったコートオブアームズを狙ってきた。しかも、その時にそいつが作ったって言うＮｏ．を使ってきた」
「Ｎｏ．を作ったって……呪われたカードなんでしょ？そんなことできるの？」
「それは分からん。でも、存在してるってことはできるんじゃないか？とりあえず言えるのは、俺達はそんなＮｏ．をばら撒いてる奴を探してるってことだ。このカードは、本当に危険だからな。遊花達に危害が加わって欲しくない」
「師匠……そのためにＮｏ．を追って……」
「ふむ、本当にこのようなカードが人を操るのか？」
　そういって真紅の手がコートオブアームズに伸びる。
「っ、馬鹿‼？危ねぇだろうが‼？」

俺は慌ててコートオブアームズと不乱健のカードを手に取る。
そして手に取ったところで自分の失策に気付いた。
コートオブアームズはともかく不乱健は俺が所持している闇のカードではない。
つまりーーー不乱健の呪いは所持していない俺には発動する。
「っ⁉？ぐああっ⁉？」
「っ⁉？師匠⁉？」
「遊騎⁉？」
不乱健のカードから溢れ出した闇が俺の身体を包み込み、遊花達が悲鳴をあげる。
俺の身体も様々なＮｏ．を手に入れて適合率が上がってるハズなのに、それでも不乱健は制御できないのかよ⁉？
「っ⁉？まずっ⁉？夜⁉？」
「分かってるよ⁉？」
夜が急いで俺の身体を突き飛ばし、俺の手元から不乱健のカードを吹き飛ばすと、俺の身体を包んでいた闇が消えた。
「ぐっ……あ、危ないところだった……サンキュー、夜」
「お礼なんて必要ないよ。元々ボクのせいみたいなものなんだから。悪かったね、突き飛ばして」
「いや、よくやってくれたよ」
「師匠⁉？大丈夫ですか⁉？」
「遊騎、アンタまた無茶をして⁉？」
「ああ、大丈夫だ。悪いな、遊花、桜」
心配そうな表情を浮かべる遊花達に俺は苦笑を浮かべて応える。
苦笑を浮かべる俺を見て、夜は鋭い視線を自分の妹に向けた。
「真紅」
「あ、姉上？」
「ボク達は話したよね、闇のカードは危険だと。それなのに、何で触ろうとしたんだい？」
「そ、それは本当にそのカードが不思議な力を持っているのかを試そうと……」

「その結果、ボクの友達が危険な目にあったわけだ。そのことに申し開きはあるかい？」
「っ……」
「夜、その辺にしとけ」
「遊騎‼？だけど……」
「妹さんもちょっと悪ノリが過ぎただけだろ？俺は無事だったんだし、責める程のことじゃねぇよ」
俺は立ち上がりながら至って平静を装って静かな怒りを発している夜を宥める。
怒ってくれるのは嬉しいが、分からないこそ真紅は行動に移っただけだ。
これ以上真紅を責める必要はない。
このまま夜の怒りが治ってくれれば……
「ふ、フン‼？其奴が余計なことをするからそんな目にあうのだ‼？我は紅神爆牙（こうこうはくが）のアイズ・Ｄ・スカーレット‼？その程度の闇に負けるわけがないのだからな‼？」
「……あちゃー」
開き直るような真紅の発言に俺は思わず頭を押さえながらそんな言葉が口に出る。
……これは、想像以上に面倒なことになりそうだ。
「真紅ちゃん⁉？何を言ってるのか分かってるの⁉？」
「クックックッ、当然よ‼？我の闇の力であれば、そのＮｏ．の闇の力程度に飲まれるわけがない‼？その呪われた力、我が全て手にしてやろう‼？」
「っ‼？真紅‼？」
不敵な笑みを浮かべる真紅に夜と幸土が表情を硬くして怒る。
しかし、開き直った真紅はそんな怒りなどどこ吹く風と言わんばかりだ。
どうしたものか……思わず頭を抱えそうになった俺の耳に予想外の声が響いた。
「やれやれ、仕方がないね。子供に現実を教えてあげるのも、大人の務

めだしね」
「島さん？」
一触即発とも言える真紅達の間に島さんが困ったような表情を浮かべて割って入る。
島さんは不敵な笑みを浮かべて自分の世界に浸っている真紅に向けて真剣な表情を浮かべて口を開いた。
「君の言い分は分かったよ。なら、私とデュエルをしないかい？」
「何？店主とデュエルだと？」
怪訝な表情を浮かべる真紅に、島さんは懐から1枚のカードを取り出す。
その瞬間、島さんの取り出したカードから吹き出す大量の闇。
あれって、もしかして……
「実は私も持っているんだよ、Ｎｏ．のカードを。もし、君が私とのデュエルに勝てたら、君にこのＮｏ．をあげよう」
「ほう、いいだろう。そのデュエル、受けてやろう」
「決まりだね」
「ちょっ⁉？島さん⁉？」
驚きの表情を浮かべる俺を見て、島さんはにこりと笑って首を振る。
任せろ……って、ことなのか？
島さんはカウンターの裏からデュエルディスクを取り出し、懐かしそうにひと撫でしてから自分の腕につけて起動する。
そんな島さんに、真紅も不敵な笑みを浮かべたままデュエルディスクを起動した。
「あの、師匠。島さんってデュエル、強いんですか？」
突然始まる島さんのデュエルに、遊花は困惑した表情で尋ねてくる。
しかし、俺はそんな遊花の問いに苦笑して応えるしかなかった。
「分からない」
「えっ？分からないって……」
「俺、島さんとデュエルしたことないし、島さんがデュエルするところ

を見たこともないんだ」
「はあっ⁉？アンタ、島さんと一緒に住んでたんでしょ？それなのに、1度もないの⁉？」
俺の返答に遊花と桜が驚いた表情を浮かべる。
「俺も子供の頃、島さんにデュエルを挑んだことあるんだけど、島さんは『デュエルは苦手だから』って受けてくれなかったんだ。何か理由があるんだろうなとは思ってたんだが……」
「それは……私達みたいに、ですか？」
「ああ」
デュエル出来る環境を失った俺。
デュエルすることが怖くなった遊花。
同じように、島さんにもきっとデュエルができない理由があるとは思ってたんだが……何故、真紅とデュエルを……
「準備はいいかい？」
「クックックッ。後悔するがいい、店主よ。すぐに貴様を倒し、そのNo.を手に入れてみせよう⁉？」
「ははは、威勢がいいね。それでは、はじめるとしよう」
『決闘⁉？』

真紅　LP8000
島　LP8000

ーーーーーーー
○

「先攻は我だ。店主よ。汝に我が力の一端を見せてやろう⁉？魔法アクティベート、真紅眼融合（レッドアイズフュージョン）⁉？このカード名のカードは1ターンに1枚しかアクティベートできず、このカードをアクティベートするターン、我はこのカードのエフェクト以外ではモンスターを召喚（サモン）・特殊召喚（スペシャルサモン）できない。だが、そのエフェクトは強力だ。我の手札・デッキ・フィールドから、融合（フュージョン）モンスターカードによって決められた

融合素材(フュージョンマテリアル)モンスターをセメタリーへ送り、レッドアイズモンスターを融合素材(フュージョンマテリアル)とするその融合(フュージョン)モンスター1体をEXデッキから融合召喚(フュージョンサモン)し、このエフェクトで特殊召喚(スペシャルサモン)したモンスターのカード名を真紅眼(レッドアイズ)の黒竜(ブラックドラゴン)として扱う!!?」

「ほう……レッドアイズとは、また珍しいカードを使っているね」

「その余裕、すぐに崩させてやろう!!?我はデッキから真紅眼の黒竜とレベル6ドラゴン族モンスター、真紅眼(レッドアイズ)の凶星竜—メテオドラゴンを融合(フュージョン)!!?」

真紅のフィールドに出来た渦の中に真紅の眼を持つ黒竜と隕石のような身体を持つ竜が吸い込まれていく。

そして渦が弾けると舞い降りるのは炎を纏った流星の如き真紅の眼を持つ黒竜。

「我が闇の力を宿し黒竜よ、宇宙(コスモス)の力を我が物とし、破滅を導く凶星となれ!!?融合召喚(フュージョンサモン)!!?流星竜メテオブラックドラゴン!!?」

〈流星竜メテオブラックドラゴン〉☆8　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ３５００

「流星竜メテオブラックドラゴンのエフェクトアクティベート!!?流星(デミス)は終焉(ミーティア)を告げる!!?このカードが融合召喚(フュージョンサモン)に成功した場合、手札・デッキからレッドアイズモンスター1体をセメタリーへ送り、そのモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージを相手に与える!!?我はデッキより真紅眼(レッドアイズ)の凶雷皇(ライトニングロード)—エビルデーモンをセメタリーに送り、その攻撃力２５００の半分、１２５０のダメージを与える!!?」

流星竜が咆哮をあげると、空から稲妻を纏った流星が島に向かって降り注ぎ、島のライフを削り取った。

島　ＬＰ８０００→６７５０

「さらに魔法アクティベート、黒炎弾!!?我のモンスターゾーンの真

紅眼の黒竜1体を対象としてその真紅眼の黒竜の元々の攻撃力分のダメージを汝に与える‼?このカードを発動するターン、真紅眼の黒竜は攻撃できないが、先攻ならば関係ない。そして流星竜メテオブラックドラゴンは、真紅眼融合の力により真紅眼の黒竜の名を得ている‼?」
「ほう、これは痛いね」
「その余裕、すぐに崩してやろう。流星竜メテオブラックドラゴンよ‼?その魂に宿し炎を放て‼?黒炎弾‼?」
真紅の呼びかけに応えるように、流星竜は口から黒い炎の弾丸を放ち、島の身体を炎が包み込んだ。

島　ＬＰ６７５０→３２５０

「我はカードを1枚セットし、ターンエンドだ。店主よ。貴様の力、我に見せてみよ」

真紅　ＬＰ８０００　手札２
ー▲ー　ー
ーーーーー
○　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
島　ＬＰ３２５０　手札５

「ふむ、1ターン目から大きくライフを削られてしまったね」
「クックック、怖気付いたか?」
「いや、ちょうどいいと思っただけさ。私のターン、ドロー。まずは私のフィールドに君を招待しよう。フィールド魔法、スパイダーウェブ」
島がフィールド魔法をセットすると、辺り一面に蜘蛛の糸が張り巡らされた蜘蛛の巣の上に変わる。

「蜘蛛の巣を自分のフィールドにしているとは、店主よ。汝は悪趣味だな」
「ははは、自覚はしてるよ。フィールド魔法、スパイダーウェブはモンスターが攻撃宣言をした場合、そのモンスターはダメージステップ終了時に守備表示になり、そのモンスターのコントローラーから見て次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができなくなる」
「チィ、面倒な……」
「攻撃する時は気をつけなさい。最も、君に攻撃をするターンがあればだけどね」
「何だと？」
「さて、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚できる。来なさい、プリミティブバタフライ」

〈プリミティブバタフライ〉☆５　昆虫族　風属性
ＡＴＫ１２００

島のフィールドに透き通った黄緑の羽根を持つ蝶のモンスターが現れる。
「私は手札からゴキポールを捨てて魔法カード、ワンフォーワン。デッキからレベル１モンスター１体を特殊召喚するよ。来なさい、ブロックスパイダー」

〈ブロックスパイダー〉☆１　昆虫族　地属性
ＤＥＦ１００

蜘蛛の巣を伝い、島の頭上からブロックの身体を持つ蜘蛛が姿を現わす。
「さらに墓地に送られたゴキポールの効果、それにチェーンしてブロックスパイダーの効果を発動するよ。このカードが特殊召喚に成功した場合に、デッキから同名モンスター１体を特殊召喚する。私は

もう1体ブロックスパイダーを特殊召喚するよ」

〈ブロックスパイダー〉☆1　昆虫族　地属性
ＤＥＦ１００

「そしてゴキポールの効果このカードが墓地へ送られた場合にデッキからレベル４の昆虫族モンスター1体を手札に加え、この効果で通常モンスターを手札に加えた場合、さらにそのモンスターを手札から特殊召喚でき、その後、この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力以上の攻撃力を持つ、フィールドのモンスター1体を選んで破壊できる。私はデッキからカマキラーを手札に加え、通常モンスターだから特殊召喚するよ」

〈カマキラー〉☆４　昆虫族　地属性
ＡＴＫ１１５０

「カマキラーの攻撃力は１１５０。カマキラーより攻撃力が高い流星竜メテオブラックドラゴンは破壊させてもらうよ」
プリミティブの横に現れた2本の鎌の腕を持つ人型のカマキリが流星竜に向かって鎌を振るうと、鎌から発生した真空波が流星竜の身体を切り裂き、爆散させた。
「チッ、低レベルの通常モンスターで我が凶星を砕くか……だが、我が凶星はただでは砕けぬ‼?流星竜メテオブラックドラゴンのエフェクトアクティベート‼?流星は真紅に染まる‼?このカードがモンスターゾーンからセメタリーへ送られた場合、自分のセメタリーの通常モンスター1体を対象として、そのモンスターを特殊召喚する‼?蘇れ、真紅眼の黒竜‼?」

真紅の呼びかけに、爆散した流星竜の爆風から勢いよく黒竜が飛び出し、力強い咆哮を響かせた。

〈真紅眼の黒竜〉☆7　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ２０００

「クックック、我のフィールドに黒竜は蘇った。店主よ、その低レベルな虫けらで我が黒竜を倒せるか？」
「ああ、勿論だとも。私は手札から機怪神（デウス）エクスクローラーを墓地へ送り、２体のブロックスパイダーを対象に、魔法カード、レベルマイスター。手札のモンスター１体を墓地へ送り、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターを２体まで選択して発動できる。選択したモンスターのレベルはエンドフェイズ時まで、このカードを発動するために墓地へ送ったモンスターの元々のレベルと同じになる。私が墓地に送った機怪神エクスクローラーのレベルは９。よってブロックスパイダーのレベルは９になる」

ブロックスパイダー
☆１→９

「何⁉？レベル９モンスターが２体だと⁉？まさかランク９のエクシーズモンスターを呼び出す気か‼？」
「いや、ランク９じゃない。プリミティブバタフライの効果を発動するよ。１ターンに１度、自分メインフェイズに自分フィールドの全ての昆虫族モンスターのレベルを１つ上げる」

プリミティブバタフライ
☆５→６

カマキラー
☆４→５

ブロックスパイダー
☆９→１０

「っ⁉？レベル９ではなくレベル１０モンスターが２体か⁉？」
「見せてあげよう、君が望む力がどれだけ危険なものかをね。私はレベル１０となった２体のブロックスパイダーでオーバーレイ。２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築。エクシーズ召喚」
２体のブロックスパイダーが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、辺り一面に張り巡らされた糸を伝って小さな毒蜘蛛が蜘蛛の巣の上に舞い降りた。
「大罪を秘めし貪欲なる捕食者よ。欲深き者に試練を与えよ。現れなさい、Ｎｏ．３５ラベノスタランチュラ」

〈Ｎｏ．３５ラベノスタランチュラ〉★１０　昆虫族　闇属性
ＡＴＫ０

「それが貴様の言うＮｏ．か。フッ、大層な物言いをするわりには大した攻撃力も持っていないではないか」
「目に見える力だけで判断するものではないよ。もっとも、目に見える力だけでも君を圧倒するには十分だがね」
「何だと？」
「Ｎｏ．３５ラベノスタランチュラの永続効果、ライフグラトニー。このカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分フィールドのモンスターの攻撃力・守備力は自分と相手のライフポイントの差の数値分アップする」
「っ⁉？何だと⁉？」
「君によって私のライフポイントは大きく削られ３２５０。対して君のライフポイントは削られていない８０００。よって、その差分、４７５０の攻撃力を私のモンスターに加えよう」
ラベノスタランチュラの身体が怪しげに輝くと、その光がプリミティブとカマキラーにも宿り、小さかったラベノスタランチュラやプリミティブ、カマキラーの身体が巨大化していき、黒竜を遥かに上回

る大きさに変わった。

Ｎｏ．３５ラベノスタランチュラ
ＡＴＫ０→４７５０

プリミティブバタフライ
ＡＴＫ１２００→５９５０

カマキラー
ＡＴＫ１１５０→５９００

「馬鹿な⁉？全てのモンスターの攻撃力が４７５０も強化されるだと⁉？」
「これで君のレッドアイズは簡単に倒せるよ。私はスパイダースパイダーを召喚。スパイダースパイダーもＮｏ．３５ラベノスタランチュラの効果で強化させて貰うよ」

〈スパイダースパイダー〉☆４　昆虫族　地属性
ＡＴＫ１５００→６２５０

蜘蛛の糸を伝ってフィールドに現れたのはスコープを目につけた蜘蛛のモンスター。
そしてスパイダースパイダーの身体もラベノスタランチュラのように怪しく輝くと黒竜を遥かに上回る大きさになるまで巨大化した。
「バトルだ。スパイダースパイダーで真紅眼の黒竜を攻撃。スパイダーストリング」
スパイダースパイダーが口から蜘蛛の糸を放ち、黒竜の身体を締め上げ、動けなくなった黒竜を喰らい尽くした。
「クッ、下級の虫けらが我が黒竜を上回るとは……これがＮｏ．の力だと言うのか⁉？」
「スパイダーウェブの効果により、攻撃を行なったスパイダースパイ

ダーは守備表示になる」

スパイダースパイダー
ＡＴＫ６２５０→ＤＥＦ５７５０

黒竜を喰らい尽くしたスパイダースパイダーが満足そうに島の元に戻ろうとすると、自身の足元に蜘蛛の糸が絡まっていることに気づく。

スパイダースパイダーは暴れて糸を外そうとするが、暴れる程に糸は絡まっていき、しばらくすると不貞腐れたようにその場に寝転がった。

「すまないね、スパイダースパイダー。さて、スパイダースパイダーの効果を発動するよ。このカードが戦闘によって相手フィールド上に守備表示で存在するモンスターを破壊した場合、自分の墓地に存在するレベル４以下の昆虫族モンスター１体を選択して特殊召喚する事ができる。来なさい、ゴキポール」

〈ゴキポール〉☆３　昆虫族　地属性
ＡＴＫ１０００→５７５０

スパイダースパイダーが大きな声をあげると、スパイダースパイダーの近くに積み重なり巨大化した４匹の台所に出没してカサカサと動く黒いアレが現れた。

「ひっ‼？な、なんておぞましいものを呼び出すんですか‼？相手は可愛い女の子ですよ‼？慈悲とかないんですか‼？」

「そう言われてもそういうカードだからねぇ。諦めて貰うしかないよ。ゴキポールでダイレクトアタック」

「む、無理無理無理無理‼？鬼畜ですかあなたは‼？リバースカードオープン‼？罠発動、レッドアイズスピリッツ‼？自分の墓地のレッドアイズモンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚します‼？ま、守って、真紅眼の黒竜‼？」

〈真紅眼の黒竜〉☆7　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ２０００

思わず素を曝け出し涙目を浮かべる真紅に呼び出され、黒竜は仕方がなさそうに咆哮をあげる。
しかし、現れた黒竜を見てラベノスタランチュラが威嚇する音を出した。
「この瞬間、Ｎｏ．３５ラベノスタランチュラの効果を発動するよ。グリードポイズン」
「えっ⁉？」
「オーバーレイユニットを持ったこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手がモンスターを特殊召喚する度に相手に６００ポイントのダメージを与える。ちゃんと外すんだよ、ラベノスタランチュラ」
島の声を聞き、ラベノスタランチュラは仕方なさそうに毒液を放つ。
ラベノスタランチュラが放った毒液は真紅の後方で飛び散ったが、飛び散った毒液が少量真紅のマントに当たると毒液が当たった部分が瘴気をあげて溶けた。

真紅　ＬＰ８０００→７４００

「えっ……な、何で本当に溶けて……」
「これが君の求めた力だよ」
驚愕の声をあげる真紅に、島は宥めるように言葉を紡ぐ。
「Ｎｏ．はただのカードとは違う。本当に人を殺める可能生すら秘めている呪われた力だ。使いこなせるなら構わない。だが、使いこなせないのであれば使った者も使われた者もただでは済まない。今、私はラベノスタランチュラに命じて実体化させた状態で外させたが、今の効果がもし本当に君に当たっていれば君の末路はそのマントと同じ

だっただろう」
「っ……そ、そんな……」
「そんな中、君のお姉さんや遊騎君はこのカード達を追っているんだ。自分の大切な者を守るために、自分の身を危険に晒そうともね。こういう言い方は悪いが、君の行っている”ごっこ遊び”とは根本的に違う。君のライフポイントが変動したことでＮｏ．３５ラベノスタランチュラの強化する数値も変動する」

Ｎｏ．３５ラベノスタランチュラ
ＡＴＫ４７５０→４１５０

スパイダースパイダー
ＤＥＦ５７５０→５１５０

ゴキポール
ＡＴＫ５７５０→５１５０

プリミティブバタフライ
ＡＴＫ５９５０→５３５０

カマキラー
ＡＴＫ５９００→５３００

「そして攻撃は続行だ。ゴキポールで真紅眼の黒竜を攻撃。コックローチストライク」
ゴキポール達が一斉に黒竜に向かって突撃し、その巨体に押しつぶされる。
「っ、真紅眼の黒竜‼？」
「スパイダーウェブの効果によりゴキポールは守備表示になる」

ゴキポール

ＡＴＫ５１５０→ＤＥＦ５３５０

「カマキラーでダイレクトアタック。シャドウシックル」

「くぅ……」

真紅　ＬＰ７４００→２１００

カマキラーの真空波が真紅の身体を斬り裂く。

「スパイダーウェブの効果によりカマキラーは守備表示に、そして君のライフポイントが変動したことにより私のモンスターの強化も変動する」

Ｎｏ．３５ラベノスタランチュラ
ＡＴＫ４１５０→１１５０

スパイダースパイダー
ＤＥＦ５７５０→２１５０

ゴキポール
ＤＥＦ５３５０→２３５０

プリミティブバタフライ
ＡＴＫ５３５０→２３５０

カマキラー
ＡＴＫ５３００→ＤＥＦ２５５０

「覚悟はいいかい？Ｎｏ．３５ラベノスタランチュラでダイレクトアタック。サーフィトストリングス」

「ひっ‼？」

ラベノスタランチュラの口から大量の蜘蛛の糸が吐き出され、真紅

に向かって吐き出される。

真紅　ＬＰ２１００→９５０

思わず目を瞑った真紅だが、一向に痛みが訪れないことに疑問を持ち、少しずつ目を開けていく。

「あ……れ？」

目を開けた真紅の身体には大量の蜘蛛の糸が巻き付いていたが、糸の感触はなく、ただの立体映像のようだった。

「驚いたかい？使いこなせてさえいればこうしてただの立体映像にすることもできる。私も君を傷つけるのは本意ではないしね。だが、この攻撃がもし実体化していれば、君がどうなったかは想像に難くないだろう」

「う……あ……」

「だから止めているのだよ。このような危険な物に君が関わることがないようにね。スパイダーウェブの効果によりＮｏ．３５ラベノスタランチュラは守備表示に、そして君のライフポイントが変動したことにより私のモンスターの強化も最後の変動を行う」

Ｎｏ．３５ラベノスタランチュラ
ＡＴＫ１１５０→ＤＥＦ２３００

スパイダースパイダー
ＤＥＦ２１５０→３３００

ゴキポール
ＤＥＦ２３５０→３５００

プリミティブバタフライ
ＡＴＫ２３５０→３５００

カマキラー
ＤＥＦ２５５０→３７００
「これで終わりだね。プリミティブバタフライでダイレクトアタック。ファレノプシスドリーム」
プリミティブが羽根を羽ばたかせ、暴風と共に鱗粉を飛ばす。
真紅は呆然としたまま、吹き荒れる暴風に呑み込まれた。

真紅　ＬＰ９５０→０

ーーーーーーーー

☆

「まあ、こんなところだね。威勢の割には大したことがなかったね」
「……っ‼？」
「真紅ちゃん⁉？あの、し、失礼します‼？」
島さんの言葉を聞き、真紅が勢いよく店を飛び出していく。
店を飛び出していった真紅に困惑しながらも、幸土はこちらに一礼すると真紅を追って店から出ていった。
静まり返る店内の中、夜は島さんの前に行くと深く頭を下げた。
「妹が失礼を働いてしまい申し訳ありません」
「いや、こちらこそすまないね。闇のカードがどのようなものかを分かって貰うためとはいえ、真紅君を怖がらさせてしまった」
「いえ、私が本当にあの子と向き合っていればこうはならなかったと思いますから」
「それは私にも言えることだからね。君が特別気にすることではないよ」
「……ありがとうございます」
夜が難しい表情を浮かべたまま顔を上げると、島さんは困ったような表情を浮かべて俺達を見た。

「遊騎君達もすまなかったね」
「いや、気にしてないけど……島さん、デュエルして良かったのか？苦手なんだろ、デュエル？」
「……ああ、気を遣わせてしまったね。構わないよ、デュエルが苦手なことには変わりがないが、道に迷っている子供達に道を説くというのも、大人として必要な役割だからね。だが、気遣ってくれてありがとう」
笑顔でそういう島さんに、俺は何も言えなくなる。
何となく微妙な雰囲気になったところで、遊花が俺と夜を見て躊躇いがちに手を挙げた。
「ええっと、その、少しいいでしょうか？」
「ん？どうした、遊花？」
「あの、師匠と夜さんはＮｏ．をケルン中に配っている人を探しているんですよね？」
「うん、そうだよ。ボクと遊騎はＮｏ．をばら撒いている奴を探している。実際に見て分かったと思うけど、Ｎｏ．は危険なカードだからね」
遊花の問いに夜が真紅が出ていった扉に視線を向け、苦い表情を浮かべながら応える。
それを聞いた遊花は1度目を閉じると、覚悟を決めたような表情で口を開いた。
「なら、そのＮｏ．をケルン中に配っている人を探すの、私にも手伝わせてくれませんか」
「はあっ⁉？」
遊花の言葉に、桜と夜が目を見開く。
ああ、やっぱりこうなったか……
「私もＮｏ．の所持者です。なら、勝者の元にＮｏ．が移動するという性質を利用して、私でもＮｏ．を回収できるハズです。だから、私でも少しは力に慣れると思います」
「ちょっ、遊花⁉？アンタさっきのデュエルを見てなかったの⁉？島さんだったから真紅は怪我をしなかったけど、本当に操られている人

だったら大怪我をするかも知れないのよ⁉？」
「それに、君はデュエルアカデミア生だ。講義がある昼間や夜中に動き回る訳にはいかないだろう？」
「はい。確かに私はデュエルアカデミア生です。ずっと街の中を探すのは難しいと思います。ですが、逆に言えば、私はデュエルアカデミア生なんです」
「デュエルアカデミア生だからこそ、俺達が入れないデュエルアカデミアの中でＮｏ．を所持している人間は探すことができる、ってことだろ？」
「はい。実際、ギャラクシークィーンを所持していたのは私と同じデュエルアカデミア生でした。なら、またデュエルアカデミアの中でＮｏ．の所持者が現れてもおかしくないと思います。それに、もしかしたら師匠達がケルンの街中を探して犯人が見つからないのなら、デュエルアカデミアの中にケルン中に配っている人がいるのかも知れません。だけど、師匠達がデュエルアカデミアの中に入るわけにはいきませんよね？そんな時、私がお役に立てると思います」
そういって、遊花が俺の目を見て柔らかく笑う。
……これを危惧してたから遊花にはバレたくなかったんだけどな。
だけど、遊花の目を見れば、遊花がどれだけ真剣に考えたかは分かる。
だから、そんな遊花に俺ができることは１つだけだ。
「……分かった。ただし、デュエルアカデミアの中でＮｏ．を所持している人間の相手だけだ。明らかに犯人みたいな人間が見つかった場合はデュエルアカデミアにいる闇に言うか、俺達に連絡すること。できるな？」
「⁉？はい⁉？ありがとうございます、師匠⁉？」
「ちょっ⁉？遊騎⁉？」
「本気かい、君は⁉？」
俺の出した条件に遊花は嬉しそうに頷く。
しかし、それを聞いた桜と夜は勢いよく俺に詰め寄った。

「何を考えてるのよ、アンタは⁉？遊花が危険な目にあってもいいの⁉？」
「良い訳ないだろ。だけど、ここで拒否したところで遊花は絶対に勝手に犯人を探すぞ？俺が犯人を探すのを止めないからな。そうすれば余計に危ない状況に陥る可能性がある。なら、分かる範囲の制限付きで許可した方がまだ安全だ」
「だけど、もしＮｏ．の攻撃を受けたら遊花ちゃんは……」
「それは俺も危惧するところではあるんだが……心配には及ばないと思うぞ？」
「えっ？」
　俺の言葉に夜が不思議そうに首を傾げる。
　そんな夜を横目に俺はもう１度遊花に向き直った。
「遊花。もう１つ、条件だ」
「……はい」
「Ｎｏ．からの攻撃だけは一切受けるな」
「⁉？それって……」
「俺でもＮｏ．の攻撃を受けるのは結構危ないんだ。俺よりも華奢な遊花が受けたら、危険なんてレベルじゃない。だからこそ、ノーダメージでＮｏ．を攻略して見せろ。できなかった時は、犯人探しからどんな手を使ってでも抜けさせる。できるな？」
　試すような俺の言葉に、遊花はしばらくの間きょとんとした表情をし、それから確かな自信を持った顔で笑った。
「勿論です⁉？耐えることなら、私は誰にも負けない自信があります⁉？どんなＮｏ．が相手でも、ノーダメージで攻略して見せます⁉？」
　そんな遊花の言葉に夜は怪訝な表情を浮かべたが、桜は仕方なさそうにため息を吐いた。
　Ｎｏ．の攻撃を受けるのが危険なら、Ｎｏ．の攻撃だけでも受けなければいい。
　完全に屁理屈だが遊花の防御特化とまで言える防御能力ならきっと成し遂げることができるだろう。

不安は確かにある。
だが、弟子が最も秀でている力を信じることができないで何が師匠か。
「そうと決まれば早速デッキを組み直さないと‼？師匠、手伝って貰っても構いませんか？」
「ああ。俺もついでに組み直すよ。遊花に心配をかけるわけにはいかないからな」
そういって、遊花の側で一緒にカードを広げる。
……本当は俺だって遊花を巻き込みたくなんてない。
だけど、気づいてしまったら、もう避けることはできない。
それならせめて、ちゃんと守ってやれるように全力を尽くさないとな。
俺は心の中で誓いを新たにし、遊花と共にデッキを組んでいくのだった。

第６８話　混沌の証

☆

「ご馳走様でした」
「はい、お粗末様でした。師匠、食後のコーヒーはいかがですか？」
「ありがとう、いただくよ」
「遊花、私もコーヒー欲しい」
「分かりました。じゃあ少し待っててくださいね」
「……ホント、こんな状況になっても相変わらずよね、アンタ達は」
嬉しそうにコーヒーを注ぎに行った遊花を見て、桜が呆れながら朝食の玉子焼きを口に入れる。
Ｎｏ．の件を遊花達に知られた翌日。
俺達はいつもと変わらない朝を過ごしていた。
いくらＮｏ．の件に関わることになったとはいえ、こんな朝早くから動くわけじゃないんだから当たり前なんだけどな。
「それにしても、デュエルアカデミアの中にまでＮｏ．が入り込んでるなんて思わなかった。ごめん」
Ｎｏ．を所持している者がデュエルアカデミアの中にまでいたということを聞いた闇が項垂れる。
遊花達が闇のカードを知ったことについては、昨日の内に闇にも話を通した。
闇曰く、いずれはそんな日が来ると思っていたらしい。
しかし、そのことに付随してＮｏ．がデュエルアカデミアにまで入り込んでいたという話を聞いた時には少し落ち込んだような表情を浮かべていた。
元々闇がデュエルアカデミアで特別講師をすることになったのは校長に頼みを聞いて貰う代わりにデュエルアカデミアの特別講師をするという約束があったのと、遊花達に闇のカードによる被害が及ばないように陰ながら守るためだったらしい。
しかし、結果としてそんな闇の目を掻い潜り闇のカードがデュエル

アカデミアにも入り込んでいたことに対して責任を感じているのだろう。
　無表情でも、真面目で心優しい闇には、少しでも自分の身内に危険が及んでしまう状況を見過ごしてしまったことが許せないのだろう。
　そんなの、闇が背負うものじゃないのにな。
「別に闇が謝ることでもないだろ？悪いのは闇のカードをばら撒いてる奴らなんだから」
「遊騎の言う通りよ。別にアンタの責任でＮｏ．って言うのが出回ってるわけじゃないんだから、気にしなくてもいいの。遊花だって怪我したわけじゃないんだから」
「遊騎……桜……」
　俺と桜の言葉に、闇が悲痛な表情を浮かべてこちらを見る。
　そんな闇に、遊花はリビングキッチンで注いできたコーヒーを正面に置きながら、優しい表情で首を振った。
「そうですよ。むしろ私達の方こそごめんなさいです。今まで闇先パイが守ってくれてたのに、気づけなくてごめんなさい」
「遊花……そんなの、気にしなくていい……私が勝手にやっただけ……」
「はい。だから、私も勝手に謝って、勝手に感謝するんですよ。いつも私達を守ってくれてありがとうございます。でも、これからは私達にも闇先パイが抱えてるものを少しは背負わせてくださいね」
「むぅ……遊花はズルい……そんな言い方をされたら断りにくい……」
　遊花の言葉に闇が困ったように笑うと、遊花がテーブルに置いたコーヒーを飲んで目を逸らす。
　きっと、遊花の真っ直ぐな気持ちが恥ずかしかったんだろう。
「さてと、それじゃあ俺はそろそろ行くかな」
「えっ？師匠、もう行くんですか？いつもより早いと思うんですが……」
　遊花から渡されたコーヒーを飲み干し、席を立った俺を見て遊花が首を傾げる。

そんな遊花に俺は自分の荷物を纏めながら答える。
「ああ、仕事の前に少しだけ見回りでもしてみようと思ってな。今まで見回りをしてたのは夕方以降だったが、そこで手掛かりを得られなかったなら朝方に何かが起きてる可能性もあるんじゃないかと思ってな」
「なら、私も行く……」
「いや、闇は遊花達に闇のカードについて説明してやってくれ。俺もそこまで詳しいわけじゃないから大まかな説明しかできなかったし。それに、俺の仕事ならまだ小回りは効くが、闇達はそういうわけにはいかないだろう？なら、俺が適任ってだけの話だよ。んじゃ、行くか」
「あ、待ってください‼？」
「ん？どうした？」
そう言ってリビングを出ようとする俺を、遊花が引き止める。
俺が首を傾げながら振り返ると、遊花が俺の前まで歩いてきて俺の手を取って心配そうに握りしめた。
「お気をつけて。無茶だけは、しないでくださいね」
「……ああ、分かってるよ」
「アンタはすぐに無茶するんだから、ヤバそうならすぐに連絡するのよ？」
「ん、何かあったらすぐに行く」
「分かってるって。んじゃ、いってきます」
「……はい、いってらっしゃい。師匠」
遊花の頭を軽く撫で、桜と闇に苦笑を返しながら栗原家を出て、自分のバイクに跨りヘルメットを被る。
「さて、それじゃあ無理せず、捜査開始といきますか」
そんなことを呟きながら俺はケルンの街を走り出すのだった。

ーーーーーーー

「んーこの辺りではそんなに変わった感じはないか。まあ、あまりくるエリアじゃないから、普段の様子もよく分からないが」

バイクから降り、少し伸びをしながら周囲の様子を見渡す。
俺の目の前に広がるのは太陽の光を受けて燦々と輝く巨大な海原と、その海原を豪快に滑るいくつもの船舶。
ここは決闘都市『ケルン』に存在する港湾エリア。
決闘都市『ケルン』はいくつかの大きなエリアに分かれているが、海を越えて『ケルン』に入ろうとするならば間違いなく通ることになるのがこの港湾エリアだ。
俺や遊花達が住んでいる中央エリアからは少し離れており、バイク等の交通手段を使わないと来るのに時間がかかるし、闇のカードが頻繁にばら撒かれていることから、海を越えて外部から入り込んでいるとは考えにくかったから今までは今まで来ることもなかったが、だからといってばら撒いている奴らが潜伏していたり、闇のカードが全くばら撒かれていないとは思えない。
今度はこういう場所も捜索範囲に加えた方がいいのかも知れないななどと思いながら、辺りを見渡していると、どこかから言い争うような声が聞こえてきた。
「ですから、私はこれからデュエルアカデミアに行かなければならないので……」
「そう言わずに、な、俺と遊ぼうぜ？デュエルアカデミアなんてサボっちまえばいいじゃんか。俺と遊んでくれたら珍しいカードを嬢ちゃんにあげるからさ」
「ん？なんだ？」
声が聞こえてきた方を見ると、そこには船乗りの格好をした男に絡まれているデュエルアカデミアの制服を着た少女がいた。
船乗りの男は下心満載の笑顔で少女に詰め寄り、少女は困った表情を浮かべていた。
こんな朝っぱらからナンパされるとは災難だなと思いながらも、このまま放っておくのも後味が悪いため少女達に近づいていく。
近づきながら少女の顔を確認すると、そこにいたのは想定外の人物だった。
「ん？もしかして、桜糀か？」

「えっ？この声……結束さん、ですか？」
ナンパされていた少女ーーー遊花の友人である桜糀が驚いた表情で俺の方を見る。
桜糀　紅葉。
遊花の為に『Ｎａｔｕｒａｌ』で開いた大会の１回戦で俺と戦い、遊花の為に俺を試し、遊花の師匠を辞めさせようとした少女だ。
あれから会うこともなかったが、まさかこんなところで再開するとは思わなかった。
「何故このようなところに結束さんが……」
「あーちょっと野暮用でな。桜糀はここら辺に住んでるのか？デュエルアカデミアからは少し遠いと思うが」
「は、はい。この先にあるバス停でバスに乗り、デュエルアカデミアに通学しております」
「へぇ、そうか。偉いんだな、桜糀は」
俺が関心したように頷くと。桜糀が気まずそうに顔を伏せる。
まあ、演技とはいえあれだけ貶した相手が目の前にいるから気まずいのだろう。
それに、状況が状況だしな。
「おいおい、兄ちゃん。知り合いだか何だか知らねぇが、その嬢ちゃんは俺と今から遊びに行くんだよ。邪魔しないで貰えねぇか？」
そう言って、桜糀にナンパをしていた男が不機嫌そうな表情を浮かべる。
桜糀をナンパしていたのは茶髪のネープレスで無色のストライプが入った制服に身を包んだガタイのいい男。
乗組員はストライプの間の色で部署が変わるという話を聞いたことがあるが、無色は確か甲板部だったハズだ。
荷物の積み下ろしとかをしているハズだから、そりゃあガタイもいいだろう。
「とか言ってるけど、実際はどうなんだ、桜糀」
「そのような事実はございません。私はデュエルアカデミアに行かなければなりませんし、第一貴方のように礼儀がない方の相手をするな

どありえません。貴方様の相手をするぐらいなら、デュエルアカデミアを休んで結束さんに相手をして貰います」
「だ、そうだ。脈もなさそうだし、諦めたらどうだ？」
桜糀のはっきりとした否定の言葉を聞いて船乗りの男を見る。
桜糀のはっきりとした否定の言葉を聞き、男は一瞬唖然としたが、すぐに表情を切り替えて面白そうに笑った。
「ハハハハハ‼？ますます気に入ったぜ‼？どうしても嬢ちゃんと遊びたくなっちまった‼？」
「マジか、お前……」
あれだけはっきりと拒絶されたのに心底面白そうに笑う船乗りの男に、俺は表情を引き攣らせる。
「よし‼？なら、こうしよう‼？兄ちゃん、俺とデュエルだ‼？」
「はあ？何で俺が……」
「兄ちゃんが勝てば、嬢ちゃんは兄ちゃんの物だ。だが、俺が勝ったら嬢ちゃんは俺が貰うぜ‼？」
「……なんで俺が巻き込まれるんだよ……」
船乗りの男は一方的にそう言ってデュエルディスクを構える。
あまりにあんまりな展開に背後にいる桜糀に視線をやると、桜糀は困ったような申し訳なさそうな表情を浮かべていた。
「……はぁ、仕方ないか」
俺はため息を吐きながらデュエルディスクを起動する。
多分このままデュエルを受けなければこの男はこのまま桜糀に付き纏うだろう。
なら、さっさと俺が倒して諦めさせた方が楽だ。
「分かった。そのデュエル、受けてやる。俺に負けたら潔く桜糀のことを諦めろよ」
「へっ、そうこなくっちゃなぁ‼？俺は水喰　鱗之助（みずはみ　りんのすけ）‼？狙った獲物は逃がさない男だ‼？」
「御託はいい。やろうぜ？」
『決闘‼？』

遊騎　ＬＰ８０００
鱗之助　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は貰うぜ‼？俺は手札から水精鱗（マーメイル）―アビスヒルデを墓地へ送り魔法カード、ワンフォーワン‼？デッキからレベル１モンスター１体を特殊召喚する‼？来やがれ、海皇子ネプトアビス‼？」

〈海皇子ネプトアビス〉☆１　海竜族　水属性
ＤＥＦ０

フィールドに現れたのは金色の矛を持つ男性のモンスター。
「さらに墓地に送られた水精鱗―アビスヒルデの効果発動‼？このカードが墓地へ送られた場合、同名カードは１ターンに１度手札から同名以外の水精鱗と名のついたモンスター１体を特殊召喚する‼？水精鱗（マーメイル）―アビスパイクを特殊召喚‼？」

〈水精鱗―アビスパイク〉☆４　魚族　水属性
ＤＥＦ８００

ネプトアビスに追従するように銀色の魚の鎧を纏った魚人が現れる。
どうやらこの男のデッキは見た目通り水属性が主体のデッキみたいだな。
「水精鱗―アビスパイクの効果発動‼？このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、手札の水属性モンスター１体を墓地へ捨てて、デッキからレベル３の水属性モンスター１体を手札に加える‼？俺は手札から水精鱗（マーメイル）―アビスグンデを捨て、デッキから海皇の狙撃兵を手札に加える‼？さらに墓地に送られた水精鱗―アビスグンデの効果発動‼？このカードが墓地へ送られた場合、同名カードは１ターンに１度

墓地から同名以外の水精鱗と名のついたモンスター1体を特殊召喚する!!?水精鱗―アビスヒルデを特殊召喚!!?」

〈水精鱗―アビスヒルデ〉☆3　水族　水属性
ＤＥＦ４００

さらにアビスパイクが咆哮をあげると、アビスパイクの背後から現れたのは魚の尾ビレを持つ妖精。

まだ召喚権も使われてないのにモンスターが3体……これはまだまだ展開されそうだな。

「デッキから海皇の竜騎隊を墓地へ送って海皇子ネプトアビスの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度デッキから同名カード以外の海皇モンスター1体を墓地へ送ってデッキから同名カード以外の海皇カード1枚を手札に加える!!?俺はデッキから2枚目の海皇の竜騎隊を手札に加える!!?そして墓地へ送られた海皇の竜騎隊の効果発動!!?このカードが水属性モンスターの効果を発動するために墓地へ送られた場合、デッキから同名カード以外の海竜族モンスター1体を手札に加える!!?俺はデッキからエクシーズスライドルフィンを手札に加える!!?」

「減った手札まで回復されたか」

「行くぜ!!?荒れ狂え!!?海をも喰らうサーキット!!?」

「リンク召喚か……」

鱗之助が正面に手を前に突き出すと、目の前に巨大なサーキットが現れる。

「召喚条件は魚族・海竜族・水族モンスター2体!!?俺は海皇子ネプトアビスと水精鱗―アビスヒルデの2体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?水精鱗(マーメイル)―サラキアビス!!?」

〈水精鱗―サラキアビス〉ＬＩＮＫ２　海竜族　水属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

ネプトアビスとアビスヒルデの２体がサーキットの中に消え、代わりに金色の矛を持つ紫髪の女神が現れる。
「まだまだ行くぜ‼？俺は海皇の竜騎隊を召喚‼？」
〈海皇の竜騎隊〉☆４　海竜族　水属性
ＡＴＫ１８００

さらに、サラキアビスに付き従うように海竜に乗った魚人が姿を現す。
レベル４モンスターが２体、ということは……
「俺は水属性レベル４モンスターの水精鱗（マーメイル）―アビスパイクと海皇の竜騎隊でオーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」
アビスパイクと竜騎隊が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、そこに現れたのは鮫のような身体を持つ巨大な白龍。
「獰猛なる力で世界を安寧に導け‼？来な‼？ババムートシャーク‼？」
〈ババムートシャーク〉★４　海竜族　水属性
ＡＴＫ２６００

「ババムートシャーク……」
「ババムートシャークの効果発動‼？ステイブルシャウト‼？１ターンに１度、オーバーレイユニットを１つ取り除き、ＥＸデッキから水属性・ランク３以下のエクシーズモンスター１体を特殊召喚する‼？ただし、このターンこのカードは攻撃できなくなるが、先攻なら関係ねぇ。来な、水精鱗（マーメイル）―アビストリーテ‼？」

〈水精鱗―アビストリーテ〉★３　海竜族　水属性
ＤＥＦ２８００

ババムートシャークが咆哮をあげると、その咆哮に呼び寄せられるかのようにイルカの尾を持つ紫髪の女神が現れた。
「再び墓地へ送られた海皇の竜騎隊の効果発動!!?俺はデッキから海皇の重装兵を手札に加える。そして水精鱗―サラキアビスの永続効果、ウォータープロテクションにより、このカードのリンク先のモンスターの攻撃力・守備力は５００ポイントアップする!!?」

ババムートシャーク
ＡＴＫ２６００→３１００

水精鱗―アビストリーテ
ＤＥＦ２８００→３３００

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ。さあ、兄ちゃん。アンタの男気を見せてみな」

遊騎　ＬＰ８０００　手札５
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　☆　ー　ー　ー　ー
ー　ー　○　ー　□　ー　ー　ー
ー　ー　▲　ー　ー　ー　ー　ー
鱗之助　ＬＰ８０００　手札３

「俺のターン、ドロー!!?よし、魔法カード、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローする!!?」
「っ!!?何だと!!?」
「さっきの説明で海皇モンスターは水属性モンスターの効果を発動す

るために墓地へ送られた場合に効果があることは分かっているし、水精鱗にも手札を捨てる効果があることも分かった。そんな状況でアンタの手札に海皇モンスターなんて残しておけるかよ。俺は5枚、アンタは3枚捨てて同じ枚数ドローだ

」

「姑息な手を……」

「わざわざアンタの土俵でデュエルをしてやる義理はないからな。俺は墓地に送られたくず鉄の像、それにチェーンして妖刀竹光の効果発動!!?」

「チッ、墓地に送られた時に発動するカードがあったのか……」

「妖刀竹光の効果でデッキから妖刀竹光以外の竹光カードをデッキから手札に加える!!?俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える!!?さらにくず鉄の像の効果発動!!?このカードが墓地へ送られた場合、自分の墓地のジャンクモンスター1体を対象としてそのモンスターを守備表示で特殊召喚する!!?甦れ、チューナーモンスター、ジャンクチェンジャー!!?」

〈ジャンクチェンジャー〉☆3　戦士族　地属性

ＤＥＦ９００

フィールドに現れたのは鋼鉄の身体を持つロボットのような戦士。

「ジャンクチェンジャーの効果発動!!?このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、フィールドのジャンクモンスター1体を対象として2つの効果から1つを選択して発動できる。対象のモンスターのレベルを1つ上げるか、対象のモンスターのレベルを1つ下げる。俺は2つ目の効果を使用し、ジャンクチェンジャーのレベルを1つ上げる!!?」

ジャンクチェンジャー

☆3→4

ジャンクチェンジャーの身体が赤く輝き、レベルが1つ上がる。
「俺はH・C（ヒロイックチャレンジャー）サウザンドブレードを召喚!!?」
〈H・C　サウザンドブレード〉☆4　戦士族　地属性
ATK1300

フィールドに頭巾を被り、背中に何本もの刀を背負った戦士のモンスターが現れる。
「H・C　サウザンドブレードの効果発動!!?1ターンに1度手札にあるヒロイックカードを捨ててデッキからヒロイックモンスターを特殊召喚する!!?俺は手札にあるH・C（ヒロイックチャレンジャー）エクストラソードを捨てて、来い、H・C（ヒロイックチャレンジャー）クラスプナイフ!!?」
〈H・C　クラスプナイフ〉☆1　戦士族　地属性
DEF100

サウザンドブレードに導かれ、フィールドに現れたのは鉄の鎧を見に纏った巨大なナイフを持つ戦士。
「この効果を使ったH・C　サウザンドブレードは守備表示になる」
H・C　サウザンドブレード
ATK1300→DEF1100

クラスプナイフを呼び出したサウザンドブレードは膝をつき、防御の構えを取る。
「さらにH・C　クラスプナイフの効果発動!!?このカードがH・Cと名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した時、デッキからH・Cと名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる!!?俺はデッキからH・C（ヒロイックチャレンジャー）ダブルランスを手札に加える。そして、斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
「リンク召喚か……」

俺が正面に手を前に突き出すと、目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター２体!!?俺はＨ・Ｃ　サウザンドブレードとＨ・Ｃ　クラスプナイフの２体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?追想に生きる王女!!?リンク２!!?聖騎士の追想　イゾルデ!!?」
〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?
サウザンドブレードとクラスプナイフがサーキットの中に消え、金髪と白髪の２人の女性が現れる。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?リンクレカレクション!!?リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター１体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキからＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）ソードシールドを手札に加える!!?聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動!!?メモリーズギフト!!?デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター１体をデッキから特殊召喚する!!?俺はデッキから妖刀竹光、ビッグバンシュートを墓地に送り、ヒーローキッズを特殊召喚!!?」
〈ヒーローキッズ〉☆２　戦士族　地属性
ＤＥＦ６００
イゾルデに導かれ、姿を現したのはＳＦで出てきそうなバトルスーツを着た小さな戦士。
「墓地に送られた妖刀竹光の効果、それにチェーンしてヒーローキッズの効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した時、デッキから同

名カードを任意の枚数特殊召喚する事ができる‼?俺はデッキから２体のヒーローキッズを特殊召喚する‼?」

〈ヒーローキッズ〉☆２　戦士族　地属性
ＤＥＦ６００

ヒーローキッズがバトルスーツを操作し通信を行うと、呼び出しに応じた２体のヒーローキッズがフィールドに現れる。
「チッ、雑魚がわらわらと集まって来やがる」
「そして墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから折れ竹光を手札に加える。まだまだ終わらないぜ?ヒーローキッズ１体をリリースして魔法カード、モンスターゲート‼?自分フィールドのモンスター１体をリリースして通常召喚可能なモンスターが出るまで自分のデッキの上からカードをめくり、そのモンスターを特殊召喚し、残りのめくったカードは全て墓地へ送る‼?１枚目、閃光の双剣―トライス、２枚目、融合、３枚目、キングスナイト‼?通常召喚可能なモンスターのため、キングスナイトを特殊召喚だ‼?」

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００
ヒーローキッズの姿が消え、代わりに現れたのは黄金の鎧を身に纏った騎士。
「さて、初陣だ。斬り開け‼?運命に抗うサーキット‼?」
「またリンク召喚か……」
「召喚条件はカード名が異なるモンスターモンスター２体‼?俺はヒーローキッズとキングスナイトの２体をリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?リンク召喚‼?業火の剣豪‼?リンク２‼?剛炎の剣士‼?」

〈剛炎の剣士〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　炎属性
ＡＴＫ１３００　↙?　↑

ヒーローキッズとキングスナイトがサーキットの中に消え、二振りの赤い大剣を構えた戦士が姿を現わす。
「剛炎の剣士の永続効果、業火招来‼?フィールドの戦士族モンスターの攻撃力は５００ポイントアップする‼?」
剛炎の剣士が雄叫びを上げると、俺のモンスターが炎のオーラを身に纏う。

ジャンクチェンジャー
ＡＴＫ１５００→２０００

聖騎士の追想　イゾルデ
ＡＴＫ１６００→２１００

ヒーローキッズ
ＡＴＫ３００→８００

剛炎の剣士
ＡＴＫ１３００→１８００

「全体を強化するリンクモンスターか」
「まだまだ行くぜ‼?俺はレベル２、ヒーローキッズに、レベル４、チューナーモンスター、ジャンクチェンジャーをチューニング‼?」
「来るか、シンクロ召喚‼?」
ジャンクチェンジャーが光の輪になり、ヒーローキッズが小さな星に変わり、光の道になる。
「夜空に輝く星屑は、希望の道を照らし出す‼?シンクロ召喚‼?光芒を描け、スターダストチャージウォリアー‼?」
〈スターダストチャージウォリアー〉☆６　戦士族　風属性
ＡＴＫ２０００→２５００

光の道が輝くと、その中から翼にいくつもの砲身を持つ空色の戦士が現れた。
「スターダストチャージウォリアーの効果発動!!?スターリーチャージ!!?このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分はデッキから1枚ドローする!!?そして装備魔法、月鏡の盾をスターダストチャージウォリアーに装備!!?」
チャージウォリアーの手元に満月のような綺麗な金色の輝きを放つ盾が現れる。
「このカードの装備モンスターが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時のみ、装備モンスターの攻撃力・守備力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力と守備力の内、高い方の数値を＋１００ポイントアップした数値になる!!?」
「ほう、戦闘じゃ絶対に勝てるってわけか」
「そしてスターダストチャージウォリアーにはもう1つ効果がある。スターダストチャージウォリアーの永続効果、アナアレーションシューティング!!?このカードは特殊召喚された相手モンスター全てに1回ずつ攻撃できる!!?」
「っ!?何だと!?」
「行くぞ、バトル!!?スターダストチャージウォリアーで水精鱗―アビストリーテを攻撃!!?ファーストフルムーンドロップ!!?ダメージ計算時、月鏡の盾によりスターダストチャージウォリアーは水精鱗―アビストリーテの守備力を＋１００ポイントアップした数値になる!!?」

スターダストチャージウォリアー
ＡＴＫ２５００→３４００

水流を盾にアビストリーテは逃げようとするが、チャージウォリアーは水流の隙間を縫い、翼の砲身でアビストリーテを撃ち抜いた。
「クッ……やるじゃねぇか。破壊された水精鱗―アビストリーテの

効果発動!!?このカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地から同名カード以外の水精鱗と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚できる!!?甦れ、水精鱗―アビスヒルデ!!?」

〈水精鱗―アビスヒルデ〉☆3　水族　水属性
ＤＥＦ４００

「蘇ろうが関係ない。二撃目だ!!?スターダストチャージウォリアーで水精鱗―アビスヒルデを攻撃!!?セカンドフルムーンドロップ!!?」

スターダストチャージウォリアー
ＡＴＫ２５００→１４００

再び姿を現したアビスヒルデをチャージウォリアーが撃ち抜いて消滅させる。
「まだまだいくぜ、三撃目だ!!?スターダストチャージウォリアーでババムートシャークを攻撃!!?サードフルムーンドロップ!!?」

スターダストチャージウォリアー
ＡＴＫ２５００→３２００

ババムートシャークが咆哮を上げながら、チャージウォリアーに喰らい付こうとするが、チャージウォリアーが翼の砲身をババムートシャークの口に砲身を突っ込み、砲撃をして消滅させた。

鱗之助　ＬＰ８０００→７９００

「クッ……」
「四撃目!!?スターダストチャージウォリアーで水精鱗―サラキアビスを攻撃!!?フォースフルムーンドロップ!!?」

「チッ、水精鱗―サラキアビスの効果発動!!?オーシャンカーラント!!?相手ターンに手札を1枚墓地へ送って、デッキから水精鱗モンスター1体を手札に加える!!?手札を1枚捨て、デッキから水精鱗(マーメイル)―メガロアビスを手札に加える!!?」

スターダストチャージウォリアー
ＡＴＫ２５００→１７００

サラキアビスは水流を操り、防壁を作るがチャージウォリアーの放った砲撃がその防壁を貫き、サラキアビスの身体を貫いた。

鱗之助　ＬＰ７９００→７８００

「水精鱗―サラキアビスの効果発動!!?アクアリターン!!?このカードが相手モンスターの攻撃または相手の効果で破壊された場合、デッキから水属性モンスターを1体を墓地へ送り、自分の墓地の水属性モンスター1体を対象としてそのモンスターを守備表示で特殊召喚する!!?俺はデッキから海皇の重装兵を墓地へ送り、甦れ、水精鱗―アビストリーテ!!?」

〈水精鱗―アビストリーテ〉★３　海竜族　水属性
ＤＥＦ２８００

「っ、また蘇ってきたか……」
「それだけじゃねぇぜ。墓地に送られた海皇の重装兵の効果発動!!?このカードが水属性モンスターの効果を発動するために墓地へ送られた場合、相手フィールドの表側表示のカード1枚を対象とし、その相手の表側表示のカードを破壊する!!?スターダストチャージウォリアーは破壊させて貰うぜ!!?」
「何っ!?!?」
爆散したサラキアビスの爆煙の中から重装備の魚人がチャージ

ウォリアーに突撃し、共に爆散する。
一気にライフを削りに行きたかったが、俺のモンスターに復活したアビストリーテを超えることができない。
「墓地に送られた月鏡の盾の効果発動!!?表側表示のこのカードがフィールドから墓地へ送られた場合、５００ライフポイントを払ってこのカードをデッキの一番上または一番下に戻す。俺は５００ライフポイントを支払い月鏡の盾をデッキの一番上に戻す」

遊騎　ＬＰ８０００→７５００

「メインフェイズ２。俺は聖騎士の追想　イゾルデに装備魔法、折れ竹光を装備する。さらに魔法カード黄金色の竹光を発動!!?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを２枚ドローする!!?」
「チッ、また月鏡の盾が手札に入ったか」
「装備魔法、月鏡の盾を聖騎士の追想　イゾルデに装備!!?カードを２枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ７５００　手札３
ー▲△△▲　ー
ーー☆ーー
☆　ー
ー□ーーー
ーー▲ーー　ー
鱗之助　ＬＰ７８００　手札３

「俺のターン、ドロー!!?魔法カード、サルベージ!!?自分の墓地の攻撃力１５００以下の水属性モンスター２体を選択して手札に加える!!?俺は墓地から海皇子ネプトアビスと水精鱗―アビスグンデを手札に加える!!?そして海皇子ネプトアビスを召喚!!?」

〈海皇子ネプトアビス〉☆1　海竜族　水属性
ＡＴＫ８００

「っ、そいつは……」
「デッキから海皇の狙撃兵を墓地へ送って海皇子ネプトアビスの効果発動!!?俺はデッキから2枚目の海皇の重装兵を手札に加える!!?そして墓地へ送られた海皇の狙撃兵の効果発動!!?このカードが水属性モンスターの効果を発動するために墓地へ送られた時、相手フィールド上にセットされたカード1枚を選択して破壊する!!?兄ちゃんの左端のセットカードを破壊して貰うぜ!!?」
「くっ、ピンポイントガードが……」
「これだけじゃ終わらなねぇぜ!!?手札の海皇の重装兵と水精鱗―アビスグンデを捨てて水精鱗―メガロアビスの効果発動!!?手札からこのカード以外の水属性モンスター2体を墓地へ捨ててこのカードを手札から特殊召喚する!!?来やがれ、水精鱗―メガロアビス!!?」

〈水精鱗―メガロアビス〉☆7　海竜族　水属性
ＡＴＫ２４００

フィールドに現れたのは白い鎧を纏ったホオジロザメのモンスター。
しかも、海皇の重装兵と水精鱗―アビスグンデがコストにされたってことは……
「海皇の重装兵の効果、水精鱗―メガロアビスの効果、水精鱗―アビスグンデの効果発動!!?水精鱗―アビスグンデの効果で墓地より甦れ、水精鱗―アビスパイク!!?」

〈水精鱗―アビスパイク〉☆4　魚族　水属性
ＤＥＦ８００

「次に水精鱗―メガロアビスの効果発動!!?アビスシャウト!!?このカードの効果で特殊召喚に成功した時、デッキからアビス魔法・罠カード1枚を手札に加える。俺はデッキから罠カード、アビスコールを手札に加える!!?最後に海皇の重装兵の効果発動!!?聖騎士の追想　イゾルデを破壊する!!?」
「くっ!!?すまない、イゾルデ……俺は再び墓地に送られた月鏡の盾の効果発動!!?俺は５００ライフポイントを支払い月鏡の盾をデッキの一番下に戻す」

遊騎　ＬＰ７５００→７０００

「ほう、このままデッキの上に固定しねぇのか。まあいい。水精鱗―メガロアビスの効果発動!!?アビスアトラサティ!!?このカード以外の自分フィールドの表側攻撃表示の水属性モンスター1体をリリースしてこのターン、このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる!!?俺は海皇子ネプトアビスをリリースして水精鱗―メガロアビスに2回攻撃を付与する!!?」
「っ、2回攻撃か……」
「それだけじゃねぇぜ!!?墓地に送られた海皇子ネプトアビスの効果発動!!?このカードが水属性モンスターの効果を発動するために墓地へ送られた場合、同名カード以外の自分の墓地の海皇モンスター1体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?」
「何っ!?」
「甦れ、海皇の竜騎隊!!?」

〈海皇の竜騎隊〉☆４　海竜族　水属性
ＡＴＫ１８００

再びフィールドに現れる竜騎隊。
それを見て鱗之助がニヤリと笑った。
「いい機会だ。兄ちゃんも別嬪な嬢ちゃんもよく見とけよ？同じもん

じゃぁねぇが。俺が嬢ちゃんにプレゼントしようとした素晴らしいカードを見せてやるよ」
「素晴らしいカード？」
「よく意味が分かりませんが……」
「安心しな、嬢ちゃんもきっと気にいると思うぜ？もっとも……兄ちゃんは怪我しちまうかも知れねぇがな」
「怪我、だと？……っ、まさか⁉？」
鱗之助の言葉に不穏な気配を感じ、眉をひそめた瞬間、俺の身体を悪寒が駆け抜ける。
間違いない、この感覚は……‼？
「俺は水属性レベル４モンスターの水精鱗―アビスパイクと海皇の竜騎隊でオーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」
アビスパイクと竜騎隊が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、そこに現れたのは蜘蛛の姿を持つ鮫のような深海の竜。
「来な、Ｎｏ．３７‼？獰猛なる捕食者よ‼？希望を識る者に絶望の姿を見せよ‼？希望織竜スパイダーシャーク‼？」

〈Ｎｏ．３７希望織竜スパイダーシャーク〉★４　海竜族　水属性
ＡＴＫ２６００

「やっぱり、Ｎｏ．‼？」
「Ｎｏ．……ですか？結束さんはご存知なのですか？」
現れたスパイダーシャークを警戒する俺に桜糀が困惑した様子で質問を投げかけてくるが、あいにくその質問に答える余裕はない。
警戒する俺を見て、鱗之助は楽しそうに笑みを浮かべる。
「あん？何だよ、兄ちゃんは知ってんのか。すげぇよな、コイツらは。とんでもねぇパワーを秘めてやがる。コイツらがいれば、全てを思い通りにすることだってできるんだ‼？」

「っ、Ｎｏ．に操られてる……ってわけでもないようだな」
言動は支離滅裂だが、鱗之助の目にははっきりと意思が宿っている。
操られていない……それがいいことってわけでもなさそうだがな。
俺の言葉に、鱗之助は明らかに不機嫌そうな表情を浮かべて俺を睨む。
「操られる？そんな軟弱な奴らと俺を一緒にしてんじゃねぇ‼？自分を偽り、取り繕うからＮｏ．程度に呑み込まれんだよ‼？自分の欲望を曝け出しちまえば、自分の欲望に取り込まれることなんてねぇんだからよぉ‼？」
そういって不気味に笑う鱗之助を見て、後ろにいる桜糀が半歩下がる。
確かに鱗之助はＮｏ．には操られていない。
だが、Ｎｏ．に操られていなくとも、鱗之助は自分の欲望の赴くままに動いてＮｏ．を使用している。
それは、Ｎｏ．に操られている人間と何が違うのだろうか？
危険だ……こいつはここで倒さないと間違いなく街中に被害が及ぶ。
「バトル‼？Ｎｏ．３７希望織竜スパイダーシャークで剛炎の剣士を攻撃‼？この瞬間、Ｎｏ．３７希望織竜スパイダーシャークの効果発動‼？ストリングスウェーブ‼？１ターンに１度、自分または相手のモンスターの攻撃宣言時、オーバーレイユニットを１つ取り除き、相手フィールドの全てのモンスターの攻撃力はターン終了時まで１０００ポイントダウンする‼？」
「っ、相手モンスター全体を弱体化させるＮｏ．‼？」
スパイダーシャークが口から糸を吐くと、その糸が波打つように剛炎の剣士を縛り付け、動きを封じ込める。

剛炎の剣士
ＡＴＫ１８００→８００

「消し飛ばせ、Ｎｏ．３７希望織竜スパイダーシャーク‼？ヴェノムタイド‼？」
動きを封じ込められた剛炎の剣士に、スパイダーシャークが毒々しい津波を発生させる。
っ、この攻撃は……⁉？
「っ、桜糀‼？」
「えっ⁉？」
俺は後ろにいた桜糀を突き飛ばし、毒の津波から庇うように桜糀に覆い被さる。
その瞬間、スパイダーシャークが放った津波が剛炎の剣士を呑み込んで、溶かし尽くし、さらに少量の毒の津波の余波が俺の身体を襲った。
「ぐっ……あああっ⁉？」
「結束さん⁉？」

遊騎　ＬＰ７０００→５２００

身体中を焼けるような痛みが駆け抜ける。
苦痛に喘ぐ俺を見て、桜糀が悲痛そうな表情を浮かべ、鱗之助が愉快そうに笑った。
「はははは‼？軟弱な割には男気があるじゃねぇか‼？」
「っ、貴方は‼？」
「大丈夫、だ。桜糀には、当たらなかったみたいだな。良かった……」
「結束さん……私などのために……」
「心配すんな、この程度なら、まだ大丈夫だからさ」
立ち上がり、精一杯不敵に笑ってみせる俺に、桜糀が泣きそうになる。
……正直、桜糀には1人で逃げてもらいたいんだが……こいつの性格上、逃げてなんかくれないよな。

このままだと、桜糀が攻撃に巻き込まれちまう。
早めに決着をつけねぇとな……
「破壊された剛炎の剣士の効果、それにチェーンしてＨ・Ｃサウザンドブレードの効果発動!!?Ｈ・Ｃサウザンドブレードの効果でこのカードが墓地に存在し、戦闘・効果で自分がダメージを受けた時、このカードを墓地から攻撃表示で特殊召喚する!!?」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

俺のフィールドに再びサウザンドブレードが現れる。
「さらに剛炎の剣士の効果発動!!?転生魂火!!?リンク召喚したこのカードが戦闘または相手の効果で破壊された場合、リンクモンスター以外の自分の墓地の戦士族モンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは、フィールドから離れた場合に除外される!!?甦れ、Ｈ・Ｃ　エクストラソード!!?」

〈Ｈ・Ｃ　エクストラソード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１０００

さらにサウザンドブレードと並び立つように銀色の鎧を身に纏った二刀流の戦士が現れた。
「蘇生効果があったか。だが、攻撃表示だなんて迂闊すぎだ!!?水精鱗―メガロアビスでＨ・Ｃ　サウザンドブレードを攻撃!!?メガロブレード!!?」
メガロアビスが手にした大剣をサウザンドブレードに振り下ろす。
だが、そんな分かりきった攻撃を易々と喰らうわけがない!!?
「手札に存在するＨ・Ｃソードシールドの効果を発動!!?ヒロイックモンスターが存在する時に手札から墓地に送ることでこのターン、戦闘によって発生するダメージは０になり、自分フィールド上のヒロ

イックモンスターは戦闘で破壊されない!!?」
「チッ、そんなモンスターを持ってやがったのか!!?」
サウザンドブレードの腕に剣と盾が融合した武器が現れ、メガロアビスの攻撃を受け止める。
これでこのターン、これ以上やられる心配はない。
「チッ、ここでやられておけばよかったのによぉ。メインフェイズ2、俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ５２００　手札２
ー▲ーーー　ー
ー○○ーー
ー　○
ー□ー○ー
ー▲▲▲ー　ー
鱗之助　ＬＰ７８００　手札１

「俺のターン、ドロー!!?」
カードをドローした瞬間、俺のＥＸデッキから闇が溢れ出し始める。
……正直言って使うのは癪だが、今の俺の手札であのフィールドを突破するには使うしかないか。
「仕方ねぇ、乗せられてやるよ。Ｈ・Ｃ　サウザンドブレードの効果発動!!?手札からＨ・Ｃ　ダブルランスを捨て、デッキからＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）強襲のハルベルトを特殊召喚!!?この効果を使ったＨ・Ｃ　サウザンドブレードは守備表示になる」

〈Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１８００

Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード
ＡＴＫ１３００→ＤＥＦ１１００

サウザンドブレードと並び立つように現れたのはハルバードを持った紫の鎧を纏った戦士。
これでレベル４モンスターが３体揃った。
これでエクシーズ召喚にーーー
「リバースカードオープン!!?罠発動!!?メタバース!!?」
「!!?そのカードは……」
「このカードはデッキからフィールド魔法を手札に加えるか、自分フィールドに発動することができる!!?俺はフィールド魔法、異次元の古戦場―サルガッソを発動!!?」
「異次元の古戦場―サルガッソ、だと?」
鱗之助がフィールド魔法を発動すると、辺りが損壊した航空母艦などが浮遊する船の墓場に変わる。
何故このタイミングでフィールド魔法を……
「どうしてこのタイミングでフィールド魔法を発動したのかって顔をしてるな?なら、教えてやる。フィールド魔法、異次元の古戦場―サルガッソの効果はエクシーズ召喚に成功する度に、そのプレイヤーは５００ポイントダメージを受け、また、エクシーズモンスターをコントロールしているプレイヤーは、それぞれの自分のエンドフェイズ毎に５００ポイントダメージを受けるからだ!!?」
「なっ!!?このタイミングでエクシーズメタのフィールド魔法だと!!?」
「テメェがエクシーズ召喚を狙ってることなんて分かりきってんだよ!!?さあ、自分から命を削ってくか、考えるんだなぁ!!?」
嘲笑うように鱗之助が声をあげる。
確かにこの状況でバーンダメージを受けるのは痛い。
だが、条件はあっちも同じ。
多少の痛みぐらい覚悟しなければ、この状況から逆転できはしない。
「臆しはしない!!?俺はクィーンズナイトを召喚!!?」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１５００

俺の前に赤い鎧を身に纏った女性の騎士が現れる。
俺はその姿を確認してから、正面に手をかざす。
「俺はレベル４のクィーンズナイト、Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード、Ｈ・Ｃ　エクストラソードでオーバーレイ!!?３体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
クィーンズナイト、サウザンドブレード、エクストラソードが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこから現れるのは異形の存在。
悪魔のような身体に白いツノ、黒い鉤爪を持つ異形の神。
「騎士の魂が宿し紋章よ!!?今こそその魂を示せ!!?現れろ!!?Ｎｏ．６９　紋章神（ゴッドメダリオン）コートオブアームズ!!?」

〈Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズ〉★４　サイキック族　光属性
ＡＴＫ２６００

「!?結束さんもＮｏ．を……」
「!!?ほう、兄ちゃんもＮｏ．を持ってたか。だが、エクシーズ召喚をしたことでフィールド魔法、異次元の古戦場―サルガッソの効果発動!!?５００ポイントのダメージを受けて貰うぜ!!?」
「ぐっ!!?」

遊騎　ＬＰ５２００→４７００

空から雷が降り注ぎ、俺の身体を貫く。
だけど、この程度で止まってなんかいられるかよ!!?
「まずはオーバーレイユニットになったＨ・Ｃ　エクストラソードの効果発動!!?このカードをオーバーレイユニットとしてエクシーズ

召喚したモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする‼?」

Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズ
ＡＴＫ２６００→３６００

「さらにＮｏ．６９　紋章神コートオブアームズの効果発動‼?ロストグローリー‼?このカードが特殊召喚に成功した時、このカード以外のフィールド上の全てのエクシーズモンスターの効果を無効にする‼?」
「っ⁉?何だと⁉?」
　コートオブアームズから謎の波動が放たれ、スパイダーシャークとアビストリーテが色を失っていく。
「さらにＮｏ．６９　紋章神コートオブアームズの効果発動‼?アームズドレイン‼?自分のメインフェイズ時、１ターンに１度、このカード以外のエクシーズモンスター１体を選択し、エンドフェイズ時まで、このカードは選択したモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得る‼?」
「なっ⁉?テメェ‼?」
「対象はＮｏ．３７希望織竜スパイダーシャークだ‼?お前の効果、いただくぜ‼?」
　コートオブアームズの鉤爪から光の糸が現れ、スパイダーシャークの身体を貫き、力を吸い取っていく。
「バトル‼?Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズでＮｏ．３７希望織竜スパイダーシャークを攻撃‼?この瞬間、Ｎｏ．３７希望織竜スパイダーシャークとなったＮｏ．６９　紋章神コートオブアームズ効果発動‼?ストリングスウェーブ‼?オーバーレイユニットを１つ取り除き、相手フィールドの全てのモンスターの攻撃力はターン終了時まで１０００ポイントダウンする‼?」
「チッ、猿真似野郎が‼?」
　コートオブアームズが腕から糸を放つと、その糸が鱗之助のモンスター達を縛り付け、動きを封じ込める。

Ｎｏ．３７希望織竜スパイダーシャーク
ＡＴＫ２６００→１６００

水精鱗―アビストリーテ
ＡＴＫ１６００→６００

水精鱗―メガロアビス
ＡＴＫ２４００→１４００

「やれ、Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズ‼？クレストマジェスティ・バージョン・ヴェノムタイド‼？」
「チッ、迎え撃て‼？Ｎｏ．３７希望織竜スパイダーシャーク‼？ヴェノムタイド‼？」
スパイダーシャークが毒々しい津波を発生させると、コートオブアームズも同じように毒々しい津波を発生させ、相殺させる。
相殺し、油断したスパイダーシャークに、コートオブアームズはさらにツノからエネルギー波を撃ち込み、消滅させた。

鱗之助　ＬＰ７８００→５８００

「ぐあぁぁぁ‼？」
「続けて、Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトで水精鱗―メガロアビスを攻撃‼？ライトニングハルバード‼？」
「ぐうっ‼？」

鱗之助　ＬＰ５８００→５４００

ハルベルトが動きを封じられたメガロアビスを雷を纏ったハルバードで貫く。
「Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトの効果発動‼？このカードが相手に戦闘

ダメージを与えた時にデッキからヒロイックカードを手札に加える。俺はデッキからＨ・Ｃ　ダブルランスを手札に加える‼？俺はこのままターンエンドだ‼？」

「テメェ、調子に乗ってんじゃねぇぞ‼？フィールド魔法、異次元の古戦場―サルガッソの効果発動‼？５００ポイントのダメージを受けろ‼？」

「っ‼？」

遊騎　ＬＰ４７００→４２００

遊騎　ＬＰ４２００　手札２

ー▲ーーー　ー

ーーー○ー

○　ー

ー□ーーー

ーー▲▲ー　▽

鱗之助　ＬＰ５４００　手札１

「テメェ、遊んでやればつけやがりやがって‼？遊びは終わりだ‼？その生意気な面が歪むまでぐちゃぐちゃにぶっ潰してやる‼？俺のターン、ドロー‼？手札の水精鱗（マーメイル）―アビスマンダーを捨てて水精鱗（マーメイル）ディニクアビスの効果発動‼？手札からこのカード以外の水属性モンスター１体を墓地へ捨ててこのカードを手札から特殊召喚する‼？来やがれ、水精鱗―ディニクアビス‼？」

〈水精鱗―ディニクアビス〉☆７　海竜族　水属性

ＤＥＦ２４００

フィールドに現れたのは銀色の鎧を纏った魚人。

「水精鱗―ディニクアビスの効果発動‼？このカードの効果で特殊召喚に成功した時、デッキからレベル４以下の水精鱗モンスター１体を

手札に加える!!?俺はデッキから水精鱗(マーメイル)アビスディーネを手札に加える!!?そして手札に加えた水精鱗—アビスディーネの効果発動!!?自分フィールド上に水精鱗と名のついたモンスターが存在する場合、このカードがカードの効果によってデッキまたは墓地から手札に加わった時、このカードを手札から特殊召喚できる!!?来やがれ、水精鱗—アビスディーネ!!?」

〈水精鱗—アビスディーネ〉☆3　水族　水属性
ＤＥＦ２００

さらにディニクアビスに導かれ、クリオネのような尾を持つ水の精霊が姿を現わす。
「そして、荒れ狂え!!?海をも喰らうサーキット!!?」
「またリンク召喚か……」
鱗之助が正面に手を前に突き出すと、再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は魚族・海竜族・水族モンスター2体!!?俺は水精鱗—アビスディーネと水精鱗—アビストリーテの2体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?再び姿を現せ!!?リンク2!!?水精鱗—サラキアビス!!?」

〈水精鱗—サラキアビス〉ＬＩＮＫ２　海竜族　水属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

「つ、またサラキアビスか……」
「まだだ!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?アビスコール!!?自分の墓地の水精鱗と名のついたモンスター3体を選択して表側守備表示で特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、攻撃宣言できず、エンドフェイズ時に破壊される!!?甦れ、水精鱗—アビスディーネ!!?水精鱗—アビスヒルデ!!?水精鱗—アビスグンデ!!?」

〈水精鱗―アビスディーネ〉☆３　水族　水属性
ＤＥＦ２００→７００
〈水精鱗―アビスヒルデ〉☆３　水族　水属性
ＤＥＦ４００
〈水精鱗―アビスグンデ〉☆３　水族　水属性
ＤＥＦ８００→１３００

アビスコールによってフィールドに現れる３体の水精鱗。
呼び出されたモンスターは３体共レベル３モンスター。
狙いはランク３エクシーズか？
「さらに墓地に存在する水精鱗―アビスマンダーを除外して効果発動‼？墓地のこのカードをゲームから除外し、２つの効果から１つを選択して発動できる。自分フィールド上の全ての水精鱗と名のついたモンスターのレベルを１つ上げるか、自分フィールド上の全ての水精鱗と名のついたモンスターのレベルを２つ上げる‼？」
「っ⁉？レベル上昇の効果だって⁉？」
「俺は１つ目の効果を選択し、自分フィールド上の全ての水精鱗と名のついたモンスターのレベルを１つ上げる‼？」

水精鱗―ディニクアビス
☆７→８

水精鱗―アビスディーネ
☆３→４

水精鱗―アビスヒルデ
☆３→４

水精鱗―アビスグンデ
☆３→４

鱗之助のフィールドの水精鱗のレベルが上昇する。
それと共に再び俺の身体を悪寒が駆け抜ける。
「っ、この感覚は!!?」
「後悔させてやるよ!!?俺に歯向ったことをな!!?俺はレベル４となった水精鱗―アビスディーネ、水精鱗―アビスヒルデ、水精鱗―アビスグンデでオーバーレイ!!?３体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
アビスディーネ、アビスヒルデ、アビスグンデが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、現れたのは深い闇のような体躯を持つ深海の竜。
「来な、Ｎｏ．３２!!?獰猛なる深海の帝王よ!!?全てを喰らい、その血で世界を塗り潰せ!!?海咬龍シャークドレイク!!?」
〈Ｎｏ．３２海咬龍シャークドレイク〉★４　海竜族　水属性
ＡＴＫ２８００→３３００
「２体目のＮｏ．だと!?だが、エクシーズ召喚したことでお前の異次元の古戦場―サルガッソの効果が発動する!!?」
空から雷が降り注ぎ、鱗之助の身体を貫こうとするが、鱗之助の周りに透明な防壁が現れ、雷を弾いた。
「何!?」
「ハッ、馬鹿が。自分のカードだぞ?そんなもの対策してるに決まってんだろうが!!?墓地に存在するサルガッソの灯台の効果発動!!?このカードが墓地に存在する限り、異次元の古戦場―サルガッソの効果によって自分が受ける効果ダメージは０になるんだよ!!?」
「なっ!!?そんなカードいつ……っ、サラキアビスの効果を使った時か!!?」

「これでエクシーズ召喚しようが俺は無事なんだよ!!?お前は地獄行きだがな!!?さらなる絶望を教えてやる!!?リバースカードオープン!!?エクシーズリボーン!!?自分の墓地のエクシーズモンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚し、このカードを下に重ねてオーバーレイユニットとする!!?深き深淵より甦れ、Ｎｏ．３７希望織竜スパイダーシャーク!!?」

〈Ｎｏ．３７希望織竜スパイダーシャーク〉★４　海竜族　水属性
ＡＴＫ２６００→３１００

「っ、スパイダーシャークまで……」
「それだけじゃねぇぜ!!?墓地に存在するエクシーズスライドルフィンの効果発動!!?このカードが墓地に存在し、自分フィールドにエクシーズモンスターが特殊召喚された場合、そのエクシーズモンスター１体を対象としてこのカードをそのモンスターの下に重ねてオーバーレイユニットとする!!?ただし、この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できないがな。俺は墓地に存在するエクシーズスライドルフィンをＮｏ．３７希望織竜スパイダーシャークのオーバーレイユニットにするぜ!!?」
　鱗之助の墓地から黄色い体躯のイルカが現れ、スパイダーシャークのオーバーレイユニットに変わる。
　これでスパイダーシャークは２回効果を使えるようになったのか。
　こいつは、ヤバイぜ。
「バトルだ!!?さっきの借りを返してやるよ!!?Ｎｏ．３７希望織竜スパイダーシャークでＮｏ．６９　紋章神コートオブアームズを攻撃!!?この瞬間、Ｎｏ．３７希望織竜スパイダーシャークの効果発動!!?ストリングスウェーブ!!?オーバーレイユニットを１つ取り除き、相手フィールドの全てのモンスターの攻撃力はターン終了時まで１０００ポイントダウンする!!?」
「っ、チェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?ダメージダイエット!!?このターン自分が受ける全てのダメージは半分にな

る!!?」
「チッ、フリーチェーンの防御カードか。構うか、縛り上げろスパイダーシャーク!!?」
スパイダーシャークが口から糸を吐き、コートオブアームズとハルベルトを縛り付ける。

Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズ
ＡＴＫ３６００→２６００

Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト
ＡＴＫ１８００→８００

「消し飛ばせ、Ｎｏ．３７希望織竜スパイダーシャーク!!?ヴェノムタイド!!?」
「っ、迎え撃て!!?Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズ!!?クレストマジェスティ!!?」
スパイダーシャークが放つ毒々しい津波をコートオブアームズはツノからエネルギー波を放ち相殺しようとするが、身体を縛られた状態では完全に相殺することはできず毒の津波に呑み込まれて消滅し、その余波が俺の身体も蝕んでいく。
「ぐっ……あああっ!!?」

遊騎　ＬＰ４２００→３９５０

「いいぞ、もっと苦しめ!!?Ｎｏ．３２海咬龍シャークドレイクでＨ・Ｃ　強襲のハルベルトを攻撃!!ブラッディクランチ!!?」
シャークドレイクが動きが封じられたハルベルトに勢いよく喰らいつき、ハルベルトが苦痛の声をあげる。
シャークドレイクはハルベルトの身体をある程度貪ると、ハルベルトを俺の方に向かって勢いよく吹き飛ばした。

遊騎　ＬＰ３９５０→２７００

「くっ……」

「まだ終わりじゃねぇぜ？Ｎｏ．３２海咬龍シャークドレイクの効果発動!!？アビスラッグ!!？１ターンに１度、このカードの攻撃によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除いて、破壊したそのモンスターを相手フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚し、この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力は１０００ポイントダウンする!!？戻って来やがれ、Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト!!？」

〈Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１８００→８００

シャークドレイクに噛み付かれ、瀕死状態に陥ったハルベルトが立ち上がる。
破壊したモンスターを弱体化させるとはいえ蘇生させる効果。
一体この効果に何の意味がーーー

「さらに、このバトルフェイズ中、Ｎｏ．３２海咬龍シャークドレイクはもう１度だけ攻撃できる!!？」

「っ!!？連続攻撃だと!!？」

「もう１度喰らいつけ!!？Ｎｏ．３２海咬龍シャークドレイクでＨ・Ｃ　強襲のハルベルトを攻撃!!デュアルブラッディクランチ!!？」

シャークドレイクが瀕死状態のハルベルトに勢いよく喰らいつき、その身体を呑み込んでいく。
シャークドレイクはハルベルトを完全に喰らい尽くすと、歓喜の咆哮を上げながら、口からハルベルトが着ていた鎧を俺に向けて勢いよく吐き出した。

「ぐっ!!？がああっ!!？」

遊騎　ＬＰ２７００→１４５０

「結束さん‼?」
鎧が俺の身体にぶつかり、俺の身体は数メートル吹き飛ばされ、桜糀が悲痛な声をあげながら、俺に駆け寄ってくる。
マズい……想像していた以上に身体にダメージが入ってる。
このままじゃ、最悪デュエル中に意識が飛んでそのまま負ける。
「さて、テメェの墓地にはダメージを受けたら出てくるモンスターがいるんだよな?なら、これ以上の攻撃は止めておくか。優しいだろう、俺?」
「……っ、下賤な輩が、どの口で‼?」
「おいおい、嬢ちゃん。それはねぇぜ?本当は野郎と思えばデュエル中にそいつを殺すことだってできんだぜ?生かしてやってるだけ温情じゃねぇか」
「貴様‼?」
「……威張り散らすことだけは、達者だな。そういうのは、本当に、俺を殺してから言えって、の」
「あん?」
自分本位な理論を振りかざす鱗之助に桜糀が掴みかかりに行きそうになるのを、痛む身体を堪えて立ち上がり、何とか止める。
「結束さん‼?いけません、動かれては……」
「大丈夫だ。まだデュエルも終わってないしな。この程度で、俺は死なねぇから、桜糀もあんな奴の言葉に乗せられんな」
「結束、さん……」
「ハッ、強がるじゃねぇか。そんなぼろぼろの身体で何ができるってんだよ‼?」
ふらふらになりながらも立ち上がった俺を見て、不機嫌そうに鱗之助が吠える。
何ができる……か。
そんなもの、分かりきっているだろ。
「決まってるだろ、デュエルだよ。ライフポイントはまだ残ってんだ。ライフポイントが消えるまで、俺は絶対に折れねぇぞ」

「っ……」
必ず勝つという気持ちを込め睨みつける俺の眼光に気圧されるように、鱗之助の身体が無意識に半歩下がる。
そんな俺を見て、桜糀が戸惑った表情を浮かべる。
「結束さん、何故そこまでしてデュエルをするのですか？私があの男に付き纏われたのが原因で、こんな危険なデュエル、貴方様がしなくても……」
「まあ、確かに、わざわざ俺である必要はないと思うよ。セキュリティとかに言ったら解決してくれるかも知れないしさ」
そう言いながら、俺は苦笑を浮かべる。
確かに、桜糀の問題を解決するのは、俺である必要はない。
だけど……
「でも、ここで逃げたら桜糀を守ってやれないだろ？」
「……えっ？」
俺の言葉に、桜糀が目を丸くする。
そんな桜糀に俺は真剣な表情のまま告げる。
「別に義務とか使命とか思ってるわけじゃないさ。俺の身体を動かしてるのは、そんな思いじゃない。自分の身近な知り合いを守りたい。そんな単純なことなんだ。誰かに強制されたわけでもない、俺の知り合いは、俺が守る。他の誰かなんかに、こんな役目はやれねぇよ」
「っ、結束、さん……」
驚く桜糀に俺は笑いかけると、庇うように鱗之助の前に立つ。
「だから、勝たせて貰うぜ。鱗之助、テメェなんかに、この子を傷つけさせるかよ‼？」
「っ、生意気なことばかりを言いやがって‼？そこまで言うならこの状況から逆転して見やがれ‼？テメェみたいな軟弱者に、俺が倒せるって言うんならよぉ‼？俺はこれでターンエンドだ‼？」
遊騎　ＬＰ１４５０　手札２
ーーーーー　ー
ーーーーー

ー　☆
ー□○ー○
ーーーーー　▽
鱗之助　ＬＰ５４００　手札０

怒鳴りながらも、鱗之助はターンエンドを宣言した。
怒ってはいるが、思考自体は冷静らしい。
まあ、攻撃されたら割と危なかったんだがな。
サルガッソのせいで俺はエクシーズ召喚をするとライフポイントが削れてしまう。
それならエクシーズ以外の戦術に頼りたいところだが、現在の俺の手札はＨ・Ｃ　ダブルランスとシャッフルリボーン。
ダブルランスからリンク召喚できるイゾルデは出しちまったし、ダブルランスにはシンクロ召喚には使えない制約がある。
その上、ダブルランスから出せる融合モンスターなんてものはいないし、いたとしても融合カードはない。
となれば、どうしてもエクシーズ召喚に頼らざるおえないのだが、ダブルランスから出せるエクスカリバーではスパイダーシャークの効果が使える限り勝ち目はないし、1ターン持っても次の俺のターンの終わりにはサルガッソのバーンでゲームエンドだ。
正直、ここから逆転する可能性はかなり低い。
だけど、まだドローが残っている。
それならば、諦めるにはまだ早い、よな。
「俺のターン‼?」
不安を吹き飛ばすように、声を張り上げてデッキの上のカードを握る。
頼む、俺のデッキよ。
この逆境を吹き飛ばす力を、俺に貸してくれ‼?
「ドロー‼?」
勢いよくカードを引き抜いて、ドローしたカードを見る。
「っ、このカードは……」

ドローしたカードは、俺が知らない間に手にしていた島さんですら分からないと言っていた謎のカードだった。
デッキを組み直した時に一応入れておいたのだが、まさかこんなタイミングでドローするなんてな。
「……分が悪い賭けだよな」
正直、このカードの力は全くの未知だ。
入手した時のことも覚えていないし、共に手に入れたカードのことを踏まえると間違いなく闇のカードなのだろう。
このぼろぼろの身体で使えるのかどうかすら分からない。
下手したら使うことで俺が闇のカードに呑み込まれ、桜糀にまで危害が加わってしまう可能性もある。
だが、それでも……
「やるっきゃないならやるしかないよな」
使ってしまえば、どうなるかは分からない。
だけど、これを使うことでしか桜糀を助ける可能性がないのなら……
「本当に癪だが……乗せられてやるよ‼?魔法カード、シャッフルリボーン‼?自分フィールドにモンスターが存在しない場合、自分の墓地のモンスター1体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する‼?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、エンドフェイズに除外される‼?甦れ、Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズ‼?」
「何?」
〈Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズ〉★４　サイキック族　光属性
ＡＴＫ２６００
「あまりのダメージにいかれちまったのか?効果もオーバーレイユニットもないＮｏ．を出して何になるって言うんだよ‼?」
フィールドに再び現れたコートオブアームズを見て鱗之助が俺を

嘲笑う。
　ああ、確かに本来ならあまり意味がない一手だよ、このカードがなかったら。
　俺が手札にあるカードを発動しようとした瞬間、立体映像のコートオブアームズが俺の方を見た。
　その目はまるで覚悟はできているのかと問いかけてくるような目をしている。
　そんなコートオブアームズに、俺は不敵な笑みを浮かべて返す。
　覚悟？そんなものーーー
「できてるに決まってんだろ‼？俺はＲＵＭ（ランクアップマジック）ーバリアンズフォースを発動‼？」
「ＲＵＭ、だと？」
「自分フィールド上のエクシーズモンスター１体を選択し、選択したモンスターと同じ種族でランクが１つ高いＣＮｏ．またはＣＸと名のついたモンスター１体を、選択したモンスターの上に重ね、エクシーズ召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚する‼？俺はＮｏ．６９　紋章神コートオブアームズ１体でオーバーレイ‼？１体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築‼？カオスエクシーズチェンジ‼？」
「カオス……エクシーズチェンジ、だと？なんだ？お前は何を言っているんだ⁉？」
　コートオブアームズが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
　それと同時にＥＸデッキから大量の闇が溢れ出し、俺の身体を包み込んだ。
「ぐっ……あああああああああ‼？」
「っ、結束様‼？」
　初めてコートオブアームズを呼び出した時と同じように身体中に嫌な感覚が駆け巡り、ぼろぼろの俺の身体を奪おうとし、その闇から様々な声が聞こえてくる。
『殺せ‼？』

『奪え!!?』
『お前を不当に扱った者に復讐しろ!!?』
『復讐はお前の正当な権利だ!!?』
『その力を、欲望を、全て開放しろ!!?』
その声が聞こえる度に、俺の意識が薄れていく。
ああ、これが闇のカードに取り憑かれた者の感覚なんだな。
確かに、耳障りのいい言葉ばかりだよ。
だけどな……俺は1番初めにお前を使った時に言ったハズだぜ、コートオブアームズ。
「俺は弟子の為に死ぬわけにはいかないし、俺自身でいなきゃならないって、な!!?それに、今の俺にはあの頃よりも守らないといけない誓いが増えてんだよ!!?」
そう叫んで俺は初めてコートオブアームズを使った時のように胸の前で腕をクロスする。
「俺は大切な弟子を、あいつが望む場所まで連れて行く!!?それまであいつの師匠として一緒に運命と戦うって決めてんだ!!?今更呪い風情が入り込む余地なんてねぇんだよ!!?」
『……』
「お前なんかじゃ……いや、もう誰だろうと、俺は止められねぇ!!?」
気合いを入れて嫌な感覚を吹き飛ばすように胸の前でクロスした腕を振り払う。
すると途端に嫌な感覚が消え、意識もはっきりしてくる。
闇が俺の身体から吹き飛ぶ刹那。
どこか楽しげな声が俺の耳に響いた。
『……いいだろう。お前も力を手に入れたならば、未来は己の手で勝ち取ってみせろ』
「……そんなの、言われるまでもねぇよ!!?」
そんな俺の叫びに応えるように宙に浮かんだ混沌の渦が爆ける。
そして渦が爆けるとそこから現れるのは進化を遂げた異形の存在。
血のような真紅に染まった悪魔のような身体に漆黒のツノ、金色の

鉤爪を持つ異形の死神。
「騎士の魂が宿し紋章よ‼？混沌の力を受け継ぎ、彷徨う魂を導け‼？現れろ‼？ＣＮｏ．６９　紋章死神（デスメダリオン）カオスオブアームズ‼？」
〈ＣＮｏ．６９　紋章死神カオスオブアームズ〉★５　サイキック族
光属性
ＡＴＫ４０００
「カオス……ナンバーズだと⁉？何だそれは⁉？そんなもん、聞いたことねぇぞ⁉？」
「なら、たっぷりその身に教えてやるよ‼？ＲＵＭ－バリアンズフォースの効果には続きがある。ＣＮｏ．またはＣＸと名のついたモンスター１体を、選択したモンスターの上に重ね、エクシーズ召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚した後、相手フィールド上にオーバーレイユニットが存在する場合、相手フィールド上のオーバーレイユニット１つを、この効果で特殊召喚したエクシーズモンスターの下に重ねてカオスオーバーレイユニットとする‼？」
「何だと⁉？」
「俺が選ぶのはＮｏ．３７希望織竜スパイダーシャークのオーバーレイユニットだ‼？吸い尽くせ、カオスアブソーブ‼？」
　カオスオブアームズが咆哮を上げ、金色の腕から光の糸を放ち、スパイダーシャークの身体を串刺にし、オーバーレイユニットごと力を根こそぎ奪い取ると、スパイダーシャークの身体が薄く透けていく。
　そしてスパイダーシャークの力を奪い尽くすと、カオスオブアームズはスパイダーシャークを光の糸でスパイダーシャークを振り回して投げ飛ばした。
「スパイダーシャークのオーバーレイユニットが……だ、だが、エクシーズ召喚をしたことでフィールド魔法、異次元の古戦場―サルガッソの効果発動‼？５００ポイントのダメージを受けろ‼？」
遊騎　ＬＰ１４５０→９５０

空から雷が降り注ぎ、俺の身体を貫き、俺のライフがレッドゾーンに突入する。
だが、そんなのはもう関係ない‼?
「ＣＮｏ．６９　紋章死神カオスオブアームズの効果発動‼?オーバーキルドレイン‼?このカードがＮｏ．６９　紋章神コートオブアームズをカオスオーバーレイユニットとしている場合、１ターンに１度、このカードのカオスオーバーレイユニットを１つ取り除き、相手フィールド上のエクシーズモンスター１体を選択し、エンドフェイズ時まで、このカードの攻撃力は選択したモンスターの元々の攻撃力分アップし、このカードは選択したモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得る‼?」
「何だと⁉?」
「対象は、Ｎｏ．３２海咬龍シャークドレイク‼?」
カオスオブアームズが再び咆哮を上げ、金色の腕から光の糸を放ち、シャークドレイクの身体を串刺にし、その全てを奪い取る。

ＣＮｏ．６９　紋章死神カオスオブアームズ
ＡＴＫ４０００→６８００

「攻撃力……６８００だと⁉?」
「バトルだ‼?ＣＮｏ．６９　紋章死神カオスオブアームズでＮｏ．３２海咬龍シャークドレイクを攻撃‼?ブラッディクランチ‼?」
シャークドレイクから力を奪ったカオスオブアームズは、光の糸でシャークドレイクを縛り付け、その身体に喰らいつくと、そのままシャークドレイクを振り回して鱗之助に向けて投げ飛ばす。

鱗之助　ＬＰ５４００→１９００

「ぐがぁぁぁぁ‼?テメェ‼?」
「まだだ‼?Ｎｏ．３２海咬龍シャークドレイクとなったＣＮｏ．６

９　紋章死神カオスオブアームズの効果発動!!?アビスラッグ!!?カオスオーバーレイユニットを１つ取り除き、破壊したそのモンスターを相手フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚し、この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力は１０００ポイントダウンする!!?再び現れろ、Ｎｏ．３２海咬龍シャークドレイク!!?」

〈Ｎｏ．３２海咬龍シャークドレイク〉★４　海竜族　水属性
ＡＴＫ２８００→３３００→２３００

「これで終わりだ!!?ＣＮｏ．６９　紋章死神カオスオブアームズでＮｏ．３２海咬龍シャークドレイクを攻撃!!?」
俺の声を聞きカオスオブアームズはシャークドレイクに突撃し、シャークドレイクの身体に光の糸を突き刺して巨大な腕で身体を抑え込み動きを封じると、カオスオブアームズの身体が金色に輝き始める。
カオスオブアームズの輝きが増していくと、それと同時にシャークドレイクの身体が少しずつ溶けていく。
「終わりだ、メルトアウトヘルデザイア!!?」
シャークドレイクの身体が原型を留めれない程に溶けると、カオスオブアームズはツノからエネルギー波をシャークドレイクに向けて放ち、そのまま爆散させた。
「クソ!!?この俺が、軟弱者なんかに……ぐあぁぁぁ!!?」

鱗之助　ＬＰ１９００→０

ーーーーーーー

「俺の、勝ちだ……!!?」
デュエルが終わり、カオスオブアームズに吹き飛ばされた鱗之助のデュエルディスクから凄い勢いで回転して俺の元に飛んでくる２枚のカードを掴み取る。

俺が手にした2枚のカードを見て、鱗之助は怒り狂うように俺を睨みつける。
「クソっ‼？クソがぁぁぁ‼？俺がこんな奴なんかに負けるだと⁉？ふざけるな‼？何なんだよ⁉？テメェはよぉ⁉？」
「……」
怨嗟の声を出しながら何度も地面を叩く鱗之助を、俺は憐憫の目で見る。
そんな俺に気づいたのか、鱗之助は怒り狂った様子で立ち上がり、俺に怒鳴り声をあげながら想定外の言葉を口にした。
「ＣＮｏ．なんてもんあの男も作ったなんて言ってなかったぞ⁉？なんでそんなものをテメェが持ってんだよぉ⁉？」
「っ⁉？お前、今何て言った⁉？あの男も作ったなんて言ってなかった？お前、Ｎｏ．を作ってる奴を知ってるのか⁉？」
「あの野郎、俺に黙っていやがったな⁉？クソが、今からでも乗り込んで文句を言いに言ってやる‼？」
鱗之助から漏れた言葉に、俺は思わず目を見開く。
間違いない……コイツはＮｏ．を作った奴を、その居場所を知っている。
「覚えてろよ、クソ野郎‼？テメェは絶対に俺がぶっ潰してやる‼？テメェ以上の力を手に入れてなぁ‼？」
「っ、待て‼？……くっ‼？」
「結束様‼？」
俺に明確な殺意を叩きつけながら走り去っていく鱗之助を追おうとしたが、先程までのデュエルのダメージが大きくその場に膝をついてしまい、桜糀が慌てた様子で俺の身体を支える。
そうしている間にも鱗之助は走り去っていき、そのまま姿が見えなくなってしまった。
「クソっ……折角の手がかりだってのに……」
「無理をしてはいけません。どう言った理由なのかは存じておりませんが、その身体であの輩を追うのは危険です。大怪我という程ではないかも知れませんが、あまり無茶はしないでください」

「……分かったよ」
桜糀の言葉を聞き、身体の力を抜く。
鱗之助の姿は完全に見失ってしまったし、この身体で次に闇のカードを使ったデュエルを行えば流石に俺の身体も持たないだろう。
幸い鱗之助の名前と特徴は覚えている。
それを頼りに鱗之助の追っていけば黒幕にまで辿り着けるかも知れない。
ならば、万全の状態でことに臨む方がいい。
「悪いな、桜糀。危険な目に合わせちまって」
「そんな、それは私の台詞でございます。あのような危険な輩から助けて頂き、このような怪我を負わせてしまうなど、遊花さんにも合わせる顔がありません」
そう言って桜糀が泣きそうな表情で俯く。
きっと今桜糀の中ではこんな怪我をするようなデュエルに巻き込んでしまったことと、前に大会でデュエルした時に俺に行ったことの罪悪感が綯交ぜになっているのだろう。
桜糀も変に真面目な奴だからな。
だが、そんな罪悪感を桜糀が抱く必要はない。
「何言ってんだよ。桜糀のおかげで俺は知りたかったことの手がかりが得られたんだ。お前のお手柄だぜ」
「っ……ですが……」
「それに、デュエル中にも言ったぜ？俺の知り合いは、俺が守る。ただそれだけのことだ。お前が遊花の将来を守ってやろうと俺に挑んだように、俺がお前を守ってやりたいと思ったから鱗之助と戦ったんだ。お前のせいなんかじゃない」
そういって俺は桜糀に向かって笑顔を浮かべる。
「だから、気にすんな。お前を守れて、よかったぜ。俺はさ」
「っ……はい、ありがとうございます」
俺の言葉を聞き、ようやく桜糀が笑顔を浮かべる。
何とかなった、かな？
知り合いが泣いてる姿なんて見たくないからな。

「そういえば、桜糀はバスの時間は大丈夫なのか？結構時間が経っちまったが……」
「あ……」
俺の言葉にハッとしたように桜糀が手につけた腕時計を見て、慌てた様子で立ち上がり、困ったような表情を浮かべて俺を見た。
「いけません‼？もうすぐバスが到着してしまいます‼？ですが……」
「３年の出席日数は大事だろ？俺のことなら気にすんな。しばらく休んだら動けるようになるさ。むしろ、これで桜糀が遅刻したらそっちの方が俺は気にするぞ」
「っ、重ね重ねすみません。このご恩、いつか必ず貴方様に返します、結束様」
「だから別にいいって……ん？様？」
「それでは失礼します」
「ん？あ、ああ。またな」
首を傾げる俺に深く頭を下げ、桜糀は走り去っていった。
なんか変な言葉が聞こえてきた気がするけど、きっと気のせいだろう。
「それにしても……あー疲れた」
桜糀の姿が見えなくなったところで、俺は大の字になって寝転がった。
意識が飛ぶ程ではなかったとはいえ、やはりＮｏ．の攻撃を喰らうのは並のことではない。
「身体も鍛えないといけねぇかな」
そういいながら先程鱗之助から手に入れたＮｏ．を何の気なしに覗き込む。
シャークドレイクはともかくスパイダーシャークは水属性指定があったから使えないよな、などと思いながらカードを覗き込むと、そこには想定外の光景があった。
「……は？」
俺は目に映った光景に思わず飛び起き、改めて自分が手に入れた

カードを見る。
鱗之助とのデュエルで出てきたのはシャークドレイクとスパイダーシャーク。
だからこそ、勝利した俺が手に入れるＮｏ．はその２枚のハズだ。
だが、俺が手に入れたカードは違った。
いや、正確に言えばその言葉は正しくない。
１枚は確かに鱗之助が使用していたシャークドレイクのカードだ。
だが、もう１枚……スパイダーシャークのハズだったカードに変化が起きていた。
「白紙……だと？」
シャークドレイクと共に手に入れたそのカードには絵柄がなかった。
テキストもランクなどのデータもない完全に真っ白なカード。
困惑する俺だったが、そんな俺の頭に島さんから聞いた言葉が浮かび上がる。
『Ｎｏ．はＮｏ．を手にした者の心の闇や欲望を読み取り、その姿や能力を決めてしまうんだ。例えば、誰かを倒したいという欲望なら戦闘では負けなくなるとか、誰にも邪魔はさせたくないという欲望なら相手を縛る効果、とかね。他にもその効果に付随した特殊な力を使用者に授けるんだ。最も、１度姿を獲得してしまえば、そこから変化することはそうそうないみたいだけどね』
Ｎｏ．は手にした者の心の闇や欲望を読み取り、その姿や能力を決め、１度姿を獲得してしまえば、そこから変化することはそうそうない、島さんはそう言っていた。
だが、それは言い換えれば稀になら姿が変化してしまうということではないのか？
つまりは、スパイダーシャークのカードからまだ誰の欲望も読み取っていない、真っさらなＮｏ．に戻された。
そしてその原因は……
「このカード、か？」
俺が取り出したのはＲＵＭ－バリアンズフォースのカード。

このカードの効果でスパイダーシャークのオーバーレイユニットを奪った時、スパイダーシャークの姿は消えかけていた。
このカードがオーバーレイユニットごと、スパイダーシャークの姿を形取っていた心の闇や欲望を呑み込んでしまったのだとすれば……
「いや、まだ推測の域をでないか」
俺は頭に浮かんだ想像を頭を振って振り払う。
何にせよ、このカードがヤバいカードだってことはよく分かった。
このカードを使い続けても大丈夫なのか、そんな不安も浮かんでくる。
「はぁ……やれやれだな」
そんな俺のため息は海風に流されて消えていくのだった。

第６９話　赤き影

★

「行ったわね。全く、確かに私達にはデュエルアカデミアがあるけど、無茶するんだから……」
「そこが遊騎らしいところではある……納得するかは別だけど」
「そこんところがわかんないんでしょうね、あの馬鹿は。まあ、言ってることは一理あるんだし、今はデュエルアカデミアに行く準備をしましょうか」
「ん……遊花、大丈夫？」
「ふぇ⁉？だ、大丈夫です⁉？」
「……大丈夫じゃなさそう」
「遊騎が心配なのが丸わかりね」
「あぅ……」
　朝早くから見回りのためにリビングから出かけていった師匠を視線で追って、玄関の方を向いて呆けていたところを、闇先パイに声をかけられ、慌てて返答したが桜ちゃんと共に呆れたようなジト目を向けられてしまった。
　師匠が強いことはわかっているけど、闇のカードというもので師匠は１度入院している。
　だから、どうしても不安が拭えない。
　あの時のように、また師匠が帰ってこないんじゃないかって。
　そんな私の不安を見抜いたのか、闇先パイは優しい笑みを浮かべ、背伸びをして私の頭を撫でた。
「大丈夫……遊騎は強いから、ちゃんと私達がいる場所に戻ってくる……だから、私達はいつも通りに過ごすの……遊騎が守ってる、遊騎が戻ってくる日常を」
「闇先パイ……」
「それでも心配なら、もっと強くなればいい……遊騎を手伝って、遊

騎が守りたいものを一緒に守れるように……」
「……はい‼?私、もっと頑張ります‼?」
「ん……遊花はいい子……それじゃあそろそろデュエルアカデミアに行こう……あんまりのんびりしてても遅れちゃうしね……」
そういって闇先パイが私の頭を撫でるのを止めて、自分の支度に移っていく。
そうだ。
師匠が心配なら、私が師匠の手伝いができるぐらいに強くなればいい。
師匠を危険なことから守れるぐらいに強く。
「……よーし、頑張るぞー‼?」
私は改めてそう呟きながら自分の支度に移るのだった。

ーーーーーーー

「そういえば、遊騎が言ってた闇に闇のカードについて説明して貰えって言われてたのは何だったの?一応私達、島さんに闇のカードについては教えて貰ったんだけど……」
「ん、多分、島さんは大まかな説明しかしてないから補足をしてほしいってことだと思う……闇のカードについては遊騎より私の方が詳しいから」
「そうなんですか?」
デュエルアカデミアに向かう通学路を闇先パイと一緒に歩きながら、今朝の師匠の言葉を思い出して闇先パイに闇のカードについての話を聞くことにした。
私も桜ちゃんも島さんから闇のカードについての説明は受けたけど、それでも師匠が闇先パイに頼んだということはそれだけの理由があるのだろう。
そんな私の考えを肯定するように、闇先パイは何の気なしにその言葉を口にした。
「うん……だって、私はいつも闇のカードを使ってるから……」

「……え？」
「……は？」
闇先パイの言葉に私達は目を見開く。
闇先パイがいつも闇のカードを使っている？
だけど、闇先パイがＮｏ．を使ってるところなんて見たことがない。
「ん……遊花達だって知ってるハズだよ……私の闇のカード……」
「私達が知ってるって……」
困惑する私達に闇先パイは自分のデッキから１枚のカードを抜き取り、私達に見せる。
そこにあったのは……
「これって……ヴェルズウロボロス？」
「ん、これが私の使う闇のカード……正確にいえば私が使うヴェルズのカード全てが、だけどね」
「ええっ⁉？」
「はぁ⁉？」
闇先パイの言葉に私達が驚きのあまり声を上げる。
闇先パイが使ってるヴェルズのカードが全部闇のカードだったの⁉？
だけど、ヴェルズ達は……
「ちょ、ちょっと待ちなさい⁉？アンタが使うヴェルズ達はＮｏ．じゃないじゃない⁉？」
「そ、そうですよ⁉？それなのに闇のカードって……」
「……成る程。だから遊騎は私に説明を頼んだんだ……遊花達は勘違いしてる……闇のカードはＮｏ．だけじゃない……ただのカードに見えても実は闇のカードだというパターンはいくらでもある……分かりやすいのが今ケルンにばら撒かれているＮｏ．というだけ……」
「そ、そうなんですか⁉？」
「ん……」

私の言葉に闇先パイが頷く。
まさか闇先パイが普段から使ってるヴェルズ達が人を傷つける可能性がある闇のカードだなんて、思っても見なかった。
だけど、そんな危険なカードを普段から使っている闇先パイは大丈夫なんだろうか？
そんな私の考えを読んだのか、闇先パイは柔らかく笑った。
「私は大丈夫……闇のカードは適合できなかった使用者の意思を好戦的にしたり身体の乗っ取ったりするけど、適合者には普通のカードと大差はないから」
「……そうなんですか？」
「ん……私はヴェルズ達をちゃんと制御できてるから……遊花だって私のヴェルズ達と何度も戦ったことあるけど、怪我したことはないでしょ？」
「……確かにそうよね。闇がヴェルズを使っても誰も怪我をしなかったからこそ、ヴェルズ達が闇のカードだなんて思わなかったんだし……」
闇先パイの言葉に桜ちゃんが真剣な表情で頷く。
確かに、今まで修行中に何度も闇先パイとお手合わせをしてもらったことはあるけど、それで私が怪我をしたことはない。
ということは、闇先パイが言う通りヴェルズ達は闇先パイに完全に制御されているのだろう。
「ん……これは予想以上に大まかな説明しか受けてない……仕方ない、闇先生の特別講義、闇のカード編を開講しよう……というわけで……美人教師モード……きりっ」
そういうと闇先パイは懐から伊達眼鏡を取り出して目にかける。
……えっと……
「……それって闇先パイが変装する時にかけてる眼鏡ですよね？」
「ん……この方が……雰囲気出るでしょ？これ、潜入美人教師眼鏡だから……」
「……色々とツッコミたいところがあるけど、とりあえず変装用なのか潜入用なのかはっきりしなさいよ」

「桜ちゃん、ツッコむところは多分そこじゃないよ？」
「それで結局闇のカードって何なのよ？」
「ん……それじゃあ改めて闇のカードについて説明するね……」
「あ、私のツッコミはスルーなんだね。別にいいけど……」
　そんなどこか締まらない会話をしながら、闇先パイは潜入美人教師眼鏡（？）をかけたまま真剣な表情で話し始めた。
「闇のカードというのはカードの精霊に悪意が宿って歪んでしまった呪われたカードのことで闇のカードに適合できなかった使用者の意思を好戦的にしたり破壊衝動を生み出したり、身体の乗っ取りや身体を傷付けたりする……ここまでは島さんからも聞いてるよね？」
「はい……」
「闇のカードは使用者すらも傷付ける可能性がある呪われたカードだけど、それも使用者の意思や力量、資質、適合割合次第で制御することができて、制御さえできれば普通のカードと変わらずに使用することができるの」
「適合割合、ですか？」
　闇先パイの言葉に私は首を傾げる。
　意思や力量、資質はまだ理解できるんだけど、適合割合って何なんだろう？
「簡単にいうと闇のカードとのシンクロ率のこと……闇のカードを使用し続けることで適合割合は上がっていく……最も適合割合が上がることに対するリスクもあるけど」
「リスク？」
「最初に説明したように闇のカードはカードの精霊に悪意が宿って歪んでしまった存在……だからこそ、闇のカードとカードの精霊は基本的に仲が悪い……カードの精霊によっては気にしない子やそれよりも気の合うマスターを優先する子もいるけど……本質的に噛み合うことがない……だからこそ、闇のカードとの適合割合が高まることで精霊が宿ったカードは使えなくなっていくの……」
「使えなくなるって、デッキに入れれなくなるってことですか？」
「ううん……デッキに入れられないわけじゃないよ……だけど、

精霊の宿ったカードは絶対に手札に来なくなる……」
「手札に来なくなるって……なら、サーチカードを入れればいいだけじゃないの？」
「あ、確かに。ドローできないなら手札に持ってこれるカードを引けばいいだけなんじゃ……」
　そんな私達の言葉に闇先パイは首を振る。
「それも無理。カードの精霊はそこまで甘い存在じゃない……精霊は穢れた存在を嫌悪している……だからこそ本気で手札に来たくなければサーチカードをドローさせないことだって精霊は平然とやる」
「ドローさせないってそんなオカルト……いや、元々オカルトの存在だったわね」
　闇先パイの言葉に桜ちゃんは頭を押さえる。
　きっと自分が向き合っている問題がどれだけ常識から離れているのかを実感してるのだろう。
　私としては異世界に呼び出されたことがある時点で今更なことだと思うんだけどなぁ。
「それに、闇のカードは精霊の存在を殺しうる厄介な特性を持ってるから……よっぽど強い力を持った精霊じゃないと、闇のカードには絶対に近づこうとしない」
「厄介な特性？」
「ん……闇のカードが持つもう1つの特性……それが『汚染』」
「『汚染』……ですか？」
「使いこなせているならそう簡単には起こらないけど、闇のカードを使用者が使いこなしていない場合、闇のカードじゃない他のカードすらも自らの呪いを植え付け、闇のカードに変質させていく……1枚の闇のカードが持つ呪いが、他のカードを闇のカードに変えてしまうの」
「つまり、闇のカードはゾンビや吸血鬼みたいな奴ってことね」
「……単純に言えばね……さて、と」
　そこまで闇先パイが話したところでデュエルアカデミアの校門が

見えてくる。
　すると、私達と並んで歩いていた闇先パイは急にその場で立ち止まった。
「遊花達と一緒に入ると面倒なことになりそうだから私は少し寄り道をしてくる……」
「私は別に気にしませんけど……」
「アンタが遊花を名指しした時点で今更だと思うわよ？」
「……それでもこれ以上遊花へのやっかみを増やすのは私としても本位じゃない……これでも責任は感じてる……それじゃあまた後で……私の講義に遅れないようにね」
「あ、闇先パイ‼？」
　そういうと闇先パイは私達に背を向けてデュエルアカデミアとは反対方向に歩き去って行った。
「まあ、仕方ないわね。行くわよ、遊花」
「あ、うん……」
　桜ちゃんの声に応えながらも、私は闇先パイの後ろ姿を見送りながら拳を握り締める。
　……今闇先パイが私に気を使わないといけないのは私に闇先パイの隣にいる程の実力がないからだ。
　今日は無理かも知れない……だけど、いつか絶対に胸を張って闇先パイの隣に立てるように……強く、なるんだ。
　そんなことを改めて思いながら、私は桜ちゃんを追ってデュエルアカデミアの門を潜るのだった。

ーーーーーーーー

「バトル‼？スターヴヴェノムフュージョンドラゴンで漆黒（ダークルシアス）の魔王ＬＶ８を攻撃‼？消失のヴェノムストリーム‼？」
「きゃぁぁぁ‼？」

女子生徒　ＬＰ２８００→０

立体映像が消え、項垂れている女子生徒に私は手を差し出す。
「ありがとうございました‼？いいデュエルでした‼？」
「っ……勝ったからって調子に乗らないでよね‼？」
「あっ……」
しかし、差し出した手は払いのけられ、女子生徒は私を睨みつける。
「貴方程度の決闘者が『氷の女王』に認められるなんて、有り得ないわ‼？一体どんな卑怯な手を使ったのよ‼？」
「卑怯な手って、私は別に何も……」
「嘘を言いなさい‼？大体、貴方みたいな落ちこぼれが学年トップ10に勝っているのもおかしいのよ‼？一体どんな卑怯な手をーーー」
「誰の親友を落ちこぼれだなんて言ってるのかしら？」
「っ……宝月……さん」
「あ、桜ちゃん」
不穏な気配を感じてかいつの間にかに私に近づいてきていた桜ちゃんが私と女子生徒の間に立つ。
「弱い奴程よく吠えるものだわ。遊花に一方的に負けてる癖に逆恨みなんてみっともない」
「さ、逆恨みなんか……」
「現実を正しく認識していないのに一方的に私の親友を中傷してる奴が逆恨みじゃなきゃなんなのよ。そこまで言うなら次は私とでもデュエルしてもらおうかしら？」
「な、なんでその子に言ったことで宝月さんが出てくるのよ⁉？」
「……呆れ果てて言葉もないとはこのことね。アンタ自分の発言が遊花だけじゃなく、遊花と真剣にデュエルをした学年トップの連中にも喧嘩を売ってることぐらいわかりなさいよ。私はあの頃の私が出せる全力を出しきってこの子に負けた。その勝負を卑怯だなんだと言って侮辱してるアンタに腹が立たないわけないでしょ？」
そこまで言って桜ちゃんがデュエルディスクを構える。
「だから、私の親友との真剣勝負を馬鹿にしたあんたを完膚無きまでにぶっ壊してやるって言ってんのよ。半端な覚悟で入ってくるん

じゃないわよ‼?私と親友の大切なデュエルの思い出に‼?」
「ひっ‼?」
桜ちゃんが明らかに怒気を含んだ声を聞き、女子生徒は慌てて走り去っていった。
女子生徒の姿が見えなくなると、桜ちゃんはため息を吐きながらデュエルディスクを下ろした。
「全く……こういう小物が混ざってるから困るのよね。遊花、大丈夫?」
「うん……ありがとう、桜ちゃん」
「どういたしまして。でも、とりあえず一旦休憩しなさい」
「えっ?私、まだ大丈夫だよ?」
「何がまだ大丈夫よ。もうすでに昼休みに入ってるのに１０連戦もしてるじゃない。しかも、遊騎の言いつけを守るための練習だったんでしょうけど全戦ノーダメージだし……無理してるのが丸分かりよ」
「え、えっと、それは……あ、あはは……」
私が苦笑いを浮かべながら目を逸らすと桜ちゃんは深いため息を吐いて私の頭を小突いた。
「もう……いいから少し休みなさい。無理して本当にあのカードを持ってる奴が現れてダメージ受けたら元も子もないんだから」
「ん……ごめんね、桜ちゃん」
「別に、私が好きにやってることだもの。謝られることなんかじゃないわ。というわけで、これから遊花は私と一緒に休憩するから遊花とのデュエルを待ってた奴は挑むのはまた今度にしなさい‼?文句があるなら私が相手になってやるわ‼?」
桜ちゃんの声を聞き、デュエルが出来なかった生徒達は残念そうな表情を浮かべて散っていく。
「これで邪魔者はいなくなったわ。休憩にしましょ」
「邪魔者って言い方は酷いよ、桜ちゃん」
「私と遊花の時間を邪魔する奴らなんだから邪魔者で十分よ」
そんなことを言って桜ちゃんが近くの椅子に座って私に手招きをする。

そんな桜ちゃんに苦笑を浮かべながらも私も桜ちゃんの近くの席に座った。
「それにしても、いなかったなぁ……闇のカードを使ってる人」
「……待ちなさい。遊花、アンタあのデュエル中に闇のカードを使ってる人を探してたの？」
「えっ？うん。だって、私に勝てば闇先パイに挑戦できるでしょ？なら、少しでも勝率を上げるためにそういう危険なカードに手を出す人もいるんじゃないかなって思って」
「……アンタねぇ」
私がそんなことを口にすると桜ちゃんは呆れた表情を浮かべながらまた私の頭を小突いた。
「あいたっ‼？」
「例え闇のカードを持っててもこんな大勢の目撃者がいる状況で挑んでくる可能性は低いでしょうが」
「あぅ、でもでも、暴走してるのなら可能性は……」
「暴走してるのならお行儀よく並んで待ったりせずに、無理矢理デュエルを挑んでくるわよ。自分の欲望が解放されてるんだから」
「うっ……そう言われればそうかも」
桜ちゃんに指摘に私は項垂れる。
今の私の状況は囮としてはかなり使えると思ったんだけど、そう上手くはいかないかぁ……
「なら、どうやって調べればいいんだろう？」
「闇のカードに操られてる奴は暴走するんでしょ？なら、面倒事や不思議なことが起こってるところを調べればいいんじゃない？」
「そっか‼？じゃあ早速ーーー」
「休憩だって言ってるのに、行かせるわけないでしょ。そういうのは放課後にしなさい、私も手伝ってあげるから」
「……はーい」

ーーーーーーー

「うーん、でも、面倒事や不思議なことが起こってるところってどういうところなんだろう？」
「噂話とかを頼りにするしかないのかしらね。といっても、最近の噂は遊花と闇が独占してるものね」
「うぅ……それはそれで恥ずかしいからあまり考えたくはないんだけど……」
放課後。
私達はデュエルアカデミアの中庭で項垂れていた。
桜ちゃんと行く当てもなくデュエルアカデミアの中を見て回りながら闇のカードを持ってる人を探すが、やっぱりそれらしき人はなかなか見つからなかった。
そもそも不死川君が偶々持っていただけで、他には闇のカードがデュエルアカデミアの中にないって可能性もある。
そうなるとデュエルアカデミアの中を捜索するのは無駄になるかも知れないんだよね。
「うーん、どうにかしてデュエルアカデミア内の面倒事や不思議なことを調べる手段ってないかな？」
「そうねー風紀委員とか新聞部、生徒会や先生達に聞けば少しぐらいは情報が手に入りそうよね」
「でも、それって結構怪しまれるよね？なんでそんな情報を調べてるんだーって」
「まあ、そうなるわよね」
「むー難しいなぁ……」
闇のカードを調べるのはいいけど、それで私達が疑われるのはよくない。
私達が何か調べてるなんて噂が出来ちゃったら、もしデュエルアカデミアの中に闇のカードをばら撒いている人がいた場合逃げられちゃうかも知れないし……
「とはいえ、このままじゃラチがあかないし、とりあえず聞きに言ってみるしかないんじゃない？私達にその辺りの知り合いはいないんだし、知り合いがいればそこから聞けばいいんだけど」

「そうだよね。よし、それじゃあまずは風紀委員会にでもーーー」
「見つけたぞ、栗原　遊花!!?」
「えっ?」
　とりあえず風紀委員会に手掛かりを探しに行こうとした私の背後から聞き覚えのある声がかけられる。
　そこにいたのはーーー
「服部、君?」
「デュエルだ!!?栗原　遊花!!?俺はお前を倒すために新たな力を手に入れた!!?お前を倒して、俺は冬城プロに挑戦させて貰う!!?」
　そこにいたのは、闇先パイとのデュエルを賭けて私が初めてデュエルすることになった服部君の姿があった。
　服部君は私が初めて会った時のようにデュエルディスクを構え、鋭い眼光で私を見ていた。
「服部君?その悪いんですが今は少し用事が……」
「ふっ、新たな力を手にした俺に恐れをなして逃げるのか?」
「逃げるわけではないんですが……」
「……遊花」
　鋭い眼光で私を睨みつける服部君に戸惑っていると、桜ちゃんが小さな声で話しかけてくる。
「こいつ、なんか様子がおかしくない?」
「……もしかしたら?」
「もしかするかもね」
「……分かりました。そのデュエル受けて立ちます!!?」
「ふっ、ようやくやる気になったようだな」
　好戦的な笑みを浮かべる服部君を横目に私は桜ちゃんに私の後ろに下がってもらいデュエルディスクを起動して構える。
　このデュエルはもしかしたら危険なデュエルになるかも知れない。
　だけど、逃げるわけにはいかない。
　私の後ろには、護りたい親友がいるんだもん!!?
「……行きます!!?」
「今度こそお前を地に這い蹲らせてやろう!!?」

『決闘!!?』

遊花　ＬＰ８０００
香月　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は俺だ。俺は忍者マスターＨＡＮＺＯを召喚!!?」

〈忍者マスターＨＡＮＺＯ〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１８００

フィールドに現れたのは銀の忍装束を着た仮面をつけた忍者。
「忍者マスターＨＡＮＺＯの効果発動!!?このカードが召喚に成功した時、デッキから「忍法」と名のついたカード１枚を手札に加える事ができる。俺はデッキからデッキから忍法　変化の術を手札に加える。カードを４枚伏せてターンエンドだ」

遊花　ＬＰ８０００　手札５
ーーーーー　ー
ーーーーー
ー　ー
ーー○ーー
ー▲▲▲▲　ー
香月　ＬＰ８０００　手札１

「私のターン、ドロー!!?」
「スタンバイフェイズ、忍者マスターＨＡＮＺＯをリリースし、リバースカードオープン!!?永続罠、忍法　変化の術!!?自分フィールドの表側表示の忍者モンスター１体をリリースしてリリースしたモンスターのレベル＋３以下のレベルを持つ獣族・鳥獣族・昆虫族モンス

ター1体を、手札・デッキから特殊召喚する!!?ただし、このカードがフィールドから離れた時にそのモンスターは破壊される。俺はデッキから鳥獣族モンスター、ダークシムルグを特殊召喚する!!?」

〈ダークシムルグ〉☆7　鳥獣族　闇属性
ＡＴＫ２７００

ＨＡＮＺＯの姿が煙に包まれ、ＨＡＮＺＯがいた場所から煙を吹き飛ばしながら黒い身体の怪鳥が現れる。
「そのモンスターは……」
「ダークシムルグの永続効果、このカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手はカードをセットすることができない!!さらに2枚のリバースカードをオープン!!?永続罠、魔封じの芳香!!?虚無空間!!?魔封じの芳香の効果でこのカードが魔法＆罠ゾーンに存在する限り、お互いに魔法カードはセットしなければ発動できず、セットしたプレイヤーから見て次の自分ターンが来るまで発動できず、虚無空間の効果でこのカードが魔法＆罠ゾーンに存在する限り、お互いにモンスターを特殊召喚できない!!?」
「っ、この布陣は……」
「これでお前は魔法・罠を使えず、特殊召喚もできない。前は先攻を取られたからこそやられたが今度こそ、お前には何もさせない」
こちらの全てを封じ込むような布陣を作った服部君が不敵な笑みを浮かべる。
確かに、前に戦った時には先手を取ってセットしていたカードを使って突破することができたが今回セットカードはない。
私にできることはモンスターを召喚することのみで、レベル1が主体の私のデッキではダークシムルグを倒すのは至難の技だ。
……だけど、こう言い換えることもできる。
至難の技ではあるけれど、出来ないわけじゃない、と。
「いえ、それぐらいじゃ私は止められません!!?私だって前より強くなってるんです!!?」

「何？」
「私はものマネ幻想師を召喚!!?」
〈ものマネ幻想師〉☆1　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ０
フィールドに現れたのは手鏡を手に持つ道化師のモンスター。
「ものマネ幻想師の効果発動!!?このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して、このカードの攻撃力・守備力は、選択したモンスターの元々の攻撃力・守備力と同じ数値になります!!?」
「何!?」
「私が対象にするのは、勿論ダークシムルグ!!?」
ものマネ幻想師がダークシムルグを鏡で写すと、ものマネ幻想師の姿がダークシムルグに変化する。
ものマネ幻想師
ＡＴＫ０→２７００
「バトル!!?ものマネ幻想師でダークシムルグを攻撃!!?イリュージョンミラー!!?」
ダークシムルグがものマネ幻想師に向けて闇を纏った暴風を放つが、ダークシムルグに変化したものマネ幻想師も同じように闇を纏った暴風を放ち、ぶつかり合った暴風は両者を吹き飛ばし、爆散させた。
「くっ……相討ちか。ダークシムルグが墓地にいったことにより虚無空間は破壊される……」
「これで特殊召喚の制限とカードのセットが解除されました!!?私はカードを3枚セットしてターンエンドです!!?」
遊花　ＬＰ８０００　手札２
ー▲▲▲ー　　ー

ーーーーー
ー　　ー
ーーーーー
ー△△ー▲　　ー
香月　ＬＰ８０００　手札１

「チッ、まさかこんなにあっさりとロックを解除してくるとはな。俺のターン、ドロー!!?リバースカードオープン!!?魔法カード、マジックプランター!!?自分フィールドの表側表示の永続罠カード１枚を墓地へ送って自分はデッキから２枚ドローする。俺は魔封じの芳香を墓地へ送って２枚ドローする!!?」

「自分で魔封じの芳香を解除するカードを仕掛けていたんですね……」

「俺は成金（ゴールド）忍者を召喚!!?」

〈成金忍者〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ５００

フィールドに現れたのは紫の忍装束を着た恰幅のいい仮面をつけた忍者。

「成金忍者の効果発動!!?１ターンに１度、手札から罠カード１枚を墓地へ送ってデッキからレベル４以下の忍者と名のついたモンスター１体を表側守備表示、または裏側守備表示で特殊召喚する!!?俺は手札のスキルプリズナーを捨ててデッキから２体目の忍者マスターＨＡＮＺＯを特殊召喚する!!?」

〈忍者マスターＨＡＮＺＯ〉☆４　戦士族　闇属性
ＤＥＦ１０００

「忍者マスターＨＡＮＺＯの効果発動!!?このカードが反転召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから同名カード以外の忍者と名のついた

モンスター1体を手札に加える事ができる!!?俺はデッキから黄昏の忍者―ジョウゲンを手札に加える!!?そして、現れろ!!?闇夜に紛れしサーキット!!?」
「リンク召喚ですか……」
服部君が正面に手を前に突き出すと、巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター2体!!?俺は成金忍者と忍者マスターＨＡＮＺＯの2体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?聖騎士の追想　イゾルデ!!?」
〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

成金忍者とＨＡＮＺＯがサーキットの中に消えると、代わりに師匠も使っている金髪と白髪の2人の女性が現れる。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター1体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキから黄昏の忍者―カゲンを手札に加える!!?さらに聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター1体をデッキから特殊召喚する!!?俺はデッキから風魔手裏剣、月鏡の盾、最強の盾、団結の力を墓地に送り、3体目の忍者マスターＨＡＮＺＯを特殊召喚!!?」
〈忍者マスターＨＡＮＺＯ〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１８００
「忍者マスターＨＡＮＺＯの効果発動!!?デッキから黄昏の忍者将軍―ゲツガを手札に加える!!?俺は、スケール1の黄昏の忍者―ジョウゲンとスケール１０の黄昏の忍者―カゲンでペンデュラムスケール

をセッティング!!?」
「っ!!?ペンデュラムカード!!?」
服部君を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中に鎖鎌を持った金色の鎧を纏った忍者と紫のマントを羽織った忍者が現れ、下に1と10の数字が現れる。
「黄昏の忍者―カゲンのペンデュラム効果により、自分は忍者モンスターしかペンデュラム召喚できないがわこれで俺は2から9までのモンスターを同時に召喚可能だ!!?深淵に浮かびし新月よ!!?我を勝利へと導け!!?ペンデュラム召喚!!?来たれ、我が刃!!?」
服部君がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって3つの光が舞い降りる。
「レベル4、機甲忍者フレイム!!?」

〈機甲忍者フレイム〉☆4　戦士族　炎属性
ＡＴＫ１６００

最初に現れたのは青い忍装束を纏った忍者。
「レベル5、機甲忍者アース!!?」

〈機甲忍者アース〉☆5　戦士族　地属性
ＡＴＫ１６００

フレイムに続くように現れたのは茶色の忍装束を纏った忍者。
そして2体の忍者後ろから、2本の旗を背負った黒い鎧の忍者が現れる。
「レベル8、黄昏の忍者将軍―ゲツガ!!?」

〈黄昏の忍者将軍―ゲツガ〉☆8　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２０００

「っ、一気にモンスターが……」

「機甲忍者フレイムの効果発動!!?・このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分フィールド上の忍者と名のついたモンスター1体を選択して選択したモンスターのレベルを1つ上げる!!?・俺は機甲忍者フレイムのレベルを1つ上げる!!?・」

機甲忍者フレイム
☆4→5

「クックック、これで準備は整った。お前に見せてやろう、俺の新しい力を!!?・」
「新しい力、ですか?・」
服部君は不気味な笑みを浮かべてフレイム達に手をかざす。
その瞬間、服部君の身体から闇が溢れ出し、服部君の身体を覆っていく。
「っ!?・?・これってやっぱり……服部君!!?・」
「俺はレベル5になった機甲忍者フレイムと機甲忍者アースでオーバーレイ!!?・2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?・エクシーズ召喚!!?・」
フレイムとアースが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、そこに現れたのは赤髪をたなびかせた一刀の刀を逆手に持つ赤き鎧の忍者。
「闇より生まれし刃よ!!?・その絶技にて主君を守れ!!?・現れろ!!?・No.12 機甲忍者クリムゾンシャドー!!?・」
〈No.12 機甲忍者クリムゾンシャドー〉★5 戦士族 地属性
ATK2400
「やっぱり、No.!!?・これが人を狂わせる闇のカードの力ってわけね……」
「でも、なんで服部君がNo.を……」

「クックック、お前達もこのカードを知っているようだな。だが、お前達の問いに答えるつもりはない!!?黄昏の忍者将軍―ゲツガの効果発動!!?忍之一字!!?同名カードは1ターンに1度、フィールドに攻撃表示で存在する場合、同名カード以外の自分の墓地の忍者モンスター2体をこのカードを守備表示にし、特殊召喚する!!?黄昏の忍者将軍―ゲツガを守備表示にし、現れろ、2体の忍者マスターＨＡＮＺＯ!!?」

黄昏の忍者将軍―ゲツガ
ＡＴＫ２０００→ＤＥＦ３０００
〈忍者マスターＨＡＮＺＯ〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１８００

ゲツガが2本の旗を掲げて座り込むと、ゲツガに寄り添うように2体のＨＡＮＺＯが現れる。
「2体の忍者マスターＨＡＮＺＯの効果発動!!?デッキから機甲忍者アクアと2体目の成金忍者を手札に加える!!?これだけでは終わらん!!?俺は戦士族レベル4の忍者マスターＨＡＮＺＯ2体でオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
2体のＨＡＮＺＯが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、そこに現れたのは装甲を纏い、二振りの刀を構えた忍者。
「闇に生きし刃よ!!?その妙技にて主君に仇なす者を斬り裂け!!?現れろ!!?機甲忍者ブレードハート!!?」
〈機甲忍者ブレードハート〉★４　戦士族　風属性
ＡＴＫ２２００

「またエクシーズモンスター……!!?」
「機甲忍者ブレードハートの効果発動!!?一箭双雕!!?1ターンに1度、オーバーレイユニットを1つ取り除き、自分フィールド上の忍者と名のついたモンスター1体を選択してこのターン、選択したモンスターは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる!!?俺はＮｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーに2回攻撃を付与する!!?」
「っ!?Ｎｏ．が2回攻撃に!?」
ブレードハートが手にしていた刀を一刀クリムゾンシャドーに手渡し、クリムゾンシャドーが二刀流になる。
ただでさえ物理的なダメージが発生するＮｏ．が2回攻撃になるなんて……
「バトル!!?聖騎士の追想　イゾルデでダイレクトアタック!!?」
「させません!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?聖なるバリア　―ミラーフォース―!!?相手モンスターの攻撃宣言時に、相手フィールドの攻撃表示モンスターを全て破壊します!!?」
「何!?」
イゾルデが勢いよく突撃してくるが、その攻撃は見えない壁弾き返し、その突撃のエネルギーが光弾となって服部君のモンスターを襲う。
これでＮｏ．を破壊できれば服部君を正気に戻せるハズ……!!?
しかし、そんな私の考えを読んだかのように、服部君がニヤリと笑う。
「そうはいかない!!?Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーの効果発動!!?近朱必赤!!?1ターンに1度、オーバーレイユニットを1つ取り除き、このターン、自分フィールド上の忍者と名のついたモンスターは戦闘及びカードの効果では破壊されない!!?この効果は相手ターンでも発動できる!!?」
「っ!?破壊耐性!?」
クリムゾンシャドーが印を結ぶと、服部君の忍者達が赤いオーラに

包まれる。
　赤いオーラに包まれた忍者達は凄まじい速さで移動し、ミラーフォースによって跳ね返されたエネルギーを全て躱しきった。
「相変わらず侮れない奴だ。だが、そのような小細工は俺には通じん‼？機甲忍者ブレードハートでダイレクトアタック‼？機略縦横‼？」
「通しません‼？相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札のゴーストリックランタンの効果発動‼？その攻撃を無効にし、このカードを手札から裏側守備表示で特殊召喚します‼？」
「防いできたか」
　ブレードハートが刀で私を斬り裂こうとした瞬間ブレードハートの正面にジャックオーランタンのような幽霊が現れる。
　ブレードハートは急に現れたランタンに驚きながらも、ランタンを斬り裂こうとしたが、ランタンの姿はすぐに空気に溶けるように消えていった。
「だが、その程度では俺の攻撃は防げん‼？Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーでセットモンスターを攻撃‼？この瞬間、黄昏の忍者―カゲンのペンデュラム効果発動‼？１ターンに１度、自分の忍者モンスターの攻撃宣言時、そのモンスターの攻撃力はダメージステップ終了時まで１０００ポイントアップする‼？」
「えっ？」

Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドー
ＡＴＫ２４００→３４００

　光の柱の中にいるカゲンが印を結ぶと、クリムゾンシャドーの手にしている片方の刀に淡い光が灯る。
　私のフィールドにはセットされているランタンがいる。
　このまま攻撃してもダメージなんて入らないのになんで攻撃力を……
　そんな私の疑問は、次の服部君の言葉ですぐに明らかになる。

「さらに黄昏の忍者―ジョウゲンのペンデュラム効果発動!!?自分の忍者モンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ相手に戦闘ダメージを与える!!?」
「っ!?!?貫通効果!?!?」
　次は光の柱の中にいるジョウゲンが印を結ぶと、クリムゾンシャドーの手にしている淡い光が灯っていない刀を闇が纏う。
「斬り裂け、Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドー!!?光陰流転!!?」
「っ、セットモンスターはゴーストリックランタンです!!?」

〈ゴーストリックランタン〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

　ランタンが笑いながら、クリムゾンシャドーの刀に斬り裂かれ、その衝撃が明らかな質量を持って私に向かってくる。
「っ!!?遊花!!?」
「大丈夫!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?パワーウォール!!?」
「何!?!?」
「相手モンスターの攻撃によって自分が戦闘ダメージを受けるダメージ計算時、その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージが０になるように５００ダメージにつき1枚、自分のデッキの上からカードを墓地へ送ります!!?Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーの攻撃で発生する戦闘ダメージは３４００だからデッキの上から7枚のカードを墓地に送ってダメージを０にします!!?」
　私がデッキの上から7枚のカードを墓地に送ると、私の前に粒子で出来た盾が生まれ、クリムゾンシャドーの斬撃を防ぐ。

Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドー
ＡＴＫ３４００→２４００

「チッ、この奇襲すらも防ぐか。だが、まだ攻撃は残っているぞ!!?Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーでダイレクトアタック!!?光陰流転!!?」
「手札からクリボーの効果発動!!?ダークエンヴェロップ!!?相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこのカードを手札から捨てて発動できる。その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージを０にします!!?」
「これも防ぐだと!?」
　再び私に向かって音も無く忍び寄ったクリムゾンシャドーが二刀の刀を私に振るう。
　しかし、その刀は私を庇うように立ち塞がったクリボーが受け止め、クリボーは粒子になって消えていった。
「っ、おのれ……俺のＮｏ．の攻撃を一度ならず二度までも防ぐとは……俺はこれでターンエンドだ」
「ならエンドフェイズ!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?裁きの天秤!!?相手フィールドのカードの数が自分の手札・フィールドのカードの合計数より多い場合に発動でき、自分はその差の数だけデッキからドローします!!?」
「っ!?何だと!?」
「服部君のフィールドのカードは６枚、私は裁きの天秤１枚のみ。その差分の５枚のカードをドローします!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札５
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー○□○
△ー△ー△　ー
香月　ＬＰ８０００　手札２

「私のターン、ドロー!!?」

ドローしたカードを見て、服部君のフィールドを見ながら次の手を考える。
今の手札じゃ、まだクリムゾンシャドーの強力な耐性を突破することはできない。
なら、今の私がすべきことは……‼?
「私は手札を5枚捨てて、永続魔法、守護神の宝札を発動‼?」
「何?一気に増えた手札を捨てるだと?」
「自分はデッキから2枚ドローし、このカードが魔法&罠ゾーンに存在する限り、自分ドローフェイズの通常のドローは2枚になりす‼?」
「ほう、未来への投資というわけか」
「はい。でも、それだけじゃ終わりませんよ。私は、今ドローした占い魔女　ヒカリちゃんの効果発動‼?このカードをドローした時、このカードを相手に見せることで手札から特殊召喚します‼?」
〈占い魔女　ヒカリちゃん〉☆1　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

フィールドに現れたのは太陽の形をしたステッキを持った黄色い髪の女の子。
現れたヒカリちゃんは嬉しそうにニコニコと笑うと、手にしたステッキをブンブンと振いながらもう片方の手で私に向かってピースサインをする。
うん、貴女の力、貸して貰うね?
「占い魔女　ヒカリちゃんの効果発動‼?このカードが手札からの特殊召喚に成功した場合、自分フィールドのモンスター1体を対象として、そのモンスターを墓地へ送り、デッキから魔法使い族・レベル1モンスター1体を特殊召喚します‼?私は占い魔女　ヒカリちゃんを墓地へ送り、デッキからミスティックパイパーを特殊召喚‼?」
〈ミスティックパイパー〉☆1　魔法使い族　光属性

ＤＥＦ０

ヒカリちゃんが一礼をしてからステッキを振るうと、ヒカリちゃんの身体が光に包まれて霧散する。

そして霧散した光が再び集まると、そこにフルートのようなものを弾いている男の人が現れた。

「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを１枚ドローし、この効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル１モンスターだった場合、自分はカードをもう１枚ドローします!!?」

いつものようにミスティックパイパーがサムズアップをするのを見て、私もサムズアップを返すと、ミスティックパイパーは満足そうに笑って姿を消す。

それと同時に私はカードをドローし、そのカードを服部君に見せる。

「私がドローしたのは金華猫!!?レベル１モンスターなのでもう１枚ドローします!!?そして金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性

ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のようなモンスター。

「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル１モンスターを特殊召喚します!!?墓地から戻ってきて、ものマネ幻想師!!?」

〈ものマネ幻想師〉☆１　魔法使い族　光属性

ＡＴＫ０

「っ、そいつは……」

「ものマネ幻想師の効果発動!!?Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾン

シャドーを選択して、このカードの攻撃力・守備力は、選択したモンスターの元々の攻撃力・守備力と同じ数値になります!!?」
「チッ、小賢しい!!?Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーを対象に墓地に存在するスキルプリズナーを除外して効果発動!!?このターン、選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にする!!?」
　ものマネ幻想師がクリムゾンシャドーを鏡で写そうとするがクリムゾンシャドーを覆うようにバリアが現れて、ものマネ幻想師の効果が弾かれる。
「相討ち狙いだったんだろうが、残念だったな」
「いえ、これでスキルプリズナーは使わせました!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「っ、リンク召喚か!!?」
　私の前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はトークン以外のレベル１モンスター１体!!?私はものマネ幻想師をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?相手を捕える深淵の邪眼!!?リンク１!!?サクリファイスアニマ!!?」

〈サクリファイスアニマ〉ＬＩＮＫ１　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０　→

　ゲツガの目の前に怪しげな邪眼を持つモンスターが現れる。
「サクリファイスのリンクモンスターだと!!?」
「サクリファイスアニマの効果発動!!?コネクトアブソープション!!?１ターンに１度このカードのリンク先の表側表示モンスター１体を対象にその表側表示モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップします!!?対象は黄昏の忍者将軍―ゲツガ!!?吸い込んじゃって、サクリファイスアニマ!!?」
「っ、はじめからこちらが狙いか!!?」

アニマの目の上にある空間からゲツガを吸い込むように風が生み出され、ゲツガが呑み込まれると、アニマの羽根な2振りの旗が飛び出した。

サクリファイスアニマ
ＡＴＫ０→２０００

「これでこれ以上忍者モンスターは蘇生できません!!?私はカードを1枚伏せてエンドフェイズ、金華猫の効果発動!!?召喚・リバースしたターンのエンドフェイズに手札に戻ってきます。これでターンエンドです!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札２
ー▲△△ー　ー
ーーーーー
ー　☆
ーー○ー○
△ー△ー△　ー
香月　ＬＰ８０００　手札２

「俺のターン、ドロー!!?魔法カード、機甲忍法ゴールドコンバージョン!!?自分フィールド上に忍法と名のついたカードが存在する場合、自分フィールド上の忍法と名のついたカードを全て破壊し、その後、デッキからカードを2枚ドローする!!?俺は忍法　変化の術を破壊して2枚ドローする!!?そして再びペンデュラム召喚を行う!!?深淵に浮かびし新月よ!!?我を勝利へと導け!!?ペンデュラム召喚!!?来たれ、我が刃!!?」

服部君がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって2つの光が舞い降りる。

「レベル4、機甲忍者アクア!!?」

〈機甲忍者アクア〉☆４　戦士族　水属性
ＤＥＦ１６００

最初に現れたのは赤い忍装束を纏った忍者。
「レベル４、成金忍者!!?」

〈成金忍者〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１８００

さらにアクアに続くように再び紫の忍装束を着た恰幅のいい仮面をつけた忍者が姿を現わす。
「俺は戦士族レベル４の機甲忍者アクアと成金忍者の２体でオーバーレイ!!?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
アクアと成金忍者が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、そこに現れたのは装甲を纏い、二振りの刀を構えた忍者。
「闇に生きし二振りの刃よ!!?その妙技にて主君に仇なす者を斬り裂け!!?再び姿を現せ!!?機甲忍者ブレードハート!!?」

〈機甲忍者ブレードハート〉★４　戦士族　風属性
ＡＴＫ２２００

「２体目のブレードハート……!!?」
「２体の機甲忍者ブレードハートの効果発動!!?一箭双雕!!?オーバーレイユニットを１つ取り除き、Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーと１体の機甲忍者ブレードハートに２回攻撃を付与する!!?さあ、苦しみに喘ぐがいい!!?バトル!!?Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーでサクリファイスアニマを攻撃!!?」
クリムゾンシャドーが二刀の刀をアニマに向かって振るう。

だけど、そんな単調な攻撃を受ける程、私は甘くない!!?

「Ｎｏ．に操られた服部君にあげるライフなんて、１ポイントもありません!!?リバースカードオープン!!?永続罠、強制終了!!?この効果はバトルフェイズ時にのみ発動でき、自分フィールド上に存在するこのカード以外のカード１枚を墓地へ送る事で、このターンのバトルフェイズを終了します!!?」

「何!?バトルフェイズを終了させる永続罠だと!?」

「私はサクリファイスアニマに装備されていた黄昏の忍者将軍―ゲツガを墓地に送ってバトルフェイズを終了します!!?」

クリムゾンシャドーの刃がアニマを斬り裂こうとした瞬間、アニマの羽根からゲツガと共に吸収した旗が放たれ、クリムゾンシャドーの刀を弾き飛ばし、アニマを守るように見えない防壁が現れた。

「チッ、守ってばかりの臆病者が!!?俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札２

ー△△ーー　ー

ーーーーー

○　☆

ーー○ー○

△ー▲ー△　ー

香月　ＬＰ８０００　手札１

「私のターン、守護神の宝札の効果で２枚ドロー!!?そして金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性

ＡＴＫ４００

「金華猫の効果発動!!?墓地から戻ってきて、ミスティックパイパー」

〈ミスティックパイパー〉☆1　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースしてカードを1枚ドロー!!?私がドローしたのは妖醒龍ラルバウール!!?レベル1モンスターなのでもう1枚ドローします!!?さらに魔法カード、貪欲な壺!!?墓地に存在するクリボー、ゴーストリックランタン、ものマネ幻想師、占い魔女　ヒカリちゃん、ミスティックパイパーをデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローします!!?」

「くっ、また手札が増えたか……」

「まだです!!?再びドローした占い魔女　ヒカリちゃんの効果発動!!?このカードを相手に見せ手札から特殊召喚します!!?」

〈占い魔女　ヒカリちゃん〉☆1　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

「占い魔女　ヒカリちゃんの効果発動!!?私はサクリファイスアニマを墓地へ送り、デッキからものマネ幻想師を特殊召喚!!?」

〈ものマネ幻想師〉☆1　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ０

「っ、またそいつか!!?」

「ものマネ幻想師の効果発動!!?今度こそＮｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーを選択して、このカードの攻撃力・守備力は、選択したモンスターの元々の攻撃力・守備力と同じ数値になります!!?」

ものマネ幻想師がクリムゾンシャドーを鏡で写し、ものマネ幻想師の姿がクリムゾンシャドーに変化する。

ものマネ幻想師

ＡＴＫ０→２４００

「バトル‼?ものマネ幻想師でＮｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーを攻撃‼?イリュージョンミラー‼?」

「チッ、Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーの効果発動‼?近朱必赤‼?オーバーレイユニットを１つ取り除き、このターン、自分フィールド上の忍者と名のついたモンスターは戦闘及びカードの効果では破壊されない‼?迎え撃て、Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドー‼?光陰流転‼?」

ものマネ幻想師が姿を写し取って作り出した刀をクリムゾンシャドーに振るうが、クリムゾンシャドーが印を結ぶと、服部君の忍者達が再び赤いオーラに包まれ、クリムゾンシャドーが凄まじいスピードで動き、ものマネ幻想師を斬り裂いた。

「ゴメンね、ものマネ幻想師……でも、これでＮｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーのオーバーレイユニットはなくなりました‼?メインフェイズ２‼?墓地に存在するジェットシンクロンの効果発動‼?手札を１枚墓地に送り、墓地からこのカードを特殊召喚する‼?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合、除外される‼?」

〈ジェットシンクロン〉☆１　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

現れたのは小さなジェット機のような機械のモンスター。
そして私は再び正面に手をかざす。

「導いて‼?希望に繋がるサーキット‼?」

「リンク召喚……」

「召喚条件はレベル１モンスター１体。私は占い魔女　ヒカリちゃんをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚‼?希望の守り手‼?リンク１‼?リンクリボー‼?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

ヒカリちゃんがサーキットに吸い込まれると、代わりに青い球体のモンスターが現れる。
現れたリンクリボーはどこか警戒した様子でクリムゾンシャドーを見つめていた。
やっぱり、Ｎｏ．を警戒してる……私は今まで受けたことはないけど、師匠が一度入院した程だ。
安全なんてことはありえないということを、きっとリンクリボー達も分かってるんだ。
なら、そんな状況で私が打てる手は……
私は自分の手札にあるカードと服部君のフィールドにいるモンスター達を見てから目を閉じる。
そして覚悟を決めると目を開いて、手を正面にかざした。
「私はレベル１の金華猫とジェットシンクロンでオーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼？」
金華猫とジェットシンクロンが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして、渦が弾けると、舞い降りたのは金色の翼を持つ小さな戦士。
私が呼ぶ小さき希望。
「おいで、Ｎｏ．３９‼？小さき希望は、逆境の中で進化を遂げる‼？希望皇ホープルーツ‼？」

〈Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツ〉★１　戦士族　光属性
ＡＴＫ５００

「Ｎｏ．だと⁉？お前もＮｏ．を所持していたのか⁉？」
「これが、遊花が使うＮｏ．……」
「私はカードを２枚伏せてターンエンドです‼？」

遊花　ＬＰ８０００　手札２
ー△△▲▲　ー
ーーー○ー
○　☆
ーー○ー○
△ー▲ー△　ー
香月　ＬＰ８０００　手札１

「俺のターン、ドロー!!?」
「スタンバイフェイズ!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?バトルマニア!!?相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターは全て攻撃表示になり、このターン表示形式を変更する事はできず、このターン攻撃可能な相手モンスターは攻撃しなければならない!!?」
「何?……何を狙っているかは知らないが、そんなちっぽけなＮｏ.で俺のクリムゾンシャドーに勝てるわけがない!!?とはいえ、そもそもお前には厄介な永続罠があるからな。先にそれを消させてもらうぞ!!?俺は覆面忍者ヱビスを召喚!!?」

〈覆面忍者ヱビス〉☆４　戦士族　風属性
ＡＴＫ１２００

フィールドに現れたのは爆弾を手にした恰幅のいい緑の忍装束を着た忍者。
「覆面忍者ヱビスの効果発動!!?1ターンに1度、自分フィールド上に同名カード以外の忍者と名のついたモンスターが存在する場合、自分フィールド上の忍者と名のついたモンスターの数だけ、相手の魔法・罠カードを持ち主の手札に戻す!!?」
「っ……リバースカードオープン!!?速攻魔法、アクションマジックーフルターン!!?このターン、モンスター同士の戦闘で発生するお

互いの戦闘ダメージは倍になります!!?」
「何だと?」
　エビスが投げた爆弾が私の魔法・罠を吹き飛ばす。
「はっ、血迷ったか。俺のモンスター達はお前の弱小モンスターに比べて圧倒的に攻撃力が高い!!?その効果でやられるのはお前自身だと言うことすら分からないとはな!!?」
　私が発動したアクションマジック―フルターンを見て服部君が一瞬怪訝そうな表情を浮かべたがすぐにこちらを嘲笑うような笑みに変わる。
　Ｎｏ．は人の心の闇を増幅すると言っていたけど、その分気も大きくなっているのかも知れない。
「機甲忍者ブレードハートの効果発動!!?一箭双雕!!?オーバーレイユニットを１つ取り除き、Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーに２回攻撃を付与する!!?さらに装備魔法、エクシーズユニットをＮｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーに装備する!!?このカードはエクシーズモンスターにのみ装備でき、装備モンスターの攻撃力は、装備モンスターのランク×２００ポイントアップする!!?また、自分フィールド上の装備モンスターがオーバーレイユニットを取り除いて効果を発動する場合、このカードは取り除くオーバーレイユニットの１つとして扱う事ができる!!?Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーのランクは５!!?よって攻撃力は１０００ポイントアップする!!?」

　Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドー
　ＡＴＫ２４００→３４００

「バトル!!?覆面忍者エビスでＮｏ．３９　希望皇ホープルーツを攻撃!!?」
「相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動!!?ゼロリンク!!?このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力はターン終了時まで０になります!!?」

リンクリボーの身体が粒子に変わってヱビスに纏わりつき、力を奪う。

覆面忍者ヱビス
ＡＴＫ１２００→０

「いい加減しつこいんだよ!!?Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーでＮｏ．３９　希望皇ホープルーツを攻撃!!?この瞬間、黄昏の忍者―カゲンのペンデュラム効果発動!!?Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーの攻撃力はダメージステップ終了時まで１０００ポイントアップする!!?」

Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドー
ＡＴＫ３４００→４４００

光の柱の中にいるカゲンが印を結ぶと、クリムゾンシャドーの手にしている片方の刀に淡い光が灯り、それを見たクリムゾンシャドーがホープルーツに向かって駆け出す。
「Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーよ!!?脆弱な臆病者のＮｏ．を斬り刻め!!?光陰流転!!?」
クリムゾンシャドーが凄まじいスピードでホープルーツに迫り、二振りの刀を振るう。
それを見て、私は不敵な笑みを浮かべた。
「その攻撃を……待ってました!!?」
「何!!?」
「Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツの効果発動!!?ムーンバリアオリジン!!?自分または相手モンスターの攻撃宣言時、このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除いてそのモンスターの攻撃を無効にし、そのモンスターがエクシーズモンスターだった場合、このカードの攻撃力はそのモンスターのランク×５００ポイントアップします!!?」

「何だと⁉？」
「Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーのランクは５⁉？よって攻撃力は２５００ポイントアップします⁉？」
　クリムゾンシャドーが振るった刀をホープルーツが背中の翼を盾に変えて受け止め、その刀を通じてクリムゾンシャドーから闇の力を奪い取っていく。

Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツ
ＡＴＫ５００→３０００

Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドー
ＡＴＫ４４００→３４００

「ぐっ⁉？コイツ……⁉？」
　自分の力が奪われていることに気づいたのか慌てた様子でクリムゾンシャドーがホープルーツから離れていく。
「貴方がエクシーズモンスターばかりを出し、ランクが低いＮｏ．３９　希望皇ホープルーツを侮ってくれて助かりました。今の貴方のエクシーズモンスターはバトルマニアの効果で攻撃しなければいけません。これならＮｏ．３９　希望皇ホープルーツは全力を出すことができます⁉？」
「っ⁉？貴様、まさか最初からこれが狙いで……⁉？」
「Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドー⁉？貴方を攻略して、私が知る服部君を返して貰います⁉？」
「っ……1体目の？機甲忍者ブレードハートでＮｏ．３９　希望皇ホープルーツを攻撃⁉？機略縦横⁉？」
「Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツの効果発動⁉？ムーンバリアオリジン⁉？オーバーレイユニットを１つ取り除いてそのモンスターの攻撃を無効にし、そのモンスターがエクシーズモンスターだった場合、このカードの攻撃力はそのモンスターのランク×５００ポイントアップする⁉？機甲忍者ブレードハートのランクは４⁉？よって攻

撃力は２０００ポイントアップします‼?」
ブレードハートが振るった刀をホープルーツが背中の翼を盾に変えて受け止め、その力を自身の力に変える。

Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツ
ＡＴＫ３０００→５０００

「ランク１で……攻撃力、５０００だと⁉?っ、クソが‼２体目の?機甲忍者ブレードハートでＮｏ．３９　希望皇ホープルーツを攻撃‼?機略縦横‼?」
「迎え撃って‼?Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツ‼?ホープ剣ルーツスラッシュ‼?」
ブレードハートが素早くホープルーツの背後に回って刀を振り下ろすが、ホープルーツは背中の翼を盾に変えて、振るわれた刀を弾き返す。
刀を弾かれ、体勢を崩したブレードハートにホープルーツは剣を横薙ぎに振るい、両断した。

香月　ＬＰ８０００→２４００

「があっ‼?ぐっ、おおおお‼?Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドーでＮｏ．３９　希望皇ホープルーツを攻撃‼?光陰流転‼?」
香月君が雄叫びをあげると、クリムゾンシャドーが凄まじいスピードでホープルーツに迫り、二振りの刀を振るう。
しかし、次の瞬間、クリムゾンシャドーの刀は空を切り、ホープルーツの姿はクリムゾンシャドーの視界から消える。
「これで終わりです‼?Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツ‼?」
ホープルーツの姿を探し、辺りを見渡していたクリムゾンシャドーは自身の頭上に光輝くものがあることに気付き頭上に視線を向ける。
クリムゾンシャドーの光輝く剣を勢いよく振り被ったホープルー

ツの姿があった。
「闇を断ち切って‼?・ホープ剣ルーツスラッシュ‼?」
ホープルーツが剣を振り下ろすと、クリムゾンシャドーの身体が両断され、爆散した。
「ぐあぁぁぁぁぁ‼?」

香月　ＬＰ２４００→０

ーーーーーーー

「ふぅ……攻略完了です」
「やったわね、遊花‼?」
デュエルが終わり、私の後ろに下がっていた桜ちゃんが安心した表情で声をかけてくる。
私がホッと一息ついて桜ちゃんの方を向こうとすると、デュエルが終わって気絶してしまった服部君のデッキからカードが1枚、勝手に宙に浮き、そのカードを闇のようなものが覆ったかと思うと凄い勢いで回転しながら私の元に飛んできた。
「ひゃぅ⁉?」
「っ⁉?・遊花⁉?」
咄嗟にそのカードを受け止めるために手をかざすと、そのカードを覆っていた闇が跡形も無く霧散し、勢いが弱まりながら私の手の中にカードが収まる。
恐る恐る手の中に収まったカードを見て見ると、私の元に飛んできたのは先程まで服部君に取り憑いていたクリムゾンシャドーのカードだった。
「ふぅ……びっくりした……痛っ‼?」
「遊花⁉?」
クリムゾンシャドーを受け止めたことでホッと一息をついた瞬間、急に頭痛が襲ってくる。
しかし、頭を押さえるとその頭痛が嘘のように消えていった。

「大丈夫⁉？まさか、さっきのデュエルでどこか怪我を……」
「あ、ううん。ちょっと頭痛がしただけだから、平気、へっちゃらだよ。ちょっと集中し過ぎたから疲れちゃったのかも」
「……そう……よかった。もう心配かけないでよね」
「えへへ、ごめんね」
　桜ちゃんがホッとした表情で私の身体を抱きしめてくるので私も優しく抱きしめ返す。
「う……ここは……」
「あ‼？服部君、大丈夫⁉？」
「むっ、栗原か……何をしてるんだ、君達は？」
「っ‼？」
「わわっ、桜ちゃん？」
「ごめん、今はこっち見ないで……」
「え？あ、うん。わかった」
　しばらくして起き上がった服部君は抱き合っている私達を見て怪訝そうな表情を浮かべる。
　私を抱きしめていたことを見られたのが恥ずかしかったのか桜ちゃんは顔を真っ赤にして私の身体を離すと私の後ろに隠れてしまった。
「服部君、大丈夫？」
「ああ……俺はここで倒れていたのか？」
「え？あ、う、うん‼？偶々中庭に来たら服部君が倒れてたから、ビ、ビックリシタヨー」
「どうして棒読みなんだ？とはいえ、心配をかけたな、すまない」
「ううん、ううん‼？気にしなくてもいいよ。困った時は助け合いだもん‼？」
「そうか、いい奴だな、君は」
　そういって服部君が柔らかく笑う。
　……よかった、Ｎｏ．に操られた後遺症みたいなものもないみたい。
　……そうだ‼？

「ねぇ、服部君。このカードって服部君の？このカード、気絶してた服部君が持ってたんだけど……」
「俺が？……Ｎｏ．１２　機甲忍者クリムゾンシャドー？いや、確かに俺は忍者を使っているが、そのようなカードは所持していないぞ」
　クリムゾンシャドーのカードを見た服部君は驚いた表情を浮かべながら首を振る。
　この感じだと、服部君はさっきのデュエルと手にしていたクリムゾンシャドーのことは覚えていないみたいだ。
　直接聞いて何か手掛かりが得られないかと思ったけど、そう簡単にはいかないか。
　そこまで考えて私は手の中にあるクリムゾンシャドーを見る。
　何故だかよく分からないけど、このクリムゾンシャドーからはデュエル中に感じていた闇の気配が一切感じられない。
　なら、もしかしたら……
「うーん。そっか、とりあえず服部君にこのカード返すね」
「ちょっ⁉？遊花⁉？」
「いや、返すと言われてもそもそも俺のカードでは……」
「でも、服部君のデッキなら使えるでしょ？外に落ちてたものだし、風で飛ばされてきたかも知れないから持ち主を探す方が難しいよ。だから、服部君が使ったらいいと思う。忍者を使いこなしてる服部君、カッコいいしね」
　そういって、少し緊張しながらも服部君の手にクリムゾンシャドーを握らせる。
　もし、私の勘違いでまだ闇が残っているのであれば服部君は再び暴走してしまうかも知れない。
　でも、私の感覚がもし正しいのであれば……
「……分かった。とりあえず俺が所持しておこう。だが、敵に塩を送ったことを後悔するなよ？」
「なら、後悔しないように私はもっと強くなるね」
「ふっ、それでこそ栗原だ」

服部君はそう言って笑みを浮かべると、クリムゾンシャドーを自分のデッキに入れた。
……暴走の気配は、ない。
「そうだ‼？一応、保健室に行って見てもらっておいた方がいいよ。倒れてたんだし」
「ふむ、そうだな。それでは俺は保健室に行くとしよう。今回は迷惑をかけたな」
「気にしなくていいよ。それじゃあ、またね」
「ああ」
服部君が保健室の方に歩いていき、その姿が見えなくなるまで見送る。
服部君の姿が完全に見えなくなったところで、桜ちゃんが私に詰め寄ってきた。
「ちょっと遊花⁉？回収したＮｏ．を返すってどういうことよ⁉？もし、また暴走したらどうするのよ⁉？」
「その時はまた私がデュエルすればいいだけだよ。それに、多分もう暴走はしないんじゃないかな？桜ちゃんだって服部君の様子を見てたでしょ？」
「……確かに暴走しそうな感じには見えなかったけど……でも、それでもあれは闇のカードなのよ？」
「いや、それもどうだろう。多分ね、クリムゾンシャドーはもう闇のカードじゃなくなってたよ」
「……は？」
私の言葉に桜ちゃんが目を丸くする。
「私が手にした時にはもうクリムゾンシャドーが纏ってた闇みたいなものが見えなかったもん」
「でも、さっきまでは……」
「私も不思議に思ったけど、私の持ってるホープルーツとギャラクシークィーンも闇のカードじゃなくなってたみたいだし、そんなこともあるのかなって」
私の言葉に桜ちゃんがしばらく考え込んでからため息を吐く。

「……まあいいわ。だけど、心臓に悪いから迂闊な行動は謹んでよね」
「あはは、ごめんね。でも、これでデュエルアカデミアの中にも闇のカードが入ってきてることが分かったね」
「いいことではないけどね。これから忙しくなりそうだわ」
私達は苦笑を浮かべながらこれからのことを話し始める。
これが、私達の一歩目。
闇のカードを巡る長い戦いの始まりだった。

第７０話　亡霊の宴

☆

「あれだけ遊花と桜に言われてたのに……無茶し過ぎ」
「いや、あれは不可抗力ーーー」
「言い訳しない」
「……悪かったよ」
「素直でよろしい」
　公園のベンチに座り、擦り傷だらけの俺を治療してくれた闇にバツが悪く思いながらもそう返事をすると、闇が仕方なさそうな、困ったような笑みを浮かべた。
　鱗之助とのデュエルの後、何とか動ける程度まで回復した俺が仕事場である公園まで行くと、公園のベンチに座っていた闇が物凄いジト目でこちらを見ながら手招きをしていた。
　どうやら、ヘリオロープで作られたネックレスを通じて俺が怪我をしたことを察知して待ち伏せしていたらしい。
　最早発信機みたいだなどと思いながらも、今朝の出来事を説明しながらも、闇からの手当てを受ける。
「というか、お前デュエルアカデミアでの仕事はどうしたんだよ？」
「今の時間は講義がないから抜け出てきた。校長には話を通してあるから問題ない」
「問題しかない気がするが……」
「ん、これでおしまい」
「痛っ⁉？」
「当たり前……これに懲りたら無理はしないように」
「……できる限りな」
「全く懲りてない……遊騎らしくはあるけど」
　俺の手当てを終え、救急箱を鞄の中にしまいながら闇は口元に握り拳を当てて考え込む。

「それにしても、港湾エリアに闇のカードをばら撒いてる奴の関係者がいるのは少し厄介……私達がいる中央エリアからは距離が離れてるし、港湾エリアから海を渡ってケルン外に逃げられたら落とし前をつけられなくなる……」
「それに港湾エリアに拠点があるってことは海を越えて闇のカードがばら撒かれてる可能性もあるもんな」
「私としては遊騎達の危険に繋がらないなら海を越えて闇のカードがばら撒かれようがどうでもいいけど……」
「……相変わらずドライだな、闇は」
「……えい」
「うおっ⁉？何だよ、いきなり？」
闇の言葉に思わず苦笑を浮かべると、闇は勢いよく俺の身体に抱き着いてくる。
突然のことに戸惑っていると、闇は上目遣いをしながら真剣な声色で口を開いた。
「私は別に正義の味方じゃないから……私にとって大切なのは遊騎達がいる、私の両手の中に収まるちっぽけな世界だけ……そのちっぽけな世界が守れれば、他はどうでもいい……」
「……反応に困ることを言うなよ」
「ふふっ……」
照れ臭くて思わず視線を逸らすと、闇は真剣な表情を崩して面白そうに笑いながら抱きついていた腕を離した。
「それはそれとしてこれからしばらくは港湾エリアも調べることにする。ちょっと遠いから帰りは遅くなるけど……」
「闇は移動手段がないんだからちょっとどころじゃないだろ」
闇はその外見もありバイクや車等の移動手段は所持していない。
中央エリアにある栗原家に戻ってくることも考えると港湾エリアを調べるのはかなり僅かな時間になるだろう。
「……そこは気合で何とかする」
「機動力の足りなさを気合で何とかできるレベルかよ。いいから、港湾エリアの調査は俺に任せろって」

「むぅ……また無茶をする」
「戦闘にはならないように気をつけるって」
「それは無理。遊騎は絶対、手かがりを見つけたらそこに突っ込んでいくから」
「……信用ねぇな」
「信用してるからこそ。だけど、だからこそ遊騎が止まらないことも知ってる」
　そういうと闇は俺の手を握って再び真剣な表情を浮かべた。
「何か情報を手に入れたらすぐに連絡して……危ないことは、しないで」
「……善処する」
「ん、それで十分……遊騎は……私が守るから」
　そういって寂しそうに笑う闇に、俺は言葉を返すことができなかった。

ーーーーーーー

「それで、無茶を続ける君はこうしてボクと調査をしてるわけだ」
「仕方ないだろ？場所が場所だけに早めの対処が必要だと思ったんだよ」
「まあ君の考えは正しいとは思うけどね。周りに心配をかけてる事実は別として」
「うぐっ……」
　何とか仕事を終え、夜に連絡を取り合流した俺は今朝の件を話すと物凄く呆れたようなジト目を向けられた。
　夜は1つため息を吐くと真剣な表情で俺を見る。
「はぁ……全く、無茶しかできないのかい、君は？こんなことを続けていると……君は近いうちに死ぬよ」
「……俺はただ、守りたいだけだよ。俺のことを支えてくれる……こんな俺を受け入れてくれた奴らを」
「そのためなら自分を傷つけてでもって？歪んだ自己犠牲精神だね

……いや、自己犠牲の果てにある自殺衝動、かな？」
「そんなこと……」
「……どちらにせよ、ボクの前で死ぬことは赦さないからね。死んでも生きてて貰うよ」
「……死んでたら生きてないだろ」
「はは、そうかもね」
そういうと夜は真剣な表情を崩して俺に背を向ける。
「とにかく、今は情報収集だよ。港湾エリアには酒場が多いし、そこでその鱗之助とかいう船乗りの情報収集をしてみよう」
「……ああ」
歩き出す夜の後を追って俺も港湾エリアを歩き始める。
歩き始めた俺の頭の中で、先程の夜の言葉が嫌に重く響いていた。

ーーーーーーー

「ここだね」
「ああ」
夜空に月が輝き始めた頃、鱗之助の情報を得るため、数軒の酒場を回って情報収集をしていた俺達はとある会社の宿舎に辿り着いた。
どうやら鱗之助は国内の港と港の間を航行する内航船の船員をしており、普段はこの宿舎で寝泊まりをしているらしい。
今朝の件もあり、既にこの宿舎はもぬけの殻になっている可能性も高いが、今は僅かでも闇のカードの手かがりである鱗之助の情報を得る必要がある。
虎穴に入らずんば虎子を得ず。
多少危険だろうと踏み込むしかないと思ってはいたのだが……
「……夜、気づいてるか？」
「……ああ。見られてる……いや、囲まれてるね。この宿舎の中にいる人間にも見られてる。しかも……」
『ウゥ……ウァ‼？』
「不乱健が言うには見ている人間全員から闇のカードに操られてる気

配がするってさ」
「マジか……」
俺の問いかけに、夜は小さく頷いて辺りに意識を向けながら答える。
どうやら踏み込んだ虎穴には親の虎もいたらしい。
情報収集をするために俺達は鱗之助のことを酒場で聞いて回った。
その際に鱗之助に繋がっている人間がいたのかも知れない。
いや、今回の敵は闇のカードを生み出すような奴らだ。
見ている人間全員から闇のカードの気配がするということは、闇のカードの関係者の情報を探す人間が現れたら自動的に迎撃するような機能が闇のカード自体に備わっている可能性すら否定はできない。
「退くしかない……か？」
「素直に退かせて貰えればいいんだけどね。君は怪我人、しかもバイクは駅において来ただろ？徒歩でこの人数を巻くのは流石に厳しい」
「それでもやるしかないだろ」
「そうだけど……っ、避けて、遊騎‼？」
「くらえぇぇぇ‼？」
「っ⁉？くっ‼？」
夜が叫ぶのと同時に俺の背後から1人の船乗りが雄叫びをあげながら殴りかかってきた。
俺は咄嗟に横っ跳びをして躱そうとしたが完全に躱しきることはできず、路地裏の方に殴り飛ばされる。
すると、吹き飛ばされた路地裏の方から同じように2人の船乗りが俺を捕らえようと飛びかかってきた。
「っ‼？やられる、か‼？」
「がっ‼？」
俺は殴り飛ばされた勢いを利用し、地面を転がって飛びかかってきた船乗り達を避け、お返しに蹴りをくらわせる。
「遊騎‼？今飛びかかってきた奴らがいた路地裏には人がいない‼？」
「なら、そこから逃げる、ぞ‼？」

「ぐっ‼?」
男達が飛び出してきた路地裏に向かって走り出した夜の声を聞きながら再び殴りかかってきた船乗りをカウンターの要領で蹴り飛ばして夜の後を追う。
すると、先程入ろうとしていた宿舎からも扉を吹き飛ばしながら何人もの船乗りが飛び出してきて、こちらに向かって走りはじめた。
「チッ、ゾンビ映画かよ‼?」
「無駄口を叩かない‼?三十六計逃げるに如かず、だよ‼?」
月が照らす路地裏の一本道を夜と並走して駆け抜ける。
後ろから聞こえる唸り声はどんどん大きくなっていき、ちらりと背後を見るとその人数は数十人と言える規模まで膨れ上がっていた。
「くそっ‼?どうする?このまま人通りが多い通りに出ちまったら大混乱だぞ?」
「騒ぎに紛れて逃げきれるかも知れないけど、あの理性がないバーサーカー達があのままの勢いで人通りの多い通りに出たら玉突き事故で間違いなく死人が出るだろうね‼?」
「だからってこのまま逃げ続けることも……」
「……仕方ない、か」
「は⁉?夜⁉?」
そういうと、夜は急に走るのを止めて船乗り達の方を向く。
突然の夜の行動に俺も戸惑って脚を止める。
「ここはボクに任せて遊騎は先に逃げて」
「ばっ⁉?死亡フラグなんか立ててんじゃねぇよ⁉?」
「ここで2人共やられたら元も子もないでしょ?そして君は負傷中だ。君よりはボクが殿を務めた方が時間は稼げるさ」
「それなら負傷してる俺が囮になった方が……」
「言ったろ?ボクの前で死ぬことは赦さない、死んでも生きてて貰うって」
「おまーーー」
「いいから‼?早く逃げろ、結束　遊騎‼?君の無事を願ってる人間が待ってるんだろ⁉?」

「っ……くそっ‼?」
夜の剣幕に、俺は苦虫を噛み潰しながら再び走り始める。
このままあの船乗り達に襲われたら、負傷してる俺じゃ役に立てないだろう。
なら、今の俺にできることは……
俺は拳を握り締めながら、自分の成すべきことを成す為に夜道を走り続けるのだった。

ーーーーーーー

○

「ようやく行ったね……」
走り去っていく遊騎を眺めながら、夜は深いため息を吐く。
「全く困った共犯者君だ。勝手に死ぬと決めつけるなんて止めて貰いたいよ。ボクより死ぬ可能性が高い癖に」
『ウゥ‼?』
「不乱健もそう思うだろ?まあ、それが彼の欠点でありながら、嫌いになれないところなんだけど……」
「うおぉぉぉ‼?」
困ったような苦笑を浮かべる夜の背後から1人の船乗りが殴りかかる。
船乗りの拳が夜の身体を捕らえようとした瞬間、夜は船乗りの方を見ずにその拳を掴む。
「なっ⁉?」
「いい加減、五月蝿い……少し静かにして貰えるかな」
「う……あぁぁぁ‼?」
船乗りの拳を掴んだ夜はそのままその場で半回転して船乗りの身体を振り回すと、後ろから追ってきていた船乗り達に向かって投げ飛ばした。
突然投げ飛ばされてきた船乗りを躱すことができず、追ってきてい

た船乗り達の何人かはドミノ倒しのようにその場に倒れていった。
「うーん、ストライクは取れなかったか。ボーリングって難しいな」
『ウゥ……』
「もう少し力加減をしろ、って？ボクより力技が得意な不乱健が何を言ってるのさ？」
「捕まえた‼？」
「だから五月蠅い、って‼？」
「げふっ⁉？」
「ぐぎゃっ⁉？」
夜が不乱健と話している隙をついて、夜を取り抑えようと飛びかかってきた２人の船乗りを、夜はひらりと躱して蹴り飛ばす。
蹴り飛ばされた船乗りはもう１人の船乗りを巻き込みながら凄い勢いで近くのコンクリートでできた建物の壁にめり込み、そのまま２人の船乗りは気を失った。
『ウゥ』
「……うん、確かにこれはやり過ぎたよ。反省する」
「な⁉？なんだこいつ⁉？」
仲間が吹き飛ばされていくのを見て、ドミノ倒しに巻き込まれず、残った船乗りも動揺する。
そんな船乗りに夜はデュエルディスクを起動して構える。
「ボクもあまり野蛮な真似はしたくないんだ。どうせなら１人ずつデュエルをして決めないかい？」
「っ‼？舐めやがって‼？テメェなんか俺様がぶっ潰してやる‼？」
夜の挑発に乗ってデュエルディスクを起動した船乗りと、それを見て身を引いた他の船乗り達を見て内心ほくそ笑む。
いくら自分が強かろうがこの身体はただの少女でしかない。
そして相手の船乗り達は成人した男性だ。
倒れている者もいるが、このまま体力勝負となれば流石に分が悪い。
だが、デュエルとなれば夜が一本道の中央で陣取っている以上、逃げた遊騎を追うこともできず、遊騎が逃げる時間を充分に稼げると踏

んでいた。
「できるものならご勝手に。行くよ？」
『決闘‼？』

夜　ＬＰ８０００
船乗り　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は貰うよ。ボクはモンスターをセット。カードを１枚伏せてターンエンドだよ」

夜　ＬＰ８０００　手札３
ーー▲ーー　ー
ーー??ーー
ー　　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
船乗り　ＬＰ８０００　手札５

「俺様のターン、ドロー‼？俺様はフィールド魔法、巨大要塞ゼロスを発動‼？」
船乗りがフィールド魔法を発動すると、辺りの風景が機械的な要塞の内部に変化する。
「巨大要塞ゼロスの発動時の効果処理として、俺様はデッキからボスラッシュ１枚を手札に加える‼？そして巨大要塞ゼロスの効果発動‼？１ターンに１度、自分メインフェイズに手札から巨大戦艦モンスター１体を特殊召喚する‼？来い、巨大戦艦テトラン‼？」

〈巨大戦艦テトラン〉☆６　機械族　風属性
ＡＴＫ１８００

フィールドに現れたのは４本の腕を持つ巨大な宇宙戦艦。
テトランの姿を見て、夜は思わず引き攣った笑みを浮かべた。
「……いつから船乗りが乗る船は宇宙船になったんだい？」
「船乗りに乗りこなせねぇ船なんてねぇんだ‼？宇宙船だろうと船である限り乗りこなしてやらぁ‼？巨大要塞ゼロスの効果発動‼？自分フィールドに巨大戦艦モンスターが召喚・特殊召喚された場合、そのモンスターに、自身の効果で使用するカウンターを１つ置く‼？さらに自分フィールドの巨大戦艦モンスターの攻撃力・守備力は５００ポイントアップし、相手の効果の対象にならず、相手の効果では破壊されない‼？」

巨大戦艦テトラン
ＡＴＫ１８００→２３００
カウンター０→１

「さらに永続魔法、ボスラッシュを発動‼？自分が通常召喚していないターンにこのカードを発動でき、このカードが魔法＆罠ゾーンに存在する限り、自分は通常召喚できないが、自分フィールドの表側表示の巨大戦艦モンスターが破壊され墓地へ送られた場合、そのターンのエンドフェイズにデッキから巨大戦艦モンスター１体を特殊召喚する‼？」
「破壊されても次々と別の巨大戦艦がやってくるってわけか……面倒だね」
「巨大戦艦テトランの効果発動‼？このカードのカウンターを１つ取り除く事で、フィールド上の魔法・罠カード１枚を破壊する‼？テメェのセットカードを破壊だ‼？」

巨大戦艦テトラン
カウンター１→０

テトランが４本の腕から弾丸を発射し、夜がセットしていたカードを破壊した。
「ギブ＆テイクが破壊されちゃったか」
「バトル‼？巨大戦艦テトランでセットモンスターを攻撃‼？スティールテンタクル‼？」
「セットモンスターは精気を吸う骨の塔だよ」
〈精気を吸う骨の塔〉☆３　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ１５００

骨が組み合わさった不気味な塔がテトランの４本の鉄の腕に押し潰され消滅する。
しかし、骨の塔を消滅させた瞬間、テトランの鉄の腕が爆発し、爆発はテトランの身体中に広がるとそのままテトランは爆散した。
「巨大戦艦テトランの効果、戦闘を行った場合、ダメージステップ終了時にこのカードのカウンターを１つ取り除き、カウンターのない状態で戦闘を行った場合、ダメージステップ終了時にこのカードを破壊する」
「ということは、ボスラッシュの効果で次の巨大戦艦が出てくるってわけか」
「メインフェイズ２‼？カードを１枚伏せ、エンドフェイズ、永続魔法、ボスラッシュの効果発動‼？俺様はデッキから巨大戦艦ビッグコアＭｋ―Ⅱを特殊召喚だ‼？」
〈巨大戦艦ビッグコアＭｋ―Ⅱ〉☆６　機械族　炎属性
ＤＥＦ１１００→１６００

新たに要塞の奥から現れたのは赤いラインの入った銀色の巨大な宇宙戦艦。
「巨大戦艦ビッグコアＭｋ―Ⅱの効果発動‼？このカードが特殊召喚に成功した時、このカードにカウンターを３つ置き、巨大要塞ゼロス

の効果で追加でカウンターを１つ置く‼?」

巨大戦艦ビッグコアＭｋ―Ⅱ
カウンター０→４

「巨大戦艦モンスターは共通効果で戦闘では破壊されない。ただし、戦闘を行ったダメージステップ終了時カウンターを１つずつ取り除いていき、取り除けない場合、破壊されるがな」
「つまり、実質４回の戦闘破壊耐性ってわけだ。巨大要塞ゼロスとボスラッシュの効果もあるし、本当に面倒だね」
「さあ、俺様の艦隊を突破できるものならしてみな‼?ターンエンドだ‼?」

夜　ＬＰ８０００　手札３
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー　□　ー　ー
ー　▲　△　ー　ー　▽
船乗り　ＬＰ８０００　手札３

「あまり時間をかけてられないって言うのに、なかなかどうしてやってくれるじゃないか。ボクのターン、ドロー‼?魔法カード、名推理‼?相手は１～１２までの任意のレベルを宣言し、ボクは通常召喚可能なモンスターが出るまで自分のデッキの上からカードをめくり、そのモンスターのレベルが宣言されたレベルと同じ場合、めくったカードを全て墓地へ送る。違った場合、そのモンスターを特殊召喚し、残りのめくったカードは全て墓地へ送るよ」
「運試しのカードか……俺様が宣言するのはレベル３だ」
「レベル３ね。それじゃあデッキをめくっていくよ。１枚目、アンデットストラグル、２枚目、リターンオブアンデット、３枚目、ヴァ

ンパイアの使い魔‼?ヴァンパイアの使い魔のレベルは1。どうやら君は名探偵にはなれなかったようだね」
「チッ、外したか」
「宣言されたレベルと違うため、ヴァンパイアの使い魔は特殊召喚される‼?おいで、ヴァンパイアの使い魔‼?」
〈ヴァンパイアの使い魔〉☆1　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ０

現れたのは小さな蝙蝠のモンスター。
ヴァンパイアの使い魔は夜の肩に止まり、その首に牙を立てる。
「ヴァンパイアの使い魔の効果発動‼?このカードが特殊召喚に成功した場合、同名カードは1ターンに1度、５００ライフポイントを払って発動できる。デッキからヴァンパイアの使い魔以外のヴァンパイアモンスター1体を手札に加える。ボクは５００ライフポイントを支払いデッキからシャドウヴァンパイアを手札に加えるよ」

夜　ＬＰ８０００→７５００

「そしてヴァンパイアの使い魔をリリースしてシャドウヴァンパイアをアドバンス召喚‼?」
〈シャドウヴァンパイア〉☆5　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２０００

フィールドに現れたのは影のように薄く、黒く染まった巨大な吸血鬼。
現れたシャドウヴァンパイアは咆哮をあげる。
「シャドウヴァンパイアの効果発動‼?このカードが召喚に成功した時、手札・デッキからシャドウヴァンパイア以外の闇属性のヴァンパイアモンスター1体を特殊召喚する‼?ただし、この効果で特殊召喚

に成功したターン、そのモンスター以外の自分のモンスターは攻撃できない。ボクはデッキからヴァンパイアロードを特殊召喚する‼?」

〈ヴァンパイアロード〉☆5　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２０００

フィールドに現れたのは夜空のようなマントを羽織った吸血鬼。
「そして、このカードは通常召喚できず、自分フィールド上に存在するヴァンパイアロード1体をゲームから除外した場合のみ特殊召喚する事ができる‼?ボクはフィールドのヴァンパイアロードを除外する‼?」
ヴァンパイアロードがマントを翻すと、マントで隠れたヴァンパイアロードの身体が膨れ上がっていき、紫色の身体に爪のような物が背中から飛び出した始まりの吸血鬼が姿を現わす。
「現れろ。全ての吸血鬼を統べる真祖‼?ヴァンパイアジェネシス‼?」

〈ヴァンパイアジェネシス〉☆8　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ３０００

「ヴァンパイアジェネシス……そいつがテメェの切り札か」
「ヴァンパイアジェネシスの効果発動‼?ソウルサブミット‼?1ターンに1度、手札からアンデット族モンスター1体を墓地に捨てる事で、捨てたアンデット族モンスターよりレベルの低いアンデット族モンスター1体を自分の墓地から選択して特殊召喚する‼?ボクは手札のレベル8モンスター、死霊王　ドーハスーラを墓地に送って戻っておいで、ヴァンパイアの使い魔‼?」

〈ヴァンパイアの使い魔〉☆1　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ０

「まだだよ‼？魅力せよ‼？月夜に輝くサーキット‼？」
「リンク召喚か……」
夜が正面に手をかざすと、巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はアンデットモンスター２体‼？ボクはヴァンパイアの使い魔とシャドウヴァンパイアの２体をリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？月下で戯れる吸血鬼‼？リンク２‼？ヴァンパイアサッカー‼？」

〈ヴァンパイアサッカー〉ＬＩＮＫ　２　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ１６００　↙？　↘？

ヴァンパイアの使い魔とシャドウヴァンパイアがサーキットの中に消え、代わりに現れたのはピンクの帽子を被った吸血鬼。
「ヴァンパイアサッカーの効果発動‼？同名カードは１ターンに１度、相手の墓地のモンスター１体を対象としてそのモンスターを相手フィールドに守備表示で特殊召喚し、特殊召喚したそのモンスターはアンデット族になる。ボクは君のフィールドに君の墓地から巨大戦艦テトランを特殊召喚するよ」
ヴァンパイアサッカーが墓地にいたテトランの残骸に噛みつくが、機械の身体の硬さに歯を押さえて涙目になる。
泣きそうになりながらも、ヴァンパイアサッカーは勢いよくテトランを蹴り飛ばすが、その硬さに足を押さえてその場を跳びはねる。
しかし、蹴り飛ばした衝撃でテトランは再稼働し、船乗りのフィールドに蘇った。

〈巨大戦艦テトラン〉☆６　機械族↓アンデット族　風属性
ＤＥＦ２３００↓２８００

「無理させてゴメンね。ヴァンパイアサッカーの効果発動‼？１ターンに１度自分・相手の墓地からアンデット族モンスターが特殊召喚された場合に自分はデッキから１枚ドローする‼？」

「チッ、手札を増やしやがったか。だが、巨大要塞ゼロスの効果で特殊召喚された巨大戦艦テトランにカウンターを1つ置く!!?」

巨大戦艦テトラン
カウンター0→1

「構わないよ。シャドウヴァンパイアのデメリットでボクは攻撃できない。カードを1枚伏せてターンエンドだ」

夜　LP8000　手札1
ーーー▲ーー　ー
ー○ーーー
☆　ー
ーー□□ー
ー▲△ーー　▽
船乗り　LP8000　手札3

「俺様のターン、ドロー!!?」
「スタンバイフェイズ、墓地に存在する死霊王　ドーハスーラの効果発動!!?フィンドリバイヴ!!?フィールドゾーンに表側表示でカードが存在する場合、自分・相手のスタンバイフェイズに発動できる。このカードを墓地から守備表示で特殊召喚する!!」
「何!?」
「蘇れ、死霊王　ドーハスーラ」

〈死霊王　ドーハスーラ〉☆8　アンデット族　闇属性
DEF2000

要塞の床に穴が開くとその中から現れたのは髑髏の身体を持つ魔術師のような蛇。
「俺様のフィールド魔法を利用しやがったな!!?だが、そんな蛇が1

体増えたぐらいでなんだってんだ‼?巨大戦艦テトランの効果発動‼?このカードのカウンターを1つ取り除く事で、フィールド上の魔法・罠カード1枚を破壊する‼?テメェのセットカードを破壊だ‼?」

巨大戦艦テトラン
カウンター1→0

テトランが再び夜がセットしていたカードに向かって4本の腕から弾丸を発射する。
放たれた弾丸を見て夜はニヤリと笑った。
「それを待ってたよ。死霊王ドーハスーラの効果発動‼?ゴーストグラジュエイト‼?死霊王　ドーハスーラ以外のアンデット族モンスターの効果が発動した時に2つある効果から1つを選んで適用する。ただし、このターン、自分の死霊王　ドーハスーラの効果で同じ効果を適用できない。その効果を無効にするか、自分または相手の、フィールド・墓地のモンスター1体を選んで除外する‼?」
「何だと‼?」
「ヴァンパイアサッカーの効果で巨大戦艦テトランはアンデット族になっている。そして死霊王　ドーハスーラの効果は対象をとらないから巨大要塞ゼロスに防がれることもない‼?ボクは2つ目の効果を適用して巨大戦艦ビッグコアＭｋ―Ⅱを除外する‼?」
ドーハスーラの魔術でビッグコアＭｋ―Ⅱが闇に呑まれて消滅し、テトランが放った弾丸が夜のセットカードを破壊する。
しかし、夜のセットカードが破壊された瞬間、夜の背後に強欲な壺が乗った巨大なスロットマシーンが現れ、左端のスロットが7の数字で止まった。
「な、なんだそいつは‼?」
「君の巨大戦艦テトランに破壊されたカードだよ。相手のカードの効果によって墓地へ送られた魔法カード、ジャックポット7の効果発動‼?このカードは相手のカードの効果によって墓地へ送られた時、

ゲームから除外される。そしてこの効果によってゲームから除外された自分のジャックポット７が３枚揃った時、自分はデュエルに勝利する‼？」
「なっ⁉？特殊勝利のカードだと⁉？」
「言っただろう？あまり時間をかけるつもりはないんだ。特殊勝利だろうが何だろうが、取れる手段は全てとらせて貰うよ」
そういって不敵な笑みを浮かべる夜を見て、船乗りは怒りの眼を夜に向ける。
そしてそんな船乗りの身体から闇が溢れ始めるか。
「すましやがって‼？そんなに早く終わらせてぇなら終わらせてやるよ‼？相手フィールドのモンスターの数が自分フィールドのモンスターより多い場合、このカードは手札から特殊召喚できる‼？来やがれ、巨大戦艦ブラスターキャノンコア‼？」

〈巨大戦艦ブラスターキャノンコア〉☆９　機械族　地属性
ＡＴＫ２５００→３０００

フィールドに現れたのは巨大な銀色の宇宙戦艦。

「巨大戦艦ブラスターキャノンコアの効果発動‼？このカードが特殊召喚に成功した時、このカードにカウンターを３つ置き、巨大要塞ゼロスの効果で追加でカウンターを１つ置く‼？」

巨大戦艦ブラスターキャノンコア
カウンター０→４

「さらに巨大要塞ゼロスの効果発動‼？、巨大戦艦カバードコアを特殊召喚だ‼？」

〈巨大戦艦カバードコア〉☆７　機械族　地属性
ＡＴＫ２５００→３０００

さらにブラスターキャノンコアと編隊飛行するように円形のボディとその本体を覆うようにカバーが装備された巨大な宇宙戦艦が現れる。
「巨大要塞ゼロスの効果で巨大戦艦カバードコアに自身の効果で使用するカウンターを1つ置く!!?」

巨大戦艦カバードコア
カウンター0→1

「数を揃えてきたか……」
「これだけじゃ終わらねぇ!!?テメェに見せてやる!!?俺様の力をよぉ!!?魔法カード、星に願いを!!?自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択、選択したモンスターと同じ攻撃力または同じ守備力を持つ自分フィールド上のモンスターのレベルは、エンドフェイズ時まで選択したモンスターと同じになる!!?俺様は巨大戦艦ブラスターキャノンコアを選択し、同じ攻撃力を持つ巨大戦艦カバードコアのレベルを巨大戦艦ブラスターキャノンコアと同じにする!!?」

巨大戦艦カバードコア
☆7→9

「レベル9モンスターが2体……来るね」
「俺様はレベル9となった巨大戦艦カバードコアと巨大戦艦ブラスターキャノンコアでオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
カバードコアとブラスターキャノンコアが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれ、渦が爆ける。
しかしーーー
「?モンスターの姿が見えない?」

渦が弾けた場所には何も存在しておらず、夜は首を傾げる。
そんな夜を、船乗りは鼻で笑う。
「ハッ、テメェの目は節穴か？いるだろうが、俺達の真上によぉ‼？」
「真上だって？」
船乗りの言葉に夜は上を見上げる。
しかし、そこにモンスターらしき姿はなく要塞の天窓から太陽が夜達を照らしていた。
「……えっ？太陽？」
そこで夜は異変に気付く。
夜のデュエルが始まったのは時刻が夜の８時を回った頃で、辺りは夜の闇に包まれていた。
だというのに、現在空に太陽が浮かんでいるという状況は明らかに異常だった。
「っ、まさか……‼？」
夜が異変に気付いて再び突如現れた太陽を見上げると、太陽の後ろから機械の身体が展開され、太陽を覆っていく。
そして現れるのは空を覆い尽くす程の巨大な建造物。
「宇宙に浮かびし大輪よ‼？その絶大なる神気で世界を見下ろせ‼？現れろ‼？Ｎｏ．９　天蓋星ダイソンスフィア‼？」
〈Ｎｏ．９　天蓋星ダイソンスフィア〉★９　戦士族　光属性
ＡＴＫ２８００
「っ、いくらなんでも限度がある。何でも大きければいいってわけじゃないってば‼？」
「Ｎｏ．９　天蓋星ダイソンスフィアの効果発動‼？プリシジャンカルキュレーション‼？このカードの攻撃力より高い攻撃力を持つモンスターが相手フィールド上に存在する場合、自分のメインフェイズ１にオーバーレイユニットを１つ取り除く事で、このターンこのカードは相手プレイヤーに直接攻撃できる‼？」
「‼？直接攻撃をしてくるＮｏ．‼？」

「テメェのフィールドにはＮｏ．９　天蓋星ダイソンスフィアより攻撃力が高いヴァンパイアジェネシスがいる‼？よって、Ｎｏ．９　天蓋星ダイソンスフィアは効果を発動できるってワケだ‼？」
　ダイソンスフィアの中心にある太陽にオーバーレイユニットが吸い込まれると、ダイソンスフィアの外装が光りはじめる。
「俺様は巨大戦艦テトランを攻撃表示に変更する」

巨大戦艦テトラン
ＤＥＦ２８００→ＡＴＫ２３００

「バトル‼？巨大戦艦テトランでヴァンパイアサッカーを攻撃‼？スティールテンタクル‼？」
「くっ‼？」

夜　ＬＰ８０００→７３００

　テトランの４本の鉄の腕がヴァンパイアサッカーを押し潰し、同時にテトランが爆散する。
「巨大戦艦テトランの効果、戦闘を行った場合、ダメージステップ終了時にこのカードのカウンターを１つ取り除き、カウンターのない状態で戦闘を行った場合、ダメージステップ終了時にこのカードを破壊する。そしてコイツが本命だ‼？Ｎｏ．９　天蓋星ダイソンスフィアでダイレクトアタック‼？グリッタージャッジメント‼？」
「ぐっ‼？ああっ‼？」

夜　ＬＰ７３００→４５００

　ダイソンスフィアの外装から一斉にレーザーの雨が降り注ぎ、レーザーの雨に身体を貫かれた夜は苦痛の声を上げる。
「ハッ、思い知ったか。俺様の力を‼？」
「っ……この程度でもう勝った気でいるのかい？だとしたら、とん

だロマンチストだね」
「チッ、減らず口を⁉？なら完膚なきまでに叩き潰してやるよ⁉？メインフェイズ２⁉？カードを１枚伏せ、エンドフェイズ、永続魔法、ボスラッシュの効果発動⁉？俺様はデッキから巨大戦艦ビッグコアＭｋ―Ⅲを特殊召喚だ⁉？」

〈巨大戦艦ビッグコアＭｋ―Ⅲ〉☆８　機械族　光属性
ＤＥＦ１９００→２４００

新たに要塞の奥から現れたのはビッグコアＭｋ―Ⅱに似た、中央部に砲塔がつき、赤いラインの入った銀色の巨大な宇宙戦艦。
「巨大戦艦ビッグコアＭｋ―Ⅲの効果発動⁉？このカードが特殊召喚に成功した時、このカードにカウンターを３つ置き、巨大要塞ゼロスの効果で追加でカウンターを１つ置く⁉？」

巨大戦艦ビッグコアＭｋ―Ⅲ
カウンター０→４

「俺様はこれでターンエンドだ⁉？減らず口を叩くってんならＮｏ．９　天蓋星ダイソンスフィアを倒してみやがれ⁉？」

夜　ＬＰ４５００　手札１
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー○□ー　ー
ー　○
ー　ー□ー
ー▲△▲ー　▽
船乗り　ＬＰ８０００　手札０

「ボクのターン、ドロー⁉？ヴァンパイアジェネシスの効果発動⁉？ソウルサブミット⁉？さらにその効果にチェーンして死霊王ドーハ

スーラの効果発動!!?ゴーストグラジュエイト!!?」
「ハッ、狙いがバレバレなんだよ!!?チェーンしてリバースカードオープン!!?カウンター罠、エクシーズブロック!!?自分フィールド上のオーバーレイユニットを1つ取り除いて相手が発動した効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する!!?Ｎｏ．９　天蓋星ダイソンスフィアのオーバーレイユニットを1つ取り除き、死霊王ドーハスーラを破壊だ!!?」
　ダイソンスフィアがオーバーレイユニットをエネルギーに変換し、ドーハスーラにレーザーを放って消滅させる。
「くっ!!?だけど、ヴァンパイアジェネシスの効果によりボクは手札のレベル2モンスター、ヴァンパイアの眷属を墓地に送って戻っておいで、ヴァンパイアの使い魔!!?」

〈ヴァンパイアの使い魔〉☆1　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ０

「ヴァンパイアの使い魔の効果発動!!?ボクは５００ライフポイントを支払いデッキからヴァンパイアスカージレットを手札に加えるよ」

夜　ＬＰ４５００→４０００

「さらに墓地のヴァンパイアの眷属の効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが墓地に存在する場合、手札及び自分フィールドの表側表示のカードの中から、ヴァンパイアカード1枚を墓地へ送ってこのカードを特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。ボクはヴァンパイアの使い魔を墓地に送りヴァンパイアの眷属を特殊召喚!!?」

〈ヴァンパイアの眷属〉☆2　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ０

ヴァンパイアの使い魔の姿が闇に包まれると、その身体が身体の半分が闇に呑まれた白い獣が現わる。
「ヴァンパイアの眷属の効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、同名カードは1ターンに1度、５００ライフポイントを払ってデッキからヴァンパイア魔法・罠カード1枚を手札に加える。ボクは５００ライフポイントを支払いデッキからヴァンパイアの支配を手札に加えるよ」

夜　ＬＰ４０００→３５００

ヴァンパイアの眷属はヴァンパイアの使い魔のように夜の足に牙を立てと、夜の手札にヴァンパイアの支配が手札に加わる。
「オーバーレイユニットは無くなったけど、このまま放置して何かされても嫌だからね。ここは攻める!!?バトル!!?ヴァンパイアジェネシスでＮｏ．９　天蓋星ダイソンスフィアに攻撃!!?ブラッディストーム!!?」
ヴァンパイアジェネシスが手をかざすと、ヴァンパイアジェネシスの周囲に血で出来た槍が現れ、ダイソンスフィアに向かって放たれる。
しかし、その攻撃を船乗りは鼻で笑った。
「ハッ!!?馬鹿め、その攻撃が自分の首を締めることを知るがいい!!?攻撃対象にされたＮｏ．９　天蓋星ダイソンスフィアの効果発動!!?バーニングサンチャージ!!?このカードがオーバーレイユニットの無い状態で攻撃対象に選択された時、自分の墓地のモンスター2体を選択し、このカードのオーバーレイユニットとする事ができる!!?俺様は墓地の巨大戦艦カバードコアと巨大戦艦ブラスターキャノンコアを再びこのカードのオーバーレイユニットとする!!?」
ダイソンスフィアの身体にある太陽にカバードコアとブラスターキャノンコアが吸収され、オーバーレイユニットが生み出される。
「オーバーレイユニットを再び生み出す効果!!?だけど、倒してしま

えばいいだけの話だ!!?」
「そんな簡単に行くわけねぇだろうが!!?リフレクトプラネット!!?オーバーレイユニットを持っているこのカードが攻撃されたバトルステップ時に1度、その攻撃を無効にする!!?」
「攻撃無効まで!?」
ダイソンスフィアに生み出されたオーバーレイユニットが吸い込まれると、ダイソンスフィアが障壁に包まれ、ヴァンパイアジェネシスの槍を全て弾き飛ばした。
「これでＮｏ．９　天蓋星ダイソンスフィアは再びダイレクトアタックができる!!?ありがとよ、オーバーレイユニットを補充してくれてよぉ!!?」
「っ、メインフェイズ2、カードを2枚伏せてターンエンドだよ」

夜　ＬＰ３５００　手札１
ー　ー　▲　▲　ー　　ー
ー　○　□　ー　ー
ー　　○
ー　ー　□　ー
ー　ー　△　▲　ー　　▽
船乗り　ＬＰ８０００　手札０

「俺様のターン、ドロー!!?」
「スタンバイフェイズ、墓地に存在する死霊王　ドーハスーラの効果発動!!?フィンドリバイヴ!!?蘇れ、死霊王　ドーハスーラ!!?」
「いい加減ウゼェんだよ!!?チェーンして速攻魔法、墓穴の指名者!!?相手の墓地のモンスター1体を対象としてそのモンスターを除外し、次のターンの終了時まで、この効果で除外したモンスター及びそのモンスターと元々のカード名が同じモンスターの効果は無効化される!!?死霊王　ドーハスーラは除外だ!!?」
「くっ……死霊王　ドーハスーラが」
闇から現れようとしたドーハスーラが地面から這い出てきた手に

掴まれ、闇の中に戻される。
「これで邪魔ものも消えた!!?Ｎｏ．９　天蓋星ダイソンスフィアの効果発動!!?プリシジャンカルキュレーション!!?オーバーレイユニットを１つ取り除く事で、このターンこのカードは相手プレイヤーに直接攻撃できる!!?」
「させない!!その効果に?チェーンしてカウンター罠、ヴァンパイアの支配!!?自分フィールドにヴァンパイアモンスターが存在し、モンスターの効果・魔法・罠カードが発動した時、その発動を無効にし破壊する!!?その後、破壊したカードがモンスターカードだった場合、自分はその元々の攻撃力分だけライフポイントを回復する!!?これでーーー」
「そんな小細工が効くかよ!!?それにチェーンしてカウンター罠、ギャクタン!!?罠カードが発動した時、その発動を無効にし、そのカードを持ち主のデッキに戻す!!?」
「っ!!?」
発動したヴァンパイアの支配がデッキに戻っていき、夜は苦い表情を浮かべる。
そんな夜を見て、船乗りは嗜虐的な笑みを浮かべる。
「さっきまでの威勢はどうしたよぉ～?偉そうな口を聞いてた割には大したことねぇなぁ?俺様は巨大戦艦ビッグコアＭｋ―Ⅲを攻撃表示に変更する!!?」

巨大戦艦ビッグコアＭｋ―Ⅲ
ＤＥＦ２４００→ＡＴＫ３２００

「バトル!!?Ｎｏ．９　天蓋星ダイソンスフィアでダイレクトアタック!!?グリッタージャッジメント!!?」
「リバースカードオープン!!?罠発動!!?パワーウォール!!?相手モンスターの攻撃によって自分が戦闘ダメージを受けるダメージ計算時、その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージが０になるように５００ダメージにつき１枚、自分のデッキの上からカードを墓地へ送る!!

？Ｎｏ．９　天蓋星ダイソンスフィアの攻撃で発生する戦闘ダメージは２８００‼？よってデッキの上から６枚のカードを墓地に送ってダメージを０にする‼？」

夜がデッキの上から７枚のカードを墓地に送羅列、粒子の盾に変わりダイソンスフィアのレーザーを防ぐ。

「墓地に落ちたグローアップブルームの効果発動‼？このカードが墓地へ送られた場合、墓地のこのカードを除外してデッキからレベル５以上のアンデット族モンスター１体を手札に加える‼？ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はアンデット族モンスターしか特殊召喚できない‼？ボクは……」

グローアップブルームの効果を発動した夜は少し逡巡した後、観念するかのようにデッキからモンスターを加える。

「っ、仕方ない、か。ボクはヴァンパイアフロイラインを手札に加えるよ」

「チッ、防ぎやがったか‼？なら、巨大戦艦ビッグコアＭｋ―Ⅲでヴァンパイアジェネシスを攻撃‼？ラディアントブラスト‼？」

「っ……ヴァンパイアフロイラインの効果発動‼？モンスターの攻撃宣言時このカードを手札から守備表示で特殊召喚する‼？」

〈ヴァンパイアフロイライン〉☆５　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ２０００

夜がフロイラインのカードをフィールドに置くが、フィールドには何も現れなかった。

デュエルディスクには確かに存在しているのに姿を現さないフロイラインに、船乗りが訝しげな表情を浮かべる。

「何？テメェのモンスターはどこだ？」

「……さあね。それより、攻撃はどうする？因みにヴァンパイアフロイラインには自分のアンデット族モンスターが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時に１度、１００の倍数のライフポイントを最大３０００まで払ってその自分のモンスターの攻撃力・守備力はそ

のダメージ計算時のみ払った数値分アップする効果があるよ」
「チッ、このまま攻撃したら大ダメージってわけか。なら、攻撃対象を変更し、ヴァンパイアの眷属を攻撃する‼?」
ビッグコアＭｋ―Ⅲの放ったレーザーの一斉掃射を受け、ヴァンパイアの眷属が消滅する。
「戦闘を行ったダメージステップ終了時、巨大戦艦ビッグコアＭｋ―Ⅲの効果によりカウンターを１つ取り除く」

巨大戦艦ビッグコアＭｋ―Ⅲ
カウンター４→３

「俺様はこれでターンエンドだ。さあ、いつまで持つかなぁ?テメェの身体はよぉ?」

夜　ＬＰ３５００　手札１
ー　ー　ー　ー　ー　　ー
ー○ー□ー
ー　　○
ー　ー○ー
ー　ー△ー　ー　▽
船乗り　ＬＰ８０００　手札０

「ボクのターン、ドローー……思ったより、時間がかかっちゃったね」
「何?」
夜の言葉に船乗りは首を傾げる。
そんな船乗りに、夜は不敵な笑みで応える。
「終わりにしよう。このターンで、君とのデュエルを」
「何だと⁉?」
「まずは墓地に存在する罠カード、リターンオブアンデットの効果発動‼?このカードが墓地に存在する場合、除外されている自分のアンデット族モンスター１体を選んでデッキに戻し、このカードを自分

フィールドにセットする‼?ただし、この効果でセットしたこのカードはフィールドから離れた場合に除外される。ボクは除外されている死霊王　ドーハスーラをデッキに戻してこのカードをセットする」
「っ、除外からデッキに戻すカードがあったのか……」
「そしてカードがセットされたこの瞬間、墓地のＥＭ(エンタメイト)五虹の魔術師の効果発動‼?このカードが墓地に存在し、自分フィールドに魔法・罠カードがセットされた場合、墓地のこのカードを自分のペンデュラムゾーンに置くよ‼?」
　夜の右隣に光の柱が立ち上り、その光の中に虹色に輝く魔術師の姿が映る。
　そしてその魔術師の下には１２の数字が浮かぶ。
「ＥＭ五虹の魔術師のペンデュラム効果により、お互いは自身の魔法&罠ゾーンにセットされているカードの数により効果を適用する。０枚なら自分フィールドのモンスターは攻撃できず、効果を発動できなくなる」
「っ‼?ってことは……」
「君ご自慢のＮｏ．はもう無力ってわけさ。さらに墓地にあるアンデットストラグルの効果発動‼?このカードもリターンオブアンデットと同じように除外されている自分のアンデット族モンスター１体を選んでデッキに戻し、このカードを自分フィールドにセットする。ただし、この効果でセットしたこのカードはフィールドから離れた場合に除外される。ボクは除外されているグローアップブルームをデッキに戻してこのカードをセットする」
「チッ、インチキくさいことをしやがって‼?」
「まだまだ序の口さ。ボクは堕ち武者(デスサムライ)を召喚‼?」

〈堕ち武者〉☆４　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ１７００

　フィールドに現れたのは顔だけになった侍の亡霊。
「堕ち武者の効果発動‼?このカードが召喚に成功した時、デッキか

らアンデット族モンスター1体を墓地へ送る!!?ボクはデッキからグローアップブルームを墓地に送り、再びその効果を発動!!?除外してデッキから死霊王　ドーハスーラを手札に加える!!?ボクは墓地に存在するチューナーモンスター、ゾンビキャリアの効果を発動。手札を1枚デッキの上に置くことでこのカードを墓地から特殊召喚する!!?」
「っ!??チューナーモンスターだと!??」
「ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合に除外されるけどね」

〈ゾンビキャリア〉☆2　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ２００

フィールドに現れた小さなゾンビを見て、夜は少しだけ笑みを浮かべると正面に手をかざす。
「ボクは、レベル4、アンデット族の堕ち武者に、レベル2、チューナーモンスター、ゾンビキャリアをチューニング」
ゾンビキャリアが光の輪になり、堕ち武者が小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から現れるのは骨の身体を持つ骸の龍。
「紅き月に導かれ、死者の声を世界に届けよ!!?シンクロ召喚!!?死に寄り添う優しき賢竜!!?デスカイザードラゴン!!?」

〈デスカイザードラゴン〉☆6　アンデット族　炎属性
ＡＴＫ２４００

「デスカイザードラゴン、だと?」
「この子の効果は今は使えないんだけどね。そんなの今は些細な話さ。魅力せよ!!?月夜に輝くサーキット!!?」
「リンク召喚か……」
夜が正面に手をかざすと、巨大なサーキットが現れる。

「召喚条件はアンデットモンスター２体!!?ボクはヴァンパイアフロイラインとデスカイザードラゴンの２体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?再び月下で戯れる吸血鬼!!?リンク２!!?ヴァンパイアサッカー!!?」

〈ヴァンパイアサッカー〉ＬＩＮＫ　２　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

デスカイザーがサーキットに吸い込まれると、何故かサーキットが光り輝き再びヴァンパイアサッカーが姿を現わす。
「ヴァンパイアサッカーの効果発動!!?ボクは再び君のフィールドに君の墓地から巨大戦艦テトランを特殊召喚するよ」
ヴァンパイアサッカーが墓地にいたテトランの残骸を投げ飛ばすと、落ちた衝撃で再びテトランが再起動を始めた。

〈巨大戦艦テトラン〉☆６　機械族→アンデット族　風属性
ＤＥＦ２３００→２８００
カウンター０→１

「ヴァンパイアサッカーの効果発動!!?１ターンに１度自分・相手の墓地からアンデット族モンスターが特殊召喚された場合に自分はデッキから１枚ドローする!!?さらにヴァンパイアジェネシスの効果発動!!?ソウルサブミット!!?ボクは手札のレベル８モンスター、死霊王　ドーハスーラを墓地に送って戻っておいで、デスカイザードラゴン!!?」

〈デスカイザードラゴン〉☆６　アンデット族　炎属性
ＡＴＫ２４００

「遊騎、君から教えて貰った戦術使わせて貰うよ。ボクは墓地に存在する速攻魔法、バスターモードゼロを除外して効果発動!!?自分メイ

ンフェイズに墓地のこのカードを除外して、手札・デッキからバスターモード1枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンにセットする‼？そしてこの効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できる‼？ボクはデッキから罠カード、バスターモードをセットする‼？」

「バスターモードだと⁉？」

セットされたバスターモードを見て、夜は1度目を閉じると楽しそうな笑みを浮かべてその力を解放する。

「行くよ、デスカイザードラゴンをリリースし、リバースカードオープン‼？罠発動‼？バスターモード‼？」

「っ‼？」

「自分フィールドのシンクロモンスター1体をリリースしてそのモンスターのカード名が含まれる／バスターモンスター1体をデッキから攻撃表示で特殊召喚する‼？アクセスコード、デスカイザードラゴンＥＸＥ‼？」

デスカイザーの正面に骸骨で出来た鎧が現れる。

デスカイザーが咆哮を上げると、鎧が弾け飛びデスカイザーに装着されていく。

装着が終わるとそこに佇むのは悪魔の鎧を見に纏った骸の竜。

「幽鬼合体‼？デスカイザードラゴン／バスター‼？」

〈デスカイザードラゴン／バスター〉☆８　アンデット族　炎属性
ＡＴＫ２９００

「デスカイザードラゴン／バスター、だと⁉？」

「さあ、始めようか。偽りの太陽が照らすこの夜に……亡霊の宴をね。デスカイザードラゴン／バスターの効果発動‼ゴーストフィースト‼？このカードが特殊召喚に成功した時、自分・相手の墓地からアンデット族モンスターを任意の数だけ選択して自分フィールド上に特殊召喚する‼？」

「なっ⁉？アンデットモンスターの任意蘇生だと⁉？」

「ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、このターンのエンドフェイズ時に破壊されるけどね。戻っておいで、シャドウヴァンパイア!!?死霊王　ドーハスーラ!!?」

〈シャドウヴァンパイア〉☆５　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２０００

〈死霊王　ドーハスーラ〉☆８　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２８００

〈闇より出でし絶望〉☆８　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２８００

デスカイザードラゴン／バスターが咆哮を上げると、闇の中から亡者達が雄叫びを上げながら姿を現わす。
「くっ、大型モンスターを大量に蘇らせるだと!!?」
「まだだ!!?ボクは闇属性レベル８モンスター、死霊王　ドーハスーラと闇より出でし絶望でオーバーレイ!!?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
ドーハスーラと闇より出でし絶望が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、現れたのは顔に布を被った巨大な人型のモンスター。
「人に生み出されし生命よ!!?その優しき拳で闇を撃ち砕け!!?現れろ!!?Ｎｏ．２２不乱健!!?」

〈Ｎｏ．２２不乱健〉★８　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ４５００

『ウゥ……ウァァァ!!?』
夜を守るように夜の前に現れた不乱健は空に向かって雄叫びをあ

げ、辺りの空気を震わせる。
「馬鹿な、Ｎｏ．だと⁉？」
「さあ、仕上げといこうか。墓地のアクションマジック―ダブルバンキングの効果発動‼？このカードが墓地に存在する場合、自分メインフェイズに手札から魔法カード１枚を捨ててこのカードを自分の魔法＆罠ゾーンにセットするよ。ただし、この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できない。ボクは手札のアンデットネクロナイズを捨ててこのカードをセットする。さらに今墓地にいったアンデットネクロナイズの効果発動‼？このカードもリターンオブアンデットと同じように除外されている自分のアンデット族モンスター１体を選んでデッキに戻し、このカードを自分フィールドにセットする。ただし、この効果でセットしたこのカードはフィールドから離れた場合に除外される。ボクは除外されているゾンビキャリアをデッキに戻してこのカードをセットする」
ネクロナイズがセットされたことで夜の魔法・罠ゾーンが埋まる。
その瞬間、光の柱にいた五虹の魔術師から虹色のオーラが夜のモンスター達に放たれ、その身体を包み込んだ。
「ＥＭ五虹の魔術師のペンデュラム効果発動‼？自分フィールドに４枚以上のセットカードがある時、自分フィールドのモンスターの攻撃力は元々の数値の倍になる‼？」
「っ⁉？何だと⁉？」

ヴァンパイアサッカー
ＡＴＫ１６００→３２００

シャドウヴァンパイア
ＡＴＫ２０００→４０００

デスカイザードラゴン／バスター
ＡＴＫ２９００→５８００

ヴァンパイアジェネシス
ＡＴＫ３０００→６０００

Ｎｏ．２２不乱健
ＡＴＫ４５００→９０００

「攻撃力９０００だと⁉？」
「君のモンスターが耐性を持っていたってこれなら関係ない。モンスターが生き残ろうとも、君が生き残れなければ関係ない‼？バトル‼？デスカイザードラゴン／バスターで巨大戦艦ビッグコアＭｋ―Ⅲに攻撃‼？マストダイパーガトーリィ‼？」
「ぐあぁぁ‼？」

船乗り　ＬＰ８０００→５４００

デスカイザードラゴン／バスターが放った炎がビッグコアＭｋ―Ⅲを呑み込み、燃やし尽くす。
「ＥＭ五虹の魔術師のペンデュラム効果により、効果を発動できなくなっている巨大戦艦はカウンターを取り除けない。巨大戦艦は戦闘破壊されないらしいけど、それは逃げられないのと同じだよね？ヴァンパイアジェネシスで巨大戦艦ビッグコアＭｋ―Ⅲに攻撃‼？ブラッディストーム‼？」
「がぁぁぁっ⁉？」

船乗り　ＬＰ５４００→２６００

ヴァンパイアジェネシスの放つ血で出来た槍が、燃え続けているビッグコアＭｋ―Ⅲを貫き、ビッグコアＭｋ―Ⅲの機体のあちこちから爆炎が上がる。
「これで最後‼？Ｎｏ．２２不乱健でＮｏ．９　天蓋星ダイソンスフィアを攻撃‼？カラプスフィスト‼？

『ウァァァァ‼?･』
「くっ‼?･迎え撃て‼?Ｎｏ･９　天蓋星ダイソンスフィア‼?･グリッタージャッジメント‼?･」
　虹色のオーラを纏った不乱健が助走をつけ、ダイソンスフィアに向かって勢いよく跳躍すると、不乱健を地上に落とそうとダイソンスフィアも外装から一斉にレーザーの雨を降らせる。
　不乱健は虹色のオーラを使って、空中を蹴りながらレーザーの雨を交わすとその巨大な拳をダイソンスフィアの核に振りおろす。
　すると、ダイソンスフィアの核が粉々に砕け散り、ダイソンスフィアは爆散した。
「ぐあぁぁぁっ‼?･」

船乗り　ＬＰ２６００→０

ーーーーーーー

「ふぅ……なんとか勝ったけど……」
　デュエルが終わり、気絶した船乗りから移動してきたダイソンスフィアを手に取りながら、立体映像が消えて元の路地裏に戻ったことを確認した夜は辺りを見回す。
　立体映像が消えた路地裏では夜を取り囲むように船乗りが近づいてきていた。
　どうやらフィールド魔法で当たりの風景を張り替えた際に反対側の路地から近づいてきていたようだ。
「さっきより増えてる……まあ、アレだけ巨大なモンスターが攻撃してたんだから居場所もバレるよね」
　夜はため息を吐きながら、空に浮かぶ月を見上げる。
「遊騎は……逃げてくれたよね?･馬鹿なことしないといいんだけど……いや、馬鹿はボクの方かもね」
　夜はそう自嘲気味に笑うと、再び船乗り達に向かってデュエルディスクを構える。

「……いいよ、こんなに月も綺麗なんだ。いくらでも相手してあげようじゃないか」
そういって、夜が船乗り達と再びデュエルを始めようとしたところでーーー
「っ、何か聴こえる……これは、エンジン音？」
夜の耳が自分の後方から聴こえてくるエンジン音を捉えた。
何かのエンジン音はどんどん夜のいる場所に近づき、そのエンジン音がバイクのものであると気付いた時には夜達の姿をバイクのライトが照らしていた。
「邪魔だ‼？どけ‼？」
バイクに乗っている人物は怒鳴り声を上げながら減速することなく夜達に近づき、夜を背後から取り囲んでいた船乗り達は慌てて近づいてきたバイクを避ける。
「ちょっ⁉？嘘でしょ⁉？」
夜が思わず衝撃に備えて顔を隠すように手をかざすが、バイクは夜の少し手前でUターンをすると夜の真横に止まった。
おそるおそる夜がバイクに乗っている人物に目をやると、そこにいたのはーーー
「悪い、待たせたな」
「遊騎⁉？」
被っていたヘルメットを脱いで夜を庇うように立つ遊騎がいた。
「な、何で逃げてないのさ⁉？」
「何でって、逃げるわけないだろ。夜が、俺の友達が俺を庇って1人で危険なことをしようとしてるんだ。それを見捨てちまったら、俺はもう胸を張って夜の友達だなんて言えなくなる」
「っ……ば、馬鹿なのかい⁉？いや、分かってたよ、君が馬鹿なことぐらい‼？分かってたけど、何で戻ってきちゃうのさ⁉？」
そういいながら夜は遊騎に詰め寄る。
「戻ってきたら、君は絶対に無茶をするじゃないか‼？そうならないために君を逃したって言うのに‼？それなのに君は‼？」
「酷い言われようだな……まあ否定はできないんだが。安心しろ

よ、俺だって別に無策で戻ってきたわけじゃない。強力な助っ人を連れてきたからさ」
「えっ？」
夜が首を傾げた瞬間、遊騎の背後から何者かが船乗り達の前に躍り出る。
そこにいたのはスーツを着た黒髪でショートボブの小学生程の少女。
その少女はデュエルディスクを起動しながら平坦な声で遊騎に尋ねる。
「この人達が手掛かり？」
「一応な。もっとも、闇のカードに操られてるからどこまで情報を引き出せるかは分からないけどな」
「そう……この人達が遊騎を傷付けたんだよね？」
「えっ？まあ、確かに不意を突かれて少し殴り飛ばされたりはしたけど……」
「そう……遊騎を傷つけたんだ……そっか……ふふっ」
「……ええっと、遊騎？彼女は大丈夫かい？」
「……悪い、ダメかも知れない」
無表情のまま不気味な声を漏らす少女に、夜は引き攣った笑みを浮かべる。
遊騎は頭を掻きながら、困ったようにその名を口にした。
「とりあえず……ほどほどにな、闇」
「ん……任せて……この人達は私の心を滾らせた……だから……1人残らず……ブチころがす……」
「……ほどほどにな」
引き攣った笑みを浮かべる遊騎達を背に、闇は無表情のまま闘志を滾らせるのだった。

第７１話　不自然な凶星

☆

「これで終わり。ヴェルズオピオンでダイレクトアタック。暴虐のクリエイションクライシス」
「ぎゃあああああ‼？」

船乗り　ＬＰ１２５０→０

オピオンが口から闇を纏った氷のブレスが闇のカードに操られていた最後の船乗りを呑み込み、デュエルが終わる。
「一通り片付いた？」
「みたいだな、サンキュー、闇」
辺り一面に倒れ伏せた船乗り達を見ながら、闇は心なしか自慢げに胸を張る。
「えへん……頑張った……だから、ご褒美に撫で撫でを所望する」
「ぷっ、何だそりゃ。ほら、これでいいか」
「むふー……よきにはからえ」
俺が闇の頭を軽く撫でると、闇が心から満足そうな笑みを浮かべる。
そんなじゃれ合っている俺達を見て、夜は呆れたようなため息を吐いた。
「君達、仲がいいのはいいけど、こんな敵陣のど真ん中、しかも辺りが死屍累々の状態でやることじゃないでしょ」
「まあ、無事だったんだからいいじゃないか。誰かさんの死亡フラグも成立しなかったし」
「うっ、アレはその、勢いで言ったというか……」
「その子が遊騎の言ってた一緒に調査してるお友達？」
俺の言葉に視線を泳がせる夜を見て、闇が首を傾げる。
そういえば、来る前に友達と調査してたって話はしたが、名前まで

は言ってなかったな。
「ああ。こいつは……」
「知ってる、眼竜　夜。プロリーグでも有名人」
「やっぱり知ってたか」
「ん、私もデュエルしたことあるから。すごく強かった」
「それをボクより有名人で、苦戦もせずに圧勝した冬城プロに言われるのは少し複雑なんですが……」
相変わらずの無表情ながらもどこか楽しそうに口にする闇に、夜が苦笑いを浮かべる。
まあどちらも同じプロリーグのトップ決闘者だからデュエルする機会があるのは当然か。
そして圧勝したのか、闇……まあ、夜のデッキだとヴェルズオピオンを出されたらほとんど動けなくなるし、そこを突かれたのだろう。
「それに、プロリーグ以外でも会ったことあるから」
「プロリーグ以外でも？」
「ん。前に遊騎に少し話した1年前のーーー」
「あー!!？あー!!？」
「むぐっ」
闇が何かを口にしようした時、夜が慌てた様子で闇の口を塞ぐ。
何だかよく分からないが、今闇が話そうとしたことを夜は聞かれたくないってことなのか？
夜に口を塞がれながらも、闇は目でどうするかと尋ねてくる。
そんな闇に俺は首を横に振って答えとする。
別に本人が聞かれたくないことを無理矢理聞き出そうとは思わない。
話す必要があれば向こうから話してくれるだろうし、敵が潜伏している可能性があるこの場所でそんな押し問答をする意味もないだろう。
「夜、闇を放してやってくれないか？」
「うっ……だけど……」

「別にお前が聞かれたくないことを無理矢理聞き出したりしねぇし、闇だってお前が嫌がるなら話さないさ。だから、な」
「うっ……分かった、よ」
そういうと夜は闇の口を塞いでいた手を退ける。
解放された闇は夜にぺこりと頭を下げた。
「ごめんなさい。言っちゃダメなことだとは思わなかったから、あなたが黙ってて欲しいなら私は話さない」
「い、いえ、こちらこそ急に口を塞いでしまってすみませんでした‼?」
「ん、別にいい。敬語も不要。遊騎と同じように接してくれた方が、私も嬉しい」
「……分かったよ、闇……さん」
「ん、呼びにくいならそれでいい。遊騎がいつもお世話になってる。これからよろしく、夜」
「あ、ああ」
「それはそれとして、これからどうする?一応インヴェルズオリジンに記憶を漁らせてるけど、ろくな情報はなさそうだよ?」
一通り夜との自己紹介を終えた闇が倒れている船乗り達を指差しながら首を傾げる。
船乗り達をよく見ると、闇のデュエルディスクに置かれたままになっているインヴェルズオリジンから溢れ出した闇が船乗り達の身体を包んでいた。
おそらく前にブラックミストを使っていた男にも行っていたように記憶を読み取っているのだろう。
「とりあえず、こいつらがいた宿舎に行ってみるか。中にいた奴らが全員闇のカードに操られてたなら、何か重要なものがあるかも知れないし」
「ん、分かった。本当なら無茶したことを怒りたいところだけど、私を頼ってきたから許す。さっさと終わらせて一緒に遊花のご飯を食べに帰ろう」
「……ちょっと待って。遊花って、この前紹介してくれた遊騎の弟

子だよね？なんで遊花ちゃんの家に遊騎と闇さんが帰るのさ？」
「……あー」
闇の言葉に思わずといった風に夜が口を開く。
完全にいつもの感じで闇は話したけど俺達が遊花の家に居候してるのは内緒なんだよな。
どう説明するべきか悩んでいると何でもないことのように闇が答える。
「私達、今遊花の家に居候してるから」
「はぁ⁉？それって同棲なんじゃ……」
「ん、スキャンダル。別に広めてくれてもいいよ？」
「こらこら、遊花にまで迷惑がかかるからそういうことを言うんじゃない」
「むー残念」
「何が残念だ‼？悪いな、夜。今のは聞かなかったことにしてくれ」
「いや、色々と無理があると思うんだけど……」
夜は凄く引き攣った表情で目を泳がせると、深いため息を吐いた。
「……はー、分かったよ。ボクのことも触れないでくれたし、これでおあいこってことにしとく」
「悪りぃな」
「……まさか遊花ちゃんに手を出したりは……いや、ないか、前の感じだと」
「？2人共疲れてる？」
「お前（闇さん）のせいだ（です）……」
「むぅ……解せぬ」
納得がいかない様子の闇と、疲れたようにため息を吐く俺達は締まらない雰囲気のまま夜の港湾エリアを歩いていくのだった。

ーーーーーーー

「お邪魔します」
「敵陣に声かけて入っていってどうするんだよ」

「残党が出てくるなら早い方がいいかなって」
「逆に逃げられる可能性もあるだろうが」
「……それは盲点だった」
「何でもいいけどもう少し緊張感を持ってくれるかい？」
訪れた船乗り達の宿舎は闇のカードに操られた船乗り達が出払ったせいか異様な静けさが漂っていた。
俺が見た限り人がいないだけで特に怪しいところはないが……
「ん……ここ、かな？」
「闇？」
闇が宿舎の奥にある暖炉の壁を蹴り飛ばすと、何かが外れる音が聞こえ、暖炉が動き出したかと思うと、暖炉があった場所から階段が現れた。
「これって、隠し階段⁉？」
「またベタな……よく分かったな、闇」
「隠してるつもりなのかも知れないけど、結構強力な闇の力が残ってたから……」
「……本当に、頼りになるよ」
得意げな笑みを浮かべる闇に苦笑を浮かべながらも、闇が見つけた隠し階段を降っていく。
隠し階段を降った先にあったのは何もない小さな部屋だった。
部屋の中はすでにもぬけの殻になっていて、大きなものを引きずったような痕跡はあるが、既に手がかりにはなりそうになかった。
「遅かったか……」
「君がその鱗之助とかいう船乗りを見つけたのは今朝だったんだろ？今は既に夜だ。半日分時間があれば、操られていた船乗り達を利用して使ってたものを全部運び出すぐらいはできるんじゃないかな？」
「でも、闇のインヴェルズオリジンでその記憶を読み取ることはできなかったんだろ？」
「何もここの船乗りを使う必要はない。ここの船乗り全てを宿舎から出払わせてその間に他の操られた人間で運ぶことはできる」
「間接的にして足を付かなくしたってわけか……」

「意外と厄介……っ、誰か来る」
「何？」
　隠し部屋でここで行われていたことを考察していると、闇が何かの気配を感じ、俺達は階段の方を向く。
　すると、階段を降って隠し部屋に姿を現したのはーーー
『まさか、この部屋が見つけられるとはね。君達か、闇のカードを追っているのは』
「っ‼？お前は、あの時の‼？」
　黒の装甲のようなスーツに黒いヘルメットを被った男。
　忘れるハズもないコートオブアームズを狙い、ロンゴミアントを使って俺を病院送りにしたあのヘンテコヘルメット野郎だった。
「闇、夜‼？コイツが俺を前に襲った闇のカードを生み出してる奴だ‼？」
「っ、なんだって⁉？」
「この不審者が？」
『クックック、あの時は世話になったね、結束　遊騎。そのうえ、世界ランキング４位、『氷の女王』冬城　闇。現世界ランキング１６位、『真祖』眼竜　夜までいるとは、私も有名人になったものだ。やはり、才能があるものは周りの目を惹きつける』
「やっぱり俺達のことを知ってるのか」
「曲がりなりにも色んな意味で有名人だしね、ボク達は」
「何コイツ……すごく気持ち悪い」
　俺達が警戒するような視線を向けると、ヘンテコヘルメット野郎はデュエルディスクを起動させ、デュエルディスクを操作する。
　すると、前にデュエルした時と同じように急に辺りの風景が変化し、気づけば隠し部屋はなくなり、辺りは闇に包まれ、草生い茂る星降る霊園になっていた。
「っ、またこのヘンテコ空間か‼？」
『ヘンテコ空間とは心外だな。ここは私の才能により生み出された立体映像に質量を与えた現実世界とは異なる仮想領域。閉幕世界（クローズワールド）、死者と生者（ミッドガルド）の境界』

「閉幕世界……っ‼?」
「遊騎⁉?」
　ヘンテコヘルメット野郎の言葉を聞いた瞬間、俺の頭にノイズが走り、何かが浮かんでくる。

ーーーーーーー

『そしてここが＊の閉幕世界、＊＊＊＊＊＊。綺麗な場所でしょ？それに便利なんだよ、ここならデュエルが終わるまで誰も出れないし入れないから、誰の邪魔も入らないもん』

ーーーーーーー

「っ、今のは前の……この閉幕世界からはデュエルが終わるまで誰も出れないし入れない、だったよな？」
『ほう……正体不明の抹消者（アンノウンイレイザー）と戦った時のことを覚えているのか』
「やっぱりあの時デュエルしたのはお前のお仲間なんだな」
『クックック……知っているならば話は早い。私とデュエルしなければ君達はここから出ることはできない』
　そういってヘンテコヘルメット野郎がデュエルディスクをこちらに向ける。
　咄嗟にデュエルディスクを起動しようすると、それを闇が手で制した。
「私がやる……遊騎を傷つけた落とし前をつけさせる」
「闇……」
「それに、遊騎も夜もデュエルでのダメージが抜けてないでしょ？なら、1番ダメージがない私が適任」
「……悪い、頼んだ」
「ん、素直でよろしい。夜もそれでいい？」
「この場で1番強いのは間違いなく闇さんだからね……任せます」
「ん、任された……コイツは私がブチころがす……」
　そういうと闇がデュエルディスクを起動し、ヘンテコヘルメット野

郎に構える。
『ほう、君がでるか。世界ランキング４位、『氷の女王』冬城　闇』
「私の大切な人を傷つけた落とし前、つけてもらう」
『できるかな、君に？』
「最初に言っておく……私は、強い」
『決闘‼？』

闇　ＬＰ８０００
黒い男　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

○

「先攻は私。私はレスキューラビットを召喚」
〈レスキューラビット〉☆４　獣族　地属性
ＡＴＫ３００

闇が呼び出したのはヘルメットを被った可愛いらしいうさぎのモンスター。
「レスキューラビットの効果、フィールドのこのカードを除外して、デッキからレベル４以下の同名の通常モンスター２体を特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに破壊される」
現れたレスキューラビットが空高く跳び上がってそのまま姿を消す。
代わりに空中から落ちてきたのは２体の禍々しい闇を纏った岩石の戦士。
「私はヴェルズヘリオロープを２体特殊召喚」

〈ヴェルズヘリオロープ〉☆４　岩石族　闇属性
ＡＴＫ１９５０

『それが貴様の闇のカードか』
「私は２体のレベル４ヴェルズモンスター、ヴェルズヘリオロープ２体でオーバーレイ。２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚」
２体のヘリオロープが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から青い翼を持つ漆黒の龍が舞い降りる。
「希望を消し去る暴龍、ランク４、ヴェルズオピオン」

〈ヴェルズオピオン〉★４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２５５０

「ヴェルズオピオンの永続効果、イビルソートカース。オーバーレイユニットを持っているこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、お互いにレベル５以上のモンスターを特殊召喚できない」
『ほう……厄介な効果を持っているな』
「さらにヴェルズオピオンの効果発動、イビルソートインベーション。オーバーレイユニットを１つ使い、１ターンに１度、デッキから『侵略の』魔法・罠カード１枚を手札に加える。私はデッキから速攻魔法、侵略の汎発感染を手札に加える。私はカードを２枚伏せてターンエンド」

闇　ＬＰ８０００　手札４
ー▲ー　ー
ーーーー
○　ー
ーーーー
ーーーー

黒い男　ＬＰ８０００　手札５

『私のターン、ドロー。速攻魔法、手札断殺。お互いのプレイヤーは手札を２枚墓地へ送り、その後、それぞれデッキから２枚ドローする』

「手札交換……」

『私は星因士（サテラナイト）アルタイルを召喚』

〈星因士アルタイル〉☆４　戦士族　光属性

ＡＴＫ１７００

フィールドに現れたのはわし座の名を持つ翼を持つ星の戦士。

『星因士アルタイルの効果発動!!?このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、星因士　アルタイル以外の自分の墓地のテラナイトモンスター１体を守備表示で特殊召喚する。この効果の発動後、ターン終了時までテラナイトモンスター以外の自分フィールドのモンスターは攻撃できない。私は星因士（サテラナイト）ベガを特殊召喚』

〈星因士ベガ〉☆４　戦士族　光属性

ＤＥＦ１６００

アルタイルの身体が輝き、その輝きに導かれて琴のような形をした星の戦士が姿を現わす。

『さらに星因士ベガの効果発動!!?このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、手札から星因士ベガ以外のテラナイトモンスター１体を特殊召喚する。手札から星因士（サテラナイト）ウヌクを特殊召喚』

〈星因士ウヌク〉☆４　戦士族　光属性

ＡＴＫ１８００

アルタイルに呼応するようにベガの身体も輝きはじめ、その輝きに導かれてさらに蛇使いのような星の戦士が姿を現わす。

『星因士ウヌクの効果発動!!?・このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから星因士ウヌク以外のテラナイトカード1枚を墓地へ送る。私はデッキから星因士(サテラナイト)デネブを墓地に送る』

そして男はモンスター達に手をかざす。

『私は3体のレベル4モンスター、星因士アルタイル、星因士ウヌク、星因士ベガでオーバーレイ。3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?・』

アルタイル、ベガ、ウヌクが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けると、空から翼が生え、剣と光の輪を持つ光輝く戦士が舞い降りる。

『闇夜に輝く破滅の戦士!!?・星輝士(ステラナイト)デルタテロス!!?・』

〈星輝士デルタテロス〉★4　戦士族　光属性

ＡＴＫ２５００

『星輝士デルタテロスの効果発動!!?・オーバーレイユニットを1つ使い、1ターンに1度フィールドのカード1枚を対象とし破壊する!!私が選択するのはヴェルズオピオン。バーンコメット!!?・』

デルタテロスが持つ光の輪から隕石が現れ、オピオンに降り注ぐ。

「チェーンして攻撃力２５００以上の闇属性モンスター、ヴェルズオピオンをリリースし、罠カードを宣言してリバースカードオープン。罠発動、闇のデッキ破壊ウイルス」

『っ、侵略の汎発感染じゃないだと?伏せたと思わせて別のカードを伏せていたのか……』

「自分フィールドの攻撃力２５００以上の闇属性モンスター1体をリリースし、魔法・罠、どちらかのカードの種類を宣言し、相手フィールドの魔法・罠カード、相手の手札、相手ターンで数え3ターンの間に相手がドローしたカードを全て確認し、その内の宣言した種類のカードを全て破壊する。私が宣言したのは罠カード。相手フィールドの罠カード、相手の手札、相手ターンで数えて3ターンの間に相手

がドローしたカードを全て確認し、その内の罠カードを全て破壊する」
オピオンの姿が消え、男の手札とデッキが全て闇に覆われる。
そして手札を覆っていた闇が消えると、男の手札は1枚になっていた。
「破壊できたのは神星なる因子と幻影霧剣（ファントムフォッグブレード）……残ったのは星因士（サテライトナイト）リゲル……十分なダメージは与えれた」
『……バトル!!?星輝士デルタテロスでダイレクトアタック!!?デルタブレイク!!?』
「……」

闇　LP8000→5500

高速で移動するデルタテロスが闇の身体を何度も斬り付ける。
しかし、身体を斬り付けられたハズの闇は表情1つ変えずにジッと黒い装甲を纏った男を見つめていた。
『闇のゲームによる痛みはあるハズだが、表情1つ変えないか』
「この程度の攻撃で怯む程私は弱くない」
『口が減らない女だ。メインフェイズ2、私は星輝士デルタテロス1体でオーバーレイ!!?1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?ランクアップエクシーズチェンジ!!?』
デルタテロスが再び空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りたのは星のような輝きを放つ神龍。
『闇夜を払う幽玄なる神龍よ!!?邪悪なる者に裁きを与えよ!!?ランク5、星輝士（ステラナイト）セイクリッドダイヤ!!?』
〈星輝士セイクリッドダイヤ〉★5　幻竜族　光属性
ATK2700
「っ!!?美傘が使ってるダースメタトロンと同じ幻竜族……しか

も、遊騎の持っているプレアデスと同じセイクリッドモンスター……」
遊騎が使用しているプレアデスと同じセイクリッドモンスターが、美傘が所持しているダースメタトロンと同じ幻竜族として現れたことに、流石に闇も驚きを露わにする。
そんな闇の様子を見て、男は愉快そうな笑い声をあげる。
『クックック、流石に驚いたようだな。どうだ、この神々しい姿は？あらゆるカードを生み出すことができる神である私に相応しいカードだとは思わないか？』
「神々しい姿、か……皮肉だね……欲望塗れのあなたには過ぎたカードだよ」
『クックック、闇に染まりきっている君に言われても負け惜しみにしか聞こえないな。星輝士セイクリッドダイヤは自分のターンのメインフェイズ2に、同名以外の自分フィールドのテラナイトエクシーズモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚する事ができる。そして星輝士セイクリッドダイヤの永続効果、エタニティトゥインクル‼？オーバーレイユニットを持ったこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、お互いにデッキからカードを墓地へ送る事はできず、墓地から手札に戻るカードは手札に戻らず除外される』
「っ……面倒な」
『私はこれでターンエンドだ。さあ、君の力を見せてみたまえ』
「ウイルスの効果、1ターン目終了」

闇　ＬＰ５５００　手札４
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　○　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
黒い男　ＬＰ８０００　手札１

「私のターン、ドロー。私は召喚僧サモンプリーストを召喚」
〈召喚僧サモンプリースト〉☆４　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ８００

闇の前に現れたのは黒いローブを纏った魔法使い。
しかし、その魔法使いは直ぐにその場に座り込む。
「召喚僧サモンプリーストは召喚時、守備表示になる」

召喚僧サモンプリースト
ＡＴＫ８００↓ＤＥＦ１６００

「私は影霊衣（ネクロス）の反魂術を捨てて召喚僧サモンプリーストの効果、１ターンに１度、手札から魔法カード１枚を捨てて、デッキからレベル４モンスター１体を特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン攻撃できない」
『無駄だ。闇の中だろうと星の光が絶えることはない。星輝士セイクリッドダイヤの効果発動!!?スターリーヘブン!!?相手の闇属性モンスターの効果が発動した時、このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除き、その発動を無効にし破壊する!!?』
「っ、闇属性メタの効果……」
　サモンプリーストが呪文を唱えようとすると、セイクリッドダイヤの身体が輝きはじめ、咆哮をあげると、サモンプリーストに向かって流星が降り注ぎ、跡形もなく消しとばした。
『さあ、君の召喚権とモンスターは消えた。君に星輝士セイクリッドダイヤを突破できるかな?』
「小物らしいセコさ……ならば逆に問う……その程度で私が止まるとでも思うの?」
『ほう……』
「墓地に存在するユニコールの影霊衣（ネクロス）と影霊衣の反魂術を除外して影霊衣の反魂術の効果発動、自分フィールドにモンスターが存在しない

場合、自分の墓地からこのカードと影霊衣モンスター1体を除外してデッキから影霊衣魔法カード1枚を手札に加える。私はデッキから影霊衣（ネクロス）の万華鏡を手札に加える」

『!!?手札断殺の時に墓地に送っていたか……』

「そして、儀式魔法、影霊衣の万華鏡。儀式召喚するモンスターと同じレベルになるように、自分の手札・フィールドのモンスター1体をリリース、またはEXデッキのモンスター1体を墓地へ送り、手札から影霊衣儀式モンスターを任意の数だけ儀式召喚する……私はEXデッキからレベル10モンスター、波動竜騎士ドラゴエクィテスを墓地に送る」

フィールドに輝くダイヤモンドのような物が現れ、それにドラゴエクィテスの姿が浮かび上がる。

しばらくするとそのダイヤモンドが輝きはじめ、光が収まると、ダイヤモンドがあった場所に魔杖を持った氷の暴龍の鎧を纏った魔法使いと緑の鳥のような鎧を纏った小柄な戦士が現われる。

「その身に宿すは希望を粉砕する暴龍。その魔法は希望すら打ち砕く。儀式召喚。可能性を打ち砕く魔導師、グングニールの影霊衣（ネクロス）」

〈グングニールの影霊衣〉☆7　魔法使い族　水属性
ＡＴＫ２５００

「その身に宿すは祈りの歌。その旋律は争いをも凍てつかせる吹雪となる。儀式召喚。未来に舞い上がる戦士、クラウソラスの影霊衣」

〈クラウソラスの影霊衣〉☆3　戦士族　水属性
ＤＥＦ２３００

「クラウソラスの影霊衣の効果発動、プレアーシンフォニー。ＥＸデッキから特殊召喚された、フィールドのモンスター1体を対象としてターン終了時まで、そのモンスターの攻撃力は0になり、効果は無効化する。対象にするのは星輝士セイクリッドダイヤ」

クラウソラスの影霊衣が歌を歌いはじめると、吹雪が吹き荒れ、セイクリッドダイヤを氷の中に閉じ込める。

星輝士セイクリッドダイヤ
ＡＴＫ２７００→０

「バトル。グングニールの影霊衣で星輝士セイクリッドダイヤを攻撃。暴虐のアイシクルクライシス」
『チッ……迎え撃て、星輝士セイクリッドダイヤ!!?イーサルフォール!!?』
セイクリッドダイヤが再び咆哮をあげ、グングニールの影霊衣に向かって流星と共にブレスを放つ。
放たれるセイクリッドダイヤの攻撃にグングニールの影霊衣が魔杖を振るうと、流星とブレスが凍りついていき、ブレスを伝ってセイクリッドダイヤをも凍りつかせる。
凍り付いたセイクリッドダイヤに向けてグングニールの影霊衣が魔杖を振り下ろすと、凍り付いた流星が巨大な氷柱に変化し、セイクリッドダイヤに向けて一斉に放たれ、その身体は串刺しにして粉砕した。

黒い男　ＬＰ８０００→５５００

『くっ……』
「私はこのままターンエンド」

闇　ＬＰ５５００　手札１
ー　ー　ー　ー
ー　ー○□ー
ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー

黒い男　ＬＰ５５００　手札１

『クックック、なかなかやるじゃないか。流石は世界ランキング４位、『氷の女王』と言ったところか』

そういってヘルメット越しに愉快そうな声で笑う男を、闇は冷たい無表情で睨む。

「……こちらは退屈もいいところ。全然心が踊らない……あなた、戦う気はあるの？」

『……』

闇の言葉に男は沈黙で応える。

沈黙を続ける男に、闇は冷たい無表情のまま言葉を紡ぐ。

「……まあいい。別にあなたが戦う気があるかどうかだなんて関係ない。あなたが生み出した闇のカードのせいで、私の大切な人が傷つけられた。やる気がないなら、さっさとブチころがされろ」

『物騒なお嬢さんだ。だが、まだ私の実験は終わっていないのでね。もうしばらく付き合って貰おう!!?私のターン、ドロー!!?』

「闇のデッキ破壊ウイルスの効果、ドローしたカードを確認させて貰う」

『クックック、いいだろう……存分に確認するがいい、私の才能を!!?私が引いたのはＲＵＭ（ランクアップマジック）ー七皇（ザ・セブンス・ワン）の剣!!?』

「ＲＵＭ……七皇の剣？」

「ＲＵＭー七皇の剣、だと？ぐっ!!?」

「遊騎!!?どうしたんだい!!?」

男が発動した七皇の剣を見て、遊騎は頭を抑える。

心配そうに夜が見つめる中、遊騎の頭の中に記憶がノイズ混じりで蘇ってくる。

「あのカード……俺は知っている。気を付けろ、闇!!?そいつは直接Ｎｏ．を呼び出してランクアップさせれるんだ!!?」

「!!?……分かった」

『っ、確か奴は正体不明（アンノウン）の抹消者（イレイザー）とデュエルしていたな……まあいい。知ったところで防ぐことなどできやしない!!?このカード名の

効果はデュエル中に１度しか適用できず、自分のドローフェイズに通常のドローをしたこのカードを公開し続ける事で、そのターンのメインフェイズ１の開始時に発動できる‼？私はＲＵＭ－七皇の剣を発動‼？ＣＮｏ．以外のＮｏ．１０１～Ｎｏ．１０７のいずれかをカード名に含むモンスター１体を、自分のＥＸデッキ・墓地から選んで特殊召喚し、そのモンスターと同じＮｏ．の数字を持つＣＮｏ．モンスター１体を、そのモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚する‼？ＲＵＭ－七皇の剣の効果でＥＸデッキより現れろ、Ｎｏ．１０４‼？偽善の仮面を被り、弱者に救いの光を与えよ‼？不吉なる仮面舞踏会の支配人、仮面魔踏士（マスカレードマジシャン）シャイニング‼？『

〈Ｎｏ．１０４仮面魔踏士シャイニング〉★４　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ２７００

現れたのは清廉そうな仮面をつけ、白いスーツに身を包んだ青いつばさを持つ魔術師。
「そしてＮｏ．１０４仮面魔踏士シャイニング１体でオーバーレイ‼？１体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築‼？カオスエクシーズチェンジ‼？」
シャイニングが空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りたのは清廉な仮面が黒く禍々しいものに代わり、全身が血で染まったかのような真紅のスーツを身に付けた邪悪なる魔術師。
「現れろ、ＣＮｏ．１０４‼？偽善の仮面を外し、愚者を冥府の仮面舞踏会に導け‼？絶望を告げる恐怖の死神、仮面魔踏士（マスカレードマジシャン）アンブラル‼？」

〈ＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラル〉★５　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ３０００

「これが遊騎が話してたＣＮｏ．……」
『クックック、正体不明の抹消者（アンノウンイレイザー）でも実験はしたが、これは想像以上の力だ。やはり私の才能に不可能はない‼』
「自分の才能を過信して……無駄に高いプライド……」
『才能がないものが何を言おうと負け惜しみにしか聞こえないな。この力、存分に味わうがいい。私は星因士リゲルを召喚‼?』

〈星因士リゲル〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

フィールドに現れたのは宝石のように輝く星の戦士。
『星因士リゲルの効果発動。召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、フィールドのテラナイトモンスター１体を対象としてそのモンスターは、攻撃力が５００ポイントアップする』
「む……」
『ただしこの効果を受けたモンスターはエンドフェイズに墓地へ送られる。私は星因士リゲルの攻撃力を５００ポイントアップする』

星因士リゲル
ＡＴＫ１９００→２４００

『バトル‼?星因士リゲルでクラウソラスの影霊衣を攻撃‼?』
「ただでやられるつもりはない。クラウソラスの影霊衣の効果発動、プレアーシンフォニー。対象にするのはＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラル」
クラウソラスの影霊衣の歌が響き、吹雪がアンブラルに向けて吹き荒れる。
しかし、自身に吹き付ける吹雪を見て、アンブラルは不気味な笑い声をあげた。
『クックック、使うと思っていたぞ、その効果を‼?その効果にチェーンしてＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラルの効果発動‼?カース

ドリーパー‼?』
「‼?」
『このカードがＮｏ．１０４仮面魔踏士シャイニングをカオスオーバーレイユニットとしている場合、以下の効果を得る。１ターンに１度、相手フィールド上で効果モンスターの効果が発動した時、このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除き、その発動を無効にする‼?さらにその後、相手の手札をランダムに１枚墓地へ送り、相手ライフを半分にする‼?』
「っ……相手に多数の影響を与える無効効果……」
『私はクラウソラスの影霊衣の効果を無効にし、君の手札とライフを減らさせてもらおう‼?』
　アンブラルが杖を振るうと、吹き荒れていた吹雪が黒いオーラを纏いながら跳ね返され、闇を襲う。
　跳ね返された吹雪により、闇の手札は吹き飛ばされ、ライフポイントも削り取った。

闇　ＬＰ５５００→２７５０

「っ……」
『そして攻撃は続行される‼?クラウソラスの影霊衣を砕け、星因士リゲル‼?ダイヤモンドスター‼?』
　リゲルが生み出したダイヤモンドの隕石がクラウソラスの影霊衣を押し潰し、消滅させる。
『続けてＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラルでグングニールの影霊衣を攻撃‼?ブラッディマスカレード‼?』
「……迎え撃って、グングニールの影霊衣。暴虐のアイシクルクライシス」
　グングニールの影霊衣が魔杖を振るい、巨大な氷柱を放つが、放たれた氷柱をアンブラルは踊るようなステップで躱していく。
　氷柱を躱しきったアンブラルが杖を振るうと、グングニールの影霊衣の視界を奪うように闇が辺りを包み込む。

視界を奪う闇に紛れ、アンブラルはグングニールの影霊衣の背後に回り込むと頭部を杖で執拗に殴りつけ、撲殺した。

闇　ＬＰ２７５０→２２５０

「っ……ごめんね、グングニールの影霊衣」

『これで君のフィールドと手札のカードは全て消え、残りライフもアンブラルで削りきれる程になった。どうした、『氷の女王』？世界ランキング４位の力はその程度か？』

「……」

『だんまりか。あまり失望させないでほしいものだな。エンドフェイズ、星因士リゲルは自身の効果により墓地へ送られる。私はこれでターンエンドだ』

闇　ＬＰ２２５０　手札０

ーーーーーー　ー

ーーーーーー

ー　○

ーーーーーー

ーーーーーー　ー

黒い男　ＬＰ５５００　手札０

ーーーーーーー

☆

「ＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラルのオーバーレイユニットは無くなったとはいえ、これはかなり厳しい状況だね……」

闇とヘンテコヘルメット野郎のデュエルを見て、夜が難しい表情を浮かべる。

確かに闇の手札は０。

ライフポイントも２２５０ではアンブラルのダイレクトアタックを受ければ削りきられてしまう。
闇の墓地には他の影霊衣儀式魔法をサーチすることができる影霊衣の万華鏡はあるが、結局サーチできるのは儀式魔法。
儀式モンスターがいなければ使用できないし、現状儀式モンスターを引いてもリリースできるモンスターがいないから使用することなどできない。
モンスターを引けなければそこで終わり。
例え引けたとしても、もしヘンテコヘルメット野郎がモンスターを引けばそれだけで危ない状況。
不安に思うのも無理はない。
だけど……
「大丈夫だ。あの程度でどうにかなる闇じゃない。闇は勝つよ」
「勝つって、闇さんを信じたい気持ちは分かるけど、この状況は……」
「信じたい、じゃない……信じてるんだ。闇の力を、思いを、その全てを。だから、闇は絶対に負けない」
「……君は……」
夜が驚いた表情で俺を見る。
子供の頃からずっとデュエルしてきたからこそ、きっと俺は世界で１番闇の実力を、その小さな身体に秘めた覚悟の重みを知っている。
だからこそ……
「……闇‼？」
「‼？……ん‼？」
俺が名前を呼ぶと、闇はこちらを見て力強く頷く。
俺と闇の間に下手な言葉なんていらない。
そんなものは必要ないぐらい、確かな絆が俺達にはある。
だから、見せつけてやれ。
思いの力で世界ランキング４位にまで至ったお前の力を‼？
ーーーーーーー

○

「私のターン」

『クックック、名前を呼ばれただけで威勢を取り戻すか。だが、君が絶対絶命な状況であることに変わりはーーー』

「さっきから耳障り。いい加減、その浅ましい口を閉じろ」

『ーーー何だと？』

闇の言葉に男は不愉快そうな声を出す。

そんな男を嘲笑うかのように、闇は淡々と言葉を紡ぐ。

「この程度で絶対絶命なんて、笑わせる。思いのこもってないデュエルにやられる程、私は甘くない」

『っ、強がりを……!?』

「強がりかどうかはこれからたっぷりと味わうといい。あなたはただ、決められた敗北への道を辿るだけ……最初に言ったハズ……」

そういって闇は自分のデッキの上のカードを掴むと、勢いよく引き抜いた。

「私は……強い!?……ドロー!?墓地に存在するグングニールの影霊衣と影霊衣の万華鏡を除外して影霊衣の万華鏡の効果発動、このカードも自分フィールドにモンスターが存在しない場合、自分の墓地からこのカードと影霊衣モンスター1体を除外してデッキから影霊衣魔法カード1枚を手札に加える。私はデッキから影霊衣（ネクロス）の降魔鏡を手札に加える」

『チッ、儀式魔法を手札に加えるか……』

「さらに魔法カード、貪欲な壺。墓地に存在するヴェルズオピオン、波動竜騎士ドラゴエクィテスをEXデッキに、クラウソラスの影霊衣、ヴェルズヘリオロープ2体をデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローする。まだ終わりじゃない、デッキの上から10枚を裏側で除外して、魔法カード、強欲で貪欲な壺」

『ここにきて連続ドローだと!?』

「自分はデッキから2枚ドローする……っ‼あなたは……？」
強欲で貪欲な壺でドローしたカードを見て、闇は一瞬目を見開く。
しかし、すぐにその表情を柔らかなものに変えると嬉しそうに微笑んだ。
「そっか、久しぶりに暴れたいんだね……いいよ。力を貸してもらうね。魔法カード、手札抹殺‼？お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローする‼あなたの手札はない。だから、？私だけ3枚のカードを捨てて同じ枚数ドローする‼？」
『チッ‼？まだデッキからカードを引くと言うのか⁉？』
「さあ、行こうか……私の眷属。私は墓地に存在する覇王眷竜ダークヴルムの効果発動‼？」
『っ⁉？なんだ、その聞いたこともないカードは⁉？』
「このカードが墓地に存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードを特殊召喚する‼？雷よ、暗雲を裂け‼？おいで、覇王眷竜ダークヴルム‼？」
闇がその名を呼ぶと、星空が暗雲で黒く塗りつぶされ、雷鳴が鳴り響く。
そして一際大きな雷鳴が轟くと暗雲の中から、鋭い刃の身体を持つ緑龍が闇を守るように降り立った。

〈覇王眷竜ダークヴルム〉☆4　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ１８００

『覇王眷竜、だと⁉？』
「覇王眷竜ダークヴルムの効果発動‼？インフィニットドミネーション‼？このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから覇王門ペンデュラムモンスター1体を手札に加える‼？私はデッキから覇王門無限（インフィニティ）を手札に加える‼？私はスケール０の覇王門零とスケール１３の覇王門無限でペンデュラムスケールをセッティング‼？」
闇がペンデュラムスケールをセットすると、闇を挟むように暗黒の

柱が立ち上り、その闇の中から2つの門が現れ、その門に0と13の数字が刻まれる。
　現れた覇王門を見て、男は怒り狂ったかのような声をあげる。
『覇王門零、無限、だと⁉？覇王眷竜に続き、また私が知らないペンデュラムモンスターを呼び出すというのか⁉？冬城　闇‼？貴様は一体何者だ‼？何故私すら知らないモンスターばかりを所持している‼？』
　怒り狂ったかのような声を上げる男に、闇は素っ気なく告げる。
「知らない」
『っ、ふざけたことを……‼？』
「知らないものは知らない。覇王眷竜も、覇王門も、私が私になった時から気付いたら持ってた。だから、知らないものは知らない。記憶があった頃の私なら何か知ってるかも知れないけど、今の私にはどうでもいい」
『何だと？冬城　闇、貴様はーーー』
　闇の言葉に男が疑問の声をあげるが、そんな声を断ち切るかのように闇は言葉を紡ぐ。
「今の私にとって大切なのは大切な人達の幸せを守ること。私の真実はそれだけでいい」
『っ……』
「だから、さっさと終わらせる。墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動‼？自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローする‼？ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外する‼？私はフィールドの覇王眷竜ダークヴルムをデッキに戻し、カードを1枚ドローする‼？これにより私は1から12までのモンスターを同時に召喚可能‼？私の魂に宿る覇王よ‼？善悪を超越し、運命を捻じ伏せろ‼？ペンデュラム召喚‼？おいで、私の眷属達‼？」
　闇がそういうと暗黒の門が開き、そこからフィールドに向かって闇に包まれた3つの波動が放たれる。

「レベル４、ヴェルズケルキオン‼?」

〈ヴェルズケルキオン〉☆４　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ１６００

最初に現れたのは両手に杖を持った魔術師のようなモンスター。
「レベル４、ヴェルズカストル‼?」

〈ヴェルズカストル〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１７５０

ケルキオンに続くように闇を纏った白い鎧をつけた戦士が現れる。
「レベル４、ヴェルズサンダーバード」

〈ヴェルズサンダーバード〉☆４　雷族　闇属性
ＡＴＫ１６５０

最後にフィールドに現れたのは漆黒の身体を持つ鳥のようなモンスター。
『クッ、ペンデュラム召喚……』
「私はヴェルズケルキオンの効果、自分の墓地のヴェルズモンスター１体を除外し、自分の墓地のヴェルズモンスター１体を対象としてそのモンスターを手札に加える。私は墓地のヴェルズカストルを除外して、ヴェルズオウィスプを手札に加える」
『っ‼?手札抹殺の時に……』
「さらにヴェルズケルキオンには墓地からモンスターを回収する効果を発動したターンのメインフェイズにヴェルズモンスターを１体召喚できる。私はヴェルズオウィスプを召喚」

〈ヴェルズオウィスプ〉☆４　炎族　闇属性
ＡＴＫ４５０

フィールドに青白い炎の姿をしたモンスターが現れる。
そして闇はすぐさま正面に手をかざす。
「私は2体のレベル4ヴェルズモンスター、ヴェルズサンダーバードとヴェルズオウィスプでオーバーレイ!!?・2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?・」
サンダーバードとウィスプが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りるのは青い翼を黒い闇に侵食されている漆黒の竜。
「希望を奪い去る邪竜、ランク4、ヴェルズバハムート!!?・」

〈ヴェルズバハムート〉★4　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２３５０

「ヴェルズバハムートの効果発動、イビルソートテンプテーション!!?・1ターンに1度、オーバーレイユニットを1つ使い、手札からヴェルズと名のついたモンスター1体を捨てることで相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体のコントロールを、永続的に得る!!?・」
『コントロール奪取だと!?・?・』
「私は手札からヴェルズコッペリアルを捨ててＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラルのコントロールを得る!!?・」
ババハムートから黒い波動が出てアンブラルの身体を蝕んでいく。
アンブラルは抵抗していたが、次第に抵抗が弱まり闇のフィールドに移動した。
『ＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラルが!!?・私のＣＮｏ．を返せ!!?・』
「いいよ、すぐに返してあげる……攻撃つきでね。バトル!!?・ＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラルでダイレクトアタック!!?・ブラッディマスカレード!!?・」

『がああぁぁ‼?』

黒い男　ＬＰ５５００→２５００

アンブラルの殴打を受け、男の身体が勢いよく吹き飛ばされる。

「追撃。ヴェルズカストルでダイレクトアタック。イビルスラッシュ」

「ぐうっ‼?」

黒い男　ＬＰ２５００→７５０

吹き飛ばされ、地面を転がる男に向けてバハムートが羽根を広げる。

「これで終わり、ヴェルズバハムートでダイレクトアタック‼?剥奪のカンシャスニスディサピアランス‼?」

バハムートが男に向かって羽根を羽ばたかせ闇の吹雪を放つ。

迫り来る闇の吹雪に、男は黒い装甲から白紙のカードを取り出すと、そのカードを闇の吹雪に向けて掲げた。

『今こそ、ヴェルズの呪いを手に入れる時‼?』

「っ、ヴェルズバハムート‼?」

闇の制止するよりも早く、白紙のカードは怪しく輝くとバハムートが放った闇の吹雪は白紙のカードに吸収されていき、吹雪が収まると白紙のカードを闇が塗りつぶしていた。

黒い男　ＬＰ７５０→０

ーーーーーーーー

☆

『クックック、ついに手に入れたぞ、ヴェルズの闇の力を‼?』

「お前、今何しやがった‼?」

デュエルが終わり、立体映像が消え、辺りの風景が隠し部屋に戻る中不気味な笑い声をあげるヘンテコヘルメット野郎に問いかける。
そんなヘンテコヘルメット野郎が掲げる漆黒に染まったカードを見て、闇が悔しそうに表情を歪ませる。
「やられた……姿を現したのも最初からこれが狙いだったんだね」
「闇？どういうことだ？」
「ヴェルズバハムートの攻撃に込められたヴェルズの呪いの力を吸収された……今あの男が持ってるカードには、吸収されたヴェルズの呪いの力が宿ってる」
「なっ⁉？」
『守るべきものがいれば全力を出さざるおえない。君の大切な人間を守りたいという思いは美しいが、だからこそ利用しやすいというわけさ。それに加え、もう１つの実験も成功した‼？やはり私の才能に不可能はない‼？』
「もう１つの実験、だと？」
不気味に笑うヘンテコヘルメット野郎の言葉に俺は眉をひそめる。
こいつ、まだ他にも何かを企んでたのか？
「遊騎……変。アイツを倒したのに、さっきのＣＮｏ．がこちらに移ってこない」
「っ⁉？何だって⁉？」
『私が使用したＮｏ．１０４を含めたオーバーハンドレッドナンバーズは特別性でね。専用のランクアップマジックであるＲＵＭ－七皇の剣を触媒としてリンクさせ、固定させることで他者に移動するという性質を克服させたのさ‼？』
「他者に移動することがないＮｏ．だって⁉？そんなものが出回ったら……」
『クックック、実に有意義な時間だった。今日のところは君達に勝利を譲るとしよう。私達の闇のゲームはまだ始まったばかりなのだから‼？』
そういって、ヘンテコヘルメット野郎がデュエルディスクについてある何かのスイッチを押すと、まるで空気に溶けるかのようにその姿

が消えていく。
「くそ、待ちやがれ、このヘンテコヘルメット野郎‼?」
『……いい加減、その呼び方をされるのも不愉快だな。私のことは”ヘイムダル”と呼んでくれたまえ。戦いを告げる者としてはちょうどいいだろう?』
「”ヘイムダル”だと?ふざけやがって‼?」
『勇敢なる決闘者諸君‼?闇のカードは、既にケルン中にばら撒かれている。つまり、いつ誰が闇のカードの呪いに呑まれてもおかしくない‼?手に入れたＮｏ．を使用し人々を救うことができるかは……君たち次第だ‼?ハハハハハ、ハーハハハハっ‼?』
そんな高笑いをして”ヘイムダル”と名乗った男は完全に姿を消す。
「遊騎……ごめん」
「いや、闇は何も悪いことなんかしてない。悪いのは全部あの”ヘイムダル”とか名乗ったヘンテコヘルメット野郎だ」
「”ヘイムダル”……確か北欧神話の神の名前だったよね?ギャラルホルンを鳴らしてラグナロクの始まりを告げたっていう」
「上等だ。闇のゲームだろうがラグナロクだろうが、絶対にぶっ潰してやる‼?そんなもので俺の大切な人達を傷つけられてたまるかよ‼?」
ヘイムダルが消えた場所に向かって思い切り拳を振り抜く。
俺達の戦いが、次のステージに進んだ気がした。

第７２話　厚遇する守護者

★

「ふむ、まだデザインは完成していないんだね」
「すみません……最近少しバタバタしてまして」
「いや、構わないさ。そもそも本題は課題のことではなく、栗原君に渡したいものがあったからだからね」
「渡したいもの、ですか？」
そういって朗らかに笑う天神先生に、私は課題ができていないことを申し訳なく思いながらも渡したいものがあると言われ首を傾げる。
クリムゾンシャドーに操られた服部君とデュエルした翌日の昼休み。
私がいつものように闇先パイへの挑戦者達とデュエルを行い、桜ちゃんが集まったデュエルアカデミア生から闇のカードについての噂を調べているところを、校内放送で天神先生に呼び出され、天神先生の研究室に来ていた。
てっきり課題の進捗状況を聞くために呼ばれたのかと思ったのだが、どうやら天神先生が私を呼んだのは違う理由らしい。
天神先生は自分の机の上にあるファイルの中から１枚のカードを取り出すとそれを私に手渡す。
「‼？……ふぇ？」
「……ほう、やはりか」
天神先生からカードを受け取った瞬間、一瞬妙な感覚がしたがすぐにその感覚は霧散する。
私は首を傾げながらも渡されたカードを見る。
そのカードに描かれていたのは……
「ギャラクシークィーンズライト？これって、ギャラクシークィーン、ですか？」
「ああ。この前の君とのデュエルで私の才能が刺激されてね。立役者

として渡したいと思ってね」
「そんな……」
「既存のカテゴリーに入れることを考えたため君には使い難いものではあるのが申し訳ないのだがね」
そう言われながらも受け取ったギャラクシークィーンズライトを見る。
確かに、その効果は自分フィールドのレベル7以上のモンスター1体を対象として自分フィールドの全てのモンスターのレベルはターン終了時まで対象のモンスターと同じレベルになるというもの。
ローレベルが主体の私のデッキでは使いにくいかも知れないけど、全く使えない可能性がないわけじゃない。
「ありがとうございます!!?絶対に使いこなしますね」
「……栗原君はこのカードを使うつもりなのかい?ローレベルである君のデッキでは使いにくいと思うが……」
「それでも、せっかくいただいたカードですから」
「……君は本当に優しい子のようだね。他者を労り、繋がろうとする。だが、私はそんな君が心配でならないよ」
「えっ?」
「すべての人間が善人とは限らない。もし、悪意を持つ人間によって君の思いが踏みにじられてしまったら……その優しさが失われてしまう危険性もある」
真剣な表情でそう告げる天神先生の言葉に私は目を閉じる。
確かに天神先生の言葉は最もだ。
すべての人が優しいわけじゃない。
困っているフリをして他者を傷つける人だって、いるのかも知れない。
だけど……
「確かに、天神先生の言葉は最もだと思います。それでも、私は誰かと繋がることを諦めたくないんです。繋がって、託された思いを無駄にはしたくないんです。例え、この気持ちを何百回裏切られようとも、私はこの気持ちは絶対に失いません」

「……」
「何回も誰かを騙す人間より、何回も誰かに騙されて馬鹿を見て、それでも誰かを信じれる人間の方が、私は好きです。私は、そういう人でいたいんです」
「……そうか。君がそういうのであれば、私は口を噤もう。余計なお節介だったようだからね」
「い、いえいえ‼？私の方こそ、生意気なことを言ってしまい申し訳ありませんでした‼？」
苦笑を浮かべる天神先生に私は頭を下げる。
思えば心配してくれている天神先生にかなり失礼なことを言ってしまった。
うぅ～まだまだ未熟だなぁ、私。
「まあ、君ならば大丈夫だろうが、怪しい人間には注意することだ……ここだけの話だが、最近、数人ではあるが、デュエルアカデミアの中で行方不明者が出ているんだ」
「行方不明者、ですか？」
「ああ。そのうえ行方不明になった生徒は学年トップクラスに属する人間だったようだ。意図的なものかはわからないが、君も気をつけた方がいい」
そういえば先程、桜ちゃんからデュエルアカデミアの中の噂を聞いた時に、そんな話が出ていた気がする。
最近になってデュエルアカデミアに通っている生徒が少し減ったように感じると。
最近少しずつ寒くなってきているから風邪とかが流行ってるのかなと思っていたのだが、まさかそんな自体になっていたとは。
……これも、闇のカードが原因なのだろうか？
そんなことを考えていた私の思考は次の天神先生の言葉で完全に止まることになる。
「君の学年にも行方不明者がいたハズだ。確かーーー桜糀　紅葉、といったか」
「……えっ？」

私の身体を冷たい汗が伝っていく。
穏やかに進んでいると思っていた私の日常は、既におぞましい気配に侵略されていた。

ーーーーーーー

「桜糀が、行方不明？」
「みたい……」
「デュエルアカデミアで出た行方不明者、それに闇のカード。私の知らないところでそんなことに巻き込まれていたのね」
「ごめんなさい、霊華さん。話したら巻き込んじゃうと思ったから……」
「別にいい。私を危ないことに巻き込みたくなかったということぐらい、分かってる。でも、次からは頼って欲しい。私も遊花の友達だから」
「ありがとう、霊華さん」
放課後。
天神先生の研究室から戻った私の様子が明らかにおかしかったため、その後のデュエルは中止となった。
不満を漏らす人達もいたのだが、その人達は桜ちゃんがお話してくれたみたい。
私といえばまだ天神先生からもたらされた情報のショックが抜けきれず、気付いたら放課後になっていた。
授業もかなり上の空で何度も先生に注意されてしまい、そのことを心配した桜ちゃんと霊華さんに何があったかを尋ねられ現在に至る。
大地君も心配していたみたいだけど、今日はどうしても外せない用があったらしくまた今度話を聞かせてくれと、私を心配しながらも帰っていった。
本当に、自分が情けない。
「それにしてもまさか行方不明者まで出てるとはね。危ないことだと分かってはいたけど……」

「闇先パイの話だと、闇のカードに適合できなかった人の身体を乗っ取っちゃうこともあるみたいだから、それでそのままどこかに連れてかれちゃったのかな？」
「問題はどこに連れていかれたのかと、何が狙いか、ね。後はどれだけ相手が問題を大きくしたいか。行方不明者が出てきてるなら遠からずデュエルセキュリティは動くわ」
「あ、そうだね。それならすぐに見つかるかも」
「それは希望的観測。もし、見つけれても闇のカードに操られた人がデュエルセキュリティに危害を加えたら公務執行妨害で捕まる」
「えっ⁉？で、でもその人達は操られてて……」
「これはどちらかといえばオカルトの分類。それをあの頭が硬いデュエルセキュリティがまともに取り扱うとは思わない。危害を加えれば間違いなく罪になる」
「そんな……」
　霊華さんの言葉に私は血の気が引く。
　もし、闇のカードに操られた紅葉さんが捜索にきたデュエルセキュリティの人に危害を加えることになれば……
「そんなのダメ⁉？早く探さないと⁉？」
「でも、どうするのよ？遊騎からはデュエルアカデミアの中でＮｏ．を所持している人間の相手だけしか許可されてないでしょ？それなのにどうやって探しに行くのよ？」
「それは……」
「ん……それから学内の活動の一貫、ということならどう？」
「えっ？どういう意味、ですか？」
　霊華さんの言葉に私は首を傾げる。
　学内の活動？紅葉さんを探しに行くのが？
「学内の活動で行方不明者を捜索する必要があるなら、それを断るのは学生として不自然。だから、学校の活動としてどうしても桜糀を探さないといけない理由を作ればいい」
「でも、そんなことどうやって……」
「こういう時に動く組織がデュエルアカデミアには２つある。１つは

生徒会、もう1つは風紀委員会。こういう事態の場合、教員に近い権限があるこの2つは捜索に関わるハズ。まずは情報収集もかねて、風紀委員会に乗り込んでみる。そこで協力関係を取り付けて私達も捜索に加えて貰おう」

ーーーーーーー

「失礼する」
「ちょっ⁉？何ですのあなた一体⁉？」
「御子神　霊華。風紀委員長に用があってきた」
「す、すみません⁉？失礼します⁉？れ、霊華さん、いきなり過ぎますよ⁉？」
「そう？」
「……まさか本当に言葉通り乗り込むとは、恐れ入ったわ、御子神」
　風紀委員会の教室に辿り着いた私達は、いきなり教室に入っていった霊華さんを慌てて止めていた。
　風紀委員会に乗り込んでって言ってたけど、まさか言葉の綾じゃなくてそのままの意味だなんて思わなかった。
「げぇっ⁉？宝月　桜⁉？」
「……お嬢様、淑女がそのような言葉を使うのははしたないと、前も述べたハズですが」
「ほぇ？」
　突然の乱入者である私達に、ざわざわしはじめる教室に一際大きな声が響く。
　桜ちゃんの名前が聞こえてきたので、思わずそちらの方を見ると、金髪に縦ロールの女生徒と黒髪をセミロングにしたメイドさんがそこにいた。
　えっと、この人達は確か……
「うげっ、鬼石　千晶。なんでアンタがいるのよ……」
「あ、思い出した。鬼石さんですよね？桜ちゃんと仲がいい」
「「仲良くなんかない（ありませんわ）⁉？」」

「ひゅぃ‼?息合ってるのに……」
「遊花、多分喧嘩友達」
「「友達じゃない（ありませんわ）‼?」」
「息ぴったり」
　桜ちゃんと鬼石さんに同じタイミング（ユニゾン）で怒鳴られ、私は思わず霊華さんの背中に隠れる。
　いつも教室で楽しそうに話してたから仲がいいと思うんだけどなぁ……
「……コホン。ご機嫌よう、宝月　桜。貴方のような輩が風紀委員会に何のご様子ですの？ああ、己が罪を振り返って自首でもしに参りました？それは殊勝な心意気ですわ」
「っ、アンタの方こそ風紀委員会の教室なんかで何してるのよ？ああ、何かやらかしてお説教中だったのかしら？悪いわね、辱めちゃって」
「っ、お生憎様。私はこれでも副委員長ですので。いつも力で周りをねじ伏せている野蛮な貴方とは違いますの」
「はぁ⁉?アンタが副委員長？アンタみたいな喚き散らすことしかできない高飛車が副委員長とか風紀委員会も可哀想ね」
「何ですって⁉?」
「何よ‼?」
「あの、桜ちゃんも鬼石さんもその辺にしてーーー」
「「はい？」」
「あ、ごめんなさい。何でもないです」
　こちらを見た2人の表情が怖くて思わず視線を逸らす。
　すると、鬼石さんの側で控えていたメイドさんが申し訳なさそうに頭を下げてきた。
「申し訳ございません。お嬢様はこうして宝月様と戯れ合うことのみが生き甲斐なのでご容赦いただければと」
「だから生き甲斐ではありませんわ‼?貴女本当に失礼ですわね、珊瑚‼?前にも言いましたが本当に貴女は私のメイドですの⁉?」
「お嬢様を弄ぶのが私の生き甲斐ですので」
「だからそんな生き甲斐捨ててしまえ、ですわ‼?」

怒る鬼石さんを見て、珊瑚さんがすごく楽しそうに笑う。
うぅ、話が進まないよぉ……
どうしようかと困っていると、そんな私の姿が見えたのか珊瑚さんが改めて私に向き直る。
「申し訳ありません。お嬢様が可愛かったので少しはしゃいでしまいました」
「は、はぁ……」
「改めまして、私は千晶お嬢様のメイドの珊瑚と申します。このデュエルアカデミアには1人では何もできないポンコツなお嬢様のために特例として立ち入らせて貰っており、その代わりに学内の事務をいくつか引き受けております。以後、お見知り置きを」
「は、はい。私は栗原　遊花です。よろしくお願いします」
「こちらこそ、よろしくお願い致します。それで風紀委員会にどのようなご用でしょうか？風紀委員長は所用で少し出られているので、ポンコツなお嬢様の代わりに完璧なメイドである私がご用件を伺わせていただきますわ」
「聞こえてますわよ、珊瑚ー!!？」
「は、はい。実はーーー」
後ろで怒鳴り声をあげながら他の風紀委員の人に取り押さえられてる鬼石さんを横に、私は風紀委員会を訪れた理由を話していく。
友人が行方不明になってること、その捜索のために風紀委員会と共に行方不明者の捜索を行いたいということを闇のカードのことはぼかし、霊華さんにフォローされながらも話していく。
私の話を聞いた珊瑚さんは顎に握り拳を当てて少し考え込むような仕草を見せる。
「成る程、事情は分かりました。しかし、今回の件はまだ不明瞭な部分が多くあります。そのため調査の中で栗原様達にまで危害が及ぶ可能性もないとは言い切れません。ですので、正規の風紀委員でない栗原様達を調査に加えるのはーーー」
「無理無茶無謀なのは分かっています!!？それでも、私は友達を助けたいんです!!？だからお願いします!!？私に捜索を手伝わせてくだ

さい‼?」
私は必死に珊瑚さんに頭を下げる。
私が無茶を言ってるということは分かってる。
それでも、私は紅葉さんを助けたい‼?
「決意は固い……ですか。分かりました、それでは試験と参りましょう」
「えっ?試験?」
そういうと珊瑚さんはデュエルディスクを構えて私に向ける。
「ここは決闘都市『ケルン』です。大抵の物事はデュエルで決着をつけることができます。私は栗原様の実力は存じているつもりですが、ここにいる風紀委員会の皆様は知りません。なので、貴方の実力を私達に示してください」
「……分かりました」
私はデュエルディスクを起動して珊瑚さんに構える。
このデュエルは絶対に負けられない。
お願い、私のデッキ。
友達を助けるために、力を貸して‼?
「……いきます‼?」
「それでははじめると致しましょう」
『決闘‼?』

遊花　ＬＰ８０００
珊瑚　ＬＰ８０００

ーーーーーーーー

「先攻は私ですね。モンスターをセット。カードを2枚伏せてターンエンドです」
「随分控えめなスタートですね。それならば、僭越ながら私がリードさせていただきましょう」
「えっ?」

カードを伏せるだけでエンドフェイズに入った私に珊瑚さんがそんな言葉を口にした。
まだ私の先攻1ターン目なのに……何だか、嫌な予感がする。
「私は手札のドラゴンメイドエルデを捨ててその効果を発動します!!?」
「ドラゴンメイド……ですか?」
「ドラゴンメイドエルデの効果、同名カードは1ターンに1度、このカードを手札から捨てることで手札からレベル4以下のドラゴンメイドモンスター1体を特殊召喚します!!?そして現在の状況から分かるようにこの効果は相手ターンでも発動することができます。現れなさい、ドラゴンメイドラドリー!!?」

〈ドラゴンメイドラドリー〉☆2　ドラゴン族　水属性
ＤＥＦ１６００

珊瑚さんの呼び方によりフィールドに現れたのは洗濯籠を抱えた着物風のメイド服を着た紫髪の竜人の少女。
「そして特殊召喚されたドラゴンメイドラドリーの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、自分のデッキの上からカードを3枚墓地へ送ります!!?」
フィールドに現れたラドリーは現れた拍子に足を滑らせて洗濯籠に入っていた洗濯物を辺り一面にばら撒いてしまい、慌てた表情を浮かべる。
「ふふっ、運がいいです。墓地に送られたコドモドラゴンの効果発動!!?同名カードの効果は1ターンに1度しか発動できず、この効果を発動するターン、自分はドラゴン族モンスターしか特殊召喚できず、バトルフェイズを行えません。最も、栗原さんのターンなのでこのデメリットはないようなものですが。このカードが墓地へ送られた場合、手札からドラゴン族モンスター1体を特殊召喚します!!?現れなさい、ドラゴンメイドナサリー!!?」

〈ドラゴンメイドナサリー〉☆２　ドラゴン族　地属性
ＤＥＦ１６００

慌てているラドリーを慰めるように現れたのはナースキャップを被ったメイド服を着た桃髪の竜人の少女。
「さらにドラゴンメイドナサリーの効果発動‼？同名カードは１ターンに１度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、同名カード以外の自分の墓地のレベル４以下のドラゴンメイドモンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚します‼？」
「また特殊召喚ですか⁉？まだ私のターンなのに……」
「ふふっ、持て成す者として先じて行動してこそのメイドですから、ご容赦ください。現れなさい、ドラゴンメイドティルル‼？」

〈ドラゴンメイドティルル〉☆３　ドラゴン族　炎属性
ＤＥＦ１７００

次に現れたのはボウルを抱えたメイド服を着た赤髪の竜人の少女。
「ドラゴンメイドティルルの効果発動‼？同名カードは１ターンに１度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから同名以外のドラゴンメイドモンスター１体を手札に加え、その後、手札からドラゴンメイドモンスター１体を選んで墓地へ送ります‼？私はデッキからドラゴンメイドフランメを手札に加え、ドラゴンメイドルフトを墓地に送ります」
「うぅ、私の先攻なのにモンスターが３体も……改めてターンエンドです」

遊花　ＬＰ８０００　手札２
ー▲▲ー　ー
ー??ー
ー　ー
ー□□□ー

ーーーーー　ー

珊瑚　ＬＰ８０００　手札２

「私のターン、ドロー!!?スタンバイフェイズ、前のターンに墓地に落ちたアークブレイブドラゴンの効果発動!!?」

「っ!!?まだ墓地から発動するドラゴンがいるんですか!!?」

「このカードが墓地へ送られた次のターンのスタンバイフェイズに、同名カード以外の自分の墓地のレベル７・８のドラゴン族モンスター１体を対象として特殊召喚します!!現れなさい、ドラゴンメイドルフト!!?」

〈ドラゴンメイドルフト〉☆８　ドラゴン族　風属性

ＡＴＫ２７００

フィールドに龍の咆哮が響いたかと思うと、空から緑の体躯を持つ龍が舞い降りる。

「魔法カード、アドバンスドロー!!?自分フィールドに表側表示に存在するレベル８以上のモンスター１体、ドラゴンメイドルフトをリリースして発動!!?デッキから２枚ドローします!!?ふふっ、それでは私なりのおもてなしを存分にお楽しみくださいませ。まずは料理をお持ち致しましょう。１０００ライフポイントを払って魔法カード、簡易融合（インスタントフュージョン）を発動!!」

珊瑚　ＬＰ８０００→７０００

ティルルがキッチンワゴンにクロッシュを乗せてフィールドの中央に移動し、クロッシュを開けるとその中から湯気を立てているカップ麺が姿をみせる。

……えっと……

「あの、どう見てもインスタント食品なんですが……」

「申し訳ありません。鬼石家はあまり裕福ではありませんので、この

ようなおもてなししか……よよよ」
「ダウト!!?ダウトですわ!!?酷い風評被害ですわ!!?」
「ぷっ……そ、そうなの……それはお気の毒に……ぷふっ」
「笑い過ぎですわよ、宝月　桜!!?」
「鬼石さん……」
「栗原　遊花もあからさまな嘘泣きに騙されて悲しそうな表情を浮かべるのはやめてくださらない!?!?貴女どれだけ純粋ですの!?!?」
「……と、私の趣味のお嬢様弄りはこの辺にして」
「最低!!?最低ですわ、このメイド!!?」
「簡易融合の効果で１０００ライフポイントを払って、レベル５以下の融合モンスター１体を融合召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚します!!?この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃できず、エンドフェイズに破壊されます!!?いらしてください、暗黒火炎龍!!?」

〈暗黒火炎龍〉☆４　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ１２５０

クロッシュに乗せられていたカップ麺の匂いにつられ、炎の身体を持つ龍が姿を現わす。
「それでは参ります。防護せよ!!?輝石を守護するサーキット!!?」
珊瑚さんが正面に手を前に突き出すと、巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はトークン以外のレベル４以下のドラゴン族モンスター２体!!?私は暗黒火炎龍とドラゴンメイドラドリーの２体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク２!!?ツインライアングルドラゴン!!?」

〈ツインライアングルドラゴン〉ＬＩＮＫ　２　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ１６００　←↓

暗黒火炎龍とラドリーがサーキットの中に消えると、代わりに両腕に三角形のシールドを持つ黒竜が現れた。
「ツイントライアングルドラゴンの効果発動!!?このカードがリンク召喚に成功した時、５００ライフポイントを払い、自分の墓地のレベル５以上のモンスター１体を対象としてそのモンスターをこのカードのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚します!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、このターン攻撃できません。いらしてください、アークブレイブドラゴン!!?」

珊瑚　ＬＰ７０００→６５００

〈アークブレイブドラゴン〉☆７　ドラゴン族　光属性
ＡＴＫ２４００

ツイントライアングルが咆哮をあげると、フィールドに金と白銀の体躯を持つ龍が現れる。
「続けて参ります。防護せよ!!?輝石を守護するサーキット!!?」
「またリンク召喚ですか……」
「召喚条件はトークン以外のモンスター２体以上!!?私はアークブレイブドラゴンとツイントライアングルドラゴンを２体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク３!!?スリーバーストショットドラゴン!!?」

〈スリーバーストショットドラゴン〉ＬＩＮＫ　３　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２４００　↑←→

アークブレイヴと２体に分身したツイントライアングルがサーキットの中に消えると、代わりに真っ赤な体躯に３つの銃口を持つ龍が現れる。
「それでは早速バトル、と言いたいところですが、まずはバトルフェイ

ズ開始時にドラゴンメイドナサリーの効果発動!!?」
「バトルフェイズ開始時に、ですか?」
「同名カードは1ターンに1度、自分・相手のバトルフェイズ開始時、このカードを持ち主の手札に戻し、自分の手札・墓地からレベル7のドラゴンメイドモンスター1体を選んで特殊召喚します!!?さあ、お出迎えの時間です。ドラゴンメイドナサリー、真なる力をお見せしなさい!!?私はドラゴンメイドナサリーを手札に戻し、墓地からドラゴンメイドエルデを特殊召喚します!!?」
ナサリーが深くお辞儀をするとナサリーの身体が光を放つ。
やがて光が収まると、ナサリーのいた場所にはナースキャップを被った桃色の体躯を持つ龍が現れた。

〈ドラゴンメイドエルデ〉☆7　ドラゴン族　地属性
ＡＴＫ２６００

「ドラゴンの姿を持つメイドさん……だからドラゴンメイドなんですね」
「理解していただけたようですね。ですが、まだ終わってはいません。ドラゴンメイドナサリーと同じようにドラゴンメイドティルルの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、自分・相手のバトルフェイズ開始時に、このカードを持ち主の手札に戻し、自分の手札・墓地からレベル8のドラゴンメイドモンスター1体を選んで特殊召喚します!!?交代の時間ですよ、私はドラゴンメイドティルルを手札に戻し、墓地からドラゴンメイドルフトを特殊召喚します!!?」

〈ドラゴンメイドルフト〉☆8　ドラゴン族　風属性
ＡＴＫ２７００

ティルルが深くお辞儀をして姿を消すと、代わりに空からルフトがフィールドに舞い降りた。
「一気に上級ドラゴンが……」

「それでは改めて、バトルです‼?・スリーバーストショットドラゴンでセットモンスターを攻撃‼?・バーストショット‼?・」
「させません‼?・リバースカードオープン‼?・罠発動‼?・聖なるバリア ―ミラーフォース―‼?・相手モンスターの攻撃宣言時に、相手フィールドの攻撃表示モンスターを全て破壊します‼?・」
スリーバーストが私に向けて銃弾を放つがその銃弾を見えない壁が受け止める。
しかし、ミラーフォースを見ても珊瑚さんは余裕の笑みを崩さない。
「ふふっ、危ないですね。ですが、スリーバーストショットドラゴンの効果発動‼?・1ターンに1度、ダメージステップにモンスターの効果・魔法・罠カードが発動した時、その発動を無効にします‼?・」
「っ、限定的な無効効果⁉?・」
スリーバーストが受け止められている弾丸に向けて更なる弾丸を放つと、見えない壁は砕け散り私のモンスターに向けて勢いよく突き進む。
「っ、セットモンスターはフリップフローズンです‼?・」

〈フリップフローズン〉☆1　サイバース族　水属性
ＤＥＦ５００

セットされていた氷の精霊がスリーバーストの銃弾に撃ち抜かれ、粉々に砕け散る。
しかし、フローズンを破壊してもまだスリーバーストの銃弾は止まらない。
「さらにスリーバーストショットドラゴンの効果により、このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ戦闘ダメージを与えます‼?・」
「っ⁉?・貫通効果まで……なら、手札からクリボーの効果発動‼?・ダークエンヴェロップ‼?・相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこのカードを手札から捨てて発動できる。その戦闘

で発生する自分への戦闘ダメージを０にします‼?」
私を貫こうとする銃弾の前に、クリボーが受け止め、粒子になって消えていく。
「そして墓地に送られたフリップフローズンの効果発動‼?このカードが墓地へ送られた場合、相手フィールドの攻撃表示モンスターを全て守備表示にします‼?」
フィールドに強力な冷気が発生し、あまりの寒さにドラゴンメイド達は身体を丸めて地面にへたり込む。
これでこのターンの追撃はない。

ドラゴンメイドエルデ
ＡＴＫ２６００→ＤＥＦ１０００

ドラゴンメイドルフト
ＡＴＫ２７００→ＤＥＦ１７００

「防がれてしまいましたか。ならば、バトルフェイズ終了時にドラゴンメイドエルデの効果発動‼?」
「今度はバトルフェイズ終了時に発動するんですか⁉?」
「同名カードは１ターンに１度、自分・相手のバトルフェイズ終了時、このカードを持ち主の手札に戻し、自分の手札からレベル２のドラゴンメイドモンスター１体を選んで特殊召喚します‼?ドラゴンメイドエルデよ、従者の姿に戻りなさい‼?ドラゴンメイドナサリーを特殊召喚‼?」
エルデが咆哮をあげるとエルデの身体が再び光を放つ。
やがて光が収まると、エルデのいた場所に恥ずかしそうに笑うナサリーが現れた。

〈ドラゴンメイドナサリー〉☆２　ドラゴン族　地属性
ＤＥＦ１６００

「成る程、バトルフェイズが終わればメイドの姿に戻るんですね」
「左様でございます。いつまでも臨戦態勢でいてはお客様におくつろぎいただくことはできませんから。ですが、まだ私のおもてなしは終わっていませんよ？特殊召喚されたドラゴンメイドナサリーの効果発動‼？」

「っ、そういえば最初に効果を発動したのは私のターンでしたね……」
「墓地より戻りなさい、ドラゴンメイドラドリー‼？」

〈ドラゴンメイドラドリー〉☆２　ドラゴン族　水属性
ＤＥＦ１６００

ナサリーに呼び出され、ラドリーが慌てた様子で洗濯籠を手に現れる。
「そして特殊召喚されたドラゴンメイドラドリーの効果発動‼？自分のデッキの上からカードを３枚墓地へ送ります‼？」
慌てて現れたラドリーは足を滑らせて洗濯籠に入っていた洗濯物を辺り一面にばら撒いてしまい、それを見たナサリーは頭を抱えた。
「さらにドラゴンメイドエルデと同じようにドラゴンメイドルフトの効果発動‼？同名カードは１ターンに１度、自分・相手のバトルフェイズ終了時に、このカードを持ち主の手札に戻し、自分の手札からレベル３のドラゴンメイドモンスター１体を選んで特殊召喚します‼？交代の時間ですよ、私はドラゴンメイドルフトを手札に戻し、手札からドラゴンメイドティルルを特殊召喚します‼？」

〈ドラゴンメイドティルル〉☆３　ドラゴン族　炎属性
ＤＥＦ１７００

ルフトが咆哮をあげて飛び立つと、代わりに姿を消していたティル

ルが姿を現した。
「特殊召喚されたドラゴンメイドティルルの効果発動!!?デッキからドラゴンメイドフルスを手札に加え、そのまま墓地に送ります。それでは、メインフェイズ2です。魔法カード、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨てて同じ枚数ドローします!!?私は4枚、栗原様は1枚のカードを捨ててドローします!!?」
「うっ、上級のドラゴンメイドが一気に墓地に……」
「おや?これはこれは、今日の私のおもてなし力は絶好調のようです」
「おもてなし力って……」
「私はドラゴンメイドパルラを召喚します!!?」

〈ドラゴンメイドパルラ〉☆3　ドラゴン族　風属性
ＡＴＫ５００

新たにフィールドに現れたのはティーポットを持ったメイド服を着た緑髪の竜人の少女。
多分、髪の色からしてこの子がルフトになるんだろうな。
「ドラゴンメイドパルラの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから同名カード以外のドラゴンメイドカード1枚を墓地へ送ります。私が墓地に送るのは魔法カード、ドラゴンメイドのお召し替え。そして墓地のドラゴンメイドのお召し替えの効果発動!!?このカードが墓地に存在する場合、同名カードは1ターンに1度、自分フィールドのドラゴンメイドモンスター1体を対象として、このカードを手札に加え、そのモンスターを持ち主の手札に戻します。私はドラゴンメイドナサリーを手札に戻し、ドラゴンメイドのお召し替えを手札に加えます」
「うぅ、また手札が……」
「さらに永続魔法、ドラゴンメイドのお出迎えを発動!!?自分フィールドのモンスターの攻撃力・守備力は、自分フィールドのドラゴンメイドモンスターの数×１００ポイントアップします!!?私のフィールドには3体のドラゴンメイドがいるため、自分フィールドのモンス

ターの攻撃力・守備力は３００ポイントアップします‼?」

スリーバーストショットドラゴン
ＡＴＫ２４００→２７００

ドラゴンメイドティルル
ＤＥＦ１７００→２０００

ドラゴンメイドラドリー
ＤＥＦ１６００→１９００

ドラゴンメイドパルラ
ＡＴＫ５００→８００

「さらにドラゴンメイドのお出迎えの効果発動‼?同名カードは１ターンに１度、自分フィールドにドラゴンメイドモンスターが２体以上存在する場合、自分の墓地の同名カード以外のドラゴンメイドカード１枚を対象として手札に加えます‼?私は墓地のドラゴンメイドフランメを手札に加えます‼?そして、魔法カード、ドラゴンメイドのお召し替えを発動‼?自分の手札・フィールドから、ドラゴン族の融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をＥＸデッキから融合召喚します‼?」

「っ‼?融合魔法‼?」

「私はフィールドのドラゴンメイドモンスター、ドラゴンメイドラドリーと手札のドラゴン族モンスター、ドラゴンメイドナサリーで融合‼?無垢なる竜人よ、看護の竜人と合わさりて、主人を守る力を生み出せ‼?融合召喚‼?」

洗濯物をばら撒いて青ざめるラドリーの手を引いてナサリーがフィールドに出来た渦の中に飛び込んでいく。

そして渦が弾けるとそこに現れたのは眼鏡をかけた黒髪の竜人。

「ドラゴンメイドを統べる家政婦長!!?・ドラゴンメイドハスキー!!?・」

〈ドラゴンメイドハスキー〉☆9　ドラゴン族　光属性
ＡＴＫ３０００

「ドラゴンメイドの融合モンスター……」
「そして速攻魔法、超再生能力!!?・このカードを発動したターンのエンドフェイズ、自分の手札から捨てられた及び自分の手札・フィールドからリリースされたドラゴン族モンスターの数だけ自分はデッキからドローします!!?・」
「っ、ドローカード!!?・なら、チェーンしてリバースカードオープン!!?・罠発動!!?・裁きの天秤!!?・相手フィールドのカードの数が自分の手札・フィールドのカードの合計数より多い場合に発動でき、自分はその差の数だけデッキからドローします!!?・」
「成る程、そちらもドローカードを残していましたか」
「珊瑚さんのフィールドのカードは6枚、私は裁きの天秤と手札1枚の2枚!!?・その差分の4枚のカードをドローします!!?・」
「お見事です。私はカードを1枚伏せ、エンドフェイズに、超再生能力の効果発動!!?・このターン、リリース及び捨てられたドラゴンはドラゴンメイドルフト2体にドラゴンメイドエルデ、ドラゴンメイドフランメの4体。よってカードを4枚ドローします!!?・これで私はターンエンドでございます」

遊花　ＬＰ８０００　手札５
ー　ー　ー　ー　ー
☆　ー
ー○□○ー
ー　ー△▲ー　ー
珊瑚　ＬＰ６５００　手札５

「私のターン、ドロー!!?」
「スタンバイフェイズ、前のターンに墓地に落ちたアークブレイブドラゴンの効果、それにチェーンしてドラゴンメイドハスキーの効果発動!!?コーチングホスピタリティー!!?」
「っ!!?ドラゴンメイドハスキーも発動できる効果があるんですか……」
「まずはドラゴンメイドハスキーの効果、自分・相手のスタンバイフェイズに、このカード以外の自分フィールドのドラゴンメイドモンスター1体を対象としてそのモンスターよりレベルが1つ高い、またはレベルが1つ低いドラゴンメイドモンスター1体を自分の手札・墓地から選んで守備表示で特殊召喚します!!?」
「ドラゴンメイドの展開効果……!!?」
「私はドラゴンメイドティルルを対象に、墓地より戻りなさい、ドラゴンメイドラドリー!!?」

〈ドラゴンメイドラドリー〉☆2　ドラゴン族　水属性
ＤＥＦ１６００

ハスキーに呼び出され、青ざめた表情のラドリーがフィールドに現れる。
「次にアークブレイブドラゴンの効果発動!!?私は墓地より巨神竜フェルグラントを特殊召喚!!?」
フィールドにアークブレイヴの咆哮が響く。
すると、空より金色に輝く巨大な龍が咆哮を上げながらフィールドに舞い降りた。

〈巨神竜フェルグラント〉☆8　ドラゴン族　光属性
ＡＴＫ２８００

「巨神竜フェルグラント……そんかモンスターまで墓地に送られて

たんですね」
「特殊召喚されたドラゴンメイドラドリーの効果、それにチェーンして巨神竜フェルグラントの効果発動!!?グランドプレステージ!!?このカードが墓地からの特殊召喚に成功した場合、相手のフィールド・墓地のモンスター1体を対象としてそのモンスターを除外し、このカードの攻撃力・守備力は、除外したモンスターのレベルまたはランク×１００ポイントアップします!!?私は栗原様の墓地からクリボールを除外して、巨神竜フェルグラントの攻撃力を１００ポイント上昇させます!!?」
「っ、クリボー!!?」
巨神竜フェルグラントの咆哮により、クリボーの魂が異次元に吹き飛ばされる。

巨神竜フェルグラント
ＡＴＫ２８００→２９００

「さらにドラゴンメイドラドリーの効果発動!!?自分のデッキの上からカードを3枚墓地へ送ります!!?」
慌てて現れたラドリーは先程ばら撒いてしまった洗濯物で足を滑らせ、ばら撒かれていた洗濯物を辺り一面に撒き散らす。
その姿を見て、ハスキーは冷たい笑みを浮かべるとラドリーの首根っこを掴んで、フィールドの隅でお説教を始めた。
な、何だか見ててラドリーが可愛そうになってくるんだけど……
「フィールドのドラゴンメイドが増えたことでドラゴンメイドのお出迎えを発動!!?私のフィールドのモンスターの攻撃力・守備力はさらに上昇します」

スリーバーストショットドラゴン
ＡＴＫ２７００→２８００

巨神竜フェルグラント

ＡＴＫ２９００→３３００

ドラゴンメイドティルル

ＤＥＦ２０００→２１００

ドラゴンメイドパルラ

ＡＴＫ８００→９００

ドラゴンメイドラドリー

ＤＥＦ１６００→２０００

ドラゴンメイドハスキー

ＡＴＫ３０００→３４００

珊瑚さんのフィールドのドラゴンがさらに攻撃力を上げる。

何とかさっきは凌げたけど、珊瑚さんのドラゴンメイドの展開能力は危険だ。

早めに手を打たないと、このままじゃ防御が間に合わなくなる。

だけど、その分珊瑚さんのデッキもすごい勢いで減っていってる。

なら……‼？

「私はこのままバトルフェイズに入ります‼？」

「モンスターがいないのにバトルフェイズに、ですか？……バトルフェイズ開始時、ドラゴンメイドティルル、ドラゴンメイドパルラ、ドラゴンメイドラドリーの効果をそれぞれ発動‼？ドラゴンメイドティルル、ドラゴンメイドパルラは自分・相手のバトルフェイズ開始時に、このカードを持ち主の手札に戻し、自分の手札・墓地からレベル８のドラゴンメイドモンスター１体を選んで特殊召喚し、ドラゴンメイドラドリーは自分・相手のバトルフェイズ開始時、このカードを持ち主の手札に戻し、自分の手札・墓地からレベル７のドラゴンメイドモンスター１体を選んで特殊召喚します‼？真なる力をお見せしなさい‼？私はドラゴンメイドティルル、ドラゴンメイドパルラ、ド

ラゴンメイドラドリーをそれぞれ手札に戻し、現れなさい、ドラゴンメイドフランメ‼?ドラゴンメイドルフト‼?ドラゴンメイドフルス‼?」

〈ドラゴンメイドフランメ〉☆8　ドラゴン族　炎属性
ＡＴＫ２７００→３１００

〈ドラゴンメイドルフト〉☆8　ドラゴン族　風属性
ＡＴＫ２７００→３１００

〈ドラゴンメイドフルス〉☆7　ドラゴン族　水属性
ＡＴＫ２６００→３０００

ティルル、パルラ、ラドリーの姿がそれぞれ光り輝き、光りが収まるとそれぞれの髪の色と同じ色をした体躯の龍が姿を現わす。
強力なドラゴン達だけど、そんなことはもう関係ない‼?
「私はこのままバトルフェイズを終了し、バトルフェイズ終了時に手札から罠発動‼?拮抗勝負‼?」
「っ‼?そのカードは……」
「自分フィールドにカードが存在しない場合、このカードは手札からも発動できる‼?相手フィールドのカードの数が自分フィールドのカードの数より多い場合、自分・相手のバトルフェイズ終了時に発動できる‼?自分フィールドのカードの数と同じになるように、相手はフィールドのカードを裏側表示で除外しなければならない‼?私のフィールドには今発動した拮抗勝負のみ。珊瑚さんにもフィールドのカードが1枚になるようにカードを除外して貰います‼?」
「やられましたね……仕方ありません。ドラゴンメイドハスキー以外のカードを全て除外します」
拮抗勝負の力でハスキー以外のカードが全て粒子に変わって消えていく。
「お見事です。しかし、私の手札には戻ってきたドラゴンメイド達が

いますよ？」
「だったらいなくなって貰えばいいんです‼？メインフェイズ２‼？まずは魔法カード、一時休戦‼？お互いのプレイヤーは、それぞれデッキから１枚ドローし、次の相手ターン終了時まで、お互いが受ける全てのダメージは０になります‼？さらに魔法カード、手札抹殺‼？お互いに手札を全て捨てて同じ枚数ドローします‼？私は４枚、珊瑚さんは９枚のカードを捨ててドローします‼？」
「っ⁉？ここで……しかもこれは……‼？」
私が発動した手札抹殺により、私と珊瑚さんは再びカードを引きなおす。
改めてカードをドローした珊瑚さんは残り１枚となった自分のデッキをチラリと見ると、感心した表情を浮かべて私を見た。
「少しデッキを削り過ぎましたか。それを見抜いてデッキ破壊にシフトしてくるとは……そのうえ、次のターンに最後の１枚をドローしようと一時休戦により私は栗原様にダメージを与えれません。このままいけば、私は確実に敗北するというわけですか」
「前に私も墓地肥やしやドローのし過ぎでデッキ切れになりそうになったことがありましたから。今の珊瑚さんのデッキの減り方ならデッキ破壊にシフトできると思ったんです」
それは前に『Ｎａｔｕｒａｌ』で行われた大会の決勝戦で師匠とデュエルした時にやってしまった私の悪手。
勿論、全力でいかなければその時点で師匠には負けていただろうけど、デュエルに集中し過ぎたせいでお互いのデッキの枚数を把握しながらデュエルするということが、あの時の私にはできていなかった。
それでも師匠は真正面から私にぶつかってくれたからデッキ切れで終わるという結末はむかえなかったけど、師匠はあのまま私のデッキが切れるまで防御を固めるだけでもよかったのだ。
ならばこそ、あの経験も活かして自分の力に変えなければいけない。
それができなければ、悪手を打った私にそれでも真正面からぶつかってくれた師匠に申し訳が立たないから。

「成る程、自らの失敗を糧に自身の力に変える。大変素晴らしいことだと思います。お見事でした」
「確かに、これで決まってくれればそれでいいんだと思います。だけど、そうじゃないですよね？」
「……」
「珊瑚さんの目を見れば分かります。珊瑚さんの目は、全然諦めていません。この状況をどう覆すのかまでは、私には分かりませんけど……珊瑚さんにまだ手があるというのなら、私も自分の全力で最後までぶつかるだけです‼？」
「……ほう、これは参りましたね。どうやら私は、栗原様のことを過小評価していたようです」
　私の言葉に、珊瑚さんは心底感心したというような声を漏らし、深く頭を下げた。
「お見それしました。今までの非礼、深くお詫び申し上げます」
「いえ、私がまだまだ未熟なのはよく知っていますから。だから、御指南の程よろしくお願いします‼？」
　そういって私も頭を下げる。
　そんな私を見て、珊瑚さんはくすりと笑うともう1度恭しく頭を下げた。
「ならば、私の全力のおもてなしに付き合っていただけますか？」
「勿論です‼？」
「ありがとうございます。ならば、早速動かせていただきましょう。私は墓地に存在する守護竜プロミネシス、さらに手札に存在する守護竜ガルミデスの効果発動‼？」
「えっ⁉？守護、竜？」
　柔らかい笑顔を浮かべながらも、確かな自信を持った目で珊瑚さんは2体の竜の名を呼ぶ。
「まずは守護竜ガルミデスの効果、通常モンスターが自分の墓地へ送られた場合、このカードを手札から特殊召喚します‼？」
「っ、さっきの手札抹殺で通常モンスターが落ちちゃったんですね……」

「いらしてください、守護竜ガルミデス!!?」

〈守護竜ガルミデス〉☆３　ドラゴン族　地属性
ＡＴＫ１６００

現れたのは身体にある青い宝玉を煌めかせている黒竜。
「さらに守護竜プロミネシスの効果、このカードが墓地に存在し、通常モンスターが自分の墓地へ送られた場合、このカードを特殊召喚します!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外されます。いらしてください、守護竜プロミネシス!!?」

〈守護竜プロミネシス〉☆１　ドラゴン族　炎属性
ＤＥＦ２００

さらにガルミデスと並び立つように黄色い宝玉を煌めかせた炎を纏った竜が姿を現わす。
「これが私のもう１つの力、守護竜です。その力、存分にご堪能ください」
「はい!!?私はこのままターンエンドです!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札４
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー
ー○□○ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
珊瑚　ＬＰ６５００　手札８

「私のターン、ドロー!!?」
これで珊瑚さんのデッキは無くなった。

だけど、その表情が曇ることはない。
「参ります‼?防護せよ‼?輝石を守護するサーキット‼?」
珊瑚さんが正面に手を前に突き出すと、巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はドラゴン族モンスター2体‼?私は守護竜ガルミデスと守護竜プロミネシスの2体をリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?」
ガルミデスとプロミネシスがサーキットに吸い込まれていく。
そしてサーキットが光り輝くと、サーキットから現れるのは白銀の鎧を身につけ、紫の宝玉を輝かせた巨大な竜。
「リンク召喚‼?無償の愛を守る白銀の竜‼?リンク2‼?守護竜アガーペイン‼?」
〈守護竜アガーペイン〉ＬＩＮＫ２　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ１５００　←→
「守護竜のリンクモンスター……」
「守護竜アガーペインの真価を見せるのはもう少し先の話です。永続魔法、星遺物の守護竜を発動‼?このカードの発動時に、自分の墓地のレベル４以下のドラゴン族モンスター1体を対象にそのモンスターを手札に加えるか特殊召喚します‼?墓地より戻りなさい、ドラゴンメイドナサリー‼?」
〈ドラゴンメイドナサリー〉☆２　ドラゴン族　地属性
ＤＥＦ１６００
「さらにドラゴンメイドナサリーの効果発動‼?墓地より戻りなさい、ドラゴンメイドラドリー‼?」
〈ドラゴンメイドラドリー〉☆２　ドラゴン族　水属性
ＤＥＦ１６００

「うっ……またドラゴンメイド達が……」
「まだまだ行きますよ。防護せよ‼？輝石を守護するサーキット‼？」
珊瑚さんが正面に手を前に突き出すと、再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル４以下のドラゴン族モンスター１体‼？私はドラゴンメイドラドリーをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？リンク１‼？守護竜ピスティ‼？」
〈守護竜ピスティ〉ＬＩＮＫ１　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ１０００　↓

ラドリーがサーキットの中に消えると代わりに現れたのは赤い宝玉を輝かせる黒竜。
「また守護竜のリンクモンスター……」
「永続魔法、星遺物の守護竜の効果を発動‼？１ターンに１度、自分フィールドのドラゴン族モンスター１体を対象としてその自分のモンスターの位置を、他の自分のメインモンスターゾーンに移動します。私は守護竜ピスティを中央のメインモンスターゾーンに移動します」
星遺物の守護竜の効果でピスティがフィールドの中央に移動する。
これでアガーペインのリンク先が空いた。
狙いは更なるＥＸデッキからの召喚？
そんなことを考える私を見て、珊瑚さんはくすりと笑った。
「警戒しなくとも、すぐに答えあわせをしますよ。守護竜アガーペインの効果発動‼？ラブイリュージョン‼？自分メインフェイズに２体以上のリンクモンスターのリンク先となる、ＥＸモンスターゾーンまたは自分フィールドにＥＸデッキからドラゴン族モンスター１体を特殊召喚します‼？」
「ＥＸデッキからドラゴン族モンスターを直接特殊召喚するんですか

⁉？」
「私は守護竜アガーペインと守護竜ピスティのリンク先となるモンスターゾーンにＥＸデッキからドラゴン族モンスターを特殊召喚します⁉？いらしてください、竜魔人キングドラグーン⁉？」
アガーペインとピスティが咆哮をあげると、空に亀裂ができる。
その亀裂が広がっていくと、亀裂の先にある空間から巨大な竜が姿を現した。

〈竜魔人キングドラグーン〉☆７　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２４００

「竜魔人キングドラグーンの永続効果により、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手はドラゴン族モンスターを魔法・罠・モンスターの効果の対象にする事はできません⁉？」
「全体への効果耐性……⁉？」
「それだけではありませんよ。竜魔人キングドラグーンの効果発動⁉？１ターンに１度、手札からドラゴン族モンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚します⁉？いらしてください、青氷の白夜龍（ブルーアイスホワイトナイツドラゴン）⁉？」
「青氷の白夜龍⁉？」

〈青氷の白夜龍〉☆８　ドラゴン族　水属性
ＡＴＫ３０００

フィールドに現れたのは氷の身体を持つ青き巨龍。
その名前だけではなく、姿までも異世界で見たことがある伝説の白龍に似ている。
だけど、その雰囲気から感じる白夜龍の本質はきっと別物だ。
「青氷の白夜龍は効果によりこのカードを対象とする魔法・罠カードが発動した時にその発動を無効にし破壊する効果とこのカード以外の自分の表側表示モンスターが攻撃対象に選択された時、自分フィー

ルドの魔法・罠カード　1枚を墓地へ送って攻撃対象をこのカードに移し替えることができます」
「効果無効に攻撃の誘導……守護竜やキングドラグーンを守るための龍」
「それではバトルフェイズに移ります。バトルフェイズ開始時、ドラゴンメイドナサリーの効果発動!!?交代の時間です、このカードを手札に戻し、墓地からドラゴンメイドフルスを特殊召喚します!!?」

〈ドラゴンメイドフルス〉☆7　ドラゴン族　水属性
ＡＴＫ２６００

ナサリーが深くお辞儀をして姿を消すと、代わりにフルスが姿を現わす。
1体は拮抗勝負で除外したから2体目が落ちてたということだろう。
だけど、このターンは一時休戦の効果によりダメージは受けない。
なら、狙いは別にあるハズ……
「私はこのままバトルフェイズを終了し、ならば、バトルフェイズ終了時にドラゴンメイドフルスの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、自分・相手のバトルフェイズ終了時、このカードを持ち主の手札に戻し、自分の手札からレベル2のドラゴンメイドモンスター1体を選んで特殊召喚します!!?忙しくてすみませんが、交代の時間です。ドラゴンメイドナサリーを特殊召喚!!?」
フルスが咆哮をあげ、空に飛び上がるとナサリーが再び姿を現わす。

〈ドラゴンメイドナサリー〉☆2　ドラゴン族　地属性
ＤＥＦ１６００

「そしてメインフェイズ2、私は手札のドラゴンメイドフルスを捨ててその効果を発動します!!?同名カードは1ターンに1度、このカー

ドを手札から捨て、自分または相手の墓地のモンスター1体を対象としてそのモンスターを持ち主のデッキに戻します!!?」
「っ!?!?・ということは……!!?」
「私は墓地よりドラゴンメイドラドリーをデッキに戻します」
珊瑚さんはデュエルディスクにあるデッキ部分にラドリーのカードをおき、試すような目でこちらを見る。
「これで私は次のターンを向かえることができます。そしてこの意味、栗原様なら理解できると思います」
「墓地にいったドラゴンメイドフルスはレベル2のドラゴンメイドがいる限りバトルフェイズを介して手札に戻る。ドラゴンメイドフルスをどうにかしない限り、珊瑚さんのデッキが切れることはない、ということですね」
「左様でございます。さらに私のフィールドの防御は完成しております。そう易々と突破できるとは思わないことです」
珊瑚さんの言葉に、私は苦い表情を浮かべる。
そもそも私のデッキはローレベルデッキだから純粋な攻撃力は低く、高攻撃力のモンスターが多く、蘇生手段も豊富なドラゴンデッキは特に苦手としている。
そのうえ今回は魔法・罠の耐性があり、白夜龍により攻撃すら誘導される。
おまけにデッキ切れも狙えないとなると、かなり勝ち目は薄い。
だけど……それはあくまでも薄いだけだ。
勝てないわけじゃない。
「ふふっ、どうやら闘志は尽きていないようですね」
「勿論です!!?・確かに厳しい状況です……だけど、諦めることだけは絶対にしないって、私は決めてますから!!?・」
「それでこそ、持て成しがいがあるというものです。墓地に存在するドラゴンメイドのお召し替えの効果発動!!?・私はドラゴンメイドナサリーを手札に戻し、ドラゴンメイドのお召し替えを手札に加えます。さらに墓地に存在する墓地のアクションマジック―ダブルバンキングの効果発動!!?・このカードが墓地に存在する場合、自分メイン

フェイズに手札から魔法カード1枚を捨ててこのカードを自分の魔法＆罠ゾーンにセットします。私は先程手札に加えたドラゴンメイドのお召し替えを墓地に送り、アクションマジック―ダブルバンキングをセットします」
「ドラゴンメイドのお召し替えはドラゴンメイドを手札に戻せば何度でも回収できる……つまり、何度でもアクションマジックのコストにできるというわけですね」
「理解が早くて助かります。私は再びドラゴンメイドナサリーを召喚します‼？」

〈ドラゴンメイドナサリー〉☆２　ドラゴン族　地属性
ＡＴＫ５００

「さらに私はカードを3枚伏せてターンエンド。栗原様の力、存分に見せていただきます」
そういって珊瑚さんがターンの終わりを宣言する。
珊瑚さんのフィールドにいるのは強固な6体のドラゴン。
セットカードも潤沢で手札だって多い。
それに比べて私にあるのはたった４枚の手札のみ。
圧倒的な逆境。
だとしても、紅葉さんを探すため、この逆境を乗り越えて絶対に珊瑚さんに勝ってみせる‼？

遊花　ＬＰ８０００　手札４
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　☆
○○☆○○
▲▲△▲▲　ー
珊瑚　ＬＰ６５００　手札４

第７３話　ぶつかり合う魂

★

遊花　ＬＰ８０００　手札４
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

龍。
「融合召喚!!?閉ざされた世界を溶かす毒龍!!?スターヴヴェノムフュージョンドラゴン!!?」
〈スターヴヴェノムフュージョンドラゴン〉☆８　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２８００
「っ、そのドラゴンは……」
「スターヴヴェノムフュージョンドラゴンの効果発動!!?パワースワローヴェノム!!?このカードが融合召喚に成功した場合、相手フィールドの特殊召喚されたモンスター１体を選び、その攻撃力分だけこのカードの攻撃力をターン終了時までアップする!!?対象にするのは青氷の白夜龍!!?」
「っ、青氷の白夜龍!!?」
スターヴヴェノムが毒の瘴気を放ち、瘴気を浴びた白夜龍の力を奪い取っていく。
スターヴヴェノムフュージョンドラゴン
ＡＴＫ２８００→５８００
「攻撃力５８００……」
「さらにスターヴヴェノムフュージョンドラゴンの効果発動!!?スキルスワローヴェノム!!?１ターンに１度、相手フィールドのレベル５以上のモンスター１体を対象としてターン終了時まで、このカードはそのモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得る!!?対象は青氷の白夜龍!!?」
「っ、効果まで……」
スターヴヴェノムが再び白夜龍に毒の瘴気を放ち、次は効果を奪い取る。
「まだ終わりじゃありません!!?魔法カード、儀式の下準備!!?デッ

キから儀式魔法カード1枚を選び、さらにその儀式魔法カードにカード名が記された儀式モンスター1体を自分のデッキ・墓地から選んで、そのカード2枚を手札に加えます!!?私が加えるのはイリュージョンの儀式とサクリファイス!!?」
「次は儀式召喚ですか……」
「私は儀式魔法、イリュージョンの儀式を発動!!?自分の手札・フィールドから、レベルの合計が1以上になるようにモンスターをリリースし、手札からサクリファイスを儀式召喚します!!?私は墓地のクリボールの効果で儀式召喚を行う場合、必要なレベル分のモンスターの内の1体として、墓地のこのカードを除外できます!!?」
「!?手札を捨てた時に墓地に送っていましたか……」
　金色の目の形をした壺にクリボールが吸い込まれ、しばらくすると壺が割れ、中から妖しい邪眼を持つモンスターが現れた。
　しばらくすると壺が割れ、中から妖しい邪眼を持つモンスターが現れた。
「儀式召喚!!?相手を捕える妖しい邪眼!!?サクリファイス!!?」

〈サクリファイス〉☆1　魔法使い族　闇属性
　ＡＴＫ０

「サクリファイス……そのモンスターに効果を使わせるわけにはいきませんね。リバースカードオープン!!?速攻魔法、ドラゴンメイドのお見送り!!?自分フィールドのドラゴンメイドモンスター　1体を対象としてそのモンスターとはカード名が異なるドラゴンメイドモンスター　1体を手札から守備表示で特殊召喚し、対象のモンスターを持ち主の手札に戻します。そしてこの効果で特殊召喚したモンスターは次のターンの終了時まで、戦闘・効果では破壊されません。私は、ドラゴンメイドティルルを特殊召喚し、ドラゴンメイドナサリーを手札に戻します!!?」

〈ドラゴンメイドティルル〉☆3　ドラゴン族　炎属性

ＤＥＦ１７００

ナサリーの姿が消え、代わりにティルルが姿を現わす。
だけど、その効果にどんな意味が……
私のそんな疑問はすぐに答えられる。
「そしてドラゴンメイドハスキーの効果発動!!?タッチプロハビシャン!!?このカード以外の自分フィールドの表側表示のドラゴン族モンスターが自分の手札に戻った時、相手フィールドのモンスター　１体を対象としてそのモンスターを破壊します!!?」
「っ!?破壊効果!?」
「私が破壊するのは当然、サクリファイスです!!?」
ハスキーが尻尾を使ってサクリファイスの身体を粉砕する。
特殊召喚しかしてこなかったからまだ効果があるとは思ってたけど、まさか破壊効果まで持っているとは思わなかった。
早めにどうにかしないとこちらもモンスターを展開できなくなる。
「なら、バトル!!?」
「バトルフェイズ開始時、ドラゴンメイドティルルの効果発動!!?真なる力をお見せしなさい!!?このカードを手札に戻し、墓地からドラゴンメイドフランメを特殊召喚します!!?」

〈ドラゴンメイドフランメ〉☆８　ドラゴン族　炎属性
ＡＴＫ２７００

「そしてドラゴンメイドハスキーの効果発動!!?タッチプロハビシャン!!?スターヴヴェノムフュージョンドラゴンを破壊します!!?」
「ゴメンね、スターヴヴェノムフュージョンドラゴン」
ハスキーが尻尾を使ってスターヴヴェノムの身体を吹き飛ばす。
しかし、吹き飛ばされたスターヴヴェノムの亡骸から大量の毒の瘴気が溢れ出し、珊瑚さんのモンスターを呑み込んでいく。
「破壊されたスターヴヴェノムフュージョンドラゴンの効果発動!!?ロンリーブレイク!!?融合召喚したこのカードが破壊された場合、相

手フィールドの特殊召喚されたモンスターを全て破壊します!!?」
「存じております。墓地に存在する復活の福音を除外して効果を適用します。自分フィールドのドラゴン族モンスターが戦闘・効果で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外できます!!?」
「っ、そんなカードが……」
毒の瘴気が晴れるとそこには青いオーラに包まれた珊瑚さんのモンスター達が佇んでいた。
スターヴヴェノムの全体破壊も防がれてしまい、これはいよいよ不味いのかもしれない。
「だけど、まだまだ諦めません!!?私はバトルフェイズを終了します!!?」
「ならば、ドラゴンメイドフランメの効果発動!!?このカードを手札に戻し、手札からドラゴンメイドティルルを特殊召喚します!!?」

〈ドラゴンメイドティルル〉☆3　ドラゴン族　炎属性
ＤＥＦ１７００

「メインフェイズ２!!?私はジェットシンクロンを召喚!!?」

〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＡＴＫ５００

フィールドに現れたのは小さなジェット機のような機械のモンスター。
「そして、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「リンク召喚ですか」
私の正面に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はトークン以外のレベル1モンスター1体!!?私はジェットシンクロンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?相手を捕える深淵の邪眼!!?リンク1!!?サクリファイスアニマ!!?」

〈サクリファイスアニマ〉ＬＩＮＫ１　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０　→

ハスキーの目の前に怪しげな邪眼を持つモンスターが現れる。
「サクリファイスのリンクモンスター……ということは……!!?」
「サクリファイスアニマの効果発動!!?コネクトアブソープション!!?1ターンに1度このカードのリンク先の表側表示モンスター1体を対象にその表側表示モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップします!!?対象はドラゴンメイドハスキー!!?吸い込んじゃって、サクリファイスアニマ!!?」
アニマの目の上にある空間からハスキーを吸い込むように風が生み出され、ハスキーの身体を飲み込むとアニマの邪眼に眼鏡がかかる。

サクリファイスアニマ
ＡＴＫ０→３０００

「っ、ドラゴンメイドハスキーがやられましたか」
「まだです!!?墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動!!?自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローします。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外すします!!?私はフィールドのサクリファイスアニマをＥＸデッキに戻し、カードを1枚ドローします!!?」
「そのようなカードまで墓地に送っていたのですね……」
「よし、まだいけます!!?私は、今ドローした占い魔女　ヒカリちゃんの効果発動!!?このカードをドローした時、このカードを相手に見せることで手札から特殊召喚します!!?」

〈占い魔女　ヒカリちゃん〉☆1　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

フィールドに現れたのは太陽の形をしたステッキを持った黄色い髪の女の子。
現れたヒカリちゃんは手にしたステッキをブンブンと振いながら笑顔で私に向かってピースサインをする。
うん、貴女の力、貸して貰うね？
「占い魔女　ヒカリちゃんの効果発動!!?このカードが手札からの特殊召喚に成功した場合、自分フィールドのモンスター1体を対象として、そのモンスターを墓地へ送り、デッキから魔法使い族・レベル1モンスター1体を特殊召喚します!!?私は占い魔女　ヒカリちゃんを墓地へ送り、デッキからミスティックパイパーを特殊召喚!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆1　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

ヒカリちゃんが一礼をしてからステッキを振るうと、ヒカリちゃんの身体が光に包まれて霧散し、再び光が集まると、そこにフルートのようなものを弾いている男の人が現れた。
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを1枚ドローし、この効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル1モンスターだった場合、自分はカードをもう1枚ドローします!!?……あ、ふふっ」
「何かいい物を引けたようですね」
いつものようにミスティックパイパーにサムズアップを返してからドローした私は、引いたカードを見て思わず笑みを浮かべてしまう。
笑みを浮かべる私に警戒する珊瑚さんに私は親友が譲ってくれたそのカードを珊瑚さんに見せる。

「私がドローしたのはジェスターコンフィ‼?レベル1モンスターなのでもう1枚ドローします‼?」
「‼?それは宝月様が使っていた……」
「そしてこのカードは手札から攻撃表示で特殊召喚できます‼?おいで、ジェスターコンフィ‼?」

〈ジェスターコンフィ〉☆1　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０

現れたのは球に乗った道化師のモンスター。
この子は元々桜ちゃんのデッキに入っていたモンスターだ。
だけど、私が師匠の手伝いをするためにデッキを組み直した時に、少しでも役に立てればと譲ってくれたのだ。
「桜ちゃんのカードはいつだって私を助けてくれます。そして、その力は希望に繋がってくれます‼?導いて‼?希望に繋がるサーキット‼?」
「再びリンク召喚ですか……」
私の前に再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル1モンスター1体。私はジェスターコンフィをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚‼?希望の守り手‼?リンク1‼?リンクリボー‼?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

ジェスターコンフィがサーキットに吸い込まれると、代わりに私の前に元気一杯に飛び出してきたの青い球体のモンスター。
今日も頼むね、リンクリボー。
「そして魔法カード、貪欲な壺‼?墓地に存在するスターヴヴェノムフュージョンドラゴンをＥＸデッキに、フリップフローズン、占い魔女　ヒカリちゃん、ミスティックパイパー、ジェスターコンフィを

デッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローします!!?」
「!!?・まだドローをしますか……」
「どんどんいきます!!?・速攻魔法、サクリファイスフュージョン!!?・アイズサクリファイス融合モンスターカードの融合素材モンスターを自分の手札・フィールド・墓地から除外し、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚するよ!!?・私が除外するのは、墓地のサクリファイスとジェットシンクロン!!?・」
「っ!!?・ここでサクリファイスの融合魔法!!?・」
フィールドに現れた渦の中に、サクリファイスとジェットシンクロンが吸い込まれていく。
「妖しい邪眼よ、調律の銀翼よ!!?・今交わりて、全てを奪う力とならん!!?・融合召喚!!?・全てを見透かす叡智の邪眼!!?・ミレニアムアイズサクリファイス!!?・」

〈ミレニアムアイズサクリファイス〉☆1　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０

フィールドに現れた渦の中から出てきたのは金色の邪眼と身体を持つモンスター。
「ミレニアムアイズサクリファイスは1ターンに1度、相手モンスター1体を対象としてその相手の効果モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力・守備力は、このカードの効果で装備したモンスターのそれぞれの数値分アップし、このカードの効果で装備したモンスターと同名のモンスターは攻撃できず、その効果は無効化します」
「私が効果をしようすればその時点で吸収されて無効化されるわけですね」
「いいえ、その前に吸収させて貰います!!?・墓地のサクリファイスフュージョンの効果発動!!?・自分メインフェイズに墓地のこのカードを除外し、相手フィールドの効果モンスター1体を対象とし自分

フィールドの、アイズサクリファイス融合モンスターまたはサクリファイス1体を選び、その効果による装備カード扱いとして対象の相手の効果モンスターを装備します‼？対象にするのは青氷の白夜龍‼？そしてこの効果は魔法効果ではなくモンスター効果として扱われるため、青氷の白夜龍では防げません‼？」

「っ、青氷の白夜龍‼？」

ミレニアムアイズのお腹にある穴から暴風のような吸い込みに、白夜龍は身体を飲み込まれミレニアムアイズの身体に氷の羽根が生まれた。

ミレニアムアイズサクリファイス
ＡＴＫ０→３０００

「私はカードを２枚伏せてターンエンドです‼？エンドフェイズにシャッフルリボーンのデメリット効果が発動しますが、私の手札は既にないので効果はありません‼？」

遊花　ＬＰ８０００　手札０
ー▲△▲ー　　ー
ー○ーーー
　　☆　　ー
□ー☆ーー
ー▲△▲▲　　ー
珊瑚　ＬＰ６５００　手札５

「息もつかさぬ連続ドロー……お見事です、栗原様。ですが、それは私の生存にも繋がってしまったようです」

「えっ？」

私のドローが珊瑚さんの生存に繋がる？

それって一体……

「私のターン、ドロー。まずは私は墓地に存在するドラゴンメイドの

お召し替えの効果を再び発動!!?私はドラゴンメイドティルルを手札に戻し、ドラゴンメイドのお召し替えを手札に加えます。そして今手札に加えた魔法カード、ドラゴンメイドのお召し替えを捨て、栗原様の墓地に存在する貪欲な壺を対象に、リバースカードオープン!!?魔法カード、二重魔法（ダブルマジック）を発動します!!?」

「二重……魔法？」

「このカードは手札から魔法カード　1枚を捨て、相手の墓地の魔法カード1枚を選択して発動でき、選択した魔法カードを自分フィールド上の正しいカードゾーンに置き、使用することができます!!?」

「っ!!?ということは……!!?」

「私は栗原様の貪欲な壺を私のカードとして発動!!?墓地に存在するドラゴンメイドフルス、ドラゴンメイドナサリー、守護竜ユスティア、ドラゴラド、神竜アポカリプスをデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローします!!?」

私の貪欲な壺を使い、珊瑚さんのデッキが回復する。

まさかそんなカードまで入っていたなんて……

「さて、これでデッキ切れは遠のきました。次はミレニアムアイズサクリファイスをどうにかしなければいけませんね。私は墓地に存在する守護竜ガルミデスの効果発動!!?このカードが墓地に存在する場合、手札からドラゴン族モンスター1体を墓地へ送ってこのカードを手札に加えます!!?私は手札の守護竜ユスティアを墓地に送り守護竜ガルミデスを手札に加えます!!?そして守護竜ガルミデスのもう1つの効果発動!!?通常モンスターが自分の墓地へ送られた場合、このカードを手札から特殊召喚します!!?いらしてください、守護竜ガルミデス!!?」

〈守護竜ガルミデス〉☆3　ドラゴン族　地属性

ＡＴＫ１６００

「参ります。防護せよ!!?輝石を守護するサーキット!!?」

珊瑚さんが正面に手を前に突き出すと、再び巨大なサーキットが現

れる。
「召喚条件はレベル４以下のドラゴン族モンスター１体!!?私は守護竜ガルミデスをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク１!!?守護竜エルピィ!!?」
〈守護竜エルピィ〉ＬＩＮＫ１　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ１０００　↑

ガルミデスがサーキットの中に消えると代わりに現れたのは橙色の宝玉を輝かせる白竜。
「また守護竜のリンクモンスター……」
「永続魔法、星遺物の守護竜の効果を発動!!?私は守護竜エルピィを右端のメインモンスターゾーンに移動します」
星遺物の守護竜の効果でエルピィがフィールドの右端に移動する。
先程のアガーペインの効果を考えると、あの守護竜達にもリンクマーカーが向いた場所にモンスターを特殊召喚する効果があるハズ……
「守護竜ピスティの効果発動!!?自分の墓地のモンスターまたは除外されている自分のモンスターの中から、ドラゴン族モンスター１体を対象としてそのモンスターを２体以上のリンクモンスターのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚します!!?墓地よりいらしてください、守護竜アンドレイク!!?」
〈守護竜アンドレイク〉☆４　ドラゴン族　風属性
ＡＴＫ２０００

フィールドに現れたのは緑の宝玉を輝かせた黒い炎のような竜が巻きついている緑竜。
「守護竜アンドレイクの効果発動!!?このカードが墓地からの特殊召喚に成功した場合、または除外されているこのカードが特殊召喚に成功した場合、相手フィールドのモンスター　１体を対象としてそのモ

ンスターを破壊します!!?・対象は勿論ミレニアムアイズサクリファイスです!!?」
「なら、ミレニアムアイズサクリファイスの効果発動!!?・ミレニアムアブソープション!!?・1ターンに1度、相手モンスターの効果が発動した時、相手のフィールド・墓地の効果モンスター1体を対象としてその相手の効果モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備します!!?・対象は守護竜アンドレイク!!?・」
ミレニアムアイズのお腹にある穴から暴風のような吸い込みに負け、アンドレイクは身体を飲み込まれミレニアムアイズの金色の身体の上に黒い炎のような竜が現れた。

ミレニアムアイズサクリファイス
ＡＴＫ３０００→５０００

「これでミレニアムアイズサクリファイスの効果を気にする必要はなくなりました。私はドラゴラドを召喚!!?・」

〈ドラゴラド〉☆４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ１３００

フィールドに現れたのは小さな黒竜。
「ドラゴラドの効果発動!!?・このカードが召喚に成功した時、自分の墓地の攻撃力１０００以下の通常モンスター1体を対象としてそのモンスターを守備表示で特殊召喚します!!?・墓地からいらしてください、チューナーモンスター、守護竜ユスティア!!?・」
「っ!?・?・チューナーモンスターですか!?・?・」

〈守護竜ユスティア〉☆２　ドラゴン族　水属性
ＤＥＦ２１００

フィールドに現れたのは水晶のように透き通った身体を持つ竜。

チューナーモンスターが現れたということは、次に行われるのは……

「私は、レベル4、ドラゴラドに、レベル2、チューナーモンスター、守護竜ユスティアをチューニング!!?」

「やっぱり、シンクロ召喚!!?」

ユスティアが光の輪になり、ドラゴラドが小さな星に変わり、光の道になる。

光の道が輝くと、その中から現れるのは珊瑚の身体を持つ水竜。

「美しき海底に棲まう水竜よ!!?神秘の光で海底を照らせ!!?シンクロ召喚!!?海を守りし龍神!!?シンクロチューナー、珊之龍(コーラルドラゴン)!!?」

〈珊之龍〉☆6　ドラゴン族　水属性

ＡＴＫ２４００

「シンクロモンスターのチューナー!?」

「ふふっ、驚かれたようですね。ですが、それはもう少し後の話です。珊之龍の効果発動!!?コーラルブリッツ!!?　1ターンに1度、手札を1枚捨て、相手フィールドのカード1枚を対象としてそのカードを破壊します!!?私は手札を1枚捨てミレニアムアイズサクリファイスを破壊します!!?」

「っ、ゴメンね。ありがとう、ミレニアムアイズサクリファイス」

珊之龍が放った水の弾丸に撃ち抜かれ、ミレニアムアイズが爆散する。

「まだ終わりではありませんよ。守護竜エルピィの効果発動!!?自分メインフェイズに2体以上のリンクモンスターのリンク先となる自分フィールドに、手札・デッキからドラゴン族モンスター　1体を特殊召喚します!!?デッキより現れなさい、ドラゴンメイドナサリー!!?」

〈ドラゴンメイドナサリー〉☆2　ドラゴン族　地属性

ＤＥＦ１６００

「さらにドラゴンメイドナサリーの効果発動!!?墓地より戻りなさい、ドラゴンメイドラドリー!!?」

〈ドラゴンメイドラドリー〉☆2　ドラゴン族　水属性
　ＤＥＦ１６００

「うっ……またドラゴンメイド達が……」
「それではお待たせ致しました。栗原様に敬意を評し、お見せしましょう。私の切り札を!!?私は、レベル2、ドラゴンメイドラドリーに、レベル6、シンクロチューナー、瑚之龍をチューニング!!?」
「やっぱり、チューナーとして扱えるんですね……」
　瑚之龍が光の輪になり、ラドリーが小さな星に変わり、光の道になる。
「全身凶器の鉛玉!!?空を撃ち抜き、鮮烈なる硝煙を撒き散らしなさい!!?シンクロ召喚!!?」
　光の道が輝くと、その中から現れるのは弾丸の如き白龍。
　以前に異世界で見たことがあるヴァレルロードの進化系。
「獰猛なる弾丸!!?ヴァレルロード Ｓ（サベージ）ドラゴン!!?」

〈ヴァレルロードＳドラゴン〉☆8　ドラゴン族　闇属性
　ＡＴＫ３０００

「ヴァレルロード……Ｓドラゴン……」
「私の記憶が正しければ栗原様はヴァレルシリーズを使用されていましたね。ならば、ヴァレルロードＳドラゴンについてもご存知でしょうか？」
「はい……実物を見たことがありますから」
「ならば、その力、改めてご堪能ください。ヴァレルロードＳドラゴンの効果発動!!?リンクチャージャー!!?このカードがシンクロ召喚に成功した場合、自分の墓地からリンクモンスター1体を選び、装備

カード扱いとしてこのカードに装備し、そのリンクマーカーの数だけこのカードにヴァレルカウンターを置きます!!?さらにこのカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力の半分アップします!!?私は墓地に存在するスリーバーストショットドラゴンをヴァレルロードSドラゴンに装備!!?」

ヴァレルロードSが咆哮をあげると、スリーバーストが弾丸となりヴァレルロードSの身体に装填される。

「スリーバーストショットドラゴンは攻撃力２４００でリンクマーカーは３つ!!?よって、ヴァレルロードSドラゴンの攻撃力を１２００ポイントアップし、ヴァレルカウンターを３つおきます!!?」

ヴァレルロードSドラゴン
ＡＴＫ３０００→４２００
ヴァレルカウンター０→３

「攻撃力、４２００……!!?」

「それでは、バトル!!?バトルフェイズ開始時にドラゴンメイドナサリーの効果発動!!?ドラゴンメイドナサリー、真なる力をお見せしなさい!!?私はドラゴンメイドナサリーを手札に戻し、墓地からドラゴンメイドエルデを特殊召喚します!!?」

ナサリーが深くお辞儀をするとナサリーの身体が光を放ち、エルデへと姿を変える。

〈ドラゴンメイドエルデ〉☆7　ドラゴン族　地属性
ＡＴＫ２６００

「それでは改めまして、バトルです!!?守護竜エルピィでリンクリボーを攻撃!!?シールドブラスト!!?」

「相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動!!?ゼロリンク!!?このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力はターン終了時まで０になります!!?」

エルピィが橙色のブレスを放つが、リンクリボーの身体が粒子に変わりそのブレスを受け止める。

守護竜エルピィ
ＡＴＫ１０００→０

「これでリンクリボーの効果は使わせました。続けて守護竜ピスティでダイレクトアタック‼？アーマーブラスト‼？」
「なら、相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のクリアクリボーの効果発動‼墓地のこのカードを除外し、自分はデッキから１枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替えます‼？」
「そのようなカードも墓地に……その効果も通しましょう」
私は勢いよくカードをドローし、そのままそのカードをフィールドに呼び出す。
「私がドローしたのはドットスケーパー‼？モンスターなので特殊召喚し、攻撃対象を移し替えます‼？」

〈ドットスケーパー〉☆１　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

「守備力２１００⁉？」
「跳ね返してドットスケーパー‼？ピクセルリフレクション‼？」
ピスティが放つ赤色のブレスをフィールドに現れたドットの身体を持つモンスターが、ドット絵でできた盾を生み出し珊瑚さんに向けて跳ね返した。

珊瑚　ＬＰ６５００→５４００

「くっ……まさかレベル１モンスターに受け止められるとは思いま

せんでした。続けてドラゴンメイドエルデでドットスケーパーを攻撃!!?アースアンラッシュ!!?」
　ドットスケーパーが再びドット絵でできた盾を構えるが、そんなドットスケーパーにエルデは勢いよく突撃し、盾ごとドットスケーパーを押し潰した。
「まだです!!?墓地に送られたドットスケーパーの効果発動!!?デュエル中に1度、このカードが墓地に送られた場合に特殊召喚します!!?」

〈ドットスケーパー〉☆1　サイバース族　地属性
　ＤＥＦ２１００

「蘇生してきましたか。ならばこちらもこれを使わせていただきましょう。手札を1枚捨て、アクションマジック―ダブルバンキング!!?自分フィールドのモンスターは、このターン戦闘で相手モンスターを破壊した場合、もう　1度だけ続けて攻撃できます!!?」
「つ、そういえばセットしていましたね……なら、このタイミングで!!?リバースカードオープン!!?速攻魔法、魔力の泉!!?相手フィールドの表側表示の魔法・罠カードの数だけ自分はデッキからドローし、その後、自分フィールドの表側表示の魔法・罠カードの数だけ自分の手札からカードを選んで捨てます!!?ただし、このカードの発動後、次の相手ターンの終了時まで、相手フィールドの魔法・罠カードは破壊されず、発動と効果を無効化されなくなります」
「つ!!?ここにきてまたドローカードですか!!?……いえ、ここで手札を増やされれば栗原様ならば間違いなく逆転の手段を得るでしょう。ならば、ヴァレルロードＳドラゴンの効果発動!!?ストップピングパワー!!?同名カードは1ターンに1度、相手の効果が発動した時、このカードのヴァレルカウンターを1つ取り除いてその発動を無効にします!!?」

ヴァレルロードＳドラゴン

ヴァレルカウンター３→２

発動しようとしていた魔力の泉がヴァレルロードＳの銃弾に撃ち抜かれ、その機能を停止する。

できればドローはしておきたかったけど、こればかりは仕方ないか。

「再びドラゴンメイドエルデでドットスケーパーを攻撃‼？アースアンラッシュ‼？」

「ありがとう、ドットスケーパー」

再びドットスケーパーがエルデに勢いよく突撃され、押し潰す。

「これでモンスターはいなくなりました。ヴァレルロードＳドラゴンでダイレクトアタック‼？衰廃のメガデスバースト‼？」

ヴァレルロードＳが身体中の武装から一斉に銃弾を放ち、さらに口から砲台を出し、粒子砲を放つ。

「その攻撃は通しません‼？リバースカードオープン‼？罠発動‼？パワーウォール‼？相手モンスターの攻撃によって自分が戦闘ダメージを受けるダメージ計算時、その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージが０になるように５００ダメージにつき１枚、自分のデッキの上からカードを墓地へ送ります‼？ヴァレルロードＳドラゴンの攻撃力は４２００なのでデッキの上から９枚のカードを墓地に送ってダメージを０にします‼？」

「‼？これも防ぎますか……」

私がデッキの上から９枚のカードを墓地に送ると、私の前に粒子で出来た盾が生まれ、ヴァレルロードＳが放った銃弾と粒子砲を防ぎきる。

「さらに墓地に送られた絶対王バックジャックの効果発動‼？このカードが墓地へ送られた場合、自分のデッキの上からカードを３枚確認し、好きな順番でデッキの上に戻します‼？そして墓地の絶対王バックジャックを除外して効果発動‼？相手ターンに墓地のこのカードを除外して自分のデッキの一番上のカードをめくり、そのカードが通常罠カードだった場合、自分フィールドにセットし、違った場

合、そのカードを墓地へ送ります。そして、この効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できます!!?」
「デッキ操作は既に終わっており、狙ったものを捲ることができるというわけですね」
「はい!!?絶対王バックジャックの効果めくられたのは通常罠、貪欲な瓶!!?通常罠カードなのでセットされます!!?」
「ふふっ、ここでまたドローを行うカードを引き込みますか……流石です、栗原様」
セットされた貪欲な瓶を見て、珊瑚さんは感心したような表情を浮かべて笑う。
しかし、その次に続けられた言葉で私の背中を冷たい汗が伝う。
「そのうえ何度攻撃を仕掛けても防ぎきるその鉄壁とも言える防御力……”小さな聖域の守護女神(リトルサンクチュアリガーディアン)”の名は伊達ではないということですね」
「っ!!?げほっ!!?げほっ!!?さ、珊瑚さん!!?どうしてその呼び名を知ってるんですか!!?」
珊瑚さんの口から飛び出した思わぬ呼び名に思わず咽せてしまう。
そんな私を見て珊瑚さんはきょとんとした表情を浮かべた。
「どうして、と言われましても……デュエルアカデミアではかなり有名な噂話ですよ?冬城プロに挑むには1人の少女を打倒しなければならない。その少女の守りはまさに金城。どんな攻撃も寄せ付けず、挑むものを跳ね除ける。その少女の姿はまさに”小さな聖域の守護女神(リトルサンクチュアリガーディアン)”だと。主に高等部3年生と1年生の間から広まっていき、今では学内で知らない者はいないと思われますが」
「なんか恥ずかしい解説が追加されてる!!?も〜〜〜真紅ちゃん〜〜〜!!?」
私は頬が熱くなるのを感じながら顔を覆ってその場に蹲り、広めたと思われる後輩に向けて叫び声をあげる。
うぅ〜恥ずかしいよ〜
「ふふっ、有名になればいずれは通る道です。早めに経験できてよかったと捉えた方が良いかと思いますよ。さて、デュエルに戻りま

しょう。私はこのままバトルフェイズを終了し、バトルフェイズ終了時にドラゴンメイドエルデの効果発動!!?このカードを手札に戻し、ドラゴンメイドナサリーを特殊召喚!!?」

〈ドラゴンメイドナサリー〉☆2　ドラゴン族　地属性
ＤＥＦ１６００

「私はこのままターンエンドです」
「なら、エンドフェイズにリバースカードオープン!!?貪欲な瓶!!?私は墓地に存在する手札抹殺、一時休戦、超融合、貪欲な壺、魔力の泉の５枚をデッキに戻し、カードを１枚ドローします!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札１
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

だけど、臆して防御を固めてもこのままならヴァレルロードＳに無効化され、じわじわと削り取られるだけ。
それなら、今の私にできる全力をぶつける方がいい!!?
「すー……はー……珊瑚さん」
「ふふっ、覚悟は決めたという顔ですね。ここが勝負どころでしょうか？」
私は深く深呼吸をして、確かな覚悟を込めて珊瑚さんにその言葉を告げる。
「あなたを、攻略します!!?」
「ふふっ、いいでしょう。攻略できるのであれば、成し遂げてみてください」
「はい!!?桜ちゃんの力、もう１度借ります!!?このカードは手札から攻撃表示で特殊召喚できます!!?おいで、ジェスターコンフィ!!?」

〈ジェスターコンフィ〉☆１　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０

「そして、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「リンク召喚ですか」
私の正面に再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はトークン以外のレベル１モンスター１体!!?私はジェスターコンフィをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?相手を捕える深淵の邪眼!!?リンク１!!?サクリファイスアニマ!!?」

〈サクリファイスアニマ〉ＬＩＮＫ１　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０　→

「!!?またそのモンスターですか……」
「サクリファイスアニマの効果発動!!?コネクトアブソープション!!

？1ターンに1度このカードのリンク先の表側表示モンスター1体を対象にその表側表示モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップします‼？対象はドラゴンメイドナサリー‼？吸い込んじゃって、サクリファイスアニマ‼？」

「仕方ありませんね、通しましょう」

アニマの目の上にある空間からナサリーを吸い込むように風が生み出され、ナサリーの身体を飲み込むとアニマの頭にナースキャップが現れる。

サクリファイスアニマ
ＡＴＫ０→５００

「さらに私は金華猫を召喚‼？」

〈金華猫〉☆1　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のようなモンスター。

「金華猫の効果発動‼？召喚した時、墓地に存在するレベル1モンスターを特殊召喚します‼？対象にするのは、サクリファイス‼？」

「それは通すことができませんね。ヴァレルロードＳドラゴンの効果発動‼？ストッピングパワー‼1ターンに1度、相手の効果が発動した時、このカードのヴァレルカウンターを1つ取り除いてその発動を無効にします‼？」

ヴァレルロードＳドラゴン
ヴァレルカウンター2→1

金華猫がサクリファイスを呼び出そうとするが、金華猫に向けてヴァレルロードＳが銃弾を放ち、その動きを阻害する。

これでヴァレルロードＳの効果を使わせることはできた。
だけど、これから打つ手は一種の賭けだ。
失敗すれば、今度こそあのドラゴン達に私のライフは削りきられるだろう。
それでも、ここまできたらやるしかない。
「そして魔法カード、モンスタースロット‼？自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、選択したモンスターと同じレベルの自分の墓地に存在するモンスター1体を選択してゲームから除外する。その後、自分のデッキからカードを1枚ドローし、この効果でドローしたカードをお互いに確認して選択したモンスターと同じレベルのモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚します‼？」
「‼？ここにきて運に身を委ねましたか。ですが、果たして上手くいきますか？」
「例え上手くいかないとしても、進むこと以外に答えなんてないんです‼？私は金華猫対象に墓地のドットスケーパーを除外し、カードを1枚ドロー‼？」
勢いよくカードをドローして、ゆっくりとそのカードを目の前に持ってくる。
そして私はドローしたカードを見て満面の笑みを浮かべた。
「私がドローしたのはサクリボー‼？レベル1モンスターだから特殊召喚します‼？」

〈サクリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

フィールドに現れたのは背中にウジャト眼を装備した茶色い毛玉のような悪魔。
「さらに除外されたドットスケーパーの効果発動‼？デュエル中に1度、このカードが除外された場合に特殊召喚します‼？」

〈ドットスケーパー〉☆1　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

「あの状況からここまでモンスターを展開してくるとは……」
「まだ終わりではありません‼?・墓地に存在するリンクリボーの効果発動‼?・スケープリンク‼?・このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル1モンスター1体をリリースしてこのカードを墓地から特殊召喚します‼?・私はサクリボーをリリース‼?・戻っておいで、リンクリボー‼?・」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

サクリボーの姿が消え、代わりにリンクリボーが跳ねるように私の前に現れる。
「サクリボーの効果発動‼?・このカードがリリースされた場合に自分はデッキから1枚ドローします‼?・そして、導いて‼?・希望に繋がるサーキット‼?・」
「ここにきてリンク召喚……となれば」
さあ、行くよ‼?
「召喚条件は効果モンスター3体以上‼?・私はサクリファイスアニマ、金華猫、ドットスケーパー、リンクリボーをリンクマーカーにセット‼?・サーキットコンバイン‼?・」
アニマ達がサーキットの中に吸い込まれていくと、サーキットが光り輝く。
珊瑚さんにはまだ正体が分からない伏せカードがある。
だからこそ、あなたの力を貸して‼?
「閉ざされた運命を撃ち抜く信念の弾丸‼?・リンク４‼?・ヴァレルロードドラゴン‼?・」
私の呼び声に応えるように龍の咆哮が轟いた。

〈ヴァレルロードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑←↘?

「ほう、ヴァレルロードドラゴンですか。ですが、ヴァレルロードドラゴンでは私のドラゴン達を突破して私にトドメを刺すことはできませんよ?それとも、その最後にドローしたカードでどうにかするのでしょうか?」
「いいえ、この手札は関係ありません。ヴァレルロードドラゴンが珊瑚さんを攻略してくれるんです!!?バトル!!?ヴァレルロードドラゴンでヴァレルロードＳドラゴンを攻撃!!?銃声のイジェクトフレア!!?」
「っ、迎え撃ってください、ヴァレルロードＳドラゴン!!?衰廃のメガデスバースト!!?」
　ヴァレルロードＳが身体中の武装から一斉に銃弾を放つが、ヴァレルロードはその銃弾を掻い潜るように飛び、口から伸びた砲台からヴァレルロードＳに向けて粒子砲を放つ。
　ヴァレルロードの粒子砲を防ごうと、ヴァレルロードＳも口から砲台を出し、粒子砲を放つ。
「この瞬間、ヴァレルロードドラゴンの効果発動!!?エロージョンエイミング!!?このカードが相手モンスターに攻撃するダメージステップ開始時に、その相手モンスターをこのカードのリンク先に置いてコントロールを得ます!!?ただし、そのモンスターは次のターンのエンドフェイズに墓地へ送られます!!?」
「っ、私の力が及ばず申し訳ありません、ヴァレルロードＳドラゴン」
　相殺しきれずヴァレルロードの粒子砲をその身に受けたヴァレルロードＳは消滅し、こちらのバトルゾーンに移動する。
「続けてヴァレルロードＳドラゴンで守護竜エルピィに攻撃!!?攻撃宣言時、ヴァレルロードドラゴンの効果発動!!?ジャムバレット!!?守護竜エルピィを対象にして攻撃力・守備力を５００ポイントダウンさせます!!?この効果は相手ターンにも発動することができ、この効果に対して相手は効果を発動することが出来ません!!?」

「攻撃宣言時に発動することで攻撃反応のカードを封じてきましたか……」

守護竜エルピィ
ＡＴＫ１０００→５００

ヴァレルロードが手についているリボルバーから弾丸を撃ち出し、エルピィに当て怯ませる。
「お願いします、ヴァレルロードＳドラゴン‼?衰廃のメガデスバースト‼?」
怯んでいるエルピィにヴァレルロードＳは身体中の武装から一斉に銃弾を放ち、エルピィの身体を撃ち抜くと、最後に粒子砲を放ち跡形もなく吹き飛ばした。

珊瑚　ＬＰ５４００→１７００

「くっ……かなり削られてしまいましたね。ですが、やはりこのターンでトドメを刺すことはできないようですね」
そういってホッと息を吐く珊瑚さんに、私は不敵な笑みで答える。
「いいえ、珊瑚さんに次のターンはありません‼?」
「えっ?」
「墓地に存在するパラレルポートアーマーの効果発動‼?自分の墓地からこのカードとリンクモンスター2体を除外し、自分フィールドのリンクモンスター1体を対象として、このターン、そのモンスターは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃ができます‼?」
「っ⁉?それでは……‼?」
「私は墓地に存在するサクリファイスアニマとリンクリボーを除外し、ヴァレルロードドラゴンをもう1度攻撃可能にします‼?」
ヴァレルロードの身体に何処からかパラレルポートが装着され、その身体にエネルギーを再チャージしていく。
「これで終わりです‼?ヴァレルロードドラゴンで守護竜ピスティを

攻撃‼?銃声のイジェクトフレア‼?」
ヴァレルロードが再び粒子砲を放ち、ピスティを呑み込んでいく。
粒子砲に呑み込まれるピスティを見て、珊瑚さんはゆっくりと目を閉じた。
「お見事です、栗原様」

珊瑚　ＬＰ１７００→０

ーーーーーーー

「ふぅ……攻略完了です」
「お疲れ、遊花。流石は”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”ね」
「流石の防御力。”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”は伊達じゃない」
「っ～～～もう‼?桜ちゃんも霊華さんもいじわるです‼?」
「あはは、ごめんごめん」
「クスッ、ごめんなさい」
立体映像が消え、勝手についた呼び名をからかってくる２人を私はぽかぽかと叩く。
うぅ～こんな呼び名が広まってるなんて恥ずかしいよ～
「本当にお見事でした、栗原様」
「あ、珊瑚さん」
「あれ程のデュエルを見せられれば栗原様の実力を疑うものはいないでしょう。お嬢様、如何でしょうか?栗原様達を臨時の風紀委員という形で調査に同行していただくというのは?」
「うっ、そうですわね……」
珊瑚さんに話を振られ、鬼石さんは少し視線を泳がせると仕方がなさそうにため息を吐いた。
「……風紀委員長に確認をしなければいけませんが、私個人としましては……本当に、ほんっ～～～とうに気に食いませんが、栗原遊花達が調査に同行しても問題ないと思いますわ……一応、風紀委員長に口添えはしてあげますわ」

「‼?・ありがとうございます‼?・鬼石さん‼?・」
「ちょっ⁉?・いきなり抱き着いてくるんじゃありませんわ‼?・」
「あわわ、ごめんなさい‼?・つい嬉しくって……」
「全く……本当に調子が狂いますわ」
思わず抱き着いてしまった私を押しのけ、鬼石さんは疲れたようにため息を吐く。
でも、これでようやく一歩前に進めた。
後は紅葉さんをーーー
そんなことを考えていると、私の背後にあった教室の扉が開く。
「戻ったよ、話し合いから……おや?・珍しいね、お客様とは」
「あら、ちょうどいいところに戻っていらしましたわね、風紀委員長」
「えっ?・」
そこにいたのは黒髪をツーブロックにした男子生徒。
鬼石さんの言葉通りなら、この人が風紀委員長?
風紀委員長?は私達の方を見ると、驚いた表情を浮かべる。
その視線の先にいるのは……霊華さん?
「驚いたよ、とてもね。来てたのかい?・ハニー」
「……ハニーは止めてって言ってる」
「はにー、ですか?・」
「御子神?・」
風紀委員長の言葉に私達は首を傾げる。
そんな私達に霊華さんはため息を吐き、仕方なさそうに風紀委員長を指差して口を開く。
「宮司　霊兎(みやじ　れいと)。このデュエルアカデミアの風紀委員長で……私の許嫁」
「初めましてだね、宮司　霊兎だ。いつもお世話になっているよ、ハニーが」
「……だから、ハニーは止めてって言ってる」
「許嫁……って」
「「えぇ〜〜〜‼?・」」
私達は驚きのあまり大声を上げてしまう。

そんな私達を見て、霊華さんは今まで見たことがない照れた表情でそっぽを向くのだった。

ーーーーーーー

「ふむ……分かったよ、理由は。ありがたいよ、協力してくれるなら」
「あ、ありがとう、ございます」
「こちらの台詞だよ、それはね」
そういって、宮司さんは柔かな笑みを浮かべる。
衝撃の紹介が終わった後、珊瑚さんから宮司さんに私達が調査に協力するという話をしてくれた。
それを聞いた宮司さんは柔かな笑みを浮かべながらも、私達が協力するのを了承してくれた。
それはとてもよかったんだけど……
「だが、懸念がある、1つね。君の参加さ、ハニー」
「だからハニーは止めてって言ってる。何が懸念なの？」
「許容できない、君の参加は」
「何故？」
「当然のことだよ、許嫁を心配するのは」
「それは嬉しい。だけど私だって霊兎のことが心配。同じこと」
「言ってくれるね、嬉しいことを。だけど別だよ、それとこれとは」
「……ねぇ、遊花。私達は惚気話を聞かされてるのかしら？」
「えっと……多分？」
「多分じゃなくて、聞かされているのですわ、栗原　遊花。全く、そういうのは家でやって欲しいですわ」
「家ならいいの？というか、宮司さん、何で倒置法で話してるんだろう？」
「キャラづけだよ、ただのね。覚えやすいだろう、風紀委員長として、インパクトがあってね」
「キャラづけなんだ……」

「エンターテイメントだよ、１つのね。もうなってしまったがね、癖に」
目の前で繰り広げられている会話に、桜ちゃんと鬼石さんはげんなりした表情を、私は困った表情を浮かべてしまう。
霊華さんに許嫁がいたことにも驚いたけど、それ以上に今まで見たことがないような雰囲気で宮司さんと話す霊華さんに驚いてしまう。
うぅ、私達邪魔になってないかな？
これってしばらく席を開けた方がいいような……
「それはいいとして……譲れないというわけだね、お互いに」
「なら、やることは１つ」
そういって２人はデュエルディスクを起動してはじめる……って、えっ⁉？
「抜けて貰うよ、調査から、僕が勝てばね」
「私が勝ったら私も調査に入れて貰う。後、学内でハニー呼びは禁止する」
「負けられないね、それは」
「どうしよう、桜ちゃん⁉？ツッコミどころが多すぎるんだけど⁉？」
「とりあえず、学外ならいいのね、ハニー呼び。本当に御子神は変わってるわ」
「勝たせて貰うよ、今回は‼？」
「負けない」
『決闘‼？』

霊華　ＬＰ８０００
霊兎　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

○

「先攻は私。荒魂を召喚」

〈荒魂〉☆４　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ８００

現れたのは鬼の顔のような形をした霊体のモンスター。
「荒魂の効果発動、このカードが召喚・リバースした時にデッキから荒魂以外のスピリットモンスター１体を手札に加える」
「潰しておくよ、早めにね‼？効果発動だ、手札から捨てて、幽鬼うさぎを‼？手札・フィールドのこのカードを墓地へ送り破壊するよ、フィールドのモンスターの効果が発動した時、またはフィールドの既に表側表示で存在している魔法・罠カードの効果が発動した時、そのカードを‼？」
霊兎の手札から、兎の霊が飛び出し、荒魂を破壊する。
「むぅ、やってくれる。荒魂の効果で私はデッキから和魂を手札に加える。カードを２枚伏せてターンエンド」

霊華　ＬＰ８０００　手札３
ー▲▲ーー　ー
ーーーーー
ー　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
霊兎　ＬＰ８０００　手札４

「ドローするよ、僕のターンだ。招待するよ、僕のフィールドに。発動するよ、フィールド魔法を。心眼の祭殿‼？」
霊兎がフィールド魔法を発動すると、辺りが鉾が祀られた神殿に変わる。
「１０００になるよ、自分と相手が戦闘ダメージを受ける場合、このカードがフィールドゾーンに存在する限りね」
「いきなり面倒なカードを使ってくる」

「召喚するよ、因幡之白兎を‼?」

〈因幡之白兎〉☆３　獣族　地属性
ＡＴＫ７００

現れたのは機械的な杵で臼をつく兎の霊体のモンスター。
「厄介なスピリットが現れた。なら、リバースカードオープン。罠発動、八汰烏の骸。次の効果から1つを選択して発動する。自分のデッキからカードを1枚ドローするか、相手フィールド上にスピリットモンスターが表側表示で存在する場合、自分のデッキからカードを2枚ドローする。因幡之白兎はスピリットモンスター、私は2つ目の効果を使用し、カードを2枚ドローする」
「ほぅ……流石だね、ハニー」
「だからハニーって言わないで」
「バトルだよ、カードを1枚伏せてね。直接攻撃するよ、因幡之白兎で‼?砕月‼?」
「くっ‼?」

霊華　ＬＰ８０００→７０００

因幡之白兎が杵で霊華を叩きつける。
因幡之白兎に攻撃を受けた霊華を見て霊兎はニヤリと笑った。
「受けたね、攻撃を。発動するよ、狂戦士の魂（バーサーカーソウル）を、手札を全て捨ててね‼?」
「‼?そのカードは……」
「手札を全て捨てて発動できるよ、自分フィールドのモンスターが直接攻撃で相手に１５００以下のダメージを与えた時にね‼?モンスター以外がめくられるまで最大7回繰り返すよ、自分のデッキの一番上のカードをめくり、それがモンスターだった場合ね‼?相手に５００ダメージを与えるよ、そのモンスターを墓地へ送って‼?そのカードをデッキの一番上に戻すよ、めくったカードがモンスター以外だっ

た場合ね‼?」
発動された狂戦士の魂により、因幡之白兎が怒りの表情で咆哮をあげる。
「いくよ、それじゃあね。１枚目だよ、まずはね」
そういって霊兎は勢いよくカードを引く。
「モンスターカードだよ、軍荼利は‼?受けて貰うよ、５００ポイントのダメージを‼?」
「うっ‼?」

霊華　ＬＰ７０００→６５００

墓地に送られた軍荼利を見て、因幡之白兎が杵を振り回して霊華に叩きつける。
「２枚目だよ。モンスターカードだよ、Ｅｍ（エンタメイジ）トリッククラウンは‼?受けて貰うよ、５００ポイントのダメージを‼?」
「っ‼?」

霊華　ＬＰ６５００→６０００

墓地に送られたトリッククラウンを見て、因幡之白兎が再び咆哮をあげて杵を霊華に叩きつける。
「行くよ、まだまだ。３枚目だよ。モンスターカードだよ、Ｅｍ（エンタメイジ）ダメージジャグラーは‼?受けて貰うよ、５００ポイントのダメージを‼?」

霊華　ＬＰ６０００→５５００

墓地に送られたダメージジャグラーを見て、因幡之白兎が杵を霊華に投げつける。
「っ、なかなか終わらない」
「調子がいいようだね、今日の僕は。４枚目だよ。モンスターカード

だよ、月読命は!!?受けて貰うよ、５００ポイントのダメージを!!?」

霊華　ＬＰ５５００→５０００

墓地に送られた月読命を見て、因幡之白兎が今度は臼を霊華に投げつける。

「っ、本当に狂戦士……」

「５枚目だよ。モンスターカードだよ、Ｅｍ（エンタメイジ）フレイムイーターは!!?受けて貰うよ、５００ポイントのダメージを!!?」

霊華　ＬＰ５０００→４５００

墓地に送られたフレイムイーターを見て、因幡之白兎が霊華に跳び蹴りをくらわせる。

「６枚目だよ。魔法カードだよ、バリアバブルは。終わりだね、これで」

「やっと終わった」

「終わりではないよ、まだね。効果が発動するよ、Ｅｍトリッククラウンの!!?自分は１０００ダメージを受けるよ、自分の墓地のＥｍモンスター　１体を攻撃力・守備力を０にして特殊召喚した後に、このカードが墓地へ送られた場合ね。特殊召喚するよ、Ｅｍトリッククラウンを!!?」

霊兎　ＬＰ８０００→７０００

〈Ｅｍトリッククラウン〉☆４　魔法使い族　光属性

ＤＥＦ１２００→０

霊兎のフィールドに杖を持ったピエロのモンスターが現れる。

「移るよ、メインフェイズ２に。効果を発動するよ、メインフェイズに墓地に存在するＥｍダメージジャグラーを除外してね。手札に加え

るよ、デッキから同名カード以外のＥｍモンスター１体を‼？
Ｅｍ（エンタメイジ）ハットトリッカーさ、加えるのは。このカードは手札から特殊召喚できるよ、フィールドにモンスターが２体以上存在する場合、Ｅｍハットトリッカーは‼？」

〈Ｅｍハットトリッカー〉☆４　魔法使い族　地属性
ＤＥＦ１１００

霊兎のフィールドに身体が透明な帽子を被った魔術師のモンスターが現れる。
そして霊兎は正面に手をかざす。
「ショータイムと行こうか、役者は揃ったからね。レベル４のＥｍトリッククラウンとＥｍハットトリッカーでオーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」
トリッククラウンとハットトリッカーが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、そこに現れたのは天を舞う奇術師。
「空に舞え、奇術師しよ‼？魅力しろ、観客を‼？　Ｅｍ（エンタメイジ）トラピーズマジシャン‼？」

〈Ｅｍトラピーズマジシャン〉★４　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ２５００

「レギュレーションダメージ‼？永続効果だよ、Ｅｍトラピーズマジシャンの。自分はこのカードの攻撃力以下の戦闘・効果ダメージを受けない、このカードがモンスターゾーンに存在する限りね‼？」
「今霊兎のフィールドには戦闘ダメージが１０００になる心眼の祭殿がある。Ｅｍトラピーズマジシャンがいる限り、私の戦闘ダメージは入らない」
「諦めるかい？」

「まさか。直ぐに突破してあげる」
「いい覚悟だ、惚れ直す程にね。ターンエンドだよ、このままね。効果が発動するよ、因幡之白兎の‼?このカードを手札に戻すよ、このカードが召喚・リバースしたターンのエンドフェイズにね」
「なら、エンドフェイズにリバースカードオープン。罠発動、緊急儀式術」
「ほう?」
「自分フィールドに儀式モンスターが存在しない場合、自分の手札・墓地から儀式魔法カード　1枚を除外し、このカードの効果は、その儀式魔法カード発動時の儀式召喚する効果と同じになる。私は手札にある　霊魂の降神（エスプリットコーリング）を除外してその効果を発動。レベルの合計が儀式召喚するモンスターのレベル以上になるように、自分の手札・フィールドのモンスターをリリース、またはリリースの代わりに自分の墓地のスピリットモンスターを除外し、手札から　霊魂鳥神（エスプリットロード）―姫孔雀または　霊魂鳥神（エスプリットロード）―彦孔雀を儀式召喚する」
「驚いたよ。初めてじゃないか、儀式召喚なんて」
「私の友達は目標のために色々な召喚法を覚えていった。私も、そんな友達においていかれたくはないから」
　そういって、霊華がチラリと遊花を見る。
　そんな霊華を見て、霊兎は柔らかく笑った。
「出会えたようだね、いい友人に」
「うん、大切な友達だよ。だから、私もその子の力になってあげたい。私は手札の和魂をリリースし、墓地の荒魂を除外して儀式召喚を行う」
　和魂と荒魂がフィールドに現れた巻物に吸い込まれていく。
　そして巻物が光り輝くとその場に現れたのは鳥の羽根でできた服を見に纏った女神。
「儀式召喚。魂を戦ぐ清風、霊魂鳥神―姫孔雀」
〈霊魂鳥神―姫孔雀〉☆８　鳥獣族　風属性
ＡＴＫ２５００

「見せて貰うよ、新しい力を」
「霊魂鳥神―姫孔雀の効果、それにチェーンしてリリースされた和魂の効果発動。このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上にスピリットモンスターが存在する場合、デッキからカードを1枚ドローする。霊魂鳥神―姫孔雀は儀式モンスターにしてスピリットモンスター。よって1枚ドローする」
「!!?・スピリットモンスターの儀式モンスターだと!?・」
「さらに霊魂鳥神―姫孔雀の効果発動、清風明月。このカードが儀式召喚に成功した場合、相手フィールドの魔法・罠カードを3枚まで選んで持ち主のデッキに戻し、その後、デッキからレベル4以下のスピリットモンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚できる」
「何!?・」
「私は霊兎のセットカードと心眼の祭殿を手札に戻し、デッキから天岩戸を特殊召喚」

〈天岩戸〉☆4　岩石族　地属性
ＡＴＫ１９００

フィールドに神風が巻き起こり、心眼の祭殿が消えると、その代わりに鉾が祀られていた場所に巨大な洞窟が現れる。
「やってくれるね、本当に」
「そしてエンドフェイズに霊魂鳥神―姫孔雀の効果発動、分霊召喚。このカードが特殊召喚したターンのエンドフェイズにこのカードを持ち主の手札に戻し、自分フィールドに鳥獣族、風属性、レベル4、攻撃力守備力１５００の霊魂鳥トークン2体を特殊召喚する」
「っ!?・呼び出せるのか、式神まで!?・」
姫孔雀の姿が光り輝くと、その姿が消え、代わりに2体の霊体の鳥が現れた。

〈霊魂鳥トークン〉☆４　鳥獣族　風属性
ＡＴＫ１５００

「っ……ターンエンドだよ、改めてね」

霊華　ＬＰ４５００　手札４
ー　　ー
ー　　ー
ー○○○ー
ー　　○　　ー
ー　　ー
ー　　ー
ー　　ー
霊兎　ＬＰ７０００　手札３

「私のターン、ドロー。このターンで決める。魔法カード、儀式の下準備。デッキから儀式魔法カード１枚を選び、さらにその儀式魔法カードにカード名が記された儀式モンスター１体を自分のデッキ・墓地から選んで、そのカード２枚を手札に加える。私がデッキから手札に加えるのは霊魂の降神と霊魂鳥神―彦孔雀」

「行うつもりか、再び儀式召喚を‼？」

「私は儀式魔法、霊魂の降神を発動。レベルの合計が儀式召喚するモンスターのレベル以上になるように、自分の手札・フィールドのモンスターをリリース、またはリリースの代わりに自分の墓地のスピリットモンスターを除外し、手札から霊魂鳥神―姫孔雀または霊魂鳥神―彦孔雀を儀式召喚する。私は手札の霊魂鳥神―姫孔雀をリリースし儀式召喚を行う」

姫孔雀がフィールドに現れた巻物に吸い込まれていく。

そして巻物が光り輝くとその場に現れたのは鳥の羽根でできた服を見に纏い、剣を手にした男神。

「儀式召喚。魂を震わす疾風、霊魂鳥神―彦孔雀」

〈霊魂鳥神―彦孔雀〉☆８　鳥獣族　風属性

ＡＴＫ３０００

「霊魂鳥神―彦孔雀の効果発動、風流雲散。このカードが儀式召喚に成功した場合、相手フィールドのモンスターを３体まで選んで持ち主の手札に戻し、その後、手札からレベル４以下のスピリットモンスター　１体を召喚条件を無視して特殊召喚できる」
「っ⁉？モンスターか、次は‼？」
「私はＥｍトラピーズマジシャンを手札に戻す。特殊召喚はしない」
　フィールドに再び神風が巻き起こり、トラピーズマジシャンが吹き飛ばされる。
　それを見た霊兎が悟ったように目を閉じる。
「完敗だね、僕の」
「うん。天岩戸の永続効果でこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、お互いにスピリットモンスター以外のモンスターの効果を発動できない。オーバーレイユニットとして墓地にいったＥｍトリッククラウンの効果も発動しない。霊兎を守る手段はもうない」
「駄目だね。役不足のようだ、僕では、君を守るのには」
「……そんなことない。今回のことは私の我が儘。霊兎の気持ちは、ちゃんと胸に届いてる。だから、自分を卑下しないで。そっちの方が、悲しい」
「……そうか。止めよう、それなら。悲しませるわけにはいかないからね、君を」
「ありがとう、バトル。１体目の霊魂鳥トークンでダイレクトアタック。霊鳥撃」
「くっ‼？」

霊兎　ＬＰ７０００→５５００

「続けて２体目の霊魂鳥トークンでダイレクトアタック。霊鳥撃」
「っ……」

霊兎　ＬＰ５５００→４０００
「次、天岩戸で攻撃。閃光」
「ぐっ‼？効くね、結構」
霊兎　ＬＰ４０００→２１００
天岩戸の洞窟から太陽光がレーザーとなって放たれ、霊兎の身体を貫く。
「終わりだよ、霊魂鳥神―彦孔雀でダイレクトアタック。迅雷風烈」
彦孔雀が剣を振るうと、剣から暴風が放たれる。
暴風は稲妻を纏いながら、霊兎の身体を呑み込み、そのライフを削り取った。
霊兎　ＬＰ２１００→０
―――――――
★
「負けだね、僕の」
「うん、私の勝ち。約束、守ってね」
「分かっているとも。僕は、守る男だよ、約束を。許すとも、霊華が同行するのをね」
「お疲れ様でした、霊華さん‼？」
「ありがとう、遊花。これで一緒に調査できる」
「はい‼？嬉しいです‼？」
デュエルが終わり、霊華さんに労いの言葉をかけると、霊華さんは柔らかく笑う。
そんな霊華さんに桜ちゃんも柔らかい表情で声をかける。
「本当に、お疲れ様ね。それにしても、いつの間に儀式召喚なんてでき

るようになったのよ、アンタ」
「つい最近。遊花と桜においていかれないために身に付けた。２人共、少し目を離すとすごく強くなってるから」
「そうかしら？あんまり自覚ないんだけど……修行はつけて貰ってるけど、炎さんには相変わらず勝てないし」
「私も師匠や闇先パイには全然勝てるようになってませんよ？」
「……２人共、だいぶ感覚がズレてきてる。プロ決闘者でも上位のあの３人に勝つことができる学生の方がおかしい。だからこそ、私も頑張るんだけど」
　首を傾げる私達を見て、霊華さんが呆れたような苦笑を浮かべる。
　そんな私達に宮司さんが声をかけてくる。
「いいかい、そろそろ。話がしたいんだが、調査内容のね」
「あ、ご、ごめんなさい‼？」
「構わないよ、別にね。お世話になっているしね、霊華も。それじゃあ、話すとしよう、今回の件をね」
　そういうと、宮司さんが教室の中にいた風紀委員会の人達にプリントを配る。
　飛び入り参加の形になった私達の分は本来なかったんだけど、珊瑚さんが進行をするからと３人に１枚ということで譲ってくれた。
「それでは、今回の調査の内容について説明します。現在、このデュエルアカデミアにて行方不明者になった生徒が存在しています。行方不明になっていることが発覚したのは、その生徒の保護者からデュエルアカデミアに問い合わせがあり、どの生徒もデュエルアカデミアの通学時に行方不明になっていたために発覚が遅れたようです」
「通学時……それなら遅刻と勘違いされて気付かれなくてもおかしくないですね」
「この学校、講義ごとに担当が変わるし、受けなくていい講義とかがあるから、いなくてもその講義を受けてないだけだと思うものね」
「現在こちらが把握している行方不明者が先程配った資料に記されています。その生徒を探し、保護するのが今回の我々の仕事です。資料には生徒の学年、氏名などが書かれていますので、各自ご確認くださ

い」
珊瑚さんの言葉に私達はプリントに視線を移す。
渡されたプリントには十数名の生徒の氏名が書いてあり、私達と同じ高等部三学年の欄には桜糀　紅葉の名前が確かに記されていた。
「紅葉さん……」
「遊花、大丈夫？」
険しい表情を浮かべる私を見て、桜ちゃんが心配そうな表情を浮かべる。
そんな桜ちゃんに私は首を振って応える。
「大丈夫……心配だけど、きっと紅葉さんは無事だから。だから、絶対に見つけ出すよ」
「……そうね。私だって力を貸すわ。だから、絶対に見つけましょ」
「ありがとう、桜ちゃん」
「……こうして見ると、桜糀以外にも知ってる名前がある。これ」
「斎京　力一……これってあの学年トップ１０の⁉？」
「うん、すごい馬鹿」
「言い得て妙ね。間違えてないけど」
斎京　力一。
私が前期試験でデュエルした学年トップ１０の１人だ。
身体が凄く大きく、私にしてきたセクハラ紛いの発言と、残念なネーミングセンス、効果が理解できないなら効果を消してしまえばいいという豪快な発言をしていたことから記憶にも残っている。
斎京君みたいな腕っぷしが強そうな人まで行方不明になっちゃうなんて……
関わったことがある人が行方不明になってしまっていることにショックを受けながらプリントを読み進めていく。
そして私は再び見つけてしまう。
「えっ⁉？さ、桜ちゃん、これって……」
「遊花？……っ、嘘、でしょ？」
私が指し示した場所に書かれていた２つの名前。
私が指し示した高等部一年生の欄にはーーー

「眼竜　真紅……幸土　刀花……」

ーーー『Ｎａｔｕｒａｌ』で別れたままになっていた、２人の後輩の名前が記載されていた。

第７４話　暴走する配下

☆

「……よし、これで一段落か……ふぁ、流石に眠いな」

公園のゴミを集めたゴミ袋をベンチの横に置き、昼食の弁当を取り出しながら俺は欠伸を噛み殺していた。

ヘイムダルと名乗ったあのヘンテコヘルメット野郎との邂逅から一夜が明けた。

結局あの後、深夜まで姿を消したヘイムダルを捜索したが見つけ出すことはできなかった。

おまけに湾岸エリアにあった隠れ家から手掛かりを得ることもできず、捜索は完全に白紙に戻ってしまった。

いや、それどころかより悪い方向に向かってしまったと言ってもいい。

こちらが闇のカードについて探りを入れているということがバレ、闇の使っているヴェルズの力の一部を盗まれてしまったことはかなりの痛手だ。

闇が使っているヴェルズの力はかなり強力だ。

あの闇の力を利用して新たな闇のカードが生み出されてしまえば、より深刻な事態を引き起こすだろう。

そしてあの男は必ずその事態を引き起こす。

『勇敢なる決闘者諸君!!?闇のカードは、既にケルン中にばら撒かれている。つまり、いつ誰が闇のカードの呪いに呑まれてもおかしくない!!?手に入れたＮｏ．を使用し人々を救うことができるかは……君たち次第だ!!?ハハハハハ、ハーハハハハっ!!?』

昨夜、ヘイムダルはそんな言葉を告げて姿を消した。

あの言葉が正しければ既にこの街にはいくつもの闇のカードが解き放たれている。

もし、そのカードを手にし、暴走を引き起こしてしまえばこの街の

至る所で混乱が起きるだろう。
そして闇のカードは得てして通常ではあり得ない現象を暴走した人々に与える。
ブラックミストの電波すらも封じる黒い霧やバグースカの人々を醒めない眠りに落とす霧。
あのような力を振るわれれば普通の人々が対処などできるわけがない。
「本当にどうしたものか……ん？」
これから起こるであろう厄介な事態に思いを馳せていると、何かの視線を感じ思わずそちらに視線を向ける。
そこにいたのは黒髪をリーゼントにしたデュエルアカデミア生だった。
今は昼時とはいえまだデュエルアカデミア内では講義を行っている時間のハズだ。
そんな時間にこの公園にいるということはサボりなのだろう。
別に俺にもそんな経験が無いわけではないから咎めようとは思わない。
しかし、気になるのはその不良少年の目だ。
そのリーゼントのデュエルアカデミア生は公園の一角に座り込み、こちらを血走った眼で強く睨みつけている。
しばらく考えたがずっと睨みつけられているのも落ち着かないため、ため息を吐いてその少年に声をかける。
「こんにちは。俺に何かようか？」
「……ああ、テメェに用があるんだよ。その面貸して貰うぜ、結束遊騎‼？」
「っ……へぇ、俺の名前を知ってるのか」
俺は、俺の名前を呼んだ不良少年の姿を改めて見る。
俺の名前を知ってるってことは少なくともつい最近俺の外見と名前を知るような場にこの少年はいたということだ。
人の噂も七十五日。
プロリーグでデュエルしていた頃ならともかく、２年も経った今、

姿で俺の名前が分かる人なんて早々いないハズだ。
ましてや相手はデュエルアカデミア生。
デュエルアカデミア生と関わった機会などそう多くもない。
それに、この少年の外見、どこかで見た気がするんだが……
俺が何とか少年のことを思い出そうとしていると、その不良少年はデュエルディスクを起動し、こちらに構えた。
「俺とデュエルしろ!!?結束　遊騎!!?テメェをぶっ潰して、俺の憧れの人の強さを取り戻すんだ!!?そのために俺は新たな力を手に入れたんだ!!?」
「は?憧れの人の強さ?言ってる意味がーーー」
「うるせぇ!!?テメェが、テメェさえいなければ!!?」
困惑する俺に不良少年は血走った眼でこちらを見てくる。
言ってることも支離滅裂だが、どうも様子がおかしい。
この話が全く通じない感じ……これはまさか……
俺はため息を吐いてデュエルディスクを起動し、少年に向けて構える。
「……いいだろう。君のデュエルを受けて立とう」
「ハッ、そうこねぇとな!!?テメェだけは必ずぶっ潰す!!?」
『決闘!!?』

遊騎　ＬＰ８０００
不良少年　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は俺か。まずはコイツだ。Ｈ・ヒロイックチャレンジャーＣサウザンドブレードを召喚!!?」
〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

現れたのは頭巾を被り、背中に何本もの刀を背負った戦士。
そしてこのモンスターはフィールドに更なる戦士を呼べる。
「Ｈ・Ｃ　サウザンドブレードの効果発動!!?1ターンに1度手札にあるヒロイックカードを捨ててデッキからヒロイックモンスターを特殊召喚する!!?俺は手札のＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）ダブルランスを捨ててデッキから現れろ、Ｈ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）クラスプナイフ!!?」

〈Ｈ・Ｃ　クラスプナイフ〉☆1　戦士族　地属性
ＤＥＦ１００

フィールドに現れたのは鉄の鎧を見に纏った巨大なナイフを持つ戦士。
「そしてこの効果を使ったＨ・Ｃ　サウザンドブレードは守備表示になる」

Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード
ＡＴＫ１３００→ＤＥＦ１１００

「Ｈ・Ｃ　クラスプナイフの効果発動!!?このカードがＨ・Ｃと名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した時、デッキからＨ・Ｃと名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる!!?俺はデッキからＨ・Ｃダブルランスを手札に加える!!?そして、斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
「チッ、リンク召喚か……」
俺が正面に手を前に突き出すと、目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター2体!!?俺はＨ・Ｃ　サウザンドブレードとＨ・Ｃ　クラスプナイフの2体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?追想に生きる王女!!?リンク2!!?聖騎士の追想　イゾルデ!!?」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙？　↘？

サウザンドブレードとクラスプナイフがサーキットの中に消え、金髪と白髪の２人の女性が現れる。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動‼？リンクレカレクション‼？リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター１体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキからＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）ソードシールドを手札に加える‼？聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動‼？メモリーズギフト‼？デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター１体をデッキから特殊召喚する‼？俺はデッキから妖刀竹光、ビッグバンシュートを墓地に送り、ヒーローキッズを特殊召喚‼？」

〈ヒーローキッズ〉☆２　戦士族　地属性
ＤＥＦ６００

イゾルデに導かれ、姿を現したのはＳＦで出てきそうなバトルスーツを着た小さな戦士。
「墓地に送られた妖刀竹光の効果、それにチェーンしてヒーローキッズの効果発動‼？このカードが特殊召喚に成功した時、デッキから同名カードを任意の枚数特殊召喚する事ができる‼？俺はデッキから２体のヒーローキッズを特殊召喚する‼？」

〈ヒーローキッズ〉☆２　戦士族　地属性
ＤＥＦ６００

ヒーローキッズがバトルスーツを操作し通信を行うと、呼び出しに

応じた2体のヒーローキッズがフィールドに現れる。
「雑魚をわらわらと呼び出しやがって!!?」
「そして墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?このカードが墓地へ送られた場合にデッキから同名カード以外の竹光カード1枚を手札に加える。俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える。まだ終わりじゃないぜ?俺は1体のヒーローキッズをリリースし、魔法カード、トランスターン!!?同名カードは1ターンに1度しか発動できず、自分フィールドの表側表示モンスター1体を墓地へ送り、墓地のそのモンスターと種族・属性が同じでレベルが1つ高いモンスター1体をデッキから特殊召喚する。ヒーローキッズはレベル2・戦士族・地属性!!?よって、レベル3・戦士族・地属性モンスターをデッキから特殊召喚する!!?来い、チューナーモンスター、ジャンクチェンジャー!!?」
「チューナーモンスターだと!?!?」

〈ジャンクチェンジャー〉☆3　戦士族　地属性
DEF900

フィールドに現れたのは鋼鉄の身体を持つロボットのような戦士。
「ジャンクチェンジャーの効果発動!!?このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、フィールドのジャンクモンスター1体を対象として2つの効果から1つを選択して発動できる。対象のモンスターのレベルを1つ上げるか、対象のモンスターのレベルを1つ下げる。俺は2つ目の効果を使用し、ジャンクチェンジャーのレベルを1つ上げる!!?」

ジャンクチェンジャー
☆3→4

ジャンクチェンジャーの身体が赤く輝き、レベルが1つ上がる。
「俺はレベル2、ヒーローキッズ2体に、レベル4、チューナーモンス

ター、ジャンクチェンジャーをチューニング!!?」
「来るか、シンクロ召喚!!?」
ジャンクチェンジャーが光の輪になり、２体のヒーローキッズが小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から現れるのは機械の身体を持つ電子の巨人。
「迫る逆境、覆したるは不屈の闘志!!?シンクロ召喚!!?百折不撓の戦士、ギガンティックファイター!!?」

〈ギガンティックファイター〉☆８　戦士族　地属性
ＡＴＫ２８００

「ギガンティックファイターの永続効果、フォルテュードフォース!!?このカードの攻撃力は、お互いの墓地の戦士族モンスターの数×１００ポイントアップする!!?」
「っ、攻撃力を増加させるタイプのモンスターか!!?」
「俺の墓地にいる戦士族モンスターはＨ・Ｃ　ダブルランス、Ｈ・Ｃ　クラスプナイフ、Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード、ジャンクチェンジャー、ヒーローキッズ３体の７体。よって攻撃力は７００ポイントアップする!!?」

ギガンティックファイター
ＡＴＫ２８００→３５００

「俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ８０００　手札４
ー▲ー　ー
ー○ー
☆　ー
ーーーー

ーーーーー　ー
不良少年　ＬＰ８０００　手札５

「俺のターン、ドロー!!?・余裕そうな面をしやがって!!?・すぐにその面を苦痛の色に染めてやる!!?・魔法カード、妖仙獣の神風!!?・自分フィールドにモンスターが存在しない場合、以下の効果から１つを選択して発動できる。デッキからレベル５以上の妖仙獣モンスター１体を手札に加えるか、デッキから妖仙獣　左鎌神柱、妖仙獣　右鎌神柱を１枚ずつ選び、自分のペンデュラムゾーンに置く!!?・俺は２つ目の効果を使い、俺はデッキからスケール３の妖仙獣　左鎌神柱とスケール５の妖仙獣　右鎌神柱でペンデュラムスケールをセッティング!!?・」

「っ!!?・デッキから直接ペンデュラムスケールをセッティングするカードだって!!?・」

「ただし、この効果でペンデュラムゾーンに置かれたカードは次の相手エンドフェイズに破壊され、このカードの発動後、ターン終了時まで自分は妖仙獣モンスターしか特殊召喚できない」

不良少年を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中に仮面のついた鳥居が浮かびあがり、下に３と５の数字が現れる。

「これでレベル４モンスターをペンデュラム召喚できるってわけか」

「ハッ、俺の妖仙獣はそんなにぬるくねぇ!!?・妖仙獣　右鎌神柱のペンデュラム効果発動!!?・１ターンに１度、もう片方の自分のペンデュラムゾーンに妖仙獣カードが存在する場合に発動できる。このカードのペンデュラムスケールはターン終了時まで１１になる!!?・」

「なっ!!?・ペンデュラムスケールが１１だって!!?・」

「ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は妖仙獣モンスターしか特殊召喚できない。まあ、そんなもん妖仙獣の神風のデメリットが発動している今、何も関係ねぇがな!!?・」

右鎌神柱の周りを風が渦巻くと、右鎌神柱の下の数字が１１に変わる。

これだけ大きなペンデュラムスケールを作ったってことはそれだ

け大型のモンスターが出てくるってことか。
「これにより俺は４から１０までのモンスターを同時に召喚可能‼？吹き荒れよ暴風よ‼？立ち塞がるものを吹き飛ばし、超常の獣を導け‼？ペンデュラム召喚‼？現れろ、俺のモンスター達‼？」
　不良少年がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって２つの巨大な光が舞い降りる。
「現れよ、生命を薙ぎ払う鎌鼬‼？レベル１０、魔妖仙獣　大刃禍是」

〈魔妖仙獣　大刃禍是〉☆１０　獣族　風属性
ＡＴＫ３０００

　最初に現れたのは風の身体を持つ巨大な鎌鼬。
　そしてその背後に風の身体を持つ独眼の竜が舞い降りる。
「天候を統制する龍神‼？レベル１０、魔妖仙獣　独眼群主‼？」

〈魔妖仙獣　独眼群主〉☆１０　獣族　風属性
ＡＴＫ２０００

「レベル１０のペンデュラムモンスター……最初から派手なものを出してくるじゃないか」
「風の大妖怪の力、存分に味わえ‼？魔妖仙獣　独眼群主の効果、それにチェーンして魔妖仙獣　大刃禍是の効果発動‼？風雲之志‼？このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、フィールドのカードを２枚まで対象としてそのカードを持ち主の手札に戻す‼？俺はペンデュラムスケールの妖仙獣　左鎌神柱、妖仙獣　右鎌神柱を手札に戻す‼？」
「っ‼？破壊されるペンデュラムスケールを回収してきたか‼？」
　大刃禍是が咆哮をあげると光の柱に包まれた左鎌神柱と右鎌神柱を暴風が覆い、不良少年の手札に戻っていく。
「そして魔妖仙獣　独眼群主の効果発動‼？風霜之気‼？このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、相手フィールドのカード１枚を対

象として、そのカードを持ち主の手札に戻す‼?戻りやがれ、ギガンティックファイター‼?」
「っ、すまない、ギガンティックファイター」
独眼群主が咆哮をあげると強烈な雷雨と共に竜巻が吹き荒れ、ギガンティックファイターを吹き飛ばし消滅させた。
「まだ終わりじゃないぜ、魔妖仙獣　独眼群主の効果発動‼?威風凛然‼?このカードがモンスターゾーンに存在し、自分のカードの効果によって、このカード以外のフィールドのカードが手札・デッキに戻る度、自分フィールドの全ての妖仙獣モンスターの攻撃力は５００ポイントアップする‼?」
「っ、ここで全体強化だって⁉?」
「驚くのはまだ早いぜ‼?魔妖仙獣　独眼群主の効果はフィールドのカードが手札・デッキに戻る度に発動する。つまり、魔妖仙獣　大刃禍是で手札に戻した妖仙獣　左鎌神柱、妖仙獣　右鎌神分……つまり後２回分、魔妖仙獣　独眼群主自身の効果にチェーンして発動される‼?」
「っ、タイミングを逃さずに強化してくるのか‼?」
「魔妖仙獣　独眼群主の効果が３回発動したことにより、俺のフィールドの全ての妖仙獣モンスターの攻撃力は１５００ポイントアップするってわけだ‼?」

魔妖仙獣　大刃禍是
ＡＴＫ３０００→３５００→４０００→４５００

魔妖仙獣　独眼群主
ＡＴＫ２０００→２５００→３０００→３５００

「っ……まさか、１ターン目から攻撃力４５００と３５００のモンスターを作り上げるなんてな」
「さあ、伝説の妖怪に蹂躙されるがいい‼?バトル‼?」
「なら、リバースカードオープン‼?罠発動‼?トゥルースリイン

フォース‼?デッキからレベル2以下の戦士族モンスター1体を特殊召喚する‼?ただし、このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行えない。来い、H・C（ヒロイックチャレンジャー）アンブッシュソルジャー‼?」

〈H・Cアンブッシュソルジャー〉☆1　戦士族　地属性
DEF0

フィールドに現れたのは緑のマントを羽織った迷彩服の戦士。
現れたアンブッシュソルジャーを見て、不良少年は舌打ちをする。
「チッ、壁を作りやがったか。魔妖仙獣　大刃禍是で聖騎士の追想イゾルデを攻撃‼?鎧風春雨‼?」
「なら、攻撃宣言時に手札からH・Cソードシールドを捨てて効果発動‼?ヒロイックモンスターが存在する時に手札から墓地に送ることでこのターン、戦闘によって発生するダメージは0になり、自分フィールド上のヒロイックモンスターは戦闘で破壊されない‼?」
「チッ、戦闘ダメージを防ぎやがったか‼?」
大刃禍是が暴風を纏いながらイゾルデに突進し、その身体を吹き飛ばし、消滅させる。
荒れ狂う暴風は俺の方にも吹き荒れるが、俺を守るように現れた盾がその暴風を防いだ。
「仕方ねぇ、メインフェイズ2だ。俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ。エンドフェイズに魔妖仙獣　大刃禍是、魔妖仙獣　独眼群主の効果発動だ。このカードを特殊召喚したターンのエンドフェイズに、このカードを持ち主の手札に戻す」
「スピリットモンスターみたいに手札に帰っていくのか」
大刃禍是と独眼群主の姿が掻き消え、不良少年の手札に帰っていく。
フィールドは空いたが、ペンデュラムスケールごと手札に戻っていることを考えると、またこちらのカードを手札に戻されちまう。
これは短期決戦を狙っていくしかないな

遊騎　ＬＰ８０００　手札３
｜｜｜｜｜｜　｜
｜｜□｜｜
｜　｜
｜｜｜｜｜
｜｜▲｜｜　｜
不良少年　ＬＰ８０００　手札６

「俺のターン、ドロー!!?スタンバイフェイズ、Ｈ・Ｃアンブッシュソルジャーの効果発動!!?自分のスタンバイフェイズ時、フィールド上のこのカードをリリースして自分の手札・墓地からＨ・Ｃアンブッシュソルジャー以外のＨ・Ｃと名のついたモンスターを２体まで選んで特殊召喚できる!!?墓地より甦れ、Ｈ・Ｃサウザンドブレード、Ｈ・Ｃクラスプナイフ!!?」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

〈Ｈ・Ｃ　クラスプナイフ〉☆１　戦士族　地属性
ＤＥＦ１００

アンブッシュソルジャーの姿が粒子になり、代わりにサウザンドブレードとクラスプナイフが姿を現わす。
「再びＨ・Ｃ　クラスプナイフの効果発動!!?Ｈ・Ｃと名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功したため、俺はデッキからＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）エクストラソードを手札に加える!!?俺はＨ・Ｃダブルランスを召喚!!?」

〈Ｈ・Ｃ　ダブルランス〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１７００

俺が出したのは２つの槍を持った白い戦士。
そのモンスターは出てくると同時に再び勇ましい雄叫びをあげる。
「Ｈ・Ｃ　ダブルランスの効果発動!!?召喚成功時に手札・墓地の同名モンスターを表側守備表示で特殊召喚する!!?ただしこのカードはシンクロ素材にできず、このカードをエクシーズ素材とする場合、戦士族モンスターのエクシーズ召喚にしか使用できない!!?」
「エクシーズ召喚が狙いか。だが、そんなことさせるか!!?それにチェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動、エンペラーオーダー!!?」
「っ、そいつは……」
「エンペラーオーダーの効果によりモンスターが召喚に成功した時に発動するモンスターの効果が発動した時、その発動を無効にし、無効にされたプレイヤーは１枚ドローする!!?テメェのＨ・Ｃ　ダブルランスの効果を無効にして１枚ドローさせる!!?」
「相変わらず面倒なカードだな。だけど、その程度で止まる俺じゃない!!?Ｈ・Ｃ　サウザンドブレードの効果を再び発動!!?俺は手札のＨ・Ｃエクストラソードを捨ててデッキから現れろ、Ｈ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）強襲のハルベルトを特殊召喚!!?」

〈Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１８００

俺の前に現れたのはハルバードを持った紫の鎧を纏った戦士。
「そしてこの効果を使ったＨ・Ｃ　サウザンドブレードは守備表示になる」

Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード
ＡＴＫ１３００→ＤＥＦ１１００

「まだだ!!?装備魔法、妖刀竹光をＨ・Ｃクラスプナイフに装備!!?さ

らに魔法カード黄金色の竹光を発動!!?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローする!!?」
「チッ、次から次へと……!!?」
「そして、斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
俺がそういって手を前に突き出すと、俺の目の前に再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はカード名が異なる戦士族モンスター3体!!?俺はH・Cサウザンドブレード、H・Cクラスプナイフ、H・C　ダブルランスの3体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
サウザンドブレード、クラスプナイフ、ダブルランスがサーキットに吸い込まれていく。
そしてサーキットのリンクマーカーが輝くとサーキットの中から白銀の鎧を身に纏った騎士が現れた。
「リンク召喚!!?運命と戦う孤高の騎士!!?リンク3!!?アルカナエクストラジョーカー!!?」

〈アルカナエクストラジョーカー〉ＬＩＮＫ３　戦士族　光属性
ＡＴＫ２８００　↙?　→　↘?

「出やがったか、絵札の三銃士のリンクモンスター!!?」
「墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから2枚目の黄金色の竹光を手札に加える。そして、バトル!!?H・C　強襲のハルベルトでダイレクトアタック!!?ライトニングハルバード!!?」
「くっ!!?」

不良少年　ＬＰ８０００→６２００

ハルベルトが雷を纏ったハルバードで不良少年の身体を貫く。
「H・C　強襲のハルベルトの効果発動!!?このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時にデッキからヒロイックカードを手札に加える

!!?俺はデッキからＨ・Ｃ　ダブルランスを手札に加える!!?続けてアルカナエクストラジョーカーでダイレクトアタック!!?ストレートフラッシュ!!?」
「がぁっ!!?」

不良少年　ＬＰ６２００→３４００

さらにエクストラジョーカーが大剣を振りかざし、不良少年のライフを大きく削り取る。
このまま上手くいってくれればいいんだけどな。
「メインフェイズ２!!?カードを２枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ８０００　手札４
ー▲▲ー　ー
ー○ーー
☆　ー
ーーーー
ー△ーー　ー
不良少年　ＬＰ３４００　手札６

「俺のターン、ドロー!!?クックック、俺を前のターンに倒しきれなかったことを後悔するがいい!!?俺は妖仙獣　鎌壱太刀を召喚!!?」

〈妖仙獣　鎌壱太刀〉☆４　獣戦士族　風属性
ＡＴＫ１６００

現れたのは青い羽織りを羽織った鎌鼬のモンスター。
「妖仙獣　鎌壱太刀の効果、それにチェーンして手札にあるカゲトカゲの効果発動!!?自分がレベル４モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚できる!!?さらにチェーンして罠発動、エンペラーオーダー!!?」

「っ‼?このコンボは闇と同じ……」
「まずはエンペラーオーダーの効果によりカゲトカゲの特殊召喚を無効にして1枚ドロー‼?そして妖仙獣　鎌壱太刀の効果発動‼?このカードが召喚に成功した場合、手札から同名カード以外の妖仙獣モンスター1体を召喚する‼?来やがれ、妖仙獣　鎌弐太刀‼?」

〈妖仙獣　鎌弐太刀〉☆4　獣戦士族　風属性
ＡＴＫ１８００

次に現れたのは水色の羽織りを羽織った鎌鼬のモンスター。
「まずは妖仙獣　鎌弐太刀の効果、それにチェーンして手札にあるカゲトカゲの効果、さらにチェーンして罠発動、エンペラーオーダー‼?まずはエンペラーオーダーの効果によりカゲトカゲの特殊召喚を無効にして1枚ドロー‼?そして妖仙獣　鎌弐太刀の効果発動‼?もこのカードも召喚に成功した場合、手札から同名カード以外の妖仙獣モンスター1体を召喚する‼?」
「くっ、つまりまだ手札を増やしながらモンスターを展開できるってわけか」
「来やがれ、妖仙獣　鎌参太刀‼?」

〈妖仙獣　鎌参太刀〉☆4　獣戦士族　風属性
ＡＴＫ１５００

次に現れたのは緑色の羽織りを腰に巻いた鎌鼬のモンスター。
壱、弐ときて参ということは……
「まずは妖仙獣　鎌参太刀の効果、それにチェーンして手札にあるカゲトカゲの効果、さらにチェーンして罠発動、エンペラーオーダー‼?まずはエンペラーオーダーの効果によりカゲトカゲの特殊召喚を無効にして1枚ドロー‼?そして妖仙獣　鎌参太刀の効果発動‼?もこのカードも召喚に成功した場合、手札から同名カード以外の妖仙獣モンスター1体を召喚する‼?」

「っ、やっぱりまだ召喚してくるか」
「来やがれ、妖仙獣　飯綱鞭!!?」

〈妖仙獣　飯綱鞭〉☆４　獣戦士族　風属性
ＡＴＫ８００

次に現れたのは鞭を手にした鎌鼬のモンスター。
「妖仙獣　飯綱鞭の召喚時、手札にあるカゲトカゲの効果発動!!?自分がレベル４モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚できる!!?カゲトカゲを特殊召喚!!?」

〈カゲトカゲ〉☆４　爬虫類族　闇属性
ＡＴＫ１１００

エンペラーオーダーに無効化されていた影で出来たトカゲがようやく姿を現わす。
まさかペンデュラム召喚せずに５体のモンスターを並べられるとは思わなかった。
それにしてもコイツのこの１体のモンスターから次々と次のモンスターを展開していく戦い方、どこかで見たことがあるような。
「まずは妖仙獣　飯綱鞭の効果発動!!?自分フィールドに他の妖仙獣モンスターが存在する場合、自分はデッキから１枚ドローする!!?さらに妖仙獣　鎌壱太刀の効果発動!!?このカードがフィールドに表側表示で存在する限り１度だけ、自分フィールドにこのカード以外の妖仙獣モンスターが存在する場合に相手フィールドの表側表示のカード１枚を対象としてそのカードを持ち主の手札に戻す!!?俺が手札に戻すのはアルカナエクストラジョーカーだ!!?」
「使わざるをえないか!!?アルカナエクストラジョーカーの効果発動!!?アボイドフェイト!!?１ターンに１度、フィールドのこのカードまたはこのカードのリンク先のモンスターを対象とする、モンスターの効果・魔法・罠カードが発動した時、そのカードと同じ種類の手札

を1枚捨てることでその発動を無効にする‼?俺は手札からタスケナイトを捨てる‼?」
鎌壱太刀が放った烈風にエクストラジョーカーが手をかざすと、烈風はエクストラジョーカーに当たる直前で霧散する。
それを見た不良少年は不気味な笑みを浮かべ身体に闇を纏いながら正面に手をかざす。
「さあ、見せてやるぞ、俺の力をな‼?俺は3体のレベル4モンスター、妖仙獣　鎌壱太刀、妖仙獣　鎌弐太刀、妖仙獣　鎌参太刀でオーバーレイ‼?3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼?」
鎌壱太刀、鎌弐太刀、鎌参太刀が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、舞い降りたのは雷を纏いし白き雷竜。
「雷の竜よ‼?嵐と共に降臨し、全ての生命を焼き尽くせ‼?Ｎｏ．９１　サンダースパークドラゴン‼?」
〈Ｎｏ．９１　サンダースパークドラゴン〉★４　ドラゴン族　光属性
ＡＴＫ２４００
「出てきたか、Ｎｏ．‼?」
コイツがこの少年に取り憑いているＮｏ．……コイツを倒せばこの少年を解放できる。
そんなことを考える俺を見て、不良少年は不気味に笑う。
「まだだ‼?俺の力はこんなもんじゃねぇ‼?魔法カード、能力調整（パワーチューン）‼?自分フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターのレベルをエンドフェイズ時まで1つ下げる‼?」
「何‼?」
妖仙獣　飯綱鞭
☆４→３

カゲトカゲ
☆４→３

能力調整の力により不良少年のフィールドにいた飯綱鞭とカゲトカゲのレベルが３に変わる。
それと同時に不良少年の身体を先程より濃い闇が覆い、不良少年は正面に手をかざす。
「っ、まさか‼？」
「俺はレベル３モンスターとなった妖仙獣　飯綱鞭とカゲトカゲでオーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼？」
飯綱鞭とカゲトカゲが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、舞い降りたのは闇を纏いし人形。
「全てを知る風の精よ‼？虚構を述べる罪人に罰を与えよ‼？Ｎｏ．７５　惑乱のゴシッププシャドー‼？」

〈Ｎｏ．７５　惑乱のゴシッププシャドー〉★３　魔法使い族　風属性
ＤＥＦ２６００

「２体目のＮｏ．だって⁉？」
現れたゴシッププシャドーが不気味に笑うと、不良少年の身体を闇がどんどん覆っていく。
「そうだ‼？テメェが全て悪いんだ‼？卑怯者のテメェのせいで俺達の希望は奪われたんだ‼？全部全部、テメェのせいだ‼？」
「っ……コイツ、この少年の心の闇を増幅させてるのか？」
「卑怯者のテメェとデュエルしてから、俺達が憧れた人は変わっちまった‼？あんな弱虫の栗原　遊花を認め、腑抜けちまった‼？テメェさえいなければ、憧れの人は俺の力で更なる力を得れたんだ‼？栗原　遊花の龍を使って‼？」

「遊花の龍？それに、俺とデュエルだって？」
不良少年の言葉に俺は考え込む。
遊花のことを認めている人物で俺とデュエルをし、この不良少年が目撃している。
そして極め付けに遊花の龍を渡して強くしようとしたという言葉。
この不良少年の外見、戦い方、どこかで見たことがあるとは思っていたが……
「そうか‼？お前は初めて遊花に会った日に遊花からヴァレルソードドラゴンを奪った空閑の取り巻きか‼？」
「っ、卑怯者風情が空閑さんのことを気安く呼ぶんじゃねぇ‼？」
そういって空閑の取り巻きだった不良少年は吠える。
遊花との師弟関係が始まったあの日。
遊花のヴァレルソードは空閑に奪われていた。
それは遊花を再びデュエルの場に引きずり出そうとした空閑の不器用な行動だったが、その命令を受け実行したのはこの少年だったのだ。
遊花は既に気にしてもいないだろうが、空閑が遊花のヴァレルソードを奪おうとしたのは事実で。
そのことが引っかかっていたこの不良少年の心の闇は、このＮｏ．に囚われてしまったんだろう。
「テメェがいなければ、空閑さんは最強になれたんだ‼？テメェが、テメェさえいなければ‼？」
「……違うだろ」
「……何？」
「そうじゃないだろ、強くなるってのは。無理矢理奪い取って得た強さなんてものは、ただのハリボテだ。そいつの本当の力になんてならねぇよ。本当に強くなりたいのなら、自分の意思で、強くなった自分を夢見て、変わらなきゃならないんだ」
「っ、うるせぇ、うるせぇ‼？卑怯な大人風情が夢なんて絵空事を語ってんじゃねぇよ‼？夢なんて幻想に逃げている時点でテメェがまともな人間であるものか‼？」

俺の言葉を拒絶するように不良少年を纏う闇が濃くなっていく。
早くあのＮｏ．をどうにかしないと不味いことになりそうだ。
「テメェだけは許さねぇ‼？テメェだけは跡形もなく吹き飛ばしてやる‼？Ｎｏ．７５　惑乱のゴシップシャドーの効果発動‼？マリスアンプラフィケーション‼？このカード以外の自分フィールドのＮｏ．エクシーズモンスター１体を対象として、このカードをこのカードの持つ全てのオーバーレイユニットと共にそのモンスターのオーバーレイユニットとする‼？」
「‼？自身をオーバーレイユニットに変えて増加させるＮｏ．‼？」
「喰らえ、Ｎｏ．９１　サンダースパークドラゴンよ‼？Ｎｏ．７５　惑乱のゴシップシャドーの力を受け全てを破壊し尽くせ‼？」
ゴシップシャドーが不気味な笑い声を上げて、その身体を闇に変えてサンダースパークの口内に侵入する。
ゴシップシャドーに体内に侵入されたサンダースパークはしばらく苦痛の声を上げていたが、その目が怪しく光ると白い身体が漆黒に変わり、不気味な咆哮をあげた。

Ｎｏ．９１　サンダースパークドラゴン
オーバーレイユニット３→６

「っ、あのＮｏ．……もう１体のＮｏ．を乗っ取りながった」
「さあ、全てを焼き尽くせ‼？Ｎｏ．９１　サンダースパークドラゴンの効果発動‼？迅雷風烈‼？１ターンに１度、以下の効果から１つを選択して発動できる。１つはこのカードのオーバーレイユニットを３つ取り除く事で、このカード以外のフィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する効果。そしてもう１つが、このカードのオーバーレイユニットを５つ取り除く事で、相手フィールド上のカードを全て破壊する効果だ‼？」
「っ‼？今のあのＮｏ．のオーバーレイユニットはもう１体のＮｏ．の力で増加してる……ってことは‼？」
「俺が発動するのは２つ目のこのカードのオーバーレイユニットを５

つ取り除く事で、相手フィールド上のカードを全て破壊する効果だ‼?砕け散れ‼?」
サンダースパークの身体から闇を纏った雷が放たれ、俺のフィールドにある全てのカードを焼き尽くす。
「これでテメェを守るものは何も無くなった‼?俺は再びスケール３の妖仙獣　左鎌神柱とスケール５の妖仙獣　右鎌神柱でペンデュラムスケールをセッティング‼?」
不良少年を挟むように再び光の柱が立ち上り、その光の中に左鎌神柱と右鎌神柱が浮かびあがり、下に３と５の数字が現れる。
「さらに妖仙獣　右鎌神柱のペンデュラム効果発動‼?１ターンに１度、もう片方の自分のペンデュラムゾーンに妖仙獣カードが存在する場合に発動できる。このカードのペンデュラムスケールはターン終了時まで１１になる‼?ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は妖仙獣モンスターしか特殊召喚できない‼?」
右鎌神柱の周りを風が渦巻くと、右鎌神柱の下の数字が１１に変わる。
「これにより俺は４から１０までのモンスターを同時に召喚可能‼?吹き荒れよ暴風よ‼?立ち塞がるものを吹き飛ばし、超常の獣を導け‼?ペンデュラム召喚‼?現れろ、俺のモンスター達‼?」
不良少年がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって２つの巨大な光が舞い降りる。
「再び現れよ、生命を薙ぎ払う鎌鼬‼?レベル１０、魔妖仙獣　大刃禍是」

〈魔妖仙獣　大刃禍是〉☆１０　獣族　風属性
ＡＴＫ３０００

「再臨せよ、天候を統制する龍神‼?レベル１０、魔妖仙獣　独眼群主‼?」

〈魔妖仙獣　独眼群主〉☆１０　獣族　風属性

ＡＴＫ２０００

再び現れる２体の魔妖仙獣。

そして２体の魔妖仙獣は咆哮と共に嵐を呼ぶ。

「魔妖仙獣　大刃禍是の効果発動!!?風雲之志!!?俺はペンデュラムスケールの妖仙獣　左鎌神柱、妖仙獣　右鎌神柱を手札に戻す!!?」

大刃禍是が再び咆哮をあげると光の柱に包まれた左鎌神柱、右鎌神柱を暴風が覆い、不良少年の手札に戻っていく。

「そして魔妖仙獣　独眼群主の効果、それにチェーンして魔妖仙獣独眼群主の同じ効果を発動!!?威風凛然!!?魔妖仙獣　独眼群主の効果が２回発動したことにより、俺のフィールドの全ての妖仙獣モンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする!!?」

魔妖仙獣　大刃禍是

ＡＴＫ３０００→３５００→４０００

魔妖仙獣　独眼群主

ＡＴＫ２０００→２５００→３０００

「さあ、死ぬほど苦しむがいい!!?バトル!!?Ｎｏ．９１　サンダースパークドラゴンでダイレクトアタック!!?」

サンダースパークが黒い雷を纏いながらこちらに向かって突撃してくる。

２体のＮｏ．の力が混ざった攻撃……そんなもの、まともに受けるわけにはいかない!!?

「そうは行くか!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札のガガガガードナーの効果発動!!?このカードを手札から特殊召喚できる!!?来い、ガガガガードナー!!?」

〈ガガガガードナー〉☆４　戦士族　地属性

ＤＥＦ２０００

俺のフィールドに巨大な盾を持ったモンスターが現れる。
「チッ!!?特殊召喚できるモンスターが手札にいたか。ならば、Ｎｏ．９１　サンダースパークドラゴンでガガガガードナーを攻撃!!?雷騰雲奔!!?」
「ガガガガードナーの効果発動!!?このカードが攻撃対象に選択された時、手札を1枚捨てる事で、このカードはその戦闘では破壊されない!!?」
「何!?!?戦闘破壊耐性だと!?!?」
黒い雷を纏ったサンダースパークの突進を、ガガガガードナーは大きな盾で受け流す。
「面倒なことを!!?魔妖仙獣　大刃禍是でガガガガードナーを攻撃!!?鎧風春雨!!?」
「ガガガガードナーの効果発動!!?手札を1枚捨てる事で、この戦闘では破壊されない!!?」
続けざまかな大刃禍是が暴風を纏いながら突進してくるが、ガガガガードナーは再び大きな盾で受け流す。
「だが、これでテメェの手札は無くなった!!?魔妖仙獣　独眼群主でガガガガードナーを攻撃!!?苦雨凄風!!?」
２体の突進を防ぎ、力を消耗したガガガガードナーに独眼群主が風のブレスを放つ。
「まだだ!!?墓地に存在するタスケナイトの効果発動!!?このカードが墓地に存在し、自分の手札が０枚の場合、相手モンスターの攻撃宣言時にデュエル中に1度だけ発動出来る!!?このカードを墓地から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する!!?」
「っ!?!?何だと!?!?」

〈タスケナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１７００

迫り来る風のブレスに、ガガガガードナーが盾を構えると、そんな

ガガガガードナーを支えるように赤い鎧の戦士が現れ、独眼群主のブレスを防ぎきった。
「くっ‼?ムカつくぜ、テメェ‼?何でさっさとぶっ倒れねぇんだよ‼?」
「そんなことを言われて、ハイそうですかって倒れるわけにはいかないだろ?子供が道を間違えたら正しい道を教えてやるのだって大人の義務だ」
「っ、ぐっあああああ‼?潰す‼?テメェだけは、必ず潰す‼?メインフェイズ2‼?俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド‼?エンドフェイズに魔妖仙獣　大刃禍是、魔妖仙獣　独眼群主の効果発動‼?手札に戻れ、魔妖仙獣　大刃禍是、魔妖仙獣　独眼群主‼?」
大刃禍是と独眼群主の姿が掻き消え、再び不良少年の手札に帰っていく。
さあ、ここからが正念場だ。
あの不良少年の心の闇を増幅させているのはオーバーレイユニットとなったあのＮｏ.。
スパークドラゴンの身体が漆黒に染まったままということは、あのＮｏ.はまだオーバーレイユニットとして存在している。
正直、あのカードの闇の力は異質だ。
このデュエルで俺が勝利し、あのカードを手に入れたとしても今度は俺が乗っ取られる可能性がある。
あのカードをどうにかする可能性があるとすれば……鱗之助とのデュエルで覚醒したあの力だけだ。
しかし、カッコつけてはみたものの、俺の手札は０。
墓地から起動できるカードもそんなにない。
だからこそ、次のドローに全てをかける。

遊騎　ＬＰ８０００　手札０
ーーーーーー　ー
ーー□○ー
ー　　ー

ー○ーーー
ーー△▲ー　　ー
不良少年　ＬＰ３４００　手札４

「俺のターン……ドロー!!?」
よし、まだ終わっちゃいない!!?
「魔法カード、貪欲な壺!!?」
「ここにきてドローカードだと!!?」
「墓地に存在する聖騎士の追想　イゾルデをＥＸデッキに、Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード、Ｈ・Ｃ　エクストラソード、Ｈ・Ｃ　ダブルランス２体をデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする!!?そして、斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
「チッ、ここでリンク召喚をしてくるということは……」
俺が正面に手を前に突き出すと、目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター２体!!?俺はガガガガードナーとタスケナイトの２体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?再誕せよ、追想に生きる王女!!?リンク２!!?聖騎士の追想　イゾルデ!!?」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

ガガガガードナーとタスケナイトの姿がサーキットに消え、再びイゾルデが姿を現わす。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?リンクレカレクション!!?俺はデッキからＨ・Ｃダブルランスを手札に加える!!?聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動!!?俺はデッキから妖刀竹光、閃光の双剣―トライス、月鏡の盾、孤毒の剣を墓地に送り、Ｈ・Ｃ　サウザンドブレードを特殊召喚!!?」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

「墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?デッキから折れ竹光を手札に加える!!?さらにＨ・Ｃ　サウザンドブレードの効果発動!!?俺は手札のＨ・Ｃダブルランスを捨ててデッキから現れろ、Ｈ・Ｃエクストラソードを特殊召喚!!?」

〈Ｈ・Ｃ　エクストラソード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１０００

現れたのは銀色の鎧を身に纏った二刀流の戦士。
「そしてこの効果を使ったＨ・Ｃ　サウザンドブレードは守備表示になる」

Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード
ＡＴＫ１３００→ＤＥＦ１１００

「そして魔法カード、手札抹殺!!?」
「なっ!?」
「お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローする!!?俺は２枚、お前は４枚捨ててドローだ!!?」
「くっ、俺の魔妖仙獣達が……」
手札抹殺により不良少年の手札に戻っていた妖仙獣達が一気に墓地に行く。
妖仙獣達が墓地に送られ、不良少年は動揺した様子を見せたが、すぐにその表情は不気味な闇に書き換えられる。
「くっ、ググググ、それがどうした!!?俺のフィールドにはまだＮｏ．が残っている!!?魔妖仙獣程度がいなくなったところでテメェなんかＮｏ．でーーー」
「憐れだな」

「何⁉？」
「闇に呑まれ、大切な絆を紡いできたカードを程度と切り捨てちまうなんて、本当に憐れだよ、お前」
きっと本当のコイツは妖仙獣を大切に思っていたのだろう。
憧れている空閑の空牙団のような戦い方を夢見て、同じように仲間を集い戦う妖仙獣達で戦うことに、誇りを持っていたハズだ。
だが、その思いはＮｏ．によって歪められてしまった。
だからこそ、助けてやらないといけない。
「俺は墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動⁉？自分フィールドのカード１枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから１枚ドローする。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を１枚除外する⁉？俺はフィールドの聖騎士の追想　イゾルデをＥＸデッキに戻し、カードを１枚、ドローする⁉？……よし⁉？俺はクィーンズナイトを召喚⁉？」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１５００

俺の前に現れたのは赤い鎧を身に纏った女性の騎士。
俺はその姿を確認してから、正面に手をかざす。
「俺はレベル４のクィーンズナイト、Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード、Ｈ・Ｃ　エクストラソードでオーバーレイ⁉？３体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築⁉？エクシーズ召喚⁉？」
クィーンズナイト、サウザンドブレード、エクストラソードが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこから現れるのは異形の存在。
悪魔のような身体に白いツノ、黒い鉤爪を持つ異形の神。
「騎士の魂が宿し紋章よ⁉？今こそその魂を示せ⁉？現れろ⁉？Ｎｏ．６９　紋章神（ゴッドメダリオン）コートオブアームズ⁉？」

〈Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズ〉★４　サイキック族　光属性
ＡＴＫ２６００

「何⁉？テメェもＮｏ．を持ってやがったのか⁉？」
「Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズの効果、それにチェーンしてオーバーレイユニットになったＨ・Ｃ　エクストラソードの効果発動⁉？このカードをオーバーレイユニットとしてエクシーズ召喚したモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする⁉？」

Ｎｏ．６９　紋章神コートオブアームズ
ＡＴＫ２６００→３６００

「さらにＮｏ．６９　紋章神コートオブアームズの効果発動⁉？ロストグローリー⁉？このカードが特殊召喚に成功した時、このカード以外のフィールド上の全てのエクシーズモンスターの効果を無効にする⁉？」
「っ⁉？何だと⁉？」
　コートオブアームズから謎の波動が放たれ、サンダースパークが色を失っていき、身体から闇が漏れていく。
「クッ、だが今更Ｎｏ．９１　サンダースパークドラゴンの効果が無くなったところで……」
「そっちはあくまで副次的なもの、本命はこっちだ⁉？俺はＲＵＭ（ランクアップマジック）ーバリアンズフォースを発動⁉？」
「ＲＵＭ、だと？」
「自分フィールド上のエクシーズモンスター１体を選択し、選択したモンスターと同じ種族でランクが１つ高いＣＮｏ．またはＣＸと名のついたモンスター１体を、選択したモンスターの上に重ね、エクシーズ召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚する⁉？俺はＮｏ．６９　紋章神コートオブアームズ１体でオーバーレイ⁉？１体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築⁉？カオスエクシー

ズチェンジ!!?」
「カオスエクシーズチェンジ、だと!?!?」
コートオブアームズが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
それと同時にＥＸデッキから大量の闇が溢れ出し、俺の身体を包み込む。
「ぐうっ……うおおおおお、りゃぁぁぁ!!?」
俺は胸の前で腕をクロスし、気合いで腕を振り払って身体を包み込む闇を吹き飛ばす。
俺の身体を纏う闇が吹き飛ぶのと同時に宙に浮かんだ混沌の渦が爆ける。
そして渦が爆けるとそこから現れるのは進化を遂げた異形の存在。
血のような真紅に染まった悪魔のような身体に漆黒のツノ、金色の鉤爪を持つ異形の死神。
「騎士の魂が宿し紋章よ!!?混沌の力を受け継ぎ、彷徨う魂を導け!!?現れろ!!?ＣＮｏ．６９　紋章死神（デスメダリオン）カオスオブアームズ!!?」

〈ＣＮｏ．６９　紋章死神カオスオブアームズ〉★５　サイキック族
光属性
ＡＴＫ４０００

「カオスナンバーズだと!?!?何だそいつは!?!?俺よりも強力な力があるってのか!?!?」
「知りたいなら、たっぷりその身に刻みつけて教えてやるよ、Ｎｏ．!!?ＲＵＭ－バリアンズフォースの更なる効果!!?ＣＮｏ．またはＣＸと名のついたモンスター１体を、選択したモンスターの上に重ね、エクシーズ召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚した後、相手フィールド上にオーバーレイユニットが存在する場合、相手フィールド上のオーバーレイユニット１つを、この効果で特殊召喚したエクシーズモンスターの下に重ねてカオスオーバーレイユニットとする!!?」

「何だと⁉？」
「俺が選ぶのはＮｏ．９１　サンダースパークドラゴンのオーバーレイユニットとなっているお前だ、Ｎｏ．７５　惑乱のゴシッププシャドー⁉？吸い尽くせ、カオスアブソーブ⁉？」
「や、止めろぉぉぉ⁉？」
　カオスオブアームズが咆哮を上げ、金色の腕から光の糸を放ち、サンダースパークの身体を串刺にし、オーバーレイユニットとなっているゴシッププシャドーを貫く。
　ゴシッププシャドーはオーバーレイユニットから身体を闇に変えて逃げようとするが、カオスオブアームズは逃げようとしたゴシッププシャドーを光の糸で捉え喰らい尽くした。
　ゴシッププシャドーの力を失い、自身の力をも失ったサンダースパークをカオスオブアームズは光の糸を振り回して投げ飛ばす。
「ぐっ、があっ……」
「ＣＮｏ．６９　紋章死神カオスオブアームズの効果発動⁉？オーバーキルドレイン⁉？このカードがＮｏ．６９　紋章神コートオブアームズをカオスオーバーレイユニットとしている場合、１ターンに１度、このカードのカオスオーバーレイユニットを１つ取り除き、相手フィールド上のエクシーズモンスター１体を選択し、エンドフェイズ時まで、このカードの攻撃力は選択したモンスターの元々の攻撃力分アップし、このカードは選択したモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得る⁉？対象は、Ｎｏ．９１　サンダースパークドラゴン⁉？」
　カオスオブアームズが再び咆哮を上げ、金色の腕から光の糸を放ち、サンダースパークの身体を串刺にし、その全てを奪い取る。

ＣＮｏ．６９　紋章死神カオスオブアームズ
ＡＴＫ４０００→６４００

「Ｎｏ．９１　サンダースパークドラゴンとなったＣＮｏ．６９　紋章死神カオスオブアームズの効果発動⁉？迅雷風烈⁉？俺が選択す

るのは1ターンに1度、このカードのカオスオーバーレイユニットを3つ取り除く事で、このカード以外のフィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する効果だ‼?」
カオスオブアームズの漆黒のツノから雷が放たれ、サンダースパークを焼き尽くす。
「がぁぁぁぁ‼?」
ゴシップシャドーをカオスオブアームズが吸収し、サンダースパークを破壊したことで不良少年が纏っていた闇が薄くなっていく。
しかし、2体分のＮｏ．６９の力は強かったのか不良少年の身体から引き剥がされるのを拒むかのように、薄くなった闇が再び集まっていく。
このままだとまた闇に呑まれて暴走してしまうかも知れない。
なら、やることは1つ。
「終わらせる‼?バトル‼?ＣＮｏ．６９紋章死神カオスオブアームズでダイレクトアタック‼?」
「まだ、終われるかぁぁぁ‼?俺は相手モンスターの直接攻撃宣言時に手札の妖仙獣　閻魔巳裂を墓地へ送り、妖仙獣　大幽谷響の効果発動‼?同名カードは1ターンに1度、相手モンスターの直接攻撃宣言時に手札から同名カード以外の妖仙獣モンスター1体を墓地へ送ってこのカードを手札から特殊召喚する‼?」
〈妖仙獣　大幽谷響〉☆6　獣族　風属性
ＤＥＦ?
攻撃をしようとしたカオスオブアームズの前に立ち塞がったのは巨大な山のようなモンスター。
「特殊召喚できるモンスター……モンスターが増えたことで攻撃対象を変更だ。ＣＮｏ．６９紋章死神カオスオブアームズで妖仙獣　大幽谷響を攻撃‼?雷騰雲奔‼?」
「妖仙獣　大幽谷響の効果発動‼?このカードが相手モンスターと戦闘を行うダメージステップ開始時、このカードの攻撃力・守備力は

ターン終了時まで、戦闘を行う相手モンスターの元々の攻撃力と同じになる!!?」

妖仙獣　大幽谷響
ＤＥＦ?→４０００

「だが、Ｎｏ．９１　サンダースパークドラゴンの力を得たＣＮｏ．６９　紋章死神カオスオブアームズには関係ない!!?貫け、雷騰雲奔!!?」

闇の雷を纏ったカオスオブアームズが大幽谷響の身体を貫き爆散させる。

「妖仙獣　大幽谷響の効果発動!!?このカードが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、デッキから妖仙獣カード１枚を手札に加える!!?俺はデッキから妖仙獣の神風を手札に加える!!?これで次のターンに再びペンデュラム召喚を行ってテメェをーーー」

「お前に次のターンはない!!?速攻魔法、旗鼓堂々!!?このターン、自分はモンスターを特殊召喚できなくなる代わりに、自分の墓地の装備魔法カード１枚をその正しい対象となるフィールド上のモンスターに装備する!!?ただしこの効果で装備した装備魔法カードはエンドフェイズ時には破壊される!!?俺はこの効果で墓地に存在する装備魔法、閃光の双剣―トライスをＣＮｏ．６９　紋章死神カオスオブアームズに装備する!!?」

カオスオブアームズの金色の鉤爪に１組の双剣が現れる。

「そして閃光の双剣―トライスを装備したモンスターは攻撃力が５００ポイントダウンする代わりにバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができる!!?」

「この状況で２回攻撃、だと!?」

ＣＮｏ．６９　紋章死神カオスオブアームズ
ＡＴＫ６４００→５９００

「これによりＣＮｏ．６９　紋章死神カオスオブアームズはもう１度攻撃することができる‼？これで終わりだ‼？ＣＮｏ．６９　紋章死神カオスオブアームズでダイレクトアタック‼？」
　俺の声を聞き、カオスオブアームズの身体が金色に輝き始め、周囲に凄まじい熱が発生する。
「メルトアウトヘルデザイア‼？」
　カオスオブアームズは熱により生まれた強力なエネルギーを、ツノからエネルギー波として放ち、不良少年を呑み込んだ。
「馬鹿な‼？この俺が、卑怯者風情に……ぐあぁぁぁ‼？」

不良少年　ＬＰ３４００→０

ーーーーーーー

「終わったな……おっと」
　デュエルが終わり、カオスオブアームズに吹き飛ばされた不良少年のデュエルディスクから凄い勢いで回転して俺の元に飛んでくる２枚のカードを掴み取る。
「……またか」
　俺が手にした２枚のカードを見ると、想像通り変化が起こっていた。
　確かに１枚は不良少年が使用していたサンダースパークのカードだ。
　だが、もう１枚……ゴシップシャドーのハズだったカードは絵柄が消え、テキストもランクなどのデータもない完全に真っ白なカードに変わっていた。
「やっぱりバリアンズフォースが原因なのか？でも、前に使った時にはカオスオブアームズの効果を受けたスパイダーシャークが消えたんだよな……だけど、今回は効果を受けたサンダースパークは残ってオーバーレイユニットだったゴシップシャドーが消えた……ダメだ、情報が足りなさ過ぎる」

俺はため息を吐きながらカオスオブアームズに吹っ飛ばされた不良少年を見る。
大した怪我はないようだが、2枚の闇のカードに乗っ取られていたこともあるから少し心配だ。
とはいえこういう時に頼りになりそうな闇と夜は今日はプロリーグの試合があるようで近場にはいないみたいだし……
「どうしたものか……」
「ようやく見つかったか」
「!!?この声は……」
聞き覚えがある声が背後から聞こえて振り向くと、そこにいたのは厳つい顔をしたドレッドヘアーの青年。
「久しぶりだな、結束　遊騎」
「空閑」
あの不良少年の憧れの人物、空閑　騨がそこにいた。
空閑は不良少年をチラリと見てから俺に視線を移すと口を開く。
「東風谷（こちや）が世話になったようだな」
「東風谷って言うのか。いきなりデュエルを挑んできて俺が勝ったら気絶してな」
「そうか。迷惑をかけた」
そういうと空閑は気絶している東風谷という少年に肩を貸す。
「……聞かないのか?そいつに何があったのか。デュエルを挑んで気絶した、なんて信じられないだろ?」
「テメェが嘘をつく人間ではないということを俺様は知っている。そのテメェがデュエルを挑んできて気絶したというなら、それが事実だ」
「……そうか」
空閑の言葉に、俺は苦笑を浮かべて頭を掻く。
なんとも言えない気分になった俺に空閑は想定外の言葉を口にした。
「それに気絶程度で見つかったのであれば文句は言えん。コイツは2日前から行方不明になっていたからな」

「は？行方不明だって？」
空閑の言葉を俺は思わず聞き返す。
この闇のカードに操られていた少年が行方不明になってただって？
「俺様も何があったかは分からん。だが、先公が東風谷が行方不明になったと俺様に話を聞きにきた。先公の話だと、他にもデュエルアカデミア内で行方不明になっているものがいるらしい」
「他にも行方不明者が……それで空閑はその子を探してたのか」
「コイツらは俺の強さを見て勝手に俺様の周りに集まってきた奴らだ。だが、行方不明のまま放置しておくのは忍びなかった。それだけだ」
そういって空閑が顔を背ける。
そんな空閑の言葉に俺は思わず笑みを漏らしてしまう。
何だかんだで仲間思いの奴じゃないか。
だが、その後に続いた空閑の言葉に俺は目を見開くことになる。
「東風谷の目撃情報によれば昨日は昼間に港湾エリアで同じように行方不明になった連中と何かを運び出す作業をしていたらしい。だから今朝向かってはみたが、ここにいたなら完全に無駄足だったな」
「……ちょっと待て、湾岸エリアだって？」
空閑の言葉に、俺は背中に冷たい汗が伝うのを感じる。
昨日、突入したもぬけの殻となったヘイムダルの隠れ家。
闇の話しではその宿舎にいた船乗りからは持ち物を運び出した記憶は読み取れず、他の操られた人間で運ばせたのではないかという話だった。
そして今の空閑の闇のカードに操られていた東風谷という少年の目撃情報。
まさか……繋がるのか、この話が。
「……空閑」
「？何だ？」
「その東風谷って子を探していた時の話と行方不明になってるって言うデュエルアカデミア生の話を聞かせてくれ」

「は？何故そんなことをーーー」
「その代わり、憶測も含めだがその東風谷って奴に何が起きたか、全部教えてやる」
「……ほう、面白えじゃねぇか」
俺の言葉を聞き、空閑が面白そうに笑う。
切れたと思っていた線は繋がり、事態は進む。
俺達が予測していなかった方向へ。

第７５話　最速最短の伝え方

★

もし、過去に戻れるなら。
そんな後悔を、何度繰り返してきただろう。
いつだって私は、全てが過ぎ去ってしまったその後に……そのことに気付く。
ありふれた日常が、どれだけ大切なものだったのかを。
私がありふれた日常を送れるように、必死に守ってくれている人がいることを。
だからこそ、これはきっとそんな大切なことを忘れてしまっていた私への、世界が下した罰。
どこまでも愚かで傲慢な私への……逃れられることが赦されない罰なのだ。

ーーーーーーー

「師匠、食後のコーヒーはいかがですか？」
「ありがとう、いただくよ」
「いえいえ、どういたしましてです」
朝食を終えた師匠に用意していたコーヒーを手渡すと、師匠から柔らかい笑顔でお礼を言われ、私も思わず笑顔を浮かべる。
そんな私達を見て桜ちゃんが呆れた表情でため息を吐く。
「アンタ達が相変わらずなのはよく分かるけど、今日は朝の内にお互いの情報を交換しておくんだからさっさとしなさいよね」
「ああ、すまない」
「ご、ゴメンね、桜ちゃん」
「いや、いいんだけどさ」
行方不明になった紅葉さん、真紅ちゃん、刀花ちゃんを探すために

臨時風紀委員になったり、異世界で出会った友人に再開し、ケルン中に大混乱を引き起こした『ケルン五不思議』を解決した大波乱の日から1日が経過した。
ここ数日、お互いに色々とあって情報交換をできていなかったため前に朝食後のミーティングを行なっていたこの時間にお互いがこの数日で得た情報を伝えることにした。
本当は昨日の内に色々と報告をしようと思っていたんだけど……
「私のせいで色々迷惑をかけてごめん」
「闇先パイが気にすることじゃないですよ。むしろこちらこそごめんなさいです。プロリーグでお忙しくなってきているのに何もお手伝いができず……」
「それこそ、遊花が気にすることじゃない。やっぱり、プロリーグは面倒。遊騎と一緒にいられる時間が減る」
「それを理由に面倒とか言うなよ……」
闇先パイの言葉に師匠が思わず苦笑を浮かべる。
9月も半ばを過ぎ、プロリーグではそろそろレギュラーシーズンの終了が近づきつつあり、世界ランキング2位のプロチームである『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の闇先パイは試合が続いてとても忙しいようだ。
桜ちゃんの師匠である不知火さんも連日試合が続いているようで、桜ちゃんは一時的に修行が中止になっているらしい。
それでも闇先パイはプロリーグ、デュエルアカデミアの講師、そして闇のカードの出所を探しを行なっているのだから、闇先パイは本当に尊敬する。
「それじゃあ本題に入るか。昨日は色々あって報告する暇がなかったからな、お互いに得た情報を報告するとしよう。まずは遊花達は何か新たな情報を得られたか？」
「はい‼？実は、デュエルアカデミアの生徒が何人か行方不明になっているみたいなんです」
師匠に促され、私が行方不明になっている生徒がいることについて

話し始めると師匠は真剣な表情で頷く。
「ああ、その情報なら俺の耳にも入っている」
「はあ？何でアンタが知ってるのよ？」
「昨日、闇のカードに操られたデュエルアカデミア生に襲われてな。何とか無傷で撃退したんだがそいつは空閑の取り巻きの奴だったんだが、そいつを探して現れた空閑に聞いた話だと、その取り巻きは昨日から2日前から行方不明になっていたらしい」
「そんなことが……」
「ああ。そしてその際に空閑から詳しく話を聞いたんだが、その行方不明になっていた取り巻きは一昨日の昼間に港湾エリアで同じように行方不明になったデュエルアカデミア生と何かを運び出す作業をしていたって情報が手に入った」
「っ、港湾エリア⁉？遊騎、それって……⁉？」
師匠の言葉に闇先パイが目を見開き、師匠は神妙な表情で頷く。
「ああ、多分闇の予想であってると思う。話の途中ですまないが、今度は俺達の得た情報だ。一昨日の朝、俺は新たな情報を得るために湾岸エリアまで見回りに行ったんだ。そこで、俺は闇のカードをばら撒いている奴の仲間と思われる船乗りに遭遇した。名前は水喰　鱗之助。デュエルの結果なんとか撃退したんだが、俺もそこそこダメージがデカくてその場は逃しちまった」
「えっ⁉？師匠⁉？身体は大丈夫なんですか⁉？」
師匠が黒幕に繋がっているであろう人物とデュエルをしたと聞き、私は思わず師匠に駆け寄ってその身体をペタペタと触る。
そんな私に師匠は苦笑を浮かべながらも、優しく頭を撫でてくれた。
「まあ、何とか大丈夫だ。それで場所がケルンの海の出入り口である湾岸エリアだったから早めに行動を移したくてな。夜、そして闇と一緒に湾岸エリアの調査をしてたんだ。その際に闇のカードに操られている船乗り達ともデュエルになってな、アジトらしきものは見つけて使われていた形跡もあったんだが、中にあった物は運び出されても抜けの空になっていた」

「物が運び出されて……!!?まさか、その物を運びだしたのって!!?」
「想像通りなら、闇のカードに操られた行方不明になっているデュエルアカデミア生だろうな。鱗之助に遭遇したのは朝。そして俺達が調査をしたのは夜だ。その間に物を運び出していた行方不明者がいたなら結びつくのが自然だろう」
師匠の言葉に、私は苦い表情を浮かべる。
同じデュエルアカデミア生が闇のカードに操られて師匠を傷つけた人達と共に悪事の片棒を担がされている。
もしかしたら、紅葉さん達も……
「そしてそのアジトを捜索する際に、闇のカードをばら撒いている元凶とも出くわした」
「えっ!!?」
「最終的には取り逃しちまったんだが、あのヘンテコヘルメット野郎……”ヘイムダル”と名乗っていたが、そいつの言葉だと闇のカードは、既にケルン中にばら撒かれていて、いつ誰が闇のカードの呪いに呑まれてもおかしくないらしい。そしてあいつは、そのことをゲーム感覚で笑ってやがった」
「っ、本当にふざけた奴みたいね、あのヘルメット野郎は」
師匠の言葉に桜ちゃんが怒りの表情を浮かべてテーブルを叩く。
私も気づけば自分の拳を固く握り締めていた。
ゲーム感覚で人を操って誰かを傷つけるなんて、許せるわけがない。
「とりあえず俺はもう少し色んなところで情報収集をするつもりだ。遊花達はどうするんだ?」
「私達のやることは決まってるわ。ね、遊花」
「そうなのか?」
私達の次の行動が決まっているという言葉に師匠が少し驚いた表情を浮かべる。
そんな師匠に、私は次の私達の行動を告げる。
「私達、デュエルアカデミアで臨時風紀委員として活動することに

なったんです。そこで、行方不明になったデュエルアカデミア生を探そうと思っています」
「……何？」
「っ、師匠？」
私の言葉を聞き、師匠の表情が変わる。
今まで見たことがないぐらい、真剣で怒っている表情に。
「俺は約束したよな？遊花が相手にしていいのはデュエルアカデミアの中でＮｏ．を所持している人間の相手だけだと」
「で、でも、行方不明になった人達はデュエルアカデミア生です‼？それなら私の方がーーー」
「確かに相手は行方不明になったデュエルアカデミア生かも知れない。だが、行方不明になったデュエルアカデミア生を探しに行くということは必然的にデュエルアカデミアの外に出るということ。そしてそれはデュエルアカデミア生を行方不明にしている元凶と出会す可能性があることも意味している。師匠として、遊花に危険が及ぶ可能性があることを許容することはできない」
淡々と、諭すように、師匠は私に言葉を投げかける。
師匠が私のことを心配してくれていることは分かっている。
だけど、ここだけは譲るわけにはいけない。
「それでも、私は行方不明になったデュエルアカデミア生を探したいんです‼？だって、行方不明になった人達の中には私の友達がいるんです‼？紅葉さんが、真紅ちゃんが、刀花ちゃんがいるんです‼？」
「……なんだって？」
「私達は風紀委員会の資料を見せて貰ったの。その中には桜糀や真紅、刀花の名前があったわ。だから私達にとっても全くの無関係ってわけじゃいられない」
私達の言葉に師匠は一瞬目を見開く。
しかし、すぐに真剣な表情に戻り諭すように言葉を紡ぐ。
「……分かった。まずはデュエルアカデミア生の捜索を１番に尽力する。だから遊花達はーーー」
「っ、どうして……」

「遊花？」
「どうして師匠は私のものまで抱え込もうとするんですか⁉？」
「っ⁉？」
師匠の言葉に私は思わず声を荒げてしまう。
ダメだった。
もう我慢はできなかった。
「紅葉さん達を探したいのは私の意思です⁉？危険なことだって分かってます⁉？それでも大切な友達のために頑張りたいんです⁉？その思いはいけないものなんですか⁉？」
「っ、遊花の思いが悪いなんて言ってない。だけど、遊花が危険な目にあう可能性があることを俺はーーー」
「確かに師匠の言う通りにすれば私は危険な目にあう可能性は減るかも知れません⁉？だけど、その分師匠が危険な目にあうんじゃないですか⁉？」
「っ……」
「どうして……どうして分かってくれないんですか……」
思い出すのは、師匠が入院したあの日のこと。
世界が崩れ去り、目の前が真っ暗になっていくようなゾッとする感覚。
「っ……師匠の……師匠のバカー⁉？」
「っ、遊花⁉？」
静止の声も聞かず、私は涙を拭いながら玄関から飛び出す。
私の心を映し出すように、空には暗雲が立ち込めていた。

ーーーーーーー

●

「……ったく、あの子はカバンも弁当も置きっ放しで、本当に仕方がない子ね」
遊花が飛び出していったリビングで、私は苦笑を浮かべながらキッ

チンにおいてあった弁当とテーブルの横においてあったカバンを手に取る。
　何とも言えない沈黙の後、遊騎が暗い表情で口を開く。
「……悪い」
「……それは遊花に対して？それとも私達に対して？」
「どっちもだ。遊花の気持ちも汲んでやれなかったし、そのせいでお前達にも嫌な思いをさせちまった……はは、本当に、遊花の言う通りだ。馬鹿だよ、俺は」
「そうね……馬鹿よ、アンタは」
「っ‼？」
　自嘲気味に笑う遊騎の頭を思いっきりブン殴る。
「別に、アンタの遊花を守ろうとする気持ちを否定したりはしないわ。私だって、できれば遊花に危険な目にはあって欲しくないし」
「……」
「だけど、同じぐらい……遊花も、私だってアンタに傷ついて欲しくない。それだけのことよ」
「仲間外れは酷い……私だって遊騎に傷ついて欲しくない」
「はいはい、悪かったわよ。それじゃあ遊花も、闇も、そして私も遊騎に傷ついて欲しくない、にしとくわ」
「ん……それなら許す」
「……悪い……いや、違うな。心配してくれてありがとうな、桜、闇」
「分かればいいのよ」
「どういたしまして」
　自嘲気味に笑いながらも感謝の言葉を述べてくる遊騎に、私と闇は柔らかな笑みを返す。
「さてと、私もデュエルアカデミアに行くわね。勢いよく出て行った遊花のことも心配だし」
「悪い、桜。少しだけ待ってくれ。話しておきたいことがあるんだ」
「？何よ？」
　遊花を追ってリビングを出ようとした私を遊騎が呼び止める。

そして、少し躊躇いながらも真剣な表情で口を開く。
「さっきは話せなかったんだが、闇のカードをばら撒いている奴の仲間と思われる船乗りの鱗之助って奴とデュエルしたって話をしたよな？」
「それがどうしたのよ？」
「そのデュエルのきっかけがな、鱗之助が桜糀をナンパしてたからなんだよ」
「は⁉？闇のカードをばら撒いてる奴が桜糀をナンパって……待ちなさい。それってつまり……」
「一昨日の朝までは桜糀は行方不明になってなかったってことだ。そして、あの鱗之助って野郎が桜糀を狙ってたんだとしたら……」
「行方不明になった原因もそいつの可能性があるってことね」
私の言葉に遊騎は頷く。
桜糀が行方不明になった原因になったと思われる情報。
これは色々な面で役に立つ。
桜糀を探す手がかりに、そして……遊花が危険な目にあう可能性を減らすことにも。
「この情報をどう使うかは桜に任せる。俺も今日は仕事が休みだから、色々なところで情報を収集してみるつもりだ。また何かが分かったら連絡する……遊花のこと、頼んだ」
「言われるまでもないわ。遊花は私の1番の親友だもの。アンタも、あんまり無理するんじゃないわよ？」
「……善処する」
「……はぁ、仕方ないからその答えで勘弁してあげるわ。じゃ、いってくるわ」
「ああ」
「いってらっしゃい。私もなるべくプロリーグを早く片付けて帰れるようにする」
「闇が言うとシャレにならないんだけど……期待してるわ」
私は遊騎達に見送られながら玄関を出る。
すると、私の頭に少女の声が響く。

『お互いに大切に思い合っているのにぶつかり合う。面倒な生き物ね、人間って』
「大切だからこそぶつからないといけない時もあるのよ。まあ、それが今かどうかは別として、ね」
『難儀なものね』
「否定はしないわ」
デッキケースから聞こえてきた相棒の声に苦笑を返す。
本当に仕方がない友人達だ。
「でも、どうにかしてあげないとね。あの2人は、馬鹿みたいに笑ってる方が似合ってるんだから」
『ふふっ、それでこそ私の桜だわ』
「アンタのじゃないっての」
相棒の嬉しそうな声を聞きながら、私は親友を追って通学路を走り出す。
走って飛び出して行ったとは言え、遊花はそれ程運動神経がいいわけじゃない。
体力だってあまりある方じゃないし、私が全力で走れば……
そんなことを考えながら走っていると、少し先の公園で佇んでいる少女の姿が目に入る。
私は苦笑いを浮かべながらも走るのを止め、何の気なしにその少女に話しかける。
「朝から走り込み?まあ、体力をつけるのには悪くないと思うわよ」
「……桜ちゃん」
私の方を振り返った遊花は、目尻に涙を浮かべ今にも消えてしまいそうな表情を浮かべる。
そんな遊花を私は正面から優しく抱きしめ、頭を撫でる。
「もう……泣き虫ね、遊花は。ぎゅー……いいこいいこ」
「さくら、ちゃん……う、あ……」
遊花の声に涙の色が混ざる。
それでも構わず、私は遊花を抱きしめ続ける。
「大丈夫。遊花の思いは、何も間違ってないわ。そのことは、きっと遊

騎にだって伝わってる」
「で、でも……私……」
「もし、それでも自信がないのなら、遊花の気持ちがちゃんとアイツに届くまで、私がずっと遊花の傍で支えてあげる。それは、絶対に絶対よ。だから、大丈夫よ」
「っ……桜ちゃん!!?」
涙を溢しながら私の身体を強く抱き締めてくる遊花を優しく抱き締め返す。
雨が降り出しそうな暗雲の中、私は遊花が落ち着くまでその身体を抱き締め続けるのだった。

ーーーーーーーー

★

「頼むよ、情報収集を、新聞部でね」
昼休み。
臨時風紀委員として訪れた風紀委員会の教室で、私達は宮司さんにそんなことを頼まれた。
「新聞部?というか、情報収集って行方不明事件の情報なら風紀委員の方が正式な情報を知ってるんじゃないの?」
「甘いですわね、宝月　桜。逆に言ってしまえば、風紀委員会には裏が取れた正式な情報しか集まってこないのですわ」
「?どういうことですか?」
「風紀委員会はデュエルアカデミアの風紀を守るためにデュエルアカデミアの教員とも深く結びついている組織です。そのため、風紀委員会に寄せられる情報は教員から寄せられたものが殆どとなります。ですが、デュエルアカデミアの風紀を守る者とはいえ、それでも生徒であることには変わりがありません。なので、教員から寄せられる情報もなるべく危険が伴わないものや、安全性を考慮できるものとなります」

首を傾げる私達に鬼石さんと珊瑚さんが説明してくれる。
つまり、風紀委員会に集まる情報は教員から得られた確かな情報だけってことだよね。
「それに比べ、我が校の新聞部に属する方々はとても行動的な方が多く、真実を求めるために危険なことにも自分から関わり、情報を得ようとする方が多いのです。そのため、確証が得られない情報や噂話と言った情報ではあちらの方が上手ですわ。そしてそういった確約されていない情報を調べ上げるのが我が校の新聞部です」
「つまり、今回みたいな話は新聞部の方がこちらが得てない情報を持ってるかも知れないってこと？」
「ええ。ですが、今回のアナタ達への指令はそれだけではありません。あなた達には新聞部の方々に忠告をしてきてもらいたいのですわ」
「忠告？」
「疎まれるものだよ、賢しすぎると」
そういって宮司さんは肩をすくめる。
「確かなものだよ、彼女達の収集した情報は。だが、危険なのだよ、その分ね」
「我が校の新聞部の方々は自分達が興味を抱いた情報は徹底的に調べ上げます。それこそ聞き込みや突撃取材を行って。ですが、その結果余計なトラブルにも巻き込まれやすいのです」
「このあいだもデュエルアカデミアの実技試験で不正を行ったとされる生徒に突撃取材を敢行し一悶着あって風紀委員会が介入することになりましたの。実際、その生徒は裏で対戦相手を脅して勝ち星を得ていたらしいのですが、事件が明るみになることを恐れた生徒が逆上し、もう少しで刃傷沙汰でしたわ」
「に、刃傷沙汰ですか⁉？」
想定外のワードに私の表情が引き攣る。
実技試験で不正を行ったというのも信じられないけど、まさかそんな危険なことがデュエルアカデミアで行われていたなんて……
「幸い、風紀委員会が新聞部とその問題があった生徒をマークしていたお陰でその前に鎮圧できましたが、今回は行方不明事件です。怪し

い何かに気付いた新聞部の方が突撃していき、行方不明になったのでは洒落になりません」
「だからこそ、頼みたいのだよ、情報収集を、新聞部からね。そして、してほしい、忠告を、危険ならばね」
「分かりました」
「とはいえ、しなくていいよ、無理は。知らないがね、何があったかは」
そういって宮司さんは心配そうに私を見る。
そんな宮司さんに私は今見せれる精一杯の笑顔で応える。
「大丈夫……平気、へっちゃらです。私を支えてくる親友が、傍にいてくれますから」
「……そうかい。いいことだね、それは」
「はい。それでは、新聞部への情報収集へ行って参ります」
「手伝うことにしたからには、しっかりとこなしてくるわ」
「期待してて、霊兎」
「期待してるとも、勿論ね。祈るよ、幸運を」
そんな宮司さんの言葉を背に、私達は風紀委員会の教室を出て教えて貰った新聞部の部室に向かう。
その最中、霊華さんは心配そうに私に声をかけてくる。
「それはそうと、話は聞いたけど本当に大丈夫？今日の遊花は波動も乱れているわ。とても大丈夫といえる精神状態ではないと思うけれど。デュエルだって、負けはしなかったとはいえ、いつもより危ない場面が多かったわ」
霊華さんの言葉に、私は思わず苦笑いを浮かべる。
今朝の師匠との小さないざこざは私の心を大きく乱していた。
師匠への負い目、弱い自分への苛立ち。
そのことが胸に引っかかり、普段なら冷静に対処できることでも必要以上に焦り、余計に状況を悪化させるかとが増えていた。
午前中のデュエルでも、何とか黒星はつかなかったが、いつもよりも危なかったことは事実だった。
「それでも……自分から望んだことですから。お手伝いもしないなら……師匠とぶつかったことすら、無意味になってしまいます」

「……そう。遊花がそれでいいのであれば、私は何も言わないわ」
そういうと、霊華さんは口を噤んだ。
そんな霊華さんに私は心の中で謝罪する。
霊華さんが謝る必要なんてない。
悪いのは、全部私のせい。
自分の気持ちを上手く伝えられず、師匠の手を振り払ってしまった私が悪いのだから。
もし、私がもっと上手に師匠に気持ちを伝えられていたのなら、何が変わったのだろうか？
私はーーー
「ん？遊花達じゃないか。何してるんだ、こんなところで？」
私が思考の海に沈んでいると、正面から聞き覚えのある声が聞こえてくる。
「あら、九石じゃない」
私の意識が思考の海から浮上すると、そこにいたのは大地君だった。
大地君は不思議そうな表情で私達を見て首を傾げた。
「よ、何してんだ？何か面白いことか？」
「予想外の遭遇。面白いことではないけど、私達は新聞部に用があって向かってた」
「新聞部に？」
「ええっと、実はーーー」
不思議そうな表情を浮かべる大地君に、私は事情を説明する。
説明を終えると、大地君は笑顔を浮かべて自分の胸を叩いた。
「へぇ、そんなことになってたのか。なら、俺も手伝うぜ。俺にとっても紅葉は楽しいデュエルを繰り広げた友達だしな」
「ありがとう、大地君‼？」
「気にすんなって。んじゃ、風紀委員に挨拶に行く前に、ちょっと遊花達の役に立っておくかな」
そういうと、大地君は携帯端末を操作し始める。
「……これでよし、っと。ちょっと待ってな。もう少ししたら新聞

部の友達が来てくれるからさ」
「友達？九石と新聞部って、なんかマッチしないんだけど……」
「まあ、色々あってな。でも、すっごく頼りになる奴だぜ」
「大地君の友達で新聞部……それってもしかしてーーー」
「いた!!？大地くーん!!？」
「お、来たみたいだぜ」
　私が頭に思い浮かんだことを口に出そうとすると、それを遮るかのように遠くから大地君のことを呼ぶ女の子の声が聞こえた。
　私達がそちらに視線を向ける、こちらに向かって勢いよく走ってきたのは赤髪混じりの茶色の髪の毛が特徴的な女の子。
「わ、私に大事な用があるって、それって……って、あれ、遊花さん？それに一緒にいるのは……えっ、と？ど、どういう状況？」
「よ、蛍。悪い、少し力を貸してくれないか？」
　大地君の言葉に、大地君の友達ーーー式見　蛍（しきみ　ほたる）さんは困惑した表情で首を傾げた。

ーーーーーーー

●

「臨時風紀委員になった遊花さんの手伝いで情報収集を……ふーん、それで私に用があったんだ」
「おう!!？蛍は新聞部だし、何か知ってることはないかと思ってさ」
「そっか……はぁ」
　九石の説明を受け、蛍と呼ばれた少女は深いため息を吐くと、ブツブツと何かを呟きはじめる。
「……まあ、そんなことだろうとは思ってたけど……いきなり、〝大事な用がある〟なんてメールがくるから、少しは期待したのに……って、なんか言ってる!!？別に期待なんかしてないし……」
「ん？どうかしたのか？」
「うぅ～何でもないよ……何でもないけど、大地君は少しぐらい私に殴られるべきだと思うよ」

「いや、何でだよ？」
「べっつにぃ～何でもないよ」
そういって少女は拗ねたように九石から顔を背ける。
……あーそういうことね。
意外とやるじゃない、九石も。
そっとしてあげたいけど、このままじゃ話が進まないのよね。
「夫婦漫才中のところ悪いんだけど」
「「夫婦漫才じゃない‼？」」
「はいはい、九石と息ぴったりなのは分かったから、とりあえず自己紹介をして貰えないかしら？遊花は知ってるみたいだけど、私達は初対面だし」
「あ、ごめんなさい。それでは改めて、新聞部所属の式見　蛍です。数式の式に、見るの見、蛍と書いて〝ほたる〟です。気軽に蛍って呼んでくれればいーよ」
「蛍ね。私はーーー」
「知ってます。デュエルアカデミア高等部学年４位『壊獣姫』、宝月桜さんと、同じく学年７位　御子神　霊華さんだよね」
「流石は新聞部。私達のこと知ってるのね」
「まあ、皆さん有名人ですから」
そういって、蛍がにししっと笑う。
成る程、九石と同じタイプみたいね。
「それで、デュエルアカデミア内での行方不明者についての情報だけど、それなら部長に聞きに行った方がいいよ」
「部長って、新聞部の、ですか？」
「うん。私は今別の件を調査してるから、行方不明の方の情報は殆ど持ってないんだ。だけど、行方不明の方は部長が情報収集を行うって言ってたから、聞けば何かは分かると思うよ。よかったら、部長に話を通しておこうか？」
「いいんですか？」
「モチ‼？というか、先に私に話しにきて正解だったよ。事前に連絡しておかないと、ウチの部長は絶対に捕まらないからね」

「絶対に捕まらない？それはどういう意味？」
蛍の言葉に御子神は首を傾げる。
そんな御子神に蛍はなんとも言えない表情で苦笑を浮かべた。
「ウチの部長、放課後になるとすぐに情報収集に行っちゃうから。それが校内でも校外でも。だから、携帯端末で事前に話を通さないとなかなか会えないんだよね。まあ、どんな人かは会ってからのお楽しみだよ」

ーーーーーーー

「ほうほう、私達に情報を提供しろと。それはそれは、余程風紀委員会も事態の深刻さに困窮しているようですね」
放課後。
蛍に案内された新聞部の部室で、遊花の言葉を聞き、茶髪のノームコアショートの少女ーーー新聞部の部長である早見　文愛（はやみあやめ）が片目を瞑って顎に手をやり思案する。
「いいでしょう、私が調べ上げたものでよければ今回の事件についての情報を提供しましょう」
「本当ですか‼？」
「ええ、ここで断って何度も尋ねられるのも時間の無駄ですからね。それは私の信条からして許容できるものではありませんから」
そういって早見が目を瞑って肩を竦める。
意外にあっさりと話が通ったことを遊花は喜んでるけど、蛍が早見の話をした時に浮かべた苦笑を考えるとこのまま終わるとも思えないのよね。
そんな私の予感を肯定するかのように、早見は不敵な笑みを浮かべた。
「ですが、こちらが一方的に情報を提供するのでは、利がありません。折角仕入れた特ダネをみすみす手放すことになってしまえば、今まで私が調査に費やした時間が無駄になってしまいます」
「……それで？」

「なので、どうでしょう？皆さんには私が提供する情報と同じぐらい、新聞に特ダネとして掲載できるような情報を提供して貰えませんか？」
「特ダネとして掲載できる情報⁉？そんなの私達は持ってないですよ⁉？」
早見の言葉に遊花が驚愕の声を上げる。
「いえいえ、あるじゃないですか。皆さんが……いえ、皆さんだからこそ提供できる情報が」
しかし、そんな遊花を見て早見は楽しそうに笑う。
確かに遊花の言う通り、私達が新聞部に提供できるような情報を持ってるとは思えない。
でも、早見の口ぶりだと私達がその新聞に特ダネとして掲載できるような情報を持っていると確信しているようだ。
私達だからこそ提供できる情報……何だか嫌な予感がしてきたわね。
そして、私の嫌な予感は当たる。
「単刀直入に言いましょう。皆さんには新聞部の取材を受け、記事にさせていただきたいんです⁉？」
「ふぇ⁉？」
「……やっぱり」
「……まあ何となくそんな気はしてたわ」
満面の笑みでカメラを片手にデュエルディスクを起動させ、そんなことを口にする早見に私達は顔を引き攣らせる。
私と御子神はデュエルアカデミア高等部の学年トップ。
そして遊花はここ数ヶ月で急激に成長し、私達学年トップと対等に渡り合え、闇に目をかけられる程の決闘者だ。
その情報を独占取材という形で出せば確かに特ダネにはなりそうだ。
「はは、蛍。お前のところの部長、すっげぇ面白い奴だな」
「大地君ならそういうと思ったよ」
九石の言葉を聞き、蛍が呆れた表情を浮かべる。

面白いかはともかく、私達に他に渡せる情報なんてものはない。
それに……
チラッと遊花の方を見ると、戸惑いながらも自分のデュエルディスクを起動しようとしている。
あの子は自己評価が低いから、自分のことが知られても大したことにはならないと思ってるんだろうけど、この中で1番この条件を受けてはいけないのは遊花だ。
現在の遊花は闇に挑戦するために様々なデュエルアカデミア生からデュエルを挑まれている。
ここで遊花のデュエルの情報が漏れたら、その情報を元に遊花を完全に対策したデッキで挑んでくる者も出てくるだろう。
それは遊花にとっても闇にとってもいいことではない。
それに、今日の遊花は今朝の件を引きずって精神的に不安定になっている。
不安定なことで取材中に大きなミスをしでかしたら後々遊花が不利になる可能性もある。
……気は乗らないけど、仕方がない、か。
「いいわ。その話、受けてあげる」
「えっ⁉？桜ちゃん⁉？」
「おお‼？話が早いですね。それはとてもいいことです」
「ただし、提供するのは私の情報だけよ。私達全員の情報を渡して、後から他の情報を手に入れた時に対価にできる情報がないから教えない、なんてこと言われたら堪らないもの」
「それでいて頭の回転も早い……ふふ、余計に気に入ってしまいました。いいでしょう、それで今回の件は手をうたせていただきましょう」
「交渉成立ね。あなたの方こそ、話が早いじゃない」
私がそういいながらデュエルディスクを起動すると、早見は心底楽しそうに笑いながらデュエルディスクを構えた。
「悩んでいる時間は無駄以外の何ものでもありません。即断即決即時即座即答‼？それが限られた時間を有意義に使うコツですよ」

「立ち止まって考えることが必要な時もあると思うけど？」
「否定はしませんが、私としては悩む前に真っ直ぐにぶつかっていくことをオススメしますね。考えた末に得た結果が相容れなければ悩んだ時間は無駄になります。それならば考えるということに逃げずに真っ直ぐ一直線にぶつかって、お互いの求める答えを探した方が有意義というものです」
「真っ直ぐ一直線にぶつかって……」
早見の言葉を、遊花が小さな声で反覆する。
そんな遊花を見て、早見が私に向かってウィンクをする。
この子、まさか遊花の様子が変なことに気づいて……はぁ、こんなことされたら、少しぐらいサービスして答えてあげないといけないじゃない。
「……それじゃあ、始めるわよ、早見!?私は宝月　桜、１８歳!?誕生日は７月７日で血液型はＯ型!?身長はこの間の測定では１６５ｃｍ!?体重はヒミツ!?趣味は裁縫!?好きなものは遊花の作るご飯!?……後は、彼氏いない歴は年齢と同じよ!!」
「……ふふっ、これは想像以上に面白い取材になりそうです。私は早見　文愛、１７歳!?誕生日は１０月２７日で血液型はＢ型!?身長はこの間の測定では１６２ｃｍ!?体重は同じくヒミツとさせていただきます!?趣味はＦ１鑑賞!?好きなものはわんこそば!?彼氏いない歴は年齢と同じです!!『壊獣姫』の力、見せて貰います!?」
『決闘!?』

桜　ＬＰ８０００
文愛　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は私ね。まずは速攻魔法、転生炎獣の炎陣（サラマングレイト・サークル）!?この同名カードは１ターンに１枚しか使えず、２つ効果から１つを選択して発動で

きる。デッキからサラマングレイトモンスター1体を手札に加えるか、自身と同名のモンスターを素材としてリンク召喚した自分フィールドのサラマングレイトリンクモンスター1体を対象としてこのターン、そのリンクモンスターは自身以外のモンスターの効果を受けなくする効果よ。私はデッキからサラマングレイトモンスター1体を手札に加える効果でデッキから転生炎獣(サラマングレイト)ウルヴィーを手札に加えるわ!!?」

「転生炎獣……あの『壊獣姫』が新たな力を手に入れたという噂は流れていましたが、実際に体験できる日が来るとは……」

「さらに手札の転生炎獣ウルヴィーを捨てて、魔法カード、サイバネットマイニング!!?同名カードは1ターンに1度、手札を1枚墓地へ送って発動できる。デッキからレベル4以下のサイバース族モンスター1体を手札に加えるわ!!?私はデッキから転生炎獣(サラマングレイト)ガゼルを手札に加えるわ!!?そして今手札に加えた転生炎獣ガゼルの効果発動!!?1ターンに1度転生炎獣ガゼル以外のサラマングレイトモンスターが自分の墓地に送られた場合、このカードを手札から特殊召喚する!!?」

〈転生炎獣ガゼル〉☆3　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１０００

私のフィールドに現れるのは炎を纏ったガゼルのモンスター。

「転生炎獣ガゼルのもう1つの効果発動!!?1ターンに1度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから転生炎獣ガゼル以外のサラマングレイトカード1枚を墓地に送る。私はデッキから転生炎獣(サラマングレイト)Ｊジャガーを墓地に送るわ!!?早速行くわよ、繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」

「!!?リンク召喚ですか」

私が目の前に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。

「召喚条件はレベル4以下のサイバース族モンスター1体!!?私は転生炎獣ガゼルをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン

!!?リンク召喚!!?リンク1!!?転生炎獣(サラマングレイト)ペイルリンクス!!?」

〈転生炎獣ペイルリンクス〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ５００　←

ガゼルがサーキットに吸い込まれると、代わりにサーキットから現れたのは真っ赤な装甲に身を包んだ山猫のモンスター。

「転生炎獣ペイルリンクスの効果発動!!?1ターンに1度、このカードがリンク召喚に成功した場合に、デッキから転生炎獣(サラマングレイト)の聖域(サンクチュアリ)1枚を手札に加える!!?私はデッキからフィールド魔法、転生炎獣の聖域を手札に加える!!?そしてフィールド魔法、転生炎獣の聖域を発動!!?」

フィールド魔法を発動すると、辺りの風景がマグマに囲まれた火山のフィールドに変わる。

「転生炎獣のフィールド魔法……」

「私は転生炎獣(サラマングレイト)フォクシーを召喚!!?」

〈転生炎獣フォクシー〉☆3　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１０００

フィールドに現れたのは尻尾から炎を灯している狐のモンスター。

「転生炎獣フォクシーの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが召喚に成功した時、自分のデッキの上からカードを3枚めくり、その中からサラマングレイトカード1枚を選んで手札に加え、残りのカードはデッキに戻すわ!!?私はデッキの上から3枚めくり、転生炎獣(サラマングレイト)フォウルを手札に加えるわ!!?どんどん行くわよ、繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」

「っ、またリンク召喚ですか」

「召喚条件は炎属性の効果モンスター2体!!?私は転生炎獣フォクシーと転生炎獣ペイルリンクスをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?転生炎獣(サラマングレイト)サンラ

イトウルフ!!?」

〈転生炎獣サンライトウルフ〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１８００　←→

フォクシーとペイルリンクスがサーキットに吸い込まれ、代わりに炎を纏った機械的な狼が現れる。
「転生炎獣サンライトウルフの特殊召喚成功時、手札の転生炎獣フォウルの効果発動!!?自分フィールドに同名カード以外のサラマングレイトモンスターが召喚・特殊召喚された場合、このカードを手札から特殊召喚するわ!!?」

〈転生炎獣フォウル〉☆４　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１８００

サンライトウルフが咆哮をあげるとフィールドに炎の羽根を持つ孔雀が姿を現わす。
「さらに墓地に存在する転生炎獣Ｊジャガーの効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードが墓地に存在し、自分フィールドにサラマングレイトリンクモンスターが存在する場合、転生炎獣Ｊジャガー以外の自分の墓地のサラマングレイトモンスター１体を対象としてそのモンスターをデッキに戻し、墓地のこのカードを自分のサラマングレイトリンクモンスターのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚するわ!!?」
「っ、まだ展開が止まらないんですか!?」
「知らないの?１度燃え上がった炎はそう簡単には消えないのよ。私は墓地の転生炎獣フォクシーをデッキに戻して転生炎獣Ｊジャガーを特殊召喚!!?」

〈転生炎獣Ｊジャガー〉☆４　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１２００

サンライトウルフの近くに身体に着いた棘から炎を噴き出させているジャガーが現れる。
そしてJジャガーが現れたことでサンライトウルフは歓喜の咆哮をあげる。
「転生炎獣サンライトウルフの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードのリンク先にモンスターが召喚・特殊召喚された場合、自分の墓地から炎属性モンスター1体を選んで手札に加える!!?ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できない。私は墓地の転生炎獣ウルヴィーを手札に加えるわ!!?さらに墓地から手札に加わった転生炎獣ウルヴィーの効果発動!!?このカードが効果で自分の墓地から手札に加わった場合、このカードを相手に見せ、自分の墓地の炎属性モンスター1体を対象としてそのモンスターを手札に加える!!?私は墓地から転生炎獣ガゼルを手札に加えるわ!!?」
「手札補充……これだけ展開されているのにまだ4枚もの手札を残して……」
唖然としている早見に私は不敵に笑って正面に手をかざす。
「驚くのはまだ早いわ!!?私はレベル4の転生炎獣フォウルと転生炎獣Jジャガーでオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
「エクシーズ召喚まで!?!?」
フォウルとJジャガーが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りるのは炎の翼を持つ機龍。
「さあ、初陣よ!!?現世に燃えゆく炎龍!!?転生炎獣ブレイズドラゴン!!?」
〈転生炎獣ブレイズドラゴン〉★4　サイバース族　炎属性
DEF1200

「驚きました。まさか宝月さんがエクシーズ召喚まで使えるようになっているとは……」
「驚くのはまだ早いわ‼？フィールド魔法、転生炎獣の聖域の効果発動‼？1ターンに1度、このカードがフィールドゾーンに存在する限り、自分がサラマングレイトリンクモンスターをリンク召喚する場合、自分フィールドの同名のサラマングレイトリンクモンスター1体のみを素材としてリンク召喚できる‼？」
「同名カードを使ったリンク召喚？」
「繋がって‼？希望に導くサーキット‼？私は転生炎獣サンライトウルフをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？」
サンライトウルフの頭上にサーキットが、足元に炎で出来た魔法陣が現れ、交差するようにサンライトウルフの身体を通過する。
サーキットと魔法陣が通過すると、サンライトウルフの纏っていた炎が一際激しく燃え上がる。
「転生リンク召喚‼？リンク2‼？転生炎獣サンライトウルフ‼？」
〈転生炎獣サンライトウルフ〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１８００　←→
「転生リンク召喚……ですか。でも、同名カードをリンク召喚することに何の意味が……」
「意味なら大有りよ‼？転生炎獣サンライトウルフの効果発動‼？同名カードは1ターンに1度、このカードが転生炎獣サンライトウルフを素材としてリンク召喚されている場合、自分の墓地のサラマングレイト魔法・罠カード1枚を選んで手札に加える‼？私は墓地に存在する転生炎獣の炎陣を手札に加えるわ‼？」
「っ、成る程。同名カードを素材にすることで更なる効果を得る……それが転生炎獣のリンクモンスターのようですね」
「そう、転生炎獣は生まれ変わる程強くなれる‼？その進化にアンタはついてこれるかしら？私はカードを2枚伏せてターンエンド‼？さあ、アンタの実力、見せて貰うわよ？」

桜　ＬＰ８０００　手札３
ーー▲▲ー　　▽
ー□ーーー
　　ー　　☆
ーーーーー
ーーーーー　　ー
文愛　ＬＰ８０００　手札５

「お見事です、宝月さん。１ターン目だというのに圧倒されてしまいました。流石はデュエルアカデミア高等部学年４位『壊獣姫』と言ったところでしょうか？」
「まあ、まだ怪獣も姫も使えてないけどね。そもそも私、先攻って苦手だし」
　私の言葉に、早見は苦笑いすると、すぐに表情を切り替えて澄ました笑みを浮かべる。
「そのようですね。ですが、私は宝月さんの代名詞と呼ばれるモンスターを出すまで時間をかけるつもりはありません。私にも私なりのポリシーってものがありますからね」
「言うじゃない。何なのよ、アンタのポリシーって？」
「単純なことですよ。どんなことでも最速最短で成し遂げる、です」
　そういって早見は不敵に笑う。
「物事を早く成し遂げればその分時間が有効に使えます。情報を仕入れるのも、新聞を作るのも、デュエルで勝利することさえも早く成し遂げればその分更なる行動に繋げる余裕が持てる。新しい情報を仕入れにいくのも、更なる記事を書き上げるのも、デュエル後に親睦を深めることも、早く成し遂げればその分使える時間が増えるんです」
「……成る程、面白い考えね」
「だからこそ、宝月さんには悪いですが。このデュエル、最速最短で勝利まで突っ切らせていただきます」
　確かな自信を持ってそう告げる早見に、私は思わず笑みを浮かべて

しまう。
私はこれでも学年４位。
自分で言うのも何だけど同じ学年の生徒は遊花に手を出す輩が多かったから容赦なく叩き潰してきた。
だからこそ、私の名前は同じ学年では恐怖の代名詞のように扱われているのは分かっている。
そんな私に対してここまで自信満々の表情を浮かべてくる決闘者は久しぶりだ。
「面白いじゃない、私から勝利を奪えるものなら奪ってみなさい!!?」
「望むところです!!?私のターン、ドロー!!?自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚できます!!?来てください、ＳＲ（スピードロイド）ベイゴマックス!!?」

〈ＳＲベイゴマックス〉☆３　機械族　風属性
ＤＥＦ６００

早見のフィールドに現れたのはいくつもの独楽が合わさってできたモンスター。
ベイゴマックス……あのモンスターは確か異世界に行った時に見たことがあったハズ。
その効果はーーー
「ＳＲベイゴマックスの効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから同名カード以外のスピードロイドモンスター１体を手札に加える!!?私が手札に加えるのはＳＲ（スピードロイド）タケトンボーグ!!?そして自分フィールドに風属性モンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できます!!?来てください、ＳＲタケトンボーグ!!?」

〈ＳＲタケトンボーグ〉☆３　機械族　風属性
ＤＥＦ１２００

次に現れたのは竹とんぼを模した人形のようなモンスター。
その姿を確認すると、早見は正面に手をかざす。
「早速行きますよ、突き抜けろ!!?疾風怒濤のサーキット!!?」
「リンク召喚ね」
早見の正面に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は機械族モンスター2体!!?私はSRベイゴマックスとSRタケトンボーグをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?追跡フルスロットル!!?リンク2!!?
F・(フォーミュラアスリート) A・シャイニングスターGT!!?」
「F・A・!!?」
〈F・A・シャイニングスターGT〉LINK 2 機械族 光属性
ATK0 ↙? ↘?

ベイゴマックスとタケトンボーグがサーキットに吸い込まれると、代わりにサーキットから赤と白を基調としたレーシングカーが飛び出してきた。
SRデッキかと思ってたけど出てきたのはF・A・……どうやらこの2つの混合デッキみたいね。
「さあ、迅速にどんどん行きますよ!!?私は手札からS(スピード)R(ロイド)電々大公を捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動!!?デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚します!!?来てください、チューナーモンスター、F・(フォーミュラアスリート) A・カーナビゲーター!!?」
〈F・A・カーナビゲーター〉☆1 機械族 風属性
DEF0

次に早見のフィールドに現れたのはホログラムの身体を持つ電子の妖精。
「F・A・カーナビゲーターの効果発動!!?このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキからF・Aフィールド魔法カード1枚を

手札に加えます‼?私はデッキからフィールド魔法、F・（フォーミュラアスリート）A・シティGP（グランプリ）を手札に加えます‼そして即座にフィールド魔法、?F・A・シティGPを発動‼?」

マグマに囲まれた火山のフィールドに、近未来的な都市が現れる。

「この瞬間、F・A・シャイニングスターGTの効果発動‼?マッハブースト‼?F・A・魔法・罠カードの効果が発動した場合、このカードにアスリートカウンターを1つ置きます‼?」

「アスリートカウンター?」

F・A・シャイニングスターGT
アスリートカウンター0→1

近未来的な都市の公道をシャイニングスターは物凄い勢いで走りはじめる。

「アスリートカウンターが乗ったF・A・シャイニングスターGTは相手がモンスターの効果を発動した時、このカードのアスリートカウンターを1つ取り除き、その発動を無効にし破壊することができます」

「‼?成る程、モンスター効果を牽制してきたってわけね」

「さらにフィールド魔法F・A・シティGPの永続効果‼?このカードがフィールドゾーンに存在する限り、フィールドのF・A・モンスターのレベルはメインフェイズ及びバトルフェイズの間だけ2つ上がり、自分フィールドのF・A・モンスターは相手の効果の対象になりません‼?」

「効果耐性まで与えられるのは厄介ね」

F・A・カーナビゲーター
☆1→3

「サーチも済みましたからドローに移りましょう。デッキの上から10枚を裏側で除外して、魔法カード、強欲で貪欲な壺‼?自分はデッ

キから2枚ドローします!!?・そして、私はＳ（スピードロイド）Ｒダブルヨーヨーを召喚!!?・」

〈ＳＲダブルヨーヨー〉☆４　機械族　風属性
ＡＴＫ１４００

フィールドに現れたのは機械で出来た２つのヨーヨーのモンスター。

「ＳＲダブルヨーヨーの効果発動!!?・このカードが召喚に成功した時、自分の墓地のレベル３以下のスピードロイドモンスター１体を特殊召喚します!!?・戻って来てください、チューナーモンスター、ＳＲ電々大公!!?・」

〈ＳＲ電々大公〉☆３　機械族　風属性
ＤＥＦ１０００

ダブルヨーヨーに引きずられ、太鼓を手にした機械人形が姿を現わす。

チューナーモンスターが出てきたということは、次の早見の狙いは……

「私は、レベル４、ＳＲダブルヨーヨーに、レベル３となっている、チューナーモンスター、Ｆ・Ａ・カーナビゲーターをチューニング!!?・」

「やっぱり、シンクロ召喚ね」

カーナビゲーターが光の輪になり、ダブルヨーヨーが小さな星に変わり、光の道になる。

「光速の先駆者よ!!?・即断即決最速最短、一直線に駆け抜けろ!!?・シンクロ召喚!!?・」

光の道が輝くと、現れたのは稲妻の如き白銀のレーシングカー。

「輝く雷光、疾風の如し!!?・Ｆ・（フォーミュラアスリート）Ａ・ライトニングマスター!!?・」

〈F．A．ライトニングマスター〉☆7→9　機械族　光属性
ＡＴＫ０

「F．A．のシンクロモンスター……そいつも攻撃力は０なのね」
「ふふっ、ご心配なく。F．A．ライトニングマスターの永続効果、スタードライブ‼?このカードの攻撃力はこのカードのレベル×３００ポイントアップします‼?」
「‼?レベルを攻撃力に変化させるモンスターなんて珍しいわね」
「現在のF．A．ライトニングマスターのレベルは9‼?よって攻撃力は２７００ポイントアップします‼?」

F．A．ライトニングマスター
ＡＴＫ０→２７００

「さらにF．A．シャイニングスターＧＴの永続効果、スターミキシドライブ‼?このカードの攻撃力は、このカードのリンク先のF．A．モンスターのレベルの合計×３００ポイントアップします‼?現在リンク先にはF．A．ライトニングマスターがいるので攻撃力は２７００ポイントアップです‼?」

F．A．シャイニングスターＧＴ
ＡＴＫ０→２７００

「一気に攻撃力２７００のモンスターが2体か……だけど、これで終わりじゃないんでしょ?」
「勿論ですとも‼?魔法カード、アイアンコール‼?自分フィールドに機械族モンスターが存在する場合、自分の墓地のレベル４以下の機械族モンスター1体を対象としてその機械族モンスターを特殊召喚します‼?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、エンドフェイズに破壊されます。戻って来てください、ＳＲダブルヨーヨー‼?」

〈ＳＲダブルヨーヨー〉☆４　機械族　風属性
ＡＴＫ１４００

フィールドに再び現れるダブルヨーヨー。
これで再び早見のフィールドにモンスターとチューナーが揃った。
「さあ、お見せしましょう、私の切り札を‼？私は、風属性レベル４モンスター、ＳＲダブルヨーヨーに、レベル３、チューナーモンスター、ＳＲ電々大公をチューニング‼？」
電々大公が光の輪になり、ダブルヨーヨーが小さな星に変わり、光の道になる。
「神速の風竜よ‼？誰にも知覚されぬ速さに至り、清澄なる世界に吹き荒れろ‼？シンクロ召喚‼？」
光の道が輝くと、現れたのは翠の鎧を身に纏う疾風の如き白竜。
「事象の地平を翔ける白竜‼？クリアウィングファストドラゴン‼？」

〈クリアウィングファストドラゴン〉☆７　ドラゴン族　風属性
ＡＴＫ２５００

「……クリアウィング？」
現れたファストドラゴンを見て、一瞬異世界で見た緑の翼を持つ白竜の姿が思い浮かぶ。
でも、あの時の白竜は確かクリアウィングシンクロドラゴンと呼ばれていた気がする。
遊花や私が持つヴァレルシリーズのようにクリアウィングにもカテゴリーがあるのかしら？
「おや？クリアウィングファストドラゴンをご存知で？」
「いいえ、クリアウィングファストドラゴンについては知らないわ。ただ同じクリアウィングの名を持つドラゴンを見たことがあったから少し驚いただけよ」

「ほほう、大変興味深い話ですが、それはデュエルが終わってから伺うとしましょう。私はスケール５のライブラの魔法秤をペンデュラムスケールにセッティング‼？」
「‼？ペンデュラムモンスター⁉？」
早見の右隣に光の柱が立ち上り、その光の中に金色の天秤が浮かびあがり、下に５の数字が現れる。
早見の手札は残り１枚。
例えもう１枚の手札がペンデュラムモンスターだとしてもペンデュラム召喚はできない。
なら、早見の狙いはあのモンスターのペンデュラム効果ね。
「ライブラの魔法秤のペンデュラム効果‼？１～６までの任意のレベルを宣言し、自分フィールドの表側表示モンスター　２体を対象としてターン終了時まで、対象のモンスター１体のレベルを宣言したレベル分だけ下げ、もう１体のモンスターのレベルを宣言したレベル分だけ上げます‼？」
「レベル変動のペンデュラム効果……なかなか厄介なことをしてくるじゃない」
「私はクリアウィングファストドラゴンとＦ．Ａ．ライトニングマスターを対象に、レベル６を選択‼？クリアウィングファストドラゴンのレベルを６下げ、Ｆ．Ａ．ライトニングマスターのレベルを６上げます‼？」

クリアウィングファストドラゴン
☆７→１

Ｆ．Ａ．ライトニングマスター
☆９→１５

ライブラの天秤が傾くと、ファストドラゴンのレベルが下がり、ライトニングマスターのレベルが上がる。
そしてライトニングマスターのレベルが上がったということは

……

「レベルが変動したことでＦ．Ａ．ライトニングマスターの永続効果、スタードライブとＦ．Ａ．シャイニングスターＧＴの永続効果、スターミキシドライブにより、２体の攻撃力は６レベル分……１８００ポイントアップします‼？」

Ｆ．Ａ．ライトニングマスター
ＡＴＫ２７００→４５００

Ｆ．Ａ．シャイニングスターＧＴ
ＡＴＫ２７００→４５００

「攻撃力４５００が２体……‼？」
「ご安心ください。Ｆ．Ａ．シャイニングスターＧＴは自身の効果によりこのカードの戦闘で発生するお互いの戦闘ダメージが０になります。いくら攻撃力が上がろうと、宝月さんのライフは削れません」
「……それでも高攻撃力のモンスターがいることには変わりがないじゃない。どこも安心できないわよ」
「ふふっ、それはそうですね。さあ、ひとっ走り、突っ切らせていただきますよ‼？バトル‼？」
「なら、バトルフェイズ開始時にリバースカードオープン‼？罠発動‼？サラマングレイトレイジ‼？このカードは２つの効果から１つを選択して発動できるわ。１つは手札及び自分フィールドの表側表示モンスターの中から、サラマングレイトモンスター１体を墓地へ送り、フィールドのカード１枚を対象としてそのカードを破壊する効果。そしてもう１つは自身と同名のモンスターを素材としてリンク召喚した自分フィールドのサラマングレイトリンクモンスター１体を対象としてそのモンスターのリンクマーカーの数まで、相手フィールドのカードを選んで破壊する効果よ‼？」
「リンクマーカーの数相手のカードを破壊⁉？」
「使用するのは勿論２つ目の効果‼？私は転生炎獣サンライトウルフ

を対象に効果を発動するわ‼?」
「しかも対象を取らない破壊効果……使わざるを得ませんね。その効果にチェーンしてF．A．ライトニングマスターの効果発動‼?バニシングブレイカー‼?1ターンに1度、相手が魔法・罠カードの効果を発動した時、このカードのレベルを2つ下げ、その発動を無効にし破壊します‼?」
「‼?魔法・罠の無効効果もあったのね」

F．A．ライトニングマスター
☆15→13
ATK4500→3900

F．A．シャイニングスターGT
ATK4500→3900

サラマングレイトレイジの効果を受け、怒りの咆哮をあげるサンライトウルフにライトニングマスターが勢いよく突撃し、その身体を跳ね飛ばし、サラマングレイトレイジの効果を打ち消す。
「ひき逃げとはやってくれるじゃない」
「人聞きの悪い……ただの体当たりじゃないですか」
「ただの体当たりを車がやったらひき逃げって言うのよ」
「ごもっとも。F．A．ライトニングマスターで転生炎獣ブレイズドラゴンを攻撃‼?攻撃宣言時、速攻魔法、アクションマジック―フルターン‼?このターン、モンスター同士の戦闘で発生するお互いの戦闘ダメージは倍になります‼?」
「っ、戦闘ダメージが倍になるカードを使ってるのに守備表示の転生炎獣ブレイズドラゴンを狙ってきたってことは……」
「F．A．ライトニングマスターの永続効果、ライトニングアタッカー‼?このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ戦闘ダメージを与えます‼?」
「っ、やっぱり貫通効果‼?迎え撃ちなさい、転生炎獣ブレイズドラゴ

ン‼?熱誠のアオスブルフ‼?」
「貫け、Ｆ．Ａ．ライトニングマスター‼?雷轟のシャイニングドライブ‼?」
ブレイズドラゴンが炎を纏い、ライトニングマスターに突撃するが、ライトニングマスターはその突撃をドリフトで躱すと車体を高速で回転させながら背後から跳ね飛ばす。
空中に跳ね飛ばしたブレイズドラゴンにライトニングマスターは回転する速度を増しながら公道の傍にある斜面を利用して空高く飛び上がると、跳ね飛ばされて硬直しているブレイズドラゴンのに突撃し、その身体を貫いた。

桜　ＬＰ８０００→２６００

「くっ、やってくれるわね‼?だけど、転生炎獣ブレイズドラゴンの永続効果、グルートベッセルング‼?このカードが戦闘・効果で破壊される場合、代わりにこのカードのオーバーレイユニットを１つ取り除くことができるわ‼?」
「戦闘破壊耐性がありましたか」
オーバーレイユニットがブレイズドラゴンに吸収されると、ブレイズドラゴンの身体が燃え上がり、貫かれていた身体が修復される。
「そして転生炎獣ガゼルの効果発動‼?１ターンに１度転生炎獣ガゼル以外のサラマングレイトモンスターが自分の墓地に送られた場合、このカードを手札から特殊召喚するわ‼?」
「墓地を肥やされたら何が起こるか分かりませんからね。止めさせていただきます‼?Ｆ．Ａ．シャイニングスターＧＴの効果発動‼?チェイスブレイク‼?相手がモンスターの効果を発動した時、このカードのアスリートカウンターを１つ取り除き、その発動を無効にし破壊します‼?」

Ｆ．Ａ．シャイニングスターＧＴ
アスリートカウンター１→０

フィールドに現れようとしたガゼルをシャイニングスターＧＴが跳ね飛ばして消滅させる。
「動物まで跳ね飛ばすなんてどれだけ余罪を増やすのよ」
「これで最後にするつもりですよ。クリアウィングファストドラゴンで転生炎獣サンライトウルフを攻撃‼?」
ファストドラゴンが咆哮をあげ、自身の身体　に暴風を纏いはじめる。
アクションマジック―フルターンの効果で戦闘ダメージが倍になってるとはいえファストドラゴンの攻撃力ではサンライトウルフを倒しても私のライフが削りきられることはない。
それでも早見はこれで最後にすると言った。
そして暴風を纏ったファストドラゴンから確かに感じる嫌な予感。
「なら、私は手札の転生炎獣（サラマングレイト）ラクーンを墓地へ送り効果発動‼?」
「‼?まだ手札誘発のモンスターが残っていましたか……」
「自分のサラマングレイトモンスターが相手モンスターの攻撃対象に選択された時、このカードを手札から墓地へ送り、その戦闘を行うモンスター2体を対象として対象の相手モンスターの攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復し、このターン、対象の自分のモンスターは戦闘では破壊されない‼?」
「っ、戦闘破壊耐性にライフポイントの回復⁉?」
「早見のクリアウィングファストドラゴンの攻撃力は２５００‼?よって、私は２５００ポイントのライフを回復するわ‼?」
炎の尻尾を持つアライグマが尻尾の炎を燃やし、炎の防壁を築き上げて私とサンライトウルフを守るように包み込む。

桜　ＬＰ２６００→５１００

「ライフポイントを回復されてしまうのは流石に想定外でした……ですが、私の成すべきことは変わりません‼?ダメージステップ、クリアウィングファストドラゴンの効果発動‼?ゼロマキシマムオー

バードライブ!!?・ＥＸデッキから特殊召喚された相手フィールドの表側表示モンスター１体を対象としてターン終了時まで、そのモンスターの攻撃力は０になり、効果は無効化されます!!?そしてこの効果は相手ターンでも発動できます!!?」
「っ!!?・攻撃力と効果を打ち消す効果!!?・だからこのターンで最後って言ったのね」

転生炎獣サンライトウルフ
ＡＴＫ１８００→０

暴風を纏ったファストドラゴンがサンライトウルフに向かって風のブレスを放つと、サンライトウルフが空高く舞い上げられる。
空中で身動きが取れないサンライトウルフに向かって、ファストドラゴンは勢いよく翔び立ち、一瞬でサンライトウルフの正面に現れる。
「突き抜けろ、クリアウィングファストドラゴン!!?・瞬殺のラピッドゲイル!!?・」
姿を現したファストドラゴンはその身に纏った暴風でサンライトウルフを斬り刻みながら勢いよく突撃し、サンライトウルフに風穴を開けた。

桜　ＬＰ５１００→１００

「っ……ギリギリだったけど、首の皮一枚、繋がったわね」
「仕損じてしまいましたか……ですが、今の宝月さんはまさに風前の灯火!!?・そのまま吹き消してみせましょう!!?・Ｆ・Ａ・シャイニングスターＧＴで転生炎獣ブレイズドラゴンを攻撃!!?・撲滅のチェイスエンド!!?・」
「転生炎獣ブレイズドラゴンの永続効果、グルートベッセルング!!?・このカードが戦闘・効果で破壊される場合、代わりにこのカードのオーバーレイユニットを１つ取り除く!!?・」

シャイニングスターが加速し、光を纏いながらブレイズドラゴンに突撃し、その身体を貫く。
すると再びオーバーレイユニットがブレイズドラゴンに吸収され、ブレイズドラゴンの身体が燃え上がり、貫かれていた身体が修復される。
「これで転生炎獣ブレイズドラゴンのオーバーレイユニットも無くなりました。エクシーズモンスターはオーバーレイユニットを使用して強力な効果を発動する。そのオーバーレイユニットが無くなってしまえば怖くありません!!?私はこのままターンエンーーー」
「ふふっ」
「っ、何がおかしいんですか?」
自信満々の表情でターンエンドを宣言しようとする早見に私は思わず笑みを漏らしてしまう。
そんな私を見て、早見は警戒するような視線を私に向ける。
確かに、私のライフは残り僅か。
早見の言う風前の灯火という表現は何も間違っていない。
だけど、間違っていることもある。
「確かに早見の言う通り、私のライフは風前の灯火。灯火が風に煽られ消えてしまうこともあるわ。でもね、風を受けた灯火がさらに大きく燃え上がることがあるということも知りなさい!!?バトルフェイズの終了前、オーバーレイユニットが無くなったことで転生炎獣ブレイズドラゴンの効果発動!!?アオフローダーンゼーレ!!?」
「っ!??オーバーレイユニットが無くなったことで効果を発動するエクシーズモンスター!??」
「このカードにオーバーレイユニットが無い場合、自分・相手のバトルフェイズに発動できる!!?サラマングレイトエクシーズモンスター1体を、自分フィールドのこのカードの上に重ねてエクシーズ召喚扱いとしてEXデッキから特殊召喚する!!?私は転生炎獣ブレイズドラゴン1体でオーバーレイ!!?1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?転生エクシーズ召喚!!?」
「転生エクシーズ召喚!!?」

ブレイズドラゴンが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りるのは青き炎の翼を持つ機龍。
「生まれ変われ、現世に燃えゆく炎龍!!?転生炎獣ブレイズドラゴン!!?」

〈転生炎獣ブレイズドラゴン〉★４　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２３００

「再び転生炎獣ブレイズドラゴンが……ですが、そのモンスターは……」
「お生憎様。生まれ変わった転生炎獣ブレイズドラゴンは一味違うわ!!?転生炎獣ブレイズドラゴンの効果発動!!?ニーダーブレンネン!!?このカードが同名カードを素材としてエクシーズ召喚に成功した場合、相手フィールドのモンスター１体を選んで破壊する!!?」
「同名カードをオーバーレイユニットとすることで更なる効果を得るエクシーズモンスター!!?」
「対象はクリアウィングファストドラゴン!!?派手にかまして来なさい、転生炎獣ブレイズドラゴン!!?」
ブレイズドラゴンが青い炎を纏いながら、ファストドラゴンに青い炎のブレスを放つ。
ファストドラゴンは風のブレスを放ち相殺しようとしたが、風のブレスを受けた青い炎のブレスは勢いよく燃え上がり、一瞬でファストドラゴンまで到達するとその身体を燃やし尽くした。
「くっ……すみません、クリアウィングファストドラゴンの効果発動!!?モンスターゾーンのこのカードが戦闘・効果で破壊された場合、このカードを自分のペンデュラムゾーンに置きます!!?」
「!!?ペンデュラムカードのシンクロモンスター!!?」
破壊されたファストドラゴンが粒子に変わると、早見の左隣に光の柱が立ち上り、その光の中に粒子が集まっていき再びファストドラゴンの姿をなすと、下に４の数字が現れた。

どうやらファストドラゴンは想像以上に凄いカードだったみたいね。

「クリアウィングファストドラゴンはやられてしまいましたが、まだデュエルは圧倒的に私の方が有利!!?このまま逃げ切ってみせます!!?私はこのままターンエンド!!?エンドフェイズ、ライブラの魔法秤とF・A・シティGPの効果が一時的に切れ、F・A・ライトニングマスターのレベルが下がります!!?」

「それと同時にクリアウィングファストドラゴンの効果を受けていた転生炎獣サンライトウルフの攻撃力と効果も元に戻る!!?」

F・A・ライトニングマスター
☆13→7→5
ATK3900→2100→1500

F・A・シャイニングスターGT
ATK3900→1500

転生炎獣サンライトウルフ
ATK0→1800

桜　LP100　手札1
ーーー▲ー　▽
ーーー○ー
☆　☆
○ーーーー
△ーーー△　▽
文愛　LP8000　手札0

私のライフは残り僅か。
早見のフィールドにライトニングマスターがいることから防御を固める選択肢はない。

だからこそ、このターンで決める!!?
「私のターン、ドロー!!?」
「メインフェイズ!!?フィールド魔法F．A．シティGPの永続効果が適用され、フィールドのF．A．モンスターのレベルが2つ上がります!!?」

F．A．ライトニングマスター
☆5→7
ATK1500→2100

F．A．シャイニングスターGT
ATK1500→2100

「構うもんですか!!?私は転生炎獣サンライトウルフの効果発動!!?墓地に存在するサラマングレイトレイジを手札に加えるわ!!?」
「っ、また厄介なカードが手札に……」
「そして、繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」
「くっ、またリンク召喚」
私が前に再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は炎属性の効果モンスター2体以上!!?私は転生炎獣ブレイズドラゴンと転生炎獣サンライトウルフを2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
サーキットの中にブレイズドラゴンとサンライトウルフが2体に分身して吸い込まれると、フィールドにあった火山が噴火し、マグマが溢れ都市の公道を呑み込み始める。
そして火山の噴火に合わせるように、サーキットの中からマグマを喰らいながら現れたのは炎の身体を持つ灼熱の獅子。
「古より伝わる灼熱の獅子!!?リンク召喚!!?リンク3!!?転生炎獣(サラマングレイト)ヒートライオ!!?」
〈転生炎獣ヒートライオ〉LINK3　サイバース族　炎属性

ＡＴＫ２３００　↙？→↘？

「リンク３の転生炎獣モンスター……‼？」

「さあ、食事の時間よ、転生炎獣ヒートライオの効果発動‼？イグズィスタンスイーター‼？このカードがリンク召喚に成功した場合、相手の魔法・罠ゾーンのカード１枚を対象に、そのカードを持ち主のデッキに戻す‼？私は早見のペンデュラムゾーンにあるライブラの魔法秤をデッキに戻すわ‼？」

ヒートライオが咆哮を上げると、炎で出来た魔法陣が現れ、光の柱の中にいるライブラを吸収する。

ライブラを飲み込んだヒートライオは満足そうに両手を合わせる。

「くっ……ライブラの魔法秤が‼？」

「まだ終わらないわ‼？フィールド魔法、転生炎獣の聖域の効果発動‼？１ターンに１度、このカードがフィールドゾーンに存在する限り、自分がサラマングレイトリンクモンスターをリンク召喚する場合、自分フィールドの同名のサラマングレイトリンクモンスター１体のみを素材としてリンク召喚できる‼？」

「っ、ここで再び転生リンク召喚ですか‼？」

「繋がって‼？希望に導くサーキット‼？私は転生炎獣ヒートライオをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？」

ヒートライオの頭上にサーキットが、足元に炎で出来た魔法陣が現れ、交差するようにヒートライオの身体を通過する。

サーキットと魔法陣が通過すると、ヒートライオの身体からさらに大きな炎が噴き出した。

「生まれ変われ、古より伝わる灼熱の獅子‼？転生リンク召喚‼？リンク３‼？転生炎獣ヒートライオ‼？」

〈転生炎獣ヒートライオ〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　炎属性

ＡＴＫ２３００　↙？→↘？

「さあ、もう１度食事の時間よ‼？転生炎獣ヒートライオの効果発動

‼?イグズィスタンスイーター‼?今度は私はクリアウィングファストドラゴンをデッキに戻させて貰うわ‼?」
「くっ……」
　再誕したヒートライオが咆哮を上げ、炎で出来た魔法陣を生み出して光の柱の中にいるファストドラゴンを吸収し、満足そうに両手を合わせる。
「さあ、どんどん行くわよ‼?リバースカードオープン‼?速攻魔法、転生炎獣の炎陣‼?私はデッキからサラマングレイトモンスター1体を手札に加える効果を選択するわ‼?」
「これ以上展開される可能性を与えるわけにはいきません‼?その効果にチェーンしてF・A・ライトニングマスターの効果発動‼?バニシングブレイカー‼?このカードのレベルを2つ下げ、その発動を無効にし破壊します‼?」

F・A・ライトニングマスター
☆7→5
ＡＴＫ２１００→１５００

F・A・シャイニングスターＧＴ
ＡＴＫ２１００→１５００

　加速するライトニングマスターの生み出す風圧が転生炎獣の炎陣を吹き飛ばし無効化する。
　だけど、それは狙い通りだ。
「これで無効化される心配も無くなったわ‼?速攻魔法、バウンドリンク‼?同名カードは1ターンに1枚しか発動できず、自分のフィールド・墓地のリンクモンスター1体を対象としてそのモンスターを持ち主のＥＸデッキに戻して、そのリンクマーカーの数だけ自分はデッキからドローし、その後、ドローした数だけ手札を選んで好きな順番でデッキの下に戻す‼?私は墓地に存在する転生炎獣ヒートライオをＥＸデッキに戻し、3枚のカードをドローし、手札から3枚のカー

ドをデッキの下に戻すわ‼?・さらに魔法カード、貪欲な壺‼?・」
「っ、ここにきてさらにドローカードを引いてきましたか‼?」
「墓地に存在する転生炎獣ブレイズドラゴンと転生炎獣サンライトウルフ2体ずつをＥＸデッキに、転生炎獣ガゼルをデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローする‼?・」
『あらあら、随分追い詰められているじゃない、桜』
「っ、この声……遅いのよ、アンタは」
『何?・私のこと待ってたの?それは相棒冥利に尽きるわね』
　私の耳に聞き覚えがある女の子の声が届き、ドローしたカードに目をやると、私の相棒ーーー妖精伝姫―カグヤが楽しそうに笑っていた。
「全く……遅れた分、しっかりと働いて貰うわよ」
『はーい、了解よー』
「さてと、早見」
「なんですか?」
「私の代名詞と呼ばれるモンスターを出すまで時間をかけないって言ってたけど、残念ながら時間切れよ‼?・魔法カード、妨げられた壊獣の眠り‼?・このカードの発動時、フィールドのモンスターを全て破壊するわ‼?」
「っ‼?・ここで怪獣の全体破壊魔法⁉?・ですが、それでは宝月さんの転生炎獣も破壊されて……」
「心配無用よ。この瞬間、墓地に存在する転生炎獣ペイルリンクスの効果‼?・自分フィールドのサラマングレイトカードが戦闘・効果で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外できる‼?・私はこの効果で転生炎獣ヒートライオを破壊から守るわ」
　フィールドが揺れ、ライトニングマスターとシャイニングスターが地割れに呑み込まれて消滅する。
　その代わりに早見のフィールドには巨大な地竜が、私のフィールドには私の切り札である三つ首の竜が現れる。
「その後、デッキからカード名が異なる壊獣モンスターを自分・相手のフィールドに1体ずつ攻撃表示で特殊召喚するわ‼?・この効果で特

殊召喚したモンスターは表示形式を変更できず、攻撃可能な場合は攻撃しなければならないけどね。私は早見のフィールドに怒炎壊獣ドゴラン、そして私のフィールドには私の切り札を呼び出すわ‼?あなたの全てを壊してあげる‼?雷撃壊獣サンダーザキング‼?」

〈怒炎壊獣ドゴラン〉☆8　恐竜族　炎属性
ＡＴＫ３０００

〈雷撃壊獣サンダーザキング〉☆9　雷族　光属性
ＡＴＫ３３００

「そして、行くわよ、相棒‼?月より来たる永遠の姫‼?妖精伝姫(フェアリーテイル)―カグヤを召喚‼?」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆4　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ１８５０

現れたのは月のマークが入っている扇子を持ったお姫様。
『私、参上‼?』
カグヤはそういうと楽しそうに自分を指差しながら扇子を掲げる。
「……気に入ったの、それ?」
『ふふん、勇ましくて素敵でしょ?』
「……ああ、そう」
『もう、つれないわねー桜はもう少しユーモアセンスを鍛えるべきだわ』
「はいはい、善処するわ。妖精伝姫―カグヤの効果発動!召喚に成功した時、デッキから攻撃力１８５０の魔法使い族モンスター1体を手札に加える‼?私は2体目の妖精伝姫―カグヤを手札に加えるわ‼?そして妖精伝姫―カグヤの効果発動‼?アンリーゾナブルディマンド‼?1ターンに1度、相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動‼?相手はそのモンスターの同名カード1枚を自

身のデッキ・ＥＸデッキから墓地へ送ってこの効果を無効にできる。墓地へ送らなかった場合、このカードと対象のモンスターを持ち主の手札に戻す‼？この効果は相手ターンでも発動できるわ‼？対象は勿論、怒炎壊獣ドゴランよ‼？」
「っ、私のデッキに怒炎壊獣ドゴランなんて入ってるわけがありません……」
「なら怒炎壊獣ドゴランは返して貰うわ‼？」
『それじゃあドゴラン、久しぶりに力比べといきましょ。私の強さは泣けるわよ？』
　早見がそう宣言するとカグヤが腕をぶんぶんと振り回しながらドゴランに向かって歩いていく。
　向かってくるカグヤを見てドゴランは慌てて逃げようとしたが、尻尾を掴まれ動きを止められると、カグヤにジャイアントスイングの要領で振り回されながら私の方に向かって放り投げられ、カードとして手札に戻っていった。
「……可愛そうだから放り投げるのは止めてあげなさいよ。というか、どんな筋力してるのよ、アンタ」
『あら、姫に対して失礼ね。私は精霊よ？これは筋力じゃなくて霊力で干渉してるだけよ』
「それはドゴランも同じなんじゃないの？攻撃力的にはドゴランの方が上だし」
『……そこは多少筋力で補ってるのよ』
「……やっぱりほぼ筋力なんじゃ……」
『あー疲れたわー私も手札に戻って休むわねー』
　カグヤはジト目を浮かべる私から目を逸らしながら私の手札に戻っていった。
　……まあいいわ、追求しても得するわけじゃないし。
「宝月さん？何やら独り言を呟かれていたようですが、どうかしましたか？」
「……何でもないわ。さあ、決めるわよ‼？墓地に存在する転生炎獣Ｊジャガーの効果発動‼？墓地の転生炎獣フォウルをデッキに戻

して転生炎獣Ｊジャガーを特殊召喚!!?」

〈転生炎獣Ｊジャガー〉☆４　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１８００

ヒートライオの傍にＪジャガーが再び姿を現わす。
「バトル!!?転生炎獣Ｊジャガーでダイレクトアタック!!?グレートフレイムクロー!!?」
「くっ!!?」

文愛　ＬＰ８０００→６２００

Ｊジャガーが勢いよく飛び出し、炎を纏った鉤爪で早見を切り裂く。
「続けて、転生炎獣ヒートライオでダイレクトアタック!!?ヒートストライク!!?」
「っ、まだまだ平気です!!?」

文愛　ＬＰ６２００→３９００

ヒートライオが炎を集めて弾丸を作り、早見に向けて撃ち込む。
「まだよ!!?雷撃壊獣サンダーザキングでダイレクトアタック!!?グラビティレイ!!?」
炎の弾丸に呑み込まれた早見にサンダーザキングの三つ首からレーザーを放ち、その身体を貫いた。

文愛　ＬＰ３９００→６００

「くうっ……何とか耐えきりましたか。手札はありませんが、何とか次のターンに逆転してーーー」
「いいえ、残念ながら次はないわ!!?速攻魔法、ライバルアライバル!!

？自分・相手のバトルフェイズにモンスター１体を召喚する‼？」
「っ‼？この状況でさらなる召喚を……これが、デュエルアカデミア高等部学年４位『壊獣姫』の実力‼？」
「決めるわよ、相棒‼？妖精伝姫―カグヤを召喚‼？」
『ようやくクライマックスね‼？最後は私に任せなさい‼？』

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ１８５０

「妖精伝姫―カグヤでダイレクトアタック‼？タツノクビノタマ‼？」
『私の必殺技、パート１‼？』
カグヤは着物の中から綺麗な玉を取り出し、綺麗な投球フォームで早見に向かって投げつけた。
「うああっ‼？」

早見　ＬＰ６００→０

『綺麗に決まったわね』
「それも毎回言う気なのね」

ーーーーーーー

★

「私の勝ちね」
「宝月さんを貫くだけの速さが足りませんでしたか……とはいえ、取材にご協力ありがとうございました‼？『壊獣姫』の新戦術、これは特ダネとしてばっちりです」
「……立ち直るのも早いわね」
「ええ、それが私の取り柄ですから」

そういって、デュエルを終えた桜ちゃんと早見さんが笑い合う。
凄いデュエルだった。
後攻1ターンキルを狙おうとした早見さんも、それを受け切って逆転した桜ちゃんも……自分の思いをカードに乗せて、お互いに真っ向からぶつかり合っていた。
そして、2人のデュエルを見て自分の至っていない点に気づいた。
今朝の師匠とのいざこざで、私は自分の気持ちを素直に師匠に伝えられていなかった。
師匠が心配だから、師匠のお手伝いがしたいということを。
紅葉さん達が心配なのは本当だ。
だけど、その紅葉さん達を言い訳のように理由に使い、私がこの事件に深く関わろうとするのは違う。
きっと、師匠は私が師匠の負担を少しでも減らそうとしていることに気づいていると思う。
だけど、察してくれていることを理由に、それを伝えずにいるのはフェアじゃない。
本当に師匠が心配なら、本当に師匠のお手伝いがしたいのなら、自分の気持ちを言葉にして真っ直ぐに伝えるべきだったんだ。
「さて、それでは約束の報酬です。私が掴んでいる行方不明事件の情報をお伝えしましょう」
私が自分の至らなかった部分を後悔していると、早見さんが早速行方不明事件の情報を話そうする。
そんな早見さんに桜ちゃんはチラリと私を見て口を開く。
「あー早見。それ、風紀委員会の教室で話して貰っていいかしら？ほら、わざわざ風紀委員会で同じ話をしてその情報が正しいか確認に来られたら時間の無駄でしょ？」
「それは……ああ、そういうことですか。確かに、それは時間の無駄かも知れません。では、直接風紀委員会でお話するとしましょう。なので、宝月さん達は他のことをなさっていても構いませんよ。私から風紀委員会にはお話しておきますので」
「ありがとう。だけど、私も行くわ。アンタの取材もちゃんと受けな

いといけないし。でも、もし他に何か用があるんだったら、みんなは帰ってもいいわよ？私から風紀委員会には伝えておくから」
　そういって、桜ちゃんがわざとらしく私達を見る。
　そんな桜ちゃんを見て、皆が柔らかい笑顔を浮かべた。
「私も行く。霊兎に会いたいから」
「アンタは直球ね、御子神」
「俺も遊花達みたいに臨時風紀委員って奴に入れて貰わないといけないから行くぜ」
「それじゃあ私も‼？それが終わったら大地君に調査に付き合って貰いたいし‼？」
「結局みんな行くのね。別にいいのよ、これだけいれば1人ぐらい自分の用事を片付けに行っても」
　そういうと、桜ちゃんは私に向かってウィンクをする。
　……ああ、そういうことなんだ。
　やっぱり、優しいな、桜ちゃんは。
「あ、あの‼？私行きたいところがあって……報告、任せてもいい？」
「ふふっ、任せなさい。もう少ししたら暗くなってくるから、行きたい場所があるなら真っ直ぐに行くのよ？」
「うん……桜ちゃん」
「ん？」
　みんなに柔らかい笑顔で見つめらる中、私は教室の扉に手をかけながら桜ちゃんを呼ぶ。
　この胸の思いを言葉にして、真っ直ぐに、伝える。
「……いつも私の傍にいてくれてありがとう。いってきます」
「……ん、どういたしまして。いってらっしゃい」
　そんな桜ちゃんの言葉を背に私は扉を開けて校内を走り出す。
　向かう先は初めて師匠と出会ったあの公園。
　何だか師匠はそこにいる気がする。
　師匠に会ったらまずは今朝のことを謝らないと。
　そして、今度こそちゃんと言うんだ。

師匠が怪我をしないか心配なんです、だから私にお手伝いさせてくださいって。
許してくれないかもしれない。
それでもちゃんと、自分の思いを師匠にぶつけて、私と師匠がお互いに求める答えを探すんだ。
そんなことを考えながら、校内から出ると、私の携帯端末が着信を告げた。
私が携帯端末に目をやると、そこに映るのは師匠の名前だった。
「……すー……はー……よし」
私は大きく深呼吸をすると、気合いを入れて着信を取る。
「もしもし、あの、師匠、ですか？その、今朝はーーー」
『……はぁ……はぁ』
「師、匠？」
携帯端末からノイズ混じりに師匠の息遣いが聞こえてくる。
だけど、その息遣いも少し遠くにあるようで偶然携帯端末の通話機能が作動してしまったかのようだった。
「あの、師匠ーーー」
『無様なものだな。地面を這うことしかできないのにまだ抗うというのか』
「っ⁉？」
携帯端末越しに、師匠の声ではない、どこか聞き覚えのある声が聞こえる。
『うる……せぇ、よ』
『強がりもここまでくると滑稽だよ。さあ、終わりの時だ』
「師匠……師匠⁉？」
師匠の苦しそうな息遣いと共にそんな声が携帯端末越しに聞こえ、私の心臓は早鐘を打つように早くなる。
今、私は何を聞いているのだろう？
信じたくない……それでも、残酷な現実は……その言霊を響かせる。
『真実と共に……闇に消え去れ、結束　遊騎』

そんな言葉が携帯端末越しに聞こえてきたかと思うと、どこからか大きな爆発音が聞こえてくる。
私が慌てて辺りを見回すと、ある一箇所から爆煙が上がっていた。
そこは初めて師匠と出会ったあの公園。
「っ‼？師匠ー‼？」
私は全速力で公園に向かって走り出す。
朝から立ち込めていた暗雲から、大粒の雨が降りはじめていた。

第７６話　闇に沈む希望

☆

もし、過去に戻れるなら。
そんな後悔を、俺は何度も繰り返す。
大切なものを守るために、他の選択肢があったんじゃないかって。
だからこそ、これはきっとその選択肢を絶った俺への、世界が下した呪い。
どこまでも愚かで傲慢な俺への……消えることがない呪いだ。

ーーーーーーー

「……」
「消沈しているね、遊騎君。後悔しているのかい？」
「……まあ、ね」
遊花と仲違いをしてしまった後、俺は島さんにとある頼み事をするために『Ｎａｔｕｒａｌ』を訪れていた。
本当はすぐにでも頼み事をして情報収集に出かけるつもりだったのだが、遊花との仲違いは余程堪えていたらしい。
俺の表情から何かがあったことに気付いた島さんにコーヒーを入れてもらい、気づけば今朝何があったかを話していた。
「もっとさ、別の選択肢があったんだろうなって、思うんだよ。遊花も俺も、両方が納得できるような選択肢が。だけど、やっぱり俺は馬鹿だから、間違った選択肢を選んだんだろうなってことが、終わってからじゃないと分からない」
「……間違った選択肢かどうかは、遊騎君次第だと私は思うよ」
「えっ？」
島さんの言葉に、俺は思わず目を見開く。
戸惑う俺に、島さんは諭すように言葉を紡ぐ。

「確かに、今回遊騎君は遊花君を思いやるあまり、遊花君と仲違いをしてしまった。だが、仲違いなんてものは、生きていれば誰とでも起こり得ることだ。問題は、仲違いをした後、君がどうしたいかだ」
「俺が、どうしたいか？」
「そうさ。自分の気持ちを譲らず、遊花君と気持ちをぶつけ合っていくのか。遊花君のことを慮り、遊花君の気持ちに寄り添っていくのか。どちらが正しい、ということはないよ。これは人の想いの問題だからね」
「正しいが……ない」
「そうさ。遊花君の安全を考えれば、遊騎君がしたことは正しい。だが、遊騎君の安全を考えるなら、遊花君が正しいんだ。遊騎君は遊花君のことを慮るあまり自分のことを蔑ろにし過ぎた。だが、遊花君も遊騎君を慮るあまり、自分を蔑ろにしようとした。第三者である私から突き放すような言い方をすれば、どっちもどっちと言えるだろう」
「……」
「遊騎君が悪い。でも、遊花君も悪かった。ならば、折り合いをつける方法はあると、私は思うけどね」
「……手厳しいな、島さんは。でも……そっか。うん、ありがとう、島さん」
「どういたしまして、だね。私は君達の選択がどうであれ、君達を支えよう。子供のやりたいことを支えてやれない大人なんて、かっこ悪くてかなわないからね」
そういって笑う島さんを見て、俺も思わず笑みを浮かべた。
思えば、俺が悩んだ時にいつも道を示してくれたのは島さんだった。
本当に感謝してもしたりない。
いつか、返せるだろうか？
島さんが貰った沢山の恩義を。
「さて、それじゃあ本題に入るとしよう。私に何か頼み事があるんだったね」
「……ああ。島さんには、これを預かっててて欲しいんだよ」

「これは……」
そういって、島さんのいるカウンターに数枚のカードを置く。
「Ｎｏ．にＲＵＭ……それに、ＣＮｏ．……遊騎君、君は……」
俺が置いたのは白紙に戻ったものを除いた、カオスオブアームズやバリアンズフォースを含めた俺が手に入れてきた闇のカード。
俺は険しい表情を浮かべる島さんに、真剣な表情で口を開く。
「昨日、今回の事件の黒幕に関する手掛かりになりそうな情報を手に入れてさ。今日はそれを調べにいくつもりなんだ。だけど、この情報は黒幕にとってもアキレス腱だ。気づかれたら、まず間違いなく襲われるだろう。もし、万が一にも俺が負けたらこのカード達が奴らに渡っちまう。それだけは避けたいんだ」
「……負けた後のことを考えるなんて、随分弱気じゃないか。君らしくもない」
「まあね。だけど、相手は闇のカードを生み出してる奴らだ。どんな悪辣な手を使ってくるか分からない。おまけに、アイツらはよく分からない空間に俺を引きずりこむことができる。襲われたらまず逃げられない。リスクはできるだけ減らしたいんだ。それに……」
俺はカウンターの上においたコートオブアームズのカードを手に取る。
「この事件に関わるきっかけになったカードではあるんだけどさ、何だかんだで気に入っちまったんだよ、コイツのこと。闇のカードだけど、コイツは俺のことを試しながらも、何度も助けてくれた。だから、コイツを他の誰かに悪用なんて、させたくない」
「遊騎君……分かった。君が受け取りにくるまで、責任を持って預からせて貰うよ。だから、必ず君が受け取りに来るんだ。そのカードも、きっとそれを望んでいるよ」
そういって島さんが柔らかな笑みを浮かべる。
俺はそんな島さんに心の中で謝りながら、コートオブアームズをカウンターに置いた。
「ああ。それじゃあ、行ってくる」
「ああ、いってらっしゃい。君の無事を、心から祈っているよ」

そんな島さんの言葉を背に受けながら、俺は『Ｎａｔｕｒａｌ』を後にし、自分のバイクに跨ってケルンの街を走り出す。
俺の頭の中には、昨日空閑から聞いた話がずっと頭の中を巡っていた。

ーーーーーーー

「闇のカード……そいつが東風谷を操ってたと、テメェは言いたいのか？」
「ああ」
俺の言葉に、空閑は舌打ちをして不機嫌そうな表情を浮かべる。
「チッ、とんだオカルトだと笑い飛ばしたいところだが、実際に東風谷は行方不明になっている間に何かを行い、こうしてテメェを襲っている。頭がいてぇ話だぜ」
「この東風谷って子が行方不明になった２日前だったよな？その時に何か変わったことはなかったか？」
「俺様達だっていつも連んでるわけじゃねぇ。俺様も先公に聞かれなければ気づかなかった。正直覚えてもいねぇよ」
「……そうか」
空閑の言葉に、俺は難しい表情を浮かべてしまう。
取り巻きとはいえ別行動をすることもあるなら気づくのに遅れても仕方がない。
そのうえ普段から意識して集まってるんじゃないのなら尚更のこと。
やっぱりこの情報からは先に行けないか？
そんなことを考えていると、空閑がふと思い出したかのように口を開く。
「だが、そうだな……同じように連んでる奴が、東風谷のことで妙な事を口にしていたな」
「妙なこと？」
「ああ。東風谷が数日前から外部講師に呼び出されたって話だ」

「外部講師？」
外部講師と言われ、闇の姿が思い浮かぶが、それはないだろうとその考えを打ち消す。
ただでさえ、闇はデュエル以外のことにほとんど興味がない。
先程デュエルをした感じだと、闇が興味を抱く程のレベルではないだろう。
となると、別の外部講師か？
「ああ。『氷の女王』と同じ日に講師をすることになったカードデザイナーに呼び出されたらしい。何でも『講義で行なったカードデザインについて話がある』って呼び出しだったらしい。東風谷の奴もあまり乗り気じゃなかったが、先公の呼び出しを無視して面倒事になっても俺様に迷惑がかかると言って呼び出しに応じたらしいぜ」
「カードデザイナー……なあ、講義で行なったってことは空閑達もデザインをしたのか？」
「ああ、外部講師の講義は必修だ。サボれば留年が決まっちまう。面倒ではあるが、俺様も勧誘されている手前参加せざる得なかった」
その空閑の言葉に、俺はあることに思い至る。
俺が初めてヘイムダルとデュエルをした時に戦ったロンゴミアント。
あれは闇のカードでありながら俺が使うＨ－Ｃのカテゴリーに含まれていた。
そして奴はロンゴミアントを『闇のカードを研究し、既存のカードをベースとして変容させた』と言っていた。
確証と言える程のものではない。
だが、カードデザイナーとはそもそもカードを生み出す者だ。
それならば、もしそんな奴に闇のカードを生み出す力があれば。
そして、もしそんな奴を刺激するようなデザインが大した労力も得ずに手に入る場所があるならばーーー
「……なあ、その外部講師の名前はなんて言うんだ？」
「ほう、アイツを疑ってんのか。まあ、テメェの話を聞けば疑う理由も分かるがな」

「……言っとくが、危ないから下手に刺激すんなよ？」
「テメェに指図される筋合いはねぇな」
「薮蛇だったか……お前が闇のカードに操られるようなことがあれば問答無用でぶっ倒してやるからな」
「そんなチンケなもんで俺様を従わすことができるならな。まあいい。そいつの名前はーーー」

ーーーーーー

「天神　幻騎、か」
昼過ぎ。
栗原家にバイクを置いてきた俺は立派な噴水が設置された中央エリアの駅前広場でベンチに腰をかけながらその名前を呟いていた。
午前中の内に行った情報収集では大した情報を得られなかった。
分かったことといえば、天神　幻騎は世界的に活躍しているカードデザイナーであるということぐらいだ。
やはり正規の情報収集では集めるのにも限界がある。
となればーーー
そこまで考えたところで背後から誰かの気配を感じた。
その気配は頑張って気配を消しながらゆっくりと近づいてきているが、強烈な視線を感じるせいで全然気配を隠せていなかった。
俺はため息を吐きながらわざとらしく空を見上げて呟く。
「……美傘、新しい街でも、元気にやってるかな？」
「私ここにいますよ⁉？この街、出て行ってないですよ⁉？」
背後から大声でそんなツッコミがとんでくる。
俺が振り返ると、そこでは変装用なのか眼鏡をかけ、ゆったりとした黒のパーカーに青色のロングスカートというカジュアルな服装をした美傘が腕をブンブンと振り回しながらツッコミを入れていた。
そんな美傘に、俺はわざとらしく驚いた表情を浮かべる。
「おお、美傘。いたのか？」
「絶対気付いてたよね⁉？そういうの良くないよ⁉？」

「で、何しようとしてたんだよ？」
「うっ、そ、それは……」
俺の問いかけに美傘はあからさまに目を逸らす。
そんな美傘に俺はため息を吐きながら笑みを浮かべる。
「まぁ、だいたい想像はつくけどな」
「はぅ……やっぱり遊騎さんには敵わないや……」
「背後から忍び寄ってコブラツイストでもくらわせようとしたんだろ？」
「想像ついてないよ⁉？見当違いも甚だしいよ⁉？」
俺の言葉に美傘が驚愕に目を見開く。
まあ、そんな反応をするのが分かってて言ってるんだけどな。
「で？こっそり背後から近付いて、抱きついて驚かせようとでもしたのか？」
「うっ……流石は遊騎さん……こういう時は気持ち悪いくらいに鋭い」
「気持ち悪いは余計だ。お前が分かりやすすぎるんだよ」
俺の言葉に美傘が項垂れる。
まあ、美傘は分かりやすいぐらいがちょうどいいと思うけどな。
「それで、遊騎さん。今日は何の用なの？私をわざわざ呼び出すなんて、初めてだよね？……はっ⁉？まさか、愛の告白⁉？ダメだよ～私がいくら可愛いからって～」
そういって美傘がわざとらしく茶化してくる。
何となく、俺の雰囲気からどんな内容なのかを感じているのだろう。
本当に、今日は気を使われてばかりだ。
それはそれとして、こうして茶化されると少しからかってやりたくなる。
だから、俺は真剣な表情を浮かべて美傘に近寄る。
「そうだと言ったら、どうする？」
「……ほぇ？」
俺の言葉に美傘が分かりやすく固まる。

そして固まった美傘の耳元で真剣な声色で囁く。
「本当に、愛の告白だったら、どうする？」
「ほによっ⁉？」
俺の言葉に、美傘の顔が一瞬で林檎のように真っ赤になっていく。
そして目をぐるぐると回しながらうわ言のように言葉が漏れていく。
「ゆ、ゆゆゆゆうきしゃん⁉？あ、あの、あのあの、みかさも、いやじゃ、にゃい、けど、けど‼？あぅ、あぅぅぅ‼？」
「……なーんて、冗談だ。これに懲りたら歳上をからかうのは……って、美傘？」
「……ぷしゅー」
「美傘⁉？」
そして今までの比ではないほど……もう他の人種に変身したんじゃないかと思う程真っ赤になった美傘は奇妙な声を出すと、その場でふらりと倒れ込みそうになり、慌てて身体を支える。
「き、気絶してる……ええ？自分でそういう流れを振ってきたのに？」
真っ赤になったまま気絶した美傘を見て、心配するよりも先に困惑してしまう。
自分でからかうように言ってきた癖に、からかい返されて気絶するとは……
「美傘……残念すぎる」
何とも言えない微妙な気分になりながら、俺は気絶した美傘をさっきまで座っていたベンチに運んで介抱するのだった。

ーーーーーーー

「ぐすん、また辱められた……乙女の純情を弄ばれた……」
「いや、まあ、今回は俺も悪かったよ。まさか美傘がここまで残念な奴だとは思ってなかったんだ、すまん」
数分後。

気絶から覚めた美傘を連れて近くのカフェでお茶をしながら、先程の茶番を引きずる美傘を慰める。
まさかあの程度の演技で気絶するとは流石に俺も予想ができなかった。
先程は心配よりも困惑が勝っていたが、改めて考えると美傘の今後が心配になってくる。
「むぅ……まあ謝ってくれるなら……あれ？本当に謝られてる？なんか馬鹿にされてない？」
「……はぁ～本当に残念だな、美傘は」
「やっぱり馬鹿にされてるよね⁉？」
俺の微妙な謝罪の言葉に騙されかけて驚愕の表情を浮かべる残念な美傘を見て、俺は思わずため息を吐く。
「お前、もうちょっとしっかりした方がいいぞ？あんな簡単に狼狽えて、あんなんじゃ悪い男に捕まっちまうぞ？」
「……あれはむしろ遊騎さんだったから狼狽したんだけど」
「？何か言ったか？」
「うー何でもないですよー」
何事かを呟いた美傘に尋ね返すと注文したコーヒーを口にしながら拗ねたように顔を逸らす。
全く、本当に心配になってくるな、美傘は。
「お前は可愛いんだから、その手の輩が寄ってこないとも限らないんだぞ？もう少し緊張感と落ち着きを持ってだな……」
「っ⁉？～～～～～っ⁉？けほっ⁉？けほっ⁉？」
「うぉい⁉？大丈夫か⁉？」
飲んでいたコーヒーが気管に入ったのか、いきなり目を白黒とさせながらむせ込んだ美傘を慌てて介抱する。
本当に落ち着きがなさ過ぎるだろうコイツは。
しばらくしてむせこみが治ると、美傘は再び頬を赤く染めながらあわあわと口を震わせる。
「ゆ、遊騎さん？い、今、なんて？」
「は？いや、だからもう少し緊張感と落ち着きを持って」

「その前!!?・その前になんて言ったの!?・?」
「その前?……ああ、お前は可愛いんだから?」
ようやく質問されていることが分かって自分が言ったことを復唱する。
すると美傘は頭から湯気をーーーって湯気!?・?
そんな馬鹿な……漫画じゃあるまいし……いや、でも、目を擦ってもやっぱり湯気みたいなものが見えるーーーって、あれ美傘の霊魂じゃないのか!?・?
「み、美傘!!?・」
「はうっ!!?・」
俺が声をかけると、湯気みたいなものが美傘の中におさまる。
本当に霊魂が抜け出てたのかよ……
「どうしたんだお前、変だぞ?いや、いつも奇怪な行動が目立ちはするけど」
「余計なお世話だよ!!?・そして遊騎さんには言われたくないよ!!?・」
怪訝な表情を浮かべると美傘はきっぱりとそう言う。
失礼な。
俺は美傘に比べれば絶対に一般人だ。
俺程一般的な青年も今時珍しいぐらい普通だろ、俺は。
「……うぅ〜遊騎さんが天然なのは知ってたけど、これ以上私のハートにダイレクトアタックされたら保たないよ……」
「だから、何をぶつぶつ呟いてるんだよ?」
「う〜〜〜!!?・べっつにぃ〜何でもないですよーだ!!?・」
「何故怒る?」
「何でもないったら!!?・それで、結局遊騎さんの用事は何なの?可愛い可愛い後輩の美傘さんだって忙しいんですからね!!?・」
「何故可愛いを強調する?」
そういって美傘が強引に話を切り替えようとする。
よく分からないが、触れて欲しくない部分のようだ。
まあ、俺も時間に余裕があるわけじゃないし、そろそろ本題に入るとしよう。

「まあいい。わざわざ呼び出したのは、ちょっと知りたい情報があってな」
「知りたい情報？」
「ああ、天神　幻騎ってカードデザイナーだ。知ってるか？」
　俺が本題を切り出すと、美傘が真剣な表情で自分の携帯端末を操作し、こちらに見せる。
　差し出された携帯端末に映っていたのは柔和な笑みを浮かべる黒髪をオールバックにした男だった。
「世界的に活躍しているカードデザイナーであり発明家、天神　幻騎。年齢　２６歳。デュエルモンスターズの流通に関与している会社の１つ、『Ｓｃｈｏｐｆｅｒ（シェプファー）』の現社長。幼少期からカードデザイナーの仕事を手伝い、１２歳という若さで『幻影騎士団』等の数々の有力カテゴリーを生み出し、天才の名を欲しいままにした。また発明家としての才能も有しており、彼の功績により現代におけるソリッドビジョン技術は数十年進んだと言われる。理論段階であった仮想立体触感（バーチャルソリッドフィール）やリアルソリッドビジョンの第一人者となり研究を進めており、技術の実用化も近いと言われている。２年前に元社長であり父親である現在の世界ランキング２位、『神秘』天神　幻時（あまがみ　げんじ）がプロリーグに専念するため社長の座を譲り渡され、現在も社長という立場でありながら様々なカードを生み出す多忙な日々を送っている。その実生活は謎に包まれており、ケルン中に隠れ家を作り、そこで試作品のカードを生み出していると噂されている」
「……思ったより情報が出てきたな」
「まあ、少し理由があって調べてたからね。まあ、私が調べてたのは『神秘』の方だけど」
「父親の方を？」
「うん。まあ、理由は内緒ってことで。今はまだ語るべきときではないってやつだよ」
　そういって美傘が何処からわざとらしく笑う。
　……気にならないわけではないが、今俺が求めているのは父親ではなく天神　幻騎の情報だ。

余計なことにかまけて足元をすくわれたのでは目も当てられない。
ここは当初の目的だけを達成することを考えよう。
「……分かった、今は聞かない。それで天神　幻騎のことで美傘が知ってるのはそれだけか？」
「まあ、些細な噂話とかはあるけど、何でそんなに天神　幻騎の情報を欲しがるの？もしかして、何か特ダネになりそうなこと？」
そういって茶化すような口ぶりだが、表情は真剣なままで美傘が尋ねてくる。
俺の推測が外れているならともかく、当たってしまっていた場合、美傘の身にまで危険が及ぶ可能性がある。
今ならまだ誤魔化すこともできるが、そうなるとこれ以上の情報は集まらないかもしれない。
さて、どこまで話すべきか……
「遊騎さん。前に遊騎さんが入院した時に私が話したこと覚えてますか？」
「え？」
躊躇する俺を見て、美傘は真剣な表情のまま、珍しく敬語を使って口を開く。
「私がこうしてプロ決闘者を続けられているのは新人時代に遊騎さんに色々アドバイスして貰ったからです。私がこうしていられるのも、遊騎さんのおかげです。どんなに尽くしても返しきれないくらいに、遊騎さんには恩があります」
そういって美傘は柔らかい笑みを浮かべる。
「それを返すにはきっと一生かかっても足りません。だから、何がなんでも、遊騎さんのために役立ちたいです。私に、恩返しをさせてもらいたいです」
「……お前がプロ決闘者を続けられてるのは、お前が頑張ったからだ」
「そんな言葉、私には響きませんよ？だって、私は確固たる自信を持って言えます。その頑張れる力をくれたのは遊騎さんです。夢を諦めてプロリーグから去ろうかと考えてたあの日に、もう一度立ち上がる

力をくれたのは遊騎さんなんです」
「……」
「だから、遊騎さんが困ってることに、私の力が役立つなら、力を貸したいです。だって……だって、美傘さんは遊騎さんの可愛い可愛い後輩ですからね!!?」
そういって、真剣な表情から一転して戯けるように笑う美傘。
ただ、顔が林檎のように赤くなってることから真剣に心情を吐露したことに照れてるのが丸分かりだ。
そんな美傘に、俺は思わず笑みを浮かべてしまう。
本当に、誰かを笑顔にするのが得意な奴だよ、お前はさ。
「……ったく、照れ臭いなら最初から言わなければいいものを」
「て、照れてなんかないもん!!?エンターテイナーはこんなことぐらいじゃ照れないし!!?」
「どんな意地の張り方だよ……じゃあ、力を貸して貰ってもいいか、美傘?」
「!!?にひひ、まっかせて!!?不肖、雨夜　美傘!!?全力で頑張っちゃうよ!!?」
そういってキラキラとした笑顔を浮かべる美傘に俺は事の全容を話し始める。
美傘な俺の話に驚きながらも真剣な表情で話を聞き、そしてーーー

ーーーーーーー

「それじゃあ、また何か分かったら連絡するね?」
「ああ。とは言っても、無理はするんじゃないぞ?今日俺が相談したことも、基本的には内緒だからな」
「モチのロンだよ!!?遊騎さんとの密会をわざわざ言いふらしたりしないって。遊騎さんも無茶なことはしないでね?」
「善処する」
「うわー絶対無茶するやつだ」
そういって美傘がジト目で俺を見る。

だが、こればかりは闇のカードをばら撒いている連中次第だ。
俺はただ闇のカードをばら撒いている奴を探しているだけだから、襲われるのは不可抗力だ。
「遊騎さんはこれからどうするの？」
「とりあえず奴が外部講師をしているデュエルアカデミアに行ってみるつもりだ」
「そっか、デュエルアカデミアには遊花ちゃん達もいるもんね。情報共有と危機管理は必要だもんね」
「ん……まあ、な」
「遊騎さん？」
急に歯切れが悪くなった俺を見て美傘が首を傾げる。
そんな美傘に俺は首を振って応える。
「いや、何でもない。それじゃあ情報収集、頼んだぜ。くれぐれも、気をつけてな」
「分かってる。それじゃあねー」
そういってブンブンと手を振りながら去っていく美傘を見送り、俺も雨が降り出しそうな曇り空の中、デュエルアカデミアへの道のりを歩いていく。
美傘から得られた情報はとても有力な情報だった。
そしてこの情報の真偽を確かめるには虎穴に入るしかない。
とはいえ、その前に遊花達にこの情報を伝えておくべきだろう。
でも、その前に……
「謝らないとな……遊花に」
デュエルアカデミア前にあるいつもの公園に差し掛かったところで、俺はそんなことを呟いて携帯端末を操作し、遊花の番号を映し出させる。
俺は自分の命が価値のあるものだと思っていない。
だからこそ、俺がいくら傷つこうが遊花達の日常を守れるなら構わないと思っている。
その考えは微塵も変わっていない。
だけど、それでも遊花達にとっては、こんな価値がない俺でも傷つ

くのが許容できないのだろう。
それは、きっと俺が遊花達に穏やかな日常を送って貰いたいのと同じ気持ちで……
「……いや、謝るなら直接の方がいいよな」
そういって携帯端末の画面を消そうとしたところでーーー
『見つけたぞ、結束　遊騎』
ーーー後ろから何かの声がした。
振り向くと、そこにいたのは黒の装甲のようなスーツに黒いヘルメットを被った男。
闇のカードを生み出している元凶ーーーヘイムダルが木の陰からこちらを見ていた。
俺は極めて平静を装いながら、携帯端末をポケットにしまい込み軽快な声で話しかける。
「よう、まさかこんなところで会えるなんてな、ヘイムダル。いや、それともこう呼んだ方がいいのか？『Ｓｃｈｏｐｆｅｒ』現社長、天神　幻騎さん？」
『……何のことだ？』
「惚けんなって。アンタが第一人者なんだってな、立体映像を現実化させ、衝撃波のような物理的なダメージとして現れさせる仮想立体触感に立体映像を完全に実体化させるリアルソリッドビジョン。あの閉幕世界（クローズワールド）とかいう謎空間はそれを応用してるって訳か」
『……驚いたよ。まさかそこまで調べあげ、推理しているとはね』
そういってヘイムダルがこちらに歩みよりながら黒いヘルメットについてあった機械のスイッチを押すと、黒い装甲がデータのように消えていく。
そして木の陰から姿を現したのは黒髪をオールバックにした男ーーー天神　幻騎だった。
「へぇ、そのヘンテコな装甲もリアルソリッドビジョンだったってわけか」
「君には敵わないな。どうだ、取引をしないか？」
「取引だ？」

幻騎の言葉に俺は眉を顰める。
そんな俺に幻騎はスーツの胸ポケットから小さなケースを取り出すと俺に差し出した。
「君にプレゼントをあげよう」
そういって幻騎がケースを開けると、そこにあったのは金色の翼を持つ戦士。
「っ、Ｎｏ．３９　希望皇ホープ……」
俺はなるべく平静を装いながらそのカードに目をやる。
かつて異世界、そしてこの世界で共に戦った少女が所持していたＮｏ．。
まさかこの世界にも存在していたなんてな。
「このカードはとても強力な力を持つＮｏ．だ。このカードを研究したことにより、現在ケルンに蔓延しているＮｏ．は生み出されている」
「っ⁉？このカードから他のＮｏ．を生み出された……そんな貴重なカードを俺に渡そうってのか？」
「そうだ。そしてもう１つ、君の弟子だそうだね、栗原　遊花君は」
「っ‼？」
幻騎の口から遊花の名前が出てきたことで俺の心臓がドクンと大きいな音を鳴らす。
コイツ、俺と遊花の関係まで知ってるのか？
「そう怖い顔をしないでくれたまえ。もう１つの条件、Ｎｏ．３９希望皇ホープを渡すのを含め、君の弟子である栗原　遊花君には手を出さないことを約束しよう。代わりに、私のことについて公表しないで貰いたい。これでも、重要な立場にいるからね」
そういって、幻騎は笑顔でホープを俺に差し出してくる。
俺はしばらく考え、差し出されたホープを手に取った。
「乗った……なーんてな、ふっ‼？」
「おっと‼？」
そう言いながら勢いよくケースを蹴り飛ばし、幻騎を狙うが、何なく躱される。

あわよくば直撃して気絶してくれればと思ったが、そう上手くはいかないか。
「逃しやしない。ここでお前を倒せばこれ以上闇のカードが広まるのも止まるし遊花が狙われることはない‼?･行方不明になってるデュエルアカデミア生の居場所も洗いざらい吐いてもらうぞ‼?･」
「まさか強盗してくるとはな。やはり、決着はデュエルでつけるしかないか」
そういって幻騎がデュエルディスクを起動する。
俺のデッキの中にＮｏ．は入っていない。
このデュエルで幻騎がＮｏ．を使ってきても、このままじゃ回収することはできない。
それならと、俺はデュエルディスクを起動し、先程手に入れたホープのカードをデュエルディスクにセットする。
「さあ、懺悔してもらうぜ?･今まで闇のカードに傷つけられてきた人達に‼?･」
「クックック、君にできるものならな」
『決闘‼?･』

遊騎　ＬＰ８０００
幻騎　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は俺か」
幻騎のデッキは幻影騎士団と星因士というモンスター達の混合デッキだったハズだ。
幻騎騎士団はサーチが行える多彩な罠でこちらの動きを妨害し、星因士はモンスター除去や妨害を行なってくるモンスター達だと記憶している。
さらに幻騎は闇のカードを生み出している元凶。
もたもたすれば、どんな強力な闇のカードが現れるか分からない。

それならば、最初から全力で動くしかない。
「魔法カード、予想ＧＵＹを発動‼?自分フィールドにモンスターが存在しない場合にこのカードは発動できる。デッキからレベル４以下の通常モンスター１体を特殊召喚する‼?来い、クィーンズナイト‼?」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

俺の前に現れたのは赤い鎧を身に纏った女性の騎士。
「さらに俺はキングスナイトを召喚‼?」

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

さらにクィーンズナイトと並び立つように現れるのは黄金の鎧を身に纏った騎士。
そしてクィーンとキングが揃った時、新たな騎士が姿を現わす。
「キングスナイトの効果発動‼?自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト１体を特殊召喚する‼?集え、絵札の三銃士‼?来い、ジャックスナイト‼?」

〈ジャックスナイト〉☆５　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

クィーンズナイトとキングスナイトの剣に合わせるように剣を掲げると、青い鎧の騎士が現れる。
「ふっ、馬鹿の１つ覚えか」
「否定はしねぇよ、絵札の三銃士は俺が１番信頼するモンスター達だ。だが、俺のデッキだって前にデュエルした時より進化している。それ

をお前に教えてやる!!?斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
「リンク召喚か……」
俺が正面に手を前に突き出すと、目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター2体!!?俺はクィーンズナイトとキングスナイトの2体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?追想に生きる王女!!?リンク2!!?聖騎士の追想　イゾルデ!!?」
〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

クィーンズナイトとキングスナイトがサーキットの中に消え、今度は俺のフィールドにイゾルデ達が現れる。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?リンクレカレクション!!?リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター1体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキから魔装戦士ドラゴディウスを手札に加える!!」
「ほう、ペンデュラムモンスター……君も新たな力を手に入れていたか」
「聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動!!?メモリーズギフト!!?デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター1体をデッキから特殊召喚する!!?俺はデッキから妖刀竹光、最強の盾、ビッグバンシュート、閃光の双剣―トライス、孤毒の剣を墓地に送り、デッキから天融星カイキを特殊召喚!!?」
〈天融星カイキ〉☆５　戦士族　光属性
ＤＥＦ２１００

俺のフィールドに現れたのは鬼の顔の鎧を見に纏った鎧武者。
「天融星カイキの効果、それにチェーンして墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える。俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える。そして天融星カイキの効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、ライフポイントを５００を払って発動できる!!?」

遊騎　ＬＰ８０００→７５００

「自分の手札・フィールドから、戦士族の融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をＥＸデッキから融合召喚する!!?俺はフィールドのレベル５以上の戦士族モンスター、ジャックスナイトと天融星カイキを融合!!?」
「ほう、モンスター効果で融合召喚か!!?」
カイキが雄叫びをあげると、空に見える星が輝き、カイキとジャックスナイトを照らす。
その光に導かれるように、カイキとジャックスナイトは粒子に変わり、混ざり合う。
「天に融けし戦士よ、絵札の三銃士よ!!?今交わりて、勝利を照らす星となれ!!?融合召喚!!?」
混ざり合った粒子が輝くと、その場に現れたのは漆黒のマントを羽織り、巨大な槍を持つ鬼神。
「勝利を告げる明星!!?覇勝星イダテン!!?」

〈覇勝星イダテン〉☆１０　戦士族　光属性
ＡＴＫ３０００

「覇勝星イダテンの効果発動!!?このカードが融合召喚に成功した場合、デッキから戦士族・レベル５モンスター１体を手札に加える!!?

俺はデッキからターレットウォリアーを手札に加える!!?そして覇勝星イダテンの効果発動!!?神行法!!?1ターンに1度、手札を任意の枚数捨ててこのカードの攻撃力を捨てた数×２００ポイントアップさせる!!?俺は手札の妖刀竹光を捨てて、覇勝星イダテンの攻撃力を２００ポイントアップさせる!!?」

覇勝星イダテン
ＡＴＫ３０００→３２００

「墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?デッキから折れ竹光を手札に加える!!?そして聖騎士の追想　イゾルデに装備魔法、折れ竹光を装備!!?魔法カード黄金色の竹光を発動!!?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローする!!?」
「チッ、また手札を増やすか……」
「まだまだ行くぜ!!?魔法カード、蛮族の狂宴ＬＶ５!!?自分の手札・墓地から戦士族・レベル５モンスターを2体まで選んで特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは、効果が無効化され、このターン攻撃できない。蘇れ、ジャックスナイト、天融星カイキ!!?」

〈天融星カイキ〉☆５　戦士族　光属性
ＤＥＦ２１００

〈ジャックスナイト〉☆５　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

「レベル５モンスターが2体。ということは……」
「俺は光属性レベル５の天融星カイキ、ジャックスナイトでオーバーレイ!!?2体の光属性モンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」

カイキとジャックスナイトが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から純白の鎧を見に纏った戦士が降りてくる。
「星々を守りし光の戦士!!?セイクリッドプレアデス!!?」
〈セイクリッドプレアデス〉★5　戦士族　光属性
ＡＴＫ２５００
「やはり次はエクシーズ召喚か」
「まだだ!!?まだ終わらない!!?このカードは自分フィールド上の戦士族モンスター1体をリリースして手札から特殊召喚できる!!?俺は聖騎士の追想　イゾルデをリリースし、来い、ターレットウォリアー!!?」
〈ターレットウォリアー〉☆5　戦士族　地属性
ＡＴＫ１２００
イゾルテ達が粒子に変わり、その粒子が集まって砲塔のような戦士に姿を変える。
「この方法で特殊召喚したターレットウォリアーの攻撃力は、リリースしたモンスターの元々の攻撃力分アップする」
ターレットウォリアー
ＡＴＫ１２００→２８００
「攻撃力が２８００のモンスター……いや、君の狙いはエクストラモンスターゾーンを空けることか」
「その通りだ!!?俺はスケール２の魔装戦士ドラゴディウスとスケール７の魔装戦士ドラゴノックスでペンデュラムスケールをセッティング!!?」

「っ、ペンデュラムモンスターまで引き込んでいたか」
俺を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中に２体の戦士の姿が浮かびあがり、下に２と７の数字が現れる。
「これにより俺は３から６までのモンスターを同時に召喚可能‼？魂に宿りし剣よ‼？煌めく勇気となりて、運命を超える力を導け‼？ペンデュラム召喚‼？現れろ、俺のモンスター‼？」
俺がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって１つの光が舞い降りる。
「レベル３、チューナーモンスター、ジャンクチェンジャー‼？」
「チューナーモンスターだと⁉？」

〈ジャンクチェンジャー〉☆３　戦士族　地属性
ＤＥＦ９００

姿を現したのは鋼鉄の身体を持つロボットのような戦士。
そして俺はあの言霊を口にする。
「俺はレベル５、ターレットウォリアーに、レベル３、チューナーモンスター、ジャンクチェンジャーをチューニング‼？」
「来るか、シンクロ召喚‼？」
ジャンクチェンジャーが光の輪になり、ターレットウォリアーが小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から現れるのは機械の身体を持つ電子の巨人。
「迫る逆境、覆したるは不屈の闘志‼？シンクロ召喚‼？百折不撓の戦士、ギガンティックファイター‼？」

〈ギガンティックファイター〉☆８　戦士族　地属性
ＡＴＫ２８００

「ギガンティックファイターの永続効果、フォルテュードフォース‼？このカードの攻撃力は、お互いの墓地の戦士族モンスターの数×１

００ポイントアップする‼?」
「戦士の無念を攻撃力に変えるモンスターか……君に相応しい脳筋モンスターだな」
「余計なお世話だ‼?俺の墓地にいる戦士族モンスターはクィーンズナイト、キングスナイト、聖騎士の追想　イゾルデ、ターレットウォリアー、ジャンクチェンジャーの５体‼?よって攻撃力は５００ポイントアップする‼?」

ギガンティックファイター
ＡＴＫ２８００→３３００

「俺はカードを１枚伏せてターンエンド‼?さあ、どこからでもかかってこい‼?」

遊騎　ＬＰ７５００　手札０
△ー▲ー△　ー
○ー○ーー
○　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
幻騎　ＬＰ８０００　手札５

「まさか１ターン目からリンク、融合、シンクロ、エクシーズ、ペンデュラム召喚を行われるとは思っても見なかったよ。だが、その動きから伝わってくるぞ、君の焦りが」
「……」
「とはいえ、それを馬鹿にはすまい。才能あるものを恐怖するのは人として当然のこと、神の如き才能を持つ私を恐怖するのは当たり前なのだから‼?」
　そういって幻騎が愉快そうに笑う。
　態度から見て取れる過剰すぎる自信に、肥大したエゴ。

それが実力を伴い、なおかつ悪い方向に向いているのだからタチが悪い。
「さあ、存分に感じるがいい、私の才能を!!?私のターン、ドロー!!?私が引いたのはＲＵＭ（ランクアップマジック）ー七皇の剣（ザ・セブンス・ワン）!!?」
「っ!!?いきなりそのカードか!!?」
「このカード名の効果はデュエル中に1度しか適用できず、自分のドローフェイズに通常のドローをしたこのカードを公開し続ける事で、そのターンのメインフェイズ1の開始時に発動できる!!?私はＲＵＭ－七皇の剣を発動!!?ＣＮｏ．以外のＮｏ．１０１～Ｎｏ．１０７のいずれかをカード名に含むモンスター1体を、自分のＥＸデッキ・墓地から選んで特殊召喚し、そのモンスターと同じＮｏ．の数字を持つＣＮｏ．モンスター1体を、そのモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚する!!?ＲＵＭ－七皇の剣の効果でＥＸデッキより現れろ、Ｎｏ．１０４!!?偽善の仮面を被り、弱者に救いの光を与えよ!!?不吉なる仮面舞踏会の支配人、仮面魔踏士（マスカレードマジシャン）シャイニング!!?』

〈Ｎｏ．１０４仮面魔踏士シャイニング〉★４　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ２７００

現れたのは清廉そうな仮面をつけ、白いスーツに身を包んだ青いつばさを持つ魔術師。
「そしてＮｏ．１０４仮面魔踏士シャイニング1体でオーバーレイ!!?1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?カオスエクシーズチェンジ!!?」
シャイニングが空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りたのは清廉な仮面が黒く禍々しいものに代わり、全身が血で染まったかのような真紅のスーツを身に付けた邪悪なる魔術師。
「現れろ、ＣＮｏ．１０４!!?偽善の仮面を外し、愚者を冥府の仮面舞踏会に導け!!?絶望を告げる恐怖の死神、仮面魔踏士（マスカレードマジシャン）アンブラル!!

？」

〈ＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラル〉★５　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ３０００

「ＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラルの効果発動!!?ダンスマカブル!!?このカードが特殊召喚に成功した時、フィールド上の魔法・罠カード１枚を選択して破壊する!!?」
「っ、そんな効果も持っていたのか!!?」
「私が破壊するのは魔装戦士ドラゴノックスだ!!?」
　アンブラルが放つ魔術の暴風が光の柱にいるドラゴノックスを吹き飛ばす。
「破壊された魔装戦士ドラゴノックスはＥＸデッキに送られる」
「バトル!!?ＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラルでセイクリッドプレアデスを攻撃!!?ブラッディマスカレード!!?」
「セイクリッドプレアデスの効果発動!!?ゾディアックリターン!!?オーバーレイユニットを１つ使い、１ターンに１度、相手のカード１枚を手札に戻す!!?この効果は相手ターンでも使用することが出来る!!?俺はＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラルを手札に戻す!!?」
「無駄だよ。その効果にチェーンしてＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラルの効果発動!!?カースドリーパー!!?このカードがＮｏ．１０４仮面魔踏士シャイニングをカオスオーバーレイユニットとしている場合、１ターンに１度、相手フィールド上で効果モンスターの効果が発動した時、このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除き、その発動を無効にする!!?」
「くっ……」
「さらにその後、相手の手札をランダムに１枚墓地へ送り、相手ライフを半分にすることができるが、手札を墓地へ送らなければライフは半分にできない。今の君の手札は０、運がよかったね」
　プレアデスが放つ星の弾丸がアンブラルに向かって打ち出されるが、アンブラルが杖を振るうと、星の弾丸が黒いオーラを纏いながら

跳ね返され、プレアデスの視界を奪う。
視界を奪う星の弾丸に紛れ、アンブラルは踊るようなステップでプレアデスの背後に回り込むと頭部を杖で執拗に殴りつけ、撲殺した。

遊騎　ＬＰ７５００→７０００

「ぐあっ‼？……やっぱり、ダメージは実体化してるのか」
「メインフェイズ２。はてさて、折角のＣＮｏ．もカオスオーバーレイユニットが無くなってしまえばただのバニラモンスターだ。だからこそ、次の手を打たせて貰うよ。手札から速攻魔法、ＲＵＭ（ランクアップマジック）ー幻影騎士団（ファントムナイツ）ラウンチを発動‼？」
「っ⁉？幻影騎士団のランクアップマジック⁉？まだランクアップするって言うのか⁉？」
「自分・相手のメインフェイズに、自分フィールドのオーバーレイユニットの無い闇属性エクシーズモンスター１体を対象としてその自分のモンスターよりランクが１つ高い闇属性エクシーズモンスター１体を、対象のモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚し、このカードを下に重ねてオーバーレイユニットとする‼？私はＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラル１体でオーバーレイ‼？１体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築‼？ランクアップエクシーズチェンジ‼？」
アンブラルが空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りたのは黒いマントに身を包み、白き羽根を血と闇で染め上げた死神。
「恐怖の死神よ‼？愚かな魂を糧として、更なる絶望を蔓延させよ‼？現れろ、ランク６‼？巡死神（ピルグリム）リーパー‼？」

〈巡死神リーパー〉★６　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ？

「邪悪なる魔術師が完全な死神に堕ちたか」

「巡死神リーパーは攻守共に定まっていないモンスター。このカードの攻撃力・守備力は、お互いの墓地の闇属性モンスターの数×２００ポイントアップする。現在私達の墓地には闇属性のモンスターは存在しないため、攻撃力・守備力は共に０だ」

巡死神リーパー
ＤＥＦ？→０

攻守共に０。
だけど、ランクアップマジックを使って呼び出したモンスターの効果がそれだけとは思えない。
「巡死神リーパーの効果発動‼？カッティングスピリット‼？このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除き、お互いのデッキの上からカードを５枚墓地へ送る‼？」
「デッキ破壊のエクシーズモンスターか‼？」
リーパーが鎌を振るうと、俺と幻騎のデッキの上から５枚のカードが墓地に送られる。
短期決戦のために無理にデッキを動かしているから１ターン目を終えた段階でかなりデッキ枚数が減っている。
この効果を喰らい続けたら流石にマズイか。
「だが、巡死神リーパーの効果で墓地に戦士族であるＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）ダブルランス、Ｈ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）サウザンドブレードが墓地に送られた‼？墓地の戦士族モンスターが増えたことでギガンティックファイターの攻撃力が上昇する‼？」
「こちらの墓地にも戦士族である星因士（サテラナイト）デネブ、星因士（サテラナイト）シャム、幻影騎士団（ファントムナイツ）サイレントブーツが墓地に送られている」
「お互いの墓地に存在する戦士族モンスターは合計して１０体‼？よって攻撃力は１０００ポイントアップする‼？」

ギガンティックファイター
ＡＴＫ３３００→３８００

「それぐらい構わないさ。だが、墓地に落ちたカードはそれだけではない。墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?」
「何?」
「効果を説明する必要はないね。私はデッキから黄金色の竹光を手札に加える!!?」
幻騎がデッキから黄金色の竹光を見せ、手札に加える。
アイツのデッキにも竹光が入ってるのか?
……何だか嫌な予感がする。
「私は墓地に存在する幻影騎士団サイレントブーツの効果発動!!?このカードを除外し、デッキからファントム魔法・罠を手札に加える。私は永続罠、幻影霧剣(ファントムフォッグブレード)を手札に加える!!?」
「くっ、厄介なカードが手札に……墓地の戦士族が減ったことでギガンティックファイターの攻撃力も変動する」

ギガンティックファイター
ＡＴＫ３８００→３７００

「私はカードを2枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ７０００　手札０
ー－▲－△　　－
○－－－－
　○　　□
－－－－－
－－▲▲－　　－
幻騎　ＬＰ８０００　手札４

「俺のターン、ドロー!!?」
奴の伏せカード、１枚は間違いなく幻影霧剣。
面倒なカードだが、超えられないわけじゃない。

「俺は墓地に存在する速攻魔法、バスターモードゼロを除外して効果発動!!?自分メインフェイズに墓地のこのカードを除外して、手札・デッキからバスターモード1枚を選んで自分の魔法&罠ゾーンにセットする!!?そしてこの効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できる!!?俺はデッキから罠カード、バスターモードをセットする!!?」
「ほう、巡死神リーパーの効果で落ちていたか」
「バトル!!?覇勝星イダテンで巡死神リーパーを攻撃!!?天翔疾風撃!!?」
「止めるならばここか。リバースカードオープン!!?永続罠、幻影霧剣!!?フィールドの効果モンスター1体を対象としてこのカードが魔法&罠ゾーンに存在する限り、対象のモンスターは攻撃できず、攻撃対象にならず、効果は無効化され、そのモンスターがフィールドから離れた時にこのカードは破壊される。対象は覇勝星イダテンだ!!?」
イダテンに向かって闇の霧を纏った剣が放たれ、イダテンを貫いてその身体を霧に変える。

覇勝星イダテン
ＡＴＫ３２００→３０００

「続けてギガンティックファイターで巡死神リーパーを攻撃!!?ギガンティックブレイク!!?」
ギガンティックファイターは力強く跳躍するとリーパーを勢いよく蹴り飛ばした。
「巡死神リーパーが破壊されたか」
「さあ、ここからが本番だ!!?ギガンティックファイターをリリースし、リバースカードオープン!!?罠発動!!?バスターモード!!?」
「やはり追撃してくるか」
「自分フィールドのシンクロモンスター1体をリリースしてそのモンスターのカード名が含まれる／バスターモンスター1体をデッキか

ら攻撃表示で特殊召喚する‼?・アクセスコード、ギガンティックファイターＥＸＥ‼?」
ギガンティックファイターの正面にロケットがついた青いアーマーが現れる。
ギガンティックファイターがそのアーマーを蹴り飛ばすと、アーマーが弾け飛びギガンティックファイターに装着されていく。
装着が終わるとそこに佇むのは背中にロケットを背負った青いボディの電子の巨人。
「重甲合体‼?・ギガンテックファイター／バスター‼?」

〈ギガンテックファイター／バスター〉☆１０　戦士族　地属性
ＡＴＫ３３００

「ギガンテックファイター／バスター……」
「ギガンテックファイター／バスターの効果発動‼ノックアウトフォース‼??このカードが特殊召喚に成功した時、自分のデッキから戦士族モンスターを２体まで選択し墓地へ送る事ができる‼?俺はデッキからタスケナイトとＨ・ヒロイックチャレンジャー　Ｃエクストラソードを墓地に送る‼?そして追撃だ‼?ギガンテックファイター／バスターでダイレクトアタック‼?ギガンティックブレイクバスター‼?」
ギガンテックファイター／バスターは背中のロケットを使い勢いよく空へと飛び立つと、右手を幻騎に向け、左手で支えと、右手が銃口に変わり、銃口からレーザーが放たれる。
しかし、幻騎を貫かんと放たれたそのレーザーはいきなり軌道を変え、幻騎の身体を避けた。
「何⁉?」
「それは防がせて貰おう。リバースカードオープン‼?罠発動、幻影騎士団ウロングマグネリング‼?相手モンスターの攻撃宣言時にその攻撃を無効にし、その後、このカードはこのカード及び自分フィールドの表側表示の、幻影騎士団モンスター１体またはファントム永続魔法・永続罠カード１枚を墓地へ送って自分はデッキから２枚

ドローし、この効果を相手ターンでも発動できる戦士族・闇属性・レベル２・攻撃力守備力０の効果モンスターとなり、モンスターゾーンに攻撃表示で特殊召喚される‼?」

〈幻影騎士団ウロングマグネリング〉☆２　戦士族　闇属性
ＡＴＫ０

フィールドに現れた磁石の輪を持った戦士がその磁力によりギガンテックファイター／バスターのレーザーを引き寄せ、受け流す。
バスターモードによる連続攻撃も防いでくるとは……やはり一筋縄にはいかないか。
「俺はこのままターンエンドだ。ギガンテックファイター／バスターには永続効果、パーフェクトファイターがある。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、全ての相手モンスターの攻撃力は、自分の墓地に存在する戦士族モンスターの数×１００ポイントダウンする」
「君の墓地にいる戦士族モンスターはギガンテックファイター／バスターにより墓地に送られた2体のモンスターに、ギガンテックファイターが追加され１１体。私のフィールドのモンスターは全て攻撃力が１１００ポイントダウンするということか。なかなか強力な効果だ、ここは対抗策をドローしにいくこととしよう。エンドフェイズに幻影騎士団ウロングマグネリングの効果発動‼?幻影霧剣を墓地に送り、カードを2枚ドローする‼?覇勝星イダテンの戒めは解いてやろう」
イダテンを貫いていた幻影霧剣が消え、再びイダテンが姿を現わす。
イダテンは戻ってきたが、代わりに幻騎の手札は増えた。
これは、次のターン辺りに仕掛けてきそうだな。

遊騎　ＬＰ７０００　手札１
ー－▲ー△　　ー

○ー○ーー
ー　　ー
ーー○ーー
ーーーーー　ー
幻騎　ＬＰ８０００　手札６

「準備は整った。そろそろ攻めさせて貰うよ。私は星因士（サテラナイト）ベガを召喚!!?」

〈星因士ベガ〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１２００→１００

フィールドに現れたのは琴のような形をした星の戦士。
「星因士ベガの効果発動!!?このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、手札から星因士ベガ以外のテラナイトモンスター１体を特殊召喚する。手札から星因士（サテラナイト）ウヌクを特殊召喚!!?」

〈星因士ウヌク〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１８００→７００

ベガの身体が輝くと、その輝きに導かれてさらに蛇使いのような星の戦士が姿を現わす。
「星因士ウヌクの効果発動!!?このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから星因士ウヌク以外のテラナイトカード１枚を墓地へ送る。私はデッキから星因士（サテラナイト）ベテルギウスを墓地に送る」
　そして幻騎は正面に手をかざす。
「今回は出し惜しみをする必要もない。私の本気を見せてあげよう。閉鎖せよ!!?運命に従うサーキット!!?」
「リンク召喚か」
　幻騎の正面に巨大なサーキットが現れる。

「召喚条件は戦士族モンスター2体!!?・私は幻影騎士団ウロングマグネリングと星因士ベガの2体をリンクマーカーにセット!!?・サーキットコンバイン!!?・リンク召喚!!?・過去に囚われし王女!!?・リンク2!!?・聖騎士の追想　イゾルデ!!?・」
「何!!?・」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００→５００　↙?　↘?

ウロングマグネリングとベガがサーキットの中に消え、幻騎の前に現れたのは俺も普段使用している金髪と白髪の2人の女性。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?・リンクセレクト!!?・リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター1体を手札に加える!!?・ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。私はデッキから星因士(サテラナイト)アルタイルを手札に加える!!?・聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動!!?・ロストメモリア!!?・私はデッキから妖刀竹光、一惜二跳、やりすぎた埋葬、リビングフォッシルを墓地に送り、星因士(サテラナイト)プロキオンを特殊召喚!!?・」
「っ、この動きは……」

〈星因士プロキオン〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１３００→２００

イゾルデに導かれ、フィールドに現れたのはこいぬ座の名を持つ星の戦士。
だが、それよりも気になるのは……
「どういうつもりだ?」
「ククッ、流石に気付くか。そう、これは君の動きを模しているのだよ、結束　遊騎。これでも、私は君のファンだからね」
「……ふざけてるのか?」

「大真面目だとも。どう受け取るかは君次第だがね」
俺が睨みつけると幻騎は愉快そうな笑みを浮かべる。
幻騎の言葉が真実であれ挑発であれ、どちらにせよ俺の動きを意識してるのは間違いない。
「星因士プロキオンの効果、それにチェーンして墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?私はデッキから折れ竹光を手札に加える!!?そして、星因士プロキオンの効果発動!!?このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、手札のテラナイトモンスター1体を墓地へ送り、自分はデッキから1枚ドローする!!?私は手札の星因士アルタイルを捨てて1枚のカードをドローする!!?さらに私は聖騎士の追想　イゾルデに装備魔法、折れ竹光を装備!!?さらに魔法カード黄金色の竹光を発動!!?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローする!!?……ほう」
黄金色の竹光の効果でドローしたカードを見て、幻騎は愉快そうに笑う。
そして幻騎は笑みを浮かべたままモンスター達に手をかざす。
「私はレベル4テラナイトモンスター、星因士ウヌク、星因士プロキオンでオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
ウヌク、プロキオンが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、空から舞い降りたのは漆黒の鎧を見に纏ったケンタウロス。
「全てを闇に染め上げる悪星!!?煉獄の騎士(テラナイト)ヴァトライムス!!?」
〈煉獄の騎士ヴァトライムス〉★4　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２６００→１５００
「闇属性のテラナイトだと?」
「このカードはテラナイトの中でも変わり者でね。だが、非常に私好

みのカードだ。煉獄の騎士ヴァトライムスの永続効果、フォーリングダークサイド!!?このカードがモンスターゾーンに存在する限り、フィールドの全ての表側表示モンスターは闇属性になる!!?」
「っ、属性を変化させるエクシーズモンスター!?!?」

聖騎士の追想　イゾルデ
光属性→闇属性

ギガンテックファイター／バスター
地属性→闇属性

覇勝星イダテン
光属性→闇属性

ヴァトライムスの身体から闇が溢れ出すと、フィールドを呑み込み、フィールドにいたモンスター達が漆黒のオーラを纏う。
確か幻騎のデッキには闇属性の効果メタであるセイクリッドダイヤというエクシーズモンスターがいたハズ。
ということはあのカードは闇に対する対抗策じゃなく本来ならこのカードと併用することを想定したカードってことか。
「このカードの力はとても便利でね。応用すればこんなこともできる。まずは手札を1枚捨て、除外されている幻影騎士団サイレントブーツを対象として装備魔法、ＤＤＲを発動!!?そのモンスターを攻撃表示で特殊召喚し、このカードを装備する。フィールドに舞い戻れ、幻影騎士団サイレントブーツ!!?」

〈幻影騎士団サイレントブーツ〉☆3　戦士族　闇属性
ＤＥＦ１２００
ＡＴＫ２００→０

フィールドに現れたのは茶色い服を着た亡霊。

「そして私は手札を1枚捨てて速攻魔法、超融合を発動!!?」
「っ、超融合、だと!?」
「このカードは手札を1枚捨てて発動でき、自分・相手フィールドから融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をEXデッキから融合召喚する!!?このカードの発動に対して魔法・罠・モンスターの効果は発動できない!!?私は私のフィールドの闇属性モンスター、幻影騎士団サイレントブーツと煉獄の騎士ヴァトライムスによって闇属性となっている君のギガンテックファイター/バスター、覇勝星イダテンを融合!!?」
「俺のモンスター達を使って融合召喚を……!!?」
「闇に呑まれし戦士達よ!!?今交わりて、全てを呑み込む闇となれ!!?」
フィールドに稲妻を纏った渦が現れ、その中にモンスター達が吸い込まれていく。
そして渦が弾けると、現れるのは全てを溶かし尽くす捕食者。
「融合召喚!!?世界を閉ざす毒蛇!!?捕食植物(プレデタープランツ)トリフィオヴェルトゥム!!?」
「捕食植物、だと!?」

〈捕食植物トリフィオヴェルトゥム〉☆9　植物族　闇属性
ＡＴＫ３０００

「クックック、そういえば君の哀れな弟子も捕食植物を使っていたね。驚いたかい?」
「っ、お前……!!?」
「おお怖い怖い」
そういって幻騎がわざとらしく肩をすくめる。
コイツ、俺を挑発するためにわざとこのモンスターを……
「私は割と臆病でね。怖いものは早めに消しておきたいのだよ。さて、ギガンテックファイター/バスターが消えたことで私のモンス

ターの攻撃力は元に戻る」

煉獄の騎士ヴァトライムス
ＡＴＫ１５００→２６００

聖騎士の追想　イゾルデ
ＡＴＫ５００→１６００

「墓地に存在する幻影霧剣の効果発動!!?墓地のこのカードを除外し、自分の墓地の幻影騎士団モンスター1体を対象として特殊召喚する!!?ただしこの効果で特殊召喚したモンスターは、フィールドから離れた場合に除外される。現れろ、幻影騎士団フラジャイルアーマー!!?」

〈幻影騎士団フラジャイルアーマー〉☆４　戦士族　闇属性
ＤＥＦ２０００

フィールドに現れたのは青白い炎の身体を持った騎士。
さっきの超融合かＤＤＲで墓地に送っていたのか。
「そして、閉鎖せよ!!?運命に従うサーキット!!?」
「再びリンク召喚か……」
幻騎が手をかざすと、正面に再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は闇属性モンスター2体以上!!?私は幻影騎士団フラジャイルアーマーと闇属性となった聖騎士の追想　イゾルデを2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
フラジャイルアーマーとイゾルデが2体に分身してサーキットに吸い込まれる。
そしてサーキットが輝くと、現れたのは巨大な戦斧を構えた漆黒の騎士。
「リンク召喚!!?終わりを告げる戦斧の騎士!!?リンク３!!?幻影騎士団ラスティバルディッシュ!!?」

〈幻影騎士団ラスティバルディッシュ〉ＬＩＮＫ　３　戦士族　闇属性

ＡＴＫ２１００　↙？　↘？↓

「このモンスターはあの時の……」

「ほう、どうやら幻影騎士団ラスティバルディッシュのことを知っているようだな。ならばその力、存分に味わうがいい‼？幻影騎士団ラスティバルディッシュの効果発動‼？ラストファントム‼？自分メインフェイズにデッキから幻影騎士団モンスター１体を墓地へ送り、その後、デッキからファントム魔法・罠カード１枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンにセットする‼？私はデッキから幻影騎士団ダスティローブ（ファントムナイツ）を墓地に送り、永続罠、幻影霧剣をセットする‼？私は墓地に存在する幻影騎士団サイレントブーツの効果発動‼？このカードを除外し、デッキからファントム魔法・罠を手札に加える。私は３枚目の永続罠、幻影霧剣を手札に加える‼？さらに墓地に存在する幻影騎士団ダスティローブの効果発動‼？同名カードは１ターンに１度、墓地のこのカードを除外し、デッキから同名カード以外の幻影騎士団カード１枚を手札に加える‼？私はデッキから幻影騎士団（ファントムナイツ）ロストヴァンブレイズを手札に加える‼？」

「っ、面倒なカードばかりを……」

「さて、煉獄の騎士ヴァトライムスの役割は終わった。役目を終えたものには交代してもらおう。煉獄の騎士ヴァトライムスの効果発動‼？シャドーインセパラブル‼？オーバーレイユニットを１つ取り除き、手札を１枚捨てて発動できる。光属性のテラナイトエクシーズモンスター１体を、自分フィールドのこのカードの上に重ねてエクシーズ召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する‼？ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はモンスターをエクシーズ召喚できない」

「またエクシーズモンスターを使ったエクシーズ召喚か……」

「私は手札を１枚捨て、煉獄の騎士ヴァトライム１体でオーバーレイ

!!?1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?エクシーズチェンジ!!?」
ヴァトライムが空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、空から翼が生え、剣と光の輪を持つ光輝く戦士が舞い降りる。
「闇夜に輝く破滅の戦士!!?星輝士(ステラナイト)デルタテロス!!?」

〈星輝士デルタテロス〉★4　戦士族　光属性
ＡＴＫ２５００

「星輝士デルタテロス……」
「星輝士デルタテロスの効果発動!!?バーンコメット!!?オーバーレイユニットを1つ使い、1ターンに1度フィールドのカード1枚を対象とし破壊する!!私が選択するのはペンデュラムゾーンの魔装戦士ドラゴディウス!!?」
デルタテロスが持つ光の輪から隕石が現れ、光の柱の中にいたドラゴディウスに降り注ぎ、消滅させた。
「これで厄介なペンデュラム効果は無くなった。バトル!!?幻影騎士団ラスティバルディッシュでダイレクトアタック!!?ファントムスマッシャー!!?」
「ぐっ!!?」

遊騎　ＬＰ７０００→４９００

ラスティバルディッシュが戦斧を掲げると戦斧に闇が集まっていき、辺りの闇を集め終わると空高く跳び上がり、勢いよく戦斧を振り下ろすと闇の斬撃が俺の身体を斬り裂く。
「だが、戦闘ダメージを受けた時、Ｈ・Ｃサウザンドブレードの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが墓地に存在し、戦闘・効果で自分がダメージを受けた時、このカードを墓地から攻撃表示で特殊召喚する!!?」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

ダメージを受けた俺を庇うように頭巾を被り、背中に何本もの刀を背負った戦士が現れる。
「面倒なモンスターだ、盾になるには少し物足りないがね。星輝士デルタテロスでＨ・Ｃ　サウザンドブレードを攻撃!!?デルタブレイク!!?」
高速で移動するデルタテロスがサウザンドブレードの身体を何度も斬り付け、消滅させた。
「くっ!!?」

遊騎　ＬＰ４９００→３６００

「捕食植物トリフィオヴェルトゥムでダイレクトアタック!!?トリニティピルムプラント!!?」
「ぐあぁぁぁっ!!?」

遊騎　ＬＰ３６００→６００

トリフィオヴェルトゥムが槍の形をした種子の弾丸を放ち、躱そうとした俺の右足を貫き、俺はその場に崩れ落ちる。
この状況は不味い。
このままだと、上手く実体化した攻撃を躱せない。
「メインフェイズ２、カードを２枚伏せてターンエンドだ。さあ、存分に足掻いてくれたまえ」
「ああ、足掻いてやるさ!!?エンドフェイズにリバースカードオープン!!?罠発動、裁きの天秤!!?相手フィールドのカードの数が自分の手札・フィールドのカードの合計数より多い場合に発動でき、自分はその差の数だけデッキからドローする!!?お前のフィールドのカー

ドは6枚、俺は裁きの天秤と手札1枚の2枚。その差分の4枚のカードをドローする!!?」
「ここにきて4枚のカードをドローするだと!?!?チッ、弟子共々忌々しい!!?」

遊騎　ＬＰ６００　手札５
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　☆
ーー○ー○
ー▲▲▲ー　ー
幻騎　ＬＰ８０００　手札２

「俺のターン、ドロー!!?魔法カード、貪欲な壺!!?」
「っ、またドローカードだと!?!?」
「墓地に存在する聖騎士の追想　イゾルデ、覇勝星イダテン、ギガンティックファイターをＥＸデッキに、キングスナイト、ジャックスナイトをデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローする!!?」
手札は増えたが俺のライフは残り僅か。
おまけに幻騎のフィールドには強力なモンスターが3体存在し、伏せカードにも2枚の幻影霧剣がある。
それでも、可能性は残っている!!?
「魔法カード、戦士の生還!!?自分の墓地の戦士族モンスター1体を対象としてその戦士族モンスターを手札に加える!!?俺は墓地からクィーンズナイトを手札に加える!!?」
「今更そんなカードを手札に加えて何をしようと言うんだ」
「こうするんだよ!!?魔法カード、悪魔への貢物!!?フィールド上の特殊召喚されたモンスター1体を選択して墓地へ送り、手札からレベル４以下の通常モンスター1体を特殊召喚する!!?俺はお前のフィールドの捕食植物トリフィオヴェルトゥムを墓地へ送り、現れろ、クィーンズナイト!!?」

「何だと⁉？」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

フィールドに現れた悪魔がトリフィオヴェルトゥムを喰らい尽くし、対価として俺のフィールドにクィーンズナイトが姿を現わす。
「さらに俺はキングスナイトを召喚⁉？」

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

さらにクィーンズナイトと並び立つように再びキングスナイトが姿を現し、新たな騎士を呼ぶ。
「キングスナイトの効果発動⁉？自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト１体を特殊召喚する⁉？」
「いい加減しつこいぞ、馬鹿の１つ覚えが⁉？チェーンしてリバースカードオープン⁉？永続罠、幻影霧剣⁉？対象はキングスナイトだ⁉？」
キングスナイトが幻影霧剣に貫かれ、その身体を霧に変える。
「まだだ⁉？斬り開け⁉？運命に抗うサーキット⁉？」
俺が正面に手を前に突き出すと、再び目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター２体⁉？俺はクィーンズナイトとキングスナイトの２体をリンクマーカーにセット⁉？サーキットコンバイン⁉？リンク召喚⁉？再誕せよ、追想に生きる王女⁉？リンク２⁉？聖騎士の追想　イゾルデ⁉？」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙？　↘？

「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?リンクレカレクション!!?」
「無意味だ。だが、それ以上に目障りだ!!?チェーンしてリバースカードオープン!!?永続罠、幻影霧剣!!?対象は聖騎士の追想　イゾルデだ!!?」
　イゾルデに向かって幻影霧剣が放たれる。
　だが、それがどうした!!?
「無意味だなんて、お前が決めることじゃない!!?手札を1枚捨て、速攻魔法、ツインツイスター!!?フィールドの魔法・罠カードを2枚まで対象として破壊する!!?俺が破壊するのは、今発動した幻影霧剣とセットカードだ!!?」
「何!!?」
　突如フィールドに出現した竜巻が闇の霧を纏った剣とセットカードを破壊する。
「これで聖騎士の追想　イゾルデの効果は無効化されない!!?俺はデッキからジャックスナイトを手札に加える!!?聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動!!?メモリーズギフト!!?俺はデッキから妖刀竹光、月鏡の盾を墓地に送り、デッキからヒーローキッズを特殊召喚!!?」

〈ヒーローキッズ〉☆2　戦士族　地属性
　ＤＥＦ６００

　イゾルデに導かれ、姿を現したのはＳＦで出てきそうなバトルスーツを着た小さな戦士。
「墓地に送られた妖刀竹光の効果、それにチェーンしてヒーローキッズの効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した時、デッキから同名カードを任意の枚数特殊召喚する事ができる!!?俺はデッキから2体のヒーローキッズを特殊召喚する!!?」

〈ヒーローキッズ〉☆２　戦士族　地属性
ＤＥＦ６００

ヒーローキッズがバトルスーツを操作し通信を行うと、呼び出しに応じた２体のヒーローキッズがフィールドに現れる。
「墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?俺はデッキから折れ竹光を手札に加える!!?そして魔法カード、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローする!!?俺は４枚、お前は２枚捨ててドローだ」
「っ、ここに来て手札交換か!!?」
「俺は４枚のカードをドローする!!?……来てくれたか!!?」
勢いよくドローしたそのカードに視線を向け、俺は思わず笑みを浮かべる。
「行くぞ、俺は自分フィールドのモンスター３体、ヒーローキッズ３体をリリースし、手札からこのモンスターを特殊召喚する!!?」
「何!!?その特殊な召喚条件は!!?」
３体のヒーローキッズが粒子に変わり、空に集まっていく。
集まった粒子が弾けると、空から舞い降りたのは龍の鎧を見に纏った漆黒の戦士。
その戦士はフィールドに降り立つと、力強い咆哮を上げた。
「呪われた運命に抗う孤独の戦士!!?ＤＥＳＴＥＮＹ－ＨＥＲＯ（デステニーヒーロー）－ＢＬＵＥ－ＤＥＥＹＥＤ（ブルーディー）!!?」

〈ＤＥＳＴＥＮＹ－ＨＥＲＯ－ＢＬＵＥ－ＤＥＥＹＥＤ〉☆８　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１９００

「ＤＥＳＴＥＮＹ－ＨＥＲＯ－ＢＬＵＥ－ＤＥＥＹＥＤ!!?君の本来の切り札であり、運命の囚人……呪われた英雄か!!?」
「ＤＥＳＴＥＮＹ－ＨＥＲＯ－ＢＬＵＥ－ＤＥＥＹＥＤは運命の囚人でも、呪われた英雄でもない!!?ＤＥＳＴＥＮＹ－ＨＥＲＯ－ＢＬＵＥ－ＤＥＥＹＥＤは残酷な運命に抗う英雄だ!!?ＤＥＳＴＥＮＹ－ＨＥＲＯ－ＢＬＵＥ－ＤＥＥＹＥＤの永続効果、シールデステニー!!?こ

のカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手フィールドの表側表示モンスターの効果は無効化される!!?」
Ｂｌｏｏｏｄの鎧から闇が吹き出し、辺りの風景を夜に変える。
「そしてＤｒＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏｄの効果発動!!?カースアブソーブ!!?１ターンに１度、相手フィールドのモンスター１体を対象として、その相手モンスターを装備カード扱いとして１枚だけこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの元々の攻撃力の半分だけアップする!!?対象は幻影騎士団ラスティバルディッシュ!!?」
「チッ、幻影の騎士をも呑み込むか、運命の英雄」
Ｂｌｏｏｏｄがラスティバルディッシュに手を伸ばすと、Ｂｌｏｏｏｄの背中に付いている龍の爪がラスティバルディッシュに放たれ、その爪に貫かれたラスティバルディッシュはガラスのように砕け、粒子に変わるとＢｌｏｏｏｄに吸い込まれていった。

ＤｒＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏｄ
ＡＴＫ１９００→２９５０

ラスティバルディッシュを吸収したＢｌｏｏｏｄの攻撃力が上がる。
幻影騎士団は墓地にいった罠カードに幻影騎士団を蘇生させる効果を持つものが存在している。
デルタテロスを吸収した方が攻撃力は上がるが、リンクモンスターを蘇させられるよりかはこちらの方がマシなハズだ。
「バトル!!?ＤｒＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏｄで星輝士デルタテロスを攻撃!!?デソレイションフィアー!!?」
Ｂｌｏｏｏｄも地面を強く蹴って跳び上がり、空中で一回転して足に闇を纏いながらデルタテロスに向けて跳び蹴りを放ち、その身体を貫いた。

幻騎　ＬＰ８０００→７５５０

「くっ……無駄な足掻きを!!?星輝士デルタテロスの効果発動!!?メテオリインカネーション!!?このカードがフィールドから墓地へ送られた場合、手札・デッキからテラナイトモンスター1体を特殊召喚する!!?私はデッキから星因士アルタイルを特殊召喚」

〈星因士アルタイル〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１７００

デルタテロスが墜落しながら粒子に変わっていく、しかしデルタテロスの身体が光輝くとデルタテロスの身体を少し小さくしたような星の戦士の姿に変わり、その戦士はそのまま地面に降り立った。
「さあ、どうする?聖騎士の追想　イゾルデでは星因士アルタイルに勝てないぞ?」
そういって幻騎が俺を挑発する。
確かにこのままだと次のターンにエクシーズ召喚に繋げられ、イゾルデを攻撃されれば俺のライフは簡単に尽きる。
ならーーー
「すまない、イゾルデ。聖騎士の追想　イゾルデで星因士アルタイルを攻撃!!?ツインアタック!!?」
「勝利の為に特攻させるか!!?迎え撃て、星因士アルタイル!!?デルタストラッシュ!!?」
イゾルデ達が同時に飛び上がり、空中で一回転してからアルタイルに跳び蹴りを放つが、アルタイルは空を飛んで跳び蹴りを躱し、すれ違いざまにイゾルデ達を斬り裂き、粒子に変えた。

遊騎　ＬＰ６００→５００

「戦闘ダメージを受けた時、Ｈ・Ｃサウザンドブレードの効果発動!!?このカードを墓地から攻撃表示で特殊召喚する!!?」

〈Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００

ダメージを受けた俺を庇うように再びサウザンドブレードが姿を現わす。
「再び蘇ったか。だが、蘇ったＨ・Ｃサウザンドブレードも攻撃表示。結末は変わらない」
「それが分かってて特攻させるわけないだろ‼？イゾルデの仇は取らせて貰う‼？速攻魔法発動‼？ライバルアライバル‼？」
「ほう、ここでそのカードか」
「このカードは自分・相手のバトルフェイズに発動でき、モンスター１体を召喚する‼？来い、Ｈ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）強襲のハルベルト‼？」

〈Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルト〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１８００

俺の前に現れたのはハルバードを持った紫の鎧を纏った戦士。
「Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトで星因士アルタイルを攻撃‼？ライトニングハルバード‼？」
空を飛んで逃げようとするアルタイルにハルベルドは雷を纏ったハルバードを投擲し、その身体を貫いて消滅させた。

幻騎　ＬＰ７５５０→７４５０

「チッ……むず痒い攻撃を……」
「Ｈ・Ｃ　強襲のハルベルトの効果発動‼？このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時にデッキからヒロイックカードを手札に加える‼？俺はデッキからヒロイックリベンジソードを手札に加える‼？メインフェイズ２、俺は……」
俺の残りライフは５００。
墓地のタスケナイト、そしてＢｌｏｏｍＤの効果が俺を守ってくれ

ているとはいえ何が起こるかは分からない。
それなら、さっき手に入れたばかりのあのカードを使ってみるのも手か。
「早速試してみるか。俺はレベル４のＨ・Ｃ　強襲のハルベルトとＨ・Ｃ　ダブルランスでオーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」
ハルベルトとダブルランスが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると現れたのは金色の翼を持つ戦士。
「現れろ、Ｎｏ．３９‼？逆境の中で輝く希望の光‼？希望皇ホープ‼？」

〈Ｎｏ．３９　希望皇ホープ〉★４　戦士族　光属性
ＡＴＫ２５００

「クックック、ハーッハハハハ‼？」
「っ、何がおかしい‼？」
俺が幻騎から奪った希望皇ホープをＥＸデッキからデュエルディスクにセットした瞬間、幻騎が不気味な笑い声をあげる。
しばらく笑い続けた幻騎は愉快そうな表情で俺を見た。
「クックック、本当に、君が単純で良かったよ。使ったね、そのＮｏ．３９　希望皇ホープを」
「何？」
幻騎の言葉に、俺が訝しげな表情を浮かべた瞬間、フィールドに現れたホープの目が怪しく光る。
すると、ホープのカードからカオスオブアームズの時とは比べ物にならない程の大量の闇が溢れ出し、俺の身体を包み込んだ。
「何‼？ぐっ……あああああああああ‼？」
気を抜けば深い闇の淵に落ちてしまいそうな程の嫌な感覚が身体中を駆け巡り、闇に貫ったネックレスに亀裂が走る。
「ぐっ……がああ‼？何だ、これ‼？」

「君は知りすぎた。真実に近づき過ぎた者は深淵に呑まれる。よくある話だろう？」
そういって幻騎は愉悦の笑みを浮かべながら、淡々と口を開く。
「そのＮｏ．３９　希望皇ホープは私が作り上げたレプリカだ」
「レプリカ⁉？偽物、だってのか⁉？」
「ああ、勘違いしないで貰いたい。レプリカといってもカード自体は本物と相違ない。ただし、そのレプリカには本物を遥かに超えた呪いを宿している。使用した者を暴走させるなんて柔なものじゃない。使用者に寄生して心を喰らい、確実に死に至らしめる呪いの宿り木、マリシャスシードがね」
「ぐっ……最初から、俺を始末するつもりだったって、わけか……ぐうっ‼？」
あまりの闇の瘴気に、俺は思わず膝をつく。
そんな俺を見て、幻騎が興味深そうな表情を浮かべた。
「とはいえ、そのカードを使用して即死しなかったのは想定外だったよ。予想以上の精神力だ。これはこれで興味深い。ああ、安心したまえ。レプリカであるそのカードにはＮｏ．特有の勝者へ移動する性質はない。存分に扱ってくれたまえ」
「そう、かよ……‼？」
意識が朦朧とし始め、視界が霞みはじめる。
これは本格的にマズイ。
だが、対処方法が思いつくわけでもない。
なら……せめてコイツだけでも……
「俺は、カードを、２枚伏せて、ターン、エンドだ……」

遊騎　ＬＰ６００　手札０
ー▲△▲ー　ー
ーー○ーー
○　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー

幻騎　ＬＰ７４５０　手札２

「私のターン、ドロー‼?……クックック、ハーッハハハハ‼?どうやら運命は君に終わりを告げているようだ」
そういって確かな自信と狂気を孕んだ表情で幻騎は笑う。
コイツ、この後に及んで一体何をする気なんだ?
「まずは墓地に存在する幻影霧剣を除外して効果発動‼?墓地のこのカードを除外し、自分の墓地の幻影騎士団モンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する‼?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは、フィールドから離れた場合に除外される。蘇れ、幻影騎士団（ファントムナイツ）クラックヘルム‼?」

〈幻影騎士団フラジャイルアーマー〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１５００

現れたのは宙に浮くヘルムのようなモンスター。
「さらに私は星因士（サテラナイト）シリウスを召喚‼?」

〈星因士シリウス〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

さらにクラックヘルムに並び立つようにおおいぬ座の力を持つ星の戦士が姿を現わす。
これで幻騎のフィールドにはレベル４モンスターが２体。
ということは……
「冥土の土産に見せてあげよう、本物の希望をね。私はレベル４の星因士シリウスと幻影騎士団クラックヘルムでオーバーレイ‼?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築‼?エクシーズ召喚‼?」
シリウスとクラックヘルムが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けると現れたのは俺が先程呼び出したのと全く同じ外見をした金色の翼を持つ戦士。
「現れろ、Ｎｏ．３９!!?夢幻なる希望の戦士!!?希望皇ホープ!!?」
〈Ｎｏ．３９　希望皇ホープ〉★４　戦士族　光属性
ＡＴＫ２５００
「それが、本物ってわけ、か!!?」
だが、ホープの効果は自分または相手のモンスターの攻撃宣言時にオーバーレイユニットを１つ取り除いてそのモンスターの攻撃を無効にするという効果だ。
ただでさえ、ＢｌｏｏｒＤに効果を消された状態なのに、何故ホープを……
訝しげな表情を浮かべる俺を見て、幻騎は指を振ると、１枚のカードを掲げた。
「どうやら君はＮｏ．３９　希望皇ホープを防御用のＮｏ．だと考えているようだね。違うんだよ、このカードはこうやって使うんだ。私はＲＵＭ（ランクアップマジック）ーヌメロンフォース!!?」
「何!!?ＲＵＭーヌメロンフォース、だと!!?」
「自分フィールド上のエクシーズモンスター１体を選択し、選択したモンスターと同じ種族でランクが１つ高いＣＮｏ．と名のついたモンスター１体を、選択したモンスターの上に重ね、エクシーズ召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚する!!?私はＮｏ．３９　希望皇ホープ１体でオーバーレイ!!?１体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?カオスエクシーズチェンジ!!?」
ホープが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこから現れるのは進化を遂げた希望の戦士。
血のような真紅の装甲と漆黒の鎧を見に纏った希望の英雄。
「希望の戦士よ!!?混沌の力を受け入れ、殺戮の果てに儚き希望を見出せ!!?現れろ!!?ＣＮｏ．３９　希望皇ホープレイＶ!!?」

〈ＣＮｏ．３９　希望皇ホープレイＶ〉★５　戦士族　光属性
ＡＴＫ２６００

「ＣＮｏ．３９　希望皇ホープレイＶ……だが、いくらＣＮｏ．になっても、ＤｒＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｒｄがいる限り、効果は使えない!!?」
「ハッ、運命の囚人程度で、私が生み出したＣＮｏ．を止めることはできない!!?ＲＵＭ－ヌメロンフォースの更なる効果!!?ＣＮｏ．と名のついたモンスター１体を、選択したモンスターの上に重ね、エクシーズ召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚した後、この効果で特殊召喚したモンスター以外のフィールド上に表側表示で存在するカードの効果を全て無効にする!!?」
「っ!!?なん、だと!!?」
「私の才能の前には全てが無価値だ。消え失せろ、カオスデリート!!?」
ホープレイＶの身体が光り輝くと、Ｂｌｏｏｒｄの放った闇が消滅し、俺のフィールドにあった全てのカードが色を失う。

ＤｒＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｒｄ
ＡＴＫ２９５０→１９００

「さあ、希望という名の幻想を抱いた報いを受けるがいい!!?ＣＮｏ．３９　希望皇ホープレイＶの効果発動!!?このカードが希望皇ホープと名のついたモンスターをカオスオーバーレイユニットとしている場合、１ターンに１度、このカードのカオスオーバーレイユニットを１つ取り除き、相手フィールド上のモンスター１体を破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える!!?対象はＤｒＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｒｄ!!?」
「っ、モンスターを破壊する、バーン効果、だと!!?ぐっ、リバースカード、オープン!!?罠発動、スキルプリズナー!!?自分フィールド上のカード１枚を選択して、このターン、選択したカードを対象として発

動したモンスター効果を、無効にする‼?」
「最後まで生き足掻くか……感動的だな、だが無意味だ。ライフポイントを半分払い、手札からカウンター罠発動‼?レッドリブート‼?」
「っ⁉?ここで、レッドリブート、だと⁉?」

幻騎　ＬＰ７４５０→３７２５

「言っただろう?私は君のファンだと。君の戦い方は知り尽くしている。相手が罠カードを発動した時に発動できる‼?その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする‼?その後相手はデッキから罠カード1枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンにセットできる。最もこのカード発動後、ターン終了時まで罠カードは発動できないがね」
「っ……俺は、ダメージダイエットを、セット……する……ぐっ」
身体を侵食してくる闇の瘴気に耐えきれず、俺は地面に倒れ伏し、その拍子にポケットに入れていた携帯端末が地面に落ちる。
「っ……ちく、しょう‼?」
ホープレイＶの手元に赤黒い剣が現れ、赤黒い剣に闇の瘴気が集まっていく。
俺はなんとか直撃を避けるために、身体を動かそうとするが、ホープによる呪いと先程のダメージにより地面を這うことしかできなかった。
「……はぁ……はぁ」
「無様なものだな。地面を這うことしかできないのにまだ抗うというのか」
「うる……せぇ、よ」
「強がりもここまでくると滑稽だよ。さあ、終わりの時だ」
闇の瘴気が集まり、ホープレイＶの赤黒い剣が怪しく輝き始める。
こんなところで、俺は終わるのか?
そんな考えが俺の頭をよぎった時ーーー

『師匠……師匠⁉？』
「っ……」
ーーー近くから心配そうな遊花の声が聞こえてきた。
視線を声が聞こえてきた方に向けると、そこにあるのはポケットから落ちた携帯端末。
そうだ……俺はまだ、遊花に謝れてもいない。
「真実と共に……闇に消え去れ、結束　遊騎」
ホープレイＶが赤黒い剣をＢｌｏｏｏｍＤに向ける。
それでも俺は視線を逸らさずに、ホープレイＶを睨みつける。
遊花に謝るまで……諦めるものか、絶対に⁉？
そんな俺をホープレイＶから遮るように、動く影があった。
「っ……Ｂｌｏｏｏｍ？」
俺に背を向ける運命の英雄は、そんな俺に笑みを浮かべた気がした。
「砕け散れ、Ｖブレードシュート⁉？⁉？」
ホープレイＶが赤黒い剣をＢｌｏｏｏｍＤに向けて投擲し、ＢｌｏｏｏｍＤの身体を貫き、俺の身体を吹き飛ばした。
遊騎　ＬＰ５００→０
ーーーーーーー

★

「はぁ……はぁ……」
私は降りしきる雨に濡れながら、必死に走って初めて師匠と出会ったあの公園に足を踏み入れる。
「はぁ……はぁ……師匠は……」
私は息を切らしながら必死に公園の中を見回す。
すると、私の視界に入る２つの人影があった。
「む？栗原　遊花だと？何故ここに……」

「天神、先生？」
１つの人影は、見たこともない冷たい表情を浮かべている天神先生。
そしてもう１つの人影。
天神先生の近くに倒れているその人影はーーー
「し、しょー？」
ーーー傷だらけになり、身体から大量の血を流しながら闇に包まれている師匠の姿だった。
「っ‼？師匠⁉？」
私は慌てて駆け寄り、師匠の身体を抱え起す。
「師匠⁉？大丈夫ですか⁉？しっかりしてください‼？」
「ゆうか……はは、わりぃ……わるのりが、すぎたみたいだ……」
そういって、師匠は力なく笑う。
そんな……何で師匠がこんなボロボロに……
「想定外の出来事ではあるが、見られたからには生かしておくわけにはいかないな」
「っ、天神、先生……あなたが、やったんですか？」
「ああ、そうだとも。安心したまえ。師弟共々、仲良くあの世に送ってあげよう」
そういって天神先生がデュエルディスクを起動すると、真紅の装甲と漆黒の鎧を見に纏った戦士の姿が映し出される。
何が起こるかは分からない。
だけど、これだけ師匠がボロボロになっているのなら同じようなことが私の身に起こるのだろう。
だけど……それでもいい。
このまま師匠を失うぐらいなら、私も一緒にーーー
「ばか、やろう……いきるのを、あきら、めるな」
「っ、師匠？」
「おまえには、かなえなきゃならない……ゆめが、あるだろう？」
「夢……でも、師匠がいないと、私は……」

「おれの……じまんの、でしは……ぜったいに……あきらめない、やつだ……こんなことで……あきらめてんじゃ、ねぇよ」
「師匠？師匠‼？」
そういって師匠が私を安心させるために私の頭をひと撫でして柔らかく笑い、意識を失う。
私だって、諦めたくない……私の夢も……師匠のことも……
「じゃあ私は、師匠のために何を……」
「つまらない三文芝居は終わりだ。君にできることなどただ1つ。2人仲良く死にたまえ」
天神先生がそういうと真紅の装甲と漆黒の鎧を見に纏った戦士が手に持った剣を振り下ろそうとする。
嫌だ。
やっぱり諦めたくない。
私がーーー
「私が……師匠を守るんだ‼？」
「守れるものか、ただの小娘の君に‼？」
そんな天神先生の言葉と共に、剣が振り下ろさる。
私は思わず目を瞑りながら振り下ろされる剣に右手を向け、力一杯に叫ぶ。
「師匠を、傷付けないで‼？」
すると、視界が眩い光りに包まれてーーー
「……何？」
驚くような天神先生の声が私の耳に届く。
恐る恐る目を開けると、真紅の装甲と漆黒の鎧を見に纏った戦士の姿が消えていた。
「何故、ホープレイVが消えた？貴様、一体何をーーー」
戸惑うように天神先生が口を開こうとするが、公園の外からいくつかの足音と人の声が聞こえてくると、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべきびしを返した。
「チッ、野次馬が集まり始めたか。まあいい、結束　遊騎にマリシャスシードは植えつけた。どの道その男は死に至る。ここは1度引かせ

て貰おう」
そういうと天神先生がデュエルディスクについてある何かのスイッチを押す。
「私の計画は誰にも止められない。次は貴様の命を貰いにこよう、栗原　遊花」
そんな言葉を残し、まるで空気に溶けるかのように天神先生は姿を消した。
「見つけた、遊花……って、遊騎⁉？」
公園の外から、爆音を聞きつけて私を追ってきたであろう桜ちゃんの声が聞こえてくる。
降りしきる雨が、私と師匠の身体を冷たく濡らしていた。

第７７話　希望の存在意義

○

「ふむ……こうなったか」

薄暗い部屋の中、様々な機械に接続されている1枚のカードを見て、幻騎は興味深そうな声で呟く。

そんな幻騎に話しかける声があった。

「へぇーまた新しいカードが出来たんだーそれにしてはテンションが低いねー」

「っ!??……君か。相変わらず、神出鬼没だな、正体不明の抹消者（アンノウンイレイザー）」

「お生憎様。これは私の体質みたいなものだし、私にはどうすることもできないんだよねー実際凄いと思うよ、幻騎は。私の記憶が残ってないのに状況証拠から私が何をしているのか認識してるんだからさー」

正体不明の抹消者（アンノウンイレイザー）と呼ばれた少女はそういってケラケラと笑う。

そんな少女に幻騎はつまらなそうに鼻を鳴らす。

「フン……君が関われば記憶が不自然に消える。後はそれまでに私が行っていた行動と、失った記憶の間に何が変わったかが分かれば、私自身がするであろう行動が予測できるだけだ。そして突然私の研究室に出現するような埒外な存在は君しかあり得ないと、確信しているからね」

「……あはは!!?流石は天才!!?あったまいいー!!?」

そういって、少女はパチパチと拍手をする。

しかし、すぐに拍手を止めると感情がこもっていない透き通った声で幻騎に尋ねる。

「だけどさーちょーっと気に入らないこともあるんだよねー……何でお兄さんを手にかけたの？」

「お兄さん？……ああ、結束　遊騎のことか。奴は私の秘密を嗅ぎ回っていた。不穏分子は早めに消しておく。当然のことだろう？」

そういって幻騎はなんてことの無いようにそう告げる。
そんな幻騎に少女は不服そうな表情を浮かべる。
「お兄さんとは再戦する予定だったんだけど？私と楽しいゲームができるプレイヤーは貴重なんだよ？」
「そんなこと、私が知ったことではない。私の邪魔をするものは誰であろうと許さない」
「……そ。じゃあこの話はおしまい。それで、結局何を作ったの？」
少女は一瞬不機嫌そうな表情を浮かべながらも、すぐに感情のこもっていない笑顔を浮かべる。
そんな少女に、幻騎は楽しげな笑みを浮かべた。
「希望皇ホープのレプリカさ」
「レプリカ？それってお兄さんに渡したのと同じ？」
「そうさ。ただし、実験として結束　遊騎に渡したものよりもさらに呪いを詰め込んだものだ。結果、人が耐えられるものでは無くなってしまったがね。呪いを凝縮させたため触れる程度なら影響は受けないだろうが、デュエルディスクにセットしようものなら凝縮された呪いが一気に解放され、それだけで死に至るだろう」
「また物騒なものを作ったねーだけど、それって本当に希望皇ホープなの？」
そういって少女が機械にセットされていたカードを手に取り、不思議そうな表情を浮かべる。
「だって、このカード。イラストも効果も、名前すら無いよー？」
そういって少女が幻騎に見せたカードは闇に染まりきっており、イラストは愚か効果や名前の部分すら漆黒に塗りつぶされていた。
「言っただろう、実験だと。希望皇ホープをベースにどれだけの呪いを詰め込めるか試していたのさ。結果として、限界を超えた呪いにより希望皇ホープの存在も塗りつぶしてしまったようだがね」
不思議そうに首を傾げる少女に、幻騎はそう説明しながら楽しそうな笑みを浮かべる。
「だが、これでカードが許容できる呪いの範囲も明確にすることがで

きた。これで呪いの量を調節し、より強力な闇のカードを生み出すことができる」
「ふーん、それで？このカードはどうするのー？」
「残念だが、廃棄する他ないな。罠にするとしても、それだけ怪しげなカードを使用する馬鹿はいないだろう。何、実験の過程で不完全なものが生まれてしまうなど世の常だ。大したことではあるまい」
「廃棄ねー……それじゃあさ、これ、私が貰ってもいい？」
そういって、少女が手に持ったカードをひらひらと振る。
そんな少女に幻騎は興味は失ったかのように視線を逸らした。
「どの道そのカードは誰にも使用することはできない。君の好きにしたまえ」
「そ。じゃあありがたくいただいてくねー」
そういって少女は新しい玩具を手に入れた子供のような笑顔を浮かべながらそのカードをポケットにしまう。
「それじゃあ、私はまたプレイヤー探しにでもいってくるねー」
「好きにしたまえ。私は栗原　遊花を始末しなければならない。記憶に残らないであろう君の行動に関与するつもりはない」
「……そっか。じゃあ好きにさせて貰うねー……私の好きに、ね」
そういって、少女は研究室から姿を消す。
それを確認することもなく、幻騎は自身のデッキを取り出して怪しげな笑みを浮かべるのだった。

ーーーーーーー

★

規則的な機械音が聞こえる病室で、私はベッドの側にある椅子に腰をかけていた。
「……師匠」
私の呼び声に、返ってくる声はない。
当たり前だ。

その師匠は今も意識を取り戻さず、機械に繋がれたままベッドの上で眠っているのだから。
師匠が天神先生に襲われたあの日から一夜が明けた。
師匠が倒れ、放心状態になっていた私は気付けば病院の手術室の前にある椅子に座っていた。
どうやら私を見つけた桜ちゃん達が病院に連絡して師匠と放心状態だった私を病院に連れてきてくれたらしい。
デュエルセキュリティの人達も私に事情聴取に来ていたみたいだけど、正直何を話したかなんて全く覚えてない。
結局桜ちゃんがフォローを入れてくれて、師匠は通り魔に襲われたということになったようだ。
それ自体はある意味で全く間違えてはいないけど、きっと本当のことを話しても信じてくれないと思う。
モンスターが実体化して師匠を攻撃したなんて、師匠が倒れたショックでおかしくなったと思われるだけだ。
「……遊花」
「っ!!?……闇先パイ……」
気付いたら、私の背後に闇先パイが立っていた。
闇先パイの表情はいつも通りの無表情。
でも、どこか悲しげに見えた。
「ずっとここにいたんだね。講義、始まってるよ?」
「ごめんなさい……でも、今は……」
「ん、意地悪なこと言った。大丈夫、桜がデュエルアカデミアで先生達に伝えておくって言ってた。遊騎や遊花が心配だから、それだけ伝えたら早退してくるって」
「桜ちゃんが……」
「遊花は真面目すぎる。前にも言ったように、サボって何かを見つめ直すことが出来るのは学生の特権。だから、休みたい時は休めばいい。それがまた、新しい一歩を踏み出すきっかけにもなる」
「……はい」
それは、初めて師匠が入院した時に闇先パイに言われた言葉。

あの時は、師匠は意識もあったし、怪我も命に関わるものではなかった。
だけど、今度は……
表情を暗くする私に、闇先パイは少し明るい調子で口にする。
「それに、かく言う私もおサボり中。遊花を悪くいえない」
「……えっ？」
「プロリーグ、ほっぽってきた。社長達、大慌て」
「ええっ⁉？」
闇先パイの言葉に、私は思わず目を見開いて驚く。
そんな私を見て、闇先パイは柔らかい笑みを浮かべた。
「やっと、表情が変わった」
「えっ？」
「プロリーグのことは冗談。今日の試合はお昼からだからまだ大丈夫だし、遊騎のことを話したら休んでもいいって許可ももらった。暗い表情のままだと、心も引っ張られる。私は、遊花にそんな表情をして欲しくない。遊騎だって、同じハズ」
「っ……」
闇先パイのその言葉に、私は視線を今もベッドで眠っている師匠に向ける。

ーーーーーーー

『っ、遊花の思いが悪いなんて言ってない。だけど、遊花が危険な目にあう可能性があることを俺はーーー』
『確かに師匠の言う通りにすれば私は危険な目にあう可能性は減るかも知れません⁉？だけど、その分師匠が危険な目にあうんじゃないですか⁉？』
『っ……』
『どうして……どうして分かってくれないんですか……っ……師匠の……師匠のバカー⁉？』
『っ、遊花⁉？』

ーーーーーーー

昨日の朝の師匠の悲しそうな表情が頭に浮かぶ。

「私は……本当に馬鹿です。いつだって私は、全てが過ぎ去ってしまったその後にしか、大切なことに気づけない……」

「……」

「私がありふれた日常を送れるように、師匠が必死になって守ってくれていたこと。師匠が察してくれているだろうからって、師匠が心配だから、師匠のお手伝いがしたいって自分の気持ちを素直に師匠に伝えなかったこと……師匠の手を振り払って、結果はこうして後悔してばかりで……絶対に、離しちゃいけなかったんです……師匠と繋いだ、この手だけは……」

私の目から涙が溢れ出し、思わず手を握りしめる。

そんな私の頭を闇先パイは優しく撫でた。

「昨日の朝、遊花が出て行った後に遊騎も後悔してた。遊花の気持ちも汲んでやれなかったって」

「っ……師匠、が？」

「後悔なんて、誰でもする。私だって後悔してる。遊騎がこんな大怪我をしたのに、私は助けにくることができなかった。大切なのは、後悔した後に何を成すか。手を離してしまったのなら、また繋げばいい。その機会ぐらい、きっと遊騎は与えてくれる」

そういって、闇先パイが真っ直ぐな瞳で師匠を見る。

「だから、今は私達にできることをしよう。昨日何があったのか、私に教えて？」

「……はい。ありがとうございます、闇先パイ。心配してくれて」

「気にしないで……遊花は私の大切な後輩だから……」

闇先パイの言葉に、私は涙を拭う。

そうだ、師匠はまだ生きている。

だからこそ、師匠が目を覚ました時、胸を張って謝れるように、今の私にできることを……

私は昨日、私が見たことを全て話した。
天神先生が師匠に重症を負わせたこと。
その時に交えた会話、その全てを。
私が話し終えると、闇先パイは真剣な表情で自分の頭をポンポンとノックするように叩くと、自分のデュエルディスクから1枚のカードを取り出し、ベッドの側に置いてあった師匠のデュエルディスクにセットした。
すると、デュエルディスクにセットした闇先パイのカードから闇が溢れ出し、師匠の身体とデュエルディスクを包み込んだ。
「闇先パイ⁉？一体何を……」
「マリシャスシード。日本語に直すと悪意のある種。どの道その男は死に至るという言葉を考えると呪いによるものであり、その核になるもののハズ。そういうのを探すの、私は得意。どう、インヴェルズオリジン？」
『ダウヨキウヨジ　ナイカツヤ　ガダ　ゾタケツミ』
「っ⁉？この声、闇先パイのカードから……って、厄介な状況⁉？師匠は師匠は大丈夫なんですか⁉？」
闇先パイのカードから底冷えするような声が聞こえてくる。
私が驚いていると、闇先パイも驚いた表情を浮かべた。
「遊花、インヴェルズオリジンの声、聞こえるの？というか、分かるの、インヴェルズオリジンの言葉？」
「えっ？あ、はい。えっと、インヴェルズオリジンさんって言うんですか？えっと、分かります、何となくですけど」
『ナダ　ノモシレサイア　ハガスサ　カタシイカリ　ウモ　ヲゴンゲ　ノラレワ　ウホ』
「『愛されし者』？私のこと、なんですか？」
インヴェルズオリジンさんの言葉に首を傾げていると、闇先パイが何かを考え込むような表情を浮かべる。
しかし、すぐに首を振ると真剣な表情で口を開いた。
「色々気になることはあるけど、今は遊騎のこと優先。それで、何が厄介なの？」

『ルイテイヅネ　ニデス　ニイシマタ　ノコトオ　ノコ　ガダ　ドーシスヤシリマ　ノンダク』
「えっ⁉？」
「吸収は？」
『ウマシ　テシ　ツメウヨシ　モイシマタ　ノコトオ　ノコ　バレス　ニタヘ　イシカズム』
「っ⁉？そんな……」
師匠の魂が消滅？
それって……死ぬってこと？
「核となるカードから干渉は？」
『ルイテツナ　ニラガケヌ　シダキハ　ヲドーシスヤシリマ　ニデス　ハイタジ　ドーカ　ダリム』
「私からのアプローチではダメ……別の手が必要……魂に根付く悪意のある種……必要なのは……魂に干渉する力……それなら……」
そこまでいうと闇先パイはインヴェルズオリジンさんをデュエルディスクから抜くと、病室の外に向かいながら私に向かって口を開いた。
「助っ人を呼んでくる。すぐに戻ってくるし、じきに桜が来るから遊花はここを動かないで。天神　幻騎の言葉が正しいなら……次に狙われるのは遊花だから」
「あ、闇先パイ‼？」
そういうと闇先パイは早足で病室を出て行った。
私は再び師匠の方に視線をむけ、その手を握る。
「……師匠」
大丈夫、ですよね？
師匠は……呪いなんかに負けたりしませんよね？
縋るように、師匠の手を握りしめる。
そんな私の背後から突然どこか感情がこもっていない透き通った少女の声が聞こえてきた。
「ふーん、本当にやられちゃったんだー」

「……え？」
私が思わず振り返ると、そこにいたのは、幼い少女だった。
綺麗な銀髪をツインテールにし、大きくて袖から手が出ていないデュエルアカデミアの制服に身を包んで、どこか残念そうな表情を浮かべてこちらを見ている。
身長からして初等部の中学年と言ったところだろうか？
それにこの少女の姿、顔立ち……どこかで見たことがあるような……
いや、それよりも今は……
「えっと、迷子なのかな？お母さんは？」
「……ぷっ、あはは‼？お姉さん、面白いねーこの状況で私を迷子だって思っちゃうんだー」
そういって、無邪気そうに少女は笑う。
迷子じゃない？
でも、それならなんでこの病室に……
そんなことを考えていた私は、次の少女の言葉で背筋が凍り付いた。
「私はレイナ。幻騎は正体不明の抹消者（アンノウンイレイザー）って呼ぶけどねーこの街に闇のカードをばら撒いている幻騎の協力者、って言ったら分かるかな？」
「っ⁉？天神先生の協力者⁉？」
私は咄嗟に師匠を庇うように少女の正面に立つ。
そんな私にレイナと名乗った少女は笑いながら手を振った。
「あはは、そんなに身構えなくてもいいよー私はお姉さんとお話したかっただけだからさー」
「お話……ですか？」
「そうそう。お姉さんとは1度お話して見たかったんだよねー」
そういってレイナちゃんは病室にあった椅子に座って足をパタパタと振りながら口を開いた。
「お姉さんのこと、色々調べたんだーお父さんとお母さんを失って、クラスでもいじめられて、世の中を恨んだりしなかったの？」

「……確かに、辛いことはたくさんありました。それでも、そんな私をずっと守ってくれた親友がいたから、世界が残酷なだけじゃないって教えてくれたから、だから、私はそんな大切な親友と、優しい人達と出会わせてくれたこの世界を恨みたくなんかありません。この世界を恨むということは、私を守ってくれた人達の存在を否定することですから」
「へー立派だねーそれでも世界は残酷に時を刻むのに？決められた運命を辿るのに？そこで死にかけているお兄さんみたいにさー」
「っ……ふざけないでください‼？師匠がこうなったのはーーー」
　思わず激昂しそうになった私を、いつのまにか目の前にまで近づいてきたレイナちゃんが肩を叩いて宥める。
「落ち着きなよ。お兄さんをやったのは幻騎だよ。私も1度デュエルはしたけど、『次は負けない』なんて言うから、見逃したもん」
「っ⁉？レイナちゃんが……勝ったんですか、師匠に？」
「おおー新鮮な呼ばれ方だねーまあねー私はこれでも結構やるんだよーだから、お兄さんとの再戦は楽しみにしてたんだけどねー」
　そういってレイナちゃんが残念そうにベッドで眠る師匠を見る。
「だから、正直ムカつくんだよねーお兄さんとの再戦を潰した幻騎が。私はただデュエルが楽しみたいだけなのにさー」
「デュエルを楽しみたい……なら、何で闇のカードをばら撒いてるんですか？あなたも知ってるんですよね？闇のカードを使いこなせない人は暴走する。それで他の人に危害が加わるかも知れない状況なんかじゃ、楽しめないじゃないですか」
「あはは、流石は師弟。お兄さんと同じことを言うんだねー」
　私の問いに少女は心底楽しそうに笑うと、どこか感情がこもっていないような声で口を開く。
「だって、ゲームって言うのはフェアじゃないと面白くないでしょ？私も相手を傷つけるんだから相手も私を傷つけれないと面白くないよ」
「っ⁉？」
　レイナちゃんの言葉に、私は思わず絶句する。

そんな私に構わずレイナちゃんは言葉を続ける。
「それにお兄さんみたいに闇のカードに適合できる人もちゃんといるしね。こうやってばら撒いてれば、どんな人なら闇のカードを使えるかが分かるでしょ？」
「っ、実験してるつもりなんですか？この街に生きる人の日常を壊してまで‼？」
「それが闇のカードを使う人が背負う運命だよ。闇のカードを使ってデュエルをするってことは誰かを傷つけるってこと。それでも人は闇のカードを手に入れ、受け入れる。デュエルで相手に勝つために。お姉さんだって、そうじゃないの？それだけ強力な闇のカードを沢山持ってるのに」
「……えっ？」
レイナちゃんの言葉に私は首を傾げる。
私が持っている闇のカードはホープルーツとギャラクシークィーンの2枚のハズ……だけど、沢山って……
困惑する私にレイナちゃんは楽しそうに笑いながら口を開く。
「絶望神アンチホープ。ダークネスネオスフィア。究極時械神セフィロン。聞き覚えあるよね？」
「っ⁉？このカード達が……？」
私はデッキからレイナちゃんが告げた3枚のカードを取り出す。
確かに、このカード達を手に入れた時、一瞬鈍い闇色に光った気がした。
あれは勘違いじゃなくて、このカード達が闇のカードだったから？
「お姉さんのことを調べてた時に気づいたんだけど、お姉さんが持ってるその3枚の闇のカードは街に出回ってるＮｏ．なんかよりも遥かに危険な闇のカードだよ。その中のどれか1枚だけでも世界を滅ぼせる代物なんだよー」
「……えっ？」
「そう。そんな危険なものを3枚も所持しているのに、お姉さんは平然としていられる。それは闇のカードに適合しているということ。だからこそ、お姉さんの中にはそんな闇のカードにも適合できるよう

な素質があるんだよ。世界を滅ぼせる素質が、世界を滅ぼす運命がねー」
「私に……世界を滅ぼせる素質が？私が……世界を滅ぼす？」
「だからこそ、そのカード達もあなたに力を貸してるんじゃないの？いつか世界を滅ぼすためにさ」
レイナちゃんの言葉に、嘘をついている気配は全く感じられない。
それなら、レイナちゃんの言葉は真実？
私は手にした3枚のカードを見つめ、瞳を閉じ、今までのことを思い返す。
このカード達が私を助けてくれたのは、この3枚と感じる繋がりは、私が世界を滅ぼすような存在になるから？
その答えはーーー考えるまでもない。
「……違う」
「？」
「違うよ、レイナちゃん。アンチホープ達が私に力を貸してくれるのは、私に世界を滅ぼす素質があるからなんかじゃない」
「確信を持ったように言うねーそれならなんで？なんでお姉さんに世界を滅ぼせるカードが力を貸すの」
アンチホープ達が栗原　遊花に力を貸してくれる理由。
そんなもの……1つしかない。
「この子達が私に力を貸してくれる理由。それはーーーこの子達が優しいからです‼？」
「……へ？」
私の言葉にレイナちゃんが目を丸くする。
それでも、栗原　遊花が導き出せる答えはこれしかない。
「アンチホープと初めて一緒に戦ったのは師匠や島さんの思いを馬鹿にした人に負けそうになった時でした」
絶望的な状況で、島さん達の思いを守るための力を、私に貸してくれた。
「ダークネスネオスフィアと初めて一緒に戦ったのは神路祇君に私とデュエルをしてくれた学年トップの人達を馬鹿にされた時」

大切な人達の誇りを守るための力を、私に貸してくれた。
「セフィロンだけはちょっと特殊。初めて戦った時は敵同士だった。だけどそれは、私を試すため」
絶望的な未来を覆す力があるか、それを試すために、きっとセフィロンとは出会った。
「私が絶望に落ちそうになった時、いつもこの子達は私の希望になりにきてくれた。この子達の存在が、私の希望なんだ!!?」
「……ぷっ、あはは!!?お姉さんは本当に面白いねー世界を滅ぼすカードを手にして、そんなことを言えちゃうんだー」
そういって、レイナちゃんは心底おかしそうに笑う。
「だから、私はこの子達を信じます。この子達は誰かを傷つけたりしない、誰も傷つけさせない!!?この子達と力を合わせて、私はみんなを守ります!!?私は、世界を滅ぼしたりなんて絶対にしない!!?」
「呪われた闇のカードでみんなを守る……ね。それじゃあ、その証拠を私に見せてよ」
そういって、レイナちゃんはポケットから1枚のカードを取り出して私に手渡す。
「これは……」
そこにあったのはイラストは愚か効果や名前の部分すら漆黒に塗りつぶされていたカードだった。
レイナちゃんは楽しそうに笑いながら、私に背を向けて口を開く。
「それはとっても強力な闇のカード。幻騎がいらないって言うから貰ってきちゃった」
「これが……」
「呪われた闇のカードでみんなを守るというのなら……そのカードを使ってみなよ。もうすぐここに幻騎がやってくる。お姉さんを殺しに」
「っ、天神先生が……」
「だから、幻騎を倒して運命を超えてみせてよ。お姉さんが、本当に、呪われた闇のカードで誰かを守れるっていうんなら、ね。それじゃあ次会った時には忘れてると思うけど、またね、お姉さん」

「えっ？」
そんなことを言われ、カードからレイナちゃんの方に視線を戻すと、そこにはすでにレイナちゃんの姿はなかった。
私は慌てて病室の外を見回すが一直線の廊下のどこにもレイナちゃんの姿はなかった。
「不思議な子だったな……あんなに印象が強くて忘れることなんてありえないのに」
そんなことを呟いてから、改めてベッドの上の師匠に近づく。
「師匠、今から天神先生とデュエルをしてきます。危険だということは、分かっています。正直、少し怖いです。負けることが、じゃなくて。このまま、師匠のいる場所に戻ってこれなくなるんじゃないかと思うと。だけど……」
そういって、私は目を瞑る。
目を瞑るといつでも思い出せる。
初めて師匠と出会った日の、逆境に追い込まれても不敵に笑って空閑君とデュエルをしていた師匠の姿が。
私はあの日のことを思い出して笑顔を浮かべると、目を開けて師匠の手を握る。
「だけど……平気、へっちゃらです。なけなしの勇気しか持っていない私だけど……師匠の側が、私のいる場所ですから。だから、今度は、私に師匠を守らせてください。師匠がいつも私を守ってくれていたように……私も、強くなって師匠の側に戻ってきます。……それじゃあ、行ってきます」
そういうと私は少しだけデッキを調整し、病室を出て、病院の外に向かって歩いていく。
病院の外に出たところで妙な視線を感じたけど、それも気にせずに歩いていき病院の近くにあった小さな公園に入る。
昨日雨が降り、空がまだ曇っているせいか、公園には人影が一切なかった。
そして私は、振り返りながら感じていた視線の主に話しかける。
「ここならいいですか……天神先生」

「……ほう、気づいていたか」
公園の木の陰から天神先生が姿を現わす。
その表情は冷え切っており、正直怖くて腰が抜けそうだった。
「狙われると分かっていながら何故1人になった」
「話がしたかったからです」
「あいにく、私が話すことは何もない。速やかに消えたまえ」
そういって、天神先生がデュエルディスクを起動する。
それでも構わず、私は話を続ける。
「私は、あまり難しいことはよく分かりません。だけど、天神先生がやっていることがよくないことだってことは分かります」
「ふっ、私に説教をするというのか？」
「説教なんてできる程、私は偉くありません。だけど、理由を聞いておきたいんです。何故、師匠が傷つかなければならなかったのかを」
「何故だと？分かりきっていることだろう？私の計画に邪魔だったからだよ」
「……師匠が、闇のカードについて探っていたから、ですか？」
「フン、そうだとも。真実を知ったものは闇に消える。それだけのことだ」
そういって、つまらなそうに天神先生が鼻を鳴らす。
それはもう、師匠が死ぬことは決まっているというような態度だ。
だけど、そんなことは、私がさせない。
「……消えません……消えさせません‼？私が、師匠を守ります‼？」
「ハッ、あの男のために命をかけるというのか？貴様は何様だと言うのだ。小娘風情が思い上がりも甚だしい」
そういって天神先生が私を嘲笑う。
「……その時には、分からないものなんです。ありふれたことが、どれだけ大切なものだったのかって……私は、失敗ばかりで、後になってから分かるんです。ああしておけば良かった……こうしておけば良かった……そんなことの繰り返しで……」
「……」

「それでも、1つだけ、誇れるようになったことがあるんです!!?怖くても、逃げたくても、諦めずに向き合うこと!!?今も、正直逃げ出したいです!!?痛いのは嫌です!!?それでも、この場所を逃げてしまう痛みよりは、全然マシです!!?」
「ほう……」
初めて師匠に会った日の、あの夕暮れ時の公園を思い出す。
まだデュエルをするのが怖くて、それでも諦めきれず師匠に弟子入りした時のことを。
身体はまだ震えてて、変わるって決めても、やっぱりデュエルをすることが怖くて。
そんな私を、師匠は優しい表情で見守ってくれた。
まだ弟子でなかった私を、守ってくれていた。
私は、そんな師匠に恩を返したい!!?
「私は知ったんです!!?最初は本当に偶然の出会いでも、選択によって、偶然は運命にすることができるんです!!?」
私はデュエルディスクを起動し、ポケットからレイナちゃんに貰ったカードを取り出す。
そんな時、公園の外から聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「こっちから声が……遊花!!?」
「病室を動かないでって言ったのに……あれは、天神　幻騎!!?」
聞こえてくるのは桜ちゃんと闇先パイの声。
言いつけを守ってごめんなさい。
それでも、このデュエルだけは譲れないから。
「運命を斬り開いてみせる……このカードで!!?」
そういって、私がレイナちゃんから貰ったカードを掲げると天神先生が目を見開く。
「それは……っ、正体不明の抹消者(アンノウンイレイザー)め!!?」
「遊花?何、そのカード……?」
「っ!!?遊花、それはーーー!!?」
私はレイナちゃんに貰ったカードを勢いよくデュエルディスクにセットする。

その瞬間、デュエルディスクから見たこともないような闇の塊が溢れ出し、私を呑み込んだ。

ーーーーーーー

○

「えっ⁉？ぐうううう……あああああーーーッ⁉？」
「フッ、正体不明の抹消者（アンノウンイレイザー）の奴、えぐい事を考えたものだな」
「遊花⁉？っ、アンタ‼？一体何をしたのよ‼？」
遊花がデュエルディスクから溢れ出した闇に呑まれ、絶叫を上げるのを見て、桜が幻騎を怒鳴りつける。
そんな桜に幻騎は愉快そうな笑みを浮かべた。
「あれは廃棄予定だった闇のカードの失敗作だ。どうやら、私の協力者が手渡したようだが、まさか使用する馬鹿がいるとはな」
「……失敗作？」
「あのカードはどれだけの呪いを闇のカードに詰め込めるか試したものだ。結果として、限界を超えた呪いが存在していたカードをも塗りつぶしてしまい、全てを闇が呑み込んでしまってね。結束　遊騎に与えた呪いよりも遥かに強力でとても人が耐えられるものでは無い。デュエルディスクにセットしようものなら凝縮された呪いが一気に解放され、それだけで死に至る代物さ‼？」
「何ですって⁉？っ、早く助けないと……‼？」
「駄目‼？」
『そうよ、桜。アレはマズいわ‼？』
「闇⁉？カグヤ⁉？どうして止めるの⁉？」
遊花に駆け寄ろうとした桜を、闇が必死に押さえる。
「アレだけの呪い。近づけば桜も呑まれて死ぬ」
『そうよ、アレは人の身で耐えられるものじゃないわ‼？』
「じゃあ遊花を見捨てろっての⁉？」
「そうは言ってない。やるなら私がやる」

「はぁ⁉？」
闇の言葉に桜が目を見開く。
それでも構わず、闇は言葉を続ける。
「私の身体は限りなく闇に近い資質を持ってる。あの呪いでも耐えられる可能性は桜より高い」
「いや、でも……」
「桜より私の方が可能性が高い。なら、私の方が適任」
そういって、闇が遊花に近づこうとする。
そんな闇を止める声があった。
『ヨウオウヨジ　ガラレワ　イナウヨツヒ』
「ヴェルズウロボロス？」
ウロボロスの言葉に、闇は怪訝な表情を浮かべる。
それでもウロボロスは淡々と言葉を続ける。
『ヨウオウヨジ　ガラレワ　ダノイナ　ウヨツヒ　ガダ　ダキイヘラナ　ウオウヨジ　ニカシタ』
「必要ない？」
首を傾げる闇に、ウロボロスは嬉しそうに笑う。
『ガイメンウ　ノノモシレサイア　ゾルマジハ　ダトコウイ　トイナキデ　ハトコ　スロコ　ヲノモシレサイア　ハデ　ドイテノア』
「『愛されし者』の、運命？」
ウロボロスの言葉に闇は改めて遊花を見る。
そして闇と同じように公園にある木の上からレイナが遊花を見て、楽しそうに笑った。
「さあ、運命を決めるときだよ、お姉さん。お姉さんの選択、ちゃんと見せてね」

ーーーーーーー

★

「っ、ここは……？」

気付いたら、私は真っ白な世界にいた。
「そうだ……デュエルディスクから溢れ出した闇に呑まれて……でも、私は公園にいたハズなのに……」
足を動かしてみるが進むことはできず、ただただ真っ白な世界が広がっているだけだ。
私が困惑していると、私の目の前にどこからともなく闇が集まり、黒い人影に姿を変えた。
『憎い……お父さん達を……師匠を傷つけた、この世界が!!?』
「これ……私の声？」
黒い人影は私の声で慟哭の声を上げる。
『壊れてしまえばいいんだ!!?こんな世界、何もかも!!?全部全部、消えてしまえば!!?』
「ええっ!!?だ、駄目だよ、世界を壊すなんて!!?そんなことしたら、お父さん達がいたことが、師匠の帰る場所が無くなっちゃう!!?そんなの……私は嫌だよ!!?私はそんなの望まない!!?私は、みんなを守りたいんだ!!?」
思わず私がそう口にすると、黒い人影は急に淡々とした声で私に話しかけてくる。
『消えてしまいたい程辛い思いをしてきたのに？怯えて、縮みこんで、目を閉じて、耳を塞いで、自分を心配してくれた親友さえも拒絶して、ただ自分の部屋でずっと震えていただけの私が？自分が何者なのかも知らない私が？そんな私が誰かを守りたいだなんて、望みがすぎるんじゃないの？』
「っ……」
その言葉に、私は両親が亡くなった頃の自分を思い出す。
確かに、両親が亡くなった頃の私は自分の部屋でずっと縮みこんでいた。
両親がいなくなった現実が嫌で、心配してくれた桜ちゃんの声すら、私は耳を塞いでいた。
「もしかして、あなたは私の心の闇……なの？」
『そうだよ。あなたは私。だから、私が話しているのは全てあなたが

思っていること』
そう言って、目の前の黒い人影が話す。
よく見れば、人影は私と同じ身長、体型をしている。
正直全く意味が分からないけど、これもあの闇に呑まれたのが原因なの？
困惑する私に構わず、私の心の闇は口を開く。
『だから、壊してしまおうよ、こんな世界』
「全然文面が繋がってないよ⁉？」
『レイナちゃんも言ってたじゃない。私には世界を滅ぼせる素質が……世界を滅ぼす運命にあるって。あなただって、恨んでるでしょ？理不尽なこの世界を。あなたから大切なものを奪っていく世界を。だから、壊しちゃおうよ、こんな世界、全部』
「……」
私の心の闇の言葉に、私は少し考えてからはっきりと答える。
「嫌です」
『……』
「確かに、思わないわけじゃないよ。理不尽だって、どうして私の大切な人達を傷つけるのって。だけど、そんな大切な人達との出会いをくれたのも、この世界なんだよ」
『それでも、この世界は傷付けるよ？私の大切な人達を』
「世界が私の大切な人を傷付けるというのなら、大切な人達が傷つかないように、強くなって、私がみんなを守りたい」
私の言葉に、私の心の闇は諦めたような声で語りかける。
『無理だよ……私には。誰かを守るなんて……』
「無理なんかじゃないよ」
『ううん、分かってるハズだよ。あなたは私なんだから。それに、強くなりたいなんて、思ってないでしょ？本当は……』
「私は思ってるよ。強くなって、私は師匠をーーー」
『そうして、師匠が守ってくれなくなってもいいの？』
「っ⁉？」
その言葉に、一瞬息が詰まった。

そんな私の隙を、私の心の闇は攻めてくる。
『弱ければ、師匠が、桜ちゃんが、闇先パイが、みんなが守ってくれる。だから、ずっと守られていればいいのに』
「でも、それじゃあ師匠達が傷ついて……」
『だから、壊しちゃえばいいんだよ。あなたから大切なものを奪っていく世界を。大切な人達を傷付けるもの全てを。そうして大切な人達を傷つけるものを壊して、私を傷つけようとする人から守ってもらう。そうすれば、師匠達とずっと一緒にいられる』
「……」
『師匠はきっと戦い続けるよ。残酷な運命と、その犠牲になる人達のために……私が強くなったら、私以外の誰かを優先するようになるかもしれないよ』
「それは……」
『それでもいいの？師匠が、私の側から離れていっても？』
「……」
『師匠の側にいたいよね？私の側にいてほしいよね？だから、強くなんかならない方がいいんだよ。ずっと、守られていればいいんだよ』
そういって、私の心の闇は優しく語りかけてくる。
確かに師匠は優しい人だ。
見ず知らずの身だった私を助けてくれるような。
きっと師匠は、困っている人達を助け続けるだろう。
自分の身を犠牲にして。
それはーーー栗原　遊花には赦せないことだ。
「……違う」
『……』
「それは違う‼確かに？師匠の側にはいたいよ‼？だけどそれ以上に私は、師匠に傷ついて欲しくない‼？」
『でも、師匠は戦い続けるよ。勝てもしない運命と。その度に傷ついてーーー』
「運命に勝てないなんて、私が決めるな‼？私は何を見てたの⁉？私の師匠は、強くて、だけど本当はとても弱くて、それでもそんな弱さ

を隠して、笑顔で、どんな逆境だって乗り越える人でしょ⁉？」
『だけど、師匠は負けたよ？天神先生に……そしてもう……』
「1度負けたぐらいがなんですか⁉？それぐらいで弱気になるな、栗原　遊花⁉？そんなこと言ってたらあなたは何回負けてるって言うんですか⁉？師匠は絶対に戻ってくる⁉？弟子であるあなたが、師匠を疑ってどうするんですか⁉？私の師匠への思いは、その程度だって言うんですか⁉？違うでしょ⁉？」
　私の剣幕に、私の心の闇が黙る。
　これが本当に栗原　遊花の心の闇なら、こんな心の闇があることを栗原　遊花は赦せない⁉？
「師匠はまだ生きてる⁉？絶対にまた目を覚ましてくれる⁉？だから、私は師匠を信じてそれを待つの⁉？」
『自分の気持ちを素直に出せず、師匠に八つ当たりをしてその手を振り払ったのに？』
「確かに私は馬鹿です⁉？私のことを考えてくれた師匠の手を振り払った⁉？だからこそ、私は強くならなきゃいけないの⁉？もう1度、その手を繋ぐために⁉？もう2度と、その手を離さないために⁉？誰かを守って師匠が傷つくなら、その師匠を私が守る⁉？誰にも師匠を傷つけさせない⁉？」
『……』
「もう師匠に守られるだけの、みんなに守られるだけの私じゃない⁉？みんなを守れるように、私は強くなる⁉？そして今まで私を守ってくれた恩を返すの⁉？」
『私のことを守ってくれなくなってもいいの？』
「私はみんなに守って貰いたいんじゃない⁉？私はみんなと一緒に運命と戦いたい⁉？一緒の道を歩いていきたい⁉？1人でみんなが戦う背中を見るのは嫌だ⁉？」
　私が息を切らしながら自分の感情を、私の心の闇に叩きつける。
　そんな私を見て、私の心の闇は柔らかく笑った。
『……ふふっ、そっか。強いんだね、私は』
「自画自賛とか恥ずかしいですから止めてください。自己啓発キャン

ペーンじゃないんですから」
『ふふっ……確かに、あなたは私だよ。でも、私はあなたじゃない』
「……えっ？」
私の心の闇が発した言葉に、私は目を丸くする。
この黒い人影は私の心の闇だと言った。
あなたは私だと言って。
だけど、私があなたではないと言う。
つまり、栗原　遊花はこの黒い人影の一部だが、黒い人影の存在全てが栗原　遊花でできているわけではないということ？
「じゃ、じゃあ、あなたは誰なんですか？」
私がそう口にすると、黒い人影は霧散し、霧のようにその場に留まる。
そしてその霧から、私の声に被ってどこか聞き覚えのある女性の声が聞こえた。
『『いずれ分かるよ……いずれね。そういう運命に、”あなた（私）”はいるから』』
「いずれじゃなくて今教えて欲しいんですが⁉？」
『『忘れないで、”あなた（私）”は光で”私（あなた）”は闇。光を抱いて闇となし、闇を抱いて光に変える。それが、”あなた（私）”の役割。”私（あなた）”の存在理由』』
「意味が分かりませんよ⁉？抽象的な表現じゃなくて具体的に教えてください‼？」
『『というわけで、今から”あなた（私）”の周りを渦巻いている闇を光に変えよう。大丈夫、”あなた（私）”ならできるよ。絶望を希望に変えた”あなた（私）”なら』』
「実地試験ですか⁉？実地試験なんですね、これ⁉？」
そんな私のツッコミと共に私の意識が薄れていく。
『『願わくば……”あなた（私）”が、運命を超えれますように』』
意識が消えゆく最中、どこか悲しげな声が聞こえた気がした。
ーーーーーーー

「えっ⁉？ぐぅぅぅ……あああああーーーッ⁉？」
意識が浮上した瞬間、身体中を引き裂くような痛みと破壊衝動が襲ってきて、私は思わず絶叫してしまう。
油断したら一瞬で意識を持っていかれそうな闇の中で、私は必死に意識を繋ぐ。
「遊花⁉？っ、アンタ⁉？一体何をしたのよ⁉？」
闇の外から、桜ちゃんの声が聞こえてくる。
だけど、今はそちらに意識を配る余裕がない。
原因はおそらく私を包み込んでいるこの闇。
その闇から様々な声が聞こえてくる。
『お前の家族を奪った世界に復讐しろ⁉？』
『全て壊してしまえ⁉？』
『その力を、欲望を、全て開放しろ⁉？』
その声が聞こえる度に、私の意識が薄れそうになる。
ああ、これが闇のカードに取り憑かれた人達が感じていた感覚なんだ。
だけど、それに対する答えを、私はもう持っている。
『ガイメンウ　ノノモシレサイア　ゾルマジハ　ダトコウイ　トイナキデ　ハトコ　スロコ　ヲノモシレサイア　ハデ　ドイテノア』
「『愛されし者』の、運命？」
闇の外から闇先パイの心配そうな声が聞こえた気がする。
大丈夫です、闇先パイ。
見ていてください、あなたの後輩が、成長するところを⁉？
「平気……へっちゃら……です⁉？闇を、抱いて……光に、変える⁉？」
「むっ？なんだ、何をしようとしている？」
私が祈りを捧げるように、胸の前で手を組むと、私の身体を包み込んでいた闇が少しずつ剥がれ、闇が吹き出していたデュエルディスクに集まっていく。
「っ⁉？貴様、一体何をーーー⁉？」

「この破壊、衝動に……塗り潰され、たりなんか、しない‼?私、が……私が、みんなを……守る‼?運命を、超えるんだぁぁぁ‼?」
私がそう叫ぶと、デュエルディスクの中にセットされていたあの漆黒のカードが勢いよく空へと弾き出され、身体中を引き裂くような痛みと破壊衝動が消える。
空に弾き飛ばされた漆黒のカードを、私は目の前に落ちてきたタイミングで掴み取る。
すると、全てが漆黒に染め上げられていたカードは光り輝き、光が治ると、そこにはイラストや効果が浮かび上がった1枚のカードが存在していた。
「ゆう……か?」
「……これは流石に驚いた」
「馬鹿な、ありえない……」
桜ちゃんと闇先パイが唖然とした表情を浮かべ、天神先生が驚愕に表情を歪ませる。
私は新しいカードを一目見て、胸ポケットからカードを取り出し、共にデュエルディスクにセットしてあるデッキに加え、デュエルディスクを構える。
「デュエルです、天神先生‼?私は、大切な人達を守ってみせる‼?」
「っ、許さない……私以外の存在が私のカードを使って不正に新しい闇のカードを生み出すなど‼?栗原　遊花‼?貴様だけは、この手で屠ってやる‼?」
『決闘‼?』

遊花　ＬＰ８０００
幻騎　ＬＰ８０００

第７８話　未知数の希望

★

遊花　ＬＰ８０００
幻騎　ＬＰ８０００

「先攻は私だ。私は星因士（サテラナイト）ベガを召喚!!?」

〈星因士ベガ〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１２００

天神先生のフィールドに現れたのは琴のような形をした星の戦士。
「星因士ベガの効果発動!!?このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、手札から星因士ベガ以外のテラナイトモンスター１体を特殊召喚する。手札から星因士（サテラナイト）ウヌクを特殊召喚!!?」

〈星因士ウヌク〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１８００

ベガの身体が輝くと、その輝きに導かれてさらに蛇使いのような星の戦士が姿を現わす。
「テラナイト……そんなモンスター、この前にデュエルをした時には使ってませんでしたよね?」
「私が本気で君の相手をしていたとでも思っていたのか?あんなもの、私の正体を隠すためのダミーデッキに過ぎない」
「……それならそのデッキが天神先生の本来のデッキというわけですか」
「そうだとも、君の師匠を屠る程の力を秘めたね!!?星因士ウヌクの効果発動!!?このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、

デッキから星因士ウヌク以外のテラナイトカード1枚を墓地へ送る。
私はデッキから星因士(サテラナイト)デネブを墓地に送る」
　そして天神先生は正面に手をかざす。
「私の本気を見せてあげよう!!?閉鎖せよ!!?運命に従うサーキット!!?」
「リンク召喚ですか」
　天神の正面に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター2体!!?私は星因士ベガと星因士ウヌクの2体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?過去に囚われし王女!!?リンク2!!?聖騎士の追想イゾルデ!!?」
「えっ!?」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

　ベガとウヌクがサーキットの中に消え、天神の前に現れたのは師匠がいつも使用している金髪と白髪の2人の女性。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?リンクセレクト!!?リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター1体を手札に加える!!?ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。私はデッキから幻影騎士団(ファントムナイツ)フラジャイルアーマーを手札に加える!!?聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動!!?ロストメモリア!!?デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター1体をデッキから特殊召喚する!!?私はデッキから妖刀竹光、一惜二跳、ストイックチャレンジ、リビングフォッシルを墓地に送り、星因士(サテラナイト)アルタイルを特殊召喚!!?」
「っ、この動きは……」

〈星因士アルタイル〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１７００

イゾルデに導かれ、フィールドに現れたのはわし座の名を持つ翼を持つ星の戦士。
だけど、それよりも気になるのは……
「この動き、師匠と同じ……」
「ククッ、流石は弟子と言ったところか。そう、これは結束　遊騎の動きを模しているのだよ。これでも、私は結束　遊騎のファンだからね」
「……っ、師匠を傷付けた天神先生が、師匠のファン？」
「どう受け取るかは君次第だがね」
私が思わず天神先生睨みつけると天神先生は愉快そうな笑みを浮かべる。
天神先生の言葉が真実であれ挑発であれ、どちらにせよ師匠の動きを意識してるのは間違いない。
それならば、まだまだこの程度じゃ展開は止まらないハズだ。
「星因士アルタイルの効果、それにチェーンして墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える!!?私はデッキから黄金色の竹光を手札に加える!!?そして、星因士アルタイルの効果発動!!?このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、星因士　アルタイル以外の自分の墓地のテラナイトモンスター１体を守備表示で特殊召喚する!!?ただし、この効果の発動後、ターン終了時までテラナイトモンスター以外の自分フィールドのモンスターは攻撃できない。最も、先攻である今は関係ないがね。舞い戻れ、星因士デネブ!!?」

〈星因士デネブ〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１０００

アルタイルが地面に剣を突き刺すと、地面から光の粒子が漏れ、そ

の粒子は白鳥のような優雅な星の戦士に姿を変えた。
「星因士デネブの効果発動!!?このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから星因士デネブ以外のテラナイトモンスター1体を手札に加える!!?私はデッキから星因士(サテラナイト)シャムを手札に加える!!?さらに、速攻魔法、手札断殺!!?お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送り、その後、それぞれデッキから2枚ドローする!!?」
「手札交換ですか……ですが、墓地に送られた絶対王バックジャックの効果発動!!?このカードが墓地へ送られた場合、自分のデッキの上からカードを3枚確認し、好きな順番でデッキの上に戻します!!?」
「フン、デッキ操作ぐらいは許してやる。カードを1枚伏せ、リバースカードオープン!!?罠発動、幻影騎士団(ファントムナイツ)シェードブリガンダイン!!?」
「1ターン目から発動できる罠カード!?!?」
「同名カードは1ターンに1枚しか発動できず、自分の墓地に罠カードが存在しない場合、このカードはセットしたターンでも発動できる!!?このカードは発動後、戦士族・闇属性・レベル4・攻撃力0、守備力300の通常モンスターとなり、モンスターゾーンに守備表示で特殊召喚する!!?現れろ、幻影騎士団シェードブリガンダイン!!?」

〈幻影騎士団シェードブリガンダイン〉☆4　戦士族　闇属性
DEF300

フィールドに現れたのは青い炎のを纏った鎧のモンスター。
そして幻騎はモンスター達に手をかざす。
「私はレベル4テラナイトモンスター、星因士アルタイル、星因士デネブでオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
アルタイル、デネブが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けると、空から舞い降りたのは漆黒の鎧を見に纏ったケンタウロス。
「全てを闇に染め上げる悪星!!?煉獄(テラナイト)の騎士ヴァトライムス!!?」
〈煉獄の騎士ヴァトライムス〉★４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２６００
「テラナイトのエクシーズモンスター……」
「煉獄の騎士ヴァトライムスの永続効果、フォーリングダークサイド!!?このカードがモンスターゾーンに存在する限り、フィールドの全ての表側表示モンスターは闇属性になる!!?」
「っ、属性を変化させるエクシーズモンスター!?」

聖騎士の追想　イゾルデ
光属性→闇属性

ヴァトライムスの身体から闇が溢れ出すと、イゾルデの身体を呑み込み、イゾルデが漆黒のオーラを纏う。
「そして、このカードの力を応用すればこんなこともできる。閉鎖せよ!!?運命に従うサーキット!!?」
天神先生が手をかざすと、正面に再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は闇属性モンスター２体以上!!?私は幻影騎士団シェードブリガンダインと闇属性となった聖騎士の追想　イゾルデを２体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
シェードブリガンダインとイゾルデが２体に分身してサーキットに吸い込まれる。
そしてサーキットが輝くと、現れたのは巨大な戦斧を構えた漆黒の騎士。
「リンク召喚!!?終わりを告げる戦斧の騎士!!?リンク３!!?幻影騎士団(ファントムナイツ)ラスティバルディッシュ!!?」

〈幻影騎士団ラスティバルディッシュ〉ＬＩＮＫ　３　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２１００　↙？　↘？↓

「幻影騎士団ラスティバルディッシュの効果発動!!？ラストファントム!!？同名カードは1ターンに1度、自分メインフェイズにデッキから幻影騎士団モンスター1体を墓地へ送り、その後、デッキからファントム魔法・罠カード1枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンにセットする!!？私はデッキから幻影騎士団ダスティローブ（ファントムナイツ）を墓地に送り、永続罠、幻影霧剣（ファントムフォッグブレード）をセットする!!？さらに墓地に存在する幻影騎士団ダスティローブの効果発動!!？同名カードは1ターンに1度、墓地のこのカードを除外し、デッキから同名カード以外の幻影騎士団カード1枚を手札に加える!!？私はデッキから幻影騎士団（ファントムナイツ）ウロングマグネリングを手札に加える!!？」

「っ、見えている罠でも、これだけあると掻い潜るのが大変ですね」

「まだ終わってはいない!!？私は煉獄の騎士ヴァトライムスに装備魔法、折れ竹光を装備!!？さらに魔法カード黄金色の竹光を発動!!？自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローする!!？私はカードを3枚伏せてターンエンドだ」

「ならエンドフェイズ、墓地の絶対王バックジャックを除外して効果発動!!？相手ターンに墓地のこのカードを除外して自分のデッキの一番上のカードをめくり、そのカードが通常罠カードだった場合、自分フィールドにセットし、違った場合、そのカードを墓地へ送ります。そして、この効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できます!!？めくられたのは通常罠、裁きの天秤!!？通常罠カードなのでセットされます!!」

「チッ、またそのカードか……だが、まだデュエルは始まったばかりで君の手札も多い。大して気にする必要はあるまい」

遊花　ＬＰ８０００　手札５
ー ー ▲ ー ー　　ー
ー ー ー ー ー ー
☆　　ー
ー ー ー ー ○
▲ ▲ ▲ △ ▲　　ー
幻騎　ＬＰ８０００　手札２

「私のターン、ドロー!!?今の言葉、早速後悔して貰いますよ!!?私は手札を５枚捨てて、永続魔法、守護神の宝札を発動!!?」
「何!?そのカードは……!!?」
「自分はデッキから２枚ドローし、このカードが魔法&罠ゾーンに存在する限り、自分ドローフェイズの通常のドローは２枚になります!!?さらにその発動にチェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?裁きの天秤!!?相手フィールドのカードの数が自分の手札・フィールドのカードの合計数より多い場合に発動でき、自分はその差の数だけデッキからドローします!!?天神先生のフィールドのカードは７枚、私は裁きの天秤と守護神の宝札の２枚。その差分の５枚のカードをドローします!!?さらにチェーン処理により守護神の宝札の効果でカードを２枚ドローします!!?」
「馬鹿な!?守護神の宝札のデメリットを利用して７枚のカードをドローしただと!?」
「これで思う存分動けます!!?私はクリボルトを召喚!!?」

〈クリボルト〉☆１　雷族　光属性→闇属性
ＡＴＫ３００

出て来たのは電気を出している黒い球体のモンスター。
「クリボルトの効果発動!!?自分のメインフェイズ時にオーバーレイユニットを持っているエクシーズモンスター１体を選択し、選択したモンスターのオーバーレイユニットを１つ取り除き、自分のデッキか

らクリボルト1体を特殊召喚します!!?対象は煉獄の騎士ヴァトライムス!!?」
「チッ、面倒なモンスターを……チェーンしてリバースカードオープン!!?永続罠、幻影霧剣!!?クリボルトを対象としてその効果を無効にする!!?」
クリボルトの身体を闇の霧を纏った剣が貫き、その身体を霧に変える。
だけど、そんなことは分かりきっている。
「1度攻略した戦術じゃ、私は止められません!!?私は、スケール8の捕食植物(プレデタープランツ)スパイダーオーキッドでペンデュラムスケールをセッティング!!?」
私の右隣に光の柱が立ち上り、その光の中に蜘蛛のように見える植物が浮かびあがり、下に8の数字が現れる。
「捕食植物スパイダーオーキッドのペンデュラム効果発動!!?このカードを発動したターンの自分メインフェイズに、このカード以外の魔法&罠ゾーンの表側表示のカード1枚を対象としてそのカードを破壊する!!?私が破壊するのは幻影霧剣!!?」
「っ、またそれか……」
光の柱からスパイダーオーキッドが蔦を伸ばし、幻影霧剣を破壊すると霧に変わっていたクリボルトの姿が元に戻る。
「これで再び効果が使えます!!?クリボルトの効果発動!!?煉獄の騎士ヴァトライムスのオーバーレイユニットを1つ取り除き、自分のデッキからクリボルト1体を特殊召喚します!!?」

〈クリボルト〉☆1　雷族　光属性→闇属性
ＤＥＦ２００

ヴァトライムスのオーバーレイユニットが私のフィールドに飛んでくると、その光がクリボルトに変わる。
「もう1度、クリボルトの効果発動!!?煉獄の騎士ヴァトライムスのオーバーレイユニットを1つ取り除き、自分のデッキからクリボルト

1体を特殊召喚します!!?」

〈クリボルト〉☆1　雷族　光属性→闇属性
ＤＥＦ２００

私のフィールドに3体目のクリボルトが現れる。
ヴァトライムスのオーバーレイユニットを無くしながら一気にクリボルトを展開することができた。
ここからリンク召喚に繋げて一気に攻めて……
そう考えを巡らせる私を見て、天神先生はニヤリと笑った。
「クックック、まさかこうも簡単にことが進むとはな。言葉を返すようだが、1度攻略された戦術をそのまま使用するわけないだろう?」
「えっ!!?」
「私を見くびったことを後悔するがいい!!?私は手札を1枚捨てて速攻魔法、超融合を発動!!?」
「っ、超融合!!?」
「このカードは手札を1枚捨てて発動でき、自分・相手フィールドから融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚する!!?このカードの発動に対して魔法・罠・モンスターの効果は発動できない!!?私はフィールドの闇属性モンスター、闇属性となっている君の3体のクリボルトを融合!!?」
「私のクリボルト達を使って融合召喚を!!?」
「闇に呑まれし雷の精霊よ!!?今交わりて、全てを呑み込む闇となれ!!?」
フィールドに稲妻を纏った渦が現れ、その中に3体のクリボルトが吸い込まれていく。
そして渦が弾けると、現れるのは全てを溶かし尽くす捕食者。
「融合召喚!!?世界を閉ざす毒蛇!!?捕食植物(プレデタープラント)トリフィオヴェルトゥム!!?」
「捕食植物ですか!!?」

〈捕食植物トリフィオヴェルトゥム〉☆９　植物族　闇属性
ＡＴＫ３０００
「捕食植物の融合モンスター……このために煉獄の騎士ヴァトライムスを……」
「私がエクシーズモンスターを出せば君はクリボルトを使ってくるだろうと思っていた。幻影霧剣を使えばそれを突破するための手も使ってな。だからこそ、そんな浅はかな考えを利用させて貰ったというわけさ」
「うっ……」
召喚権も使っているし、クリボルトを一気に除去されたことはかなり痛い。
これは師匠を倒した天神先生を甘く見た私のミスだ。
「それなら、少しでも防御を固めにいかないと……このカードは手札から攻撃表示で特殊召喚できます!!?おいで、ジェスターコンフィ!!?」

〈ジェスターコンフィ〉☆１　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０
現れたのは球に乗った道化師のモンスター。
「導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「リンク召喚か……」
私が正面に手をかざすと、目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル１モンスター１体。私はジェスターコンフィをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚!!?希望の守り手!!?リンク１!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

ジェスターコンフィがサーキットに吸い込まれると、代わりに青い球体のモンスターが私の前に元気一杯に飛び出してくる。
しかし、現れたリンクリボーを見てトリフィオヴェルトゥムは舌舐めずりをして荒々しく咆哮を上げた。
「本当に御し易いよ、君は‼？捕食植物トリフィオヴェルトゥムの効果発動‼？ディープリィデザイア‼？」
「っ⁉？」
「同名カードは1ターンに1度、このカードが融合召喚されている場合、相手がＥＸデッキからモンスターを特殊召喚する際にその特殊召喚を無効にし、そのモンスターを破壊する‼？」
「ＥＸデッキからの特殊召喚無効効果⁉？」
「リンクリボーを喰らい尽くせ、捕食植物トリフィオヴェルトゥム‼？」
トリフィオヴェルトゥムが三つ首から毒のブレスを放ち、リンクリボーを呑み込んで一瞬で消滅させる。
「っ、リンクリボー……ゴメンね」
「そいつの防御性能は厄介だからな。特殊召喚を無効化してしまえば蘇ることもない」
「……私はカードを2枚伏せてターンエンドです」

遊花　ＬＰ８０００　手札２
ー▲▲△△　ー
ーーーーー
☆　ー
○ーーー○
▲ーー△▲　ー
幻騎　ＬＰ８０００　手札１

「私のターン、ドロー‼？クックック、今日の私は運がいいようだ。私が引いたのはＲＵＭ（ランクアップマジック）ー七皇（ザ・セブンス・ワン）の剣‼？」

「ＲＵＭ……七皇の剣？」
「っ‼？遊花、気をつけて……そのカードは直接Ｎｏ．を呼び出してランクアップさせる‼？」
「えっ⁉？」
「クックック、正体を知ったところで君に止められるかな？このカード名の効果はデュエル中に１度しか適用できず、自分のドローフェイズに通常のドローをしたこのカードを公開し続ける事で、そのターンのメインフェイズ１の開始時に発動できる‼？私はＲＵＭ－七皇の剣を発動‼？ＣＮｏ．以外のＮｏ．１０１～Ｎｏ．１０７のいずれかをカード名に含むモンスター１体を、自分のＥＸデッキ・墓地から選んで特殊召喚し、そのモンスターと同じＮｏ．の数字を持つＣＮｏ．モンスター１体を、そのモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚する‼？ＲＵＭ－七皇の剣の効果でＥＸデッキより現れろ、Ｎｏ．１０４‼？偽善の仮面を被り、弱者に救いの光を与えよ‼？不吉なる仮面舞踏会の支配人、仮面魔踏士（マスカレードマジシャン）シャイニング‼？』

〈Ｎｏ．１０４仮面魔踏士シャイニング〉★４　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ２７００

現れたのは清廉そうな仮面をつけ、白いスーツに身を包んだ青いつばさを持つ魔術師。
「そしてＮｏ．１０４仮面魔踏士シャイニング１体でオーバーレイ‼？１体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築‼？カオスエクシーズチェンジ‼？」
シャイニングが空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りたのは清廉な仮面が黒く禍々しいものに代わり、全身が血で染まったかのような真紅のスーツを身に付けた邪悪なる魔術師。
「現れろ、ＣＮｏ．１０４‼？偽善の仮面を外し、愚者を冥府の仮面舞踏会に導け‼？絶望を告げる恐怖の死神、仮面魔踏士（マスカレードマジシャン）アンブラル‼

？」

〈ＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラル〉★５　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ３０００

「仮面魔踏士アンブラル……うっ‼？」
　天神先生が特殊召喚したアンブラルを見た瞬間、突然視界がノイズに包まれ、頭の中に見たことのないイメージが流れ込んでくる。
『現れろ、ＣＮｏ．１０４‼？混沌より生まれしバリアンの力が光を覆うとき、大いなる闇が舞い踊る‼？仮面魔踏士アンブラル‼？』
「っ……何、今の……？」
　私が頭に流れ込んできたイメージに戸惑っていると、天神先生は狂気的な笑みを浮かべた。
「さあ、私が生み出したＣＮｏ．の力、存分に味わいたまえ‼？ＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラルの効果発動‼？ダンスマカブル‼？このカードが特殊召喚に成功した時、フィールド上の魔法・罠カード１枚を選択して破壊する‼？対象は捕食植物スパイダーオーキッドだ‼？」
「っ……魔法・罠破壊……」
「さらにそれにチェーンして幻影騎士団ラスティバルディッシュの効果発動‼？アパリシャンモーン‼？同名カードは１ターンに１度、このカードが既にモンスターゾーンに存在する状態で、このカードのリンク先に闇属性エクシーズモンスターが特殊召喚された場合、フィールドのカード１枚を対象としてそのカードを破壊する‼？対象は守護神の宝札だ‼？」
　ラスティバルディッシュが守護神の宝札に手をかざすと、守護神の宝札を覆うように闇が立ち込め、その闇の中から数えきれない程の亡霊が現れる。
「それを通すわけにはいきません‼？それにチェーンしてリバースカードオープン‼？罠発動、スキルプリズナー‼？自分フィールド上のカード１枚を選択して、このターン、選択したカードを対象として

発動したモンスター効果を無効にします!!?対象にするのは守護神の宝札です!!?」
「チッ、破壊対策のカードもドローしていたか。だが、守護神の宝札は破壊できなかったが、捕食植物スパイダーオーキッドは破壊させて貰うぞ!!?」
守護神の宝札の周りに目に見えない障壁があらわれ、亡霊達の侵入を拒む。
しかし、アンブラルが放つ魔術の暴風により光の柱にいるスパイダーオーキッドを吹き飛ばされ、消滅してしまった。
「ゴメンね、スパイダーオーキッド……破壊された捕食植物スパイダーオーキッドはＥＸデッキに送られます」
「幻影騎士団ラスティバルディッシュの効果発動!!?ラストファントム!!?私はデッキから幻影騎士団サイレントブーツ(ファントムナイツ)を墓地に送り、２枚目の幻影霧剣をセットする!!?さらに私は墓地に存在する幻影騎士団サイレントブーツの効果発動!!?このカードを除外し、デッキからファントム魔法・罠を手札に加える!!?私は永続罠カード、幻影剣(ファントムソード)を手札に加える!!?」
「っ、潜っても潜っても罠が減らない……」
「さあ、どこまで耐えられるかな?バトル!!?幻影騎士団ラスティバルディッシュでダイレクトアタック!!?ファントムスマッシャー!!?」
「通しません!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札のゴーストリックランタンの効果発動!!?その攻撃を無効にし、このカードを手札から裏側守備表示で特殊召喚します!!?」
ラスティバルディッシュが戦斧を掲げると戦斧に闇が集め、空高く跳び上がって私に戦斧を振り下ろそうとする。
しかし、ラスティバルディッシュが戦斧を振り下ろそうとした瞬間、ラスティバルディッシュの前に一瞬だけジャックオーランタンのような幽霊が現れ、驚いたラスティバルディッシュの戦斧は空を斬った。
「防いだか。ならば、煉獄の騎士ヴァトライムスでセットモンスター

を攻撃!!?・パーガトリートランプル!!?・」
「セットモンスターはゴーストリックランタンです!!?・」
〈ゴーストリックランタン〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

ランタンが笑いながらヴァトライムスの燃え盛る蹄に踏みつけられ、消滅する。
「捕食植物トリフィオヴェルトゥムでダイレクトアタック!!?・トリニティピルムプラント!!?・」
「リバースカードオープン!!?・罠発動!!?・パワーウォール!!?・相手モンスターの攻撃によって自分が戦闘ダメージを受けるダメージ計算時、その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージが０になるように５００ダメージにつき1枚、自分のデッキの上からカードを墓地へ送ります!!?・」
「ほう、これも防ぐか」
「捕食植物トリフィオヴェルトゥムの攻撃で発生する戦闘ダメージは３０００!!?・デッキの上から6枚のカードを墓地に送ってダメージを０にします!!?・」
　私がデッキの上から6枚のカードを墓地に送ると、私の前に粒子で出来た盾が生まれ、トリフィオヴェルトゥムが槍の形をした種子の弾丸を防ぎきる。
「だが、これでセットカードも消え失せた。ＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラルでダイレクトアタック!!?・」
「まだです!!?・相手モンスターの攻撃宣言時、墓地に存在するクリボーンの効果発動!!?・墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のクリボーモンスターを任意の数だけ対象として、そのモンスターを特殊召喚します!!?・来て、サクリボー!!?・クリアクリボー!!?・虹クリボー!!?・ジャンクリボー!!?・アンクリボー!!?・」
〈サクリボー〉☆1　悪魔族　闇属性

ＤＥＦ２００

〈クリアクリボー〉☆１　天使族　光属性↓闇属性
ＤＥＦ２００

〈虹クリボー〉☆１　悪魔族　光属性↓闇属性
ＤＥＦ１００

〈ジャンクリボー〉☆１　機械族　地属性↓闇属性
ＤＥＦ２００

〈アンクリボー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

私のフィールド現れる５体のクリボー達。
現れたクリボー達に、天神先生は苛立つように手を振るう。
「目障りな雑魚共が‼？モンスターが増えたことにより、攻撃対象を変更し、ＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラルでジャンクリボーを攻撃‼？ブラッディマスカレード‼？」
「ありがとう、ジャンクリボー」
私の感謝の言葉に、ジャンクリボーは嬉しそうに身体を振るが、アンブラルが振り下ろした杖に叩き潰され、消滅した。
あなたの仇……必ずとるからね。
「相変わらず自分を守ることだけは上手い奴だ。だが、所詮君のデッキはレベル１モンスターを軸にしたローレベルデッキ。捕食植物トリフィオヴェルトゥムでＥＸデッキからの特殊召喚を封じられた今、私のモンスター達を突破する手はあるまい。メインフェイズ２、カードを１枚伏せてターンエンド」

遊花　ＬＰ８０００　手札１
ーーー△ー　ー

ー□□□□
☆　　ー
○ー○ー○
▲▲▲△▲　　ー
幻騎　ＬＰ８０００　手札１

「私のターン、守護神の宝札の効果でカードを２枚ドロー!!?」
守護神の宝札でドローした瞬間、私の墓地が鈍い闇色に光る。
……そうだよね、私にはあなた達がついているんだよね。
確かにトリフィオヴェルトゥムの効果は強力だ。
だけど、私だってＥＸデッキにいる仲間達だけで戦っているわけじゃない。
例え、あなた達が本当に世界を滅ぼす程の力を秘めているのだとしても……
「私は……あなた達を信じる!!?私はフィールドに存在するサクリボー、クリアクリボー、虹クリボー、アンクリボー、４体のレベル１モンスターを墓地に送ることで墓地からモンスターを特殊召喚します!!?」
「何!?何だ、その召喚条件は!?」
私のモンスター達が粒子に変わる。
そしてその粒子は重なり合い、大きな闇の巨人が、私を守るように現れた。
「おいで!!?絶望を統べる優しき神!!?絶望神アンチホープ!!?」

〈絶望神アンチホープ〉☆１２　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ５０００

「絶望神アンチホープ!?希望に歯向かう絶望の神だと!?だが、いくら攻撃力が５０００のモンスターであろうと、幻影霧剣がある限り私のモンスター達には触れることすら叶わない!!?」
「そうとも限りません!!?私はバトルフェイズに入り、バトルフェイ

ズ開始時、速攻魔法、封魔の矢!!?」
「っ!!?そのカードは……」
「このカードの発動に対して魔法・罠・モンスターの効果は発動できず、自分または相手のバトルフェイズ開始時に発動できます!!?このカードの発動後、ターン終了時までお互いに魔法・罠カードの効果を発動できません!!?」
「チッ、バトルフェイズ前に破壊される可能性を考えて使わなかったが、召喚時に使っておけばよかったか」
　空から大量の弓矢が降り注ぎ、天神先生のセットカードを撃ち抜いて地面に縫い付ける。
　これでこのターン、沢山ある罠を警戒する必要はない!!?
「バトル!!?絶望神アンチホープで捕食植物トリフィオヴェルトゥムに攻撃!!?ホープブレイクパニッシャー!!?」
「くっ、迎え撃て!!?捕食植物トリフィオヴェルトゥム!!?トリニティピルムプラント!!?」
　トリフィオヴェルトゥムが槍の形をした種子の弾丸をアンチホープに放つが、アンチホープは種子の弾丸を全て弾き飛ばし、その大剣でトリフィオヴェルトゥムの三つ首を斬り落とした。
「ちいっ!!?」

幻騎　ＬＰ８０００→６０００

「これでＥＸデッキからの特殊召喚を無効化される心配もなくなりました!!?メインフェイズ２、墓地に存在するジェットシンクロンの効果発動!!?手札を１枚墓地に送り、墓地からこのカードを特殊召喚します!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合、除外されます!!?」

〈ジェットシンクロン〉☆１　機械族　炎属性→闇属性
ＤＥＦ０

現れたのは小さなジェット機のような機械のモンスター。
現れたジェットシンクロンは嬉しそうに私の周りを飛び回る。
「そして、墓地に送られたドットスケーパーの効果発動!!?デュエル中に1度、このカードが墓地に送られた場合に特殊召喚!!?」

〈ドットスケーパー〉☆1　サイバース族　地属性→闇属性
ＤＥＦ２１００

さらにジェットシンクロンに寄り添うようにドットの身体を持つモンスターが現れる。
そして私は2体のモンスターに手をかざす。
「私はレベル1、ジェットシンクロンとドットスケーパーでオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
ジェットシンクロンとドットスケーパーが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこには白い馬に乗る小さな首無しの騎士がいた。
「闇夜に紛れし哀しき妖精!!?その刃で疑惑を切り裂け!!?ランク1!!?ゴーストリックデュラハン!!?」

〈ゴーストリックデュラハン〉★1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

「さらに私はゴーストリックデュラハン1体でオーバーレイ!!?1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?ランクアップエクシーズチェンジ!!?」
デュラハンが再び空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りたのは黒いドレスを身に纏い、白い羽根にところどころ漆黒の羽根が混ざる女の子のモンスター。
「闇夜を彷徨う自由な天使!!?その気ままさで憂鬱を払え!!?ランク

４‼?ゴーストリックの駄天使‼?」

〈ゴーストリックの駄天使〉★４　天使族　闇属性
ＤＥＦ２５００

駄天使が私の周りをひらひらと飛びながらいつものようにドヤ顔で空を指差して決めポーズをとる。
そして私がそのまま駄天使の効果を発動しようとした瞬間、アンブラルの姿が目に入る。
……何だか、このまま効果を発動したらいけない気がする。
「……私はカードを1枚伏せ、ゴーストリックの駄天使の効果発動‼?チャームコール‼?オーバーレイユニットを1つ取り除くことでデッキからゴーストリック魔法・罠を手札に加えます‼?」
「直感的にアンブラルの力を感じ取ったか……チェーンしてＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラルの効果発動‼?カースドリーパー‼?このカードがＮｏ．１０４仮面魔踏士シャイニングをカオスオーバーレイユニットとしている場合、以下の効果を得る。１ターンに1度、相手フィールド上で効果モンスターの効果が発動した時、このカードのオーバーレイユニットを1つ取り除き、その発動を無効にする‼?」
「っ、無効効果……」
「さらにその後、相手の手札をランダムに1枚墓地へ送り、相手ライフを半分にすることができるが、手札を墓地へ送らなければライフは半分にできない。だが、今の君の手札は０。どうやらライフを削り取ることはできないようだ」
アンブラルが杖を振るうと、堕天使が私に向けて飛ばそうとした小さなハートが消し去られ、駄天使がショックを受けたように肩を落とす。
大丈夫だよ、あなたはよくやってくれたから、心配しないで。
「私はこのままターンエンドです‼?」

遊花　ＬＰ８０００　手札０
ーーー▲△ー　　ー
ーーー○ーー
　　☆　　□
ーー○ー○
▲▲▲△▲　　ー
幻騎　ＬＰ６０００　手札１

「まさか、ただの小娘風情が神をも従え私に歯向かってくるとはね。賞賛してあげよう」
そういって、天神先生が目を閉じ、私に空虚な拍手を送る。
しかし、すぐに拍手を止め目を開けると、怒りに満ちた表情を浮かべ、血走った眼で私を睨みつけた。
「……だが、茶番は終わりだ。貴様のような小娘に、これ以上無駄な時間をかけるつもりはない。速やかに死ね」
「っ……」
剥き出しの殺意に、私は思わず身体を強張らせる。
そんな天神先生の殺意を遮るように、私の前に立つ影があった。
「絶望神アンチホープ……」
私に背を向け、天神先生を睨みつけるアンチホープに私は思わず笑みを浮かべた。
レイナちゃんが言っていた世界を滅ぼせる力を持つ闇のカード。
だけど、こうして私を守ってくれている優しい姿には、やっぱり私に世界を滅ぼす素質があるからなんて理由は微塵も感じられない。
「ありがとう……でも、大丈夫。平気、へっちゃらだよ」
そういって私が笑いかけると、アンチホープは微かに笑った気がした。
「さあ、この茶番をすぐに終わらせてあげよう‼？私のターン、ドロー‼？私は墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動‼？自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローする。ただ

しこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外される!!?私はフィールドの折れ竹光をデッキに戻し、カードを1枚ドローする!!?そして魔法カード、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローする!!?貴様の手札はない。よって私のみ2枚捨ててドローする!!?さらに私は星因士(サテラナイト)シリウスを召喚!!?」

〈星因士シリウス〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

天神先生のフィールドに現れたのはおおいぬ座の星の戦士。
「星因士シリウスの効果発動!!?このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合、自分の墓地のテラナイトモンスター5体をデッキに戻してシャッフルし、その後、自分はデッキから1枚ドローする!!?私は墓地に存在する星因士ベガ、星因士ウヌク、星因士アルタイル、星因士デネブ、星因士シャムをデッキに戻し、カードを1枚ドローする!!?さらに墓地に存在する幻影霧剣の効果発動!!?墓地のこのカードを除外し、自分の墓地の幻影騎士団モンスター1体を対象として特殊召喚する!!?ただしこの効果で特殊召喚したモンスターは、フィールドから離れた場合に除外される。現れろ、幻影騎士団フラジャイルアーマー!!?」

〈幻影騎士団フラジャイルアーマー〉☆4　戦士族　闇属性
ＤＥＦ２０００

さらにシリウスの側に青白い炎の身体を持った騎士が現れる。
これで天神先生のフィールドにはレベル4モンスターが2体。
「冥土の土産に見せてあげよう、私のエースモンスターを!!?私はレベル4の星因士シリウスと幻影騎士団フラジャイルアーマーでオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
シリウスとフラジャイルアーマーが光となり、空に浮かんだ混沌の

渦に吸い込まれる。
　そして渦が爆けると現れたのは見覚えがある金色の翼を持つ戦士。
「現れろ、Ｎｏ．３９‼?夢幻なる希望の戦士‼?希望皇ホープ‼?」
〈Ｎｏ．３９　希望皇ホープ〉★４　戦士族　光属性→闇属性
ＡＴＫ２５００
「希望皇ホープ……っ、また‼?」
　天神先生が特殊召喚したホープを見た瞬間、再び視界がノイズに包まれ、頭の中にアンブラルの時よりも強烈なイメージが複数流れ込んできた。
『現れよ、Ｎｏ．３９‼?我が戦いはここより始まる。白き翼に望みを託せ‼?光の使者、希望皇ホープ‼?』
『オレの戦いはここから始まる‼?白き翼に望みを託せ‼?現れろＮｏ．３９‼?光の使者、希望皇ホープ‼?』
『我が名は■■■。お前たちの希望の光を消し去る絶望の神……‼?』
「っ……はぁ……はぁ……今のは……」
　頭に流れ込んでくる大量のイメージに、私は思わず頭を押さえる。
　今、頭に流れ込んだイメージ……最初の２つは希望皇ホープのものだと思う。
　見たことがない幽霊みたいな人と少年が希望皇ホープをエクシーズ召喚する姿。
　だけど、最後のイメージだけは、ノイズ混じりではっきりとしたものは見えなかった。
　だけど、あの言葉……
『お前たちの希望の光を消し去る絶望の神……‼?』
「あなたの記憶なの……絶望神アンチホープ?」
　私の言葉に、絶望の神であるアンチホープは厳しい表情でホープを睨みつけて答えない。
　私は更に言葉をかけようとするが、それを遮るかのように天神先生

の言葉が私をデュエルに引き戻す。
「この状況で考え事とは余裕だな!!?幻影騎士団ラスティバルディッシュの効果発動!!?アパリシャンモーン!!?対象は貴様のセットカードだ!!?」
「っ!!?チェーンして墓地のスキルプリズナーを除外して効果発動!!?!!?墓地のこのカードをゲームから除外し、自分フィールド上のカード1枚を選択してこのターン、選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にする!!?対象にするのは現在選択されているセットカードです!!?」
ラスティバルディッシュが手をかざし再び闇の中から亡霊が現れるが、障壁に守られたセットカードには触れられず消滅する。
しかし、それを見て天神先生は愉快そうに高笑いをした。
「クックックッ、ハーハッハッハ!!?」
「っ、何がおかしいんですか?」
「いやいや感心しているだけだよ。貴様の無垢さにね。本当に……御し易くてたまらない!!?」
そういうと、天神先生は狂気の笑みを浮かべながら1枚のカードを掲げた。
「見せてやろう、貴様の師匠を屠った希望皇ホープの真の姿を!!?私はＲＵＭ（ランクアップマジック）ーヌメロンフォース!!?」
「ＲＵＭ……ヌメロンフォース!!?」
「自分フィールド上のエクシーズモンスター1体を選択し、選択したモンスターと同じ種族でランクが1つ高いＣＮｏ．と名のついたモンスター1体を、選択したモンスターの上に重ね、エクシーズ召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚する!!?私はＮｏ．３９　希望皇ホープ1体でオーバーレイ!!?1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?カオスエクシーズチェンジ!!?」
ホープが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこから現れるのは進化を遂げた希望の戦士。
あの雨の中、師匠に剣を振り下ろそうとした血のような真紅の装甲と漆黒の鎧を見に纏った希望の英雄。

「希望の戦士よ!!?混沌の力を受け入れ、殺戮の果てに儚き希望を見出せ!!?現れろ!!?ＣＮｏ．３９　希望皇ホープレイＶ!!?」

〈ＣＮｏ．３９　希望皇ホープレイＶ〉★５　戦士族　光属性
ＡＴＫ２６００

「このモンスターは……あの時の!!?」
「ＲＵＭ－ヌメロンフォースの更なる効果!!?ＣＮｏ．と名のついたモンスター１体を、選択したモンスターの上に重ね、エクシーズ召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚した後、この効果で特殊召喚したモンスター以外のフィールド上に表側表示で存在するカードの効果を全て無効にする!!?」
「全てのカード効果を無効!?」
「私の才能の前には全てが無価値だ。消え失せろ、カオスデリート!!?」
　ホープレイＶの身体が光り輝くと、私のフィールドにあった全てのカードが色を失っていき、力を奪われた駄天使が顔から地面に落下し、アンチホープが膝をつく。
「さあ、君の終焉を迎える時だ!!?ＣＮｏ．３９　希望皇ホープレイＶの効果発動!!?このカードが希望皇ホープと名のついたモンスターをカオスオーバーレイユニットとしている場合、１ターンに１度、このカードのカオスオーバーレイユニットを１つ取り除き、相手フィールド上のモンスター１体を破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える!!?」
「攻撃力分のバーン効果!?っ、ということは……!!?」
「私が破壊するのは絶望神アンチホープだ!!?その攻撃力分……５０００のダメージを受けて師匠の後を追うがいい!!?砕け散れ、Ｖブレードシュート!!?」
　ホープレイＶの手元に赤黒い剣が現れ、赤黒い剣に闇の瘴気が集まっていき、怪しく輝き始め、赤黒い剣をアンチホープに向けて投擲する。

アンチホープは大剣を使い、投擲された剣を弾き返そうとするが、力を奪われた状態では弾き返すことができず、その身体を貫かれ、アンチホープを貫いた剣が私の身体を吹き飛ばした。
「きゃあああああ‼?」

遊花　ＬＰ８０００→３０００

赤黒い剣に吹き飛ばされ、私の身体が勢いよく地面を転がり、身体中に擦り傷ができ、関節は軋んで悲鳴をあげる。
痛い……こんな痛みを、いつも師匠は……
「遊花⁉?」
「っ……アイツ……」
「っ……大丈夫、夫……平気……へっちゃら……です」
慌てて駆け寄ってこようとする桜ちゃん達を手で制し、軋む身体に耐えて立ち上がる。
そんな私を見て、天神先生が嘲笑うかのように鼻を鳴らす。
「フン、その身体でまだ立ち上がるか。そのまま大人しく眠っていれば、これ以上痛みに耐える必要も無く永遠に眠ることができたものを……」
「勝手に……私が、負けるなんて……決めつけないで、ください‼?前にも、言ったハズです……私は……諦めることだけは、絶対にしない‼?そして……運命を斬り開いて、師匠との未来を掴むんです‼?」
「っ……気に入らない……心底気に入らない‼?諦めなければ道を開けると信じるその目が‼?希望なんてものに縋る貴様らの目が、心底気に入らない‼?」
私の言葉に、天神先生の表情が歪み、私への……私と師匠への憎悪を剥き出しにする。
「そこまでいうのなら教えてあげよう、貴様に未来など無いということを‼?バトル‼?煉獄の騎士ヴァトライムスでゴーストリックの駄天使を攻撃‼?パーガトリートランプル‼?」

「やらせません‼?･墓地に存在するサクリボーの効果発動‼?･自分のモンスターが戦闘で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外します‼?･」
　ヴァトライムスの燃え盛る蹄に駄天使が踏みつけられそうになるのを、サクリボーが庇い消滅する。
「それがどうした‼?･ＣＮｏ．１０４仮面魔踏士アンブラルでゴーストリックの駄天使を攻撃‼?･ブラッディマスカレード‼?･」
「ゴメンね、ゴーストリックの駄天使……」
　アンブラルは踊るようなステップで駄天使の背後に回り込むと頭部を杖で執拗に殴りつけ、撲殺した。
「オーバーレイユニットとして墓地に送られたゴーストリックデュラハンの効果発動‼?･このカードが墓地へ送られた場合、このカード以外の自分の墓地のゴーストリックカード１枚を対象としてそのカードを手札に加えます‼?･私は墓地にあるゴーストリックランタンを手札に加えます‼?･」
「そうはさせない‼?･速攻魔法、墓穴の指名者‼?･相手の墓地のモンスター１体を対象として、そのモンスターを除外し、次のターンの終了時まで、この効果で除外したモンスター及びそのモンスターと元々のカード名が同じモンスターの効果は無効化される‼?･私が除外するのはゴーストリックランタンだ‼?･」
「っ‼?･ここで……」
　天神先生の背後から青い腕が伸びてきて墓地にあったランタンを除外する。
　まずい、このままじゃ防御が……
「幻影騎士団ラスティバルディッシュでダイレクトアタック‼?･ダメージステップ、リバースカードオープン‼永続･罠、幻影剣‼?･フィールドの表側表示モンスター１体を対象としてこのカードを発動し、対象のモンスターの攻撃力は８００ポイントアップし、戦闘・効果で破壊される場合、代わりにこのカードを破壊できる。そのモンスターがフィールドから離れた時にこのカードは破壊される。対象は幻影騎士団ラスティバルディッシュだ‼?･」

幻影騎士団ラスティバルディッシュ
ＡＴＫ２１００→２９００

ラスティバルディッシュの手元に霧を纏った剣が現れ、ラスティバルディッシュが戦斧と共に空に掲げると戦斧と幻影剣に闇が集まる。
「斬り裂け、ファントムスライサー!!?」
闇を集めたラスティバルディッシュは戦斧と幻影剣を交互に振るい、私に闇の斬撃を放った。
「っ、あああああーーーッ!!?」

遊花　ＬＰ３０００→１００

闇の斬撃を受け、私は再び地面に倒れ込む。
「遊花!!? 闇、このデュエルを止めれないの!!?」
「私だって止めたい……でも、闇のカードを使ったデュエルを途中で中断すればどんなことが起こるか分からない……」
「だけど、このままじゃ遊花が……!!?」
「それに……遊花はまだ諦めてない……」
「えっ……?」
心配そうな桜ちゃん達の声を受けながら、私は地面に手をついて何とか身体を起こす。
「馬鹿な……ただの小娘が、これだけの闇のカードの攻撃を受けてまだ立ち上がるというのか!!?」
「当たり前、です!!? まだ……まだ、私のライフは、残ってる!!? まだ、デュエルは……終わってない!!? デュエルが、終わっていないなら……私はまだ……戦える!!?」
「っ、ならばすぐにその僅かなライフを消しとばし永遠の闇に葬ってやる!!? 墓地に存在する幻影翼（ファントムウイング）の効果発動!!? 墓地のこのカードを除外し、自分の墓地の幻影騎士団モンスター1体を対象として特殊召喚する!!? ただしこの効果で特殊召喚したモンスターは、フィール

ドから離れた場合に除外される。現れろ、幻影騎士団フラジャイルアーマー!!?」

〈幻影騎士団フラジャイルアーマー〉☆４　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１０００

「っ、さっきの手札抹殺で……」
「幻影騎士団フラジャイルアーマーでダイレクトアタック!!?」
「まだです!!?墓地に存在する虹クリボーの効果!!?レインボーシールド!!?このカードが墓地に存在する場合、相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードを墓地から特殊召喚します!!?お願い、虹クリボー!!?」

〈虹クリボー〉☆１　悪魔族　光属性
ＤＥＦ１００

「なら、そのまま攻撃を続行して幻影騎士団フラジャイルアーマーで虹クリボーを攻撃!!?アーマーパージ!!?」
　私を守るように現れた虹クリボーにフラジャイルアーマーの鎧が放たれ、虹クリボーが消滅する。
「これで貴様を守るモンスターはいなくなった。終わりだ!!?ＣＮｏ．３９　希望皇ホープレイＶでダイレクトアタック!!?ホープ剣Ｖの字斬り!!?」
　天神先生の言葉にホープレイＶが私の前に立ち、あの雨の中で行おうとしたように手に持った剣を振り下ろそうとする。
「まだ……まだです!!?相手モンスターの攻撃宣言時、墓地からクリアクリボーの効果発動!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のこのカードを除外し、自分はデッキから１枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替えます!!?」
「そんな運任せの効果で、この状況を耐え切れるものか!!?」

「そんなこと、あなたが決めることじゃない‼?私の運命は……私が決める‼?」
私が勢いよくドローするのと同時にホープレイVが私に向かって剣を振り下ろす。
剣が私を斬り裂こうとした瞬間、私の目の前にピンク色のスライムのようなモンスターが現れ、私の代わりにホープレイVの剣を受けた。
「なん……だと⁉?」
「ありがとう、私の新しいお友達……私がドローしたのはマシュマカロン‼?モンスターなので特殊召喚し、攻撃対象を移し替えます‼?」

〈マシュマカロン〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

ホープレイVに斬り裂かれ、マシュマカロンの身体が真っ二つに切断される。
しかし、斬り裂かれたマシュマカロンの身体は再び集まると2体のマシュマカロンに変化した。
「マシュマカロンの効果発動‼?同名カードは1ターンに1度、このカードが戦闘・効果で破壊された場合に発動できる‼?自分の手札・デッキ・墓地からこのカード以外の同名カードを2体まで選んで特殊召喚します‼?」
「分裂効果だと⁉?」
「おいで、マシュマカロン達‼?」

〈マシュマカロン〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

「貴様……死に損ないがどこまでも‼?っ、いいだろう……メインフェイズ2、カードを1枚伏せてターンエンドしてやる。どの道次

の私のターンにはＣＮｏ．３９　希望皇ホープレイＶの効果で貴様の負けは決定する‼？精々醜く足掻いてみるがいい‼？」

遊花　ＬＰ１００　手札０
ーー▲△ー　　ー
ー□□ーー
　　☆　　ー
○○○ー○
△▲▲▲▲　　ー
幻騎　ＬＰ６０００　手札０

何とか耐えることができたけど、天神先生のフィールドには強力なモンスターが４体に５枚のセットカードがあり、ライフポイントもまだ６０００も残っている。
それに対して私の手札は０、ライフポイントもたったの１００。
フィールドにいるのも２体のマシュマカロンに効果が無効になった守護神の宝札にセットカードが１枚。
それに、このセットカードはもう……
完全なる逆境。
だけど、だとしても……諦める理由なんて、どこにもない‼？

「すー……はー……私のターン‼？」
私は深く深呼吸をして、握るカードに力を込める。
次のターンになればホープレイＶの効果で私の残り僅かなライフポイントは確実に尽きる。
だからこそ、このターンが最後のチャンス。
頭に浮かぶのは、今も病室で苦しみ、意識を失っている師匠の姿。
お願い、私のデッキ……私は、師匠を守りたい……師匠の側に、師匠とずっと一緒にいたい。
だから、お願い……私に、運命を乗り越える力を貸して‼？
「ドローー‼？」

勢いよくカードを引き抜き、ゆっくりとそのカードを自分の目の前に持ってくる。
……まだ、望みは尽きてない。
「魔法カード、貪欲な壺‼?墓地に存在するリンクリボー、ゴーストリックデュラハン、ゴーストリックの駄天使をＥＸデッキに、クリボルト２体をデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローします‼?」
「っ、この状況でドローカードを引いてくるだと⁉?」
「まだです‼?私も墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動‼?フィールドの守護神の宝札をデッキに戻し、カードを１枚ドローします‼?よし‼?私は、今ドローした占い魔女　ヒカリちゃんの効果発動‼?このカードをドローした時、このカードを相手に見せることで手札から特殊召喚します‼?」
「何⁉?」

〈占い魔女　ヒカリちゃん〉☆１　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

フィールドに現れたのは太陽の形をしたステッキを持った黄色い髪の女の子。
現れたヒカリちゃんは嬉しそうにニコニコと笑うと、手にしたステッキをブンブンと振いながらもう片方の手で私に向かってピースサインをする。
うん、あなたの力、貸して貰うね？
「占い魔女　ヒカリちゃんの効果発動‼?このカードが手札からの特殊召喚に成功した場合、自分フィールドのモンスター１体を対象として、そのモンスターを墓地へ送り、デッキから魔法使い族・レベル１モンスター１体を特殊召喚します‼?私は占い魔女　ヒカリちゃんを墓地へ送り、デッキからミスティックパイパーを特殊召喚‼?」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性

ＤＥＦ０

ヒカリちゃんが一礼をしてからステッキを振るうと、ヒカリちゃんの身体が光に包まれて霧散する。

そして霧散した光が再び集まると、そこにフルートのようなものを弾いている男の人が現れた。

「ミスティックパイパーの効果発動‼？このカードをリリースして自分のデッキからカードを１枚ドローし、この効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル１モンスターだった場合、自分はカードをもう１枚ドローします‼？」

いつものようにミスティックパイパーがサムズアップをするのを見て、私もサムズアップを返すと、ミスティックパイパーは満足そうに笑って姿を消す。

あなたの力、無駄にはしないよ‼？

「私がドローしたのは金華猫‼？レベル１モンスターなのでもう１枚ドローします‼？さらに速攻魔法、大欲な壺‼？除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計３体を対象にそのモンスター３体を持ち主のデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから１枚ドローします‼？私は除外されているクリボーン、クリアクリボー、サクリボーをデッキに戻して１枚ドローします‼？……っ、このカード……」

私はドローしたカードを見て目を見開く。

すると、私のＥＸデッキから鼓動のようなものが伝わってきた。

……使えって、言ってるんだね。

うん、信じるよ……あなたの力を。

あなたの力を最大限に発揮できるフィールドを、今から整えてみせる。

だから……

「私に運命を超える力を貸して‼？このモンスターは自分の墓地にモンスターが１０体以上存在する場合のみ特殊召喚する事ができる‼？」

「っ⁉？また聞いたことがない特殊召喚条件だと⁉？」
私の呼び声に呼応するかのように、私の背後に巨大な大樹が現れる。
そして大樹から１０の光が溢れ、光の線で結ばれていくと、大樹の中から現れたのは機械の身体を持つ巨大な天使にして、時を司り、世界を救おうとした究極の神。
「おいで⁉？時空を超え、希望を導く叡智の神⁉？究極時械神セフィロン⁉？」

〈究極時械神セフィロン〉☆１０　天使族　光属性
ＡＴＫ４０００

「２体目の神の名を持つモンスターだと⁉？」
「究極時械神セフィロンの効果発動⁉？リザレクションウィッシュ⁉？１ターンに１度、レベル８以上の天使族モンスター１体を自分の手札・墓地から特殊召喚する事ができる⁉？この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、攻撃力は４０００になる⁉？私が対象にするのは、ハネクリボーＬＶ９⁉？」
「何だと⁉？っ、そんな効果を通すとでも思っているのか⁉？チェーンしてリバースカードオープン⁉？永続罠、幻影霧剣⁉？対象は究極時械神セフィロンだ⁉？」
セフィロンが幻影霧剣に貫かれ、その身体を霧に変える。
ごめんなさい……だけど、あなたの思いを無駄にはしない⁉？
「魔法カード、モンスタースロット⁉？自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択し、選択したモンスターと同じレベルの自分の墓地に存在するモンスター１体を選択してゲームから除外する。その後、自分のデッキからカードを１枚ドローし、この効果でドローしたカードをお互いに確認して選択したモンスターと同じレベルのモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚します⁉？私はマシュマカロンを対象に墓地のドットスケーパーを除外し、カードを１枚ドロー⁉？私がドローしたのはサクリボー⁉？レベル

1モンスターだから特殊召喚します!!?」

〈サクリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

フィールドに現れたのは1度デッキに戻ったサクリボー。
「そして、除外されたドットスケーパーの効果発動!!?デュエル中に1度、このカードが除外された場合に特殊召喚します!!?」

〈ドットスケーパー〉☆1　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

「あの状況からモンスターを並べてきたか……ということは……」
「導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「やはり、リンク召喚か!!?」
私が正面に手をかざすと、目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル1モンスター1体。私はマシュマカロンをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚!!?希望の守り手!!?リンク1!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ1　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

再びフィールドに現れたリンクリボーは嬉しそうに私に擦り寄ってくる。
うん、君の力、私に貸して!!?
「そして、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私は1つ深呼吸をして、そのモンスターを呼ぶ。
「召喚条件は効果モンスター3体以上!!?私はドットスケーパー、サクリボー、マシュマカロン、リンクリボーをリンクマーカーにセット

‼?サーキットコンバイン‼?」
　ドットスケーパー、サクリボー、マシュマカロン、リンクリボーがサーキットに吸い込まれていく。
　そしてサーキットが光り輝くとそこから現れるのは剣の如き龍。
「お願い、私に運命を超える力を貸して‼?リンク召喚‼?閉ざされた運命を斬り開く魂の剣(つるぎ)‼?リンク４‼?ヴァレルソードドラゴン‼?」
　待ち望んでいたというように、剣の如き龍はその咆哮を世界に轟かせた。

〈ヴァレルソードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↓?↑←→

「ヴァレルソードドラゴン……あの状況から君のエースモンスターに繋げるとは見事だよ。だが、その剣に運命を超える力などない。リバースカードオープン‼?永続罠、幻影霧剣‼?」
「っ、まだ幻影霧剣が……」
「対象はヴァレルソードドラゴンだ‼?消え失せろ、剣の龍よ‼?」
　セフィロンに続き、ヴァレルソードまでもが幻影霧剣に貫かれ、その身体を霧に変える。
「ここまでやるとは思わなかったよ。だが、これでーーー」
「……届いた」
「ーーー何?」
「ようやく届きました。３枚の幻影霧剣を使わせた……もう、私の効果を止めるカードは、あなたにはない‼?私は金華猫を召喚‼?」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

　現れたのは霊体になっている猫のようなモンスター。
「金華猫の効果発動‼?召喚した時、墓地に存在するレベル１モンス

ターを特殊召喚します!!?おいで、サクリボー!!?」

〈サクリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

金華猫がサクリボーを呼び戻す。

「墓地に存在するリンクリボーの効果発動!!?スケープリンク!!?このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル1モンスター1体をリリースしてこのカードを墓地から特殊召喚します!!?私はサクリボーをリリース!!?戻っておいで、リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ1　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

サクリボーの姿が消え、代わりにリンクリボーが跳ねるように私の前に現れる。

「サクリボーの効果発動!!?このカードがリリースされた場合に自分はデッキから1枚ドローします!!?」

これで全ての準備は整った。

そして私は……1枚の手札を天神先生に見えるように掲げ、発動する。

「魔法カード、発動!!?ギャラクシークィーンズライト!!?」

「何……!?」

天神先生の目が驚愕に見開かれる。

それに構わず、私は笑顔でその効果を告げる。

「自分フィールドのレベル7以上のモンスター　1体を対象として自分フィールドの全てのモンスターのレベルはターン終了時まで対象のモンスターと同じレベルになります!!?私はレベル１０の究極時械神セフィロンを対象に、私のフィールドのモンスター全てをレベル１０にします!!?」

金華猫
☆1→10

霧に変わったセフィロンが光り輝き、金華猫に力を与える。
それを見て、天神先生は愉快そうに笑った。
「クックックッ、ハーハッハッハ‼?遂に気が狂ったか?私が実験として渡した君の役に立たないカードを投入し、こんな状況で使ってくるとはな‼?私への当てつけのつもりかい?ハーハッハッハ‼?」
そういって、天神先生が心底愉快そうに笑う。
そんな天神先生に私は不敵な笑みで応える。
「そうですね。確かに、私には使えないカードでしたよ……さっきまでは」
「……何だと?」
天神先生の表情が変わる。
そんな天神先生に、私は正面に手をかざし、その言霊を告げることで応えた。
「私はレベル10、究極時械神セフィロンとレベル10となった金華猫でオーバーレイ‼?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼?」
「馬鹿な⁉?ランク10のエクシーズ召喚だと⁉?」
セフィロンと金華猫が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
それを確認し、私はEXデッキで脈動する新しいお友達の名前を呼ぶ。
「おいで、No.……X(ダブルエックス) X‼?」
「No. X(ダブルエックス)だと⁉?」
天神先生が驚愕を露わにするのと同時に、空に浮かんだ混沌の渦が弾ける。
その瞬間、私の頭の中にイメージが流れ込んでくる。
『私もまた愛で動いている‼?』
きっと、私の頭の中に流れ込んでくるこのイメージは、どこかの物

語の、誰かの記憶の欠片。
私の胸の思いは……きっと、愛なんて言える程のものじゃない。
だけど、みんなが大好きだって気持ちだけは、その感情にも負けないハズだから……
だから、私の思いを、あなたに託すよ!!?
そんな私の思いに応えるように混沌の渦から舞い降りたのは紅いマフラーをたなびかせ、巨大な盾と二振りの大剣を身に付けた漆黒の戦士。
「永遠(とわ)に続く闇の中でも、希望は輝き運命(さだめ)を変える!!?見参、インフィニティダークホープ!!?」

〈Ｎｏ．ＸＸ　インフィニティダークホープ〉★１０　戦士族　闇属性
ＡＴＫ４０００

「インフィニティダークホープ、だと!?創造主の私の許可なく新しいＮｏ．を、ホープを生み出したというのか!?栗原　遊花ぁぁぁ!!?貴様ぁぁぁ!!?」
私のフィールドに現れたダークホープを見て、天神先生は憤慨する。
「貴様だけは、貴様だけは絶対に許さん!!?八つ裂きにして、貴様が生み出したその不正なカードごとこの世から消滅させてやる!!?」
「できるものならやってみてください!!?あなたじゃ、私の希望を消すことはできません!!?Ｎｏ．ＸＸ　インフィニティダークホープの効果発動!!?このカード以外の自分フィールドの特殊召喚された表側表示モンスター1体を対象としてそのモンスターの元々の攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復します!!?」
「っ!!?回復効果を持つＮｏ．だと!!?」
「私が対象にするのはヴァレルソードドラゴン!!?癒しの力をここに!!?ブラッドムーンバリア!!?」
ダークホープが闇の防壁で私と霧に変えられたヴァレルソードを

包み込むと、ヴァレルソードの身体から溢れだした力が闇に変換されて私に流れ込み、私の身体を包んでいく。
闇が晴れると、私の傷が癒えていき、軋んでいたハズの身体の痛みが完全に無くなった。

遊花　ＬＰ１００→３１００

「遊花の傷が……治った？」
「これが遊花の生み出したＮｏ．の力……でも、あれって……」
私の身体の傷が治るのを見て、桜ちゃん達が驚きの声を上げる。
「ライフポイントを一気に回復したか……だが、それもＣＮｏ．３９　希望皇ホープレイＶの力を使えばーーー」
「いいえ、あなたに次のターンはありません‼？このターンで私の勝ちです‼？」
「っ⁉？戯言を……」
「戯言なんかじゃありません‼？これでようやくセットしていたカードが使えます‼？リバースカードオープン‼？罠発動、墓荒らし‼？」
「墓荒らし……だと？」
私が発動したカードを見て、天神先生が首を傾げる。
「罠カード墓荒らしは、相手の墓地にある魔法カード１枚を選択し、ターン終了時まで自分の手札として使用する事ができます。ただし、その魔法カードを使用した場合、自分は２０００ポイントのダメージを受けてしまいます。さっきまでは、私のライフポイントが足りなくて使うことができませんでした。だけど、回復したライフポイントのおかげで、今は使うことができる‼？私が選択するのは、天神先生の墓地にある装備魔法、ストイックチャレンジ‼？」
「何だと⁉？」
小さな盗掘者が天神先生の墓地からストイックチャレンジのカードを盗み出し、私の手札に加える。
「私は墓荒らしによるデメリット、２０００ポイントのダメージを受

け、装備魔法、ストイックチャレンジをＮｏ．ＸＸ　インフィニティダークホープに装備‼？」

遊花　ＬＰ３１００→１１００

「ストイックチャレンジは自分フィールド上に１枚しか表側表示で存在できず、オーバーレイユニットを持っているエクシーズモンスターにのみ装備可能なカード。そして装備モンスターの攻撃力は自分フィールド上のオーバーレイユニットの数×６００ポイントアップし、相手モンスターとの戦闘によって相手ライフに与える戦闘ダメージは倍になります‼？ただし、装備モンスターは効果を発動できなくなり、このカードは相手のエンドフェイズ時に墓地へ送られ、このカードがフィールド上から離れた時に装備モンスターは破壊されてしまいます」

Ｎｏ．ＸＸ　インフィニティダークホープ
ＡＴＫ４０００→５２００

ダークホープの身体を金色のオーラが包み込んでいく。
「クッ、優等生である貴様が私の力を盗むとはな……」
「……私、みんなが思ってる程いい子じゃないです。我儘で、傲慢で、お父さん達を奪った、師匠を傷つけた理不尽なこの世界が大嫌いで……こんな世界、滅んでしまえばいいって、心の中では思ってます」
「……何？」
「遊花……？」
「……」
私の独白に、桜ちゃん達は勿論、天神先生まで驚いた表情を浮かべる。
そんな桜ちゃん達に、私は満面の笑みで応える。
「だけど、師匠や桜ちゃん、闇先パイ、デュエルアカデミアのみんなや、

リーネさん達みたいなプロ決闘者の人達と……私の大切な人達との出会いをくれたのも、この世界なんです。この世界は……正直言って嫌いです。だけど、それでも私は、そんな世界がくれた大切な人達と繋がっていたい。優しい人達を守りたい。この理不尽だけど優しい世界で……一緒の道を歩いていきたい。だから、世界が私の大切な人達を傷付けるというのなら、大切な人達が傷つかないように、私がみんなを守ります‼?だから今は……」

そこまで言うと私は1度目を閉じて、しっかりと天神先生を見据えて口を開く。

「天神先生……あなたを、攻略します‼?」

「っ、減らず口を‼?」

「バトル‼?Ｎｏ．ＸＸ　インフィニティダークホープで幻影騎士団フラジャイルアーマーを攻撃‼?」

「無駄だ‼?リバースカードオープン‼?罠発動、幻影騎士団ウロングマグネリング‼?相手モンスターの攻撃宣言時にその攻撃を無効にし、その後、このカードはこのカード及び自分フィールドの表側表示の、幻影騎士団モンスター1体またはファントム永続魔法・永続罠カード1枚を墓地へ送って自分はデッキから2枚ドローし、この効果を相手ターンでも発動できる戦士族・闇属性・レベル2・攻撃力守備力0の効果モンスターとなり、モンスターゾーンに攻撃表示で特殊召喚される‼?これで君のＮｏ．の攻撃は届かず、無意味に自壊する‼?」

「……いいえ、意味ならあります……届きます……届かせます‼?ライフポイントを半分払い、手札からカウンター罠、レッドリブートを発動‼?」

「何⁉?このタイミングでだと⁉?」

遊花　ＬＰ１１００→５５０

「相手が罠カードを発動した時、その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする‼?その後相手はデッキから罠カード1枚を選ん

で自分の魔法＆罠ゾーンにセットでき、このカード発動後、ターン終了時まで相手は罠カードは発動できません!!?」
「クッ、馬鹿な!!?私はデッキから幻影剣をセットする!!?」
「これで攻撃は止まりません!!?お願い、Ｎｏ．ＸＸ　インフィニティダークホープ!!?」
　ダークホープが両手に一振りずつ大剣を持ち、フラジャイルアーマーに向かって跳び上がる。
「ホープ剣ダブルエックススラッシュ!!?」
　慌てて逃げようとするフラジャイルアーマーをダークホープは両手の大剣をクロスするように振り下ろし、フラジャイルアーマーを爆散させ、爆風で天神先生を吹き飛ばした。
「ぐわあああああ!!?」

幻騎　ＬＰ６０００→０

ーーーーーーー

○

「ふぅ……勝った……っ!!?ううっ、頭、が……!!?」
「っ、遊花!!?」
　デュエルが終わった瞬間、遊花が頭を抑え、意識を失ってその場に倒れ込む。
　そんな遊花を見て、桜と闇は慌てて遊花に近づく。
「遊花!!?しっかりして!!?遊花!!?」
「桜、落ち着いて。息もしてるし、脈拍も正常。気絶してるだけ」
「そ、そうなの?良かった……」
　闇の言葉に桜はホッと息を吐く。
　そんな桜とは裏腹に、闇は注意深く遊花の身体を観察する。
「(さっきのデュエルで受けた傷……かなり深かったハズなのに１つも残っていない……いくら回復効果を持った闇のカードだか

らって、ここまで完全に治っているのは流石におかしい……実際、遊花の着ていた服の損傷は治っていない。それに……）」
闇は先程のデュエルでダークホープが遊花の傷を治した時のことを思い出す。
「（遊花の身体を闇が包んだ瞬間……一瞬遊花の姿がブレた……一瞬だったから、桜は気づかなかったみたいだけど……アレは、いつも私が傷を治しているのと同じ方法……）」
闇は以前、『Ｎａｔｕｒａｌ』での大会で終夜とのデュエルの際、彼の精霊による攻撃を受けて火傷を負った。
その際、ヴェルズウロボロスの力と自分の闇のカードとの適合割合の高さを活かして、闇で身体を包みこみ一度身体を分解し、再構築して火傷を治した。
これは適合割合が高く、闇のカードを使い続け、資質が闇そのものに近づいた闇だけの特権であり、常人なら耐えられず死に至るような方法だった。
だが、今のデュエルで行われた遊花の傷の回復はその時の闇の回復方法に似ていた。
即ち、分解からの再構築。
いくら気づいていなかろうが、そのようなものを人間が耐えられるわけがないのだ。
そして今はダークホープとなった闇のカードを使おうとして闇に呑まれた時の幻騎の言葉。
『あのカードはどれだけの呪いを闇のカードに詰め込めるか試したものだ。結果として、限界を超えた呪いが存在していたカードをも塗りつぶしてしまい、全てを闇が呑み込んでしまってね。結束　遊騎に与えた呪いよりも遥かに強力でとても人が耐えられるものでは無い。デュエルディスクにセットしようものなら凝縮された呪いが一気に解放され、それだけで死に至る代物さ!!?』
死に至るハズの呪い。
だが、遊花はその呪いに耐え抜き、あまつさえその呪いを書き換えて新しいカードまで生み出した。

「（遊花……あなたは……）」
「クッ、やってくれるじゃあないか、小娘風情が‼？」
「っ‼？」
突如聞こえてきた地の底から響くような声に、闇は遊花達を庇うように振り返る。
そこにいたのは身体中に擦り傷を作りながらも、狂気的な憤怒の表情で遊花を睨みつける幻騎だった。
そこで闇は遊花が勝利したのにホープのカードが遊花に渡っていない事実に思い至る。
「デュエルは遊花が勝ったのに闇のカードの移動が行われない……またカードに細工してるの？」
「私の才能の賜物さ。オーバーハンドレッドナンバーズのようにＲＵＭーヌメロンフォースを触媒として希望皇ホープの存在をリンクさせ、固定させることで他者に移動するという性質を克服させた‼？私のエースが万が一にも他人に渡るなんてことは、あってはならないからね」
「そう……でも、それも無駄。この場であなたを消してしまえばそれでおしまい……ヴェルズウロボロス」
『ヨウオウヨジ　ガラレワ　ヨセカマ』
「はっ？闇……って、えっ？」
闇の言葉に桜が視線を向けると、桜の頭上に大きな影ができる。
桜が恐る恐る頭上を見ると、実体化したヴェルズウロボロスが幻騎に闇のブレスを放った。
そうして、闇のブレスが幻騎を呑み込もうとしたところでーーー
「はい、そこまでにしてねー」
そんな声が聞こえてきたかと思うと、いつの間にか幻騎の前に銀髪の少女が現れ、１回手を打ったかと思うとヴェルズウロボロスの放っていたブレスが消滅した。
「むっ？」
『⁉？ハツイコ』
「ちょっ⁉？今度は何なの⁉？」

「やーはろはろーはじめましてー私はーーー」
「っ‼?貴様、正体不明の抹消者(アンノウンイレイザー)‼?貴様が余計なことをしたせいで‼?」
「ええー協力者から怒られるのは納得いかないんだけどー良かれと思ってやったのにさー」
そういって感情のこもっていない透き通った声でレイナが脱力する。
それを見て、闇は再びヴェルズウロボロスにブレスを放たせるが、少女が再び手を打つとブレスは消滅した。
「むむっ、なかなか面倒」
「あはは、お姉さんぶっそーだねー。会話の最中なのにいきなり殺そうとしてくるなんてさーまあ、それぐらいじゃ死ねないんだけどさーこれはさっさと帰るのが得策かなー」
そういって、レイナがデュエルディスクを操作すると幻騎とレイナの身体が透けていく。
「っ、逃がさない‼?」
「戦略的撤退だよーそれじゃあ、次に会った時は覚えてないかも知れないけど、待ったねー」
そういうと同時に幻騎達の姿が完全に消える。
闇は辺りを見回すと、ため息を吐いた。
「逃げられた」
「いやいやいや、逃げられたじゃないわよ⁉?非常識には慣れてきたつもりだったけど、何いきなり人を殺そうとしてんのよ⁉?」
思わずツッコむ桜に、闇は不思議そうに首を傾げる。
「だって、アレらが元凶。それなら、消したら全部解決」
「いや、全部解決じゃないわよ⁉?」
「ん……確かに既にばら撒かれたカードはどうしようもない。盲点だった」
「いや、そういう意味でも……もういいわ。ツッコむだけ無駄ね」
そういって、桜が疲れたようにヘタリ込む。
「それにしても、さっきの女の子、幻騎の仲間だったみたいだったけ

ど、一体何者ーーー」
「は？何言ってるの？」
考え込む闇に、桜はきょとんとした表情で首を傾げる。
そして困惑した表情でその言葉を口にした。
「女の子って誰のこと？」
「……えっ？」
桜の言葉に、今度は闇が困惑する番だった。
しかし、冗談を言っているようにも見えない桜の様子からすぐにそれに思い至った。
「……成る程、道理で闇のカードをばら撒いている人間が特定できなかったハズ……あの女の子、他人の記憶に干渉してる……」
「闇？何を言って……」
「分からないなら分からないでいい。どうして私の記憶は残ってるのかは分からないけど、逃げられたなら優先順位は別。桜、遊花を背負える？」
「え？ええ、遊花は軽いから背負えはするけど……」
「なら、このまま遊騎の病室に急ぐ。助っ人ももう遊騎の病室にいると思うし」
「助っ人？それって……」
事態を呑み込めず、困惑する桜に闇は珍しく笑みを浮かべて応えた。
「この世界で、私が遊騎の次に信頼している人達だよ」

第７９話　魂を刈り取る刃

☆

「っ……」

目が覚めると、視界に入ってきたのは見覚えがある真っ白な天井だった。

俺は布団を退け、身体を起こして頭を押さえる。

「……何か、変な夢を見た気がする」

とても変で……それでいて何か大切な夢だった気がするのだが、その夢の内容はまるで霧に包まれてしまったかのように曖昧になり、思い出すことができない。

近くにおいてある時計を見ると、現在の時刻は７時３５分。

それを確認して俺は深いため息を吐く。

「寝坊してればサボれたってのに……まあ、そういうわけにはいかないよな」

俺はもう１度深いため息を吐くと、ベッドから降りて、クローゼットからいつも着ているデュエルアカデミアの制服に身を包み、自分の部屋から出て１階に降りる。

リビングをちらりと覗き、人がいないことを確認すると、リビングに置いてあった食パンを口に咥え、そそくさと裏口から外に出る。

「……行ってきます」

そう小さく口にして、俺は『Ｎａｔｕｒａｌ』を後にしデュエルアカデミアに向けて歩き始める。

しばらく歩き、デュエルアカデミアの近くにある大きな公園に差し掛かったところで、不愉快な雑音が耳に入ってきた。

「あん？おうおう、そこにいるのは家族殺しの遊騎君じゃねぇか？」

「こんな朝早くから出かけてまた誰かを殺しにでも行くのか？ぎゃははは‼？」

「……」

近くから聞こえてくる雑音を無視して俺はデュエルアカデミアに

向かって歩く。
　すると、いきなり目の前に壁が現れる。
「おい、なに無視してんだよ？ちったぁ反応しろよ」
「……邪魔だ」
「あん？今なんつった？」
「邪魔だって言ったんだよ。その耳は飾りなのか？」
「っ‼？舐めてんじゃねぇぞ、おら‼？」
　俺の言葉に反応して、壁のように俺の通り道を塞いでいた不良が殴りかかってくる。
　俺はため息を吐きながら、放たれた腕を掴んでもう1人の不良に向かって投げ飛ばす。
「がっ‼？」
「ぐあっ‼？」
「時間の無駄だ。喧嘩がしたいなら他所でやれ」
　俺は倒れ伏せる不良共を尻目に再びデュエルアカデミアに向けて歩き出そうとする。
　そんな俺の耳に背後から2つのデュエルディスクの起動音が聞こえた。
「待ちやがれ‼？逃げるのか腰抜け野郎‼？」
「人殺し風情が散々こけにしやがって‼？デュエルだ‼？デュエルでテメェをぶっ潰してやる‼？」
　その言葉に俺は再び足を止め、背後にいる不良に向き直り自分のデュエルディスクを起動する。
「別にお前らの言い分を聞いてやる必要はないが、デュエルだって言うなら話は別だ。俺に喧嘩を売ったこと、後悔して貰うぞ」
　そういって、俺は不良達に向けて獰猛に笑う。
　ああ、今日も最悪な1日になりそうだ。

ーーーーーーーー

○

「ようやく着いた」
「待ちなさいって‼？私は遊花を背負ってるんだから‼？病院の３階まで全力疾走とか、堪えるわよ‼？」
　公園で倒れた遊花を背負った桜が闇に悪態をつきながら遊騎がいる３階の病室に駆け込む。
　そんな桜達に、病室の中にいた人物達は苦笑を浮かべながら声をかける。
「状況が状況だが、病院内でぐらいもう少し静かにした方がいいと思うぞ」
「仕方ないのです。遊騎君の一大事なのですから」
「えっ⁉？炎さん⁉？リーネさん⁉？」
　声をかけてきた炎とリーネに、桜は驚きの声を上げる。
　そんな桜の様子に、炎とリーネは首を傾げる。
「闇、宝月に説明はしていなかったのか？」
「緊急事態だったから……合流できたのも偶然。遊花が天神　幻騎とデュエルしてたから」
「えっ⁉？遊花ちゃんがですか⁉？」
「話にあった結束に重症を負わせた元凶か。栗原は無事なのか？」
「大丈夫……色々想定外の事態はあったけど、気絶してるだけだから」
「ほっ、それなら良かったのです。遊花ちゃんまで大怪我しちゃったらリーネは遊騎君に合わせる顔がないのです」
　桜の背中で眠る遊花を見て、リーネが安心したように胸を撫で下ろす。
　そんなリーネ達を見て、桜が闇に尋ねる。
「闇、この２人が助っ人なの？」
「ん……私が遊騎の次に信頼できる助っ人。今の遊騎を救うことができる唯一の可能性」
「とはいえ、俺はただの付き添いだがな。一応冬城が来る前に少し試してみたが、俺の力ではどうにもならなかった。本命はまだ試してい

ない天羽の方だな」
「それじゃあ、リーネさんが遊騎を助けるってこと？リーネさんも闇のカードを持ってるの？」
　現在の遊騎は闇のカードに込められた呪いによって身体を蝕まれている状態だ。
　その呪いに干渉するということはそれに付随する力をリーネが所持していることになる。
　そう思っての質問だったのだが、桜の質問にリーネは首を振った。
「ご期待のところ悪いのですが、リーネは闇のカードを持っていないのですよ」
「えっ？それじゃあなんでリーネさんが助っ人に？」
「それはリーネが闇のカード以外で呪いに……というより、魂に干渉する力を持ってるからなのですよ」
「闇のカード以外で？」
「そうなのです。桜ちゃんにも心当たりがあると思うのですよ。闇のカードによく似た意思を持った存在に」
「闇のカードによく似た意思を持った存在？」
　リーネの言葉が理解できず、桜が難しい表情を浮かべる。
　そんな桜に、リーネはあっけらかんとその言葉を口にする。
「妖精伝姫―カグヤ。桜ちゃんの精霊さんなんですよね？桜ちゃんの周りには他にも沢山の精霊さんがいるですが、今は繋がってるのはその子だけみたいなのですね」
「えっ⁉？な、なんでそれを……」
「えっへん‼？お姉さんはこう見えて鋭いのです‼？意思を持った精霊さんかどうかは見れば分かっちゃうのです‼？」
『あらあら、まさか私のことに気づく人間がいるなんてね』
　胸を張ってドヤ顔を浮かべるリーネに、カグヤが驚いたような声を出す。
『桜、私を出して。私の存在に気づいているなら、挨拶はしっかりしておきたいわ』
「いや、出せって言われても……」

『いつも通りにデュエルディスクにセットしてくれれば立体映像を通じてどうとでもできるわ』
「わ、分かったわよ」
カグヤの言葉に桜は遊花を病室の椅子に座らせ、デュエルディスクを起動して、カグヤのカードをセットする。
立体映像として現れたカグヤはリーネに向かってお辞儀をした。
『初めまして、というのも知られている相手に言うのはおかしいのだけれど、カグヤよ。いつも桜がお世話になっているわ』
「これはこれはご丁寧に、天羽　リーネなのです。こちらこそいつも桜ちゃんがお世話になっているのです‼?」
『相棒だもの、当然よ。どうかこれからも、桜を、よろしく』
「はい、なのです‼?これからも仲良くできたらなって、リーネも思っているのですよ」
「……私がお世話になってるのは確定なのね。否定はしないけど……」
ぺこぺこと頭を下げあう2人を見て、桜が微妙な表情を浮かべる。
そんな中、今も意識を失ったまま機械に繋がれベッドの上で眠っている遊騎が呻き声を上げ、身体から闇の瘴気が溢れ出した。
「ぐっ、ああ……‼?」
「っ、遊騎‼?」
「呪いが本格的に結束の命を蝕み始めたか‼?挨拶は後だ、天羽‼?早く蹴りをつけなければ結束の命が先に尽きる‼?」
「がってん承知の助なのです‼?お姉さんにドドーンとお任せなのです‼?遊騎君は絶対に死なせないのです‼?」
そういって、リーネがデュエルディスクを起動し、1枚のカードをデュエルディスクにセットしようとする。
その瞬間、遊騎の身体から大量の闇の瘴気が溢れ出し、遊騎の身体を完全に包み込んだ。

―――――――

☆

「……遅れました」
「結束‼?お前、また遅刻か‼?これで何度目だと思ってる‼?」
「……忘れました」
「っ、もういい‼?講義後に生徒指導室だ‼?お前のその態度、今日こそ改めさせてやる‼?」
「……はいはい」
　教師の言葉を聞き流し、いつも座っている教室の1番隅の席に向かう。
「結束の奴、また遅刻か……」
「人殺しの癖に、よく平然とデュエルアカデミアに来れるわね」
　他の生徒から向けられるのは冷ややかな視線とこちらを侮蔑する陰口。
　だけどそんなもの、もう気にすることすらない。
「遊騎……おはよ」
「闇か、おはよう」
　いつも座っている席に座ると、その隣の席に座っていた闇が心配そうに話しかけてくる。
「また、喧嘩?」
「喧嘩なんて言える程のものですらねぇよ」
「怪我、してない?」
「してないしてない。それより、講義に集中しろよ。俺なんかと話してると、お前まで色々言われるぞ」
「っ、そんなのどうでもいい。私は、遊騎と一緒ならーーー」
「そこ‼?何を話している‼?」
　悲しそうな表情で話しかけてくる闇を見つけ、教師が怒鳴りつけてくる。
　はぁ～仕方ねぇな……
「悪いな、先生。来てみたはいいけど、先生の講義がつまんなくてさ。遊びに誘ってたんだよ」

「っ⁉？違っ……」
「またお前か、結束⁉？もういい⁉？そんなに俺の講義がつまらないなら今すぐ生徒指導室に連れてってやる⁉？」
「ちぇっ、分かったよ。じゃ、そういうことで……あんまり目をつけられることはしないようにな」
「っ、遊騎……⁉？」
怒り狂った教師が近づいてくるのを見ながら、俺は席を立って小声で闇に向けて呟く。
闇は何かを言おうとしたようだが、俺はそれを視線で制して手を振って教師と一緒に教室を出て行く。
あー本当に、最悪だ。
どうして俺は取り残されてしまったのだろう？
あの業火が……両親を灰に変えたあの業火が……俺すらも焼き尽くしてしまえば良かったのに。

ーーーーーーー

●

「ウァァァァァァァ⁉？」
「っ⁉？これは、さっき遊花の時に見たーーー」
背後で桜ちゃんのそんな声が聞こえたかと思うと、遊騎君を覆っていた闇が弾ける。
しかし、そこにいた遊騎君は身体が完全に闇に塗り潰された漆黒の人型に変わっていた。
遊騎君を塗り潰した漆黒の人型は、遊騎君の声で言葉を紡ぐ。
『ようやくこの男の身体を奪い取ることが出来たか。感謝するぞ、オマエ達がこの男を救おうと力を振るったおかげでオレはこの身体を手に入れることができた⁉？』
「あなたは誰なのです？」
『オレの名はマリシャスシード。心を喰らう呪いの宿り木だ。もう少

しだ、もう少しでこの男の記憶と心を触媒にオレの身体を得ることができる‼?』
そういって遊騎君の身体を乗っ取った漆黒の人型は不気味に笑う。
とはいえ、相手が誰であろうとリーネのやるべきことはただ1つなのです。
「その身体は遊騎君のものなのです‼?大人しく出て行って貰うのです‼?」
『ハッ、そう言われて素直に返す奴がいると思うのか‼?』
「出ていかないのなら宿り木ごとばらばらに斬り刻んでやるだけなのです‼?」
『おお、怖い怖い。それなら抵抗しないとな‼?』
そういって、マリシャスシードはベッドの脇に置いてあった遊騎君のデュエルディスクを手に取って起動し、遊騎君のデッキを呪いの闇で呑み込んでいく。
まさか……‼?
「遊騎君のデッキを丸ごと呪いで汚染するつもりですか⁉?」
『生憎オレにはデッキがないからなぁ。この男のデッキを利用して……』
マリシャスシードの呪いの力により、遊騎君のデッキから徐々に闇の瘴気が溢れ始める。
しかし、闇の瘴気が溢れるデッキの中で数枚のカードが呪いに抵抗するように輝きはじめた。
『っ、なんだ、コイツら⁉?オレの力を跳ね除けて……ええい、邪魔だ‼?』
マリシャスシードが呪いを跳ね除け、輝きを放つカードをデッキから抜いてこちらに向けて投げつける。
リーネと闇ちゃんは咄嗟に投げつけられたカードを掴み取り、そのカードを確認する。
「これは……」
リーネが掴み取ったのは遊騎君のキーカードである絵札の三銃士とセイクリッドプレアデス。

そして、闇ちゃんが掴み取ったのは……
「アルカナナイトジョーカー……アルカナエクストラジョーカー……ＤＨＥＲＯ　ＢｌｏｏｌＤ……遊騎の英雄達」
遊騎君の切り札である英雄達が、闇ちゃんの手に握られていた。
やっぱりあなた達は遊騎君の……
『クックック、多少の邪魔はあったが、汚染仕切ったぞ、この男のデッキを‼?』
「っ‼?やらかしたです‼?」
投げつけられた絵札の三銃士に気を取られている間に、遊騎君のデッキが闇の瘴気に呑まれていた。
「絵札の三銃士達が抜けたからデッキ枚数は足りなくなっている……ということも、なさそうですね」
リーネはため息を吐きながら視線を、マリシャスシードが手にしているカードに向ける。
多分、アレは遊騎君がデュエルディスクに収納していたサイドデッキ。
緊急用に用意してたであろう遊騎君の真面目な性格が仇になったですね。
『さあ、これで準備は整った。オマエ以外にオレを取り除けないことは知っている‼?オマエを葬ればもう誰もオレの邪魔はできん‼?』
「あなたなんかに葬られる程、リーネは甘くないのです‼?痛む間も無く斬り刻んであげるのです‼?」
そういって、リーネはデュエルディスクをマリシャスシードに構える。
遊騎君、少しだけ待ってて欲しいのです。
すぐにその呪いを斬り刻んで、助けてあげるのです‼?
『決闘‼?』

リーネ　ＬＰ８０００
マリシャス　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻はリーネなのです‼？早速行かせて貰うのです‼？魔法カード、隣の芝刈り発動なのです‼？」

『チッ、面倒なカードを……』

「このカードは自分のデッキの枚数が相手よりも多い場合に発動できるのです。その効果はデッキの枚数が相手と同じになるように、自分のデッキの上からカードを墓地へ送るのです‼？さあ、あなたの残りのデッキ枚数を教えて貰うのです‼？」

『オレの残りデッキは３５枚だ』

「なら、リーネは５５枚なので、その差分の２０枚のカードを墓地に送らせて貰うのです。さらに墓地に送られた２枚の妖刀竹光の効果発動なのです‼？デッキから妖刀竹光以外の竹光カードをデッキから手札に加えるのです。リーネは折れ竹光と黄金色の竹光を手札に加えるのです。さらに魔法カード、シャッフルリボーンなのです‼？自分フィールドにモンスターが存在しない場合、自分の墓地のモンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚するのです‼？ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、エンドフェイズに除外されるのです‼？さあ、今回も頼むのです‼？戦場を舞う始まりの戦乙女‼？閃刀姫―レイ‼？」

〈閃刀姫ーレイ〉☆４　戦士族　闇属性

ＡＴＫ１５００

リーネの前に現れたのは刀を持ち、制服を着た白髪の少女。

レイはフィールドに現れると、リーネを見て真剣な表情で頷く。

『閃刀姫―レイ……この男の記憶ではオマエのキーモンスターだったな』

「それじゃあ早速行っちゃうのですよ‼？刀術式起動なのです‼？戦場へと続くサーキット‼？」

リーネが正面に手をかざすと、レイの正面に巨大なサーキットが現

れる。
「召喚条件は水属性以外の閃刀姫モンスター１体!!?リーネは閃刀姫―レイをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
レイの身体を巨大なサーキットが通過するように動き始める。
レイがサーキットを潜ると、４つの盾を装備した青い鎧を身に纏った白髪の少女が現れた。
「リンク召喚!!?水簾の如き刀衛の盾なのです!!?リンク１!!?閃刀姫ーシズク!!?」

〈閃刀姫ーシズク〉ＬＩＮＫ１　機械族　水属性
ＡＴＫ１５００　↑?

『水の閃刀姫か……』
「まだまだこれからなのですよ!!?魔法カード、閃刀起動―エンゲージなのです!!?自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しない場合に発動でき、デッキから閃刀起動―エンゲージ以外の閃刀カード１枚を手札に加え、その後、自分の墓地に魔法カードが３枚以上存在する場合、自分はデッキから１枚ドローできるのです!!?リーネの墓地には勿論３枚以上魔法カードがあるので後の効果も発動するのです!!?リーネはデッキから閃刀機―イーグルブースターを手札に加えてさらに１枚ドローなのです!!?いいものを引いたのです!!?まずは永続魔法、燃え竹光を発動なのです!!?さらに装備魔法、折れ竹光を閃刀姫―シズクに装備するのです!!?」
フィールドに燃え盛る竹刀と折れた竹刀が現れ、折れた竹刀をシズクが持つ。
すると、燃え盛っていた竹刀から炎が舞い上がった。
「この瞬間、永続魔法、燃え竹光の効果発動なのです!!?このカードが魔法＆罠ゾーンに存在する状態で自分が竹光カードを発動した場合、次の相手のメインフェイズ１をスキップするのです!!?」
『チッ!!?面倒なことを!!?』
燃え竹光から舞い上がった炎がマリシャスシードを囲むように辺

りに広がる。
「まだ終わってないのですよ。あなたには何もさせてあげないのです!!?永続魔法、端末世界（ターミナルワールド）を発動なのです!!?自分メインフェイズ1にのみこのカードを発動でき、このカードが魔法&罠ゾーンに存在する限り、お互いのメインフェイズ2をスキップするのです!!?」
『っ!!?つまり……』
「次のあなたのターンはドローフェイズ、スタンバイフェイズ、バトルフェイズ、エンドフェイズのみになるのです!!?」
オレンジ色の球体が現れ、リーネとマリシャスシードを包む。
これで召喚もセットも封じたのです。
このまま押し切っちゃいたいところですが、何だか嫌な予感もしてくるのです。
ここは突破されたことも考えて……
「魔法カード、黄金色の竹光を発動なのです!!?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローするのです!!?これ以上動くことはなさそうなのです。閃刀姫ーシズクの永続効果、ヘルフィヨトゥル!!?相手フィールドのモンスターの攻撃力・守備力は、自分の墓地の魔法カードの数×１００ポイントダウンするのです!!?リーネの墓地には魔法カードは２３枚あるので、あなたのモンスターの攻撃力は２３００ポイントダウンするのです!!?」
『次から次へと厄介な効果だな……』
「リーネはカードを1枚伏せてエンドフェイズに閃刀姫ーシズクの効果発動!!?ヘルヴォル!!?このカードを特殊召喚したターンのエンドフェイズ、デッキから同名カードが自分の墓地に存在しない閃刀魔法カード1枚を手札に加えるのです!!?リーネはデッキから閃刀機—シャークキャノンを手札に加えてターンエンドなのです!!?」

リーネ　ＬＰ８０００　手札４
▲△△△ー　ー
ーーーーー

☆　ー

ーーーーー

ーーーーー　ー

マリシャス　ＬＰ８０００　手札５

『オレのターン、ドロー!!?』

「燃え竹光の効果でメインフェイズ1はスキップなのです!!?」

『ウザってぇ!!?なら、利用するだけ利用して丸ごと消しとばしてやるよ!!?バトルフェイズ!!?速攻魔法、魔力の泉!!?相手フィールドの表側表示の魔法・罠カードの数だけ自分はデッキからドローし、その後、自分フィールドの表側表示の魔法・罠カードの数だけ自分の手札からカードを選んで捨てる!!?ただし、このカードの発動後、次の相手ターンの終了時まで、相手フィールドの魔法・罠カードは破壊されず、発動と効果を無効化されなくなる!!?オマエのフィールドにある表側の魔法・罠は折れ竹光、燃え竹光、端末世界の3枚。オレのフィールドに表側の魔法・罠は魔力の泉1枚。よって3枚ドローし、1枚手札を捨てる!!?』

「大量ドローのカード……これで逆転の方法を引き込むというわけなのですね」

『バカが!!?逆転の方法なんてものは既に用意してんだよ!!?まずは手札から墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?オレはデッキから黄金色の竹光を手札に加える!!?そしてバトルフェイズを終了し、バトルフェイズ終了時に手札から罠発動!!?拮抗勝負!!?』

「っ!!?そのカードは……」

『自分フィールドにカードが存在しない場合、このカードは手札からも発動できる!!?相手フィールドのカードの数が自分フィールドのカードの数より多い場合、自分・相手のバトルフェイズ終了時に発動できる!!?自分フィールドのカードの数と同じになるように、相手はフィールドのカードを裏側表示で除外しなければならない!!?オレのフィールドには今発動した拮抗勝負のみ!!?オマエにもフィールドのカードが1枚になるようにカードを除外して貰うぞ!!?』

「……リーネの魔法・罠は破壊されなくても除外はされてしまう……抜け目がないのです。リーネは閃刀姫ーシズクを残して他のカードを除外するのです」
リーネがそう宣言すると、シズク以外のカードが粒子に変わって消えていく。
あの布陣をこうもあっさりと攻略してくるとは……魂に取り憑いた偽者でも、遊騎君だということには変わりがないということですか。
『呆気ねぇな、これでメインフェイズに入ることができるぜ。メインフェイズ2、オレはH・ヒロイックチャレンジャーC サウザンドブレードを召喚!!?』
〈H・C　サウザンドブレード〉☆4　戦士族　地属性
ＡＴＫ１３００→０

現れたのは頭巾を被り、背中に何本もの刀を背負った戦士。
前にも遊騎君が使っていた時に見たことはあるのですが、その時と違っているところがある。
それは、サウザンドブレードの身体から溢れ出る闇の瘴気と怪しく光る赤い眼光。
「完全に汚染されてるようなのですね……」
『コイツはオレがこの男に取り憑く際、寄生していたカードのオーバーレイユニットになっていた。直接オレの呪いを受けたコイツは汚染されやすくなっていたんだ。このカードを汚染できて本当に良かったよ。コイツの力は他のヒロイックを呼び出すことができる。その力は他のヒロイックと繋がる力、繋がっているからこそ、連鎖的にヒロイックをオレの力で汚染することができたんだからな!!?』
そういって、マリシャスシードが遊騎君の身体を使って下卑た笑い声をあげる。
リーネはそれを見て心の中でムッとする。
遊騎君の身体でそんな笑い声を上げないでほしいのです。
すっごく不愉快なのです!!?

『Ｈ・Ｃ　サウザンドブレードの効果発動‼？1ターンに1度手札にあるヒロイックカードを捨ててデッキからヒロイックモンスターを特殊召喚する‼？オレは手札のＨ・（ヒロイックチャレンジャー）Ｃ ダブルランスを捨ててデッキから現れろ、Ｈ・（ヒロイックチャレンジャー）Ｃ クラスプナイフ‼？』

〈Ｈ・Ｃ　クラスプナイフ〉☆1　戦士族　地属性
ＤＥＦ１００
ＡＴＫ３００→０

フィールドに現れたのは鉄の鎧を見に纏った巨大なナイフを持つ戦士。
当然その身体からは闇の瘴気が溢れ出していた。
『そしてこの効果を使ったＨ・Ｃ　サウザンドブレードは守備表示になる』

Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード
ＡＴＫ０→ＤＥＦ１１００

マリシャスシードのフィールドに並ぶ2体の戦士族モンスター。
遊騎君のデッキならここから繋がるリンクモンスターはまず間違いなく聖騎士の追想　イゾルデ。
それなら……
『Ｈ・Ｃ　クラスプナイフの効果発動‼？このカードがＨ・Ｃと名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した時、デッキからＨ・Ｃと名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる‼？』
「なら、その効果にチェーンして手札から浮幽さくらの効果発動なのです‼？」
『っ‼？手札誘発のモンスターか‼？』
「同名カードは1ターンに1度しか発動できず、相手フィールドのモンスターの数が自分フィールドのモンスターより多い場合、このカードを手札から捨て、自分のＥＸデッキのカード1枚を選んでお互いに

確認し、その後、相手のＥＸデッキを確認し、選んだカードの同名カードがある場合、その相手の同名カードを全て除外するのです‼？この効果は相手ターンでも発動できるのです‼リーネが選ぶのは、聖騎士の追想　イゾルデなのです‼？」

『何だと⁉？』

リーネの手札から死神の鎌を持った白装束の少女が現れ、その少女が鎌を振るうとマリシャスシードのＥＸデッキにあったイゾルデが除外される。

イゾルデは戦士族デッキなら使える汎用性の高いリンクモンスター。

リーネのデッキでも閃刀機―ホーネットビットで出せる閃刀姫トークンを使うことでリンク召喚ができるから、浮幽さくらで除外できることも考えて投入されているのです。

それがまさか遊騎君のデッキをメタるために使うことになるとは流石に思わなかったですけど。

『チッ、面倒なことを‼？オレはＨ・Ｃ　クラスプナイフの効果でデッキから２枚目のＨ・Ｃダブルランスを手札に加える‼？だが、まだ終わりじゃねぇ‼？装備魔法、妖刀竹光をＨ・Ｃ　サウザンドブレードに装備‼？さらに魔法カード、黄金色の竹光を発動‼？自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを２枚ドローする‼？』

「まだ妖刀竹光が残っていたですか……」

『オレはカードを２枚伏せてターンエンドだ‼？』

リーネ　ＬＰ８０００　手札３

ー　ー　ー　ー　ー

☆　　ー

ー　ー　□　□　ー

ー　▲　△　▲　ー

マリシャス　ＬＰ８０００　手札４

「リーネのターン、ドローなのです!!?」
マリシャスシードのフィールドには2体の守備表示モンスター。
単騎戦闘を得意とするリーネのデッキとしてはこういう単純な戦法の方が苦手だったりするのです。
しかも、マリシャスシードのフィールドにいるサウザンドブレードは破壊しても戦闘ダメージを受ければ蘇生してしまう。
破壊する意味はほとんどない。
それなら、直接本体を叩くに限るのです!!?
「刀術式起動なのです!!?戦場へと続くサーキット!!?」
『再びリンク召喚か……』
リーネが正面に手をかざすと、シズクの正面に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は風属性以外の閃刀姫モンスター1体!!?リーネは閃刀姫―シズクをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
巨大なサーキットはシズクの身体を通過するように動き始める。
シズクがサーキットを潜ると、スナイパーのような装備をした緑の鎧を身に纏った白髪の少女が現れた。
「リンク召喚!!?疾風の如き天翔る牙なのです!!?リンク1!!?閃刀姫ーハヤテ!!?」

〈閃刀姫ーハヤテ〉ＬＩＮＫ１　機械族　風属性
ＡＴＫ１５００　↙?

Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード
ＡＴＫ０→１３００

Ｈ・Ｃ　クラスプナイフ
ＡＴＫ０→３００

『お次は風の閃刀姫か!!?』

「さあ、派手に行くのです!!?デッキの一番上のカードを墓地へ送って、魔法カード、アームズホールを発動なのです!!?自分のデッキ・墓地から装備魔法カード1枚を選んで手札に加えるのです!!?ただし、このカードを発動するターン、自分は通常召喚できないのです。リーネはデッキから装備魔法、サイコブレイドを手札に加えるのです!!?そしてリーネはデッキから手札に加えた装備魔法、サイコブレイドを２０００ポイントのライフを支払って閃刀姫ーハヤテに装備するのです!!?」

リーネ　ＬＰ８０００→６０００

ハヤテの手元に緑色に輝く大剣が現れる。

「サイコブレイドは1ターンに1枚しか発動できず、１００の倍数のライフポイントを最大２０００ポイントまで払って発動できるのです。そして装備モンスターの攻撃力・守備力は、このカードを発動するために払ったライフポイントの数値分アップするのです!!?」

『払ったライフポイントの数値分……つまり今回は２０００ポイントアップするってわけか』

閃刀姫ーハヤテ
ＡＴＫ１５００→３５００

「さらに装備魔法、巨大化を閃刀姫ーハヤテに装備するのです!!?」

『何!!?そのカードは!!?』

「自分のライフポイントが相手より少ない場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力の倍になるのです!!?リーネのライフは６０００、あなたのライフは８０００!!?よって閃刀姫ーハヤテの攻撃力は倍になるのです!!?」

ハヤテはサイコブレイドに石版のような物を取りつけると、サイコブレイドが巨大化してハヤテの身長の2倍程の大剣に変化する。

閃刀姫ーハヤテ
ＡＴＫ１５００→３０００→５０００

『攻撃力５０００だと⁉？だが、オレのフィールドには守備表示のモンスター達がいるオマエの攻撃は通らない⁉？』
「問題ないのです⁉？閃刀姫ーハヤテの永続効果、ゲイレルル⁉？このカードは直接攻撃できるのです⁉？」
『っ⁉？攻撃力５０００の直接攻撃だと⁉？』
「バトル⁉？閃刀姫ーハヤテでダイレクトアタック⁉？」
リーネの言葉に、ハヤテがサイコブレイドをマリシャスシードに向ける。
「奥義⁉？閃刀術式―ベクタードブラスト起動⁉？」
リーネがそう口にするとハヤテの背後に魔法陣が浮かび上がると、ハヤテの目にスコープがかかり、サイコブレイドの先端部にエネルギーが充填されていく。
「スゴイのいっちゃうのです⁉？ゲイルスケグル⁉？」
エネルギーが溜まり切ると、ハヤテはマリシャスシードに向けてサイコブレイドに充填されたエネルギーを解き放った。
『ぐがぁぁぁぁ⁉？』

マリシャス　ＬＰ８０００→３０００

「閃刀姫ーハヤテの効果発動なのです⁉？スヴィプツル⁉？このカードが戦闘を行ったダメージ計算後、デッキから閃刀カード１枚を墓地へ送るのです⁉？リーネはデッキから閃刀術式―ベクタードブラストを墓地へ送るのです⁉？そして巨大化のデメリットにより、自分のライフポイントが相手より多い場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力の半分になるのです」

閃刀姫ーハヤテ
ＡＴＫ１５００→７５０→２７５０

「それじゃあお色直しと行くのです!!?刀術式起動なのです!!?戦場へと続くサーキット!!?」
『っ、またリンク召喚か!!?』
リーネが正面に手をかざし、再び巨大なサーキットを出現させる。
「召喚条件は炎属性以外の閃刀姫モンスター1体!!?リーネは閃刀姫ーハヤテをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
ハヤテがサイコブレイドを投げ捨て、サーキットを通過していく。
ハヤテがサーキットを潜ると、真っ赤な鎧を身に纏った白髪の少女が現れた。
「リンク召喚!!?業火の如き閃滅の刃なのです!!?リンク1!!?閃刀姫—カガリ!!?」

〈閃刀姫—カガリ〉ＬＩＮＫ１　機械族　炎属性
ＡＴＫ１５００　↖?

「閃刀姫—カガリの効果発動!!?アルヴィト!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、自分の墓地の閃刀魔法カード1枚を対象としてそのカードを手札に加えるのです!!?リーネは墓地から閃刀起動—エンゲージを手札に加えるのです!!?」
『チッ、面倒なものを回収しやがった!!?』
「そして再び魔法カード、閃刀起動—エンゲージなのです!!リーネはデッキから閃刀機—ホーネットビットを手札に加えてさらに1枚ドローなのです!!?そして閃刀姫—カガリの永続効果!!?ヒルド!!?このカードの攻撃力は自分の墓地の魔法カードの数×１００ポイントアップするのです!!?今のリーネの墓地には２８枚の魔法カードがあるのです!!?なので攻撃力は……」

閃刀姫—カガリ
ＡＴＫ１５００→４３００

『攻撃力、４３００!!?』
「このまま一気に押しきっちゃうのですよ。リーネはカードを３枚伏せてターンエンドなのです!!?」
『リバースカードオープン!!?罠発動!!?活路への希望!!?』
「っ!!?ここでドローカードですか」
『自分のライフポイントが相手より１０００以上少ない場合、１０００ＬＰを払って発動!!?』

マリシャス　ＬＰ３０００→２０００

『お互いのライフポイントの差２０００につき１枚、自分はデッキからドローする!!?オレのライフは２０００!!?オマエは６０００!!?よって２枚のカードをドローする!!?』

リーネ　ＬＰ６０００　手札１
ー▲▲▲ー　ー
ーーーーー
☆　ー
ーー□□ー
ーー△▲ー　ー
マリシャス　ＬＰ２０００　手札６

ーーーーーー

○

「凄い……取り憑かれてるとはいえあの遊騎を圧倒してる」
リーネのデュエルを見て、思わず桜がそんな言葉を漏らす。
「前にも話したけど、社長の強さは私達『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の中でも郡を抜いてるから。遊騎の身体を奪った偽者程度がどうにか

できる相手じゃない」
「……信頼してるのね、リーネさんのこと」
「当然。私を救ってくれたのは遊騎。でも、私に遊騎と一緒にいれる居場所をくれたのは社長。そんな社長も信じられないなら、遊騎以外の誰も信じられない」
「……それでも遊騎は信じられるのね」
闇の真っ直ぐな言葉に桜は苦笑を浮かべる。
そんな桜を尻目に闇は真剣な表情でデュエルを見る。
「とはいえ、曲がりなりにも遊騎の偽者。これで終わるとは考えにくい」
「ここから逆転してくるって？」
「それでも、社長は負けない。悔しいけど、きっと誰よりも遊騎を救ってきたのは社長だから……今回も絶対に、遊騎を助けてくれる」

ーーーーーーー

☆

「ようやく解放されたか……」
生徒指導室での教師達のお説教は結局昼になるまで続いた。
おかげで朝の講義は全滅だ。
まあ、今更講義の１つや２つ出なくても変わりはしないが。
「っ、返して‼？」
「ん？この声は……」
聞き覚えのある声が教室から聞こえ、俺は首を傾げながら教室の中を覗き込む。
教室の中では、男子生徒と言い争いをしている闇の姿があった。
「そのカードは遊騎に貰った大切なもの‼？返して‼？」
「ハッ、そんな大切なカードを落とす奴が悪いんだろ？俺はただ落ちてたカードを拾っただけだぜ？」
「それは貴方がぶつかってきたから……」

「知らねぇな、そんなこと。大体、何が大切なカードだ。あんな人殺しから貰ったカードが大切だなんて頭が狂ってやがるんじゃないのか？ぎゃはははは‼？」
そういって言い争いをしている男が闇を嘲笑う。
周りにいる生徒も、必死な闇の姿を見て笑っているか傍観しているだけで闇を助けようともしない。
それを見た瞬間、俺の中の何かが切れた。
「ぎゃはははは‼……？ぐべっ⁉？」
「……えっ？」
闇の惚けたような声が何処かで聞こえる。
だけど、それは今どうでもいい。
今はただーーー目の前の敵を排除するだけだ。
「ぎゃっ⁉？ぎゃあ‼？やめ‼？」
悲鳴を上げる男を正面から何度も何度も殴りつける。
俺を止めようと近づいてくる奴らも投げ飛ばし、悲鳴も上げなくなった男の胸倉を掴んで無理矢理立たせる。
「おい」
「ひっ‼？」
「俺は人殺しなんだよな？」
「ご、ごべんなさーーー」
「謝る必要なんてねぇよ。ただ、俺を人殺しだと嘲笑うならーーー殺される覚悟はちゃんとできてるんだよな？」
「ひぃっ⁉？」
俺の言葉に悲鳴をあげる男に向かって拳を振り上げる。
そんな俺の腕を必死に掴む手があった。
「遊騎、止めて‼？もういい‼？もういいから‼？」
ちらりと視線を向けると、そこにいたのは泣きながら腕を掴む闇がいた。
闇のその表情を見て、血が上っていた俺の頭は急激に冷えていき、視界もクリアになっていく。
傍観していた周りの生徒からの畏怖の視線が俺を見る。

教室の外からは騒ぎを聞きつけた教師の声が聞こえてくる。
……これでいい。
これで……俺の居場所は完全になくなった。
俺は男の胸倉を掴んでいた腕を放すと、殴り飛ばした拍子に落ちた闇のカードを拾うと、闇の手に握らせる。
「遊騎……」
「じゃあな、もうカードは取られないようにしろよ」
「遊騎!!?待っーーー」
「お前ら、何をしている!!?っ、またお前か結束!!?」
闇が何か言おうとした瞬間、教室の外から教師がやってくる。
「んじゃ、ちょっと先生と話してくるわ。まぁ、良くて停学だろうけど、元気でな」
「っ!!?遊騎!!?」
引き止める闇を無視して傍観していた奴らの説明を受けた教師に連れていかれる。
ああ、やっぱり今日は最悪だ。

ーーーーーーーー

●

『一気に押しきるだと?そう上手くいくと思ってるのかよ!!?』
「っ……どうやら、ここからが正念場のようなのです」
遊騎君の身体を覆うマリシャスシードの闇が濃くなっていく。
このままじゃ、本格的に遊騎君の命が危ない。
早くケリをつけないとですね。
『オレのターン、ドロー!!?手札を1枚捨て、速攻魔法、ツインツイスター!!?フィールドの魔法・罠カードを2枚まで対象として破壊する!!?オレが破壊するのは、オマエの両脇のセットカードだ!!?』
「っ、リバースカードオープンなのです!!?速攻魔法、閃刀機―ホーネットビットなのです!!?さらにチェーンしてリバースカードオー

プンなのです!!?速攻魔法、閃刀機―シャークキャノンなのです!!?自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しない場合、相手の墓地のモンスター1体を対象としてそのモンスターを除外するのです!!?自分の墓地に魔法カードが3枚以上存在する場合、除外せずにそのモンスターを自分フィールドに特殊召喚できるのですが、今回はその効果は使わないのです。あなたの墓地からH・Cダブルランスを除外するのです!!?」

『チッ、上手く躱されたか……』

カガリの手元にランチャーのようなものが現れ、カガリが引き金を引くとそこから放たれたレーザーがマリシャスシードの墓地からダブルランスを除外する。

「そして閃刀機―ホーネットビットの効果発動なのです!!?自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しない場合、自分フィールドにリリースできない戦士族・闇属性・レベル1・攻撃力守備力0の閃刀姫トークン1体を守備表示で特殊召喚するのです!!?そして自分の墓地に魔法カードが3枚以上存在する場合、そのトークンの攻撃力・守備力は1500になるのです!!?出てきてくださいです、閃刀姫トークン!!?」

〈閃刀姫トークン〉☆1　戦士族　闇属性
DEF1500

フィールドにホーネットビットが飛び交い、ホーネットビットから閃刀姫―レイの立体映像が投影される。

『チェーン処理でツインツイスターが閃刀機―ホーネットビットと閃刀機―シャークキャノンを破壊する』

そして突如フィールドに出現したとカガリが持つシャークキャノンを吹き飛ばした。

「さらに墓地に魔法カードが増えたので閃刀姫―カガリの攻撃力は上がるのですよ」

閃刀姫―カガリ
ＡＴＫ４３００→４５００

『多少攻撃力が上がるぐらい許してやるよ‼？墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動‼？』
「さっきのツインツイスターで墓地に送ってたですね」
『自分フィールドのカード１枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから１枚ドローする。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を１枚除外する‼？オレはフィールドのＨ・Ｃ　クラスプナイフをデッキに戻し、カードを１枚、ドローする‼？オレはＨ・Ｃ　サウザンドブレードを攻撃表示に変更し、再びＨ・Ｃ　サウザンドブレードの効果発動‼？オレは手札のＨ・Ｃ（ヒロイックチャレンジャー）アンブッシュソルジャーを捨ててデッキから現れろ、Ｈ・Ｃダブルランス‼？そしてこの効果を使ったＨ・Ｃ　サウザンドブレードは守備表示になる‼？』

〈Ｈ・Ｃ　ダブルランス〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１７００

フィールドに現れたのは２つの槍を持った白い戦士。
当然その身体からは闇の瘴気が溢れ出す。
そしてマリシャスシードは正面に手をかざす。
『オレは戦士族、レベル４のＨ・Ｃ　サウザンドブレードとＨ・Ｃ　ダブルランスでオーバーレイ‼？２体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？』
サウザンドブレードとダブルランスが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこにいたのは赤い鎧から闇の瘴気を溢れ出させている王者の風格を漂わせる戦士。
「闇を纏て、光を切り伏せる孤独な王者‼？　Ｈ（ヒロイック）ー　Ｃ（チャンピオン）エクスカリバー‼？」

〈ＨＩＣ　エクスカリバー〉★４　戦士族　光属性
ＡＴＫ２０００

「ＨＩＣ　エクスカリバーまで汚染されてるですか……」
『ＨＩＣ　エクスカリバーの効果発動!!?ダールフォース!!?オーバーレイユニットを２つ使い、このカードの攻撃力は、次の相手のエンドフェイズ時まで元々の攻撃力の倍になる!!?』
　エクスカリバーの周りを漂っていたオーバーレイユニットがエクスカリバーに集まると、エクスカリバーの身体が闇に包まれ、その目が血のような赤で輝き始める。

ＨＩＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ２０００→４０００

『さらに魔法カード、ヒロイックチャンス!!?自分フィールド上のヒロイックと名のついたモンスター１体を選択し、このターン、選択したモンスターは攻撃力が倍になる!!?ただし、相手プレイヤーにダイレクトアタックは出来なくなる。オレが対象にするのはＨＩＣ　エクスカリバーだ!!?』

ＨＩＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ４０００→８０００

「攻撃力８０００……でも、それならまだライフポイントは尽きないから大丈夫なのです!!?」
『ハッ!!?大丈夫なんて簡単に言ってくれるじゃねぇか、お気楽者が!!?オレはＨ・Ｃ　ダブルランスを召喚!!?』

〈Ｈ・Ｃ　ダブルランス〉☆４　戦士族　地属性
ＡＴＫ１７００

マリシャスシードのフィールドに再びダブルランスが姿を現わし、勇ましい雄叫びを上げる。
『Ｈ・Ｃ　ダブルランスの効果発動‼？召喚成功時に手札・墓地の同名モンスターを表側守備表示で特殊召喚する‼？ただしこのカードはシンクロ素材にできず、このカードをエクシーズ素材とする場合、戦士族モンスターのエクシーズ召喚にしか使用できない。墓地より蘇れ、Ｈ・Ｃ　ダブルランス‼？』
〈Ｈ・Ｃ　ダブルランス〉☆４　戦士族　地属性
ＤＥＦ９００

ダブルランスの雄叫びに導かれもう１体ダブルランスが現れる。
そしてマリシャスシードは再び正面に手をかざす。
『俺はレベル４のＨ・Ｃ　ダブルランス２体でオーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？』
２体のダブルランスが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると現れたのは闇を纏った金色の翼を持つ戦士。
『現れろ、Ｎｏ．３９‼？儚く光る希望の戦士‼？希望皇ホープ‼？』
〈Ｎｏ．３９　希望皇ホープ〉★４　戦士族　光属性
ＡＴＫ２５００

「Ｎｏ．３９　希望皇ホープ……遊騎君に取り憑いた呪いの核だったカードですか」
『さあ、終わりにしてやる‼？バトル‼？ＨーＣ　エクスカリバーで閃刀姫―カガリを攻撃‼？この瞬間、Ｎｏ．３９　希望皇ホープの効果発動‼？ムーンバリア‼？自分または相手のモンスターの攻撃宣言時、このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除き、そのモン

スターの攻撃を無効にする‼?』
「何ですと⁉?」
エクスカリバーがカガリに斬りかかり、カガリが反撃をしようと刀を振るうと、その刀をホープが翼を盾に変えて防ぐ。
なんでわざわざ自分の攻撃を無効化して……攻撃の無効?
「っ‼?そうなのです‼?遊騎君のデッキにはーーー」
『速攻魔法、ダブルアップチャンス‼?攻撃が無効になったモンスターを対象にして発動‼?このバトルフェイズ中、選択したモンスターはもう1度だけ攻撃でき、その場合、選択したモンスターはダメージステップの間、攻撃力が倍になる‼?』
「っ⁉?やっぱりそれですか‼?」
「バトル‼?HーC　エクスカリバーで閃刀姫―カガリを攻撃‼?」
「っ、リバースカードオープンなのです‼?罠発動、ダメージダイエットなのです‼?このターン自分が受ける全てのダメージは半分になるのです‼?」
『ほう、ダメージを軽減する罠を仕掛けていたか……ダメージステップ‼?ダブルアップチャンスの効果、HーC　エクスカリバーの攻撃力を倍にする‼?』

HーC　エクスカリバー
ＡＴＫ８０００→１６０００

「攻撃力……１６０００です⁉?」
『斬殺しろ‼?HーC　エクスカリバー‼?必殺剣　二の太刀‼?叫喚地獄‼?』
ホープの背後に隠れたエクスカリバーがもう1度剣を構え、集中するとエクスカリバーの剣に闇が集まっていく。
ホープが盾を使ってカガリの攻撃を受け流し、カガリの体勢を崩す。
エクスカリバーはホープの背後から飛び出すと、カガリに向かって剣を振り下ろして闇の衝撃波を放ち、カガリを吹き飛ばし、そのまま

リーネの身体をも吹き飛ばした。

リーネ　ＬＰ６０００→２５０

「っ‼？ああああああ‼？」

闇の衝撃波によって、リーネの身体は病室の窓を突き破り、病室の外に吹き飛ばされる。

ここは病院の３階。

ここから落ちるのは流石に洒落になってないですよ⁉？

「天羽⁉？」

「リーネさん⁉？」

「っ、ヴェルズウロボロス‼？」

『ヨセカマ』

病院の窓から紐無しバンジーをしそうになったところを、窓の外で実体化した闇ちゃんのヴェルズウロボロス君がリーネが着ていたスーツの襟を咥えて、紐無しバンジーを防いでくれた。

「ふぅー流石に死ぬかと思ったのです。ありがとうなのです、ヴェルズウロボロス君」

『ヨシヌ　ウヨコ　ノウオウヨジ　イヨ』

「わお、凄く距離感を感じる呼ばれ方なのです。間違ってはないですけど」

リーネはヴェルズウロボロス君に放って貰って病室の中に舞い戻る。

心配そうに駆け寄ってくる闇ちゃん達を、リーネは身体を起こしながら手で制した。

「大丈夫なのです‼？これぐらいでへこたれてたら、遊騎君に笑われちゃうのです‼？閃刀姫ーカガリが破壊された時に墓地にいる閃刀姫ーレイの効果発動なのです‼？このカードが墓地に存在する状態で、自分フィールドの表側表示の閃刀姫リンクモンスターが相手の効果でフィールドから離れた場合、または戦闘で破壊された場合にこのカードを特殊召喚するのです‼？」

〈閃刀姫ーレイ〉☆４　戦士族　闇属性
ＤＥＦ１５００

エクスカリバーが放った闇の衝撃波が晴れるとボロボロになり、刀で身体を支えながらもフィールドに立っているレイの姿があった。
『無駄な足掻きだな。ダブルアップチャンスの効果が切れることでＨｰＣ　エクスカリバーの攻撃力が元に戻る』

ＨｰＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ１６０００→８０００

『Ｎｏ．３９　希望皇ホープで閃刀姫ーレイを攻撃‼？ホープ剣スラッシュ‼？』
「自身をリリースして閃刀姫ーレイの効果発動なのです‼？ＥＸデッキから閃刀姫モンスター１体をＥＸモンスターゾーンに特殊召喚するのです‼？この効果は相手ターンでも発動できるのです‼？」
ホープが剣をレイに振りかざそうとしたところで、レイの正面に巨大なサーキットが現れ、ホープがサーキットに弾かれて吹き飛ばされる。
レイの身体をサーキットを通過すると、今度は重機のように巨大な４つの機械の手を装備し、橙色の鎧を身に纏ったレイの姿が現れた。
「地盤の如き揺るぎない豪腕なのです‼？リンク１‼？閃刀姫ーカイナ‼？」

〈閃刀姫ーカイナ〉ＬＩＮＫ１　機械族　地属性
ＡＴＫ１５００　↘？

『地の閃刀姫……ソイツは……』
「閃刀姫ーカイナの効果発動‼？フリスト‼？このカードが特殊召喚に成功した場合、相手フィールドの表側表示モンスター１体を対象と

してそのモンスターは相手ターン終了時まで攻撃できなくなるのです‼？対象は勿論、Ｎｏ．３９　希望皇ホープなのです‼？」
弾き飛ばされたホープが再び剣を構えてカイナに迫る。
しかし、そんなホープの身体をカイナは４つの機械の手を使って拘束し、完全に封じ込めた。
『チッ、どこまでも足掻いてくれる。メインフェイズ２、カードを２枚伏せてターンエンド。エンドフェイズ、ヒロイックチャンスの効果が消え、ＨＩＣ　エクスカリバーの攻撃力は元に戻る』

ＨＩＣ　エクスカリバー
ＡＴＫ８０００→２０００

リーネ　ＬＰ２５０　手札１
ーーーーーー　ー
ーー□ーー
☆　○
ーー○ーー
ー▲▲▲ー　ー
マリシャス　ＬＰ２０００　手札０

ーーーーーーー

☆

「はぁ……停学、か……」
再び連れていかれた生徒指導室。
校長までもが関わってきた話し合いの末、俺は一定期間停学することになった。
あれだけのことをしておいて停学ならまだいい方なのだろう。
いっそのこと退学にしてくれた方が楽だったのにな。
「……なーんてな。それじゃあ意味ないっての」

俺は首を振って自分が考えたことを頭から追い出す。
デュエルアカデミアを退学ってことはプロ決闘者の道を諦めるってこと。
それは死んだ両親の願いを俺自身が踏みにじるということだ。
そんなこと出来るわけがない……だけど……
俺は自分のデュエルディスクにセットされあデッキを取り出す。
「今の俺に……コイツらと一緒に戦う資格、あるのかな」
そう俺が呟いた時だった。
「なら、そいつは俺が貰ってやるよ‼?」
「っ‼?」
後ろから衝撃が走り、俺の身体は地面を転がり、手に持っていたデッキが奪われる。
何が起こったか混乱する俺を尻目に、俺を突き飛ばした男が俺のデッキを奪って走り出した。
「っ‼?待ちやがれ‼?」
俺も慌てて身体を起こして走りはじめる。
しばらく追いかけていると、男は朝通った公園に入っていくのが見えた。
俺が公園に足を踏み入れると公園の奥には俺から奪ったデッキを眺めながらニヤニヤと笑う今朝俺に喧嘩を売ってきた男達がいた。
「よう、やっときたか。待ちくたびれたぜ」
「テメェら、今朝の……」
「今朝はよくもやってくれたな。リベンジマッチと行こうじゃねぇか」
「人のデッキを奪っておいてふざけたことを‼?」
「あれあれーデッキがねぇの?じゃあ俺の不戦勝だな‼景品として?このデッキは頂いてくぜ‼?」
「っ‼?テメェ‼?」
俺が男に掴み掛かろとすると、もう1人の男に蹴りを入れられ、俺の身体が地面を転がる。
「ぐっ……」

「暴力はいけないな～悔しかったら誰かお友達でも連れてきて代わりにデュエルをしてもらえよ‼？お前にそんな友達なんているわけねぇけどな‼？ぎゃはははは‼？」
そういって男達が俺を嘲笑いながら俺の身体を蹴り飛ばす。
ああ、そんなこと分かってるさ。
俺なんかを助けてくれる奴がいないことぐらい。
それでも、俺はーーー

ーーーーーーー

●

「残りライフは２５０で手札もたったの１枚。いわゆる崖っぷちって奴なのですね」
そのうえマリシャスシードにはセットカードが３枚ある上に防御効果を持ったホープもいるなんて、本当にやれやれなのですよ。
でもーーー
『……オマエ、気が狂ったか？何故この状況で笑っていられる？』
「こんな状況だから、なのですよ。辛い時ほど笑うのです‼？」
リーネは満面の笑みでマリシャスシードに応える。
「辛気臭い顔をしてても勝利の女神は微笑んでくれないのです‼？それに……リーネにはいつもへらへらと笑っててほしいって言ってくれる人もいるですからね」
目を閉じれば浮かんでくる。
あの病室で、なんて言葉をかければいいか分からなかったリーネに、冗談混じりでそう言って笑ってくれた遊騎君の姿が。
あの笑顔を取り戻すためにも、リーネは笑っていないといけないんです‼？
「リーネが笑っていられるためにも、あなたを刈り取らせて貰うのです‼？」
『何故だ？何故オマエはこの男を助けようとする？所詮はただの他人

だろう？』
　マリシャスシードは心底不可解そうな表情を浮かべる。
　でも、その言葉をリーネは否定する。
「他人じゃないのです‼？」
『何？』
「遊騎君は……辞めた今でも、リーネにとって我が社の大切な社員なのです‼？リーネにとって、社員は家族なのです‼？闇ちゃんも、炎君も、治虫君も、みんなリーネの家族なのです‼？」
『……何を言っている？そんなもの、ただのまやかし。ただの家族ごっこだろう？』
「確かにあなたの言う通り、側から見たら家族ごっこかも知れないです。それでも、この繋がりはリーネにとって、本当の家族と同じぐらい大切な繋がりなのです‼？この繋がりだけは、誰にも否定させないのです‼？リーネのターン、ドローなのです‼？魔法カード、貪欲な壺‼？」
『何⁉？この状況でドローカードを引き当てたというのか⁉？』
「墓地に存在する閃刀姫ーシズク、閃刀姫ーハヤテ、閃刀姫ーカガリをEXデッキに、浮幽さくら、閃刀姫ーレイをデッキに戻してシャッフルするのです‼？」
　リーネは目を閉じて、握るカードに力を込める。
　頼むのです、リーネのデッキ。
　遊騎君を……リーネの大切な家族を、弟君を守らせて欲しいのです‼？
「そして、カードを2枚ドローするのです‼？」
　リーネが勢いよくデッキからカードをドローする。
　その瞬間、リーネの耳に待ち望んでいた声が聞こえてきたのです。
『リーちゃん、お待たせ』
「‼？……もう、遅いのですよ‼？」
『ごめんなさい』
「仕方がないですね。それでも、来てくれたので許してあげるのです‼？その分、遊騎君を助けるために力を貸して貰うのですよ‼？」

『うん。精一杯、頑張る』
そんな声が聞こえ、リーネは思わず笑みを浮かべる。
これで全ての準備が整ったのです。
「さあて、いっちょやらかすのですよ‼？リーネも墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動なのです‼？フィールドの閃刀姫―カイナをＥＸデッキに戻し、カードを１枚、ドローするのです‼？そして、刀術式起動なのです‼？戦場へと続くサーキット‼？」
『またリンク召喚か……芸のない』
リーネが正面に手をかざし、再び巨大なサーキットを出現させる。
「召喚条件は炎属性以外の閃刀姫モンスター１体‼？リーネは閃刀姫トークンをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？」
レイの立体映像がサーキットに吸い込まれる。
そしてサーキットから再び現れるのは真っ赤な鎧を身に纏った白髪の少女。
「リンク召喚‼？再燃する業火の如き閃滅の刃なのです‼？リンク１‼？閃刀姫―カガリ‼？」

〈閃刀姫―カガリ〉ＬＩＮＫ１　機械族　炎属性
ＡＴＫ１５００　↖？

「閃刀姫―カガリの効果発動‼？アルヴィト‼？リーネは墓地から閃刀起動―エンゲージを手札に加えるのです‼？そして再び魔法カード、閃刀起動―エンゲージなのです‼リーネはデッキから閃刀術式―アフターバーナーを手札に加えてさらに１枚ドローなのです‼？魔法カード、閃刀術式―アフターバーナー発動なのです‼？自分のメインモンスターゾーンにモンスターが存在しない場合、フィールドの表側表示モンスター１体を対象としてそのモンスターを破壊し、その後、自分の墓地に魔法カードが３枚以上存在する場合、フィールドの魔法・罠カード１枚を選んで破壊できるのです‼？破壊するモンスターはＮｏ．３９　希望皇ホープなのです‼？」
『何だと⁉？』

「何もないようなので、ついでに中央のセットカードも破壊させて貰うのです‼?」
ホープに向かってカガリが刀の形をした８つの炎を飛ばし、ホープを斬り裂き、その背後にあったセットカードも破壊する。
これで手札の閃刀魔法も使い切ったですし、お膳立ては済んだのです。
さあ、あなたの出番なのですよ‼?
「派手に行くのです‼?自分の墓地にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚できるのです‼?」
『っ⁉?その召喚条件……閃刀姫じゃないモンスターか⁉?』
驚愕するマリシャスシードに満面の笑みで答えながら、リーネはそのカードをデュエルディスクにセットする。
すると、天空より鳥をモチーフとした帽子を被った天使がフィールドに舞い降りた。
「光と闇を番う天翔ける守護者の牙‼?ガーディアンエアトスなのです‼?」

〈ガーディアンエアトス〉☆８　天使族　風属性
ＡＴＫ２５００

『私の出番。それじゃあ、始めよう』
『っ‼?ソイツ、精霊か‼?』
「そうなのです‼?この子が遊騎君を救うのです‼装備魔法、？女神の聖剣―エアトスをガーディアンエアトスに装備するのです‼?装備モンスターの攻撃力は５００ポイントアップするのです‼?」

ガーディアンエアトス
ＡＴＫ２５００→３０００

天空から聖剣が舞い降りて、エアトスの手元に収まる。
「そしてガーディアンエアトスの効果発動なのです‼?ハイリヒグラ

ンツ!!?このカードに装備された自分フィールドの装備魔法カード1枚を墓地へ送り、相手の墓地のモンスターを3体まで対象としてそのモンスターを除外し、このカードの攻撃力はターン終了時まで、この効果で除外したモンスターの数×５００ポイントアップするのです!!?リーネが対象にするのはあなたの墓地に眠る、Ｈ・Ｃ　サウザンドブレード、Ｈ・Ｃダブルランス、Ｎｏ．３９　希望皇ホープ!!?」

『なっ!?!?っ、させるか!!?リバースカードオープン!!?罠発動、エクシーズリボーン!!?自分の墓地のエクシーズモンスター1体を対象としてそのモンスターを特殊召喚し、このカードをオーバーレイユニットとする!!?甦れ、Ｎｏ．３９　希望皇ホープ!!?』

〈Ｎｏ．３９　希望皇ホープ〉★４　戦士族　光属性
ＡＴＫ２５００

フィールドに再びホープが姿を現わす。

逃げられちゃったですけど、それでも問題はないのです!!?

「墓地に眠りし穢れた魂を助けてあげるのです、ガーディアンエアトス!!?」

『任せて』

エアトスが聖剣を掲げると、墓地に眠っていたサウザンドブレードとダブルランスから闇の瘴気が溢れ出し聖剣に吸収されていく。

『まさか、聖剣の力で呪いを浄化して!!?』

「そのモンスター達も、その身体も、遊騎君のものなのです!!?だから耳を揃えて返して貰うのです!!?」

ーーーーーーーー

☆

「そこの子達、何をやってるですか!!?」

突然俺の背後から誰かの声が聞こえた。

声の主は俺に近づいて俺の身体を起こしながら優しい声をかけてくれる。
「何があったのです⁉？あなた達この子に何をしたですか⁉？」
「アンタは……？」
そこにいたのは腰まで届く長い金髪をポニーテールにした、緑のパーカーを着た女性。
くりっとした大きな青い瞳に、スラリとした手足と白い肌、豊満な胸部。
どこをとっても人の目を引いてしまうようなとても綺麗な人だった。
「そいつとこのデッキを賭けてデュエルすることになったんだが、そいつがデッキを持って無くてな。力強くで奪おうとしてきやがったから突き飛ばしただけだよ」
「下手な誤魔化しはいらないのです。それはこの子のデッキですよね？この子に返すのです⁉？」
「うるせぇ⁉？人殺しからデッキを奪って何が悪いんだよ⁉？それとも、そいつの代わりにアンタがデュエルすんのか？その場合、アンタのデッキも賭けて貰うがな⁉？」
「何ですと⁉？」
「元々テメェは部外者なんだ⁉？覚悟もねぇ奴は引っ込んでろ⁉？」
「そうだ⁉？部外者は引っ込んでろ⁉？」
その言葉を聞いて、女性は顔を顰める。
当たり前だ。
俺のデッキだけならともかく、自分のデッキがかかってまで彼女がデュエルを受ける義理なんてない。
俺と彼女は完全な他人なのだ。
そんな他人の為に自分のカードを賭けることなんてあるわけないし、する必要もない。
そこまで考えたところで俺の耳に、想定外の言葉が聞こえてきた。
「上等なのです⁉？勝てたらデッキでも何でも持ってくといいのです⁉？その代わり、こちらが勝ったらこの子のデッキは返して貰うので

す‼?」
「……はっ?」
女性の切った啖呵に、俺は思わず耳を疑う。
「アンタ、なんで……」
「デッキは決闘者の魂です。その魂を奪われたあなたを、お姉さんはほっておくことはできないのです」
「いや、そもそも俺とアンタは他人で‼?アンタのデッキまで賭ける必要なんて……‼?」
「あなたの魂を賭けて貰うのです。それぐらいの代償を払わないと、お姉さんも立つ瀬がないのです‼?それに、あなたは今戦えないんですよね?」
真っ直ぐと俺の目を見て尋ねてくる女性の言葉に、俺は思わず目を逸らす。
そんな俺に、女性は優しく微笑んだ。
「なら、戦えないあなたの代わりに、お姉さんが戦ってあげるのです‼?こう見えて、お姉さんは凄く強いですから、心配なんていらないのですよ‼?」
「いや、だけど……‼?」
それでも何とかこの女性を巻き込むまいとすする俺の頭を、女性は優しく撫でると満面の笑みを浮かべた。
「大丈夫なのです‼?お姉さんにドドーンとお任せなのです‼?」
「えっ……や……」
その優しく、綺麗な笑みに、俺は何も言えなくなる。
そんな俺に構わず、女性はデュエルディスクを起動して、デッキを奪った男に構えた。
「さあて、それじゃあやるとするのです‼?」
「……テメェ、正気か?」
その条件を呑んでくるとは思わなかったのだろう。
男が理解出来ないものを見るような目で女性を見る。
それに対して女性は不敵に笑って見せた。
「ふふん、勿論正気なのです‼?さぁ、人の魂がこもったデッキを奪う

悪い子さんにはお姉さんがお仕置きしちゃうのです!!?」
そうして女性と男のデュエルが始まる。
その光景を見ながら、俺はどこか妙な感覚を覚える。
「知っている……俺は、この光景を知っている気がする。あの女性を……リーネを!!?」
リーネの名前を口にした瞬間、目の前の景色にガラスが割れるかのようにひびが入る。
そして、ひび割れた風景が全て壊れると、俺の耳にあの底なしに明るい……優しい声が届いた。
「戻ってくるのです、遊騎君!!?」

ーーーーーーー

●

『ぐっ!!?がぁっ!!?馬鹿な、衰弱して、死にゆくはずだったこの男の自我が、目覚めて!!?』
リーネの呼びかけに、マリシャスシードが突然苦しみ始める。
そして、マリシャスシードの口から聞き覚えがある、リーネが聞きたかった声が聞こえてくる。
「……ったく、うるせぇっての、アホの子が。おちおち眠ることもできねぇじゃねぇか」
「っ!!?えへへへ、もう、アホの子は酷いのですよ、遊騎君!!?」
遊騎君の言葉に、リーネは思わず笑みを浮かべてしまう。
そして遊騎君が目覚めたことでマリシャスシードは焦り始める。
『馬鹿な!!?クソ、もう一度コイツを眠らせてーーー』
「……ぐっ、悪りぃ、リーネ。よく、状況は分かんねぇけどさーーー頼んだ」
「!!?えへへ、大丈夫なのです!!?お姉さんにドドーンとお任せなのです!!?」
リーネがそういうのと同時に、エアトスが手にしていた聖剣がサウ

ザンドブレード達の闇の瘴気を吸収しきり、砕け散る。
　しかし、浄化されたサウザンドブレード達の魂がエアトスに吸い込まれ、力を与える。

ガーディアンエアトス
ＡＴＫ３０００→２５００→３５００

「そして閃刀姫―カガリの永続効果!!?ヒルド!!?今のリーネの墓地には３２枚の魔法カードがあるのです!!?なので攻撃力は……」

閃刀姫―カガリ
ＡＴＫ１５００→４７００

『バカな……攻撃力４７００だと!?!?』
「バトルフェイズなのです!!?ガーディアンエアトスでＮｏ．３９希望皇ホープを攻撃!!?ベーテンリート!!?」
『私の全部、リーちゃんに捧げて歌うよ』
　エアトスが綺麗な声色で祈りの歌を絶唱し、その音色が波動となってホープを襲う。
『ガーディアンエアトスでＮｏ．３９　希望皇ホープを無力化し、ＨｌＣ　エクスカリバーを閃刀姫―カガリで攻撃して勝つつもりか!!?……だが、そうはいくか!!?リバースカードオープン!!?罠発動、アームズコール!!?』
「っ!!?」
『デッキから装備魔法カード１枚を手札に加え、その後、そのカードを装備可能な自分フィールドのモンスター１体を選び、そのモンスターに装備できる!!?オレはこの効果でデッキから装備魔法、月鏡の盾を手札に加え、Ｎｏ．３９　希望皇ホープに装備する!!?』
　ホープの手元に異次元から満月のような綺麗な金色の輝きを放つ盾が現れ、エアトスの祈りの歌を受け止める。
『そして装備魔法、月鏡の盾の効果発動!!?このカードの装備モンス

ターが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時のみ、装備モンスターの攻撃力・守備力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力と守備力の内、高い方の数値を＋１００ポイントアップした数値になる‼？』

「何ですと⁉？」

『ダメージ計算時、月鏡の盾によりＮｏ．３９　希望皇ホープはガーディアンエアトスの攻撃力を＋１００ポイントアップした数値になる‼？」

Ｎｏ．３９　希望皇ホープ
ＡＴＫ２５００→３６００

月鏡の盾が輝くと、エアトスの祈りの歌が波動となって跳ね返され、エアトスが体勢を崩す。

『迎え撃て、Ｎｏ．３９　希望皇ホープ‼？ホープ剣ムーンミラースラッシュ‼？』

体勢が崩れたエアトスをホープが跳躍して剣で斬り裂き、エアトスは勢いよく地面に叩きつけられた。

リーネ　ＬＰ２５０→１５０

フィールドを爆煙が包み、それを見て、マリシャスシードは高笑いをする。

『クックック、ハーハッハッハ‼？これでオマエの精霊は葬った‼？閃刀姫ーカガリの攻撃もＮｏ．３９　希望皇ホープのムーンバリアで届かない‼？これでーーー』

「……高笑いを上げているところ悪いのですが、あなたの敗北に変わりはないのです」

『ーーーは？』

リーネの言葉に、マリシャスシードの表情が固まる。

そんなマリシャスシードに、リーネは1枚のカードを掲げた。

「このカードはガーディアンエアトスが戦闘・効果で破壊され自分の墓地へ送られた場合に手札から特殊召喚するのです!!?」
『何!!?ガーディアンエアトスを破壊することで現れるモンスターだと!!?』
フィールドを包んでいた爆煙が晴れると、そこに佇む影が1つ。
そこにいたのは白い仮面をつけた漆黒の鎧に身を包んだ守護者。
「光と闇を番う彷徨う魂の守護者!!?ガーディアンデスサイスなのです!!?」

〈ガーディアンデスサイス〉☆8　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ２５００

『武装、完了』
「ガーディアンデスサイスの効果発動なのです!!?トートズィッヒェル!!?このカードが特殊召喚に成功した時、デッキから死神の大鎌―デスサイス1枚をこのカードに装備するのです!!?」
地底から巨大な鎌がデスサイスの手元に収まるように現れる。
「そして装備された死神の大鎌―デスサイスの効果なのです!!?このカードはガーディアンデスサイスにのみ装備でき、装備モンスターの攻撃力は、お互いの墓地のモンスターの数×５００ポイントアップするのです!!?」
『お互いの墓地のモンスターの数×５００ポイントアップする装備魔法、だと!!?』
「リーネの墓地にいるモンスターはガーディアンエアトスなのです!!?」
『オ、オレの墓地にはＨ・Ｃダブルランスが1体』
「合計2体なので攻撃力は１０００ポイントアップするのです!!?」

ガーディアンデスサイス
ＡＴＫ２５００→３５００

「閃刀姫―カガリでＨｒＣ　エクスカリバーを攻撃なのです!!?」
「くっ……Ｎｏ．３９　希望皇ホープの効果発動!!?ムーンバリア!!?オーバーレイユニットを１つ取り除き、その攻撃を無効にする!!?」
　エクスカリバーに斬りかかろとするカガリの刀をホープが翼を盾に変えて防ぐ。
「これでもう攻撃は防げないのです!!?」
『だが、ガーディアンデスサイスの攻撃力は３５００!!?それだけならまだオレのライフを削りきることはーーー』
「それはどうかな?なのです!!?」
『っ!!?』
「残念ですが、リーネはそこまで甘くないのです!!?ガーディアンデスサイスは相手の魂を刈り取る刃!!?その果てしなき斬撃を防ぐ術など存在しないと知るのです!!?ガーディアンデスサイスでＨｒＣ
　エクスカリバーを攻撃なのです!!?攻撃宣言時、速攻魔法、旗鼓堂々なのです!!?」
『っ!!?そのカードは!!?』
「このターン、自分はモンスターを特殊召喚できなくなる代わりに、自分の墓地の装備魔法カード１枚をその正しい対象となるフィールド上のモンスターに装備するのです!!?ただしこの効果で装備した装備魔法カードはエンドフェイズ時には破壊されるのです。リーネは墓地から装備魔法、巨大化をガーディアンデスサイスに装備するのです!!?」
『なっ!!?』
「効果の説明は不要ですよね?リーネのライフは１５０、あなたのライフは２０００!!?よってガーディアンデスサイスの攻撃力は倍になるのです!!?」
　デスサイスが大鎌に石版のような物を取りつけると、大鎌が巨大化する。
　ガーディアンデスサイス

ＡＴＫ２５００→５０００→６０００

『攻撃力、６０００だと⁉？』

「Ｄａｓ ｉｓｔ ｄａｓ Ｅｎｄｅ（これで終わりなのです）⁉？斬り刻んであげるのです、ガーディアンデスサイス⁉？シュテルプリヒシュナイデン⁉？」

『マスト……ダイ⁉？』

デスサイスは巨大化した鎌を高速回転させながら投擲し、その大鎌でエクスカリバーを斬り裂き、そのままマリシャスシードに突き刺さる。

『ぐあぁぁぁぁぁぁ⁉？』

その瞬間、遊騎君の身体に根付いていたマリシャスシードが切断され、遊騎君の身体から勢いよく吐き出された。

マリシャス　ＬＰ２０００→０

ーーーーーーーー

☆

「うっ、ぐっ……」

「おっととと、大丈夫なのですか、遊騎君？」

「……なんとかな」

悪夢から解き放たれ、痛む身体に病室の床に倒れ込みそうになったところをリーネに抱きとめられる。

思わず安心して、気を抜きそうになった俺の耳に炎さんの焦ったような声が響く。

「結束⁉？天羽⁉？まだだ⁉？」

「っ⁉？」

「やおいかんです⁉？ガーディアンデスサイス⁉？」

俺の身体から吐き出された呪いの塊が、勢いよく突撃してきて俺の腕に装着されていたデュエルディスクを弾き飛ばす。

動き回る呪いの塊にリーネが呼び出していたデスサイスが大鎌を振るうが、呪いの塊は大鎌を躱して弾き飛ばされた俺のデュエルディスクを呑み込んだ。
「っ、俺のデュエルディスクが!!?」
「何をする気なのです!?」
呪いの塊に呑み込まれたデュエルディスクが、宙に浮かび上がり、禍々しく輝く。
すると、呪いの塊が変化していき、俺のデュエルディスクを装着した身体が闇に塗り潰された漆黒の人型に変化した。
漆黒の人型は、ノイズの混じった電子的な、それでいてどこか聞き覚えのある声で話し始める。
『クッ……まだダ!!?』
「この声……俺の声、なのか?」
「まさか……遊騎君の長年使ってきたデュエルディスクに宿る思い出を、遊騎君の記憶の代わりに触媒として実体化したですか!?」
『まだ……オレは消えネェ!!?消えてタマルカァァァ!!?』
そんな唸り声をあげたかと思うと呪いの塊は割れた窓から外に飛び出していった。
それを見て、慌てて闇が窓に近づいて外を見たが、悔しそうに首を振った。
「っ、逃げられた……」
「ちょっ!?ここ3階よ!?」
「相手は実体化しているとはいえ精霊と同じ身体が霊気でできた霊体だ。物理的に不可能なことなど、奴らには関係ない」
正直意識が戻ったばかりで状況はよく分からないが、それでも分かっていることが1つある。
「俺のデッキとデュエルディスク、奪われちまった……」
ーーーーー結束　遊騎はデュエルをする手段を失ったということだ。

第８０話　見守る者達

★

深い闇の中、様々な声が響いていく。
『■■■■。カードの真を知り、魂の自由を知る者よ。だが、たとえ我を倒そうと、我は真実の闇なり。いずれ再び、この世界に蘇る』
『本当は、私も、君達が変える未来を見届けたかった……』
『我が名は■■■。お前たちの希望の光を消し去る絶望の神……!!?』
これはきっと、もう終わってしまった物語。
物語の最後に必ず現れてしまう”モノ”の……嘆きの声。
だとすれば、何故その声は私に語りかけてくるのだろう？
私はーーー

ーーーーーーー

「……ん、ここ、は……？」
深い微睡みの中から、意識が浮上した私は柔らかい何かに顔を埋めていることに気付き、身体を起こす。
何か、妙な夢を見ていた気がする。
もう見ていた夢の内容は全然思い出せないけど、とても妙で……大切な何かを見ていたような……
「ん、やっと目が覚めたか」
「……え？」
寝ぼけていた意識が一気に覚醒し、声が聞こえた方向に目を向ける。
そこにいたのは、私が今１番声が聞きたかった人。
その人は苦笑を浮かべながら、私の頭を撫でてくれる。
「幻騎とデュエルしたんだってな。怪我するかも知れないってのに、無茶しやがって……なんて、死にかけた俺が言えたことじゃない

な」
「う、あ……」
「いっぱい心配かけたし、いっぱい傷つけちまったな。自分の気持ちばっかりで、遊花がどう考えてたかなんて、全然考えてなかった。本当に、情けねぇ」
「あ、ぁぁぁ……」
「俺はさ、こうして死にそうになった今でも、自分の命が価値のあるものだと思えない。だけどさ、そんな価値がない俺の命でも、失うことで遊花達が穏やかな日常を送れなくなるなら、蔑ろにはしちゃいけないんだよな」
私の瞳から涙が溢れ落ちる。
その涙をその人は優しく拭ってくれてーーー
「俺もさ、もう少し色々と頑張って見るよ。忌まわしい過去に、遊花が描こうと思う未来が負けちゃダメだもんな。だから、頑張るとしか言えないけど……諦めずに頑張ってみるよ。だってーーー」
ーーーそして、照れくさそうな、優しい笑みを浮かべて、笑った。
「ーーー俺は、遊花の師匠だもんな」
「っ!!?師匠〜〜〜!!?」
私はその言葉に耐えきれなくなり、師匠に勢いよく抱き着いて、その胸に顔を埋めた。
「師匠……生きてる……生きててくれてる……師匠……師匠……うわぁぁぁ!!?」
「本当に、ごめんな、遊花」
「いいんです……師匠が、師匠が生きてて、くれるなら、それで……私は……私は……うわぁぁぁん!!?」
顔を埋めて泣き続ける私の頭を、師匠が優しく撫で続けてくれる。
師匠がいてくれる。
師匠の温もりが、私の手の中にある。
それだけで、私は十分に幸せだった。
ーーーーーーー

「それじゃあ遊花ちゃんも落ち着いたようですし、これからのお話をしていくのですよ」
「その栗原は宝月の背中に隠れているわけだが……」
「炎、触れないであげて。恥ずかしがってるから」
「もう、本当に仕方がない子ね、この子は」
　しばらくして、師匠に抱き着いて泣いているのを微笑ましいものを見る目で見ている桜ちゃん達がいることに気付いた私は羞恥のあまり桜ちゃんの背中に抱き着いて顔を埋めながら、桜ちゃんに頭を撫でられていた。
　考えてみれば師匠に取り憑いた呪いをどうにかするために助っ人を呼ぶと闇先パイは言っていたし、その師匠が意識を取り戻したのであれば師匠の呪いをどうにか出来たというわけで、意識を失っていた私以外の人がいるのは当たり前なのだが、師匠が意識を取り戻したということに安心しきっていた私はそんなことにも気づかなかった。
「完全に2人の世界だったですからね。遊花ちゃんの目には遊騎君しか映ってなかったですし」
「っ‼?～～～～～‼?」
「リーネ、遊花が大変なことになってるから。俺も恥ずかしいから止めてくれ……」
「おおっと、これはごめんなさいなのです‼?遊花ちゃんが可愛くてつい……」
　う～～～何も聞こえない‼?
　聞こえてないもん‼?
　だから恥ずかしくないもん‼?
　そうやって自己暗示をかけながらいやいやと桜ちゃんの背中に顔を押し付ける。
　そんな私を桜ちゃんは苦笑を浮かべながら頭を撫でてくれる。
「社長、話が進まないから早く本題に入って。このまま長引くなら……私は今日の試合をサボらないといけなくなる」
「おおっと。試合をサボってでもこっちの話を聞く気満々なのです‼

？それはリーネとしても困るのでちゃんと本題に入るのですよ」
　闇先パイのそんな声が聞こえてきたかと思うと、リーネさんはコホンと咳払いをして改めて話しはじめた。
「とりあえず、闇のカードをこの街にばら撒き、デュエルアカデミア生を操っていたのが『Ｓｃｈｏｐｆｅｒ』の現社長でありデュエルアカデミアの特別講師、天神　幻騎君だということが分かったのですが、闇ちゃん、デュエルアカデミアの方はどうだったのです？」
「校長に聞いたけど、昨日から行方不明。会社にもいないみたい。完全に行方を眩ました」
「まあ、遊花ちゃん達に正体がバレた今、分かりやすい場所にいるわけがないですよね」
　今回の闇のカードに関する事件。
　私達は闇のカードを生み出しているのが天神先生だということを知ってしまった。
　もしデュエルアカデミアにいるままなら闇先パイと一緒に乗り込むぐらいはしていただろうし、そんな場所に長居はしないだろう。
「とすると湾岸エリアにあった隠れ家みたいな場所に潜んでるってわけだな。また探すのも大変そうだ」
「遊騎君はまず身体を治すところからスタートするのですよ？呪いが大元だったとはいえ怪我もあるのです。お医者さんの話だと最低でも２週間は入院なのです」
「またベッドの上で一日中過ごす生活が続くのか……」
　師匠の憂鬱そうな声が耳に届く。
　師匠がいない生活……桜ちゃんや闇先パイはいてくれるけど、やっぱり寂しいという思いが強い。
「アンタが自分の身体を蔑ろにし過ぎなのが悪いのよ。これからはちゃんと気を付けなさいよね」
「返す言葉もないな。だけど、そうなると……リーネ」
「？何ですか？」
「遊花と桜、お前のとこで預かってくれないか？」
「はあっ⁉？アンタ、何言ってるのよ⁉？」

「師匠⁉?・」
師匠の突然の提案に私達は思わず声を上げる。
そんな私達に師匠は真剣な表情で言葉を続ける。
「遊花と桜は幻騎の正体を知っちまった。となると、遊花達が直接狙われる可能性が高い。闇だってプロリーグがあって遅くまで帰ってこないことがあるし、俺はこのざまだ。そんな状況で遊花達が襲われたら、俺は自分が赦せない」
「師匠……」
師匠の言葉に、私は思わず拳を握り締める。
確かに私達は天神先生の正体を知ってしまった。
そのうえ、私は自分でも未だによく分かっていない力でダークホープを生み出し、天神先生に勝った。
ダークホープを見た天神先生は怒り狂っていたし、私は間違いなく恨まれているだろう。
1度勝利したとはいえギリギリの状況だった。
次に襲われた時に勝てるかどうかなんて分からない。
「うーん、遊騎君の意見は最もですけど、それはあんまりオススメできないのです」
「は?・何でだよ?・」
しかし、師匠の言葉にリーネさんは否定の意を示す。
そしてリーネさんは柔らかい笑顔を浮かべた。
「だって、それは遊花ちゃん達の日常を崩すことなのです。遊騎君が守ろうとしたものを、遊騎君が崩してちゃ本末転倒なのですよ。こんな馬鹿馬鹿しい事件のせいで遊花ちゃん達の日常を崩すなんて絶対に反対なのです⁉?お姉さん赦さないのですよ」
「っ、いや、だけどな……」
リーネさんの言葉に、師匠が困ったような表情を浮かべる。
そんな師匠にリーネさんは更に言葉を続ける。
「それに、また遊騎君の悪い癖が出てるのです。遊花ちゃんを闇のカードから遠ざけようとしてるですけど、遊花ちゃんの気持ち、まだ聞いてないのですよ?」

「あ……」
リーネさんの言葉に、師匠は目を見開いて私の方を見て、自分の頭を強く小突いた。
「……そうだな、悪い」
「い、いえ‼?そんな、謝らないで下さい‼?師匠が私達のことを考えてくれてるのは分かってます‼?」
悔やむような表情を浮かべる師匠に私は慌てて首を振る。
師匠は私達の安全を守るために一生懸命考えてくれてる。
それは私にとって、とても嬉しいこと。
だけど、ここでただ師匠の言葉を受け入れるだけなら、今までと変わらない。
「それでも……それでも、私が望んでもいいのなら。私は……お父さん達が残してくれた、師匠達との思い出ができた、あの家で過ごしたいです」
「遊花……」
「正直、またあんなデュエルをすることになるかもって考えると、怖いです。だけど、師匠が、桜ちゃんが、闇先パイが、みんなが帰って来てくれる場所にいれないことの方が、何も知らないままでいることの方が、もっと怖いです」
この胸の思いを言葉にして、真っ直ぐに、伝える。
「危険だってことも分かってます。それでも、私は師匠のお手伝いがしたい。師匠がいてくれる場所を守りたい‼?それが私の我儘です‼?」
「……」
「師匠が怪我をしないか心配なんです、だから、お願いします‼?私に師匠のお手伝いさせてください‼?」
そういって師匠に頭を下げる。
師匠がどんな言葉を返してくれるのかが怖い。
だけど、この胸の思いを伝えられないことの方がずっと怖いってことを知ったから……
「怪我しないように……なんて、俺が言えた試しじゃねぇしな」

「現在進行形で入院中の遊騎君ですからね」
「茶化すなっての……遊花、とりあえず顔を上げてくれ」
師匠の言葉に私は顔を上げる。
私の目に映る師匠の顔は困ったような表情で笑った。
「正直、遊花に危険な目にあって欲しくないって気持ちは変わらない。だけど、それは遊花が俺に対して抱いてる気持ちだってことも分かってる。だから、まあ……うん、頼んだ」
「……えっ？」
今、なんて……
「俺の手伝い……まあ、俺が退院したらだが、頼む。もう、1人で抱えないように頑張って見るからさ」
「っ‼？……はい‼？」
師匠の言葉に私は満面の笑みを浮かべて応える。
そんな私を見て、師匠は諦めたような苦笑を浮かべながら、リーネさんはニコニコと笑った。
「よかったですね、遊騎君」
「うるせぇ、それに肝心の遊花達が狙われるって問題は解決してないだろうが」
「ああ、それは心配しなくても大丈夫なのですよ」
「はあ？それってどういう……」
リーネさんの言葉に師匠が首を傾げる。
そんな師匠に、リーネさんはドヤ顔で応えた。
「遊騎君がいない間、遊花ちゃんの家にリーネと炎君がお世話になるですからね」
『……はい⁉？』
リーネさん以外の全員の声が被る。
とりあえずリーネさん……私も、後、不知火さんも聞いてなかったみたいなのですが？

ーーーーーーー

「いらっしゃい……おや、珍しい組み合わせだね？」
「こんにちはーなのです‼？」
「こんにちは」
お店に入るといつものようにレジのところでコーヒーを飲んでいた島さんが私とリーネさんを見て不思議そうな表情を浮かべた。
結局あの後、師匠達が話し合った末、師匠の入院中の間、リーネさんが私の家に泊まることになった。
不知火さんは男性ということで外聞を考慮して辞退。
その代わりにリーネさんや闇先パイが帰ってくるまでは私の家に護衛として来てくれるらしい。
桜ちゃんは修行をする時間が増えるって喜んでたなー
そうして話し合いが終わった後、闇先パイはプロリーグの試合があるので会場に。
そして私とリーネさんはもう１つの大きな問題を解決するため、桜ちゃんと不知火さんに師匠の護衛を任せてこうして島さんのいる『Ｎａｔｕｒａｌ』に訪れた。
その大きな問題とはーーー
「島さん、デュエルディスクって置いてないですか？」
「デュエルディスク？見た限り遊花君もリーネ君もデュエルディスクはちゃんと持っているようだが……」
「ああ、必要なのはリーネ達の分じゃなくて、遊騎君の分なのです」
「遊騎君の？」
「はい。実はーーー」
私は島さんに師匠に起こったことを話す。
師匠が呪いを植え付けられたこと。
リーネさんがその呪いを師匠から斬り離したこと。
その際に自我を持った呪いに師匠のデッキとデュエルディスクを奪われてしまったこと。
私が知らない部分はリーネさんが補足してくれながら私はことの全容を話しきる。
一通り話し終えると、島さんは困ったような安心したような苦笑を

浮かべた。
「全く、遊騎君はまた無茶をして……まあ、生きててくれただけありがたいと思うべきか。ありがとうね、遊花君、リーネ君」
「いえ、私なんて全然役に立てませんでしたから……」
「そんなことないのですよ‼？遊花ちゃんも遊騎君のために一生懸命頑張ったのです‼？いい子いい子、なのですよー」
そういってリーネさんが私の頭を優しく撫でてくれる。
そんな私達を見て、島さんは柔らかく笑うと店の裏に視線をやった。
「とりあえずデュエルディスクを持ってくるよ。店の裏に置いてあるから店番を頼めるかい？あまり人はこないけどね」
「わ、分かりました」
「大船に乗ったつもりで、どーんとこいです‼？」
「頼んだよ。それじゃあちょっと行ってくるね」
そういって島さんが店の奥に入っていく。
島さんの姿が見えなくなった後、リーネさんは私に振り向くと、ショーケースに入っているカードを指差した。
「それでは遊花ちゃん。店番をしながら、リーネ達はリーネ達のミッションをやり遂げるのです‼？」
「は、はい‼？頑張ります‼？」
リーネさんに手を引かれ、私はショーケースの中にあるカードを見ていく。
リーネさんが言うミッションとは、『Ｎａｔｕｒａｌ』にくる際にデュエルディスクを手に入れること以外で師匠に頼まれたことだ。
それはーーー

ーーーーーーー

「それじゃあリーネが遊花ちゃんのところでお世話になるのは決定として、もう１つの問題に取り掛かるのです」
「もう１つの問題、ですか？」

「そう、マリシャスシードに奪われた遊騎君のデッキとデュエルディスクをどうするのかって話なのです」
「えっ⁉？」
　リーネさんの言葉に私は目を見開いて師匠を見る。
　そんな私の様子を見て、師匠は苦い笑みを浮かべた。
「そういえば栗原には話してなかったな。結束から呪いを分離させた際に呪いが意思を持って結束のデッキとデュエルディスクを奪っていったんだ」
「幸い、呪いに抵抗した絵札の三銃士やＤ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄみたいな一部のカードは無事だったですけど、ヒロイックを含むデッキのほとんどは持っていかれちゃったのですよね」
「そんな……」
　不知火さんとリーネさんの説明に、デュエルディスクごとデッキを奪われた師匠の気持ちを考えると、私は再び涙が出そうになる。
　そんな私の頭を師匠は優しく撫でて笑みを浮かべた。
「ありがとな、俺のために悲しんでくれて。だけど、心配するな」
「でも……」
「アイツらを奪われちまったのは俺の所詮だ。だからこそ、アイツらは必ずこの手で奪い返す」
「師匠……」
「とはいえ、奪いかえすためには新しいデッキとデュエルディスクがいるんだがな。デュエルディスクは島さんのところに貰いにいくとして、デッキをどうするべきか……」
「遊花の家にアンタのデッキの予備のカードは置いてないの？」
「無いわけじゃ無いんだが、少し思うところがあってな」
「思うところ？」
　桜ちゃんの言葉に、師匠は苦々しい表情を浮かべる。
「幻騎とデュエルをした時だ。アイツは俺のプレイングをほとんどコピーしていた。俺のファンだとか言ってな」
「あ、そういえば、私とデュエルをした時もそんなことを……」
「遊花の家に置いてあるカードは使えなくなったカードも含め、ほと

んど俺がプロ時代に使ってたカード達だ。どちらにせよ、奪われなかった絵札の三銃士達は使うつもりなんだが、考えたくも無い話ではあるけど、あの言葉が真実だった場合、使っても手の内が読まれるんじゃないかと思ってな」
師匠が顎に手を当てながら考え込む。
確かに、天神先生は師匠の動きを自分なりにアレンジしながらも完全にコピーしていた。
となれば、同じようなデッキを組んでも、その手の内を天神先生には読まれてしまう可能性があるということ？
でも、それじゃあ一体どうすれば……
「成る程成る程、それを悩んでいたのですね。それなら、リーネにいい考えがあるのです‼？」
「……凄く嫌な予感がする前振りなんだが」
「天羽のいい考えはかなり突飛だからな……」
「もう‼？話を聞く前から決めつけるなんて、遊騎君も炎君も酷いのです‼？」
そういって怒ってみせるリーネさんに師匠達が苦笑を浮かべる。
「それで、リーネさん。いい考えってなんなの？」
「桜ちゃん、いいことを聞いてくれたのです‼？それはですね……」
そういってリーネさんが勿体振りながらも私の背後に移動して私の両肩を掴む。
「遊花ちゃんに遊騎君のデッキを作って貰えばいいのですよ」
「……ふぇ？ふぇぇぇ⁉？」
リーネさんの言葉に私は思わず目を丸くして大声を上げてしまう。
そんな私の反応を見て、師匠は呆れたような目でリーネさんを見る。
「お前なぁ、無茶振りが過ぎるだろ。というか、どうしてそうなる？」
「遊花ちゃんは遊騎君の弟子で遊騎君のデュエルをよく見ているのです‼？だからこそ、遊騎君に合ったデッキをきっと作れると思うのです‼？多分‼？」
「確証がねぇじゃねぇか……」

「それに、遊騎君のデュエルの弱点を補うには遊花ちゃんの力があった方がいいのです」
「俺の弱点？」
「自分の身が犠牲になることも厭わない肉を切らせて骨を断つその防御の薄さなのです」
「……あー」
リーネさんの指摘に思い当たるところがあるのか、師匠が罰が悪そうに視線を逸らす。
確かに、師匠のデッキには防御用のカードはかなり少ない。
装備魔法や奇襲用のカードが殆どで、防御用のカードなんてそれこそ数えるほどだ。
「それに引き換え、弟子である遊花ちゃんは防御特化と言える程の防御の達人なのです‼？」
「あの‼？防御の達人と言える程ではないと思うんですが⁉？」
「遊騎君のデュエルを知り、防御においては抜きんでた才能を持っている遊花ちゃんの力が加われば、遊騎君の戦い方を阻害せずに防御も取り入れることもできると思うのですよ。特に、闇のカードが関わる今回の事件は少しのミスで大怪我に繋がるのです。それを踏まえても、遊騎君の身を捨てた攻撃方法は危険だと思うのです」
私の言葉を無視してリーネさんがそういって師匠を見る。
師匠は少し逡巡すると、躊躇いがちに口を開いた。
「……遊花はどうだ？」
「えっ？」
「どちらにせよ、カードを手に入れるのは遊花に頼むことになる。それにリーネの指摘した点は自覚してるが、治せるかと言われれば多分無理だ。俺の身体に染み付いちまってる戦術だからな」
そういって、師匠は苦笑を浮かべながらもはっきりとその言葉を口にする。
「俺だけだと、多分俺はまた俺を傷つける。だから、もし、遊花に頼めるなら……俺は遊花に頼んでみたい。遊花が考えた、俺が自分を守りながら戦える、俺らしい戦い方を」

「あ……」
師匠の言葉に、私の胸がぽかぽかとし始める。
踏み出してくれた。
師匠が、私のために、師匠自身を守ることを。
それの、お手伝いができるというのならーーー
「師匠がそういってくれるなら、私は頑張りたいです。師匠のために、師匠を守れるように」
「……そっか。じゃあ、頼んだ」
「っ‼?はい‼?」

ーーーーーーー

「絵札の三銃士は決まってますし、アルカナエクストラジョーカーのことも考えるとやっぱり戦士族が主体ですよね。セイクリッドプレアデスを使うことも考えると光属性……通常モンスターのサポートも使える。後は装備魔法もよく使ってたから……それに合いそうなカードは……」
「ふふっ」
「?リーネさん?どうかしたんですか?」
師匠のデッキに入れれそうなカードを探していると、同じようにカードを探していたリーネさんの微笑む声が聞こえてきて、私は首を傾げて尋ねる。
そんな私に、リーネさんはニコニコと嬉しそうに笑う。
「遊騎君もいい弟子を持ったなって思っただけなのですよ。こんなに甲斐甲斐しくお手伝いをして師匠を愛してくれるお弟子さんなんて、そうはいないのですよ」
「あ、あああ、愛⁉?」
リーネさんの言葉に私は動揺してしまう。
そんな私を見て、リーネさんは不思議そうに首を傾げる。
「違うのです?」
「ええっと‼?それは、その、私なんかじゃ、恐れ多いことと言います

か‼?愛だなんて、そんな……私は、師匠のお側に入れれば、それで……」
私は頬が赤くなるのを感じながら、思わずその場にしゃがみこんでしまう。
そんな私を微笑ましいものを見る目でリーネさんが見る。
「ふふっ、遊花ちゃん可愛いのです。こんな可愛いお弟子さんがいるなんて遊騎君は幸せものなのです」
「……そう……でしょうか?」
「自信がないのです?」
「……師匠には返しきれない程の恩がありますから。師匠は赤の他人だったデュエルのできない私のために、大切な自分のデッキを賭けてデュエルをしてくれました。その後も私がもう1度デュエルができるように、色んなことを教えてくれました。私の側に、いてくれました。だから、いつも思うんです。そんな私は、師匠に何が返せているんだろうって。私ばかり、師匠から貰っているんじゃないかって」
そういって、私は思わず拳を握り締める。
そんな私の拳をリーネさんは自分の手の平で優しく包み込む。
「きっと、大丈夫なのです。遊花ちゃんが遊騎君が側にいてくれることを嬉しく思っているように、遊騎君だって、遊花ちゃんが側にいることで、救われているのです。間違いないのです」
「そう、でしょうか?」
「絶対に、絶対なのです‼?」
そういって柔らかく笑うリーネさんを見ると、何だか心が落ち着いてくる。
きっとこんなリーネさんに師匠も救われてきたんだろう。
「おやおや、何やら盛り上がっているようだね。店の奥まで声が聞こえてきたよ」
「あ、おかえりなさい、なのです‼?だいぶ時間がかかっていたですね?」
「ああ、デュエルディスク自体は直ぐに見つかったんだけど、この子達がどうしても連れて行けと言って聞かなくてね」

「この子達？」
デュエルディスクを持って店の奥から戻ってきた島さんの手には中から闇が溢れ出している小さなデッキケースが握られていた。
私の質問に島さんは困ったように笑うと、そのデッキケースを私に向かって差し出した。
「遊花君、この子達を使ってあげてくれないか？」
「ほぇ？私、ですか？」
「ああ。ここで封じていた闇のカードの一種なんだが、君に使って貰いたいらしい」
「闇のカード⁉？」
「……またとんでもないモノが出てきたのです」
島さんの言葉に私とリーネさんは目を見開く。
そんな私達に苦笑を浮かべながらも、島さんはデッキケースからそのカード達を出してテーブルの上に並べた。
そのカード達を見た瞬間ーーー
『■■■■……■■■……■■……■■■■■』
「っ⁉？今のは……」
私の頭の中に、見たことがないビジョンが広がった。
今のはホープ達の時にもあった……それじゃあ今のはこの子達の記憶？
「遊花ちゃん？」
「……」
私を見て心配そうな表情を浮かべるリーネさんと複雑な表情を浮かべる島さんの姿が目に入る。
私はテーブルの上に置かれたカードの内、1枚のカードを手に取る。
……感じる。
相棒やアンチホープ達と同じ、確かな繋がり。
私は、この子達と確かに繋がっている。
相変わらず、この繋がりが何なのかは分からないけど……
「……分かりました。この子達と一緒に、私も戦ってみたいです」

「遊花ちゃん⁉?」
「遊花君ならそう言うと思っていたよ」
私の言葉にリーネさんは驚き、島さんは苦笑を浮かべる。
「大丈夫なのです⁉?操られたりしてないのです⁉?」
「大丈夫です、リーネさん。この子達、優しい子ですから」
「言ってること、全然分からないですよ⁉?」
慌てるリーネさんを横目に私はそのカード達を手に取って抱き締める。
……このカード達と一緒に戦えば、少しは分かるようになるのだろうか?
この力の意味も……その思いも……

ーーーーーーー

「もう⁉?よく分からないけど分かったのです⁉?とにかく、そのカード達を使うのなら、遊花ちゃんのデッキも調整しないといけないのです」
「そうですね、今のままでデッキに組み込んでもこの子達の力を活かせそうにないですし」
「もうこうなったら何でもどんとこいなのです⁉?お姉さんも出来る限り協力してあげるのです⁉?」
何とかリーネさんに納得してもらい、師匠のデッキを作る傍ら、私のデッキの調整もはじめる。
同時進行でデッキを調整していく私を見て、リーネさんは深いため息を吐いた。
「本当に、遊花ちゃんは遊騎君の弟子なのです。こういう無茶をするところとか、遊騎君そっくりでほっておけないのです」
「そ、そうでしょうか?」
「リーネが出会って少し経った頃の遊騎君が、そうやって闇ちゃんのデッキを組みながら自分のデッキも組んでたですよ。リーネもよく手伝ったものなのです」

そういって、リーネさんは困ったような、それでいてどこか嬉しそうな表情を浮かべて笑う。
そんなリーネさんを見て、私は前々からずっと気になっていたことを尋ねる。
「そういえば、リーネさんはどうやって師匠と出会ったんですか？」
「およ？聞いたことないのです？」
「その、何だか聞きづらくて……弟子として、知っておいた方がいいということは分かってるんですけど……」
躊躇いがちな私を見て、リーネさんは微笑ましいものを見るような笑みを浮かべて口を開いた。
「ふふっ、本当に、遊花ちゃんは遊騎君のことが大切なのですね。ならば、教えてしんぜよう、なのです‼？リーネと遊騎君の出会いのお話を‼？」

ーーーーーーー

●

「Ｎｕｎ，ｗｉｒ ｓｉｎｄ ｅｎｄｌｉｃｈ ａｎｇｅｋｏｍｍｅｎ．」
ケルンにある空港エリア。
飛行機から降り、空港から外に出たリーネはグイッと伸びをしながら辺りを見渡す。
『次のニュースです。昨夜行われたプロチーム『Ｄｏｎｎｅｒ』と『Ｆｅｌｓ』の対抗試合ではーーー』
「昨日のプロリーグの試合見た？」
「見た見た、凄かったよね。『Ｄｏｎｎｅｒ』の雲母選手‼？」
「ええー私は『Ｆｅｌｓ』の天地選手の方が凄かったと思うけど？」
空港にあるモニターから流れているプロチームの試合に、その試合を見て楽しむ人々。
リーネはその光景を見て、帰ってきたということを実感しながら満面の笑みを浮かべた。

「Es ist schon lange her, dass Japan.
‼?」
「ふふっ、リーちゃんは相変わらず元気ね」
久しぶりの日本にはしゃぐリーネの背後からそんな声が聞こえてくる。
リーネが振り返ると、そこでは金髪のロングヘアーでリーネと同じ青目の女性がリーネを見て嬉しそうに笑っていた。
「だけど、折角パパのいる日本に戻ってきたのに、まだドイツ語が抜け切ってないわよ?」
「うっ……少し出ちゃっただけなのです‼?もう、ママは意地悪なのです‼?」
「ふふっ、ごめんなさい。リーちゃんがあまりにも可愛いから、ついからかっちゃったわ。それじゃあ車も来ているようだし、パパのいる我が家に戻りましょうか」
「はーい、なのです‼?」
そういって、嬉しそうに笑うママの後ろをついて行く。
少し歩くと、全長が7、8メートルはある真っ黒のリムジンが見え、その前に立っていたスーツ姿の男性がリーネ達を見て頭を下げた。
「お待ちしておりました、リーゼロッテ様。リーネお嬢様」
「ご苦労様、鞍馬（くらま）。有実は?」
「社長はご多忙につき会社でお仕事の最中でございます」
「もう、あの人は……折角の妻と娘の帰国だと言うのに……」
「いえ、リーゼロッテ様とリーネお嬢様が帰国するとのことで、他社との会議を重役に押し付けてすっぽかそうとしていらしたので、重役に引き渡して参りました」
「もう、あの人は……困った人ね。だから代わりに秘書である貴方が来ているのね」
「折角の家族の再開を邪魔立てしてしまい、申し訳ございません」
「構わないわ。それなら早く会いに行ってあげないとね」
「かしこまりました。どうぞ、お乗りください」
そういってどこか嬉しそうに笑うママに続き、鞍馬さんが開けてく

れたドアを潜ってリムジンに乗り込むと、リムジンが勢いよく走り出した。
リーネはドイツ人のママーーーリーゼロッテ　ヴォルフと、日本人のパパーーー天羽　有実（あまは　ありざね）から生まれたハーフなのです。
小学生の頃まではパパのいる日本で暮らしていたのですが、ママの実家の都合でしばらくママはドイツにある実家のお手伝いをするために帰国しなければならなくなり、仕事で忙しかったパパを日本に残して、リーネはママに連れられて今日までドイツで暮らしていたのです。
ドイツでの日々も勿論楽しかったですし、パパも3か月に1回はドイツまで会いに来てくれたので寂しくはなかったのですが、日本での生活を懐かしく思っていたのも事実。
そしてようやくママの実家の都合も片付き、こうして日本に戻ってくることになったのです。
リムジンに乗ること数十分。
辿り着いたのはかなり広い敷地を持つ1つの高層ビル。
『Ｓｅｇｅｎ』。
ドイツ語で祝福や幸福、幸運などの意味を持つ名前が付けられたその会社はケルンで売られている食品や医療品の6割を一手に担っている大手メーカー。
そしてリーネのパパが社長を務めている会社でもあるのです。
リーネ達がリムジンから降りると、高層ビルの方から走ってくる人影が見えた。
その人物は黒髪をベリーショートにし、無精髭を生やした長身の男性。
その人物はリーネ達の姿を見ると笑顔を浮かべると、走ってくる勢いのままリーネ達を抱きしめた。
「リーゼロッテ‼?リーネ‼?良かった、無事に帰ってこられたんだね‼?」
「わぁ‼?もう、パパ、苦しいのですよ……」

「もう、有実ったら……会議の方はどうしたの？」
「君達が帰ってきたんだ、すぐに終わらせたさ‼？勿論、いい方向に話を進めてね‼？」
　そういって、パパが自信満々の笑みを浮かべる。
　パパが笑顔でそういうのなら、きっと間違いないのです。
「社長、そろそろ」
「むっ、もう次の会議の時間なのか。他の役員だけでーーー」
「もう、パパ。お仕事をサボっちゃメッ、なのです‼？」
「リーネ……しかしだな、折角の家族の再開を……」
「リーネ達はこうしてパパのいる場所に戻ってきたのです‼？お話ならこれからだってたくさんできるのです‼？だから、パパには今パパにしかできない仕事を頑張って、カッコいいところを見せて欲しいのです‼？」
「リーネ……」
　リーネの言葉にパパは目を見開いて驚く。
　そんなリーネとパパを見て、ママは楽しそうに笑った。
「ふふっ、流石は私達のリーちゃんね。ほら、有実。私達の娘がこう言ってくれてるのよ？父親としてカッコいいところを見せないと」
「……そうだね。可愛い娘と妻がそういってくれるんだ。父親として頑張らないといけないか」
「はいなのです‼？いっぱいいっぱい頑張って、色んな話を聞かせて欲しいのです‼？」
　リーネが笑顔でそういうとパパは真剣な表情で鞍馬さんに話しかける。
「よし、頑張るか‼？鞍馬、行くぞ‼？」
「かしこまりました。リーゼロッテ様、リーネ様。お二人のお荷物は既にお部屋に運ばせて貰いました」
「ふふっ、ありがとう鞍馬」
「ありがとうなのです、鞍馬さん‼？」
「恐縮です。それでは、私めはこれで。失礼します」
「リーゼロッテ、リーネ、行ってくる」

「ええ、いってらっしゃい、有実」
そういうと、ママがパパにキスをする。
パパはママを1度強く抱きしめるとそのまま笑顔で会社の中に戻っていった。
「さて、パパも仕事に行ったし、私は疲れたからこのまま我が家に戻るけど、リーちゃんはどうする？」
「あ、それなら、リーネは1度家に戻ったら久しぶりのケルンを見て回りたいのです‼？」
「リーちゃんならそういうと思ったわ。あまりはしゃぎ過ぎて迷子にならないようにね」
「もう、ママは心配性なのです。リーネだってもう一人前のレディなのですよ？そんなヘマはしないのです‼？」
「ふふっ、そうね。気をつけて行ってくるのよ？」
「はい、なのです‼？」
自信満々に胸を張るリーネを見て、ママは可笑しそうに笑うのだった。

ーーーーーーーー

1度自分の部屋に戻ったリーネは身支度を整えると久しぶりのケルンを探検しに行った。
久しぶりのケルン。
懐かしい部分も変わっている部分もたくさんあって、つい色々と見回っていたリーネはーーー
「……迷ったのです」
道に迷って公園のベンチに座って途方に暮れていた。
そんなリーネの耳に呆れたような女性の声が聞こえてくる。
『リーちゃん、後先考えないで動くから』
「だって、懐かしくて色々と見て回りたくて……」
『リーちゃんが住んでた頃から10年は経ってるんだよ？街だって様変わりするよ』

「うぅ～エアトスの正論が耳に痛いのです……」
デッキの中にいるエアトスの声にリーネは肩を落とす。
エアトスはリーネのデッキに宿るカードの精霊さんなのです。
初めてその声を聞いたのはリーネが3歳の頃。
パパに誕生日プレゼントとして初めてデッキを渡された時だったのです。
あの頃は幽霊かと思って怖くて泣いてしまっていたのですが、リーネがデュエルをする時、いつも助けてくれたエアトスは、血の繋がりは無くとも、家族以上の家族で、最高の相棒なのです。
……時折、正論が耳に痛いですけどね。
『どうする？電話してマムを呼ぶ？』
「でもでも、あれだけ大見得切ってママに電話をするのは恥ずかしいのですよ」
『だけど、このままじゃ帰れないよ？』
「うぐっ、それは……」
「人のデッキを奪っておいてふざけたことを!!？」
「ん？何なのです？」
そう思い悩むリーネの耳に怒った男の人の声が聞こえてくる。
リーネがそちらに目を向けると1人の青年君が明らかに不良っぽい格好をした男の子達に怒りの形相を浮かべていた。
そんな青年君を嘲笑うように、不良君達は笑みを浮かべる。
「あれあれーデッキがねぇの？じゃあ俺の不戦勝だな!!景品として？このデッキは頂いてくぜ!!？」
「っ!!？テメェ!!？」
青年君が1人の不良君に掴み掛かろとするが、もう1人の不良君に蹴りを入れられ、青年君の身体が地面を転がる。
「ぐっ……」
「暴力はいけないな～悔しかったら誰かお友達でも連れてきて代わりにデュエルをしてもらえよ!!？お前にそんな友達なんているわけねぇけどな!!？ぎゃはははは!!？」
そういって不良君達が嘲笑いながら青年君の身体を蹴り飛ばす。

むむっ、何だかよく分からないですが、見ていてとっても不愉快なのです。
『リーちゃん、あの子、助けるの？』
「やらいでかなのです‼？」
『ん、それでこそリーちゃん。だけど、怪我しないようには気をつけて』
「勿論なのですよ‼？そこの子達、何をやってるですか‼？」
リーネは大声で注意をしながら、青年君に近づいてその身体を起こして声をかける。
「何があったのです⁉？あなた達この子に何をしたですか⁉？」
「アンタは……？」
青年君を庇うように不良君達を睨みつけると、不良君達は一瞬きょとんとした表情を浮かべたが、その表情はすぐに下卑た笑みに変わる。
「そいつとこのデッキを賭けてデュエルすることになったんだが、そいつがデッキを持って無くてな。力強くで奪おうとしてきやがったから突き飛ばしただけだよ」
そういって不良君が手に持ったデッキをひらひらと振ってみせる。
だけど、青年君の行動と不良君達の態度を見れば、そのデッキが青年君のものだということは一目瞭然なのです‼？
「下手な誤魔化しはいらないのです。それはこの子のデッキですよね？この子に返すのです‼？」
「うるせぇ‼？人殺しからデッキを奪って何が悪いんだよ‼？それとも、そいつの代わりにアンタがデュエルすんのか？その場合、アンタのデッキも賭けて貰うがな‼？」
「何ですと⁉？」
「元々テメェは部外者なんだ‼？覚悟もねぇ奴は引っ込んでろ‼？」
「そうだ‼？部外者は引っ込んでろ‼？」
不良君達の言葉にリーネは顔を顰める。
人殺しというのが事実かどうかなんてリーネには分からないのです。

ですが、それはこの青年君のデッキを奪うことは何の関係もない。
そのうえ、リーネのデッキまで差し出せというのです？
頭にくるのです‼？
堪忍袋の緒が切れたのです‼？
「上等なのです‼？勝てたらデッキでも何でも持ってくといいのです‼？その代わり、こちらが勝ったらこの子のデッキは返して貰うのです‼？」
「……はっ？」
リーネの切った啖呵に、青年君が間の抜けた声を出す。
「アンタ、なんで……」
困惑する青年君の目を真っ直ぐに見つめ返しリーネは言葉を紡ぐ。
「デッキは決闘者の魂です。その魂を奪われたあなたを、お姉さんはほっておくことはできないのです」
「いや、そもそも俺とアンタは他人で‼？アンタのデッキまで賭ける必要なんて……‼？」
「あなたの魂を賭けて貰うのです。それぐらいの代償を払わないと、お姉さんも立つ瀬がないのです‼？それに、あなたは今戦えないんですよね？」
リーネの言葉に、青年君は思わずと言った風に目を逸らす。
そんな青年君に、リーネは安心させるように優しい笑顔を浮かべる。
「なら、戦えないあなたの代わりに、お姉さんが戦ってあげるのです‼？こう見えて、お姉さんは凄く強いですから、心配なんていらないのですよ‼？」
「いや、だけど……‼？」
それでも何とかリーネを巻き込むまいとする青年君の頭を、リーネは優しく撫で、満面の笑みを浮かべた。
「大丈夫なのです‼？お姉さんにドドーンとお任せなのです‼？」
「えっ……や……」
リーネの言葉に、青年君が言葉を詰まらせる。
大丈夫なのです。

あなたのデッキはちゃんとリーネが取り戻してあげるのですよ‼？

リーネはデュエルディスクを起動して、デッキを奪った不良君に向けて構える。

「さあて、それじゃあやるとするのです‼？」

「……テメェ、正気か？」

その条件を呑んでくるとは思わなかったのだろう。

不良君が理解出来ないものを見るような目でリーネを見る。

それに対してリーネは不敵に笑って見せた。

「ふふん、勿論正気なのです‼？さぁ、人の魂がこもったデッキを奪う悪い子さんにはお姉さんがお仕置きしちゃうのです‼？」

「っ……舐めやがって、できるものならやって見やがれ‼？」

『決闘‼？』

リーネ　ＬＰ８０００

不良君　ＬＰ８０００

ーーーーーーーー

「先攻は俺だ‼？魔界発現世行きデスガイドを召喚‼？」

〈魔界発現世行きデスガイド〉☆３　悪魔族　闇属性

ＡＴＫ１０００

フィールドに現れたのはバスガイドのような格好をした悪魔の女の子のモンスター。

「魔界発現世行きデスガイドの効果発動‼？このカードが召喚に成功した時に手札・デッキから悪魔族・レベル３モンスター１体を特殊召喚する‼？この効果で特殊召喚したモンスターは効果が無効化され、シンクロ素材にできない。俺はデッキからクリッターを特殊召喚‼？」

〈クリッター〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

さらにデスガイドの隣に三つ目の毛玉のような悪魔が現れる。
「俺に逆らったことを後悔させてやるぜ‼？招来せよ‼？悪魔を生み出すサーキット‼？」
「早速リンク召喚をしてくるですか」
不良君が手をかざすと、正面に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル３モンスター２体‼？俺は魔界発現世行きデスガイドとクリッターをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？リンク２‼？パーペチュアルキングデーモン‼？」

〈パーペチュアルキングデーモン〉ＬＩＮＫ　２　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ２０００　↙？　↘？

デスガイドとクリッターがサーキットに吸い込まれると、骨の身体を持つ悪魔のモンスターが現れた。
「墓地に送られたクリッターの効果発動‼？のカードがフィールドから墓地へ送られた場合、デッキから攻撃力１５００以下のモンスター１体を手札に加える‼？ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたカード及びその同名カードの発動ができない。俺はデッキからサイバーデーモンを手札に加えるぜ‼？まだまだ行くぞ、魔法カード、闇の誘惑‼？デッキから２枚ドローして、その後手札にある闇属性モンスター１体を除外する‼？俺は２枚ドローし、サイバーデーモンを除外する。そしてフィールド魔法、チキンレースを発動‼？」
不良君がフィールド魔法を発動すると、公園の景色が崖の上に変化する。
「このカードがフィールドゾーンに存在する限り、相手よりライフポ

イントが少ないプレイヤーが受ける全てのダメージは０になる‼？さらにライフポイントを１０００払ってチキンレースの効果発動‼？」

不良君　ＬＰ８０００→７０００

「お互いのプレイヤーは１ターンに１度、自分メインフェイズに１０００ライフポイントを払って３つの効果から１つを選択して発動できる‼？この効果の発動に対して、お互いは魔法・罠・モンスターの効果を発動できない。デッキから１枚ドロー、このカードの破壊、相手のライフポイントを１０００回復する効果だ。俺は１つ目の効果を使いカードを１枚ドローする‼？そしてこの瞬間、パーペチュアルキングデーモンの効果発動‼？ブラッドコントラクト‼？」

「さっき出したリンクモンスターの効果ですか」

「自分がライフポイントを払った場合に発動できる。その数値と同じ攻撃力か守備力の悪魔族モンスター１体をデッキから墓地へ送る‼？俺はデッキから払ったライフポイントと同じ、攻撃力１０００のトリックデーモンを墓地に送る‼？さらに墓地に送られたトリックデーモンの効果発動‼？同名カードは１ターンに１度、効果で墓地へ送られた場合、または戦闘で破壊され墓地へ送られた場合、デッキから同名カード以外のデーモンカード１枚を手札に加える‼？俺はデッキからデーモンの降臨を手札に加える‼？」

「手札が最初より増えてるですね……思ってたより繊細なプレイングなのです」

「ハッ‼？余裕ぶるのも今の内だ‼？今日の俺はすこぶる調子がいいんだからよぉ‼？儀式魔法、高等儀式術を発動‼？」

「儀式魔法……」

「レベルの合計が儀式召喚するモンスターと同じになるように、デッキから通常モンスターを墓地へ送り、手札から儀式モンスター１体を儀式召喚する‼？俺はデッキからレベル６の通常モンスター、デーモンの召喚を墓地に送り儀式召喚を行う‼？」

崖の上に遺跡が現れ、そこに白い身体の悪魔が入っていく。
遺跡が光り輝くと、中から現れたのは青い雷を纏った悪魔。
「儀式召喚!!?青き稲妻に導かれて降臨せよ!!?デーモンの降臨!!?」

〈デーモンの降臨〉☆6　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ２５００

「デーモンの降臨を降臨させたですか……」
「テメェ!!?馬鹿にしてやがるだろ!!?」
「えっ？何がなのです？」
リーネが首を傾げると、不良君は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。
「チッ、天然かこの女……デーモンの降臨はモンスターゾーンに存在する限り、カード名をデーモンの召喚として扱う!!?そしてデーモンの降臨の永続効果、リチュアルライトニング!!?フィールドのこのカードは、儀式モンスター以外のモンスターとの戦闘では破壊されず、儀式モンスター以外のモンスターの効果では破壊されない!!?」
「儀式モンスター以外のモンスター耐性……中々厄介な耐性です」
「そしてコイツの耐性を利用すればこんなことも出来んだぜ!!?自分フィールドにデーモンカードが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できる!!?来やがれ、デーモンの将星!!?」

〈デーモンの将星〉☆6　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ２５００

刺々しい身体を持つ悪魔がフィールドに現れる。
「ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはこのターン攻撃できず、特殊召喚に成功した場合、自分フィールドのデーモンカード1枚を破壊しなければならない」
「……成る程です。デーモンの降臨でその効果をやり過ごすつもり

ですか」
「ぎゃはははは‼?その通りだよ‼?俺はデーモンの将星の効果でデーモンの降臨を破壊する‼?だが、デーモンの降臨は破壊されない‼?」
　将星が降臨に雷を落とすが、落とされた雷の中で降臨は平然としていた。
「まだまだショーは終わらないぜ?魔法カード、思い出のブランコ‼?自分の墓地の通常モンスター1体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する‼?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはこのターンのエンドフェイズに破壊される。　蘇れ、デーモンの召喚‼?」

〈デーモンの召喚〉☆6　悪魔族　闇属性
　ＡＴＫ２５００

　崖の上にあった木にいつのまにかブランコが現れ、ブランコを漕いでいた召喚がブランコから飛び降りるとフィールドに着地する。
「そしてライフポイントを２０００払って魔法カード、超越融合‼?」
「今度は融合魔法なのですね」

　不良君　ＬＰ７０００→５０００

「融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスター2体を自分フィールドから墓地へ送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚する‼?このカードの発動に対してカードの効果は発動できない‼?俺はデーモンの召喚と闇属性のデーモンの将星を超越融合‼?」
　フィールドに稲妻が迸り、巨大な渦が現れる。
　その巨大な渦に召喚と将星が吸い込まれていく。
　そして渦の中から巨大な雷がフィールドに落ち、光が収まると、そこにいたのは紫電を纏った悪魔。

「原初の悪魔よ、将たる悪魔よ!!?今交わりて、ここに顕現せよ!!?融合召喚!!?デーモンの顕現!!?」

〈デーモンの顕現〉☆６　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ２５００

「次はデーモンの顕現を顕現させたですか」
「やっぱりテメェ馬鹿にしてやがるだろ!?」
「だから何がなのです?」
リーネが首を傾げると、不良君は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。
「チッ、ウザってぇ!!?デーモンの顕現はモンスターゾーンに存在する限り、カード名をデーモンの召喚として扱う!!?そしてデーモンの顕現の永続効果、フュージョンライトニング!!?このカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分フィールドのデーモンの召喚の攻撃力は５００ポイントアップする!!?デーモンの顕現もデーモンの降臨もモンスターゾーンではデーモンの召喚だ!!?攻撃力は５００ポイントアップするぜ!!?」

デーモンの顕現
ＡＴＫ２５００→３０００

デーモンの降臨
ＡＴＫ２５００→３０００

「さらに再びパーペチュアルキングデーモンの効果発動!!?ブラッドコントラクト!!?」
「っ、１ターンで何回も使える系統の効果でしたか」
「俺はデッキから払ったライフポイントと同じ、守備力２０００の彼岸の悪鬼　スカラマリオンを墓地に送る!!?」
意外と色々やってくるですね……もう少し大雑把なデュエルを

してくると思ってたですが、人は見かけによらないのです。
「まだ終わりじゃねぇぞ‼?墓地の超越融合の効果発動‼?このカードを除外し、このカードの効果で融合召喚したモンスター1体を対象としてそのモンスターの融合召喚に使用した融合素材モンスター一組を自分の墓地から特殊召喚する‼?ただしこの効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力・守備力は0になり、効果は無効化される。デーモンの顕現を対象に蘇れ、デーモンの召喚‼?デーモンの将星‼?」

〈デーモンの召喚〉☆6　悪魔族　闇属性
　ＤＥＦ１２００→０

〈デーモンの将星〉☆6　悪魔族　闇属性
　ＤＥＦ１２００→０

再びフィールドに現れる召喚と将星。
守備力は0になってるですけど、2体のレベルは共に6。
これは……来るですね。
「俺はレベル6、デーモンの召喚とデーモンの将星でオーバーレイ‼?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼?」
「やっぱりエクシーズ召喚ですか」
召喚と将星が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこに現れたのは禍々しい角を持つ紫電を纏った悪魔。
「原初より世界に存在する悪魔よ‼?今こそ全てを超越せよ‼?ランク6‼?デーモンの超越‼?」

〈デーモンの超越〉★6　悪魔族　闇属性
　ＡＴＫ２５００

「デーモンの超越もモンスターゾーンに存在する限り、カード名をデーモンの召喚として扱う!!?つまり、デーモンの顕現の効果で５００ポイント攻撃力がアップする!!?」

デーモンの超越
ＡＴＫ２５００→３０００

「さらにデーモンの超越の効果、オーバーソウルライトニングにより自分フィールドのデーモンの召喚が戦闘・効果で破壊される場合、代わりにこのカードのオーバーレイユニットを１つ取り除く事ができる!!?」
「戦闘・効果耐性を付与するデーモン……いきなり儀式、融合、エクシーズ召喚をしてくるとは……敵もさるもの引っ掻くものです」
「カードを１枚伏せて、エンドフェイズに墓地に送られた彼岸の悪鬼スカラマリオンの効果発動!!?このカードが墓地へ送られたターンのエンドフェイズ、デッキから同名カード以外の悪魔族・闇属性・レベル３モンスター１体を手札に加える!!?俺はデッキからガーベージオーガを手札に加え、ターンエンドだ!!?」

リーネ　ＬＰ８０００　手札５
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
☆　ー
○○○ーー
ーー▲ーー　▽
不良君　ＬＰ５０００　手札１

「リーネのターン、ドローなのです!!?」
「さあ、俺のデーモン軍団を突破できるものならしてみやがれ!!?」
そういって不良君が自信満々に高笑いをする。
確かに厄介な布陣ではあるですけど……

「別に馬鹿正直にあなたのデーモン軍団を突破する必要はないのですよ。単純に、あなたを倒せればいいのです」
「……は？」
不良君が意味が分からないとでも言うように首を傾げる。
分からないなら分からないでもいいのです。
ただ、デュエルが終わるだけなのです。
『リーちゃん、行こう』
「さあて、いっちょやらかすですよ‼？自分の墓地にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚できるのです‼？」
リーネがカードをデュエルディスクにセットすると、天空より白い羽根が降り注ぐ。
そして天空より鳥をモチーフとした帽子を被った天使がフィールドに舞い降りた。
「光と闇を番う天翔ける守護者の牙‼？ガーディアンエアトスなのです‼？」

〈ガーディアンエアトス〉☆８　天使族　風属性
ＡＴＫ２５００

『私の出番。それじゃあ、始めよう』
「ガーディアンエアトス⁉？そいつがテメェの切り札か‼？」
「まずは下準備なのです‼？デッキの一番上のカードを墓地へ送って、魔法カード、アームズホールを発動なのです‼？自分のデッキ・墓地から装備魔法カード１枚を選んで手札に加えるのです‼？ただし、このカードを発動するターン、自分は通常召喚できないのです。リーネはデッキから装備魔法、妖刀竹光を手札に加えるのです‼？さらにライフポイントを１０００払ってリーネもチキンレースの効果を発動なのです‼？１つ目の効果を使いカードを１枚ドローするのです‼？」

リーネ　ＬＰ８０００→７０００

「それじゃあ行くですよ‼?装備魔法、妖刀竹光をガーディアンエアトスに装備するのです‼?」
　エアトスの手元に禍々しい竹刀が現れる。
「そしてガーディアンエアトスの効果発動なのです‼?ハイリヒグランツ‼?このカードに装備された自分フィールドの装備魔法カード１枚を墓地へ送り、相手の墓地のモンスターを３体まで対象としてそのモンスターを除外し、このカードの攻撃力はターン終了時まで、この効果で除外したモンスターの数×５００ポイントアップするのです‼?」
「何だと⁉?」
「装備されていた妖刀竹光を墓地に送りリーネが対象にするのはあなたの墓地に眠る、魔界発現世行きデスガイド、クリッター、彼岸の悪鬼　スカラマリオン‼?」
　リーネがそういうのと同時に、エアトスが手にしていた竹刀が不良君の墓地にいたモンスター達の魂を吸収し、砕け散る。
　しかし、吸収され浄化された魂がエアトスに吸い込まれ、力を与える。

　ガーディアンエアトス
　ＡＴＫ２５００→４０００

「攻撃力４０００⁉?」
「まだ終わりじゃないのですよ?墓地に送られた妖刀竹光の効果発動なのです‼?デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加えるのです。リーネはデッキから装備魔法、折れ竹光を手札に加えるのです‼?さらに速攻魔法、異次元からの埋葬を発動なのです‼?除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計３体まで対象としてそのモンスターを墓地に戻すのです‼?リーネはさっき除外した魔界発現世行きデスガイド、クリッター、彼岸の悪鬼　スカラマリオンを墓地に戻すのです‼?」

「っ⁉？ってことは……⁉？」
「それじゃあ行くですよ⁉？装備魔法、折れ竹光をガーディアンエアトスに装備するのです⁉？そして再びガーディアンエアトスの効果発動なのです⁉？ハイリヒグランツ⁉？装備されていた折れ竹光を墓地に送り、リーネが対象にするのはあなたの墓地に眠る、魔界発現世行きデスガイド、クリッター、彼岸の悪鬼　スカラマリオンなのです⁉？」
　エアトスが手にした折れた竹刀に不良君の墓地に戻ったモンスター達の魂が集まり砕け散る。
　そして再び吸収され浄化された魂がエアトスに吸い込まれ、力を与える。

ガーディアンエアトス
ＡＴＫ４０００→５５００

「クッ、俺の墓地のモンスターが全て吸収されて……」
「まだまだ終わりじゃないのです⁉？装備魔法、？女神の聖剣―エアトスをガーディアンエアトスに装備するのです⁉？装備モンスターの攻撃力は５００ポイントアップするのです⁉？」

ガーディアンエアトス
ＡＴＫ５５００→６０００

　天空から聖剣が舞い降りて、エアトスの手元に収まる。
「攻撃力６０００⁉？だ、だが、チキンレースがある限りどんなに攻撃力を上げようとも……⁉？」
「ならチキンレースを破壊してしまえばいいだけなのです。速攻魔法、ダブルサイクロンを発動なのです⁉？自分フィールドの魔法・罠カード１枚と、相手フィールドの魔法・罠カード１枚を対象としてそのカードを破壊するのです⁉？リーネは女神の聖剣―エアトスとチキンレースを破壊するのです⁉？」

エアトスが聖剣を崖に投げつけると、崖に突き刺さった聖剣から竜巻が発生し、フィールドとして展開されていたチキンレースを吹き飛ばした。

ガーディアンエアトス
ＡＴＫ６０００→５５００

「チ、チキンレースが破壊されて……」
「それだけじゃないのです!!?墓地に送られた女神の聖剣―エアトスの効果発動なのです!!?このカードがフィールドから墓地へ送られた時、自分フィールドのガーディアンエアトス１体を対象としてそのモンスターの攻撃力は除外されているモンスターの数×５００ポイントアップするのです!!?」
「なっ!?それじゃあ!?」
「除外にはガーディアンエアトスの効果で除外した３体と闇の誘惑で除外されているサイバーデーモンの合計４体のモンスターがいるのです!!?よって、ガーディアンエアトスの攻撃力は……」

ガーディアンエアトス
ＡＴＫ５５００→７５００

「攻撃力……７５００だとっ!?」
「バトルフェイズなのです!!?ガーディアンエアトスでパーペチュアルキングデーモンを攻撃!!?ダメ押しなのです!!?速攻魔法、アクションマジック―フルターンなのです!!?このターン、モンスター同士の戦闘で発生するお互いの戦闘ダメージは倍になるのです!!?」
「っ、そんな攻撃通せるか!!?チェーンしてリバースカードオープン!!?１０００ライフポイントを払い、永続罠、光の護封霊剣を発動!!?」

不良君　ＬＰ５０００→４０００

「相手モンスターの攻撃宣言時に1度、１０００ライフポイントを払ってその攻撃を無効にする‼?これでーーー」
「残念ながらそれじゃあリーネの攻撃は防げないのです。さらにチェーンして速攻魔法、禁じられた聖槍を発動なのです‼?フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてそのモンスターはターン終了時まで、攻撃力が８００ポイントダウンし、このカード以外の魔法・罠カードの効果を受けなくなるのです‼?対象はガーディアンエアトスなのです‼?」
「なっ⁉?それじゃあ……」
「チェーン処理に移るですよ。ガーディアンエアトスは禁じられた聖槍の効果を受け、攻撃力が８００ポイントダウンして、このカード以外の魔法・罠の効果を受けなくなるのです‼?」

ガーディアンエアトス
ＡＴＫ７５００→６７００

エアトスの手元に聖槍が現れ、エアトスの身体を聖なるオーラが包み込む。
「次に光の護封霊剣の効果が発動しますが、ガーディアンエアトスは禁じられた聖槍の効果を受け、禁じられた聖槍以外の魔法・罠の効果を受けないため、意味を無さないのです」
空から不良君を守るように何本もの光の剣が落ちてくるが、エアトスが光の剣に向けて聖槍を投げると1本の光の剣が粒子に変わり、防壁に穴が空く。
「最後にアクションマジック―フルターンの効果でこのターン、モンスター同士の戦闘で発生するお互いの戦闘ダメージは倍になるのです‼?」
「っ、お、俺はパーペチュアルキングデーモンの効果発動‼?ブラッドコントラクト‼?俺はデッキから払ったライフポイントと同じ、攻撃力１０００の2枚目のトリックデーモンを墓地に送る‼?さらに墓

地に送られたトリックデーモンの効果発動!!?俺はデッキからエキセントリックデーモンを手札に加える!!?」
「そ　ん　な　の　も　う　関　係　な　い　の　で　す　!!?
　Ｄａｓ　ｉｓｔ　ｄａｓ　Ｅｎｄｅ!!?斬り刻むのです、ガーディアンエアトス!!?ベーテンリート!!?」
『私の絶唱、受けてみて!!?』
　エアトスが綺麗な声色で祈りの歌を絶唱し、その音色は風の刃に変わり、パーペチュアルごと不良君を斬り刻んだ。
「ぎゃあああ!!?」

不良君　ＬＰ４０００→０

ーーーーーーー

「ば……馬鹿な……ワンターンキル、だと?」
「リーネの勝ちなのです!!?約束通り、その子のデッキは返して貰うのですよ!!?」
「っ……ふざけんな!!?誰が返すかよ!!?」
「っ、危ねぇ!!?」
　リーネに負け、逆上した不良君は拳を握りしめ、リーネに向かって振り抜く。
「おっと、おいたがすぎるのです、よ!!?」
「がっ!!?イダダダダ!!?」
　しかし、あまりにも隙が多過ぎるパンチを、リーネはさらりと躱してその拳を捻りあげ、不良君が持っていた青年君のデッキを奪い返すとその足を払いながら突き飛ばして地面に転がした。
　これでもリーネは社長令嬢なのです。
　護身術の類いは幼い頃から習っているのでそこらの不良君の拳なんて怖くとも何ともないのです。
　リーネは取り返したデッキを持って青年君に近づき、そのデッキを差し出した。

「どうぞなのです‼?あなたのデッキなのですよ」
「あ、ああ……ありがとう」
　青年君が困惑しながらもリーネからデッキを受け取る。
　すると、リーネとデュエルをしなかったもう1人の不良君が怒声を上げた。
「このアマ‼?よくもやってくれやがったな‼?」
「あなた達が悪いことをするから天罰が下っただけなのです。リーネに怒るのは筋違いなのですよ」
「っ、テメェ、ふざけんな‼?今度は俺とデュエルしやがれ‼?俺がテメェをぶっ壊してやる‼?」
「物騒な子なのです。まあ、デュエルと言うのであればリーネだって受けて……」
　そういってリーネが再びデュエルディスクを構えようとすると、そんなリーネを制するように青年君が手を出してデュエルディスクを起動した。
「これ以上、アンタに迷惑なんてかけれねぇよ。デッキが返ってきた以上、これは俺の喧嘩だ」
「とはいえ、不良君はリーネにデュエルを申し込んできてるですよ?」
「こんなの相手にアンタの時間を無駄にする必要なんてねぇよ。俺で十分だ」
　そういって、青年君がリーネの前に出る。
　そんな青年君を見て、不良君は怒りの形相で怒鳴る。
「っ、人殺し風情が吠えやがって‼?」
「その人殺し風情にデッキを奪うって手段が無ければ戦えない小者風情が何言ってんだ。そういうのは俺に勝ってから言うんだな」
「っ、ぶっ殺す‼?」
「できねぇよ、お前には。そんな言葉を出してる時点でな」
『決闘‼?』

青年君　ＬＰ８０００
不良君　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は俺か、悪くない手札だ。手札からＤーＨＥＲＯ（デステニーヒーロー）ディアボリックガイを捨てて魔法カード、デステニードロー‼？手札からＤーＨＥＲＯカード１枚を捨てて自分はデッキから２枚ドローする‼？」

「チッ、いきなり面倒なカードを……」

「さらに魔法カード、予想ＧＵＹを発動‼？自分フィールドにモンスターが存在しない場合にこのカードは発動できる。デッキからレベル４以下の通常モンスター１体を特殊召喚する‼？来い、クィーンズナイト‼？」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

青年君の前に現れたのは赤い鎧を身に纏った女性の騎士。

「俺はキングスナイトを召喚‼？」

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

さらにクィーンズナイトの横に並び立ったのは黄金の鎧を身に纏った騎士が現れる。

あのカードは確か絵札の三銃士と呼ばれていたカードだったハズなのです。

そして絵札の三銃士はクィーンとキングが揃った時、新たな騎士を招集する。

「キングスナイトの効果発動‼？自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト１体を特殊召喚する‼？集え、絵札の三銃士‼？来い、ジャックスナイト‼？」

〈ジャックスナイト〉☆５　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

クィーンズナイトとキングスナイトが剣を掲げ、その剣に合わせるように剣を掲げる青い鎧の騎士が現れる。
「クッ、絵札の三銃士を揃えたか‼？」
そして青年君は正面に手をかざす。
「そして、斬り開け‼？運命に抗うサーキット‼？」
青年君がそういって手を前に突き出すと、青年君の目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター２体‼？俺はジャックスナイトとキングスナイトの２体をリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？追想に生きる王女‼？リンク２‼？聖騎士の追想　イゾルデ‼？」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙？　↘？

ジャックスナイトとキングスナイトの２体がサーキットの中に消えると代わりに現れたのは金髪と白髪の２人の女性。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動‼？リンクレカレクション‼？リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター１体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキからＤＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）ドリームガイを手札に加える‼？これだけじゃ終わらない‼？聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動‼？メモリーズギフト‼？デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター１体をデッキから特殊召喚する‼？俺はデッキから妖刀竹光、ビッグバンシュート、最強の盾、閃光の

双剣―トライスを墓地に送り、デッキからD―HERO（デステニーヒーロー）ドリルガイを特殊召喚!!?」

〈D―HEROドリルガイ〉☆4　戦士族　闇属性
DEF1200

イゾルデに導かれてフィールドに現れたのは運命を司るドリルを武器とする英雄。
あれはD―HEROシリーズですか。
数あるHEROシリーズの中で運命の名を持つ英雄。
他のHEROシリーズと合わせているのは見たことあるですけど、絵札の三銃士と合わせるなんて珍しい組み合わせのデッキを使っているのですね。
「D―HEROドリルガイの効果、それにチェーンして墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える。俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える!!?そしてD―HEROドリルガイの効果発動!!?このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、このカードの攻撃力以下の攻撃力を持つD―HEROモンスター1体を手札から特殊召喚する!!?来い、D―HERO（デステニーヒーロー）ダイヤモンドガイ!!?」

〈D―HEROダイヤモンドガイ〉☆4　戦士族　闇属性
DEF1600

ドリルガイがドリルを使って地面に風穴を開けると、地面から運命を司るダイヤモンドの身体を持つ英雄が現れた。
「これだけじゃ終わらないぜ!!?魔法カード、フュージョンデスティニー!!?」
「っ、そのカードは……」
「このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できないが、自分の手札・デッキから、融合モンスターカードによって決められた融合

素材モンスターを墓地へ送り、Ｄ－ＨＥＲＯモンスターを融合素材とするその融合モンスター１体をＥＸデッキから融合召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは次のターンのエンドフェイズに破壊され、このカードの発動後、ターン終了時まで自分は闇属性のＨＥＲＯモンスターしか特殊召喚できない!!?俺はデッキからＤ－ＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）ド ローガイ、Ｄ－ＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）ディバインガイ、Ｄ－ＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）ディスクガイの３体を融合!!?」

「Ｄ－ＨＥＲＯの３体融合だと!?!?」

フィールドに現れた渦にデッキから３体の運命を司る英雄が飛び込んでいく。

そして渦が爆けると、現れたのは漆黒のマントを羽織った鋼鉄の英雄。

「融合召喚!!?哀しき運命を覆す戦士!!?Ｄ－ＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）ドミネイトガイ」

〈Ｄ－ＨＥＲＯドミネイトガイ〉☆１０　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２９００

「Ｄ－ＨＥＲＯドミネイトガイの効果発動!!?フェイトプレセデンス!!?自分メインフェイズ、自分または相手のデッキの上からカードを５枚確認し、好きな順番でデッキの上に戻す!!?俺は自分のデッキの上から５枚を確認し、好きな順番でデッキの上に戻す!!?」

「っ、自分の運命を書き換えたか……」

「これで俺の運命は決まった!!?Ｄ－ＨＥＲＯダイヤモンドガイの効果発動!!?プロミスドフェイト!!?１ターンに１度、自分メインフェイズに自分のデッキの一番上のカードをめくり、それが通常魔法カードだった場合、そのカードを墓地へ送り、違った場合、そのカードをデッキの一番下に戻す。この効果で通常魔法カードを墓地へ送った場合、次の自分ターンのメインフェイズに墓地のその通常魔法カードの発動時の効果を発動できる!!?その際にコスト、発動条件、誓約効果は無視される!!?」

「何だと⁉？お前のデッキの上は……⁉？」
「そう、ＤーＨＥＲＯドミネイトガイにより操作されている。めくられたカードは通常魔法、運命のドロー⁉？墓地に送られ、次の発動が確定する⁉？」
　青年君のデッキの上から運命のドローが墓地に送られる。
　確かあのカードは結構厳しい発動条件と誓約効果があったハズですが、それを戦術で踏み倒すとはなかなかやるですね、あの子。
「俺はＤーＨＥＲＯダイヤモンドガイに装備魔法、折れ竹光を装備する。これ自体には何も効果はないが、さらに魔法カード黄金色の竹光を発動⁉？自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを２枚ドローする⁉？まだだ⁉？墓地に存在するＤーＨＥＲＯディアボリックガイの効果発動⁉？墓地のこのカードを除外してデッキから同名モンスター１体を特殊召喚する⁉？来てくれ、ＤーＨＥＲＯディアボリックガイ⁉？」

〈ＤーＨＥＲＯディアボリックガイ〉☆６　戦士族　闇属性
　ＤＥＦ８００

　フィールドに現れたのは運命を司る悪魔の姿をした英雄。
　そして青年君は不敵な笑みを浮かべると１枚のカードを掲げた。
「そして、自分フィールドのＤーＨＥＲＯを含む３体のモンスター、ＤーＨＥＲＯディアボリックガイ、ＤーＨＥＲＯドリルガイ、クィーンズナイトをリリースし、手札からこのモンスターを特殊召喚する⁉？」
　運命の英雄達とクィーンズナイトが粒子に変わり、空に集まっていく。
　集まった粒子が弾けると、空から舞い降りたのは漆黒の翼を持つ漆黒の戦士。
　その戦士はフィールドに降り立つと、力強い咆哮を上げた。
「忌まわしき運命を滅する気高き戦士⁉？ＤーＨＥＲＯドグマガイ⁉？」

〈Ｄ－ＨＥＲＯドグマガイ〉☆８　戦士族　闇属性
ＡＴＫ３４００

「１ターン目から攻撃力３４００のモンスターを呼び出しただと⁉？」
「おーお見事なのです」
青年君のプレイングに思わず声を漏らしてしまう。
次のターンの布石を整えながら１ターン目からあれだけ強力なＤ－ＨＥＲＯを呼び出すとは、なかなか出来るものじゃないのですよ。
「俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ」

青年君　ＬＰ８０００　手札１
ー－▲－－　ー
○□－○－
☆　ー
－－－－－
－－－－－　ー
不良君　ＬＰ８０００　手札５

「俺のターン、ドロー⁉？」
「スタンバイフェイズ、墓地にいるＤ－ＨＥＲＯドローガイの効果、それにチェーンしてＤ－ＨＥＲＯドグマガイの効果発動⁉？デスティニーパニッシュ⁉？このカードを自身の効果で特殊召喚に成功した場合、次の相手のスタンバイフェイズに相手のライフポイントを半分にする⁉？」
「何だと⁉？」
ドグマガイが不良君に手をかざすと不良君の足元と頭上に闇の結界が現れる。
ドグマガイが手を握ると、頭上の結界が勢いよく下降し、不良君を

押し潰した。

不良君　ＬＰ８０００→４０００

「ぐっ……やってくれる!!?」

「さらに墓地にいるＤ－ＨＥＲＯドローガイの効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードが墓地へ送られた場合、次のスタンバイフェイズに発動できる!!?このカードを墓地から特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。甦れ、Ｄ－ＨＥＲＯドローガイ!!?」

〈Ｄ－ＨＥＲＯドローガイ〉☆４　戦士族　闇属性
ＤＥＦ８００

フィールドに現れたのは闇に染まった白い帽子を被り、マフラーをたなびかせる英雄。

「Ｄ－ＨＥＲＯドローガイの効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードがＨＥＲＯモンスターの効果で特殊召喚した場合、お互いのプレイヤーは、それぞれデッキから１枚ドローする!!?」

「手札補充か……だが、手札が増えたのはこちらも同じだ!!?魔界発現世行きデスガイドを召喚!!?」

〈魔界発現世行きデスガイド〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

さっきの不良君と同じようにデスガイドが姿を現わす。

この子も悪魔族デッキなのですね。

「魔界発現世行きデスガイドの効果発動!!?このカードが召喚に成功した時に手札・デッキから悪魔族・レベル３モンスター１体を特殊召喚する!!?この効果で特殊召喚したモンスターは効果が無効化され、シンクロ素材にできない。俺はデッキから魔犬オクトロスを特殊召

喚!!?」

〈魔犬オクトロス〉☆3　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ８００

さらにデスガイドの隣に小さな魔犬が現れる。
「俺はカードを1枚セットし、手札の破械童子アルハの効果発動!!?自分フィールドのカード1枚を対象としてそのカードを破壊し、このカードを手札から特殊召喚する!!?ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は悪魔族モンスターしか特殊召喚できない。俺はセットカードを破壊し、来やがれ、破械童子アルハ!!?」

〈破械童子アルハ〉☆3　悪魔族　炎属性
ＤＥＦ１５００

セットカードを破壊して引き千切られた鎖を身につけた悪魔が現れる。
これで不良君のフィールドにはモンスターが3体。
だけど、それだけで終わりそうな感じでは無いのですよ。
「破壊された罠カード、破械雙極の効果発動!!?セットされたこのカードが効果で破壊された場合、デッキから破械モンスター1体を特殊召喚する!!?来やがれ、破械神の禍霊!!?」

〈破械神の禍霊〉☆8　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ３０００

現れたのは鎖に繋がれた獣の霊魂。
そして不良君は現れた禍霊を見て下卑た笑みを浮かべた。
「さあ、全部消しとばしてやるよ!!?テメェのモンスターを!!?テメェの聖騎士の追想　イゾルデを対象に破械神の禍霊の効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、相手フィールドの表側表示モンス

ター1体を対象として、その相手モンスターと自分フィールドのこのカードのみを素材として闇属性リンクモンスター1体をリンク召喚する!!?」
「っ、俺のモンスターを使ってリンク召喚!?」
「俺に逆らったことを後悔させてやるぜ!!?破戒せよ!!?悪霊渦巻くサーキット!!?」
　不良君が手をかざすと、正面に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件は破戒神モンスターを含むモンスター2体以上!!?俺は破械神の禍霊とテメェの聖騎士の追想　イゾルデを2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
　禍霊がイゾルデに取り憑き、サーキットの中へ引き摺り込む。
　そしてサーキットが輝くと現れたのは赤き獣の姿をした禍霊。
「リンク召喚!!?リンク3!!?破械神アルバ!!?」

〈破械神アルバ〉ＬＩＮＫ３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ２４００　↙?　→↘?

「さあ、まだまだ行くぞ!!?テメェのＤ－ＨＥＲＯ　ドグマガイを対象に破械神アルバの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてその相手モンスターと自分フィールドのこのカードのみを素材として同名カード以外の闇属性リンクモンスター1体をリンク召喚する!!?」
「Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイも呑み込むつもりか……だが、チェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?Ｄ－フュージョン!!?自分フィールドから、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚する!!?この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン、戦闘・効果では破壊されない!!?ただし、このカードの効果で融合召喚する場合、Ｄ－ＨＥＲＯモンスターしか融合素材にできない。俺はＤ－ＨＥＲＯ融合モンスター、Ｄ－ＨＥＲＯドミネイトガイとＤ－ＨＥＲＯモンスター、Ｄ－ＨＥＲＯドグマガイを融合!!?」

「っ、融合させることで対象から逃れたか‼?」
取り憑こうとしたアルバを躱し、青年君のドグマガイとドミネイトガイが、フィールドに現れた渦に飛び込んでいく。
「哀しき運命を覆す戦士よ‼?忌まわしき運命を滅する気高き戦士よ‼?今交わりて、理想の未来を摑み取れ‼?」
そして渦が爆けると、現れたのは黄金の鎧を身に纏った鋼鉄の英雄。
「融合召喚‼?輝く運命を掴み取る戦士‼?Ｄ－ＨＥＲＯ（デステニーヒーロー）ダスクユートピアガイ‼?」

〈Ｄ－ＨＥＲＯダスクユートピアガイ〉☆１０　戦士族　闇属性
ＤＥＦ３０００

「チッ、対象がいなくなったことで破械神アルバの効果は不発する」
「Ｄ－ＨＥＲＯダスクユートピアガイの効果発動‼?チェンジザフェイト‼?このカードが融合召喚に成功した場合、自分の手札・フィールドから、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をＥＸデッキから融合召喚する‼?」
「何⁉?更なる融合召喚だと⁉?」
「俺が墓地に送り融合するのはフィールドのＤ－ＨＥＲＯダイヤモンドガイと手札のＤ－ＨＥＲＯドリームガイ‼?」
ダスクユートピアガイが生み出した渦に、ダイヤモンドガイと道化師のような英雄が渦に飛び込んでいく。
「不屈なる運命の戦士よ‼?夢を守護する運命の戦士よ‼?今交わりて、暗黒に包まれし運命に抗え‼?」
そして渦が爆けると、現れたのは漆黒の闇を纏いし暗黒の英雄。
「融合召喚‼?終末の運命へと至りし戦士‼?Ｄ－ＨＥＲＯ（デステニーヒーロー）ディストピアガイ‼?」

〈Ｄ－ＨＥＲＯディストピアガイ〉☆８　戦士族　闇属性

ＤＥＦ２４００

「チッ、次から次へと!!?」

「ＤーＨＥＲＯディストピアガイの効果発動!!?ダークネスフェイト!!?同名カードは１ターンに１度、このカードが特殊召喚に成功した場合、自分の墓地のレベル４以下のＤーＨＥＲＯモンスター１体を対象としてそのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える!!?」

「何だと!?」

「俺が選ぶのはＤーＨＥＲＯドリルガイ!!?ＤーＨＥＲＯドリルガイの攻撃力、１６００分のダメージを受けて貰うぜ!!?」

ディストピアガイの手の平に暗黒の球体が現れ、そこにドリルガイの魂が吸収すれていく。

ディストピアガイが暗黒の球体を不良君に向けると、暗黒の球体から闇で出来たドリルが現れ、不良君の身体を貫いた。

不良君　ＬＰ４０００→２４００

「クッ、ウザってえ!!?ちまちまちまちまライフを削りやがって!!?それが英雄の名を持つ連中がすることかよ!?」

「うるせぇな。喧嘩を売ってきたうえに人のデッキを奪ってくるような奴に優しい英雄である必要がどこにある?大体、こちとらダークヒーロー系なんだよ。ただのヒーローと一緒にすんな」

そういって青年君はどこか冷めた表情を浮かべる。

言ってることはちょっとアレなのですが、青年君のプレイングはかなり理にかなってるのです。

ドグマガイで相手のライフを削り取り、相手の追撃を融合して躱しながら更なる追撃を与える。

これじゃあどちらのターンなのか分かったものじゃないのです。

だけど、不良君の表情を見る限り、ここで終わるということも無さそうなのです。

「っ、イラッとくるぜ!!?そんなに言うんならその英雄共を全部破壊

しつくしてやる!!?破戒せよ!!?悪霊渦巻くサーキット!!?」
不良君が手をかざすと、再び正面に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はリンクモンスターを含むモンスター2体以上!!?俺は魔犬オクトロスと破械神アルバを3体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
「リンク4のモンスターか」
アルバとオクトロスがサーキットの中に吸い込まれていく。
そしてサーキットが輝くと現れたのは漆黒の獣の姿をした禍霊。
「リンク召喚!!?全てを破戒し尽くす禍津神!!?リンク4!!?破械雙王神ライゴウ!!?」

〈破械雙王神ライゴウ〉LINK4　悪魔族　闇属性
ATK3000　↙?　→←↘?

「リンク素材として墓地に送られた魔犬オクトロスの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードがフィールドから墓地へ送られた場合にデッキから悪魔族・レベル8モンスター1体を手札に加える!!?俺はデッキから雙極の破械神を手札に加える!!?そしてこれで俺の墓地の闇属性モンスターは3枚!!?自分の墓地の闇属性モンスターが3体のみの場合、ダークアームドドラゴンを特殊召喚だ!!?」

〈ダークアームドドラゴン〉星7　ドラゴン族　闇属性
ATK2800

現れるのは漆黒の鎧で武装された黒龍。
「ダークアームドドラゴンの効果発動!!?自分の墓地から闇属性モンスター1体を除外し、フィールドのカード1枚を対象としてそのカードを破壊する!!俺は墓地の魔犬オクトロスを除外してDーHEROディストピアガイを破壊だ!!?」
「チェーンしてDーHEROダスクユートピアガイの効果発動!!?グ

ローリアスフェイト‼?1ターンに1度、フィールドのモンスター1体を対象としてこのターン、そのモンスターは戦闘・効果では破壊されず、そのモンスターの戦闘で発生するお互いの戦闘ダメージは0になる‼?この効果は相手ターンでも発動できる‼?」
「何だと⁉?」
「対象は勿論、DーHEROディストピアガイだ‼?」
「テメェ、どこまでもコケにしやがって‼?なら、それにチェーンして相手が魔法・罠・モンスターの効果を発動した時、手札から怨念の邪悪霊(ダークスピリット)墓地へ送り、墓地の破械神の禍霊を対象として効果発動‼?相手が魔法・罠・モンスターの効果を発動した時、同名カードは1ターンに1度、手札・フィールドのこのカードを墓地へ送り、自分の墓地の悪魔族・レベル8モンスター1体を特殊召喚する‼?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。蘇れ、破械神の禍霊‼?」

〈破械神の禍霊〉☆8　悪魔族　闇属性
DEF3000

怨念の邪悪霊に導かれ、再び禍霊が姿を現わす。
「蘇ってきたか。DーHEROダスクユートピアガイの効果で、DーHEROディストピアガイはこのターン、そのモンスターは戦闘・効果では破壊されず、そのモンスターの戦闘で発生するお互いの戦闘ダメージは0になる‼?」
ダスクユートピアガイから黄金のオーラが放たれ、ディストピアガイの身体を包み込む。
ダークアームドの闇の刃がディストピアガイに放たれるが、その闇の刃は黄金のオーラに弾かれ、ディストピアガイに届くことはなかった。
「構うもんか‼?それならテメェのターンでそいつを潰す方法を用意するだけだ‼?破戒せよ‼?悪霊渦巻くサーキット‼?」
「またリンク召喚か」

「召喚条件は破戒神モンスターを含むモンスター２体!!?俺は破械神の禍霊と魔界発現世行きデスガイドをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
　禍霊とデスガイドがサーキットの中へ吸い込まれていく。
　そしてサーキットが輝くと現れたのは青き獣の姿をした禍霊。
「リンク召喚!!?リンク２!!?破械神ラギア!!?」

〈破械神ラギア〉ＬＩＮＫ　２　悪魔族　闇属性
　ＡＴＫ１８００　→←

「墓地に存在する怨念の邪悪霊の効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードが墓地に存在し、悪魔族・レベル８モンスターが自分の墓地へ送られた場合、このカードを手札に加える!!?」
「手札に戻ったか」
「余裕ぶれるのも今の内だぜ!!?破械神ラギアも破械神アルバと似たような効果を持っている!!?同名カードは１ターンに１度、相手メインフェイズに、相手フィールドの特殊召喚された表側表示モンスター１体を対象としてその相手モンスターと自分フィールドのこのカードのみを素材として同名カード以外の闇属性リンクモンスター１体をリンク召喚できる!!?」
「っ、ということは俺のターンになれば俺のＤーＨＥＲＯを素材に新たな破械神アルバを出せるってわけか」
「俺はカードを１枚セットし、エンドフェイズに破械雙王神ライゴウの効果発動!!?破戒爆雷!!?自分・相手のエンドフェイズにフィールドのカード１枚を対象としてそのカードを破壊する!!?破壊するのはテメェのＤーＨＥＲＯドローガイだ!!?」
　ライゴウが咆哮を上げるとライゴウの身体から雷が放たれ、ドローガイが消滅する。
「っ、毎ターンの破壊効果か……自身の効果で蘇生したＤーＨＥＲＯドローガイは除外される」
「ハッ、破械雙王神ライゴウの効果はこれだけじゃねぇ!!?破械雙王

神ライゴウには、破械雙王神ライゴウ以外のカードの効果でフィールドのカードが破壊された場合、フィールドのカード1枚を対象としてそのカードを破壊する効果とこのカード以外のモンスターが戦闘で破壊された時、フィールドのカード1枚を対象としてそのカードを破壊する効果がある!!?」
「どこまでも俺のカードを破壊し尽くすつもりか」
「次のテメェのターンにテメェのカードを破壊し尽くし、俺のターンでトドメを刺してやる!!?精々最後のターンを楽しむんだな!!?」

青年君　ＬＰ８０００　手札１
ーーーーーーーー
ーーーー□ー
□　☆
○□☆ーー
ーー▲ーー　ー
不良君　ＬＰ２４００　手札３

「俺のターン……」
さて、青年君の手札はドローも含めて2枚……いや、運命のドローを入れれば3枚。
フィールドにはダスクユートピアガイとディストピアガイがいるですが、ラギアとライゴウの効果を考えると防御としては不十分という感じなのです。
ライフポイントでは有利ですけど、状況的には青年君の方が不利。
この状況で、青年君は一体どんな手を打つのです?
そんなことを考えて何の気なしに青年君を見たリーネはその光景に思わず目を見開いた。
「状況的には俺が不利……か。面白くなってきたな」
「あ……」
そこにあったのはずっと冷めた表情を浮かべていた青年君の、心底楽しそうな、子供っぽい笑顔。

その表情を見て、不良君は不愉快そうに表情を歪める。
「気味がわりぃ。自分が負けるかも知れねぇ状況で何を笑っていやがる？」
「ハッ、お前こそ何言ってるんだよ？負けるかも知れない？そんなもの関係ねぇよ」
そういうと青年君は不敵に笑いながら勢いよくカードをドローした。
「デュエルって言うのは、どんな状況でも楽しむものなんだよ。ドロー‼？墓地に存在するＤ－ＨＥＲＯディアボリックガイの効果を発動‼？墓地のこのカードを除外して、来てくれ、Ｄ－ＨＥＲＯディアボリックガイ‼？」

〈Ｄ－ＨＥＲＯディアボリックガイ〉☆６　戦士族　闇属性
ＤＥＦ８００

フィールドに現れたのは３体目のディアボリックガイ。
「ハッ、そんな雑魚が１体増えたところで何が変わるってんだ‼？そいつからどんなモンスターを呼び出そうと、俺の破械雙王神ライゴウと破械神ラギアがテメェのモンスターをーーー」
「好きに言ってろ。お前に選べる運命はもうない……お前はもう詰んでるよ。自分フィールドのモンスター３体、Ｄ－ＨＥＲＯダスクユートピアガイ、Ｄ－ＨＥＲＯディストピアガイ、Ｄ－ＨＥＲＯディアボリックガイをリリースし、手札からこのモンスターを特殊召喚する‼？」
「何っ⁉？」
３体の運命の英雄が粒子に変わり、空に集まっていく。
集まった粒子が弾けると、空から舞い降りたのは龍の鎧を見に纏った漆黒の戦士。
その戦士はフィールドに降り立つと、力強い咆哮を上げた。
「呪われた運命に抗う孤独の戦士‼？Ｄ－ＨＥＲＯＢｌｏｏｄ（デスティニーヒーロー ブルー ディー）‼？」

〈ＤｒＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｒｄ〉☆８　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１９００

「なっ⁉？そいつは……⁉？」
「ＤｒＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｒｄの永続効果、シールデステニー⁉？このカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手フィールドの表側表示モンスターの効果は無効化される⁉？」
　Ｂｌｏｏｒｄの鎧から闇が吹き出し、辺りの風景が夜に変わる。
　そのＢｌｏｏｒｄから吹き出した闇により、不良君のモンスターは力を失っていた。
「クッ、俺のモンスター達が……だが、結局はそいつを潰しちまえば関係ねぇ⁉？リバースカードオープン⁉？罠発動、破械唱導⁉？自分フィールドの破械モンスター１体とフィールドのカード１枚を対象としてそのカード２枚を破壊する⁉？俺が対象にするのは破械童子アルハとテメェのＤｒＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｒｄ⁉？これでーーー」
「残念だが、そうはいかないぜ？ライフポイントを半分払い、手札からカウンター罠発動⁉？レッドリブート⁉？」

遊騎　ＬＰ８０００→４０００

「相手が罠カードを発動した時に発動できる⁉？その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする⁉？その後相手はデッキから罠カード１枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンにセットできる。ただしこのカード発動後、ターン終了時まで罠カードは発動できないがな」
「何だと⁉？……クッ、俺はデッキから破械雙極をセットする⁉？だ、だが、ＤｒＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｒｄの攻撃力は１９００⁉？次のターンでーーー」
「言っただろ、お前はもう詰んでるってな。ＤｒＨＥＲＯダイヤモンドガイで墓地においた運命のドローの発動時の効果を発動する⁉？デッキからカード名が異なるカード３枚を選んで相手に見せ、その３

枚をシャッフルしてデッキの上に戻す。その後、自分はデッキから1枚ドローする‼?本来このカードを発動するためには自分のライフポイントが相手より少なく、フィールドの攻撃力が一番高いモンスターが相手フィールドに存在する場合でなければならず、このカードの発動後、ターン終了時まで自分は魔法・罠カードをセットできず、魔法・罠・モンスターの効果を1度しか発動できなくなるが、ＤＨＥＲＯダイヤモンドガイで発動しているため、この誓約は適応されない」

「馬鹿な⁉?ランダムとは言え、テメェの好きなカードが手札に加わるってのか⁉?」

「俺はデッキから融合、闇の量産工場、貪欲な壺をシャッフルデッキの上におき、カードを1枚ドローする‼?」

「馬鹿が‼?血迷いやがったか⁉?融合や闇の量産工場なんてもの今更ドローしてどうなるってんだ‼?」

　確かにこの状況でそんなカードをドローしてもどうしようも無さそうですけど、確かあの青年君の墓地には……

「それは全部ドローできない場合の話だろ?俺はカードを1枚伏せ、墓地に存在するＤＨＥＲＯディバインガイの効果発動‼?自分の手札が0枚の場合、自分の墓地からこのカードとＤＨＥＲＯモンスター1枚を除外して自分はデッキから2枚ドローする‼?ただし、この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できないがな」

「っ、ここで2枚ドローだと⁉?ってことは……⁉?」

「運命のドローで仕掛けたカードは全部加えれるってことだよ。俺は墓地に存在するＤＨＥＲＯディバインガイとＤＨＥＲＯドグマガイを除外して2枚ドローする‼?魔法カード、貪欲な壺‼?墓地に存在する聖騎士の追想　イゾルデ、ＤＨＥＲＯダスクユートピアガイをＥＸデッキに、ＤＨＥＲＯドリルガイ、ＤＨＥＲＯダイヤモンドガイ、キングスナイトをデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローする‼?まだ行けるみたいだな、魔法カード、ＨＥＲＯの遺産‼?ＨＥＲＯモンスターを融合素材とする融合モンスター2体を自分の墓地からＥＸデッキに戻し、自分はデッキから3枚ドローす

る‼?俺は墓地に存在するＤ－ＨＥＲＯディストピアガイ、Ｄ－ＨＥＲＯドミネイトガイをＥＸデッキに戻し、カードを３枚ドローする‼?まだだ‼?速攻魔法、大欲の壺‼?除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計３体を持ち主のデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから１枚ドローする‼?俺は除外されているＤ－ＨＥＲＯドグマガイと２体のＤ－ＨＥＲＯディアボリックガイをデッキに戻してカードを１枚ドローする‼?」

「何だと⁉?」

「息もつかさぬ連続ドロー……凄いのです」

青年君の流れるようなドローに魅せられ、リーネは思わずそんな言葉を零してしまい、青年君のデュエルから目を離せなくなってしまう。

直感的に感じる。

きっとこの青年君はそれを持っている。

天性とも言えるドローの才能と、それに見合うデュエルを楽しむ心。

誰かにワクワクする気持ちを与える、決闘者としての才能が。

「墓地に存在するＤ－ＨＥＲＯディアボリックガイの効果を再び発動‼?墓地のこのカードを除外して、来てくれ、Ｄ－ＨＥＲＯディアボリックガイ‼?」

〈Ｄ－ＨＥＲＯディアボリックガイ〉☆６　戦士族　闇属性

ＤＥＦ８００

「さらにＤ－ＨＥＲＯディアボリックガイをリリースしてＤ－ＨＥＲＯダッシュガイをアドバンス召喚‼?」

〈Ｄ－ＨＥＲＯダッシュガイ〉☆６　戦士族　闇属性

ＡＴＫ２１００

フィールドに現れたのはローラーでフィールドを走り抜ける運命

の英雄。
「墓地に存在するＤ－ＨＥＲＯディアボリックガイの効果を再度発動‼？墓地のこのカードを除外して、来てくれ、Ｄ－ＨＥＲＯディアボリックガイ‼？」

〈Ｄ－ＨＥＲＯディアボリックガイ〉☆６　戦士族　闇属性
ＤＥＦ８００

「そして、斬り開け‼？運命に抗うサーキット‼？」
青年君がそういって手を前に突き出すと、再び青年君の目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター２体‼？俺はＤ－ＨＥＲＯディアボリックガイとＤ－ＨＥＲＯダッシュガイの２体をリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？追想に生きる王女‼？リンク２‼？聖騎士の追想　イゾルデ‼？」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙？　↘？

「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動‼？リンクレカレクション‼？俺はデッキからキングスナイトを手札に加える‼？これで準備は整った‼？リバースカードオープン‼？魔法カード、闇の量産工場‼？自分の墓地の通常モンスター２体を対象としてそのモンスターを手札に加える‼？俺は墓地からクィーンズナイトとジャックスナイトを手札に加える‼？そして魔法カード、融合‼？自分の手札・フィールドから、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をＥＸデッキから融合召喚する‼？」
「っ、ここで融合ということは‼？」
「俺は手札の絵札の三銃士‼？クィーンズナイト、キングスナイト、ジャックスナイトを融合‼？」

フィールドに現れた渦に絵札の三銃士が飛び込んでいく。
そして渦が爆けるとその中から現れるのは黒い鎧を身に纏った漆黒の騎士。
「融合召喚!!?運命に打ち勝つ勇敢なる騎士達の主!!?アルカナナイトジョーカー!!?」

〈アルカナナイトジョーカー〉☆9　戦士族　光属性
ＡＴＫ３８００

「アルカナナイトジョーカーまで呼び出しやがった……」
「さあ、終わりにしようぜ。ＤＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄの効果発動!!?カースアブソーブ!!?1ターンに1度、相手フィールドのモンスター1体を対象として、その相手モンスターを装備カード扱いとして1枚だけこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの元々の攻撃力の半分だけアップする!!?対象は破械雙王神ライゴウ!!?」
Ｂｌｏｏｄがライゴウに手を伸ばすと、Ｂｌｏｏｄの背中に付いている龍の爪がライゴウに放たれ、その爪に貫かれたライゴウはガラスのように砕け、粒子に変わるとＢｌｏｏｄに吸い込まれていった。

ＤＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄ
ＡＴＫ１９００→３４００

「俺の破械雙王神ライゴウが!!?」
「バトル!!?アルカナナイトジョーカーで破械神ラギアを攻撃!!?速攻魔法、アクションマジック―フルターン!!?このターン、モンスター同士の戦闘で発生するお互いの戦闘ダメージは倍になる!!?」
「何だと!?!?っ、ダメージステップ開始時、手札から抹殺の邪悪霊（ダークスピリット）墓地へ送り、墓地の破械神の禍霊を対象として効果発動!!?相手モンスターが攻撃するダメージステップ開始時に、同名カードは1ターン

に１度、自分の手札・フィールドのこのカードを墓地へ送り、自分の墓地の悪魔族・レベル８モンスター１体を対象としてそのモンスターを効果を無効にして特殊召喚し、攻撃対象をそのモンスターに移し替えてダメージ計算を行う!!?蘇れ、破械神の禍霊!!?」

〈破械神の禍霊〉☆８　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ３０００

ラギアを庇うように抹殺の邪悪霊に導かれ、再び禍霊が姿を現わす。
「関係ない!!?行け、アルカナナイトジョーカー!!?ロイヤルストレートフラッシュ!!?」
アルカナナイトジョーカーが大剣を構えると、大剣に金色の光が集まっていく。
アルカナナイトジョーカーは勢いよくに禍霊突撃し、その大剣を振り下ろして禍霊を斬り伏せた。
「墓地に存在する抹殺の邪悪霊の効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードが墓地に存在し、悪魔族・レベル８モンスターが自分の墓地へ送られた場合、このカードを手札に加える!!?」
「だが、効果が使えなければ意味はない!!?これで終わりだ!!?ＤＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄで破械神ラギアを攻撃!!?」
Ｂｌｏｏｄは足に闇を纏い、地面を強く蹴って跳び上がり、空中で一回転してラギアに向けて跳び蹴りの体勢に移る。
「貫け、デソレイションフィアー!!?」
青年君の言葉にＢｌｏｏｄが力を込めるとＢｌｏｏｄが加速し、ラギアの身体ごと不良君を貫いた。
「んぎゃあああ!!?」

ーーーーーーー

不良君　ＬＰ２４００→０

「俺の勝ちだ。やっぱり、大したことなかったな」
「っ、クソっ、覚えてろよ‼?」
そんな捨て台詞を残して不良君達が逃げていく。
まさかそんな昔の漫画みたいな捨て台詞を吐いて逃げる人がいるとは……ケルンは奥が深いのです。
逃げていった不良君達を見送った青年君はデュエルディスクを仕舞うとこちらに振り向いて頭を下げた。
「その、ありがとう、ございました。おかげで、助かりました」
「お礼なんていいのです。人として当然のことをしたまでですからね」
「……いい人だな、アンタ」
「っ……」
そういって、青年君が柔らかく笑う。
冷めた表情ばかり浮かべていた青年君のその笑顔に、不覚にもドキッとしてしまったのです。
「とにかく、助かった。この借りは絶対に返す。何か困ってることとか、俺にできることはないか?」
「困ってること……それじゃあ、お願いがあるのですが……」
「何だ?何でも言ってくれ」
「リーネにこの場所を教えて欲しいのですよ」
そういって、リーネはメモしてあったパパの会社の住所と会社の写真を青年君に手渡す。
青年君はメモと写真を見て不思議そうな表情を浮かべ、リーネの後ろを指差した。
「これって、あそこに見える建物じゃないか?」
「……えっ?」
リーネがぎこちなく振り向きながら青年君が指差した方を見ると、少し遠くにはあったのですが、確かにパパの会社が見えたのです。
ま、まさか、リーネは目視ができる場所で迷子になってたのです‼?

は、恥ずかしいのです‼?
レディとして恥ずかし過ぎる失態なのです‼?
「あ、ありがとう、なのです……」
「あ、ああ、役に立てたようなら良かった。とはいえ、これでお礼ってのもな……」
青年君が困ったように頬を掻く。
うぅ〜リーネのせいなのに、何だか申し訳ないのですよ。
他にリーネが青年君にしてほしいこと……してほしいこと……
「……あ」
考えを巡らせ視線を彷徨わせていたリーネの目に青年君がつけているデュエルディスクが入る。
さっき見た青年君のデュエル。
見ているだけでリーネをワクワクさせてくれたあのデュエル。
あのデュエルを、もっともっとたくさん見たい。
だからーーー
「じゃあ、もう1つ、お願いをいいですか?」
気付けば、リーネはそんな言葉を口にしていた。
そんなリーネに青年君は首を縦に降る。
「ああ、俺にできることなら」
「大丈夫なのです。むしろ、君にしかできないことなのですよ」
「俺にしかできないこと?」
リーネの言葉に、青年君は首を傾げる。
この言葉を口にするのは、少しドキドキするのです。
だけど、リーネはこの気持ちを誤魔化すことだけはできそうにないのです。
「君に……リーネの友達になって欲しいのです‼?」
「……は?」
それが、リーネと青年君ーーー遊騎君の始まりの物語だったのです。

ーーーーーーーー

★

「ーーー思えば、出会ったあの時から、リーネは遊騎君のファンになっちゃったのですよ」

そういって、リーネさんは照れくさそうに笑う。

リーネさんの話を聞いて分かったことがある。

師匠がきっと赤の他人だった私を助けてくれたのは、このリーネさんとの出会いがあったからなのだ。

赤の他人だった師匠を助けたリーネさんの思いを嘘にしないために……同じ境遇だった私に、渡すためだったんだ。

「ああーリーネから話し始めたことですけど、ここでお話しはおしまいなのです。リーネも流石にちょっと恥ずかしいのですよ」

そういって、リーネさんは「さあて、何かいいカードはあるですかねー？おおっ‼？これなんてどうなのです？きっと遊花ちゃんのデッキにはぴったりなのですよ‼？」などと言ってわざとらしいリアクションを取りながら再びカードを探しはじめる。

リーネさんから師匠に渡された思い。

そして師匠から私に渡された思い。

この思いの名は、何なのだろう？

そんなことを、ふと思った。

第８１話　愛念の送り火

★　桜ｓｉｄｏ

「……はぁ～」

遊花とリーネさんが出て行った病室で、闇のカードによるダメージが抜けきっていないのか再び眠りについた遊騎を横に、病室の窓から外を見て深いため息を吐く。

そんな私の耳に相棒の冷静な声が聞こえる。

『あら、随分酷いため息ね。ため息を吐くと幸せが逃げていくって言うわよ？』

「……元から逃げてるわよ、闇のカードだなんてオカルトに巻き込まれてる時点で」

『ま、それもそうね』

「……少しは否定してくれてもいいんじゃない？」

『真実とは耳に痛いもの。誤魔化したって意味がないことぐらい、桜には分かっているでしょう？』

「……はぁ～そうだけどね」

カグヤの言葉に深いため息を吐く。

どうやら私の相棒はちょっとドライなところがあるようだ。

とはいえ、全く私のことを心配していないようではないみたいだけど。

『それで、何を悩んでいるのかしら？まあ、大体桜が考えそうなことぐらい想像はつくのだけれど』

「それなら聞く意味なくない？」

『本人の口から聞くことに意味があるのよ。思ってるだけでは伝わらないわ』

「……霊気の伝達とか言うので思ってることを伝えてるアンタがそれを言うと何だか微妙な気分だわ」

『あら、これは一本取られたわね』

そういってカグヤが楽しそうに笑う。

そんな相棒に苦笑しながらも、私はぽつぽつと話し始める。
「……今回の闇のカードに纏わる事件。私は遊花達の役に立てるのかって考えてたの。遊花や遊騎、闇は闇のカードを扱えて、操られてる人を解放するだけの力がある。だけど……私にはそんな特別な力なんてない」
『……そうね、今の桜はただの一般人。あの中であなたに1番近い一般人は遊騎だけど、彼だって闇のカードを扱えているわ。闇のカードを所持しているわけでもなく、彼を救ったガーディアンエアトス達のような強力な精霊の力を扱えているわけでもない桜は、正直言って今回の事件では足手纏いよ』
「っ……随分はっきりと言ってくれるわね。
聞いてはみるけど、アンタは闇のカードをどうにかできたりしないの？」
『……やーね、私は少し長く顕現しているだけの攻撃力１８５０ぽっちのただの精霊よ？闇のカードとまともにやり合えば汚染されるのがオチだわ』
「……何よ、今の間は？」
少しの間をおき、カグヤが手に持った扇子で口元を隠しながら笑う。
カグヤの不自然な態度に私がそのことを追求しようとすると、病室の扉が開く。
その音に反応して遊騎を庇うように立つが、病室の扉を開いて入ってきたのはプロリーグに向かった闇と連絡を取るために病室から出て行っていた炎さんだった。
炎さんの姿を確認し、警戒を解いた私を見て炎さんが申し訳さそうな表情を浮かべた。
「すまない、驚かせたようだな」
「もう、本当に炎さんは真面目過ぎよ。これぐらいのことで別に謝らなくてもいいわよ」
「そうか、すまない」
「だから謝らなくてもいいって。それで闇は無事にプロリーグの試合

に間に合ったの？」
「ああ。ついでに言えばもう試合を終わらせたらしい」
「……は？」
炎さんの言葉に私は目を丸くする。
闇が病院を出て行ってからまだ1時間も経ってないんだけど……
「機嫌の悪い冬城とデュエルすることになるとは、相手の決闘者も運が悪い。ウロボロスとウィルスで手札を全て捲いでそのまま捻り潰したようだ」
「……ご愁傷様ね」
闇の全力を受け止められる決闘者なんてそうそういるわけがない。
無表情のまま相手を叩き潰す闇の姿が思い浮かび私は思わず対戦した決闘者を思い合掌した。
「それで、随分暗い顔をしていたが、どうかしたのか？」
「いや、別に……ただ、私は今回の事件で何か役に立てることはあるのかなって思っただけよ」
「……宝月」
「炎さん？」
私の言葉に炎さんの目が鋭くなる。
そして少し躊躇うそぶりを見せながらもはっきりとその言葉を口にした。
「この件には関わるな」
「……えっ？」
「闇のカードが関わっている今回の件に宝月は関わるなと言ったんだ。闇のカードが関わっているこの事件で、宝月にできることはない」
真剣な表情でそう告げる炎さんに私は思わず拳を握りしめて口を開く。
「……それは私が闇のカードに対抗する力を持たないから、足手纏いだから言ってるの？」
「……そうだと言ったら？」

険しい表情で炎さんを睨みつける私を、炎さんは真っ直ぐに見つめ返す。
そんな炎さんの目を見て、私は苦い表情を浮かべて目を逸らした。
「……心無い言葉は口にしない方がいいわ。炎さんがそんなことを言う人じゃないってこと、私がしてることがただの八つ当たりだってこと、ちゃんと分かってるから」
「……そうか」
そう分かっているんだ。
私に遊花達を助けられる力がないことは。
下手に関わっても、闇のカードによって怪我をするのが関の山。
最悪の場合、私自身が闇のカードに操られて遊花達に危害を加えてしまうことも、頭では理解している。
そんな目に合わないように、炎さんが私を今回の事件から遠ざけようとしていることも。
だけどーーー
「……だけど、それでも私は遊花達の手伝いがしたい。怪我する可能性があることなんて、遊花達だって同じよ。だからこそ、私にだって何かできることがきっと‼?」
「……ああ、宝月のことだ、例え闇のカードに対抗できる力を持たずともそう言うであろうことは予想していた。宝月のような友達思い人間が決してこのような言葉では止まらないことも」
「っ、炎さん?」
そんな私の言葉に、炎さんは悲しそうに目を伏せる。
これは私の我儘だ。
なのに、何で炎さんがそんな悲しそうな表情を浮かべるの?
見たこともない炎さんの悲しげな表情に戸惑っていると、炎さんが私のいる窓際に近づいて、先程の私のように窓の外に視線を向ける。
そして炎さんは私に転生炎獣を渡した時のような寂しそうな笑みを浮かべ、口を開いた。
「少し、昔の話をしよう。これから話すのは闇のカードに関わり大切なものを失った……愚か者の物語だ」

ーーーーーーー

★　炎ｓｉｄｏ

「バトル。ヴェルズウロボロスで炎にダイレクトアタック。侵食のイモータルフリーズ」
「っ、俺の負けか」

炎　ＬＰ１０５０→０

ウロボロスの三つ首から放たれる闇のブレスに呑み込まれ、俺のライフがゼロになり、デュエルルームで映し出されていた立体映像が消えていく。
立体映像が消えるのと同時に冬城が深く息を吐いた。
「ん……問題なし……炎、相手してくれてありがとう……」
「いや、問題ない。俺としても冬城と直接手合わせができるのは有意義だからな」
無表情ながらも申し訳なさそうな雰囲気で頭を下げる冬城に俺は手を振って応える。
「それにしても、冬城なら大丈夫だとは思っていたが、まさかここまで強力な力を得て復活するとは思ってもみなかったな」
結束がいなくなり、早くも半年が経過した。
結束がいなくなり、さらには愛用していた氷結界が使えなくなり酷く落ち込んでいた冬城だったが、今ではそんな面影を感じさせない程に完全復活を果たした。
いや、むしろ氷結界を使っていた頃よりも進化していると言ってもいいだろう。
結束がいなくなってから一ヶ月の間は氷結界を扱えず、あわやこのまま消えてしまうのではと心配していたが、それから僅か数日でデッキを完全に一新し、今まで見たことがないヴェルズというカテゴリー

を引っさげて蘇るとは思っても見なかった。
デッキを一新してからの冬城の躍進は凄まじく勝率は９割を超えており、負けた数など両手で数えられる程だ。
氷結界を使っていた頃の冬城の勝率は『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の中では御影と最下位争いをしていたが、今では俺や『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』にいた頃の結束の勝率を超えているのだ。
デッキを変えたことも含め、冬城の中で何か変化があったのだろう。
そんなことを思っているとデュエルルームの扉が開く。
俺と冬城が視線を向けると、そこには身体を伸ばしながら疲れた表情を浮かべた御影がいた。
俺は苦笑を浮かべながら疲れ果てた御影に声をかける。
「御影か、その様子だと試合には勝ったようだな」
「勿論です。結束さんを馬鹿にするような奴に俺は負けませんよ。というか、結束さんを馬鹿にするんだったらできるだけの実力をつけてから挑んでこいっての」
「そこは同意。治虫にも勝てないようなら遊騎に勝てるわけなんてない」
「……疲れてるんで喧嘩売らないで貰います？」
「その程度で疲れるなんてまだまだ未熟な証……これだからもやしは」
「断崖絶壁ちんちくりん幼女のあなたよりは体力あるつもりですけどね」
「よし、もういっぺん言ってみろ。その喧嘩、買ってやる」
「その言葉、そっくりそのまま返してあげます」
デュエルディスクを起動して睨み合う２人に俺はため息を吐く。
「それぐらいにしておけ。それとも天羽に報告されたいか？」
「別に報告されても構わないけど社長の仕事を増やすのも可愛そうだから今日は勘弁してあげる」
「別に社長が怖いわけではありませんが無駄に体力を消費するつもりもないのでこの辺にしといてあげましょう」

天羽の名前が出た途端早口でそう言いながらデュエルディスクを停止させる冬城と御影に思わず苦笑を浮かべる。
この２人の仲の悪さは相変わらずだな。
前は結束がそれとなく仲介をしていたが、これはこれから大変そうだな。
「それにしても、疲れが見えるが大丈夫か、御影」
「大丈夫です、ちょっと連戦で疲れてるだけですから」
「結束が抜けてから１人当たりの試合の頻度が増したからな。結束はいつか帰ってくると信じてはいるが、現在のままだと厳しいことも確かだな」
「……炎はメンバーを増やすべきだと思ってるの？」
「俺とて冬城の気持ちは理解できる。だが、欠員があればチームとしての負担も増す。それにより『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』が消滅してしまったら本末転倒だ」
「……むぅ、分かっては、いる」
そう口にする冬城の表情は相変わらずの無表情ではあるがどこか不満そうに見える。
御影も口には出さないが苦い表情を浮かべている。
『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』は結束と天羽が中心となり、その知り合いで生み出されたプロチームだ。
おそらく冬城は結束の代わりの人員が加わることで『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』が形骸化することを恐れているのだろう。
だが、このまま人員を欠くことにより『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』が消滅し、結束が帰ってくる場所が無くしてしまってはいけない。
理不尽な目にあって追放され、姿を消してしまった結束に、帰ってくる場所があると言うことを証明し続けなければいけないのだから。
とはいえ、チームに加入できそうな決闘者に心当たりはないがな。
「……炎も疲れてる？」
「この程度なら問題ない」
「……そう」
俺が心配をかけないように笑みを浮かべると、冬城は変わらない無

表情で沈黙する。
……正直言って、疲れてはいるし、結束が抜けたショックから完全に立ち直れているかと問われれば否だ。
だが、だからといって弱音を吐いてなどいられない。
疲労やショックが見えているのは俺だけではない、天羽や冬城、御影とて同じだ。
『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の中では俺が１番年長だ。
こんな状態だからこそ、年上として毅然とした態度で皆を支えなければいけないのだから。
「ああ、そういえば不知火さんにお客さんがきてましたよ」
「俺に？」
「はい、そろそろくると思うんですが……」
御影がそういうと不意にデュエルルームの扉が開いた。
俺がそちらに視線を向けるとデュエルルームに白衣を着た茶髪でロングヘアーの女性が入ってきた。
「失礼します。ここに不知火君がいると伺ってきたのですが……あ、いた‼？」
「篝か」
「篝か……じゃないよ‼？相変わらず、ドライだなぁ不知火君は」
そういって女性は呆れたように笑う。
篝　聖夜火（かがり　さやか）。
俺が懇意にしている他社のカードデザイナーであり、幼少期から付き合いがある俺の幼馴染だ。
性格は天真爛漫で好奇心旺盛。
興味を持ったことには一直線で、初等部の頃は興味を引くものを見つけると俺の腕を引いてケルン中を走り回ったものだ。
カードのデザインをするのが大好きな奴で、様々な経緯を得て今は『Ｓｃｈｏｐｆｅｒ』という会社でカードデザイナーをやっている。
俺が使用している不知火も元はと言えば彼女がデザインして生み出されたカードであり、彼女が俺に使用して欲しいと売り込みに来たことが俺が今のデッキを使う経緯にもなっており、こうしてたまに訪

れては新しいカードの実験や売り込みをしていくのだ。
「それで、今日は何の用だ？」
「何の用だって、今日は新作のカードを見せにくるって言ってたじゃない」
「そうだったか？すまない、忘れていた」
「そうやって素直に謝れるのが不知火君の良いところだよね。まあ、不知火君も色々あって忙しいだろうし、仕方がないから許してあげる」
「そうか、ありがとう」
「どういたしまして」
　俺が非礼を詫びると篝が柔らかく笑う。
　そんな篝の様子を見て御影は気まずそうに目を逸らすと、どこかわざとらしく口を開いた。
「ああっと、俺、社長に報告しに行くの忘れてたんで、社長のところに行って試合の結果を報告してきます‼？」
「ん？そうなのか？」
「はい‼？ああ、そうだ。冬城……さんも社長に呼ばれてましたよ？」
「ん？社長から？報告に行くのは忘れてたんじゃーーー」
「ほら、早く行きますよ‼？それじゃあ篝さん、ごゆっくり‼？」
「むっ、自分で歩くから掴むな、治虫」
　そういってどこか慌てた様子で冬城の首根っこを掴んで部屋から出て行く御影。
　一体何だったんだ？
　首を傾げる俺に篝は苦笑を浮かべ、頭を掻いた。
「……気を遣わせちゃったな。でも、それならなおさら頑張らないと」
「篝？何か言ったか？」
「ううん、何でもない。それじゃあ、始めよっか」
「始めるって何を……」
「決まってるでしょ、デュエルだよ‼？」

そういって篝は腕につけていたデュエルディスクを起動させてこちらに構える。
「新作のカードを見せに来たんじゃなかったのか？」
「うん、見せにきたよ。だから存分に見せてあげようと思って、デュエルの中で。それに、不知火君とデュエルもしたかったしね‼？この前は負けちゃったけど、今度は絶対に負けないんだから‼？」
「……そうか。なら、存分に見せてもらうとしよう。篝の新作とやらを」
満面の笑みを浮かべる篝につられて俺も思わず笑みを浮かべ、デュエルディスクを構える。
そして２人同時にデュエル開始の宣言をした。
『決闘‼？』

炎　ＬＰ８０００
聖夜火　ＬＰ８０００

ーーーーーーーー

「先攻は私だね。まずは速攻魔法、転生炎獣の炎陣（サラマングレイト・サークル）‼？この同名カードは１ターンに１枚しか使えず、２つ効果から１つを選択して発動できる。デッキからサラマングレイトモンスター１体を手札に加えるか、自身と同名のモンスターを素材としてリンク召喚した自分フィールドのサラマングレイトリンクモンスター１体を対象としてこのターン、そのリンクモンスターは自身以外のモンスターの効果を受けなくする効果だよ。私はデッキからサラマングレイトモンスター１体を手札に加える効果でデッキから転生炎獣（サラマングレイト）ウルヴィーを手札に加えるね」
「厄介なサーチカードだ。篝のデザインしたカードは相変わらず強力だな」
「えへへーいいでしょー？」
転生炎獣は篝が子供の頃にデザインし、デュエルモンスターズの流

通に関与している会社の１つ、『Ｓｃｈｏｐｆｅｒ』で行われたカードデザイン募集イベントに応募した際に見事に当選して生み出されたカテゴリーだ。
『Ｓｃｈｏｐｆｅｒ』の上層部は転生炎獣のデザインを甚く気に入ったようで、篝の為にこのカテゴリーを生み出し、転生炎獣を対価とすることで篝を『Ｓｃｈｏｐｆｅｒ』にスカウトした。
　そのため、転生炎獣は篝専用のカテゴリーであり、世界中で篝しか所持していない。
　そして転生炎獣を生み出したことで、篝は幼くして『Ｓｃｈｏｐｆｅｒ』にスカウトされ、『Ｓｃｈｏｐｆｅｒ』でもトップクラスのカードデザイナーとなった。
　それが俺の幼馴染、天才カードデザイナー、篝　聖夜火だ。
「さらに手札の転生炎獣ウルヴィーを捨てて、魔法カード、サイバネットマイニング‼？同名カードは１ターンに１度、手札を１枚墓地へ送ってデッキからレベル４以下のサイバース族モンスター１体を手札に加えるよ‼？私はデッキから転生炎獣（サラマングレイト）ガゼルを手札に加える‼？そして今手札に加えた転生炎獣ガゼルの効果発動‼？１ターンに１度転生炎獣ガゼル以外のサラマングレイトモンスターが自分の墓地に送られた場合、このカードを手札から特殊召喚する‼？」

〈転生炎獣ガゼル〉☆３　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１０００

　篝のフィールドに現れるのは炎を纏ったガゼルのモンスター。
「転生炎獣ガゼルのもう１つの効果発動‼？１ターンに１度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから転生炎獣ガゼル以外のサラマングレイトカード１枚を墓地に送る。私はデッキから転生炎獣（サラマングレイト）Ｊジャガーを墓地に送るよ‼？早速行くね、燃え滾れ‼？聖火が輝くサーキット‼？」
「リンク召喚か」
　篝が目の前に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。

「召喚条件はレベル４以下のサイバース族モンスター１体!!?私は転生炎獣ガゼルをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク１!!?転生炎獣(サラマングレイト)ペイルリンクス!!?」

〈転生炎獣ペイルリンクス〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ５００　←

ガゼルがサーキットに吸い込まれると、代わりにサーキットから現れたのは真っ赤な装甲に身を包んだ山猫のモンスター。
「転生炎獣ペイルリンクスの効果発動!!?１ターンに１度、このカードがリンク召喚に成功した場合に、デッキから転生炎獣(サラマングレイト)の聖域(サンクチュアリ)１枚を手札に加える!!?私はデッキからフィールド魔法、転生炎獣の聖域を手札に加えるよ!!?そしてそのままフィールド魔法、転生炎獣の聖域を発動!!?」
フィールド魔法を発動すると、辺りの風景がマグマに囲まれた火山のフィールドに変わる。
「どんどん行くよ!!?私は転生炎獣(サラマングレイト)フォクシーを召喚!!?」

〈転生炎獣フォクシー〉☆３　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１０００

フィールドに現れたのは尻尾から炎を灯している狐のモンスター。
「転生炎獣フォクシーの効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードが召喚に成功した時、自分のデッキの上からカードを３枚めくり、その中からサラマングレイトカード１枚を選んで手札に加え、残りのカードはデッキに戻すわ!!?私はデッキの上から３枚めくり、転生炎獣(サラマングレイト)ミーアを手札に加えるよ!!?そして今手札に加えた転生炎獣ミーアの効果発動!!?このカードが通常のドロー以外の方法で手札に加わった場合、このカードを相手に見せ、手札から特殊召喚!!?」

〈転生炎獣ミーア〉☆２　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ６００

フィールドに身体から炎を噴き出しているミーアキャットが現れる。
「そして、燃え滾れ‼？聖火が輝くサーキット‼？」
「２回目のリンク召喚か」
「召喚条件は炎属性の効果モンスター２体‼？私は転生炎獣ミーアと転生炎獣ペイルリンクスをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？リンク２‼？転生炎獣（サラマングレイト）サンライトウルフ‼？」

〈転生炎獣サンライトウルフ〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１８００　←→

ミーアとペイルリンクスがサーキットに吸い込まれ、代わりに炎を纏った機械的な狼が現れる。
「墓地に存在する転生炎獣Ｊジャガーの効果発動‼？同名カードは１ターンに１度、このカードが墓地に存在し、自分フィールドにサラマングレイトリンクモンスターが存在する場合、転生炎獣Ｊジャガー以外の自分の墓地のサラマングレイトモンスター１体を対象としてそのモンスターをデッキに戻し、墓地のこのカードを自分のサラマングレイトリンクモンスターのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚するよ‼私は墓地の転生炎獣ミーアをデッキに戻して転生炎獣Ｊジャガーを特殊召喚‼？」

〈転生炎獣Ｊジャガー〉☆４　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１２００

サンライトウルフの近くに身体に着いた棘から炎を噴き出させているジャガーが現れる。

そしてＪジャガーが現れたことでサンライトウルフは歓喜の咆哮をあげる。
「転生炎獣サンライトウルフの効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードのリンク先にモンスターが召喚・特殊召喚された場合、自分の墓地から炎属性モンスター１体を選んで手札に加える!!?ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できないけど。私は墓地の転生炎獣ウルヴィーを手札に加えるよ!!?さらに墓地から手札に加わった転生炎獣ウルヴィーの効果発動!!?このカードが効果で自分の墓地から手札に加わった場合、このカードを相手に見せ、自分の墓地の炎属性モンスター１体を対象としてそのモンスターを手札に加える!!?私は墓地から転生炎獣ガゼルを手札に加えるよ!!?そしてお待ちかね、フィールド魔法、転生炎獣の聖域の効果発動!!?１ターンに１度、このカードがフィールドゾーンに存在する限り、自分がサラマングレイトリンクモンスターをリンク召喚する場合、自分フィールドの同名のサラマングレイトリンクモンスター１体のみを素材としてリンク召喚できる!!?」
「来たな、転生炎獣特有の転生リンク召喚!!?」
「燃え滾れ!!?聖火が輝くサーキット!!?私は転生炎獣サンライトウルフをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
サンライトウルフの頭上にサーキットが、足元に炎で出来た魔法陣が現れ、交差するようにサンライトウルフの身体を通過する。
サーキットと魔法陣が通過すると、サンライトウルフの纏っていた炎が一際激しく燃え上がる。
「転生リンク召喚!!?リンク２!!?転生炎獣サンライトウルフ!!?」
〈転生炎獣サンライトウルフ〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１８００　←→
「転生炎獣サンライトウルフの効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードが転生炎獣サンライトウルフを素材としてリンク召

喚されている場合、自分の墓地のサラマングレイト魔法・罠カード1枚を選んで手札に加える!!?私は墓地に存在する転生炎獣の炎陣を手札に加えるよ!!?」
「またサーチカードが手札に加わったか。相変わらず、全然手札が減らないな」
「まだ終わりじゃないよ!!?これがこのターン最後のリンク召喚!!?燃え滾れ!!?聖火が輝くサーキット!!?」
　籌の前にこのターン4度目のサーキットが現れる。
「召喚条件は炎属性の効果モンスター2体!!?私は転生炎獣フォクシー、転生炎獣Jジャガー、転生炎獣サンライトウルフを2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
　サーキットの中にフォクシーにJジャガー、2体に分身したサンライトウルフが吸い込まれると、フィールドにあった火山が噴火し、マグマが溢れ始める。
　そして火山の噴火に合わせるように、サーキットの中から飛び立ったのは転生し続ける不死鳥。
「無限の炎より生まれし不死鳥!!?リンク召喚!!?リンク4!!?転生炎獣(サラマングレイト)パイロフェニックス!!?」

〈転生炎獣パイロフェニックス〉ＬＩＮＫ４　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２８００　↑←→↓

「いきなり籌の切り札の登場か」
「私はカードを3枚伏せて、ターンエンド!!?不知火君も本気でこないとすぐに終わっちゃうよ?」

炎　ＬＰ８０００　手札５
ー　　ー
ー　　ー
ー　　ー
ー　☆　ー
ー　　ー
ー　　ー

ー▲▲▲ー　　▽
聖夜火　ＬＰ８０００　手札２

「言ってくれるな。俺のターン、ドロー!!?手札から不知火の師範を捨て、速攻魔法、逢華妖麗譚―不知火語を発動!!?同名カードは１ターンに１度しか発動できず、相手フィールドにモンスターが存在する場合、手札からアンデット族モンスター１体を捨てて捨てたモンスターとカード名が異なる不知火モンスター１体を自分のデッキ・墓地から選んで特殊召喚する!!?ただし、このカードの発動後、ターン終了時まで自分はアンデット族モンスターしか特殊召喚できない。俺はデッキから不知火の隠者を特殊召喚!!?」

〈不知火の隠者〉☆４　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

現れたのは袈裟を着た坊主のモンスター。
「不知火の隠者の効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、自分フィールドのアンデット族モンスター１体をリリースしてデッキから守備力０のアンデット族チューナー１体を特殊召喚する!!?俺は不知火の隠者をリリースしてデッキからチューナーモンスター、妖刀―不知火を特殊召喚する!!?」

〈妖刀―不知火〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ８００

隠者の姿が消えると、その代わりに一振りの刀が現れ、その刀の近くに薄っすらと武士の霊の姿が浮かびあがる。
「さらに俺は不知火の宮司を召喚!!?」

〈不知火の宮司〉☆４　アンデッド族　炎属性
ＡＴＫ１５００

次に現れたのは祈祷をしている宮司のモンスター。
「不知火の宮司の効果発動!!?このカードが召喚に成功した時、自分の手札・墓地から不知火の宮司以外の不知火モンスター1体を選んで特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは、フィールドから離れた場合に除外される。墓地より甦れ、不知火の隠者!!?」

〈不知火の隠者〉☆4　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

宮司が祈祷を捧げると、再びフィールドに隠者が姿を現わす。
これで俺のフィールドにはモンスターが3体。
しかし、籌には3枚のセットカードがある。
1枚は間違いなく転生炎獣の炎陣。
そしてパイロフェニックスを出して来たということは残る2枚の内、1枚は予想がつく。
ここは少々勿体無いが……
「俺は、レベル4、不知火の宮司と、レベル　4、不知火の隠者に、レベル2、チューナーモンスター、妖刀―不知火をチューニング!!?」
「いきなりレベル10のシンクロ召喚……!!?」
妖刀が浮かびあがり、光を纏いながら宮司と隠者に向かって飛んでいく。
妖刀が宮司と隠者の間の地面に突き刺さると、宮司と隠者を取り囲むように地面から炎が舞い上がり、宮司と隠者の姿を隠す。
しばらくして、炎が斬り払われるように霧散すると、炎の身体を持つ馬に乗った武士のモンスターが現れた。
「剣に宿し無念の思いが、神へと至る不知火となる!!?シンクロ召喚!!?憑依神化!!?炎神ー不知火!!?」

〈炎神―不知火〉☆10　アンデッド族　炎属性

ＡＴＫ３５００

「不知火君の切り札、炎神―不知火……だけど、その効果は特殊召喚に成功した場合、自分の墓地か除外されている自分のカードの中から、アンデット族シンクロモンスターを任意の数だけＥＸデッキに戻して戻した数だけ相手フィールドのカードを選んで破壊する効果。今の状況じゃ使えないよ？」

「確かにそちらの効果は使えない。だが、炎神ー不知火には自分フィールドのアンデット族モンスターが戦闘・効果で破壊される場合、代わりに自分の墓地の不知火モンスター１体を除外できる永続効果、燎原之火がある。こちらの効果が今の篝には効くハズだ」

「うっ……読まれてるか」

「当たり前だ。いつからの付き合いだと思っている。バトル‼？炎神ー不知火で転生炎獣パイロフェニックスを攻撃‼？不知火流　煉獄ノ祓‼？」

炎神が刀を抜き、空に掲げると、その刀に炎が集まっていき、５メートル程の巨大な刀になる。

炎神は集まって巨大な刀になった炎を圧縮していき、通常のサイズの刀に変える。

刀が完成すると炎神は馬を走らせてパイロフェニックスに向けて駆け、すれ違い様にその身体を３度斬りつけた。

聖夜火　ＬＰ８０００→７３００

「くっ……先制攻撃は貰っちゃったか。だけど墓地に存在する転生炎獣ペイルリンクスの効果、自分フィールドのサラマングレイトカードが戦闘・効果で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外できる‼？この効果で転生炎獣パイロフェニックスを破壊から守るよ‼？」

炎神に斬られたパイロフェニックスが膝をつく。

しかし、その身体にはペイルリンクスの鎧が纏われており致命傷を

免れていた。
「そう簡単に仕留めることができるとは思っていないさ。メインフェイズ2、俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ」
「例え読まれていたとしても、私は私の全力でぶつかるだけだよ‼?エンドフェイズに速攻魔法発動‼?転生炎獣（サラマングレイト）の超転生（トランセンド）‼?」
「やはりそのカードがあったか」
「同名カードは1ターンに1度しか発動できず、自分フィールドのサラマングレイトリンクモンスター1体を対象としてその自分のモンスター1体のみを素材として同名のサラマングレイトリンクモンスター1体をリンク召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚する‼?燃え滾れ‼?聖火が輝くサーキット‼?私は転生炎獣パイロフェニックスをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?」
　パイロフェニックスの頭上にサーキットが、足元に炎で出来た魔法陣が現れ、交差するようにパイロフェニックスの身体を通過する。
　サーキットと魔法陣が通過すると、パイロフェニックスの纏っていた炎が一際激しく燃え上がった。
「再臨せよ‼?無限の炎より生まれし不死鳥‼?転生リンク召喚‼?リンク４‼?転生炎獣パイロフェニックス‼?」

〈転生炎獣パイロフェニックス〉ＬＩＮＫ４　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２８００　↑←→↓

「さあ、行くよ‼?転生炎獣パイロフェニックスの効果発動‼?エンドレスフレア‼?このカードが同名カードを素材としてリンク召喚に成功した場合、相手フィールドのカードを全て破壊する‼?」
　パイロフェニックスが身体を燃え上がらせながら突撃し、俺のフィールドのカードを焼き尽くす。
　だが、こちらもただ焼かれるわけではない。
「炎神ー不知火の永続効果、燎原之火‼?俺は墓地に存在する不知火の宮司を除外することで破壊を免れる。そしてフィールド魔法、転生炎獣の聖域を対象に除外された不知火の宮司の効果、それにチェーン

して破壊された一族の結集の効果発動!!?」
「破壊された時に発動する伏せカードだったんだ……」
「まずは破壊された罠カード、一族の結集の効果発動!!?魔法&罠ゾーンのこのカードが相手の効果で破壊された場合、デッキから同名カード1枚を選んで自分の魔法&罠ゾーンにセットする!!?そして不知火の宮司の効果でこのカードが除外された場合、相手フィールドの表側表示のカード1枚を対象としてそのカードを破壊する!!?転生炎獣の聖域は破壊させて貰うぞ!!?」
宮司の霊魂が火山に突撃し、噴火を引き起こして消滅させる。
転生炎獣の炎陣が伏せてある今、パイロフェニックスを狙っても破壊は叶わず、次のターンに再び転生リンク召喚をされてしまえば俺のフィールドは再び吹き飛ばされてしまう。
ならば、この選択が今は最適解のハズだ。
「改めてターンエンドだ」

炎　LP8000　手札1
ー▲ー　ー
ー○ー
ー　☆
ー
ー▲ー　ー
聖夜火　LP7300　手札2

「私の動きを読んでくるなんて流石不知火君だね」
「当たり前だ。何年の付き合いだと思っている」
「……その割には、大事なことには気づいてくれないんだけどなぁ」
俺の言葉に篝は不満そうに頬を膨らませながら何かを呟く。
しかし、すぐに首を振って真っ直ぐな目で俺を見た。
「でも、例え動きを読まれていようと、今日は絶対に不知火君に勝って見せるんだから!!?」
「……意気込みは凄いんだが、どうしてそこまで今日は勝利に拘る

んだ？」
普段の篝からは考えられない程鬼気迫った表情に俺は困惑する。
そんな俺に、篝は照れ臭そうに笑いながらその胸の内を口にする。
「だって……不知火君に勝てば、私も『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入れるんでしょ？」
「なっ⁉？篝、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入るつもりなのか⁉？」
篝が口にした言葉に俺は目を見開く。
結束がプロリーグから追放され、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』は３人になった。
人数が少なくなったことで、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に多くの決闘者が売り込みにきていたが、売り込みに来る奴らはどいつもプロリーグを追放された結束を馬鹿にするような奴らばかりだった。
そのことに腹を立てた天羽は採用するにあたり１つのルールを作った。
それは採用試験にて『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバーの誰か１人にでも勝利すること。
俺達と対等……いや、それ以上の力を秘めていた結束を馬鹿にするのであれば、当然結束のように自分達に勝つことができるということだ。
それが証明できるのであれば、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に採用するというのが天羽の打ち出した条件だった。
今までにその条件を突破できたものはいない。
何故なら、このチームは結束の思いによって生まれたチームなのだ。
そのチームに、結束を蔑むような人間が入ることを、俺達は赦さない……赦せる訳がない。
「篝……何故お前が『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入りたがる？プロ決闘者の資格を持っていることは知っているが、君はカードデザイナーだろ？しかも、君は『Ｓｃｈｏｐｆｅｒ』の社員だ。『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入るなら今の仕事を辞めることになるんだぞ？」
「うっ……」

俺の指摘に篝が目を逸らし、右手の人差し指に自分の髪をくるくると巻きつける。
これは篝が照れている時の癖だ。
だが、今の状況で何を照れることがある？
首を傾げる俺に、篝は顔を真っ赤にして自棄になったかのような大声で叫んだ。
「っ～～～ああ、もう‼？不知火君の馬鹿‼？鈍感‼？私が『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入りたいのは、もっと不知火君の傍にいたいからだよ‼？」
「は、はぁ？」
「だから……だから、不知火君が好きだって、言ってるの～～～‼？」
「……はあっ⁉？」
篝の告白に、俺は目を見開いてしまう。
篝が……俺のことを好いている？
「いや、その、だが、何故それで篝が『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入るということになる？」
「だって……だって、最近の不知火君……見てられないんだもん」
そういって篝は悲しそうに目を伏せる。
「私はそんなに話したことはなかったけど、結束プロがいなくなってから、元気もないし、周りに心配かけないように、空元気で頑張って……そんなの、見てられないよ……」
「っ、篝……」
「分かってはいるよ？私は、結束プロの代わりになんかなれない……だけど、それでも私は不知火君をもっと近くで支えてあげたい……」
「……」
知らなかった。
いつもの明るい笑顔の裏で、篝がそんなことを考えていたなんて、知りもしなかった。
「私はきっと、誰よりも不知火君のことを知ってる……幼馴染だか

ら……不知火君のこと、好き、だから……だから、今までの私から変わってしまったとしても、今日だけは、不知火君にだって勝ちは譲らない!!?」

そういうと篝は凛とした真っ直ぐとした目でこちらを見る。

「不知火君を守るためにも、私はそう簡単に負けるわけにはいかないの。不知火君を1番近くで支えれるのは、私だけなんだから!!?」

「……全く、馬鹿だな、篝は」

「な、何をぉ〜!?」

あまりにも真っ直ぐな篝に、俺は思わず笑みを漏らしてしまう。

「『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入るために必要な条件は、採用試験にて『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバーの誰か1人にでも勝利することだ。ただのフリーデュエルであるこのデュエルで篝が勝っても、『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』には入れん」

「……え、ええっ!?? 嘘!?」

「フッ、全く……君という奴はそそっかしいところも相変わらずだな」

俺の言葉に篝があたふたと慌てはじめる。

その様子があまりにも面白く、思わず含み笑いを漏らしてしまう。

「そんな〜こんな恥ずかしい告白までしたのに……」

「だが……ここには幸い正規の『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバーである俺がいる。天羽に口添えをすれば、採用試験として扱うこともできるだろう。まぁ、裏口入学よりはマシ程度の不正手段ではあるがな」

「……えっ？」

恥ずかしそうに項垂れていた篝がきょとんとした表情で顔を上げる。

そんな篝に、俺は柔らかい笑みで応えた。

「だから、勝てるものなら勝ってみろ」

「っ……言ったな〜？よし、すぐにでも勝っちゃうんだから!!?これでも私は天才って呼ばれてるんだからね!!?私の勝利への道筋は、もう出来てるんだから!!?」

そんな俺の言葉に篝は満面の笑みを浮かべて応えた。
「私のターン、ドロー!!?・まずはリバースカードオープン!!?・速攻魔法、転生炎獣の炎陣!!?・私はデッキからサラマングレイトモンスター1体を手札に加える効果でデッキから転生炎獣(サラマングレイト)Bバイソンを手札に加えるよ!!?・そして私は転生炎獣ウルヴィーを召喚!!?・」

〈転生炎獣ウルヴィー〉☆4　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１７００

フィールドに現れたのは鋭い爪を持ち身体かや炎を噴き出させているクズリが現れる。
「手札の転生炎獣Bバイソンの効果発動!!?・自分の墓地のサラマングレイトモンスターが3体以上いる場合、このカードを手札から守備表示で特殊召喚する!!?・」

〈転生炎獣Bバイソン〉☆8　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１０００

さらにウルヴィーと並び立つように炎を纏ったバイソンが現れる。
「転生炎獣Bバイソンの効果発動!!?・相手フィールドの表側表示のカードの数まで自分の墓地の炎属性リンクモンスターを対象としてEXデッキに戻し、その後戻したカードの数まで相手フィールドの表側表示のカードを選んでターン終了時までその効果を無効にできる!!?・私は墓地の転生炎獣サンライトウルフをEXデッキに戻して炎神ー不知火の効果を無効にするよ!!?・」
バイソンの両横に、炎で出来たバイソンが現れ、　炎神が乗っている馬に突撃して吹き飛ばし、炎神を落馬させる。
「っ、破壊耐性が消されたか……」
「墓地に存在する転生炎獣Jジャガーの効果発動!!?・私は墓地の転生炎獣フォクシーをデッキに戻して転生炎獣Jジャガーを特殊召喚!!?・」

〈転生炎獣Ｊジャガー〉☆４　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１２００

「行くよ、私のとっておき‼？私はレベル４の転生炎獣ウルヴィーと転生炎獣Ｊジャガーでオーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」
「エクシーズ召喚だと⁉？」
ウルヴィーとＪジャガーが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りるのは蒼き装甲に身を包んだ機械の龍。
「閉ざされた世界に絆を伝え、魂の光を守護する聖盾‼？ファイアウォール　Ｘ（エクシード）　ドラゴン‼？」

〈ファイアウォールＸドラゴン〉★４　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ２５００

「ファイアウォールＸドラゴン⁉？何だそのモンスターは⁉？」
「えへへーカッコいいでしょ？突然頭に浮かんだデザインを形にし、連日徹夜して生み出した私の新作だよ‼？」
そういって篝が自信満々と言った風に胸を張る。
篝の生み出した新たなモンスター……一体どんな力を……
「さあ、私の新作の力、受けてみて‼？ファイアウォールＸドラゴンの効果発動‼？ストロングボンズ‼？このカードのオーバーレイユニットを２つ取り除き、自分の墓地のリンク４のサイバース族リンクモンスター１体をこのカードとリンク状態となるように自分フィールドに特殊召喚する‼？ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はモンスターを特殊召喚できず、直接攻撃できない。蘇って、転生炎獣パイロフェニックス‼？」
ファイアウォールＸがオーバーレイユニットを吸収して咆哮を上

げると、ファイアウォールXの左隣に次元の裂け目が現れる。
　そして次元の裂け目からもう1体のパイロフェニックスが姿を現した。

〈転生炎獣パイロフェニックス〉ＬＩＮＫ４　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２８００　↑←→↓

「転生炎獣パイロフェニックスを蘇生させたか……だが、それだけでは炎神ー不知火は倒せないぞ」
「ファイアウォールXドラゴンの力はこれだけじゃないよ!!?ファイアウォールXドラゴンの永続効果、シャイニングネクサス!!?エクシーズ召喚したこのカードの攻撃力は、このカードとリンク状態になっているリンクモンスターのリンクマーカーの数×５００ポイントアップする!!?」
「っ!?!?リンクしているリンクマーカーの数で攻撃力を上げるだと!?!?」
「現在ファイアウォールXドラゴンは2体の転生炎獣パイロフェニックスとリンクしてる!!?転生炎獣パイロフェニックスのリンクマーカーは４つ!!?だから合計８つのリンクマーカーと繋がることでファイアウォールXドラゴンの攻撃力は４０００ポイントアップする!!?」

ファイアウォールXドラゴン
ＡＴＫ２５００→６５００

「攻撃力……６５００!?!?」
「バトル!!?ファイアウォールXドラゴンで炎神ー不知火を攻撃!!?」
「っ、迎え撃て!!?炎神ー不知火!!?不知火流　煉獄ノ祓!!?」
　炎神が再び刀に炎を集め、５メートル程の巨大な刀に変えると、今度はそのまま巨大な刀をファイアウォールXに振り下ろす。

振り下ろされる巨大な刀に、ファイアウォールXは口から蒼い炎のブレスを放ち、巨大な刀を弾き飛ばす。
「そしてこれが勝利の最後のピース!!?リバースカードオープン!!?罠発動、スノーマンエフェクト!!?自分フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてそのモンスターの攻撃力はターン終了時まで、そのモンスター以外の自分フィールドのモンスターの元々の攻撃力の合計分アップする!!?」
「なっ!?ここで更なる攻撃力増加カードだと!?」
「ただし、このカードを発動するターン、対象のモンスターは直接攻撃できない。私はファイアウォールXドラゴンを対象に私のモンスター達の攻撃力を集束させる!!?」
炎神の刀を弾き返した、ファイアウォールXは背中の翼から蒼い衝撃波を噴射させて高速移動し、炎神の懐に入り込む。
そして炎神の懐に入り込んだファイアウォールXに、パイロフェニックス達が炎を放ち、その力を分け与える。
「2体の転生炎獣パイロフェニックスと転生炎獣Bバイソンの攻撃力は全て2800!!?よって、ファイアウォールXドラゴンの攻撃力は……!!?」

ファイアウォールXドラゴン
ATK6500→14900

「攻撃力……14900だと!?」
「私の思い、受け取って!!?堅牢のネクサスシュトローム!!?」
パイロフェニックス達の力を受け取ったファイアウォールXは炎神の懐で再び蒼い炎のブレスを放ち、炎神を跡形もなく吹き飛ばした。
「……見事だ」

炎　LP8000→0

ーーーーーーー

「私の勝ちだよ‼？不知火君‼？」

「ああ、俺の負けだ。まさかこうもあっさり負けてしまうとはな」

まさかたった2ターンで負けてしまうとは思わなかった。

それだけ籌の思いが強かったということだろう。

その事実は正直言って気恥ずかしいが、嬉しくあることもまた事実だ。

「これで私も『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入れるかな？」

「口添えはしてみよう。とはいえ、公式記録に残っているわけではないからどこまで聞いて貰えるかは分からないが……」

「それなら問題ないのですよ‼？今のデュエル、ばっちり記録させてもらったのです‼？」

「っ⁉？天羽⁉？」

「天羽社長⁉？」

「ああ‼？社長、まだ入っちゃ悪いですって‼？」

「社長は空気が読めないから」

「アンタがそれを言うのか‼？」

「失礼な。私は読めないんじゃなくて読まないだけ」

「なお悪いわ‼？」

突然デュエルルームの扉が開いたかと思うと、満面の笑みを浮かべた天羽が入ってきた。

その後ろでは慌てた様子の御影といつもの無表情でこちらを見ている冬城がいた。

……どうやら今のデュエルは全て見られていたようだな。

「御影、お前だな、下手人は」

「うっ……いやーあはは」

「誤魔化してもダメだ。後で話があるからな」

「うぐっ……はい」

俺の言葉に御影が項垂れる。

下世話な真似をするからだ。

「聖夜火さんが『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入ってくれるなら歓迎するのですよ‼？炎君の知り合いですし、遊騎君を馬鹿にもしないですし」
「えっと、いいん、ですか？」
「はいなのです‼？とはいえ、聖夜火さんも会社を辞めてくるのであればそれなりの手続きも必要ですし、そんなすぐにってわけにはいかないのですが……」
「いえ‼？そんなの、全然気にしません‼？私、プロリーグでも勝ち抜けるようにもっと強くなります‼？だから、お願いします‼？」
「ふふっ、勝ち抜けるかどうかなんて、リーネは気にしないのですよ。こちらこそ、よろしくお願いするのです」
　そんなことを言っている間に気づけば天羽と篝が握手をして頭を下げあっていた。
　これで篝は『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の一員となるのか……だが……
「本当にいいのか、篝？」
　長年続けてきたカードデザイナーとしての仕事を俺なんかのために断ち切ってもいいのだろうか？
　そう思っての質問だったのだが、その問いかけを受けた篝は不機嫌そうに頬を膨らませた。
「もう、不知火君はデリカシーがないな。良くなかったらあんなこと言わないよ‼？」
「だが、君はカードデザインが好きだからカードデザイナーになったんだろう？それを辞めてまで『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に来るなんて……」
「確かに、私はカードをデザインするのは好きだよ。今でもその気持ちは変わらない」
「なら……」
「もう不知火君の唐変木‼？確かにカードをデザインするのは好きだけど、それ以上に不知火君のことが好きなの‼？一緒にいたいの‼？」

そういって篝が顔を真っ赤に染めながら叫ぶ。
そういうことを大声で言うのは止めて欲しい。
部屋の外に叫び声を聞いて人が集まってきてる気配を感じるし、流石に照れくさい。
「ふふふ、愛されてるのですね、炎君」
「天羽……」
「おっと、炎君の目が怖くなってきたのでリーネ達はここで失礼するのです。リーネもお馬さんに蹴られたくはないですからね。それじゃあ後は若い２人でごゆっくり、なのですよ。行くのですよ、闇ちゃん、治虫君」
「ん……聖夜火、ファイト」
「お、お邪魔しました」
そんなことを言いながら天羽達が部屋を出て行く。
そしてデュエルルームに残されたのは俺と篝だけになった。
気まずい沈黙が俺達の間に流れる。
それでも、いつまでも黙っておくのも篝に失礼だ。
俺は意を決して口を開こうとする。
「「篝（不知火君）」」
「な、何だ、篝？」
「いや、えっと、不知火君からでいいよ？」
お互いの声が被り、２人揃って相手から目を逸らす。
意を決したタイミングでこれは心が折れそうだ。
だが、不安なのはきっと篝の方だ。
ならば、俺は答えを出さなければならない。
「……篝」
「な、何？」
「篝が『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入ってくれるなら、それはとても嬉しく思う。篝は『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』以外で俺が唯一心を許せる存在だ」
「……それは私が幼馴染だから？」
篝の目が不安に揺れる。

だが、自分の気持ちを真っ直ぐに伝えてくれた篝には、俺も真っ直ぐに答えなければならない。
「……ああ、そうだ。篝は幼少期から共にいた幼馴染だ。正直な話、俺は篝に恋愛感情を感じたことはない」
「っ……あ、はは、そっ、か」
俺の言葉に、篝の眼から涙が溢れる。
「あはは、なんか、ゴメン、ね？そうだよね、私なんかじゃ、不知火君と一緒に入れるわけーーー」
「だが……それはきっと、俺が自分の気持ちに気づけていなかっただけなのだろう」
「ーーーえっ？」
「何故なら、今こんなにも満たされた気持ちなのだからな」
続いた俺の言葉に、篝が目を丸くする。
本当に、篝の言う通りだ。
俺は馬鹿で鈍感で唐変木だ。
自分の気持ちにすら気づいていなかったのだからな。
「篝、俺は君の言う通り馬鹿で鈍感で唐変木な人間だ。だが……そんな俺でも君のことを大切に思っている」
「っ⁉？し、不知火、君？」
驚いてた表情で涙を流している篝に近づき、流れている涙を手で拭う。
そしてはっきりと自分の気持ちを口にした。
「君のことが好きだ。こんな俺でいいのなら、これからも君の側にいさせて欲しい」
「っ……もう、本当に不器用だなぁ、不知火君は……最初から、そう言ってくれれば、不安になんてならなかったのに……」
溢れ落ちる涙を拭いながら篝が拗ねたような表情を浮かべる。
「馬鹿……大馬鹿不知火君……」
「すまない」
「でも……大好きだよ」
そういうと、篝は満面の笑みを浮かべて勢いよく俺の身体に抱きつ

いてくる。
「不束者ですが、よろしくお願いします」
「……ああ、こちらこそ」

ーーーーーーー
★　桜ｓｉｄｏ

「ちょ、ちょっと待って‼?炎さん‼?」
「む、どうした?まだ話は導入部なのだが……」
思わず大声を出してしまった私に炎さんは怪訝な表情を向ける。
確かに、まだ話は本題である闇のカードの話には入っていない。
だけど、どうしても聞かなければならない疑問が私の心から溢れ出してしまった。
「『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に追加メンバーが入ってたなんて、聞いたことがないわよ?それに、今の話からすると、炎さんがくれた私の転生炎獣って、その篝さんしか持っていないハズのカテゴリーなのよね?なんでそれを炎さんが持ってるの?」
そんな私の疑問に、炎さんは寂しげな笑みを浮かべる。
胸が痛い。
本当はこんな疑問なんて無意味なことは分かってる。
だって……想像がついてしまうから、炎さんの表情や行動から、その答えが。
それでも聞かずにはいられなかった。
私の残酷な想像が、ただの想像であって欲しかった。
「……その質問に対する答えは、きっと宝月が想像する通りだろう。結論から言えば、篝が『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入ることは無く、転生炎獣は俺に託されることになった。何故ならーーー」
だけど、やはり現実は……私の残酷な想像を肯定する。
「ーーー篝　聖夜火はもうこの世にはいない。『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の追加メンバーになる予定だった俺の幼馴染は……闇のカードによって命を落とした」

第８２話　追憶の復讐者

●　炎ｓｉｄｏ

「これで終わりだよ‼？バトル‼？ファイアウォールＸドラゴンでエルシャドールシェキナーガを攻撃‼？堅牢のネクサスシュトローム‼？」
「ぐあああああっ‼？」

治虫　ＬＰ２５００→０

ファイアウォールＸのブレスが御影のシェキナーガを消しとばし、立体映像が消えていく。
デュエルに勝った篝はこちらを向いて心底嬉しそうな笑みを浮かべた。
「勝てたよ、不知火君‼？私、治虫君に勝てた‼？えへへ、これでちゃんと不知火君に並ぶことができたかな？」
「俺に並ぶ？」
「でも、やっぱりまだかな？勝てたと言っても２０戦以上デュエルしてやっと１回勝てただけだし……これじゃ不知火君の隣に立つことなんてまだ……」
「全く、何を言い出すかと思えば……」
「わっ⁉？し、不知火君⁉？」
勝手に自己完結して落ち込みはじめる篝の身体を、俺は正面から優しく抱き締め、自分の心から思った言葉を口にする。
「篝はとうの昔に俺と並んでいる。隣に立てないなどと寂しいことは言わないでくれ」
「不知火君……」
「先程のデュエル、見事だった。御影のシャドールの妨害を掻い潜るのは中々面倒だからな。それを掻い潜り勝利を掴んだのは篝の実力だ。もっと誇れ」

「……うん」
俺の言葉に籌が柔らかな笑みを浮かべて、俺の身体を抱き返してくる。
そんな俺達を見て籌のデュエルの相手をしていた御影な複雑そうな表情で口を開いた。
「人が負けたというのに目の前で勝者にイチャイチャされると流石にちょっとイラっと来ますね……」
「僻み？」
「僻んでない‼？アンタは俺に喧嘩を売らないと気が済まないのか⁉？」
「……うん」
「無駄に溜めて喧嘩を売ってくるな‼？」
「もう、２人共、喧嘩はダメなのですよ」
御影達のそんなやりとりが聞こえてきて、俺は籌と顔を見合わせて思わず笑みを浮かべてしまった。
籌が『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入ることを決め、俺とデュエルをしてから早くも２ヶ月が経った。
あのデュエルの後、籌は正式に『Ｓｃｈｏｐｆｅｒ』を退職した。
籌の突然の退職宣言に『Ｓｃｈｏｐｆｅｒ』側は必死に籌を引き止めようとしたが、籌の意思は変わらずこれまでの貢献と退職する代わりに新しいカードのデザインを数十種類譲渡することで惜しまれながらも退職を受け入れられたらしい。
流石に退職してすぐに『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入るのは外聞が悪いということになり、籌の『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』への入社は半年程延期された。
とはいえ、半年もの時間を無駄にするのも勿体無い為、籌は『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入り浸ってデュエルの特訓をしていた。
籌の実力があれば俺は充分過ぎると思うのだが、本人としてはまだまだ俺に追いつけていないと感じているらしく、俺と並び立てるようにと日夜デュエルに励んでいる。
そんな真っ直ぐな籌の感情は正直照れくらい。

とはいえ、嫌というわけは勿論なく思わず表情が緩みそうになってしまう程心地が良いものだった。
「さてさて、デュエルが終わったところで今日はこの辺でお開きにするのです。すっかり遅くなってしまったですからね」
「ん？ああ、もうこんな時間だったのか」
天羽の言葉にデュエルルームにある時計に目をやると既に時刻は夜の１０時を越えようとしていた。
篝の特訓に集中していたから全然気づかなかったな。
「ああ‼？皆さんごめんなさい‼？こんなに遅くまで付き合わせちゃって……」
「いえいえ、そんなの気にしなくていいのですよ」
「ん、社長の言う通り。聖夜火は炎のため、そして『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のために頑張ってる。その頑張りは謝られることじゃない」
「負けたのは悔しいですけど、それだけ篝さんも頑張ってるってことなんですから、気にしないでください。俺達だって篝さんには色々迷惑かけてるんですから」
「皆さん……ありがとうございます。私、もっと頑張ります‼？」
天羽達の言葉に、篝が目を潤ませながら嬉しそうに笑い、その笑みに釣られるように天羽達も笑みを浮かべる。
篝が来るようになって結束が抜け、暗くなっていた天羽達の空気も少しだけ柔らかくなった。
きっと『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のために一生懸命な篝の姿に思うところがあったのだろう。
無論、それは俺に対しても言えることだがな。
「それじゃあ今日はこれで解散なのです。炎君、ちゃんと聖夜火さんを送っていってあげるのですよ」
「ああ、分かっている」
「よろしくね、不知火君」
「あ、でも、送り狼になっちゃダメなのですよ？」
「……余計なことは言わなくていい」
何故、天羽は一言多いのだろうか？

そして篝、目を逸らして凄い勢いで右手の人差し指に自分の髪をくるくると巻きつけるな。
物凄く照れてるのが伝わってきてこちらも居た堪れない。

ーーーーーーー

「くしゅん‼?」
「大丈夫か、篝?」
「う、うん。うぅ、流石に外は寒いね……はーっ……」
1つくしゃみをして篝がコートの袖からちょこんと出た指先に息をかけ、すりすりと擦り合わせる。
季節は既に2月。
春が近づいてきているとはいえまだまだ肌寒い季節だ。
特に夜も遅くなってきているこの時間にもなればその寒さもひとしおだろう。
俺はコートのポケットに手を突っ込んでいるから直接的な寒さはあまり感じないがな。
「手袋はどうした?」
「あはは、実は今朝寝坊しちゃって家に忘れてきちゃったんだ」
「寝坊って、お前はまだ正式に入社したわけじゃないんだから出勤時間も何もないだろう?」
「うぅ、もう‼?本当に不知火君は朴念仁だよ‼?」
「はぁ?」
今更篝の朴念仁だという評価に異議を唱えることはないが、何故今そんな話になる?
俺が首を傾げていると、篝は右手の人差し指に自分の髪をくるくると巻きつけながら、小さな声で囁いた。
「……だって、早く不知火君に会いたかったんだもん」
「っ……そ、そうか」
「そ、そうだよ‼?だから、手袋を取りに戻れなかったのは仕方なかったんだよ‼?こんな時間になるとも思ってなかったし‼?」

頬を真っ赤に染めながら籌が開き直ったかのようにそんなことを口にする。
「……」
俺はコートのポケットに突っ込んだ自分の手を意識する。
コートの中は結構暖かい。
だから……その、だな。
……別に他意はない。
寒そうな籌が可哀想だと思っただけで、それ以外の気持ちはない……なんて、誰に言い訳をしてるのだろうか？
俺は自分のそんな考えに苦笑しながら、自分の手で隣で寒そうにしている籌の手を握った。
「ひゃぅ⁉？し、不知火、君？」
驚いたようにこちらを見る籌に、俺は目を逸らしながらぶっきらぼうに告げる。
「……手袋の代わりだ」
「⁉？……そ、そっか⁉？それじゃあ、その……お、お邪魔、します」
そっと、籌のひんやりとした指先が、俺の手に触れる。
俺はそれを、できる限り優しく握って、コートのポケットに導いた。
少し開いていた俺達の距離が縮まり、ほとんど密着した状態になる。
「あ、あったかいね」
「そ、そうか。それは、よかった」
何となく、お互い無言になりながら人がいない夜道を歩く。
だが、それは嫌な沈黙ではなく寧ろ心地よくて……
「見つけたぞ」
「っ⁉？」
だからこそ、その沈黙を破る底冷えするような声は、俺達の耳に届いた。
俺達が警戒するように声が聞こえた方を見ると、そこは夜の闇に包まれた薄暗い路地裏があった。

そしてその路地裏で、黒いロングコートを纏った白髪混じりの黒髪の男が鋭い眼光でこちらを睨んでいた。
その男を見て、篝は恐る恐ると言った風にその男に声をかけた。
「あの、もしかして、相坂さん、ですか？」
「久しいな、篝　聖夜火」
「篝、知り合いか？」
「う、うん。相坂　雪斗（あいさか　ゆきと）さん。『Ｓｃｈｏｐｆｅｒ』で私と同じ部署でカードデザインをしてたカードデザイナーの人」
相坂と呼ばれた人物は相変わらず厳しい眼光で篝を睨んだまま言葉を紡ぐ。
「貴様がいなくなり、『Ｓｃｈｏｐｆｅｒ』は中々大変でね。『Ｓｃｈｏｐｆｅｒ』を辞めて何処に行ったのかと思っていたが、何故君が『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』の人間と一緒にいる？」
「っ、それ、は……わ、私が『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』に入るからです‼？」
「ほぅ、貴様がか？中々面白いことを言うな」
篝の言葉に、相坂が鋭い眼光のまま興味深そうな表情を浮かべる。
言葉の端々や視線から感じるこれは敵意か？
それとも……
「ならば、俺と一戦交えないか？」
「相坂さんと、ですか？」
「ああ。貴様が本当に『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』としてデュエルができるのか、デザイナーとして共に仕事をした俺には不思議でね。君がカードデザイナーを辞めてまで成し遂げる意味はあるのか、試してみようではないか」
そういって、相坂がデュエルディスクを起動し、自身のデッキをこちらに見せる。
その瞬間、相坂が持っていたデッキから黒い何が溢れ、路地裏がより暗くなったように感じた。
「っ……分かりました。そうまで言われたら私だって黙っているわ

けにはいきません‼?そのデュエル、受けて立ちます‼?」
「おい、篝‼?」
怪しげな男のあからさまな挑発。
それを受けてデュエルディスクを起動しようとする篝を制止しようとする。
しかし、篝は強い意志の篭った目で俺を見た。
「相坂さんの意見は最もだもん。相坂さんのようなことを言う人はきっとこれからも出てくる。ここで逃げたら、私は胸を張って不知火君の隣に立てないんだよ」
「……分かった、俺の好きなお前のデュエルを見せてくれ」
「‼?……うん‼?」
俺の言葉に、篝は嬉しそうにデュエルディスクを起動して構える。
あからさまに怪しい相手だが、こうなった篝を止めることはできないだろう。
俺にできるのは篝のデュエルを見守ることだけだ。
「……行きます‼?」
「ああ、挑んでくるがいい。クックック」
『決闘‼?』

聖夜火　ＬＰ８０００
雪斗　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は俺だ。まずは魔法カード、魔妖廻天‼?同名カードは１ターンに１度しか発動できず、デッキから同名カード以外の魔妖カード１枚を選び、手札に加えるか墓地へ送る。俺はデッキから氷の魔妖―雪娘を墓地へ送る‼?」
「魔妖……相坂さんが作り上げた私の不知火と対になるように作られたカテゴリー」
相坂が使用したカードを見て篝が微妙な表情を浮かべる。

魔妖。
篝が作り上げた不知火と対を成すように作り上げられた妖怪をモチーフにしたカテゴリーだ。
確かアンデット特有の蘇生能力を活かした連続シンクロ召喚を得意としたカテゴリーになっていたハズだ。
「俺は翼の魔妖―波旬を召喚!!?」

〈翼の魔妖―波旬〉☆1　アンデッド族　風属性
ＡＴＫ６００

フィールドに現れたのは山伏の姿をした天狗のモンスター。
「翼の魔妖―波旬の効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから同名カード以外の魔妖モンスター1体を特殊召喚する!!?現れろ、チューナーモンスター、麗の魔妖―妲姫!!?」

〈麗の魔妖―妲姫〉☆2　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

波旬が法螺貝を吹くと、フィールドに狐の尻尾を持つ巫女装束の美女が姿を現わす。
「さらに墓地に存在する氷の魔妖―雪娘の効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが手札・墓地に存在し、自分フィールドに同名カード以外の魔妖カードが存在する場合、このカードを特殊召喚する!!?蘇れ、氷の魔妖―雪娘!!?」

〈氷の魔妖―雪娘〉☆1　アンデッド族　水属性
ＤＥＦ１９００

さらに波旬と妲姫に導かれ、青い着物を着た小さな雪女が姿を現わす。

「その後、デッキからアンデット族モンスター1体を墓地へ送る。俺はデッキから馬頭鬼を墓地に送る。さらに俺は永続魔法、コモンメンタルワールドを発動!!?」
「っ、そのカードは!!?」
「自分がシンクロモンスターのシンクロ召喚に成功する度に、相手ライフに５００ポイントのダメージを与える」
発動されたコモンメンタルワールドを見て篝が苦い表情を浮かべる。
連続シンクロ召喚を行う魔妖でその効果はかなり不味い組み合わせだ。
「さあ、妖怪の宴の始まりだ。俺は、レベル1、翼の魔妖—波旬に、レベル2、チューナーモンスター、麗の魔妖—妲姫をチューニング!!?」
妲姫が光の輪になり、波旬が小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から鬼の顔がついた怪しい人力車が現れた。
「黄泉を彷徨う魂が、生者を求めて地を駆ける!!?シンクロ召喚!!?轢き殺せ、轍の魔妖—朧車!!?」

〈轍の魔妖—朧車〉☆3　アンデット族　地属性
ＤＥＦ２１００

「永続魔法、コモンメンタルワールドの効果、それにチェーンして墓地に存在する麗の魔妖—妲姫の効果発動!!?このカードが墓地に存在し、魔妖モンスターがＥＸデッキから自分フィールドに特殊召喚された時、このカードを特殊召喚する!!?ただし、この効果を発動するターン、自分は魔妖モンスターしかＥＸデッキから特殊召喚できない。蘇れ、麗の魔妖—妲姫!!?」

〈麗の魔妖—妲姫〉☆2　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

シンクロ素材となった妲姫が再びフィールドに姿を現わす。
チューナーモンスターである妲姫の安易過ぎる蘇生能力。
それが魔妖の連続シンクロ召喚の源になっている。
そして今の相坂のフィールドにはコモンメンタルワールドがある。
「そして永続魔法、コモンメンタルワールドの効果発動!!?貴様に５００ポイントのダメージを与える」
「くっ!!?」

聖夜火　ＬＰ８０００→７５００

コモンメンタルワールドによって篝のライフポイントが削られる。
これはかなり厄介なことになったな。
「次だ。俺は、レベル３、轍の魔妖―朧車に、レベル２、チューナーモンスター、麗の魔妖―妲姫をチューニング!!?」
妲姫が光の輪になり、朧車が小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から鎧を纏った巨大な蜘蛛が現れる。
「黄泉を駆ける魂が、糸と成りて生者を縛る!!?シンクロ召喚!!?絞め殺せ、毒の魔妖―土蜘蛛!!?」

〈毒の魔妖―土蜘蛛〉☆５　アンデット族　地属性
ＡＴＫ２０００

「再び永続魔法、コモンメンタルワールドの効果、そして麗の魔妖―妲姫の効果を発動!!?麗の魔妖―妲姫を特殊召喚し、貴様に５００ポイントのダメージを与える!!?」
「っ……」

〈麗の魔妖―妲姫〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

聖夜火　ＬＰ７５００→７０００

「さあ、まだまだ行くぞ。俺は、レベル５、毒の魔妖―土蜘蛛に、レベル２、チューナーモンスター、麗の魔妖―妲姫をチューニング!!?」
妲姫が光の輪になり、土蜘蛛が小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から巨大な翼を持つ天狗が宙へと飛び立つ。
「黄泉へと縛る魂が、大空を舞い生者を攫う!!?シンクロ召喚!!?消し飛ばせ、翼の魔妖―天狗!!?」

〈翼の魔妖―天狗〉☆７　アンデット族　風属性
ＡＴＫ２６００

「三度永続魔法、コモンメンタルワールドの効果、そして麗の魔妖―妲姫の効果を発動!!?麗の魔妖―妲姫を特殊召喚し、貴様に５００ポイントのダメージを与える!!?」
「うっ……」

〈麗の魔妖―妲姫〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

聖夜火　ＬＰ７０００→６５００

「まだまだ終わらんぞ。俺は、レベル７、翼の魔妖―天狗に、レベル２、チューナーモンスター、麗の魔妖―妲姫をチューニング!!?」
妲姫が光の輪になり、天狗が小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から九尾の狐が姿を現わす。
「黄泉へと攫う魂が、生者を惑わし黄泉へと誘う!!?シンクロ召喚!!?幻惑せよ、麗の魔妖―妖狐!!?」

〈麗の魔妖―妖狐〉☆９　アンデット族　炎属性
ＡＴＫ２９００

「四度永続魔法、コモンメンタルワールドの効果、そして麗の魔妖―妲姫の効果を発動!!?麗の魔妖―妲姫を特殊召喚し、貴様に５００ポイントのダメージを与える!!?」
「っ、ああもう!!?チクチクと嫌らしいダメージ!!?」

〈麗の魔妖―妲姫〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

聖夜火　ＬＰ６５００→６０００

「仕上げだ。俺は、レベル９、麗の魔妖―妖狐に、レベル２、チューナーモンスター、麗の魔妖―妲姫をチューニング!!?」
妲姫が光の輪になり、妖狐が小さな星に変わり、光の道になる。
「黄泉へと誘う魂が、怨嗟となりて生者を喰らう!!?シンクロ召喚!!?」
光の道が輝くと、その中から黒い骨の身体を持つ鎧武者が現れた。
「斬り結べ、骸の魔妖―餓者髑髏!!?」

〈骸の魔妖―餓者髑髏〉☆１１　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ３３００

「魔妖の極地……レベル１１のシンクロモンスター!!?」
「五度永続魔法、コモンメンタルワールドの効果、そして麗の魔妖―妲姫の効果を発動!!?麗の魔妖―妲姫を特殊召喚し、貴様に５００ポイントのダメージを与える!!?」
「ぐっ……まだ麗の魔妖―妲姫をさせてきますか」

〈麗の魔妖―妲姫〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

聖夜火　ＬＰ６０００→５５００

「連続シンクロは完成した。だが、これだけでは味気ないだろう？氷結せよ‼？生命を凍らすサーキット‼？」

「っ、この状況でリンク召喚ですか」

相坂が目の前に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。

「召喚条件は魔妖モンスター２体‼？俺は麗の魔妖―妲姫と骸の魔妖―餓者髑髏をリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？」

妲姫と雪娘がサーキットに吸い込まれていく。

そしてサーキットが光り輝くとサーキットから現れたのは白い着物に身を包んだ雪女。

「リンク召喚‼？魂を凍らせる魔性の妖‼？リンク２‼？氷の魔妖―雪女‼？」

〈氷の魔妖―雪女〉ＬＩＮＫ２　アンデット族　水属性

ＡＴＫ１９００　↙？　↘？

「氷の魔妖―雪女……魔妖の核になるリンクモンスター」

「氷の魔妖―雪女がリンク召喚されたことで麗の魔妖―妲姫の効果発動‼？麗の魔妖―妲姫を特殊召喚する‼？」

〈麗の魔妖―妲姫〉☆２　アンデッド族　炎属性

ＤＥＦ０

「フィールドにはレベル１の氷の魔妖―雪娘がいる……もしかしてまた‼？」

「流石は天才と呼ばれるだけはある。最も、予想が出来たところで俺の動きは止められないがな。俺は、レベル１、氷の魔妖―雪娘に、レベル２、チューナーモンスター、麗の魔妖―妲姫をチューニング‼？シンクロ召喚‼？轍の魔妖―朧車‼？」

〈轍の魔妖―朧車〉☆３　アンデット族　地属性
ＤＥＦ２１００

「２回目の連続シンクロ召喚!!?」
「もう説明する必要もないだろう。永続魔法、コモンメンタルワールドの効果、そして麗の魔妖―妲姫の効果を発動!!?麗の魔妖―妲姫を特殊召喚し、貴様に５００ポイントのダメージを与える!!?」

〈麗の魔妖―妲姫〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

聖夜火　ＬＰ５５００→５０００

「レベル３、轍の魔妖―朧車に、レベル２、チューナーモンスター、麗の魔妖―妲姫をチューニング!!?シンクロ召喚!!?毒の魔妖―土蜘蛛!!?」

〈毒の魔妖―土蜘蛛〉☆５　アンデット族　地属性
ＡＴＫ２０００

「永続魔法、コモンメンタルワールドの効果、麗の魔妖―妲姫の効果を発動する!!?」

〈麗の魔妖―妲姫〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

聖夜火　ＬＰ５０００→４５００

「レベル５、毒の魔妖―土蜘蛛に、レベル２、チューナーモンスター、麗の魔妖―妲姫をチューニング!!?シンクロ召喚!!?翼の魔妖―天

狗‼?」

〈翼の魔妖―天狗〉☆７　アンデット族　風属性
ＡＴＫ２６００

「永続魔法、コモンメンタルワールドの効果、麗の魔妖―妲姫の効果を発動だ‼?」

〈麗の魔妖―妲姫〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０
聖夜火　ＬＰ４５００→４０００

「レベル７、翼の魔妖―天狗に、レベル２、チューナーモンスター、麗の魔妖―妲姫をチューニング‼?シンクロ召喚‼?麗の魔妖―妖狐‼?」

〈麗の魔妖―妖狐〉☆９　アンデット族　炎属性
ＡＴＫ２９００

「永続魔法、コモンメンタルワールドの効果、麗の魔妖―妲姫の効果を発動‼?」

〈麗の魔妖―妲姫〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０
聖夜火　ＬＰ４０００→３５００

「レベル９、麗の魔妖―妖狐に、レベル２、チューナーモンスター、麗の魔妖―妲姫をチューニング‼?シンクロ召喚‼?骸の魔妖―餓者髑髏‼?」

〈骸の魔妖―餓者髑髏〉☆１１　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ３３００
「２体目の骸の魔妖―餓者髑髏!!?」
「永続魔法、コモンメンタルワールドの効果、麗の魔妖―妲姫の効果発動!!?」
〈麗の魔妖―妲姫〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０
聖夜火　ＬＰ３５００→３０００
「くぅっ……１ターン目からライフポイントが半分以下に……だけど、流石にこれ以上は……」
「考えが甘いな。俺がこの程度で済ますと思っているのか？魔法カード、貪欲な壺!!?」
「っ!!?ここでさらに貪欲な壺!!?」
「墓地に存在する轍の魔妖―朧車、毒の魔妖―土蜘蛛、翼の魔妖―天狗、麗の魔妖―妖狐をＥＸデッキに、翼の魔妖―波旬をデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする!!?これでＥＸデッキも回復した。俺は墓地に存在する馬頭鬼を除外して効果発動!!?自分メインフェイズに墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のアンデット族モンスター１体を特殊召喚する!!?蘇れ、氷の魔妖―雪娘!!?」
〈氷の魔妖―雪娘〉☆１　アンデッド族　水属性
ＤＥＦ１９００
再びフィールドに雪娘と妲姫が揃う。
そしてその２体が揃ったということはーーー
「さあ、３度目の連続シンクロだ!!?俺は、レベル１、氷の魔妖―雪娘に、レベル２、チューナーモンスター、麗の魔妖―妲姫をチューニン

グ!!?シンクロ召喚!!?轍の魔妖―朧車!!?」

〈轍の魔妖―朧車〉☆３　アンデット族　地属性
ＤＥＦ２１００

「永続魔法、コモンメンタルワールドの効果、麗の魔妖―妲姫の効果発動!!?」

〈麗の魔妖―妲姫〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

聖夜火　ＬＰ３０００→２５００

「レベル３、轍の魔妖―朧車に、レベル２、チューナーモンスター、麗の魔妖―妲姫をチューニング!!?シンクロ召喚!!?毒の魔妖―土蜘蛛!!?」

〈毒の魔妖―土蜘蛛〉☆５　アンデット族　地属性
ＡＴＫ２０００

「永続魔法、コモンメンタルワールドの効果、麗の魔妖―妲姫の効果発動!!?」

〈麗の魔妖―妲姫〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

聖夜火　ＬＰ２５００→２０００

「レベル５、毒の魔妖―土蜘蛛に、レベル２、チューナーモンスター、麗の魔妖―妲姫をチューニング!!?シンクロ召喚!!?翼の魔妖―天狗!!?」

〈翼の魔妖―天狗〉☆７　アンデット族　風属性
ＡＴＫ２６００

「永続魔法、コモンメンタルワールドの効果、麗の魔妖―妲姫の効果発動!!?」

〈麗の魔妖―妲姫〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

聖夜火　ＬＰ２０００→１５００

「レベル７、翼の魔妖―天狗に、レベル２、チューナーモンスター、麗の魔妖―妲姫をチューニング!!?シンクロ召喚!!?麗の魔妖―妖狐!!?」

〈麗の魔妖―妖狐〉☆９　アンデット族　炎属性
ＡＴＫ２９００

「永続魔法、コモンメンタルワールドの効果、麗の魔妖―妲姫の効果を発動!!?」

〈麗の魔妖―妲姫〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

「きゃあああああ!!?」

「籌!!?」

聖夜火　ＬＰ１５００→１０００

「ＥＸデッキの魔妖モンスターは同名カードは１体しか存在できない

ため、既にフィールドにいる骸の魔妖―餓者髑髏をシンクロ召喚できないため連続シンクロはここで途切れる。だが、これだけでも十分な成果と言えるだろう？」

そういって相坂が不気味に笑う。

連続シンクロにより篝のライフは１ターン目だと言うのに残り１０００まで削られた。

この男……かなりの強敵だぞ。

「俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ。さあ、貴様の力を見せて見ろ」

聖夜火　ＬＰ１０００　手札５

ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー

☆　　ー

○□○ー　ー

ー▲△ー　ー

雪斗　ＬＰ８０００　手札２

「１ターン目からかなり追い詰められちゃったけど、これぐらいじゃ私の魂の炎は消えません‼？私のターン、ドロー‼？まずは速攻魔法、転生炎獣の炎陣（サラマングレイト・サークル）‼？この同名カードは１ターンに１枚しか使えず、２つ効果から１つを選択して発動できる。デッキからサラマングレイトモンスター１体を手札に加えるか、自身と同名のモンスターを素材としてリンク召喚した自分フィールドのサラマングレイトリンクモンスター１体を対象としてこのターン、そのリンクモンスターは自身以外のモンスターの効果を受けなくする‼？私はデッキからサラマングレイトモンスター１体を手札に加える効果でデッキから転生炎獣（サラマングレイト）ミーアを手札に加えます‼？そして今手札に加えた転生炎獣ミーアの効果発動‼？このカードが通常のドロー以外の方法で手札に加わった場合、このカードを相手に見せ、手札から特殊召喚‼？」

〈転生炎獣ミーア〉☆２　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ６００

フィールドに身体から炎を噴き出しているミーアキャットが現れる。
「早速行きます、燃え滾れ‼？聖火が輝くサーキット‼？」
「リンク召喚か」
籌が目の前に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル４以下のサイバース族モンスター１体‼？私は転生炎獣ミーアをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？リンク１‼？転生炎獣（サラマングレイト）ペイルリンクス‼？」

〈転生炎獣ペイルリンクス〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ５００　←

ミーアがサーキットに吸い込まれると、代わりにサーキットから現れたのは真っ赤な装甲に身を包んだ山猫のモンスター。
「転生炎獣ペイルリンクスの効果、それにチェーンして転生炎獣（サラマングレイト）ガゼルの効果発動‼？１ターンに１度転生炎獣ガゼル以外のサラマングレイトモンスターが自分の墓地に送られた場合、このカードを手札から特殊召喚する‼？」

〈転生炎獣ガゼル〉☆３　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１０００

ミーアの姿が消えたことで籌のフィールドに炎を纏ったガゼルのモンスターが現れる。
「そして転生炎獣ペイルリンクスの効果発動‼？１ターンに１度、このカードがリンク召喚に成功した場合に、デッキから転生炎獣（サラマングレイト）の聖域（サンクチュアリ）１枚を手札に加える‼？私はデッキからフィールド魔法、転生炎獣の聖域を手札に加えます‼？さらに転生炎獣ガゼルのもう１

つの効果発動!!?1ターンに1度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから転生炎獣ガゼル以外のサラマングレイトカード1枚を墓地に送る。私はデッキから転生炎獣(サラマングレイト)スピニーを墓地に送る!!墓地に存在する転生炎獣スピニーの効果発動!!?自分フィールドに転生炎獣スピニー以外のサラマングレイトモンスターが存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚します!!?ただしこの効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される」

〈転生炎獣スピニー〉☆3　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１５００

篝の墓地からガゼルに寄り添うように炎を纏ったアルマジロトカゲが現れる。
篝はそれを見て正面に手をかざす。
「私はレベル3の転生炎獣ガゼルと転生炎獣スピニーでオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
「ほう、ここでエクシーズ召喚か」
ガゼルとスピニーが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りるのは炎を纏った荒馬。
「六道を駆け巡る灼熱の神馬!!?転生炎獣(サラマングレイト)ミラージュスタリオ!!?」

〈転生炎獣ミラージュスタリオ〉★3　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２０００

「さらに私は転生炎獣(サラマングレイト)Ｊジャガーを召喚!!?」

〈転生炎獣Ｊジャガー〉☆4　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１８００

フィールドに身体に着いた棘から炎を噴き出させているジャガーが現れる。
さらにJジャガーが咆哮をあげると、空から炎の羽根を持つ孔雀が姿を現わした。
「転生炎獣Jジャガーの召喚成功時、手札の転生炎獣(サラマングレイト)フォウルの効果発動!!?自分フィールドに同名カード以外のサラマングレイトモンスターが召喚・特殊召喚された場合、このカードを手札から特殊召喚します!!?」

〈転生炎獣フォウル〉☆4　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１８００

「一気にモンスターを展開してきたか」
「吹雪にも負けない全てを焼き尽くす魂の炎を見せてあげます!!?燃え滾れ!!?聖火が輝くサーキット!!?」
不敵に笑う篝の前に再びサーキットが現れる。
「召喚条件は炎属性の効果モンスター2体以上!!?私は転生炎獣ペイルリンクス、転生炎獣ミラージュスタリオ、転生炎獣Jジャガー、転生炎獣フォウルをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
「ほう、リンク4のモンスターを呼び出すか」
4体の転生炎獣がサーキットに吸い込まれていく。
そしてサーキットが輝くと、サーキットの中から飛び立ったのは転生し続ける不死鳥。
「無限の炎より生まれし不死鳥!!?リンク召喚!!?リンク4!!?転生炎獣パイロフェニックス!!?」

〈転生炎獣パイロフェニックス〉ＬＩＮＫ４　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２８００　↑←→↓

「それが貴様の切り札か。えらくちっぽけな灯火だな」
「今は小さな灯火でも、その灯火が全てを照らす輝きに変わることができるということを教えてあげます‼？まずは転生炎獣ミラージュスタリオの効果発動‼？フラッシュオーバー‼？エクシーズ召喚したこのカードがサラマングレイトリンクモンスターのリンク素材として墓地へ送られた場合、フィールドのモンスター1体を対象としてそのモンスターを持ち主の手札に戻します‼？対象は骸の魔妖―餓者髑髏‼？」
「っ、小癪な真似を……」
　リンク素材として消えたハズのミラージュスタリオが炎でできた幻影となって現れ、餓者髑髏を吹き飛ばした。
「魔妖は破壊された時にそれよりもレベルが低いシンクロモンスターが蘇生される。麗の魔妖―妖狐の蘇生効果は使われると厄介ですからね」
「骸の魔妖―餓者髑髏を破壊することで現れるレベル9の麗の魔妖―妖狐は墓地からの特殊召喚に成功した場合に相手フィールドのモンスター1体を選んで破壊する対象を取らない破壊効果がある。そこまで見越して手を打ってくるとはな」
「これで邪魔ものはいなくなりました‼？まずはフィールド魔法、転生炎獣の聖域を発動‼？」
　フィールド魔法を発動すると、辺りの風景がマグマに囲まれた火山のフィールドに変わる。
「そしてフィールド魔法、転生炎獣の聖域の効果発動‼？1ターンに1度、このカードがフィールドゾーンに存在する限り、自分がサラマングレイトリンクモンスターをリンク召喚する場合、自分フィールドの同名のサラマングレイトリンクモンスター1体のみを素材としてリンク召喚できます‼？」
「ほう、噂の転生リンク召喚という奴か」
「燃え滾れ‼？聖火が輝くサーキット‼？私は転生炎獣パイロフェニックスをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？」
　パイロフェニックスの頭上にサーキットが、足元に炎で出来た魔法

陣が現れ、交差するようにパイロフェニックスの身体を通過する。
サーキットと魔法陣が通過すると、パイロフェニックスの纏っていた炎が一際激しく燃え上がった。
「再臨せよ!!?無限の炎より生まれし不死鳥!!?転生リンク召喚!!?リンク４!!?転生炎獣パイロフェニックス!!?」
〈転生炎獣パイロフェニックス〉ＬＩＮＫ４　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２８００　↑←→↓
「燃やし尽くしてあげます!!?転生炎獣パイロフェニックスの効果発動!!?エンドレスフレア!!?このカードが同名カードを素材としてリンク召喚に成功した場合、相手フィールドのカードを全て破壊する!!?」
「チッ、全体破壊か」
パイロフェニックスが身体を燃え上がらせながら突撃し、相坂のフィールドのカードを全て焼き尽くす。
しかし、焼き尽くされたモンスター達の亡骸から新たなモンスターが姿を現わす。
「墓地に存在する骸の魔妖―餓者髑髏の効果、それにチェーンして墓地に存在する翼の魔妖―天狗の効果発動!!?このカードが墓地に存在し、元々のレベルが９の自分のシンクロモンスターが戦闘または相手の効果で破壊された場合、自分の墓地から他のアンデット族モンスター１体を除外し、このカードを特殊召喚する!!?俺は墓地に存在する轍の魔妖―朧車を除外して、現世に舞い戻れ、翼の魔妖―天狗!!?」
〈翼の魔妖―天狗〉☆７　アンデット族　風属性
ＤＥＦ１５００
「そして墓地に存在する骸の魔妖―餓者髑髏の効果発動!!?このカードが墓地に存在し、自分のリンクモンスターが戦闘または相手の効果で破壊された場合、自分の墓地から他のアンデット族モンスター１体

を除外し、このカードを特殊召喚する!!?・俺は墓地に存在する氷の魔妖―雪女を除外して、現世に舞い戻れ、骸の魔妖―餓者髑髏!!?・」

〈骸の魔妖―餓者髑髏〉☆１１　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ３３００

再びフィールドに姿を現わした餓者髑髏と天狗を見て篝が苦い表情を浮かべる。
「魔妖特有の蘇生効果ですか」
「ただで蘇ったわけではない。骸の魔妖―餓者髑髏の効果、それにチェーンして翼の魔妖―天狗の効果発動!!?・このカードが墓地からの特殊召喚に成功した場合、相手フィールドの魔法・罠カード１枚を選んで破壊する!!?・消え去れ、転生炎獣の聖域!!?・」
天狗が生み出した竜巻に呑まれ、転生炎獣の聖域が消滅する。
「そして骸の魔妖―餓者髑髏の効果発動!!?・このカードが墓地からの特殊召喚に成功した場合、このターン、表側表示のこのカードは他のカードの効果を受けない!!?・」
餓者髑髏が辺りを彷徨っていた魂を喰らい怪しげな闇のオーラを纏う。
転生炎獣の聖域は消え去り、餓者髑髏は効果を受けなくなった。
それでも篝の目に宿る闘志の炎は消えていない。
「それぐらいで私を止めることはできません!!・永続魔法、転生炎獣(サラマングレイト)の意志(ハート)を発動!!?・このカードは１ターンに１度、２つある効果の内、１つを発動することができます。１つは自分メインフェイズに自分の手札・墓地からサラマングレイトモンスター１体を選んで特殊召喚する効果。そしてもう１つは魔法＆罠ゾーンの表側表示のこのカードを墓地へ送り、自身と同名のモンスターを素材としてリンク召喚した自分フィールドのサラマングレイトリンクモンスター１体を対象としてそのモンスターのリンクマーカーの数まで、自分の手札・墓地からサラマングレイトモンスターを選んで守備表示で特殊召喚する効果です!!?・」

「何⁉？まさか貴様……⁉？」
「私は２つ目の効果を使い、転生炎獣の意志を墓地に送り、転生炎獣パイロフェニックスを対象にその効果を発動⁉？転生炎獣パイロフェニックスのリンクマーカーは４⁉？よって４体のサラマングレイトモンスターを選んで守備表示で特殊召喚します⁉？蘇れ、転生炎獣ミーア、転生炎獣ガゼル、転生炎獣スピニー、転生炎獣フォウル⁉？」

〈転生炎獣ミーア〉☆２　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ６００

〈転生炎獣ガゼル〉☆３　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１０００

〈転生炎獣スピニー〉☆３　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１５００

〈転生炎獣フォウル〉☆４　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ２００

パイロフェニックスが纏っていた炎が弾けると、弾け飛んだ炎が４体の転生炎獣に姿を変える。
「さらに墓地に存在する転生炎獣Ｊジャガーの効果発動⁉？同名カードは１ターンに１度、このカードが墓地に存在し、自分フィールドにサラマングレイトリンクモンスターが存在する場合、転生炎獣Ｊジャガー以外の自分の墓地のサラマングレイトモンスター１体を対象としてそのモンスターをデッキに戻し、墓地のこのカードを自分のサラマングレイトリンクモンスターのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚します⁉私は墓地の転生炎獣ミラージュスタリオをＥＸデッキに戻して転生炎獣Ｊジャガーを特殊召喚⁉？」

〈転生炎獣Ｊジャガー〉☆４　サイバース族　炎属性

ＤＥＦ１２００

墓地から再びＪジャガーが姿を現わす。

篝は１度目を閉じると、覚悟を決めた目で正面に手をかざした。

「行きます、私のとっておき‼?･私はレベル４の転生炎獣Ｊジャガーと転生炎獣フォウルでオーバーレイ‼?･２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築‼?･エクシーズ召喚‼?･」

「再びエクシーズ召喚か」

Ｊジャガーとフォウルが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けると空から舞い降りるのは蒼き装甲に身を包んだ機械の龍。

「閉ざされた世界に絆を伝え、魂の光を守護する聖盾‼?･ファイアウォール　Ｘ（エクシード）　ドラゴン‼?･」

〈ファイアウォールＸドラゴン〉★４　サイバース族　闇属性

ＡＴＫ２５００

「ファイアウォールＸドラゴン……クックック、ようやく、見つけたぞ」

「っ、何だ?･」

フィールドに現れたファイアウォールＸを見て、一瞬相坂はゾッとするような不気味な笑みを浮かべ何かを呟いた。

相坂の一瞬の変化を、篝が気づいた様子はない。

今の不気味な笑みはなんだ?

篝とのデュエルを望んだこととといい、コイツは一体、何を狙っている?

俺のそんな懸念を他所に篝は動き出す。

「私のとっておきを見せてあげます‼?･ファイアウォールＸドラゴンの効果発動‼?･ストロングボンズ‼?･このカードのオーバーレイユニットを２つ取り除き、自分の墓地のリンク４のサイバース族リンク

モンスター1体をこのカードとリンク状態となるように自分フィールドに特殊召喚する‼？ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はモンスターを特殊召喚できず、直接攻撃できない。蘇って、転生炎獣パイロフェニックス‼？」

ファイアウォールXがオーバーレイユニットを吸収して咆哮を上げると、ファイアウォールXの左隣に次元の裂け目が現れる。

そして次元の裂け目からもう1体のパイロフェニックスが姿を現した。

〈転生炎獣パイロフェニックス〉ＬＩＮＫ４　サイバース族　炎属性

ＡＴＫ２８００　↑←→↓

「転生炎獣パイロフェニックスを蘇生させたか……だが、それだけではこの状況を打開できまい」

「ファイアウォールXドラゴンの力はこれだけじゃありません‼？ファイアウォールXドラゴンの永続効果、シャイニングネクサス‼？エクシーズ召喚したこのカードの攻撃力は、このカードとリンク状態になっているリンクモンスターのリンクマーカーの数×５００ポイントアップする‼？」

「ほう、リンクしているリンクマーカーの数で攻撃力を上げるか」

「現在ファイアウォールXドラゴンは2体の転生炎獣パイロフェニックスとリンクしてる‼？転生炎獣パイロフェニックスのリンクマーカーは４つ‼？だから合計８つのリンクマーカーと繋がることでファイアウォールXドラゴンの攻撃力は４０００ポイントアップする‼？」

ファイアウォールXドラゴン

ＡＴＫ２５００→６５００

「さらに装備魔法、団結の力をファイアウォールXドラゴンに装備‼？」

「っ⁉？そのカードは……」
「団結の力の効果により装備モンスターの攻撃力・守備力は、自分フィールドの表側表示モンスターの数×８００ポイントアップします⁉？私のフィールドにはファイアウォールＸドラゴンを含めて６体のモンスターがいます⁉？よってその攻撃力・守備力は４８００ポイントアップします⁉？」

ファイアウォールＸドラゴン
ＡＴＫ６５００→１１３００

「攻撃力……１１３００だと⁉？」
転生炎獣との絆の力と繋がったファイアウォールＸの攻撃力が跳ね上がる。
相坂のフィールドにいる攻撃表示の餓者髑髏の攻撃力は３３００。
ファイアウォールＸとの攻撃力の差はちょうど８０００。
この攻撃が通ればそれだけで籌の勝ちだ。
「バトル⁉？ファイアウォールＸドラゴンで骸の魔妖―餓者髑髏を攻撃⁉？堅牢のネクサスシュトローム⁉？」
ファイアウォールＸは口から蒼い炎のブレスを放ち、パイロフェニックス達が援護するように炎を放ってファイアウォールＸに力を分け与える。
パイロフェニックス達の力を受け取ったファイアウォールＸのブレスは勢いを増し、餓者髑髏を貫かんとする。
ファイアウォールＸのブレスが餓者髑髏を貫こうとしたその瞬間、餓者髑髏を庇うように天狗が仁王立ちをした。
「翼の魔妖―天狗を対象に墓地の仁王立ちを除外して効果発動⁉？」
「えっ⁉？」
「墓地のこのカードを除外し、自分フィールドのモンスター１体を対象としてこのターン、相手は対象のモンスターしか攻撃できなくなる。貴様の全霊の攻撃も無駄だったというわけだ」
「っ、さっき転生炎獣パイロフェニックスで破壊したセットカードが

仁王立ちでしたか……ファイアウォールXドラゴンで翼の魔妖―天狗を攻撃!!?堅牢のネクサスシュトローム!!?」
餓者髑髏を庇った天狗がブレスに貫かれ爆散する。
しかし、爆散した天狗の亡骸から土蜘蛛が這い出てきた。
「墓地に存在する毒の魔妖―土蜘蛛の効果発動!!?このカードが墓地に存在し、元々のレベルが7の自分のシンクロモンスターが戦闘または相手の効果で破壊された場合、自分の墓地から他のアンデット族モンスター1体を除外し、このカードを特殊召喚する!!?俺は墓地に存在するを翼の魔妖―天狗を除外し、現世に舞い戻れ、毒の魔妖―土蜘蛛!!?」

〈毒の魔妖―土蜘蛛〉☆5　アンデット族　地属性
ＤＥＦ１８００

「毒の魔妖―土蜘蛛の効果発動!!?このカードが墓地からの特殊召喚に成功した場合、お互いのデッキの上からカードを3枚墓地へ送る!!?」
土蜘蛛が口から糸を放ち、篝と相坂のデッキの上から3枚のカードを弾き飛ばし墓地に送る。
「くっ……墓地に送られた転生炎獣（サラマングレイト）ファルコの効果発動!!?このカードが墓地へ送られた場合、自分の墓地のサラマングレイト魔法・罠カード1枚を自分フィールドにセットします!!?私は墓地から転生炎獣の炎陣をセットします!!?」
「ほぅ、運がいい……いや、貴様の性質を考えれば当然と言ったところか」
「……どういうことですか?」
「クックック、知らないということは幸福だな……いや、貴様のそれに関しては最大の不幸というべきか」
「言ってること、全然分かりません!!?何のことを言ってるんですか!?」
訝しげな視線を向ける篝の質問に相坂は意味深な発言を返すが、そ

れ以上は応えなかった。
相坂の言葉の意味は分からない。
籌の性質……幸福であり不幸……一体コイツは何を知っているというんだ？
「黙りですか……なら、このデュエルに勝ってそれを聞き出して見せます‼？私はこのままターンエンドです‼？」

聖夜火　ＬＰ１０００　手札０
ー－△▲ー　ー
□□□○☆
ー　☆
○ー□ーー
ーーーーー　ー
雪斗　ＬＰ８０００　手札２

「クックック、このデュエルに勝つ、か」
「……何がおかしいんですか？」
籌の啖呵を相坂は心底可笑しそうに嘲笑う。
一頻り笑った相坂がゾッとするような笑みを浮かべると、先程相坂のデッキから感じた闇が、その身体から噴き出した。
「おかしいに決まっている。貴様はすでに詰んでいるのだからな。このデュエルも……貴様の人生もな」
「……えっ？」
「喰らってやろう、貴様を護る精霊の加護ごとな‼？俺のターン、ドロー‼？墓地に存在する氷の魔妖―雪娘の効果発動‼？同名カード以外の魔妖カードが存在するため、このカードを特殊召喚する‼？蘇れ、氷の魔妖―雪娘‼？」
〈氷の魔妖―雪娘〉☆１　アンデッド族　水属性
ＤＥＦ１９００

「その後、俺はデッキからヴェンデットストリゲスを墓地に送る」
「ヴェンデットストリゲス？相坂さんがそんなカードを作ったなんて聞いたこと……」
「そして墓地に送られたヴェンデットストリゲスの効果発動‼？このカードが墓地へ送られた場合、手札からヴェンデットカード1枚を相手に見せ、このカードを特殊召喚する‼？ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。俺は手札の儀式魔法、リヴェンデットバースを見せ、現れろ、ヴェンデットストリゲス‼？」

〈ヴェンデットストリゲス〉☆2　アンデッド族　闇属性
ＤＥＦ２０００

現れたのはキメラのように様々な動物が混ざっている複数体の骸の梟。
「さあ、貴様を終焉に導く闇の化身を見せてやろう。俺は儀式魔法、リヴェンデットバースを発動‼？レベルの合計が儀式召喚するモンスターと同じになるように、自分の手札・フィールドのモンスターをリリース、またはリリースの代わりにデッキからヴェンデットモンスターを1体まで墓地へ送り、自分の手札・墓地からヴェンデット儀式モンスター1体を儀式召喚する‼？ただし、この効果で儀式召喚したモンスターは、次のターンのエンドフェイズに破壊される。俺はフィールドにいるヴェンデットストリゲスをリリースし、デッキからヴェンデットキマイラを墓地に送り、墓地から儀式召喚を行う‼？」
「デッキのカードを使って墓地から儀式召喚する儀式魔法⁉？」
フィールドに様々な骸が合成されているキマイラが現れ、その身体にストリゲスが次々と飛び込んで取り込まれていき、その身体を死肉が覆う。
全てのストリゲスが取り込まれると、キマイラを覆っていた死肉が弾け、中から現れたのは漆黒に染まった骨の鎧を持つ幽鬼。
「儀式召喚‼？全ての生者に破滅を持たらす怨霊の化身‼？ヴェン

デットバスタード!!?」

〈ヴェンデットバスタード〉☆7　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２７００

「またヴェンデット……っ!?ファイアウォールＸドラゴン?」
現れたバスタードを見て、ファイアウォールＸは警鐘を鳴らすように唸り声をあげる。
そんなファイアウォールＸを見て相坂は愉快そうに笑った。
「クックック、自らの主人の危機を告げるか、守護龍よ。だが、もう遅い!!?墓地のヴェンデットキマイラを除外してヴェンデットバスタードの効果発動!!ポクナモシリサンペ!!?同名カードは1ターンに1度、?自分の墓地からヴェンデットカード1枚を除外し、モンスター・魔法・罠いずれかのカードの種類を宣言し、このターン、相手は宣言した種類のカードの効果を発動できない!!?」
「カード効果の発動を禁止する儀式モンスター!?」
「俺が宣言するのはモンスターだ!!?」
バスタードが咆哮を上げながら大剣を振るう。
すると、バスタードの大剣から闇を纏った斬撃が篝に向かって放たれる。
ファイアウォールＸはその身を盾に篝を庇うように立ち塞がる。
「ファイアウォールＸドラゴン?って、きゃぁっ!?」
「っ!?篝!?」
ファイアウォールＸが闇の斬撃を弾いた瞬間、不思議なことが起こった。
弾かれた立体映像であるハズのバスタードの斬撃でコンクリートが抉れ、その破片が篝の身体を傷付けたのだ。
「っ、何が起こっている!?何故ただの立体映像の効果地面が抉られるんだ!?」
「クックック、知らないとは恐ろしいことだな。俺が現れた時点でこのデュエルはすでに貴様らが知っている生ぬるいデュエルではなく

なっているんだよ。生死がかかった本物の決闘……闇のデュエルなのだよ‼?」
「生死がかかった……」
「闇の決闘だと⁉?」
相坂の言葉に俺達は思わず声を漏らしてしまう。
その言葉の意味が分からないわけではない。
先程のバスタードの斬撃により抉れている地面を既に目にしているのだから。
もし、あの斬撃が本当に籌の身体に届いてしまえば……
「貴様の手札はなくセットカードは転生炎獣をサーチする転生炎獣の炎陣のみ。モンスター効果を封じられた貴様にできることは死への道を進むだけだ。俺は墓地に存在する罠カード、ヴェンデットリバースを除外して効果発動‼?墓地のこのカードを除外し、除外されている自分のアンデット族モンスター5体をデッキに加えてシャッフルし、カードを1枚ドローする‼?俺は除外されている氷の魔妖—雪女、轍の魔妖—朧車、翼の魔妖—天狗をＥＸデッキに、馬頭鬼、ヴェンデットキマイラをデッキに戻してシャッフルし、カードを1枚ドローする‼?そして、氷結せよ‼?生命を凍らすサーキット‼?」
相坂が目の前に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は魔妖モンスター2体‼?俺は氷の魔妖—雪娘と毒の魔妖—土蜘蛛をリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?リンク召喚‼?再び姿を現せ、魂を凍らせる魔性の妖‼?リンク２‼?氷の魔妖—雪女‼?」
〈氷の魔妖—雪女〉ＬＩＮＫ２　アンデット族　水属性
ＡＴＫ１９００　↙?　↘?
「氷の魔妖—雪女がリンク召喚されたことで墓地の麗の魔妖—妲姫の効果発動‼?麗の魔妖—妲姫を特殊召喚する‼?」
〈麗の魔妖—妲姫〉☆２　アンデッド族　炎属性

ＤＥＦ０

「さらに俺はチューナーモンスター、毒の魔妖―束脛を召喚!!?」

〈毒の魔妖―束脛〉☆２　アンデッド族　地属性

ＡＴＫ０

新たにフィールドに現れたのは投げ縄のようなものを持っている男性のモンスター。

そして相坂は再び正面に手をかざした。

「これで終わりにしてやろう。氷結せよ!!?生命を凍らすサーキット!!?」

相坂の目の前に再び巨大なサーキットが現れる。

「召喚条件はアンデットモンスター２体以上!!?俺は麗の魔妖―妲姫、毒の魔妖―束脛、氷の魔妖―雪女を２体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」

「っ!!?リンク４モンスター!!?」

妲姫と束脛、雪女が２体に分身してサーキットに吸い込まれていく。

そしてサーキットが光り輝くと、そこには凍り付いた薙刀を携え、成長した雪女の姿があった。

「リンク召喚!!?生命を閉ざす氷獄の妖!!?リンク４!!?零氷の魔妖―雪女!!?」

〈零氷の魔妖―雪女〉ＬＩＮＫ４　アンデット族　水属性

ＡＴＫ２９００　↙?↑↓　↘?

「リンク４の雪女……」

「零氷の魔妖―雪女がリンク召喚されたことで墓地の麗の魔妖―妲姫の効果発動!!?麗の魔妖―妲姫を特殊召喚する!!?」

〈麗の魔妖―妲姫〉☆２　アンデッド族　炎属性
ＤＥＦ０

フィールドにこのデュエルで何度目かの妲姫が姿を現わす。
その瞬間、零氷がファイアウォールＸに向けて冷たい笑みを浮かべた。
「この瞬間、零氷の魔妖―雪女の効果発動!!?コンルレラ!!?墓地からモンスターが特殊召喚された場合、または墓地のモンスターの効果が発動した場合、このカード以外のフィールドの表側表示モンスター１体を対象としてそのモンスターの攻撃力を０にし、その効果を無効にする!!?」
「攻撃力を０に固定する効果!?」
「対象は貴様のファイアウォールＸドラゴンだ!!?永遠の氷獄に眠れ、守護龍よ!!?」
零氷が薙刀を振るうと絶対零度の斬撃が放たれ、辺りを凍らせながらファイアウォールＸに向かって突き進む。
斬撃がファイアウォールＸに当たる瞬間、ファイアウォールＸは篝を俺に向かって突き飛ばした。
「えっ!?ファイアウォールＸドラゴン!?」
「っ!!?」
篝の悲痛な声が響き、突き飛ばされた篝を俺は何とか受け止める。
篝を受け止め、再びファイアウォールＸに視線を向けると、そこには完全に凍りつき、氷像に姿を変えたファイアウォールＸの姿があった。

ファイアウォールＸドラゴン
ＡＴＫ１１３００→０

「凍りつこうとも主人を守ろうとしたか……だが、無駄だ!!?貴様の主人はこれから永遠の眠りにつくのだからな!!?バトル!!?ヴェンデットバスタードでファイアウォールＸドラゴンを攻撃!!?」

バスタードが凍っているファイアウォールXを斬り飛ばし、そのまま大剣を構えて俺達の方に向かってくる。
相坂の言葉が正しければバスタードの攻撃は実体化している。
あの大剣に斬られれば間違いなく命はないだろう。
だが、逃げるわけにはいかない。
あんな化け物に篝を殺させるわけにはいかない!!?
「篝、俺の後ろにーーー」
「不知火君……ゴメンね」
篝を庇おうと動こうとした瞬間、篝が勢いよく俺の身体を突き飛ばす。
突然のことに為すすべもなく突き飛ばされた俺が見たのは申し訳なさそうに笑う篝の姿だった。
「不知火君を1番近くで支えるって約束したのに、守れそうにないや」
「かがーーー」
「愚者を斬り裂け、ヴェンデットバスタード!!?イペタム!!?」
篝のことを呼ぶ暇すらなく、バスタードの大剣が振り下ろされ、凍結した地面の上に鮮血が舞い散った。

聖夜火　LP1000→0

ーーーーーーー

「篝!!?おい!!?しっかりしろ!!?」
バスタードにその身体を斬り裂かれ、身体から大量の血を流して凍てつく地面に倒れ伏せる篝の身体を抱き抱える。
「不知火、君……ゴメン、ね……」
「謝るな!!?今デュエルディスクで緊急信号を送った!!?だから……生きるのを諦めないでくれ!!?」
「不知火君なら……分かる……ハズ、だよ?」
「分からん!!?分かってたまるか!!?」
ぼんやりとした表情を浮かべる篝に必死に話しかける。

だが、そんなことで篝の状態が良くなるわけもなく、篝の声はどんどん小さくなっていく。
「迷惑ばかり、かけて……ダメな恋人で、ゴメンね？」
「篝はダメなんかじゃない‼？篝にかけられる迷惑など、迷惑の内に入るか‼？」
「やっぱり……不知火君は、優しい……ね……だからこそ、心配だなぁ……」
「なら、お前が傍にいてくれ‼？これからも、ずっと……」
「あは、は……そう言ってくれて……すごく嬉しい……だけどーーー」
篝の手が弱々しくも最後の力を振り絞るかのようにすっと伸び、俺の顔を掴んで唇を重ねる。
「……これでおしまい……私は、ここでお別れ……」
そういうと篝の手から力が抜けていく。
「真面目なのは、あなたのいいところだけど……私に、操なんて立てないで……ちゃんと新しい恋人、作ってね……」
「お前、何言って……‼？」
「だけど、忘れられるのは寂しいから……小さな篝火程でも……覚えててくれたら、嬉しい……な……」
「忘れるわけないだろ‼？だから、そんなことを……」
俺の言葉が聞こえているのかすら怪しくなり、篝の瞳が閉じられていく。
そして完全に瞳が閉じようとした時、篝は柔らかな笑みを浮かべた気がした。
「……愛してたよ、炎君」
その言葉を最後に篝の身体から全ての力が抜け、凍てつく地面に落ちる。
「……篝？篝ッ‼？」
身体を揺すり、声をかけるがその瞳が開かれることはない。
先程まで感じていた温もりは急速に無くなっていき、嫌でも終わりを連想させる。

俺のせいだ……

相坂に感じたあの違和感を、あの闇を感じた時に無理矢理にでも篝を止めていれば……

呆然とする俺の耳に届いたのは、嘲笑うかのような忌まわしき声だった。

「クックック、逝ったか。当然の結果だが、恨むのなら類稀なる才を背負った自らの運命を呪うがいい」

「っ、貴様ぁぁぁッ‼?」

俺の中で何かが切れ、相坂に向かって走りだし勢いよく殴りかかる。

しかし、怒り任せに振るった拳を相坂は片手で受け止めた。

「邪魔だ」

「っ⁉?が……はっ⁉?」

相坂はつまらなそうに俺の拳を掴むと、そのまま俺の身体を軽々と持ち上げ、路地裏の建物の壁に向かって勢いよく叩きつけると、コンクリートでできた建物の壁にひびが入った。

コンクリートを砕く程の強い衝撃に俺の口から血が溢れ出す。

コイツ……本当に人間なのか?

だが、相手が人間だろうが人間じゃなかろうが関係ない。

「相、坂……貴様だけは……貴様だけは赦さん‼?」

「ほぅ、これ程精神と身体を傷つけた俺にまだ憎悪を抱く力があるか……面白い」

怒りに燃える俺を見て、相坂は怪しげな笑みを浮かべると、俺を篝の側に投げ飛ばす。

激痛により動けない俺に対し、相坂は懐から闇を纏った2枚のカードを取り出した。

「そこで果てた貴様の恋人のように、お前の憎悪すら俺の糧にしてやろう」

「何……?」

そういうと、相坂は俺に向けて取り出した2枚のカードを投げつける。

投げつけられた2枚のカードが俺の身体に触れた瞬間、そのカードから大量の闇が溢れ出し、俺の身体を呑み込んだ。
「ぐっ……がああああああああああ!!?ああああ、ああああああああああああ!!?」
大量の闇に呑まれ、自分の中の激情が無理矢理引き出されるかのような感覚に陥り、自分が無くなってしまうかのような感覚を味わいながら意識が急激に薄れていく。
何が起きているかは分からない。
だが、このままなら間違いなく俺が消えてしまう気がする。
……俺では、ダメなのか?
籌の無念を晴らすこともできないまま……ここで果ててしまうのか?
「俺の糧になって生き絶えるがいい。そこで果てた恋人のことすら忘れる程の燃えたぎる憎悪に呑まれ、貴様は生まれ変わる。そうすれば貴様もそこの哀れな彼女のことを忘れ、ただ無念に塗れた呪いに変わり、救われるだろう」
籌のことを、忘れる?
俺のような愚かな男を愛してくれた優しい彼女を?
「……けるな」
「ん?」
「ふざ、けるな……ふざけるな!!?」
意識が飛びそうな激痛の中、俺は闇を放っているカードを握りしめながら、身体を起こして立ち上がり相坂を睨みつける。
「何が救われるだ!!?死ねば、救われると言うのか?そんなものが、救いになるものか!!?人の想いも、愛も、死ぬ程度で消えて無くなったりするものか!!?」
「気力だけで立ち上がるか。だが、それでも結末は変わらない貴様はそこで憎悪に呑まれ俺の糧となり消えるのだ」
嘲笑う相坂を必死に睨みつけるが無情にも俺の意識は薄れていき、身体は再び地に伏せる。
強がっていても、限界は訪れる。

自分の無力さを感じ、完全に意識を手放しそうになったその時、路地裏に龍の咆哮が響き、蒼い炎のブレスが相坂に放たれた。
「っ⁉？何だと⁉？」
相坂がその場を跳びのき、蒼い炎を避ける。
俺が蒼い炎のブレスが放たれた方を見ると、籌のデュエルディスクにセットされていたカードが光り輝いており、動かなくなった籌を守るように斬り飛ばされたハズのファイアウォールXが強く相坂を睨みつけていた。
「チッ、依り代となっていた主人を失ってもまだそれ程の力を残しているか。目障りな守護龍が‼？」
相坂は身体から闇を溢れ出さし、その闇を弾丸のようにしてファイアウォールXに撃ち出す。
傷ついたファイアウォールXは避けることが出来ず、闇の弾丸を何度も受けて苦痛の咆哮をあげ、倒れ伏せて沈黙した。
「主人共々無駄な足掻きをするものだ。大人しく俺に喰われればいいものを」
そう口にしながら相坂が腕に闇を纏いながらファイアウォールXに近づいていく。
そして相坂が闇を纏った腕をファイアウォールXに振るおうとした瞬間、ファイアウォールXは顔を起こし、相坂に向けてブレスを放った。
「何⁉？がああああっ‼？」
躱しきれず、至近距離でブレスを受けた相坂が吹き飛ばされる。
何が起きているかは分からないが、これならば奴も……
そう思い、相坂が吹き飛ばされた方を見るが、そこには息を切らしながらも、血走った目でファイアウォールXを睨みつける相坂がいた。
「守護龍……依り代を用いなければ顕現すらできない精霊風情が俺を傷付けやがって‼？貴様だけはここでーーー」
そういって相坂が一歩を踏み出そうとしたところで、遠くからサイレンの音が聞こえてきた。

その音を聞き、相坂が苛立だしそうに舌打ちをした。
「チッ、デュエルセキュリティか……普段なら非力な人間など殺してやればいいだけだが、守護龍とやり合った隙を突かれれば面倒だ……いいだろう、見逃してやろう、守護龍よ。だが、この痛みを俺は忘れん……いつか必ず、貴様を喰らってやる」
「っ、待て‼?」
相坂は忌々しげにファイアウォールXを睨みつけると走り去って夜の闇の中に消えていく。
逃げられた……籌の仇に。
「クソっ……籌……」
俺は闇に呑まれた身体に鞭を打ち、身体を起こすと、動かなくなった籌の身体を抱き上げる。
「すまない……籌……君の仇を、討てなかった……そして、俺ももう……」
闇の中に自分が融けていくのが分かる。
この闇に完全に融けた時、俺はどうなってしまうのだろうか?
……いや、もうそれもどうでもいいことだ。
籌を失った俺には、もう生きる気力も残っていないのだから。
「籌……直ぐにそちらに行く……だから……」
そこまで口にしたところで再び俺の耳に龍の咆哮が響く。
「ファイアウォールXドラゴン?」
いつのまにか俺達の近くに立っていたファイアウォールXの身体が淡い光を纏い、力を振り絞るかのように咆哮をあげる。
すると、俺の身体がファイアウォールXと同じように淡い光を纏い、先程まで身体を包み込んでいた闇が、相坂が投げつけたカードの中へと戻っていった。
「っ‼?これ、は……あの闇を、弾いたのか?」
闇に呑まれていた時の嫌な感覚は俺の身体から消えていた。
俺を包んでいた闇が完全に無くなると、ファイアウォールXが空気に溶けるように消えていき、光り輝いていた籌のカードが光を失った。

俺が思わずそのカードを手に取ると、そこに描かれていたのは……

「ファイアウォールドラゴン……だと？」

そこに描かれていたのはファイアウォールXドラゴンではなく、ファイアウォールXドラゴンに似た白い龍が描かれているリンクモンスターだった。

相坂はファイアウォールXのことを守護龍だと呼んでいた。

きっと、ファイアウォールXはそう呼ばれる程の力を秘めていたのだろう。

そしてファイアウォールXはその力を行使し、俺をあの闇から守ったのだろう。

ファイアウォールが守ってくれたからこそ、俺は生き残ることができた。

しかしーーー

「何故だ……ファイアウォールドラゴン……何故、それ程の力を持ちながら、篝を助けなかった!!？」

ーーーだからこそ、俺はファイアウォールを赦せなかった。

「何故、俺を助けたその力を篝に使わなかった!!？その力があれば、篝を救うことができたハズだ!!？何故だ!!？」

俺の声にファイアウォールは応えない。

それが余計に俺を苛立たせる。

「相坂はお前を狙っていた!!？確かに直接篝を殺したのは相坂だ!!？だが、お前がいなければ、篝が相坂に狙われることもなかったハズだ!!？篝を救わなかったお前を、俺は赦さない!!？」

自分でも分かっている。

こんなものは八つ当たりに過ぎないと、救って貰えてまだ求めるのかと。

だが、それでも……

「俺は……生きていて欲しかった……俺の命よりも、篝の命を優先して欲しかった……」

そこまで口にしたところで気力も使い果たしたのか、身体に限界が

訪れる。
　薄れゆく意識の中、最後に俺は篝の手を握る。
「すまない、篝……いつか必ず、お前に逢いに行く……だから、もう少しだけ待っていてくれ……」
　やることは決まっている。
　それを篝が望まないであろうことも分かっている。
　それを口にすれば、俺はもう後戻りはできないことも分かっている。
　それでも、俺は必ず成し遂げる。
「必ず果たす……お前を奪った相坂への……復讐を!!?」

ーーーーーーー

●　桜ｓｉｄｏ

「次に目が覚めたのは全てが終わった後の病院のベッドの上だった。デュエルセキュリティの事情聴取を受け、相坂を探して貰ったが、奴は既に『Ｓｃｈｏｐｆｅｒ』を後にし、行方不明になっていた。まあ、見つけたところで闇のカードをオカルトだと切って捨てるデュエルセキュリティに奴を捕らえることができるとは思えないが……だが、奴は必ずまだこの街にいる。奴が俺を取り込もうとして渡してきたリヴェンデットスレイヤーと、この街で度々ばら撒かれているヴェンデットカードがそれを示している」
　淡々とそう告げる炎さんに、私は何て言葉をかければいいのか分からなくなる。
　大切な恋人を闇のカードによって失った。
　その事実はどれだけこの人に深い傷を与えているのだろう？
「これが、闇のカードに関わったものの末路だ。現に結束は生死の境を彷徨った。それが今度は君に降りかかるかも知れない。特に悪いのが君はファイアーウォールドラゴンは手にしてしまったことだ。あの男はファイアーウォールドラゴンを守護龍と呼び、狙っていた。

現在の所有者である君を、必ずあの男は狙ってくるだろう」
「……色々と質問があるんだけど、まず、何でファイアーウォールドラゴンは『Ｎａｔｕｒａｌ』にあったの？このカードは元々篝さんのカードなのよね？」
　私は自分のデッキからファイアーウォールのカードを取り出し、炎さんに見せる。
　炎さんは感情を必死に押し殺したかのような目でファイアーウォールを見て口を開いた。
「……君達には告げていなかったし、結束も気づいてはいないだろうが、『Ｎａｔｕｒａｌ』はカード達の牢獄だ。あの店には、曰く付きとも言える様々なカードが集められ、封印されている」
「カード達の……牢獄？」
「いつからしているかは分からないが、島さんはそういうカード達が出回ることを防ぐ番人をしているらしい。そしてその中でカードが選び、島さんがそのカードを使うに相応しいと認めた人間にのみ、その封印は外され、与えられる」
「私が、ファイアーウォールドラゴンに選ばれたってこと？」
「……恐らく、君には才能があるのだろう。篝のように、カードの精霊に好かれるような才能がな」
　そう口にする炎さんの表情は険しい。
　何故ならそれは、私が篝さんのようなことに見舞われる可能性を示しているからだ。
「最初は転生炎獣のようにファイアーウォールドラゴンも俺の手元に残しておこうと考えた。奴はこのカードを狙っていた。手元にあれば、奴はファイアーウォールドラゴンを狙って現れると考えたからだ。それに待ったをかけたのが島さんだ」
「島さんが？」
「……奴と再び見えることになれば、どちらかが死ぬ可能性が高い。だから、世話になった島さんにも話を通しておこうと考えた、遺言みたいなものだ。そこで島さんは『Ｎａｔｕｒａｌ』の秘密を教えてくれた。そしてファイアーウォールドラゴンを来るべき日まで封印す

ることを提案してくれたんだ」
「来るべき日っていうのは、私みたいな所持者が現れる日までってこと？」
「いや……俺が奴を滅ぼせる力を手に入れるまで、だ」
「っ⁉？」
　炎さんの言葉に、私は息がつまる。
　だって、それは……
「俺は奴に対抗するために闇のカードを求めた。最初の頃は暴走し、冬城に止めて貰いながら、闇のカードに適応していった。そうして十分過ぎる力を手にし、近々ファイアーウォールドラゴンを受け取ろうと思ったところで……」
「私がファイアーウォールドラゴンに選ばれてしまった、ってわけね」
　私の言葉に炎さんは頷く。
　ファイアーウォールに選ばれてしまった私という存在。
　それはきっと炎さんをかなり動揺させてしまっただろう。
「なら、私を弟子にしたのはファイアーウォールドラゴンに選ばれた私を監視するためってわけね」
「……ああ、そうだ。ファイアーウォールドラゴンに選ばれた君を餌に奴を誘き寄せるつもりだった」
　私の言葉に、炎さんは感情を隠したような目で淡々と告げる。
「ふふっ」
「何がおかしい？」
　私はその様子に、思わず笑ってしまった。
　私を訝しげに見つめる炎さんに私ははっきりと口にする。
「嘘はつかなくてもいいわよ」
「……何のことだ？俺は君を利用しようと……」
「別に、そういうのいいから。勿論、まるっきり嘘ってわけじゃないんだろうけど、ここまでの話を聞いてそれが嘘だって分からないわけないわ。だって……」
　必死に感情を押し殺そうとする炎さんに私は柔らかい笑みを浮かべてその言葉を口に出す。

「例え接点が少なかったとしても、炎さんが大切な人を失う苦しみを、誰かに押し付けるわけがないじゃない」
「っ‼?」
「だから、嘘なんてつかなくていいわ。正直まだ混乱してるし、分からないことだらけだけど、炎さんのことは信頼してるから」
私の言葉に炎さんは心底驚いた表情を浮かべ、申し訳なさそうに目を伏せた。
「……すまない」
「別にいいわよ。そんな冷酷な判断を下さなければならない程、炎さんにとって篝さんとの思い出は大切だってだけの話じゃない。とはいえ、知りたいことはまだまだ沢山あるから、それは話して貰うけどね」
「……ああ、俺に話せることならーーー」
そこまで言ったところで、炎さんの携帯端末が震える。
炎さんはそれを一瞥すると、こちらに頭を下げてから携帯端末に出た。
「冬城か?どうした……何?」
どうやら着信相手は闇のようだ。
だけど、どこか炎さんの様子が険しい。
「……分かった、天羽にも連絡を入れ直ぐに向かう。冬城はそこで待機していてくれ」
そこで炎さんは携帯端末をきり、申し訳なさそうに頭を下げた。
「すまない、話の途中だったが急用ができた。俺達は冬城がいる会場に向かわなければならない。申し訳ないが……」
「話はまた今度、遊騎の守りは任せるってわけね。分かったわ、何があったかは分からないけど、闇のところに言ってあげて」
「本当にすまない、結束を頼む。そして……くれぐれも気をつけてくれ」
「ええ、勿論よ」
私の返事を聞くと、炎さんは凄い勢いで病室を出て行った。
何があったかは分からないけど、とりあえずは……

『よく頑張ったわね、桜。その演技力があれば女優にだってなれるんじゃない？』
「お見通しってわけ？」
『平然としているように見えて、微かに震えてるんだもの。まあ、当然の反応だとは思うけど。ただの少女である貴方が、自分の命を狙われてるかも知れないんだから』
　そんなカグヤの言葉を聞きながら、私は病室の床に座り込み、震える自分の身体を抱き締めた。
「私も……狙われるわよね、きっと」
『そうなるでしょうね、貴方が所持しているファイアーウォールドラゴンはかなり強力な精霊みたいよ。桜にはまだ完全に繋がってないみたいだけど』
「何で、私なんかが選ばれるのよ……私なんて、ただの無力な人間なのに……」
『……』
　私の言葉にカグヤは応えない。
　それは分からないからか、それとも言えない何かがあるのか。
　怖い……こんなに怖いのは異世界でデュエルをした時以来だ。
　だけど、それでも、私は……
「どうすればいいのよ……私は……」
　そんな弱音が私の口から漏れた瞬間ーーー
「クックック、アッハハハハ‼？見つけたぞ、『墜ちた英雄』‼？」
「っ⁉？この声って……」
　突然病室に響いた妙な声に私が声の聞こえた方を見ると、そこにいたのは黒い日傘を差し、マントを羽織った人物。
「真紅⁉？」
「ん？ああ、貴様か『壊獣姫』」
　行方不明になっていた後輩、眼竜　真紅がそこにいた。
ーーーーーーー

★

「ふう、終わったぁ……」
「自分のだけじゃなく、遊騎君のデッキも含めた再構築、お疲れ様なのです、遊花ちゃん!!?」
「あ、ありがとうございます、リーネさん」
何とか自分と師匠の分のデッキを組み上げた私の頭をリーネさんが優しく撫でる。
上手くできたかは分からないけど、自分の考えつく全てを積み込めたハズ。
師匠にも、喜んで貰えればいいんだけど……
「それじゃあ早速試してみるですか?」
そういってリーネさんが自分のデュエルディスクを起動しようとした瞬間、リーネさんの携帯端末が鳴り出した。
「およよ?炎君なのです?」
「不知火さんから、ですか?」
「ちょっと失礼するのです。もしもし、炎君なのです?何かあったのです?……えっ!?」
リーネさんが不知火さんと何らかの会話を交わし、驚いたように目を見開く。
そして直ぐに真剣な表情を浮かべて、端末越しの炎さんに応えた。
「……分かったのです!!?今すぐそちらに向かうのです!!?」
そこでリーネさんは携帯端末をきり、申し訳なさそうな表情を浮かべた。
「ごめんなさいなのです。リーネも炎君も急用ができて、闇ちゃんがいる会場に向かわないと行けなくなったのです」
「何かあったんですか?」
「まだ確証が得られてるわけではないので、ここでは語らないですが、あまり良くないことなのは間違いないのです。だからごめんなさいなのですが、遊花ちゃんには遊騎君がいる病院に急いで戻って貰いたいのです」

「炎さんも行かないといけないなら病院に桜ちゃんだけになっちゃいますもんね、分かりました。すぐに病院に戻ります」
「お願いするのです‼?それじゃあ、遊花ちゃんまたなのです‼?島さんもバタバタしちゃって申し訳ないのです‼?また来るのです‼?」
「気にしなくてもいいよ。急ぎの用事何だろう?また余裕がある時においで」
「はい、なのです‼?それじゃあ天羽　リーネ、行ってくるのです‼?」
　そういうと凄い勢いでリーネさんが『Ｎａｔｕｒａｌ』を出て行った。
　本当に何があったんだろう?
　だけど、とりあえず今は私にできることをやるしかないよね?
「それじゃあ島さん、私も師匠のいる病院に戻ります。色々とお世話になりました」
「どういたしまして。おっと忘れるところだったよ」
　そういうと島さんはカウンターに置いてあった箱の中から数枚のカードを取り出して私に手渡す。
　そのカードから一瞬闇が漏れたような気がしたが、直ぐに収まった。
「遊騎君から預かっていたＮｏ．とＲＵＭだ。遊花君から遊騎君に返して欲しい」
「師匠の……分かりました‼?受け取ります‼?それじゃあ、失礼します‼?」
「ああ、また来てね」
　島さんから受け取ったカードを師匠の新しいデュエルディスクにセットしてあった加え、『Ｎａｔｕｒａｌ』を出る。
　さあ、急いで病院に戻らないと‼?
　そう思って走り出そうとした瞬間ーーー
「見つけました」
「えっ⁉?」

どこかで聞いた覚えのある声が聞こえてきて、そちらを振り向く。
そこにいたのは黒髪をクラシカルストレートにした少女。
「刀花ちゃん⁉?」
行方不明になっていたハズの刀花ちゃんの姿が、そこにあった。

ーーーーーーー

●　桜ｓｉｄｏ

「真紅‼?アンタ、今までどこに行って……‼?」
『ダメよ、桜』
「カグヤ?」
真紅に近づこうとした私をカグヤが真剣な声で止める。
訝しげな表情を浮かべる私を見て、真紅は不敵に笑う。
「そこを退け、『壊獣姫』。我が用があるのはそこで床に伏せている『墜ちた英雄』だ」
「遊騎に?」
「そうだ。そいつは我を侮った。だからこそ、我は正面しなければならない、我の力をな」
遊騎が真紅を侮った?
遊騎が真紅にあったのは、真紅が行方不明になったあの日だけだ。
あの時の会話を思い返してみるが、遊騎が真紅を侮るような発言をしたことに覚えがない。
……何かがおかしい。
そもそも真紅は行方不明になっていた。
なのに、それに関する発言はなく、遊騎を狙っている。
「っ‼?まさか、アンタ……‼?」
「『墜ちた英雄』を倒して証明する‼?我には力があることをな‼?邪魔をするなら、まずは貴様から倒してやろう、『壊獣姫』‼?」
その言葉と同時に、真紅はデュエルディスクを起動する。
そしてその身体からは、大量の闇が溢れ出した。

「っ、やっぱり、よりにもよって……!?」
間違いない、真紅は闇のカードに操られている。
炎さんが出て行き、遊花とリーネさんも帰ってきていないこの状況。
遊騎を守れるのは闇のカードに対抗する手段がない私のみ。
最悪の状況が、目の前にあった。

ーーーーーーー

★

「刀花ちゃん!?よかった、無事で!?」
行方不明であった刀花ちゃんが見つかったことに、私はほっとして刀花ちゃんに声をかける。
そんな私を見て、刀花ちゃんは怪しい笑みを浮かべた。
「私もよかったです、栗原先輩が見つかって。真紅ちゃんの覇道に、栗原先輩は邪魔ですから」
「えっ?刀花、ちゃん?」
刀花ちゃんの口から飛び出した言葉に、私は困惑し、後退る。
刀花ちゃんの様子がおかしい。
この言動、視線に籠る敵意。
「っ、まさか!?」
「私の親友の夢を叶えるために……栗原先輩には消えてもらわないと」
そんな言葉と共に刀花ちゃんはデュエルディスクを起動する。
そしてその身体からは、大量の闇が溢れ出した。
「そんな、刀花ちゃん!?」
「さあ、私とデュエルをしましょう、栗原先輩。私とデュエル、したがってましたもんね?」
そういって刀花ちゃんは身体から闇を溢れ出させながら不気味に笑う。

完全に闇のカードに操られてる。
直ぐにデュエルをして解放してあげたいけど……
私はチラリと周りを見る。
ここは街中。
辺りには通行人も沢山いる。
ここでデュエルをして闇のカードによって攻撃が実体化したらどれだけの被害がでるか分からない。
なら……
「戦略的撤退です!!?」
「っ!??待ってください!!?」
私は近くの路地裏に全力で駆け込むと、刀花ちゃんも苛立った様子で私を追ってくる。
とりあえず、少しでも人がいない場所に誘導しないと……後は!!?
私はぐねぐねと路地裏を走りながら携帯端末を操作して、桜ちゃんに向けて発信する。
しばらくのコールの後、端末越しに桜ちゃんの焦ったような声が聞こえてきた。
『もしもし、遊花!!?』
「桜ちゃん!!こっちに?闇のカードに操られた刀花ちゃんが!!?」
『っ!!?そっちには刀花が来たのね!!?こっちにも闇のカードに操られてる真紅が来たわ!!?遊騎を狙って!!?』
「真紅ちゃんが!?」
『とりあえず隙を突いて掌底を当てて病室の外に弾き飛ばしたんだけ、ど!!?っ、危ないわ、ね!!?』
「桜ちゃん!?大丈夫!?」
携帯端末越しに風を切るような凄い音が聞こえてくる。
一体何が起こってるの!?
『ごめん、あまり余裕ない!!?とりあえずその攻撃で私の方を先に片付けるようにしたみたいよ。なんか闇を纏ったカードを投げながら追ってきてる!!?カードは手裏剣じゃないっての!!?とりあえず人

気がなさそうな屋上まで誘導して見るわ‼?人がいる下よりかはマシだわ‼?』
「えっ⁉?だけど、屋上じゃ逃げ場が……」
『どの道、デュエルしない限り解決しないでしょ?私が真紅の相手をする』
「でも、桜ちゃんは闇のカードをどうにかする手段が……」
そう、桜ちゃんには闇のカードに対抗する手段がない。
ただのデュエルで闇のカードに操られている真紅ちゃんをどうにかすることなんて……
『遊花‼?』
「っ‼?」
そんな考えが頭によぎった瞬間、端末越しに桜ちゃんの力強い声が聞こえてきた。
『私を信じなさい‼?』
そんな桜ちゃんの言葉に、私は……
「……うん、信じる」
全幅の信頼を持ってそう応える。
本当に、桜ちゃんが闇のカードをどうにかする手段があるかは分からない。
だけど、覚悟を決めた親友を信じられず、誰が信じられるというのか。
そんな言葉と同時に、私は路地裏にある少し開けた場所に出る。
ここなら、誰もいない。
私はそこで足を止めて追ってくる刀花ちゃんを見つめる。
それと同時に端末越しに桜が立ち止まる音が聞こえた。
恐らく屋上に着いたのだろう。
『遊花』
携帯端末から桜ちゃんの声が聞こえる。
『……正直言うとね、少し怖いわ。私は、特別な力は持たないただの人間だもの。だけど……困っている親友や後輩、こんな私に目をかけてくれる人達を守りたい……だから……』

そこで1度言葉が途切れーーー
『真紅は私が助ける。だから、刀花を助けるのは任せたわよ、遊花(親友)』
ーーー確かな信頼が込められた言葉が聞こえた。
そんな桜ちゃんに、私も確かな信頼を込めた言葉で応える。
「任せて、桜ちゃん(親友)」
そう応えて携帯端末を切るのと同時に、刀花ちゃんが私に追いつき止まった。
「鬼ごっこは終わりですか？」
「うん、おしまいだよ。ここなら、周りを気にする必要もないから」
「随分な自信ですね、私に勝つつもりなんですか？」
「私は、負けるつもりでデュエルをしたことはないよ」
そういって私はデュエルディスクを起動する。
「ならば、直ぐに地面に這いつくばらせてあげましょう。私の新しい力で‼？」
「直ぐに助けてあげるからね、刀花ちゃん‼？」
『決闘‼？』

遊花　ＬＰ８０００
刀花　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

●　桜ｓｉｄｏ

『それで、かっこ良く啖呵を切ったところで勝算はあるのかしら、桜？』
遊花との通話が切れたところでカグヤが私に語りかけてくる。
そんなカグヤに、私は苦笑を浮かべた。
「無いわよ、そんなの。少なくとも、今の私には」
『……へぇ、そういうこと。大博打を打つつもりってわけね』
私の言葉に、カグヤは面白そうに笑う。

そう、今の私には闇のカードをどうにかする手段はない。
だけど、炎さんの話を聞いた私には1つだけ、僅かな可能性が残っている。
炎さんの話では闇のカードに取り込まれかけた炎さんをファイアーウォールが助けた。
カグヤの言葉から、私が手にしているファイアーウォールは強力な力を有している。
なら、ファイアーウォールの力を私が引き出すことができれば……真紅を救う可能性も見いだせるかもしれない。
ただし、それは本当に博打としか呼べない一手だ。
少なくとも今の私にファイアーウォールの力を引き出すことなんてできていないし、今のファイアーウォールが本当にそんな力を秘めているかも未知。
全ては希望的観測でしかない。
それでも、私は退くわけにはいかない。
屋上の扉が開き、真紅が私の前に立つ
「鬼ごっこは終わりか？」
「ええ。ここなら、何も気にせずにアンタをぶん殴れる」
「随分な自信だな」
「アンタこそ、私に勝てるなんて思わないことね。最初に言っておくけど、私はかなり強いわよ？」
そういって私はデュエルディスクを起動する。
「ならば、我の新たな力をその身に刻み、跪くがいい‼？」
「アンタを包むその闇、全てぶっ壊してあげるわ‼？」
『決闘‼？』

桜　ＬＰ８０００
真紅　ＬＰ８０００

第８３話　親愛の天秤

★

遊花　ＬＰ８０００
刀花　ＬＰ８０００

「先攻は私です。まずは永続魔法、サイバネットコーデックを発動。そして、ガベージコレクターを召喚します」

〈ガベージコレクター〉☆２　サイバース族　風属性
ＡＴＫ１００

現れたのはゴミ箱のような姿をしたモンスター。
「さらに１ターンに１度、自分フィールドにサイバース族モンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できます。来てください、バックアップセクレタリー」

〈バックアップセクレタリー〉☆３　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１２００

ガベージコレクターの近くに電子的な外見をした秘書のモンスターが現れる。
「ガベージコレクターの効果発動。同名カードは１ターンに１度、このカード以外の自分フィールドのサイバース族モンスター１体を持ち主の手札に戻し、手札に戻ったモンスターと同じレベルでカード名が異なるサイバース族モンスター１体をデッキから特殊召喚します。私はバックアップセクレタリーを手札に戻してデッキからフレイムバッファローを特殊召喚します」

〈フレイムバッファロー〉☆３　サイバース族　炎属性

ＡＴＫ１４００

セクレタリーの姿がデータに変わってガベージコレクターに吸い込まれ、代わりに青い炎を纏ったバッファローが現れる。
「現れて、未来を描くサーキット」
「リンク召喚」
刀花ちゃんの正面に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は効果モンスター２体。私はガベージコレクターとフレイムバッファローをリンクマーカーにセット、サーキットコンバイン。リンク召喚。戦場を掛ける電子の雑兵、リンク２、コードトーカー」

〈コードトーカー〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１３００　→←

サーキットから現れたのは無色の鎧を纏う騎士。
「出てきたね、刀花ちゃんのリンクモンスター……コードトーカー……っ⁉？」
刀花ちゃんが出したコードトーカーを見てそう呟くと、呟いた言葉に反応してか私のＥＸデッキから自己主張をするように淡い闇が溢れ始める。
多分、この闇を出しているのはさっき島さんから貰ったカード。
あなたはコードトーカーを知っているの？
私がそんな疑問を抱いている間に、刀花ちゃんは淡々とデュエルを進めていく。
「この瞬間、永続魔法、サイバネットコーデックの効果、それにチェーンしてフレイムバッファローの効果発動。表側表示のこのカードがフィールドから離れた場合、手札からサイバース族モンスター１体を捨て、自分はデッキから２枚ドローします。私はバックアップセクレタリーを捨ててカードを２枚ドロー。さらに永続魔法、サイバネットコーデックの効果発動。コードトーカーモンスターがＥＸデッキから自分フィールドに特殊召喚された場合、そのモンスター１体を対象

としてそのモンスターと同じ属性のサイバース族モンスター1体をデッキから手札に加えます。ただし、このターン、同じ属性のモンスターを自分のサイバネットコーデックの効果で手札に加える事はできず、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はサイバース族モンスターしかＥＸデッキから特殊召喚できません。さらにこのカード名の効果は同一チェーン上では1度しか発動できません。サイバネットコーデックの効果でデッキから闇属性のサイバース族モンスター、マイクロコーダーを手札に加えます。まだまだ行きます。現れて、未来を描くサーキット」

「またリンク召喚ですか……」

「召喚条件はサイバース族モンスター2体以上。この瞬間、手札のマイクロコーダーの効果発動。同名カードは1ターンに1度、自分フィールドのサイバース族モンスターをコードトーカーモンスターのリンク素材とする場合、手札のこのカードもリンク素材にできます」

「手札からリンク素材にできるモンスター……」

「私は手札のマイクロコーダーとコードトーカーを2体分として扱ってリンクマーカーにセット、サーキットコンバイン」

刀花ちゃんの手札からコードトーカーを更に小さくしたような騎士が、フィールドからコードトーカーが2体に分身してサーキットに吸い込まれる。

そしてサーキットが輝くと中から現れたのは巨大な盾を持つ透き通った水色の鎧を纏った騎士。

「リンク召喚。敗北をねじ伏せる守護騎士。リンク3、エンコードトーカー」

〈エンコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　光属性

ＡＴＫ２３００　→←↘?

「今度は光属性のコードトーカーですか」

「再び永続魔法、サイバネットコーデックの効果、それにチェーンして

マイクロコーダーの効果発動。同名カードは1ターンに1度、コードトーカーモンスターのリンク素材として手札・フィールドから墓地へ送られた場合、デッキからサイバネット魔法・罠カード1枚を手札に加え、フィールドのこのカードを素材とした場合にはその1枚をサイバース族・レベル4モンスター1体にできます。私はデッキから永続魔法、サイバネットオプティマイズを手札に加えます。さらにサイバネットコーデックの効果でデッキから光属性のサイバース族モンスター、サイバースガジェットを手札に加えます」

「相変わらず連続リンク召喚をしてるハズなのに手札が減らないね……」

「私は今手札に加えた永続魔法、サイバネットオプティマイズを発動し、その効果を発動。同名カードは1ターンに1度、自分メインフェイズにサイバース族モンスター1体を召喚します。ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はサイバース族モンスターしかEXデッキから特殊召喚できません。私はバランサーロードを召喚します」

〈バランサーロード〉☆4　サイバース族　光属性
ATK1700

現れたのはデータの身体を持つ戦士のモンスター。

「バランサーロードの効果発動。1ターンに1度、ライフポイントを1000払ってこのターン自分は通常召喚に加えて1度だけ、自分メインフェイズにサイバース族モンスター1体を召喚できます。私はライフポイントを1000払って、サイバースガジェットを召喚します」

刀花　LP8000→7000

〈サイバースガジェット〉☆4　サイバース族　光属性
ATK1400

現れたのは頭にガジェットをつけたロボットのモンスター。
「サイバースガジェットの効果発動。このカードが召喚に成功した時、自分の墓地のレベル２以下のモンスター１体を対象としてそのモンスターを守備表示で特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化されます。戻って来てください、マイクロコーダー」

〈マイクロコーダー〉☆１　サイバース族　闇属性
ＤＥＦ０

フィールドにマイクロコーダーが呼び戻される。
これはまだまだ止まりそうにない。
「現れて、未来を描くサーキット。召喚条件は効果モンスター２体以上。私はバランサーロード、サイバースガジェット、マイクロコーダーをリンクマーカーにセット、サーキットコンバイン」
バランサーロード、サイバースガジェット、マイクロコーダーがサーキットに吸い込まれる。
そしてサーキットが輝くと中から現れたのは巨大な銃を持つ橙色の鎧を纏った騎士。
「リンク召喚。騎士達を束ねる総督。リンク３、トランスコードトーカー」

〈トランスコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　地属性
ＡＴＫ２３００　→←↓

「次は地属性のコードトーカーですか」
「再び永続魔法、サイバネットコードデックの効果、それにチェーンしてサイバースガジェットの効果発動。同名カードは１ターンに１度、このカードがフィールドから墓地へ送られた場合、自分フィールドサイバース族、光属性、レベル２、攻撃力守備力０のガジェットトークン

１体を特殊召喚します。来てください、ガジェットトークン」

〈ガジェットトークン〉☆２　サイバース族　地属性
ＤＥＦ０

刀花ちゃんのフィールドにサイバースガジェットが頭につけていたガジェットが現れる。

「さらにサイバネットコードデックの効果でデッキから地属性のサイバース族モンスター、コードジェネレーターを手札に加えます。そしてトランスコードトーカーの永続効果、ディンジィオーダー。このカードが相互リンク状態の場合、このカード及びこのカードの相互リンク先のモンスターの攻撃力は５００ポイントアップし、相手の効果の対象になりません」

トランスコードトーカー
ＡＴＫ２３００→２８００

エンコードトーカー
ＡＴＫ２３００→２８００

「更にトランスコードトーカーの効果発動。ネクロポーテンス。同名カードは１ターンに１度、トランスコードトーカー以外の自分の墓地のリンク３以下のサイバース族リンクモンスター１体を対象としてそのモンスターをこのカードのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚する。ただし、この効果を発動するターン、自分はサイバース族モンスターしか特殊召喚できません。戻って来てください、コードトーカー」

〈コードトーカー〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１３００　→←

再びフィールドにコードトーカーが舞い戻る。
「現れて、未来を描くサーキット」
刀花ちゃんの正面に現れるのはこのターン４回目のサーキット。
「召喚条件はサイバース族モンスター2体以上。私はガジェットトークン、コードトーカーを2体分として扱ってリンクマーカーにセット、サーキットコンバイン」
ガジェットトークンとコードトーカーが2体に分身してサーキットに吸い込まれる。
そしてサーキットが輝くと中から現れたのは巨大な緑色の鎧を纏った魔導騎士。
「リンク召喚。希望を閉ざす絶望の騎士。リンク3、エクスコードトーカー」

〈エクスコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　風属性
ＡＴＫ２３００↓２８００　↑→↓

「今度は風属性のコードトーカー……」
「永続魔法、サイバネットコーデックの効果、それにチェーンしてエクスコードトーカーの効果発動、クローズホープ。このカードがリンク召喚に成功した時、ＥＸモンスターゾーンのモンスターの数だけ、使用していないメインモンスターゾーンを指定して指定したゾーンはこのモンスターが表側表示で存在する間は使用できません。私が指定するのはエンコードトーカーの正面、エンコードトーカーのリンクマーカーが向いているゾーンを指定します」
エクスコードがエンコードの正面にある私のゾーンに重力場を放ち、エンコードの正面のゾーンを消失させた。
エンコードのリンクマーカー先へのＥＸデッキからの特殊召喚を封じてきた。
やっぱり刀花ちゃんの狙いは……
「サイバネットコーデックの効果でデッキから風属性のサイバース族モンスター、リンクインフライヤーを手札に加えます。エクスコード

トーカーの永続効果、デュアルリストレント。このカードのリンク先のモンスターは、攻撃力が５００ポイントアップし、効果では破壊されません」

トランスコードトーカー
ＡＴＫ２８００→３３００

「そしてこのカードはフィールドのリンクモンスターのリンク先となる自分フィールドに手札から特殊召喚できます。来てください、リンクインフライヤー」

〈リンクインフライヤー〉☆２　サイバース族　風属性
ＤＥＦ１８００

フィールドに現れたのは小さな凧のモンスター。

「現れて、未来を描くサーキット」

「まだ止まらないよね……」

「召喚条件はサイバース族モンスター２体。この瞬間、手札のコードジェネレーターの効果発動。同名カードは１ターンに１度、自分フィールドのサイバース族モンスターをコードトーカーモンスターのリンク素材とする場合、手札のこのカードもリンク素材にできます」

「また手札からリンク素材にできるモンスター……」

「私はリンクインフライヤーとコードジェネレーターをリンクマーカーにセット、サーキットコンバイン。リンク召喚。終局を告げる電子の雑兵。リンク２、コードトーカーインヴァート」

〈コードトーカーインヴァート〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１３００→１８００　↑→

サーキットから現れたのはコードトーカーに似た白銀の鎧を纏う

騎士。
「コードトーカーインヴァートの効果、それにチェーンしてコードジェネレーターの効果発動。このカードがコードトーカーモンスターのリンク素材として手札・フィールドから墓地へ送られた場合、デッキから攻撃力１２００以下のサイバース族モンスター１体を墓地へ送り、そしてフィールドのこのカードを素材とした場合には墓地へ送らず手札に加える事もできます。私はデッキからシーアーカイバーを墓地へ送ります。そしてコードトーカーインヴァートの効果発動。このカードがリンク召喚に成功した場合に、手札からサイバース族モンスター１体をこのカードのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚します。来てください、ドングルドングリ」

〈ドングルドングリ〉☆１　サイバース族　闇属性
ＤＥＦ０

インヴァートに導かれフィールドに現れたのはＵＳＢコネクタにドングリがくっ付いているようなモンスター。
「ドングルドングリの効果発動。このカードが特殊召喚に成功した場合、自分フィールドにサイバース族・闇属性・レベル１・攻撃力守備力０のドングルトークン１体を特殊召喚します。来てください、ドングルトークン」

〈ドングルトークン〉☆１　サイバース族　闇属性
ＤＥＦ０

ドングルドングリがＵＳＢコネクタから外れりと、ＵＳＢコネクタがそのままトークンとしてモンスターに変わる。
ここまでくれば、この後の流れは確定する。
「現れて、未来を描くサーキット」
刀花ちゃんの正面に現れるのはこのターン６回目のサーキット。
「召喚条件はサイバース族モンスター２体以上!!?私はドングルトー

クン、コードトーカーインヴァートを2体分として扱ってリンクマーカーにセット、サーキットコンバイン」
ドングルトークンとインヴァート2体に分身してサーキットに吸い込まれる。
そしてフィールドに現れたのは青い鎧を身に着けた弓兵の騎士。
「リンク召喚。星をも撃ち落とす弓兵。リンク3、シューティングコードトーカー」

〈シューティングコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　水属性
ＡＴＫ２３００↓２８００　↑→←

「永続魔法、サイバネットコードデックの効果でデッキから水属性のサイバース族モンスター、コードラジエーターを手札に加えます。仕上げです。現れて、未来を描くサーキット」
刀花ちゃんの正面にこのターン最後であろうサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル2以下のサイバース族モンスター1体。私はドングルドングリをリンクマーカーにセット、サーキットコンバイン。リンク召喚。リンク1、トークバックランサー」

〈トークバックランサー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１２００　←

もう1つのエクストラモンスターゾーンに緑と青の鎧を着た槍兵が現れる。
これで、刀花ちゃんのモンスターは全て相互リンクで繋がった。
「やっぱり、1ターン目からのエクストラリンク!!?」
「エクスコードトーカーの効果によりエンコードトーカーのリンクマーカーが向いているゾーンは使用できなくなっています。これで栗原先輩はＥＸデッキからモンスターを出すことができません。レベル1モンスターが主体の栗原先輩のデッキでは私のエクストラリ

ンクを突破することはできません。さらに永続魔法、サイバネットオプティマイズには自分のコードトーカーモンスターが戦闘を行う場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠・モンスターの効果を発動できなくなります。栗原先輩の防御カードも、このカードの前では無力です。次の私のターンに確実な敗北を与え、地面に這いつくばらせてあげましょう。私はこのままターンエンドです」

遊花　ＬＰ８０００　手札５
ーーーーーー　ー
ー??ーーー
☆　☆
ー☆☆☆ー
ーー△△ー　ー
刀花　ＬＰ７０００　手札３

１ターン目からのエクストラリンク。
だけど、それを成し遂げてもそこには前に桜ちゃんとデュエルしていた時のような楽しそうな笑顔はなく、どこか機械的で虚ろな無感情さを感じてしまう。
私がデュエルをしたかったのはこんな刀花ちゃんじゃない。
私がデュエルをしたかったのは、桜ちゃん相手にも一歩も退かず楽しそうに笑っていたあの刀花ちゃんなのだ。
だから、刀花ちゃんのあの楽しそうな笑顔を必ず取り戻してみせる‼?
「私のターン、ドロー‼?リーネさん、早速力をお借りします‼?魔法カード、隣の芝刈り‼?」
「隣の芝刈り?」
「このカードは自分のデッキの枚数が相手よりも多い場合に発動でき、デッキの枚数が相手と同じになるように、自分のデッキの上からカードを墓地へ送るよ‼?」
「大量の墓地肥やしカードですか……私のデッキ枚数は２５枚で

す」
「私は５４枚なので、その差分の２９枚のカードを墓地に送らせて貰うよ‼？」
「っ、６０枚デッキ……なんて出鱈目なデッキ……」
隣の芝刈りの効果で一気に私のデッキからカードが墓地に送られていく。
「墓地に送られた絶対王バックジャックの効果発動‼？このカードが墓地へ送られた場合、自分のデッキの上からカードを３枚確認し、好きな順番でデッキの上に戻すよ。さらに私はミスティックパイパーを召喚‼？」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ０

現れたのはフルートのようなものを弾いている男の人。
今日も頼んだよ、ミスティックパイパー‼？
「ミスティックパイパーの効果発動‼？このカードをリリースして自分のデッキからカードを１枚ドローし、この効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル１モンスターだった場合、自分はカードをもう１枚ドローするよ‼？」
「絶対王バックジャックによってデッキの上は操作されている……確実にドローができるというわけですか」
ミスティックパイパーはいつものように私にサムズアップをして姿を消し、私はデッキからカードをドローして刀花ちゃんに見せる。
「私がドローしたのは魔轟神獣キャシー‼？レベル１モンスターなのでもう１枚ドロー‼？さらに魔法カード、悪夢再び‼？自分の墓地の守備力０の闇属性モンスター２体を対象としてその闇属性モンスターを手札に加えるよ‼？私は墓地からゴーストリックランタンと捕食植物（プレデタープランツ）スパイダーオーキッドを手札に加えるよ‼？そして私は、スケール８の捕食植物スパイダーオーキッドでペンデュラムスケールをセッティング‼？」

私の右隣に光の柱が立ち上り、その光の中に蜘蛛のように見える植物が浮かびあがり、下に8の数字が現れる。
「捕食植物スパイダーオーキッドのペンデュラム効果発動!!?このカードを発動したターンの自分メインフェイズに、このカード以外の魔法&罠ゾーンの表側表示のカード1枚を対象としてそのカードを破壊する!!?私が破壊するのはサイバネットオプティマイズ!!?」
光の柱からスパイダーオーキッドが蔦を伸ばし、サイバネットオプティマイズを破壊する。
「サイバネットオプティマイズを破壊してきましたか……」
「これで私の防御カードも使えるようになった!!私の新しい戦術を見せてあげる!!?フィールド魔法、スマイルアクション!!?」
「スマイルアクション?」
私がデュエルディスクにスマイルアクションをセットすると、辺りが宙に浮いた足場やバルーンなど、様々な仕掛けが施されたスタジアムに変わる。
「このカードは発動時の効果処理として、お互いのプレイヤーは、それぞれ自分の墓地から魔法カードを5枚まで選んで裏側表示で除外できる。そしてモンスターの攻撃宣言時に攻撃されたプレイヤーはこのカードの効果で除外した自分のカードの中からランダムに1枚選び、手札に加え、その後、そのカードを捨ててその攻撃を無効にでき、捨てなかった場合、このターン、自分が受ける戦闘ダメージは倍になる効果を適用できるようになるよ。私は墓地から悪夢再び、モンスタースロット、ワンフォーワン、大欲な壺、シャッフルリボーンを除外するよ!!?」
「墓地の魔法カードを防御札に変えれるフィールド魔法ですか……私もサイバネットオプティマイズを除外します」
私達がカードを除外すると、除外されたカードが弾けてスタジアムに散らばった。
これで準備は整ったかな。
「私はカードを2枚伏せてターンエンド!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札３
△ー▲▲ー　　▽
ー??ーーー
　　☆　　☆
ー☆☆☆ー
ーー△ーー　　ー
刀花　ＬＰ７０００　手札３

「厄介なフィールド魔法ではありますが、所詮は攻撃を無効化して一時凌ぎをするだけのカード。それでは私を止めることなんてできません。私のターン、ドロー。私はレディデバッガーを召喚」

〈レディデバッガー〉☆４　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１７００

フィールドに現れたのはテントウムシのような外見をした女性型のモンスター。
「レディデバッガーの効果発動。同名カードは１ターンに１度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキからレベル３以下のサイバース族モンスター１体を手札に加えます。私はデッキからマイクロコーダーを手札に加えます」
「っ‼?またマイクロコーダーが手札に……」
「現れて、未来を描くサーキット」
刀花ちゃんの正面に再びサーキットが現れる。
「召喚条件はモンスター３体。この瞬間、手札のマイクロコーダーの効果発動。手札のこのカードをリンク素材にします。私はマイクロコーダー、レディデバッガー、エクスコードトーカーをリンクマーカーにセット、サーキットコンバイン」
手札のマイクロコーダーとレディデバッガー、エクスコードがサーキットに吸い込まれる。
そしてサーキットが輝くと中から現れたのは手甲状のパーツから

クワガタムシの顎のような爪が伸びた燃えるような赤色の鎧を纏った騎士。
「リンク召喚!!?希望を打ち砕く暴虐の騎士!!?リンク３!!?パワーコードトーカー!!?」
〈パワーコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２３００→２８００　↓?↑↓

トランスコードトーカー
ＡＴＫ３３００→２８００

シューティングコードトーカー
ＡＴＫ２８００→２３００

「炎属性のコードトーカー……だけど、これでエクスコードトーカーによって封じられてたモンスターゾーンが解放されるよ!!?」
「構いません。このターンで決めますから。永続魔法、サイバネットコーデックの効果、それにチェーンしてマイクロコーダーの効果発動。私はデッキから２枚目のサイバネットオプティマイズを手札に加えます」
「っ、２枚目のサイバネットオプティマイズ……」
「さらにサイバネットコーデックの効果でデッキから炎属性のサイバース族モンスター……斬機サブトラを手札に加えます」
「斬機、サブトラ?」
デッキから刀花ちゃんの手札にサイバネットオプティマイズと共に聞いたことのないカードが手札に加わる。
そして刀花ちゃんの手札にサブトラが加わった瞬間、一瞬だけカードから闇が溢れ出した。
「えっ!?」
その光景に、私は思わず目を見開く。
……私の見間違いじゃなければさっき刀花ちゃんの手札に加

わったのは闇のカードだ。
確かに私のアンチホープ達みたいにメインデッキに入る闇のカードだって確かに存在する。
だけど、現在ケルンに天神先生がばら撒いている闇のカードはＮｏ．のハズだ。
天神先生がＮｏ．以外の闇のカードを作り、それを実験として刀花ちゃんに渡した？
それとも……
「何をボーっとしているんですか？まぁ、栗原先輩にできることがないのは確かですが。永続魔法、サイバネットオプティマイズを発動。これで私のコードトーカー達が戦闘を行う際、栗原先輩はダメージステップ終了時まで魔法・罠・モンスターの効果を発動できません」
「っ‼？」
そうだ、刀花ちゃんが手札に加えた闇のカードは気になるけど、今はこの状況を乗り越えなきゃ‼？
「バトル。念には念を入れましょう。バトルフェイズ開始時にシューティングコードトーカーの効果発動、ステラマリス。自分バトルフェイズ開始時に発動でき、このバトルフェイズ中、このカードはこのカードのリンク先のモンスターの数＋１回まで相手モンスターに攻撃できます。ただし、このターン、相手フィールドのモンスターが１体のみの場合、そのモンスターと戦闘を行うこのカードの攻撃力はそのダメージ計算時のみ４００ポイントダウンします。シューティングコードトーカーのリンク先にはトークバックランサーとパワーコードトーカーがいます。よってシューティングコードトーカーはモンスターに限り３回の攻撃が可能です」
こちらがモンスターを増やすことを前提とした効果発動。
正直言って厳しいけど、それでもやらなければいけないことは変わらないのだから気にしてもしょうがない。
「その効果にチェーンしてリバースカードオープン‼？罠発動、光の召集‼？自分の手札を全て捨て、その後、この効果で墓地へ捨てられたカードの数だけ、自分の墓地から光属性モンスターを選んで手札に

加えるよ‼?私は3枚の手札を捨てて墓地からミスティックパイパー、虹クリボー、クリボルトを手札に加えるよ‼?」
「この状況で手札交換?そんなことに何の意味があるんですか」
「意味ならちゃんとあるよ‼?手札から捨てられた魔轟神獣キャシーの効果発動‼?このカードが手札から墓地へ捨てられた時、フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊します‼?」
「っ……」
「私が破壊するのはサイバネットオプティマイズ‼?」
手札から捨てられた身体に金色の腕輪のようなものをつけた猫のモンスターが、緑色のボールのような悪魔を弾き飛ばしてサイバネットオプティマイズを破壊する。
これでコードトーカーに攻撃されても防御カードが使用できる‼?
「仕方ありません。ならば、少しでも栗原先輩の防御手段を減らしましょう。トークバックランサーでダイレクトアタック。ルビスローター」
「相手モンスターの攻撃宣言時、墓地からクリアクリボーを除外して効果発動‼?さらにそれにチェーンしてフィールド魔法、スマイルアクションの効果発動‼?」
「……えっ?」
私の宣言に闇のカードに操られ、無表情だった刀花ちゃんが目を丸くする。
それに構わず、私は立体映像でばら撒かれたカードに向かって走り出す。
「モンスターの攻撃宣言時に攻撃されたプレイヤーはこのカードの効果で除外した自分のカードの中からランダムに1枚選び、手札に加え、その後、そのカードを捨ててその攻撃を無効にでき、捨てなかった場合、このターン、自分が受ける戦闘ダメージは倍になる‼?私はこのカードを手札に加えるよ‼?」
私がフィールドに浮かんでいた立体映像のカードに触れると、そのカードが手札に加わる。

「私はこのカードを破棄しない。よってこのターン、私が受けるダメージは倍になるよ」
「攻撃を無効にしない？なら、トークバックランサーの槍に貫かれるだけです」
トークバックが私に向かって槍を投擲する。
だけど、それは私には届かない。
「まだだよ、クリアクリボーの効果発動!!？相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のこのカードを除外し、自分はデッキから1枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替える!!？」
「っ、あのデッキの上のカードはまだ絶対王バックジャックによって操作されているカード……」
私が勢いよくドローするのと同時に私の眼前に槍が到達する。
しかし、槍が私に触れる寸前、私の目の前にピンク色のスライムのようなモンスターが現れ、私の代わりに槍を受け止めた。
「私がドローしたのはマシュマカロン!!？モンスターなので特殊召喚し、攻撃対象を移し替えるよ!!？」

〈マシュマカロン〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

槍に貫かれ、マシュマカロンの身体が真っ二つに分断される。
しかし、分断されたマシュマカロンの身体は再び集まると2体のマシュマカロンに変化した。
「マシュマカロンの効果発動!!？同名カードは1ターンに1度、このカードが戦闘・効果で破壊された場合に発動できる!!？自分の手札・デッキ・墓地からこのカード以外の同名カードを2体まで選んで特殊召喚するよ!!？」
「っ、ここで分裂効果のモンスターを……!?？」
「おいで、マシュマカロン達!!？」

〈マシュマカロン〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

「ここで壁となるモンスターを呼び出してくるとは……ですが、モンスターを増やしてもシューティングコードトーカーに撃ち抜かれるだけです。シューティングコードトーカーでマシュマカロンを攻撃。ステラディグレイド」

シューティングコードが空に向かって弓矢を放とうとする。

しかし、シューティングコードの弓矢が放たれる前に、私は1枚のカードを掲げながら次の立体映像でばら撒かれたカードに向かって走り出し、その立体映像に触れて次のカードを手に入れた。

「相手モンスターの攻撃宣言時、手札の虹クリボーの効果発動‼？さらにそれにチェーンしてフィールド魔法、スマイルアクションの効果発動‼？除外した自分のカードの中からランダムに1枚選び、手札に加える。既にこのターンに受けるダメージは倍になってる。だから当然、私はこのカードを破棄しない。そして虹クリボーの効果発動‼？このカードをそのモンスターに装備し、そのモンスターは攻撃することが出来なくなる‼？レインボーガード‼？」

私の手札から虹色の角を持つ球体が現れてシューティングコードの手から弓を弾き飛ばす。

これでシューティングコードは攻撃できない。

「っ、次です。トランスコードトーカーでマシュマカロンを攻撃。潰れて下さい、グラウンドデス」

「ゴメンね、マシュマカロン。フィールド魔法、スマイルアクションの効果発動‼？除外した自分のカードの中からランダムに1枚選び、手札に加える。当然、破棄しないよ」

トランスコードは自身のパーツの一部を変形させて銃にし、岩石の弾丸を放ち、マシュマカロンを押し潰す。

「もう1体もです。エンコードトーカーでマシュマカロンを攻撃。ブラッドアイギス」

「フィールド魔法、スマイルアクションの効果発動!!?除外した自分のカードの中からランダムに1枚選び、手札に加える。当然、破棄しないよ」
　エンコードの盾から剣先の刃が伸びてマシュマカロンを斬り裂き、消滅させる。
「これであなたを守るものは無くなりました。パワーコードトーカーでダイレクトアタック。グラインドネイル」
　パワーコードの手甲状のパーツからクワガタムシの顎のような鉤爪が伸びこちらに迫る。
　このターンは受けるダメージが倍になるから、確かにこれを受ければ大ダメージになる。
　だけど……それはやっぱりまともに攻撃を受ければの話だ。
「フィールド魔法、スマイルアクションの効果、それにチェーンしてリバースカードオープン!!?速攻魔法、クリボーを呼ぶ笛!!?」
「っ、まだそんなカードを残して……」
「自分はデッキからクリボーまたはハネクリボー1体を選択し、手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができる!!?私が選ぶのは手札に加える効果!!?私はデッキからクリボーを手札に加えるよ!!?そしてフィールド魔法、スマイルアクションの効果発動!!?除外した最後の1枚を手札に加える。当然、破棄しない。そしてクリボーの効果発動!!?ダークエンヴェロップ!!?相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこのカードを手札から捨てて発動できる。その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージを0にするよ!!?」
　クリボーが私の前に現れてパワーコードの鉤爪から私を守った。
「スマイルアクションの効果でダメージが2倍……でも、0の2倍は0ッ!!?」
「あの攻撃を耐え切り除外されていた魔法カードを全て回収するなんて……常軌を逸した防御力……これが真紅ちゃんの覇道を邪魔する”小さな聖域（リトルサンクチュアリガーディアン）の守護女神”の力……」
「……だから、その呼び方は止めてって言ってるのにぃ……」

刀花ちゃんの呟きに私は思わず項垂れてしまう。
ううん、今の刀花ちゃんは操られて正気じゃないから‼?
きっと普段の刀花ちゃんなら私をそんな恥ずかしい名前で呼ばない‼?
……と、いいなぁ……
「ですが、どれだけ硬い防御だろうと、無尽蔵というわけではないハズです。次のターンに、必ず斬らせて貰います。メインフェイズ2、カードを2枚伏せてターンエンドです」

遊花　ＬＰ８０００　手札７
△ー　ー　ー　ー　▽
ー　ー　ー　ー　ー
☆　　☆
ー☆☆☆ー
ー▲△▲ー　　ー
刀花　ＬＰ７０００　手札２

エクストラリンクは依然存在している。
だけど、エクスコードによって存在していた使用不能ゾーンももう存在していない。
攻めるなら今がチャンス。
「私のターン、ドロー……よし、刀花ちゃん。今度はこちらから攻めさせて貰うよ‼?魔法カード、シャッフルリボーン‼?自分フィールドにモンスターが存在しない場合、自分の墓地のモンスター1体を対象としてそのモンスターを特殊召喚するよ‼?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、エンドフェイズに除外される。戻ってきて、マシュマカロン‼?」
〈マシュマカロン〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

「どんどん行くよ、魔法カード、悪夢再び‼?私は墓地からゴーストリックランタンと絶対王バックジャックを手札に加えるよ‼?さらに墓地に存在するジェットシンクロンの効果発動‼?手札を1枚墓地に送り、墓地からこのカードを特殊召喚する‼?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合、除外される‼?」

〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

現れたのは小さなジェット機のような機械のモンスター。
現れたジェットシンクロンは嬉しそうに私の周りを飛び回る。
「墓地に送られた絶対王バックジャックの効果発動‼?自分のデッキの上からカードを3枚確認……よし、来てくれたんだね。その後、好きな順番でデッキの上に戻すよ。そして魔法カード、モンスターロット‼?自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、選択したモンスターと同じレベルの自分の墓地に存在するモンスター1体を選択してゲームから除外する。その後、自分のデッキからカードを1枚ドローし、この効果でドローしたカードをお互いに確認して選択したモンスターと同じレベルのモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚するよ‼?」
「っ、また絶対王バックジャックの効果を活かして特殊召喚を……」
「私はジェットシンクロンを対象に墓地の魔轟神獣キャシーを除外し、カードを1枚ドロー‼?私がドローしたのは私の新しいお友達‼?ヒヤリ@イグニスター‼?レベル1モンスターだから特殊召喚するよ‼?」
「ヒヤリ@イグニスター?」

〈ヒヤリ@イグニスター〉☆1　サイバース族　水属性
ＤＥＦ４００

現れたのは小さな水球のようなモンスター。
初陣だけど、あなた達の力、いっぱい貸して貰うね!!?
「そのためにも、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「リンク召喚ですか……」
私が正面に手をかざすと、目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル1モンスター1体。私はマシュマカロンをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚!!?希望の守り手!!?リンク1!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

マシュマカロンがサーキットに吸い込まれると、代わりに青い球体のモンスターが私の前に元気一杯に飛び出してくる。
出てきて貰ったのに、早速で悪いんだけど、あなたの力を私に貸して!!?
「リンクリボーをリリースし、ヒヤリ@イグニスターの効果発動!!?このカード以外の自分フィールドのサイバース族モンスター1体をリリースしてデッキからレベル5以上の@イグニスターモンスター1体を手札に加え、このカードのレベルをターン終了時まで4にする。さらにこの効果を発動するためにリンクモンスターをリリースした場合、さらにデッキからＡｉの儀式1枚を手札に加えるよ!!?」
「っ、また@イグニスター……しかも、Ａｉの儀式ってことは儀式モンスター……!?」
「私はデッキからレベル7、ウォーターリヴァイアサン@イグニスターとＡｉの儀式を手札に加えて、ヒヤリ@イグニスターのレベルを4にするよ!!?」

ヒヤリ@イグニスター
☆1→4

ヒヤリの力でリンクリボーが粒子に変わり、私のデッキから2枚のカードが手札に加わる。
「まだまだ行くよ‼?・私は手札からクリボルトを捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動‼?・デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚する‼?・あなたもお願い‼?・ドシン@イグニスター‼?・」
「っ、また@イグニスター……」

〈ドシン@イグニスター〉☆1　サイバース族　地属性
ＤＥＦ８００

ヒヤリに並び立つように現れたのは土で出来たブロックの身体を持つモンスター。
「墓地のリンクリボーをＥＸデッキに戻してドシン@イグニスターの効果発動‼?・自分の墓地のサイバース族リンクモンスター1体をＥＸデッキに戻し、デッキからＡｉラブ融合1枚を手札に加えるよ‼?」
「っ、次は融合カードですか……」
ドシンが泥団子を作って私に放ると泥団子がカードに変わって手札に加わる。
「これで準備は整った‼?・魔法カード、Ａｉラブ融合を発動‼?・自分の手札・フィールドから、サイバース族の融合モンスターによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚する‼?・さらに自分の@イグニスターモンスターを融合素材とする場合、相手フィールドのリンクモンスターも1体まで融合素材とする事ができる‼?・私はドシン@イグニスターと刀花ちゃんのエンコードトーカーを融合‼?・」
「っ⁉?・私のリンクモンスターを使って融合召喚を⁉?・」
フィールドにハートの形をした時空の裂け目が現れ、その中にドシンとエンコードが吸い込まれていく。
「愛に生きる大地の精霊よ‼?・勝利を導く守護騎士と交わりて、愛を守護する巨人となれ‼?・融合召喚‼?・」

時空の裂け目が光り輝くと、土の身体を持つ巨大なゴーレムが時空の裂け目から舞い降り、土煙を上げた。
「心優しき大地(ガイア)の巨人!!?・アースゴーレム@イグニスター!!?」
〈アースゴーレム@イグニスター〉☆7　サイバース族　地属性
ＡＴＫ２３００
「@イグニスターの融合モンスター……」
「アースゴーレム@イグニスターの効果発動!!?・シュープリームブルク!!?・このカードが融合召喚に成功したターン、自分が受ける全てのダメージは０になる!!?」
アースゴーレムが私に手をかざすと私を守るように土の防壁が現れる。
「続けて私は儀式魔法、Ａｉの儀式を発動!!?・レベルの合計が儀式召喚するモンスターのレベル以上になるように、自分の手札・フィールドの@イグニスターモンスターをリリースし、手札からサイバース族の儀式モンスター１体を儀式召喚する!!?・私はフィールドのアースゴーレム@イグニスターをリリースして儀式召喚を行うよ!!?・」
「せっかく出した融合モンスターを使って儀式召喚を……?・」
私の頭の上に魔女帽子が現れ、目の前には混沌とした毒々しい水が入った魔女の大釜と大釜をかき混ぜる木の棒が現れる。
その大釜を見てアースゴーレムがお風呂にでも入るかのように大釜の中に身体を沈めていく。
アースゴーレムの姿が完全に見えなくなったところで私は木の棒で大釜に入った毒々しい水をかき混ぜていく。
しばらくすると大釜が光り輝き、中から勢いよく空に向かって飛び出したのは巨大な水竜。
「儀式召喚!!?・愛を羨望する大罪の水神!!?・ウォーターリヴァイアサン@イグニスター!!?・」
〈ウォーターリヴァイアサン@イグニスター〉☆7　サイバース族

水属性
ＡＴＫ２３００
「今度は儀式モンスターの@イグニスター……」
「ウォーターリヴァイアサン@イグニスターの効果発動!!ラピッド?ジェラシー!!?このカードが儀式召喚に成功した場合、相手フィールドの攻撃力２３００以下のモンスターを全て持ち主の手札に戻す!!?」
「っ!!?全体バウンスを持つ儀式モンスター……!!?」
ウォーターリヴァイアサンが咆哮をあげると、どこからか津波が現れ、トークバックとシューティングコードを呑み込み、洗い流した。
「よし、後2体!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私が正面に手をかざすと、目の前に再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル1モンスター1体。私はジェットシンクロンをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚!!?もう1度、希望を守って!!?リンク1!!?リンクリボー!!?」
〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←
ジェットシンクロンがサーキットに吸い込まれると、再びリンクリボーが飛び出してくる。
「そして私はハイキューピットを召喚!!?」
〈ハイキューピット〉☆１　天使族　光属性
ＤＥＦ６００
フィールドに弓を持った小さな天使が姿を現わす。
「ハイキューピットの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、自分のデッキの上からカードを3枚まで墓地へ送ってこのカードのレ

ベルをターン終了時まで、この効果を発動するために墓地へ送ったカードの数だけ上げる‼?私はデッキの上から3枚のカードを墓地に送ってハイキューピットのレベルを3つ上げるよ‼?」
ハイキューピットが空に向かって3本の矢を放つと、弓は粒子に変わってハイキューピットに吸い込まれる。

ハイキューピット
☆1→4

「レベル4モンスターが2体……まさか⁉?」
無感情な雰囲気を崩し、目を見開く刀花ちゃんに、私は正面に手をかざし、その言霊を告げることで応えた。
「私は、レベル4となったヒヤリ@イグニスターとハイキューピットでオーバーレイ‼?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼?」
ヒヤリとハイキューピットが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
空に浮かんだ混沌の渦が弾けると、空から舞い降りたのは雷を纏った光の龍神。
「天空を統べる誇り高き雷の龍神よ‼?愛をもって闇夜を照らせ‼?ランク4‼?ライトドラゴン@イグニスター‼?」

〈ライトドラゴン@イグニスター〉★4　サイバース族　光属性
ＡＴＫ２３００

「次はエクシーズモンスターの@イグニスター……」
「ライトドラゴン@イグニスターの効果発動‼?ヴァリアントスパーク‼?同名カードは1ターンに1度、オーバーレイユニットを1つ取り除いて発動できる。自分フィールドの@イグニスターモンスターの数まで、相手フィールドの表側表示モンスターを選んで破壊する‼?この効果は対象を取らない。トランスコードトーカーでも防げな

いよ‼?」
「っ、なら、チェーンしてリバースカードオープン。速攻魔法、サイバネットバックドア。自分フィールドのサイバース族モンスター1体を対象とし、そのモンスターを除外し、そのモンスターの元々の攻撃力より低い攻撃力を持つサイバース族モンスター1体をデッキから手札に加えます。そしてこの効果で除外したモンスターは次の自分スタンバイフェイズにフィールドに戻り、そのターン直接攻撃できます。私はトランスコードトーカーを除外してデッキから斬機マルチプライヤーを手札に加えます」
「っ、また斬機……だけど、パワーコードトーカーは破壊させて貰うよ‼?」
ライトドラゴンが空から巨大な雷を降らせ、パワーコードとトランスコードを襲う。
トランスコードはバックドアに入り雷を免れたが、パワーコードはそのまま雷に身体を焼き尽くされて爆散する。
爆煙が漂う中、バックドアが消え、デッキから刀花ちゃんの手札にマルチプライヤーが手札に加わる。
マルチプライヤーが刀花ちゃんの手札に加わった瞬間、やはりアディオンのカードから闇が溢れ出した。
やっぱりあの斬機と呼ばれるカード達は闇のカードみたいだ。
あのカード達をどうにかしないと、刀花ちゃんを助け出すことはできない。
だけど、今までデュエルしてきたＮｏ．達と違うということは、あのカード達は私がデュエルに勝ってもきっと回収できない。
私が闇先パイとのデュエルに負けてもアンチホープ達が闇先パイに渡らなかったように、普通（？）の闇のカードはきっとデュエルだけではどうすることもできないのだ。
……とりあえず、今はデュエルを続けて、その間に解決策を見つけ出すしかない。
「私は墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動‼?自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻して

シャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローするよ。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外する‼?私はフィールド魔法、スマイルアクションをデッキに戻して、カードを1枚ドローする‼?」
「成る程、私にスマイルアクションの効果を使わせるつもりはないということですか」
スマイルアクションが消え、辺りの風景がただの路地裏に戻り、私はカードを1枚ドローする。
これではまだ刀花ちゃんに勝つには手が足りない。
それでもやれることからやるしかない。
「バトル‼?リンクリボーでダイレクトアタック‼?リンクラッシュ‼?」

刀花　ＬＰ７０００→６７００

「その程度の攻撃、痛くも痒くもありません」
「なら、こっちはどうかな?ウォーターリヴァイアサン@イグニスターでダイレクトアタック‼?背徳のピュアストリーム‼?」
ウォーターリヴァイアサンが水のブレスを刀花ちゃんに放つ。
水のブレスが刀花ちゃんに当たる瞬間、３つの円盤が現れて刀花ちゃんの盾になった。
「リバースカードオープン。速攻魔法、スプールコード。自分の墓地のサイバース族モンスターが3体以上の場合、相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動できる。その攻撃を無効にし、自分フィールドにサイバース族・光属性・レベル1・攻撃力守備力0のスプールトークンを3体まで守備表示で特殊召喚します。ただし、このトークンはアドバンス召喚のためにはリリースできません。私は3体のスプールトークンを特殊召喚します」
〈スプールトークン〉☆1　サイバース族　光属性
ＤＥＦ０

「っ、モンスターが増えちゃったか。それなら1体でも数を減らす‼?ライトドラゴン@イグニスターでスプールトークンを攻撃‼?万雷のホワイトフレア‼?」
ライトドラゴンが放つ雷のブレスが1体のスプールトークンを焼き払う。
刀花ちゃんのフィールドにはまだ2体のスプールトークンが残っていて、次のターンには除外されていたトランスコードは帰還する。
これは結構面倒なことになりそうだね。
「メインフェイズ2‼?速攻魔法、大欲の壺‼?除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計3体を持ち主のデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから1枚ドローするよ‼?私は除外されているクリアクリボー、ジェットシンクロン、魔轟神獣キャシーをデッキに戻してカードを1枚ドローする‼?そしてカードを2枚セットしてターンエンド‼?エンドフェイズ、シャッフルリボーンのデメリットにより手札からミスティックパイパーが除外されるよ」

遊花　ＬＰ８０００　手札１
△ー▲▲ー　　ー
ー○ーー○
　☆　　ー
ー○○ーー
ーー△ーー　　ー
刀花　ＬＰ６７００　手札３

「流石は栗原先輩です。未だに私はあなたを傷付けられず、私のエクストラリンクは完全に破られてしまいました」
「……」
「ですが、ここまでのデュエルで確信しました。あなたは真紅ちゃんの覇道の邪魔になる。真紅ちゃんの夢を叶えるために、栗原先輩には

消えて貰わないといけないんです」
虚ろな目で刀花ちゃんは自分に言い聞かせるかのようにそう呟く。
この感じ……刀花ちゃんが増幅され、歪められているのは真紅ちゃんに対する思い？
……少し揺さぶってみるしかないかな。
「……どうして刀花ちゃんが私を倒すことが真紅ちゃんの夢を叶えることに繋がるの？」
「それは栗原先輩が真紅ちゃんの好敵手だからです。栗原先輩は必ず、真紅ちゃんの覇道の障害となる。だから、真紅ちゃんの障害になるものは全部私が取り除いてあげるんです。真紅ちゃんが望む世界を、私が与えてあげるんです」
「……だけどね、刀花ちゃん。そんなやり方で進んだ道を、真紅ちゃんは本当に望むのかな？」
「っ!!？」
私の言葉に刀花ちゃんが微かに動揺する。
「真紅ちゃんの言ってることは全然分からなかったし、1度デュエルをしただけだけど、真紅ちゃんのデュエルからは、真紅ちゃんが凄く努力してきたのが伝わってきたよ」
私を倒すために様々な方法で私の防御を突破して私を倒そうとしてきた。
あのデュエルだって、セフィロンが来てくれなかったら負けていたし、次も勝てるとは思えないぐらい、真紅ちゃんは強敵だった。
「あの後も、真紅ちゃんは私に挑んでこようとした。きっとそれは、真紅ちゃんが私を正面から乗り越えて、自分を誇れるようになりたかったからだって、私は思う。真紅ちゃんが自分で成長する機会を閉ざすことが、刀花ちゃんのやりたいことなの？」
「っ!!？私がしたかったこと……違う……私がしたかったことは、こんなことじゃ……ないのに!!う、あぁぁぁ!!？」
「っ!!？刀花ちゃん!!？」
私の言葉を聞いていた刀花ちゃんがいきなり頭を抑えてしゃがみ込むと、刀花ちゃんのデュエルディスクにセットされているＥＸデッ

キから闇が溢れ出し、完全に刀花ちゃんを包み込み、その姿を隠してしまう。
突然のことに戸惑っていると、刀花ちゃんを包み込んでいた闇が弾ける。
闇の中から再び姿を見せた刀花ちゃんは虚ろな目で私を睨みつけていた。
「倒す……あの人邪魔になる人は1人残らず私が斬り伏せる‼?栗原　遊花‼?あなただけは絶対に斬る‼?」
「っ、刀花ちゃん……?」
闇に呑まれ、虚ろな目で私を睨みつける刀花ちゃんから感じるのは明らかな敵意と憎悪。
だけど、その敵意には明らかな違和感がある。
さっきまでは真紅ちゃんのためって言っていたハズだけど、今刀花ちゃんの口から溢れたのはーーー
「私のターン、ドロー‼?スタンバイフェイズ、サイバネットバックドアで除外されていたトランスコードトーカーがフィールドに戻ります‼?戻ってきてください、トランスコードトーカー‼?」
〈トランスコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　地属性
ＡＴＫ２３００　→←↓
私が変化した刀花ちゃんの違和感を手繰ろうとしていると、フィールドにトランスコードが帰還する。
「現れて、未来を描くサーキット‼?」
刀花ちゃんの正面に再びサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル2以下のサイバース族モンスター1体‼?私はスプールトークンをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?リンク召喚‼?リンク1、トークバックランサー‼?」
〈トークバックランサー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１２００　←

スプールトークンが消え、再びトークバックが姿を現わす。
「スプールトークンをリリースしてトークバックランサーの効果発動‼?同名カードは1ターンに1度このカード以外の自分フィールドのサイバース族モンスター1体をリリースし、そのモンスターと元々のカード名が異なる自分の墓地のコードトーカーモンスター1体を対象としてそのモンスターをこのカードのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚する‼?」
「っ⁉?コードトーカーの蘇生効果⁉?」
「蘇ってください、コードトーカーインヴァート‼?」

〈コードトーカーインヴァート〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１３００　↑↓

「墓地に存在するシーアーカイバーの効果発動‼?同名カードは1ターンに1度、このカードが手札・墓地に存在し、フィールドのリンクモンスターのリンク先にモンスターが召喚・特殊召喚された場合にこのカードを特殊召喚する‼?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。蘇ってください、シーアーカイバー‼?」

〈シーアーカイバー〉☆3　サイバース族　水属性
ＤＥＦ２１００

蘇ったインヴァートに寄り添うように現れたのは機械の身体を持つタツノオトシゴ。
その姿を見て刀花ちゃんは再び正面に手をかざす。
「現れて、未来を描くサーキット‼?」
「っ、またリンク召喚……」
「召喚条件はサイバース族モンスター2体‼?私はトークバックランサーとシーアーカイバーをリンクマーカーにセット‼?サーキット

コンバイン‼?リンク召喚‼?リンク２、サイバースウィキッド‼?」

〈サイバースウィキッド〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ８００　←↘?

トークバックとシーアーカイバーがサーキットに消え、代わりに現れたのは翡翠の杖を持った少年。
ウィキッドが現れるのと同時に刀花ちゃんは１枚のカードを掲げる。
掲げられたカードからは、当然のように闇が溢れ出していた。
「ライトドラゴン@イグニスターを対象に手札の斬機サブトラの効果発動‼同名カードは１ターンに１度、?フィールドの表側表示モンスター１体を対象としてこのカードを手札から特殊召喚し、対象のモンスターの攻撃力をターン終了時まで１０００ポイントダウンさせます‼?」
「っ‼?相手を弱体化させながら特殊召喚できるモンスター‼?」
「ただし、この効果で特殊召喚したターン、このカードは攻撃できず、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はサイバース族モンスターしかＥＸデッキから特殊召喚できません。来てください、斬機サブトラ‼?」
ライトドラゴンの背後に突如赤い装甲を持つ機械騎士が現れ、ライトドラゴンを斬り付けて刀花ちゃんの前に降り立った。

〈斬機サブトラ〉☆４　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１０００

ライトドラゴン@イグニスター
ＡＴＫ２３００↓１３００

「この瞬間、サイバースウィキッドの効果発動発動‼?同名カードは

1ターンに1度、このカードが既にモンスターゾーンに存在する状態で、このカードのリンク先にモンスターが特殊召喚された場合、自分の墓地からサイバース族モンスター1体を除外してデッキからサイバース族チューナー1体を手札に加えます!!?私は墓地のバランサーロードを除外してデッキからチューナーモンスター、斬機ナブラを手札に加えます!!?」

「つ、チューナーモンスターの斬機……しかも除外されたのがバランサーロードってことは……!!?」

「除外されたバランサーロードの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが除外された場合に手札からレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する!!?来てください、チューナーモンスター、斬機ナブラ!!?」

〈斬機ナブラ〉☆4　サイバース族　闇属性
DEF1500

フィールドに現れたのは漆黒の装甲を持つ機械騎士。
チューナーモンスターが出てきたということは狙いはシンクロ召喚?

「コードトーカーインヴァートをリリースして斬機ナブラの効果発動!!?自分フィールドのサイバース族モンスター1体をリリースしてデッキから斬機モンスター1体を特殊召喚する!!?来てください、斬機ディヴィジョン!!?」

〈斬機ディヴィジョン〉☆4　サイバース族　地属性
ATK1500

インヴァートが消え、代わりに現れたのは黄金の槍を手にした黄金の装甲を持つ機械騎士。
ディヴィジョンが現れるのと同時に、刀花ちゃんは正面に手をかざし、その言霊を告げることで応えた。

「私は、レベル４モンスター、斬機サブトラ、斬機ナブラでオーバーレイ!!?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
「っ!??狙いはエクシーズ召喚!??」
サブトラとナブラが粒子となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
空に浮かんだ混沌の渦が弾けると、空から舞い降りたのは雷を纏った両刃の薙刀を持ち、黄金の装甲を纏った機械騎士。
「蟲（バグ）に侵されし鋼鉄の守護騎士よ!!?同胞を改竄し、守護者を殺戮せよ!!?ランク４!!?塊斬機ダランベルシアン!!?」

〈塊斬機ダランベルシアン〉★４　サイバース族　地属性
ＡＴＫ２０００

「斬機のエクシーズモンスター……」
「塊斬機ダランベルシアンの効果発動!!?メモリーリライト!!?同名カードは１ターンに１度、このカードがエクシーズ召喚に成功した場合、このカードのオーバーレイユニットを２つ以上取り除き、効果を発動できます。現在の塊斬機ダランベルシアンのオーバーレイユニットは２つ、よって２つ取り除きデッキからデッキから斬機カード１枚を手札に加えます!!?私はデッキから魔法カード、斬機方程式を手札に加えます!!?」
「っ、斬機の魔法カードまであるんですか……」
「斬機の力はこの程度ではありませんよ?サイバースウィキッドをリリースして斬機ディヴィジョンの効果発動!!?エクストラモンスターゾーンの自分のサイバース族モンスター１体をリリースして手札及び自分の墓地からそれぞれ１体まで、サイバース族・レベル４モンスターを選んで特殊召喚します!!?来てください、コードラジエーター、チューナーモンスター、斬機ナブラ!!?」

〈コードラジエーター〉☆４　サイバース族　水属性

ＤＥＦ８００

〈斬機ナブラ〉☆４　サイバース族　闇属性

ＤＥＦ１５００

ウィキッドの姿が消え、青い鎧を身につけたナーガのようなモンスターとナブラが再び姿を現わす。

「さあ、お待ちかねです。私は、レベル４、斬機ディヴィジョンに、レベル４、チューナーモンスター、斬機ナブラをチューニング!!?」

「やっぱり、シンクロ召喚!!?」

ナブラが光の輪になり、ディヴィジョンが小さな星に変わり、光の道になる。

光の道が輝くと、その中から現れたのは赤を基調とした白の装甲に真っ赤なマントを羽織り、炎を纏った剣を手にした機械騎士。

「炎を纏いし守護騎士よ!!?灼熱の刃で歯向かう敵を断罪せよ!!?シンクロ召喚!!?鋼鉄の斬鬼!!?シンクロチューナー、炎斬機マグマ!!?」

〈炎斬機マグマ〉☆８　サイバース族　炎属性

ＡＴＫ２５００

「っ、珊瑚さんの瑚之龍（コーラルドラゴン）と同じシンクロチューナー!?」

「まだです。炎斬機の力を活かすには、このような戦場（いくさば）ではまだ足りません。再びトランスコードトーカーの効果発動!!?ネクロポーテンス!!?再び戻って来てください、コードトーカー!!?」

〈コードトーカー〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　闇属性

ＡＴＫ１３００　→←

トランスコードによってフィールドに再びコードトーカーが舞い戻る。

「現れて、未来を描くサーキット」
　刀花ちゃんの正面に現れるのはこのターン3回目のサーキット。
「召喚条件はサイバース族モンスター2体以上!!?コードラジエーターとコードトーカーを2体分として扱ってリンクマーカーにセット、サーキットコンバイン!!?」
　ラジエーターとコードトーカーが2体に分身してサーキットに吸い込まれる。
　そしてサーキットが輝くと中から現れたのは漆黒の鎧を纏った騎士。
　刀花ちゃんの本来の切り札。
「リンク召喚!!?廃棄されし楔たる暗黒の騎士!!?リンク3!!?デコードトーカー!!?」

〈デコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　闇属性
　ＡＴＫ２３００　↙?→↘?

「デコードトーカー……刀花ちゃんの切り札」
「永続魔法、サイバネットコーデックの効果、それにチェーンしてコードラジエーターの効果発動!!?このカードがコードトーカーモンスターのリンク素材として手札・フィールドから墓地へ送られた場合、相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてそのモンスターは攻撃力が0になり、効果は無効化され、フィールドのこのカードを素材とした場合にはこの効果の対象を2体にできます!!?対象はライトドラゴン@イグニスターとウォーターリヴァイアサン@イグニスター!!?」
　デコードトーカーの剣が青い輝きを放つと、デコードトーカーがライトドラゴンとウォーターリヴァイアサンに青い輝きを纏った斬撃を放つ。
　斬撃がライトドラゴンとウォーターリヴァイアサンを斬り裂くと、ライトドラゴンとウォーターリヴァイアサンは力無くフィールドに倒れ伏せた。

ライトドラゴン@イグニスター
ＡＴＫ１３００→０

ウォーターリヴァイアサン@イグニスター
ＡＴＫ２３００→０

「っ、ライトドラゴン@イグニスター!!?ウォーターリヴァイアサン@イグニスター!!?」
「永続魔法、サイバネットコーデックの効果でデッキからＳＩＭＭタブラスを手札に加えます。さて、忘れておられませんよね？私はまだ通常召喚を行っておりません。私は斬機マルチプライヤーを召喚!!？」

〈斬機マルチプライヤー〉☆４　サイバース族地属性
ＡＴＫ５００

フィールドに現れたのは２振りの刀を手にした黄金の装甲を持つ機械騎士。
マルチプライヤーを出した刀花ちゃんが正面に手をかざすと、刀花ちゃんが纏っていた闇が一層深くなる。
この感じ……刀花ちゃんを操っている闇のカードの本体がくる!!?
「さあ、見せてあげます。私が手に入れた最強の力を!!?私は、レベル４、斬機マルチプライヤーに、レベル８、シンクロチューナーモンスター、炎斬機マグマをチューニング!!?」
「レベル１２のシンクロ召喚!!?」
マグマが炎の輪になり、マルチプライヤーが小さな星に変わり、炎の道になる。
炎の道が燃え上がると、その中から現れたのは白を基調とした赤の装甲に真っ赤なマントを羽織り、炎を纏った剣を手にした巨大な機械

騎士。
「炎を纏いし最後の守護騎士よ!!?那由多を経ても消えぬ劫火で、守護者に永遠の煉獄を与えよ!!?シンクロ召喚!!?煉獄の斬鬼!!?炎斬機ファイナルシグマ!!?」
〈炎斬機ファイナルシグマ〉☆１２　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ３０００
「攻撃力３０００……攻撃力は案外低い?」
レベル８だったマグマが攻撃力２５００だったことを踏まえると、攻撃力が５００しか増えていない。
しかし、侮ってはいけない。
攻撃力がそれほど上昇していないということは、それだけ厄介な効果を秘めていることに違いないのだ。
それを裏付けるかのように、刀花ちゃんが纏った闇が不気味に蠢いた。
「そのようなことを言っていられるのは今の内です。墓地に送られた斬機マルチプライヤーの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが墓地へ送られた場合、エクストラモンスターゾーンの自分のサイバース族モンスター1体を対象としてそのモンスターの攻撃力はターン終了時まで倍になります!!?」
「っ!!?今刀花ちゃんのエクストラモンスターゾーンには炎斬機ファイナルシグマがいる……ということは……!!?」
「私はエクストラモンスターゾーンにいる炎斬機ファイナルシグマを対象にその攻撃力を倍にします!!?」
炎斬機ファイナルシグマ
ＡＴＫ３０００→６０００
「攻撃力６０００!?!?」
「それだけではありません。炎斬機ファイナルシグマは２つの永続効

果を秘めています。１つ目はナッシングカンフラグレーシャン。このカードはエクストラモンスターゾーンに存在する限り、斬機カード以外のカードの効果を受けません。そして２つ目の永続効果、ミラクルエクスターミネイト。エクストラモンスターゾーンのこのカードが相手モンスターとの戦闘で相手に与える戦闘ダメージは倍になります」

「完全耐性に戦闘ダメージを倍にする効果⁉？」

今の私のフィールドには攻撃力を０にされたライトドラゴンとウォーターリヴァイアサンがいる。

リンクリボーでは止められないその攻撃を受けるだけで、私へ発生するダメージは１２０００。

一撃で決着がついてしまう。

「怖いですか？ですが、侮りはしません。”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”の力は存分に体感しましたからね。デコードトーカーをリリースし、塊斬機ダランベルシアンの効果発動⁉？エグジスタンスリライト⁉？自分フィールドのモンスター１体をリリースして自分の手札・墓地からレベル４の斬機モンスター１体を選んで特殊召喚する⁉？蘇ってください、斬機ディヴィジョン⁉？」

〈斬機ディヴィジョン〉☆４　サイバース族　地属性

ＡＴＫ１５００

デコードトーカーがリリースされ、フィールドに再びディヴィジョンが現れる。

「これで墓地に充分なカードが揃いました。魔法カード、終わりの始まり⁉？自分の墓地に闇属性モンスターが７体以上存在する場合、その内の５体を除外して自分はデッキから３枚ドローする⁉？私は墓地のマイクロコーダー、トークバックランサー、サイバースウィキッド、コードトーカー、デコードトーカーを除外してカードを３枚ドローする⁉？さらに速攻魔法、バウンドリンク⁉？同名カードは１ターンに１度、自分のフィールド・墓地のリンクモンスター１体を対

象としてそのモンスターを持ち主のＥＸデッキに戻し、そのリンクマーカーの数だけ、自分はデッキからドローし、その後、ドローした数だけ手札を選んで好きな順番でデッキの下に戻します‼？私は墓地からリンク３のエクスコードトーカーをＥＸデッキに戻し、３枚のカードをドローし、３枚のカードをデッキの下に戻します‼？」

「っ、ここでドローカードに手札交換……」

「ふふっ、いいカードをドローしました。炎斬機ファイナルシグマを対象に手札の斬機アディオンの効果発動‼同名カードは１ターンに１度、？フィールドの表側表示モンスター１体を対象としてこのカードを手札から特殊召喚し、対象のモンスターの攻撃力をターン終了時まで１０００ポイントアップさせます‼？ただし、この効果で特殊召喚したターン、このカードは攻撃できず、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はサイバース族モンスターしかＥＸデッキから特殊召喚できません。来てください、斬機アディオン‼？」

〈斬機アディオン〉☆４　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１０００

炎斬機ファイナルシグマ
ＡＴＫ６０００→７０００

赤い装甲を持つ機械騎士が現れ、ファイナルシグマに力を分け与える。

ただでさえ手がつけられない攻撃力なのに、まだ上がるなんて……

「さらに魔法カード、斬機方程式‼？自分の墓地の斬機モンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚し、この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力をターン終了時まで１０００ポイントアップする‼？蘇ってください、斬機ナブラ‼？」

〈斬機ナブラ〉☆４　サイバース族　闇属性

ＡＴＫ１０００→２０００

揃ったのは３体の斬機。

これってまさか……‼？

「私は、レベル４モンスター、斬機アディオン、斬機ナブラ、斬機ディヴィジョンでオーバーレイ‼？３体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼？」

「っ、やっぱりエクシーズ召喚‼？」

３体の斬機が粒子となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

空に浮かんだ混沌の渦が弾けると、空から舞い降りたのは雷を纏った大剣を手にし、黄金の装甲を纏った機械騎士。

「改竄されし鋼鉄の守護騎士よ‼？偽りの記憶に従い守護者を殺戮せよ‼？ランク４‼？塊斬機ラプラシアン‼？」

〈塊斬機ラプラシアン〉★４　サイバース族　地属性

ＡＴＫ２０００

「２体目の斬機エクシーズモンスター……」

「塊斬機ラプラシアンの効果発動‼？メモリーオルタレーシャン‼？このカードがエクシーズ召喚に成功した場合、このカードのオーバーレイユニットを３つまで取り除き、その数だけ３つの効果から選択して発動できる。１つ目は相手の手札をランダムに１枚選んで墓地へ送る効果、２つ目は相手フィールドのモンスター１体を選んで墓地へ送る効果、３つ目は相手フィールドの魔法・罠カード１枚を選んで墓地へ送る効果。私は塊斬機ラプラシアンのオーバーレイユニットを全て取り除き、全ての効果を適用します‼？」

「対象を取らない手札とフィールドの墓地送り効果‼？」

「私は栗原先輩の最後の手札、フィールドのリンクリボー、中央の魔法・罠を墓地へ送ります‼？」

「きゃあ‼？」

ラプラシアンが黄金の大剣を振るうと、剣から紫電が放たれ、私の

手札にあったランタンとリンクリボー、セットしていた強制終了を弾き飛ばして墓地へ送る。
ラプラシアンの紫電により手札を弾かれた際に、紫電が私の身体を焼き、激痛が走る。
痛みに顔を歪める私を見て、刀花ちゃんは不気味に笑う。
「ふふふ、痛いですか？なら、もっと痛めつけてあげましょう。墓地に送られた斬機ナブラの効果発動‼？同名カードは1ターンに1度、このカードが墓地へ送られた場合、エクストラモンスターゾーンの自分のサイバース族モンスター1体を対象としてこのターン、そのモンスターは1度のバトルフェイズ中に2回までモンスターに攻撃できます‼？私は炎斬機ファイナルシグマに2回攻撃を付与します‼？」
「っ、2回攻撃まで……」
「さあ、あなたを絶望へ誘う最後のピースを見せてあげましょう。魔法カード、貪欲な壺‼？墓地に存在するパワーコードトーカーをEXデッキに、斬機ナブラ、斬機マルチプライヤー、斬機ディヴィジョン、斬機アディオンをデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローする‼？」
「っ、まだドローカードが……」
「そして私は装備魔法、斬機刀ナユタを炎斬機ファイナルシグマに装備‼？」
「斬機の装備魔法⁉？」
空から赤と銀の大剣が降ってきて、地面に突き刺さる。
ファイナルシグマが地面に突き刺さった大剣を抜くと、大剣が炎を纏い勢いよく燃え始めた。
「斬機刀ナユタはサイバース族モンスターにのみ装備でき、同名カードは1ターンに1度、装備モンスターが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時に、デッキから斬機モンスター1体を墓地へ送って装備モンスターの攻撃力はターン終了時まで、墓地へ送ったモンスターの攻撃力分アップさせることができます」
「っ、さっき墓地から斬機をデッキに戻したのはこのカードのため……」

そのうえ、デッキから斬機を墓地に送れるということはそのまま斬機の効果を発動させ、ファイナルシグマを強化させれるということにも繋がる。
ただでさえ完全耐性を持っているファイナルシグマが更に強化されたことにより、私の生存はかなり絶望的になった。
ファイナルシグマの2連撃を防ぐ手段は今の私にはないし、防げたとしても次のターンにファイナルシグマを倒す方法もない。
だけど……まだ可能性は残っている。
だから、最後の瞬間まで、私は絶対に諦めない‼?
「さあ、終わりの刻です。バトル‼?」
「バトルフェイズ開始時、墓地の絶対王バックジャックを除外して効果発動‼?相手ターンに墓地のこのカードを除外して自分のデッキの一番上のカードをめくり、そのカードが通常罠カードだった場合、自分フィールドにセットし、違った場合、そのカードを墓地へ送ります。そして、この効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できるよ‼?」
「そんな効果が……ですが、あなたのデッキの上にあるカードはあなたにも分からないカードのハズです。そんな状況で罠カードを引き当てることなんて、できるわけがない」
「それでも……私は小さな可能性の先にある希望を掴むために、未知の未来を進むことを躊躇わない‼?絶対王バックジャックの効果でデッキの上をめくるよ‼?めくられたのは……通常罠、アルケミーサイクル‼?通常罠カードだからセットするよ」
「っ、まさか本当に罠カードを引き当てるとは……ですが、そのカードは確か発動ターンのエンドフェイズ時まで、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター全ての元々の攻撃力を0にし、この効果によって元々の攻撃力が0になっているモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られる度に、自分のデッキからカードを1枚ドローする罠。どちらにせよあなたの敗北という結果は変わらない‼?炎斬機ファイナルシグマの攻撃は防げない‼?炎斬機ファイナルシグマでリンクリボーを攻撃‼?」

「まだ、終わりじゃない!!?相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動!!?ゼロリンク!!?さらにそれにチェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動、アルケミーサイクル!!?発動ターンのエンドフェイズ時まで、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター全ての元々の攻撃力を0にし、この効果によって元々の攻撃力が0になっているモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られる度に、自分のデッキからカードを1枚ドローする!!?そしてリンクリボーの効果発動!!?ゼロリンク!!?このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力はターン終了時まで0になる!!?」
「使ってきましたか……ですが、その効果は炎斬機ファイナルシグマには効かない!!?」
リンクリボーが粒子となってファイナルシグマに纏わりつくが、その粒子すらもファイナルシグマに焼き尽くされる。
「モンスターがいなくなったことで、攻撃対象を変更!!?炎斬機ファイナルシグマでライトドラゴン@イグニスターを攻撃!!?斬鬼炎極斬・那由多斬り!!?」
「迎え撃って、ライトドラゴン@イグニスター!!?万雷のホワイトフレア!!?」
ライトドラゴンが最後の力を振り絞り雷のブレスを放つが、それを物ともせずにファイナルシグマが肉迫し、炎の刃を持ってライトドラゴンを斬り伏せる。
「炎斬機ファイナルシグマの攻撃力は7000!!?そして戦闘ダメージは倍になる!!?これで終わりです!!?」
「まだだよ!!?リバースカードオープン!!?罠発動、ガードブロック!!?相手ターンの戦闘ダメージ計算時にその戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、カードを1枚ドローする!!?」
「っ、戦闘ダメージを無くしてドローするカードが残っていましたか……」
炎の刃が私に迫るが、ライトドラゴンが最後の力を振り絞り、炎の刃から私を守る盾となった。
「まさか炎斬機ファイナルシグマの攻撃を防ぐとは思いませんでし

た。ですが、この状況でたった2枚カードをドローしても何も変わらない。あなたの負けは決まっています!!?」
普段の刀花ちゃんからは考えられない程冷徹な目で刀花ちゃんはそう告げる。
そんな刀花ちゃんの目を、私は真っ直ぐ見つめ返す。
「ううん、まだ決まってなんかいないよ。ドローには無限の可能性と希望があるんだから!!?」
「世迷言を……」
「世迷言なんかじゃない!!?私はこうやって希望を手繰ってきたんだから!!?ガードブロックの効果で、カードを1枚ドロー!!?さらにアルケミーサイクルの効果でさらにカードを1枚ドローする!!?」
「どんなに強がろうがこれで終わりです!!?炎斬機ファイナルシグマでウォーターリヴァイアサン@イグニスターを攻撃!!?斬鬼炎極斬・終炎!!?」
私がデッキから勢いよく2枚のカードをドローするのと同時にファイナルシグマがウォーターリヴァイアサンに斬りかかり、一瞬でその身体を燃え上がらせて爆散させ、爆炎が私を包む。
爆炎に包まれた私を見て、刀花ちゃんは不気味な笑みを浮かべたが、すぐにその表情が愕然としたものに変わる。
何故なら、その爆炎から黒い球体のモンスターが現れ、私を緑色のオーラで守っていたからだ。
「ドンヨリボー@イグニスターの効果発動!!?自分の@イグニスターモンスターが攻撃されたダメージ計算時にこのカードを手札から捨て、その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージを0にする!!?」
「なっ!?ここで専用の防御カードを引いたというんですか!?」
私を爆炎から守りきり、ドンヨリボーが姿を消す。
ありがとう、ドンヨリボー。
あなたのおかげで、私はまだ戦えるよ。
「アルケミーサイクルの効果でカードを1枚ドローするよ!!?」
「小賢しい真似を!!?塊斬機ダランベルシアンでダイレクトアタック!!?」

「まだ……まだだよ‼？手札からバトルフェーダー‼？さらにチェーンして墓地からクリボーンの効果発動‼？」
「なっ⁉？」
「相手モンスターの攻撃宣言時、墓地に存在するクリボーンの効果発動‼？墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のクリボーモンスターを任意の数だけ対象として、そのモンスターを特殊召喚します‼来て、クリボー‼？ＥＭ（エンタメイト）クリボーダー‼？サクリボー‼？アンクリボー‼？」

〈クリボー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

〈ＥＭクリボーダー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

〈サクリボー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

〈アンクリボー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

私の周りに現れるのは４体のクリボー達。
そしてそんなクリボー達を守るように鐘の音を鳴らす悪魔が姿を現した。

〈バトルフェーダー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ０

「バトルフェーダーの効果発動‼？相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードを手札から特殊召喚し、その後バトルフェイズを終了します‼？そしてこの効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドか

ら離れた場合に除外されます」
「っ、ここでバトルフェイズを終了させるカードをドローするなんて……」
私のフィールドに集った小さな希望の欠片達を見て、刀花ちゃんは歯噛みをする。
「クッ……運良く生き抜こうと、あなたに私の炎斬機ファイナルシグマを倒すことは不可能!!?次のターンで必ずあなたにトドメを刺す!!?メインフェイズ2!!?カードを2枚伏せてターンエンド!!?エンドフェイズ、炎斬機ファイナルシグマの攻撃力が元に戻る」

炎斬機ファイナルシグマ
ＡＴＫ７０００→３０００

遊花　ＬＰ８０００　手札１
△ーーーー　ー
□□□□□
ー　○
☆○ーー○
ー▲△△▲　ー
刀花　ＬＰ６７００　手札０

刀花ちゃんのフィールドにはファイナルシグマやトランスコードを含んだ４体のモンスターがおり、伏せカードが３枚、ライフポイントもまだ６７００も残っている。
だけど……怖くなんてない。
私の希望となるために、みんなが私を助けにきてくれたんだから。
「すー……はー……私のターン!!?」
私は深く深呼吸をして、握るカードに力を込める。
お願い……私のデッキ……私は刀花ちゃんを助けたい。
だから……私に、刀花ちゃんを助けるための力を貸して!!?
「ドロー!!?」

勢いよくドローしたカードをゆっくりと自分の正面に持ってくる。
……うん、まだ終わりじゃない!!?
「スタンバイフェイズ、墓地に存在するキラースネークの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが墓地に存在する場合、自分スタンバイフェイズにこのカードを手札に戻すよ!!?ただし、次の相手エンドフェイズに自分の墓地のキラースネーク1体を選んで除外しなければならない」
「自動回収のモンスターですか。そんなモンスターが加わったところで……」
「さらに墓地に存在するリンクリボーの効果発動!!?スケープリンク!!?このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル1モンスター1体をリリースしてこのカードを墓地から特殊召喚するよ!!?私はサクリボーをリリース!!?戻っておいで、リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

サクリボーの姿が消え、代わりにリンクリボーが跳ねるように私の前に現れる。
「サクリボーの効果発動!!?このカードがリリースされた場合に自分はデッキから1枚ドローする!!?よし、魔法カード、貪欲な壺!!?」
「っ!!?ここでドローカードを!!?」
「墓地に存在する金華猫、天輪の葬送士、占い魔女　ヒカリちゃん、ジェスターコンフィ、究極時械神セフィロンをデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローします!!?さらに、魔法カード、ワンチャン!!?　!!?」
「ワンチャン!!?……?」
「自分フィールドにレベル1モンスターが存在する場合に発動でき、デッキからレベル1モンスター1体を手札に加えるよ。ただし、発動後、このターン中に自分がこの効果で手札に加えたモンスターまたは

その同名カードの召喚に成功しなかった場合、エンドフェイズに自分は２０００ポイントのダメージを受ける」
「っ、あなたのデッキはレベル１デッキ……実質手札に加えたいカードを何でもサーチできるカードってわけですか」
「私はデッキから金華猫を手札に加える‼？……行くよ、刀花ちゃん‼？導いて‼？希望に繋がるサーキット‼？」
　私は１つ深呼吸をして、新しいサーキットを開く。
「召喚条件はカード名が異なるモンスター３体‼？私はバトルフェーダー、アンクリボー、リンクリボーをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？」
　バトルフェーダー、アンクリボー、リンクリボーがサーキットに吸い込まれていく。
　それを確認し、私がＥＸデッキから１枚のカードを取り出すと、
　その瞬間、私の頭の中にイメージが流れ込んでくる。
　浮かんできたのは刀花ちゃんが使っているデコードトーカーと瓜二つな悪魔の翼を持つ黒騎士。
　そしてそのデュエルの結末が導く１つの別れ。
『じゃあな……■■■……■■……愛してたぜ』
　その言葉と共に、ボロボロの街中で相棒に看取られながら、１人の男性の身体が粒子となって消えていく。
　私の頭の中に流れ込んでくるこのイメージも、きっとどこかの物語の誰かの記憶の欠片。
　私には、あなたがどんな思いで相棒と呼ぶ人とデュエルをしたのか……断片的な記憶では、理解してあげることはできないけれど……きっとあなたは、大切な相棒と仲間のために戦ったんだよね。
　だから、あなたの相棒と同じカードを使う私の友達を助けるために、あなたの力を貸してください‼？
　私の思いに応えるように、サーキットは光り輝く。
　光り輝くサーキットから現れたのは、イメージの中でデコードトーカーと戦っていた悪魔の翼を持つ黒騎士。
「リンク召喚‼？親愛なる相棒と出会い、哀を知り、愛に生きた、深愛

の黒騎士!!?リンク3!!?ダークナイト@イグニスター!!?」
私の呼び声に応えるように、黒騎士は剣を振り抜いた。
〈ダークナイト@イグニスター〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ２３００　↙?←↘?
「リンクモンスターの@イグニスター?いや、それよりもその姿は何なんですか!?何で私のデコードトーカーに似てるんですか!?」
「さあ、何でだろうね?だけど、これだけは言える。この子が、闇に呑まれた刀花ちゃんを救う私の切り札だよ!!?」
「っ、また世迷言を!!?」
私の言葉とダークナイトの姿に、刀花ちゃんが激しく動揺する。
流石に自分の切り札に似ているダークナイトには驚きを隠せないみたいだね。
それなら、その動揺をもっと大きくする!!?
「私は金華猫を召喚!!?」
〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００
現れたのは霊体になっている猫のようなモンスター。
「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル１モンスターを特殊召喚するよ!!戻って?おいで、ハイキューピット!!?」
〈ハイキューピット〉☆１　天使族　光属性
ＤＥＦ６００
「っ、またそのモンスターですか……」
「ハイキューピットの効果発動!!?私は再びデッキの上から３枚のカードを墓地に送ってハイキューピットのレベルを３つ上げるよ!!?」

ハイキューピット
☆1→4

「よし、墓地に送られたドットスケーパーの効果発動!!?デュエル中に1度、このカードが墓地に送られた場合に特殊召喚するよ!!?」
「っ、自己蘇生持ちのモンスターが紛れていましたか……」

〈ドットスケーパー〉☆1　サイバース族　地属性
ＤＥＦ２１００

ハイキューピットの弓矢に導かれ、ドットの身体を持つモンスターが姿を現わす。
そして私は、墓地に取っておいたとっておきを発動する。
「私はクリボーを選択し、墓地に存在するダブルリゾネーターを除外して効果発動!!?」
「なっ!!?リゾネーター!!?」
私の告げた名前に刀花ちゃんが目を見開く。
このカードはリーネさんとデッキを作っていく中で偶然見つけたカードだ。
真紅ちゃんが使用していたリゾネーターシリーズであり、２つを意味するこのカードに、行方不明になった真紅ちゃんと刀花ちゃんの２人を助けるという決意を込めてこのデッキに投入した。
その力は、絶対に刀花ちゃん達を助けるための力になってくれると信じて。
だからこれは、２人を救うための必然の一手。
「墓地のこのカードを除外し、自分フィールドの悪魔族モンスター１体を対象としてこのターン、その悪魔族モンスターをチューナーとして扱う!!?私はこのターン、クリボーをチューナーとして扱うよ!!?」
「クリボーをチューナーに!!?っ、まさか……!!?」

２つの顔と音叉を持った悪魔がクリボーに音叉を１つ手渡し、クリボーをチューナーに変える。
そして私は、正面に手をかざしてその言霊を口にする。
「私は‼?レベル４となったハイキューピットと、レベル１、金華猫、レベル１、ＥＭクリボーダーに、レベル１、チューナーモンスターとなったクリボーをチューニング‼?」
クリボーが光の輪になり、ハイキューピット達が小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から疾風を纏いし白銀の天馬が姿を現した。
「愛を告げる神風が、祈りに応え具現する‼?シンクロ召喚‼?蒼天を駆けよ、ウィンドペガサス@イグニスター‼?」
〈ウィンドペガサス@イグニスター〉☆７　サイバース族　風属性
ＡＴＫ２３００
「シンクロモンスターの@イグニスター‼?」
「この瞬間、ダークナイト@イグニスターの効果発動‼?プロミスドリバイブ‼?このカードのリンク先にモンスターが特殊召喚された場合、自分の墓地からレベル４以下の@イグニスターモンスターを可能な限りこのカードのリンク先となる自分フィールドに効果を無効にして特殊召喚する‼?戻ってきて、ヒヤリ@イグニスター、ドシン@イグニスター‼?」
〈ヒヤリ@イグニスター〉☆１　サイバース族　水属性
ＤＥＦ４００
〈ドシン@イグニスター〉☆１　サイバース族　地属性
ＤＥＦ８００
ダークナイトが剣を振るうと、空間が割れ、空間の裂け目からヒヤ

リとドシンが姿を現わす。
「小型の@イグニスターの蘇生効果……」
「そしてウィンドペガサス@イグニスターの効果発動!!?ストームブリンガー!!?自分メインフェイズに発動でき、自分フィールドの@イグニスターモンスターの数まで、相手フィールドの魔法・罠カードを選んで破壊する!!?この効果もライトドラゴン@イグニスターと同じで対象を取らないよ!!?」
「なっ!?!?ライトドラゴン@イグニスターと同等の魔法・罠破壊!?!?っ、リバースカードオープン!!?罠発動、ダメージダイエット!!?このターン自分が受ける全てのダメージは半分になる!!?」
「ダメージダイエット……私のフィールドには4体の@イグニスターがいる!!?だから、刀花ちゃんの魔法・罠ゾーンのカードを全て破壊する!!?」
　ウィングペガサスが空を駆けると凄まじい暴風が吹き荒れ、刀花ちゃんの魔法・罠を全て吹き飛ばす。
「くっ、破壊された斬機刀ナユタの効果発動!!?このカードが魔法&罠ゾーンから墓地へ送られた場合、同名カード以外の自分の墓地の斬機カード1枚を手札に加える!!?私は墓地から斬機方程式を手札に加える!!?」
「まだだよ!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「っ、またリンク召喚ですか……」
　私は再び正面に手をかざし、もう1度サーキットを開く。
「召喚条件はサイバース族モンスター2体以上!!?私はヒヤリ@イグニスター、ドシン@イグニスター、ドットスケーパーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
　ヒヤリ、ドシン、ドットスケーパーがサーキットに吸い込まれていく。
　そしてサーキットから輝くと、サーキットから現れたのは巨大な不死鳥。
「リンク召喚!!?友愛に燃える不死鳥!!?リンク3!!?ファイアフェニックス@イグニスター!!?」

〈ファイアフェニックス@イグニスター〉ＬＩＮＫ３　サイバース族
炎属性
ＡＴＫ２３００　↑←↓

「また@イグニスターのリンクモンスターが……」
「まだだよ!!?速攻魔法、Ａｉドリングボーン!!?同名カードは1ターンに1度、自分の墓地の@イグニスターモンスター1体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はサイバース族モンスターしか特殊召喚できない!!?蘇って、心優しき大地の巨人!!?アースゴーレム@イグニスター!!?」

〈アースゴーレム@イグニスター〉☆7　サイバース族　地属性
ＡＴＫ２３００

「どんどん@イグニスターが並んで……!?」
「さあ、決めるよ!!?手札を1枚捨て、速攻魔法、アクションマジック―ダブルバンキング!!?」
「っ!?そのカードは……!!?」
「アクションマジック―ダブルバンキングの効果により、自分フィールドのモンスターは、このターン戦闘で相手モンスターを破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃できる!!?バトル!!?ファイアフェニックス@イグニスターで塊斬機ラプラシアンに攻撃!!?フェニックスブレイヴ!!?」
「迎え撃って、塊斬機ラプラシアン!!?雷電撃滅!!?」
ラプラシアンが紫電を纏った大剣でファイアフェニックスを斬り裂く。
しかし、斬り裂かれたハズのファイアフェニックスの身体は炎に包まれ何事もなかったかのように再生する。
「ファイアフェニックス@イグニスターの効果発動!!?メビウスフレ

ア‼？同名カードは１ターンに１度、このカードが攻撃するダメージ計算時、このカードの攻撃力分のダメージを相手に与え、その戦闘で発生する相手への戦闘ダメージは０になる‼？」
「直接バーン効果⁉？」
「さらに墓地のドンヨリボー@イグニスターを除外して効果発動‼？@イグニスターモンスターまたはＡｉ魔法・罠カードの、相手にダメージを与える効果が発動した時、墓地のこのカードを除外してその効果で相手に与えるダメージは倍になる‼？」
「なっ⁉？」
「ダメージダイエットの効果で受けるダメージは半分になってる。でも、倍を半分にするだけだから通常のダメージは受けて貰うよ‼？」
　再生したファイアフェニックスの炎はラプラシアンを焼き払い、そのまま刀花ちゃんを包む闇に燃え広がった。

刀花　ＬＰ６７００→４４００

「ぐっ、あああ‼？」
「もう１度だよ、ファイアフェニックス@イグニスターで塊斬機ダランベルシアンに攻撃‼？フェニックスブレイヴ‼？」
「っ、迎え撃って、塊斬機ダランベルシアン‼？重突雷撃‼？」
　ダランベルシアンが槍を振り回し、ファイアフェニックスに迫るが、ファイアフェニックスは槍ごとダランベルシアンを燃やし尽くした。

刀花　ＬＰ４４００→４２５０

「くうっ‼？」
「まだまだ行くよ‼？アースゴーレム@イグニスターで炎斬機ファイナルシグマを攻撃‼？スプリームフィスト‼？」
「攻撃力が低いモンスターで炎斬機ファイナルシグマに攻撃⁉？迎え撃って、炎斬機ファイナルシグマ‼？斬鬼炎極斬‼？」

アースゴーレムが振るった拳を、炎斬機ファイナルシグマが大剣で受け止め、徐々に押し返していく。
「アースゴーレム@イグニスターの効果発動!!?ガイアフォース!!?EXデッキから特殊召喚されたモンスターをこのカードが攻撃するダメージステップの間、このカードの攻撃力は元々の攻撃力分アップする!!?」
「っ、今度は自己強化モンスター!?!?」
「効果耐性がある炎斬機ファイナルシグマでも、自己強化には意味がない!!?」
アースゴーレムが雄叫びをあげると、辺りの土が盛り上がり、アースゴーレムの腕に集まりアースゴーレムの腕を強化していく。

アースゴーレム@イグニスター
ＡＴＫ２３００→４６００

強化されたアースゴーレムの剛腕を押さえきれなくなり、ファイナルシグマはその拳に叩き潰された。

刀花　ＬＰ４２５０→３４５０

アースゴーレム@イグニスター
ＡＴＫ４６００→２３００

「ぐっ……まだ、まだ負けじゃない!!?破壊された炎斬機ファイナルシグマの効果発動!!?このカードが戦闘または相手の効果で破壊された場合、デッキから斬機カード１枚を手札に加える!!?私はデッキから斬機ナブラを手札に加える!!?」
「っ、やっぱりこのままじゃダメ見たいだね……」
フィールドにいた斬機達を全て倒したのに刀花ちゃんの様子に変化は見られない。
手札にある斬機のカード達がそうしているのか、それとも私が今ま

で戦ってきたＮｏ．達ではないからなのかは分からないけど、このままじゃ刀花ちゃんを闇のカードから解放できない。
どうすればいい？
どうすれば刀花ちゃんを助けられる？
悩む私の視界に突如悪魔の翼が入ってくる。
私がそちらに視線を向けるとダークナイトが真っ直ぐな目で私を見てから、フィールドにいた他の@イグニスター達に視線を向け、最後に刀花ちゃんに向き直り、剣を構えた。
……もしかして、自分達を信じてデュエルを続けろって言ってるの？
「……うん、分かった。信じるよ、あなた達を!!?もう1度、アースゴーレム@イグニスターで今度はトランスコードトーカーを攻撃!!?そしてアースゴーレム@イグニスターの効果発動!!?ガイアフォース!!?ＥＸデッキから特殊召喚されたモンスターをこのカードが攻撃するダメージステップの間、このカードの攻撃力は元々の攻撃力分アップする!!?」

アースゴーレム@イグニスター
ＡＴＫ２３００→４６００

「砕いて、アースゴーレム@イグニスター!!?スプリームフィスト!!?」
「迎え撃って、トランスコードトーカー!!?グラウンドデス!!?」
トランスコードが岩石の弾丸を放つが、それを弾き飛ばし、アースゴーレムの拳がトランスコードを貫き、爆散させた。

刀花　ＬＰ３４５０→２３００

アースゴーレム@イグニスター
ＡＴＫ４６００→２３００

これで刀花ちゃんのフィールドにモンスターはいなくなった。
私にはまだダークナイトとウィンドペガサスがいる。
「決めに行くよ、ウィンドペガサス@イグニスターでダイレクトアタック!!?スターゲイザートルネード!!?」
ウィンドペガサスが空を駆け、刀花ちゃんに迫る。
しかし、その身体が刀花ちゃんに迫った瞬間、刀花ちゃんを守るように黒衣の騎士が現れた。
「まだ、まだ終わりません!!?墓地に存在するリコーデッドアライブを除外して効果発動!!?」
「っ、ウィンドペガサス@イグニスターで破壊したカードに混ざってたんだね」
「ＥＸモンスターゾーンに自分のモンスターが存在しない場合、墓地のこのカードを除外し、除外されている自分のコードトーカーモンスター１体を対象として特殊召喚します!!?次元の狭間より戻れ!!?デコードトーカー!!?」

〈デコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ２３００　↙?→↘?

「デコードトーカーの永続効果、リンクアブソーブ!!?このカードの攻撃力は、このカードのリンク先のモンスターの数×５００ポイントアップします!!?デコードトーカーのリンク先にはダークナイト@イグニスターがいる!!?よってデコードトーカーの攻撃力は５００ポイントアップする!!?」

デコードトーカー
ＡＴＫ２３００→２８００

まるで刀花ちゃんに宿った闇のカードの呪いが乗り移っていくかのようにデコードトーカーの身体に刀花ちゃんから闇が流れこみ、その瞳が怪しく光り、力を増していく。

「あなたの@イグニスターの攻撃力は全て２３００‼?･私のデコードトーカーには及ばない‼?･」
確かに、私の@イグニスター達の攻撃力は全員２３００だ。
攻撃力を上昇させる効果を持たないダークナイトとウィンドペガサスではデコードトーカーを倒せない。
だけど、それを覆すための手段は既に手札にきている。
私はそのままウィンドペガサスの攻撃を続行しようとしてーーー
「……モンスターが増えたことにより、ウィンドペガサス@イグニスターの攻撃を中止する」
ーーー止めた。
確かにこのカードを使えば、ウィンドペガサスでデコードトーカーを倒すことができる。
だけど、闇に囚われたデコードトーカーを倒すのに相応しいモンスターは、他にいる。
「……いけるよね、ダークナイト@イグニスター?･」
私の問いかけにダークナイトは感謝を示すように頭を下げる。
それだけで、私にはダークナイトの気持ちが伝わってくる。
私は信じてるよ。
あなたは絶対に過去に打ち勝てるって‼?･
「……行くよ、刀花ちゃん‼?･ダークナイト@イグニスターでデコードトーカーを攻撃‼?･」
「自爆特効⁉?･ヤケになりましたか?･迎え撃って、デコードトーカー‼?･デコードエンド‼?･」
ダークナイトとデコードトーカー。
２体の黒衣の騎士が激しく斬り結び、剣戟が鳴り響く。
しかし、闇の力を得たデコードトーカーにダークナイトは徐々に押されていき、追い込まれていく。
「さあ、地に伏せなさい、偽物の騎士‼?･」
「ダークナイト@イグニスターは偽物の騎士なんかじゃない‼?･この子は大切な人の為に戦える優しい騎士なんだもん‼?･この子の思いは、私が叶える‼?･自分と相手のモンスター同士が戦闘を行うダメー

ジ計算時、速攻魔法、Ａｉ打ち‼?」
「Ａｉ打ち⁉?」
「自分と相手のモンスター同士が戦闘を行うダメージ計算時、その自分のモンスターの攻撃力はそのダメージ計算時のみ、その相手モンスターの攻撃力と同じになり、そのダメージステップ終了時にその戦闘で破壊されたモンスターのコントローラーはその元々の攻撃力分のダメージを受ける‼?」
「なっ⁉?文字通り相討ち覚悟のバーン効果⁉?」

ダークナイト@イグニスター
ＡＴＫ２３００→２８００

私が発動したＡｉ打ちの力を受け、押されていたダークナイトがデコードトーカーの剣を押し返していく。
「ううん、相討ちになんかさせない‼?ダークナイト@イグニスターは私が護る‼?Ａｉ打ちのもう１つの効果‼?自分の@イグニスターモンスターが戦闘で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外する‼?」
「なっ⁉?それじゃあ私だけがバーンダメージを⁉?」
「私が一方的にぶん護る‼?それが私のＡｉ打ちだよ‼?闇夜を斬り裂いて、ダークナイト@イグニスター‼?ナイトエンド‼?」
ダークナイトとデコードトーカーがそれぞれの剣を振り抜き、交差する。
しばらくの静寂の後、ダークナイトがその場に片膝をつく。
片膝をついたダークナイトの方をデコードトーカーが振り向き、満足そうに笑うとデコードトーカーの剣が折れ、そのまま粒子に変わって消滅した。

刀花　ＬＰ２３００→１１５０

ダークナイト@イグニスター

ＡＴＫ２８００→２３００

「そんな、デコードトーカーまで……」

「ダークナイト@イグニスターの効果発動!!?ブレイキングダウン!!?このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、自分の墓地からサイバース族モンスター1体を選んで特殊召喚する!!?蘇って、愛を羨望する大罪の水神!!?ウォーターリヴァイアサン@イグニスター!!?」

〈ウォーターリヴァイアサン@イグニスター〉☆7　サイバース族
水属性
ＡＴＫ２３００

ダークナイトの力でウォーターリヴァイアサンが蘇る。

刀花ちゃんのフィールドにはもうカードはない。

もう、阻むものは何もない!!?

「これで終わりだよ!!?ダークナイト@イグニスターでダイレクトアタック!!?ナイトエンド!!?」

ダークナイトが剣を刀花ちゃんに振り下ろす。

その瞬間、刀花ちゃんが気を失うように倒れ、刀花ちゃんが纏っていた闇が弾けて辺りに霧散する。

霧散した闇に向け、ダークナイトが剣をかざすと闇はダークナイトの剣に吸い込まれていき、消滅した。

刀花　ＬＰ１１５０→０

ーーーーーーー

「何とか勝てた……っ、刀花ちゃん!!?」

デュエルを終え、その場に倒れた刀花ちゃんに慌ててかけよる。

よかった……ただ気を失ってるだけみたい。

私がホッと胸を撫で下ろすと、刀花ちゃんが倒れた際に散らばった刀花ちゃんのデッキから、闇を溢れ出させている斬機のカード達を拾う。
私が拾った斬機達から一瞬闇が溢れ出したが、すぐにその闇は霧散して消えていき、しばらくすると、刀花ちゃんのデッキから感じていたものも含めて、闇の気配は完全に感じられなくなった。
おそらく、何らかの力で服部君のクリムゾンシャドーみたいに、この斬機達も闇のカードじゃ無くなったのだろう。
「ふぅ……終わった、のかな？……痛っ‼？」
闇の気配が感じられなくなり、ホッと一息をついた瞬間、急に頭痛が襲ってくる。
思わず頭を押さえると、すぐにその頭痛は嘘のように消えていった。
「うぅ……最近頭痛が多い気がする……闇のカードを相手に気を張ったデュエルばかりしてるからかな？」
私が苦笑いを浮かべながら頭を押さえていると、私の後ろに影が指す。
「そういえば、まだお礼が言えてなかったね。刀花ちゃんを助けてくれてありがとう、ダークナイト@イグニスター」
後ろを振り向き、私達を見つめていたダークナイトにお礼を言うと、ダークナイトは顔を逸らして気にするなとでも言うように手を振って姿を消した。
案外、照れ屋さんなのかな？
まあ、それはそれとして、今やるべきことは別にあるよね。
「刀花ちゃん‼？起きて‼？」
「……うっ、ううっ……ここ、は……？」
「よかった、気がついた」
散らばったカードを拾い集め、私が必死に身体を揺さぶると、気を失っていた刀花ちゃんが目を覚まし、ぼんやりとした表情で不思議そうに辺りを見渡す。
「栗原……先輩？あれ、ここ、どこ？私、どうして……」

「刀花ちゃんは闇のカードに操られて、しばらくの間行方不明になってたんだよ」
「えっ⁉？闇のカードって⁉？そ、それに行方不明ですか⁉？」
私の言葉にぼんやりしていた刀花ちゃんは一気に覚醒して慌てはじめる。
当然の反応ではあるし、混乱しているところで申し訳ないんだけど、今はその質問に答えるよりも大事なことがある。
「話してあげたいし私も聞きたいことはあるんだけど、ちょっと今は立て込んでるからその話は私に付いてきて貰いながらでいいかな？今、師匠が入院している病院で桜ちゃんが闇のカードに操られた真紅ちゃんに襲われてるみたいなんだ」
「宝月先輩が真紅ちゃんに⁉？」
「桜ちゃんのことは信じてるけど、桜ちゃんは闇のカードに対抗できる力はないハズ。だから、もしもの時は助けてあげたいの。勿論、真紅ちゃんも‼？」
私の言葉に、刀花ちゃんは一瞬戸惑うような表情を見せたが、すぐに真剣な表情を浮かべて頷いた。
「っ……分かりました。ちょっとまだ状況は呑み込めないですけど、栗原先輩の言うことを信じて付いていきます‼？」
「ありがとう‼？それじゃあ、急ごう‼桜ちゃん達のところに‼？」
刀花ちゃんを先導し、私は路地裏を駆ける。
無事でいてね、桜ちゃん。
最速最短で一直線に向かうから‼？

第８４話　荒魂を鎮める業

●

桜　ＬＰ８０００
真紅　ＬＰ８０００

「先攻は我が貰う!!?魔法アクティベート、紅玉の宝札!!?手札からレベル７のレッドアイズモンスター１体をセメタリーへ送り、我はデッキから２枚ドローする。その後、デッキからレベル７のレッドアイズモンスター１体をセメタリーへ送る事ができる!!?手札の真紅眼の黒炎竜（レッドアイズブラックフレアドラゴン）をセメタリーへ送り、カードを２枚ドローする!!?その後、デッキから真紅眼の黒竜（レッドアイズブラックドラゴン）をセメタリーに送る!!?さらに魔法アクティベート、レッドアイズインサイト!!?このカード名のカードは１ターンに１枚しかアクティベートできず、手札・デッキからレッドアイズモンスター１体をセメタリーへ送ってデッキから同名カード以外のレッドアイズ魔法・罠カード１枚を手札に加える!!?我はデッキから真紅眼の飛竜（レッドアイズワイバーン）をセメタリーへ送り、魔法カード、真紅眼融合（レッドアイズフュージョン）を手札に加える!!?」

「っ、その融合魔法は……」

「見せてやろう、我が呪血に呑まれた真紅眼を!!?魔法アクティベート、真紅眼融合!!?このカード名のカードは１ターンに１枚しかアクティベートできず、このカードをアクティベートするターン、我はこのカードのエフェクト以外ではモンスターを召喚（サモン）・特殊召喚（スペシャルサモン）できない。その代わり、我の手札・デッキ・フィールドから、融合（フュージョン）モンスターカードによって決められた融合素材（フュージョンマテリアル）モンスターをセメタリーへ送り、レッドアイズモンスターを融合素材（フュージョンマテリアル）とするその融合（フュージョン）モンスター１体をＥＸデッキから融合召喚（フュージョンサモン）し、このエフェクトで特殊召喚（スペシャルサモン）したモンスターのカード名を真紅眼の黒竜として扱う!!?我はデッキから真紅眼の黒竜とレベル６ドラゴン族モンスター、真紅眼（レッドアイズ）の凶星竜―メテオドラゴンを融合（フュージョン）!!?」

真紅のフィールドに出来た渦の中に真紅の眼を持つ黒竜と隕石のような身体を持つ竜が吸い込まれていく。
そして渦が弾けると舞い降りるのは炎を纏った流星の如き真紅の眼を持つ黒竜。
「我が呪血に呑まれし黒竜よ‼?・禍津星を喰らいて、終焉を齎す破壊竜となれ‼?・融合召喚(フュージョンサモン)‼?・流星竜メテオブラックドラゴン‼?・」

〈流星竜メテオブラックドラゴン〉☆8　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３５００

「流星竜メテオブラックドラゴンのエフェクトアクティベート‼?・禍津星(デスハルマゲドン)は終焉に至る‼?・このカードが融合召喚(フュージョンサモン)に成功した場合、手札・デッキからレッドアイズモンスター1体をセメタリーへ送り、そのモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージを汝に与える‼?・我はデッキより真紅眼の凶雷皇(レッドアイズライトニングロード)―エビルデーモンをセメタリーに送り、その攻撃力２５００の半分、１２５０のダメージを与える‼?・」
流星竜が咆哮をあげると、空から稲妻を纏った流星が私に向かって降り注いだ。

桜　ＬＰ８０００→６７５０

「くっ……初っ端からやってくれるじゃない」
「我はカードを1枚セットし、ターンエンドだ。『壊獣姫』よ。汝が深淵に至った我に抗えるのか、見せてみよ」

桜　ＬＰ６７５０　手札５
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　○
ー　ー

ーー▲ーー　　ー
真紅　ＬＰ８０００　手札３
「随分な生意気なこと言うじゃない。そんなに私の力が見たければいくらでも見せてあげるわ!!?私のターン、ドロー!!?私は真紅の流星竜メテオブラックドラゴンをリリースし、怒炎壊獣ドゴランを真紅のフィールドに攻撃表示で特殊召喚!!?」
「っ!?」
〈怒炎壊獣ドゴラン〉☆８　恐竜族　炎属性
ＡＴＫ３０００

流星竜を喰らい、真紅のフィールドに地の底から巨大な地竜が現れる。
「チッ、壊獣王め。禍津星をも喰うとはな。だが、禍津星は呪血に呑まれし黒竜へと流転する。流星竜メテオブラックドラゴンのエフェクトアクティベート!!?禍津星（スカーレットアルマゲドン）は真紅に呪転する!!?このカードがモンスターゾーンからセメタリーへ送られた場合、我のセメタリーの通常モンスター１体を特殊召喚する!!?蘇れ、真紅眼の黒竜!!?」
真紅の呼びかけに、喰らわれた流星竜の残骸から勢いよく黒竜が飛び出し、殺意の篭った咆哮を響かせた。
〈真紅眼の黒竜〉☆７　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ２０００
「蘇ってきたわね、真紅眼の黒竜。悪いけど、早々に捻り潰してあげるわ!!?相手フィールドに壊獣モンスターが存在する場合、このカードは手札から攻撃表示で特殊召喚できる!!?あなたの全てを壊してあげるわ!!?雷撃壊獣サンダーザキング!!?」
〈雷撃壊獣サンダーザキング〉☆９　雷族　光属性

ＡＴＫ３３００

私のフィールドに降り立つ三つ首の竜。

サンダーザキングは私を見て、歓喜の咆哮を上げた。

「チッ、金星の雷撃龍か‼?」

「そして、行くわよ、相棒‼?月より来たる永遠の姫‼?妖精伝姫(フェアリーテイル)―カグヤを召喚‼?」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性

ＡＴＫ１８５０

現れたのは月のマークが入っている扇子を持ったお姫様。

『私、参上‼?』

カグヤはそういいながら自分を指差しながら扇子を掲げる。

『桜、分かっているとは思うけど、無理は禁物よ?』

「分かってはいるけど、そもそもこの状況が既に無理そのものでしょ?詮無きことだわ」

『それでも無理は禁物だと言ってるのよ』

カグヤが少し心配そうにそう口にする。

だけど、今この状況で無理できるのも私しかいないのよ‼?

「なら、私のしてることが無理にならないようにアンタの力を貸しなさい‼?妖精伝姫―カグヤの効果発動!召喚に成功した時、デッキから攻撃力１８５０の魔法使い族モンスター１体を手札に加える。私は２体目の妖精伝姫―カグヤを手札に加えるわ‼?そして妖精伝姫―カグヤの効果発動‼?アンリーゾナブルディマンド‼?１ターンに１度、相手フィールドの表側表示モンスター１体を対象として発動‼?相手はそのモンスターの同名カード１枚を自身のデッキ・ＥＸデッキから墓地へ送ってこの効果を無効にできる。墓地へ送らなかった場合、このカードと対象のモンスターを持ち主の手札に戻す。この効果は相手ターンでも発動できるわ。対象は勿論、怒炎壊獣ドゴランよ‼?」

「チッ、我のデッキには怒炎壊獣ドゴランは入っていない」
「なら手札に戻させて貰うわよ」
真紅がそう宣言するとドゴランは咆哮を上げてカグヤに向かって尻尾を振るう。
振るわれるドゴランの尻尾を、カグヤは正面から受け止めた。
『壊獣王の名は伊達ではないわね。だけど、私には勝てないわよ』
カグヤはドゴランの尻尾を掴み、回転を始めると、ドゴランの身体が浮かび上がり振り回されながら宙を舞う。
カグヤがジャイアントスイングのようにドゴランを私に向けて放り投げるとドゴランはカードとして手札に戻り、カグヤもドヤ顔で胸を張りながら私の手札に戻っていった。
「バトル!!?・雷撃壊獣サンダーザキングで真紅眼の黒竜を攻撃!!?・グラビティレイ!!?・」
「迎え撃て、真紅眼の黒竜!!? 黒炎弾(ダークメガフレア)!!?・」
黒竜はサンダーザキングに黒い炎の弾丸を放つが、サンダーザキングの口から放たれたレーザーにより貫かれ、爆散した。

真紅　ＬＰ８０００→７１００

「クッ、我が呪血に呑まれし黒竜を破壊するか。なかなかの力だ」
「そりゃあどうも。メインフェイズ２、カードを１枚伏せてターンエンドよ!!?・」

桜　ＬＰ６７５０　手札５
ー ー ▲ ー ー　ー
ー ー ○ ー ー
ー　ー
ー ー ー ー ー
ー ー ▲ ー ー　ー
真紅　ＬＰ７１００　手札３

「我のターン、ドロー!!?・我はチューナーモンスター、ヴァレットシンクロンを召喚!!?」

〈ヴァレットシンクロン〉☆1　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ０

現れたのは機械的な身体を持つ弾丸の如き龍。
「ヴァレットシンクロンのエフェクトアクティベート!!?・このカードが召喚に成功した時、我のセメタリーのレベル５以上のドラゴン族・闇属性モンスター１体を対象としてそのモンスターをエフェクトをインヴァリドにして守備表示で特殊召喚する!!?・ただし、このエフェクトで特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに破壊され、このエフェクトのアクティベート後、ターン終了時まで我は闇属性モンスターしかＥＸデッキから特殊召喚できない。再び蘇れ、真紅眼の黒竜!!?・」

〈真紅眼の黒竜〉☆7　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ２０００

ヴァレットシンクロンの後ろに再び黒竜が姿を現わす。
この流れなら、来るわね。
真紅のもう1体のエースモンスターが。
「我が魂に宿りし深淵の悪魔!!?・真紅の竜王の名をその魂に刻んでやろう!!?・我はレベル7、真紅眼の黒竜に、レベル1、チューナーモンスター、ヴァレットシンクロンをチューニング!!?」
ヴァレットシンクロンが光の輪になり、黒竜が小さな星に変わり、光の道になる。
そして光の道が輝くと、そこに現れたのは闇に呑まれた王者の風格を持つ巨大な竜王。
「深淵に至りし呪われし覇王よ!!?・孤高なる闇を纏いて歯向かう愚者を呪い尽くせ!!?・シンクロ召喚!!?・深淵の呪王、琰魔竜レッドデーモ

ン!!?」

〈琰魔竜レッドデーモン〉☆8　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００

「出たわね、レッドデーモン……」
「琰魔竜レッドデーモンのエフェクトアクティベート!!?1ターンに1度、我のメインフェイズ1でのみアクティベートでき、このカード以外のフィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスターを全て破壊する!!?」
「っ、攻撃表示モンスターの全体破壊!!?」
「ただしこのエフェクトをアクティベートするターン、このカード以外のモンスターは攻撃できないがな。さあ、呪われし炎に焼かれ消えるがいい、金星の雷撃龍よ!!?呪王(クリムゾンカースドグマ)は一人世界を呪う!!?」
琰魔竜が闇を纏った炎を放ち、その炎に呑み込まれたサンダーザキングの身体が融解し、消滅した。
「っ、ごめんなさい、雷撃壊獣サンダーザキング……」
「これで汝を守るものはいなくなった!!?バトル!!?琰魔竜レッドデーモンでダイレクトアタック!!?呪王(カース)は劫火(オブ)で世界(ワ)を焦(レ)がす(ア)!!?」
琰魔竜が拳に闇の炎を纏い、私に向けてその拳を振るう。
ヘルテンペストを引いてて闇のカードに操られた真紅が相手じゃなければ受けても良かったんだけど、受けるわけにはいかないわね。
「リバースカードオープン!!?永続罠、サラマングレイトギフト!!?手札からサラマングレイトモンスター1体を捨てて、デッキからサラマングレイトモンスター1体を墓地へ送り、その後、自分はデッキから1枚ドローするわ!!?私は手札の転生炎獣(サラマングレイト)ゼブロイドXを捨てて、デッキから転生炎獣(サラマングレイト)ウルヴィーを墓地へ送り、カードを1枚ドローするわ!!?」
「手札交換か。そんなことをして何になる!!?」
「意味ならあるに決まってるでしょ?そしてサラマングレイトモンスターが自分の墓地に送られたことで手札の転生炎獣(サラマングレイト)ガゼルの効果発

動!!?同名カードは1ターンに1度、転生炎獣ガゼル以外のサラマングレイトモンスターが自分の墓地に送られた場合、このカードを手札から特殊召喚する!!?」

〈転生炎獣ガゼル〉☆3　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１０００

淡魔竜から私を守るように炎を纏ったガゼルが姿を現わす。
これで淡魔竜の攻撃が私に届くことはない。
「チッ、壁になるモンスターを増やしたか」
「転生炎獣ガゼルのもう1つの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから転生炎獣ガゼル以外のサラマングレイトカード1枚を墓地に送る。私はデッキから転生炎獣Ｊ(サラマングレイト)ジャガーを墓地に送るわ!!?」
「小癪な真似を!!モンスターが増えたことで?攻撃対象を変更!!?淡魔竜レッドデーモンで転生炎獣ガゼルをアタック!!?呪王(カース)は劫火(オブ)で世界を焦(レア)がす!!?」
淡魔竜の振るった拳がガゼルを貫いて爆散させ、辺りに爆風が吹き荒れる。
そして立体映像のハズの爆風から感じるのは確かな熱気。
やっぱり、遊花のデュエルの時みたいに攻撃が実体化している。
受けたら火傷なんかじゃ済まなそうね。
「その程度の小さな炎では我が呪王の呪いには勝てん。メインフェイズ2、カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

桜　ＬＰ６７５０　手札４
ー△ーー　ー
ーーーーー
○　ー
ーーーーー
ー▲▲▲ー　ー

真紅　ＬＰ７１００　手札１

「何が呪王よ。呪王だろうと何だろうと、私の壊獣の餌にしてやるわ‼?私のターン、ドロー‼?」
「汝ならばそういうであろうな、『壊獣姫』。なればこそ、汝が呪われるのは必然と言うわけだ。スタンバイフェイズ、我が呪王、琰魔竜レッドデーモンをリリースし、リバースカードオープン‼?罠アクティベート、影のデッキ破壊ウイルス‼?」
「なっ⁉?ウィルスカード⁉?」
「我がフィールドの守備力２０００以上の闇属性モンスター１体を贄とすることでアクティベートし、汝のフィールドのモンスター、汝の手札、汝のターンで数えて３ターンの間に汝がドローしたカードを全て確認し、その内の守備力１５００以下のモンスターを全て破壊する‼?」
「っ、守備力１５００以下のモンスター⁉?」
『……やられたわね、ごめんなさい、桜』
琰魔竜が咆哮を上げると、琰魔竜の身体が闇に変わっていく。
完全なる闇に姿を変えた琰魔竜は怨嗟の咆哮を上げながら霧散し、私のカードに乗り移る。
私のカードに乗り移った闇が深くなると、私の手札にいたカグヤ達を墓地へと弾き飛ばした。
「くっ、カグヤ‼?」
「破壊できたのは汝の相棒である妖精伝姫―カグヤ２体に怒炎壊獣ドゴラン、転生炎獣（サラマングレイト）コヨーテか。たわいない。貴様の力はその程度か、『壊獣姫』？」
「っ、言ってくれるわね。だけど、勝ったつもりになるのはまだ早いんじゃない？私の手札はまだ残ってるのよ‼?」
「ほう、たった１枚の手札で死地を切り開くと戯言をほざくか」
「戯言かどうかはちゃんと効果を見てから言いなさいよね‼?魔法カード、転生炎獣（サラマングレイト）の再起（リキュアランス）‼?同名カードは１ターンに１度、自分の墓地のカード名が異なるサラマングレイトモンスター２体を手札

に加える!!?」
「チッ、回収効果の魔法カードが残ったか」
「私は墓地から転生炎獣ウルヴィーと転生炎獣ガゼルを手札に加えるわ!!?さらに墓地から手札に加わった転生炎獣ウルヴィーの効果発動!!?このカードが効果で自分の墓地から手札に加わった場合、このカードを相手に見せ、自分の墓地の炎属性モンスター1体を対象としてそのモンスターを手札に加える!!?私は墓地から転生炎獣コヨーテを手札に加えるわ!!?」
「っ、減らした手札を一気に3枚まで回復させるとは、悪運が強い……」
「まだまだこんなものじゃないわよ!!?永続罠、サラマングレイトギフトの効果発動!!?私は手札の転生炎獣ウルヴィーを捨てて、デッキから転生炎獣(サラマングレイト)ファルコを墓地へ送り、カードを1枚ドローするわ!!?」
「だが、ドローしたそのカードは呪王の呪いに侵される!!?」
「……私がドローしたのは転生炎獣(サラマングレイト)モル。守備力が１５００以下だから破壊されるわ」
　サラマングレイトギフトでドローしたモルが琰魔竜の呪いに蝕まれ、墓地に弾き飛ばされる。
「だけど、サラマングレイトモンスターが自分の墓地に送られたことで手札の転生炎獣ガゼルの効果、それにチェーンして墓地に送られた転生炎獣ファルコの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが墓地へ送られた場合、自分の墓地のサラマングレイト魔法・罠カード1枚を自分フィールドにセットする!!?私は墓地から転生炎獣の再起をフィールドにセットするわ!!?」
「っ、次のターン、さらなる転生炎獣を回収するつもりか。小賢しい真似を……」
「そして転生炎獣ガゼルの効果発動!!?このカードを手札から特殊召喚する!!?」
〈転生炎獣ガゼル〉☆3　サイバース族　炎属性

ＤＥＦ１０００

「転生炎獣ガゼルのもう１つの効果発動!!?私はデッキから転生炎獣(サラマングレイト)ラクーンを墓地に送るわ!!?さらに私は転生炎獣コヨーテを召喚!!?」

〈転生炎獣コヨーテ〉☆３　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１０００

フィールドに現れたのは鋼の身体を持つ狼のようなモンスター。
「そして、繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」
「リンク召喚か……」
私が目の前に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル４以下のサイバース族モンスター１体!!?私は転生炎獣コヨーテをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク１!!?転生炎獣(サラマングレイト)ペイルリンクス!!?」

〈転生炎獣ペイルリンクス〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ５００　←

コヨーテがサーキットに吸い込まれると、代わりにサーキットから現れたのは真っ赤な装甲に身を包んだ山猫のモンスター。
「転生炎獣ペイルリンクスの効果発動!!?１ターンに１度、このカードがリンク召喚に成功した場合に、デッキから転生炎獣(サラマングレイト)の聖域(サンクチュアリ)１枚を手札に加える!!?私はデッキからフィールド魔法、転生炎獣の聖域を手札に加える!!?」
「ほう、汝にに有利な聖域を生み出すつもりか」
「そしてフィールド魔法、転生炎獣の聖域を発動!!?」
フィールド魔法を発動すると、辺りの風景がマグマに囲まれた火山のフィールドに変わる。
「もう１度!!?繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」

「再びリンク召喚か!!?」
「召喚条件は炎属性の効果モンスター2体!!?私は転生炎獣ペイルリンクスと転生炎獣ガゼルをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?転生炎獣(サラマングレイト)サンライトウルフ!!?」

〈転生炎獣サンライトウルフ〉LINK2　サイバース族　炎属性
ATK1800　←→

ペイルリンクスとガゼルがサーキットに吸い込まれ、代わりに炎を纏った機械的な狼が現れる。
「墓地に存在する転生炎獣Jジャガーの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが墓地に存在し、自分フィールドにサラマングレイトリンクモンスターが存在する場合、転生炎獣Jジャガー以外の自分の墓地のサラマングレイトモンスター1体を対象としてそのモンスターをデッキに戻し、墓地のこのカードを自分のサラマングレイトリンクモンスターのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚する!!私は墓地の転生炎獣ファルコをデッキに戻して転生炎獣Jジャガーを特殊召喚!!?」

〈転生炎獣Jジャガー〉☆4　サイバース族　炎属性
ATK1800

サンライトウルフの近くに身体に着いた棘から炎を噴き出させているジャガーが現れる。
そしてJジャガーが現れたことでサンライトウルフは歓喜の声をあげる。
「転生炎獣サンライトウルフの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードのリンク先にモンスターが召喚・特殊召喚された場合、自分の墓地から炎属性モンスター1体を選んで手札に加える!!?ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及び

その同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できない。私は墓地の転生炎獣ガゼルを手札に加えるわ。そして、繋がって‼？希望に導くサーキット‼？」

私の目の前に３度目の巨大なサーキットが現れる。

「召喚条件は炎属性の効果モンスター２体以上‼？私は転生炎獣Ｊジャガーと転生炎獣サンライトウルフを２体分として扱ってリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？」

サーキットの中にＪジャガーと２体に分身したサンライトウルフが吸い込まれると、フィールドにあった火山が噴火し、マグマが溢れ始める。

そして火山の噴火に合わせるように、サーキットの中からマグマを喰らいながら現れたのは炎の身体を持つ灼熱の獅子。

「古より伝わる灼熱の獅子‼？リンク召喚‼？リンク３‼？転生炎獣（サラマングレイト）ヒートライオ‼？」

〈転生炎獣ヒートライオ〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　炎属性

ＡＴＫ２３００　↙？→↘？

「さあ、食事の時間よ、転生炎獣ヒートライオ‼？転生炎獣ヒートライオの効果発動‼？イグズィスタンスイーター‼？このカードがリンク召喚に成功した場合、相手の魔法・罠ゾーンのカード１枚を対象に、そのカードを持ち主のデッキに戻す‼？私は真紅のセットカードを１枚をデッキに戻すわ‼？」

「我がセットカードを喰らううつもりか、焔の獅子よ。ならば、リバースカードオープン‼？罠アクティベート、ブレイクスルースキル‼？フィールドの効果モンスター１体を対象としてこのターン、その汝のモンスターのエフェクトはインヴァリドされる‼？　」

ヒートライオが咆哮を上げると、炎で出来た魔法陣が現れ、真紅のセットカードを吸収しようとする。

しかし、それに反応するようにセットカードが消えると、虚空に輝が入り、輝の中から現れた白い竜がヒートライオを殴り飛ばした。

「やっぱりモンスターの動きを止めるカードを伏せていたわね。だけど、それぐらいで私の転生炎獣の灯火を消すことはできないわ!!?」
フィールド魔法、転生炎獣の聖域の効果発動!!?」
「ここでフィールド魔法の効果だと?」
「1ターンに1度、このカードがフィールドゾーンに存在する限り、自分がサラマングレイトリンクモンスターをリンク召喚する場合、自分フィールドの同名のサラマングレイトリンクモンスター1体のみを素材としてリンク召喚できる!!?」
「同名のモンスターをリンク召喚するだと!?」
「繋がって!!?希望に導くサーキット!!?私は転生炎獣ヒートライオをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
吹き飛ばされたヒートライオの頭上にサーキットが、足元に炎で出来た魔法陣が現れ、交差するようにヒートライオの身体を通過する。
サーキットと魔法陣が通過すると、ヒートライオの身体からさらに大きな炎が噴き出した。
「生まれ変われ、古より伝わる灼熱の獅子!!?転生リンク召喚!!?リンク3!!?転生炎獣ヒートライオ!!?」

〈転生炎獣ヒートライオ〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２３００　↙?→↘?

「さあ、もう1度食事の時間よ!!?転生炎獣ヒートライオの効果発動!!?イグズィスタンスイーター!!?私は真紅のもう1枚のセットカードもデッキに戻させて貰うわ!!?」
「輪廻を巡り、再び我がセットカードを喰らおうとするか焔の獅子よ!!?だが、無意味だ!!?チェーンしてリバースカードオープン!!?罠アクティベート、裁きの天秤!!?」
「なっ!!?それは遊花の使ってる罠カード!!?」
「汝のフィールドのカードの数が我の手札・フィールドのカードの合計数より多い場合にアクティベートでき、我はその差の数だけデッキからドローする!!?汝のフィールドのカードは4枚、我は裁きの天秤

と手札が１枚のみ‼?その差分の２枚のカードをドローする‼?」
ヒートライオが喰らおうとしたセットカードが消滅し、真紅はデッキからカードを２枚ドローする。
遊花とのデュエルを見て、真紅の強さは理解してたつもりだったけど、実際にデュエルするとここまで厄介とは思わなかったわね。
……中身はただの厨二病なのに。
「だけど、これでアンタのフィールドもがら空きよ‼?バトル‼?転生炎獣ヒートライオでダイレクトアタック‼?ヒートストライク‼?」
「ぐうっ‼?」

真紅　ＬＰ７１００→４８００

ヒートライオが炎を集めて弾丸を作り、真紅に向けて撃ち込む。
とりあえずライフポイントは逆転した。
とはいえ、真紅の竜王達はどれも強力。
更にはまだ姿を現していない闇のカードもある。
ウィルスで行動を制限されてるこの状況でどこまでやれるか……
「エンドフェイズに転生炎獣コヨーテの効果発動‼?このカードがリンク素材として墓地へ送られたターンのエンドフェイズに２つの効果から１つを選択して発動できる。同名以外の自分の墓地のサラマングレイトモンスター１体を対象としてそのモンスターを守備表示で特殊召喚するか、同名以外の自分の墓地のサラマングレイトカード１枚を対象としてそのカードを手札に加える。私は２つ目の効果で墓地の転生炎獣ラクーンを手札に加えるわ‼?私はこれでターンエンドよ‼?」
「汝のエンドフェイズ、呪王の呪いによる刻限が１つ刻まれる」

桜　ＬＰ６７５０　手札２
ー－△▲ー　▽

ーーーーーー
ー　☆
ーーーーーー
ーーーーーー　ー
真紅　ＬＰ４８００　手札３

「呪王の呪いに蝕まれている身でここまで立て直したのは褒めてやろう。だが、いつまで持つかな？我のターン、ドロー‼？……クックック、ハァーッハッハッハッハッ‼？荒ぶる‼？荒ぶるぞ‼？我が魂に潜む深淵の悪魔が‼？『壊獣姫』‼？汝を贄に捧げろとな‼？」

「……大層な言い分ね。だけど、口だけならなんとでも言えるわ」

高笑いをする真紅に淡白な反応を返す。

だけど、それは虚勢だ。

本当は私だって気付いている。

高笑いしている真紅のドローしたカードから闇が溢れ出していることを。

……どうやら、ここからが本番みたいね。

「その減らず口、どこまで叩いていられるかな？手札に存在するクリムゾンリゾネーターのエフェクトアクティベート‼？我のフィールドにモンスターが存在しない場合にアクティベートでき、このカードを手札から特殊召喚する‼？ただし、このカードのエフェクトをアクティベートするターン、我はドラゴン族・闇属性シンクロモンスターしかＥＸデッキから特殊召喚できない‼？現れよ、チューナーモンスター、クリムゾンリゾネーター‼？」

〈クリムゾンリゾネーター〉☆２　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ３００

現れたのは身体から炎を噴き出させている小さな悪魔のようなモンスター。

そして真紅は先程ドローした闇を纏っているそのカードをデュエ

ルディスクに叩きつける。
「さらに、我が魂に潜む深淵の悪魔の眷属を見せてやろう。スカーレッドファミリアを召喚!!?」
〈スカーレッドファミリア〉☆4　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１６００

現れたのは王冠やマントをつけた炎の身体を持つ悪魔。
だけど、その姿を見て私は思わず呟く。
「……違う、コイツじゃない」
明らかに闇を纏っていたカードだからコイツが真紅を操っているのかと思ったけど、そうとは思えない。
コイツが操っているにしてはこのカードから漏れている闇よりも、真紅が纏っている闇は深すぎる。
なら、考えられることはコイツは真紅が手にした闇のカードの１枚でしかないということ。
闇のカードをぶっ飛ばせば終わるかもって思ってたけど、思っていたよりも遥かに厄介なデュエルだったってことね。
「さあ、狂宴の始まりだ!!?スカーレッドファミリアをリリースしてスカーレッドファミリアのエフェクトアクティベート!!?我のフィールドの悪魔族モンスター１体をリリースし、我のセメタリーのドラゴン族・闇属性シンクロモンスター１体を対象としてそのモンスターを守備表示で特殊召喚する!!?」
「なっ!!?ということは……!!?」
「ただし、このエフェクトで特殊召喚したモンスターのエフェクトはインヴァリドされる。さあ、煉獄より甦れ、深淵の呪王、琰魔竜レッドデーモン!!?」
スカーレッドファミリアが不気味な笑い声を上げながら炎に包まれる。
その炎が弾けると、炎の中から琰魔竜が姿を現した。

〈琰魔竜レッドデーモン〉☆8　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ２０００

「っ、また出てきたわね、琰魔竜レッドデーモン」
「さらにクリムゾンリゾネーターのエフェクトアクティベート!!?このカード以外の我のフィールドのモンスターがドラゴン族・闇属性シンクロモンスター1体のみの場合にアクティベートでき、手札・デッキからクリムゾンリゾネーター以外のリゾネーターモンスターを2体まで特殊召喚する!!?」
「はぁ!?インチキ効果も大概にしなさいよ!?」
「さあ、呪王の元に集え、我が眷属!!?シンクローンリゾネーター!!?チェーンリゾネーター!!?」

〈シンクローンリゾネーター〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ１００

〈チェーンリゾネーター〉☆1　悪魔族　光属性
ＤＥＦ１００

クリムゾンリゾネーターに導かれて現れたのは音叉を持つ小さな悪魔と長い鎖と音叉を持つ小さな悪魔。
琰魔竜がいる状況で小型のチューナーが多数。
遊花を苦しめたあのレッドデーモンがくるのは間違いない。
なら……!!?
「永続罠、サラマングレイトギフトのもう1つの効果発動!!?自身と同名のモンスターを素材としてリンク召喚したサラマングレイトリンクモンスターが自分フィールドに存在する場合、手札からサラマングレイトモンスター1体を捨てて自分はデッキから2枚ドローする!!?私は手札の転生炎獣ガゼルを捨てて、カードを2枚ドローするわ!!?」
「ほう、転生することで更なる祝福(ギフト)を得るか。だが、祝福されしその

カードも呪王の呪いに侵される‼?」
「お生憎様。私がドローしたのは早すぎた帰還と貪欲な瓶‼?守備力が１５００以下のモンスターじゃないわ‼?」
「我が呪王の呪いから逃れるとはな。ならば、更なる呪いを貴様に与えよう‼?我はドラゴン族闇属性レベル８シンクロモンスター、琰魔竜レッドデーモンに、レベル１、チューナーモンスター、チェーンリゾネーターをチューニング‼?」
チェーンが光の輪になり、琰魔竜が小さな星に変わり、光の道になる。
そして光の道が輝くと、そこに現れたのは身体中から禍々しい棘が生え、両腕の刃から闇を溢れ出させる巨大な竜王。
「呪いを侵されし王者よ‼?深淵の呪いに憤怒を宿し、全てを潰せ‼?深淵の呪魔王、琰魔竜レッドデーモンアビス‼?」

〈琰魔竜レッドデーモンアビス〉☆９　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３２００

「琰魔竜レッドデーモンアビス……面倒なのが出てきたわね」
「ハッ、我が呪い‼?我が憤怒はこの程度では終わらんぞ‼?我はドラゴン族闇属性シンクロモンスター、琰魔竜レッドデーモンアビスに、レベル１、チューナーモンスター、シンクローンリゾネーターをチューニング‼?」
「っ、連続シンクロ召喚……‼?」
シンクローンが光の輪になり、琰魔竜が小さな星に変わり、光の道になる。
そして光の道が輝くと、現れたのは綺麗な真紅が闇の瘴気に染まった紫の身体に、闇を纏った漆黒の鎧を身につけ、両腕にアビスよりも巨大な刃がついた竜王。
「呪魔王へと至りしよ王者よ‼?更なる深淵の呪いに侵され、その存在を呪いへと変えよ‼?深淵の呪滅竜、琰魔竜レッドデーモンベリアル‼?」

〈琰魔竜レッドデーモンベリアル〉☆１０　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３５００

「シンクローンリゾネーターのエフェクトアクティベート!!?この カードがフィールドからセメタリーへ送られた場合、同名カード以外の我のセメタリーのリゾネーターモンスター1体を手札に加える!!?我はセメタリーからチェーンリゾネーターを我が手に戻す。さあ、真なる狂宴の時だ!!?我はクリムゾンリゾネーターをリリースし、琰魔竜レッドデーモンアビスを対象として、琰魔竜レッドデーモンベリアルのエフェクトアクティベート!!?呪滅竜(カースキング)は呪王(グボーン)を生み出す!!?我のフィールドのモンスター1体をリリースし、我のセメタリーのレッドデーモンモンスター1体を特殊召喚する!!?甦れ、深淵の呪魔王、琰魔竜レッドデーモンアビス!!?」

〈琰魔竜レッドデーモンアビス〉☆９　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３２００

「強力なレッドデーモンが一気に2体も……」
「バトル!!?琰魔竜レッドデーモンベリアルで転生炎獣ヒートライオをアタック!!?呪滅竜(カースドリーズンデソレーション)は寂滅の理である!!?」
「っ、転生炎獣ヒートライオが攻撃対象になった時、手札から転生炎獣ラクーンを捨てて琰魔竜レッドデーモンベリアルと転生炎獣ヒートライオを対象に効果発動!!?自分のサラマングレイトモンスターが相手モンスターの攻撃対象に選択された時、このカードを手札から墓地へ送り、その戦闘を行うモンスター2体を対象として対象の相手モンスターの攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復し、このターン、対象の自分のモンスターは戦闘では破壊されない!!?」

桜　ＬＰ６７５０→１０２５０

「ほぅ、そのような防御カードを持っていたか。だが、切れ味は受けてもらう!!?」
フィールドに現れた炎を纏ったアライグマが粒子に変わってヒートライオと私の身体を包み込み、炎の防壁に変わる。
それを見て、レッドデーモンベリアルは巨大な刃から闇を纏った斬撃をヒートライオに放つ。
ラクーンの防壁によりヒートライオは闇の斬撃を防いだが、その余波が私の左肩を切り裂いた。
「っ!!?痛っ!!?」

桜　ＬＰ１０２５０→９０５０

闇の斬撃が当たった制服の左肩の部分が切り裂かれ、微かな痛みに左肩を押さえると、押さえた手には少量の血が付いていた。
ラクーンの防壁とヒートライオが防いでくれたことでダメージは軽減できたが、これをまともに喰らったら只じゃ済まないことは間違いない。
だけど、今の私に真紅の攻撃を防ぐ手立てはない。
これは……想像以上にハードなデュエルだわ。
しかし、私の焦りを考慮することなく、事態は悪化の一歩を辿る。
「琰魔竜レッドデーモンベリアルのエフェクトアクティベート!!?呪滅竜(カース)は呪われし眷属(ファミリア)を呼び出(コール)す!!?このカードが汝に戦闘ダメージを与えた時、我のデッキ及びセメタリーからレベルが同じチューナーをそれぞれ1体ずつ選んで守備表示で特殊召喚する!!?現れよ、チューナーモンスター、ミラーリゾネーター!!?甦れ、チューナーモンスター、シンクローンリゾネーター!!?」

〈ミラーリゾネーター〉☆1　悪魔族　光属性
ＤＥＦ０

〈シンクローンリゾネーター〉☆1　悪魔族　闇属性

ＤＥＦ１００

真紅の呼びかけに応えるように、鏡の姿をした小さな悪魔とシンクローンが姿を現わす。

現れた２体のチューナーを見て、真紅は不気味な笑みを浮かべると手札から１枚のカードを掲げた。

「クックック、ハァーッハッハッハッハッ‼？時は満ちた‼？呪炎より生まれた魂を宿す覇王をここに顕現させてやろう‼？速攻魔法アクティベート‼？バーニングソウル‼？」

「バーニング……ソウル？」

「同名カードは１ターンに１度しか発動できず、我のフィールドにレベル８以上のシンクロモンスターが存在する場合にアクティベートできる。同名カード以外の我のセメタリーのカード１枚を選んで手札に加え、我は我のフィールドのモンスターをシンクロ素材としてシンクロ召喚する‼？さらにこのカードの発動後、ターン終了時まで汝はフィールドのシンクロモンスターをエフェクトの対象にできない‼？」

「なっ⁉？墓地回収をしながらシンクロ召喚をする速攻魔法⁉？」

「我はセメタリーの紅玉の宝札を手札に戻し、ドラゴン族闇属性レベル１０シンクロモンスター、琰魔竜レッドデーモンベリアルに、レベル１、チューナーモンスター、シンクローンリゾネーター、ミラーリゾネーターをダブルチューニング‼？」

「っ、ダブルチューニング……あれが来るわね」

シンクローンとミラーが光の輪になり、レッドデーモンベリアルの周りを囲むようにして光の玉になる。

そこで、真紅が自分の腕から闇の炎を溢れ出させながらＥＸデッキから勢いよくカードを引き抜き、デュエルディスクに叩きつけると、光の玉が突如収縮し、勢いよく弾ける。

光が弾け、フィールドに顕現したのは綺麗な真紅が完全なる漆黒に染まった悪魔のような竜王。

４本の腕で全てを破壊しつくす暴虐の化身。

「呪いとなりし竜王よ!!?・その衝動の赴くまま世界を呪い、全てを深淵の底に叩き落とせ!!?・シンクロ召喚!!?・深淵の呪滅覇王竜、琰魔竜王レッドデーモンカラミティ!!?」

〈琰魔竜王レッドデーモンカラミティ〉☆１２　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ４０００

「呪滅覇王竜よ!!?・『壊獣姫』を呪い尽くせ!!?・琰魔竜王レッドデーモンカラミティのエフェクトにチェーンして再びシンクローンリゾネーターのエフェクトアクティベート!!?・我はセメタリーからクリムゾンリゾネーターを我が手に戻す。そして琰魔竜王レッドデーモンカラミティのエフェクトアクティベート!!?・呪滅覇王竜（カーズオブルイン）は滅びの理となる!!?・このカードがシンクロ召喚に成功した時、このターン汝はフィールドでアクティベートするエフェクトをアクティベートできず、このアクティベートに対して、汝はカードのエフェクトをアクティベートできない!!?・」

レッドデーモンカラミティが身体から闇を溢れ出させると、フィールド全てが闇に包まれ、フィールドにあった全てのカードが効果を失う。

「さあ、呪滅覇王竜の力をその身に受けるがいい!!?・琰魔竜王レッドデーモンカラミティで転生炎獣ヒートライオをアタック!!愚者を滅せよ、琰魔竜王レッドデーモンカラミティ!!?・呪滅覇王竜（オーバーロードカースディファイル）は魂すら穢す!!?・」

レッドデーモンカラミティが２本の腕でヒートライオの身体を掴み、頭上で逆さに持ち上げる。

ヒートライオを持ち上げたレッドデーモンカラミティはそのまま空高く飛翔すると、ヒートライオの両腿を手で掴み、首を自分の肩口で支えると、そのまま空中から尻餅をつくように落下し、病院が揺れる程のその衝撃でヒートライオの首をへし折った。

桜　ＬＰ９０５０→７３５０

「くっ‼?なんてデタラメなパワーなの……」
「まだだ‼?まだ我が蹂躙は終わらぬぞ‼?琰魔竜レッドデーモンアビスで転生炎獣ヒートライオをアタック‼?呪魔王(カースラスロスライサー)は憤怒の呪いで斷つ‼?」
レッドデーモンカラミティのダメージで動けないヒートライオに、レッドデーモンアビスは両腕の刃を振り下ろし、斬撃がヒートライオと私の身体を切り裂いた。
「っ、くうっ‼?」

桜　LP7350→6450

切り裂かれた身体の痛みに思わず苦悶の声を上げる。
苦痛に喘ぐ私を見て、真紅はいやらしい笑みを浮かべて嘲笑う。
「クックック、良い声で鳴くではないか。琰魔竜レッドデーモンアビスのエフェクトアクティベート‼?呪滅竜(カースクリエイト)は呪いを生み出す‼?このカードが汝に戦闘ダメージを与えた時、我のセメタリーのチューナー1体を対象としてそのモンスターを守備表示で特殊召喚する‼?甦れ、チューナーモンスター、シンクローンリゾネーター‼?」

〈シンクローンリゾネーター〉☆1　悪魔族　闇属性
DEF100

「メインフェイズ2、魔法アクティベート、紅玉の宝札‼?手札の真紅眼(レッドアイズ)の亜黒竜(オルタナティブブラックドラゴン)をセメタリーへ送り、カードを2枚ドローする‼?その後、デッキから2枚目の真紅眼の黒竜をセメタリーに送る‼?カードを1枚セットし、ターンエンドだ」

桜　LP6450　手札2
ー△▲ー　▽
ーーーー

ー　　☆
ー□○○ー
ーー▲ーー　　ー
真紅　ＬＰ４８００　手札３

ライフポイントではまだ勝っているけど、真紅のフィールドには強力な竜王達がいる上に、その竜王達によって引き起こされる闇のカードによる実体化したダメージがある。

これ以上、このデュエルを長引かせるわけにはいかない。

「私のターン、ドロー!!?ドローしたカードは儀式魔法、転生炎獣（サラマングレイト）の降臨!!?守備力が１５００以下のモンスターじゃないからそのまま手札に加えるわ!!?そしてリバースカードオープン!!?魔法カード、転生炎獣の再起!!?私は墓地から再び転生炎獣ウルヴィーと転生炎獣ガゼルを手札に加えるわ!!?」

「チェーンして琰魔竜レッドデーモンアビスのエフェクトアクティベート!!?呪魔王（カーズ）は戦術（ホール）すら呪い尽（ルド）くす!!?汝のフィールドの表側表示のカード１枚を対象としてそのカードのエフェクトをターン終了時までインヴァリドにする!!?このエフェクトは汝のターンでもアクティベートできる!!?転生炎獣の再起はインヴァリドだ!!?」

転生炎獣の再起がレッドデーモンアビスが放った呪いの炎で焼き尽くされる。

ウルヴィーを回収できればその効果でドゴランを回収して無効効果を使われる前に除去できたんだけど……流石にそう上手くはいかないか。

「だけど、これでもう無効効果を気にする必要は無くなったわ!!?転生炎獣ヒートライオのもう１つの効果発動!!?サラマングレイトマジック!!?このカードが転生炎獣ヒートライオを素材としてリンク召喚されている場合、１ターンに１度、フィールドの表側表示モンスター１体と、自分の墓地のモンスター１体を対象として、対象のフィールドのモンスターの攻撃力は、ターン終了時まで対象の墓地のモンスターの攻撃力と同じになる!!?」

「何っ⁉？」
「私はアンタの琰魔竜王レッドデーモンカラミティの攻撃力を私の墓地にある転生炎獣モルと同じ０にするわ⁉？」

琰魔竜王レッドデーモンカラミティ
ＡＴＫ４０００→０

ヒートライオが魔法陣をレッドデーモンカラミティに向かって放ち、魔法陣を潜ったレッドデーモンカラミティの身体に小さな炎が灯る。
「チッ、小賢しい真似を⁉？」
「これでアンタの琰魔竜王レッドデーモンカラミティを簡単に葬れる⁉？墓地に存在する転生炎獣Ｊジャガーの効果発動⁉？私は墓地の転生炎獣サンライトウルフをＥＸデッキに戻して転生炎獣Ｊジャガーを特殊召喚⁉？」

〈転生炎獣Ｊジャガー〉☆４　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１８００

ヒートライオの近くにＪジャガーが舞い戻る。
そして私は１つ深呼吸をすると、サーキットを開くために手をかざす。
「……籌さん、私に力を貸してください。繋がって⁉？希望に導くサーキット⁉？召喚条件は炎属性の効果モンスター２体以上⁉？私は転生炎獣Ｊジャガーと転生炎獣ヒートライオを３体分として扱ってリンクマーカーにセット⁉？サーキットコンバイン⁉？」
「っ、リンク４のリンクモンスターを呼び出すつもりか⁉？」
Ｊジャガーと３体に分身したヒートライオが火山の上に出現したサーキットに吸い込まれていく。
それと同時に火山が噴火し、サーキットの中にもマグマが流れ込んでいく。

マグマが流れ込み、サーキットに輝が入る中、サーキットが一際強く輝くと、サーキットが砕けるのと同時にマグマと共にサーキットから何かが飛び出てくる。
サーキットから飛び立ったのは転生し続ける火の鳥。
絶えることない不死鳥。
「輪廻を超え、想いを繋ぐ不死鳥!!?リンク召喚!!?リンク４!!?
転生炎獣(サラマングレイト)パイロフェニックス!!?」

〈転生炎獣パイロフェニックス〉ＬＩＮＫ４　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２８００　↑←→↓

「転生する不死鳥……それが汝の切り札か!!?」
「バトル!!?転生炎獣パイロフェニックスで琰魔竜王レッドデーモンカラミティを攻撃!!?シックザールリヒトグルート!!?」
「迎え撃て、琰魔竜王レッドデーモンカラミティ!!?
呪滅覇王竜(オーバーロードカースディファイル)は魂すら穢す!!?」
レッドデーモンカラミティが２本の腕でパイロフェニックスの身体を掴み、頭上で逆さに持ち上げ、そのまま空高く飛翔する。
レッドデーモンカラミティはヒートライオの時のようにそのままフィニッシュホールドに移ろうとするが、パイロフェニックスは身体を炎に変え、レッドデーモンカラミティの拘束から逃れる。
炎に身体を変え、拘束から逃れたパイロフェニックスは無防備になったレッドデーモンカラミティの身体を貫き、レッドデーモンカラミティを爆散させた。

真紅　ＬＰ４８００→２０００

「くっ!!?おのれ、よくも我が呪滅覇王竜を!!?」
「墓地に存在する転生炎獣ラクーンの効果発動!!?このカードが墓地に存在し、自分のサラマングレイトモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、このカードを手札に加える!!?」

「チッ、面倒なことを‼?だが、呪滅覇王竜もただでは滅びん‼?破壊された琰魔竜王レッドデーモンカラミティのエフェクトアクティベート‼?呪滅覇王竜(カーズイン)が死せども呪いは絶えず(セスント)‼?このカードが汝によって破壊された場合、我ののセメタリーのレベル８以下のドラゴン族・闇属性シンクロモンスター１体を特殊召喚する‼?甦れ、深淵の呪王、琰魔竜レッドデーモン‼?」

〈琰魔竜レッドデーモン〉☆８　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００

爆散したレッドデーモンカラミティの亡骸から闇が溢れ出し、その闇が集まってレッドデーモンに変わる。
だけど、それは１度見ているから想定内よ‼?
「だけど、これで準備が整ったわ‼?メインフェイズ２‼?フィールド魔法、転生炎獣の聖域の効果発動‼?私は転生炎獣パイロフェニックスを転生リンク召喚させる‼?」
「ほう、リンク４の不死鳥まで転生させるか‼?」
「繋がって‼?希望に導くサーキット‼?私は転生炎獣パイロフェニックスをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?」
パイロフェニックスの頭上にサーキットが、足元に炎で出来た魔法陣が現れ、交差するようにパイロフェニックスの身体を通過する。
サーキットと魔法陣が通過すると、パイロフェニックスの纏っていた炎が一際激しく燃え上がった。
「再臨せよ‼?輪廻を超え、想いを繋ぐ不死鳥‼?転生リンク召喚‼?リンク４‼?転生炎獣パイロフェニックス‼?」

〈転生炎獣パイロフェニックス〉ＬＩＮＫ４　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２８００　↑←→↓

「さあ、アンタの全てを燃やし尽くしてあげる‼?転生炎獣パイロフェニックスの効果発動‼?フェーニクスフランメ‼?このカード

が同名カードを素材としてリンク召喚に成功した場合、相手フィールドのカードを全て破壊する!!?」
「っ、全体破壊だと!?」
パイロフェニックスが身体を燃え上がらせながら突撃し、真紅のフィールドのレッドデーモン達をも貫き、全てのカードを焼き尽くす。
「クッ、まさか全体破壊効果を持っているとはな。だが、破壊されたシンクローンリゾネーターのエフェクトアクティベート!!?さらにチェーンして破壊された永続罠、真紅眼の凱旋(リターンオブレッドアイズ)のエフェクトアクティベート!!?」
「っ、破壊された時に発動する罠が仕掛けられてたのね」
「このカードが汝のエフェクトで破壊されセメタリーへ送られた場合、我の墓地のレッドアイズモンスター1体を特殊召喚する!!三度?蘇れ、真紅眼の黒竜!!?」

〈真紅眼の黒竜〉☆7　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ２０００

「さらにシンクローンリゾネーターのエフェクトアクティベート!!?我はセメタリーからミラーリゾネーターを我が手に戻す」
「また真紅眼の黒竜が……私はカードを2枚伏せてターンエンドよ」
「汝のエンドフェイズ、呪王の呪いによる刻限がまた1つ刻まれる」

桜　ＬＰ６４５０　手札２
ー▲△▲ー　▽
ーーーーー
ー　☆
ーー□ーー
ーーーーー　ー
真紅　ＬＰ２８００　手札４

「クックック、我が竜王達を焼き尽くすとは、存外粘るものよの、『壊獣姫』よ」
「……そりゃあどうも」
「しかし、その抵抗もここまでだ。宣言してやろう、我が魂に潜む深淵の悪魔が!!?深淵たる闇の炎が!!?汝を滅するとな!!?我のターン、ドロー!!?　我はチューナーモンスター、クリムゾンリゾネーターを召喚!!?」

〈クリムゾンリゾネーター〉☆2　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ８００

「魔法アクティベート、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローする!!?」
「ここで手札交換をするカード!?っ、チェーンして?永続罠、サラマングレイトギフトの効果発動!!?私は手札の転生炎獣ラクーンを捨てて、デッキから転生炎獣ファルコを墓地へ送り、カードを1枚ドローするわ!!?」
「再び転生炎獣の再起をセットするつもりか、必死だな。だが、そのドローカードとて呪王の呪いに侵される!!?」
「……私がドローしたのは海亀壊獣ガメシエル。守備力が１５００以下じゃないから破壊されない」
「ほう、凌いだか。だが、まだ我の手札抹殺のエフェクトが残っている!!?我は3枚、汝は2枚捨ててドローだ。そして汝の手札は呪王の呪いに侵される!!?」
「っ……私がドローしたのは3枚目の妖精伝姫―カグヤとヘルテンペスト……」
「クックック、汝の代名詞ともいえる魔法か。最も、汝にそれを使う余力が残るかは別の話だがな!!?　妖精伝姫―カグヤは呪いに侵され破壊される!!?」
　手札に来た3枚目のカグヤも闇に呑まれて消滅する。
　これは本当に大きな痛手ね。

「だけど、墓地に送られた転生炎獣ファルコの効果発動!!?私は墓地から転生炎獣の再起をフィールドにセットするわ!!?」
「好きにするがいい!!?その程度のカードで我を止められるならばな!!?さらに魔法アクティベート、終わりの始まり!!?我のセメタリーに存在する闇属性モンスター5体をゲームから除外する事で、我はデッキからカードを3枚ドローする!!?我はセメタリーに存在する真紅眼の凶雷皇―エビルデーモン、真紅眼の凶星竜―メテオドラゴン、流星竜メテオブラックドラゴン、スカーレッドファミリア、シンクローンリゾネーターを除去してカードを3枚ドローする!!?」
「ここでまた大量ドローカード……」
「さあ、汝の終焉を告げてやろう!!?セメタリーに存在するミラーリゾネーターのエフェクトアクティベート!!?このカードが手札・セメタリーに存在し、EXデッキから特殊召喚されたモンスターが相手フィールドにのみ存在する場合にこのカードを特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される!!?甦れ、チューナーモンスター、ミラーリゾネーター!!?」

〈ミラーリゾネーター〉☆1　悪魔族　光属性
DEF0

真紅の呼びかけに応えるように、鏡の姿をした小さな悪魔が墓地から姿を現わす。
チューナーモンスターとレベル7の黒竜を出してきたということは……
「『壊獣姫』、汝に見せてやろうぞ。我が深淵の悪魔に魅入られた深淵の覇者を!!?我はレベル7、真紅眼の黒竜に、レベル1、チューナーモンスター、ミラーリゾネーターをチューニング!!?」
ミラーが光の輪になり、黒竜が小さな星に変わり、光の道になる。
そして光の柱が輝くと、光の柱の中から現れたのは闇を纏った王者の風格を持つ傷だらけの竜王。

「覇者の威光、光を揺るがす‼?深淵に至りしその力で、弱者を滅ぼせ‼?シンクロ召喚‼?深淵の覇者、レッドデーモンズドラゴンスカーライト‼?」

〈レッドデーモンズドラゴンスカーライト〉☆８　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００

「レッドデーモンズドラゴンスカーライト……」
「深淵の覇者よ、その力を愚者に振るうがいい‼?レッドデーモンズドラゴンスカーライトのエフェクトアクティベート‼?深淵の覇者は愚者を蹴散らす‼?１ターンに１度、我のメインフェイズにこのカード以外の、このカードの攻撃力以下の攻撃力を持つ特殊召喚された効果モンスターを全て破壊し、この効果で破壊したモンスターの数×５００ポイントのダメージを汝に与える‼?」
　スカーライトが咆哮をあげると、フィールドを闇を纏った炎が包み込み、パイロフェニックスを一瞬で焼き尽くす。
「焔の不死鳥だろうと我が呪炎を耐えることはできん。次は汝が焼かれる番だ、『怪獣姫』‼?」
「くっ‼?熱っ‼?」

桜　ＬＰ６７５０→５９５０

　私に迫るスカーライトの放った炎を慌てて躱すが、完全には避けきれず、足を炎が掠め、制服のスカートが一部焦げる。
　こんなものまともに受けたら火傷程度じゃ済まないわね。
　だからこそ、ここは守りを固める‼?
「転生炎獣パイロフェニックスが効果で破壊された時、墓地に存在する転生炎獣ゼブロイドＸの効果発動‼?」
「そのカードは確か最初のサラマングレイトギフトのコストとしてセメタリーに送られた……」

「このカードが墓地に存在し、自分のサラマングレイトリンクモンスターが相手の効果でフィールドから離れた場合に発動できる!!?自分の墓地からこのカードを含むレベル４のサラマングレイトモンスター２体を選んで効果を無効にして特殊召喚し、その２体のみを素材としてサラマングレイトモンスター１体をエクシーズ召喚する!!?」
「なっ!!?我のターンにエクシーズ召喚をするというのか!!?」
「まずは蘇りなさい、転生炎獣ゼブロイドＸ!!?転生炎獣Ｊジャガー!!?」

〈転生炎獣ゼブロイドＸ〉☆４　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１０００

〈転生炎獣Ｊジャガー〉☆４　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１２００

焼き尽くされたパイロフェニックスの身体が小さな篝火に変わり、その中から２体の転生炎獣が現れる。
現れた２体の転生炎獣に私は手をかざし、言霊を紡ぐ。
「私はレベル４の転生炎獣ゼブロイドＸと転生炎獣Ｊジャガーでオーバーレイ!!?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
ゼブロイドＸとＪジャガーが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りるのは炎の翼を持つ機龍。
「現世に燃えゆく炎龍!!?転生炎獣（サラマングレイト）ブレイズドラゴン!!?」

〈転生炎獣ブレイズドラゴン〉★４　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１２００

「転生炎獣ゼブロイドＸの更なる効果!!?フィールドのこのカードをオーバーレイユニットとしてエクシーズ召喚したモンスターの攻撃

力はオーバーレイユニットの数×３００ポイントアップする‼?・転生炎獣ブレイズドラゴンのオーバーレイユニットは２つ‼?・よって攻撃力は６００ポイントアップするわ‼?・」

転生炎獣ブレイズドラゴン
ＡＴＫ２３００→２９００

「我が呪炎を利用し炎龍を生み出すとはな。だが、その程度の小さな炎龍では我が深淵の悪魔には敵わぬと知れ‼?・クリムゾンリゾネーターのエフェクトアクティベート‼?・覇者の元に集え、我が眷属‼?・レッドリゾネーター‼?・ダークネスリゾネーター‼?・」

〈レッドリゾネーター〉☆２　悪魔族　炎属性
ＤＥＦ２００

〈ダークリゾネーター〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１３００

クリムゾンリゾネーターに導かれて現れたの炎の身体を持つ小さな悪魔と黒いローブを纏った小さな悪魔。
「レッドリゾネーターのエフェクトアクティベート‼?・このカードが特殊召喚に成功した時、フィールドの表側表示モンスター１体を対象とし、そのモンスターの攻撃力分だけ我はライフポイントを回復する‼?・」
「っ、ここでライフ回復……」
「我が対象にするのはレッドデーモンズドラゴンスカーライト‼?・よってライフポイントを３０００ポイント回復する‼?・」

真紅　ＬＰ２８００→５８００

かなり少なくなっていた真紅のライフポイントが一気に回復する。

それだけでも不味いことだけど、私の直感が警鐘を鳴らしている。
何か途轍もなく不味い奴が出てくると。
そんな私の予感を裏付けるように、真紅の身体から大量の闇が噴き出した。
「クックック、ハァーッハッハッハッハッ‼?さあ、顕現させようぞ‼?我が魂に潜む深淵の悪魔を‼?レッドデーモンズドラゴンスカーライトはパーマナンスエフェクト、呪われし真紅の忌み名(レッドデーモンズ)によりフィールド・セメタリーに存在する限りレッドデーモンズドラゴンとして扱う‼?」
「?それがどうしたって言うのよ。ただ名前が変わるだけでしょ?」
「クックック、鈍いな。大切なことなのだよ、我が魂に潜む深淵の悪魔を呼び出すためには赤き竜王の名がな‼?我はレッドデーモンズドラゴンとなっているレベル8、レッドデーモンズドラゴンスカーライトに、レベル2、チューナーモンスター、クリムゾンリゾネーター、レッドリゾネーターをダブルチューニング‼?」
「っ⁉?またダブルチューニング⁉?」
クリムゾンリゾネーターとレッドリゾネーターが炎の輪になり、スカーライトの周りを囲むようにして炎の玉になる。
「深淵に到し覇者の竜王よ‼?世界創生の力を取り込み、呪われし力で屍山血河に満ちた世界を生み出せ‼?」
真紅の身体から溢れ出した闇が、スカーライトを包んでいる炎の玉に吸収されていく。
赤き炎が汚染され、呪われた闇の炎に変わると、闇に染められた炎の球はまるで心臓のように脈動する。
それを見て真紅がEXデッキから勢いよくカードを引き抜き、闇を纏ったそのカードをデュエルディスクに叩きつけると、炎の玉が突如収縮し、勢いよく弾ける。
呪われた闇の炎が弾け、フィールドに顕現したのは血のような真紅の身体を持つ禍々しい悪魔のような竜王。
世界を生み出し、世界を壊す呪われし暴竜。
「シンクロ召喚‼?呪われし我が魂に潜む深淵の悪魔‼?深淵より出

し呪炎の太陽!!?・スカーレッドノヴァドラゴン!!?・」

〈スカーレッドノヴァドラゴン〉☆１２　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３５００

「スカーレッド……ノヴァドラゴン……コイツが真紅を操ってる闇のカード……!!?・」
「クックック、ハァーッハッハッハッハッ!!?・遂に、遂に降臨したぞ!!?・我が魂に潜む深淵の悪魔が!!?・この力があれば、誰も我を止めることなどできん!!?・」
姿を現したスカーレッドノヴァを見て、真紅が狂ったように笑う。
完全に闇のカードに取り憑かれてる。
これは良くない感じだ。
だけど、私が感じている悪い予感はまだ止まっていない。
まだーーー何かが来る。
「とはいえ、だ。『壊獣姫』、汝を甘くみるわけではない。ここまで生きながらえた汝の力を、我は正当に評価している。だからこそ、汝に見せてやろう、我が呪血に呑まれ、深淵に至った黒竜を!!?・魔法アクティベート、復活の福音!!?・　我のセメタリーのレベル７・８のドラゴン族モンスター１体を特殊召喚する!!?・甦れ、呪血に呑まれし黒竜!!?・真紅眼の黒竜!!?・」

〈真紅眼の黒竜〉☆７　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２４００

復活を遂げた黒竜な私を睨みつけながら咆哮を上げる。
黒竜を見て不気味な笑みを浮かべた真紅が１枚のカードを空に掲げると、そのカードから溢れ出すのはスカーレッドノヴァと同質の闇。
「っ!!?・まさかまたーーー!!?・」
「進化を遂げろ、我が呪血に呑まれし黒竜よ!!　自分フィールド上に

存在する真紅眼の黒竜1体をリリースし、このカードを特殊召喚する!!?」

黒竜の身体を真紅から溢れ出している闇が呑み込んでいく。

しばらくして闇が吹き払われるとそこに現れたのは完全なる漆黒に身を包んだ真紅の眼を持つ邪竜。

「集え呪炎よ!!?全てを焼き消す焔と変われ!!?降誕し、全てを壊せ!!?我が現し身たる邪竜!!?真紅眼の闇竜(レッドアイズダークネスドラゴン)!!?」

〈真紅眼の闇竜〉☆9　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ２４００

「真紅眼の闇竜……真紅眼の闇のカードまで……!?」

「さあ、我が深淵の力を汝に見せてやろうぞ!!?スカーレッドノヴァドラゴンのパーマナンスエフェクト、深淵の悪魔(ティア)は世界を創(マト)る!!?このカードの攻撃力は我のセメタリーのチューナーの数×５００ポイントアップする!!?現在、我のセメタリーに存在するチューナーはヴァレットシンクロン、チェーンリゾネーター、クリムゾンリゾネーター、レッドリゾネーターの４体!!?よって攻撃力は５５００ポイントアップする!!?」

スカーレッドノヴァドラゴン

ＡＴＫ３５００→５５００

「攻撃力５５００!?」

「驚くのはまだ早い!!?　さらに真紅眼の闇竜のパーマナンスエフェクト、真紅の深淵(ウシュ)は夕闇(ムガル)に燃える!!?このカードの攻撃力は、我のセメタリーに存在するドラゴン族モンスター1体につき３００ポイントアップする!!?」

「つ、こっちも攻撃力の上昇効果!?」

「現在、我のセメタリーには2体の真紅眼の黒竜に真紅眼の亜黒竜、真紅眼の黒炎竜、真紅眼の飛竜、ヴァレットシンクロン、レッドデーモ

ンズドラゴンスカーライト、琰魔竜レッドデーモン、琰魔竜レッドデーモンアビス、琰魔竜レッドデーモンベリアル、琰魔竜王レッドデーモンカラミティの１１体のドラゴン族モンスターが存在している‼?よって真紅眼の闇竜の攻撃力は……‼?」

真紅眼の闇竜
ＡＴＫ２４００→５７００

「攻撃力……５７００⁉?」
「さて、このまま攻撃しても構わぬが、我の本能が訴えている。その炎龍を封じろとな‼?セメタリーに存在するブレイクスルースキルを除外してエフェクトアクティベート‼?我のターンにセメタリーのこのカードを除外し、汝のフィールドの効果モンスター１体を対象としてその効果モンスターのエフェクトをターン終了時までインヴァリドする‼?対象にするのは無論、転生炎獣ブレイズドラゴンだ‼?」
「っ、しまった⁉?」
再び虚空に輝が入り、輝の中から現れた白い竜がブレイズドラゴンを拘束する。
これじゃあブレイズドラゴンの破壊耐性を使えない……‼?
「バトル‼?ダークリゾネーターで転生炎獣ブレイズドラゴンをアタック‼?深淵に響く闇の音（ダークネスチューニング）‼?」
「くっ、墓地に存在する転生炎獣ペイルリンクスの効果‼?自分フィールドのサラマングレイトカードが戦闘・効果で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外できる‼?私はこの効果で転生炎獣ブレイズドラゴンを破壊から守るわ‼?」
「ほう、防いだか」
ダークリゾネーターの音叉から放たれた闇の音色を、どこからか真っ赤な装甲が受け止め消滅する。
「だが、次の攻撃は耐え切れるか?スカーレッドノヴァドラゴンで転生炎獣ブレイズドラゴンをアタック‼?」

スカーレッドノヴァが呪われた闇の炎に包まれていき、暗黒の太陽へと姿を変える。
暗黒の太陽となったスカーレッドノヴァはそのままブレイズドラゴンに向かって一直線に突き進みーーー
「消え失せよ、深淵世界(エヌマエリシュ)を創る呪われし太陽!!?」
ーーー何事もなかったかのように、一瞬にしてその命を無に返した。
「っ!!?くっ!!?」
ブレイズドラゴンの身体が溶けて行くのを見た私は思いっきり横に飛び退いて屋上を転がる。
起き上がった私がさっきまで自分がいた場所を見ると、そこにはあまりの熱量に溶けてしまった屋上と、焼き切られたフェンスがあった。
「っ!!?」
あまりの光景に血の気が引き、一瞬思考が停止してしまう。
ーーーそれがよくなかった。
「これで汝を守る壁は無くなった!!?真紅眼の闇竜でダイレクトアタック!!?」
闇竜が口を開くと、闇竜の口に闇が辺りの闇が凝縮されていき、禍々しい呪炎の弾丸が生み出される。
「闇の炎に抱かれて眠れ!!? 黒淵弾(ダークネスギガフレイム)!!?」
私に向かって一直線に放たれた呪炎の弾丸は、茫然として避けることもできなかった私の身体を容赦なく焼き尽くした。

桜　LP6450→750

「っ!!?あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”!!」
私の身を焦がしていく圧倒的な呪炎の熱と痛みに、私は思わず絶叫しながら屋上をのたうち回る。
痛い(あつい)!!? 熱い(いたい)!!? 痛い(あつい)!!? 熱い(いたい)!!? 痛い(あつい)!!? 熱い(いたい)!!? 痛い(あつい)!!?

ただただ苦痛が私の身体の中を駆け巡っていく。
こんな痛みを遊騎はいつも耐えていたの？
そんな感傷すら苦痛に塗り潰されていく。
「クックック、ハァーッハッハッハッハッ‼？地を這いずり回るとは無様なものだな、『壊獣姫』よ。よもや、この程度で死なぬよな？」
「あっ……くっ……」
私を包み込んでいた呪炎が消える。
しかし、呪炎が消えたところで受けた痛みが無くなるわけではない。
着ていた制服は焼け焦げ、呼吸をするだけで全身が軋むように痛み、あまりの痛みに意識が遠のいていく。
ダメ……このまま意識を失ったら、それこそ終わり……まだ、デュエルは終わってないんだから……
今にも消えそうな意識を必死に繋ぎ止め、軋んで崩れてしまいそうな身体を無理矢理起こして、真紅を睨みつける。
そんな私を見て、真紅はいやらしい笑みを浮かべて不気味に笑う。
「ほう、まだそのような目ができるか。噂に違わぬ狂犬ぶりだな、最も、その様では我を喰らうことなどできそうにないがな。メインフェイズ2、カードを2枚セットし、ターンエンドだ。存分に足掻いて見せよ、『壊獣姫』」

桜　ＬＰ７５０　手札１
ー▲△▲ー　　▽
ーーーーー
○　　ー
ー○○ー
ーー▲▲ー　　ー
真紅　ＬＰ５８００　手札１

「わた……しの、ターン……ドロー‼　ドローした……カードは装備魔法……ライジングオブファイア……‼？そのまま

……手札に……」
「スタンバイフェイズ、リバースカードオープン、罠アクティベート、戦線復帰!!?我のセメタリーのモンスター1体を守備表示で特殊召喚する!!?甦れ、深淵の呪魔王、琰魔竜レッドデーモンアビス!!?」
〈琰魔竜レッドデーモンアビス〉☆9　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ２５００
ＡＴＫ５７００→５４００
真紅眼の闇竜

再びフィールドにレッドデーモンアビスが現れる。
正直キツいけど……今の私にできることをやるしかない……
「墓地の転生炎獣……モルの……効果、発動!!　自分フィールドに、モンスターが……存在しない場合、墓地のこのカードを除外し……自分の墓地の、サラマングレイト……カード5枚を、デッキに加えてシャッフルし、自分はデッキから2枚ドローする!!墓地の……転生炎獣の降臨……転生炎獣ガゼルを、デッキに……転生炎獣パイロフェニックス……?2体の転生炎獣ヒートライオを、ＥＸデッキに……戻して……2枚、ドロー!!?ドロー……したの、は……転生炎獣ファルコ……フュージョンオブファイア……そのまま、手札に……!!?」
「チッ、厄介なカードを手札に加えたか」
「永続罠、サラマングレイトギフト……効果発動!!?手札の転生炎獣ファルコ……を捨てて、デッキから転生炎獣(サラマングレイト)スピニーを墓地へ……カードを1枚ドロー!!?　ドローしたのは……転生炎獣(サラマングレイト)エメラルドイーグル……手札に加える……墓地に送られた……転生炎獣ファルコの効果、発動!!?墓地から転生炎獣の再起をセット……!!?リバースして……転生炎獣の再起、発動……!!?」
「何度やろうが無駄だ!!?チェーンして琰魔竜レッドデーモンアビスのエフェクトアクティベート!!?呪魔王(カー)は戦術(ス)すら呪い(ホー)尽(ル)くす(ド)!!?

転生炎獣の再起はインヴァリドだ‼?」
　再び転生炎獣の再起がレッドデーモンアビスが放った呪いの炎に焼き尽くされる。
　だけど、これでもう止めるものはない‼?
「装備、魔法……ライジングオブファイア……‼?同名カードは、1ターンに……1度、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、自分の……墓地の、炎属性モンスター1体を……特殊召喚し、このカードを装備して……装備モンスターの攻撃力を５００ポイントアップさせる……‼?ただし、このカードがフィールドから離れた時にそのモンスターは破壊される……現世に、舞い戻れ……輪廻を超え、想いを繋ぐ不死鳥‼?転生炎獣パイロフェニックス……‼?」

〈転生炎獣パイロフェニックス〉ＬＩＮＫ４　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２８００→３３００　↑←→↓

　私の墓地から炎が舞い上がり、その炎がパイロフェニックスへと姿を変える。
「再び姿を現すか、不死鳥よ。ならば汝の狙いは……」
「フィールド魔法、転生炎獣の聖域の効果、発動……‼?私は転生炎獣パイロフェニックスを転生リンク召喚させる‼?」
「やはり再び転生リンク召喚を行うか‼?」
「繋がって……希望に導くサーキット‼?私、は……転生炎獣パイロフェニックスをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?」
　パイロフェニックスの頭上にサーキットが、足元に炎で出来た魔法陣が現れ、交差するようにパイロフェニックスの身体を通過する。
　サーキットと魔法陣が通過すると、パイロフェニックスの纏っていた炎が一際激しく燃え上がった。
「再臨せよ……輪廻を超え、想いを繋ぐ不死鳥……‼?転生リンク召喚‼?リンク４‼?転生炎獣パイロフェニックス‼?」

〈転生炎獣パイロフェニックス〉ＬＩＮＫ４　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２８００　↑←→↓

「全てを燃やし尽くす……転生炎獣パイロフェニックスの効果、発動……フェーニクスフランメ‼？相手フィールドのカードを全て破壊する‼？」

パイロフェニックスが身体を燃え上がらせながら突撃し、スカーレッドノヴァ達を炎で包む。

しかし、パイロフェニックスの炎はダークリゾネーターとセットカードを焼き尽くしたが、真紅の竜王を傷付けることは叶わなかった。

「無駄だ。我のフィールドのドラゴン族モンスターが戦闘・効果で破壊される場合、代わりにセメタリーの復活の福音を除外する。不死鳥の炎だろうと我が深淵の悪魔を傷付けることはできぬ‼？さらにダークリゾネーターが破壊されたことでスカーレッドノヴァドラゴンの攻撃力はさらに上昇する‼？」

スカーレッドノヴァドラゴン
ＡＴＫ５５００→６０００

「っ……まだ……諦めない……私の心火を……燃やしきる……‼？墓地の……転生炎獣Ｊジャガーの効果発動……‼？墓地の転生炎獣ファルコをデッキに戻して……特殊召喚‼？」

〈転生炎獣Ｊジャガー〉☆４　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１２００

「魔法カード……フュージョンオブファイア‼？自分の手札……自分・相手フィールドからサラマングレイト、融合モンスターカードによって決められた……融合素材モンスターを墓地へ送り、その融

合モンスター１体をＥＸデッキから融合召喚する……!!?私はサラマングレイトモンスター、転生炎獣Ｊジャガーとリンクモンスター、転生炎獣パイロフェニックスで融合……!!?」
「ほう、ここで融合召喚か!!?」
　フィールドに現れた渦の中にＪジャガーとパイロフェニックスが消える。
「炎を纏し獣よ、思いを繋ぐ不死鳥と交わりて……新たな世界に、生命の炎を灯せ……融合召喚!!?」
　そして渦が弾けると、フィールドに降り立つのは全身から紫炎を撒き散らす紫色の魔獣。
「紫炎を司る古の魔獣……!!?転生炎獣ヴァイオレットキマイラ!!?」

〈転生炎獣ヴァイオレットキマイラ〉☆８　サイバース族　炎属性
　ＡＴＫ２８００

「其奴が転生炎獣の融合モンスターか!!?」
「転生炎獣ヴァイオレットキマイラの効果、発動……!!?リインカネーションブレイズ!!?このカードが融合召喚に成功した場合……このカードの攻撃力は、ターン終了時まで素材としたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値の半分だけ、アップする……!!?素材にしたのは攻撃力１８００の転生炎獣Ｊジャガーと攻撃力２８００の転生炎獣パイロフェニックス!!?よって転生炎獣ヴァイオレットキマイラの攻撃力は２３００ポイント、アップする……!!?」

　転生炎獣ヴァイオレットキマイラ
　ＡＴＫ２８００→５１００

「ほう、攻撃力５１００。なかなかのパワーになったではないか、だがその程度ではーーー」
「バト、ル……!!?転生炎獣ヴァイオレットキマイラで、スカーレッ

ドノヴァドラゴンに攻撃!!?」
「何?」
ヴァイオレットキマイラの身体から紫炎が溢れ出し、紫炎が身体を包み込むと、ヴァイオレットキマイラは勢いよくスカーレッドノヴァに向かっていく。
ヴァイオレットキマイラにはダメージ計算時、に元々の攻撃力と異なる攻撃力を持つモンスターと戦闘を行うダメージ計算時に1度、自身の攻撃力を倍にする効果、フュアリィフレイムがある。
これでスカーレッドノヴァを倒せればラクーンも墓地から回収できるからまだ可能性はある。
しかし、そんな僅かな希望はーーー儚く打ち砕かれる。
「攻撃宣言時、スカーレッドノヴァドラゴンのエフェクトアクティベート!!? 深淵世界に触れること叶わず!!?」
「えっ……?」
「汝のモンスターの攻撃宣言時、その攻撃モンスター1体を対象としてフィールドのこのカードを除外し、その攻撃をインヴァリドにする!!?」
ヴァイオレットキマイラの身体がスカーレッドノヴァを貫こうとしたところで、スカーレッドノヴァの姿が闇に変わり霧散する。
霧散した闇はヴァイオレットキマイラの身体に纏わり付き、ヴァイオレットキマイラの動きを完全に封じ込めた。
「最後の抵抗も無意味だったな。やはり、我が魂に潜む深淵の悪魔を解放した今、誰も我を止めることなどできん」
「っ……でも、スカーレッドノヴァドラゴンは……」
「この程度で消えたと思ったか?我が魂に潜んでいた深淵の悪魔はそこまで温くはない。スカーレッドノヴァドラゴンには更なるエフェクトがある。 深淵世界は現世と表裏で在る。スカーレッドノヴァドラゴンが自身のエフェクトで除外されたターンのエンドフェイズに除外されているスカーレッドノヴァドラゴンを特殊召喚する。今のスカーレッドノヴァスドラゴンは一時的に深淵世界に潜ったに過ぎぬ」

「そん、な……」
真紅の言葉を聞き、私は膝から崩れ落ちる。
真紅のフィールドには強力な竜王達が残っている。
次のターンに攻撃力が元に戻るヴァイオレットキマイラじゃ太刀打ちできない。
やっぱり、ダメなの？
私じゃ……遊花みたいに、誰かを助けることはできないの？
絶望に心が支配され、必死に繋ぎ止めていた意識が闇の中に落ちていき、身体が地面に倒れていく。
ごめん、遊花……やっぱり、私じゃ……
『平気……へっちゃら……です‼？』
『私、が……私が、みんなを……守る‼？運命を、超えるんだぁぁぁ‼？』
『当たり前、です‼？まだ……まだ、私のライフは、残ってる‼？まだ、デュエルは……終わってない‼？デュエルが、終わっていないなら……私はまだ……戦える‼？』
「っ……‼？」
闇の中に落ちそうになった意識が一瞬で覚醒し、崩れそうになった身体を地面に手をついて支える。
……そうよ、何を弱気になってるのよ、私。
遊花は私なんかよりもっと絶望的な状況でも、私よりも遥かに華奢なその身に闇のカードの攻撃を受けても、最後まで諦めなかったじゃない。
それなのに、私がこんなところで諦めてどうするのよ‼？
まだ、私のライフだって残ってる。
可能性という炎はまだ消えていない。
なら、あの子の親友である私が、諦めるわけにはいかない‼？
「平気……へっちゃら……よね、遊花……」
「むっ？」
「ライフが尽きる、その時まで……醜く生き足掻いてやるわよ‼？
私の命の灯火、燃やし尽くせるものなら燃やし尽くしてみなさい‼

？メインフェイズ２……墓地に存在する転生炎獣スピニーの効果発動!!？自分フィールドに転生炎獣スピニー以外のサラマングレイトモンスターが存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚する!!？ただしこの効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される」

〈転生炎獣スピニー〉☆３　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１５００

墓地からヴァイオレットキマイラに寄り添うように炎を纏ったアルマジロトカゲが現れる。
「カードを、１枚伏せて……ターンエンド!!？エンドフェイズ、転生炎獣ヴァイオレットキマイラの攻撃力は元に戻る!!？」

転生炎獣ヴァイオレットキマイラ
ＡＴＫ５１００→２８００

「汝のエンドフェイズ、呪王の呪いによる刻限が最後の刻を刻み、霧散する。だが、スカーレッドノヴァドラゴンのエフェクトアクティベート!!？深淵世界は現世（イルカ）と表裏（ルラ）で在る!!？スカーレッドノヴァドラゴンが自身のエフェクトで除外されたターンのエンドフェイズに除外されているスカーレッドノヴァドラゴンを特殊召喚する!!？現世に顕現せよ、スカーレッドノヴァドラゴン!!？」

ヴァイオレットキマイラを包んでいた闇が霧散し、真紅の正面に集まって行く。
全ての闇が集まると、フィールドに深淵の悪魔が再臨した。

〈スカーレッドノヴァドラゴン〉☆１２　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３５００→６０００

桜　ＬＰ７５０　手札２
ー▲△▲ー　　▽
ーーーー□ー
　　ー　　○
□ー○○ー
ーーーーー　　ー
真紅　ＬＰ５８００　手札１

「ほざいたな、『壊獣姫』よ!!?ならば汝の灯火、握り潰してくれようぞ!!?我のターン、ドロー!!?」
「スタンバイフェイズ……手札の、ヘルテンペストを除外……して、リバースカード、オープン!!?……罠発動、早すぎた帰還!!?……手札を１枚除外し、除外されている自分のモンスター１体を裏側守備表示で特殊召喚する……!!?」
「無駄な足掻きだな。その程度のことは許してやろう」
「……転生炎獣モルを、裏側守備表示で特殊召喚……!!?さらに永続罠、サラマングレイトギフト……効果発動!!?手札の転生炎獣エメラルドイーグルを捨てて……」
「いい加減それも見飽きたぞ!!?チェーンして琰魔竜レッドデーモンアビスのエフェクトアクティベート!!?呪魔王(カー)は戦術(ス)すら呪い(ル)尽くす(ド)!!?　サラマングレイトギフトはインヴァリドだ!!?」
　サラマングレイトギフトがレッドデーモンアビスが放った呪いの炎に焼かれ、その力を封じられる。
「いくら足掻いたところで、我の勝利は揺るがん!!?我は伝説の黒石(ブラックオブレジェンド)を召喚!!?」

〈伝説の黒石〉☆１　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ０

フィールドに現れたのは赤黒い石のような卵のモンスター。

あのカードは確か……

「伝説の黒石のエフェクトアクティベート!!?このカードをリリースしてデッキからレベル7以下のレッドアイズモンスター1体を特殊召喚する!!? 現れよ、真紅眼の黒炎竜」

黒石が輝きはじめ、空に浮かび上がる。

空に浮かんだ黒石が割れ、卵の殻が弾け飛ぶと、黒石が浮かんでいた場所に炎の翼を持つ黒竜が現れ、私を睨みつけながら咆哮をあげていた。

〈真紅眼の黒炎竜〉☆7　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ２４００

真紅眼の闇竜

ＡＴＫ５４００→５７００

「我は琰魔竜レッドデーモンアビスを攻撃表示に変更!!?」

琰魔竜レッドデーモンアビス

ＤＥＦ２５００→ＡＴＫ３２００

「さあ、終幕といこうではないか。バトル!!?」

「バトルフェイズ、開始時!!?リバース、カード……罠、発動……貪欲な、瓶!!? 同名カード、以外の……自分の墓地のカード、5枚を……デッキに、加えてシャッフル、し……その後、自分はデッキから1枚ドローする!!?墓地の……海亀壊獣ガメシエル……雷撃壊獣サンダーザキング……3枚の妖精伝姫―カグヤをデッキに戻して……カードをドロー!!?」

「最後まで醜く足掻くか。だが、どれだけ足掻こうが希望など無いことをその身に教えてやろう!!? 琰魔竜レッドデーモンアビスで転生 炎 獣 ヴァ イ オ レッ ト キ マ イ ラ を ア タッ ク !!?

呪魔王(カーススロスライサー)は憤怒の呪いで斷つ!!?」

「迎え撃って、転生炎獣ヴァイオレットキマイラ!!?インフュアリエイティングインレジュメント!!?」
ヴァイオレットキマイラが紫炎の弾丸となって突撃するが、レッドデーモンアビスが振り下ろした両腕の刃から放たれた斬撃で紫炎ごと斬り裂かれた。
「くぅっ!!?あぁぁ!!?」

桜　ＬＰ７５０→３５０

「痛むか?その悲鳴が新たな悪魔を生み出すのだ!!?琰魔竜レッドデーモンアビスのエフェクトアクティベート!!?呪滅竜(カースクリエイト)は呪いを生み出す!!?甦れ、チューナーモンスター、レッドリゾネーター!!」

〈レッドリゾネーター〉☆２　悪魔族　炎属性
ＤＥＦ２００

スカーレッドノヴァドラゴン
ＡＴＫ６０００→５５００

「っ、そいつは……」
「レッドリゾネーターのエフェクトアクティベート!!?我が対象にするのは真紅眼の闇竜!!?よってライフポイントを５７００ポイント回復する!!?」

真紅　ＬＰ５８００→１１５００

真紅のライフポイントが一気に回復し、１００００を超える。
いよいよ持って真紅を倒すのが難しくなってきたが、どの道このターンを乗り切れなければ同じことだ。
「次だ!!?真紅眼の黒炎竜で転生炎獣スピニーをアタック!!?

黒焔弾(ダークキロフレア)!!?」

黒炎竜が放った炎の弾丸がスピニーを燃やし尽くし消滅させる。

「っ、破壊された転生炎獣スピニーは除外される……」

「さあ、終焉の時は近いぞ!!?最後のモンスターを我が深淵の悪魔に捧げよ!!?スカーレッドノヴァドラゴンでセットモンスターをアタック!!?深淵世界(エヌマエリシュ)を創る呪われし太陽!!?」

「っ、セットモンスターは転生炎獣モル!!?」

〈転生炎獣モル〉☆1　サイバース族　炎属性

ＤＥＦ０

暗黒の太陽となったスカーレッドノヴァに突撃され、爪に炎を纏ったモグラが跡形も無く焼失する。

「これで汝を守るモンスターはいなくなった!!?これでーーー」

「……まだ」

「ーーーは?」

「まだよ!!?サラマングレイト、モンスターが……自分の墓地に送られたことで手札の転生炎獣ガゼルの効果、発動!!?」

「なっ!?この状況で再び引き当てたというのか!?」

「このカードを手札から特殊召喚する!!?」

〈転生炎獣ガゼル〉☆3　サイバース族　炎属性

ＤＥＦ１０００

私を守るように手札からガゼルが飛び出してくる。

「転生炎獣ガゼルのもう1つの効果、発動!!?……デッキから転生炎獣ファルコを墓地に……墓地に送られた……転生炎獣ファルコの効果、発動!!?墓地から転生炎獣の再起をセット……!!?」

「っ、何度も何度も小賢しい真似を!!?奴を焼き尽くせ、真紅眼の闇竜!!?真紅眼の闇竜で転生炎獣ガゼルをアタック!!?　黒淵弾(ダークネスギガフレイム)!!?」

闇竜が禍々しい呪炎の弾丸が放ち、私を守るように立つガゼルを消滅させる。

ごめんなさい……ガゼル……だけど、あなたのおかげで私はまだ、戦える‼?

「ぐぎぎぎぎ……いいだろう。このターンは見逃してやる。だが、所詮は１ターン寿命が伸びただけだ‼?汝の手札は０‼?さらにライフも僅か３５０‼?その状態で我に勝つ手段などない‼?我が元に深淵の悪魔が‼?深淵に魅入られた竜王達がいる限り、我が負けることなどあり得ぬのだからな‼?メインフェイズ２、カードを１枚セットしてターンエンド‼?さあ、最後まで醜く踊ってみせよ、『壊獣姫』‼?」

桜　ＬＰ３５０　手札０
ー▲△ーー　　▽
ーーーーー
ー　　ー
○□○○○
ーー▲ーー　　ー
真紅　ＬＰ１１５００　手札０

「私の、ターン……っ、あ……‼?」

カードをドローしようとデュエルディスクに手を伸ばした瞬間、身体中に激痛が走り、その場に身体が崩れ落ちる。

そんな私を見て真紅が愉快そうに笑う。

「クックック、ハァーッハッハッハッハッ‼?どうした?とうとう限界へと至ったか?何、汝はよく耐えた。我が現し身たる邪竜の焔に焼かれ、まだ生きているだけ幸運なのだからな‼?定められた運命という大海からは、逃れぬことはできぬ‼?」

分かっている。

度重なる闇のカードによって実体化したモンスターの攻撃で私の身体はぼろぼろだ。

これ以上身体を行使すれば、それこそ命に関わることぐらい、本当

は分かっている。
「だと、しても……!!?」
痛む身体に鞭を打ち、力が入らない身体を無理矢理動かし、身体を起こそうとしては地面にひれ伏す。
それでも、私は諦めずに身体を起こそうと力を入れる。
そんな私を見て愉快そうに笑っていた真紅の表情は曇り、不愉快そうなものへと変わる。
「何故だ。何故汝は呪炎に焼かれたその身で立ち上がろうとする?痛むハズだ、苦しいハズだ。今にも意識を失い、永遠の闇に沈むハズだ。それなのに何故、汝はまだ立ち上がろうとする!!?」
「何故?……そんなの、最初に言ったじゃない」
力を振り絞り、地面に手をついて身体を起こしながら、真紅を見て不敵に笑う。
「アンタを包むその闇、全てぶっ壊してアンタを助ける……そのためなら、何度だって、立ち上がってやるわよ!!?」
「な、何を言っている!!?我を、助けるだと!!?我は汝の助けなど望んではいない!!?」
私の言葉に真紅は激怒する。
でも、言葉で否定しようと、その心の内が私には分かる。
「強くなければ、誰にも認められない。そうでなければ、自分に存在価値はない。そしてそうあろうとする自分を変えることはできない。だからこそ、自分は常に最強の自分でなければならない。そうでなければ、こんな自分に付き合ってくれている刀花に顔向けできない」
「っ……」
「図星、でしょ?アンタは私に似てるもの」
私の言葉に真紅の表情が固まる。
あからさまな厨二病発言は、自分という存在を見てほしいから。
だけどその奇抜な行動の皺寄せが行くのは一緒にいる刀花だ。
奇抜な行動をしている真紅のことを必死に庇い、助けてくれる刀花の存在はきっと真紅の中でとても大きいのだろう。
私にとっての遊花みたいに。

「そんな気持ちが大きくなり過ぎて、アンタは闇に呑まれた。アンタは……私にとってあり得たかもしれない未来の1つ。だからこそ、そうなってしまったアンタを、見てられないのよ」
「っ、地面に這いつくばる弱者風情が我を憐むな‼?貴様に、貴様に一体何が分かる‼?」
「分かるわよ、アンタがどうしようもない意地っ張りだって。だからこそ、私はアンタを救ってみせる。私を信じてアンタのことを任せてくれた遊花(親友)のために。アンタにだって、私みたいな未来があるって教えてあげるために‼?……私は絶対に諦めない‼?諦めて……たまるもんですか‼?」
自分を鼓舞し、私は立ち上がる。
そう、遊花と約束したんだ。
遊花の代わりに困っている後輩である真紅を助けるって。
「そう、遊花ならきっと諦めない‼?届かなくても、失敗しても、その手を伸ばし続ける‼?だから、私も、遊花の親友である私も、アンタを助けるために、手を伸ばすんだ‼?」
そう叫ぶ私の耳に小さな声が届く。
『助けて』
「っ‼?」
私は耳に届いたその声が聞こえた方を向く。
そこにいたのはーーー
「真紅眼の……闇竜?」
ーーー全身から闇を溢れ出させている闇竜だった。
今のは、幻聴?
……ううん、確かに聞こえた。
あの闇竜から真紅の声が。
『私は、こんなことがしたいんじゃない……だから、助けて‼?』
闇竜が悲しげに咆哮をあげ、それと同時に再び真紅の声が響く。
真紅は言っていた。
闇竜のことを、”我が現し身たる邪竜”だと。
どんな原理かは分からない。

だけど、それが言葉通りの意味ならーーー本当の真紅は、闇竜の中にいる。
「……ええ、確かに聞こえたわよ、アンタの声」
私は思わず笑みを浮かべる。
そう、ちゃんと聞こえたんだ。
暗闇の中でずっと助けを求めていた、真紅の声が。
「声、だと？貴様、何を言っている⁉？」
真紅の身体の中にいる何かが私の言葉に狼狽る。
奴に本当の真紅の声は聞こえていない。
きっと、今真紅の身体にいるのが闇のカードに潜む闇の力の元凶。
真紅の言う、深淵の悪魔。
そんなものに、いつまでも真紅の身体を渡しているわけにはいかない‼？
「絶対に助けてみせる‼？」
助けると誓っておきながら、遊花の時には寄り添うことすらできていなかったけど。
「約束したのよ、遊花の代わりにアンタを助けるって‼？」
どんなに辛い逆境でも、立ち上がってきた遊花が、ずっとそうしてきたように。
「私1人の力じゃ、できないかも知れないけど‼？遊花なら、きっと、諦めないから‼？」
諦めないという気持ちがあればーーー
「遊花が、そして遊騎が教えてくれた‼？諦めなければ、運命なんてどうとでも変えられる‼？変えてみせる‼？」
ーーー特別な力がなくたって、運命は変えられるのだから‼？
『それが、桜ちゃんの覚悟なんだね』
「……えっ？」
ーーーふと、妙な感覚がして、私の耳に聞き覚えのない女性の声が聞こえた。
この感覚には、覚えがある。
刀花とデュエルをした時、初めてカグヤと話せるようになったあの

時と同じだ。
　でも、今の私は手札にもフィールドにもモンスターはいないのに、どこからこの声がーーー
「……えっ？」
　そんな私の考えに呼応するように、私のＥＸデッキから光りが溢れはじめる。
「っ、まさか……⁉？」
　私は自分のＥＸデッキから１枚のカードを取り出す。
　私が取り出したのはＥＸデッキに入っていたファイアウォールドラゴン。
　ファイアウォールドラゴンが、私の手の中で淡い光を放っていた。
　そして私の手の中からその声が響いてくる。
『ようやく、話すことができたね、桜ちゃん』
「ファイアウォールドラゴン……なの？」
『……うん、そうだよ。私がファイアウォールドラゴンです』
「な、何か私が考えてた雰囲気とだいぶ違うんだけど……」
　ドラゴンの姿をしてるんだからもっと尊厳があるのかと思ってたんだけど、聞こえてくる声のイメージから感じるのは少し年上のお姉さんといった雰囲気だ。
　私の困惑を知ってか知らずか、ファイアウォールは構わず私に問い掛けてくる。
『助けたい？闇の力に囚われているあの子を』
「っ……当たり前よ‼私は、約束したんだから‼？真紅は、私が助けるって‼？」
『……そっか』
　私の言葉に、ファイアウォールは少し嬉しそうな声色で呟く。
　そんなファイアウォールに私は真っ直ぐに自分の気持ちをぶつける。
「だから……お願い、ファイアウォールドラゴン。私に、少しだけ力を貸して。私に、遊花みたいな力を……」
　私は、遊花と一緒の方向を向いて進んでいきたい。

遊花が帰ってきた時に、胸を張って笑い合いたい!!?
真紅を見捨て、ここから逃げたらーーー私は二度と遊花を笑顔で迎えれなくなるから!!?
「誰かを守る力を……誰かと誰かを繋ぐ力を、私に貸して!!?」
『……うん!!?桜ちゃんの思い、しかと聞き届けたよ!!?桜ちゃんの勝利への道筋は、私が作り出してあげる!!?』
そんな思念の後、力強い龍の咆哮と共に、ファイアウォールドラゴンのカードが強い輝きを放った。
「くっ!!?何だ!!?何をした、『壊獣姫』!!?」
「これって……」
徐々に光りが治まっていくと、そこにあったのは私の新たな力。
私はそのカードを胸に抱き、目を閉じる。
「感じる、温かくて優しい力を。胸に、身体に、力と勇気が溢れてくる!!?」
『さあ、行こう。桜ちゃん。あなたの思いを、あの子に届けよう!!?』
「ええっ!!?……真紅!!?」
「っ!!?」
突然のことに狼狽ていた真紅に、私は新たな力をＥＸデッキに戻しながら、不敵な笑みを浮かべてデッキの上のカードを手に取り、勢いよく引き抜いた。
「覚悟しなさい。今からアンタを覆うその薄暗い闇を全部祓って、アンタを光の下に引きずり出してあげるわ!!?ドロー!!?リバースカードオープン!!?　転生炎獣の再起!!?」
「っ、チェーンして琰魔竜レッドデーモンアビスのエフェクトアクティベート!!?呪魔王(カーズホード)は戦術すら呪い尽くす(ルド)!!?転生炎獣の再起はインヴァリドだ!!?」
転生炎獣の再起がレッドデーモンアビスが放った呪いの炎に焼き尽くされる。
「墓地の転生炎獣モルを除外して効果発動!!　墓地のフュージョンオブファイア、ライジングオブファイア、転生炎獣ガゼルをデッキに2体の転生炎獣パイロフェニックスをＥＸデッキに戻して2枚ドロー

!!?　私は転生炎獣(サラマングレイト)フォクシーを召喚!!?」

〈転生炎獣フォクシー〉☆3　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１０００

フィールドに現れたのは尻尾から炎を灯している狐のモンスター。
「転生炎獣フォクシーの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが召喚に成功した時、自分のデッキの上からカードを3枚めくり、その中からサラマングレイトカード1枚を選んで手札に加え、残りのカードはデッキに戻すわ!!?私はデッキの上から3枚めくり、転生炎獣(サラマングレイト)ミーアを手札に加える!!?そして今手札に加えた転生炎獣ミーアの効果発動!!?このカードが通常のドロー以外の方法で手札に加わった場合、このカードを相手に見せ、手札から特殊召喚する!!?」

〈転生炎獣ミーア〉☆2　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ６００

フィールドに身体から炎を噴き出しているミーアキャットが現れる。
「そして、繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」
「リンク召喚か……」
私が目の前に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は通常召喚された攻撃力１０００以下のモンスター1体!!?私は転生炎獣フォクシーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク1!!?転生炎獣(サラマングレイト)アルミラージ!!?」

〈転生炎獣アルミラージ〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ０　↘?

フォクシーがサーキットに吸い込まれると、代わりにサーキットから現れたのは炎の角を持つ兎のモンスター。

「もう1度!!?繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」

「再びリンク召喚か!!?」

「召喚条件は炎属性の効果モンスター2体!!?私は転生炎獣アルミラージと転生炎獣ミーアをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?転生炎獣サンライトウルフ!!?」

〈転生炎獣サンライトウルフ〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１８００　←→

「っ、そいつは……」

「転生炎獣サンライトウルフの特殊召喚成功時、手札の転生炎獣(サラマングレイト)フォウルの効果発動!!?自分フィールドに同名カード以外のサラマングレイトモンスターが召喚・特殊召喚された場合、このカードを手札から特殊召喚するわ!!?」

〈転生炎獣フォウル〉☆４　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１８００

サンライトウルフが咆哮をあげるとフィールドに炎の羽根を持つ孔雀が姿を現わす。

そしてフォウルが現れたことでサンライトウルフは歓喜の声をあげる。

「転生炎獣サンライトウルフの効果発動!!?」

「それは通さぬ!!?リバースカードオープン!!?罠アクティベート、無限泡影!!?汝のフィールドの表側表示モンスター1体のエフェクトをターン終了時までインヴァリドにする!!?さらにセットされていたこのカードをアクティベートした場合、さらにこのターン、この

カードと同じ縦列の他の魔法・罠カードのエフェクトはインヴァリドされる‼？転生炎獣サンライトウルフのエフェクトはインヴァリドだ‼？」

サンライトウルフの炎が幻のように霧散する。

だけど、これでもう止めるものは無くなった‼？

「繋がって‼？希望に導くサーキット‼？」

私の目の前にこのターン、３度目の巨大なサーキットを出現させる。

「召喚条件は炎属性の効果モンスター２体以上‼？私は転生炎獣フォウルと転生炎獣サンライトウルフを２体分として扱ってリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？」

サーキットの中にフォウルと２体に分身したサンライトウルフが吸い込まれると、フィールドにあった火山が噴火し、マグマが溢れ始める。

そして火山の噴火に合わせるように、サーキットの中からマグマを喰らいながら現れるのは炎の身体を持つ灼熱の獅子。

「古より伝わる灼熱の獅子‼？リンク召喚‼？リンク３‼？　転生炎獣ヒートライオ‼？」

〈転生炎獣ヒートライオ〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　炎属性

ＡＴＫ２３００　↙？→↘？

「再び現れたか、焔の獅子‼？」

「フィールド魔法、転生炎獣の聖域の効果発動‼？私は転生炎獣ヒートライオを転生リンク召喚させる‼？」

「っ、また転生リンク召喚か」

「繋がって‼？希望に導くサーキット‼？私は転生炎獣ヒートライオをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？」

ヒートライオの頭上にサーキットが、足元に炎で出来た魔法陣が現れ、交差するようにヒートライオの身体を通過する。

サーキットと魔法陣が通過すると、ヒートライオの身体からさらに

大きな炎が噴き出した。
「生まれ変われ、古より伝わる灼熱の獅子!!?転生リンク召喚!!?リンク3!!?転生炎獣ヒートライオ!!?」
〈転生炎獣ヒートライオ〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２３００　↙?→↘?
「さあ、行くわよ!!?転生炎獣ヒートライオのもう1つの効果発動!!?サラマングレイトマジック!!?このカードが転生リンク召喚をしているため、私はアンタの真紅眼の闇竜の攻撃力を私の墓地にある転生炎獣アルミラージと同じ0にするわ!!?」

真紅眼の闇竜
ＡＴＫ５７００→０

ヒートライオが魔法陣を闇竜に向かって放ち、魔法陣を潜った闇竜の頭に小さな炎の角がつく。
「っ、小癪な真似を……!!?」
「そして、魔法カード、貪欲な壺!!?」
「なっ!?まだドローカードを残しているだと!?」
「墓地の転生炎獣ミーア、転生炎獣フォウル、転生炎獣ファルコをデッキに戻し、転生炎獣サンライトウルフ、転生炎獣ヒートライオをＥＸデッキに戻してカードを2枚ドローする!!?見せてあげるわ、更なる転生リンク召喚を!!?　速攻魔法発動!!?転生炎獣の超転生(サラマングレイト・トランセンド)!!?同名カードは1ターンに1度しか発動できず、自分フィールドのサラマングレイトリンクモンスター1体を対象としてその自分のモンスター1体のみを素材として同名のサラマングレイトリンクモンスター1体をリンク召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚する!!?」
「何!?貴様、まさか……!!?」
「私が対象とするのは転生炎獣ヒートライオ!!?繋がって!!?希望に導くサーキット!!?私は転生炎獣ヒートライオをリンクマーカーに

セット!!?サーキットコンバイン!!?」
　再びヒートライオの頭上にサーキットが、足元に炎で出来た魔法陣が現れ、交差するようにヒートライオの身体を通過する。
　サーキットと魔法陣が通過すると、ヒートライオの身体から極大の炎が噴き出した。
「三度生まれ変われ、古より伝わる灼熱の獅子!!?転生リンク召喚!!?リンク3!!?転生炎獣ヒートライオ!!?」

〈転生炎獣ヒートライオ〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２３００　↙?→↘?

「３度目の転生リンク召喚だと!?」
「さあ、行くわよ!!?転生炎獣ヒートライオのもう１つの効果発動!!?サラマングレイトマジック!!?　今度はアンタのスカーレッドノヴァドラゴンの攻撃力を私の墓地にある転生炎獣アルミラージと同じ０にするわ!!?」

スカーレッドノヴァドラゴン
ＡＴＫ５５００→０

　ヒートライオが今度は魔法陣をスカーレッドノヴァに向かって放ち、魔法陣を潜ったスカーレッドノヴァの頭に小さな炎の角がつく。
「こんな屈辱を味わうのは初めてだ。だが、我が深淵の悪魔の攻撃力を下げたところで、深淵の悪魔には深淵世界に触れること叶わずがある!!?この局面でとんだプレイミスだな!!?」
「プレイミスかどうかを決めるのはアンタじゃなくて私よ!!?　墓地に存在する転生炎獣Ｊジャガーの効果発動!!?私は墓地の転生炎獣ヒートライオをＥＸデッキに戻して転生炎獣Ｊジャガーを特殊召喚!!?」

〈転生炎獣Ｊジャガー〉☆４　サイバース族　炎属性

ＡＴＫ１８００

ヒートライオと並び立つようにＪジャガーが姿を現す。

「さらに永続魔法、転生炎獣の意志（サラマングレイト・ハート）を発動!!?このカードは１ターンに１度、２つある効果の内、１つを発動することができる!!?１つは自分メインフェイズに自分の手札・墓地からサラマングレイトモンスター１体を選んで特殊召喚する効果。そしてもう１つは魔法＆罠ゾーンの表側表示のこのカードを墓地へ送り、自身と同名のモンスターを素材としてリンク召喚した自分フィールドのサラマングレイトリンクモンスター１体を対象としてそのモンスターのリンクマーカーの数まで、自分の手札・墓地からサラマングレイトモンスターを選んで守備表示で特殊召喚する効果よ!!?」

「何!!?まさか貴様……!!?」

「私は２つ目の効果を使い、転生炎獣の意志を墓地に送り、転生炎獣ヒートライオを対象にその効果を発動!!?転生炎獣ヒートライオのリンクマーカーは３!!?よって３体のサラマングレイトモンスターを選んで守備表示で特殊召喚する!!?蘇れ、転生炎獣ゼブロイドＸ、転生炎獣ブレイズドラゴン、転生炎獣ヴァイオレットキマイラ!!?

〈転生炎獣ゼブロイドＸ〉☆４　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１０００

〈転生炎獣ブレイズドラゴン〉★４　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ１２００

〈転生炎獣ヴァイオレットキマイラ〉☆８　サイバース族　炎属性
ＤＥＦ２０００

フィールドに蘇る私を支えてくれた転生炎獣達。
それを確認した私は１つ深呼吸をすると正面に手をかざした。
「ふー……行くわよ!!?繋がって!!?希望に導くサーキット!!?」

私の正面にこのターン6度目の巨大なサーキットが現れる。
そして私は……その言霊を口にした。
「召喚条件はモンスター3体以上!!?私は転生炎獣ブレイズドラゴン、転生炎獣ヴァイオレットキマイラ、そして転生炎獣ヒートライオを3体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
「馬鹿な!?ありえない、リンク5のモンスターだと!?」
私の口にした言霊に真紅が狼狽る。
そんな中、ブレイズドラゴンとヴァイオレットキマイラ、そして3体に分身したヒートライオがサーキットの中に吸い込まれると、サーキットから今まで見たことが無い程の光りが溢れ出す。
そして私はＥＸデッキから1枚のカードを取り出すと胸の前で握りしめた。
「お願い、私に大切な誓いを守る力を貸して!!?閉ざされた世界を繋ぐ生命の盾!!?リンク5!!?ファイアウォールドラゴンダークフルード!!?」
咆哮が響く……世界を繋ぐ、守護龍の咆哮が。

〈ファイアウォールドラゴンダークフルード〉ＬＩＮＫ５　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑→↘↓?

サーキットから現れたのは緑色の身体を持ち、巨大な輪と6つのクリスタルを背負った機械的な守護龍。
篝さんが至ったファイアウォールＸドラゴンでもない。
私の思いに応えてくれた、ファイアウォールドラゴンの新しい姿。
「ファイアウォールドラゴン……ダークフルード、だと!?」
「さあ、行くわよ!!?ファイアウォールドラゴンダークフルードの効果発動!!?コスモスクロイツ!!?このカードがリンク召喚に成功した場合、自分の墓地のサイバース族モンスター、儀式・融合・シンクロ・エクシーズモンスターの種類の数だけこのカードにカウンターを

置く!!?私の墓地には儀式モンスター、転生炎獣エメラルドイーグル、融合モンスター、転生炎獣ヴァイオレットキマイラ、エクシーズモンスター、転生炎獣ブレイズドラゴンがいる!!?よってファイアウォールドラゴンダークフルードには3つのカウンターが乗るわ!!?」

『エメラルドイーグル……ヴァイオレットキマイラ……ブレイズドラゴン……私に力を貸して!!?』

ダークフルードの呼び声に応えるように、墓地から緑炎、紫炎、黒炎が現れ、ダークフルードの背負っているクリスタルに吸い込まれて淡い輝きを灯す。

ファイアウォールドラゴンダークフルード
カウンター0→3

「真紅!!?今からアンタを覆うその闇を全部壊してあげる!!?バトル!!?」

「っ、何が我を覆う闇全部壊すだ!!?未知なるリンク5のモンスターだろうと、我が深淵の悪魔を倒すことはできぬ!!?」

「それはどうかしら?バトルフェイズ、ファイアウォールドラゴンダークフルードの永続効果発動!!ハイルシュテルンビルト!!?このカードの攻撃力はバトルフェイズの間、このカードのカウンターの数×2500ポイントアップする!!?」

「何!!?」

「現在ファイアウォールドラゴンダークフルードに乗っているカウンターは3つ!!?よってその攻撃力は7500ポイントアップする!!?」

ダークフルードが咆哮をあげると、クリスタルに灯っていた炎が燃え上がり、ダークフルードの身体を聖なる輝きが包み込んだ。

ファイアウォールドラゴンダークフルード
ＡＴＫ３００００→１０５００

「攻撃力……１０５００だと⁉？」
「行くわよ⁉？ファイアウォールドラゴンダークフルードでスカーレッドノヴァドラゴンを攻撃⁉？」
「無駄だ⁉？スカーレッドノヴァドラゴンのエフェクトアクティベート⁉？　深淵世界に触れること叶わず⁉？スカーレッドノヴァドラゴンを除外し、その攻撃をインヴァリドにする⁉？」
　スカーレッドノヴァの姿が闇に変わり霧散してダークフルードに纏わり付く。
「闇の中に何か逃がさない⁉？ファイアウォールドラゴンダークフルードの効果発動⁉？シュヴァルツシルト⁉？相手がモンスターの効果を発動した時、このカードのカウンターを１つ取り除いてその発動を無効にする⁉？」
「何だと⁉？」
　クリスタルの中から紫炎が溢れ出し、ダークフルードの身体を包み込むと、ダークフルードの身体から聖なる波動が放たれ、身体に纏わりついていたスカーレッドノヴァを吹き飛ばされ、再び竜王としての姿を成す。

ファイアウォールドラゴンダークフルード
カウンター３→２

ファイアウォールドラゴンダークフルード
ＡＴＫ１０５００→８０００

「闇を祓って、ファイアウォールドラゴンダークフルード⁉？安寧のゲシュテルンヴァイスシュトラール⁉？」
　ダークフルードが力強い咆哮をあげると、ダークフルードの緑色の身体が赤く染まり、背負っていた６つのクリスタルが輝く。
　クリスタルが強く輝くと輪の中に生まれた虹色の極光が放たれ、スカーレッドノヴァを貫き、纏っていた禍々しい闇と共に消滅させた。

真紅　ＬＰ１１５００→３５００

「があっ⁉？馬鹿な⁉？ありえぬ⁉？我が器から、呪われし闇の力が消えてゆく、だと⁉？まさか、この極光⁉？魔を退ける光の本流……　凶祓いの力だとでもいうのか⁉？」

スカーレッドノヴァを失った真紅の身体から大量の闇が溢れ出し、消滅していく。

それにより、真紅の身体の中にいる何者かが苦しげに呻く。

「だが、計算を間違えたな‼？カウンターが消えたことでファイアウォールドラゴンダークフルードの攻撃力は下がり、貴様のモンスターで我のライフを削り切ることが出来なくなった‼？次のターン、我が竜王でーーー」

「アンタに次のターンはないわ‼？ファイアウォールドラゴンダークフルードの効果には続きがある‼？このカードの攻撃宣言時からダメージステップ終了時までに相手のモンスター効果を無効にした場合、このカードはもう1度続けて攻撃できる‼？」

「っ⁉？馬鹿な、連続攻撃だと⁉？」

「これで終わりよ‼？ファイアウォールドラゴンダークフルードで真紅眼の闇竜を攻撃‼？」

「くっ、迎え撃て、真紅眼の闇竜‼？　黒淵弾（ダークネスギガフレイム）‼？」

真紅の呼びかけに闇竜は応えない。

ただその場で悲しげに咆哮をあげる。

「馬鹿な、何をしている真紅眼の闇竜⁉？」

「馬鹿はアンタよ‼？それ以上、真紅の身体を好き勝手にさせてやらないわ‼？真紅を縛る呪縛を祓って、ファイアウォールドラゴンダークフルード‼？安寧のゲシュテルンヴァイスシュトラール‼？」

『もう大丈夫だよ。桜ちゃんは、あなたを暗闇の中に置き去りになんかしない。もう誰にも、あなたに呪わせたりなんかしない。だから、その呪い、今祓ってあげる‼？』

ダークフルードの背負っていた６つのクリスタルが再び輝きを放

つ。
クリスタルが強く輝き、輪の中に生まれた虹色の極光が、闇竜諸共真紅を貫き、纏っていた禍々しい闇の呪縛を完全に消滅させた。
真紅　ＬＰ３５００→０
ーーーーーーー
「勝っ……た……うっ……」
デュエルが終わり、気が抜けた私の身体から力が抜け、病院の屋上に倒れ伏す。
意識は少しずつ闇の中に沈んでいき、視界は闇に包まれようとしている。
最後の力を振り絞り、地面に転がったまま顔を真紅の方に向ける。
気を失っている真紅からは、先程まで感じていた禍々しい気配は感じられない。
「助け、られた……のよね？よかっ……た……」
そう口にした瞬間、一気に目蓋が重くなる。
身体中は痛むし、気分も最悪だけど……それでもやりきった。
ちゃんと、助けられた。
壊すことしかできなかった私が……誰かのことを、守ることができた。
「やっと着い……桜ちゃん⁉？」
「っ、この惨状は……宝月先輩⁉？真紅ちゃん⁉？」
確かに感じる達成感と、薄れゆく意識の中、最後に耳にしたのは――
「桜ちゃん‼？しっかりして‼？桜ちゃん‼？」
――私のことを全力で案じてくれている親友の声だった。

第８５話　破滅を祓う光剣

☆

「……それで、桜も入院することになったわけか。俺の時には自分の身体を蔑ろにし過ぎなのが悪いとか言ってたのに、桜も人の事言えてないじゃないか」
「う、うるさいわね‼？分かってるわよ、そんなこと‼？」
「師匠？確かに桜ちゃんも無理をしましたけど、師匠の方がもっと酷い無茶をしてるんですからね？」
「……そうだったかな？」
「惚けてもダメです‼？」
「やーい、遊花に怒られたー」
「桜ちゃん？私が怒ってるのは師匠だけじゃないからね？桜ちゃんもだからね？２人共ちゃんと分かってます？」
『……はい、すみません』
遊花にジト目で睨まれ、本気で怒られた俺と桜は揃って項垂れる。
そんな俺達を見て、遊花は表情を崩すと、目尻を擦りながら心底安心した表情を浮かべた。
「……でも、本当によかったです。２人共無事で……」
ちょっと声が震えている遊花に俺達はばつが悪くなり、顔を逸らした。
幻騎に植え付けられた呪いから解放され、意識を取り戻した日の翌日。
俺は俺が眠っている間に闇のカードに操られた状態で現れた夜の妹と激闘を繰り広げ、入院することになった桜の病室に遊花と共に足を運んでいた。
どうやら遊花は今日もデュエルアカデミアを休むことにしたらしい。
しかし、それも無理も無いことだろう。
桜は闇のカードの力で実体化した炎に焼かれたようで身体中包帯

だらけの状態でベッドの上。
俺は動けてはいるものの身体の大部分は桜と同じで包帯がつけられている状態だ。
身内の人間がここまでの大怪我を負っているのだ、遊花の心情は察するにあまりある。
……それに心が穏やかじゃないのは遊花だけではないしな。
「……ふぇ？」
「桜、痛むか？」
いつもの桜の姿が脳裏に浮かび、ベッドの上で寝ている姿と、その原因が闇のカードによって生み出された炎という現実に居た堪れなくなり、思わず桜の頭に手をやる。
「な、な、な、だ、だだだ、大丈夫よっ‼？ぜーんぜん‼？もう、なんていうか、大丈夫過ぎて身体が悲鳴をあげそうなぐらいよっ‼？」
「……危険じゃないか、それ？」
「とにかくっ、大丈夫だからっ‼？」
頭に置いていた手を振り払い、桜は慌てた様子でそんなことを捲し立てた。
何故かさっきより余計に顔が赤くなっているので、俺としては本気で心配なのだが、桜はどうもあまり触れて欲しくないようなので渋々引き下がる。
「とはいえ、ありがとな、桜。お前が守ってくれたおかげで俺は無事だったし、夜の妹も無事で済んだ。感謝してる」
「っ……べ、別にアンタのためにデュエルをしたわけじゃないんだからね‼？私は、ただ、遊花と真紅を助けてあげたかっただけ‼？アンタが助かったのはそのついでってだけなんだから‼？」
「……そっか」
「ふん、だ」
照れ臭そうに顔を逸らす桜を見て、俺は脳裏に浮かんだ全てを焼き尽くすような業火のイメージを振り払うように無理矢理にでも笑みを浮かべた。
桜が無事で、本当に良かった。

もう……炎に巻かれて全てを奪われるのはごめんだ。
「っ、師匠？あのーーー」
「桜!!？」
遊花が俺に何かを問いかけようとした瞬間、勢いよく俺達の背後にあったこの病室の扉が開かれた。
あまりの音に驚いて俺達が振り返ると、そこにいたのは桜に似た濡れ羽色の髪をロングヘアーにした大人の女性。
この人はもしかして……
その女性はベッドの上で寝ている桜を見ると、目を潤ませながら桜にかけよってその身体を抱きしめた。
「良かった……目が覚めたのね。本当に、良かった……」
「お母さん……ごめんなさい。心配かけて……」
やはりこの人が桜の母親か。
泣きそうな顔の桜を見て、俺は遊花と顔を見合わせるとそっと桜の病室を後にした。
ここから先は部外者が立ち入るべき場所ではないだろうから。

ーーーーーーー

「先程桜ちゃんの病室にいらした人が桜ちゃんのお母さん、宝月　睡蓮（ほうづき　すいれん）さんです」
遊花と一緒に自分の病室に戻ると、遊花が桜の病室の方を向きながらそう言った。
「睡蓮さんは両親が亡くなって途方に暮れていた私に家事を教えてくれたり、桜ちゃんの家で一緒に住まないかって誘ってくれたりしてくれたとても優しい人なんです。まあ、一緒に住まないかって提案は断っちゃったんですけど」
そういう遊花の表情はどこか申し訳無さそうだった。
自分を案じてくれた睡蓮さんや桜の申し出を断ったことに罪悪感を感じているのだろう。
口にしても遊花の罪悪感は消えないだろうが、それでもこの言葉は

口にしておくべきだろう。
「気にするな、とは言わないが。そこまで重く捉えるなよ。それだけ遊花が自分の両親を愛してるってことなんだからさ」
「師匠……ありがとうございます」
遊花の表情が少しだけ緩み柔らかな笑顔に変わったのを見て、俺はほっとする。
上手くいったみたいでよかった。
やっぱり遊花には悲しそうな顔より笑顔でいてほしいからな。
「事情が事情だったので、詳しくは説明出来なかったんですが、入院する程の怪我だったので昨日連絡しておいたんです。睡蓮さんにとって、桜ちゃんは唯一の家族で、娘ですから」
「そっか、桜のところは一人親だったな」
「はい。お父さんは私と出会うよりも前に事故で亡くなったらしくて」
「事故か……世の中ままならないものだな」
「……そうですね」
俺も遊花も両親を事故で失っている。
闇には記憶がなく、両親の顔すら知らないし、リーネは母親を事故で失った。
あまり思いたくもないことだが、俺達の周りにはそう言った過患が溢れすぎている。
本当に、世の中はままならないものだ。
「……暗い話はここまでにしておくか。それは桜も望みはしないだろう」
「そうですね。過去がどんなに辛くても、私達は寄り添いあってこの今を生きてるんですから」
「……だな」
過去は変わらないし、悲しみは消えない。
それでも、俺達はこの今を生きて進むことでしかその人達に報いることができないのだから。
「……よし、切り替えていくか。そういえば遊花、昨日は家に1人

だったが大丈夫だったか？闇達、帰ってこなかったんだろう？」
「ちょっと寂しかったですけど、大丈夫です。闇先パイから連絡はありましたし。詳しいことは教えて貰えませんでしたけど。大丈夫でしょうか、闇先パイ達？」
遊花が心配そうな表情を浮かべながら病室の窓から外を見る。
そう、遊花と俺が襲撃される直前に急用ができたといって何処かに向かって行ったリーネと不知火さんは戻ってこなかった。
闇からの連絡はあったようだから心配いらないとは思うが、幻騎に狙われているであろう遊花を1人にするリスクを冒してまで片付けなければならない急用というのは少々気になる。
単なる杞憂であればいいのだが、今の『ケルン』は怪奇事件が頻発する魔境といっても過言ではない状況だ。
本当に変なことに巻き込まれてなければいいんだが……心配しても仕方がないか。
「まあ、心配しても俺達にできることはない。闇達が何があったか教えてくれるのを待つとしよう。……そうだ、まだ遊花にお礼をいえてなかったな。あの新しいデッキとデュエルディスク、ありがとな。おかげでまた思う存分デュエルができそうだ」
「いえ、あの……どうでしたか？リーネさんに手伝って貰ったとはいえ、私、誰かのデッキを作るなんて初めてで……」
そういって遊花は不安そうな表情を浮かべる。
そんな遊花を安心させるように、俺は笑顔を浮かべて遊花の頭を優しく撫でた。
「完璧だったぜ。まだ数回しか回してないから十全に使いこなせているとは言えないが、それでもよく馴染む。本当によくやってくれた」
「あ……えへへ、お役に立てたならよかったです」
遊花が安心したように花咲く笑顔を浮かべる。
まあ、ちょっと過剰な言い回しにはなってしまったかも知れないが、嘘は言っていない。
それぐらい、遊花が新しく作ってくれたデッキは俺によく馴染んでくれている。

「とはいえ、練習がもう少し必要なのは間違いないな」
「あ、なら、私がデュエルの相手になりますよ？私も新しいデッキをもっと試してみたいですから」
「そうか？ならーーー」
遊花の提案を受け、デュエルディスクを起動しようとしたところで病室の扉がノックされる。
今朝の検査は終わったし、この時間にノックして入ってくるような人はいないハズだが……
俺達は顔を見合わせ首を傾げながらも、遊花に頼んで病室の扉を開けて貰う。
「はい、どなたでしょうか？」
遊花がそういいながら病院の扉を開けると、そこにいたのは車椅子に乗せられ、引き攣った表情を浮かべる桜と、険しい表情を浮かべている睡蓮さん。
驚いた遊花が口を開く前に、睡蓮さんはこちらを睨み、声を上げた。
「アナタが私の娘と遊花ちゃんを誑かした男ね‼？」
「……ええっ⁉？睡蓮さん⁉？」
……ああ、これは面倒なことになりそうだ。
驚く遊花と後ろめたそうに顔を逸らす桜を見て、俺は思わずため息を吐くのだった。

ーーーーーーー

「宝月　睡蓮よ。アナタには桜の母親と言った方が分かりやすいわね」
「これはどうもご丁寧に。俺はーーー」
「娘から聞いて知っているわ。結束　遊騎。『ケルン』における大罪人、『墜ちた英雄』でしょ？アナタには即刻、デュエルセキュリティに来てもらって桜と遊花ちゃんの前から消えて貰うわ」
鋭い眼光で俺を睨みながら切り捨てるように告げてくる睡蓮さんに俺は苦笑を浮かべるしかなかった。

取りつく島もないとはこのことだな。
この親あっての桜だと思わざるおえない程の気の強さだ、まだ初対面の時の桜の方が態度が柔らかかったぞ。
この気の強さであれば初対面の時に桜が言っていた俺の存在がバレたら間違いなく通報と言っていたのも納得できる。
とはいえ、俺の世間的な評価を考えれば、この反応は親として妥当な反応だろう。
怪しい経歴の男が娘の周りにいるのだ、良心的な親であれば、娘に危険が及ばないようにするのは当然だろう。
最も……言われている俺以上に怒っている人間がこの場にはいるのだが。
「睡蓮さん……今の言葉、撤回してください!!?師匠は大罪人なんかじゃないです!!?」
「……遊花ちゃんは騙されてるのよ。遊花ちゃんはこの男のことを詳しく知らないからーーー」
「師匠のことを詳しく知らないのは睡蓮さんの方です!!?師匠と関わったこともないのに、師匠を貶すならいくら睡蓮さんでも赦しません!!?」
遊花が俺を庇うように立ち、頬を膨らませながら絶対に意思を曲げませんとばかりに胸の前で両手を握って睡蓮さんを威嚇する。
相変わらず、遊花は俺の悪口となると沸点が低くなるな。
それだけ慕われており、俺の代わりに怒ってくれているという事実は嬉しいのだが、この沸点の低さをどうにかしなければ付け込まれる隙にもなる。
俺が遊花をどう宥めようかと悩んでいると、意外なところから更に事態を混沌とさせるように声が上がった。
「お母さん!!?遊騎はそんな人じゃないって言ったでしょ!!?遊騎を通報するって言うなら私だって赦さないわよ!!?」
「っ、桜……」
「……桜、お前もか」
威嚇するように睡蓮さんを睨み付ける桜を見て、俺は思わず顔を右

手で覆う。
　言ってることは間違いなく睡蓮さんの方が正しいのだが、まるで睡蓮さんが悪者みたいな雰囲気だ。
　客観的に見ても間違いなく悪いのは俺なんだがな。
「とにかく落ち着け、遊花、桜」
「「ですが（だけど）……‼？」」
「お前達は頭がいいんだから、睡蓮さんの言ってることの方が正しいのは分かるだろ？側から見れば、お前達を利用してると見られるのは当然だ。ましてや、睡蓮さんはお前達を心配して言ってくれてるんだ。それを怒るのは御門違いってもんだろ」
　俺の嗜めるような言葉に、遊花達は泣きそうな顔で目を逸らす。
　悲しげな顔の理由は、自分達を心配してくれた睡蓮さんに対して怒ってしまった罪悪感か、それとも俺を守れそうにないことを悟っているのか。
　まあ、そもそもが歪な状況だったんだ。
　その報いだとすれば仕方のないことだろう。
「睡蓮さん。謝って許されることではありませんが、すみません。２人の前から消えて牢獄に入れと言うのであればその通りにします」
「……その程度のことでアナタの罪が赦されるとでも思っているの？」
「いえ、全く。ですが、俺はそうすることでしか報いる術を知りません。なので、他に望みがあるのであればいくらでも言ってください」
　殺気が込められた鋭い視線を向けてくる睡蓮さんを、俺は真っ直ぐに見つめ返す。
　そんな俺を見て、遊花は覚悟を決めた表情で睡蓮さんに頭を下げた。
「睡蓮さん……師匠とデュエルをしてくれませんか？」
「遊花ちゃん？」
「デュエルをすれば、睡蓮さんも絶対に師匠が私達を利用するような人じゃないって分かります。だから、師匠とデュエルをしてくれませんか？」

「お、おい。遊花」
頭を下げたまま真剣な声色で遊花は睡蓮さんに頼み込む。
そんな遊花を見て、桜も真剣な表情で睡蓮さんを見る。
「お母さん、私からも頼むわ。遊騎とデュエルをして」
「桜まで……」
「私も、最初はお母さんと同じだった。でも、遊騎とデュエルをして、遊騎のことを知っていく中で、遊騎が悪い奴じゃないって分かった。だから、誰かからの評価じゃなくて、ちゃんと遊騎のことを知ってから考えてほしいの」
「……」
桜の言葉に、睡蓮さんは困惑した表情を浮かべたが、しばらくするとため息を吐いて俺の方を見た。
「……分かったわ」
「お母さん!!?」
「結束　遊騎。アナタが本当に桜が言うような人間なのか、見極めさせて貰うわ。ただし、デュエルの結果は関係ないわ。私が気に入らなければ、アナタをデュエルセキュリティに突き出す。それでいいのであれば、ね」
睡蓮さんは試すような視線をこちらに向ける。
しかし、それに対する俺の答えは決まっている。
「勿論、構いません。俺は自分が遊花達が言う程良い人間だとは思ってません。睡蓮さんが言うようにデュエルセキュリティに突き出されようが、仕方ないと思ってます」
今回のことは絶対的に睡蓮さんが正しい。
その事実に変わりはない。
だけど、それでもーーー
「それでも、こんな俺がいなくなることを悲しんでくれる優しい弟子と友人のために、チャンスをくれると言うのであれば、俺は全力で睡蓮さんとデュエルをします。俺を救ってくれた優しい人達のためにも、可能性があるのなら、俺は諦めちゃいけないから」
ーーーこんな俺を望んでくれた遊花達のためにも、諦めるわけには

いかないのだから。

ーーーーーーー

「準備はいいかしら？」
「はい」
病院の中庭に移動し、睡蓮さんとお互いにデュエルディスクを構える。
そんな俺達を、真剣な表情で遊花達が見ている。
まさか遊花が作ってくれた新デッキの実戦がこんなデュエルになるとは思わなかったが、それでも、きっとこのデッキはーーー
「……いきます‼？」
「デュエルを通して見せてみなさい、アナタがどんな人間なのかを‼？」
『決闘‼？』

遊騎　ＬＰ８０００
睡蓮　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は俺か」

デュエルディスクの決定により先攻になった俺は自身の手札を見る。
初手としては……悪くないか。
マリシャスシードに自分のデッキを奪われた俺の為に、遊花がリーネのアドバイスを受けながら一生懸命作ってくれたデッキだ。
何度か試運転をしたとはいえ、まだ使いこなせると言えるレベルじゃないんだが……作ってくれた本人の前で無様なデュエルは見せられないよな。

「自分フィールドにモンスターが存在しない場合にこのモンスターは特殊召喚できる!!?来い、フォトンスラッシャー!!?」

〈フォトンスラッシャー〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ２１００

フィールドに現れたのは光りの身体を持つ鋼鉄の戦士。
「さらに俺は曙光の騎士を召喚!!?」

〈曙光の騎士〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１４００

さらにフォトンスラッシャーに寄り添うように、赤いマフラーを靡かせたゴーグルをかけた騎士が現れる。
「そして、斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
「リンク召喚ね……」
俺が正面に手を前に突き出すと、目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター２体!!?俺はフォトンスラッシャーと曙光の騎士の２体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?追想に生きる王女!!?リンク２!!?聖騎士の追想　イゾルデ!!?」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

フォトンスラッシャーと曙光がサーキットの中に消え、金髪と白髪の２人の女性が現れる。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果、それにチェーンして曙光の騎士の効果発動!!?　フィールド上のこのカードが墓地へ送られた場合、デッキから光属性モンスター１体を墓地へ送る事ができる!!?俺は

デッキから閃刀姫ーロゼを墓地に送る‼?」
曙光の効果でデッキから墓地に送るのはリーネが入れたであろう閃刀姫。
というかアイツ、人のデッキに自分のデッキのメタカードにもなる閃刀姫を入れるなんてどういうつもりなんだ?
いや、アイツのことだからあまり深く考えてないか、自分も使ってる閃刀姫を俺が使ってるのが見たいとかそんな感じだな。
まぁ、ありがたく使わせては貰うが。
「そして聖騎士の追想　イゾルデの効果発動‼?リンクレカレクション‼?リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター1体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキからペンデュラムモンスター、イグナイトウージーを手札に加える‼?」
「へぇ、ペンデュラムモンスター。プロ時代のアナタは使っていなかったハズだけど?」
「俺も遊花達に刺激を受けて変わってきてるんですよ。聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動‼?メモリーズギフト‼?デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター1体をデッキから特殊召喚する‼?俺はデッキから妖刀竹光、リビングフォッシル、最強の盾、閃光の双剣―トライス、使い捨て学習装置(ラーニングマシン)を墓地に送り、ジャックスナイトを特殊召喚‼?」

〈ジャックスナイト〉☆5　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

イゾルデに導かれ、姿を現したのは絵札の名を持つ青い鎧の騎士。
「墓地に送られた妖刀竹光の効果発動‼?デッキから妖刀竹光以外の竹光カードをデッキから手札に加える‼?俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える‼?さらに俺は装備魔法、妖刀竹光をジャックス

ナイトに装備‼?・そして魔法カード、黄金色の竹光を発動‼?・自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローする‼?・」
「どんどんデッキを圧縮しているわね。流石は元プロ決闘者と言ったところかしら?・」
「恐縮です。俺はスケール2のイグナイトデリンジャーとスケール7のイグナイトウージーでペンデュラムスケールをセッティング‼?・」
俺を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中に導火線に火がついた2体の戦士の姿が浮かびあがり、下に2と7の数字が現れる。
「これにより俺は3から6までのモンスターを同時に召喚可能‼?・魂を燃やす戦士よ‼?・燃え盛る勇気となりて、運命を超える力を導け‼?・ペンデュラム召喚‼?・現れろ、俺のモンスター達‼?・」
俺がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって2つの光が舞い降りる。
「レベル4、クィーンズナイト‼?・」

〈クィーンズナイト〉☆4　戦士族　光属性
DEF1600

最初に現れたのは絵札の名を持つ赤い鎧を身に纏った女性の騎士。
そしてその後ろに赤き装甲の戦士が降り立つ。
「レベル5、オーバーレイブースター‼?・」

〈オーバーレイブースター〉☆5　戦士族　光属性
ATK2000

「レベル5モンスターが2体……これは……‼?・」
「俺は光属性レベル5のジャックスナイト、オーバーレイブースターでオーバーレイ‼?・2体の光属性モンスターでオーバーレイネットワークを構築‼?・エクシーズ召喚‼?・」
ジャックスナイトとオーバーレイブースターが光となり、空に浮か

んだ混沌の渦に吸い込まれる。
　そして渦が爆けると空から純白の鎧を見に纏った戦士が降りてくる。
「星々を守りし光の戦士!!?セイクリッドプレアデス!!?」
〈セイクリッドプレアデス〉★５　戦士族　光属性
　ＡＴＫ２５００
「やはりエクシーズ召喚!!?それもプロ時代には使っていなかったものね」
「あの頃の俺はリンクと融合しか使おうとしませんでしたからね。今となっては勿体なかったなって思ってますよ。墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?デッキから黄金色の竹光を手札に加える!!?そしてペンデュラムゾーンのイグナイトデリンジャーのペンデュラム効果発動!!?イグナイトモジュール!!?もう片方の自分のペンデュラムゾーンにイグナイトカードが存在する場合、自分のペンデュラムゾーンのカードを全て破壊し、自分のデッキ・墓地から戦士族・炎属性モンスター１体を選んで手札に加える!!?俺はペンデュラムゾーンのイグナイトデリンジャー、イグナイトウージーを破壊し、デッキからゴッドフェニックスギアスリードを手札に加える!!?」
　光の中にいた２体の戦士の導火線が勢いよく燃え上がり、２体の戦士が爆散する。
　その爆風でデッキから不死鳥の騎士が手札に加わる。
「まだまだ行きます!!?手札のゴッドフェニックスギアフリードの効果発動!!?自分のフィールド・墓地から装備魔法カード１枚を除外してこのカードを手札から特殊召喚する!!?俺は墓地にある妖刀竹光を除外!!?」
　墓地にあった妖刀竹光が勢いよく燃え上がり、灰へと変わる。
　その灰が集まり、輝くとそこに現れたのは炎を纏う不死鳥の騎士。
「幾星霜を燃え尽きようと、不死鳥は騎士に宿りて蘇る!!?降誕せよ、ゴッドフェニックスギアフリード!!?」

〈ゴッドフェニックスギアフリード〉☆9　戦士族　炎属性
ＡＴＫ３０００
「今度は最上級の戦士モンスター……」
「まだですよ。遊花の思いがこもったこのデッキの力はこんなものじゃありません!!?　自分フィールドに戦士族・炎属性モンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できる!!?来い、焔聖騎士―リナルド!!?」
〈焔聖騎士―リナルド〉☆1　戦士族　炎属性
ＤＥＦ２００
　ゴッドフェニックスの近くに現れたのは馬に乗った赤き騎士。
「この方法で特殊召喚した焔聖騎士―リナルドはチューナーとして扱う!!?」
「っ、次はチューナーモンスター!!?」
「さらに焔聖騎士―リナルドの効果発動!!?　このカードが特殊召喚に成功した場合、自分の墓地のカード及び除外されている自分のカードの中から、同名カード以外の戦士族・炎属性モンスター1体または装備魔法カード1枚を手札に加える!!?俺は除外された妖刀竹光を手札に加える!!?」
「手札に竹光が揃ったことでまたドローができる……そして……」
「俺はレベル4、クィーンズナイトに、レベル1、チューナーモンスターとなった焔聖騎士―リナルドをチューニング!!?」
「やっぱりシンクロ召喚まで使えるのね」
　リナルドが光の輪になり、クィーンズナイトが小さな星に変わり、光の道になる。
「他者の痛みを知る傭兵よ!!?その力を弱きものを守る為に振るえ!!?シンクロ召喚!!?懇篤の傭兵!!?スカーウォリアー!!?」

〈スカーウォリアー〉☆５　戦士族　地属性
ＡＴＫ２１００

光の道が輝くと、その中から現れたのは片腕を包帯で吊るした傷だらけの傭兵。
「俺は装備魔法、妖刀竹光をゴッドフェニックスギアフリードに装備!!?　魔法カード、黄金色の竹光を発動!!?デッキからカードを２枚ドローする!!?よし!!?さらに俺は戦士族である聖騎士の追想　イゾルデをリリースし、手札より現れよ、沈黙の剣士―サイレントソードマン!!?」

〈沈黙の剣士―サイレントソードマン〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１０００

イゾルデの姿が消え、代わりに現れたのは銀色の大剣を持つ戦士。
「沈黙の剣士―サイレントソードマン……確かそのモンスターはレベルモンスターの……」
「一応、俺の布陣の説明、いりますか？」
「……そうね、教えて貰えるかしら」
「それじゃあ説明させて貰いますね。まずはスカーウォリアーの永続効果、ディヴォートチャリティーによりこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は表側表示で存在する他の戦士族モンスターを攻撃対象に選択する事はできず、また、スカーウォリアーは１ターンに１度だけ、戦闘では破壊されません」
「戦闘破壊耐性に攻撃誘導ね」
「さらにゴッドフェニックスギアフリードの効果、炎凰十字斬により、１ターンに１度、モンスターの効果が発動した時、自分フィールドの表側表示の装備カード１枚を墓地へ送ってその発動を無効にして破壊し、沈黙の剣士―サイレントソードマンの効果、魔断斬りによって、１ターンに１度、魔法カードが発動した時にその発動を無効にしま

す」
「お次はモンスター効果と魔法無効……」
「最後にセイクリッドプレアデスの効果、ゾディアックリターンによりオーバーレイユニットを1つ使い、1ターンに1度、相手のカード1枚を手札に戻すことができ、この効果は相手ターンでも使用することができます」
「最後にはカードバウンス……本当に容赦無いわね」
先攻で作り上げた俺のフィールドに、睡蓮さんは苦い表情を浮かべる。
この布陣は幻騎とデュエルをした遊花が考えたものだ。
ＣＮｏ．と実際に相見えた遊花が出した結論は相手にＣＮｏ．を出させない、ＲＵＭを使わせないということらしい。
ＣＮｏ．となったホープの攻撃は普通の闇のカードよりも強力なものだったというのは闇の弁。
それこそ俺が生死の境を彷徨ったように、簡単に人を死に至らしめる力だ。
だからこそ、使わせない。
出させない。
それでいて俺にあった攻撃的な防御手段を考えたらしい。
まぁ、元はと言えば俺のデッキに相手を妨害する手段が乏しかったのも原因なのだが。
チラッと遊花の方を見ると、嬉しそうに目を輝かせている。
あの表情が見れただけでも、頑張って新戦術を身につけた甲斐はあると言ったものだ。
とはいえ、まだデュエルは始まったばかり。
相手はあの桜の母親だ。
きっと油断をしていい相手ではない。
成り行きで始まったデュエルではあるが、遊花達の期待に応えるためにも、俺は全力でデュエルをするだけだ。
「それじゃあ俺はカードを1枚伏せてターンエンドです」

遊騎　ＬＰ８０００　手札０
ー▲△ーー　ー
ー○○○○
ー　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
睡蓮　ＬＰ８０００　手札５

「さて、どうしたものかしらね。私のターン、ドロー!!?」
「スタンバイフェイズ、沈黙の剣士―サイレントソードマンの効果発動!!?沈思黙考!!?自分・相手のスタンバイフェイズ、このカードの攻撃力は５００ポイントアップする!!?」
沈黙の剣士―サイレントソードマン
ＡＴＫ１０００→１５００

「時間が経てば立つ程強くなるってわけね。なら、早めに破壊させて貰おうかしら。魔法カード、儀式の下準備!!?デッキから儀式魔法カード１枚を選び、さらにその儀式魔法カードにカード名が記された儀式モンスター１体を自分のデッキ・墓地から選んで、そのカード２枚を手札に加えるわ!!?」
「儀式デッキか……沈黙の剣士―サイレントソードマンの効果発動!!?魔断斬り!!?　１ターンに１度、魔法カードが発動した時にその発動を無効にする!!?」
沈黙の剣士が睡蓮さんが発動しようとした儀式の下準備をぶった斬り、その発動を無効にする。
儀式魔法と儀式モンスターが揃ってしまうから使わざるを得なかったとはいえ、早速、沈黙の剣士を使わされてしまった。
儀式デッキということが分かったが、早くも魔法無効が出来なくなったところがどこまで響くか……
「早速使ってきたわね。それなら次はこれよ。手札の機械天使の絶対儀式を見せて、魔神儀（デビリチャル）―キャンドールの効果発動!!?同名カードは

1ターンに1度、手札の儀式魔法カード1枚を相手に見せて同名カード以外のデッキの魔神儀モンスター1体と手札のこのカードを特殊召喚するわ!!?」
「つ、2体特殊召喚されるのはマズいか。ゴッドフェニックスギアフリードの効果発動!!?炎凰十字斬!!?1ターンに1度、モンスターの効果が発動した時、自分フィールドの表側表示の装備カード1枚を墓地へ送ってその発動を無効にして破壊する!!?俺は装備魔法、妖刀竹光を墓地に送り、魔神儀―キャンドールの効果を無効にする!!?」
ゴッドフェニックスが妖刀竹光を振るうと妖刀竹光から不死鳥の形をした炎が放たれ、キャンドールを焼き尽くす。
キャンドールが燃え尽きると、妖刀竹光も燃えはじめ、灰に変わった。
「墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?デッキから装備魔法、折れ竹光を手札に加える!!?」
「手札は増えたけど、これで無効効果は無くなった。思う存分動かせて貰うわ!!?　私は　宣告者の神巫(デクレアラーディヴァイナー)を召喚!!?」

〈宣告者の神巫〉☆2　天使族　光属性
ＡＴＫ５００

フィールドに現れたのは白いローブを羽織った虹色の羽根を持つ天使の少女。
「宣告者の神巫の効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキ・ＥＸデッキから天使族モンスター1体を墓地へ送り、このカードのレベルはターン終了時まで、そのモンスターのレベル分だけ上がるわ!!?私はＥＸデッキからレベル４の虹光の宣告者(アークデクレアラー)を墓地に送り、宣告者の神巫のレベルを４つ上昇させるわ!!?」

宣告者の神巫
☆2→6

宣告者の神巫の背後に虹色の羽根を持つ白い球体の天使が現れ、宣告者の神巫に力を与えてレベルを上昇させる。
「さらに墓地に送られた虹光の宣告者の効果発動!!?このカードが墓地へ送られた場合に、デッキから儀式モンスター1体または儀式魔法カード1枚を手札に加える!!?私はデッキから儀式モンスター、サイバーエンジェル―　美朱濡(ビシュヌ)―を手札に加えるわ!!?」
「サイバーエンジェル―美朱濡―……?その名前、どこかで……」
「行くわよ、儀式魔法、機械天使の絶対儀式を発動!!?レベルの合計が儀式召喚するモンスターと同じになるように、自分の手札・フィールドのモンスターをリリース、またはリリースの代わりに自分の墓地から天使族または戦士族のモンスターをデッキに戻し、手札からサイバーエンジェル儀式モンスター1体を儀式召喚するわ!!?」
「っ、墓地のモンスターを使って儀式召喚!?」
「私はフィールドのレベル6となった宣告者の神巫をリリースし、さらに墓地のレベル4モンスター、虹光の宣告者をEXデッキに戻して儀式召喚を行う!!?」
睡蓮さんの前に炎が灯った祭壇が現れ、その炎の中に宣告者の神巫と虹光の宣告者が身を投げる。
炎が一際強く燃え上がると、炎を吹き飛ばしながら姿を現したのは金の歯車を背負う機械の天使。
「勝利をもたらす天使よ!!?その力で悪しきもを浄化せよ!!?儀式召喚!!?降臨せよ、サイバーエンジェル―美朱濡―!!?」
〈サイバーエンジェル―美朱濡―〉☆10　天使族　光属性
ATK3000
「サイバーエンジェル―美朱濡―の効果発動!!?イミディアトゥブゥーダ!!?このカードが儀式召喚に成功した場合、EXデッキから特殊召喚された相手フィールドのモンスターを全て破壊し、破壊したモンスターの数×1000ポイントのダメージを相手に与え、この

ターン、このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる!!?」
「なっ!?!?」
「さらにサイバーエンジェル―美朱濡―の効果にチェーンしてリリースされた宣告者の神巫の効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードがリリースされた場合、手札・デッキから同名カード以外のレベル2以下の天使族モンスター1体を特殊召喚する!!?」
「っ、後続まで増えるのか。なら、さらにチェーンしてセイクリッドプレアデスの効果発動!!?ゾディアックリターン!!?オーバーレイユニットを1つ使い、サイバーエンジェル―美朱濡―を手札に戻す!!?」
プレアデスが空間に穴を開け、星の弾丸を放って美朱濡を空間の裂け目に弾き飛ばす。
しかし、空間の裂け目に呑まれる瞬間、美朱濡は背負っていた金の歯車をプレアデスに向けて放ち、放たれた金の歯車が意志を持っているかのように辺りを旋回し始めた。
「サイバーエンジェル―美朱濡―は手札に戻るわ。次に宣告者の神巫の効果発動!!?私はデッキからサイバープチエンジェルを特殊召喚するわ!!?」

〈サイバープチエンジェル〉☆2　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

宣告者の神巫の力により、フィールドに機械の身体を持つ小さな天使が姿を現す
「最後にサイバーエンジェル―美朱濡―の効果発動!!?イミディアトゥブゥーダ!!?あなたがＥＸデッキから特殊召喚したモンスターを全て破壊し、破壊したモンスターの数×１０００ポイントのダメージを相手に与えるわ!!?」
最後に辺りを旋回していた美朱濡の放った金の歯車が高速で移動してプレアデス、スカーを斬り刻んだ。

遊騎　ＬＰ８０００→６０００

「くっ……これで妨害手段は全部使わされたか」

「これで私を止めるものは本当に無くなったわ。サイバープチエンジェルの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合にデッキからサイバーエンジェルモンスター1体または機械天使の儀式1枚を手札に加える!!?私はデッキからサイバーエンジェル―弁天―を手札に加えるわ!!?　そして私は今手札に加えたサイバーエンジェル―弁天―をリリースし、魔法カード、慈悲深き機械天使!!?同名カードは1ターンに1度、自分の手札・フィールドのサイバーエンジェル儀式モンスター1体をリリースし、自分はデッキから2枚ドローし、その後手札を1枚選んでデッキの一番下に戻す!!?ただし、このカードの発動後、ターン終了時まで自分は儀式モンスターしか特殊召喚できないわ。さらにリリースされたサイバーエンジェル―弁天―の効果発動!!?このカードがリリースされた場合、デッキから天使族・光属性モンスター1体を手札に加える!!?私はデッキから破滅の美神ルインを手札に加えるわ!!?」

「破滅の美神ルイン!??そのカードは確か……」

「あら、このカードのことを知ってるのね。それなら話は早いわ。世界が崩壊していく中で、あなたは滅びずにいられるかしら?儀式魔法、エンドオブザワールド!!?　フィールドか手札から、儀式召喚するモンスターと同じレベルになるようにリリースし、破滅の女神ルイン、または終焉の王デミスを降臨させる!!?そして、破滅の美神ルインの永続効果により、破滅の美神ルインは手札・フィールドに存在する限り破滅の女神ルインとして扱う!!?私は手札のレベル１０モンスター、サイバーエンジェル―美朱濡―をリリースして儀式召喚を行う!!?」

空に巨大な魔法陣が描かれ、地表が青白い炎に包まれていく。

終末に近づく世界の中、美朱濡が巨大な魔法陣に吸い込まれてい

く。
美朱濡を吸収し、魔法陣が光り輝くと、天から舞い降りたのは真紅のラブリュスを手にした銀髪の女神。
世界の崩壊を告げる破滅の女神。
「破滅を告げる女神よ‼?定められし滅びの未来に向け、迷える小羊を導け‼?儀式召喚‼?降誕せよ、破滅の美神ルイン‼?」
〈破滅の美神ルイン〉☆１０　天使族　光属性
ＡＴＫ２９００
「破滅の美神ルイン……サイバーエンジェル―美朱濡―……やっぱり、そういうことなのか……」
俺はフィールドに現れた破滅の美神ルインを見て、睡蓮さんから感じていた既視感の正体に気付いた。
「睡蓮さん……１つ尋ねてもよろしいですか?」
「何かしら?」
「『破滅の天使』……この呼び名に聞き覚えは?」
「あら、懐かしい呼び名ね」
「やっぱり、そうなんですね」
昔を懐かしむような遠い目をする睡蓮さんに、俺は苦笑を浮かべる。
道理で娘である桜があんなに強いわけだ。
「遊騎?お母さん?一体何の話をしてるの?」
「師匠、『破滅の天使』って何ですか?」
そんな俺達を見て、不思議そうに首を傾げる遊花と桜。
チラッと睡蓮さんを見ると、悪戯を成功させた子供のような楽し気な笑みを浮かべている。
俺は肩を竦めると、遊花達の質問に答えるべく口を開いた。
「『破滅の天使』って言うのは。俺が保育園の時ぐらいに世界ランキング上位で活躍していたプロ決闘者の異名だよ。天使族のサーチ効果を主軸として呼び出す儀式モンスターで相手のフィールドを破壊し

尽くす。特にその人の切り札であり代名詞ともなった3体の儀式モンスター、『サイバーエンジェル―美朱濡―』、『終焉の覇王デミス』、そして『破滅の美神ルイン』は、その人が結婚してプロ決闘者を引退する日まで、見るだけで当時のプロ決闘者を震え上がらせたって話を、学生時代に武者小路校長に聞いたことがある」
「『サイバーエンジェル―美朱濡―』、『終焉の覇王デミス』、『破滅の美神ルイン』……えっ？待って。それ全部お母さんのデッキに入ってるんだけど……」
桜が引き攣った表情でぎこちなく顔を動かし、遊花も困惑した表情で睡蓮さんを見る。
そんな彼女達に俺は間違いないであろうその真実を告げる。
「そのプロ決闘者の名前を、天国　睡蓮（あまくに　すいれん）と言う。いや、それは旧姓で正しくは宝月　睡蓮、だな。あってますか、睡蓮さん？」
「ええ、正解よ」
「はあっ⁉？」
「睡蓮さんが、元プロ決闘者⁉？」
あっさりと肯定した睡蓮さんに、遊花、そして実の娘である桜が目を見開いて驚く。
この反応からして、2人は睡蓮さんが元プロ決闘者ってことを知らなかったみたいだな。
「ちょっと、お母さん⁉？何で教えてくれなかったのよ⁉？」
「だって、聞かれなかったもの。それに、恥ずかしいじゃない、母親として『破滅の天使』なんて呼び名を娘に知られるの。あなただって、デュエルアカデミアで『壊獣姫』って呼ばれてることをお母さんに教えてくれなかったじゃない」
「どうして知ってるの⁉？」
「あら？遊花ちゃんが話してくれたわよ？」
「っ⁉？遊花～～～⁉？」
「ひゃぅ⁉？ご、ごめんって⁉？隠してるなんて思ってなくて、ゆ、揺らさないで～⁉？」

桜が顔を真っ赤に染めて遊花の身体を揺さ振る。
ああ、やっぱり恥ずかしかったんだな、あの呼び名。
桜らしいと言えばらしい話だ。
いや、プロ決闘者だった時に俺が呼ばれてた『英雄騎士』って名前も大概なんだけどな。
こういうのは慣れと諦めが大事だ。
「それで、私が『破滅の天使』だと知って怖気付きでもしたのかしら？」
そういって、睡蓮さんが試すような視線を俺に向けてくる。
俺が怖気ずく？
まさか、とんでもない‼？
「それこそまさか、ですよ。聞き及んでいた世界ランキング上位に位置してた元プロ決闘者とのデュエルなんですよ？これで燃えないなんて男が廃りますよ」
「っ……へぇ、少しは見込みがありそうね」
自分でも分かる程楽しげに、獰猛な笑みを浮かべる俺を見て、睡蓮さんが興味深そうに笑う。
「なら、精々足掻いて見せなさい‼？　破滅の美神ルインは破滅を体現する女神。その身には確実な破滅をもたらす3つの力を秘めているわ。1つ目の永続効果、リチュアルルインは儀式召喚したこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分フィールドの儀式モンスターは効果では破壊されなくする」
「儀式モンスター全体への効果耐性付与……」
「さらに2つ目の永続効果、チェインルインにより儀式モンスターのみを使用して儀式召喚したこのカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる。そして3つ目の効果、カミトゥマントルインによりこのカードが戦闘で相手モンスターを破壊した場合、そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与えるわ‼？」
「っ、連続攻撃にバーン効果まであるのか‼？」
「さあ、破滅の美神ルインがもたらす破滅にあなたは抗うことができるかしら？バトル‼？　破滅の美神ルインでゴッドフェニックスギアフリードを攻撃‼？」

「攻撃力が足りない破滅の美神ルインでゴッドフェニックスギアフリードを攻撃……っ、狙いはあれか‼?リバースカードオープン‼?罠発動、マジカルシルクハット‼?相手バトルフェイズに発動でき、デッキから魔法・罠カード2枚を選び、そのカード2枚を攻撃力守備力0の通常モンスターカード扱いとして、自分のメインモンスターゾーンのモンスター1体と合わせてシャッフルして裏側守備表示でセットする‼?」
「へぇ、珍しいカードを使ってくるわね」
「ただし、この効果でデッキから特殊召喚したカードはバトルフェイズの間しか存在できず、バトルフェイズ終了時に破壊される。俺はデッキから装備魔法、スーペルヴィスと装備魔法、妖刀竹光を通常モンスターカード扱いとして呼び出し、ゴッドフェニックスギアフリードと合わせて裏側守備表示でセット、シャッフルする‼?」
フィールドに3つのシルクハットが現れ、ゴッドフェニックスを隠すように動き回り、配置される。
破滅の美神ルインは光属性。
攻撃力が足りないのにゴッドフェニックスを直接狙ってきたということは十中八九オネストだろう。
シルクハットの中にゴッドフェニックスを隠せたとはいえ、1度目の攻撃でゴッドフェニックスを当てられたら2度目の攻撃で沈黙の剣士を狙われてバーン効果も合わさって俺の負けが確定する。
ここが勝負の別れ目だ。
「攻撃対象が増えたことで、攻撃対象を変更するわ。破滅の美神ルインで中央のシルクハットを攻撃‼?ファーストルイン‼?」
破滅の美神ルインがラブリュスを振り下ろし、中央のシルクハットを切断する。
そのシルクハットの中にあったのは……
「セットカードは……妖刀竹光‼?破壊される」
「残念、外れちゃったわね」
シルクハットの中に隠されていた妖刀竹光が破壊される。
「墓地に送られた妖刀竹光の効果発動‼?デッキから最後の黄金色の

竹光を手札に加える!!?」
「手札まで増やされるなんてね、なら次よ!!?　破滅の美神ルインで右のシルクハットを攻撃!!?セカンドルイン!!?」

破滅の美神ルインが横薙ぎにラブリュスを振るい、右のシルクハットを切断する。
「っ、セットカードは……ゴッドフェニックスギアフリードだ」

〈ゴッドフェニックスギアフリード〉☆9　戦士族　炎属性
ＤＥＦ２２００

切断されたシルクハットからは炎が上がり、苦悶に喘ぐ戦士の声が響き、消滅した。
「当たったわね。なら、破滅の美神ルインの効果発動!!?カミトゥマントルイン!!?このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した場合、そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える!!?」
破滅の美神ルインがラブリュスを掲げると、ラブリュスから光が放たれ、俺の身体を貫いた。
「ぐっ!!?」

遊騎　ＬＰ６０００→３０００

「このターンで決めるつもりだったんだけどね。よく耐えたわ。私はこのままターンエンドよ」
「バトルフェイズ終了時、最後のシルクハットが破壊される。そして破壊されたスーペルヴィスの効果発動!!?表側表示のこのカードがフィールドから墓地へ送られた場合、自分の墓地の通常モンスター1体を特殊召喚する!!?」
「へぇ、ここでモンスターも増やしてくるか」
「甦れ、クィーンズナイト!!?」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

遊騎　ＬＰ３０００　手札２
ーーーーーー　ー
ー○□ーー
ー　ー
ーー○□ー
ーーーーー　ー
睡蓮　ＬＰ８０００　手札１

「俺のターン、ドロー!!?スタンバイフェイズ、沈黙の剣士―サイレントソードマンの効果発動!!?沈思黙考!!?自分・相手のスタンバイフェイズ、このカードの攻撃力は５００ポイントアップする!!?」

沈黙の剣士―サイレントソードマン
ＡＴＫ１５００→２０００

睡蓮さんのフィールドにセットカードはなく、モンスターも破滅の美神ルインとプチエンジェルのみだ。
一見チャンスのようにも見えるが、先程の睡蓮さんの行動からあの手札はオネストだと仮定して動かなければならない。
迂闊に破滅の美神ルインに攻撃すればその時点でカウンターを受けて俺の負けが確定する。
ここは慎重にいかないとな。
「俺はクィーンズナイトに装備魔法、折れ竹光を装備!!?さらに魔法カード、黄金色の竹光を発動!!?自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在するためカードを２枚ドローする!!?よし、永続魔法、武装鍛錬（ギアフリード）を発動し、その効果を発動!!?同名カードは１ターンに１度、自分フィールドに装備魔法カードが存在する場合、自分の墓地から戦士族・炎属性モンスターまたはデュアルモンスター１体をデッ

キの一番下に戻し、自分はデッキから1枚ドローする‼?俺は墓地のゴッドフェニックスギアフリードをデッキの下に戻してカードを1枚ドローする‼?」
「ゴッドフェニックスギアフリードをデッキに戻してくる、か」
「これで準備は整った、俺はキングスナイトを召喚‼?」

〈キングスナイト〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

クィーンズナイトと並び立つように現れるのは黄金の鎧を身に纏った騎士。
そしてクィーンとキングが揃った時、新たな騎士が姿を現わす。
「キングスナイトの効果発動‼?自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト1体を特殊召喚する‼?集え、絵札の三銃士‼?来い、ジャックスナイト‼?」

〈ジャックスナイト〉☆5　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

クィーンズナイトとキングスナイトが剣を合わせると、その剣に重ねるように、剣を掲げたジャックスナイトが現れる。
「絵札の三銃士……プロ決闘者だったアナタの代名詞」
「それだけじゃない‼?自分フィールドのモンスター3体、クィーンズナイト、キングスナイト、ジャックスナイトをリリースし、手札からこのモンスターを特殊召喚する‼?」
「っ‼?その特殊な召喚方法は……」
絵札の三銃士が粒子に変わり、空に集まっていく。
集まった粒子が弾けると、空から舞い降りたのは龍の鎧を見に纏った漆黒の戦士。
その戦士はフィールドに降り立つと、力強い咆哮を上げた。

「呪われた運命に抗う孤独の戦士!!?・Ｄ－ＨＥＲＯＢｌｏｏｏ－Ｄ(デステニーヒーロー ブルー ディー)!!?」

〈Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏ－Ｄ〉☆８　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１９００

「Ｄ－ＨＥＲＯ……アナタのもう１つの代名詞たる運命の英雄ね」
「Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏ－Ｄの永続効果、シールデステニー!!?このカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手フィールドの表側表示モンスターの効果は無効化される!!?」
「っ!!?」
　Ｂｌｏｏｏ－Ｄの鎧から闇が吹き出し、辺りの風景が夜に変わる。
　そのＢｌｏｏｏ－Ｄから吹き出した闇により、破滅の美神ルインの力が失われていく。
「そしてＤ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏ－Ｄの効果発動!!?カースアブソーブ!!?１ターンに１度、相手フィールドのモンスター１体を対象として、その相手モンスターを装備カード扱いとして１枚だけこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの元々の攻撃力の半分だけアップする!!?対象は破滅の美神ルイン!!?」
「くっ、モンスターの吸収効果……!!?」
　Ｂｌｏｏｏ－Ｄが破滅の美神ルインに手を伸ばすと、Ｂｌｏｏｏ－Ｄの背中に付いている龍の爪が破滅の美神ルインに放たれ、その爪に貫かれた破滅の美神ルインはガラスのように砕け、粒子に変わるとＢｌｏｏｏ－Ｄに吸い込まれていった。

Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏ－Ｄ
ＡＴＫ１９００→３３５０

「バトル!!?・沈黙の剣士―サイレントソードマンでサイバープチエンジェルを攻撃!!?・沈黙の剣ＬＶ０!!?」

沈黙の剣士が大剣を振るい、プチエンジェルを両断する。
「くっ‼?」
「これで睡蓮さんを守るモンスターはいなくなった‼?ＤーＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏ－Ｄでダイレクトアタック‼?デソレイションフィアー‼?」
Ｂｌｏｏｏ－Ｄも地面を強く蹴って跳び上がり、空中で一回転して足に闇を纏いながら睡蓮さんに向けて跳び蹴りを放った。
「きゃあ‼?」

睡蓮　ＬＰ８０００→４６５０

睡蓮さんのモンスターは全滅し、ライフも大きく削れた。
とはいえ、相手は世界ランキング上位だった決闘者だ。
このまますんなりといってくれればいいが……
「メインフェイズ２、俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ‼?」

遊騎　ＬＰ３０００　手札０
ー▲△ーー　　ー
ー○○ーー
　　ー　　ー
ーーーーー
ーーーーー　　ー
睡蓮　ＬＰ４６５０　手札１
「モンスター効果を封じるＤーＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｏ－Ｄに魔法をふうじてくる沈黙の剣士―サイレントソードマン……なかなかに厄介ね。私のターン、ドロー‼?」
「スタンバイフェイズ、沈黙の剣士―サイレントソードマンの効果発動‼?沈思黙考‼?自分・相手のスタンバイフェイズ、このカードの攻撃力は５００ポイントアップする‼?」

沈黙の剣士―サイレントソードマン

ＡＴＫ２０００→２５００

「そろそろ成長具合が不味くなってきたわね。そろそろ沈黙の剣士―サイレントソードマンにも退場して貰うわよ。私はイーバを召喚‼？」

〈イーバ〉☆１　天使族　光属性
ＡＴＫ５００

フィールドに現れたのは小型の銃を持ち、ヘルメットをつけた小さな宇宙人のモンスター。

「バトル‼？イーバでＤ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄを攻撃‼？イレイズレイ‼？ダメージステップ開始時、手札からオネストの効果を発動‼？」

「っ、やっぱりオネストがあったか……」

「自分の光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ開始時からダメージ計算前までに、このカードを手札から墓地へ送って発動できる‼？そのモンスターの攻撃力はターン終了時まで、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分アップする‼？Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄの攻撃力は３３５０。よってイーバの攻撃力を３３５０ポイントアップさせる‼？」

イーバ
ＡＴＫ５００→３８５０

イーバの背中に天使の羽根が生え、手にした銃にエネルギーが集束していく。

イーバが引き金を引くと、銃口から極太のレーザーが放たれ、Ｂｌｏｏｄを呑み込み、跡形もなく消しとばした。

遊騎　ＬＰ３０００→２５００

「くっ……すまない、ＤＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄ……」
「これでフィールドでもモンスター効果が使えるようになったわ!!?メインフェイズ２!!?再生せよ!!?廃墟に芽吹くサーキット!!?」
「っ、リンク召喚か……」
　睡蓮さんの前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はトークン以外のレベル１モンスター１体!!?私はイーバをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク１!!?サクリファイスアニマ!!?」
「サクリファイスアニマだって!?!?」

〈サクリファイスアニマ〉ＬＩＮＫ１　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０　→

　睡蓮さんが呼び出したのは遊花も使っている怪しげな邪眼を持つモンスター。
　この状況でアイツはマズい。
「まずは墓地に送られたイーバの効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードが墓地へ送られた場合、このカード以外の自分のフィールド・墓地の天使族・光属性モンスターを２体まで除外し、除外した数だけ、デッキからイーバ以外のレベル２以下の天使族・光属性モンスターを同名カードは１枚まで手札に加える!!?私は墓地から宣告者の神巫とサイバープチエンジェルを除外してデッキからサイバーエッグエンジェルと２枚目の宣告者の神巫を手札に加えるわ!!?そしてサクリファイスアニマの効果発動!!?リンクアブソーブ!!?１ターンに１度このカードのリンク先の表側表示モンスター１体を対象にその表側表示モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする!!?対象は沈黙の剣士―サイレントソードマンよ!!?吸収なさい、サクリファイスアニマ!!?」
　アニマの目の上にある空間が開き、沈黙の剣士が吸い込まれる。

しばらくするとアニマの背中についている羽のような部分から大剣が浮き上がった。

サクリファイスアニマ
ＡＴＫ０→１０００

「これで私を縛るものは全部無くなったわ。とはいえ、それが効果を生むのは次のターンだけど。私はこれでターンエンドよ」
「なら、リバースカードオープン!!?罠発動、貪欲な瓶!!?同名カードは1ターンに1度しか発動できず、同名カード以外の自分の墓地のカード5枚を対象としてそのカード5枚をデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから1枚ドローする!!?俺は墓地に存在する妖刀竹光2枚、黄金色の竹光3枚をデッキに戻してシャッフルし、カードを1枚ドローする!!?」
「っ!!?へぇ、ドローカードを一気にデッキに戻してくる、か。お手並み拝見といこうかしら」

遊騎　ＬＰ２５００　手札１
ー－△－－　ー
－－－－－
☆　ー
－－－－－
－－△－－　ー
睡蓮　ＬＰ４６５０　手札２

「俺のターン!!?ドローフェイズ、永続魔法、武装鍛錬の効果発動!!?
自分ドローフェイズに通常のドローを行う代わりに自分のデッキ・墓地から装備魔法カード1枚を選んで手札に加える!!?俺はデッキから装備魔法、妖刀竹光を手札に加える!!?」
「また妖刀竹光が手札に加わっちゃったわね」
「俺は睡蓮さんのサクリファイスアニマに装備魔法、妖刀竹光を装備

‼?」
アニマの手元に妖刀竹光が現れる。
これで準備はできた。
「そして永続魔法、武装鍛錬の効果発動‼?俺は墓地の焔聖騎士―リナルドをデッキの下に戻してカードを1枚ドローする‼そして俺はバトルサバイバーを召喚‼??」

〈バトルサバイバー〉☆4　戦士族　地属性
ＡＴＫ１６００

フィールドに現れたのは串についた肉を頬張るボロボロのマントを羽織った冒険者のモンスター。
「バトル‼?バトルサバイバーでサクリファイスアニマに攻撃‼?エニシングゴーズ‼?」
サバイバーが肉を刺していた串をアニマの眼に投擲し、目潰しをすると、アニマの羽根から浮き上がった沈黙の剣士の大剣とアニマが手にしていた妖刀竹光を奪い取り、二刀を使ってアニマを切り刻んだ。

睡蓮　ＬＰ４６５０→４０５０

「くっ……流石にあの攻撃力じゃやられるわよね」
「ここからが本番ですよ。墓地に送られた妖刀竹光の効果、それにチェーンして墓地の閃刀姫―ロゼの効果発動‼?」
「っ‼?そのカードは最初に曙光の騎士で墓地に送っていた……」
「このカードが墓地に存在する状態で、ＥＸモンスターゾーンの相手モンスターが、戦闘で破壊された場合、または自分のカードの効果でフィールドから離れた場合、このカードを特殊召喚する‼?その後、相手フィールドの表側表示モンスター1体を選び、ターン終了時までその効果を無効にできる。来い、閃刀姫―ロゼ‼?」

〈閃刀姫―ロゼ〉☆4　戦士族　光属性

ＡＴＫ１５００

フィールドに黒い軍服に身を包み、真っ赤な刀を手にした銀髪赤目の少女が現れる

「そして墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?・デッキから黄金色の竹光を手札に加える!!?・バトルフェイズ中の特殊召喚のため、閃刀姫―ロゼには攻撃する権利が残っている!!?　閃刀姫―ロゼでダイレクトアタック!!?・ダーインスレイヴ!!?」

攻撃宣言をするとロゼは一瞬で睡蓮さんとの距離を詰め、手にした真紅の刀で睡蓮さんを斬り裂いた。

睡蓮　ＬＰ４０５０→２５５０

「くぅっ!!?・やってくれるわね!!?・」

「よし!!?・バトルフェイズ終了時、バトルサバイバーの効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、自分・相手のバトルフェイズ終了時にこのバトルフェイズ中、このモンスターが表側表示で存在する間に自分の墓地へ送られたカードの中から、同名カード以外のカード１枚を自分の墓地から選んで手札に加える!!?・俺はフィールドから墓地に送られた妖刀竹光を手札に加える!!?・」

「っ!!?・そこも見越して妖刀竹光を手札に加えてたのね……」

「メインフェイズ２!!?・俺は装備魔法、妖刀竹光をバトルサバイバーに装備!!?・そして魔法カード、黄金色の竹光を発動!!?・自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在するため、カードを２枚ドローする!!?・」

サバイバーがアニマから手に入れた妖刀竹光を掲げ、黄金色の竹光により俺はカードをドローする。

そして俺は正面に手をかざす。

「俺はフィールドにいるレベル４モンスター、バトルサバイバーと閃刀姫―ロゼでオーバーレイ!!?・２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?・エクシーズ召喚!!?・』

サバイバーとロゼが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこに現れたのは翠玉の身体を持つ岩石の戦士。
「勝機を照らす翠玉の戦士!!?現れろ!!?ダイガスタエメラル!!?」
〈ダイガスタエメラル〉★４　岩石族　風属性
ＤＥＦ８００
「ランク４のエクシーズモンスター……」
「再び墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?デッキから２枚目の黄金色の竹光を手札に加える!!?そしてダイガスタエメラルの効果発動!!?レエディアンスリバイバル!!?１ターンに１度、オーバーレイユニットを１つ取り除き、２つの効果から１つを選択して発動できる。１つ目は自分の墓地のモンスター３体をデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから１枚ドローする効果。もう１つは効果モンスター以外の自分の墓地のモンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する効果だ。俺は１つ目の効果を使い墓地の聖騎士の追想　イゾルデをＥＸデッキに、キングスナイト、ジャックスナイトをデッキに戻してシャッフルし、カードを１枚ドローする!!?」
「これで手札は５枚……まさかここまでやるとは思わなかったわ」
「俺はカードを１枚伏せてターンエンド!!?」

遊騎　ＬＰ２５００　手札４
ー▲△ーー　ー
ーーーーー
ー　□
ーーーーー
ーーーーー　ー
睡蓮　ＬＰ２５５０　手札２

「まさかここまで持ち直されるとはね。想像以上、と言ったところかしら」
「……そういってますけど、睡蓮さんからはまだまだ余裕を感じられますよ？」
　困ったように頬に手を当てる睡蓮さんだが、表情は追い詰められているとは到底思えない程余裕のある笑顔だ。
「あら、手札がたった2枚しかない相手に随分怯えているじゃない」
「例え手札が無くても、たった1枚のドローで全てを覆す可能性がある。それがデュエルじゃないですか？」
「……ふふっ、そうね」
　俺の言葉に睡蓮さんは一瞬きょとんとした表情を浮かべた後、くすくすと笑い出す。
「アナタのこと、何となく分かってきたわ。アナタは不器用なぐらい、ただひたすらに真っ直ぐな人なのね。桜と遊花ちゃんが懐くはずだわ」
「……どうも」
　その言葉は俺を褒める言葉であり、同時に攻める言葉でもあった。
　睡蓮さんはこう言っているのだ。
　アナタは確かに誠実かも知れない。
　だけど、誠実なだけでは遊花達は守れない、と。
「だからといって、アナタの行動が私の目に余るのは変わらないわ。その居場所を守りたいのであれば、死ぬ気で証明して見せなさい‼？私のターン、ドロー‼？……ふふっ」
「っ‼？」
　勢いよくカードを引いた睡蓮さんの雰囲気が変わる。
　どうやら、ここからが正念場みたいだな。
「アナタに見せてあげるわ、過去に『破滅の天使』と呼ばれていた私の全力をね‼？まずは魔法カード、儀式の準備‼？デッキからレベル7以下の儀式モンスター1体を手札に加え、その後、自分の墓地の儀式魔法カード1枚を選んで手札に加える事ができる‼？私はデッキか

ら儀式モンスター、魔神儀（デビリチャル）—カリスライムを手札に加え、墓地の機械天使の絶対儀式を手札に加えるわ‼？」
「魔神儀—カリスライム……？」
「手札の魔神儀—カリスライムを見せて魔神儀—カリスライムの効果発動‼？この効果は魔神儀—カリスライムを相手に見せて発動でき、手札を1枚選んで捨て、デッキから魔神儀モンスター1体を特殊召喚する‼？ただし、発動後、このターン中に自分が儀式モンスターの特殊召喚に成功しなかった場合、エンドフェイズに自分は２５００のライフポイントを失うわ。私は手札の宣告者の神巫を捨てて、デッキから魔神儀—キャンドールを特殊召喚‼？」

〈魔神儀—キャンドール〉☆４　炎族　光属性
ＤＥＦ０

「魔神儀—キャンドールの効果発動‼？このカードがデッキからの特殊召喚に成功した場合、デッキから儀式魔法カード1枚を手札に加える‼？私はデッキから儀式魔法、魔神儀（デビリチャル）の祝誕を手札に加えるわ‼？」
「魔神儀の儀式魔法……」
「さらに私はサイバーエッグエンジェルを召喚‼？」

〈サイバーエッグエンジェル〉☆２　天使族　光属性
ＡＴＫ２００

フィールドに現れたのは機械で出来た卵に羽根が生えた天使のモンスター。
「サイバーエッグエンジェルの効果発動‼？同名カードは1ターンに1度、このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合デッキから機械天使魔法カードまたは祝福の教会—リチューアルチャーチ1枚を手札に加える‼？
私はデッキから祝福の教会—リチューアルチャーチを手札に加え

るわ‼？そしてフィールド魔法、祝福の教会―リチューアルチャーチを発動‼？」

睡蓮さんがフィールド魔法ゾーンにカードを置くと、辺りの景色が教会の礼拝堂に変わる。

「手札から儀式魔法、魔神儀の祝誕を捨てて、祝福の教会―リチューアルチャーチの効果発動‼？同名カードは1ターンに1度、自分メインフェイズに手札から魔法カード1枚を捨ててデッキから光属性の儀式モンスター1体または儀式魔法カード1枚を手札に加える‼？私はデッキから儀式魔法、機械天使の儀式を手札に加えるわ‼？さらに魔神儀―キャンドールを墓地に送り、墓地の魔神儀の祝誕の効果発動‼？このカードが墓地に存在する場合、手札及び自分フィールドの表側表示のカードの中から、同名カード以外の魔神儀カード1枚を墓地へ送ってデッキから魔神儀モンスター1体を特殊召喚し、その後、墓地のこのカードを手札に加える‼？来なさい、魔神儀（デビリチャル）―タリスマンドラ‼？」

〈魔神儀―タリスマンドラ〉☆6　植物族　闇属性
ＤＥＦ０

ペンシルベルの代わりにフィールドに現れたのは首にタリスマンをかけたマンドラゴラのモンスター。

「魔神儀―タリスマンドラの効果発動‼？このカードがデッキからの特殊召喚に成功した場合にデッキから儀式モンスター1体を手札に加える‼？私はデッキからサイバーエンジェル―韋駄天―を手札に加えるわ‼？さらに祝福の教会―リチューアルチャーチのもう1つの効果発動‼？同名カードは1ターンに1度、自分の墓地の魔法カードを任意の数だけデッキに戻し、デッキに戻した数と同じレベルを持つ、自分の墓地の天使族・光属性モンスター1体を特殊召喚する‼？私は墓地の儀式の下準備と儀式の準備をデッキに戻して墓地から宣告者の神巫を特殊召喚‼？」

〈宣告者の神巫〉☆２　天使族　光属性
ＤＥＦ３００
「っ、そいつは……」
「宣告者の神巫の効果発動!!?私は再びＥＸデッキからレベル４の虹光の宣告者を墓地に送り、宣告者の神巫のレベルを４つ上昇させるわ!!?」

宣告者の神巫
☆２→６

「さらに墓地に送られた虹光の宣告者の効果発動!!?私はデッキから儀式モンスター、サイバーエンジェル―弁天―を手札に加える!!?そして儀式魔法、魔神儀の祝誕を発動!!?レベルの合計が儀式召喚するモンスターのレベル以上になるように、自分の手札・フィールドの魔神儀モンスターをリリースし、手札から儀式モンスター１体を儀式召喚する!!?私はフィールドの魔神儀―タリスマンドラをリリース!!?」
フィールドに現れた聖杯の中にタリスマンドラが吸い込まれていく。
タリスマンドラの力が込められた聖杯が光り輝くと、聖杯から現れたのは背中にブースターが付いた神速の天使。
「神速の天使よ!!?神風を巻き起こし、悪しき者に裁きを与えよ!!?儀式召喚!!?降臨せよ、サイバーエンジェル―韋駄天―!!?」

〈サイバーエンジェル―韋駄天―〉☆６　天使族　光属性
ＡＴＫ１６００
「サイバーエンジェル―韋駄天―の効果発動!!?このカードが儀式召喚に成功した場合、自分のデッキ・墓地から儀式魔法カード１枚を選んで手札に加える!!?私はデッキから儀式魔法、エンドレスオブワー

ルドを手札に加えるわ!!?」
「エンドレスオブワールド……あのカードは……」
「そして儀式魔法、機械天使の儀式!!?レベルの合計が儀式召喚するモンスターのレベル以上になるように、自分の手札・フィールドのモンスターをリリースし、手札からサイバーエンジェル儀式モンスター1体を儀式召喚する!!?私はフィールドのレベル6となった宣告者の神巫をリリース!!?」
フィールドに現れた再び炎が灯った祭壇が現れ、その炎の中に宣告者の神巫が身を投げる。
炎が一際強く燃え上がると、炎を吹き飛ばしながら現れたのは聖杯から現れたのは鉄扇を手にした七福神。
「富を司る天使よ!!?幸運を呼び込み更なる高みへと至れ!!?儀式召喚!!?降臨せよ、サイバーエンジェル—弁天—!!?」

〈サイバーエンジェル—弁天—〉☆6　天使族　光属性
ＡＴＫ１８００

「っ、どんどん儀式モンスターが出てくるな……」
「リリースされた宣告者の神巫の効果発動!!?私は再びデッキからサイバープチエンジェルを特殊召喚するわ!!?」

〈サイバープチエンジェル〉☆２　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

「さらにサイバープチエンジェルの効果発動!!?私はデッキから再びサイバーエンジェル—美朱濡—を手札に加えるわ!!?」
「これでまたサイバーエンジェル—美朱濡—を呼び出す準備ができたってわけか……」
「さらに再生せよ!!?廃墟に芽吹くサーキット!!?」
「っ、またリンク召喚か……」
睡蓮さんの前に再び大きなサーキットが現れる。

「召喚条件はカード名が異なるモンスター２体‼？私はサイバーエッグエンジェルとサイバープチエンジェルをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？リンク２‼？クロシープ‼？」

〈クロシープ〉ＬＩＮＫ　２　獣族　地属性
ＡＴＫ７００　↙？　↘？

サイバーエッグエンジェルとサイバープチエンジェルがサーキットに吸い込まれ、代わりに現れたのは編み物をしている羊のモンスター。

「これで準備は出来たわ。さあもう１度あの子を降臨させるわよ。儀式魔法、機械天使の絶対儀式を発動‼？私は墓地のレベル１０モンスター、破滅の美神ルインをデッキに戻して儀式召喚を行う‼？」

睡蓮さんの前に再び炎が灯った祭壇が現れ、その炎の中に破滅の美神ルインが身を投げる。

炎が一際強く燃え上がると、炎を吹き飛ばしながら再び姿を現したのは金の歯車を背負う機械の天使。

「再臨せし勝利をもたらす天使よ‼？その力で悪しきもを浄化せよ‼？儀式召喚‼？降臨せよ、サイバーエンジェル―美朱濡―‼？」

〈サイバーエンジェル―美朱濡―〉☆１０　天使族　光属性
ＡＴＫ３０００

「サイバーエンジェル―美朱濡―の効果、それにチェーンしてクロシープの効果発動‼？同名カードは１ターンに１度、このカードのリンク先にモンスターが特殊召喚された場合にこのカードのリンク先のモンスターの種類によって効果を適用する‼？儀式モンスターがいる場合自分はデッキから２枚ドローし、その後手札を２枚選んで捨てる‼？」

「手札交換……なら、こっちも手札を増やさせて貰う‼？チェーン

してリバースカードオープン!!?永続罠、闇の増産工場!!?自分の手札・フィールドのモンスター1体を墓地へ送って自分はデッキから1枚ドローする!!?俺はフィールドのダイガスタエメラルを墓地へ送って1枚ドローする!!?」
「ダメージを与えなければサイバーエンジェル―美朱濡―は2回攻撃はできない。上手く躱したわね。でも、それぐらいじゃアナタが至る終焉からは逃れられないわ!!?クロシープの効果発動!!?自分はデッキから2枚ドローし、その後手札を2枚選んで捨てる!!さらに魔法カード、貪欲な壺!!?墓地のイーバ、サイバーエッグエンジェル、サイバープチエンジェル、オネスト、魔神儀―カリスライムをデッキに戻してカードを2枚ドローする!!?さらに墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動!!」
「っ、クロシープの時に墓地に送ってたのか……!!?」
「自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローする。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外する!!?私はフィールドのクロシープをEXデッキに戻し、カードを1枚ドローする!!?さあ、下ごしらえはこれで終わり。ようやくメインディッシュよ!!?儀式魔法、エンドレスオブザワールド!!?」
「っ、遂にくるか!!?」
「レベルの合計が儀式召喚するモンスターのレベル以上になるように、自分フィールドのモンスターをリリースし、手札から破滅の女神ルインまたは終焉の王デミスを儀式召喚する!!?そして、終焉の覇王デミスの永続効果により、終焉の覇王デミスは手札・フィールドに存在する限り終焉の王デミスとして扱う!!?私はフィールドのレベル6モンスター、サイバーエンジェル―韋駄天―とサイバーエンジェル―弁天―をリリースして儀式召喚を行う!!?」
空に巨大な魔法陣が描かれ、地表が青白い炎に包まれていく。
終末に近づく世界の中、韋駄天と弁天が巨大な魔法陣に吸い込まれていく。
魔法陣から闇が降り注ぐと、闇より現れたのは漆黒の鎧に身を包

み、巨大なラブリュスを手にした覇王。
世界を崩壊させる終焉の覇王。
「終焉に導く覇王よ‼?定められし滅びをもたらし、彷徨える魂を安寧へと導け‼?儀式召喚‼?降誕せよ、終焉の覇王デミス‼?」
〈終焉の覇王デミス〉☆１０　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３０００
「遂に来たか、終焉の覇王デミス‼?」
「さあ、終焉の始まりよ‼?リリースされたサイバーエンジェル―韋駄天―、さらにチェーンしてリリースされたサイバーエンジェル―弁天―の効果発動‼?私はデッキから再び破滅の美神ルインを手札に加えるわ‼?そしてサイバーエンジェル―韋駄天―の効果発動‼?
このカードがリリースされた場合、自分フィールドの全ての儀式モンスターの攻撃力・守備力は１０００ポイントアップする‼?」
「っ、全体強化か‼?」
韋駄天の力の残滓が終焉の覇王デミスと美朱濡に流れ込み、その力を強化していく。
終焉の覇王デミス
ＡＴＫ３０００→４０００　ＤＥＦ３０００→４０００
サイバーエンジェル―美朱濡―
ＡＴＫ３０００→４０００　ＤＥＦ２０００→３０００
「攻撃力４０００の儀式モンスターが２体……」
「まだよ‼?終焉がもたらす破滅はこの程度じゃないわ‼?速攻魔法、リバースオブザワールド‼?」
「リバースオブザワールド……?」
「レベルの合計が儀式召喚するモンスターのレベル以上になるように、手札の儀式モンスターをリリースし、手札・デッキから破滅の女

神ルインまたは終焉の王デミスを儀式召喚する!!?」
「っ!!?儀式召喚ができる速攻魔法!!?」
「私は手札のレベル１０モンスター、魔神儀（デビリチャル）の創造主―クリオルターをリリースして儀式召喚を行う!!?」
地面に巨大な魔法陣が描かれ、天に向かって青白い炎の柱が立ちのぼる。
終末に近づく世界の中、祭壇の姿をした悪魔が巨大な魔法陣に吸い込まれていく。
クリオルターを吸収し、魔法陣が光り輝くと、地の底から再び姿を現したのは真紅のラブリュスを手にした銀髪の女神。
世界の崩壊を告げ、終焉をもたらすために再臨した破滅の女神。
「破滅を告げる女神よ!!?今ここに再臨し、定められし滅びの未来に向け、迷える小羊を導け!!?儀式召喚!!?降誕せよ、破滅の美神ルイン!!?」

〈破滅の美神ルイン〉☆１０　天使族　光属性
ＡＴＫ２９００

「『サイバーエンジェル―美朱濡―』、『終焉の覇王デミス』、そして『破滅の美神ルイン』……『破滅の天使』の切り札が揃い踏みか」
まさか一気にレベル１０の儀式モンスターを３体も呼び出されるとは思わなかった。
これが、『破滅の天使』と呼ばれた睡蓮さんの実力。
俺が子供の頃に活躍していたプロ決闘者の本気……!!?
「さあ、アナタの全てを終焉へと導いてあげるわ!!?終焉の覇王デミスは終焉をもたらす覇王。その身には破滅の美神ルインと同じく確実な破滅をもたらす３つの力を秘めている!!?１つ目の永続効果、リチュアルデミスは儀式召喚したこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分フィールドの儀式モンスターは戦闘では破壊されなくする」
「っ、破滅の美神ルインの効果と合わさって儀式モンスターは戦闘で

も効果でも破壊されなくなってるのか……」
「さらに２つ目の永続効果、ステップダウンデミスにより儀式モンスターのみを使用して儀式召喚したこのカードの効果を発動するために払うライフポイントは必要なくなる。そして３つ目の効果は、今から体感させてあげるわ!!?・終焉の覇王デミスの効果発動!!?・ディストピアデミス!!?・１ターンに１度、２０００ライフポイントを払ってフィールドの他のカードを全て破壊し、破壊した相手フィールドのカードの数×２００ポイントのダメージを相手に与える!!?・」
「っ!!?・実質ノーコストでの全体破壊効果!!?……なら、使わせて貰うぜ、遊花!!?・２０００ライフポイントを払って終焉の覇王デミスの効果にチェーンして手札からクリフォトンの効果発動!!」
「!!?・へぇ……」

遊騎　ＬＰ２５００→５００

「このカードを手札から墓地へ送り、２０００ライフポイントを払って、このターン、自分が受ける全てのダメージは０になる!!?・」
終焉の覇王デミスが巨大なラブリュスを掲げると、空に巨大な魔法陣が現れ、魔法陣から全てを消滅させる万雷が降り注ぐ。
降り注がれた万雷は俺のフィールドの全てのカードを消しとばし、俺をも焼き尽くさんと迫るが、雷が俺の身体を貫く前に俺の前に現れた電球のような姿をしたモンスターが、俺の身体を包みこむように光の粒子を放ち、降り注ぐ雷を無効化した。
「手札誘発の防御カードが入ってたなんてね……だからこその余裕だったってわけか……私はこのままターンエンドよ」

遊騎　ＬＰ５００　手札４

ー　ー　ー　

ーーーーー　ー
睡蓮　ＬＰ２５５０　手札０

遊花がくれたクリフォトンのおかげで生き残ることはできたが、３体の強力な儀式モンスターが健在なことには変わりがない。
おまけに終焉の覇王デミスと破滅の美神ルインにより睡蓮さんの儀式モンスターは全て戦闘・効果破壊耐性を得ている。
遊花に作って貰ったとはいえ、俺の新デッキも出来ることは以前のデッキとそこまで変わっていない。
つまり、基本的には戦闘でしか相手モンスターに対応できないのだ。
そしてこのターンで睡蓮さんを倒し切ることが出来なければ次のターンには終焉の覇王デミスの効果により俺の敗北が決まるだろう。
だけど、だからこそーーー
「……こんな状況でもまだ笑えるのね」
「こんな状況、だからですよ。逆境だからこそ、笑うんです」
こちらを睥睨する睡蓮さんと3体の儀式モンスターに、俺は満面の笑みで応えた。
「確かに状況は俺の方が不利です。でも、だからこそデュエルは楽しいんだって俺は思います」
「楽しい？」
「立ちはだかる強大なモンスター。一寸先に待っている敗北の未来。それをたった1枚のドローで覆せるかも知れない。そんなワクワクした気持ちを、楽しめなきゃ嘘ってもんですよ」
「……成る程、ね。それがアナタの根源ってわけ」
俺は祈るように胸の前で両手を握っている遊花をチラッと見て、デッキの上のカードを掴む。
今の手札じゃ、まだ睡蓮さんを倒し切るには足りない。
だけど、俺は信じている。
遊花が作ってくれたこのデッキは……必ず
俺のことを助けてくれると‼？

「俺のターン、ドロー!!?」
勢いよくカードをドローし、そのカードを見る。
「……睡蓮さん。このデュエル、俺の勝ちだ」
「っ!?」
笑顔で勝利宣言をする俺に睡蓮さんは目を見開く。
見せてやる、俺の仲間達の力を!!?
「俺はクィーンズナイトを召喚!!?」

〈クィーンズナイト〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１５００

俺が呼び出したのは絵札の三銃士の起点たる女騎士。
「そして俺は装備魔法、災いの装備品を破滅の美神ルインに装備する!!?」
「っ、災いの……装備品?」
「災いの装備品の効果により装備モンスターの攻撃力は、自分フィールド上に存在するモンスターの数×６００ポイントダウンする!!?」
フィールドに化け物の顔の意匠が施された紫色の装備が現れ、災いの装備品はその呪いにより破滅の美神ルインに取り憑き、その力を奪っていく。

破滅の美神ルイン
ＡＴＫ２９００→２３００

「攻撃力を下げる装備カード……だけど、それでもクィーンズナイトの攻撃力じゃ破滅の美神ルインの攻撃力には届かない!!?」
「確かにクィーンズナイトじゃ破滅の美神ルインの攻撃力には届かない。だけど、俺もコイツも、強大な敵を前に1人で何とか出来るだなんて思っていない!!?バトル!!?クィーンズナイトで破滅の美神ルインを攻撃!!?」
「っ!!?迎え撃ちなさい、破滅の美神ルイン!!?ファーストルイン!!

？」
破滅の美神ルインが向かってくるクィーンズナイトに向かって勢いよくラブリュスを振り下ろす。
このままいけばクィーンズナイトが破壊されて俺の負け……だが、勿論このままでは終わらない!!?
「1人では成し遂げれなくても仲間を信じ、連携することで不可能を打ち倒す。それが絵札の三銃士だ!!?速攻魔法発動!!?ライバルアライバル!!?」
「!!?その速攻魔法は!!?」
「このカードは自分・相手のバトルフェイズに発動でき、モンスター1体を召喚する!!?来い、キングスナイト!!?」

〈キングスナイト〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

現れたキングスナイトが剣を振るい、クィーンズナイトに向かって振り下ろされたラブリュスを逸らす。
「そしてキングスナイトの効果発動!!?クィーンズナイトが存在するため、再び集え、絵札の三銃士!!?来い、ジャックスナイト!!?」

〈ジャックスナイト〉☆5　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

更にジャックスナイトが盾を構えて破滅の美神ルインに向かって突撃し、その身体を突き飛ばす。
「っ、結束　遊騎の代名詞……絵札の三銃士!!?」
「俺のフィールドにモンスターが増えたことにより、災いの装備品の効果で破滅の美神ルインは更に弱体化する!!?」

破滅の美神ルイン
ＡＴＫ２９００→１１００

「破滅の美神ルインの攻撃力がクィーンズナイトよりも低く……!?」
「斬り裂け、クィーンズナイト!!?クィーンズスラッシュ!!?」
突き飛ばされ、体勢を崩した破滅の美神ルインをクィーンズナイトは容赦なく斬りつけた。

睡蓮　ＬＰ２５５０→２１５０

「くっ!!?」
「終焉の覇王デミスの効果により破滅の美神ルインは戦闘破壊されない!!?追撃だ、キングスナイトで破滅の美神ルインを攻撃!!?キングスラッシュ!!?」

睡蓮　ＬＰ２１５０→１６５０

クィーンズナイトに斬られ、苦悶の表情を浮かべる破滅の美神ルインに、追撃をかけるようにキングスナイトがクィーンズナイトが斬りつけた場所を更に斬り付ける。
「くぅっ!!?戦闘破壊耐性が仇に……!!?」
「まだだ!!?ジャックスナイトで破滅の美神ルインを攻撃!!?ジャックススラッシュ!!?」
キングスナイトの攻撃に気を取られた破滅の美神ルインを見て、ジャックスナイトは２人の騎士と同じ場所を更に斬りつけた。

睡蓮　ＬＰ１６５０→８５０

「うっ!!?結構ダメージを受けたわね……でも、凌ぎ切ったわよ。次のターンに絵札の三銃士ごとアナタをーーー」
そう……これで本当に最後だ!!?
「いいや、あなたに次のターンはない!!?これが勝利への最後のピー

ス‼?速攻魔法発動‼?瞬間融合‼?」
「っ⁉?ここにきて融合魔法⁉?」
「自分フィールドに存在から融合モンスターによって決められた融合素材を墓地に送り、ＥＸデッキから融合モンスターを特殊召喚する‼?俺はクィーンズナイト、キングスナイト、ジャックスナイトの３体で融合‼?」
フィールドに現れた渦に３体の騎士達が飛び込んでいく。
そして渦が爆けるとその中から現れるのは黒い鎧を身に纏った漆黒の騎士。
「融合召喚‼?運命に打ち勝つ勇敢なる騎士達の主‼?アルカナナイトジョーカー‼?」

〈アルカナナイトジョーカー〉☆９　戦士族　光属性
ＡＴＫ３８００

「絵札の三銃士の融合体、アルカナナイトジョーカー……結束　遊騎の切り札、か」
「フィールドのモンスターが減ったため、災いの装備品の効果も変動する」

破滅の美神ルイン
ＡＴＫ２９００→２３００

「これで決める‼?アルカナナイトジョーカーで破滅の美神ルインを攻撃‼?」
「っ、最後の意地よ‼?迎え撃ちなさい、破滅の美神ルイン‼?ファーストルイン‼?」
アルカナナイトジョーカーが大剣を構えると、大剣に金色の光が集まっていき、破滅の美神ルインに向かって勢いよく突撃する。
それに対し、破滅の美神ルインは手放していたラブリュスを拾い、突撃してくるアルカナナイトジョーカーに向かって横薙ぎにラブ

リュスを振るう。
「これで終わりだ!!?・行け、アルカナナイトジョーカー!!?・ロイヤルストレートフラッシュ!!?」
振るわれたラブリュスに向けてアルカナナイトジョーカーは勢いよく大剣を振るう。
交差する大剣とラブリュス。
怒号のような破砕音。
その後に残されたのは、根元から断ち切られたラブリュスと共にフィールドに沈む破滅の美神ルインの姿だった。

睡蓮　ＬＰ８５０→０

ーーーーーーー

「……俺の勝ちです」
「……そうね、見事なデュエルだったわ」
デュエルが終わり、立体映像が消えていく中で、俺は真っ直ぐに睡蓮さんの目を見る。
俺の目を見た睡蓮さんは、深いーーーとても深いため息を吐いた。
「はぁ～……ええ、ええ、癪だけど認めるしかないわ。強敵を前に正面からぶつかり、不可能を打倒する……本当に、デュエルだけで自分の人間性を証明するなんてね」
「お母さん!!?・ということは……!!?」
「結束　遊騎さん。アナタは娘達に不埒な真似を働くような人間ではないことを認めるわ。桜や遊花ちゃんの言ってたことは、確かに間違いじゃなかった」
「っ!!?・師匠……!!?」
「うおっ!!?」
感極まったかのように、勢いよく抱きついてくる遊花を受け止めきれず、押し倒されるように中庭の芝生の上に倒れ込む。
「師匠!!?・師匠!!?・やっぱり、師匠は凄いです!!?・これでこれからも

一緒です!!?」
「ゆ、遊花、あのな……」
俺の胸元に頭を擦り付けてはしゃぐ遊花に、俺は困った表情を浮かべる。
そんな俺を見て、睡蓮さんはクスクスと笑いながらも嗜めるように口を開く。
「ふふっ、成る程ね。むしろアナタの方が不埒な真似をされる方かしら?遊花ちゃん、アナタの師匠が認められて嬉しいのは分かるけど、淑女としてもう少し慎みを持った方がいいわよ?あまり無防備だとアナタの師匠が狼さんになっちゃうかも知れないわ」
「ひゃうっ!!?!?は、はわわ、ごめんなさい!!?師匠!!?」
「あ、ああ」
睡蓮さんの言葉に自分が大胆な行動を取っていることに気付いた遊花は、顔を真っ赤にして慌てた様子で俺の上から飛び退く。
倒れていた身体を起こし、遊花の方に視線を向けると、遊花はビクッと身体を震わせ、その顔を更に真っ赤に染めた。
「あぅあぅ……ぅ〜〜〜!!?」
「あらあら、この前まで小さな子供だと思っていたのに、遊花ちゃんも一人前の女の子になっていたのね」
「す、睡蓮さん!!?」
恥ずかしそうに睡蓮さんをポカポカと叩く遊花を見て、睡蓮さんは楽しげに笑う。
どう反応するべきか困り、思わず遊花から視線を逸らすと、こちらをジッと見ていた桜と視線が合う。
何となく気まずい雰囲気の中、桜は1つため息を吐くと呆れたような表情で口を開いた。
「……はぁ〜とりあえず、お疲れ様」
「……ああ、ありがとな、桜。睡蓮さんに認められたのも、お前と遊花が抗議してくれた結果だ」
「前例があったもの。遊騎ならお母さんにも認められるって思ってたわ」

「前例？」
桜の言葉に首を傾げると、桜は不服そうに頬を膨らました。
「……ふーん、そう。遊騎にとっては忘れる程度のことってわけ」
「は？……ああ、もしかして桜と初めて会った時のことを言ってるのか？」
不機嫌そうな桜を見て、俺は納得したようにそう呟く。
確かに状況としては桜に認められた時と全く同じか。
だからこそ、俺なら睡蓮さんにも認められると信じていたのだろう。
それなのに俺がすぐに分からなかったから拗ねていると。
俺はそんな桜が微笑ましく感じ、その頭を軽く撫でた。
「ばーか。大事な友人との最初の出会いだぞ？忘れるわけないだろ？」
「っ、ふ、ふん‼？どうだか……いつか私のことだって忘れちゃうんじゃないの？」
「すぐに思い至らなかっただけだっての。例え何十年経とうが、桜との出会いを忘れられるかよ」
大事な親友のために、得体の知れない怪しい男に果敢に挑み、友の為に自分を変えることを決意した強く優しい少女。
遊花の出会いと同じく、その少女との出会いを俺は生涯忘れないということは自信を持って言えるのだ。
「そ、そう……なら、赦してあげるわ」
「ククッ、そっか。サンキューな」
「っ……ふん」
俺の言葉に照れ臭そうに桜な顔を逸らす。
本当に、素直じゃない奴だ。
素直じゃない桜の姿を見ながら、俺は思わず笑い声を漏らすのだった。

第８６話　失踪する炎影

☆

「それでは、私はこれで失礼します。結束さん、認めはしましたが、くれぐれも桜と遊花ちゃんに不埒な真似を致しませんように」
「はい。その信頼を損なわないよう、全力を尽くします」
　真剣な表情で俺を見つめる睡蓮さんに、俺は目を逸らさずに真剣に見つめ返す。
　そんな俺を見て、睡蓮さんは表情を緩めると邪悪な笑みを浮かべた。
　あ、なんか嫌な予感がする。
「……まあ、合意があるのであれば遊花ちゃんのためにある程度は黙認してあげますよ」
「ふぇっ⁉」
「ちょっ⁉？お母さん⁉？」
「ふふふ、それでは後は若い子達に任せるわ。桜、あまり遊花ちゃんと結束さんにご迷惑をかけないようにね」
　そんな言葉を残して睡蓮さんは逃げるように去って行った。
　後に残されたのは微妙な表情を浮かべた俺と顔を真っ赤にしてこちらをチラチラと見ている遊花、そして頭を痛そうに押さえる桜だ。
　……どうするんだよ、この空気。
　睡蓮さん、いくら『破滅の天使』と呼ばれていたからって空気まで破滅させなくてもいいんですよ？
　思わず頭を抱えて悩んでいると、俺の耳に聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「あ、こんなところにいました‼？闇さん、こっちです、こっち‼？中庭に遊騎さん達がいますよ‼？」
「でかした、美傘」
「ちょっ⁉？速っ⁉？速いですよ、闇さん⁉？」
「あれ？この声って……」

「闇と……美傘？」
「何だか珍しい組み合わせね」
　俺達が声が聞こえてきた方に視線を向けると、そこには走ってこちらに向かってくる闇と美傘の姿があった。
　走ってきた闇はそのままの勢いで俺に抱きついてくる。
「遊騎‼？無事で良かった……」
「え？あ、ああ。闇も無事そうでよかったよ。遊花から急に帰ってこれなくなったって聞いて心配したんだぞ？」
　俺の言葉に、闇は俺の身体に顔を埋めながら闇が申し訳なさそうな雰囲気を発する。
「ん、ごめん。色々あったから……」
「……まあ、闇が無事なら何でもいいけどな」
「闇先パイ、お帰りなさい。無事でよかったです」
「ん、遊花もごめん……帰ってこれなくて……」
「気にしないでください。こうして闇先パイが帰って来てくれただけで私は十分嬉しいですから」
「遊花……ん、ありがと」
　柔らかな笑顔を浮かべる遊花に闇も嬉しそうに表情を緩ませる。
　本当に、闇が無事に戻ってきてよかった。
「……遊騎に抱きついてることに関してはスルーなのね。いや、別にいいけど」
　呆れたような表情を浮かべながら、桜も安心したように胸を撫で下ろす。
　少しだけ場の空気が和らいだところで、送れてこちらに向かって走ってきていた美傘が俺達のいる場所に到達する。
　現れた美傘は肩で息をしながら、必死に呼吸を落ち着けていた。
「はぁ、はぁ、本当に、速いですって、闇さん……その身体の、どこにそんな力が……」
「勿論、愛の力」
「何故、そこで、愛？」
「だ、大丈夫ですか？美傘さん？」

「だ、大丈夫だよ、遊花ちゃん。遊騎さんが、見つからなかったから、病院中、駆け回ったけど、これぐらい、お夜食前だから、全然、へーき……」
「お夜食前ってわりと能力の限界っぽいですけど……」
「限界が、近くても、気合で、乗り切るのが、エンターテイナー、なんだよ、桜ちゃん……」
「……言ってること、全然分かりません」
「……根性論が必要なものだったかしら、エンターテイナーって？」
息を切らしている美傘に遊花と桜が律儀にツッコミを入れる。
全くもって遊花達の言う通りだと思う。
少なくとも俺の知ってるエンターテイナーじゃない。
「って、そんなこと言ってる場合じゃないんです‼？遊騎さん、大変なんです‼？一大事です‼？」
「一大事？」
突然深刻な表情を浮かべる美傘に困惑しながらも、俺達は首を傾げる。
困惑している俺達に、美傘達が告げたのはーーー
「昨日からプロ決闘者に行方不明者が出て、その行方不明者の中に御影君や竜河さんがいるんです‼？」
「さらに治虫を探しに行った炎まで音信不通になった……完全にお手上げ……まだ公にはなってないけど、他にも色々あって……プロリーグ、しばらく中止になりそう」
ーーーーー俺達の日常を侵食する、紛れもない凶報だった。

ーーーーーーー

美傘達から凶報を告げられた俺達は、桜の体調や話が外部に漏れないように考慮し、桜の病室に来ていた。
美傘達から告げられた凶報は、それだけ俺達にとっても深刻なものだった。
「それで、どうしてプロ決闘者に行方不明者が出ているなんてことに

気付いたんだ？」
「私、昨日のプロリーグで実況を行なってたんです。そうしたら昨日のプロリーグの試合で無断欠場が相次いだんです。しかも、1試合目には参加していたのにその後の試合前に連絡が取れなくなったプロ決闘者が多くなって、治虫君や竜河さんまでいなくなっちゃったからこれはただ事じゃないなって思って……」
深刻そうな表情で美傘がそう告げる。
当然の話だがプロ決闘者にとってプロリーグでのデュエルは死活問題だ。
生活するためのファイトマネーも含め、無断欠場などすればそれこそ評判にも直結する。
それにも関わらず相次ぐ無断欠場は明らかに異常だと言えるだろう。
「私がプロリーグの試合会場についた時には既に治虫が無断欠場になってた……あの堅物が無断欠場してるのは異常過ぎるから社長や炎に連絡して来てもらって美傘にも手伝って貰って手分けして試合会場を色々調べたの……あらかた調べ終わってお互いの情報を共有しようとしたら今度は炎とも連絡が取れなくなってた……」
「っ、炎さん……」
闇の言葉を聞き、桜が不安そうに表情を歪ませ拳を握る。
桜は不知火さんの弟子だ。
師弟として関わる機会が多かった不知火さんの行方が分からないというのが不安なのだろう。
勿論、俺も内心穏やかというわけではない。
だが、まだ俺達は大事なことを聞いていない。
「……不知火さんのことは1度置いておく。それで、結局プロ決闘者が失踪した原因は分かったのか？」
「遊騎達も想像はついてると思うよ……薄れてはいたけど確かに感じた……失踪したプロ決闘者がいた控え室に残留にした闇の気配」
「闇……ということはやっぱり原因は……」
「ん……十中八九……闇のカード……」

闇の言葉に俺達は苦虫を噛み潰した表情を浮かべた。
想像通りとはいえ、流石に今回の件は規模が大き過ぎる上に厄介度が桁違いだ。
今まで俺達がデュエルをしてきた相手はケルンに住んでいる一般人だった。
勿論、だからといって侮っていた訳では無いのだが、今後はその中にプロリーグでデュエルをしていたプロ決闘者が混ざってくる可能性があるというわけだ。
プロリーグに参加しているようなデュエルにおけるプロフェッショナルが闇のカードにより暴走していることを考えれば、その被害は今までのレベルでは済まなくなるだろう。
それだけプロ決闘者は一般の決闘者よりも強いのだ。
「遊騎さんや闇さんから話は聞いてたけど、ここまで厄介なものだなんて、流石に思ってなかったよ」
「……天神　幻騎の仕業なのか？」
「現在ケルンで起こっている闇のカードに纏わる事件の元凶はアイツ……デュエルアカデミア生の失踪事件のことを踏まえても無関係とは考えられない……」
「やっぱりーーー」
「だけど……実行犯ではないと思う……」
「ーーー何？」
「実行犯ではない、ですか？」
どこか確信しているかのように告げる闇の言葉に俺達は首を傾げる。
闇のカードがばら撒かれているなら、アイツが原因じゃないのか？
「天神　幻騎は昨日、遊花に負けて結構な傷を負ってた……傷を直して動いたにしては流石に早過ぎる……それに、不自然なところがある」
「不自然なところ？」
「遊騎なら知ってると思うけど、プロ決闘者の控え室の前には基本的に警備員がいる……だけど、

どの警備員も不審な人物を見ていない……それどころか
控え室から失踪したプロ決闘者の姿すら見ていないの」
「はぁ⁉？」
俺は思わず驚きの声を上げ、遊花達も目を見開く。
控え室の前にいた警備員に気付かせることなくプロ決闘者を失踪させた？
冗談にしては達が悪過ぎる。
最悪なのは闇が嘘を言っているわけじゃないってところだ。
「プロ決闘者が失踪したと思われる時間帯……確かに警備員は控え室の前にいた。だけど、控え室の中にいたプロ決闘者がいなくなるところを見ていない……それどころか警備員は失踪する程の出来事があったハズなのに失踪した人の声や物音すら聞いていない……明らかに異常」
「控え室の前にいる警備員に気付かれずに控え室に入ったってことですか？そんなことって……」
「勿論、出来るわけがない……でも、それに近いことができる存在を、私は実際に見たことがある……」
「近いことができる存在を見たことがあるって……そんな無茶苦茶な奴がいるって言うの？」
「いる……というより、桜も私と一緒に会ったことがある」
「はぁ⁉？私も会ったことがあるって、そんな奴私は知らないわよ⁉？」
闇の言葉に桜が困惑した表情を浮かべる。
そんな桜を見て闇は確信を持ったかのように頷く。
「それが答え……桜はそいつに会ったことがある……だけど、桜の記憶にはそいつの痕跡が残っていない……多分、そいつは他人の記憶や認識に干渉できる……何で私がそいつを覚えているのかは分からないけど」
「他人の記憶に干渉する……」
……なんだ？
どこかで俺はそんな存在に会ったことがあるような気がする。

必死に記憶を呼び戻そうとしていると、闇がそいつの正体を告げた。
「そいつは天神　幻騎から正体不明の抹消者って呼ばれてた……多分、そいつが今回の失踪事件の犯人」
「っ、正体不明の抹消者⁉？そいつは確か……」
「⁉？遊騎、知ってるの？」
「……ああ。俺にＣＮｏ．とＲＵＭを渡した人物……そして多分、俺がデュエルで負け、持っていたＮｏ．を奪っていった奴だ」
「えっ⁉？遊騎さんが負けたの⁉？」
「ああ。そいつの姿やデュエル内容については思い出せないがな。どうやら闇が言うように、記憶に干渉されてるらしい」
闇の言っていた推測を実感してしまい、俺は思わず苦笑いを浮かべる。
記憶を消してくる相手なんて、対処の使用がない。
下手をすれば、闇のカードを生み出している天神　幻騎以上に厄介な相手だ。
だがそこで、予想外のところから声が上がった。
「正体不明の抹消者……？それに師匠に勝ったって、確かレイナちゃんが言ってた……」
「っ⁉？遊花、知ってるのか⁉？」
「ふぇ⁉？え、えっと、多分ですけど……闇先パイ、その人って銀髪をツインテールにしたデュエルアカデミアの初等部ぐらいの女の子じゃなかったですか？」
「っ、あってる……そいつが正体不明の抹消者……遊花は一体どこで正体不明の抹消者と……」
「え、えっと……実はーーー」
戸惑った表情を浮かべながら遊花が話し始めた内容は深刻な状況にも関わらず無茶苦茶過ぎて思わず呆れてしまいそうな内容だった。
俺がマリシャスシードに蝕まれている時に急に現れたこと。
楽しいデュエルを求めてケルンに闇のカードをばら撒いているということ。

そしてーーー
「レイナちゃんは言ってました。絶望神アンチホープ。ダークネスネオスフィア。究極時械神セフィロン。この3枚のカードはどれか1枚だけでも世界を滅ぼせる代物なんだって。そんな闇のカードに適合している私は、いずれ世界を滅ぼす運命にある。だから私に興味があるって」
「遊花ちゃんが世界を滅ぼすって……冗談だよね？」
「……分かりません。でも、強ち否定もできないと思います。私はそれだけ強力な闇のカードを扱えます。それに、かなり特殊な力を持ってることも、知ってしまいました。だから、いずれ、私は……」
そういって、遊花は悲し気に目を伏せる。
そんな遊花に俺達はーーー
「ばーか」
「ん、遊花は馬鹿」
「ええ、馬鹿ね」
「あぅ⁉？へぅ⁉？ひゃぅ⁉？し、師匠？闇先パイ？桜ちゃん？」
ーーー馬鹿なことを口にする遊花に、俺は頭を軽くチョップし、闇は頬をひっぱり、桜はデコピンをした。
全く、何を言い出すかと思えばこの馬鹿弟子は……
「簡単に敵の言葉に乗せられてんじゃねーよ。遊花が世界を滅ぼす？ある訳ないだろ、そんなこと」
「ん……優しい遊花にそんなこと無理。むしろ、遊花が世界を滅ぼしたくなるぐらい酷い世界なら私が滅ぼす」
「いじめられても言い返すことすらしない遊花に世界を滅ぼすなんて大層なことができる訳ないでしょ？馬鹿も休み休みにしなさいよね」
俺達の言葉に、遊花がきょとんとした表情を浮かべたかと思うと、徐々に目尻に涙が浮かんでくる。
「もし、遊花が世界を滅ぼすような存在になった時は俺が止めてやるよ。だから、いらん心配はするな」
「遊騎、間違ってる……俺、じゃなくて、俺達、だよ」
「そうよ。私達だっているんだからね」

「師匠……闇先パイ……桜ちゃん……ありがとう、ございます」
遊花が目を擦りながら嬉しそうに笑う。
全く、本当に世話がかかる弟子だ。
「えっと、とりあえず遊花ちゃんの件はいいとして、何で遊花ちゃんと闇さんはそのレイナちゃんって子のことを覚えてるの？闇さんの話だと、記憶から消えちゃうんだよね？」
「えっと、それは私には何とも……」
「ん、理由は不明……」
美傘の言葉に遊花達は困ったような表情を浮かべる。
確かに、俺と桜の記憶からは消えた正体不明（アンノウンイレイザー）の抹消者が何故、遊花達の記憶に残っているのかは分からないが……
「まぁ、分からないものは分からないでいいだろう。根拠なんて見つけようがないんだし。大事なのは遊花と闇なら正体不明（アンノウンイレイザー）の抹消者が分かるってところだな」
「そうね。闇の話が本当なら私達は見つけても気付けないし、覚えていられない。なら、歯痒いけど対処は遊花と闇に任せるしかないわ」
そう、俺や桜では正体不明（アンノウンイレイザー）の抹消者に対処できない。
相手が記憶を消してくるなら、出会ったところで忘れさせられるだろうし、勝っても負けても情報は手に入らない。
完全な無駄足になる。
どちらにせよ、神出鬼没みたいだから遭遇できるかは運次第だろうがな。
「とりあえず、正体不明（アンノウンイレイザー）の抹消者のことは分かった。それで、不知火さんの行方は本当に分からないのか？」
「うん。携帯端末の電源も入ってないみたいなんだよね……」
「まさか天神先生達に捕まってるとか……」
「それは考え難い……炎は治虫みたいに闇のカードに耐性がないわけじゃないから操られてる可能性も低いし……あり得るなら始末されてるって可能性だけど、炎だって『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバー……生半可な実力じゃないのは遊花達も知ってるハズ……並大抵の決闘者じゃ炎には勝てない……それに、もし始末さ

れてるなら今頃炎の死体やらが発見されてるハズ」
「じゃあ、何で連絡が取れないのよ？」
困惑する桜の言葉に闇は無表情のまま俺達に見えるように指を立てる。
「可能性として考えられるのは３つ……１つ目は敵に捕まった……これは１番可能性が低い……生かしておくメリットが特に無いから……２つ目は始末された……これならやられた証拠が何処かに残ってるハズ……そして最後……３つ目は……自分から行方をくらませた」
「自分から？何のためにですか？」
「そこまでは分からない……あえて推測するのなら厄介な情報を知ったことを気づかれたから身を隠しているか私達を巻き込みたくないから、とか？」
「何かどちらも今更な感じがする推測だな」
俺達を巻き込みたくないもこの件は言ってしまえばケルンに住んでいる全ての人に関係がある。
それを知っているかいないかの差でしかない。
それに身を隠すのも、それこそ俺達に端末で情報を告げるという手がある。
不知火さん……一体あんたは今何をしてるんだ？
「それに面倒事がもう１つある……」
「まだあるのかよ……もうお腹一杯って感じだぞ」
「それも私達だけじゃなくて、全ての決闘者に関わる問題……それもあわさってプロリーグはしばらく休止になる」
「全ての決闘者に関わる問題ですか？それは一体……」
「それがね、マスタールールが変わるみたいなんだ」
「はっ⁉？まだプロリーグもやってるこのタイミングでか⁉？」
「ええっ⁉？」
「嘘でしょ⁉？」
美傘の言葉に俺達は目を見開く。
マスタールール。

それはデュエルモンスターズにおける競技ルールだ。
マスタールールはデュエルモンスターズの歴史と共に変化していき、ペンデュラムモンスターやリンクモンスターなど、新たな召喚法が増えたりしていく中で様々な変化を遂げてきた。
それがまだプロリーグも終わってないこんな状況で行われるって言うのか⁉？
「大きな点で言えば、今度のマスタールールでは融合・シンクロ・エクシーズモンスターは、いずれもＥＸデッキから特殊召喚する場合、エクストラモンスターゾーンに加えて、新たに自分のメインモンスターゾーンにも特殊召喚できるようになるみたいなんだ。ペンデュラム・リンクモンスターを特殊召喚する際のルールは今までどおりらしいんだけどね」
「……なあ、それって嫌な予感がしてくるんだが」
「気付いた？ルールとして融合・シンクロ・エクシーズモンスターが出しやすくなる……これ自体はリンクモンスターが登場したことによりそれまで出来ていた戦術を取れなくなったことによる不満が色々あったみたいだから分からなくはない……でも、あまりに今のケルンの状態では悪手……ううん、言い方を変えればあまりにも天神　幻騎達に　都合が良過ぎる」
そう、あまりにも都合が良過ぎるのだ。
メインモンスターゾーンに融合・シンクロ・エクシーズモンスターを出せるようになるってことは……
「リンクモンスターがいなくても、Ｎｏ．をフィールドに並べやすくなる……」
「あっ‼？」
俺の言葉に遊花達が目を見開く。
そう、今まではエクストラモンスターゾーンに１体だけだったり、リンクモンスターによる縛りがあったがそれがなくなったということはこれまで以上にＮｏ．が現れる可能性もあると言うことになる。
「……本当に偶然だと思うか？」
「あまり考えたくはないけど……偶然じゃないのならルールに口出

しできるような存在が敵にいるってことも考えられるよね、やっぱり。業界の闇を見ちゃった気分だよ。いや、実際闇のカードが相手なんだけどさ」
何とも言えない美傘の感想に俺達は顔を引きつらせる。
本当に、どうするんだよ、この状況。
「こうなってくると問題が山積みでどこから片付ければいいか分からないわね」
「本当だね。それに師匠や桜ちゃんは怪我してるし、私達だけじゃとても手が足りないよ」
遊花と桜が困ったように顔を顰める。
遊花の言う通り、圧倒的に俺達では手が足りない。
何せ俺達の中ですぐに動けるのは遊花と闇しかいないのだ。
かといって、闇のカードに耐性がないのであれば下手な味方を増やしたところで操られる可能性がある。
どう足掻いても手が足りない。
「どうすりゃいいってんだよ……」
あまりの状況に思わず頭を抱えそうになった時ーーー
「だったら、ボクにも声をかけてくれよ、共犯者クン？」
ーーーそんな言葉と共に病室の扉が開かれた。
そこにいたのは、病院内にも関わらず黒いパーカーを深く被った黒髪で中性的な顔立ちの女性。
「全く、君は会う度にボロボロだよね。もう少し何とかならないのかい？遊騎」
「夜⁉？」
俺の共犯者こと眼竜　夜がそこにいた。
「夜、どうしてここに……」
「美傘から連絡を貰ってね。作戦会議をするって聞いたから寄らせて貰ったのさ。まあ、本命は謝罪とその付き添いなんだけどね」
「謝罪と付き添い？」
「ああ。ほら、いつまでそこに隠れている気だい？早く入ってくるんだ」

「うっ……失礼する」
「失礼します」
夜に促され、病室に入ってきたのは真紅と幸土だった。
真紅は前に会った時の勢いはどこにいったのかと言いたくなるぐらい暗い表情を浮かべており、幸土と一緒に遊花と桜の前に立つと勢いよく頭を下げた。
「すまな……すみませんでした、”小さな(リトル)”……栗原先輩!!?壊……宝月先輩!!?」
「すみませんでした、栗原先輩!!?宝月先輩!!?私達のせいでご迷惑を……」
「えっ!?ええっと……さ、桜ちゃん?」
「何で私に振るのよ……とりあえず、頭をあげなさい、真紅、刀花。闇のカードに操られてたことに対する謝罪なんでしょうけど、私達は別に怒ってないから」
「う、うん!!?そうだよ!!?むしろ2人が無事でよかったよ!!?だから、頭を上げて!!?ね!!?」
遊花と桜の言葉に真紅と幸土はおそるおそる顔をあげる。
2人の表情は暗く今にも泣き出しそうだ。
まあ、無理もない話だろう。
闇のカードに操られ、先輩である遊花達を襲い、桜に至っては入院する程の大怪我を負ったのだ。
その罪悪感はきっと俺には正確に慮ることすらできないだろう。
だとしてもーーーその表情では遊花達が浮かばれない。
「真紅、幸土。その表情は違うぜ」
「えっ?」
「何?」
「お前らが浮かべなきゃいけないのはそんな辛気臭い顔じゃなくて、笑顔だ。助けてくれてありがとうって気持ちを込めた輝くような笑顔だよ。そうじゃなきゃ、遊花達が浮かばれないぜ」
「……うん。私も師匠が言うように、2人には笑って欲しいな。闇のカードが原因で2人には悪いところはなかったんだし。笑顔の2

人が私は好きだな」
「そんな暗い顔してたんじゃ、こっちだって助けた甲斐がないじゃない。別に悔やむなとは言わないから、せめてアンタ達が助かったんだって実感を私達に与えなさいよね」
　そんな遊花達の言葉に真紅達は涙が溢れ出しそうだった目を擦り、歪ながらも精一杯の笑みを浮かべ……
「「助けてくれてありがとうございました、栗原先輩‼？宝月先輩‼？」」
「「どういたしまして」」
　そんな２人に遊花達も満面の笑みで応えるのだった。

ーーーーーーー

「さてと、一区切りついたところで今後の方針なんだが、どうする？」
　真紅達の謝罪も一区切りついたところで俺は今後のことについて切り出す。
　正直、状況は不味いなんてレベルじゃないからな。
「とりあえず私は炎や失踪したプロ決闘者を追いながら闇のカードに操られてる決闘者を探していく……どうせプロリーグも暫く中止になりそうだし」
「ああ、頼んだ。操られているプロ決闘者の可能性を考えると、遊花には荷が重いからな」
「任せて……誰が相手だろうと……ブチころがす」
「いや、程々に、な」
　無表情ながらも自信満々に胸を張る闇に俺は苦笑を浮かべる。
　闇なら本当にこの街の決闘者を斃し尽くしてもおかしくないからな。
「なら、私は情報収集ですね‼？　天神　幻騎や行方不明になってるプロ決闘者やデュエルアカデミア生、ついでにルール変更について怪しい点がないか調べてみます‼？」
「……俺が言うのも何だが、無茶すんなよ、美傘。多分、お前がやる

ことが１番危険だからな」
「にひひ、遊騎さんが心配してくれるなら、元気１００倍だよ‼？」
「美傘の元気が１００倍？騒音問題で苦情がきそうだな……」
「そこまでうるさくないですよ⁉？元気で明るく可愛いとファンから評判の美傘さんになんてこと言うですか⁉？」
「隠れファンな」
「なんで隠れてるです⁉？堂々とファンを明言してほしいです‼？」
「馬鹿、お前。いじめられたらどうするんだ」
「いじめられないですよ⁉？」
「はいはい、真面目な話をしてるんだから戯れない。だったらボクは美傘の護衛かな？」
「ああ、夜が付いてるなら安心だ。頼んだぜ」
「任せてよ」
「私の信頼低すぎです⁉？でも、夜ちゃんがいるなら安心‼やっぱり夜ちゃんは私の心のアミーゴだよ～」
「うわっ⁉？だからっていきなり抱きついてこないでって‼？」
美傘に抱きつかれ夜が苦笑を浮かべる。
流石は友人。
なんだかんだでいいコンビなのかも知れない。
「私は臨時の風紀委員として行方不明になってるデュエルアカデミア生を探します」
「ああ。天神　幻騎を倒した遊花に口煩いことは言わない。だが……くれぐれも気をつけてくれ。遊花に何かあったら、俺は自分を許せそうにない」
「‼？……はい‼？師匠の期待に応えられるように頑張ります‼？」
「……あまり気張らなくていいからな」
嬉しそうに気合を入れる遊花を嗜める。
心配ではあるが、遊花は天神　幻騎を退ける程の力を身につけた。
ならば、師匠として弟子の力をもっと信じてやるべきだろう。
「あの、栗原先輩‼？私達も栗原先輩を手伝わせ貰えませんか？」

「えっ？刀花ちゃん？」
「我らが汝らを傷付けた罪は消えない。ならばこそ、扶翼にて贖罪としたいのだ」
真剣な表情で（真紅の言動はふざけてるように見えるが）頼み込む真紅達に遊花が戸惑う。
真紅達の気持ちは買うが、２人は１度闇のカードに操られている。だからこそ、２度目がないとは言い切れない。
しかし、そんな２人に思わぬところから援護が入った。
「私は良いと思う」
「闇先パイ？」
「２人は１度闇のカードに操られてる分闇のカードに適応してる……数枚程度なら手にしても問題ないと思う。正直これから新しく闇のカードに適応できる人間を探す方が厳しい……それなら事情も把握している２人に手伝って貰った方がいい」
「でも……」
「最悪２人には闇のカードに操られている人を探すことだけを頑張って貰えばいい……報いる機会を与えないのも２人に失礼」
「……分かりました。でも、絶対無茶はしないこと‼？それだけは約束してね」
「‼？ありがとうございます、栗原先輩‼？」
「感謝する、〝小さな聖域（リトルサンクチュアリ）の守護女神（ガーディアン）〟」
「ほ、本当に感謝されてるのかなぁ？」
頭を下げた真紅を見て遊花が微妙な表情を浮かべる。
まぁ、あれも真紅なりの感謝なのだろう。
頑張れ、遊花。
そして俺と桜は……
「さっさと身体を治して戦線復帰しないとな」
「ええ、遊花達にばかり負担はかけてられないわ」
状況はどんどん悪くなっていく。
だとしても、俺達は抗うことを選んだ。
待っていろ、天神　幻騎。

必ず見つけ出し、お前らの壊した日常を取り戻してやる。

第87話　偽りの骸

★

「……ん、もう朝……ん～～～」
軽快に鳴り響く目覚まし時計を止めながら私は自分の部屋のベッドから身体を起こして伸びをする。
起きたばかりで寝ぼけている顔をパチパチと叩いて気合を入れる。
「よし、今日も頑張ろう!!?」
私は胸の前で両手を握って気合を入れると急いでクローゼットから制服を取り出し、着替える。
そして身だしなみを整えてから2階にある私の部屋からリビングキッチンに降り、朝食とお昼のお弁当を作り始める。
朝ご飯とお弁当のおかずがある程度作り終わった時、2階からゆっくりと誰かが降りてくる物音が聞こえてくる。
しばらくして、リビングキッチンの扉がゆっくりと開くと、そこにはーーー
「ふぁ～おはよう、なのです～」
「おはようございます、リーネさん……って、リーネさん!!?服のボタンが止めれてないですよ!!?見えてます!!?色々見えてますから!!?」
「ほぇ……?そうですか……とりあえず、座ってから……」
「わぁ!!?そっちは椅子じゃなくて食器棚ですよ!!?ぶつかっちゃいます!!?ちゃんと起きてください!!?」
ーーー明らかに寝ぼけているリーネさんがそこにいた。
師匠と約束をしたリーネさんは師匠がいない間私の家に泊まることになった。
行方不明になった不知火さんと御影さんを夜遅くまで探し回っていたリーネさんは自宅からとりあえず最低限の荷物だけを持って私の家に来た。
時間ももう少しで深夜になるところだったから疲れているとは

思ってたけど、まさかここまで寝ぼけてるなんて思わなかった。
そうやってフラフラしているリーネさんのフォローをしていると2階から降りてきた闇先パイがリビングに入ってくる。
闇先パイは私にフォローされているリーネさんを見ると申し訳無さそうな表情を浮かべた。
「おはよう、遊花……社長が迷惑をかけてるみたいでごめんなさい」
「あ、おはようございます、闇先パイ。これぐらいは大丈夫なんですが……リーネさんって、朝弱いんですか？」
「みたい……私も今初めて知った」
「あ、あはは……とりあえず、リーネさんを洗面所に連れて行ってあげてくれませんか？まだ朝ご飯の準備が終わってなくて……」
「任された……社長、ちゃんと起きる……」
「ほぇ……あー……おはようなのです……闇ちゃん……」
「……社長、のしかからないで……くっ、駄肉が重い」
闇先パイは寝ぼけたリーネさんにのしかかるように抱き付かれ、凄く不機嫌そうな表情を浮かべる。
「……大丈夫……胸なんてただの飾り。胸なんて……ただの、飾り」
「闇先パイ？」
突然早口でぶつぶつと何かを呟き始めた闇先パイに困惑し、私が声をかけると闇先パイの視線がこちらを向く。
闇先パイは私の胸元をジッと見つめ、その後両手で自分の胸元を触ると悲しそうな表情を浮かべーーー
「……どうせ私は”平らか”だから……遊騎好みの”ばいんばいん”じゃないから!!？」
捨て台詞のようなものを口にすると、リーネさんを洗面所の方に引きずっていった。
”ばいんばいん”って……えっと、多分そういうことだよね？
というか、師匠好みのって……？

私は無意識の内に自分の胸元に視線を向けていたことに気づき、頭を振って邪念を追い出すと、何とも言えない感情を抱きながら朝食の準備に戻る。
しばらく続きそうな私の新たな日常はそんな微妙な始まり方をするのだった。

ーーーーーーー

「ん～何度食べても遊花ちゃんの手料理は美味しいのです‼？遊花ちゃんは絶対に将来いいお嫁さんになるのですよ‼？」
「も、もう、恥ずかしいですよ、リーネさん……」
しっかりと目が覚め、いつもの調子に戻ったリーネさんの言葉に私は顔が真っ赤になってしまう。
うぅ～前にも言われたけど、やっぱり恥ずかしいよ……
「うん……いつも通り、美味しい……」
「？闇ちゃん？なんか元気ないですけど、どうかしたですか？」
「……何でもない……社長と遊花には縁のないこと……」
「リーネと遊花ちゃんには？遊花ちゃん、何のことか分かるですか？」
「さ、さぁ？あ、あはは……」
「ん～？」
どこか遠い目をして悲しそうな表情を浮かべる闇先パイを見て、リーネさんは不思議そうな表情を浮かべ、私は苦笑いを浮かべながら闇先パイから視線を逸らす。
多分さっきの発言のことを引きずってるんだろうけど、それに触れたらきっと余計に闇先パイを悲しませてしまう。
ここは強引にでも話題を変えて誤魔化してしまおう。
「そ、それはそれとして‼？今日は闇先パイ達はどうするんですか？」
「……私は遊騎と桜が心配だから今日は病院で２人を護衛しておく。１度真紅達を使って襲撃してきたから、２度目がないとは言い切れない……」
「リーネは炎君達の目撃情報がないかデュエルセキュリティに詳しい

話を聞きに行ってくるのですよ。行方不明に新ルールの件でしばらくはプロリーグも再開出来そうにないですからね……全く、２人揃って迷子だなんて困ったものなのです‼？やっぱり常識人でお姉さんなリーネが見つけてあげないとダメなのですね‼？」
「社長が常識人……？何の冗談？」
「なにおう？常日頃から常識人として清楚に穏やかにやってるじゃないですか‼？」
「むしろ、常識人（笑）とか、せいぞ（）だと思う。社長が常識人で清楚だと常識人と清楚の定義が壊れる……とりあえず社長。常識人と清楚の概念に謝って」
「そこまで否定されるのです⁉？概念に謝ってとかパワーワードがすぎるのですよ⁉？」
私の質問に、闇先パイとリーネさんは戯れあいながら答える。
私も当事者ではあるが、闇先パイとリーネさんにとって今回の出来事はかなり重大なことだ。
大切な友人であり仕事仲間でもある師匠の重症と不知火さん、御影さんの失踪は２人の心に重くのしかかっているハズだ。
そうだというのに、私に心配をかけないためか毅然に振る舞いふざける余裕すらあるかのように見せている。
……強い人達だ、闇先パイも、リーネさんも。
勿論、それは今までも感じていたことではあるけれど、こんな状況だからこそ、余計に強くそう思う。
だからこそ、そんな２人に私ができることはーーー
「私はデュエルアカデミアの行方不明者についてと、できることなら天神先生が使ってた研究室を調べてみます。可能性は低いですけど、手がかりがあるかも知れませんから」
「そう……分かった。私も本当は出勤して手伝ってあげたいけど……」
「いえ、闇先パイは師匠達についていてあげてください。その方が、私も安心して調べにいくことができます。師匠と桜ちゃんのこと……よろしくお願いします」

「ん、任された……遊花ができないこと……私がやり遂げるから」
「でも、遊花ちゃんも気をつけるのですよ？怪我をしたら、めっ、なのですよ」
「はい‼？」
私の力強い返事に、闇先パイ達も表情を緩める。
……私は、この人達から沢山の大切なものを貰った。
この程度じゃ、その恩を全然返すこともできないと思うけど……
それでも、少しでもこの優しい人達が心から笑っていられるように……私も、私にできることを全力でやり遂げたい。
「さてと、そろそろリーネも行くとするのです。そうだ‼？ちょうど良いので遊花ちゃんと闇ちゃんも乗って行くといいのですよ。丁度いいのであの話もしにいきたいですし」
「乗って行く？」
リーネさんの言葉に首を傾げていると玄関のインターホンが鳴る音がした。
こんな朝から一体誰が来たんだろう？
私は首を傾げながらも闇先パイ達に断りを入れて、玄関のドアを開ける。
「はーい……ふぇ⁉？」
「朝早く失礼します、栗原　遊花様」
私が玄関を開けると、そこにはスーツ姿の男性が立っており、その後ろには全長が7、8メートルはある真っ黒のリムジンが見えた。
えっ⁉？えっ⁉？どういうことなんですか⁉？
「あ、やっぱり鞍馬さんだったのです‼？声がしたからそうじゃないかなって思っていたのです‼？」
「おはようございます、リーネお嬢様。御加減はいかがですか？」
「お腹一杯‼？元気一杯、なのですよ‼？」
「それはよろしゅうございました。もう出られる準備はできておられますか？」
「あ、もう少し待って欲しいのです。それと遊花ちゃんをデュエルアカデミアに、闇ちゃんを病院まで送って行きたいのです」

「かしこまりました」
「え、えっと、リーネさん？この方は？」
「あ、紹介するのを忘れていたのです‼？この人は鞍馬さん。リーネの秘書をやってくれている人なのです」
「ご紹介にあがりました、鞍馬と申します。リーネお嬢様がお世話になっております」
そういって鞍馬さんは深く頭を下げる。
突然の事態に困惑する私にリーネさんは満面の笑みを浮かべてーーー
「リーネは遊騎君と約束したですからね。遊花ちゃんを守るって。だから、これからしばらくは安全のために鞍馬さんにデュエルアカデミアに送って行って貰うのですよ」
ーーーそんなことを口にするのだった。

ーーーーーーー

「おい何だよ、アレ？」
「アレは……アレでしょ？ほら、オレンジ色の野菜の……」
「ニンジンじゃなくてリムジンだろ。そういうボケじゃなくて何であんなものがデュエルアカデミアに来てんだよ？」
「知るかー‼？何でもかんでも私に聞くんじゃないわよ‼？」
「逆ギレ⁉？」
早朝、デュエルアカデミアの前で止まった全長が七、八メートルはあろうかという真っ黒なリムジンを見て、登校中の生徒達が動揺して騒めく声が聞こえてくる。
ガチャリとリムジンの運転席のドアが開くと、運転席からスーツ姿の男性ーーー鞍馬さんが降りてきて、リムジンのドアを開く。
生徒達が注目する中、リムジンのドアが開き、中から現れたのは顔を真っ赤に染め恥ずかしそうに俯いている左側頭部を水色のリボンをつけてサイドテールにしている黒髪の少女だった。
ーーーまぁ、私なんですが。

「……ありがとうございました、鞍馬さん」
「いえいえ。むしろご迷惑をおかけしてしまったようで申し訳ありません」
「あ、あはは……確かに大変な騒ぎになってますね」
辺りを見渡すとリムジンから現れた私を見て様々な声があがっており軽くパニックが起きている。
穏便に終わりそうにはないなぁ……そんな風に思わず遠い目をしているとその騒ぎを更に大きくするようにリムジンから２つの人影が顔を出す。
「おおー朝早いのにみんな元気なのです‼？やっぱり学生はこうでなくちゃいけないのです‼？」
「これは元気なのとは関係ないと思う……」
楽しそうなリーネさんと呆れている闇先パイの姿に、私は思わず頬を引きつらせる。
プロチーム『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』のメンバーである闇先パイとリーネさんはこの街ではかなりの有名人だ。
おまけに今日は２人共変装をしておらず、テレビで流れる姿のままだ。
端的に言って目立つ……凄く目立つ。
突然現れたトッププクラスの２人のプロ決闘者のせいで、喧騒はさらに大きくなっていき、通行人の中に野次馬まで生まれはじめている。
度重なる衝撃で場の空気が風船が破裂する寸前にまで達したところでーーー
「騒がしいと思って老体に鞭を打って出てきて見れば、君達は何をしているんだい？」
ーーー突如聞こえてきた呆れながらも確かな存在感を示す声に、辺りの喧騒が一瞬で静まった。
デュエルアカデミアの校内から現れたのは柔和そうな印象を受ける初老の老人。
「あ、校長先生……その、お、おはようございます」
「おはよう、栗原君。ああ、そう怯えないでいいよ。どうしてこんな状

況になっているかは大体察したからね」
校長先生はそういうと視線を闇先パイとリーネさんに向ける。
闇先パイはそんな校長先生を真剣な表情を浮かべてーーー
「……眩しい……あれ？……日の出？」
「そんなに反射してないよね⁉？不快になるほどはさぁ⁉？天羽君⁉？君のところの社員、再教育しといてくれるかなー⁉？」
ーーー眩しそうに目を覆った。
どんな会話が交わされるのか見守っていた生徒達の何人かが闇先パイの言葉に思わず吹き出して顔を逸らす……みんな、失礼だよ？
笑顔のまま額に血管を浮かべるという器用な技を披露しつつ、校長先生はリーネさんに視線を向ける。
視線を向けられたリーネさんは特に気にした様子も見せず笑顔で校長先生に挨拶をした。
「武者小路さん⁉？お久しぶりなのです⁉？遊騎君と闇ちゃんのことでお話に行った時以来なのです⁉？」
「ああ、久しぶりだね。君の活躍は聞いているよ。そして人の話を聞かないのも相変わらずだね」
「リーネの特技だと思っているのですよ。えっへん」
「褒めてないからね？それでどうして今日はこんなことになっているんだい？」
「大したことじゃないのです。ただの遊花ちゃんのボディガードなのですよ。最近、何かと物騒ですからね」
「成る程、確かに君のところで守るなら栗原君は安全だろうね……他のところで被害がでそうだけどね」
そういってニコニコ笑うリーネさんに校長先生はため息を吐く。
「君が連れて来たということは栗原君はそうなんだね？」
「勿論、そうなのですよ⁉？誰にも渡すつもりなんてないのです⁉？」
「ひゃう⁉？り、リーネさん？」
校長先生と話していたリーネさんにいきなり抱き付かれ、私は困惑する。
そんな私を見て、校長先生は楽しそうに笑った。

「ははは‼?・そうか。まぁ、彼の弟子であり、闇君に教わっているのであれば当然の帰結というものだろうね」
「そういうわけなので少しお話しがしたいのですよ。突然の訪問になっちゃったのはごめんなさいなのですが」
「ははは‼?・良いとも、君も多忙だろうしね」
「ありがとうなのです‼?・そんなわけでリーネも少しデュエルアカデミアにお邪魔するのです。鞍馬さん、少しの間遊花ちゃんのことをお願いするのです」
「承知いたしました」
「闇ちゃんは……」
「歩いて行くから問題ない……寄りたいところもある」
「分かったのです‼?・2人によろしくなのです‼?」
「ん……」
「え?・えっと……」
リーネさんの行動に困惑している間に目まぐるしく変わる状況に私が目を白黒させていると、リーネさんが今度は私の頭を優しく撫でてーーー
「まあまあ、ここはリーネお姉さんにどどーんとお任せなのです‼?・」
ーーーそういって、満面の笑みで笑うのだった。
……この状況を作ったのもリーネさんですけどね。

ーーーーーーー

「成る程ね……感謝するよ、報告を。とはいえ、するものじゃないよ、無茶は」
「は、はい……ごめんなさい」
「君達も、良かったよ、無事でね」
「う、うむ」
「ご、ご迷惑をおかけして申し訳ありません」
「構わないよ、反省しているなら。手に余るけどね、状況は」
リーネさんのせいで混沌とした状況に陥った午前中が過ぎて昼休

み。
　霊華さんや大地君に助けて貰って何とか他の生徒からの追求を逃げ切った私は真紅ちゃん達を連れて臨時風紀委員として風紀委員会の教室を訪れ、宮司さん達に休んでいた間のことを話した。
　最も、闇のカードのことを正直に話したわけじゃない。
　行方不明者が呪われたカードに操られているなんて話、普通は信じてもらえない。
　だからこそ、少し事実を曲解させ、行方不明になっている生徒達は誘拐され、様々な方法で無理矢理怪しげな男達の仕事を手伝わされているという話にした。
　そして、行方不明について調べていた私達は偶々怪しげな男達の仕事を手伝わされていた真紅ちゃん達を見つけ、何とか解放。
　その際に桜ちゃんは重症を負ってしまったということにした。
　８割ぐらいは本当の話だからそこまで違和感もないと思う……多分。
「見回りぐらいだね、出来るとしても」
「生徒だけの見回りは現状では難しいですわね。とはいえ、教師の手もどれだけ借りられるか……」
　眉間に皺を寄せ、宮司さん達が難しい表情をする。
　今回の案件は完全に風紀委員会で対処できる案件を超えている。
　私が誤魔化したせいもあるけど、敵は複数、尚且つ怪しい大人。
　そんなものをただの学生がどうにかできるわけがない。
「考える必要があるね、じっくりと。今回の件に関して」
「そうですわね。とはいえ、あの生徒からも聞き取りをする必要もありますし……」
「あの生徒？」
　困った表情を浮かべ鬼石さんが溢した言葉が私の耳に入る。
　首を傾げた私を見て、宮司さんが口を開く。
「登校してきたんだよ、行方不明になった生徒が」
「えっ⁉？」
「その生徒は１週間程行方不明になっていたのですが、今朝方になっ

てフラッと登校してきたのですわ」
「こう言ったそうだよ、教師に。『友人の家に泊まっていた』、と。家族にも行方不明者として探され、携帯端末が繋がらなかったにも関わらず、ね」
「さらに言えば登校してきた生徒の性格は別人のように変わっているらしいですわ」
「性格が？」
「ええ。行方不明になる前は大人しい生徒だったらしいのですが、今日登校したその生徒は傍若無人と言える程偉そうな態度をとっているようですわ」
「それは……」
　怪しい……明らかに怪しい。
　いくら友人の家に泊まっていたのだとしても、1週間も、家族にすら連絡していないのは流石におかしい。
　そして極め付けに性格が豹変している。
　これは……間違いない。
「……あの、なら、その生徒の聞き取りは私に任せてくれませんか？」
「あなたが？」
「はい。3日も休んでしまって風紀委員としての仕事もできませんでしたし……臨時とはいえ、お役に立てていないのは心苦しいですから」
　私の言葉に鬼石さんが訝しげな表情を浮かべる。
　うぅ、不自然だったかな？
　でも、本当にその生徒が闇のカードに操られているなら大変なことになるかも知れないし……
　内心の焦りを隠し、何とかその生徒と接触できるように更に言葉を続けようとしたところで……
「ならば、任せよう、君に」
「風紀委員長⁉？ですが、栗原　遊花は……」
「必要だからね、考える時間が。そして、必要なことだ、聞き取りも、

早急にね。なら、頼るべきだよ、彼女に」
不敵に笑いながら宮司さんが私を見る。
……多分、気付かれてる。
私が真実を隠していることを。
だけど、この失踪事件に関する真実を告げるわけにはいかない。
前に新聞部の件で宮司さんが言っていた。
賢しすぎると疎まれると。
ある意味で、私は既に染まっていた。
闇のカードであるアンチホープ達と出会い、様々な出会いをしていた私には闇のカードの存在とその真実に対する動揺は少なかった。
だけど、闇のカードについて知らない宮司さん達がこの真実を知ってしまった時、動揺しないということはないだろう。
真実を伝えることが必ずしも正しいとは限らない。
時に真実が人を狂わせる可能性もある。
だからこそーーー
「任せるよ、君に。その生徒の真実を」
「……はい、任されました」
宮司さんの言葉に私は頭を下げる。
みんなを守るために全てを背負う覚悟。
師匠を守るために天神先生とデュエルをしたあの時から、その覚悟はもう決めているのだから。

ーーーーーーー

「ごめんね、手伝って貰っちゃって」
「気にしないでください。私も栗原先輩に助けて貰いましたから。これぐらいで救っていただいた恩を返せるとは思っていませんが、手伝わせてください」
「汝と『壊獣姫』には借りがある。深淵より出でし、全てを喰らう真紅の悪竜として、受けた借りをそのままにしておくなど、紅神爆牙(こうこうはくが)のアイズ・D・スカーレットの名が廃る。我が名は紅神爆牙(こうこうはくが)のアイズ・D・

スカーレット‼？　深淵より出でし、全てを喰らう真紅の悪竜‼？汝に借りを返した時こそ、汝との真の聖戦（ジハード）が幕を開けるのだ‼？」

行方不明になっていたハズの生徒に会いに行くことにした私が付いてきてくれた真紅ちゃん達にお礼を言うと、刀花ちゃんは柔らかい笑顔で真紅ちゃんはマントを勢いよく広げながら不敵な笑みを浮かべて応えてくれた。

……真紅ちゃんが言ってることは相変わらずよく分からないけどね。

「真紅ちゃんのことは気にしないでください。いつものことなので」

「あ、えっと、うん」

「因みに真紅ちゃんの言葉を要約すると栗原先輩と宝月先輩に助けられたご恩は私の全てに変えても返します、です」

「え？内容全然違うけど……」

「勝手に我が意を明かすな‼？”深淵の話し手（アビストーカー）”‼？」

「あってるみたいですよ」

「……うん、あってるみたいだね」

どうして真紅ちゃんの言ってることが分かったんだろう？

一緒にいた時間の差なのかな？

私には分かるようになる気がしないんだけど……

そんなことを思っている内に宮司さんに教えてもらった行方不明になっていたハズの生徒がいる高等部2年生の教室につく。

3年生である私と1年生である真紅ちゃん達が2年生の教室の近くにいるのが珍しいのだろう。

私達は教室内から2年生の好奇の視線に晒されている。

とはいえ、今回に限ってはそれもちょうど良い。

「すみません、風紀委員です。この教室に五味　宝生（ごみ　ほうせい）君という生徒はいらっしゃいますか？」

私の言葉に教室内にいた生徒達が騒めき、視線が1つの方向に向く。

私が生徒達の視線が向いた先を見ると、そこには1人の男子生徒がいた。

男子生徒は私の姿を見て舌打ちをすると、私の前まで来る。
「俺だよ、五味　宝生は。風紀委員さんが俺に何のようだ？」
「少し場所を変えてお話しを聞かせて貰いたいのですが、よろしいでしょうか？」
「話だと？」
「あなたがしばらく行方不明になっていたということについてです」
私の言葉に五味君は苛立たしげに私を睨む。
「またその話か。先生に話した通りだよ。友人の家に泊まっていた、それだけだ」
「そのことについて詳しく聞かせていただきたいんです。何故、両親に連絡もしなかったのか、とか」
「チッ、面倒臭い奴だな……どいつもこいつもゴミ共が‼？」
五味君は舌打ちをし、身体から一瞬闇が溢れたかと思うと、私に向かって懐から何かを取り出して投げる。
私は嫌な予感がして反射的に投げられたものを掴んで胸に抱くと、投げられたものーーーデュエルモンスターズのカードから大量の闇が溢れ出そうとしていた。
やっぱり持ってた、闇のカード‼？
「させない、よ‼？」
「何⁉？」
私は直感に任せて祈りを捧げるように胸の前で手を組み、掴んだカードに力を込めると溢れ出そうとしていた闇が霧散し、手にしていたカードが白紙のカードに変わった。
「えっ⁉？」
白紙に変わってしまったカードを見て、私は思わず目を見開く。
ダークホープの時と同じ感覚がしたのに、まさかカードが白紙に変わってしまうとは思わなかった。
これって一体……
「っ‼？どけ‼？」
「あ‼？待って‼？」
私が思わぬ自体に動揺していると、闇のカードによる呪いが私に効

かないことを悟った五味君が一目散に教室から駆け出していき、私は慌ててその後を追う。
闇のカードは白紙になってしまったのに、五味君の様子が変わった感じはしない。
つまり、五味君は別の闇のカードを持っている。
被害者側か加害者側かは分からないけど、闇のカードを持っている五味君を放っておくわけにはいかない‼?
「ま、待ってください‼?栗原先輩‼?」
「鞘走るな‼?”小さな聖域の守護女神(リトルサンクチュアリガーディアン)”‼?」
後ろから真紅ちゃん達の焦ったような声が聞こえてくるけど、今五味君を見失う訳にはいかない。
校内で突如始まったデットヒートを何事かと見てくる生徒達を躱しながら五味君を追って行くと、五味君が人気のない体育館に逃げ込んで行くのが見えて私も体育館の中に駆け込む。
体育館の真ん中で動きを止めた五味君は忌々しげに私を睨む。
「チッ、しつこい奴だ」
「当たり前、です。闇のカードを持っているあなたを逃すわけにはいきません‼?」
「闇のカードだと?一体何を言っている?」
私の言葉を聞いて五味君が訝しげな表情を浮かべる。
闇のカードのことを知らない?
なら、五味君はただ闇のカードに操られているだけ?
……正解がどちらかは分からないけど、私にできることは1つだけだ。
私は後ろから追いついてきた真紅ちゃん達の足音を聞きながらデュエルディスクを起動して五味君に向けて構える。
「なら、デュエルで決着をつけましょう。私が勝ったらあなたが知っていることを全て話して貰います‼?私が負けたらあなたの好きにしてくれて構いません‼?」
「ほざいたな‼?なら、お望み通りデュエルでお前に絶望を教えてやる‼?」

五味君もデュエルディスクを起動し、私に向けて構える。
「やっと追いついた……って、栗原先輩⁉？」
「”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”⁉？貴様、また無茶をーーー」
ごめんね、２人共。
どの道私が退く訳にはいかないの。
五味君をこのままにしておくと、またデュエルアカデミアに闇カードをばら撒かれるかも知れない。
だからーーー
「行きます‼？」
「後悔させてやる‼？」
『決闘‼？』

遊花　ＬＰ８０００
宝生　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は俺だ。クックック、俺は手札を全てセットする」
「ええっ⁉？」
不気味な笑い声を漏らしたかと思うと、五味君はいきなり手札を全て魔法＆罠ゾーンにセットした。
いきなり手札を全てセットしてくるなんて、一体五味君のデッキはどんなデッキなの？
「俺はこれでターンエンドだ。さあ、恐れぬのならかかってくるがいい」

遊花　ＬＰ８０００　手札５
ーーーーーー　ー
ーーーーー
ー　ー
ーーーーー

▲▲▲▲▲　　ー
宝生　ＬＰ８０００　手札０
「私のターン、ドロー!!?」
５枚のセットカード……どんなカードが仕掛けられてるかは分からないけど、進んでみるしか道はないよね。
「私はクリバンデットを召喚!!?」
〈クリバンデッド〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００
私の前に現れたのは盗賊のような姿をした黒い毛玉のモンスター。
久しぶりの登場だからか凄く好戦的にぴょんぴょんと跳ねながら手を振っている……って、君は元々そうだったか。
「バトル!!?クリバンデットでダイレクトアタック!!?バンデットクロー!!?」
クリバンデットが五味君に突撃し、勢いよくその爪を振り下ろす。
迫るクリバンデットを見て、五味君は不気味な笑みを浮かべた。
「蛮勇だな。その短慮がどのような結果を齎すか教えてやろう!!相手モンスターの攻撃宣言時、?私は伏せていた２枚のセットカードを破壊し、リバースカードオープン!!?速攻魔法、報復の隠し歯!!?このカード名のカードは１ターンに１枚しか発動できず、このカードの発動に対して魔法・罠・モンスターの効果は発動できない。自分または相手のモンスターの攻撃宣言時に発動でき、自分フィールドにセットされているカード２枚を選んで破壊し、その攻撃を無効にする!!?」
五味君の手にいつの間にか小さなナイフが現れ、クリバンデットの爪はその小さなナイフに受け止められ、弾かれる。
「さらに、この効果で破壊され墓地へ送られたカードの中にモンスターカードがあった場合、その内の１体を選び、選んだモンスターの守備力以下の攻撃力を持つ相手フィールドのモンスターを全て破壊し、その後このターンのエンドフェイズになる!!?」

「えっ？でも、五味君が破壊したのは魔法＆罠ゾーンのカードだからそんな効果があっても使えないんじゃ……」
「陳腐な発想だな。俺が選択するのは守備力２４００のアーティファクト―カドケウス‼？　このカードは魔法カード扱いとして手札から魔法＆罠カードゾーンにセットできる‼？」
「っ⁉？　魔法＆罠ゾーンにセットできるモンスター⁉？ということは……‼？」
「お前のクリバンデットを破壊し、お前のターンのエンドフェイズになる‼？」
　攻撃を弾かれ、体勢を崩したクリバンデットは五味君の手にしたナイフに斬り裂かれ、その身体を粒子に変えて消滅した。
「っ、クリバンデット……」
「破壊されたモンスターを悼んでいる場合か？お前の短慮が招いた絶望はまだ始まったばかりだ。報復の隠し歯によって破壊されたアーティファクト―ベガルタの効果、それにチェーンしてアーティファクト―カドケウスの効果発動‼？魔法＆罠カードゾーンにセットされたこのカードが相手ターンに破壊され墓地へ送られた時、このカードを特殊召喚する‼？」
「っ、魔法＆罠ゾーンで破壊された時に特殊召喚できるモンスター⁉？」
「現れよ、アーティファクト―カドケウス‼？」

〈アーティファクト―カドケウス〉☆５　天使族　光属性
ＤＥＦ２４００

　フィールドに現れたのは２匹の蛇の意匠が象られた機械仕掛けの巨大な杖のモンスター。
「さらにアーティファクト―ベガルタの効果発動‼？魔法＆罠カードゾーンにセットされたこのカードが相手ターンに破壊され墓地へ送られた時、このカードを特殊召喚する‼？現れよ、アーティファクト―ベガルタ‼？」

〈アーティファクト―ベガルタ〉☆５　天使族　光属性
ＤＥＦ２１００

さらにカドケウスの横に赤き紋様を持つ機械仕掛けの片手剣が現れる。
どうやら魔法＆罠ゾーンにセットできるのと破壊された時に特殊召喚できるのはアーティファクトモンスターの共通効果みたいだ。
「まだ終わらんぞ、特殊召喚されたアーティファクト―ベガルタの効果、それにチェーンしてアーティファクト―カドケウスの効果発動‼相手ターン中にアーティファクトと名のついたモンスターが特殊召喚された時、デッキからカードを１枚ドローする‼？さらにアーティファクト―ベガルタの効果発動‼？相手ターン中にこのカードが特殊召喚に成功した場合、自分フィールド上にセットされたカードを２枚まで選んで破壊する‼？」
「っ‼？まさかまた……‼？」
「俺は伏せていた２枚のセットカードを破壊する‼？そして破壊されたアーティファクト―アイギスの効果、アーティファクト―アキレウスの効果発動‼？魔法＆罠カードゾーンにセットされたこのカードが相手ターンに破壊され墓地へ送られた時、このカードを特殊召喚する‼？現れよ、アーティファクト―アイギス‼？　アーティファクト―アキレウス‼？」

〈アーティファクト―アキレウス〉☆５　天使族　光属性
ＤＥＦ２２００

〈アーティファクト―アイギス〉☆５　天使族　光属性
ＤＥＦ２５００

五味君を守るように、五味君の左右から機械仕掛けの紫の紋様が入った大楯と黄色の紋様が入った大楯が現れる。

「特殊召喚されたアーティファクト―アイギスの効果、それにチェーンしてアーティファクト―アキレウスの効果、さらにチェーンしてアーティファクト―カドケウスの効果を2回発動‼アーティファクト―アイギスとアーティファクト―アキレウスが特殊召喚されたことでデッキからカードを2枚ドローする‼?さらにアーティファクト―アキレウスの効果発動‼?相手ターン中にこのカードが特殊召喚に成功した場合、ターン終了時まで、自分フィールド上のアーティファクトと名のついたモンスターは相手のカードの効果の対象にならず、相手のカードの効果では破壊されなくなる‼?そしてアーティファクト―アイギスの効果発動‼?相手ターン中にこのカードが特殊召喚に成功した場合、このターン相手は自分フィールド上のアーティファクトと名のついたモンスターを攻撃対象にできない‼?」

「っ……これは……」

たった1度の攻撃により現れた4体のアーティファクトモンスターとその効果を見て私は思わず顔を引き攣らせる。

……間違いない。

五味君のデッキは私と同じデッキタイプ……相手の攻撃に反応して強力な防御戦術を展開し、返しのターンで一気に攻めるカウンターデッキだ。

そして何よりも不味いのは報復の隠し歯によって私はすでにエンドフェイズにされていて、セットカードもないというところだ。

……下手をすれば、次のターンで一瞬でやられる。

「っ……ターンエンドです」

遊花　ＬＰ８０００　手札５

ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー

□□□□ー

ー　ー　ー　ー　ー

宝生　ＬＰ８０００　手札３

「俺のターン、ドロー!!?クックック、どうやら今日の俺の運は最強のようだな。私は全てのモンスターを攻撃表示に変更する!!?」

アーティファクト―カドケウス
ＤＥＦ２４００→ＡＴＫ１６００

アーティファクト―ベガルタ
ＤＥＦ２１００→ＡＴＫ１４００

アーティファクト―アキレウス
ＤＥＦ２２００→ＡＴＫ１５００

アーティファクト―アイギス
ＤＥＦ２５００→ＡＴＫ１２００

「そして魔法カード、右手に盾を左手に剣を!!?このカードの発動時にフィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの元々の攻撃力と元々の守備力を、エンドフェイズ時まで入れ替える!!?」

「えっ!?」

アーティファクト―カドケウス
ＡＴＫ１６００→２４００　ＤＥＦ２４００→１６００

アーティファクト―ベガルタ
ＡＴＫ１４００→２１００　ＤＥＦ２１００→１４００

アーティファクト―アキレウス
ＡＴＫ１５００→２２００　ＤＥＦ２２００→１５００

アーティファクト―アイギス

ＡＴＫ１２００→２５００　ＤＥＦ２５００→１２００

右手に盾を左手に剣をの効果で五味君のフィールドのモンスターの攻守が反転し、アーティファクトモンスターの攻撃力が一時的に強化される。

「五味先輩のモンスターが一気に強化されて……全ての攻撃を受けたら、それだけで栗原先輩のライフポイントは尽きちゃう!!?」

「チッ!!?何とかしろ!!?　〝小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）〟!!?」

「終わらせてやろう。バトル!!?アーティファクト―ベガルタでダイレクトアタック!!?小なる激情（ベガルタ）!!?」

ベガルタの近くに粒子の身体を持つ英霊が現れ、ベガルタを振るって私を斬り裂こうとする。

しかし、次の瞬間、英霊の正面にジャックオーランタンのような幽霊が私を守るように現れた。

「そんな攻撃、通しません!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札のゴーストリックランタンの効果発動!!?その攻撃を無効にし、このカードを手札から裏側守備表示で特殊召喚します!!?」

英霊は急に現れたランタンに驚きながらも、ランタンを斬り裂こうとしたが、ランタンの姿はすぐに空気に溶けるように消えていった。

「防いできたか。続けてアーティファクト―アキレウスでセットモンスターを攻撃!!?差し迫る（アキ）破滅（レ）の前の静（ウ）けさ（ス）!!?」

「セットモンスターはゴーストリックランタン!!?」

〈ゴーストリックランタン〉☆１　悪魔族　闇属性

ＤＥＦ０

アキレウスの近くに粒子の身体を持つ英霊が現れ、アキレウスを手にすると姿を現したランタンに向かって突撃し、アキレウスを使ってその身体を押し潰した。

「ありがとう、ゴーストリックランタン。手札に存在する妖醒龍ラルバウールの効果発動!!?このカードが手札・墓地に存在し、自分

フィールドのモンスターが戦闘または相手の効果で破壊された場合にこのカードを特殊召喚します!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外されます!!?おいで、妖醒龍ラルバウール!!?」

〈妖醒龍ラルバウール〉☆1　ドラゴン族　闇属性
ＤＥＦ０

フィールドに現れたのは銀色の身体の幼竜。
現れたラルバウールはアーティファクト達を睨みつけながら私の頭の上に乗る。
「妖醒龍ラルバウールの効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、フィールドの表側表示モンスター1体を対象として自分の手札を1枚選んで捨て、対象のモンスターと同じ種族・属性でカード名が異なるモンスター1体をデッキから手札に加える!!?私はアーティファクト―カドケウスを対象に手札を1枚捨て、天使族・光属性のワタポンを手札に加えます!!?そして手札に加わったワタポンの効果、それにチェーンして墓地に送られた絶対王バックジャックの効果発動!!?」
「手札コストとして墓地に送ったカードか」
「このカードが墓地へ送られた場合、自分のデッキの上からカードを3枚確認し、好きな順番でデッキの上に戻します。そしてワタポンの効果発動!!?このカードがカードの効果によって自分のデッキから手札に加わった場合、このカードを手札から特殊召喚できる!!?おいで、ワタポン!!?」

〈ワタポン〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ３００

ラルバウールに導かれ、手札に加わったカードから触覚を持つ白い毛玉のようなモンスターが飛び出し、私の肩の上に乗る。

君達……私を乗り物だと思ってない？
デュエル中だから私に乗ってるのって危ないんだよ？
「壁となるモンスターまで出してきたか。小癪な真似を……だが、そのような矮小な虫けらが生き残れると思うな!!？アーティファクト―カドケウスで妖醒龍ラルバウールを攻撃!!？伝令使の杖（カドケウス）!!？」
カドケウスの近くに粒子の身体を持つ英霊が現れ、カドケウスを手にすると、カドケウスが怪しげに光ると、虚空から水銀でできたの蛇が現れ、勢いよくラルバウールに向かって突撃する。
ラルバウールは宙を舞い、青い炎のブレスを纏って抵抗するが、水銀の蛇に丸呑みにされ、消滅した。
「破壊された妖醒龍ラルバウールは除外されます……」
「最後だ。アーティファクト―アイギスでワタポンを攻撃!!？災厄（アイ）を払う魔除（ギ）けの雲（ス）!!？」
アイギスの近くに粒子の身体を持つ英霊が現れる。
それを見たワタポンは私から降りて距離を取ろうとするが、英霊がアイギスを手にして構えると、アイギスから雷を纏ったレーザーが放たれ、ワタポンを一瞬で蒸発させた。
……私が知ってる盾となんか違う!!？
「メインフェイズ2……クックック、お前は後悔するだろう。このターンの内にデュエルに敗北しなかったことをな」
「言ってること、全然分かりません!!？デュエルに負けなかったことを後悔するなんて、あり得ません!!？」
「ハッ、おめでたい奴だ。お前は味わうだろう、敗北すれば味わうことの無かった、苦痛と恐怖をな!!？」
五味君がそういうと、五味君の身体から闇が溢れ出し始める。
その瞬間、私の心臓がドクンと脈打ち、その言いようの無い奇妙な感覚に目を見開く。
「えっ!!？この感覚は……!!？」
「？”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）？」
突然声を上げた私を見て真紅ちゃんが訝しげな表情を浮かべる。
だけど、私はそれに反応する余裕はなかった。

五味君の身体から溢れ出した闇から感じたのは……絶望神アンチホープ達から感じた、私と繋がっている感覚で……

「っ、まさか……!?」

「俺はレベル５のアーティファクト―ベガルタ、アーティファクト―アキレウス、アーティファクト―アイギスでオーバーレイ!?３体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!?エクシーズ召喚!?」

ベガルタ、アキレウス、アイギスが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けると、舞い降りたのは赤黒い鎧を纏いし偽りの神。

「偽りの骸を纏いし神よ!?神話!?歴史!?全ての過去を無意味な塵芥へと塗り替えろ!?現れろ!?　Ｎｏ．５３偽骸神Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨ!?」

〈Ｎｏ．５３偽骸神Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨ〉★５　悪魔族　闇属性　ＡＴＫ１００

「Ｎｏ．５３偽骸神Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨ……うっ!?」

五味君が特殊召喚したＨｅａｒｔ―ｅａｒｔＨを見た瞬間、突然視界がノイズに包まれ、頭の中に見たことのないイメージが流れ込んでくる。

『これがＮｏ．の頂に立つ最強のＮｏ．!?超然の鎧を纏い、世界を震撼させよ!?現れろ、Ｎｏ．５３偽骸神Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨ!?』

『見るがいい、これがＨｅａｒｔ―ｅａｒｔＨの真の姿ーーー』

「っ!?今のは……天神先生のデュエルでも見えた……」

「栗原先輩!?大丈夫ですか!?」

「っ、うん!?大丈夫!?」

心配そうな表情を浮かべる刀花ちゃんに返事をしながら、Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨを見つめる。

確かに感じる。

Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨ……ううん、その先にある真の姿から……アンチホープ達と同じ……私と繋がっているあの感覚を。
あの姿になられたら大変なことになる。
どうにかして、あの姿になられる前に五味君を倒さないと‼？
「クックック、楽しみだよ。お前が苦痛に喘ぐ姿がなぁ。俺はカードを３枚伏せてターンエンド」
「なら、メインフェイズ２終了時、墓地の絶対王バックジャックを除外して効果発動‼？相手ターンに墓地のこのカードを除外して自分のデッキの一番上のカードをめくり、そのカードが通常罠カードだった場合、自分フィールドにセットし、違った場合、そのカードを墓地へ送ります。そして、この効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できます」
「チッ、お前のデッキの上は操作されていたな……」
「はい。絶対王バックジャックの効果で操作済みです。絶対王バックジャックの効果でデッキの上をめくります‼？めくられたのは通常罠、バトルマニア‼？通常罠カードなのでセットされます」
「チッ、面倒なものを……エンドフェイズ、右手に盾を左手に剣をの効果が消え、アーティファクト―カドケウスの攻守は元に戻る」
アーティファクト―カドケウス
ＡＴＫ２４００→１６００　ＤＥＦ１６００→２４００

遊花　ＬＰ８０００　手札２
ー―▲―ー　ー
ー―ー―ー
ー　ー
ー―○○ー
ー▲▲▲ー　ー
宝生　ＬＰ８０００　手札０

「私のターン、ドロー‼？　私は、今ドローした占い魔女　ヒカリちゃんの効果発動‼？このカードをドローした時、このカードを相手に見

せることで手札から特殊召喚します!!?」

〈占い魔女　ヒカリちゃん〉☆1　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

フィールドに現れたのは太陽の形をしたステッキを持った黄色い髪の女の子。
現れたヒカリちゃんは嬉しそうにニコニコと笑い、ステッキをブンブンと振いながらもう片方の手で私に向かってピースサインをする。
うん、あなたの力、貸して貰うね!!?
「占い魔女　ヒカリちゃんの効果発動!!?このカードが手札からの特殊召喚に成功した場合、自分フィールドのモンスター1体を対象として、そのモンスターを墓地へ送り、デッキから魔法使い族・レベル1モンスター1体を特殊召喚します!!?私は占い魔女　ヒカリちゃんを墓地へ送り、デッキからミスティックパイパーを特殊召喚!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆1　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

ヒカリちゃんが一礼をしてからステッキを振るうと、ヒカリちゃんの身体が光に包まれて霧散する。
そして霧散した光が再び集まると、そこにフルートのようなものを弾いている男の人が現れた。
「そいつは知っているぞ。リバースカードオープン!!?罠発動、アーティファクトの神智!!?　このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できず、このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行えない。デッキからアーティファクトモンスター1体を特殊召喚する!!デッキより?現れよ、アーティファクト―ベガルタ!!?」

〈アーティファクト―ベガルタ〉☆5　天使族　光属性
ＤＥＦ２１００

「っ、また……!!?」
「特殊召喚されたアーティファクト―ベガルタの効果、それにチェーンしてアーティファクト―カドケウスの効果発動!!相手ターン中にアーティファクトと名のついたモンスターが特殊召喚された時、カードを1枚ドローする!!?さらにアーティファクト―ベガルタの効果発動!!?自分フィールド上にセットされたカードを2枚まで選んで破壊する!!?そして破壊されたアーティファクト―モラルタの効果、アーティファクト―デスサイズの効果発動!!?魔法&罠カードゾーンにセットされたこのカードが相手ターンに破壊され墓地へ送られた時、このカードを特殊召喚する!!?現れよ、アーティファクト―モラルタ!!?アーティファクト―デスサイズ!!?」

〈アーティファクト―モラルタ〉☆5　天使族　光属性
ＤＥＦ１４００

〈アーティファクト―デスサイズ〉☆5　天使族　光属性
ＤＥＦ９００

フィールドにベガルタに似た青き紋様を持つ機械仕掛けの片手剣と漆黒の機械仕掛けの大鎌が現れる。
「特殊召喚されたアーティファクト―モラルタの効果、それにチェーンしてアーティファクト―デスサイズの効果、さらにチェーンしてアーティファクト―カドケウスの効果を2回発動!!アーティファクト―モラルタとアーティファクト―デスサイズが特殊召喚されたことでカードを2枚ドローする!!?さらにアーティファクト―デスサイズの効果発動!!?　相手ターンに、このカードが特殊召喚に成功した場合、このターン、相手はＥＸデッキからモンスターを特殊召喚できない!!?」
「っ!??ＥＸデッキ封じのアーティファクトっ!!?」
デスサイズから闇の波動が放たれ、私のＥＸデッキが闇に包まれ

る。
　これは一気にＨｅａｒｔ―ｅａｒｔＨを攻略するのが難しくなったね。
「さらにアーティファクト―モラルタの効果発動!!?相手ターンに、このカードが特殊召喚に成功した場合、相手フィールドの表側表示のカード1枚を選んで破壊する!!?消え去れ、ミスティックパイパー!!?」
「っ、ミスティックパイパー!!?」
　モラルタの放つ青い斬撃を受け、ミスティックパイパーは無念そうに消えていく。
　満足に効果も使ってあげられなくてゴメンね、ミスティックパイパー……でも、あなたの犠牲は無駄にはしないから!!?
「これでお前のドロー手段は潰した。残念だったな」
「それはどうかな？」
「何？」
「さっきまでなら無理でした。でも、あなたが動いてくれたから、私も動くことができます!!?魔法カード、三戦の才!!?このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できず、このターンの自分メインフェイズに相手がモンスターの効果を発動している場合、3つの効果から1つを選択して発動できる!!?1つ目が自分はデッキから2枚ドローする効果、2つ目が相手フィールドのモンスター1体を選び、エンドフェイズまでコントロールを得る効果、3つ目が相手の手札を確認し、その中からカード1枚を選んでデッキに戻す効果です!!?」
「なっ!?禁止カード級の効果を選んで発動できる魔法カードだと!?」
「私は1つ目を選択してカードを2枚、ドローします!!?よし!!?金華猫を召喚!!?」
〈金華猫〉☆1　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のようなモンスター。
「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル1モンスターを特殊召喚します!!?戻ってきて、ミスティックパイパー!!?」
〈ミスティックパイパー〉☆1　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

金華猫に導かれ、再びミスティックパイパーが姿を現し、こちらを見て嬉しそうに笑いながらサムズアップをする。
そんなミスティックパイパーに私も笑顔でサムズアップを返した。
うん、君の力貸して貰うね!!?
「チッ、蘇ってきたか……」
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを1枚ドロー!!?私が引いたのはクリボーン!!?レベル1モンスターだからもう1枚ドロー!!?」
私が勢いよくドローすると、手札に存在した1枚のカードから自己主張をするように黒い闇が溢れ出す。
……ここは任せろって言ってるんだね。
分かった、君を信じるよ。
「私はカードを2枚伏せてターンエンド!!?エンドフェイズ、金華猫はスピリットモンスターなので手札に戻ります」

遊花　ＬＰ８０００　手札２
ー▲▲▲ー　　ー
ーーーーー
ー　　ー
□□○○□
ーーーーー　　ー
宝生　ＬＰ８０００　手札３

「チッ、しぶとい。俺のターン、ドロー!!?」

「スタンバイフェイズ⁉？リバースカードオープン⁉？罠発動⁉？バトルマニア⁉？さらにチェーンしてリバースカードオープン⁉？罠発動⁉？竜嵐還帰⁉？このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できませんが、除外されている自分または相手のモンスター1体を対象としてそのモンスターを自分フィールドに特殊召喚します⁉？ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに持ち主の手札に戻る⁉？除外から戻ってきて、絶対王バックジャック⁉？」

〈絶対王バックジャック〉☆1　悪魔族　闇属性

ＤＥＦ０

私のフィールドに機械の身体を持つ人型の悪魔が現れる。

「そしてバトルマニアの効果で相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターは全て攻撃表示になり、このターン表示形式を変更する事はできない⁉？また、このターン攻撃可能な相手モンスターは攻撃しなければならない⁉？」

「チッ、面倒な。何が狙いかは知らんが、そう簡単に乗るとは思わないことだ⁉？亡失せよ⁉？塵芥漂うサーキット⁉？」

「リンク召喚ですか……」

五味君がそういって手を前に突き出すと、巨大なサーキットが現れる

「召喚条件はカード名が異なるモンスター2体⁉？俺はアーティファクト―デスサイズとアーティファクト―カドケウスの2体をリンクマーカーにセット⁉？サーキットコンバイン⁉？リンク召喚⁉？リンク2⁉？アーティファクト―ダグサ⁉？」

〈アーティファクト―ダグサ〉ＬＩＮＫ　２　天使族　光属性

ＡＴＫ１５００　↙？　↘？

デスサイズとカドケウスの2体がサーキットの中に消えると代わ

りに現れたのは機械仕掛けの巨大な棍棒。
「まだまだ行くぞ‼？俺はレベル５のアーティファクト―ベガルタ、アーティファクト―モラルタでオーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」
「今度はエクシーズ召喚……」
ベガルタとモラルタが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、空から落ちてきたのは機械仕掛けの巨大な大剣。
「不滅の力を持つ刃よ‼？全ての理を塗り替えろ‼？現れろ‼？アーティファクト―デュランダル‼？」
〈アーティファクト―デュランダ〉★５　天使族　光属性
ＡＴＫ２４００
「アーティファクトのエクシーズモンスターですか……」
「Ｎｏ．５３偽骸神Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨはバトルマニアの呪縛から逃れることはできないが、それでもお前のフィールドにいる雑魚を屠ることぐらい造作もない‼？だが、まだだ‼？魔法カード、エクシーズギフト‼？それにチェーンしてアーティファクト―ダグサの効果発動‼？大いなる知恵の権力者（ルアドロエサ）‼？このカード以外のフィールドのカードの効果が発動した時、手札・デッキからアーティファクトモンスター１体を選んで、魔法カード扱いとして自分の魔法＆罠ゾーンにセットする‼？ただし、この効果でセットしたカードは次の相手エンドフェイズに破壊される‼？俺はデッキからアーティファクト―カドケウスをセットする‼？」
「っ、またアーティファクト―カドケウスが……」
「そしてエクシーズギフトの効果‼？自分フィールド上にエクシーズモンスターが２体以上存在する場合に発動でき、自分フィールド上のオーバーレイユニットを２つ取り除き、デッキからカードを２枚ドローする‼？私はＮｏ．５３偽骸神Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨのオー

バーレイユニットを２つ取り除き、カードを２枚ドローする!!?」
　五味君のフィールドにカドケウスがセットされ、さらにカードが２枚ドローされる。
　マズい。
　ドローされたことがじゃなくて、Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨのオーバーレイユニットが減ったことがマズい。
　時間はあまり残されていない。
　五味君を早く倒さないと大変なことになる。
　……だから!!?
「バトル!!?Ｎｏ．５３偽骸神Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨで絶対王バックジャックを攻撃!!?」
「お願い、貴方の力を私に貸して!!?相手モンスターの攻撃宣言時、手札のダークネスネオスフィアの効果発動!!?自分の手札・フィールド上から悪魔族モンスターをそれぞれ１体ずつ墓地へ送る事でのみ、このカードを手札から特殊召喚する事ができます!!?」
「っ!?!?特殊な召喚条件のモンスターだと!?!?だが、どんなモンスターだろうと出て来れなければ意味がない!!?チェーンしてアーティファクト―デュランダルの効果発動!!?記憶を断つ剣（ドウリンダナ）!!?１ターンに１度、以下の効果から１つを選択して発動でき、この効果は相手ターンでも発動できる!!?１つ目はフィールドのモンスターの効果が発動した時、または通常魔法・通常罠カードが発動した時、このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除いてその効果を相手フィールドの魔法・罠カード１枚を選んで破壊するに書き換える効果!!?そして２つ目はこのカードのオーバーレイユニットを１つ取り除いてお互いは手札を全てデッキに戻してシャッフルする。その後、お互いはそれぞれ自身がデッキに戻した数だけデッキからドローする効果だ!!?」
「っ!?!?相手のカード効果や手札を書き換えるエクシーズモンスター!?!?」
「俺が選択するのは２つ目の効果だ!!?手札からいなくなれば特殊召喚もできまい!!?」

「そんな効果、通さなければいいだけです!!?さらにチェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?巨神封じの矢(ティタノサイダー)!!?　このカード名の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できず、EXデッキから特殊召喚された相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてそのモンスターの攻撃力を0にし、その効果を無効にする!!?対象はアーティファクト―デュランダルです!!?」

「何だと!?」

私の手元に巨大な神弓と弓矢が現れる。

私は足を開いて姿勢を整えると、弓に矢をつがえ、デュランダルに向けて巨神封じの矢を放つ。

放たれた巨神封じの矢がデュランダルを貫くと、デュランダルは機能を停止した。

アーティファクト―デュランダル
ＡＴＫ２４００→０

「これでアーティファクト―デュランダルの効果は無効になりました!!?もう止められるものはありません!!?　私は、フィールドの悪魔族モンスター、絶対王バックジャックと、手札の悪魔族モンスター、クリボーンを墓地に送る!!?」

フィールドにいたバックジャックと手札から現れたクリボーンの姿が粒子に変わる。

そしてその粒子が集まり現れたのは、深い闇を纏う、天使と悪魔の羽根を持つ人型のモンスター。

「おいで!!?闇夜に紛れる不可視の天体!!?ダークネスネオスフィア!!?」

〈ダークネスネオスフィア〉☆１０　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ４０００

「馬鹿な!!?守備力４０００のモンスターだと!!?」

「何だと⁉”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”め……まだこんな隠し球を持っていたとは……」
「凄い……栗原先輩はこんなモンスターまで扱えるんだ……」
フィールドに降臨したネオスフィアを見て、五味君だけじゃなく真紅ちゃん達も圧倒されている。
無理も無いとは思うけどね。
ネオスフィアは闇のカードの中でも一線を画する……世界を滅ぼしかねない、”砕け得ぬ闇の天体”なのだから。
「あなたのＮｏ．５３偽骸神Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨはバトルマニアによる制約を受けてます⁉？この攻撃は止められません⁉？さらに墓地に送られた絶対王バックジャックの効果発動⁉？墓地へ送られた場合、自分のデッキの上からカードを３枚確認し、好きな順番でデッキの上に戻します⁉？」
「っ、クソッ⁉？Ｎｏ．５３偽骸神Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨでダークネスネオスフィアを攻撃⁉？偽・神の手（フェイクゴットハンド）⁉？」
「迎え撃って、ダークネスネオスフィア⁉？ヘブンリィダークネス⁉？」
Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨがネオスフィアに向かって腕を振り下ろすが、直撃する瞬間にネオスフィアの身体が闇に溶けるように消え、Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨの頭上に現れる。
ネオスフィアがＨｅａｒｔ―ｅａｒｔＨに向けて異形の手をかざすと幾千もの白と黒の光弾がＨｅａｒｔ―ｅａｒｔＨを囲むように浮かび上がる。
ネオスフィアが手を振り降ろすと、幾千もの白と黒の光弾がまるで流星群のようにＨｅａｒｔ―ｅａｒｔＨに降り注いだ。

宝生　ＬＰ８０００→４１００

「ぐぬぅぅっ⁉？やってくれる⁉？この屈辱、必ず返してくれる⁉？メインフェイズ２⁉？俺はカードを４枚伏せてターンエンドだ⁉？」
「なら、メインフェイズ２終了時、再び墓地の絶対王バックジャックを

除外して効果発動!!?デッキの上をめくり、めくられたのは通常罠、裁きの天秤!!?」
「何!?そのカードは……!?」
「通常罠カードなのでセットされます!!?そしてエンドフェイズにリバースカードオープン!!?罠発動!!?裁きの天秤!!?相手フィールドのカードの数が自分の手札・フィールドのカードの合計数より多い場合に発動でき、自分はその差の数だけデッキからドローします!!?」
「ぐっ、お前……!!?」
「五味君のフィールドのカードは8枚、私は裁きの天秤、ダークネスネオスフィア、そして手札1枚の3枚!!?その差分の5枚のカードをドローします!!?」
私が勢いよくデッキからカードをドローすると、ドローしたカードの内の1枚から黒い闇が溢れ出すと、デュエルディスクのEXデッキが入ってある部分に纏わり付いた。
……あなたを使ってあの子を呼べって言ってるんだね。
分かった、あなた達の力、貸して貰うね。
「っ、やってくれる……!!?」
「エンドフェイズ、巨神封じの矢の効果が消え、アーティファクト―デュランダルは元の力を取り戻します」

アーティファクト―デュランダル
ＡＴＫ０→２４００

遊花　ＬＰ８０００　手札６
ー ー ー ー ー ー　ー
ー ー □ ー ー
ー　☆
ー ー ○ ○ ー
▲▲▲▲▲　ー
宝生　ＬＰ４１００　手札１

手札は増え、ネオスフィアを呼び出し五味君に大ダメージを与えることもできた。
とはいえ、五味君には再び５枚のセットカードがあり、Ｎｏ．　であり、まだ強力な力を残しているＨｅａｒｔ―ｅａｒｔＨとこちらのカード効果を書き換えるデュランダルは健在。
だけどーーー
「見えました……あなたの攻略法!!?」
「何!?」
私の言葉に五味君が目を見開く。
そんな五味君に、私は確かな自信を持って口を開く。
「五味君……あなたを、攻略します!!?」
「っ、戯言を!!?」
「戯言かどうか、その身で確かめてください!!?私のターン、ドロー!!?このカードは手札から攻撃表示で特殊召喚できます!!?おいで、ジェスターコンフィ!!?」
〈ジェスターコンフィ〉☆１　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０

現れたのは球に乗った道化師のモンスター。
「導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「リンク召喚か……」
私が正面に手をかざすと、目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル１モンスター１体。私はジェスターコンフィをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚!!?希望の守り手!!?リンク１!!?リンクリボー!!?」
〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

ジェスターコンフィがサーキットに吸い込まれると、代わりに青い球体のモンスターが私の前に元気一杯に飛び出してくる。
「さらに手札からジェットシンクロンを捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動!!?デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚します!!?おいで、ヒヤリ@イグニスター!!?」

〈ヒヤリ@イグニスター〉☆1　サイバース族　水属性
ＤＥＦ４００

現れたのは小さな水球のようなモンスター。
「リンクリボーをリリースし、ヒヤリ@イグニスターの効果発動!!?このカード以外の自分フィールドのサイバース族モンスター1体をリリースしてデッキからレベル5以上の@イグニスターモンスター1体を手札に加え、このカードのレベルをターン終了時まで4にする。さらにこの効果を発動するためにリンクモンスターをリリースした場合、さらにデッキからＡｉの儀式1枚を手札に加えるよ!!?」
「っ、一気に儀式モンスターと儀式魔法を手札に加えるつもりか!!?ならば、チェーンしてアーティファクト―デュランダルの効果発動!!?記憶を断つ剣(ドウリンダナ)!!?私は1つ目の効果を適用し、オーバーレイユニットを1つ取り除いてヒヤリ@イグニスターの効果を相手フィールドの魔法・罠カード1枚を選んで破壊するに書き換える!!?」
「仕方ありませんね。破壊するのはアーティファクト―ダグサによってセットされたアーティファクト―カドケウスです!!?」
デュランダルの身体から青い稲妻が放たれ、ヒヤリの身体を貫くと、ヒヤリの身体から勝手に水流が溢れ出し、五味君のセットカードを貫く。
破壊されたセットカードが爆散したかと思うと、煙の中からカドケウスが姿を現した。
「アーティファクト―カドケウスの効果発動!!?現れよ、アーティファクト―カドケウス!!?」

〈アーティファクト―カドケウス〉☆５　天使族　光属性
ＤＥＦ２４００
「でも、これでもうアーティファクト―デュランダルは使えません‼？いくよ、導いて‼？希望に繋がるサーキット‼？」
「またリンク召喚か‼？」
「召喚条件はレベル４以下のサイバース族モンスター１体。私はヒヤリ＠イグニスターをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚‼？希望の詰め手‼？リンク１‼？リングリボー‼？」
「リングリボー……だと？」
〈リングリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　↙？

ヒヤリがサーキットに吸い込まれると、代わりにリンクリボーの目付きを鋭くしたような青い球体のモンスターが飛び出してくる。
現れたリングリボーは私の足元にくるとジーッと私を見つめてくる。
私はそんなリングリボーを見て、思わず笑みを浮かべるとしゃがみ込んでリングリボーの身体を優しく撫でる。
身体を撫でられたリングリボーはプイッと顔を背けるも、どこかやる気に満ちた雰囲気で五味君を睨みつけた。
うん、最後の詰めは頼んだよ、リングリボー。
「これで準備は整いました‼？このモンスターは自分の墓地にモンスターが１０体以上存在する場合のみ特殊召喚する事ができる‼？」
「っ⁉？また聞いたことがない特殊召喚条件だと⁉？」
私の呼び声に呼応するかのように、私の背後に巨大な大樹が現れる。
そして大樹から１０の光が溢れ、光の線で結ばれていくと、大樹の中から現れたのは機械の身体を持つ巨大な天使にして、時を司り、世

界を壊してでも世界を救おうとした究極の神。
「おいで‼?時空を超え、希望を導く叡智の神‼?究極時械神セフィロン‼?」
〈究極時械神セフィロン〉☆１０　天使族　光属性
ＡＴＫ４０００
「馬鹿な⁉?２体目のレベル１０モンスターだと⁉?」
フィールドに現れたセフィロンと、私を守るように立っていたネオスフィアが私を見る。
分かってる。
あなた達がやれって言うのなら、それはきっと必要なことなんだよね。
私のＥＸデッキから伝わる鼓動に応えるように正面に手をかざし、その言霊を告げる。
「私はレベル１０のダークネスネオスフィアと究極時械神セフィロンでオーバーレイ‼?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼?」
「馬鹿な⁉?ランク１０のエクシーズ召喚だと⁉?」
ネオスフィアとセフィロンが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして空に浮かんだ混沌の渦が弾けると、空から舞い降りたのは紅いマフラーをたなびかせ、巨大な盾と二振りの大剣を身に付けた漆黒の戦士。
「おいで、Ｎｏ．　ＸＸ（ダブルエックス）‼?永遠（とわ）に続く闇の中でも、希望は輝き運命（さだめ）を変える‼?見参、インフィニティダークホープ‼?」
〈Ｎｏ．ＸＸ　インフィニティダークホープ〉★１０　戦士族　闇属性
ＡＴＫ４０００

「Ｎｏ．だと⁉？何故お前が……⁉？」
「まだです⁉？私は金華猫を召喚⁉？」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

「金華猫の効果発動⁉？召喚した時、墓地に存在するレベル１モンスターを特殊召喚します⁉？戻ってきて、ミスティックパイパー⁉？」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

「チッ、再び蘇ってきたか……」
「ミスティックパイパーの効果発動⁉？このカードをリリースして自分のデッキからカードを１枚ドロー⁉？私が引いたのはジャンクリボー⁉？レベル１モンスターだからもう１枚ドローします⁉？さらに墓地に存在するジェットシンクロンの効果発動⁉？手札を１枚墓地に送り、墓地からこのカードを特殊召喚する⁉？ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合、除外される⁉？」

〈ジェットシンクロン〉☆１　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

現れたのは小さなジェット機のような機械のモンスターが私の周りを飛び回る。
現れたジェットシンクロンを見て私は思わず笑みを浮かべる。
天神先生。
あなたが仕組んだことかは私には分かりません。
ですが、マスタールールが変わったことで、私はもっと、先に行ける⁉？

「私はレベル１の金華猫とジェットシンクロンでオーバーレイ!!?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
「っ!!?次はランク１のエクシーズ召喚か!!?」
金華猫とジェットシンクロンが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして、渦が弾けると、舞い降りたのは金色の翼を持つ小さな戦士。
私が呼ぶ小さき希望。
「おいで、Ｎｏ．３９!!?小さき希望は、逆境の中で進化を遂げる!!?希望皇ホープルーツ!!?」

〈Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツ〉★１　戦士族　光属性
ＡＴＫ５００

「２体目のＮｏ．だと!?」
「行きます!!?バトル!!?Ｎｏ．ＸＸ　インフィニティダークホープでアーティファクト―ダグサを攻撃!!?そしてＮｏ．３９　希望皇ホープルーツの効果発動!!?ムーンバリアオリジン!!?自分または相手モンスターの攻撃宣言時、このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除いてそのモンスターの攻撃を無効にし、そのモンスターがエクシーズモンスターだった場合、このカードの攻撃力はそのモンスターのランク×５００ポイントアップします!!?」
「何だと!?だが、その前にそいつらを倒してしまえばいいだけだ!!?チェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?邪神の大災害!!?相手モンスターの攻撃宣言時にフィールドの魔法・罠カードを全て破壊する!!?これでセットしてあるアーティファクト―モラルタをーーー」
「そういうカードが仕掛けてあるって思ってました!!?さらにチェーンしてリングリボーの効果発動!!?スケープトラップ!!?相手が罠カードを発動した時、このカードをリリースしてその効果を無効にし除外する!!?」

「っ⁉？何だと⁉？」
リングリボーが粒子に変わり、発動しようとしていた邪神の大災害に纏わり付くと、邪神の大災害はウィルスに侵されたかのようにノイズが走り、消滅した。
「これで阻むものはなくなりました‼？Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツの効果によりオーバーレイユニットを１つ取り除いてＮｏ．ＸＸ　インフィニティダークホープの攻撃を無効にします‼？」
２体のホープが頷きあい、ダークホープがホープルーツに向けて一振りの大剣を投げるとホープルーツは背中の翼を盾に変えて弾き、空に舞った大剣を受け止め、その大剣から溢れ出す闇の力を浄化していく。
「Ｎｏ．ＸＸ　インフィニティダークホープのランクは１０‼？よって攻撃力は５０００ポイントアップします‼？」

Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツ
ＡＴＫ５００→５５００

「攻撃力５５００だと⁉？っ、これは……‼？」
「Ｎｏ．５３偽骸神Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨには１ターンに１度、このカードが攻撃対象に選択された時、このカードの攻撃力はエンドフェイズ時までその攻撃モンスターの元々の攻撃力分アップする効果があるハズです。ですが、Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツの元々の攻撃力は５００。それだけではＮｏ．３９　希望皇ホープルーツの攻撃は防げません‼？」
「っ⁉？何故お前がＮｏ．５３偽骸神Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨの効果を……⁉？」
「決めます‼？Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツでＮｏ．５３偽骸神Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨを攻撃‼？」
「クッ、Ｎｏ．５３偽骸神Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨの効果発動‼？偽・神殺し（フェイクゴットキラー）‼？１ターンに１度、このカードが攻撃対象に選択された時、このカードの攻撃力はエンドフェイズ時までその攻撃モンス

ターの元々の攻撃力分アップする‼？Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツの攻撃力は５００。よって攻撃力を５００ポイントアップする‼？」

Ｎｏ．５３偽骸神Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨ
ＡＴＫ１００→６００

「迎え撃て‼？Ｎｏ．５３偽骸神Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨ‼？偽・神の手（フェイクゴットハンド）‼？」

Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨが敗北を拒むかのようにホープルーツとダークホープに向かってその腕を振り下ろすが、２体のホープはその攻撃を掻い潜り空へと跳躍する。

「これで終わりです‼？偽りの神を蝕む呪いを解き放って‼？Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツ‼？　Ｎｏ．ＸＸ　インフィニティダークホープ‼？」

跳躍した２体のホープが空中で大剣を構えると、ホープルーツの大剣に光が、ダークホープの大剣に闇が集まっていく。

「ホープ剣ダブルクロスルーツスラッシュ‼？」

再び振るわれるＨｅａｒｔ―ｅａｒｔＨの腕に向けて２体のホープが大剣を振り下ろすと、Ｈｅａｒｔ―ｅａｒｔＨの身体がＸ字に斬り裂かれ、身体から闇を噴出させながらＨｅａｒｔ―ｅａｒｔＨは爆散した。

「ぐあぁぁぁぁぁぁ‼？」

宝生　ＬＰ４１００→０

ーーーーーー

「ふぅ……攻略完了、だね」

「闇のカードに操られてる人をノーダメージで……す、凄いです‼？栗原先輩‼？」

「ま、まぁ、我のライバルならば当然のことよな」
デュエルが終わり、私の後ろに下がっていた刀花ちゃんと真紅ちゃんの安心したような声が聞こえる。
私がホッと一息つくと、デュエルが終わって気絶してしまった五味君のデッキから2枚の闇のカードが宙に浮き、凄い勢いで回転しながら私の元に飛んできた。
「わわっ!!……?っと」
咄嗟にそのカードを受け止めるために手をかざすと、私の手の中に飛んできたカードが収まる。
手の中に収まったカード達は一瞬鈍い闇色に光った気がしたが、もう1度眺めてみてもそんな気配は全く無かった。
だけど、やっぱり感じる。
絶望神アンチホープ達と同じ……私と繋がっている感覚を。
このカードも……もしかしたらーーー
「……なんて、考えても仕方ないよね……うっ!?っ、あぁぁぁ!!?」
「栗原先輩!?」
「”小さな聖域の守護女神(リトルサンクチュアリガーディアン)”!?」
考えるのを止め、頭を振った瞬間、急に強い頭痛が襲ってきて、思わず頭を押さえてその場に膝をつく。
しばらく頭を押さえているとその頭痛はすぐに消えていった。
「大丈夫ですか!?栗原先輩!?」
「まさか、さっきのデュエルでどこか怪我をしたんじゃないだろうな!?」
「だ、大丈夫、大丈夫。ちょっと頭痛がしただけだから、平気、へっちゃらだよ。最近ちょっと多いんだよね」
心配そうな真紅ちゃん達に笑顔を見せて、立ち上がる。
やっぱり、ちょっと疲れてるのかな?
最近気を張ったデュエルばかりだし……
「……あれ?ここは……」
自分の体調の変化について考えていると、近くから五味君の惚けた

ような声が聞こえてきた。
「気が付きましたか？」
「あれ、えっと、あの３年生の先輩ですよね？あの、僕は……」
「あなたはここで気を失っていたんですよ。大丈夫ですか？」
「あ、はい。ありがとうございます。僕は大丈夫です」
私が手を差し伸べると、五味君は申し訳なさそうに私の手を掴み立ち上がる。
闇のカードから解放された五味君の声からは先程まで感じていた刺々しさはない。
これだけ大人しそうな五味君をあそこまで豹変させるんだから改めて闇のカードの危険性が分かる。
五味君を闇のカードから解放できたのはよかったんだけど、１つだけ問題があるとすれば……
「一体何があったんですか？」
「……すみません、気を失う前のことは思い出せなくて。誰かに見たこともないカードを渡されたような気はするんですけど……」
五味君が歯痒そうな表情を浮かべ首を傾げる。
やっぱり、五味君は闇のカードに操られていた時のことを覚えていない。
手かがりが得られるかと思ったけど、これでまた振り出しだね。
「とりあえず保健室に行った方が良さそうですね、気を失ってましたし」
「じゃあ、私が連れて行きますよ。栗原先輩は風紀委員会への報告もありますから」
「分かった。ありがとう、刀花ちゃん」
「いえいえ。これぐらい気にしないでください」
「ならば我は”規律の番兵（ディサプリンセンチネル）”を呼んできてやろう。汝は戦いのダメージを癒すがいい」
「ディサ？えっと……」
「風紀委員の方のことだと思いますよ」
「フッ、我が呪言に秘められし真実を見抜くとは……流石は我が朋

友だ、〝深淵の話し手（アビストーカー）〟‼?」
「あってるみたいですよ」
「……みたいだね」
何故か不敵な笑みを浮かべる真紅ちゃんを見て私は思わず苦笑いを浮かべる。
本当に、刀花ちゃんはなんで分かるんだろう?
私には全く分からないよ。
「では我は〝規律の番兵（ディサプリンセンチネル）〟を呼んでくるとしよう。汝は動くでないぞ、〝小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）〟」
「あ、うん。お願いね」
私の返事を聞くと真紅ちゃんはニヤリと笑うと、大袈裟にマントを翻し体育館から出て行く。
言動や行動には分からないところもあるけど、やっぱり真紅ちゃんは優しい子だね。
「それでは私も保健室にこの方を連れて行ってきますね」
「うん、刀花ちゃんもありがとう」
「いえいえ。それでは先輩、念のため私が肩を貸すので保健室まで行きましょう」
「あ、うん。ありがとう……あの‼?」
「うん?何かな?」
「ありがとうございました‼?」
刀花ちゃんに支えられながら、保健室に歩いて行こうとした五味君はいきなり私の方に振り返ると真剣な表情で頭を下げる。
「私はあなたを見つけただけたがら、お礼なんて別に……」
「いや、あの、なんかうまく言えないんですけど、僕、闇の中にいた気がするんです。何も見えなくて晴れることのない暗い闇の中に」
「っ……‼?」
五味君の言葉に私は少しだけ驚く。
まさか、覚えてる?
さっきの五味君とのデュエルを?
「そんな暗闇の中で、声が聞こえた気がするんです。闇を照らす、陽だ

まりのような優しい声が。根拠とか、ないんですけど。その声は先輩の声だった気がするんです。だから……」
五味君は1度顔を上げると、もう一度深く頭を下げる。
「僕を闇の中から救ってくれて、ありがとうございました」
「……何のことかは分からないけど、どういたしまして」
私の言葉を聞いて五味君はもう1度頭を下げると刀花ちゃんに連れられて体育館から出て行った。
2人が体育館から出て行くのを見送った後、私は思わず呟いた。
「あなたも今闇の中にいるんですか？紅葉さん」
脳裏に浮かんだのは、行方不明になっている私が私で在るために必要なことを教えてくれた優しい友人の姿。
きっと行方不明になっている人達は五味君のように晴れることのない呪われた闇の中に囚われてる。
そして闇のカードの呪いを祓うために、きっと私は戦うことになるだろう。
紅葉さんとも、きっと。
「必ず助けてみせます……絶対に、絶対です」
違うことが赦されない誓いを言霊に変え、胸に刻む。
私の力は……きっとそのためにあるのだから。
「……あ、そういえば‼？」
私はふと思い出してポケットにしまった操られていた五味君が投げてきたカードを改めてみる。
取り出したカードはやっぱり白紙のままだ。
「これ、どうしたらいいんだろう？」
白紙のカードからは闇のカードの時に感じた嫌な感じはしない。
だけど、元が闇のカードだったからこそ、放置しておくのも少し怖い。
「うーん……えっ？」
私が頭を悩ませていると、いきなり私のデュエルディスクから闇が溢れ出し、私が手にしていた白紙のカードを呑み込んだ。
私が慌ててデュエルディスクかやカードを取り出して見てみると、

白紙のカードを呑み込んだ闇を溢れ出させていたのは究極時械神セフィロンとＮｏ．ＸＸ　インフィニティダークホープのカードだった。
「えっ⁉？だ、ダメ‼？えっと、食べちゃ？いや、食べてるのかは分からないけど、と、とにかく呑み込んじゃダメ‼？ぺっ、して‼？ぺっ‼？」
　私の言葉が聞こえているのかいないのか、しばらくすると白紙のカードを覆っていた闇が霧散する。
「一体何が……えっ⁉？」
　今までにない出来事に戸惑いながら、私は改めて白紙のカードに目を向けると、そこにあったのはーーー
「新しいカードに変わってる？」
　ーーー白紙のカードではなく、イラストやテキストが記入されている1枚のカードが存在していた。

第８８話　不揃いな決闘者

○

「ふむふむ、貴重な情報ありがとうございました‼？」
「いえいえ‼？あ、あの‼？よかったら、サインを貰えませんか‼？」
「フッフッフ、勿論いいですよ。色々お話を聞かせて貰ったですから。でも、そんなメモ帳じゃ寂しいですよね？」
狼狽し若干怪しい挙動をしながらメモ帳を取り出した女性に、サインを強請られた少女ーーー雨夜　美傘は持っていたメモ帳をしまうとカバンからミニ色紙を取り出して、さらさらとサインを書き手渡した。
「っ‼？ありがとうございます‼？」
「えへへ。このことは内緒ですよ？それじゃあ、ありがとうございました‼？」
満面の笑みを浮かべる女性に、美傘は変装用のサングラスをずらして笑顔で口元に人差し指を当て、ウインクを決めながらその場を後にする。
少し離れた場所にあるベンチに腰をかけた美傘に、隣のベンチに座っていたパーカーを被った中性的な人物が声をかける。
「お疲れ様。相変わらず、美傘は人の話を聞くのとファンサービスが得意だよね」
「それを言うなら、夜ちゃんだって相変わらず、不思議なくらい周りに人が寄ってこないですよね」
そんな美傘の言葉に、声をかけた人物ーーー眼竜　夜は苦笑いを浮かべながらひらひらと手を振った。
「ちょっとした変装技術と視線誘導さえできればこのくらいはね」
「そういうのはあんまりだなぁ、私」
「まぁ、美傘は目立ちがり屋だからね」
「うっ、ソ、ソンナコトナイデスヨ……」
夜の言葉に美傘は思わず視線を逸らしながら消え入りそうな声で

答える。
美傘も夜もプロ決闘者として活動しているため、ケルンではかなりの有名人だ。
容姿も可愛らしいため、変装しないで街中を歩けばすぐに目を付けら、街中を歩けばファンに囲まれる……とまでは行かなくとも、行動に難儀するくらいには人を引き寄せてしまうのだ。
しかし、そこは流石と言うべきか、夜は非常に変装が上手い。
それは付き合いの長い美傘でもパッと見ではわからないほどだ。
今だって、周りに沢山の人がいるのにまるで夜に目をやることさえない。
何なら、周囲の人が無関心すぎて美傘は逆に怖いくらいだ。
視線誘導ーーーミスディレクションという手品などで種を仕込む時に行う技術を夜は普段から使いこなしていた。
「それで、何かわかったかい？天神　幻騎や行方不明になってるプロ決闘者やデュエルアカデミア生について？」
「めぼしい情報はまだないかなぁ。一応、似たような人を見かけたとか言う情報はあったけど、又聞きの話が多いから分からないんだよね。　どこまでが本物でどこまでが意図的な物か」
そう言って美傘はカバンからメモ帳を取り出すと、そこに記してある自分が集めた情報を整理しながら真剣な表情を浮かべる。
「まず天神　幻騎の目撃情報は完全にデマだと思うから気にしない。今までのことからして天神　幻騎ってかなり計画的に動いてるし、正体不明（アンノウン）の抹消者（イレイザー）とか言う情報を消せるような人間がいるんだもん。そんな迂闊な方法は取らないよ」
「……それなら調べる意味がなくないかい？」
「意味ならあるよ。偽の情報で居場所を絞らせるってことはそこに罠かそれに類するものがあるってことだと思うし。案外そういうところに正体不明（アンノウン）の抹消者（イレイザー）や行方不明のプロ決闘者がいるんじゃないかな」
「……自分を探ってる人間を消すためにってことかい？」
「推測に過ぎないけどね。遊騎さんが自由に動けない現状で突くのは

ちょっと危ないかなって感じだよね」
　冷静にそう言う美傘を見て、夜は何とも言えない表情で口を開く。
「なんだろう……美傘が真面目な表情で考察してるのって、すごく違和感あるね」
「なんでです⁉？美傘はいつも真面目ですよ⁉？」
「ごめんごめん。真面目にふざけてるんだよね」
「ふざけてないですよ⁉？みんなに笑顔になってもらうために一生懸命なだけですよ⁉？」
　衝撃を受けたように騒ぎ出す美傘に夜は苦笑いを浮かべる。
　その一生懸命さが空回りしてふざけてるように見えるというのを夜は言わないでおいた。
　そんなことを諭しても誰も幸せになれないからである。
「それで、他の情報は？」
「な、なんだかとても大事なことを簡単に流された気が……」
「今は緊急事態だからね」
「な、なんか納得がいかないけど……まぁいいですよ。デュエルアカデミア生の目撃情報ついての情報はある程度信用できると思う。言い方は悪いけど闇のカードに操られてるだけの捨て駒だろうから」
「それは同意だね。デュエルセキュリティには暴れてもその子にしか目がいかないだろうし。操られてるなんてオカルト的な領分は考慮もしないでしょ」
「こういう事件を調べる程にデュエルセキュリティの役立たずさがよく理解できるんだよね。闇さんが嫌悪するハズだよ」
　美傘と夜は同時にため息を吐く。
　遊騎のプロリーグ追放の件でデュエルセキュリティの信用がただでさえ下がっているというのに、さらに下がるのかと美傘は頭を抱えたくなる。
　しかし、普通は捜査をする上でオカルトを前提にする方がおかしいということに、闇のカードというオカルトに足を踏み入れはじめた美傘は気づいていない。
「とりあえずこれ以上は聞き込みでは難しそうかな。さっき聞いた情

報の中にこの近くで行方不明になったデュエルアカデミア生を見たって場所があったからちょっと調べてみよう‼?」
「大丈夫なのかい?必要以上に前のめりになると、足元掬われるよ?」
「そのために夜ちゃんがついててくれるんでしょ?」
「……まぁね。仕方ない、共犯者クンのためにも一肌脱ぐか」
楽しそうに笑う美傘に夜は肩をすくめながら苦笑する。
真実を追跡する者達はどこまでもマイペースだった。

ーーーーーーー

「一応目撃情報からするとこの辺のハズなんだけど……」
集めた情報をまとめたメモ帳を覗き込みながら美傘達がやってきたのはケルンの港湾エリアにある裏通りだった。
遊騎が遭遇した天神　幻騎との繋がりが疑われる人物、水喰　鱗之助が潜伏していると思われ、天神　幻騎の隠しアジトがあったエリア。
更には未だに闇のカードによって操られているデュエルアカデミア生の目撃情報の多数が湾岸エリアにあるため、美傘達が調査を行うのは当然だった。
「夜ちゃん、何か怪しげな雰囲気を感じたりとかする?」
「一応、闇のカードっぽい気配はするんだけど、それっぽい人も見つからないな」
美傘の言葉に夜は肩をすくめる。
とはいえ、当てが外れたからといって美傘達は特に気にしているわけではなかった。
今まで遊騎や闇が調べ、夜も独自に調べてきたのにほとんど情報を得られていない今回の事件。
街で聞き込みをしてすぐに結果が出る訳ではないことを2人はよく分かっていた。
「湾岸エリアも広いからね。今度は闇さん達も一緒にーーー」
そういって美傘が今日の調査を打ち切ろうとした時だった。

「んぎゃあああああああああ!!?!?」
「っ!??夜ちゃん!!?」
「ああ!!?」
突如裏路地に響き渡った叫び声に美傘達は叫び声が聞こえた方向に駆け出す。
美傘達が入り組んだ路地裏を奥へと進んでいくて、そこにはーーー
「新手か……ん?チッ、テメェらは……!!?」
「っ!!?　射手園　大和……!!?」
ーーー路地裏の壁にめり込んでいる男を冷たい目で見下ろす大和がいた。
『『真祖』……と『　奇行の魔術師』か……」
「今絶対違う字で言ったですよね!?『気虹の魔術師』ですからね!?」
夜を睨みながら呟く大和に美傘が吠える。
『気虹の魔術師』は天気とオッドアイズによる立体映像を活かしな観客を魅力するデュエルを魅せる雨夜　美傘の持つ二つ名だ。
会場を様々な天気に染め上げ、様々な人を驚かしている美傘らしい二つ名であり、本人も気に入っていた。
……なお、偶に突拍子もない行動をするためにその二つ名に擬え『奇行の魔術師』と苦笑と共に呼ばれることもあるが。
「それはそれとして、あなたは射手園　大和さんですよね?夜ちゃんと同じプロチーム『Ｕｎｔｅｒｗｅｌｔ（ウンターヴェルト）』の」
「……昔の話だ」
美傘の質問に大和は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。
「そんなあなたがどうしてこんなところにいるんですか?」
「答える義理はねぇな」
「そういうわけにも行きません。この状況を見る限りの加害者はあなたです。ちゃんと話してくれないと、あなたが悪者になってしまうです!!?」
「チッ、甘ちゃんが……」
美傘が大和に質問している間にも夜は壁にめり込んでいる男性に

近づく。
男性は外傷はあるものの命に関わる怪我ということはなく、ただ気絶しているだけのようだった。
夜はホッと一息つくと、大和を睨みつけた。
「この人をやったのはキミかい？」
「だとしたら、なんだよ」
「……一応確認しておく。　闇のカードに操られていたこの人を倒し、闇のカードを回収したのはキミだね？」
「ああ」
大和の言葉に美傘が驚いたように目を見開く。
闇のカードを感じることができない美傘にとっては大和が闇のカードに操られ、男を傷つけたように見えるからだ。
大和の言葉を聞いた夜は睨みつけていたその目を更に鋭くして、口を開いた。
「ならーーーキミが持っている闇のカード、全部ボクに渡せ」
「……ほぉ」
「ちょっ、ちょっと、夜ちゃん⁉？」
夜の強気な言葉に美傘は目を丸くして驚き、大和は口元を綻ばせ笑っていない目で夜を見つめる。
「嫌だと言ったら？」
「そんなもの、決まってるだろう？」
そういうと夜はデュエルディスクを起動して、大和にむけて構えた。
それを見た大和は鼻で笑うと同じようにデュエルディスクを起動して夜に構えた。
「ハッ、面白え。いいだろう、お互いの闇のカードを賭けて、やろうぜ？『真祖』。いい加減、テメェともやり合わないといけないと思ってたんだ。テメェを倒すために、俺は地獄から這い上がってきたんだからな‼？」
「キミに闇のカードを使わせるわけにはいかない。キミの闇のカードはボクが回収する‼？いくよーーー」

『決闘!!?』

夜　ＬＰ８０００
大和　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は俺だ!!?テメェに勝つために手に入れた俺の力を見せてやる!!?中央に魔弾の射手カスパールを召喚!!?」

〈魔弾の射手カスパール〉☆３　悪魔族　光属性
ＡＴＫ１２００

大和のフィールドに現れたのはマントを羽織った悪魔の羽根を持ち、異形の手をした銃士。

「魔弾、だって?」

「さらにライフを２０００払って、中央で魔法カード、同胞の絆を発動!!?」

大和　ＬＰ８０００→６０００

「このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行えなくなる代わりに、自分フィールドのレベル４以下のモンスター１体を対象として、そのモンスターと同じ種族・属性・レベルでカード名が異なるモンスター２体をデッキから特殊召喚する!!?ただし、このカードの発動後、ターン終了時まで自分はモンスターを特殊召喚できない。魔弾の射手カスパールを対象に、来やがれ、魔弾の射手ドクトル、魔弾の射手ザキッド!!?それぞれ魔弾の射手カスパールの左右に特殊召喚だ!!?」

〈魔弾の射手ドクトル〉☆３　悪魔族　光属性

ＡＴＫ１４００

〈魔弾の射手ザキッド〉☆３　悪魔族　光属性
ＡＴＫ１６００

さらにカスパールに並び立つように同じように悪魔の羽根と異形の手を持つ医師とガンマンのモンスターが現れる。
「ここで魔弾の射手カスパールの効果発動だ。同名カードは１ターンに１度、このカードと同じ縦列で魔法・罠カードが発動した場合、発動したカードとカード名が異なる魔弾カード１枚をデッキから手札に加える。俺はデッキから速攻魔法、魔弾―クロスドミネーターを手札に加える!!?さらに魔弾の射手ザキッドと同じ縦列で魔法カード、精神統一を発動!!?同名カードは１ターンに１度、デッキから同名カード１枚を手札に加える。そして魔弾の射手ザキッドの効果を発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードと同じ縦列で魔法・罠カードが発動した場合、手札から魔弾カード１枚を捨てて自分はデッキから２枚ドローする。俺は手札の魔弾―クロスドミネーターを捨てて２枚ドローする!!?まだだ!!?魔弾の射手ドクトルと同じ縦列で魔法カード、一時休戦。お互いのプレイヤーは、それぞれデッキから１枚ドローし、次の相手ターン終了時まで、お互いが受ける全てのダメージは０になる。そして魔弾の射手ドクトルの効果発動。同名カードは１ターンに１度、このカードと同じ縦列で魔法・罠カードが発動した場合、その発動したカードとカード名が異なる魔弾カード１枚を自分の墓地から選んで手札に加える。俺は墓地に存在する魔弾―クロスドミネーターを手札に戻す!!?」
「っ、１ターン目から好き勝手してくれるね」
「はっ、なんとでもいいやがれ。俺は左端にカードを１枚伏せてターンエンドだ」

夜　ＬＰ８０００　手札６
ーーーーー　ー

ーーーーー
ー　　ー
ー○○○ー
▲ーーーー　ー
大和　ＬＰ６０００　手札５

「キミがどんな力を手に入れていたって、負けられないのはボクも同じだ‼?ボクのターン、ドロー‼?手札から馬頭鬼を捨てて右端から魔法カード、ワンフォーワンを発動‼?デッキからレベル１モンスター１体を特殊召喚する‼?　おいで、ヴァンパイアの使い魔‼?」

〈ヴァンパイアの使い魔〉☆１　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ０

現れたのは小さな蝙蝠のモンスター。
ヴァンパイアの使い魔は夜の肩に止まり、その首に牙を立てる。
「ヴァンパイアの使い魔の効果発動‼?このカードが特殊召喚に成功した場合、同名カードは１ターンに１度、５００ライフポイントを払って発動できる。デッキからヴァンパイアの使い魔以外のヴァンパイアモンスター１体を手札に加える。ボクは５００ライフポイントを支払いデッキからシャドウヴァンパイアを手札に加えるよ」

夜　ＬＰ８０００→７５００

「チッ、魔弾モンスターがいる場所を避けてきたか」
「魔弾モンスターの効果が発動するのは同じ縦列で魔法・罠カードが発動した時だって言ってただろ?自分のとは言わなかったところで読めてたよ。ヴァンパイアの使い魔をリリースしてシャドウヴァンパイアをアドバンス召喚‼?」

〈シャドウヴァンパイア〉☆５　アンデット族　闇属性

ＡＴＫ２０００

フィールドに現れたのは影のように薄く、黒く染まった巨大な吸血鬼。

現れたシャドウヴァンパイアは咆哮をあげる。

「シャドウヴァンパイアの効果発動!!?このカードが召喚に成功した時、手札・デッキからシャドウヴァンパイア以外の闇属性のヴァンパイアモンスター1体を特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚に成功したターン、そのモンスター以外の自分のモンスターは攻撃できない。ボクはデッキからヴァンパイアロードを特殊召喚する!!?」

〈ヴァンパイアロード〉☆5　アンデット族　闇属性

ＡＴＫ２０００

フィールドに現れたのは夜空のようなマントを羽織った吸血鬼。

「そして、このカードは通常召喚できず、自分フィールド上に存在するヴァンパイアロード1体をゲームから除外した場合のみ特殊召喚する事ができる!!?ボクはフィールドのヴァンパイアロードを除外する!!?」

ヴァンパイアロードがマントを翻すと、マントで隠れたヴァンパイアロードの身体が膨れ上がっていき、紫色の身体に爪のような物が背中から飛び出した始まりの吸血鬼が姿を現わす。

「現れろ。全ての吸血鬼を統べる真祖!!?ヴァンパイアジェネシス!!?」

〈ヴァンパイアジェネシス〉☆8　アンデット族　闇属性

ＡＴＫ３０００

「ヴァンパイアジェネシス……夜の切り札か。だが、テメェにそいつは使わせねぇ!!?手札から中央で罠発動!!?魔弾―デスペラード!!?」

「っ、手札から罠だって⁉？」
「悪いな。魔弾モンスターには永続効果としてモンスターゾーンに存在する限り、自分・相手ターンに自分は魔弾魔法・罠カードを手札から発動できんだよ⁉？魔弾―デスペラードの効果、同名カードは1ターンに1度しか発動できないが、自分フィールドに魔弾モンスターが存在する場合、フィールドの表側表示のカード1枚を対象としてそのカードを破壊する⁉？俺が破壊するのはヴァンパイアジェネシスだ⁉？」
　カスパールが放った弾丸をジェネシスは避けるが、魔弾は円を描くように曲がり、背後からジェネシスの身体を貫いて爆散させる。
「っ⁉？ヴァンパイアジェネシス⁉？」
「魔弾の射手カスパールの効果発動⁉？俺はデッキから罠カード、魔弾―ダンシングニードルを手札に加える⁉？」
「っ、まだまだ⁉？手札からヴァンパイアの眷属を墓地に送ってヴァンパイアの使い魔の効果発動⁉？同名カードは1ターンに1度、このカードが墓地に存在する場合、手札及び自分フィールドの表側表示のカードの中から、ヴァンパイアカード1枚を墓地へ送ってこのカードを特殊召喚する⁉？ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される⁉？」
「無駄だ⁉？手札から中央右で罠発動⁉？魔弾―ダンシングニードル⁉？同名カードは1ターンに1度しか発動できないが、自分フィールドに魔弾モンスターが存在する場合、お互いの墓地のカードを合計3枚まで対象としてそのカードを除外する⁉？」
「この状況で墓地除外だって⁉？」
「俺が除外するのはお前の墓地に存在するヴァンパイアの眷属、ヴァンパイアの使い魔、馬頭鬼だ⁉？」
　ドクトルが放った魔弾が墓地にいた夜のヴァンパイア達を撃ち抜き、消滅させていく。
　消えていくヴァンパイア達を見て、大和は不敵な笑みを浮かべる。
「吸血鬼の弱点は銀の弾丸（シルバーバレット）だろ？コイツらの魔弾はよく効くハズだ。言ったはずだぜ、『真祖』。俺はテメェを倒すためにこの力を手に入れ

たってな‼？魔弾の射手ドクトルの効果発動‼？俺は墓地に存在する魔弾―デスペラードを手札に戻す‼？」
「っ、本当に性格が悪いやつだな、キミは‼？」
「はっ‼？何とでも言えばいい。結局のところ、負けるやつが何を言っても言い訳にしかならないんだよ‼？」
「っ、言いたい放題言って‼？ボクは君なんかに負けない‼？シャドウヴァンパイアをリリースして魔法カード、モンスターゲート‼？自分フィールドのモンスター１体をリリースして通常召喚可能なモンスターが出るまで自分のデッキの上からカードをめくり、そのモンスターを特殊召喚し、残りのめくったカードは全て墓地へ送る‼？１枚目、魔法カード、黒き覚醒のエルドリクシル、２枚目、魔法カード、シャッフルリボーン、３枚目、モンスターカード、精気を吸う骨の塔‼？モンスターカードだから特殊召喚だ‼？」

〈精気を吸う骨の塔〉☆３　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ１５００

夜のフィールドに骨が組み合わさった不気味な塔が建築される。
建築された骨の塔を見て、大和は舌打ちをした。
「チッ、面倒なやつを……」
「さあ、今度はこちらから反撃させてもらうよ‼？まずは墓地に送られた黒き覚醒のエルドリクシルを除外して効果発動‼？このカードは２つの効果を持ち、同名カードその効果は１ターンに１度、いずれか１つしか使用できない。墓地のこのカードを除外してデッキから黄金郷魔法・罠カード１枚を選んで自分フィールドにセットする‼？ボクはデッキから永続罠、黄金郷のコンキスタドールをセット‼？そして魔法カード、強制転移‼？お互いはそれぞれ自分フィールド上のモンスター１体を選び、そのモンスターのコントロールを入れ替える‼？ただし、そのモンスターはこのターン表示形式を変更できない‼？ボクは君に精気を吸う骨の塔をあげるよ」
「チッ、面倒なものを押しつけやがって、俺は魔弾の射手ザキッドのコ

ントロールをテメェに移す!!?」
骨の塔とザキッドの周囲の空間が歪み、お互いの場所が入れ替わる。
「これで準備完了だ!!?魔法カード、ヴァンパイアデザイア!!?同名カードは1ターンに1枚しか発動できず、2つの効果から1つを選択して発動できる!!?1つ目は自分フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてそのモンスターのレベルと異なるレベルを持つヴァンパイアモンスター1体をデッキから墓地へ送り、対象のモンスターのレベルは、ターン終了時まで墓地へ送ったモンスターと同じレベルにする効果、もう1つは自分の墓地のヴァンパイアモンスター1体を対象として自分フィールドのモンスター1体を選んで墓地へ送り、対象のモンスターを特殊召喚する効果だ!!?ボクは2つ目の効果を使い、魔弾の射手ザキッドを墓地に送り、墓地より蘇れ、シャドウヴァンパイア!!?」

〈シャドウヴァンパイア〉☆5　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２０００

大量の蝙蝠が現れ、ザキッドの身体を喰らったかと思うと、フィールドにシャドウヴァンパイアが再誕する。
そしてシャドウヴァンパイアが現れると骨の塔から青い人魂が溢れ出す。
「ここで君のフィールドにいる精気を吸う骨の塔の効果が発動する。アンデット族モンスターが特殊召喚に成功する度に、相手のデッキの上からカードを2枚墓地へ送る」
骨の塔から溢れ出した青い人魂が夜のデッキへと向かって放たれ、夜のデッキが削られる。
すると、削られたハズのデッキから真紅の悪魔が現れる。
「精気を吸う骨の塔の効果で墓地に送られた闇より出でし絶望の効果発動!!?このカードが相手の効果で手札・デッキから墓地へ送られた時、このカードをフィールドに特殊召喚する!!?」

〈闇より出でし絶望〉☆８　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２８００

「チッ、悪運の強い奴め‼?」
「闇より出でし絶望もアンデット。特殊召喚したことで精気を吸う骨の塔の効果が発動し、ボクのデッキを削る‼?そして、魅力せよ‼?月夜に輝くサーキット‼?」
「リンク召喚か……」
少年が正面に手をかざし、巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はアンデットモンスター２体‼?ボクはシャドウヴァンパイアと闇より出でし絶望の２体をリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?リンク召喚‼?月下で戯れる吸血鬼‼?リンク２‼?ヴァンパイアサッカー‼?」

〈ヴァンパイアサッカー〉ＬＩＮＫ　２　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

ヴァンパイアロードと闇より出でし絶望がサーキットの中に消え、代わりに現れたのはピンクの帽子を被った吸血鬼。
「ヴァンパイアサッカーを特殊召喚したことで骨の塔の効果が発動し、ボクのデッキを削るよ‼?さらにヴァンパイアサッカーの効果発動‼?同名カードは１ターンに１度、相手の墓地のモンスター１体を対象としてそのモンスターを相手フィールドに守備表示で特殊召喚し、特殊召喚したそのモンスターはアンデット族になる。ボクは君のフィールドに君の墓地から魔弾の射手ザキッドを特殊召喚するよ‼?」

〈魔弾の射手ザキッド〉☆３　悪魔族→アンデット　光属性
ＤＥＦ２００

ヴァンパイアサッカーが墓地にいたザキッドに噛みつき、吸血鬼として大和のフィールドに蘇生させる。
「ヴァンパイアサッカーに蘇生された魔弾の射手ザキッドもアンデット!!?特殊召喚したことで精気を吸う骨の塔の効果が発動し、ボクのデッキを削る。それにチェーンしてヴァンパイアサッカーの効果発動!!?1ターンに1度自分・相手の墓地からアンデット族モンスターが特殊召喚された場合に自分はデッキから1枚ドローする!!?」
「チッ、ウザってぇ!!?」
「さらに精気を吸う骨の塔の効果で墓地に送られた闇より出でし絶望の効果発動!!?フィールドに特殊召喚!!?」

〈闇より出でし絶望〉☆8　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ３０００

「闇より出でし絶望を特殊召喚したことで精気を吸う骨の塔の効果が発動し、ボクのデッキを削る!!?さらに、フィールドにセットした黄金郷のコンキスタドールを墓地へ送り、墓地の黄金卿エルドリッチの効果発動!!?このカードも2つの効果を持ち、同名カードその効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドの魔法・罠カード1枚を墓地へ送ってこのカードを手札に加え、その後、手札からアンデット族モンスター1体を特殊召喚できる!!?この効果で特殊召喚したモンスターは相手ターン終了時まで、攻撃力・守備力が１０００ポイントアップし、効果では破壊されない!!?さあ、おいで死霊王　ドーハスーラを特殊召喚!!?」

〈死霊王　ドーハスーラ〉☆8　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ２０００→３０００　ＡＴＫ２８００→３８００

黄金の光に導かれて現れたのは髑髏の身体を持つ魔術師のような蛇。

「っ、そいつは!!?」
「精気を吸う骨の塔の効果、それにチェーンして死霊王ドーハスーラの効果発動!!?ゴーストグラジュエイト!!?死霊王　ドーハスーラ以外のアンデット族モンスターの効果が発動した時に2つある効果から1つを選んで適用する。ただし、このターン、自分の死霊王ドーハスーラの効果で同じ効果を適用できない。その効果を無効にするか、自分または相手の、フィールド・墓地のモンスター1体を選んで除外する!!?ボクは2つ目の効果を適用して魔弾の射手カスパールを除外する!!?」
　ドーハスーラの魔術でカスパールが闇に呑まれて霊魂に変わり、消滅する。
「エンドフェイズ、墓地の黄金郷のコンキスタドールを除外して効果発動!!?このカードも2つの効果を持ち、同名カードの効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。自分・相手のエンドフェイズに墓地のこのカードを除外してデッキからエルドリクシル魔法・罠カード1枚を選んで自分フィールドにセットする!!?ボクはデッキから罠カード、紅き血染めのエルドリクシルをセットしてターンエンドだ」

夜　ＬＰ７５００　手札１
ー▲ー　ー
ー□ー□
ー　☆
□□ー○ー
▲ーーー　ー
大和　ＬＰ６０００　手札５

「チッ、厄介な奴を出しやがって、だがその程度で俺を止められると思うなよ!!?俺のターン、ドロー!!?撃ち砕け!!?風穴開けるサーキット!!?」
「っ、リンク召喚か!!?」

大和が正面に手をかざすと大和の前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル８以下の魔弾モンスター１体!!?俺は魔弾の射手ザキッドをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク１!!?魔弾の射手マックス!!?」
〈魔弾の射手マックス〉ＬＩＮＫ１　悪魔族　光属性
ＡＴＫ１０００　←

ザキッドがサーキットに入り、代わりに出てきたのは灰色に肌と鋭い牙を持つ異形の射手。
「魔弾のリンクモンスター……」
「魔弾の射手マックスの効果発動!!?オールリローデッド!!?同名カードの効果は１ターンに１度しか発動できず、このカードがリンク召喚に成功した場合、２つの効果から１つを選択して発動できる!!?１つは相手フィールドのモンスターの数までデッキから魔弾魔法・罠カードを同名カードは１枚までとして手札に加える効果!!?そしてもう１つは相手フィールドの魔法・罠カードの数までデッキから魔弾モンスターを同名カードは１枚までとして特殊召喚する効果だ!!?」
「っ!?!?大量展開か大量サーチができるモンスター!?!?インチキ効果も大概にしなよ!?!?」
「知ったことか!!?嫌なら自分が展開するのを止めるんだな!!?俺は１つ目の効果を選択する。テメェのフィールドにいるモンスターは３体!!?俺はデッキから速攻魔法、魔弾―ネバーエンドルフィン、永続罠、魔弾―デビルズディール、カウンター罠、魔弾―デッドマンズバーストを手札に加える!!?俺は中央に魔弾の射手　スターを召喚!!?」
〈魔弾の射手スター〉☆４　悪魔族　光属性
ＡＴＫ１３００

現れたのは悪魔の羽根と異形の手を持つ踊り子のような姿のモン

スター。
「魔弾の射手スターと同じ縦列で魔法カード、精神統一を発動!!?デッキから同名カード1枚を手札に加える!!?そして魔弾の射手スターの効果を発動!!同名カードは1ターンに1度、このカードと同じ縦列で魔法・罠カードが発動した場合、デッキから同名カード以外のレベル4以下の魔弾モンスター1体を守備表示で特殊召喚する!!?来い、魔弾の射手カラミティ!!?」

〈魔弾の射手カラミティ〉☆4　悪魔族　光属性
DEF1300

スターに呼び出されたのは悪魔の羽根と異形の手を持つロケットランチャーを持った女性型のモンスター。
「手札の魔弾の悪魔ザミエルを捨て、？　魔弾の射手カラミティと同じ縦列で魔弾の射手カラミティと魔弾の射手スターを対象に、魔法カード、レベルマイスター!!?　手札のモンスター1体を墓地へ送り、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターを2体まで選択し、選択したモンスターのレベルはエンドフェイズ時まで、このカードを発動するために墓地へ送ったモンスターの元々のレベルと同じになる!!?魔弾の悪魔　ザミエルのレベルは8!!?よって、魔弾の射手カラミティと魔弾の射手スターのレベルは8になる!!?」

魔弾の射手カラミティ
☆4→8

魔弾の射手スター
☆4→8

「っ、レベル8モンスターが2体……」
「まだだ!!?魔弾の射手カラミティの効果を発動!!同名カードは1ターンに1度、このカードと同じ縦列で魔法・罠カードが発動した場

合、自分の墓地の魔弾モンスター1体を守備表示で特殊召喚する!!?
さあ早速出番だぜ!!?甦れ、魔弾を生み出しし堕天した天使達の長!!?魔弾の悪魔　ザミエル!!?」

〈魔弾の悪魔　ザミエル〉☆8　悪魔族　光属性
ＤＥＦ２５００

カラミティが地面に向かって弾丸を放つと、地面に魔法陣が展開され、魔法陣から銃士達と同じ悪魔の羽根を持ち、両手に銃を手にした双銃の悪魔が現れた。
「魔弾の悪魔　ザミエル……それがキミの今の切り札なのかい?」
「ああ、そしてこれがテメェを絶望に突き落とす力だ」
そういうと大和は不敵に笑い、正面に手をかざした。
「俺はレベル8となった魔弾の射手カラミティと魔弾の射手スターでオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
カラミティとスターが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると、そこに現れたのは空に浮かんだ巨大な牢獄。
「罪人を幽閉する摩天楼よ!!?全ての亡者を縛り付けろ!!?現れろ!!?Ｎｏ．６８魔天牢サンダルフォン!!?」

〈Ｎｏ．６８魔天牢サンダルフォン〉★8　岩石族　闇属性
ＡＴＫ２１００

「ランク8のＮｏ．……!?……また懲りずに闇のカードを!!?キミにそれが使いこなせるのか!!?　あの時、闇に呑まれたキミが!!?」
大和が呼び出したＮｏ．を見て、夜は怒りの形相を浮かべて吠える。
そんな夜を見て、大和は同じように怒りの形相を浮かべて夜を睨み

つけた。
「……あの時、俺は闇のカードによる煮湯を味わった。しかし、だからこそ今の俺がある!!?闇のカードを残さず根絶するためなら、闇のカードだろうと利用してやる!!?扱える!!?今の俺ならな!!?テメェを倒すために!!?　Ｎｏ．６８魔天牢サンダルフォンの効果発動!!?ヘブンズゲート!!?１ターンに１度、このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除き、相手ターン終了時まで、このカードは効果では破壊されず、お互いに墓地のモンスターを特殊召喚できない!!?」
「なっ!!?墓地封じ!!?」
　サンダルフォンがオーバーレイユニットを吸収すると、紫色に発光し身体からいくつもの鎖が放たれ、墓地に存在するモンスターを縛りつけると、自分の身体の中に収容する。
「テメェのデッキは墓地を利用することに長けている。コイツの効果は効くはずだぜ?」
「っ、本当に嫌な奴だなキミは!!?」
「はっ、なんとでもいいやがれ!!?　手札から中央で罠発動!!?魔弾―デスペラード!!?俺が破壊するのは闇より出でし絶望だ!!?」
　闇より出でし絶望がザミエルから放たれた魔弾に貫かれ、爆散する。
「バトルだ!!?魔弾の射手マックスで死霊王ドーハスーラを攻撃!!?ダメージステップ、魔弾の射手ドクトルと同じ縦列で速攻魔法、魔弾―クロスドミネーター!!?同名カードは１ターンに１度しか発動できないが、自分フィールドに魔弾モンスターが存在する場合、フィールドの表側表示モンスター１体を対象としてターン終了時まで、そのモンスターの攻撃力・守備力は０になり、効果は無効化される!!?対象は死霊王ドーハスーラだ!!?」
「っ!!?」

死霊王ドーハスーラ
ＤＥＦ３０００→０

ザミエルが魔弾でドーハスーラ弾き、のドーハスーラの体勢を崩させる。
「魔弾の射手ドクトルの効果発動!!?俺は墓地に存在する魔弾―ダンシングニードルを手札に戻す。そして、ぶち抜け、魔弾の射手マックス!!?ブラッディパトローネ!!?」
体勢が崩れたドーハスーラの頭をマックスが魔弾で貫き、爆散させた。
「くっ、ドーハスーラ!!?」
「次だ!!?魔弾の射手ドクトルでヴァンパイアサッカーを攻撃!!?ダメージステップ、中央で速攻魔法、魔弾―ネバーエンドルフィン!!?同名カードは1ターンに1度しか発動できないが、自分フィールドの魔弾モンスター1体を対象としてそのモンスターの攻撃力・守備力はターン終了時まで元々の数値の倍になる!!?ただし、このカードを発動するターン、対象のモンスターは直接攻撃できないがな。対象にするのは魔弾の射手ドクトルだ!!?」
ドクトルの銃に弾丸が装填され、銃から闇が溢れ出す。

魔弾の射手ドクトル
ＡＴＫ１４００→２８００

「貫け、魔弾の射手ドクトル!!?ギフトパトローネ!!?」
「ぐっ!!?」

夜　ＬＰ７５００→６３００

「これでテメェを守る肉壁はなくなった!!?Ｎｏ．６８魔天牢サンダルフォンの永続効果、バインドスピリット!!?　このカードの攻撃力・守備力は、お互いの墓地のモンスターの数×１００ポイントアップする!!?俺の墓地には魔弾の射手ザキッド、魔弾の射手スターの２体がいる!!?」

「っ、ボクの墓地にはモンスターは８体……」
「合計１０体、Ｎｏ．６８魔天牢サンダルフォンの　能力が１０００ポイントアップする‼？」

Ｎｏ．６８魔天牢サンダルフォン
ＡＴＫ２１００→３１００　ＤＥＦ２７００→３７００

「攻撃力、３１００‼？」
「Ｎｏ．６８魔天牢サンダルフォンでダイレクトアタック‼？ジャッジメントチェーン‼？」
サンダルフォンからいくつもの鎖が放たれ、夜の身体を縛り上げる。
そしてサンダルフォンの身体が発光したかと思うと、鎖を伝って夜に雷が放たれた。
「うわぁぁぁ‼？」

夜　ＬＰ６３００→３２００

「はっ、いい気味だな。俺はこれでターンエンドだ」

夜　ＬＰ３２００　手札１
ー▲ー　ー
ーーーー
☆　ー
□○○ー□
▲ーーーー　ー
大和　ＬＰ６０００　手札４

「夜ちゃん‼？」
「っ、大丈夫だよ」
鎖から解放され、その場に崩れ落ちる夜に美傘は慌てて駆け寄ろう

とするが、そんな美傘を夜は手で静止、ゆっくりと立ち上がる。
　そんな夜を見て、大和は心底不快そうに顔を顰める。
「はっ、テメェも変わらねぇじゃねぇか。嘘つきが」
「……」
「まあいい。テメェはここで潰す。そうじゃないと、俺はアイツに顔向けできねぇ」
「顔向けできないのは……」
「あ？」
「夜、ちゃん？」
　大和の吐き捨てるような言葉に夜は俯き、拳を握りしめる。
　そして次の瞬間、夜は暗い声でその思いの丈をのせ咆哮する。
「顔向けできないのはボクも同じなんだよ‼？キミに闇のカードを使わせたら、あの子になんて謝ればいいのさ‼？」
「っ‼？」
「ボクのターン、ドロー‼？ボクは堕ち武者（デスサムライ）を召喚‼？」

〈堕ち武者〉☆４　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ１７００

　フィールドに現れたのは顔だけになった侍の亡霊。
「堕ち武者の効果発動‼？このカードが召喚に成功した時、デッキからアンデット族モンスター１体を墓地へ送る‼？ボクはデッキからグローアップブルームを墓地に送る‼？そして墓地に落ちたグローアップブルームを除外して効果発動‼？このカードが墓地へ送られた場合、墓地のこのカードを除外してデッキからレベル５以上のアンデット族モンスター１体を手札に加え、フィールドゾーンにアンデットワールドが存在する場合、手札に加えず特殊召喚する事もできる。ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はアンデット族モンスターしか特殊召喚できない‼？ボクがこの効果で手札に加えるのは……ヴァンパイアフロイライン‼？」
「っ‼？『真祖』‼？テメェ‼？」

夜が手札に加えたフロイラインを見て、大和は怒りの形相で夜を睨みつける。
そんな大和を、同じように夜が怒りに染まった眼で睨みつける。
「うるさい‼?・キミにボクを非難する権利なんかあるものか‼?・バトル‼?・堕ち武者で魔弾の射手ドクトルを攻撃‼?・そして、攻撃宣言時‼?・ヴァンパイアフロイラインの効果発動‼?・モンスターの攻撃宣言時このカードを手札から守備表示で特殊召喚する‼?・」
〈ヴァンパイアフロイライン〉☆5　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ２０００
夜が叩きつけるようにフロイラインのカードをデュエルディスクにセットする。
しかし、確かに存在するはずのフロイラインはいつまでたってもフィールドに姿を現さない。
フィールドに姿を現さないフロイラインに美傘は首を傾げるが、大和は苦々しい表情で夜を見る。
「……テメェ、これはどういうことだ?」
「見ての通りだよ。それ以上の答えは必要ない‼?・アンデット族であるヴァンパイアフロイラインを特殊召喚したことで精気を吸う骨の塔の効果発動‼?・ボクのデッキを削りとる‼?・」
再び骨の塔から溢れ出した青い人魂が夜のデッキへと向かって放たれ、夜のデッキが削られる。
「さらに墓地の闇より出でし絶望を除外し、墓地に送られた牛頭鬼の効果、それにチェーンして墓地に送られたヴァンパイアソーサラーの効果発動‼?・このカードが相手によって墓地へ送られた場合にデッキから闇属性のヴァンパイアモンスター1体またはヴァンパイア魔法・罠カード1枚を手札に加える‼?・ボクはデッキから永続魔法、ヴァンパイアの領域を手札に加える‼?・そして牛頭鬼の効果発動‼?　このカードが墓地へ送られた場合、自分の墓地から同名カード以外のアンデット族モンスター1体を除外して手札からアンデット族

モンスター1体を特殊召喚する!!?現れろ、黄金卿エルドリッチ!!?」
墓地より現れた牛鬼が雄叫びを上げると、夜の手札より黄金の鎧を纏った亡者が姿を現す。
〈黄金卿エルドリッチ〉☆10　アンデット族　光属性
ＡＴＫ２５００
「チッ!!?また、わらわらと!!?」
「アンデット族である黄金卿エルドリッチを特殊召喚したことで精気を吸う骨の塔の効果発動!!?ボクのデッキを削りとる!!?さらに今墓地に送られた2枚目のヴァンパイアソーサラーの効果発動!!?ボクはデッキからヴァンパイアレッドバロンを手札に加える!!?さあ、まだボクの攻撃は続いているよ、堕ち武者で魔弾の射手ドクトルを攻撃!!?」
「チッ、魔弾の射手ドクトルと同じ縦列で永続罠、魔弾―デビルズディール!!?同名カードは1ターンに1度しか発動できないが、このカードが魔法＆罠ゾーンに存在する限り、自分フィールドの魔弾モンスターは効果では破壊されない!!?そして魔弾の射手ドクトルの効果発動!!?俺は墓地に存在する魔弾―クロスドミネーターを手札に戻す!!?」
「それがどうした!!?喰らえ、堕ち武者!!?デスバイト!!?」
堕ち武者が一瞬でドクトルの頭上に移動すると、頭からドクトルを喰い殺した。
大和　ＬＰ６０００→５７００
「くっ!!?ウザってぇ!!?」
「リバースカードオープン!!?罠発動!!?紅き血染めのエルドリクシル!!?このカードも2つの効果を持ち、同名カードの効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。自分のデッキ・墓地からア

ンデット族モンスター1体を選んで特殊召喚する!!?ただし、自分フィールドにエルドリッチモンスターが存在しない場合には、この効果でエルドリッチモンスターしか特殊召喚できず、このカードの発動後、ターン終了時まで自分はアンデット族モンスターしか特殊召喚できない!!?」

「っ、これ以上好き勝手させると思うな!!?手札からカウンター罠、魔弾―デッドマンズバースト!!?同名カードは1ターンに1度しか発動できないが、自分フィールドに魔弾モンスターが存在する場合、相手が魔法・罠カードを発動した時、その発動を無効にし破壊する!!?」

ザミエルが銃弾を放ち、紅き血染めのエルドリクシルを破壊する。

「それがどうした!!?メインフェイズ2、永続魔法、ヴァンパイアの領域を発動!!?1ターンに1度、５００ライフポイントを払ってこのターン自分は通常召喚に加えて1度だけ、自分メインフェイズにヴァンパイアモンスター1体を召喚できる!!?」

夜　ＬＰ３２００→２７００

「クソが!!?チェーンして手札から罠発動!!?魔弾―ダンシングニードル!!?俺が除外するのはお前の墓地に存在する2体のヴァンパイアソーサラーと死霊王ドーハスーラだ!!?タダで、ヴァンパイアレッドバロンは出させねぇ!!?」

「ボクは堕ち武者をリリースし、ヴァンパイアレッドバロンをアドバンス召喚!!?」

〈ヴァンパイアレッドバロン〉☆6　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２４００

堕ち武者の姿が闇に溶け、代わりに現れたのは赤毛の黒馬に乗る黒騎士。

「１０００ライフポイントを払い、ヴァンパイアレッドバロンの効果発動!!?」

夜　ＬＰ２７００→１７００

「１ターンに１度、１０００ライフポイントを払い、相手フィールドのモンスター１体とこのカード以外の自分フィールドのヴァンパイアモンスター１体を対象としてそのモンスター２体のコントロールを入れ替える‼？ボクが選ぶのは……ヴァンパイアフロイラインと魔弾の悪魔　ザミエル‼？キミの切り札はいただくよ‼？」

「なっ⁉？させるか‼？手札から速攻魔法、魔弾―クロスドミネーター‼？対象はヴァンパイアレッドバロン‼？ザミエルは渡さねぇ‼？」

レッドバロンが槍を振るうと空間が裂け、ザミエルを吸い込もうとするがザミエルが放った魔弾が空間の裂け目に放たれると、空間の裂け目が霧散した。

ヴァンパイアレッドバロン
ＡＴＫ２４００→０

「油断も隙もねぇな。だが、もうテメェには手札がねぇ。流石に万策尽きたようだな。諦めてさっさと楽になりな」

大和は嘲笑うような笑みを浮かべて夜を睨む。

そんな大和に苦しげな表情を浮かべながらも、尽きぬ闘志を秘めた目で夜は笑う。

「はっ、諦める？キミらしい、つまらない冗談だ」

「何だと？」

「まだデュエルは終わってない‼？例え万策尽きたとしても‼？一万と一つ目の手立てはきっとあるんだ‼？墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動‼？自分フィールドのカード１枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから１枚ドローする‼？」

「なっ⁉？まだそんなカードを……‼？」

「ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外する‼?ボクはフィールドのヴァンパイアの領域をデッキに戻し、カードを1枚ドローする‼?……っ‼?きた‼?」
「⁉?」
「ボクは魔法カード、アンデットネクロナイズを発動‼?　フィールドにレベル5以上のアンデット族モンスターが存在する場合、相手フィールドのモンスター1体を対象としてそのモンスターのコントロールをエンドフェイズまで得る‼?ボクが選択するのは魔弾の悪魔　ザミエル‼?今度こそキミの切り札はいただくよ‼?」
「っ?⁉?ザミエル‼?」
　アンデットネクロナイズの力により、ザミエルは操られ夜のフィールドに移動する。
　それを横目に夜は正面に手をかざした。
「行くよ‼?ボクはレベル6、ヴァンパイアレッドバロンと、魔弾の悪魔　ザミエルをレベル6として扱いオーバーレイ‼?」
「何だと⁉?」
「2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築‼?エクシーズ召喚‼?」
　レッドバロンとザミエルが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
　そして渦が爆けると、現れたのは白い礼服を身に纏った高貴なる吸血鬼。
「現れろ‼?高潔なる吸血鬼の支配者‼?ランク6‼?　交血鬼(アルダンピール)―ヴァンパイアシェリダン」
〈交血鬼―ヴァンパイアシェリダン〉★6　アンデット族　闇属性
　ＡＴＫ２６００
「俺のザミエルを使ってエクシーズ召喚とは、ふざけた真似を‼?」
「生憎、こっちは大真面目だよ‼?交血鬼―ヴァンパイアシェリダンら元々の持ち主が相手となるモンスターをエクシーズ召喚の素材と

する場合、そのレベルを6として扱うことができるのさ。まずはアンデット族である交血鬼―ヴァンパイアシェリダンを特殊召喚したことで精気を吸う骨の塔の効果発動!!?ボクのデッキを削りとる!!?そして、交血鬼―ヴァンパイアシェリダンの効果発動!!?ナイトメアバイト!!?1ターンに1度、このカードのオーバーレイユニットを1つ取り除き、相手フィールドのカード1枚を対象としてそのカードを墓地へ送る!!?ボクが選ぶのはＮｏ．６８魔天牢サンダルフォン!!?」

「っ!!?」

「破壊耐性があるんだったかな?でも、残念。破壊じゃなくて墓地送りだよ!!?」

シェリダンがマントを振るうとマントの中から辺りを埋め尽くす程のコウモリが現れサンダルフォンを呑み込んでいく。

コウモリが飛び去るとそこにはもう何も残っていなかった。

「ボクはこれでターンエンド!!?　エンドフェイズ、墓地の黄金郷のガーディアンを除外して効果発動!!?このカードも2つの効果を持ち、同名カードの効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。自分・相手のエンドフェイズに墓地のこのカードを除外してデッキからエルドリクシル魔法・罠カード1枚を選んで自分フィールドにセットする!!?ボクはデッキから速攻魔法、白き宿命のエルドリクシルをセットしてターンエンドだ!!?今度はキミが追い詰められる番だ!!?」

夜　ＬＰ１７００　手札０

ー－▲－－　－

－○○□－

☆　　－

□－－－－

▲－△－－　－

大和　ＬＰ５７００　手札１

たった1ターンで完全に覆されたフィールドを見て、大和は思わず歯噛みをする。
自身の思いを込めた切り札を奪われ、確実に倒すために手にしたＮｏ．すら跳ね除けられた。
覆されたフィールドを再びねじ伏せるための力は自分の手にはなく、何もしなければ待っているのは確実な敗北だ。
「ふざけるな……」
「……」
「ふざけるな‼？俺が追い詰められる番だと？そんな番があるものか‼？テメェだけは赦さねぇ‼？テメェだけは確実にぶっ潰す‼？そのために俺はあの日から生きてきたんだ‼？」
「っ……‼？」
大和から溢れ出すドス黒い執念に思わず夜は顔を顰める。
そんな夜を大和は血走った目で睨みつけながら獣のように咆哮した‼？
「俺はテメェを許さねぇ‼？『真祖』‼？俺から　夜を奪ったテメェだけはぁぁぁ‼？俺の……タァァァン‼？ドロォォォォ‼永続罠、魔弾―デビルズディールを墓地に送り、魔法カード、？マジックプランター‼？自分フィールドの表側表示の永続罠カード1枚を墓地へ送って自分はデッキから2枚ドローする‼？さらにリバースカードオープン‼？罠発動‼？戦線復帰‼？自分の墓地のモンスター1体を対象としてそのモンスターを守備表示で特殊召喚する‼？俺は中央に魔弾の射手カラミティを特殊召喚する‼？」
「っ、蘇生カードを残してたのか……」
〈魔弾の射手カラミティ〉☆４　悪魔族　光属性
ＤＥＦ１３００
「そして右端に魔弾の射手ワイルドを召喚‼？」
〈魔弾の射手ワイルド〉☆４　悪魔族　光属性

ＡＴＫ１７００

現れたのは悪魔の羽根と異形の手を持つ近未来的な火器で武装したゲリラのようなモンスター。

そして大和は溢れ出す黒い衝動を叩きつけるように正面に手をかざし、その言霊を口にする。

「俺はレベル４の魔弾の射手カラミティと魔弾の射手ワイルドーでオーバーレイ!!?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」

カラミティとワイルドが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けると、そこに現れたのは白銀の装甲と無数の砲塔を持つ戦艦。

「恐れを知らぬ戦艦よ!!?歯向かう敵を蹴散らし、その使命を果たせ!!?現れろ!!?Ｎｏ．２７弩級戦艦―ドレッドノイド!!?」

〈Ｎｏ．２７弩級戦艦―ドレッドノイド〉★４　機械族　水属性

ＡＴＫ２２００

「Ｎｏ．２７!?!?２体目のＮｏ．だって!?!?」

「バトル!!?　Ｎｏ．２７弩級戦艦―ドレッドノイドでヴァンパイアフロイラインを攻撃!!?ダメージステップ、速攻魔法、コンセントレイト!!?　自分フィールドの表側表示モンスター１体を対象とし、そのモンスターの攻撃力はターン終了時までその守備力分アップする!!?ただし、このカードを発動するターン、対象のモンスター以外の自分のモンスターは攻撃できない!!?　Ｎｏ．２７弩級戦艦―ドレッドノイドの守備力は１０００!!?よって攻撃力は１０００ポイントアップする!!?」

Ｎｏ．２７弩級戦艦―ドレッドノイド

ＡＴＫ２２００→３２００

「攻撃力、３２００……!?」
「ぶち抜け!?ドレッドノートブラスター!?」
大和の叫ぶような宣言にドレッドノイドの砲塔が全て　夜に向き、一斉に砲撃が放たれた。
「っ!?」
「夜ちゃん!?」
ドレッドノイドの放った砲弾が夜の周囲に着弾し、夜は爆煙に包まれる。
全てを吹き飛ばすような爆撃に美傘は夜の無残な姿を想像して青ざめ、その場に崩れ落ちる。
しかし、そんな美傘の想像とは裏腹に爆煙が晴れると爆風で深く被っていたフードが脱げた夜が厳しい表情を浮かべて立っていた。
「ヴァンパイアフロイラインの効果は使ってこなかったか」
「ボクのライフは残り少ない。白き宿命のエルドリクシルを使えば蘇生しようと思えばヴァンパイアフロイラインを蘇生できる。無理に身を削って僅かな反射ダメージを与える必要はないだろう?」
「はっ!?理知的なことだな。だが、その選択は間違いだ!?バトルフェイズ終了時、Ｎｏ．２７弩級戦艦―ドレッドノイドの効果発動!!?アサルトフォーメーション!?」
「っ!?ここでＮｏ．……!?」
「このカードが戦闘で相手モンスターを破壊したバトルフェイズ終了時にランク１０以上の機械族エクシーズモンスター１体を、自分フィールドのこのカードの上に重ねてエクシーズ召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚する!?」
「なっ!?大型エクシーズにランクアップするＮｏ．!?」
「俺はＮｏ．２７弩級戦艦―ドレッドノイドでオーバーレイ!?１体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!?ランクアップエクシーズチェンジ!?」
ドレッドノイドが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けるとそこから現れるのは巨大な砲塔を持つ列車。
「鉄路を駆ける鋼鉄の駿馬よ!!?その弾丸に全てを込めよ!!?現れろ、ランク１０!!?　超弩級砲塔列車グスタフマックス!!?」
〈超弩級砲塔列車グスタフマックス〉★１０　機械族　地属性
ＤＥＦ３０００
「超弩級砲塔列車グスタフマックス……」
「これでジ・エンドだ。メインフェイズ２!!?　超弩級砲塔列車グスタフマックスの効果発動!!?　１ターンに１度、このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除き、相手に２０００ポイントのダメージを与える!!?」
「なっ!!?ボクのライフは１７００……っ!!?」
「引き金は２度引かねぇ。この一撃で終いだ!!?砕け散れ!!?ドレッドノートレールガン!!?」
グスタフマックスの砲塔にエネルギーが充填され、巨大な光弾が放たれる。
避ける間もないまま、夜はその光弾に撃ち抜かれ、吹き飛ばされた。
夜　ＬＰ１７００→０
ーーーーーーー
「っ!!?夜ちゃん!!?」
グスタフマックスの砲撃で吹き飛ばされ、ビルの壁に叩きつけられた夜に美傘は慌てて駆け寄っていく。
そんな美傘をつまらなそうに見て、大和は激情を抑えるように目を逸らし、夜がいる場所から飛んできた　２枚のカードを掴み取るとデュエルディスクをしまった。
「……これにてミッションコンプリートだ」
「っ、なんで!!?」

きびしを返し、足早にその場を去ろうとする大和を、美傘は思わず呼び止める。
「なんでそこまで夜ちゃんに怒りをぶつけるの⁉？夜ちゃんは、あなたのーーー‼？」
「『気虹の魔術師』テメェは何も分かっちゃいない」
「えっ？」
憐れむような声色で悲しげに目を細めて自分を振り向いた大和に、思わず美傘は目を見開く。
そんな美傘を見て、大和は悲しげに笑うとその場を立ち去りながら口を開いた。
「『真祖』をよく見てみるといい。ソイツはーーー　眼竜　夜じゃない」
「……えっ？」
大和の言葉に美傘は夜に目を向ける。
グスタフマックスの砲撃をその身に受けた夜は傷だらけの身体で壁に寄りかかって気を失っている。
普段は深く被っているパーカーも先程のドレッドノイドの攻撃で敗れ、普段は隠されている彼女の顔を太陽の光が照らしている。
息はあり、気を失っているだけの様子に美傘がホッとしたところでーーー美傘は　それに気が付いた。
「……えっ？……嘘⁉？なんで⁉？」
見開いた美傘の目に映るのは傷だらけの夜の姿。
そしてーーーいつもはパーカーで隠されている夜の背後。
太陽に照らされている夜の背後に本来であれば必ず存在していなければならないもの。
眼竜　夜の背後にはーーー　影が存在しなかった。

第８９話　贖罪の鍵

☆

「はぁ……リハビリって思ってたよりハードなのね……」
「桜の場合は怪我してから2日も経ってないからだと思うぞ」
「そういうアンタは死にかけたのにぴんぴんしてるじゃない？」
「ま、俺は多少鍛えてるからな。学生の桜に体力で負けてるようなら逆に問題だ」
　病室のベッドに横になり、疲れた顔をしている桜に、俺は苦笑する。
　闇のカードによって引き起こされた怪我により入院している俺と桜は一刻も早く戦線復帰できるようにリハビリを開始した。
　とはいえ、俺達の怪我は軽いものでもなく、まだまだ安静にしている必要があるため、医者に隠れてやっていたのだが、すぐに見つかってドクターストップとなってしまった。
　そんな俺達を見て、ボディーガード兼見舞いに来ていた闇は呆れた表情を浮かべた。
「2人とも急ぎたい気持ちは分かるけど、無茶はダメ。また遊花に怒られるよ？」
「うぐっ、それは勘弁して貰いたいわね……」
「そうだな……」
　闇の言葉に俺達は目を逸らす。
　遊花に怒られる……というよりは、多分無茶した俺達を見たら遊花が泣くだろうことは想像に難くない。
　そちらの方が怒られるよりも何倍もダメージになるだろう。
「仕方ない、もうしばらくは大人しくするか。飯食って、デュエルして、寝る。それだけでも決闘者の鍛錬としては十分だしな」
「言ってること、全然分からない……って、言いたいとこだけど、それ、遊翼さんと愛花さんにも言われた覚えがあるわね……」
「遊翼さんと愛花さん？」

「遊花の両親よ。私と遊花にデュエルを教えてくれた人でもあるわ。私はデュエルだけじゃなくて身体の鍛え方も教えてもらったけど」
「遊花の親父さんとお袋さんか……きっと聡明で優しい人だったんだろうな」
「ん、間違いない。あの遊花の親だもん。きっと強くて優しい人」
「……そうね、すごく優しい人達だったわ。遊花の強さと優しさは間違いなくあの2人に似たって言えるぐらい」
俺は遊花の家の写真立てに飾ってある写真に写っていた人達の姿を思い出しながら目を閉じる。
遊花がプロ決闘者を目指すきっかけとなり、遊花にヴァレルソードドラゴンを託した、2年前のあの運命の日に交通事故で亡くなった人物。
遊花は、俺と出会うまでデュエルをするのがトラウマになっていた。
それだけ、遊花は両親に大切にされていたのだろう。
とりあえず、もし遊花の両親が壮健だったなら俺はきっと愛娘を誑かして危険な目に合わせているとぶん殴られているだろう。
ちょっとしんみりとしていると、病室のドアが控えめにノックされる。
俺達は顔を見合わせ首を傾げていると、まだ体調が万全じゃない俺達に代わり闇が病室のドアを開けてくれる。
そこにいたのはーーー
「し、失礼します!!?」
「刀花?」
そこにいたのは黒髪をクラシカルストレートにした少女。
遊花達の後輩である幸土　刀花がそこにいた。

ーーーーーーー

「結束さん、宝月先輩、冬城先生。改めてご迷惑をかけてしまい本当に申し訳ありませんでした!!?」

「ちょっ‼?･頭下げないでよ‼?･私は何もしてないから‼?･」
「俺もな。幸土に頭を下げられるようなことは何もしてない。気にすんな」
「ん、助けたのは遊花。それに謝罪も前に受け取ってる。必要なし」
病室に入るなり頭を下げてくる幸土に、桜は慌てた表情を浮かべ、俺と闇は平然と応える。
そんな俺達を見ても、幸土は申し訳無さそうな表情を浮かべて胸の前で拳を握る。
「ですが、皆さんに迷惑をかけてしまったのは事実です。闇のカードに操られ、栗原先輩も傷つけそうになって……せめて迷惑をかけた贖罪のため、力になれれば良いのですが、私にはそれ程の力もなく……」
暗い表情で俯く幸土を見て、俺は思わず苦笑する。
きっと幸土はとても律儀な奴なのだろう。
だからこそ、闇のカードに操られたとはいえ、自身の知り合いを、そして俺達の大切な仲間を傷つけそうになったことを本気で悔いているのだ。
だったら、どこかで落とし所をつけてやるのが幸土のためにもなるだろう。
「……よし、ならこうするか」
「遊騎?」
「幸土、俺とデュエルしようぜ」
「デュエル……ですか?」
俺の突然の提案に全員が驚いた表情を浮かべる。
「さっきも言ったけど、俺達は別に幸土のしたことを気にしてない。闇のカードに操られたのは仕方ないことだし、お前を助けたのは遊花だ。それに、謝ってばかりってのもな」
「そうよ。謝って貰っても困るわ」
「ごめんなさいよりもありがとうが欲しいお年頃。気にするならむしろ助けてくれてありがとうという言葉が欲しい」
俺の言葉に桜と闇が続く。

幸土の謝罪は受け取っている。
これ以上は貰いすぎだ。
だけど、それでも幸土の気が晴れないというのであればーーー
「だけど、それで幸土の気が晴れないというのなら。デュエルにでも付き合ってくれ。なんせ、俺のデッキは弟子が心を込めて作ってくれた新デッキ。少しでも早く使いこなして、弟子にお前が作ったデッキは凄いんだぞって、教えてやれなきゃカッコ悪くてかなわないからな」
そういって少し戯けたように俺が笑うと、幸土はぽかんとした表情を浮かべていたが、しばらくして思わずといった風に笑い声を漏らし、真っ直ぐに俺を見た。
「……ふふっ、分かりました。それが私の贖罪になるというのであれば。存分にお相手させていただきます」
「そうこなくっちゃな。闇、悪い」
「ん、いい。遊花が作った遊騎のデッキ、私も興味あるから」
そういうと、闇は預かってくれていた俺のデュエルディスクとデッキを渡してくれる。
俺がデュエルディスクを起動し、デッキをセットすると、幸土も同じようにデュエルディスクを起動し、構える。
遊花達の話では幸土は高等部1年での成績は学年2位らしい。
楽しいデュエルになりそうだ。
「行くぜ？」
「はい‼？」
『決闘‼？』

遊騎　ＬＰ８０００
刀花　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は俺だな。まずは魔法カード、予想ＧＵＹを発動‼？自分

フィールドにモンスターが存在しない場合にこのカードは発動できる。デッキからレベル４以下の通常モンスター１体を特殊召喚する‼?来い、クィーンズナイト‼?」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

俺の前に赤い鎧を身に纏った女性の騎士が現れる。
「さらに俺はキングスナイトを召喚‼?」

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

そしてクィーンズナイトに並び立つようには黄金の鎧を身に纏った騎士が現れる。
そして並び立ったクィーンズナイトとキングスナイトはお互いに剣を掲げて更なる騎士を呼ぶ。
「キングスナイトの効果発動‼?自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト１体を特殊召喚する‼?集え、絵札の三銃士‼?来い、ジャックスナイト‼?」

〈ジャックスナイト〉☆５　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

クィーンズナイトとキングスナイトの剣に合わせるように剣を掲げる青い鎧の騎士が現れる。
「絵札の三銃士……結束さんの代名詞のモンスター達、ですか。まさか１ターン目からお目にかかれるとは……」
「どうも今日は引きがいいみたいでな。行くぞ、斬り開け‼?運命に抗うサーキット‼?」

「っ、早速リンク召喚ですね」
俺が正面に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター２体!!?俺はクィーンズナイトとキングスナイトをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?追想に生きる王女!!?リンク２!!?聖騎士の追想イゾルデ!!?」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

クィーンズナイトとキングスナイトがサーキットに吸い込まれていき、代わりにフィールドに現れたのは金髪と白髪の２人の女性型のモンスター。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?リンクレカレクション!!?リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター１体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキからペンデュラムモンスター、イグナイトライオットを手札に加える!!?」
「!!?ペンデュラムモンスターが手札に!!?」
「まだまだ行くぞ!!?聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動!!?メモリーズギフト!!?デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター１体をデッキから特殊召喚する!!?俺はデッキから妖刀竹光を墓地に送り、デッキから焔聖騎士―リナルドを特殊召喚!!?」

〈焔聖騎士―リナルド〉☆１　戦士族　炎属性
ＤＥＦ２００

イゾルデに導かれ俺のフィールドに馬に乗った赤き騎士が現れる。
「焔聖騎士―リナルドの効果、それにチェーンして墓地に送られた妖

刀竹光の効果発動。デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える‼?俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える‼?そして焔聖騎士―リナルドの効果発動‼?　このカードが特殊召喚に成功した場合、自分の墓地のカード及び除外されている自分のカードの中から、同名カード以外の戦士族・炎属性モンスター1体または装備魔法カード1枚を手札に加える‼?俺は墓地の妖刀竹光を手札に加える‼?どんどん行くぜ‼?装備魔法、妖刀竹光を焔聖騎士―リナルドに装備‼?　魔法カード、黄金色の竹光を発動‼?　自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローする‼?」

「これだけ展開してるのに、最初より手札が増えてる……」

「よし、遊花が作ってくれたこのデッキの新しい仲間を見せてやる。俺は魔法カード、魔鍵―マフテアを発動‼?」

「魔鍵―マフテア……?」

「このカードはちょっと変わったカードでな。魔鍵融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを自分の手札・フィールドから墓地へ送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚するか、レベルの合計が儀式召喚するモンスターのレベル以上になるように、自分の手札・フィールドのモンスターをリリースし、手札から魔鍵儀式モンスター1体を儀式召喚することができるんだ‼?」

「っ⁉?融合にも儀式にも使える魔法カード⁉?」

「それだけじゃないぜ。さらに自分フィールドに通常モンスターが存在する場合、融合素材モンスターまたは儀式召喚のためにリリースするモンスターとして、デッキの通常モンスター1体を墓地へ送る事もできる‼?」

「っ⁉?結束さんのフィールドには通常モンスターのジャックスナイトがいる‼?」

「その通りだ‼?俺はデッキから通常モンスター、イグナイトマスケットをリリースし、儀式召喚を行う‼?」

フィールドに巨大な扉が現れ、扉の鍵穴にマスケット銃を手にした

戦士が吸い込まれていく。
　そして鍵穴にマフテアが差し込まれ、開錠すると扉の中から現れたのは巨大なガトリングを手にした銃士。
「儀式召喚!!?逆境に風穴を開ける銃士!!?儀式チューナー、魔鍵銃―バトスバスター!!?」
「っ!!?儀式モンスターのチューナーモンスター!!?」

〈魔鍵銃―バトスバスター〉☆４　機械族　闇属性
　ＤＥＦ２２００

「魔鍵銃―バトスバスターの効果発動!!?アンノウンアンロック!!?同名カードは１ターンに１度、このカードが儀式召喚に成功した場合、デッキから魔鍵カード１枚を手札に加える!!?俺はデッキからフィールド魔法、魔鍵施解を手札に加える!!?そしてそのままフィールド魔法、魔鍵施解を発動!!?」
　俺がフィールド魔法ゾーンにカードをセットすると、辺りが幾つもの閉ざされた扉に囲まれた世界に書き換えられた。
「魔鍵施解……」
「このカード名のカードは１ターンに１枚しか発動できず、このカードの発動時の効果処理として、デッキから魔鍵モンスター１体を手札に加える事ができる。俺はデッキから儀式モンスター、魔鍵砲―ガレスヴェートを手札に加える!!?さらに魔鍵施解がフィールドゾーンに存在する限り、トークン以外の自分フィールドの通常モンスターはそれぞれ１ターンに１度だけ戦闘・効果では破壊されない」
「成る程。結束さんのデッキだとクィーンズナイトが生き残れる可能性を高められるわけですか……」
「ご明察の通りだな。さて、まだ俺は止まらないぜ?俺はレベル１、焔聖騎士―リナルドに、レベル４、チューナーモンスター、魔鍵銃―バトスバスターをチューニング!!?」
「っ!!?お次はシンクロ召喚ですか」
　バトスバスターが光の輪になり、リナルドが小さな星に変わり、光

の道になる。
「他者の痛みを知る傭兵よ‼？その力を弱きものを守る為に振るえ‼？シンクロ召喚‼？懇篤の傭兵‼？スカーウォリアー‼？」
〈スカーウォリアー〉☆５　戦士族　地属性
ＤＥＦ１０００

光の道が輝くと、その中から現れたのは片腕を包帯で吊るした傷だらけの傭兵。
「墓地に送られた妖刀竹光の効果発動‼？俺はデッキから２枚目の黄金色の竹光を手札に加える‼さあ、次だ。魔鍵施解の更なる効果発動‼？同名カードは１ターンに１度、自分メインフェイズに発動できる。デッキから魔鍵―マフテア１枚を手札に加え、その後、手札を１枚選んでデッキの一番下に戻す‼？」
「っ⁉？また魔鍵―マフテアが……‼？」
「俺は再び俺は魔法カード、魔鍵―マフテアを発動‼？俺はフィールドのジャックスナイトとデッキから通常モンスター、魔鍵銃士―クラヴィスをリリースし、儀式召喚を行う‼？」
フィールドに巨大な扉が現れ、扉の鍵穴にアフテマを手にした銃士とジャックスナイトが吸い込まれていく。
そして鍵穴にマフテアが差し込まれ、開錠すると扉の中から現れたのは巨大な大砲に乗った銃士。
「儀式召喚‼？逆境を撃ち抜く銃士‼？儀式モンスター、魔鍵砲―ガレスヴェート‼？」
〈魔鍵砲―ガレスヴェート〉☆８　機械族　闇属性
ＤＥＦ２８００
「今度はレベル８の儀式モンスター……」
「魔鍵砲―ガレスヴェートは永続効果、レインボーエナジーにより、このカードの攻撃力は、自分の墓地のモンスターの属性の種類×３００

ポイントアップする。俺の墓地には光、闇、火の３種類のカードがあるから攻撃力は９００ポイントアップする」

魔鍵砲―ガレスヴェート
ＡＴＫ２０００→２９００

「攻撃力２９００……」
「さらに、魔鍵砲―ガレスヴェートの効果、レインボーブレイクはこのカードの儀式召喚に使用したモンスターの属性が２種類以上だった場合に同名カードは１ターンに１度自分の墓地のいずれかのモンスターと同じ属性を持つモンスターの効果を相手が発動した時にその発動を無効にし破壊する」
「無効効果まで⁉？」
「さらに俺は戦士族である聖騎士の追想　イゾルデをリリースし、手札より現れよ、沈黙の剣士―サイレントソードマン‼？」

〈沈黙の剣士―サイレントソードマン〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１０００

イゾルデの姿が消え、代わりに現れたのは銀色の大剣を持つ戦士。
「沈黙の剣士―サイレントソードマン⁉？」
「沈黙の剣士―サイレントソードマンの効果、魔断斬りによって、１ターンに１度、魔法カードが発動した時にその発動を無効にする。さらにスカーウォリアーの永続効果、ディヴォートチャリティーによりこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は表側表示で存在する他の戦士族モンスターを攻撃対象に選択する事はできず、また、スカーウォリアーは１ターンに１度だけ、戦闘では破壊されない。幸土がどうやってこの布陣を攻略してくるのか、楽しみにしてるぜ。俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ８０００　手札１

ーー▲ーー　▽
ーー□□□
ー　　ー
ーーーーー
ーーーーーー　ー
刀花　ＬＰ８０００　手札５

「私のターン、ドロー‼　？」
「スタンバイフェイズ、沈黙の剣士―サイレントソードマンの効果発動‼？沈思黙考‼？自分・相手のスタンバイフェイズ、このカードの攻撃力は５００ポイントアップする‼？」
「っ、時間をかければかけるほど成長していくモンスターってわけですね」

沈黙の剣士―サイレントソードマン
ＡＴＫ１０００→１５００

「（結束　遊騎さん。栗原先輩の師匠であり、過去に世界ランキング９位にまで至り『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』を世界ランキング２位にまで押し上げた御仁。このデュエルは栗原先輩達に迷惑をかけた私の贖罪のためのものだけど……）」
俺が展開した盤面と自分の手札を見て、幸土は少し顔を顰めてから目を閉じる。
よほど手札が悪いのか？
そんな疑念は次の瞬間、瞳を開いた幸土の心底楽しそうな笑顔に覆される。
「（今の私の全力がどれだけこの人に通用するのか、試して見たい‼？だから、栗原先輩に迷惑をかけたこの子達に思うところがないわけではないけど……）私の全力、ぶつけさせていただきます‼？」
「‼？ふっ、来い‼？」
「手札を１枚捨て、魔法カード、サイバネットマイニングを発動‼？同

名カードは1ターンに1度しか発動できず、手札を1枚墓地へ送って発動でき、デッキからレベル4以下のサイバース族モンスター1体を手札に加えます!!?」
「サーチ効果か……なら、沈黙の剣士―サイレントソードマンの効果発動!!? 魔断斬り!!? 1ターンに1度、魔法カードが発動した時にその発動を無効にする!!?」
沈黙の剣士が幸土が発動しようとしたサイバネットマイニングをぶった斬り、その発動を無効にする。
「初動を止めてきましたか……ですが、これでもう魔法カードは止められません!!? 私の全てはここから始まります!!? 永続魔法、サイバネットコーデックを発動!!?」
「っ、それが本当に通したかったカードか」
「さらに墓地に存在するチューナーモンスター、斬機シグマの効果発動!!?」
「さっきサイバネットマイニングで捨てたカードっ!!?」
「同名カードは1ターンに1度このカードが手札・墓地に存在し、エクストラモンスターゾーンに自分のモンスターが存在しない場合、このカードを特殊召喚します!!? ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外されます!!? 斬機シグマは光属性のモンスター。魔鍵砲―ガレスヴェートで止めますか?」
「……いや、その効果は通そう」
「なら、来てください!!? チューナーモンスター、斬機シグマ!!?」

〈斬機シグマ〉☆4　サイバース族　光属性
DEF1500

幸土の前に現れたのは赤と白の装甲を持つ機械騎士。
「さらに私はチューナーモンスター、斬機ダイアを召喚!!?」

〈斬機ダイア〉☆4　サイバース族　光属性
ATK1000

シグマと並び立つように現れたのは白銀の装甲を持つ機械騎士。
ダイアが現れるのと同時に、幸土は正面に手をかざし、その言霊を告げる。
「私は、レベル４モンスター、斬機シグマ、斬機ダイアでオーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼？」
「狙いはエクシーズ召喚か‼？」
シグマとダイアが粒子となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
空に浮かんだ混沌の渦が弾けると、空から舞い降りたのは雷を纏った両刃の薙刀を持ち、黄金の装甲を纏った機械騎士。
「罪を背負いし鋼鉄の守護騎士よ‼？過去を改竄し、未来を掴め‼？ランク４‼？塊斬機ダランベルシアン‼？」

〈塊斬機ダランベルシアン〉★４　サイバース族　地属性
ＡＴＫ２０００

「塊斬機ダランベルシアンの効果発動‼？パストリライト‼？同名カードは１ターンに１度、このカードがエクシーズ召喚に成功した場合、このカードのオーバーレイユニットを２つ以上取り除き、効果を発動できます。現在の塊斬機ダランベルシアンのオーバーレイユニットは２つ、よって２つ取り除きデッキからデッキから斬機カード１枚を手札に加えます‼？私はデッキから魔法カード、斬機方程式を手札に加えます‼？」
「サーチ効果を持つエクシーズモンスターか‼？」
「さらに斬機ダイアを素材としてシンクロ、エクシーズ召喚した斬機モンスターはこのカードを特殊召喚したターンに１度、相手が魔法・罠・モンスター効果を発動した時、その効果を無効にできます‼？」
「っ⁉？ってことは……」
「魔鍵砲―ガレスヴェートはもう機能させません‼？魔法カード、斬

機方程式!!?自分の墓地の斬機モンスター1体を対象としてそのモンスターを特殊召喚し、この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力をターン終了時まで１０００ポイントアップする!!?蘇ってください、斬機シグマ!!?」

〈斬機シグマ〉☆４　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１０００↓２０００

「行きます!!?現れて!!?未来を描くサーキット!!?」
「っ、リンク召喚か」
「召喚条件は効果モンスター２体!!?この瞬間、手札のコードラジエーターの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、自分フィールドのサイバース族モンスターをコードトーカーモンスターのリンク素材とする場合、手札のこのカードもリンク素材にできます!!?」
「手札からリンク素材にできるモンスターだって!?」
「私は斬機シグマと手札のコードラジエーターをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?　リンク召喚!!?戦いの始まりを告げる電子の騎士!!?リンク２!!?コードトーカー!!?」

〈コードトーカー〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１３００　→←

サーキットから現れたのは無色の鎧を纏う騎士。
「この瞬間、永続魔法、サイバネットコーデックの効果、それにチェーンしてコードラジエーターの効果発動!!?このカードがコードトーカーモンスターのリンク素材として手札・フィールドから墓地へ送られた場合、相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてそのモンスターは攻撃力が０になり、効果は無効化され、フィールドのこのカードを素材とした場合にはこの効果の対象を２体にできます!!?対象は、魔鍵砲―ガレスヴェート!!?」
「っ!!?リンク素材時に効果無効にするモンスター!?しかも、水属

性だから止められない!!?」
　コードラジエーターが身に着けていた青い鎧が輝くと、コードトーカーがガレスヴェートに向けて水を纏ったの斬撃を放つ。
　斬撃を受けたガレスヴェートはその場で沈黙した。

　魔鍵砲―ガレスヴェート
　ＡＴＫ２９００→０

「これで無効化効果は完全に使えません!!?さらに永続魔法、サイバネットコーデックの効果発動!!?コードトーカーモンスターがＥＸデッキから自分フィールドに特殊召喚された場合、そのモンスター1体を対象としてそのモンスターと同じ属性のサイバース族モンスター1体をデッキから手札に加えます!!?ただし、このターン、同じ属性のモンスターを自分のサイバネットコーデックの効果で手札に加える事はできず、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はサイバース族モンスターしかＥＸデッキから特殊召喚できません。さらにこのカード名の効果は同一チェーン上では1度しか発動できません」
「っ、コードトーカーモンスターが出るたびにサーチできるのか……そりゃ通したいわけだよな」
「私はサイバネットコーデックの効果でデッキから闇属性のサイバース族モンスター、マイクロコーダーを手札に加えます!!?まだまだ行きます!!?現れて!!?未来を描くサーキット!!?」
「またリンク召喚か……」
「召喚条件は効果モンスター2体以上!!?この瞬間、手札のマイクロコーダーの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、自分フィールドのサイバース族モンスターをコードトーカーモンスターのリンク素材とする場合、手札のこのカードもリンク素材にできます!!?」
「っ、また手札からリンク素材にできるモンスターか!!?」
「私は手札のマイクロコーダーとコードトーカーを2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」

幸土の手札からコードトーカーを更に小さくしたような騎士が、フィールドからコードトーカーが2体に分身してサーキットに吸い込まれる。
そしてサーキットが輝くと中から現れたのは巨大な銃を持つ橙色の鎧を纏った騎士。
「リンク召喚!!?騎士達を纏める騎士団長!!?リンク3!!?トランスコードトーカー!!?」

〈トランスコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　地属性
ＡＴＫ２３００　→←↓

「再び永続魔法、サイバネットコーデックの効果、それにチェーンしてマイクロコーダーの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、コードトーカーモンスターのリンク素材として手札・フィールドから墓地へ送られた場合、デッキからサイバネット魔法・罠カード1枚を手札に加え、フィールドのこのカードを素材とした場合にはその1枚をサイバース族・レベル4モンスター1体にできます。私はデッキから永続魔法、サイバネットオプティマイズを手札に加えます。さらにサイバネットコーデックの効果でデッキから地属性のサイバース族モンスター、コードジェネレーターを手札に加えます!!?」
「っ、手札が減らないな」
「更にトランスコードトーカーの効果発動!!?リターンコマンド!!?同名カードは1ターンに1度、トランスコードトーカー以外の自分の墓地のリンク3以下のサイバース族リンクモンスター1体を対象としてそのモンスターをこのカードのリンク先となる自分フィールドに特殊召喚する!!?ただし、この効果を発動するターン、自分はサイバース族モンスターしか特殊召喚できません!!?戻って来てください、コードトーカー!!?」

〈コードトーカー〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１３００　→←

再びフィールドにコードトーカーが舞い戻る。
これは、まだしばらくは終わりそうにないな。
「まだ止まりません!!?現れて!!?未来を描くサーキット!!?」
幸土の目の前に3回目のサーキットが現れる。
「召喚条件はサイバース族モンスター2体以上!!?　この瞬間、手札のコードジェネレーターの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、自分フィールドのサイバース族モンスターをコードトーカーモンスターのリンク素材とする場合、手札のこのカードもリンク素材にできます!!?私はコードジェネレーターとコードトーカーを2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
トランスコードトーカーを小型化したようなモンスターとコードトーカーが2体に分身してサーキットに吸い込まれる。
そしてサーキットが輝くと中から現れたのは巨大な緑色の鎧を纏った魔導騎士。
「リンク召喚!!?戦場に終焉をもたらす叡智の騎士!!?リンク3!!?エクスコードトーカー!!?」

〈エクスコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　風属性
ＡＴＫ２３００　↑→↓

「今度は風属性のコードトーカーか……」
「永続魔法、サイバネットコーデックの効果、それにチェーンしてコードジェネレーターの効果、さらにチェーンしてエクスコードトーカーの効果発動!!?ヴァイアビィラティクローズ!!?このカードがリンク召喚に成功した時、ＥＸモンスターゾーンのモンスターの数だけ、使用していないメインモンスターゾーンを指定して指定したゾーンはこのモンスターが表側表示で存在する間は使用できません!!?」
「っ!?モンスターゾーンを封じる効果!?」
「私が指定するのは私から見て左端のモンスターゾーンを指定します!!?」

エクスコードが俺のゾーンに重力場を放ち、俺の左端のゾーンを消失させた。
「次にコードジェネレーターの効果発動!!?このカードがコードトーカーモンスターのリンク素材として手札・フィールドから墓地へ送られた場合、デッキから攻撃力１２００以下のサイバース族モンスター１体を墓地へ送り、そしてフィールドのこのカードを素材とした場合には墓地へ送らず手札に加える事もできます!!?私はデッキから斬機ナブラを墓地に送ります!!?さらにサイバネットコーデックの効果でデッキから風属性のサイバース族モンスター、クロックワイバーンを手札に加えます!!?そして墓地に送られた斬機ナブラの効果発動!!?　同名カードは１ターンに１度、このカードが墓地へ送られた場合、エクストラモンスターゾーンの自分のサイバース族モンスター１体を対象としてこのターン、そのモンスターは１度のバトルフェイズ中に２回までモンスターに攻撃できます!!?私はトランスコードトーカーに２回攻撃を付与します!!?」
「なっ!?!?２回攻撃だって!?!?」
「それだけではありません!!?エクスコードトーカーの永続効果、ダブルコネクト!!?このカードのリンク先のモンスターは、攻撃力が５００ポイントアップし、効果では破壊されません!!?　さらにトランスコードトーカーの永続効果、ブリリアントコマンダー!!?このカードが相互リンク状態の場合、このカード及びこのカードの相互リンク先のモンスターの攻撃力は５００ポイントアップし、相手の効果の対象になりません!!?」
「っ、強化効果まであるのか!!?」

トランスコードトーカー
ＡＴＫ２３００→２８００→３３００

エクスコードトーカー
ＡＴＫ２３００→２８００

「まだまだ行きます‼？　私は永続魔法、サイバネットオプティマイズを発動し、その効果を発動‼？同名カードは1ターンに1度、自分メインフェイズにサイバース族モンスター1体を召喚します‼？ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はサイバース族モンスターしかＥＸデッキから特殊召喚できません」
「っ、ここで召喚権を増やす永続魔法だって⁉？」
「私はクロックワイバーンを召喚‼？」

〈クロックワイバーン〉☆４　サイバース族　風属性
ＡＴＫ１８００→２３００

エクスコードの隣に現れたのは翼に水晶のついた機械的な飛龍のモンスター。
「クロックワイバーンの効果発動‼？同名カードは1ターンに1度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、このカードの攻撃力を半分にし、自分フィールドにサイバース族・風属性・レベル1・攻撃力守備力０のクロックトークン1体を特殊召喚する‼？来てください、クロックトークン‼？」

クロックワイバーン
ＡＴＫ２３００→１１５０

〈クロックトークン〉☆1　サイバース族　風属性
ＤＥＦ０

クロックワイバーンが吠えると翼の水晶が外れ、それがトークンへと変わる。
「まだです‼？　自身をリリースし塊斬機ダランベルシアンの効果発動‼？ライフリライト‼？自分フィールドのモンスター1体をリリースして自分の手札・墓地からレベル４の斬機モンスター1体を選んで特殊召喚する‼？蘇ってください、斬機ナブラ‼？」

〈斬機ナブラ〉☆４　サイバース族　闇属性
ＤＥＦ１５００

フィールドに現れたのは漆黒の装甲を持つ機械騎士。

「さらにクロックトークンをリリースして斬機ナブラの効果発動!!?自分フィールドのサイバース族モンスター１体をリリースしてデッキから斬機モンスター１体を特殊召喚する!!?来てください、斬機ディヴィジョン!!?」

〈斬機ディヴィジョン〉☆４　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１５００

クロックトークンが消え、代わりに現れたのは黄金の槍を手にした黄金の装甲を持つ機械騎士。

そして幸土は再びその言霊を口に出す。

「私はレベル４モンスター、斬機ナブラ、斬機ディヴィジョン、クロックワイバーンでオーバーレイ!!?３体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」

「っ、またエクシーズ召喚か!!?」

クロックワイバーンとナブラ、ディヴィジョンが粒子となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

空に浮かんだ混沌の渦が弾けると、空から舞い降りたのは雷を纏った大剣を手にし、黄金の装甲を纏った機械騎士。

「改竄されし鋼鉄の守護騎士よ!!?偽りの記憶を跳ね除けよ!!?ランク４!!?塊斬機ラプラシアン!!?」

〈塊斬機ラプラシアン〉★４　サイバース族　地属性
ＡＴＫ２０００→２５００

「2体目の斬機エクシーズモンスター……」
「塊斬機ラプラシアンの効果発動!!?メモリートランスフォーメーション!!?このカードがエクシーズ召喚に成功した場合、このカードのオーバーレイユニットを3つまで取り除き、その数だけ3つの効果から選択して発動できる。1つ目は相手の手札をランダムに1枚選んで墓地へ送る効果、 2つ目は相手フィールドのモンスター1体を選んで墓地へ送る効果、3つ目は相手フィールドの魔法・罠カード1枚を選んで墓地へ送る効果。私は塊斬機ラプラシアンのオーバーレイユニットを全て取り除き、全ての効果を適用します!!?」
「対象を取らない手札とフィールドの墓地送り効果だって!?」
「私は結束さんの手札、フィールドのスカーウォリアー、セットカードを墓地へ送ります!!?」
「くっ!!?」
　ラプラシアンが黄金の大剣を振るうと、剣から紫電が放たれ、俺の手札、スカーウォリアー、セットカードを弾き飛ばして墓地へ送る。
「バトル!!?トランスコードトーカーで沈黙の剣士―サイレントソードマンを攻撃!!?この瞬間、永続魔法、サイバネットオプティマイズの効果発動!!?自分のコードトーカーモンスターが戦闘を行う場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠・モンスターの効果を発動できなくなります!!?」
「っ!?効果を封殺までできるのか、あの永続魔法!?」
「撃ち抜いて、アーススストライク!!?」
　トランスコードは自身のパーツの一部を変形させて銃にし、岩石の弾丸を放ち、沈黙の剣士を押し潰す。
　沈黙の剣士は破壊されたらサイレントソードマンを呼び出せるはずだが、効果が封じられたらどうしようもない。
「次です!!?トランスコードトーカーで魔鍵砲―ガレスヴェートを攻撃!!?アーススストライク!!?」
　さらにトランスコードは動きが止まっているガレスヴェートにも岩石の弾丸を放ち、その身体を爆砕させた。
「これでフィールドはガラ空きです!!?エクスコードトーカーでダイ

レクトアタック!!?グラビティスクラッチ!!?」
「くっ!!?」

遊騎　ＬＰ８０００→５２００

エクスコードの重力波を纏った鉤爪で切り裂かれ、俺のライフが大きく削られる。
「よし!!?さらに塊斬機ラプラシアンでダイレクトアタック!!?雷電剛斬!!?」
ラプラシアンが紫電を纏った大剣を構えて俺に斬りかかってくる。
しかし、そんな俺を守るようにラプラシアンとの間にはいつのまにか馬に乗った亡霊の騎士が現れていた。

〈幻影騎士団シャドーベイル〉☆４　戦士族　闇属性
ＤＥＦ３００

「えっ!!?」
「相手の直接攻撃宣言時、墓地から罠カード幻影騎士団（ファントムナイツ）シャドーベイルの効果発動!!?このカードをレベル４、戦士族、攻撃力０、守備力３００の通常モンスターとして守備表示で特殊召喚する!!?」
「そんなカードいつ……っ!!?まさかさっき墓地に送ったセットカード!!?」
「ご明察だ。モンスターが増えたから攻撃対象の変更だ。どうする？」
「幻影騎士団シャドーベイルは通常モンスター……魔鍵施解によってトークン以外の結束さんのフィールドの通常モンスターはそれぞれ１ターンに１度戦闘・効果では破壊されないからこのターンに倒すのは不可能ですね」
「まぁ、そうなるな」
俺を守るように立つシャドーベイルに、俺は思わず苦笑いを浮かべる。

確かに遊花に出会った頃に俺が使っていたカードだが、あの天神幻騎が製作し、使っているカードを遊花が採用するとは思わなかった。

遊花曰く、師匠のファンだと言って師匠の真似をされた意趣返しです、らしい。

俺の弟子は何ともたくましく成長しているものである。

「上手く躱されてしまいました……流石は栗原先輩のお師匠様です‼?私は攻撃を中止。メインフェイズ2、カードを1枚セットしてターンエンドです‼?」

遊騎　ＬＰ５２００　手札０
ーーーーー　▽
×ー□ーー
　☆　ー
○☆ーーー
ー△△▲ー　ー
刀花　ＬＰ８０００　手札０

俺の布陣を吹き飛ばしながらも、楽しそうにこちらを見る幸土を見て思わず頬を緩める。

あれだけ妨害する布陣を用意したのに、それを簡単にくぐり抜け、こちらの後続を完全に塞ぎながら押し込まれるとは流石に思わなかった。

俺に残されたのは魔鍵施解とシャドーベイルのみ。

次のドローでこの状況を打開する何かを引けなければこのまま押しきられて負ける。

こんなに強い奴が、今のデュエルアカデミアの高等部1年。

なんとも将来が有望すぎる。

その事実に俺は思わず笑ってしまった。

「ぷっ、あはははは‼?」

「っ‼?結束、さん?」

思わず笑い声を上げてしまった俺を見て、幸土は驚いた表情を浮かべ、不思議そうに首を傾げる。
そんな俺を見て、桜と闇は何処か嬉しそうに笑った。
ああ……やっぱり、デュエルは面白い。
闇のカードの事件に巻き込まれ、命に関わるデュエルばかりに身を置いて、久しく忘れていたが、心の底からそう感じる。
自分をここまで追い詰められる決闘者とこんなに楽しいデュエルが出来ることに、堪らなくワクワクする。
「幸土、サンキューな」
「えっ？」
「幸土は贖罪だって言ってたけどさ。十分すぎるぐらいに貰っちまったよ。こんなに楽しいデュエルは久しぶりだ……久しぶりに燃えてきた」
「っ‼？」
「さあ、目一杯楽しませて貰うぜ？俺のターン、ドロー‼？よし、焔聖騎士―オジエを召喚‼？」

〈焔聖騎士―オジエ〉☆４　戦士族　炎属性
ＡＴＫ１５００

現れたのは６匹の妖精を連れた焔の聖騎士。
「焔聖騎士―オジエの効果発動‼？このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合に、デッキから同名カード以外の戦士族・炎属性モンスター１体または聖剣カード１枚を墓地へ送る‼？俺はデッキから焔聖騎士―モージを墓地へ送る‼？そして墓地に送られた焔聖騎士―モージの効果発動‼？このカードが墓地へ送られた場合、自分の墓地のカード及び除外されている自分のカードの中から、このカード以外の戦士族・炎属性モンスターまたは聖剣カードを合計３枚デッキに戻して自分はデッキから１枚ドローする‼？俺は墓地のイグナイトライオット、イグナイトマスケット、焔聖騎士―リナルドをデッキに戻してシャッフルし、カードを１枚ドローする‼？」

デッキから勢いよくカードをドローし、俺はそのまま正面に手をかざす。
「俺はフィールドにいるレベル４モンスター、焔聖騎士―オジエと幻影騎士団シャドーベイルでオーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？『オジエとシャドーベイルが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこに現れたのは翠玉の身体を持つ岩石の戦士。
「勝機を照らす翠玉の戦士‼？現れろ‼？ダイガスタエメラル‼？」
〈ダイガスタエメラル〉★４　岩石族　風属性
ＤＥＦ８００
「ランク４のエクシーズモンスター……」
「そしてダイガスタエメラルの効果発動‼？レエディアンスリバイバル‼？１ターンに１度、オーバーレイユニットを１つ取り除き、２つの効果から１つを選択して発動できる。１つ目は自分の墓地のモンスター３体をデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから１枚ドローする効果。もう１つは効果モンスター以外の自分の墓地のモンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する効果だ。俺は１つ目の効果を使い墓地の聖騎士の追想　イゾルデ、スカーウォリアーをＥＸデッキに、沈黙の剣士―サイレントソードマンをデッキに戻してシャッフルし、カードを１枚ドローする‼？俺はカードを１枚伏せてターンエンドだ‼？」
遊騎　ＬＰ５２００　手札１
ー―▲ー―　▽
×ー□ー―
☆　ー
○☆ー―ー

ー△△▲ー　ー
刀花　ＬＰ８０００　手札０

「逆転できるカードは引けなかった？……私のターン、ドロー‼？……バトル‼？」
「ならバトルフェイズ開始時、リバースカードオープン‼？罠発動、マジカルシルクハット‼？相手バトルフェイズに発動でき、デッキから魔法・罠カード２枚を選び、そのカード２枚を攻撃力守備力０の通常モンスターカード扱いとして、自分のメインモンスターゾーンのモンスター１体と合わせてシャッフルして裏側守備表示でセットする‼？」
「っ‼？」
「ただし、この効果でデッキから特殊召喚したカードはバトルフェイズの間しか存在できず、バトルフェイズ終了時に破壊される。俺はデッキから装備魔法、妖刀竹光２枚を通常モンスターカード扱いとして呼び出し、ダイガスタエメラルと合わせて裏側守備表示でセット、シャッフルする‼？」
　フィールドに３つのシルクハットが現れ、ダイガスタエメラルを隠すように動き回り、配置される。
「これは……っ、塊斬機ラプラシアンで右側のセットモンスターを攻撃‼？雷電剛斬‼？」
「セットカードは……妖刀竹光だ‼？」
　ラプラシアンが紫電を纏った大剣を構えて右側のシルクハットを切り裂くが、シルクハットの中に入っていた妖刀竹光が大剣を受け止め、弾き返した。
「マジカルシルクハットでセットされた妖刀竹光は通常モンスターとして扱われる。よって、魔鍵施解の効果によりトークン以外のフィールドの通常モンスターはそれぞれ１ターンに１度戦闘・効果では破壊されない‼？」
「っ、なら‼？エクスコードトーカーで左側のセットモンスターを攻撃‼？グラビティスクラッチ‼？」

「セットカードは……こっちも妖刀竹光だ!!?」
「うっ!!?」
　エクスコードが重力波を纏った鉤爪で左側のシルクハットを切り裂くが、シルクハットの中に入っていた妖刀竹光が鉤爪を受け止め、弾き返した。
「永続魔法、サイバネットオプティマイズの効果により、自分のコードトーカーモンスターが戦闘を行う場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠・モンスターの効果を発動できなくなってます。ですが、魔鍵施解の効果によって与えられる破壊耐性は永続効果……サイバネットオプティマイズでは止められない」
「そしてバトルフェイズが終了すれば妖刀竹光は破壊され、俺はデッキから竹光をサーチして手札を増やすことができる。トランスコードトーカーで妖刀竹光を戦闘破壊すれば1枚サーチを防げるが、代わりにダイガスタエメラルは生き残る。さあ、どうする?」
「どちらにせよ、2回外した時点で結束さんに有利な展開……けど、そう思い通りには行かせません!!?」
「っ!!?」
「まずはトランスコードトーカーでセットモンスターに攻撃!!?アースストライク!!?」
「ダイガスタエメラルを狙ってきたか!!?セットモンスターはダイガスタエメラルだ!!?」

〈ダイガスタエメラル〉★4　岩石族　風属性
　DEF800

「迎え撃て、ダイガスタエメラル!!?エメラルスプラッシュ!!?」
　トランスコードに向けてエメラルドの弾丸を飛ばすがトランスコードな放った岩石の弾丸に貫かれ、その身体を爆砕させた。
「っ、だが、ダイガスタエメラルはやられたが、2枚の妖刀竹光は残ったぜ?」

「いいえ、残させません‼?リバースカードオープン‼?罠発動‼?リコーデッドアライブ‼?　自分のフィールド・墓地のリンク３のサイバース族リンクモンスター１体を対象としてそのモンスターを除外し、ＥＸデッキからコードトーカーモンスター１体を特殊召喚する‼?」
「なっ‼?コードトーカーを特殊召喚する罠カード‼?」
「私はエクストラモンスターゾーンのトランスコードトーカーを除外し、来てください‼?全てを打ち砕く豪胆なる騎士‼?リンク３‼?パワーコードトーカー‼?」

〈パワーコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ２３００→２８００　↙?↑↓

エクスコードトーカー
ＡＴＫ２８００→２３００

トランスコードの姿が消え、代わりに手甲状のパーツからクワガタムシの顎のような爪が伸びた燃えるような赤色の鎧を纏った騎士が現れる。
「サイバネットコーデックの効果発動‼?デッキから炎属性のサイバース族モンスター、斬機サブトラを手札に加えます‼?そしてこれはバトルフェイズ中の特殊召喚‼?当然パワーコードトーカーは攻撃できます‼?」
「っ‼?」
「パワーコードトーカーで妖刀竹光を攻撃‼?エクスプロージョンカタストロフィ‼?」
　パワーコードは手甲状のパーツからクワガタムシの顎のような鉤爪を伸はじ、妖刀竹光を巻き取ると、地面に思いっきり叩きつけて爆散させた。
「永続魔法、サイバネットオプティマイズの効果により、自分のコードトーカーモンスターが戦闘を行う場合、相手はダメージステップ終了

時まで魔法・罠・モンスターの効果を発動できなくなっているため、妖刀竹光の効果は発動しません!!?」
「くっ!!?」
「まだ終わりじゃありません!!?墓地に存在するリコーデッドアライブを除外して効果発動!!?エクストラモンスターゾーンに自分のモンスターが存在しない場合、墓地のこのカードを除外し、除外されている自分のコードトーカーモンスター1体を対象としてそのモンスターを特殊召喚します!!?」
「なっ!?ってことは……!!?」
「戻ってきてください、トランスコードトーカー!!?」

〈トランスコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　地属性
ＡＴＫ２３００　→←↓

次元の狭間に姿を隠していたトランスコードが再び姿を現す。
「1度バトルゾーンを離れたことでトランスコードトーカーももう1度攻撃ができます!!?トランスコードトーカーで妖刀竹光を攻撃!!?アースストライク!!?」
トランスコードが岩石の弾丸で妖刀竹光を押し潰す。
手札を増やして反撃に繋げる策も完全に潰されてしまった。
これは本当にヤバくなってきた。
「メインフェイズ2!!?トランスコードトーカーの効果発動!!?リターンコマンド!!?再び戻って来てください、コードトーカー!!?」

〈コードトーカー〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１３００　→←

再びフィールドに姿を現すコードトーカー。
「いきます!!?現れて!!?未来を描くサーキット!!?」
幸土の目の前に何度目かになるサーキットが現れる。
「召喚条件はサイバース族モンスター2体以上!!?　私は塊斬機ラプ

ラシアンとコードトーカーを２体分として扱ってリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？」
　フィールドからラプラシアンと２体に分身したコードトーカーがサーキットに吸い込まれる。
　そしてサーキットが輝くと中から現れたのは巨大な盾を持つ透き通った水色の鎧を纏った騎士。
「リンク召喚‼？勝利を導く守護騎士‼？リンク３‼？エンコードトーカー‼？」

〈エンコードトーカー〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　光属性
　ＡＴＫ２３００→２８００　→←↘？

「今度は光属性のコードトーカーか」
「サイバネットコーデックの効果発動‼？デッキから光属性のサイバース族モンスター、バランサーロードを手札に加えます‼？　エンコードトーカーの効果、リフレクトサンクチュアリで、１ターンに１度、このカードのリンク先の自分のモンスターが、そのモンスターより攻撃力が高い相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算前に、その自分のモンスターはその戦闘では破壊されず、その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは０になり、そのダメージ計算後、このカードまたはこのカードのリンク先の自分のモンスター１体を選び、その攻撃力をターン終了時まで、その戦闘を行った相手モンスターの攻撃力分アップします‼？」
「つまり、最初に倒すならエンコードトーカーじゃないてダメってわけか」
「私はカードを１枚セットしてターンエンドです‼？」

遊騎　ＬＰ５２００　手札１
ーーーーー　▽
×ーーーー
☆　　ー

ー☆☆☆ー
ー△△▲ー　ー
刀花　ＬＰ８０００　手札２

妖刀竹光を使って手札を増やせなかったのはかなり痛い。
だが、その代わりにライフは繋ぐことができた。
まだ、戦える‼?
「俺のターン、ドロー‼?……カードを１枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ５２００　手札１
ーー▲ーー　▽
×ーーーー
☆　　ー
ー☆☆☆ー
ー△△▲ー　ー
刀花　ＬＰ８０００　手札２

「私のターン、ドロー‼?このターンで決めます‼?トランスコードトーカーの効果発動‼?リターンコマンド‼?何度でも舞い戻って来てください、コードトーカー‼?」

〈コードトーカー〉ＬＩＮＫ２　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ１３００　→←

「数を増やしてきたか……」
「バトル‼?」
「いいや、まだだ‼?バトルフェイズ開始時、２０００ライフポイントを払い、手札からクリフォトンの効果発動‼」
「っ‼?」

遊騎　ＬＰ５２００→３２００

「このカードを手札から墓地へ送り、２０００ライフポイントを払って、このターン、自分が受ける全てのダメージは０になる‼?」
俺の前に現れた電球のような姿をしたモンスターが、俺の身体を包みこむように光の粒子を放つ。
「これじゃあダメージは与えられない……私はこのままターンエンドーーー」
「それにはまだ早いぜ?バトルフェイズを終了時、リバースカードオープン‼?罠発動‼?拮抗勝負‼?」
「っ⁉?その罠は⁉?」
「相手フィールドのカードの数が自分フィールドのカードの数より多い場合、自分・相手のバトルフェイズ終了時に発動できる‼?自分フィールドのカードの数と同じになるように、相手はフィールドのカードを裏側表示で除外しなければならない‼?俺のカードは魔鍵施解と拮抗勝負の２枚‼?幸土も２枚になるように除外してもらうぜ?」
「うっ、私は……トランスコードトーカーとサイバネットオプティマイズを残します」
幸土のフィールドに並んでいたコードトーカー達が次元の狭間に消えていき、トランスコードとサイバネットオプティマイズだけがフィールドに残った。
「やられました。ですが、結束さんの手札は０……まだ押し切れるハズです‼?改めて私はターンエンド‼?」

遊騎　ＬＰ３２００　手札０
ーーーーー　▽
ーーーーー
ー　　ー
ーーー☆ー
ー△ーーー　ー
刀花　ＬＰ８０００　手札２

厄介なコードトーカー達はあらかた除外できたが、まだ俺が不利な状況なのは変わらない。
このドローにかかってるな。
「俺のターン、ドロー!!?よし、引いたぜ!!?　手札のゴッドフェニックスギアフリードの効果発動!!?自分のフィールド・墓地から装備魔法カード1枚を除外してこのカードを手札から特殊召喚する!!?俺は墓地にある妖刀竹光を除外!!?」
墓地にあった妖刀竹光が勢いよく燃え上がり、灰へと変わる。
その灰が集まり、輝くとそこに現れたのは炎を纏う不死鳥の騎士。
「幾星霜を燃え尽きようと、不死鳥は騎士に宿りて蘇る!!?降誕せよ、ゴッドフェニックスギアフリード!!?」

〈ゴッドフェニックスギアフリード〉☆9　戦士族　炎属性
ＡＴＫ３０００

「最上級の戦士族モンスター!!?」
「俺は墓地に存在する焔聖騎士―オジエの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドの戦士族モンスター1体を対象としてこのカードを装備カード扱いとしてその自分のモンスターに装備する!!?さらに墓地に存在する焔聖騎士―モージの効果発動!!?このカードも同様に同名カードは1ターンに1度、このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドの戦士族モンスター1体を対象としてこのカードを装備カード扱いとしてその自分のモンスターに装備する!!?俺はゴッドフェニックスギアフリードに焔聖騎士―オジエ、焔聖騎士―モージをそれぞれ装備する!!?」
墓地に存在するオジエとモージが火の玉に変わり、ゴッドフェニックスに吸収されていく。
「2体の焔聖騎士が装備カードに……」
「ただ装備されるだけじゃないぜ?装備カードとなった焔聖騎士―オ

ジエによりこのカードの装備モンスターは効果では破壊されず、焔聖騎士―モージを装備したモンスターは戦闘では破壊されない‼?」
「戦闘効果破壊耐性の付与⁉?」
「バトル‼?ゴッドフェニックスギアフリードでトランスコードトーカーを攻撃‼?炎凰獄翔斬‼?」
「っ、迎え撃って‼?トランスコードトーカー‼?アーススストライク‼?」
トランスコードが岩石の弾丸を放つが、弾丸が直撃する瞬間、ゴッドフェニックスが炎を纏い不死鳥へと変わり、悠々と弾丸を避けるとトランスコードに突撃し、すれ違いざまに斬り伏せた。

刀花　ＬＰ８０００→７３００

「くっ……」
「俺はこれでターンエンドだ‼?ゴッドフェニックスギアフリードには１ターンに１度、モンスターの効果が発動した時、自分フィールドの表側表示の装備カード１枚を墓地へ送ってその発動を無効にして破壊する効果、炎凰十字斬がある。効果の使いどきは考えた方がいいぜ?」

遊騎　ＬＰ３２００　手札０
ー－△△－　▽
ー－○－－
－　　－
－－－－－
－△－－－　－
刀花　ＬＰ７３００　手札２

「効果無効まで……私のターン、ドロー‼?……っ、まだ足りない。私はカードを１枚セットしてターンエンドです……」

遊騎　ＬＰ３２００　手札０
ーーー△△ー　▽
ーーー○ーー
ー　　ー
ーーーーー
ー△▲ーー　ー
刀花　ＬＰ７３００　手札２

「俺のターン、ドロー!!?　動きが止まった今が好機……って、言いたいとこなんだが、特に出来ることはないな。バトル!!?　ゴッドフェニックスギアフリードでダイレクトアタック!!?炎凰獄翔斬!!?」
「きゃっ!!?」

刀花　ＬＰ７３００→４３００

「メインフェイズ２!!?カードを１枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ３２００　手札０
ー▲△△ー　▽
ーー○ーー
ー　　ー
ーーーーー
ー△▲ーー　ー
刀花　ＬＰ４３００　手札２

「私のターン、ドロー!!?……っ!!?」
勢いよくカードをドローした幸土が、ドローしたカードを見て満面の笑みを浮かべた。
……どうやらこのターンが正念場らしいな。
「結束さん、行きます!!?ゴッドフェニックスギアフリードを対象に

手札の斬機サブトラの効果発動‼同名カードは1ターンに1度、？フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてこのカードを手札から特殊召喚し、対象のモンスターの攻撃力をターン終了時まで1000ポイントダウンさせます‼？　ただし、この効果で特殊召喚したターン、このカードは攻撃できず、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はサイバース族モンスターしかEXデッキから特殊召喚できません‼？」

「っ⁉？相手を弱体化させながら特殊召喚できるモンスター⁉？……なら、ゴッドフェニックスギアフリードの効果発動‼？炎凰十字斬‼？1ターンに1度、モンスターの効果が発動した時、自分フィールドの表側表示の装備カード1枚を墓地へ送ってその発動を無効にして破壊する‼？俺は装備カードとなっている焔聖騎士—オジエを墓地に送り、斬機サブトラの効果を無効にする‼？」

ゴッドフェニックスがオジエの魂を剣に変えて振るうと不死鳥の形をした炎が放たれ、赤い装甲を持つ機械騎士を焼き尽くす。

それを見て、幸士はその笑みを濃くする。

「これで私を止めるものはありません‼？　墓地の斬機ディヴィジョン、斬機サブトラ、チューナモンスター、斬機ダイアを対象に、リバースカードオープン‼？罠発動‼？斬機超階乗‼？同名カードは1ターンに1枚しか発動できず、自分の墓地の斬機モンスターを同名カードは1枚までとし、3体までを対象とし、2つの効果から1つを選択して発動できます‼？1つはそのモンスターを効果を無効にして特殊召喚し、そのモンスターのみを素材として斬機シンクロモンスター1体をシンクロ召喚する効果、ただし、こちらの効果でシンクロ召喚をする場合、その時のシンクロ素材モンスターは墓地へは行かず持ち主のデッキに戻ります。そして2つ目はそのモンスターを効果を無効にして特殊召喚し、そのモンスターのみを素材として斬機エクシーズモンスター1体をエクシーズ召喚する効果です‼？」

「っ‼？斬機を蘇生してシンクロかエクシーズ召喚をする罠⁉？」

「私は1つ目の効果を使用し、蘇ってください、斬機ディヴィジョン‼？斬機サブトラ‼？チューナモンスター、斬機ダイア‼？」

〈斬機ディヴィジョン〉☆４　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１５００

〈斬機サブトラ〉☆４　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ１０００

〈斬機ダイア〉☆４　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１０００

フィールドに現れる３体の斬機。
そして幸土はその言霊を口にする。
「私は、レベル４、斬機ディヴィジョン、斬機サブトラに、レベル４、チューナーモンスター、斬機ダイアをチューニング!!?」
「レベル１２のシンクロ召喚!!?」
ダイアが光の輪になり、ディヴィジョンとサブトラが小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から現れたのは白を基調とした赤の装甲に真っ赤なマントを羽織り、炎を纏った剣を手にした巨大な機械騎士。
「炎の如き最後の守護騎士よ!!?那由多を経ても消えぬ慚愧を祓い、行くべき道を斬り開け!!?シンクロ召喚!!?浄火の斬鬼!!?炎斬機ファイナルシグマ!!?」

〈炎斬機ファイナルシグマ〉☆１２　サイバース族　炎属性
ＡＴＫ３０００

「攻撃力３０００……それだけなら戦闘破壊耐性を得ているゴッドフェニックスギアフリードの方が有利だが……」
「炎斬機ファイナルシグマは２つの永続効果を秘めています。１つ目はヒューミリエーション。このカードはエクストラモンスターゾーンに存在する限り、斬機カード以外のカードの効果を受けません!!?

そして２つ目の永続効果、メモリアルサルベージ。エクストラモンスターゾーンのこのカードが相手モンスターとの戦闘で相手に与える戦闘ダメージは倍になります!!?」
「っ、完全効果耐性に戦闘ダメージの倍化……完全に決戦機能だな」
「私は装備魔法、斬機刀ナユタを炎斬機ファイナルシグマに装備!!?」
「っ、専用の装備魔法まであるのかよ!!?」
空から赤と銀の大剣が降ってきて、地面に突き刺さる。
ファイナルシグマが地面に突き刺さった大剣を抜くと、大剣が炎を纏い勢いよく燃え始めた。
「斬機刀ナユタはサイバース族モンスターにのみ装備でき、同名カードは1ターンに1度、装備モンスターが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時に、デッキから斬機モンスター1体を墓地へ送って装備モンスターの攻撃力はターン終了時まで、墓地へ送ったモンスターの攻撃力分アップさせることができます
!!?」
「っ、斬機は墓地に送られた時に効果があるやつがいたな……」
「この一刀で終わらせます!!?バトル!!?炎斬機ファイナルシグマでゴッドフェニックスギアフリードを攻撃!!?」
「迎え撃て!!?ゴッドフェニックスギアフリード!!?炎凰獄翔斬!!?」
ゴッドフェニックスが炎を纏い不死鳥へと変わってファイナルシグマに迫る。
ファイナルシグマは迫り来るゴッドフェニックスの攻撃をナユタで弾きいなしていく。
「斬機刀ナユタの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、装備モンスターが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時に、デッキから斬機モンスター1体を墓地へ送って装備モンスターの攻撃力はターン終了時まで、墓地へ送ったモンスターの攻撃力分アップさせることができます!!?私はデッキから攻撃力５００の斬機マルチプライヤーを墓地に送り、炎斬機ファイナルシグマの攻撃力を５００ポイントアップします!!?」

炎斬機ファイナルシグマ
ＡＴＫ３０００→３５００

「さらに墓地に送られた斬機マルチプライヤーの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが墓地へ送られた場合、エクストラモンスターゾーンの自分のサイバース族モンスター1体を対象としてそのモンスターの攻撃力はターン終了時まで倍になります!!?」
「何!!?」
「私はエクストラモンスターゾーンにいる炎斬機ファイナルシグマを対象にその攻撃力を倍にします!!?」

炎斬機ファイナルシグマ
ＡＴＫ３５００→７０００

「攻撃力７０００!!?しかも、炎斬機ファイナルシグマには戦闘ダメージを倍にする効果が……!!?」
「結束さんのゴッドフェニックスギアフリードの攻撃力は３０００!!?炎斬機ファイナルシグマによって発生する戦闘ダメージは４０００!!?その倍、８０００ポイントのダメージで私の勝ちです!!?」
攻撃をいなしていたファイナルシグマが力を込めるとナユタが燃え上がり、その炎によりゴッドフェニックスが弾かれ、騎士の姿に戻る。
騎士の姿に戻った瞬間、ファイナルシグマが横薙ぎにナユタを振るった。
「決めてください!!?炎斬機ファイナルシグマ!!?　斬鬼終極剣・風燐火斬!!?」
ゴッドフェニックスは咄嗟に剣で防ぐかファイナルシグマの振るったナユタに吹き飛ばされる。
この攻撃を受けたら俺の負け……だが!!?

「まだ終わっちゃいない‼?リバースカードオープン‼?罠発動‼?パワーウォール‼?」
「えっ⁉?」
「相手モンスターの攻撃によって自分が戦闘ダメージを受けるダメージ計算時、その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージが０になるように５００ダメージにつき1枚、自分のデッキの上からカードを墓地へ送る‼?炎斬機ファイナルシグマの攻撃で発生する戦闘ダメージは８０００‼?俺はデッキの上から１６枚のカードを墓地に送ってダメージを０にする‼?」
　俺がデッキの上から１６枚のカードを墓地に送ると、俺の前に粒子で出来た盾が生まれ、ファイナルシグマの斬撃を防ぎきった。
「そして焔聖騎士―モージを装備したゴッドフェニックスギアフリードは戦闘では破壊されない‼?皮一枚だが、繋げたぜ」
「っ、仕留め切れなかった……」
「まだ終わりじゃ無いぜ?デッキから墓地に送られた曙光の騎士の効果発動‼?同名カードは1ターンに1度、このカードがデッキから墓地へ送られた場合、自分の墓地の光属性モンスター1体を選択してデッキの一番上に置く‼?俺は墓地からクィーンズナイトをデッキの上に置く‼?」
「クィーンズナイト……ですが、この状況をクィーンズナイトだけでは解決できないはず、ドローロックになるだけです‼?メインフェイズ2‼?私はモンスターをセットしてターンエンドーーー」
「残念だが、ドローロックにはならないぜ?エンドフェイズ、焔聖騎士―ローランの効果発動‼?」
「っ⁉?さっきのパワーウォールで……‼?」
「同名カードは1ターンに1度、このカードが墓地へ送られたターンのエンドフェイズにデッキから同名カード以外の戦士族・炎属性モンスター1体または装備魔法カード1枚を手札に加える‼?俺はデッキから装備魔法、リビングフォッシルを手札に加える‼?」
「っ、デッキがシャッフルされたからドローロックも解除……っ、私はこのままターンエンドです‼?」

遊騎　ＬＰ３２００　手札１
ーーー△ー　▽
ーー○ーー
　　○　　ー
ーー□ーー
ー△△ーー　ー
刀花　ＬＰ４３００　手札０

なんとか防ぎ切ったが、状況が不利なことには変わりない。
完全効果耐性を持つファイナルシグマを倒すには戦闘しかないが、戦闘すればナユタの効果により返り討ちになる可能性がある。
おまけにパワーウォールで想像以上にデッキを削ってしまったため、残り時間も僅かだ。
だけどーーー
「幸土」
「っ、なんでしょう？」
俺の声に少し警戒したような顔を浮かべる幸土に、俺は満面の笑みを浮かべた。
「認めるよ、幸土　刀花。お前は今のプロリーグですら通用する程の立派なデュエリストだ」
「っ⁉？私が、ですか？」
「ああ、掛け値なしにそう思うよ。幸土は強い」
呆けたような表情を浮かべる幸土に俺は力強く頷く。
このデュエル、俺は終始押されっぱなしだ。
いくらまだ完全に慣れてはいない新デッキだからといって、ここまで追い詰められるとは思わなかった。
そして、逆転されかけた状況ですら楽しげに笑って見せた。
その姿に、自分の弟子である遊花の姿が重なる。
幸土は強い。
現状ですら間違いなくプロ決闘者相手にも通用する程の強者で、遊

花のようにどこまで成長していくのかが分からない程の才能の原石だ。
　だからこそーーー
「だからこそ、俺も今出せる全力でお前に勝たせて貰うぜ。弟子に作って貰ったデッキで、いつまでもカッコ悪いところは見せられないからな」
「っ!!?……はい!!?私だって負けません!!?このまま結束さんに勝って見せます!!?」
　俺の言葉に幸土は心底楽しそうな、満面の笑みを浮かべる。
　俺は目を閉じて自分のデッキの上のカードを掴む。
　このドローは、勝敗を分ける一手。
　だけど、臆する必要はどこにもない。
　何故なら、これはどこまでいっても、楽しいデュエルなのだから!!?
「俺のターン……ドロー!!?」
　勢いよくドローしたカードを見て、俺は勝利までの道筋を探っていく。
　このカードだけではまだ足りない……だけど、希望はまだ消えていない!!?
「俺は墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動!!?自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローする!!?ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外される!!?俺はフィールドの魔鍵施解をデッキに戻し、カードを1枚ドローする!!?さらに魔法カード、貪欲な壺!!?」
「っ!?!?またドローカード!?!?」
「墓地に存在するダイガスタエメラル、スカーウォリアーをＥＸデッキに、沈黙の剣士―サイレントソードマン、サイレントソードマンＬＶ７、魔鍵砲―ガレスヴェートをデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする!!?」
　勢いよくドローしたカードを見て、そのカードから繋がる軌跡を思

い描く。
　そしてーーー俺は心からの笑みを浮かべた。
「行くぜ、幸土。この勝負、俺がもらう!!?」
「っ!!?」
「まずは墓地の魔鍵銃―バトスバスターを対象に装備魔法、リビングフォッシル!!?同名カードは1ターンに1枚しか発動できず、自分の墓地のレベル4以下のモンスター1体を対象としてそのモンスターを特殊召喚し、このカードを装備する!!?ただし、装備モンスターの攻撃力・守備力は1000ポイントダウンし、効果は無効化され、この効果で特殊召喚したモンスターは、フィールドから離れた場合に除外され、このカードがフィールドから離れた時にそのモンスターは除外される!!?甦れ、逆境に風穴を開ける銃士!!?儀式チューナー、魔鍵銃―バトスバスター!!?」

〈魔鍵銃―バトスバスター〉☆4　機械族　闇属性
　DEF2200→1200

「そして魔法カード、闇の量産工場!!?自分の墓地の通常モンスター2体を対象としてそのモンスターを手札に加える!!?俺は墓地のクィーンズナイト、ジャックスナイトを手札に加える!!?そしてゴッドフェニックスギアフリードをリリースし、ジャックスナイトをアドバンス召喚!!?」
「ゴッドフェニックスギアフリードをリリースしてジャックスナイトを!!?」

〈ジャックスナイト〉☆5　戦士族　光属性
　ATK1900

「そして墓地に送られた焔聖騎士―モージの効果発動!!?俺は墓地のゴッドフェニックスギアフリード、イグナイトライオット、焔聖騎士―リナルドをデッキに戻してシャッフルし、カードを1枚ドローする

!!?」
「なんでゴッドフェニックスギアフリードをリリースして……」
「それはジャックスナイトがこの逆境を切り開く鍵だからだ!!?　１０００ライフポイントを払って魔法カード、簡易融合（インスタントフュージョン）を発動!!」

遊騎　ＬＰ３２００→２２００

「１０００ライフポイントを払い、レベル５以下の融合モンスター１体を融合召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃できず、エンドフェイズに破壊される!!?現れろ、魔獣従えし銃士!!?チューナーモンスター、魔鍵召獣―アンシャラボラス!!?」
「っ!!?魔鍵の融合チューナー!!?」

〈魔鍵召獣―アンシャラボラス〉☆４　獣族　闇属性
ＡＴＫ２２００

フィールド湯気を立てているカップ麺が現れ、その匂いにつられてやってきたのは翼を生やした犬に乗る銃士。
「行くぜ、魔鍵召獣―アンシャラボラスの効果発動!!?セメタリーアンロック!!?同名カードは１ターンに１度このカードが融合召喚に成功した場合に自分の墓地から魔鍵―マフテア１枚を選んで手札に加える!!?」
「っ!!?またマフテアが手札に!!?」
「俺は魔法カード、魔鍵―マフテアを発動!!?俺はフィールドの魔鍵効果モンスター、魔鍵召獣―アンシャラボラスとデッキから通常モンスター、クィーンズナイトを融合!!?」
フィールドに巨大な扉が現れ、扉の鍵穴にアンシャラボラスとクィーンズナイトが吸い込まれていく。
「魔獣を従えし銃士、女王の騎士よ!!?今交わりて新たな世界の扉を開け!!?融合召喚!!?」

そして鍵穴にマフテアが差し込まれ、開錠すると扉の中から現れたのは巨大な龍に乗った銃士。
「融合召喚!!?魔龍従えし銃士!!?魔鍵召竜―アンドラビムス!!?」
〈魔鍵召竜―アンドラビムス〉☆８　ドラゴン族　風属性
ＡＴＫ２８００
「魔鍵の融合モンスター……」
「どんどん行くぜ?俺はレベル５、ジャックスナイトに、レベル４、チューナーモンスター、魔鍵銃―バトスバスターをチューニング!!?」
「っ!!?やっぱり、レベル９のシンクロ召喚!!?」
バトスバスターが光の輪になり、ジャックスナイトが小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から現れたのは片腕を包帯で吊るした傷だらけの傭兵。
「烈火の如き聖騎士よ!!?果てなき幻想を抱き、劣勢を覆せ!!?シンクロ召喚!!?幻想の大帝!!?焔聖騎士帝―シャルル!!?」
〈焔聖騎士帝―シャルル〉☆９　戦士族　炎属性
ＡＴＫ３０００
「焔聖騎士帝―シャルル……」
「俺は墓地に存在する焔聖騎士―モージの効果発動!!?焔聖騎士帝―シャルルに焔聖騎士―モージを装備する!!?この瞬間、焔聖騎士帝―シャルルの効果発動!!?オルドルシャティマン!!?フィールドのモンスターに装備カードが装備された場合に、フィールドのカード１枚を選んで破壊する!!?破壊するのは斬機刀ナユタ!!?」
モージが火の玉に変わり、シャルルの手元に集まると、シャルルはその火の玉をファイナルシグマが手にしたナユタに向けて放ち、火の玉が当たったナユタは爆散した。

「斬機刀ナユタが……っ、破壊された斬機刀ナユタの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが魔法&罠ゾーンから墓地へ送られた場合、同名カード以外の自分の墓地の斬機カード1枚を対象としてそのカードを手札に加えます!!?私は墓地から斬機方程式を手札に加えます!!?」
「これでもう炎斬機ファイナルシグマも倒せない敵じゃない!!?バトル!!?焔聖騎士帝―シャルルで炎斬機ファイナルシグマを攻撃!!?ジュワユーズフラム!!?」
「迎え撃ってください!!?炎斬機ファイナルシグマ!!?斬鬼終極剣!!?」
ナユタが壊されたファイナルシグマは炎を剣に変え、シャルルに向かって振るう。
シャルルも炎を纏った剣をファイナルシグマに振るい、お互いの剣に斬り裂かれた両者を相手の炎が焼いていく。
燃えゆく炎の中、ファイナルシグマは崩れ落ち、爆散したが、シャルルは剣を振るい、剣圧で炎を吹き飛ばした。
「炎斬機ファイナルシグマを破壊したこの瞬間、魔鍵召竜―アンドラビムスの効果、それにチェーンして墓地の閃刀姫―ロゼの効果発動!!?」
「っ!!?なら、さらにそれにチェーンして炎斬機ファイナルシグマの効果発動!!?パーガトリーリコレクション!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが戦闘または相手の効果で破壊された場合、デッキから斬機カード1枚を手札に加えます!!?私はデッキから斬機ダイアを手札に加えます!!?」
「サーチ効果……だが、このターンで決めれば問題ない!!?閃刀姫―ロゼの効果発動!!?このカードが墓地に存在する状態で、ＥＸモンスターゾーンの相手モンスターが、戦闘で破壊された場合、または自分のカードの効果でフィールドから離れた場合、このカードを特殊召喚する!!?その後、相手フィールドの表側表示モンスター1体を選び、ターン終了時までその効果を無効にできる。来い、閃刀姫―ロゼ!!?」

〈閃刀姫―ロゼ〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１５００

フィールドに現れたのは黒い軍服に身を包み、真っ赤な刀を手にした銀髪赤目の少女。
「さらに魔鍵召竜―アンドラビムスの効果発動!!?セカンドアクセス!!?このカードの融合素材としたモンスターの属性が２種類だった場合、１ターンに１度、自分の墓地のいずれかのモンスターと同じ属性を持つ、相手モンスターが戦闘・効果で破壊された場合、自分はデッキから１枚ドローする!!?俺の墓地には炎属性のモンスターがいるため、１枚ドロー!!?」
「っ、モンスターが増えた上にドローまで……」
「閃刀姫―ロゼでセットモンスターを攻撃!!?ダーインスレイヴ!!?」
「っ、セットモンスターはバランサーロード!!?」

〈バランサーロード〉☆４　サイバース族　光属性
ＤＥＦ１２００

ロゼは一瞬でデータの身体を持つ戦士の背後に現れ、手にした真紅の刀で斬り伏せる。
「これでもう壁となるモンスターはいない!!?魔鍵召竜―アンドラビムスでダイレクトアタック!!?シュトゥルムシュトラール!!?」
「くぅっ!!?」

刀花　ＬＰ４３００→１５００

アンドラビムスが放つ暴風の息吹が刀花のライフを削り取る。
「な、なんとかライフが残りました……次のターンでーーー」
「いや、幸土に次のターンはない!!?　速攻魔法発動!!?ライバルア

ライバル!!?」
「っ!!?その速攻魔法は!!?」
「このカードは自分・相手のバトルフェイズに発動でき、モンスター1体を召喚する!!?来い、クィーンズナイト!!?」
〈クィーンズナイト〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１５００
「っ……私の負け、ですね……」
クィーンズナイトの姿を見た幸土は悔しそうに目を閉じる。
しかし、すぐに目を開くと満面の笑みを浮かべた。
「ですが、次は負けません!!?」
「ああ。だが、俺だって次も負けないぜ。クィーンズナイトでダイレクトアタック!!?クィーンズスラッシュ!!?」
刀花　ＬＰ１５００→０
ーーーーーーーー
「ふぅ、ギリギリだったな。サンキュー、幸土。いいデュエルだったぜ」
「いえ、こちらこそ、ありがとうございました!!?」
満面の笑みを浮かべる幸土に俺はホッとする。
どうやらデュエルでいい具合に幸土の罪悪感を抜けれたようだ。
俺としてもよりデッキが自分に馴染んだようで満足である。
「いいデュエルだったわよ、刀花。遊騎をあそこまで追い詰めるなんて、やるじゃない」
「あ、ありがとうございます、宝月先輩」
「ん、見事なデュエルだった。遊騎の新しいデッキも凄かった」
「まぁ、作った遊花の腕がいいからな」
「ふふっ、そうだね……ん?」

そういって少し談笑をしていると不意に闇の携帯端末が鳴りはじめる。
闇は携帯端末を手に取るとそのまま電話に出た。
「もしもし。ん、何かあった？……そう、わかった。すぐ行く」
そこまで言うと闇は携帯端末を切り、申し訳なさそうな表情でこちらを見た。
「ごめん、遊騎。行かないと行けなくなった」
「分かった。相手は？」
「美傘。ちょっとトラブルみたい。対処してくる」
「美傘か……分かった、頼んだぜ」
「ん、任せて。いってきます」
そういうとすぐに闇は自分の荷物を持って病室から出て行く。
その様子を見て、桜は心配そうな表情を浮かべた。
「何かあったのね、美傘さん、大丈夫かしら？」
「大丈夫だろ、闇も何も言わなかったしな。闇が言わなかったなら、それは必要ないってことだ。闇に任せておけば問題ない」
「信頼してるんですね、冬城先生のことを」
平然としている俺を見て幸土が驚いた表情を浮かべる。
そんな幸土に俺は満面の笑みで応えた。
「勿論だ。なんたって、闇は俺の1番の親友だからな」

第９０話　月夜の追走

●

「確か連絡によるとこの辺り……」
「あ、闇さん‼?こっちです‼?」
　美傘の連絡を受け、夜の帳が下り始めた湾岸エリアまで出向いた私は美傘の案内の元路地裏の一角に来ていた。
　意識を失っているのか路地裏に背中をつけてぴくりともしない夜に、心配そうに美傘が付き添っている。
　私は夜に近づくと彼女の様子を観察し、美傘に話しかける。
「大丈夫、ただ気を失ってるだけ。すぐに目を覚ます」
「そうですか……よかった。闇のカードのことはまだ分からないから心配で……」
「……それだけじゃないでしょ?」
　私の言葉に、美傘が一瞬固まり、辛そうな顔で視線を彷徨わせる。
　私はそんな美傘の両頬を押さえ、こちらを向かせる。
「ほにょ⁉?や、闇さん?」
「美傘が何を考えてるのかは、大体想像がつく。射手園　大和から何を言われたのかも」
「っ……」
　私の言葉に、泣きそうな顔になる美傘に私は押さえて手をどけ、口を開く。
「心配いらない」
「でも……」
「夜が何を隠していたとしても、夜が美傘と過ごしてきた日々は嘘にはならない」
「っ‼?」
「彼女が何であったとしても、それに美傘が気付いたのだとしても、美傘が気付くまでの彼女は、確かに美傘の友達の眼竜　夜だったハズだ

よ」
「闇さん……っ‼?」
　私の言葉を受けて、美傘は自分の頭を振ると力一杯自分の両頬を叩いた。
「すみません、お手数をおかけしました。ちょっと寝ぼけてたみたいです」
「仕方ない。もう夜になるし、眠くなってもおかしくない」
　私の言葉に美傘は笑顔を浮かべると、倒れていた夜を支えて立ち上がる。
「とりあえず、今日のところは夜ちゃんを美傘のアパートに連れて帰ります。こんなところで寝てたら風邪引いちゃいますからね‼?初めてですが、友人同士のお泊まり会です‼?お互いの秘密とか語り合って、もっと仲良くなってきます‼?」
「ん、それがいい。今日の調査は私に任せて。ゆっくりと親睦を深めるといい」
　戯けたように笑う美傘に、私は自分の胸を叩きながら頷く。
　そんな私に、美傘は懐からメモ帳を取り出し、私に手渡した。
「あ、これ、今日の調査内容を纏めたものです。考察とか書いてるので読みにくいかもですが……」
「大丈夫。助かる。後は任せて」
「はい……お気をつけて」
「ん、大丈夫。私は、強いから」
　確かな自信を持って頷く私を見て、美傘は真剣な表情で頭を下げると、夜と共に街中に消えていった。
『ウオウヨジ　ガラレワ　カノイイ　テクナゲツ　ヲツジンシ』
「本人以外が語るのは無粋。遊騎にも止められたし、私が語ることではないよ」
　美傘達の姿が見えなくなったところで、語りかけきたヴェルズウロボロスに淡々と返す。
　夜の真実を、私は知っている。
　夜から聞いたのではなく、ただその場にいたというだけだが。

だけど、それを本人ではなく、部外者である私が夜の友達である美傘に話すのは無粋過ぎるだろう。
『ガチタノモノカ　？ゾルイ　デンヨ　モリヨレソ　ウオウヨジ　ガラレワ　ナイシサヤ』
「ん？あの子達が？」
ヴェルズウロボロスの言葉を聞き、私は自分のポシェットからカードローダーに入れられた数枚のカード達を取り出す。
カードローダーから1枚のカードを除き全てのカードを抜き取ると、取り出したカード達からドス黒い闇が溢れ出し、何かの鳴き声が耳に響いた。
『ーーー‼？』
「ん？久しぶりに遊びたいの？」
『ーーー‼？　ーーー‼？』
「闇のカードが相手なら力になれる……それは分かってはいるけど」
聞こえてきた鳴き声に私が渋っていると、ヴェルズウロボロスが声をかけてくる。
『ウオウヨジ　ガラレワ　？カイナ　ハデノイヨ　ハニマタ』
「ヴェルズウロボロス……」
『ラカダ　ノナ　イメシ　ノチタノモノカ　ガノルス　ゴユシ　エカツ　ニウオウヨジ　ウロア　デウヨツヒ　モキヌキイ　ダノルイテネサカ　ヲンマガ　ラカンダフ』
「……そうだね。わかった。久しぶりに遊ぼう。ただし、私が止めたらちゃんと止まること。ただでさえあなた達はやりすぎちゃうんだから。いい？」
『ーーー‼？　ーーー‼？』
私の声に嬉しそうな鳴き声が返ってきて、私はしょうがないなと少し微笑ましい気持ちになりながら、取り出したカードと他にも数枚のカードをポシェットから取り出してデッキを組み換えるのだった。
ーーーーーーー

「これで終わり、ヴェルズバハムートでダイレクトアタック。剥奪のカンシャスニスディサピアランス」
「んぎゃあああ‼?」

操られた男　ＬＰ１９００→０

「ここもハズレ……いや、ある意味では当たりだけど」
『ハヨジウヨシ　ノア　ナダウヨ　ルイテツモ　ヲクヨリウノ　ウユシウユシ　ウホウヨジ　イシラバス　ハト　リオド　ツサウコ』
「それは認める。美傘はすごい。ちょっと騒がしいけど」
美傘のメモ帳を頼りに、湾岸エリアの　罠だと思われる場所を調べること　３箇所目。
それぞれの場所にいた、闇のカードに操られ行方不明になっていたプロ決闘者を３人程倒し、それぞれのデュエルディスクを使って通報したところで私は軽く息を吐いた。
美傘のメモ帳に考察として書かれていた通り、天神　幻騎の目撃情報があった場所には闇のカードに操られ行方不明になっていたプロ決闘者がいた。
目的はやはり、天神　幻騎を探る者を葬るためだろう。
虎穴に入らずんば虎子を得ず。
罠の可能性が高かろうと、調べておかなければ後々その罠に行き着く可能性が高いのは遊騎と遊花だ。
ならば、多少の罠であれば踏み潰すことができる私が危険な場所を潰しておくのが無難である。
ついでに何か得るものがあればと思ったが、そちらの当ては完全にハズレてしまった……色んな意味で。
『ウオウヨジ　ガラレワ　ナダウソサナリタノモ』
「正直に言うと、ね。適合できずに操られている程度のプロ決闘者じゃ、弱すぎて心が踊らない」
「イマイ　ウソ　ドナ　トスリエユデ　ルセタミ　ヲエウ　ノウオウ

ヨジ　ナウロダ」
　不服そうに頬を膨らませる私を見て、ヴェルズウロボロスは面白そうに笑う。
　一応フォローを入れておくと戦ったプロ決闘者達が決して弱いわけではない。
　彼らが普通の精神状態であれば、私も多少は手間取るだろうし、遊花であれば苦戦するだろう。
　だが、闇のカードで操られた人間はその闇のカードに固執し過ぎるきらいがある。
　精神干渉を受けているのだから仕方がないことなのだが、だからこそ無理な動きを見せることが非常に多い。
　そんなデュエリストとしての心もこもっていないデュエルをされても、私の心は躍らないし、潰しやすいのだ。
　これでは折角デッキを組み替えて入れたあの子達を呼び出す程でもない。
　ほとんど時間の無駄だった。
「結局あの子達も暴れさせれてないし、もう少し手応えがありそうなのはいないかな？」
『？カルミ　テツイ　タジンカ　ヲツヤ　ツモ　ヲイハケノミヤ　ナクヨリウヨキ　コソコソ　ニヨシバ　タレナハ　シコス　ラカココ　テマシコス』
「無論。案内よろしく」
『タエロココ』
　ヴェルズウロボロスの案内を頼りに、ヴェルズウロボロスが感じた闇の気配に近づいていく。
　一応美傘のメモ帳を確認してみるが、ヴェルズウロボロスが感じた闇の気配を放つ人物がいる場所はメモ帳には記されていなかった。
　美傘の調査では得られなかった場所なのか、それとも今日は偶然そこにいるのか。
　分からなくはあるが、私がやること自体は変わらない。
　ヴェルズウロボロスに案内されてついたのは、湾岸エリアの一角に

ある中規模の倉庫だった。
決闘都市『ケルン』の海の出入り口である湾岸エリアには貿易船の積荷等を保管するためにいくつもの巨大な倉庫が存在している。
物語の中でもこういう倉庫に怪しい組織の隠れ家があったりするし、確かに調べてみる価値はあるかも知れない。
とはいえ、今回はすでに調べる必要はなさそうだけど。
「ほ、本当に、そのカードがあれば俺は強くなれるのか⁉？」
「ああ。これは　ある男が生み出した。貴方を新たな高みへと至らせる素晴らしいカード達だ。使用すれば必ず貴方を更なる高みへと引き上げることを約束しよう」
倉庫と倉庫の間にある路地裏で、スーツを着た気弱そうな男性が、黒いバイクヘルメットを被り、黒いライダースジャケットを着た奇妙な男が黒いアタッシュケースを開け、気弱そうな男性に見せているところだった。
アタッシュケースから感じるのは複数の闇のカードの気配。
今までにないパターンではあるが、先程の言葉から考えるとこの男は闇のカードの売人だろう。
それだけ分かれば十分だ。
「そこまで」
「ひぃっ⁉？こ、子供？」
「っ‼？チッ‼？」
息を潜めていた倉庫の影から姿を見せると、男達は驚いてこちらを見る。
気弱そうな男性は失礼なことを呟き、こちらを呆然とした様子で見るだけだったが、ライダースジャケットを着た男は違った。
私の姿を確認するのと同時に近くに止めていた奇妙なデザインのバイクに乗り、アタッシュケースを荷台に固定して、エンジンをつけると凄まじいスピードで走り去っていった。
「っ、逃げ足の早い……」
『ナラカダ　クイバ』
「すぐに追う」

『?カノナ　キルス　ヲレア　ヤシモ』
ヴェルズウロボロスが心配そうな声を出すが、私はポシェットからあるものを取り出し、デュエルディスクを起動するとニヤリと笑った。
「勿論、試運転にはちょうどいい……頼んだよ、ーーーーーーーーーー」
『ーーー!!?』
私の声に、デュエルディスクから大量の闇が溢れ出し、何かの鳴き声が夜の倉庫街に響いた。

ーーーーーーー

○

「チッ!!?まさかあんな　化け物に目撃されるとはな……」
闇から逃げ出したライダースジャケットを着た男は、人気のない夜の湾岸エリアをバイクで必死に駆けていた。
「世界ランキング4位、『氷の女王』冬城　闇。　あの男もいずれ遭遇する可能性があるとは言っていたが……何が『氷の女王』だ。アレは　その程度の生易しいものじゃないだろう」
思わず独り言で悪態を突きながらも、ライダースジャケットを着た男はただひたすら夜の闇を駆ける。
「何にせよ、アレは危険だ。幸い移動手段はなさそうだった。このままーーー」
「逃がさない」
「っ!!?」
不意に聞こえた少女の声にライダースジャケットを着た男は声が聞こえてきた方向に視線を向ける。
すると、そこには異常なスピードで道路を　滑走し、バイクに追いついて並走する闇の姿があった。
「馬鹿な!!?どうやって私に追いついて……っ!!?」

ライダースジャケットを着た男がバイクに追いついてきた闇の姿を見て驚愕に目を見開く。
バイクに追いついてきた闇の両靴には、地面を滑走する車輪が取り付けられていた。
「ローラースケート、だとっ⁉？ふざけやがって⁉？」
「私ができる合理的な移動手段なだけ。ふざけてるつもりはない。それに昔、疑似人格プログラムと世界を救う物語の主人公も移動手段に使ってた。つまり、おかしくない」
「それは創作物の話だろう⁉？どこまでもコケにしてくれる⁉？」
「あなたには聞きたいことがある。だから、逃さない」
「チッ⁉？」
真面目な顔でふざけたことを言ってくる闇にライダースジャケットを着た男は思わず舌打ちをする。
実際、どんなにスピードを上げようと何故か闇は追い風に押されてバイクと　並走してくる。
言っていることもやってることもおかしく、どういう原理なのかも分からないが、事実としてあるのは確かな脅威として闇がそこにいるということである。
「チッ⁉？こうなってしまえば仕方がない……オートパイロット起動⁉？デュエルシステム、スタンバイ⁉？」
「むっ？」
ライダースジャケットを着た男が奇妙なデザインのバイクにつけられていたスイッチを押すと、バイクが自動操縦に切り替わり、バイクに内蔵されていたデュエルディスクが起動する。
それを見て、闇は楽しそうに笑うと起動していたデュエルディスクを構える。
「ふふ、面白いことになった。いいよ、相手をしてあげる」
「ローラースケートで移動しながらデュエルをしようって言うのか⁉？どこまでもふざけやがって⁉？」
「バイクでデュエルしようとしてるあなたに言われたくない。さあ、始めよう」

「後悔させてやるぞ‼?・」
『決闘‼?』

闇　ＬＰ８０００
ライダー　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

●

「先攻は私だ‼?クックック、完璧な手札だ‼?まずは手札の星遺物―『星杖』を墓地に送り、魔法カード、オルフェゴールプライム‼?同名カードは１ターンに１度しか発動できず、手札及び自分フィールドの表側表示モンスターの中から、オルフェゴールモンスターまたは星遺物モンスター１体を墓地へ送って自分はデッキから２枚ドローする‼?私は宵星の騎士（ジャックナイツ）ギルス（オルフェゴール）を召喚‼?」

〈宵星の騎士ギルス〉☆４　機械族　闇属性
ＡＴＫ１８００

フィールドに現れたのは黒衣の機械騎士。
「宵星の騎士ギルスの効果発動‼?同名カードは１ターンに１度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合にデッキからオルフェゴールカードまたは星遺物カード１枚を墓地へ送る‼?このカードと同じ縦列に他のカードが２枚以上存在する場合、さらにこのターン、このカードをチューナーとして扱うが、今はそちらはどうでもいい。私はデッキからオルフェゴールディヴェルを墓地に送る‼?さらに宵星の騎士ギルスのもう１つの効果発動‼?同名カードは１ターンに１度、自分フィールドに他のモンスターが存在しない場合、お互いのフィールドに機械族・闇属性・レベル１・攻守０の星遺物トークンを１体ずつ守備表示で特殊召喚する‼?」

〈星遺物トークン〉☆1　機械族　闇属性
ＤＥＦ０

ギルスが槍を掲げると、私とライダーのフィールドに小さな機械の妖精が現れた。
「さらに墓地のオルフェゴールディヴェルの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、墓地のこのカードを除外してデッキからオルフェゴールディヴェル以外のオルフェゴールモンスター1体を特殊召喚する!!?ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は闇属性モンスターしか特殊召喚できない。私はデッキからオルフェゴールトロイメアを特殊召喚!!?」

〈オルフェゴールトロイメア〉☆7　機械族　闇属性
ＤＥＦ２０００

次に現れたのは体表が崩壊し、顔の右半分を覆っているがひび割れ、仮面の下から赤く光り輝く眼が見える機械人形。
現れたオルフェゴールトロイメアを見て、ライダーは正面に手をかざす。
「動き出せ!!?狂気が奏でるサーキット!!?」
「リンク召喚……」
ライダーの正面に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はオルフェゴールモンスターを含む効果モンスター2体!!?私は宵星の騎士ギルス、オルフェゴールトロイメアをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
ギルスとオルフェゴールトロイメアがサーキットに吸い込まれる。
そして代わりに現れるのはオルフェゴールトロイメアに似た身体が機械で出来ている少女。
「リンク召喚!!?狂気に造られた悲しき巫女!!?リンク2!!?オルフェゴールガラテア!!?」

〈オルフェゴールガラテア〉ＬＩＮＫ２　機械族　闇属性
ＡＴＫ１８００　↙？↗？

「オルフェゴールガラテアの効果発動‼？ルナティックセレナーデ‼？同名カードは１ターンに１度、除外されている自分の機械族モンスター１体を対象としてそのモンスターをデッキに戻し、その後、デッキからオルフェゴール魔法・罠カード１枚を自分フィールドにセットできる‼？私は除外されているオルフェゴールディヴェルをデッキに戻し、デッキからカウンター罠、オルフェゴールクリマクスをセット‼？さらに、動き出せ‼？狂気が奏でるサーキット‼？」
「連続リンク召喚……」
「召喚条件は通常モンスター１体‼？私は星遺物トークンをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？リンク１‼？リンクリボー‼？」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

ライダーの前に遊花が普段から使っている青い球体型のモンスターが現れ、思わず顔を顰める。
遊花が使っているカードをこんなのに使われるなんて正直とても不愉快だ。
しかし、何故かリンクリボーを出したライダーも顔を顰める。
「くっ、何故だかこの青い球体を見ていると臍下辺りがむず痒くてイライラする‼？」
「嫌なら使わなければいい」
「チッ、こんな奴すぐにフィールドから消してやる‼？　動き出せ‼？狂気が奏でるサーキット‼？」
舌打ちをしながらライダーは再びサーキットを開く。
「召喚条件はオルフェゴールモンスターを含む効果モンスター２体以

上‼?私はリンクスパイダーとオルフェゴールガラテアを２体分として扱ってリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?」
リンクリボーとガラテアが２体に分身してサーキットに吸い込まれる。
そして代わりに現れるのは機械の盾と槍を手にした戦士。
「リンク召喚‼?狂気に侵された悲しき戦士‼?リンク３‼?オルフェゴールロンギルス‼?」

〈オルフェゴールロンギルス〉ＬＩＮＫ３　機械族　闇属性
ＡＴＫ２５００　↖?←↘?

「さらにオルフェゴールロンギルスを対象に墓地のオルフェゴールトロイメアの効果発動‼?同名カードは１ターンに１度、墓地のこのカードを除外し、フィールドの表側表示モンスター１体を対象としてデッキから同名カード以外の機械族・闇属性モンスター１体を墓地へ送り、対象のモンスターの攻撃力はターン終了時まで、墓地へ送ったモンスターのレベル×１００ポイントアップさせる‼?ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は闇属性モンスターしか特殊召喚できない。私はデッキからレベル３のオルフェゴールスケルツォンを墓地に送り、オルフェゴールロンギルスの攻撃力を３００ポイントアップさせる‼?」

オルフェゴールロンギルス
ＡＴＫ２５００→２８００

「まだ終わらんぞ‼?私は墓地に存在するオルフェゴールスケルツォンの効果発動‼?同名カードは１ターンに１度墓地のこのカードを除外し、同名カード以外の自分の墓地のオルフェゴールモンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する‼?ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は闇属性モンスターしか特殊召喚できない。墓地より蘇れ、狂気に造られた悲しき巫女‼?オルフェゴー

ルガラテア‼?」

〈オルフェゴールガラテア〉ＬＩＮＫ２　機械族　闇属性
ＡＴＫ１８００　↙?↗?

墓地から再びガラテアが姿を現す。
ガラテアを見てライダーはニヤリと笑うと空に手をかざした。
「私はオルフェゴールガラテア１体でオーバーレイネットワークを構築‼?」
「っ‼?リンクモンスターでエクシーズ召喚?」
空に浮かんだ混沌の渦にガラテアが吸い込まれていく。
そして渦が爆けると空から降り立つのは建造物のように巨大な馬の脚を持つ機械騎士。
「エクシーズ召喚‼?　現れろ、人類の罪の証たる高みへと至る巨塔‼?ランク８‼?　宵星の機神（シーオルフェゴール）ディンギルス‼?」

〈宵星の機神ディンギルス〉★８　機械族　闇属性
ＡＴＫ２６００

「宵星の機神ディンギルス……」
「宵星の機神ディンギルスは１ターンに１度しか特殊召喚できず、自分フィールドのオルフェゴールリンクモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚する事ができるモンスターだ」
「成る程、だからリンクモンスターを使ってエクシーズ召喚を……」
「宵星の機神ディンギルスの効果発動‼?エテメンアンキ‼?このカードが特殊召喚に成功した場合、２つの効果から１つを選択して発動できる。１つは相手フィールドのカード１枚を選んで墓地へ送る効果。もう１つは除外されている自分の機械族モンスター１体を選び、このカードの下に重ねてオーバーレイユニットとする効果だ。私は２つ目の効果を使い、除外からオルフェゴールスケルツォンをオーバーレイユニットとする‼?」

ディンギルスが槍を掲げると次元に穴が空き、そこから現れたスケルツォンがディンギルスに吸収され、オーバーレイユニットに変わった。

ここまで動いているのにも関わらず、オルフェゴールプライムでドローした以外でやったことはギルスの召喚だけ。

控えめに言って1枚のカードで動きすぎだ。

「まだまだ動かせて貰うぞ？私は手札を1枚捨てて魔法カード、機甲部隊の再編制（マシンナーズ リフォーメーション）!!?同名カードは1ターンに1枚しか発動できず、2つの効果から1つを選択して発動できる。1つ目は手札を1枚捨ててデッキから同名カードは1枚までとしてマシンナーズモンスター2体を手札に加える効果。もう1つは手札からマシンナーズカード1枚を捨ててデッキから同名カード以外のマシンナーズカード2枚を同名カードは1枚までとして手札に加える効果だ。私は1つ目の効果でデッキからマシンナーズアンクラススペアとマシンナーズパゼストレージを手札に加える!!?そして手札に加わったマシンナーズアンクラススペアの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードがドロー以外の方法で手札に加わった場合、このカードを特殊召喚する!!?ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は機械族モンスターしか特殊召喚できない。現れろ、マシンナーズアンクラススペア!!?」

〈マシンナーズアンクラススペア〉☆4　機械族　闇属性
ＤＥＦ８００

フィールドに現れたのは黒い闇を纏った機械兵のスナイパー。

「さらにマシンナーズアンクラススペアの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから同名カード以外のマシンナーズモンスター1体を墓地へ送る!!?私はデッキからマシンナーズフォートレスを墓地へ送る!!?カードを1枚伏せてターンエンドだ!!?」

闇　ＬＰ８０００　手札５
ー ー ー ー ー ー ー
ー ー □ ー ー
??　　ー
ー ー ○ □ ー
ー ー ▲ ▲ ー　ー
ライダー　ＬＰ８０００　手札２

「私のターン、ドロー」
ドローしたカードを見て、ライダーに引き離されないように滑走しながら、考えを巡らせると、私はすぐに手札のカードを掲げた。
「手札からブリューナクの影霊衣（ネクロス）を捨てて効果発動。同名カードは１ターンに１度、デッキから同名カード以外の影霊衣モンスター１体を手札に加える」
「サーチ効果か……ならば、チェーンしてリバースカードオープン‼？カウンター罠、オルフェゴールクリマクス‼？同名カードは１ターンに１度、自分フィールドにオルフェゴールリンクモンスターが存在し、モンスターの効果・魔法・罠カードが発動した時、その発動を無効にし除外する‼？」
ロンギヌスの命令を受け、ディンギルスが槍を振るい、ブリューナクの影霊衣を除外する。
カウンター罠は使わせた。
伏せカードはまだあるが、元より躊躇をする気は一切ない。
「星遺物トークンをリリースし、ヴェルズコッペリアルをアドバンス召喚」
〈ヴェルズコッペリアル〉☆６　機械族　闇属性
ＡＴＫ２４５０
現れたのは闇を纏った黒い暴走機関車。
「ヴェルズ、だと？」

「バトル。ヴェルズコッペリアルでオルフェゴールロンギルスに攻撃。ダークネスロコモーティブ」
「攻撃力が低いモンスターで攻撃だと？迎え撃て、オルフェゴールロンギルス‼？エレジーロンギヌス‼？」

闇　ＬＰ８０００→７９５０

闇を纏って爆速してくるコッペリアルをロンギルスはひらりと躱すと、槍で貫いて爆散させる。
しかし、爆散したコッペリアルの残骸から闇の瘴気が溢れ出す。
「ヴェルズコッペリアルの効果発動。このカードが相手によってフィールド上から離れた時、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して次の自分のエンドフェイズ時までコントロールを得る」
「何⁉？」
「私は宵星の機神ディンギルスのコントロールを得る」
闇の瘴気がディンギルスを包み込むと、ディンギルスは私のフィールドに移り、恭しく跪いた。
「くっ、私の宵星の機神ディンギルスを奪うとは……」
「続けて、宵星の機神ディンギルスでオルフェゴールロンギルスを攻撃。スターライトカディンギル」
ディンギルスが手にした槍を空に向けると、槍の先に光が集束していき、ディンギルスがロンギルスに槍を振り下ろすと、集束した光がレーザーのように放たれ、ロンギルスは焼き尽くされて消滅した。

ライダー　ＬＰ８０００→７９００

「チッ、私のモンスターを好きなように使ってくれる……だが、このターンのエンドフェイズには宵星の機神ディンギルスは戻ってくる。そうなればこっちが有利だ」
「それはすんなりとあなたのフィールドに戻ったらの話。メインフェ

イズ2、宵星の機神ディンギルスをリリースし、魔法カード、モンスターゲート」
「何だと⁉？」
「自分フィールドのモンスター1体をリリースし、通常召喚可能なモンスターが出るまで自分のデッキの上からカードをめくり、そのモンスターを特殊召喚し、残りのめくったカードは全て墓地へ送る。1枚目、スキルプリズナー。2枚目、シャッフルリボーン。3枚目、ダメージダイエット。4枚目、召喚僧サモンプリースト。通常召喚可能なモンスターのため、召喚僧サモンプリーストを特殊召喚」

〈召喚僧サモンプリースト〉☆4　魔法使い族　闇属性
DEF1600

ディンギルスの姿が消え、代わりに現れたのは黒いローブを纏った魔法使い。
「チッ、そいつは……」
「召喚僧サモンプリーストの効果、1ターンに1度、手札から魔法カード1枚を捨てて、デッキからレベル4モンスター1体を特殊召喚する。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン攻撃できない。私は影霊衣の降魔鏡を捨てて、デッキから終末の騎士を特殊召喚」

〈終末の騎士〉☆4　戦士族　闇属性
ATK1400

サモンプリーストが呪文を唱えると、サモンプリーストの横に黒い騎士が現れる。
「終末の騎士の効果、召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから闇属性モンスター1体を墓地へ送る。　私はデッキから覇王眷竜ダークヴルムを墓地に送る。そしてレベル4、召喚僧サモンプリーストと終末の騎士でオーバーレイ。2体のモンスターでオーバーレ

イネットワークを構築、エクシーズ召喚」
サモンプリーストと終末の騎士が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこにいるのは王者の風格を持つグレムリン。
「群れを伴い進撃せよ、ランク４、キングレムリン」

〈キングレムリン〉★４　爬虫類族　闇属性
ＡＴＫ２３００

「キングレムリンの効果、王者の呼び声。オーバーレイユニットを１つ使い１ターンに１度、デッキから爬虫類族モンスター１体を手札に加える。私はデッキからカゲトカゲを手札に加える」
キングレムリンの咆哮が響き、私の手札にカゲトカゲが加わる。
このターンはこれで十分だろう。
「私はカードを２枚伏せてターンエンド」

闇　ＬＰ７９５０　手札１
ー－▲▲－　ー
ー－○－－
ー　　ー
ー－－□－
ー－－▲－　ー
ライダー　ＬＰ７９００　手札２

「私のターン、ドロー‼?・よくも私のカードを好き勝手にしてくれたな。貴様には確実な敗北を与えてやる」
「やれるものならどうぞ」
「そう余裕ぶっていられるのも今の内だ‼?・私は、マシンナーズパゼストレージを召喚‼?・」

〈マシンナーズパゼストレージ〉☆４　機械族　闇属性

ＡＴＫ１６００

フィールドに現れたのは黒い闇を纏った機械兵。

「マシンナーズパゼストレージの効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、同名カード以外の自分の墓地のマシンナーズモンスター１体を対象としてそのモンスターを守備表示で特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは、このターン効果を発動できない。甦れ、マシンナーズフォートレス!!?」

〈マシンナーズフォートレス〉☆７　機械族　地属性

ＤＥＦ１６００

パゼストレージの目が赤く光ると、ライダーの墓地から青い装甲車がフィールドに現れた。

「私は機械族レベル４、マシンナーズパゼストレージとマシンナーズアンクラスペアでオーバーレイ!!?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」

「エクシーズ召喚……」

パゼストレージとアンクラスペアが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けるとフィールドに現れたのは身体中に歯車があり、背中に巨大な歯車を背負った機械戦士。

「大戦への歯車!!?ランク４!!?ギアギガントＸ!!?」

〈ギアギガントＸ〉★４　機械族　地属性

ＡＴＫ２３００

「ギアギガントＸの効果発動!!?インクリースプロダクション!!?オーバーレイユニットを１つ取り除き、自分のデッキ・墓地からレベル４以下の機械族モンスター１体を選んで手札に加える!!?私は

デッキからオルフェゴールディヴェルを手札に加える!!?　さらに私は手札からオルフェゴールディヴェルを捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動!!?デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚する!!?来い、オルフェゴールカノーネ!!?」

〈オルフェゴールカノーネ〉☆1　機械族　闇属性
ＤＥＦ１９００

現れたのはトランペットを模した機械。
「行くぞ!!?私は、レベル7、機械族モンスター、マシンナーズフォートレスに、レベル1、闇属性チューナーモンスター、オルフェゴールカノーネをチューニング!!?」
「シンクロ召喚……」
カノーネが光の輪になり、フォートレスが小さな黒い星に変わり、黒光りする道になる。
そうしてライダーがエクストラデッキから取り出したのは黒い闇を纏ったカード。
「深き暗闇に潜む不沈艦よ!!?呪われし爆撃者を蘇らせ、この世を破壊の海に沈めよ!!?ダークシンクロ!!?」
黒光りする道が輝くと、その中から現れたのは闇の球体を動力とした空中戦艦。
「現れろ、ダークフラットトップ!!?」

〈ダークフラットトップ〉☆8　機械族　闇属性
ＤＥＦ３０００

「!!?シンクロモンスターの闇のカード……」
「私の持つダークシンクロモンスターの力、特と味うがいい!!?ダークフラットトップの効果発動!!?アンダーワールドマニュファクチャー!!?1ターンに1度、自分の墓地のリアクターと名のついたモンスターまたはジャイアントボマーエアレイド一体を選択して選

択したモンスターを、召喚条件を無視して特殊召喚する!!?冥府の底より飛び立て、ジャイアントボマーエアレイド!!?」
ダークフラットトップの動力となっている闇の球体が輝くと、その中から巨大な爆撃機が姿を現した。

〈ジャイアントボマーエアレイド〉☆8　機械族　風属性
ＡＴＫ３０００

「ジャイアントボマーエアレイド……機甲部隊の再編制で捨ててたか……マイナーだけど、なかなか厄介なのがでてきた」
「クックック、いつまでその減らず口が続くか楽しみだな。私は墓地に存在するオルフェゴールスケルツォンを除外して効果発動!!?墓地より再び蘇れ、狂気に造られた悲しき巫女!!?オルフェゴールガラテア!!?」

〈オルフェゴールガラテア〉ＬＩＮＫ２　機械族　闇属性
ＡＴＫ１８００　↙?↑?

「また出てきた……」
「オルフェゴールガラテアの効果発動!!?ルナティックセレナーデ!!?私は除外されているオルフェゴールスケルツォンをデッキに戻し、デッキから2枚目のカウンター罠、オルフェゴールクリマクスをセットする!!?　さらに墓地のオルフェゴールディヴェルを除外して効果発動!!?デッキより舞い戻れ、オルフェゴールスケルツォンを特殊召喚!!?」

〈オルフェゴールスケルツォン〉☆3　機械族　闇属性
ＤＥＦ１５００

現れたのはさっきから墓地と除外とデッキを行ったり来たりしているドラムのようなモンスター。

そしてライダーは手を正面にかざす。
「動き出せ‼?狂気が奏でるサーキット‼?」
ライダーの前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はオルフェゴールモンスターを含むモンスター２体以上‼?私はオルフェゴールスケルツォン、ギアギガントＸ、オルフェゴールガラテアを２体分として扱ってリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?」
ガラテア２体に分身し、スケルツォンとギアギガントＸが共にサーキットに吸い込まれていく。
そして代わりに現れるのはオーケストラを奏でるオーケストリオンのようなモンスター。
「リンク召喚‼?殺戮を為す狂気のオーケストリオン‼?リンク４‼?オルフェゴールオーケストリオン‼?」

〈オルフェゴールオーケストリオン〉ＬＩＮＫ４　機械族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?←→↗?

「攻撃力３０００のリンク４モンスター……」
「まだだ。本番はこれからだ‼?自分の墓地に闇属性モンスターが７体以上存在する場合に、魔法カード、終わりの始まり‼?自分の墓地に存在する闇属性モンスター５体をゲームから除外する事で、自分のデッキからカードを３枚ドローする‼?私は墓地に存在するオルフェゴールロンギルス、宵星の機神ディンギルス、宵星の騎士ギルス、マシンナーズパゼストレージ、マシンナーズアンクラスペアを除外してカードを３枚ドローする‼?」
「っ、ここで手札が増えるか……」
「さらに私は墓地に存在する星遺物―『星杖』の効果発動‼?同名カードは１ターンに１度、墓地のこのカードを除外し、除外されている自分のオルフェゴールモンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する‼?ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は闇属性モンスターしか特殊召喚できない‼?除外より戻れ、狂気に

侵された悲しき戦士!!?リンク３!!?オルフェゴールロンギルス!!?」

〈オルフェゴールロンギルス〉ＬＩＮＫ３　機械族　闇属性
ＡＴＫ２５００　↖?←↘?

「さらにオルフェゴールオーケストリオンの効果発動!!?クロックワークカデンツァ!!?除外されている自分の機械族モンスター３体をデッキに戻し、相手フィールドにリンク状態の表側モンスターが存在する場合、それらのモンスターは、攻撃力・守備力が０になり、効果は無効化される!!?」
「っ」
「現在、オルフェゴールオーケストリオンのリンクマーカーはキングレムリンに向いていてリンク状態になっている!!?私は除外されている宵星の機神ディンギルスをＥＸデッキに、宵星の騎士ギルス、オルフェゴールディヴェルをデッキに戻し、跪け!!?　キングレムリン!!?」
　オーケストリオンから空気を震わせるような演奏が響く。
　その演奏を聴き、キングレムリンは力無く崩れ落ちる。

キングレムリン
ＡＴＫ２３００→０

「そして私はオルフェゴールロンギルス　１体でオーバーレイネットワークを構築!!?」
　空に浮かんだ混沌の渦にロンギルスが吸い込まれていく。
　そして渦が爆けると再び空から建造物のように巨大な馬の脚を持つ機械騎士が舞い降りる。
「エクシーズ召喚!!?　再臨せよ!!?人類の罪の証たる高みへと至る巨塔!!?ランク８!!?宵星の機神ディンギルス!!?」

〈宵星の機神ディンギルス〉★８　機械族　闇属性
ＡＴＫ２６００

「また宵星の機神ディンギルスか……」
「宵星の機神ディンギルスの効果発動!!?エテメンアンキ!!?私は２つ目の効果を使い、除外からオルフェゴールトロイメアをオーバーレイユニットとする!!?さらに手札を1枚捨て、ジャイアントボマーエアレイドの効果発動!!?シューティングエアライド!!?1ターンに1度、手札を1枚墓地へ送る事で、相手フィールド上のカード一枚を選択して破壊する!!?貴様のセットは破壊させて貰う!!?」
「チェーンして墓地のスキルプリズナーを除外して効果発動。墓地のこのカードをゲームから除外し、自分フィールド上のカード1枚を選択してこのターン、選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にする。対象にするのは現在選択されているセットカード」
　ジャイアントボマーが空から爆弾を投下するが、障壁に守られたセットカードは傷一つつかない。
「守ってきたということは余程大切なカードということか……まぁいい。バトル!!?ジャイアントボマーエアレイドでキングレムリンを攻撃!!?ギガデスフーガ!!?」
　ジャイアントボマーが数えきれない程のミサイルを放ち、キングレムリンを跡形もなく吹き飛ばした。

闇　ＬＰ７９５０→４９５０

「っ!!?おっ、と……」
　キングレムリンを吹き飛ばす際に生まれた爆風で、私の身体が大きくよろめき、体勢を崩す。
「愚か者め、そのまま消え失せるがいい」
　ライダーが嘲笑し、私があわや転倒しそうになった次の瞬間ーーー
『ーーー』

「何⁉？」
ーーー突然、凄まじい暴風が吹き荒れ、私の身体は空高く舞い上がった。
暴風によって空中に投げ出された私は、空中で体勢を立て直すと、道路に向かって勢いよく落下していく。
道路に着地する瞬間、道路から強い風が吹き、私の身体はゆっくりと道路に着陸し、再び滑走を始めた。
「馬鹿な⁉？ありえない⁉？一体何が起こったというんだ⁉？」
「さあ？なんだろうね。それよりも、まだあなたのバトルフェイズだよ」
無事だった私を見て取り乱すライダーだったが、すぐに首を振ると強い視線で私を睨みつけた。
「っ、何が起こったかはわからないが、そんな奇跡が何度も続くものか⁉？宵星の機神ディンギルスでダイレクトアタック⁉？スタードロップカディンギル⁉？」
ディンギルスが槍を私に振り下ろすと、槍から光の本流が放たれる。
しかし、放たれた光の本流は私の前に現れた扉に吸い込まれ消え失せた。
「リバースカードオープン。罠発動、カウンターゲート。相手モンスターの直接攻撃宣言時、その攻撃を無効にし、自分はデッキから1枚ドローする。そしてそのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを表側攻撃表示で通常召喚できる」
「チッ、防御手段を残していたか……」
「私はドローしたヴェルズヘリオロープを召喚」
〈ヴェルズヘリオロープ〉☆4　岩石族　闇属性
ＡＴＫ１９５０
私のフィールドに現れたのは禍々しい闇を纏った岩石の戦士。
ヘリオロープはライダーの盤面と今の私を見ると少し面白そうに

笑った。
『ウオウヨジ　ガラレワ　ナルス　ヤチム　ズラワカイア　ハト　ル
エユデ　デトーケスーラーロ』
「うるさい。黙って壁になれ」
『イドヒ』
「あなたはお調子がすぎる。今は真面目なところ」
『モトツモゴ』
「何をごちゃごちゃ言っている!!?　オルフェゴールオーケストリオンでヴェルズヘリオロープを攻撃!!?スロウスカプリッチオ!!?」
オーケストリオンのパイプから数えきれない程のレーザーが撃ち出され、ヘリオロープはレーザーに貫かれ爆散した。

闇　ＬＰ４９５０→３９００

「メインフェイズ２、カードを１枚伏せてターンエンドだ」
「ならエンドフェイズにリバースカードオープン。罠発動、裁きの天秤。相手フィールドのカードの数が自分の手札・フィールドのカードの合計数より多い場合に発動でき、自分はその差の数だけデッキからドローする」
「っ!!?なん……だと!!?」
「あなたのフィールドのカードは７枚、私は裁きの天秤と手札１枚の２枚。その差分の５枚のカードをドローする」
「っ、やってくれるな……」

闇　ＬＰ３９００　手札６
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
☆　　ー
○○□ー　ー
ー▲▲▲ー　ー
ライダー　ＬＰ７９００　手札２

「私のターン、ドロー……あ」
『ーーー!!?』
私がドローしたカードを見ると、そのカードから強烈な歓喜の思念とドス黒い闇が溢れ出してくる。
私は溢れ出す強力な闇の気配に思わずくすりと笑った。
「わかった……あなた達が暴れられる準備をするから、ちょっと待っててね。手札のクラウソラスの影霊衣を捨てて効果発動。同名カードは1ターンに1度、デッキから影霊衣魔法・罠カード1枚を手札に加える」
「チッ、またサーチ効果か!!?チェーンしてリバースカードオープン!!?カウンター罠、オルフェゴールクリマクス!!?その発動を無効にし除外する!!?」
クラウソラスの影霊衣がオルフェゴールクリマクスに阻まれて除外される。
まずはカウンター罠を使わせた。
次は……
「速攻魔法、手札断殺。お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送り、その後、それぞれデッキから2枚ドローする」
「チッ、手札交換させられたか……」
「墓地に存在する影霊衣の降魔鏡とトリシューラの影霊衣を除外して影霊衣の降魔鏡の効果発動。自分フィールドにモンスターが存在しない場合、自分の墓地からこのカードと影霊衣モンスター1体を除外してデッキから影霊衣魔法カード1枚を手札に加える。私はデッキから影霊衣の万華鏡を手札に加える。カードを1枚セット。墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動。自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローする。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外する。私はフィールドのセットカードをデッキに戻し、カードを1枚ドローする。魔法カード、闇の誘惑。自分はデッキから2枚ドローし、その後手札の闇属性モンス

ター1体を除外する。そして手札に闇属性モンスターが無い場合、手札を全て墓地へ送る。私はデッキから2枚ドローし、手札からヴェルズサンダーバードを除外する。私はヴェルズケルキオンを召喚」

〈ヴェルズケルキオン〉☆4　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ１６００

現れたのは両手に杖を持った魔術師のようなモンスター。
しかし、現れたケルキオンを見てジャイアントボマーが怪しく唸った。
「この瞬間、ジャイアントボマーエアレイドの効果発動!!?ジェノサイドシューティング!!?相手のターンに1度、2つの効果から1つを選択して発動できる。相手がモンスターの召喚・特殊召喚に成功した時、そのモンスターを破壊し、相手ライフに８００ポイントのダメージを与えるか、相手がカードをセットした時にそのカードを破壊し、相手ライフに８００ポイントのダメージを与える効果だ!!?私は1つ目の効果を使い、ヴェルズケルキオンを破壊し、貴様に８００ポイントのダメージを与える!!?」
ジャイアントボマーがミサイルを投下し、ケルキオンを跡形もなく吹き飛ばした。

闇　ＬＰ３９００→３１００

「これで貴様の召喚権は潰した!!?」
「予定通りだよ。自分の墓地に闇属性モンスターが7体以上存在する場合に、魔法カード、終わりの始まり」
「何っ!?」
「効果の説明は必要ないよね?私は墓地から終末の騎士、召喚僧サモンプリースト、キングレムリン、カゲトカゲ、ヴェルズコッペリアルを除外して3枚のカードをドローする。手札から罠発動、無限泡影」
「手札から罠だと!?」

「自分フィールドにカードが存在しない場合、このカードの発動は手札からもできる。相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてそのモンスターの効果をターン終了時まで無効にする。私は宵星の機神ディンギルスの効果を無効にする」
無限泡影の力を受け、ディンギルスが跪き、力を失う。
「これで準備は整った。さあ、行こうか……私の眷属　達。私は墓地に存在する覇王眷竜ダークヴルムの効果発動!!?」
「っ!??最初に墓地に送っていたカードか!!?」
「同名カードは1ターンに1度、このカードが墓地に存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードを特殊召喚する!!?雷よ、暗雲を裂け!!?おいで、覇王眷竜ダークヴルム!!?」
闇がその名を呼ぶと、星空が暗雲で黒く塗りつぶされ、雷鳴が鳴り響く。
そして一際大きな雷鳴が轟くと暗雲の中から、鋭い刃の身体を持つ緑龍が闇を守るように降り立った。

〈覇王眷竜ダークヴルム〉☆4　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ１８００

「覇王眷竜ダークヴルムの効果発動!!?インフィニットドミネーション!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから覇王門ペンデュラムモンスター1体を手札に加える!!?私はデッキから覇王門　無限（インフィニティ）を手札に加える!!?」
「ペンデュラムモンスターだと!??」
「さらに私は、スケール4の覇王眷竜オッドアイズをペンデュラムスケールにセッティング!!?」
「っ!??また別の覇王眷竜だと!??」
私がペンデュラムスケールをセットすると、私の右側に暗黒の柱が立ち上り、その闇の中から美傘の使うオッドアイズペンデュラムドラゴンに酷似した赤と青の目を持ち緑の鎧を纏った巨大な龍が現れ、その下に4の数字が刻まれる

「私は覇王眷竜ダークヴルムをリリースし、覇王眷竜オッドアイズのペンデュラム効果発動!!?オーバーロードリード!!?自分フィールドの覇王眷竜モンスター1体をリリースし、このカードを破壊し、デッキから攻撃力１５００以下のペンデュラムモンスター1体を手札に加える!!?私はデッキからペンデュラムモンスター、覇王門零を手札に加える!!?そして私はスケール０の覇王門零とスケール１３の覇王門無限でペンデュラムスケールをセッティング!!?」
「何だと!?」
　私がペンデュラムスケールをセットすると、私を挟むように暗黒の柱が立ち上り、その闇の中から2つの門が現れ、その門に０と１３の数字が刻まれる。
「これにより私は1から１２までのモンスターを同時に召喚可能!!?私の魂に宿る覇王よ!!?善悪を超越し運命を捻じ伏せろ!!?ペンデュラム召喚!!?おいで、私の眷属達!!?」
　私がそう叫ぶと暗黒の門が開き、そこからフィールドに向かって闇に包まれた４つの波動が放たれる。
「レベル４、レスキューラビット」

〈レスキューラビット〉☆４　獣族　地属性
ＡＴＫ３００

　最初に現れたのはヘルメットを被ったうさぎのモンスター。
「レベル４、チューナーモンスター、執愛のウヴァループ」

〈執愛のウヴァループ〉☆４　悪魔族　地属性
ＤＥＦ１８００

　次に姿を現したのはラクダの姿をした悪魔のモンスター。
「再臨せし雷よ、暗雲を裂け!!?おいで、レベル４、覇王眷竜ダークヴルム!!?」

〈覇王眷竜ダークヴルム〉☆４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ１８００

レスキューラビットとウヴァループの背後に再びダークヴルムが姿を現し、咆哮をあげる。
そして最後に現れるのは赤と青の目を持ち緑の鎧を纏った巨大な龍。
「覇王に仕えし終末の虹竜よ‼？死の輝きを放ち、刃向かう者に絶望を与えよ‼？おいで、私の眷属‼？　終末の四竜（ドラゴンクォーターズ）の滅びの極光‼？レベル８、覇王眷竜オッドアイズ‼？」

〈覇王眷竜オッドアイズ〉☆８　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２５００

「くっ、一気に４体ものモンスターを……だが、そのモンスター達では私のモンスターを超えることはできない‼？」
「確かに、このカード達ではまだ足りていない。だけど、どうにかするための道筋はすでに見えている。レスキューラビットの効果発動‼？フィールドのこのカードを除外して、デッキからレベル４以下の同名の通常モンスター２体を特殊召喚する‼？ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに破壊される」
レスキューラビットが夜の闇に紛れて消えていく。
代わりに空から舞い降りたのは闇のローブを羽織った魔王。
「私はペンデュラムモンスター、竜魔王ベクター（ペンデュラム）Ｐを２体を特殊召喚‼？」

〈竜魔王ベクターＰ〉☆４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ１８５０

そして私はあの言霊を口にする。
「行くよ。私は、レベル４、闇属性、ペンデュラムモンスター、覇王眷

竜ダークヴルムに、レベル４、チューナーモンスター、執愛のウヴァループをチューニング!!?」
「っ、シンクロ召喚か!!?」
　ウヴァループが光の輪になり、ダークヴルムが小さな黒い星に変わり、黒光りする道になる。
「覇王に仕えし終末の風竜よ!!?死の風を振るい、刃向かう者を薙ぎ払え!!?シンクロ召喚!!?」
　黒光りする道が輝くと、その中から現れたのは黒緑の身体に白と青の鎧をつけた覇王の眷属たる暴虐の竜。
「おいで、私の眷属!!?　終末の四竜（ドラゴンクオーターズ）の滅びの暴風!!?覇王眷竜クリアウィング!!?」

〈覇王眷竜クリアウィング〉☆８　ドラゴン族　闇属性
　ＡＴＫ２５００

「また覇王眷竜だと!?」
「私の眷属の力、じっくりと味わうといい。覇王眷竜クリアウィングの効果発動!!?このカードがシンクロ召喚に成功した場合、相手フィールドの表側表示モンスターを全て破壊する!!?」
「全体破壊のシンクロモンスターだと!?」
「吹き荒れろ、滅びの暴風!!?ディザスターストーム!!?」
　覇王眷竜クリアウィングを中心に闇を纏った竜巻が生み出される。
　闇を纏った竜巻はライダーのモンスターを呑み込んでいき、オーケストリオン以外の全てのモンスターを跡形もなく消し飛ばした。
「何と凄まじき暴風……っ!!?まさか!!?先程から貴様を後押しするように不自然に吹き荒れるこの風は!!?」
「ご名答。それは全部、覇王眷竜クリアウィングの力。この翼がある限り、私はどこまでだって行ける。どこまでだって翔べる」
『ーーー!!?』
　私の声に応えるように覇王眷竜クリアウィングが歓喜の咆哮をあげる。

どうやら久しぶりの出番だからかすごく張り切っているようだ。
私はそんな覇王眷竜クリアウィングが微笑ましく思い、少しだけ笑みを浮かべる。
「ぐっ、だが、リンク状態になっているオルフェゴールオーケストリオンは戦闘・効果では破壊されない!!?さらに破壊されたダークフラットトップの効果発動!!?グラッジリバイバル!!?このカードが破壊され墓地へ送られた場合、手札からレベル５以下の機械族モンスター１体を特殊召喚できる!!?現れろ、サモンリアクターＡＩ!!?」

〈サモンリアクターＡＩ〉☆５　機械族　闇属性
ＤＥＦ１４００

ダークフラットトップの残骸から小型の爆撃機が現れる。
確かに面倒な効果を持ったカードだ。
だけど、あれでは私の眷属達を止めるに足りえない。
私はサモンリアクターを横目に今度は正面に手をかざした。
「まだ行くよ。私は、レベル４、闇属性、ペンデュラムモンスター、竜魔王ベクターＰ２体でオーバーレイ!!?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
「っ、今度はエクシーズ召喚か!!?」
２体の竜魔王ベクターＰが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
「覇王に仕えし終末の雷竜よ!!?死の迅雷を迸らせ、刃向かう者を焼き払え!!?」
そして渦が爆けるとそこにいるのは美傘の使うダークリベリオンエクシーズドラゴンに酷似した漆黒の身体に緑の鎧を纏った龍。
「おいで、私の眷属!!?　終末の四竜（ドラゴンクオーターズ）の滅びの万雷!!?ランク４!!?覇王眷竜ダークリベリオン!!?」

〈覇王眷竜ダークリベリオン〉★４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２５００

「今度はエクシーズモンスターの覇王眷竜だと⁉？だが、サモンリアクターＡＩの効果発動⁉？シャープボム⁉？１ターンに１度、相手フィールド上にモンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時、相手ライフに８００ポイントのダメージを与える⁉？」

闇　ＬＰ３１００→２３００

「さらにこの効果を使用したターンのバトルフェイズ時、相手モンスター１体の攻撃を無効にできる⁉？」

「だから、なに？私は魔法カード、ペンデュラムフュージョン⁉？同名カードは１ターンに１度しか発動できず、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを自分フィールドから墓地へ送り、その融合モンスター１体をエクストラデッキから融合召喚する⁉？自分のペンデュラムゾーンにカードが２枚存在する場合、自分のペンデュラムゾーンに存在する融合素材モンスターも融合素材に使用できる⁉？」

「融合魔法だと⁉？貴様、まさか⁉？」

「私はペンデュラムゾーンにいる覇王門零、覇王門無限で融合⁉？」

フィールドに出来た渦の中に覇王の力を持つ門が吸い込まれていく。

「零にて無限となりし無の力、今ここに交わる⁉？覇王に仕えし終末の毒竜よ⁉？死の病毒を撒き散らし、刃向かう者を死に絶えらせよ⁉？融合召喚⁉？」

渦が光ると、渦の中から現れたのは遊花が使うスターヴヴェノムフュージョンドラゴンに酷似した紫色の身体に緑色の鎧を纏った龍。

「おいで、私の眷属⁉？　終末の四竜（ドラゴンクオーターズ）の滅びの猛毒⁉？覇王眷竜スターヴヴェノム⁉？」

〈覇王眷竜スターヴヴェノム〉☆８　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ２８００

「今度は融合モンスターの覇王眷竜だと⁉？しかも、何だ⁉？そのおぞましい闇の瘴気は⁉？」
私のフィールドに並んだ覇王眷竜達を見てライダーは驚愕の声をあげる。
私のフィールドに並んだ覇王眷竜達はそれぞれ身体中から闇の瘴気を溢れ出させながら歓喜の咆哮をあげていた。
きっと、久しぶりのデュエルに興奮しているのだろう。
このカード達は記憶を失った私が、私になった時から気付いたら持ってた最初のカード達だ。
記憶を失う前の私の手掛かりでもあるのだが、少しばかり危険な為、普段使いはしないようにしているのだ。
ちょっと使い方を間違えれば――簡単に対戦相手を殺しかねないから。
「みんな、久しぶりだね。今日はいっぱい暴れていいよ」
私の言葉に、私の可愛い眷属達は力強い咆哮をあげた。
「ふふっ。じゃあ、いこう。まずは、覇王眷竜スターヴヴェノムの効果発動‼？デスドレインヴェノム‼？　1ターンに1度、このカード以外の自分または相手のフィールド・墓地のモンスター1体を対象として、エンドフェイズまで、このカードはそのモンスターと同じ、元々のカード名・効果を得る‼？」
「存在のコピーだと⁉？」
「さらにこのターン、自分のモンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ相手に戦闘ダメージを与える。私がコピーするのは、あなたの墓地にいるジャイアントボマーエアレイド‼？」
覇王眷竜スターヴヴェノムの身体から溢れ出す大量の闇の瘴気がライダーの墓地にいるジャイアントボマーの存在を喰らい尽くす。
覇王眷竜スターヴヴェノム↓　ジャイアントボマーエアレイド

「手札を1枚捨て、ジャイアントボマーエアレイドとなった覇王眷竜スターヴヴェノムの効果発動!!?シューティングエアライド!!?私はあなたのセットカードを破壊する!!?」
　覇王眷竜スターヴヴェノムの緑色の鎧から巨大なミサイルが放たれ、ライダーのセットカードを爆散させる。
「くっ!!?　オルフェゴールアタックが……」
「バトル!!?覇王眷竜オッドアイズでサモンリアクターＡＩを攻撃!!?愚直のラッシュバースト!!?」
「サモンリアクターＡＩの効果発動!!?その攻撃を無効にする!!?」
　覇王眷竜オッドアイズが放つ闇を纏った虹のブレスをサモンリアクターは空高く舞い上がり回避する。
「これで攻撃の無効化も無くなった。続けて、覇王眷竜クリアウィングでサモンリアクターＡＩを攻撃!!?暴風のヘブンアセンションスラッシャー!!?」
　覇王眷竜クリアウィングが暴風を纏い、空高く舞い上がったサモンリアクターに一瞬で肉薄する。
「覇王眷竜クリアウィングの効果発動!!?コラプスハリケーン!!?1ターンに1度、このカードが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算前、そのモンスターを破壊し、破壊したモンスター元々の攻撃力分のダメージを相手に与える!!?」
「何だと!?」
「砕けて爆ぜろ、サモンリアクターＡＩ!!?」
　暴風を纏った覇王眷竜クリアウィングはサモンリアクターを容易く引き裂き、爆散させた。

ライダー　ＬＰ７９００→５９００

「ぬぅぅっ!!?なんだ、この凄まじき力は!!?一体どこからこんな力が!!?」
「覇王眷竜ダークリベリオンでオルフェゴールオーケストリオンを攻撃!!?」

「っ、また攻撃力の低いモンスターで攻撃だと⁉？」
「覇王眷竜ダークリベリオンの効果発動⁉？トリーズンデスチャージ⁉？１ターンに１度、このカードが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算前に、このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除き、ターン終了時まで、その相手モンスターの攻撃力を０にし、その元々の攻撃力分このカードの攻撃力をアップする⁉？」
「っ⁉？何だと⁉？」
覇王眷竜ダークリベリオンが咆哮をあげると闇を纏った雷が迸り、オーケストリオンの身体を貫き、その力を奪っていく。

オルフェゴールオーケストリオン
ＡＴＫ３０００→０

覇王眷竜ダークリベリオン
ＡＴＫ２５００→５５００

「攻撃力、５５００だと⁉？」
「焼き払え、覇王眷竜ダークリベリオン⁉？悪虐のライトニングディペンデンス⁉？」
その身を黒き稲妻に変えた覇王眷竜ダークリベリオンは一瞬でオーケストリオンの身体を貫き、爆散させた。

ライダー　ＬＰ５９００→４００

「ぐぎゃぁぁぁ⁉？」
「これで決まり。覇王眷竜スターヴヴェノムでダイレクトアタック⁉？」
覇王眷竜スターヴヴェノムの緑色の鎧が怪しく光り、覇王眷竜スターヴヴェノムに闇の力が集まっていく。
「滅却のタクシンストリーム⁉？」
私の声と共に覇王眷竜スターヴヴェノム放った闇を纏った毒のブ

レスがライダーを呑み込んだ。
「ぐあぁぁぁ‼?」

ライダー　ＬＰ４００→０

ーーーーーーー

覇王眷竜スターヴヴェノムの放った毒のブレスに呑み込まれたバイクは煙を吐き出して急激に減速していく。
「クソっ‼?何だこれは⁉?」
「よっと……追い風をありがとう、覇王眷竜クリアウィング。みんなも、ありがとうね」
『ーーー‼?』
完全に動きを止めたバイクを見て、私はローラースケートによる滑走を止め、覇王眷竜達に労いの言葉をかけると、覇王眷竜達は嬉しそうに鳴いて姿を消していく。
それを眺めてから、動かなくなったバイクに動揺しているライダーに近づいていく。
「何故動かない‼?貴様、何をした‼?」
「そのバイクは覇王眷竜スターヴヴェノムのブレスを受けた。覇王眷竜スターヴヴェノムは全てを滅ぼす猛毒を自在に操ることができる。その猛毒で、バイクの電脳中枢を侵した。そのバイクはもう私の意のままに制御できる」
「何だと⁉?」
「コンピュータウィルスだってコンピュータを侵す毒の一種。猛毒を掌る覇王眷竜スターヴヴェノムが使えない道理はない」
「っ、どこまでもデタラメな‼?」
私の言葉にライダーはこちらを睨みつける。
確かにライダーが言う通り、この子達の力はデタラメだ。
だけど、だからこそこういう時に役に立つ。
「もう逃げられない。闇のカードの売人をしているならあなたは知っ

ているハズ。天神　幻騎の居場所、答えてもらう」
　問い詰めるようや私の言葉にライダーはーーー
「天神　幻騎だと？何故その名前が出てくる？それが貴様が探っていることなのか？」
「……えっ？」
　ーーー心底不思議そうな声色で、そう言った。
　嘘は……ついていない。
　間違いなく、この男は天神　幻騎を知らない。
　私は猛烈に感じる嫌な予感に突き動かされるように、口を開く。
「じゃあ、あなたが言っていた　あの男って言うのは、あなたに闇のカードをばら撒くように言ったのは誰なの？」
　私がその言葉を口に出した瞬間、不意に真横から強烈な殺気が飛んできた。
「っ‼？」
　私がその場を飛び退くと、先程まで立っていた場所に闇を纏った斬撃が飛来し、地面を抉り飛ばした。
「これは‼？っ……‼？覇王眷竜クリアウィング‼？」
『ーーー‼？』
　体勢を崩した私に向かってどこからか次々と闇を纏った斬撃が飛来する。
　私は覇王眷竜クリアウィングの暴風による補助を受けながらローラースケートで滑走し、次々と飛来する斬撃を躱し、近くにあった倉庫の影に隠れる。
　しばらく倉庫の影で斬撃をやり過ごしていると、放たれていた斬撃の音が消える。
　私が倉庫の影から先程いた場所に戻ると、先程までいたライダーの姿が消え、大破したバイクと抉り飛ばされた地面だけが残っていた。
「逃げられた……これは……また、面倒なことになったかも」
　私はため息を吐きながら私は困った時の癖で、自分の頭をポンポンとノックするように叩き、先程のデュエルを振り返る。
　先程のデュエルでライダーが使ってきた闇のカードはダークフ

ラットトップのみ。
しかも、ダークフラットトップはシンクロモンスターの闇のカードだ。
遊騎と夜を助けにいき、湾岸エリアで戦ったデュエル。
そしてこの前目撃した遊花とのデュエル。
天神　幻騎はＮｏ．を私の才能と言って執着を見せていた。
そんな天神　幻騎が、Ｎｏ．に拘っていた天神　幻騎が、いきなりＮｏ．以外の闇のカードを作るだろうか？
可能性は……０ではない。
だけど、拭いきれない違和感は確かにある。
それに今回戦ったライダーが使っていた奇妙なバイク型のデュエルディスク。
天神　幻騎は確かに立体映像の進歩に関わった科学者の一面がある。
だからといって、このバイク型のデュエルディスクを天神　幻騎が作る理由はあるのだろうか？
こちらも可能性は０とは言えない。
だけど、それほど可能性が高いとは思えない。
そして何よりも、先程デュエルしたライダーは天神　幻騎のことを知らなかった。
そのことを踏まえ、想定される最悪の結論はーーー
「天神　幻騎の引き起こした闇のカード事件に便乗して……いや、紛れて闇のカードをばら撒こうとしてる人間が他にもいる……かったるいことになってきた」

第91話　無垢なる邪心

○

「……」

『この破壊、衝動に……塗り潰され、たりなんか、しない!!?私、が……私が、みんなを……守る!!?運命を、超えるんだぁぁぁ!!?』

『永遠(とわ)に続く闇の中でも、希望は輝き運命(さだめ)を変える!!?見参、インフィニティダークホープ!!?』

「っ!!?あああああ!!?」

薄暗い部屋の中、抑えきれない怨嗟の声を漏らし、幻騎は苛立ち気に机を叩く。

「おー元気そうだねー幻騎だけにー」

そんな幻騎の前にいつの間にか1人の少女が現れ、透明な笑みを浮かべて笑っていた。

「正体不明の抹消者(アンノウンイレイザー)……よくここに来れたものだな」

「何の話？私、別に悪いことしてないよー」

「栗原　遊花に廃棄予定の闇のカードを渡しただろう!!?」

「誰にも使用することはできないから君の好きにしたまえって言って渡したのは幻騎だよ？だから、私は好きにしてお姉さんに渡しただけー」

悪びれも無く笑うレイナは透明な声色で諭すように口を開く。

そんな幻騎に、レイナは怒りの眼でレイナを睨みながら歯を食いしばる。

「大体、元はといえば、私の遊び相手になれそうなお兄さんに手を出した幻騎が悪いんでしょ？」

「っ、それが今回私を邪魔した理由か？」

「だから邪魔はしてないってーアレは　偶々新しい闇のカードが生まれただけ。本当なら死ぬハズの運命をあのお姉さんが乗り越えた。その結果だよー」

「死を乗り越えた結果……か」

「うんうん、結果だけ言えばそれだけ、だよ」
淡々と言うレイナに苦虫を噛み潰したような表情で幻騎は顔を逸らす。
「まあ、今はゆっくり休みなってーお姉さんとのデュエルで受けたダメージもまだ抜けきってないんでしょ？その間、ちゃんと私がテストプレイのデータは取ってあげるよ」
そういうとレイナは部屋の中に置いてあった十数枚の白紙でカードを手に取る。
「さあて、楽しいゲームになるといいねー」
そんな言葉と共に、レイナの姿は闇の中に消えていった。

ーーーーーーーー

「バトル!!？　ファイアフェニックス@イグニスターでアルティメットインセクトＬＶ７に攻撃!!？ファイアフェニックス@イグニスターの効果発動!!？メビウスフレア!!？同名カードは１ターンに１度、このカードが攻撃するダメージ計算時、このカードの攻撃力分のダメージを相手に与え、その戦闘で発生する相手への戦闘ダメージは０になる!!？」
「何!!？」
「焼き払って!!？ファイアフェニックス@イグニスター!!？フェニックスブレイヴ!!？」
「うわぁぁぁ!!？」

男子生徒　ＬＰ１５００→０

立体映像が消え、項垂れている男子生徒に遊花は満面の笑みを浮かべて手を差し出す。
「ありがとうございました!!？いいデュエルでした!!？」
「っ、ありがとうございました。またデュエルしましょう!!？」
「はい!!？こちらこそ、またよろしくお願いします!!？」

「っ～～～‼?」
　デュエルをしていた男子生徒は遊花の手を取って立ち上がると、目に手を当てて天を仰ぎながら去っていく。
「?それでは、次の方どうぞ‼?」
　妙な反応をして立ち去っていく男子生徒を首を傾げながら見送ると、遊花は再びデッキをデュエルディスクにセットし近くにいた生徒達に向き合った。
　すぐに次のデュエルを始めた遊花を見て、すぐ近くで遊花のデュエルを見守っていた大地と霊華は苦笑いを浮かべた。
「何というか、少し休んでる間にまた強くなってないか?遊花のやつ?」
「確かに。また面白い波動を感じるカードが増えてるし、デュエルも心も、より強くなったように感じる。相変わらず面白い」
「面白いってのは遊花も霊華に言われたくないんじゃないか?」
「失礼な。私は普通」
「それはない」
　不服そうな表情を浮かべる霊華に大地は肩をすくめる。
「とはいえ、そろそろ止めた方がいいよな?今何戦目だっけ?」
「　１５戦目。さらに言えば　全戦ノーダメージ。昼休みになって休みもせずによくやる」
「普段は桜が止めてたもんな。途中で止めるかと思って黙って見てたけど……」
「止まる気配なし。止めないと昼休みが終わるまで続きそう。そろそろ強制終了が必要ね」
「だな。桜の代わりにストッパーをやってやるか」
「バトル‼?ウォーターリヴァイアサン@イグニスターで超化合獣メタンハイドを攻撃‼?背徳のピュアストリーム‼?」
「きやぁぁぁ‼?」

女子生徒　ＬＰ２１００→０

「ありがとうございました!!?・いいデュエルでした!!?・」
「くっ……いいデュエルだったわ。リベンジは必ず!!?・」
「はい!!?・またデュエルしましょうね!!?・それじゃあ次の方ーーー」
「はーい、ストップストップ!!?・」
「遊花、そこまで」
「大地君?・霊華さん?・」
　遊花のデュエルが一区切りついたところで、大地と霊華は遊花を止めに入ると、遊花は不思議そうに首を傾げる。
　そんな遊花に2人は呆れた表情で頭を押さえた。
「流石に連戦し過ぎだ。昼飯だってまだだろ?・」
「えっ?・でも、私はまだーーー」
「武士も食わねど高楊枝、とは言うけど、今は必要ないわ。それに、いざ　アレを持つ決闘者が現れた時に、お腹が減って満足に戦えなかったでは、笑い話にもならない」
「うっ……はい、分かりました。少し休憩します」
　大地と霊華の指摘に、遊花は思うところがあったのかしょんぼりとしながら俯いて両手の人差し指をつんつんと合わせる。
　そんな遊花に苦笑を浮かべながらも、大地と霊華は遊花を囲んで機会を伺っていた生徒達全員に聞こえるように声を上げた。
「うん、それでよし」
「というわけで、しばらくの間遊花は休憩だ!!?・悪いが挑戦は後にしてくれ!!?・」
「どうしても今やりたいというなら、私達が先に相手になる。私達に勝てば、遊花とデュエルしていい」
　そう言いながら2人がデュエルディスクを起動すると、周りにいた生徒達は仕方なさそうに退散していった。
「よし、いなくなったな。飯にしようぜ!!?・俺、腹減っちまってそろそろお腹と背中がくっついちまうよ」
「うん、私も流石にお腹が空いた」
「えっ!?・?・2人共まだ食べてなかったの!?・?・」
　大地と霊華の言葉に遊花が目を見開いて驚く。

そんな遊花に、２人は当然だとでも言うように笑みを浮かべた。
「友達（ダチ）が全力でデュエルしてんのに、自分だけ呑気に飯なんて食べれるわけないだろ？一緒に食べようぜ‼？」
「ご飯は誰かと一緒に食べた方が美味しいわ。遊花達となら、特にね」
「大地君……霊華さん……はい‼？一緒に食べましょう‼？」
２人の言葉に遊花は満面の笑みを浮かべる。
穏やかな日常が、そこにはあった。

ーーーーーーー

★

「それにしても、本当に強くなったよな、遊花は」
「同意。流石にこんなに強くなるとは思わなかった」
「ほぇ？」
私を待っていてくれた大地君と霊華さんと一緒にお昼ご飯を食べていると、２人が不意にそんなことを言い出した。
「そんなことないと思いますけど……私なんてまだまだで……」
「まだまだの奴が１５戦も連続ノーダメージでデュエルできるかよ‼？相変わらず自己評価が低いよな、遊花は」
「周りにいる人達が人達だから仕方ないけど、遊花はちょっと基準が壊れてるわ。一般常識を学んでおいた方がいい」
「い、一般常識って……これでも常識的なつもりなんですが……」
「それはない（な）」
「ハモって否定される程ですか⁉？」
呆れたように肩を竦める２人を見て私はちょっとショックを受ける。
いや、まぁ確かに、最近立て続けに妙なことが起こっているせいで、自分の常識がちょっとだけ……ほーんのちょっとだけ違うのかなーなんて思うことがないわけではないけど。
それでも、まだ私は常識的なハズだよ、うん。

……考えて我ながらちょっとだけ怪しく感じてしまう自分が悲しい。
「まぁ、そういうところも遊花らしくていいとは思うけどな」
「デュエルは強く、いつも笑顔で気立もよく、素直で一生懸命な頑張り屋さん。ちょっと天然なところも愛らしいと評判。ファンクラブもできるわけね」
「そんなことは……って、ファンクラブ⁉？わ、わわ、私なんかにファンクラブなんてあるんですか⁉？」
「知らなかったの？」
「知りませんよ⁉？」
「あ、その話俺も聞いたことあるぜ。大抵の奴なら知ってるんじゃないか？」
「周知の事実⁉？」
突然霊華さんと大地君の口から出てきた予想外の言葉に私は思わず目を見開いて驚く。
えっ⁉？ファンクラブなんてものいつできたんですか⁉？
というか、私みたいなただの学生にファンの人がいらっしゃるんですか⁉？
「確か真紅とデュエルした頃にはそんな話が出てたよな」
「そうね。元々は期末試験での遊花のデュエルを見てファンになった人達が、闇さんに認められ、色んな人と楽しそうにデュエルをする遊花に心を打たれたのがファンクラブ結成のはじまりとかなんとか」
「そんな前から⁉？」
「こうして休み時間にデュエルを挑んでくる人だって、闇さんとのデュエル狙いじゃなくて遊花とデュエルしたいからって人もいるらしいぜ」
「主に関わりが少ない他学年の子とかね。実質ファンサービス」
「そんなつもりはありませんよ⁉？あ、うぅ～⁉？」
２人の言葉に私は顔が赤くなっていくのを感じて、両手で頬を押さえる。
そ、そういえばデュエルしてると時折変わった反応をしてる人達が

いたけど、もしかしてその人達がファンクラブの人達だったのかな？
うぅ～恥ずかしいよ～
「はは‼？まぁ、それだけ遊花を応援してくれてる奴がいるってことさ」
「うん。遊花はこれからも変わらず、いつも通りにやればいいわ」
「大地君……霊華さん……はい、そうですね」
２人の言葉に私はしっかりと頷く。
ちょっと驚いたし恥ずかしいけど、こんな私を応援してくれている人がいる。
それは、とっても嬉しいこと。
私を応援してくれる人。
私に期待してくれる人。
私を支えてくれる人。
そして……私を待ってくれている人。
そんな人達のためにも、私はもっとその人達の想いに応えれるような人になりたい。
そんなことを、改めて私は思った。

ーーーーーーー

「クックック、我に恐れを成したか、”闇に魅入られ者（ダークネスプリズナー）”よ。まあ、仕方なきことよ。所詮は闇の囚人。深淵より出でし、全てを喰らう真紅の悪竜たる我を恐れるのは当然のことだ」
「えっと……ごめんね、真紅ちゃん。言ってること、全然分かりません」
放課後。
風紀委員会の教室で、臨時風紀委員として見回りを頼まれた私は真紅ちゃんと２人でデュエルアカデミア内の見回りを行っていた。
先日少しの虚実を混ぜて話した今回の失踪事件に関する今後の風紀委員会の対応に関してはまだ協議中らしい。
内容が内容であるため仕方がないとは思うけど、それもふまえて風

紀委員会ではちょっと人手が足りていないみたいだ。
なので正規の風紀委員の人達が会議をしている間に臨時風紀委員である私が校内の見回りを引き受けたんだけど……
「クックック、やはり汝は光、我は影。我らが相入れることはない。我が言霊は光の存在である”小さな聖域(リトルサンクチュアリガーディアン)の守護女神”には通じぬか」
「できれば通じる努力はしてほしいんだけどなぁ……」
相変わらずよく分からない言葉を使う真紅ちゃんに思わず苦笑してしまう。
今日は刀花ちゃんはまだ講義があるらしく、風紀委員会に1人で顔を出していた真紅ちゃんと2人で見回りをすることになった。
霊華さんと大地君もいたんだけど、2人は別の場所を見回ってくれている。
流石に4人が纏まって見回りをするのは効率が悪いしね。
「やはり我が言を読み解けるのは”深淵の話し手(アビストーカー)”のみか。流石は我が同胞よ」
「”深淵の話し手(アビストーカー)”……確か、刀花ちゃんのことだよね？本当に2人は仲が良いね」
「当然よ。”深淵の話し手(アビストーカー)”は我の唯一無二の盟友だからな」
そういって羽織っていたマントを翻しながら真紅ちゃんが自慢気に笑う。
言ってることはよく分からないけど、刀花ちゃんのことを大切そうに語る真紅ちゃんを微笑ましく思い私は思わず笑顔を浮かべる。
しかし突然、何かに気づいた真紅ちゃんは真剣な表情を浮かべると私の方を向いて口を開いた。
「……妙だな」
「えっ？何が？」
「気付かぬか？先程から我らは誰ともすれ違っておらぬ。いくら講義を受けている者がいるとはいえ、すでに放課後だぞ？」
「えっ？そういえば……」
真紅ちゃんの言葉に私は思わず当たりを見渡す。
確かに講義をしている教室があるとはいえ、先程から妙に辺りが静

かだ。
　人の姿は見えず、話し声どころか物音すら聞こえず、不気味な静寂が辺りを支配している。
「気付かぬ内に伏魔殿に呑み込まれたか？」
「伏魔殿？えっと、デーモンのフィールド魔法だっけ？」
「たわけ‼？　伏魔殿（デーモンパレス）―悪魔の迷宮―のことではない‼？悪魔が潜んでいる場所のことだ‼？」
「悪魔が潜んでる場所？うぅ～よく分からない」
「あーもう‼？ようは敵がいるかも知れない場所ってことです‼？遊花先輩はもっと語彙力を鍛えてください‼？小説とか漫画とか辞書とか読んだら大体難しい言葉とか書いてますから‼？今度私が貸してあげます‼？」
「ご、ごめんなさい」
　急に素に戻った真紅ちゃんに怒られて私は縮こまる。
　なんだろう、凄く理不尽な怒られ方してる気がするよ……
「あはははは‼？相変わらず、お姉さんは面白いねぇー」
『っ‼？』
　真紅ちゃんに怒られていると、そんな私の背後から突然無邪気ながらもどこか感情がこもっていない透き通った少女の声が聞こえてきた。
　私達が思わず振り返ると、そこにいたのは綺麗な銀髪をツインテールにし、大きくて袖から手が出ていないデュエルアカデミアの制服に身を包んだ初等部の中学年ぐらいの少女。
「っ、レイナちゃん……」
「っ‼？へぇ……お姉さん、私のこと覚えてるんだ。そっかそっか、へぇーやっぱりお姉さんは面白いや」
　私が名前を呼ぶと、レイナちゃんは驚いた表情を浮かべると興味深そうに私を見た。
「”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”。この幼女を知っているのか？」
「この子はレイナちゃん……天神先生の協力者でこの街に闇のカードをばら撒いている子」

「何⁉？この幼女がか⁉？」
私の言葉に真紅ちゃんは目を見開いてレイナちゃんを見る。
警戒する私達を見て、レイナちゃんは楽しそうに笑う。
「あはははは‼？警戒されてるねーまあ当然だろうけどさー」
「……何をしにきたの？」
「遊びに来たんだよ、お姉さんとね」
そういってレイナちゃんはデュエルディスクを起動し、操作すると急に辺りの風景が変化する。
静まりかえった校舎は消え、辺りは色とりどりの花々が咲き誇り、その花々の中央に巨大な大樹がそびえ立つ花園に変わっていた。
「えっ⁉？」
「何⁉？貴様、何をした⁉？」
「ようこそ、私の閉幕世界（クローズワールド）、世界樹（ユグドラシル）の花園へ」
「世界樹（ユグドラシル）の花園？」
「世界樹（ユグドラシル）の花園だと⁉？九つの世界を内包する世界樹だと言うのか⁉？」
「えっ⁉？　世界樹（ユグドラシル）の花園って知ってるの？真紅ちゃん？」
「北欧神話は大好物っ、じゃなかった。クックック、深淵より出でし、全てを喰らう真紅の悪竜たる我に知らぬ理などないわ‼？」
何故か妙にテンションが上がっている真紅ちゃんと突然変な空間に連れてこられたことに戸惑っていると、レイナちゃんは楽しそうに笑う。
「あはははは‼？綺麗な場所でしょ？それに便利なんだよ、ここならデュエルが終わるまで誰も出れないし入れないから、誰の邪魔も入らないもん」
「っ‼？」
レイナちゃんの言葉に私は頬を引き攣らせる。
外部と干渉できない閉鎖空間に閉じ込められ、相手は天神先生の協力者のレイナちゃん。
そして、私だけならともかく、今この場所には真紅ちゃんも一緒にいる。

この状況は、とても危険だ。
「そう怖い顔しないでよ。私はただお姉さんと遊びにきただけだってー」
「……私と？」
「そうだよ。こないだの幻騎とのデュエル、凄かったよ。お姉さんが言った通り、あの呪われたカードで運命を超えてみせた。だから、ちょっと遊んでみたくなっちゃったんだよね」
そういうとレイナちゃんはデュエルディスクを起動して私に向ける。
「というわけで、デュエルしよ？お姉さん。お姉さんのデュエル、私にいっぱい見せて欲しいな」
「……分かった。相手になるよ」
「”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”⁉？」
「ふふ、そうこなくっちゃ」
デュエルディスクを起動して構える私を見て、真紅ちゃんが目を見開く。
だけど、レイナちゃんの言葉が正しければどの道ここから出るにはレイナちゃんとデュエルするしかないのだ。
なら、真紅ちゃんがするよりも私がデュエルした方がいい。
レイナちゃんは師匠が負けた程の決闘者。
多少の痛みと危険は覚悟して、全力で挑む⁉？
「さあ、楽しいゲームをはじめよう」
「負けないよ⁉？」
『決闘⁉？』

遊花　ＬＰ８０００
レイナ　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は貰うよ⁉？魔法カード、隣の芝刈り⁉？このカードは自分の

デッキの枚数が相手よりも多い場合に発動でき、デッキの枚数が相手と同じになるように、自分のデッキの上からカードを墓地へ送るよ‼？」

「へぇー大量の墓地肥やしカード。いきなり派手だねぇー私のデッキ枚数は３５枚だよー」

「私は５５枚なので、その差分の２０枚のカードを墓地に送らせて貰うよ‼？」

私のデッキから一気にカードが墓地に送られていく。

落ちたカードは……よし、これなら‼？

「墓地に送られたイーバの効果発動‼？同名カードは１ターンに１度、このカードが墓地へ送られた場合、このカード以外の自分のフィールド・墓地の天使族・光属性モンスターを２体まで除外し、除外した数だけ、デッキからイーバ以外のレベル２以下の天使族・光属性モンスターを同名カードは１枚まで手札に加えるよ‼？私は墓地からハネワタとハイキューピットを除外して、デッキから天輪の葬送士とワタポンを手札に加えるよ‼？そして手札に加わったワタポンの効果発動‼？このカードがカードの効果によって自分のデッキから手札に加わった場合、このカードを手札から特殊召喚できる‼？おいで、ワタポン‼？」

〈ワタポン〉☆１　天使族　光属性

ＤＥＦ３００

イーバの効果で手札に加わったカードから触覚を持つ白い毛玉のようなモンスターが飛び出し、私の肩の上に乗る。

「私は天輪の葬送士を召喚‼？」

〈天輪の葬送士〉☆１　天使族　光属性

ＡＴＫ０

フィールドに現れたのは銀色の棺の身体を持つモンスター。

「天輪の葬送士の効果発動!!?このカードが召喚に成功した時、自分の墓地の光属性・レベル1モンスター1体を対象としてその光属性モンスターを特殊召喚するよ!!?おいで、ミスティックパイパー!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆1　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

葬送士が自分の腕で身体になっている棺を開けると、棺の中からフルートのようなものを弾いている男の人が姿を現わす。
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを1枚ドローし、この効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル1モンスターだった場合、自分はカードをもう1枚ドローするよ!!?」
ミスティックパイパーは任せろというようにサムズアップをし、姿を消すのと同時に私はカードをドローする。
「私が引いたのはクリアクリボー!!?レベル1モンスターなのでもう1枚ドローするよ!!?」
「手札が減らないねーなかなかやるなぁ」
「行くよ!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私が正面に手をかざすと、私の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル1モンスター1体。私は天輪の葬送士をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?希望の守り手!!?リンク1!!?リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

葬送士がサーキットに吸い込まれると、代わりに青い球体のモンスターが現れる。
現れたリンクリボーはいつもと違い警戒した様子でレイナちゃんを見つめている。

リンクリボーのこの反応……やっぱり、レイナちゃんは……

「私はカードを2枚伏せてターンエンド!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札４

ーー▲▲ー　　ー

ーー□ーー

ー　　☆

ーーーーー

ーーーーー　　ー

レイナ　ＬＰ８０００　手札５

「さあ、楽しいゲームのはじまりだよ。私のターン、ドロー。まずはまずは魔法カード、手札抹殺。お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローするよ。私は５枚、お姉さんは４枚捨ててドロー」

「いきなり大量の手札交換……」

「そして墓地に送られたステイセイラロマリンの効果発動。同名カードは1ターンに1度、このカードが効果で墓地へ送られた場合にデッキ・エクストラデッキからレベル５以下の植物族モンスター1体を墓地へ送る。私はデッキから薔薇恋人（バララヴァー）を墓地に送るよー」

「薔薇恋人……そのカードは……」

「さらに手札からスポーアを捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動。デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚するよ。おいで、イービルソーン」

〈イービルソーン〉☆1　植物族　闇属性

ＤＥＦ３００

フィールドに現れたのは手榴弾の形をした棘の生えた実をつけている花のモンスター。

「イービルソーンの効果発動。このカードをリリースして相手ライフに３００ポイントのダメージを与え、自分のデッキから同名カードを

２体まで表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。ただし、この効果で特殊召喚した同名カードは効果を発動する事ができないけどね。まずは３００ポイントのダメージ、受けて貰うよ」
「っ、バーン効果‼？」

遊花　ＬＰ８０００→７７００

イービルソーンがつけていた手榴弾の形をした棘の生えた実が弾け、弾け飛んだ棘が私の身体を貫く。
そして私の身体に当たらなかった棘が落ちた場所から２体のイービルソーンが生えてきた。

〈イービルソーン〉☆１　植物族　闇属性
ＤＥＦ３００

「さあ、どんどんフィールドに彩りを添えてくよー１体のイービルソーンをリリースして、永続魔法、超栄養太陽。自分フィールド上のレベル２以下の植物族モンスター１体をリリースしてリリースしたモンスターのレベル＋３以下のレベルを持つ植物族モンスター１体を、手札・デッキから特殊召喚する。ただし、このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊し、そのモンスターがフィールド上から離れた時、このカードを破壊する。イービルソーンのレベルは１。私はデッキからローンファイアブロッサムを特殊召喚するよ」
「っ‼？ローンファイアブロッサム‼？」

〈ローンファイアブロッサム〉☆３　植物族　炎属性
ＤＥＦ１４００

超栄養太陽によりイービルソーンが変異し、フィールドに現れたのは黄色い爆弾のような実をつけた植物。

ローンファイアはデッキから好きな植物族を特殊召喚できるカード……間違いない、レイナちゃんのデッキは植物族デッキ‼？

「ローンファイアブロッサムの効果発動。１ターンに１度、自分フィールドの表側表示の植物族モンスター１体をリリースしてデッキから植物族モンスター１体を特殊召喚するよ。私はローンファイアブロッサムをリリースしてデッキからギガプラントを特殊召喚するよ」

〈ギガプラント〉☆６　植物族　地属性
ＡＴＫ２４００

ローンファイアブロッサムの実が弾け、辺りを爆煙が包む。
そして爆煙が晴れると、そこには巨大な食虫植物のモンスターが現れた。

「ギガプラント……確かデュアルモンスターの……」

「おーお姉さん、この子のこと知ってるんだねぇ」

「……植物族デッキを使う人が身近にいたから、ね」

「へぇーなら、このカードの怖さも知ってるよね？ギガプラントを再度召喚‼？」

レイナちゃんがギガプラントを再度召喚すると、ギガプラントの身体が成長し、更に巨大になる。

「ギガプラントの効果発動。１ターンに１度、自分メインフェイズに自分の手札・墓地から昆虫族または植物族のモンスター１体を選んで特殊召喚する。墓地より咲き誇れ、椿姫ティタニアル」

〈椿姫ティタニアル〉☆８　植物族　風属性
ＡＴＫ２８００

ギガプラントが咆哮を上げながら地面を叩くと地面から現れたのは椿の身体を持つアルラウネのモンスター。

「まだまだ行くよー私は墓地に存在する薔薇恋人の効果発動。墓地のこのカードを除外して、手札から植物族モンスター1体を特殊召喚する。そしてこの効果で特殊召喚したモンスターはこのターン、相手の罠カードの効果を受けない。出ておいで、姫葵マリーナ」

〈姫葵マリーナ〉☆8　植物族　炎属性
ＡＴＫ２８００

ティタニアルに寄り添うように向日葵の身体を持つアルラウネのモンスターが現れる。

「墓地のバラガールを除外してスポーアの効果発動。同名カードはデュエル中に1度、このカードが墓地に存在する場合、自分の墓地からこのカード以外の植物族モンスター1体を除外してこのカードを特殊召喚し、この効果で特殊召喚したこのカードのレベルは除外したモンスターのレベル分だけ上がる。おいで、チューナーモンスター、スポーア」

〈スポーア〉☆1→4　植物族　風属性
ＤＥＦ８００

フィールドに現れたのは毛玉のような胞子のモンスター。
スポーアはチューナーモンスター……ということは、レイナちゃんの狙いは‼？
「私はレベル1、イービルソーンに、レベル4となったチューナーモンスター、スポーアをチューニング」
「やっぱり、シンクロ召喚……‼？」
スポーアが光の輪になり、イービルソーンが小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から現れるのは白い薔薇のドレスを纏った少女。

「黒薔薇の庭に咲く純潔なる少女よ、聖域を侵す者に白き茨の呪いを与えよ。シンクロ召喚、白き薔薇乙女、ガーデンローズメイデン」

〈ガーデンローズメイデン〉☆５　植物族　闇属性
ＡＴＫ１６００

「ガーデンローズメイデンの効果発動、ローゼンアルタール。このカードが特殊召喚に成功した場合、自分のデッキ・墓地からブラックガーデン１枚を選んで手札に加える。私はデッキからブラックガーデンを手札に加えて、そのままフィールド魔法、ブラックガーデンを発動ー!!?」

レイナちゃんがそういってブラックガーデンを発動すると、世界樹の花園に変化が訪れる。

色とりどりの花が綺麗に咲き誇っていた花園を茨が侵食していき、色とりどりの花が枯れていく代わりに辺り一面に黒い薔薇が咲き誇った。

「ようこそ私のゲームエリアへ。ここはブラックガーデン……世界樹の花園に寄生し、全ての生命を養分として花を咲かせる異界の花園」

「ブラックガーデン……これがレイナちゃんのゲームエリア」

黒い薔薇で埋め尽くされてしまった花園を見て、私は悲しくなってしまう。

せっかく綺麗な場所だったのに、全てが黒に染め上げられてしまう。

それはまるで闇のカードに宿る呪いのようでーーー

「さあ、存分に戦おうか。バトル。ガーデンローズメイデンでリンクリボーを攻撃。シュラーフローゼン」

ローズメイデンが手を伸ばすとリンクリボーに向かって白い茨が襲いかかる。

「相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動!!?ゼロリンク!!?このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力は

ターン終了時まで０になる‼?」
　ローズメイデンの身体と茨にリンクリボーの身体が粒子に変わって纏わりつき、その動きを止める。

　ガーデンローズメイデン
　ＡＴＫ１６００→０

「うまくかわしたねー攻撃対象がいなくなったことでガーデンローズメイデンの攻撃は中止するよ。次、ギガプラントでワタポンに攻撃‼?ヴォレイシャスウィーク」
　ギガプラントが地面から蔦を伸ばし、ワタポンを捕らえるとそのままワタポンを口に運び喰らい尽くす。
「っ、ごめんね、ワタポン」
「モンスターに謝ってる場合かな?椿姫ティタニアルでダイレクトアタック。カメーリエドルン」
　ティタニアルが茨を操り、私に大量の茨が迫ってくる。
「相手モンスターの攻撃宣言時、手札からクリブーを捨てて効果発動‼?」
「クリブー?クリボーじゃなくて?」
「デッキから同名カード以外のクリボーモンスター１体を手札に加える‼?私はデッキからクリボーを手札に加えるよ‼?そして手札から、クリボーの効果発動‼?ダークエンヴェロップ‼?相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこのカードを手札から捨て、その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは０になる‼?」
　茨から庇うようにクリボーが現れ、私を守って消滅する。
　ありがとう、クリボー。
「まだ終わりじゃないよ。姫葵マリーナでダイレクトアタック。サマーサンシャイン」
「相手モンスターの攻撃宣言時、墓地からクリアクリボーの効果発動‼?相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のこのカードを除外し、自分はデッキから１枚ドローし、そのドローしたカードがモンスター

だった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替える!!?」
私が勢いよくドローするのと同時に姫葵マリーナの目の前に巨大な向日葵が現れ、向日葵から光の弾丸が放たれる。
しかし、放たれた弾丸は私の前に現れた一角を持つ深緑の毛玉に阻まれた。

〈クリバビロン〉☆5　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ１０００

「私がドローしたのはクリバビロン!!?モンスターだから特殊召喚し、このカードに攻撃対象を移し替える!!?そして、クリバビロンは永続効果、ブラザーバンドにより攻撃力・守備力は、自分のフィールド・墓地のクリボーモンスターの数×３００ポイントアップする!!?私の墓地には、アンクリボー、クリボーン、クリボー、ハネクリボーＬＶ９、ジャンクリボー、リンクリボー、そしてルール上クリボーカードとして扱うクリバー、クリビー、クリブー、クリベーの１０体のクリボーモンスターがいます!!?よって、クリバビロンの攻撃力・守備力は３０００ポイントアップします!!?」

クリバビロン
ＡＴＫ１５００→４５００　ＤＥＦ１０００→４０００

「!!?レベル５で攻撃力４５００に守備力４０００のモンスター!!?凄いねーだけど、私のゲームフィールドでは攻撃力は意味ないんだよね」
「えっ?」
「フィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動、ブラック・ガーデンの効果以外でモンスターが表側表示で召喚・特殊召喚される度に、そのモンスターの攻撃力を半分にし、その後、そのコントローラーは、相手のフィールドに植物族・闇属性・レベル２・攻撃力守備力８００の

ローズトークン1体を攻撃表示で特殊召喚するよー」
「っ!!?・弱体化とトークンを生成する効果を持つフィールド魔法!!?・」
レイナちゃんの言葉に反応するように花園に蔓延っていた茨がくりばびあに向かって伸び、その角を締め上げる。
締め上げられたクリバビロンが苦悶の声を上げると、レイナちゃんのフィールドに黒い薔薇が咲いた。

クリバビロン
ＡＴＫ４５００→２２５０

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００

「っ、だけど、クリバビロンは守備表示!!?・攻撃力が下がろうと関係ないよ!!?・弾き返して、クリバビロン!!?・アサルトホーン!!?・」
クリバビロンが暴れ、茨の戒めを解くと、巨大な向日葵に体当たりをして向日葵ごとマリーナを弾き飛ばした。

レイナ　ＬＰ８０００→６８００

「ふふふ、弾き返されちゃった。おまけにあれだけ攻撃したのに全て躱されちゃった。流石だね、お姉さん。まさに鉄壁の防御。伊達に”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”なんて呼ばれてるわけじゃないかー」
「っ!?・けほっ、けほっ!!?・そ、その名前は関係ないよ!!?・というか、なんでレイナちゃんまでその名前を知ってるの!?・」
「んー?・おかしなこと言うねーデュエルアカデミアでお姉さんの名前を聞いたらまず一緒に”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”って単語が出てるよ?・」
「そんなレベルで認知されてるの!?・」
「クックック、流石は我が好敵手!!?・それでこそ、我が超える価値があ

る‼?」
「真紅ちゃんも変に話を膨らまさない‼?というか、この名前が広がってるの絶対に真紅ちゃんのせいだからね⁉?」
レイナちゃんから告げられた言葉に思わず頬が赤くなる。
まさかそんなにあの名前が広がってるなんて……
う～恥ずかしいよ～
「さてと、お話しはこの辺りにして、メインフェイズ2。カードを1枚伏せてターンエンドだよ。エンドフェイズ、リンクリボーの効果で下がっていたガーデンローズメイデンの攻撃力は元に戻るよー」

ガーデンローズメイデン
ＡＴＫ０→１６００

遊花　ＬＰ７７００　手札３
ー ー ▲ ▲ ー　　ー
ー ー □ ー ー
ー　　ー
○○○○○
ー ー ▲ ー ー　▽
レイナ　ＬＰ６８００　手札０

「私のターン、ドロー‼?」
レイナちゃんのフィールドはもう埋まっていてこれ以上ローズトークンが出ることはない。
セットカードが1枚あるけど、ここは果敢に攻めていく‼?
「私はクリバビロンの効果発動‼?コンバインリリース‼?同名カードは1ターンに1度、自分のメインフェイズ及びバトルフェイズにこのカードを持ち主の手札に戻し、自分の手札・墓地からクリバー、クリビー、クリブー、クリベー、クリボーを1体ずつ選んで攻撃表示で特殊召喚する‼?墓地から出ておいで、クリボー5兄弟‼?」

〈クリバー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３００

〈クリビー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３００

〈クリブー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３００

〈クリベー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３００

〈クリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３００

クリバビロンの身体が光り輝くと、その光が５つに分かれ、５体の色とりどりな毛玉の悪魔に変わる。
「へぇー分離もできるんだ。だけど、フィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動、クリボー５兄弟の攻撃力を半分にするよーとはいえ、私のフィールドは埋まってるし、この場合出てきても１体しかローズトークンは出せないんだけど」
「っ、トークンが出なくても弱体化はさせられるんだね……」

クリバー
ＡＴＫ３００→１５０

クリビー
ＡＴＫ３００→１５０

クリブー
ＡＴＫ３００→１５０

クリベー
ＡＴＫ３００→１５０

クリボー
ＡＴＫ３００→１５０

攻撃力を下げられるブラックガーデンはかなり厄介だけど、今はあのカードを対処する方法がない。
なら、今は私のできる全力でぶつかる!!?
「導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私の正面に再び巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はトークン以外のレベル１モンスター１体!!?私はクリバーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?相手を捕える深淵の邪眼!!?リンク１!!?サクリファイスアニマ!!?」

〈サクリファイスアニマ〉ＬＩＮＫ１　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０　→

「そのモンスターは確か……ブラックガーデンは発動するけど、トークンもでないし攻撃力も下がらないから意味ないかー」
「サクリファイスアニマの効果発動!!?コネクトアブソープション!!?１ターンに１度このカードのリンク先の表側表示モンスター１体を対象にその表側表示モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップするよ!!?対象はギガプラント!!?吸い込んじゃって、サクリファイスアニマ!!?」
アニマの目の上にある空間からギガプラントを吸い込むように風が生み出され、ギガプラントの身体を飲み込むとアニマの羽根に植物の蔦が現れる。

サクリファイスアニマ
ＡＴＫ０→２４００

「まだまだ行くよ‼？導いて‼？希望に繋がるサーキット‼？」
「連続リンク召喚かー次はどんなモンスターが出てくるかな？」
さあ、久しぶりに行くよ‼？
「召喚条件は効果モンスター３体以上‼？私はサクリファイスアニマ、クリビー、クリブー、クリベーをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？」
アニマ達がサーキットの中に吸い込まれていくと、サーキットが光り輝く。
あなたの力を、私に貸して‼？
「閉ざされた運命を撃ち抜く信念の弾丸‼？リンク４‼？ヴァレルロードドラゴン‼？」
私の呼び声に応えるように龍の咆哮が轟いた。

〈ヴァレルロードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙？↑←↘？

「リンク４のモンスターかーでも、そのモンスターもブラックガーデンに縛られて、私のフィールドにはローズトークンが生まれるよ」

ヴァレルロードドラゴン
ＡＴＫ３０００→１５００

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００

「まだ終わりません‼？　速攻魔法‼？増殖‼？自分フィールド上に表側表示で存在するクリボー１体をリリースして自分フィールド上

にクリボートークンを可能な限り守備表示で特殊召喚します!!?」

〈クリボートークン〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００　ＡＴＫ３００→１５０

茨に縛られながらも、私のフィールドにいたクリボーが５体に増える。

「導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」

「流れるような連続リンク召喚。流石だねー」

さぁ、いくよ、皆!!?

「召喚条件は通常モンスター1体!!?私はクリボートークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク1!!?リンクスパイダー!!?」

〈リンクスパイダー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１０００→５００　←

私の前に機械の蜘蛛が現れる。

それを確認しながら私は再びサーキットを開く。

「まだ行くよ!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?召喚条件はモンスター2体!!?私はクリボートークン2体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?プロキシードラゴン!!?」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００→７００　↑↓

次に現れたのは白い身体をした機械の竜。

そして私はあの子を呼ぶ。

「墓地に存在するリンクリボーの効果発動!!?スケープリンク!!?このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル1モンス

ター1体をリリースしてこのカードを墓地から特殊召喚する!!?私はクリボートークンをリリース!!?戻っておいで、リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００↓１５０　←

「そして、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
　私は1度目を閉じて、深呼吸をしてからそのモンスターを呼ぶ。
「召喚条件は効果モンスター3体以上!!?私はリンクスパイダー、リンクリボー、プロキシードラゴンを2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
　リンクスパイダー、リンクリボー、プロキシードラゴンが2体に分身してサーキットに吸い込まれていく。
「お願い、私に行く道を阻む茨を断ち斬る力を貸して!!?リンク召喚!!?閉ざされた運命を斬り開く魂の剣（つるぎ）リンク4!!?ヴァレルソードドラゴン!!?」
　自身を縛りつける茨に苦しみながらも、その茨を断ち斬り、龍の咆哮が世界に響いた。

〈ヴァレルソードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００↓１５００　↙?↑←→

「へぇー2体目のリンク4モンスターかー」
「行くよ!!?バトル!!?　ヴァレルロードドラゴンで姫葵マリーナを攻撃!!?銃声のイジェクトフレア!!?」
　ヴァレルロードの口から砲台が現れ、マリーナに向けて粒子砲を放つ。
「この瞬間、ヴァレルロードドラゴンの効果発動!!?エロージョンエイミング!!?このカードが相手モンスターに攻撃するダメージステップ開始時に、その相手モンスターをこのカードのリンク先に置い

てコントロールを得る‼？　そのモンスターは次のターンのエンドフェイズに墓地へ送られるよ」
「成る程ーコントロール奪取か」
　ヴァレルロードの粒子砲を受けたマリーナは消滅し、こちらのバトルゾーンに移動する。
「まだ、行くよ‼？ヴァレルソードドラゴンで椿姫ティタニアルを攻撃‼？」
「迎え撃ってね、椿姫ティタニアル。カメーリエドルン」
　ティタニアルが大量の茨を生み出し、ヴァレルソードを呑み込んでいく。
　だけど、それぐらいじゃ私の剣は止められない‼？
「攻撃宣言時、ヴァレルソードドラゴンの効果発動‼？アブソーブブースト‼？１ターンに１度、このカードが表側表示モンスターに攻撃宣言した時、ターン終了時まで、このカードの攻撃力はそのモンスターの攻撃力の半分アップし、そのモンスターの攻撃力は半分になる‼？」
「今度は攻撃力吸収効果かー」

椿姫ティタニアル
ＡＴＫ２８００→１４００

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ１５００→２９００

　ヴァレルソードが斬りかかり、自身を捉えようとする茨を全て斬り裂き、剣から漏れる赤い光が茨を通じてティタニアルの力を奪っていく。
「斬り開いて、ヴァレルソードドラゴン‼？剣光のベイオネットブレイク‼？」
　私の言葉にヴァレルソードは応えるように咆哮を上げると、一瞬でティタニアルの正面に移動し、その身体を斬り裂いた。

レイナ　ＬＰ６８００→５４００

「っーやるねー」

「まだだよ‼?・ヴァレルソードドラゴンの効果発動‼?・アサシネイトショット‼?・1ターンに1度、攻撃表示モンスター1体を対象として発動‼?・そのモンスターを守備表示にし、このターン、このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる‼?・そしてこの効果の発動に対して相手は効果を発動できない‼?・この効果は相手ターンにでも使用することが出来ます‼?・対象にするのは、ローズトークン‼?」

ヴァレルソードの腕から突然散弾がローズトークンに向かって撃ち出され、その衝撃でローズトークンが地面に落ちる。

ローズトークン
ＡＴＫ８００→ＤＥＦ８００

「これでヴァレルソードドラゴンは2回目の攻撃が可能‼?・ヴァレルソードドラゴンでガーデンローズメイデンを攻撃‼?・剣光のベイオネットブレイク‼?・」

ヴァレルソードは一瞬でローズメイデンの懐に踏み込むと、一刀の元に斬り伏せた。

レイナ　ＬＰ５４００→４１００

「あいたたた」

「まだ私の攻撃は終わってないよ‼?・　姫葵マリーナで攻撃表示のローズトークンを攻撃‼?・サマーサンシャイン‼?・この瞬間、ヴァレルロードドラゴンの効果発動‼?・ジャムバレット‼?・ローズトークンを対象にして攻撃力・守備力を５００ポイントダウンさせるよ‼?・この効果は相手ターンにも発動することができ、この効果に対して相

手は効果を発動することが出来ない!!?」

ローズトークン
ＡＴＫ８００→３００

ヴァレルロードが手についているリボルバーから弾丸を撃ち出し、ローズトークンを撃ち抜く。
撃ち抜かれたローズトークンをマリーナが放った光の光弾が焼き尽くし、消滅させた。

レイナ　ＬＰ４１００→１６００

「っ……」
「流石は”小さな聖域の守護女神(リトルサンクチュアリガーディアン)”だな。黒幕だと聞いて警戒していたが、大したことないではないか」
一気にライフポイントを失ったレイナちゃんを見て、真紅ちゃんがそんなことを言う。
だけど、私は冷や汗をかきながらそんな真紅ちゃんに首を振る。
「……ううん、違うよ、真紅ちゃん」
「?”小さな聖域の守護女神(リトルサンクチュアリガーディアン)?」
確かに、私の攻撃は上手く行っている……いや、上手く行きすぎている。
師匠を倒したレイナちゃんが、そんなに簡単に倒せるわけがない。
そんな私の予感を肯定するように、レイナちゃんは楽しそうに笑いはじめた。
「あはは!!?お姉さん、すっごく強いねーうんうん、これでこそ戦う価値がある」
「っ!!?」
「な、なんだ此奴?急に笑い出したぞ?」
レイナちゃんの笑顔を見て、真紅ちゃんは気味が悪そうにし、私は引き攣りそうになる顔を堪える。

やっぱり、遊ばれている。
できれば、遊ばれている間に勝てればよかったんだけど……どうやら、そう簡単にはいかないみたいだね。
「メインフェイズ2、モンスターをセット!!?カードを1枚伏せてターンエンド!!?」
「ならエンドフェイズにリバースカードオープン。罠発動、裁きの天秤」
「っ!?そのカードは!!?」
「相手フィールドのカードの数が自分の手札・フィールドのカードの合計数より多い場合に発動でき、自分はその差の数だけデッキからドローするよーお姉さんのフィールドのカードは8枚、私は裁きの天秤とローズトークン、ブラックガーデンの3枚。その差分の5枚のカードをドローするよー!!?……あは!!?」
ドローしたカードを見て、レイナちゃんは今までで1番楽しそうな笑みを浮かべる。
一体何を引いて……
私は警戒しながらレイナちゃんがドローしたカードに視線を向ける。
その瞬間ーーー
ゾクッ!!?
「っ!?何、今の感覚?」
そのカードから大量の闇が噴き出し、一瞬だけ悪寒が走る。
闇が噴き出してるということは間違いなく闇のカードだと思うけど、こんなにゾクリとした感覚を受けるカードは初めてだった。
そして、異変はそれだけには止まらなかった。
「っ!!?えっ!?真紅ちゃん!?」
私の背後から、何かが倒れる音がしたかと思い振り返ると、真紅ちゃんが突然気を失って倒れてしまった。
私が慌てて真紅ちゃんに駆け寄るが、顔色は悪い。
「一体何が……」
「あは、あはははは!!?うん、いいね!!?最高だよ、お姉さん!!?流石

は世界を滅ぼす資質があるお姉さんだ!!?　あはははは!!?」
「っ!?」
今までで1番嬉しそうな笑みを浮かべ、まさに有頂天とでも言うよりに狂ったように笑うレイナちゃん。
「真紅ちゃんに、何をしたの!?」
「私は何もしてないよ。その子が私がドローしたカードを見ちゃっただけー」
「ドローしたカードを?」
「そう、お姉さんも見てるでしょ、このカード」
そういって、レイナちゃんがぷらぷらと振りながら掲げるのは先程悪寒がした闇が噴き出してるカード。
「このカードはねーすっごく強力な呪われたカードなんだよ!!?見ただけで相手を恐怖させ、精神を狂わせる程でねーその子の意識はこのカードの恐怖に耐えられずに強制的にシャットアウトしちゃったって訳!!?生命としての生存本能って凄いよね!!?あはははは!!?」
そういって狂ったように笑うレイナちゃんに、私は初めて恐怖を覚える。
この子は、危険だ。
それも色んな意味で。
闇のカードをばら撒いていることも、平気で人を傷つけられることも。
そして、真紅ちゃんが気絶しちゃう程の強力な呪いを秘めたカードを手にしても、この子は心の底から　自然体で笑っているのだ。
「だけど、何より凄いのはお姉さんだよ!!?」
「……私?」
「だって、その子が気絶するような呪われたカードを見ても、お姉さんは平然としているでしょ?」
「っ!!?」
レイナちゃんの言葉に、私はハッとして自分の身体を見る。
確かに、真紅ちゃんの意識を刈り取るような呪われたカードを見ても、私が感じたのは少しの悪寒だけだった。

前にダークホープを創造した時に出会った、私の中にいる闇の何か。
そして私自身の特異な体質。
どれが原因なのかは今は分からない。
だけどーーー
「流石は世界を滅ぼせる闇のカードに選ばれたお姉さんだ‼?お姉さんなら、私が本気を出してもきっと　壊れないでいてくれる‼?あははは‼?」
「っ‼?」
ーーーたった1つ分かることは、このデュエルは私の想像を遥かに超えて危険なデュエルだってことだ。

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ２９００→１５００

遊花　ＬＰ７７００　手札２
ー▲▲▲ー　　ー
○ー☆■□
☆　　ー
ーーーー□
ーーーーー　▽
レイナ　ＬＰ１６００　手札５

「私のターン、ドローー‼?あは、ちょうどいいもの引いちゃった‼?私が引いたのはＲＵＭ（ランクアップマジック）ー七皇（ザ・セブンス・ワン）の剣‼?」
「っ⁉?そのカードは‼?」
「お姉さんは知ってるよね?このカード名の効果はデュエル中に1度しか適用できず、自分のドローフェイズに通常のドローをしたこのカードを公開し続ける事で、そのターンのメインフェイズ1の開始時に発動できる‼?私はＲＵＭー七皇の剣を発動‼?ＣＮｏ．以外のＮｏ．１０１～Ｎｏ．１０７のいずれかをカード名に含むモンス

ター１体を、自分のＥＸデッキ・墓地から選んで特殊召喚し、そのモンスターと同じＮｏ．の数字を持つＣＮｏ．モンスター１体を、そのモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚する‼？見せてあげるね、私のＮｏ．　‼？ＲＵＭ－七皇の剣の効果でＥＸデッキより現れろ、Ｎｏ．１０３‼？無より生まれし氷の令嬢、神葬零嬢ラグナゼロ‼？」

〈Ｎｏ．１０３神葬零嬢ラグナゼロ〉★４　天使族　水属性
ＡＴＫ２４００

現れたのは氷の剣を持った氷の翼で空を舞う天使。
だが、これで終わりじゃない。
「そしてＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナゼロ１体でオーバーレイ‼？１体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築‼？カオスエクシーズチェンジ‼？」
ラグナゼロが空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると空から舞い降りたのは透き通った氷の翼が黒く染まり、巨大な鎌を手にした死の天使。
「現れろ、ＣＮｏ．１０３‼？罪ある者へ永遠の休息を与える氷の令嬢、神葬零嬢ラグナインフィニティ‼？」

〈ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティ〉★５　天使族　水属性
ＡＴＫ２８００

「ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティ……っ‼？また……‼？」
レイナちゃんが特殊召喚したラグナインフィニティを見た瞬間、視界がノイズに包まれ、頭の中に見たことのないイメージが流れ込んでくる。
『現れなさい、ＣＮｏ．１０３‼？時をも凍らす無限の力が今、よみが

える‼?神葬零嬢ラグナインフィニティ‼?』
「っ……また、知らないイメージが……」
「特殊召喚したＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティもブラックガーデンの戒めを受ける。そうじゃないとフェアじゃないからねー」

ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティ
ＡＴＫ２８００→１４００

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００

ラグナインフィニティが黒い茨に縛られ、私のフィールドに黒い薔薇が咲く。
「さて、まずは下準備だ‼?魔法カード、フレグランスストーム‼?フィールド上に表側表示で存在する植物族モンスター１体を破壊し、自分のデッキからカードを１枚ドローする‼?さらに、この効果でドローしたカードが植物族モンスターだった場合、そのカードをお互いに確認し自分はカードをもう１枚ドローする事ができる‼?私はお姉さんに盗られちゃった姫葵マリーナを破壊して１枚ドロー‼?ドローしたのは大凛魔天使ローザリアン‼?植物族だからもう１枚ドローだよ‼?」
私のフィールドに移動していたマリーナが破壊され、レイナちゃんの手札が増える。
除去とドローを同時にこなされるなんて……
「さらに私はフィールド魔法、ブラックガーデンのもう１つの効果を発動‼?」
「っ⁉?まだ効果があったの⁉?」
「フィールドの全ての植物族モンスターの攻撃力の合計と同じ攻撃力を持つ、自分の墓地のモンスター１体を対象としてこのカード及びフィールドの植物族モンスターを全て破壊して、全て破壊した場合、

対象のモンスターを特殊召喚する!!?私のフィールドとお姉さんのフィールドには攻撃力８００のローズトークンが１体ずついる!!?私はブラックガーデンとフィールドにの植物族モンスターを全て破壊して、再び咲き誇れ白き薔薇乙女、ガーデンローズメイデン!!?」

辺り一面に咲き誇っていた黒い薔薇が朽ち果てていく。

そして全ての黒い薔薇が朽ち果てると、その残骸からローズメイデンが姿を現した。

〈ガーデンローズメイデン〉☆５　植物族　闇属性

ＡＴＫ１６００

「特殊召喚したガーデンローズメイデンの効果発動、ローゼンアルタール!!?私は墓地から再びブラックガーデンを手札に加える!!?」

「っ、ガーデンローズメイデンを蘇生してブラックガーデンを回収しつつ自分のモンスターの攻撃力が下がるのを解いた……!!?」

「どんどん行くよー!!?このカードは自分の手札と墓地からレベル７以上の植物族モンスターを１体ずつをゲームから除外した場合に特殊召喚できる!!?私は手札の桜姫タレイアと墓地の椿姫ティタニアルを除外して大凛魔天使ローザリアンを特殊召喚!!?」

〈大凛魔天使ローザリアン〉☆８　植物族　地属性

ＡＴＫ２９００

フィールドに現れたのは、左翼が赤い薔薇、右翼が黒い薔薇で出来ている巨大な天使のモンスター。

「大凛魔天使ローザリアンの効果発動!!?フォールダウンローズ!!?１ターンに１度、自分のメインフェイズ時、このカード以外のフィールド上に表側表示で存在するカードの効果をエンドフェイズ時まで無効にする!!?」

「全体効果無効!?っ、チェーンしてヴァレルロードドラゴンの効果発動!!?ジャムバレット!!?　ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナイン

フィニティを対象にして攻撃力・守備力を５００ポイントダウンさせる‼？さらにチェーンしてヴァレルソードドラゴンの効果発動‼？アサシネイトショット‼？大凛魔天使ローザリアンを守備表示に変更させるよ‼？」
「あははは‼？必死だねぇ‼？」

大凛魔天使ローザリアン
ＡＴＫ２９００→ＤＥＦ２４００

ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティ
ＡＴＫ１４００→９００

ヴァレルソードの銃弾がローザリアンを怯ませ、ヴァレルロードの散弾がラグナインフィニティを怯ませる。
しかし、ローザリアンが生み出した黒と赤の茨に、私のヴァレルソード達は捕らわれ、身動きを封じられてしまった。
「さらに、墓地に存在するにん人の効果発動‼？　」
「っ‼？手札抹殺の時に墓地に送ったカード‼？」
「同名カードは１ターンに１度、このカードが墓地に存在する場合、手札及び自分フィールドの表側表示モンスターの中から、同名モンスター以外の植物族モンスター１体を墓地へ送ってこのカードを墓地から特殊召喚する‼？私は手札から　返り咲く薔薇の大輪（リバイバルローズ）を墓地に送り、にん人を特殊召喚‼？」

〈にん人〉☆４　植物族　闇属性
ＡＴＫ１９００

フィールドに現れたのは人のような身体を持つ人参。
現れたにん人を見て、レイナちゃんは楽しそうに笑うと、真紅ちゃんを気絶させた大量の闇を放つカードを頭上に掲げた。
「あはははは‼？さあ、これで神の生贄はフィールドに揃った‼？お

姉さんに見せてあげるよ!!?世界をも歪め、恐怖を齎す!!?圧倒的な神の力を!!?　私は、大凛魔天使ローザリアン、ガーデンローズメイデン、にん人をリリースし、神の生贄に捧げる!!?」
「っ!??神の、力……?それに、生贄って……!??」
ローザリアン、ローズメイデン、にん人がレイナちゃんが掲げたカードから放たれる闇に呑まれ、悲鳴を上げながら溶けていく。
溶けていくモンスター達を眺めながら、レイナちゃんはどこか歪んだ笑みを浮かべる。
「お姉さんは人身御供という言葉は知ってる?人間にとって、最も重要と考えられる人身を供物として捧げるのは神に対する最大級の奉仕なんだよ。とはいえ、神だって不味い供物なんていらないんだ。神だって以外と健康主義なんだよ。健康的な食生活があってこそ、生物は全ての力を発揮できる。　大凛魔天使ローザリアン、ガーデンローズメイデン、にん人なんて、私の神にはぴったりな供物なんだよ!!?健康的な血と肉と野菜、健康的な食生活から健全なる邪神が生まれるんだ!!?」
「健全な……邪神!?」
レイナちゃんのモンスター達を溶かし尽くした闇は止まることなく、カードから溢れ出し、花園を、世界を、呪われた闇で満たしていく。
「恐怖の根源たる大いなる闇!!?世界を暗黒に塗り潰す恐怖の化身!!?今、終焉を齎す絶望の力で、全ての希望を闇に還せ!!?」
そして闇が1箇所に集まると、そこに現れたのは骨の身体と翼を持つ禍々しい邪悪なる闇の化身。
「降臨せよ!!?　邪神ドレッドルート!!?」
全ての者を恐怖に呑み込む邪神が、ここに降臨した。

〈邪神ドレッドルート〉☆10　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ４０００

「邪神……ドレッドルート!?」

私はレイナちゃんが呼び出した禍々しい気配を感じさせるドレッドルートに無意識のうちに身体を後退らせるが、後退らせた私の脚が倒れている真紅ちゃんに当たる。

……ここで退いたら、真紅ちゃんがどうなるか分からない。

どの道、私達はレイナちゃんが生み出したこの閉幕世界（クローズワールド）……世界樹（ユグドラシル）の花園に閉じ込められている。

なら、例え邪神が相手だろうと迎え撃つしかない。

思わず苦い表情を浮かべる私を見ても、レイナちゃんは楽しそうな笑みを崩さない。

「邪神ドレッドルートは人の心に宿る恐怖の具現‼？その闇を見たものは希望の灯を消され、闇に触れた者はその肉体を維持できなくなる‼？封じられし邪神の力、たっぷりと楽しむといい‼？邪神ドレッドルートの永続効果、フィアーダークマター‼？このカードがモンスターゾーンに存在する限り、このカード以外のフィールドのモンスターの攻撃力・守備力は半分になる‼？」

「全体弱体化効果‼？」

ドレッドルートが咆哮を上げると、周囲を覆っている闇が濃くなっていく。

その闇に触れたモンスター達は苦痛の声を上げると、闇に同化していくように、身体が透け、その存在が希薄になっていった。

ヴァレルソードドラゴン
ＡＴＫ１５００→７５０

ヴァレルロードドラゴン
ＡＴＫ１５００→７５０

クリボートークン
ＡＴＫ３００→１５０　ＤＥＦ２００→１００

ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティ

ＡＴＫ９００→４５０　ＤＥＦ２４００→１２００

「っ⁉？みんな⁉？」

「さあ、お楽しみの時間だよ⁉？バトル⁉？」

「バトルフェイズ開始時、墓地に存在するリンクリボーの効果発動⁉？スケープリンク⁉？私はクリボートークンをリリース⁉？戻っておいで、リンクリボー⁉？」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００→１５０　←

「蘇ってきたかーなら、ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティでリンクリボーを攻撃⁉？ナッシングインフィニティ⁉？」

「相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動⁉？ゼロリンク⁉？このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力はターン終了時まで０になる⁉？」

ラグナインフィニティの身体にリンクリボーの身体が粒子に変わって纏わりつき、その動きを止める。

ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティ
ＡＴＫ４５０→０

「これで邪魔なのはいなくなったね。邪神ドレッドルートでヴァレルロードドラゴンを攻撃⁉？」

レイナちゃんの言葉を受けたドレッドルートの両腕に禍々しい闇が集まり、球体に変わる。

ドレッドルートは両腕に生まれた闇の球体を合わせ、自分の正面に浮かせると、ヴァレルロードとその背後にいる私に向けて闇の球体を力一杯殴りつける。

「消し飛んじゃえ⁉？パーフェクトテラーノックアウト⁉？」

殴りつけられ闇の球体から、集束された闇の波動が放たれヴァレル

ロードを呑み込み、一瞬で消滅させた。
「っ、リバースカードオープン!!?罠発動!!?　パワーウォール!!?
相手モンスターの攻撃によって自分が戦闘ダメージを受けるダメージ計算時、その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージが０になるように５００ダメージにつき1枚、自分のデッキの上からカードを墓地へ送る!!?　邪神ドレッドルートの攻撃で発生する戦闘ダメージは３２５０だからデッキの上から7枚のカードを墓地に送ってダメージを０にする!!?」
私がデッキの上から7枚のカードを墓地に送ると、私の前に粒子で出来た盾が生まれ、ドレッドルートが放った闇の波動を受け止める。
しかし、闇の波動はジリジリと粒子でできた盾を侵食していき、ガラスが割れるような嫌な音が聞こえてくる。
嫌な予感がした私は倒れていた真紅ちゃんの身体を抱えて慌てて横に転がると、粒子でできた盾は崩れ去り、私達が先程までいた場所を闇の波動が呑み込み、そこにあった全ての物を無に還した。
「っ……」
あまりの光景に、私は身震いをする。
もしも逃げるのが間に合わず、私達があの攻撃を受けていたら……
「あはははは!!?凄い凄い!!?よく生き残ったねぇーお姉さん!!?」
「っ、レイナちゃん……」
「あれあれー?怖い顔してどうしたの?もっとデュエルを楽しもうよ!!?生命を賭けた、本当の決闘（デュエル）を!!?」
「っ……」
心底楽しそうに笑うレイナちゃんの言葉に私は思わず握る拳に力が籠る。
本当は、声に出して言いたい。
こんなの、デュエルじゃないって。
デュエルは誰かの生命を対価に行うものじゃないくて、誰かに笑顔を、希望を与えてくれるものなんだって。
だけど、今の私がその言葉を口に出したとしても、その言葉はきっ

と、レイナちゃんには届かない。
レイナちゃんは、本気でこの生命が賭けた決闘（デュエル）を楽しんでいる。
それが、あの笑顔から伝わってきてしまう。
だからこそ、私のこの胸の想いを伝えるためにはーーー
「……分かった、デュエルを続けよう、レイナちゃん」
「あはっ、そうこなくっちゃ‼？」
ーーー続けるしかない、この生命を賭けた決闘（デュエル）を。
私の言葉を聞いたレイナちゃんは満面の笑みを浮かべる。
だけど、私はそんなレイナちゃんに首を振る。
「だけどーーー私はレイナちゃんの生命なんて賭けて貰っても嬉しくない」
「んー？」
私の言葉に、レイナちゃんが不思議そうに首を傾げる。
「だからーーーもし、私がこのデュエルに勝ったら、もう2度と、誰かの生命を賭けた決闘（デュエル）はしないって約束して」
「……えっ？」
「それが私が求めるレイナちゃんの生命の代わり。レイナちゃんが生命を賭けて楽しんでいる、生命を賭けた決闘（デュエル）を、私が貰う‼？」
「……あは、あはは‼？あはははは‼？」
私の言葉にレイナちゃんは心の底から楽しそうな声を上げると、満面の笑みを浮かべながらも酷く冷たい声で口を開いた。
「本当に、甘い、甘い、お姉さん」
「っ……」
「だけど、いいよ、約束してあげる。もし、私に勝てたら、だけどね」
「……負ける気でデュエルしたことはないよ」
「ふーん、なら、精々私を楽しませてね？メインフェイズ2、私はフィールド魔法、ブラックガーデンを再び発動ー‼？」
闇が漂う花園が、再び黒い薔薇に侵食されていく。
「カードを2枚伏せてターンエンド。さあ、邪神ドレッドルートを相手に、お姉さんがどれだけ保つか、じっくりと見せてね」

ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティ
ＡＴＫ０→１４００

状況は極めて危険。
だけど、いくら邪神と呼ばれ、それに類する力を持っていたとしても、ドレッドルートだってモンスター。
絶対に攻略方法はある。
だから、必ず攻略できる、してみせる!!?
そして、この決闘（デュエル）を終わらせるんだ!!?

遊花　ＬＰ７７００　手札２
ー▲ー▲ー　ー
ーー☆■ー
ー　ー
ーー○○ー
ー▲▲ーー　▽
レイナ　ＬＰ１６００　手札０

第９２話　兆し

★

遊花　ＬＰ７７００　手札２
ー▲ー▲ー　　ー
ーー☆■ー
　ー　　ー
ーー○○ー
ー▲▲ーー　▽
レイナ　ＬＰ１６００　手札０

「私のターン、ドロー!!?」
　私のフィールドには１ターンに１度、表側表示モンスターに攻撃宣言した時、ターン終了時まで、攻撃力をその相手モンスターの攻撃力の半分アップし、そのモンスターの攻撃力は半分にするヴァレルソードが残っている。
　ヴァレルソードなら邪神だって斬り伏せられる!!?
「バトル!!?」
「ふふふ、ヴァレルソードドラゴンで邪神を斬り捨てるつもりかー安直だね……バトルフェイズ開始時、ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティの効果発動、ウンエントリヒフェアボート!!?１ターンに１度、カオスオーバーレイユニットを１つ取り除き、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して、選択したモンスターの攻撃力と、その元々の攻撃力の差分のダメージを相手ライフに与え、そのモンスターをゲームから除外する!!?」
「っ!!?ＣＮｏ．の効果!!?」
「この効果は相手ターンでも発動できるよー対象は勿論、ヴァレルソードドラゴン!!?ヴァレルソードドラゴンの現在の攻撃力は１５００。元々の攻撃力が３０００だから１５００ポイントのダメージを受けて貰うよー!!?」

ラグナインフィニティがヴァレルソードに向けて手をかざすと吹雪が吹き荒れ、ヴァレルソードの身体が凍りついていく。
ヴァレルソードの身体が完全に凍りつくと、ラグナインフィニティは鎌を振るって斬撃を放ち、ヴァレルソードごと私の身体を切り裂こうとする。
「っ‼？　チェーンして手札からハネワタを捨てて効果発動‼？このターン、自分が受ける効果ダメージは０になる‼？この効果は相手ターンでも発動できるよ‼？」
「へぇーバーンから身を守るカードをドローしてたんだ」
私の前に天使の羽根を持つ触角の生えた毛玉のモンスターが現れ、粒子に変わって私の身体を包みこみ、ラグナインフィニティが放った斬撃を弾き返す。
あまりにも禍々しい気配を放つドレッドルートに意識を向いて焦りすぎた。
ヴァレルソードでドレッドルートを倒せると、ラグナインフィニティを警戒するのを忘れていた。
ハネワタのおかげでダメージを受けることはなかったけど……このミスはかなり痛い。
このターンはドレッドルートを倒すことはできない。
なら、全力で防御を固める‼？
「っ、メインフェイズ２‼？セットモンスターをリリースしてクリバビロンをアドバンス召喚‼？」

〈クリバビロン〉☆５　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１５００→４８００→２４００
ＤＥＦ１０００→４３００→２１５０

「リリースされたサクリボーの効果発動‼？このカードがリリースされた場合に自分はデッキから１枚ドローする‼？」
「成る程ねーだけど、邪神ドレッドルートが支配するブラックガーデンではどんなモンスターだって無力だよ‼？チェーンしてフィール

ド魔法、ブラックガーデンの効果発動、クリバビロンの攻撃力を半分にして私のフィールドにローズトークン1体を攻撃表示で特殊召喚するよー」
闇を纏った黒い茨に締め上げられたクリバビロンが苦悶の声を上げると、再びレイナちゃんのフィールドに黒い薔薇が咲いた。

クリバビロン
ＡＴＫ２４００→１２００

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００→４００　ＤＥＦ８００→４００

「っ、出しただけで２回も攻撃力が半分に……」
「ふふふ、本当に２回かな？その子をよく見てみなよ」
「……えっ？」
レイナちゃんの言葉に首を傾げながらもクリバビロンを見る。
すると、そこにいたのはーーー

クリバビロン
ＡＴＫ１２００→６００

ーーードレッドルートの闇に蝕まれ、さらに存在を希薄にされたクリバビロンの姿がそこにあった。
「っ⁉？なんでまたクリバビロンの攻撃力が下がって⁉？」
「ふふふ、これが邪神ドレッドルートが支配するブラックガーデンの力だよ」
「邪神ドレッドルートが支配する……ブラックガーデンの？」
「そう‼？ややこしいからお姉さんにもちゃんと説明してあげるよ。邪神ドレッドルートの永続効果、フィアーダークマターはあらゆる攻守変動の効果を行った最後に適用されるんだーまずは邪神ドレッドルート以外の変動を計算し、その後に邪神ドレッドルートの効果によ

りその数値を半分にすることができる」
ドレッドルート以外を蝕む究極の闇の力。
まさに邪神という名前に相応しい凶悪な効果に私は苦い表情を浮かべる。
「そして邪神の効果を更に凶悪にするのが私のゲームエリア、ブラックガーデンなんだ。まずは邪神ドレッドルートの永続効果により、召喚されたモンスターの攻撃力・守備力は半分になる。次に召喚・特殊召喚にチェーンしてブラックガーデンの効果が発動し、さらにそのモンスターの攻撃力を半分にする。そして攻守変動が行われたことで再び邪神ドレッドルートの永続効果が相手の攻撃力を奪うんだ!!?」
「っ!!?ということは……!!?」
「邪神ドレッドルートが降臨しているブラックガーデンがある限り、お姉さんの召喚・特殊召喚するモンスターの攻撃力は全部８分の１にまで下げられちゃうんだー!!?」
レイナちゃんの言葉に、私は血の気が引いていく。
ドレッドルートの攻撃力は４０００。
つまり、ドレッドルートが支配するブラックガーデンの中でドレッドルートに攻撃力で勝とうとするのであれば、その８倍ーーー３２００の攻撃力が必要になり、それでもようやく相打ちに持ち込めるというだけだ。
そもそもこちらがモンスターを出すことで生まれるローズトークンの攻撃力ですら、並大抵のモンスターでは勝てなくなる。
攻撃力による正面からの突破は不可能。
なら、やっぱり今は防御を固めるしかない。
「私はクリバビロンの効果発動!!?コンバインリリース!!?墓地から再び出ておいで、クリボー５兄弟!!?」
〈クリバー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３００→１５０　ＤＥＦ２００→１００
〈クリビー〉☆１　悪魔族　闇属性

ＡＴＫ３００→１５０　ＤＥＦ２００→１００

〈クリブー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３００→１５０　ＤＥＦ２００→１００

〈クリベー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３００→１５０　ＤＥＦ２００→１００

〈クリボー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３００→１５０　ＤＥＦ２００→１００

クリバビロンの身体が光り輝くと、その光が５つに分かれ、再び５体の色とりどりな毛玉の悪魔に変わる。
「でも、その子達もブラックガーデンに侵され、ローズトークンを生み出す‼？フィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動、クリボー５兄弟の攻撃力を半分にして私のフィールドにローズトークン１体を攻撃表示で特殊召喚するよー」

クリバー
ＡＴＫ１５０→７５→３８

クリビー
ＡＴＫ１５０→７５→３８

クリブー
ＡＴＫ１５０→７５→３８

クリベー
ＡＴＫ１５０→７５→３８

クリボー

ＡＴＫ１５０→７５→３８

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００→４００　ＤＥＦ８００→４００

「攻撃力３８のモンスターを５体も並べるぐらいなら、フィールドを空にしといた方がマシだったんじゃないかな？」
「ううん、この子達が来てくれたおかげで、私を守ってくれる優しい絶望（きぼう）を呼べる‼？私はフィールドに存在するクリバー、クリビー、クリブー、クリベー、４体のレベル１モンスターを墓地に送ることで墓地からモンスターを特殊召喚する‼？」
「っ‼？へぇーその召喚条件は……」
　私のモンスター達が粒子に変わる。
　そしてその粒子は重なり合い、大きな闇の巨人が、私を守るように現れた。
「おいで‼？絶望を統べる優しき神‼？絶望神アンチホープ‼？」

〈絶望神アンチホープ〉☆１２　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ５０００→２５００　ＡＴＫ５０００→２５００

「絶望神アンチホープ……お姉さんが手にした世界を滅ぼせる力の１枚かー」
「っ、絶望神アンチホープは私を守ってくれる優しい神様‼？この子は絶対に世界を滅ぼしたりなんかしない‼？」
「ふふふ、どうだろうね？だけど、例え世界を滅ぼせる神様だって、ドレッドルートが支配するブラックガーデンは攻略できない‼？フィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動、絶望神アンチホープの攻撃力を半分にして私のフィールドにローズトークン１体を攻撃表示で特殊召喚するよー」

絶望神アンチホープ

ＡＴＫ２５００→１２５０→６２５

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性

ＡＴＫ８００→４００　ＤＥＦ８００→４００

闇を纏った黒い茨にアンチホープが力を奪われていく。

しかし、アンチホープはそんな茨を気にした様子もなく、私を守るように盾を構えた。

「……成る程ー考えたね。確かに守備表示の絶望神アンチホープを倒すのはちょっと苦労しそうだなー」

私を守るように立つアンチホープを見て、レイナちゃんは笑う。

ブラックガーデンが下げるのはあくまでも攻撃力。

あの黒い茨に守備力を奪う力はない。

そしてアンチホープには戦闘を行うバトルステップ中に１度、自分の墓地のレベル１モンスター１体を除外してそのダメージステップ終了時まで、他のカードの効果を受けず、戦闘では破壊されなくなるインヴィンシブルディスペアがある。

レイナちゃんがアンチホープを攻撃すればインヴィンシブルディスペアが発動し、アンチホープはそのバトルステップの間だけドレッドルートの効果を打ち消す力を得る。

そうなればアンチホープの守備力はドレッドルートの呪縛を逃れて５０００に戻り、逆にレイナちゃんが反射ダメージを受けることになる。

レイナちゃんは迂闊にアンチホープを攻撃することはできなくないのだ。

フィールドに残ったクリボーも墓地にいるリンクリボーにいつでも変わることができるし、ヴァレルソードを除外したラグナインフィニティのカオスオーバーレイユニットはもうない。

まだデュエルはどうなるかわからない。

「私はカードを１枚伏せてターンエンド‼？」

「ならエンドフェイズ、リバースカードオープン。罠発動、ハイレート

ドロー!!?自分フィールドのモンスターを2体以上任意の数だけ選んで破壊し、破壊したモンスター2体につき1枚、自分はデッキからドローするよー私はＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティとローズストークン3体を破壊して2枚ドローするよー!!?」
「っ、ここでＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティを破壊してまでドローを……」

遊花　ＬＰ７７００　手札１
ー▲▲▲ー　　ー
ーー□ー○
ー　　ー
ーー○ーー
ーー▲ーー　　▽
レイナ　ＬＰ１６００　手札４

「私のターン、ドロー!!?あは、いいの引いちゃった。魔法カード、貪欲な壺!!?墓地に存在するＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナゼロ、ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティをＥＸデッキに、イービルソーン3枚をデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドロー!!?」
「っ!!?Ｎｏ．がＥＸデッキに戻って……」
「墓地に存在するにん人の効果発動!!?　私は手札からコピープラントを墓地に送り、にん人を特殊召喚!!?」

〈にん人〉☆4　植物族　闇属性
ＡＴＫ１９００→９５０

「フィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動、にん人の攻撃力を半分にしてお姉さんのフィールドにローズストークン1体を攻撃表示で特殊召喚するよー!!?」

にん人
ＡＴＫ９５０→４７５→２３８

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００→４００　ＤＥＦ８００→４００

黒い茨がにん人に向かって伸び、その身体を締め上げて私のフィールドにローズトークンを生む。
アンチホープは私を守ってくれるけれど、このブラックガーデンはレイナちゃんが支配するゲームエリア。
レイナちゃんが支配するこの世界全てが、私に向かって牙を剥く。
「さらにチューナーモンスター、エンジェルトランペッターを召喚‼？」

〈エンジェルトランペッター〉☆４　植物族　地属性
ＡＴＫ１９００→９５０　ＤＥＦ１６００→８００

にん人の横に闇の霧を放つアサガオのモンスター現れる。
「再びフィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動、エンジェルトランペッターの攻撃力を半分にしてお姉さんのフィールドにローズトークン１体を攻撃表示で特殊召喚するよー‼？」

エンジェルトランペッター
ＡＴＫ９５０→４７５→２３８

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００→４００　ＤＥＦ８００→４００

「チューナーモンスター……ううん、レベル４モンスターが２体……‼？」
「私はレベル４のにん人とエンジェルトランペッターでオーバーレイ

!!?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
にん人とエンジェルトランペッターが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると再び現れたのは氷の剣を持った氷の翼で空を舞う天使。
「再び現れろ、Ｎｏ．１０３!!?無より生まれし氷の令嬢、神葬零嬢ラグナゼロ!!?」

〈Ｎｏ．１０３神葬零嬢ラグナゼロ〉★４　天使族　水属性
ＤＥＦ１２００→６００　ＡＴＫ２４００→１２００

「今度は普通にＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナゼロを……」
「フィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動、Ｎｏ．１０３神葬零嬢ラグナゼロの攻撃力を半分にしてお姉さんのフィールドにローズトークン１体を攻撃表示で特殊召喚するよー!!?」

Ｎｏ．１０３神葬零嬢ラグナゼロ
ＡＴＫ１２００→６００→３００

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００→４００　ＤＥＦ８００→４００

ラグナゼロにも黒い茨が伸び、その身体を締め上げて私のフィールドをローズトークンで埋め尽くす。
「そして、私はＲＵＭ（ランクアップマジック）ーバリアンズフォースを発動!!?」
「ＲＵＭ　ーバリアンズフォース!?それは師匠の持ってた……!?」
「あはははは!!?当然だよ。だって、ＲＵＭ　ーバリアンズフォースをお兄さんにあげたのは私だもん!!?自分フィールド上のエクシーズモンスター１体を選択し、選択したモンスターと同じ種族でランクが

１つ高いＣＮｏ．またはＣＸと名のついたモンスター１体を、選択したモンスターの上に重ね、エクシーズ召喚扱いとしてＥＸデッキから特殊召喚する‼？私はＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナゼロ　１体でオーバーレイ‼？１体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築‼？カオスエクシーズチェンジ‼？」

ラグナゼロが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

それと同時にレイナちゃんのＥＸデッキから大量の闇が溢れ出す。

混沌の渦が弾けると、空から舞い降りたのは再臨する透き通った氷の翼が黒く染まり、巨大な鎌を手にした死の天使。

「再び現れろ、ＣＮｏ．１０３‼？罪ある者へ永遠の休息を与える氷の令嬢、神葬零嬢ラグナインフィニティ‼？」

〈ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティ〉★５　天使族　水属性

ＤＥＦ２４００→１２００　ＡＴＫ２８００→１４００

「っ、またＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティが……しかも、今回はカオスオーバーレイユニットが３つも……」

「さて、お姉さんはどこまで耐えられるかな？まずはフィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動、ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティの攻撃力を半分にするよー‼？」

ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティ

ＡＴＫ１４００→７００→３５０

「カオスオーバーレイユニットを１つ取り除き、ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティの効果発動、ウンエントリヒフェアボート‼？対象は勿論、絶望神アンチホープ‼？　絶望神アンチホープの現在の攻撃力は６２５。元々の攻撃力が５０００だから４３７５ポイントのダメージを受けて貰うよー‼？」

ラグナインフィニティがアンチホープに向けて手をかざすと吹雪

が吹き荒れる。
「絶望神アンチホープはやらせません‼?リバースカードオープン‼?罠発動‼?スキルプリズナー‼?　自分フィールド上のカード1枚を選択してこのターン、選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にする‼?対象は絶望神アンチホープ‼?」
しかし、アンチホープの正面に見えない障壁が現れ、吹雪を全て受け止めた。
「あは、これも耐えるんだーいいねーいいねー‼?じゃあ、こっちはどうかな?バトル‼?　邪神ドレッドルートでクリボーを攻撃‼?」
ドレッドルートの両腕に禍々しい闇が集まっていく。
思い返すのは先程みた破滅の一撃。
あんな攻撃、させるわけにはいかない‼?
「こうするよ‼?リバースカードオープン‼?罠発動‼?ハイレートドロー‼?」
「‼?へぇーお姉さんもそのカードを伏せてたんだー」
「私はクリボーとローズトークン3体を破壊して2枚ドロー‼?」
クリボーとローズトークンが粒子に変わり、私はデッキから2枚のカードをドローする。
クリボー5兄弟やクリボーンから蘇生したクリボー達の力を借りてドローするために入れてたけど、まさかローズトークンを退けるために役に立つとは思わなかった。
「これで私のフィールドのモンスターは絶望神アンチホープだけだよ。攻撃を続ける?」
「あは、冗談。攻撃したらダメージ受けちゃうの私だもん。攻撃は中止するよー」
レイナちゃんの言葉を受け、ドレッドルートの両腕に集まっていた禍々しい闇が霧散していく。
このターンは何とか防いだけど、ドレッドルートがいる限りあの攻撃は付き纏う。
どうにかして早くドレッドルートを倒さないと……
「メインフェイズ2ーカードを2枚伏せてターンエンドだよー」

遊花　ＬＰ７７００　手札３
ー▲ーーー　ー
ーー□ーー
ー　　ー
ーー○ー□
ー▲▲▲ー　▽
レイナ　ＬＰ１６００　手札１

「私のターン、ドローー!!?」
状況はどんどん悪い方向に向かっている。
私のフィールドに出るモンスターは全てドレッドルートとブラックガーデンの力により弱体化させられてしまい、場合によってはラグナインフィニティにより除外され、ダメージへと変換させられてしまう。
ラグナインフィニティのカオスオーバーレイユニットは２つ。
墓地にあるスキルプリズナーで後１度は防げるが、２度目はない。
アンチホープを除外されたら、それだけで私はラインポイントだけではなく、ドレッドルートの攻撃を耐える手段を失うことになり大きなダメージを負うだろう。
なら、このターンでせめてラグナインフィニティの動きだけでも封じる!!?
「私はクリボルトを召喚!!?」
〈クリボルト〉☆１　雷族　光属性
ＡＴＫ３００→１５０　ＤＥＦ２００→１００

出て来たのは電気を出している黒い球体のモンスター。
「っ!!?そのモンスターは……フィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動、クリボルトの攻撃力を半分にして私のフィールドにローズトークン１体を攻撃表示で特殊召喚するよー」

クリボルト
ＡＴＫ１５０→７５→３８

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００→４００　ＤＥＦ８００→４００

「クリボルトの効果発動‼？自分のメインフェイズ時にオーバーレイユニットを持っているエクシーズモンスター１体を選択し、選択したモンスターのオーバーレイユニットを１つ取り除き、自分のデッキからクリボルト１体を特殊召喚するよ‼？対象はＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティ‼？」
「仕方ないかーチェーンしてカオスオーバーレイユニットを１つ取り除き、ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティの効果発動、ウンエントリヒフェアボート‼？対象は絶望神アンチホープ‼？」
「チェーンして墓地からスキルプリズナーを除外して効果発動‼？墓地のこのカードをゲームから除外し、自分フィールド上のカード１枚を選択してこのターン、選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にする‼？対象は絶望神アンチホープ‼？」
　ラグナインフィニティが再びアンチホープに向けて手をかざし、吹雪を生み出すがアンチホープを守るように現れる見えない障壁が吹雪を全て受け止める。
「クリボルトの効果‼？ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティのカオスオーバーレイユニットを１つ取り除き、自分のデッキからクリボルト１体を特殊召喚‼？」

〈クリボルト〉☆１　雷族　光属性→闇属性
ＤＥＦ２００→１００　ＡＴＫ３００→１５０

　吹雪が止んだ瞬間ラグナインフィニティのカオスオーバーレイユニットが私のフィールドに飛んでくると、その光がクリボルトに変

わった。
「本当に厄介な効果だなーフィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動、クリボルトの攻撃力を半分にして私のフィールドにローズトークン1体を攻撃表示で特殊召喚するよー」

クリボルト
ＡＴＫ１５０→７５→３８

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００→４００　ＤＥＦ８００→４００

これでラグナインフィニティのカオスオーバーレイユニットは無くなった。
本当は攻撃表示のまま残っているクリボルトでホープルーツをエクシーズ召喚しておきたいけど、ホープルーツを出してもレイナちゃんのフィールドに溢れかえるローズトークンにやられてしまう未来しかない。
それならむしろこのまま……
「私はカードを1枚伏せてターンエンド!!?」
「おっと、ならメインフェイズ終了時に墓地に存在するハイレートドローの効果発動。このカードが墓地に存在する場合、相手メインフェイズに、自分フィールドのモンスター1体を破壊し、このカードを自分フィールドにセットするよーただし、この効果でセットしたこのカードはフィールドから離れた場合に除外されるけどねー私はローズトークンを1体破壊してハイレートドローをセットするよー」
「っ、ターンエンドだよ」

遊花　ＬＰ７７００　手札２
ー▲▲ーー　ー
ー○□□ー
ー　　ー

○○○ー□
▲▲▲▲ー　　▽
レイナ　ＬＰ１６００　手札１

「私のターン、ドロー!!?なかなか粘るねーでも、一体いつまで持つかなー?咲き誇れ、生命を飲み込むサーキット」
「っ、リンク召喚……」
レイナちゃんが正面に手をかざすと巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は植物モンスター２体。私はローズトークン２体をリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚。リンク２、アロマセラフィージャスミン」

〈アロマセラフィージャスミン〉ＬＩＮＫ　２　植物族　光属性
ＡＴＫ１８００→９００　↙?↘?

ローズトークンがサーキットに吸い込まれ、葉っぱの羽根を持つ妖精のモンスターが現れる。
「フィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動、アロマセラフィージャスミンの攻撃力を半分にしてお姉さんのフィールドにローズトークン１体を攻撃表示で特殊召喚するよー!!?」

アロマセラフィージャスミン
ＡＴＫ９００→４５０→２２５

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００→４００　ＤＥＦ８００→４００

黒い茨がセラフィージャスミンに向かって伸び、その身体を締め上げて私のフィールドにローズトークンを生む。
「まだまだ行くよ!!?アロマセラフィージャスミンの効果発動。１ターンに１度、このカードのリンク先の自分のモンスター１体をリ

リースしてデッキから植物族モンスター1体を守備表示で特殊召喚する。私はＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティをリリースしてデッキから紅姫チルビメを特殊召喚するよ‼？」
「っ‼？そのモンスターは……」
〈紅姫チルビメ〉☆８　植物族　地属性
ＤＥＦ２８００→１４００　ＡＴＫ１８００→９００

ラグナインフィニティの姿が消え、紅葉の身体を持つアルラウネのモンスターが現れる。
「フィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動、紅姫チルビメの攻撃力を半分にしてお姉さんのフィールドにさらにローズトークン1体を攻撃表示で特殊召喚するよー‼？」

紅姫チルビメ
ＡＴＫ９００→４５０→２２５

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００→４００　ＤＥＦ８００→４００

「お姉さんは知ってるみたいだね、紅姫チルビメの効果を」
「……紅姫チルビメは永続効果によりフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は他の植物族モンスターを攻撃対象に選択できない……だよね？」
「そう‼？これでお姉さんは私のアロマセラフィージャスミンとローズトークンは攻撃できない‼？攻撃力を８分の１にまで下げられるこのゲームエリアで正攻法で守備表示の紅姫チルビメを倒してローズトークン達を狙うのは不可能って訳‼？」
「っ……」
どんどん悪化していく状況に私は思わず苦い表情を浮かべる。
これでドレッドルート以外を倒してレイナちゃんのライフを削り

切ることも難しくなった。
　やっぱり、なんとかしてドレッドルートとブラックガーデンを攻略しない限り、私に勝ち目はない。
「さあ、いつまでお姉さんは耐えられるかな？バトル‼？」
「ならメインフェイズ終了時、私は墓地に存在するハイレートドローの効果発動‼？ローズトークンを１体破壊してハイレートドローをセットするよ‼？」
「いいよー」
「さらにバトルフェイズ開始時、墓地に存在するリンクリボーの効果発動‼？スケープリンク‼？私は攻撃表示のクリボルトをリリース‼？戻っておいで、リンクリボー‼？」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００→１５０　←

　クリボルトの姿が粒子に変わり、代わりに墓地からリンクリボーがフィールドに現れる。
「あはは‼？無駄無駄‼？フィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動‼リンクリボーの攻撃力を半分にして私のフィールドにローズトークン１体を攻撃表示で特殊召喚ー‼？」

リンクリボー
ＡＴＫ１５０→７５→３８

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００→４００　ＤＥＦ８００→４００

「まずはその厄介なリンクリボーに退いて貰おうかな？アロマセラフィージャスミンでリンクリボーに攻撃‼？ソーラーセラピー‼？」
「相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動‼？ゼロリンク‼？このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力は

ターン終了時まで０になる‼？」

アロマセラフィージャスミン
ＡＴＫ２２５→０

リンクリボーの身体が粒子に変わり、アロマセラフィージャスミンの身体に纏わりついて動きを止める。
「これで邪魔する子はいなくなったよ？邪神ドレッドルートでローズトークンを攻撃‼？」
「通さない‼？手札からクリボールの効果発動‼？スピンショット‼？相手モンスターの攻撃宣言時、そのモンスターを守備表示にするよ‼？」
両腕に禍々しい闇が集めるドレッドルートの右目にクリボールが回転しながら突撃し、ドレッドルートを怯ませる。

邪神ドレッドルート
ＡＴＫ４０００→ＤＥＦ４０００

「まだ防御手段があったかーローズトークンでクリボルトを攻撃‼？マリシャスウィップ‼？」
「っ、ゴメンね、クリボルト……」
闇を纏ったローズトークンの茨に貫かれ、クリボルトが消滅する。
「あははは‼？流石だねー私はこれでターンエンドだよーさあ、もっと私を楽しませてね？」

遊花　ＬＰ７７００　手札１
ー▲▲▲ー　ー
ー○□ーー
ー　☆
ー○□□ー
▲▲▲▲ー　▽

レイナ　ＬＰ１６００　手札１

「私のターン、ドロー!!?……っ」

私はドローしたカードと今まで見えた自分のカードを思い返し、勝利への可能性を手繰る。

……ダメだ、今見えているカードだけじゃどうやってもドレッドルートを攻略することができない。

かといって、このままだと次のドレッドルートの攻撃は絶対に防ぎきれない。

……なら、手繰り寄せるしかない。

生き残るための術を。

勝利への可能性を。

激しい攻防で、早くも残り僅か１０枚になってしまったこのデッキの中から。

幸いなことに、勝利への可能性はまだ消えていない。

ドレッドルートを攻略できる　可能性を秘めた力は確かにある。

だけど、そのためには……

私が私を守るように立つアンチホープに視線を向けると、アンチホープはこちらを見て力強く頷く。

……気にするなと言っているのだろうか？

声が聞こえるわけではない。

それでも、確かに感じるこの繋がりはーーー

「……ありがとう」

ーーーいつだって、私の背中を押してくれる!!?

「リバースカードオープン!!?罠発動!!?ハイレートドロー!!?私は絶望神アンチホープとローズトークンを破壊して1枚ドロー!!?」

「っ!!?へぇー絶望神アンチホープを破壊しちゃうんだ。せっかく邪神ドレッドルートと渡り合えるカードなのに」

粒子に変わっていくアンチホープを見て、レイナちゃんは嘲るように笑う。

だけど、そんな言葉じゃ私は揺るがない。

「絶望神アンチホープはただ破壊されるんじゃない!!?いつだってこの子は、私のために優しい絶望(きぼう)を導いてくれるんだ!!?手札のクリバビロンの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、自分の墓地のモンスターの数が相手の墓地のモンスターより多い場合にこのカードを手札から特殊召喚できる!!?ただし、この効果を使用した場合、クリボー5兄弟へ分離する効果は使えなくなる!!?おいで、クリバビロン!!?」

〈クリバビロン〉☆5　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１５００→４８００→２４００
ＤＥＦ１０００→４３００→２１５０

「分離ができないのにクリバビロン?フィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動、クリバビロンの攻撃力を半分にして私のフィールドにローズトークン1体を攻撃表示で特殊召喚するよー」

クリバビロン
ＡＴＫ２４００→１２００→６００

〈ローズトークン〉☆2　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００→４００　ＤＥＦ８００→４００

「クリバビロンをリリースして魔法カード、ティンクルファイブスター!!?同名カードは1ターンに1枚しか発動できず、自分フィールドのモンスターがレベル5モンスター1体のみの場合、そのモンスターをリリースして発動できる。自分の手札・デッキ・墓地からクリバー、クリビー、クリブー、クリベー、クリボーを1体ずつ選んで特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはアドバンス召喚のためにはリリースできない!!?」
「へぇー魔法カードで分離する方法があったのか」
「さらにそれにチェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動、裁

きの天秤!!?」
「っ!!?あは、この状況でドローカード!!?」
「レイナちゃんのフィールドには４枚の伏せカードと、ブラックガーデン、ローズトークン２体、アロマセラフィージャスミン、紅姫チルビメ、邪神ドレッドルートの１０枚!!?私は手札１枚に伏せカード、発動中の裁きの天秤とティンクルファイブスターの４枚!!?その差分、６枚のカードをドローするよ!!?」
「流石にそんなにドローはさせられないねーさらにチェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動、ハイレートドロー!!?私はアロマセラフィージャスミンと２体のローズトークンを破壊して１枚ドローするよー!!?」
「っ、チェーン処理で裁きの天秤の効果、レイナちゃんのカードが３枚減ったから３枚のカードをドロー!!?そして、ティンクルファイブスターの効果!!?墓地から戻っておいで、クリボー５兄弟!!?」

〈クリバー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００→１００　ＡＴＫ３００→１５０

〈クリビー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００→１００　ＡＴＫ３００→１５０

〈クリブー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００→１００　ＡＴＫ３００→１５０

〈クリベー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００→１００　ＡＴＫ３００→１５０

〈クリボー〉☆１　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００→１００　ＡＴＫ３００→１５０

「フィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動、クリボー５兄弟の攻

撃力を半分にして私のフィールドにローズトークン１体を攻撃表示で特殊召喚するよー」

クリバー
ＡＴＫ１５０→７５→３８

クリビー
ＡＴＫ１５０→７５→３８

クリブー
ＡＴＫ１５０→７５→３８

クリベー
ＡＴＫ１５０→７５→３８

クリボー
ＡＴＫ１５０→７５→３８

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００→４００　ＤＥＦ８００→４００

私は新しくドローした手札を見て少し考えると、１つ深呼吸をして正面に手をかざす。
「すー……はー……行くよ!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
私の目の前に新しいサーキットが現れる。
「召喚条件はカード名が異なるモンスター３体!!?私はクリバー、クリビー、クリベーをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
クリバー、クリビー、クリベーがサーキットに吸い込まれていく。
サーキットが光り輝くと、現れたのは悪魔の翼を持つ黒騎士。

「リンク召喚!!?親愛なる相棒と出会い、哀を知り、愛に生きた、深愛の黒騎士!!?リンク３!!?ダークナイト@イグニスター!!?」
私の呼び声に応えるように、黒騎士は剣を振り抜いた。
〈ダークナイト@イグニスター〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ２３００→１１５０　↙?←↘?
「あは!!?すごいすごい!!?また見たことのないモンスターだ!!?だけど、どんなモンスターが出てこようと、ブラックガーデンの呪いは受けて貰うよ!!?フィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動、ダークナイト@イグニスターの攻撃力を半分にして私のフィールドにローズトークン１体を攻撃表示で特殊召喚するよー!!?」
ダークナイト@イグニスター
ＡＴＫ１１５０→５７５→２８８
〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００→４００　ＤＥＦ８００→４００
「次はこうだよ!!?私はレベル１のクリブーとクリボーでオーバーレイ!!?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
「っ!!?次はランク１のエクシーズ召喚!!?」
クリブーとクリボーが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして、渦が弾けると、舞い降りたのは金色の翼を持つ小さな戦士。
私が呼ぶ小さき希望。
「おいで、Ｎｏ．３９!!?小さき希望は、逆境の中で進化を遂げる!!?希望皇ホープルーツ!!?」
〈Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツ〉★１　戦士族　光属性

ＤＥＦ１００→５０　ＡＴＫ５００→２５０

「あは‼?お姉さんの希望(ホープ)か‼?本当に、小さい希望だねぇー」

「例え小さくとも、この子が私の希望を繋いでくれる‼?この瞬間、ダークナイト@イグニスターの効果発動‼?プロミスドリバイブ‼?このカードのリンク先にモンスターが特殊召喚された場合、自分の墓地からレベル４以下の@イグニスターモンスターを可能な限りこのカードのリンク先となる自分フィールドに効果を無効にして特殊召喚する‼?」

「へぇー小型の@イグニスターもいるんだ?チェーンしてフィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動‼　Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツの攻撃力を半分にして私のフィールドにローズトークン１体を攻撃表示で特殊召喚するよー‼?」

Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツ
ＡＴＫ２５０→１２５→６３

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００→４００　ＤＥＦ８００→４００

「ゴメンね、Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツ……ダークナイト@イグニスターの効果‼?おいで、ヒヤリ@イグニスター、ドシン@イグニスター‼?」

〈ヒヤリ@イグニスター〉☆１　サイバース族　水属性
ＤＥＦ４００→２００　ＡＴＫ３００→１５０→７５→３８

〈ドシン@イグニスター〉☆１　サイバース族　地属性
ＤＥＦ８００→４００　ＡＴＫ１００→５０→２５→１３

ダークナイトが剣を振るうと、空間が割れ、空間の裂け目から小さ

な水球のようなモンスターと土で出来たブロックの身体を持つモンスターが姿を現わす。
「魔法カード、手札抹殺‼？私は　３枚、レイナちゃんは２枚捨ててドローだよ‼？」
「っ⁉？あは、肝が座ってるね。お姉さんのデッキは残り僅かなのにさー」
　レイナちゃんは勢いよくデッキからカードをドローした私を見て楽しそうに笑う。
　私のデッキは残り３枚。
　もう残された時間は僅か。
　だからこそ‼？
「残り僅かだからこそ、私の望みは繋がるんだ‼？墓地に送られた絶対王バックジャックの効果発動‼？このカードが墓地へ送られた場合、自分のデッキの上からカードを３枚確認し、好きな順番でデッキの上に戻すよ‼？」
「っ‼？その枚数でのデッキ操作……」
「フィールドに同じレベルのモンスターが２体以上存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できる‼？おいで、スロワースワロー‼？」

〈スロワースワロー〉☆１　鳥獣族　風属性
　ＤＥＦ１００→５０　ＡＴＫ１００→５０

　私の手札から飛び出してきたのは小さな翠燕。
「フィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動‼ローズトークンは出ないけど、スロワースワローの攻撃力を半分にするよー」

　スロワースワロー
　ＡＴＫ５０→２５→１３

「そしてこれが最後のピース‼？墓地に存在するジェットシンクロン

の効果発動!!?手札を1枚墓地に送り、墓地からこのカードを特殊召喚します!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合、除外される!!?」

〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＤＥＦ０　ＡＴＫ５００→２５０→１２５→６３

そしてスロワーに寄り添うように小さなジェット機のような機械のモンスターが現れる。
「ジェットシンクロンが最後のピース?ジェットシンクロンはチューナーモンスターだよね?今度はシンクロ召喚かな?」
レイナちゃんが楽しそうに笑いながら首を傾げる。
そんなレイナちゃんに首を振り、フィールドに揃った6体のモンスターを見て、私は目を閉じて1つ深呼吸をすると、胸に手を当ててその言霊を口にする。
「すー……はー……行くよ!!?私の全力、見せてあげる!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「ここでまたリンク召喚?」
私の目の前に巨大なサーキットが展開される。
「召喚条件は属性が異なるモンスター3体以上!!?私は闇属性、ダークナイト@イグニスター!!?光属性、Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツ!!?水属性、ヒヤリ@イグニスター!!?地属性、ドシン@イグニスター!!?風属性、スロワースワロー!!?そして炎属性、ジェットシンクロン!!?属性の異なる6体のモンスターをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
「っ!?!?6体のモンスターでリンク召喚!?!?」
私のフィールドにいたモンスター達が次々とサーキットの中に飛び込んでいくと、サーキットから今まで見たことが無い程の光が溢れ出す。
私の身体がその光に包まれると、視界にノイズが走り、再び頭の中に見たことのないイメージが流れ込んでくる。

『これは俺の夢のフィールドだ……俺達は今度こそ本当に一つになるんだ……』
私の頭の中に流れ込んできたのはダークナイトを呼び出した時にも見えた悲しそうな表情を浮かべる1人の男性。
それはきっとどこかの物語に存在したこの男の人の記憶の欠片。
悲しみの記憶。
なんでそんな記憶が私に見えるのかは、今の私にはわからない。
だけど、あなたの気持ちは絶対に無駄にはしないから‼?
だから、今は私に力を貸してください‼?
「世界を作りし六大元素‼?その力、今再び1つに束、混沌の世界に愛を示せ‼?」
サーキットが砕け散り、サーキットの中に溜まっていた光が世界を照らすと、その輝きの中から現れたのは巨大な鎌を手にした生まれたての超越神。
アンチホープ達と同じ確かな繋がりを感じる、私の新しい切り札。
「おいで、善悪を超越し、永愛を誓う現人神‼?リンク6‼?ジアライバルサイバース@イグニスター‼?」

〈ジアライバルサイバース@イグニスター〉ＬＩＮＫ　６　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ０　↓?↑→←↓↘?

「リンク6のモンスター⁉?しかも……っ、あは、あはははははは‼?本当に、最っ高だね‼?お姉さんは‼?あはははは‼?」
私が呼び出したジアライバルを見たレイナちゃんは心底楽しそうな笑い声をあげる。
「私が知らない内にまた1枚世界を滅ぼせる力を手に入れたんだ‼?流石は世界を滅ぼせる素質を、世界を滅ぼす運命を持つお姉さんだ‼?あはははは‼?」
「っ……」
レイナちゃんの言葉が私の胸を刺す。

……何となく感じてはいた。
アンチホープ達と同じ繋がりを感じるジアライバルには、きっとアンチホープ達と同じ力があると。
きっと先程見たイメージも、その確かな繋がりが私に見せた物で……
だけど……だとしても!!?
「それでも、私達は世界を滅ぼしたりなんかしない!!?運命にも、邪神にだって勝ってみせる!!?ジアライバルサイバース@イグニスターの永続効果、オールラブブレイジング!!?このカードの元々の攻撃力は、このカードのリンク素材としたモンスターの数×１０００ポイントの数値になる!!?」
「っ!!?へぇー」
「ジアライバルサイバース@イグニスターのリンク素材となったモンスターは6体!!?よってその攻撃力は……!!?」

ジアライバルサイバース@イグニスター
ＡＴＫ０→６０００

「っ、攻撃力６０００かーだけど、どんな攻撃力を持っていようがドレッドルートが支配するブラックガーデンの前では無力!!?フィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動!!」
闇を纏った茨が、ドレッドルートの瘴気がジアライバルを呑み込んでいく。
しかし、次の瞬間、闇を纏った茨は全て断ち切られ、無傷のジアライバルが姿を現した。
「無力なのはそっちだよ!!例え邪神だろうと、?ジアライバルサイバース@イグニスターを止めることなんてできない!!?ジアライバルサイバース@イグニスターのもう1つの永続効果、アルティメットリジェクション!!?このカードは他のカードの効果を一切受けない!!?」
「なっ!!?効果に対する完全耐性!!?」

邪神が完全に支配したフィールドすらも跳ね除けるジアライバルの力に、レイナちゃんの瞳に初めて動揺の色がうつる。
畳みかけるなら、今しかない!!?
「紅姫チルビメを対象にジアライバルサイバース@イグニスターの効果発動!!?ジャッジメントエクスキューショナー!!?1ターンに1度、このカード以外のフィールドのモンスター　1体を対象としてそのモンスターを破壊し、このカードのリンク先となる自分フィールドにサイバース族・闇属性・レベル1・攻守0の@イグニスタートーク1体を特殊召喚する!!?」
「っ、効果破壊まで……リバースカードオープン!!?罠発動、スキルプリズナー!!?」
「っ!!?」
「効果の説明はいらないよね?対象は紅姫チルビメ!!?」
チルビメの正面に見えない障壁が現れ、ジアライバルが放った破滅の極光を受け止める。
防がれた!!?
だけど、まだ終わりじゃない!!?
「バトル!!?ジアライバルサイバース@イグニスターで邪神ドレッドルートを攻撃!!?」
「っ、迎え撃って!!?邪神ドレッドルート!!?パーフェクトテラーノックアウト!!?」
ドレッドルートの両腕に禍々しい闇が集まり、球体に変わる。
ドレッドルートは両腕に生まれた闇の球体を合わせ、生み出された闇の球体を力一杯殴りつけると、殴りつけられ闇の球体から、集束された闇の波動が放たれる。
放たれた闇の波動をジアライバルは鎌で受け止め、力を込めると鎌が眩い光に包まれていく。
「お願い、ジアライバルサイバース@イグニスター!!?邪悪なる神を断ち切って!!?暁光のフォーザフューチャー!!?」
鎌を光が完全に包み込み、ジアライバルが鎌を振り抜くと、闇の波動を断ち斬る光の奔流が放たれ、ドレッドルートを呑み込み、跡形も

無く消滅させた。
「っ……まさか、邪神ドレッドルートを正面から倒すなんてね……邪神ドレッドルートが破壊されたことで能力が下がっていたモンスターは全て元に戻る」

紅姫チルビメ
ＤＥＦ１４００→２８００　ＡＴＫ２２５→９００

ローズトークン
ＡＴＫ４００→８００　ＤＥＦ４００→８００

ドレッドルートが倒されたことで世界を覆っていた呪われた闇が晴れていく。
まだブラックガーデンは健在だけど、これで私のモンスターの攻撃力が大きく下げられることはない。
残りのデッキ枚数は３枚。
だけど、なんとかする方法もある。
勝負はまだ分からない!!?
「私はこのままターンエンド!!?」

遊花　ＬＰ７７００　手札２
ー▲ーーー　ー
ーーーーー
☆　ー
○○ー□○
ー▲ー▲ー　▽
レイナ　ＬＰ１６００　手札２

「あは、あはははは!!?本当にすごいね!!?お姉さんは!!?まさか邪神ドレッドルートまで倒されるなんて思わなかった!!?本当に、お姉さんはいつも私の想像の斜め上を行ってくれる!!?あはははは!!?」

「っ‼?」
ドレッドルートを倒され、俯いていたレイナちゃんは急に顔を上げると歓喜の笑い声をあげる。
その声色に、ドレッドルートを倒された怒りや嘆きは無く、どこまでも狂気的な喜びが満ちている。
「邪神に対しても決して引かず、僅かなデッキから諦めずに勝利への道を手繰ってくる‼?認めるよ、お姉さん‼?お姉さんはお姉さんの師匠であるお兄さんよりももっと上の、私と　対等に遊べるプレイヤーだ‼?だからーーー」
そこまでいうと、レイナちゃんは本当に楽しそうにーーー
「ーーー私の本気を受けても、簡単には壊れないでね?」
「っ‼?」
ーーー全てを萎縮させるような残酷な声色で笑った。
「私のターン、ドロー‼?あは、あはははは‼?」
「っ⁉?えっ⁉?この感覚って……⁉?」
ドローしたカードを見てレイナちゃんが狂気の笑い声を上げると、カードから大量の闇が噴き出し、私の身体に悪寒が走る。
その悪寒は先程ドレッドルートから感じたものと同じもの。
そしてその悪寒の中から僅かに感じたのはーーーアンチホープ達と同じ確かな　繋がり。
「あはははは‼?今日は大盤振る舞い‼?お姉さんに見せてあげるよ‼?世界を惑わせ、狂気を齎す‼?圧倒的な神の力‼?　２体目の邪神を‼?私は、３体のローズトークンをリリースし、神の生贄に捧げる‼?」
「２体目の、邪神⁉?」
ローズトークンが掲げたカードから放たれる闇に呑まれて溶けていく。
ローズトークンを溶かした闇は収縮し、レイナちゃんの頭上に集まっていく。
「狂気の根源たる大いなる闇‼?世界を惑わせ歪ませる狂気の化身‼?今、狂気を齎す銷魂の力で、全ての希望を狂わせろ‼?」

そして闇が１箇所に集まると、そこに現れたのは極限にまで圧縮された呪いの根源。
「降臨せよ‼？　邪神アバター‼？」
全ての者を狂わせる２体目の邪神が、ここに降臨した。
〈邪神アバター〉☆１０　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ？
「これが、２体目の邪神……攻撃力が決まってない？」
私はドレッドルートより禍々しい気配を感じさせるアバターを見て、震えそうになる身体を押さえながら疑問を浮かべる。
そんな私を見て、レイナちゃんは嬉しそうに口を開く。
「ふふふ、邪神アバターは邪神の中でも最高位に位置する邪神‼？最強の闇の力、存分に堪能してね‼？まずは邪神アバターの永続効果‼？ダークソウルトランセンデンス‼？このカードの攻撃力・守備力は、邪神アバター以外のフィールドの攻撃力が一番高いモンスターの攻撃力＋１００の数値になる‼？」
「っ⁉？フィールドにいるモンスターの中で必ず１番強くなるの⁉？っ‼？ということは……⁉？」
「現在、フィールドで最も攻撃力が高いモンスターはお姉さんのジアライバルサイバース＠イグニスター‼？その強大な力を写し取り、超越しろ‼？邪神アバター‼？」
レイナちゃんが叫ぶと、闇の球体だったアバターの身体が変化していく。
変化が止まり、現れたのは闇でできた巨大な鎌を手にした生まれたての闇の超越神。
闇に塗りつぶされたジアライバルの姿を持つ、アバターがそこに存在した。
邪神アバター
ＡＴＫ？→６１００　ＤＥＦ？→６１００

「攻守６１００……!?」
「驚くのはまだ早いよ?最高位に位置する邪神が齎す狂気の時間はここからだ!!?邪神アバターの効果、それにチェーンしてフィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動!!邪神アバターの攻撃力を半分にしてお姉さんのフィールドにローズトークン１体を攻撃表示で特殊召喚するよー!!?」

邪神アバター
ＡＴＫ６１００→３０５０→６１００

〈ローズトークン〉☆２　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００

アバターに黒い茨が巻き付き、私のフィールドにローズトークンが生まれるが、アバターに巻き付いていた黒い茨は一瞬でアバターの身体に呑み込まれ、消滅する。
「邪神アバターの攻撃力変動は永続効果……ブラックガーデンは効かないってわけだね」
「言ったでしょ?ブラックガーデンは邪神のためのゲームエリア!!?その力で邪神が不利になることはないんだよ!!?そして、お待ちかね。邪神アバターの効果発動!!?ルナティックタイム!!?このカードが召喚に成功した場合、相手ターンで数えて２ターンの間、相手は魔法・罠カードを発動できない!!?」
「っ!?魔法・罠封じ!?」
アバターの身体から闇の波動が放たれ、私のカード達を蝕んでいく。
マズい……私の残りデッキは残り３枚。
そしてバックジャックで操作した上２枚は魔法・罠カードだ。
おまけにアバターは必ずフィールドのモンスターの中で最強の力を手に入れてしまう。

早く決着をつけないといけないのに、よりによってこちらの行動を封じ、上回ってくる力を持つ邪神なんて……

「さあ、お姉さんは耐えられるかな？バトル‼？邪神アバターでジアライバルサイバース＠イグニスターを攻撃‼？」

「っ、迎え撃って‼？ジアライバルサイバース＠イグニスター‼？暁光のフォーザフューチャー‼？」

ジアライバルが光り輝く鎌を振り抜くと、ドレッドルートを断ち斬った光の奔流が放たれる。

放たれた光の奔流に対し、ジアライバルの姿を持つアバターが力を込めると闇でできた鎌が深淵の如きドス黒い闇に包まれていく。

「深淵に呑み込め‼？ダークマターマイアズマ‼？」

鎌を闇が完全に包み込み、アバターが鎌を振り抜くと、光を喰らう闇の奔流が放たれた。

光と闇の本流が激突し、暫くは拮抗していたが、徐々に闇の本流は勢いを増し、光の本流を完全に断ち斬り、ジアライバルに向かっていく。

「っ‼？墓地に存在するサクリボーの効果発動‼？自分のモンスターが戦闘で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外します‼？」

「そういえば墓地にいたねーでも、ダメージは受けて貰うよ‼？」

闇の本流がジアライバルを断ち斬ろうとした瞬間、サクリボーが姿を現し代わりに闇の本流を受けて消滅する。

弱まった闇の本流をジアライバルは弾き返したが、その余波は私と真紅ちゃんの身体を襲い、私達の身体は容易く宙に吹き飛ばされた。

「っ……くぅ、ぁぁぁ‼？」

遊花　ＬＰ７７００→７６００

私の身体が勢いよく地面を転がり、身体中に擦り傷ができ、関節は軋んで悲鳴をあげる。

たった１００ポイントのダメージでこれ程の破壊力があるなんて

……やっぱりこの攻撃をまともに受けるわけにはいかない。
「ふふふ、よく耐えれたねーさあ、終わりの時は近い。最後までゲームを楽しもう？私はこれでターンエンドー!!？」

遊花　ＬＰ７６００　手札２
ー▲ーーー　ー
ーー○ーー
☆　ー
ーー○□ー
ー▲ー▲ー　▽
レイナ　ＬＰ１６００　手札２

「私のターン、ドローー!!？」
痛む身体を堪えて立ち上がり、デッキからドローしたのは貪欲な瓶。
本当はバックジャックの効果でセットして残り少ないデッキを回復させる予定だったけど、アバターの力で魔法・罠を封じられてしまったため、完全に予定が狂ってしまった。
だけど、アバターの効果は２ターン後には切れる。
デッキ切れまでには、ギリギリ間に合うハズだ。
ならば、今私が出来ることを全力でやるしかない。
「邪神アバターを対象にジアライバルサイバース＠イグニスターの効果発動!!？ジャッジメントエクスキューショナー!!？」
「あはははは!!？無駄無駄!!？チェーンして墓地からスキルプリズナーを除外して効果発動!!？　墓地のこのカードをゲームから除外し、対象は邪神アバターー!!？その効果は無効だよー!!？」
アバターの正面に見えない障壁が現れ、ジアライバルが放つ破滅の極光を受け止める。
でも、これでもうスキルプリズナーは無くなった。
次のターンにはアバターを破壊できる。
なら、ここは……

「私はローズトークンを守備表示に変更!!?」

ローズトークン
ＡＴＫ８００→ＤＥＦ８００

「カードを１枚伏せてターンエンド!!?」
「無闇に紅姫チルビメを攻撃してこなかったかー懸命だねー邪神アバターの効果が１つ目の時を刻むよー」

遊花　ＬＰ７６００　手札２
ー▲▲ーー　ー
ーー□ーー
☆　ー
ーー○□ー
ー▲ー▲ー　▽
レイナ　ＬＰ１６００　手札２

「私のターン、ドローー!!?さて、と」
ドローしたカードに視線も向けずにレイナちゃんは私に笑いかける。
「久しぶりに楽しいデュエルだったよ、お姉さん」
「っ、まだデュエルは終わってないーーー」
「ううん、終わりだよ。邪神アバターの召喚を許した時点でお姉さんの敗北は決定してるんだ」
「っ!!?」
確かな確信を持って告げられるレイナちゃんの言葉に私は息を呑む。
そんな私にレイナちゃんは少し不満気な表情を浮かべた。
「本当はこういう勝ち方はしたくないんだけどねー私は　陽竜果（ソルドラポム）フォンリーを召喚ー」

〈陽竜果フォンリー〉☆1　植物族　炎属性
ＡＴＫ８００

フィールドに現れたのは竜の姿をしたパイナップルのモンスター。
「フィールド魔法、ブラックガーデンの効果発動、陽竜果フォンリーの攻撃力を半分にしてお姉さんのフィールドにローズトークン１体を攻撃表示で特殊召喚するよー‼?」

陽竜果フォンリー
ＡＴＫ８００→４００

〈ローズトークン〉☆2　植物族　闇属性
ＡＴＫ８００

「そしてフィールド魔法、ブラックガーデンのもう１つの効果を発動‼?フィールドには攻撃力９００の紅姫チルビメ、攻撃力４００の陽竜果フォンリー、そして私とお姉さんのフィールドに攻撃力８００のローズトークンが１体ずつがいる‼?攻撃力の合計は２９００だ‼?私はブラックガーデンとフィールドの植物族モンスターを全て破壊して、再び現れろ大凛魔天使ローザリアン‼?」
辺り一面に咲き誇っていた黒い薔薇が朽ち果てていく。
そして全ての黒い薔薇が朽ち果てると、その残骸からローザリアンが姿を現した。

〈大凛魔天使ローザリアン〉☆8　植物族　地属性
ＡＴＫ２９００

「大凛魔天使ローザリアン……」
「警戒してるところ悪いけど、これでもう終わりなんだー」
「……えっ?」
「これでゲームエンドだよー紅姫チルビメが破壊されたことで返り咲

く薔薇の大輪の効果、それにチェーンしてリバースカードオープン‼?罠発動‼?　泥仕合(ドローゲーム)‼?」
「泥……仕合?」
「同名カードは1ターンに1度しか発動できず、自分及び相手フィールドのカードが同時に、戦闘・効果で破壊された場合、お互いのプレイヤーは、それぞれデッキから2枚ドローする‼?」
「っ⁉?お互いに2枚ドロー罠カード⁉?」
「私はデッキから2枚ドロー‼?さあ、お姉さんもドローしてね?その　2枚しかないデッキから」
「っ……」
　私がデッキから2枚のカードをドローすると、デュエルディスクにカードが存在しなくなる。
　……これで私のデッキはもうない。
　次の私のターンで、私のデッキ切れで敗北だ。
「これで私の勝ちは確定ーだけど、これだけじゃ不完全燃焼になっちゃうからーーー最後まで楽しませてね?」
「っ‼?」
　そういってレイナちゃんが不気味に笑う。
　私の敗北は決まっている。
　だけど……ただ敗北するだけということはなさそうだ。
「さてさて、まずはチェーン処理で返り咲く薔薇の大輪の効果発動ー‼?　自分フィールド上に存在するレベル5以上の植物族モンスターが破壊された場合、墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる‼?咲き誇れ、返り咲く薔薇の大輪‼?」

〈返り咲く薔薇の大輪〉☆4　植物族　闇属性
　DEF1300

　レイナちゃんの墓地から巨大な赤い薔薇が咲き誇る。
「大凛魔天使ローザリアンをリリースし、魔法カード、アドバンスド

ロー‼？　自分フィールド上に表側表示で存在するレベル８以上のモンスター１体をリリースしてデッキからカードを２枚ドローする‼？さらに墓地に存在するにん人の効果発動‼？私は手札から死の花―ネクロフルールを墓地に送り、にん人を特殊召喚‼？」

〈にん人〉☆４　植物族　闇属性
ＡＴＫ１９００

「レベル４モンスターが２体……‼？」
「残念、レベル４じゃないよー手札の妖精弓士イングナルを捨てて、魔法カード、レベルマイスター‼？手札のモンスター１体を墓地へ送り、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターを２体まで選択して選択したモンスターのレベルはエンドフェイズ時まで、このカードを発動するために墓地へ送ったモンスターの元々のレベルと同じになるよー私は返り咲く薔薇の大輪とにん人のレベルを６に変更ー‼？」

返り咲く薔薇の大輪
☆４→６

にん人
☆４→６

「っ、レベル６モンスターが２体……」
「私はレベル６となったにん人と返り咲く薔薇の大輪でオーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築‼？エクシーズ召喚‼？」
にん人と薔薇の大輪が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると現れたのは山のように巨大な巨人。
「現れろ、Ｎｏ．６‼？古に伝わりし世界を焼き尽くした人智を超え

し巨人!!?　先史遺産アトランタル!!?」

〈Ｎｏ．６　先史遺産アトランタル〉★６　機械族　光属性
ＡＴＫ２６００

「２体目のＮｏ．!?」
「Ｎｏ．６　先史遺産アトランタルの効果発動!!?アームドナンバーズ!!?このカードがエクシーズ召喚に成功した時、自分の墓地のＮｏ．モンスター１体を対象としてそのモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力の半分アップする!!?私は墓地のＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティを装備ー!!?　ＣＮｏ．１０３神葬零嬢ラグナインフィニティの攻撃力は２８００!!?よってその半分の１４００ポイント、Ｎｏ．６　先史遺産アトランタルの攻撃力をアップさせるよー!!?」

ラグナインフィニティの魂がアトランタルに吸収されていき、完全に取り込まれるとアトランタルの手元に巨大な氷の鎌が現れた。

Ｎｏ．６　先史遺産アトランタル
ＡＴＫ２６００→４０００

「攻撃力４０００……!?だけど、その攻撃力じゃジアライバルサイバース@イグニスターには届かない!!?」
「何もＮｏ．６　先史遺産アトランタルでジアライバルサイバース@イグニスターを越えようなんて思っていないよ。この子の力はこの先にあるからねーリバースカードオープン!!?罠発動、ミスリバイブ!!?」
「ミス……リバイブ?」
「相手の墓地のモンスター１体を選択して選択したモンスターを相手フィールド上に表側守備表示で特殊召喚するよー!!?私はお姉さん

の墓地からＮｏ．３９　希望皇ホープルーツをお姉さんのフィールドに特殊召喚ー!!?」
「希望皇ホープルーツを!?」
〈Ｎｏ．３９　希望皇ホープルーツ〉★１　戦士族　光属性
ＤＥＦ１００

ミスリバイブの力で私のフィールドに再びホープルーツが姿を現す。
レイナちゃんの意図が読めず困惑する私に、レイナちゃんは楽しそうに笑いながら1枚のカードを掲げた。
「さあ、ショータイムと行こうかー!!?私はＲＵＭーバリアンズフォースを発動!!?」
「2枚目のＲＵＭ　ーバリアンズフォース!?」
「私はＮｏ．６　先史遺産アトランタル1体でオーバーレイ!!?1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?カオスエクシーズチェンジ!!?」
アトランタルが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
それと同時にレイナちゃんのＥＸデッキから大量の闇が溢れ出す。
混沌の渦が弾けると、空から降り立つのは禍々しく光り輝く炎を纏った山のように巨大な巨神兵。
「現れろ、ＣＮｏ．６!!?愚かなる人類を焼き尽くす裁定の巨神兵、先史遺産カオスアトランタル!!?」
〈ＣＮｏ．６　先史遺産カオスアトランタル〉★７　機械族　光属性
ＡＴＫ３３００
「ＣＮｏ．６　先史遺産カオスアトランタル……2体目のＣＮｏ．!?」
「さあ、見せてあげるよ。ＣＮｏ．６　先史遺産カオスアトランタルの圧倒的な裁きの力を!!?　ＣＮｏ．６　先史遺産カオスアトラン

タルの効果発動!!?ジャッジメントアームド!!?1ターンに1度、相手フィールドのモンスター1体を対象としてその相手モンスターを攻撃力１０００ポイントアップの装備カード扱いとしてこのカードに装備する!!?私が装備させるのはＮｏ．３９　希望皇ホープルーツー!!?」
「っ!?ホープルーツ!!?」
　カオスアトランタルが炎を纏った腕を振るい、ホープルーツの身体を掴むと、ホープルーツの身体が石化していき、カオスアトランタルに吸収された。

ＣＮｏ．６　先史遺産カオスアトランタル
ＡＴＫ３３００→４３００

「そしてＣＮｏ．６　先史遺産カオスアトランタルの更なる効果発動!!?このカードがＮｏ．６　先史遺産アトランタルをカオスオーバーレイユニットとしている場合、このカードのカオスオーバーレイユニットを3つ取り除き、このカードの効果で装備しているＮｏ．モンスターカードを全て墓地へ送ることで相手のライフポイントを１００にする!!?」
「っ!?効果ダメージじゃなくて、強制的にライフポイントを１００にする効果!?そのためにホープルーツを……!!?」
「まぁ、安心してよーＣＮｏ．６　先史遺産カオスアトランタルが自身の効果を発動したターン、相手が受ける全てのダメージは０になるからーまぁ、デッキ切れのお姉さんには関係ないけどねーさあ、巨神の裁きを受けよ!!?ムスペルジャッジメント!!?」
　カオスアトランタルが石化したホープルーツを握り潰すと、カオスアトランタルの手元に太陽のように巨大な炎の球体が生まれる。
　カオスアトランタルが腕を振るうと炎の球体は勢いよく私に向かって飛来し、私の身体を焼き尽くした。
「っ!!?きゃぁぁぁぁぁぁぁ!!?」

遊花　ＬＰ７６００→１００

「あぁ……」

身を焦がす程の炎による激痛で私は地面に崩れ落ちる。

視界は明滅し、意識が闇の中に落ちていく感覚をどこか他人事のように感じる。

「あははは‼?やりすぎちゃったかなぁ?まだ本番じゃないのにー」

狂気を含んだレイナちゃんの笑い声が闇の中にこだまする。

ダメ、もう、意識が……

「まぁ、これぐらいならお姉さんは死なないでしょ。一緒にいたお姉さんは知らないけど」

「っ……‼?」

レイナちゃんの言葉に、私は消えそうな意識を必死に繋ぎ止めて地面に倒れたまま顔を動かして真紅ちゃんの姿を探す。

「っ……ぁ」

私の視界に入ってきたのは、私から少し離れた場所、ジアライバルの真後ろで意識を失っている真紅ちゃんの姿だった。

「さてと、このまま終わってもいいんだけど……邪神ドレッドルートを破壊したお礼参りはしとかないとね‼?バトル‼?」

「っ‼?」

響くレイナちゃんの声に私は心臓を掴まれたかのような感覚が襲う。

何故なら、邪神ドレッドルートへのお礼参りとして狙われるのはーーー

「邪神アバターでジアライバルサイバース@イグニスターを攻撃‼?ダークマターマイアズマ‼?」

ーーー気絶した真紅ちゃんの正面にいるジアライバルなのだから。

「っ……ダ……メ‼?」

私は混濁する意識と激痛が走る身体に鞭を打ち、真紅ちゃんの元に向かって駆け出し、ジアライバルの姿をしたアバターが鎌を振り抜き、放たれた闇の奔流から真紅ちゃんを守るように前に出る。

「守ら……なきゃ……」
ーーーどうやって？
「守ら、なきゃ……」
ーーー超常の力を持つ邪神の呪いから、どうやって？
「守らなきゃ……」
ーーー違う、どんなものが相手でも、関係ない。
「守らなきゃ」
ーーー例え、　全てを滅ぼしても。
そこまで考えたところで、ジアライバルが闇の奔流に呑み込まれ、私も闇の中に呑み込まれる。
闇に呑まれ、意識が途絶えるその最中。
私の身体にーーー　優しい闇が流れ込んでくる　感覚がした。

ーーーーーーーー

○

「あらら、ちょっと予想外だったなー」
ジアライバルを消しとばしたアバターの闇の奔流によって生まれた砂煙の中、レイナはつまらなそうな声を出す。
「まさかお姉さんが邪神アバターの攻撃に飛び込んできちゃうなんてねーどうせ直撃したらもう1人のお姉さんは消し飛んじゃうんだから見捨てればよかったのにーこれだから偽善者って言うのは厄介だなー」
徐々に薄くなっていく砂煙を見据えながらレイナは深いため息を吐いて頭をかく。
「まぁ、仕方ないかー邪神を相手にしても遊べる貴重なプレイヤーだったけど、縁がなかったってことでーーーえ？」
そこまで言ったところで、砂煙が晴れ、物言わぬ死体となった少女達の姿を想像していたレイナは目を見開く。
「はは……あはははは‼？なに、それ？」

砂煙が晴れ、レイナの目に入ったのは巨大な黒い盾だった。
アバターの闇の奔流の中から現れたその盾は役割を終えたとでもいうように、消えていく。
黒い盾が消えた後、黒い盾の後ろから現れたのは
闇を鎧のように纏い虚ろな瞳を　紅く輝かせた遊花の姿があった。
「お姉さんがやったの、それ？」
「……」
レイナの言葉に、遊花は応えようとせず、ただ虚ろな瞳でレイナを見据える。
「おーい、お姉さんー聞こえてるー？」
「……」
「意識がない……無意識で、かな？ふふふ、本当に面白いお姉さんだ‼？それも世界を滅ぼせる素質なのかな？あはははは‼？私はこれでターンエンド。デュエルもお姉さんのデッキ切れでゲームエンドだ」
そういって笑うとレイナはデュエルディスクを停止させる。
立体映像が消えていき、アバターの姿が見えなくなると、遊花は糸が切れたかのように倒れ、纏っていた闇が濃くなり、遊花を完全に包み込む。
遊花を包み込んだ闇が弾けると、集まって1枚のカードになり、遊花の手の中に収まった。
レイナは気絶した遊花に近づくと、楽しそうに笑った。
「へぇー本当にお姉さんは特別なのかな？傷ひとつないや」
カオスアトランタルに身を焼かれ、ボロボロになっていたハズの遊花の外傷が一切なくなっていることに、レイナは興味深そうな声を出す。
そして遊花の身体から吐き出された闇を纏ったカードーーー絶望神アンチホープを見て、楽しそうに笑う。
「あの不思議な力が貴方達がお姉さんを選んだ理由なのかな？勝ったハズなのにお姉さんのＮｏ．はこっちにこないし、ふふふ、本当に最高の逸材だ‼？お姉さんなら、もしかしたらーーー」
そこまで言うと、レイナはポケットから十数枚の白紙のカードを取

り出して気絶している遊花の手に握らした。
「もっと強くなってね、お姉さん。そして私ともっと楽しい命懸けの決闘(デュエル)をしよう!!?その決闘(デュエル)で私が勝った時ーーーあは、あはははは!!?」
レイナが楽しそうな笑い声を上げながらデュエルディスクを操作すると、世界樹の花園(ユグドラシル)が消滅し、辺りの風景が先程までいた校舎に戻る。
そこにレイナ姿はなく、あるのは喧騒に包まれている廊下に倒れ伏せた遊花と真紅の姿だけだった。

ーーーーーーー

★

深い闇の中、どこかで聞いたことがあるような声が響いてくる。
『『運命は……動き出してしまった……今はまだ、緩やかにしか進まない……だけど、いずれは到達する……全てが滅ぶ……運命の終焉へ』』
届く言葉は闇の中に溶けていき、私の中に消えていく。
『『滅びの運命は……誰にも止められない……”あなた(私)”にも……必ず』』
最後に聞こえたその声はーーーとても悲しそうに響いた。

ーーーーーーー

「……ん、あ、れ……?」
深い闇の中から、意識が浮上した私は柔らかい何かに顔を埋めていることに気付き、身体を起こす。
「遊花!!?気づいたの!!?」
「大丈夫か!!?俺達が誰だか分かるか!!?」
「霊華さん……大地君?」

ぼーっとした私の視界にうつるのは心配そうな表情でベッドの上で身体を起こした私を覗き込む霊華さんと大地君だった。
「ここは……？」
「保健室。遊花と真紅が校舎の中で倒れてるのが発見されて連れてこられたの」
「一体何があったんだ？」
「倒れて……っ、そうだ!!？私……真紅ちゃんは!?？」
ぼーっとしていた意識が一気に覚醒する。
そうだ、私、レイナちゃんとデュエルをして……
「真紅なら……」
「むっ、目覚めたか？”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”」
「栗原先輩!!？目が覚めたんですね!!？よかった」
私の声が聞こえたのか、カーテンを開き、真紅ちゃんと刀花ちゃんが入ってくる。
「真紅ちゃん!!？大丈夫!?？怪我とかない!?？」
「わっ!?？なんだいきなり!?？何故だかよく分からんが身体が少し痛むぐらいだ!!？問題ないから抱きついてくるな!!？」
詰め寄る私を見て、鬱陶しそうに真紅ちゃんが私の身体を押さえる。
よかった、特に大きな怪我とかはしてないみたい。
ホッと息を吐いた私に、霊華さん達は心配そうな表情を浮かべた。
「それで、何があったの？2人揃って倒れてたなんて、尋常じゃない。真紅は何も覚えてないみたいだし」
「え、えっと、どこから説明すればいいのか……」
心配そうにこちらを見る霊華さん達に私も困ってしまう。
レイナちゃんとデュエルをしたことは間違いない。
デュエルの内容はちゃんと覚えているから、デッキ切れになってしまった私が逆転したという可能性はありえない。
多分、私はあのまま負けたんだと思う。
だけど、カオスアトランタルの効果を受けた後からの記憶は虚ろで、定かではない。

でも、そうなるとレイナちゃんが私を見逃した理由がよく分からないんだけど……

困惑する私は、大地君の次の言葉で更に戸惑うことになる。

「そういえば、遊花。これ、気を失ってた遊花が握ってたんだけど、何か関係あるのか？」

「えっ？……えっ⁉？なんで⁉？」

大地君に見せられたのは、見覚えのある、身に覚えのない十数枚の白紙のカード。

持っているハズがないそのカード達に、私は思考を放棄するのだった。

ーーーーーーー

○

「ふふふ、今日は楽しかったなーやっぱりゲームはこうじゃなくっちゃねー」

高層ビルの上から夜のケルンの街並みを見下ろしながらレイナは1人楽しそうに笑い声をあげる。

「お姉さんが…完成してくれたら、きっと…これだっていらなくなるんだけどなーあー待ち遠しい」

そういうと、レイナは残念そうに自分の頬を軽く引っ張る。

しかし、すぐに笑顔を浮かべると自分のポケットから1枚の白紙のカードを取り出した。

「ま、いっか。時間はいくらでもあるしねー精々今は楽しく遊ばせて貰おっとー私達以外にゲームをはじめた人がいるみたいだし、ちょっと混ぜてもらおうかなー」

そういってレイナが笑うと、レイナの身体から闇が溢れ出し白紙のカードを塗りつぶし、姿を変えていく。

闇が収まり、イラストが浮かび上がったカードーーーRUM　ーバリアンズフォースーーーを手の平の上でくるくると回転させながら、

レイナは無邪気な笑みを浮かべた。
「さあ、第2ステージの始まりだ‼?ゲームスタートだよ……ふふふ、あはははは‼?」
無邪気な笑い声は夜の街の中に消えていくのだった。

第９３話　夜に架かる虹

●　夜ｓｉｄｏ

『ッ……やっぱりもう、この手しかないか』
『ダメ‼？これ以上、そんなことしたらあなたがーーー‼？』
『わかってる……わかってるけど、もう……こうするしかないんだ……ごめんね。ボクがもっと強ければ、キミにこんなことを背負わさなくても済んだのに……』
『ッ……‼？』
　渦巻く闇の瘴気の中で、覚悟を決めた聞き慣れた声が聞こえてくる。
『だけど、後悔はしない。キミがいてくれたから、ボクはここまでこれた。そして、　ボクの続きは、キミが見てくれる。ボクの最高の相棒である、キミが』
『ッ、違う‼？私は、そんな、こと……あなたに、相棒なんて言われる存在じゃ……』
　否定を続けるもう１つの声に、聞き慣れたその声は優しく語りかける。
『ううん。キミはボクの相棒だよ。キミがなんであろうと、どうなろうとも、いつまでもキミはボクの相棒だ。それだけは、ボクが溶けても変わらない。これからも、ずっと一緒だ』
『ッ……』
　そういう聞き慣れたその声の主は優しく私を撫でた。
『彼のことも任せたよ。いじっぱりでちょっと捻くれてて無愛想だけど、本当はとても優しい人だから……って、これは言うまでもなくキミに　伝わるよね』
　そこまで言うと声の主は真っ直ぐに眼前の敵に目を向けた。
『じゃあ、そういうわけだから……後は任せるね』
　『……ううん、新しい『ボク』』

最後に聞こえたその声は、とても寂しそうに、闇の中に響いた。

ーーーーーーー

「よっ……!?ッ……!?うぐっ、あぁ……!?」

闇の中から覚醒し、飛び起きたボクは、身体中に響く痛みに思わずその場にのたうち回る。

「ぐっ……あっ……ここ、は？」

痛む身体を抑えながら辺りを見回す。

気を失っていたボクが眠っていたのはどこかの建物の一室にあるベッドの上だった。

部屋の中は妙に生活感に溢れており、乱雑に脱ぎ捨てられた衣服やコンビニで買ってきたのであろう惣菜の食べ終えたゴミがゴミ箱に突っ込まれている。

「ボク、は……ッ!?」

『引き金は2度引かねぇ。この一撃で終いだ!?砕け散れ!?ドレッドノートレールガン!?』

「ッ……そうだ、ボク……アイツに……」

思い出したのはグスタフマックスから放たれた光弾に撃ち抜かれ、大和とのデュエルに敗北した記憶。

「ッ……クソッ!?」

ボクは思わず、様々な怒りからベッドに握り拳を叩きつける。

行き場のない感情が自分の中で暴れ回り、そんなボクの感情に呼応するかのように眼の色が　真紅に染まっていく。

「ッ……うっ、ぁぁぁ、くっ……はぁ……はぁ……」

暴れ回る自分の感情を押さえつけるように自分の身体を抱きしめると、徐々に昂っていた感情が収まり眼の色も元の黒に戻っていく。

感情を押さえつけたボクは思わず深く息を吐き、呟いた。

「……やっぱり、ボクじゃダメだよ……キミじゃないと……ダメなんだよ……」

思わず漏れ出してしまった弱音に自己嫌悪していると、部屋の外か

らドタバタと足音が聞こえ、勢いよく部屋の扉が開いた。
　大きな音に驚いて視線を向けると、そこにはボクの顔を見て安堵の表情を浮かべている美傘がいた。
「夜ちゃん‼?よかった、目が覚めたんだね‼?」
「美傘……」
「大丈夫?どこも痛いとこない?夜になっても目を覚さないから心配したよ‼?美傘さんのこと分かる?」
「ちょっ、ちょっと、美傘⁉?」
　心底心配している表情でボクの身体をぺたぺたと触る美傘。
　それがくすぐったくてボクは思わず身体をくねらせる。
　というか、どさくさに紛れて変なとこ触ってるよね⁉?
「あーもう、若干離れて‼?」
「うぉいた⁉?……うー何も叩かなくても」
「美傘が変なとこ触るからだよ‼?」
　チョップをくらった額を押さえながら美傘が涙目で身体を離す。
　そんな美傘の様子にため息を吐こうと下を向いてーーー
「……えっ?」
　ーーー背筋が凍りついた。
「あれ、なん、で……ボクの、服……」
　先程までは自分の激情を抑え込むのに必死で気づかなかったが、ボクの服は意識を失う前に自分が着ていたパーカー姿から美傘がよく着ている水色のフレアワンピースに変わっていた。
　そんなボクの様子に美傘は気まずそうな、そして心配するような表情でボクを見る。
「えっと、夜ちゃんの服はあのデュエルでボロボロになっちゃって……血とかついてたから今はお洗濯中なんだ。汚れたままの服でいるのも傷に影響しちゃうかもと思ったから、マンションにある私の部屋に運んで代わりに私の服に着替えて貰ったんだけど……」
　美傘の言葉が耳を通り抜けて行くのを感じながら、私は自分の背後を見る。
　美傘の部屋の照明が照らす私の背後には宙に浮かんでいるように

美傘のフレアワンピース　の影だけが映っていた。
ーーー見られた。
「ッ!!?」
「っ!??夜ちゃん!??」
美傘の驚いた顔を横目に、私はベッドの横に置いたままになっていたボクのデュエルディスクを手に、美傘の部屋から飛び出した。
ーーー外はボクの感情を反映するかのように、夜の闇に加え、雨が降りそうな曇天の暗闇が迫っていた。

ーーーーーーー

●　美傘ｓｉｄｏ

「っ!??夜ちゃん!??」
勢いよく部屋を飛び出していった夜ちゃんを追って、私も慌ててデュエルディスクを手に部屋を飛び出す。
部屋の外にはすでに夜ちゃんの姿はなく、足音も聞こえない。
「夜ちゃん!!?どこ!??」
私は急いでマンションの階段を駆け降り、マンションの前の通りを見回すがやはり夜ちゃんの姿は見えない。
これはまずい。
非常にまずい。
夜ちゃんは気づいたのだろう。
自分に影がないということが私にバレたことを。
そしてそれは、夜ちゃんにとってとても悪いことだということを。
このまま夜ちゃんを見失ったら、もう2度と夜ちゃんに会えなくなるという確信めいた予感が私の頭によぎる。
「っ、考えろ!!?考えろ、雨夜　美傘!!?」
慌てそうになる心を必死に抑え、私は考える。
夜ちゃんの身体はまだぼろぼろだ。
起きてすぐにそんなに遠くにはいけないはず。

そしていくら夜闇があるからといって、まだ人通りがある時間帯に街灯がある街中にでれば夜ちゃんの影のことが不特定多数にバレる可能性があるということを考えれば街中に出たとは考えにくい。
なら、夜ちゃんを探している私を撒くために行く場所はーーー
「外じゃない、　上!!?」
そこまで考えたところで私は降りてきたマンションの階段を駆け上がっていく。
「夜ちゃんの、馬鹿!!?……まだ、何も話してないじゃんか!!?」
不安と憤りを抑えつけ、降り始めた雨の音を聞きながら私は一心不乱に上を目指した。

ーーーーーーー

「はぁ、はぁ、見つけた、夜ちゃん」
「ッ……美傘」
降りしきる雨の中、屋上の影で膝を抱えていた夜ちゃんに声をかけ、私は切れた息を整える。
そんな私を見て、夜ちゃんは悲しそうに顔を歪める。
「なんで、追ってきたの?」
「夜ちゃんが、逃げる、から」
「……見たんだろ、ボクの影」
「……うん、見たよ」
「ッ……」
私が肯定するのを見て夜ちゃんは悲しげに笑う。
「なら、余計になんで追ってきたのさ。こんな　化け物を」
「夜ちゃんは化け物なんかじゃーーー」
「化け物さ、ボクは。誰よりも醜くおぞましい。化け物なんだよ、ボクは」
そういって夜ちゃんは目を閉じると悲し気な表情のまま立ち上がった。
「だから、終わりにしよう」

「えっ？」
「化け物は化け物らしく、闇に消える。もう2度と、陽の当たる場所に出ることはない。美傘の前に現れることもない……最初から、そうしていればよかったんだ」
そういって、夜ちゃんは屋上を去ろうとする。
だけどーーー
「行かせないよ」
「ッ……美傘」
ーーー私は屋上の出口の前で扉を塞ぐように立ち塞がった。
「どいて」
「どかない」
「どいて‼？」
「どかない‼？」
「どいてって言ってるでしょ‼？」
「どかないって言ってるでしょ‼？」
苛立った表情で私を睨みつける夜ちゃんを、私は正面から見つめ返す。
「逃げないでよ‼？」
「ッ……」
「まだ、何もお話ししてないのに、勝手に逃げないでよ‼？」
私の言葉に気圧されたのか、夜ちゃんが半歩後ろに下がる。
だけど、それでも夜ちゃんは私を正面から睨みつける。
「美傘に話すことなんて、何もない‼？」
「っ……」
夜ちゃんからの強い拒絶の意志に私は胸が締めつけられる。
でも、この程度の胸の痛みで引き下がるわけにはいかない。
だって、本当に痛いのはーーー
「なら、なんでそんなに泣きそうな顔をするの？夜ちゃん」
「ッ‼？」
ーーー今にも泣いてしまいそうな顔をしている、夜ちゃんの方だから。

私は腕につけていたデュエルディスクを起動し、夜ちゃんに向けて構える。
「デュエルだよ、夜ちゃん」
「ッ……」
「夜ちゃんが勝ったら、もう何も言わない。夜ちゃんのしたいようにしたらいい。だけど、私が勝ったら、夜ちゃんの抱えてること、全部お話しして貰うから」
「……よく言ったものだね。ボクに勝ったことなんて、ほとんどない癖に」
「例え勝率が僅かでも、その僅かな勝率をここで引き寄せればいいだけだよ‼?」
「……ホント、口だけは達者だよね、キミは」
そういって、夜ちゃんは一瞬口元を緩ませたが、すぐに真剣な表情でデュエルディスクを起動した。
「なら、ここで終わりにしよう。ボクとキミの全てを」
「終わりになんかさせない‼?絶対に、夜ちゃんにお話を聞かせて貰うんだから‼?」
『決闘‼?』

美傘　ＬＰ８０００
夜　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は私だよ‼?私は雪天気シエルを召喚‼?」
〈雪天気シエル〉☆３　天使族　地属性
ＡＴＫ０
フィールドに現れたのは背中に雪の結晶のようなものをつけ、手に銃のような物を持っているモンスター。

「雪天気シエルの効果発動!!?このカードが召喚に成功した時にデッキから天気魔法・罠カード1枚を選んで自分の魔法・罠ゾーンに表側表示で置くよ!!?私はデッキからフィールドの中央に永続魔法、雪の天気模様を置くね!!?」

シエルが銃のような物を握ると空から雪が降り出し、辺り一面が雪景色になっていく。

雪に辺りの電流が反射し、雪が薄緑に光り幻想的な風景を作り出す。

「雪の天気模様は自分フィールドに1枚しか表側表示で存在できず、このカードと同じ縦列の自分のメインモンスターゾーン及びその両隣の自分のメインモンスターゾーンに存在する天気効果モンスターはこのカードを除外してデッキから天気カード1枚を手札に加え、この効果は相手ターンでも使えるという効果を得るよ。ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はドロー以外の方法でデッキからカードを手札に加える事はできなくなるけどね」

「美傘お得意の天気魔法か……」

「Ｉｔ，ｓ（さあ、）Ｓｈｏｗｔｉｍｅ（ショータイム）!!?私はスケール2の曲芸の魔術師とスケール8のオッドアイズミラージュドラゴンをペンデュラムスケールにセッティング!!?」

私を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中に道化師のような魔術師と緑のドラゴンの姿が映り、その下には2と8の数字が浮かぶ。

「いきなりペンデュラム召喚か、本当にとばしてるね……」

「これで私は3から7までのモンスターを同時に特殊召喚可能!!?揺れろ揺れろ、魂の振り子!!?空に輝け、虹のアーチ!!?ペンデュラム召喚!!?飛び出せ、私のモンスター!!?」

私がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって1つの光が舞い降りる。

「レベル4、ＥＭ（エンタメイト）ペンデュラムマジシャン!!?」

〈ＥＭペンデュラムマジシャン〉☆4　魔法使い族　地属性

ＡＴＫ１５００

現れたのは真っ赤なシルクハットを被ったマジシャンのモンスター。
「ＥＭペンデュラムマジシャンの効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、自分フィールドのカードを2枚まで対象としてそのカードを破壊し、破壊した数だけデッキからＥＭペンデュラムマジシャン以外のＥＭモンスターを同名カードは1枚まで手札に加えるよ!!?私はＥＭペンデュラムマジシャンとペンデュラムゾーンのオッドアイズミラージュドラゴンを破壊してデッキから　ＥＭ（エンタメイト）リザードローと　ＥＭ（エンタメイト）ギタートルを手札に加えるよ!!?」
ペンデュラムマジシャンが指を鳴らすと、降っていたペンデュラムマジシャンとオッドアイズミラージュが消え、私の手元に2枚のカードが現れる。
「さらにペンデュラムゾーンの曲芸の魔術師の効果発動!!?自分フィールドのモンスターが効果で破壊された時、ペンデュラムゾーンのこのカードを特殊召喚する!!?おいで、曲芸の魔術師!!?」

〈曲芸の魔術師〉☆5　魔法使い族　闇属性
ＤＥＦ２３００

光の柱から曲芸の魔術師が飛び出して私のフィールドに舞い降りる。
「まだまだ!!?私はスケール6のＥＭギタートルとスケール6のＥＭリザードローをペンデュラムスケールにセッティング!!?」
再び私を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中に帽子を被ったトカゲとギターの形をした亀のモンスター姿が映り、その下には6の数字が浮かぶ。
「またペンデュラムスケールを?スケールも一緒だし、ペンデュラム召喚ももうしたハズだけど?」
「チッチッチッ、狙いはそっちじゃないんだよ!!?ＥＭギタートルのペンデュラム効果発動!!?同名カードのペンデュラム効果は1ター

ンに1度しか発動できず、もう片方の自分のペンデュラムゾーンにＥＭカードが発動した場合、自分はデッキから1枚ドローする‼？さらに、ＥＭリザードローのペンデュラム効果発動‼？同名カードのペンデュラム効果は1ターンに1度しか発動できず、自分メインフェイズにもう片方の自分のペンデュラムゾーンに同名カード以外のＥＭカードが存在する場合、このカードを破壊し、自分はデッキから1枚ドローするよ‼？」

「ッ‼？狙いはペンデュラム効果でのドローか……」

ギタートルが私に向かって音符を放ち、リザードローが粒子に変わって私の手元に集まり、私はデッキから2枚のカードをドローする。

よしよし、これならまだ動ける‼？

夜ちゃんに私の全力をぶつけられる‼？

「ここからが私のステージだよ‼？私はフィールド魔法、天空の虹彩を発動‼？」

「ッ、それも引かれちゃったか……」

私がフィールド魔法を発動させると、雪が舞う空間に大きな虹が現れる。

「天空の虹彩の効果を発動‼？1ターンに1度、このカード以外の自分フィールドの表側表示のカード1枚を破壊してデッキからオッドアイズカードを手札に加えるよ‼？私は曲芸の魔術師を破壊してデッキから魔法カード、オッドアイズフュージョンを手札に加えるよ‼？」

「オッドアイズの融合魔法……」

「私は雪の天気模様の効果を得た雪天気シエルの効果を発動‼？このカードを除外してデッキから天気カード1枚を手札に加えるよ‼？雪天気シエルを除外してデッキから虹の天気模様を手札に加える‼？さらに魔法カード、ペンデュラムホルト‼？　自分のＥＸデッキの表側表示のペンデュラムモンスターが3種類以上存在する場合、自分はデッキから2枚ドローする‼？ただし、このカードの発動後、ターン終了時まで自分はデッキからカードを手札に加える事はできない

よ!!?」
「制約を重ねてこれ以上美傘の手札は増えることはない……まぁ、もう十分すぎる程増えてるけど」
「私はカードを2枚伏せてターンエンド!!?」

美傘　ＬＰ８０００　手札３
△▲雪ー▲　▽
ーーーーーー
ー　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
夜　ＬＰ８０００　手札５

「ボクのターン、ドロー!!?」
「スタンバイフェイズ!!?雪天気シエルの効果発動!!?フィールドのこのカードが天気カードの効果を発動するために除外された場合、次のターンのスタンバイフェイズに除外されているこのカードを特殊召喚するよ!!?」

〈雪天気シエル〉☆３　天使族　地属性
ＤＥＦ２２００

「悪いけど、手は抜かないよ。まずはカードを1枚伏せて、魔法カード、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローするよ!!?ボクは４枚、美傘は３枚捨ててドローだ!!?」
「うっ、せっかくオッドアイズフュージョンを手札に加えたのに……」
「オッドアイズボルテックスドラゴンは厄介だからね。そうそう出させるわけにはいかないさ。墓地に存在する馬頭鬼の効果発動!!?自分メインフェイズに墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のアンデット族モンスター1体を特殊召喚する!!?甦れ、精気を吸う骨の塔

!!?」
「うえっ!?!?そのモンスターは!!?」
〈精気を吸う骨の塔〉☆3　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ１５００

夜ちゃんのフィールドに骨が組み合わさった不気味な塔が現れる。
「さらにリバースカードオープン!!?魔法カード、シエンの間者!!?自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択してこのターンのエンドフェイズ時まで、選択したカードのコントロールを相手に移すよ!!?ボクの精気を吸う骨の塔を美傘にあげる」
「ええっ!?!?いらないよ!?!?なら、チェーンしてリバースカードオープン!!?永続罠、虹の天気模様!!?　虹の天気模様は自分フィールドに1枚しか表側表示で存在できず、このカードと同じ縦列の自分のメインモンスターゾーン及びその両隣の自分のメインモンスターゾーンに存在する天気効果モンスターは相手フィールドにモンスターが存在する場合、このカードを除外してデッキから、このカードとカード名が異なる天気モンスター1体を特殊召喚する効果を得る!!?ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はデッキからモンスターを特殊召喚できず、この効果は相手ターンでも発動できるよ!!?私は虹の天気模様の効果を得た雪天気シエルの効果発動!!?　このカードを除外してデッキからおいで、雨天気ラズラ!!?」
〈雨天気ラズラ〉☆3　天使族　水属性
ＤＥＦ１４００

シエルが虹の橋を渡って姿を消すと代わりに虹橋かや降りてきたのはメガネをかけ、手にペンのような物を持っているモンスター。
「シエンの間者の効果で精気を吸う骨の塔は美傘のフィールドに移動するよ」
夜ちゃんのフィールドから骨の塔が私のフィールドに移ってくる。

不味いことになったかもだけど、やれることはやっとかないとね‼？

「雨天気ラズラの効果発動‼？このカードが特殊召喚に成功した場合、手札から天気魔法・罠カード1枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンに表側表示で置くよ‼？私は手札から永続魔法、晴れの天気模様を置くよ‼？」

ラズラがペンを空にかざすと、雪が降り、虹がかかるフィールドに大きな太陽が現れた。

「今度は太陽か……だけど、いくら光がさそうと、絶望が始まることに変わりはないよ。墓地に存在するチューナーモンスター、ゾンビキャリアの効果発動‼？手札を1枚デッキの上に置くことでこのカードを墓地から特殊召喚する‼？ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合に除外される。おいで、ゾンビキャリア‼？」

〈ゾンビキャリア〉☆2　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ２００

夜ちゃんのフィールドに小さなゾンビのモンスターが現れる。

「この瞬間、美傘のフィールドの精気を吸う骨の塔の効果発動‼？アンデット族モンスターが特殊召喚に成功する度に、相手のデッキの上からカードを2枚墓地へ送るよ」

「うぇー始まったー」

骨の塔から溢れ出した青い人魂が夜ちゃんのデッキへと向かって放たれ、夜ちゃんのデッキが削られる。

すると、削られた夜ちゃんのデッキの上から真紅の悪魔が現れた。

「精気を吸う骨の塔の効果で墓地に送られた闇より出でし絶望の効果発動‼？このカードが相手の効果で手札・デッキから墓地へ送られた時、このカードをフィールドに特殊召喚する‼？」

〈闇より出でし絶望〉☆8　アンデット族　闇属性

ＡＴＫ２８００

「闇より出でし絶望が特殊召喚されたことで美傘のフィールドの精気を吸う骨の塔の効果が再び発動!!?ボクのデッキの上からカードを２枚墓地へ送るよ」

骨の塔から溢れ出した青い人魂が夜ちゃんのデッキを再び削りとる。

「ボクは堕ち武者（デスサムライ）を召喚!!?」

〈堕ち武者〉☆４　アンデット族　闇属性

ＡＴＫ１７００

フィールドに現れたのは顔だけになった侍の亡霊。

「堕ち武者の効果発動!!?このカードが召喚に成功した時、デッキからアンデット族モンスター１体を墓地へ送る!!?ボクはデッキからグローアップブルームを墓地に送る!!?そして墓地に落ちたグローアップブルームを除外して効果発動!!?このカードが墓地へ送られた場合、墓地のこのカードを除外してデッキからレベル５以上のアンデット族モンスター１体を手札に加え、フィールドゾーンにアンデットワールドが存在する場合、手札に加えず特殊召喚する事もできる。ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はアンデット族モンスターしか特殊召喚できない!!?ボクはデッキから黄金卿エルドリッチを手札に加えるよ!!?ボクは、レベル４、アンデット族の堕ち武者に、レベル２、チューナーモンスター、ゾンビキャリアをチューニング」

ゾンビキャリアが光の輪になり、堕ち武者が小さな星に変わり、光の道になる。

光の道が輝くと、その中から現れるのは骨の身体を持つ骸の龍。

「紅き月に導かれ、死者の声を世界に届けよ!!?シンクロ召喚!!?死に寄り添う優しき賢竜!!?デスカイザードラゴン!!?」

〈デスカイザードラゴン〉☆６　アンデット族　炎属性
ＡＴＫ２４００

「デスカイザードラゴン……」
「デスカイザードラゴンが特殊召喚されたことで美傘のフィールドの精気を吸う骨の塔の効果が再び発動!!?ボクのデッキの上からカードを２枚墓地へ送る。そして相手のカードの効果によって墓地へ送られた魔法カード、ジャックポット７の効果発動!!?」
「げげっ!!?そのカードは……」
「このカードは相手のカードの効果によって墓地へ送られた時、ゲームから除外され、この効果によってゲームから除外された自分のジャックポット７が３枚揃った時、自分はデュエルに勝利する」
夜ちゃんの後ろに強欲な壺が乗った巨大なスロットマシーンが現れ、左端のスロットが７の数字で止まる。
これで私は夜ちゃんのエクストラウィンにまで警戒しないといけなくなった。
というか、警戒しようがもう始まってしまったからこのまま終わっちゃうかも……参ったなぁ。
「さてと、遊騎から教えて貰った戦術使わせて貰うよ。ボクは墓地に存在する速攻魔法、バスターモードゼロを除外して効果発動!!?自分メインフェイズに墓地のこのカードを除外して、手札・デッキからバスターモード１枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンにセットする!!?そしてこの効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できる!!?ボクはデッキから罠カード、バスターモードをセットする!!?」
「っ!!?バスターモード!!?」
セットされたバスターモードを見て、夜ちゃんは１度目を閉じるとその力を解放する。
「行くよ、デスカイザードラゴンをリリースし、リバースカードオープン!!?罠発動!!?バスターモード!!?」
「っ!!?」

「自分フィールドのシンクロモンスター1体をリリースしてそのモンスターのカード名が含まれる／バスターモンスター1体をデッキから攻撃表示で特殊召喚する!!?アクセスコード、デスカイザードラゴンＥＸＥ!!?」

デスカイザーの正面に骸骨で出来た鎧が現れる。

デスカイザーが咆哮を上げると、鎧が弾け飛びデスカイザーに装着されていく。

装着が終わるとそこに佇むのは悪魔の鎧を見に纏った骸の竜。

「幽鬼合体!!?デスカイザードラゴン／バスター!!?」

〈デスカイザードラゴン／バスター〉☆８　アンデット族　炎属性

ＡＴＫ２９００

「デスカイザードラゴン／バスター……」

「さあ、亡霊の宴を始めよう。デスカイザードラゴン／バスターの効果、それにチェーンしてデスカイザードラゴン／バスターが特殊召喚されたことで美傘のフィールドの精気を吸う骨の塔の効果が再び発動!!?ボクのデッキの上からカードを2枚墓地へ送る。そして、デスカイザードラゴン／バスターの効果発動!!ゴーストフィースト!!?このカードが特殊召喚に成功した時、自分・相手の墓地からアンデット族モンスターを任意の数だけ選択して自分フィールド上に特殊召喚する!!?」

「っ!?アンデットモンスターの大量蘇生効果!?もう!!?ただでさえ夜ちゃんは強いのに、遊騎さんも余計なことをして!!?」

「ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、このターンのエンドフェイズ時に破壊されるけどね。墓地より甦れ、堕ち武者!!?シノビネクロ!!?ヴァンパイアロード!!?」

〈堕ち武者〉☆４　アンデット族　闇属性

ＡＴＫ１７００

〈シノビネクロ〉☆2　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ０

〈ヴァンパイアロード〉☆5　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２０００

デスカイザードラゴン／バスターが咆哮を上げると、夜ちゃんの墓地から大量のアンデットが姿を現す。
「アンデット族が特殊召喚されたことで美傘のフィールドの精気を吸う骨の塔の効果が再び発動‼？ボクのデッキの上からカードを２枚墓地へ送る‼？」
「うぐっ、なら、ここだ‼？チェーンしてリバースカードオープン‼？速攻魔法、速攻魔法、皆既日蝕の書‼？」
「なっ⁉？」
「太陽の光が隠れることで全てのモンスターが眠りにつき、フィールドの表側表示モンスターを全て裏側守備表示になるよ‼？　ただし、このターンのエンドフェイズに、相手フィールドの裏側守備表示モンスターを全て表側守備表示にし、その後、この効果で表側守備表示にしたモンスターの数だけ相手はデッキからドローさせちゃうけどね。さらにそれにチェーンして雪の天気模様の効果を得た雨天気ラズラの効果を発動‼？雨天気ラズラを除外してデッキから雷の天気模様を手札に加える‼？」
ラズラの姿が雪のように消えていくと、フィールドに現れていた太陽に月が重なり、太陽の光が遮られてフィールドが夜のように暗くなる。
あたりが暗くなったことにより、フィールドにいたモンスターは全て眠りについた。
前に遊花ちゃんとデュエルした時に使われて、皆既日食は私のデッキのイメージにもあってるから入れてみたけど、やっぱり優秀な防御カードだね。
「……やられたね。まさかそんな防御手段があるなんてね」

「ふふん!!?・これでも気象予報士だからね!!?・天気や空気を読むのはお手の物だよ!!?・」
「……」
「なんでそこで目を逸らすの!?!?・まるで私が空気が読めてないみたいじゃん!!?・そういうのいくないよ!!?・」
　そういって私が胸を張ると夜ちゃんがスッと目を逸らした。
　天気も読める美傘になんでそんな反応なの!?!?・
「……コホン。確かに展開は防がれたけど、裏側表示になったことでデスカイザードラゴン／バスターの自壊効果も消えるし、手札も増える。まだまだこっちが有利なことには変わりない。ボクはカードを1枚セットし、墓地の黒き覚醒のエルドリクシルを除外して効果発動!!?・このカードは2つの効果を持ち、同名カードその効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。墓地のこのカードを除外してデッキから黄金郷魔法・罠カード1枚を選んで自分フィールドにセットする!!?・ボクはデッキから永続罠、黄金郷のコンキスタドールをセット!!?・そしてエンドフェイズ、墓地の黄金郷のワッケーロを除外して効果発動!!?・このカードも2つの効果を持ち、同名カードの効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。自分・相手のエンドフェイズに墓地のこのカードを除外してデッキからエルドリクシル魔法・罠カード1枚を選んで自分フィールドにセットする!!?・ボクはデッキから速攻魔法、白き宿命のエルドリクシルをセット。皆既日蝕の書の効果で眠っていたモンスターが目覚め、表側守備表示になりボクはカードを5枚ドロー!!?・

〈闇より出でし絶望〉☆8　アンデット族　闇属性
　ＤＥＦ３０００

〈デスカイザードラゴン／バスター〉☆8　アンデット族　炎属性
　ＤＥＦ２０００

〈堕ち武者〉☆4　アンデット族　闇属性

ＤＥＦ０

〈シノビネクロ〉☆２　アンデット族　闇属性

ＤＥＦ０

〈ヴァンパイアロード〉☆５　アンデット族　闇属性

ＤＥＦ１５００

「このドローで手札が７枚になったから手札超過で１枚捨てるよ」

「私のフィールドにいる精気を吸う骨の塔はシエンの間者の効果で夜ちゃんのフィールドに戻ろうとするけど、夜ちゃんのフィールドが埋まってるから墓地に送られるよ」

美傘　ＬＰ８０００　手札３

△虹雪晴ー　▽

ーーーーー

ー　ー

□□□□□

ー▲▲▲ー　ー

夜　ＬＰ８０００　手札６

「さぁて、華麗に逆転しちゃうよ‼？私のターン、ドロー‼？スタンバイフェイズ‼？除外された雪天気シエル、チェーンして雨天気ラズラの効果発動‼？フィールドのこのカードが天気カードの効果を発動するために除外された場合、次のターンのスタンバイフェイズに除外されているこのカードを特殊召喚するよ‼？戻っておいで、雨天気ラズラ、雪天気シエル‼？」

〈雨天気ラズラ〉☆３　天使族　水属性

ＤＥＦ１４００

〈雪天気シエル〉☆３　天使族　地属性
ＤＥＦ２２００

「まずは永続罠、虹の天気模様を墓地に送って魔法カード、マジックプランター!!?自分フィールドの表側表示の永続罠カード１枚を墓地へ送って自分はデッキから２枚ドロー!!?墓地に存在する晴天気ベンガーラの効果発動!!?このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドの表側表示の永続魔法・永続罠カード１枚を墓地へ送って、このカードを守備表示で特殊召喚し、手札から天気魔法・罠カード１枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンに表側表示で置くよ!!?私は晴れの天気模様を墓地に送り、墓地の晴天気ベンガーラを特殊召喚し、手札から永続罠、雷の天気模様をフィールドに置くよ!!?」
「手札抹殺の時に墓地に送られてたか……」

〈晴天気ベンガーラ〉☆３　天使族　炎属性
ＤＥＦ４００

フィールドから大きな虹が消え、光り輝く太陽が雲に隠れていくと、雷と共にパレットと筆を持ったモンスターが現れる。
「行くよ!!?輝いて!!?笑顔で溢れるサーキット!!?」
私の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は天気モンスター３体!!?私は雪天気シエル、雨天気ラズラ、晴天気ベンガーラをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
サーキットの中にシエル、ラズラ、ベンガーラが吸い込まれていく。
そしてサーキットが光り輝くと、中から現れるのは虹を模したパレットと絵具を持つ白銀の髪を持つ天使。
「リンク召喚!!?笑顔に繋がる希望の架け橋!!?リンク３!!?虹天気アルシエル!!?」

〈虹天気アルシエル〉ＬＩＮＫ　３　天使族　光属性

ＡＴＫ２４００　↙？←↘？

「天気のリンクモンスター……」

「私はスケール１の　ＥＭ（エンタメイト）スマイルマジシャンをペンデュラムスケールにセッティング‼？」

私を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中に小さなシルクハットを被り、笑顔を浮かべたマジシャンの姿が映り、その下には１の数字が浮かぶ。

「ＥＭギタートルのペンデュラム効果発動‼？もう片方の自分のペンデュラムゾーンにＥＭカードが発動したからデッキから１枚ドロー‼？さらに天空の虹彩の効果発動‼？私は雪の天気模様を破壊してデッキからオッドアイズファントムドラゴンを手札に加えるよ‼？」

「来たね、オッドアイズファントムドラゴン……」

降り注いでいた雪が止み、私の手札にファントムドラゴンが手札に加わる。

さあ、ショータイムだ‼？

「私は２から５までのモンスターを同時に特殊召喚可能‼？揺れろ揺れろ、魂の振り子‼？空に輝け、虹のアーチ‼？ペンデュラム召喚‼？飛び出せ、私のモンスター達‼？」

私がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって３つの光が舞い降りる。

「まずはＥＸデッキからご登場‼？レベル４、ＥＭペンデュラムマジシャン‼？」

〈ＥＭペンデュラムマジシャン〉☆４　魔法使い族　地属性

ＡＴＫ１５００

最初に現れたペンデュラムマジシャンが夜ちゃんに恭しく頭を下げる。

「レベル３、ＥＭリザードロー‼？」

〈ＥＭ　リザードロー〉☆３　爬虫類族　地属性
ＤＥＦ６００

ペンデュラムマジシャンの横に現れたリザードローはシルクハットを外して一礼する。
「お次は手札からの登場です‼？レベル３、雷天気ターメル‼？」

〈雷天気ターメル〉☆３　天使族　光属性
ＡＴＫ１７００

次に現れたクレヨンのような物を持ち背中に雷を背負ったモンスター。
「一気に３体のモンスターをペンデュラム召喚か……流石だね」
「ＥＭペンデュラムマジシャンの効果発動‼？私はＥＭリザードローとペンデュラムゾーンのＥＭギタートルを破壊してデッキから
ＥＭ（エンタメイト）ドクロバットジョーカーと　ＥＭ（エンタメイト）バリアバルーンバクを手札に加えるよ‼？」
ペンデュラムマジシャンが指を鳴らすと、降っていたリザードローとペンデュラムゾーンギタートルが消え、私の手元に２枚のカードが現れる。
「私はＥＭドクロバットジョーカーを召喚‼？」

〈ＥＭドクロバットジョーカー〉☆４　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ１８００

フィールドに現れたのは帽子を被ったマジシャンのようなモンスター。
「ＥＭドクロバットジョーカーの効果発動‼？このカードが召喚に成功した時、デッキからＥＭドクロバットジョーカー以外のＥＭモンスター、魔術師ペンデュラムモンスター、オッドアイズモンスターの内、いずれか１体を手札に加えるよ‼？私はデッキから貴竜の魔術師を

手札に加えるよ‼?」
「ッ、その魔術師は……」
「行くよ、夜ちゃん‼?私はレベル４、ＥＭペンデュラムマジシャンとＥＭドクロバットジョーカーでオーバーレイ‼?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼?」
「ッ、エクシーズ召喚か‼?」
　私が手をかざすとペンデュラムマジシャンとドクロバットが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
　そして渦が爆けると白いローブを羽織った魔術師がフィールドに舞い降りる。
「笑顔が輝く希望の奇術師‼?ランク４‼?ペンデュラムエクシーズモンスター、希望の魔術師‼?」

〈希望の魔術師〉★４　魔法使い族　光属性
　ＡＴＫ２５００

「ペンデュラムエクシーズモンスター、だって?」
「希望の魔術師の効果発動‼?スマイルホープ‼?同名カードの効果は１ターンに１度しか発動できず、このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除き、手札からレベル７以下のペンデュラムモンスター１体を効果を無効にして守備表示で特殊召喚し、その後、表側表示のこのカードを自分のペンデュラムゾーンに置く事ができる‼?」
「ッ、レベル７以下のペンデュラムモンスター……ということは‼?」
　希望の魔術師が光り輝き、光の柱が立ち昇る。
　その光の柱に導かれるように現れたのは骨を想起させる身体を持ち、眼に青い炎が宿った龍。
「美しき２色の眼で観客を幻惑せよ‼?オッドアイズファントムドラゴン‼?」

〈オッドアイズファントムドラゴン〉☆７　ドラゴン族　闇属性

ＤＥＦ２０００

「そして希望の魔術師自身の効果により、私はフィールドのスケール８、希望の魔術師をペンデュラムスケールにセッティングするよ‼？」

光が弾けると、希望の魔術師が浮かび上がった光の柱に８の数字が刻まれた。

「ペンデュラムスケールになるエクシーズモンスターか……だけど、美傘の切り札のオッドアイズファントムドラゴンは守備表示。ボクのモンスター達を倒すこともできないよ」

「ふっふっふ、今日の夜ちゃんはせっかちさんだね。まだまだ美傘のショーは始まったばかりだよ‼？手札を３枚墓地へ送って、魔法カード、ＥＭ（エンタメイト）ポップアップ‼？同名カードは１ターンに１枚しか発動できず、手札を３枚まで墓地へ送って発動できる。自分はその数だけデッキからドローし、その後、この効果でドローした数まで、自分のペンデュラムゾーンのカード２枚のペンデュラムスケールでペンデュラム召喚可能なレベルを持つ、ＥＭモンスター、魔術師ペンデュラムモンスター、オッドアイズモンスターを同名カードは１枚まで手札から特殊召喚できる‼？」

「ッ‼？実質２回目のペンデュラム召喚を行うカードってわけか」

「ただし、このカードの効果で特殊召喚しなかった場合、自分は自分の手札の数×１０００ライフポイントを失うけどね。私は３枚の手札を墓地へ送ったから３枚のカードをドローする‼？そして、再び揺れろ、魂の振り子‼？空に輝け、虹のアーチ‼？ペンデュラム召喚‼？飛び出せ、私のモンスター‼？」

私がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって１つの光が舞い降りる。

フィールドに舞い降りたのは赤と青の目を持つ巨大な龍。

「美しき２色の眼で観客を魅了せよ‼？　レベル７、オッドアイズペンデュラムドラゴン‼？」

〈オッドアイズペンデュラムドラゴン〉☆7　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２５００
「オッドアイズペンデュラムドラゴン……美傘のもう1体の切り札か」
「お楽しみはこれからだ‼？墓地に存在する貴竜の魔術師の効果発動‼？このカードが手札・墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル7以上のオッドアイズモンスター1体を対象として、そのモンスターのレベルを3つ下げ、このカードを特殊召喚する‼？」
「ッ、ＥＭポップアップで墓地に送ってたか……」
「私はオッドアイズファントムドラゴンのレベルを3つ下げて貴竜の魔術師を召喚‼？」

オッドアイズファントムドラゴン
☆7→4

〈貴竜の魔術師〉☆3　魔法使い族　炎属性
ＤＥＦ１４００

現れたのは白いローブを纏った魔法使いのモンスター。
「チューナーモンスターか。なら、次にくるのは……」
「貴竜の魔術師の効果でこのカードをシンクロ素材とする場合、ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できず、他のシンクロ素材にオッドアイズモンスター以外のモンスターを使用した場合、このカードを持ち主のデッキの一番下に戻るよ。私は、レベル４となったオッドアイズファントムドラゴンに、レベル　3、チューナーモンスター、貴竜の魔術師をチューニング‼？」
貴竜の魔術師が光の輪になり、ファントムドラゴンが小さな星に変わり、光の道になる。
そして光の道が輝くと、その中から燃え上がる炎と共にルビーのような体躯を持つ龍が現れた。

「シンクロ召喚!!?・観客を魅力し、熱狂の炎を灯せ!!?・オッドアイズメテオバーストドラゴン!!?・」

〈オッドアイズメテオバーストドラゴン〉☆7　ドラゴン族　炎属性
ＡＴＫ２５００

「シンクロの炎のオッドアイズか!!?・」
「オッドアイズメテオバーストドラゴンの効果発動!!?・ペンデュラムコネクト!!?・このカードが特殊召喚に成功した時、自分のペンデュラムゾーンのカード1枚を対象としてそのカードを特殊召喚する!!?・ただし、このターン、このカードは攻撃できなくなる!!?・」
「ッ、だけどそのオッドアイズを残させるわけにはいかない!!?・チェーンしてリバースカードオープン!!?・罠発動、閻魔の裁き!!?・相手がモンスターの特殊召喚に成功した時、そのモンスターを破壊する!!?・」
「っ!!?・流石、夜ちゃんだね……」
メテオバーストドラゴンの背後に閻魔が現れ、メテオバーストドラゴンを叩き潰す。
しかし、破壊されたメテオバーストドラゴンの身体の下から炎の魔法陣が姿を現し、その魔法陣の中から笑顔を浮かべたマジシャンが現れる。
「私がペンデュラムゾーンから選択するのはこのカード!!?・デュエルで笑顔を!!?・ＥＭスマイルマジシャン!!?・」

〈ＥＭスマイルマジシャン〉☆8　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ２５００

「ＥＭスマイルマジシャン……」
「ＥＭスマイルマジシャンの効果発動!!?・ハッピースパイラル!!?・同名カードは1ターンに1度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキからスマイル魔法・罠カード1枚を手札に加える!!?・私

はデッキから魔法カード、スマイルワールドを手札に加えるよ!!?」
「スマイル、ワールド?」
「お楽しみは後にとっておかないとね。お次はこの子だ!!?私は儀式魔法、オッドアイズアドベントを発動!!?」
「ッ!!?儀式のオッドアイズまで呼びだすつもりか!!?」
「レベルの合計が儀式召喚するモンスターのレベル以上になるように、自分の手札・フィールドのペンデュラムモンスターをリリースし、自分の手札・墓地からドラゴン族の儀式モンスター1体を儀式召喚する!!?私は手札のオッドアイズファンタズマドラゴンをリリースし、墓地から儀式召喚を行うよ!!?」
　ペンデュラムが飾られた祭壇が現れると私の手札から1体のオッドアイズが光に変わり、ペンデュラムに吸い込まれていく。
　ペンデュラムが光り輝くと地面の中から岩石覆われたインペリアルトパーズのような体躯を持つ龍が現れた。
「儀式召喚!!?観客を魅力し、その重力で惹きつけろ!!?オッドアイズグラビティドラゴン!!?」

〈オッドアイズグラビティドラゴン〉☆7　ドラゴン族　地属性
　ＡＴＫ２８００

「儀式の地のオッドアイズ……本当、色んな召喚方法をよくもここまで使いこなせるものだね」
「ふふん、美傘さんはやればできる子ですからね!!?オッドアイズグラビティドラゴンの効果発動!!?グラビティリッパー!!?このカードが特殊召喚に成功した時、相手フィールドの魔法・罠カードを全て持ち主の手札に戻す!!?この効果の発動に対して相手は魔法・罠・モンスターの効果を発動できない!!?」
　グラビティドラゴンが夜ちゃんに向けて両手を振り下ろすと、空間が歪みはじめ、辺りを覆っていた電流が流れる緑色の空間が消え、伏せカードと共に夜ちゃんの手札に戻っていく。
「これで厄介なセットカードも無くなった!!?　さらに魔法カード、

ペンデュラムホルト!!?　自分のＥＸデッキの表側表示のペンデュラムモンスターが３種類以上存在するから自分はデッキから２枚ドローする!!?そして魔法カード、スマイルワールド!!?フィールドの全てのモンスターの攻撃力はターン終了時まで、フィールドのモンスターの数×１００ポイントアップする!!?」

「ッ!!?全体強化の魔法カード!!?」

「私のフィールドには、虹天気アルシエル、ＥＭスマイルマジシャン、オッドアイズグラビティドラゴン、オッドアイズペンデュラムドラゴンの４体。夜ちゃんのフィールドには守備表示のモンスターが５体!!?だからフィールドのモンスターの攻撃力は全て９００ポイントアップするよ!!?」

虹天気アルシエル
ＡＴＫ２４００→３３００

雷天気ターメル
ＡＴＫ１７００→２６００

ＥＭスマイルマジシャン
ＡＴＫ２５００→３４００

オッドアイズグラビティドラゴン
ＡＴＫ２８００→３７００

オッドアイズペンデュラムドラゴン
ＡＴＫ２５００→３４００

闇より出でし絶望
ＡＴＫ２８００→３７００

デスカイザードラゴン／バスター

ＡＴＫ２９００→３７００

堕ち武者
ＡＴＫ１７００→２６００

シノビネクロ
ＡＴＫ８００→１７００

ヴァンパイアロード
ＡＴＫ２０００→２９００

フィールドに笑顔が描かれた星が散らばると、その星々を見てモンスター達が笑顔を浮かべる。
「これで準備は完了‼？バトル‼？　オッドアイズペンデュラムドラゴンで闇より出でし絶望を攻撃‼？螺旋のストライクバースト‼？」
ペンデュラムドラゴンが放つ虹色のブレスが闇より出でし絶望を呑み込み消滅させる。
「ッ……」
「続けてＥＭスマイルマジシャンでデスカイザードラゴン／バスターを攻撃‼？スマイルプレゼント‼？」
スマイルマジシャンがトランプを投げ、デスカイザードラゴン／バスターにトランプが突き刺さると、トランプが煙を立てて消滅し、トランプの代わりに爆弾が現れて爆発し、デスカイザードラゴン／バスターが爆風に包まれた。
「くっ……やってくれるね。だけど、破壊されたデスカイザードラゴン／バスターの効果発動‼？バスターキャストオフ‼？フィールド上のこのカードが破壊された時、自分の墓地のデスカイザードラゴン１体を選択して特殊召喚できる‼？」
「っ、デスカイザードラゴンが⁉？……だけど、オッドアイズグラビティドラゴンの永続効果、フォースプレッシャー‼？このカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手は５００ライフポイントを払わ

なければ、カードの効果を発動できないよ!!?」
「ッ、そんな効果も持ってたね……だけど、構うもんか。ボクは５００ライフポイントを支払い、デスカイザードラゴン／バスターの効果発動!!?キャストオフだ、デスカイザードラゴン!!?」

夜　ＬＰ８０００→７５００

爆煙を弾き飛ばすように、骸骨で出来た鎧が弾け飛び、爆煙の中からデスカイザーが力強い雄叫びをあげて現れた。

〈デスカイザードラゴン〉☆６　アンデット族　炎属性
ＤＥＦ１５００

「デスカイザードラゴンは蘇生されちゃったけど、お楽しみはまだまだこれからだよ!!?速攻魔法発動!!?瞬間融合!!?」
「ッ!!?融合魔法!!?」
「自分フィールドに存在から融合モンスターによって決められた融合素材を墓地に送り、ＥＸデッキから融合モンスターを特殊召喚するよ!!?ただし、この効果で融合召喚したモンスターはエンドフェイズに破壊される。私が融合するのはオッドアイズペンデュラムドラゴンと魔法使い族モンスター、ＥＭスマイルマジシャン!!?」
フィールドに現れた渦にスマイルマジシャンを背に乗せたペンデュラムドラゴンが飛び込んでいく。
「笑顔を与える魔術師よ!!?龍の眼に宿て、未知なる世界に笑顔を示せ!!?」
そして渦が爆けるとその中から現れるのは左眼に秘術を宿した叡智の龍。
「融合召喚!!?笑顔の秘術を極めし賢龍!!?ルーンアイズペンデュラムドラゴン!!?」

〈ルーンアイズペンデュラムドラゴン〉☆８　ドラゴン族　闇属性

ＡＴＫ３０００

「ルーンアイズペンデュラムドラゴン⁉？ッ、確かそのモンスターは……」

「ルーンアイズペンデュラムドラゴンの永続効果、サプライズルーン⁉？このカードは、オッドアイズペンデュラムドラゴン以外の融合素材としたモンスターの元々のレベルによって効果を得る。レベル４以下の魔法使い族モンスターの場合、このカードは１度のバトルフェイズ中に２回までモンスターに攻撃でき、レベル５以上の魔法使い族モンスターの場合、このカードは１度のバトルフェイズ中に３回までモンスターに攻撃できる⁉？」

「くっ、ＥＭスマイルマジシャンはレベル８……ということは⁉？」

「ルーンアイズペンデュラムドラゴンは１度のバトルフェイズ中に３回までモンスターに攻撃できるってわけさ⁉？ルーンアイズペンデュラムドラゴンでデスカイザードラゴンを攻撃⁉？衝撃のファーストバースト⁉？」

ルーンアイズの背中にある金色の輪が輝くと、金色の輪から雷の弾丸が放たれ、デスカイザーを一瞬で焼き尽くす。

「くっ、すまない、デスカイザードラゴン」

「続けて、ルーンアイズペンデュラムドラゴンで堕ち武者を攻撃⁉？劇滅のセカンドバースト⁉？」

ルーンアイズの背中にある金色の輪が再び輝くと、金色の輪から雷撃が放たれ堕ち武者を蒸発させる。

「ッ……」

「ラスト⁉？ルーンアイズペンデュラムドラゴンでヴァンパイアロードを攻撃⁉？瞬光のファイナルバースト⁉？」

ルーンアイズの背中にある金色の輪が一際強く耀くと、金色の輪から雷の弾丸と雷撃が放たれ、それに合わせるようにルーンアイズが光のブレスを放ち、ヴァンパイアロードを消滅させた。

「雷天気ターメルでシノビネクロを攻撃⁉？ライトニングスタンプ⁉？」

ターメルが持っていたクレヨンのような物を投げつけ、シノビネクロを破壊する。
「くっ、５体いたボクのモンスターが全滅……やってくれるね」
「これで夜ちゃんを守るモンスターはいなくなった‼？虹天気アルシエルでダイレクトアタック‼？」
「残念だけど通す気はないよ。ボクは５００ライフポイントを支払い、墓地から罠カード、もののけの巣くう祠を除外して効果発動‼？自分フィールドにモンスターが存在しない場合、墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のアンデット族モンスター1体を対象としてそのモンスターを効果を無効にして特殊召喚する‼？」

夜　ＬＰ７５００→７０００

「っ、墓地から罠⁉？だけど、それこそ通さなければいいだけ‼？　私は虹天気アルシエルの効果を得た雷天気ターメルの効果を発動‼？アルカンシエル‼？虹天気アルシエルのリンク先の天気効果モンスターは魔法・罠・モンスターの効果が発動した時、このカードを除外してその発動を無効にし破壊する‼？私は雷天気ターメルを除外してもののけの巣くう祠を無効にするよ‼？」
　ターメルが虹色に輝くと、夜ちゃんの発動しようとしていた祠に突撃し、破壊すると光の中に消えていった。
「ッ、防がれたか」
「これで虹天気アルシエルの攻撃は防げないよ‼？撃ち抜け、レインボーティアーズ‼？」
「くっ‼？」

夜　ＬＰ７０００→３７００

　アルシエルが虹を模した絵具を向け、７色のレーザーが夜ちゃんを撃ち抜く。
　私にはまだグラビティドラゴンの攻撃が残っている。

グラビティドラゴンの攻撃力は３７００。
そしてさっきライフポイントを支払ったことで夜ちゃんのライフポイントも残り３７００だ。
「Ｗｅｌｌ（それじゃあ）ｔｈｅｎ（フィナーレだよ）ｆｉｎａｌｅ‼？オッドアイズグラビティドラゴンでダイレクトアタック‼？グラビドンクロー‼？」
グラビティドラゴンが腕を振るうと重力波の斬撃が夜ちゃんに向かって放たれる。
しかし、重力波が夜ちゃんを斬り裂く瞬間、夜ちゃんを守るように骨が飛び出した黒豚のモンスターが現れた。
「ボクは５００ライフポイントを支払い、墓地のタスケルトンの効果発動‼？モンスターが戦闘を行うバトルステップ時、墓地のこのカードをゲームから除外し、デュエル中に１度だけ、そのモンスターの攻撃を無効にする‼？」
「っ‼？墓地誘発のモンスターがいたんだね……」

夜　ＬＰ３７００→３２００

重力波を受けてタスケルトンが消滅するが夜ちゃんのライフは削りきれなかった。
このターン、私にこれ以上の攻撃は不可能。
残った手札を見るがこの状況を打破するものではなく、次のターンを防げるかも怪しい。
不安に焦りそうになる心を無理矢理鎮め、顔を振って前を向く。
まだデュエルは終わってない。
なら、諦める道理はない‼？
「メインフェイズ２‼？私はカードを２枚伏せてターンエンド‼？エンドフェイズ、スマイルワールドの効果は消え、瞬間融合で融合召喚されたルーンアイズペンデュラムドラゴンは破壊され、スマイルワールドの効果は切れる」

虹天気アルシエル

ＡＴＫ３３００→２４００
オッドアイズグラビティドラゴン
ＡＴＫ３７００→２８００

美傘　ＬＰ８０００　手札０
△雷▲▲ー　　▽
ーーー○ー
　　??　　ー
ーーーーー
ーーーーー　　ー
夜　ＬＰ３２００　手札８

「まさかここまでやられるとはね。正直、侮ってたよ」
「むむっ、失礼な。私だって一応プロ決闘者なんだよ？」
「そりゃあわかってるけど、普段が普段だからねぇ？」
「むわぁー!!？それは確実に失礼な奴だよ!!？名誉毀損だよ!!？」
　私の猛攻を耐え切った夜ちゃんが苦笑いを浮かべながら私を煽ってくる。
　だけど、夜ちゃんはすぐに苦笑いを止め、一度目を閉じるとどこか寂しそうな目で私を見た。
「だけど、それもここまで。このデュエルはボクが貰う」
「っ、私だってそう簡単にはーーー」
「いや、勝つのはボクだ。もう、ボクは誰にも負けるわけにはいかないんだ!!？」
「っ!!？」
　そういうと、夜ちゃんはどこか悲しげな顔でデッキの上のカードを掴み、勢いよくカードをドローした。
「終わらせよう。ボクと美傘の何もかも!!？ボクのターン、ドロー!!？　ボクは５００ライフポイントを支払い、スタンバイフェイズ、墓地に存在する死霊王　ドーハスーラの効果発動!!？フィンドリバイ

ヴ‼?フィールドゾーンに表側表示でカードが存在する場合、自分・相手のスタンバイフェイズ、このカードを墓地から守備表示で特殊召喚する‼?」
「うなっ⁉?もう墓地に落ちてたの⁉?」
「蘇れ、死霊王　ドーハスーラ」

夜　ＬＰ３２００→２７００

〈死霊王　ドーハスーラ〉☆８　アンデット族　闇属性
ＤＥＦ２０００

地面に穴が開くとその中から現れたのは髑髏の身体を持つ魔術師のような蛇。
「くっ、除外された雷天気ターメルの効果発動‼?フィールドのこのカードが天気カードの効果を発動するために除外された場合、次のターンのスタンバイフェイズに除外されているこのカードを特殊召喚するよ‼?戻っておいで、雷天気ターメル‼?」

〈雷天気ターメル〉☆３　天使族　光属性
ＤＥＦ０

「雷天気ターメルが戻ってきたね。だけど、その程度じゃボクは止められないよ‼?　ボクは５００ライフポイントを支払い、手札からリターンオブアンデットと黄金卿エルドリッチを捨てて黄金卿エルドリッチの効果発動‼?グリードディルジョン‼?手札からこのカードと魔法・罠カード１枚を墓地へ送り、フィールドのカード１枚を対象としてそのカードを墓地へ送る‼?対象はオッドアイズグラビティドラゴン‼?」

夜　ＬＰ３２００→２７００

「っ‼?」
「それにチェーンしてボクは５００ライフポイントを支払い、死霊王ドーハスーラの効果発動‼?ゴーストグラジュエイト‼?死霊王ドーハスーラ以外のアンデット族モンスターの効果が発動した時に２つある効果から１つを選んで適用する。ただし、このターン、自分の死霊王　ドーハスーラの効果で同じ効果を適用できない。その効果を無効にするか、自分または相手のフィールド・墓地のモンスター１体を選んで除外する‼?ボクは２つ目の効果で虹天気アルシエルを除外する‼?」

夜　ＬＰ２７００→２２００

「っ、それは通さないよ‼?虹天気アルシエルの効果を得た雷天気ターメルの効果を発動‼?アルカンシエル‼?雷天気ターメルを除外して死霊王ドーハスーラの効果を無効にし、破壊する‼?」
　ターメルが虹色に輝きながらドーハスーラに突撃し、その身体を貫いて破壊し、光の中に消えていく。
「だけどこれで黄金卿エルドリッチの効果は止められない‼?オッドアイズグラビティドラゴンは墓地送りだ‼?」
　グラビティドラゴンの足元からいきなり金色の腕が生え、グラビティドラゴンを掴むと、そのまま地面の中にグラビティドラゴンを引き摺り込み消えていった。
「これでボクの行動を阻むライフ制限は無くなった‼?まずは魔法カード、三戦の才‼?同名カードは１ターンに１枚しか発動できず、このターンの自分メインフェイズに相手がモンスターの効果を発動している場合、３つの効果から１つを選択して発動できる‼?１つ目は自分はデッキから２枚ドローする効果、２つ目は相手フィールドのモンスター１体を選び、エンドフェイズまでコントロールを得る効果。３つ目は相手の手札を確認し、その中からカード１枚を選んでデッキに戻す効果だ‼?」
「ええっ⁉?何そのトンデモ⁉?全部禁止カードの効果じゃん⁉?」

「ボクは1つ目の効果で2枚ドロー!!?・さらに魔法カード、シャッフルリボーン!!?・自分フィールドにモンスターが存在しない場合、自分の墓地のモンスター1体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?・ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、エンドフェイズに除外される!!?・甦れ、ヴァンパイアロード!!?・」

〈ヴァンパイアロード〉☆5　アンデット族　闇属性
　ＤＥＦ１５００

「行くよ、美傘。このカードは通常召喚できず、自分フィールド上に存在するヴァンパイアロード1体をゲームから除外した場合のみ特殊召喚する事ができる!!?・ボクはフィールドのヴァンパイアロードを除外する!!?・」
「っ、その特殊召喚条件は……」
　ヴァンパイアロードがマントを翻すと、マントで隠れたヴァンパイアロードの身体が膨れ上がっていく。
　しばらくしてヴァンパイアロードがいた場所に佇んでいるのは紫色の身体に爪のような物が背中から飛び出した始まりの吸血鬼。
「現れろ。全ての吸血鬼を統べる真祖!!?・ヴァンパイアジェネシス!!?・」

〈ヴァンパイアジェネシス〉☆8　アンデット族　闇属性
　ＡＴＫ３０００

「ボクはカードを1枚セットし、今セットした速攻魔法、アンデットストラグルを墓地に送り、墓地に存在する黄金卿エルドリッチの効果発動!!?・グリーディリバイブ!!?・」
「っ!!?・また!!?・」
「このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドの魔法・罠カード1枚を墓地へ送ってこのカードを手札に加え、その後、手札からアンデット族モンスター1体を特殊召喚できる!!?・この効果で特殊召喚

したモンスターは相手ターン終了時まで、攻撃力・守備力が１０００ポイントアップし、効果では破壊されない‼？墓地より黄金卿エルドリッチを手札に加え、現れろ‼？ヴァンパイアグリムゾン‼？」

〈ヴァンパイアグリムゾン〉☆５　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２０００→３０００　ＤＥＦ１４００→２４００

夜ちゃんの手札から現れたのは死神の鎌を持つ吸血鬼。
「まだまだ行くよ‼？ヴァンパイアジェネシスの効果発動‼？ソウルサブミット‼？１ターンに１度、手札からアンデット族モンスター１体を墓地に捨てる事で、捨てたアンデット族モンスターよりレベルの低いアンデット族モンスター１体を自分の墓地から選択して特殊召喚する‼？ボクは手札のレベル１０モンスター、黄金卿エルドリッチを墓地に送って墓地から再び蘇れ‼？死霊王　ドーハスーラ‼？」

〈死霊王　ドーハスーラ〉☆８　アンデット族　闇属性
ＡＴＫ２８００

「っ、またドーハスーラが……しかも、今度は攻撃表示……っ‼？」
「まだ止まらないよ‼？速攻魔法、白き宿命のエルドリクシル‼？同名カードは１ターンに１度、２つある効果の内どちらか１つしか使用できず、自分の手札・墓地からアンデット族モンスター１体を選んで特殊召喚する‼？ただし、自分フィールドにエルドリッチモンスターが存在しない場合には、この効果でエルドリッチモンスターしか特殊召喚できず、このカードの発動後、ターン終了時まで自分はアンデット族モンスターしか特殊召喚できない。墓地より甦れ、黄金卿エルドリッチ‼？」

〈黄金卿エルドリッチ〉☆１０　アンデット族　光属性
ＡＴＫ２５００

「それだけじゃないよ。ボクはカードを2枚伏せ、墓地に存在する罠カード、リターンオブアンデットの効果発動!!?」
「っ!!?さっき黄金卿エルドリッチのコストにしたカード!!?」
「このカードが墓地に存在する場合、除外されている自分のアンデット族モンスター1体を選んでデッキに戻し、このカードを自分フィールドにセットする!!?ただし、この効果でセットしたこのカードはフィールドから離れた場合に除外される。ボクは除外されているゾンビキャリアをデッキに戻してこのカードをセットする。さらに墓地に存在するアンデットストラグルの効果発動!!?このカードもリターンオブアンデットと同じように除外されている自分のアンデット族モンスター1体を選んでデッキに戻し、このカードを自分フィールドにセットする。ただし、この効果でセットしたこのカードはフィールドから離れた場合に除外される。ボクは除外されている馬頭鬼をデッキに戻してこのカードをセットする……そして、カードがセットされたこの瞬間、墓地のEM(エンタメイト)五虹の魔術師の効果発動!!?」
「っ!!?そのカードは……!!?」
夜ちゃんの口から飛び出した予想外のカード名に思わず驚きの声を上げる。
だって、五虹の魔術師はーーー
「……私があげたカード、入れててくれたんだ」
「……美傘がくれたカードだからね。無駄にはしたくなかった」
「夜ちゃん……」
「皮肉なものだよね。そうして美傘が託してくれたこのカードが、このデュエルと、美傘との繋がりに引導を渡す!!?EM五虹の魔術師の効果発動!!?このカードが墓地に存在し、自分フィールドに魔法・罠カードがセットされた場合、墓地のこのカードを自分のペンデュラムゾーンに置くよ!!?」
夜ちゃんの右隣に光の柱が立ち上り、その光の中に虹色に輝く魔術師の姿が映る。

そしてその魔術師の下には１２の数字が浮かぶ。
「ＥＭ五虹の魔術師のペンデュラム効果により、お互いは自身の魔法＆罠ゾーンにセットされているカードの数により効果を適用する。０枚なら自分フィールドのモンスターは攻撃できず、効果を発動できなくなる。そして自分フィールドに４枚以上のセットカードがある時、自分フィールドのモンスターの攻撃力は元々の数値の倍になる‼？」
「っ‼？」
ーーーそして、秘められていた強力な力が解放される。
光の柱にいる五虹の魔術師から虹色のオーラが夜ちゃんのモンスター達に放たれ、その身体を包み込んでいく。
虹色のオーラに包まれた夜ちゃんのモンスター達は力強い咆哮をあげた。

黄金卿エルドリッチ
ＡＴＫ２５００→５０００

死霊王　ドーハスーラ
ＡＴＫ２８００→５６００

ヴァンパイアグリムゾン
ＡＴＫ３０００→６０００

ヴァンパイアジェネシス
ＡＴＫ３０００→６０００

「さあ、これで全て終わりにしよう。バトル‼？ヴァンパイアグリムゾンで虹天気アルシエルを攻撃‼？ブラッディシックル‼？」
「っ、この瞬間、ペンデュラムゾーンの希望の魔術師の効果発動‼？ペンデュラムバリア‼？１ターンに１度、自分または相手のモンスターの攻撃宣言時、その攻撃を無効にし、その後、このカードを破壊する

‼?」
「ッ‼?攻撃無効のペンデュラム効果があったのか」
グリムゾンが鎌を振るい、血の斬撃がアルシエルに向かって放たれるが、光の柱から飛び出してきた希望の魔術師がその攻撃を防ぎ、代わりに破壊される。
「なら、ヴァンパイアジェネシスで虹天気アルシエルを攻撃‼?ブラッディストーム‼?」
「っ、迎え撃って‼?虹天気アルシエル‼?レインボーティアーズ‼?」
アルシエルが虹を模した絵具から7色のレーザーをヴァンパイアジェネシスに放つが、ヴァンパイアジェネシスはマントを翻し、その身体を無数の小さな蝙蝠に変えて7色のレーザーを躱しきる。
小さな蝙蝠が再び集まり、ヴァンパイアジェネシスが姿を現し、アルシエルに手をかざすと、ヴァンパイアジェネシスの周囲に血で出来た槍が無数に現れ、アルシエルに降り注ぎ、串刺しにした。

美傘　ＬＰ８０００→４４００

「これで、全部終わりだ‼?黄金卿エルドリッチでダイレクトアタック‼?ゴールデングレイヴ‼?」
「っ、まだ、終わりじゃない‼?リバースカードオープン‼?罠発動‼?スマイルポーション‼?」
「ッ‼?スマイルポーション?」
「同名カードは1ターンに1度しか発動できず、自分フィールドにモンスターが存在せず、元々の攻撃力より高い攻撃力を持つモンスターが相手フィールドに存在する場合、自分はデッキから2枚ドローする‼?」
「ドローカード、ＥＭ五虹の魔術師の強化が仇に……っ、だけど、今更ドローしたってどうにもならない‼?運命は何も変わらない‼?変えられないんだ‼?」
黄金卿の拳が迫る中、勢いよくカードをドローし、ドローしたカー

ドに視線を向けると、夜ちゃんの悲痛な叫びが聞こえてくる。
私はそんな夜ちゃんを真っ直ぐに見据える。
「夜ちゃんは誰と戦ってるの？」
「っ‼？」
「今の夜ちゃんは私を見ているようで見ていない。まるで、私を通してここにはいない誰かと戦ってるみたいだ」
私の言葉に夜ちゃんは目を見開く。
そう、今の夜ちゃんは私を見ていない。
私に誰かを重ね、その誰かに怯え、振り払うように当たり散らす幼子のようだ。
「夜ちゃんが何を隠しているかは知らない。過去に何があったかも分からない。だけど、今、夜ちゃんとデュエルしてるのは私だ‼？見えないどこかの誰かじゃない‼？エンタメデュエリスト、雨夜美傘だ‼？」
デュエルで皆を驚かせ、笑顔にするエンタメデュエリストである私とデュエルをしていながら、過去ばかりを見て私を全く見ようとしないなんて我慢ならない‼？
私は拳を握りしめて、伏せてあったカードを発動させる。
「過去（そこ）にいる誰かじゃない‼？　現在（ここ）にいる私を見ろ‼？『眼竜夜』‼？手札から魔法カード、死者蘇生を捨てて、リバースカードオープン‼？罠発動‼？決別‼？」
「っ⁉？決、別……⁉？」
「相手バトルフェイズに手札から魔法カード1枚を墓地へ送り、そのバトルフェイズを終了し、フィールドの表側表示モンスターはターン終了時まで効果が無効化される‼？」
私は振り抜かれた黄金卿の拳をしゃがんで避けると、握りしめた拳を黄金卿に向けて突き上げる。
「夜ちゃんの、あほぉ～～～っ‼？」
叫びと共に放った私のアッパーカットを腹部に受けた黄金卿はその場で崩れ落ち、ぴくりとも動かなくなった。
それを見た夜ちゃんは目を見開き、ドーハスーラは震えながらその

場に蹲った。
「ふぅ～～～これで、夜ちゃんのバトルフェイズは終了‼？まだデュエルは終わりじゃない‼？」
「……ホント無茶苦茶だ」
「忘れちゃったの？無茶苦茶なのが美傘さんのいいとこなんだよ‼？」
そういって胸を張る私を見て、夜ちゃんは一瞬口角を上げたが、すぐに険しい顔をして私を睨んだ。
「それでもボクが有利なことには変わりはない。美傘にペンデュラムカードはなく、セットカードもないからモンスター効果はＥＭ五虹の魔術師に無効化される。ボクの有利は覆らない‼？次のボクのターンで全て終わりだ‼？ボクはこれでターンエンド‼？」

美傘　ＬＰ４４００　手札１
ー雷ーーー　▽
ーーーーー
ー　　ー
ー○○○○
▲▲▲▲△　ー
夜　ＬＰ２７００　手札０

「私のターン‼？」
私は気合を入れて状況を整理する。
夜ちゃんのフィールドには４体のモンスターが五虹の魔術師に強化されていて、４枚の伏せカードがある。
対する私はたった１枚の手札に天空の虹彩、雷の天気模様だけだ。
「にひひ、どう見たって私の逆境だよね」
圧倒的な逆境。
その事実に私は思わず笑顔を浮かべる。
そんな私を見て、夜ちゃんは思わずといった風に呟いた。
「どうして……」

「んぅ？」
「どうしてこの状況で笑っていられるのさ」
　心底理解できないと言うように、呆然とした声で夜ちゃんは言葉を続ける。
「美傘にだって分かるでしょ？この状況から逆転できる可能性は限りなく低いって」
「……そうかもね」
「ならーーー」
「だけど、あいにく、エンタメデュエリストってのは諦めが悪くてね。諦めない限り、希望は最後まで消えないんだよ」
「ッ……」
「それに、まだ夜ちゃんの笑顔を見てないから」
「……は？」
　私の言葉に夜ちゃんはぽかんとした表情を浮かべる。
　そんな夜ちゃんに、私は目を瞑って大切な記憶を思い出しながら答える。
「昔ね、私がプロ決闘者になったばかりで、観客を驚かせて笑顔にさせるようなデュエルが上手く出来なかった時に、私にアドバイスをくれた人がいたんだ。『顰めっ面でデュエルしてても、誰も笑顔になんかならないぜ。誰かを笑顔にしたいなら、まずは自分が笑顔でいないとな』って」
「それって……」
「私は夜ちゃんにお話しを聞かせてもらって、また一緒に笑ってほしいからこうしてデュエルをしてる。だから、夜ちゃんが心から笑ってくれるまで、私は笑顔でデュエルをするんだ‼？」
　目を開け、満面の笑みでそう告げる私を見て、夜ちゃんは拳を握り締めると明らかに怒っている表情で私を見た。
「ッ、意味がわかんない……だからって美傘が笑顔でいることと、ボクが笑顔になることにどんな因果関係があるって言うのさ‼？ボクを馬鹿にしてるの⁉？」
「……」

「負けちゃいけなかったのにアイツに負けて‼?知られたくなかったことを美傘に知られて‼?こんな気持ちのボクが笑顔になれるわけないじゃないか‼?能天気でお気楽者のキミに、ボクの……『私』の何が分かるって言うのさ‼?」

ずっと押し込めていた感情を爆発させるように夜ちゃんが目の色を赤く染めながら涙を流して叫ぶ。

そんな夜ちゃんに、私ははっきりとした声で告げる。

「分からないよ」

「……えっ?」

「夜ちゃんはズルいよ。なんでもかんでも1人で完結させようとして。自分の物語を勝手に悲しい結末で終わらせようとしてる。そんなんじゃ夜ちゃんが何を考えてるかなんてわかるわけないじゃん‼?」

「ッ……」

私の言葉に夜ちゃんが言葉を詰まらせる。

「影がない?化け物?だから何さ‼?そんなことで私が夜ちゃんを見捨てるとでも思ってるの?私と夜ちゃんが過ごしてきた日々は、その程度のことで全部捨てられるようなものだと思ってるの?そっちの方が馬鹿にしてるよ‼?」

「美傘……」

私はそんな夜ちゃんに、真剣な表情で自分の胸の内に秘めていた言葉を口に出す。

「確かに私はお気楽者だよ。頭は悪いし、空元気だけが得意技。いつも周りの人に助けられて、呆れられてばっかり。だけど、一人くらい何も背負ってないお気楽者がいないと……もしもの時に重荷を一緒に背負ってあげられないじゃん」

私の言葉に夜ちゃんは苦しそうに胸を押さえる。

そんな夜ちゃんに私ははっきりと胸の思いを形にする。

「夜ちゃんにどんな過去があるのか、何を背負っているのか、私は知らないよ。だけど、もしその過去が悲しい雨となって夜ちゃんを濡らすなら、私はその雨を弾く傘になる。夜ちゃんに寄り添って、いつか雨

が上がった空に、笑顔っていう名前の虹をかけて、一緒にみたい。私は夜ちゃんの、そんな親友になりたい!!?」
「ッ、美傘……キミは……」
「だって私は、眼竜　夜の親友、　雨夜　美傘だもん!!?」
雨(なみだ)の夜に寄り添う、美しい傘が私なんだから!!?
「だからこそ、夜ちゃんに降り注ぐ悲しい雨は、私が全部弾き飛ばす!!?ドロー!!?」
私は決意を胸に笑顔でデッキの上のカードを思いきり引き抜いた。
「魔法カード、ペンデュラムパラドックス!!?同名カードは1ターンに1枚しか発動できず、自分のEXデッキの表側表示のペンデュラムモンスターの中から、ペンデュラムスケールが同じでカード名が異なるモンスター2体を選んで手札に加える!!?私がEXデッキから手札に加えるのはスケール6のEMギタートルとEMリザードドロー!!?」
「ッ!!?その2枚は……」
「私はスケール6のEMギタートルとスケール6のEMリザードドローをペンデュラムスケールにセッティング!!?」
再び私を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中にギタートルとリザードドローの姿が映り、その下には6の数字が浮かぶ。
「EMギタートルのペンデュラム効果発動!!?もう片方の自分のペンデュラムゾーンにEMカードが発動したため、デッキから1枚ドロー!!?さらに、EMリザードドローのペンデュラム効果発動!!?このカードを破壊し、デッキからさらに1枚ドロー!!?よし!!?魔法カード、貪欲な壺!!?墓地に存在する虹天気アルシエル、ルーンアイズペンデュラムドラゴンをEXデッキに、晴天気ベンガーラ、雪天気シエル、雨天気ラズラをデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドロー!!?さらに天空の虹彩の効果を発動!!?私は雷の天気模様を破壊してデッキからオッドアイズアークペンデュラムドラゴンを手札に加えるよ!!?」
「手札がどんどん増えて……」
「まだまだ!!?魔法カード、シャッフルリボーン!!?墓地より舞い戻

り、再び熱狂の炎を灯せ‼?オッドアイズメテオバーストドラゴン‼?」

〈オッドアイズメテオバーストドラゴン〉☆7　ドラゴン族　炎属性
ＡＴＫ２５００

「墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動‼?自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローする‼?ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外する‼?私はフィールドの天空の虹彩をデッキに戻し、カードを1枚ドローする‼?カードを1枚セットし、魔法カード、ダウジングフュージョン‼?同名カードは1ターンに1枚しか発動できず、自分の墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを除外し、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚する‼?」

「ッ⁉?墓地融合の融合魔法⁉?」

「ただし、この効果で融合召喚する場合、ペンデュラムモンスターしか融合素材にできない‼?私は墓地に存在するオッドアイズペルソナドラゴンとＥＭペンデュラムマジシャンを除外して融合‼?」

私の前に渦が現れ、そこに仮面の龍とペンデュラムマジシャンが吸い込まれていく。

そして渦が弾けると、暴風と共にエメラルドのような体躯を持つ龍が現れた。

「仮面の龍、振り子の奇術師よ‼?今交わりて、笑顔を導く力となれ‼?融合召喚‼?観客を魅力し、歓声の旋風を巻き起こせ‼?オッドアイズボルテックスドラゴン‼?」

〈オッドアイズボルテックスドラゴン〉☆7　ドラゴン族　風属性
ＡＴＫ２５００

「ッ、ボルテックスドラゴン……‼?」

「オッドアイズボルテックスドラゴンの効果発動!!?サンダーフォールウインド!!?このカードが特殊召喚に成功した時、相手フィールドの表側攻撃表示モンスター1体を対象としてそのモンスターを持ち主の手札に戻す!!?対象は死霊王　ドーハスーラ!!?」

ボルテックスドラゴンがドーハスーラを中心にして高速で旋回すると、ドーハスーラを包み込むように旋風が発生し、周囲の電流が集まりドーハスーラの動きを止める。

ドーハスーラはその旋風に吹き飛ばされ、そのまま姿を消した。

「くっ……ドーハスーラが!!?」

「これで邪魔者もいなくなった!!?　速攻魔法、揺れる眼差し!!?お互いのペンデュラムゾーンのカードを全て破壊する!!?」

「なっ!?」

フィールドに巨大な眼が現れ、その眼が赤く光と光の柱に包まれていたギタートルと五虹の魔術師が粒子に変わり消滅した。

「その後、この効果で破壊したカードの数によって効果を適用する!!?1枚以上で相手に500ダメージを与え、2枚以上でデッキからペンデュラムモンスター1体を手札に加えることができ、3枚以上でフィールドのカード1枚を選んで除外でき、4枚でデッキから同名カード1枚を手札に加える事ができる!!?破壊されたペンデュラムカードは2枚!!?よって、夜ちゃんに500ポイントのダメージを与え、デッキから　EM(エンタメイト)ダクダガーマンを手札に加える!!?」

「くっ!!?」

夜　LP2700→2200

「さらに、EM五虹の魔術師が破壊されたことで夜ちゃんのモンスターの強化は解かれる!!?」

黄金卿エルドリッチ
ATK5000→2500

ヴァンパイアグリムゾン
ＡＴＫ６０００→３０００

ヴァンパイアジェネシス
ＡＴＫ６０００→３０００

虹色のオーラが弾け、夜ちゃんのモンスター達の力が弱まっていく。
「私はスケール２のＥＭダクダガーマンとスケール８のオッドアイズアークペンデュラムドラゴンをペンデュラムスケールにセッティング!!?」
　再び私を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中にシルクハットを被りダガーを手にした奇術師と、オッドアイズの姿が映り、その下には２と８の数字が浮かぶ。
「ＥＭダクダガーマンのペンデュラム効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードを発動したターンの自分メインフェイズに自分の墓地のＥＭ　モンスター１体を対象としてそのモンスターを手札に加える!!?私は墓地のＥＭドクロバットジョーカーを手札に加えるよ!!?さらにリバースカードオープン!!?魔法カード、ペンデュラムホルト!!?自分のＥＸデッキの表側表示のペンデュラムモンスターが３種類以上存在するため、カードを２枚ドローする!!?」
「ッ!??まだドローカードが残って……!??」
「これで準備は整った!!?魔法カード、ペンデュラムエクシーズ!!?同名カードは１ターンに１枚しか発動できず、自分のペンデュラムゾーンのカード２枚を対象として発動できる!!?そのカード２枚を効果を無効にして特殊召喚し、そのモンスター２体のみを素材としてエクシーズモンスター１体をエクシーズ召喚する!!?その際、オーバーレイユニットとするモンスター１体のレベルは、もう１体のモンスターと同じレベルとして扱う事ができる!!?」
「なっ!??ペンデュラムスケールからエクシーズ召喚だって!??」
「私はペンデュラムスケールからオッドアイズアークペンデュラムド

ラゴンとＥＭダクダガーマンを特殊召喚‼？」

〈オッドアイズアークペンデュラムドラゴン〉☆７　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２７００

〈ＥＭダクダガーマン〉☆５　戦士族　地属性
ＡＴＫ２０００

「そして私はレベル７、オッドアイズアークペンデュラムドラゴンとレベル５、ＥＭダクダガーマンをレベル７として扱い、オーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼？」

ＥＭダクダガーマン
☆５→７

私が手をかざすとアークペンデュラムドラゴンとダクダガーマンが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると吹き荒れる吹雪と共にサファイアのような体躯を持つ龍が現れた。
「観客を魅力し、銀雪の輝きを見せよ‼？オッドアイズアブソリュートドラゴン‼？」

〈オッドアイズアブソリュートドラゴン〉★７　ドラゴン族　水属性
ＡＴＫ２８００

「ッ、オッドアイズアブソリュートドラゴンまで……だけど‼？そのオッドアイズ達でも、ボクのモンスターを倒しきってボクを倒すことなんてーーー」
「まだ終わりじゃない‼？夜ちゃんに見せてあげる‼？私の本当の

とっておきを‼?私は自分フィールドのドラゴン族の融合モンスター、オッドアイズボルテックスドラゴン、ドラゴン族シンクロモンスター、オッドアイズメテオバーストドラゴン、ドラゴン族エクシーズモンスター、オッドアイズアブソリュートドラゴンをリリース‼?」

「ッ⁉?せっかく出したオッドアイズ達をリリース⁉?」

ボルテックスドラゴン、メテオバーストドラゴン、アブソリュートドラゴンが光の球に代わり重なり合って私の手に集まる。

「Ｌａｄｉｅｓ　ａｎｄ　Ｇｅｎｔｌｅｍｅｎ（皆様）‼?　お待たせ致しました‼?今宵ご覧にいただくのは、２色の眼を持つ龍達が生み出す奇跡の光‼?瞬き厳禁‼?どうかお見逃しがないようにご覧ください‼?」

私は集まった光の球を見て不敵に笑うと、勢いよく光の球を空に向かって放り投げる。

光の球は輝きを増しながら空へと昇り、勢いよく弾けると、弾けた光の中から巨大な何かがフィールドに降り立つ。

「鮮やかな理想を示す進化の輝き‼?今降り注ぎ、新たな奇跡の扉を開け‼?」

フィールドに降り立ったのは３つの輪を背負い、金色の角に２色の眼を持つ巨大な銀龍。

「これが私のとっておき‼?天衣無縫の進化を遂げた奇跡のオッドアイズ‼?さぁ、驚け‼?超天新龍オッドアイズレボリューションドラゴン‼?」

〈超天新龍オッドアイズレボリューションドラゴン〉☆１２　ドラゴン族　光属性

ＡＴＫ?

「レベル１２のオッドアイズ⁉?」

「超天新龍オッドアイズレボリューションドラゴンの永続効果、ライフリンクレボリューション‼?このカードの攻撃力・守備力は相手の

ライフポイントの半分の数値分アップする!!?夜ちゃんのライフポイントは２７００!!?よって、超天新龍オッドアイズレボリューションドラゴンの攻撃力、守備力は１３５０ポイントアップする!!?」

超天新龍オッドアイズレボリューションドラゴン
ＡＴＫ?→１３５０　ＤＥＦ?→１３５０

「攻撃力１３５０?そんな攻撃力じゃボクのモンスターを倒すこともできないじゃないか!!?そんなモンスターでーーー」
「ちっちっち!!?気が早いね、夜ちゃんは。お楽しみはこれからだよ!!?」
「ッ!!?」
「自分のライフポイントを半分払い、超天新龍オッドアイズレボリューションドラゴンの効果発動!!?」

美傘　ＬＰ４４００→２２００

「１ターンに１度、ライフポイントを半分払って発動できる!!?このカード以外のお互いのフィールド・墓地のカードを全て持ち主のデッキに戻す!!?」
「なっ!?全てのカードをデッキに!?っ、チェーンしてリバースカードオープン!!?罠発動!!?リターンオブアンデット!!?フィールドのアンデット族モンスター１体を選んで除外し、その後、そのコントローラーの墓地からアンデット族モンスター１体を選び、その持ち主のフィールドに守備表示で特殊召喚する!!?これで墓地から墜ち武者を出せばーーー」
「ライフポイントを半分払い、手札からカウンター罠発動!!?レッドリブート!!?」
「ッ!?その、カードは……!?」

美傘　ＬＰ２２００→１１００

「相手が罠カードを発動した時に発動できる‼?その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする‼?その後相手はデッキから罠カード1枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンにセットできる。ただしこのカード発動後、ターン終了時まで罠カードは発動できないけどな……なーんてね。　Ｉｔ，ｓ（さあ、）　Ｓｈｏｗｔｉｍｅ（ショータイム）‼?　レッドリブートによりリターンオブアンデットの効果が無効‼?そして、超天新龍オッドアイズレボリューションドラゴンの効果発動‼?悲しい過去も、　現実（いま）も‼?全てを巻き戻し、世界の全てをひっくり返せ‼?ワールドイリュージョン‼?」

オッドアイズレボリューションが咆哮を上げると、眩い光が世界を照らし、全てのカードがデッキの中に戻っていく。

「ボクのカードが全部デッキに……」

「私はＥＭドクロバットジョーカーを召喚‼?」

〈ＥＭドクロバットジョーカー〉☆４　魔法使い族　闇属性

ＡＴＫ１８００

「バトル‼?　超天新龍オッドアイズレボリューションドラゴンでダイレクトアタック‼?驚天のエンドロールバースト‼?」

夜　ＬＰ２７００→１３５０

「ぐっ‼?」

オッドアイズレボリューションの光のブレスが夜ちゃんのライフを削り取る。

「Ｗｅｌｌ（それじゃ）　ｔｈｅｎ（あ）　ｆｉｎａｌｅ（フィナーレだよ）‼?　ＥＭドクロバットジョーカーでダイレクトアタック‼?」

「ッ‼?」

ドクロバットが勢いよく夜ちゃんに向かって走りだし、あまりの勢いに夜ちゃんが思わず目を瞑る。

少しの間目を瞑っていた夜ちゃんが恐る恐る目を開けると、夜ちゃんの目の前で止まったドクロバットは夜ちゃんの目に溜まっていた涙を指で拭った。
「ドクロバットスティール……夜ちゃんの涙は、私がいただいたよ‼?」

夜　ＬＰ１３５０→０

ーーーーーーー

立体映像が消えていき、風景が雨の中の闇夜の屋上に戻り、夜ちゃんが屋上に座り込む。
私はデュエルディスクをしまうと、座り込んだ夜ちゃんに近づき、正面にしゃがみ込む。。
「私の勝ちだよ、夜ちゃん」
「……うん、ボクの負けだ」
夜ちゃんは呆然としたように呟くと、強張らせていた身体の力を抜いた。
「まさか、お気楽者の美傘に負けるなんてね。ボクもまだまだだな」
「えへへ、お気楽者にはお気楽者の強さがあるんだよ‼?思い詰めやすい人には何倍もの効力を発揮しちゃうんだよ‼?どやぁ‼?」
「……」
「ひゃうっ‼?い、痛たたた‼?無言でほっぺたつねるのやめて‼?ごめん‼?ごめんって‼?」
「ふっ……全く、キミって奴は……」
調子に乗ってドヤ顔を浮かべた私の頬を無言で引っ張っていた夜ちゃんは、涙目の私を見て呆れたように笑った。
そんな夜ちゃんを見て、私もようやく安心して笑顔を浮かべる。
「ようやく、笑ってくれた」
「ッ‼?あ……」
「やっぱり、夜ちゃんはそうやって笑ってくれてた方がいいよ。悲し

い顰めっ面でこーんな顔してるより、にっこにこの笑顔の方が私は嬉しいよ」
　そういって自分の頬を引っ張りながら笑いかけると夜ちゃんの目から涙が溢れ出す。
　そんな夜ちゃんの身体を私は優しく抱き締める。
「夜ちゃんが何を隠してたかなんて、馬鹿でお気楽者な私にはわからない。でも、そんな馬鹿な私でもこれだけはわかる。例え、夜ちゃんが何者だとしても……眼竜　夜は雨夜　美傘の親友なんだよ。それだけは、絶対に間違いなんかじゃないから」
「ッ……み……かさ……‼？」
「わっ‼？」
　夜ちゃんに正面から抱きつかれ、私は夜ちゃんに押し倒されるように屋上に倒れ込む。
「ごめん……ごめんね……美傘……ボクは……『私』は……」
　ポロポロと涙を流しながら私に抱きつく夜ちゃんを落ち着かせるように私は夜ちゃんの背中を優しく叩く。
「大丈夫。聞かせて、夜ちゃんのこと。私、もっと夜ちゃんのこと、知りたいよ」
「ッ……うん……わかった」

ーーーーーーーー

「ーーーこれが、ボクの全て。ボクが絶対に果たさないといけない贖罪なんだ」
「……そっか」
　降り続く雨にうたれながら、夜ちゃんと2人で空を見上げて横になっていた私は目を閉じる。
　そんな私を見て、夜ちゃんは身体ごと顔を背けて身体を震わせる。
　真実を知った私がどんな反応をするのかが怖いのだろう。
　確かに、夜ちゃんが話してくれた真実はそれ程の重さがある……

だけど、それだけだ。
私は閉じていた目を開けると顔を背けている夜ちゃんの身体を後ろから抱きしめた。
「話してくれてありがとう、夜ちゃん。やっぱり、夜ちゃんはすごいね」
「……えっ？」
私の言葉に夜ちゃんは呆然とした声を出す。
「そんな重たいものをたった1人で背負ってきたんだもん。辛くて、苦しかったハズなのに、その重さを投げ出さずに、たった1人で」
夜ちゃんの身体を優しく抱きしめながら、私は強く拳を握る。
どこまでも重く残酷な真実を、この小さな身体で今まで背負ってきたことが私の胸を刺す。
だけど、それも今日までだ。
「だから、その重さ、私にも一緒に背負わせてね。そのためのお気楽者なんだよ、美傘さんは」
「美傘……ッ!!?」
私の言葉に夜ちゃんは身体をこちらに向けて私の身体を抱きしめる。
「夜ちゃんが何者だろうと、私にとって夜ちゃんは夜ちゃんだよ。私の大親友、眼竜　夜だから」
「ッ、うっ、ぁぁ!!?」
「夜ちゃんの身体を濡らす　涙(あめ)を弾けるように、私はいつだって、側にいるよ」
「う、ん……うん……ッ!!?」
私の言葉に夜ちゃんが涙で顔を歪めながらも、不器用な笑みを浮かべる。
すると、そんな夜ちゃんの心を写すように空から降り注いでいた雨が止んでいき、雲の隙間から月明かりが私達を照らし出す。
私は雨上がりの空を見上げながら、満面の笑みで夜ちゃんに笑いかける。
「ほら、雨、止んだでしょ？止まない雨なんて、この世界にはないんだ

から」

第９４話　蠱毒に巣食うモノ

★

『あは、あはははは‼?うん、いいね‼?最高だよ、お姉さん‼?流石は世界を滅ぼす資質があるお姉さんだ‼?　あはははは‼?』
『恐怖の根源たる大いなる闇‼?世界を暗黒に塗り潰す恐怖の化身‼?今、終焉を齎す絶望の力で、全ての希望を闇に還せ‼?降臨せよ‼?　邪神ドレッドルート‼?』
『狂気の根源たる大いなる闇‼?世界を惑わせ歪ませる狂気の化身‼?今、狂気を齎す銷魂の力で、全ての希望を狂わせろ‼?降臨せよ‼?　邪神アバター‼?』
『現れろ、ＣＮｏ．６‼?愚かなる人類を焼き尽くす裁定の巨神兵、先史遺産カオスアトランタル‼?』
『さあ、巨神の裁きを受けよ‼?ムスペルジャッジメント‼?』
「……」
「……か……遊花?」
「ひゃぅ‼?は、はい‼?」
レイナちゃんとのデュエル。
その苦い敗北の記憶を思い返して深く思考の海に沈んでいた私を呼ぶ声が聞こえ、慌てて顔を上げる。
顔を上げると、そこには心配そうな表情で私を見ている師匠と病室のベッドの上で師匠と同じ表情を浮かべている桜ちゃんの姿があった。
「大丈夫、遊花?ボーっとしてたみたいだけど疲れとか溜まってない?」
「負担かけてる俺達が言うのもなんだが、無理はよくないぞ?」
「あ、あはは、大丈夫です。ちょっと考え事をしてただけなので……心配かけちゃってごめんなさい」
心配そうな２人の表情に、私は思わず誤魔化すように胸の前でわた

わたと手を振ってから頭を下げる。
　そんな私を見て、師匠と桜ちゃんは少しホッとしたように息を吐いた。
「何でもないならいいんだ。だけど、何か気になることがあるなら相談してくれよ？」
「そうよ。ただでさえ遊花は1人で抱え込みがちなんだから」
「っ……はい、ありがとうございます。師匠、桜ちゃん」
「それで、今日の調査はどうだったんだ？」
「……すみません、今日は　手掛かりになりそうなことは
　何もなくて……」
「そっか。まぁ、毎日何か起こると決まってるわけでもないしな」
「手掛かりが掴めてないのは残念だけど、遊花に何もなかったんならいいことだわ」
　師匠と桜ちゃんの言葉に私は罪悪感を覚えながらも、それを隠すように笑顔を浮かべる。
　私を真摯に心配してくれる2人に、邪神とＣＮｏ．を操るレイナちゃんとの危険なデュエルで敗北したという事実といつの間にか手に入れていた白紙のカードについて話すことはできなかった。

ーーーーーーー

「バトル‼？　ウィンドペガサス＠イグニスターでトラミッドスフィンクスに攻撃‼？」
「攻撃力の低いモンスターで攻撃を⁉？ならそのまま返り討ちだ‼？やれ、トラミッドスフィンクス‼？スーパートラミッドウェーブ‼？」
「返り討ちにはなりません‼？自分と相手のモンスター同士が戦闘を行うダメージ計算時、速攻魔法、Ａｉ打ち‼？自分と相手のモンスター同士が戦闘を行うダメージ計算時、その自分のモンスターの攻撃力はそのダメージ計算時のみ、その相手モンスターの攻撃力と同じに

なり、そのダメージステップ終了時にその戦闘で破壊されたモンスターのコントローラーはその元々の攻撃力分のダメージを受けます!!?」
「なっ!?!?相討ち覚悟のバーン効果だとっ!?!?」

ウィンドペガサス@イグニスター
ＡＴＫ２３００→４０００

「いえ、相討ちになんかさせません!!?Ａｉ打ちのもう１つの効果!!?自分の@イグニスターモンスターが戦闘で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外する!!?」
「なっ!?!?それじゃあ俺だけがバーンダメージを!?!?」
「私が一方的にぶん護る!!?それが私のＡｉ打ちです!!?駆け抜けて、ウィンドペガサス@イグニスター!!?　スターゲイザートルネード!!?」
ウィンドペガサスが竜巻を纏いながら空を駆け、トラミッドスフィンクスに突撃し、その身体を貫く。
「戦闘破壊したことでＡｉ打ちの効果発動!!?トラミッドスフィンクスの元々の攻撃力分のダメージを与えます!!?」

男子生徒ＬＰ２４００→０

「ふぅ……私の勝ちです」
レイナちゃんとのデュエルがあった日から数日たった昼休み。
私はレイナちゃんとの件で抱えたモヤモヤとした気持ちを残したまま、普段通りに闇先パイへの挑戦権をかけたデュエルアカデミア生とのデュエルに励んでいた。
「くっ、届かなかったか……やっぱり強いんだな」
「いえいえそんな!!?私なんてまだまだで……」
『邪神アバターでジアライバルサイバース@イグニスターを攻撃!!?ダークマターマイアズマ!!?』

「っ……」
思い返されるのはレイナちゃんに敗北した記憶。
負けられないデュエルだったのに遊ばれたまま完膚なきまでに叩き潰された。
……私はまだまだ未熟だということを改めて思い知らされた。
だからこそ、ここで満足してはいけない。
私が敵わないデュエリストはきっとまだまだたくさんいる。
そしてそれは、もしかしたらレイナちゃんのような人達かも知れないのだ。
だから私は、私が護りたいと思う大切な人達を護り抜くために、もっと強くなりたい。
「……ありがとうございました!!?いいデュエルでした!!?」
「ああ、次は必ず俺が勝利してみせる」
デュエルをしていた男子生徒は私と握手をするとすぐに去っていく。
私は気持ちを切り替えるように両手で頬を叩くと、周りで待機していた人達に視線を向けた。
「さあ、次は誰が相手をしますか?」

ーーーーーーー

○

すぐに次のデュエルを始めた遊花を見て、近くで遊花のデュエルを見守っていた大地と霊華は困惑した表情を浮かべていた。
「なんか今日の遊花、焦ってないか?いつも通り楽しそうには見えるんだが、どこか……」
「鬼気迫るものを感じる」
「だよなぁ?」
いつも楽しそうにデュエルを行う遊花だが、今日はその表情に時折翳りのようなものが混ざっているのを大地達は感じていた。

「遊騎さん達になんかあったのか？」
「それはないと思う。そうだったら遊花は多分デュエルアカデミア自体を休むかもっと取り乱してると思うわ」
「前に遊騎さんと喧嘩かなんかしてた時の落ち込みようは凄かったしなぁ。じゃあ別口ってことか」
　いつもと違う遊花の様子にお互いの見解を言い合う大地と霊華。
　そんな２人に後ろから声をかける者がいた。
「九石先輩、御子神先輩。こんにちは‼？」
「息災か、〝磁石の反英雄（マグネットアンチヒーロー）〟、〝電子の巫女（エレクトロニックソーサレス）〟」
「よお、刀花に真紅。どうしたんだ？」
　かけられた声に振り向くと、教室に入ってきた刀花と真紅の姿が見えたため大地は軽く手を振って２人を呼ぶ。
　真紅の妙な呼び方については完全スルーだ。
　刀花は大地達に会釈をすると、視線を遊花に向ける。
「栗原先輩の様子を見にきたんです。昨日少し様子がおかしかったですから心配で……」
「結局何があったか教えてくれなかったしな。遊花自身よくわかってなかったみたいだし……」
「真紅もなんで倒れてたか覚えてないのよね？」
「我が真名を呼ぶな、〝電子の巫女（エレクトロニックソーサレス）〟‼？我は紅神爆牙（こうこうはくが）のアイズ・Ｄ・スカーレットだ‼？」
「スカーレットも覚えてないのよね？」
「うむ、何かがあった気はするがさっぱり記憶にない」
　呼び方を変えた途端に怪しい笑みを浮かべながら肩をすくめる真紅に苦笑いを浮かべながら、霊華も遊花に視線を向ける。
「多分遊花は何があったか知ってると思うけど……」
「遊花はすぐ自分で抱え込んじまうからな。おまけに頑固だし」
「目を覚ました時の栗原先輩の取り乱し方、凄かったですからね……本当に何も覚えてないの、真紅ちゃん？」
「だから、我が真名で呼ぶな〝深淵の話し手（アビストーカー）〟‼？何度言われようと覚えてないものは覚えてない。我とて思い出せるものなら思い出し

たいわ。我に失われし記憶が存在するなど……かっこいいが、口惜しいではないか」
　微妙な表情でそんなことを口にする真紅を見て霊華は軽く握った手を顎の下に当てて考え込む。
「失われし記憶……記憶が消える……」
『■は、あは■■は‼?■ゃ■■、■ね■ちゃ■。次■■界が■わる■にで■、ま■私■覚■ていた■会■ま■■う?あ■は■■は‼?』
「……っ」
　真紅の言葉に、霊華は頭の中にとある光景が思い浮かび、思わず表情を歪める。
「霊華?どうかしたのか?」
「……なんでもない。色々と考えこんでしまっただけ」
　大地の不思議そうな声に、霊華は自分の頭に浮かんだ光景をかき消けし、再び遊花に視線を向ける。
「……消えた記憶……この事件の先に、あなたはいるの?ねえ、ーーー?」
　呟いた霊華の声は誰に聞こえることもなく消えていった。

ーーーーーーー

★

「これで終わりです‼?ダークナイト@イグニスターでダイレクトアタック‼?ナイトエンド‼?」
「うわぁぁぁ‼?」

　下級生男子ＬＰ１５００→０

「私の勝ちです‼?」
「……参りました」
　デュエルが終わり、座り込んでいる下級生だと思われる男子生徒に

手を伸ばす。
「大丈夫ですか？」
「あ、はい‼？栗原先輩、対戦ありがとうございました‼？」
「いえ、こちらこそありがとうございました‼？いいデュエルでした‼？」
　私の手を掴んで起き上がった下級生の男の子は少し恥ずかしそうに目を逸らす。
「もっと腕を磨いたらまた挑戦させて貰います。そうしたら、また僕とデュエルしてくれますか？」
「勿論です‼？いつでも挑戦してくださいね」
　そういって私が笑うと、下級生の男の子は何故か顔を真っ赤にしながら慌てた様子で頭を下げた。
「あ、ああ、ありがとうございます‼？で、では、また‼？ありがとう、ございました‼？」
　そういうと下級生の男の子は勢いよく走り去っていった。
　どうしたんだろう？
　お昼休みもそろそろ半ばだし、お腹が空いてたのかな？
　私が首を傾げていると、背後から私に声がかかった。
「遊花‼？そろそろ休憩にしようぜ‼？」
「大地の言うとおり。そろそろ休憩した方がいい」
「大地君に霊華さん。あ、真紅ちゃんと刀花ちゃんも来てたんだ」
「お邪魔してます、栗原先輩」
「調子は良さそうではないか、”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”。流石は我が運命の好敵手‼？」
「あはは、うん、まぁ、なんとか、ね」
　マントを翻し、私を指差してポーズを取る真紅ちゃんに苦笑いを浮かべながらも、その元気そうな姿にホッとする。
　よかった、レイナちゃんの邪神を見てしまった影響は残ってないみたい。
　何度もデュエルをして自分の気持ちは整理していったつもりだけど、そこだけはとても心配していたのだ。

見るだけで相手の意識すら奪う最上級の闇のカード。
その力がどれ程のものなのか、その影響を何故か受けなかった私にはわからないから。
「そんなことより、そろそろ飯にしようぜ？早くしないと昼休みが終わっちまうしさ」
「うーん。そうだね、だけどよかったらあと1戦だけーーー」
少し考えてしまったもやもやを晴らすために思わずそんなことを口にしているとーーー
「へぇ～じゃあ次は僕ちゃんの相手をしてよ、ヒハハ‼？」
ーーー聞き覚えのある全てを嘲笑うような声が私の耳に届いた。
「っ、この声は……」
私が声をした方向を見ると、そこには眼鏡をかけた茶髪をコーンロウにした男性ーーー1学期の期末試験の最終日に私と苛烈なデュエルを繰り広げた神路祇　電二がそこにいた。
「神路祇君……」
「やぁ、虫ケラさん。相変わらず踏み潰したくなるような目障りさだねぇ、ヒハハ‼？」
滲み出る悪意を隠そうともせず私を嘲笑う神路祇君。
そんな神路祇君を厳しい表情で大地君が睨みつけた。
「何しにきたんだよ、神路祇？」
「何しにぃ～？デュエルだよ、デュエル～そんぐらいわかんないかなぁ～？そこの虫ケラさんに勝てば現世界ランキング4位の『氷の女王』に挑めるんだろう？その挑戦権をかけて僕ちゃんがデュエルを挑むのはそんなにおかしいことかね～？」
そういって神路祇君はニヤニヤと不気味な笑みを浮かべる。
「なんだこの胡散臭い奴は」
「このマナーが悪い方は栗原先輩達の知っている方ですか？」
「ん～？」
神路祇君のことを知らない真紅ちゃんと刀花ちゃんは嫌悪感を露わにした表情で神路祇君を見る。
そんな2人に神路祇君は視線を向けると、冷たい声色で吐き捨てる

ように口を開く。
「低学年の虫けら風情が何声をかけて来てんの？踏み潰すよ、君達もさぁ？」
「何だと⁉？貴様‼？」
「っ……」
「ヒハハ‼？虫ケラ風情が一丁前に怒ってんの？どうせ、叩き潰される程度の実力しかないんだから怒っちゃやーよ♪」
「コイツ‼？」
「待って、真紅ちゃん‼？」
「”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”‼？何故止める⁉？」
神路祇君の挑発に一歩踏み出した真紅ちゃんを慌てて止める。
相手を蔑んで挑発するのは神路祇君の十八番だ。
冷静さを欠いて神路祇君の挑発に乗るのはどう考えてもいい予感がしない。
「私とデュエルをしにきたんですよね？なら、望み通り相手になります」
「へぇ～虫ケラさんの癖に随分粋がってるじゃないの。世界ランキング上位のデュエリストに認められてるからって調子に乗ってる訳？」
「お好きなように解釈してください。私はただ、挑まれたデュエルは受けるだけです」
「ヒハハハ‼？上等上等‼？それぐらいじゃないと叩き潰しがいがないからねぇ～」
私達はデュエルディスクを起動して向かい合う。
何が目的かはわからないけど、このデュエル、負ける訳にはいかない‼？
「いきます‼？」
「ヒハハハ‼？叩き潰してやるよぉ‼？」
『決闘‼？』

遊花　ＬＰ８０００
電二　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は私です!!?」

神路祇君のデッキはカード破壊が得意な甲虫装機（インゼクター）と守備表示のモンスターに対して効果を発揮する電子光虫（デジタルバグ）の混合デッキだったハズ。

中途半端な守りだと簡単に崩される……早めに防御を固めておかないと。

「手札のクリボーンを捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動!!?デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚します!!?」

「ヒヒヒ、ならそれにチェーンして、手札から増殖するGを捨てて効果発動だよ〜!!?」

「うえっ!!?」

「同名カードの効果は1ターンに1度しか使用できず、この効果は相手ターンでも発動できる。このカードを手札から墓地へ送り、このターン、相手がモンスターの特殊召喚に成功する度に、自分はデッキから1枚ドローしなければならないのさ!!?」

「っ、手札増強の手札誘発モンスター……!!?」

神路祇君が手札を1枚墓地に送ると、神路祇君の墓地から蠢く黒い影と光る眼がこちらを見る。

「ひぅっ!!?」

無理無理無理!!?アレだけは何回見ても無理だよ!!?

しかも、効果自体も非常に強力だ。

このまま私が構わずモンスターを展開してしまえば神路祇君の手札は一気に増えてしまう。

後攻ならそれでも攻め切るために展開してもよかったかも知れないけど、先攻の私は攻撃できないため展開してしまったら次の神路祇君のターンにどれほどのことをされてしまうか分からない。

「うっ、ワンフォーワンの効果で私はデッキからミスティックパイパーを特殊召喚!!?」

「ヒヒヒ、なら増殖するGの効果で1枚ドローだ!!?」

〈ミスティックパイパー〉☆1　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

現れたのはフルートのようなものを弾いている男の人。
増殖するＧを使われている現状を踏まえると今の手札で防御を固めることは難しい
だから、君の効果に任せるよ、ミスティックパイパー。
そんな私にミスティックパイパーは任せろというようにサムズアップをした。
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを1枚ドローします!!?そしてこの効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル1モンスターだった場合、自分はカードをもう1枚ドローします!!?」
ミスティックパイパーが姿を消し、私はカードをドローする。
「私が引いたのはクリビー!!?レベル1モンスターなのでもう1枚ドローします!!?よし、さらに私はクリバンデッドを召喚します!!?」

〈クリバンデッド〉☆3　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

私の前に現れたのは盗賊のような姿をした黒い毛玉のモンスター。
「ヒヒヒ、面倒なカードが出てきたね～」
「私はカードを1枚伏せて、エンドフェイズにーーー」
「ヒヒヒ、まぁ焦るなよ。デュエルはまだ始まったばかりなんだからさぁ!!?　僕ちゃんの墓地に存在する増殖するＧと君の墓地のクリボーンを対象に手札から騎甲虫（ビートルーパー）スティンギーランスの効果発動!!?」
「えっ!!?　騎甲虫（ビートルーパー）?」
未知のカードの存在に驚いていると神路祇君は嘲るような表情で私を見た。

「前と同じデッキだと思ったぁ？進化してるのは君だけじゃないんだよぉ‼？同名カードは1ターンに1度、？自分・相手のメインフェイズに、自分の墓地の昆虫族モンスター1体と相手の墓地のモンスター1体を対象としてこのカードを手札から特殊召喚し、対象のモンスターを持ち主のデッキの一番下に戻す‼？出ておいで、騎甲虫スティンギーランス‼？」

〈騎甲虫スティンギーランス〉☆7　昆虫族　風属性
ＡＴＫ２４００

フィールドに現れたのは鎧を纏った巨大な蜂に乗った２つの槍を手にした騎士の姿をした虫人。

「っ、クリボーンがデッキの下に……」

「君のデッキのそのカードは面倒だからねぇ。邪魔くさいから消させて貰ったよ。さらに騎甲虫スティンギーランスの効果発動‼？同名カードは1ターンに1度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合にデッキからビートルーパー魔法・罠カード1枚を手札に加える‼？僕ちゃんはデッキからフィールド魔法、騎甲虫隊（ビートルーパー）戦術機動（フォーメーション）を手札に加えるぅ‼？」

「っ、エンドフェイズ、クリバンデッドの効果発動‼？このカードをリリースしてデッキの上から5枚めくり、その中から魔法・罠カード1枚を手札に加えて残りを墓地におきます」

ぴょんぴょん跳ねていたクリバンデッドの姿が消える。

その代わりに私はデッキの上から5枚のカードをめくって中から1枚のカードを手札に加えた。

「私は魔法カード、Ａｉラブ融合を手札に加えてターンエンドです‼？」

遊花　ＬＰ８０００　手札３
ー－▲－－　ー
－－－－－

ー　　ー
ーー○ーー
ーーーーー　ー
電二　ＬＰ８０００　手札５

「ヒヒヒ、僕ちゃんのターン、ドロー‼？いいカードを引いてるみたいだねぇ。だけど、無駄ァ‼？まずはフィールド魔法、騎甲虫隊戦術機動を発動‼？」
神路祇君がフィールド魔法を発動する時、周りが緑溢れる戦場に変わる。
「そして魔法カード、手札抹殺‼？お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローする‼？僕ちゃんは４枚、君は３枚捨ててドローだ‼？」
「っ、せっかく加えた手札が……」
「さらにさらに、手札から捨てられたゴキポールの効果発動‼？このカードが墓地へ送られた場合にデッキからレベル４の昆虫族モンスター１体を手札に加える。この効果で通常モンスターを手札に加えた場合、さらにそのモンスターを手札から特殊召喚でき、その後、この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力以上の攻撃力を持つ、フィールドのモンスター１体を選んで破壊できる。まぁ、君のフィールドにモンスターはいないけどぉ、モンスターは特殊召喚できるからねぇ。僕ちゃんはデッキからゴキボールを特殊召喚‼？」
「ひぅっ‼？」
〈ゴキボール〉☆４　昆虫族　地属性
ＡＴＫ１２００
フィールドに現れたのはどう見ても台所に出没してカサカサと動く黒いアレ。
前回のデュエルでも見たけど、やっぱりアレはちょっと無理だよ‼？

そして神路祇君は手を前にかざす。
「犇めきあえ‼？光を呑み込むサーキット‼？」
「っ、リンク召喚……」
「召喚条件は昆虫族モンスター２体‼？僕ちゃんはゴキボールと騎甲虫スティンギーランスをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？リンク２‼？　騎甲虫アームドホーン（ビートルーパー）‼？」

〈騎甲虫アームドホーン〉ＬＩＮＫ２　昆虫族　地属性
ＡＴＫ１０００　→←

ゴキボールとスティンギーランスがいなくなり、代わりに現れたのは鎧を纏ったカブトムシに乗ったカブトムシの騎士。
「さらに騎甲虫アームドホーンの効果発動‼？同名カードは１ターンに１度、自分メインフェイズに昆虫族モンスター１体を召喚する‼？おいで、　甲虫装機ダンセル（インゼクター）‼？」

〈甲虫装機ダンセル〉☆３　昆虫族　闇属性
ＡＴＫ１０００

現れたのは虫を模した赤い装甲を纏い、片手に銃を持っているモンスター。
「っ、そのモンスターは……」
「さぁ、楽しい　蹂躙劇（パーティー）の始まりだ‼？　甲虫装機ダンセルの効果発動‼？１ターンに１度、自分メインフェイズに自分の手札・墓地から甲虫装機モンスター１体を選び、装備カード扱いとしてこのカードに装備する‼？僕ちゃんはさっきの手札抹殺で墓地にいった甲虫装機ホーネット（インゼクター）を甲虫装機ダンセルに装備するよ～」

甲虫装機ダンセル　☆６→３
ＡＴＫ２０００→１０００

墓地に存在していたホーネットから蜂を模した銃がダンセルに装着される。
　ということはーーー
「そして装備カードとなった甲虫装機ホーネットの効果発動!!?モンスターに装備されているこのカードを墓地へ送り、フィールドのカード1枚を対象として破壊する!!?その後ろのセットカードを破壊させて貰おうか!!?スティンガースパーク!!?」
「っ、カウンターゲートが……」
　ダンセルがホーネットから渡された銃を構え、私のセットカードに向けて砲撃し、セットカードを跡形もなく消しとばす。
　その砲撃でエネルギーが切れたのか、銃は機能を停止し、消滅した。

甲虫装機ダンセル　☆6→3
ＡＴＫ２０００→１０００

「ヒハハハ!!?ナイスショット!!?甲虫装機　ダンセルの効果発動!!?このカードが自分フィールドに存在し、このカードに装備されたカードが自分の墓地へ送られた場合、デッキから甲虫装機　ダンセル以外の甲虫装機モンスター1体を特殊召喚する!!?現れろ、甲虫装機センチピード(インゼクター)!!?」

〈甲虫装機センチピード〉☆3　昆虫族　闇属性
ＡＴＫ１６００

　現れたのは百足を模した茶色の装甲を纏ったモンスター。
「さてさて、本当ならセンチピードにホーネットを装備……って言いたいところだけど、すでに君のフィールドは焼け野原。特に装備する意味がないんだよねぇ～」
「……」
「だ・か・ら、次はこうさせて貰おうかなぁ!!?　僕ちゃんは

電子光虫（デジタルバグ）―ＬＥＤバグを召喚‼?」

〈電子光虫―ＬＥＤバグ〉☆３　昆虫族　光属性
ＡＴＫ５００

現れたのは電子の身体を持つテントウムシのようなモンスター。
「さらにさらに、自分が昆虫族・レベル３モンスターの召喚に成功した時、手札から　電子光虫（デジタルバグ）―レジストライダーの効果発動‼?自分が昆虫族・レベル３モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚し、その後、このカードとそのモンスターのレベルを５または７にできる‼?現れろ、電子光虫―レジストライダー‼?」

〈電子光虫―レジストライダー〉☆３　昆虫族　光属性
ＡＴＫ１０００

さらにＬＥＤバグに寄り添うように電子の身体を持つアメンボが姿を現す。
「そして電子光虫―ＬＥＤバグと電子光虫―レジストライダーを７に変更する‼?」

電子光虫―ＬＥＤバグ
☆３→７

電子光虫―レジストライダー
☆３→７

「レベル７モンスターが２体……‼?」
「おおっとご期待のとこ悪いがまだエクシーズ召喚にはいかないよぉ。電子光虫―レジストライダーの効果発動‼?このカードが手札から特殊召喚に成功した場合、自分フィールドの昆虫族モンスター１体を選んで表示形式を変更する‼?　僕ちゃんは電子光虫―ＬＥ

Ｄバグを守備表示に変更だぁ‼?」

電子光虫―ＬＥＤバグ
ＡＴＫ５００↓ＤＥＦ０

「そして表示形式が変更されたことで電子光虫―ＬＥＤバグの効果発動‼?１ターンに１度、表側攻撃表示のこのカードが守備表示になった時、デッキから昆虫族・レベル３モンスター１体を手札に加える‼?僕ちゃんはデッキから　騎甲虫（ビートルーパー）スケイルボムを手札に加えるぅ‼?」

「っ、また騎甲虫が手札に……」

「そして僕ちゃんは昆虫族・光属性のレベル７モンスター２体以上、電子光虫―ＬＥＤバグと電子光虫―レジストライダーでオーバーレイ。２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼?」

ＬＥＤバグとレジストライダーが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして渦が爆けると次に現れたのは電子的な身体を持つカブトムシのようなモンスター。

「現れろ‼?電子を統べる孤高の王者‼?ランク７、　電子光虫（デジタルバグ）―ライノセバス‼?」

〈電子光虫―ライノセバス〉★７　昆虫族　光属性
ＡＴＫ２６００

「っ、ライノセバス……‼?」

「そうそう、君が苦手としている貫通効果を持つライノセバスちゃんだよーん。し・か・も、今回はオプション増し増しさ‼?オーバーレイユニットとなった電子光虫―ＬＥＤバグと電子光虫―レジストライダーにより電子光虫―ライノセバスは更なる効果を得る‼?　電子光虫―ＬＥＤバグをオーバーレイユニットとしてエクシーズ召喚

したため、このカードが戦闘でモンスターを破壊した時に自分はデッキから1枚ドローし、電子光虫―レジストライダーをオーバーレイユニットとしてエクシーズ召喚したため、このカードの攻撃力・守備力は１０００ポイントアップする‼?」

電子光虫―ライノセバス
ＡＴＫ２６００→３６００　ＤＥＦ２２００→３２００

「攻撃力３６００のライノセバス⁉?」
「さらにさらにぃ、自分フィールドに昆虫族モンスターが召喚・特殊召喚された場合に、手札の騎甲虫スケイルボムの効果発動‼?このカードを手札から特殊召喚する‼?おいで、騎甲虫スケイルボム」

〈騎甲虫スケイルボム〉☆３　昆虫族　炎属性
ＤＥＦ２０００

フィールドに現れたのは巨大な蝶の上に乗り、松明を持った虫人のモンスター。
そして神路祇君は再び正面に手をかざす。
「ヒヒヒ、どんどん行くよぉ?犇めきあえ‼?光を呑み込むサーキット‼?」
「っ、またリンク召喚ですか……」
神路祇君の前に再びサーキットが現れる。
「召喚条件は昆虫族モンスター２体‼?僕ちゃんは甲虫装機ダンセルと甲虫装機センチピードをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?リンク召喚‼?リンク２‼?　甲虫装機ピコファレーナ‼?」

〈甲虫装機ピコファレーナ〉ＬＩＮＫ２　昆虫族　闇属性
ＡＴＫ１０００　↙?↘?

ダンセルとセンチピードがサーキットに消え、代わりに蛾を模したピンク色の装甲を纏い、リボンを手に持ったモンスターが現れる。
「甲虫装機ピコファレーナの効果発動!!?インゼクターフォーゼ!!?このカードがリンク召喚に成功した場合、手札を1枚捨て、このカード以外の自分フィールドの昆虫族モンスター1体を対象としてデッキから昆虫族モンスター1体を攻撃力・守備力500ポイントアップの装備カード扱いとして対象のモンスターに装備する!!?俺は手札を1枚捨ててデッキから騎甲虫スケイルボムに共振虫(レゾナンスインセクト)を装備!!?」
ピコファレーナがリボンを振るうと、どこからか鈴虫のモンスターが現れ、スケイルボムの乗っている蝶に掴まれる。

騎甲虫スケイルボム
ＡＴＫ１０００→１５００　ＤＥＦ２０００→２５００

「更に甲虫装機ピコファレーナの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度自分の墓地の昆虫族モンスター3体を対象としてそのモンスターをデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから1枚ドローする!!?僕ちゃんは墓地のゴキボール、ゴキポール、甲虫装機ダンセルをデッキに戻して1枚ドロー!!?そしてえ、犇めきあえ!!?光を呑み込むサーキット!!?」
「っ!?!?連続リンク召喚!?!?」
神路祇君の目の前にこのターン3度目のサーキットが現れる。
「虫けらの君の戦術を真似してるみたいで気分が悪いが、君を叩き潰すためならなんだってやってやるさ!!?召喚条件は昆虫族モンスター2体以上!!?僕ちゃんは騎甲虫アームドホーンと甲虫装機ピコファレーナをそれぞれ2体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
「っ!?!?リンク4の大型モンスター!?!?」
アームドホーンとピコファレーナが2体に分身してサーキットに吸い込まれていく。

そしてサーキットが光り輝くとサーキットの中から現れたのは巨大な櫓に何体もの甲虫騎士を背に乗せ、悠々と闊歩する蒼の巨大甲虫。
「リンク召喚!!?全次元を捻じ伏せる無敵の大甲虫!!?リンク４!!?
大騎甲虫（ビートルーパー）インヴィンシブルアトラス!!?」
〈大騎甲虫インヴィンシブルアトラス〉ＬＩＮＫ　４　昆虫族　地属性
ＡＴＫ３０００　↑→←↓
「リンク４の大騎甲虫!!?」
「驚いてるところ悪いが、まだまだ終わらないぜぇ？君に味わわされた屈辱は、こんなものじゃ返しきれないんだからさぁ!!?僕ちゃんは共振虫を装備している騎甲虫スケイルボムをリリース!!?　装備カードを装備した自分の守備力２０００以上の昆虫族モンスター１体をリリースした場合にＥＸデッキからこのモンスターを特殊召喚できる!!?共振虫を喰らえ、騎甲虫スケイルボム!!?」
神路祇君の声を聞き、スケイルボムの乗っていた蝶の目が怪しく光ったかと思うと掴んでいた共振虫に喰らい付いた。
「えっ!?」
喰らいつかれた共振虫は悲鳴を上げるが、それに構うことなく蝶は共振虫を喰らいつくしていき、その身体が歪に変化しながら膨れ上がっていく。
突如蝶の身体が膨れ上がったことで背中に乗っていたスケイルボムが振り落とされると、変異した蝶は今度はスケイルボムに視線を向け、鳴き声を上げながらスケイルボムに喰らいつく。
スケイルボムは必死に逃げ出そうとするが、変異して巨大化していく蝶に押し潰され、断末魔の悲鳴をあげながら喰われていく。
「ひっ!?」
「うわぁぁぁぁぁ!?」
「そんな、酷い……」

あまりの凄惨な光景に見学していた他の生徒達も目を逸らしたり、悲鳴や嗚咽を漏らす。
そんな中、神路祇君は心底楽しそうな歓喜の声を上げる。
「ヒハハハハハ!!?喰らえ喰らえ!!?全てを喰らい尽くせ!!?　生きる意味も、死ぬ訳も、蠱毒の　壺(なか)では見出せない!!?響く　呪詛(ひめい)も喰らい尽くし、その身は蠱毒となり、災禍に変わる!!?」
スケイルボムを喰らい尽くした蝶が鳴き声を上げると、蝶の身体がどんどん変貌していく。
身体は緑に染まり、巨大な牙と角が生え、腕は血のように赤黒染まり、綺麗だった蝶の羽根も変貌した身体のように変化し、緑と赤黒い羽根に変わり肥大化していく。
肥大化が止まると、蝶は世界を呪い尽くすような新たな産声を上げた。
「これこそ、人の業と弱肉強食の世界が産みし呪法!!?蠱毒より溢れ出た災禍!!?完全態グレートインセクト!!?」
〈完全態グレートインセクト〉☆9　昆虫族　地属性
ＡＴＫ３０００
「昆虫族の大型融合モンスター!?こんなモンスターまで……!!?」
「ヒハハハハハ!!?さぁ、まだまだ　蹂躙劇(パーティー)は始まったばっかりだ!!?楽しんでいこうぜぃ!!?フィールドから墓地に送られた共振虫の効果発動!!?　このカードがフィールドから墓地へ送られた場合にデッキからレベル５以上の昆虫族モンスター１体を手札に加える!!?　僕ちゃんが手札に加えるのは　重騎甲虫(ビートルーパー)マイティネプチューン!!?」
「大型の重騎甲虫が手札に……」
「ヒヒヒヒヒ!!?まだ、まだだぁ!!?もっと面白いものを君に見せてやるよぉ!!?フィールド魔法、騎甲虫隊戦術機動の効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、自分の墓地のビートルーパーモンスター１

体を対象としてそのモンスターを特殊召喚し、自分はその元々の攻撃力分のライフポイントを失う。ただし、この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン攻撃できないけどね。墓地より甦れ、騎甲虫（ビートルーパー）スカウトバギー!!?」

〈騎甲虫スカウトバギー〉☆3　昆虫族　風属性
ＡＴＫ１０００

電二　ＬＰ８０００→７０００

フィールドに現れたのは巨大なテントウムシの上に乗り、槍を持った虫人のモンスター。
「騎甲虫スカウトバギーの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合に自分の手札・デッキ・墓地から同名カード1体を選んで特殊召喚する!!?デッキから現れろ、2体目の騎甲虫スカウトバギー!!?」

〈騎甲虫スカウトバギー〉☆3　昆虫族　風属性
ＡＴＫ１０００

「レベル3モンスターが2体……」
「ヒハハハハ!!?さぁ、これで準備は整った!!?君を痛めつけ、這い蹲らせる、地獄の嬉遊曲（ディベルティメント）の準備がなぁ!!?」
「嬉遊曲?」
そういって神路祇君は不気味な笑みを浮かべてスカウトバギー達に手をかざす。
その瞬間、神路祇君の身体から大量の闇が溢れ出し、感じたことのある嫌な気配が教室を満たしていく。
「っ!?この気配……まさか!?」
「僕ちゃんはレベル3、騎甲虫スカウトバギー2体でオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エク

シーズ召喚!!?」
スカウトバギー達が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
渦が爆けると、そこに現れたのは呪われし闇に身体を染め上げ、巨大な羽根に血の赤を纏う蝉の王。
「地の底に眠りし呪われし演奏家よ!!?今こそ長き眠りより目覚め、呪われた旋律で悲鳴の嬉遊曲を奏でよ!!?現れろ!!?Ｎｏ．３　地獄蝉王ローカストキング!!?」

〈Ｎｏ．３　地獄蝉王ローカストキング〉★３　昆虫族　地属性
ＡＴＫ１２００

「やっぱり……Ｎｏ．!!?」
「Ｎｏ．……だとぉ!!?」
「あれって栗原先輩がこの前戦ってた闇のカードと同じ種類の……じゃあ、あの人も闇のカードに操られてるんですか!!?」
「闇のカード!!?じゃああれが遊花達が言ってた奴なのか!!?」
「すごく嫌な波動を感じる……あのカードはマズい」
神路祇君のフィールドに現れたローカストキングに私達は驚愕の表情を浮かべる。
そんな私達を見て、神路祇君は意外そうな表情を浮かべる。
「へぇ～君達　も闇のカードのことを知ってるのか……なら都合がいいなぁ」
「えっ!!?」
今の言葉、まさか神路祇君は……!!?
私が神路祇君の言葉から感じた違和感を口に出すると、神路祇君はいやらしい笑みを浮かべると右手をローカストキングにかざして告げる。
「さぁ、悲鳴のオーケストラの始まりだぁ!!?　鳴け、Ｎｏ．３　地獄蝉王ローカストキング!!?」
神路祇君の言葉を受けたローカストキングは身体を縮こまらせる

とけたたましい音で鳴き始めた。
「っ、すごい音……」
「くっ、耳障りな地獄の狂詩曲（ヘルラプソディ）を奏でおって……!!?」
「耳が、痛いです……」
「あぁーもう、うるせぇな!!?」
ローカストキングが奏でるあまりの音の大きさに私達は耳を塞ぐ。
デュエルを続けれないわけじゃないけど、この音量の中デュエルを続けるのは地味にキツい。
だけど、異変はそれだけじゃなかった。
「うっ、あああああ!!?」
「霊華さん!!?どうしたんですか!!?」
「頭が……割れそう……うぁぁ!!?」
「おい!!?霊華、しっかりしろ!!?」
私達の側にいた霊華さんは耳を抑えながらその場に崩れ落ち、苦しそうにその場を転がる。
いや、変化が起きているのは霊華さんだけじゃなかった。
「いやぁぁぁぁぁ!!?」
「んぎゃあああ!!?」
「頭が、頭が割れるぅぅぅ!!?」
同じ教室の中で私と神路祇君のデュエルを見ていた人達も霊華さんと同じように苦しそうに教室の中をのたうち回っている。
「っ!!?まさか、この音って闇のカードの攻撃と同じ……!!?」
「ヒハハハハ!!?泣け泣け!!?無様に地面を這いずり回れ、虫ケラ共が!!?ヒハハハハハハハ!!?」
パニックが起こっている教室の中で神路祇君が狂ったように笑う。
だけど、神路祇君のこの感じは……
「ぐっ、うぅぅ!!?」
「っ、真紅ちゃん!!?刀花ちゃん!!?大地君!!?霊華さんとこの教室で苦しんでる人達を連れて、この羽音が聞こえない場所まで急いで避難して!!?後誰もこの教室に近づかせないように、お願い!!?」
「”小さな聖域（リトルサンクチュアリガーディアン）の守護女神”!!?」

私は何故かローカストキングの被害を受けていない真紅ちゃん達に指示を出す。
この状況は危険だ。
少なくとも、今影響を受けている霊華さん達をこの状況に置いておくと何が起こるかわからない。
「私が動いたら多分、Ｎｏ．３　地獄蝉王ローカストキングもついてきちゃう。この音がどこまで響いてるか分からない以上ここから移動するのも危険なの。だから、私はここでデュエルを続ける‼?」
「しかしーーー」
真紅ちゃんが戸惑った表情を浮かべるが、刀花ちゃんと大地君は苦い表情を浮かべながらも頷いた。
「わかりました。栗原先輩、ご武運を」
「任せたぜ、霊華達のことは俺達に任せろ‼?」
「”深淵の話し手（アビストーカー）”⁉?だが……」
「真紅ちゃん。今ここにいても私達が栗原先輩のデュエルに対してできることはないの。それに、このままだと闇のカードの力を受けてる御子神先輩や他の人達に何が起こるかわからない。悔しいけど、私達にできるのは栗原先輩の邪魔にならないように他の人を連れて避難することだけなんだよ」
「っ、無様を晒したら許さんからな‼?貴様は我の好敵手なのだから‼?……えぇい‼?何をしている‼?　”小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）”の邪魔にならぬよう、全員、疾く失せよ‼?」
苦虫を噛み潰したような表情を浮かべながら真紅ちゃんは苦しんでる人達に手を貸しながら教室から出て行く。
真紅ちゃん達の声かけを受け、苦しんでいる人達はふらつきながらも教室から逃げ出していく。
しばらくすると、私と神路祇君以外の全ての人が教室からいなくなった。
「ヒハハハハ‼?あー笑った笑った。虫ケラ達が逃げ出すのはいつ見ても滑稽で面白いねぇ」
「っ、神路祇君……」

不気味な表情で笑い続ける神路祇君の姿に怒りを覚えながらも、冷静に声をかける。
「神路祇君……あなたは闇のカードに操られていませんね？」
「あん？そんなの当たり前じゃん。こんなのに操られるなんて虫ケラぐらいだよ。ヒハハ‼？」
そういって楽しげに神路祇君は笑う。
「全く、天才カードデザイナー様々ってねぇ。まさかこんな凄い力を持ったカードをポンっとくれるなんてねぇ」
「っ⁉？……神路祇君は天神先生の協力者なんですか？」
私の質問に神路祇君は少し驚いた表情を浮かべたが、すぐにその表情を楽しそうに歪ませた。
「へぇ、虫ケラの癖にあの天才カードデザイナー様の裏の顔を知ってるとはねぇ」
「じゃあやっぱりあなたは……‼？」
「そう、僕ちゃんは選ばれたのさ‼？闇のカードを使って虫ケラを支配する捕食者にねぇ‼？ヒハハハハ‼？」
そういって神路祇君は悪意を隠しもしない笑みで嘲笑う。
「いやぁ、全く僕ちゃんの才能は恐ろしいねぇ。こんな危ない代物を簡単に扱えちゃうんだからさぁ。他の　学年のトップ１０の奴らは簡単に操られちゃったのにさぁ‼？ヒャハハ‼？」
「っ‼？」
神路祇君の言葉に私は心臓が掴まれたかのような感覚がした。
今の言葉が意味することはーーー
「そうそう、確か闇のカードに操られちゃった虫ケラさんたちの中には君のお友達もいたっけなぁ。確か……桜糀　紅葉、だったかなぁ？」
「っ、やっぱり紅葉さんを攫ったのはあなた達なんですか⁉？紅葉さんをどこにやったんですか‼？」
紅葉さんの名前が出てきたことに動揺した私が思わず問い詰めると、神路祇君は悪辣な笑みを深めながらも惚けるように顎に握り拳を当てて考え込むような仕草を見せる。

「う～ん、どこにいったかなぁ～僕ちゃんは虫ケラさんのことはよく覚えてないんだよねぇ～ヒハハ‼？」
「っ、ふざけないでーーー」
「ヒハハハハ‼？そう怒りなさんなって、どの道……君は僕ちゃんにここで叩き潰されて二度と会うことはないんだからさぁ‼？」
「っ‼？」
　そういうと神路祇君は血走った眼で私を睨みつけながら楽しそうに笑った。
「さあて、せっかく現れた僕ちゃんの王様だ。たっぷりと着飾ってあげないとねぇ‼？まずは墓地に存在する騎甲虫スティンギーランス、共振虫、騎甲虫スケイルボムを除外し、墓地の騎甲虫アームドホーンの効果発動‼？このカードが墓地に存在する場合、自分の墓地からこのカード以外の昆虫族モンスター3体を除外してこのカードを特殊召喚する‼？ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外されるけどねぇ。甦れ、騎甲虫アームドホーン‼？」

〈騎甲虫アームドホーン〉ＬＩＮＫ２　昆虫族　地属性
ＡＴＫ１０００　→←

「さらに除外された共振虫の効果発動‼？　このカードが除外された場合、デッキから同名カード以外の昆虫族モンスター1体を墓地へ送る‼？僕ちゃんはデッキから昆虫機甲鎧（バイオインセクトアーマー）を墓地へ送るよぉ。さらに騎甲虫アームドホーンをリリースし、大騎甲虫インヴィンシブルアトラスの効果発動‼？アトラスライフ‼？自分フィールドの昆虫族モンスター1体をリリースし、2つの効果から1つを選んで発動できる‼？デッキからビートルーパーモンスター1体を特殊召喚するかこのカードの攻撃力はターン終了時まで２０００ポイントアップする‼？僕ちゃんは1つ目の効果でデッキから再び現れろ、騎甲虫スティンギーランス‼？」

〈騎甲虫スティンギーランス〉☆7　昆虫族　風属性
ＡＴＫ２４００

「騎甲虫スティンギーランスの効果発動!!?僕ちゃんはデッキからカウンター罠、騎甲虫（ビートルーパー）空殺舞隊（フロートスティング）を手札に加えるぅ!!?」
「カウンター罠まで手札に……!!?」
「さあ、王が鎧を纏う時だぁ!!?墓地に存在する昆虫機甲鎧の効果発動!!?同名カードは1ターンに1度このカードが手札・墓地に存在し、自分フィールドに同名カードが存在しない場合、自分フィールドの昆虫族モンスター1体を対象としてこのカードを装備カード扱いとしてそのモンスターに装備する!!?ただし、このカード及びこの効果でこのカードを装備したモンスターは、フィールドから離れた場合に除外される。Ｎｏ．３　地獄蝉王ローカストキングに昆虫機甲鎧を装備!!?王の鎧となれ、昆虫機甲鎧!!?」
　墓地から火炎放射器を背負ったバッタの鎧が現れると、鎧のパーツが分離し、ローカストキングに装着されていく。
　腕にはバッタの爪、羽根には棘付き肩パッド、背中には火炎放射器が装着され、最後にバッタの顔が仮面のようにローカストキングに装着されると、バッタの複眼が怪しく光る。
「さぁ、祝え!!?全ての虫ケラを踏み潰し、悲鳴を齎す地獄の王者!!?その名もＮｏ．３　地獄蝉王ローカストキング・昆虫機甲鎧!!?また1つ、地獄を統治する力を継承した瞬間だぁ!!?」
「Ｎｏ．３　地獄蝉王ローカストキング・昆虫機甲鎧……」
　昆虫機甲鎧を纏ったローカストキングの身体から大量の闇が溢れ出す。
　なんだか、あまりよくない気がする。
「さぁ、僕ちゃんの力をたっぷり味わいなぁ!!?バトル!!?そしてバトルフェイズに入ったこの瞬間、昆虫機甲鎧の効果が起動する!!?昆虫機甲鎧を装備したモンスターはお互いのバトルフェイズ及びメインフェイズ2の間、攻撃力が１５００ポイントアップし、守備力が２０００ポイントアップする!!?」

「っ、能力アップの鎧……!!?」

Ｎｏ．３　地獄蝉王ローカストキング
ＡＴＫ１２００→２７００　ＤＥＦ２５００→４５００

「ヒハハハハ!!?どうだい?まさに王の力と呼ぶに相応しい鎧だろう?その力、たっぷり味わいなぁ!!?　Ｎｏ．３　地獄蝉王ローカストキングでダイレクトアタック!!?バイオレンスデスビート!!?」

ローカストキングの羽根が振動し、不愉快な音が響くと背中の火炎放射器にエネルギーが充填されていく。

強化された闇のカードの攻撃を直接受けるのはマズい……なら!!?

「通しません!!?手札からクリボールの効果を発動!!?スピンショット!!?相手モンスターの攻撃宣言時、そのモンスターを守備表示にします!!?」

ローカストキングの背負った火炎放射器から黒炎溢れ出しそうになったとき、手札から現れたクリボールが回転しながらローカストキングが背負っている火炎放射器に突撃し、それにより火炎放射器の射線が上に逸れる。

射線が逸れたその瞬間、火炎放射器から黒炎が放たれ、騎甲虫隊戦術機動の立体映像を穿ち、その先にあるデュエルアカデミアの天井を文字通り焼き払った。

Ｎｏ．３　地獄蝉王ローカストキング
ＡＴＫ２７００→ＤＥＦ４５００

「あーらら、派手にやっちゃったねぇ。ヒハハハハ!!?」

「っ、火が……!!?」

闇のカードであるローカストキングの攻撃により、立体映像が貼り付けられていた教室の天井が吹き飛び、放たれた黒炎が燃え上がり、火の気が回りはじめる。

火が上がったことで教室のスプリンクラーが作動するが、闇のカードによって生み出された炎のせいか全然勢いが弱まる気配がない。
このままデュエルを続けたら私達まで焼け焦げちゃう!!?
「神路祇君!!?デュエルは中止です!!?このままじゃーーー」
「はぁ?止めるわけないだろぉ?こっちは元々君を叩き潰し、復讐するためにきてるんだからさぁ!!?　寧ろ丁度いいぐらいさぁ!!?まさにデス☆ゲーム!!?ヒハハハハ!!?」
「っ!?!?」
神路祇君の目に宿る明確な殺意に私は思わず息を呑む。
本気だ。
本気で神路祇君は私を殺そうとしている。
今までだって同じように命をかけたデュエルはしてきた。
それでも、こんな自分の身すら危ぶまれる状況で迷いなく殺意を叩きつけられたのは初めてだ。
その事実に、私の身体が僅かに震える。
そんな私を見て、神路祇君は殺意の宿った瞳で狂ったように笑う。
「ヒハハハハ!!?いいねぇ、いいねぇ!!?君のその顔が見たかったぁ!!?僕ちゃんに怯えるその顔がぁ!!?ヒハハハハ!!?その表情、もっともっと見せてくれよぉ!!?そしてぇ、なによりぃ、Ｎｏ．３　地獄蝉王ローカストキングを守備表示にしたのは悪手だぁ!!?　Ｎｏ．３　地獄蝉王ローカストキングの効果発動!!?コーリングデスゲート!!?同名カードは1ターンに1度、このカードの表示形式が変更された場合、自分の手札・墓地から昆虫族モンスター1体を選んで守備表示で特殊召喚するぅ!!?」
「表示形式の変更で発動する効果!?!?」
「甦れ、甲虫装機センチピード!!?」

〈甲虫装機センチピード〉☆３　昆虫族　闇属性
ＤＥＦ１２００

ローカストキングが羽根を揺らし、鳴り響く音に釣られて墓地から

再びセンチピードが姿を現す。
「さぁ、まだまだ攻撃は終わってないぜぇ？大騎甲虫インヴィンシブルアトラスでダイレクトアタック‼？アイギスアサルト‼？」
「きゃっ‼？」

遊花　ＬＰ８０００→５０００

インヴィンシブルアトラスの巨体が私を跳ね飛ばし、私のライフを削る。
それを見て神路祇君はいやらしい笑みを浮かべて嘲笑う。
「おいおい、どうしたどうしたぁ‼？この程度の攻撃を受けちゃって、〝小さな聖域の守護女神（リトルサンクチュアリガーディアン）〟なんて大層な異名がついた防御力はどうしたのさぁ‼？ヒハハハハ‼？」
「これは……必要なダメージです‼？墓地に存在するＥＭ（エンタメイト）クラシックリボーの効果発動‼？同名カードは１ターンに１度、このカードが墓地に存在し、自分が戦闘ダメージを受けた時、このカードを自分のペンデュラムゾーンに置きます‼？」
「っ‼？へぇ～」
墓地から音符のついた指揮棒を持ち、マントを羽織った茶色い毛玉のようなモンスターが現れて空に浮かび上がると、クラシックリボーの周りから光の柱が立ち上り、下に８の数字が現れる。
「ペンデュラムモンスターねぇ～なら、そんなちっぽけな雑魚で何ができるか見せて見なよ‼？電子光虫―ライノセバスでダイレクトアタック‼？ライノプラズマ‼？」
ライノセバスから私に向かって雷が放たれる。
「相手モンスターの直接攻撃宣言時、ＥＭクラシックリボーのペンデュラム効果発動‼？　相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードは破壊されます‼？」
「はぁ？」
光の柱が砕け、その中から飛び出したクラシックリボーが私の正面に現れる。

「さらにＥＭクラシックリボーの効果発動⁉？エンドオブオラトリオ⁉？このカードが自身のペンデュラム効果によって破壊された場合、バトルフェイズを終了します⁉？」
「っ⁉？成る程ねぇ」
　クラシックリボーが指揮棒を振ると、私の正面に音波でできた障壁が現れて、ライノセバスの雷を受け止め、消滅させた。
「そしてバトルフェイズ終了時⁉？　自分フィールドにカードが存在しない場合、手札から罠発動⁉？拮抗勝負⁉？」
「っ⁉？手札から罠だとぉ⁉？」
「このカードは相手フィールドのカードの数が自分フィールドのカードの数より多い場合、自分・相手のバトルフェイズ終了時に発動できる⁉？自分フィールドのカードの数と同じになるように、相手はフィールドのカードを裏側表示で除外しなければならない⁉？」
「何っ⁉？馬鹿なぁ僕ちゃんの最強の布陣が消し飛ばされるだとぉ⁉？」
　私が発動した拮抗勝負を見て神路祇君は目を見開く。
　相手の布陣が強力である程、拮抗勝負で受けるダメージは大きくなる。
　これでローカストキングを処理できるかはわからないけど、これで神路祇君のモンスターが少しでも減れば状況が楽にーーー
「馬鹿なぁ、そんな馬鹿なぁ……なーんちゃってぇ☆」
「っ⁉？」
「そんなことだろうと思ってたぜぇ。そして僕ちゃんは、運がいい⁉？ライフポイントを半分払い、手札から罠発動⁉？カウンター罠⁉？レッドリブート⁉？」
「っ⁉？レッドリブート⁉？」

　電二　ＬＰ７０００→３５００

「相手が罠カードを発動した時に発動できる⁉？その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする⁉？その後相手はデッキから罠

カード1枚を選んで自分の魔法＆罠ゾーンにセットできる……最もこのカード発動後、ターン終了時まで罠カードは発動できないけどね……なーんてな、ヒハハハハ‼?」

「っ……」

その言葉期末試験の時に私が神路祇君とのデュエルの最終局面で言った言葉。

まさかそれをこの状況で返されるなんて……しかも、神路祇君のフィールドには蘇生されたセンチピード、そして墓地にはホーネットがいる。

間違いなく拮抗勝負はこのターン中に破壊されてしまう。

なら、私が打てる次の手は……‼?

「私はデッキから裁きの天秤をセットします‼?」

「っ‼?成る程ねぇ。転んでもただでは起きないかぁ……拮抗勝負を破壊しないと次のターンには僕ちゃんのフィールドはズタボロにされる……だけど、裁きの天秤が残れば僕ちゃんのフィールドが整ってるおかげで大量にドローできるってわけ……ヒハハハハ‼?やるねぇ、流石は僕ちゃんを1度倒した虫ケラさん‼?……パナい、ムカつく」

裁きの天秤をセットした私を見て神路祇君は一瞬真顔になったが、すぐに悪辣な笑みを浮かべなおした。

「まぁ、いいよ。それぐらい許してあげるさ。足掻けば足掻くほど、絶望って言うのは深くなるんだからさぁ‼?メインフェイズ2‼?甲虫装機センチピードの効果発動‼?1ターンに1度、自分メインフェイズに自分の手札・墓地から甲虫装機モンスター1体を選び、装備カード扱いとしてこのカードに装備する‼?僕ちゃんは墓地から甲虫装機ホーネットを甲虫装機センチピードに装備するよ～」

再びホーネットが現れ、センチピードに自分の銃を手渡す。

甲虫装機センチピード　☆3→6

ＡＴＫ１６００→２１００

そしてセンチピードはその銃を私のセットカードに向ける。
「さあ、再び装備カードとなった甲虫装機ホーネットの効果発動!!?このカードを墓地に送り、拮抗勝負は破壊だ!!?スティンガースパーク!!?」

甲虫装機センチピード　☆6→3
ＡＴＫ２１００→１６００

「っ!!?」
「ヒハハハハ!!?拮抗勝負、爆☆散☆!!?そしてここからは拮抗しない　一方的な勝負さ!!?さらに甲虫装機センチピードの効果発動!!?このカードが自分フィールドに存在し、このカードに装備されたカードが自分の墓地へ送られた場合、デッキから甲虫装機カード１枚を手札に加える。僕ちゃんが手札に加えるのは甲虫装機ダンセルだぁ!!?」
「っ、またダンセルが手札に……」
「まだ終わらないよぉ?・・・

ターが存在する限り、相手はこのカードを攻撃対象に選択できない。
虫忍　ハガクレミノのリンク先には大騎甲虫インヴィンシブルアトラスがいるから大騎甲虫インヴィンシブルアトラスがいる限り、コイツは攻撃できないよぉ？まぁ、大騎甲虫インヴィンシブルアトラスも永続効果、インビシブルオーラによってリンク召喚されたこのカードの攻撃力が３０００以下の場合、相手の効果の対象にならず、相手の効果では破壊されないからそう簡単にはやられないんだけどねぇ。ヒハハハハ‼？」
「っ、あの攻撃力でそんな耐性まであるんですか……」
「まぁ、虫忍　ハガクレミノ自体はフィールドを空けるためのおまけだけどねぇ。本命はこっちさ‼？　除外されている自分の昆虫族モンスター３体をデッキに戻した場合にこのカードは特殊召喚できる‼？除外されている騎甲虫スティンギーランス、共振虫、騎甲虫スケイルボムをデッキに戻し、　現れろ、重騎甲虫マイティネプチューン‼？」

〈重騎甲虫マイティネプチューン〉☆８　昆虫族　地属性
ＡＴＫ３０００

現れたのは巨大な櫓に何体もの甲虫騎士を背に乗せ、悠々と闊歩する碧の巨大甲虫。
「っ、さっきサーチした重騎甲虫……‼？」
「カードを１枚伏せて、エンドフェイズに重騎甲虫マイティネプチューンの効果発動‼？ネプチューンシュトローム‼？　エンドフェイズに、このカード以外の自分フィールドの昆虫族モンスター１体を対象としてそのモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする‼？対象は勿論、Ｎｏ．３　地獄蝉王ローカストキング‼？」
「っ‼？」
「エンドフェイズになったから昆虫機甲鎧の効果は切れちまうが、重騎甲虫マイティネプチューンで最強の昆虫王者に育て上げてやるぜぇ‼？ヒハハハハ‼？」

Ｎｏ．３　地獄蝉王ローカストキング
ＡＴＫ２７００→１２００→２２００　ＤＥＦ４５００→２５００

遊花　ＬＰ５０００　手札１
ー　ー　ー　▲　ー　　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
　　☆　　ー
○□☆○○
ー△▲ー　　▽
電二　ＬＰ３５００　手札１

「私のターン、ドロー……っ!!?」
ローカストキング・昆虫機甲鎧の攻撃で燃え上がった炎が少しずつ広がり、教室を侵食していき熱風が私の身体に吹き付ける。
逃げようにも前方はローカストキングを従えている神路祇君で後方は炎が広がり始めているため逃げ場がない。
早く決着をつけて脱出しないと!!?
「まずは手札を１枚墓地に送り墓地に存在するジェットシンクロンの効果発動!!?手札を１枚墓地に送り、墓地からこのカードを特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合、除外されます!!?」
「へぇ～そいつが墓地に落ちてたか」
「さらにその効果にチェーンしてリバースカードオープン!!?　罠発動!!?裁きの天秤!!?相手フィールドのカードの数が自分の手札・フィールドのカードの合計数より多い場合に発動でき、自分はその差の数だけデッキからドローします!!?神路祇君のフィールドのカードは９枚、私は裁きの天秤と手札１枚の２枚。その差分の７枚のカードをドローします!!?」
「チッ、洒落臭いことしてくれるねぇ」

「そして、おいで、ジェットシンクロン!!?」

〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

現れたのは小さなジェット機のような機械のモンスター。
手札は一気に増えた。
だけど、神路祇君には未知の大型モンスターで埋め尽くされている。
なら、少しでも数を減らさないと!!?
「行くよ、導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「へぇ～リンク召喚か」
私の正面に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はトークン以外のレベル1モンスター1体!!?私はジェットシンクロンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?相手を捕える深淵の邪眼!!?リンク1!!?サクリファイスアニマ!!?」

〈サクリファイスアニマ〉ＬＩＮＫ1　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０　→

ライノセバスの目の前に怪しげな邪眼を持つモンスターが現れる。
「サクリファイスアニマの効果発動!!?コネクトアブソープション!!?1ターンに1度このカードのリンク先の表側表示モンスター1体を対象にその表側表示モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップします!!?対象は電子光虫―ライノセバス!!?吸い込んじゃって、サクリファイスアニマ!!?」
アニマの目の上にある空間からライノセバスを吸い込むように風が生み出される。
しかし、そんなアニマを嘲笑うかのように神路祇君は手を翳す。

「成る程成る程。虫ケラさんなりに僕ちゃんのモンスターを吸収して利用しようって訳ねぇ……だけど、舐めてんじゃねぇ!!?」
「っ!!?」
「Ｎｏ．３　地獄蝉王ローカストキングの効果発動!!?アイスクリームラプソディ!!?」
「あ、アイスクリームラプソディ?」
　冗談のような効果名に私は首を傾げるが、そんな私を嘲笑うかのように、羽根を広げたローカストキングを見ながら神路祇君は声をあげる。
「食べ物のアイスクリームだと思ったぁ?ヒハハハハ!!?教養が足りないねぇ虫ケラさん。これは食べ物のアイスクリームじゃない……アイ・スクリーム。つまり、『私は悲鳴をあげた』って意味なのさぁ!!?」
「っ!!?」
「ヒハハハハ!!?さぁ、泣き叫べ、Ｎｏ．３　地獄蝉王ローカストキング!!?同名カードは1ターンに1度、フィールドのモンスターの効果が発動した時、このカードのオーバーレイユニットを1つ取り除き、そのモンスター1体を対象としてそのモンスターの効果を無効にするぅ!!?」
「効果無効!!?」
　ローカストキングは再び身体を縮こまらせるとけたたましい音で鳴き始め、その羽根から生み出された振動波がアニマが生み出した空間を打ち消し、そのままアニマが吹き飛ばされた。
「うっ、またこの音、耳が……」
「更にぃ、その後、フィールドの昆虫族モンスター1体を選び、守備力を５００ポイントアップするか、表示形式を変更するぅ!!?僕ちゃんは前者の効果でＮｏ．３　地獄蝉王ローカストキングの守備力を５００ポイントアップするぅ!!?」

Ｎｏ．３　地獄蝉王ローカストキング
ＤＥＦ２５００→３０００

「またＮｏ．３　地獄蝉王ローカストキングが強化されて……」
「ご協力ありがとさんってかぁ‼?ヒハハハハ‼?」
「っ……だけど、これでＮｏ．３　地獄蝉王ローカストキングの効果は使わせました‼?　私は天輪の葬送士を召喚‼?」

〈天輪の葬送士〉☆1　天使族　光属性
ＡＴＫ０

フィールドに現れたのは銀色の棺の身体を持つモンスター。
「天輪の葬送士の効果発動‼?このカードが召喚に成功した時、自分の墓地の光属性・レベル1モンスター1体を対象としてその光属性モンスターを特殊召喚します‼?私は墓地からクリボルトをーーー」
「ヒハハハハ‼?　無駄無駄無駄ぁ‼?チェーンしてリバースカードオープン‼?カウンター罠発動‼?　騎甲虫空殺舞隊‼?同名カードは1ターンに1度、自分フィールドにビートルーパーモンスターが存在し、相手がモンスターの効果を発動した時、その発動を無効にし破壊するぅ‼?」
「効果無効のカウンター罠⁉?」
「クリボルトには前に舐めた真似されたからねぇ。今度は蘇る前に棺桶ごと爆破してやるよぉ‼?」
葬送士が自分の腕で棺を開けようとした瞬間、空からスケイルボムとスティンギーランスが現れ、葬送士の頭上から爆薬を落とし、葬送士を爆殺した。
「さぁ、召喚権も使っちゃったぜ?どうする虫ケラさんよぉ‼?」
「っ……まだ、行けます‼?　魔法カード、Ａｉラブ融合を発動‼?自分の手札・フィールドから、サイバース族の融合モンスターによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚する‼?さらに自分の@イグニスターモンスターを融合素材とする場合、相手フィールドのリンクモンスターも1体まで融合素材とする事ができる‼?私は手札のドシン

@イグニスターと神路祇君の大騎甲虫インヴィンシブルアトラスを融合!!?」
「僕ちゃんのリンクモンスターを使って融合召喚だとぉ!!?」
フィールドにハートの形をした時空の裂け目が現れ、その中に手札から現れた土で出来たブロックの身体を持つモンスターとインヴィンシブルアトラスが吸い込まれていく。
「愛に生きる大地の精霊よ!!? 無敵の甲虫と交わりて、愛を守護する巨人となれ!!?融合召喚!!?」
時空の裂け目が光り輝くと、土の身体を持つ巨大なゴーレムが時空の裂け目から舞い降り、土煙を上げた。
「心優しき 大地(ガイア)の巨人!!?アースゴーレム@イグニスター!!?」

〈アースゴーレム@イグニスター〉☆7 サイバース族 地属性
ＡＴＫ２３００

「アースゴーレム@イグニスターの効果発動!!?シュープリームブルク!!?このカードが融合召喚に成功したターン、自分が受ける全てのダメージは0になる!!?」
アースゴーレムが私に手をかざすと私を守るように土の防壁が現れる。
「ハッ!!?そんな泥人形が1体出たところでこの状況をどうにかできるのかなぁ?」
「やってみせます!!?バトル!!?」
「ならバトルフェイズ開始時に、電子光虫―ライノセバスの効果発動!!?ライノスライス!!?オーバーレイユニットを1つ使うことで相手フィールドで守備力が1番高いモンスターを破壊するぅ!!?いくら電気を通さない土塊だろうと、大地を穿つ雷には耐えられない!!?」
ライノセバスが斬撃のような雷を放ちアースゴーレムを焼き払い、斬り刻む。
「ヒハハハハ!!?あっさりご退場だねぇ」

「いえ、まだ終わってません‼？　速攻魔法、Ａｉドリングボーン‼？同名カードは１ターンに１度、自分の墓地の@イグニスターモンスター１体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する‼？ただし、この効果の発動後、ターン終了時まで自分はサイバース族モンスターしか特殊召喚できません‼？」
「チッ、速攻魔法の蘇生手段を持っていたか」
「蘇って、心優しき大地の巨人‼？アースゴーレム@イグニスター‼？」

〈アースゴーレム@イグニスター〉☆７　サイバース族　地属性
ＡＴＫ２３００

「ここで決めます‼？　アースゴーレム@イグニスターで虫忍　ハガクレミノを攻撃‼？」
「っ‼？大騎甲虫インヴィンシブルアトラスがいなくなり攻撃可能になった虫忍　ハガクレミノを狙ってきたって訳かぁ……ヒハ……冗談だろう？……また俺が負ける？」
アースゴーレムがハガクレミノに向かって振るう拳をみて神路祇君が呆然としながら口を開く
神路祇君のライフポイントはフィールド魔法、騎甲虫隊戦術機動の効果とレッドリブートで削れて残３５００。
そしてアースゴーレムにはＥＸデッキから特殊召喚されたモンスターを攻撃するダメージステップの間、攻撃力を元々の攻撃力分アップする効果、ガイアフォースがある。
ハガクレミノの攻撃力は１０００。
ガイアフォースによって強化されるアースゴーレムの攻撃力は４６００。
３６００のダメージで私の勝ち‼？
……後方から感じる炎の熱とローカストキングという闇のカードとの対時に焦る私は、決着を焦るあまり自分の視界を狭めてしまった。

だからこそーーー
「こんな……こんな、雑魚決闘者に……負ける訳ないんだよぉぉぉ!!?」
「っ!??」
ーーー見逃してしまう……神路祇君が浮かべる呆然とした表情に紛れた悪辣な笑みを。
「完全態グレートインセクトの効果発動ぅぅぅ!!?フィールドゾーンに表側表示でカードが存在する場合、自分・相手のバトルフェイズに1度、相手フィールドのモンスターを全て破壊するぅぅぅ!!?」
「こ、ここでバトルフェイズに使える全体破壊効果っ!??」
「ヒハハハハ!!?全て溶けて爛れて壊れろ!!?ヴェノムパーフェクトストーム!!?」
グレートインセクトが羽根を羽ばたかせると、羽根から紫色の鱗粉が撒き散らされる。
紫色の鱗粉に触れたアースゴーレムとアニマの身体が溶け出し、そのまま崩れ落ちて消滅した。
「アースゴーレム@イグニスター!!?サクリファイスアニマ!!?……っ、メインフェイズ2、私はカードを3枚伏せてターンエンドですっ!!?」
「ヒハハハハ!!?残念!!?無念!!?また次回ってか!!?まぁ、お前はここで終わりだがなぁ!!?ヒハハハハ!!?」
焼け落ちていく教室の中に神路祇君の声が響く。
強力な全体破壊効果を持つモンスターに効果を無効化するＮｏ：。
更に神路祇君のフィールドにいるモンスターはどれも強力な攻撃力を持っている。
攻撃力が低いモンスター達を並べてモンスター効果を活かして戦うという私のデュエルスタイルの弱点をここまで狙われたことは初めてだ。
おまけに教室の天井から広がる炎はどんどん勢いを増している。
教室が燃え尽き、私達の身体を焼き尽くすというタイムリミットがある中でこの不利な状況。

一体どうやって攻略すればいいの？

遊花　ＬＰ５０００　手札２
丨▲▲▲丨　　丨
丨丨丨丨丨
　　丨　　丨
○□☆○○
丨△丨丨丨　　▽
電二　ＬＰ３５００　手札１

番外編

番外編１　ゴーストリックオアトリート

☆

「トリックオアトリート、だよ‼?」

１０月３１日。

公園での清掃中、そんな声と共にいきなり目の前にマントを羽織り、カボチャを被って顔を隠した不審者が現れた。

それを見て、俺は躊躇わずに携帯端末を取り出し、電話をかける。

「もしもし、デュエルセキュリティですか?」

「にょわぁ～‼?通報は勘弁してくだせぇ‼?わちきが悪うござんした‼?」

「……だから突拍子もないことは止めろと言ってるだろうが」

必死に土下座をしているカボチャを被って顔を隠した不審者ーーー声と反応からして間違いなく美傘であろう人物に、俺は呆れた表情を浮かべる。

そんな俺に美傘は慌てた様子で口を開く。

「そんなことより通報は‼?私捕まっちゃう‼?」

「ばーか。今更この程度のお前の奇行なんざで通報なんかするか」

「で、でも、今電話して……」

酷く狼狽えている美傘に、俺は携帯端末を渡す。

そこに表示されているのはーーー

『現在、ケルンにて、注意報は発令されておりません』

「て、天気予報……よ、よかった～」

へなへなと崩れ落ちる美傘に、俺はニヤリと笑って見せた。

「これに懲りたら少しは突拍子もないことは控えるんだな。ああ、そうだ。トリックオアトリート、だっけ?お前はお菓子とか持ってなさそうだから、これが悪戯な」

「うぅ～完全にしてやられたよ～遊騎さんを驚かせようと思ったのに～」
そういって悔しそうな声を出す美傘の格好を改めて見返す。
マントを羽織り、カボチャを被ってるこの仮装は恐らくーーー
「ゴーストリックランタンか」
「うぅ～仮装まで完璧に見破られてる……」
「弟子が使ってるモンスターぐらい覚えてて当然だろ」
ゴーストリックランタンは遊花も使っているファンシーな見た目をした幽霊・妖怪・怪物などをモチーフとしたゴーストリックというカテゴリーのモンスターだ。
ゴーストリックの名前の由来は　Ｇｈｏｓｔ（ゴースト）と　ｔｒｉｃｋ（トリック）を組み合わせたもので、意味としては、”幽霊による悪意のない悪戯”といったところか。
その姿は確かに今日という日の仮装には持ってこいだろう。
１０月３１日。
世間一般でハロウィンと呼ばれている日だ。
元々は古代ケルトかなんかの収穫祭だとか宗教的な行事とかのハズだが、現代では民間行事の一種となり、子供達がオバケの仮装なんかをしてお菓子を貰うものになっている。
勿論、このケルンでもハロウィンは行われており、街はハロウィンの色一色だ。
「はっ‼?遊騎さん、私トリックオアトリートって言ったよ‼?何もないなら悪戯させてーーー」
「ほら、これでいいか」
美傘の手の平に、ポケットからチョコレートを出して手渡す。
それを見て、美傘がわなわなと震えはじめる。
「な、なんでお菓子なんて持ってるの⁉?」
「ハロウィンの飾り付けを見ていたらお前が来るような気がしてな。一応保険として用意しておいた。何する気だったか知らんが、それぐらいのお前の動きは読めるぞ」
「むぅ～‼?」

悔しそうに唸る美傘を見て、ほくそ笑む。
驚かせることが好きな美傘がハロウィンなんて大義名分を得て悪戯を出来る機会を逃すわけがない。
それぐらいの予想は当然できる。
「というか、いい加減その頭のカボチャを取れ。お前の奇行に慣れている俺だから笑い話で済んでいるが、他の奴からみたら完全に不審者だから本当に通報されても知らんぞ？」
「それは困る‼？というわけで、遊騎さん、このカボチャ取って？さっきは仮装のためって言って、公園にいた吸血鬼の仮装みたいなのをしてた女の子につけて貰ったんだけど、自分じゃ外せなくて……」
「なんて傍迷惑なことをしてるんだよ……んじゃ、取るぞ？」
「おうともさ‼？」
「……はぁ～」
ため息を吐きながら美傘の頭に付いているカボチャを取る。
カボチャの中から現れたのは勿論美傘……なのだが、何故かドヤ顔をしており、頭には猫耳がついていた。
「どう？驚いた？驚いた？ゴーストリックランタンからゴーストリックの猫娘にシフトチェンジだよ‼？」
「ベタすぎる、５点」
「にゃうぅ～評価が辛辣だよ～」
思わず真顔で評価を告げる俺に、美傘は半泣きになって再び崩れ落ちるのだった。

ーーーーーーー

「……はぁ～なんか無駄に疲れたな」
仕事が終わり、少し寄り道をしながら、遊花達が待っているであろう栗原家に帰っていく。
結局あの後、美傘はすぐ仕事があるからとテレビ局の方に向かっていった。
どうやら本当に俺に悪戯をしたいが為に公園に寄ったらしい。

相変わらず、アイツは何がしたいのかよく分からないな。
そんな取り留めもないことを考えている内に栗原家に着く。
……何だかもう帰ってくるのが当然みたいな感じになっている気がする。
おかしい、一時の仮宿のつもりだったのにいつからこうなってしまったのだろう？
だが、今でもケルンはプロリーグの真っ最中の為、空き家や空き部屋の類は存在しないだろう。
……それに、今更出て行くとなると本気で遊花に泣かれる気がする。
それは流石に心苦しいので遠慮したい。
「毒されてるのかな、俺」
苦笑しながら栗原家の玄関を開ける。
家の中に入るとリビングの方から遊花達の話し声が聞こえてきた。
『さ、桜ちゃん、流石にこの格好は恥ずかしいんだけど……』
『ん～似合ってはいるんだけど、遊花の性格的に少し難しいか』
『うぅ～それって褒めてるの？似合ってるって言われてもあんまり嬉しくないよ……』
『遊花は普段から大人し過ぎるのよ。だからたまには大胆な格好をしてみるのもいいんじゃない？』
『桜ちゃんは自分が着てないからそんなこと言えるんだよ……スカート短いし……なんか透けてるし……あぅ』
リビングの方から遊花の恥ずかしそうな声が聞こえてくる。
一体リビングで何をしてるんだ？
不思議に思いながら、玄関を上がってリビングの扉を開ける。
「ただいま。何してるんーーー」
「やっぱりこんな派手なの、私には無理だよぅ……大体、見せパンを履くのが前提の衣装なんて、師匠の前じゃ着られな……い……」
リビングの中に入ると、黒いシルクハットを被り、ゴスロリ風の黒いドレスに身を包んだ遊花と目が合った。
シルクハットにはうさぎの髪飾りと羽根飾りがつけられ、黒のドレ

スは背中に白い羽根がついており、サイズが合っていないのか遊花の豊満な身体をぴっちりと浮き上がらせている。
薄紫のスカートは少し透けて水色の下着が見えており、普段の遊花からは考えられないぐらい全体的に派手な衣装に、思わず目を疑ってしまう。
そして遊花のこの格好、どこかで見覚えがある。
確か、遊花が使っているモンスターの1体の……
「……ゴーストリックの駄天使？」
「っ～～～‼？」
「あっ、悪い‼？」
俺が思わず呟くと、遊花は顔を真っ赤にし、声にならない叫び声をあげながら身体を隠すようにしゃがみ込む。
俺も衝撃的な光景から我に返ると、遊花を見ないように後ろを向いてそのままリビングを出る。
『ふ、ふぇぇぇ～‼？見られた……師匠に見られた～～～‼？もうやだぁ……おうちかえるぅ……』
『ちょっ、落ち着きなさいって‼？というかアンタの家はここでしょうが‼？』
ドタバタと物音が聞こえてくるリビングを背後に俺は深くため息を吐く。
「……間違いない、今日は厄日だ」
そんな俺の呟きは、リビングの喧騒に呑まれるのだった。

ーーーーーーー

★

「すまん‼？遊花」
「い、いえいえ‼？あまり気にしないでください……リビングで着替えていた私も悪いですし……でも、出来れば先程のことは忘れて欲しいです。その、大変お見苦しいものをお見せしてしまいましたの

で……あは、あはは」
「見苦しくは……いや、なんでもない。本当にすまなかった」
「いえ、私の方こそごめんなさいでした」
師匠に恥ずかしい仮装姿を見られてから数分後。
私は他の服に着替えて苦笑を浮かべながら、師匠とお互いに頭を下げあっていた。
私の言葉に師匠は何かを言おうとしたようだが、微妙な表情を浮かべながら口を噤むことにしたようだ。
私としても、その方がありがたい。
さっきの格好について言及されちゃうと、恥ずかしさで死んでしまいそうだから。
「全く、そんなんだからアンタは冤罪を受けたりするのよ。少しは注意しなさいよね」
「いや、本当に返す言葉もない……」
「師匠は悪くないですよ‼?それに、桜ちゃん?元々は誰のせいだと思ってるの?嫌だって言ったのにあの衣装を私に着させたの、桜ちゃんだよね?」
「……さあ、覚えがないわね?」
私の言葉に桜ちゃんがサッと目を逸らす。
そんな桜ちゃんをジト目で見ていると、師匠が頭を掻きながら口を開く。
「そもそも、なんで遊花達は仮装なんてしてたんだ?あんな衣装、遊花達が持ってたとはとても思えないんだが……」
「それは、その、実は先程、リーネさんが訪ねて来まして……」
「リーネが?」
リーネさんの名前が出たことで師匠が不思議そうに首を傾げる。
「はい。何でも闇先パイにこの近くのショッピングモールで今日の夜に行われるハロウィンイベントのお仕事が急に入ってきたらしくて……」
「当日にって、本当に急な話だな……まあ、リーネのことだから考えも無しに受けたんだろうが……」

「あ、あはは……それで時間が惜しいので使えそうな衣装のいくつかを全て持ってきたらしく。その際に、せっかくのハロウィンなんだし、後日回収にくるから後学の為に闇先パイが着ないもの、着れないものは好きに使ってくれって言われまして……」
「せっかくだから着てみていた、と。だから、今の遊花達の格好もその衣装ってわけか」
遊騎さんが納得したような表情を浮かべながら、私達の姿を見る。
私も桜ちゃんも、今着ている服はリーネさんが持ってきたハロウィンで使う仮装用の衣装だ。
私の衣装は水色のドレスに水色のストローハットがセットになっているもので、ゴーストリックの人形の衣装らしい。
桜ちゃんの衣装は黒のとんがり帽子に黒のローブとドレスがセットになっている、ゴーストリックの魔女の衣装だ。
私達の衣装を見た師匠は呆れたようなジト目で桜ちゃんを見る。
「というか、お前は遊花にあんな衣装を進めておきながら自分は無難なものを選んでるのかよ」
「うぐっ‼?・そ、それはほら、私だとサイズが合わないし‼?・」
「ほう、ならサイズがあれば着るわけか?・何なら今からお前に合うものをリーネに用意して貰うが……」
「ぐ、ぐぬぬぬぬ……わ、悪かったわよ。悪ふざけが過ぎだわ……ゴメンね、遊花」
「うん、もういいよ。だけど、恥ずかしかったから、次は止めてね?・」
苦笑しながら、申し訳なさそうに顔を伏せる桜ちゃんを許す。
桜ちゃんだって悪気があったわけじゃないと思うし、師匠に見られたのはちょっと恥ずかしかったけど、謝ってくれるなら許してもいいよね?
「それで、なんかゴーストリックの衣装が多いみたいだが、結局闇は何を着ていったんだ?・」
「えっと、確か肌寒いからってマフラーと着物がセットになっていたもので……確かゴーストリックの雪女だったかと……」
「……納得した。流石は『氷の女王』だな」

「やっぱりそう思うわよね」
「闇先パイのことを知っていると余計にそう思ってしまいますよね」
　白い着物に身を包み、頭には雪の結晶をイメージしたカチューシャをつけ、マフラーを巻いて口元を隠し、急にお仕事が入ったことでいつも以上に無表情でお仕事に向かった闇先パイの姿を思い返し、私達は思わず顔を見合わせて頷き合う。
　闇先パイのことを思い返し、なんとも言えない空気を払拭するように師匠は明るい声で手に持っていた袋を私達に見せる。
「ま、まあ、闇がいないのは予想外だったが、せっかくのハロウィンなんだから俺達は俺達で楽しむとしよう」
「師匠、その袋は？」
「ああ、帰り際にちょっと寄り道してな。せっかくのハロウィンなんだから、遊花達にお菓子でも買ってきてやろうと思ってさ」
「ちょ、ちょっと待ちなさい‼？まさかその袋って、超人気洋菓子店の『魔導人形（マドルチェティーブレイク）の小休止』のものじゃない‼？」
「ええっ⁉？あの『魔導人形の小休止』⁉？」
「ん、２人共知ってるのか？」
「あんな有名店知らないわけないでしょうが‼？」
　驚く私達を見て、師匠は首を傾げる。
『魔導人形の小休止』というのはケルンで１番人気の洋菓子店だ。
　人気商品はチョコレートケーキの上にカスタードプディングが乗っている『プディンセス・ショコアラモード』。
　それ以外にも様々な種類の洋菓子を取り扱っており、あまりの美味しさにケルンの外からも買いに来る人がいて全ての商品が連日完売になる程の超有名店なのだ。
　そんなところのお菓子をなんで師匠が？
「まあ、知ってるなら話は早いか。『Ｔｒｕｍｐｆｋａｒｔｅ』にいた時に闇やリーネにせがまれてよく買いに行ってたからあそこのオーナーとは顔見知りでな。闇やリーネへの差し入れだっていって用意して貰ったんだ」
「そ、それを私達が食べるのは不味いんじゃ……」

「別に嘘はついてないぜ？闇には帰ってきたらやるつもりだし、リーネには今度持ってくつもりだからな。それにオーナーにも今闇達が教えている未来のプロ決闘者の為に少し多めに欲しいと頼んだら快く用意してくれたからな。気にする必要はない」
「き、気にする必要はないって……というか、お金‼？お金はどうしたのよ‼？あのお店のお菓子結構高いのよ‼？」
「お前、元とはいえ世界ランキングに入ってたプロ決闘者の収入を舐めすぎだぞ。辞めてるとはいえ高級菓子を少し買ったぐらいで生活に困るわけあるか。そもそも、プロ決闘者辞めてからまともな仕事にほとんどつけてないのに2年間俺が生活自体に困っていなかったのがその証拠だろうが」
「あ……」
師匠の言葉に私は思わずハッとする。
そ、そういえば前に師匠は仕事を探してるのは働かないのは気分的に良くないからとか言ってた気がする。
それに、私の家に住まない場合はしばらくホテル暮らしをするとか言っていたけど、ケルンのホテルって結構高いところが多いし……
「だから、これぐらいでいちいち気にするな。特に遊花には住むところを用意して貰ってるんだし、デュエルのこと以外でもこれぐらいはさせてくれ。それでも気に病むなら、修行を頑張ってるご褒美だと思ってくれ」
「し、師匠……あ、ありがとうございます‼？」
「ほ、本当にいいのね？後で駄目って言っても知らないわよ？」
「言わねえよそんなの。まあ気にせずに食べてくれ。なんか新作の『プティンセスール』とかいうお菓子の感想も頼まれたしな」
「はぅ‼？そ、そんなものまであるんですか‼？」
「ははは、やっぱり女の子ってのはお菓子が好きなんだな」
驚く私を見て、微笑ましいものを見るような目で師匠が私を見る。
そういえば、前にもこんなことがあったような……
「……」
「ん、遊花？」

「ふぇ⁉?あ、あーえっと、どんなのがあるんでしょう?師匠、開けて貰っていいですか?」
「……ああ、好きなものを選べよ」
私は頭に浮かんだもやもやを振り払うように師匠が買ってきてくれたお菓子に目をやる。
そんな私を、師匠が心配そうな目で見ていたことに、私は気づかなかった。

ーーーーーーー

☆

『それで、ちゃんと私の分のお菓子は残ってる?』
「残ってるから心配すんなって。それで、イベントの方はいつまでかかりそうなんだ?」
夕食が終わり、遊花達がリビングで買ってきたお菓子を食べている間に、俺は2階にあるベランダに移動して闇に連絡を取っていた。
闇が帰ってくるまでは栗原家の鍵を開けておく必要があるが、遊花達は明日もデュエルアカデミアがあるため、起きているなら俺が適任だ。
だからこそ、闇がいつ頃に帰ってくるのかを把握しておいた方が予定は立てやすい。
『ん、一応終了時刻は22時になってるから、後1時間ぐらい?そこから後片付けとかも含めるから23時ぐらいになりそう』
「そうか……遅くまでご苦労様だな。分かってるとは思うが、最近何かと物騒だから気をつけて帰ってこいよ?」
『ふふ、心配してくれてるの?』
「当たり前だろうが」
『むふー……嬉しい。でも、大丈夫。社長に車で送って貰うから。そうじゃないとお菓子が持って帰れない』
「そっちでもお菓子を貰ってるんじゃないか」

『どういう訳か会場を歩いてるとみんながお菓子を渡してくる』
「仮装した子供と間違えられてるんだろ」
『解せぬ』
闇の不服そうな声が端末越しに聞こえてきて、思わず苦笑してしまう。
本当に、いつまでたっても変わらないな、闇は。
『？遊騎、何かあった？』
おまけに、相変わらず勘も凄まじく鋭い。
直接顔を合わせていないってのにこれだもんな。
「まあ、何かあったかと聞かれればあったな」
さっき、新作のお菓子の話をした後に遊花が一瞬だけ見せた辛そうな表情。
そんな予兆は何処にもなく、あまりにも急な変化から考えられるのは多分遊花の過去に関連したことなんだろう。
あの一瞬で遊花が何を感じたのかは俺には分からない。
だけど……
「まあ、闇が気にする程のことじゃない。俺がなんとかするさ」
『……ん、そっか。なら安心』
端末越しに、闇の本当に安堵したような声が聞こえてくる。
そんな闇の全幅の信頼に思わず苦笑する。
だけど、やっぱり遊花のあんな表情はほっとけない。
こんなんだからお人好しなんて言われるんだろうな。
それでも、俺は遊花の師匠だから……
「それじゃあ切るぜ。イベント、頑張れよ」
『ん、遊騎も頑張って』
「おう」
そういって闇との通話を切る。
すると、誰かが登ってきたのか階段の方で足音が聞こえた。
階段の方に視線をやると、しばらくして2階に姿を現したのは遊花だった。
遊花はベランダに俺がいることが分かると、少し駆け足になりなが

ら近付いてきた。
「闇先パイとのお電話、終わりましたか？」
「ああ、たった今な。帰ってくるのは２３時ぐらいになるらしい。とりあえず闇が帰ってくるまでは俺が起きておくから、遊花達は安心して寝てくれ」
「ありがとうございます。今、桜ちゃんがお風呂に入っているので、桜ちゃんがお風呂から出たら私も入ってから寝ようと思います」
「そっか。んじゃ、今少し話しておくかな」
「はい？お話、ですか？」
　遊花が不思議そうに首を傾げる。
　そんな遊花の顔を曇らせるのは本位ではないが、俺は少し真剣な表情で口を開く。
「その、さっきさ。新作のお菓子の話をしてた時、一瞬辛そうな顔してただろ？」
「っ‼？えっと、あの、それは……」
「いや、別に言いたくないならいいんだ。ただちょっと気になってさ。遊花が忘れてくれって言うなら忘れるから、気にしないでくれ」
　そんな俺の言葉に遊花は少し逡巡してから、俯き気味の上目遣いで俺を見た。
「……それじゃあ、その、少しだけお話を聞いて貰ってもいいですか？」
「ああ、勿論だ」
「ありがとうございます、師匠」
　遊花はそういうと、ベランダから外の風景を眺めながらぽつぽつと話はじめた。
「その、ですね。師匠が買ってきてくれたお菓子を見ていたら、私が小さかった頃に家族でしたハロウィンのことを思い出したんです」
「遊花が小さかった頃の？」
「はい。家の中でハロウィンの飾り付けをして、両親と私の３人しかいないささやかなハロウィンでしたけど、両親はたくさんのお菓子を私に買ってきてくれながら、『いたずらだよ』って、私をぎゅ～って抱

きしめてくれたんです」
　遊花はそっと目を閉じながら、両親との思い出を語る。
　その声色は本当に懐かしむようで、それでいてどこか物寂しい。
「だから、師匠が買ってきてくれた沢山のお菓子を見て、その時のことを思い出しちゃいました。あはは、ダメですよね、私。いつまでも過去に囚われてばっかりで。前を向くって、決めたのに……」
　そういって寂しそうに笑う遊花に、俺は努めて明るい声色で口を開いた。
「そういえば、遊花には言ってなかった」
「えっ？」
「トリックオアトリート。お菓子をくれなきゃ悪戯するぜ？」
「えっ？えっ？あの、その、リビングに行けばありますけど……」
「でも、今は無いんだよな？んじゃ、悪戯だ」
　そういって困惑している遊花の頭に手を伸ばし、その頭を優しく撫でる。
　状況が理解出来ず、戸惑っている遊花に俺は優しく話しかける。
「別にいいじゃないか。たまには立ち止まって過去を懐かしんだって。遊花は十分前を向けてるよ」
「えっ、あ、あの……」
「だからまぁ……たまには誰かに甘えろよ。流石に抱きしめてやるのは無理だが、これぐらいのことはしてやれるからさ。どうも俺の周りの人間は、1人で抱え込む奴が多いみたいだし」
「……それは師匠もじゃないですか？」
「……かもな」
　遊花の言葉に思わず目を逸らす。
　いや、まぁ、自覚はあるけどさ。
「でも……はい、ありがとうございます。それじゃあ、ちょっとだけ甘えさせて貰いますね……トリックオアトリート、です、師匠」
「さっき下で買ってきた奴をあげたじゃないか」
「あの時は、ほら、私は言ってなかったですから」
「欲張りな奴め……残念だけど、今は手持ちのお菓子はないな」

「そ、それじゃあ、悪戯、です」
遊花はそう言うと俺の後ろに回る。
すると背中に衝撃を感じ、何か柔らかな感触が伝わってきた。
「ゆ、遊花？」
「だ、抱きしめて貰うのが無理なら、私から抱き着くのならいいですよね？」
そういって、遊花は頬を少し赤く染め、緊張で声を震わせながらも、俺の背中に抱きつきながら悪戯が成功した子供のような笑顔を浮かべる。
「……恥ずかしいならやらなければいいものを」
「は、恥ずかしくなんてないです!!？きょ、今日の私は悪戯っ子ですから。さあ師匠、これ以上他の悪戯をされなくなかったらもっとたくさんのお菓子を私にください!!？……なんちゃって」
そういって、やっぱり照れたように笑う遊花を見ていると、何だか少しからかいたくなってくる。
「そっか。なら、仕方ないから闇の為に取っておいたお菓子は遊花にあげるとするか。遊花が悪戯をしてくるんだから仕方がないよな～」
「ええっ!?？本当に頂けるんですか？い、いえ、大丈夫です!!？闇先パイにちゃんとあげてください!!？私はそんな……うぅ～、師匠が意地悪をします～」
「ぷっ……な、慣れないことをやるからそうなるんだ」
俺がそんなことを言うと、途端にわたわたと慌てだし、ぷくっと頬を膨らませながら涙目になる遊花を見て、俺は必死に笑いを堪える。
そんな俺を見て、遊花は柔らかな表情を浮かべた。
「もう……でも、師匠、ありがとうございました。おかげで少し、スッキリしました」
「……そっか。ならよかった」
「はい。過去には戻れないですけど……思い出はちゃんとここにありますから。それに……今は両親の代わりに……師匠や闇先パイ、桜ちゃんが一緒にいてくれますから」
そういって、遊花は胸に手を置きながら曇りのない笑顔を見せる。

そんな遊花を見て、俺は咄嗟に今思いついたことを口に出す。
「ならさ、来年は皆でパーティーでもやろうぜ。リーネや美傘、不知火さんや九石とかを呼んで、皆で騒ごうぜ」
「‼?・はい‼?・来年が楽しみですね‼?・」
そういって、気が早いことに来年の話なんかをしながら、なんとなく夜空を見上げる。
夜空にはそんな俺達を見守るように、星達が輝いているのだった。

番外編・1周年記念　夢でも師弟でいられたら

☆

朝、目が覚めると、俺は自分の家にいた。
居候している栗原家でも、『Ｎａｔｕｒａｌ』でもない。
木目の浮かんだ古い天井に、枕元には、デュエルディスクと自分のデッキを調整したのか散乱したカードがおいてある。
ここは、もう二度と帰れない俺の家だ。
父さんと母さん、俺の３人で暮らしていた家の、俺の部屋。
「……あぁ、夢だな、これ」
夢だと確信するのに、時間は必要なかった。
俺の家はもう存在していないのだから、俺がここにいるのならそれは夢の中でしかありえない。
「なんか懐かしいな」
身体を起こして少し伸びをする。
改めて自分の身体を見てみると、俺の身体は少し小さくなっていた。
記憶が確かなら、デュエルアカデミアの高等部２年ぐらいの時はこれぐらいの身長だった気がする。
その頃には既にこの家はなく、『Ｎａｔｕｒａｌ』に住んでいたハズなんだが……まあ、夢だしな。
ベッドを降りると、懐かしい木の感触が足の裏に伝わってくる。
耳を済ませると台所の方から包丁の音が聞こえてくる。
その音に自然とベッドから腰が浮き、俺は廊下を進んで台所へ向かう。
夢だと分かってはいる……夢であることは間違いない。
だが、夢の中だからこそ……両親に会えるかもしれない。
そんな思いで台所に行った俺は、そこに立つ後ろ姿に驚くことになった。

「あ、師匠!!?・おはようございます!!?・」
そこに立っていたのは、デュエルアカデミアの制服の上からエプロンをつけた遊花だった。
いつものように花が咲いたような嬉しそうな笑顔を浮かべ、いつものように料理をしている。
「どうしたんですか、師匠?・何だか驚かれてるようですが……」
驚いてる俺を見て、遊花が不思議そうに首を傾げる。
いやいや、おかしいだろう。
なんでここに遊花がいるんだ?
俺が高等部2年ということは、遊花は中等部1年のハズだ。
だけど、今の遊花の姿は普段見ている遊花の姿とほとんど変わりがない。
「何、してるんだ?」
「ほぇ?朝ご飯を作ってるんですよ?」
いや、それは見れば分かるんだが、そうじゃなくて……
「何で遊花がここにいるんだ?」
「えっと……台所なら料理ができるから、ですかね?」
いや、そういうことでもないんだが……まあ、夢だし、あり得ないことが起こってもおかしくないか。
きっと、もう俺の中では朝食といえば遊花の作ったものって認識になってるんだろう。
「まあ、いいや。それで、あの2人は?」
遊花がここにいるということは、闇や桜もいるのだろうと思い、そんな質問をしたのだが……
「……あの2人、ですか?あの、どなたのことですか?」
「え?」
俺の質問に遊花が不思議そうに首を傾げる。
もしかして、闇や桜はいないのか?
いやいや、遊花は俺の家にいるのにあの2人はいないとかどんな設定なんだよ、この夢は?
「あ……もしかして、師匠のご両親のことですか?師匠のご両親は

……」
そういって、遊花が難しそうな表情を浮かべて俯く。
もしかして、父さんと母さんは既に亡くなっている設定なのか？
まあ、俺も高等部２年だし、いなくてもおかしくはないーーー
「今頃ドイツの大会が終わったところですかね？」
「ドイツ⁉？」
「はい。『武者修行のために世界中の大会に挑んでくる』って、世界旅行に行ってるんですよね。流石は師匠のご両親です」
「何その理由⁉？そしてどういう意味の流石なんだ⁉？」
なんか物凄く元気そうだった⁉？
というかそれだけ元気なら夢でぐらい合わせて欲しいんだが……
なら、今遊花が俯いて難しい表情をしてたのは腕時計を見てドイツとの時差を計算してたからか。
聞きたいこととは違ったけど、夢の中でぐらい両親が元気でいることは喜ばしいことだよな？
「闇と桜は？」
「闇先パイと桜ちゃんですか？今日は一緒に登校する約束してましたっけ？」
一緒に登校する約束ってことは、桜と闇はこの家に住んでないのか……いやいやいや、ならなんで遊花だけこの家に住んでるんだよ？
……もしかして、俺は無意識の内にそんな願望を持ってる、のか？
「ど、どうしたんですか、師匠？何だか顔色が良くないですよ？」
「い、いや、何でもない……それで、その、遊花は……」
「はい、何でしょうか？……もしかして、実は体調が悪かったりしますか？あの、体調が悪いなら、無理せずに私を頼ってくださいね。私、師匠のためならなんだってしますから」
こちらを心配そうな目で見ながら、真剣な表情でそんな言葉を口にする遊花。
……ヤバい、遊花の好感度が高すぎてちょっと死にたくなってき

た。
なんて夢を見てるんだよ、俺は……
遊花の態度に言いようのない罪悪感を感じながらも、俺は何とか口を開く。
「いや、大丈夫だ。ところで、遊花の部屋はどこだ？」
「……ふぇ？」
「遊花の部屋だよ。うちは確かに空き部屋が多かったしな、どこだ？」
俺が元々住んでた家は結構空き部屋があったからな。
おそらく父さんがカードの整理をサボって手に入れたカードをそのまま突っ込んでいた倉庫みたいな部屋のどれかが遊花の部屋になってるんだろうが……
「え、えっと、あの、し、師匠？そ、それって……」
頬を真っ赤に染め、わたわたとした様子で自分の髪をいじりながら、ちらちらとこちらへ視線を向ける遊花。
な、なんだ？
普通にどの部屋に住んでるのかを聞いただけなのにどうしてそんな反応になるんだ？
「あのあの、今のは……その、いつかは一緒に住もうっていう……プロポーズ、なの、でしょうか？」
「プロポーズ⁉？」
「みゅうぅ‼？」
俺の声に、遊花がさらに真っ赤に染まった顔を隠すようにその場に蹲る。
いやいやいや、本当にどういう設定なんだ、この世界⁉？
遊花がこの家に住んでいないなら、なんで今遊花が俺の家にいるんだよ⁉？
「じゃ、じゃあ、遊花は今どこに住んでるんだよ？」
「お、お向かいです……」
「お向かい？」
「ほ、保育園の頃に師匠が引っ越してきた時からの付き合いで、私がお父さんから貰った大切なカードを近所の子供達に盗られたのを、師匠

が勇敢に立ち向かって取り返してくれて、それで私の両親が師匠のことを気に入って、それから家族ぐるみのお付き合いになって……」
遊花は赤い顔のまま目をぐるぐると回しながら早口でそんなことを口にする。
ということは、この世界では俺と遊花は幼馴染なのか？
そして、うちの両親が突拍子もない理由で俺をおいて旅行に出掛けたから俺のために朝食を作りに来てくれたとか、そういう設定なのか？
うわっ、何そのベタな設定……今時逆に珍しいぐらいだぞ。
「それで、その……たった今、プロポーズを……」
「ちょっと待て‼？だいぶ誤解だから‼？」
現実じゃ一緒に住んでるから、いつもの感じで、どこの部屋なのかなって思っただけで……この言葉も改めて考えるとヤバイな⁉？
いや、あまり深く考えたらダメだ、夢だし‼？
「と、とりあえず朝食にしようぜ？遊花の飯は美味いからな」
「そ、そうですね‼？ご飯にしましょう‼？は、早くしないと遅刻しちゃいますもんね‼？」
お互いに顔を赤くしながら朝食の準備をし、椅子に座って朝食を食べていく。
……朝食の味が分からなかったのは、きっと夢だからに違いなかった。

ーーーーーーー

「えへへ、今日は日差しが暖かいですね、師匠」
「あ、ああ、そうだな」
俺の左隣を柔らかな笑顔を浮かべて遊花が歩く。
どうやらこの世界では遊花は高等部1年で、俺の後輩に当たるらしい。
カードを盗んだ近所の子供達に勇敢に立ち向かっていった俺の姿に憧れて、師匠と呼ぶようになったんだとか。

そこらへんは、多分遊花と初めて出会ったあのことが元になってるんだろう。
それにしても、まさか遊花と一緒にデュエルアカデミアに登校する光景を見ることになろうとは……夢、おそるべし。
「そういえば師匠、昨日話されていた今日のデュエル学の宿題、ちゃんと終わらせましたか？」
「え？いや、うん、多分……」
「多分って……もう、ちゃんとしないとリーネ先生に怒られちゃいますよ？」
「あいつ先生なのかよ……」
スーツで教壇に立つリーネの姿が思い浮かび、思わず微妙な表情を浮かべてしまう。
いや、確かにリーネは俺よりも年上だし、教師のポジションにいてもおかしくはないが……あいつに教師ができるのか？
……ダメだ、やらかしている姿しか思い浮かばない。
教師なら不知火さんの方がよっぽど似合うだろうに。
「よっ、遊花、遊騎さん」
「ん、九石か」
「おはよう、大地君」
「おう、相変わらず仲がいいな、お二人さん。今日も夫婦揃って登校か？」
「もう、大地君ったら、そんなんじゃないよ」
「はは、わりぃわりぃ。んじゃ、俺日直だから、また教室でな‼？」
「あ、うん。またね」
俺達の横を抜き去ってデュエルアカデミアに向けて走り去っていく九石の言葉に遊花が少し頬を赤らめながらも苦笑を浮かべる。
今日もって、いつもこんなからかいを受けてるのか、この世界の俺達は……
「……おはよう、遊騎、遊花」
「おはよ、遊花、遊騎」
「あ、おはようございます、闇先パイ、桜ちゃん」

少し頭を抱えたくなった俺の背後から聞き覚えのある声が聞こえてくる。
俺達が振り向くと、そこにはデュエルアカデミアの制服に身を包んだ闇と桜がいた。
……桜はともかく、闇は現実と同じ姿のハズなのに制服に違和感がないのは、なんだかなぁ？
「む、何だか失礼なことを考えられてる気がする」
「気のせいだ。おはよう、闇、桜」
「ん、おはよ」
「うっ……」
そういうと闇はささっと俺の右隣に移動し、ぴとっと寄り添ってくる。
うーん、こういうところもあまり変わってないな、闇は。
そして遊花、俺の隣に寄り添ってきた闇を見て悲しそうな表情を浮かべるのは止めてくれ、何だか罪悪感があるから。
「朝から両手に花とかいい御身分ね、遊騎」
「いや、これって俺が悪いのか？」
呆れたような表情でこちらを睨んでくる桜に俺は苦笑を浮かべる。
いや、多分俺も桜と同じ立場ならそう思うだろうけどさ。
「よう、待っとったで、遊騎!!?」
「お前は……!!?」
そんな何とも言えない空気をぶち壊すように、俺達の前方を仁王立ちして通せんぼするかのように立っている人物がいた。
この聞き覚えのあるエセ関西弁は……
「霧生　竜河!?お前、生きていたのか!?」
「えっ？」
俺の言葉に竜河が目を丸くする。
そんな竜河を見て、闇は一瞬楽しそうな笑みを浮かべると、すぐに表情を悲しげなものに変え、俺の肩を叩いて首を振る。
「ううん、よく見て、遊騎。霧生の身体、透けてる」
「嘘やろ!?って、なんや、ちゃんとあるやないか。びっくりさせんと

いてぇな」
「……化けてでるなんて、霧生先輩、自分が死んだことにも気づいていないなんて……」
「そうだよな、あいつがこんな所にいるわけない。俺達の知ってる竜河は、もう……」
「えっ⁉？ホンマなん⁉？ワイ、ホンマに死んどるん⁉？」
悲しげに目を伏せる（口元は楽しげに歪んでいるが）桜を見て、竜河が本当に慌てはじめる。
そんな竜河を見た後、俺は優しい笑みを浮かべながら首を振った。
「大丈夫だ、きっとこれからも竜河は俺達を見守ってくれるさ」
「ん、だから私達はいつも通りデュエルアカデミアに行こう」
「さようなら、霧生先輩。また来世で会いましょう」
「みんな……おう、またな」
そういって悲しげに目を伏せながら竜河の横を何事もなかったかのように通り抜ける。
そんな俺達を見て穏やかな笑みを浮かべて歩き出そうとした竜河は勢いよくこちらを振り返り、虚空に向けてツッコミをした。
「って、勝手に殺さんといてぇな⁉？ワイ、生きとるからな⁉？」
「もう、竜河先輩が可愛そうですよ？」
呆れた表情でそんなことをいう遊花を見て俺達が肩をすくめる。
「ホンマ冗談キツイで、遊騎。親友やっちゅうのに……」
「俺と竜河が親友？……本当に？」
「えっと……多分」
「ん、多分」
「そうね、多分」
「ということらしいぞ、多分」
「どんだけ断定できへんの、ワイの存在⁉？」
俺達の言葉に竜河が驚愕する。
いや、俺は純粋に驚いただけだけどな。
そうか、竜河と親友になるような世界もあるのか……
「疲れそうだなぁ」

「ホンマ酷いな⁉?･でも、そういうツッコミはそれはそれで美味しいで」
夢の中でも竜河はノリがいい馬鹿だった。

ーーーーーーー

「それでは師匠、また」
「あ、ああ。また後でな」
校舎に入り、遊花と桜は1年の教室に、俺と闇、竜河は2年の教室に向かっていく。
「いや～相変わらず愛されとるなぁ、遊騎。あんな可愛い後輩ちゃんに慕われて」
「何故そこで愛……別にそんなんじゃねぇだろ?･」
「朴念仁やなぁ、遊騎は。普通幼馴染とはいえ毎日弁当は作って貰えへんで?･」
「ここでも遊花が弁当を作ってくれてたのか……そしてその分かってるからみたいな雰囲気で首を振るの止めろ。純粋にムカつく」
呆れた表情で首を振る竜河にイラッときながらも、俺達は自分のクラスの扉を開け、教室の中に入る。
すると、扉の近くでクラスメイトと話していた人物がこちらを見て、クラスメイトとの会話を打ち切ると近づいてきた。
……近づいてきたのはいいんだが……
「やあ、おはよう、遊騎」
「ああ、おはよう、夜。だけど、何でお前教室の中でもフードを被ってるんだよ?･」
「ん?･何かおかしいかい?･いつものことだろう?･」
「この状況がいつものことならそれはおかしいことだと思うんだけどな」
いつものように気さくに話しかけきた夜だが、何故かデュエルアカデミアの制服の上からパーカーを羽織り、フードを深く被っていた。
いやいやいや、確かに現実の夜もフードを外さないけど、デュエル

アカデミアの中ですらそうなのかよ⁉？
大丈夫か、このデュエルアカデミア？
実は荒れてるんじゃ……
「おはようさん、眼竜。相変わらずけったいな格好しとるなぁ」
「余計なお世話だよ、竜河。闇もおはよう」
「ん、おはよ、夜。今日は風紀委員の仕事はいいの？」
「それは君の隣に遊騎がいることから分からないかい？朝の見回りは別の人だよ」
「そっか」
「……ここでは俺、風紀委員なのか？」
「？寝ぼけてるのかい？遊騎とボクは風紀委員会のバディじゃないか」
「風紀委員がフード被った怪しい格好して率先して風紀を乱すの止めろよ……」
夜の呆れたような顔を見て頭が痛くなってくる。
これは普段やっている闇のカード探しが影響してるのか？
いや、それ以前にこんな怪しい格好をしてる夜に注意されても相手が納得できないだろうに……
「ん……そろそろ席に座ろう。担任の先生も来たみたい」
「先生？」
闇が教室の扉の方を向いてそう呟き、俺もつられるようにそちらを向く。
すると、教室の外からバタバタとした足音が近づいてきてーーー
「おっはよーございまーすでーすよー‼？」
「チェンジで」
「いきなり担任の交代を告げられた⁉？私、遊騎さんに何かしたかな⁉？」
「いや、何かしたというか、しそうというか……とりあえず美傘が教師だけはない。絶対に、ない」
「まさかの全否定⁉？しかも物凄く力強く言い切られた⁉？」
いつもながらの頭の悪そうな挨拶をして入ってきたスーツ姿の美

傘を見て条件反射でそう答えると、俺の辛辣な言葉に美傘が驚愕の表情を浮かべる。
　というか、美傘は俺より年下のハズなのに何で教師役なんだよ⁉？
　本当に大丈夫か、このデュエルアカデミア⁉？
　リーネと美傘なんていう俺の知り合いの中でのアホの子２トップが教師とか人選間違いすぎじゃないか⁉？
「遊騎、言い過ぎ……美傘は一応先生……余計なことばかりするけど……」
「そうやで、流石に言い過ぎや。これでも生徒の相談に乗ってくれる生徒思いの良い先生なんやで？その相談内容の半分は先生が引き起こした問題のせいやけど」
「闇さん⁉？竜河さん⁉？それフォローになってませんよ⁉？私、物凄く問題があるみたいに言われてますよ⁉？」
「私、嘘は苦手だから……」
「そう言われても……なぁ？」
「うぅ……あんまりだぁ」
　闇と竜河のフォローにもなっていないフォローに美傘が涙目になって項垂れる。
　というか、ここまで言われるってお前何をやらかしたんだよ？
「まあまあ、それぐらいにしておきなよ。美傘先生も私達のことを考えて頑張ってるんだし」
「うぅ～ありがとう～夜ちゃん～やっぱり夜ちゃんは私の心のアミーゴだよ～」
「いや、生徒だけどね、うん」
　美傘に抱きつかれ苦笑を浮かべる夜。
　というか美傘、お前本当に何したんだよ？
　そんなことを思っていると、デュエルアカデミアに講義開始のチャイムが響き渡る。
　何とも言えない不安を感じながら、夢の中のデュエルアカデミア生活は始まるのだった。

ーーーーーーーー

「それではこれで午前中の講義は終わりです。しっかりお昼ご飯を食べて午後の講義も頑張ってくださいね」

「……やっと終わったか。夢の中とはいえ破茶滅茶が過ぎるだろ」

美傘の代わりにやってきていた先生が教室を出て行き、食堂に向かって行く生徒達を眺めながら俺は自分の机に突っ伏す。

夢の中だからか時間の進みがかなり早く感じられはしたのだが、それでもかなり無茶苦茶な講義だった。

講義としてはデュエルタクティクス基礎の講義で、初めは普通のデュエルの戦術の話だったのだが、途中でデュエルの魅せ方の話になったところで美傘が暴走をはじめ、明らかに過剰な演出を生徒達に見せようとして、教室の外から見ていた校長に講義中にも関わらず職員室に連行されて行くのを見たときは思わず頭を抱えてしまった。

連行された美傘の代わりの先生が入ってきて生徒達も動じてなかったところを見るとこれも日常茶飯事なのだろう。

「大丈夫、遊騎？」

「なんやえろう疲れとるな」

「闇と竜河か……お前達は何とも思わなかったのか？」

「講義のこと？別に、いつものことだから」

「なんや講義のことかいな。美傘先生が校長に連行されるなんていつものことやろ？」

「何その絶望的な事実。聞きたくなかったんだけど……」

こんな講義が毎日続いてるとか正気を疑いたくなるぞ。

「そないなことより、嫁さんが来とるで？」

「竜河、嫁じゃなくてお客さん。情報は正しく伝えるべき」

「お昼時やからってそない食い気味に否定せんでも……」

「は？嫁？お客さん？」

「し、失礼します‼？師匠……じゃなかった、結束先パイはいらっしゃいますか？」

「いつものことなのに何を緊張してるのよ……」

不機嫌そうな闇に呆れたような表情を浮かべた竜河が教室の扉の方を指差し、その指の差している先を追うと少し緊張した様子でスクールバックを持っている遊花と呆れた表情を浮かべた桜がいた。
しばらく教室の中をきょろきょろと見回していた遊花は俺を見つけると、ぱあっと花が咲いたような笑顔を浮かべてこちらに駆け寄ってきた。
「師匠‼?あのあの、よろしければ、お昼ご飯をご一緒してもよろしいですか?勿論、師匠の分のお弁当も作ってきていますので‼?」
「……それ、断るって選択肢がなくないか?弁当は既にあるんだろう?」
「い、いえ、ダメなら私の晩御飯になるだけですから、気にしていただかなくても……」
「……そう言われて断るわけないだろ。というか、そうじゃなくても遊花の申し出を断ることなんてしないさ。俺なんかでよかったら、ありがたくいただくよ」
「‼?……はい‼?ではでは、失礼、します‼?」
俺が承諾すると遊花は嬉しそうな笑顔を浮かべ、教室から出て行った生徒の椅子を借りてきて俺の机の正面に座り、俺の机に弁当箱を広げた。
そんな遊花の様子に苦笑していると、同じように近くの椅子を借りて桜が遊花の隣に座る。
「遊花に毎食作って貰うなんて本当にいい御身分ね、遊騎」
「そう言われると返す言葉がないんだが……」
「……まあ、いいけどね。遊花、私も遊花のお弁当少し貰ってもいい?」
「えっ?うん、師匠のじゃなくて、私のでよければだけど……」
「じゃあ交換しながら食べましょ。コイツだけ遊花のご飯が食べられるなんて許せないもの」
「もう、桜ちゃんったら……」
勝手に俺の机の上にお重を広げる桜を見て困ったような表情を浮かべる遊花。

この２人は夢の中でも仲が良いんだな。
まあ幼馴染だから仲が良いのも頷けるのだが……ん、待てよ？
この世界で俺と遊花が幼馴染ってことは、桜も俺の幼馴染ってことになるのか？
「？何よ、人のことをじろじろと見て？」
「いや、お前との関係について考えててな」
「……アンタ、大丈夫？熱でもあるんじゃないでしょうね？」
そういって桜が俺の額と自分の額に手を当てる。
いや、俺の言い方も悪かったとは思うが、そこまで言わなくてもいいだろ。
「……なんか桜に心配されるのも少し違和感があるな」
「せっかく人が心配してあげてるのに失礼な奴ね。昔みたいにぶん殴ってやろうかしら」
「桜ちゃん、初めて師匠と会った時、私が師匠とお話してただけなのにいきなり殴りかかったもんね。『遊花をいじめるな』って言って」
「し、仕方ないでしょ‼？あの頃遊花にちょっかい出してた奴なんていじめっ子ばっかりだったんだから‼？」
「……ああ、喧嘩友達的な奴だったか」
なんか凄く桜らしい理由で納得する。
初対面の俺に信用ならないからとデュエルを挑んできた桜なら遊花のためにそれぐらいやるだろうしな。
「あの頃は遊騎のこともよく知らなかったし……む、昔のことなんだから時効よ‼？？」
「別に、俺も気にしてるわけじゃないから気にすんな。それだけ桜が遊花のことを大切にしてるってことなんだしな」
「はい‼？桜ちゃんはいつも私のことを大切にしてくれるんです‼？」
「っ～～～‼？もう、あまり恥ずかしいこと言うんじゃないわよ、この天然師弟‼？」
桜が恥ずかしそうに頬を赤らめながらそっぽを向く。
変な夢の中でも、こういうところは変わらないんだな。

「遊騎、私もここで食べていい？」
「ん？いいんじゃないか？な、遊花」
「あ、はい‼？」
「なら、ワイも……」
「ただし、竜河。テメェはダメだ」
「酷ッ⁉？なんか今日はワイだけ扱い雑いで⁉？」
「冗談だ」
「遊騎が言うとあんま冗談に聞こえへんから勘弁してや」
そんなやり取りをしながら、闇達も近くの机を移動させて自身の昼飯を取り出す。
闇は少し小さめのお弁当箱に色合いのいいおかずが入ったもので、竜河はあきらかにコンビニで買ってきたであろうパンだった。
「闇は自分で作ってきたのか？」
「ん、自信作。はい、あーん」
「別に催促したわけじゃないんだが……ん、美味いな」
「っ‼？」
「ふふん、当然」
闇が差し出してきたベーコン巻きを口に入れ、素直な感想を告げるとどこか嬉しそうに得意げな笑みを浮かべる。
この夢の世界でどうかは知らないが、闇も現実では一人暮らしをしてたし、プロ時代はたまに遊びに行ってたから家事が一通りできることは知ってるんだけどな。
「あ、あの‼？師匠‼？」
「ん？」
そんなことを考えていると、正面に座っていた遊花から声をかけられる。
遊花の方を向くと、遊花は何故か頬を赤らめ、少し緊張した様子で自分の弁当箱からハンバーグを箸で摘むとこちらに差し出してきた。
「あ、あ～ん、です」
「えっと……遊花？」
「あ～ん」

「いや……遊花？」
「……私のお弁当じゃ、ダメですか？」
「うぐっ」
ハンバーグを摘んだ箸をこちらに差し出したまま、遊花の瞳がみるみる不安の色に塗り潰されていく。
ああ、もう、分かった‼？分かったからそんな泣きそうな表情をするな‼？
ええい、ままよ‼？
差し出されたハンバーグを口にすると、遊花が期待に満ちた表情でこちらを見てくる。
……うん、まあ、分かりきってたことではあるんだけどさ。
「お、美味しいぞ、遊花」
「‼？よ、よかったです‼？えへへ」
俺の言葉に遊花は満足そうに笑う。
……こんなことで喜んでもらえるなら、お安い御用だ……顔が少し熱いけどな。
後、俺と遊花の様子を見てニヤニヤと微笑ましいものを見るような目でこちらを見るなクラスメイト共‼？
「お楽しみのところ悪いけど、少しいいかい、遊騎？」
「お楽しみじゃねぇよ‼？」
ニヤニヤとした笑みを浮かべて近づいてくる夜に思わず声を荒げてしまう。
そんな俺を見て夜はクスクスと笑いながらも口を開く。
「ごめんごめん。それで、要件なんだけど。今日の放課後、風紀委員の見回りの仕事が入ったから勝手に帰らないようにね」
「は？見回り？」
「……本当に大丈夫かい？デュエルアカデミアで不届きなことをしてる奴らがいないか見回りするのはいつもしてることだろ？」
「あ、ああ。そっか、悪い」
「全く。とりあえず、放課後一緒に風紀委員会の教室に行って、どこを見回るか他の風紀委員と話し合ってから仕事を開始するからね」

「ん、了解した」
俺が応えると夜は教室から出て行った。
風紀委員の見回り、ね。
俺の学生時代に風紀委員をしてたわけじゃないのに、風紀委員の仕事があるって言われてもやっぱり違和感が拭えない。
まあ、夢だから仕方ないと割り切ってしまえばそれまでなんだけどさ。
「夜さんと一緒に風紀委員会の教室に……それって、所謂同伴出勤では……？」
「ん？どうかしたか？遊花？」
「いえ、その、師匠のことが少し心配で……」
そういって遊花が微妙な表情を浮かべる。
まあ、風紀委員って言うぐらいだから多少は風紀を乱す奴と出会す可能性もあるんだろうからな。
流石に暴力沙汰にはならないと思うが……今までのデュエルアカデミアの荒れ具合を見るとありえないと言い切れないのがなんとも言えない。
「まあ、夜も一緒だから心配すんなって」
「だからって……いえ、むしろだからこその心配があると言いますか……」
「だからこそ？」
遊花の言葉に俺は首を傾げる。
夜と一緒だと何か不味いことがあるのだろうか？
いや、確かに夜と一緒に風紀委員の仕事してるとやっかみも多そうだけどな。
お前の方が風紀乱してるだろってツッコミを入れられたりとか。
「あ、あのですね、師匠」
「おう、なんだ？」
何故かもじもじしている遊花はこちらをチラチラと見ながら躊躇いがちに言葉を紡ぐ。
「……昔の船乗りさんには、港、港に家庭があったって話があるんで

す」
「……ん？悪い、それなんの話だ？今、関係あることなのか？」
「うー……な、何でもないです」
「お、おう」
遊花のよく分からない言葉に首を傾げながら、昼休みの時間は過ぎていくのだった。

ーーーーーー

「こらそこ、階段で立体映像を使ったデュエルするのは、立体映像のせいで階段が見えなくなって危ないからやるならよそでやってくれるかい？」
「何だよ……って、ふ、風紀委員!?？」
「ボク達も荒事を望むわけじゃないけど、必要なら力尽くも辞さないよ」
「す、すみませんでした!!？」
「……荒れすぎだろ、このデュエルアカデミア」
「遊騎、何か言ったかい？」
「……何でもねぇよ」
放課後。
こちらに謝りながら走り去っていくデュエルアカデミア生に思わずため息をこぼしながら夜と一緒にデュエルアカデミアの中を見回っていく。
夢の中だからかいつのまにか放課後になり、夜との見回りが始まっていたがその内容がまた酷かった。
先程注意した階段でデュエルをしている奴などまだ可愛いもので、デュエルディスクを改造してバイクと連動させようとしてる奴だったり、乗馬部が校舎内で馬を走らせながらデュエルしてたり、屋上で立体映像を使って学内の天気を変えて遊んでたアホ教師が校長に引きずられていったりと、本当にろくなことがなかった。
「んー今日は平和だね、遊騎」

「お前正気か？これのどこが平和なんだよ？」
「だって、まだ闇のカードに操られて暴れてる奴とか、バイクと合体してデュエルしてる奴とか、ガラスぶち破ってグライダーで校舎に侵入してくる奴とかがいないじゃないか」
「なんでそんな想定外なことばかり起こってんだよ。魔境過ぎるだろ、ここ……」
「いつも起こってたら想定外だって想定内になるものさ」
「なってほしくねぇよ、想定外が想定内に」
　よくこんなデュエルアカデミアの中で風紀委員なんてやれてるなと夢の中の自分に本気で感心してしまう。
　俺なら1日で辞める自信があるぞ。
「っ、返してください‼？」
「おや？この声は……」
「今の声、遊花か？」
　聞き覚えのある声が近くの教室から聞こえ、夜と顔を見合わせて教室の中を覗き込む。
　教室の中では、数人の男子生徒に囲まれた遊花の姿があった。
「それは私の大切なデッキなんです‼？返してください‼？」
「ハッ、そんな大切なデッキを落とす奴が悪いんだろ？俺はただ落ちてたデッキを拾っただけだぜ？落ちてたカードをどう扱おうが俺の勝手だろ？」
「それは貴方達が勢いよくぶつかってきたからじゃないですか⁉？」
「知らねぇなぁ、そんなこと。ぶつかるようなところに立ってるお前が悪いんじゃねぇか、なぁ？」
　そういってリーダー格なのであろう男が言うと、周りで遊花を取り囲んでいる男達も嘲笑うように声を上げる。
　……遊花を威圧してる声もどこかで聞いた覚えがあるような気がするが、例え夢だろうと自分の弟子を嘲笑されて耐えられるものじゃねぇな。
「夜」
「言われなくても分かってるよ。ボクもこんな光景を見せられて凄く

不愉快だからね」
「んじゃ、遠慮なくいかせて貰うか。風紀委員だ‼?お前ら何をしてる?」
「あ……師匠」
「チッ、この声は……」
教室に踏み込むと、遊花や取り囲んでいた男子生徒達の視線がこちらに向く。
そこで遊花と言い争っていたリーダー格の男はーーー
「ん?治虫じゃねぇか」
「っ、馴れ馴れしく俺のことを呼ぶな‼?結束　遊騎‼?」
こちらを不機嫌そうな表情で睨みつける現実世界での俺の元チームメイトである御影　治虫だった。
確か、初めてあった時の治虫は少し荒れてたんだったか?
それにしてもここまで酷い感じでは無かった気がするが……夢の中だから他の誰かのイメージが混ざってるのか?
そういえば、前に桜からデュエルアカデミアに遊花にちょっかいを出している神路祇って生徒がいたって話を聞いた気がするな。
話によれば神路祇って奴は昆虫族を主体にしてたらしいし、同じ昆虫族であるクローラーを使ってる治虫がそのイメージに引っ張られたのかもな。
「……まぁいい。聞いていた限りだと、その子のカードを強引に奪ったように聞こえたんだが?」
「ハッ、俺は落ちてたカードを拾っただけだぜ?」
「持ち主が申し出てるなら返すのが道理だろ」
「そいつが落としたカードだって確証がねぇだろ?そいつが嘘をついてるかも知れねぇじゃねぇか?」
「それをいえば君が嘘をついてることも考えられるよね?」
「俺を疑うってのか?お前らは俺がコイツからカードを奪うところを見たって言うのかよ」
「見てないよ。だけど、君にやましいところがないのならそれ相応の態度があるハズだけどの。それに、拾い物なんだでしょ?ならそれこ

そボク達風紀委員に手渡せばいい。落とした持ち主は大層困ってるだろうからね、ちゃんとボク達が持ち主を探して返してあげるよ」
「……チッ、うぜえ」
俺達の言葉に治虫が舌打ちをする。
そりゃそうだよな。
せっかく奪い取れると思ったら風紀委員なんかに見つかっちまったんだから。
「ああ、うるせぇな‼?そんなに文句があるんなら俺とのデュエルで勝ってから言えよ‼?俺にデュエルで勝てたらデッキでも何でも返してやるよ‼?」
「デュエルで勝てたらって……私のデッキを奪ったのは貴方じゃないですか⁉?」
「ならお前の不戦敗だ‼?お前が俺に文句を言う資格なんかねぇ‼?それとも、そいつの代わりに結束　遊騎。お前がデュエルするのか？その場合、お前のデッキも賭けて貰うがな‼?」
「っ……」
嘲笑うかのような治虫の言葉に遊花は泣きそうになりながら拳を握り締める。
その光景を見て、俺は少しの懐かしさを感じた。
この光景は、あの時の再現だ。
場所も、相手も、立場も違う。
だけど、間違いなくあの時の再現だ。
なら、俺が言える言葉はただ1つ。
「なぁ、遊花。俺に任せてくれないか」
「……えっ？」
俺から告げられた言葉に遊花は驚きの表情を浮かべる。
「なんで……」
何故か、その答えはもう決まっているし、知っている。
「大切なデッキなんだろ？大切なものを奪われる気持ちは、俺にも分かるからさ」
「でも、それで師匠のデッキまで賭けることは……」

確かに俺のデッキは遊花には関係ない。
だけど、そんな関係ない俺のデュエルに自分のデッキの行方を委ねてくれるのに、自分のデッキも賭けないでどう信じてもらうんだ。
「お前のデッキを俺に賭けて貰うんだ。それぐらいの覚悟はいるだろ。それに、遊花は今戦えないんだろ？」
まさか、夢の中とはいえ、またこの言葉を告げることになるなんて思わなかった。
だけど、それでも俺に出来ることは……俺がやりたいことはただ1つだ。
「なら、戦えない遊花の代わりに、俺が戦う。任せてくれ」
遊花の思いを背負い、このデュエルに望むことだけだ!!?
「いいぜ。負けたら俺のデッキも賭ける。その条件で俺とデュエルだ」
「……お前、正気か？」
その条件を呑んでくるとは思わなかったのだろう。
理解出来ないものを見るような目で治虫は俺を見てくる。
だけど、それがどうした!!?
そんなもの、既に1度経験してるんだよ!!?
俺はデュエルディスクを起動させながら力強く答える。
「勿論正気だ。さぁ、やろうぜ。遊花のデッキ、返して貰うぞ!!?」
「ハッ!!?ヒーロー気取りが!!?そんな奴が俺に勝てるかよ!!?」
「ヒーロー気取りだろうがどうでもいい。戦えない遊花の代わりに俺は戦う!!?行くぞ!!?」
『決闘!!?』

遊騎　ＬＰ８０００
治虫　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は俺か……っ!!?これは……!!?」

デュエルディスクが先攻を告げ、自分の手札を見た俺は驚いて目を見開く。
そこにあったのは現実で俺が使っているカードと……俺が使えなくなった昔のカード達。
俺の記憶が元になっているからだろうか？
それでも過去に共に戦っていたカード達がそこにあることが、堪らなく嬉しかった。
「そうか……夢の中でぐらいは一緒に戦うことを許してくれるんだな……それなら、久しぶりにお前達の全力を見せて貰うぜ‼？手札からＤ－ＨＥＲＯ（デステニーヒーロー）ディアボリックガイを捨てて魔法カード、デスティニードロー‼？手札からＤ－ＨＥＲＯカード１枚を捨てて自分はデッキから２枚ドローする‼？」
「チッ、いきなり面倒なカードを……」
「さらに魔法カード、予想ＧＵＹを発動‼？自分フィールドにモンスターが存在しない場合にこのカードは発動できる。デッキからレベル４以下の通常モンスター１体を特殊召喚する‼？来い、クィーンズナイト‼？」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＤＥＦ１６００

俺の前に現れたのは赤い鎧を身に纏った女性の騎士。
「俺はキングスナイトを召喚‼？」

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

クィーンズナイトの横に並び立ったのは黄金の鎧を身に纏った騎士。
そしてクィーンズナイトとキングスナイトはお互いに剣を掲げて更なる騎士を呼ぶ。

「キングスナイトの効果発動!!?自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト1体を特殊召喚する!!?集え、絵札の三銃士!!?来い、ジャックスナイト!!?」

〈ジャックスナイト〉☆5　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

クィーンズナイトとキングスナイトの剣に合わせるように剣を掲げる青い鎧の騎士が現れる。
「クッ、絵札の三銃士を揃えたか!!?」
「まだだ!!?墓地に存在するＤ－ＨＥＲＯディアボリックガイの効果発動!!?墓地のこのカードを除外してデッキから同名モンスター1体を特殊召喚する!!?来てくれ、Ｄ－ＨＥＲＯディアボリックガイ!!?」

〈Ｄ－ＨＥＲＯディアボリックガイ〉☆6　戦士族　闇属性
ＤＥＦ８００

フィールドに現れたのは運命を司る悪魔の姿をした英雄。
その懐かしい姿に思わず笑みがこぼれる。
「そして、斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
俺がそういって手を前に突き出すと、俺の目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はカード名が異なる戦士族モンスター3体!!?俺はＤ－ＨＥＲＯディアボリックガイ、キングスナイト、ジャックスナイトの3体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
ディアボリックガイ、キングスナイト、ジャックスナイトがサーキットに吸い込まれていく。
そしてサーキットのリンクマーカーが輝くとサーキットの中から白銀の鎧を身に纏った騎士が現れた。

「リンク召喚!!?運命と戦う孤高の騎士!!?リンク３!!?アルカナエクストラジョーカー!!?」

〈アルカナエクストラジョーカー〉ＬＩＮＫ３　戦士族　光属性
ＡＴＫ２８００　↙?　→　↘?

「アルカナエクストラジョーカー……お得意の絵札の三銃士のリンクモンスターか」

「これだけじゃ終わらないぜ!!?魔法カード、フュージョンデスティニー!!?」

「っ、そのカードは……」

「このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できないが、自分の手札・デッキから、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、ＤＨＥＲＯモンスターを融合素材とするその融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは次のターンのエンドフェイズに破壊され、このカードの発動後、ターン終了時まで自分は闇属性のＨＥＲＯモンスターしか特殊召喚できない!!?俺はデッキから
ＤＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）ドローガイ、ＤＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）ディバインガイ、
ＤＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）ディスクガイの3体を融合!!?」

「ＤＨＥＲＯの3体融合だと!?」

フィールドに現れた渦にデッキから3体の運命を司る英雄が飛び込んでいく。

そして渦が爆けると、現れたのは漆黒のマントを羽織った鋼鉄の英雄。

「融合召喚!!?哀しき運命を覆す戦士!!?ＤＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）ドミネイトガイ」

〈ＤＨＥＲＯドミネイトガイ〉☆１０　戦士族　闇属性
ＡＴＫ２９００

「ＤＨＥＲＯドミネイトガイの効果発動!!?フェイトプレセデンス!!?自分メインフェイズ、自分または相手のデッキの上からカードを５枚確認し、好きな順番でデッキの上に戻す!!?俺は自分のデッキの上から５枚を確認し、好きな順番でデッキの上に戻す!!?」
「チッ、自分の運命を書き換えたか……」
「俺はカードを２枚伏せてターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ８０００　手札０
ー▲▲ー　ー
ー□○ーー
☆　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
治虫　ＬＰ８０００　手札５

「俺のターン、ドロー!!?」
「スタンバイフェイズ、墓地に存在するＤＨＥＲＯドローガイの効果発動!!?」
「何!?」
「同名カードは１ターンに１度、このカードが墓地へ送られた場合、次のスタンバイフェイズに発動できる!!?このカードを墓地から特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。甦れ、ＤＨＥＲＯドローガイ!!?」

〈ＤＨＥＲＯドローガイ〉☆４　戦士族　闇属性
ＤＥＦ８００

フィールドに現れたのは闇に染まった白い帽子を被り、マフラーをたなびかせる英雄。
「ＤＨＥＲＯドローガイの効果発動!!?同名カードは１ターンに１

度、このカードがＨＥＲＯモンスターの効果で特殊召喚した場合、お互いのプレイヤーは、それぞれデッキから1枚ドローする‼?」
「手札補充か……だが、手札が増えたのはこちらも同じことだ‼?魔法カード、影依融合（シャドールフュージョン）‼?」
「やっぱり引かれてるか……」
「自分の手札・フィールドからシャドール融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚する‼?さらにＥＸデッキから特殊召喚されたモンスターが相手フィールドに存在する場合、自分のデッキのモンスターも融合素材とする事ができる‼?俺が融合するのはデッキのシャドールモンスター、シャドールヘッジホッグと光属性の超電磁タートル‼?影に飲まれし鼠よ、磁力の亀と交わりて、全てを操る闇となれ‼?」
　フィールドに現れた渦に治虫のデッキ影のようなハリネズミのモンスターと磁石の身体を持つ亀が呑み込まれていく。
　そして渦が弾けると影の糸が溢れ出している操り人形が現れた。
「融合召喚‼?影より生まれし操り人形‼?エルシャドールネフィリム‼?」

〈エルシャドールネフィリム〉☆8　天使族　光属性
　ＡＴＫ２８００

「厄介な奴が出てきたな……」
「エルシャドールネフィリムの効果発動‼?シャドーフォール‼?このカードが特殊召喚に成功した場合に、デッキからシャドールカード1枚を墓地へ送る。さらにチェーンして墓地に送られたシャドールヘッジホッグの効果も発動‼?シャドールヘッジホッグの効果でデッキからシャドールモンスターを1枚を手札に加える‼?チェーン処理でシャドールヘッジホッグの効果でシャドールビーストを手札に。そしてエルシャドールネフィリムの効果でデッキからシャドールファルコンを墓地に送り、そのまま墓地に送られたシャドール

ファルコンの効果を発動!!?・このカードを墓地から裏側守備表示で特殊召喚する!!?」
　ネフィリムの身体から闇が溢れ出し、隼の姿になると、フィールドの影に溶けていく。
「まだ終わりじゃないぞ!!?・俺はフィールド魔法、星遺物に差す影を発動!!?」
「そのカードは……なら、チェーンしてリバースカードオープン!!?・罠発動!!?・ワンダーエクシーズ!!?・自分フィールドのモンスターを素材としてエクシーズモンスター1体をエクシーズ召喚する!!?」
「何!?・俺のターン中にエクシーズ召喚だと!?」
「俺は戦士族、レベル4のクィーンズナイトとD－HEROドローガイでオーバーレイ!!?・2体の戦士族モンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?・エクシーズ召喚!!?」
　クィーンズナイトとドローガイが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
　そして渦が爆けると空から赤い鎧を着た馬に乗る弓兵が舞い降りた。
「現れろH－C（ヒロイックチャンピオン）ガーンデーヴァ!!?」

〈H－C　ガーンデーヴァ〉★4　戦士族　地属性
DEF1800

「チッ、面倒なモンスターを……チェーン処理によりフィールドが星遺物に差す影に変わる」
　フィールドが夜に代わり、巨大な物体が治虫の背後に現れる。
　あのカードは小型の昆虫族であるクローラーを呼び出すフィールド魔法だ。
　ガーンデーヴァは牽制程度にはなるだろう。
「なら先にぶっ潰せばいいだけだ!!?・速攻魔法、神の写し身（エルシャドールフュージョン）との接触!!?・同名カードは1ターンに1度しか発動できず、自分の手札・フィールドから、シャドール融合モンスターカードによって決められ

た融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚する!!?俺が融合するのは手札のシャドールモンスター、シャドールビーストと手札の地属性モンスター、クローラーデンドライト!!?影に飲まれし獣よ、影より生まれし害虫と交わりて、全てを封じる闇となれ!!?」

フィールドに現れた渦に治虫の手札から影のような獣のモンスターと機械の身体を持つ寄生虫のようなモンスターが呑み込まれていく。

そして渦が弾けると機械の鎧から伸びる影の糸に縛られた操り人形が現れた。

「融合召喚!!?影より生まれし機兵!!?エルシャドールシェキナーガ!!?」

〈エルシャドールシェキナーガ〉☆１０　機械族　地属性

ＡＴＫ２６００

「っ、また面倒な奴がでてきたな……」

「墓地に送られたシャドールビーストの効果発動!!?このカードが効果で墓地へ送られた場合、カードを1枚ドローする!!?バトル!!?エルシャドールシェキナーガでＨ－Ｃ　ガーンデーヴァを攻撃!!?シャドーシェル!!?」

「すまない……迎え撃て、Ｈ－Ｃ　ガーンデーヴァ!!?暴嵐の矢!!?」

ガーンデーヴァはシェキナーガに向かって暴風のような数の矢を番えるがシェキナーガを覆う機械の鎧に弾かれていく。

ガーンデーヴァの矢を耐えきったシェキナーガは影で覆われた鉄の弾丸を撃ち出し、ガーンデーヴァを貫いた。

「これで邪魔者は消えた!!?今度はお前のご自慢の騎士の番だ!!?エルシャドールネフィリムでアルカナエクストラジョーカーを攻撃!!?シャドーマリオネッター!!?」

「なら、リバースカードオープン!!?罠発動!!?無限泡影!!?相手

フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてそのモンスターの効果をターン終了時まで無効にし、さらにセットされていたこのカードを発動した場合、このターン、このカードと同じ縦列の他の魔法・罠カードの効果は無効化される!!?」
「何だと!!?」
「エルシャドールネフィリムに特殊召喚されたモンスターと戦闘を行うダメージステップ開始時、そのモンスターを破壊する効果があることは覚えてんだよ!!?これで真っ向勝負だ!!?迎え撃て、アルカナエクストラジョーカー!!?ストレートフラッシュ!!?」
　ネフィリムがエクストラジョーカーに影の糸を伸ばそうとするが、伸ばした影の糸が幻のように崩壊していき、その隙にエクストラジョーカーの大剣がネフィリムの身体を斬り裂く。
　しかし、破壊されたネフィリムの身体から大量の影の糸が溢れ出し、エクストラジョーカーの身体を呑み込み、消滅させた。
「くっ……相討ちか」
「アルカナエクストラジョーカーの効果発動!!?ユナイテッドリンク!!?リンク召喚したこのカードが戦闘で破壊され、墓地へ送られた時、デッキから戦士族・レベル4の通常モンスター1体を特殊召喚し、デッキから戦士族・レベル4モンスター1体を手札に加える!!?」
「そんなことさせるか!!?チェーンしてエルシャドールシェキナーガの効果発動!!?シャドーシンク!!?1ターンに1度、特殊召喚されたモンスターが効果を発動した時、その発動を無効にし破壊する!!?その後、自分は手札のシャドールカード1枚を墓地へ送る!!?アルカナエクストラジョーカーの効果を無効にし、手札から影依の原核（シャドールーツ）を墓地に送り無効にする!!?」
「無効にしてきたか……」
　シェキナーガの身体から闇の波動が放たれエクストラジョーカーの効果が打ち消される。
「さらに墓地に送られた影依の原核の効果も発動!!?墓地から影依の原核以外の自分の墓地のシャドール魔法・罠カード1枚を手札に加える!!?俺は憑依融合を手札に加える!!?ネフィリムを失ったのは痛

いがこれで邪魔者は消えた‼?メインフェイズ2‼?フィールド魔法、星遺物に差す影の効果発動‼?1ターンに1度、自分メインフェイズに手札からレベル2以下の昆虫族モンスター1体を表側守備表示または裏側守備表示で特殊召喚する‼?俺は手札からクローラーグリアを裏側守備表示で特殊召喚‼?」

巨大な物体が淡く光ると、巨大な物体の影に何かが現れる。

「魔法カード、太陽の書‼?フィールド上に裏側表示で存在するモンスター1体を選択し、表側攻撃表示にする‼?姿を表せ、クローラーグリア‼?フィールド魔法、星遺物に差す影の効果により、フィールドのクローラーモンスターの攻撃力・守備力は300ポイントアップする‼?」

〈クローラーグリア〉☆2　昆虫族　地属性
ＡＴＫ700→1000

巨大な物体の影から現れたのは機械的な身体を持つ蝗のようなモンスター。

「クローラーグリアの効果発動‼?このカードがリバースした場合、自分の手札・墓地からクローラーグリア以外のクローラーモンスター1体を選んで表側攻撃表示または裏側守備表示で特殊召喚する‼?俺は墓地からクローラーデンドライトを攻撃表示で特殊召喚‼?」

〈クローラーデントライト〉☆2　昆虫族　地属性
ＡＴＫ1300→1600

グリアの目が怪しく光ると地面からデントライトも姿を現わす。

「そして、覆いつくせ‼?影を纏しサーキット‼?」

「リンク召喚か……」

治虫が手をかざすと正面に巨大なサーキットが現れる。

「召喚条件はリバースモンスター2体‼?クローラーグリアとクローラーデントライトをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバ

イン‼?リンク召喚‼?現れろ、原初の操り人形‼?リンク２‼?シャドールネフィリム‼?」

〈シャドールネフィリム〉ＬＩＮＫ２　天使族　光属性
ＡＴＫ１２００　↑↓

グリアとデントライトがサーキットに吸い込まれると、代わりに現れたのはネフィリムに似た小さな人形。
「そしてシャドールネフィリムの効果発動‼?カオスシャドー‼?同名カードは１ターンに１度、自分メインフェイズに発動できる。自分の手札・フィールドから、シャドール融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をＥＸデッキから融合召喚する‼?俺が融合するのはフィールドのシャドールモンスター、シャドールネフィリムと闇属性、シャドールファルコン‼?原初の操り人形よ、影から生まれし隼と交わりて、全てを戒める闇となれ‼?」
フィールドに現れた渦にシャドールネフィリムとファルコンが呑み込まれていく。
そして渦が弾けると影の糸に操られている竜の人形に乗った少女の人形が現れた。
「融合召喚‼?影に操られし哀れな人形‼?エルシャドールミドラーシュ‼?」

〈エルシャドールミドラーシュ〉☆５　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ２２００

「またシャドール融合モンスターか……」
「エルシャドールミドラーシュの永続効果、シャドーリストラクション‼?このカードがモンスターゾーンに存在する限り、その間はお互いに１ターンに１度しかモンスターを特殊召喚できない‼?俺はカードを２枚伏せてターンエンドだ。そしてエンドフェイズに

フュージョンデステニーのデメリットでお前のＤ－ＨＥＲＯドミネイトガイは破壊される‼？」
　ドミネイトガイがその場に膝をつき、身体が徐々に闇に変わっていき消滅する。
「これで運命の英雄は消えた‼？お前に残されたのはたった１枚の手札のみ‼？お前に敗北の運命を覆す力など残されてはいない‼？」
「……はぁ、分かってねぇな、治虫。夢の中でも、相手を見下す癖は治んないか」
「何？」
「お前はもう負けてるよ」
「っ、世迷言を‼？」
「世迷言なんかじゃないさ。Ｄ－ＨＥＲＯドミネイトガイは哀しき運命を覆す戦士だ。敗北の運命なんて、覆せるに決まってんだろ？」
「何をバカなことを……」
「分からないようなら教えてやるよ。敗北の運命なんて、俺の前には無いってな。Ｄ－ＨＥＲＯドミネイトガイの効果発動‼？トラジャディリライト‼？融合召喚したこのカードが戦闘・効果で破壊された場合、自分の墓地のレベル９以下のＤ－ＨＥＲＯモンスター３体を同名カードは１枚までで特殊召喚する‼？」
「っ⁉？何だと⁉？」
「エルシャドールミドラーシュの召喚制限はエルシャドールミドラーシュがモンスターゾーンに現れてからはじまり、１ターンに１度しかモンスターを特殊召喚できないが同時に召喚すれば複数体の特殊召喚は可能だ。おまけにエルシャドールシェキナーガの効果も既に使用済み。そいつらじゃＤ－ＨＥＲＯドミネイトガイは止められない‼？甦れ、Ｄ－ＨＥＲＯドローガイ‼？Ｄ－ＨＥＲＯディアボリックガイ‼？Ｄ－ＨＥＲＯディスクガイ‼？」
〈Ｄ－ＨＥＲＯドローガイ〉☆４　戦士族　闇属性
ＤＥＦ８００

〈Ｄ－ＨＥＲＯディアボリックガイ〉☆６　戦士族　闇属性
ＤＥＦ８００

〈Ｄ－ＨＥＲＯディスクガイ〉☆１　戦士族　闇属性
ＤＥＦ３００

ドミネイトガイが消滅する際に現れた闇が再び集まり、３体の運命を司る英雄に変わる。
「さらにＤ－ＨＥＲＯディスクガイの効果発動!!?このカード名の効果はデュエル中に１度しか使用できず、このカードは墓地へ送られたターンには墓地からの特殊召喚はできないが、このカードが墓地からの特殊召喚に成功した場合、自分はデッキから２枚ドローする!!?」
「ここでドロー効果、だと!?」
「さあ、終わらせて貰うぜ。お前が言う、敗北の運命って奴をな」

遊騎　ＬＰ８０００　手札３
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー□□□ー
ー　ー　○
ー○ーーー
ーー▲▲ー　ー
治虫　ＬＰ８０００　手札１

「俺のターン、ドロー!!?俺は自分フィールドのモンスター３体、Ｄ－ＨＥＲＯドローガイ、Ｄ－ＨＥＲＯディアボリックガイ、Ｄ－ＨＥＲＯディスクガイをリリースし、手札からこのモンスターを特殊召喚する!!?」
３体の運命を司る英雄が粒子に変わり、空に集まっていく。
集まった粒子が弾けると、空から舞い降りたのは龍の鎧を見に纏った漆黒の戦士。
その戦士はフィールドに降り立つと、力強い咆哮を上げた。

「呪われた運命に抗う孤独の戦士!!?DーHEROB1ooーD(デスティニーヒーロー ブルー ディー)!!?」

〈DーHERO　B1ooーD〉☆8　戦士族　闇属性
ATK1900

「っ、そのDーHEROは……!!?」
「DーHERO　B1ooーDの永続効果、シールデステニー!!?このカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手フィールドの表側表示モンスターの効果は無効化される!!?」
「チッ、させるか!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?堕ち影の蠢き!!?デッキからシャドールカード1枚を墓地へ送る!!?これでーーー」
「残念だが通さねぇよ。ライフポイントを半分払い、手札からカウンター罠発動!!?レッドリブート!!?」
「何っ!!?手札からカウンター罠だと!!?」

遊騎　LP8000→4000

「相手が罠カードを発動した時に発動できる!!?その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする!!?その後相手はデッキから罠カード1枚を選んで自分の魔法&罠ゾーンにセットできる。最もこのカード発動後、ターン終了時まで罠カードは発動できないけどな」
「何だと!!?くっ、俺はデッキから星遺物の傀儡をセットする」
治虫が驚愕に歪み、発動しようとしていた堕ち影の蠢きが再びセットされ、B1ooーDの鎧から闇が吹き出し、その闇の力で治虫のモンスターは力を失っていく。
「これでお前はフィールドのモンスター効果も罠カードも使えない!!?DーHERO　B1ooーDの効果発動!!?カースアブソーブ!!?1ターンに1度、相手フィールドのモンスター1体を対象として、その相手モンスターを装備カード扱いとして1枚だけこのカードに

装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの元々の攻撃力の半分だけアップする!!?対象はエルシャドールシェキナーガ!!?」
「っ、調子に乗るな!!?リバースカードオープン!!?速攻魔法、神の写し身との接触!!?俺はフィールドのシャドールモンスター、エルシャドールミドラーシュと地属性モンスター、エルシャドールシェキナーガ!!?影に操られし哀れな人形よ、影より生まれし機兵と交わりて、新たな封緘の闇となれ!!?融合召喚!!?再誕せよ!!?エルシャドールシェキナーガ!!?」

〈エルシャドールシェキナーガ〉☆１０　機械族　地属性
ＤＥＦ３０００

「逃げられたか」
「墓地に送られたエルシャドールミドラーシュ、エルシャドールシェキナーガの効果発動!!?このカードが墓地へ送られた場合、自分の墓地のシャドール魔法・罠カード１枚を対象としてそのカードを手札に加える!!?俺は墓地にある神の写し身との接触と影依の原核を手札に加える!!?これでお前のモンスターじゃエルシャドールシェキナーガを突破できない!!?このターンで勝つことなどーーー」
「なら違う手を打てばいいだけだ。俺はカードを２枚伏せて、墓地に存在するＤ－ＨＥＲＯディバインガイの効果発動!!?自分の手札が０枚の場合、自分の墓地からこのカードとＤ－ＨＥＲＯモンスター１枚を除外して自分はデッキから２枚ドローする!!?ただし、この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できないがな。俺は墓地に存在するＤ－ＨＥＲＯディバインガイとＤ－ＨＥＲＯディスクガイを除外して２枚ドローする!!?」
「っ、また２枚ドローだと!!?」
「まだだ!!?墓地に存在するＤ－ＨＥＲＯディアボリックガイの効果発動!!?墓地のこのカードを除外し、再び来てくれ、Ｄ－ＨＥＲＯディアボリックガイ!!?」

〈ＤｒＨＥＲＯディアボリックガイ〉☆６　戦士族　闇属性
ＤＥＦ８００

「さらに速攻魔法、大欲の壺!!?除外されている自分及び相手のモンスターの中から合計３体を持ち主のデッキに加えてシャッフルし、その後、自分はデッキから１枚ドローする!!?俺は除外されている２枚のＤｒＨＥＲＯディアボリックガイとＤｒＨＥＲＯディバインガイをデッキに戻してカードを１枚ドローする!!?」
「くっ、またディアボリックガイがデッキに……」
「俺はジャンクチェンジャーを召喚!!?」

〈ジャンクチェンジャー〉☆３　戦士族　地属性
ＡＴＫ１５００

フィールドに現れたのは鋼鉄の身体を持つロボットのような戦士。
「そして、斬り開け!!?運命に抗うサーキット!!?」
「リンク召喚か……」
俺が正面に手を前に突き出すと、目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター２体!!?俺はジャンクチェンジャーとＤｒＨＥＲＯディアボリックガイをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?追想に生きる王女!!?リンク２!!?聖騎士の追想　イゾルデ!!?」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

ジャンクチェンジャーとディアボリックガイがサーキットの中に消え、金髪と白髪の２人の女性が現れる。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?リンクレカレクション!!?

リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター1体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキからキングスナイトを手札に加える!!?」

「ここでキングスナイトを手札に加えるだと?」

「リバースカードオープン!!?魔法カード、闇の量産工場!!?自分の墓地の通常モンスター2体を対象としてそのモンスターを手札に加える!!?俺はクィーンズナイトとジャックスナイトを手札に加える!!?」

「手札に絵札の三銃士を揃えた……!!?お前、まさか……!!?」

「聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動!!?メモリーズギフト!!?デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター1体をデッキから特殊召喚する!!?俺はデッキから妖刀竹光、最強の盾、ビッグバンシュート、閃光の双剣―トライス、パワーピカクスを墓地に送り、デッキから天融星カイキを特殊召喚!!?」

「天融星カイキ、だと?」

〈天融星カイキ〉☆5　戦士族　光属性

ＤＥＦ２１００

俺のフィールドに鬼の顔の鎧を見に纏った鎧武者が現れる。

さあ、派手に行くぜ!!?

「天融星カイキの効果、それにチェーンして墓地に送られた妖刀竹光の効果発動。デッキから妖刀竹光以外の竹光カードを手札に加える。俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える。そして天融星カイキの効果発動!!?このカードが特殊召喚に成功した場合、ライフポイントを５００を払って発動できる!!?」

遊騎　ＬＰ４０００→３５００

「自分の手札・フィールドから、戦士族の融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚する‼？俺は手札のクィーンズナイト、キングスナイト、ジャックスナイトの３体で融合‼？」
「モンスター効果で融合召喚だと⁉？」
カイキが雄叫びをあげると、空に見える星が輝き、手札から現れた絵札の三銃士を照らす。
その光に導かれるように、絵札の三銃士は粒子に変わり、混ざり合う。
そして混ざり合った粒子が爆けると現れるのは黒い鎧を身に纏った漆黒の騎士。
「融合召喚‼？運命に打ち勝つ勇敢なる騎士達の主‼？アルカナナイトジョーカー‼？」

〈アルカナナイトジョーカー〉☆９　戦士族　光属性
ＡＴＫ３８００

「あの状況からアルカナナイトジョーカーを融合召喚するだと⁉？だが、その程度ならまだーーー」
「何終わった気でいるんだよ。まだまだこれからだ‼？魔法カード、貪欲な壺‼？墓地に存在するアルカナエクストラジョーカー、ＤＨＥＲＯドミネイトガイ、ＨＣガーンデーヴァをＥＸデッキに、クィーンズナイト、キングスナイトをデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする‼？」
「っ、まだドローするってのか⁉？」
「そして、斬り開け‼？運命に抗うサーキット‼？」
俺が正面に手を前に突き出すと、再び目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はカード名が異なるモンスターモンスター２体‼？俺は天融星カイキとＤＨＥＲＯディアボリックガイをリンクマーカーに

セット!!?・サーキットコンバイン!!?・リンク召喚!!?・業火の剣豪!!?・リンク２!!?・剛炎の剣士!!?」

〈剛炎の剣士〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　炎属性
ＡＴＫ１３００　↙?　↑

カイキとディアボリックガイがサーキットの中に消え、二振りの赤い大剣を構えた戦士が姿を現わす。
「剛炎の剣士の永続効果、業火招来!!?・フィールドの戦士族モンスターの攻撃力は５００ポイントアップする!!?」
剛炎の剣士が雄叫びを上げると、俺のモンスターが炎のオーラを身に纏う。

ＤＩＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄ
ＡＴＫ１９００→２４００

アルカナナイトジョーカー
ＡＴＫ３８００→４３００

聖騎士の追想　イゾルデ
ＡＴＫ１６００→２１００

剛炎の剣士
ＡＴＫ１３００→１８００

「全体を強化するリンクモンスターか!!?」
「リバースカードオープン!!?・魔法カード、魔法石の採掘!!?・手札を２枚捨て、自分の墓地の魔法カード１枚を手札に加える!!?・俺は手札を２枚捨て墓地の装備魔法、パワーピカクスを手札に加える!!?・さらにくず鉄の像の効果発動!!?・このカードが墓地へ送られた場合、自分の墓地のジャンクモンスター１体を対象としてそのモンスターを守

備表示で特殊召喚する‼?‼甦れ、チューナーモンスター、ジャンクチェンジャー‼?‼」

〈ジャンクチェンジャー〉☆３　戦士族　地属性
ＤＥＦ９００→１４００

「ジャンクチェンジャーの効果発動‼?‼このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、フィールドのジャンクモンスター１体を対象として２つの効果から１つを選択して発動できる。対象のモンスターのレベルを１つ上げるか、対象のモンスターのレベルを１つ下げる。俺は１つ目の効果を使用し、ジャンクチェンジャーのレベルを１つ下げる‼?‼」

ジャンクチェンジャー
☆３→２

ジャンクチェンジャーの身体が赤く輝き、レベルが１つ下がる。
「さらに墓地に存在するＤ－ＨＥＲＯディアボリックガイの効果発動‼?‼墓地のこのカードを除外し、再び来てくれ、Ｄ－ＨＥＲＯディアボリックガイ‼?‼」

〈Ｄ－ＨＥＲＯディアボリックガイ〉☆６　戦士族　闇属性
ＤＥＦ８００→１３００

「俺はレベル６、Ｄ－ＨＥＲＯディアボリックガイに、レベル２、チューナーモンスター、ジャンクチェンジャーをチューニング‼?‼」
ジャンクチェンジャーが光の輪になり、ディアボリックガイが小さな星に変わり、光の道になる。
光の道が輝くと、その中から現れるのは機械の身体を持つ電子の巨人。
「迫る逆境、覆したるは不屈の闘志‼?‼シンクロ召喚‼?‼百折不撓の

戦士、ギガンティックファイター!!?」

〈ギガンティックファイター〉☆8　戦士族　地属性
ＡＴＫ２８００→３３００

「今度はレベル８のシンクロモンスターだと!?」
「ギガンティックファイターの永続効果、フォルテュードフォース!!?このカードの攻撃力は、お互いの墓地の戦士族モンスターの数×１００ポイントアップする!!?俺の墓地にいる戦士族モンスターＤＨＥＲＯディアボリックガイ、ＤＨＥＲＯドローガイ、天融星カイキ、ジャックスナイト、ジャンクチェンジャー、の５体。よって攻撃力は５００ポイントアップする!!?」

ギガンティックファイター
ＡＴＫ３３００→３８００

「攻撃力３８００……（確かに強力なモンスター達だ。だが、所詮は脳筋。俺の墓地にある超電磁タートルを使えば……）」
「超電磁タートル」
「っ!!?」
「悪いが、ちゃんと覚えてるしどうにかする手段もあるんだよ。装備魔法、パワーピカクスをＤＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄに装備!!?」
Ｂｌｏｏｄが手をかざすと、Ｂｌｏｏｄの手元に巨大なツルハシが現れる。
「パワーピカクスの効果発動!!?１ターンに１度、装備モンスターのレベル以下のレベルを持つ、相手の墓地に存在するモンスター１体を選択してゲームから除外し、エンドフェイズ時まで装備モンスターの攻撃力を５００ポイントアップする事ができる!!?」
「何だと!?」
「俺が除外するのは勿論超電磁タートルだ!!?」
Ｂｌｏｏｄが勢いよくツルハシを地面に突き立てると、ツルハシ

から衝撃波が放たれ、墓地にいた超電磁タートルは弾き飛ばされ、闇の中に消えていった。

ＤｒＨＥＲＯ　ＢｌｏｏｍｅｒＤ
ＡＴＫ２４００→２９００

「そんな、馬鹿な……」
「バトル‼?ギガンティックファイターでエルシャドールシェキナーガを攻撃‼?ギガンティックブレイク‼?」
「っ、迎え撃て、エルシャドールシェキナーガ‼?シャドーシェル‼?」
シェキナーガは影で覆われた鉄の弾丸をギガンティックファイターに撃ち出すが、ギガンティックファイターは力強く跳躍して鉄の弾丸を躱すと、シェキナーガを勢いよく蹴り飛ばし、爆散させた。
「くっ……エルシャドールシェキナーガ‼?」
「続けて、剛炎の剣士でダイレクトアタック‼?浄火一閃‼?」
「ぐっ‼?」

治虫　ＬＰ８０００→６２００

剛炎の剣士が二振りの赤い大剣を振り下ろし、治虫の身体を斬り裂く。
「どんどん行くぜ‼?聖騎士の追想　イゾルデでダイレクトアタック‼?ツインアタック‼?」
「がっ‼?」

治虫　ＬＰ６２００→４１００

金髪と白髪の２人の女性が同時に飛び上がり、空中で一回転してから治虫に飛び蹴りを放つ。
「ぐっ……クソ、俺は最強のハズだ‼?最強の俺が負けるわけが

……」
「……悪いな、治虫。現実のお前が遊花に対してこんなことをする奴だとは思ってないよ。だけど、夢だからといって俺の弟子を傷付ける奴を許すわけにはいかないんだ。だから……いっぺんぶっ飛んで反省しやがれ‼?」
「っ‼?」
「これで終わりだ‼?アルカナナイトジョーカーでダイレクトアタック‼?ロイヤルストレートフラッシュ‼?」
アルカナナイトジョーカーは大剣を構えると、治虫に勢いよく突撃し、その大剣を振り下ろした。
「クソッ……ぐあぁぁぁ‼?」

治虫　ＬＰ４１００→０

ーーーーーーー

「ふぅ、終わったな」
アルカナナイトジョーカーに斬られ、その場に膝をついた治虫に歩み寄る。
「約束通り、遊花のデッキは返して貰うぜ」
「……っ、クソッ」
治虫からデッキを受け取るとデュエルをずっと見ていた遊花に近づき、受け取ったデッキを手渡す。
「これで間違いないか?」
「っ、はい‼?ありがとうございました‼?やっぱり、師匠は私の最高の師匠です‼?」
「うおっ‼?」
デッキを受け取った遊花は感極まった表情で勢いよく俺に抱き着いてくる。
しかし、突然のことでその勢いを受け止めきれず、俺はよろけて背中から倒れこみ、近くにあった机で思いっきり頭部を強打してしまっ

た。
「ぐっ……勢い、強すぎ、だ」
「ふぇ⁉？師匠⁉？師匠⁉？」
頭部を強打した衝撃で薄れゆく意識の中、心配そうに身体を揺する遊花の声が頭に響く。
そしてーーー

ーーーーーー

「いてっ‼？……最悪だ」
俺はベッドから落ちて強打した頭を押さえながら、起き上がってベッドの縁に座る。
「……夢、か」
……なんだか、凄く疲れた気がする。
なんで、あんな夢を見たんだろうか。
辺りを見渡すと、そこはあるのはいつもの風景。
いつのまにか日常になってしまった栗原家の俺の部屋だった。
「ああ、落ち着くな。ここは」
なんだか、酷くほっとした。
なんだかんだ言って、栗原家はもう俺の帰る場所なんだな。
そんなことを思いながら俺は部屋を出て、リビングに向かう。
耳を済ませるとリビングキッチンの方から包丁の音が聞こえてくる。
……これで両親がいたら、面白いんだけどな。
「あ、師匠‼？おはようございます‼？」
そこに立っていたのは、当然デュエルアカデミアの制服の上からエプロンをつけた遊花だった。
いつものように花が咲いたような嬉しそうな笑顔を浮かべ、いつものように料理をしている。
「どうしたんですか、師匠？何だか驚かれてるようですが……」
夢でも見た光景に俺が苦笑を浮かべると、遊花が不思議そうに首を

傾げた。
　凄く既視感がある光景だな。
「実は、ちょっと面白い夢を見てな」
「面白い夢、ですか？」
「ああ。俺と遊花が幼馴染で一緒にデュエルアカデミアに通ってる夢だ」
「私と師匠が幼馴染でデュエルアカデミアにですか⁉？凄く楽しそうです⁉？よければ聞かせて貰えませんか⁉？」
　遊花が朝食を手に目を輝かせながら俺を見る。
　……そうだな。
　なんとなく、話さないのは勿体ないかなと思った。
　きっと、それはありえたかも知れないとても楽しい夢想の世界なのだから。
「そうだな。じゃあ、話すとするか」
「やった⁉？それじゃあちょっと準備しますね」
　いそいそと軽食を用意し、ワクワクした目で俺を見る遊花と共に、俺の変わらない日常は始まるのだった。

番外編・2周年記念　夢見る少女じゃ割といられる

★

「……ん、もう朝……」
軽快に鳴り響く目覚まし時計を止めると、微妙な違和感を感じた。
目覚ましを止めた手を見ると、いつも見る自分の手よりも小さく見える。
起きたばかりで寝ぼけているからかと、身体を起こして顔をパチパチと叩こうとすると……
「……あれ？」
身体を起こして改めて自分の身体を見てみると、私の身体は少し小さくなっていた。
記憶が確かなら、デュエルアカデミアの高等部1年ぐらいの時はこれぐらいの身長だった気がする。
頭が回らず混乱していると、私の部屋の扉がノックされ開かれる。
「遊花～あら、起きてるじゃない。もう、休日だからっていつまでも寝てちゃダメよ？」
「……えっ？」
かけられた声に、思わず思考が止まった。
そこにいたのは、フワフワとした長い黒髪の女性。
女性は呆れたような声を出しながらも、優しい笑みを浮かべている。
「お母……さん？」
「遊花？まだ寝ぼけてるの？」
そこにいたのは栗原　愛花（くりはら　まいか）という女性。
2年前のあの運命の日。
交通事故で亡くなったハズの私のお母さん。
そしてーーー
「愛花？遊花はまだ起きてないのかい？」
お母さんの後ろから黒髪をウルフカットにした男性が顔を覗かせ

る。
栗原　遊翼（くりはら　ゆうすけ）。
お母さんと一緒に交通事故で亡くなったハズの私のお父さん。
「……あぁ、夢なんだ、これ」
夢だと確信するのに、時間は必要なかった。
私の記憶が、心が、この光景を夢だと断言する。
本物のお母さんも、お父さんも、もういない。
もし、私の両親が生きていたのなら、私は師匠とあの公園で出会うことは無い。
師匠と出会い、沢山の優しさと出会いを貰ったからこそ、今の栗原遊花は存在する。
だからこそ、師匠の記憶を持っている私に、あの辛い現実が起こっていないことはあり得ない。
だからこそ……この光景は夢でしかあり得ない。
それでもーーー
「っ……お母さん……お父さん‼?」
「ええっ⁉?ゆ、遊花⁉?」
「うぉっ⁉?どうしたんだい⁉?何か怖い夢を見たのかい⁉?」
いきなり泣き出し、２人に抱き着いた私を見てお母さん達が狼狽る。
これは夢だ。
それは間違いなくて、この光景だって、きっと私の頭の中で作られたイメージだ。
それでも……それでも、今だけは……
「お母さん……お父さん……うわぁぁぁん‼?」
顔を埋めて泣き続ける私の頭を、お母さんが優しく撫で続けてくれて、お父さんは優しく肩を叩いてくれる。
例え夢の中でも、両親の温もりが、私を包んでくれている。
それだけで、私は十分に幸せだった。
ーーーーーーー

「全く、怖い夢を見て泣き出すなんて、遊花はまだまだ子供ね」
「ハッハッハ、まぁいいじゃないか。そんなところも遊花の魅力さ」
「そうね、ウチの娘が可愛過ぎて困るわ」
「あぅ……恥ずかしいよぉ……」
私を微笑ましそうに見て微笑む両親に、私は顔を赤くして俯く。
夢だとは理解しているけど、両親に思いっきり泣きついたという事実が今更になって恥ずかしくなってくる。
後悔をしているかと言われれば……してないと断言はできる。
目覚めれば、この温もりを得ることは、もう無いのだから。
それでも、恥ずかしくないかと言われれば、また別の話なんだけど。
「それにしても遊花、そんなにのんびりしててもいいの？」
「ほぇ？」
お母さんの言葉に私は首を傾げる。
もしかして夢の中の私には何か用事があったのだろうか？
そんなことを言われても今の私にその用事は分からないんだけれど……
「ほぇ？じゃないわよ。そろそろ愛しの彼が来るんじゃないの？」
「愛しの……？」
お母さんの言葉に首を傾げていると玄関のインターホンがなった。
お客さんだろうか？
でも、夢の中だから誰が来たのか全く読めない。
「あら、もう来たんじゃない？ほら、遊花。出迎えに行ってらっしゃい」
「えっ？う、うん。はーい、今開けまーす」
私は首を傾げながらもお母さんに言われた通り玄関に移動し、扉を開ける。
そこにいたのはーーー
「よっ。おはよう、遊花」
「えっ⁉？師匠⁉？」
茶髪のエアリーヘアで、とても優しい瞳をした男性。

見間違えるわけもない。
結束　遊騎ーーー私の師匠がそこにいた。
「な、なんで師匠がここに……」
「ん？明日はデュエルアカデミアが休みだから家でデュエルをしませんかって、誘ってきたのは遊花じゃないか」
「ふぇっ⁉？」
師匠の言葉に私は思わず目を丸くする。
私が師匠を家に誘った？
というか、デュエルアカデミアが休みだからって師匠はこの夢だとデュエルアカデミア生なの⁉？
「やっぱり遊騎君だったわね。おはよう、遊騎君。ごめんなさいね、遊花はまだちょっと寝ぼけてるみたいなの」
「おはようございます、愛花さん。悪い、遊花。いくら家がお向かいにあるからってちょっと来るのが早過ぎたか？」
「お向かい⁉？」
「お、おぅ。なんか驚くところがあったか？」
不思議そうに首を傾げる師匠に私はパニックになりそうだった。
師匠の家がお向かいにあるってことは、この夢では私と師匠は幼馴染ってことなの？
そ、そういえば、前に師匠が私と幼馴染でデュエルアカデミアに通ってる夢を見たって言ってたけど……まさか、世界観が同じ？
師匠に言われた夢の話がこの夢にも影響してるの？
それは……それはーーー
「遊花？やっぱり迷惑だったか？」
「そんなことないです‼？すっごく嬉しいです‼？」
「お、おう。なんか今日の遊花はテンションが高いな」
ーーー良い‼？すっごく良いです‼？素敵です‼？
勿論、現実での師匠との関係に不満なんてものは全くない。
偶然出会っただけの私を助け、弟子にしてくれた師匠。
もう1度私がデュエルができるように、夢に向かって翔べるようにしてくれた師匠に、あの奇跡的な出会いに、不満なんて持つハズもな

い。
師匠からの恩義、その恩義に対する敬愛の念は、私の中で1番大きく、何よりも大切なものなのだ。
……ただ、それはそれとして、私が師匠にとってもっと身近な存在、特別な存在になるということに憧れが無いわけでもない。
幼馴染ということは、師匠とずっと一緒に成長してきたってことだもんね。
それはきっと、とても素敵な関係なんだよ、多分‼?
……うん、私だって女の子だもん。
夢の中でぐらい、夢見てもいいよね?
「もう、遊花ったら。遊騎君が来たからってはしゃぎ過ぎよ?そんなにはしゃいで、いつまで遊騎君を玄関口で待たせるつもりなの?」
「あ‼?お、お待たせしてすみません‼?どうぞ‼?どうぞ入ってください、師匠‼?」
「ぷっ、何でそんなに慌ててるんだよ。じゃあ、まぁ、お邪魔するな」
「は、はい‼?」
苦笑を浮かべながらも優しい眼差しで私に笑いかけてくれる師匠を私の家に招き入れる。
何だかちょっぴり不思議な感じ。
現実では、「ただいま」って言って師匠は帰ってきてくれるから、少しだけ新鮮だ。
何とも言えない感覚にくすぐったくなりながらも師匠をリビングに招き入れると、リビングにいたお父さんが柔和な笑みを浮かべた。
「おはよう、遊騎君。いつも遊花が世話になってるね」
「おはようございます、遊翼さん。いや、遊花には俺の方が世話になってますよ。ウチの両親がいない時にはご飯を作りにきて貰ってますし……」
「ハハハハハ、気にすることはないよ。その代わりに遊騎君には遊花のボディーガードをやって貰っているのだから。その調子で遊花の事を頼むよ。君に預けておけば、おじさんも安心だ‼?」
「そうね。遊騎君にはこれからも遊花を支えてあげて欲しいわ。勿

論、末永くね」
「は、はぁ……まぁ、期待に応えられるように頑張ります」
お父さん達の言葉に師匠は戸惑いながらも了承の意を返す。
末永くって、そういう意味だよね？
わ、私が師匠と……あぅ～～～!?
勿論、嫌なわけないけどね!?
師匠が求めてくれるなら、私は……って、落ち着け、私!?
これは夢!?夢だから!?
「フム……時に遊騎君。君が今日我が家に来たのはデュエルをしにきたということでいいのかな？」
「えっ？は、はい。遊花が俺とデュエルをしたいって言ってましたから。遊花の強力な防御を突き崩すには多彩な攻め方が必要ですから、俺としてもいい経験になりますし」
私が内心テンパっている内に、お父さんが口元に握り拳を当て、俯いて何かを考え込む。
しばらくして顔をあげたお父さんはとても楽しそうな表情で笑っていた。
「なら、ちょうど良いね。遊騎君。今日はおじさんがデュエルをしてあげようじゃないか」
「っ!?遊翼さんが!?」
「ええっ!?お父さん!?」
お父さんの言葉に私と師匠は驚いて目を見開く。
お父さんは現実の師匠や闇先パイ程ではなかったけどプロリーグで活躍するプロ決闘者だった。
そんなお父さんがこの夢世界ではただのデュエルアカデミア生でしかない師匠とデュエルを？
「遠慮はいらないよ。いつも遊花と一緒にいてくれる君に対する1人の親としてのお礼だと思ってくれればいい。今の遊騎君の実力にも興味があるしね。勿論、僕も1人のプロ決闘者として手は抜くつもりはないがね」
そういってお父さんが試すような目で師匠を見る。

そんなお父さんに、師匠は心底楽しそうな笑みを浮かべ、デュエルディスクを起動することで応えた。
「勿論、受けて立ちます‼?相手が誰であろうと、俺は俺の全力でデュエルをするだけです‼?」
「ふふっ、遊騎君ならそう言うだろうと思っていたよ」
師匠の答えにお父さんも嬉しそうに笑って近くにおいていたデュエルディスクをつけ、起動する。
そんなお父さん達を見て、お母さんはクスクスと楽しそうに笑う。
「もう、お父さんったら年甲斐もなくはしゃいじゃって。本当に、男の人っていくつになっても子供なんだから」
「師匠とお父さんのデュエル……」
「遊花は遊騎君を応援するわよね?」
お母さんの言葉に私は少し考え込む。
プロ決闘者であるお父さんと、この夢世界ではデュエルアカデミア生の師匠。
確かに実力差があるかもしれないことを考えると師匠を応援するべきだとは思うけど、今、私がしたいことはーーー
「師匠‼?お父さん‼?どっちも頑張ってください‼?」
ーーー師匠も、お父さんも、どっちも応援すること。
だって、現実では絶対に見ることができない、私の憧れの人と私が憧れたプロ決闘者のデュエルなんだから。
私の声援に師匠とお父さんは一瞬きょとんとした表情を浮かべたが、すぐに笑顔を浮かべてサムズアップをした。
「ハハハ、まさか遊花が私も応援してくれるとはね。これはあまり無様な姿は見せられないね」
「それは俺もですよ。弟子の前でカッコ悪いところは見せられません」
「ハハハ、それじゃあ、お互いに思いは同じというところで」
「ええ、全力の……楽しいデュエルを、遊花に見せましょう。胸を貸して貰います、遊翼さん‼?」
「全力で来たまえ、遊騎君‼?」

『決闘!!?』

遊騎　ＬＰ８０００
遊翼　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は僕だね。愛娘に応援されてるんだ。最初から全力でいかせて貰うよ?まずは手札からＬ（リリカルルスキニア）　Ｌ　―コバルトスパローを捨て、魔法カード、神鳥（シムルグ）の来寇!!?このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できず、手札から鳥獣族モンスター1体を捨てることでデッキから同じ属性は1体までとしてシムルグモンスター2体を手札に加える!!?僕はデッキから風属性の雛神鳥シムルグと闇属性のダークシムルグを手札に加えるよ。そして自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚できる。来なさい、Ｌ（リリカルルスキニア）　Ｌ　―ターコイズワーブラー!!?」

〈ＬＬ―ターコイズワーブラー〉☆1　鳥獣族　風属性
ＤＥＦ１００

お父さんのフィールドに現れたのはターコイズの羽根を持つ小鳥のモンスター。

「ＬＬ　―ターコイズワーブラーの効果発動!!?このカードが手札からの特殊召喚に成功した場合、自分の手札・墓地からＬＬモンスター1体を選んで特殊召喚する!!?墓地より舞い戻りなさいＬＬ―コバルトスパロー!!?」

〈ＬＬ―コバルトスパロー〉☆1　鳥獣族　風属性
ＤＥＦ１００

さらにワーブラーに導かれ、墓地よりコバルトの名を持つ雀が姿を現す。

「ＬＬ　―コバルトスパローの効果発動‼？同名カードは１ターンに１度しか使用できず、このカードが特殊召喚に成功した場合、デッキから鳥獣族・レベル１モンスター１体を手札に加える‼？僕はデッキから２体目のＬＬ―ターコイズワーブラーを手札に加えさせて貰うよ。さらに手札から雛神鳥シムルグを捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動‼？デッキからレベル１モンスター１体を特殊召喚する‼？来なさい、ミスティックパイパー‼？」

〈ミスティックパイパー〉☆１　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

現れたのは私のデッキにも入っているフルートのようなものを弾いている男の人。
「っ、ミスティックパイパー⁉？そいつは……」
「よく遊花とデュエルをしている遊騎君ならばその強さも知っているだろう？ミスティックパイパーの効果発動‼？このカードをリリースして自分のデッキからカードを１枚ドローし、この効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル１モンスターだった場合、自分はカードをもう１枚ドローする‼？私がドローしたのは金華猫‼？レベル１モンスターなのでもう１枚ドローだ‼？」
「っ、手札が減らない……」
「さて、まずはこれだ。飛翔せよ‼？希望へ羽ばたくサーキット‼？」
「っ、リンク召喚か‼？」
お父さんが正面に手をかざすと、目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル１モンスター１体。私はＬＬ―ターコイズワーブラーをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚‼？希望の伝え手‼？リンク１‼？リンクリボー‼？」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

ワーブラーがサーキットに吸い込まれると、代わりにいつも私を守ってくれる青い球体のモンスターがお父さんの前に飛び出した。
「遊花も使ってるリンクリボーか」
「どんどん行くよ、金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆1　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

現れたのは私も使っている霊体になっている猫のようなモンスター。
「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル1モンスターを特殊召喚する!!?戻っておいで、ＬＬ―ターコイズワーブラー!!?」

〈ＬＬ―ターコイズワーブラー〉☆1　鳥獣族　風属性
ＤＥＦ１００

金華猫に咥えられ、再びワーブラーが姿を現す。
そして、お父さんは再び正面に手をかざす。
「さあ、次だ。飛翔せよ!!?希望へ羽ばたくサーキット!!?」
「っ、またリンク召喚……」
「召喚条件は鳥獣族モンスターを含むモンスター2体以上!!?私はＬＬ―ターコイズワーブラー、リンクリボー、金華猫をリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚!!?神鳥に至し王!!?リンク3!!?王神鳥シムルグ!!?」

〈王神鳥シムルグ〉ＬＩＮＫ　3　鳥獣族　風属性
ＡＴＫ２４００　↙?←↘?

ワーブラー達がサーキットに吸い込まれると、サーキットの中から

翡翠の羽根を持つ巨大な鳥が飛翔する。
「王神鳥シムルグ……リンク３のモンスターか」
「まだだ。まだまだ私は飛べる‼？墓地に存在する雛神鳥シムルグの効果発動‼？このカードが墓地に存在し、相手の魔法＆罠ゾーンにカードが存在しない場合、このカードを守備表示で特殊召喚する‼？ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外され、この効果の発動後、ターン終了時まで自分は鳥獣族モンスターしか特殊召喚できない。墓地より舞い戻れ、雛神鳥シムルグ‼？」

〈雛神鳥シムルグ〉☆１　鳥獣族　風属性
ＤＥＦ１６００

墓地からフィールドに舞い戻ってきたのは翡翠の羽根を持つ小鳥。
そしてお父さんはその言霊を口にする。
「私はレベル１のＬＬ―コバルトスパローと雛神鳥シムルグでオーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼？」
「っ‼？次はランク１のエクシーズ召喚か‼？」
スパローと雛神鳥が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして、渦が弾けると、舞い降りたのは群青の翼を持つ小さな歌い手。
「殺伐とした戦場に安らぎの歌を届けよ‼？ランク１　‼？
ＬＬ（リリカルルスキニア）―リサイトスターリング‼？」
〈ＬＬ　―リサイトスターリング〉★１　鳥獣族　風属性
ＡＴＫ０
「ＬＬのエクシーズモンスターか‼？」
「ＬＬ　―リサイトスターリングの効果発動‼？ブレイヴソング‼？

このカードがエクシーズ召喚に成功した場合、フィールドの表側表示モンスター1体を対象として、そのモンスターの攻撃力・守備力は、このカードのオーバーレイユニットの数×３００ポイントアップする‼？ＬＬ　―リサイトスターリングのオーバーレイユニットは２つ‼？私は王神鳥シムルグを選択し、攻撃力を６００ポイントアップする‼？」

リサイトスターが綺麗な歌声で歌い始めると、その歌を聞いていた王神鳥が力強い鳴き声を上げた。

王神鳥シムルグ
ＡＴＫ２４００→３０００

「攻撃力３０００……」

「さらにＬＬ　―リサイトスターリングの効果発動‼？ブレッシングソング‼？１ターンに１度、このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除き、デッキから鳥獣族・レベル１モンスター１体を手札に加える‼？私はデッキからＬ（リリカルルスキニア）　Ｌ　―サファイアスワローを手札に加える‼？エンドフェイズ、王神鳥シムルグの効果発動‼？キングスフラップ‼？自分・相手のエンドフェイズ、使用していない自分・相手の魔法＆罠ゾーンの数以下のレベルを持つ、鳥獣族モンスター１体を手札・デッキから特殊召喚する‼？」

「っ⁉？俺と遊翼さんの魔法・罠ゾーンは全て空いている……‼？」

「現れよ、霞の谷の巨神鳥（ミストバレー）‼？」

王神鳥が翼を羽ばたかせ、巨大な竜巻を生み出すと、その竜巻を斬り裂くように、竜巻の中から金色の羽根を持つ巨大な鳥が現れた。

〈霞の谷の巨神鳥〉☆７　鳥獣族　風属性
ＡＴＫ２７００

「私はこれでターンエンドだ。さあ、遊騎君。君のデュエルを見せてもらおうか」

遊騎　ＬＰ８０００　手札５
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
☆　ー
ー○○ーー
ーーーーー　ー
遊翼　ＬＰ８０００　手札５

「いきなり攻撃力３０００のモンスターに、最上級モンスター、エクシーズモンスターを並べたのに手札は最初と同じ５枚、か」
「怖気付いたかな？」
試すような視線で、お父さんが師匠を見る。
そんなお父さんに対して、師匠は溢れるような笑みで応えた。
「まさか。むしろワクワクしてますよ。こんなに強い人をどうやって攻略しようかってね‼？俺のターン、ドロー‼？まずはこれだ‼？魔法カード、予想ＧＵＹを発動‼？自分フィールドにモンスターが存在しない場合にこのカードは発動できる。デッキからレベル４以下の通常モンスター１体を特殊召喚する‼？来い、クィーンズナイト‼？」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１５００

師匠の前に現れたのは師匠の代名詞である絵札の三銃士の一角。
赤い鎧を身に纏った女性の騎士。
「さらに俺はキングスナイトを召喚‼？」

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

さらにクィーンズナイトと並び立つように黄金の鎧を身に纏った騎士が現れる。
そしてクィーンとキングが揃った時、新たな騎士が姿を現わす。
「キングスナイトの効果発動‼?自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト1体を特殊召喚する‼?」
「遊騎君お得意の絵札の三銃士か。だが、残念だけど揃わせはしないよ。霞の谷の巨神鳥の効果発動‼?魔法・罠・モンスターの効果が発動した時、自分フィールドのミストバレーカード1枚を対象としてその自分のミストバレーカードを持ち主の手札に戻し、その発動を無効にし破壊する‼?」
「っ‼?無効効果……‼?」
「私は霞の谷の巨神鳥自身を手札に戻し、キングスナイトを破壊する‼?」
巨神鳥は荒々しい鳴き声をあげると、その身体に風を纏いながらキングスナイトに突撃し、キングスナイトを破壊するとお父さんの手札に戻っていった。
「遊騎君お得意の絵札の三銃士は潰したよ。召喚権も使っている、次はどう動くかな?」
「なら、こうだ‼?フィールド上にエクシーズモンスターが存在する場合、このカードは手札から表側守備表示で特殊召喚できる‼?来い、フォトンスレイヤー‼?」
〈フォトンスレイヤー〉☆5　戦士族　光属性
ＤＥＦ１０００
クィーンズナイトを守るようにフィールドに現れたのは光りの身体を持つ白金の戦士。
「ＬＬ　―リサイトスターリングがいるため条件を満たしてしまったか。戦士族モンスターが2体……狙いはリンク召喚かな?」
「いくぜ‼?斬り開け‼?運命に抗うサーキット‼?」

師匠が正面に手を前に突き出すと、目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件は戦士族モンスター２体!!?俺はクィーンズナイトとフォトンスレイヤーの２体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?追想に生きる王女!!?リンク２!!?聖騎士の追想　イゾルデ!!?」

〈聖騎士の追想　イゾルデ〉ＬＩＮＫ　２　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００　↙?　↘?

クィーンズナイトとフォトンスレイヤーがサーキットの中に消えると、代わりにサーキットの中から金髪と白髪の２人の女性が現れる。
「聖騎士の追想　イゾルデの効果発動!!?リンクレカレクション!!?リンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスター１体を手札に加える。ただし、このターン、自分はこの効果で手札に加えたモンスター及びその同名モンスターを通常召喚・特殊召喚できず、そのモンスター効果も発動できない。俺はデッキからペンデュラムモンスター、イグナイトウージーを手札に加える!!?さらに俺は装備魔法、焔聖剣―デュランダルを聖騎士の追想　イゾルデに装備する!!?」
イゾルデの手元に現れたのは不滅の刃を意味する黄金の柄の剣。
「そして装備魔法、焔聖剣―デュランダルの効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードが装備されている場合、デッキからレベル５以下の戦士族・炎属性モンスター１体を手札に加え、その後このカードを破壊する!!?俺はデッキからペンデュラムモンスター、イグナイトデリンジャーを手札に加え、焔聖剣―デュランダルを破壊する!!?」
イゾルデが手にしていた焔聖剣―デュランダルから優しい灯火が灯り、灯火の中から１枚のカードが現れて師匠の手札に加わると、焔聖剣―デュランダルが砕け散った。
「聖騎士の追想　イゾルデの更なる効果発動!!?メモリーズギフト!!

？デッキから装備魔法カードを任意の数だけ墓地へ送り、墓地へ送ったカードの数と同じレベルの戦士族モンスター1体をデッキから特殊召喚する!!？俺はデッキから妖刀竹光、最強の盾、閃光の双剣―トライス、使い捨て学習装置（ラーニングマシン）を墓地に送り、来い、焔聖騎士―オジエ!!？」

〈焔聖騎士―オジエ〉☆4　戦士族　炎属性
ＤＥＦ２０００

イゾルデに導かれて現れたのは6匹の妖精を連れた焔の聖騎士。
「焔聖騎士―オジエの効果、それにチェーンして墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!？デッキから妖刀竹光以外の竹光カードをデッキから手札に加える!!？俺はデッキから黄金色の竹光を手札に加える!!？焔聖騎士―オジエの効果発動!!？このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合に、デッキから同名カード以外の戦士族・炎属性モンスター1体または聖剣カード1枚を墓地へ送る!!？俺はデッキから焔聖騎士―オリヴィエを墓地へ送る!!？さらに俺は装備魔法、妖刀竹光を焔聖騎士―オジエに装備!!？そして魔法カード、黄金色の竹光を発動!!？自分フィールドに竹光と名のついた装備魔法が存在する場合に発動でき、デッキからカードを2枚ドローする!!？俺はスケール2のイグナイトデリンジャーとスケール7のイグナイトドラグノフでペンデュラムスケールをセッティング!!？」
師匠を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中に導火線に火がついた2体の戦士の姿が浮かびあがり、下に2と7の数字が現れる。
「ペンデュラムカードが2枚……これは、くるかな？」
「いや、まだです!!？ペンデュラムゾーンのイグナイトデリンジャーのペンデュラム効果発動!!？イグナイトモジュール!!？もう片方の自分のペンデュラムゾーンにイグナイトカードが存在する場合、自分のペンデュラムゾーンのカードを全て破壊し、自分のデッキ・墓地から戦士族・炎属性モンスター1体を選んで手札に加える!!？俺はペンデュラムゾーンのイグナイトデリンジャー、イグナイトドラグノフを

破壊し、デッキからイグナイトキャリバーを手札に加える‼?そして今度はスケール2のイグナイトキャリバーとスケール7のイグナイトウージーでペンデュラムスケールをセッティング‼?」

光の中にいた2体の戦士の導火線が勢いよく燃え上がり、2体の戦士が爆散し、その爆風でデッキから新たなイグナイトが手札に加わると、再び師匠を挟むように光の柱が立ち上り、その光の中に導火線に火がついた2体の戦士と2と7の数字が現れる。

「これにより俺は3から6までのモンスターを同時に召喚可能‼?魂を燃やす戦士よ‼?燃え盛る勇気となりて、運命を超える力を導け‼?ペンデュラム召喚‼?現れろ、俺のモンスター達‼?」

師匠がそういうと空に巨大な穴が空き、そこからフィールドに向かって3つの光が舞い降りる。

「EXデッキより現れろ‼?レベル4、イグナイトドラグノフ‼?」

〈イグナイトドラグノフ〉☆4　戦士族　炎属性
ＡＴＫ１７００

最初に現れたのは導火線に火がついた銃剣を持った戦士。

ドラグノフは真剣な表情で王神鳥を睨むが、そんなドラグノフの上に導火線に火がついたナイフを手にした女戦士が落ちてきて、ドラグノフが下敷きになる。

「レベル5、イグナイトデリンジャー‼?」

〈イグナイトデリンジャー〉☆5　戦士族　炎属性
ＡＴＫ２４００

「レベル4、閃刀姫―ロゼ‼?」

〈閃刀姫―ロゼ〉☆4　戦士族　光属性
ＡＴＫ１５００

最後にフィールドに現れたのは黒い軍服に身を包み、真っ赤な刀を手にした銀髪赤目の少女。
「一気に3体もモンスターを展開してきたか。さあ、次は何を見せてくれるんだい？」
「まずはこれだ‼？ペンデュラムゾーンのイグナイトキャリバーのペンデュラム効果発動‼？イグナイトモジュール‼？もう片方の自分のペンデュラムゾーンにイグナイトカードが存在する場合、自分のペンデュラムゾーンのカードを全て破壊し、自分のデッキ・墓地から戦士族・炎属性モンスター1体を選んで手札に加える‼？」
「成る程、その効果はイグナイトモンスター共通のペンデュラム効果ってわけだね」
「俺はペンデュラムゾーンのイグナイトキャリバー、イグナイトウージーを破壊し、デッキから焔聖騎士―リナルドを手札に加える‼？そして自分フィールドに戦士族・炎属性モンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できる‼？来い、焔聖騎士―リナルド‼？」

〈焔聖騎士―リナルド〉☆1　戦士族　炎属性
ＤＥＦ２００

オジエの近くに現れたのは馬に乗った赤き騎士。
「この方法で特殊召喚した焔聖騎士―リナルドはチューナーとして扱う‼？」
「っ、次はチューナーモンスターか‼？」
「さらに焔聖騎士―リナルドの効果発動‼？　このカードが特殊召喚に成功した場合、自分の墓地のカード及び除外されている自分のカードの中から、同名カード以外の戦士族・炎属性モンスター1体または装備魔法カード1枚を手札に加える‼？俺は墓地の妖刀竹光を手札に加える‼？そして俺はレベル4、イグナイトドラグノフに、レベル1、チューナーモンスターとなった焔聖騎士―リナルドをチューニング‼？」

リナルドが光の輪になり、ドラグノフが小さな星に変わり、光の道になる。
「勇猛なる聖騎士よ!!?その武勇を持って騎士の矜持を示せ!!?シンクロ召喚!!?燃えたぎる騎士道!!?焔聖騎士導―ローラン!!?」
〈焔聖騎士導―ローラン〉☆5　戦士族　炎属性
ＡＴＫ２０００

光の道が輝くと、その中から現れたのは炎の大剣を持つ聖騎士。
「焔聖騎士導―ローランの効果、それにチェーンして墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?俺はデッキから2枚目の黄金色の竹光を手札に加える!!そして?焔聖騎士導―ローランの効果発動!!?このカードがシンクロ召喚に成功した場合、このターンのエンドフェイズに、デッキから装備魔法カード1枚を墓地へ送り、その後、デッキから戦士族モンスター1体を手札に加える!!?」
「後続をサーチするシンクロモンスターか。しかも、また竹光が揃ったということは……」
「俺は装備魔法、妖刀竹光を焔聖騎士導―ローランに装備!!?魔法カード、黄金色の竹光を発動!!?デッキからカードを2枚ドローする!!?次はコイツだ!!?俺はレベル４の焔聖騎士―オジエと閃刀姫―ロゼでオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
「お次はエクシーズ召喚か」
オジエとロゼが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けると現れたのは金色の翼を持つ希望の戦士。
「現れろ、Ｎｏ．３９!!?逆境の中で輝く希望の光!!?希望皇ホープ!!?」
〈Ｎｏ．３９　希望皇ホープ〉★４　戦士族　光属性
ＡＴＫ２５００

「Ｎｏ．……見たことがないカードだ。珍しいカードを持ってるね」
「珍しいのはＮｏ．３９　希望皇ホープだけじゃないですよ。俺はレベル５のイグナイトデリンジャーと焔聖騎士導―ローランでオーバーレイ!!?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!?エクシーズ召喚!!?」
「っ、次はランク５のエクシーズ召喚!?!?」
　デリンジャーと焔聖騎士導が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
　そして渦が爆けると現れたのは鋼の身体を持つ黄金の獅子。
「鋼の鎧纏し獅子王!!?Ｚ（ゼアルウエポン）Ｗ―獣王獅子武装（ライオアームズ）!!?」

〈ＺＷ―獣王獅子武装〉★５　獣族　光属性
ＡＴＫ３０００

「ＺＷ?また聞いたことがないカードだね」
「まずは墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?俺はデッキから３枚目の黄金色の竹光を手札に加える!!ＺＷ―獣王獅子武装の効果発動!!?ウェポンクリエイト!!?１ターンに１度、このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除く事で、デッキからＺ（ゼアルウエポン）Ｗと名のついたモンスター１体を手札に加える!!?俺はデッキからＺ（ゼアルウエポン）Ｗ―阿修羅副腕（アシュラブロー）を手札に加える!!?」
「またＺＷか……」
「ＺＷ―獣王獅子武装の更なる効果発動!!?ライズアップウェポン!!?フィールド上のこのモンスターを、攻撃力３０００ポイントアップの装備カード扱いとして自分フィールド上の希望皇ホープと名のついたモンスターに装備でき、装備モンスターが攻撃したバトルフェイズ中に、装備されているこのカードを墓地へ送る事で、そのバトルフェイズ中、装備モンスターは相手モンスターにもう１度だけ攻撃できる!!?」
「っ!!?」

獣王獅子武装が咆哮を上げると、ＺＷ―獣王獅子武装の身体が分かれ、装甲となってホープの身体に纏われていく。
「その翼、破邪の光を纏う!!?孤高なる獣の力、闇を打ち砕け!!?獣装合体!!?ライオホープ!!?」

Ｎｏ．３９　希望皇ホープ
ＡＴＫ２５００→５５００

「攻撃力５５００!?」
「さらに手札のＺＷ―阿修羅副腕の効果発動!!?自分のメインフェイズ時、手札または自分フィールド上のこのモンスターを攻撃力１０００ポイントアップの装備カード扱いとして自分フィールド上の希望皇ホープと名のついたモンスターに装備でき、装備モンスターは相手フィールド上の全てのモンスターに１回ずつ攻撃できる!!?」
「っ!?まだＮｏ．３９　希望皇ホープを強化するのか!?」
「その拳、鬼神の力を宿す!!?獣装鬼神合体!!?アシュラライオホープ!!?」

Ｎｏ．３９　希望皇ホープ
ＡＴＫ５５００→６５００

「まだだ!!?俺は墓地に存在する焔聖騎士導―ローランの効果発動!!?このカードが墓地に存在する場合、自分・相手のメインフェイズに、自分フィールドの戦士族モンスター１体を対象としてこのカードを攻撃力５００ポイントアップの装備カード扱いとしてその自分のモンスターに装備する!!?俺はＮｏ．３９　希望皇ホープに焔聖騎士導―ローランを装備する!!?」

Ｎｏ．３９　希望皇ホープ
ＡＴＫ６５００→７０００

「攻撃力７０００の全体攻撃モンスターだって⁉？」
「バトルだ⁉？Ｎｏ．３９　希望皇ホープで王神鳥シムルグを攻撃⁉？」
「っ、迎え撃て⁉？王神鳥シムルグ⁉？ゴットウィンド⁉？」
　王神鳥が翼を羽ばたかせて竜巻を引き起こし、竜巻がアシュラライオホープを呑み込んでいく。
　しかし、次の瞬間、竜巻が真っ二つに切り裂かれたかと思うと、中から勢いよくアシュラライオホープが飛び出し、王神鳥の頭上に跳び上がる。
「行け⁉？Ｎｏ．３９　希望皇ホープ⁉？ホープ剣アシュラライオスラッシュ⁉？」
　アシュラライオホープが勢いよく大剣を振り下ろすと、王神鳥の身体はあっさりと斬り裂かれて消滅し、その剣によって生まれた斬撃がお父さんを襲う。
　しかし、お父さんに斬撃が当たろうとした瞬間、その間に割って入る影があった。
「手札から、クリボーの効果発動⁉？ダークエンヴェロップ⁉？相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこのカードを手札から捨てて発動できる。その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージを０にする⁉？」
「っ⁉？クリボーだって⁉？」
　お父さんを庇うように茶色の毛玉のモンスターが立ち塞がり、その攻撃を受け止めて粒子になって消えていく。
「っ、だけど、まだＮｏ．３９　希望皇ホープは攻撃できる⁉？Ｎｏ．３９　希望皇ホープでＬＬ　―リサイトスターリングを攻撃⁉？ホープ剣アシュラライオスラッシュ⁉？」
　アシュラライオホープが勢いよく大剣を振り下ろし、その斬撃がリサイトスターに向かっていく。
　その斬撃を見て、お父さんは不敵に笑った。
「少し無用心がすぎるよ。ＬＬ　―リサイトスターリングの永続効果、ペインソング⁉？エクシーズ召喚したこのカードの戦闘で発生す

る自分への戦闘ダメージは相手も受ける!!?」
「っ!??なんだって!??」
アシュラライオホープが放った斬撃を受けたリサイトスターが断末魔の叫びを上げる。
その叫び声は衝撃波に変わり、師匠の身体を貫いた。
「ぐぅっ!!?結構効くね」

遊翼　ＬＰ８０００→１０００

「ぐあっ!!?」

遊騎　ＬＰ８０００→１０００

師匠とお父さんのライフポイントが同時にレッドゾーンに入る。
だけど、お父さんのフィールドにモンスターはなく、師匠のフィールドにはまだイゾルデがいる。
「くっ、だけど、これで終わりだ!!?聖騎士の追想　イゾルデでダイレクトアタック!!?ツインアタック!!?」
金髪と白髪の２人の女性が同時に跳び上がり、空中で一回転してからお父さんに跳び蹴りの態勢でお父さんに迫る。
これを受ければお父さんのライフポイントは尽きる。
だけど、やはりお父さんは不敵な笑みを崩さなかった。
「相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札から速攻のかかしを捨てて効果発動!!?相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から捨て、その攻撃を無効にし、その後バトルフェイズを終了する!!?」
「っ!??バトルフェイズを終了させるモンスター!!?」
お父さんの手札からかかしが現れ、イゾルデ達の跳び蹴りを受けて爆散する。
だけど、これで師匠のバトルフェイズは終了してしまった。
「……ははっ!!?流石は遊翼さんだ。やっぱりそう簡単にはいかせて貰えないな。メインフェイズ２、俺はカードを２枚伏せ、エンド

フェイズ!!?焔聖騎士導―ローランの効果により、デッキから妖刀竹光を墓地へ送り、護封剣の剣士を手札に加える。さらに墓地に送られた妖刀竹光の効果発動!!?俺はデッキから折れ竹光を手札に加える!!ターンエンドだ」

遊騎　ＬＰ１０００　手札３
ー▲△△▲　　ー
ーー○ーー
　ー　　☆
ーーーーー
ーーーーー　　ー
遊翼　ＬＰ１０００　手札４

フィールドを見れば明らかに追い詰められているのはお父さんの方だ。

だけど、師匠の表情は笑顔を浮かべながらも厳しそうに見え、代わりに追い詰められているハズのお父さんには余裕が見える。

きっとそれは、師匠達のようなデュエリストにだけわかる感覚。

追い詰められているハズの相手が逆転してくるという虫の知らせ。

「さあ、行くよ。僕のターン、ドロー!!?よし、速攻魔法、手札断殺!!?　お互いのプレイヤーは手札を２枚墓地へ送り、その後、それぞれデッキから２枚ドローする!!?」

「っ、手札交換か!!?」

「さらに魔法カード、貪欲な壺!!?墓地に存在する王神鳥シムルグ、ＬＬ　―リサイトスターリングをＥＸデッキに、霞の谷の巨神鳥、金華猫、クリボーをデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローする!!?良いものを引いたよ。手札からＲ（レイドラプターズ）　Ｒ　―ラストストリクスを捨てて、魔法カード、神鳥（シムルグ）の排撃!!?同名カードは１ターンに１度しか発動できず、手札から鳥獣族モンスター１体を捨てて発動でき、相手の魔法＆罠ゾーンのカードを全て持ち主の手札に戻す!!?」

「なっ!!?魔法・罠バウンス!!?っ、チェーンしてリバースカードオー

プン‼？罠発動‼？ダメージダイエット‼？このターン自分が受ける全てのダメージは半分になる‼？」
「ほう、ダメージを減らすカードを仕掛けていたか。だが、それでも私の追い風は止まらない‼？神鳥の排撃により、遊騎君の魔法＆罠ゾーンのカードを全て持ち主の手札に戻す‼？」
お父さんのカードから吹く暴風がホープが纏っていた獣王獅子武装や伏せカードを吹き飛ばしていく。
これで師匠には魔法・罠による妨害ができなくなり、ホープの攻撃力も一気に下がる。

Ｎｏ．３９　希望皇ホープ
ＡＴＫ７０００→２５００

「さあ、私の暴風を受け切れるかな？自分フィールドにモンスターが存在しないため、ＬＬ―ターコイズワーブラーを特殊召喚‼？」

〈ＬＬ―ターコイズワーブラー〉☆１　鳥獣族　風属性
ＤＥＦ１００

再びフィールドにワーブラーが姿を現す。
そしてワーブラーは次の小鳥を呼んでいく。
「ＬＬ　―ターコイズワーブラーの効果発動‼？墓地より舞い戻りなさいＬＬ―コバルトスパロー‼？」

〈ＬＬ―コバルトスパロー〉☆１　鳥獣族　風属性
ＤＥＦ１００

さらにワーブラーに導かれ、墓地よりコバルトの名を持つ雀が姿を現す。
「ＬＬ　―コバルトスパローの効果発動‼？僕はデッキからＲ（レイドラプターズ）　Ｒ―ペインレイニアスを手札に加えさせて貰うよ。そして手札に存在

するＬＬ　―サファイアスワローの効果発動!!?同名カードの効果は１ターンに１度しか発動できず、自分フィールドに鳥獣族モンスターが存在する場合にこのカードと鳥獣族・レベル１モンスター１体を手札から特殊召喚する!!?おいで、ＬＬ　―サファイアスワロー!!?　ＲＲ　―ペインレイニアス!!?」

〈ＬＬ―サファイアスワロー〉☆１　鳥獣族　風属性
ＤＥＦ０

〈ＲＲ　―ペインレイニアス〉☆１　鳥獣族　闇属性
ＤＥＦ１００

フィールドに現れたのは蒼玉の翼を持つ小鳥と緑の羽根を持つ機鳥。
「さらに墓地に存在する雛神鳥シムルグの効果発動!!?相手の魔法＆罠ゾーンにカードが存在しないため、墓地より舞い戻れ、雛神鳥シムルグ!!?」

〈雛神鳥シムルグ〉☆１　鳥獣族　風属性
ＤＥＦ１６００

再びフィールドに舞い戻ってくる雛神鳥。
これでお父さんのフィールドには５体のレベル１モンスターが揃った。
そしてお父さんはその言霊を口にする。
「私はレベル１のＬＬ―ターコイズワーブラー、ＬＬ―コバルトスパロー、ＬＬ―サファイアスワロー、ＲＲ　―ペインレイニアス、雛神鳥シムルグの５体オーバーレイ!!?５体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
「っ!??５体のモンスターを使ったランク１のエクシーズ召喚!??」
お父さんの呼び出した小鳥達が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に

吸い込まれる。
　そして、渦が弾けると、舞い降りたのは白い翼を持つ小さな歌い手。
「殺伐とした戦場に戦いの終わりを告げる歌を響かせよ‼？ランク１‼？　Ｌ（リリカルルスキニア）　Ｌ　―アセンブリーナイチンゲール‼？」

〈ＬＬ　―アセンブリーナイチンゲール〉★１　鳥獣族　風属性
ＡＴＫ０

「ＬＬ　―アセンブリーナイチンゲール……」
「まずはオーバーレイユニットとなったＬＬ―サファイアスワローの効果発動‼？フィールドのこのカードを素材としてエクシーズ召喚した風属性モンスターは、エクシーズ召喚に成功した場合、自分の墓地のＬＬモンスター１体を対象としてそのモンスターをこのカードの下に重ねてオーバーレイユニットとする効果を得る‼？この効果により、墓地よりＬＬ―ターコイズワーブラーをＬＬ　―アセンブリーナイチンゲールのオーバーレイユニットとする‼？」
　オーバーレイユニットとなったサファイアスワローが墓地よりワーブラーを呼び戻し、アセンブリーナイチンゲールのオーバーレイユニットとする。
「オーバーレイユニットが６つに……」
「さあここからが本番だ。ＬＬ　―アセンブリーナイチンゲールの永続効果、ファイトソング‼？このカードの攻撃力は、このカードのオーバーレイユニットの数×２００ポイントアップする‼？現在のＬＬ　―アセンブリーナイチンゲールのオーバーレイユニットは６つ‼？よって１２００ポイントの攻撃力をアップさせる‼？」

ＬＬ　―アセンブリーナイチンゲール
ＡＴＫ０→１２００

「攻撃力１２００……だけどそれじゃあまだＮｏ．３９　希望皇ホープを倒すことは……」

「Ｎｏ．３９　希望皇ホープを倒す必要はないよ。遊騎君を倒せればいいんだからね‼？ＬＬ　―アセンブリーナイチンゲールの永続効果、ストームソング‼？このカードは直接攻撃でき、オーバーレイユニットを持ったこのカードは、その数まで１度のバトルフェイズに攻撃できる‼？」
「なっ⁉？直接攻撃できる連続攻撃モンスター⁉？」
師匠のライフポイントは残り１０００。
ダメージダイエットにより受けるダメージは半分になってるけど、それでも６回の攻撃は耐えきれない。
そうだというのに、さらにお父さんはダメ押しを加える。
「さらにフィールド魔法、神鳥（シムルグ）の霊峰エルブルズを発動‼？」
お父さんがフィールド魔法を発動させると、部屋の中が暴風が吹き荒れる山脈に変わる。
「神鳥の霊峰エルブルズの効果により、フィールドの鳥獣族・風属性モンスターの攻撃力・守備力は３００ポイントアップする‼？」
「っ⁉？まだ攻撃力が上がるのか‼？」

ＬＬ　―アセンブリーナイチンゲール
ＡＴＫ１２００→１５００
ＤＥＦ０→３００

「さあ、終わりだよ。バトル‼？　ＬＬ　―アセンブリーナイチンゲールでダイレクトアタック‼？」
「っ、だけど、ＬＬ　―アセンブリーナイチンゲールを破壊すればいいだけだ‼？　相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札に存在する護封剣の剣士の効果発動‼？　相手モンスターの直接攻撃宣言時にこのカードを手札から特殊召喚し、その後、特殊召喚したこのカードの守備力がその攻撃モンスターの攻撃力より高い場合、その攻撃モンスターを破壊する‼？これで……」
「残念だか、それではＬＬ　―アセンブリーナイチンゲールを止められないよ。チェーンしてＬＬ　―アセンブリーナイチンゲールの効

果発動!!?アンサーソング!!?1ターンに1度、このカードのオーバーレイユニットを1つ取り除き、ターン終了時まで、自分フィールドのLLモンスターは戦闘・効果では破壊されず、自分が受ける戦闘ダメージは0になる!!?この効果は相手ターンでも発動できる!!?」
「なっ!??破壊耐性とダメージ無効効果!??」
オーバーレイユニットがアセンブリーナイチンゲールに吸収されると、アセンブリーナイチンゲールが優しい声色で歌い始める。
その歌声は優しい風壁となり、アセンブリーナイチンゲールの身体を包み込む。

ＬＬ　―アセンブリーナイチンゲール
ＡＴＫ１５００→１３００

「っ、チェーン処理で護封剣の剣士を特殊召喚!!?」

〈護封剣の剣士〉☆８　戦士族　光属性
ＤＥＦ２４００

光の剣を手にした青い鎧の剣士が師匠を守るように現れ、アセンブリーナイチンゲールに光の剣を振るう。
しかし、アセンブリーナイチンゲールの纏った風壁は護封剣の剣士の光の剣を弾き返した。
「さあ、攻撃はこのまま続行だよ。ＬＬ　―アセンブリーナイチンゲールでダイレクトアタック!!?ラストソング!!?」
アセンブリーナイチンゲールが再び歌を歌うと、アセンブリーナイチンゲールの正面に風の球が現れ、その風の球は勢いよく師匠の身体を貫いた。
「ぐっ!!?」

遊騎　ＬＰ１０００→３５０

「続けてＬＬ　―アセンブリーナイチンゲールでダイレクトアタック‼？」
「くっ‼？Ｎｏ．３９　希望皇ホープの効果発動‼？ムーンバリア‼？　自分または相手のモンスターの攻撃宣言時、このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除いてそのモンスターの攻撃を無効にする‼？」
「ほう、攻撃を無効化させる力を持っていたんだね」
　ホープが白い翼を盾に変え、風の球から師匠を守る。
「ほう、だがいちまで耐え切れるかな？続けてＬＬ　―アセンブリーナイチンゲールでダイレクトアタック‼？」
「くっ‼？Ｎｏ．３９　希望皇ホープの効果発動‼？ムーンバリア‼？そのモンスターの攻撃を無効にする‼？」
　ホープが白い翼を盾に変え、風の球から師匠を守り続ける。
　だが、これでもう師匠を守るカードはなくなった。
「さあ、終わりだよ。ＬＬ　―アセンブリーナイチンゲールでダイレクトアタック‼？ラストソング‼？」
「……やっぱり遊翼さんは強いや」
　再びアセンブリーナイチンゲールが風の球を放つ。
　その球に貫かれ、師匠の残りのライフポイントは消しとんだ。

遊騎　ＬＰ３５０→０

ーーーーーーー

「ふぅ、ひやひやさせられたが、何とか勝てたね」
「あらあら、愛しの遊騎君が負けちゃったわよ？慰めてあげなくてもいいの、遊花？」
　どこか余裕そうな笑みを浮かべるお父さんと、楽しそうな声で私をからかってくるお母さん。
　確かに、デュエルの結果は師匠の負けだ。
　だけど……

私はデュエルが終わり、静かに目を閉じている師匠に近づき、声をかけた。
「師匠、お父さんとのデュエル、どうでした？」
私の声を聞き、師匠は目を開けると、とても嬉しそうな顔で笑った。
「勿論、凄く楽しかった。遊翼さん、凄く強くてさ。勝てたと思ったんだが、今はまだ届かないや」
「そうですね、確かにお父さんは強いです」
夢の中なのだから当たり前なんだけど、久しぶりにみたお父さんのデュエルはやっぱり凄くて、今でも私の憧れだ。
だけど、私が憧れる強さを手にしているのは、お父さんだけじゃない。
「でも、それは今だけです‼？師匠は絶対にお父さんより強くなります‼？師匠に対して余裕そうな表情を浮かべられるのなんか今の内です‼？」
「そこまで言い切るのか。根拠なんてないだろうに」
「根拠なんて必要ありません‼？師匠はお父さんを越えられる‼？それは絶対に絶対です‼？」
師匠はいずれ、世界ランキング９位の『英雄騎士』なんて異名で呼ばれる存在になることを、私は知っている。
ただのプロ決闘者だったお父さんよりも、もっと凄い人になるのだ。
夢だから現実とは違うだなんて言わせない。
どんな逆境も笑顔で楽しめる強さがある師匠を、私は信じているのだから。
「ああも力説されると、僕は僕で複雑なのだけれどね」
「ふふっ、それだけ成長してるのよ、遊花もね」
「あ、お父さん、ごめんなさい」
「いやいや、それだけ遊花は遊騎君を信じてるということさ。結構結構、少し寂しいがね」
師匠の強さを力説する私を見て、お父さんは複雑そうに、お母さんは余計に楽しそうに笑う。

確かに、師匠がお父さんを超えるのは絶対だけど、流石にちょっと言いすぎたかもしれない。
私がおろおろとしていると、そんな私を見てお母さんが優しい笑みを浮かべた。
「ふふっ、遊花は相変わらずね。そうだ、良い機会だから、今度は私と遊花でデュエルをしましょ」
「えっ⁉？お母さんと、私が？」
「ええ。遊花がどれだけ成長したか、見せて貰うわよ」
そういうと、お母さんは自分のデュエルディスクを起動して構える。
お母さんは幼い日の私にとって、1番身近なデュエルの師匠だった。
プロ決闘者として忙しくしていたお父さんの代わりに、デュエルの基本を教えてくれたのはお母さんだった。
そんなお母さんと、夢の中とはいえデュエルができる。
そんなのーーー断る理由なんて、どこにもない‼？
私は自分のデュエルディスクを起動してお母さんに向けて構えると、顔を振って気持ちが昂って溢れ出そうとした涙を払い、満面の笑みを浮かべてお母さんを見据えた。
「うん‼？今の私の全力、お母さんにぶつけます‼？」
「ええ、かかってきなさい‼？」
『決闘‼？』

遊花　ＬＰ８０００
愛花　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は私です‼？私はクリバンデットを召喚‼？」

〈クリバンデッド〉☆3　悪魔族　闇属性

ＡＴＫ１０００

私の前に現れたのは盗賊のような姿をした黒い毛玉のモンスター。

凄く好戦的にぴょんぴょんと跳ねながら手を振っているけど、ゴメンね、今は１ターン目だから攻撃できないんだ。

「カードを２枚伏せて、エンドフェイズにクリバンデッドの効果発動!!?このカードをリリースしてデッキの上から５枚めくり、その中から魔法・罠カード１枚を手札に加えて残りを墓地におきます!!?」

ぴょんぴょん跳ねていたクリバンデッドの姿が消える。

その代わりに私はデッキの上から５枚のカードをめくって中から１枚のカードを手札に加えた。

「私はワンフォーワンを手札に加えます!!?そして墓地に送られた絶対王バックジャックの効果発動!!?このカードが墓地へ送られた場合、自分のデッキの上からカードを３枚確認し、好きな順番でデッキの上に戻します。私はこれでターンエンドです!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札３

ー－▲▲－　－

－－－－－

－　－

－－－－－

－－－－－－　－

愛花　ＬＰ８０００　手札５

「相変わらず遊花は控えめね。そんなんじゃ私に勝つことはできないわよ?私のターン、ドロー!!?まずは私のフィールドに遊花を引き込んであげるわ。フィールド魔法、森羅の霊峰を発動!!?」

お母さんがフィールド魔法を発動させると、家の中が緑が生い茂る山の中に変わる。

「そして手札の森羅の仙樹レギアを墓地へ送りフィールド魔法、森羅の霊峰の効果発動!!?同名カードのこの効果は１ターンに１度しか

発動できず、自分のメインフェイズ時に手札または自分フィールド上に表側表示で存在する、植物族モンスター1体を墓地へ送り、デッキから森羅と名のついたカード1枚を選んでデッキの一番上に置くわ!!?私はデッキから森羅の神芽スプラウトをデッキの上に置くわ!!?そして永続魔法、増草剤を発動し、そのまま増草剤の効果発動!!?」
「っ!!?そのカードは……」
「1ターンに1度、自分の墓地の植物族モンスター1体を対象としてその植物族モンスターを特殊召喚するわ!!?ただし、この効果でモンスターを特殊召喚するターン、自分は通常召喚できず、この効果で特殊召喚したモンスターがフィールドから離れた時にこのカードは破壊されるわ!!?私は墓地から森羅の仙樹レギアを特殊召喚するわ!!?」

〈森羅の仙樹レギア〉☆8　植物族　炎属性
ＡＴＫ２７００

フィールドに現れたのは真っ赤な花を付けた巨木の賢者。
「森羅の仙樹レギアの効果発動!!?アンサートーカー!!?1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に自分のデッキの一番上のカードをめくり、めくったカードが植物族モンスターだった場合、そのモンスターを墓地へ送り、デッキからカードを1枚ドローし、違った場合、そのカードをデッキの一番下に戻すわ!!?」
「お母さんのデッキの上は森羅の霊峰の効果で固定されてる。つまり……」
「めくれるのは当然植物族!!?私はデッキの上をめくり、森羅の神芽スプラウトを墓地へ送りカードを1枚ドローするわ!!?そして墓地へ送られた森羅の神芽スプラウトの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、デッキのこのカードがカードの効果によってめくられて墓地へ送られた場合、デッキから植物族・レベル1モンスター1体を特殊召喚できる!!?私はデッキから植物族・レベル1モンスター、六花のひとひらを特殊召喚するわ!!?」

〈六花のひとひら〉☆1　植物族　水属性
ＤＥＦ０

フィールドに芽が息吹き、その芽が成長して白い花が咲くとその花の上に小さな花の精が現れる。
「六花のひとひらの効果発動‼？同名カードは1ターンに1度、自分メインフェイズにデッキから同名カード以外の六花モンスター1体を選び、手札に加えるか墓地へ送るわ‼？ただしこの効果の発動後、ターン終了時まで自分は植物族モンスターしか特殊召喚できない。私はデッキから六花精ボタンを手札に加えるわ‼？そして今手札に加えた六花精ボタンの効果を発動‼？自分フィールドの植物族モンスター1体をリリースしてこのカードを手札から特殊召喚する‼？六花のひとひらをリリースして、咲き誇りなさい、六花精ボタン‼？」

〈六花精ボタン〉☆6　植物族　水属性
ＤＥＦ２４００

ひとひらの姿が消え、代わりに現れたのは紫の和服を着た花の精霊。
「六花精ボタンの効果発動‼？同名カードは1ターンに1度、このカードが召喚または植物族モンスターの効果で特殊召喚に成功した場合、デッキから六花魔法・罠カード1枚を手札に加えるわ‼？私はデッキから罠カード、六花の薄氷を手札に加える‼？」
「っ、手札が減らない……」
「さらに手札から六花精ヘレボラスを捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動‼？デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚するわ‼？来なさい、スポーア‼？」

〈スポーア〉☆1　植物族　風属性
ＤＥＦ８００

フィールドに現れたのは毛玉のような胞子のモンスター。
「まだまだ行くわよ？スポーアをリリースして、永続魔法、超栄養太陽。自分フィールド上のレベル２以下の植物族モンスター１体をリリースしてリリースしたモンスターのレベル＋３以下のレベルを持つ植物族モンスター１体を、手札・デッキから特殊召喚するわ‼？ただし、このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊し、そのモンスターがフィールド上から離れた時、このカードを破壊する。スポーアのレベルは１。私はデッキからローンファイアブロッサムを特殊召喚‼？」
「っ‼？そのモンスターは……」

〈ローンファイアブロッサム〉☆３　植物族　炎属性
ＤＥＦ１４００

超栄養太陽によりスポーアが変異し、フィールドに現れたのは黄色い爆弾のような実をつけた植物。
「ローンファイアブロッサムの効果発動。１ターンに１度、自分フィールドの表側表示の植物族モンスター１体をリリースしてデッキから植物族モンスター１体を特殊召喚するよ。私はローンファイアブロッサムをリリースしてデッキから森羅の番人オークを特殊召喚‼？」

〈森羅の番人オーク〉☆６　植物族　地属性
ＡＴＫ２４００

ローンファイアブロッサムの実が弾け、辺りを爆煙が包み、爆煙が晴れると広葉樹の木人が現れた。
「森羅の番人オークの効果発動‼？１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に、自分のデッキの上からカードを３枚までめくり、めくったカードの中に植物族モンスターがあった場合、それらのカード

を全て墓地へ送り、残りのカードは好きな順番でデッキの一番下に戻すわ。私はデッキの上を3枚めくり、植物族モンスター、六花精エリカ、森羅の葉心棒ブレイドを墓地へ送り、罠カード、森羅の恵みをデッキの下に戻すわ!!?そして墓地に送られた森羅の葉心棒ブレイドの効果発動!!?森羅の葉心棒ブレイドの効果でデッキのこのカードが効果でめくられて墓地へ送られた場合、墓地のこのカードを手札に加えるわ。そして魔法カード、森羅の施し!!?同名カードは1ターンに1度しか発動できず、デッキからカードを3枚ドローし、その後、森羅と名のついたカード1枚を含む手札のカード2枚を相手に見せ、好きな順番でデッキの上に戻すわ。ただし、手札に森羅と名のついたカードが無い場合、手札を全て相手に見せ、好きな順番でデッキの上に戻さないといけないけどね」

「お母さんの手札には森羅の葉心棒ブレイドがある……」

「そう、手札を戻すことはないわ!!?私は3枚のカードをドローし、手札の森羅の葉心棒ブレイドと森羅の姫芽君スプラウトをデッキの上に戻すわ。そして今ドローした2枚目の増草剤を発動!!?」

「ええっ!?!?2枚目!?!?」

「2枚目の増草剤の効果発動!!?現れなさい、六花精エリカ!!?」

〈六花精エリカ〉☆6　植物族　水属性
ＡＴＫ２４００

増草剤により咲き誇ったのは桃色の和服を着た花の精。

「っ、この流れは……!!?」

「私はレベル6の六花精エリカ、六花精ボタン、森羅の番人オークでオーバーレイ!!?3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」

エリカ、ボタン、オーク、が光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして、渦が弾けると、舞い降りたのは尊厳な雰囲気を放つ妖精。

「神聖なる妖精よ!!?道阻む邪念を払え!!?ランク6　!!?妖精騎士

イングナル!!?」

〈妖精騎士イングナル〉★6　植物族　地属性
ＡＴＫ２２００

「妖精騎士イングナル!!?っ、リバースカードオープン!!?速攻魔法、魔力の泉!!?相手フィールドの表側表示の魔法・罠カードの数だけ自分はデッキからドローし、その後、自分フィールドの表側表示の魔法・罠カードの数だけ自分の手札からカードを選んで捨てます!!?ただし、このカードの発動後、次の相手ターンの終了時まで、相手フィールドの魔法・罠カードは破壊されず、発動と効果を無効化されなくなります。お母さんのフィールドにある表側の魔法・罠はフィールド魔法、森羅の霊峰と2枚の増草剤の3枚。私のフィールドに表側の魔法・罠は魔力の泉1枚。よって3枚ドローし、1枚手札を捨てます!!?」

「構わないわ。妖精騎士イングナルの効果発動!!?1ターンに1度、このカードのオーバーレイユニットを2つ取り除き、このカード以外のフィールドのカードを全て持ち主の手札に戻す!!?この効果の発動に対して相手は魔法・罠・モンスターの効果を発動できない!!?」

イングナルの魔法により、イングナル以外の全てのカードが吹き飛ばされる。

伏せカードを戻されたことは大したことじゃない。

問題は、お母さんの手札に2枚の増草剤が戻ってしまったことだ。

「私は手札から再び2枚の増草剤を発動!!?そして1枚目の増草剤の効果を発動し、再び現れなさい、森羅の番人オーク!!?」

〈森羅の番人オーク〉☆6　植物族　地属性
ＡＴＫ２４００

「再び森羅の番人オークの効果発動!!?私はデッキの上を3枚めくり、植物族モンスター、森羅の姫芽君スプラウト、森羅の葉心棒ブレ

イドを墓地へ送り、永続魔法、デーモンの宣告をデッキの下に戻すわ‼?そして墓地に送られた森羅の姫芽君スプラウト、チェーンして森羅の葉心棒ブレイドの効果発動‼?森羅の葉心棒ブレイドを手札に戻すわ。そして森羅の姫芽君スプラウトの効果発動‼?　同名カードは1ターンに1度、デッキのこのカードが効果でめくられて墓地へ送られた場合、1～8までの任意のレベルを宣言してこのカードを墓地から特殊召喚し、このカードのレベルは宣言したレベルになる‼?私はレベル7を宣言して森羅の姫芽君スプラウトを特殊召喚‼?」

〈森羅の姫芽君スプラウト〉☆1→7　植物族　光属性
ＤＥＦ１００

フィールドに現れたのは小さな木の精。
「墓地の六花精エリカを除外してスポーアの効果発動‼?同名カードはデュエル中に1度、このカードが墓地に存在する場合、自分の墓地からこのカード以外の植物族モンスター1体を除外してこのカードを特殊召喚し、この効果で特殊召喚したこのカードのレベルは除外したモンスターのレベル分だけ上がる‼?再び現れなさい、スポーア‼?」

〈スポーア〉☆1→7　植物族　風属性
ＤＥＦ８００

「今度はレベル7モンスターが2体‼?」
「私はレベル7となった森羅の姫芽君スプラウトとスポーアでオーバーレイ‼?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼?」
姫芽君とスポーアが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして、渦が弾けると、舞い降りたのは樹木の羽根を持つ神鳥。
「聖なる森を鎮める神鳥よ‼?森羅万象を制し、万物を吹き飛ばせ‼

?ランク7!!?　森羅の鎮神オレイア!!?」

〈森羅の鎮神オレイア〉★7　植物族　闇属性
ＡＴＫ２８００

「森羅のランク7エクシーズモンスター……」
「さあ、森羅万象を司る森羅の鎮神オレイアの力をとくとみなさい!!?手札の森羅の仙樹レギアを墓地へ送って森羅の鎮神オレイアの効果発動!!?ホールクリエイション!!?1ターンに1度、自分の手札・フィールド上の植物族モンスター1体を墓地へ送ってそのレベル分だけデッキの上からカードを確認し、好きな順番でデッキの上に戻すわ!!?」
「っ!??デッキ操作効果!??」
「森羅の仙樹レギアのレベルは8!!?よって私はデッキの上から8枚を確認して好きな順番に戻すわ!!?そして2枚目の増草剤を発動!!?再び現れなさい、森羅の仙樹レギア!!?」

〈森羅の仙樹レギア〉☆8　植物族　炎属性
ＡＴＫ２７００

「森羅の仙樹レギアの効果発動!!?アンサートーカー!!?」
「お母さんのデッキの上は森羅の鎮神オレイアが操作しているから……」
「めくれるのは当然植物族!!?　私はデッキの上をめくり、コピープラントを墓地へ送りカードを1枚ドローするわ!!?私は手札から3枚目の増草剤を発動!!?」
「3枚目!?!?まさか、今の森羅の仙樹レギアでドローして!?!?」
「3枚目の増草剤を発動!!?蘇りなさい、コピープラント!!?」

〈コピープラント〉☆1　植物族　風属性
ＤＥＦ０

フィールドに現れたのは小さな枯れ木。
だけど、その小さな枯れ木が秘めている恐ろしい力を私は知っている。
「コピープラントの効果発動!!?1ターンに1度、このカード以外のフィールド上の植物族モンスター1体を選択し、このカードのレベルはエンドフェイズ時まで、選択したモンスターと同じレベルになる!!?私が選択するのはレベル8の森羅の仙樹レギアよ!!?」

コピープラント
☆1→8

「次はレベル8モンスターが2体……!!?エクシーズ召喚が止められない……!!?」
「私はレベル8、森羅の仙樹レギアと、レベル8となったコピープラントでオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
レギアとコピープラントが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして、渦が弾けると、現れたのは森羅万象を守る聖獣。
「悠久の時を過ごす聖獣よ!!?森羅万象を汚すものを浄化せよ!!?ランク8!!?森羅の守神アルセイ!!?」

〈森羅の守神アルセイ〉★8　植物族　光属性
DEF3200

「これで準備は整ったわね。森羅の鎮神オレイアの効果発動!!?ライフフラッピングウィンド!!?1ターンに1度、このカードのオーバーレイユニットを1つ取り除いて自分のデッキの上からカードを3枚までめくる。その中に植物族モンスターがあった場合、それらのモンスターを全て墓地へ送り、その数までこのカード以外のフィールド上

のカードを選んで手札に戻し、残りのカードは好きな順番でデッキの下に戻すわ‼?」
「私のフィールドには何もないのにバウンス?……っ、まさか‼?」
「私はデッキの上を3枚めくり、植物族モンスター、森羅の実張りピース、六花精シクラン、森羅の賢樹シャーマンを墓地へ送り、私のフィールドにある3枚の増草剤を手札に戻すわ‼?」
オレイアが羽ばたくと、お母さんのフィールドにある3枚の増草剤が手札に帰っていく。
植物族ならなんでも蘇生させるカードが3枚も手札に戻ってしまうなんて、これはかなり厳しいです。
しかも、まだ墓地に送られた森羅モンスターの効果が残っている。
「そして墓地へ送られた森羅の実張りピースの効果、チェーンして森羅の賢樹シャーマンの効果発動‼?デッキのこのカードがカードの効果によってめくられて墓地へ送られた場合、自分の墓地の森羅と名のついた魔法・罠カード1枚を選択して手札に加える事ができる‼?私は墓地の魔法カード、森羅の施しを手札に加えるわ‼?そして森羅の実張りピースの効果発動‼? 同名カードは1ターンに1度、デッキのこのカードがカードの効果によってめくられて墓地へ送られた場合、自分の墓地からレベル4以下の植物族モンスター1体を選択して特殊召喚できる‼?蘇りなさい、ローンファイアブロッサム‼?」
〈ローンファイアブロッサム〉☆3　植物族　炎属性
DEF1400
「っ、またローンファイアブロッサムが……」
「再びローンファイアブロッサムの効果発動‼?ローンファイアブロッサムをリリースしてデッキから2体目の森羅の仙樹レギアを特殊召喚‼?」
〈森羅の仙樹レギア〉☆8　植物族　炎属性

ＡＴＫ２７００

「森羅の仙樹レギアの効果発動!!?アンサートーカー!!?私はデッキの上をめくり、森羅の花卉士　ナルサスを墓地へ送りカードを１枚ドロー!!?さらに墓地に送られた森羅の花卉士　ナルサスの効果発動!!?デッキのこのカードがカードの効果によってめくられて墓地へ送られた場合、デッキから森羅と名のついたカード１枚を選んでデッキの一番上に置く事ができる!!?私はデッキから２枚目の森羅の賢樹シャーマンをデッキの上に置くわ!!?そして私は、森羅の賢樹シャーマンを宣言して森羅の守神アルセイの効果発動!!?セイクリッドワルツ!!?１ターンに１度、カード名を１つ宣言して自分のデッキの一番上のカードをめくり、宣言したカードだった場合、手札に加え、違った場合、めくったカードを墓地へ送るわ!!?デッキの上は当然森羅の賢樹シャーマン!!?手札に加えるわ!!?」

「うっ、まだ止まらないの?」

「ええ、まだまだよ。森羅の番人オークをリリースして六花精ヘレボラスの効果発動!!?このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドの植物族モンスター１体をリリースしてこのカードを守備表示で特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される!!?咲き誇りなさい、六花精ヘレボラス!!?」

〈六花精ヘレボラス〉☆８　植物族　水属性

ＤＥＦ１２００

オークの姿が消え、代わりに姿を現したのは紫色のドレスを着た花の精。

「さらに手札の六花精プリムの効果発動!!?自分フィールドのモンスターがリリースされた場合にこのカードを手札から守備表示で特殊召喚するわ!!?咲き誇りなさい、六花精プリム!!?」

〈六花精プリム〉☆４　植物族　水属性
ＤＥＦ１８００

ヘレボラスに続くように桃色の髪をしたツインテールの花の精が姿を現す。
「さあ、行くわよ‼？私はレベル８、森羅の仙樹レギアと六花精ヘレボラスでオーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼？」
レギアとヘレボラスが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして、渦が弾けると、舞い降りたのは雪の傘を手にし、白いドレスを着た花の精。
「涙を堪え、永き逆境を超えし乙女よ‼？希望の花を束ね、歓喜の涙を流せ‼？ランク８‼？六花聖ティアドロップ‼？」

〈六花聖ティアドロップ〉★８　植物族　水属性
ＡＴＫ２８００

「っ、六花聖ティアドロップ……大型エクシーズモンスターがこんなに並ぶなんて……」
「私は手札から増草剤を発動‼？そして増草剤の効果発動し、三度現れなさい、森羅の番人オーク‼？」

〈森羅の番人オーク〉☆６　植物族　地属性
ＡＴＫ２４００

「再び森羅の番人オークの効果発動‼？私はデッキの上を３枚めくり、植物族モンスター、薔薇恋人（バララヴァー）を墓地へ送り、魔法カード、名推理と罠カード、六花深々をデッキの下に戻すわ‼？そして自身を対象に、六花精プリムの効果発動‼？自分フィールドの植物族モンスターを２体まで対象としてそのモンスターのレベルをターン終了時まで

２つ上げる‼?」

六花精プリム

☆４→６

「私はレベル６、森羅の番人オークと六花精プリムでオーバーレイ‼?２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼?」

オークとプリムが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。

そして、渦が弾けると、舞い降りたの大きな花簪をつけた和服の花の精。

「永き逆境を超えし優しき乙女よ‼?優しき花を束ね、他者を労わる力となれ‼?ランク６‼?　六花聖カンザシ‼?」

〈六花聖カンザシ〉★６　植物族　水属性

ＡＴＫ２４００

「そして墓地の薔薇恋人を除外して効果発動‼同名カードは１ターンに１度、?墓地のこのカードを除外して手札から植物族モンスター１体を特殊召喚する‼?そしてこの効果で特殊召喚したモンスターはこのターン相手の罠カードの効果を受けない‼?現れなさい、森羅の賢樹シャーマン‼?」

〈森羅の賢樹シャーマン〉☆７　植物族　風属性

ＡＴＫ２６００

最後にフィールドに現れたのは新緑が生茂る巨木の賢者。

お母さんのフィールドにいる強力な６体のモンスター達に私は思わず圧倒される。

その布陣を整えてなお余りある手札と豊富な蘇生手段。

無垢にして苛烈。
どんなに根絶やそうと再び咲き誇る新緑の力。
これが、私のお母さんーーー栗原　愛花のデュエルなのだ。
「さあ、私の攻撃を遊花は耐えられるかしらね？バトル‼？妖精騎士イングナルでダイレクトアタック‼？勝利の剣‼？」
「きゃあ‼？」

遊花　ＬＰ８０００→５８００

イングナルが新緑の剣を振るい、私の身体を斬り裂く。
「次よ、六花聖カンザシでダイレクトアタック‼？ウェザーレイン‼？」

遊花　ＬＰ５８００→３４００

カンザシが手にしている傘を開くと、空から光の雨が降り注ぎ、私の身体を穿つ。
「あらあら、なす術なしかしら？森羅の賢樹シャーマンでダイレクトアタック‼？リーフストーム‼？」
「これ以上は、受けません‼？相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札のゴーストリックランタンの効果発動‼？その攻撃を無効にし、このカードを手札から裏側守備表示で特殊召喚します‼？」
私にむけて葉っぱを飛ばそうとしたシャーマンの目の前に、ジャックオーランタンのような幽霊が現れる。
シャーマンは急に現れたランタンに驚きながらも、ランタンに向けて葉っぱを放つが、ランタンの姿はすぐに空気に溶けるように消えていった。
「防いできたわね。だけど、それじゃあまだまだ甘いわよ‼？六花聖ティアドロップでセットモンスターを攻撃‼？攻撃宣言時、六花聖ティアドロップの効果発動‼？ラマンティションレイン‼？このカードのオーバーレイユニットを１つ取り除き、自分・相手フィール

ドのモンスター1体を対象としてそのモンスターをリリースする‼?このカードが植物族モンスターをオーバーレイユニットとしている場合、この効果は相手ターンでも発動できるわ‼?私が対象とするのはゴーストリックランタン‼?」
「っ、ゴメンね、ゴーストリックランタン」
ティアドロップが傘を振るうとセットされていたランタンを水が包み込み、そのまま消滅する。
「さらに六花聖ティアドロップの効果発動‼?ストロングナンバーズティア‼?モンスターがリリースされる度にこのカードの攻撃力はターン終了時まで、リリースされたモンスターの数×２００ポイントアップする‼?」

六花聖ティアドロップ
ＡＴＫ２８００→３０００

「っ、攻撃力が３０００に……‼?」
「モンスターがいなくなったことで攻撃対象の変更よ。六花聖ティアドロップでダイレクトアタック‼?ティアーズフラワーカノン‼?」
「きゃあ‼?」

遊花　ＬＰ３４００→４００

ティアドロップが雪の傘から花の形をした水弾を放ち私のライフポイントを削りとる。
「これで終わりかしら?森羅の鎮神オレイアでダイレクトアタック‼?スピリットオブツリー‼?」
オレイアが翼を羽ばたかせると、暴風と共に地面から沢山の樹木が生え、私の身体を貫かんと迫る。
この攻撃を受けたら私の負け。
だけど、せっかくのお母さんとのデュエルをこんなにあっさりと終わらせたりなんかしない‼?

「相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のクリアクリボーの効果発動!!?自分はデッキから1枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替えます!!?」
「へぇ、確か遊花のデッキの上は……」
「はい。絶対王バックジャックの効果で操作済みです。私がドローしたのはアンクリボー!!?モンスターなので特殊召喚し、攻撃対象を移し替えます!!?」

〈アンクリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

フィールドに現れたのは身体に金色の装飾をつけ、頭にアンクをつけた紫色の毛玉のモンスター。
現れたアンクリボーは私を見て、仕方なさそうに身体を振ると沢山の樹木と暴風に呑み込まれて消滅した。
ゴメンね、アンクリボー。
だけど、君の力はちゃんと借り受けるよ!!?
「アンクリボーの効果発動!!?クリーングオブライフ!!?このカードが戦闘・効果で破壊され墓地へ送られた場合、このターンのエンドフェイズに、自分のデッキ・墓地から死者蘇生1枚を選んで手札に加えます!!?」
「避けられちゃった上に、死者蘇生まで手札に加えられちゃうわね。なら、メインフェイズ2ーーー」
「今です!!?　バトルフェイズ終了時、自分フィールドにカードが存在しない場合、手札から罠発動!!?拮抗勝負!!?」
「っ!!?そのカードは……!!?」
「相手フィールドのカードの数が自分フィールドのカードの数より多い場合、自分・相手のバトルフェイズ終了時に発動できる!!?自分フィールドのカードの数と同じになるように、相手はフィールドのカードを裏側表示で除外しなければならない!!?」

「っ、やられたわね。私は六花聖ティアドロップ以外のカードを全て除外するわ。ただし、薔薇恋人の効果で特殊召喚した森羅の賢樹シャーマンは罠カードの効果を受けないからフィールドに残させて貰うわよ」

お母さんのフィールドにあるカード達がティアドロップとシャーマンを残して粒子に変わる。

これでお母さんのフィールドにいたモンスターは一気にいなくなった。

だからといって、油断するわけにはいかないんだけど。

「改めてメインフェイズ2よ‼?私は手札から2枚の増草剤を発動‼?そして1枚目の増草剤の効果発動し、芽吹きなさい、森羅の神芽スプラウト‼?」

〈森羅の神芽スプラウト〉☆1　植物族　光属性

ＤＥＦ１００

現れたのは小さな若葉の精霊。

「森羅の神芽スプラウトの効果発動‼?このカードが特殊召喚に成功した時、自分のデッキの上からカードを2枚までめくる事ができ、めくったカードの中に植物族モンスターがあった場合、それらのモンスターを全て墓地へ送り、残りのカードは好きな順番でデッキの一番下に戻すわ。植物族モンスター、森羅の渡し守ロータスを墓地へ送り、永続罠、森羅の滝滑りをデッキの下に戻すわ‼?そして墓地に送られた森羅の渡し守ロータスの効果発動‼?デッキのこのカードがカードの効果によってめくられて墓地へ送られた場合、同名カード以外の自分の墓地の森羅と名のついたカードを5枚まで選択し、好きな順番でデッキの下に戻す事ができる‼?私は墓地から森羅の仙樹レギア、森羅の実張りピース、森羅の賢樹シャーマン、森羅の姫芽君スプラウトの4枚をデッキの下に戻すわ。さらに2枚目の増草剤を発動‼?蘇りなさい、コピープラント‼?」

〈コピープラント〉☆1　植物族　風属性
ＤＥＦ０

「私はレベル1、森羅の神芽スプラウトとコピープラントでオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
「今度はランク1　!?」
神芽とコピープラントが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして、渦が弾けると、舞い降りたの可憐なる若木の精霊。
「桜の若木に宿る精霊よ!!?新たなる生命の芽吹きをここに!!?ランク1!!?森羅の姫芽宮!!?」

〈森羅の姫芽宮〉★1　植物族　光属性
ＤＥＦ１００

「森羅の姫芽宮の効果発動!!?スプラウトホープ!!?同名カードは1ターンに1度このカードのオーバーレイユニットを1つ取り除き、自分のデッキの一番上のカードをめくる。めくったカードが魔法・罠カードだった場合、そのカードを手札に加え違った場合、そのカードを墓地へ送るわ!!?デッキの上からめくられたのは罠カード、ワンダーエクシーズ!!?手札に加えるわ!!?さらに森羅の姫芽宮の更なる効果発動!!?ブルームユグドラシル!!?手札及びこのカード以外の自分フィールドの表側表示モンスターの中から、植物族モンスター1体を墓地へ送り、自分の墓地の森羅モンスター1体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?私は手札の森羅の葉心棒ブレイドを墓地に送り、蘇りなさい、森羅の花卉士ナルサス!!?」

〈森羅の花卉士ナルサス〉☆4　植物族　地属性
ＤＥＦ１０００

フィールドに現れたのはスイセンの鎧を着た花騎士。
「私はカードを3枚伏せてターンエンドよ」
「待ってください!!?なら、メインフェイズ2終了時、墓地の絶対王バックジャックを除外して効果発動!!?相手ターンに墓地のこのカードを除外して自分のデッキの一番上のカードをめくり、そのカードが通常罠カードだった場合、自分フィールドにセットし、違った場合、そのカードを墓地へ送ります。そして、この効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できます!!めくられたのは通常罠、裁きの天秤!!通常罠カードなのでセットされます!!?」
「っ!!?成る程ね。私はそのままターンエンドよ!!?」
「ならエンドフェイズ!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?裁きの天秤!!?相手フィールドのカードの数が自分の手札・フィールドのカードの合計数より多い場合に発動でき、自分はその差の数だけデッキからドローします!!?お母さんのフィールドのカードは9枚、私は裁きの天秤と手札2枚の3枚その差分の6枚のカードをドローします!!?そしてアンクリボーの効果によりデッキから死者蘇生を手札に加えます!!?」
「ふふっ、やるわね。それでこそ栗原家の乙女よ。さあ、私の布陣を遊花はどうやって突破するのかしらね」

遊花　ＬＰ４００　手札９
ー－▲ー－　ー
ー－－－－
□　ー
ー□○ー○
▲▲△△▲　ー
愛花　ＬＰ８０００　手札２

「私のターン、ドロー!!?」
お母さんの使う植物族は蘇生効果があるものが多くて墓地には大量の植物族モンスターが眠っている。

長期戦は不利。
一気に決着をつけにいく!!?
「まずはカードを2枚伏せて、魔法カード、手札抹殺!!?お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数と同じ枚数ドローする!!?私は7枚、お母さんは2枚捨ててドローして貰います!!?」
「いきなり大掛かりな手札交換……狙いは墓地肥しかしらね」
「正解であり、間違いでもあります!!?手札から捨てられた魔轟神ルリーの効果、それにチェーンして手札に加わったワタポンの効果発動!!? このカードがカードの効果によって自分のデッキから手札に加わった場合、このカードを手札から特殊召喚できる!!?おいで、ワタポン!!?」

〈ワタポン〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ３００

手札に加わったカードから触覚を持つ白い毛玉のようなモンスターが飛び出し、私の左肩の上に跳び乗る。
「さらに手札から捨てられた魔轟神ルリーの効果発動!!? このカードが手札から墓地へ捨てられた時、このカードを墓地から特殊召喚します!!?おいで、魔轟神ルリー!!?」

〈魔轟神ルリー〉☆1　悪魔族　光属性
ＤＥＦ４００

さらにワタポンを真似するように仮面をつけた小さな悪魔が私の右肩の上に乗る。
「さらにリバースカードオープン!!?手札からジェットシンクロンを捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動!!?デッキからレベル1モンスター1体を特殊召喚します!!?おいで、クリボルト!!?」

〈クリボルト〉☆1　雷族　光属性

ＤＥＦ２００

出て来たのは電気を出している黒い球体のモンスター。

クリボルトの姿を見てお母さんがすぐさまティアドロップに手をかざす。

「クリボルトは通すわけにはいかないわね。六花聖ティアドロップの効果発動!!?ラマンティションレイン!!?このカードのオーバーレイユニットを１つ除き、クリボルトをリリースするわ!!?」

「ゴメンね、クリボルト」

「さらに六花聖ティアドロップの効果発動!!?ストロングナンバーズティア!!?モンスターがリリースされる度にこのカードの攻撃力はターン終了時まで、リリースされたモンスターの数×２００ポイントアップする!!?」

六花聖ティアドロップ
ＡＴＫ２８００→３０００

クリボルトが水に包み込まれ、消滅する。

だけど、これでティアドロップのオーバーレイユニットはなくなった!!?

「私は金華猫を召喚!!?」

〈金華猫〉☆１　獣族　闇属性
ＡＴＫ４００

現れたのは霊体になっている猫のようなモンスター。

「金華猫の効果発動!!?召喚した時、墓地に存在するレベル１モンスターを特殊召喚します!!?」

「残念だけど、通さないわよ?六花聖ティアドロップをリリースしてリバースカードオープン!!?罠発動、六花の薄氷!!?同名カードは１枚しか発動できず、このカードは自分フィールドの植物族モンスター

1体をリリースして発動する事もできる。相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてこのターン、その表側表示モンスターはフィールドで発動する効果を発動できず、モンスターをリリースしてこのカードを発動した場合、さらにそのモンスターのコントロールをエンドフェイズまで得て、この効果でコントロールを得たモンスターは植物族になる‼？対象にするのは勿論、金華猫よ‼？」
「っ、金華猫‼？」
ティアドロップの身体が雪のように溶けたかと思うと、強烈な吹雪に変わり金華猫を凍りつかせ、凍りついた金華猫の上に氷でできた花が咲く。

金華猫
獣族→植物族

「残念だったわね、金華猫は封じたわ」
「妨害なんて百も承知です‼？速攻魔法、クリボーを呼ぶ笛‼？自分のデッキからクリボーまたはハネクリボー1体を選択し、手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができる‼？私が選ぶのは特殊召喚‼？いつだって、私と共に‼？ハネクリボー‼？」

〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

現れるのは天使の羽を持つ私の最高の相棒。
ハネクリボーはお母さんと私を見て嬉しそうに鳴き声をあげる。
「ハネクリボー……そう、あなたは今でも遊花を守ってくれてるのね」
「そして導いて‼？希望に繋がるサーキット‼？」
私が正面に手をかざすと、目の前に巨大なサーキットが現れる。
「召喚条件はカード名が異なるモンスター3体‼？私はワタポン、魔轟神ルリー、ハネクリボーをリンクマーカーにセット‼？サーキット

コンバイン‼?」
ワタポン、ルリー、ハネクリボーがサーキットに吸い込まれていく。
そしてサーキットが光り輝くと中から現れたのは、悪魔の翼を持つ黒騎士。
「リンク召喚‼?親愛なる相棒と出会い、哀を知り、愛に生きた、深愛の黒騎士‼?リンク３‼?ダークナイト@イグニスター‼?」

〈ダークナイト@イグニスター〉ＬＩＮＫ３　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ２３００　↙?←↘?

「ダークナイト@イグニスター……」
「そしてリバースカードオープン‼?魔法カード、死者蘇生‼?自分または相手の墓地のモンスター1体を特殊召喚します‼?蘇って、電幻機塊コンセントロール‼?」

〈電幻機塊コンセントロール〉☆1　機械族　闇属性
ＤＥＦ１００

死者蘇生により蘇ったのはコンセントの姿をした機械兵。
「この瞬間、ダークナイト@イグニスターの効果発動‼?プロミスドリバイブ‼?このカードのリンク先にモンスターが特殊召喚された場合、自分の墓地からレベル４以下の@イグニスターモンスターを可能な限りこのカードのリンク先となる自分フィールドに効果を無効にして特殊召喚する‼?戻ってきて、ヒヤリ@イグニスター、ドシン@イグニスター‼?」

〈ヒヤリ@イグニスター〉☆1　サイバース族　水属性
ＤＥＦ４００

〈ドシン@イグニスター〉☆1　サイバース族　地属性
ＤＥＦ８００

ダークナイトが剣を振るうと、空間が割れ、空間の裂け目から小さな水球のようなモンスターと土で出来たブロックの身体を持つモンスターが姿を現わす。
「っ、さっきの手札抹殺で墓地に送っていたのね」
「さらに電幻機塊コンセントロールを対象に手札の複写機塊コピーボックルの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、自分フィールドの機塊モンスター1体を対象としてこのカードを手札から特殊召喚し、この効果で特殊召喚したこのカードはエンドフェイズまで、対象のモンスターと同名カードとして扱う!!?おいで、複写機塊コピーボックル!!?」

〈複写機塊コピーボックル〉☆1　機械族　闇属性
ＤＥＦ０

複写機塊コピーボックル→　電幻機塊コンセントロール

フィールドにカメラの姿をしたモンスターが現れたかと思うと、そのモンスターはコンセントロールの写真を撮り、その写真を自身に貼りつけてコンセントロールに姿を変える。
「さらに電幻機塊コンセントロールの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度このカードが既にモンスターゾーンに存在する状態で、自分フィールドに他の電幻機塊コンセントロールが特殊召喚された場合にデッキから電幻機塊コンセントロール1体を特殊召喚する!!?」

〈電幻機塊コンセントロール〉☆1　機械族　闇属性
ＤＥＦ１００

コンセトロールがコンセトロールを呼び、私のフィールドが一気にモンスターで埋め尽くされる。

「モンスターを展開してきたわね。さあ、ここからどう来るかしら？」
「こうします‼？導いて‼？希望に繋がるサーキット‼？」
「またリンク召喚ね」
「召喚条件はモンスター２体‼？私は電幻機塊コンセントロールと電幻機塊コンセントロールとなった複写機塊コピーボックルをリンクマーカーにセット‼？サーキットコンバイン‼？リンク召喚‼？リンク２‼？プロキシードラゴン‼？」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

コンセントロールの姿がサーキットに消え、代わりに現れたのは白い身体をした機械の竜。
「次です‼？魔法カード、貪欲な壺‼？墓地に存在するクリバンデット、ワタポン、魔轟神ルリー、クリボルト、電幻機塊コンセントロールをデッキに戻してシャッフルし、カードを２枚ドローします‼？よし、このカードは手札から攻撃表示で特殊召喚できる‼？おいで、ジェスターコンフィ‼？」

〈ジェスターコンフィ〉☆１　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０

現れたのは球に乗った道化師のモンスター。
「私はレベル１のジェスターコンフィと電幻機塊コンセントロールでオーバーレイ‼？２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼？」
「ランク１のエクシーズ召喚ね」
コンフィとコンセントロールが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして、渦が弾けると、舞い降りたのは黒の翼を持つ太々しい小鳥。
「あらゆるものを受け流す小さな暴君‼？キキナガシ風鳥‼？」

〈キキナガシ風鳥〉★1　鳥獣族　風属性
ＤＥＦ０

「そしてこれが最後のピース!!?墓地に存在するジェットシンクロンの効果発動!!?手札を1枚墓地に送り、墓地からこのカードを特殊召喚する!!?ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合、除外される!!?おいで、ジェットシンクロン!!?」

〈ジェットシンクロン〉☆1　機械族　炎属性
ＤＥＦ０

現れたのは小さなジェット機のような機械のモンスター。
現れたジェットシンクロンは嬉しそうに私の周りを飛び回る。
「ジェットシンクロンが最後のピース?そんな不揃いなモンスター達で何をする気なの?」
私のフィールドに並んだモンスターを見て困惑するお母さん。
確かに、私のフィールドに並んだモンスター達にはほとんど統一性はない。
だけど、統一性がないことが、今の私には大事なピース。
フィールドに揃った6体のモンスターを見て、私は目を閉じて1つ深呼吸をすると、胸に手を当ててその言霊を口にする。
「すー……はー……いきます!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「ここでまたリンク召喚?」
私の目の前に巨大なサーキットが展開される。
さあ……あなたの力、存分に見せつけちゃおう!!?
「召喚条件は属性が異なるモンスター3体以上!!?私は闇属性、ダークナイト@イグニスター、光属性、プロキシードラゴン、水属性、ヒヤリ@イグニスター、地属性、ドシン@イグニスター、風属性、キキナガシ風鳥、そして炎属性、ジェットシンクロン、属性の異なる6体

のモンスターをリンクマーカーにセット‼?サーキットコンバイン‼?」
「なんですって⁉?」
　私のフィールドにいたモンスター達が次々とサーキットの中に飛び込んでいくと、サーキットから今まで見たことが無い程の光りが溢れ出す。
「世界を作りし六大元素‼?その力、今再び　１つに束、混沌の世界に愛を示せ‼?」
　サーキットが砕け散り、サーキットの中に溜まっていた光りが世界を照らすと、その輝きの中から現れたのは巨大な鎌を手にした生まれたての超越神。
「おいで、善悪を超越し、永愛を誓う現人神‼?リンク６‼?ジアライバルサイバース@イグニスター‼?」

〈ジアライバルサイバース@イグニスター〉ＬＩＮＫ　６　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ０　↙?↑→←↓↘?

「ジアライバルサイバース@イグニスター……リンク６のモンスターですって⁉?」
「さあ、あなたの力をお母さんに見せてあげよう‼?ジアライバルサイバース@イグニスターの永続効果、オールラブブレイジング‼?このカードの元々の攻撃力は、このカードのリンク素材としたモンスターの数×１０００ポイントの数値になる‼?」
「なっ⁉?」
「ジアライバルサイバース@イグニスターのリンク素材となったモンスターは６体‼?よってその攻撃力は……‼?」

ジアライバルサイバース@イグニスター
ＡＴＫ０→６０００

「攻撃力６０００ですって⁉？」
「さらにジアライバルサイバース＠イグニスターのもう１つの永続効果、アルティメットリジェクションにより、このカードは他のカードの効果を受けません‼？」
「っ⁉？完全耐性まで持っているの⁉？」
「まだこれで終わりじゃありません‼？　六花聖ティアドロップを対象にジアライバルサイバース＠イグニスターの効果発動‼？ジャッジメントエクスキューショナー‼？１ターンに　１度、このカード以外のフィールドのモンスター　１体を対象としてそのモンスターを破壊し、このカードのリンク先となる自分フィールドにサイバース族・闇属性・レベル　１・攻守０の＠イグニスタートークン　１体を特殊召喚する‼？」
「破壊効果まで⁉？っ、そう好き勝手はさせないわ‼？チェーンして六花聖ティアドロップをリリースし、リバースカードカードオープン‼？罠発動、六花深々‼？同名カードは　１ターンに　１枚しか発動できず、このカードは自分フィールドの植物族モンスター　１体をリリースして発動する事もできるわ。自分の墓地から六花モンスター　１体を選んで守備表示で特殊召喚し、さらにモンスターをリリースしてこのカードを発動した場合、さらに自分の墓地から植物族モンスター　１体を選んで守備表示で特殊召喚するわ‼？墓地より蘇りなさい、六花精プリム‼？ローンファイアブロッサム‼？」

〈六花精プリム〉☆４　植物族　水属性
ＤＥＦ１８００

〈ローンファイアブロッサム〉☆３　植物族　炎属性
ＤＥＦ１４００

「っ、ローンファイアブロッサムが……だけどこちらも、出ておいで、＠イグニスタートークン‼？」

〈@イグニスタートークン〉☆1　サイバース族　闇属性
ＤＥＦ０

ジアライバルが放った破滅の極光をかわすように、ティアドロップの身体が雪のように溶け、溶けて生まれた水の中からプリムとローンファイアが芽吹く。

しかし、芽吹いた２つの花を観察するように私のフィールドにも水玉のような球体のモンスターが現れた。

「避けられちゃいましたけど、勝負はここからです‼？導いて‼？希望に繋がるサーキット‼？」

私が正面に手をかざすと、再び目の前に巨大なサーキットが現れる。

「召喚条件はレベル４以下のサイバース族モンスター１体。私は@イグニスタートークンをリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン。リンク召喚‼？希望の詰め手‼？リンク１‼？リングリボー‼？」

〈リングリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　↙？

@イグニスタートークンがサーキットに吸い込まれると、代わりにリンクリボーの目付きを鋭くしたような青い球体のモンスターが飛び出してくる。

リングリボーには相手が罠カードを発動した時、自身をリリースしてその効果を無効にし除外する効果がある。

これでお母さんの罠を封じることができる‼？

「バトル‼？ジアライバルサイバース@イグニスターで金華猫を攻撃‼？攻撃宣言時、速攻魔法、アクションマジック―フルターン‼？このターン、モンスター同士の戦闘で発生するお互いの戦闘ダメージは倍になります‼？」

「っ‼？それで一気に決着をつけるってわけね」

「これで決まりです!!?お願い、ジアライバルサイバース@イグニスター!!?暁光のフォーザフューチャー!!?」
ジアライバルが鎌を構えると、鎌が眩い光に包まれていく。
鎌を光が完全に包み込み、ジアライバルが鎌を振り向くと、光の本流が放たれ、凍り付いていた金華猫ごとお母さんを呑み込んだ。
「これで……」
「甘いわよ、遊花。忘れてないかしら、私達がどんな子達と共に戦っているのかを。手札から、クリボーの効果発動!!?ダークエンヴェロップ!!?相手モンスターが攻撃した場合、そのダメージ計算時にこのカードを手札から捨てて発動できる。その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージを0にする!!?」
「っ!!?」
光の本流が消えると、お母さんを庇うようにクリボーが立ち塞がり、その攻撃を受け止めて粒子になって消えていく。
そうだった。
元々、私が使っているデッキはお母さんが昔に使っていたデッキが元になっている。
そんなお母さんなら、クリボーがデッキの中に入っていても不思議じゃない。
マズい、こうなると今度はリングリボーの攻撃力の低さが仇に……!!?
「っ、メインフェイズ2、墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動!!?自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローする。ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外する!!?私はフィールドのリングリボーをEXデッキに戻し、カードを1枚ドローする!!?」
「流石にフィールドから逃す手段は持ってたようね」
「私はカードを2枚伏せてターンエンド!!?」
「ならエンドフェイズ、墓地に存在する六花のひとひらの効果発動!!?このカードが墓地に存在し、自分フィールドにモンスターが存在し

ない場合、または自分フィールドのモンスターが植物族モンスターのみの場合、相手エンドフェイズにこのカードを特殊召喚する‼?再び咲きなさい、六花のひとひら‼?」

〈六花のひとひら〉☆1　植物族　水属性
ＤＥＦ０

遊花　ＬＰ４００　手札０
ー▲▲ーー　ー
ーーーーー
□　☆
□□□□○
▲ー△△▲　ー
愛花　ＬＰ８０００　手札　１

「さっきのはちょっとヒヤッとしたわ。強くなったわね、遊花」
「……そう、かな?私、強くなれたかな?」
「ええっ、あなたはとても強くなったわ。どんなに辛いことがあっても、その逆境を耐え、乗り越えて希望を掴み取る強さを手に入れた。あなたはもう、守られるだけの儚い蕾じゃない。たくさんの出会いを経験して立派に咲き誇ることができる強さを手に入れた。それが、お母さんにはとても誇らしいの」
「っ‼?お母、さん?」
柔らかい笑みを浮かべるお母さん。
だけど、その言葉は夢の中の私じゃなくて、確かに現実の私に向けられている気がして……
「遊花。あなたはもう、どんなことがあっても真っ直ぐに進んでいくことができる。そうよね?」
「……うん‼?私はもう、何があっても諦めることだけはしないって、師匠に、そして私自身に誓ったんだから‼?」
「……その言葉を聞いて安心したわ。あなたはもう、私達に守られ

ていたあなたじゃないのね」
　そういうと、お母さんはとても嬉しそうに、そしてどこか楽しそうな笑みでデッキの上のカードに手を置く。
「だからこそ、これはあなたへの選別。愛する愛娘である遊花に贈る、私からの手向のデュエル。しっかりと、その胸に刻み込みなさい!!?私のターン、ドロー!!?森羅の姫芽宮の効果発動!!?スプラウトホープ!!?オーバーレイユニットを1つ取り除き、自分のデッキの一番上のカードをめくる!!?デッキの上からめくられたのは装備魔法、ストイックチャレンジ!!?手札に加えるわ!!?」
「っ!?ストイックチャレンジ!?」
「さらにローンファイアブロッサムの効果発動!!?私は森羅の姫芽宮をリリースしてデッキから咲き誇りなさい、六花精スノードロップ!!?」

〈六花精スノードロップ〉☆8　植物族　水属性
　ＤＥＦ２６００

　ローンファイアに導かれて現れたのは白いドレスに身を包んだ花の精。
　現れたスノードロップは私を見て嬉しそうに手を振り、その姿を見て私は思わず笑顔を浮かべてしまう。
「わぁ、六花精スノードロップ!!?」
「ふふっ、遊花は本当にスノードロップが好きね」
　キラキラと目を輝かせる私を見て微笑ましい笑みを浮かべるお母さん。
　スノードロップ。
　私が1番好きな花の名前を持つ六花精。
　スノードロップは可憐な草姿に白い下向きの花を1輪咲かせ、厳しい冬を超え、春を告げる花の名前だ。
　その花言葉は、『慰め』、『慈愛』、『恋の最初のまなざし』、そして、『逆境の中の希望』。

厳しい冬を耐え凌ぎ、希望に満ちた春を告げるその花が、私は大好きなのだ。
とはいえ、その姿を見れたことを喜んでいるわけにはいかない。
何故なら、お母さんにとっての希望となるその花が牙を向くのは私なのだから。
「まずは六花精スノードロップを対象に六花精プリムの効果発動!!?六花精スノードロップのレベルをターン終了時まで2つ上げる!!?」
「六花精スノードロップのレベルを?」

六花精スノードロップ
☆8→10

プリムの力を得て、スノードロップのレベルが10に上がる。
「まずはこうよ!!?私はレベル4、森羅の花卉士ナルサスと六花精プリムでオーバーレイ!!?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚!!?」
ナルサスとプリムが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして、渦が弾けると、舞い降りたの小さく可憐な花の精。
「逆境を耐えし強き乙女よ!!?その生命で希望を紡げ!!?ランク4!!?六花聖ストレナエ!!?」

〈六花聖ストレナエ〉★4　植物族　水属性
ＡＴＫ２０００

「そして自身を対象に六花精スノードロップの効果発動!!?自分フィールドの植物族モンスター　1体を対象として自分フィールドの全ての植物族モンスターのレベルはターン終了時まで対象のモンスターのレベルと同じになる!!?六花精スノードロップのレベルは10!!?よって私のフィールドの植物属モンスターは全てレベル10になる!!?」

「えっ⁉？」

六花精スノードロップ
☆８→１０

ローンファイアブロッサム
☆３→１０

六花のひとひら
☆１→１０

スノードロップの力によりお母さんのモンスターのレベルが全て１０になる。
レベルを合わせたこととお母さんの今までのデュエルからエクシーズ召喚を狙っているのはわかるけど、お母さんが使っている植物族はＥＸデッキに属するモンスターが非常に少なく、ランク１０のモンスターなんていなかったハズだ。
一体何を狙って……
「その表情は私が何を狙っているか分からないって顔ね。いい、遊花。ことデュエルにおいて、常識に囚われてはいけないのよ⁉？私はレベル１０となった六花精スノードロップ、ローンファイアブロッサム、六花のひとひらでオーバーレイ⁉？３体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚⁉？」
スノードロップ、ローンファイア、ひとひらが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして、渦が弾けると、舞い降りたの次元を越える巨大ロボ。
「正義の心は永久不滅⁉？希望は大きく燃え滾る⁉？ランク１０⁉？超次元ロボギャラクシーデストロイヤー⁉？」
「ええっ⁉？」
〈超次元ロボギャラクシーデストロイヤー〉★１０　機械族　光属性

ＡＴＫ５０００

お母さんが呼び出した巨大なモンスターに思わず目を見開く。

まさかお母さんのデッキからこんなロボットが出てくるなんて⁉？

「超次元ロボギャラクシーデストロイヤーは　１ターンに　１度、このカードのオーバーレイユニットを　１つ取り除いて相手フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する。そのこの効果の発動に対して、相手は魔法・罠カードを発動できないわよ？」

「っ、リバースカードオープン⁉？罠発動、無限泡影⁉？相手フィールドの表側表示モンスター　１体を対象としてそのモンスターの効果をターン終了時まで無効にする⁉？さらにセットされていたこのカードを発動した場合、さらにこのターン、このカードと同じ縦列の他の魔法・罠カードの効果は無効化される⁉？超次元ロボギャラクシーデストロイヤーの効果を無効にし、増草剤の効果を無効にする⁉？」

無限泡影がギャラクシーデストロイヤーと増草剤の効果を無効化する。

使わされているのは分かってるけど、チェーンできずに破壊されるなら使うしかない。

「行くわよ⁉？装備魔法、ストイックチャレンジを超次元ロボギャラクシーデストロイヤーに装備⁉？オーバーレイユニットを持っているエクシーズモンスターにのみ装備可能。装備モンスターの攻撃力は自分フィールド上のオーバーレイユニットの数×６００ポイントアップし、相手モンスターとの戦闘によって相手ライフに与える戦闘ダメージは倍になる⁉？ただし、装備モンスターは効果を発動できず、このカードは相手のエンドフェイズ時に墓地へ送られ、このカードがフィールド上から離れた時、装備モンスターを破壊する。私のフィールドには超次元ロボギャラクシーデストロイヤーの３つのオーバーレイユニットと六花聖ストレナエの２つのオーバーレイユニット、合計５つのオーバーレイユニットがあるわ⁉？よって、超次

元ロボギャラクシーデストロイヤーの攻撃力は……」

超次元ロボギャラクシーデストロイヤー

ＡＴＫ５０００→８０００

「攻撃力……８０００⁉？」

「バトルよ⁉？超次元ロボギャラクシーデストロイヤーでジアライバルサイバース@イグニスターを攻撃⁉？ギャラクシーブレイカー⁉？」

「っ、迎え撃って⁉？ジアライバルサイバース@イグニスター⁉？暁光のフォーザフューチャー⁉？」

ジアライバルが鎌を振り向き光の本流を放つが、ギャラクシーデストロイヤーは光のほんりを跳ね除けてジアライバルに迫り、その身体を拳で貫き、爆風が私に迫る。

このダメージを受けたら私の負け⁉？

「リバースカードオープン⁉？罠発動⁉？ガードブロック⁉？相手ターンの戦闘ダメージ計算時にその戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になり、自分のデッキからカードを１枚ドローする⁉？」

私の前に見えない障壁が現れ、爆風から私の身体を守る。

「しっかりと防いできたわね。だけど、私の攻撃はまだ終わってないわ⁉？六花聖ストレナエでダイレクトアタック⁉？ブロッサムシャワー⁉？」

「まだ……終わりません⁉？攻撃宣言時、手札から虹クリボーの効果発動⁉？このカードをそのモンスターに装備し、そのモンスターは攻撃することが出来ません⁉？レインボーガード⁉？」

私の手札から虹色の角を持つ球体が現れてストレナエが放った花吹雪を抑え込む。

もうお母さんに攻撃できるモンスターはいない。

防ぎきった⁉？

そう私が気を抜きそうになったところでーーー

「流石ね、だけど。甘いわよ、遊花。リバースカードオープン!!?罠発動!!?ワンダーエクシーズ!!?その効果により自分フィールド上のモンスターでエクシーズ召喚を行うわ!!?」
「えっ!?」
ーーーお母さんの言葉が重く響いた。
「私は超次元ロボギャラクシーデストロイヤー1体でオーバーレイ!!?1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築!!?エクシーズチェンジ!!?」
ギャラクシーデストロイヤー光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆けるとそこから現れるのは巨大な砲塔を持った列車。
「圧倒的な愛の化身!!?ランク11!!?超弩級砲塔列車ジャガーノートリーベ!!?」

〈超弩級砲塔列車ジャガーノートリーベ〉★11　機械族　地属性
ＡＴＫ４０００

「ここにきて、ランク11のエクシーズモンスター!?」
私には手札もセットカードもなく、墓地から起動できるカードもない。
この攻撃は、避けられない。
「……私の、負けかぁ」
「ええ、お母さんは強いのよ。まだ遊花に追い越される訳にはいかないわ。超弩級砲塔列車ジャガーノートリーベでダイレクトアタック!!?ジャガーノートラッシュ!!?」
ジャガーノートリーベの砲身が私の方を向き、その砲身から何発ものエネルギー弾が放たれる。
いくつものエネルギー弾が私を呑み込もうとした時、私の口から漏れたのは。
「でも、やっぱり勝って、お母さん達を安心させてあげたかったなぁ……」

そんな、懺悔の念だった。

遊花　ＬＰ４００→０

ーーーーーーー

デュエルが終わり、立体映像が消えていく中で不意に私の意識が遠のきはじめる。

夢が終わり、目が醒めようとしているのが、はっきりとわかる。

「っ……お母さん‼?……お父さん‼?」

薄れゆく意識を必死に繋ぎ止め、お母さん達を呼ぶ。

「私は……もう大丈夫‼?こんな私を、優しく見守ってくれる人がいる‼?こんな私と、肩を並べてくれる親友がいる‼?こんな私に、期待をかけてくれる先パイがいる‼?だから、私はもう、大丈夫‼?どんなことがあっても、負けない‼?平気、へっちゃらだから‼?だから……‼?」

私は……目から溢れ出る何かを感じながらも、精一杯の笑顔を浮かべ、口を開く。

「だから……いってきます、お母さん‼?お父さん‼?」

そんな私の言葉に、お母さん達は確かに笑顔を浮かべてーーー

『いってらっしゃい、私達の可愛い遊花』

その言葉が耳に届と同時に、私の意識は完全に途絶えた。

ーーーーーーー

「……ん、あれ……この匂いは?」

目が覚めると、何故か近くからコーヒーの匂いがして、私はぼんやりとしたまま目を擦る。

そんな私の耳に響いたのは、とても温かな優しい声。

「お、起きたか、遊花」

「ふぇっ‼?」

近くから聞こえたその声に、私の意識が覚醒して声の聞こえた方を向くと、コーヒーを飲みながら優しい眼差しで私を見ている師匠がいた。
「珍しいな、遊花がリビングでうたた寝してるなんて。最近色々あったし、疲れが溜まってたのかもな」
「し、師匠⁉？あ、だ、ダメです‼？ちょっとだけ‼？ちょっとだけ後ろを向いててください‼？」
「えっ⁉？あ、ああ、わかった」
私の慌てた声を聞き、師匠が後ろを向いてくれたのを見てから、自分の身嗜みを整える。
うぅ～まさか眠ってるところを見られちゃうなんて、涎とか、出てなかったよね？変なところないよね？
時間を見ると、時刻はそろそろ１７時になろうとしていたところだった。
そっか、私、庭の掃除をしている時にあまりにも日差しが気持ち良かったから、そのままお昼寝しちゃったんだ。
「も、もう大丈夫です。ごめんなさい、師匠」
「あ、ああ。別に構わない。確かにちょっとデリカシーにかけてたな、悪い」
「い、いえ、師匠が悪い訳じゃ……こんなところで眠っちゃった私が悪いんですし」
苦笑を浮かべる師匠を見て、私は恥ずかしくて縮こまる。
「随分幸せそうな顔をしてたけど、なにかいい夢でも見たのか？」
「……はい。とても、とても幸せな夢を見ました。温かくて、優しい、幸せな夢を」
「……そっか」
私の返答に、師匠は何も言わずに優しく私の頭を撫でてくれる。
子供扱いされてるみたいでちょっとだけ複雑だけど、それでも師匠が一生懸命私のことを考えてくれてるのが伝わってきて、思わず頬が綻ぶ。
ああ、やっぱり私は、師匠のことがーーー

「……なんてね」
「ん？何か言ったか、遊花？」
「えへへ、何でもないです……あれ？」
自分の考えに頬が熱くなり、思わず誤魔化すように笑って首を振ると、不意に視界に白い花が映った。
私が思わずそちらに視線を向けると、そこにあったのはーーー
「スノー……ドロップ」
そこにあったのは、可憐な草姿に白い下向きの花を1輪咲かせる、私が大好きな春告花。
その可憐な春告花が、綺麗に花瓶に飾られていた。
「ああ、その花か？俺が帰ってきたら、遊花がそれを握ったまま眠っててさ。大事そうに握ってたから飾ったんだが、悪かったか？」
「っ……いえ、すごく、すっごく嬉しいです‼？」
師匠の言葉に私は思わず笑顔を浮かべて花瓶に飾られているスノードロップを見る。
そんな私を見て、師匠は不思議そうな表情を浮かべて口を開く。
「その花、好きなのか？」
「はい、とっても。とっても大切な花なんです。花言葉は、『慈愛』や『逆境の中の希望』っていうのがあって、厳しい冬を超え、希望に満ちた春を告げる優しいこの花が、私は大好きなんです」
「……そっか。慈愛に希望、か。なんか、遊花みたいな花だな」
「あぅ……えへへ、そんなこと言われると、少し照れちゃいます」
師匠の言葉に、私は思わず頬が緩む。
希望を告げるこの花みたいだと言われるのは、素直に嬉しい。
優しさに満ちた花言葉を持つ、希望の花。
『慰め』、『慈愛』、『逆境の中の希望』そして……『恋の最初のまなざし』。
「っ‼？」
そこまで考えて、不意に師匠に視線が向いていたことに気づき、再び頬が熱くなる。
……この思いは、まだ秘めておこう。

私はまだ、そこまで私に自信が持てない。
だけど、いつかきっと、この思いに自信を持てる時がきたらーーー
「遊花ー‼?晩ご飯はまだー?」
「桜、子供みたい……」
「し、仕方ないでしょ‼?お腹空いたんだから‼?」
「ふっ、賑やかだな、桜達は」
そんなことを考えていると、２階から賑やかな声が聞こえてきて、師匠が苦笑を浮かべる。
聞こえてきた声に私も思わずくすりと笑うと、リビングの机の上にあるお母さんとお父さんの写真が飾ってある場所を見る。
お母さん、お父さん。
いつも私を見守ってくれてありがとう。
お母さん達はいなくなって、寂しくなったこの家も、こんなに賑やかで、温かくなりました。
私は、もう大丈夫。
どんなことがあっても、優しいこの人達に貰った羽根で、私は翔んでいける。
だから、きっといつか、また会う日が来たら……
その時は、私の全てを、笑顔で報告ができるようにするから。
だから、いってらっしゃい、お母さん、お父さん。

番外編・3周年記念　まっさらな闇

○

夜の帳が下りるケルンの街に焦ったような男の声が響く。
「君!!?大丈夫か!!?っ、すぐにデュエルセキュリティと救急に連絡を!!?」
「はい!!?」
男の声に側にいた女性が慌てて近くの建物に入っていく。
「っ!!?これは……くっ!!?しっかりしろ!!?」
男が見つけたのは倒れている小さな少女だった。
男は少女は背負い、女性が入っていた建物の中に入ると、ベッドの上に少女を寝かせて必死に声をかける。
その小さな少女の状態は目を覆いたくなるような惨状だった。
意識はなく痩せ干せた身体に、服もなくボロボロの布切れを身に纏っているだけ。
しかし、気を失っているにも関わらず、少女は手に何かを握りしめ、決して離そうとはしなかった。
しばらく、男が懸命に声をかけていると、少女の身体がピクリと動いた。
「うっ……」
「!!?気がついたのか!!?一体何があった!!?」
少女はゆっくりと目を開けていき、近くにいた男を見ると掠れたような声で呟く。
「ここ、どこ……？あなたは……？」
「ここは教会、私はここで神父をしているものだよ」
「神父、さん……教会……？」
男の言葉を、少女は反復するように呟く。
神父を名乗った男はなるべく優しい声色で少女に話しかける。
「君はこの教会の前に倒れていたんだ。君は一体どうしてあんなところにーーー」

「……わから、ない」
「わからないだって？それならーーー」
「何も……わからない……何も……思い出せない……本当に、何も……」
「っ、君、まさか……⁉？」
少女の言葉に神父は目を見開く。
そして少女はその残酷な現実を口に出す。
「私は……誰……なの？」
そう呟くのと同時に、少女は再び意識を失う。
少女の問いの答えを知る者は、どこにも存在しなかった。

ーーーーーーー

●

「……」
「失礼します……あら、起きてたのね」
そんなことを言って入ってきた女性の看護師さんとおじいさんのお医者さんに私は頷く。
頷いた私を見て、部屋の外を見ながら嫌そうな顔ですお医者さんは大きなため息を吐いた。
「今日もデュエルセキュリティが君に話を聞きに来ているよ。全く、記憶もない小さな少女に聞き取りなんて何を考えているんだか」
「全くですよ。この子に答えられない質問を何度も聞いて困らせるだけ困らせる癖に、この子の手がかりすら探せないんですから」
呆れたようにため息を吐きながら、若干の怒りを露わにするお医者さんと看護師さんに私は首を振る。
「ははは、構いやしないよ。あんな無作法な奴らなんかいくら困ろうとね。君が気にかける程のことじゃない」
「そうよ。いつも通り、わからないものを無理矢理答えなくていいんだからね」

そういうと、ベッドで寝ていた私の身体を起こして、看護師さんが車椅子に乗せて移動してくれる。
私が倒れているところが発見され、この病院に緊急搬送されてから早くも1週間が経った。
未だに私の記憶は戻っていない。
私が倒れている間に、私を助けてくれた神父さん達が私の手がかりになるようなものが落ちたりしてないか調べてくれたのだが、残念ながらそのようなものは見つからなかった。
私が身につけていたのは、ぼろぼろの布切れとーーー
「あら、今日もそのカード達を見てたのね。倒れていたあなたが持ってたっていう」
「う、ん」
看護師さんの言葉に私はまた頷くと、自分の服のポケットからカードローダー（？）というものに入れられた数枚のカードを取り出す。
倒れていた私はこのカードを大切そうに握りしめていたらしい。
大事なものかも知れないからと、神父さんがカードローダーにしまってくれたらしい。
見ていれば何か思い出すかもと思い、じっと見てはいるのだが、いつまで経ってもそんな兆候はなかった。
神父さんの言付けとして、お医者さんは『そのカードには直接触れないように注意して欲しい』ということを言われたらしい。
言ってることは全然わからないけど、きっと大切なことなのだろうということで、その言いつけは守るようにしていた。
「それにしても相変わらず謎のカードよね。ちょっと調べて見たけどそんなカード見たことないわ」
「そう、なの？」
看護師さんの言葉に、私は首を傾げる。
私が持っているようなカードが他にもあるのだろうか？
記憶もなく、ずっと病院にいる私にはそれすらも知るすべはない。
看護師さんたちがに聞くという方法もあるとは思うのだが、記憶がない私がわからないことをいちいち聞くのも酷だろう。

この病院を出て、自分で調べれるようになってから調べればいい。
この時の私は、本気でそう思っていた。
「来ましたか」
しばらくすると姿が見えたのは緑色のジャケットを着た男性。
男性は私を見ると柔和そうな笑顔で、しかし、どこか冷たい雰囲気で私に向かって一礼した。
「こんにちは、お嬢さん。ごきげん麗しゅうございます」
私はそんな男性に無言のまま頷き返す。
「それでは、先生方。ここからはこちらの業務になりますので」
「……わかったよ。ただその子はまだ幼く衰弱状態から回復したばかりだ。あまり無茶な真似はしないでいただきたいね」
「心得ておりますとも」
「……じゃあまた後でね」
「は、い。あり、がとう、ございい、ます」
心配そうに去っていくお医者さんと看護師さんに頷く。
2人がいなくなると、男性は私の方に向き直ると胡散臭い笑顔を浮かべた。
「すみませんね、お手間をかかせてしまって」
「いえ、何か、わかり、ましたか？」
「誠に残念ながら……こちらとしても様々なところをあたっては見たのですが、記憶を失う前のお嬢さんに関する情報は何も得られず……」
「そう、ですか」
男性の言葉に私は力なく頷く。
せめて何か私の情報が見つかれば、記憶が戻る手がかりにもなるのに……
「ええ、本当に何も見つからないのです。お嬢さんに関する情報が、一切。デュエルセキュリティではお嬢さんが闇から生まれたのではないかなんて与太話まで出る始末で……ふふふ」
「……」
私が不気味に笑う男性をじっと見つめると、男性はすぐに表情を取

り繕い、柔らかなで胡散臭い笑みを浮かべた。
「とはいえ、お嬢さんは今こうして生きています。なので、すでにデュエルセキュリティの方から戸籍を登録する準備と、保護する施設についての準備をさせていただきました」
「準備？」
「ええ。とはいえ、急拵えなところもあり、まだ確定していない部分がいくつかありますので、詳しい話は退院次第そちらの施設に移動してからになると思います」
「そう、ですか。わかり、ました」
この時の私は、記憶の欠落によって男性の言葉の意味がよく理解できず、何も考えずに頷いてしまった。
このことが、後に自分を地獄に送ることになることも知らずにーーー

ーーーーーーー

「さあ、ここがお嬢さんがこれから過ごす場所ですよ」
時間は流れ、体力もある程度回復した私は、私の捜査を担当していたデュエルセキュリティの男性に連れられ、入院していた病院を退院することになった。
私の治療を担当してくれていたお医者さんと看護師さんは最後まで心配そうな表情を浮かべ、私の行く末を心配し、幸せになるように祈ってくれた。
残念なことに、その懸念は的中してしまったようだが。
「ここ？」
「ええ、ここがこれからあなたが入る施設ーーーいえ、実験場です。ふふふ」
そういうと、男性はいつも浮かべていた胡散臭い柔和な笑みを消し、下卑た笑みで笑った。
最早隠そうともしない悪辣さと、身体につけられたよく分からない機械を見て、心の中でため息を吐いた。

男性に連れてこられたのは、黒い孤児院だった。
外観を見る限りでは特に異常な様子は見られず、病院の窓から見えていた近くの施設と同じように見えた。
それが、この施設の罠なのだろう。
この男性に連れられ、何も知らずに施設に入った瞬間、施設の扉が重い音を立てて閉まり、隣の男にハンカチを顔に押し付けられて気を失った。
そして目を覚ましたら、目に映るのは壁も天井も真っ黒な世界と、私を気絶させた胡散臭いデュエルセキュリティの男。
そして、周りにいる白衣を着た大人達と私の頭にはよく分からない機械がつけられていて、身体はバンドで動けないように縛られているという状況である。
ここまでくれば流石に碌でもない目にあうことは想像がつく上に諦めもつくというものである。
元々記憶もなく、身内もいない。
これからどんな目に遭おうとも誰も困りはしないだろうと、酷く冷めた思考が頭を満たす。
大きな反応を示さない私を見て、男性はつまらなそうに顔を歪めた。
「チッ、つまらないですね。その無表情が崩れ、泣き叫ぶ様が見られるかと思ったのですが」
「あなた、を、喜ばせる、つもり、ない」
「ああ？生意気なガキが大人を舐めやがって‼？」
「っ……‼？」
私の言葉に怒ったのか、男性は私の身体を思いっきり蹴り飛ばす。
痛みに思わず顔を歪めると、男性の表情が愉快そうに歪む。
しかし、そんな男性を止めるように近くにいた白衣の男達の中の1人が声を上げた。
「おい‼？大事な被験体（モルモット）を傷つけるな‼？」
「チッ‼？いいじゃないですか。1匹ぐらい減っても」
「ダメだ。我らの目的のためにも無駄なことは省かなければならな

い」
「『人間をどんなものにも負けない生命に進化させる』、でしょう？崇高な目的なことで。学の無い私には理解できませんね」
男性がそういうと白衣の男の声がさらに冷たくなる。
「……あまり調子に乗らない方がいい。君のようなチンピラの替えなどいくらでもいるのだ。理解できないというのであれば、その身を持って理解して貰ってもいいのだよ？」
白衣の男がそういって指を鳴らすと、男の背後にあった扉が開き、そこから地響きのようなものが聞こえてくる。
しばらくして、地響きと共に扉の奥から現れたのはあからさまに異形な存在だった。
トカゲのような顔に植物の蔓のように伸びる手、そして人間のような胴体で二足歩行をする異形の存在が男性を睨みつける。
異形の存在を目にした男性は青い表情を浮かべると、必死に捲し立てた。
「はは、わ、悪かったですよ。そうですよね、あなた達の目的は素晴らしいことですものね」
「そうだ。我々の目的が達成されれば人類は新たなステージに進める。そのことを覚えておきたまえ」
白衣の男がそういって指を鳴らすと異形の存在は扉の奥に戻っていく。
想像以上にとんでもない場所に連れてこられたことに私は少し頭を抱えたくなった。
なお、抱えるための手はベルトに固定されているため動くことは叶わない。
「さて、観客も静まったところで、検査を開始しよう。君が俺達に新たな刺激を与えてくれることを願っているよ」
そんな白衣の男の言葉と共に、何かを注射器で打ち込まれる。
私の意識はすぐに混濁し、再び闇の中に消えていった。
ーーーーーーー

「ＨＯ－０８３Ａ。実験の時間だ」
「……」
この施設にあてがわれた自室のような場所でボーっとしていると、白衣の男達が呼びに来たため心の中でため息を吐きながら男達についていく。
抵抗したところで逃げれるわけもなく、同じ施設にいた子供で抵抗した子供達は暴力を受けて無理矢理連れていかれるので、余計な労力はかけない方がいい。
初めてこの施設ーーー同じ施設に引き取られてしまった子供達が『黒い孤児院』と呼ぶこの施設に連れてこられて早くも2か月が経った。
どうやら私の身体は彼らのお眼鏡にかなったらしい。
ＨＯ－０８３Ａ。
通称『闇』。
これが今の私の識別番号らしい。
食事は与えられ、衣服などもちゃんとしたものが支給されるなど、思っていたよりは大切にされている。
全く嬉しいことではないが、それでも生きていられるだけまだマシなのか、それとも早く死ねない分惨いのかは判断に困るところである。
どうやらここは私のように行く当てのない孤児を実行犯であるデュエルセキュリティの人間が騙し、この施設に連れてきては『人間をどんなものにも負けない生命に進化させる』というよく分からない目的のために研究員が人体実験を行う施設らしい。
施設には身寄りのない子供達が保護の名目で送られてくるが、薬の苦さ、拒絶反応による身を裂くような痛み、そしてひとりぼっちで横たわる手術台。
そんな毎日の中、同じように施設に引き取られていた子供達はいつの間にか消えていった。
それがどういう意味かわからない私ではない。

最もこの身体は意外と便利なようで、他の子供達に起こるよく分からない薬の拒絶反応がこの身に起こったことはない。
そのせいで、重要視もされているようで、この実験における最も重要な個体ーーーカテゴリーA（エース）と呼ばれているらしいのだが。
今日も今日とてよく分からない機器によるデータの収集とよく分からない薬を投与される。
特に反応を見せない私を見て、興味深そうに目を輝かせる研究員達は何とも不気味である。
「高濃度の呪いを直接打ち込んだことによる拒絶反応もない……素晴らしい‼?」
「先天的に呪いに完全適合した生物……ＨＯ－０８３Ａの人体をより詳しく調べれば『人間をどんなものにも負けない生命に進化させる』ために重要な足掛かりとなる‼?やはり、解剖してーーー」
「馬鹿を言うな‼?こんな貴重な個体。次はいつ巡り会えるかすらわからないんだぞ⁉?ここは慎重に行くべきだ‼?」
相変わらず物騒な言葉が平然と飛び交う研究員達を冷めた目で見つめる。
こんな身体の何がそんなにいいのかさっぱりわからない。
おまけに私には記憶（なかみ）すらない。
そんな生物がなんの参考になるのだろう？
初めから理解できる気もする気もなかったが、うるさいから少しは黙ってほしい。
そんなことを淡々と考えていると、そんな研究員達を鎮めるように手を叩く音が聞こえてくる。
音が聞こえた方を見ると、そこには私が初めてこの施設に来た時にデュエルセキュリティの男を止め、化け物を呼び出した研究員が立っていた。
「くだらない言い争いはよせ。少なくとも、その少女を解剖するのは却下だ」
「しかし、アイサカさまーーー」
「俺の決定に意見すると言うのかね？」

底冷えするような声を出し、反論しようとした研究員をアイサカと呼ばれた男が睨みつける。
すると、研究員の男は顔を真っ青にして深く頭を下げた。
「め、滅相もございません‼?」
「よろしい。とにかく、ＨＯ－０８３Ａに対する実験は万全を期して行っていく。ＨＯ－０８３Ａには我らがどんなものにも負けない生命に進化するため、滅びを克服するための『滅びの聖母』になって貰わなければならないからな」
そういってアイサカと呼ばれた男が不気味に笑うが、私としては心底どうでもいい。
この施設に閉じ込められている限り、私に未来などないのだから。
「しかし、いつ見ても感情らしき感情を見せませんね、ＨＯ－０８３Ａは」
「感情がないのか、それとも実験の影響で壊れてしまったのか?」
「もしくは感情がないことで呪いに適合しているのかもしれませんね」
周りの研究員がひそひそと失礼なことを言ってるが気にしない。
そもそもこの壁も天井も真っ黒な世界で何に感情を見出せというのか。
「む?ＨＯ－０８３Ａ。そのポケットに入っているものはなんだ?出せ」
「……」
私はアイサカという男の視線が私のポケットに向いたことに思わず心の中で舌打ちをしながら、ポケットに入っていたものを取り出す。
私のポケットに入れられていたのはカードローダーに入れられた数枚のカード。
記憶を失った私が持つ唯一の手がかり。
いつもなら部屋に置いてきているのだが、今日は咄嗟に呼ばれたのでポケットに忍ばせたままだった。
「カードだと?ＨＯ－０８３Ａ。どこでそのようなものを手に入れた

？」
「あれは確か、ＨＯ－０８３Ａの所持品だったかと。何でも、記憶を失い、倒れていたＨＯ－０８３Ａが離さずに持っていたとか。一応、ＨＯ－０８３Ａの所持品自体はそのまま所有させていたため持ってきていたのでしょう」
「成る程。そのカードを見せなさい、ＨＯ－０８３Ａ」
アイサカが私に向かってカードを手渡すように言ってくるが私はそれを無視する。
この人達に渡ったらこのカードがどうなるかわからない。
これは私の手がかりなのだから。
無視をした私をアイサカは興味深そうに笑う。
「ほう、そのカードには執着を見せるか」
「調子に乗るな‼？　ＨＯ－０８３Ａ‼？そのカードを渡せ‼？」
「あ……」
先程私を解剖するだの言っていた研究員が私のポケットから強引に１枚のカードを奪い取る。
「一丁前にカードローダーなんてものつけて。全く、手間をかけさせるな」
そういって研究員がカードローダーの中から入っていたカードを取り出す。
その瞬間ーーー
『ーーー‼？』
「……えっ？」
ーーー私の耳に何かの怒ったような鳴き声が聞こえた。
私が聞こえてきた鳴き声に首を傾げていると、私からカードを奪った研究員から焦った声が聞こえてきた。
「な、何だ、これは⁉？あ、あ、あぁ‼？」
その声に研究員の方を見ると、カードから黒い何かが溢れ出し研究員を呑み込んでいくところだった。
突然の事態に周りの研究員が呆然としていると闇に呑まれた研究員の表情が蒼白に変わり、異常な発汗を始め、ガタガタと震えていた。

『ーーーー!!?ーーーー!!?』
そして再び私の耳に何かの怒った鳴き声が聞こえてきた瞬間、闇に呑まれた研究員の目が白眼に変わった。
「う、うわぁぁぁぁぁぁぁ!!?ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいゴメンナサイゴメンナサイ!!?」
研究員が発狂した。
身体は闇に包まれたまま、カードを手放し、唾を吐き、頭を抱えながら、地面を這いずり回り、ただひたすら何かに謝っている。
「おい!!?どうした!?」
「赦してください赦してください赦してください赦してください!!?助けて助けて助けてたすけてたすけてたすけてタスケテタスケテタスケテタスケテ!!?」
「っ!!?」
近くにいた私の足元に縋りつき、涙ながらに懇願する研究員があまりにも不気味で私は思わず研究員の身体を蹴り、研究員が放り出してしまった私のカードの元に駆け出し、そのカードを拾う。
『ーーーー!!?……ーーーー!!?』
私がカードを拾うと怒っているような謎の鳴き声は静まり、代わりに喜んでいるような鳴き声が聞こえたかと思うとーーー
「うぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」
ーーー突如、室内に雷雲が生まれ、発狂していた研究員に落雷が降り注いだ。
耳をつんざくような絶叫と爆音に私は思わず耳を押さえる。
研究員の末路は……見ないでもわかる。
「チッ!!?何をした!?HO-083A!!?」
「知りま、せん」
「知らないだと!?ふざけたことを!!?」
私の言葉に、研究員が怒りの声をあげる。
だけど、私が言える言葉はそれしかない。
「嘘じゃ、ない。私が、持ってる、間、こんな、こと、起こった、こと、ない。私、以外の、人、触った、こと、ない。だから、知ら、ない」

「何を馬鹿なーーー」
「クックック、ハーッハハハハ‼?素晴らしい‼?」
私の言葉に研究員の男性が怒りを露わにしようとした時、アイサカが急に心底嬉しそうな不気味笑い声を上げた。
「人を容易く狂わせ死にいたらしめる呪い‼?そしてその呪いの根源に触れようとも、その呪いに蝕まれることのない精神と肉体‼?素晴らしいよ、ＨＯ－０８３Ａ‼?闇‼?やはり貴様は最高の実験体‼?カテゴリーＡ（エース）‼?『滅びの聖母』だ‼?」
狂ったように笑うアイサカの言葉に私は握っていたカードーーー覇王眷竜ダークリベリオンに目をやる。
触れた者を発狂させ、雷で裁いたこのカード。
それに触れても大丈夫な私の身体。
このカード達、そして私は一体なんなのだろう？
私の中に押し殺していた自身の失われた記憶と謎への探究心が再び目を覚ます音が聞こえた。

ーーーーーーーー

午後の人体実験は中止になり、私は自室に戻された。
流石にあの惨状で実験は続けられないらしい。
私は普段着にしている真っ黒のワンピースに着替えると自室の机の上にカードローダーから外した私のカード達を並べる。
私が持っているカードは、覇王眷竜ダークリベリオンだけではない。
だけど、さっきの様子を見る限り他のカードにも同じような何かがあるのではないかと勘繰ってしまう。
そういえば、病院に入院していた時に看護師さんは『そんなカード見たことない』と言っていた。
ということは、似たようなカードが外の世界にはあるのだろうか？
私は、何も知らない。
私の中の世界は入院していた病院とこの壁も天井も真っ黒な世界

だけだ。
知りたい。
私は自分のことも、このカード達のことも、何も分かっていない。
自分の失われた記憶、記憶を失った私が手にしていたこのカード達、そして、私が知らないこの施設の外の世界を、私は知りたい。
だけど、そのためにはこの施設から抜け出さなければならないが、それは容易なことではない。
施設の中にはいくつもの監視カメラがある上に、出入り口は私が最初に入ってきた扉だけだ。
壁にある窓はかなり頑丈にできており、前に脱走しようとした子供達が部屋にあった机や椅子を投げつけたがびくともしていなかったのを覚えている。
とてもじゃないが、抜け出せるとは思えない。
それでもーーー
「ここから、出たい、な」
思わず私は小さな声で呟く。
その瞬間ーーー
『ーーーー!!?』
『ーーー!!?　ーーー!!?』
「っ!?何!?」
ーーー私の耳にまた何かの鳴き声が響き、私の手に持っていたカードの内、2枚のカードから黒い何かが溢れ出していた。
「っ?霸王眷竜オッドアイズ……霸王眷竜スターヴヴェノム?」
黒い何かが溢れ出しているそのカードの名前を呼んだ次の瞬間、霸王眷竜オッドアイズが黒く輝き、私の部屋をその輝きで覆い尽くす。
「何が、起こって……」
私が戸惑っていると、今度は霸王眷竜スターヴヴェノムから黒い何かが部屋の窓に向けて放たれ、黒い何かが触れた瞬間、部屋の窓と壁がどろどろと溶けていき、外へと繋がった。
「っ!!?」
未知なることへの驚きは一瞬。

私は何も考えずに、机の上に置いてあったカード達とカードローダーをポケットに入れると外へと繋がったその場所から施設の外に出る。
施設の外は大きな柵で覆われており、入り口と言えるのは玄関の方にある大きな門だけだった。
でも、そちらの方に向かったらきっと研究員達がすぐに追いかけてきて捕まってしまう。
『ーーー‼?』
「っ、また‼?」
そんなことを考えていると、再び私のポケットの方から何かの鳴き声が聞こえてきて、私はその鳴き声の発生源と思われるカードを手に取る。
「覇王眷竜クリアウィング……」
私がカードの名前を読み上げると、今度は覇王眷竜クリアウィングから黒い何かが溢れはじめる。
すると、次の瞬間ーーー
「えっ?」
ーーー突然、凄まじい暴風が吹き荒れたかと思うと、私の身体はその暴風に吹き飛ばされて空高く舞い上がった。
暴風によって吹き飛ばされた私の身体は施設の外へと一気に吹き飛ばされると、人のいない空き地の方に落下していく。
「っ‼?落ち……‼?」
急激に落下していく私は思わず地面とぶつかる衝撃を予想して目を瞑るが、その瞬間、次は地面の方から強い風が吹き、私の身体はゆっくりとその地面に着地した。
「はぁ……はぁ……生き、てる?」
私は呆然としたまま、その場に倒れ込み、ポケットに入れ直した覇王眷竜オッドアイズ、覇王眷竜スターヴヴェノムのカードを取り出し、手に握っていた覇王眷竜クリアウィングと一緒に眺める。
「助けて、くれた、の?」
私の問いに先程聞こえた鳴き声は聞こえてこなかった。

だけど、何となくこのカード達が私を助けようとしてくれたことだけは伝わった。
「ありが、と」
私はカード達にお礼を言うと再びカードローダーに入れ、ポケットに仕舞って街の中に向かって走り出す。
こうして、私のいく宛のない脱走劇は始まった。

ーーーーーーー

『次のニュースです。昨夜行われたプロチーム、『Ｖｅｒｂｉｎｄｕｎｇ（ベッィーウンゲン）』と『Ｗｉｒｂｅｌｗｉｎｄ（ヴィルヴェルヴィント）』のチーム対抗戦第２試合。中堅戦では『Ｖｅｒｂｉｎｄｕｎｇ』の結束　豪騎選手が、『Ｗｉｒｂｅｌｗｉｎｄ』の栗原　遊翼選手を下し、戦績を１勝１敗に持ち込み、勝敗は大将戦へとーーー』
私はきょろきょろとあたりを見回しながら初めての街の中を歩いていく。
街中にはたくさんの人がおり、至るところにあるモニターを眺めて何かの映像を見ていたりする。
今までが静かな壁も天井も真っ黒な世界にいたせいで、街の喧騒は私には少しうるさ過ぎた。
とはいえ、逃亡中の身としてのんびりとはしていられない。
どうするべきかを思考しながら辺りを見回していると、近くにある１つの建物が目に入った。
「っ!!?あれ……」
私はその建物に急いで近づいていくと、その建物の窓から見えたものに視線を向ける。
「これ……カード、だ」
私が見つけたのは外側のガラスの中に複数枚のカードが並んである小さくてとても寂しい雰囲気がするお店だった。
上を見上げると、店名だろう『Ｎａｔｕｒａｌ（ナチュラル）』と書かれた看板がぶら下がっている。

私は何かに引き寄せられるようにその店の扉を開ける。
お店の中にいたのはおじさんと私と同い年ぐらい男の子だった。
茶髪の黒いパーカーを着た少年と４０代ぐらいのおじさんが親しげに話していた。
私のことに気づいたおじさんは、こちらに近寄りしゃがみ込んで視線を合わせて口を開く。
「いらっしゃいませ。ようこそ『Ｎａｔｕｒａｌ』へ。今日はカードを見に来たのかい？」
おじさんの言葉に私が頷くと、おじさんはにこやかな笑みを浮かべた。
「そうかい。なら、見ての通り寂れた店だがゆっくりと見ていくといいよ。カードならあそこのショーケースやストレージから探すといい」
おじさんの言葉に、私は再びこくんと頷くとショーケースの前に移動してショーケースに張り付きながらカードを探し始める。
自分の持っていたカードを思い返し、ショーケースの中のカードを丁寧に見ていくが私が持っていたカードと同じものが見つからない。
ここにはないのかもと思いながら、辺りに視線を彷徨わせと、近くで先程の男の子がカードを広げて束にしているのが目についた。
もしかしたら、あの子が持っているカードに似たものがあるかもしれない。
そう思った私は男の子に近づき、男の子と男の子の手にしているカードをジッと見ていく。
さっきから、この男はカードの束を作っている。
だけど、そのカードの束からカードを抜いたり足したりを繰り返している。
片付けてるだけかと思ったんだけど、これは何をしてるんだろう？
私が男の子のことを見ていると、男の子は躊躇いがちに口を開いた。
「……なあ、なんか俺に用があるのか？」
男の子の言葉に私はふるふると首を振る。

私を見て男の子は困ったような表情を浮かべると、近くにいたおじさんの方を見る。
すると、おじさんは苦笑を浮かべながら私に近づいてきて声をかけてきた。
「遊騎君が作っているデッキに興味があるのかい？」
「デッキ……？」
私は首を傾げながら声を出す。
そんな私の反応におじさんは目を見開いて驚きを露わにした。
「おや？デッキが分からないのかい？カードを探しにきたのだから君も決闘者だと思ったんだけどね」
デッキ……決闘者……知らない言葉がいっぱい出てきて何のことだかさっぱりわからない。
だけど、せっかくの機会なので私は自分の本来の目的を話すことにした。
「デッキ……決闘者……知らない……私、カード、探しに、来た。私の、手かがり、欲しくて」
「手がかり？」
「このカード……知らない？」
「うわっ、何このカード……見たことねぇ」
「これは……私も見たことがないね」
私はポケットから数枚のカードを取り出し、男の子とおじさんが思わずといったように呟いた。
おじさん達の言葉に思わず私は肩を落とす。
分かってはいた。
そんなにすぐ手がかりは見つかるわけないことは。
だけど、カードショップを開いているおじさんにすらわからないなんて、このカード達は一体何なんだろう？
そんな私を見て、男の子は何を思ったのか明るい表情を浮かべて口を開いた。
「よし、じゃあさせっかくだから、そのカードを使ってデュエルしてみようぜ」

「えっ？」
　男の子の言葉に私の胸がドクンと大きく鳴る。
「デュエルって、何？」
「あーデッキも知らないんだからデュエルも分かんないか。このカードでデッキを使って勝負するんだよ。せっかく見たこともないカードがあるんだから、やっぱりデュエルしてみたいじゃん。それにデュエルすることでお互いのことも分かるしさ」
「遊騎君……君ねぇ」
　男の子の言葉におじさんは呆れたような表情を浮かべる。
　デュエル。
　何故だろう？
　私は聞いたことがないはずなのにーーー私はそれを知っている気がする。
「デュエル……やって、みたい。なんか、知ってる、気がする」
「お、そっか。ならやろうぜ、デュエル」
　私の言葉に男の子が嬉しそうに笑う。
　私が本当にそれを知っていると言うのなら、やってみたい。
　だけど、問題は……
「でも、私、デッキ？ない」
　そう、私には男の子が持っているようなデッキと呼ばれるものがない。
　私が困っていると、男の子は一瞬微妙な表情を浮かべたがすぐに私に笑いかけてきた。
「あーそうだよな。なら、俺の余ってるカード分けるからさ、それでデッキ作ろうぜ」
　そういって男の子ら自分の持っていたカードをテーブルの上に広げていく。
「でも、それ、あなたの、カード」
「気にすんなって。決闘者同士、困った時は助け合いだからな。まあ、大したカードもないんだけど……俺は結束　遊騎。お前、名前は？」

男の子ーーー遊騎の言葉に私は少し困ってしまう。
私は、自分の名前すら分からない。
しいて言うなら、ＨＯ－０８３Ａが私を示す名前だけど、それがおかしいことは流石に私もわかる。
そういえば、あの施設で呼ばれていた名前が１つあった気がする。
確かーーー
「……闇、って、呼ばれてた」
「呼ばれてた？……まあいいや。それじゃあ闇、デュエルしようぜ‼？」
「‼？……うん、よろしく、遊騎」
遊騎に闇と呼ばれた瞬間、胸のあたりがぽかぽかとあったかくなる。
私は不思議な感覚に戸惑いながらも、遊騎からデュエルのことについて教えて貰うのだった。

ーーーーーーーー

『決闘‼？』

闇　ＬＰ８０００
遊騎　ＬＰ８０００

「先攻は俺が貰うな。魔法カード、増援‼？　デッキからレベル４以下の戦士族モンスター１体を手札に加える‼？俺はデッキからキングスナイトを手札に加える‼？モンスターをセット。カードを２枚伏せてターンエンドだ‼？」

闇　ＬＰ８０００　手札５
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　　ー

ーー■ーー
ーー▲▲ー　ー
遊騎　ＬＰ８０００　手札２

「私の、ターン、ドロー」
遊騎が説明してくれたデュエルのルールを思い出しながら、私は恐る恐る手札のカードを島さんに貸して貰ったデュエルディスクに置く。
「私は、魔法カード、おろかな埋葬!!?デッキから、モンスター１体を墓地へ送る。私は、デッキから、覇王眷竜ダークヴルムを、墓地に、送る!!?」
「おお!!?そいつが闇の持ってたカードだな!!?でも、いきなり墓地に送っていいのか?」
「うん、この子は、墓地にいた方が、いい、みたい。私は、墓地に存在する、覇王眷竜ダークヴルムの効果、発動!!?このカードが、墓地に存在し、自分フィールドに、モンスターが存在しない場合、このカードを、特殊召喚する!!?」
「うえっ!?!?マジか!?!?」
驚く遊騎を見ながら、私が墓地に送ったダークヴルムを手に取ると、胸の奥から自然と言葉が浮かんできて、私はそれを口に出す。
「おいで、私の眷属!!?雷よ、暗雲を裂け!!?覇王眷竜ダークヴルム!!?」
私がその名を呼ぶと、空に暗雲が現れ、雷鳴が鳴り響く。
そして一際大きな雷鳴が轟くと暗雲の中から、鋭い刃の身体を持つ緑龍が私を守るように降り立った。

〈覇王眷竜ダークヴルム〉☆４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ１８００

「おぉ!!?カッコいいな、闇!!?その口上もすっごくカッコいい!!?」
「えへ、へ。私は、覇王眷竜ダークヴルムの、効果、発動!!?インフィ

ニットドミネーション‼?このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから覇王門ペンデュラムモンスター1体を、手札に加える‼?私はデッキから覇王門　無限（インフィニティ）を、手札に、加える‼?」
「それも闇が持ってたカードだな‼?くぅ～どんなことできるのか楽しみだぜ‼?」
「っ?」
　私が行動する度に、遊騎は目をキラキラと輝かせながら嬉しそうにくしゃっとした笑顔を浮かべる。
　そんな遊騎を見ていると、なんだか胸の辺りがぽかぽかとしてきて、私は思わず胸を押さえる。
　なんだろう、なんか変な感じ……こんなこと、今までなかったのにな……
「ん?どうかしたのか?あ、もしかしてルール分からなくなっちゃったか?」
「ううん、大丈夫」
　私を見て不思議そうに首を傾げる遊騎に、私は首を振って応える。
　なんだか胸のぽかぽかは治らないけど、今は遊騎とデュエルをしなきゃ。
「私は、ジェムナイトエメラルを、召喚‼?」

〈ジェムナイトエメラル〉☆4　岩石族　地属性
　ＡＴＫ１８００

　目の前に現れたのは翡翠の盾を持つ岩石の戦士。
「バトル‼?覇王眷竜ダークヴルムで、セットモンスターを、攻撃‼?ダークライトニングクラッシュ‼?」
「セットモンスターは朱雀の召喚士‼?」

〈朱雀の召喚士〉☆4　魔法使い族　炎属性
　ＤＥＦ１３００

遊騎のフィールドに現れた赤い鎧の戦士に守られた女性に紫電を纏ったダークヴルムが激突し、その身体を吹き飛ばして爆散させた。
「よし、破壊、した!!?」
「安心するのはまだ早いぜ?朱雀の召喚士の効果発動!!?このカードが相手モンスターの攻撃で破壊され墓地へ送られた時、デッキから攻撃力１５００以下の戦士族モンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する!!?」
「えっ!?!?」
「来い、俺のデッキのキーカード!!?クィーンズナイト!!?」

〈クィーンズナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１５００

遊騎が呼び出したのは赤い鎧を身に纏った女性の騎士。
「せっかく倒したのに、モンスターが増える、なんて、ズルい」
「ズルいって、そういう効果なんだから仕方ないだろ?」
「でも、ジェムナイトエメラルの方が、攻撃力は上。倒せる。ジェムナイトエメラルで、クィーンズナイトを、攻撃!!?エメラルドタイフーン!!?」
ジェムナイトエメラルが翡翠の盾から暴風を生み出し、クィーンズナイトを吹き飛ばそうとする。
それを見て、遊騎はニヤリと笑う。
「甘いぜ、闇!!?リバースカードオープン!!?罠発動!!?　鎖付きブーメラン!!?」
「!!?罠、カード?」
「このカードは２つの効果は持ちその中から１つ、または両方を選択してこのカードを発動できる!!?１つ目は相手モンスターの攻撃宣言時に、その攻撃モンスター１体を対象としてその攻撃モンスターを守備表示にする効果!!?もう１つは自分フィールドの表側表示モンスター１体を対象としてこのカードを攻撃力５００ポイントアップの装備カード扱いとして、その自分のモンスターに装備する効果だ!!

？」
「っ⁉？ということは……⁉？」
「俺は２つ目の効果でこのカードをクィーンズナイトに装備するぜ⁉？」

クィーンズナイト
ＡＴＫ１５００→２０００

「攻撃力が、クィーンズナイトの方が、上に⁉？」
「反撃だ⁉？クィーンズナイト⁉？ブーメランクィーンズスラッシュ⁉？」
暴風に空に巻き上げられたクィーンズナイトの手元に鎖がついたブーメランが現れ、クィーンズナイトはブーメランをジェムナイトエメラルに向かって投げ、鎖を身体に巻きつける。
自身の暴風により吹き飛ばされるクィーンズナイトに巻き込まれるようにジェムナイトエメラルが耐性を崩すと、その隙にクィーンズナイトは暴風の範囲内から逃れ、頭上からジェムナイトエメラルを斬り伏せた。

闇　ＬＰ８０００→７８００

「うっ、やっぱり、遊騎、ズルっ子」
「ズルじゃねぇって。こういうのは、ズルじゃなくて、戦術っていうんだよ」
「むぅ……メインフェイズ、２、カードを１枚、伏せて、ターンエンド」

闇　ＬＰ７８００　手札４
ー－－－－－－ー
ー－○－－
ー　　ー

ーー○ーー
ーー△▲ー　ー
遊騎　ＬＰ８０００　手札２

「俺のターン、ドロー!!?俺はキングスナイトを召喚!!?」

〈キングスナイト〉☆４　戦士族　光属性
ＡＴＫ１６００

クィーンズナイトの横に並び立ったのは黄金の鎧を身に纏った騎士。
そしてクィーンズナイトとキングスナイトはお互いに剣を掲げて重ね合う。
「キングスナイトの効果発動!!?自分フィールドにクィーンズナイトが存在し、このカードを召喚に成功した時、デッキからジャックスナイト１体を特殊召喚する!!?集え、絵札の三銃士!!?来い、ジャックスナイト!!?」

〈ジャックスナイト〉☆５　戦士族　光属性
ＡＴＫ１９００

クィーンズナイトとキングスナイトの剣に合わせるように剣を掲げる青い鎧の騎士が現れる。
「凄い、一気に、２体、増えた」
「にひひっ!!?コイツらは絵札の三銃士!!?俺のお気に入りの騎士達なんだ!!?カッコいいだろ?」
「うん、カッコいい」
自身を守るように並ぶ絵札の三銃士を見て自慢気に笑う遊騎に、私は頷く。
絵札の三銃士も、三銃士のことを誇らし気に見ている遊騎も、キラキラしてて、カッコいい。

三銃士に守られながらもキラキラとした笑顔で笑う遊騎は、まるで王子様みたい。
「へへっ‼?行くぜ‼?バトル‼?クィーンズナイトで覇王眷竜ダークヴルムを攻撃‼?ブーメランクィーンズスラッシュ‼?」
「迎え撃って、覇王眷竜ダークヴルム‼?ダークライトニングクラッシュ‼?」
紫電を纏ったダークヴルムがクィーンズナイトに突撃するが、クィーンズナイトは跳躍することで躱し、ブーメランをダークヴルムに投げつける。
ブーメランが直撃し、怯んだダークヴルムを一瞬で距離を詰めたクィーンズナイトが斬り裂いた。

闇　ＬＰ７８００→７６００

「っ、ダークヴルム……覇王眷竜ダークヴルムは、ペンデュラムモンスター。破壊されたから、エクストラデッキに、加わる」
「つまりはまた出てくるかもってことだな。それでも俺は臆さないぜ‼?行け‼?キングスナイトでダイレクトアタック‼?キングススラッシュ‼?」
「うぅっ」

闇　ＬＰ７６００→６０００

「追撃だ‼?ジャックスナイトでダイレクトアタック‼?ジャックススラッシュ‼?」
「きゃっ‼?」

闇　ＬＰ６０００→４１００

キングスナイトとジャックスナイトの連撃で私のライフが大きく削られる。

初心者の私相手でも、遊騎は容赦無い……でも、だからこそ、嬉しいし、楽しい‼?
それだけ、遊騎が真剣に私に向き合ってくれてるってことだから。
「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ‼?」

闇　ＬＰ４１００　手札４
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　　ー
ー○○○ー
ー▲△▲ー　ー
遊騎　ＬＰ８０００　手札１

「私の、ターン、ドロー‼?」
自分の手札を見て、遊騎に教えて貰ったことを思い出しながら戦略を考える。
このままだと絵札の三銃士にじりじりと削られていってしまう。
それに残っていたらリリースして強いモンスターが出てくるかもしれない。
どうにかして絵札の三銃士を一気に倒せないかな?
そうやって悩んでいるとーーー
『ーーー‼?』
「えっ?」
「ん?闇?」
ーーーまた私の耳に何かの鳴き声が聞こえた。
「今、何かの、鳴き声、聞こえなかった?」
「鳴き声?いや、俺は聞こえてないけど……」
私の言葉に遊騎は首を傾げる。
遊騎には聞こえていない?
でも、今確かにあの鳴き声が聞こえた。
私は首を傾げながらも、私は鳴き声が聞こえた場所ーーー私の貸し

て貰ったデュエルディスクのエクストラデッキが入っている場所を見る。
別に変わったことはないみたいだけど……
そう思ってカードを仕舞おうとすると、エクストラデッキに入っていたカードの1枚が鈍い闇色に光った気がした。
「？あ、このカードなら……」
光ったように見えたカードに目を向けて、テキストを読んでいく。
これなら遊騎の絵札の三銃士を倒せるかも。
なら……
「私は、スケール０の、覇王門零と、スケール１３の、覇王門無限で、ペンデュラムスケールを、セッティング‼？」
「なんだって⁉？」
私がペンデュラムスケールをセットすると、私を挟むように暗黒の柱が立ち上り、その闇の中から２つの門が現れ、その門に０と１３の数字が刻まれる。
「これにより、私は、１から、１２までの、モンスターを、同時に、召喚、可能‼？」
「１から１２までのモンスターを⁉？すげー‼？なんでも出し放題じゃん⁉？」
「行く、よ？私の、魂に宿る、覇王よ‼？善悪を超越し、運命を、捻じ伏せろ‼？ペンデュラム召喚‼？おいで、私の、眷属達‼？」
私がそういうと暗黒の門が開き、そこからフィールドに向かって闇に包まれた３つの波動が放たれる。
「レベル７、霞の谷（ミストバレー）の巨神鳥‼？」

〈霞の谷の巨神鳥〉☆７　鳥獣族　風属性
ＡＴＫ２７００

最初に現れたのは金色の羽根を持つ巨大な怪鳥
「レベル３、チューナーモンスター、ドラグニティ―ブラックスピア‼？」

〈ドラグニティ―ブラックスピア〉☆３　ドラゴン族　風属性
ＤＥＦ１０００

巨神鳥に続くように現れたのは槍のような顔を持つ黒竜。
そして最後にフィールドに舞い降りるのは鋭い刃の身体を持つ緑龍。
「ＥＸデッキから舞い戻れ、レベル４、覇王眷竜ダークヴルム!!?」

〈覇王眷竜ダークヴルム〉☆４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ１８００

「一気に3体、しかも1体は上級モンスターか!!?だったら、リバースカードオープン!!?罠発動!!?奈落の落とし穴!!?相手が攻撃力１５００以上のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚した時にその攻撃力１５００以上のモンスターを破壊し除外する!!?これで闇のモンスターは破壊される!!?」
「っ!!?させ、ない!!?奈落の落とし穴に、チェーンして、霞の谷の巨神鳥の、効果、発動!!?魔法・罠・モンスターの効果が発動した時、自分フィールドの、ミストバレーカード1枚を、対象として、その自分のミストバレーカードを、持ち主の手札に戻し、その発動を無効にし、破壊する!!?」
「っ!!?無効効果……!!?」
「私は、霞の谷の巨神鳥、自身を手札に戻し、奈落の落とし穴を破壊する!!?」
巨神鳥は荒々しい鳴き声をあげると、その身体に風を纏いながら翼を羽ばたかせ、風を起こすと、奈落の落とし穴を埋め立てて私の手札に戻ってきた。
危ないところだった。
巨神鳥がいなければ、この時点で終わってた。
だけど、まだ可能性はある。

「速攻魔法、発動!!?スターチェンジャー!!?　フィールド上に、表側表示で存在するモンスター、1体を選択し、2つの効果から、1つを、選択して、発動できる。そのモンスターの、レベルを、1つ、上げるか、そのモンスターの、レベルを、1つ、下げる。私は、1つ目の、効果で、ドラグニティ―ブラックスピアの、レベルを、1つ、上げる!!?」

ドラグニティ―ブラックスピア
☆3→4

スターチェンジャーの効果を受け、ブラックスピアのレベルが4になる。

これで準備は整った。

「レベル4モンスターが2体……いや、ドラグニティ―ブラックスピアはチューナーだから……」

「行く、よ。私は、レベル4、闇属性、ペンデュラムモンスター、覇王眷竜ダークヴルムに、レベル4、チューナーモンスター、ドラグニティ―ブラックスピアをチューニング」

「やっぱりシンクロ召喚か!!?」

ブラックスピアが光の輪になり、ダークヴルムが小さな黒い星に変わり、黒光りする道になる。

そして私がエクストラデッキから1枚のカードを手に取ると、ダークヴルムの時のように胸の奥から自然と言霊が浮かんできて、私はそれを口に出す。

「覇王に仕えし終末の風竜よ!!?死の風を振るい、刃向かう者を薙ぎ払え!!?シンクロ召喚!!?」

黒光りする道が輝くと、その中から現れたのは黒緑の身体に白と青の鎧をつけた覇王の眷属たる暴虐の竜。

「おいで、私の眷属!!?　終末の四竜(ドラゴンクォーターズ)の滅びの暴風!!?覇王眷竜クリアウィング!!?」

〈覇王眷竜クリアウィング〉☆８　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２５００

「また覇王眷竜⁉？コイツも闇が持ってたカードだな⁉？」
「私の、眷属の力、じっくり、味わって⁉？覇王眷竜クリアウィングの効果、発動⁉？このカードが、シンクロ召喚に、成功した場合、相手フィールドの、表側表示モンスターを、全て、破壊する⁉？」
「全体破壊だって⁉？」
「吹き荒れろ、滅びの暴風⁉？ディザスターストーム⁉？」
　覇王眷竜クリアウィングを中心に闇を纏った竜巻が生み出される。
　その竜巻が絵札の三銃士に向こうとしたところで、急に竜巻がかき消えた。
「えっ⁉？」
「残念だけど、その効果は通させないぜ⁉？　覇王眷竜クリアウィングの効果にチェーンしてリバースカードオープン⁉？罠発動⁉？もの忘れ⁉？」
「もの、忘れ⁉？」
「相手フィールド上に表側攻撃表示で存在する
　モンスターの効果が発動した時、その発動した効果を無効にし、そのモンスターを表側守備表示にする⁉？」

覇王眷竜クリアウィング
ＡＴＫ２５００→ＤＥＦ２０００

遊騎が発動した罠カードに、覇王眷竜クリアウィングは頭を押さえてフィールドに伏せる。
　私は、神父さんに拾われるまでの記憶がない。
　だけど、まさか記憶のない私が持っていたモンスターまで効果を忘れちゃうなんて思ってもみなかった。
「ふぅ、あっぶねぇ。流石に今のはひやひやしたぜ」
　遊騎は汗を拭うように額を手で擦る。

私に打てる手はもうない。
幸い、守備表示でも覇王眷竜クリアウィングの能力は絵札の三銃士に超えられてはいない。
その上、覇王眷竜クリアウィングには1ターンに1度、相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算前にそのモンスターを破壊し、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える効果、コラプスハリケーンもある。
まだ勝負はどうなるかわからない。
「私は、これで、ターンエンド」

闇　ＬＰ４１００　手札１
△ー－－－△　ー
－－－－－－
□　　ー
ー○○○ー
－－△－－　ー
遊騎　ＬＰ８０００　手札１

「ははっ‼?やるな、闇‼?まさか俺のあまりカードで作ったデッキをそこまで使いこなして切り札まで出しちまうとは思わなかったぜ」
「っ、また?」
そういって遊騎が心底楽しそうに笑う。
そんな遊騎を見ていると、また胸の辺りがぽかぽかとあったかくなっていく。
デュエルを初めてからの私は、なんだかちょっと変だ。
今までに感じなかった色々なあったかいもので、私の中が満たされていく感じがする。
だけど、それは不思議と嫌な気はしない。
これも、私が失った記憶が関係しているのだろうか?
わからない……わからないけど……
「遊騎」

「ん？」
「ありがとう、私に、デュエルを、教えてくれて」
私にこのあたたかいものをくれたのは、間違いなく目の前にいるこの男の子だ。
きっとこの男の子が教えてくれなかったら、私が永遠に手にすることができなかったものだ。
だからこそ、お礼の言葉を口にしてみたのだが、言われた遊騎はきょとんとした表情を浮かべた。
流石に唐突すぎたかな？
でも、どうしようもなく伝えたくなってしまったのだ。
私に尊いものを教えてくれたこの男の子に、感謝の言葉を。
遊騎は私の言葉に少しの間呆けていたが、すぐにその表情は満面の笑みに変わった。
「どういたしまして。だけど、負けてやったりなんかはしないぜ？このデュエルは俺が勝つ‼？」
「ん。遊騎のデュエル、見せて欲しい」
私はまだ、何も知らない。
自分のことも、私が持っているカード達のことも、デュエルのことも、何にも知らない。
それを、この人なら教えてくれる気がするのだ。
この人の……遊騎のデュエルなら。
「へへっ‼？じゃあたくさん見せてやるぜ‼？俺のターン、ドロー‼？よし‼？魔法カード、強欲で金満な壺‼？自分のメインフェイズ1開始時に、自分のエクストラデッキの裏側表示のカード3枚または6枚をランダムに裏側表示で除外して除外したカード3枚につき1枚、自分はデッキからドローする‼？ただし、このカードの発動後、ターン終了時まで自分はカードの効果でドローできない‼？俺はエクストラデッキから6枚のカードを除外して、カードを2枚、ドロー‼？」
遊騎が自身のエクストラデッキから6枚のカードを除外してデッキから2枚のカードを勢いよくドローする。
ドローしたカードを見た遊騎はくしゃっとした笑顔を浮かべた。

「ふっ!!?引いたぜ!!?俺の新しい切り札!!?」
「遊騎の、切り札？」
「ああ、行くぜ!!?自分フィールドのモンスター３体、クィーンズナイト、キングスナイト、ジャックスナイトをリリースし、手札からこのモンスターを特殊召喚する!!?」
「っ!!?絵札の三銃士をリリース!!?」
絵札の三銃士が粒子に変わり、空に集まっていく。
集まった粒子が弾けると、空から舞い降りたのは龍の鎧を見に纏った漆黒の戦士。
その戦士はフィールドに降り立つと、力強い咆哮を上げた。
「呪われた運命に抗う孤独の戦士!!?　ＤｒＨＥＲＯＢｌｏｏｒＤ（デステニーヒーロー　ブルー　ディー）!!?」

〈ＤｒＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｒ　Ｄ〉☆８　戦士族　闇属性
ＡＴＫ１９００

「ＤｒＨＥＲＯ……これが、遊騎の切り札!!?」
「運命を覆すヒーローの力、見せてやる!!?ＤｒＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｒ　Ｄの永続効果、シールデステニー!!?このカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手フィールドの表側表示モンスターの効果は無効化される!!?」
「っ、効果無効!!?」
Ｂｌｏｏｒ　Ｄの鎧から闇が吹き出し、辺りの風景が夜に変わる。
そのＢｌｏｏｒ　Ｄから吹き出した闇により、覇王眷竜クリアウィングが力を失っていく。
「そしてＤｒＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｒ　Ｄの効果発動!!?カースアブソーブ!!?１ターンに１度、相手フィールドのモンスター１体を対象として、その相手モンスターを装備カード扱いとして１枚だけこのカードに装備し、このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの元々の攻撃力の半分だけアップする!!?対象は覇王眷竜クリアウィング!!?」

「覇王眷竜クリアウィングを装備カードに⁉？」
Ｂｌｏｏｌｄが覇王眷竜クリアウィングに手を伸ばすと、Ｂｌｏｏｌｄの背中に付いている龍の爪が覇王眷竜クリアウィングに放たれ、その爪に貫かれた覇王眷竜クリアウィングはガラスのように砕け、粒子に変わるとＢｌｏｏｌｄに吸い込まれていく。
Ｂｌｏｏｌｄに吸い込まれ、遊騎のフィールドに移動していく覇王眷竜クリアウィングが鈍い闇を纏って光る。
その瞬間に思い出す。
私の持っているカード達に、私以外が触ったらダメだということを。
黒い孤児院で私のカードに触ろうとした人が雷に撃たれたみたいに、遊騎までそれで倒れちゃったら……⁉？
「っ、ダメ⁉？覇王眷竜クリアウィング⁉？」
遊騎を傷つけないで⁉？
そう願いを込め、私は覇王眷竜クリアウィングに向けて叫びをあげる。
『ーーー……』
すると、また何かの鳴き声が聞こえたかと思うと、覇王眷竜クリアウィングが纏っていた闇が霧散していった。

ＤｌＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｌｄ
ＡＴＫ１９００→３１５０

「へへっ⁉？　覇王眷竜クリアウィングの力はいただいたぜ？」
「あ、れ？」
「？どうかしたのか？闇？」
覇王眷竜クリアウィングに触っても変わらない様子の遊騎に、私は思わず呆然としてしまう。
なんとも、ない？
でも、なんで……わからない……わからないけど……
「ううん、なんでも、ない」

「？変な闇」
私が首を振ると、遊騎は不思議そうに首を傾げた。
理由はわからない……だけど、遊騎が無事ならそれでいい。
本当はこの時、私の願いを聞いて闇のカードである覇王眷竜クリアウィングが遊騎を傷つけるのを止めてくれていたのだが、そのことに気づくのは何年も後のことになる。
「なんだかよくわからないけど、これでフィナーレだぜ？魔法カード、一騎加勢!!？フィールドの表側表示モンスター１体を対象としてそのモンスターの攻撃力はターン終了時まで１５００ポイントアップさせる!!？」
「っ!!？ということは……!!？」
「俺はＤ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄの攻撃力を１５００ポイントアップさせる!!？」

Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄ
ＡＴＫ３１５０→４６５０

「攻撃力……４６５０!!？」
「これで終わりだ!!？バトル!!？Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏｄでダイレクトアタック!!？」
Ｂｌｏｏｄは地面を強く蹴って跳び上がると空中で一回転して足に闇を纏い跳び蹴りの体勢に移る。
「デソレイションフィアー!!？」
闇を纏ったＢｌｏｏｄはそのままの勢いで私の身体を貫き、私のライフポイントは０になった。

闇　ＬＰ４１００→０

ーーーーーーー

「へへっ!!？俺の勝ちだぜ!!？」

「ん、私の、負け」
デュエルに勝った遊騎はとても嬉しそうな笑顔で笑う。
そんな遊騎を見て、島さんは呆れたように首を振る。
「遊騎君……君ねぇ、初心者の闇君相手に何もそこまで全力でやらなくても……」
「俺はデュエルでは手を抜かねぇって決めてるんだ。どんな時も全力じゃないと、楽しくないじゃん」
「いや、だからってねぇ……」
「な、闇だって、楽しかったよな？」
そうやって笑顔で尋ねてくる遊騎に、私は力強く頷いた。
「うん、楽しかった」
「ほら」
「えぇ……まぁ、闇君がいいのならそれでもいいんだが……」
島さんがどこか納得のいかなそうな顔で唸る。
そんな島さんを横に置き、私は遊騎に話しかける。
「遊騎」
「ん？なんだ、闇？」
「また、デュエル、したい」
私の言葉に、遊騎は一瞬目を丸くしたが、すぐに満面の笑みでデュエルディスクを起動した。
「ああ、いいぜ‼？まだ帰らないといけない時間まではしばらくあるし、何回でも、相手になるぜ‼？」
「‼？うん、何回でも、しよ‼？」
私も遊騎のようにデュエルディスクを起動する。
それから、私達は遊騎の帰る時間になるまでずっと2人でデュエルをした。
何回やっても、遊騎に勝つことはできなかったけど、デュエルをする度に胸の辺りがぽかぽかとあったかくなって、今まで見えていなかった、色々なことが見えていくような気がした。
この日、初めてーーー私は、自分が生きているんだということを、感情があるのだと言うことを、知ることができた。

ーーーーーーー

「遊騎君。そろそろ帰らないといけない時間じゃないかい？」

「えっ？あ、やべぇ‼？もうこんな時間か‼？」

しばらく遊騎とデュエルをしていると、島さんの言葉で時計を見た遊騎が慌て出す。

「わりぃ、闇。今日はもう帰んなきゃ。続きはまた今後やろうぜ‼？」

「また、今後……」

「おう。次は家に置いてるカードも持ってくるからさ‼？闇のデッキもうんと強くして、またやろうぜ‼？」

そういって遊騎が楽しそうに笑う。

だけど私は、それに素直に頷くことができなかった。

逃亡することはできたが、多分黒い孤児院の大人達は私を探しているだろう。

大人達は私のことをカテゴリーAーーー大事な被験体だと言っていた。

見つかれば私が次にこの店にこれる可能性は限りなく0だ。

そもそも、今までは大丈夫だったが、あの黒い孤児院では実験で倒れたまま永遠に動けなくなった子供達もいた。

あの子供達のように、次は私が動かなくなっても、おかしくない。

かといって、私にはこの身1つで、他に行く場所があるわけでもない。

どうしたって、これから先、遊騎に会えることはないのだ。

黙り込む私を見て、遊騎は不思議そうな顔をすると、困ったような笑顔で自分の小指を私の小指を絡めた。

「よし、じゃあ約束だ‼？」

「約、束？」

「そうだ。俺は絶対にまた闇に会って、デュエルをする‼？友達同士の、大事な約束だ‼？」

そういうと、遊騎は絡めた小指を動かして歌う。

「ゆーびきりげんまん♪ウソついたら針千本のーます♪ゆーびきった♪……よし、約束完了‼?·また会おうぜ‼?·」
「あっ」
そういうと遊騎は自分のカードを持っていたリュックにしまうと店の出口の方に走っていきーーー
「またな、闇‼?·」
ーーーそういって、笑いながら店を出て行った。
「また……約束……」
遊騎の言った言葉を呟くと、胸の辺りがじんわりと熱くなっていく。
そんな私に、近くで様子を伺っていた島さんが話しかけてくる。
「さあ、闇君もお家に帰らないと親御さんが心配するよ」
「……親、いない」
私がそう呟くと島さんが一瞬目を見開き、申し訳無さそうな表情を浮かべた。
「それは……悪いことを聞いたね」
「悪いこと?·」
「その、闇君に親がいないということを……」
「それは、悪いこと、なの?·ただの、事実」
私の言葉に島さんは悲しそうな表情で目を伏せると、頭を振って優しい笑顔で私を見る。
「いや……うん、これ以上は言わないでおこう。それでも帰る場所はあるだろう?·」
「……あるけど、帰りたくない」
「それはまた……家出でもしてきたのかい?·」
「帰ったら、多分、私は、もう、ここに、これない」
「よっぽど厳しいところにいるのかい?·親がいないってことは、親戚の家かな?·それとも何処かのーーー」
「私の、住んでる、場所、名前、分からない。壁も、天井も、真っ黒な、施設。住んでる、子達、黒い、孤児院、って、言ってた」
私がそう呟いた瞬間、島さんが勢いよく目を見開いて私の両肩に手

を置いた。
その表情はとても真剣で、私は驚いてしまう。
「島、さん？」
「闇君……黒い孤児院、そう、言ったのかい？壁も天井も真っ黒な施設だと？」
島さんの言葉に困惑しながらも私は頷く。
頷いた私を見て、島さんは苦い表情で深くため息を吐くと真剣な表情で口を開いた。
「確かに、そこは闇君が帰るには不適切な場所のようだ。悪いけど、詳しいことを聞かせてくれないかい？そこで何があったのか……そして、君がどういう存在なのか」
私は、島さんに全てを話した。
自分の記憶がなく、倒れているところを拾われたこと。
デュエルセキュリティという人にあの施設に連れていかれ、実験をされてカテゴリーAと呼ばれていること。
自分の記憶の手がかりを探すため、逃げ出してきたこと。
自分が分かることは全部島さんに話しきった。
話を聞いた島さんは渋い表情を浮かべると、私の身体を強く抱きしめた。
「すまなかった。辛い話をさせてしまったね」
「辛く、ない。ただの、事実」
「その事実が辛いことなのだよ……いずれ、君にも分かる時がくる」
そういって島さんは悲しそうに目を伏せる。
「私、どうすれば、いい？」
「あの孤児院がまだあるのだと言うのなら、君を戻すわけにはいかないね。かといって、何もせず私が君を庇い続けるのも難しい」
「そう、仕方ない」
島さんの言葉に私は淡々と頷く。
そんな私を見て、島さんは真剣な表情で私を見た。
「勘違いしないで欲しい。それは私が何もしなければの話だよ」
「？」

「古い友人に話をつけよう。今日はここに泊まって行くといい。明日には、君の問題の大半は解決されるハズだよ」
「そうなの？」
「ああ。私もあの孤児院とは浅からぬ因縁があってね」
そこまで言うと島さんは私の手を引き、お店の奥の方に移動していく。
「あの孤児院が再び活動しているというのであれば、ほってはおけないのさ」
そういって悲しそうな表情を浮かべる島さんの身体から私が持つカード達と同じ、深い闇の色を見た気がした。

ーーーーーーー

「知らない、天井？」
次の日、目を覚ました私はボーっとした頭で木の色をした天井を見て思わずそんなことを呟く。
辺りを見渡し、壁も天井も真っ黒ではない世界を見て、ようやく昨日のことを思い出す。
島さんに連れられ、カードショップにある生活スペースに移動した私は、島さんが作ってくれた晩ご飯を食べてお風呂に入るとそのまま寝てしまったのだ。
しばらくボーっとしていると、美味しそうな匂いがしてきて、私は匂いに釣られて部屋を出る。
「おはよう。目が覚めたかい？ちょうどご飯ができたから起こしにいこうと思ったところなんだ。こっちにおいで」
リビングに移動すると島さんがテーブルの上に美味しそうなご飯を用意していた。
私は島さんの言葉に頷くと、テーブルに移動して椅子に座る。
「それでは、食べるとしよう。いただきます」
「いただき、ます」
島さんがご飯を食べ始めるのを見て、私もご飯を食べ始める。

「……闇君、その食べ方はどうかと思うんだが……」
「？変？」
「変というか、それはそんな風にご飯にザバーッとかけるものではないと思うよ」
「そう？この方が美味しい」
「……」
　島さんは困ったように笑うと、テレビのリモコンを操作する。
　すると、近くにあったモニターがつき、映像が流れ始めた。
『速報です。昨夜、セントラルエリアの一角にある孤児院が何者かに襲撃されました』
「あ……」
　モニターに映っていたのは、私がいた壁も天井も真っ白な世界。
　私が実験を受けていたあの黒い孤児院が映っていた。
『昨夜０時頃、セントラルエリアにある孤児院から叫び声が聞こえると通報があり、デュエルセキュリティが駆けつけたところ、孤児院は何か　巨大な物に押し潰されたかのような形で半壊していたとのこと。被害者は孤児院に暮らしていたと思わされる職員２０人で、子供達に被害者はいませんでした。発見された職員は蜘蛛の糸のようなもので縛られており、救出され、事情聴取を受けた職員は『蜘蛛の化け物が現れた』『黒い巨人が建物を壊した』等の証言がなされているなど、錯乱している模様。また、現場を調査したところ、この孤児院では引き取った子供達に実験を行っていたという証拠が出てきており、デュエルセキュリティでは引き続き調査を続けていく模様です。それでは、次のニュースです』
　モニターで流れていた映像が切り替わるところで、私は島さんに視線を向ける。
「島さんが、やったの？」
「……」
　私の問いに島さんは困ったように肩を竦める。
　確かな言葉にはしていない。
　でも、あの孤児院のこと、そして昨日の島さんの言葉を思い返せば、

わからないわけじゃない。
「ありがとう、島さん」
「さて、私がお礼を言われるようなことは何もないと思うけどね」
「……ご飯を、くれて、泊めて、くれた」
「ああ、それはそうだね。じゃあ、どういたしまして、だ」
そういって薄く笑う島さんと朝食を食べていると、不意にお店の方から音がした。
私が首を傾げていると、島さんが困ったような表情を浮かべた。
「やれやれ、まだ朝ご飯中だというのに……気にせずご飯を食べてなさい。古い知り合いが訪ねてきただけだから。後で闇君にも紹介するよ」
島さんがお店の方に出て行くのを見送り、私は島さんに言われた通りに朝ご飯を食べていく。
しばらくして、私が朝ご飯を食べ終えたところでお店の方から島さんと見覚えがある男の人が入ってきた。
「お邪魔するよ」
「あ……神父、さん」
入ってきたのは、最初に記憶を失い、倒れていた私を助けてくれた神父さんだった。
神父さんは私を見ると、屈み込んで私に視線を合わせると申し訳なさそうな表情を浮かべた。
「すまなかったね」
「？何が？」
「私の不手際で君を　あんなところに送ってしまった。君のことは気にかけていたのだが、デュエルセキュリティからは『検査のために病院に入院。衰弱が激しいためしばらくは面会謝絶の状態だ』と聞かされていてね。まさかデュエルセキュリティの中にまであの外道共が紛れているとは思っていなかった。本当にすまない」
「それ、神父、さんの、せいじゃ、ない。悪い、の、悪い、人の、せい」
そう、悪いのは神父さんじゃない。
神父さんは記憶もなく倒れていた私を助けてくれただけだ。

その後、私の取り調べをしてあの黒い孤児院に連れて行ったのはデュエルセキュリティとかいう人達だ。
悪いのはその人達であって神父さんでは決してない。
「そうか、ありがとう」
「とはいえ、君の不手際には間違いないからね。偶々、私に闇君と接点ができたからよかったものの、なかったら今もこの子は外道が蔓延るあの悪魔の施設の中だったのだから」
「わかっている。そのために我々はここにいるのだからな。この街に巣食う外道共をまとめて神の御許に送るまで、私達が満足することはないのだから」
「神の御許に送る……ある意味最大の皮肉だね」
そんな言葉を言う島さんと神父さんの声は何処か冷たく暗い。
だけど、それだけのことがこの2人にもあったのだと言うことは何となく私にもわかった。
「さて、余計な話をしてしまったが、そろそろ本題に入ろう」
「本題？」
「君がいたあの黒い孤児院はなくなった。あそこにいた子供達は別の孤児院や保護してくれる信頼にたる人物の元に移動している。今回の件には腐敗していたデュエルセキュリティの人間まで関与していた。孤児院の子供達の形跡はマスコミ達もかなり注目している。この移動の際にまた似たような実験施設に送られる可能性はかなり低いだろう」
神父さんの言葉に私は頷く。
私はあの施設にいた子供達とはほとんど関わることはなかったけど、それでもこれからあんな目に合わないというのであればそれはとてもいいことなのだろう。
「そこで、だ。同じように君の行き場を考えなければならなかったのだが、少々面倒なことがあってね」
「何？」
「君のことは島から聞いた。あの黒い孤児院で、君はカテゴリーAと呼ばれていたと。連中にとって君はとても魅力的な研究材料なのだ

ろう」
「時定。言い方を考えろ」
「だが、事実だ。真実は耳に痛いもの、多少の苛つきは我慢して貰わないとね」
「構わない、事実」
島さんは不快そうに顔を歪めるが、私は神父さんの言葉に頷く。
あのカテゴリーAという言葉にどれ程の意味が込められているのかは知らないけど、それがあの黒い孤児院にいた大人達にとって重要だったのは真実だ。
「一応、あそこにあった君のデータはほとんど破棄した。残っているのはあの施設に君がいたことぐらいだ。だが、あの施設に全てのデータを置いていたとは限らない。似たような施設があり、そこにも君のデータが運ばれている可能性もある」
「つまり、私は、まだ、危ない？」
私の言葉に神父さんは頷く。
そのことに対する落胆は特にない。
そんなことなど、最初から分かっていたから。
あの黒い孤児院での私のことを知っている人間がいる限り、私に本当の意味で安全な場所なんて存在しないのだから。
「とはいえ、だ」
そんな私を見て、神父さんは優しい表情を浮かべる。
「あの黒い孤児院による被害者がいつまでも怯えて暮らさなければならないなど、道理が合わない。君にはこれからの人生でたくさん幸せになる権利がある」
「幸せ、に？」
「そうだとも。それは誰にでもある権利であり、義だ。そして、義を守りきれない奴は、大人として格好悪い。私達は大人としてそう在りたくはないのだよ。そこでだ」
そこで言葉を区切ると、神父さんは私に向かって手を差し出した。
「私のところにこないか？」
「神父、さんの、ところ？」

「ああ」
　首を傾げる私に神父さんは力強く頷く。
「私はこれでも結構顔が広く、腕も長くてね」
「腕、長くないよ？」
「……すまない、比喩では分かりにくかったか。用は色々な人と友達で君を守ることができるということだ」
「友達……ね」
　神父さんの言葉に、島さんが笑いを堪えている。
　よくはわからないけど言葉通りの意味じゃないことは何となくわかった。
「私の養女ーーー娘と言い換えた方がわかりやすいかな？そういうことにしておけば奴らもそう易々は手を出してこないだろう。奴らも私の怖さはよく知ってるハズだ」
「神父さん、怖い？」
「……なかなか難しいものだね、比喩無しの言葉というのは」
「君がカッコつけすぎなだけだろう」
　島さんが呆れたような声を出し、私の近くにきて私の頭に手を置く。
「簡単にいうと、この男はかなり強いから襲われても返り討ちにできるのさ」
「神父さん、強い？」
「ああ、とてもね。そして信頼できる人間だよ。私にとっても、彼はね」
　島さんがそういってちょっと照れ臭そうに笑う。
　私は2人が話してくれたことを頭に入れながら、私にとって1番大切なことを聞く。
「神父、さんの、とこに、行けば、私は、また、ここに、来ていい？」
「この店にかい？」
「ん、約束、したから」
　私は昨日のことを思い出し、ぽかぽかとする胸に手を当てて口を開く。

「また、絶対に、遊騎に、会って、デュエルを、する。友達、同士の、大事な、約束」
私の言葉に島さんが目を見開く。
そして柔らかい笑みを浮かべて私の頭を撫でた。
「ああ、勿論だとも。君の不安は全て私達が取り除こう。君は普通の女の子として、遊騎君と楽しくデュエルをしながらこれからの日々を過ごしていくといい」
「わかった」
私は神父さんの方に向き直り、頭を下げる。
「私、神父、さんの、とこ、行く」
「……ああ、これからよろしく頼むよ」
「よろしく、お願い、します」
神父さんの差し出した手を私は握る。
そんな私を見て、神父さんは柔らかく笑いながら口を開く。
「こちらこそ、よろしく頼むよ。となると、まずは君の名前を決めないとね」
「名前？」
「君が名乗った『闇』というのは、施設における被検体番号ＨＯ－０８３Ａからつけられた通称であり、デュエルセキュリティが経歴が見つからない君のことから勝手につけた名だろう？ならば、そんな過去と決別し、ちゃんとした名前を決めてもいいと思うのだが」
「……いい」
神父さんの言葉に私は首を振る。
確かに、『闇』という名前は私の本当の名前ではないし、あの身勝手な大人達がつけた名前なのかもしれない。
それでも……
「私は、『闇』」
実験を受けた過去は変わらないし、私の失われた記憶も変わらない。
だけど、昨日までにあったことは、悲しい事ばかりじゃない。
「遊騎が、覚えて、くれた、この、名前が、いい」

私に、自分が生きているんだということを教えてくれた。
感情があるのだと言うことを教えてくれた。
デュエルを教えてくれた。
そして、友達になってくれた。
そんな人が呼んでくれた、大切な名前なのだから。
「……どうやら、君はすでに大切な出会いをしたようだね」
そういうと神父さんは柔らかく笑う。
「ならば、君の意思を尊重し、祝福しよう。これからの君の本当の始まりを、新しい人生を」
神父さんがそういうと再びお店の方から物音がしてくる。
『あれ？開いてる……島さん、いるのか？』
「‼？」
お店の方から聞こえて来たのは私が1番聞きたかった声。
元気で優しくて、胸のあたりをあったかくさせてくれる、そんな安心する声。
その声に反応した私を見て、島さんは楽しそうに笑うと、私に手招きをした。
「やれやれ、こんな朝早くからやってくるとは……だけど、君にとってはこれ以上ない門出だね」
私が島さんに連れられてお店の方に出ると、そこにいたのは私の想像通りの人物。
私の、大切な友達。
「あ、いた。おはよう、島さん……って、闇‼？こんな時間から来てたのか‼？」
「あ、えっと……」
「まぁ、いいや。今日も来てるかと思ってさ、家からいっぱいカード持って来たんだ‼？これで闇のデッキをもっと強化してーーー」
その大切な友達はーーー遊騎は、私に心底楽しそうな笑みを浮かべてーーー
「今日もいっぱい、デュエル、しようぜ‼？」
「っ‼？……うん‼？」

私は力強く頷いて遊騎のいる場所に走っていく。
その日ーーー私の人生は本当の意味で始まりを告げた。

番外編・４周年記念　守り護られる桜の花

●

『ねぇ、そこでなにしてるの？』
　水色のリボンをつけた少女が不機嫌そうな顔をした少女に話しかける。
『なによ、わたしになにかよう？』
『むこうであそばないの？むこう、おともだちがたくさんいるよ？』
『いないわよ、おともだちなんて』
『いないの？』
『あいつら、わたしのことばかにするし。なんでおまえには”ぱぱ”がいないんだって。だから、あんなやつら、しらないわ』
『そうなんだ』
　そういうとリボンをつけた少女は不機嫌そうな少女の隣に座り込んだ。
　能天気な顔をして座り込む少女に不機嫌そうな少女は思わず、むっとして怒鳴り声をあげる。
『なんなのよ‼？わたしにようがあるわけじゃないんでしょ⁉？さっさとどっかいきなさいよ‼？』
『？なんで？』
『あんたもどうせわたしのことをばかにするんでしょ‼？』
『??なんでばかにするの？』
『なんでって、ばかにしてんの⁉？』
『???ゆうか、ばかにしてないよ？』
『あーもう‼？なんなのよあんたは‼？』
『？ゆうかはゆうかだよ？』
『なまえをきいたんじゃないわよ‼？』
　リボンをつけた少女は不機嫌そうな少女がどれだけ敵意を見せても怯まず、首を傾げる。
　不思議そうに首を傾げる少女の姿に、ついには不機嫌そうな少女の

方が泣き出してしまう。
『どうしたの？どこかいたいの？』
『いたい、わけじゃ、ない、わよ‼？』
『えっと、えっと、いたいの、いたいの、とんでけー？』
『だから、いたいんじゃ、ない、わよー‼？』
『でもでも、ないてるし。あのあの、なかないで？ぎゅー‼？いいこいいこ』
突然泣き出した少女を、リボンをつけた少女は心配そうに抱き締めながら頭を撫でる。
『うわ、あああああ‼？』
『だいじょうぶ、だいじょうぶだよー』
『あああああ‼？』
『ゆうかがいっしょにいるよーだから、だいじょうぶだよーいたくないよー』
保育園の先生が近づいてくるまで、不機嫌そうな少女はリボンをつけた少女に抱きしめられながら泣き続けた。
これが私達の始まり。
私達の最初の物語。
そしてーーー

ーーーーーーー

「ーーーーお…て……ら……ん‼？」
朦朧とする意識の中、誰かの声が遠くで聞こえる。
心地よい揺れに優しい声が私を呼んでいる。
「はや……お……いと……し…や…よ‼？」
揺れはどんどん激しくなり、声もだんだん焦ったような声に変わっていく。
「もう‼？起きて、桜ちゃん‼？遅刻しちゃうよ‼？」
そんな声が響いたと思うと、眩しい光が私に降り注いだ。
「ひゃっ‼？……も～なによ～？」

あまりの眩しさに汗で張り付いた髪を掻き上げ、ベッドから起き上がる。
寝ぼけ眼を擦りながら起き上がった私が目にしたのはーーー
「あ、やっと起きた。相変わらず寝坊助さんだね。おはよう、桜ちゃん」
ーーー太陽のように眩しい笑顔を浮かべる私の親友ーーー栗原遊花がそこにいた。
「遊花……？おは……よう？」
「早く着替えないと遅刻しちゃうよ？今日から本格的に高等部の講義も始まるんだし」
遊花の言葉がまだ寝ている頭の中を素通りしていく。
遊花の言ってることの意味を頭が理解できない。
「ん～まだ、ねむぃ……」
「わわっ、二度寝しようとしちゃダメだよ!!？もう、桜ちゃんったら。ほら、着替えて着替えて!!？」
「ん～遊花……着替えさせて～……むにゅ」
「……もう、仕方ないなぁ、桜ちゃんは」
もう一度布団の中に入ろうとする私を遊花は苦笑しながら引っ張り起こし、ベッドの縁に座らせるとクローゼットの中から私の制服を取り出してくる。
「ほら、パジャマ脱いで」
「んゆぅ……」
「はい。制服に袖を通して……ボタンもして……髪も梳いてくね」
「ん～」
遊花にされるがままにされながら、私は朝の支度をしていく。
結局、意識がしっかりと覚醒し、遊花が自分の家の中にいたことの違和感に気づいたのは遊花に手を引かれデュエルアカデミアに着いた時だった。
ーーーーーーー

「ごめん‼?遊花‼?朝からいっぱい迷惑かけちゃって……」
「大丈夫、気にしてないよ。桜ちゃんは昔から朝弱いもんね」
私の隣の席に座り、微笑ましげに笑う遊花に私はがっくりと肩を落とす。
起こしてもらうところから始まり、着替えにご飯、登校まで遊花の手を煩わせてしまうなんて本当に自分が情けない。
「お仕事に行こうとしてた睡蓮さんにお家に入れて貰ってよかったよ。あのまま寝過ごしちゃったら遅刻してたもんね」
「うぐぅ……否定できる要素がないわ」
「まぁ、間に合ったんだし結果オーライだよ。高等部の初講義で遅刻したらすごく目立ったと思うし」
「そうね……本当にいつもありがとね、遊花」
「ふふっ、どういたしまして」
柔らかく笑う遊花を見て、私は内心ため息を吐いた。
私の親友であり幼馴染の少女、栗原　遊花はとても心優しい少女だ。
いつも太陽の下に咲き誇る花のような柔らかい笑顔を浮かべ、困っている人を放っておけないお人好し。
素直で大人しい性格ではあるけれど、心にしっかりとした芯を持っていて1度決めたことは絶対に曲げないほど強い意志を持っている。
私が知る中で誰よりも強く優しい女の子。
保育園の頃、父親がいないことでいじめられていた私の側にいつもいてくれて、私のことを馬鹿にするいじめっ子達に玩具を投げつけられて怪我をしようが一歩も引かずに私を護ってくれた。
『ゆうか‼?もういい‼?もういいから‼?このままじゃゆうかがいっぱいけがしちゃう‼?』
『だいじょうぶ。へいき、へっちゃら。だから、しんぱいしないで』
『なんだよ、おまえ‼?』
『おれたちにたてつくなんて、なまいきなんだよ‼?』
『おまえにはかんけいないだろ‼?ひっこんでろよ‼?』

『かんけいなくない‼?さくらちゃんは、ゆうかのおともだちだもん‼?ゆうかのおともだちに、ひどいことしないで‼?』
どんなに怪我をしようと、どんなに馬鹿にされようと、私を庇うように両手を広げて一歩も引かない遊花の姿は今でも鮮明に覚えている。
その内いじめっ子達の攻撃の矛先はいつも私を庇う遊花にむいていってーーー
『ゆうか‼?ごめんね、わたしのせいで、ゆうかが……‼?』
『えへへ、だいじょうぶ。へいき、へっちゃらだよ。さくらちゃんがけがしなくてよかった』
たくさん怪我をしたハズなのに、私を見て柔らかく笑う遊花を見て、私は強くならなきゃって強く思った。
私のせいで遊花が傷つくことがないように。
遊花が傷つきそうになった時、今度は私が遊花を守れるようになるように。
『ゆうかのおとうさん‼?』
『ああ、桜君か。遊花から話は聞いたよ。怪我がなくてよかったーーー』
『わたしを、つよくしてください‼?』
『ーーーえっ?』
『わたし、つよくなりたい‼?わたしをまもってくれるゆうかをまもれるように、つよくなりたいの‼?だから、わたしをつよくしてください‼?』
『え、ええっと……』
『でゅえるでも、けんかでも、ゆうかのてきはわたしがぜんぶぶっとばすの‼?だからおねがいします‼?』
『……よわったなぁ。あまり物騒なことを子供に教えたくはないんだが……意志は硬いみたいだしねぇ』
子供ながらの無茶苦茶な言葉で、無茶苦茶なお願いを遊花のお父さんーーー栗原　遊翼さんは困った顔をしながらも聞いてくれて……

『うわっ⁉?』
『ぎゃあ‼?』
『い、いてぇよ〜‼?』
『ふん。あんたたち』
『ひっ‼?』
『ゆうかにてをだしたら、こんどはこんなものじゃすまさないから。さっさとうせなさい‼?』
『ひ、ひぃ〜‼?』
『ま、まてよ‼?』
『うぇーん‼?まま〜‼?』
いじめっ子達を返り討ちにできるぐらい、私は強くなった。
だけどーーー
『さ、さくらちゃん‼?だいじょうぶ⁉?』
『このぐらい、へいきよ……って、ゆ、ゆうか⁉?』
いじめっ子達との喧嘩で傷だらけになった私を、遊花は優しく抱き締めてくれて。
『いたかったよね。たたかれたのも、たたくのも』
『えっ?べつに、わたしはいたくなんて……』
『だいじょうぶ、だいじょうぶだよー』
『ゆう……か』
『ゆうかがいっしょにいるよーだから、かなしいかお、しないで?だいじょうぶだよーいたくないよー』
『うわ、あああああ‼?』
結局、また護られたのは私の方だった。
誰かと戦うことの恐怖を、傷つけることの恐怖を、私の心を、遊花は優しく抱きしめて護ってくれた。
「?桜ちゃん、どうかした?」
「っ、何でもないわ」
「そう?調子悪いなら言ってね?」
「えぇ、ありがと、遊花」
過去を思い返し、無意識のうちに遊花を見つめていた私は首を振っ

て笑顔を作る。
小さな身体に、どこまでも大きな優しさと強さを秘めた私の親友。
その優しさに、私は何度も護られてばかりだ。
だからせめて、遊花のその優しさと笑顔が失われないようにしたい。
今日から高等部の生活が本格的に始まる。
中等部の時と違ってケルンの外から進学してきた人間もいる。
中等部の頃までいた連中は……まぁ、色々お話ししたから大丈夫だろうけど、高等部に入ってからの連中は分からない。
だからこそ、大切な親友を守れるように気をつけないとね。
私は拳を硬く握りながら決意を新たにするのだった。

ーーーーーーーー

「ーーーというわけで、今日のデュエル学実技の時間は皆さんの顔合わせもかねてデュエルをしてもらいます」
新たに始まった高等部の学園生活。
その最初のデュエル学の時間に先生から言われたのはそんな言葉だった。
「皆さんの中には中等部から上がってきた人やケルンの外部から来た人など様々な人がいると思います。これから3年間続く高等部で過ごしていく仲間がどのような人達なのか今日のデュエルで感じて貰いたいと思います。組み合わせは私が名簿からランダムに決めてあるので呼ばれた人から順番に出てきてください」
先生がそういって何人かの生徒の名前を呼び上げていき、デュエルスペースへと移動してデュエルを始めていく。
ふと、隣を見ると遊花がとてもわくわくした表情で行われているデュエルを眺めていた。
私はそんな遊花の姿に思わず笑みをこぼしながら口を開く。
「楽しそうね、遊花」
「うん‼?だって、今まで見たことがない色んな人のデュエルが見れ

るんだもん‼？どんな戦術を使う人達がいるのかすごーく楽しみ‼？」
そういって目をキラキラと輝かせながら食い入る様にデュエルを観戦する遊花。
本当に、この子はデュエルが好きなんだから。
きっと彼女の父親である遊翼さんがプロ決闘者だって言うのも理由なのだろうけれど、それを踏まえても遊花のデュエルに対する熱意は凄まじかった。
中等部の頃もどんなに強い相手に打ちのめされても楽しそうにデュエルをしていたし、遊花の笑顔が最も輝くのはデュエルをしている時と言ってもいい。
そんな遊花はデュエルの成績も非常によく、悪く見積もっても中の上。
贔屓目に見なくても十分に成績上位陣に通用する実力者だった。
「わぁ‼？見て見て、桜ちゃん‼？あのドラゴンすっごくカッコいいよ‼？　空牙団？って言うんだって‼？いいなぁ、私もデュエルしてみたいなぁ……」
「ふふっ、もう、遊花ったら」
そういって屈託ない笑顔を浮かべる遊花に私は苦笑を浮かべる。
その遊花がデュエルをしたいって言ってる相手はどう見ても不良といった態度を隠そうともしてないような奴なのに全く気にした様子がない。
本当に、いつまで経っても変わらないんだから。
「ーーー次、出席番号９８番。栗原　遊花さん。出てきてください」
「あ、私の番だ‼？」
先生に名前を呼ばれた遊花がとても嬉しそうな表情を浮かべる。
そんな遊花に私は右手を握りながらジャブを打つように突き出した。
「頑張ってね、遊花。外から来た奴らの度肝を抜くようなデュエルをかましてきなさい」
「そ、そんなにすごいデュエルができるかはわからないけど……う

ん、頑張ってくるね‼?」
私の突き出した拳に控えめに拳を当ててから遊花は楽しそうな笑顔を浮かべてデュエルスペースに移動していく。
同じように遊花がいるデュエルスペースに1人の男子生徒が入っていく。
見覚えがないから、恐らくは外部から入学した生徒だろう。
というよりは、恐らく外部と繰り上がり組で当たるように組み合わせられてるのね。
そんなことを考えながらデュエルスペースに移動した遊花を見る。
遊花は楽しそうな笑みを浮かべているが、男子生徒は明らかにそんな遊花を見て見下すような表情を浮かべている。
「栗原　遊花です‼?よろしくお願いします‼?」
「ふん、見るからに弱そうな奴だ。これは楽勝だな」
……デュエルの結果がどうであれ、アイツはシメた方が良さそうね。
まあ、デュエルが始まる前からあんなこと言ってる奴が遊花に勝てるとも思わないけど。
明らかに侮りを隠さない男子生徒を相手にしても遊花は気にせずにデュエルディスクを起動する。
さぁ、遊花。
遊花のデュエル、遊花を舐めてる奴らに見せつけてやりなさい‼?
「いきます‼?」
「すぐに終わらせてやるよ‼?」
『決闘‼?』

遊花　ＬＰ８０００
男子生徒　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は貰います‼?　私はクリバンデッドを召喚します‼?」

〈クリバンデッド〉☆３　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ１０００

遊花の前に現れたのは盗賊のような姿をした黒い毛玉のモンスター。
凄く好戦的にぴょんぴょんと跳ねながら男子生徒を見て手を振り威嚇をしている。
「私はカードを２枚伏せて、エンドフェイズにクリバンデッドの効果発動!!?このカードをリリースしてデッキの上から５枚めくり、その中から魔法・罠カード１枚を手札に加えて残りを墓地におきます」
ぴょんぴょん跳ねていたクリバンデッドの姿が消える。
その代わりに遊花はデッキの上から５枚のカードをめくって中から１枚のカードを手札に加えた。
「私は増殖の魔法カードを手札に加えてターンエンドです」

遊花　ＬＰ８０００　手札３
ーー▲▲ー　ー
ーーーーー
ー　　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
男子生徒　ＬＰ８０００　手札５

「俺のターン、ドロー!!?お前なんかさっさと潰してやる!!?まずは速攻魔法、手札断殺!!?お互いのプレイヤーは手札を２枚墓地へ送り、その後、それぞれデッキから２枚ドローする!!?手札を２枚墓地へ送り２枚ドロー!!?」
「私も手札を２枚墓地へ送り２枚ドローします!!?」
「さらに魔法カード、おろかな埋葬!!?　デッキからモンスター１体を墓地へ送る!!?俺はデッキから化合獣オキシンオックスを墓地へ

送る!!?そして魔法カード、トライワイトゾーン!!?　自分の墓地のレベル2以下の通常モンスター3体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?墓地より蘇れ、化合獣オキシンオックス!!?　化合獣カーボンクラブ!!?　化合獣ハイドロンホーク!!?」

〈化合獣オキシンオックス〉☆2　獣族　風属性
ＤＥＦ２１００

〈化合獣カーボンクラブ〉☆2　水族　炎属性
ＤＥＦ１４００

〈化合獣ハイドロンホーク〉☆2　鳥獣族　水属性
ＡＴＫ１４００

男子生徒の墓地から3体の化合獣が現れる。
「一気にモンスターが3体……しかも出てきたあのモンスター達は確か……」
「くっくっくっ、お前にこのデッキの恐ろしさを見せてやる!!?速攻魔法、フォースリリース!!?　このカードの発動時に自分フィールド上に表側表示で存在する全てのデュアルモンスターは再度召喚した状態になる!!?」
「っ、やっぱりデュアルモンスターですか……」
「ただし、この効果を適用したモンスターはエンドフェイズ時に裏側守備表示になるがな。さあ、目覚めよ!!?化合獣達よ!!?
再度召喚(デュアル)!!?」
化合獣達の身体を光が包み込み、光が霧散すると化合獣達が咆哮を上げた。
「化合獣カーボンクラブの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、デッキからデュアルモンスター1体を墓地へ送り、その後、デッキからデュアルモンスター1体を手札に加える!!?俺はデッキから進化合獣ヒュードラゴンを墓地に送り、進化合獣ダイオーキシンを手

札に加える!!?さらに化合獣オキシンオックスの効果発動!!?　手札からデュアルモンスター1体を特殊召喚し、自分フィールドの全てのデュアルモンスターのレベルはターン終了時まで、この効果で特殊召喚したモンスターの元々のレベルと同じになる!!?現れろ、進化合獣ダイオーキシン!!?」

〈進化合獣ダイオーキシン〉☆8　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ２８００

化合獣オキシンオックス
☆2→8

化合獣カーボンクラブ
☆2→8

化合獣ハイドロンホーク
☆2→8

オキシンオックスが吠えると、牛の角と蟹の身体を持つ悪魔が現れる。
「レベル8モンスターが４体!?」
「まだだ!!?手札を1枚捨てて化合獣ハイドロンホークの効果発動!!?同名カードは1ターンに1度、手札を1枚捨て、自分の墓地のデュアルモンスター1体を対象としてそのモンスターを守備表示で特殊召喚する!!?甦れ、進化合獣ヒュードラゴン!!?」

〈進化合獣ヒュードラゴン〉☆8　ドラゴン族　水属性
ＤＥＦ２８００

ハイドロンホークが嘶くと三つ首の水竜が現れた。
「っ、また!!?」

「さあ、行くぜ‼?·結合せよ‼?·変化を導くサーキット‼?·」
　男子生徒が正面に手をかざすと光り輝くサーキットが現れる。
「召喚条件はカード名が異なるモンスター３体‼?·俺は進化合獣ダイオーキシン、化合獣ハイドロンホーク、化合獣カーボンクラブの３体をリンクマーカーにセット‼?·サーキットコンバイン‼?·リンク召喚‼?·リンク３‼?·　混沌の戦士　カオスソルジャー‼?·」

〈混沌の戦士　カオスソルジャー〉ＬＩＮＫ３　戦士族　地属性
　ＡＴＫ３０００　↙?·→↘?·

　サーキットから現れたの重厚なる鎧を纏った戦士。
「混沌の戦士　カオスソルジャー……」
「混沌の戦士　カオスソルジャーは永続効果、スターアーマーによりレベル７以上のモンスターを素材としてリンク召喚したこのカードは相手の効果の対象にならず、相手の効果では破壊されなくなる‼?·」
「っ、耐性持ち、ですか」
「まだ終わりじゃねぇぞ‼?·俺はレベル８デュアルモンスター、進化合獣ヒュードラゴンとレベル８となった化合獣オキシンオックスをオーバーレイ‼?·２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼?·」
　男子生徒が手をかざすとヒュードラゴンとオキシンオックスが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
　そして渦が爆け、現れたのは牛の角に、鷹の翼、蟹の鋏と脚を持つ合成獣。
「現れろ‼?·叡智より生まれし超獣‼?·超化合獣メタンハイド‼?·」

〈超化合獣メタンハイド〉★８　獣戦士族　炎属性
　ＡＴＫ２８００

「ランク８エクシーズ……」

「超化合獣メタンハイドの効果発動!!?ケミカルコンビネーション!!?このカードがエクシーズ召喚に成功した時、自分の墓地のデュアルモンスター1体を対象としてそのモンスターを特殊召喚する!!?甦れ、進化合獣ダイオーキシン!!?」

〈進化合獣ダイオーキシン〉☆8　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ２８００

「またダイオーキシンが……」
「まだだ!!?覚醒しろ!!?進化合獣ダイオーキシン!!?　再度召喚(デュアル)!!?」
ダイオーキシンの身体を光が包み込み、光が霧散すると共にダイオーキシンが咆哮を上げる。
それに呼応するかのように超化合獣メタンハイドが咆哮を上げた。
「この瞬間、超化合獣メタンハイドの効果発動!!?バーンアイス!!?デュアルモンスターが召喚に成功した時、このカードのオーバーレイユニットを1つ取り除き、相手は自身の手札・フィールドのカード1枚を墓地へ送らなければならない!!?」
「っ!?プレイヤー指定の除去効果!?私は手札を1枚墓地に送ります」
遊花がそう言って手札のカードを選ぶと、遊花が選んだ手札が一瞬で凍りついたかと思うと、凍ったカードを焼き尽くすように氷が燃え上がり消失した。
「これだけじゃ終わらないぜ!!?　進化合獣ダイオーキシンの効果発動!!?インコンプリートコンバスチョン!!?1ターンに1度、自分の墓地のデュアルモンスター1体を除外し、相手フィールドのカード1枚を対象としてそのカードを破壊する!!?俺は墓地の化合獣ハイドロンホークを除外し、お前のセットカードを1枚破壊する!!?」
ダイオーキシンが鋏を振るうと炎の斬撃が放たれ、遊花のセットカードを燃やしながら切り刻んだ。
だが、破壊されたセットカードを見て、遊花は笑みを浮かべる。

「この瞬間、破壊された罠カード、運命の発掘の効果発動!!?」
「何!!?」
「フィールドのこのカードが相手の効果で破壊された場合、自分の墓地の同名カードの枚数分だけ、自分はデッキからドローします!!?墓地にはもう1枚、運転の発掘が存在するため2枚ドローします!!?」
「っ、運がいい奴だ。だが、終わりにしてやる!!?バトル!!? 進化合獣ダイオーキシンでダイレクトアタック!!?シェルタックル!!?」
ダイオーキシンは身体を屈めて勢いよく遊花に向かって走り出す。
自分の眼前まで迫ったダイオーキシンを見て、遊花は楽しそうに笑う。
「リバースカードオープン!!?罠発動!!? ディメンションウォール!!? 相手モンスターの攻撃宣言時に発動でき、この戦闘によって自分が受ける戦闘ダメージは、かわりに相手が受けます!!?」
「何だと!!?」
遊花の正面に次元の歪みが現れ、そこにダイオーキシンが突っ込んだかと思うと、姿を消したダイオーキシンは男子生徒の背後に現れ、男子生徒を弾き飛ばした。
「ぐあぁ!!?」

男子生徒　ＬＰ８０００→５２００

「ぐっ、やりやがったな!!? 超化合獣メタンハイドでダイレクトアタック!!?メタンハイドレード!!?」
メタンハイドが咆哮を上げると極大の結晶が遊花に向かって放たれる。
そんなメタンハイドを見て、遊花は墓地から1枚のカードを取り出す。
「相手モンスターの直接攻撃宣言時、墓地のクリアクリボーの効果発動!!?自分はデッキから1枚ドローし、そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを特殊召喚してその後、攻撃対象をそのモンスターに移し替えます!!?」

「チッ、そんなのを墓地に送っていやがったか!!?」
「ドローしたのはハネクリボー!!?モンスターだから特殊召喚します!!?　いつだって、私と共に!!?ハネクリボー!!?」
〈ハネクリボー〉☆1　天使族　光属性
ＤＥＦ２００

現れるのは遊花が相棒と呼ぶ天使の羽を持つ茶色い毛玉のようなモンスター。
ハネクリボーは遊花を守るように両手を広げ、極大の結晶に弾き飛ばされ粒子に変わる。
そして粒子となったハネクリボーが遊花を包むように漂い始めた。
「ハネクリボーの効果発動!!?プリフィケーション!!?このカードがフィールドから墓地に送られたターン、自分の受ける戦闘ダメージは０になる!!?」
「チッ、悪運が強い!!?ターンエンドだ!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札４
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
☆　ー
ー○○ー
ー　ー　ー　ー　ー
男子生徒　ＬＰ５２００　手札２

「私のターン、ドロー!!?私は手札からジャンクリボーを捨てて魔法カード、ワンフォーワンを発動!!?デッキからレベル１モンスター１体を特殊召喚する!!?お願い、ミスティックパイパー!!?」
〈ミスティックパイパー〉☆1　魔法使い族　光属性
ＤＥＦ０

現れたのはフルートのようなものを弾いている男。
「ミスティックパイパーの効果発動!!?このカードをリリースして自分のデッキからカードを1枚ドローします。そしてこの効果でドローしたカードをお互いに確認し、レベル1モンスターだった場合、自分はカードをもう1枚ドローします!!?私が引いたのはクリボルト!!?レベル1モンスターなのでもう1枚ドローです!!?そして私はクリボルトを召喚!!?」

〈クリボルト〉☆1　雷族　光属性
ＡＴＫ３００

出て来たのは電気を出している黒い球体のモンスター。
「はっ、そんな雑魚モンスターを出して何になる!!?」
「雑魚なんかじゃありません!!?例え小さくても、小さい者には小さい者の戦い方があるんです!!?クリボルトの効果発動!!?自分のメインフェイズ時にオーバーレイユニットを持っているエクシーズモンスター1体を選択して発動できる。選択したモンスターのオーバーレイユニットを1つ取り除き、自分のデッキからクリボルト1体を特殊召喚します!!?」
「何だと!?」
「私は超化合獣メタンハイドのオーバーレイユニットを1つ使って、おいで!!?クリボルト!!?」

〈クリボルト〉☆1　雷族　光属性
ＡＴＫ３００

メタンハイドのオーバーレイユニットの1つが遊花のフィールドに飛んでくると、その光がクリボルトに変わる。
「そして魔法カード、ミニマムガッツ!!?」
「ミニマムガッツだと?」

「自分フィールド上のモンスター1体をリリースし、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動!!?私は1体のクリボルトをリリースして進化合獣ダイオーキシンを選択します!!?選択したモンスターの攻撃力はエンドフェイズまで0になり、このターン選択したモンスターが戦闘によって破壊され、相手の墓地に送られた時、そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与えます!!?」
「何だとっ!?」
「お願い、クリボルト!!?」
クリボルトが青いオーラを纏い身体を粒子に変えながら、ダイオーキシンに突撃していく。
ダイオーキシンはクリボルトの体当たりを受けて膝をついた。

進化合獣ダイオーキシン
ＡＴＫ２８００→０

「バトル!!?クリボルトで進化合獣ダイオーキシンを攻撃!!?プチボルト!!?」
電気を纏ったクリボルトがダイオーキシンに突撃する。
膝をついていたダイオーキシンはクリボルトの身体を受け止め切れず、その巨体を貫かれ、爆散した。

男子生徒　ＬＰ５２００→４９００

「くっ!!?小賢しい真似を……!!?」
「そしてミニマムガッツの効果!!?戦闘によって破壊された進化合獣ダイオーキシンの元々の攻撃力分のダメージを相手に与えます!!?」
「ぐあぁっ!!?」

男子生徒　ＬＰ４９００→２１００

「よし、もう少し!!?・メインフェイズ2!!?　導いて!!?・希望に繋がるサーキット!!?」
「リンク召喚か……」
　遊花が正面に手をかざすと遊花の前に大きなサーキットが現れる。
「召喚条件はレベル1モンスター1体!!?・私はクリボルトをリンクマーカーにセット!!?・サーキットコンバイン!!?・リンク召喚!!?・希望の守り手!!?・リンク1!!?・リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

　クリボルトがサーキットに入り、代わりに出てきたのは青い球体型のモンスター。
「私はカードを2枚伏せてターンエンドです!!?」

遊花　ＬＰ８０００　手札１
ー▲▲ー　ー
ーーーーー
☆　☆
ー○ーーー
ーーーーー　ー
男子生徒　ＬＰ２１００　手札２

「クソッ!!?・雑魚が粋がりやがって!!?・テメェなんかさっさと潰れちまえばいいんだよ!!?・俺のターン、ドロー!!?・クックック、来たぜ!!?・魔法カード、龍の鏡（ドラゴンズミラー）!!?」
「っ!!?・そのカードは……」
「自分のフィールド・墓地から、ドラゴン族の融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを除外し、その融合モンスター1体をＥＸデッキから融合召喚する!!?・俺は墓地からデュアルモンスター、進化合獣ヒュードラゴンと化合獣オキシンオックスを融合!!

？」
　フィールドに現れた小さな鏡にヒュードラゴンとオキシンオックスが吸い込まれていく。
「交わり生まれる水蛇よ、勇猛なる雄牛と交わりて、全てを呑み込む魔獣となれ‼？」
　鏡が光り輝き、砕け散ると中から現れたのは様々な生物が混ざった魔龍。
「融合召喚‼？来やがれ、数多の生物を結合した超魔生物‼？　超合魔獣ラプテノス‼？」

〈超合魔獣ラプテノス〉☆８　ドラゴン族　光属性
　ＡＴＫ２２００

「超合魔獣ラプテノス……あのカードは確か……」
「超合魔獣ラプテノスの永続効果、デュアルアップはこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、フィールドのデュアルモンスターはもう１度召喚された状態として扱う‼？これで召喚権を使わずとも俺のモンスターは全てデュアルモンスターになるわけだ‼？魔法カード、黙する死者‼？自分の墓地の通常モンスター１体を対象としてそのモンスターを守備表示で特殊召喚する‼？ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃できない。甦れ、化合獣カーボンクラブ‼？」

〈化合獣カーボンクラブ〉☆２　水族　炎属性
　ＤＥＦ１４００

「化合獣カーボンクラブの効果発動‼？俺はデッキから化合獣オキシンオックスを墓地に送り、進化合獣ダイオーキシンを手札に加える‼？さらに魔法カード、闇の量産工場‼？　自分の墓地の通常モンスター２体を対象としてそのモンスターを手札に加える‼？俺は墓地から化合獣オキシンオックスと進化合獣ダイオーキシンを手札に加

える‼?化合獣オキシンオックスを召喚‼?」

〈化合獣オキシンオックス〉☆2　獣族　風属性
ＡＴＫ０

「化合獣オキシンオックスの効果発動‼?　現れろ、進化合獣ダイオーキシン‼?」

〈進化合獣ダイオーキシン〉☆8　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ２８００

化合獣オキシンオックス
☆2→8

化合獣カーボンクラブ
☆2→8

「っ、これは……」
「まだ終わりじゃねぇぞ‼?俺はレベル8となったデュアルモンスター化合獣オキシンオックスと化合獣カーボンクラブをオーバーレイ‼?2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚‼?」
男子生徒が手をかざすとオキシンオックスとカーボンクラブが光となり、空に浮かんだ混沌の渦に吸い込まれる。
そして渦が爆け、現れたのは2体目の牛の角に、鷹の翼、蟹の鋏と脚を持つ合成獣。
「現れろ‼?叡智より生まれし超獣‼?超化合獣メタンハイド‼?」

〈超化合獣メタンハイド〉★8　獣戦士族　炎属性
ＡＴＫ２８００

「っ、２体目の超化合獣メタンハイド……」
「超化合獣メタンハイドの効果発動!!?ケミカルコンビネーション!!?甦れ、進化合獣ダイオーキシン!!?」

〈進化合獣ダイオーキシン〉☆８　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ２８００

「また進化合獣ダイオーキシン!?そんなカードいつ……っ、化合獣ハイドロンホークの手札コストの時に……」
「さぁ、圧殺してやる!!?バトル!!?　超合魔獣ラプテノスでリンクリボーを攻撃!!?シンセシスブラスト!!?」
「相手モンスターの攻撃宣言時、リンクリボーの効果発動!!?ゼロリンク!!?このカードをリリースし、その相手モンスターの攻撃力はターン終了時まで０になる!!?」

超合魔獣ラプテノス
ＡＴＫ２２００→０

リンクリボーの身体が粒子に変わってラプテノスに纏わりつき、ラプテノスが放とうとしたブレスを無力化する。
「これで邪魔者は消えた!!?進化合獣ダイオーキシンでダイレクトアタック!!?シェルタックル!!?」
「うっ!!?」

遊花　ＬＰ８０００→５２００

「まだまだ行くぞ!!?２体目の進化合獣ダイオーキシンでダイレクトアタック!!?シェルタックル!!?」
「きゃあ!!?」

遊花　ＬＰ５２００→２４００

２体のダイオーキシンのタックルを受けて遊花のライフが大きく削られる。
しかも、男子生徒にはまだ攻撃できるモンスターが３体残ってる。
「さぁ、終わりだ!!?　超化合獣メタンハイドでダイレクトアタック!!?メタンハイドレード!!?」
メタンハイドが咆哮を上げ、極大の結晶が遊花に向かって放たれる。
「まだ終わりません!!?リバースカードオープン!!?罠発動、ガードブロック!!?　相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができ、その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になり、自分のデッキからカードを１枚ドローする!!?」
遊花を守るように障壁が現れ、メタンハイドが放った結晶を防ぐ。
「チッ、悪あがきを!!?２体目の超化合獣メタンハイドでダイレクトアタック!!?メタンハイドレード!!?」
「攻撃宣言時、手札から虹クリボーの効果発動!!?このカードをそのモンスターに装備し、そのモンスターは攻撃することが出来ません!!?レインボーガード!!?」
遊花の手札から虹色の角を持つ球体が現れてメタンハイドの動きを止める。
それを見て男子生徒は苛立ちを強くする。
「雑魚がうぜぇんだよ!!?さっさと潰れやがれ!!?　混沌の戦士　カオスソルジャーでダイレクトアタック!!?混沌流転斬!!?」
混沌の戦士が跳躍し、遊花に向けて剣を振り下ろす。
迫る剣に対し、それでも遊花は余裕の笑みを浮かべた。
「リバースカードオープン!!?罠発動!!?カウンターゲート!!?　相手モンスターの直接攻撃宣言時、その攻撃を無効にし、自分はデッキから１枚ドローする!!?」
「っ!?これも防ぐだと!?」
遊花の前に扉が現れ、混沌の戦士の剣は防がれる。
「さらにそのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンス

ターを表側攻撃表示で通常召喚できますが、その効果は使いません」
「っ‼？あぁぁぁ‼？ムカつくぜ‼？雑魚の癖になんでさっさと潰れねぇんだよ‼？俺はこのままターンエンドだ‼？次だ‼？次のターンで必ずテメェを潰してやる‼？」

遊花　ＬＰ２４００　手札２
ー△ーーー　ー
ーーーーー
☆　　ー
○○○○○
ーーーーー　ー
男子生徒　ＬＰ２１００　手札１

「なんとか凌ぎ切ったわね……とはいえ、ここからどうする気かしら」
遊花のことだから防ぐ手立ては必ずあるとは思ったけど、流石にあれだけのモンスターが並んで攻撃してきたのには焦った。
とはいえ、遊花が劣勢であることには変わりがない。
遊花のデッキはローレベルのモンスターが軸のデッキだ。
今のように大型モンスターを並べられると対処するのは難しいはずだ。
そのはずなのにーーー
「……全く、あの子ったら、あんなに楽しそうな表情しちゃって」
私の眼に映る遊花の表情はどう見ても楽しそうだった。
明らかな逆境のはずなのに、輝きが増していく楽しそうな笑顔。
明らかに暴言を吐かれて始まったデュエルのはずなのに、そんなことを全く気にも留めていない。
きっと、遊花の中ではこのデュエルはただの楽しいデュエルでーーー
「すー……はー……私のターン‼？ドロー‼？」
遊花は楽しそうな表情のまま深く深呼吸をして、勢いよくカードを

ドローする。
　そしてドローしたカードを見て、不敵に笑った。
「見えました、あなたの攻略法!!?」
「っ、何だと？雑魚がイキがりやがって!!?戯言を言ってんじゃねぇ!!?」
「戯言かどうか、今から自分の眼で確かめてください!!?あなたを、攻略します!!?まずは墓地に存在するシャッフルリボーンの効果発動!!?自分フィールドのカード1枚を対象としそのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルし、その後自分はデッキから1枚ドローします!!?ただしこのターンのエンドフェイズに、自分の手札を1枚除外しなければいけません。私は虹クリボーをデッキに戻してカードを1枚ドローします!!?私はクリボーを召喚!!?」

〈クリボー〉☆1　悪魔族　闇属性
ＡＴＫ３００

　フィールドに現れたのは小さな毛玉のモンスター。
「速攻魔法!!?増殖!!?自分フィールド上に表側表示で存在するクリボー1体をリリースして自分フィールド上にクリボートークンを可能な限り守備表示で特殊召喚します!!?」

〈クリボートークン〉☆1　悪魔族　闇属性
ＤＥＦ２００

　遊花が発動した魔法カードにより、クリボーが分裂していく。
「……クックック、ハハハハハ!!?何があなたを攻略します、だ!!?そんな貧弱な雑魚を壁として並べてどうなるって言うんだ!!?」
　遊花のフィールドに分裂していくクリボーを見て男子生徒は笑い声をあげる。
　しかし、そんな嘲笑を受けても遊花は楽しそうに笑いながら1枚のカードを掲げる。

「勿論、全てがひっくり返るんですよ!!?」
「……何?」
「見せてあげます、あなたの言う雑魚の意地ってものを!!?これが私の奥の手です!!?魔法カード、弱肉一色!!?」
「弱肉一色、だと?」
「このカードは自分フィールド上にレベル2以下の通常モンスターが表側表示で5体存在する時に発動する事ができる!!?お互いのプレイヤーは手札を全て捨て、レベル2以下の通常モンスターを除くフィールド上に存在するカードを全て破壊します!!?」
「何だと!?」
「お願い、クリボー!!?」
　増殖を続けるクリボーが男子生徒のモンスター達に突撃していく。
　押し寄せるクリボーを叩き落とそうといじめっ子のダイオーキシンが腕を振り下ろすと、振り下ろされた腕に当たったクリボーが派手に爆発し、ダイオーキシンの腕が弾け飛んだ。
「なっ!?」
「クリボーには特殊能力、機雷化があります!!?クリボーは敵の身体……あるいは攻撃に触れた瞬間、誘爆する!!?そして増殖を続けるクリボーはどんどん誘爆していく!!?防ぐことはできません!!?」
　増殖し、男子生徒のモンスター達を呑み込んだクリボーが一気に爆発する。
　爆煙が晴れると後に残ったのは混沌の戦士と5体のクリボーだけだった。
「ぐっ、まさかあのフィールドを吹き飛ばすとは……だが、混沌の戦士　カオスソルジャーはレベル7以上のモンスターを素材としてリンク召喚したため相手の効果の対象にならず、相手の効果では破壊されない!!?次のターン、その雑魚共をーーー」
「いいえ、あなたに次のターンはありません!!?このターンで私の勝ちです!!?導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「っ、リンク召喚か!!?」
　遊花の前に大きなサーキットが現れる。

「召喚条件は通常モンスター1体!!?私はクリボートークンをリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク1!!?リンクスパイダー!!?」

〈リンクスパイダー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　地属性
ＡＴＫ１０００　←

遊花の前に機械の蜘蛛が現れる。
それを確認しながら遊花は再びサーキットを開く。
「まだいきます!!?希望に繋がるサーキット!!?」
「連続リンク召喚か!!?」
「召喚条件はモンスター2体!!?私はクリボートークン2体をリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?リンク召喚!!?リンク2!!?プロキシードラゴン!!?」

〈プロキシードラゴン〉ＬＩＮＫ　２　サイバース族　光属性
ＡＴＫ１４００　↑↓

次に現れたのは白い身体をした機械の竜。
「墓地に存在するリンクリボーの効果発動!!?スケープリンク!!?このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドのレベル1モンスター1体をリリースしてこのカードを墓地から特殊召喚する!!?私はクリボートークンをリリース!!?戻っておいで、リンクリボー!!?」

〈リンクリボー〉ＬＩＮＫ１　サイバース族　闇属性
ＡＴＫ３００　←

墓地から蘇るリンクリボー。
この流れは、来るわね、遊花の切り札が。
「そして導いて!!?希望に繋がるサーキット!!?」

このターン３度目のサーキット。
遊花は１度目を閉じて、深呼吸をしてからそのモンスターを呼ぶ。
「召喚条件は効果モンスター３体以上!!?私はリンクスパイダー、リンクリボー、プロキシードラゴンを　２体分として扱ってリンクマーカーにセット!!?サーキットコンバイン!!?」
「リンク４のモンスターだと!?」
サーキットに遊花のモンスター達が吸い込まれていく。
そしてサーキットが光り輝くと、中から現れたのは弾丸の如き巨龍。
「閉ざされた運命を撃ち抜く信念の弾丸!!?リンク４!!?ヴァレルロードドラゴン!!?」
遊花の声に応えるように、巨龍の咆哮が世界に響いた。
〈ヴァレルロードドラゴン〉ＬＩＮＫ４　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ３０００　↙?↑↑↘?
「馬鹿な!?ヴァレルシリーズだと!?テメェみたいな雑魚がなんでーーー」
「これで決めます!!?バトル!!?ヴァレルロードドラゴンで混沌の戦士　カオスソルジャーを攻撃!!?銃声のイジェクトフレア!!?」
「っ、相打ち狙いか!?」
ヴァレルロードドラゴンの口から砲台が現れ、混沌の戦士に向けて粒子砲を放つ。
混沌の戦士は粒子砲を防ごうとするが、無駄だ。
遊花の切り札はその程度で防げるものじゃない。
「この瞬間、ヴァレルロードドラゴンの効果発動!!?エロージョンエイミング!!?このカードが相手モンスターに攻撃するダメージステップ開始時に、その相手モンスターをこのカードのリンク先に置いてコントロールを得ます!!?」
「なっ!?コントロール奪取だと!?」
「そのモンスターは次のターンのエンドフェイズに墓地へ送られま

す。そしてこの効果は対象を取らない!!?　混沌の戦士　カオスソルジャーでも防げません!!?」
　ヴァレルロードドラゴンの粒子砲を受けた混沌の戦士は消滅し、遊花のバトルゾーンに移動する。
「これで決まりです!!?　混沌の戦士　カオスソルジャーでダイレクトアタック!!?混沌流転斬!!?」
「ぎゃあああああああ!!?」

男子生徒　ＬＰ２１００→０

ーーーーーーー

「そこまで!!?勝者、出席番号９８番。栗原　遊花さん!!?」
「ふぅ……私の勝ちです!!?」
「馬鹿な、こんな軟弱そうな奴に、俺が負けるなんて……!!?」
　嬉しそうに笑う遊花を見て、男子生徒は悔しげな表情で遊花を睨みつける。
　周りの反応としては遊花が勝ったことに対する驚き半分、納得と男子生徒への侮蔑がさらに半分ずつってところかしら。
　驚いている人達はアレだけ強力なモンスターが並んでいる状態をローレベルモンスターで戦っていた遊花が覆したことによる驚きだろう。
　男子生徒への侮蔑の視線もアレだけ優位な状況を覆されて負けたことに対してだと思う。
　そして納得しているのは遊花の普段のデュエルを知っている中等部上がりの生徒。
　遊花と1度でもデュエルしたことがあれば、遊花の諦めの悪さからくる逆転劇は想像に難くないだろう。
　相手の攻勢を受けきり、反撃に転じて勝利する。
　それこそが栗原　遊花のデュエルなのだから。
「ありがとうございました!!?いいデュエルでした!!?」

「っ、舐めやがって‼?」
「あぅ‼?」
デュエル終了の握手を求めて遊花が差し出した手を怒りの表情を浮かべた男子生徒が払いのける。
「お、お前みたいな雑魚に俺が負けるなんて何かの間違いだ‼?調子乗ってるんじゃねぇぞ‼?」
「あっ……」
怒鳴り散らしながら不機嫌そうに去っていく男子生徒を遊花は悲しげな表情で見送る。
遊花はしばらく悲しげな表情を浮かべていたが、頭を振ると笑顔を貼り付けて私の方に戻ってきた。
「桜ちゃん‼?私、勝ったよ‼?」
「ええ、ちゃんと見てたわ。流石は遊花ね」
「えへへ」
私が褒めると遊花は表情に少しの翳りを残しながらも嬉しそうに笑う。
……全く、新生活早々　あんなのに当たるなんて、幸先が不安だわ。
「……遊花の笑顔を曇らせた落とし前、どうやってつけてやろうかしら」
「?桜ちゃん、何か言った?」
「……ううん、なんでもないわ。それよりも、次のデュエルが始まるみたいよ」
「あ、本当だ‼?次はどんなデュエルが見られるかな?」
デュエルスペースで始まったデュエルを見て瞳を輝かせている遊花を横目に私は落とし前をつけさせる方法を考えるのだった。

ーーーーーーー

「ん〜今日も遊花の作ったお弁当は美味しいわ。世界一美味しいと言っても過言じゃないわね」

「もう、桜ちゃんったら。大袈裟だよ」
お昼休み。
デュエル学の講義を終えた私達は教室で遊花とお互いにお弁当のおかずを交換しながら談笑していた。
自分のデュエルを終えた後、少々表情を曇らせていた遊花だが、デュエル学の講義で他の人のデュエルを見ているうちにすっかり元気になったようだ。
何にせよ、元気になったみたいで私はホッとしていた。
「それにしても、楽しかったなぁ。デュエル学の講義」
「デュエルが好きな遊花にとっては夢のような講義だものね」
「うん‼?だって、見たことないモンスター達もいっぱい見れたんだもん‼?これからデュエルする機会があるんだって思うと楽しみで……えへへ」
嬉しそうに笑う遊花を見ると私も思わず表情が緩む。
遊花の嬉しそうな笑顔はいつも私の心を癒やしてくれる。
その太陽のような笑顔は嫌な思いを全て浄化してしまうぐらいに暖かく柔らかい。
ちょっと捻くれてる私には眩しすぎるぐらい……なんてね。
少し自分の考えを恥ずかしく感じた私は誤魔化すように席を立つ。
「……ちょっと喉渇いたから飲み物買ってくるわ。遊花は何か欲しいのある?奢ってあげる」
「えっ⁉?そんなの悪いよ」
「気にしなくていいわ。今朝のお礼よ」
「うーん……なら、緑茶で」
「緑茶ね、了解。じゃあ、ちょっと待ってなさい」
「うん、いってらっしゃい。桜ちゃん」
遊花に見送られながら私は飲み物を買いに歩き出す。
そんな私達の姿を見ていた悪意の視線を、私は気づかなかった。

ーーーーーーー

「思ったより時間がかかっちゃったわね」
２つの飲み物を抱えた私は小走りをしながら教室へと急ぐ。
学内に設置された自動販売機を見つけたまではよかったのだが、お昼時ということもあってか何人か同じように飲み物を買おうとしていた生徒が並んでいたのだ。
「遊花、待ちくたびれてなきゃいいけど……ん？」
有り得ないであろう想定をしながら小走りで教室まで駆けていると教室の方からなんだか良くない雰囲気と騒めきを感じた。
何かあったのかと教室を覗き込むと、そこには柄の悪い２人の男子生徒に威圧されている遊花の姿があった。
よく見ると片方の男子生徒は先程のデュエル学で遊花に敗北した男子生徒だった。
教室にいる他の生徒は関わり合いになりたくないのか顔を逸らしている。
これは、穏やかじゃないわね。
「えっと、ですからあの、私、友達を待っているのでここから離れるわけにはいかなくて……」
「あ”ぁ⁉？テメェの都合なんざ知ったことかよ⁉？」
「いいから面を貸せってんだよ‼？俺に恥をかかせやがってただで済むと思ってんのか‼？」
「きゃっ⁉？」
逆上した男子生徒が遊花の腕を掴んだ瞬間、私は抱えていた飲み物を放り出してその場から駆け出し、勢いよく跳び上がる。
「いいから来いってーーー」
「失せなさい、クソ野郎‼？」
「ーーーぶべらっ⁉？」
「あん？」
「ふぇっ⁉？さ、桜ちゃん⁉？」
そしてその勢いのまま遊花に掴みかかったクソ野郎の横っ面に跳び蹴りをかました。
私の跳び蹴りを顔面にくらったクソ野郎は突然の衝撃に掴んでい

た遊花の腕を話し、錐揉み回転しながら教室の壁に頭から突っ込み、ずるずるとその場に倒れ込む。
私はそのまま地面に倒れたクソ野郎に近づくと髪を引っ張って顔を上げさせる。
「誰の親友に手を出してんのよ、ねぇ？」
「かっ、な、なんだキサマーーー」
「恥だなんだとぐだぐだ五月蝿いのよ‼？私の親友に手を出そうとするクソ野郎が‼？黙って床のシミにでもなってなさい‼？」
「ーーーげぶっ‼？ぶへぇ‼？」
掴んでいた髪を放し、喚いているクソ野郎の脳天に踵落としをくらわしてから横っ腹に思いっきり蹴りを入れるとクソ野郎は教室の床の上をごろごろと転がっていき、うつ伏せになるようにして止まるとピクリとも動かなくなった。
『……』
沈黙したクソ野郎の姿と怒気を隠そうともしない私の姿に、教室の空気が一気に重苦しくなる。
そんな中で真っ先に声をかけてきたのは遊花だった。
顔を真っ青にしながら慌てた様子で私に詰め寄る。
「さ、桜ちゃん⁉？やり過ぎ‼？やり過ぎだから‼？」
「そんなことないわ。私の親友に手を出そうとしたんだもの、これでもまだやり足りないぐらいよ」
「絶対そんなことないからね⁉？絶対にやり過ぎだからね‼？」
目をぐるぐると回しながらちょっと泣きそうな表情を浮かべる遊花。
その姿を見るとちょっと心が痛むけど、反省はしないし後悔もしない。
もし私が帰ってくるのが間に合わなければ遊花は力づくで連れて行かれていただろう。
こんな輩がその後どうするかなんて、考えたくもない。
私にとって大切なのは遊花だ。
たった1人の親友を守れるなら、後はどうだっていい。

「て、テメェ俺様のダチに何してくれてんだ⁉？クソアマが⁉？」
「あ〟ぁ⁉？か弱い女の子に手を出すような下郎がなんか文句でもあるっていうの？」
「さ、桜ちゃん落ち着いて‼？その声は明らかに女の子が出しちゃいけない声だよ⁉？その道の人の声だよ⁉？」
激怒してメンチ切りながら喚き散らす不良を威嚇するように睨みつけると、こちらの様子を見守っていたギャラリーから恐怖を堪えるような悲鳴が聞こえる。
こんな状況に怯えるぐらいならさっさと先生でも呼んで対処しなさいっての。
「生意気なクソアマが‼？」
ブチギレた不良が私に向かって拳を振り抜く。
私はその拳を躱しながら振り抜かれた腕を掴み、身体をずらしながらその腕を引っ張りながら屈み、がら空きの不良の足を蹴り払うと、身体が宙に浮いた不良はその勢いのまま私に投げ飛ばされ教室の壁に叩きつけられた。
「がっ‼？」
「フン、この程度で喧嘩なんか売ってきてんじゃないわよ」
私が鼻を鳴らしながら地面に横たわった不良を見下ろすと、不良は顔を怒りで真っ赤にしながら立ち上がった。
「テメェ‼？」
「あら、まだ実力差も分からないのかしら？アンタ程度じゃ何回やっても無駄よ」
「ぐっ」
私の冷めた目を見て、不良がたじろぐ。
しかし、すぐに立ち上がると懐に手を入れてデッキを取り出すと私に向けて構えた。
「なら、こっちだ‼？俺とデュエルしろ‼？」
「……へぇ、デュエルならアンタが私に勝てるとでも？」
みっともなく喚き散らす不良に思わず低い声が出る。
断るのは簡単だ。

だけど、それじゃあ私の気が収まらないのも事実。
ならーーー
「いいわ、受けてあげる。アンタが誰の親友に手を出したのか、思い知らせてあげるわ」
「さ、桜ちゃん‼?」
「悪いわね、遊花。どうしても、コイツは潰しとかないと気が済まないの」
悲しげな声を出す遊花に胸を痛めながらも私はデュエルディスクを装着し、デッキをセットを取り出す。
私の大切な親友を守るために、今日も力を貸して貰うわね。
『ーーー』
「ん?……気のせいかしら?」
デュエルディスクにデッキをセットした瞬間、何かの音が聞こえた気がした。
私が首を傾げていると同じようにデュエルディスクにデッキをセットした不良が怒りの目でこちらを見ていた。
「ぐちゃぐちゃに叩き潰して誰を敵に回したか思い知らせてやる‼?クソアマ‼?」
「それはこちらの台詞よ。私の親友に手を出したこと、後悔させてあげるわ‼?」
『決闘‼?』

桜　ＬＰ８０００
不良　ＬＰ８０００

ーーーーーーー

「先攻は貰った‼?魔法カード、強欲で金満な壺‼?自分メインフェイズ１開始時に、自分のＥＸデッキの裏側表示のカード３枚または６枚をランダムに裏側表示で除外し、除外したカード３枚につ１枚、自分はデッキからドローする‼?ただし、このカードの発動後、ターン

終了時まで自分はカードの効果でドローできない。俺は６枚のカードを除外して２枚ドロー!!?　ククッ、完璧な手札だ!!?手札の雷帝家臣ミスラの効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、自分メインフェイズにこのカードを手札から特殊召喚し、相手フィールドに雷族・光属性・レベル１・攻撃力８００、守備力１０００の家臣トークン１体を守備表示で特殊召喚する!!?ただし、このターン、自分はＥＸデッキからモンスターを特殊召喚できない。来い、雷帝家臣ミスラ!!?」

〈雷帝家臣ミスラ〉☆２　雷族　光属性
ＤＥＦ１０００

〈家臣トークン〉☆１　雷族　光属性
ＤＥＦ１０００

フィールドに現れたのは雷を纏った従者。
それに付随して私のフィールドにもミスラそっくりのモンスターが現れる。
「雷帝家臣ミスラをリリースし、ホルスの黒炎竜ＬＶ６をアドバンス召喚!!?」

〈ホルスの黒炎竜ＬＶ６〉☆６　ドラゴン族　炎属性
ＡＴＫ２３００

フィールドに現れたのは隼の姿をした神竜。
「ホルスの黒炎竜……ちょっと面倒な奴が出てきたわね」
「クックック、このデッキの恐ろしさ、しっかり味わいな!!?リリースされた雷帝家臣ミスラの効果発動!!?同名カードは１ターンに１度、このカードがアドバンス召喚のためにリリースされた場合、このターン、自分は通常召喚に加えて１度だけ、自分メインフェイズにアドバンス召喚できる!!?さらに速攻魔法、帝王の烈旋!!?　同名カードは

1ターンに1枚しか発動できず、このカードを発動するターン、自分はＥＸデッキからモンスターを特殊召喚できない。このターン、自分がモンスターをアドバンス召喚する場合に1度だけ、自分フィールドのモンスター1体の代わりに相手フィールドのモンスター1体をリリースできる‼?俺はテメェのフィールドの家臣トークンをリリースして人造人間―サイコショッカーをアドバンス召喚‼?」

〈人造人間―サイコショッカー〉☆6　機械族　闇属性
ＡＴＫ２４００

家臣トークンが竜巻に飲み込まれ姿を消すと、代わりにフィールドに現れたのは機械の身体を持つ人型のモンスター。
「人造人間―サイコショッカー……」
「さらにホルスの黒炎竜ＬＶ６を墓地に送り、魔法カード、レベルアップ！‼?　フィールド上に表側表示で存在するＬＶを持つモンスター1体を墓地へ送り、そのカードに記されているモンスターを、召喚条件を無視して手札またはデッキから特殊召喚する‼?デッキより現れろ、ホルスの黒炎竜ＬＶ８‼?」

〈ホルスの黒炎竜ＬＶ８〉☆８　ドラゴン族　炎属性
ＡＴＫ３０００

黒炎竜ＬＶ６の身体が光り輝くと、黒炎竜が肥大化していき、光が弾けると巨大な神鳥に姿を変えた。
「ホルスの黒炎竜ＬＶ８……面倒な奴が出てきたわね」
「ハーッハハハ‼?これで俺様の戦術は完成した‼?ホルスの黒炎竜ＬＶ８の永続効果、マジックディサラァウによりこのカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、魔法カードの発動を無効にし破壊する事ができる‼?さらに人造人間―サイコショッカーの永続効果、トラップジャミングによりこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、お互いにフィールドの罠カードの効果を発動できず、

フィールドの罠カードの効果は無効化される!!?つまり、テメェは魔法も罠も使わずにコイツらを倒さなきゃいけないってわけだ!!?」
「……」
魔法と罠を封じて高レベルモンスターで相手を蹂躙する。
確かに悪くはない戦術ではあるけど……
私が考え事をしていると何を勘違いしたのか遊花を威圧していた不良は気味が悪い笑みを浮かべる。
「クックック、戦意を喪失したか?だが、サレンダーは許さねぇ!!?俺様達に舐めた口をきいたことをたっぷり後悔させてやる!!?俺様はこれでターンエンドだ!!?」

桜　ＬＰ８０００　手札５
ーーーーーー　ー
ーーーーーー
ー　　ー
ーー○○ー
ーーーーーー　ー
不良　ＬＰ８０００　手札１

「さあ、無様に踊ってみせろよーーー」
「あ～もう!!?うるさいわね!!?大して強くもないくせに粋がってんじゃないわよ!!?」
「な、何?」
好き放題口にしていた不良は突然キレた私を見て唖然とする。
本当に、腹が立つ。
この程度の相手に舐められる自分自身に。
何が”遊花を守る”だ。
結局は口だけでこの程度の相手に舐められて遊花に手を出される始末。
本当にーーー自分が情けなくて嫌になる。
だからこそーーー

「この程度で遊花に手を出したこと、私を怒らせたことを後悔させてあげるわ!!?私のターン、ドロー!!?さぁ、喰らい尽くしてあげるわ!!?ホルスの黒炎竜ＬＶ８をリリースして怒炎壊獣ドゴランを攻撃表示で特殊召喚!!?」
「っ!!?何だと!!?」

〈怒炎壊獣ドゴラン〉☆８　恐竜族　炎属性
ＡＴＫ３０００

黒炎竜ＬＶ８を喰らいながら、地の底から巨大な地竜が不良のフィールドに降り立つ。
「これでアンタが自慢していた魔法封じは無くなったわ。さぁ、あなたの全てを壊してあげる!!?　相手フィールドに壊獣モンスターが存在する場合、このカードは手札から攻撃表示で特殊召喚できる!!?来なさい、雷撃壊獣サンダーザキング!!?」

〈雷撃壊獣サンダーザキング〉☆９　雷族　光属性
ＡＴＫ３３００

不良のフィールドで咆哮するドゴランに呼応するように私の切り札である三つ首の竜がフィールドに舞い降りる。
「攻撃力３３００のモンスターがこんなにあっさりと出てくるだと!!?」
「そしてこの娘が私のもう1体の切り札、来なさい、私の相棒!!?月より来たる永遠の姫!!?妖精伝姫（フェアリーテイル）―カグヤを召喚!!?」

〈妖精伝姫―カグヤ〉☆４　魔法使い族　光属性
ＡＴＫ１８５０

フィールドに現れたのは月のマークが入っている扇子を持ったお姫様。

現れたカグヤは扇子越しに不良に視線を向けた。
「妖精伝姫―カグヤの効果発動！召喚に成功した時、デッキから攻撃力１８５０の魔法使い族モンスター１体を手札に加える。私は２体目の妖精伝姫―カグヤを手札に加えるわ。まだまだ行くわよ、このカードは手札から攻撃表示で特殊召喚出来るわ。来なさい、ジェスターコンフィ!!?」

〈ジェスターコンフィ〉☆１　魔法使い族　闇属性
ＡＴＫ０

現れたのは球に乗った道化師のモンスター。
「この状況で攻撃力０の雑魚モンスターだと？」
「好きなように思えばいいわ。これが私がアンタに出してあげる難題!!?気づいた時には終わりだけどね!!?バトルよ!!?　雷撃壊獣サンダーザキングで人造人間―サイコショッカーを攻撃!!?グラビティレイ!!?」
サンダーザキングの三つ首からレーザーが放たれ、サイコショッカーの身体を貫くと、サイコショッカーは跡形もなく爆散した。

不良　ＬＰ８０００→７１００

「ぐぁぁぁっ!!?くっ、俺様のサイコショッカーが……」
「次よ、ジェスターコンフィで怒炎壊獣ドゴランを攻撃!!?スーサイドマジック!!?」
「攻撃力０の雑魚モンスターで攻撃だと!?!?馬鹿が、血迷ったか!!?」
ドゴランに突撃したコンフィはドゴランに火炎を吐かれ、そのまま消滅してしまった。

桜　ＬＰ８０００→５０００

ドゴランの火炎で私のライフが大きく減る。

それを見て、周りのギャラリーは困惑し、不良はポカンとした表情を浮かべたかと思うとすぐに笑い始めた。
「クックック、ハーッハハハ‼？どんな効果があるかと思えば何もねぇじゃねぇか‼？何がしたかったんだよ、テメェはよ‼？」
大笑いを続ける不良を私は鼻で笑う。
「ふっ、その程度だから粋がるなって言ってんのよ。中途半端にしか状況が見れないから、アンタがもう終わってることにすら気付けない」
「あ〝っ？何だと？」
私の言葉に不愉快そうに不良が眉を顰める。
そんな不良に私は1枚のカードを掲げて不敵に笑う。
「何もない？ないわけないでしょ。これがアンタを焼き尽くす私の怒りの炎よ‼？たっぷりと後悔しなさい‼？３０００ポイントの戦闘ダメージを受けた時、このカードは発動できる‼？速攻魔法発動、ヘルテンペスト‼？」
「っ⁉？　ヘルテンペスト……だと⁉？」
私が発動したカードに不良は表情が青ざめていき、ギャラリーもざわつき始める。
私がこんなカードを使うなんて思ってなかった、ってところかしら？
なら、たっぷりと思い知りなさい‼？
「このカードは３０００ポイント以上の戦闘ダメージを受けた時に発動する事ができるわ。お互いのデッキと墓地のモンスターを全てゲームから除外する‼？」
「な、何だと⁉？」
私がそう宣言するとお互いのデッキ、墓地からモンスターが一気にいなくなる。
そして私の難題はまだ終わらない‼？
「そしてデッキから除外されたネクロフェイスの効果発動‼？このカードがゲームから除外された時、お互いはデッキの上からカードを５枚ゲームから除外する‼？」

「なっ⁉?」
　ネクロフェイスの力によって私と不良のデッキが更に薄くなっていく。
　デッキが一瞬で蒸発し、呆然としている不良を見て、私は不敵な笑みを濃くして笑いかける。
「あら、残念。デッキが1枚残ってしまったわ。倒し損なったわね」
「っ……だ、だが、俺のフィールドにはまだテメェが出した壊獣がいる‼?次の俺のターンになんとかーーー」
「残念だけど、私はアンタと違ってそんなにぬるくないの。希望なんか残してやらないわ。妖精伝姫―カグヤの効果発動‼?アンリーゾナブルディマンド‼?1ターンに1度、相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動‼?相手はそのモンスターの同名カード1枚を自身のデッキ・エクストラデッキから墓地へ送ってこの効果を無効にできる。墓地へ送らなかった場合、このカードと対象のモンスターを持ち主の手札に戻すわ‼?」
「っ⁉?な、何だと⁉?」
「因みにこの効果は相手ターンでも発動できるわ。対象は怒炎壊獣ドゴラン。さぁ、デッキから怒炎壊獣ドゴランを墓地に送ってもいいわよ?」
「ふ、ふざけんなぁ⁉?俺様のデッキに怒炎壊獣ドゴランは入ってねぇし、いたとしてもヘルテンペストで消えている。無理難題もいいとこじゃねぇか⁉?」
　私の言葉に不良は怒りの声をあげる。
　そんな不良に私は冷たい笑みで応える。
「教養が足りないわね。妖精伝姫―カグヤはかぐや姫をモチーフにしたモンスター。無理難題を出すからこそ、この子はかぐや姫なのよ。怒炎壊獣ドゴランと妖精伝姫―カグヤは手札に帰るわ」
　カグヤとドゴランの姿が光に変わり、私の手札に返ってくる。
「因みにこの効果は相手ターンにも使えるわ」
「な、何だと⁉?じゃ、じゃあ……」
「例え何とかして生き残ったとしてもアンタが私の出す難題を解ける

可能性はないってことよ。メインフェイズ2、カードを1枚セットしてターンエンドよ」

桜　ＬＰ５０００　手札３
ーー▲ーー　ー
ーー○ーー
ー　　ー
ーーーーー
ーーーーー　ー
不良　ＬＰ７１００　手札１

「お、俺様のターン……」
「さぁ、最後の1枚を引きなさい。それで私を倒せるカードを引けなければアンタの負けよ」
最初の威勢のよさをどこにやったのか。
不良は表情を青ざめさせ、震えながらデッキに残った最後のカードに手を添える。
逃げ出さないだけの意地があるのだけは認めてやる。
最もーーー
「あ、ぁぁぁぁぁぁ!!?ドロー!!?」
「アンタはもう終わりだけど。スタンバイフェイズ、罠発動!!?D・D・ダイナマイト!!?相手が除外しているカードの数×３００ポイントダメージを相手ライフに与えるわ!!?」
「っ!!?な、何だと!!?」
「アンタの除外は強欲で金満な壺とヘルテンペストで除外されたカードをあわせて４１枚……結果は分かるわよね？」
「あ、ぁぁぁ……!!?」
不良の目の前にダイナマイトが現れる。
不良が震えながら膝を突き、ダイナマイトに導火線が燃え尽きるのと同時に私はその光景から背を向ける。
「１２３００ポイントのダメージをアンタに与えるわ。遊花に手を出

したことを後悔しながらーーー潰れなさい」
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼?」
激しい爆発の中不良の惨めな断末魔の叫び声が響き渡った。

不良　ＬＰ７１００→０

ーーーーーーー

「口ほどにもなかったわね」
「馬鹿な‼?俺様が、こんなあっさりと……」
立体映像が消え、青ざめた顔で地面に項垂れる不良に私は近づいていき、その胸ぐらを掴んでこちらを向かせる。
「わかったかしら?誰に喧嘩を売ったのか?」
「ひっ‼?」
こちらを向かせた不良の顔は恐怖に歪み、震えながら涙を浮かべている。
どうやら先程のデュエルで完全に心が折れたらしい。
最も、容赦してやる気はないけど。
『誰を敵に回したか思い知らせてやる』って言ってたわよね、アンタは?」
そもそもそこから間違えてるのよ、アンタは。
「敵に回しちゃいない奴は……世界中にいるのよ。アンタの小さな世界の外には、いくらでもね」
この不良は多分外部生だ。
きっと元々いた場所ではそこそこ強かったのだろう。
だけど、それはただの井の中の蛙だ。
その視野の狭さが、コイツの敗因。
そういって私が掴んでいた胸ぐらを離すと、不良はその場でへたり込む。
私はしゃがみこんで不良に視線を合わせると低い声で口を開く。
「今回はこの辺で勘弁してあげる。けど、もし次に同じようなことを

した時にはーーー」
　私はそこで言葉を区切ると、全力の殺気を不良にむけて叩きつけた。
「ーーー生きてたことを後悔する程、完膚なきまでに叩き潰してあげる」
「ひっ‼?ひぃっ‼?」
「そこで倒れてる奴連れてさっさと失せなさい」
「す、すみませんでしたぁ‼?」
　私が殺気を消すと不良は未だに床に転がっていた男子を抱えると脱兎の如く教室から逃げて行った。
「ふぅ、こんなものよね」
　私がため息を吐きながら立ち上がると辺りを見渡す。
　すると、こちらの様子を傍観していた生徒が怯えた表情で視線を逸らし、ひそひそと話す声が聞こえる。
　わかってはいたけれど、どうやら私は周囲から危険人物として認定されたようだ。
　まあ、そういう風に映るように振る舞ったんだから当然なんだけどね。
　こうしておけばよっぽどの馬鹿か自信家じゃなければ私の　逆鱗(ゆうか)を刺激しようとする奴はいなくなるだろう。
　私が多少疎まれるだけで遊花の危険が減るなら安いものだ。
　そんなことを考えていると、突然背後から両手が伸びてきて私の身体を掴むと勢いよく身体を後ろに回された。
　勢いのまま後ろを見ると頬を膨らませて明らかに怒った顔の遊花がいた。
　遊花は怒った表情のまま両手で私の頬を掴むと軽く引っ張る。
「もう、桜ちゃん‼?危ないことはしちゃダメっていつも言ってるよね‼?」
「いひゃ‼?いひゃいわよ、遊花‼?」
「助けてくれたのはありがとうだけど、アレはやり過ぎだよ‼?桜ちゃんに何かあったらどうするの‼?」

「ゆ、ゆぅか……」
むぎゅむぎゅと私の頬を遠慮なく引っ張っていく遊花に傍観していた生徒は青ざめていく。
大方これで私が激怒してまた凄惨な事態が引き起こされたらどうするか考えているのだろう。
そんな生徒をよそにどんどん遊花の声には熱がこもっていく。
「やり過ぎたら桜ちゃんの方が悪いことになっちゃうんだよ⁉？それで⁉？……それで……桜ちゃんが、先生達に怒られ、ちゃったら……」
「ゆ、遊花⁉？」
突然私の頬を掴んでいた遊花の手から力が抜ける。
そして真正面から私を射抜く遊花の瞳には大粒の涙が溜まっていた。
遊花は掴んでいた頬から手を離すとそのまま私の身体を抱きしめた。
「よかった……桜ちゃんが無事で……よかったよぉ」
「遊花……心配かけてごめん。私は大丈夫だから」
「うん……」
泣きながら私を抱きしめる遊花の身体を抱きしめながら、私は歯を食いしばる。
やっぱり、私は未熟者だ。
遊花の身体を守れても遊花の心を守れない。
それどころかこうやって抱きしめて、私の心が本当に堕ちてしまわないように、護ってもらってばかりだ。
私を抱きしめたまま泣き出した遊花を見て教室の張り詰めた空気が弛緩してうく。
結局は、私の尻拭いを遊花にさせてしまったようなものだ。
私は視線を未だに腕に装着したままにしていたデュエルディスクにセットされているデッキにむける。
やっぱり私は壊獣と同じだ。
相手を喰らい、場を荒らすことしかできない。

そんな私を止めることができるのは、柔らかくそれでいて頑固なこの親友(ゆうか)だけだ。
……私は本当に守ることができるのだろうか？
この大切な親友を。
「……ううん、やってみせる。絶対に」
「桜、ちゃん？」
「……なんでもないわ。それより、ほら。泣き止んで。せっかくの可愛い顔が台無しよ」
ポケットからハンカチを取り出して遊花の涙を拭う。
涙を拭うと、遊花は控えめながらも柔らかい表情で笑った。
「うん、えへへ」
その笑顔を見て、改めて誓う。
必ずなってみせるこの子に護られるんじゃなくて、この子を守れる親友に。
……この後、遊花がデュエルが出来なくなり自分の無力さを実感したり、急にデュエルができるようになった遊花の師匠に喧嘩を売ったり、その師匠と友人となって遊花と共に同居生活を送ることになるのだが……それはまた、別のお話。